ハイスクールD×D ～闇皇の蝙蝠～

サドマヨ２世

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その身に摩訶不思議な力を宿すバウンティハンターの少年が悪魔、天使、堕天使の三竦みや過酷な運命に巻き込まれていく……

※この作品は以前閉鎖されたにじふぁんから始まり、アットノベルスでも掲載しておりましたが、ここ一択になりました。若干内容を修正する箇所もあると思います。あと精神の耐久力は少ない方なので、どうか長い目で暖かく見守って下さると嬉しいです。誹謗中傷はなるべく勘弁してください。ご意見や質問等もございましたら、気軽に送っていただいて結構です。

※リアスはオリキャラのヒロインにしました。イッセー×リアス派の方々には申し訳ございません…

目次

第1章　旧校舎のディアボロスとダークバット
賞金稼ぎの少年 ―― 1
運命の幕開け ―― 5
リアス・グレモリーと眷属達 ―― 18
女を泣かす奴は敵確定 ―― 31
新、一誠、アーシア ―― 40
教会へ殴り込み！ ―― 60
覚醒！赤龍帝の力！ ―― 90
新、悪魔になる!? ―― 115
入部&転校 ―― 138
第2章　戦闘校舎のフェニックスとマッドサンダー
蝙蝠とフライドチキン（笑） ―― 153
10日間の修行 ―― 189
レーティングゲーム開始！ ―― 214
蝙蝠VSライザーの駒 ―― 247
怒りが生み出した進化 ―― 287
初の敗北 ―― 305
結婚式乱入！ ―― 317
闇皇&赤龍帝VS不死鳥 ―― 330
闇人の王 ―― 348
闇が動き出す予兆 ―― 375
第3章　月光校庭のエクスカリバーとプロミネンス

生徒会とご対面 ―――― 390
聖剣計画 ―――― 416
リベンジマッチ ―――― 436
エクスカリバー破壊団結成！468
灼熱の男 ―――― 486
邪悪な聖剣 ―――― 501
いざ戦場へ ―――― 521
『魔剣創造』、禁手化 ―――― 536
闇皇、覚醒 ―――― 549
闇皇ＶＳコカビエル ―――― 558
新しい眷属 ―――― 570
開始！異空間での修行！ ―――― 578
修行を通して ―――― 596
第４章　停止教室のヴァンパイアとカイザースネーク
波乱の前兆と魔王と父親 ―――― 604
水着と白龍皇 ―――― 622
授業参観、魔王少女も来るよ☆645
引きこもりのビショップと朱乃の秘密 ―――― 659
三大勢力会談 ―――― 683
『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人 ―――― 699
ギャスパー奪還作戦！ ―――― 713

新VSカテレア！『蛇神皇（じゃしんおう）の鎧』 ―――― 733
あり得ない共闘 ―――― 749
駒王協定 ―――― 769
同居人増加と闇オークション 782
おっぱいパワー爆発！ ―――― 804
光帝の蝙蝠と愉快（？）な仲間達 826
第5章　冥界合宿のヘルキャットとアサルトチェス
いざ行かん、冥界とグレモリー邸 839
若手悪魔会合、やっぱり新はデタラメ過ぎる ―――― 855
ウハウハの冥界温泉 ―――― 878
修行開始、ウェルダンは勘弁してね！ ―――― 896
小猫の秘密と涙 ―――― 914
冥界パーティ開催！ ―――― 926
黒猫と第2の覚醒 ―――― 936
闇人襲来、『チェス』のメンバー 958
リアス・グレモリーVSソーナ・シトリー ―――― 968
動き回る闇皇、新技炸裂！ ―――― 979

ゲーム決着！新ＶＳソーナ ―― 994
勝者、面会、帰省 ―― 1009
第６章　体育館裏のホーリーとロックンローラー
転生天使イリナと一誠の大親友 1031
ディオドラ・アスタロト ―― 1043
ダイアンの正体 ―― 1055
冥界テレビ出演 ―― 1069
卑劣なディオドラ ―― 1081
死闘開始！最凶のタッグ!? ―― 1098
悲劇の真相 ―― 1112
オーフィス、サーゼクス ―― 1125
神殿の戦い、第３の覚醒 ―― 1137
アーシアを救え！ ―― 1151
覇龍 ―― 1166
おっぱいドラゴンの歌 ―― 1181
アポカリュプスと暗躍する陰謀 1198
第７章　放課後のラグナロクとテンプテーション
男は顔で笑い、心で泣く ―― 1210
ムフフなリゾート ―― 1224
「乳龍帝おっぱいドラゴン」鑑賞会 1241
英雄派との戦い、オルレアンの乙女

朱乃とデート　1256
オーディン来訪　1278
戦闘訓練！やっぱり新は強過ぎた　1281
1306
北欧の悪神ロキ　1311
渉と祐希那と3人の魔族　1317
『初代キング』の甘言　1341
決戦開始！VSロキ　1363
最強形態発現!?　1371
放置された戦乙女　1396
オリキャラ紹介編（随時更新予定）　1408
オリジナルキャラクター紹介（主人公）　1413
オリジナルキャラクター紹介（仲間編）　1422
オリジナルキャラクター紹介（闇人編）　1444
オリジナルキャラクター紹介（地獄兄弟編）　1448
オリキャラ紹介（イッセー眷属候補編）　1452
オリキャラ紹介（リュオーガ族編）
第8章　正々堂々のチェックメイトとセカンドキング

闇皇と戦乙女と魔銃 ―――― 1475
こだわりＶＳ熱意 ―――― 1462
リベンジ！新ＶＳシトリー眷属！ 1488
リベンジ続編！新ＶＳ匙！ ―――― 1566
バトルゲーム開幕！ ―――― 1541
悪夢にピリオドを打て ―――― 1526
風魔と２代目クイーン ―――― 1506
鬼髪師アスカ・シャーベット 1584
強運こそ勝利のカギ!? ―――― 1611
ラストゲーム！超魔鎧身！ ―――― 1600
第８．５章　異界転移のドッグデイズと
ヘルブラザーズ
宿命始動、２つの危機 ―――― 1623
一誠が怨敵!?地獄から来た兄弟 1640
ここは何処!?不可解過ぎる世界 1658
幽神兄弟 ―――― 1674
ようこそフロニャルド！三国の領主
―――― 1718
暗闇の復讐劇 ―――― 1699
フロニャルド陣との手合わせ開始！ 1737
仁義無きハンティング ―――― 1752

スゥパァ脱衣タァイム！ ―――― 1767
人間なれど悪魔の如し ―――― 1792
蒼き翼と焔の闇人 ―――― 1810
アーシア誘拐！ ―――― 1826
フロニャルド大戦！伊坂軍の進撃 1846
ムッツリ兄弟（笑）の苦難 ―――― 1863
闇皇の蝙蝠ＶＳ魔剣将官 ―――― 1891
希望の赤龍帝、絶望の地獄兄弟 1916
勇者と悪魔の競演！ ―――― 1938
帰還 ―――― 1962
第９章　修学旅行のパンデモニウムと
ファーストキング
闇皇と天龍と大王の拳 ―――― 1991
修学旅行、いざ京都へ！ ―――― 2014
不穏な京都 ―――― 2032
九尾のお姫様 ―――― 2042
急襲、英雄派！ ―――― 2070
魔帝ジークと神風一派 ―――― 2094
二条城へ向かえ！ ―――― 2121
一誠とダイアンの共闘！ ―――― 2155
大混戦！グレモリーＶＳ英雄派ＶＳ神風一派 ―――― 2175
『初代キング』復活！超魔身神風！ 2196
2228

超絶進化！三又成駒と闇焔皇　――――――

2653
第１１章　氷城決戦のリュオーガとドラグーン
呪われた一族の影……　――――
さあ、お前の嘘を数える！　――――
2696 2679
新ＶＳ総司！忍び寄る竜の一族！
2714
凍てつく居城、フローズンパレス！
2733
竜獄の宴、始まる　――――
人形使いレモネード　――――
2769 2753
新＝ゼノン・ブラック・ドラグニル
2789
二者択一、偽りと本物　――――
2804
爆進帝王ッ！ニトロ・グリーゼエエエエエエッ！　――――
2816
一方通行過ぎる愛情は成立しない件について　――――
月影の武士、長光重蔵　――――
2859 2846 2831
竜人の誇り　――――
火竜ラース・フレイム・ドラグニル
2870
決するメンバー、怒れる火竜　――
2881
グランドフィナーレ、非情なる火竜
2894
ラース、究極の変身！　――――
2908

新の究極変身！超越の黒竜帝！ 2921
終戦と悲痛な結末 ―――― 2935
第１２章　謹慎休暇のメモリアルとバッドゲーマー
転校生、シド・ヴァルディ ―――― 2962
新の悲しきメモリー ―――― 2948
正教会のシストラとガブリエルさま 2975
ユナイト・キリヒコ ―――― 2988
俺だってハーレムしたいんだよおおおお！ｂｙイッセー ―――― 3002
ゲームスタート！――ＶＳシド・ヴァルディ ―――― 3012
ＶＳシド・ヴァルディ　後編！勇気を貫った乙女達 ―――― 3024
襲撃のキリヒコとデンジャラスなゾンビ ―――― 3036
ＶＳキリヒコ　死者への冒涜 3048
罪を認める勇気 ―――― 3060
職権乱用も犯罪だからやめようね？ 3072
新＆一誠ＶＳシド！ ―――― 3085
胎動する造魔、拾弐の魔凶 ―――― 3097
第１３章　進級試験のウロボロスとダ

ブルクロス
動き出す各々の道 ―――――
昇格試験の話 ―――――
試験勉強ほど嫌な物は無い！ ―――――
発情小猫と驚愕の訪問 ―――――
龍神と『初代クイーン』とのお茶会 3189
中級悪魔昇格試験 ―――――
打ち上げと強化プラン ―――――
『龍喰者』サマエル ―――――
天輪聖王 ―――――
脱出作戦は計画的に ―――――
脱出作戦ミーティング ―――――
3306328132643246322932 12
3168314031193108
脱出作戦開始！ ―――――
乳力（にゅうパワー）炸裂！ ―――――
狂喜のシャルバ ―――――
闇の根源！ＶＳ『初代キング』！ 3385
帰る、帰ろう、帰れない…… ―――――
第１４章　補習授業のヒーローズとブラックウィドウ 3402
赤龍帝、闇皇不在のグレモリー眷属 3413
獅子王の檄 ―――――
アジュカ・ベルゼブブ ―――――
『魔人化』、『闇黒化』 ―――――
3336233353321
347434533434

反撃の狼煙を上げろ！ ―――
魔王の牽制 ―――
獅子の王と蛇の皇 ―――
師弟対決！ゼノヴィア＆イリナＶＳ神代剣護 ―――
ＶＳメタル！真の強さの意味 ―
ヒーロー帰還の前兆 ―――
２人のヒーロー ―――
身分証明って大事だよね！ ―――
リターンマッチ！赤龍帝＆闇皇ＶＳ天輪聖王 ―――
魔鬼化（アビス・ブレイク）！激昂の鬼 ―――
幽神兄弟ＶＳ神風一派 ―――
魔獣騒動決着！闇皇＆赤龍帝ＶＳ神風 ―――
魔獣騒動後日談 ―――
第１５章　短編騒動のデイリーとシリアス
家族団欒のホームグルメ ―――
戦闘校舎のフェニックスＤＸ ―
護衛任務のブラザーズとセルゼン（前編） ―――
護衛任務のブラザーズとセルゼン（中編） ―――
護衛任務のブラザーズとセルゼン（後

3688 3663 364036183601358435683534971737353835173497 3712 37573735 38063791 3838 3861

編）――――――――――――3891
黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（前編）――――――――3920
黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（中編）――――――――3940
黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（後編）――――――――3970
運動会のハルマゲドーン⁉――――――――3999
第１６章　生存競争のクロニクルとオートマタ
迫るデスゲームの魔手――――――――4037
デスゲーム『クロニクル』、ゲームスタート……！――――――――4058
序盤から難易度高いのはバ〇オだけで充分！――――――――4079
蛇は言葉を弄（ろう）して獲物を喰らう……――――――――4099
レベル２か３でレベル５０と戦えって無理ゲーだよね？――――――――4116
火の手はもう、足を焼いてんだよ……！――――――――4136
復活の要（かなめ）は……おパンティー⁉――――――――4158
赤い拳と青いパズルの交差！――――――――4185
『クロニクル』終局間近、絶望の選択……っ！――――――――4210

絶望……絶望……更なる絶望……っ　4230
ユナイト・クロノス・キリヒコ　4248
第１７章　魔剣聖のヴァンキッシュとゾーマ
情報戦はいつの時代でも大事なので怠らないようにしよう！　――――　4272
晦冥（かいめい）と厄災（やくさい）の襲来　――――　4293
魔王少女ＶＳ厄災のテンペスター　4323
新ＶＳ厄災のテンペスター　――――　4345
剥げたな、テメェの化けの皮が……　4367
独眼の怪物、バサラ・クレイオス　4389
ハンター同士の戦い　――――　4408
バサラ・クレイオスと言う怪物（おとこ）　――――　4428
焼かねぇホルモンはただのゴミだ……　――――　4446
誰にだって苦手な人物はいるさ……　4466
ＶＳ『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』！　――――　4500

深淵の闇（ダークネス・フォーム）、晦冥（かいめい）のトランザー　――　4532
異世界おっぱいチャンネル受信!!　4553
厄災を砕け!（あか）き雷炎竜（らいえんりゅう）　――――――――　4591
温泉に行こう！　――――――――　4571
第１８章　進路指導のウィザードとダークロード
平和が1番とか言ってるけど、本当に大丈夫？　――――――――　4623
魔法使いとの契約は思った以上に大変そうだ！　――――――――　4652
たまには日々の幸せを噛み締めたいものさ　――――――――　4712
吸血鬼との会談　――――――――　4681
唐揚げを二度揚げするかしないかで、美味しさが劇的に変わる……！　――――――――　4743
リアス一行、ルーマニアへ発つ　4778
悪党より一般人（パンピー）の方が性質（タチ）が悪い　――――――――　4804
ロリっ娘（こ）死神（グリム・リッパー）、略してロリム・リッパーだ！　――――――――　4827
グレモリー＆シトリー　ＶＳ　造魔（ゾーマ）幹部衆！　――――――――　4852

『大罪の暴龍（クライム・フォース・ドラゴン）』グレンデル　――――　4885
ハート・メルトダウン、エンドヴィル・ジョロキア　――――　4916
お嬢様キャラって目の前では気丈に振る舞うけど、実は泣いてる事が多いよね。　――――　4946
第１９章　日常暗躍のサービスとエヴォル・スターク
魔法少女リーア☆マジか⁉　前編　4961
魔法少女リーア☆マジか!?　中編　4992
魔法少女リーア☆マジか!?　後編　5020
新の黒歴史。『魔女の夜（ヘクセン・ナハト）』の元カノ　――――　5078
聖☆お嬢さん聖地へ！　――――　5056
兵藤一誠と幽神正義、２人を合わせれば迷コンビ、『イッセーギ』の誕生だッ!?（前編）　――――　5118
兵藤一誠と幽神正義、２人を合わせれば迷コンビ、『イッセーギ』の誕生だッ!?（中編①）　――――　5138

第1章　旧校舎のディアボロスとダークバット
賞金稼ぎの少年

月が真円を描いている夜……
路地裏を激走する人影が2つあった
「はぁ……はぁ……もう奴は追ってこないか？」
「何とか撒いたようだ。ヒヤヒヤさせやがって」
男らしき2つの人影が安堵していると、1人の背中にナイフが刺さる
呻き声を漏らしながら倒れた1人の後ろから、1つの人影が歩いてくる
「盗賊の頭ナッシュ、はぐれ悪魔ガニメデ。お前らの首には高額の賞金が賭けられている。大人しく首よこせ」
月光に照らされたロックミュージシャン風貌の少年
直ぐにもう1人のお尋ね者の両足にナイフを投げつけて動きを止める
「まっ、待ってくれ……！俺にはまだ借金が残ってんだ……！せめてそれを返済するまでは――――」
少年が右腕を水平に掲げると赤い光が発し、腕が鎧に包まれていく

赤と黒を基調としており、禍々しい鋭利な爪がギラリと光る
「悪いけど職業上、お前らを殺さないといけねぇんだよ。それがバウンティハンター（賞金稼ぎ）だからな」
赤と黒の爪は2人のお尋ね者の首をはね飛ばした

ごく少数の者にしか知られてない酒場

そこは賞金稼ぎ、バウンティハンターの賞金引き換え所となっている
先程はねた首を袋に入れて携えた少年が扉を開け、真っ先にカウンターへと向かった
「よう新（あらた）。今日の獲物はどうだった？」
「上々かな？その内の1体がはぐれ悪魔だったから」
竜崎新（りゅうざきあらた）――――それが首を持ってきた少年の名前だった
主に人外を専門としたバウンティハンターで、時には人間の犯罪者も捕まえる
不可思議な力で仕留めた賞金首（人外も含む）は数百を超える
「はいよ、これが今回の報酬。光熱費と武器代を差し引いた額だ」

「３０万!?おい、この前よりちょっと少なくないか?」
「贅沢言うな。どうせお前カジノで儲けるんだから、それだけあれば充分だろ」
「この日本じゃ競馬ぐらいしか出来ないんだよ」
バウンティハンターと言っても全てが裕福とは限らない
捕まえても危険度が低い賞金首だったり、時間が経つ毎にレートが変わったりしてしまうので、バウンティハンターはあまり人気がある職業とは言えない
なので、報酬が少ない時はカジノや競馬で稼いだりしている
「まぁ確かに、外国と違って日本でカジノは違法だからねぇ。何で外国から離れて狭苦しい日本に?」
「分からねぇ。父さんからいきなり『1人で日本に行ってこい。そして生き抜いてみろ☆』って言われて追い出されちまったんだ」
「そら災難だったな。向こうで作った女達は今頃騒いでるんじゃないか?」
「多分」
新は賞金を受け取るついでにカクテルをオーダーする
本来なら新は未成年なので飲酒は法律で禁じられているが、バウンティハンターの場合は特別に許可されている
カクテルを一口飲み、賞金首のリストに目を通す

「この町に来てから稼ぎが悪くなったな～。それに誰もが弱く感じる」
「仕方ない事だよ。何せこの町はグレモリーの領土なんだから」
「グレモリー？誰だそれ？」
「知らないのかい？有名な悪魔、元７２柱の１つだよ。この町もグレモリーの管轄に加えられたから、犯罪者や賞金首が寄って来ないんだ」
新はふ～んと再びカクテルを一口
グレモリーと言う悪魔のお陰でこの町は平和を保っている
実際のところ、稼ぎが少なくなるのは遺憾だが感謝はしている
何故なら女を侍らす事が出来るから
「まぁ良いや。明日競馬で稼げばいいし。じゃあなマスター、ごっそさん」
５００円玉を置いて席を外す新
酒場を出て、側に駐車してあるバイクに跨がりエンジンを掛ける
流石にヘルメットを被らないと警察に捕まるので忘れずに被り、バイクを走らせる
これがバウンティハンター、竜崎新の今までの日常だった
グレモリーの領土に来てしまった事で、大きな波乱の歯車が回り始めた事など――
――本人は予想もしていなかった……

運命の幕開け

「へっへ～、プラス８５万も儲かっちまった。大穴はやっぱり怖いぜ」
時刻は既に夕刻
全レースを終えた競馬場のゲートから出る新
本日の戦績は１２レース中９レース勝利、３レース敗北、プラス８５万円の功績を叩き出した
更に投資した金額も少な目に抑えての戦績なので本人は勝ち誇った顔をしていた
「さて、町に戻って良い女を捕まえようか」
バイクで疾走する新の頭の中は、ナンパで埋め尽くされていた

自分好みの女性を見つけるべく町を徘徊するが今日は不調のようでなかなか見つからない
新はどうしようかと悩む

「まいったな。今日は捕まえられそうにないか……？いや、まだだ。まだ夜が残っている」

新は夜に女性を捕まえようと一旦家に帰る事に――――――

ザワッ……

――――――しようと思った矢先、妙な雰囲気を感じ取った

「何だ……？人間じゃない魔力が近くから感じる？」

周りを見回して気の正体を探っていると、２人のカップルが視界に入る

片方は高校生くらいの男子で、もう片方は同い年くらいで黒髪のスレンダー美少女

新が特に目を付けたのは美少女の方だった

「あの女、何か匂うな……妙な気の正体はあれか？」

新は気付かれないように尾行していくと、噴水のある公園に到着

隠れながらしばらく美少女の様子を伺っていると、いきなり美少女が全裸となった

「おおっ！ピンク色の乳首！」

間抜けな声を出してしまう新

裸になった美少女の背中から黒い翼が生え、露出過多の黒いボンテージに身を包む

（殆ど裸に近い）

「っ？あぁ、そうか。あれが堕天使って奴か。聞いた事はあるけど、本物は初めて見た

な」
バウンティハンターはいろんな賞金首に出くわすので魔物についての知識は頭に入れておかなければならない
悪魔や堕天使も例外ではなかった
「しっかし、良い色の乳首だったな。どうせなら全裸の方が――――あっ、あいつ死んだ」
感想を述べる途中で高校生男子が、堕天使が作ったであろう光の槍で腹を貫かれた
その後、堕天使は黒い翼を羽ばたかせて去っていく
新は「運が無かったな、あの高校生」と薄情な台詞を吐きながらも、堕天使の行方を追う事にした
紅い髪の女性が死体となった高校生の前に現れた事に気付かないまま……

「おかえり～♪レイナーレ様」
古ぼけた教会前でボンテージ堕天使を迎えたのは恐らく仲間の堕天使
数は2人、1人が妖艶な雰囲気を醸し出す美女でもう1人は金髪ツインのゴスロリ堕

天使

新は茂みに隠れて更に様子を伺う

「あの堕天使はレイナーレって言うのか。良い女なのに人殺しをするとは勿体ねぇ。それに後の2人もなかなかの代物だ――――教会前でのセッ○スに挑戦してみようか？」

新の頭は性交の予定で埋め尽くされていた

何を話しているのかを聞くため、もう少し近付こうとした

「そこにいるのは誰？隠れてないで出てきたらどう？」

「ありゃりゃ。バレてたのか」

堕天使の忠告に応じて新は茂みの中から姿を現す

「誰あなた？」

「おっと。人に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀だぜ？堕天使さん」

「人間の癖に生意気な態度ね。良いわ。あなたの最後の人生を飾る名前だから覚えておきなさい。私は至高の堕天使レイナーレ」

「名乗ってくれてサンキュー。俺は竜崎新――――バウンティハンターだ。せっかくだから、そこのお二人も名乗ってくれるかい？」

「あんた面白い奴～♪これから殺されるってのに名前を言うとか呑気過ぎ～。え～、う

ちは堕天使のミッテルトと申します～♪」
「私はカラワーナ。賞金稼ぎ風情がここに何の用だ？」
　新は余裕の笑みを見せながらゆっくりと堕天使の方に歩み寄る
「なぁに、良い女を放っておけなくてね。そしたら、そこの堕天使さんが人殺しを働いたから何でだろうな～って探求欲を解消しに来たんだ。どうだい？古ぼけた教会で話すより、深夜のバーかホテルで酒を飲み交わしながら熱く盛り上がらないか？」
「ププッ。あんた分かりやすいくらいエロい目ぇしてる～。心の中じゃうちらとセッ○スしたいとか思っちゃってる？」
「その通り。気の強そうな女は弄ったら良い声で啼いてくれる。あんたらはどんな声で啼いてくれるのか是非聞かせてもらいたい」
　堕天使３人は新を嘲笑しながら、黒い翼を生やす
「ふふっ。残念だけどあなたはここで死ぬのよ。至高の堕天使である私を侍らそうなんて、下等な人間としては大した度胸ね」
「貴様のような男は初めて見た。殺されると分かってても尚、逃げる素振りを見せないとは」
「今からでも逃げる～？まぁ逃げても追い掛けて殺すから、逃げられても全然無問題（モウマンダイ）だし。最後にお礼言っといてあげるわ。今世紀最大の笑いをくれてあっざ～す♪」

堕天使達が光の槍を作って新に投げつける
狙いは心臓辺り、くらえば無論命はない
そう――――くらえば……
「悪いが、死ぬつもりは毛頭ない」
ガシャァアアンッ！
堕天使の投げた槍は、新の右腕でいとも簡単に砕かれた
光の槍を砕いた鎧の右腕はレイナーレを指さす
「俺も礼を言わせて貰うぜ。ピンク色の乳首を見せてくれてあっざ～す」
ただの人間が光の槍を砕き、右腕に謎の鎧を装着している
そんな目の前の状況に堕天使達は驚きを隠せなかった
「まさか……あなたも神器（セイクリッド・ギア）を宿しているの!?」
「っ？　神器（セイクリッド・ギア）？こいつの事か？生まれた時からあった力なんだが」
「でも、そんな神器（セイクリッド・ギア）は見た事ないわ……何と言うか、禍々しい魔力を感じる……！
いったい何なの!?」
怒りを交えて新に質問するレイナーレ
しかし、新もこの力が何なのかは詳しくは知らない
ただ便利な力とだけ認識していた

「ちょっ、レイナーレ様!?アレ何か超ヤバそうじゃない!?」
「確かに……悪魔でも、我々堕天使でもない恐ろしい力が滲み出ている……今この場で殺しておかねば！」
焦ったカラワーナとミッテルトが光の槍を携えて突っ込んでくる
一方、新は鎧の右腕を水平に掲げる
すると、鎧の手の甲が赤と黒のオーラを発し、中から長い何かを出現させていく
「っ!?剣だと!?」
「ナニソレ！そんなん有り!?」
２人の言う通り、手の甲から出現したのは1本の剣だった
だがソレは普通の剣とは思えない装飾をしていた
凶暴そうな顔と蝙蝠の翼が混じったような柄に、そこから伸びる刀身はクリスタルの様に綺麗な輝きを放つ
新は出てきた剣を右手で掴み一振りする
「どうする？逃げるか？」
「だ、誰が人間ごときに逃げるか！」
「そうよ！調子に乗んないでくれる!?」
カラワーナとミッテルトは先程よりも強く大きな槍を形成して新に斬りかかる

ブンッ！バキィンッ！
新の振るう剣は光の槍を豪快に壊した
それと同時に剣から発する魔力と風圧がカラワーナとミッテルトを裸にする
「おおっ。あんたらもピンクの乳首か。あざっす」
小さく頭を下げる新だが、堕天使の２人はその場にへたれ込み裸体を震わせる
「ちょっと、あり得ないんですけど……。何なのこの力……？怖いよう……」
「身体の震えが止まらない……。まるで、私達の全てを喰らおうとするような感覚が全身を……」
完全に萎縮し戦意喪失となってしまった堕天使２人
レイナーレも異様な力に焦りを感じ始めた
「さて、もう１度乳首を見せて貰おうか。レイナーレとやら」
「ふ、ふざけないで！私はいずれ至高の堕天使になるのよ！あなたみたいな下等な人間ごときに負ける筈が無いわっ！」
「至高の堕天使ねぇ。じゃあこれから只のバウンティハンターに負けるあんたは、至高でも何でもないって訳だ？」
その言葉にキレたレイナーレは先程の１０倍の大きさはある槍を投げつける
しかも２本

「アハハハハッ！これならどう!?いくらあなたの力が強力でも、私の全力を注いだこの槍は簡単に」
コォオオオオオ……！
新が左腕にも鎧を展開し、剣の刀身を左手でゆっくりと下から往復で研ぐ
クリスタルの刀身は鮮血を思わせる赤に染まっていき、強い魔力も放つ
「ワリィ。破壊しま～す」
バキャァアアアンッ！
軽薄な台詞と共に、新の赤い剣は2本の巨大槍を粉々にした
全力を注いだ攻撃を簡単に破壊された事で、レイナーレは開いた口が塞がらなかった
「嘘よ……こんなの……！何で只の人間が……私の光を……!?」
「そろそろ降りてこい（ビュンッ！）」
空高く舞い上がった新は一瞬でレイナーレの背後に回り、右の蹴りで地面に落とす
回転しながら落下したレイナーレ
その眼前に着地した新は剣を構える
「ひっ！」
思わず目を瞑るレイナーレに高速の剣技を放つ新
新が剣を鎧の中に収めると、レイナーレのボンテージが一気に弾け飛び、再び彼女の

裸体が展開された
「やっぱ綺麗な乳首だな」
新は残りの鎧を解除してレイナーレの前に座る
「今から質問していくから、それに答えてくれ。妙な真似をしたら……悪戯(イタズラ)に走った方の腕を斬り落とす。あと、質問に全て答えてくれたら俺は帰る」
新はドスを利かせた目で堕天使3人を睨みつける
震える堕天使は新の言う通りにするしかなかった
「あっ。その前に、3人横に並んで手を後ろにやってくれるか？」
「……て、抵抗させないため？」
「いや、乳首を見たいだけ」
拍子抜けさせられる台詞だが、新は至って真剣な表情
レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトは横一列に並んで座って手を後ろにやった
新は彼女達の裸体を真剣に見つめ、乳房(おっぱい)を揉んでいく
「んっ……はぁんっ。まさかこんなエッチ事をしたいだけ？んんっ……！」
「うんっ。みょ、妙に上手い手つきだ……ぁんっ」
「おっぱい揉むなんて聞いてな――――ひゃぁんっ！」
「何人もの女を抱いてきた俺の手技は伊達じゃないからな」

　自信満々に自分の特技をカミングアウトする新
乳房(おっぱい)を揉みながら本題に入る
「まず1つめ、神器(セイクリッド・ギア)ってのは何なんだ？」
「神が特定の人間に宿らせる規格外の力の事よ」
「特定の人間に……。さっきの高校生を殺したのも、その神器(セイクリッド・ギア)が宿っていたからか？」
「そ、そうよ――――ぁんっ。中には悪魔や堕天使の存在を脅かす程の力を持った神器(セイクリッド・ギア)があるわ。私達は上からの命令で――――んんっ。危険因子と認識された神器(セイクリッド・ギア)を宿す人間を排除しているの」
「結局は人殺しか」
「人殺しって。うちらは出世の為に必死で――――んひぃぃぃんっ！」
　身勝手な言い分に少しムカついた新は、ミッテルトの桃色突起物を強く摘まんだ
　思わぬ不意打ちを食らったミッテルトは仰向けに倒れ息を荒らくする
「はぁ……はぁ……刺激強すぎぃ……。エッチ過ぎるぅ……」
「喧しい。どんな大層な理由で殺してるかと思ったら、出世の為かよ。出世したいなら指名手配されてる賞金首を捕まえろっての」
　新は生きる為に賞金首を捕まえたり殺したりしているが、殆ど理由は似たような物で

ある

「じゃあ2つ目、俺のこの力もその神器（セイクリッド・ギア）って奴なのか？」

「それは分からないわ。異質で異様な力を感じたから……」

レイナーレの言葉にカラワーナもただ頷くのみ

ミッテルトはまだ立ち直れないままだったが

「そうか。じゃあこれで質問終わりっ」

「な、なら……早くこの指をどけてぇ……。くすぐったいいぃ……！」

「まさか乳房じゃなく、乳輪に爪先を這わせるなんて――――はひんっ！」

新の手技及び指技は殆どの女性を蕩けさせる猛毒

レイナーレとカラワーナはその毒の餌食となり、女としての顔が出来上がってしまう

「そっちの、ミッテルトだったな。あんたは何かこれ以上弄ったら壊れそうだから止めといてやるよ」

一仕事終えた新は立ち上がってその場を去ろうとする

「待ちなさいよ。1つ聞かせて――――あなたはいったい何者なの？」

「さっきも言ったろ？俺はバウンティハンター。変な力を持った賞金稼ぎだ」

それだけ言って新は全裸の堕天使達に軽く手を振って去っていった

「屈辱ね……。只の人間ごときに負けた挙げ句、感じさせられた……」
「うちなんて乳首摘まれた～！マジ最悪！あいつ絶対いつかブチ殺す！」
「だがあの男の力に、我々は手も足も出なかった……奴を相手にするのは」
「心配無いわ。あの子がくれば、私は至高の堕天使になれる……その時こそ、あの男の最後よ……！」

「ようやく見つけた。忌まわしき男の息子。その身に宿りし皇（おう）の力――――返してもらうぞ」

リアス・グレモリーと眷属達

レイナーレ達と一悶着があってから数日が経ち、新は賞金引換所でマスターと駄弁っていた

「で、その女堕天使達を弄(いじ)り倒したって訳か？」

「まぁな。俺好みの良い女達だったぜ」

「はっはっ！相変わらずの鬼畜っぷりだな新！」

大笑いする新とマスター

席を外して賞金首のリストが貼ってある看板の前に行く

目ぼしい賞金首はいないかと探していると、『はぐれ悪魔』バイサーの名が新の目に止まる

「マスター。こいつはどんな賞金首なんだ？結構な値段が付いてるぜ」

「そいつは主を裏切ってこの町に潜伏し、人間をおびき寄せて喰らうはぐれ悪魔だ。しかも喜べ、上半身裸の女悪魔らしいぞ」

上半身裸と言う素敵なワードに反応するが、すぐにダメだなと首を横に振る

「女と言ってもはぐれ悪魔。欲望を晒け出し過ぎると心も肉体も醜悪になる……そう

言う化け物は圏外だ」
「ははっ。そうか」
新ははぐれ悪魔バイサーの手配書を手に取って懐(ふところ)にしまう
「マスター。こいつが何処にいるのか分かるか？」
「あ～。少し離れた廃墟で何人も行方不明者が出てるって聞いたから、多分そこじゃないか？」
「オッケー、サンキュー」
新は酒代を払ってバイクで目的地に向かう
生活費を稼ぐためと言う不純な動機を秘めて

目的の廃墟に到着した新
スタンドを立てて停め、頭部を守るバイクメットを外す
「ここが例の廃墟だな。確かに異様な気配と血の臭いが漂ってくるぜ……儲けさせて貰おうか」
新がいざ行かんと一歩足を踏み出そうとした時、彼のすぐ近くで魔方陣が浮かび上が

る

いきなりの事態に思わず飛び退いた新は警戒を強める

魔方陣から出現したのは、紅い髪を靡かせる女性と黒髪のポニーテールをした和風美女、剣を持ったイケメンに小柄な少女

そして何より、新を驚かせる者がいた

「――――っ!?お前、堕天使に殺された高校生じゃねぇか!どういう事だ!?

「堕天使!?お前、夕麻(ゆうま)ちゃんを知ってるのか!?」

――――ただ今新が説明中（省略し過ぎ）

「そう。偶然イッセーが殺される現場を見てしまったって訳ね」

「まぁ、そんなところだ。ところで、あんた達は何者だ?」

「あら。人に名前を聞く時はまず自分から名乗るのが礼儀じゃなくて?」

堕天使に言った台詞が自分に返ってくるとは……

新は苦笑いしながら自己紹介をする事に

「俺は竜崎新。職業バウンティハンターだ。その制服、確か私立駒王学園(くおうがくえん)って所のだよな?」

「えぇ、そうよ。じゃあ次は私達ね。祐斗、あなたから自己紹介してくれる？」
「はい。初めまして、僕は木場祐斗。駒王学園2年生です。えーと、悪魔です。よろしく」
「よろしくイケメン」
「……1年生。……搭城小猫です。よろしくお願いします。……悪魔です」
「変わった名前だな……ま、よろしく」
「3年生、姫島朱乃ですわ。よろしくお願いしますね？これでも悪魔ですわ。うふふ」
「おっぱいデカイな。よろしく」
「2年の兵藤一誠。最近悪魔になりました。よろしく竜崎さん」
「おう。イッセーって呼ばれてたな。俺も新って名前で呼んでくれねぇか？名字で呼ばれんのは何か嫌なんだ」
「分かった。よろしく新」
「よろしくな一誠」
　握手を交わす新と一誠
「最後は私ね。私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、新」
「――――っ！あんたがこの町を領土にしているグレモリーか。朱乃さんと同じくらい

デカイおっぱいだな。揉み応えありそうで」
「部長のおっぱいを揉むのは俺だ！」
一誠が新とリアスの間に割って入る
「あらあら。イッセーくんと同じくらいエッチな子ですわね」
朱乃の言葉に新は一誠にある質問をする
「一誠。お前、女の裸は見た事あるか？」
「ブッ！部長達の前で何聞いてんだ!?」
「あるのか無いのかどっちなんだよ？」
一誠はフフンと鼻を鳴らして自慢気に答える
「俺は一昨日の朝、部長のおっぱいを見た！」
「イッセー。あまり大きな声でそういう事を言わないで。流石に恥ずかしいから」
「じゃあよう。乳首を味わった事あるか？」
新の言葉で一誠だけでなく全員がフリーズした
「……何て？」
「そのままの意味だ。乳首を舐めたり、吸ったりして味わった事はあるか？」
「な……無い」
「乳輪を爪でなぞった事は？」

「……無い」
「乳首を摘まんだ事は？」
一誠は沈黙した
「無いか。俺は全部した事あるぜ。それだけでなく首筋、鎖骨、脇の下、わき腹、腿、尻。女の性感帯と言う性感帯を全て味わってきた」
「……ド変態」
小猫の言葉が新の心に刺さる
「とにかく、おっぱいを見ただけじゃあまだまだだな」
「そ、そこまで自信満々に語るって……お前まさか!?」
「ふんっ。１２歳で童貞を卒業した」
「ぐあああああああああああああああああっ!!」
新の童貞卒業発言に打ちのめされた一誠
完全に敗者の顔となっていた
「んんっ。ところで新。あなたはここに何をしに来たのかしら？」
「賞金首になっているはぐれ悪魔を殺しに来たんだよ。こいつだ」
新は懐に入れてた手配書を取り出してリアス達に渡す
実はリアス達も逃げ込んだはぐれ悪魔の討伐の為にここに来たのである

「つまり、殺した賞金首の肉体の一部を持っていかないと報酬が貰えないんだ」
「それがバウンティハンターの仕事なのね。でも、私達も大公から依頼を受けてるの。あなたにだけ手柄をやるなんて出来ないわ」
リアスは腕を組んでそう答える
これは頑固そうだなと、新は仕方無くはぐれ悪魔討伐をリアス達に任せる事にした
そして一同が廃墟の中に入る
中は血の臭いが漂っており、小猫は制服の袖で鼻を覆う
新は職業上、何度も嗅いだ事があるので気にしていなかった
「リアス・グレモリー。気になったんだが、悪魔って大昔に堕天使や神と長年争い合ったんだよな？戦争は数百年前に終結したって聞いたが、あれ以来どうしてるんだ？」
「確かに我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は大軍勢を率いて、永久とも思える期間、争い合ったわ。その結果、どの勢力も疲弊し、勝利する者もいないまま、戦争は終結したの」
「悪魔側も大きな打撃を受けてしまってね。二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てない程にね」
リアスの語りに祐斗が続き、更に朱乃が説明を続ける

「純粋な悪魔はその時に多く亡くなったと聞きます。しかし、戦争は終わっても堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。いくら、堕天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

俺が思ってるよりも深刻な状況になってるのか……と、新はしみじみと深く感じた

そこでリアスが再び語り出す

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取る事にしたの。それが『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』」

「イーヴィル・ピース？」

聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる新と一誠

重要そうなのでちゃんと耳を傾ける

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉も込めてね。それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていた訳だけれど。それは置いておくとして。主となる悪魔が『王（キング）』。私達の間で言うなら私のことね。そして、そこから『女王（クイーン）』、『騎士（ナイト）』、『戦車（ルーク）』、『僧侶（ビショップ）』、『兵士（ポーン）』と5つの特性を作り出したわ。軍団を持てなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与える事にしたのよ」

新は長話になりそうだと思いながらも、聞く姿勢を崩さない

更にこのチェスのルールが爵位持ちの悪魔に好評であること、『レーティングゲーム』

と呼ばれる上級悪魔同士の戦いが悪魔の間で大流行し、大会まで行われる程発展した事も聞かされた

悪魔の間では駒の強さ、ゲームの強さが地位や爵位に影響される程になっていると言う

「ん？今さっき転生っつったよな？一誠が生きているのは、その『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』が関係してるのか？」

「良いところに気付いたわね。そう、イッセーは『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』で悪魔に転生させたの」

「へ～」

「あっ、部長。俺の駒は、役割や特性って何ですか？」

「そうね――――イッセーは」

大事なところで言葉を止めたリアス

その理由は、何かが放つ殺意・敵意と言った空気が濃度を増したからである

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

不快極まりない声音が聞こえてきた

新はその方角を睨む

「はぐれ悪魔バイサー。あなたを消滅しに来たわ」

リアスがそう言うと異様な笑い声が辺りに響き、暗闇から上半身裸の女性が姿を現した
「おっぱい！」
「そこで反応するなよ。アレはどう見たってバケモンだ」
そう。現れたのは女性の上半身と獣の下半身を持った化け物
両手には槍が1本ずつ存在する
「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる！」
「こざかしいいいい！小娘ごときがぁぁぁ！その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染め上げてやるわぁぁぁぁ！」
小悪党感丸出しの台詞に新は『お決まりな奴だな』と溜め息をつく
「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。祐斗！」
「はい！」
近くにいた祐斗が命令を受けて、物凄い速さで飛び出す
「おぉっ。あいつ結構なスピードだな」
「新、お前反応出来たの!?」
一誠が驚いたような声を上げる中、リアスが悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の特性について説明を続ける

「祐斗の役割は『騎士(ナイト)』、特性はスピード。『騎士』となった者は速度が増すの。そして、祐斗の最大の武器は剣。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。2つが合わさる事で、あの子は最速のナイトとなれるの」

『騎士(ナイト)』の説明が終わると同時に化け物の両腕が切断されていた

悲鳴をあげる化け物の足元に小猫が近付いていく

「次は小猫。あの子は『戦車(ルーク)』。戦車の特性はシンプル。バカげた力と屈強なまでの防御力。踏みつけぐらいでは小猫を潰せないわ」

「本当だ。全然余裕で持ち上げてる」

化け物の足をどかした小猫はジャンプし、どてっ腹に拳を打ち込んだ

化け物は後方へ大きく吹っ飛び、瓦礫の下敷きとなる

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

「朱乃さんは『僧侶(ビショップ)』辺りか?」

「いいえ。朱乃は『女王(クイーン)』。私の次に強い最強の者。『兵士(ポーン)』、『騎士(ナイト)』、『僧侶(ビショップ)』、『戦車(ルーク)』、全ての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

なんというチートだ

「ぐぅぅぅぅ……」

「あらあら、まだ元気みたいですね？それなら、これはどうでしょうか？」
朱乃が手を上に翳(かざ)すと、化け物に雷が落ちた
激しく感電する化け物に対し、朱乃はただ不敵に笑う
「あらあら。まだ元気そうね？」
カッ！
再び雷が化け物に落ちる
一誠は完全にビビっていたが、新は軽く笑い声をあげていた
「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女は究極のSよ」
「何となく分かる。あれは天性のドSだ」
トンでもない事をサラリと言うリアスと新
「あれはSってもんじゃないでしょう！」
「普段は優しいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」
「それは良い。特に化け物相手に優しくする必要なんて無いからな」
「あなたもなかなかのSね」
「いやいや、それ程でも」

その間にも朱乃の雷攻撃は続き、一息ついたところでリアスが化け物へ近付く
「最後に言い残すことはあるかしら？」
リアスが聞くと、化け物から発せられたのは「殺せ」の一言だけだった
「そう、なら消し飛びなさい」
冷徹な一声の直後、掌（てのひら）から魔力の塊が撃ち出され、化け物は完全に消滅した
グレモリーの力を目の当たりにした新は思わず息を飲んだ
「これが……悪魔の戦いか……」
これにてはぐれ悪魔の討伐が終了
リアス達が帰り仕度を始めた時に、一誠は疑問を思い出した
「部長、聞きそびれてしまったんですけど。俺の駒……っていうか、下僕としての役割は何ですか？」
「『兵士（ポーン）』よ。イッセーは『兵士』なの」
紅髪のリアスは微笑みながらハッキリとそう答えた
簡単に言えば1番の下っ端
それを聞いた新は笑いを堪えるのに必死だったが、結局耐えきれず大爆笑していた

女を泣かす奴は敵確定

「オラァ！ロイヤルストレートフラッシュ！」
「だぁ～！また負けた～！」
「何でそんなに強いんだよ？イカサマしてんのか？」
「女同様、勝利の女神は俺に惚れてるんだよ！」
　他のバウンティハンターとポーカーをして金を稼ぐ新
　結局賞金首だったはぐれ悪魔は、リアスが消滅させてしまったので報酬は０
　討伐した後はオカルト研究部の部室に招待され、リアスがシャワーを浴びているのを堂々と観察しようとしたり、お茶を飲んだり、一誠に『新流、良い女とセッ◯スする時のルール４ヶ条』をレクチャーしたり、国民的人気アニメ『ドラグ・ソボール』を熱く語り合ったりで時間を潰してしまい、その日の報酬金額は過去最低記録を更新してしまったのだ
　なので現金を賭けた（本来は違法）ポーカーで勝負しているのが新の現状である
「よっしゃあ！もう一勝負やんぞ！」

「次こそ負かしてやる！」
「いつまでも勝てると思うなよ！」

「どうだ！ストレート！」
「ちくしょう……ワンペア……」
「俺なんか役無しだ～（泣）」
「新、お前はどうなんだ？」
新は自分の手札５枚を上に掲げ、勢い良くテーブルに叩きつけ公開する
「Ｑ（クイーン）のフォーカードぉ！勝利の女神は俺のモノだぁ
あああああ！」
「うがぁあああああ！」
その日は閉店までポーカーをやり通し、相手プレイヤーの財布を空っぽにした

次の日、昼間は特にこれと言った用事が無かったので町で女性達とお茶を飲んだりキスしたりして時間を潰し、夜はバイクで移動しながら予定を練っていた
目ぼしい賞金首はいなかったので、このままキャバクラに行ったり、また賞金引換所のバウンティハンター達とギャンブルをするつもりでいる
「今日はいつになく良い夜だ。最高のセッ○スにありつけるかもしれ――――――」
キキィッ！突然バイクを一軒家を少し過ぎた所でストップさせる新
端に駐車してメットを外してから一軒家を見る
「何だ？血の臭い？それにこの異様な気配は……」
一軒家から漂う変な空気と血の臭い
ジッと見ていると中から耳を貫くような怒声が聞こえてくる
「はぁぁぁ

逆さに貼り付けられ、内臓が飛び出した死体
足から血を流して膝をつく一誠
服を裂かれ、乳房を揉みしだかれてる金髪のシスター
シスターを押さえ付けて乳房を揉みしだく白髪の少年神父
それを見て、新は1秒で答えを導き出した
このクソ神父殺す……と
右腕に鎧を展開し、視認されないスピードで少年神父を殴り飛ばす
神父は家具を巻き込みながら壁に大激突
「……新?何なんだその腕は!?」
「んな事より、お前足は平気なのか?」
「イッセーさん!」
金髪のシスターが一誠に近付き負傷した箇所に手を当てる
すると、シスターの手のひらが淡い緑色の光を放つ
光に包まれた一誠の傷が治癒されていく
「スゲェなあんた。おっぱい丸出しで傷を治癒するとは恐れ入ったよ」
「え……?あっ!いやんっ!」
やっと自分の格好に気が付いたシスターは今まで見えていた乳房を隠す

勿論、一誠も今まで見ていた
「ごめんなさい、イッセーさん。私なんかの為に……」
「いや、大丈夫だアーシア。俺こう見えて結構頑丈だから」
「その割にはさっき膝をついていたよな？」
新がツッコミを入れた後に家具を飛び散らせる神父の姿があった
「いってぇ、いってぇえええええなぁあああああ！このクソ悪魔に加担するクソ人間がぁあああ！このフリード様を無視して盛り上がってんじゃねぇえええよぉおおおおおっ！」
「うるせーよクソ神父。こんな良い娘を泣かしてんじゃねぇ。俺の前でふざけた真似をした罪に対する判決は――――拳百万発で顔面整形の刑だ」
ゴキゴキと音を鳴らす新の右腕
一誠はハッと気付き、新の右腕について疑問をぶつける
「新、その腕――――俺と同じ神器（セイクリッド・ギア）か!?」
「俺にも分からん。ただ神器（セイクリッド・ギア）とは違う力らしいんだ」
「なぁにくっちゃべってやがんだぁあああ！あぁあああああ!?」
クソ神父フリードが光の剣で斬りかかってきたが、新は鎧の右腕でガード
新は目を細め、光の剣を薙ぎ払って鳩尾に拳を叩き込む

威力を増大させる為にインパクトすると同時に捻りを入れる
そのせいでフリードは口から吐瀉物を出す
更に新は追い打ちに、左足にも鎧を展開してフリードの脇腹を蹴る
1度地面にバウンドしてから再び壁に激突
力の差は歴然だった
「つ、強ぇ……！」
「ゲホッ、ゲホッ！ふっざけんな！ふざけてんじゃねぇよっ！このクソがぁあああああっ！」
「黙れ」
低い声音を放ってフリードを踏みつける新
左手で首を掴んで持ち上げ、鎧の右拳をブチ込もうとする
その瞬間、側で魔方陣が赤い光を放つ
見覚えのある紋章からリアス率いるグレモリー眷属達が現れた
「兵藤くん、助けに来たよ――――って、竜崎くん来てたんだ」
「あらあら。またお会いしましたわね」
祐斗がスマイルを送り、朱乃が微笑みながら挨拶
小猫は無言で新の方を見ていた

「イッセー、ゴメンなさいね。まさか、この依頼主のもとに『はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）』の者が訪れるなんて計算外だったの」
　リアスが一誠に謝る
「『はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）』？……っ！そういえば」
　ポイッとフリードを放り投げると、新は常備している手配書を広げる
「思い出した！こいつ危険度上位クラスの賞金首、フリード・セルゼンじゃねぇか！しかも賞金額は３００万！ラッキー！」
　意外な事にクソ神父フリードは賞金首となっていた
「リアス・グレモリー。悪いがこいつの始末は俺に任せてくれないか？バウンティハンターとして、これ程の賞金首を見逃す訳にはいかねぇんだ」
「本当なら私が消し飛ばしてあげたいけれど、良いわ。その代わり質問に答えてくれる？あなたのソレは神器（セイクリッド・ギア）なの？」
　リアスが新の右腕を指差す
　一誠からも同じ質問をくらったよと前置きをしてから話す
「以前俺が話した堕天使によれば、神器（セイクリッド・ギア）とはまた違う異質な物らしい」
「でも、ソレが神器（セイクリッド・ギア）でないとするなら――――――いったい」
「――――っ！部長、この家に堕天使らしき者達が複数近づいていますわ。このままで

は、こちらが不利になります」
何かを察知したのは朱乃だった
堕天使と言う言葉で新が思い浮かぶのはレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの3人
だが今回はその気配に加えて数が増えている事に気付く
「……朱乃、イッセーを回収しだい本拠地へ帰還するわ。ジャンプの用意を」
「はい」
「部長!この子も一緒に!」
一誠がアーシアの手を持ってリアスに言うが、魔方陣を移動出来るのは悪魔だけで、
しかもリアスの眷属しかジャンプ出来ない事を言われてしまう
「イッセーさん。また、会いましょう」
「アーシア!」
シスターは涙を浮かべながらも、笑顔を見せて一誠の手を優しく突き放す
本当なら自分も一緒に逃げたいのに、これ以上一誠を危険な目に遭わせない為に自ら
……
新は強い女だなと心の中で感じた
そして魔方陣が光り、リアス達はその場から姿を消した
新もフリードの首根っこを掴んで逃走を図る

「おい。アーシアって言ったな?あんたも逃げるぞ」
新はアーシアの手を取ろうとしたが、アーシアは手を伸ばす素振りを見せなかった
「あなたも……逃げてください。私のせいで、これ以上ご迷惑をお掛けする訳にはいきません……」
「あんた何でそんな事を言うんだよ?」と言おうとした新だが、彼女の真剣な涙に言葉を失った
新は知っている……この涙は覚悟を決めた者の、自分の命を懸けた者の涙だと
「俺もまたまだ弱いのかな……なら、逃げたい時はいつでも頼れ。俺にも一誠にもな。何となく分かる。あいつは必ずお前を助けに来る――――もちろん俺も一緒だ」
新は賞金首を抱えて、崩壊した壁から脱出した

「あのシスターが『聖母の微笑(トワイライト・ヒーリング)』の宿主か。悪魔や堕天使、全ての生物に癒しを与える神器(セイクリッド・ギア)……利用しない手は無いな」

新、一誠、アーシア

「なにぃ!?逃げられたぁっ!?」

「そうなんだ。今日の昼、ビッグロックに搬送する予定だったんだが、留置所から脱走したと政府から連絡があった」

危険度が上位クラスを越える賞金首は『犯罪者の棺桶』の異名を持つ施設『ビッグロック』に収容され、処刑されるか死ぬまでは絶対に外には出られない

『ビッグロック』に収監されたら終わりだが、その前に逃げられたらしい

「ちょっと待て！フリードは昨夜、俺がボコボコに痛め付けたんだぞ!?まともに動ける状態じゃなかった筈だ！」

「あぁ、その通り。留置所を襲撃されたんだ」

「襲撃？いったい誰が？」

「それがよく分からないんだ。悪魔でも、堕天使でも、妖怪ですらない化け物だったらしい……留置所にいた検査官が全員殺られたよ」

新の脳裏に何かが引っ掛かる

フリードは『はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）』、しかも堕天使との繋がりがある事は昨夜の朱乃の言葉で立証されている

普通なら脱獄の手助けをしたのは堕天使だと考えるのが道理

だが実際は違った……謎の化け物がフリードを回収した

「何か手掛かりは無かったのか？」

「唯一あるとすれば、コレだけだ」

そう言うと、マスターは一枚の写真を見せる

写真には一輪の薔薇が死体に突き刺さっていた

「薔薇……？」

「そう。殺された検査官全員の死体に突き刺さっていた。しかも妙な薔薇だ。花の半分が赤、もう半分が青で占められてる」

写真の薔薇もマスターが言った通り、妙な色合いだった

普通の薔薇とは違う不気味さを感じさせる

「確かにこれだけじゃ分からねぇな」

「そういう事だから、報酬を出す訳にはいかないんだ」

「くそぅ……３００万が……！」

新は報酬を貰えなかった怒りでワイングラスを握り潰してしまう

その手から血が滴り落ちるが、怒りでそんな事を気にする余裕など無かった

新は公園のブランコに座り、缶コーヒーを飲みながら揺れていた

今まで新が捕まえた、殺した賞金首の中で逃げられた者は１人としていなかった

今朝その記録を破られた事に多少ではあるがショックを受けた

「あ～……。気が滅入るわ……。俺の３００万円が泡となって弾けた……」

逃げられた事より、報酬を貰えなかった方のショックが大きかった……

缶コーヒーを飲み干し、近くにあったゴミ箱へシュート

狙いがズレ、弾かれた缶は地面を転がる

「……今更落ち込んでも仕方無いな。逃げたならまた捕まえ――――――いや、次は殺せば良い。脱獄の首謀者も殺す。これで報酬が貰える！」

新は気を取り直してブランコから離れ、落ちた缶を拾ってゴミ箱に入れる

前向きに考えれば良いと、新は帰ろうとした

「ん？一誠とアーシア？」

ベンチに見覚えのある2人が座っていた

リアス・グレモリーの眷属、兵藤一誠とシスターのアーシア

何やら様子がおかしかったので、新は気になって2人のもとへ走っていった

新と一誠はアーシアの口から、「聖女」と祭られた彼女の末路を聞いた

生まれてすぐに両親から捨てられた事……

教会兼孤児院で育てられた事……

八つの頃に不思議な力、神器（セイクリッド・ギア）が宿った事……

そこからカトリック教会の本部に連れて行かれ、「聖女」として担ぎ出された事……

皆が裏で自分の力を異質なものを目で見ている事を……

怪我をしていた悪魔を助けた事……

それが原因で「聖女」は、今度は「魔女」と恐れられ、カトリックから捨てられた事……

誰一人、教会で自分を庇ってくれる人がいなかった事……

神から力を授かったと言うのに、あまりにも酷い仕打ちだった

神は助けてくれなかった……

神への祈りと感謝を一度も忘れた事などない少女を……神は助けてくれなかった

彼女の救いは「はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）」の組織、つまり堕天使の加護しかなかった……

「……きっと、私の祈りが足りなかったんです。ほら、私、抜けているところがありますから。ハンバーガーだって、1人で買えないぐらいバカな子ですから」

アーシアは笑いながら涙を拭った

一誠は慰めようにも、かける言葉が見付からない

新は拳を震わせていた

それは神に対しての怒りだった

アーシアは誰よりも神に敬意を払っているのに、誰よりも救いを求めているのに、何

もしてやらない神に憎しみを覚えた

新は神の存在など信じない男だが、この時ばかりは――――自分の中ではこの世にいないと決めつけている神に怒りを覚えた

ふざけんじゃねぇ

低い声音で空に向かって暴言を放ち、側に立っていた木を拳で破壊する

「一誠。神に見せつけんぞ。アーシアに何もしなかったクソ神様に、人間だろうと悪魔だろうと――――助ける事が出来るってな」

一誠も頷き、新と一緒にアーシアの手を取る

「アーシア、俺が――――俺達が友達になってやる。いや、もう友達だ」

一誠の言葉にアーシアはキョトンとしている

「昨夜言ったろ？俺や一誠を頼れって。気軽に遊びたい時も、何かあった時も呼べばいい。携帯の番号も教えてやる」

「……どうしてですか？」

「どうしてもこうしてもあるもんか！今日一日、俺とアーシアは遊んだだろう？話しただろう？笑い合っただろう？なら、俺とアーシアは友達だ！新だって頼れって言ってるんだ！新もアーシアの友達だ！」

「……それは悪魔の契約としてですか？」

「違う！俺とアーシアと新は本当の友達になるんだ！わけの分からない事は抜き！そういうのは無しだ！話したい時に話して、遊びたい時に遊んで、そうだ、買い物も今度付き合うよ！本だろうが花だろうが何度でも買いに行こう！な？」

アーシアの目から涙が溢れ出る

しかし、その涙は悲しみの塊ではなく――――――喜びを表す涙だった

新も聞いててむず痒くなったが、神にざまーみろと心の中で罵り、一誠と共に笑う

「……私と友達になってくれるんですか？」

「ああ、これからもよろしくな。アーシア」

「俺も忘れず、よろしくな」

こうして、アーシアに初めての友達が２人も出来た

「無理だな」

突如飛んでくる否定の声

新と一誠が声のした方向へ顔を向ける

そこには青い薔薇を持つスーツ姿の男と、一誠を殺した堕天使レイナーレがいた

「ゆ、夕麻(ゆうま)ちゃん……？」

「お前、あの時の堕天使か。それと――――そこのお前は誰だ？」

「お初にお目にかかる。私の名は村上京司(むらかみきょうじ)。挨拶代わりにこの薔薇をプレゼントしよう」

村上京司と名乗る男が薔薇を投げつける

投擲された薔薇は新の腕に突き刺さった

「ぐあっ！……っ！？」

新は一瞬、目を疑う光景を見てしまう

腕に刺さった青い薔薇が赤に変色していく

あの時、写真で見たのと全く同じ薔薇を……

薔薇を引っこ抜いて捨てると、新は村上京司に『ある事』を聞く

「まさか……お前か？留置所を襲撃して、フリードを逃がした化け物ってのは」

「その通りだよ。彼はなかなかの戦闘狂だから使えると思ってね」

「テメェのお陰で……俺は報酬を貰えなかったんだぞ……！覚悟しとけよ……！」

「それは留置所の検査官が間抜けなだけだ。あっさり死んでしまうと、私の薔薇が綺麗な赤に染まらない」

死人を侮辱するような発言に、新は嫌悪感をむき出しにする

「どういう意味だ？」

「私の持つ青い薔薇は魔性の薔薇でね。生物の血を吸って赤に染まるのだよ。徐々に赤く染まっていく様子は、まさにこの世の物では表せない美しさを見せてくれる。だが最近は、良い獲物にありつけなくて落胆しているのだよ」

「その薔薇を青から赤に変える為だけに、検査官全員を殺したのか？」

「そうだ。私の旺盛な探求欲は諦める事を知らない。そこの少年と君の血は――――――この薔薇をどんな赤に染めてくれるのか、気になって仕方がない」

青い薔薇を顔の前に寄せ、ニヤリと笑う村上

事情をよく知らない一誠もこれだけは分かる

「あんたイカれてるんじゃないのか!?その薔薇の色を変える為だけに人を殺して来たのか！」

「純粋な探求欲を満たす為には、多少の犠牲は付き物だ。何を怒る必要がある?」

「ふざけんな！そんな勝手な理由で殺されてたまるか！セイクリッド・ギア！」

一誠が叫ぶと、左手に赤い籠手が出現

新も右腕に鎧を展開して戦闘体勢を取る

「上の方々にあなたの神器（セイクリッド・ギア）が危険だからと以前命（めい）を受けた訳だけれど、どうやら上の方々の見当違いだったようね」

レイナーレは心底おかしそうに一誠を嘲笑う

「私も神器（セイクリッド・ギア）に関して多少の知識はある。そいつは確か『龍の手（トウワイス・クリティカル）』。所有者の力を

一定時間、倍にする神器（セイクリッド・ギア）。転生悪魔ごときの力が倍になったところで私には勝てない。まさに下等生物にピッタリの代物だ」

村上も一誠を嘲笑する

「弱い神器（セイクリッド・ギア）って、お前とことん運がねぇな……。一度元カノに殺されてるし……」

「憐れみの目を向けるなーっ！ちきしょう、今は何でも良い！神器（セイクリッド・ギア）！動きやがれ！俺の力を倍にしてくれんだろう!?動いてみせろ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

籠手から機械的な音声が発した

一誠の体内に力が流れ込むが、村上が掌から生み出した巨大な薔薇に腹部を突き刺される

「ごふっ！」

「一誠！」

「君にはこれをプレゼントしよう」

バババッ！今度は掌から無数の薔薇の花びらが新の体を切り裂いていく

負傷した一誠に気を取られていたので、まともにくらってしまい後ろに吹っ飛ぶ

「どうだね堕天使くん？私が協力すれば、いとも簡単に『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』が手に入る」

「ええ。アーシア。その悪魔と人間を殺されたくなかったら、私達と共に戻りなさい。あなたの神器（セイクリッド・ギア）は我々の計画に必要なのよ」

「『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』は希少価値のある神器（セイクリッド・ギア）らしいんだ。応じないのなら、そこの少年達は死ぬ事になる」

一誠の傷を治すアーシアに冷酷な提示をしてくる

一誠が喋る前にアーシアは堕天使と村上の提示を受け入れた

「アーシア！」

「イッセーさん。今日は一日ありがとうございました。本当に楽しかったです。新さん。私と友達になってくれてありがとうございました」

「待てアーシア……！」

アーシアは村上とレイナーレの方へ進み出す

「いい子ねアーシア。それでいいのよ。問題ないわ。今日の儀式であなたの苦悩は消え去るのだから」

不吉極まりない単語、一誠はアーシアへ叫ぶ

「アーシア！待てよ！俺達は友達だろう！」

「はい。こんな私と友達になってくれて本当にありがとうございます……さようなら」

別れの言葉を告げられ、アーシアの手を取る村上

そしてレイナーレ、村上はアーシアと共に空の彼方へと消え去る

あとに残されたのは黒い羽と薔薇の花びらだけだった

一誠は生まれて初めて自分の非力さを呪い、新は悔しさの末に拳を地面に叩き付けた

「やっと、やっと『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』が手に入った……！これで私は今夜、至高の堕天使になれるわ！アハハハハハハハッ！」

教会に着いたレイナーレは歓喜しながら儀式の準備に取り掛かる

カラワーナとミッテルトも地位を約束されたので張り切って準備を進める

『そうだ。今の内に喜んでおけよ堕天使……。今夜の儀式で彼女は救われる――――――闇人（やみびと）としてな……』

教会へ殴り込み！

「――――――ここか」

教会前に停まる一台のバイク

バイクメットを外して教会を睨み付ける男――――――新だ

村上と名乗る男にやられた傷を高額な回復薬で治療し、アーシアを取り戻す為にやってきた

「女を見捨てる、守れなかったなんて男の恥だ。ぜってぇ取り戻す」

両腕・両足に鎧を展開させ、万全の戦闘態勢で教会に入ろうとする

そこで新に呼び掛ける声がしたので、その方向を向く

「祐斗、小猫、一誠。やっぱり考える事は同じか」

「当たり前だ。絶対にアーシアを助ける」

「僕達も手伝うよ」

小猫も小さく頷く

無口な娘だなぁと思いつつも、新は数が足りない事に気付く

「おい。リアス・グレモリーと朱乃さんがいないじゃねぇか」

「2人は別行動を取ってるよ。それより気付いているかい?教会から妙な異質の魔力が出ている事に」

祐斗の言葉通り、教会から変な力が零れている

悪魔歴が浅い一誠でも気付く程の魔力が……

「これから教会に攻め込む訳だが、一誠は大丈夫か？そこの２人は戦闘慣れしているだろうが――――お前はどう見てもド素人だ」

「た、確かに俺は戦闘慣れしてないし。木場や小猫ちゃんより劣るかもしれないけど」

「兵藤くん。部長が仰ってた事を忘れたの？君には『プロモーション』がある。『兵士（ポーン）』特有の力がね」

「『プロモーション』？」

一誠の特性『兵士（ポーン）』には特別な力、『プロモーション』が備わっている

『プロモーション』とは普通のチェス同様で『兵士(ポーン)』が相手陣地の最深部へ入った時、『王(キング)』以外の全ての駒に昇格する能力である

「なるほど。つまり、リアス・グレモリーはここを敵の陣地と認めたって訳だ」

「ああ。朱乃さんの『女王(クイーン)』は負担が掛かり過ぎるからまだ無理らしいけど、それ以外なら変化出来るんだ」

「それなら少しぐらいはマシになるな。ってか、自在に能力を変化させられるから羨ましいぜ」

「なら竜崎くんも、部長の眷属になる?」

祐斗から出た言葉に新と一誠は驚く

「出来んの?一度死なないといけないとか」

「ハハッ。そんなの無いよ。それに部長は君に興味津々なんだ。神器（セイクリッド・ギア）とは違う力を宿している君を気に入ったらしくて」

「それは光栄だな。有名な悪魔の令嬢に興味を持たれるとは。でも、今はその話は後にして――――――行くぞ」

新達一行は教会の扉を開け、一番怪しいと祐斗から教えられた聖堂まで走る

この時点で敵は侵入に気付いている筈、後戻りの選択肢はもう存在しない

そして聖堂の中へ足を踏み入れる

長椅子と祭壇、頭部が破壊された聖人の彫刻が不気味な雰囲気を醸し出していた

「やあやあやあ～！ご対面！再会だねぇ！感動的だねぇ！」

柱の陰から出てきたのは、村上が救出した神父フリード

「よおクソ神父。今朝はよくも脱獄なんかしてくれやがったな」

「おぉやおや〜!テメェは俺をボッコボコに痛め付けてくれたクソ人間さんじゃあ〜りませんか!しかもそこの雑魚悪魔とご一緒ですか〜!俺としては二度会う悪魔はいないって事になってんだけど!ほら俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見で首チョンパ、だったからね〜!でも、お前らが邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ街道まっしぐら!ダァメダァメ〜。人の人生設計をブッ壊しちゃ〜。だからさ、ムカつくんだよ。俺に恥をかかせたクソ悪魔のクズどもとクソ人間がよぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!」

「笑ったり落ち込んだりキレたり、忙しい奴だな。肺活量どれぐらいあるんだ?」

「おい!アーシアはどこだ!」

一誠の言葉にフリードは祭壇を指さす

「んー、そこの祭壇の下に地下への階段が隠されてございます～。そこから儀式が行われている祭儀場へ行けますぞ～。お前らブッ殺せば良いから、先に言っといてやります～。それに」

フリードが指を鳴らすと、また柱の陰から何かが飛び出し、新達の前に現れる

「っ!?何なんだこいつら!?」

一誠は驚愕する

眼前に現れたのは、今まで見た事もない三匹の人型化け物

外見はネズミに近いが、全身から出る魔力と殺気は凄まじかった

「どうどうどう！すげぇっしょ!?俺を脱獄させた村上の旦那が寄越してくれた化け物だ

ぜ～!こいつらはそこらの悪魔よりも強いし、何よりさっき人間をバリボリ喰らう姿にシビレビレ～!こんな素敵なプレゼントを贈ってくれてサンキューっ!」

ネズミの化け物は裂けた口からヨダレをダラダラと垂らしまくる

４人は一斉に不快感を覚えさせられた

「新。あの化け物――――何なのか分かる?」

「流石に見た事ねぇけど、何か……村上って奴の魔力の波動と似てる気がする」

一誠は目を見開く

村上と同じような魔力……ならば村上の正体は、この化け物と同じ類いなのか?

一誠は頭は疑問だらけとなるが、今は考えてる暇などない

目の前の敵を倒して祭儀場へ進む、ただそれだけだ

「俺があのネズミどもを殺る。お前らはクソ神父を」

「っ！無茶だ！あんな化け物を三匹同時に」

「心配すんな。こっからは本気で殺る。お前らも死ぬなよ？」

「わ、分かった！セイクリッド・ギア！」

一誠が左手に赤い籠手を装着

祐斗も鞘から剣を抜き、敵に剣先を向ける

小猫は自分の何倍もの大きさがある長椅子を持ち上げていた

「ぶっ！なんつー怪力！流石『戦車（ルーク）』だな！」

「……潰れて」

怪力少女は長椅子を敵へぶん投げる

三匹のネズミは散らばって回避し、フリードは懐から出した光の剣で一刀両断

ネズミ達が奇声を発しながら新に襲い掛かる

「ネズミは大人しくチーズでも食い漁ってろ!」

空中へ飛び出し、ネズミ一匹に鎧の蹴りをぶち込む新

一匹は壁に激突した

着地直後、残り二匹の爪や噛みつき攻撃のラッシュに怯まず回避

隙が出来たところを爪で切り裂く

「ギャシャァァァァァッ！」

悲鳴に近い鳴き声をあげる二匹のネズミ

新の背後から、さっき蹴り飛ばしたネズミが突っ込んできた

新は気配を察知して避ける

攻撃が単調過ぎるので、かわすのは簡単だった

「じゃあ――――そろそろ殺すか」

右手を前に出し、鎧の中から剣を取り出す

出した剣を持ち、刀身を左手で擦る

コォオオオオオオオ……!

刀身が赤い色を帯びていき、三匹のネズミの方へ走る

三匹の内、一匹が果敢に突っ込んで来るが――――――新の振る剣で首を切断された

２つの切り口から噴き出す鮮血が新と剣に付着する

「ギャシャアアアアアアッ!」

「はい二匹」

今度は斜めに切り裂き、二匹目のネズミを２つのパーツに分断

三匹目は鋭利な爪を伸ばし、斬りかかってくる

新は爪を剣で防いでいき、片手を斬り落とす

斬られた手を押さえる化け物の手

新はもう一本と言わんばかりに残った手を切断

狼狽するネズミの顔面に剣を突き刺し抉る事で、完全に化け物を沈黙させた

「おい、こっちは終わったぜ。そっちはどうだ?」

新が真後ろを向くと、フリードが左手の銃を乱射しており、祐斗はそれを避けながら攻撃を仕掛けていた

フリードも祐斗の動きを捉えて斬撃を受け止める

「やるねキミ。かなり強いよ」

「あんたもサイコーだぜ！本気でブッ殺したくなっちまうよ！」

鍔迫り合いを中止して距離を取る２人

新は「クソ神父、あいつ噛ませじゃなかったのか」と少しだけ感心する

「じゃあ、僕も少しだけ本気を出そうかな」

祐斗の剣に黒い闇がまとわりつく

舌を出しながら斬りかかってくるフリードに対し、祐斗は闇の剣で迎え撃つ

すると、光の剣が徐々に形を失っていく

「な、何だよこりゃ！」

「『光喰剣（ホーリー・イレイザー）』、光を喰らう闇の剣さ」

「て、テメェも神器（セイクリッド・ギア）持ちか!?」

祐斗も神器（セイクリッド・ギア）の所有者だった事に新と一誠は驚く

しかも闇の剣、イケメンにピッタリの武器だった

光の剣は完全に形を失い、一誠はここしかないと言わんばかりに駆け出した

「神器（セイクリッド・ギア）！動けぇぇぇ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

籠手の宝玉から音声が発せられ、更に――――

「プロモーションッ！『戦車（ルーク）』っ！」

一誠は『戦車(ルーク)』へと昇格

フリードが放つ光の弾丸を物ともせず突っ込んでいく

「『戦車(ルーク)』の特性!それはあり得ない防御力と、バカげた攻撃力だぁあああああああっ!」

一誠の左拳がクソ神父を後方の祭壇まで吹っ飛ばした

「あの時はよくもアーシアに酷い事してくれたな。一発殴れて少しスッキリしたぜ」

「ふっざけんな――――――ふざけんなよこのクソがぁぁあああああああっ!」

フリードは二本目の光の剣を取り出すが、新は「突撃隣の朝御飯!」と、掌から赤い塊をフリードに撃ち放つ

「イタァイッ!」

魔力の塊をくらったフリードはまた後方へ吹っ飛ばされ、新、一誠、祐斗、小猫が周囲を囲う

「ヒュウッ。俺的に悪魔に殺されるのだけはカンベンしてチョンマゲ！村上の旦那から貰った化け物もバラバラ祭りになっちまったし！つーわけで、はいバイチャ！」

フリードが閃光弾を使って姿を消す

完全に逃げられたが一応は勝利

４人は祭壇の隠し階段を下りていった

隠し階段を下りてくと、今度は一本道

進んでいくと、先に大きな扉が見えてくる

「この道の奥……。血の匂いがする……それもたくさんの」

小猫が鼻を押さえ、顔を歪めながら答える

「血の臭い?何でそんな臭いが」

「今更考えてもしょうがない。早くアーシアを」

一誠の言葉に3人は頷く

扉を開けると、血の臭いが鼻を貫く程強くなる

彼等の目に信じられない光景が飛び込んできた

「な、何だこれ……？何がどうなってんだ……？」

さっきのネズミの時と同じように驚く一誠

それもその筈、辺り一面に堕天使の部下であろう神父達が死体となって転がっていたのだ

首が無いもの、噛み千切られたもの、引き裂かれたもの等が薔薇を咲かせて地面を埋め尽くす

更には3人の女堕天使が全裸で倒れており、薔薇を持つ男が十字架の傍に立っていた

十字架に貼り付けられている少女に向かって一誠は叫ぶ

「アーシアァァ！」

「……イッセーさん?イッセーさん……」

貼り付けられた少女が涙を流す

薔薇を持つ男、村上京司は拍手をする

「感動の対面と言うものか。いやはや、実に滑稽だ」

「村上、こいつはいったい何なんだ?昼間は堕天使と共闘していたってのに、何でこいつらは傷だらけなんだ?」

新がゆっくりと体を起こすレイナーレ達を指差しながら言う

村上は笑いながら答えた

「簡単な事だ。本来なら神器(セイクリッド・ギア)を抽出する儀式を行う予定だったんだが、神器(セイクリッド・ギア)を抜かれた者は死んでしまうのでね。それは困るから裏切らせて貰ったのだよ」

「神器（セイクリッド・ギア）を引き抜く。それが儀式の正体か」

「そうだ。だが、私はそんな野蛮な方法よりも彼女を救ってやるのだ――――闇人（やみびと）に転生させてな」

聞き慣れない単語に全員が理解出来なかった

「闇人？聞いた事ないね。それがあなたの正体なのかい？」

「私だけではない。お前達を襲った三匹のネズミがいただろう？そいつらは闇人に転生させた人間だ」

村上の言葉に全員が驚いた

先程、新が殺した化け物――――あれは元人間だった

「どういう事だ!?」

「少し我々についての話をしてやろう。闇人とは――――万物が秘める邪(よこしま)な感情、あらゆる欲望が集結し、覚醒する事で誕生する魔族。大昔、闇人の先祖であり王とも言える『初代キング』は、闇人こそが冥界、天界、人間界を統治出来る唯一無二の種族だと断言し、数々の魔族を絶滅に追い込んだ。最も目をつけたのが悪魔、天使、堕天使との三竦みの戦争。疲弊したところで上位勢力を滅ぼせば簡単に冥界、天界、人間界を支配出来た。だが、ある男のせいで闇人の勢力の歯車に狂いが生じ、そこを一時団結した三大勢力に突かれ、『初代キング』は封印されてしまった」

村上は淡々と長話を続ける

「支配欲を持つ純粋な闇人は少なくなり、他の種族との共存や隠居と言う逃げ道を選んだ者も出てきてしまった。これではいずれ、闇人の血は歴史から消え去ってしまう。そこで『初代キング』の息子である『二代目キング』はある事を提案したのだ。悪魔達が人間を使って勢力を増やすなら――――我々も同じ方法を取れば良いと」

それを聞いた新は奴の意図を理解した

「まさか、アーシアを――――――さっきのネズミみたいな化け物に変えるってのか!?」

一斉に全員の目が見開かれる

村上は高笑いしながら、新の言葉を肯定した

「その通りだ！私の様に人間態に変異出来る力を持つ者がいれば、そのまま魔人態――――化け物の姿のまま転生を終える者もいる！だが、彼女は神器（セイクリッドギア）を宿しているから、人間態になれる力を授かるだろう。この可愛らしい美貌の下に隠された、恐ろしい姿――――――さぞかし美しい闇人が完成するだろうなぁ」

村上がアーシアの頬に手を添える

アーシアの顔には恐怖が浮き出ていた

これから自分が化け物に変えられる事を知ってしまったら無理もなかった

「ふざけないで!その為に私を利用したって言うの!?」

激昂したレイナーレが村上に向かって叫ぶ

傷だらけ、全裸である事など頭に入っていない位怒りに満ちていた

「そうだ。貴重な人材をむざむざ手放す訳がないだろう?アーシア・アルジェントの持つ『聖母の微笑(トワイライト・ヒーリング)』はあらゆる者を治癒する癒しの力。その力を元に新たな回復術を開発していけば、闇人は無敵の軍勢を率いる事が出来る。そしていずれは『初代キング』の復活に繋がるやもしれない。君のアザゼルやシェムハザに向ける愛など知った事か」

村上は嫌味ったらしい目でレイナーレを嘲笑う

だが、レイナーレの顔には微かな笑みがあった

「間抜けね、私達にはもう一人仲間がいるわ。裏切りの可能性を考慮した上で呼んでいたのよ。あなたはそれに気付いていない。今頃あなたを殺す手筈を整えているわ」

レイナーレは自信たっぷりに言う中、村上は何故か笑っていた

「そうそう、1つ見せたい物があったんだった。よぉく見たまえ。私の薔薇を綺麗な赤にしてくれた――――――堕天使の首」

村上が袋から出したのはレイナーレが言った仲間の堕天使の頭部だった……

「い、いやぁあああああああああっ!」

凄惨な光景を見てしまったアーシアは叫び、新達の全身に悪寒が走る

レイナーレ達、堕天使の表情も絶望に溢れた

「ド、ドーナシーク……」

「彼は意外と勘が良くてね。私の裏切りにいち早く気付いてしまったから始末したのだよ。それより見てくれ――――――この顔を。死ぬと悟った瞬間、恐怖にひきつらせた表情は絵画や宝石よりも美しい。更に天界から追放された身だけあって、彼の血肉は私の薔薇を完全な赤に染めてくれた……邪な情を持つ者の血肉ほど、綺麗な赤を生み出す」

嬉しそうに屍となったドーナシークの頭部を見る村上

突如、村上の腹の虫が空腹を合図する

「やれやれ。少し運動したから小腹が空いてしまった。悪いが、食事を摂らせてもらうよ」

そう言った村上の身体から薔薇の花びらが溢れ出し全身を包み込む

新も一誠達も状況を理解出来ないまま、その様子を凝視する

花びらが散りゆくと、そこには異形の化け物が立っていた

鋭角なフォルムと爪、大きく裂けた口、腕や足に巻き付いた茨、鋭く光る眼

悪魔でも堕天使でも、妖怪でもない化け物が彼等の前に現れた

「何だよあれ……マジで化け物じゃないか！」

「それが魔人態って奴か」

「そう。これが私の魔人態だ。美しいだろう？薔薇を愛する私にはピッタリの姿だ」

魔人態へと変異した村上が大口を開け、頭部のみとなったドーナシークを喰らう

「あ、あああ……」

「ひいっ!」

「うぷっ……!」

「ゲボッ」

頭部を噛み砕く際に発する不快な音

アーシア、堕天使3人、小猫と祐斗は目を背ける

新は殺す等の光景には慣れているが、喰う場面には一度も遭遇した事が無い故に吐きそうになる

一誠は耐えきれず、吐瀉物を地面にぶちまけた

ゴクンと喉を鳴らして食事を終えた村上は口元に付いた血を拭う

「ふぅ……やはり堕天使の血と肉は格別だな。欲や恐怖に溺れた者は、豊潤なワインの様に甘くて喉越しが良く、香りも違う」

村上はドーナシークの血を吸った薔薇の匂いを嗅ぐ

そしてアーシアの方を向く

「さて、そろそろ転生の儀式を始めるとしよう。アーシア・アルジェント、君はどの様な魔人態になるのか楽しみだ」

「「アーシアに触るな!」」

新と一誠の叫びが村上の動きを止める

村上は汚物を見る様な眼で2人を睨む

「触るな?それは私に言ってるのか?」

「あぁ、そうだ!その汚い手でアーシアに触れるんじゃねぇ!」

「何が、私の魔人態は美しいだぁ?ただの蔦の化け物じゃねぇか。自惚れんのも大概にしとけよ」

「はっはっはっはっは。私の力をまだ分かってない様だな。良いだろう――――――君達全員、仲良くあの世へ送ってあげよう。『生ける薔薇の死体(リビング・ローズ)』」

村上が腕を天に向けて翳すと神父達の死体に咲いていた薔薇が巨大化し、人型となって新達の前に立ちはだかる

「さぁ、良い声で泣き喚いてくれ。この青い薔薇を君達の骸に突き立ててやりたい」

覚醒！赤龍帝の力！

「オラァッ！」

村上が生み出した薔薇人間を片づけていくが、薔薇人間の数は一向に減らない

「無駄だ。『生ける薔薇の死体（リビング・ローズ）』は薔薇のゾンビ。殴ろうが蹴ろうが決して倒れず、斬っても分裂して甦る」

村上は高みの見物をしながらワインを飲む

新や一誠にとっては非常にムカつく光景だ

「くっそぉ！倒しても倒してもキリが無いぞ！」

「斬ったら数を増やしてしまうだけに厄介過ぎるね」

「しかも、こっちには負傷者が3人もいる」

レイナーレ達は村上にやられて満身創痍の状態

新は（何故か）堕天使を守護しながら薔薇のゾンビを蹴散らしている

「しっかし、お前らも災難だな。あんな奴を仲間に引き込んだ挙げ句、裏切られて敵にされちまうとは。流石に同情するぜ」

「う、五月蝿いわね！」

「後ろから来てるぞ」

「えっ……？っ！」

堕天使3人も、光の槍で薔薇ゾンビを攻撃するが――――槍が突き刺さっても倒れ

る事はない

一誠達の顔にも疲れの色が出てくる

「君達は実に愚か極まりないな。素直に命乞いをし、私と同じ闇人になるか……。忠実なしもべとして働けば良いものを」

「うるせー！誰がてめぇなんかに！」

一誠は薔薇ゾンビの頭部らしき花に左拳を叩き込むと、花はグシャッと嫌な音を立てた

「……？何だ？さっきまでと手応えが違う？」

頭部がひしゃげた薔薇ゾンビはピクピクと体を痙攣させ、地面に突っ伏す様に倒れた

その様子を見た新は、試しに薔薇ゾンビの花を爪で斬る

すると、同じように薔薇ゾンビの活動が停止した

「そうか、花だ！頭みたいになってる花を潰せ！そうすればこいつらは死ぬ！」

「それは良かった。それなら苦労せずに済むよ。小猫ちゃん！」

「……了解」

新の助言を受けた祐斗と小猫

祐斗は剣で頭部を斬り落とし、小猫は拳や蹴りで頭を砕く

死体から吸った血を噴き出しながら倒れる薔薇ゾンビは、次第に数を増していく

「クックックッ。『生ける薔薇の死体（リビング・ローズ）』の短所を早くも見つけてしまったか。確かに頭部である花を破壊すれば活動を停止してしまう――――――だが」

村上が手から数十輪の薔薇を出して、神父の死体と薔薇ゾンビの死体に投げつける

死体に刺さった薔薇が、新たなな薔薇ゾンビとなった

「死体がある限り『生ける薔薇の死体（リビング・ローズ）』が絶える事はない。どちらにせよ、無駄な足掻きだ」

殆ど焼け石に水だった

薔薇ゾンビを殺しても、投げられた薔薇が血を吸って新たな薔薇ゾンビとなる

術者である村上を倒さないと薔薇ゾンビは永遠に消えない

新は少し殺り方を変える事にした

「死体の血を吸って生み出されるなら――――その元が無くなればどうなる？」

新は掌に溜めた魔力で炎を作り、２体の薔薇ゾンビに放つ

炎に包まれた薔薇ゾンビは花からボロボロと崩れた

「やっぱりな。焼き殺せば奴等は復活しないし、薔薇ゾンビを作れば作る程、死体の血は減っていき、いずれ尽きる!」

「本当だ!新!そのまま炎で攻撃してくれ!」

新は一誠の言葉を了承して、炎で薔薇ゾンビを焼き払っていく

死体も巻き添えを喰ってしまうが、この状況では死体も焼いた方が得策

薔薇ゾンビは死人の血を吸って作られるモノ

死体を全て焼けば、村上はもう薔薇ゾンビを作れない筈

新の予想通り、村上は次なる薔薇ゾンビを作ろうとしなかった

「いくぞ一誠!あのクソ野郎をブッ殺す!」

「おぉっ!」

新と一誠がアーシアを助けるべく駆け出す

村上は一輪の薔薇をサーベルに変えた

「私に勝てるとでも思っているのか?」

「思ってんだよ!」

新も鎧から剣を出し、村上に斬りかかる

サーベルと剣が激突し、火花を散らし合う

「一誠!今の内にアーシアを!」

「サンキュー!新!」

一誠は急いでアーシアの元へ行き、手足の拘束具を解いて彼女を解放する

村上は横目で一誠を見て、不気味な笑いを浮かべる

「イッセーさん!」

「もう大丈夫だ、アーシア!一旦逃げるぞ!」

一誠はアーシアの手を引いて一緒に逃げる

村上は直ぐにサーベルで一誠を突き刺そうとするが、新の剣がサーベルを阻止する

「へっ、残念だな。アーシアは返して貰うぜ?」

新はバカにする様な口調で言うが、何故か村上はまだ笑みを浮かべていた

「お気楽だな」

なんと村上の背中から一際長い薔薇が飛び出した

花を開くと、中央には巨大なトゲが発進準備を控えていた

「っ!?逃げろ一誠!アーシア!」

「もう遅い」

ドシュウンッ!薔薇が一誠に向けて巨大なトゲを発射

新の声に反応した一誠だったが、トゲを避けられそうになかった

その時――――――アーシアが一誠を庇うかの様に突き飛ばし、トゲがアーシアの華奢な体を貫く

「「アーシアアアアアアアアアアアッ!!」」

倒れた少女の傷から血が溢れ出す

村上は隙だらけの新を蹴飛ばす

蹴飛ばされたにも係わらず、新は一誠とアーシアの元へ

「アーシア!・アーシア!」

「クソッ!・胸を貫かれてる!・治療をしねぇと!」

新に治療技術は無い

アーシアを助けるには一刻も早く、この場から脱出するしかなかった

アーシアが一誠と新の手を握る

弱々しい握りで体温も失われつつ、苦しい筈なのにアーシアは微笑みを2人に見せる

「……私、少しの間だけでも……友達ができて……幸せでした……。もし……生まれ変わったら、また友達になってくれますか……？」

「な、何を言ってんだ！そんな事言うなよ！」

「待ってろ！今からあいつをブッ倒して、お前を助けてやるよ！そうすれば、お前は自由になれるんだ！俺達といつでも遊べる様になれるんだぞ！」

必死に呼び掛ける新と一誠

それでもアーシアの力が弱くなっていく

「そうだ!これからいっぱい楽しい所に連れてくぞ!アーシアが嫌だって言っても連れてってやるさ!カラオケだろ!ゲーセンだろ!そうだ、ボウリングも行こうぜ!他にもそうだ、アレだよ、アレ!ほら!」

一誠の目から涙が止めどなく溢れる

「俺らダチじゃねぇか!ずっとダチだ!ああ、そうさ!松田や元浜にも紹介するよ!あいつら、ちょっとスケベだけどさ、すっげぇイイ奴らなんだぜ?絶対にアーシアの友達になってくれる!絶対だぜ!」

「俺も行き付けの酒場に連れてって、マスターや他の仕事仲間も紹介してやる!お前はまだ未成年だけどよ、受け入れてくれる!酒がダメなら牛乳かジュースを飲もう!一緒にマスターと駄弁んぞ!マスターは面白い話をするのが得意なんだ!」

「……きっと、この国で生まれて……イッセーさんと同じ学校に行けたら……」

「行こうぜ！俺達の学校に来いよ！」

「俺もイッセーと同じ学校に通うぞ！アーシア！だから――――――」

アーシアの手が新と一誠の頬を静かに撫でる

「……私のために泣いてくれる……もう、何も……ありがとう……」

頬を触れていた手がゆっくりと落ち――――――アーシアは2人の目の前で逝った

「……何でだよ。何でだよ……!?何でこんな良い女が、死ななきゃなんねぇんだぁあああああっ！」

新が涙を流しながら天に向かって叫ぶ

祐斗も小猫も、儀式に加担しようとした堕天使3人も苦い表情をしていた

「なあ、神様!神様、いるんだろう!?悪魔や天使がいるんだ!神様だっているんだよな!?見てるんだろう!?この子を連れて行かないでくれよ!頼む!頼みます!この子は何もしてないんだよ!ただ、友達が欲しかっただけなんだよ!ずっと俺達が友達でいます!だから、頼むよ!この子にもっと笑って欲しいんだ!なあ、頼むよ!神様!」

一誠は天へ訴えかけるが勿論応じてはくれない

パチ……パチ……パチ……パチ……パチ……パチ……

一定の間隔で手を鳴らす村上

「くだらない演説をどうもありがとう。滑稽を通り越して笑いが込み上げてくるぞ。しかし、アーシア・アルジェントも実にバカな事をしてくれた。下等な悪魔を庇って死ぬなど――――――愚の骨頂だ」

村上が冷淡な態度で物言わなくなったアーシアを見下す

さっきまでアーシアを貴重な存在だと言っていたのが嘘のようだ

「だがまぁ、彼女は良い死体となってくれた。その血肉がどんな赤を作ってくれるか……非常に興味がある。何せ現役のシスターだったからなぁ」

青い薔薇を持ちながら近づいてくる村上

新と一誠はアーシアを後ろに優しく置き、近づいてくるゲス野郎を睨む

「その汚い口を閉じろコラ」

「おや？君達は興味が無いのか？今まで味わった事の無い、シスターの血肉で色が変わる薔薇の姿に……もっとも、闇人に転生させたかったのだが仕方無いか。彼女自らが愚かな選択をしてしまったから」

「うるせぇよ。闇人とか、愚かな選択とか、そんなもの、この子には関係なかったんだよ!」

「いいや、関係あった。アーシア・アルジェントは神器(セイクリッド・ギア)を身に宿した選ばれた存在」

「……それでも静かに暮らせたはずだ。普通に暮らせたはずだ!」

一誠の言葉に村上はただ嘲笑うだけだった

「そんなもの出来る訳が無いだろう。神器(セイクリッド・ギア)は他の者から見れば異質な力。それを持つ者は何処の世界でも、何処の組織でも爪弾きにされる運命だ。ならば、我々と同じ闇人になった方が彼女にとって幸せだったのだよ」

「だったら、俺が。いや……俺達が、アーシアの友達として守った!」

「守った? いったい誰を守ったと言うんだ? 現実から目を背けたつもりか。アーシア・アルジェントは死んだのだよ。お前達は彼女を守れなかった!それが現実だ!」

「……。知ってるよ。だから、許せないんだ」

「あぁ、俺も自分とテメェを許せねぇ……！」

２人はアーシアを殺した村上を許せなかった

アーシアを守れなかった自分達を許せなかった

「返せよ――――――アーシアを返せよオオオオオオオッ！」

『Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!』

一誠の叫びに応えるように、神器（セイクリッドギア）が動き、宝玉が眩い輝きを放つ

「村上、俺は――――――俺達はテメェをブッ殺す。覚悟しやがれぇぇぇぇぇっ！」

新から激しいオーラが解き放たれ、全身に鎧が展開されていく

開いた翼を彷彿させる肩、背中を守護する漆黒のマント、エメラルド色に光る目、全てを噛み砕きそうな口

新は禍々しい異形の蝙蝠へと変貌した

「竜崎くんの姿が!?」

「……少し怖いです」

祐斗と小猫は新の変貌ぶりに驚き、禍々しさに恐怖する

「おのれ……忌まわしき男が再び――――――目の前に現れた様な感覚だ」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

一誠の力が増し、拳を固めて殴ろうと突っ込む

「うおおおおおお！」

村上は一誠の拳を楽に回避し、その際に膝を腹に食い込ませる

「がはっ！」

「おぉおおおおおっ！」

新は左の爪で村上を攻撃するが、村上は上空に飛び上がって回避

「逃がすかぁっ！」

両手から放たれた魔力が村上に炸裂

村上の肩から血が飛び散る

村上が掌を上に向け、薔薇の花びらが刃となって２人に襲い掛かる

「ちぃっ！」

「ぐぁあああああああっ！」

新はマントを広げてガードしたが、一誠はまともにくらってしまう

一誠の身体中から血が噴き出し、激痛が全身を駆け巡る

「こんなもの！あの子が！アーシアが苦しんだものに比べたら何だってんだよ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

赤い籠手から再び声が発せられる

「おかしいな。下等な悪魔はまだ立てるのか？普通なら、いつ倒れても不思議ではないのに」

「あー、痛ぇよ。チョー痛ぇよ。だがなぁ、今はそんなのどうでもいい位、テメェがムカついてんだよぉっ！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）!!』

籠手の宝玉が今までにない強い輝きを見せる

その魔力の波動は敵どころか、味方も驚愕させた

「何だ？一誠の魔力の波がより強くなった？スゲェ……！今のこいつは、上級クラスに匹敵してんぞ！」

「……う？どういう事だ？あの少年の神器（セイクリッド・ギア）は、力を倍にするただの『龍の手（トウワイス・クリティカル）』の筈だ。何故この様な強い魔力を放つ？……まさか……！」

流石の村上も爆発的に膨れ上がった一誠の魔力に驚いていた

「思ったより危険な存在だと認識出来た。特に悪魔の少年、君は我々にとって大きな障害になるやもしれん!だから――――――死んでもらうぞ!」

村上は全身から花びらを頭上に舞わせ、巨大な怪物を生成する

花びらに牙みたいな突起物が生え、中央に存在する目玉が新と一誠を凝視する

ヨダレが地面に一滴落ちると、その箇所から煙が立ち上がる

「こいつの唾液は強力な酸で出来ていてね。獲物をあっという間に溶解してしまうのだよ。2人仲良く餌になってくれたまえ!『巨躯の薔薇(ギガント・ローズ)』!」

村上の手が「奴等を喰え」と指示を出す

巨大な薔薇は大口を開けて新と一誠を喰らおうとする

新は剣に最大級の魔力を流し、刀身を左手で擦る

「一誠！まだ我慢しとけよ？こいつを消したら、ありったけの力で奴をブッ飛ばせ！」

「分かってる！この一発だけは、絶対に外さねぇ！」

『巨躯の薔薇（ギガント・ローズ）』がすぐそこまで来た瞬間、剣の刀身が赤と黒の魔力に包まれ、更に魔力自体が巨大な刀身を作っていく

「うおおおおおおっ！」

横薙ぎの斬撃、その一撃で『巨躯の薔薇（ギガント・ローズ）』は上下に分断されたのち、大きな音を立てて沈黙した

「バカな！」

ガシッ!村上の手が一誠に掴まれる

絶対に逃がさない、一誠の頭にはその言葉しかなかった

そして左腕の籠手が力を解放し、拳を作る

新も魔力を右拳に集中させ、構えを取る

「やはりそうか……!下等悪魔、貴様の力は――――――」

「「ブッ飛べクソ野郎オオオオオオオオオッ!!」」

ドゴッ!双方の拳が憎き化け物の顔面を打ち抜き吹っ飛ばす

村上は大きく吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた

壁が崩壊し、瓦礫の山が築き上げられる

そして2人は口を揃えて言った

「「ざまーみろ」」

新、悪魔になる!?

「良いパンチだったな一誠！スカッとしたぜ！」

「あぁ。……アーシア、五月蝿くてごめんな？でも、もう終わったぞ」

一誠がアーシアの頭を撫でるが、その表情は曇っていた

怨敵（おんてき）の村上を倒したところで、アーシアが生き返る訳ではない

そう思うと、やはり気が晴れなかったが――――――新がある事に気付く

「おい一誠。お前は一度死んだよな？どうやって生き返ったんだったっけ？」

「え？それは部長から悪魔（イーヴィル・ピース）の駒を貰って――――――あっ！」

「そうだ。それを使えばアーシアを生き返らせる事が出来る！」

新が思い付いたのは、アーシアを悪魔に転生させると言う方法だった

「あ、でも……そういうのってやっぱり契約の一環になると思うから、代価が必要に――――」

「俺が契約すれば良いだけだ」

なんと自分から悪魔の駒（イーヴィル・ピース）を持っているリアスと契約を交わすと言い出した

命を生き返らせる契約なので、代価として何を取られてもおかしくない

だが、新の顔には何の迷いも無かった

「良いのかい？人の命を生き返らせる代価に、何を要求されるか分からないよ？」

「構わねぇよ。腕だろうが足だろうがくれてやる。何だったら、俺の寿命の半分も付けてやるぜ」

祐斗の言葉にも怯まず、新は胸を叩いて答える

鎧を装着したままだから鈍い金属音が鳴り、新の身体は振動を受ける

「一誠は嫌か？アーシアが悪魔になるのは」

「嫌なもんか！」

「じゃあ決まりだな」

新は笑顔で一誠に握手を求める

一誠も新の手を取り握手を交わす

「何か嬉しい事でもあったのか？私も混ぜてくれよ」

耳を疑わざるを得ない声

声がした方角を向くと、瓦礫の山から村上が起き上がってきた

「やれやれ、大した攻撃力だ。お陰で私の顔が２センチほど凹(へこ)んでしまったよ」

力一杯の拳を振るったのに、顔を凹ます程度しか効いてなかった

村上は体に付着した土埃を払い、一歩一歩近づく

「そ、そんな……！効いてなかったのか!?」

「くそっ！そのまま大人しく死んどけよ！」

「少々君達を侮り過ぎていたよ。それに、私にここまで恥をかかせたんだ。その礼を

たっぷりしてやろう」

村上の魔力が爆発的に膨れ上がり、天井や壁が揺れる

一誠はもう戦える状態ではない

新、祐斗、小猫は構えを取る

「そこまでよ」

ドンッ！村上に向けての魔力の塊が飛んでくる

村上はそれに気付き、体をずらして回避する

「この消滅の力、グレモリーか！」

村上が新達の後ろを激しく睨む

そこにいたのは、グレモリー家の次期当主リアス・グレモリーと姫島朱乃

「リアス・グレモリーに朱乃さん。ようやく来たのか――――――ってか、何でそんなにエロい格好なんだ？」

新の言う通り、リアスと朱乃は下着オンリーと言う過激な格好をしていた

「それを言うなら、そこにいる堕天使達の方がより過激じゃないかしら？」

「まぁ、そうだな」

全裸の堕天使達は、さっきの村上の異様な魔力のせいで腰を抜かしていた

「ごきげんよう、村上京司。私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ。どうぞお見知り置きを」

「挨拶はいいから、何で下着姿なんだ?ここに来るまでに何があった?」

素朴な疑問をぶつける新と、鼻の下を伸ばしながら鼻血を垂らす一誠

「あらあら。知りたいですか?」

「以前、イッセーを襲った堕天使ドーナシークと出会った時から、この町で複数の堕天使が何かの計画を立てているのは察していたわ。けれど、それは堕天使全体の計画だと思って、私は無視していた。いくら私でも堕天使全体を敵に回すなんて愚は冒さないわ。でも、何やら突然こそこそと動き出したと耳にしたから、私は朱乃を連れてお話をしに行こうとした。そしたら、教会の前で妙な化け物達がお出迎えをしてくれたわ」

「数が多くて大変でしたわ」

リアスの言っていた別行動とは、教会周りを見張っていた敵の始末だった

一誠は感動して泣きそうになり、新はヒュウッと口笛を吹く

「ほう、見張りをさせていた闇人を全て蹴散らしたのか。やはり数が多くても力が足りなければ、捨て駒にもならないか」

「その一撃を食らえばどんな者でも消し飛ばされる。滅亡の力を有した公爵家のご令嬢。部長は若い悪魔の中でも天才と呼ばれる程の実力の持ち主ですからね」

「別名『紅髪(べにがみ)の滅殺姫(ルイン・プリンセス)』と呼ばれる程の方なのですよ?」

なんて物騒な二つ名だ……

新と一誠は同じ事を考えた

そんな中、リアスが一誠の籠手と鎧姿の新を交互に見る

「……赤い龍。この間までこんな紋章はなかったはず……。そう、そういう事なのね」

「リアス・グレモリー。１つだけ質問させてもらうぞ。その少年が持っている神器（セイクリッド・ギア）――――それは、赤龍帝（せきりゅうてい）の力を宿した籠手だな？」

「ご明察。イッセーの神器（セイクリッド・ギア）は単なる『龍の手（トウワイス・クリティカル）』ではない。持ち主の力を１０秒毎に倍増させていく、『神滅具（ロード・ギヌス）』の１つ。『赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）』よ」

「１０秒毎に力を倍加!?それ強すぎじゃねぇか！」

つまり、一誠の力を１に例えると――――１０秒で２、更に１０秒で４、８、１６、３２、６４と延々と増幅していく事になる

「まあ、どんなに強力でも時間を要する神器（セイクリッド・ギア）はリスクも大きいわね。そうそう増大するのを待ってくれる相手なんていないわ」

確かにその通りである

「私も質問して宜しいかしら？今の新の姿について――――何か知ってるの？」

リアスがそう聞くと、村上は裂けた口をニヤケさせながら答える

「知ってるも何も、その力は『闇皇(やみおう)の鎧。』我々闇人が開発した最強の鎧であり、『初代キング』が使用していた、闇人の王の証だった」

「っ！この鎧、元々はお前らのか!?」

「そうだ。忌まわしき男――――――――竜崎総司(りゅうざきそうじ)に奪われてしまい、今は貴様の身に宿っているがな」

「竜崎総司？」

「それ……親父の名前だ……！」

新が今まで使ってきた便利な力の正体は、目の前にいる闇人が作った最強の鎧だと言う事を聞いて誰もが驚いた

鎧を装着している本人も

「竜崎総司――――――その名前だけは決して忘れん！闇人の重鎮である『クイーン』をたぶらかし、挙げ句の果てに闇皇の鎧を奪い取り、闇人の勢力の歯車を狂わせた！そのせいで『初代キング』は貴様ら悪魔や堕天使、神どもに封印されてしまったのだ！」

「親父、スゲェ事しやがったな……ただの女たらしじゃなかったんだ」

村上は憎々しげに力の正体を吐いた後、不敵に笑う

「つまり、リアス・グレモリー。貴様の前にいるそいつは全ての魔族の敵とも言える一族の鎧を着けている。悪魔や堕天使を滅亡させようとした我らと同等の力を持っていると言う事だ」

村上は鎧姿の新を指差す

「この期に及んで、新は私達の敵だと言うつもり？随分と程度の低い言い訳ね」

「言い訳か。そう思いたいなら勝手にするが良い。忌まわしき男の息子、１つだけ言っておく。貴様はいずれ我らと同類になる」

村上は意味深な台詞を残して姿を消した

流石に数で不利だと判断したのだろう

「逃げたか。俺がいずれあいつと同類になる？ふざけんな、俺は俺だ。自分の道は自分で決めるモンだろ」

新はリアス・グレモリーに近づき、あの話を持ち掛ける

「リアス・グレモリー、頼みがある。こいつを――――――アーシアを悪魔に転生させて生き返らせてくれ。一誠も転生させたんだから出来るよな？」

「出来るわ。ただ、それは契約として受けとるから、それなりの代価を払ってもらうわよ？」

「元よりそのつもりだ」

代価は手か？足か？命の半分か？

新は覚悟を決めたものの、やはり要求する代価が分からないので唾を飲む

「じゃあ新、この子を転生させる代わりに――――――私の眷属となりなさい」

新の思考が一瞬止まった

それは一誠も同じで、祐斗は”やっぱりね”と言う顔をしていた

「どうしたの？間抜けな顔になってるわよ」

「い、いや……てっきり腕か足の一本寄越せだの、内臓の一部を寄越せだの言ってくるかと思ったから」

「場合によってはそうかもしれなかったですわ」

笑顔で返す朱乃

笑い事じゃねぇよと突っ込む新

それはさておき、リアスは悪魔(イーヴィル・ピース)の駒を取り出して話を続ける

「あなた達に説明するのが遅れたけど、爵位持ちの悪魔が手に出来る駒の数は『兵士(ポーン)』が8つ、『騎士(ナイト)』、『戦車(ルーク)』、『僧侶(ビショップ)』がそれぞれ2つずつ。そして『女王(クイーン)』が1つの計15体なの。実際のチェスと同じね。『僧侶(ビショップ)』の駒を1つ使ってしまっているけれど、私にはもう1つだけ『僧侶(ビショップ)』の駒があるわ」

リアスは死んでいるアーシアの胸に『僧侶(ビショップ)』の駒を置く

「『僧侶』の力は眷属の悪魔をフォローする事。この子の回復能力は『僧侶』として使えるわ。前代未聞だけれど、このシスターを悪魔に転生させてみる」

そう言って、リアスの体を紅い魔力が覆う

悪魔への転生の儀が始まった

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。今再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が『僧侶』として、新たな生に歓喜せよ!」

駒が紅い光を発しながらアーシアの胸に沈んでいく

完全に入ったのを確認してから、リアスは魔力の波動を止めた

アーシアの目がゆっくりと開き始める

「あれ？」

二度と聞けないと思っていた少女の声

一誠は涙を止められなかった

「悪魔をも回復させるその子の力が欲しかったからこそ、私は転生させたわ。新の契約と共にね。さて、次は新よ」

リアスが笑みを浮かべながら新に近づく

新は1つ気になる事があるので聞いてみた

「俺を眷属にするって事は、俺も悪魔になるって事だよな。その場合、俺は何の駒なんだ？」

新に合いそう駒は『騎士(ナイト)』、『戦車(ルーク)』、『兵士(ポーン)』の3種類

新はドキドキしながらリアスの返答を待つ

「新も一誠と同じ『兵士(ポーン)』よ」

「イエスッ！」

ガッツポーズをする新にリアス達はキョトンとする

「新さん、『兵士(ポーン)』は一番下の駒なのに嬉しそうですわね？」

「能力が使えるんだよ。『プロモーション』だっけ？他の駒に自在に昇格出来るなら、戦法のバリエーションも増える！『騎士(ナイト)』のスピードや『戦車(ルーク)』の攻撃力、防御力も魅力的だが――――『兵士(ポーン)』ならどちらにもなれるからな」

「ふふっ、変わった子ね。でも、確かに『兵士(ポーン)』の価値は未知数。あなたの力も含めてね。

受け取りなさい。あなたは今日から――――――私の『兵士』よ」

リアスが新に紅に輝く『兵士』の駒を差し出す

鎧を解除した新は『兵士』の駒をガシッと握り締める

体の中に悪魔の魔力が入り込み、新の背中から翼が生える

「これからよろしくね？新」

「仰せのままに、リアス・グレモリー」

こうして新はリアスの『兵士』として、新しい人生の道を歩む事になった

「あ、そういえば忘れてた。あいつらどうする？」

新がレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトを指差すと、３人はビクッと裸体を震わせ

る

「本来なら消し飛ばすつもりだったけど、あなたに任せるわ」

「それはどうも。殺したら苛め甲斐がなくなっちまう」

翼を閉じた新は堕天使に近づいていく

「な、何をする気……？」

「うちらを……殺すの……？」

「んな事はしねぇよ。ただ、もうこれでお前らの出世の道は絶たれた訳だから――――――いっそ、バウンティハンターやってみねぇか？」

「「「「「えっ？」」」」」

新以外の全員の声がハモる

「賞金首にはぐれ悪魔も多いから、悪魔を滅する力を持つ堕天使は仕事で使えるなって思ってたんだよ。それに、お前ら3人とも結構好みだし」

「冗談じゃないわ！悪魔ごときに成り下がったあなたの下僕になれって言うの!?」

「下僕じゃなくて仕事仲間。どうせ、あの村上って奴から闇人全体に俺達の名が広まっていくだろ。お前らだって例外じゃない。そうなったら何処にも逃げられねぇ。この町に残るしか方法は無いって事だ」

「むぅ……確かに一理あるが……」

「で、どうするんだ?それとも今ここで死にたいのか?」

新の眼光に堕天使3人はビビる

悪魔の提案に乗るのは屈辱だが、死にたくない

そんな思いから取った行動は――――――

「……仕方無いわね、乗ってあげるわ。私だって死にたくないもの」

「じゃあ、交渉成立」

新はレイナーレ、カラワーナ、ミッテルト、３人の堕天使を飼う――――――もとい、仕事仲間に加えた

――――――新の家

「つー訳で、今日からお前らはここに居候させるから、仕事はキッチリしてくれよ?」

「言われなくても分かってるわよ。それより他に服は無いの？Ｙシャツだけじゃ寒いわ」

「お風呂ひっろ～！エロいだけじゃなくてセンスあるぅ～」

「上質な酒ばかりだ。ん？ロマネ・コンティまであるじゃないか」

「おう、丁度今が飲み頃だぜ。今夜はパァーっと飲み明かすか」

「良い度胸ね。酔い潰させてあげるわ」

「上等。酒に溺れる程、俺は落ちぶれちゃいねぇぜ？」

――――――――リアス邸

「良かったのかリアス？あれは最後の『変異の駒（ミューテーション・ピース）』だったのに」

「ええ、お兄様。彼の力はそれ位の価値があったの。イッセーと同じ様に。それより……先程のお話の続き」

「うん。闇人についてだね？とうとう奴らが動きを見せてきたか……リアスも覚悟しておいてくれ。この先、近い内に闇人の重鎮組織が集まるかもしれない」

入部＆転校

「うぁ～……頭痛ぇ～……。まさか冷蔵庫にあったボトルが全部無くなるとは……」

新は自分を過信して酒を飲み過ぎたと後悔していた

「しっかし、こいつらはスヤスヤ眠ってやがる。堕天使だから酒に強いのか？」

左にはレイナーレ、右にはカラワーナが裸で眠る姿があった

気持ち良さそうに寝ている顔に、新は思わず見とれてしまう

「やっぱ良い女だよな～。スタイルは申し分ねぇし、感度も良かった。乳首だってこんなに」

新は寝ているレイナーレの桃色突起物を指先で押す

「ぁんっ」

官能的な声をあげるが、起きる気配はない

新は更に弄りたくなった

「良い反応。こっちはどうだ？」

今度はカラワーナの乳首を指先でプッシュ
「うぅんっ」
大人の雰囲気とは掛け離れた可愛らしい声を漏らすカラワーナ
新はこのまま乳房を揉みしだいてセッ◯スに移行しようかと思ったが、二日酔いしてるから止めておく事に
まずは酔いを覚ます為、頭痛薬を飲んでから朝風呂に入る事にした
洗濯かごに服を入れようとしたら、中にゴスロリ服が入っていた
扉越しから聞こえるシャワーの音
しかも先程、ミッテルトの姿を見ていなかった
つまり――――
「ミッテルト。いないと思ったら風呂入ってたのか」
「えっ？アラタ～？なになに？朝から覗き～？いや～んエッチぃ～♪どんだけ性欲強いの～？」
「二日酔いを覚ましに来ただけだ」
「なら入って来れる～？別にうちはどっちでも良いけど、今裸だからぁ。入るならちゃんと責任取ってね～♪」

挑発気味の誘いに新は考えた
こういう誘いをしてくる女は、大抵下着で待ち構えてバカにするだろうと
新は裏をかいて敢えて風呂に入る事に、そしてミッテルトが下着で待ち構えていたら、逆にバカにし返して脱がす

そう考えながら扉を開けると……
「ふっ、ほれ見ろ。やっぱ裸で待ち構えて――――――――アルェ？」
予想が大幅に外れた
ミッテルトは本当に裸だった
「いや～ん♪新のドスケベ～。そんなに口を開けて、うちの裸がショック～？」
「バカな……！この俺が読み違えただと……!?」
女性の事に関して絶対の自信を持っていただけに、新はショックで額を押さえる
「まさか本当に裸だったなんて思わなかったって顔してる～。良いザマね～♪」
「くそっ……！二重の意味で恥ずい……！」

「アハッ。うちの勝ちぃ？じゃあ罰として、うちの背中を流せ～♪」
放心寸前の新は何も考えられず、ミッテルトの背中を流す事になった

ゴシ……ゴシ……ゴシ……ゴシ……ゴシ……ゴシ……

マーライオンみたいに口を開けながら上を向いて、ミッテルトの背中を流す様は何とも間抜けだった

ミッテルトは軽く新の頬を叩く

「はっ！俺は何を!?」

「ちょっと、いつまで惚けてんの？真面目にやってよね～。それとも、もう一回さっきの顔になる？アレは大爆笑モンだから、うちとしてはもう一回見たい～♪アハハハハッ！」

追い討ちを掛けるミッテルトにムカついたので、新は背後に回って乳房を揉む

「きゃんっ！あ、アラタ……？もしかして怒っちゃった？」

「あぁ怒ったとも。傷心の俺をいたぶった代償は高えぞ？」

「や、やだなぁ～……ちょっとからかっただけ――――――あんっ。はぁっ、からかっただけだからぁ……だから――――んんっ！つ、爪を乳首に這わせないでえええええ……！え？あっ！だ、ダメ！また強く摘まんだら次は――――――はひぃいいいいんっ！」

新の手技にミッテルトの身体は痙攣を起こしてタイルに倒れる

「あひっ……はぁ……はぁ……もう、エッチぃ……」

「調子に乗って煽るからだ。自業自得」

新はミッテルトをお姫様だっこして湯船に浸かる

「……ふぇ？今、うち無防備過ぎるんだけど……？」

「何だ？犯して欲しいのか？」

「普通の男なら……無理矢理犯してくるのに……アラタはしないの……？」

「お前がシて欲しいなら遠慮なくさせてもらうが？無論ゴム付きで」

新は今まで何人もの女性を誘ってセッ○スしてきたが、彼なりのルールがある

その1……良い女である事

その2……理由も無しに性交をしない

その3……ちゃんと避妊具を付ける

その4……本気で嫌がられたり、精神が崩壊しそうな場合は寸前で撤退する（かなり重要）

これ等の条項に気を付けた上で、新は現在までセッ○スをしてきたのだ

「無理矢理は俺の主義に反する。相手を説得してからちゃんとセッ○スしてんだ」

「この前、レイナーレ様やうちらの乳首を弄りまくったくせに……卑怯者」

「それ自体は性交じゃないから良いんだよ」

新の主義は強姦ではなく和姦

端から見ればかなりの自己中だが、彼はこのルールを守り通している

「アラタって、何か他の奴らと違うね。悪魔だから無理矢理犯してくると思ってた」

「無理矢理なんてお互い気持ち良くないだろ？合意の上でのセッ○スの方が俺は良い」

新は湯船から上がり、頭を洗う

ミッテルトは新の背中を見つめる

「アラタって変なところで紳士だね」

「俺は紳士って柄じゃないんだが」

駒王学園旧校舎の中にあるオカルト研究部の部室

風呂から上がった後、朱乃からの電話を貰い、大事な話があるとここに来るよう言われた

「自宅の電話番号どころか、住所も知らせてない筈なのに何故知っている?」と疑問をぶつけたところで電話を切られてしまったから、新は旧校舎の部室に行くしかなかった

「ここがオカルト研究部か……すんませ～ん。誰かいる～?」

新は恐る恐る扉を開けて中に入る

部室の奥のシャワーカーテンが開き、バスタオル一枚姿のリアスと朱乃が出てくる

「いらっしゃい新。ちょっとシャワーを浴びてたの。ごめんなさいね」

「いやいや、朝っぱらからの眼福サンキュー。だが俺としては、やはり全裸が望ましいな」

「あらあら。これからお話をするのに裸になって欲しいだなんて、新さんはエッチですわね」

「イッセーもそうだけど、あなたはイッセー以上に性欲が強いわ」

「人間の三大欲求は食欲、睡眠欲、そして性欲だ。人間の本能に従っちゃダメなのか?」

「あなたはもう悪魔よ?」

「あ、そうでした……」

リアスと朱乃がソファーに腰掛け、新も最後に座る

「んで、大事な話って何なんだ？」

「えぇ。あなたは昨夜、私の眷属になった。それは勿論分かってるわよね？」

「ちゃんと覚えてるけど？」

「――――――明日からあなたはアーシアと共に、この学園に通ってもらう事になったわ。オカルト研究部にも入部済みよ」

は……？新から出たのはその一言だけだった

意味が分からない新は固まるしかなかった

「このオカルト研究部、実は私達悪魔の集まりなの。もちろんイッセーも入部しても

らったわ。眷属になったのに、あなただけメンバーじゃないのは不自然でしょ？」

「良かったですわね。明日からこの学園に通えますよ？」

笑顔で話すリアスと朱乃だが、新は絶対に嫌だと言わんばかりに立ち上がった

「そんなの勝手に決めるな！学校に通うだと!?冗談じゃねぇ！俺は悪魔になってもバウンティハンターなんだ！学校なんかに通ってたら稼ぎが減っちまうだろ！」

「もう決まった事だから」

「決まった事だから、じゃねぇだろ！俺はそんなの絶対に」

「この話を受けてくれるなら――――――触らせてあげても良いわよ？」

新の心が揺らいだ

「私も触らせてあげますわ」

新の心が更に揺らいだ

その結果……

「ショウガネェナ～。貴重な体験ダカラ、悪クナイカ～」

裏声で駒王学園に転校＆オカルト研究部入部を承諾した

「ありがとう。じゃあ約束通り」

リアスと朱乃の手が新の手を掴み――――――そのまま静止

ただ静止するのみ

「……何コレ？」

「何って、触らせてあげてるの。手も体の一部でしょ？」

「はい。新さんの手、思った以上に柔らかいんですね」

嵌められた！新は見事な罠に引っ掛かってしまった

ドスッと座り込む新は、しばらくしてから『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』について、ある事を聞いた

「そういえばさ、チェスの駒と同じだけ『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』があるんだよな？つまり、俺や一誠の他にも『兵士（ポーン）』があと6人存在出来るって事になる。やっぱりいずれは『兵士（ポーン）』を増やすのか？」

新の質問にリアスは首を横に振った

「いえ、私の『兵士（ポーン）』はイッセーと新だけよ」

「俺と一誠だけ？どういう事だ？」

「人間を悪魔へ転生させる時、『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』を用いるのだけれど、その時に転生者の能力

次第で駒を通常よりも多く消費しなくてはいけなくなるの。つまり、イッセーに7つ、新に1つ使って『兵士（ポーン）』の駒を全部使用してしまったから、これ以上『兵士（ポーン）』を増やせないわ」

「マジか!?つーかイッセーが『兵士（ポーン）』7つぅ!?俺は童貞一誠よりも価値が下なのかぁ!?」

童貞に負けた――――――新にとっては、これ以上ない屈辱だった

「一誠より価値が下……一誠より価値が下……童貞に負けた……童貞に負けた……」

打ちのめされた新は、壊れたラジオみたいに何度も繰り返し言う

「相当ショックみたいですわね」

「仕方無いわ。イッセーは至高の神器（セイクリッド・ギア）と呼ばれる『神滅具（ロンギヌス）』の1つ、『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』を宿していたから、『兵士（ポーン）』の駒を7つ消費するしかなかったの。他の駒では転生出来な

かったのよ」

「な、なるほど……」

「そんな訳で、改めてよろしく。新」

「よろしくお願いしますね？新さん」

「あ、あぁ……よろしく」

新は苦笑しながら握手を交わす

明日から、新の学園生活が始まる事になった

第2章　戦闘校舎のフェニックスとマッドサンダー

蝙蝠とフライドチキン（笑）

新とアーシアが転校してから数日が経った放課後

新は最近オープンしたファーストフード店でフライドチキンを買って、旧校舎の部室に行こうとしていた

因みに新とアーシアはリアスの計らいで、一誠と同じクラスに所属する事となり、転校初日は注目の的になった

特に新はシャープな目付きと制服の着こなしで女子生徒からの人気が大爆発

男子からは嫉妬と殺意がプレゼントされ、一誠のダチである元浜と松田が闇討ちを仕掛けてきたが、新は2人の両腕両足の関節を外して撃退した

高校生である以前にバウンティハンター

格闘術で素人に負ける筈もなかった

「あむっ……なかなか美味いな、このフライドチキン。リアスや一誠達にも早く食わせてやるか――――――っ？」

部室の前まで来ると、新は妙な気配を察知した

数は８人、オカルト研究部のメンバーは６人なのに２人多い

扉を開けようとしても何故か開かない

新は次第にイライラが募っていく

「チッ、何か結界が張られてるな。壊すか」

新は右手に『闇皇の鎧』を展開して魔力を集中、右拳の一撃で扉を破壊した

立ち上がる煙を腕で払いのけ、部室の中に入る

「いや～悪い悪い。開かなかったから破壊しちまった――――――って、あれ？」

新の前にいたオカルト研究部のメンバー、銀髪のメイド、赤いスーツを着たホスト風の男は全員呆然としていた

「新、扉を壊して入ってくるなんて……どういう神経してるの？」

「いやいや、何かただ事じゃなさそうな雰囲気だったから」

「だからって壊さないでよ！」

「こりゃどうも失礼しました」

「新、ちゃんと謝る気ある？」

「それ程には」

リアスは額を押さえながら溜め息を吐く

「ところで……そこのメイドはなかなかの逸材じゃないか。俺と一緒にお茶でも――――――っ!?」

新は銀髪のメイドに近づこうとしたが、足を止める

背中どころか全身に走る悪寒に、新は慎重にならざるを得なかった

「どうされました？」

「ははっ……あんた、すげぇ力の持ち主なんだな？数多くの女を攻略してきた俺でも、これ程恐ろしいと思ったのは初めてだ」

「初対面でそこまで察知するとは驚きました。では、改めてご挨拶させて頂きます。はじめまして、私はグレモリー家に仕えるグレイフィアと申します。以後、お見知りおきを」

「あ、どうも。リアス・グレモリーの眷属悪魔、竜崎新です」

頭を下げて挨拶するグレイフィアに対し、新も丁寧に挨拶する

「おいおいリアス。お前の下僕は教育がなってないんじゃないのか？いきなり扉を壊して入ってくるとは、正気の沙汰じゃないな」

ホスト風の男が新を見て嘲笑していた

新はすぐに、その男の方を向いて目を細める

「グレイフィアさん。あの男は誰すか？」

「この方はライザー・フェニックスさま。純血の上級悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家のご三男であらせられます。そして、リアスお嬢様の婚約者です」

婚約？新はライザーを見た後、すぐにリアスの方を向いた

「リアス部長。このホストと結婚すんのか？」

「バカ言わないで！私はライザーと結婚なんてしないわ！」

「リアス。さっきも言った様にキミのところの御家は切羽詰まってるだろ？それに、この縁談には悪魔の未来がかかっているんだ」

話が全く分からない新は、一誠を呼んで簡単な説明をさせた

「なるほど。そこのライザーは純血悪魔の子孫を残す為にリアス部長と結婚したがってる。だが、リアス部長はそれを嫌がっている。埒があかないから『レーティングゲーム』で決めようって話か」

「あぁ。しかも、あいつ――――――ライザーはかなりいけすかない野郎なんだ。俺達を焼き尽くしてでも部長を連れていくって言うんだ」

一誠の説明と言葉を聞いて、新は一層ライザーが気に入らなくなった

「要するに、本人の意見を無視した政略結婚か……なら話は早い。俺達がレーティングゲームで勝てば良いだけだろ？」

新は単純に結論を述べる

「そう。私達が勝てば婚約は解消。こんな好機はないわ。ライザー、あなたを消し飛ばしてあげる！」

「いいだろう。そちらが勝てば好きにすればいい。俺が勝てばリアスは俺と即結婚してもらう」

「承知致しました。お二人のご意見は私グレイフィアが確認させて頂きました。ご両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね？」

グレイフィアの問いにリアスとライザーは了承

非公式ではあるが、新もレーティングゲームに参加出来る

「なぁ、リアス。まさかここにいる面子がキミの下僕なのか？」

「だとしたらどうなの？」

答えるリアスにライザーはおかしそうに笑い出す

「これじゃ話にならないんじゃないか？キミの『女王（クイーン）』である『雷の巫女』ぐらいしか俺

のかわいい下僕に対抗出来そうにないな」

ライザーがパチンと指を鳴らすと、魔方陣が光り出す

その魔方陣からライザーの下僕が続々と出現していく

「おおっ！全員女じゃねぇか！」

レーティングゲームに参加出来る駒の数は最大で１５

一方のリアス組は７人しかいない

７ｖｓ１５……圧倒的に不利だが、それ以上に驚いたのは――――――ライザーの下僕が全員女性だった事だ

鎧を着込んだ女騎士、魔導師のような美女、チャイナドレスの女の子、猫耳を生やした女の子二名、体操服を着た双子、和服で童顔の女の子、ナイスバディな露出過多のフ

リフリメイド二名、大和撫子風の女の子、ドレスを着たお姫様、剣を背負ったワイルドっぽい女性、踊り子の女の子、顔半分に仮面をつけた女性

新はヒュウッと口笛を吹き、一誠は大号泣していた

「お、おいリアス……。この下僕くん、俺を見て大号泣しているんだが」

ライザーはドン引きの表情で一誠を見て言った

リアスもそれを見て、困り顔で額に手を当てる

「その子の夢がハーレムなの。きっと、ライザーの下僕悪魔達を見て感動したんだと思うわ」

ライザーの下僕悪魔は一誠を心底気持ち悪そうにした

当然の反応である

「そう言うな、俺のかわいいお前達。上流階級の者を羨望の眼差しで見てくるのは下賤な輩の常さ」

ワリィ。俺は数だけならお前に勝ってると思う

新は心の中で突っ込んでしまった

「よし。あいつらに見せつけてやるか――――――ユーベルーナ」

「はい」

ユーベルーナと呼ばれた女性がライザーの側へ行き、２人は濃厚なキスをし始めた

その光景にリアスは呆れ、アーシアは湯気を放出、一誠は羨ましそうにしていた

「わーおっ。スゲェなこりゃ――――――って、胸まで揉むか!?それはやり過ぎ――――――

―いや、乳首が見えたから良いか」

新は乳首を見れた事に合掌する

そして同時に『一誠じゃ、こんな事は一生出来ない』と思った

「お前達じゃ、こんな事は一生出来まい。下級悪魔くん」

「俺が思っている事をそのまんま言うな！」

「いや、正論だ。一誠、お前じゃあ一生あんな事は出来ない」

「新まで言うなーっ！ちくしょう！ブーステッド・ギア！」

一誠は嫉妬心＋怒り全開で『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』を出した

「お前みたいな女ったらしと部長は不釣り合いだ！」

「はっ？お前、その女ったらしの俺に憧れているんだろう？」

一誠は痛いところを突かれた

「英雄、色を好む。確か、人間界のことわざだよな？いい言葉だ」

「あ、それには激しく同意」

「納得するな！だいたい何が英雄だ！お前なんか、ただの種まき鳥野郎じゃねぇか！火の鳥フェニックス？ハハハ！まさに焼き鳥だぜ！」

「っ！ブッハッハッハッハッハッハ！焼き鳥！ぷくくくくくく……っ！一誠！ナイスな名前だ！アッハッハッハッハッハ！腹いてぇ～！」

一誠の焼き鳥発言に新の笑いが止まらない

一方、ライザーは憤怒の表情へ一変した

「焼き鳥!?こ、この下級悪魔ぁぁぁぁ!調子こきやがって!上級悪魔に対して態度がなってねぇぜ!そこのお前も笑い過ぎだ!リアス、下僕の教育はどうなってんだ!?」

「ハハハ!そうだ一誠!流石に焼き鳥は失礼だ!こいつはな――――――――」

新は袋に入ったフライドチキンを取り出し、一誠やリアス達に渡していく

「焼き鳥じゃなくて、フライドチキンなんだよ」

「ブフゥゥゥゥゥゥゥゥッ!新!お前の方がよっぽど失礼だ!アッハッハッハッハッハッハ!」

「ぷくく……!やめて新……!堪えきれない……!」

一誠大爆笑、リアスは笑いを堪える

朱乃も祐斗も笑いを堪え、小猫はフライドチキンを黙々と食べる

アーシアだけは意味が分からず、首を傾げていた

「最近オープンしたファーストフード店のフライドチキン。結構イケるぜこれは。お前も食う？」

新はフライドチキンをライザーに差し出すが、ライザーはフライドチキンを叩き落とした

「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁっ！今すぐ焼き殺してやろうかぁ!?」

「え？『焼き鳥にしてやろうか？』って、自分に言ってるの？」

新はわざと間違えてライザーを煽る

「このクソ下級悪魔の分際でぇぇぇぇぇっ！」

「おっ？何だ、やる気か？面白ぇ。本当のフライドチキンに」

「待て新！この焼き鳥野郎は俺がぶっ倒す！ゲームなんざ必要ねぇさ！俺がこの場で全員倒してやらぁ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

籠手から音声が発すると、一誠の力がアップ

拳を固めて突撃する一誠に、ライザーは嘆息した

「ミラ。やれ」

「はい。ライザーさま」

ミラと呼ばれた童顔の女の子が長い棍で一誠をひと突き

一誠は攻撃を認識する間もなく吹っ飛ばされた

「イッセーさん！」

アーシアが一誠に駆け寄り、腹部に手を当て治療する

「弱いなお前。さっきお前が戦ったのは俺の『兵士（ポーン）』ミラだ。俺の下僕では一番弱いが、少なくともお前よりも実戦経験も悪魔としての質も上だ。ブーステッド・ギア？はっ！確かにそいつは凶悪で最強の無敵神器（セイクリッド・ギア）のひとつだが、ロクに使いこなせないお前じゃ大した事なくなっちまうな！こう言うのを、人間界の言葉ではなんて言ったっけな。……そうだ、『宝の持ち腐れ』、『豚に真珠』だ！フハハハ！そう、まさにお前の事だよ！リアスの『兵士（ポーン）』くん！」

ライザーは倒れている一誠をバカにする

弱いのは事実な為、一誠はグゥの音も出せなかった

「ハハハハハ！っ？どうしたミラ？」

「あの、ライザーさま？何だかさっきから下がスースーして……。っ!?」

突然ミラが顔を真っ赤にして、自分の尻を押さえる

ライザーや皆は何がどうしたのか理解出来なかった

すると、新がクスクス笑い出した

「もしかして忘れ物でもしたのか？これとか」

新がヒラヒラと布みたいな物を見せびらかす

それを見たミラの全身が真っ赤に染まる

「そ、それは私の……っ!?」

「おい。まさか……？」

「その通り。今の最中にミラから盗った下穿きだ。しかし、フンドシとは驚いた」

これぞ新の手技『衝撃！神速で女性の下着を剥ぎ取るの術！』である

「イヤァァァァァァァァ！」

ミラが慌てて下着を取り返そうとするが、新はヒョイヒョイと回避

動く度にチラチラ見える尻を見ながら、余裕であしらう

スッ……サワサワッ……

「きゃひんっ!?」

新はかわしざまにミラの尻を撫でる

手技の餌食となったミラは、ペタリと崩れ落ちた

「なかなか良い感触の尻だが、お子ちゃまじゃ俺には勝てねぇよ。ほれ」

投げられたミラの下着が、ゆっくりとライザーの頭に着地

全員がポカ～ンと口を開けていた

「お前はそこの『兵士(ポーン)』くんとは違うな。ランクは何だ?『騎士(ナイト)』か?スピードに秀でた『戦車(ルーク)』か?」

「いや、俺は一誠と同じ『兵士(ポーン)』だ。因みに消費数は一誠が7で、俺が1だけどな」

「なにっ？ミラの攻撃に反応出来なかったそいつの方が、駒の消費数が多いだと？何の冗談だ」

「何の冗談だって言われても事実だ。俺は元人間のバウンティハンター。ただそれだけだ」

「ふっ、面白い。カーラマイン、相手してやれ」

呼ばれた女騎士が剣を抜き、新に剣先を向ける

「私はライザー様に仕える『騎士（ナイト）』カーラマイン！リアス・グレモリーの『兵士（ポーン）』よ、いざ正々堂々と手合わせ願おう！」

「元気な女だな。騎士道精神ってヤツか？それにあんたもなかなか可愛らしいな」

「私を油断させようとしても無駄だぞ。さっきの様な……ハ、ハレンチな行為を仕掛けても、私は『騎士（ナイト）』だ。『騎士（ナイト）』の特性は速度にあるんだからな」

「俺は純粋な感想を述べただけなんだが……まぁ良いや。じゃあ、やるか」

新は右腕に『闇皇の鎧』を展開、更に中から剣を出現させる

「ほう。お前も神器（セイクリッド・ギア）を所持していたのか。しかし、何だ?その神器（セイクリッド・ギア）は今まで見た事が無いぞ?」

「ま～たそれかよ。残念ながら、こいつは神器（セイクリッド・ギア）じゃない」

それを聞いたライザー陣営が全員驚く

「神器（セイクリッド・ギア）でないなら、それはいったい何なのだ!?」

「そうだな～。カーラマインって言ったな?あんたが脱いでおっぱい揉ませてくれたら話してやるよ」

「っ!?ふ、ふざけるな!そんなハレンチな事を誰がするか!」

カーラマインは新の提案に激昂する

ライザー眷属も「最低!」、「変態!」、「女を脱がして楽しむなんて愚劣よ!」等と罵倒を飛ばす

「今の俺は悪魔だぜ?何かを得るには、それなりの代価を払わなければならない。悪魔社会の基本じゃないのか?」

「うるさい!お前の様な不埒者は私が成敗してくれる!」

カーラマインは『騎士(ナイト)』特有のスピードで縦横無尽に駆け回る

一方、新はその場に留まり静止する

「速いな。流石は『騎士(ナイト)』か」

「どうだ！これだけ速く動けば、お前は私の動きについてこれまい！」

動き回っていたカーラマインが背後から新に斬りかかる

ライザーは「こいつも大した事なかったな」と、思ったその刹那だった

「気配が丸分かりなんだよ」

ガキィィィンッ！

なんと後ろを向かずにカーラマインの剣を弾き返した上に、そのまま連続でカーラマインの鎧と下の服を破壊する

「っ!?鎧と服が！」

左手で純白パンツを隠そうとするも面積が足りず

一誠は見ようとしたがアーシアに目を塞がれ、小猫にボディーブローを入れられる

「どうした？俺はまだ一歩も動いちゃいねぇぞ」

「ど、どうやればあんな攻撃が出来る!?常人では不可能だぞ！」

「なら、俺は常人じゃないだけだ。まだやるか？後ろを向いとくから安心しな」

その場に留まり続ける新

カーラマインはパンツを隠そうとしている左手を放して構え直す

「はぁあああああっ！」

剣を振り下ろすカーラマインに対し、新はまた振り返らずに怒濤の斬撃を繰り出す

「ここだっ！」

カーラマインは長剣で新の剣とぶつかり合う瞬間に、左手の短剣と長剣で挟み込む様に新の剣を押さえる

これでもう、剣を持っている腕を動かす事は出来ない

そう思っていた

「「「「「「っ!?」」」」」」

全員が驚愕と畏怖の目を向けた

何故なら、挟んだ長剣と短剣のせいで動かせない筈の右腕が動き――――――いや、あり得ない位グニャリグニャリと波打つ様に捻(ねじ)れていたのだ

「ひ、肘関節が捻れてるぅぅぅぅっ!?」

「イヤァァァァ！怖いですーっ！」

「あ、新！いったいどういう体の構造してるの!?」

「流石に僕も引いちゃうな……」

「あらあら。まだ捻れてますわね」

「……気持ち悪いです」

これは確かに気持ち悪い光景である

ようやく捻れが終了した新の腕は、そのままカーラマインを宙に放り投げる

ギュルルンっと腕を元通りにした新は、刀身に魔力を込める

「そろそろ決めさせてもらうぜ」

新が魔力を込めた剣で高速の斬撃を放つ

速すぎて反応出来なかったカーラマインは床に落ちる

「……っ？どこも斬られていない？貴様、何のつもりだ!?手合わせとはいえ、わざと攻撃を外すとは恥を知れ！」

立ち上がって怒るカーラマイン

新は剣と鎧を解除して首を鳴らす

「いや、外しちゃいねぇし――――――もう勝負は着いた」

ピシッ……パララララララッ……

長剣と短剣が刃からバラバラになり、直後にカーラマインの服が弾け飛ぶ

『騎士（ナイト）』さながらの引き締まった肢体、綺麗な乳房と乳首があらわとなった

「っ!? いやっ！」

カーラマインは顔を真っ赤にして、屈むように自分の裸体を隠す

もちろん一誠は見ようとしたが、小猫に吹っ飛ばされたせいで見れなかった

「……鬼畜変態のドスケベです」

小猫から痛い言葉をくらうも、新は全然気にしなかった

「残念だったな、俺の力の正体を知るのはお預けだ。あと、さっきの別に期待してないから気にすんな」

新が手を振ってその場から一歩踏み出す

二歩、三歩、四歩目で「待て」と呼び止められる

「わ、私はライザー様に仕える『騎士(ナイト)』……。主のライザー様を勝利に導く義務がある……。未知なる力が脅威となるならば、その正体を突き止める事もまた役目……!」

カーラマインがゆっくりと立ち上がる

「ライザー様の勝利の為なら、この身を落とす覚悟も出来ている……!リアス・グレモリーの『兵士(ポーン)』よ……さ、触るが良い!私はどんな恥辱にも耐えてみせる……!」

カーラマインは手を退けて自ら裸体を披露した

これには流石の新もビックリ

「えっ!?ちょ、ちょっと待った!確かに揉ませてくれたら話してやるとは言ったけど!

そんな無理してまで」

「『騎士（ナイト）』に二言など無い！その力の正体を知る事は、ライザー様の勝利に繋がるんだ！さあ、触れ！」

「リ、リアス部長！何とか言ってくれって、なに耳塞いで後ろ向いてやがんだゴラァ！放置か!?俺を放置する気か!?ライザー！お前も止めろよ！眷属のおっぱいが大ピンチなんだぞ!?」

「いや、別の男に感じさせられるカーラマインも見てみたいな」

「何だこの新手の羞恥プレイはチクショウっ！」

新が地団駄を踏む中、カーラマインは涙を浮かべながら近づく

「い、いつまで私に恥をかかせる気だ……？お前が触りたいと言ったんだぞ……。は、早く触れ……」

カーラマインの涙を見て、新は覚悟を決めた

――早く終わらせて、この場から逃げよう――

新はかつてない心境を味わった

モニュッ……モミモミモミ……

「ふぁっ……んっ、んんっ……はぁっ」

「何故だ……!?今まで罪悪感など沸いた事無いのに……何故心が痛む……!?」

「ど、どうだ……？私の胸は……気持ち良いか……？」

「え……あ、あぁ。スッゲェ気持ち良い……形も感度も良く、張りがあって乳首も綺麗だが……なんかスッゲェ恥ずい！」

新は現状の空気に耐えられなくなり、カーラマインに自分の制服の上着を着せる

「いやぁ、何とも見事だったな『兵士（ポーン）』くん？あそこまで感じさせるとは。で、その力の正体は何だ？」

「……こいつはリアス部長やお前を含む悪魔、堕天使達を滅亡させようとした魔族、闇人が作った『闇皇の鎧』だ」

「闇人……？っ！まさか、先の三つ巴戦争時に悪魔や堕天使だけでなく、神をも滅ぼそうとした、全魔族の敵とも言えるあの闇人の力か!?そんな力が何故お前に宿っている!?」

「チョイと訳ありで、俺の中に入ってるんだよ」

「ただの元人間じゃなかったのか。なのに消費した駒が『兵士（ポーン）』ひとつとは……どうやら、ゲームで最初に潰す必要があるのはお前の方だな。リアス、ゲームは１０日後でど

うだ？こっちも作戦を立ててゲームを面白くしたいんでね」

「いいわ。１０日、それだけあれば充分よ。覚悟してなさい」

レーティングゲームの日程が決まり、ライザーは眷属達と共に姿を消した

「ところで新。さっきのはらしくなかったけど――――何であんなに取り乱してたの？」

「……流石にマジ泣きされると、良心が痛むっつーか何つーか……自分でも分からねぇ」

「あなたに良心なんて物があったの？」

「今まで無いと思ってたのかよチクショウ！」

「あの『兵士（ポーン）』の服……」

スー……クンクンクン……

「カーラマイン、何をしている？」

「っ!?イ、イザベラ？驚かさないでくれ」

「今、匂いを嗅いでなかったか？」

「――――っ！そ、そんな事あるはずがない！私は『騎士（ナイト）』だ！その様な不埒な真似は」

「していたぞ。今見てしまった」

「イヤアアアアアアアアアアアアアっ！」

１０日間の修行

「合宿？」

「そう。明日から１０日間、山籠りで修行しに行くんだ。だから、お前らはその間留守番って事」

新からレーティングゲームと合宿の話を聞いた堕天使三人組

酒を飲むレイナーレ、風呂から上がったカラワーナ、足をパタパタするミッテルトは何故か不満そうだった

「その間、うちらはどうすれば良いの～？」

「お前らだけで生活すれば良いだけだろ」

「食事や酒の用意は？」

「それもお前らが」

「アラタ。私達が家事なんて仕事、やると思ってる？」

「じゃあどうすんだよ」

レイナーレは嫌な笑みを浮かべながらボンテージを脱ぎ捨て、ある人物の格好をする

レイナーレの仮の姿――――天野夕麻（あまのゆうま）だ

「っ？何の真似だ？」

「決まってるじゃない。その合宿に勝手に参加するの。食事の用意担当がいない生活なんて真っ平だわ」

「そうだな。最近は目ぼしい賞金首を見ないから丁度良い」

「やっほぅ♪タダ飯食い放題～♪」

「テメェらなぁ……まぁ、電話してリアス部長に聞いてみるか。却下されたら余計な荷物が減るだけだし」

その後でリアスに電話してみたら「新が監視役なら大丈夫そうね」と、堕天使三人組の同伴が認められた

「ひー……ひー……」

「ほらイッセー、早くなさい。新は私達よりずっと先にいるのよ」

一誠は巨大なリュックを背負わされ、両肩に荷物をかけて山を登っていた

行く時も修行の一環と言う物だろう

「待てコラ堕天使！飛ぶなんてズリぃぞ！1個ぐらい荷物持て！」

「嫌よ。そんな汗臭い事やりたくないもの」

黒い翼を羽ばたかせながら山を登る堕天使三人組と追い掛ける新

彼も一誠と同じ様にリュックを背負っているが、現役バウンティハンターなので体力は一誠よりある

「俺……頂上に着く前に死ぬかも……」

レッスン1、木場祐斗との剣術修行

バシィバシィッ！ガッ！バシィンッ！

新と祐斗が互いの木刀で打ち合っている

祐斗は元々剣の才能に秀でており、新もバウンティハンターでの実戦経験で剣の扱いはお手の物

一誠は自分との実力差に唖然としていた

「やっぱり凄いね、竜崎くん！」

「祐斗もなかなかの剣捌きだ」

ザッ！新が木刀で地面を抉り土を飛ばす

祐斗が気を取られた隙に、喉元へ切っ先を突きつけた

「参りました」

悔しくてもにこやかに木刀を下ろし、頭を下げる祐斗

「悪いな。こういうやり方もしてくるんじゃないかと思ってやってみた。勝負の世界は皆クリーンじゃないから気を付けろよ？」

「そうだね。参考にさせてもらうよ」

新は一誠に木刀を渡して堕天使三人組のところへ

「お疲れアラタ～」

「流石悪魔ね。やる事が汚いわ」

「少なくともお前らよりマシだ。それより、ちゃんとタオルと飲み物用意しとけよ」

「分かっている」

新がドリンクを飲み干す中、一誠は祐斗に何度も打ちのめされていた

レッスン2、姫島朱乃との魔力修行

「そうじゃないのよ。魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めるのです。意識を集中させて、魔力の波動を感じるのです」

丁寧な説明を受けているが、一誠の手には全く魔力が集まらない

作り出せるとしても米粒程度だった

隣のアーシアは緑色の魔力を手のひらに出現させ、新は赤と黒が混ざった魔力を両手に生み出していた

「アラタ凄いね～」

「鎧を展開してないと炎や氷を作れないのが難点だけどな」

「私達の光には遠く及ばないわね」

「喧しいな」

この後も一誠だけが魔力をうまく作れなかったが、途中で何やら凄い事を思い付き、

朱乃に耳打ちしていた

新はその様子を見ながら、魔力を増大させようとして爆発させてしまった（被害は新のみ）

レッスン３、塔城小猫との組手

「ぬががああああ！」

ドンッ！ズルズルズル……

一誠が本日１０回目の巨木とのハグに成功した

組手を見ていた新と堕天使達は皆大爆笑

「……弱っ」

「は～い！小猫からキツい一言が一誠に放たれました～っ！」

「アハハハハハハッ！おっかしい！よっぽどその木が好きなのね！」

「もううち、お腹痛過ぎてヤバイ～！」

「笑ってやるなミッテルト……！あれでも必死なんだろう……プククッ！」

小猫は見掛けによらず、立ち技、寝技、色んな格闘技を使いこなす

素人の一誠では、まず当てるだけでも難しい

更に小柄な体格を活かした俊敏性も備わっているので、普通に強い

「……打撃は体の中心線を狙って、的確かつ抉り込むように打つんです。では次、新先輩」

腕を振り回す小猫の呼び掛けに応じる新

静かに構えを取る

ビュッ！ビシッ！

新が素早く動いて拳を当てようとするも、小猫の手に阻まれる

しかし、小猫も拳を鳩尾に入れようとするが、新は掌で止める

そこから激しい拳と蹴りの合戦が始まり、しばらくして距離を取る

「……新先輩。ただのドスケベじゃないんですね。強いです」

「小猫もな」

小猫との組手は更に続き、一誠は組手途中で三回ほど死にかけたとか

レッスン4、リアス・グレモリーとの修行

「イッセー！気張るのよー！」

「おおっス！ハヒー……ハヒー……」

新と一誠は背中に岩を括り付け、険しい山道を何度も往復していた

新は一誠より体力があるので、岩の大きさは三倍

それを何十往復ともなると、流石に疲弊の色が出てくる

「はぁ……はぁ……ま、まだ往復しないと……いげねぇのか……？」

「新の基礎体力はイッセーを大幅に上回っているから、イッセーと同じメニューじゃダメよ。さ、もう一個岩を乗せてあげる。あと十往復したら次は腕立て三百回よ」

「三百か。それぐらいなら何とか」

「新は千回よ」

「ぬがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

新の悲痛な叫びは山全体に響き渡り、堕天使三人組は腕立ての間、新の上に乗っかってずっと笑っていたらしい

修行を開始してから一週間過ぎたある夜、新は眠れずにいた

堕天使三人組と同部屋と言う男のロマンを独り占めしている

いつも裸で寝ているレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトに毛布を掛けて外に出る

別荘を出た新は林の中を進む

少し離れた場所で足を止め、辺りを見回す

「出てこいよ闇人。いるんだろ？」

そう言うと、木の陰から続々と異形の化け物が出てくる

以前見たネズミ型十匹と、初めて見る馬型がいた

「こんな山奥で森林浴か？お気楽だな」

「森林浴じゃなくて修行だ。三日前から妙な気配を感じると思ってたら、案の定いたか」

「『闇皇の鎧』を宿している限り、貴様は何処にも逃げられはしない。おとなしく我らの元に下れば、命だけは助けてやるぞ？」

闇人の提案に新はペッと唾を吐き捨てる

「今の俺の主はリアス・グレモリーだ。お前らみたいなゲスな化け物の所なんか行くかよ」

「ならば仕方ない。『闇皇の鎧』だけでも返してもらうぞ」

闇人が体内から剣を生み出し、ネズミの化け物が囲うように陣形を取る

新は『闇皇の鎧』で闇皇と化し、腕から剣を取り出す

闇人が剣で合図をすると、ネズミ達が一斉に襲い掛かる

「ネズミに用はねぇんだよ」

新は刀身に魔力を注入してネズミ達を切り払う

「一匹、二匹、三匹、四、五、六、七、八、九、ラストォ！」

ネズミ達は全員死骸となって地面に落ちた

「やはり普通の量産型では意味が無いか」

闇人の下半身が闇に包まれ、ケンタウロスみたいな姿となった

地面を蹴って駆け出し、新に斬りかかる

足を斬ろうとするも、闇人は後ろ足で立ち上がり回避

そのまま新を踏みつけようとした

「うおっ！」

新は剣で防ぎ、横へ払って距離を置く

闇人ケンタウロスは口から魔力の塊を三発放出

新はソレを斬り、剣を振って斬撃を飛ばす

「ぐわぁっ！」

新の斬撃はケンタウロスの左腕を切断した

「早速修行の成果が出てるな。斬撃を飛ばせた」

「ぐっ！おのれぇぇぇぇぇ……！」

ケンタウロスは憎々しげに新を睨み、新は少し余裕を持つ

今は誰もいないし、別荘から離れているからちょっとやそっとじゃ気付かれない

そう思っていた

パキッ

「ん……？小猫!?」

木の陰に何故か小猫がいた

それを見た闇人ケンタウロスはニヤリと笑い、小猫に魔力の塊を数発撃った

「っ！クソッタレが！」

新が小猫と魔力弾の間に割って入る

ドオオオオオン！

「きゃあ！……っ！新先輩！」

珍しく声を荒げた小猫

新は少しばかり血を吐いた

「やっぱちゃんと防御してなかったから、少しくらっちまった……。このクソ馬が、ブッ

殺す」

今のでキレた新は、再び刀身に魔力を込める

さっきよりも強い魔力を

「させるかぁ!」

闇人ケンタウロスが轟音を立てながら突進してきたが、その選択は間違いだった

「死ね」

魔力で形成された刀身がケンタウロスの肉体を貫く

闇人ケンタウロスは身体をピクピク痙攣させ、絶命した

生々しい音を立てて落ちたケンタウロスを余所に、新は人間の姿に戻る

「いってぇ～、油断しちまったよ……」

「……新先輩。ごめんなさい……私が邪魔してしまったせいで」

「気にすんな。今のは俺のミスだから」

別荘近くまで戻った新と小猫

新は小猫に応急処置を施された

「……あとはアーシアさんに治療してもらって下さい」

「あ、あぁ……分かった」

新は平気だと言ったんだが、小猫の迫力に負けてしまい包帯を巻かれた

負けなくても無理矢理包帯を巻かれる光景は容易に浮かび上がったが、そこはスルー

「ところで、小猫は何であんな所にいたんだ？」

「……眠れなくて。散歩していたら、妙な気配を感じて」

「つい来ちまった、ってか？」

小猫は無言で頷く

「……不安だったんです。初めてのレーティングゲームだから……。もし皆さんの役に立てなかったらって思うと、怖くなって……」

「俺だって最初の仕事ん時はビビりまくってた。最初からビビらない奴がいたら、お目にかかりたいぐらいだ」

新は小猫の頭を撫でて落ち着かせる

「それに、リアスがそんな事で責める様な器の持ち主じゃないのは、俺より悪魔歴が長いお前らの方が知ってるだろ？ベストを尽くせ。俺から言えるのはそれだけだ」

頭を撫でる手を止め、新は立ち上がる

「……新先輩。少し見直しました」

「そりゃどうも。なら謝礼として乳首を」

「やっぱり最低です。ドスケベ先輩」

「せめて最後まで言わせてくれよ……まぁ良いや。寝る」

新は先に別荘へ戻っていった

「……先輩の強さが羨ましいです。私もいつか、新先輩みたいに強くなりたい」

「何処に行ってたの？アラタ」

「起きてたのかよレイナーレ。ちょっと夜の散歩だ」

「性欲の権化が裸の堕天使を置いて散歩？」

「何だ。寂しかったのか？」

「別に。いつも横にいる者がいなかったから眠れなかっただけよ」

「あっそ。じゃあもう寝る。３日後はライザーとのレーティングゲームだから」

「アラタの無様な姿を拝んで大笑いしてあげ――――――ひゃんっ！だ、だから乳首を弄らないでぇぇぇ……！敏感になっちゃったから――――――はあぁぁあああんっ！」

新は少しムカついたのでレイナーレの乳首を弄り、軽く絶頂させた

そして、遂にライザーとのレーティングゲーム、決戦当日を迎えた

レーティングゲーム開始！

レーティングゲーム当日、時間は深夜１１時４０分頃

オカルト研究部メンバーは全員部室に集まっていた

新は日常生活で着ているロックミュージシャン服

アーシアはシスター服、それ以外は全員学生服だった

祐斗は手甲と脛当てを装備し、剣は壁に立て掛けている

フィンガーグローブを装備した小猫は椅子に座って本を読んでいる

リアスと朱乃はソファーに座って紅茶を飲む

一誠だけが、緊張と不安でガチガチに固まっていた

「一誠。お前緊張し過ぎ」

「しょ、しょうがねぇだろ!ゲームとはいえ、ちゃんとした戦いなんて初めてなんだよ!新は何でそんなに余裕なんだ!」

「そりゃあ、バウンティハンターは常に賞金首と死闘を演じてるからな」

「俺、お前が羨ましいよ……」

開始１０分前、部室の魔方陣が光り出し、審判役であるグレイフィアが現れる

「皆さん、準備はお済みになられましたか?開始１０分前です。開始時間になりましたら、ここの魔方陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。そこではどんなに派手な事をしても構いません。使い捨ての空間なので思う存分にどうぞ」

今回が初めてのレーティングゲーム

その様子は中継で他の場所からも見れるらしい

しかも、悪魔のトップである魔王サーゼクス・ルシファーもこのバトルを観戦するとか

サーゼクス・ルシファーは、実はリアスの兄であり、もうグレモリーを名乗っていない

ルシファーとは他の魔王と同じ役職名

先の大戦で魔王は亡くなってしまったが、強大な力を持つ者へ名を受け継がせてきたと言う

そうこうしている内に開始時間となり、全員が戦闘用のフィールドへ転移された

転移された先は駒王学園そっくりのレプリカフィールド

本物そっくりの再現率に新と一誠は驚いてしまう

そして転移された旧校舎の部室がリアスチームの本陣

対するライザーチームは新校舎が本陣となり、ゲーム開始のチャイムが鳴った

〜作戦説明中（省略し過ぎ）〜

「じゃあ作戦通りに。一誠、新、小猫の３人で体育館を攻めて。祐斗は途中で別れてちょうだい。朱乃は頃合いを見てお願いね」

「了解」

「はい、部長」

祐斗と朱乃は笑顔で返事をする

アーシアは唯一の回復係なのでリアスと共に本陣で待機

そして全員の確認を取ったリアスが一歩前に出る

「さて、私の可愛い下僕達。準備はいいかしら？もう引き返せないわ。敵は不死身のフェニックス家の中でも有望視されている才児ライザー・フェニックスよ。さあ！消し飛ばしてあげましょう！」

「おう!」「「「はい!」」」」

目的地に到着した新、一誠、小猫は体育館の裏口から侵入

コソコソ進んでいくと、新と小猫が足を止める

「……気配。敵」

「あぁ。数は4人ってとこか」

体育館に大きな声が響く

「そこにいるのは分かっているわよ、グレモリーの下僕さん達!あなた達がここへ入り

込むのを監視していたんだから」

もう隠れる必要がないので、3人は堂々と壇上から姿を現す

「グレモリーの『戦車(ルーク)』さんと、ミラに瞬殺された『兵士(ポーン)』さんに、スケベな『兵士(ポーン)』さんだったわね」

「竜崎新だ。えーっと、チャイナドレスが『戦車(ルーク)』の雪蘭(シュエラン)で、双子の『兵士(ポーン)』がイルとネル。んで、俺に下着を盗られたクワガタ頭が『兵士(ポーン)』のミラ――――で、良かったよな？」

「ク、クワガタ頭!?」

棍使いの少女ミラは新の言葉に顔を真っ赤にして怒る

「だって、その髪形……クワガタにそっくり」

「バカにしないでよ!」

ミラが激怒する中、小猫が敵の『戦車(ルーク)』を見て呟く

「……あの『戦車(ルーク)』、かなりレベルが高いです」

「あぁ、見た感じで分かる。戦闘力だけなら恐らく『女王(クイーン)』レベルだな」

「……新先輩とイッセー先輩は『兵士(ポーン)』をお願いします。私は『戦車(ルーク)』を」

「任せとけ」

「ああ!ブーステッド・ギア、スタンバイ!」

『Ｂｏｏｓｔ(ブースト)!!』

一誠の倍加が始まる

「新、悪いけどしばらく敵を引き付けてくれないか？新必殺技を準備しておくから」

「元よりそのつもりだ。倍加中は隙だらけになるからな」

新も『闇皇(やみおう)の鎧』を両腕両足に装備して、ライザーの『兵士(ポーン)』３人と対峙する

「あの時はよくも恥をかかせたわね！今回は手加減なんてしないわ！」

「へーへー、ご自由に。さて、そちらの双子は――――チェーンソー？」

ドル、ドルルルルルルルルンッ！

双子の『兵士(ポーン)』、イルとネルはチェーンソーを起動させた

「逃げても無駄ですよー？」

「大人しく解体されてくださーい♪」

「おいおい……今日は13日でも金曜日でもねぇぞ。ま、これくらいのハンデはあっても仕方ねぇか」

ザッ、ガリガリガリガリガリガリッ!

新は爪で床に1人分しか入れない大きさの円を描き、その中に足を踏み入れる

「何のつもり?」

「お前らお子ちゃまを相手にするには、このサークル内で充分だ。こっから一歩も出ないでやるよ」

なんと自ら描いたサークルの中を一歩も出ずに戦うと言い出した新

その顔は余裕と自信に満ち溢れていた

「どこまでバカにすれば気が済むの！」

「お兄さんムカつくーー！」

「もう謝っても許さないから！」

ミラ、イル、ネルの３人が激昂して新に攻撃してくる

棍とチェーンソーをボクシングのダッキングでかわしていく

その際に、３人の乳房や尻を触る

「ひんっ！い、今おっぱいとお尻触った!?」

「隙だらけだったから触らせてもらった。あともう少し成長したら、俺の夜の営みを教えてやっても良いぜ？」

「いらないわよ!」

「ムカつくぅぅぅ!私達を子供扱いするなー!」

「そうよそうよ!」

新は更に3人を煽って冷静さを失わせる

更に激しく攻撃してくるが、新は全て余裕でかわしていく

「一誠!準備は出来たか!?」

「バッチリだ!いくぜ神器(セイクリッド・ギア)!」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ(エクスプロージョン)!!』

３段階パワーアップした一誠が駆け出す

まずはチェーンソーの双子イルとネルに一発ずつ拳を入れて吹っ飛ばした

「このっ！」

「そうはいくか！」

バキッ！ミラの棍が一誠に届く前に、新の鎧の蹴りが棍を破壊した

その隙に一誠がミラを突き飛ばす

「よし！必殺技の発動条件が揃った！」

「ほう。どんな技か見せてもらうぜ？」

「くらえ！俺の新必殺技！『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』ッ！」

パチン!一誠が指を鳴らすと同時にイルとネル、ミラの服が弾け飛び、発育途中の裸体が展開された

「イヤァァァァァァァァァァァァァッ!」

悲鳴を上げてその場にうずくまる3人

新はサークルの中で笑いを堪えていたが耐えきれずに爆笑し、一誠は勢い良く鼻血を出した

「ハッハッハッハッハッハ!一誠!何だこの愉快過ぎる技は!?」

「アハハハハハ!どうだ見たか!これが俺の必殺技!『洋服破壊(ドレス・ブレイク)』だ!俺は脳内で女の子の服を消し飛ばすイメージだけを延々と、延々と妄想し続けたんだよ!魔力の才能を、全て女の子を裸にするためだけに使った!」

「そうか！修行で野菜とフルーツの皮を魔力で剥いていたのはこの為だったのか！恐れ入ったぜ！」

新はサークルを出て、裸にされた3人の前まで歩く

「いやっ！来ないで！」

「最低！ケダモノ！」

「変態！女の敵！」

「何とでも言え。とりあえず武器は破壊させてもらうぜ」

新は鎧の腕でチェーンソーと棍を修復が出来ない位に壊す

「いやはや、実に眼福な光景だ」

スリスリ……

「きゃあっ!?触んないで!変態!」

「ひゃあっ!お兄さんのエッチ!」

「こんな事して恥ずかしくないの!?」

「ぜ～んぜん思わない。それにお前らはまだお子ちゃまだから、これでもユルくしてやってんだよ」

横を見てみると、チャイナドレスの『戦車(ルーク)』が床に倒れていた

「あ、あなたはいったい……何者なの……?」

「……リアス・グレモリーさまの下僕です」

ここで耳にしている通信機から音が入る

『イッセー、新、小猫。聞こえる？』

「はい！俺も新も小猫ちゃんも無事です！」

「あぁ。良い乳首も見れたし絶好調だ」

『それは結構。でも、朱乃の準備が整ったわ！例の作戦通りにお願いね！』

リアスから指示が入る

新は踵を返して去ろうとしたが、『戦車（ルーク）』の雪蘭（シュエラン）が立ち上がる

「ま……まだよ！まだ勝負は終わってない！」

「はぁ、仕方ねぇな。一誠、小猫、ちょっと待ってろ」

「……先輩? いったい何を」

「どうせなら――――全員平等ッ!」

ズババッ!

新は両手の爪をX状に振り下ろす

その刹那、雪蘭(シュエラン)のチャイナドレスが細切れと化し、白みを帯びた美麗な裸体があらわとなった

ミラ、イルとネルとは対照的に引き締まったナイスボディ

そしてチャイナドレスから解放され、プルンと弾む豊満な乳房が仄かなピンク色の乳首を輝かせた

「い、いやあぁぁぁぁぁぁっ！」

勿論雪蘭(シュエラン)はこの羞恥に耐えきれず手で裸体を隠そうとするが、新は彼女の両手を掴んで動きを封じる

両手を広げられた挙げ句、目の前でジックリと自分の裸を見られている雪蘭(シュエラン)の顔が真っ赤に染まっていく

「み、見ないで！」

「そいつは無理な相談だ。せっかく裸にしたんだから目に焼き付けておかねぇと」

「ズルいぞ新！俺にも見せ――――ぐえっ!?こ、小猫ちゃん！何故に俺の襟首を掴んで引き摺るの!?」

「……先を急ぎましょう」

「待ってぇぇぇぇぇっ!おっぱいが!目の前にあるおっぱいが俺を呼んでいるんだ!だからお願いします小猫ちゃん!せめて1分だけでもお慈悲をぉぉぉぉぉぉぉぉっ!」

一誠はおっぱいを見たいが為にその場に留まろうとしたが、小猫に引き摺られたまま体育館を退場する事に……

新もそろそろ逃げようかと雪蘭(シュエラン)の手を放して踵を返した

「ちょ、ちょっと待ちなさい!逃げる気!?ここは重要拠点なのに!それに――――こんな事してただで済むと思ってるの!?」

「悪いが長く相手にしてるほど暇じゃないんでな。続きはベッドの上とかで頼んでくれや。じゃあな」

新が今一度去ろうとした瞬間――――

「「逃がさないんだから!」」

「え？ひでぶっ！」

ミラ、イル、ネルが新の足にしがみつく

そのせいでバランスを崩した新は、顔面から床にダイブしてしまった

更に雪蘭（シュエラン）が上にのし掛かって新の首を絞めようとする

「痛ぇ！つーか何しやがる!?」

「散々私達を子供扱いして！絶対に逃がさないもん！」

「私達だって立派なレディなんだから！」

「絶対に逃がさない！」

「せめてあなただけでも……っ!」

４人はうつ伏せで倒れている新に全裸でしがみつく

バカにされた事が相当頭にキテるのだろうか

「ちょっ!離せ!全裸でしがみつかれるのは悪くないが、巻き添えを食うのは真っ平だ!離さねぇと乳を揉みしだくぞ!待て一誠!小猫!俺を置いて行かないでくれぇぇぇぇぇぇっ!」

『朱乃、お願い』

『はい、部長』

朱乃の声が聞こえた直後、巨大な雷の柱が体育館へ降り注いだ

「え……小猫ちゃん。今『ちょっ！ま――――』って聞こえなかった……？」

「……聞きたくありませんでしたが、聞こえてしまいました」

「新ぁあああああああっ！」

一誠は怒気を含めた叫びを消滅した体育館の方角へ放った

そこへリアスから通信が入る

『イッセー、どうしたの？何があったの？』

「部長……新が、裸の女の子４人に抱き付かれながら……雷の巻き添えに」

『え!?何やってるのあの子は!?』

「……バカ過ぎます。新先輩」

呆れる小猫とガックリ項垂(うなだ)れる一誠

ところが……

『……リタイヤ報告が無い……?』

「えっ?」

リアスの言葉に一誠は間の抜けた声を出した

そう、本来ならばここでリタイヤのアナウンスが流れる筈なのだが――――それが一向に流れてこない

つまり……新は先程の雷で戦闘不能になっていないと言う事になる

確信を得たリアスは2人に指示を出した

『イッセー、小猫、新のリタイヤ報告が無かったって事は……あの子はまだ生きているわ。おそらく相手の「兵士（ポーン）」3人と「戦車（ルーク）」も。このまま作戦通りに進んでちょうだい！』

「でも、新1人で」

『新の強さはあなたも知ってるでしょ？大丈夫、彼なら心配ないわ。自分の仲間を信じなさい』

消滅した体育館跡

そこに存在した黒い球体が開く

「はぁ……はぁ……危なかった……!マジで死ぬかと思った……!」

黒い球体の正体はマントを使ってガードした新だった

実は雷が落ちる瞬間に、闇皇(やみおう)の姿になってマントで４人もろとも自分を覆い、雷から身を守っていたのだ

しかし、あまりにも強力だったためにマントが少し破けてしまった

未だに事態を咀嚼出来ていない雪蘭(シュエラン)が新に訊く

「……どうして私達を助けるような真似を?」

「どうしてって言われても時間が無かったし、そこまで頭が回らなかっただけだ」

新は首や肩を回し、付着した土埃を払い落とす

「ったく、お前らのせいで巻き添え食っちまったじゃねぇか。武器が無いのに往生際悪くしがみつきやがって」

「だってお兄さんが私達を子供扱いするから！」

「レディに対して失礼だもんっ！」

「じゃあ逆に、お前らが子供じゃないって事を証明出来るか？」

ミラ、イル、ネルは言葉が出なかった

新は頭部の鎧だけを解除する

「ねぇだろ？だいたい、お子ちゃまと言われて取り乱してる時点でお子ちゃまなんだよ。そんなんだから――――――って、何でいきなり泣くんだ？」

新は3人が泣いているのを見て、少し動揺する

「私達がまだ子供だから……ライザー様も呼んでくれないのかな……？」

「他の皆みたいに……おっぱい大きくないから、ダメなのかな……？」

「私達が『犠牲（サクリファイス）』の駒にされたのも……弱くて、子供だから……」

「『犠牲（サクリファイス）』？」

『犠牲（サクリファイス）』とは、その名の通り駒を犠牲にして相手を狩る戦法

リアス陣営は只でさえメンバー不足

多少の犠牲を払って、こちら側の駒を削っていけば勝てるとライザーは踏んでいるのだろう

自分は不死身で下僕の人数が多い事を利用した、いけすかないやり方だ

「本当にいけすかない野郎だなライザーは。こんな良い女達を犠牲にしやがるなんて。一応言っておくが、子供だから『犠牲（サクリファイス）』に選ばれたって考えはやめろ。子供だってな、いつかは大人になっちまうんだよ」

「「……？」」

「無理して大人になろうとしても、ボロが出るだけだ。毎日背伸びしながら生活してたら疲れるだろ？それと同じだ。子供だからゆっくりで良い。自分のペースで大人になって見返してやれ。お前らだって、将来はきっと良い女になれる」

「「……本当？」」

裸の３人が大事な部分を隠している手を退けて新に詰め寄る

新は思わずたじろいでしまう

「あぁ、本当だ。俺が保証してやる」

「あなたって変な『兵士（ポーン）』よね……さっきまで私達をバカにしていたのに」

「戦法の１つだからな。数で不利な場合は相手の冷静さを失わせる。そうすれば陣形が崩れて作戦が狂う」

「「お兄さん、ただのエッチ蝙蝠じゃなかったんだ」」

新が「ハモるな双子」と言おうとした寸前、アナウンスが入る

『リアス・グレモリーさまの「戦車（ルーク）」一名、リタイヤ』

新は信じたくなかった

リアス・グレモリーの『戦車(ルーク)』、小猫が負けた……

あの夜、ふと悩みを漏らした小猫が……リアス達の役に立ちたいと言っていた小猫が負けた……

新の拳が震える

「悪い。俺はもう行くわ。仲間がやられてジッとしてる訳にもいかなくなった」

「お兄さん？私達まだリタイヤしてないのに？」

「武器も何もない、文字通りの丸裸で戦うのか？俺は別に構わないが」

新はミラ、イル、ネルの小ぶりな乳房、雪蘭(シュエラン)の豊満な乳房を揉む

たとえ発育途中でも乳房は乳房

特有の柔らかさを見せる

「いやんっ!……エッチ」

「「やっぱりお兄さんはエッチ蝙蝠だよぉ……」」

「ひんっ……節操無し……っ」

「俺はこういう性分なんだよ。じゃあな、発育途中のおっぱいと」

新は全裸の４人を置いて先へ進む

彼の拳にはまだ怒りが宿っていた……

「本当に変な『兵士（ポーン）』ね……敵なのに、私達の事を真剣に考えてくれてるなんて……」

「一瞬、ライザー様よりカッコいいって思っちゃった……」

「私もお姉ちゃんと同じ……エッチだけど、カッコよかった……」

「あんなヒト、きっと他にはいないわよね……」

蝙蝠ＶＳライザーの駒

レーティングゲームが始まってから数十分が経過した頃

現在一誠は祐斗と共に体育用具を入れる小屋の物陰に隠れていた

「すまん、木場。小猫ちゃんは……」

「アナウンスを聞いているから僕も知っているよ。無念だったろうね。いつも何を考えているか分からない子だけど、今回は張り切っていたよ。森にトラップを作る時も一生懸命にしていた」

「……勝とうぜ」

「もちろんだよ、イッセーくん」

互いに拳を当て合う２人

いざ相手の様子を窺おうと顔を出した祐斗だが、何やら違和感を覚える

「……？何かおかしい」

「っ？どうした木場？」

「さっきから妙だよ。敵の駒がいる感じがしないんだ。体育館を消し飛ばしたから、相手はこちらからの侵入を警戒して駒を配置する筈なのに……」

目ぼしいと思われた２つの侵入ルートの内、体育館からのルートは囮に使ったので新校舎裏の運動場からのルートしかない

体育館を消し飛ばされた相手は一誠達がいる運動場を警戒する筈だった

だが運動場を見る限り、敵らしき人影など何処にも存在しなかった

「本当だ。これだけ静か過ぎるとかえって気味悪いな。新も無事だったら良い――――――っ？」

一誠は不意にある考えが浮かんだ

リタイヤする者がいればアナウンスされる

さっきはアナウンスが無かったから、新はリタイヤしていない

新の力は『闇人』が作った最強（？）の鎧、そして新自身も強い

ライザーは１０日前、新を先に潰した方が良さそうとか言っていた……

一誠の頭脳に最悪の展開が過った

「……っ！ヤベェぞ木場！奴らの狙いは新かもしれねぇ！」

「何だって!?」

「新の力は俺達悪魔の天敵が作った鎧だったろ！ライザーはその力を１０日前まで知らなかった！」

「なるほど。そんな力を持っているのに駒の消費数『兵士（ポーン）』１つの竜崎くんを最初に警戒していたんだね。もしかしたら残りの駒総動員で竜崎くんを……。仕掛けたトラップに発動した形跡が無かったのはその為か……やられたね」

「のんびりしてる場合じゃねぇ！急ぐぞ木場！」

「待ってよイッセーくん。通信機を使って何処にいるのか聞かないと」

祐斗は通信を入れて新の通信機に繋げようとするが、流れてくるのは雑音のみ

「通信出来ない……魔力で妨害されてるのかな……？」

「通信出来ない!?だったらしらみ潰しに探すしか！」

「残念ながら、そうするしかない様だね」

「ほう。団体さんのお出ましってヤツか」

一誠の心配が当たっていた

合流しようと駆けていた新を取り囲むライザー眷属

『騎士（ナイト）』２人、『戦車（ルーク）』１人『僧侶（ビショップ）』２人、『兵士（ポーン）』５人――――残りのメンバーが集結している

「さて、小猫を殺ったのはどいつだ？」

「あら、心外ですわね。リアス・グレモリーさまの『戦車（ルーク）』を倒したのは私達ではなく、ユーベルーナですわ」

「ユーベルーナ……あの女魔導師か」

「ええ。『兵士（ポーン）』を犠牲（サクリファイス）にして、勝利させたところで狩る。獲物は何かをやり遂げた後が一番油断しやすく、狩りやすいですからね。『戦車（ルーク）』を最初に倒させてもらいましたわ。『キャスリング』がありますので」

『キャスリング』とは自分と『王（キング）』の位置を瞬間的に入れ替える技法

『兵士（ポーン）』のプロモーションの様に『戦車（ルーク）』のみが有している技である

だが、新にはそんな話を耳に入れる余裕などなかった

「能書きはどうでも良い。小猫の次は、俺を狩りに来たんだな？」

「その通りですわ。消費数『兵士（ポーン）』１つにもかかわらず、あなたの力はカーラマインを軽くあしらう程なら、全員で仲良く倒せば宜しいですもの」

そう言うと、お姫様『僧侶（ビショップ）』は後ろへ下がる

「……っ？おい。お前は戦わずに高みの見物か？オマケに９人がかりの陣を取らせるとは、随分と臆病者なんだな」

「し、失礼な！あなたごとき相手に、わざわざ出る必要がないからですわ！」

「気にしないでくれ、リアス・グレモリーの『兵士（ポーン）』。あの子は特殊だから。今回の戦いも殆ど観戦しているだけだ。彼女は――――いや、あの方はレイヴェル・フェニックス。ライザー様の妹君だ。特別な方法でライザー様の眷属悪魔とされているが、実の妹君だよ」

「フェニックス!?ライザーの妹!?つーか妹を眷属にするとは近親相姦……って、んな事気にしてる場合じゃなかったな」

新は静かに構えを取る

対するライザー側は、以前新が裸にした『騎士(ナイト)』カーラマインが出てくる

「まずはお前からか」

「うむ。あの時は裸にされてしまったが……今回はそうはいかないぞ。リアス・グレモリーの『兵士(ポーン)』」

「そういえば、ちゃんと名乗ってなかったな。俺はリアス・グレモリーに仕える『兵士(ポーン)』竜崎新だ」

「……竜崎新と言うのか」

「良かったなカーラマイン。あの『兵士（ポーン）』の名前が聞けて」

「――――っ!?な、何をいきなり！」

新はいきなり相手が口論し始めた事に目を細める

「あー。実はな、カーラマインはキミが心底気に入ったみたいで。あれ以来キミから貰った上着を寝間着代わりにしているらしくて」

「わぁぁぁぁぁぁぁっ！イザベラ！何故その事を知っているんだ!?」

「お、驚いた。騎士道精神を具現化した様なお前がそんな可愛らしい事を……」

新は流石に照れて頬を掻き、カーラマインは秘密を聞かれたせいで顔を真っ赤にした

「い、今のは聞かなかった事にしろ！」

「聞かなかった事にしろって言われてもな……」

「うぅっ……ならば、ここで記憶が残らない程倒す！今の話を忘れると言うまで斬る！」

「無茶苦茶過ぎるわ！それに――――次は本気でやらせてもらうぜ？数で不利な状況下にいるからな！」

新は闇皇へ化身し、１０日前と同じ様に剣を出す

ライザー陣営は初めて見る姿に顔が強張る

「な、なんて禍々しい姿だ……！魔力も以前とは桁違い……だが、二度も負ける訳にはいかない！我ら誇り高きフェニックス眷属は炎と風と命を司る！我が炎の剣を受けてみよ！」

カーラマインが剣を抜き、炎を宿らせる

横薙ぎの構えから突進してくるカーラマインに対し、新は刀身に左手を添える

「炎と風と命を司るフェニックス眷属か……なら俺は、万物を喰らう――――――――闇皇の蝙蝠だ」

オォォォォオオオオン……

柄の顔の眼がギラリと光り、呻き声が発せられる

左手で刀身をゆっくり擦ると、今度は赤じゃなく黒に染まっていく

「っ!?あの時とは違う色に……!何だ、この異様な魔力と全身を駆け巡る寒気は……!?」

カーラマインの炎の剣撃を剣で受け止める新

ギュゴォォォォォォォォォォ……!

装飾の顔がカーラマインの炎を喰らい、次第に炎が無くなっていく

「剣が炎を喰っている⁉」

「喰ってるとは少し違うな。赤は力を象徴する魔力だが、黒は吸収と反発を象徴する。即ち、お前の炎の力を取り込んでいるんだ」

蝙蝠の顔が全ての炎を喰らい終わると、刀身に込められた魔力が一層強い気迫を放つ

「一振り。この一振りでカーラマイン、お前は再び裸になるぜ。オォォォラァァァ

手と腰の剣が完全に粉砕され、カーラマインの鎧と服が千切れ飛ぶ

旋風が止むとカーラマインは裸体を隠す事も出来ずに、その場にペタンと崩れ落ちる

「あの時は、全く本気じゃなかったと言うのか……？つ、強過ぎる……っ」

新は剣をしまい、全裸で座り込むカーラマインに近寄る

「……私の負けだ。トドメを刺すなら刺せ。『騎士（ナイト）』として全力を尽くした。それで破れてリタイヤさせられるなら本望だ」

「これ以上戦えないあんたに攻撃なんざしたくないね。綺麗な裸体を傷付けるのは嫌なんだ」

新は鎧の手でカーラマインの乳房を揉む

「ひっ……っ、冷たいぞ……！もっと優しく……してくれ……きゃっ!?」

新はカーラマインを抱きかかえ、少し離れた場所に彼女を降ろす

「ど、どういうつもりだ?」

「まだ敵は8人もいる。俺とあいつらの戦いに巻き込ませない為に移動させた。不満か?」

新の言葉にカーラマインは頬を紅潮させながら首を横に振る

新は「じゃあな」と言って、さっきの場所へ戻っていく

「カーラマインを一撃で退けるとは。やはりキミはリアス・グレモリーの眷属の中で一番危険な存在かもしれない。相手を躊躇なく裸にする上、とてつもない強さを秘めている」

「あんたは確かイザベラ、だったな？俺の次の相手をしてくれるのか？」

「あぁ、キミの強さを見て久々にたぎってきた。私も全力でいかせてもらおう！」

イザベラがビュンッと駆け出し、新に拳を放つ

新はパンチを見切ってかわす

「ボクシングか。生憎（あいにく）、俺は接近戦も得意だぜ？」

「そうか。ならば、大幅にギアを上げよう！」

イザベラが更にスピードを上げて、拳を振る

顔面・鳩尾などの急所を狙ってくる拳を、新は難なく回避していく

「流石は『戦車（ルーク）』。威力もスピードも申し分無いが、俺を倒すには到底及ばないな」

「くっ！なら、これはどうだ！」

イザベラは右足の蹴りを放つ

新のコメカミに蹴りが炸裂した――――――が、蹴りは効いておらず、新はその足首を左手で掴む

「もらったぁ！」

「くっ、マズイ！」

新の突きに対し、イザベラは顔を庇うように両腕を交差させる

シュルッ、モニュッ

「な、何をしているっ!?」

新の手はイザベラの顔面ではなく、乳房が狙いだった

服の下から潜り込ませ、柔らかい乳房と乳首を堪能する

「あっ……や、やめろぉ……！はぁんっ……しょ、勝負の最中に……ひうっ！む、胸を、乳首を弄るなぁ……やめろぉ……っ。やめてぇ……っ」

生娘の如く喘ぎ声を出してしまうイザベラ

新は「そろそろ止めてやるか」と足を放すと、イザベラは体を守る様な姿勢を取る

「や、やはりキミは危険な男だ。その手技で……女を感じさせて骨抜きに……」

「あんたブラ着けてないのか……こんなモンまだ序の口だ。次はあんたを裸にしてやる」

新は体から魔力を放出し、右腕に集中させる

イザベラは拳でくるのかと身構える

新の右拳が震えを増していき――――蓄積した力が解き放たれる

「バッー！」

ゴオォォォオオオオオッ！

開いた右手をイザベラに向けて突き出すと衝撃波が発生し、イザベラに襲い掛かる

ビリビリビリビリビリッ！

服が弾け飛び、イザベラの裸体――――健康的な肢体、大きな乳房、ピンク色の乳首がお披露目される

「な、何だこれは！」

イザベラは直ぐに自分の裸体を隠そうとするが、新の右手がイザベラの両腕をガッチリ掴み、持ち上げる

そのせいで、イザベラは隠す事もままならない体勢となった

「やっ！み、見ないでくれ……恥ずかしいんだ……！」

「何を恥じらう必要があるってんだ。こんな良い裸体を持ってるなら、もっと自信を持てよ」

新が左手でイザベラの乳輪に爪を這わせる

円を描く様にゆっくりと……

「あっ、あぁぁあんっ！そ、それは……やめてくれぇ……！爪が……擦れて――――――

―っ!?に、2本もやめてぇぇぇぇ……!」

「ははっ、可愛い声を出すなぁ。本当はもっと弄(いじ)ってやりたいところだが、まだまだ味わい甲斐のある奴等がいる。そいつらも相手してやらないとな」

新はイザベラを持ち上げたまま、カーラマインの所へ行き、横に寝かせる

イザベラは裸体を隠す事もせず、荒い呼吸を続ける

「はぁ……はぁ……き、キミの技は……本当に恐ろしい……。ラ、ライザー様より上手だ……」

「伊達に今まで、数多くの女を抱いちゃいねぇよ。天敵である堕天使だって、俺に掛かれば骨抜きだ」

新はスタスタと戻っていく

レイヴェルは炎の翼を広げて空中へ避難する

「な、なんて破廉恥極まりない殿方……！女性を平気で裸にするなんて、心が痛みませんの!?」

「いや全然。寧ろ、この方が相手の戦意を失わせるから」

「ふ、不潔ですわ！シーリス！ニィ！リィ！シュリヤー！マリオン！ビュレント！６人がかりで攻めなさい！美南風（みはえ）は遠距離から攻撃して動きを止めなさい！」

「御意」「にゃ」「にゃにゃ」「はい」「かしこまりました」「了解です」「分かりました」

７人同時に相手、流石の新でもキツいと思われるが――――――新は余裕で首を鳴らしていた

「やっぱりそう来たか。なら、全員まとめて裸にしてやるぜ！」

新は爪を7人の方へ向ける

「私はカーラマインの様に甘くはないぞ！」

シーリスが大剣を持って攻めてくる

大振りな剣撃を新は回避し続ける

「攻撃が大振りだな。そんなんじゃ、いつまで経っても当たらねぇぞ」

「鎧を着けているのに、しかも『騎士（ナイト）』じゃないのに、何故こんなに速いんだ！ひぁんっ。か、かわしざまに胸を触るなぁ！」

「ほれほれぃ。ちゃんと攻撃しねぇと、どんどん触るぞ～」

姿は禍々しいのに、やっている事は完全な変態である……

新はバック宙で大きく飛び退く

「この変態！」

「下半身で物を考えるなんて愚劣にょ！」

左右からニィとリィが攻撃してくる

「ほ～。パンツを見せながら攻撃か……視点を変えたらお前らだって変態だぞ」

「にゃっ!?見ないでよ変態！」

ニィとリィの攻撃を防いだり、力をズラしていなす新

「にゃあ！」「にゃにゃあ！」

「おっと！」

ニィの拳を右手で掴み、リィの蹴りを左腕で挟む様に止める

「その状態では防御出来まい！」

シーリスが剣を振り降ろしてきた

新の両腕はニィとリィの攻撃を防いでるため、使う事が出来ない

しかし――――――

「エンガチョッ！」

ガキィィンッ！

なんと新は口でシーリスの大剣を止めた

これぞ「真剣白刃取り」ならぬ、「真剣白歯取り」である

「なっ！私の剣を歯で受け止めた!?」

新は力を入れ、シーリスの大剣を噛み砕く

そしてニィとリィをシーリスに向かって投げつける

「そろそろ裸にしてやるか！」

フォォォォォォォォォ……！

新の両腕に黒い魔力が宿り、ユラユラと蠢く

両腕を広げたまま、前傾姿勢を取る

「シャアッ！」

ザッ！一瞬で新は3人の後ろに、両腕を交差した状態でいた

「な、何だ今のは……？」

「全然見えなかったにゃ……」

3人が新の方を向き、新が振り向いて両腕をブンッと払うと、シーリス、ニィ、リィの服が消し飛び、裸体が公開された

「いにゃぁぁぁぁぁぁっ！」

「ひにゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「い、いつの間に裸に!?」

ニィとリィはうずくまって裸体を隠すが、シーリスは立ったまま裸体を隠す

「３人とも、なかなか良い体してんな。乳首もピンクだったし。さて次は――――――って、何だありゃ!?」

新の視線の先には『僧侶(ビショップ)』美南風が両手を頭上に翳し、その上に夥(おびただ)しい数の矢が漂っている光景があった

「美南風！矢を放ちなさい！」

「はい！」

美南風が手を前にやると、頭上にあった無数の矢が新に襲い掛かる

「うわぁぁぁぁぁぁぁっ！ナンチャッテ♪」

ブゥウウン

新の両手に赤い魔力が集まる

「ヒョウオオオオオオッ！」

シュバババババババッ！

新は一斉に襲い掛かる矢を、驚異のハンドスピードで一本残らず掴んでいく

「そ、そんな……」

「なんて奴だ……！」

数秒経ち、全ての矢を両手に収めた新

それを美南風に向かって――――――

「セイヤァァァァァァァァァァッ！」

全て跳ね返した

「ひいっ！」

新に跳ね返された矢は術者である美南風に襲い掛かっていったが、矢は美南風に直撃せず直ぐ傍を通過していく

殺られると思い目を瞑っていた美南風は恐る恐る目を開けてみる

自身に傷１つ付いてない事を怪訝に感じていると――――直後に美南風の着ている十二単（じゅうにひとえ）がバラバラに散った

和服で着痩せしていたのか、意外にも美南風はスタイルが良く乳首も綺麗だった

「そ、そんな……強すぎます……っ」

新のとてつもない強さに戦(おのの)く美南風は尻餅をつき、完全に戦意を失う

新は乳首に向かって手を合わせ「ごっそさん」と一言発し、残りの『兵士(ポーン)』３人の方を向く

一方、新の実力と戦術を目の当たりにしたシュリヤー、マリオン、ビュレントは軽くたじろいだ

「思ってた以上にスケベなボウヤね。顔は私好みなんだけど」

「正直言って……あまり戦いたくありませんわ」

「でも、向こうは見逃してくれたりしないわよね……」

その通り、今の新は戦闘意欲と情欲を燃やした鬼と化している

逃げ場は何処にも無い……

覚悟を決めた３人はそれぞれ駆け出す

ビュレントは右、シュリヤーは左、マリオンは中央から攻め込んだ

ビュレントとマリオンが手から炎の魔力を撃ち放つも、新は剣でそれを切り裂く

その隙を突いてシュリヤーの蹴り足が新のコメカミを狙う

「おっと、あぶねっ！」

新は気配を察知してシュリヤーの蹴り足を左腕で防ぎ、その足を掴んでマリオンとビュレントがいる方向へ投げ飛ばす

体勢を立て直して着地するシュリヤー、その直後に３人は炎の魔力を高めて新に一斉攻撃を仕掛けた

並列で飛んでくる炎に新は剣を掲げ、刀身に黒い魔力を集束させ――――飛んできた炎を綿菓子の如く絡め取った

「嘘でしょ……？こんな事って……」

３人が絶句する中、新は続いて赤い魔力を刀身に流し込む

炎と融合した魔力は並々ならぬオーラを発していた

「お返ししてやるぜ」

新は悪(あく)どい笑みを浮かべながら三度剣を振り下ろし、炎を纏った斬撃が目の前の獲物に向かって突き進む

マリオンとビュレントは直ぐに炎と風を混ぜた防壁を作ったが……斬撃の威力に押されてしまう

「そ、そんなぁ……っ」

「私達の結界が……っ」

粘りを見せたものの防壁は呆気なく消され、斬撃は3人の眼前で爆発

視界を封じた隙に新はダッシュで駆け抜けた

3人の近くまで到着した新は神速の剣捌きを行う

その剣速で爆煙が晴れ、『兵士』の3人は何が起こったのか分からず呆然と立ち尽くしていた

ズバババッ！

その刹那――――シュリヤー、マリオン、ビュレントの衣類は下着もろとも細かく粉

砕され、綺麗な裸体があらわとなる

それぞれの体は引き締まっており、尚且つ出る所は出ていた

「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

マリオンとビュレントは悲鳴を上げて大事な部分を手で隠す

シュリヤーは悲鳴を上げていないが微かに頬を紅潮させ、先の2人と同様に大事な部分を手で隠した

「あれだけの攻撃をしておきながら服だけを切り裂くなんて……恐れ入るわ、ボウヤ」

「そりゃどうも。俺からも礼を言わせてもらうぜ。あんたらの乳首と裸もマジで綺麗だったよ」

新は去り際に３人の乳首を指で味わい、他のライザー眷属の乳首を味わうべく歩みを進めた

新の驚異的な強さにレイヴェルは戦慄する

「ぜ、全滅……！こんな事が……!?」

「お、おのれ……！」

シーリスが２本目の剣を手に持ち、裸体を隠さず構える

「止めときな。手が震えてるぞ」

「このまま引き下がれるか！はぁぁぁあああっ！」

シーリスが突っ込んでくる

新は剣を掴み取り、右手でシーリスの裸体を撫で回す

「ぁんっ……」

感じさせられたシーリスは可愛らしい喘ぎ声を出してペタリと座り込んだ

「はい、一丁上がりぃ。さ～て……次は」

「「ひっ」」

新は近くでうずくまるニィとリィに近づいていく

「い、いやぁ……」

「来ないで……お願い……」

ニィとリィは蹂躙される恐怖に耐えきれず泣き出してしまう

溢れんばかりに出てくる涙、恐怖に裸体を震わせる２人を見た新は――――

「やめた。マジ泣きしてる女を弄るのは俺の主義に反するな」

彼自身が守っているルールに則り見逃した

そこへ丁度、新を探し回っていた一誠と祐斗がやって来る

「おおっ！ライザーの下僕悪魔達が全員裸に！新！これをお前１人でやったのか!?」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる？」

「俺……俺……！今初めてお前を尊敬するよ！ただのエロ野郎じゃなかったんだな！」

「一誠！今まで俺をただのエロ野郎と思ってたのかよ!?」

「あはは……さすが竜崎くん……容赦ないね……僕らの出番が無くなっちゃった」

「とにかく！これでこっちが有利になった！」

一誠と祐斗は順番に新とハイタッチを交わす

だが――――

『リアス・グレモリーさまの「女王（クイーン）」一名、リタイヤ』

「「なっ!?」」

なんと最強の駒、『女王（クイーン）』である朱乃のリタイヤ報告が流れた

更に――――

「……っ！一誠、祐斗！離れろ！」

新がその場から離れ、続く様に別々に飛び退く２人

ドォォォオオオンッ！

『リアス・グレモリーさまの「騎士（ナイト）」一名、リタイヤ』

「っ！木場ぁっ！」

「祐斗ぉっ！」

無情に響いた爆発音

嘲笑うかの様に、ライザーの『女王（クイーン）』は冷笑を浮かべていた……

怒りが生み出した進化

「『騎士(ナイト)』撃破(テイク)」

空に浮かぶライザー眷属の『女王(クイーン)』

新はそいつを見上げた

「あいつが……小猫の、朱乃さんの、祐斗の仇か……！」

「朱乃さんと木場をやったのもてめぇか！降りてこい！朱乃さんの！小猫ちゃんの！木場の仇を取ってやる！降りてきやがれぇぇぇっ！」

一誠が拳を向けて『女王(クイーン)』を挑発するが、相手はただ嘲笑するだけだった

その後に通信でアーシアから、リアスと共に敵本陣である新校舎の屋上に侵入し、ラ

イザーと一騎討ちをしていると報告を受ける一誠

一方で、新は空にいるライザーの『女王(クイーン)』を睨みながら拳を震わせ、歯軋りをしていた

「グロギャァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！」

獣や龍とは違う奇怪な咆哮を上げる新

その雄叫びに周りの木々は折れ、大地に亀裂が入る

一誠のとは比べ物にならない怒り

仲間を含む全員を戦慄させた

「あ、新……？」

咆哮が止み、新は一度下を向いてから再び敵の『女王(クイーン)』を見上げる

「一誠。ここは俺に殺らせてくれないか？あの『女王(クイーン)』だけは許さねぇ。戦略とはいえ、平気で仲間を捨て駒みたいに扱いやがるあいつを……小猫に朱乃、祐斗を殺りやがったあいつを……。お前はリアスとアーシアの所へ行け」

「新！俺だってあいつを許せねぇんだ！ここは２人で――――――」

「無駄に戦力を減らす気か？向こうは正攻法で戦う気なんざ全く無かったんだよ。だったら、こっちも一騎討ちなんてブチ壊してやれ。『王(キング)』を倒せばゲーム終了だ……リアスと共に、クソフェニックスをブッ殺してやれ！」

「言ってる事は外道に近いが……分かった！必ずお前も来いよ！あの『女王(クイーン)』をブッ倒してな！」

一誠は主であるリアスのもとへ駆け出していく

ユーベルーナが行かせまいと一誠を攻撃しようとするが、新の放った魔力弾に阻まれる

すぐに新の足場を爆発させるが、新は既に横へ回避していた

「爆発系の魔法か。しかも、かなり強力だな」

「その通り。私は気に入らんが『爆弾王妃（ボム・クイーン）』と呼ばれている」

「『爆弾王妃（ボム・クイーン）』……そらぁ大層な名前だ」

新の右手に螺旋状の魔力が集まる

「俺が爆発させられるか、あんたが爆発させられるか……勝負だ！」

新は勢い良く空へ飛び上がる

ユーベルーナは爆発の魔法を撃ってくるが、新は空中で方向転換して回避しながら接近していく

螺旋状の魔力を纏わせた右手を突き出す

ユーベルーナはギリギリでかわすものの、螺旋状の魔力の渦で下の服が破かれる

「……ッ！っ!?服が！」

「隠してる暇はねぇぞ！」

新は勢いを利用して、回し蹴りをユーベルーナの腹に入れる

鎧の足で蹴られて大ダメージを受けるユーベルーナ

「カハっ……！」

「まだまだぁ！」

新は右足を振り上げ、カカト落としを相手の腹に決める

ユーベルーナは隕石の様な勢いで地面に落下した

「ゴホッ、ゴホッ！おのれ……！――――っ!?」

ユーベルーナが空を見上げると、新の姿は何処にもいない

新は既に地上に降り立ち、ユーベルーナの真正面に立っていた

「ハァッ！」

ドゴッ！新の魔力を込めた右拳がユーベルーナの腹に食い込む

ユーベルーナに攻撃の隙を与えず、拳打を与えていく

一切の妥協もせず……

「おおおおおおらぁぁぁぁぁぁっ！」

「グハッ！」

新の渾身の一撃でユーベルーナは地面を転がりながら吹っ飛ぶ

「ぐっ……！私はライザー様の『女王（クイーン）』……！こんな『兵士（ポーン）』相手に、負ける事など許されない！私の魔法で砕けろぉっ！」

ドゴォォォンッ！

巨大な爆発、いなくなった敵、ユーベルーナは勝ち誇った表情をした

「正常な判断が出来なくなったら終わりだぜ？『爆弾王妃（ボム・クイーン）』さんよぉ」

ドムッ！

新は巨大な爆発から回避し、ユーベルーナの真後ろにいた

そして、拳が『爆弾王妃（ボムクイーン）』の背中にめり込む

「カッ……い、いつの間に……!?」

「シメェだ――――――ブッ飛べ」

ギュォォオオオオオオッ！

拳に力を入れると、魔力の衝撃波がユーベルーナを通り過ぎる様に放出される

「きゃぁぁぁぁぁぁっ！」

完全に油断していたユーベルーナは、裸のまま地に伏せる

本来なら、新は裸のユーベルーナに猥褻行為をする筈だが、今回はしない……いや、してる暇が無いほどキレていた

「小猫の無念、朱乃さんの無念、祐斗の無念。その全てをまとめてぶつけてやった。もう立てない筈だ」

傷だらけの状態で憎々しげに新を睨むユーベルーナ

そこへレイヴェル・フェニックスがユーベルーナに近づき、何かを飲ませた

すると――――――ユーベルーナの傷が綺麗サッパリ消え、立ち上がった

「まさかユーベルーナをここまで追い込むとは予想外でしたわ……でも、結局あなた方の負けになりますわ」

「……今そいつに何をした？」

「フェニックスの涙。聞いた事あります？」

フェニックスの涙とはフェニックス家に伝わる秘薬

使用すれば如何なる傷も、体力も回復するアイテムである

それを聞いて、新はすぐに理解出来た

「朱乃さんを倒せたのは、そのフェニックスの涙を使ったからか」

「そうですわ。卑怯と仰らないで下さるかしら？そちらだって、『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』を持つ者がいるでしょう？それにちゃんとルールにも記載されてますわ。『フェニックスの涙はゲームに参加する悪魔二名までしか所持できない』――――と。あまりに強力なので規制されてしまいましたけどね。それに私達の一族の涙は高値で取り引きされますのよ。おかげでフェニックス家の財政はとっても潤ってますわ。そして今、あなた方が

相手をしてるのは『不死鳥』。どんなに絶対の力を持っていても不死身が相手ではどうしようもありませんわ。不死身と涙、私達の自慢でしてよ」

ペチャクチャと自慢気に話すレイヴェル・フェニックス

最初からリアス陣営に勝ち目など無いと言ってやったつもりだろうが――――新は不気味に笑っていた

「クックックックック……。不死身かぁ……そいつぁ良いねぇ。だが、それがどうした？何度でもブチ殺せば良いだけの話だ。何か今の俺なら――――それぐらい余裕で出来そうだ」

ゴォォォオオオオオッ！

新の全身から放出される赤と黒の魔力が混ざり合う

混ざり合った魔力が新を――――闇皇を変えていく……

両肩、両腕、両足に鋭い爪の様な刃物が生え、更に異形さを増した

「な、何なんですの……!?何で、あの殿方は魔力も体力も尽きないんですの……!?それにあの姿は……!?」

「レイヴェル様！下がってください！我が全魔力をもって、あの男を打ち砕きます！」

レイヴェルが炎の翼を広げ空へ舞うと、ユーベルーナが全力の爆発魔法を新に向かって放つ

巨大な爆発の渦が、異形さを増した新を飲み込もうとした

カコッ……ギュォォォォォォォッ……！

「っ!?わ、私の爆発を……喰らってる……!?バカな！この男は化け物か……!?」

なんと新は爆発の渦をいとも簡単に、口から吸収している

爆発の渦は小さくなっていった挙げ句、完全に新の口の中へ……

静寂に包まれる空気……

新の口が動き――――――

ギュバァァァァァァァァァァァッ！

巨大な赤い閃光を発射した

そしてユーベルーナは何も出来ずに消え去っていく

『ライザー・フェニックスさまの「女王（クイーン）」一名、リタイヤ』

リタイヤ報告が流れる中、レイヴェルも……裸にされたライザー眷属全員も恐怖した

「き、危険過ぎます……！あの殿方は……！お、お兄さまの所へ行かなければ――――――」

ギュゥゥンッ！ガシッ！

レイヴェルの体を、先端の尖った触手が拘束する

触手は新の腕から伸びていた

捕縛したレイヴェルを力任せに引っ張る新

「きゃあっ！」

レイヴェルは新のすぐ前に落ち、眼前の闇皇（バケモノ）が不気味な呼吸をしながら凝視してくる

「ひっ！た、助けて……！誰か、誰か助けて！」

レイヴェルは残った眷属に助けを求めるが効果なし

眷属達も今の新――――――異形の化け物に恐怖していたから

化け物となった闇皇はレイヴェルの腕と足を触手で縛り動けないようにする

更にドレスに手をかけ、強引に破り捨てる

上下の下着も破り、レイヴェルは裸にされた

「い、いや……！やめてください……こんなの……嫌です……！」

泣きじゃくるレイヴェル

だが、その声は化け物と化した新には届かないだろう……

化け物は唾液をレイヴェルの乳房に垂らす

ゆっくりと垂れる唾液は乳房を伝って地に流れていく

そして……化け物の舌がレイヴェルの乳房を味わう

犯される……レイヴェルは逃げる事も出来ず、ただ恐怖に怯え、泣くしか出来なかった

「う……ウゥゥッ……」

化け物から呻き声が出てくると、レイヴェルを拘束していた触手と全身から隆起していた爪が消えていく

元の闇皇――――新の姿に戻った

「……っ？い、今……何があった？『女王（クイーン）』を倒そうと思ったら、いきなり目の前が真っ

暗になって……って、何で乳首が目の前に？」

新はちゃんと乳房に反応した

どうやら本当に元に戻った様だ

「あ、あなた……何も覚えてないんですの……？」

「いや、一誠に必ず屋上へ来いって言われて。お前んとこの『女王（クイーン）』をボコボコにして、フェニックスの涙の説明を聞いたトコまでは覚えてるが……お前いつの間に裸になったんだ？」

新の言葉に顔を赤くしたレイヴェルはすぐに隠そうとするが、手が震え過ぎて動かない

手だけでなく、足も……

「か、体が……動きませんわ……せ、責任……取ってくださいまし……」

「ん～、そう言われてもな。もうお前らは全員戦えないみたいだし。悪いけど、新校舎の屋上へ行かせてもらうわ」

「ちょ、ちょっと！裸の私をこのままにするおつもりですか!?」

「今はお前らよりも、一誠とリアスの所に行かなきゃなんねぇんだよ。どうしても相手して欲しいなら、ベッドの上で頼んでくれや。じゃっ」

新は一誠とリアスがいる新校舎の屋上へ走っていった

自分の身に何が起こっていたのか分からないが、今は一誠達のもとへと急いだ

「あの殿方……最低ですわ……」

初の敗北

新は今、新校舎の廊下を走っている

敵本陣に侵入した事で『プロモーション』の発動条件は揃ったが、まだ使わない

全てはライザーを倒す為に取っておく

「一誠、リアス、アーシア。今行くから待ってろよ！」

屋上へ続く階段を上っていき、少し開いた扉を蹴りで開け放つ

新の目の前にいたのは、余裕の顔を浮かべるライザー

身体中が血だらけで、目が虚ろになった一誠

その一誠を、涙を流しながら抱き止める『王』リアス・グレモリー

結界の中に閉じ込められたアーシア

一目で状況は最悪だと判断出来た

「ほう……もう一人の『兵士(ポーン)』か。俺の『女王(クイーン)』を倒したくらいでいい気に――――――」

ザシュッ！

新の爪がライザーを縦に切り裂いた

しかし、ライザーは不死鳥フェニックスの力を持っている

すぐに切り裂かれた部分から炎が広がり、ライザーは元の状態に復活した

「お前も頭が悪い奴だな。俺は不死鳥フェニックス。灰の中から甦るフェニックスは、

何度でも肉体を再生出来る。何度俺を殺そうが俺は死な――――――」

ザシュッ！

新はライザーを横に切り裂く

また元の状態に戻るライザー

首をコキコキ鳴らしながら嘆息する

「だから何度も言ってるだろ？俺は――――――」

ドシュッ！

今度はライザーの顔面を貫くが、やっぱり再生してしまう

「少しは人の話を聞け！お前が何度俺を殺しても、俺は何度でも復活するんだ！最初か

らお前らに勝ち目なんて物は無いんだよ！」

「関係ねぇよ。何度でも復活するなら、何度でもブッ殺せば良い！『プロモーション』！『女王（クイーン）』！」

新の体に力がみなぎる

ドクンッ！

右腕が疼く……ユーベルーナに対抗していた時と同じ様な力の波動を感じる新

次第に右腕が形状を変えていく

右腕と右肩に爪の様な刃物が隆起し、新は初めて見る力に驚いてしまう

「な、何だこの腕……？初めて見た……」

「これが『闇皇(やみおう)の鎧』の力か!?その腕から伝わる禍々しい気迫と魔力……今の貴様の腕は、ただの化け物の腕だ!」

「化け物?そいつぁ結構!化け物にでもならなきゃ、不死身のテメェを殺せそうにねぇからな!」

新が右腕を振ると、赤い魔力で作られたカマイタチが発生し、ライザーを上下に分断する

二発目のカマイタチを放つ新

ライザーはそれを回避して肉体を再生させる

「す、スゲェ力だ……!腕が痺れる……!だが、この力を使いこなせば……フェニックスをブッ殺せる!」

新の右腕から先端が尖った触手が槍となって伸びる

ライザーは手のひらに炎を集め、新を焼き尽くそうと投げつける

だが――――炎は槍に掻き消され、ライザーの翼を捕縛する

「おぉぉぉぉぉぉっ！」

新はライザーを引き寄せ、左爪で右翼を切り裂く

「ぐぅぅっ……！化け物め！このまま焼き尽くしてやる！至近距離から撃つ俺の炎に耐えられた奴はいない！不死鳥フェニックスの炎を受けて――――――――燃え尽きろぉぉぉぉぉぉっ！」

ライザーの体から放出された特大の炎が新を包み込む

「ぐぉぉぉぉぉぉっ！あっちぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」

流石に不死鳥の炎は効いている新

新は右手を伸ばしてライザーの頭部を掴む

「はっ！悪あがきもいい加減にしろよ！そんな事したところで、状況は何も――――――っ!?な、何だ!?魔力が、吸い取られていく……!?」

ライザーの炎の左翼が次第に小さくなっていく

そればかりか……新を焼き尽くそうとしていた炎も一緒に、新の右手に吸い込まれていく

黒い魔力は吸収と反発の象徴

新はソレを使ってライザーの炎を吸収する

「ぐあぁぁぁあああっ！さ、流石に不死鳥の炎はキツいな……！安心しろ、すぐに返して

やるぜぇぇぇぇぇぇっ！」

新は右手をライザーの腹にめり込ませ――――――内部から爆発させた

跡形もなく散った頭部以外のライザーのパーツ

頭部がゴトッと地面に落ちる

「ぜぇ……ぜぇ……疲れるわ……！腕も元に戻っちまった……もう少しだ……！もう少しで、ライザーを倒せる……！ゲームに勝てる！」

頭部だけのライザーは時間を掛けながらも再生し、新の前に立つ

「な、何なんだお前は！俺の炎を吸収しただけでなく、それを自らの力に転換させやがった！それが闇人の力なのか!?お前はいったい何者なんだ!?」

明らかに狼狽しているライザーに、新は答える

「俺は元人間のバウンティハンター兼悪魔だ。それ以上でも、それ以下でもねぇ！」

新がゆっくりと足を出すと、ライザーは一歩後退する

いくら肉体が不死身でも、心が折れてしまっては敗北

今のライザーは完全に新を恐れていた

「奴の顔が一変した。勝てる、勝てるぞ……！一誠、リアス、アーシア、もう少し待ってくれや。今からこいつに負けを――――――」

『リアス・グレモリーさまの投了（リザイン）を確認。ライザー・フェニックスさまの勝利です』

「――――っ!?」

突如鳴ったアナウンスは新の主、リアス・グレモリーの敗北を知らせる物だった

新は振り向いて、俯いてるリアスを見た

鎧を解除し、ズカズカとリアスに歩み寄る

「なんでだよ？なんで投了（リザイン）なんかしたんだ？」

「……」

「なんで『王（キング）』のお前が諦めてんだ？ライザーを倒すって、自分で言ってたんじゃなかったのかよ？」

「……」

終始沈黙するリアスに新は我慢出来ず、胸ぐらを掴んで強引に立たせる

「黙ってないで何とか言えや！なに真っ先に降参してんだよ！もう少しで俺はライザー

に勝てたんだぞ！」

「もう……良いのよ。私はこれ以上、あなた達に傷付いて欲しくない……」

涙を流すリアス

新は血まみれの一誠を見て確信した

「一誠がボロボロになったから、投了したのか？」

リアスは黙って一誠の方を見る

新はその動きを肯定と受け取った

「……そうかい。お前は、たった1人の仲間がボロボロになったからって理由で降参する様な弱い女なのかよ？小猫や朱乃さん、祐斗がどんな思いでリタイヤしていったか分かってんのか!?そいつらの無念を無駄にしない為にも、勝ちを持って帰る事がせめても

の手向けなんじゃねぇのか!?『王(キング)』としての責務なんじゃねぇのか!?」

新の言葉にリアスは何も言い返さない

ただ黙っているだけだった

新は掴んでいる手を離し、フラフラと屋上の扉に歩いていく

扉を開けて校舎の中に入る

「……チクショウが」

結婚式乱入！

ングングング……

「っぷはぁ！あ～……マスター、カシオレもう一杯」

「新、もうやめときなよ。これで何杯めだ？流石に飲み過ぎだぞ」

レーティングゲームが終わった翌日

新はレイナーレ達がバイトしている行き付けの酒場で飲んだくれていた

リアスの不甲斐ない心境と態度が、未だに納得いかない新は頬杖をつく

「一誠が……たった1人の仲間が傷付いただけで降参とかよ～……だったら、マジの戦いでも敵に命乞いをすんのかよ……俺達バウンティハンターだって、時には共同で仕事

したりする時もあるから、一時的な仲間はいるんだよ。その仲間が殺られた時は……苦しくても目の前の賞金首を捕まえなきゃならねぇんだよ……なのにリアスときたら」

新にもレイナーレ達の他、仕事仲間のバウンティハンターはいる

一緒に賞金首を捕まえたり、酒を飲み交わしたり、ギャンブルしたり、バカ笑いしたりと……数多くの仕事仲間がいた

だが職業上、その仲間が死んでしまう事も少なくないし、死んでしまっても悔いている暇などない

賞金首を討伐しなければ一般市民の生活は脅かされ、自分達も生きていけないからだ

「仕方無いんじゃないか?グレモリー家は寵愛に深い一族らしいから」

「寵愛に深いって言われてもなぁ……戦いはそんなに甘いモンじゃねぇんだよ。特に戦闘の指揮を執る奴は情に流されちゃいけねぇのに……情けねぇの一言だ」

「じゃあ、新はリアス・グレモリーを見限るのか？」

酒場のマスターの言葉に新はゆっくりと起き上がり、グラスに注がれたカシスオレンジを一気に飲み干す

「ぷはぁっ。正直……分からねぇ」

「分からない？普通それだけ愚痴るなら見限るでしょう？」

バニー姿のレイナーレが割り込んでくる

「あん時は俺も本気で見限ろうかって思ったよ。けどよ……一誠に向けた目を思い出しちまったんだ。あれは一誠を失いたくない色の他にも、俺達に対して申し訳ないって色が混じってた気がする……そう思うと、何だかなぁ……」

「……らしくないわね」

レイナーレの言葉に理解出来なかった新は「どういう意味だ？」と聞く

「アラタはどうして私達を居候させてるの？」

「は？そりゃあ、仕事に役立ちそうだし……良い女を殺すなんて勿体無いから」

「リアス・グレモリーの第一印象は？」

「揉み応えありそうな胸してて、紅髪の綺麗な良い女」

「だったら、それで良いんじゃないの？」

レイナーレが隣に座って言った

「アラタは天敵である私達堕天使の命を拾った。良い女だからと言うあまりにもバカげた理由でね。だったら……それと同じ様に、リアス・グレモリーも助けたら良いんじゃ

ないの？」

確かにレイナーレ達堕天使は村上に裏切られた時、新が拾ってくれなかったらリアスに殺されていた

だが、彼女達をどうするかは新に任せられ、結果――――――新の仕事仲間兼居候になった

良い女だからと言う理由で……

新はその事を思い出した

「そうだったな……」

「そうそう♪アラタはドスケベなんだから、それだけで助けに行けば良いの～♪」

「悩んでいる姿など、お前らしくない」

レイナーレと同じバニー姿のカラワーナとミッテルトが新を励ます

新は少し沈黙するが、すぐに立ち上がる

「……そうだよな。ふっ、何悩んでたんだ俺は。リアスは良い女なんだ。そんな良い女の涙を見て、黙ってる訳にもいかねぇよな！」

「ふふっ。やっとあなたらしくなったわね」

「サンキュー3人とも。お陰で次にやるべき事が決まったぜ」

結婚式当日、新に届いた一通の手紙

それには結婚式の会場に転移する魔方陣があった

差出人はサーゼクス・ルシファー……リアスの兄だった

『妹を取り戻したいなら殴り込んで来なさい』と言う文面と、一誠は既に会場に転移したと言う文面が書かれていた

無論、新の答えは決まっていた

「行きますか。その結婚式とやらに」

「待ちなさいアラタ」

後ろからの声、振り向くとレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトがいた

レイナーレが新に近づき――――――キスをした

「――――っ!?」

「んっ……ちゅむ、ちゅぱぁ……はむっ。……ふふっ、景気付けよ。ありがたく思いなさい」

妖艶な笑みを浮かべるレイナーレ

彼女の頬が少し紅潮していた

「レイナーレ様だけじゃないよアラタっ。うちも～♪んちゅ～♪」

ミッテルトも負けじと新にキスをする

大人顔負けの舌使いで新にエールを贈る

「うちらのファーストキスあげたんだから、絶対戻ってきてよね♪」

「……あぁ。当たり前だ」

「待てアラタ。私を忘れているぞ？んむっ……ちゅう……ちゅぱっ」

カラワーナも新の唇に自らの唇をくっ付ける

舌を使い交わす濃厚なキスの３コンボに新は大満足

「お前の唇、なかなか美味しいな。クセになりそうだ」

「ははっ。今まで味わってきたキスの中じゃ、お前ら３人が一番かもしれねぇや。ありがとよ……じゃあ、行ってくるぜ。主を取り戻しに」

魔方陣が強く光り、新の姿が消える

自分らしさを取り戻した新には、もう迷いの文字など微塵もなかった

「レイナーレ様。アラタが帰ってきたらどうします？うちとしては、そろそろ……アラタと交わりたい♪」

「ミッテルト、あなたねぇ……でも、アラタなら良いかしら」

「帰ってきたとしても、まだ言わないでおきましょう。押し掛けたら、向こうから来てくれるかもしれません」

「そうね。じゃあ私が1番で」

「ん～。じゃあうちはお風呂で襲っちゃお～っと♪」

「私も風呂でしようか」

３人の堕天使は新の帰りを楽しみにしながら部屋に戻っていった

「会場前か。随分とデケェ扉だな」

新は結婚式会場に繋がる扉の前にいた

扉に耳を近づけ、微かに聞こえてくる話し声に耳を集中させる

誰が言ってるかは分からないが、ドラゴンＶＳフェニックス

一誠が勝てばリアスを連れて帰っても良いと言う話を聞いた

「やっぱ一誠も来てたか。んじゃ、俺も会場に入るか」

新は闇皇の姿に変異して、手に魔力を溜める

そして――――――豪快に扉を破壊して会場に足を踏み入れた

「どうもこんばんわ～。結婚式に乱入しに来ました～」

「あ、新！」

一誠が新に駆け寄る

「お前どうしてここに!?てっきり、部長を見限ったかと……」

「本当に見限ったなら、ここには来ねぇよ。お前だってリアス部長を取り返したいんだろ？俺も付き合うぜ」

「――――っ。良いのか？新」

「そいつはこっちの台詞だ。お前ゲームの時はあれだけボロボロにされたんだ。次は――――死ぬかもしれねぇぞ？」

新と同じく、一誠の目には迷いが無かった

それを確認した新は一誠の隣に並ぶ

「……良い面構えじゃねぇか。一誠、やるぞ。本気で守りたい物は死んでも守りきれ！それが男って奴だ！」

「当たり前だ！部長をあんな奴に渡してたまるかよっ！」

拳をぶつけ合い、新と一誠は再び宿敵ライザー・フェニックスと対峙する

闇皇＆赤龍帝ＶＳ不死鳥

魔王サーゼクス・ルシファーの計らいで急遽作られた空間

その空間の中央で対峙する新＆一誠組とライザー

一誠の手には既に『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』が出現していた

『竜崎くん、もう来ないかと思ってたよ』

「リアス部長の兄、魔王様に頼まれちゃ行かない訳にもいかねぇだろ？」

白いタキシード姿の祐斗に言葉を返す新

すぐ近くでは着物を着た朱乃とドレス姿の小猫もいる

「それに――――女の涙を見ても助けに行かねぇなんざ、男として失格だと思ったんだ」

『あらあら。新さんらしいですわね』

『……見直しました』

バトルを取り仕切る審判が戦いの開始を告げ、ライザーは炎の翼を生やす

「赤龍帝、お前の能力は既に全て割れている。自分の能力を倍にしていく神器（セイクリッド・ギア）、『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』で、レーティングゲームでの戦いの最中に発現した――――倍増した力を仲間や武器に譲渡する能力だ。しかし、お前みたいなクズに使いこなせる代物じゃない」

一誠の新しい力とは先程ライザーが言った様に、倍増した力を仲間や武器に譲渡する能力『赤龍帝からの贈り物（ブーステッド・ギア・ギフト）』

レーティングゲームでライザーと戦ってる最中に発現した能力らしいが、今は殆ど使えそうにない

一誠の基本スペックが壊滅的に低すぎるからである

だが、一誠は満面の笑みを見せる

「新、１０秒でケリをつけるぞ」

「１０秒？やけに強気じゃねぇか。良いぜ、速攻であのクソッタレをぶっ飛ばしてやろうや」

一誠の提案に新は拳を打ち付ける

モニター越しに訝しげな顔をするリアスに向けて一誠が叫んだ

「部長！プロモーションの許可をお願いしますッ！」

一誠の叫びにリアスが頷く

プロモーションの許可が下りた

『プロモーション』！『女王（クイーン）』！」

「そんじゃ俺もッ！」

新と一誠が最強の駒に昇格

一誠はブーステッド・ギアを頭上に掲げながら再び叫ぶ

「部長！俺は木場みたいな剣の才能はありません！朱乃さんみたいな魔力の天才でもありません！小猫ちゃんみたいなバカ力もないし、アーシアの治癒の力もありません！新みたいに特別な力を持っていません！それでも最強の『兵士（ポーン）』になりますッ！」

一誠が現す誓いに新は口の両端を吊り上げる

「最強の『兵士(ポーン)』になる――――――か。良い目標を持ってんじゃねぇか。しっかし、プククッ。小猫みたいなバカ力って！」

『……笑い過ぎです』

小猫がムスッとした顔で新を睨んでいた

「あなたのためなら、俺は神様だってぶっ倒してみせます！このブーステッド・ギアで！俺の唯一の武器で！俺はあなたを守ってみせます！輝きやがれぇぇぇぇぇッッ!!オーバーブーストォッ!!」

『Welsh(ウェルシュ) Dragon(ドラゴン) Over(オーバー) Booster(ブースター)!!!!』

籠手の宝玉から赤い閃光が解き放たれ、一誠の体を包み込む

そして、一誠の肉体に赤い鎧が纏っていく

姿はまさにドラゴンその物だった

「鎧!?赤龍帝の力を鎧に具現化させたのか!?」

「これが龍帝の力！　禁手（バランス・ブレイカー）、『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）』――――俺を、俺達を止めたきゃ魔王さまに頼み込め！何しろ、『禁じられた忌々しい外法』らしいからな！」

「赤い鎧……！俺に宿ってる『闇皇の鎧』と同じ様な感じだが、伝わってくる魔力が半端じゃねぇな。さぁ一誠、ブッ潰してやろうぜ！」

『X（テン）』

籠手からカウントが開始され、一誠は両手の間に魔力の塊を生み出し、ライザーに向けて発射する

新も両手に赤い魔力を集束させ、帯状の波動を撃ち放った

ライザーは撃ち出された魔力を避ける

『Ⅸ(ナイン)』

一誠の鎧の背部にあるロケット噴出口から魔力が噴き出し、猛スピードで攻撃しようとしたが、制御出来ずに壁へ激突してしまった

新はライザーの背後に回り込み、右爪に魔力を纏わせて斬りかかっていく

危険な気配を察知したライザーは急降下で新の爪を回避した

『Ⅷ(エイト)』

「赤龍帝……ッ！闇皇……ッ！クソガキどもッ!!悪いが手加減しないぜ！認めたくないが、今のお前達はバケモノだ！主であるリアスの前で散れ！火の鳥と鳳凰！そして不死

鳥フェニックスと称えられた我が一族の業火！その身で受けて燃え尽きろォォォッ！」

ライザーの背中に巨大な炎の両翼が出現し、火炎に身を包みながら高速で２人に迫る

「「てめぇのチンケな炎で俺達が消える訳ねぇだろぉぉぉぉっ！」」

『Ⅶ（セブン）』

３人の拳が顔面にぶつかり合う

その衝撃で三者は吹き飛び、新は何とか着地に成功するものの、一誠は痛みと熱のせいで吐血してしまう

「赤龍帝！やはりお前はブーステッド・ギアが無ければただのクズ――――――ゴバッ！」

「何だ？ライザーが血を吐いた？」

新が疑問の視線を一誠に向けると、その理由が分かった

一誠の左手に悪魔の天敵アイテム、十字架がある

「へ、へへ……っ。うちの『僧侶(ビショップ)』は元シスターでね。奥にしまっていた物を借りてきたんだ……！十字架の効果を神器で増大させて、あんたを殴った。高めに高めた聖なる攻撃は、たとえ不死身のフェニックスでも早々癒せないんじゃないか？」

『Ⅵ(シックス)』

十字架は悪魔の苦手なもの

そんな物は持つだけで自身を激しく痛めつける

新はその問題を考察しながら一誠の左手に注目した

「……っ！まさか一誠、籠手に宿るドラゴンに自分の腕を……!?」

「ああ、新の言う通り。俺はこの力を一時的にでも得るために、左腕を代価にくれてやった。俺の左腕は本物のドラゴンの腕だ。だから、十字架は効かない」

「正気か貴様!?そんな事をすれば二度と元の腕には戻らない！お前はそれが分かっているのか!?」

『Ｖ（ファイブ）』

狼狽するライザーに一誠は迷いなく言い放つ

「それがどうした。俺みたいな奴の腕一本で部長が戻ってこられるんだぜ？こんなに安い取り引きは無いだろう？」

その言葉を聞いた新は目を見開いた

「一誠。今のお前は……俺よりも恐ろしいな。だが、良い覚悟じゃねぇか！」

「新！次で決めるぞ！」

「おう！お前のその覚悟を無駄にしてたまるかよ！」

『Ⅳ（フォー）』

一誠は手に握っている十字架に力を込め、新も右手に強大な魔力を流し込む

2人はそのまま最大の一撃を繰り出した

ライザーの拳とぶつかり合い、閃光が走った瞬間……一誠は吹き飛ばされ、更にドラゴンの鎧が解除されてしまった

一誠に残ったのはドラゴンの腕と化した左腕のみ

突然の禁手（バランス・ブレイカー）解除に一誠は焦りを交えて籠手に叫ぶ

「おい！何だよ、なんで元に戻っちまったんだよ！まだ１０秒経ってねぇだろ!?」

『残念ながら時間切れだ、小僧』

「左腕だけじゃダメなのか!?今度は何を支払えば良い!?目か！それとも足か！何だってくれてやる！」

『今のお前の基礎能力ではこれが限界だ』

「……俺が弱いからか……？くそぉッ！なんで俺はこんな肝心な時に……ッ！」

籠手に宿りしドラゴン――――ドライグの辛辣な言葉に一誠は歯噛みした

大事な場面なのに力が及ばない自分を恨めしく思い、噛み締めた口内からは血が出そうだった

ドライグから告げられる

『解除する瞬間、僅かだが力を宝玉に移せた。だが、それは一時的なものだ。フェニックスの再生能力には遠く及ばない。まあ……お前の隣にいる蝙蝠と協力すれば話は別だがな』

そう言われて一誠は自分の隣にいる新に視線を移す

確かに新の方は大きなダメージを負っておらず、鎧も解除されていなかった

諦めたくないと歯を食い縛る一誠は懐から何かを取り出す

「――――っ？一誠、その小瓶は何だ？」

「俺なりに頭振り絞って考えてきた、あの野郎に一泡吹かせる切り札――――火を消すなら、水だよな……！」

一誠が手にした物は聖水の入った小瓶

聖水も悪魔の苦手なものの１つ

一誠は小瓶を持ったまま新に耳打ちをする

新は一誠の提案に無言で頷き、炎の翼を展開させて向かってくるライザーを正面から押さえた

炎熱で両手を焼かれながらもライザーを逃がすまいと握力を維持し続ける

「今だ一誠！思いっきりぶちまけろォッ！」

「おう！ブーステッド・ギア・ギフト！」

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』

倍増した力が聖水に譲渡され、聖水がライザーの体を激しく痛めつける

「うがぁぁぁ

自身が持っている十字架、聖水、そして新に力が譲渡される

「朱乃さんが言っていた。魔力は体全体を覆うオーラから流れる様に集める。意識を集中させて、魔力の波動を感じればいいと。ああ、ダメな俺でも感じられましたよ、朱乃さん」

２人は打撃を繰り出すために拳を構える

「小猫ちゃんが言っていた。打撃は体の中心線を狙って、的確かつ抉り込むように打つんだと！」

新と一誠が拳の照準をライザーに定めた

「そして新が言っていた！本気で守りたい物は、死んでも守れと！」

「一誠、まだ倒れんなよ？倒れるのはこいつをブッ飛ばしてからにしようぜ」

「ま、待て！分かっているのか！この婚約は悪魔の未来のために必要で大事なものなんだぞ!?お前らのような何も知らないガキがどうこうする様な事じゃないんだ！」

往生際悪くライザーは言い訳を述べるが、確固たる意志を掲げた２人には無意味だった

「難しい事は分からねぇよ。でもお前に負けて気絶した時、うっすらと覚えている事がある。――――部長が泣いてたんだよっ！」

「あぁ、俺もよ～く覚えてるぜ。最初は憤り過ぎて見落としちまったが――――アレは流させちゃいけねぇ類の涙だ」

「俺が――――いや、俺達が！」

「てめぇを殴る理由は！」

「「それだけで充分だァァーーーーッ！」」

高められた新と一誠のダブルパンチがライザーの腹に突き刺さった

血を吐きながらライザーは床に倒れる

「やったな一誠」

「はぁ……はぁ……ああ、やった、ぜ……っ」

力を使い果たしたのか、一誠はガクンと崩れるように仰向けに倒れ、新と拳を合わせた

闇人の王

見事な勝利を収め、大きな疲労感から眠りに落ちてしまった一誠を運ぶ新

一誠の寝顔は今までにない程安らかで晴れた様だった

花嫁衣装のリアスが駆け寄ってくる

「新！イッセー！」

「心配すんな、疲れて眠ってるだけだ。見てみろよ、このやり遂げた感満載の寝顔」

「もう……っ。あなた達は無茶ばかり……っ。でも……許すわ、無事に帰ってきてくれたから……っ」

リアスが紅の双眸(そうぼう)から雫を流しながら新と一誠の頭を撫でる

新は照れ臭そうに頬を掻く

大団円を迎えようとしたその時――――爆発の様な轟音が後ろから響いてくる

「何処行ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！あのクソガキ共オオオオオオオオオッ！」

音の発生源はなんとライザーだった

奴の周りには守備兵らしき悪魔達が倒れており、下僕悪魔達も必死に止めようとしている

「はっ!?何してんだあいつ!?あれだけ攻撃を食らったっつうのに、まだ立てるのか!?」

「それよりも、何だかヤバそうな雰囲気になってるね」

「完全に我を忘れていますわ」

「……ヒステリー」

祐斗、朱乃、小猫がライザーの暴走を押さえるべく戦闘体勢に入る

ライザーの眷属達も落ち着かせようと止めるが――――――

「邪魔だぁっ！どけェェェェェッ！」

「きゃあっ！」

ライザーは自分の下僕達を炎で吹き飛ばした

ライザーのやってはいけない行動に新は怒りを見せる

「テメェ！何してやがる！今のは自分の下僕だろうが！」

「うるさい！黙れ！何でこの俺が、不死鳥の俺が！貴様ら下級悪魔のクソガキに負けなきゃならねぇんだぁぁぁぁぁぁぁっ！もう少しでリアスは俺の物になったのに！貴様らだけは許さねぇェェェェェッ！」

「うるせー。テメェの心情なんざ知るか！正式な勝負に負けた奴が逆ギレしてんじゃねぇよ！」

「下級悪魔が俺に説教するなァァァァァァァッ！死ねェェェェェッ！」

ライザーが手のひらから巨大な炎の塊を新に放つ

新が闇皇に変異しようとした刹那だった

ジュバッ！

一筋の青い魔力の様な何かがライザーの炎を貫き、消滅させた

その場にいた全員が上空を見上げると、２つの影が落ちてくる

スタンッと２つの影が軽く地面に着地した

１人は左手に黒いグローブを装着した青年

もう１人は有名なお菓子メーカー『グルコ』のチョコ菓子、カプリンチョをペロペロ舐めている少年だった

「ライザーはフェニックス家の才児（さいじ）と言う話を耳にしていたのだが、多少のトラブルでヒステリーを起こすとは器が知れる」

「アハハッ！こんなんじゃ、前に戦った長男と次男の方がいくつかマシだよね～！」

２人は出てきて早々ライザーを貶す

「何だ貴様らはァァァァァァァッ！クズのくせに、俺の邪魔をするの

かアアアアアアアッ！」

「なんて下品な態度だ。とても上級悪魔とは思えないな」

「っ？何なんだお前らは？」

新の質問に青年と少年は振り返る

「まだ知らない者もいるだろうから教えよう。オレは闇人（やみびと）を統率する組織『チェス』のトップにして『キング』の称号を持つ――――蛟大牙（みずちたいが）」

「同じく、ボクは『チェス』の1人で『ビショップ』の称号を持つ闇人、神風（かみかぜ）だよ～」

闇人（やみびと）とは――――先の悪魔、堕天使、神との戦争に乱入し、三大勢力を絶滅させようとした魔族

その頂点に立つ男と幹部らしき少年が現れた事に新達は戦慄する

「闇人……あいつと、村上と同じ闇人が何故ここに……？」

「そう警戒しないでよ～？今日はグレモリー家とフェニックス家の結婚式が終わった後に、ボク達闇人が勢力を盛り返したのを教えてあげようと思って来ただけなのさ」

「だが、不死鳥との戦いに発展したので少々見学させてもらった。村上が”赤龍帝は我々を脅かす存在になるかもしれん”と言っていたので興味を持った。確かに、アレは我ら闇人にとって危険因子になりかねんな」

「危険因子になるから、イッセーくんと竜崎くんを殺しに来たと？」

「いや、そういう訳じゃない。挨拶しようと思って来ただけなんだが、そう言った暇は無いようだ。また近い内にそちらへ伺おう。力を確かめにな」

『キング』の称号を持つ大牙と『ビショップ』の称号を持つ神風はライザーの方を向く

ライザーは未だに激怒していた

「さっきから何を喋っている！そこをどけ！退かないなら、貴様らも焼き殺すぞオオオオオオッ！」

「……ねぇ、キング。ボク的にあいつはマジでムカつくからさ、ちょっとフルボッコにしても良い？」

「殺さないなら好きにしろ。結界を張るから、その中でやれ」

「キヒヒッ、オッケ～」

ブゥゥゥンッ！

大牙が手を前にやると、ドーム状の結界がライザーと神風を包む

新達の他、ライザー眷属は結界に弾かれる

「退けクソガキィィィィィッ！今は貴様ごときを相手にしてる暇はねぇんだよオオオオオッ！」

「クソガキ？クソガキってボクの事ぉ？ボクから見たら、君の方がよっぽどクソガキだけど。まぁ良いや」

舐めていたカプリンチョをバリバリ食べて、喉を鳴らす神風

フゥッと息を吐き――――――

「さっさと寝てろ」

ゴオオオオオオオオッ！

低い声音の直後、膨大な魔力が神風の体から噴き出す

「な、何だこの魔力は!?」

神風の姿が一瞬で消えたかと思ったら、ライザーの眼前で右手を開いていた

ライザーは回避しようと動くが、神風は難なく追い付く

「速い……!この手の動きから逃げられ――――――」

『雷の一角召喚(ボルト・ウノ・ホルン)』

神風の手から角を持つ怪物型の雷が放たれ、ライザーを感電させる

「ぐぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!」

ライザーは結界の端まで吹っ飛ばされ、叩きつけられた

「あ、朱乃さんと同じ雷!?」

「ですわね……でも、あの雷はとても凶悪に見えますわ……！」

神風が追い討ちをかけようとライザーに近づく

ライザーは巨大な炎の塊を神風に放ったが――――――片手で静止させられた

「か、片手で俺の炎を!?」

「『雷撃の一角召喚（ライボルト・ウノ・ホルン）』」

神風の手から、さっきとは角の形が違う怪物型の雷が発射され、ライザーの出した炎を簡単に貫いた

「俺の炎が……あんな小さな雷で相殺された……!?」

この様子に大牙は呆れながら言う

「あいつ、頭が悪いな。神風の攻撃はまだ生きていると言うのに」

神風の放った雷はライザーを結界の天井まで突き上げた

神風がすぐに追ってライザーの頭を掴み、雷を発しながら地面に叩き落とす

「キャハハハハハッ！どうしたの!?不死身を売りにしているフェニックスが、弱い技たった二発でグロッキーかぁい!?」

神風がライザーから離れる

本人曰く弱い技たった二発、それだけでライザーの肉体は既にボロボロだった

「な、ナメるなぁ……！俺は不死鳥フェニックスだ……！リアスにも勝った……不死身の悪魔なんだぞ……！」

「キヒヒッ。不死身ねぇ？面白いジョークを言ってくれるじゃないか。君のド三流以下のクソ演説を聞いてると、笑いが止まんないよ！キャハハハハハッ！」

「黙れクソガキィィィィッ！」

ライザーは両翼から無数の刃物状の炎を飛ばすが、神風は余裕で回避する

「ぐっ……！クソッタレがァァァァァァッ！」

今度は拳に炎を宿らせて殴ろうとしたが、左手で防がれた

更に腕を捻られて転がされ、頭を踏みつけられる

「キヒヒッ。まるでド素人じゃないか！君はお父さんやお兄さん達から、格闘技すら学ばなかったのかい？」

頭をグリグリ踏みつける神風をライザーは憎々しげに睨み付ける

「ほらほらぁ、待っててやるから早く起きな。それでも力を入れてるの～？」

「ぎっ……！オォォォォォォォォォッ！ングァァァァァァァァァァッ！」

ライザーは力を入れて起き上がろうとするが、ビクともしない

「なんて事だ……！あのライザー・フェニックスが、まるで子供扱いじゃないか……！」

新も祐斗達も目の前の光景に、信じられないと言う表情を浮かべる

神風はニヤリと笑いながら言い放った

「弱いね、君」

ライザーは屈辱にまみれて涙を流す

「チクショウ……！何故だ……！何故大昔に、神に封印された王の一族が……今頃になって出てきたんだ……！」

「キヒッ。『初代キング』が封印されちゃったからこそ、ボク達は今まで隠れながら勢力を蓄えてたのさ♪後もうひとつ。本当はキングと一緒にパーティーの招待客に成り済まして、勢力が復活した事を教えてあげようと思ったんだけど――――君みたいな家柄を振りかざして粋がってるバカに拍手するのは、例え演技でもボクのプライドが許さないよ」

ドガッ！神風はライザーの顎を蹴り上げ、宙に浮いたところで再び蹴り飛ばす

「ごばぁっ！」

「つ、強い……！」

「強いだけじゃねぇ、あいつの戦い方は……邪悪過ぎる……！」

欠伸をする神風に、全員は震えが止まらない

不死鳥フェニックスが成す術なくやられている……

こんな悪夢みたいな事は一度たりとも無かった筈であろう

「もうそろそろ飽きてきたな～。いい加減寝ちまいなよ？」

「……っ！ナメるなぁ……！貴様みたいなクソガキに！いつまでも一方的にやられると思うかァァァァァァァッ！」

ライザーは眼前の神風に向かって叫ぶが――――誰もいない

既に神風はライザーの頭に乗っかっており、手のひらを見せていた

「黙れ。君のド三流以下の演説じゃあ、敢闘賞すら取れないよ。『雷撃の一角召喚（ライボルト・ウノ・ホルン）』」

ドガァァァァンッ！

神風は再度、一角怪物型の雷でライザーを痛めつける

「ライザー様っ！」

「お兄さまっ！」

ボロボロになって地面に突っ伏すライザーに、神風は容赦なく罵倒する

「もうちょっと必死になりなよ。そうすれば無駄口も減るでしょ？」

弱々しく頭を起こすライザーは眷属達に向かって叫んだ

「クソがァァァァァァァァッ……！レイヴェル……！ユーベルーナ……！フェニックスの涙をよこせェェェェェッ……！」

「も、もうお止めくださいお兄さま！」

「うるせぇぇぇぇぇっ！良いからさっさとよこせエェェェェェッ！」

ライザーの醜悪過ぎる態度に呆れる大牙だが、「一度分からせてやる必要があるか」と一時結界を解除する

ライザーはレイヴェルとユーベルーナからフェニックスの涙を奪い、それを飲み干したところで再度結界が張られる

２つも一気に飲んだため、ライザーの魔力が大幅に上昇した

「ハハハハハハハハッ！どうだ!?これさえあれば、俺は無敵なんだよォォォォォォッ！フェニックスの炎で消し飛べェェェェェッ！」

ライザーは今までにないくらい、巨大な炎を神風に投げつけた

だが神風はその炎を”ただの蹴り”で消滅させた

そして飛び上がって、ライザーの左頬を蹴る

「ブガァァァッ！」

「やっぱこの程度の相手に、上級技は必要ないや。使っても精々――――――中級レベル一発で充分だよッ！」

神風の膝落としがライザーの鳩尾に食い込む

ライザーは口から血が混じった吐瀉物を撒き散らす

神風はライザーの首を掴んで殴り飛ばしたり、蹴り飛ばしたりと――――――完全にサンドバッグ状態になったライザーを弄ぶ

「おいおい冗談だろ……？フェニックスの涙を２つ使って回復したライザーを、一方的

にボコってやがる……！」

「ビショップ。そろそろ遊びは終わりにしろ」

「オッケ～」

神風は倒れたライザーの上に乗り、手のひらを向ける

「『雷撃の二角召喚（ライボルト・ドス・ホルン）』」

二本角を持つ怪物型の雷が満身創痍のライザーを感電させる

「ウゲガァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！」

雷が止み、ライザーは黒い煙を上げながら体をピクピク痙攣させる

神風は「もう終わったね」と二本目のカプリンチョ（苺味）を取り出して舐める

大牙は結界を解こうとしたが、ライザーはまだ立ち上がろうとしていた

「ふ……ふざ、けるな……！俺は……俺はフェニッ……クスだ……！」

「もう立つな！これ以上は精神が崩壊しちまうぞ！」

パリッ……パリッ……

神風はカプリンチョを二口で食べきり、ライザーの方を向く

「ま～だ起き上がれるの？大したモンだねぇ。さっすが不死鳥フェニックス♪その敬意に免じて――――――ボクの最大技で眠らせてやるよ」

神風の目から妥協の色が消えた

これ以上攻撃をくらえば、フェニックスと言えど精神が崩壊する恐れがある

ライザー眷属達は結界を壊そうとするが、傷ひとつ入らない

「ぎ……ギサマ……なんぞに、負ゲル……俺、じゃねぇ……！俺はフェニックス……家の……ライザー・フェニックス……！フェニックス家の看板をォォ……！背負ってるんだよォォォォォォッ！」

ライザーが頭上に巨大な火の鳥を生み出し、神風に向かって放つ

地面に炎の轍（わだち）を刻みながら舞い進む火の鳥に神風は笑い、その刹那――――

グキグキグキッ！ガバァッ！

なんと腹が裂けて口の様な形になった！

牙が生え揃う口となった腹に、雷の魔力が集中する

「『超雷撃の三ツ又角召喚（ギガボルト・ホルン）』！」

ゴバァッ！

神風の腹から三つ首と三本角の怪物を型どった雷が放出され、ライザーの火の鳥を噛み砕いた

そして――――そのままライザーを飲み込んだ

「ライザー様ァァァァァァッ！」

結界の中に立ち込める爆煙

飛び散った血液

大牙が結界を解くと、煙が風に流され消えていく

そこに残っていたのは、キヒヒと奇怪に笑う神風と――――――頭部のみの姿にされたライザーだった

「キャハハハッ！白目向いちゃってるよこいつ！だっせ～！フェニックスが聞いて呆れるわ～！キャハハハハハハハッ！」

頭部だけになったライザーを眷属達の方へ転がす神風

新達は目の前の惨状を未だ受け入れられずにいた

「……酷いよこんなの。もう彼は戦える状態じゃなかったのに」

「はぁ～？何か言いました～？戦える状態じゃない？いやいや仕方ないっしょ。だってさ、あのバカ鳥が立ち上がるからボクも最大技を使う羽目になっちゃったんだよ？悪いのはソ・イ・ツ。分かる？」

神風は悪びれる様子も無くライザーを指差す

「つーかさぁ。ボクから言わせればぁ、君達はチョーヌル過ぎるっつ～の！悪魔や堕天使や神だって、三つ巴の戦争で互いに殺し合ったくせにさ～！なぁにバカ抜かしちゃってんの～!?なぁに良い子ぶっちゃってんの～!?」

ライザー眷属達は今にも飛びかかろうとしたが、大牙が割って入る

「ビショップ、あまり挑発するな。お前の悪い癖だ。少しは場を弁えろ」

キング――――大牙が睨むと、神風はピクッと眉を動かし、すぐに引き下がる

「さっさと治療してくるんだ。かなりマズイ状態だが、治療していけば大事には至らない。早く救護してやれ」

ライザー眷属達は急いで会場の医療班を呼びに行く

大牙は新達の方へ歩み寄るが、新達は警戒する

「見苦しい場面を見せてスマなかった。本当はこんなにするつもりは無かったんだが、ビショップは何ぶん加減しようとしない。オレに免じて、殺気を鎮めてくれないか」

大牙は新達に頭を下げる

闇人の『二代目キング』らしからぬ行動に、新達は唖然とする

「……変な奴だな。悪魔だけでなく、全ての魔族を滅ぼそうとする一族の王が……その相手に頭を下げるなんてよ」

「オレは『初代キング』――――父さんとは違うやり方で闇人を頂点に導く。力だけで押さえ続けては何れ瓦解してしまう。力の他にも、カリスマ性と言う物が必要なんだ。何処の世界でも、それは同じだ」

そう言うと大牙は神風を連れて魔方陣を作り、その中に入る

「赤龍帝にも伝えておいてくれ。”近い内に、お前達の力を確かめに来る”と」

魔方陣が青い光を放ち、闇人のキングとビショップは姿を消した

「僕達はこれから先、あんな人達を相手にしなきゃいけなくなるみたいだね……」

「そうみたいだな……ハハッ。まだ手が震えてやがる……」

「私も、手がこんなに震えていますわ……」

「……怖かった」

新達はしばらくの間、その場に佇んでいた

近い内に力を確かめに来る……

そう思うと、これからの戦いに対しての不安が生じた

闇が動き出す予兆

闇人(やみびと)の『二代目キング』大牙(たいが)と『ビショップ』神風(かみかぜ)が去った後、新達一行は騒ぎを聞き付けた魔王及び悪魔達に事情聴取を受ける羽目になってしまった

結果――――”闇人の襲撃”として咎められなかったものの、会場の修理などを手伝わされた

――――その夜

「ごめんなさい、新」

場所はオカルト研究部室

新は疲れたので自宅に帰ろうかと思ったのだが、急に呼び出された

呼んだのはリアスと朱乃の2人

呼び出されるや否や、リアスが頭を下げてきたので新は呆然としていた

「話はお兄様から聞いたわ。まさかライザーを追い詰めていたなんて知らなかったの……。あの時はただ……皆が傷付くのを見ていられなかった……大局を見るのが怖かった……。本当にごめんなさい……っ。だから……見限らないで……」

「私からもお願いしますわ」

もう一度頭を下げるリアス

その隣に座る朱乃も新に頭を下げた

新は申し訳なさそうな顔で頭を掻く

「あ～……別にもう気にしちゃいねぇから、そこまで畏(かしこ)まらないでくれ。初めてのレーティングゲームだったろうし、俺も好き勝手に暴れたからさ。それに……そういう情愛を持っていたり、振る舞えるのが羨ましいって思っちまった訳だし」

「「……っ？」」

「俺達バウンティハンターは実力と自分主義の世界だ。共闘する事はあっても……結局そいつは金と自分のランク、保身の為、仲間意識なんてモノは薄っぺらい紙切れみてぇなモンさ」

新の言う通り、バウンティハンターは資本主義と同じ様に競争世界である

他人を蹴落としてでも己のランクと報奨金を引き上げていかねば生き残るのは困難

故に一時的な共闘はあれど、それが終われば敵同士となる

味方など誰1人いない孤独な世界をこの歳まで生きてきた……

「今までは相性の悪い奴って言うか、気が合わない奴の割合が多かったんだ。仕事でも勝手に突っ走って一匹狼気取り、心の底から笑い合える仲間って奴を欲しいとも思わなかった」

新はリアスの手を握る

「だから俺はリアス部長に会えた事、眷属になれた事を感謝してるぜ。ここでなら俺はもっと笑える気がするんだ。そういう場所に居させてくれるだけで帳消しどころか釣り銭も出せる。ありがとな」

予想だにしてなかった新の面持ちと発言にリアスは一瞬呆け、直ぐに軽く吹き出して微笑む

「謝らなくちゃいけない立場にいるのに、あなたからお礼を言われるなんて思わなかったわ」

「分かってくれた相手をこれ以上責める道理なんかねぇだろ？」

「うふふ、新さんってば優しいんですね」

「俺は基本的に優しいんだよ。特に良い女に対してはな。ただ……ガツンと言わなきゃいけねぇ時は言う。ただ……あの時はキツく言い過ぎたかな？一応謝っとく、ゴメンな」

あの時とはリアスが投了（リザイン）した時だろう

新が頭を掻いた後に頭を下げる

「ううん、良いのよ。私も『王（キング）』としての自覚が足りてなかったから、良い薬になったわ」

「そっか。じゃあこの話は終わり。そろそろ――――」

「待って」

ソファーから立ち上がり帰ろうとした新を呼び止めるリアス

怪訝そうに窺っていると……突然リアスが服を脱ぎ始めた事に新は驚く

状況がよく理解出来ない新に構わず、リアスはブラのホックを外して乳房を見せる

「急にあなたを呼んだのは……ちゃんとお礼がしたいから……。まだ処女はあげられないけど、それ以外なら……」

リアスの顔が紅潮する

新はいきなりの事に戸惑うが、すぐに落ち着きを取り戻す

「『王(キング)』にそこまで言われたら無下に出来る訳ねぇよな。良いんだな？乳首弄りまくるぞ」

新の言葉にリアスは無言で頷く

いざ行かんとしたところで、今度は朱乃が待ったを掛ける

「私も是非お礼をさせてください」

「えっ？朱乃さんは何で？」

「新さんが私の代わりに『女王（クイーン）』を打倒してくれましたよね？だから、そのお礼ですわ」

朱乃も服を脱いで豊満な乳房を惜しみ無く見せる

新は今、何とも美味しすぎる現状にいた

「ですから、私のおっぱい……触ってくださらない？」

「ハハッ。何だろな、この状況。一誠が知ったら血の涙を流しそうだ。それじゃあ、お言葉に甘えて」

新は右手でリアスの乳房を、左手で朱乃の乳房を揉み始めた

今まで味わった事のない感触に新は若干感動してしまう

「んっ……ぁんっ。あ、はぁ……新、凄い上手ぅ……」

「本当、ですわ……んんっ……。イヤらしさの中に、優しさも感じる様な……ぅんっ。不思議な感覚……いやんっ」

「ヤッベェ……あんたらの顔、すげぇ興奮するんだけど……柔らかいし、感度も良すぎる……」

「そ、それはぁ……！新の手つきが、イヤらし過ぎる……から……！あぁんっ！ち、乳首い……乳首を、強くしちゃらめぇぇぇ……！ひゃうんっ！つ、爪もらめぇぇ！気持ち

良すぎて――――――――あぁぁぁぁあんっ！」

「あ、はぁ……はぁ……新、さぁん……！私も、乳首を……弄ってぇ……！んんっ！もっと、もっと強くしてください……！気持ち良い、です……！あぁっ！爪でクリクリなんて……！エッチで、気持ち……良すぎてぇ……！はうぅぅぅぅぅんっ！」

新の女体を蕩けさせる手技にリアスと朱乃は息を荒くさせながら新に凭(もた)れる

「はぁ……はぁ……っ。よ、予想以上に……気持ち良かった……っ」

「はぁ……はぁ……新さん、本当に……エッチで、上手でしたわ……クセに、なりそうです……」

「いや～。リアス部長と朱乃さんも良い乱れっぷりだった。それにこんな良い女の乳房を揉めるとは思わなかったぜ」

「……新はいつもこんな風に他の女性を堕としているの？」

「おうよ。自慢にもなるが、俺のテクで堕ちなかった女は今までいねぇ。人妻だろうが未亡人だろうが聖女だろうがな」

「あらあら。新さんは好き嫌いが無いんですね♪」

「良い女は全て抱く!それが俺のルールだ!あ、因みにセッ○スする際はちゃんとゴムを着けるぜ?相手が生でシたいなら別だが」

新は自信満々に言い放つ

帰り際に朱乃から耳元で「いつか私の処女を貰ってくれますか?」と囁かれた時は、流石に目玉が飛び出しかけたとかなんとか……

――――――――新の自宅

「お帰りアラタ～！」

「どうだった？結婚式に殴り込んだ感想は？」

「あ、あぁ。なかなか貴重な体験だった。オマケに良い思いも出来たし」

「それは良かったわね。……ねぇアラタ。あ、後でちょっと大事な話があるから……部屋で待ってなさいよ。良い？」

「……っ？あぁ」

「朱乃、彼の所に行くのね？」

「ええ、もう決めましたわ。リアスはどうするの？一緒に来る？」

「わ、私は……その……まだもう少し考えさせて……。心の準備が出来てないの……」

「あらあら、そんなに深く考え込まなくても宜しいのに。あの人ならきっと受け止めてくれますわ。私でも、あなたでもね」

「だ、だからよ。私はあの子の主なのに……」

「リアスってば純情なのね」

「――――っ！も、もうっ！からかわないでちょうだい！」

「うふふ♪じゃあ私は先に行かせてもらうわ。恋愛事は先手先手を取らないと実りませんもの」

「ねぇねぇキング。クソフェニックスがあれだけ弱いんだからさぁ、他の悪魔達も大した事ないんじゃないの～？」

「ビショップ。悪魔を愚弄するのも大概にしておけ。あれはフェニックス家の三男が己の力を過信し過ぎていたから、付け入る隙があっただけだ。他の７２柱にも細心の注意を払え。特に――――今のグレモリー家は厄介だからな」

「あ～、『初代キング』から『闇皇(やみおう)の鎧』を奪った男の息子と赤龍帝(せきりゅうてい)がいるんだよねぇ？そいつらはブッ殺すの～？」

「確かに奴等は我々にとって大きな障害になるが……逆に言うなら、味方にしてしまえば大きな糧にもなる。それに『闇皇(やみおう)の鎧』と『赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)』をあそこまで使いこなす者は、この先早々に現れる事は無いだろう」

「……チッ。『初代キング』なら”力だけ抜き取って殺してしまえ”って言うだろうに

……」

「何か言ったか？」

「うぅん、な～んにもっ。それよりさぁキング、彼とは連絡取れたの？」

「ん？あぁ、神代剣護（かみしろけんご）か。今まで音信不通だったが、ついさっきようやく連絡が取れた」

「キヒヒッ。それでもまだ『チェス』は揃わないね～。『ルーク』と『二代目クイーン』は何処で何やってるんだろ？『ポーン』は相変わらず殺戮祭りで薔薇を咲かせまくってるし」

「勝手な行動をしているが、いずれ集まるだろう。あいつらも『チェス』の一員だ。気長に待て」

「へいへ～い。あ、カプリンチョ無くなったから買ってくるね～♪」

「……その菓子は、そんなに美味いのか？」

第3章　月光校庭のエクスカリバーとプロミネンス生徒会とご対面

レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの堕天使三人組と性交を終えた翌日

新はいつもの様に体を起こして欠伸をする

「あ～……昨日は夢みたいな一日だったな。リアス部長と朱乃さんの乳首を堪能出来たし、こいつらと生でセッ○スしちまったんだよな」

スヤスヤと気持ち良さそうに眠る堕天使達は至宝とも言える光景だった

新は早速、レイナーレ達の乳首をプッシュする事に

「まずはレイナーレ」

「んんっ……ぁんっ」

「良いねぇ。次はカラワーナ」

「あっ……ぁぁんっ」

「バッチリ。お次はミッテルト」

「ううんっ……はにゃんっ」

「立ち方良好っ。じゃあ次は朱乃さ～ん♪朱乃さん……？」

ベッドに堕天使３人の他、朱乃がいた――――――しかも裸で

「何故!?Ｗｈｙ!?」

「ううん……ふわぁ……あ、新さん。うふふ、おはようございます」

「おはようございますじゃねぇよ！何で朱乃さんが俺のベッドに!?つーか、どうやって俺ん家の住所を突き止めた!?どうやって部屋に入ってきたんだ!?」

新の質問攻めに朱乃は笑顔で答える

「新さんの家の住所は秘密の調査法で調べました。家と部屋の合鍵も作って侵入しましたの♪」

「合鍵作ったぁ!?しかも侵入って！両方とも犯罪だろ!?」

新はもう突っ込まなきゃいけない話が多過ぎてテンテコ舞いになる

しかし、目の前の朱乃は全裸でピンクの乳首も見せている

これを見て黙っている訳が無かった

「朱乃さん。朝一番から乳首を弄られたいのか？」

「うふふ。良いですのよ？吸ったり舐めたりしても♪」

新が遠慮なく朱乃の乳首を味わおうとしたところで、冷たい視線の様な物を察知した

恐る恐る左を見てみると――――――

「……コウネエコオウ？」

「あらあら。そういえば、小猫ちゃんも連れて来てたのを忘れていましたわ」

「何で!?小猫を連れてくる必要性が何処にあったんだよ!?更にわざとらしいわ！」

「……ケダモノ先輩」

「朝から半眼でその言葉はキツい！いや、大体何で小猫まで俺の家に来る必要があるん

だ！」

「……変態先輩」

「話を噛み合わせろよ！俺は今、何でお前まで来る必要があるんだって聞いてるんだ！」

「……ケダ変先輩」

「ケダモノと変態を混ぜんなアァァァァァァァッ！」

朝から騒がなきゃいけない場面に、新の喉は致命的なダメージを受けた

昼休み、一誠と新はリアスに呼ばれているため昼飯を早々に終わらせていた

なんでも球技大会が近いのでミーティングをするらしい

「イッセーと竜崎は今日も部活か？」

言ってきたのは一誠のエロダチ1号の坊主、松田

すぐ近くには2号のメガネ、元浜がいた

「ああ、球技大会に向けて練習中ですよ俺ら。なぁ新」

「あぁ。球技大会なんて初めてだが、やるからには徹底的にやらないとな」

新はフライドチキンを頬張りながら意気込みを入れる

学園行事を味わった事がないから楽しみにしている

「はー、オカルト研究部がボールかよ。お前らんとこの部って、全員身体のスペック高いよな」

「イッセー、竜崎。お前らな、変な噂が流れているから気をつけろよ」

羨ましがる松田の後に、元浜がメガネを上げながら切り出す

「な、何だよ元浜……」

「変な噂？そりゃまたどう言った噂で？」

「美少女を取っ替え引っ替えしている野獣イッセーとケダモノ竜崎。イッセーと竜崎はリアス先輩と姫島先輩の秘密を握り、裏で鬼畜三昧のエロプレイを強制し、『ふふふ、普段は気品溢れるお嬢様が、俺の前では卑しい顔をしやがって！このメス○○どもがっ！』と罵るイッセー、『はっはっは！大和撫子も俺の調教に掛かれば立派なメス○○どもだな！オラァ！もっと卑しく尻を突き出せぇっ！』と強要する竜崎の乱行に次ぐ乱行」

「おおおおーいいいいい！なんじゃそりゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

あまりにも酷い噂に一誠は叫び、新はポカーンと口を開けながらフライドチキンを落とした

「まだ続きはある。ケダモノ竜崎は遂に学園のマスコットアイドル塔城小猫ちゃんのロリロリボディにまで毒牙を向けた。小さな体を壊しかねない激しい性行為は天井知らずの鰻登り。まだ未成熟の体を貪る一匹のケダモノ竜崎。『先輩……もう、やめてください……』と切ない声もケダモノの耳には届かない。そして、イッセーの性衝動の矛先は転校したての天使にまで――――――。転校初日にアーシアちゃんへ襲い掛かり、『日本語と日本の文化、俺が放課後の特別補習で教え込んでやろう』と黄昏の時間に天使を堕落させていく……。一方で竜崎の毒牙は全女子生徒にまで至り、狭い世界で始まる終わりなき調教。鬼畜イッセーとケダモノ竜崎の美少女食いは止まらない――――――。と、まあ、こんな感じか？」

「……マジか？お、俺は周囲にそんな風に見られているの？」

「流石の俺も驚いたぜ……噂の発生源は誰なんだ？」

「まあ、俺達が流しているんだがな」

「うんうん」

ドスッ！ゴキッ！グキンッ！グチャッ！

新は無言で２人の目を潰し、手足の関節を外し、首を１８０度捻り、股間を潰した

「おい一誠。スコップを４、５本持ってこい。町外れの採石場の土は結構固いからな」

「落ち着け新！目から光が無くなってる上に、２人のズボンから何か血が滲み出してる！」

「なら、行きつけの病院に連れていくぞ。そこでなら内臓が高く売れる」

「臓器売買に手を染めるな！戻ってこい新ーーーっ！」

余談だが、一誠と祐斗とのホモ疑惑も流れているとかなんとか（これも発生源は松田と元浜）

松田と元浜を保健室に運び終えた一誠と付き添いのアーシア、２人を再起不能に追い込んだ新は旧校舎の部室まで来た

部室に入ると３人以外のメンバーの他にも人がいた

「せ、生徒会長……？」

「生徒会長？あぁ、駒王学園の三年生で会長を務めてる人か。確か名前は、支取蒼那（しとりそうな）だったな」

驚く一誠と冷静に目で堪能する新の前にいるのは駒王学園の生徒会長、支取蒼奈

日本人離れの美貌を持ち、知的でスレンダーな女性だ

「なんだ、リアス先輩。もしかして俺達の事を兵藤や竜崎に話していないんですか？同じ悪魔なのに気付かない方もおかしいけどさ」

「サジ、基本的に私達は『表』、昼の生活以外ではお互いに干渉しない事になっているのだから仕方ないのよ。それに彼らは悪魔になって日が浅いわ。兵藤くんは当然の反応をしているだけ――――――っ？どうしました竜崎くん？」

「ふむ……リアス部長。俺しばらく生徒会に入っても良いすか？仕事が昼間だけなら夜に酒飲めるしでででででっ！両頬をつねるな！小猫も背中をつねるな！」

リアスは右の頬、朱乃は左の頬をつねり、小猫は新の背中をつねる

その光景は実にコミカルな物だった

「……リアスから聞いた通りですね、竜崎新くん。バウンティハンターとしての名はかなり有名なようだけど――――高校生なのにお酒を飲み、ギャンブル好きのくせ者だと言う話は」

「いてて……あ、俺の名前を知ってくれてるとは実に光栄だな。リアス部長と面識があるって事は、生徒会長様も悪魔で？」

「この学園の生徒会長、支取蒼奈さまの真実のお名前はソーナ・シトリー。上級悪魔シトリー家の次期当主さまですわ」

「上級悪魔ソーナ・シトリー。支取蒼奈……んくっ、名前が安直過ぎる……！」

朱乃の説明を受けて新は笑いそうになってしまうが、ジッと堪える

「竜崎くん？」

「コホンッ！これは失礼。つー事は、ソーナ・シトリー会長のお家も７２柱のひとつで？」

「新さんの言う通り、シトリー家もグレモリーやフェニックス同様、大昔の戦争で生き残った７２柱のひとつ。この学園は実質グレモリー家が実権を握っていますが、『表』の生活では生徒会――――つまり、昼間はシトリー家に支配を一任しております。昼と夜で学園での分担を分けたのです」

へ～っと感心する新に、生徒会書記の男が口を開く

「会長と俺達シトリー眷属の悪魔が日中動き回っているからこそ、平和な学園生活を送れているんだ。それだけは覚えておいてくれてもバチは当たらないぜ？ちなみに俺の名前は匙元士郎（さじげんしろう）。二年生で会長の『兵士（ポーン）』だ」

憎たらしい口調のサジに新は少しばかり言葉を返す

「ククッ。まるで虎の威を借る狐だな？」

「なんだと!?」

「確かに俺達は平和な学園生活を送れている。だが、それは生徒会として当然の役割だろ？俺だって感謝はしているが、お前は感謝されて当然って言い方をしてる。そう言うのは反感を買われるから、お前こそ立場を弁えろよ？」

新の反論にサジは睨む

それをソーナ・シトリーは手で制す

「ごめんなさい竜崎くん。サジは生徒会に入ったばかりですので。お気を悪くしてしまったなら、私が謝ります」

「あ、いやいや。俺はただアドバイスをしただけで。別に生徒会を悪く言った訳では――――おい一誠。同じ『兵士』なんだから、仲良くしとこうぜ？」

「今の元凶は新だろ！まぁ良いか。よろしくな匙」

サジはため息をつく

「俺としては、変態四人組の２人であるお前らと同じなんてのが酷くプライド傷付くんだけどな……」

「んだとコラ」

激しく怒る一誠と、今にも闇皇になりそうな新

特に新は、変態三人組の仲間に入れられてる事に腹が立った

「おっ？やるか？こう見えても俺は駒４つ消費の『兵士（ポーン）』だぜ？最近悪魔になったばかりだが、兵藤や竜崎なんぞに負けるかよ」

「ピーチクパーチクうるせぇな。見た目からして童貞のチェリーボウヤが粋がんじゃねぇよ」

「なんだと!?ど、童貞だのチェリーだの、今は関係ないだろ！そう言うお前だって童貞じゃないのか!?」

「はっはっはっ。残念でした。俺は既に１２歳で童貞を卒業したんだ。お前や一誠と一緒にするな」

「うわぁぁぁぁぁんっ！」

「俺までトバッチリぃ！」

サジと一誠は２人揃って泣いた

リアス達が失笑を浮かべる中、匙が拳を向ける

「もう許さねぇ！ブッ飛ばしてやる！」

「良いぜ童貞野郎？また泣きっ面にしてやる」

新は鎧を展開しようとするが、リアスと朱乃に止められる

「サジ。お止めなさい」

「し、しかし、会長！」

「今日ここに来たのは、この学園を根城にする上級悪魔同士、最近下僕にした悪魔を紹介し合うためです。つまり、あなたとリアスのところの兵藤くんとアルジェントさん、そして竜崎くんを会わせるための会合です。私の眷属なら、私に恥をかかせないこと。それに――――」

ソーナ・シトリーの視線が新と一誠に向けられる

「サジ、今のあなたでは兵藤くんや竜崎くんに勝てません。フェニックス家の三男を倒したのは兵藤くんなのだから。――――『兵士（ポーン）』の駒を７つ消費したのは伊達ではないと言う事です。それに竜崎くんは『兵士（ポーン）』ひとつのコストにもかかわらず、私達悪魔の天敵とも言える闇人（やみびと）の王の証、『闇皇（やみおう）の鎧』を宿しています」

「駒７つ!?ていうか、フェニックスをこいつが!?それに竜崎が『闇皇の鎧』を!?信じられません！」

「事実よ。特に竜崎くん。彼はレーティングゲームでは負けてしまったけれど、実質彼ひとりでライザー眷属を倒した様な物なのだから。戦い方は凄く破廉恥だったけど……」

「そういえば、あの試合って中継されてたっけ」

ソーナ・シトリーが前に出て、再び頭を下げる

「ごめんなさい、兵藤一誠くん、アーシア・アルジェントさん、竜崎新くん。うちの眷属はあなた達よりも実績が無いので、失礼な部分が多いのです。よろしければ同じ新人悪魔同士、仲良くしてあげてください」

「は、はぁ……どうも。まぁ俺としてはチェリーボウヤより、シトリー会長と仲良くしたいですな」

新はソーナ・シトリーの手を取って優しく握る

ソーナ・シトリーはキョトンとした様子で新を見る

「この野郎！会長にペタペタ触るな！」

アーシアの事で一誠とモメていた匙が怒鳴る

新は勝ち誇った様な顔を匙に向けた

「あれ～？どうしたのかなチェリーくんは？女の子と手を握った事すら無いから嫉妬してるのか？いや～、流石（さすが）上級悪魔の美人様。シットリスベスベで柔らかい手だ」

「か、会長から離れろォォォォォォォォッ！」

匙が打ってくる拳を新は左手で防ぎ捻る

「いでででででで！」

「あ、新さん！」

「新！いくらなんでもやり過ぎだ！」

「悪い悪い。つい反射的にやっちまった」

余裕の顔で匙の手を放した新

匙は捻られた腕を押さえる

「私はこの学園を愛しています。生徒会の仕事もやりがいのある物だと思っています。ですから、この学園の平和を乱す者は人間であろうと悪魔であろうとゆるしません。それはあなたでもこの場にいる者達でも、リアスでも同様の事です」

ソーナ・シトリーの言葉は新人悪魔――――自分達に向けられたものだと、新はすぐに理解した

ソーナ・シトリーの手をゆっくりと離していく

「それだけ、この駒王学園を愛しているって訳だな。流石は生徒会長様。惚れ惚れしちまうよ」

新の誉め言葉にソーナ・シトリーは小さく微笑んで返す

「ところで、リアス？」

「なにかしら、ソーナ？」

ソーナ・シトリーがリアスを呼んで、何やら話をし始めた

「本当に竜崎くんは、『兵士（ポーン）』ひとつの消費で済んだの？彼の資料を見たら、相当なスペックの筈なのに」

「ええ、そうよ。『変異（ミューテーション）の駒（ピース）』ではあるけれど」

「『変異（ミューテーション）の駒（ピース）』……なるほど。それなら納得出来るわね」

「――――っ？」

新は話の内容が聞こえないので分からず、疑問符を浮かべる

「ソーナ。もしかして……新を狙ってたの？」

「ええ、眷属として欲しくなかったと言えば嘘になるわ」

「へ〜。でも、彼はあなたに扱えないと思うわ。ちょっと厄介だから」

リアスの言葉に首を傾げるソーナ・シトリー

リアスが耳打ちすると、ソーナ・シトリーは顔を真っ赤にした

「そ、それ……本当に？竜崎くんの手技は、そんなに凄いの……？」

「本当よ。私も朱乃も、骨抜きにされたわ……彼に狙われたら覚悟を決めておいた方が良いわよ？」

リアスは妖しげな笑みを浮かべ、ソーナ・シトリーは胸を押さえながら新を見る

「……っ？な、何すか？」

「お……お互いのルーキー紹介はこれで充分でしょうね。で……では、私達はこれで失礼します。お昼休みに片付けたい書類がありますから……それと竜崎くん。あ、あまり破廉恥過ぎるのは……良くありませんよ？」

顔を真っ赤にしながら、そそくさと出ていくソーナ・シトリーとサジ

新は全く訳が分からなかった

「リアス部長。さっきシトリー会長に何を話してたんだ？」

「ふふっ。あなたの事を少し話しただけよ」

「りゅ、竜崎くんが、そんなにエッチが上手だなんて……わ、私も……もしかしたら弄られて……？」

「会長？会長！」

「――――っ!?な、何ですかサジ？」

「さっきチラッと聞こえたんですけど、何で竜崎なんかを眷属に加えたかったんですか？やっぱり、その『闇皇の鎧』を手に入れたかったからですか？」

『闇皇の鎧』は私達にとって強大で未知なる力。それを味方につければ、戦力は大幅に上がるはずです。駒の消費数や神器（セイクリッド・ギア）の有無だけでは強さは決まりません。心得ておきなさい」

「は、はい！」

「ふう。……もし、竜崎くんとゲームで戦う事になったら……私や他のメンバーも裸に

されちゃう……気を付けないと……」

聖剣計画

パンッ！

雨の音に混じって乾いた音が響く

祐斗がリアスに叩かれたからである

今日は球技大会で、競技はオカルト研究部の優勝に終わったのだが……1人だけ終始非協力的な人物がいた

それが祐斗だった

リアスに叩かれても祐斗は無表情

新と一誠は明らかに祐斗の様子がおかしいと勘づく

「もういいですか？球技大会も終わりました。球技の練習もしなくていいでしょうし、夜の時間まで休ませてもらってもいいですよね？少し疲れましたので普段の部活は休ませてください。昼間は申し訳ございませんでした。どうにも調子が悪かったみたいです」

「木場、お前マジで最近変だぞ？」

「あぁ。何つーか、自分1人だけの世界に入り込んでる感じだ」

「君達には関係ないよ」

新と一誠の問いに祐斗は作り笑顔で冷たく返す

「俺だって心配しちまうよ」

「心配？誰が誰をだい？基本、利己的なのが悪魔の生き方だと思うけど？まあ、主に従わ

なかった僕が今回は悪かったと思っているよ」

祐斗の態度が気に入らなかったのか、新は舌打ちをする

「チーム一丸でまとまっていこうとしていた矢先でこんな調子じゃ困る。この間の一戦でどんだけ痛い目に遭ったか、俺ら感じ取った事だろう？お互い足りない部分を補うようにしなきゃこれからダメなんじゃねぇかな？仲間なんだからさ」

一誠の言葉に祐斗は陰りの表情を見せる

「仲間か」

「そう、仲間だ」

「君は熱いね。……イッセーくん。僕はね、ここのところ、基本的な事を思い出していたんだよ」

「基本的な事？」

「ああ、そうさ。僕が何のために戦っているかを」

「リアス部長のため、じゃ無さそうなのは顔を見て分かった。じゃあ何のために？」

「僕は復讐のために生きている。聖剣エクスカリバー――――。それを破壊するのが僕の戦う意味だ」

この時、新と一誠は初めて、祐斗の本当の顔を見た

――――――――

「祐斗は聖剣計画の生き残り……か」

部活動を終えた直後、リアスから話を聞かされた

聖剣計画とは数年前までキリスト教内で存在した、聖剣エクスカリバーが扱える者を育てる計画

聖剣は対悪魔にとって最大の武器、悪魔が聖剣に斬られたら成す術なく消滅させられる

神を信仰し、悪魔を敵視する使徒には究極とも言える兵器である

そして、中には一誠の『赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）』同様に『神滅具（ロンギヌス）』の聖具もある

一番有名なのはイエス・キリストを殺した『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』で『神滅具（ロンギヌス）』の代名詞となった神器（セイクリッド・ギア）らしい

「聖剣エクスカリバー、聖剣デュランダル、そして日本の天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）が強力過ぎて、現時点ではそれらに匹敵する神器（セイクリッド・ギア）および魔剣は存在せず、祐斗の神器（セイクリッド・ギア）でも創る事は出

来ない。俺の『闇皇の鎧』はどうなんだろ？」

新は先程の話から、祐斗の神器（セイクリッド・ギア）――――『魔剣創造（ソード・バース）』を知った

祐斗の『魔剣創造（ソード・バース）』は名前の通り、自分のイメージした魔剣を創る神器（セイクリッド・ギア）

以前見た『光喰剣（ホーリー・イレイザー）』も、その『魔剣創造（ソード・バース）』で創られた魔剣だった

「エクスカリバーと適応するために人為的に養成を受けたが、聖剣に適応出来なかった。しかも、祐斗以外の人間全員が適応出来ず、教会関係者から『不良品』として処分された……『聖剣に適応出来なかった』って理由だけで……」

”教会の者達は私達悪魔を邪悪な存在だと言うけれど、人間の悪意こそが、この世で一番の邪悪だと思う”

新はリアスから聞かされた言葉に心を痛めた

新は悪魔になった今でもバウンティハンターの仕事をしている

賞金首の中には、悪事から足を洗った者も少なからず存在する

だが、一度広まった悪名は何をしようと払拭出来ない

例え相手が人間であっても……賞金首になってしまっては、バウンティハンターにとって金の成る樹にしか見られない

新も今までそうやって生きてきた

賞金首だから、自分が生きる為だからと言う理由で捕まえたり、殺したりしてきた……

「俺も結局は、賞金首と言う養分を吸って生きている様なモンだよな」

「考え過ぎですよ？新さん」

「何でまたここに!?」

ソファーに身を乗せながら、新に抱き付く朱乃

また勝手に侵入してきた様だ

「新さんは今まで、賞金首とは全く関係の無い人を巻き込んだ事がありますか？」

「無い……けど」

「だったら、悩む必要は無いんじゃないですか？警察や他では手に負えない犯罪者を捕まえて、普通の生活を送っている人達を守ってきた事に変わりはありません」

「……そう、だよな。そうだよな。俺ってば、らしくない事を考えてた。俺が捕まえてるのは、一般人の生活を脅かす犯罪者だ」

新は朱乃の言葉で悩みを断ち切った

「人間や人外の悪意を完全に無くす事は出来ないが、減らす事は出来る。それも俺達……バウンティハンターの役目なんだ」

「うふふ。新さんらしさが戻って良かったですわ」

「サンキュー朱乃さん。お陰で目が覚めた――――――ぜ？」

朱乃がいきなり人差し指で新の口を塞ぐ

「新さん。そのお礼としては何ですが――――――朱乃って、名前で呼んでくれませんの？」

「っ？朱乃。これで良いの――――――おわぁっ!?」

新は朱乃に押し倒され、朱乃の顔が目の前まで近づく

「ようやく名前を呼んでくれましたね。皆さんを下の名前で呼ぶのに、私だけ”さん”付けだなんて……仲間はずれみたいな気分を味わっていました……」

「あ、いや……朱乃さん――――――朱乃は年上で先輩だからさ」

「リアスだって年上じゃないですか」

言葉に詰まる新

どうしたら機嫌を直してくれるんだろうと考えた結果、やはり下の名前で呼ぶしか無いかなと諦めた

「分かった、俺も男だ！これからは朱乃って呼ぶ！何度でも呼ぶ！呼ぶから退いてくれないか？」

朱乃は実に嬉しそうな表情になり、新の頬に唇を付けた

「えっ？えっ!?い、今キスを」

「うふふ。今はこれだけで許してくださいね？いつか、いつか新さんに……私の処女をあげますから」

”なんて芯が強く、優しい女なんだろう……絶対他の男に渡したくない”

新はそう誓った

翌日、新は教会に来ていた

聖剣計画を聞かされてから妙に教会関連が気になってしまう

教会は悪魔にとって敵地

”絶対に近づいてはいけない”とリアスに固く言われた筈なのに……何故か来てしまった

「何が正義で、何が悪なのか――――――メンドクセェ時代になっちまったな」

「神のご加護を受けに来たのですか？」

新の背後から聞こえてきた声の主は、白いローブを羽織った青い髪の女性だった

一緒にいるのは同じローブを羽織った栗毛の女性

一目で教会関係者だと分かる十字架を首からぶら下げている

「ヒュウッ♪ピチピチの美人か……その妙な得物が無かったら、是非喫茶店でお茶を頂

きたかったぜ」

袋に入った長い”何か”から聖なる力を感じ取り、新は警戒体勢となった

「イリナ。この男の力の波動――――悪魔だ」

青髪の女性が袋から何かを取り出す

それは悪魔の苦手な武器――――聖剣だった

「滅せよ悪魔」

青髪が聖剣を持って斬りかかってくる

新はすぐに『闇皇の鎧』を展開し、籠手から飛び出した剣――――闇皇剣(やみおうけん)で聖剣を防いだ

「ぐっ……！防げるのは防げるが、闇皇の状態でも聖なる力は応えるか……！」

「姿が変わった!?今までとは違う悪魔ね！」

「相手が悪魔なら容赦はしない。今すぐ神の名のもとに断罪してやる」

「神、神、神って。やっぱ教会関係者は頭が固い連中ばっかりなんだな。それに……何かくだらねぇ」

新は聖剣を弾いて距離を取る

「悪いが、俺は目の前にある物――――自分の目に映った物しか信じない男なんだよ。目の前にいない偶像を信仰するなんざ――――メンドクセェし、くだらねぇ」

「何だと！貴様、神を愚弄するのか！」

「どうやら口で言っても分からねぇみたいだな。良いぜ?素っ裸にして分からせてやる

よ」

「な、なんてスケベな悪魔なの！ああ、神よ！この猥褻な発言をした悪魔に聖なる裁きを！」

「イリナ、この男は私が滅する。性欲に溺れた悪魔など――――――」

ゴオッ！

新は魔力を放出して威嚇する

青髪の女性は新の気迫に気圧されてしまう

剣の刀身に赤い魔力が注がれ、新は動かずに構えを取る

「何だ今の力は……悪魔にしては変わった波動だった。貴様はこの場で滅さなければならないようだ！」

襲ってきた聖剣を回避し、新は一降りの剣技を放つ

バババッ！

白いローブごと服が消し飛び、青髪の女性は素っ裸を公開した

「きゃあ！ゼノヴィア！」

「はい終了」

新は剣をブンッと振る

ゼノヴィアと呼ばれた女性は、現状について不可思議な顔をしている

「……傷ひとつ付いていない？数奇な男だな。敵である私にトドメを刺さず、ただ服を脱がすだけとは」

「ちょっとゼノヴィア!?聖職者なんだから隠して！汚れた悪魔に裸を見られて何とも思わないの!?」

「今はまだ戦いの最中だ。そんな事をしていたら隙を突かれてしまう。一瞬の油断が命取りになる事だってあるんだぞ」

「なにぃ……!?裸にしてやったっつうのに、平気な顔をしてやがる……!?俺は今、ピンクの乳首を見てるのに……」

新は今までに無かった反応に敗北感みたいなモノが沸き上がる

ゼノヴィアは裸体を一切隠さず、聖剣を構える

「欲望の深い悪魔らしい行動だな。さぁ来い。まだ私は戦えるぞ」

「あぁもう！少しは恥じらいなさい！」

栗毛の女性――――――イリナが自分のローブを外して、ゼノヴィアの裸体を隠すように巻き付けた

新は『闇皇の鎧』を解除する

「こんな敗北感は初めてだ……まさか、これで戦意喪失しない女に出会うとは……」

「……っ？どうした悪魔」

「あ～……ワリィけど、俺はもう戦う気が失せたっつーか、元々マジで戦う気は無かったんで逃げるわ」

「おい待て」

「……何か用か？」

「悪魔にしては拍子抜けだが、名前を聞いておいてやろう。お前の名前は何だ？」

「竜崎新だが……」

「竜崎新か……では竜崎新。次に会う時は断罪してやるから、覚悟しておけ」

「へいへい、ご自由に」

新はすっかりやる気を無くしてしまい、哀愁を漂わせながら逃げた

「ゼノヴィア！あんなハレンチ悪魔なんて、すぐに裁くべきよ！追い掛けるわよ！」

「待てイリナ。見てくれ……私の手が震えている。悪魔を断罪してきた、私の手が」

「えっ？」

「魔力の波動を感じて分かった。あの男は、ただの悪魔じゃない。得体の知れない何か

を宿している……」

リベンジマッチ

ゼノヴィア、イリナと言う2人の教会関係者に遭遇した後の夜、新は酒場でカルーアミルクを飲んでいた

沈んだ表情でチョビチョビと……

「「アハハハハハハハハハハ！」」

「笑うなコンチキショーーーッ!!」

新の脱がし術が効かなかった話を聞いたレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトはバイト中なのを忘れてしまうくらい大爆笑した

酒場のマスターも机を叩きながら……

「ハッハッハッハッハ！そうかそうか！そいつぁ落ち込むのも無理はねぇや！何せ新の無敗記録が破られちまったもんなぁ！」

「えぇ。プククックッ……！その時のアラタの顔、拝みたかったわ」

「よしよしアラタ。うちがナデナデして慰めてあげる～♪」

「ふふっ、ミッテルト。アラタが逆に萎れているぞ」

「傷心の男をもっと労りやがれ！」

新は残ったカルーアミルクを飲み干し、だらしなく机に突っ伏す

数々の女性を脱がし、啼かせてきた新には相当ショックだった事であろう

「クソォ……次に会った時はぜってぇリベンジしてやる……！汚れを知らない教会関係者程、堕ちてからの反動は期待出来る筈。弄って弄って弄り倒すまでだ！」

「ははははっ。気合入れまくってるな新。けどよ、その２人が何処にいるか分かるのか？お前高校生になったし、そんな時間は無いんじゃないのか？」

新は肝心な事を忘れていた

名前は判明しても、普段何処にいるのかが分からなければリベンジしようにも出来ない

新は”屈辱を晴らせないまま、二度と会えないのだろうか”と再び気を落とした

「む？貴様は」

「あ、あん時の……」

翌日の放課後、部室であっさり例の２人――――――ゼノヴィアとイリナに出くわした

と言うより、彼女達の方から訪問してきたらしい

「新、知ってるの？」

「知ってるも何も、昨日教会で偶然出くわしたんだよ」

「「っ!?」」

オカルト研究部員、祐斗以外のメンバーは全員驚く

自分達の敵地である教会に行っただけでも許されないのに、更に教会関係者と遭遇したのだから無理もなかった

「新！どうして昨日教会に行ったのよ!?」

「い、いや……聖剣計画の話を聞かされてから妙に気になっちまって……気が付いたら足を運んでたんだ……スマナイ」

新はリアス達に深々と頭を下げる

リアスは新の頭を撫でた

「はぁ……あまり危険な事ばかりしないでちょうだい。イッセーやアーシアだけでなく、あなたまで失ってしまったらと……不安で押し潰されそうだったわ」

「危険な事に首を突っ込むのはバウンティハンターの性（さが）――――と言っても、今回ばかりは浅はか過ぎた。本当にごめんなさい」

新の謝罪が終わると、イリナが口を開く

「イッセーくん！あのハレンチ悪魔もあなたの仲間なの!?」

「ん？あの女、一誠を知ってるのか？」

「そういえば話してなかったわね。彼女の本名は紫藤イリナ――――――イッセーの幼馴染みだそうよ」

新は目玉が飛び出しそうになった

一誠に教会関係者の幼馴染みがいたとは予想だにしていなかった

「新。お前ハレンチ悪魔って」

「あの男は昨日、私の服を切り刻んで裸にしたんだ。その後急に戦意を無くして逃げ去っていったのだが、あの時はよくも神を愚弄してくれたな」

リアスと朱乃の眉がピクッと動き、新の方を向く

「新……？あなた昨日、いったい何をやらかしたのかしら？」

「新さん？このお二人に何をやらかしたんですか？」

「えっ？えっ!?何か顔が怖いんだけど！お、俺はただ自分の身を守るために――――――」

その時、リアスと朱乃の魔力を込めたビンタは……今まで受けたどの攻撃よりも痛かった

――――――

「だから、俺は少なくとも目の前に存在しない神なんざ信じてないって言ったんだ」

「教会に喧嘩を売ってるようなものよ？」

「別に構わねぇ。俺はただ目の前で見た事実しか認めたくない性格なんでね」

両頬が腫れていては折角の場面が台無しだと思う

殺伐とする空気の中、イリナが話を切り出した

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

話は更に続けられる

エクスカリバーは大昔の戦争で折れたが、その欠片を拾い集め、錬金術によって新しく8本のエクスカリバーが作られた

因みに、ゼノヴィアが持っているのはカトリックが管理している『破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）』

イリナの方はプロテスタントが管理しており、自由自在に形を変化出来る『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』と呼ばれる代物らしい

それらを含む８本のエクスカリバーはカトリック、プロテスタント、正教会でそれぞれ管理されているのだが――――その内の３本が盗まれ、犯人はこの地に持ち運んだらしい

しかも、エクスカリバーを奪ったのは堕天使の幹部コカビエル

古の戦いから生き残っている猛者だった

「私達の依頼――――――いや、注文とは私達と堕天使のエクスカリバー争奪の戦いにこの町に巣食う悪魔が一切介入してこない事。――――――つまり、そちらに今回の事件に関わるなと言いに来た」

「早い話、俺達や他の悪魔を信用してないって事かよ」

好き勝手な言い分にリアスの目は冷たい怒りを宿し、新が珍しく目を細めて２人に問い質す

「まさかとは思うがよ。お前ら、たった2人だけで堕天使の幹部からエクスカリバーを奪い返すつもりか？無謀過ぎるな。死ぬぞ？」

「そうよ」

「私もイリナと同意見だが、出来るだけ死にたくはないな」

「――――っ。死ぬ覚悟でこの日本に来たというの？相変わらず、あなた達の信仰は常軌を逸しているのね」

「我々の信仰をバカにしないでちょうだい、リアス・グレモリー。ね、ゼノヴィア」

「まぁね。それに教会は堕天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが全て消滅しても構わないと決定した。私達の役目は最低でもエクスカリバーを堕天使の手からなくす事だ。そのためなら、私達は死んでもいいのさ。エクスカリバーに対抗出来るのはエクスカリバーだけだよ」

エクスカリバーを堕天使に利用されない為なら、自分達は死んでもいい

新はその態度が気に入らなかった

その後、会話が途絶したところでイリナとゼノヴィアは帰ろうとしたが、アーシアに視線を集中させた

アーシアも昔はシスター

『魔女』の烙印を押され、追放されてしまった『聖女』だから、2人に言い寄られ対応に困る

「聖女と呼ばれていた者が堕ちるところまで堕ちたものだな。まだ我らの神を信じているか？」

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が主を信仰している筈はないでしょう？」

２人の言葉に新と一誠の目付きが変わる

「いや、その子から信仰の匂い――――香りがする。抽象的な言い方かもしれないが、私はそういうのに敏感でね。背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない者がいる。それと同じものがその子から伝わってくるんだよ」

「そうなの？アーシアさんは悪魔になったその身でも主を信じているのかしら？」

イリナの問いにアーシアは悲しそうな表情で言った

「……捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたのですから……」

「そうか。それならば、今すぐ私達に斬られるといい。今なら神の名の下に断罪しよう。罪深くとも、我らの神ならば救いの手を差し伸べてくださる筈だ」

ゼノヴィアがエクスカリバーをアーシアに突き付けた瞬間――――

ガンッ！

新が机を蹴飛ばして威嚇し、一誠がアーシアを庇うように立った

「おい。いくら女でも、もうこれ以上我慢しねぇぞコラ」

「アーシアに近づいたら、俺が許さない。あんた、アーシアを『魔女』だと言ったな？」

「そうだよ。少なくとも今の彼女は『魔女』と呼ばれるだけの存在ではあると思うが？」

遂に一誠の怒りが爆発する

「ふざけるなッ！救いを求めていた彼女を誰一人助けなかったんだろう!?アーシアの優しさを理解出来ない連中なんか、ただのバカ野郎だ！友達になってくれる奴もいないなんて、そんなの間違っている！」

『聖女』に友人が必要だと思うか？大切なのは分け隔てない慈悲と慈愛だ。他者に友情と愛情を求めた時、『聖女』は終わる。彼女は神からの愛だけがあれば生きていけた筈なんだ。最初からアーシア・アルジェントに『聖女』の資格は無かったのだろう」

当然の様に言うゼノヴィアの頬を、爪がかすった

よく見ると……新が鎧に覆われた右手を振り抜いていた

「いい加減にしやがれ。だったらテメェらも味わってみろや。勝手に『聖女』にされて、少しでも求めていた者と違ったら見限られる辛さをよぉ。神だの愛だの好き勝手ほざきやがって、女1人救おうとしない神なんざ――――――いねぇ方が清々すらぁ」

「なんですって!?今のは神に対して最大級の侮辱よ！」

「それは私達――――――我らの教会全てに対する挑戦と受け取って良いんだな？」

「新。お止め――――――っ！」

リアスや一誠が止めようとしても止められなかった

新の顔は、今までにない怒りを見せていたから

女が相手なら、一番に口説いたり脱がしたり弄ったりしていた新が――――――キレている

そこへ先程からゼノヴィアとイリナに殺意を向けていた祐斗が新の前に出る

「待ちなよ竜崎くん。ここは僕に――――――ッ！」

「退け祐斗。俺は思った程大人じゃねぇんだ。それに神の為なら、いつ死んでもいいとか言ってるこいつらの態度が俺は気に入らねぇ」

祐斗を出させまいとする新

祐斗よりも特大の怒りを放出していた

「誰もが1つしか持ってない命を簡単に奪おうとしたり捨てようとしやがって。一誠の言う通り、お前ら教会の奴らはただのバカ共だ」

「貴様……！これ以上の愚弄は許せん……！戦え！」

全員は球技大会練習場に移動した

神を愚弄された事に怒りを露にするゼノヴィアとイリナ

その視線の先には、闇皇に変異済みの新が闇皇剣を出していた

リアスも立場的に対応に苦慮したのだが、新が「この喧嘩は俺とあいつらの私闘だ。殺さなきゃ問題は無い」と無茶苦茶な提案をしてきた

ゼノヴィアとイリナにも『この事はお互いに一切口外しない、殺し合いに発展させない』と言う条件を材料に承諾させた

朱乃さんが張る結界の外では、３人を除く全員が不安な表情で見守っている

「始めるぞ。殺さないだけ感謝しておくがいい」

ゼノヴィアとイリナはローブを脱ぎ捨て、ボンテージみたいな黒い戦闘服姿となる

「ほう。どっちも良い体してやがるが……多少傷付いたところで恨むなよ?」

新が刀身に魔力を込めると同時に、ゼノヴィアとイリナがエクスカリバーを向ける

「覚悟なさいハレンチ悪魔!この聖剣で断罪してあげる!アーメン!」

「2対1だから卑怯だとでも言うなよ！」

ゼノヴィアがエクスカリバーを天に翳し、地面に突き立てると――――地面が轟音を発して抉れた

爆(は)ぜた土がイリナと離れていた新にかかる

「なっ!?クレーターが出来た!?」

あまりの破壊力に一誠は驚く

エクスカリバーを引き抜いたゼノヴィアは得意気に言う

「我が聖剣は破壊の権化。本気を出せば砕けぬ物はない」

「真のエクスカリバーでなくてもこの破壊力。８本全部消滅させるのは修羅の道か」

祐斗の目に映る憎悪を他所に新は被った土を落として言う

「あん時は本気を出していなかったってか……上等だ。こっちも本気出してやる」

低い声音を発し、新は赤と黒の魔力を放出させる

「この感覚だ……ライザーの時と同じ、力を流し込む……！」

グキグキグキ……！

頭部を覆う兜の口が開き、両肩と両腕、更に両足のカカトから刃物状の爪が隆起してくる

コオオオオ……ホオオオオ……

奇怪な呼吸音を出す新は、全てに戦慄を与える

「っ！な、何なの……？この魔力……あれが新なの……！？」

「あの時と同じだ……新が、ライザーの『女王（クイーン）』と戦った時の……」

新の魔力に当てられた木々の葉が枯れ、幹も萎（しお）れ、儚い音を立てながら折れていく

「……っ！昨日とは桁違いの気迫だな。イリナ、同時に仕掛けるぞ！」

「わ、分かったわ！」

ゼノヴィアは左、イリナは右からエクスカリバーで斬りかかる

新はゼノヴィアの聖剣を左腕の刃で、イリナの聖剣を剣で防御

「昨日も思ったけど、どうして悪魔の苦手な聖剣を前にしても平気なの！？」

「この男は普通の悪魔ではないと言う事だろう！」

新が魔力を込めた剣で真一文字に斬ろうとしたが、２人は危険を察知して回避する

すると、新は両肩の刃を折ってイリナに投げつける

「――――っ!?避けろイリナ！」

「きゃあっ！」

イリナはエクスカリバーで受け止めようとしたが、刃の勢いに肉体が耐えきれず吹っ飛ばされた

シュゥウウウウ……

しかも、折った両肩の刃が再生した

「やはり、この男は危険過ぎる……！我が『破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）』で倒れろっ！はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

ゼノヴィアの全力を出した剣撃と新の剣がぶつかり合い――――――豪快な音と地響き、土煙をあげた

その衝撃は結界の外まで響き渡り、一誠達は体勢を崩す

「部長！これじゃあ何も見えません！」

「朱乃！結界を解いて！」

リアスは急いで朱乃に結界を解かせる

やがて晴れた土煙の中にいたのは……投げつけた刃で吹っ飛ばされたイリナ、聖剣を振り切ったまま荒く呼吸をするゼノヴィア

そして剣を握ったまま、地に転がる鎧の腕――――新の右腕だけだった

「新!?新アアアッ!」

目の前で起きた信じられない出来事に一誠は叫び、アーシアは両手で顔を覆う

「嘘でしょ……?新!返事をしなさい!新!」

「新さん!?新さん!」

「先輩!」

仲間の呼び掛けも虚しく響くだけ、ゼノヴィアは聖剣を収めて深呼吸する

「……加減が出来なかった。勢い余って消滅させてしまったようだ――――アーメン」

ボコッ……

ゼノヴィアの背後から、何かがせり出てくる音

嫌な気配を感じ取ったゼノヴィアが振り返ると――――――片腕を失った新が、左手を前に突き出していた

「グアァァァアアッ！」

雄叫びと共に左手から放出された魔力の衝撃波

ゼノヴィアの戦闘服と聖剣を吹き飛ばし、彼女の裸体が木に叩きつけられる

「ぐあっ！」

更に目を疑う出来事――――――千切れた新の右腕がビクビク動き出し、飛び掛かってゼノヴィアの両腕を拘束した

「き、斬られた腕が動いた……!?」

「な、何なんだこの男は……!本当に悪魔なのか……!?」

ゼノヴィアとイリナは今までにない恐怖を感じ取った

新は拘束したゼノヴィアに歩み寄り、左手の爪を向ける

イリナは直ぐにゼノヴィアを助けようと駆け出し、背後から『擬態の聖剣(エクスカリバー・ミミック)』を振り下ろした刹那――――新は振り返りもせず左腕の刃で聖剣を防いだ

「そ、そんなっ!」

「グルルルルル……ッ!グガアッ!」

獣の如く唸り声を上げながら新は刀身を掴み、引っこ抜くようにイリナをゼノヴィア

の隣に位置する樹木に叩きつけた

そして左手の爪に凶悪なオーラを纏わせ、イリナの胸の前を一閃する

恐怖で目を閉じたイリナは自身に何の異変も無い事に疑問を持ち、恐る恐る目を開ける

その直後……イリナの着ている戦闘服が細切れの破片と化し、彼女の裸体があらわとなった

雪の如く白い柔肌と健康的に膨らんだ胸、弾みの良さそうな尻と桃色の乳首はいつもの新なら喜ぶ事間違いなしだろう

「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

裸にされた事に気付いたイリナは絶叫し、手で裸体を隠しながらしゃがんだ

一誠は真っ先に歓喜の雄叫びを上げようとしたが、小猫に鳩尾を殴られて地面に突っ伏す

更に言ってしまえば、今の新は半ば暴走しているのでそんな事をしている場合ではない

しかし、リアス達は暴走新の覇気にたじろいでしまい思う様に体を動かせなかった

新の爪がゼノヴィアの顔に近づいていく

『や、殺られる……！』

ゼノヴィアは殺される恐怖に目を閉じた

モニュッ……プニョプニョ……

「……っ？んぁっ……な、何を……？」

目を開けてみると、暴走新はゼノヴィアの乳を優しく揉んでいた

一通り揉んだ所で手を離し、今度はしゃがみ込んでいるイリナの乳を先程と同じ様に優しく揉む

「ひぁんっ！ちょっ、なに……っ!?や、やめてぇ……っ！」

「ふぅ……俺の勝ちだな」

２人の乳を揉み終わった新はゼノヴィアを拘束してる右腕を引っこ抜き、自分の剣を回収する

ゼノヴィアは力が抜け、ペタリと座り込む

「……何故攻撃しなかったんだ?今の状況、お前は攻撃出来た筈なのに」

「お前らさぁ、今〝殺される〟って思ったろ？そん時どう思った？」

新は兜を解除して言う

「殺られる時に〝怖い〟って思ったろ？死ぬ事に対して怖いと思った筈だ。どうだ？」

ゼノヴィアは新の問いに無言で頷き、イリナも続くように頷いた

「それはお前らが本当は死にたくないって思ってる証拠だ。死んじまったら何も出来なくなる……動く事も喋る事も出来ない、ただの肉の塊になっちまうんだ。神の為なら死んでもいいとか、そんな事は例え冗談でも言うな。命ってのは1つしか持てない……悪魔も、天使も、堕天使も、全ての生き物も皆同じなんだよ」

千切れた右腕を持って、新は一誠達の方へ歩いていく

勝負はもう決まったようだ

「待ってくれ」

ゼノヴィアが呼び掛け、新は足を止めて振り向く

「何だよ。まだ何かあるのか？早いトコ腕をくっ付けたいんだが？」

「教えてくれ。君は何者なんだ？その力はいったい何なのだ？」

「俺は――――闇皇（やみおう）の蝙蝠だ。自分で名付けたんだが、カッコいいだろ？」

「千切れた腕を持ちながら言う台詞じゃないでしょ……」

イリナの指摘はその通りだった

ゼノヴィアとイリナはローブで裸体を隠して立ち上がる

「変な男だな。君は」

「男っつうのは少しバカで変なぐらいが丁度良いんだよ。ほら、もう勝負は着いたんだ。さっさと帰ってくれ」

「分かった。だが、1つだけ私の質問に答えてくれ。この写真の男に見覚えはないか？」

ゼノヴィアはローブから一枚の写真を取り出し、新達に見せる

写っていたのはゼノヴィアとイリナ

そして聖剣を肩に乗せる悪魔祓(エクソシスト)いの男だった

「……見た事ねぇな。こいつ誰だ？お前らの知り合いか？」

「そうだ。私とイリナの上司であり、8本あるエクスカリバーの内の1つ、『灼熱の聖剣(エクスカリバー・イグニッション)』を使う悪魔祓(エクソシスト)い――――神代剣護(かみしろけんご)。数年前に蒸発してしまい、今も探している先輩だ。知らないのなら仕方がない、他を探してみるよ」

「こ、今回は私達の完敗だけど……次に会った時は断罪しちゃうからね！変態蝙蝠の悪魔さん！」

「うっせぇこのっ」

新は最後にイリナのローブを足で蹴り上げ、捲れたローブの下から見えた裸体を拝む

イリナは顔を真っ赤にしてローブを押さえ、涙目で捨て台詞を吐いていった

「も、もうっ！絶対絶対断罪しちゃうんだからぁっ！」

急ぎ足で去っていくイリナ

彼女の後ろ姿を見ながら新はこう呟いていた

「な～んか妙に懐かしみがある感覚だったよな……何だ……？」

エクスカリバー破壊団結成！

「ぐっ！くっ……！ぬうううう、がぁぁぁぁぁ……！」

「我慢してなさい。アーシア、朱乃、もう少し強く」

「は、はい！」

「はい、部長」

リベンジ終了後、新はリアスと朱乃の魔力、アーシアの『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』による再生治療を受けていた

さっきまで痛みの事など頭に入っていなかったためか、肉体に激痛が走る

少しずつくっついてはいるが、痛いものは痛かった

やがて切断された右腕は完全に元の状態にまで回復した

「っはぁ！はぁ……はぁ……はぁ……超痛え。もう少し優しくしてくれたって良いだろ……？」

「痛くても我慢しなさい。一度ならず二度までも私達に心配を掛けて！さっきは本当に消滅したと思ったんだから！」

「ぎゃぁああっ！腕を叩くなーっ！」

結合部を思いっきり叩かれた新はその箇所を押さえながら転がる

腕が繋がったとはいえ、まだ痛みは消えていない

新はその後、心配を掛けた罰としてリアス達から説教をされる羽目となった

「『白い龍（バニシング・ドラゴン）』はもう動いている……か。白い龍って事は、一誠の赤龍帝と何か関係があるのか？」

次の休日、新は競馬場を出ながら考えていた

ゼノヴィアが学園から去る直前に言っていた『白い龍（バニシング・ドラゴン）』

彼女達が探しているエクソシスト――――神代剣護について

だが、どちらも――――特に神代剣護には心当たりが無いので……やはり考えがつかなかった

「もう少し酒場で情報を集めた方が良いかも知れねぇな。今日は大穴を当てたから、財布に余裕があるし」

そう言いながら財布の中に潜む福沢諭吉の枚数を数えていると……妙に見覚えのあるローブが新の視界に入り込んだ

「え～、迷える子羊にお恵みを～」

「どうか、天の父に代わって哀れな私達にお慈悲をぉぉぉぉぉっ！」

道の真ん中で小さなカゴを傍らに祈りを捧げるおかしな２人組――――それは昨日学園に押し掛けてきたゼノヴィアとイリナだった

道行く人達も奇異の視線を向けながら彼女達を避けて通り過ぎる

「何してんだあいつら……？」と新は口を半開きにして佇む

「なんて事だ……。これが超先進国にして経済大国日本の現実か。これだから信仰の匂いもしない国は嫌なんだ」

「毒づかないでゼノヴィア。路銀の尽きた私達はこうやって異教徒達の慈悲無しでは食事も摂れないのよ？ああ……パン１つさえ買えない私達！」

まるで悲劇のヒロインの如く惨めな自分達を強調し続ける様子は胡散臭さ以外感じられない

新も出来れば関与したくない思いでいっぱいだった

「元はと言えばイリナが詐欺紛いの絵画を購入したから、こんな事をする羽目になっているんじゃないか！」

「何を言うの！この絵画には聖なるお方が描かれているのよ！展示会の関係者もそんな事を言ってたわ！」

「じゃあ誰だか分かるのか？私には誰一人脳裏に浮かばないぞ」

ゼノヴィアの視線の先には１枚の絵画が置いてあった

その絵画には頭に輪を浮かばせただけで何処にでもいそうな人物とラッパを吹いて宙を舞う数人の赤ちゃん天使が描かれているだけだった……

素人でも分かる下手くそな絵画は贋作よりも酷い代物で、これは明らかに騙されたと言えよう

『……アホだな～』

「全く、これだからプロテスタントは異教徒だと言うんだ！」

「何よ！カトリックの方が異教徒じゃない！」

今度は自分達が所属する教会の事で喧嘩し始めたゼノヴィアとイリナ

しかし、ここで２人の腹の虫が大きく鳴り……彼女達は溜め息混じりにガックリと肩を落とした

「……やめましょう」

「……そうだな」

いがみ合っても腹が膨れる訳がないと悟ったゼノヴィアとイリナは喧嘩を止めた

新は近くの自販機でカフェオレを買い、飲みながらもう暫く様子を見る事にした

すると、イリナが何かを思い付く

「そうだ！異教徒を脅してお金を貰うってのは？異教徒相手なら主もお許しになると思うの」

ブフーーーーッ！

新の口に侵入したカフェオレが一気に吹き出された……

イリナが出したアイデアは紛れも無い犯罪行為である

ゼノヴィアも続くように自らの提案を出す

「寺とやらを襲撃して賽銭箱を奪うと言うのもあるな」

物騒なアイデアの流出は止まる事を知らず……

このまま放置したら間違いなく２人は犯罪者となるだろう

敵対関係とはいえ、流石にこれ以上はマズイと見兼ねた新は２人の所へ歩いていった

「おい、そこのおバカさん２人。往来で白昼堂々と犯罪計画を立てるな。俺が逮捕していろいろ尋問するぞ」

「……っ。君は――――竜崎新！いつの間に……」

「私達が空腹の時に仕掛けてくるなんて卑怯よ！」

「カツアゲに賽銭強盗をしようとしたお前らに言われたくねぇ！ったく、教会出身の奴らはマヌケしかいねぇのか……」

新は懐から財布を取り出し、競馬で稼いだ札束を扇状にして２人に見せる

「腹減ってんだろ？飯ぐらいなら俺が奢ってやる。まぁ別に食いたくねぇってんなら――あ、食うんだな……」

２人のキラキラと輝く眼差しを肯定の意味として受け取った新はその直後、ゼノヴィアとイリナを探し回っている一誠、小猫、匙とも合流した

「うまい！日本の食事は美味いな！」

「うんうん！これよ！これが故郷の味なのよ！」

余程空腹だったのか、近くのファミレスに着くや否やゼノヴィアとイリナはメニューを片っ端から注文

料理が届いては勢い良く食べ尽くしている

「はふぅ～、ご馳走さまでした。ああ、主よ。心優しきこの者にに祝福を」

胸で十字を切るイリナ

その瞬間、新、一誠、小猫、匙は頭痛に襲われ頭を押さえる

どうやら悪魔は目の前で十字を切られると軽くダメージを受けるようだ

「あー、ゴメンなさい。つい十字を切ってしまったわ」

テヘッと可愛く笑うイリナに新は「テヘッじゃねぇだろ」と軽く突っ込む

空腹が満たされ、落ち着いた所でゼノヴィアが問う

「それで、私達に接触した理由は？」

「わざわざ話があるからって言うぐらいだ。それなりの理由があるんだろ？」

新の言葉に一誠は真剣な面持ちになり、２人を探していた訳を打ち明けた

「単刀直入に言えば、エクスカリバーの破壊に協力したい」

一誠の言葉を聞いた２人は目を丸くしていた

敵対関係にある悪魔から聖剣の破壊に協力したいなどと誰も思うまい

流石の新も一誠の提案に目を細めた

この提案に対し、ゼノヴィアが口を開く

「……そうだな、1本ぐらい任せてもいいだろう。だが、そちらの正体を知られないようにしてくれ。関わりを持っているのは上にも敵にも知られたくない」

「ちょっとゼノヴィア、相手はイッセーくんと……竜崎くんとはいえ悪魔なのよ？」

「正直言って、私達だけでは聖剣3本とコカビエルの戦闘は辛い」

「それは分かるわ！でも……」

イリナは提案されたエクスカリバー破壊の共同戦線に納得がいかない様子だが、

「最低でも私達は3本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰れば良い。私達のエクスカリバーが奪われるぐらいなら、自らの手で破壊すれば良い。奥の手を使ったとしても任務を終えて、無事帰れる確率は3割程度だ」

「それでも高い確率だと私達は覚悟を決めてこの国に来た筈よ」

「上にも任務遂行して来いと言われた。自己犠牲に等しい」

「それこそ信徒の本懐じゃないの」

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟でね、いつでもベストな形で動き出す」
「前々から思っていたけど、信仰心が微妙におかしいわ！」
「否定はしないよ。だが、任務を遂行して無事帰る事が本当の信仰と信じる。生きて、これからも主のために戦う。違うか？」
「違わないわ、でも……」
「だからこそ、悪魔の力は借りない。代わりにドラゴンと蝙蝠の力を借りる。上も〝ドラゴンとハンターの力を借りるな〟とは言っていない」
　矛盾してるようで矛盾していない理屈にイリナは戸惑い、その間に新は一誠にある疑問を投げ掛けた
「おい、一誠。お前この事はリアス部長に言ったのかよ？」
「いや、部長に言ったら間違いなく反対されると思って……」
「つまりお前の独断って訳か。しかも、エクスカリバーを破壊する為のねぇ……。お前さぁ、いくら祐斗の為とはいえゼノヴィアとイリナは教会側についてる人間だぞ？その問題に首を突っ込んだら、どんな惨事を招くか分かる筈だ。悪魔歴が浅い直球バカのお前でもな」
「分かってるけど……木場は俺達の仲間なんだ。エクスカリバーに対する復讐を木場の手で終わらせてやりたい。だから、新も協力してくれ！」

一誠が新に頭を下げる
正直に言ってしまえば、この問題はあくまで教会側の問題なので新達が干渉する必要など何1つ無い
新も面倒事は極力避けたいが……乗り掛かった船だと言い聞かせて諦めた
一誠の仲間意識具合は恐らく梃子でも動かせないだろうと踏んだのだ
「わぁーったよ、俺も協力してやる。そこのお二人さん、何か問題はあるか？」
「いや、無いぞ。寧ろ君が加わってくれるのは好都合だ。何せ私達2人を退けた強者だからね」
「ここまで話が進んじゃった事だし……仕方無いわよね」
ゼノヴィアからは直ぐに了承を得て、イリナも渋々ながら承知してくれた
新の共同戦線加入が決定した所で一誠は電話で祐斗の呼び出しに掛かった

「……話は分かったよ。正直言うと、エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だけどね」
「随分な言い様だね。そちらが『はぐれ』だったら問答無用で斬り捨てているところだ」

共同戦線前なのに一触即発の空気になってしまうが、新が落ち着かせる
「やはり、『聖剣計画』の事で恨みを持っているのね？エクスカリバーと――――教会に」
「当然だよ」
「でもね、木場くん。あの計画のおかげで聖剣使いの研究は飛躍的に伸びたわ。だからこそ、私やゼノヴィアみたいに聖剣と呼応出来る使い手が誕生したの」
「だが、計画失敗と断じて被験者のほぼ全員を始末するのが許されると思っているのか？」
祐斗はイリナに憎悪の眼差しを向ける
確かに神に仕える信徒がやるには非人道的過ぎる行いである
彼女が反応に困るのも無理なかった
そこへゼノヴィアが言う
「その事件は、私達の間でも最大級に嫌悪されたものだ。処分を決定した当時の責任者は信仰に問題があるとされて異端の烙印を押された。今では堕天使側の住人さ」
「堕天使側に？その者の名は？」
「――――バルパー・ガリレイ。『皆殺しの大司教』と呼ばれた男だ」
仇敵の名前を聞いた祐斗の目に決意みたいな物が生まれた

聖剣計画の当事者――――――目標が分かっただけでも、祐斗にとっては大きな前進である

「僕も情報を提供した方が良いようだね。先日、エクスカリバーを持った者に襲撃された。その際、神父を1人殺害していたよ。やられたのはそちらの者だろうね」

この場にいる全員が祐斗の言葉に驚愕した

特にゼノヴィアとイリナは尋常じゃない慌てぶりを見せる

「エクスカリバーを……っ？」

「その者はどんな奴だった!?まさか……剣護さんが……？」

「いや、相手はフリード・セルゼン。この名に覚えは？」

フリード・セルゼンとは、アーシアとの一件で完全に敵対している白髪神父の名前だ

ゼノヴィアとイリナはホッとした様な雰囲気で胸を撫で下ろす

「つーか、あのクソ神父まだいるのかよ」

「なるほど、奴か」

「フリード・セルゼン。元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。13歳でエクソシストとなった天才。悪魔や魔獣を次々と滅していく功績は大きかったわ」

「だが奴はあまりにやり過ぎた。同胞すらも手にかけたのだからね。フリードには信仰心なんてものは最初から無かった。あったのはバケモノへの敵対意識と殺意。そして、

異常なまでの戦闘執着。異端にかけられるのも時間の問題だった」
「あいつ天才だったのか？とてもそんな風には感じられなかったが」
「――――っ？竜崎くんはフリードと戦った事があるの？」
「あの時は新が一方的に圧倒したんだっけ」
新はエヘンと自慢気に威張る
そして、さっき異常な様子を見せた2人に新はある質問をする
「さっき真っ先に、お前らが探している先輩とやらの名前が出たんだが……その男もヴァチカンに？」
「……そうだ。神代剣護（かみしろけんご）さんも、かつてヴァチカン法王庁に仕えていたエクソシストだ。私達の上司……8本あるエクスカリバーの内の1本、炎を操る『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』の使い手で、エクソシストのトップに相応しい実力の持ち主――――私達信徒の憧れだ」
「でも、数年前に突然姿を消してしまったの……エクスカリバーを持ったまま……」
沈んだ顔をするゼノヴィアとイリナだったが、直ぐに気落ちから復活する
「……けど、私達は考え過ぎてたみたいだ。剣護さんは誰よりも神を信仰し、思いやりのある人だから――――そんな事をする人じゃない」
「そうよね。きっと、何処かの町で人々を救っている筈よ！」
「そうだな。とりあえず、エクスカリバー破壊の共同戦線といこう」

ゼノヴィアはペンを取り出して、メモ用紙に自分達の連絡先を書き記す
「何かあったらそこへ連絡をくれ」
「サンキュー。なら、俺達の携帯番号も教えておこう。常備しているからな」
「イッセーくんのケータイ番号はおばさまからいただいているわ」
「マジかよ！母さん！勝手な事を！」
こうして、エクスカリバー破壊団が結成された

灼熱の男

それから数日経った放課後、部活動を終えた新達は公園に集まり神父やシスターの変装をする
内容は、神父やシスターの格好で人気のない場所を中心に町中を歩くと言う物だった
何とかエクスカリバーの足を掴みたいと意気込んではいたが、手掛かりを掴めず時間だけが過ぎていく
「ふう。今日も収穫なしか」
匙が気落ちするように言う
何日も何日も神父とシスターの格好で歩き回った挙げ句、成果が上がらないとなれば無理も無かった
……すると、ここで先頭を歩いていた祐斗が歩みを止め、最後尾を歩いていた新が辺りを見回す
「っ！上だ！」
新の声で全員が上空を見上げる
すると、見覚えのある白髪が長剣を構えながら降ってきた

「神父の一団にご加護あれってね！」
ギィィィン！
祐斗が素早く魔剣を取り出し、フリードの一撃を防いだ
「フリード！」
「ようやく見つけたぞ。クソ神父」
「――――！その声はイッセーくんと元クソ人間ちゃんですかい？へぇぇぇぇ、これはまた珍妙な再会劇でござんすね！どうだい？ドラゴンパウワーは増大してるのかい？悪魔になったパウワーはどうですかい？そろそろ殺していい？」
相変わらずのイカレ口調全開ぶりを見せるフリード
新達は神父の服を脱ぎ捨て、普段の制服の姿へ戻る
「おっと！おっ始める前にこいつを2個投入してみましょうかね～！行けぇぇ！モソヌターボールちゃぁん！」
フリードが懐から黒い球体を2つ、地面に叩きつける
球体が割れると、中から化け物が4匹出現した
「なっ！何だよこいつらは!?」
「そういや、匙は知らなかったな。あれは闇人（やみびと）。俺に宿ってる『闇皇（やみおう）の鎧』を作った怪物だ」

「ヒャッハハハハハハハ！どうよどうよ⁉村上の旦那から新しい化け物ちゃんズを貰いましてね～！この前のネズミとは桁外れに強ぇのよ～！だから死んでチョンマゲ！」
　フリードの言葉通り、今回出てきた闇人は量産タイプのネズミ型ではなく――――
腕が8本の蛸型、巨大な鎌を携えた蟷螂（かまきり）型、ショットガンらしき銃を向ける羊型、尻尾が刃となっているカメレオン型と多様な姿を持っていた
「一誠！二組（ふたくみ）に分担して潰すぞ！俺と小猫で闇人を潰すから、お前らはフリードをぶっ潰せ！」
「分かった！気を付けろよ！ブーステッド・ギア！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
　一誠の『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』から力が膨れ上がるのを合図に、新と小猫は闇人と対峙する
「いけるか小猫？アレはお前からすれば、この前の奴より強ぇぞ」
「……問題ありません」
「上等だ。２匹ずつ仕留めるぞ」
　新は両腕両足に鎧を展開して、剣を手に持つ
　新は蛸型とカメレオン型の闇人に狙いを定めた
「たった2人で何が出来る！」
　蛸型の闇人が8本の腕を伸ばして攻撃してくる

先端が刃物状になった腕で刺し殺そうとするが、新は全て斬り落とす
グニュグニュグニュ……
なんと傷口から肉が盛り上がり、斬られた腕が再生を果たす
「……っ？斬られた腕が再生しやがった？再生能力持ってんのかよ」
「ケケケケケッ！」
カメレオン型が刃の尻尾で突いてくる
新は右に回避して尻尾を掴み、蛸型に向かって投げつける
「おのれ！このドチビが！」
「……ドチビ？」
ブンッ！ドゴッ！
隣では蟷螂型と羊型ＶＳ小猫の戦い
小猫の禁句を言ってしまった蟷螂型は拳を鳩尾に打ち込まれた
「グボアァッ……！」
「……ベチョベチョ。キモいです」
蟷螂型から出された吐瀉物が小猫の胸元にかかる
更に小猫は蟷螂型に容赦無き蹴りを入れる
「向こうは心配無いようだな……じゃあ、そろそろ殺すか！」

「好きにはさせんぞ！」
８本の腕が巨大な１つの刃となり、新に振り下ろされる
新は刀身に魔力を流し、巨大な刃を一撃で両断
完全再生される前に突っ走り、蛸型を一刀両断した
斬れ目から噴き出る血しぶきが新の顔に付着する
「ケケケケケッ！コロス！コロス！」
カメレオン型の姿が徐々に消えていき、肉眼では視認出来なくなった
「透明化しやがったか。だったら、こいつでいぶり出してやる！」
新は先程両断した闇人の死骸（しがい）を持ち、そこから血の塊を辺り一面にばら蒔く
ベチョッ……
何も無い筈の空間に血が付着
姿は見えていないが、気配と血で分かる
「そこか！」
「ギャァァァアアアッ！」
カメレオン型は尻尾を斬られ、悲鳴をあげる
新は足を蹴って転がし、顔に剣を突き立てて絶命させる
「よしっ、こっちは終わった！小猫は――――おわぁっ!?」

新が小猫の方向を向くと、傷付いた小猫が飛んできた
「……すみません。新先輩」
「いって～……まぁ気にすんな。乳首見れてるからゴブゥッ！は、腹がっ……！」
「……見ないでください！ドスケベ！」
小猫は新の腹にパンチを入れ、露出している小振りな乳を隠す
新がふと前を見ると、蟷螂型は地面に突っ伏したまま動かなくなっている
そう考えると……小猫をボロボロにしたのは、残った羊型と言う事になる
ショットガンの銃口を向けている闇人に向かって魔力弾を放つ
「僕のスピードにはどんな攻撃も効かないよ」
そう言った闇人の姿が風を切る様な音と共に消えた
「――――っ!?何処行きやがった！」
意外にも羊型は超高速移動の使い手だった
傷付いた小猫を庇いながら、素早い敵と戦うのは至難の技
新は闇皇に変異する
「どうする？あの羊の動きを止めねぇと攻撃しようがねぇ……こうなったら」
新は小猫に視線を移す
「小猫、頼みがある。この状況はどうしてもお前の協力が必要なんだ」

「……私の協力？どんな協力ですか？」
「あ～、何と言うか……奴の動きを止める為の協力だ。その間、何があってもジッとしてくれ」
「……意味がよく分かりませんが、私にしか出来ない事ですか？」
新は真剣な表情で頷き、小猫もそれに応える様に頷いた
新は意識を集中させて闇人の気を探る
右……左……斜め後ろ……
正面……から気配が来た瞬間、新は――――
「そこだ！必殺『小猫ブロック！』」
「きゃあっ!?」
新は小猫の両腕を掴んで自分の前に移動させた
ここで小猫は自分の格好に気が付く
そう……制服が破れて小さなおっぱいが丸見え
『小猫ブロック』とは恐らく……乳房が露出した小猫の姿を見せつけ、相手の動きを止める技の様だ
「いいっ!?おっぱい!?」
闇人が小猫の乳房に気を取られ急ブレーキをかける

その一瞬の隙を逃さず、魔力を込めた剣で羊型闇人を斜めに斬り裂いた
しかし、新は勝った気がしなかった……
何故なら……盾にされた上、闇人に乳房を見られた小猫が怒気を発しながら半眼で睨んでいたからである
「……」
「い、いや……あの、小猫様？俺最初に確認を取りましたよね……？確認を取って小猫様が承諾したから羊を倒せたのデスヨ？お、俺はぶつかった時にしか見てませんでしたけど拳をしまってください！スンマセンした！マジスンマセンした！お願えします！何でも言う事聞きますから！どうか、どうかお命だけはお助けくだせぇ小猫様！」
羊の超高速移動にも劣らないスピードで謝罪と土下座をする新
もしこれがオリンピックの種目ならば、確実に金メダルを取れていただろう
「……新先輩。ジッとしててください」
「は……はい……」
殺されると腹を括った新の耳にビリビリと何かを破る音が聞こえた
「……っ？っ！ギャァァァァァァッ！俺のマントがァァァァァァァァッ!?」
なんと小猫は『闇皇の鎧』のマントを破り、それを自身の体に巻きつけた
「何ばしよっとですか小猫様ァ!?」

「……緊急胴衣」
「俺のマントは救命胴衣じゃごぜぇませんよぉ……？」
あまりのショックに新はキャラが崩壊してしまった……
「おっと、悲しんでる場合じゃねぇ。小猫！一誠達を援護するぞ！」
「……了解」
新は一誠のブーステッド・ギアのパワーが良い具合に溜まったであろう頃合いを見計らって、ある作戦を決行する
「小猫！一誠ロケット、発射準備開始！」
「……はい」
小猫は一誠に近付き、彼を豪快に持ち上げる
「小猫！一誠ロケット発射ァァァァァァァァァッ！」
「……イッセー先輩。祐斗先輩を頼みます」
ブゥゥゥゥン！
「うおおおおおおっ！小猫ちゃぁぁぁぁん！」
一誠は悲鳴をあげながら、祐斗がいる方向へ一直線に飛んでいく
「はっはっはっはっは！ナイス発射だ小猫！」
新大爆笑

そして『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!!』と言う音声が発せられる
ブーステッド・ギアの能力『赤龍帝からの贈り物』が祐斗に魔力を与えた
「……もらった以上は使うしかない！『魔剣創造』ッ！」
祐斗の創る魔剣が路面、電柱、壁など、あらゆる場所から出現する
祐斗は神速で縦横無尽に動き回り、魔剣を次々とフリード目掛けて飛ばす
「うっは！これは面白サーカス芸だね！だ・け・ど、俺様のエクスカリバーは『天閃の聖剣』！速度だけなら負けないんだよッ！」
フリードの聖剣の切っ先がブレ出し、神速で飛んでくる及び周囲の魔剣を全て破壊していく
最後は祐斗が両手に持っていた魔剣を粉々にして、聖剣を振り下ろそうとした
「やらせるかよ！」
匙が自身の手の甲に装備しているトカゲの顔らしき物の口から舌が伸び、フリードの足に絡み付いた舌を引っ張る
フリードの体が引っ張られて体勢を崩す
更にトカゲの舌が淡い光を放ち、それが匙の方へ流れていく
「……これは！クッソ！俺っちの力を吸収するのかよ！」
「へっ！どうだ！これが俺の神器！『黒い龍脈』だ！こいつに繋がれた以上、お

前さんの力は神器（セイクリッド・ギア）に吸収され続ける！そう、ぶっ倒れるまでな！」
なんと匙は神器（セイクリッド・ギア）の所有者だった
嬉しい誤算を物にするチャンスである
「祐斗！今がチャンスだ！とりあえずフリードをブッ潰せ！エクスカリバーも危険だが、今はそいつの方が危険だからな！」
「……不本意だけど、ここで君を始末するのには同意する。奪われたエクスカリバーはあと2本ある。そちらの使い手に期待させてもらうよ」
「大した度胸だ。こういうのを身の程知らずと言うんだろうな」
突然第三者の声が届く
声がした方向を見ると、フードを被った怪しい輩が黒い剣を肩に乗せて新達を見ていた
「……っ!?何だこの異様な気迫は……!?静かなのに、一気に爆発を起こしそうな感じだ……」
新は今までにない危険な迫力を感じ取った
ズドドドドドドドッ！
フードの輩から重い銃声の様な音が鳴った
放たれた全弾が新に命中する

「ぐぁああああっ！」
「新！」「新先輩！」
新は銃撃らしき攻撃で吹っ飛ばされた
特に右腕の負傷度が大きく、傷口から血が滴る
『魔剣創造（ソードバース）』。使い手の技量次第で無類の力を発揮するレアな神器（セイクリッド・ギア）か……だからこそ、自分の力量を把握出来ないと大局を見誤る。そうだったよな？バルパー」
フードの呼び掛けに応じ、初老の神父が出てきた
それは聖剣計画の当事者であり、祐斗の仇敵……
「……バルパー・ガリレイッ！」
「いかにも」
バルパーは堂々と祐斗の言葉に肯定する
そこへフードの人物がフリードにスタスタと近づく
「何やってるんだフリード。こんな奴ら相手に手間取るとは」
「旦那！この訳（わけ）の分からねぇトカゲくんのベロが邪魔で逃げられねぇんスよ！」
「ふんっ、聖剣の使い方がまだまだだな。聖剣とは――――こう使うんだ」
ゴオオオオオッ……！
ブシュッ！

フードの携える黒い剣から炎と輝きが放たれ、匙の神（セイクリッド・ギア）器を簡単に切断した
「逃げさせてもらうぜ！次に会う時こそ、最高のバトルだ！バルパーのじいさん！撤退だ！コカビエルの旦那に報告しに行くぜ！」
「致し方あるまい」
捨て台詞を吐くフリードだが、「逃がさん！」と言う声と共に新達の前にゼノヴィアとイリナが駆けつけていた
「やっほ。お手伝いに来たよ」
「イリナ！」
「ここに来て助っ人の登場か。数だけならこっちが有利だが――――あのフードが気になる……」
新はフードの輩をマークしている
尋常ならざる気迫と炎を発する黒い剣
ある最悪の考えが頭の中を過った
「フリード・セルゼン。バルパー・ガリレイ。反逆の徒め。神の名のもと、断罪してくれる！」
「ハッ！俺の前で憎ったらしい神の名を出すんじゃねぇや！このビッチが！あばよ、教会と悪魔の連合どもが！」

フリードが光の球を地面に投げると、閃光が辺りを包み込む
光が止むと、そこにはフードの輩しかいなかった
「追うぞ、イリナ」
「うん！」
「僕も追わせてもらおう！逃がすか、バルパー・ガリレイ！」
ゼノヴィアとイリナのあとを追う祐斗
フードの輩は駆け出していくゼノヴィアとイリナに首を向けた
「……何も変わってないな。愚か過ぎる程、未だに神を信仰していやがる」
「てめぇ！いったい何者なんだ！フリードの仲間か！」
一誠が声を荒くしてフードの輩に問い詰めた
フードの人物は乾いた笑い声を出しながら自身の頭部を覆っていたフードを外す
太陽の様な色をした髪と目
左頬に傷のある男の顔が、フードから現れた
その顔には見覚えがあった……
「おい……お前、名前何て言うんだ？」
新が恐る恐る男に名を尋ねる
出来れば違って欲しかったのだが――――その思いは見事に砕打ちかれた

「俺の名は――――神代剣護（かみしろけんご）」

ゼノヴィアとイリナが探している写真の男の名前と一致してしまった……

邪悪な聖剣

「新……今そいつ、神代剣護って言わなかったか……？」
「俺も出来れば聞きたくなかったよ。だが、間違いねぇ。そいつはゼノヴィアとイリナが探してた――――行方不明のエクソシストだ」
新の肯定の言葉に一誠達は度肝を抜かれた
神に仕える信徒が……聖職者がよりにもよってフリード側――――つまり、堕天使側にいるとは思わなかった
「おい、どうなってんだ!?何でゼノヴィアとイリナの上司がフリードやバルパーと手を組んでるんだよ！」
一誠の質問に神代剣護は剣を逆手に持って地に突き立てる
「お前ら悪魔ごときに分かるまい」
「なんだと！」
「正確には教える必要が無いだけだ。何せ、今からお前らは――――ただの灰に変わるんだからな」
神代剣護の持つ黒い剣が再び炎を発する

新はちょっと待ったと声をかける
「何だ。この期に及んで命乞いか？」
「そんなんじゃねぇ。いくつかの質問に答えて貰いたいだけだ。謎がハッキリしないまま死ぬのは嫌なんでね」
「……冥土の土産に、と言う事か。良いだろう」
「まず1つめ……その剣は八本ある内のエクスカリバー、『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』か？」
新の質問に一誠達は驚愕する
確かに神代剣護もエクスカリバーの使い手だが、所持している剣はエクスカリバーとは思えない程の黒色をしている
神代剣護は新の質問にこう答えた
「半分正解だ」
「半分って、どういう事なんだ！そいつはエクスカリバーなんじゃないのか!?」
「正確には”元”聖剣だ。確かにこいつは『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』だった……」
”だった”……？過去形って事は、今は違うのか？」
訝しげに問う新に神代剣護は剣の柄に手を添える
「その通り。改造されて全く新しい剣として現存しているんだよ」
”改造”と言う単語に一誠は理解出来なかった

悪魔は聖剣に触れる事すら出来ないし、教会側も伝説の武器を作り替えるなんて事はしない筈

そう考えると、やはり堕天使側の誰かが改造した事になるかもしれない……

新は質問を続ける

「じゃあ2つめの質問だ。そのエクスカリバーを改造したのは堕天使側の誰かか?」

「それは不正解だ」

堕天使側でもない……

新達は堕天使側の誰かが改造したんだと推測していたが間違っていた

……となると、ここに来てまた別の考えが浮かび上がってくる

闇人(やみびと)……もしくは、未だに知らない何らかの組織が改造したんじゃないのかと……

新はその正体を捻り出す質問をぶつける事にした

「そのエクスカリバーを改造した奴は、どんな奴だった?」

「それなら嫌と言う程覚えがある。奇妙な笑い声をするガキで、いつも菓子を食っていたな」

「奇妙な笑い声と菓子でガキ……あいつか、神風!」

「神風って……前に新が話した闇人の!?」

「あぁ。ライザーをボコボコにしたイカレ野郎だ」

神風とは闇人の重鎮組織『チェス』のメンバー且つ『ビショップ』の称号を持つ雷使いの少年

ロクでもない雰囲気を出していた闇人が、今回の事件にも関与していた

「当初は胡散臭いガキだったが、認めざるを得なかった。悪魔の苦手武器、聖なる力の塊とも言える聖剣に邪悪な力をプラスして――――――デスカリバーと言う未知の武器を作り上げたからな。流石に驚いた」

「デ、デスカリバー？」

「さっきの質問に対して〝半分正解〟と言ったよな？こいつはエクスカリバーからデスカリバーに改造され進化したんだよ。名前も『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』ではなく、『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』となったのだ」

聖剣であって聖剣ではない

不可思議な矛盾に一誠は頭を悩ませた

「え～っと……つまり、あの黒い剣は細かく言うとエクスカリバーとは違うのか？」

「あぁ。下手すりゃ本家のエクスカリバーよりも凶悪な代物かもしれねぇ」

悪魔にとって只でさえ危険なエクスカリバーが更に危険な武器に変わった……

その事実に新、一誠、小猫、サジは一筋の汗を流す

「お喋りは終わったか？ならば潔く（いさぎよ）灰になれ」

剣護は邪聖剣(デスカリバー)から炎を発し、前方に炎の円を描く
描かれた円の中心に炎の魔力が集結する
「いくつかの疑問は解けた。後は４人がかりで奴をブッ倒すだけだ！」
「倒す？俺をか？面白い冗談だな。『燃え盛る光砲(フレイミング・レーザー)』」
ズビィィィィィィッ！
剣護が描いた円から炎のレーザーが発射される
新達は一斉に横っ飛びで回避
炎のレーザーは地面に焦げ跡を刻んだ
「アッチィィィッ！かすっただけで焼けんのかよ！」
新だけは距離が近かったせいか、右腕に少しばかりくらってしまった
「サジ！奴の動きを封じろ！一番厄介なのはあの剣だ！」
「任せとけ！伸びろ！」
匙の神器『黒い龍脈(アブソーション・ライン)』が縦横無尽に伸び回り、翻弄させながら剣護に巻き付こうとする
「子供騙しが。『炎の球体(ファイヤー・ラッピング)』」
剣護がデスカリバーを眼前に構えると、炎が球状になって彼自身を包み込む
『黒い龍脈(アブソーション・ライン)』の舌が炎によって阻まれた

「ダメだ！これじゃあ動きを止める事が出来ない！」
「くそっ！小猫、一誠ロケット2号の発射準備に取り掛かれ！」
「……了解です」
「了解です、じゃないよ小猫ちゃん！新！俺を便利アイテムみたいに使うなぁ！」
「わぁーったよ。小猫、プランBだ。赤龍帝爆弾の投擲（とうてき）に切り替える」
「それ名前を変えただけで俺が飛ばされる事に変わりないじゃないか！」
　漫才が繰り広げられてる間に、炎の球体が解除される
「コントをしている暇があるのか？『炎の兵隊（ファイア・トルーパー）』」
邪聖剣（デスカリバー）の炎が10体の兵士を作り上げる
「炎の兵隊か、何かヤバそうだな」
「さぁどうする？こいつらの実体は炎その物だ。物理的な攻撃は殆ど効かない。すぐに形を取り戻す」
「「何だって!?」」
　一誠と匙の声がハモる
　新は頭を回転させ、炎の兵隊を倒す方法を思い付く
「小猫！俺が地面を切り取るから、しっかり持ち上げろよ！」
「……了解です」

新は剣で地面を四角形に切り込んでいく
切り終わると、小猫が切り跡の隙間に指を入れて持ち上げる
「うおぉぉぉっ!?デケェェェッ！」
「……潰れて」
小猫は持ち上げた巨大な四角形の地面で、ハエを潰すかの様に炎の兵隊全てを叩く
再び地面を持ち上げると、焦げ跡しか残っていなかった
「思った通りだ。流石に酸素が無ければ炎は形を保てない様だな」
「面白い攻撃の仕方だ。ならば、こいつはどうだ？『動き回る炎蛇（バーニング・ヴァイパー）』」
剣先から炎の大蛇が生み出され、新達に襲い掛かる
「デケェな……！一誠！魔力を撃つから、俺にブーステッド・ギアの力を譲渡しろ！」
「まだ2回しかパワーが溜まってねぇぞ！イケるのか!?」
「やらなきゃ殺られるだけだ！来い！」
「よっしゃあ！ブーステッド・ギア・ギフトォッ！」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』
赤龍帝の力が新に譲渡され、掌（てのひら）の魔力が増大していく
「オオオオオオオッ！」
新は掌（てのひら）から魔力が一直線に解き放たれ、炎の蛇を包み込んだ

炎の蛇は消滅したが……剣護がその場からいなくなっていた
「きゃあっ！」「うわぁっ！」
「っ!?小猫！」「匙っ！」
剣護は新と一誠が炎の蛇を相手にしている隙に、小猫に膝蹴りを、サジに左拳を叩き込んでいた
「さっきのは囮だ。『炎熱の銃撃（バーニング・ショット）』」
剣護が左拳――――――正確には、銃口を向ける
「――――っ!?義手型の銃だと!?」
左義手に『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』の力を流し込み、銃口から炎の弾丸が放たれる
新はまだ完治していない右腕に、一誠は腹に3発ずつくらってしまった
「ぐっ……！アッチィィィッ……！」
「ゴホッ！ゴホッ！チクショウ……！」
一誠は地面に血を吐き、新は剣を左手に持ち替えて構える
右腕はダラリと力無く垂れ下がっていた……
「そんな腕でまだ俺に立ち向かう気か？」
「まだまだ死ぬ訳にはいかねぇんだよ！オォォォォオオオッ！」
新は目一杯魔力を刀身に注ぎ込む

流された魔力が巨大な刃を作り上げていく
「大した魔力だ。こっちもそれなりの技で迎え撃つか」
剣護の『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』から巨大な炎の魔神が生み出される
炎の魔神は、その場にいるだけで新達の皮膚に火傷を負わせた
「くそっ……！デケェし、なんて熱だ！」
「こいつをくらって生き残れた奴はいない。灰になって消えろ。『灼熱業火の炎魔神（ヴォルカニック・イフリート）』」
炎の魔神が大口を開けながら突っ込んでくる
だが、新は怯まずに剣で魔神を突き刺そうとする
「ウオオオオオオオオッ！」
魔力の刀身と炎の魔神が激突し合う
だが、体力的に考えて新の方が明らかに不利だった
右腕は完治していないため、まともに動かす事が出来ず、力を入れられない
左手1本で衝撃を支えるのはあまりにも無謀と言える
「うぐぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「バカな奴だ。腕1本でどうこう出来る技だと思うか？いずれ腕が痛みと熱に耐えきれなくなり、灰になるのがオチだ」
魔神の炎が新の腕を熱で痛めつける

だが、ここで殺られる訳にはいかない……
新は残った力を振り絞って、刀身に魔力を送った
「貫けェェェェェェェッ！」
ズシャァァァァァァァッ！
新の剣が炎の魔神を貫き、魔神は静かに消えていった
「……っ。まさかアレを破る奴が出てくるとは……」
「ぜぇ……ぜぇ……へへっ、魔力はだいぶ減っちまったがよぉ。これでテメェの魔力も少なくなったんじゃねぇのか？」
今まで剣護は技を乱射していた
そこから考えると、かなりの魔力を消費している筈だと踏み、新は懐から回復薬を取り出して少し飲む
そして、それを一誠に投げ渡した
「一誠。その回復薬を小猫と匙に飲ませろ。力が溜まってるなら、ブーステッド・ギア・ギフトで譲渡してからな」
「ああ、１回だけだから効果は薄いかもしれないが……ブーステッド・ギア・ギフト！」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』
新の回復薬がパワーアップを遂げ、小猫と匙の口に注がれる

小猫と匙の顔色が良くなり、大幅に回復した
「回復薬か。悪いが、こっちも所持している。お前達のよりずっと強力なヤツをな」
そう言うと、剣護は注射器を取り出した
中には紫色の怪しい液体が満タンに入っている
それを自分の首筋に射して液体を体内に注入
「こいつは使用者の体力と魔力を完全な状態にまで回復させる。時にはその者の魔力を大幅に上げる事もある――――こんな風にな」
ゴオオオオオオオオオオッ！
剣護の全身から今までよりも膨大な魔力が放出される
「おいおい……それチート過ぎるだろ……？さっきよりも魔力が溢れてやがる……」
「よく頑張ったと言うべきだな。その功績に免じて、今度こそ灰にしてやる」

剣護は再び『灼熱業火の炎魔神（ヴォルカニック・イフリート）』の下準備に掛かる
さっきよりも魔力を費やした魔神の炎が大きく燃え上がる
「新！もう一度ブーステッド・ギア・ギフトで――――」
「そうはいかない。これでトドメだ。『灼熱業火の炎魔神（ヴォルカニック・イフリート）』！」
巨大な炎の魔神が新に襲い掛かる

新は少ししか回復していないので、先程の刀身はもう作れない
逃げるしかないと思った――――その時……
ズドオオオオオオオンッ！
一筋の巨大な赤い閃光が炎の魔神を消し去った
突然の出来事に新達は驚く
だが、それ以上に驚いたのは……
「何だお前達は？」
「よくも私の下僕達を痛めつけてくれたわね」
「力の流れが不規則になっていると思ったら……まさかこんな事態になっているとは思いませんでした」
剣護の前に現れたのは、険しい表情をしたリアスとソーナ・シトリー会長
新は苦笑いを浮かべ、一誠と匙の顔が一気に青ざめた
「そうか。グレモリー家とシトリー家の娘か。なるほど、噂通りの魔力だな」
「私達の町で随分派手な事をしてくれるじゃない。それにあなた……ゼノヴィアとイリナが言っていたエクソシストね」
「それがどうした？」
「何故姿を消したと思ったら、堕天使側についているのかしら？」

「その上……その聖剣から邪悪な力も感じられます」
質問するリアスとソーナ・シトリーに、新が剣護に代わって説明をした
神代剣護の現状に闇人（やみびと）の関与、邪悪な聖剣と化したエクスカリバーの話を聞いたリアスとソーナは険しい顔付きになる
「まさか、また闇人が関わっていたなんて……」
「デスカリバー、ですか……神や悪魔をも恐れぬ行為ですね……」
事態を把握したリアスとソーナ・シトリーは再度、剣護の方を向く
「上級悪魔の次期当主が２人か。なかなか手応えのありそうな相手だが……今戦うのは得策ではないな」
剣護はひとまず戦意を静め、『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』を肩に乗せる
「どういうつもり？」
「俺は相手の力量を測れぬバカではない。上級悪魔の次期当主２人が相手じゃ、流石にキツいからな」
「サジやリアスの眷属を散々傷付けておいて、逃げ腰になるのですか？」
「今は得策ではないだけだ。すぐにまた会う事になるだろう」
火柱を立ち上げ、神代剣護は姿を消した
相手が逃げてしまったので、リアスとソーナ・シトリーは……

「さて……イッセー、新。これはどういう事？説明してもらうわよ」
尋問を始めた

「……エクスカリバー破壊って、あなた達ねぇ……」
額に手を当てて嘆息するリアス
現在、新と一誠、小猫、サジの４人は近くの公園の噴水前で正座させられている
「サジ。あなたはこんなにも勝手な事をしていたのですね？本当に困った子です」
「あうぅ……。す、すみません、会長……」
ソーナ・シトリーも冷たい表情でサジに詰め寄る
「祐斗はそのバルパーを追っていったのね？」
「はい。ゼノヴィアとイリナも一緒だと思います。……な、何かあったら連絡をよこしてくれるとは思うのですが……」
「一誠、それはねぇよ……今の祐斗は復讐の権化となってるんだ。今まで憎んできた敵をやっと見つけた奴が、悠長に電話なんかしねぇだろ……？」
新の説明に一誠の顔が沈む

「新、小猫」
「「……はい」」
「どうして、こんな事を？」
「……祐斗先輩がいなくなるのは嫌です……」
「俺も一誠に説得されてしまって……危険だって事は分かってたが……やっぱり仲間を失うのは嫌だった」
「……過ぎた事をあれこれ言うのもね。ただ、あなた達がやった事は大きく見れば悪魔の世界に影響を与えるかもしれなかったのよ？それは分かるわね？」
新、一誠、小猫は同時に頷いた
ただ危ないと思っただけで動いていたが、今回の事件はスケールがデカイ上に、一誠は浅はかに考え過ぎた
３人は深々と頭を下げる
因みに隣では、匙がソーナ・シトリー会長に尻叩きをくらっていた
「使い魔を祐斗探索に出させたから、発見次第、部員全員で迎えに行きましょう。それからの事はその時に決めるわ。いいわね？」
「「はい」」
「さて、新、イッセー。お尻を出しなさい」

「……へ？」「は……？」

「下僕の躾は主の仕事。あなた達もお尻叩き千回よ♪」

一誠の顔が真っ白になり、新は往生際悪く弁明を開始した

「リアス部長、俺は謂わば巻き込まれただけの被害者だ。無罪放免もしくは一誠への厳罰集中放火を求める」

「汚ねぇぞ新！自分の口から手伝うって言ったくせにぃ！ってか、耳塞いで聞いてないフリすんなぁっ！」

新はバックレる様に一誠へ責任を押し付けて逃避しようとしたが、それとは別の問題で回避不能の事態に追い込まれる事に……

「新」

「……っ？な、何すか？」

「どうして小猫の制服が破れてるのかしら？」

ギクゥッ！

新にとって一番聞かれたくない質問が飛んできた

冷や汗を流す新をよそに小猫は――――

「……新先輩に見られました」

「……新？」

「それは……弁解のしようもございませぬ……」
「お尻叩き二千回ね♪」
「何故に一誠の倍っ!?」
その日、一誠のお尻は死に……新も自宅への帰路をペンギン歩きで辿る羽目になった……

「くっそ……俺が痔を患っていたら、間違い無く尻が爆発してんだろうな……」
リアスから尻叩きの罰を受け、少しずつ歩みを進めている新
ズキズキ痛む尻を押さえながらピョコピョコ歩く姿は滑稽以外の表現が思い付かないぐらい酷かった……
自宅まであと何分掛かるだろうか……そんな事を考えていた矢先――――前方から異様な気配が漂ってくる
「マジかよ、尻が痛むこんな時に……！」
前方の暗闇から出てくる人影が、点滅を繰り返す街灯に照らされる
現れたのは――――先程戦ったばかりの男、神代剣護だった

その姿を視界に捉えた新は歯を食い縛り、攻撃体勢を取ろうとするが……神代剣護は
「待て」と掌を見せた
「そう殺気立つな、今は貴様と戦うつもりなど無い」
「へっ、どうだか。さっきは俺や一誠を灰にしてやるとか言ってやがったクセに」
「〝今は無い〟と言っただけだ。いずれ黒焦げにしてやる。こいつの様にな」
神代剣護が暗闇から何かを引っ張り出し、無造作に新の前に投げつける
ドサッと自分の前に落ちた物が何なのか視線を移すと――――傷だらけのイリナが倒れていた
体のあちこちに酷い火傷と切り傷を負っていて呼吸も弱々しい……
直ぐに危険な状態だと分かった
「……テメェがやったのか？」
「ああ、根城近くまで来たんでそれなりに相手してやった。ここで殺してしまったら味わえないだろ？俺が敵として眼前に立った時のこいつらの顔がよぉ？」
悪意に満ちた笑みを見せる剣護に新は怒りのオーラを噴出
しかし、今は瀕死のイリナの処置を最優先させなければならない……
新は神代剣護から目を逸らさずイリナを抱える
「嘗ての部下をこれだけ痛めつけて何とも思わねぇのかよ？イリナは！ゼノヴィアは！

今でもテメェを尊敬してんだぞ！」
「ふっ、尊敬だと？笑わせるな」
神代剣護は踵を返して立ち去ろうとする直前、最後にこう言い残す
「俺をぶちのめしたいなら深夜に貴様の学舎――――駒王学園に来い。そこでコカビエルとバルパーがある儀式を行う。そこに俺とフリードも同席する。逃げたいなら逃げても構わんが？」
「誰が逃げるかよ」
「その意気だ。楽しみにしているぞ」
神代剣護は暗闇の奥へと消えていった
憤りを隠せない新はひとまず傷だらけのイリナに応急処置だけでも施そうとする
「思った以上に傷の具合がヒデェ……。なら、こいつで少しでも……」
新は制服のポケットから先の戦闘で使用した回復薬の予備を取り出し、イリナに飲ませようとする
だが……意識が無いせいか薬を近付けても飲んでくれない
そこで新は回復薬の中身を自らの口に含み、イリナに口移しで飲ませた
回復液は口内から食道、彼女の胃に達する事が出来た
効果は直ぐに現れ、徐々にイリナの呼吸が落ち着きを取り戻す

「とりあえず応急処置は済んだ。後は腕の良い病院に連れてってやる。それと……お前とゼノヴィアの上司、殴らせてもらうぜ」

新は闇皇へと姿を変え、イリナを抱えて飛んでいった

いざ戦場へ

イリナを知り合いの病院に運び終わった新は自宅に戻り、少しばかりの仮眠を取り直ぐに起きた
普通ならとっくに寝静まる深夜、新はベッドから体を起こして準備を始める
「この異様な気配のお陰で起きれたぜ……コカビエルの野郎が来たか」
新の表情が一気に険しくなる
相手は堕天使の幹部、しかも歴戦を生き延びてきた強者
だが、それでも行かなきゃならない
「主と共に、主の町を守るのも『兵士（ポーン）』の務め。一誠達はもう向かってるだろうな」
家の中からでも感じる強い力ゆえに、一誠とリアスもコカビエルの存在に気付いている筈
新は寝室を出ようとした
「ううん……」
レイナーレのか細い声
カラワーナとミッテルトは熟睡しているようだが、レイナーレだけは時折体を捩らせ

ていた
「アラタ……行っちゃうの……？」
「えっ？起きてる？いや、寝言か……ヤケにリアルだな」
「絶対、生きて帰ってきて……お願い……」
レイナーレの目から流れる一筋の涙
こんな弱々しい声を聞いたのは初めてだった
それだけコカビエルの実力は恐ろしい物なのだろうと新は直感した
同じ堕天使だからコカビエルの恐ろしさを知っているのだろうと……
「安心しな。俺は死なねぇよ。帰ったら、また皆で酒を飲もうな」
新は安心させるため、レイナーレの頬に優しくキスをする
すると、さっきまで泣いていたレイナーレの表情が柔らかくなった
「よしっ、行くか。コカビエル退治に」
新は家を出て自前のバイクを走らせた
決戦の地となる駒王学園へ……

キキィッ！

「……っ！誰ですか？ここから先へは通しませんよ」
学舎である駒王学園
そこにはソーナ・シトリー会長と匙が結界を張っていた
新はバイクメットを外して顔を見せる
「よっ。ソーナ・シトリー会長」
「りゅ、竜崎くん!?」
「竜崎！お前バイク持ってたのか!?」
「俺は高校生でもバウンティハンターだ。バイクの所持も許可されてんの」
バイクを降りてスタンドを立て、メットを引っ掛ける
ソーナ・シトリー会長に現状を聞いてみた
「んで、ソーナ・シトリー会長。一誠達はこの結界の向こうに？」
「はい。堕天使コカビエルの気配に……複数の魔獣とぶつかり合ってる気配もします。恐らく――――ケルベロス」
「ケルベロスって、あの地獄の番犬か？」
ケルベロスとはＲＰＧ等でも有名な魔獣

地獄で死者を喰らう三つ首の犬である
「この中にコカビエルやフリード、祐斗にとって仇とも言えるバルパーがいるんだな……会長さん、俺をこの中に入れてくれ」
新は闇皇に変異する
ソーナ・シトリーは小さく頷き、結界に隙間を開ける
「気を付けてください。竜崎くん」
「会長さんにそう言われたら、意地でも生き残らねぇとな。さて……行きますかぁっ！」
新が隙間から結界内に侵入し、一誠達の所へ走っていく
学園は既に敵地と化しているので、『プロモーション』の発動条件は揃っている
急ぐため、新は一度『騎士（ナイト）』に昇格して行った

走り続けてすぐに新は2匹のケルベロスを発見
1匹はリアス達と交戦中で、もう1匹は一誠とアーシアを喰らおうとしていた
「ハイスピード飛び蹴りィィィィィィィッ！」
バゴォォォンッ！
新は『騎士（ナイト）』のスピードを活かした蹴りをケルベロスの腹に叩き込んだ
ケルベロスは血が混じった吐瀉物（としゃぶつ）を吐きながら、地面を転がる

スッキリした新は『プロモーション』を解除して『兵士（ポーン）』に戻る
「――――っ!?新！」「新さん！」
「よう！一誠、アーシア。皆も無事みたいだな」
「遅いわよ新！今まで何してたの！」
「グッスリ寝てました（笑）」
ドンッ！
リアスの放った小さい魔力弾が新にぶつけられた
「痛ぇ！鎧を着けてても痛ぇ！いくらなんでもあんまりだ！」
「私達が必死になってる時にふざけてるからよ」
「いや、ガチで寝てたんだけど」
ドンドンドンッ！
今度は3発ぶつけられた……
「リアス部長？これは酷すぎませんか……？」
「ショボクレてないで、早くケルベロスを倒しなさい！」
「へい……さ～て、ぶつけられた鬱憤を晴らさせてもらうぜワン公！」
ガァオァァァァッ！
新に蹴られたケルベロスが咆哮をあげて突っ込んできた

新は両腕に赤い魔力を集中させる
３つの首が新を噛み砕こうとするが、それより早く新は両の拳でケルベロスの歯を１本ずつ折っていく
「オラァッ！クソ犬コラァッ！テメェのせいでリアス部長から魔力くらっちまったんだぞ！歯ァ全部折ってやるから覚悟しとけやぁっ！」
「新……完全に八つ当たりじゃないか……」
「なんだか、ケルベロスの方が可哀想に見えてきました……」
一誠とアーシアはケルベロスに同情の目を向けた
新に八つ当たりされてるケルベロスは、折られたり引っこ抜かれたりで一気に歯を全部失った
キュウウウ……キュウウウ……
満身創痍のケルベロスは弱々しく鳴き始めた
しかし、新は追撃の手を――――否、足を緩めない
「こいつはツケだ。受け取れや」
右足を上げ、そのまま中央の首にカカトを落とす
肉の潰れる音が発され、中央の首は完全に死んだ
更に新は剣を手に持ち、魔力を込めて残り２つの首を刺した

あまりにも残虐な八つ当たりだったため、一誠とアーシアは目を背けるしかなかった……

「はぁ～。スッ……キリした」

「タメが長ぇ！」

突っ込む一誠に新は肩をグルグル回す

「加勢に来たのだが、先を越されてしまったみたいだな」

「ゼノヴィア、丁度良いところに来てくれたな。クソ犬の死体は邪魔になるから消してくれねぇか？」

「やれやれ。出番を奪われた上に片付けを押し付けられるとは」

ゼノヴィアはエクスカリバーで死体となったケルベロスの胴体を突く

聖剣の一撃は魔物などの存在に絶大なダメージを与えるので、たったひと突きでケルベロスは塵となって消えた

そして一誠も溜めた力をリアスと朱乃に譲渡する

「朱乃！」

「はい！天雷よ！鳴り響け！」

朱乃が天に指を翳（かざ）し、雷を支配する

ケルベロスは逃げようとしたが、現れた『騎士（ナイト）』祐斗の『魔剣創造（ソード・バース）』が四肢を貫き動

きを止める
身動き出来なくなったケルベロスに雷が注がれ、魔物は消滅していった
「くらいなさい！コカビエル！」
赤龍帝の力を譲渡されたリアスは、巨大な魔力の塊をコカビエルに向かって撃つ
コカビエルは片手を前に突き出して巨大な一撃を防ぎ、軌道をずらした
「なるほど。赤龍帝の力があれば、ここまでリアス・グレモリーの力が引き上がるか。その上、全ての魔族の敵とも言える『闇皇（やみおう）の鎧』も飼っている――――――面白い。これは酷く面白いぞ」
コカビエルが空中で笑う中、強い光が発された
見てみると、校庭の真ん中にある四４本のエクスカリバーが重なり、１本に戻っていった
「エクスカリバーが１本になった光で、下の術式も完成した。あと２０分もしない内にこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかない」
「なんだとっ!?」
新は絶句した
あと２０分で町が壊される
自宅だけでなく行き付けの酒場も、何もかも壊されてしまう……

新はギリリと歯を噛み締めた
「フリード！」
「はいな、ボス」
「陣のエクスカリバーを使え。最後の余興だ。４本の力を得たエクスカリバーで戦ってみろ」
「へいへい。まーったく、俺のボスは人使いが荒くてさぁ。でもでも！チョー素敵仕様になったエクスなカリバーちゃんを使えるなんて光栄の極み、みたいな？ウヘヘ！ちょっくら、悪魔でもチョッパーしますかね！」
暗闇から出てきたフリードがエクスカリバーを握った
聖剣を使える因子をバルパーから貰ったので、難なく使う事が出来るらしい
「ほらほら！剣護の旦那も、素敵に改造された聖剣ちゃんでクソ悪魔どもをチョンパしましょうぜ！」
「な……け、剣護……さん？今、あいつは誰を……」
暗闇からもう一人、『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』の使い手――――神代剣護が歩いてきた
ゼノヴィアはとても信じられなかった
自分の憧れていた上司が堕天使側にいる現状に……
「久しいな。ゼノヴィア」

「何故だ……何故だ剣護さん！何故、あなたがコカビエルやフリードと一緒にいるんですか！」

狼狽するゼノヴィアの問いに、剣護はハァッと溜め息を吐きながらゼノヴィアを見る

「その訳を聞きたいか？聞きたいなら、フリードのエクスカリバーを砕いてみろ。それが出来たら話してやる――――――出来たらな」

剣護は肩に邪聖剣を乗せたまま、地面に座る

「バルパー・ガリレイ。僕は『聖剣計画』の生き残りだ。いや、正確にはあなたに殺された身だ。悪魔に転生した事で生き永らえている」

「ほう、あの計画の生き残りか。これは数奇なものだ。こんな極東の国で会う事になろうとは。縁を感じるな」

ふふふと嫌な笑いをするバルパーは聖剣計画に至った経緯を打ち明け始めた

「――――私はな。聖剣が好きなのだよ。それこそ夢にまで見る程に。幼少の頃、エクスカリバーの伝記に心を躍らせたからなのだろうな。だからこそ、自分に聖剣使いの適性が無いと知った時の絶望と言ったらなかった。自分では使えないからこそ、使える者に憧れを抱いた。その想いは高まり、聖剣を使える者を人工的に創り出す研究に没頭する様になったのだよ。そして完成した。君達のお陰だ」

「なに？完成？僕達を失敗作だと断じて処分したじゃないか」

祐斗の言葉にバルパーは首を横に振った
「聖剣を使うのに必要な因子がある事に気付いた私は、その因子の数値で適性を調べた。被験者の少年少女、ほぼ全員に因子はあるものの、どれもこれもエクスカリバーを扱える数値に満たなかったのだ。そこで私はひとつの結論に至った。ならば『因子だけを抽出し、集める事は出来ないか？』――――――となな」
「なるほどな。聖剣使いを人工的に創る為には、犠牲が必要不可欠って事か」
新の出した答えにバルパーは“その通りだ”と言って、懐(ふところ)から光り輝く球体を取り出した
「――――同志達を殺して、聖剣適性の因子を抜いたのか？」
祐斗が殺気を込めてバルパーに問う
「そうだ。この球体はその時の物だぞ？３つほどフリードに使ったがね。これは最後のひとつだ」
「ヒャハハハハ！俺以外の奴らは途中で因子に体がついていけなくなって死んじまったけどな！うーん、そう考えると俺様はスペシャルだねぇ」
「……バルパー・ガリレイ。自分の研究、自分の欲望のために、どれだけの命を弄(もてあそ)んだんだ……」
「ふん。それだけ言うのならば、この因子の結晶を貴様にくれてやる。環境が整えば、後

で量産出来る段階まで研究はきている。まずはこの町をコカビエルと共に破壊しよう。後は世界の各地で保管されている伝説の聖剣をかき集めようか。そして聖剣使いを量産し、統合されたエクスカリバーを用いて、ミカエルとヴァチカンに戦争を仕掛けてくれる。私を断罪した愚かな天使どもと信徒どもに私の研究を見せ付けてやるのだよ」

バルパーは持っていた因子の結晶を放り投げた

投げられたソレは、祐斗の足元に行き着き拾われる

結晶を哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに撫でる祐斗の目から涙が流れた

すると、結晶が淡く光り始める

徐々に広がっていき、校庭を包み込んだ

地面から光が浮いてきて形を成していく

祐斗を囲うように、光が人の形に形成されていった

「何だこれは?どうなってやがんだ?」

「きっと、この戦場に漂う様々な力が因子の球体から魂を解き放ったのです」

把握出来てない新に朱乃が答える

今この場には魔剣、聖剣、邪聖剣、悪魔、堕天使に闇人の鎧と強力な力が集合している

そんな事が起きてもおかしくない

そして形を成した光、あれは――――聖剣計画の犠牲となった者達だと理解出来た
「皆！僕は……僕は！……ずっと……ずっと思っていたんだ。僕が、僕だけが生きていて良いのかって……。僕よりも夢を持った子がいた。僕よりも生きたかった子がいた。僕だけが平和な暮らしを過ごして良いのかって……」
霊魂の少年の1人が微笑みながら、祐斗に何かを伝えた
新や一誠は霊魂が何を喋っているか分からない
すると、朱乃が代わりに話してくれる
「……『自分達の事はもういい。キミだけでも生きてくれ』。彼らはそう言ったのです」
霊魂の言葉が伝わったのか、祐斗の目から涙が溢れてくる
魂の少年少女達が口をリズミカルに同調させる
「――――聖歌」
アーシアが呟く
そう、彼らは聖歌を歌っている
祐斗も涙を溢れさせながら聖歌を口ずさみ出した
少年少女達の魂が青白く輝き、祐斗を中心に眩しくなっていく
『僕らは1人ではダメだった』
『私達は聖剣を扱える因子が足りなかった。けど』

『皆が集まれば、きっと大丈夫』
先程まで聞こえなかった声が聞こえてきた
本来、聖歌を聴けば悪魔は苦しむのだが……新達は一切苦しみを感じない
寧ろ友を、同志を想う温かさを感じた
新もいつの間にか涙を流していた
『聖剣を受け入れるんだ』
『怖くなんてない』
『たとえ、神がいなくても』
『神が見ていなくても』
『僕達の心はいつだって』
『――――ひとつだ』
魂が天に上り、ひとつの大きな光となって祐斗を包み込む
『相棒』
「ん？誰だこの声？一誠か？」
一誠の籠手から流れる声は、宿りし赤龍帝ドライグ
新は知らなかったため、少しばかり驚いた
『あの「騎士（ナイト）」は至った。神器（セイクリッド・ギア）は所有者の想いを糧に変化と進化をしながら強くなっ

ていく。だが、それとは別の領域がある。所有者の想いが、願いが、この世界に漂う「流れ」に逆らう程の劇的な転じ方をした時、『神器（セイクリッド・ギア）は至る』

「まさか、それがアレ――――禁手（バランス・ブレイカー）……」

神々しい光が闇夜を裂いた

『魔剣創造』、禁手化

「バルパー・ガリレイ。あなたを滅ぼさない限り、第二、第三の僕達が生を無視される」
「ふん。研究に犠牲は付き物だと昔から言うではないか。ただそれだけの事だぞ？」
「木場ァァァァァッ！フリードの野郎とエクスカリバーをぶっ叩けェェェェェッ！」
一誠が祐斗に向かって激励を送る
「祐斗！お前はリアス・グレモリーの眷属で、俺達の『騎士（ナイト）』だ！仲間だ！そいつらの想いと魂を乗せたお前の剣で戦えェェェェェッ！」
「祐斗！やりなさい！自分で決着をつけるの！エクスカリバーを超えなさい！あなたはこのリアス・グレモリーの眷属なのだから！私の『騎士（ナイト）』はエクスカリバーごときに負けはしないわ！」
「祐斗くん！信じてますわよ！」
「……祐斗先輩！」
「ファイトです！」
新、リアス、朱乃、小猫、アーシアからも飛んでくる激励に、祐斗は大きく頷く
「ハハハ！何泣いてんだよ？幽霊ちゃん達と戦場のど真ん中で楽しく歌っちゃってさ。

ウザいったらありゃしない。もう最悪。俺的にあの歌が大嫌いなんスよ。聞くだけで玉のお肌がガサついちゃう！もう嫌、もう限界！てめぇを切り刻んで気分を落ち着かせてもらいますよ！この四本統合させた無敵の聖剣ちゃんで！剣護の旦那は邪魔しねぇでくださいませよ？今から悪魔どもをチョンパするんでね！」

「元から邪魔するつもりは無い」

祐斗が一歩出て、同志達の魂に手を添える

「僕は剣になる。部長、仲間達の剣となる！今こそ僕の想いに応えてくれ！『魔剣創造（ソード・バース）ッ！』」

祐斗の神器（セイクリッド・ギア）と魂が混ざり合い、剣を創っていく

魔の力と聖なる力の融合

神々しい輝きと禍々しいオーラを放ちながら、『騎士（ナイト）』の手元に１本の剣が完成された

「――――禁手（バランス・ブレイカー）、『双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）』。聖と魔を有する剣の力、その身で受け止めるといい」

祐斗は『騎士（ナイト）』特有のスピードで走り出し、創った聖魔剣で一撃を見舞う

その一撃をフリードは受け止めるが、エクスカリバーを覆うオーラが聖魔剣によってかき消される

「ゲッ！本家本元の聖剣を凌駕すんのか!?その駄剣が!?」

「それが真のエクスカリバーならば、勝てなかっただろうね。――――でも、そのエクスカリバーでは……僕と同志達の想いは絶てない！」
「チィー！伸びろォォォォォ！」
フリードは舌打ちをして後方に下がり、エクスカリバーを無軌道にうねらせる
これは4本のエクスカリバー……イリナから奪った『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』と、コカビエルが盗んだ『天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリィ）』、『夢幻の聖剣（エクスカリバー・ナイトメア）』、『透明の聖剣（エクスカリバー・トランスパレンシー）』を融合させた聖剣なので、それぞれの能力を使用する事が出来る
今フリードが使っているのは『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』の能力
更に先端から枝分かれし、神速で降り注ぐ
『天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリィ）』の能力もプラスしてきた
四方八方から迫ってくる突きを、祐斗は全て防ぐ
「なんでさ！なんで当たらねぇぇぇぇぇぇッ！無敵の聖剣様なんだろぉぉ!?昔から最強伝説を語り継がれてきたじゃないのかよぉぉぉぉ！」
フリードの姿に焦りが見え始めた
座って見物をしている剣護は、フリードの醜態に嘆息する
「使い手が殺気剥き出しのバカでは、最強なんて夢幻（ゆめまぼろし）だ」
「クソがァァァァァッ！黙って聞いてりゃ涼しげに見下してんじゃねぇ！なら！こいつ

も追加でいってみようかねぇぇっ！」
今度は聖剣の先端が消えた
『透明の聖剣（エクスカリバー・トランスパアレンシー）』の能力も付与してきたようだ
しかし、祐斗はそれでもフリードの攻撃を全ていなす
「醜悪だな。ゼノヴィア、俺と話がしたいんだろ？呆けてないで、さっさとフリードを潰したらどうだ」
「「「っ!?」」」
ほぼ全員が驚きの表情を見せた
神代剣護は敵の筈……何故、味方を倒せなどと言うのか？
「剣護の旦那！どういうつもりですかいッ!?アンタは俺らを裏切るっつうのかよッ！」
「勘違いするな。誰も仲間になるなんて一言も言ってない。ただ統合させた聖剣が、どの様な力を発揮するか見に来ただけだ」
歯軋りをするフリード
ゼノヴィアはフリードを倒す事を優先させ、左手に聖剣を持ち、右手を宙に広げた
「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」
空間が歪みだし、その中心にゼノヴィアが手を入れる

そして、次元の狭間から1本の剣を引き出した
「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。デュランダル！」
デュランダルとはエクスカリバーに並ぶほど有名な伝説の聖剣
斬れ味だけなら最強と言われている
「デュランダルだと!?」
「貴様！エクスカリバーの使い手ではなかったのか!?」
バルパーだけでなく、コカビエルも驚きを隠しきれなかった
「残念。私は元々聖剣デュランダルの使い手だ。エクスカリバーの使い手も兼任していたに過ぎない」
デュランダルとエクスカリバーの二刀流にバルパーは顔を強張らせ、剣護は不適な笑みを浮かべる
「バカな！私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達してはいないぞ!?」
「それはそうだろう。俺が元いたヴァチカンでも、人工的なデュランダル使いは創れていない。イリナや他の奴らと違って、ゼノヴィアと俺は数少ない天然の聖剣使い。つまり、最初から聖剣に選ばれた者だったんだよ。そしてデュランダルは想像を遥かに超える暴君だ。触れた物質を全て斬り刻む。使用者の言う事もロクに聞かないから、異空間へ閉じ込めておかないと危険極まりない聖剣だ」

「そんなのアリですかぁぁぁ!?ここに来てまさかのチョー展開!クソッタレのクソビッチが!そんな設定いらねぇんだよォォォォ!」

フリードが殺気をゼノヴィアに向け、枝分かれした透明の剣を放つ

ガギィィィィン!

しかし、ゼノヴィアの一撃で透明となっていたエクスカリバーが砕かれた

「やはり、所詮は折れた聖剣。デュランダルどころか、俺のデスカリバーの相手にもならないな」

「マジかよマジかよマジですかよ!伝説のエクスカリバーちゃんが木っ端微塵の四散霧散ッ!?これは酷い!かぁーっ!折れた物を再利用しようなんて思うのがいけなかったのでしょうか!?」

殺気の弱まったフリードに祐斗が一気に詰め寄る

祐斗の聖魔剣はエクスカリバーを砕き――――――

「見ていてくれたかい?僕らの力は、エクスカリバーを超えたよ」

砕いた勢いでフリードを斬り払った

祐斗は天を仰ぎ、聖魔剣を強く握り締める

「せ、聖魔剣だと……?あり得ない……。反発し合う2つの要素が混じり合うなんて事はある筈がないのだ……」

表情を強張らせるバルパー
祐斗は聖魔剣をバルパーへ向けて斬り込もうとする
「バルパー・ガリレイ。覚悟を決めてもらう」
「……そうか！分かったぞ！聖と魔、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！つまり、魔王だけではなく神も――――」
ザンッ！
何かに思考が達したバルパーの首がはねられた
切り口から噴き出る鮮血……
地に転がる首……グラウンドに倒れる死体……
流れ出る血が赤い水溜まりを作っていく……
「バルパー。悪いが、その説明は俺がやらせてもらう。その方が奴らは大きな絶望を味わうからな。特にゼノヴィアは……。あと聖剣の研究だが、俺達から見れば役に立たない。年寄りはあの世で隠居していろ」
バルパーを殺したのは神代剣護だった
デスカリバーに付着した血を払い、新達の方を見る
「剣護さん！あなたはいつから……そんな平気で人を殺すようになったんですか！あなたは誰よりも神を信仰していた！何故堕天使と手を組んだのですか!?」

ゼノヴィアが剣護に問う
剣護はデスカリバーを肩に乗せて話を始める
「昔の俺は今のお前と同じだったよ。聖剣の才能を見出だされて、ヴァチカンに仕えて、毎日毎日神を信じて人を救っていた。最初は心地良い物だった……だが、人々は俺達を便利な道具としか見ていなかった」
剣護の話に怒気が混ざり始める
「次第に人の目が変わってきた事に気付いた。”聖職者だから私達を助けてくれる”、”神に仕えてるから人を救って当然”、そんな視線が俺の本心を揺るがせた。こんな事で良いのかってな……それでも俺は神に祈った。いつかこのツラい視線が消えます様にと――――だが、そんな事は無理だった。神なんざ、いなかったからな」
「……どういう事？」
リアスが怪訝そうに聞くと、コカビエルが大笑いする中で剣護は話を続ける
「お前達が知らないのも無理はない。この真相は一部の者と、闇人の間でしか語られていなかったからな。教えてやろう。先の三つ巴戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだ」
剣護の言葉に、殆ど全員が信じられないと言う様子を見せた
「知らなくて当然だ。神が死んだなどと、誰に言える？人間は神がいなくては心の均衡

と定めた法も機能しない不完全な者の集まりだぞ？我ら堕天使、悪魔さえも下々にそれらを教える訳にはいかなかった。何処から神が死んだと漏れるか分かったものじゃないからな。三大勢力でもこの真相を知っているのはトップと一部の者達だけだ」

説明に参加したコカビエルに対し、剣護が待ったをかける様に話す

「数年前、このデスカリバーを作ったガキが教えてくれたよ。神はもういないと言われた当初は、勿論信じられなかったさ。だが、奴はその時――――――俺の目の前で『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』を『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』に作り替えた。本来出来る筈がない聖なる力と邪悪なる力の融合を――――奴は目の前で行い、完成させた」

デスカリバーを自分の前に掲げ、炎を発する

「そこで俺は悟った。〝奴らの言う通り、この世に神なんていない〟、〝神は俺達が生まれる前からいなかった〟と。つまり……俺達はいる筈もない幻にすがり付いて、祈りと命を捧げていた愚かな生物だったんだよ」

「……ウソだ。……ウソだ」

力が抜けてうなだれるゼノヴィア

今まで神に仕える事を使命として生きてきたから、神は存在しないと言われて生き甲斐を失うのも無理はなかった

「神がいない事実を知った時、俺の中で今まで耐えてきた物が崩れた。人の奇異な視線

を我慢してきたと言うのに、毎日毎日何の為に祈ってきた？何の為に人を救ってきた？と自分自身に質問を繰り返していく内に、奴はこう言った……”神がいないなら、自分が神に成り代われば良い”とな」

「神代剣護、まさか自分が神に代わる為に……教会を、ゼノヴィアやイリナを裏切って闇人側についたってのか？」

剣護は迷いなく、その言葉を肯定する

「俺達は人を救える力を持った救世主。神がいなくなっただけで機能しなくなり、崇められる事もなく死を迎えるなど真っ平だ！ならば、神がいないなら自分が神になれば良い！それを行わない奴らはただのバカだ！何故こんな簡単な事に気付かない!?幻となった存在に意味なく祈り、弱者を救うなど愚か過ぎる！だから俺は闇人側についた！闇人から貰ったデスカリバーの力と、聖剣を扱える俺の力で、新しい神となってこの世を変えてやる！神となるこの俺に、弱者どもがひれ伏す世界を！」

剣護の自分勝手とも言える演説が終わる

神がいないから自分が神に代わり、神＝自分が崇められる世界を作る

そんな事で彼はゼノヴィアやイリナ、教会全てを裏切ったのだ

剣護の話が終了した直後に、コカビエルも話し始める

「正直に言えば、もう大きな戦争など故意にでも起こさない限り再び起きない。それだ

け、どこの勢力も先の戦争で泣きを見た。お互い争い合う大元である神と魔王が死んだ以上、戦争継続は無意味だと判断しやがった。アザゼルの野郎も戦争で部下を大半亡くしちまったせいか、『二度めの戦争はない』と宣言する始末だ！耐え難い！耐え難いんだよ！一度振り上げた拳を収めるだと!?ふざけるなッ！あのまま継続すれば、俺達が勝てたかもしれないのだ！それを奴はッ！闇人の王を封印しておきながら！人間の神器（セイクリッド・ギア）所有者を招き入れねば生きていけぬ堕天使どもに何の価値がある!?」

コカビエルは憤怒の形相で強く持論を語る

事の真相は予想以上に衝撃を与えた――――特にアーシアは……

「……主がいないのですか？主は……死んでいる？では、私達に与えられる愛は……」

アーシアの疑問に剣護が答える

「神の愛？守護？そんな物は最初から存在しない。神は既にいないんだからな。聞いた話によれば、天使ミカエルが神の代わりをして天使と人間をまとめているとか。生温い」

剣護は卑下するように吐き捨てるが、今度は口元を吊り上げて笑う

「まぁ……神がいなくなった事だけには感謝しといてやろう。聖と魔のパワーバランスを司る神と魔王がいなくなったお陰で、お前達は聖魔剣とやらを作る事が出来た挙げ句、俺のエクスカリバーもデスカリバーに進化した」

聖魔剣が誕生したのも、邪聖剣に改造出来たのも偶然ではなかった
神がいないからイレギュラーな現象が起きた
何とも皮肉な話である
剣護の言葉を聞いたアーシアはショックで崩れ落ちた
「アーシア！アーシアしっかりしろ！」
「神代剣護ォ……テメェ、イカれてやがる……ッ！」
「普通の考えを持つ者に神が務まる訳無いだろ？丁度良い。見せてやろう――――邪聖剣の本当の力を」
剣護は邪聖剣の柄に付いている十字架を外す
金色に輝く十字架の中央には、菱形の宝玉が埋められている
剣護は十字架を顔に装着した
十字架から黒いオーラが放出され、剣護の全身を包み込んでいく
数秒後――――金色の十字架を備えた兜、胸部に輝く太陽のエンブレム、漆黒の鎧を纏った戦士が降臨した
「――――っ!?何だあれは!?」
「俺に宿ってる『闇皇の鎧』と同じ力……!?」
「違う。こいつはお前の『闇皇の鎧』をベースに開発された鎧。『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』の力を

鎧に具現化させた――――『黒十字の鎧』だ。神を見限った俺にピッタリの力だろ？」
見せびらかす様に腕を広げる剣護
デスカリバーの剣先を、未だ項垂れているゼノヴィアに向けた
「そんなにショックかゼノヴィア？神がいない事に。自分のしてきた行動が無駄だった事に絶望したか？安心しろ。今すぐ死んだ神に会わせてやる――――――――
『炎隕石の落下』」
デスカリバーから炎に包まれた隕石が放たれる
ゼノヴィアはとても戦える状態ではない
新は隕石とゼノヴィアの間に割って入り、隕石を止める
「ぬがぁぁぁぁぁぁぁあっ！い、今までの技と威力がぁっ……！」
「当然だ。『黒十字の鎧』を装着しての技は、１０倍以上も威力が違う。真の力を発揮した『灼熱の邪聖剣』で灰になれ」
新を痛めつけていた隕石が消えた刹那――――
ザシュッ！
炎の邪聖剣が新の胸を貫いた……

闇皇、覚醒

ガフッ！
新の口から飛び出る血が剣護の腕にかかった
邪聖剣が引き抜かれ、貫かれた場所からも鮮血が噴出する
新は傷を押さえながらその場に膝をついた
「……ッ！神代剣護オオオオオオオオッ！」
激昂した一誠は籠手で殴り掛かるが、柄頭(つかがしら)で一撃を防がれる
「感情優先は身を滅ぼすぞ」
剣護は左の蹴りを一誠の腹に叩き込み、タックルで突き飛ばす
「ぐあぁっ！」
「仲間が1人やられたくらいで喚(わめ)くな。戦いで感情に呑まれた者は死ぬ。お前らバカ共の末路は皆そうだ」
「黙りなさい！私の下僕への侮辱は万死に値するわっ！」
「ふん。ならば俺を滅してみるか？グレモリーの娘」
剣護は指をクイクイと往復させ挑発する

リアスは手に特大の魔力を集中させていく
「消し飛べェェェェェェッ！」
リアスの手から最大級に溜めた滅びの力が撃ち放たれる
剣護はデスカリバーを左手に持ち替え、右拳に炎を宿らせた
しかも、ただの炎ではなく――――神々しい輝きを帯びた聖なる炎
元々はエクスカリバーから改造された剣ゆえに本来の能力も兼用出来る
漆黒の鎧を纏った拳が赤く変色し、蒸気と熱気が放出される
『炎爆熱の拳（ヒート・ナックル）』！」
ドゴォォォォォォンッ！
聖なる炎を帯びた右拳は、滅びの力を空の彼方へ打ち返した
「なかなか良い力だ。少し手が痺れたぞ」
「……っ!?拳で弾いた!?」
滅びの力が簡単に打ち返された
リアスが狼狽する中、朱乃が雷を落とす
剣護は邪聖剣の炎で雷を相殺した
「この程度か？バラキエルの力を宿す者」
「……私をあの者と一緒にするなッ！」

朱乃は雷を連発するが、全て剣護のデスカリバーに斬られてしまう
戦いを見物しているコカビエルは笑いが止まらなかった
「悪魔に堕ちるとはな！ハハハ！全く愉快な眷属を持っているな、リアス・グレモリーよ！赤龍帝、禁手（バランス・ブレイカー）に至った聖剣計画の成れの果て、バラキエルの娘、挙げ句に天敵とも言える魔族の鎧を宿した小僧！お前も兄に負けず劣らずのゲテモノ好きのようだ！」
「コカビエル！兄の――――――我らが魔王への暴言は許さないっ！」
「余所見をしている場合か？『双頭の炎龍（ツイン・プロミネンス）』！」
剣護が邪聖剣から2つの頭部を持つ炎の龍を解き放った
炎の龍は大口を開けて、回転しながら突き進んでくる
リアスは魔力弾、朱乃は雷を放って相殺しようとするが力負けしてしまう……
「キャァァァァァアッ！」
「うわぁぁぁぁあっ！」
炎の龍が起こした大爆発をくらってしまう一同
煙が晴れると、一誠達は地に倒れて呻き声をあげる
「どうした？数ではそっちが勝っていると言うのに、俺の中級技にも耐えられないのか？つまらんな」
剣護は興味をなくした様に踵（きびす）を返して、未だに傷を押さえて死にそうになっている新

とゼノヴィアの所へ足を運ぶ

「神……代、剣護……！てめぇ、ゴホッ！本気でゼノヴィアを殺す……気か!?こいつは、今までお前を尊敬してたんだぞ！ゲホッ！そんな女を！」

「それがどうした。最初からいない物に酔狂にすがり付き、人を救っていこうなんてバカげた行(おこな)いをしている奴がいるなんて反吐(へど)が出る。神がいなければ今後どうしたら良いのかも分からん奴なんざ――――死ねば良いんだよ」

剣護の冷酷な発言に新は遂にキレた

血を流しながらも、許せないと言う想いを糧に立ち上がっていく

「ふざけんじゃねぇぞ……！自分の部下に死ねとか言ってじゃねぇ！ゼノヴィア！お前、かつての上司にこんな事言われて悔しくねぇのか!?」

「……だが、私は……これからどうすれば……」

「神がいない事を聞いただけで腑抜けてんじゃねぇ！神がいなくても、人間や俺達は前に進めるんだよ！こいつの言葉に耳を貸すな！こいつは前に進む事から逃げただけ――――ガフッ！道が無いなら……自分で作れ！お前しか歩けない道を、作りやがれ！ゲボッ！ゴホゴホゴホッ！」

項垂れていたゼノヴィアは顔を上げる

彼女の目には、涙が浮かべられていた

「茶番だな。そろそろ灰になれ」
剣護は慈悲の欠片も見せないまま邪聖剣に聖なる炎を集結させる
新はゼノヴィアに言い聞かせる様に叫んだ
「自分の道を切り開け！それが悪魔だろうと何であろうと、生きてる奴全てが出来る事だアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
ドクンッ……！
ゴオオオオオオオオオオッ！
新の全身から今までに無い程、膨大な魔力の柱が発生する
「っ!?何だ！この異様なオーラを放つ魔力は!?」
剣護を始め、コカビエルや一誠達が驚く
その魔力は魔王級かもしれない程の質量だった
「……っ！力が身体中に溢れてきやがる……！新しい力が、頭の中に流れてきやがるっ！」
新は脳内に流れてきた”新しい力のひとつ”を読み取り、闇皇剣(やみおうけん)を天に翳(かざ)す
「神代剣護、お前言ったよな？神がいなくなった事に感謝してるって。神がいないから邪聖剣を手に入れたってよぉ。簡単に言えば、祐斗の聖魔剣もお前の邪聖剣も――――――神と魔王が不在の世界で生まれたバグ要素って事だ」

「それがいったい何だ？」
「俺もバグ要素になるぜぇ？恐らく、未来永劫語り継がれるだろう――――最凶最悪のバグの誕生だァッ!!」
柄の蝙蝠の目が赤い輝きを放ち、新は”力の名”を大きく叫んだ
「『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』ッ!!『騎士（ナイト）』ッ!!」

強いオーラを放つ闇皇剣が、西洋式の槍に形を変えていく
新が槍を掴むと黒いマントはジェット機のウイングの様な翼となり、背中の中央には幾つものブースターが備わっていく
両肩、両腕、両足からは刃物が隆起し、胸部には剣柄だった蝙蝠の顔がアーマーとなって装着される
機械と西洋騎士が混ざった様な風貌の闇皇が、魔力のオーラを振り払って誕生した
「何だと……!?傷も回復した上に、何なんだ……この身震いさせる程の魔力は!?」
「満を持して降臨したぜ。これが俺の新しい力！神と魔王が不在のバグった世界によって覚醒した『闇皇の鎧』の進化形態、『闇皇の神速槍騎士（アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト）』だ！今から俺の速度は、光をも凌駕するぜェェェェェェェッ！」

「新が……進化した!?」
「禁（バランス・ブレイカー）　手ではない力……!?あの子はどこまでデタラメになっていくの!?」
一誠、リアス達は勿論……コカビエルもこの異常事態に驚かざるを得なかった
「何だあの小僧は!これ程の力を隠していたと言うのかっ!?」
「違うな堕天使。新しく覚醒したんだよ。禁（バランス・ブレイカー）　手の様で禁（バランス・ブレイカー）　手では無い!さあて、覚醒した力を存分に発揮してやるかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」
背中のブースターから魔力が噴出され、新は通常の『騎士（ナイト）』を凌駕するスピードで剣護に迫り、左拳を腹に入れた
「がはっ……!い、いつの間にっ……!?」
「さっきのお返しだ!ガンガン行くぜェェェェェェェェェッ!」
新はその場から姿を消し、今度は背中に蹴りを入れる
剣護を吹っ飛ばすと、すかさず転倒予定位置に先回りして上空に蹴り上げる
「な、なんて速さだ……!さっきの『騎士（ナイト）』とは、比べ物にならない程の速度で攻撃している……!」
剣護の体が上昇し、数百メートル上空で制止した
「くっ!ナメるな!『燃え盛る光砲（フレイミング・レーザー）』ッ!」
炎のサークルから巨大なレーザーが発射される

新はレーザーが来る前に超高速――――――いや、超神速移動した
剣護の背後に出現し、槍を構える
「武器も新しくチェンジしたぜ。こいつは闇皇剣(やみおうけん)ならぬ、闇皇槍(やみおうそう)だ！」
「なっ!?」
ズガガガガガガガガガッ！
新は高速かつ連続の突きを打ち放つ
剣護はデスカリバーで防御するが、全部の突きを受けきる事は出来なかった
「ぐおぉぉぉおおおおおっ！」
突かれた勢いで地面に落下した剣護は、大きな穴を作り上げた
土煙の中、剣護は邪聖剣を杖代わりにして立ち上がる
「……チッ。今の俺では、奴に勝てないか……恐ろしい男だ。良いだろう……この場は退いておく。命拾いをしたなゼノヴィア」
剣護は炎の柱を発生させて姿を消した
勝てない事を理解して逃げるのは正解であろう
「ハハハ！こいつはスゲェやッ！次はてめぇの番だコカビエル！この『闇皇の神速槍騎士(アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト)』で、その翼全部に風穴開けてやらぁっ！」
「……フフッ。フハハハハハハハハ！面白い！面白いぞ闇皇の小僧！瀕死の状態から

復活した上に、新たな力を得るとはな！流石の俺も拳が疼いてくるわ！」
　コカビエルは狂喜にまみれて地上に降り立つ
「俺はこれを機に戦争を始めるぞ！お前達の首を土産に！俺だけでも、あの時の続きをしてやる！我ら堕天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せ付けてやる！」
「言ってろクソ堕天使ィッ！今の俺は、てめぇに負ける気が一切しねぇ！リアス・グレモリーの『兵士（ポーン）』竜崎新の力と、仲間を侮辱した罪――――――思い知りやがれエェェェェェェッ！」

闇皇VSコカビエル

『闇皇の神速槍騎士（アーク・カイザー・ジェットスピアーナイト）』に進化を遂げた新と、歴戦を生き抜いた堕天使の幹部コカビエルが対峙している現状

コカビエルは心底嬉しそうに笑っており、新も覚醒した力でコカビエルを倒せる事に楽しげな雰囲気を出していた

神速の槍と堕天使の光の剣が向き合う

「我ら堕天使を絶滅寸前にまでに追い込んだ闇皇（やみおう）の力とやら、精々俺を楽しませてくれよ！」

「楽しむのは俺の方だ。今からてめぇをバラバラにしてやるぜェッ！」

新はブースターから噴出される魔力で超神速移動を開始

あり得ない速度により姿が消えるが、時折目に見える様に現れてフェイントをかける

「速い――――ッ！」

「オラァッ！」

ズシュッ！

新の槍がコカビエルの黒翼1枚を貫く

対するコカビエルは光の剣を新の脳天に振り下ろす
新は再びブースターを噴射させて剣撃を回避した
「ぐぅぅぅぅぅっ！俺の光に勝てると思うかアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
コカビエルは剣を消して、頭上に巨大な光の槍を作る
学園を消せる程の大きさを持った光槍（こうそう）が、新に向かって放たれた
「さっき言っただろ？今から俺の速度は、光をも凌駕するってなァッ！」
新は剣と同様に、槍に赤い魔力を流し込み構える
光の槍が新の眼前まで迫った刹那――――
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
魔力を帯びた槍が幾つもの残像を生みながら、光の槍を先端から壊していく
「なっ……!?俺の光を!?」
「オラオラオラァッ！何度も言ってんだろ！俺の速度は光をも凌駕する！」
最後の一撃で光の槍を壊すと、再度背中のブースターを噴射してコカビエルに詰め寄る
新はコカビエルの眼前で止まり、左拳を向ける
「……ナメた真似をしてくれるじゃないか！」
コカビエルは拳に光の力を宿らせ殴ろうとする

シュッ！ドガッ！
「がっ……!?」
「遅い遅い」
新の左拳はコカビエルよりも速く頬を打ち抜いていた
「ぐっ……！まだまゴブァッ！貴様ブゲッ！調子にグブッ！」
ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！
『闇皇の神速槍騎士（アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト）』で攻撃速度を上げた新の左拳が、コカビエルの顔や腹に次々と拳の痕を入れていく
コカビエルは攻撃や防御はおろか、反応すら出来ずにボコボコにされていく
「……がっ、ガプァッ……」
「ラストワァンッ！」
ドゴォッ！
新は爛々とした雰囲気でコカビエルの顔面を打ち抜く
殴り飛ばされたコカビエルは砂煙を上げながら転がっていった
「「……」」
一誠達は堕天使の幹部が一方的に圧倒されている状況に唖然としていた
……と言うよりは、新の鬼畜的な攻撃に対しての反応かもしれない……

「部長……あいつ敵だけど、何か同情してしまいます……」
「奇遇ねイッセー。私も今のコカビエルに少し同情しているわ……」
「新さんは鬼畜ですわね」
「流石にアレは酷いよ……」
「……鬼畜外道先輩」
「あうぅ……」
新は全員から出された非難の声を聞き流す
コカビエルはヨロヨロと立ち上がってきた
「貴様は確実に殺してやる……！ここまで俺をコケにした代償は、高くつくぞオオオオオオッ！」
コカビエルは再び光の槍を作って新に投げ放つ
新は闇皇槍（やみおうそう）を構え、左手で槍先をゆっくり擦っていく
先程は赤い魔力を流していたが、今度は黒い魔力を帯びさせる
漆黒の槍と光の槍がぶつかり合った
ギュオオオオオオオオオオッ……！
吸収と反発を司る魔力を帯びた闇皇槍が、光の槍を先端から力を吸収していく
「ば、バカな……！こ、こんな事が……」

「残念だったなコカビエル。どうやらてめぇの願望は叶わず終いになるぜ！」
光を吸収し終えた槍が強い魔力の輝きを見せる
新は黒い魔力の反発を利用して、螺旋状の魔力を放った
堕天使幹部の力を吸収しただけあって、螺旋状のエネルギーは地面を抉りながら突き進んでいく
狼狽するコカビエルに螺旋状の魔力が――――――
カッ！
――――当たらなかった
突然白い閃光が闇夜を切り裂きながら舞い降り、新の螺旋状の魔力を打ち消した
「っ!?何だありゃ……？白い鎧……？」
現れたのは白き全身鎧を纏った者
背中から生える８枚の光の翼が神々しい輝きを発している
そして色と形は違うものの、一誠の『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）』に似ていた
「……『白い龍（バニシング・ドラゴン）』」
『白い龍（ロンギヌス）』？ゼノヴィアが言ってた奴か？なんつー輝きだよ……」
『神滅具』の１つ、『白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）』……。鎧と化していると言う事は、既にその姿はバランス・ブレイカー（ディバイン・ディバイディング・スケイルメイル）禁手状態である『白龍皇の鎧』か。――――――『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』同様、

忌々しい限りだ」

コカビエルが舌打ちをする

既に禁　手（バランス・ブレイカー）状態の『白い龍（バニシング・ドラゴン）』に新は警戒を強めた

「……赤に惹かれたか。『白い龍（バニシング・ドラゴン）』よ。邪魔立ては――――」

ザシュッ！

コカビエルの翼が宙を舞い、鮮血が飛び出た

やったのは『白い龍（バニシング・ドラゴン）』だった

「まるでカラスの羽だ。薄汚い色をしている。アザゼルの羽はもっと薄暗く、常闇（とこやみ）の様だったぞ？」

『白い龍（バニシング・ドラゴン）』が引きちぎったであろう黒い翼を持ちながら言う

「き、貴様！俺の羽をっ！」

「どうせ堕ちた印だ。地より下の世界へ堕ちた者に羽なんて必要ないだろう？まだ飛ぶつもりなのか？」

「『白い龍（バニシング・ドラゴン）』ッ！俺に逆らうのか！」

コカビエルが空に光の槍を無数に出現させる

『白い龍（バニシング・ドラゴン）』は特に動じる事もなかったが――――

「引っ込んでろキィィィィィィック！」

「グブァッ！」
「っ？」
新が神速移動してコカビエルを蹴り飛ばし、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』の前に立つ
「悪いけどよ、邪魔しないでくれるか？せっかくコカビエルを潰せそうだってのに」
「ははははっ。君が『闇皇（やみおう）の蝙蝠』だね？噂通り面白いな。俺と戦ってみるか？」
挑戦的な物言いに新は乗ろうとするが、槍を下げる
「いや、やめておく。あんたの力はヤバそうだからな。今の俺じゃ多分勝てねぇ」
「一目で我が力を察知するとは。君の考え通り、我が神器（セイクリッド・ギア）、『白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）』の能力の１つは――――触れた者の力を１０秒毎に半分にさせていく。相手の力は我が糧となる」
「赤龍帝（せきりゅうてい）は１０秒毎に倍増……白龍皇（はくりゅうこう）は逆に半減か……。末恐ろしいな、ドラゴンの神器（セイクリッド・ギア）は……」
「コカビエルを無理矢理にでも連れて帰るようアザゼルに言われてたんだが……君のお陰で手間が省けた」
白龍皇の視線についていくと、微動だにしないコカビエルの姿があった
おそらく、さっきの鬼畜攻撃の蓄積ダメージが予想以上に大きかったのだろう
白龍皇はコカビエルを肩に担ぐ

「フリードも回収しなければならないか。聞き出さないといけない事もある。始末はその後か」
　白龍皇は倒れているフリードを腕に抱え、光の翼を展開して空へ飛び立とうとした
『無視か、白いの』
　突如一誠の籠手が光りだし、声が聞こえる
　すると、白龍皇の鎧の宝玉も輝きだした
『起きていたか、赤いの』
『せっかく出会ったのにこの状況ではな』
『いいさ、いずれ戦う運命だ。こういう事もある』
『しかし、白いの。以前の様な敵意が伝わってこないが？』
『赤いの、そちらも敵意が段違いに低いじゃないか』
『お互い、戦い以外の興味対象があるという事か』
『そういう事だ。こちらは暫く独自に楽しませてもらうよ。たまには悪くないだろう？また会おう、ドライグ』
『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』
　白龍皇の名前が判明し、赤龍帝と白龍皇の会話が終了した
「アルビオン……それがお前の名前か」

「正確には、この鎧に宿るドラゴンの名前だ。闇皇の蝙蝠、君の名は？」
「竜崎新。最凶のバグとなる予定の男だ」
「覚えておこう。また会おう――――赤龍帝、闇皇の蝙蝠」
アルビオン……白龍皇は白き閃光となって飛び立っていった
コカビエルの展開していた破壊の魔方陣も消滅
ようやく戦いが終わり、町は救われた
『闇皇の神速槍騎士（アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト）』が解除され、新の全身にこれまで無かった疲労感がやってくる
朱乃が近づき、倒れそうになった新を胸に抱き寄せる
「お疲れ様ですわ、新さん」
「あ～……これ、予想以上に疲れるわ……」
「無理もないわね。一時的とはいえ、魔王級とも言える魔力を放出したまま戦っていたんだから」
リアスは新の頭を撫でて嘆息する
「それにしても新、トンでもなく凄い力だったな。俺達も驚いたよ」
「一誠、更に驚く事を教えてやろう。新しい力が頭に流れた時に知ったんだが……あと3つ、あんなのがあるらしい」
「「「えぇっ!?」」」

皆が一斉に驚いた
「あ、あんなバカみたいに強いのがあと3つも!?と言う事は……全部で4つ!?何でお前ばっかりそんな強くなるんだよッ！」
「覚醒しちまったモンは仕方ねぇだろ……まだ1つしか覚醒してねぇが、いずれまた増えるだろうな……嬉しいけどダルい……」
「うふふ。ゆっくり休んでくださいね？新さん」
「まだ寝る訳にはいかねぇな。禁手（バランス・ブレイカー）に至った仲間に激励を送らねぇとな、祐斗」
新は祐斗の方を向く
一誠は興味津々の様子で、彼の聖魔剣（せいまけん）を見ていた
「お前もやったじゃねぇか色男！へー、それが聖魔剣か。白いのと黒いのが入り交じってキレイなもんだなぁ」
「イッセーくん、僕は――――」
「ま、今は細かいの言いっこ無しだ。とりあえず、いったん終了って事で良いだろう？聖剣もさ、お前の仲間の事もさ」
「うん」
祐斗の顔に笑顔が戻る
「……木場さん、また一緒に部活出来ますよね？」

アーシアが心配そうに訊いてくる
神がいない事を知ってショックを受けている筈なのに、祐斗を心配してくれている
大丈夫と答えようとした祐斗をリアスが呼ぶ
「祐斗、よく帰ってきてくれたわ。それに禁手（バランス・ブレイカー）だなんて、私も誇れるわよ」
「……部長、僕は……部員の皆に……。何よりも、一度命を救ってくれたあなたを裏切ってしまいました……。お詫びする言葉が見つかりません……」
パシッと新が祐斗の頭を軽く叩く
「詫びなんていらねぇよ。お前がリアス部長の――――――俺達の所に戻ってきた。それだけで充分なんだよ」
「ありがとう竜――――――新くん」
「おっ？ようやく名前で呼びやがったか。『騎士（ナイト）』さんよぉ」
新は照れ臭そうに鼻を人差し指で擦った
「部長……。僕はここに改めて誓います。僕、木場祐斗はリアス・グレモリーの眷属――――『騎士（ナイト）』として、あなたと仲間達を終生お守りします」
「うふふ、ありがとう。さて……」
良い感じで終わると思いきや、ブゥゥゥンとリアスの手が紅いオーラに包まれる
「あ、あの、何事でしょうか？」

「祐斗、勝手な事をした罰よ。お尻叩き千回ね」

祐斗が尻叩きをくらってる間、新と一誠はその様子を見て爆笑した

新しい眷属

コカビエル襲撃事件から数日経ったある日
放課後の部室に顔を出した新と一誠は驚きを隠せなかった
何故なら……ゼノヴィアが駒王学園の制服を着て堂々と部室にいたからである
「やあ、赤龍帝と闇皇の蝙蝠」
「おい。なんで教会側の人間がここに？」
新が訊いたその瞬間、ゼノヴィアの背中から悪魔の翼が生えた
これには流石に驚く
「神がいないと知ったんでね、破れかぶれで悪魔に転生した。リアス・グレモリーから『騎士（ナイト）』の駒をいただいた。デュランダルが凄いだけで私はそこまで凄くなかった様だから、1つの消費で済んだみたいだぞ。で、この学園にも編入させてもらった。今日から高校2年の同級生でオカルト研究部所属だそうだ」
「マジかよ、破れかぶれって……」
「部長、貴重な駒をいいんですか？」
「まぁ、デュランダル使いが眷属にいるのは頼もしいわ。これで祐斗と共に剣士の二翼

が誕生したわね」
どうやらリアスは細かい点にこだわらないらしい
伝説の聖剣使いが味方になれば、戦力の強化は間違いない
だが、新はゼノヴィアの上司だった――――神代剣護の事について聞いてみる
「ゼノヴィア、本当に良かったのか？もう後戻りは出来ない上に、上司だった神代剣護は正真正銘の敵だぞ」
「……正直言って怖い。剣護さんが教会に対して抱いていた感情、戦っていた時の姿と気迫……優しかった剣護さんはもういないんだな……本気で私を殺そうとしていたし……」
悲しげな顔で沈むゼノヴィア
新はしまったと言う顔になり、素早く話を切り替えた
「と、ところでイリナは？」
「あぁ。イリナなら、私のエクスカリバーを合わせた5本とバルパーの遺体を持って本部に帰った。統合したエクスカリバーを破壊してしまったせいか、芯となっている『欠片』の状態で回収した。まぁ、奪還の任務には成功した訳だよ。芯があれば錬金術で再び聖剣に出来る」
「エクスカリバーを返すっつーか、教会を裏切って良かったのか？」

「一応あれは返しておかないとマズイ。デュランダルと違い、使い手は他に見繕えるからね。私にはデュランダルがあれば事足りる。あちらへ神の不在を知った事に関して述べたら、何も言わなくなったよ。私は神の不在を知った事で異分子になったわけだ。アーシア・アルジェントと同じ……それに、そちらに竜崎新がいるのも眷属になろうと思った理由の1つでもある」

異端者はデュランダル使いでも捨てる

教会の徹底過ぎる考えを、やはり新は好く事が出来ない

自嘲したゼノヴィアが沈黙すると、今度はリアスが語りだす

「教会は今回の事で悪魔側――――――つまり魔王に打診してきたそうよ。『堕天使の動きが不透明で不誠実のため、遺憾ではあるが連絡を取り合いたい』――――――と。それとバルパーの件についても過去逃した事に関して自分達に非があると謝罪してきたわ」

「遺憾かよ。身勝手な無能の集まりのクセに」

「しかし、この学舎（まなびや）は恐ろしいな。ここには魔王の妹がもう一名いるのだもの」

この学園に上級悪魔は2人しかいない

1人はリアス、もう1人はソーナ・シトリー会長

新はリアスに視線を向けると、肯定の意で頷かれた

「今回の事は堕天使の総督アザゼルから、神側と悪魔側に真相が伝わってきたわ。エク

スカリバー強奪はコカビエルの単独行為。他の幹部は知らない事だった。三竦みの均衡を崩そうと画策し、再び戦争を起こそうとした罪により、『地獄の最下層（コキュートス）』で永久冷凍の刑が執行されたそうよ」

「永久冷凍!?ビッグロックよりキツいな……」

ビッグロックとは賞金首など、危険視されている犯罪者を収容する施設

処刑されるか死ぬまで外に出る事は出来ない、犯罪者にとっては棺桶と呼ばれ恐れられている

「近い内に天使側の代表、悪魔側の代表、アザゼルが会談を開くらしいわ。なんでもアザゼルから話したい事があるみたいだから。その時にコカビエルの事を謝罪するかもしれないなんて言われているけれど、あのアザゼルが謝るかしら」

三大勢力の代表が一堂に集まる

今後の世界に影響が出そうな会談である……

「私達もその場に招待されているわ。事件に関わってしまったから、そこで今回の報告をしなくてはいけないの。新、特にあなたは絶対に出ないとダメよ?コカビエルを倒したのは殆どあなたなんだから」

「マジでっ!?」

リアスの言葉に誰もが驚いた

新は苦笑いしながら冷や汗を一筋垂らす

「あ、そう言えば聞くの忘れてた。ゼノヴィア、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』は堕天使側の戦力なのか？」

「そうだ。アザゼルは『神滅具（ロンギヌス）』を持つ神器（セイクリッド・ギア）所有者を集めている。何を考えているかは分からないが、ロクでもない事をしようとしているのは確かだね。『白い龍（バニシング・ドラゴン）』はその中でもトップクラスの使い手。『神の子を見張る者（グリゴリ）』の幹部を含めた強者の中でも4番目か5番目に強いと聞く。既に完全な禁手（バランス・ブレイカー）状態。現時点でライバルの赤龍帝よりも断然強い」

「一誠、前途多難だな」

「あ、あぁ……」

ゼノヴィアの視線がアーシアに移る

「……そうだな、アーシア・アルジェントに謝ろう。主がいないのならば、救いも愛も無かったわけだからね。すまなかった、アーシア・アルジェント。君の気が済むのなら、殴ってくれても構わない」

ゼノヴィアは頭を下げる

対してアーシアは聖母の様な微笑を彼女に向ける

「……そんな、私はその様な事をするつもりはありません。ゼノヴィアさん、私は今の生活に満足しています。悪魔ですけど、大切なヒトに――――大切な方々に出会えたの

ですから。私はこの出会いと、今の環境だけで本当に幸せなんです」
アーシアの優しさに新と一誠は泣きそうになった
ゼノヴィアは部室をあとにしようとしたが、アーシアに引き止められる
「今度の休日、皆で遊びに行くんです。ゼノヴィアさんもご一緒にいかがですか？」
「……今度機会があればね。今回は興が乗らないかな。ただ――――」
「ただ？」
「今度、私に学校を案内してくれるかい？」
「はい！」
その後は久しぶりの部活動で談笑した

――――闇人側

「キヒヒッ。まさか『ナイト』である君を退けるとはね～♪そんなにヤバかったのかぁい？」
「ヤバいなんて物じゃない。アレは危険だ」
「恐らく均衡が崩壊した世界だからこそ、新しい力が生まれたのだろう。なかなか興味深い事例だ」

「キヒヒッ。楽しみが増えてきたね～♪そろそろボクも本格的に出てみようかな～？」

――――――――新の家

「アザゼル様が来る!?それは本当なのアラタ!?」
「た、多分な……？今回の事件について会談を開くらしいんだ」
「はぁ……アザゼル様……アザゼル様……」
「おい。カラワーナ、ミッテルト。レイナーレがトリップしちまったけど、どうすりゃ良いんだ？」
「別にどうもしなくて良いと思う。いつもこうだから」
「レイナーレ様のアザゼル様に対する愛は私達も手を焼いてしまうんだ。こうなっては放っておくしかない」
「そっか。まぁ良いや」
　クックドゥドゥ～♪
　クックドゥドゥ～♪
　レイナーレのトリップ状態を眺めていると、突然チャイムが鳴る
「ん？誰だこんな時に？」

新が玄関に歩いていき、ドアを開けた
「「お兄～さん♪」」
「……っ？」
「やあ、竜崎新。突然来てすまない」
新の視界に飛び込んできたのはライザーの眷属――――『兵士（ポーン）』のミラ、双子のイルとネル、『騎士（ナイト）』のカーラマイン、『戦車（ルーク）』のイザベラに雪蘭（シュエラン）と言った面子だった
「……うちは押し売り仇討ち等の訪問はお断りしておりますので」
バタンッ
新は反射的にドアを閉めたが、この後に双子娘のチェーンソーによって無惨にも破壊されてしまった……

開始！異空間での修行！

「ん～！お菓子美味し～！」
「お兄さん気前良いね」
「そうか。そいつは良かったな……で、何でお前らが俺ん家の住所を知っている？レーティングゲーム以降の接点なんざ欠片も無いんだが……？」
　新がストレートに疑問をぶつけると、『戦車（ルーク）』のイザベラが紅茶を一口飲んで答える
「うん。実はリアス・グレモリーの『女王（クイーン）』から密かに、君の家の住所を聞いたんだ。君にしか頼めない用件なのでな」
「朱乃からッ!?つーかあの人はなんで人ん家の住所をバラしたがるんだッ!?俺のプライバシーがどんどん失せていくじゃねぇかッ！」
　新はこの場にいない朱乃に住所をバラされた怒りをぶちまけた
　ハァッと重い溜め息を吐いて本題に戻る
「それで？俺にしか頼めない用件ってのは何なんだよ？」
「それなんだが、あの結婚式以来ライザー様は完全に塞ぎ込んでしまって。私達は暫く、奥方様の計らいでこっちの世界に行ける様になったんだ」

「引きこもりか……まぁ、無理もねぇか。俺と一誠にリアス部長を取られた挙げ句、闇人（やみびと）の『ビショップ』に惨敗しちまったもんな」
「その闇人（やみびと）が今問題となって困っているんだ。ライザー様が弱体化したと言う噂が蔓延して、私達眷属は闇人から頻繁に襲撃を受ける様になってしまった」
チェスやレーティングゲームのみならず、あらゆる戦いにおいて『王（キング）』は他の駒を動かす司令塔みたいな存在
その司令塔が機能しなくなれば、他の駒もどう動くべきか分からなくなってしまう
恐らく、司令塔が動かない隙に他の駒――――即ちライザー眷属を倒してから『王（キング）』を討ち取り、フェニックス家を滅ぼしてしまおうと言う目論見だろう
「成る程な。『王（キング）』以外の駒を全員討ち取ってから、ゆっくり『王（キング）』を始末するってところか」
「このまま私達がやられたら、間違いなくライザー様も闇人に……だから頼む！私達を鍛えてくれ！協力してくれそうな人材はお前しかいない！」
「お願いお兄さん！」
「お願いします！」
カーラマインが頭を下げたのを引き金にイルとネル、ミラ、雪蘭（シュエラン）、イザベラが頭を下げて新に懇願する

新は足を組んで暫し考えた
「ん～。まぁレーティングゲームでは敵だったが、闇人に狙われてるなら話は別だしノーサイド。分かった、協力しよう」
新の承諾を聞いた6人はすぐに顔を上げて礼を言い、新は早々と行き支度を済ませる
「じゃあ善は急げだ。早速向かうぞ」
「向かうって何処に？」
「修行場にだ」

ライザー眷属を引き連れた新は、いつも行ってる酒場兼賞金引換所に到着した
「よっ、マスター」
「おう、新か。どうしたんだ？そんな上玉の嬢ちゃん達を連れて。援交で捕まえたのか？」
「違えよ。チョイと修行させる為に連れてきたんだ」
「修行？あぁ、あそこを使うのか。嬢ちゃん達、頑張れよ～」
マスターはにこやかに手を振って新達を見送る

奥の方へ進んでいくと、『修行の間』と書かれた扉の前に着く
「さて、ここが今から入る『修行の間』だ。これからこの中で修行を行う」
「この中で？」
「この『修行の間』はちょっとした異空間の世界になっている。時間の流れが非常に遅いから修行に最適の空間なんだ。簡単に説明すると、こっちの時間1分が向こうでは1日になる」
「1分で1日!?つ、つまり……向こうでの１０日は、こちらでは１０分しか経過していないと言う事か？」
「その通りだカーラマイン。更に言ってしまえば３０分で1ヶ月。1時間で2ヶ月分の修行が出来る」
「すご～いっ！」
双子に誉められる中、新は『修行の間』の扉を開ける
白い光で何も見えないが、新は構わず進んでいく
ライザー眷属達６人もあとに続いた
「……っ？ここは……ジャングル？」
扉を潜って出てきたのは、密林や湖、遺跡などが見える不思議な場所だった

ライザー眷属達は興味津々の様子で周りを見回す
「よしっ。今から2ヶ月、この場所で修行を行うぞ。覚悟は良いな？」
新が確認すると、勿論だと言うようにライザー眷属は頷いた
因みに1日目は軽く修行の説明をするらしい
「それで？まず最初は何をするの？」
「まずは基礎体力を付ける為のランニングだ」
「ランニングか。それならまだ容易いな」
「おっと、甘く見てると痛い目に遭うぜ？まずはあの林まで走るぞ」
新を先頭にライザー眷属一行は林までランニングを始めた
数十分経過して、一同は木々がズラ～っと並ぶ林に到着
この時点でミラ、イルとネルは少し息があがっていた
「次はこの木々の間を潜っていく様に走るぞ。全部な」
木の間を潜って走行距離を伸ばしながら走り続ける
新は一足先に階段が作られた山に到着した
「お～い、遅えぞ～」
「はぁ……はぁ……結構キツいものだな」
「竜崎新は……汗ひとつ、かいていないぞ……」

「あら……？あとの３人は？」
雪蘭（シュエラン）の後ろにいた筈のミラ、イルとネルはまだ後方にいた
３人は激しく息切れしながらようやく追いついた
「お、お兄さん……まだ走るの……？」
「もう……疲れたよぉ……足が……」
「つ、次は……何処を走るのよ……？」
「既にバテバテだな。次はこの階段を登って頂上の社（やしろ）まで行くぞ。段数が多いから、別に歩いても構わねぇ」
ライザー眷属達はホッとして階段を見上げた
しかし、目的地の社は豆粒程の大きさに見えるまでの距離があり、見なければ良かったと全員が後悔した

「「「「……」」」」
「おやっ。このランニングだけで驚きの白さに」
新は余裕で屈伸運動をしているのに対し、ライザー眷属達は既にグロッキーとなって

いた
「お～い。まだ最初だっつぅのに諦めるのか？」
「ま、待ってくれ……少しキツ過ぎないか？せめて……少し休憩を」
「この階段を降りて、さっきの道を戻れば休憩だ。行くぞ、時間を無駄にするな～」
新は階段をスイスイと降りていき、ライザー眷属達も覚束ない足どりで階段を降りる
そして再び林の中をさっきと同じ様に走り、最初に出てきた場所まで戻る
休憩と昼食を済ませた後に、広大な湖まで連れていき修行を再開させる
「ね、ねぇ？修行を再開するのも良いけど……汗かいちゃって気持ち悪いの」
「安心しろ。この湖で洗濯して乾かしとけ。その間はこの湖を泳いで往復してもらう」
「えっ？私達、着替え持ってないのよ？まさか裸で泳げって言うの？」
雪蘭（シュエラン）が恐る恐る聞くと、新は「当たり前だろ」と一蹴した
「そ、そんな！服が乾くまでずっと裸なの!?」
「「お兄さんのエッチ蝙蝠！」」
「やっぱりあなた変態よ！」
「喧しいなお前ら。イザベラとカーラマインを見てみろ。もう準備してんじゃねぇか」
見てみると、イザベラとカーラマインは服を脱いで裸体を晒していた
少し恥ずかしそうにしてるが、修行で強くなる為だと我慢している

「竜崎新……あまりこっちを見ないで……やっぱり恥ずかしいんだ」
「は、恥ずかしいけど……ライザー様のお力になる為だ。ここは耐えるのみ……」
イザベラとカーラマインを見て、残りのメンバーが覚悟を決めて服を脱いでいく
見事に全裸となり、新はここでの修行を説明する
「この湖での修行メニューは至極単純だ。ここから向こう岸まで泳ぎ、岩にタッチして戻ってくる。それを２０往復だ」
「に、２０往復ね。分かったわ」
全裸のライザー眷属達が一斉に水に浸かり泳ぎ始める
「あ、１つだけ注意点を言っておく。この湖にはメガロドンって言う人喰い鮫が３匹いるから、喰われないように泳いで来いよ～」
「ガボッ！ちょっと！そんな大事な事はもっと早く――――――ひぃぃぃぃぃっ！既に来てるぅぅぅぅぅっ！」
新が洗濯した服を乾かしてる間、ライザー眷属達は３匹の人喰い鮫と壮絶な鬼ごっこを繰り広げた
２０往復終了後、まだ洗濯物は乾いてなかった
ライザー眷属達は仕方なくパンツだけでも身につけ、次の修行に移行する
「りゅ、竜崎新。この格好で次は何をしようと言うんだ？」

「ん？次か？ラストはな――――――俺と組み手だ」
それは死刑宣告に限りなく近い発言だった
下着一枚で新と組み手
確実に裸にされるオチが見えた……
「安心しろ。服は脱がさない」
「「「「ホッ……」」」」
「その代わり本気で殴るっ☆」
全員がまた驚きの白さに変わり、組み手中に巨大なクレーターが15個出来上がったとか何とか……

――――――日没時

地獄の修行1日目がやっと終了
6人全員は地面に倒れ込んでい
「これで1日の修行が終了だ。明日からはこれを自分達だけで行ってもらう。時間を無駄にしない様にな。それと――――――明日からこいつを着て、今日やったトレーニングメニューをこなせ」

新が取り出したのは映画等で女スパイが着る様な黒いタイツスーツ
ライザー眷属達は疲労困憊の体に鞭を打ってソレを見る
「……何、それ……？」
「こいつは特殊繊維で作られたトレーニングスーツだ。伸び縮みするからどんな体型にもフィットする。更に汗などの水分を含むと重量が増す優れもの。１kgから３００kgまで調節が可能だ。これで修行の成果が大幅にアップするぜ☆」
只でさえキツいのに重りを付けてのトレーニング
彼女達は明日から、何回か死ぬかもしれないと悟った……

――――――修行開始から１週間が経過したある日、ちょっとした事件が起きていた

「「お風呂入りたい！」」
１週間目の修行終了後、双子の『兵士（ポーン）』イルとネルがそんな事を言い出した
「風呂なんてある訳ねぇだろ。行水で我慢しろ」
「ヤダヤダヤダ～ッ！お風呂入りたい～ッ！」
「お風呂お風呂お風呂～ッ！」
２人は新の腕を掴んでブンブン振り回す

新は喝を入れようとするが、他の４人からも同意見が出される
新は頭を掻きながらどうしたもんかと顔を歪ませる
そんな時に双子が――――
「お兄さん♪お風呂作ってくれたら」
「一緒に入って良いよ♪」
キュピーンッ！
新の目が強い輝きを放った
「うん、私も構わないぞ。君の背中を流そう」
「わ、私も『騎士（ナイト）』として……受けた恩は返さねば」
「仕方無いわよね……お風呂にありつけるんだもの」
「あまりエッチな事はしないでね……？」
イザベラ、カーラマイン、雪蘭（シュエラン）、ミラからも懇願され、新の目が４回輝く
「よっしゃあっ！張り切って作るかッ！」
新は闇皇（やみおう）になって近くにあった巨大な岩を適度な大きさに削っていき、風呂焚き用の石を大量生産する
それらを炎で熱し、小さな湖に１つずつ投入していく
次第に湯気が立ち上がり、手を入れて温度を見る

「こんなところか。湯加減はこれくらいで良いか？」
「暖か～い！お兄さんありがと～！」
「ねぇねぇ、石鹸は～？」
「そんなモンないっ」

「あ～……こんな星空を見ながらの露天風呂も悪くねぇな～」
女性陣が木陰で脱衣してる間、新は先に天然露天風呂を堪能する
丁度良い湯加減と夜風の気持ち良さに、何度も「あ～……」っと唸る
「お兄さんっ♪」
「おまたせっ♪」
まずやって来たのはイルとネル
汗拭きタオルで前を隠しながら入ろうとするが、新が待ったを掛ける
「湯に入る時は、タオルを湯の中に浸けてはならない。それが入浴時の最低限のマナーだ」
「むぅ、お兄さんのエッチ蝙蝠」

「そんなに私達の裸が見たいの？」
「良い女の裸を嫌う男なんざ、この世に存在しねぇよ。それとも見せられない程のお子ちゃま体型か？」
新のちょっとした挑発に双子はあっさり乗ってしまう
「お子ちゃまじゃないもんッ！」
「私達が立派なレディだってところ見せてあげるッ！えいッ！」
イルとネルは裸体を隠すのに使用していたタオルを投げ捨て、惜しみもなく発育途中の裸体を披露した
「どう!?これでもお子ちゃまって言える!?」
「いや、お前らは立派な良い女だよ」
新がお子ちゃま発言を撤回すると、双子は恥ずかしがりながらも照れる
露天風呂に浸かって新に体を預ける様に寄り添った
「お兄さん、暖かいね」
「何だか……ホワァ～って感じになっちゃう」
「ほう。じゃあこいつはどうだ？」
新は両手を使って双子の乳房と乳首をクニュクニュと触る
「あっ、いやんっ……！もう、お兄さんったらぁ……」

「本当に……ぅぅんっ。エッチ蝙蝠だよぉ……」
「誉めてくれてあんがとよ」
新が2人を感じさせている間に次の女性が近付いてくる
長い青髪を垂らした小柄な女性がタオルで前を隠しながらやって来た
新は誰なのか分からず、何度も瞬きをする
「あの……すんません。どちら様?」
「分からないの?ミラよ」
「えっ!?お前クワガタ頭なのか!?」
「誰がクワガタ頭よッ!」
禁句(タブー)の呼び名『クワガタ頭』と言われたミラは怒る
頬を膨らませながら入ろうとするも、やはり止められる
しかし、止めたのは新ではなく――――イルとネルだった
「入る時はタオルを外さないとダメっ」
「立派なレディの証拠だもんっ」
「うぅっ……わ、分かったわよ。取れば良いんでしょ?取れば……」
ミラは渋々タオルを置いた
こちらも発育途中の裸体が可愛らしく、ピンク色の突起物もお披露目となった

しかし、羞恥心に耐えられず右手で胸を、左手で下を隠す
「あ～！隠すのダメ！」
「そんなんじゃ、お兄さんにバカにされちゃうよ！」
「え!?ちょ、ちょっとやめ――――――きゃあっ！見ないでッ！」
ミラは双子に両手を掴まれ、隠している部分を晒け出される
「そんな死ぬ訳じゃあるまいし。自信ねぇのか？」
「そ、そんなんじゃなくて……純粋に恥ずかしいのよぉ……」
「何を言うか。そんな良い裸体を持っておきながら勿体ねぇぞ」
新はミラを湯に浸からせる
「……やっぱり恥ずかしい……水位が腰までしか無いから、み……見えちゃう」
「細かい事は気にすんなよ」
クニュクニュ……
「ひゃぁんっ!?エ、エッチな事はしないでって……言ったのにぃ……んんっ！」
「その割には嫌がる素振りを見せてねぇ様だが？」
顔を赤くするミラの小振りな胸を弄(もてあそ)ぶ新
遊んでる内に残りの女性陣が集結する
なんとイザベラ、カーラマイン、雪蘭(シュエラン)は露天風呂に入る前からタオルを持っていな

かった
「ブホッ!い、意外な展開に驚いちまった……」
「ふふっ。露天風呂なんて久しぶりだな。君は実に幸運な男だぞ?これだけの女性と共に露天風呂を堪能しているんだからね。はぁ……気持ち良い湯だ」
「修行の疲れが抜けていくな……」
「そ、そうね」
　イザベラとカーラマインは気持ち良さそうに浸かるが、雪蘭(シュエラン)だけは胸を隠しながらドギマギしていた
「っ?雪蘭(シュエラン)。隠すのは良くないぞ。私も多少恥ずかしいが、風呂では裸の付き合いが決まりなんだ」
「こ、こういうのは慣れが肝心だ。私だって『騎士(ナイト)』の誇りに泥を塗らないよう隠さないでいる。さぁ、手を退けるんだ」
「『騎士(ナイト)』だの何だのは関係ないでしょ?そ、それにあの『兵士(ポーン)』さん……物凄い手技(てわざ)で女性を骨抜きにするって聞いたんだけど……」
雪蘭(シュエラン)はチラチラと新の方を見て距離を取る
「あぁ、私も彼の手技(てわざ)をくらったよ。今でも覚えている。まるで身体中の全てを支配される様な感覚だった……」

イザベラは顔を赤くして恍惚な表情を浮かべる
「わ、私の胸を触った時も……気持ち良かった……今まで受けた事の無い感覚が、身体中を駆け巡って……」
カーラマインも新の手技(てわざ)を思い返して顔を赤く染める
「……それじゃあ、私はそろそろ上がろうかな……」
ガシッ！
露天風呂から出ようとした雪蘭(シュエラン)の足をイザベラが捕まえる
「えっ？」
「逃がさないぞ雪蘭(シュエラン)。どうせなら、彼の手技(てわざ)を受けてみるべきだ。ふんっ」
「きゃあっ!?」
「んっ？おぶっ！」
ドボンッ！
イザベラが引っ張ると、雪蘭(シュエラン)は新に覆い被さる様に体勢を崩した
そのまま湯に飛び込んで大きな水柱を立てる
「プハァッ！イ、イザベラ！何するのよっ!?この『兵士(ポーン)』さんにエッチな事されるかもしれな――――っ？『兵士(ポーン)』さん？」
プカッ……

新が背中から死体の様に浮き上がってきた
彼の頭部にはタンコブが出来上がり、ユラユラと血が漂う
元が浅い湖のため、巻き込まれた際に思いっきり頭を打ってしまったようだ
そして右手で地面に「乳凶器」と書き残して意識を失った……

修行を通して

「ええいっ！」
「やぁっ！」
「おっと！フッ、ホッ」
修行期間が終盤となり、ライザー眷属達の動きがだいぶサマになってきた
トレーニングスーツの効果で、以前より身軽さが向上されている
新も一度に全員を相手にするのは流石にキツくなってきたので、双子を除いて1人ずつ組み手を行っていた
今はイルとネルの番である
「小柄な体格を活かせ！相手が反撃出来ないような場所から攻撃するんだ！」
「「はい！」」
新は右手に鎧を展開した状態でチェーンソーをいなす
双子は攻撃の隙を探しているが、なかなかコツを掴めない
新は鎧の手でチェーンソーを叩き落とし、2人の乳房をプッシュした
「きゃんっ……また触られちゃった」

「相手の隙を探すって難しい……」
「まぁ。そんな簡単に出来たら苦労はしねぇけど、少なくとも以前よりマシにはなってきてる。後は自分達の腕次第だ」
　誉められたイルとネルは嬉しそうに跳び跳ねる
「よし。これで組み手は全員終わったな」
　メニュー全ての修行が終了し、全員が力を抜いて座る
「ミラは唯一の武器である棍を掴まれた時の対処法を編み出せ。破壊されたら打つ手が無くなるからだ。イルとネルも同じ。イザベラは攻撃面は申し分ないが、カウンターに気を付けろ。動きが速いから、相手が少し手を前に出しただけで大きなダメージになる。さっきみたいにな。雪蘭（シュエラン）は攻撃のリーチを活かしつつ、接近戦に備えて関節技を取得しておけ。炎を纏わせても当たらねぇと意味がない。最後にカーラマイン、お前は多方面からの攻撃を加えるんだ。『騎士（ナイト）』の特性を活かして相手の意表を突け。以上、修行終わりっ」
「な、長かったぁ……」
「2ヶ月の間、必死に修行していたが……実際は1時間しか経ってないから不思議だ」
「汗だくだからお風呂入ろっと」
　女性陣は小さいタオルを持って、新が作った露天風呂へ歩いていく

「あっ。お兄さんも一緒に入る？あれっ……お兄さん？」
そこに新の姿は無かった

「修行させてはいるが、俺も体を動かさないと鈍っちまうよな」
新は1人、人目を忍んで巨大な岩の前に立っていた
両手に『闇皇（やみおう）の鎧』を装備し、拳を当てて深呼吸
「シャアッ！」
ドスドスドスドスッ！
新は連続で拳を突き出し、岩に穴を開けていく
徐々に拳の速度を上げていき、最終的には人型の穴を完成させた
「はぁ……はぁ……はぁ……ふぅ～。『闇皇の神速槍騎士（アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト）』にいつでも覚醒出来る様にしとかねぇとな。やっぱ『騎士（ナイト）』の能力に特化した形態だから、速さが覚醒の鍵になるかもしれねぇ」
新はもう1つの岩に、先程と同じやり方で穴を開ける
10個開けたところで亀裂が入り、巨石はガラガラと大きな音と共に崩れた

「ここにいたのか」
「ん？イザベラ。風呂に入ってたんじゃないのか？」
「あぁ。まだ皆入ってないよ。君が突然いなくなったらおかしいと思って。それに、毎晩隠れてこんな特訓をしていたのか」
「新しい力を得たんだよ。その状態を保つ為にやってるんだが……如何せん上手くいかねぇや」
　新はポリポリと頭を掻く
「近い内に三大勢力の会談がある。そいつは闇人（やみびと）にとって絶好の襲撃チャンスだ。奴らのテロに備えて少しでも力を付けなきゃ、主のリアス部長に合わせる顔がねぇよ」
「ふふっ。君みたいな者でも心配はするんだね」
「それは俺が無神経だと言いたいのか？」
「許してくれ。私達も正直言って不安がいっぱいで、気を紛らわせたかったんだ。闇人に対しての認識は”恐怖”しかない……もし私達が殺されてしまったら、ライザー様は……」
　表情が沈むイザベラに新は肩をポンッと叩いて言う
「今までやってきた修行は勝つ為にじゃねぇ。生きる為の修行だ」
「生きる為の……？」

「俺にとって本当の敗北は死ぬ事だ。死んじまったらセッ〇スも何も出来なくなる。だが、負けても生きていればリベンジ出来る。いつでも、何度でもな……俺はそう思っている」
「真顔で性交をする事まで言わなくても良かったんじゃないのかな……？」
「そうか？欲深くても良いじゃねぇか。何せ俺は悪魔だから」
「……君の意見、皆で参考にさせてもらうよ。どうだろう？スッキリしたところで露天風呂に入ろうじゃないか。昨日は背中を流せなかったからね」
「俺は流されるより流す方を所望してる。当然、後ろも前も」
「本当に君はスケベだな」

「あっ、お兄さん」
「イザベラ、少し遅かったじゃないか。何か話していたのか？」
「ちょっとね」
「そう、チョイと世間話を。さて、ひとっ風呂浴びたらここから出るぞ～」
新はバサバサと服を脱ぎ捨て、1番最初に浸かる

女性陣も続いて服を脱いでいく
「何かもう随分と免疫が付いた感じだな」
「あなたのお陰でね」
「これでもまだ恥ずかしいんだぞ」
「「大人のレディになるためっ！」」
「勘違いしないで。修行に付き合ってくれたから、そのお礼よ」
「私はすっかり慣れてしまった」
上から順番にミラ、カーラマイン、イルとネル、雪蘭（シュエラン）、イザベラは返事をした
イザベラは入るや否や、四つん這いで新に近づいていく
「私達の頼みを聞いてくれてありがとう。じゃあ早速だが……」
「分かってる。背中を流したいんだろ？遠慮なく来い」
新はイザベラに背中を向ける
「お言葉に甘えて、遠慮なく……」
ムニュンッ
イザベラは抱き着く形で豊満な乳房を新の背中に押し付けた
「「「「――――っ!?」」」」
「ホゲッ!?おまっ、何ばしよっとりまんの!?」

「何って。君はスケベだから、こういう洗い方が好きだろうなと思って」
「まさかこんな修行場でソ◯プ紛いの体験をするとは思わなかったぜ……」
「……君の背中は暖かいな。抱いていると、何故か安心させられてしまう」
　イザベラは新の背中を堪能しつつ、大きな乳をより強く押し付ける
「イザベラ姉さんズルい～っ！」
「私達もお兄さんにくっつく～っ！」
　対抗心を燃やしたイルとネルが、新の前面から抱き着く
「まさかのｓａｎｄｗｉｃｈ!?」
「お兄さんどう……？私達のおっぱい……」
「ち、小さいけど……プニプニで柔らかいよ……？」
「さ、流石にこれは味わった事ねぇぞ……。この事を一誠が知ったら発狂しやがるだろうな」
　新はそんな事を小声で言いながら、３人の身体を撫で回す
　残ってるミラ、カーラマイン、雪蘭（シュエラン）は顔を赤くしながら見ていた
「う～……わ、私にもさせるんだ！『騎士（ナイト）』として負ける訳にはいかない！」
「おいコラ！今『騎士（ナイト）』がどうのこうの関係ねぇだろッ！」
「私だって！１つ年下のイルとネルには負けられないわ！」

「ええっ!?お前の方がこいつらより年上なのッ!?」
「1人だけ仲間外れってのも癪ね……私も参加するわ」
「マ・ジ・で・す・か・い?」
カーラマインが右腕、ミラが左腕、雪蘭（シュエラン）が新の顔に抱き着いてきた
この状況下では新の下半身もかなりヤバい事に……
「……あれ?何か、お尻に固い物が……」
「――――っ!おっとこの先はまだまだ早いのでＮＧッ！」
ドオオオオオンッ！
珍しく赤面した新は、魔力を撃ち放って危機を脱した……
斯くして、ライザー眷属達との修行は無事（?）終了し、彼女達は力を付ける事に成功した

第４章　停止教室のヴァンパイアとカイザースネーク

波乱の前兆と魔王と父親

休日、新は突然電話でリアスに呼び出された

『ちょっと買い物に付き合って欲しいの。デパートの前で待ってなさい』――――と、いきなり言われてしまって折角の競馬日和が急遽変更させられた

かと言って主に逆らう訳にもいかず、バイクでデパートに向かった新

着いた直後にリアスと朱乃が到着し、店内に入っていった

「……今日は大穴を狙える日だった。女の買い物は昔から長い物だから、競馬は諦めようと我慢してやって来た……なのに、何故……なんで寄りにもよって女性用水着なんだッ!?俺完全に場違いだろッ！店内の視線がチョー痛ぇよッ！」

そう、新はデパートにある女性用水着売り場の試着室の前に立たされている

店内の女性客や店員から刺さる視線がボディーブローの様に新を追い詰めていった

「どう？新、似合うかしら」

店内の女性客及び店員の視線を気にしていると試着室のカーテンが開かれ、水着姿となったリアスがポージングしながら新に見せつける

「新さんはこちらの方がお好きですわよね？」
　隣の試着室にいる朱乃も、前屈みになってビキニ姿を新に披露する
　新はまともな感想を述べる事など出来ずにいた
「確かに目の保養にはなるけどよ、何故に俺を選びましたか？」
「なに？新は私達の水着姿を見たくないのかしら？それとも、やっぱり裸じゃないとダメ？」
「うふふ。新さんは本当にエッチですね」
「そういう事言ってんじゃねぇよ！なんで俺を連れてきたのかって聞いてんだよ！」
　リアスと朱乃は顔を見合わせ、微笑みながら言った
「確かにイッセーを連れてくるのも良かったけど、あなたに頼みたかったのよ」
「それに新さんは経験豊富ですもの。きっと私達に１番似合う水着を選んでくださると思いまして。昨日の夜に話し合って決めましたの」
「あーあー、さいですか。わぁーりましたよ。じゃあこれなんかどうすか？」
　新は気まずい買い物に駆り出された仕返しとして、２人に際どい水着を見せつけた
　布面積が少なく、着ても殆ど裸になるような水着だった
「……新さん、随分と過激な水着を選びましたね……」
「この水着、殆ど紐みたい……」

「フッフッフッ。着れるものなら着てみるが良い！2人して俺をからかっているからお返しだ！もっとも、こんな紐みたいな水着を着る勇気など、流石のお二人にも無いだろうな」

新は勝ち誇った様に目を閉じて笑う

きっとこの2人は今手に持っている水着を着ようだなんて思わないだろう……

そう考えていると、新の手から水着が離脱する様な感覚がした

「……っ？アケノォ……？ドナイシハリマシタン……？」

「せっかく新さんが選んでくださった水着ですもの。新さんがお望みなら……着て差し上げますわ」

ゴプッ！新の口からあり得ない音と目玉が飛び出た

頬を紅潮させながら朱乃は新がチョイスした水着を持って試着室へ入る

「ちょっ！待った！タイムタイムッ！今のなし！ノーカウントッ！」

「待っててくださいね？今すぐ着替えますから。うふふ♪」

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁっ！恥ずイイイイイイッ！チョー恥ずイイイイイイッ！クソッ！かくなる上は強制離脱ぐえっ」

踵（きびす）を返して逃げ帰ろうとした新をリアスが襟首を掴んで制止させる

その目には何故か闘争心みたいな物が宿っていた

「待ちなさい新。私の水着も選びなさい」
「……拒否権を行使する」
「主命令よ。私の水着も選びなさい！朱乃には負けられないわ！」
「何でそこまで対抗的になんのッ!?」
「良いから早く選びなさい！朱乃には負けたくないのよ！」
そんな理由で対抗心を燃やさなくても良いだろ……？
新は涙目で静かに呟き、仕方なくリアスに似合いそうな水着を選ぶ事に……
「こ、こんなのはどげんすか？」
選んだのはシンプルなビキニ
先程のよりは比較的控えめだが、それでもエロい水着だった
「……ダメよ。さっきよりも過激な水着を見繕いなさい」
「もう勘弁してくれッ！俺のライフはとっくに０を通り越してマイナスになってんだよッ！」
「なら早く水着を選んで。それとも裸でプールを泳いで欲しいの？」
「あ、俺としてはそっちの方がありがたいかな」
「イッセーが死んじゃうかもしれないから却下よ」
その後は長時間かけてリアスと朱乃の水着を選んでは品定め、選んでは品定めの繰り

返しとなり、新の財布は致命的なダメージを受けた

――――――――――――――――――――――――

「はぁ……今日は今までになく疲れた……」

買い物終了後、新は近くの公園のベンチで項垂れていた

水着選びが一転して、リアスと朱乃から性攻撃を受けた新

何でこんな事になってしまったんだと黄昏ていた

「よっ。どうしたんだお前？そんなショボくれた顔をしやがってぇ」

声がしたので顔を上げてみると、目の前には二十代くらいの若い男が立っていた

ニヒルな笑いを浮かべているが、新はその男の内に眠る何かを察知した

「俺に何か用か？」

「なぁに。赤龍帝（せきりゅうてい）に挨拶する前に、お前にもチョイと顔を見せてやろうと思ってな――

――闇皇（やみおう）の蝙蝠」

その異名で呼ばれた新はベンチから立ち上がって警戒体勢となる

若い男は手を前に出して、「今日は挨拶しに来ただけだから安心しろ」と言ってきた

「念のためだが、名前を聞かせてもらえないか？」

「良いぜ……俺は――――――アザゼル。堕天使どもの頭(かしら)をやっている。よろしくな、竜崎新」

その瞬間、男――――――アザゼルの背中から、１２枚の黒翼が羽をばら蒔きながら開かれた

――――――次の日

「冗談じゃないわ。確かに悪魔、天使、堕天使の三竦みのトップ会談がこの町で執り行われるとはいえ、突然堕天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて……！」

リアスは眉を吊り上げて怒りを露(あらわ)にしていた

その理由は堕天使総督のアザゼルが会談前に接触してきたからだ

新とはショッピング後の１回だけだったが、実は一誠とは何度も〝契約相手〟として接触していた

素性と気配を隠して接してきた点に関しては、確かに営業妨害と言えよう

「しかも新とイッセーにまで手を出そうなんて、万死に値するわ！アザゼルは神器(セイクリッド・ギア)に強い興味を持つと聞くわ。きっとイッセーがブーステッド・ギアを持っているから接触

してきたのね……。新も神器（セイクリッド・ギア）ではないとはいえ、闇人（やみびと）の力を宿している。遂にはそっちにも興味を持ってきたのね……。大丈夫よ新、イッセー。私が２人を絶対に守ってあげるわ」

リアスは隣に座っている新とイッセーの頭を撫でる

「……やっぱ、俺の神器（セイクリッド・ギア）をアザゼルは狙っているのかな。堕天使の総督なんだろう？」

「確かにな。危険が無いとは言い切れない状況だ。神器（セイクリッド・ギア）所有者じゃない俺にも接触してきたくらいだ」

新は険しい表情となり、一誠も不安でいっぱいだった

「しかし、どうしたものかしら……。あちらの動きが分からない以上、こちらも動きづらいわ。相手は堕天使の総督。下手に接する事も出来ないわね」

「アザゼルは昔からああいう男だよ、リアス」

リアスが考え込んでいると、突然誰かの声が

声がした方向へ視線を移すと、紅髪（べにがみ）の若い男性がにこやかに微笑んでいた

その男の姿を見るや否や、リアスは慌てた様子で立ち上がった

「お、お、お、お兄様」

「あんたは現魔王のサーゼクス・ルシファー様か」

新達の目の前にいる男性はリアスの兄であり、現魔王でもある『サーゼクス・ルシファー』
突然の訪問に皆が驚いていた
「先日のコカビエルのような事はしないよ。アザゼル。今回みたいな悪戯はするだろうけどね。しかし、総督殿は予定よりも早い来日だな」
因みに銀髪のメイド、グレイフィアも同伴しており、今日はプライベートで来たらしい
「やあ、我が妹よ。しかし、この部屋は殺風景だ。年頃の娘達が集まるにしても魔方陣だらけと言うのはどうだろうか」
「お兄様、ど、どうしてここへ？」
リアスが怪訝そうに訊くと、魔王様は1枚のプリントを取り出した
「何を言っているんだ。授業参観が近いのだろう？私も参加しようと思っていてね。是非とも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」
駒王学園ではもうすぐ授業参観があるらしい
そんな知らせを聞いた新は、眉をひくつかせていた
「……っ？どうしたんだ新？そんな険しい顔して」
「おい。今……授業参観があるって言ったよな……？」

一誠が肯定すると、新はガックリと頭を垂らした
ピリリリリリリッ！
ピリリリリリリッ！
突如鳴り響く着信音
その発生元は新のポケットだった
新は嫌気満々の顔でスマホを取り出し、通話オンにする
「……もしもし？」
『やぁ新。久しぶりだな。そちらでの生活は上手くいってるか？』
「何の用でかけてきたんだよ？」
『何の用とは失礼だな。もうすぐ授業参観があるらしいじゃないか。私も親として参加しないとな』
「親父はただ女子高生を捕まえてセッ○スしたいだけだろ」
『安心してくれ。息子の授業参観でそんな事をする可能性は９９％だ』
「殆どヤル気満々じゃねぇかっ！とにかく、その日はこっちに来るな！メンドクサイ事態になりそうだからな」
『はっはっはっ。もう遅い。私は既にお前の所に向かっている。あと3秒くらいで着くから』

ガチャッ！
通話を切った新は歯軋りをしてリアスに近づく
「リアス部長！今すぐ窓に向かって魔力を撃ってくれ！」
「待ちなさい新。いったい何があったの？いきなりそんな事を言われても――――――」
ガシャァァァァンッ！
部室の窓ガラスが割れると共に何かが飛び込んできた
ゴロゴロと床を転がり、体操選手みたいに綺麗な立ち姿勢を見せる
新以外の全員がその者に目を向けた
「丁度3秒ピッタリだ」
飛び込んできたのはサーゼクス・ルシファーと同い年くらいの男性
爽やかな笑顔を振り撒くイケメンだった
「な、何なんだあの人……木場より輝いてる様に見えるんだが」
「……本当に来やがったか。親父」
「「「「えぇっ!?」」」」
オカルト研究部員全員が驚いた
なんと窓ガラスをブチ壊して乱入してきたのは、新の父親だった

「知らない人には教えておこう。はじめまして。私が新の父親――――――竜崎総司(りゅうざきそうじ)だ」
「新の親父!?若すぎないか!?」
「はっはっはっ。よしてくれ。私はもう今年で５３歳を迎えるんだ。若いなんて言われると照れてしまうぞ♪」
「５３歳!?とても人の親とは思えない外見なんだけれど……」
「美顔なだけだよ」
一誠とリアスの言葉に爽やかに解答する総司
ふと、リアスの顔を見て指を顎に当てる
「……っ?何でしょうか?」
「ふぅむ……君、処女だけど新に乳首を弄(いじ)られたね」
「「「「「っ!?」」」」」
再び全員が――――――特に一誠は目玉が飛び出そうなくらい驚き、新は総司の口を塞ごうと飛び掛かるが軽快に回避された
リアスは朱乃以外に知らせてない事実を暴露され、慌てて否定しようとする
「はっはっはっ。隠さなくても良い。私も情事に長けていてね、見ただけで処女か否か分かるんだ。新が情事に長けているのも私の遺伝なのだよ」

ギギギ……と関節を鳴らしながら新の方を向く一誠
彼の目には嫉妬と血だらけの涙と炎が宿っていた
「新……？オマエ、部長のチクビヲイジッタノカ……!?チクビヲイジッタノカ……!?」
「怖っ！顔怖っ！いや待て……！そ、それはだな」
「そこの少年くん。間違いないよ。新は彼女の乳首を弄ったね。この分だと、いずれは処女も――――」
「うわぁぁぁ

「そうだよ。彼は唯一、『闇皇の鎧』を奪って闇人の王の封印に協力してくれた人間なんだ」
「そうなんですか……てっきり、もっと魔人みたいな人柄だと……」
「おやっ、そちらの黒髪のお嬢さんも新に乳首を弄られたね？」
「あらあら。どうしてその様な事がお分かりになるのでしょう？」
「はっはっはっ。息子が手をつけた女性の事を分からずして、父親は務まりませんよ」
「アアアアアアアアアラアアアアアアアアアタアアアアアアアアア

「……ケダモノ！」
小猫は後ろから拳を打ち抜こうとするが、総司はそのまま指２本で拳を止めた
「……っ!?小猫の拳を止めた!?指２本だけで!?」
「はっはっはっ。どうやらかなりのお転婆ちゃんだが、その程度のパワーでは私のハートを打ち抜く事は出来ないぞ?」
総司は拳を解放して、新に１枚のプリントを投げつける
何とか一誠を鎮めた（と言うよりやむ無くボコボコにして気絶させた）新は、息を切らしながらプリントを拾う
「新、授業参観には必ず行くぞ。女子高生――――――折角の息子の学生ライフの一部を見れるんだからな」
「今真っ先に女子高生って単語を聞いたぞ」
「ではゼクスくん。話はまた後日にさせてもらうよ。これでも仕事が忙しかったのをすっかり忘れていた」
総司は割れた窓から勢い良く飛び出し、ハングライダーを展開させて去っていった
「な、何だか変わったお人ですね……お兄様」
「うん。総司さんは時々、凄いのか凄くないのか分からない人なんだ」
因みに壊れた窓ガラスは、壊した総司の息子である新が修理する羽目になったとか

……

その日の夜、新は一誠の家に呼ばれた
サーゼクス・ルシファーが新と一誠に話がしたいからと、一誠の家に急遽泊まる事になった
「2人とも、アザゼルに会ったそうだね」
「……はい」「はい」
2人は素直に肯定する
魔王様が目の前にいるので、流石に気が気でなかった
「何かされた訳ではなさそうだれど、何かは言われたのかな？」
「……『今度、改めて会いに行く』と」
「俺も同じ台詞を言われました」
「そうか。……アザゼルは神器（セイクリッド・ギア）に強い興味を持つ。キミのブーステッド・ギアも例外じゃないだろう。現にキミと同じ『神滅具（ロンギヌス）』を持つ者が彼のもとへ身を寄せている」
「俺の『闇皇の鎧』は神器（セイクリッド・ギア）じゃないが、アザゼルはこいつにも興味を示してるのでしょ

うか？それに、何の為に『神滅具（ロンギヌス）』所有者が？」
「それは分からない。けれど、アザゼルは天界、冥界、人間界に影響を及ぼせるだけの力を持った組織の総督だ。利用しようとすれば多岐に亘るだろうね。しかし、彼はコカビエルの様な戦（いくさ）好きではない。過去の大戦で１番最初に戦から手を引いたのは堕天使だったぐらいだからね」
　サーゼクスの言葉に、新は先日の事件を思い出す
　コカビエルは総督であるアザゼルを貶していた
　その様子と今の話を合わせると、確かにアザゼルは他の堕天使とは違う雰囲気を発していたと思い返す
「その上、闇人（やみびと）も本格的に動き始めたからね。直に『チェス』のメンバーが全員揃うかもしれない」
「サーゼクス様。俺は既に『チェス』とやらのメンバーに出くわしましたよ。しかも２人、『キング』と『ビショップ』に」
「……そうだったね。でも安心しなさい。私がキミ達の身の保障を約束するよ。せっかく伝説のドラゴンと『闇皇の鎧』が悪魔側に来てくれたのだから、優遇させてもらうよ。それに妹はキミ達の事を大切にしている。あんなに楽しそうなリアスは冥界でもそう見れなかった。きっと、今は毎日楽しいのだろう。それはキミ達のお陰だと私は思って

いる」
そう言われた新と一誠は少し照れた
そしてこれからも、リアス・グレモリーの『兵士（ポーン）』でいる事をサーゼクスに告げた
「ところでイッセーくん。新くん。話は変わるが、キミ達は女性の大きなお乳が好みかい？」
「はい！大好きです！」
一誠のハッキリした返事に、新は不適に笑う
「一誠。デカイ乳だけが全てだと思うなよ？乳っつうのはな、存在するだけで女の魅力を引き立てる。小さかろうが大きかろうが、俺は全ての乳を愛でて弄る」
「ぐっ！俺に黙って部長の乳首を弄りやがったお前が言うなーっ！」
「確かに、リアスの胸は兄の私から見ても豊かなものだと思う」
「はい、部長の――――主のお乳さまは最高の物だと思います！」
一誠はまたまた元気良く素直に答え、新もウンウンと頷く
「これは可能性の話なんだが……イッセーくんのブーステッド・ギアで高めた力を、リアスの胸に譲渡したらどうなるんだろうね？まあ、気にしないでくれたまえ」
「っ!?」
２人はかつてない衝撃に襲われた

そこから新と一誠は布団の中に潜り込んで緊急会議を開く
「ぶ、部長のおっぱいにブーステッド・ギア・ギフトを使う……？そんな事が可能なのか……!?」
「理屈上は出来るかもしれないが、何がパワーアップしやがる？単純にサイズが増すのか……？極上の丸みを帯びる……？いや、もしかしたら感度が増して超絶敏感乳首に……!?」
サーゼクスが隣で眠りにつく中、新と一誠は『部長のおっぱいにブーステッド・ギア・ギフトを使用したらどうなるのか？』と言う討論を一晩中続けた

水着と白龍皇

「さて、あなた達、今日は私達限定のプール開きよ」
サーゼクス・ルシファー来訪から数日が経過し、待ちに待ったプールの日
プールを1番最初に使っていい事を条件にリアスは掃除を快諾していた
懸命に苔を洗い落とし、一誠はリアスの水着姿を妄想しまくっていた
そして掃除が終わり――――――
「私の水着どうかしら?この前の買い物で新が選んでくれたのよ」
ブハッ!
リアスの水着は布面積が小さい赤いビキニ
一誠は鼻から大量に出血して、新に親指を立てる
「新!グッジョブだ!部長のおっぱいが物凄く強調されてる上に、下乳が見えたエロい水着だ!」
「その反面に俺の財布はダメージを受けた訳だが、まぁ役得役得」
「あらあら。部長ったら張り切ってますわ。新さん、私の水着はどうですか?」
後ろから朱乃が呼んでるので振り返る新

新が選んだ水着、際どい白ビキニを着た朱乃の肢体が新の欲望を加速させる
「ヒュウッ♪なかなか良いじゃねぇか。今すぐにでもそいつを取っ払ってやりたい気分だぜ」
「あらあら。急かすのはいけませんよ？」
朱乃は妖艶な微笑みを見せる
アーシアと小猫はお揃いのスクール水着で、胸には平仮名で自分の名前が書かれていた
「へ～。スクール水着か。なかなか似合ってて可愛らしいな」
「あ、ありがとうございます……。イッセーさんも同じ事を言ってくれました……」
「……新先輩は体型にこだわらないんですね。変態です」
「お前なぁ、俺は純粋に誉めてるんだぜ？小猫だって可愛らしいのは事実だ」
新がそう言うと、小猫は顔を逸らして小さく呟く
『……卑猥な目付きで見られないのも、それはそれでちょっと複雑です』
「――――っ？」
微かにしか聞こえなかった小猫の呟きに新は疑問符を浮かべる
そこへリアスがやって来て、新の肩に手を置く
「新。ちょっとお願いがあるのだけれど」

「ん、何だ？」

――――――――――――――――――――

「しっかし小猫、お前泳げなｋグフゥッ！み、鳩尾はやめろ……！」
「……余計な事は言わないでちゃんとしてください」
リアスに「小猫は泳げないの。あなたが教えてあげて」と言われ、新は小猫に泳ぎを教えていた
息継ぎをして懸命に泳いでる小猫の姿に、新は少し微笑む
「ははっ。何か妹が出来ちまった様な感覚だな。おっと、端に着いたぞ」
２５メートルを泳ぎきった小猫は勢い余って、新に抱き着く様な形でぶつかってしまう
隣では一誠がアーシアの手を引いて泳ぎを教えていた
「……新先輩は意外に優しいんですね。ドスケベ変態なのに」
「小猫、それはちょっと酷くねぇか？俺だって戦闘だけでなく、こう言ったほのぼのした日常でも役立ちたいんだよ」
ザバンッと誰かが水の中に飛び込んだので見てみると、リアスが悠々と泳いでいた

一誠はそれを見てプールに潜り込む
恐らく、水中で揺れるリアスの乳房を拝む為であろう
ひと泳ぎしたリアスがプールサイドに上がると、何故か水着のブラが無くなっていた
「あら。何処で取れちゃったのかしら？」
隠す事なく揺れるリアスの生乳
ピンク色の乳首も輝きを発している様だった
一誠は鼻血を噴射しながらプールに沈む
すると、新の前にプカプカとリアスが着けていたブラが漂流してきた
「おっ。こいつぁラッキー♪ぐぼぁっ！小猫お前、また鳩尾を……」
「拾ってくれたの新？丁度良かったわ。それを渡してちょうだい」
「ゴホッ……ゴホッ……。はいはい、ちょっと待っててくれ。じゃあ小猫、後は1人で練習出来るか？」
「……大丈夫です。さっきのでコツは掴めましたから」
「そっか。じゃあ行ってくるわ」
新は流れてきた水着のブラを持ってプールサイドに上がり、リアスの所へ歩いていった
『……新先輩、私の水着姿には〝可愛らしい〟としか言ってくれませんでした。それに

妹が出来たみたいって……やっぱり、私は妹の様な感覚なのでしょうか……？』

「んで、何の用だ朱乃？」
新はリアスに水着のブラを返却した後、朱乃が手招きをしていたので早足で駆けてきた
朱乃は日焼け用のオイルみたいな容器を新に手渡す
「うふふ。新さんに悪魔特製の美容オイルを塗って欲しいのですわ。塗ってくださらない？」
朱乃は水着のブラを外し、見事な乳房を晒け出した
「ヒュウッ♪俺みたいな獣を前にしてるのに大胆だな」
「新さんだからこそですわ。いつでも来てください」
朱乃は乳房を晒したまま、うつ伏せに寝る
新は両手に満遍なくオイルを垂らす
そしてオイルまみれの両手で朱乃の背中をゆっくり塗っていく
「うん……ぁんっ。新さん、気持ち良いですわぁ……」

「そいつぁ良かった。出来れば前の方も塗ってやりてぇな」
「うふふ。良いですわよ？たっぷりオイルを塗ってくださいね？」
朱乃が体勢をうつ伏せから仰向けに切り替える
プルンッと揺れる乳房とピンク色の乳首が、新の眼前に出現した
「後悔すんなよ？」
新は遠慮なく朱乃の乳房に両手を落とした
「ぁはんっ……」
官能的な反応をした朱乃を見て、新のＳ心に火が点いてしまう
オイルハンドで朱乃の乳房だけでなく、乳輪も乳首も蹂躙していく
「あっ……はふんっ……んっ、ぁぁんっ。あ、新さん……とても、ぅんっ……お上手です……おっぱいが、新さんに……支配されていく……感じで、はぁんっ。気持ち良い……」
「へへへっ。それじゃあ、チョイと刺激を与えてみっか？」
キュッ……プルンッ
スリュスリュ……
新はオイルの潤滑具合を利用して、乳首を指で摘まんで擦る
「あぁぁぁんっ！そ、それ……！気持ちっ、良すぎますぅ……！身体中に……電流が走って……！」

「買い物ん時のちょっとした仕返しだ」
新は乳首を攻めるのを止め、再び乳房に手を滑らせていく
途中で揉む行為も加えて、オイルを塗り終えた
朱乃は頬を紅潮させ、恍惚な表情で新を見つめる
「はぁ……ぅぅん……何だか、新さんに……ぅんっ、身体中を支配されてしまいました……とっても心地良い気分です……」
「俺も最高の気分だぜ。まだ手に感触が残ってやがる」
新が両手の開閉を繰り返し余韻に浸っていると、リアスが手招きしている姿を目撃
朱乃に「ちょっと待っててくれ」と一言告げてからリアスの所へ移動する
「どうした、リアス部長？」
「新、あなたにお願いがあるの。良いかしら？」
「別に構わねぇよ。肩揉みから乳揉みまで何でもござれだ」
「ふふっ、相変わらずね。じゃあ――――」
リアスがブルーシートの上にうつ伏せで寝転がり、水着の紐を解いた
「私にもオイルを塗ってくれないかしら？」
リアスから小瓶を渡された時点で展開を察していた新は勿論だと言わんばかりに蓋を開け、オイルを手に馴染ませていく

その途中、アーシアに泳ぎを教えている一誠が羨ましさと恨めしさを混ぜた視線を送る

リアスが小声で言う

「あまりいやらしい触り方はダメよって言いたいところだけど――――」

「無理だなっ」

「……でしょうね。でも、特別に許してあげる」

「あいよ、それじゃあ遠慮無く――――」

新はリアスの白く綺麗な背中に手を置き、オイルを刷り込む様に手を滑らせる

リアスのスベスベで柔らかい肌はまさに極上・至高の逸品としか表現出来ず、どんなクールガイでも興奮してしまう感触

オイルを塗る度にムニュムニュと形を変えるリアスのバストも目のご馳走であり、新は至近距離で、一誠は遠くから揃って凝視していた

「おおっ、スゲェ……」

「ねえ、新」

「――――っ。な、何だ？」

「あなたって本当に女性の扱いが上手よね。ただオイルを塗って貰っているだけなのに、何だか気持ち良くなってきちゃう……っ」

艶っぽい声を出すリアスの頬は微かに赤みを帯びていた
ゴクリと喉を鳴らす新にリアスは更に――――
「胸にもオイルを塗りたい？」
「マ、マジで!?良いのか!?」
「ふふっ、良いわよ。後で念入りに塗ってちょうだい」
最高の甘言を告げてきたリアス
女性の胸にオイル塗り――――それは男ならば誰もが憧れ、断ると言う選択肢を除外するシチュエーションだ
その甘言が聞こえたのか、一誠は「羨ましいぞチクショウッ！新！出来れば俺も混ぜて欲しいッ！」と羨望の視線で睨み続けた
背中を塗り終えた新はオイルハンドをワシャワシャと動かし、いざリアスの白く輝く果実(おっぱい)に手を伸ばそうとしたその時――――
「新さん、待ちきれなくて来ちゃいましたわ♪」
先程オイルを塗って貰った朱乃が後ろから新の背中に抱き付いてきた
しかも、今の朱乃は水着のブラを外していたので乳首の感触がダイレクトに伝わってくる
「おおっ!?ど、どうした朱乃？」

「うふふ、新さんにオイルを塗られている部長を見ていたらもう一度塗って貰いたくなってきましたの。ですから、もう一度塗っていただけます？」
柔和な笑みを浮かべながら２回目のオイル塗りを懇願してきた朱乃
次々とやって来る嬉しい報せに興奮する新だったが……
「ちょっと朱乃、まだ私のオイル塗りが終わってないのよ。それにあなたはさっき塗ってもらったのに、２回目だなんて卑怯じゃない」
明らかに不機嫌な様子で上半身を起こして反論を述べたリアス
ぷるんっと揺れる乳が丸見えなのもお構い無し
「ぶっはぁっ！」
「イ、イッセーさん!?」
プールではリアスの生乳を目撃した一誠が鼻血を噴き出し、サスペンスドラマに出てきそうな水死体の如くプカプカと漂流していた
ただ彼の顔は感無量とばかりに幸せそうだった……
一誠の水死体（死んでないけど）はアーシアと小猫によって引き揚げられ、新の方では更なる危機が訪れようとしていた
「……やっぱり新さんをこのままにしたくありませんわ」
「ん？それってどういう――――」

「こ・こ・で♪私の処女をあげましょうか？」

「――――っ!?」「……っ！」

朱乃のトンでもない発言に新は思わず目玉が飛び出しそうなくらい驚き、リアスの表情は段々険しい顔付きへ転じていく

危険が渦巻いているにもかかわらず、朱乃は頬擦りしながら続ける

「言葉通り、私の体を好きに蹂躙して良いですわよ？部長はガードが固いからなかなか出来ませんもの。ですが、私なら何をしても構いませんわ。おっぱいでも何処でも好きにして下さい……っ。新さんとエッチするのを想像するだけで……っ」

朱乃の官能的な息遣いが新の耳に襲い掛かり、性欲を掻き立てられそうになる

宝くじで1億円が当たったかの様に興奮度がＭＡＸを迎えようとした……その刹那

ヒュッ！ボンッ！

新の耳元を何かが通り過ぎ、直後に大きな破壊音が鳴り響いた……

その正体はプールの飛び込み台の1つが消し飛んだ音であり、リアスの掌から放たれた魔力による物だった

新の耳から少量の血が垂れ、新の脳内で危険を知らせる警鐘がガンガン音を鳴らす

「あ、あのぉ……今、俺の耳通り過ぎて――――」

「朱乃、ちょっと調子に乗り過ぎよね？あなた、私の下僕で眷属だと言う事を忘れているの？」
ドスを利かせた声音を発するリアス
目も完全に据わっており、魔力のオーラが全身から漂っていた
「あらあら、そんな風にされると私も困ってしまいますわ。――――リアス、私は引かないわよ？」
今の砲撃がスイッチとなったのか、朱乃も立ち上がって全身にオーラを纏わせる
口調にも怒気が混ざり、バチバチと電気が走る
上半身裸である事を全く気にせず睨み合う両者の気迫に流石の新は焦りを感じた
救援を求めようにも一誠は絶賛気絶中でアーシアに膝枕されており、小猫は見て見ぬフリ、祐斗からは口パクで「ゴメンね」と両手で×印を作られる始末……
誰も救援に来てくれない事態に新は目元をひくつかせた
「ちょっ、タンマ、タンマですお二人さん。ここは一先ず落ち着――――」
「いつの間にか図々しくなったわね。――――卑しい雷（かみなり）の巫女さん」
「可愛がるぐらい良いじゃないの。――――紅髪（べにがみ）の処女姫さま」
「あなただって処女じゃないの！」
「あら、そんな事を言うのなら今すぐ新さんに処女を貰ってもらうわ！」

上空に飛び上がった2人は互いに滅びの魔力と雷を撃ち合い始めた
喧嘩のレベルを遥かに超えた女同士の戦いがプールの所々を破壊していく
「だいたい、朱乃は男嫌いだった筈でしょう！」
「そういうリアスは男なんて興味無い、全部一緒に見えるなんて言ってたわ！」
時間が経つに連れて苛烈さが増していく女同士の戦いに止める隙は無い……
新は何とか止めようとするも、飛来してくる攻撃の数々を回避するだけで精一杯だった
そこで新が出した結論は――――
「ここは……一先ず避難しておこう。女の喧嘩に男が介入する余地は無い……いや、介入しちゃいけない……」
とどのつまり、その場から逃げると言う選択肢を選ぶしか無かった……

「おや、竜崎新じゃないか。どうしたんだい？外が騒がしいようだけど」
「ちょっと飲み物を取りに来ただけだ。そう言うゼノヴィアこそ、ここで何をしてんだ？」

「うん。初めての水着だから着るのに時間が掛かってしまって。似合うかな？」
用具室で新はゼノヴィアと遭遇した
尚、彼女の水着は体の凹凸を強調しやすいビキニで新は感心の様子で見る
「似合ってるぜ。水着が初めてって事は、やっぱ教会の規則は厳しかったんだな？」
「まぁそうだね。と言うよりも、こういう物に私自身興味が無かったんだ」
「確かにな。以前のお前は何か〝戦闘だけが生き甲斐だ〟って感じだったし」
新はクスクスと笑うが、ゼノヴィアは何やら畏まった表情を見せる
「竜崎新。折り入って話がある」
「おいおい、俺達はもう仲間なんだ。新って呼んでも良いんだぜ？」
「そうか。では新、私と子供を作らないか？」
その言葉を聞いた刹那、新の思考がフリーズを起こした
一瞬訳が分からなかったが、鞄の中にあった飲み物を２本取り出す
「ゼノヴィア、お前も暑くて喉が渇いてんのか？ほら、このアイスココアを飲んで落ち着け」
「いや、私は至って本気だ。新、私と子供を作ろう」
新は一旦飲み物を鞄の中に戻し、ゼノヴィアと向き合う
「ん～……ちょっと良いか？何故いきなり子作りの話を俺に持ち掛けた？」

「私は子供の頃から、これと言って夢や目標は全て神や信仰に絡んだ物だったんだ。特に1番の目標は、剣護さんと共に人を救い続ける事だった」

フムフムと頷き、新は話の続きを聞く

「神に仕えていた時は女の喜びを捨てる事にしてた。神と剣護さんの為に封印したんだ。けれど、神がいない事を知り――――剣護さんも敵になってしまった今、悪魔になった私には夢や目標が無くなったと言える。何をして良いか最初は分からなかった。そこでリアス部長に訊ねたら――――」

――――悪魔は欲を持ち、欲を叶え、欲を与え、欲を望む者。好きに生きてみなさい

ゼノヴィアはそう言われたらしい

「つまり、今まで封印していた女としての喜びを味わいたいと？」

「そう。そして私の新たな目標、夢は――――子供を産む事なんだ」

「話は分かったが……その相手に俺を選んだってのか？」

「私では不服か？リアス部長に、新は性行為に経験豊富だと言う話を聞いたから頼みたいんだが。それに部長と朱乃さんが着ている水着は、新が選んだ物だそうじゃないか」

『リアスさんよぉ！何教えてくれちゃってんの!?こいつは最近まで聖女だったんだぞ!?悪魔か！あ、元々悪魔だった……』

1人漫才をしている新にゼノヴィアはゆっくりと近づいていく

「ゼノヴィア？お前はそれで良いのか？俺は別にセッ○スする事に遺憾はねぇし、お前がシたいって言うんなら拒絶はしねぇ。だが、子供を作られるとだな……」
「安心してくれ。子供は基本的に私が育てるから。悪魔の出生も知っている。なかなか子供が出来ないそうだ。特に純血同士は難しいが、運良く君も私も転生悪魔でベースは人間、それに君は性欲が強い。毎日していけば１０年以内に妊娠出来るんじゃないかと予想している。あ、君なら1日に数回も可能かもしれないから、早くて5年以内かな？どちらにしろ学校を卒業出来る。その後で子供を産めば何の問題も無い。子供は男の子と女の子1人ずつが良いかな？さっきも言ったように私が育てるが、子供が父からの愛を望んだ時は遊んでやってくれ。やはり子供に父と母は必要だから」
　既に壮大な未来予想図まで描いている事に、流石の新も開いた口が塞がらなかった
「残念な事に私は男性経験が無い。だが、新は経験豊富だから私に色々教えてくれる筈だ。それに……」
「それに？」
「それに……以前新にリベンジを挑んだ時、君は私の胸を揉んだよね？実はあの時から君が気になり始めたんだ……。胸を揉まれた瞬間、体の奥底からゾクゾクした感覚が込み上げて……気が付いたら君を思い浮かべていたんだ」
　ゼノヴィアは頬を紅潮させる

そして勢い良くビキニを外して乳房を披露した
水着を外した事で弾むおっぱいとピンク色の乳首に新は見とれてしまう
「あ、うっかり忘れていた。君は裸の方が好きだったね。なら、これも脱ごう」
「えっ？おまっ――――――」
なんとゼノヴィアは残った下の水着も脱ぎ捨て、正真正銘の全裸となった
「さぁ、遠慮なく来てくれ。私の相手には……お前しか思い浮かばないんだ」
「そうかい。じゃあ……ヤらせてもらうぜ。据え膳食わぬは男の恥って言うし。それに……ここまで覚悟を見せてくれた女に対して逃げるのは失礼だからな」
新はゼノヴィアの両肩を掴んで、後ろのロッカーに彼女の背中を密着させる
逃げ場を失ったゼノヴィアはピクッと体を震わせるが、すぐに新の顔を向く
新はまず、ゼノヴィアの乳房を優しく揉み始めた
「あっ……んっ。んんっ……そう、これだ……。この感覚……新に胸を揉まれると、何故か体が熱くなってくる……」
「それが女の喜びってヤツだ」
ゼノヴィアの乳房を一通り揉むと、今度は乳首と乳輪を弄る
味わった事の無い快感にゼノヴィアは嬌声を漏らしてしまう
「ぁんっ……！ぅんっ……ふぁっ、んんっ……！や、やっぱり……新は上手なんだな。た

だ揉むだけじゃなくて、乳輪まで触ってくるとは……何だか恥ずかしくなってくる……」
「自分で決めた事なんだろ？だったら逃げるな。俺はお前のしたい事に応える。それが、男が女にしてやれる礼儀だ……そろそろ頂くとするか」
新は乳首と乳輪を爪で弄り続け、次第に右手を太股の方へ伸ばす
指で優しく擦って、ゼノヴィアを快感の渦に沈ませようとする
「あぁんっ……！はぁ、はぅっ……んっ、んんっ……！お、お願いだ……これ以上待たせないでくれ……！こんな声、恥ずかしいんだ……！」
「悪いな。すぐに喰ってやるから、もう少しだけ――――――」
「何がもう少しなのかしら？新」
底冷えさせられる声が聞こえ、新はロボットみたいにゆっくりと声のした方向を見てみる
そこには主であるリアスと、『女王（クイーン）』である朱乃が笑顔で黒いオーラを出しながら佇んでいた
「あらあら。ゼノヴィアちゃんったら、ズルいですわ。新さんにそんな事をしてもらっているなんて」
「新。あなたって本当にイッセーより性欲が強いわね。もうゼノヴィアまで弄るなん

て」
「……油断も隙もない」
朱乃の後ろから小猫が半眼でキツい一言を放った
「あ～……いや、これはだな。ゼノヴィアが保健体育の授業について聞きたい事があると頼まれて――――――」
「……？どうした新？早く子供を作ろう」
ゼノヴィアの一言で空気が凍りついた
特に先程まで熾烈なバトルを繰り広げていたリアスと朱乃から滲み出るオーラは濃密度を増していた
「……子供を作るって、どういう事？ちょっと聞かせてもらえるかしら？」
「うふふ。新さん、じっくりお話を聞かせてもらいますわ」
「……やっぱり新先輩はドスケベのド変態です。連行します」
ガシッ！ズリズリズリ……
新は小猫に足を掴まれ、引き摺られたままプールサイドに連行されていく
取り残されたゼノヴィアは、潤んだ瞳で新に向かって叫んだ
「隙があれば、また子作りをしよう！必ずだぞ！」
「ちったぁ助けんかい！」

その後、新はプールサイドに正座させられたまま、リアスと朱乃から長い長い説教および質問責めをくらった……

「あ～……今日は疲れる1日だったな」
「新も鼻血を出し過ぎたのか？俺は少し気を抜いたら目眩がしてくるよ」
プールから出た新と一誠は共に校舎を出ようとしていた
新はリアスと朱乃からの質問責め＆説教の後遺症、一誠は鼻血による失血で足取りがフラフラだった
すると、校門近くで銀髪の美少年が校舎を見上げているのが見えた
『……っ!?何だこの波動……前に1度感じた事がある……!まさか……』
新は目を見開いて銀髪の美少年の正体を悟った
蒼い眼を持つ銀髪の少年が2人に話し掛けてきた
「やあ、良い学校だね」
「えっと……まあね」
話し掛けられた一誠は無理矢理笑顔を作って返答するが、新は険しい表情のまま銀髪

の少年を睨む
「君、そんなにいきり立たないでくれ」
「はんっ、そいつは無理な相談だぜ？『白い龍（バニシング・ドラゴン）』さんよぉ」
新が銀髪の少年に名を告げた瞬間、一誠も先程の新と同じ様に目を見開いた
銀髪の少年は感心してクスクスと笑う
「君は凄いね。流石は闇皇の蝙蝠」
「おい、新……こいつ誰なんだ？」
「さっき言った通りだ。こいつは――――」
「俺はヴァーリ――――白龍皇（はくりゅうこう）、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』だ」
新は「やっぱりな」と片眉を吊り上げ、一誠は驚いた
先日のコカビエル事件で現れた白龍皇の正体が、今目の前にいる
「そうだな。例えば、俺がここで兵藤一誠に魔術的な物をかけたり――――」
ヴァーリの手が一誠の鼻先に迫った瞬間、２本の剣が彼の首元に突きつけていた
聖魔剣を持つ祐斗と聖剣デュランダルを持つゼノヴィアが瞬時に間合いに入っていたようだ
「何をするつもりか分からないけど、冗談が過ぎるんじゃないかな？」
「ここで赤龍帝との決戦を始めさせる訳にはいかないな、白龍皇」

２人はドスを効かせた声音でヴァーリに警告するが、ヴァーリは全く動じない
逆に祐斗とゼノヴィアの方が手元を震わせ、表情を強張らせていた
「誇って良い。相手との実力差が分かるのは強い証拠だ。俺とキミ達との間には決定的な程の差がある。コカビエルごときに勝てなかったキミ達では――――」
「悪いが、俺はコカビエルに勝ってたぜ？最後はお前に邪魔されちまったがな」
ヴァーリが言い終わる前に、新が目を鋭くさせながら介入してくる
「兵藤一誠、竜崎新。キミ達はこの世界で何番目に強いと思う？」
ヴァーリが突然そんな質問をしてきた
「この世界は強い者が多い。『紅髪の魔王（クリムゾン・サタン）』と呼ばれるサーゼクス・ルシファーでさえ、トップ１０内に入らない。だが、１位は決まっている――――不動の存在が」
「そいつは自分だとでも言いたいのか？」
「いずれ分かる。ただ、俺じゃない。兵藤一誠と竜崎新は貴重な存在だ。充分に育てた方がいい、リアス・グレモリー」
後ろを見てみるとリアス、アーシア、朱乃、小猫がいた
アーシアは対応に困っている様子だったが、他の３人は既に臨戦態勢だった
「白龍皇、何のつもりかしら？あなたが堕天使と繋がりを持っているのなら必要以上の接触は――――」

「――――『二天龍』と称されたドラゴン。『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』と『白い龍（バニシング・ドラゴン）』。そして闇人（やみびと）が作った『闇皇（やみおう）の鎧』。過去、関わった者はロクな生き方をしていないらしい。あなたはどうなるんだろうな？」

ヴァーリの言葉にリアスは言葉を詰まらせる

「今日は別に戦いに来た訳じゃない。ちょっと先日訪れた学舎を見てみたかっただけだ。アザゼルの付き添いで来日していてね、ただの退屈しのぎだよ。ここで『赤い龍』や闇皇の蝙蝠とは戦わない。それに――――俺もやる事が多いからさ」

それだけを言い残し、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』はこの場をあとにした

新はいずれ戦うかもしれない相手に、拳を震わせていた……

授業参観、魔王少女も来るよ☆

「……気乗りしないわね」
「あぁ……全くだよリアス部長」
リアスと新は朝から溜め息を吐いていた
何故なら本日は授業参観の日
リアスには父親とサーゼクス・ルシファーが来るらしい
新は無論、父親の竜崎総司が来るのだが……悩みの種が1つ増えていた
学校の玄関口で別れ、新は席に着くなり突っ伏す
「なぁ新。そんなに親御さんが来るのが嫌なのか？」
「それが九分九厘。残りはな――――レイナーレ達も来るんだよ」
一誠は驚いた
過去に自分を殺した堕天使がこの学校の授業参観に来るなんて予想だにしてなかっただろう
彼女は今や殆どバウンティハンターとして働いており、新の家に居候している身である

「レ、レイナーレも来るの……？」
「カラワーナとミッテルトもだ。な～んかヤケに張り切っててさ、断ろうとしても絶対行くって聞いてくれねぇの」
多分、新の授業を受けている姿を見たいのだと思う
そんな中、ゼノヴィアが新に近づいてきた
「ん？どうしたゼノヴィア」
「新。先日は突然あんな事を言って申し訳なかった」
「――――っ？あぁ、あの事か。別に気にする必要は無いんだが」
「私は君の事を考えずに突っ走り過ぎた。やはり、いきなりそんな事は難しいと思う。だからこそ――――まずはこれを用いて練習しよう」
そう言うとゼノヴィアはスカートのポケットから小さな袋に包まれた物を取り出した
……コンドームだった
「ゴフッ！」
それを見た瞬間、新の口からあり得ない音が飛び出し、クラス全員の視線が一斉にコンドームへ集まった
「おみゃあはバカか!?バカなんですか!?大衆の面前でコンドームなんか出すな！大体コ

ンドームを何処で用意してきやがった!?」
「新!あまりコンドームコンドームって大声で言うな!クラスの皆がざわついてる!」
　クラスの皆は新とゼノヴィアの関係について討論会を始め、新は今日の授業参観で疲れはＭＡＸになるだろうと言う悩みを植え付けられた
「それで新、性交の予定だが……」
「お前ちょっと口を閉じろ」

「アラタ～!やっほ～!」
「来たぞ新。こんなに可愛いお嬢さん達とお知り合いとは、なかなかやるじゃないか」
「げっ、親父……何でレイナーレ達と一緒にいるんだよ?」
　時刻は昼休み、飲み物を買いに自販機へ向かうと――――偶然レイナーレ、カラワーナ、ミッテルト、更には竜崎総司と遭遇した
　彼女達も新を探そうとしたら偶然総司と出くわし、一緒に探していたらしい
　レイナーレは天野夕麻（あまのゆうま）の格好で、カラワーナとミッテルトはいつものピチピチスーツとゴスロリ服で来ていた

３人ともレベルが高いせいか、男子の視線を集めている
「アラタの父親ってアラタ以上にエッチね。初対面にもかかわらずお尻を触られたわ」
「私もだ。しかし、アラタを探してくれた事には感謝しよう」
「はっはっはっ。私は新の父親だからね。そのくらいは当然さ」
「総ちゃ～ん！置いてっちゃやだ～！待って～！」
突然総司のもとに、フリル付きの服を着た小柄の女性がやって来る
それを見た新はガチガチと歯を鳴らした
「ごめんよ梓。ナデナデしてあげるから許してくれ」
「エへへ～。総ちゃんのナデナデ～♪」
「新！誰なんだこの女の子は!?まさかお前の親御さんの浮気相手か!?５０歳を過ぎたオッサンがこんな可愛い女の子をたらし込むなんて犯罪だぞ！警察を呼べ！」
「新。あの女性もあなたのお知り合いなの？」
一誠は羨ましいと思いながら新に詰め寄り、リアスは怪訝そうに訊く
だが、新は首を横に振った
「はっはっはっ。君達、失礼だな。梓は私の妻で――――新のお母さんだよ」
「「「「お母さんっ!?」」」」
その場にいた全員が驚いた

何処からどう見ても十代半ばにしか見えない外見だが、梓と言う女性は新の母親らしい

「新ちゃんのお母さんをやってます、竜崎梓（りゅうざきあずさ）で～すっ。梓ちゃんって呼んでね？因みに、今年で５０歳を迎えま～す♪」

「この外見で５０歳!?新の両親って何者なんだ！どうやったらこんな若々しく見える!?」

「とても息子がいる人の顔じゃないわね……若過ぎるわ」

「はぁ……だから嫌なんだよ。この２人は俺より目立つから黄色い声が絶えねぇの」

「新さんの困り顔……何だか新鮮ですわ♪」

「あ、部長。それに皆も」

自販機の前で談笑していると、今度は祐斗がやって来た

「あら、祐斗。お茶？」

「いえ、何やら魔女っ子が撮影会をしていると聞いたもので、ちょっと見に行こうかなと思いまして」

魔女っ子と言う単語にほぼ全員が首を傾げたが、ただ１人――――総司だけは何処からともなくカメラを出していた

カシャカシャッ！
フラッシュの音が聞こえ、カメラを持った男達が廊下の一角で何かを撮影してるのが見えてくる
新は強引に人垣を潜り抜け、魔女っ子らしい美少女を見つけた
アニメで見る様なスティックをくるくる回しており、時折パンツがチラチラ見えてたりする
総司もいつの間にか至近距離で撮影していた
「なっ！」
人垣を通り抜けてきたリアスが魔女っ子見た途端に慌てふためく
あまりの狼狽ぶりに新と一誠も驚いた
「ほらほら、解散解散！今日は公開授業の日なんだぜ！こんなところで騒ぎを作るな！」
生徒会の知り合いである匙が、メンバーらしき女子と共に撮影現場にいる男子達を追い返す
総司だけは避難しながら撮影を続けている
「あんたもそんな格好をしないでくれ。って、もしかして親御さんですか？そうだとし

ても場に合う衣装ってものがあるでしょう。困りますよ」
「えー、だって、これが私の正装だもん☆」
「良いじゃないか君。それを言うなら、私なんてトレジャーハンターの服以外似合う物が無いんだ」
２人の態度に奥歯をギリギリ鳴らす匙
すると、廊下の後方から生徒会長であるソーナ・シトリーが紅髪の男性２人を先導しながら近づいてきた
「何事ですか？サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言って――――――」
「ソーナちゃん！見つけた☆」
「ちゃん？生徒会長を『ちゃん』付け？」
「ああ、セラフォルーか。キミもここへ来ていたんだな」
紅髪の男性の１人――――サーゼクス・ルシファーがコスプレ美少女に声をかける
その時に出たセラフォルーと言う名前に新はまさかと思った
「リアス部長。セラフォルーってまさか……レヴィアタン様……？」
「そうよ。あの方は現四大魔王のお一人、セラフォルー・レヴィアタン様。そしてソーナのお姉さまよ」
「えええええええええええええええええええっ!?」

一誠の絶叫が廊下に響き渡る

四大魔王の中で唯一の女性魔王を、大人の色気溢れる女性だと思い込んでいたのだろう

「セラフォルー様、お久しぶりです」

「あら、リアスちゃん☆おひさ～☆元気にしてましたか？」

「は、はい。おかげさまで。今日はソーナの授業参観に？」

「うん☆ソーナちゃんったら酷いのよ。今日の事、黙ってたんだから！もう！お姉ちゃん、ショックで天界に攻め込もうとしちゃったんだから☆」

「そんな些細な事で天界に喧嘩を売ろうとしたのか!?」

本気なのか冗談なのか分からない態度に新は驚くしかなかった

「イッセー、新。ご挨拶なさい」

リアスの言う通り、新と一誠は頭を下げてセラフォルー・レヴィアタンに挨拶する

「は、はじめまして、兵藤一誠。リアス・グレモリー様の下僕『兵士（ポーン）』をやってます！よろしくお願いします！」

「同じく『兵士（ポーン）』の竜崎新です。よろしく」

「はじめまして☆私、魔王セラフォルー・レヴィアタンです☆『レヴィアたん』って呼んでね☆」

ピースサインを横向きでチェキする魔王レヴィアタン
こんな軽いノリでも四大魔王のお一人である
「ねぇ、サーゼクスちゃん。この子が噂のドライグくん？」
「そう、彼が『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』を宿す者、兵藤一誠くんだ」
「へ～。で、あなたが『闇皇（やみおう）の鎧』を宿していて、女の子の服を脱がすのが得意なエッチ蝙蝠さん？」
「レヴィアたん……様。俺的には闇皇の蝙蝠って呼んで欲しいんですけど、まぁそうです」
「ふ～ん……」
セラフォルー・レヴィアタンは新の周りを歩きながら品定めする様に見ている
「な、何すか？」
「あなた、本当に『兵士（ポーン）』の駒１つなの？」
「え？まぁ、一応そうですけど」
新が頭を掻きながら答えると、今度はサーゼクスに聞く
「サーゼクスちゃん。新くんのスペックを考えると、とても『兵士（ポーン）』１つで済むとは思えないよ？」
「彼には『変異（ミュータ）の駒（ピース）』が使用されたんだ」

「『変異の駒(ミューテーション・ピース)』……そっか。それなら納得☆」
理由が分かったセラフォルーは再び新に近づこうとする
「相変わらず可愛いね、セラフォルーちゃん。そんなに新が気に入ったのかい？」
「あっ！総くん☆おひさ～☆」
「総くん!?総くんって、親父の事かっ!?」
「私もゼクスくんやセラフォルーちゃん達と一緒に闇人(やみびと)の『初代キング』を封印したからね。四大魔王とは面識があるんだ」
面識があるどころのレベルじゃねぇだろと新が突っ込む
どれだけの偉業を成し遂げたのか気になってしまうくらいだ
「ところで、セラフォルーちゃん。そろそろ君のおっぱいを触らせてくれないか？」
「四大魔王様になんて事を言ってんだよ!?」
「え～、ダメ～☆総くんは既婚者でしょ？」
「スゲェ軽く返した！四大魔王はいつもこんなテンション!?」
「はっはっはっ。仕方ないか。じゃあ新におっぱいを触らせるのかい？新もセラフォルーちゃんのおっぱいを触りたいだろ？」
「ここで俺に話題を振るんじゃねぇ！つーか出来るかッ！四大魔王のお一人にそんな事したら消し飛ばされるわぁっ！」

新は総司に飛び蹴りをくらわそうとするが、やっぱりかわされてしまう
事態はソーナ会長とレヴィアタン様の話に発展する
「ソーナちゃん、どうしたの？お顔が真っ赤ですよ？せっかくお姉さまである私との再会なのだから、もっと喜んでくれてもいいと思うのよ？『お姉さま！』『ソーたん！』って抱き合いながら百合百合な展開でもいいと思うのよ、お姉ちゃんは！」
凄まじい難易度にソーナ会長は目元を引きつらせながら言う
「……お、お姉さま。ここは私の学舎であり、私はここの生徒会長を任されているのです……。いくら身内だとしてもお姉さまの行動はあまりに……。その様な格好は容認出来ません」
「そんなソーナちゃん！ソーナちゃんにそんな事を言われたら、お姉ちゃん悲しい！お姉ちゃんが魔法少女に憧れているって、ソーナちゃんは知っているじゃない！きらめくスティックで天使と堕天使、闇人をまとめて抹殺なんだから☆」
「お姉さま、ご自重ください。魔王のお姉さまがきらめかれたら小国が数分で滅びます」
これでは魔法少女ではなく、魔王少女である
「ふむぅ……」
「……っ？な、何でしょうか？」
気がつくと、新を押さえていた総司がソーナ会長をマジマジと見ていた

そして、怪訝そうな口調で切り出す

「君は……どうしてそんなに新の事が気になってるんだい？」

「――――っ!?」

「それもただ気になってるだけじゃない。何と言うかこう……新に何かされるのを少し期待している様な感じが――――」

「――――っ！し、失礼します！」

この場の空気に耐えられなくなったソーナ会長は、目元を潤ませて走り去っていく

「待ってソーナちゃん！お姉ちゃんを置いてどこに行くの！」

「ついてこないでください！」

「いやぁぁぁん！お姉ちゃんを見捨てないでぇぇぇぇぇっ！ソーたぁぁぁぁん！」

『たん』付けはお止めになってください！」

駒王学園内で魔王姉妹の追いかけっこが始まった

新と一誠は何かの拍子で学校を消さないで欲しいと密かに念じる

「あ、そうだ。ゼクスくん。丁度良かったから少し人目につかない場所で話をしないか？リアスちゃん達も一緒に。新は堕天使の女の子達と遊んでなさい。大事な話があるから」

「遊んでる暇はねぇよ。つーか、俺にも言えない話っつうのは――――」

「さて、善は急げだ」
総司は無理矢理サーゼクスとリアス、一誠を連れて何処かに行ってしまった
取り残された新はレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトに昼食をせがまれて買い出しに向かう羽目に……

比較的人目につかない空き教室にやって来た総司、サーゼクス、リアス、一誠
誰もいない事を確認してから教室の中に入り、総司は窓際に歩いていく
「総司さん。大事なお話とはやはり……新くんの『闇皇の鎧』についてですか？」
サーゼクスの言葉に総司は無言で肯定する
「そうだ。君達は私をどう思う？全ての魔族を滅ぼそうとする闇人の力を息子に宿させた――――この私を」
今の彼には茶目っ気など欠片もない
真剣な面持ちで一誠達に問う
「いや、あの……正直言ってまだ分かんないっす。新は今、俺達の……大事な仲間なんです。だから、総司さんの質問にはまだ答えられません」

「……新が闇人の力に溺れかけてもかい？嘗ては『闇皇の鎧』の力に呑まれかけた――――この私みたいに……」
「新は自分で言っていました。自分の道は自分で決めると。『闇皇の鎧』の事を知った時も、一切迷わずにそう言いました」
一誠の言葉に続き、リアスの言葉に総司はジッと2人を見る
「万が一、新が闇人の力に支配されかけても……俺達が引きずり出します。殴ってでも引きずり出してやりますよ！それじゃあダメですか？」
「ふふっ。君達に拾われて良かったよ。新は良いお友達を持った」
総司は優しい微笑みを見せてくれた
「リアスちゃん、兵藤くん。これからも息子を――――新をよろしく頼むよ」
「はい！」「お任せください」
話を終えた総司は扉を勢い良く開け放つ
「さ～て、悩みが消えたところで――――目一杯女子高生をナンパするぞ～♪」
「最低だなあんた！」
「新が彼を嫌がる理由が分かった気がするわ……」

引きこもりのビショップと朱乃の秘密

次の日の放課後
オカルト研究部メンバーは旧校舎1階の「開かずの教室」とされていた部屋の前に立っていた
聞くところによると、この部屋の中にもう1人の『僧侶(ビショップ)』がいるらしい
新や一誠、アーシアにとって今まで謎にされていた部員であり、新顔のゼノヴィア以外のメンバーは全員知っている
リアスからの話ではその能力が危険視され、現時点では扱いきれないから封印をするように上から言われていたらしい
だが、フェニックス家との一戦とコカビエルとの一戦で高評価を得たので解禁された
扉には『ＫＥＥＰ(キープ)　ＯＵＴ(アウト)!!』のテープが何重にも張られてあり、呪術的な刻印も刻まれていた
「ここにいるの。1日中ここに住んでいるのよ。一応深夜には術が解けて旧校舎内だけなら部屋から出ても良いのだけれど、中にいる子自身がそれを拒否しているの」
「つまり、引きこもりの『僧侶(ビショップ)』って訳か。だらしねぇな。女だったら裸にした上で説教

してやろうか」
新は頭を掻きながら堂々と服脱がし宣告をする
「ふふっ。新、その意気込みは叶わないわよ」
「……っ?」
新はリアスの言葉に疑問符を浮かべる
因みにこの引きこもり『僧侶(ビンショップ)』はパソコンを介して人間と契約を執り行っており、1番の稼ぎ頭だと言う
「さて、開けるわよ」
扉に刻まれていた刻印が消え、リアスが扉を開けた
その刹那――――
「イヤァァァ

出ましょう?』
『やですぅぅぅぅぅ!ここが良いですぅぅぅぅぅ!外に行きたくない!人に会いたくないいいいいっ!』
「重症過ぎねぇか!?」
完全に拒絶してる様な声に思わず突っ込みを入れる新
正体を確かめるべく、新は部屋の中に足を踏み入れる
中に入ってみると奥にリアスと朱乃がいて、更にその先に例の『僧侶(ビショップ)』がいた
赤い目をした金髪の美少女が床に力なく座り込んでいる姿を目撃した新だったが――
――その美少女を少し見た瞬間、口をワナワナと震わせた
「な、何だと……!?」
「おおっ!金髪の美少女!やったぁっ!『僧侶(ビショップ)』は金髪尽くしって事か!ヒャッホーッ!」
「一誠、お前の夢をぶっ壊す様な現実を突き付けてやる。こいつは男だ」
「……え?」
新が苦々しげに放った一言に一誠は固まった
そこでリアスと朱乃が言う
「新の言う通り、この子は紛れもない男の子よ」

「女装趣味があるのですよ」
「えええええええええええええええええええええええええっ!?」
「ヒィィィィィッ!ゴメンなさいゴメンなさぁぁぁぁい!」
一誠の絶叫と金髪美少女――――もとい金髪女装くんの絶叫が合わさった
一誠は頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ
彼にとってはあまりにも残酷な現実である
「こんな残酷な話があって良いものか……!?完全に美少女な姿なのに男だなんて……!チ○コがついているだなんてぇぇぇ……!」
「一誠、悔しいのは分かるが事実だ。こいつは男だし、チ○コもついている。俺も今この場で闇皇に変異して魔力弾をブチ当てた後、脳天に蹴りをくらわせてやりたいくらいムカついてるぜ」
新の手は冗談無しに殺気を宿させていた
「それにしても新。見ただけでこの子を男の子だと分かったわね。どうして?」
「俺ぐらいの男になれば、自然と気配で分かる様になるんすよ。あと決定的なのは胸が無かったから――――いでででででっ!小猫!背中をつねるな!」
「……新先輩は胸の有無で性別を調べるんですね。最低です」
新はいつの間にか入ってきた小猫に背中をつねられた

「いって～……だがよ、引きこもりのクセに女装って矛盾し過ぎてねぇか？誰に見せる為の女装なんだよ？」
「だ、だ、だ、だって、女の子の服の方が可愛いもん」
「可愛いもん、とか言うなぁぁぁぁぁ！クソッ！野郎のクセにいぃぃ！俺の夢を一瞬で散らしやがってえええええっ！俺はなぁ、俺はなぁ！アーシアとお前のダブル金髪美少女『僧侶（ビショップ）』を瞬間的にとはいえ夢見たんだぞ!?返せよぅ！俺の夢を返せよぅ！」
　泣き叫ぶ一誠に、新はポンと肩に手を置きながら言った
「人の夢と書いて『儚い』と読み、お前の夢と書いても『儚い』と読む」
「新ぁぁぁぁぁ！洒落になってねぇからぁぁぁぁぁ！つーか最後に余計な物を付けるなぁぁぁぁぁ！」
「と、と、と、ところで、この方は誰ですか？」
　女装くんがリアスに訊く
「あなたがここにいる間に増えた眷属よ。『兵士（ポーン）』の兵藤一誠と竜崎新、『騎士（ナイト）』のゼノヴィア、あなたと同じ『僧侶（ビショップ）』のアーシアよ」
　４人はよろしくと挨拶をするが、女装くんは怖がるだけだった
「お願いだから外に出ましょう？ね？もうあなたは封印されなくても良いのよ？」
「嫌ですぅぅぅぅ！僕に外の世界なんて無理なんだぁぁぁぁぁっ！怖い！お外怖い！

どうせ僕が出てっても迷惑をかけるだけだよぉぉぉぉっ！」

だんだん腹が立ってきたので、新は闇皇に姿を変えて口をガキンガキンッと開閉させ始めた

「クォラ～。悪い子はいねぇが～」

「えっ？ぼ、僕と同じ吸血鬼（ヴァンパイア）？」

「お外に出ねぇ悪い子は～頭から喰い千切ったろかぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ヒィィィィィッ！同じ吸血鬼（ヴァンパイア）なのに怖いいいいいっ！」

「あと、俺は吸血鬼（ヴァンパイア）じゃねぇ～。間違えたので頭から喰い千切ったらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「イヤァァァ

「その子は興奮すると、視界に映した全ての物体の時間を一定の間停止する事が出来る神器（セイクリッド・ギア）を持ってるの。でも、その子自身は神器（セイクリッド・ギア）を制御出来ないから、今まで封印されていたのよ。私は高い滅びの魔力のお陰で、新は悪魔にとって規格外の力である『闇皇（やみおう）の鎧』を宿しているから効かなかったみたいね」

「時間停止の神器（セイクリッド・ギア）？それかなりチートじゃねぇか……こいつはいったい何者なんだよ？」

「この子はギャスパー・ヴラディ。私の眷属『僧侶（ビショップ）』。一応、駒王学園の1年生なの。――――そして、転生前は人間と吸血鬼（ヴァンパイア）のハーフよ」

――――

「『停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）』？」

一誠の問いにリアスが頷く

「そう。それがギャスパーの持っている神器（セイクリッド・ギア）の名前。とても強力なの」

「さっきも言ったけどよ、やっぱ時間を停める能力ってチート過ぎねぇか？」

「あら。イッセーの倍増の力と白龍皇の半減の力、それに新の『闇皇の鎧』だって反則級の力なのよ？」

「確かにそうだ。コカビエル戦の時に進化した力だっけ？アレでコカビエルをボコボコにしちまったもん」
「その上、あんなに強い力がまだ3つも眠ってるらしいじゃないか。はっきり言ってしまうと、新くんは現時点で僕達眷属の中でも最強だと思うよ」
進化した力とは『進化する昇格《エボルシオン・プロモーション》』の事
それにより『騎士（ナイト）』の能力である速度に特化した『闇皇（アーク・カイザー）の神速槍騎士（ジェットスピア・ナイト）』と言う新しい形態を手に入れ、コカビエルを圧倒した
更に言ってしまえば、新の『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』には全部で4つの進化形態が存在するらしい
この力も、ギャスパーの神器（セイクリッド・ギア）と大差が無い反則級の力である
「話を戻させてもらうが、リアス部長はよく時間停止なんて強力な神器（セイクリッド・ギア）を持った奴を下僕に出来たよな？」
「それもそうだな。しかも、駒1つの消費だけで済んでる訳だし」
新と一誠の言葉にリアスは手元に1冊の本を出現させ、ペラペラとページを捲る
「『変異の駒（ミューテーション・ピース）』よ」
「「ミューテーション・ピース？」」
疑問の声をハモらせた新と一誠に、祐斗が『変異の駒（ミューテーション・ピース）』の説明を始める

「通常の『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』とは違い、明らかに駒を複数使うであろう転生体が、1つで済んでしまったりする特異な現象を起こす駒の事だよ」
「部長はその駒を有していたのです」
　朱乃も説明に参加し、祐斗が更に続ける
「だいたい上位悪魔の10人に1人は1つぐらい持っているよ。『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』のシステムを作り出した時に生まれたイレギュラー、バグの類らしんだけど、それも一興としてそのままにしたらしいんだ。ギャスパーくんはその駒を使った1人なんだよ」
「つまり、普通とは違うレアな駒をこいつに使ったって訳か」
「そうよ。それに、新に使った『兵士（ポーン）』の駒も『変異の駒（ミュータンション・ピース）』よ」
「えっ!?マジで!?」
　再び新と一誠の声がハモった
「私は運良く2つ持っていたのよ。1つはギャスパーに使用した『僧侶（ビショップ）』。そしてもう1つが『兵士（ポーン）』。以前あなたに渡した『兵士（ポーン）』の駒で、全ての『変異の駒（ミュータンション・ピース）』を使用したわ」
「俺にもその『変異の駒』が入ってんのか……。しかもバグの類……何か得した気分だぜ」
　新はニヒルな笑みを浮かべた

「話を戻すけど、彼は類希(たぐいまれ)な才能の持ち主で、無意識の内に神器(セイクリッド・ギア)の力が高まっていくみたいなの。そのせいか、日々力が増していってるわ。――――上の話では、将来的に『禁手(バランス・ブレイカー)』へ至る可能性もあるという話よ」

ただでさえ危険な時間停止の神器(セイクリッド・ギア)

その持ち主が『禁手(バランス・ブレイカー)』になれば、かなりの危険を伴う事になる

「そう、危うい状態なの。けれど、私の評価が認められたため、今ならギャスパーを制御出来るかもしれないと判断されたそうよ。私がイッセーと祐斗を『禁手(バランス・ブレイカー)』に至らせ、そして新も未知の進化に遂げさせたと上の人達は評価したのでしょうね」

一誠は未完成とは言え、『禁手(バランス・ブレイカー)』を発現、新は『闇皇の神速槍騎士(アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト)』でコカビエルを倒した

それによって、リアスの評価がグンと上がった故(ゆえ)の褒美とも言えよう

「能力的には朱乃に次いで2番目なんじゃないかしら。ハーフとはいえ、由緒正しい吸血鬼の家柄だし、強力な神器(セイクリッド・ギア)も人間としての部分で手に入れている。吸血鬼(ヴァンパイア)の能力も有しているし、人間の魔法使いが扱える魔術にも秀でているわ。とてもじゃないけど、本来『僧侶(ビショップ)』の駒1つで済みそうにないわね」

「へ～。そこまでスゲェ奴なのか、この引きこもり吸血鬼(ヴァンパイア)は」

「ほら走れ。デイウォーカーなら日中でも走れる筈だよ」
「ヒィィィィッ！デュランダルを振り回しながら追いかけてこないでぇぇぇぇぇッ！」
「……ギャーくん、ニンニクを食べれば健康になれる」
「いやぁぁぁぁん！小猫ちゃんが僕をいじめるぅぅぅ！」
夕日が差し掛かる旧校舎近くでゼノヴィアがデュランダルを振り回しながら、小猫がニンニクを持ちながらギャスパーを追いかけていた
因みに”デイウォーカー”とは、日中でも活動出来る特殊なヴァンパイアらしい
リアスから教育係を任されたのは新、一誠、ゼノヴィア、小猫の４人なのだが……
「ハハハハハッ！やれやれぇっ！小猫、ゼノヴィア！もっともっといじめてやれぇっ！」
新だけは高みの見物をしながら大爆笑していた
そこへ誰かが近づいてくる気配を察知し、後ろを振り向く
「よー、闇皇（やみおう）の蝙蝠。へぇ。魔王眷属の悪魔さん方はここで集まってお遊戯してる訳か」
「あんたはアザゼル……ってか、浴衣で来るとか飄々としてやがるな」
新は肩を竦めながら言う
「おっ？警戒しねぇのか？俺、一応堕天使の総督だぜ？」

「あんたからは殺気を感じねぇから、警戒する必要がない。それにサーゼクス様が言ってたんだよ。あんたは戦争好きじゃなくて、ただ神器（セイクリッド・ギア）所有者を集めているだけだと。正直、戦争よりそっちの方が平和だから、そうしといてくれるとありがたい。戦争中だとセッ○ス出来ねぇからな」

そこまで言い張った新に、アザゼルは高らかな笑い声を上げた

「ハハハハハッ！お前面白ぇ奴だな！堕天使のボスが現れたら誰だって警戒するっつうのによ！」

「これでも俺はバウンティハンター時代に鍛えまくってんだよ」

「みてぇだな。お前も『禁手（バランス・ブレイカー）』とは違う力に単独で覚醒させやがったぐれぇだし」

「白龍皇（はくりゅうこう）からでも聞いたのか？」

「ああ。神器（セイクリッド・ギア）じゃねぇのに『禁手（バランス・ブレイカー）』みたいな進化を遂げた奴は今まで見た事ねぇからよ。今度会った時にでも、その姿を見せてくれや」

そう言って、アザゼルは一誠達の方へと歩いていった

その後、アザゼルを目撃した一誠達は警戒心剥き出しで対峙したらしい

数日経った休日
新と一誠はとある場所に来ていた、と言うか朱乃に呼び出された。一誠だけに用事があった筈なのに、新にも来て欲しいと言われた
町の外れを進んでいくと石段が見えてくる
更にその先に視線を向けると神社があった
「いらっしゃい、新さん、イッセーくん」
「あれ、朱乃っ？」
そこには巫女装束を着た朱乃が立っていた
２人は石段を上がっていき、先導する朱乃は歩みを止めずに話してくる
「ゴメンなさいね。急に呼び出してしまって」
「あ、いえ。俺もやる仕事がなくて暇だったので」
「つーか朱乃。悪魔の俺達が神社に入って大丈夫なのか？」
「ここは大丈夫ですわ。裏で特別な約定が執り行われていて、悪魔でも入る事が出来ます」
そう言って朱乃は鳥居を堂々と潜る
新と一誠は慎重な様子で潜るが、何も問題は起こらなかった
「朱乃はここに住んでるのか？」

「ええ、先代の神主が亡くなり、無人になったこの神社をリアスが私の為に確保してくれたのです」
「彼が赤龍帝ですか？」
突然発せられた第三者の声
２人がその方向へ振り向くと、豪華な白いローブを着た青年の姿を視界に捉えた
その青年の頭の上には金色の輪が漂っていた
「初めまして赤龍帝、兵藤一誠くん。私はミカエル。天使の長をしております。なるほど、このオーラの質、まさにドライグですね。懐かしい限りです」
まさかまさかの天使側のトップが来ていた……

「お茶ですわ」
「あ、サンキュー。ズズ～ッ……あ～。結構なお手前で」
一誠とミカエルが神社の本殿で大事な話をしている間、新は朱乃が生活している境内の家に上がってお茶を味わっていた
「しかし、どうにも解せねぇな。天使側のトップが一誠に何の用で来たんだ？」

「なんでも、龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しの聖剣『アスカロン』を渡しに来たと聞いていますわ」
「聖剣？聖剣は悪魔にとって苦手な武器だろ。それに龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しって、一誠が触っても大丈夫なのか？」
「ご心配なく。特殊儀礼を施しているので、悪魔のイッセーくんでもドラゴンの力があれば扱えますわ。正確にはイッセーくんのブーステッド・ギアに同化させると言った感じらしいです」
新は更に話を聞いていく
今度の会談は三大勢力が手を取り合う大きな機会らしく、このまま小規模ながらも争いが続けば間違いなく三大勢力は滅び、闇人（やみびと）が真っ先に冥界、天界、人間界を支配するであろうと言う事を考えた上での執り行い
簡単に言ってしまえば、天使側から悪魔側へのプレゼントと言う事である
「和平を結ぶ為の下準備ってヤツか。まぁ、俺は平和に賛成だから良いけどな。セッ○スし放題♪」
「うふふ。新さんらしいですわね」
話が弾む中、新は以前から心の奥底で引っ掛かっている事を思い返した
コカビエル事件の時――――神代剣護（かみしろけんご）に瀕死の一撃を食らわされ、痛みに耐えていた時に聞いた『バラキエルの力を宿す者』について……

「朱乃。1つ聞いても良いか？コカビエル事件の時、神代剣護が言っていた『バラキエルの力を宿す者』って言葉。朱乃はもしかしたら――――」
「……そうよ。元々私は堕天使の幹部バラキエルと人間との間に生まれた者です」
表情を曇らせた朱乃、彼女の正体は堕天使と人間のハーフだった
朱乃は更に自分の出生について話していく
「母は、この国のとある神社の娘でした。ある日、傷つき倒れていた堕天使の幹部であるバラキエルを助け、その時の縁で私を身に宿したと聞きます」
複雑な事情を聞く新を前に、朱乃は背中から翼を広げた
片方は悪魔の、そしてもう片方は堕天使特有の黒い翼だった
「汚れた翼……。悪魔の翼と堕天使の翼、私はその両方を持っています。この羽が嫌で、私はリアスと出会い、悪魔となったの。――――でも、生まれたのは堕天使と悪魔の羽、両方を持ったもっとおぞましい生き物。ふふふ、汚れた血を身に宿す私にはお似合いかもしれません」
自嘲する朱乃の姿を新は真剣に見続ける
「……それを知った新さんはどう感じます？堕天使は嫌いよね？この町を破壊しようとした堕天使に良い思いを持つ筈が――――」
「言いたい事はそれだけか？」

朱乃が言い終わる前に新が割って入ってきた
「確かにこの町を破壊しようとした堕天使は嫌いだ。だが、それはレイナーレ達や朱乃じゃなくてコカビエルだ。何で朱乃を嫌う必要がある？」
「……えっ？」
新の言葉に朱乃の目が潤みを含み、更に新は淡々と言い続ける
「朱乃が堕天使と人間のハーフだろうと何だろうと、俺は出生だけで差別なんかしねぇよ。ってか、する必要がねぇし。朱乃は朱乃なんだからそのままで良いんだよ。昔は敵だったレイナーレ達も、今じゃ立派な仕事仲間になってる。俺は堕天使だからって理由だけで女を嫌うなんて事はしねぇよ。それに朱乃の事は好きだし」
「――――っ！」
朱乃は驚きの表情となった
「朱乃はオカルト研究部の副部長で俺達の仲間。その上、良いおっぱいと乳首もしている。レイナーレ達より上かもしれねぇ良い体をな。そんな良い女達を見捨てたりなんかしねぇ。だから、これ以上自分を卑下するのはやめてくれ」
朱乃の顔が赤くなると同時に、目から涙が溢れてくる
「……殺し文句、言われちゃいましたわね。……そんな事言われたら……本当の本当に本気になっちゃうじゃないの……」

「んっ？どうした朱乃？急に俯いて――――――ホゲッ！」
朱乃は感極まり、抱き着く形で新を押し倒した
「新さんは……私みたいな女性でも好きだと言ってくれるんですか？」
「”でも”とか言うな。朱乃だから好きなんだよ」
「……嬉しい！新さん――――――いえ、新！」
朱乃は一層強く新を抱き締める
「２人っきりの時だけ、新って呼んでも良いですか？」
「良いけどさ……俺、かなりの浮気性だぜ？過去に何人もの女と――――――レイナーレ達ともセッ○スしたんだ。それでも良いのか？」
「構いません……それでも私は……んっ……」
朱乃の唇が新の唇と合わさった
そこから朱乃は新の口内に舌を潜り込ませ、激しく絡ませる
「んちゅ……ちゅぱ、はむっ……んんっ……れろぉ、ちゅう……ちゅるっ」
「んっ、くちゅ……ちゅぷ……ぱぁっ。はむっ……ちゅむ……ちゅうううっ……」
互いに唇を激しく交わし合い、離れた唇から唾の糸が作られる
「はぁ……はぁ……俺、何人も女を惚れさせたけどさ、俺自身から惚れたのは初めてだ」
「……いつから、私に？」

「リアスから聖剣計画の話を聞いて、俺達バウンティハンターも聖剣計画の奴らと同じなんじゃないかって悩んでた時だ。朱乃は俺を励ましてくれたろ？そん時から、”この女だけは誰にも渡したくねぇ”って心の底から思ったんだ」
「うふふ。新さんにも初めてがあったんですね」
「言ってくれるじゃねぇか。このぉっ」
新は朱乃を押し倒し、巫女装束をはだけさせる
プルンッと朱乃の乳房が顔を出し、ピンク色の乳首も露出した
晒け出された朱乃の豊満な乳房を、新は強弱をつけながら揉みしだく
「はぁんっ……んっ、ぁんっ……んんっ……！新さんの、手つきぃ……凄くいやらしいですわぁ……。どんどんっ、私のおっぱいと体を……蹂躙してますぅ……」
「朱乃のおっぱいを揉んでると、何かスゲェ興奮してくるんだよな……もっとこの体を、朱乃を支配してやりたいって欲望が底無しに湧いてきやがる」
「うふふ。嬉しいですわ。でも……今日はお預けかもしれません。イッセーくんが戻ってきちゃいますし……私の処女は、誰にも邪魔されない場所で新さんにあげたいですから……」
「――――そうだな。極上のお楽しみは熟成すればする程美味いだろうし」
新は朱乃の隆起した乳首に軽くキスをする

「ぁんっ。おっぱいの先にキスだなんて……新さんは本当にエッチがお上手ですわね」
「ありがとよ、朱乃。お前の処女はいつか頂くぜ。セッ○スは激しくされるのと優しくされるの、どっちが好みだ？」
「うふふ。私はSでもMでもいけますわよ？」
それを聞いた新は朱乃との性交がますます楽しみとなった直後――――背中から浴びせられるプレッシャーに目を見開き、徐々に震えが増していく
あの時……プールの時間、ゼノヴィアの体を弄り回していた時と同じ感覚が背中を這いずり回る……
「本当に底無しの性欲ね、新？」
後ろから腹を貫かれそうな底冷えさせられる声に新は振り向けず、襟首を強く掴まれ朱乃から引き離される
紅髪（べにがみ）を持つ『王（キング）』――――リアス・グレモリーのご登場だった……
「リ、リアス部長……」
「ミカエルとの会談は終わったのかしら？」
「はい……。終わりましたでございます……。一誠はミカエルからアスカロンを貰って帰りました……」
「なら、もうここに用は無いわね！帰るわよ！」

踵を返してズカズカとその場を立ち去るリアス
新は「すまん、朱乃」と一言謝ってからそそくさと立ち去っていった
「……くすっ♪もう、リアスったら。早く素直になれば良いのに」

神社の石段を下りていくリアスの足取りは早く、しかも怒りを孕んでいる様だった
先程は彼女の凄まじい気迫に押されてしまい、何も出来なかった新は何とか宥めようと頭の中を回転させる
すると、リアスが「ちょっと来て」と新の手を引っ張って森の中へ行く
木々に囲まれた深部に辿り着いた途端、新の手を放して振り返る
さっきまでの気迫とは一転、暗い表情になっていた……
「……ねぇ、新」
「な、何だ？」
「朱乃は……朱乃なのよね」
「え？あぁ」
「朱乃は副部長、けれど……『朱乃』なのよね。……じゃあ私は？」

直ぐに答えようとした新だが、その問いとリアスの表情を見て何かを察知
思い詰めた様な顔に新は思い切って自分が思っている事をハッキリ言い出した
「あんたはオカルト研究部の部長で、グレモリー眷属を率いる『王(キング)』――――リアス・グレモリーじゃないのか？」
「……そうね。私は部長だわ。……でも――――」
「それだけじゃねぇ」
「……え？」
「普段は凛々しく、厳しく気丈に振る舞っているが……実は人一倍優しくて自分の眷属を大切に思っている。その一方で凄く繊細、誰かが支えてやらないと折れてしまう……この枝と同じ様にな」
新は1本の木から生えている小枝を握力だけでパキッと折る
折れた枝を地に落とし、リアスの肩を掴む
「朱乃が『朱乃』であると同じ様に、リアスも『リアス』だ。俺はそう思っている」
「……っ！」
「何かあるなら、何かあったなら遠慮しないで言え。頼れ。そうしなきゃまた泣きを見ちまうぞ？」
新の口から出された言葉にリアスは思わず眼を潤ませ、直ぐに隠すように目元を手で

拭う
「……本当に新ってストレートに言ってくれるわよね」
「俺はいつだって正直さ。言いたい事は言う、言わずに後悔するより言って後悔する方だ。エロに関してもな」
「ふふっ、最後の一言は余計じゃない？でも……お陰で少し気が楽になったわ。ありがとう。さあ、早く戻って三大勢力の会談に備えましょう」
リアスはいつもの笑みを取り戻し、駒王学園への足取りを早めようとした矢先――
――彼女が振り返って言う
「新、１つお願いがあるのだけれど良いかしら？」
「ん、何だ？」
「これからは私の事――――リアスって呼んでもらえる？」
「良いのか？」
「ええ、良いわ」
「じゃあ、改めて宜しくな――――リアス」
リアスは軽く会釈してから再び駒王学園への足取りを早め、新もその後を追っていった
『……朱乃が彼に惹かれた理由が分かった気がするわ。相手が誰であろうと差別しない

で、自分が思った事を真っ直ぐ正直に伝えてくれる……。それが彼にしか無い魅力なのかしらね』

三大勢力会談

「――――さて、行くわよ」

部室に集まったオカルト研究部員はリアスの言葉に頷く

今日は三大勢力が集まって会議を行う日

会談は駒王学園の新校舎にある職員会議室で行う

既に各陣営のトップ達は新校舎の休憩室で待機しているらしい

学園も強力な結界に囲まれているので誰も中へ入れなくなり、会談が終わるまで外には出られない

新はポリポリと頭を掻き、一誠は協議が決裂したりしないかと気が気でなかった

『ぶ、部長！・み、皆さぁぁぁぁぁぁん！』

部室に置かれた段ボールから聞こえてくる声

その声の主は引きこもりヘタレヴァンパイアことギャスパーである

時間停止の神器（セイクリッド・ギア）を未だに扱いきれないギャスパーが何らかのショックで邪魔をしたら大変な事になってしまいかねない

そんな訳で、彼は留守番をする事になった

「ギャスパー、おとなしくしていろよ？部室に俺の携帯ゲーム機置いていくから。それで遊んでいて良いし、お菓子もあるから食べても良い。紙袋も置いていくから寂しくなったら存分にかぶれ」
「は、はい、イッセー先輩……」
「よし」と一誠は頷いて部室を最後に出た

「失礼します」
リアスが会議室の扉をノックしてから入り、新達も後に続く
眼前には豪華なテーブルがあり、それを囲む様に各陣営のトップ達が座っていた
悪魔側にはサーゼクス、レヴィアタン、給仕係としてグレイフィア
天使側はミカエルと女性天使
堕天使側には黒い翼を１２枚生やしたアザゼルと『白い龍（バニシング・ドラゴン）』のヴァーリ
大事な会議だけあって、アザゼルやレヴィアタン、サーゼクスは皆装飾が施された衣装を着ていた
「私の妹と、その眷属だ」

サーゼクスが他の陣営に紹介する
コカビエル襲撃についてミカエルは礼を言ったが、アザゼルは「悪かったな、俺のところのコカビエルが迷惑をかけた」と、あまり悪びれた様子を見せなかった
「そこの席に座りなさい」
サーゼクスの指示を受け、壁側に設置された椅子に向かう
その席の1つには既にソーナ会長が座っていた
その隣にリアスが座り、その横に新、朱乃、祐斗、一誠、アーシア、ゼノヴィア、小猫と順番に座った
「全員が揃ったところで会談の前提条件を1つ。ここにいる者達は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している」
ソーナ会長は事前にリアスか姉のセラフォルー・レヴィアタンから知らされたのだろう
特に驚いてる様子はなかった
普段通りにしているグレイフィアも知っていたらしい
「では、それを認知しているとして、話を進める」
サーゼクスの一言で三大勢力の会談が始まった

「と言う様に我々天使は――――――」
「そうだな、その方が良いかもしれない。このままでは確実に三勢力とも滅びの道を――――――」
会談が進むにつれて、新の眠気が増進されていく
欠伸を堪えるものの、目は若干閉じかけていた
そして眠気に耐えきれなくなり、普通の人間には分からない様にうたた寝をする
途中でリアスとソーナ会長、朱乃が立ち上がり、先日のコカビエル戦での一部始終を各陣営に話した
そこで新の『闇皇(やみおう)の鎧』についての話が出てきた
神器(セイクリッド・ギア)じゃない未知なる力の覚醒や闇人(やみびと)の関わり
多くが三大勢力に大きな影響を及ぼすモノばかりだった
「――――以上が、私、リアス・グレモリーと、その眷属悪魔が関与した事件の報告です」
「ご苦労、座ってくれたまえ」
「ありがとう、リアスちゃん☆」
サーゼクスの一言でリアスは着席

セラフォルー・レヴィアタンもリアスにウインクを送った
「ＺＺＺ……ＺＺＺ……」
「……あの、新くん？」
「マジかよこいつ。三大勢力のトップを眼前にしておきながら爆睡してやがる」
「もう、この子は……新、起きなさい！」
バシンッ！
「いでぇっ！っ？あれっ？混浴露天は？美女美少女の裸は何処に消えた？」
どうやら新は爆睡中に、美女美少女達と混浴露天風呂に入ってる夢を見ていたらしい
新の非常識ぶりと夢の内容にリアス達とミカエルは呆れ、サーゼクスとセラフォルーは苦笑し、アザゼルは爆笑していた
「何だよ、夢だったのか……」
「夢だったのか、じゃないでしょ！会談中に寝るなんて、主の私に恥をかかせないでちょうだい！」
「いや～、わりぃわりぃ。どうも俺はこう言った堅苦しい空気が苦手で、つい寝ちまった。で、俺に宿ってる『闇皇（やみおう）の鎧』について話を聞きたいのか？」
「あなた今寝てたんじゃなかったの？どうして会談の内容を知ってるのよ？」
「俺は寝ながらでも会話内容を頭に残す事が出来るんだ。どうしても眠い時には必ずこ

の方法を使っている。スゲェだろ？」
「得意気に話すくらいなら、最初から寝ないで会談を聞いていなさい！」
「眠かったし、めんどくさいから嫌だ」
新の非常識＆傍若無人ぶりにリアスは掌（てのひら）に魔力を集中させ始めた
「リアス、新くんへのお説教はその辺にしておきなさい」
「……すみません、お兄様」
リアスが渋々座ると、サーゼクスは新に話を振り始める
「さて、新くん。今君が寝ながら聞いていた通り、君の体内に宿る『闇皇（やみおう）の鎧』についての話が出た。そこで覚醒した力の事と、君自身の今後について聞かせてもらえないかな？」
「……っ？覚醒した力について聞いてくるのは分かりますが、何故俺の今後について聞いてきたんですか？」
サーゼクスの言葉に疑問を浮かべる新
再びサーゼクスが口を開き、ミカエルとアザゼルも話に参加してくる
「リアスから話を聞いてみたが、やはり君の『闇皇（やみおう）の鎧』は規格外過ぎると思うんだ」
「神器（セイクリッド・ギア）でもねぇのに神器（セイクリッド・ギア）みてぇに体内に潜んだり、『禁手（バランス・ブレイカー）』みてぇな規格外の力を得たりと、色々分からねぇ事だらけだ。何故そんな力を得たのか、そして『闇皇の

鎧』を宿してるお前はこれからどうしたいかって事を、お前の口から聞いておきたいと意見が一致したんだ」

「出来る限り話せる事だけで結構です。不躾ながら、お聞かせ願えますか？」

各陣営トップ３人の提案に、新は話せる範囲で話す事にした

「まず『闇皇(やみおう)の鎧』が覚醒したのは、恐らく聖と魔のパワーを司る神と魔王がいなくなってしまったからだと思います。俺が考えるに、神器(セイクリッド・ギア)の『禁手(バランス・ブレイカー)』も神と魔王が不在になったからこそ起こせるイレギュラー要素ですよね？『闇皇の鎧』の覚醒も、それと似た様な現象じゃないかと。以前のコカビエル戦で遭遇した神代剣護(かみしろけんご)。奴も所持していた聖剣を、闇人(やみびと)に邪聖剣(じゃせいけん)と言う全く別の武器に改造して貰っていました。聖なる力と邪悪な力の融合、これも神と魔王が不在の世界だから起こせた産物だと考えています」

新の説明にサーゼクスとミカエルは複雑そうな表情になり、アザゼルは興味津々な様子となった

「それと俺の今後について話を聞きたいと仰ってましたよね？単刀直入に言ってしまえば、闇人(やみびと)側に入る気は毛頭ありません。今の俺はリアス部長――――いえ、リアス・グレモリー様の下僕であり、副業としてバウンティハンターも行っています。万が一眷属を辞めてしまう事になっても、副業が本業に戻るだけです」

「新くんは上級悪魔になろうとは思わないのかい？」
「思いませんね。なったらなったで色々とダルそうだし、これと言った目標は無いので、バウンティハンターとして生涯を終えるのも悪くありません。要は自分が後悔しない生き方をします」
「クックックッ。面白い奴だな。下級悪魔なら誰もが目指す道を”ダルい”の一言で一蹴するとはよ。話をいきなり変えちまう様で悪いが、お前んとこに俺の部下が住んでるそうじゃねぇか」
言ってる事は理解出来た
アザゼルはレイナーレ達の事を言っている
レイナーレは1度一誠を殺し、アザゼルに取り入る為にアーシアを騙して殺そうとした――――――だが……
「最終的には闇人（やみびと）の村上って野郎に裏切られて、アーシアは村上に殺され悪魔に転生しちまった。けど、俺達がいなかったらレイナーレ達も殺され、アーシアは闇人に無理矢理転生させられていただろう。ある意味、レイナーレ達も被害者じゃねぇかと思ってる。個人的にだけどな。一誠はやっぱレイナーレの事を許せねぇか？」
「そりゃあ……1度殺されたから恨みは無いって言えば嘘だよ。けど、今は新がいるからあいつらも変わってきている。何より、レイナーレ達をどうするかは新が決めた事だ

から、俺は何も言わないよ」
　新は「そうだったな」と小さく微笑み、アーシアに聞く
「アーシアはどうだ？悪魔になった事に不満はあるのか？」
「いいえ、そんな事ありません。イッセーさんと新さんがいたから、私は今こうして大切な人達に囲まれています。それに憧れのミカエル様にお会い出来たのですから光栄です！」
　アーシアは手を組みながら、今の幸せを語る
　新は再び小さく微笑み、アザゼルの方に向き直す
　すると、アザゼルはこんな事を言い出した
「それじゃあよぉ、これからも――――あいつらをお前んとこにいさせてやってくれねぇか？闇人（やみびと）と結託したってのはチョイと処分モノだ。現状じゃあ処刑とまではいかねぇが、リストラは免れねぇよ」
「それはレイナーレ達を俺に任せると捉えて良いのか？堕天使総督さん」
「まぁ、そんなところだ」
「……分かった。以上で俺からの話を終えても良いすか？」
「構わないよ。今の話で、新くんはこれまで通りにいくと言う事になったが……異存は無いかな？」

「あぁ。良いんじゃねぇか？こいつは自分から何かやらかす様な奴には見えねぇし」
「私も警戒の必要性が無くなったので問題はありません」
「――――と言う訳で新くん。我々は君の行動に制限を付けたりはしないから、後はリアス達と話し合ってくれ。あと1つだけ、くれぐれも『はぐれ』にはならない様にして欲しい」
「釘を刺されなくても、なる気はありませんよ」
新はようやく座る事が出来た
話を本題に戻そうとしたが、突然セラフォルー・レヴィアタンが挙手してきた
「ねぇねぇねぇ！じゃあじゃあ☆もし新くんがリアスちゃんの下僕を辞めちゃったら、うちのソーナちゃんの下僕にさせても良い？なんなら、私の下僕でも良いよ☆」
「「「「なっ!?」」」」
セラフォルー・レヴィアタンの勧誘宣言に全員――――特にリアスとソーナ会長が驚いた
「お姉さま!?いきなり何を言い出すんですかッ！大事な会談の最中ですよッ!?」
「だってだって～、『変異の駒（ミューテーション・ピース）』だけど『兵士（ポーン）』の駒1つ消費でこのスペックだもん。欲しくなっちゃうよ☆それにエッチだけど見た目はカッコいいし、ソーナちゃんがいら

ないって言うなら私が貰っちゃおうかな～♪新くんはどう？」
「えっ!?ど、どうって言われても……あなたは仮にも四大魔王の1人だろ？そんな軽いノリで下僕の構成を決めても良いんすか？」
「良いの良いの☆あ、もしかして私にエッチな事したいの？それともソーナちゃんとも一緒にしたい？」
「いい加減にしてください！それにそう言う問題ではありませんッ！」
「そもそも！新は私の下僕です！ソーナにも、たとえセラフォルー様にも渡しません！」
リアス、ソーナ、セラフォルーがムッとした表情で火花を散らし合う
三大勢力の会談で何故か悪魔側のみで内戦が始まろうとしていた
「一誠。確か今日、俺達は三大勢力の話し合いでここに来たんだよな？何で悪魔陣営だけ険悪な感じになってんだ……？」
「それは多分、お前のせいだと思う……」
新は「やっぱり……？」と言う顔になった
「リアスお嬢様、ソーナお嬢様、セラフォルー様。お静かにお願い致します」
給仕係のグレイフィアがキッと目を鋭くして警告した
彼女から発せられる気迫に3人はビクッと震え――――
「「……すみません」」

すぐに席に座った

一誠達およびサーゼクスとミカエルは苦笑い、アザゼルは腹を抱えながら笑っていた

「……コホンッ。さて、アザゼル。そろそろ本題に戻ろう。先程の報告を受けて、堕天使総督の意見を聞きたい」

「先日の事件は我が堕天使中枢組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが、他の幹部及び総督の俺に黙って単独で起こしたものだ。奴の処理はそこにいる闇皇の蝙蝠と『白龍皇』が行った。その後、組織の軍法会議でコカビエルの刑は執行された。『地獄の最下層』で永久冷凍の刑だ。もう出てこられねぇよ。その辺りの説明はこの間転送した資料に全て書いてあっただろう?それが全部だ」

アザゼルの意見にミカエルが嘆息しながら言う

「説明としては最低の部類ですが――――あなた個人が我々と大きな事を起こしたくないと言う話は知っています。それに関しては本当なのでしょう?」

「あぁ、俺は戦争に興味なんて無い。コカビエルも俺の事をこき下ろしていたと、そちらの報告でもあったじゃないか」

確かにコカビエルは自分達堕天使のボスであるアザゼルをかなり悪く言っていた

戦争に消極的で神器にしか興味の無い者だと

「アザゼル、1つ訊きたいのだが、どうしてここ数十年神器の所有者をかき集めてい

る？最初は人間達を集めて戦力増強を図っているのかと思っていた。天界か我々に戦争をけしかけるのではないかとも予想していたのだが……」

「そう、いつまで経ってもあなたは戦争を仕掛けてはこなかった。『白い龍（バニシング・ドラゴン）』を手に入れたと聞いた時には、強い警戒心を抱いたものです」

「神器（セイクリッド・ギア）研究の為さ。なんなら、一部研究資料もお前達に送ろうか？って研究していたとしても、それで戦争なんざ仕掛けねぇよ。戦に今更興味なんて無いからな。俺は今の世界に充分満足している。部下に『人間界の政治にまで手を出すな』と強く言い渡しているぐらいだぜ？宗教にも介入するつもりはねぇし、悪魔の業界にも影響を及ぼせるつもりもねぇ。――――ったく、俺の信用は三竦みの中でも最低かよ」

「それはそうだ」

「そうですね」

「その通りね☆」

サーゼクス、ミカエル、セラフォルー・レヴィアタンの意見が一致した

アザゼルはよっぽど信用されていないらしい……

「チッ。神や先代ルシファーよりもマシかと思ったが、お前らもお前らで面倒臭い奴らだ。こそこそ研究するのもこれ以上性に合わねぇか。あー、分かったよ。――――なら、和平を結ぼうぜ。元々そのつもりもあったんだろう？天使も悪魔もよ？」

まさか和平を1番に提示したのはアザゼルだとは思わなかった事態に、皆が驚いた

アザゼルの一言に驚いていたミカエルが微笑む

「えぇ、私も悪魔側とグリゴリに和平を持ち掛ける予定でした。このままこれ以上三竦みの関係を続けていても、今の世界の害となり、闇人(やみびと)の思う壺にもなる。天使の長である私が言うのも何ですが――――戦争の大本である神と魔王は消滅したのですから」

「ハッ！あの堅物ミカエル様が言うようになったね。あれほど神、神、神様だったのにな」

「……失った物は大きい。けれど、いない物をいつまでも求めても仕方がありません。人間達を導くのが我らの使命。神の子らをこれからも見守り、先導していくのが1番大事なことだと私達セラフのメンバーの意見も一致しています」

「おいおい、今の発言は『堕ちる』ぜ？――――と思ったが、『システム』はお前が受け継いだんだったな。良い世界になったもんだ。俺らが『堕ちた』頃とはまるで違う」

「我らも同じだ。魔王がなくとも種を存続する為、悪魔も先に進まねばならない。戦争は我らも望むべきものではない。――――次の戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

「そう。次の戦争をすれば、三竦みは今度こそ共倒れ――――もしくは闇人(やみびと)に滅ぼされる。そして、人間界にも影響を大きく及ぼし世界は終わる。俺らは戦争をもう起こせない」

先程までふざけた調子だったアザゼルが一転
真剣な表情となっていた
「神がいない世界は間違いだと思うか？神がいない世界は衰退すると思うか？残念ながらそうじゃなかった。俺もお前達も今こうやって元気に生きている。――――神がいなくても世界は回るのさ」
アザゼルの言葉は新と一誠に感慨深いモノを与えた
「――――とまぁ、こんなところだな。さて、そろそろ俺達以外に、世界に影響及ぼしそうな奴らへ意見を訊こうか。無敵のドラゴン様にな。まずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」
アザゼルの問いに白龍皇（はくりゅうこう）ヴァーリは笑みながら答えた
「俺は強い奴と戦えれば、それで良い」
「戦闘好きか。傍迷惑な答えだな」
新の呟きにヴァーリはチラリと見た
「じゃあ赤龍帝（せきりゅうてい）。お前はどうだ？」
「えっ？えっと……俺は」
「一誠。今の話の内容、簡単に言えば――――戦争が起こればセッ○ス出来なくなるって事だ。勿論、将来ハーレム王になるとか言ってるお前もセッ○ス出来なくなる。

簡単な話だろ？」

新の重要点のみを絞った説明に一誠は激しく理解出来た

「――――ッ！・和平でひとつお願いします！・ええ！・平和ですよね！・平和が1番です！・ハーレム王になって可愛い女の子とエッチがしたいです！」

欲望をそのまま口にした一誠

新は思った通りの結果に大爆笑、リアス達は苦笑するしかなかった……

その後、真面目な話をしようとしたが――――その瞬間、時が停まった

『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人

「ようやく動ける様になったか、一誠」
「新？いったい何があったんだよ？」
新は一誠に現状を簡単に説明し始めた
話によれば、旧校舎にいるギャスパーが拉致され、無理矢理『禁手（バランス・ブレイカー）』めいた力を発動させられたらしい
周囲を見渡すと、動ける者と停まっている者に別れていた
サーゼクス、セラフォルー・レヴィアタン、グレイフィア、ミカエルとアザゼルは動いており、ヴァーリはアザゼルの命で先程外へ向かった
そして他で動けるのはリアスと新、一誠に祐斗、そしてゼノヴィア
後の部員は全員停められている
「イッセーは赤龍帝（せきりゅうてい）を宿す者、祐斗は禁手（バランス・ブレイカー）に至りイレギュラーな聖魔剣（せいまけん）を持っているから、ゼノヴィアは直前になってデュランダルを発動させたから無事ね。新が動けるのは、やっぱり『闇皇（やみおう）の鎧』を宿してるのと、覚醒した力があるからかしら？」
「それはともかく。部長、何があったんですか？」

「テロだよ」
一誠の質問に、リアスより先にアザゼルが言った
外を見ると魔術師みたいな連中が攻撃している光景が視界に飛び込む
外に行ったヴァーリが蹴散らすも、魔方陣の中から同じ様な魔術師の軍勢がどんどん出てくる
「ギャスパーはテロリストの武器にされている……。何処で私の下僕の情報を得たのかしら……。しかも、大事な会談をつけ狙う戦力にされるなんて……！これ程侮辱される行為も無いわっ！」
リアスは全身から紅色のオーラを迸らせながら怒りを露(あらわ)にする
「因みにこの校舎を取り囲んでいた堕天使、天使、悪魔の軍勢も全部停止させられているようだぜ。まったく、リアス・グレモリーの眷属は末恐ろしい限りだ」
「他人事みたいに言ってんじゃねぇよ。何とかならねぇのか？」
新の質問にアザゼルは首を横に振るだけだった
「無理だな、学園全体を囲う結界を解かないと俺達は外に出られない。だが、結界を解いたら人間界に被害が出るかも知れないだろ？」
「……確かに、下手に暴れても相手側の思う壺になっちまうだけだ。それなら暫く籠城して敵の親玉が出るのを待つしか無いって事か」

「と言うより、我々首脳陣は下調べ中で動けない。だが、まずテロリストの活動拠点となっている旧校舎からギャスパーくんを奪い返すのが目的となるね」

サーゼクスが言うと真っ先にリアスが名乗り出る

「お兄さま、私が行きますわ。ギャスパーは私の下僕です。責任を持って私が奪い返してきます」

「言うと思ったよ。妹の性格ぐらい把握している。しかし、旧校舎までどう行く？この新校舎の外は魔術師だらけだ。通常の転移も阻まれる」

サーゼクスの問いにリアスは「『キャスリング』を使います」と進言してきた

『キャスリング』とはチェスのルールの1つ、1手で『王（キング）』と『戦車（ルーク）』を同時に動かす技法である

つまり旧校舎に残っている未使用の『戦車（ルーク）』と自分の位置を入れ替え、旧校舎に向かうと言う算段だろう

しかし、相手はテロリストなので何を仕掛けてくるか分からない上に転移出来る定員はあと1人

誰がギャスパーの救出に向かうか決めあぐねていると――――一誠が挙手してきた

「サーゼクスさま、俺を行かせてください。ギャスパーは俺の大事な後輩です。俺も助けに行かせてください」

その後、一誠はアザゼルから神器（セイクリッド・ギア）の力を制御及び対価無しで禁手（バランス・ブレイク）化出来る腕輪を自分用とギャスパー用、合わせて2つ貰ってから転移の準備に入る

新は外の魔術師軍勢に1度眼を通してからアザゼルに訊く

「アザゼル。あのテロリスト共はいったい何者なんだ？」

新の質問にアザゼルは答えた

「『禍の団（カオス・ブリゲード）』だ」

聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる新と一誠を他所にアザゼルは更に続ける

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前からもうちの副総督シェムハザが不審な行為をする集団に目をつけていたのさ。そいつらは三大勢力の危険分子を集めているそうだ。中には禁手（バランス・ブレイカー）に至った神器（セイクリッド・ギア）持ちの人間も含まれている。『神滅具（ロンギヌス）』持ちも数人確認してるぜ」

「その者達の目的は？」

「破壊と混乱。単純だろう？この世界の平和が気に入らないテロリストだ。しかも最大級に性質（たち）が悪い。闇人といい勝負してやがる。更に言うと、組織の頭は『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』と『白い龍（バニシング・ドラゴン）』の他に強大で凶悪なドラゴンだよ」

アザゼルの話に一誠以外の全員が絶句した

「……そうか、彼が動いたのか。『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』オーフィス――――。神が恐れたドラ

ゴン……。この世界が出来上がった時から最強の座に君臨し続けている者」
「ヴァーリが言ってた不動の存在ってのは、そいつの事だったのか」
『そう、オーフィスが「禍の団（カオス・ブリゲード）」のトップです』
声と同時に会議室の床に魔方陣が展開される
見た事のない魔方陣だったが、サーゼクスは舌打ちをする
「そうか。そう来るわけか！今回の黒幕は――――グレイフィア、リアスとイッセーくんを早く飛ばせ！」
グレイフィアは一誠とリアスを隅に移動させ、小さな魔方陣を出す
「一誠、リアス！あのヘタレヴァンパイア――――ギャスパーを必ず取り戻して来いよ！」
「ああ、分かってる！」「新も気を付けて」
それぞれの一言の後に一誠とリアスは旧校舎に転送されていった
新は目の前の事態に備えて戦闘体勢を取る
会議室に現れた魔方陣を見て、サーゼクスは苦虫を噛み潰した様な表情をした
「――――レヴィアタンの魔方陣」
「レヴィアタン？レヴィアたん様はここにいるじゃねぇか」
「ヴァチカンの書物で見た事があるぞ。あれは旧魔王レヴィアタンの魔方陣だ」

ゼノヴィアがそう呟く
まだ魔王の血を引く者が残っていたと言う事だ
そして魔方陣から1人の女性が現れた
胸元が大きく開かれ、深いスリットも入ったドレスに身を包んでいる
新と一誠好みの女性だ
「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」
「先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン。これはどういう事だ？」
サーゼクスの問いにカテレア・レヴィアタンは挑戦的な笑みを浮かべて言う
「旧魔王派の者達は殆どが『禍の団（カオス・ブリゲード）』に協力する事に決めました」
なんと旧魔王派の一族がテロ、クーデターに賛同している様だ
「新旧魔王サイドの確執が本格的になった訳か。悪魔も大変だな」
アザゼルは他人事の様に笑う
普通はそんな余裕をかましている場合ではない
「カテレア、それは言葉通りと受け取って良いのだな？」
「サーゼクス、その通りです。今回のこの攻撃も我々が受け持っております」
「クーデターか……カテレア、何故だ？」
「サーゼクス、今日この会談のまさに逆の考えに至っただけです。神と先代魔王がいな

いのならば、この世界を変革すべきだと、私達はそう結論付けました」
　彼女を含めた旧魔王派は和平を認めず、神の不在を知った上でクーデターを起こしている
　しかも、平和とは真逆の考えも述べている
「オーフィスの野郎はそこまで未来を見ているのか？そうとは思えないんだがな」
　アザゼルの問いかけにカテレアは息を吐く
「彼は力の象徴としての、力が集結するための役を担うだけです。彼の力を借りて１度世界を滅ぼし、もう１度構築します。新世界を私達が取り仕切るのです」
　そこまで和平が嫌なのか？と新は腕を組みながらカテレアを見る
「……天使、堕天使、悪魔の反逆者が集まって自分達だけの世界、自分達が支配する新しい地球を欲した訳か。それのまとめ役が『ウロボロス』オーフィス」
　それって闇人（やみびと）の考えをそのままパクっただけじゃん……
　新はカテレアの、旧魔王派の考えが闇人（やみびと）と同じ事に嘆息した
「カテレアちゃん！どうしてこんな！」
　セラフォルーの叫びにカテレアは憎々しげな睨みを見せる
「セラフォルー、私から『レヴィアタン』の座を奪っておいて、よくもぬけぬけと！私は正統なるレヴィアタンの血を引いていたのです！私こそが魔王に相応しかった！」

「カテレアちゃん……。わ、私は！」
「セラフォルー、安心なさい。今日、この場であなたを殺して、私が魔王レヴィアタンを名乗ります。そして、オーフィスには新世界の神となってもらいます。彼は象徴であれば良いだけ。あとの『システム』と法、理念は私達が構築する。ミカエル、アザゼル、そしてサーゼクス。あなた達の時代は終えて――――いやんっ」
カテレアが話してる途中で急に矯声をあげた
何故かと言うと、論説してる間に気配を消した新がカテレアの背後に回り、彼女の胸元に両手を突っ込んで乳房を揉んでいたからである
これこそ新流の技、『驚愕！誰にも気づかれずに女性のおっぱいを揉みしだいていたの術！』である
この他にもまだまだ技があるが、どこまで登場するかは誰にも分からない
そんな事はさておき、新がカテレアの乳房を揉んでいる状況に全員が目を見開いていた
「なっ!?何をしているんですかッ！」
カテレアが顔を真っ赤にして魔力の弾を放つが、新は直前に回避してカテレアと対峙する
「悪いな。話が長くなりそうだし、あんたらの考えがくだらな過ぎるから強制的に終わ

らせた」
　カテレアは胸を押さえながら新を睨む
「あなたが『闇皇(やみおう)の鎧』の宿主ですか。噂に聞いた通りの破廉恥ぶりですね……。いきなり私の胸を揉むなんて、モラルと言うものが無いんですか？」
「ハハハッ！和平交渉の現場をブチ壊したテロリストさんから、そんな言葉が出てくるとはな」
　新は笑いながら膝を叩く
　その態度にカテレアの怒りが蓄積される
「それにさっきから話を聞いていれば、世界を1度壊すだの、その後でもう1度構築するだの、考え方がアホ過ぎて笑っちまうよ。オマケに組織のトップから力を借りるとか、あんたが今やらかそうとしてるのは世界の変革なんかじゃねぇ。いじめられっ子が親を連れてきて、いじめっ子に仕返しをしようとしてる様なモンだ。そんな簡単な事にも気づかないで力説してるあんたを見てると、抱き締めてやりたくなる程可哀想に思えてくるぜ」
　ドオオンッ！バキバキッ！
　カテレアの放った魔力の弾が新に直撃
　新はテーブルを巻き込みながら壁に激突し、壊れたテーブルの瓦礫に埋もれた

「新くん！」
「新！き、貴様ァッ！」
祐斗とゼノヴィアが叫び、激昂したゼノヴィアは再びデュランダルを空間から引きずり出す
カテレアは侮蔑の目で吐き捨てる
「たかが下級悪魔の分際で私に意見した報いです。もう少し礼儀と言う物を弁(わきま)えなさい」
「――――――ほらな。世界を壊すと言っておきながら、たった1人の悪魔さえ壊せてねぇ」
瓦礫の中から新が出てきた
しかも、彼の右腕には『闇皇(やみおう)の鎧』が展開されている
魔力の弾が直撃する瞬間、鎧の腕で攻撃を防いでいたのだろう
新は木屑を取り払いながら瓦礫を出た
「直撃を受けても平気だなんて……！やはりあなたは我々にとって危険因子の様ですね！」
「危険因子ぃ？それは平和な世界を壊そうとしてるお前らの方だろ。それに『レヴィアタン』の座を奪われたのは自分の実力不足だからじゃねぇの？ヒステリーも大概にしと

けって。そんなくだらねぇ事をしてる暇があったら、さっさとエロいドレスを脱いで、俺に乳首を見せてれば良いんだよ」
「……っ！どこまで私を愚弄するのですか……！その上、なんて破廉恥な言動を……！」
「ハーハッハッハッハッハッハッハッハ！」
突然アザゼルが腹を抱えながら、大声で笑い始めた
「闇皇（やみおう）の蝙蝠。お前は無神経っつうか、怖いもの知らずか？旧魔王派の乳を揉んだ挙げ句、服を脱いで乳首を見せてりゃ良いって……プククッ！面白すぎて腹が痛くなっちまうよ！」
「アザゼル……！あなたまで私を愚弄しますか……！」
激怒したカテレアから魔力のオーラが迸る
その直後に会議室の窓際全域が吹き飛んだ
突然の出来事に新達はおろか、カテレアも驚愕する
窓を破壊した張本人は宙に浮いていたのだが、そいつの正体に更に驚愕してしまう
「……っ！てめぇは――――『2代目キング』の!?」
「蛟大牙（みずちたいが）だ。はじめまして――――魔王、天使、堕天使の首領方」
そこにいたのは現闇人（やみびと）の王にして、重鎮組織『チェス』のトップ『2代目キング』こと蛟大牙だった……

「ほう。お前が封印された『初代キング』の息子って奴か。カテレアといい、次から次へとゾロゾロやって来やがって……お前らも世界を壊すとか言いに来たのか？」
「生憎、オレは父さんの様に力だけで支配をしようとは考えていない。力だけで築き上げた物は、いずれ力で崩壊する。三大勢力のトップを亡き者にし、各陣営の戦力と治安を瓦解させればそれで良い。無駄な戦いは……相手に破滅の隙を作ってしまうだけだ。父さんも人間を見くびっていたから封印された。同じ轍は2度と踏まない」
　大牙は当然の事を言うようにカテレアとは違う考えを述べる
「あなたは何者です？邪魔をする様なら、あなたから殺しますよ？」
「別に今は邪魔などしない。オレは今日、ただ闇皇と赤龍帝の力を確かめに来ただけだ」
「赤龍帝？一誠なら今はいねぇけど」と新が言うと、大牙は「そうなのか。ならば来るまで待とう」と残念そうな雰囲気で宙に漂う
　そこでアザゼルが問いかける
「はっ？今さっき俺達を殺すって言ってなかったか？」
「確かに言ったが、クーデターを起こされてる現状では些か気分が乗らない。やはり正統な死合いで戦い、勝利してこそ実力が証明される。疲弊したトップを討ち取ったところで何の価値にもならない」
　アザゼルの問いを否定し、今だけは邪魔しない事を宣言した『2代目キング』

　それを聞いたアザゼルはニヤケながらカテレアに言い放つ
「お前なんかよりも、そいつの方がマシな考えをしてやがるぜ」
「何ですって!?」
「丁度良い。せっかくだ『2代目キング』。暇潰しに俺と遊ばねぇか？赤龍帝をただ待つだけじゃ暇だろ？」
「……堕天使総督から戦いの誘いを受けるとは光栄だな。良いだろう」
　アザゼルが黒い翼を広げて飛び立とうとする
「闇皇の蝙蝠。本当は俺がやろうと思ってたが、カテレアはお前に任せるわ」
「そっちこそ期待しといてくれよ。すぐにあの女の裸を拝ませてやる」
「ハハッ！精々死ぬなよ！」
　アザゼルが破壊された窓から空中へ飛び立ち、『2代目キング』と激しい攻防戦を繰り広げ始めた
「待ちなさいアザゼル！私を無視するつもりですかッ！」
「おっと。あんたの相手は俺だぜ？それとも立ち向かう勇気が無いのか？」
　新はカテレアを挑発し、カテレアは再び魔力のオーラを迸らせる
「どうやら堕天使総督より先に、あなたを殺した方が良いみたいですね……」
「言ってな！あんたの乳首を拝ませてもらうぜ！旧魔王派のレヴィアタン様よぉっ！」

ギャスパー奪還作戦！

新校舎に残った新がカテレア・レヴィアタンと対峙している同時刻、一誠とリアスが転送されたのは部室だった

転送は成功したのだが、そこは予想外の奴に占拠されていた……

「やっほ～、赤龍帝とグレモリーのお姉さん♪」

「……っ？お前誰だ？」

そこにはお菓子のカプリンチョ（イチゴ味とクッキー味）を大量に持った少年が、椅子に縄でくくりつけられたギャスパーの隣にいた

「君とは初対面だったよね～？改めて自己紹介してあげるよ。ボクの名は神風。全ての闇人を束ねる重鎮組織『チェス』の１人で、『ビショップ』の称号を持ったメチャ強い少年だよ」

「ビ、『ビショップ』!?こんな子供が!?」

一誠は明らかに自分より年下に感じる神風を見て驚いた

神風の外見は下手すれば中学生くらいである

「闇人の神風。ライザーを圧倒した上、神代剣護に邪聖剣を渡した張本人……」

「うん、そだよ～？いやさ～、あのクソフェニックスは本当にザコ過ぎだよね。自分の力を過信して相手の力量も測れないとか。正直不死鳥の名を捨てて、さっさと灰になって風に流されて消えろって思っちゃう訳なの」

新と一誠が倒したライザーをザコ呼ばわりしながら、イチゴ味のカプリンチョをかじる

『禍の団（カオス・ブリゲード）』の女性魔術師達に囲まれているにもかかわらず、神風は余裕の表情を浮かべていた

「ぶ、部長！イ、イッセー先輩！」

「ギャスパー！良かったわ。無事だったのね」

「キヒヒッ。良かったね～君ぃ。グレモリーのお姉さんが心配してくれてるよ～？百合百合な展開にボクも興奮しちゃいそうだよ♪」

「残念だけど、そいつは男です」

ポトッ……

一誠の通告に神風は固まって食べ掛けのカプリンチョを落とした

「は……？え……？男？この子が……男？」

「誰だってそう思うよな。けど、そいつは女装趣味のある男だ。ちゃんとチ〇コも付いてる」

「バ、バカな……！嘘でしょ……!?こんな可愛い子の性別が男……!?この顔をした下半身にチ○コがあるの……!?そりゃ詐欺だよね!?完全な詐欺だよね!?」
神風は信じがたい事実を知らされ、指をあっちこっち差しながら慌てる
しかし、男である事は事実なので神風はガックリと肩を落とした
「ちぇっ……まぁ良いや。性別がどっちだろうと、この子を闇人（やみびと）に転生させちゃえば何の問題もナッシングになるからね」
「何だと!?てめぇ！まさかギャスパーを闇人（やみびと）に転生させる為に!?」
「そうだよ?『禍の団（カオス・ブリゲード）』より先に捕まえようと思ってたんだけどさ、ここに来たらこのザマ。更に君達も来たからレッツパーティタイムになりかけてるの」
周りにいる魔術師だけでなく、眼前にいる『ビショップ』神風も敵
逆に魔術師達の敵も一誠とリアスだけではなくなった
「いきなり現れて人の道具を横取りする気か！」
「悪魔め！私達の魔術でくたばりなさい！」
女性魔術師達が一斉に魔力の弾を神風に放つ
神風は直撃をくらい、爆煙が部屋一帯を包み込む
煙が晴れると、神風は傷1つ付かずに欠伸をしていた
「危ない危ない。カプリンチョが吹っ飛んじゃうところだったよ」

「マジか!?あれだけの攻撃を受けて無傷!?」
女性魔術師達も攻撃が効いていない事にたじろぐ
「魔術師かぁ……それも良いよねぇ♪良い声で啼いてくれそうだし」
そう言うと、神風の腹が裂けて獣の口みたいな形になった
腹部の口に生え揃っている牙が蠢き、不気味さと凶悪さを見せつける
「なっ！何なのあれは!?」
「化け物め！」
腹の口に生えている牙が触手の様に伸び、女性魔術師達に襲い掛かる
魔術師達は魔法を撃って応戦しようとするも、その全てを悉く弾き返される
なす術が無いまま『禍の団（カオス・ブリゲード）』の魔術師達は神風の触手牙に捕まり、両手を封じられた挙げ句吊るされる様な格好に
「キヒヒヒヒヒッ、魔術師お姉さん達の吊し上げ完成～♪さ・て・と、そこの赤龍帝（せきりゅうてい）」
「な、何だよ？」
突然呼ばれた一誠は警戒心を高めて攻撃体勢を取るが、神風は「そんなに警戒しないでよ」と前置きをしてからある提案を述べ始めた
「君さぁ、な～んか面白い技を持ってるらしいじゃん？聞いたよ。ザコ退治のついでと言っちゃなんだけど、ヤる？」

「は、何を？」
「ほら、あれだよ。ア・レ♪」
「アレって……。……っ！アレか！」
「……？イッセー、あなた何を――――」
「部長、ちょっと待っててください！」
何かを悟った一誠は籠手を出して自らの力を倍増させる
そしてその場を駆け出し、吊るされて身動きが取れない女魔術師達に次々とタッチしていく
触れた箇所に術式の紋様が浮かび上がり準備が整った
それを見たリアスは２人の狙いを察知、額に手を当てて嘆息した
「準備オッケ～かい？」
「勿論だ！くらえ！『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』ッ！」
ババババッ！
決めポーズしながら一誠が指を鳴らした瞬間、女魔術師達の衣装が全て弾け飛んだ
その際、服の下に閉じ込められていた豊満なおっぱいがぷるんぷるん揺れる
「「「きゃあああああああああああああっ！」」」
裸にされた女魔術師達は悲鳴を上げるが、両手を封じられているので隠そうにも隠せ

ない

一誠は女魔術師達の全裸祭りに鼻血を噴かして歓喜する

「うひょほおおぉぉぉ

本来主張している筈の乳首が乳輪の奥に引っ込んでいる事を……
罵倒を飛ばしていた女魔術師達は陥没乳首に気付かれた途端、更に恥じらいを見せて黙り込む
神風は新しいカプリンチョを舐めながら、一誠は興味津々に陥没乳首を見つめ続ける
「こ、こんな乳首がこの世に存在してたのか!?」
「キヒヒッ、知らないの～？陥没乳首ってのはコンプレックスとして見られがちだけど、男にとってはロマンの塊なんだよ～♪――――掘れるから」
「――――ッ！ほ、掘る……っ？」
「そっ♪指で優しくほじったり、爪でカリカリしたり――――ちゅーちゅー吸ったり♪」
神風が指をワシャワシャ動かしながら陥没乳首の素晴らしさを伝授、一誠はワナワナと震えて「そんなロマンがこのおっぱいに……!?」と固まっていた
震撼している一誠に神風は一言囁く
「――――今ならおっぱいが見放題触り放題吸い放題だよ？」
「……ッ!!」
神風の放った甘言に一誠の頭の中はおっぱいで埋め尽くされた……
今目の前には自分が夢見た桃源郷が広がっている……
そんな中で溢れる欲望を抑えられるだろうか……？

否、出来る筈も無い……

何故なら――――そこにおっぱいがあるから

「……？イッセー？」

「つ、遂に……遂に……俺の夢が叶うのだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「イッセー!?正気に戻りなさい！」

欲望（自分の夢）を爆発させた一誠は鼻の穴を広げたスケベ顔で女魔術師のおっぱいに向かって飛び込んだ

危険生物（イッセー）に狙われた女魔術師は「ひっ……」と軽く悲鳴を上げ、防ぐ事も逃げる事も出来ない状態に涙した

――『変態に犯される……っ』――

そう思った刹那――――飛び込んでくる一誠の顔面に神風のカカトがめり込む

ドガシャアアアアアアアアンッ！

神風にカウンターを食らわされた一誠は激しく吹っ飛び、机やら椅子やらを巻き込んで壁に激突した……

一方で神風は口元を大きく歪ませて哄笑する

「キャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！引っ掛かってやんのッ！ヴァカ

ヴァ～カッ!だ～れがそう簡単に夢見させると思ってんですか～?チョー笑えるんだけどッ!」
「イッテェ……!この野郎ぉぉぉぉ!何すんだ!?俺の……叶いかけた俺の夢を邪魔しやがってええええええっ!」
一誠は血涙を流しながら妨害を行(おこな)った神風に異議を唱えるも、神風は笑い流すだけだった
「キヒヒヒヒヒッ!お姉さん達のおっぱい見れただけでもありがたく思いなよ。世の中そんなに甘くないのさ!童貞の赤龍帝(せきりゅうてい)さん!」
「チクショオオオオオオッ!おっぱい仲間だと思ってたのにいいいいいいいいいい!」
泣き叫ぶ一誠に「そうじゃないでしょ」と頭を小突くリアス
神風はカプリンチョを舐めていたカプリンチョを食べ、ギャスパーの隣に位置付く
「この人達は君達にやらないよ?ボクが持って帰るから。勿論このハーフヴァンパイアも。時間停止の神器(セイクリッド・ギア)を持った闇人(やみびと)なんて滅多に見れないからね～」
神風はギャスパーの頬をペチペチ叩く
ギャスパーは途端に泣き出した
「僕は……死んだ方が良いんです。お願いです、部長、先輩。僕を殺してください……。

この眼のせいで、僕は誰とも仲良くなんて出来ないんです……。迷惑ばかりで……臆病者で……」

ギャスパーは涙をボロボロとこぼす

敵に拉致され、利用され、一誠達に迷惑かけたと思っているからなのだろう

そんなギャスパーの言葉をリアスは一蹴する

「バカな事を言わないで。私はあなたを見捨てないわよ？あなたを眷属に転生させた時、言ったわよね？生まれ変わった以上は私の為に生き、そして自分が満足出来る生き方も見つけなさい――――と」

リアスの優しい言葉にギャスパーは首を横に振った

「……見つけられなかっただけです。迷惑かけてまで僕は……生きる価値なんて……」

「あなたは私の下僕で眷属なの。私はそう簡単に見捨てない。やっとあなたを解放させる事が出来たのに！」

「そうだぞギャスパー！俺と部長はお前を見捨てないからな！」

一誠とリアスの発言を聞いて、神風は口に手を当てながら笑い始めた

「プククククッ……！キャハハハハハハッ！君達はさぁ、ホンッッッッッッッットにヴァカな連中だよねぇッ！力を制御出来ない奴なんか、利用されるだけの道具になっときゃ良いの！闇人（やみびと）に転生した方が幸せなんだよ！仲良しこよしで下僕を扱うと

か、マァジで受けるよ！キャハハハハハハッ！」
「て、てめぇ！」
　あまりの暴言に一誠は殴り掛かろうとしたが、リアスは一誠を手で制止する
「私は……自分の下僕を大切にするわ」
　リアスの冷静な返しに、神風はカプリンチョを噛み砕く
「へぇ……」
「ギャスパー、私にいっぱい迷惑をかけてちょうだい。私は何度も何度もあなたを叱ってあげる！慰めてあげる！――――決してあなたを放さないわ！」
「ぶ、部長……僕は……僕はっ！」
　リアスの励ましに涙するギャスパー
　その涙は恐れでも悲しみでもない、嬉しみの色だった
　一誠もその涙に気づき、気合を入れされた
「ギャスパァァァ

『Ｂｏｏｓｔ(ブースト)!!』

一誠は左腕を高く掲げ、神器(セイクリッド・ギア)を発動させる

「部長！『女王(クイーン)』に昇格します！」

リアスから許可が下り、一誠の力が上がる

更にミカエルから貰った聖剣アスカロンが『Ｂｌａｄｅ(ブレード)!!』の音声と共にブースト・ギアの甲から伸びた

一誠はそれで自らの右の掌(てのひら)を斬る

斬った箇所から血が流れ出る

「イッセー……？」

「キヒヒッ。なに君？自分から手を斬っちゃって何がしたいの？頭が沸騰し過ぎてまともに機能しなくなっちゃったのかぁい？」

「ギャスパー！自分から立たなくちゃ始まらないんだぜ？女の子に活を入れてもらったら、あとは立てッ！てめぇには立派なキン○マついてんだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

一誠が左腕を突き出すと、血が付着したアスカロンがギャスパーに向かって伸びていく

アスカロンに付いた血がギャスパーの口に付着した

「――――飲めよ。最強のドラゴンを宿しているとか言う俺の血だ。それで男を見せてみろッ！」

一誠の言葉にギャスパーは強い眼差しで頷き、舌で口元に付いた血を舐め取った瞬間――――室内の空気が一変した

「……っ？今までに無かった雰囲気――――ってあれ!?あのクソガキがいない！」

いつの間にかギャスパーが消えていた

その事に一誠も驚き、室内を見渡すと――――天井近くを無数のコウモリが飛んでいた

『僕はあなたを停めます！』

無数のコウモリの瞳が赤く光り、神風を停止させる

「イッセー、あれがギャスパーの力よ。吸血鬼（ヴァンパイア）本来の力も一気に解放されたみたい」

「やったじゃねぇかギャスパー！」

『はい！ありがとうございます、イッセー先輩！』

嬉しそうな声を上げる一誠とギャスパー

感動的な場面の筈なのだが……一誠はクルリと向きを変えた

「さ～て、もう邪魔する奴はいなくなった！ぐふふっ、思う存分この魔女達のおっぱいを――――」

「せっかくの良い場面が台無しね……」
「何を言うんですか部長！目の前におっぱいがあれば、それを揉むのが男の本能なんですよ!?新に負けないぐらいのハーレム王になる為にも経験値を積んでおかなきゃならないんです！ぐふふ♪ギャスパー、よく見ておけよ！これが俺の生きざまだ！しっかり見届けて男を磨け！」
『は、はいぃぃ！勉強しますぅぅぅ！』
一誠は神風が停まっているのを良い事に、吊るされた全裸の魔女達の方へ歩みを進める
ガタガタと震える女魔術師達、変態顔で指をワシャワシャ動かす危険生物（イッセー）
今度こそ夢が叶うと思い込んだ矢先――――神風の肉体がギシギシと動き始めた
そんな馬鹿なとばかりに音の発生源に視線を向けると、神風の口が動く
「なぁるほどね……！少し力を入れたら動けない事も無いみたい。相手が魔術師のお姉さん達なら、難なく停められただろうけど……ボクは闇人（やみびと）の『ビショップ』。そんな能力で参ったりはしないよ？」
ガアアアオアアアアアアアアアアアッ！
腹部の口が凄まじい咆哮をコウモリ――――ギャスパーに浴びせる
ギャスパーは一誠達の方に吹っ飛ばされ、元の姿に戻る

しかも、時間停止の能力を力ずくで解除させた
神風は3本めのカプリンチョを二口で噛み砕く
「良いよ赤龍帝。少し遊んであげるよ♪」
神風が口を大きく開けるとカメレオンの如く舌が伸び、更にそれが中央から裂けて異様な形となる……
まるでエイリアンの様に変化した舌が宙を泳ぎ、吊るされた女魔術師達の方に照準を合わせる
「ちょっと魔力を頂くよ? お姉~さん♪」
異形の舌が大きく開き、1人の女魔術師のおっぱいにパクッとかぶり付く
その行動にリアス一行も女魔術師達も驚愕せざるを得なかった
乳肉を包み込んだ神風の舌はそのまま魔力の吸引を始め、ついでに陥没している乳首を細長い舌で刺激する
「ひゃあぁぁぁっ!? な、何これぇ……! やめてぇぇぇぇ……っ! ち、乳首がっ……転がされてるぅぅぅ……っ!」
「キヒヒ~ッ♪どお~? このほじくり具合が堪らないでしょ~」
「な、なんて羨ましい事をッ! 俺の股間に響くッ!」
「イッセー、鼻血を止めなさい。ギャスパーは見ちゃダメよ」

「あわわわわわわっ、い、今凄いのを見ちゃいましたぁぁぁ……！」
リアスがギャスパーの眼を手で覆い隠し、一誠は股間を押さえながら再び鼻血を噴出
体積の凡そ半分の鼻血を出したんじゃないかと言う所で、神風の舌が女魔術師のおっぱいから離れる
女魔術師は顔を赤らめ、陥没乳首は顔を出していた
「ふぅっ、美味しかった♪んじゃ、そろそろ遊ぼうかな？」
神風は腹部の口から球状の黒い物体を２つ吐き出した
球体は次第に形を変えて、闇人（やみびと）となって目の前に現れた
「オォォォォォォォォォッ！」
「ガァァァ

「あっ！待てぇ！男の夢を持ち逃げするなあぁぁぁ

闇人(やみびと)の爪が特大の一撃を放つ
一誠はアスカロンで防御するものの、力の差のせいで壁に吹っ飛ばされる
「くらいなさい！」
リアスは熊の闇人(やみびと)に滅びの魔力を放つが、その間にもう1人の闇人(やみびと)が割って入り、角で魔力を挟み込む
「オオオオオオオオオオッ！」
バシュンッ！
リアスが放った魔力は2本の角に挟み潰された
「効かんのう。それでも上級悪魔か？死ねぇぇぇぇっ！」
鉄球がリアスに襲い掛かる
しかし、突如鉄球が停められた
ギャスパーの神器(セイクリッド・ギア)で鉄球の時間が停まったのだ
「部長！大丈夫ですか!?」
「ありがとうギャスパー。次は闇人(やみびと)を停めてみなさい！今度は上手くいく筈よ！」
「は、はいっ！」
ギャスパーの目が赤い光を放つ
その瞳を見た昆虫闇人(やみびと)は時間を停止させられた

「こんのクソガキがぁぁぁぁぁぁっ！」
「おぉっと！後輩の邪魔はさせねぇ！」
一誠は増幅した力を解放し、ギャスパーに襲い掛かろうとした熊型の闇人（やみびと）に向かって走る
力を溜めた籠手のアスカロンで相手の腹を貫いた
「ぐはっ！ぬがぁぁぁぁぁぁぁっ……！」
「オオオオオオラァァァァァァァァァァァッ！」
アスカロンで貫いたまま、籠手で闇人（やみびと）を押し出す
巨体が吹っ飛び、室内の壁に激突
そのまま倒れてピクピクと痙攣し、やがて動かなくなった
「やったわね、イッセー。なら、こちらもトドメといこうかしら」
リアスはさっきとは比べ物にならないくらいの魔力を掌（てのひら）に込めて、塊を撃ち放つ
動けず、まともにくらったもう1人の闇人（やみびと）は両手両足が千切れ飛んだ
2本の角も砕け、完全に戦闘不能状態となった
「見てみろギャスパー。お前のお陰でこいつらを倒せたんだぞ」
「イッセー先輩、部長！ぼ、僕！これから皆さんと一緒に頑張ります！よろしくお願いします！」

ギャスパーは見事な成長を遂げた
闇人(やみびと)が片付いたので、リアス一行は部室を出て新達の方へと向かっていった
「神風……次に会ったら原形が無くなるまでボコボコにしてやる！男の夢を奪いやがってええぇぇぇぇぇっ！」
「……イッセー、少しは自重しなさい」

新ＶＳカテレア！『蛇神皇（じゃしんおう）の鎧』

場所を新校舎側に戻し、アザゼルと大牙（たいが）が空中で戦っている最中、新は旧魔王派のカテレアと魔力を撃ち合っていた

「あんたもしつこいな！いい加減に脱いで乳首を見せろってんだ！」

「黙りなさい！その破廉恥極まりない言動を、今すぐ出来なくしてあげます！」

このままでは埒が空かないと踏んだ新は、『闇皇（やみおう）の鎧』を展開して闇皇へと姿を変える

「それが闇皇――――――あなたの力ですか」

「おうよ」

更に右手の鎧から闇皇剣（やみおうけん）を出現させ、カテレアに斬りかかる

カテレアは防御障壁を前に出してきた

１度弾かれるも、２度めは刀身に魔力を込めて障壁を破壊する

「……ッ！これが天敵である闇人（やみびと）の作った忌々しい力……！」

「お陰で俺は負ける気がしてねぇ！オラァッ！」

ビリビリッ！

カテレアのドレスの下が少し破け、太股（ふとも）が露出する

カテレアは距離を取り、新は刀身を手で研ぎながら佇む
「良い脚してんじゃねぇか、旧魔王さまよぉ。次はそのデッケェ乳房を拝ませてもらうぜ」
「なるほどね。少々あなたを侮っていました。エッチとはいえ、コカビエルを圧倒した実力は本物の様ですね。なら――――私もそれなりに対処しましょうか」
カテレアは胸元に手を突っ込み、そこから小瓶を取り出した
新はそれが何なのか分からず、カテレアは中に入っていた小さな黒い蛇らしき物を呑み込んだ
ドンッ！
「……っ!?何だ!?魔力が一気に跳ね上がりやがった!?」
「カテレア！てめぇ、オーフィスの野郎に何を貰った!?」
『2代目キング』と戦いながらアザゼルがカテレアに問いかける
「彼は無限の力を有するドラゴン。世界変革のため、少々力を借りました。今の私はあなたとも戦える。闇皇(やみおう)の蝙蝠を倒した後は、サーゼクスとミカエルも倒します。勿論、あなたもです」
「さっき飲んだのは、オーフィスって奴から貰った力かよ！汚(きたね)ぇ手使いやがって！」
新は魔力を込めた闇皇剣でカテレアを斬ろうとするが、片腕だけで止められる

カテレアは新の腹部に拳を打ち込んで吹っ飛ばす
「ゲホッ！ゲホッ！」
「どうですか？闇皇（やみおう）の蝙蝠。今の私とあなたでは、力の差は歴然です」
「けっ。他人から貰った力を自分の力みたいに言ってんじゃねぇよ。チクショウ、リアスから『プロモーション』の許可貰っとけば良かった……」
新は腹を押さえながら舌打ちをする
今この場にリアスはいない……
『プロモーション』を行うには主のリアスから承認を貰わなければならない
新は不利な状況に「ちょっとやべぇな……」と、一言発した時――――体にドクンッと力が流れてきた
「新！無事か！」
「新、『プロモーション』の許可を出したわ。待たせてごめんなさいね」
「……ッ！一誠、リアス！それにヘタレヴァンパイアも」
ギャスパーは一誠の背中に隠れて現状にビクビクしており、一誠はカテレアをエロい目で見ていた
「いやらしい視線を感じるわ。闇皇（やみおう）の蝙蝠と同じ子ね。――――その子が赤龍帝（せきりゅうてい）なのですか、ヴァーリ？」

「あぁ、残念ながらそうだよ。本当に残念な宿主なんだ」
ヴァーリと言う名に戦慄を覚える一同
何故テロリストとヴァーリが親しげに話しているのか……？
新は白龍皇（はくりゅうこう）も『禍の団（カオス・ブリゲード）』の一員だと理解出来た
まばゆい輝きを放ちながら白龍皇（はくりゅうこう）がカテレアの傍（かたわ）らに降り立つ
「おいおい、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』さんよぉ。てめぇも『禍の団（カオス・ブリゲード）』の仲間だってのか」
「君からはそう見えるかい？俺はあくまで協力するだけだ。魅力的なオファーを受けてね。『アースガルズと戦ってみないか？』――――コカビエルを本部に連れ帰る途中でこんな事を言われたら、自分の力を試してみたい俺では断れない。アザゼルはヴァルハラ――――アース神族と戦う事を嫌がるだろう？戦争嫌いだものな」
「……チッ。俺もやきが回ったもんだ。身内がこれとはな……」
「ただ強い者と戦う為だけに生きる者か。愚かな考えだ……そんな奴に限って強者なのが更に悲しい」
空中で戦っていたアザゼルと大牙も降りてきた
一誠は現状を全く理解出来ずにいる
「……なぁ、新。なんでアザゼルとヴァーリはあんなに険悪なんだ？つーか、あの男と姉ちゃん誰だよ？」

「何処からどう説明すれば良いのか迷うな……まず、あのカテレアって女とヴァーリは『禍の団（カオス・ブリゲード）』で、そこにいる男は闇人（やみびと）の『２代目キング』だ」
「なっ……!?さっき神風が言ってた『２代目キング』ってのが、こいつなのか……!?」
「会うのは初めてだな、赤龍帝（せきりゅうてい）、グレモリー嬢。オレが闇人（やみびと）を統べる組織『チェス』のトップにして『２代目キング』の蛟大牙だ」
大牙は緊迫した状況を全く意に介さず、一誠とリアスに挨拶をする
組織のトップが戦いの最中に、しかも敵にも挨拶をしてくる事態に少し驚く一誠
その近くでアザゼルとヴァーリは話を続ける
「ヴァーリ。俺はお前に『強くなれ』と言ったが、『世界を滅ぼす要因だけは作るな』とも言った筈だ」
「関係ない。俺は永遠に戦えれば良いだけだ」
「……そうかよ。いや、俺は心のどこかでお前が手元から離れていくのを予想していたかもしれない。――――――お前は出会った時から今日まで強い者との戦いを求めていたものな」
「今回の下準備と情報提供は白龍皇（はくりゅうこう）ですからね。彼の本質を理解しておきながら放置しておくなど、あなたらしくない。結果、自分の首を絞める事となりましたね」
カテレアがアザゼルを嘲笑する

ヴァーリは自身の胸に手を当て、更に驚くべき事実を明かす
「俺の本名はヴァーリ。――――ヴァーリ・ルシファーだ」
「ル、ルシファー!?今ルシファーって言わなかったかッ!?」
「死んだ先代の魔王ルシファーの血を引く者なんだ。けど、俺は旧魔王の孫である父と人間の母との間に生まれた混血児。――――『白い龍（バニシング・ドラゴン）』の神器（セイクリッド・ギア）は半分人間だから手に入れたものだ。偶然だけどな。でもルシファーの真の血縁者でもあり、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』でもある俺が誕生した。運命、奇跡と言う物があるなら、俺の事かもしれない。――――なんてな」
ヴァーリの背中から光の翼と共に、悪魔の翼が幾重にも生え出した
「嘘よ……。そんな……」
流石のリアスも驚かざるを得なかった
しかし、アザゼルは肯定する
「事実だ。もし冗談の様な存在がいるとしたら、こいつの事さ。俺が知っている中でも過去現在、おそらく未来永劫においても最強の白龍皇（はくりゅうこう）になる」
「冗談の様な存在か……甘いな、アザゼル」
突如、新がそんな事を言い出した
いったい何がおかしいのか、アザゼルは片眉を上げた

「こっちにも冗談の様な存在がいるぜ」
「それは君の事を言うつもりかい？」
「違う。それはこの――――――兵藤一誠だッ！」
「え？俺？」
　新がビシッと一誠を指差す
　皆が理解出来ないまま、新は何故一誠を指名したのか話し始める
「良いか？よく聞け。この兵藤一誠は過去現在、そして未来永劫においても――――――最弱の赤龍帝（せきりゅうてい）だ！どうだまいったか！」
「「「「……？」」」」
「だってそうだろ！戦い方はド素人でエロいだけが取り柄！魔力の才能も皆無！更に神器（セイクリッド・ギア）の力でする事と言ったら、殆どが女を裸にする等のエロ関係！ハーレム目指してるとか言ってる割に全くモテやしない！女子更衣室を覗くも逃げ遅れてタコ殴りにされる！極めつけは……アザゼルの部下の女堕天使に、初デートの後に殺された！俺はここまで不憫過ぎる男を見た事がないッ！」
　ブワッ！
　新の熱弁……と言うか、ただの悪口にリアスは苦笑いし、他の皆は号泣した
「イッセー先輩！とてもかわいそうですううう！」

「すまねぇなぁ、赤龍帝(せきりゅうてい)……」
「なんて可哀想なんでしょう……」
「お前も苦労していたんだな……」
「可哀想可哀想言うなーッ！そんな哀れみの視線を向けないで！つーか新！お前はただ俺の悪口を言っただけじゃねぇか！」
「白龍皇(はくりゅうこう)の真相が発覚したんだから、負けずに一誠の事実を語らないと。あ、そうそう。あとこいつはチェリーボーイ」
「俺が童貞だって事までバラすなァァァ

そして剣柄だった蝙蝠の顔が、エンブレムとなって胸部に装着
両の腕、肩、足から刃物が隆起し、漆黒のマントがジェットウイングに変わる
背中にブースターが出現し、新は『闇皇（アーク・カイザー）の神速槍騎士（ジェットスピア・ナイト）』に変貌を遂げた
「おっしゃあ！満を持して降臨したぜ！」
「ハハハッ！本当にデタラメな力だなこりゃ！」
「『闇皇（やみおう）の鎧』の進化……神、魔王不在の世界が産んだ奇跡と言うものか」
アザゼルと大牙は各々の感想を述べ、ヴァーリは顎に指を当てて興味津々に見る
「確かに規格外の力ですね……。しかし、私は偉大なる真のレヴィアタンの血を引く者！カテレア・レヴィアタン！あなたごとき下級悪魔に負けはしない！」
カテレアの体を青黒いオーラが包み込む
新も背中のブースターを最大出力で起動させ、槍を構える
カテレアが猛スピードで飛び出すと同時に、新も飛び出して槍の連続攻撃を放つ
ドオオオオンッ！
特大の轟音が響き、新は地面に轍（わだち）を刻みながら後ろに下がる
一方、カテレアは１歩も引き下がらずに立っていた
「……うぐっ！」
カテレアが腹につけられた傷を右手で押さえる

どうやら素早過ぎる攻防戦を制したのは、新の方だった様だ
「ふぅ～……旧魔王を相手に上々ってところだな」
「……何を言っているのです?まさか、この程度の傷をつけたくらいで勝った気に――――」
パララララララ……ッ
話す途中でカテレアの服が細かな破片と化し、見事な裸体と乳房、乳首が公開された
「……っ!?こ、これは!?」
「うおぉぉおおっしゃぁぁぁぁぁぁぁッ!おっぱいいいいいいいいいッ!」
一誠は歓喜の絶叫を上げ、カテレアは左手で露出した胸を隠す
「どうだ?そんな状態でまだ戦えるってのか?やめときな。いくら旧魔王でも、万全じゃなくなったあんたに勝ち目はねぇよ」
「くっ……まさかここまでとは。しかし――――ただではやられません!」
カテレアは胸を隠していた左手を離し、その腕を触手の様に変化させ、新の槍を持つ腕に巻きつける
その直後、カテレアの体に怪しげな紋様が浮かび上がった
「あれは、自爆用の術式だわ!」
「じ、自爆!?あんた正気かよッ!?」

「闇皇（やみおう）の蝙蝠！この状態になった私を殺そうとしても無駄です！私と繋がれている以上、私が死ねばあなたも死ぬように強力な呪術も発動します！」
「チックショウ！犠牲覚悟で俺を殺す気か！古臭い手だが、効果は抜群だ！」
「イッセー、ギャスパー！距離を取るわよ！このままでは自爆に巻き込まれる！」
「でも、部長！新はどうするんですか!?このままだと新は――――」
「良いからさっさと離れろ！俺はそんな簡単にくたばったりはしねぇ！早くしやがれ！」
「……ッ！絶対死ぬなよ！新！」
一誠達は急いで距離を取り、リアスが防御障壁を何重にも展開する
アザゼル、ヴァーリ、大牙も爆発に巻き込まれないよう空を飛んだ
新は巻きつかれた触手を槍で切ろうとするが、なかなか切れない
「無駄です。その触手は私の命を吸った特別製。切れませんよ」
「最後に聞くぞ？本当に自爆する気か？」
「その力は思った以上に危険な代物ですからね。『闇皇（やみおう）の鎧』を破壊出来ればそれで良し。破壊出来なくても、宿主であるあなたを殺せば問題ありません」
「はぁ……あんた、良い乳首してんのに。残念だな」
カラン……

新は槍を投げ捨てた
自ら武器を捨てた事にカテレアは疑問を抱く
「……この技だけは使わないだろうと思ってたが、仕方ねぇよな」
新は全ての指の関節をコキコキた鳴らし、カテレアに向かって飛び出した
放たれる魔力の弾を回避しつつ進み、カテレアの眼前に来たところで両手を構える
「攻撃ですか？私が少し念じれば、すぐにも自爆出来ると言うのに」
「だったら、そんな暇を与えない程骨抜きにするだけだ！くらえッ！超絶秘技！『絶頂させる手（エクストリーム・ハンド）』オオオオオオオッ！」
超高速により無数に見える手が、カテレアの首筋、鎖骨、脇の下、おっぱい、乳首、腰、尻、太股（ふとももなど）――――あらゆる性感帯を刺激していく
「はひゃぁんっ！な、何なんですか……!?身体中を、手が……！ひぃいっ！や、やめてっ……！そこはらめぇっ！ぁぁんっ！いやぁっ！はうあっ……はふぅんっ……！いぃんっ！やめ、なさい……！やめてぇ……！おかしく、なりゆう……！あひぃっ！そ、そこは……！あ、あぁぁぁ

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……み、見たか。これが俺の封印していた秘技『絶頂させる手（エクストリーム・ハンド）』だ。両手を高速で動かし、女の性感帯と言う性感帯、全てを１秒間で１００回刺激して骨抜きにする技だ。以前俺はこの技をやり過ぎて、相手を精神崩壊寸前まで追い詰めてしまった事があった。それ以来使わない事を誓って封印していたんだが、背に腹は代えられなかった……カテレア・レヴィアタン。今のあんたは少し動くだけでも、そよ風が吹くだけでも感じる程の敏感肌になった。更に『騎士（ナイト）』形態で使ったから効果は数十倍。もう戦えねぇよ」

「あっ……あぁぁんっ……！ま、まだ……まだ終わってなどはふぅんっ……！こ、この私がひにゃんっ……偉大なる、レヴィアタンの血いいいいんっ！だ、ダメ……！少し動いただけで……い、イっちゃう……！」

動こうとしても動けないカテレア

新はそんなカテレアに背を向けて、一誠達の所へ歩いていく

「お、お前……なんて素晴らしい――――いや、恐ろしい技を持ってるんだ……」

「確かに、アレは酷いわね……出来れば今後も封印しておいて欲しいわ」

「使うのはごく稀（まれ）だ。何しろ俺がチョー疲れる……」

「ハハハハハハハッ！ヒィッ……！ヒィッ……！は、腹が痛過ぎて堪えきれねぇ……！」

「笑い過ぎだアザゼル！」
アザゼルは腹を抱え、大爆笑しながら転げ回っており、ヴァーリと大牙は唖然としていた
「ま、まぁ……これでひとまず邪魔される要素が1つ消えたな。堕天使総督」
気を取り直した『2代目キング』が再びアザゼルと対峙する
「ゴホゴホッ！そ、そうだったな。さて、俺達も闇皇（やみおう）の蝙蝠に負けねぇくらいの盛り上がりを見せてやるか」
アザゼルは笑みを浮かべ、懐から1本の儀式剣を取り出した
「……？それは何だ？」
「俺は生粋の神器（セイクリッド・ギア）マニアでな。マニア過ぎて自分で製作したりする事もある。レプリカ作ったりな。まぁ、殆どの物が屑でどうしようもないが、神器（セイクリッド・ギア）を開発した神は凄い。俺が唯一、奴を尊敬するところだ。――――――だが、甘い。『神滅具（ロンギヌス）』と『禁手（バランス・ブレイカー）』なんて言う神と魔王、世界の均衡を崩せるだけの『バグ』を残したまま死んじまったんだからな。ま、だからこそ神器（セイクリッド・ギア）は面白いんだけどよ」
短剣が幾つものパーツに別れ、アザゼルはある言葉を発した
「禁手化（バランス・ブレイク）……ッ！」
一瞬の閃光が辺りを包み、光が止むと――――――アザゼルは黄金の全身鎧（プレート・アーマー）を身に付

けていた

姿はまるで金色のドラゴン

背中から漆黒の翼を展開させた

『白い龍（バニシング・ドラゴン）』と他のドラゴン系神器（セイクリッド・ギア）を研究して作り出した、俺の傑作人工神器（セイクリッド・ギア）だ。『堕天龍の閃光槍（ダウン・フォール・ドラゴン・スピア）』、それの擬似的な禁手（バランス・ブレイカー）状態――――『堕天龍（ダウン・フォール・ドラゴン）の鎧（アナザー・アーマー）』だ」

「長ったらしい名前だな」

「いや、そう言う問題じゃないだろ！ってか、突っ込むところが違うぞ!?」

一誠が大牙に突っ込みを入れる

大牙は普通の者より、少し観点がズレている傾向があるみたいだ

『あれは正確な禁手（バランス・ブレイカー）ではない』

「……っ？どういう事だ、ドライグ？」

『神器（セイクリッド・ギア）をバースト状態にして強制的な覚醒をしているんだろう。一種の暴走だ。あれでは戦闘後に神器（セイクリッド・ギア）が壊れる。人工神器（セイクリッド・ギア）とやらを使い捨てで使用する気か？』

使い捨てとはいえ、ドラゴンの力を有する神器（セイクリッド・ギア）を開発するなど並大抵の事ではない

アザゼルの開発力に新も一誠も驚きを隠せなかった

「へへっ。『黄金龍君(ギガンティス・ドラゴン)』ファーブニルを人工神器(セイクリッド・ギア)に封じて、二天龍――――――――
『赤い龍(ウェルシュ・ドラゴン)』と『白い龍(バニシング・ドラゴン)』の神器(セイクリッド・ギア)を模してみたが、今のところは成功ってとこか」
「なるほど、素晴らしいな。その開発力は実に惜しい。良い物を見せてもらった……。
オレも褒美として見せてやろう。『闇皇(やみおう)の鎧』よりも前に開発した――――『キング』の象徴を」
大牙の体から青い魔力のオーラが放出され、巨大な蛇の形となる
蛇型のオーラは大牙を飲み込むように覆い被さり、強い閃光を放つ
そこには白銀色の鎧を着た『2代目キング』が立っていた
王を強調する王冠を模した頭部と両方の肩当て
蛇の形をした籠手が両腕に備わり、サファイアの様な青い眼光
威風堂々と佇む姿は――――まさに王と呼ぶに相応しかった
「これがオレの所持する『蛇神皇(じゃしんおう)の鎧』だ。初期型だが、オレはこっちの方が馴染み深い」
「ヒュウッ♪イカすじゃねぇか『2代目キング』さんよぉ。早いとこおっ始めるか！」
「急くのは良くないぞ」
大牙は籠手から細剣を出現させ、フェンシングの様な構えを取る
アザゼルも槍を構えて対峙する
緊迫させられる空気の中――――閃光がその場にいた全員の視界を遮った

あり得ない共闘

「い、今……何が起こったんだ……？」
「強い魔力同士がぶつかって、視認出来なくなる程の強い閃光を産んだみてぇだな」
一瞬の出来事、アザゼルと大牙（たいが）は互いに武器の切っ先を向けている
大牙が細剣（サベル）を左手でビンッと弾いた直後……アザゼルの左腕が吹き飛び、身に纏っていた鎧が砕け散った
「なかなかの技術であり、オレにかすり傷を付けた功績として、核である宝玉だけは破壊しないでおいた。また試したい時は、いつでも来い。真っ向から受けてやる」
「チッ。底知れねぇ野郎だな、闇人（やみびと）ってのは……。人工神器（セイクリッド・ギア）も……まだまだ研究と改良の余地があるな」
アザゼルは悔しそうに宝玉を握り締めて膝をつく
堕天使総督を一撃で退けた……
闇人（やみびと）のトップ、『2代目キング』の力に一誠は震えを止める事が出来なかった
そして夜空から白い鎧を着たヴァーリが降りてくる
「さすが闇人（やみびと）のトップ。アザゼルを簡単に退（しりぞ）けるとは。今度は俺と戦って欲しいな」

「白龍皇(はくりゅうこう)とやら。今の貴様ではオレと戦うにはまだ浅い」
「戦う気が無いと？はぁ……。運命ってのは残酷だな」
突然ヴァーリが変な事を言い出した
「俺の様に魔王プラス伝説のドラゴンみたいな思いつく限り最強の存在がいる反面、そちらの様にただの人間に伝説のドラゴンが憑く場合もある。いくらなんでもこの偶然は残酷だと俺は思うな。ライバル同士のドラゴン神器(セイクリッド・ギア)とはいえ、所有者2名の間の溝はあまりに深過ぎる」
一誠を指差すヴァーリ
更に話が続けられる
「キミの事は少し調べた。父は普通のサラリーマン。母は普通の専業主婦で、たまにパートに出ている。両親の血縁は全くもって普通。先祖に力を持った能力者、術者がいた訳でもない。もちろん、先祖が悪魔や天使に関わった事もない。本当に何の変哲も無い。キミの友人関係も特別な存在ではない。キミ自身も悪魔に転生するまで極普通の男子高校生だった。――――ブーステッド・ギア以外、何も無い」
「ヴァーリ、お前何が言いたいんだ？」
「つまらないな。あまりにつまらな過ぎて、キミの事を知った時は落胆よりも笑いが出た。『あぁ、これが俺のライバルなんだ。参ったな』って。せめて親が魔術師ならば、話

は少しでも変わったかもしれないが……。そうだ！こう言う設定はどうだろうか？キミは復讐者になるんだ！」

ヴァーリの言っている意味が分からない

だが、次の言葉で一誠も新も理解出来た

「俺がキミの両親を殺そう。そうすれば、キミの身の上が少しは面白い物になる。親を俺の様な貴重な存在に殺されれば晴れて重厚な運命に身を委ねられると思わないか？うん、そうしよう。どうせキミの両親は今後も普通に暮らし普通に老いて、普通に死んでいく。そんなつまらない人生よりも俺の話した設定の方が華やかだ！な？」

あまりにも自分勝手な言い草

自分が戦いたいが為に一誠の両親を殺すと言っている

ヴァーリに向かって発した言葉は――――

「「殺すぞ、この野郎」」

怒りを通り越した殺意の一言だった

流石の新もヴァーリの自分勝手ぶりに殺意をむき出しにした

「てめぇ、頭に蛆（うじ）でも湧いてんのかコラ。そんなくだらねぇ理由で親を殺すだぁ？」

「……殺す？俺の父さんと母さんを？なんで、てめぇなんかの都合に合わして殺されな

くちゃいけないんだよ。貴重だとか運命だとか、そんなの知るかよッ！」
ギュウンッ！ザシュッ！
一誠の横を、何かが風を斬りながら通り過ぎ、空に浮かんでいるヴァーリの左肩に突き刺さる
一誠と新が後ろを見ると、目を疑う光景があった
蛇神皇（じゃしんおう）――――『2代目キング』の大牙が、細剣（サーベル）の刃をチェーン状に伸ばしていた
ヴァーリの左肩を貫いたのは――――闇人（やみびと）のトップの持つ剣だった
「ぐっ……！何の真似だ『2代目キング』？キミは戦いに参加しないって言ってたんじゃなかったのか？」
「白龍皇（はくりゅうこう）。貴様のあまりにも身勝手な言動に失望した。運命に身を委ねられる？つまらない人生？それを決めるのは、貴様ではなく当人だ」
大牙はドスを効かせた声音で白龍皇（はくりゅうこう）ヴァーリに向かって言う
一誠と新は状況を理解出来ず、ただ黙って見ているしか出来なかった
「俺が戦う目的は、闇人（やみびと）こそが魔族の頂点に君臨する事を冥界、天界、人間界に認知させる為だ。無駄な戦いを重ね続ければ自惚（うぬぼ）れと破滅を招く。貴様のように娯楽の為だけに戦うと言うゲスな思考には、反吐（へど）が出る」
「反吐（へど）が出る？キミだって神と先代魔王達に父親の『初代キング』を封印されたんだろう

？その復讐の為に戦っていたんじゃ――――――――」

「だから貴様は浅はかだと言った。父さん――――――『初代キング』は三大勢力と人間を見くびり過ぎたから封印されてしまったんだ。強大な力を持っておきながらな。それは自己責任だ。オレが復讐しなければならない義理など、どこにも無い。オレはオレのやり方で戦い、闇人（やみびと）を頂点に導く。ただそれだけだ」

大牙がヴァーリの肩を貫いていた剣を引き抜き、一誠と新にトンでもない案を提示する

「赤龍帝（せきりゅうてい）、闇皇（やみおう）。一時的だが協定を結ぼう。白龍皇（はくりゅうこう）に己の浅はかさを思い知らせてやる必要がある」

「「えっ!?」」

その場にいる全員が驚いた

全魔族の敵のトップが、一時的な協定を求めてきた

だが、これは千載一遇のチャンスでもある

「あ、あんたは敵じゃなかったのか？」

「勘違いをするな。一時的な協定と言った筈だ。オレはお前達の敵だが……今だけは協力しよう。白龍皇（はくりゅうこう）の存在が気にくわなくなった」

「ハ、ハハッ……！トンでもねぇ奴が加勢してくれるとは……一誠。ここは『2代目キン

グ』の提案に乗ってやろうじゃねぇか。俺も白龍皇が気に入らねぇ。この場でぶっ殺してやる」

一瞬迷ったが、一誠は一時的な協定に同意した

この瞬間――――赤龍帝、闇皇の蝙蝠、蛇神皇のチームと言うおそらく最凶の組み合わせが誕生した

「ハハハハハハッ！今日は最高の1日になりそうだ！赤龍帝と闇皇だけでなく、闇人の『2代目キング』と同時に戦えるなんて！こんな刺激的な戦いは初めてだよ！」

白龍皇ヴァーリは歓喜に満ち溢れていた

一誠は空にいるヴァーリに向かって怒号を飛ばす

「ヴァーリ！てめぇだけは許さない！てめぇなんぞに、俺の親を殺されてたまるかよオオオオオオオオッ！」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｏｖｅｒ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!』

籠手が赤く強大なオーラを解き放ち、一誠は『赤龍帝の鎧』を装着した

本来なら犠牲を払わないと装備出来ないのだが、事前にアザゼルから特製のリングを貰っており、その作用のお陰で犠牲を払わずに済んだ

『神器は単純で強い想い程、力の糧となる。兵藤一誠の怒りは純粋な程お前に向けられているのさ。――――真っ直ぐな者、それこそドラゴンの力を引き出せる真理の1

つ』
「そうか。そう言う意味では俺よりも彼の方がドラゴンと相性が良い訳だ」
ヴァーリが自分の鎧――――『白　龍　皇　の　鎧』に宿っているアルビオンと会話する
一誠は背中の噴射口を開き、新も闇皇槍（やみおうそう）を握って飛行準備をする
「だが！頭が悪いのはどうだろうか！兵藤一誠！キミはドライグを使いこなすには知恵が足りな過ぎる。それは罪だよ」
「さっきからベラベラ俺が分からない事を言ってんじゃねぇぇぇぇっ！」
「そう！それこそバカと言う奴なんだ！」
一誠、新、大牙は揃って空中へ飛び出し、ヴァーリも顔をマスクで覆って戦闘態勢になる
一誠はタックルをかますが軽やかに避けられる
だが、まだ新と大牙が残っている
「オオオオオラァァァァァァァァァッ！」
新が全身隆起した刃をヴァーリに向かって撃ち放つ
ヴァーリはこの攻撃も避けようとしたが、大牙が繰り出すチェーン状の剣戟によって阻まれ、全身に刃が突き刺さる

一誠は体勢を立て直し、アスカロンで斬りかかる
しかし、振り回すだけの剣ではヴァーリに当てる事が出来ない
「ぐっ……！やっぱり3対1じゃ、ちょっとキツいかな！」
ヴァーリが無限に近い数の魔力弾を放ってくる
一誠は腕を交差してガード、新は神速の槍で貫き崩し、大牙はチェーン状にした剣で全て切り裂いていく
「蛇神(じゃしん)の牙に沈め」
大牙は剣をチェーン状から通常に戻し、上空に掲げる
細剣(サーベル)が青い魔力に包まれ、ヴァーリに向かって突き出される
剣から魔力で形成した巨大な蛇がヴァーリに襲い掛かっていく
「速い！」
ヴァーリは光の盾を展開するが、蛇のオーラは難なく盾を破壊してヴァーリの左肩に食らいついた
「今だ一誠！」
「おぉっ！」
一誠が勢い良く飛び出し、蛇を引き剥がそうとしているヴァーリに向かっていく
「ドライグ！収納しているアスカロンに力を譲渡だッ！」

『承知ッ！』
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』
一誠の左手に力が譲渡され、アスカロンを収納した籠手でヴァーリの顔面に拳を入れる
すると、龍殺し（ドラゴン・スレイヤー）の威力が発揮され――――『白龍皇の鎧（ディバイン・ディバイディング・スケイルメイル）』が呆気なく壊れ、ヴァーリは地面に叩きつけられた
「こ、これが龍殺し（ドラゴン・スレイヤー）の威力!?相手の鎧が紙みたいじゃねぇか！」
一誠の力が抜け始め、地上へ落下していく
新と大牙もゆっくりと降り立ち、一誠のもとへ向かう
「一誠！大丈夫か!?」
「へへっ……。１発殴れてスカッとしたぜ」
「しかし、どうする？先程破損した奴の鎧はもう復活しているぞ？」
大牙の言う通り、大破した筈のヴァーリの鎧が再び元の状態に戻っていた
しかも一誠の禁手（バランス・ブレイカー）状態は制限時間付き
時間内でヴァーリを倒すのは至難の業だ
「チッ。俺もさっきの戦いで響いたか、そろそろ足が笑ってきやがった……どうしたものか――――んっ？こいつは……」

新の視界にある物が映り込んだ
それは先程の攻撃によって破損した白龍皇（はくりゅうこう）の宝玉だった
宝玉を手に取った新は、恐ろしい事を閃いた……
「一誠。確か神器（セイクリッド・ギア）は想いに応えて進化するんだよな？」
「……っ？一応そうだけど、どうしたんだ？それに、その宝玉……」
「ヴァーリの鎧から飛び出した１つだ。こいつを――――――お前の右手に移植しちまえ♪」
一誠は絶句した
新に相反するドラゴンの力を取り込めと言う前代未聞の荒事を提案された
「どうせお前は時間が経てば倒れちまうんだ。だったらその前に、奴をぶっ殺せる力を手にしてみたいとは思わねぇか？」
「け、けどよ……そんな事が出来るのか!?」
「出来るとは言い切れないが、出来ないとも言い切れない。僅かな可能性があるならやってみる価値はある！違うか？」
「……分かった。やってやろうじゃねぇか！それで目の前のクソ野郎を超えられるならなッ！」
一誠は新から宝玉を受け取り、右手の甲に存在する赤龍帝（せきりゅうてい）の宝玉を叩き割った

『白い龍（バニシング・ドラゴン）』！アルビオン！ヴァーリ！もらうぜ、お前の力！」

一誠は白龍皇（はくりゅうこう）の宝玉を右手の甲に埋め込んだ

右手からオーラが発生し、一誠の右半身を包み込んだ刹那――――

「うがあああああああああああああああああああああああああああああッ！」

身体中に形容し難い激痛が走る

「ぬがあああああああああああああああああああああああああああああ

『俺はこの宿主――――――兵藤一誠と出会って1つ学んだ！バカを貫き通せば可能になる事がある、とな！』
「俺の想いに応えろオオオオオオオオオオツ！」
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ（バニシング）　Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン）　Ｐｏｗｅｒ（パワー）　ｉｓ（イズ）　ｔａｋｅｎ（テイクン）!!』
一誠の右手が真っ白なオーラに包まれ、白い籠手が出現した
「で、出来た……！」
「やったな一誠。こいつは差し詰め、『白龍皇の籠手（ディバイディング・ギア）』ってところだな」
『あり得ん！こんな事はあり得ない！』
自分の力が取り込まれた事にアルビオンが驚愕の声音を出す
新はそれに対して笑う
「可能性の勝利だ。俺達の仲間が聖と魔の融合をして、聖魔剣（せいまけん）を創り出した。それは神がいない為にバランスが崩れているから、実現可能になったんだよ。ま、チョイと無謀だったがな」
「無謀にも程があるぞ。死んでいないにしろ、確実に寿命を縮ませた」
「良いよ。俺は1万年も生きるつもりは無いさ。やりたい事は山程あるから、最低でも１０００年は生きたいけどな」
「……ふっ。今までこんな奴は見た事が無い」

パチパチパチ……ッ
ヴァーリが拍手をする
「面白い。なら、俺も少し本気を出そう！俺が勝ったら、キミの全てとキミの周りにある全ても白龍皇（はくりゅうこう）の力で半分にしてみせよう！」
『Ｈａｌｆ（ハーフ）　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ（ディメンション）！』
宝玉から音声が流れ、まばゆいオーラに包まれたヴァーリが木々へ手を向ける
すると、木々が一瞬で半分の太さになってしまった
「マジで半分にしやがった！あの野郎の力、やっぱ反則――――ん？半分？周りも半分？……ッ！」
新は白龍皇（はくりゅうこう）の能力を考察して、ある事に気づいた
それを一誠に報告してみる
「一誠。今見せたヴァーリの能力、お前にも分かりやすい様に説明しよう」
「おっ、何だ？」
「あの能力は周囲の物を全て半分にしていく力だ。つまり、白龍皇（はくりゅうこう）が本気を出したら――――リアスやアーシアの乳も半分にされちまうんじゃないか？」
「……」
一誠は首だけを動かしてリアスとアーシアへ視線を向ける

おっぱい　が　半分　に　なる？
部長　の　おっぱい　が　半分　に　なる？
アーシア　の　おっぱい　が　半分　に　なる？
「ふ」
「ふ？」
「ふざけんなァァァ

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!!!』

爆発的に増大された一誠の魔力によって地面が大きく抉れていき、新はその光景を見て大爆笑した

「ブッハッハッハッハッハッハッハ！すげぇ！一誠の魔力が一気に跳ね上がりやがった！」

「アアアアアアアラタアアアアアアアアアアアッ！」

一誠が急に新を呼んだ

新はビクッと反応する

「な、何だよ？」

「ヴァーリは周囲の物を全て半分にしていくって言ったよなアアアアアアアアッ!?部長のおっぱいだけじゃなく、朱乃さんのおっぱいも！アーシアのおっぱいも！ゼノヴィアのおっぱいも！小猫ちゃんのおっぱいも！いや、全ての女の子のおっぱいも半分にされる！お前はそれで良いのかアアアアアアアッ!?」

新は脳内に思い浮かべた

おっぱいのサイズを半分にされた女性達の姿を……

結果――――――

「良い訳ねぇだろがァァァ

「これは部長おっぱいの分！」
「リアスおっぱいの分！」
２人は揃ってヴァーリの腹に一撃を入れた
『Ｄｉｖｉｄｅ（ディバイド）!!』
同時に移植したばかりの一誠の力が発動し、ヴァーリの力を半分にする
「ぐはっ！」
吐瀉物を口から吐き出すヴァーリ
体勢を立て直す暇（いとま）も無く……新が背後から神速膝落としを顔面に炸裂させた
「朱乃おっぱいの分！」
ヴァーリの兜が完全に破壊された
「これは成長中のアーシアおっぱいの分！」
一誠が手刀でヴァーリの背中の噴出口を破壊する
「ゼノヴィアおっぱいの分！」
新はヴァーリを上空へ蹴り上げ、更に背中へ肘鉄を食らわす
「続けて小猫のロリおっぱいの分！」
「ガハッ！」
吐血するヴァーリの腹に大牙のチェーン状に伸びた剣が突き刺さる

一誠と新はヴァーリの頭上に飛ぶ
一誠はタックルの構えを取り、新は両足を揃えて翼型のオーラを展開する
「そしてこれが！」
「巨乳、貧乳、美乳を含めた！」
「全ての女の子の！」
「「おっぱいの分だぁぁぁ

すると、ヴァーリは呪文の様な言葉を唱え始めた
「『我、目覚めるは、覇の理に――――』」
『自重しろヴァーリッ！我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!?』
アルビオンが怒りながらヴァーリを止めようとする
一誠と新はお構い無しにトドメの一撃を放とうとしたが、その間に三国志の鎧を着た男が入り込んできた
「ヴァーリ、迎えに来たぜぃ」
「美猴か。何をしに来た？」
「それは酷いんだぜぃ？相方がピンチだっつーから遠路はるばるこの島国まで来たってのによう？他の奴らが本部で騒いでるぜぃ？北の田舎アース神族と一戦交えるから、任務に失敗したのならさっさと逃げ帰ってこいってよ？カテレアはミカエル、アザゼル、ルシファーの暗殺に失敗したんだろう？なら監察役のお前の役目も終わりだ。俺っちと一緒に帰ろうや」
話し込むヴァーリと美猴
そこで大牙が――――
「ほう。闘戦勝仏の末裔か」
新が驚きを見せながら訊く

「闘戦勝仏？まさか……西遊記の孫悟空か!?」
「えええええええええええええええっ!?」
一誠はさっきまでの怒りが吹っ飛ぶくらい驚いた
「正確には孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪と言うべきか。仏になる筈の妖怪が『禍の団』とやらに入っているとは」
「俺っちは仏になった初代と違うんだぜぃ。自由気ままに生きるのさ。俺っちは美猴。よろしくな、赤龍帝に闇皇、『2代目キング』」
美猴は手元に棍を出現させ、地面に突き立てる
地面に黒い闇が広がり、ヴァーリと美猴を沈ませていく
一誠は逃がすまいと捕まえようとするが、神器が強制解除された上に激しい疲労が襲う
一瞬とはいえ、強大な力を爆発させれば体力と魔力は空になる
それだけ無茶を重ねた一誠の肉体は地面に倒れた
新も力を使い過ぎたため、激しく息切れをする
そして白龍皇は孫悟空と共に闇の中へと消えていった……

駒王協定

新達が校庭に足を踏み入れた時、三大勢力の軍勢が入ってきて戦闘後の処理が行われた

魔術師の死体を運んだり、戦闘の後始末をしていた

特に1番苦労したのは、未だに裸で感じまくっているカテレア・レヴィアタンだった……

「あ、あんっ……！気をつけなさい……！い、今私の体は……感じやすいっ、からぁ……！」

「そ、そうは言われましても……」

「あ～……お困りのようっすね？」

そこへカテレアを超絶敏感肌にした張本人、新が手伝いにやって来た

「何とか出来ませんか？魔方陣で送ろうにも、魔力の波動だけで感じてしまうらしく……」

「ん～、流石に少しやり過ぎたか……。もしもの為にと持っておいて良かったぜ」

新は懐から小瓶を取り出し、中に入っている小さい錠剤を2つ彼女の掌（てのひら）に乗せた

「……？そ、それは――――――んんっ！な、何ですか……？」
「体質を元に戻す薬だ。セッ○スでやり過ぎて、相手が敏感肌になっちまう事が多いからさ。緊急用に持ってるんだ。こいつを飲めば敏感肌は治るから、口を開けな」
カテレアは言われるがまま口を開ける
薬を飲むと、すぐに効果が発揮される
「あ、本当に敏感肌じゃなくなりましたね……助かりました」
「そりゃどうも。けどよ、あんたにはこれから『禍（カオス・ブリゲード）の団』について話して貰わなきゃならねぇらしいから、牢屋行きは免れないみたいだぜ？」
「素直に負けを認めます。しかし……せ、責任は取って頂きますよ？私を裸にした上、こんな恥をかかせたのですから……」
「責任？セッ○スしろってのか？」
「……近々、面会に来てください」
意味深な言葉を残して、カテレアは魔方陣で冥界にある役所へ転送された
『禍（カオス・ブリゲード）の団』について事情聴取をした後、牢屋に入れられるだろう
「新くんって本当にエッチだけど凄いね☆カテレアちゃん、完全に惚れてるみたいだったよ☆次は私？それともソーナちゃん？」
「堕として良いんすか？レヴィアたん様、俺のテクは激しいですよ？」

「う～ん……ちょっとドキドキ☆」
セラフォルーはウインクを送ってサーゼクスの所へ可愛らしく走っていく
その後は一誠がミカエルに「アーシアとゼノヴィアが祈りを捧げる分だけ、ダメージ無しに出来ませんか？」と頼み込んでいるのを見た
ミカエルは特例として認め、大勢の部下を連れて天界へ飛んでいった
アザゼルも和平を選び堕天使達に指示を出すと、魔方陣を展開させて帰っていく
残ったのは鎧を解除した『２代目キング』、新達を含めた極少数となった
「キング～♪終わった～？」
「ん？『ビショップ』か。丁度良い、オレ達も引き上げるぞ」
「え～？帰るの～？まぁ良いや。帰って魔術師のお姉さん達のおっぱいを揉んじゃお～っと♪」
一誠にとって不愉快極まりない無邪気な声
その声を耳にした一誠は即座に拳を固め、男の夢（おっぱいを吸う事）を奪った怨敵に向かって駆け出す
……
「ここで会ったが１００年目くらえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「おっととととっと～とっと♪」
一誠の殺意（パンチ）を軽やかに避ける神風

回避し続けること数分……息切れを起こした一誠の手が止まり、神風は3人の所へヒョコヒョコ歩いていく

一誠は殺意の視線を向け、警戒心を高める新とリアスだったが、今の神風に敵意は見られない

そして神風は一誠にこんな事を聞いてきた

「ねぇねぇ赤龍帝。女の子にしてもらいたい枕って何だか分かる？」

「……女の子にしてもらいたい枕……？――――それは勿論膝枕だ！アーシアの膝枕は最高なんだぞ！どうだ、羨ましいだろ？あと、いつか部長にも膝枕してもらいたい！」

一誠は自信満々且つ自慢げに言うが、神風はクスクスと笑う

「膝枕？古いねぇ～♪今の時代は――――おっぱい枕でしょ？」

「……ッ!?おっぱい、枕だと……!?」

「そうそう♪おっぱい枕、最高だよ～？プルンプルンのおっぱいに頭を乗せると、すっっっっっごい寝心地が良いの♪たまに当たる乳首も気持ち良くて、もうあれはね、天然のテンピュールだよ♪」

「ま、負けた……！そんな素敵な枕があったとはァァァァァァァァッ……！」

一誠は両手をついて泣いた

神風はリアスに視線をやり、指を差して言う

「グレモリーのお姉さん。お姉さんのおっぱいも、いずれボクのおっぱい枕にしてあげるよ。覚悟しといてね？じゃっ、バイバ～イ♪」

そう言い残して、神風は大牙の出した魔方陣の中に入る

「赤龍帝（せきりゅうてい）、闇皇（やみおう）。お前達の力は予想を遥かに超えた物だった。今回は協定を結んだが、次に会った時は敵同士だ。それまでに、お互い力を付けておこう」

青い魔力の柱が立ち、闇人（やみびと）の２人は消えた……

西暦２０××年７月――――

天界代表天使長ミカエル、堕天使中枢組織『神の子を見張る者（グリゴリ）』総督アザゼル、冥界代表魔王サーゼクス・ルシファー、三大勢力各代表のもと、和平協定が調印された

以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へ――――。

この和平協定は舞台になった駒王学園（くおうがくえん）から名を採って「駒王協定（くおうきょうてい）」と称される事になった

――――

「てな訳で、今日からこのオカルト研究部の顧問になる事になった。アザゼル先生と呼べ。もしくは総督でも良いぜ？」

着崩したスーツ姿のアザゼルがオカルト研究部の部室にいた
リアスは額に手を当て、困惑しながら言う
「……どうして、あなたがここに？」
「ハッ！セラフォルーの妹に頼んだら、この役職だ！まぁ、俺は知的でチョーイケメンだからな。女生徒でも食いまくってやるさ！」
「んな事したら懲戒免職くらうぞ？つーかよ、そんな事しまくったから『堕ちた』んじゃねぇの？」
「お、よく分かったな？」
「当たってんのかい！」
「俺、なんだか急に堕天使さん達に親近感湧いてきたよ」
「おぉっ、話が分かるじゃねぇか」
その後、一誠とアザゼルは意気投合し始めた
新も話に参加しようとしたら、不意に朱乃がキュッと腕を握ってきた
瞳には不安の色が出ている……
新は思い出した……朱乃の父親は堕天使
つまり、アザゼルの部下でもある事を……
「朱乃……やっぱりお前、父親の事を」

「……大丈夫ですわ。だって、私にはあなたがいるもの」
朱乃は笑顔を作って新に寄り添う
新は何も言わずに朱乃の頭を撫でる
「よし、イッセー。じゃあ童貞卒業ツアーにでも出掛けるか！新、お前も来いよ！」
「良いのか？俺もう童貞卒業してんだけど」
「そうだ先生！こいつは１２歳で童貞を卒業しやがったんだ！ツアーに参加させる必要は――――」
「チッチッチッ、甘いなイッセー。新から堕としのテクを学ぶんだよ。そう言った奴も連れていった方が女も寄ってくる。こいつはこれ以上無い逸材だからな」
「ちょっとアザゼル、あまり変な事は教えないでちょうだい」
リアスは新と一誠の手を引っ張ってアザゼルから遠ざけようとする
因みにアーシアは一誠にしがみ付き、新にも朱乃とゼノヴィアがしがみ付く
「モテモテです、イッセー先輩！新先輩！ひ、引きこもりの僕は憧れるばかりですぅぅ！」
「いやー、段々僕の事を悪く言えなくなってきているよね」
「ハハハ！なんだよ！そうかそうか。そういや、ドラゴンや英雄は自然と一夫多妻を形成するんだったな。俺が教えるまでもないのか。ま、ここは三竦み同盟の代表的な場所

の1つとなる。堕天使の総督、魔王の妹、天使側のバックアップ、そして伝説のドラゴンと闇皇だ。仲良くやっていこうや。当面の目標は赤龍帝の完全なる禁手化。それとお前らのパワーアップだな。それらを夏休みに修業して達成するべきだ」

駒王学園　1学期　終業

駒王学園高等部　オカルト研究部

顧問教諭／アザゼル（堕天使総督）

部長／リアス・グレモリー（王）3年生　残る駒　『戦車』1個

副部長／姫島朱乃（女王）　3年生

部員／塔城小猫（戦車）1年生

木場祐斗（騎士）2年生

ゼノヴィア（騎士）2年生

アーシア・アルジェント（僧侶）2年生

ギャスパー・ヴラディ（僧侶）1年生

兵藤一誠（兵士）　2年生

竜崎新（兵士）　2年生

「ングッングッングッ……うぅぅっ、どうしてリストラなんですかぁぁぁぁ……!?アザゼル様ぁぁぁぁぁぁぁぁ……！私への愛はお預けなんですかぁぁぁぁぁぁぁぁ……!?」
　新の家、レイナーレは酒を飲んで泣いていた
『禍の団（カオス・ブリゲード）』との戦闘後、アザゼルからリストラの通知を受けて一晩中泣き明かし、今は飲んだくれている
「よっぽどショックだったのか」
「そりゃそうだよアラタ。レイナーレ様はアザゼル様とシェムハザ様からの御寵愛を貰う為に、今まで頑張ってきたんだもん」
「私達は上の殆どの連中からバカにされていたからな。特にレイナーレ様はその事を気にしていた。だから、アザゼル様とシェムハザ様の側近に付けば……」
「バカにされる事は無くなるだろうと？本質を見ようとしない奴らの悲しい性（さが）だなぁ」
　レイナーレは泣きながら、本日6本目のボトルを開けてグラスに注ぐ
「アラタ。今夜はレイナーレ様を慰めてあげて？ウチらじゃ手に負えなかったの」
「うん。アラタから何か言ってやるのが一番効き目がありそうだ。そんな訳で、頼めるか？」
「はぁ……分かった。女の涙を汲むのは男にしか出来ないからな」

「ありがとう。ミッテルト、今日は他の部屋で寝るぞ」
「は～い。じゃあアラタ。お願いね？」
カラワーナとミッテルトはいつもの寝室――――新の部屋ではなく他の部屋に向かっていく
とりあえず、新はレイナーレの酒に付き合ってやる事にした

――――――――1時間後

「お～い。まだか～？」
「もうちょっと待って……オエェェェェェッ！」
結局レイナーレは合計12本のボトルを飲み干してしまい、現在トイレでリバース中
新は額に手を当てながら嘆息する
ジャ～……ガチャッ
戻し終えたレイナーレがようやくトイレから出てきた
だが、彼女の顔色はまだ悪かった
もちろん酒のせいではない
「どうしたレイナーレ？吐いてもまだスッキリしてねぇみたいだな」

「当たり前じゃない！リストラされたのよ!?ちょっとやそっとで立ち直れる訳無いでしょ！ぐすっ……！アザゼル様ぁ……シェムハザ様ぁ……」
「ったく、まだ泣けるのか。泣きたいなら場所移すぞ」
新はレイナーレを連れて寝室へ向かう
扉を開けて部屋中のティッシュ箱をかき集める
「泣きたいなら、ここで遠慮なく泣け。涙が枯れるまで付き合ってやる」
「アラタァ……！私って、そんなに魅力が無かったの……？アザゼル様が私をリストラしたのは……魅力が無かったから……？」
レイナーレは大粒の涙を流して新に訊く
リストラされたショックから自分を卑下し始めた
しかし、新はそれを否定する
「アザゼルがお前らをリストラしたのは、天敵の闇人（やみびと）と結託した故（ゆえ）の処分であって、決してそんな事じゃねぇよ。アザゼルは俺に、お前らを頼むって言ってきたんだ。お前らを心配して、俺を信じているからここに預けたんだよ。それにレイナーレは充分魅力がある。俺が保証してやるよ。だから、もう自分を卑下すんな。な？」
「……ッ！本当!?アザゼル様が私を心配して!?はぁ……アザゼル様、なんて心がお広いお方……アラタ、ありがとう。お陰で少し気が楽になったわ」

「気にするな。困った時はお互い様だろ？」
レイナーレはよしっと頷いて、寝室の扉を閉めて鍵をかける
そして新の前にやって来て――――
「アラタ。今から私に……あなたの愛をちょうだい。女としての私に……堕天使としての私に……」
潤んだ瞳でそう言ってきた
新は「良いのか？」と確認すると、レイナーレは無言で頷き服を脱いでいく
白く透き通る様な肌、くびれた腰、豊満なおっぱい、ピンクに輝く乳首
脱ぎ終えたレイナーレは裸体を隠さず、背中の黒い翼を広げた
「あの時は普通の私を抱いてくれたわよね……？今夜は、堕天使の私を抱いて欲しいの……。愛を求める堕天使の私に……お願い……」
新の胸に顔を埋め、翼で包み込む様に密着するレイナーレ
新は真剣なその気持ちを汲んでやるべきだと思い、レイナーレをゆっくりとベッドへ倒す
「アラタ……んっ……」
レイナーレが目を閉じ、新にキスを促す
新はその想いに応えてレイナーレの唇に自身の唇を落とす

２人は寝るまで肌を重ね続けた……

同居人増加と闇オークション

朝、新はレイナーレと共に寝ている
昨夜は性交を5回したので、泥の様な眠りにつけた
「う～……」
ゴロンッと寝返りをうつと、右手が柔らかな感触を得る
目を開くと、その先にはカラワーナが頬杖をつきながら横になっていた
しかも裸で
「カラワーナ？お前、別の部屋で寝てたんじゃなかったのか？」
「最初はそうだったんだが、どうにも寂しく感じてしまってな。それ故にミッテルトと共にコッソリ忍び込んだ。アラタとレイナーレ様が気持ち良さそうに寝ていたのを見て、私達も寝たくなったんだ。もしかして、迷惑だったか……？」
カラワーナが新の手を自身の胸に当てながら訊いてきた
いつもは大人の妖艶さを醸し出しているのに、今は小動物の様な可愛らしさを出している
隣を見てみると裸のレイナーレだけでなく、ミッテルトも裸でスヤスヤと眠っていた

新は軽く笑いながらカラワーナの乳房を揉む
「迷惑どころか大歓迎だ。お前らも昨日はありがとな。レイナーレを心配して、俺に慰めさせたんだろ？そんな事で怒らねぇよ」
「……ありがとう、アラタ。んっ……ぁぁんっ。本当にスケベだな。レイナーレ様を抱いたと言うのに、まだ欲しいなんて」
「ところでよぉ、さっきから1つ気になってたんだが……この部屋にはちゃんと鍵が掛けられてた筈だ。何でお前ら入ってこれたんだ？」
新はずっと頭の中で引っ掛かっていた疑問をぶつけた
昨晩、レイナーレは邪魔をされたくないとばかりに鍵を掛けた筈……
鍵を掛けたこの部屋に何故侵入出来たのか……
「あぁ、その事か。この娘が深夜に来て、鍵を持っていたからなんだ」
そう言ってカラワーナが掛け布団を捲(めく)ると、朱乃が裸で寝ている姿が見えた
新は朱乃を見ただけで理解出来た
「そうか、また無断で侵入したのか」と……
新はスヤスヤと寝ている朱乃の乳首をギュッと摘まんだ
「んんっ……！ん……新さん。朝から欲しがり屋さんですわね」
「もう朱乃が突然いる事には驚かねぇよ。ただな……無断で侵入するのだけはやめてく

れないか？」
「あらあら。どうしてですか？新さんが喜ぶと思って忍び込みましたのに」
「忍び込む自体で問題が発生してるんだよ。俺のプライバシーが悉く――――」
「う～ん……もう朝なのか」
　隣から更に聞き覚えのある声
　振り返って見てみると……何故かゼノヴィアもいた
「あぁ、新。おはよう」
「おはよう、じゃねぇだろ。何でゼノヴィアまで俺の部屋っつーか、俺の家に無断で侵入してやがるんだ？」
「無断じゃないぞ。ちゃんと朱乃さんから確認を取って一緒に入ってきたんだ」
「朱乃からじゃなくて俺から許可を取れよ！だいたい何の用で来たんだ？」
「うふふ。私達、今日から新さんの家に住む事にしましたの♪」
「……は？」
　新の脳内は答えを導き出せなかった
　”何故唐突に朱乃とゼノヴィアが同居しなきゃならない？”
　”何故そんな事にならなければならない？”と……
「イツカラソンナハナシニナリヤガリマシタカ？」

「つい最近決めた事だ。朱乃さんに誘われて、私も住んでいたマンションを解約した。今日から新の家に住むぞ」
「因みに、新さんのお父様からは既に許可を貰っていますわ」
　新は開いた口が塞がらなかった……
「朱乃さん。新が固まっているんだが」
「きっと嬉しくて固まっているんですわ」
「んな訳あるかぁっ！只でさえ財政難な家庭状況だっつぅのに、更に居候が増えるだと!?ふざけんなぁっ！」
「新さん。居候ではなく同居、もしくは同棲ですわ」
「殆ど意味は同じだろうがぁっ！親父も何勝手な事をしてくれてやがる！」
　新はキレながらスマホで父親の総司を呼び出そうとしたが、着信拒否にされていた……
　新は手を震わせ、オーバースローでスマホを壁に叩きつけた
「新。もうマンションは解約してしまったんだ。私には帰る場所が無い。だから、お前の家に住んでも良いだろう？」
「ちょっと待て！俺はまだ認めていな――――」
「あらあら、ゼノヴィアちゃん。パジャマを着たままで新さんにお願いしても聞いてく

れませんよ?」
　朱乃は自身のおっぱいを撫でながら新に近づいていき、その豊満な凶器(おっぱい)を押しつける
「新さんは裸がお好きですから、パジャマを脱いで裸でお願いすれば、きっと許してくれますわ♪」
「そうか。新が望むなら、私も裸になろう」
「コラ朱乃!汚えぞ!俺の大好きな全裸で攻撃してくるとは!」
　ゼノヴィアはボタンを1つずつ外していき、上のパジャマを豪快に脱ぎ捨てる
　ノーブラだったので見事なおっぱいとピンク乳首が『こんにちわ』をしてきた
　更にズボンも脱いで、残ったのはパンツ1枚だけとなった
「ゼノヴィアちゃん。下着も脱がないといけませんわよ?」
「朱乃さん。どうせだから、このまま朝風呂に入らないか?」
「あらあら。良いですわね~♪新さん。私達をここに住まわせてくださるなら、体を隅々まで洗っても良いですよ?おっぱいも……お尻も……私達の大事なト・コ・ロ・も♪」
「イエスモチオッケーオフコース!」
　新は欲望に負けてしまったが、得た物はとてつもなく大きかった
「新から了解を貰ったと言う事で、早速朝風呂に入ろう。新、私の体も隅々まで洗ってく

れ」
「うふふ。新さんとお風呂♪初めてですからドキドキしますわ」
「へへへっ。朝からなんて役得だ。それじゃあレッツラゴー」
意気揚々とベッドから立ち上がる刹那、突然部屋のドアが開けられる
そこにいたのは――――『王（キング）』リアス・グレモリーと『戦車（ルーク）』塔城小猫（とうじょうこねこ）だった……
リアスは部屋に足を踏み入れるや否や、ベッド上の様子を見て嘆息する
「もうあなたの事で驚く事は何も無さそうね」
「……チョットマチナサイ。ナゼニリアストコネコマデイルンデスカ？」
「あらあら。私達”２人だけ”なんて言ってませんわ。部長も小猫ちゃんも、新さんの家に住むと決めていましたの」
「待てやコラ！４人も増えるなんて聞いてねぇぞッ！」
「……先輩。朝からケダモノ」
「もう俺の性癖に関しては否定しねぇぞ。だがな、何で小猫まで俺ん家に住む必要があるんだ？」
「……先輩を性犯罪者にさせないための監視です」
「俺はそんなに信用ねぇのかッ！」
新の家に居候が４人も増えてしまい、一誠の家に電話したところ……そっちでもアー

シアが同居している事が判明した

「あっ！コラ！そのジュースうちの～！」
「……早い者勝ち」
「目玉焼きが出来た。持っていってくれ」
「アラタ。ちょっとドレッシング取ってよ」
「レイナーレ。それぐらいは自分で取れよ」
いつの間にか新の家は賑やかになっていた
以前は独り暮らしだったのに、今は何だか家族が増えた様に感じてしまう
リアス達が押し掛けてきたのは若干ありがた迷惑だが、新は”家族って、やっぱこんな物なんだなぁ……”と少し微笑んだ
そこへ風呂上がりのリアス、朱乃、ゼノヴィアがバスタオル1枚と言う格好でリビングへ入ってきた
「新、お風呂ありがとう」
「気持ち良かったですわ～♪」

「新の家の風呂は広いな。でも、どうして一緒に入らなかったんだ？」
「入ろうと思ったけどよ。何か小猫から”……性犯罪者先輩”的な事を言われるのが鬱陶しいから――――イデェッ！おまっ、フォークを投げるな！」
新は背中に刺さったフォークを引き抜く
朱乃とゼノヴィアはソファーに座ってテレビを見ている新の隣に腰掛け、リアスは背後から新の首に自らの手を絡ませ、抱き寄せる様な体勢となる
後頭部に当たる柔らかなおっぱいが丁度良いクッションの役割を果たしていた
「小猫ちゃんはまだまだ子供ですから、新さんにアプローチ出来なくて嫉妬しているんですわ。新さん、私のおっぱいを隠しているこのタオル……取りたくありませんか？」
朱乃がタオルの端を摘まんでチラチラと見せつける
小猫はムッとした顔で新を睨む
「朱乃さん。裸になるなら自分からタオルを取れば良いのでは？」
「うふふ。ゼノヴィアちゃんは分かっていませんわね？自分で取るのも良いけど、男の子に取らせるのも一貫ですわ」
「なるほど……勉強になる。よし新、私のタオルも取ってくれるか？」
「そりゃあ勿論」
新は2人のタオルを勢い良く引き剥がした

外した反動で弾む朱乃とゼノヴィアの乳房(おっぱい)

新は背中から手を回す様にして、右手で朱乃の乳房(おっぱい)を、左手でゼノヴィアの乳房(おっぱい)を揉んでいく

「ぁぁんっ♪うふふ。やっぱり新さんにおっぱいを揉まれると、気持ち良いですわぁ……」

「うんっ……新に揉まれると、何だか安心して……身を委ねられそうだ」

「朝からこんな美味しい思いを出来るとはな。男冥利に尽きる――――っ?」

新は柔らかい感触が後頭部から離れたのを察知して後ろを振り返る

すると……対抗心を燃やしたのか、リアスは巻き付けていたバスタオルを取り払って魅惑のボディを見せる

1枚の布から解き放たれた綺麗なおっぱいが揺れ、再び新の後頭部に密着した

「おぅふっ。リ、リアス?」

「私の胸も気持ち良いでしょ、新?」

「あらあら、部長もやりますわね」

左右におっぱい、後頭部におっぱいと言った奇跡の陣形――――『おっぱいトライアングル』が完成した

全世界の男が羨(うらや)むフォーメーションを製造させた新は一旦手を離してリモコンを取

り、テレビをつけてから再び乳房を揉みしだく

『次のニュースです。5日前から相次いで起きた女性失踪事件で、行方不明となった女性の数が２０人を超えました。警察も全力を上げて捜索していますが未だに手掛かりは殆ど無く、失踪現場に残されたのはこの奇妙な青い薔薇一輪だけと言う不可解な花であり、この薔薇を元に捜索範囲を拡大していこうと――――――』

青い薔薇と言う単語に、新はある人物が浮かび上がる

村上京司――――――レイナーレ達を裏切り、1度アーシアを殺した闇人……

この失踪事件の黒幕が村上である事を確信した新の手に力が入る

「んんっ……！あ、新さん。痛いです……」

「ど、どうしたんだ……？急に力を入れて……」

「あっ、すまねぇ。この失踪事件……闇人が絡んでやがるな」

「そうみたいね」

「嫌な胸騒ぎがしやがる……。しかも、この事件の裏に潜んでる黒幕は――――――恐らく〝アイツ〟だろうな」

新はテレビを消して失踪事件の情報を集める事にした

――――――

「「「人身売買ッ!?」」」

場所は一誠の家

新はオカルト研究部のメンバー全員を集め、失踪事件の黒幕と正体を話していた

因みにレイナーレ達には留守番を頼んである

「恐らくそうだろうな。裏で仕入れた情報だと、最近あちこちでオークションみたいな催し物が開催されてるらしい。そして、その商品が現在行方不明になってる女達……と言う説が1番有力だ。黒幕は現場に落ちてた証拠品の薔薇から――――村上京司(むらかみきょうじ)」

その名を聞いたアーシアはビクッと体を震わせ、一誠はグッと拳を握る

村上京司(むらかみきょうじ)はアーシアを殺した張本人

アーシアにとっては恐怖の対象だった

「怖い物知らずね。私の町で人身売買を行(おこな)うなんて。今度こそ消し飛ばしてやりましょう」

「新、勿論行くよな?アーシアの仇を取ろうぜ」

「その言葉を待ってたぜ。情報をかき集めた甲斐があった。場所は○×港の第4倉庫、開始時間は深夜11時からだ。ただし、オークションは特定の招待客専用の場だから強行手段はあまりお勧めしない」

「じゃあ新くん、どうするんだい？」
「こういう時こそ、頭を使うんだよ」

○×港の第４倉庫
その近くにあるドラム缶を利用して身を潜めるオカルト研究部一行
そこへオークションの招待客らしき人物がやって来る
「よしっ。ゼノヴィア、あのオッサンをだな――――――――分かったか？」
「御安いご用だ」
新から指示を受けたゼノヴィアが、『騎士（ナイト）』のスピードでオッサンに近づき、首筋に手刀を打ち込んで気絶させる
その後、オッサンを引きずって新達の所に戻ってきた
新は懐（ふところ）を探り、招待状らしき紙を手にする
「１枚で１０人までか。よし、いけるな」
「新。頭を使うって言った割にはやり口が力ずくじゃないかしら？」
「何を言う。招待客に成り済まして潜入するのは大事な技だ。最初っから突っ込む気

満々で行くと、逆に気取られる可能性が高い。朱乃、変装用のスーツやドレス、仮面を出してくれ」
「はい」
朱乃は魔力で皆を招待客に変装させていくのだが……一誠がギャスパーの変装を見て指摘する
「ギャスパー、なんでお前までドレスなんだよ!?」
「だ、だって、僕にスーツなんて似合わないですぅぅぅ!」
「確かに似合わないけどよ、万が一お前が人身売買に出されても責任は一切取らねぇぞ(笑)」
「ふぇぇぇぇっ!?ぼ、ぼ、僕売られちゃうんですかぁぁぁっ!?ひぃぃぃぃぃんっ!」
一漫才舞踏会で付けるような仮面を装着して、いざ第4倉庫へ向かう
見張りにも招待状を見せ、難なく中に潜入する事に成功した
オークション会場内は仮面で顔を隠した人でごった返しており、まるで何処かの舞踏会の様な雰囲気を出していた
どうやらまだ人身売買のオークションは開催されてないようだ
眼前に並ぶ料理の数々に一誠は腹を押さえる

「い、如何わしい場なのに……美味そうな料理が……！」
「新。これから私達はどうするべきか、教えてくれないかしら。こう言った場数はあなたの方が多いでしょ？」
リアスが新に訊く
「そうだな。固まってたら怪しまれるから、何組かに別れよう。村上が現れたら、タイミングを見て合図を送る。それまでは料理を食うなり好きにすれば良い」
新の提案によりチーム分けをする事になった
チーム分けは新・一誠・ギャスパー組
リアス・アーシア・朱乃組
祐斗・小猫・ゼノヴィア組に分けられた
相手に気取られないように散開していく
「さて一誠、ギャスパー、オークションが始まるまで料理を堪能するか」
「おう。……しかし、スゲェな。キャビア、フォアグラ、ローストビーフにフカヒレ……！高級食材が満載じゃないか……！」
「こんな大きいトリュフ、初めて見ましたぁ！」
一誠とギャスパーは並んでいる高級食材の数々に思わずはしゃぎ、その様子に新は軽く笑いながら料理が盛られた皿を取る

一誠とギャスパーも新が取ったのと同じ皿を取り、肉を口に運ぶ
「美味いな～♪」
「はい、美味しいですぅ♪」
「こいつはなかなか美味いな。コックさん、この肉は何なんだ？」
「はい。そちらはスコットランド伝統のお料理でして、最高級の羊の膀胱（ぼうこう）を使用しております」
膀胱（ぼうこう）――――腎臓から送られてくる尿を一時蓄えておく袋状の器官
所謂（いわゆる）小便袋である……
「「ブゥゥゥ

「プハァッ！聞かなきゃ良かったな……スマン……」
新は食材を聞いた事に激しく後悔した
”知らない方が良い事実もある”
ドラマなどでよくある台詞を初めて痛感した
『ご来場の皆様、お待たせしました。これより本日のメインイベントであるオークションを開始致します』
バンッ！
スポットライトが前方にある舞台に当てられる
舞台の真ん中には主催者とも言える男が薔薇を持って立っていた
「本日はこの場にご来場頂き、誠にありがとうございます。私はこのオークションの主催を務める村上京司と申します」
紳士的な挨拶をする村上京司
一見華やかな舞踏会に見えるが、実態は人身売買のオークション
村上は腕を広げながら演説を続ける
「本日ご招待された皆様は政界、財界、派閥の大御所や暴力団など。特に財力に秀(ひい)でている方々に集まって頂きました。この会場に集まって下さった皆様は実に幸運です。私の開発した宝石を、どこにも真似出来ない宝石を手にする事が出来ますから」

周りを見渡してみると、顔は仮面で隠れているものの……確かに普通の招待客では無い事に気づいた
強面(こわもて)そうな人間達もいる
新は密かにリアス達に集合を掛ける
「さて……私は長話があまり好きでは無いのでね。本題に入りましょうか。今日ご紹介するのは、私が厳選した美しき子羊達です。皆様、拍手でお迎え下さい」
パチパチパチパチパチ！
盛大な拍手の中、舞台を覆うカーテンが開かれる
そこには両手を後ろで拘束された裸の美女美少女達がいた
もちろん一誠はすぐに反応したが、アーシアに目を塞がれてしまう
晒し者にされてる裸女達は涙を流す
「ここにいる可愛い子羊達。このままで売るのも良いですが、更に美しさを向上させて皆様にお渡ししようと思います。こちらをご覧ください」
村上が指を鳴らすと、ピンク色の液体が入ったボトルが運ばれてくる
新達は勿論、会場にいる全員が怪訝そうな顔をした
「お静かに。今運ばれて来た液体は、私が独自に開発した液状の宝石『ヴィーナス』です。稀少価値が高く、数百万ｃｔ(カラット)の中から数ｃｔ(カラット)しか取れないピンクダイヤモンドを集め、

液状にした物がこちらです。今からパフォーマンスをお見せ致しますので少々お待ちください」

村上が裸の美少女1人を前に出し、ピンクダイヤモンドを溶解した液体を垂らしていく

「きゃっ……！つ、冷たいです……」

「我慢してくれたまえ。すぐに済む」

鎖骨から乳房（おっぱい）、乳首、腰、下半身に液体が伝っていき、裸体がピンクダイヤモンドでコーティングされていく

幻想的な見世物に会場の招待客は「おぉ～っ」と感嘆の声を漏らす

「如何でしょうか？美しき白い肌を持ったいたいけな少女が、稀少な宝石の輝きを身に纏いました。しかも、宝石であるにもかかわらず――――」

ムニュッ、モミモミ……

村上が裸の美少女の乳を揉み始めた

美少女は感じているのか、頬を朱色に染めてしまう

「この様に女性特有の柔らかさを保ったまま、宝石の価値を発揮しています。これこそ、今までに無かった新しい宝石――――生きた宝石です」

「素晴らしい！」

「美しいわ～」
「是非私に売ってくれ！」
「金ならいくらでも出すぞ！」
金持ち共が魅了されたのか、次々と手を挙げて催促をする
人間を宝石にしたオークション
村上京司のやっている事は非人道を超えた鬼畜所業だった
「新！もう俺は我慢出来ねぇ！」
「あぁ、流石に俺も腹立ってきやがった。派手にぶっ放すか」
新が手で合図すると待ってましたと言わんばかりにリアスが魔力弾を、朱乃が雷を挨拶代わりに撃ち放つ
村上はその２つを片腕で弾き返した
「な、何だ今のは!?」
「化け物よ！」
「に、逃げるんだ！」
会場はパニックに陥り、騒ぎが拡大していく
村上は埃（ホコリ）を払いながら言う
「どうやら招かれざる客が来ていた様だな。リアス・グレモリー」

「村上京司。よくもこんな非人道的な事を私の管轄で行(おこな)ってくれたわね。今度こそあなたを消し飛ばしてあげるわ！」
「クックックッ。私を消し飛ばすか……果たして出来るかな？」
村上は宝石少女を下がらせて舞台を降りる
「おい主催者！ドアが開かないじゃないか！」
「早くここから出せ！」
「私はこんな所で死にたくないんだ！」
会場に集まった招待客が村上に駆け寄って逃走経路の案内を強要する
しかし、村上は口の端を吊り上げながら――――
「オークションは中止となった。よって……死ね」
ジュババババッ！
薔薇の剣に斬られ四散する招待客
肉と血が落ちる生々しい音が奏でられ、招待客が絶叫を上げる
「なっ!?あいつ何を!?」
「今からこの会場は戦場となる。商品と害敵以外の者達は居ても邪魔なだけだ。死んでもらうしか無いだろう？ハッ！」
村上が腕を前に突き出すと茨(いばら)が鞭となって飛び出し、次々と招待客を惨殺していく

数分と経たない内に屍(しかばね)が大量生産された
茨に付着した血を舐め取る村上京司
「クックックッ。やはり欲深く腐りきった人間の血肉ほど美味い物は無い」
「村上！てめぇ、まさか最初っから招待客全員を殺す気だったのか！」
「その通りだよ。本来なら多額の金を貰ってから殺す手筈だったんだが、それが早まっただけだ。何の問題も無い」
「村上京司……！あなたはどれだけ人の命を弄(もてあそ)べば気が済むの!?」
「笑わせてくれる。人間の欲望を叶え、欲望を糧に生きている悪魔が言えた義理か？所詮、君達も我々と同じ存在なのだよ」
「部長や俺達をてめぇなんかと一緒にするなッ！」
一誠がブーステッド・ギアを発動させ、村上に殴り掛かっていく
村上は籠手の拳打を片手で受け止めた
「ほう。前よりも力が上がっている様だな。久々に体を動かすのも悪くない！」
村上が一誠の腹に蹴りを入れる
吹っ飛ばされながらも、一誠は体勢を立て直して着地
村上は懐(ふところ)から黒い球体を複数個取り出し、地面に投げつける
球体から量産型の闇人(やみびと)が大量に出現した

「さぁ、始めようか。今宵の甘美なる宴を」

おっぱいパワー爆発！

○×港の第４倉庫
この中で闇人とリアス・グレモリー率いる眷属悪魔達の死闘が繰り広げられていた
だが……やはり量産型の闇人では相手にならず、残った闇人は村上京司ただ１人となった
「量産型とはいえ、１０００匹の闇人を数分で片づけたか。やはり君達は１番の障害になりそうだ」
死屍累々と並ぶ量産型の闇人を踏みにじりながら、魔人態と化した村上京司が歩み寄る
「村上京司！てめえだけは許さねえぞ！ブーステッド・ギア！」
『Ｂｏｏｓｔ!!』
一誠の籠手に力が溜まる
しかし、村上はただ嘲笑するだけだった
「おやおや。良いのかな？君の神　器の力は粗方把握している。１０秒毎に力が倍増していき、その力を誰かに譲渡する事も出来る。更に『禁　手』とやらにも目覚めた

が、まだ未熟らしいじゃないか。そんな危険な力をここで振るえるのかい？あのか弱き子羊達も、巻き込んでしまうんじゃないのか？」
「うっ……！」
「クックックッ。やっぱりそうだ。力があっても、使用者がクズでは話にならないな！」
ドゴッ！
村上の膝蹴りが一誠の腹に炸裂
隆起した茨が腹に食い込み、一誠は吐血する
続けて村上は右拳で一誠を殴り飛ばした
「調子に乗んなよ！村上イッ！」
新は闇皇に化身して闇皇剣で斬りかかるが、薔薇のサーベルに阻まれる
新は脇腹に蹴りを走らせるが、村上は左手でガード
「チッ。久々とか言ってた割に強えな！」
「教会の時は油断していたが、今回は違うぞ？」
グワッ！
村上の背中から何本もの長い薔薇が突き破り、中央の花から針が発射される
新はギリギリで回避し、一旦距離を取る
「「くらいなさい！」」

リアスと朱乃の同時攻撃が放たれる
対する村上は背中から出現した薔薇を複雑に絡ませ、一基の巨砲(キャノン)に変化させた
「『薔薇の主砲撃(ローズ・キャノン)』！」
ゴバァァァァァァァァッ！
中央から高密度の魔力が放出され、リアスと朱乃の攻撃を相殺(そうさい)する
「邪魔だな。『幻影の薔薇(シャドウ・ローズ)』」
リアスと朱乃の足元の影が薔薇の形となり、影を絡ませ拘束していく
「う、動けない……！」
「ダメですわ！魔力で攻撃しても解けません！」
リアスと朱乃の攻撃、助けに入った祐斗の聖魔剣(せいまけん)で斬っても影は四散しなかった
「『幻影の薔薇(シャドウ・ローズ)』の実体は影。影をいくら斬ろうが無駄だ」
「はぁぁあああっ！」
ゼノヴィアが聖剣デュランダルで村上の頭を狙う
村上は降ってくる刃を片手で制止し、もう片方の手で突き飛ばした
「ふぅむ……それが有名な聖剣デュランダルか。なかなかの名刀だが、そこの赤龍帝(せきりゅうてい)同様に使用者がクズでは話にならない」
「まだまだぁっ！」

一誠は再び殴り掛かろうと突っ込む
村上は腕から鞭を出して、商品だった美少女の1人を捕まえる
「おっと。このか弱き子羊を殴る気かい？」
「おぉっ！小振りなおっぱい――――――じゃなかった！女の子を盾にするなんて卑怯だぞ！」
「卑怯？それはどうも。だが、策を用いるのは戦いでは定石だ。油断している君達が悪いのだよ。『種子の機関銃（シード・バルカン）』！」
村上は大きく裂けた口を開け、口から種の弾丸を連射する
「ぐあぁぁぁあっ！」
「きゃあっ！」
「うわぁっ！」
至近距離にいた一誠は勿論、アーシアや小猫、祐斗は『種子の機関銃（シード・バルカン）』をくらってしまった
「チクショウ！裸の女達がいるから迂闊に攻撃出来ねぇ！せめて、こいつを外に連れ出せたら良いんだが……」
「ハハハッ。何を迷う必要がある？君達は私を殺したいのだろう？ならば、人質ごと殺す勇気を持って攻撃しなければ死んでしまうぞ？」

「女の子を盾にしただけじゃ飽き足らず、そんな台詞まで言いやがるとは……！ハーレム王を目指してる俺に対する侮辱だ！」
「一誠、ここでその言葉をチョイスすんのは場違いだろ？」
そんなバカみたいなやり取りに村上は口元を笑ませて一誠に甘言を吐く
「ハーレム王か……フッフッフッ。赤龍帝それが君の欲望なら、我々の所へ来るべきだ。悪魔等と言う下等生物共と一緒にいるよりは、我々と行動した方がハーレムを達成し易いぞ？ならば、私のビジネスをサポートしてみないか？すぐに美女美少女をたくさん抱けるぞ。こんな良い話は他に無い上に、君自身にとっても悪くない筈だ」
「……そ、そんな誘惑に屈する俺じゃねぇぞ！」
「ちょっと待て！何だ今の長い間は!?お前”それも良いかな”って考えたろ！」
一誠は魅力的な誘惑に弱かった……
他の皆も一誠の揺らぎ具合に苦笑したり、呆れたりする
「イッセー！もう！よだれを拭きなさい！あなたどうしてこんな時まで！」
「……す、すみません部長。どうにもハーレムって言葉に弱くて……」
「ったく、安い男だな一誠。だからいつまで経っても童貞止まり――――」
ここで新は野次るのを止めて思考回路を働かせる
数秒後、頭に電球マークが浮かんだ新は一誠にトンでもない事を言い出した

「おい、一誠。そんなにハーレムが欲しいか？」
「そりゃ男として当たり前だろ！」
「そうかそうか。だがな……今はハーレムよりも魅力的な褒美がお前の近くにあるんだぜ？」
　悪巧み顔をした新の言葉に耳を傾ける一誠
　次に新はアーシアを指差す
「良いか？お前はアーシアと言う最高の逸材を手中に収めている。従順で未だに穢れを知らない元シスター、加えてお前ん家にホームステイしてる身だ。１歩踏み出せば――
――アーシアに乳首を吸わせてもらえるかもしれねぇなぁ」
「……っ!?」
　衝撃的過ぎる甘言に一誠の目玉が飛び出し、新はアーシアに向かって叫ぶ
「アーシア、もし俺達が生きて帰れたら一誠に乳首を吸わせてやるんだよな！」
「「「――――っ!?」」」
　トンでもない発言にアーシア以外のメンバーは揃って絶句
　アーシアは処理しきれない事態に混乱してしまう
「え、ええっ!?あ、あの……っ」
「一誠は１度お前を殺した村上（アイツ）をぶっ倒したがってる。だが、その為にはアーシアの乳

首が必要不可欠なんだよ！お前の口から乳首を吸わせるって言うんだ！」
「ちょっ、おまっ……!?アーシアになんて事を吹き込んでんだよぉぉぉぉぉぉっ!?」
「え、アーシアの乳首吸いたくねぇの？」
「吸いたいっ！……いや、待て！確かに吸いたいけど、今はそんな場合じゃねぇだろ!?」
…
「さあ、答えろアーシア！一誠に乳首を吸わせる？吸わせない？ドッチ？」
一誠は一刻も早く羞恥プレイを止めさせようと殴りかかるが……アーシアから返ってきた答えは――――
「……良いです、イッセーさん」
振り絞る様に聞こえてきた返事に一誠の耳がピクッと反応し、首をゆっくりとアーシアの方に向ける
一誠はその言葉を聞いてやる気をアップさせていた
「マジですか……!?じゃ、じゃあ……おっぱいを吸っても!?」
「は、はい……っ。イッセーさんさえ宜しければ……す、吸ってください……っ」
会場（戦場）に響くアーシアの一大決心
それを聞いた一誠から嘗（かつ）てない程の膨大な魔力が放出された
『ま、まさか……こんな事で……っ！こんな事で本当に至るとは……っ！』

「ふふふ。吸う。吸える！吸えるんだアアアッ！よっしゃぁぁぁ

「……新先輩と負けず劣らずのドスケベ」
「凄い魔力だな」
「あらあら。イッセーくんらしいですわね」
「イ、イッセー先輩凄いですぅぅぅぅぅぅっ！」
村上は一誠のパワーアップ過程に開いた口が塞がらなかった
「まさか女性の乳首を吸いたい想いでそこまで強くなるとは……。何故か神器（セイクリッドギア）が可哀想に思えてしまう……だが、強くなろうと君は人質ごと攻撃する事など出来はしない。妙な真似をすれば子羊を――――」
ドンッ！ドンッ！
一瞬にして目を疑う光景が飛び込んでくる
村上が喋り終わる前に一誠が超速で飛び出し、村上の顔面に拳を入れていた
「遅いんだよタコ！」
「ぐわぁぁぁっ！」
村上は殴られた勢いで外まで吹っ飛ばされた
同時にリアスと朱乃を縛っていた『幻影の薔薇（シャドウ・ローズ）』も消滅する
「オオラァッ！待ちやがれ村上ィィィィィィィィィィッ！」
一誠は飛ばされた村上を追って外へ飛び出していった

「新……あなたってヒトは……。もう少し言葉を選べなかったの……?」
「なぁに言ってやがんでぃ。一誠にやる気を出させるにはこう言うしか無かったんだよ。まあ、やる気じゃなくて殺る気になっちまったが結果オーライだ（笑）」
ケラケラと笑う新の近くではアーシアが顔を真っ赤にして湯気を噴出していた……

「くっ……1度ならず2度までも油断してしまった。また顔が少し凹んだ」
村上は頭を叩きながら起き上がり、薔薇の花吹雪で一誠を攻撃する
「外に出ればこっちのもんだ!いっくぜぇぇぇぇぇぇぇっ!」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ(エクスプロージョン)!!』
一誠は倍増した力を集めて掌(てのひら)を向ける
「くらえ!ドラゴンショットオオオオオッ!」
ゴオオオオオオオッ!
一誠の掌(てのひら)から魔力が帯状に解き放たれ、薔薇の花吹雪を跡形もなく消滅させた
村上は危険を察知して回避するが、右腕を焼かれてしまう
「ぬうううっ!これ程までとは……っ」

「よそ見してる暇は無ぇぞ！」
ドゴッ！
一誠の拳が村上の腹にめり込む
村上は吐血をするも、一誠に蹴りを入れるが……
「アハハハハハハ！効かねぇ効かねぇぇぇぇっ！」
蹴り足を掴まれ、そのまま地面に叩きつけられた
後から合流した新達も呆然とするが、優勢だったので村上に攻撃を加える事にした
「小猫！ゼノヴィア砲、発射準備！」
「……ＯＫです」
「いつでも良いぞ」
小猫がゼノヴィアを持ち上げ、ゼノヴィアはデュランダルを構える
発射指揮官は新だった
「ゼノヴィア砲、発射アァァァッ！」
ブゥゥゥンッ！
ロケットと化したゼノヴィアはデュランダルで村上の前面を斬る
村上の肩口から横っ腹に斬り傷が出来た
「ぐおぉぉぉっ！」

「まだまだいくよ。氷の聖魔剣ッ！」
祐斗が聖魔剣を地面に突き刺すと――――地面を氷が走り、村上の足を凍結させて動きを封じる
「新、イッセー、朱乃！トドメよ！」
「「はい！」」「おう！」
リアスの合図で４人が一斉に魔力を溜め始める
そして――――４人の手からトドメの一撃が放たれた
「ぐ、ぐおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
絶叫する村上は４つの魔力の束に包み込まれた
体がブスブスと煙を出し、夜空を見上げたまま硬直している
「勝った……勝ったぞ……っ！ぐふふふっ。これでアーシアの乳首を……！」
「吸えると思っているのかい？」
――――ッ！
なんと村上はまだ死んでおらず、余裕を表すかの様に首を鳴らしていた
「嘘でしょ……!?あれだけの攻撃を受けて……まだ立っていられるの!?」
「チクショウ！なんて野郎だ！ある意味、今の一誠よりも怖ぇな！」
「グレモリー眷属。今のはだいぶ効いたよ。流石に痛かった」

村上は右腕を押さえながら口をニヤケさせる
一誠は村上が死んでいなかった事に地団駄を踏む
「ここまで私を追い詰めたのは君達が初めてだ。敬意を評して見せてあげよう。限られた闇人が持つ力――――『超魔身』を」
「超魔身?」
ゴオオオオオオオッ!
村上の全身から質の違う魔力が大量に噴き出し、異変が起こる
全身からトゲが隆起、筋肉が肥大していき、首が数センチ伸びて口がドラゴンの様に突き出てくる
異形の闇人が更なる異形への変貌を遂げた……
「コオオオオオオオ……ホオオオオオオオ……」
「な、何なんだこれは……!?何が起こりやがった!?」
「クッハッハッハッハッハッハッハッ。これこそ、闇人の力を極限まで高めた者のみが成せる力――――『超魔身』だ。私の超魔身態はあまりにも醜いので使うのを拒んでいた。だが……そうも言ってられない様だ」
関節をゴキゴキ鳴らす村上は今まで以上に口の端を吊り上げていた

「……強い魔力を感じる。恐らくこの近くだね。でも……かなり厄介な事になってるかもしれないよ」
「渉、それってどういう事？」
「魔力の質が邪悪な気配を発してる……。この波動は『超魔身』に違いない。誰かが『チェス』の一員と戦ってるんだ」
「まずいわね……。なら、さっさと行って鎮めてやらなきゃいけないじゃない」
「うん。分かってるよ、祐希那」

一誠の”アーシアの乳首を吸いたい”と言う想いが爆発し、村上京司を圧倒的に打ちのめしていた
仲間のと連携攻撃も決まり、村上は死んだと思っていた
だが、村上は死んでないどころか……更に『超魔身』と言う強化術を行ってパワーアップしてしまった

「さて、赤龍帝。私は今から……この右拳で君の顔面を打ち抜くぞ」
超魔身態となった村上は拳を見せつける様に掲げ、どこにどう攻撃するか宣言してきた
「バ、バカにしてるのか！攻撃を教えるなんて、今の俺なら目を瞑ってでも――――」
「避けられるとでも思っているのかい？大した自信だ。私が拳を出す前に避けても構わないぞ」
村上は拳を掲げたまま静止し、一誠は目を凝らして拳を見る
『禁　手』の状態は体力と魔力をかなり消費してしまうので、動き回って翻弄するのは得策では無いと踏んでの行動だ
なので、拳を出した瞬間に全力でかわし、一撃を加えてやろうと一誠は考えている
一誠は村上の目と拳に細心の注意を払って構える
『さぁ来い！こうしてる間にも、ブーステッド・ギアの力で倍増していくんだ。かわした後で一気にケリをつけてやる！』
１０秒……２０秒……３０秒と時間が過ぎていく
ピクッ……
『今だ！』
一誠は拳が来る直前の動きを見逃さず、背中から魔力を噴出して右に回避――――

ドゴオオオオンッ!
「おやおや。ちゃんと拳で攻撃すると言ったのに、躱せなかった様だね」
出来なかった……
右に回避した筈の一誠は、地面に顔を抉り込ませる様な形で沈んだ
「――――ッ!イッセー!」
「何だよ今のは!?殆ど拳が見えなかった!?」
「簡単な事だ。彼が避けるよりも速く動き、速く拳を打ち込んだ……ただそれだけだよ」
一誠の兜が割れ、拳の痕がくっきり残った頭部が露出する
グレモリー眷属の怒りが上がり、魔力を集中させていく
新はリアスから『プロモーション』の許可を貰い、『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』で『闇皇の神速槍騎士(アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト)』に変異した
「ぶっ殺してやる!」
「消し飛べェェェ

「うぉわぁっ!?」
新は跳ね返されたリアスの魔力をかろうじて回避
だが、左肩に少しくらってしまい煙が上がる
「アッチィィィィッ!なんて奴だ……あのバカでかい魔力を、拳だけで弾きやがった……!」
「次はリアス・グレモリー。君に左の蹴りをくれてやろう」
ビュンッ!ドゴッ!
村上は殆ど視認出来ないスピードで動き、リアスの脇腹に左足の蹴りをくらわせた
「カハッ……!」
右側の肋骨が折れ、リアスは血を吐きながら地面に転がる
「ぶ、部長ッ……!」
「ウオォォォォォォオッ!」
新も超神速移動で進み、村上の腹に槍を突き刺した
だが、貫通まではいかず……村上は余裕の笑みを見せながら槍を引っこ抜いた
「おまっ、冗談だろ?」
「現実だ。次は膝をやろう」
バゴッ!

村上の膝が新の腹にめり込み、その威力で鎧の一部が砕ける
「ガァハッ!-グ、グボェェェッ!」
吐瀉物と血を吐く新
村上は更に左拳で新を倉庫に殴り飛ばした
間髪入れず朱乃に右拳、小猫に右の蹴り、ゼノヴィアに肘鉄、祐斗に鉄槌をくらわせた
アーシアとギャスパーは何も出来ず、ただ尻餅をついて怯えていた
村上がアーシアを睨み付ける
「これはこれは、アーシア・アルジェントじゃないか。あの時に死んだと思っていたが……まさか悪魔になっているとはな」
「あ……ああ……」
「とても良い表情だ。心の底から怯えている。恐怖に顔を強張(こわば)らせた人間程美味なる物は存在しない。君の表情は、今まで私が見た中で最高の代物だ」
「「アーシアに近づくんじゃねぇェェェェェェェェェェェェッ!」」
ドゴッ!ザシュッ!
後ろから一誠と新が拳打と槍で村上に攻撃を加える
だが、村上には殆どダメージが無かった

「ほう。まだ動けるのか……大した物だ」
「アーシア！こいつは俺と新で押さえる！部長達に回復を！」
「は、はい！」
アーシアは何とか立ち上がってリアス達を回復させる作業に取り掛かる
「さっきはよくもやってくれやがったな。万倍にして返してやる！」
「出来ない口約束はしない方が良いぞ」
グキグキグキ！
村上は首を１８０度回転させて、新と一誠に高熱の火炎を浴びせる
「ぐわぁぁぁぁぁぁっ！」
「アッチィィィィッ！また火傷かよ！」
「ほらほら。次は上から行くぞ！」
村上は２人の頭上に飛び上がって太い両足で踏みつける
大地にヒビが入り、小波が跳ね上がる
「ふむ……そろそろ解除するか。超魔身を長く使っていると肉体が崩壊しかねないからな」
ググググ……ッ
村上は超魔身態から、元の魔人態へ戻した

そしてリアスを『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』で回復させているアーシアにゆっくりと近づいていく
「部長さん！しっかりしてください！もう少しですから！」
「その通り、しっかりしたまえ。もう少しで君達は死ぬのだから」
アーシアがビクッと反応して後ろを振り返る
そこには村上京司（むらかみきょうじ）が立っており、アーシアは両腕を掴まれ宙吊りにされる
「ア、アーシアを放しなさい……！」
リアスは魔力を撃とうとするもダメージで力を練れず、村上は自分に向けられたリアスの手を蹴る
一誠と新、他の皆もまともに動けなかった
「悪魔になったシスターか。これは傑作だな。しかし……そうなった事で逃れられない運命（さだめ）の渦に飲み込まれてしまった」
ビリビリッ！
村上がアーシアの制服を破る
アーシアは上半身裸の格好にされ、指で乳房（おっぱい）を弄（いじ）られる
「ひっ、いやぁぁぁぁ……」
「何とも皮肉だな。1度殺されたと言うのに、生き返ってまだ同じ相手に殺されてしまうとは……リアス・グレモリー、君も罪深い事をしたものだ。安心したまえ……アーシ

ア・アルジェントが今感じている恐怖、苦しみを再び取り除いてあげよう。あの時と同じ様に――――――心臓を串刺しにしてね」
村上の背中から長い薔薇が出現し、中央から針を出す
その照準はアーシアの心臓に定まっていた
「さらばだ、アーシア・アルジェント。君の骸(むくろ)には私の薔薇を添えてやる」
「やめろ……！やめろオオオオオオオオオオッ！」
一誠の叫びに村上は聞く耳を持たず
アーシアは死ぬ恐怖で目を閉じた……
ザシュッ
「……え？」
突然聞こえた”何かが斬られた”音
地面に落ちたのは村上の背中から生えた薔薇だった
思わずアーシアを放し、周りを見渡す村上
「誰だ！私の邪魔をするのは！」
シュタッ……
何かが地上に降り立ち、全員の視線がその方向に集中した
そこにいた”何か”に全員は驚愕してしまった

暗闇の中で輝く金色の鎧
靡くマントに紅の眼光
手に持った異形の剣
その者のは新の身に宿る『闇皇の鎧』と酷似していた……
「そ、その鎧は……!?まさか貴様……！」
「そう。『闇皇の鎧』と対を成す『光帝の鎧』……。村上京司。僕は……いや、僕達は今から君を狩るよ」
月光が出ていない闇夜の中、光帝の目が紅く光った

光帝の蝙蝠と愉快（？）な仲間達

「あ、新と同じ鎧……でもない……？けど、蝙蝠っぽい」
「あぁ。だが、あっちのは金色だし目も紅(あか)い。あんな鎧は初めて見た……何なんだあいつは？」
皆が視線を集中させる中、黄金に輝く蝙蝠は異形の剣を持ちながら村上に歩み寄っていく
剣の鍔(つば)が口を開いた狼の頭部となっており、頭のてっぺんから湾曲した刀身が伸びている
「いくよ。魔狼剣(まろうけん)フェンリオス」
黄金の蝙蝠が剣の刀身に魔力を込めていく
狼の目が光り、金色のオーラが現れる
「『光帝(こうてい)の鎧』……。奪われた『闇皇(やみおう)の鎧』と同様に、我ら闇人(やみびと)の元から消えたもう1つの力。貴様はやはり……三嶋(みしま)の子孫かッ！」
「そうだよ。でも名字は違う。それに、教えてと言われても教えられない。あなたは僕が狩るから」

「裏切り者の末裔がほざくな！『古代樹の刀剣（ユグドラシル・ブレイド）』！」
村上が両腕を広げると、周りから何本もの樹木が生え、刃を向けながら襲い掛かる
黄金の蝙蝠は居合いの様な構えを取り――――
ズババババババッ！
向かってきた古代樹の刃を1本残らず伐採した
「ぬぅぅぅっ！『薔薇の大蛇（ローズ・スネイク）』！『薔薇の荒鷲（ローズ・イーグル）』！『巨躯の薔薇（ギガント・ローズ）』！」
村上が薔薇の花びらで蛇と鷲の大群、ひとつ目の巨大な怪物を作り上げた
村上が手を前に翳（かざ）すと薔薇の怪物達は一斉に向かっていった
黄金の蝙蝠は冷静に回避していくが、数が多いせいか……攻撃を仕掛けられない
「ふっ、どうだ?これだけ多くの攻撃を回避し切れるか?」
「それ程疲れる作業じゃないよ」
「減らず口を。たった1人で何が出来ると言うのだ！」
「言った筈だよ?僕達はあなたを狩る……と。ふっ！」
黄金の蝙蝠が剣鍔（けんつば）の狼に魔力を流していくと、狼の眼が点滅を始めた
そして剣を水平にして、口の位置に狼の頭部が来る様に構える
「何をしようと無駄だ！殺れッ！」
薔薇の花びらで作られた蛇、鷲、巨躯の怪物が直前まで迫ってきた

「ハァッ！」
ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！
光帝が強い声を発したと同時に狼の眼が強い光を放ち、口から超音波が出される
村上が産み出した怪物達は超音波によって崩壊し、村上にもダメージを与えていく
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！な、何だこの超音波はっ……!?」
「魔狼剣フェンリオス、全てを切り裂く刃となれ」
再び魔狼剣の刀身に魔力が注入され、剣は金色のオーラを放つ
剣を逆手に持ち替え、上空へ飛び上がる
「おのれぇっ……！肉体に負担は掛かるが仕方無い！超魔身ッ！」
村上が魔人態から再び超魔身態に変異し、背中から無数の薔薇を出して串刺しにしようと鞭の様に伸ばす
「往生しなさいッ！」
何処からか聞こえてくる女性の声と共に水色のオーラが薔薇を凍らせた
「なにっ!?私の薔薇が!?」
村上は声がした方向を向く
視線の先には巨大な氷の斧を構える女性がいた
腰辺りまでありそうな純白の長髪と琥珀色の瞳と、異国人の様な風貌を醸し出してい

た

「しっかり決めなさい！渉ッ！」

「ありがとう祐希那」

逆手に持った魔狼剣の輝きが強くなっていき、凍結した薔薇を蹴散らしながら急降下する

「こんな奴らに私が殺られると言うのかッ!? 認めん！私は認めないぞオオオオオオオッ！おのれぇぇぇぇっ！三嶋の子孫めエエエエエッ！」

村上が全身から茨を伸ばして1本の巨大な螺旋槍を作るが……

ザンッ！

金色の戦士は逆手に持った魔狼剣で、螺旋槍ごと超魔身態の村上を斜めに斬り払った

左肩からズレ、血を噴き出しながら上半身が地に落ちる

残った体も仰向けに倒れ、2つの肉塊は煙の様に消滅していった……

「ふうっ。流石は『チェス』の『ポーン』だね。少し苦戦しちゃった」

「気をつけなさいよ渉。『チェス』の1人を倒したと言ってもこいつは組織じゃ末端。まだ上には5人もいるのよ?」

「うん。これから気をつけるよ」

「これからこれからって……渉！」

「お取り込み中スマねぇけどよ、お前ら何者なんだ？」
「あ、自己紹介がまだだったね」
弱い閃光が放たれた直後に黄金の鎧が解除される
光帝の鎧の下は肩まで伸びた茶髪に旋毛辺りからピョコンと出るアホ毛、深紫色の目、中性的な顔立ちをした者だった
「おぉっ！美少女じゃないかッ！隣の女の子もなんて可愛――――ブギャアッ！」
一誠が歓喜に震えようとした瞬間、氷の斧を持っていた美少女から蹴りが飛んできた……
一誠を殴り飛ばした琥珀髪の少女は手を消毒しながら言う
「気持ち悪い目で見るんじゃないわよ！変態！ホモ！涉は歴とした男の子よ！」
蹴られた一誠は目玉を飛び出させた
新は最初から気付いていたのであまり驚いていない
「マ、マジで……？お前、男なの……？」
「うん、僕の名前は八代涉。ちゃんとした男の子だよ？今君を蹴ったのは高峰祐希那。こっちは正真正銘の女の子さ」
「うわぁぁぁ

「また騙された！何でだよ！何でこんな可愛い顔をした奴が男なんだ！男だなんて！この顔の下にチ〇コが生えてるなんて！」
「渉の前で下ネタ言うな！このホモゴキブリ！」
「やめてやってくれ。一誠は最近、うちの部員の祐斗やギャスパーとのホモ疑惑が目立ってるんだ。これ以上ツラい現実を浴びせたらマジでホモ世界に走りかねない（笑）」
「本当にホモだったの!?キモッ！来ないで！その人らだけじゃなく、渉まで犯す気!?」
「ねぇ祐希那。そのホモってどういう意味？」
「傷心の男の前でホモホモ言うなーッ！もう俺の心のライフは０なんだよぉぉぉぉぉっ！」
一誠は涙が枯れるまで泣き続けた……

「しかし、驚いたぜ。まさか俺の『闇皇の鎧』の他にも鎧が存在していたなんてな」
「僕達は世界中を放浪しながら、人知れず闇人を狩っていたんだ。ある日『闇皇の鎧』の噂を聞いて、最近日本に来ました。そこで運良く『チェス』の１人と交戦している君達を見つけたって訳さ。そして、この鎧――――『光帝の鎧』は僕の父さん、三嶋昂が

亡くなる直前に宿してくれた遺品とも言える物なんだ」
アーシアの神器（セイクリッド・ギア）で回復したリアス一行は渉の話を聞き入っていた
渉は自分の胸に手を当て、『光帝（こうてい）の鎧』を持った経緯（いきさつ）と自分達が現在している行動について話す
「『光帝（こうてい）の鎧』か……。じゃあお前の二つ名は差し詰め、光帝（こうてい）の蝙蝠ってところだな。光と闇は表裏一体って言うし」
「ちょっと、渉に変な事吹き込まないでよね。だいたい何？そのネーミングセンス、だっさ」
「何かやたらと噛み付いてくるな、この女は。さっきも俺の気配を消したタッチを躱（かわ）しやがったし」
「私はね、エロい奴が大っっっっ

「そうだよ。祐希那の神器（ゆきなセイクリッド・ギア）――――『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』。炎や風、形の有無にかかわらず、自分がイメージした通りに対象物を凍らせる神器（セイクリッド・ギア）なんだ。普通の武器としても使えるよ」

「初めて聞く神器（セイクリッド・ギア）ね……」

「部長にも知らない神器（セイクリッド・ギア）があったんですか？」

「ええ。私だって全ての神器（セイクリッド・ギア）を知っている訳じゃないわ」

リアスの意外な事情に新と一誠はへぇ～っとハモる

「あとさ、村上がお前を”三嶋の子孫”って言ってたんだが……お前の名字は八代だったろ？なんで名字が違うんだ？」

「僕は闇人（やみびと）と人間の混血児で、八代は僕のお母さんの名字なんだ」

「「「

「『初代キング』の封印に、お前の父親も絡んでいたのか……初耳だ」
『『初代キング』を封印した後、父さんは八代早雪（やしろさゆき）――――お母さんと出会って恋に落ち、2人の間に僕が生まれた。父さんは『初代キング』を封印する代償として、寿命をかなり削り取られ――――僕が10歳を迎える誕生日に亡くなった……。その時に僕が闇人（やみびと）と人間の混血児だと言う事を知らされたんだ」
予想以上の重い話にリアス達は無言になってしまう
「でもさ、全ての闇人（やみびと）が殺戮や支配を望んでいる訳じゃない事を同時に知れました。人間や他の種族を愛したり、共存したりする事だって出来る筈。父さんもそう願っていた。だから僕は、父さんの夢を叶えてあげたいんだ。その為にも中枢となる『チェス』を倒して――――闇人（やみびと）を変えてあげたい」
真剣な眼差しで言い放つ渉
その目標に、新はなるほどなと頷く
「闇人（やみびと）でありながら争いを好まず、平和を願った男の子孫か……。お前、なんか気に入っちまったよ」
「俺もだよ。闇人（やみびと）の中にもこんな良い奴がいるんだ。きっと出来る筈だ！」
新と一誠は渉に握手を求め、渉はそれに喜んで応じた
「でも、僕達は君達と共には行動出来ないよ？祐希那（ゆきな）の頼みを聞かなきゃいけない時期

なんだ」
「あの女の頼み？何だよそれは？」
「……私の主を殺した闇人を見つけて殺すのよ」
ドスの効いた声音で口を開いた祐希那
その言葉の意味に、リアスはいち早く勘づいた
「あなた、もしかして誰かの眷属悪魔だったの？」
「……そうよ。私は元々『戦車』の転生悪魔。3年前に、いきなりやって来た闇人に主と他の眷属達を殺されたのよ……！」
祐希那はその当時の全貌をリアス達に聞かせた
3年前に突如、屋敷にやって来た1人の闇人
まだ眷属になったばかりの祐希那は、その闇人の力と残虐ぶりに歯が立たず、主と他の眷属達を守れなかった……
全身を血で染めた闇人は、辛うじて生きていた祐希那にトドメを刺そうとした
その時に、闇人を狩り回っていた渉に助けられ一命を取り留めたが……主と眷属達を守れなかったショック、自分の不甲斐なさから精神が崩壊してしまった
それ以来、渉が付きっきりで看病した
1年と言う長い治療期間を経て祐希那は心を取り戻し、渉に戦いを教わりながら一緒

に闇人を狩り回った
　自分の主と仲間を殺した闇人への復讐を誓って……
「……酷い話ね」
「あの目だけは忘れない……忘れられないわ……！殺しを楽しむようなゲスな目！奴を殺さない限り、私や主、仲間達の無念は晴らせない！」
祐希那は拳を握りながら怒りを露にした
　壮絶な過去を聞いて、一誠もその闇人を許せなかった
「殺しを糧に生きてる闇人か……。あのクソ神父よりゲス野郎だな」
「何か情報を掴んだら教えて欲しい。少しでも、どんな小さな事でも良いから」
「あぁ、良いぜ。これ以上頼もしい味方はいないからな」
　新は渉と携帯番号を交換し合い、その番号を部員全員に送信した
「じゃあ、僕達はもう行くよ。総司さんにもよろしく伝えてね」
「あ、あぁ。そっちも頑張れよ」
　渉は『光帝の鎧』を装着し、祐希那をお姫様抱っこしながら空へ飛び立った
「新、なんか俺さ……闇人にもあんな奴がいてホッとしたよ。『2代目キング』も、何だかんだで仁義って物がありそうでさ」
「そうだな。俺達も少しは見習わないとな」

その後、新達は魔方陣の中に入り姿を消した

「ねぇ渉。あんなエロい奴らを信じる気?」
「勿論だよ。それに総司さんの息子――――竜崎新さんが『闇皇(やみびと)の鎧』の所持者で良かった。いずれまた会って、助けてあげたいな。総司さんが父さんにしてくれたみたいに」
「はぁ……渉。友達は選ばないといけない物だって知ってる?」
『そうそう。あたしも少し心配になってきたわ。渉って人との免疫力が皆無なのよね』
「ご、ごめん祐希那(ゆきな)、フェリス。次からは気をつけるよ」
『その言葉は何回も聞いたし飽きた』
「うううっ……」

「キヒヒッ。見事に殺られちゃったね～?『ポーン』の村上さん?命を2つ持ってなかっ

たらとっくに死んでたよ～？」
「『ビショップ』か……弁解する気も起こらない。まさか三嶋の子孫が介入してくるとは思わなかった……」
「キャハハハハハ！それに君の超魔身（ちょうましん）もまだ未完成だからね～♪少しは節度を守らないとぉ、本当に肉体が崩壊しちゃうよ？」
「……取り合えず恩にきる」
「あっ、あとついでなんだけどぉ、君の他にも2人『ポーン』の称号を与えたから♪」
「……っ!?『ポーン』は私1人では無いのか!?」
「今までと同じじゃあ奴らには勝てないよ♪2人とも去年入ったばかりの新参者だけど、少なくとも君よりは互角かそれ以上の実力を持っているから、文句は言えない筈だよ？」
「くっ……！だが、まぁ良い。組織の拡大は我々にとって重要だからな」
「キヒヒッ。話が分かる人は長生きするよ～♪それからさぁ、今からカプリンチョとクリームソーダ買いに行かない？勿論、村上さんの奢りで♪ボクが運んであげてるんだから、それぐらいの礼は貰わないと」
「……手痛い出費になりそうだ」

第5章　冥界合宿のヘルキャットとアサルトチェス
いざ行かん、冥界とグレモリー邸

「冥界に帰る?」
人身売買オークションを潰した翌朝
一誠の家にオカルト研究部のメンバー全員が集められ、朝食後にそんな話を聞かされた
「夏休みだし、故郷へ帰るの。毎年の事なのよ。――――って、どうしたのイッセー。涙目よ?」
「うう、部長が冥界に帰ると突然言い出したから、俺達を置いて帰っちゃうのかと思いましたよぉ……」
一誠は床に両手を付きながら涙を流す
新は「そんな泣く程の事かよ」と毒づきながら欠伸をする
「そうか～。里帰りか～。んじゃ、俺は久々にまったりと競馬にギャンブル、カジノへ行って荒稼ぎしようかね～。ふわぁ～」
「何言ってるの新。私だけじゃなく、皆も冥界に行くのよ?長期旅行の準備しておいて

ちょうだいね」

リアスの発言に一誠はすぐに顔を上げ、新は逆に額を床にぶつけた

「え!?俺達も冥界ですか!?」

「そうよ。あなた達は私の眷属で下僕の悪魔なのだから、主に同伴は当然。一緒に私の故郷へ行くの」

せっかく計画していた荒稼ぎライフをあっという間に潰された新は声を荒らげて猛反論した

「ふざけんなぁっ！今週のレースは未だ嘗て無い程の荒れ具合なんだぞ!?２００万馬券が出る可能性だってあるんだ！それに賞金首もめっきり減っちまって収入源はレイナーレ達とギャンブルしか無いんだよ！リアスだけじゃなく朱乃、ゼノヴィア、小猫まで俺の家に住み始めたからギャンブルにもカジノにも行く暇が無いんだよ！俺からこれ以上娯楽を奪う気かあんたは!?鬼！悪魔！」

「新、凄い肺活量ね」

「今そこを誉めてる場合じゃねぇだろがっ！」

「あらあら。その点に関してはご心配なく。総司さんが毎月、新さんの通帳にお金を振り込んでくれるそうですわ」

「は？いつそんな話を？」

「私がお願いしましたの」
新は直ぐ様、携帯電話で総司に確認を取った
ノリノリの声で毎月３０００万送ると言ってきた
その収入源は売り捌いたお宝らしい
新は確認を終えた後、”まぁ、良いか”と納得してしまった
「８月の２０日過ぎまで残りの夏休みをあちらで過ごします。こちらに帰ってくるのは８月の終わりになりそうね。修業やそれら諸々の行事を冥界で行うから、そのつもりで」
「俺も冥界に行くぜ」
冥界での予定を聞いていると、いつの間にか堕天使総督兼オカルト研究部顧問のアザゼルがいた
「ど、何処から入ってきたの？」
「うん？普通に玄関からだぜ？」
アザゼルはリアスの問いに平然と答えた
「……気配すら感じませんでした」
「俺は今さっき気付いた」
新はバウンティハンター時代から鍛えてたので、気配を探る術は多少心得がある

「冥界でのスケジュールは……リアスの里帰りと、現当主に眷属悪魔の紹介。あと、例の新鋭若手悪魔達の会合。それとあっちでお前らの修業だ。俺は主に修業に付き合う訳だがな。お前らがグレモリー家にいる間、俺はサーゼクス達と会合か。ったく、面倒くさいもんだ」

アザゼルはメンドくさそうに嘆息する

かくして、リアス・グレモリー陣とアザゼルは冥界へ行く事になった

新はメールでこの事をレイナーレ達に伝えたら、電話で『アザゼル様が行くなら私も！』と言ってきた

アザゼルは『いや、定員オーバーだ』と言って一蹴

レイナーレは電話の向こうで泣きじゃくった

因みにミッテルトからは『お土産買ってきてね～♪』と言われ、新は”日本円は冥界でも通じるのか?”とリアスに聞いた

出発の日、新達はまず最寄り駅に集合した

服装は駒王学園の夏制服

リアス曰く、冥界入りするならこれが1番の正装らしい
新は制服よりも普段着たるロックミュージシャン服を所望したが、呆気なく却下されたので渋々着ていた
駅に設置されているエレベーターに向かい、リアスと朱乃が先に入る
「じゃあまずは新とイッセーとアーシアとゼノヴィア来てちょうだい。先に降りるわ」
「お、降りる？」
怪訝に思う一誠と首を傾げる新
言われるまま中に入ると、リアスはスカートのポッケからカードを出して電子パネルに向ける
ピッ……ガクン
上にしか行かない筈のエレベーターが下へ降り始めた
「……っ？この駅、地下なんかあんのか？」
「そうよ。悪魔専用のルート。普通の人間は一生辿り着けないわ。こんな風にこの町には悪魔専用の領域が結構隠れているのよ？」
「隠し通路って奴か。か～、悪魔はロマンが好きだね～」
降りること1分
エレベーターが停止して扉が開く

広い空間に足を踏み入れ、辺りを見渡す
そこは人間界の駅のホームと酷似しており、線路もあった
祐斗、小猫、アザゼルも合流して歩き出す
ギュッ……
新の手を握る朱乃
いつの間にいたんだと言う突っ込みはせずに、手を握り返す
「……新さんの手、優しい温もりを感じますわ」
朱乃が頬を染めて言う
今まで数々の女を堕としてきた新も朱乃の可愛さに一瞬戸惑ってしまった
反対側にゼノヴィアと小猫も加わり、２人は交代制で新の手を握ったりする
「……」
「――――っ？な、何か急に悪寒が……」
新の勘は異様な視線を察知してしまった
それもその筈、リアスは朱乃やゼノヴィア、小猫と手を繋いでいる様子をジッと見つめていた――――無言で……
しばらく歩いていると列車らしき物が見えてきた
「おい、この列車ってまさか……」

「グレモリー家所有の列車よ」
新と一誠は改めて主のスケールのデカさを思い知らされた

列車が動きだし、リアスは1番の前の車両に
眷属である新達は中央から後ろの車両に座らなければならない
席は一誠とアーシアが一緒に座り、祐斗とギャスパーはその対面席
少し離れた別の席では新の隣に朱乃、対面にはゼノヴィアと小猫が座る形となった
端の席ではアザゼルが既に眠っていた
「なぁ朱乃。冥界にはどのぐらいで着くんだ?」
「1時間程で着きますわ。この列車は次元の壁を正式な方法で通過して冥界に辿り着ける様になってますから」
「へぇ〜。いつもの魔方陣で冥界に行くんだと思ってた」
「通常はそれでも良いのですけれど、新眷属の悪魔は正式なルートで1度入国しないと違法入国として罰せられるのです。だから、新さん達はちゃんと正式な入国手続きを済ませないといけませんわ」

「はぁっ!?そうなのか!?俺と一誠は魔方陣から転移して婚約パーティに乱入しちまったんだぞ!?到着してすぐに刑務所行きなんざ冗談じゃねぇよ!」
新は慌てるが、朱乃は小さく微笑んだ
「あれはサーゼクス様の裏技魔方陣によって転移したものですから、特例みたいですわよ?勿論2度は無理ですけれど。もしかしたら、主への性的接触で罰せられるかもしれませんわね」
「笑い事じゃねぇよ……。俺、リアスの裸を見たどころか乳首も弄ったんだけど……って、うおっ?」
朱乃が新の手を取る
「眷属同士のスキンシップは問題ありませんわ。こんな風に」
朱乃は掴んだ新の手を自分の太股(ふとももに誘導する
柔らかい感触を堪能する新は、そのままスカートの中へ手を伸ばそうとした
すると、前に座っていたゼノヴィアと小猫がその手を掴む
特に小猫の手には力が入っていた
「新。そういう事がしたいなら私にもしてくれ。朱乃さんだけなんてズルいぞ」
「……新先輩。時と場所をわきまえてください。窓から放り投げますよ?」
「おぉい小猫さん。流石の俺もこんな異世界に捨てられたら死んじまうよ」

「……先輩は存在自体がデタラメですから死にません」
小猫の辛辣な一言で新は心に１００００のダメージを負った
その後、列車は冥界に入り、窓から見てみると……山や川、森も町も存在してるのが視界に映った
グレモリー領に入り、リアスから自分も領土を貰える事を知らされた
グレモリー領は日本で言うと、本州丸々らしい
「赤い所は既に手が入っている土地だからダメだけれど、それ以外の所はＯＫよ。好きな土地を指で差してちょうだい。あなた達にあげるわ」
新はその発言に遠慮しないで、欲しい土地を指差していった

『リアスお嬢様、おかえりなさいませっ！』
パンパンパンパン！
駅のホームに降りた瞬間、花火が上がり執事やメイド達が出迎えをする
ギャスパーは人の多さにビビって一誠の後ろに隠れ、新は口をポカ～ンと開けていた
そこへ銀髪のメイド、グレイフィアが1歩前に出てきた

「お嬢様、おかえりなさいませ。お早いお着きでしたね。道中、ご無事で何よりです。さあ、眷属の皆様も馬車へお乗りください。本邸までこれで移動しますので」
馬車を引く冥界の馬が予想以上にデカかった事に、新は再び口をポカ～ンとさせた

「着いたようね」
馬車のドアが開かれ、全員が降りる
巨大な城――――リアス家の本邸に到着し、巨大な城門が開かれていく
カーペットの上を歩き出そうとした時、紅髪の少年がリアスに抱きついた
「リアス姉さま！おかえりなさい！」
「ミリキャス！ただいま。大きくなったわね」
「あ、あの、部長。この子は？」
「この子はミリキャス・グレモリー。お兄様――――サーゼクス・ルシファー様の子供なの。私の甥と言う事になるわね」
「へ～、魔王様の子供。正真正銘のプリンスか」
新は顎に手を当てながら言う

因みにミリキャス・グレモリーはリアスの次の当主候補らしい
リアスは甥と手を繋いで進み出し、新達も城の中へ進んでいく
広大な玄関ホールに着き、グレイフィアを始めとしたメイド達が集合してきた
「お嬢様、早速皆様をお部屋へお通ししたいと思うのですが」
「そうね、私もお父様とお母様に帰国の挨拶をしないといけないし」
リアスはグレイフィアと話をし、新と一誠は何度も玄関ホールを見渡す
「な、なんか……このお城に来るだけでクラクラしてきた……」
「これが上位階級の悪魔の本邸か。今俺が住んでる屋敷が小さく思えてくるぜ」
「あら、リアス。帰ってきたのね」
階段からドレスを着た亜麻色の髪を持つ美少女が下りてきた
胸が大きかったので一誠は即座に反応し、新はヒュウッと口笛を吹いた
「お母様。ただいま帰りましたわ」
「「お、お母様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」」
なんと美少女の正体はリアスの母親だった
衝撃的な事実に新と一誠の大声がハモる
「ぶ、部長のお母様!?どう見ても部長と歳の変わらない女の子じゃないですか！」
「さ、流石の俺も驚いた……。あまりにも綺麗過ぎるから、姉だとばかり思ってた……

！」
「あら、女の子や綺麗過ぎるだなんて、嬉しい事をおっしゃいますのね」
「悪魔は歳を経れば魔力で見た目を自由に出来るのよ。お母様はいつも今の私ぐらいの年格好なお姿で過ごされているの」
「なるほど。リアスの乳房（おっぱい）はあの綺麗なお母様譲りか。納得納得」
「素晴らしくて泣いちゃうよ！遺伝子バンザイ！」
下心全開でそんな事を言ってしまい、新と一誠はリアスに頬をつねられた
しかも、新を頬をつねる手には妙に力が入っていた
「新、万に1つも無いと思うけれど一応忠告しておくわ。……私のお母様にまで手は出さないわよね？」
「りあひゅひゃま（リアス様）、きやおがめひゃくひゃこわいでひゅ（顔がメチャクチャ怖いです）」
新は異様な気迫に思わず逃げ腰になり、確認を終えたリアスは2人をつねりから解放する
そのやり取りを見ていたリアスの母親がクスクスと微笑む
「リアス。その方々が兵藤一誠くんと竜崎新くんね？」
「おや？俺達の事をご存じなんですか？」
「ええ、娘の婚約パーティに顔ぐらい覗かせますわ。母親ですもの」

２人は顔を見合わせて、もしかしてヤバイかな?と汗を垂らした
しかし、部長の母親は小さく笑う
「初めまして。私はリアスの母、ヴェネラナ・グレモリーですわ。よろしくね、兵藤一誠くん、竜崎新くん」

「ん～、この料理美味いな～。今まで食べてきた中で最高の料理だ」
「お、おい新……。もう少し上品にしとけよ……。部長が凄い剣幕でこっち見てるって……」
「うむ。リアスの眷属諸君、ここを我が家と思ってくれると良い。冥界に来たばかりで勝手が分からないだろう。欲しい物があったら遠慮なくメイドに言ってくれたまえ。すぐに用意しよう」
「じゃあ早速ですが、美女美少女のメイド達を一晩貸して――――――」
「新?」
「――――すんません。何も無いです」
新はすぐに欲望のまま答えようとしたが、リアスの殺気に気付いて引き下がる

そんな新の様子にリアスの父親は朗らかに笑いだした
「はっはっはっ。いやはや、竜崎新くん。君を見てると、君の父親の総司くんを思い出すよ。彼も”美女美少女のメイド達を持って帰りたい”と言っていたよ」
「……っ!?親父はサーゼクス様だけでなく、あなたにもお会いしていたのですか!?」
「もう随分昔の事だよ。闇人(やみびと)の『初代キング』の封印を祝した会食で、私は総司くんと会ったのだよ。彼は実に面白かった。メイド達だけでなく、妻の胸も触ろうとしていたが……笑顔で吹き飛ばされたよ」
「あまりにも総司さんがエッチな目と手をしていたので、つい」
新は親父の節操の無さに苦笑いした
そこでリアスの母親――――ヴェネラナが訊いてくる
「ところで、新さんと一誠さん。しばらくはこちらに滞在するのでしょう?」
「はい。部長……リアス様がこちらにいる間はいます……けど、それが何か?」
「そう、丁度良いわ。あなた達には紳士的な振る舞いも身に付けてもらいましょう。少しこちらでマナーのお勉強をしてもらいます」
「おろ?俺はそれなりに振る舞えてるつもりですけど?」
「その様ですけど、まだまだぎこちなかったり、雑な部分もあったりしますわ」
その時、リアスがテーブルを叩いて立ち上がっていた

「お父様！お母様！先程から黙って聞いていれば、私を置いて話を進めるなんてどういう事なのでしょうか?!」

リアスの意見を物ともせず、ヴェネラナは目を細めて強い気迫を解き放つ

そこには先程温かく迎え入れてくれた彼女の姿は無かった……

「お黙りなさいリアス。あなたは1度ライザーとの婚約を解消しているのよ？それを私達が許しただけでも破格の待遇だとお思いなさい。お父様とサーゼクスがどれだけ他の上級悪魔の方々へ根回ししたと思っているの？一部の貴族には『わがまま娘が伝説のドラゴンと全魔族の天敵を使って婚約を解消した』と言われているのですよ？いくら魔王の妹とはいえ、限度があります」

言葉からライザーとの婚約パーティの事を思い返す新と一誠

派手に扉をぶち壊して乱入した挙げ句、ライザーをぶっ飛ばしてリアスを奪還したのだが……2人は勝手な事をしたのかなと不安顔になり、冷や汗を垂らす

考えてる間に少しの言い合いが続いたが軍配はリアス母に上がり、リアスは納得出来ないような様子で腰を下ろした

「リアスの眷属さん達にお見苦しいところを見せてしまいましたわね。話は戻しますがここへ滞在中、新さんと一誠さんには特別な訓練をしてもらいます。少しでも上流階級、貴族の世界に触れてもらわないといけませんから」

「あ、あの、どうして俺達なのでしょうか？」
「俺達が平民とバウンティハンターの出だから？」
２人が訊くとヴェネラナは真面目な表情で言い放った
「あなた達は次期当主たる娘の最後のわがままですもの。親としては最後まで責任を持ちますわ」

若手悪魔会合、やっぱり新はデタラメ過ぎる

「皆、もう1度確認するわ。何が起こっても平常心でいる事。何を言われても手を出さない事。上にいるのは将来の私達のライバル達よ。無様な姿は見せられない」
翌日、新と一誠が上流階級及び貴族について勉強している間、リアス達はグレモリー城観光ツアーに行っていた
朝から勉強三昧だったので2人の頭はパンク寸前
特に新は堅苦しい事が大嫌いなので、何度か脱走にチャレンジしたが全て失敗に終わったり、詰め込み過ぎて走馬灯を5回も見たとか……
そしてリアス達が帰ってきてすぐに若手悪魔との会合の場に向かい、都市で1番大きい建物に足を踏み入れた
かなりの上階でエレベーターの扉が開かれ、広いホールへ出た
通路を進んでいくと、リアスが複数の人影の中の1人を見た
「サイラオーグ！」
「サイラオーグ？サイボーグの親戚か？」
新が冗談混じりでそんな事を言っていると、紫色の目をした筋肉質で短髪の男が近づ

いてきた
「久しぶりだな、リアス」
「ええ、懐かしいわ。変わりないようで何よりよ。初めての者もいるわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟でもあるの」
「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ」
「バアルって確か魔王の次に偉い大王の名前じゃねぇか。すげぇな」
感心する新と驚く一誠をよそに、リアスとサイラオーグは会話を再開させた
「それで、こんな通路で何をしていたの？」
「ああ、くだらんから出てきただけだ」
「……くだらない？他のメンバーも来ているの？」
「アガレスもアスタロトも既に来ている。挙げ句ゼファードルだ。着いた早々ゼファードルとアガレスがやり合い始めてな」
ドオオオ

「ゼファードル、こんな所で戦いを始めても仕方なくてはなくて？死ぬの？死にたいの？殺しても上に咎められないかしら」

淡いグリーンを含んだブロンドに眼鏡をかけ、青いローブを着た女性悪魔が言い放つ

恐ろしげな言動をするものの、見た目は新好みの女性だった

「ハッ！言ってろよクソアマッ！俺がせっかくそっちの個室で1発仕込んでやるって言ってやってんのによ！アガレスのお姉さんはガードが固くて嫌だね！へっ、だから未だに男も寄って来ずに処女やってんだろう!?ったく、魔王眷属の女どもはどいつもこいつも処女臭くて敵わないぜ！だからこそ、俺が開通式をしてやろうって言ってんのによ！」

下品な言葉を連発しているのは顔や体に魔術紋様の如きタトゥーを入れ、緑髪を逆立てたヤンキーっぽい男だった

「ここは時間が来るまで待機する広間だったんだがな。もっと言うなら、若手が集まって軽い挨拶を交わす所でもあった。ところが、若手同士で挨拶したらこれだ。血の気の多い連中を集めるんだ、問題の1つも出てくる。それも良しとする旧家や上級悪魔の古き悪魔達はどうしようもない」

説明をしてくれるサイラオーグ

聞き入っていると、一誠の隣にいた筈の新がいつのま間にかいなくなっていた

「――――っ!?部長?新がいないんすけど……」
「えっ?新が?まさか……」
「な、何なんですかあなたは?いきなり割って入って、邪魔をする気?」
声のした方角を見てみると、案の定新が眼鏡をかけた女性悪魔に近づいていた
「いやいや、若手悪魔の会合だから是非挨拶したいなと思いまして。俺は竜崎新と申します。お姫様のお名前を教えていただけないかな?」
「……シ、シーグヴァイラ・アガレス。大公アガレス家の次期当主ですが?」
「シーグヴァイラ・アガレス……じゃあ、シーグヴァイラ姫と呼ばせていただきます」
新は紳士的な振る舞いをしながら、シーグヴァイラの手を取る
奇妙な立ち振舞いにシーグヴァイラは唖然としていた
「おいてめぇ!クズ悪魔が!人の獲物を横取りしようとしてんじゃねぇよ!ぶっ殺されてぇか!?」
「シーグヴァイラ姫、あそこで鳴いてるニワトリもどきは何ですか?」
「ニ、ニワトリ……!うくくっ……!」
新の罵倒にシーグヴァイラと眷属は思わず笑ってしまい、逆にヤンキーは湯気を噴き出しながら激昂した
「あぁっ!?誰がニワトリだぁ!?」

「コホンッ……。あれはグラシャラボラス家の凶児ゼファードルです」
「ゼファードルねぇ……。よしっ、お前今日からニワトリドルに改名しろ。決定～♪」
「ハッハッハッハッハッハッ！リアス！お前のあの眷属は面白いな！規格外の『兵士（ポーン）』だと聞いていたが、ここまで凄いとは恐れ入った！」
「もう……新ってば……」
リアスは顔を真っ赤にして俯き、一誠達も苦笑いした
そして新の『ニワトリドル』と言う名付けにシーグヴァイラ及び眷属は笑いを堪えきれなかった
一方ニワトリドル（笑）――――――もとい、ゼファードルは怒り心頭になっていた
「ゼファードル。あなたよりも、ここにいる彼の方がよっぽど紳士的で良いわ。ぷくくっ……！」
「笑ってんじゃねぇッ！このクソアマがぁッ！」
怒り狂ったゼファードルはシーグヴァイラの顔に魔力の弾を撃ち放つ
新は後ろを向いたまま右手に『闇皇（やみおう）の鎧』を展開し、シーグヴァイラの顔を狙った魔力の弾を拳で打ち消した
「なっ!?後ろを向いたままだと!?」
「……それはまさか、噂に聞いた『闇皇の鎧』？」

「ニワトリドル。女の顔を狙うとは最低だな」
「はぁっ？小せぇ魔力打ち消したぐらいで調子に乗ってんじゃねぇよ。クズが、次は何だ？その鎧を付けた手で俺を殴るか？」
ゼファードルは挑発的な物言いをするが、新は鎧を解除して拳を下ろす
「はっ！ビビったのかクズが！さっさと退けや！ゼファードル様の前から消え――――――」
ヒュッ、ドゴォッ！
バゴォォオンッ！ガラガラガラ……
ゼファードルが言い終わる前に新は顔面に膝をぶち込んで壁にめり込ませた
一瞬の出来事に全員が驚き、新は首を鳴らしていた
「あああああああ……新ぁぁぁぁぁっ！さっきあれ程手を出さないでって言ったのに！何をしてるのよっ!?」
「え？だから、手は出さずに膝を出したんだけど？」
「そう言う問題じゃないでしょう!?」
「おのれ貴様！」
「よくもゼファードル様を！」
「下級悪魔の分際で！」

主、ゼファードルをぶっ飛ばされた眷属が飛び出しそうになるが、サイラオーグが割って入る
「主を介抱しろ。まずはそれがお前らのやるべき事だ。これから大事な行事が始まるんだ、主をまずは回復させろ」
サイラオーグの一言にゼファードル眷属は動きを止め、壁にめり込んだ主を介抱する
シーグヴァイラは関心を持った様子で新に近づいた
「あなた、やりますね。ゼファードルを一撃で退けるなんて……少し胸が弾んでしまいました」
「礼には及ばねぇよ、お姫様」
「ハハハッ。俺が止めようとしてたんだが、すっかり出番を取られてしまったな。今のは良い膝だったが、もう少し言葉というものを選ぼう。ニワトリドルは酷い」
「え？そうかな？あのヤンキーには妥当だろ」
サイラオーグは新の発言に再び笑う
リアスはズカズカと近づき、新の頬を強くつねった
「全く、どうしてあなたは場の空気を読まないのかしら……！」
「いひゃいいひゃいいひゃいいひゃい！まりょふほふぉへふはぁ！」（魔力を込めるな）
「まぁまぁ、リアス。説教は後にしたらどうだ。今広間を片付けさせるから。おい誰か

！修復作業を手伝ってくれ！」

その後、リアスの話でサイラオーグが現若手悪魔のナンバー1だと言う事が判明した

「先程は失礼しました。改めて自己紹介を。私はシーグヴァイラ・アガレス、大公アガレス家の次期当主です」

修復作業が終わり、ゼファードルとその眷属を抜かした者達でテーブルを囲んでいる

――――と言っても主は席に着き、眷属は後方で待機している感じである

「ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主です」

「私はソーナ・シトリー。シトリー家の次期当主です」

「俺はサイラオーグ・バアル。大王バアル家の次期当主だ」

「僕はディオドラ・アスタロト。アスタロト家の次期当主です。皆さん、よろしく」

お茶を飲んでいた少年も優しげな声で自己紹介をする

「グラシャラボラス家は先日、御家騒動があったらしくてな。次期当主とされていた者が不慮の事故死を遂げたばかりだ。先程のゼファードルは新たな次期当主の候補と言う事になる」

サイラオーグが説明してくれた
あんなヤンキーが次期当主候補だと先行きが不安である
ここに集まった悪魔の家柄は名高い名門ばかり
グレモリーがルシファー、シトリーがレヴィアタン、アスタロトがベルゼブブ、グラシャラボラスがアスモデウス、そして大王バアルと大公アガレス
超豪華なドリームメンバーが揃っていた
「おい兵藤。間抜けな顔を見せるなよ」
匙が嘆息しながら一誠にそう言った
「だってよ、上級悪魔の会合だぜ？緊張するじゃないかよ。皆強そうだ」
「何言ってんだよ。お前は赤龍帝だぞ？竜崎みたいにもう少し堂々とすれば良いじゃないか」
「そんな事言ってもよ……。って、なんで匙がキレてんだよ？」
「眷属悪魔はこの場で堂々と振る舞わないといけないんだ。相手の悪魔達は主を見て、下僕も見るんだからな。だから、お前がそんなんじゃ先輩にも失礼だ。ちったぁ自覚しろ、お前はグレモリー眷属で赤龍帝なんだぞ」
匙から強面に意見された一誠はちょっと驚いた
それをよそに新はアガレス家の姫、シーグヴァイラに呼ばれ隣へ座る

「竜崎新さん、でしたね？是非『闇皇の鎧』とやらをもう少し見せていただけないかしら？その力と、あなた自身にも興味が湧いてきました」
「え、いや～。お姫様の頼みとあれば断れないな。良いですよ」
新は闇皇に姿を変え、マントを翻しながらポーズを決める
「これが噂に聞く『闇皇の鎧』か……。禍々しい姿に血が猛ってくる」
「私達悪魔の天敵とも言える闇人の力、この力を持った者を眷属にしているグレモリー家が羨ましいわ」
「恐れ入ります、シーグヴァイラ。けれど、彼を眷属にするには相応の覚悟がいりますよ？」
気になるシーグヴァイラにリアスは耳打ちする
すると、シーグヴァイラは顔を真っ赤にして胸を押さえた
「そ、それは本当なの……？」
「ええ、本当です。私も聞いた当初は同じ反応でした」
ソーナ会長も若干頬を染めながらシーグヴァイラに言う
「――――っ？2人してどうした？顔が赤いんだけど」
「い、いえ……あの、出来ればそう言う事はお控えになった方が宜しいかと……。私には、まだ心の準備と言うものが……」

しどろもどろなシーグヴァイラに新は疑問符を浮かべた

ついに行事とやらが始まり、若手悪魔の面々は異様な雰囲気が漂う場所に案内された
高い所に置かれた席には悪魔のお偉いさんが座っており、もう1つ上の段にはサーゼクス・ルシファー
隣にはセラフォルー・レヴィアタンが座っていた
その隣にはベルゼブブとアスモデウスも座っており、新達は高い位置から見下ろされている状態にある
リアスを含めた若手悪魔6人が1歩前に出た
尚、新がブッ飛ばしたゼファードルも復活していたが、顔には生々しい膝の痕が残っていた
「よく集まってくれた。次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認するため、集まってもらった。これは一定周期ごとに行う若き悪魔を見定める会合でもある」
初老の男性悪魔が手を組みながら威厳の声で言い、ヒゲを生やした悪魔が「早速やってくれたようだが……」と皮肉げに言った

首謀者は殆ど新である

「キミ達6名は家柄、実力共に申し分のない次世代の悪魔だ。だからこそ、デビュー前にお互い競い合い、力を高めてもらおうと思う」

「我々もいずれ『禍の団(カオス・ブリゲード)』や闇人(やみびと)との戦(いくさ)に投入されるのですね？」

「それはまだ分からない。だが、出来るだけ若い悪魔達は投入したくはないと思っている」

「何故です？若いとはいえ、我らとて悪魔の一端を担います。この歳になるまで先人の方々からご厚意を受け、なお何も出来ないとなれば――――」

「サイラオーグ、その勇気は認めよう。しかし無謀だ。何よりも成長途中のキミ達を戦場に送るのは避けたい。それに次世代の悪魔を失うのはあまりに大きいのだよ。理解して欲しい。キミ達はキミ達が思う以上に、我々にとって宝なのだよ。だからこそ大事に、段階を踏んで成長して欲しいと思っている」

サーゼクス・ルシファーの言葉にサイラオーグは一応の納得をしたが、不満がありそうな顔をしていた

だが、これはやはりサーゼクスなりの優しさだと言えよう

「最後にそれぞれの今後の目標を聞かせてもらえないだろうか？」

サーゼクスの問いかけにサイラオーグは1番最初に答えた

「俺は魔王になるのが夢です」
威風堂々と迷い無く言い切ったサイラオーグ
その目標にお偉いさん達は感嘆の息を漏らした
「大王家から魔王が出るとしたら前代未聞だな」
「俺が魔王になるしかないと冥界の民が感じれば、そうなるでしょう」
再び言い切ったサイラオーグに続き、リアスも今後の目標を言う
「私はグレモリーの次期当主として生き、そしてレーティングゲームの各大会で優勝する事が近い将来の目標ですわ」
リアスの目標を初めて聞いた新と一誠は、その目標に支援する事を決めた
そして最後はソーナ会長だった
「冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です」
なかなかの目標に新と一誠は感心していたが、お偉いさん達は眉根を寄せていた
「レーティングゲームを学ぶ所ならば、既にある筈だが？」
「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみしか行く事が許されない学校の事です。私が建てたいのは下級悪魔、転生悪魔も通える分け隔ての無い学舎（まなびや）です」
差別の無い学校を建てる
これからの冥界にとって良い場所になるかもしれない

その目標に感心し、匙も誇らしげに聞き入っていたのだが……

『ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！』

突如お偉いさん達の声が会場を支配し、嘲笑を浮かべながら口々に言う

「それは無理だ！」

「これは傑作だ！」

「なるほど！夢見る乙女と言うわけですな！」

「若いと言うのは良い！しかし、シトリー家の次期当主ともあろう者がその様な夢を語るとは。ここがデビュー前の顔合わせの場で良かったと言うものだ」

新と一誠は理解出来なかった

何故ソーナ会長がバカにされているのかを……

「……今の冥界がいくら変わりつつあるとしても、上級と下級、転生悪魔、それらの差別はまだ存在する。それが当たり前だと未だに信じている者達も多いんだ」

祐斗の説明で新は大雑把に理解した

”こいつらは以前会ったライザー・フェニックスと同じ様な考えを持っているのか”と

新の表情が険しくなる中、ソーナ会長が真っ直ぐに言った

「私は本気です」

姉のセラフォルーもうんうんと力強く頷いていたが、お偉いさんは冷徹な言葉を口にする

「ソーナ・シトリー殿。下級悪魔、転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能を見出だされるのが常。その様な養成施設を作っては伝統と誇りを重んじる旧家の顔を潰す事となりますぞ？いくら悪魔の世界が変革の時期に入っていると言っても変えて良いものと悪いものがあります。全く関係の無い、たかが下級悪魔に教えるなどと……」

その一言に匙は黙っていられなくなった

「黙って聞いてれば、なんでそんなに会長の――――ソーナ様の夢をバカにするんスか!?こんなのおかしいっスよ！叶えられないなんて決まった事じゃないじゃないですか！俺達は本気なんスよ！」

「口を慎め、転生悪魔の若者よ。ソーナ殿、下僕の躾がなってませんな」

「……申し訳ございません。あとで言ってきかせます」

「会長！どうしてですか！この人達、会長の、俺達の夢をバカにしたんスよ！どうして黙っているんですか!?」

「サジ、お黙りなさい。この場はそういう態度を取る場所ではないのです。私は将来の目標を語っただけ。それだけの事――――」

「チッ」

突如会場に響いた舌打ち
その音の根源は――――――険悪な表情をした新だった
新はズカズカと扉の方へ進んでいく
「ちょ、ちょっと新くん?どうしたんだい?突然何処へ――――――」
「何処って、屋敷に帰るんだけど?」
その言葉にサーゼクスやセラフォルー、若手悪魔全員が驚いた
新は険悪な顔で更に言い放つ
「俺もう帰るわ。他人の夢をバカにする様な老害共の話なんざ、これ以上聞けねぇわ。つーか聞きたくねぇ」
「ちょっと新!?何を考えて――――――」
「待たんか下級悪魔。貴様、今の自分の立場が分かっているのか?これ程までに躾のなってない下級悪魔がいるとはな」
リアスが止めようとしたところで、お偉いさんの1人がドスを効かせた声で言う
新は全くビビる様子を見せずに、その方向を向く
「なにが下僕の躾がなってねぇだよ。あんたらの方がよっぽど失礼だ。真剣に語った夢や目標を踏みにじりやがって、それが先人悪魔のする事か。旧家の顔を潰す事になるとかどうとか言ってたけどよ、俺から見れば……てめぇらのその態度こそが恥だな」

新の発言にお偉いさん達が怒りの表情を見せ始めた

「伝統や誇りにすがり付くのは構わねぇよ。だがな、それだけに固執し過ぎて他勢力――――――闇人（やみびと）に滅ぼされたら本末転倒だろうが。そういうのを人間界でなんて言うか教えてやりましょうか？バブル世代って言うんだよ。自分は偉いから威張って当然、偉いから差別するのも当然って考えが頭に執着してやがる老害。もしこれが人間界の就職面接だったら、俺は速攻で蹴ってますわ。そんな会社で働きたくねぇもん」

「貴様ぁ！下級悪魔の分際で我らに意見するのか！」

「意見も何も、俺はおかしい事をおかしいと言ってるだけ。そして老害共の話を聞きたくないから出ていくだけだ。話を聞きたくない奴がここにいても邪魔なだけだろ？だから、俺はここを出て屋敷に戻る。後はどうぞ、ご勝手に話を進めてくださいや」

投げやりな敬語で新は扉を開けようとした

「新くんの言う通りだよ！だったら、うちのソーナちゃんがゲームで見事に勝っていけば文句も無いでしょう!?ゲームで好成績を残せば叶えられる物も多いのだから！」

新が退場する直前にセラフォルー・レヴィアタンが怒りながら提案してきた

「もう！おじさま達はうちのソーナちゃんをよってたかっていじめるんだもの！私だって我慢の限界があるのよ！あんまりいじめると私がおじさま達をいじめちゃうんだから！」

セラフォルーが涙目で物申し、お偉いさん達はその反応に困っていた
ソーナ会長は恥ずかしそうに顔を手で覆い、新はグッとセラフォルーに向けて親指を立てた
セラフォルーがそれに気付き、新にピースサインを返した
「丁度良い。ではゲームをしよう。若手同士のだ。リアス、ソーナ、戦ってみないか？」
２人は顔を見合わせ、目をパチクリさせて驚く
サーゼクスは構わず続けた
「元々、近日中にリアスのゲームをする予定だった。アザゼルが各勢力のレーティングゲームファンを集めてデビュー前の若手の試合を観戦させる名目もあったものだからね。だからこそ丁度良い。リアスとソーナで1ゲーム執り行ってみようではないか。対戦の日取りは、人間界の時間で8月２０日。それまで各自好きに時間を割り振ってくれて構わない。詳細は後日送信する」
サーゼクスの決定により、リアスとソーナ会長のレーティングゲームが開始される事になった

「新！あなたってヒトは何度言ったら分かるの！少しは考えて行動しなさい！」
「いや～、わりいわりい。あまりにも老害共の言い草がムカついたもので」
会合が終わり、リアスは先程の新の行動に説教していた
お偉いさん達に喧嘩を売る様な言動をしたのだから咎められるのは当然で、一誠達は生きた心地がしなかったらしい
「リアス。お前の眷属は本当に面白いな！途中で帰るなんて言い出したから、流石の俺もビックリしたぞ！」
「笑い事じゃないわよサイラオーグ！1歩間違えたら大変な事になってたのよ!?」
「過ぎた事をもう言ってやるな。確かにそいつの言葉には一理ある。夢をバカにして良い権利なんて誰にも無い。あの後、サーゼクス様がその事を話してくれたお陰で他の方々も理解し、自粛してくださった。上級悪魔の方々に、あそこまで正面から言った眷属なんて初めて見た」
サイラオーグが腕を組みながら感嘆するように頷く
「もしかしたら、竜崎新は悪魔の歴史に残る様な男になるかもしれない。そうなったら名誉な事じゃないか」
「真逆の意味で歴史に残る言動よ！はぁ……何だか頭が痛くなってきたわ」
リアスは額を押さえてフラついた

新はそんな事はお構い無しに、トイレの場所を聞いてそこに向かう
リアス一行は先に帰ってしまった
数分後、用を足し終えた新がトイレから出て、しばらく歩いてるとソーナ会長に遭遇した
「竜崎くん……」
「おぉっ、ソーナ会長。どうしたんすか？」
「あの……さっき私達の事で、あんな行動を起こしたんですか？」
ソーナの問いに新は当然の様に返答する
「あぁ。平気で他人の夢を踏みにじる様な奴に遠慮なんかする必要ねぇかなと思って。それにあのお偉いさんも、自分達の伝統と誇りを闇人（やみびと）にバカにされたらキレる筈だ。そういう事も言いたかったんだが、頭に血が上（のぼ）り過ぎて忘れてた」
新は気まずそうに頭を掻いて反省する
「竜崎くん……私の、私達の夢をどう思いますか？」
「とても良い目標だ。差別を無くした学舎を作るってのは、今の冥界にとって大きな1歩になる。誰の前でも誇れる夢だ」
「ありがとうございます……。でも、行動は奇抜過ぎでしたよ？」
「ハハッ……まぁ、俺は他人が思ってる程大人じゃないんでね。少しは自重するわ」

「新く～ん！」
新が後ろを振り向くと、セラフォルーが抱きついてきた
頭をグリグリ擦り付けて嬉しさを表現している
「お姉様!?」
「新くん☆ソーナちゃんの為に怒ってくれたんだよね！私すっごく嬉しかったよ☆」
「えっ、ま、まぁ……そう言いますかね。ってか、四大魔王の人がこんな事してて良いんすか？さっきから胸が当たってるから、俺としては嬉しい」
「良いの良いの☆私、今のでキュンとしちゃった。もう今すぐにでも新くんが欲しいぐらい！」
「それは眷属としてすか？」
「違う。男の子として……んちゅっ☆」
セラフォルーが新にキスした
しかも、頬ではなく唇に……
「おおおおおおお姉様!?竜崎くんに何を……!?」
「んっ……ちゅむ、ちゅぱぁ……れろぉ。ふふっ、私のファーストキスあげちゃった☆」
「いやいやいやいやいや！流石にこれはダメだろ!?何やっちゃってまんの!?」
「だってだって、本当に嬉しかったんだもん☆それにソーナちゃんを嫉妬させちゃおう

かな～って♪ソーナちゃんが欲しくないって言うんだから」
「だ、誰もそんな事は言っていません！それに！竜崎くんはリアスの眷属ですから！欲しいとかそう言うのは――――」
「もうっ、素直になってよソーナちゃん☆えいっ！」
セラフォルーがソーナ会長の背後に回り込み、彼女の背中を押した
思ったより力が強く、ソーナ会長は新を巻き込む形で倒れてしまった
ムニュッ……
「「あ……」」
新の手がソーナ会長の乳房（おっぱい）を鷲掴みにしてしまった
自己主張控えめなバストの触り心地はとても良く、新も思わず生唾を飲みながら指を動かしてしまう
「りゅ、竜崎く――――ひゃんっ……あ、ダメ……早く退いてください……」
「あ～っと、こりゃ失敬」
新はすぐに退いて、ソーナ会長は顔を真っ赤に染めて胸を押さえる
「お姉様っ！いきなり何をなさるんですか！竜崎くんに……む、胸を触られてしまったじゃないですか！」
「女の子ならそれぐらいのアピールは当然だよ☆ソーナちゃん、ボンヤリしてたら私が

新くんを取っちゃうよ？」
「で、ですから何故そう言う話になるんですか!?」
「新くん。私とソーナちゃん、どっちにエッチな事がしたい？勿論、姉妹一緒にってのも良いよ☆」
「話を聞いてください！お姉様！」
「まぁ、出来ればお二人一緒に」
「竜崎くんも真顔で答えないでください！」
今日は色んな意味で大変な会合となってしまった……

ウハウハの冥界温泉

「そうか、シトリー家と対決とはな」
グレモリー家の本邸に帰ってきた新達を迎えたのはアザゼルだった
広いリビングに集合し、先程の会合の事を話した
新がお偉いさん達に喧嘩を売る様な発言もした事を話したら、アザゼルは大爆笑した
今はすっかり落ち着きを取り戻している
「しゅ、修業ですか？」
「当然だ。明日から開始予定。既に各自のトレーニングメニューは考えてある」
「しかしまぁ、俺達だけ堕天使総督のアドバイスを受けてて良いのか？」
「別に。俺はいろいろと悪魔側にデータを渡したつもりだぜ？それに天使側もバックアップ体制をしているって話だ。あとは若手悪魔連中のプライド次第。強くなりたい、種の存続を高めたいって心の底から思っているのなら脇目も振らずだろうよ。うちの副総督も各家にアドバイス与えてるぐらいだ。ハハハ！俺よりシェムハザのアドバイスの方が役立つかもな！」
「……そんな、不安になる様な事を言わないでくださいよ」

「まあいい。明日の朝、庭に集合。そこで各自の修業方法を教える。覚悟しろよ」
『はい！』「おう」
　アザゼルの言葉に全員が重ねて返事をした
　その直後にメイドのグレイフィアが現れ、こう告げた
「皆様、温泉のご用意が出来ました」

「旅ぃ～ゆけば～♪」
「ここは冥界～♪地獄に仏～♪ってか」
　温泉に浸かりながら鼻歌を歌うアザゼルと新
　冥界屈指の名家グレモリーの私有温泉は名泉とも言える
「新、ギャー助知らないか？」
「ギャー助？あぁ、ギャスパーの事か。そういや見てな――――――あ、いた。入口んとこ」
　仕方ないと言わんばかりに新と一誠は1度上がり、入口でウロウロしてるギャスパーのもとへ

「おいおい。ほら、温泉なんだから入らなきゃダメだろう」
一誠がギャスパーを捕まえた直後、ギャスパー「キャッ！」と可愛らしい悲鳴をあげた
しかも、タオルを胸の位置で巻いている
端から見れば女の子……しかし、ギャスパーは残念ながら男である
「……あ、あの、こっち見ないでください……」
「……お、お前な！男なら胸の位置でバスタオル羽織るなよ！普段から女装してるからこっちも戸惑うって！」
「一誠。お前男相手に戸惑ってたら、もう男として終わりじゃねぇのか？」
「……そ、そんな、イッセー先輩は僕の事をそんな目で見ていたのですか……？身の危険を感じちゃいますぅぅぅっ！」
「うっさい！」
「喧しい女装野郎！」
このままではヤバいと感じた一誠は、ギャスパーをお姫様抱っこで抱きかかえ――――
ドボーーーーーンッ！
一気に温泉へ放り投げた

新は湯に入り、両手に持った桶で掬った湯をギャスパーにかけまくる
「いやぁぁぁぁぁぁん！あっついよぉぉぉ！溶けちゃうよぉぉぉ！イッセー先輩のエッチィィィッ！新先輩のエッチィィィッ！」
ギャスパーの絶叫が木霊（こだま）し、隣の女湯からクスクスと笑い声が聞こえてくる
疲れた新は桶を捨てて、再び湯に浸かる
「ところでイッセー、新」
アザゼルがいやらしい顔で近づいてきた
「お前らは女の胸を揉んだ事はあるのか？」
「は、はい！この右手でアーシアのおっぱいをもみっと！いつか部長や朱乃さんのおっぱいも触りたいッス！」
「俺はもう１００人以上、女の乳房（おっぱい）を揉んだぜ？いや、揉んだだけでなく……爪で乳輪をなぞったり、指の腹で擦ったりと」
「ハハハッ！そうかそうか！確かお前は１２歳で童貞を卒業したんだったな！それぐらい当然か！」
「ちくしょおおおおおおおおっ！なんで、なんでお前だけが木場と同じ様にモテるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
一誠が血の涙を流しながら新に襲い掛かった

新は「落ち着け」と言って一誠の頭を掴み、湯へ沈める
ブクブクと気泡が弾け、数秒後に一誠が勢い良く飛び出した
「おいおい、イッセー。アーシアの乳を揉んだクセにまだ新に嫉妬する節があんのか?」
「ありますよ!大ありですよ!女子更衣室を覗いた時も、何故かこいつだけが美味しい思いをしてやがるんだぁぁぁぁぁっ!」

――――――――遡(さかのぼ)ること数ヶ月前

一誠、松田、元浜は例の如く剣道部の女子更衣室を覗き、それがバレて追いかけ回された後の事だった
「まったくもう!あの変態3人組は性懲りもなく!」
「少しは木場くんや竜崎くんを見習いなさいよね!」
左右に束ねたロングヘアで「胸のデカい」村山と、ピンクのショートヘアで「いい足」の片瀬が文句を言いながら、他の女子剣道部員達と一緒に女子更衣室に入る
一誠達を追いかける為に着た剣道着を再び脱いでいく
「でもさ、噂じゃ竜崎くん……結構女遊びが凄いらしいわよ? 何人も女の子を抱いてるらしいって」
「エロ兵藤と同じように妙な催眠術をかけたりしてるのかしら……?」

「俺はそんな姑息な手段を使う奴に思われてるのかよ」
ブラを手に取ろうとした2人が声に反応して乳房を隠す
他の女子剣道部員達も下着姿や半裸を隠しながら辺りを見渡す
「その声……竜崎くん!?」
「大当たり。突撃隣の女子更衣室ってか?ふわぁ〜あ……よっと」
欠伸の後に着地音がなる
ロッカーの上から新が現れ、女子達が悲鳴をあげる
「痴漢!覗き!変態!」
「竜崎くんも変態3人組と同じなのね!」
「変態3人組?あぁ、一誠達はなんかロッカーとかに隠れて覗いたりしてるけどよ、俺は違う。こうして堂々と見ている」
「同じよ!」
「天誅!」
村山と片瀬がブラを着けて、竹刀で新を成敗しようとする
新は二本の竹刀を素手で掴んで2人から奪い取り――――
シュッ、サワサワサワサワサワサワサワ……
「「いやぁん……っ」」

２人のブラを引き剥がした上に乳房を揉み、陥落させた
その間、僅か２秒と言う早業である
乳房を揉まれた村山と片瀬は膝から崩れ落ち、官能的な息を漏らす
「ち、力が入らない……おっぱい揉まれただけなのに……ぅぅんっ」
「やっぱり……ぁぁんっ。みょ、妙な催眠術を……？」
「違ぇよ。そんな生易しいモノじゃねぇ。俺の手と指は女を蕩けさせ、一般思考を狂わせる猛毒を秘めている。この技にかかって堕ちない女はいねぇよ。いやはや、それにしても良い乳首だ。健康的なピンク色で申し分ねぇな」
村山と片瀬が恥ずかしそうに顔を赤くする
他の女子剣道部員達もその技の全貌に息を飲み、新は２人に近づいてしゃがむ
「ま、俺は一誠達の様にはいかねぇってこった」
「こ……これから毎日覗きに来るの……？」
「毎日こんな事されたら……どうしよう……変態３人組だけでも大変なのに……」
「じゃあ取引しねぇか？」
新の突然の提案に全員が疑問符を浮かべた
「どうせ一誠達は懲りずに覗きに来るだろうから、俺をガードマンとして雇う気はねぇか？あいつらの行動パターンなら大体把握出来る。警備中はさっきみたいに揉んだり

手ぇ出したりしねぇ。報酬は――――着替えてる光景と１人１００円ずつでどうだ？あいつらは意外と逃げ足が速ぇから、捕まえるにはうってつけの人材だと思うぜ？」
新の交渉に戸惑いながらも、全員が話し合う
代表として村山と片瀬が前に出てくる
「も、もう触ったりしない……？」
「俺からはな」
「変態３人組を捕まえられるの……？」
「捕まえるだけじゃ物足りねぇから、爆竹でも見舞ってやるか（笑）」
「竜崎くんって、変な人」
「思いきってお願いしてみる？自分から言ってくれてるんだし……」
「じゃあ、お願いします」
こうして、新は女子剣道部員専用のガードマンとなった
次の日、新は先に女子剣道部員が使う更衣室で入念なチェックを行っていた
そして一誠達が隠れそうな場所にリモコン式の爆竹を幾つも仕掛けた
一旦隠れて一誠達が来るのを待つ
ガチャッ
「よし、まだ誰もいないな。今の内にこのロッカーへ隠れるぞ」

「このロッカーは使用される回数が少ないから、絶好の覗きスポットだ。ウヒェヒェヒェッ♪」
「気持ち悪いぞ松田（笑）」
一誠、松田、元浜の変態3人組は爆竹が仕掛けられたロッカーの中に隠れた
新は気配を消しながら近づき、扉に瞬間接着剤を塗っていく
脱走出来ない様にする為だ
準備を終えて数分後、村山と片瀬を筆頭とした女子剣道部員達がやって来た
『おっ、来た来た……って、なんで竜崎がいるんだっ!?』
『えっ!?新がいるのか!?聞いてねぇよ!』
松田の声に一誠も驚愕した
何故女子更衣室に新がいるのか、何故女子達と話をしているのか、さっぱり分からなかった
「ねぇ、竜崎くん。大丈夫だった?」
「特に異常は無かったな。ある場所以外は……」
新が悪い顔をしながら横目でロッカーを見る
「ある場所って……何処?」
「ま、とにかく準備は整った。早く着替えな」

『なんだとっ!?片瀬や村山、女子達の着替えを生で!?』
一誠達は新を殺そうとしたが、バレたらオジャンになるため堪える
新が見てる中、村山と片瀬が恥ずかしがりながら制服を脱いで下着姿になる
そしてブラを外そうとした村山が……
「……」
「……っ?おい、どうした?何か様子が変なんだが」
「もう我慢出来ないっ！」
「うおっ!?」
ドタッ！
いきなり新を押し倒して、上に跨がる村山
それはまさに発情期に入った動物のようだった
「い、いきなりどうした?」
「竜崎くんにおっぱい触られてから……はぁ……はぁ……体が変なの。竜崎くんになら、何されても良いって……気持ちが溢れて……」
村山は自らブラを外して、見事な乳房(おっぱい)と乳首を新に見せる
「竜崎くんからは触らないって言ってくれたよね……?私が触らせるのは大丈夫だよね……?だから……」

ムニュンッ

村山は新の両手を掴み、自分の乳房を触らせた

「……っ!?おいおいおいおい、良いのか?こいつは契約違反じゃ――――――」

「違うの!私が触らせてるから違反じゃない!ぁぁんっ。んっ……はぁんっ、気持ち良い……」

「ズ、ズルいわよ!私も!」

対抗心を燃やしたのか、片瀬もブラを脱ぎ捨てて乳房と乳首を晒け出し、新の左手を掴んで胸を触らせる

「はぁっ……んっ、んんっ……気持ち良い……。体がフワフワしてくるぅ……」

「おぉい、お二人さん?正気に戻った方が良いんじゃね?あとで後悔すんぞ?」

「後悔なんてしないもん……私達が望んでやってるから……ひぁんっ」

「「2人だけズルい……。私達も混ぜて!」」

残った女子達もブラを脱ぎ捨てて新のもとへ集まっていく

一誠達は血の涙を流しながら、新を殺すか否か考えていた

その結果――――――

『『『殺してやるっ!』』』

見事に一致（笑）

ロッカーの扉を開けようとしたが、新が塗った瞬間接着剤のせいで出られない
『おい！扉が開かねぇぞ！どうなってんだ!?』
『まさか、新の仕業か!?』
ガタガタ動くロッカーに気付く女子達
新は起き上がって悪い顔をしながら、ポケットのリモコンを取り出す
「ご来場の皆さま。ただ今より、打ち上げ花火５００発分の火薬が入った強力な爆竹を爆破させま～す♪変態３人組が入ってるロッカーにご注目ください」
『――――っ!?俺達の事バレてんじゃねぇか！ってか、花火５００発分の爆竹!?』
『うわぁぁぁぁっ！急いで蹴破れ！何でも良いからドアを――――』
カチッ……
パンパンパンパ

の狭間を数時間さまよった……

――――――――――――現代に戻る

「ハハハハハハハハッ！そりゃ災難だったなぁ！」

「なんでこいつだけが、なんでこいつだけが女子の着替えを堂々と拝めるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！しかもぉ！おっぱいをおおおおおおっ！乳首を触りやがってええええっ！」

一誠は駄々っ子みたいに腕を振り回すが、新は桶の投擲（とうてき）ラッシュで一誠を再び湯に沈めた

「そんなに悲しいなら、隣の女湯を覗けば良いじゃねぇか。温泉で女湯を覗くのはお約束だ。一流のスケベになってこい」

「ぶはぁ！ど、どうすれば一流に!?」

アザゼルは一瞬考える様を見せる

「……そうだな。こんな！」

むんずっ×2！

アザゼルが新と一誠の腕を掴み――――――――

「感じかなっ！男なら混浴だぞ、イッセー！新！」

ぶぅぅぅぅぅんっ！
２人を思いっきり女湯の方へ投げ飛ばした
「おわあああああああっ！」
「力半端ねぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
２人はクルクル回りながら壁を越え、リアス達と目が合う
シュタッ！ドッボォォォォォォォンッ！
新は見事に着地したが、一誠は勢い良く温泉に叩きつけられた
「あら、新、イッセー。アザゼルに飛ばされてきたのね？ちゃんと体は洗ったの？」
「うふふ、新さんったら。大胆ですわ」
リアスと朱乃が新に白い乳房（おっぱい）を揺らしながら近づいていく
一誠はお湯から飛び出して脱出を図るが……その際にリアス、朱乃、アーシア、ゼノヴィア、小猫の裸体を見てしまい――――
「桃源郷ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
ブシャアアアッと豪快に鼻血を噴き出して再び湯に沈んだ
アーシアは直ぐに介護しようと一誠に歩み寄る
「新。覗きたかったのか？言ってくれたら見せてやるのに」
ゼノヴィアも裸体を隠さず新に近づく

ここはまさに桃源郷であるが……小猫が見ている事に新は気づいた
小猫の事だから「……最低です。変質者先輩」とか言って超ド級の拳を放ってくるに違いない！と推測し、逃走を選択した
「続きはＷｅｂ（ウェブ）で！」
「逃がさんっ」
ムニュンッ
逃げる方向に待ち構えていたゼノヴィアが新を捕獲
柔らかな乳房（おっぱい）をこれでもかと言うぐらい押しつける
「なっ!?ゼノヴィア！放せ！今は命を最優先したいんだ！」
「あらあら。ゼノヴィアちゃん、ズルいですわ」
モニュンッ
更に朱乃も背中から新に抱きついてきた
これぞ男の夢、おっぱいサンドイッチである
「朱乃、ゼノヴィア。嬉しいけど俺の命がヤバいんだ。続きは部屋で――――」
「やーですわ。今、新さんの体を肌で感じていたいんですの……ぁぁんっ。やっぱり新さんは気持ち良いですわ……蕩けますぅ……」
「今こそ、お前の温もりを味わおう。んんっ……ぁんっ、新の体……凄く気持ち良いぞ

……。ずっとこのままでいたい……」
２人は顔を紅潮させながら上下に揺らす
新は某リアクション芸人並みに焦りながら突破口を探す
一誠は既に鼻血を出しながら沈黙しているので役に立たない
何か手は無いかと考えていると……
「……先輩」
「あ、死んだわこれ……」
裸の小猫が眼前に現れた
新の顔から希望が消え、死を覚悟したが……小猫は何もせずに温泉を出ていった
「……？小猫、あいつどっか調子が悪いのか？」
新はその様子が妙に気になり、視線を小猫の背中に集中させ続けた
そんな時、不意に引っ張られる感がした直後にムニュリと柔らかな感覚に襲われる
「ちょっと朱乃、ゼノヴィア、いつまでも独り占めにしないでちょうだい」
「あらあら、独り占めじゃなくて二人占めですわよ？」
「リアス部長、新を放して欲しい。私はまだ新の温もりを感じていたいんだ」
そう言って手を伸ばしてくるゼノヴィアに対し、リアスはそうはさせないとばかりに新を自身の胸に引き寄せる

「あなた達はもう充分くっついたから良いじゃない！この子の主は私なのよ！」
「あらあら、リアスってば嫉妬？ただのスキンシップでそこまで過剰に反応するなんて……意外と『王（キング）』としての器が小さいのね♪」
その言葉が引き金になってしまい、リアスは新を解放してから赤いオーラを全身から迸らせる
「……朱乃、やっぱりあなたとは決着をつける必要があるわね」
「うふふ、では――――この前の続きをしましょうかしら？」
朱乃も負けじと金色のオーラを走らせた
温泉にて裸の美少女が２人
立場的には美味し過ぎる状況下にいる筈なのだが……
滅びの魔力を持つ『王（キング）』と雷を操る『女王（クイーン）』が激突すれば現在地の崩壊は必至……
プール時の大喧嘩バトルが再来しようとしていた……
「ちょっ、ちょっとタンマ！リアス、朱乃！温泉では静かに――――」
「いくわよッ！」
「いくなぁぁぁっ！やめろぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
ドドオオオオオオオオオオンッ！
新の叫びは虚しく空（くう）を切り、爆音に掻き消されていった……

いよいよ明日から、新達の修行が始まる……

修行開始、ウェルダンは勘弁してね！

翌朝、新達は広い庭の一角に集まっていた
服装は全員ジャージである
資料やデータらしき物を持ったアザゼルが口を開く
「先に言っておく。今から俺が言うものは将来的なものを見据えてのトレーニングメニューだ。すぐに効果が出る者もいるが、長期的に見なければならない者もいる。ただ、お前らは成長中の若手だ。方向性を見誤らなければ良い成長をするだろう。さて、まずはリアス。お前だ」
アザゼルが最初に呼んだのはリアスだった
「お前は最初から才能、身体能力、魔力全てが高スペックの悪魔だ。このまま普通に暮らしていてもそれらは高まり、大人になる頃には最上級悪魔の候補となっているだろう。だが、将来よりも今強くなりたい、それがお前の望みだな？」
「ええ。もう2度と負けたくないもの」
アザゼルの問いにリアスは力強く頷く
アザゼルはリアスのトレーニングメニューが記された紙を渡すが、リアスはその内容

を見て首を傾げた
「……これって、特別凄いトレーニングとは思えないのだけれど?」
「そりゃそうだ。基本的なトレーニング方法だからな。お前はそれで良いんだ。全てが総合的にまとまっているから基本的な練習だけで力が高められる」
「なるほど。『王(キング)』としての資質を向上させる為のトレーニングメニューか」
リアスのトレーニングメニューが記された紙を覗いた新が言う
アザゼルはその言葉を肯定した
「新の言った通り、お前には『王(キング)』としての資質が欠けている。『王(キング)』は時と場合によっては、力よりも頭脳が求められる。フェニックス家との一戦は見せてもらったが――――新がキレたのも分かる。他にもリタイヤしていった奴もいるってのに、そいつらに勝ちを持っていくのも『王(キング)』の務めだ。お前は戦況を見ずに勝手に投了《リザイン》しやがった。そんなんじゃ、これからのゲームには絶対勝てねぇ。闇人(やみびと)との戦闘なら尚更だ」
名目上ゲームと言っても実際は殺し合いの様なもの
リアスはフェニックス戦での自分の不甲斐なさを思い出した
冷静になって、自分でも情けないと思っているのだろう
「次に朱乃」

「……はい」
朱乃は不機嫌な様子で返事をした
父が堕天使の幹部――――――つまり総督アザゼルの部下であるから、それ絡みでアザゼルを苦手と言うか嫌っているらしい
「お前は自分の中に流れる血を受け入れろ」
「――――――ッ！」
ストレートに言われたせいか、朱乃は顔をしかめた
「お前のフェニックス家との一戦も、記録した映像で見せてもらったぜ。何だありゃ。本来のお前のスペックなら、敵の『女王（クイーン）』を苦もなく打倒出来た筈だ。何故、堕天使の力を振るわなかった？雷だけでは限界がある。光を雷に乗せ、『雷光（らいこう）』にしなければお前の本当の力は発揮出来ない」
朱乃は堕天使の血を引いているので、光の力を使う事が出来る
悪魔相手ならそれは効果的
更に得意の雷に光を乗せれば威力と速度は格段に上がる
しかし、朱乃は複雑極まりない様子だった
「……私は、あの様な力に頼らなくても」
「否定するな。自分を認めないでどうする？最後に頼れるのは己の体だけだぞ？ツラく

とも苦しくとも自分を全て受け入れろ。お前の弱さはお前自身だ。決戦日までにそれを乗り越えてみせろ。じゃなければ、お前は今後の戦闘で邪魔になる。『雷の巫女』から『雷光(らいこう)の巫女』になってみせろよ」

アザゼルの言葉に朱乃は応えられなかったが、少なくともやらなきゃいけない事ではある

その後も各トレーニングメニューを告げていくアザゼル

祐斗は禁手(バランス・ブレイカー)の状態維持を向上＋基本トレーニング

ゼノヴィアはデュランダルを使いこなす事と、もう1本の聖剣に慣れる特訓

もう1本の聖剣が何なのかはまだ教えないらしい

ギャスパーは専用の『引きこもり脱出計画!』なるプログラムの実践

アーシアは神器(セイクリッド・ギア)の範囲拡大および回復のオーラを飛ばせるようになる基本トレーニング

身体と魔力の向上も兼ねているが、メインは神器(セイクリッド・ギア)の強化にある

「次は小猫」

「……はい」

小猫はこの日、何故か気合いの入った様子でいた

最近までは調子が悪そうだったのに、今日は妙に張り切っていた

「お前は申し分ない程、オフェンス、ディフェンス、『戦車(ルーク)』としての素養を持っている。身体能力も問題無い。だが、リアスの眷属には『戦車(ルーク)』のお前よりもオフェンスが上の奴が多い」

「……分かっています」

ハッキリ言うアザゼルの言葉に小猫は悔しそうな表情を浮かべていた

「リアスの眷属でトップのオフェンスは現在新だ。その次に木場とゼノヴィア。禁手(バランス・ブレイカー)の聖魔剣(せいまけん)、聖剣デュランダル、更には闇人(やみびと)が作った『闇皇(やみおう)の鎧』と凶悪な兵器を有してやがる。ここにイッセーの禁手(バランス・ブレイカー)が入ると――――」

アザゼルの言う通り、新や祐斗、ゼノヴィアのパワーはこの中でもズバ抜けている

特に新は『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』を持っており、1つは目覚め、あと3つの形態が覚醒を待ち望んでいる

「小猫、お前も他の連中同様、基礎の向上をしておけ。その上で、お前が自ら封じているものを晒け出せ。朱乃と同じだ。自分を受け入れなければ大きな成長なんて出来やしねぇのさ」

「……」

アザゼルの言葉に小猫は一気に消失してしまった

新は小猫自身が封じている力について気になった

そして目を見た……
自身が封じている力に恐怖を抱いてるようだ……と新は悟る
一誠は元気付けようと小猫の頭を撫でようとしたが、新に止められる
新は無言で首を振って、手を引っ込めさせた
「さて、最後はイッセーと新だ。お前らは……ちょっと待ってろ。そろそろなんだが……」
空を見上げたアザゼル
それにつられて新と一誠も見上げると、巨大な何かが猛スピードで向かってきた
彼らの眼前に現れたのは――――――
「――――ドラゴン!」
「そうだ、イッセー。こいつはドラゴンだ」
「アザゼル、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」
「ハッ、ちゃんと魔王様直々の許可を貰って堂々と入国したぜ?文句でもあるのか、タンニーン」
「タンニーン……それがこのドラゴンの名前か。〝担任〟から捩ってんのか?それとアザゼル。まさかとは思うが……このドラゴンが俺達の?」
「あぁ。こいつがお前らの先生だ」

「「えええええええええええええええっ!?」」
新と一誠は揃って絶叫した
「ドラゴンとの修行は昔から実戦方式だ。目一杯鍛えてもらえ」
「ふざけんじゃねぇぇぇぇぇっ！おまっ、こんな大怪獣と戦えってのか!?」
「心配すんなって。ちゃんと手加減してくれっから」
「「マジで?」」
「あぁ。ただし新、お前はダメだ」
サラサラサラサラサラサラ……
新はショックで粉末状になった
しかし、すぐに復活して不敵な笑みを浮かべる
「クックックックッ……」
「おっ?どうした、やる気になったか?」
新は突如、闇皇(やみおう)に姿を変えて飛び上がる
タンニーンの目線の高さまで飛んだ新は、そこから高速回転しながら地面へ降り――

「手加減してくだせぇぇぇぇっ！お願ぇしますだぁぁぁぁっ！ドラゴンの旦那アアアアアッ！」

見事な土下座を決めた（笑）
一誠達はズッコケ、アザゼルは腹を抱えながら大爆笑した
「新アァァァァッ!その姿になって何情けない事してんだァァァァッ!」
「うるせぇボケェェェェェッ!相手はドラゴンなんだぞ!?誰だって土下座するわぁっ!しかも、一誠は手加減してくれっから良いじゃねぇかぁっ!俺なんかハナッからフルパワー!殺意ＭＡＸで最大ドライブ、リミット破壊されちまうんだぞぉぉぉっ!間違いなく死ぬわァァァァッ!」
新は一誠の首を掴んでガクンガクン揺らしまくる
タンニーンは笑いながら新に向かって言う
「お前さんはリアス嬢の眷属の中じゃ、おそらく最強クラスに匹敵している。普通に手加減しては力が上がらんのだよ。全力でやるが、死なない様にだけはしといてやるさ。『闇皇の蝙蝠』」
「差別だ!格差社会に百言物申す!一誠にもフルパワーで攻撃するべきだ!」
「お前それこそふざけんなよっ!俺だったら間違いなく死んでるわぁぁぁっ!」
「んなもん知るかァァァァッ!俺だけ貧乏クジ引くなんて真っ平だ!」
タンニーンは言い争っている新と一誠をむんずと捕まえ、離陸体勢に入る
「リアス嬢、あそこに見える山を貸してもらえるか?こいつらをそこへ連れていく」

「ええ。鍛えてあげてちょうだい」
「部長オオオオオオッ！勝手に話を進めないでエエエエエッ！」
「こいつと心中なんざしたくねェェェェェッ！死ぬならせめて、朱乃やゼノヴィアとセッ〇スさせてくれェェェェェッ！あと、出来たらリアスとも」
「ダメよ」
「あらあら。新さんったら欲張りですわね」
「新。必ず生きて帰ってきてくれ」
リアス、朱乃、ゼノヴィアは笑顔で手を振って見送る
「部長オオオオオオッ！」
「２人とも、気張りなさい！」
タンニーンが空へ飛び上がる
一誠はジタバタしながら、新は魂が抜けた様な状態で墓場――――もとい修業場となる山へ連れ去られていった……

ドゴォォォォォォォォォォンッ！

新と一誠が修行場となる山に連れていかれて数日が経過したある日、容赦なく襲ってくる火炎が爆音を響かせる
ドドォォォォォォォォォォォンッ！
「うわぁぁぁぁぁぁんっ！」
「ほーら、赤龍帝の小僧。もっと素早く避けんと灰になるぞ」
「チキショウがァァッ！」
逃げ回る一誠と勇猛果敢に挑む新
しかし、今の新は『闇皇の鎧』の装着箇所を制限されており、一部分しか展開出来ない
その為に1発でも攻撃をくらえばお陀仏である
ドゴォッ！
新は動き回りながらもタンニーンの顔面に鎧の拳を当てていく
ドラゴンの鱗は普通の鎧よりも硬く、生半可な攻撃ではビクともしない
「闇皇の小僧は成長が早いな。最初は逃げ回ってばかりだったが、今では頻繁に攻撃に転じてきている」
「それでもまだドラゴン様には敵わないけど――――なっ！」
バゴォォォォォォォォォォォォンッ！

火の息を回避しながら隙を見て攻撃を打ち込む様になっている新に対し、一誠は相変わらず逃げ隠れしていた
新は一旦樹木や岩などを利用して隠れ、息を殺しながら一誠の背後に回る
岩陰に隠れている一誠に近づき、頭を鷲掴みにする
「――――っ!?あ、新ッ!?」
「一誠……俺は死ぬ気でドラゴンのオッサンに挑んでるっつうのに、逃げ隠れたぁいかんなぁ?だから、逝ってこいやァァァァァッ!」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!鬼畜ぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!」
一誠は新に思いっきり投げ飛ばされ、タンニーンの火のブレスが容赦無く襲い掛かる
ドゴォォォォォォォォォォォォンッ!
「ひぃぃぃぃぃっ!死ぬ!死ぬ!殺されるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!」
「まったく、逃げ回ってばかりではいつまで経っても修行にならないだろう。ほら、少しは闇皇(やみおう)の小僧を見習って反撃してこい」
「無理っスよ!あんた強すぎだもん!もしかしてヴァーリより強いんじゃないの!?」
「まあ、パワーだけなら魔王級とはよく言われる」
「無理ィィィィィッ!魔王級のドラゴンって何!?ドラゴンってだけでもバケモノなのに、魔王級なんて相手に出来る訳ないでしょォォォォォォッ!」

「闇皇(やみおう)の小僧は3日で攻撃を仕掛けてきたぞ。お前もそれぐらいの根性を見せてみろ」
「新は人間時代からバケモノと殺り合ってんだよ!しかも、悪魔に転生してからもバカみたいに強くなってるし!俺をあんなバグ野郎と一緒にしないでェェェェッ!」
ピキッ……
一誠の発言に新は青筋を浮かべ、自分に課せられた制限を無視して闇皇(やみおう)になる
「ドラゴンのオッサン……今から俺も一誠をイジメてやる。本物のイジメってヤツを見せてやらぁ」
「ほう。どんなものか見せてもらおうか」
「えっ!?あ、新!?冗談だろ!?」
新は冗談抜きのＭＡＸパワーで赤い魔力を両手に集中させていき……
「殺しはしねぇけど――――死ねコラァァァァァァァァァァァッ!」
流星群の如き魔力を一誠に撃ち放った
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!マジで撃ちやがったァァァァァァァァッ!」
ドドドドドドドドドドオオオオオオオオオオオンッ!
山の木々が次々と破壊され、大自然の光景が次々に焼け野原と化していく
新の所業にタンニーンは笑うしかなかった
そこへヒョコッとアザゼルが顔を出してくる

「おー、やってんな。どうよ？」

「見ての通り、闇皇（やみおう）の小僧が赤龍帝（せきりゅうてい）の小僧をイジメている」

「うみゃい！うみゃいよおおおおおっ！」

「ムグムグ……ん～、美味（うめ）ぇなぁ～♪流石リアスと朱乃だ。疲れた体に染み渡っていくぜ」

一誠はリアス、アーシア、朱乃の3人が作った差し入れのおにぎりを涙を流しながら食べ、新は両手に持ちながら舌鼓（したつづみ）を打つ

「しかし、ハハハハ。数日見ない間に多少は良いツラになったな」

「ふざけんな！死ぬよ！俺死んじゃうよ！このドラゴンのおっさんメチャクチャ強いよ！ドラゴンの戦いを教えてくれるって言っても実力が開き過ぎてて話にならねぇぇぇぇっ！」

ご飯粒を飛ばしながら号泣する一誠

確かに魔王級のドラゴンだから実力は雲泥の差であろう

「それと新!新まで一緒に攻撃してくるんだもん!これ以上耐えられねぇよ!殺す気で隕石みたいな魔力を飛ばしてきたんだぞ!?俺、ドラゴンのおっさんと新に殺されちゃいますって!童貞のまま死にたくないっス!」
「アホか一誠。タンニーンのオッサンが本気出してたら、俺達は今頃灰になってるだろ。まぁ、俺は死なない程度かつ殺す気でお前に撃ってるけどな」
「あれのどこが死なない程度だよ!?連続で撃ったり!超デケェ魔力を撃ったり!地面から撃ってきたり!明らかに殺す気満々でやってるじゃねぇかぁっ!」
新は泣きわめく一誠を無視して、水筒のお茶を飲む
お茶を飲み干した後、ある事をアザゼルに訊き始める
「なぁアザゼル。あの時、ヴァーリが何か呪文みたいなものを唱えようとしていたんだが、あれは何だったんだ?」
「ああ、『覇龍(ジャガーノート・ドライブ)』の事か」
「もしかして、禁手(バランス・ブレイカー)の更に上とか?」
「いや、禁手(バランス・ブレイカー)の上は存在しない。神器(セイクリッド・ギア)の究極は禁手(バランス・ブレイカー)だ。だがな、魔物の類を封印して神器(セイクリッド・ギア)にしたものがいくつかあってな。それらには独自の制御が施されている。お前のブーステッド・ギアとヴァーリのディバイン・ディバイディングもその例

だ」
「独自の制御……平たく言えば、『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』は暴走みたいなもんか？」
新の問いにアザゼルは頷く
「あぁ、酷いぐらいのな。本来、神器（セイクリッド・ギア）は強力に制御されていて、その状態から力を取り出して宿主が使えるようにしている。だが、赤龍帝（せきりゅうてい）と白龍皇（はくりゅうこう）の神器（セイクリッド・ギア）の場合はそれを強制的に一時解除し、封じられているパワーを解放する……それが『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』だ。一時的に神に匹敵する力を得られるが――――リスクも大きい。寿命を大きく削り、理性を失う……。言うなれば、力の亡者と化した者だけが使う呪われた戦い方だ。イッセー、お前は絶対に真似するな」
アザゼルは真剣かつ憂いを含んだ目で一誠に忠告を出した
一誠は今後の修行に耐えられるかどうか不安になる
新は岩に頬杖をつきながら、残ったおにぎりを貪（むさぼ）る
「さてと、新。ちょっと話があっから、向こうに来てくれないか？」
「……っ？話？」
アザゼルは新を呼んで少し離れた場所へ移動を開始した
そして改まった様子で口を開く
「お前、朱乃の事どう思う？」

「朱乃か……言うまでもなく良い女だ。俺が初めて自分から惚れた女だからな」
　新が迷い無く言うと、アザゼルは安堵したかのように頷いた
「そうか。俺はな、ダチの代わりにあいつを見守らないといけない部分もあってな」
「あぁ、確かバラキエルはアザゼルの部下だったっけ?」
「バラキエルは配下ってよりはシェムハザと同じ大昔からの仲間さ。ダチだ、ダチ。よく一緒になってバカをやったもんだ。で、気づけば俺の周りは妻子持ちばかりでさ」
「話から察するに、シェムハザも既婚者か。先を越されてばかりなんだな?」
「……俺には女なんていくらでもいるから良いんだよ」
　どうやらアザゼルにとって、婚期に関する話は禁句(タブー)のようだ
「まぁ、それはともかく、俺は朱乃の事が気になるのさ。バラキエルや朱乃にとってみれば余計なお世話かもしれないがな。朱乃の事、お前に任せられるかもなんて思ってる。お前は良い女なら来る者拒まずだが、周囲の信頼も得てきている。ある意味イッセーに近い才能だな」
「ハッ、アザゼル。俺を誰だと思ってやがる?今まで俺は、欲しい女は全て手に入れてきたんだ。俺を慕ってくれる女は、誰だろうと守り通す。例え敵でもな」
　新は当然のように言う
　実際、敵だったレイナーレ達も今は新の仕事仲間、ライザーの眷属達とも良好な関係

になっている
　新は欲深いが、守りたいものは死んでも守ると豪語する男だ
　アザゼルはクスッと小さく笑う
「よし。朱乃に関してはお前にも任せる。それよりも――――問題は小猫か」
「小猫？小猫がどうかしたのか？」
「どうにも焦っている――――と言うよりも、自分の力に疑問を感じているようだ。俺が与えたトレーニングを過剰に取り組んでてな、今朝倒れた」
「はぁっ!?倒れた!?」
　悪い報せに新は声を荒らげた
「怪我はアーシアに治療してもらえるが、体力だけはそうはいかん。特にオーバーワークは確実に筋力などを痛めて逆効果だ。ゲームまでの期間が限られているのだから、それは危険だ」
「オーバーワークか……小猫の奴、いったい何やってんだか……」
「さて、行くか。新とイッセーを1度連れ返せと言われたんでな。1度グレモリーの別館に戻るぞ」
「連れ返せ？誰に言われたんだ？リアスか？」
「――――の母上殿だ」

そう言われ、新と一誠は一旦屋敷へ戻る事になった

小猫の秘密と涙

「ワン、ツー、スリー、フォー。はい、そこでターン。新さん、初めてとは思えない程の上達ぶりですね。総司さんも初心者なのに直ぐに覚えていたわ。でも、時折胸をを触ろうとするのは如何なものかしら?」
「すんません。俺の悲しい性(さが)です。自重します」
山から1度グレモリーの別館に来た新と一誠はリアスの母――――ヴェネラナとダンスの練習に励んでいた
一誠は上流社会との社交的な付き合いは無縁だったので全くダメなのに対し、新は色んな女性との付き合いがあるせいか、覚えるのも上達するのも早かった
休憩時間に入ったところで新は小猫について聞いてみた
「ヴェネラナさん。小猫は大丈夫なんすか?オーバーワークだってアザゼルから聞いたんすけど」
「ええ。1日か2日、ゆっくりと体を休めれば回復するでしょう」
「……小猫ちゃん。ここに来る前から様子がおかしかったんで、凄く心配です」
「いつもの小猫じゃなかったのは確かだな」

「彼女は今、懸命に自分の存在と力に向き合っているのでしょう。難しい問題です。けれど、自分で答えを出さねば先には進めません」
「……存在と力？」
ヴェネラナの言葉に疑問に感じる新と一誠
小猫には何か秘密がありそうだ
「……そういえば、あなた方はリアスの眷属になって間も無かったわね。そう、知らなくても当然ですね。少しお話をしましょう」
ヴェネラナは新と一誠に対面するように座り、とある話を語り出した
それは2匹の姉妹猫の話だった
姉妹の猫はいつも一緒だった。寝る時も食べる時も遊ぶ時も。親と死別し、帰る家もなく、頼る者もなく、2匹の猫はお互いを頼りに懸命に一日一日を生きていった
「2匹はある日、とある悪魔に拾われました。姉の方が眷属になる事で妹も一緒に住めるようになりました。やっとまともな生活を手に入れた2匹は、それはそれは幸せな時を過ごせると信じていたのです」
ところが、異変は起こる
姉猫は、力を得てから急速なまでに成長を遂げたそうだ
隠れていた才能が転生悪魔となった事で一気に溢れ出たらしい

「その猫は元々妖術の類に秀でた種族でした。その上、魔力の才能にも開花し、挙げ句仙人のみが使えると言う仙術まで発動したのです」

短期間で主をも超えてしまった姉猫は力に呑み込まれ、血と戦闘だけを求める邪悪な存在へと変貌していった

「力の増大が止まらない姉猫は遂に主である悪魔を殺害し、『はぐれ』と成り果てました。しかも『はぐれ』の中でも最大級に危険なものと化したのです。追撃部隊を悉く壊滅する程の……」

悪魔達はその姉猫の追撃を一旦取りやめたと言う

「残った妹猫。悪魔達はそこに責任を追及しました」

『この猫もいずれ暴走するかもしれない。今の内に始末した方が良い』――――と

「処分される予定だったその猫を助けたのだサーゼクスでした。サーゼクスは妹猫にまで罪は無いと上級悪魔の面々を説得したのです。結局、サーゼクスが監視する事で事態は収拾しました」

けど、信頼していた姉に裏切られ、他の悪魔達に責め立てられた小さな妹猫の精神は崩壊寸前だったそうだ……

「サーゼクスは、笑顔と生きる意志を失った妹猫をリアスに預けたのです。妹猫はリアスと出会い、少しずつ少しずつ感情を取り戻していきました。そして、リアスはその猫

に名前を与えたのです。――――――小猫、と」
「じゃあ、小猫の正体は――――――妖怪」
「そう、彼女は元妖怪。猫又をご存じ？猫の妖怪。その中でも最も強い種族、猫？（ねこしょう）の生き残りです。妖術だけではなく、仙術をも使いこなす上級妖怪の一種なのです」

ダンスの練習も終わり、新と一誠はグレモリー本邸に移動した
リアスが迎え入れると同時に新は本題に入る
「リアス。小猫は？」
そう訊いた途端リアスは難しい表情になり、「ついてらっしゃい」と小猫の部屋に案内をする
リアスは既に話を済ませたらしく、中に朱乃がいるので2人に入室を許可した
新と一誠は小猫の寝室へ足を運ぶ
ベッド脇には朱乃が待機しており、ベッドには小猫が横になっていた
新と一誠は小猫の頭部に生えていた”猫耳”を見て驚いた
この猫耳は普段は隠していて、体力がなくなると出てきてしまうらしい

「新さん、イッセーくん、これは――――」
「あぁ、だいたいの話は聞いた」
そう言うや否や新はベッド脇に移動して小猫の様子を窺った
「よぉ小猫。体は大丈夫か？」
新はいつもの調子で訊くが、小猫は半眼かつ不機嫌な声音で呟いた
「……何をしに来たんですか？」
「随分と不機嫌だな。仲間を心配して何が悪いんだ？」
ぶすっとしたまま小猫は答えない
新は構わず続けた
「話はリアスの母――――ヴェネラナさんから聞いたぜ。大事な試合を控えてるっつうのに、オーバーワークなんぞ起こしやがって。何をそんなに焦る必要があるんだ？」
「……なりたい」
小猫が小さく呟く
そして真っ直ぐに新を見つめ、涙を溜めながらハッキリとした口調で言った
「強くなりたいんです。祐斗先輩やゼノヴィア先輩、朱乃さん……そして、新先輩やイッセー先輩のように心と体を強くしていきたいんです。ギャーくんも強くなってきてます。アーシア先輩のように回復の力もありません。……このままでは私は役立たずに

なってしまいます……。『戦車（ルーク）』なのに、私が1番……弱いから……。お役に立てないのはイヤです……」

どうやら小猫は今まで自分の弱さを気にしていたようだ

確かに小猫を除いた全員は強くなってきている

祐斗は禁（バランス・ブレイカー）手で聖魔剣（せいまけん）を手に入れ、ゼノヴィアはデュランダルを使える

朱乃は最強の駒『女王（クイーン）』で、ギャスパーは時間停止の神器（セイクリッド・ギア）を有している

アーシアは回復能力に秀でており、一誠は伝説のドラゴンを身に宿している

新も闇人（やみびと）が作った最強の鎧――――『闇皇（やみおう）の鎧』を宿してるだけでなく、『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』と言う反則級の力にも覚醒した

小猫は溜まった涙をボロボロこぼしながら話を続ける

「……けれど、うちに眠る力を……猫又の力は使いたくない……。使えば私は……姉さまのように……。もうイヤです……もうあんなのはイヤ……」

初めて見た小猫の泣き顔

自分に主をも殺せる力が眠っていると知ったからこそ、怖くて使いたくない

しかし、これからの事情を考えると力が欲しい

小猫はこの相対する気持ちを冥界まで抱えていた……

そんな小猫に新はキツい言葉を浴びせる

「小猫、だからと言って無理にトレーニングして体を壊したら本末転倒だろ。強くなりたいって気持ちは誰だって分かる。だがな、強さってのは時間をかけて得るものだ。無理矢理ドーピングしようとしても肉体はついていかない。寧ろ逆に肉体が蝕まれる」

「……先輩は強いからそんな事が言えるんです……！以前の合宿だって、私が邪魔してしまったから……闇人に攻撃されて……！私が邪魔さえしてなかったら――――」

パシンッ！

部屋に響く乾いた音

女性にはキザったらしいぐらい優しい新が――――小猫の頬を叩いた……

突然の事にリアスも一誠も朱乃も目を見開いて驚愕する

小猫は何故叩かれたのか理解出来なかった……

「……え？」

「いい加減にしとけよ、小猫。前にも言ったよな？俺だって初仕事の時はビビってたって。それは俺も弱かったからだ。強くなりたいと願った。だが、付け焼き刃で得た強さは脆弱過ぎるんだよ。それは逆に足手まといになる。お前は俺達のお荷物になりたくないんだろ？だったら、時間をかけて強くなっていけ」

新は厳しい顔で小猫に言う

「自信が無かったら仲間に頼れ。仲間に愚痴れ。仲間に甘えろ。お前はもう……1人

じゃねぇんだよ。俺や一誠、リアス、朱乃、祐斗、ゼノヴィア、アーシア、ギャスパーと仲間がたくさんいるだろ。そいつを忘れんな」
新は最後に小猫の頭をクシャクシャと撫で、部屋を去ろうとする
「一誠、行くぞ」
「えっ？ちょ、ちょっと待てって」
ガチャッ……バタン
ズカズカと小猫の部屋を出た新を追い掛ける一誠
追い付いた所で新の正面に回って言う
「おい、新。いくらなんでも叩くのはやり過ぎだろ。小猫ちゃん、怖がってたし……」
「確かにやり過ぎちまった。けどよ、小猫は修行する際に1番やっちゃいけねぇ事をした。自分の肉体を過剰に痛めつける様なオーバーワークをし、俺達に心配をかけた。それを理解出来ねぇ時は叩いてでも分からせる必要があるんだよ。はぁ……流石に心が痛んだけど、分かってくれる筈だ」
心配しているから、分かってもらえると信じているからこそ新は敢えて厳しく言い聞かせた
後は小猫本人の勇気次第
それぞれの修行でそれぞれ超えなきゃいけない壁を自ら超えていく

一誠も新の言葉で自分にしか出来ない修行を超えると決心を固めた

――――――――――時は過ぎ、８月１５日

シトリー眷属との戦いまであと５日となった

ゲーム前にも魔王主催のパーティがあるので、修行は明日までとなる

「お前達も今日までよくやった。――――しかし、残念だったな赤龍帝（せきりゅうてい）。もう少し日があれば長時間の維持は可能だったかもしれない。明日で修行は終わりだが……おそらく無理だろう」

タンニーンがため息を吐く

新は修業期間内に戦闘力と魔力、そして「ある技」の向上に成功した

対して一誠は体力と魔力の向上のみ……ようやく発現出来た禁（バランス・ブレイカー）手の長時間維持にはまだ至る事が出来なかった

２人はタンニーンの背中に乗ってグレモリー本邸に戻り、タンニーンはパーティ当日にまた来ると言って空へ飛び去っていった

そこに祐斗とゼノヴィアが合流してきた……が、ゼノヴィアの格好に２人は唖然とした

「ゼ、ゼノヴィアか？どうしたんだ……？全身包帯だらけじゃねぇか……」
「うん。修行してケガして包帯巻いて修行してケガして包帯巻いていたら、こうなった」
「殆どミイラじゃねぇか」
「失敬な。私は永久保存されるつもりはないぞ？」
「そゆ事言ってんじゃねぇよ」
漫才はさておき、外で修業してきた新、一誠、祐斗、ゼノヴィアはシャワーを浴びて着替えた後、全員が一誠の部屋に集まって修業の報告会を行った
修業の内容を話したところ、新と一誠のサバイバル生活に全員が軽く引いたそうな……
祐斗もゼノヴィアも外で修業はしていたが、最低限の住み処はあったらしい
「あの先生、なんか俺達だけ酷い生活を送ってませんか……？」
「俺もお前が山で生活出来ていたから驚いたよ。新はともかく、お前は途中で逃げ帰ると思っていたからな。まさか普通に山で暮らし始めていたとは俺も想定外だった。なぁ新？」
「あぁ。俺もあんなキツいシゴキに耐えられなくなって逃げると思ってた（笑）」
「えええええええええええええええええっ!?何それ……？お、俺、冥界産のウサギっぽい奴とかイノシシっぽい奴を狩って捌いて焼いて食べてたんですよ……？酷い

時は変な色したクルミっぽいのを1日の食糧に……」
「だから驚いているんだよ。お前逞し過ぎ。ある意味で悪魔を超えてるぞ」
ブワァッ！
あまりの事に一誠は滝の如く涙を溢れさせた
「酷い！あの山でドラゴンと新に1日中追いかけ回されて生活してたのにいいいいっ！何度死にかけたことか！うえええええええんっ！」
「新？タンニーンと一緒にそんな事してたの……？」
リアスの問いに新は平然と、しかも笑いながら答えた
「へへっ。あぁ、タンニーンのオッサンと一緒に一誠をイジメ抜いたんだ」
「ツラかったよぉぉぉっ！毎晩ベッドとアーシアの温もりを思い出しながら葉っぱにくるまって寝てたのにいいいい！しかも！ドラゴンのおっさんと新、手加減しないで寝ている時も襲ってくるんだもん！新なんか剣で刺そうとするわ！雪崩みたいな魔力を撃ってくるわで殺されるかと思ったよぉぉぉっ！」
ワンワン泣きじゃくる一誠の頭をリアスは優しく撫でて慰める
「よしよし、よく耐えたわねイッセー。ツラかったでしょう。あの山は名前が無かったけれど、『イッセー山』と命名しておくわ」
そんな中、新は一誠との修行に関して更なる事実を告げた

「お前が寝ている間に保管してあった食糧もタンニーンのオッサンと一緒に食ってたぜ？これも修行の一環だって俺が言ってな」
「えっ？何それ？俺そんなの知らな……はっ！言われてみれば、朝起きた時に何か少なくなってるって思った時もあった……！だから、その日の飯はクルミっぽいのを……お前の仕業だったのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！飯の時も横取り――――――いや、強奪してきやがったくせにいいいい！」
　殴り掛かってくる一誠に対し、新は笑いながら攻撃を回避する
「何が修行の一環だぁっ！お前がやってたのは、ただの略奪じゃねぇかぁぁぁぁぁぁっ！なんで飯を食おうとした時に殴り飛ばされなきゃならねぇんだ！なんで川に放り込まれなきゃならねぇんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ハハハハハハッ！そう怒るなよ。昔からよく言うじゃねぇか？獅子は我が子を鍛える為に、谷底へ突き落とす。それと同じだ」
「どこが同じだぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
　皆が苦笑する中、新と一誠のサバイバル生活は終わりを告げた……

冥界パーティ開催！

次の日の夕刻、新と一誠は駒王学園の制服（夏バージョン）に身を包んで待機していた

新はいつも普段着にしているロックミュージシャン服が良かったのだが、リアスから許可が下りなかったので無い物ねだりしても仕方ない

渋々制服を着て、腕章をつけた

「兵藤か？それに竜崎も」

「匙、どうしてここに？」

「ああ、会長がリアス先輩と一緒に会場入りするってんでついてきたんだ。で、会場は先輩に会いに行っちまったし、仕方ないんで屋敷の中をウロウロしてたら、ここに出た」

匙は少し離れた席に座り、真剣な面持ちで言う

「もうすぐゲームだな」

「そうだな」

「俺、鍛えたぜ」

「俺達も鍛えた。ってか、山で毎日ドラゴンと新にイジメられた」

「そ、そうか。相変わらずハードな生き方してんな。まあ、俺も相当ハードなメニューこなしたけどさ」
　匙は頬を掻きながら、あの事について言う
「先月、若手悪魔が集まった時のこと覚えているか?」
「あぁ、あの会合か。それがどうした?」
「あれ、俺達は本気だ。……お、俺……。せ、先生になるのが夢なんだ!」
「先生……レーティングゲーム学校のか?」
　新の問いに匙は紅潮しながらも真剣に話を進めた
　ソーナ会長は冥界にレーティングゲーム専門の学校を設立しようとしており、そこでは悪魔なら階級に関係なく受け入れる自由な学校にしたいと言う
　誰でもレーティングゲームが出来るように、ソーナ会長は人間界で勉強している事も聞かされた
　実現出来る可能性が0に限りなく近くても、上級悪魔になれる事を信じてソーナ会長と共に目標を立てた匙
　その話を聞いて、新はうんうんと頷い
「レーティングゲーム専門の学校の教師か……。立派じゃねぇか。なるからには良い先生になれよ?」

「ああ、そのためにも今度お前達を倒さなきゃいけないんだけどな」
「あー、なるほど。ならダメだ。俺達が勝つさ！」
「いや、俺達だ。上にバカにされた以上、俺達は結果で見せなきゃいけない」
一誠と匙は互いに笑いながらも、真剣な目で勝利宣言を交わす
「新、イッセー、お待たせ。あら、匙くん来ていたのね」
「新さん、お待たせしました」
振り向くとドレスに着替えたリアス達がやって来た
朱乃も西洋ドレス姿
アーシア、ゼノヴィア、小猫の３人もドレスを着ていた
勿論ギャスパーも……
「ギャスパー、お前またドレス姿かよ……」
「だ、だって、ドレス可愛いんだもん……」
女装癖もここまでくれば大したものである
ソーナ会長もドレス姿でやって来て、しばらくすると執事がこう言ってきた
「タンニーン様とそのご眷属の方々がいらっしゃいました」
庭に出てみると、タンニーンと同じサイズのドラゴンが１０体もいた
「約束通り来たぞ、兵藤一誠」

「うん！ありがとう、おっさん！」
皆はタンニーンを含めたドラゴン達の背中に乗り、会場となる場所へ向かっていった

「あー、ちかれた」
「挨拶メンド……やっぱ堅苦しいのは俺に合わねぇわ……」
パーティ会場に着き、上級悪魔達との挨拶を終えた新、一誠、アーシア、ギャスパーはフロアの隅っこにある椅子に座り込んでいた
慣れない事に気疲れしたせいでグッタリしている
新は席を離れ、飲み物や酒のツマミを取ってくる事に
「……ぷはぁっ。あ～、飲み物が美味ぇ。やっぱ貴族様との付き合いは疲れるな……」
「お、お久しぶりですわね、闇皇（やみおう）の蝙蝠」
突如耳に入ってきた聞き覚えのある声
振り返ると高価そうなドレスに身を包んだ少女がいた
「……っ？お前は確か、フライドチキンの妹」
「レイヴェル・フェニックスです！まったく、これだから下級悪魔は頭が悪くて嫌になり

ますわ」

やって来たのはリアスの元婚約相手、ライザー・フェニックスの妹――――――レイヴェル・フェニックスだった

「冗談冗談、ちゃんと覚えてるっつうの。ライザーは元気か？」

「……あなたと赤龍帝（せきりゅうてい）のお陰で塞ぎ込んでしまいましたわ。よほど敗北とリアスさまを取られた事、あなたに追い詰められた事がショックだったようです。ま、才能に頼って調子に乗っていたところもありますから、良い勉強になった筈ですわ」

「容赦ねぇ～。一応レイヴェルもライザーの眷属だろ？」

「それなら現在トレードを済ませて、今はお母さまの眷属と言う事になってますわ。お母さまが自分の持っていた未使用の駒と交換してくださったの。お母さまは眷属になりたい方を見つけたら、トレードしてくれるとおっしゃってくださいましたから、実質フリーの『僧侶（ビショップ）』ですわ。お母さまはゲームしませんし」

トレードとはレーティングゲームのルールの１つで、『王（キング）』である悪魔の間で自分の駒を交換出来る制度

トレードを行（おこな）うには同じ種類の駒である事が必須条件である

「そういう手もあんのか、へぇ～」

「と、ところで……覚えていますか？」

「えっ?何を?」
「とぼけないでください!あなたは以前のレーティングゲームで、私を恥ずかしい目に逢わせました!その責任を取っていただきます!」
「恥ずかしい目に……あぁ!俺がちょっと暴走して、お前を裸にした事か。いや～、わりいわりぃ。あん時はキレてて、殆ど覚えてなかったが……良い乳首だった」
新は悪びれる様子も無く頭を掻き、レイヴェルは顔を真っ赤にする
「まぁ、あれは全面的に俺が悪かったしな。罪滅ぼしとまではいかねぇが、どうぞ何なりと」
「で、では……これからあなたの事をお名前で呼んでもよろしいですか?とりあえずは、それで許して差し上げてよ」
「そんだけで良いのか?別に構わねぇけど、竜崎新だ」
「コ、コホン。で、では……新さま」
「さま付けまでしなくても良いんだが……」
「レイヴェル。旦那さまのご友人がお呼びだ」
そこへ更に見知った女性がやって来る
ライザー眷属の1人のイザベラだった
「わ、分かりましたわ。新さま、今度お会い出来たら、お茶でも如何かしら?わ、わ、わ、

私でよろしければ、手製のケーキをご、ご、ご用意してあげてもよろしくてよ?」
キョドり過ぎだろと心の中でツッコミを入れておく新
レイヴェルはドレスの裾を上げ、一礼して去っていった
「やあ、竜崎新」
「イザベラ、久しぶりだな。レイヴェルの付き添いか?」
「まあ、そんなとこ。それに来てるのは私だけじゃないんだ」
その言葉に新は疑問を覚えた
後方からゾロゾロと見知った女性達がやって来る
「あ、お兄さん!」
「こ、こんばんわ、新さん」
「修行の時以来だ。元気にしていたか?」
「あの時は、どうもありがとう」
「イル、ネル、ミラ、カーラマイン、雪蘭(シュエラン)じゃねぇか。お前らも来てたのか」
集まったのは以前、新と異空間で修行に励んだメンバー達で、全員がドレスを着飾っていた
「お兄さん!会いたかった!」
「どう?私達のドレス姿、綺麗?可愛い?」

「ハハッ。あぁ、良く似合ってるぜ」
　褒められた事に双子は嬉しそうに顔を赤くした
「しかし、レイヴェルの付き添いにしちゃ多くないか?」
「本音を言ってしまうと、魔王主催のパーティだから、もしかしたら君も出るんじゃないかと思って出席してるようなものなんだ」
「俺に会いたかったのか?」
「そうだ。私達はお前のお陰で力をつけ、襲来してくる闇人(やみびと)もことごとく討伐出来る様になったのだ」
「色々お世話になったから、改めてお礼を言いたくて」
「ふ～ん。別に気にすんなよ。困った時はお互い様だ。それに、お前らの乳首を見れたから」
「むぅ、相変わらずエッチ……」
「ふふっ、君らしいな。でも、私達としてはやはり礼をしたい。そこで、これを是非受け取って欲しいんだ」
　イザベラが新に渡したのは、人間界にあるリゾート付きホテルの無料招待チケット
　しかも、滅多に手に入らない代物に新は驚いた
「こ、これって入手困難のチケットじゃねぇか!こんなレアな物を俺にくれるのか!?」

「うん。君が人間界に帰ったら連絡して欲しい」
「けど、良いのか？お前らだってライザー眷属なんだろ？こんな浮気紛いの事してて。まあ、その方が燃えるけど」
「それなら心配は無い。ライザー様のお父上が許可をくださった。……どうだろう、私達の誘いを受けてもらえないだろうか……？」
紅潮したイザベラの発言に新は更にビックリ
それに対して新の出した答えは――――
「ん～、上級悪魔って色々堅苦しい事があっからなぁ……。本音を言うとなりたくないんだが、リアスは拒否るだろうな……。ふぅ……分かった。俺も上級悪魔を目指してみるかぁ。せっかくの誘いを無下にする事ぁ出来ねぇし」
「「本当!?やったー！」」
「じゃ、じゃあ、今後もよろしくね？」
「何かあった時はいつでも言ってくれ。全身全霊を懸けて協力しよう」
「リゾートも楽しみに待っててね？」
順番にイルとネル、ミラ、カーラマイン、雪蘭（シュエラン）が礼を言って手を振りながら去っていく
残ったイザベラは新に近づき……

「ありがとう。レイヴェルのお誘いも承諾してくれるかい？」
「勿論だ。俺は良い女からの誘いはなるべく断らない男だからな」
「ふふっ、それはありがたい。レイヴェルも喜ぶだろう。私も嬉しいよ。さて、私はこれにて失礼する。良い宴を」
イザベラも手を振って去っていった
新は貰ったチケットを大事にしまい、豪華な料理を口に運ぶ
すると、小猫がズボンの裾をクイクイと引っ張ってきた
「ん？どうした小猫？随分と真剣な顔をしてるが……」
「……新先輩。仲間に頼れって言いましたよね？私と一緒に来てください……」
真剣な表情の小猫に新は断る事もなく承諾した
「良いぜ。それで、何をして欲しいんだ？」
「……ついてきてください」
小猫は新の腕を握って、一緒にエレベーターを降りた

黒猫と第2の覚醒

明るい場所を出て、闇夜の森を歩く小猫と新
小猫はギュッと新の手を握って森の中を進んでいく
数分歩くと、小猫が突然何かに気づいてキョロキョロと首を動かす
「久しぶりじゃない？」
聞き覚えの無い声がした方向に視線をやる
現れたのは黒い着物に身を包み、頭部に猫耳を生やした女性だった
小猫は酷く驚いた様子で全身を震わせ、新は一目で”小猫の姉だな”と悟った
「あんたが小猫の姉とやらか」
「あら？名乗った覚えは無いのによく知ってるわね。そうよ。ハロー、白音。お姉ちゃんよ」
流れから察して、白音とは小猫の本名のようだ
「黒歌姉さま……！」
「黒歌……それがあんたの名前か。こんな乳房のデカい女が主殺しの『はぐれ悪魔』とは勿体ねぇな」

新は小猫を自分の背中に隠れさせ、警戒態勢を取る
「会場に紛れ込ませたこの黒猫１匹でここまで来てくれるなんて、お姉ちゃん感動しちゃうにゃー」
「……姉さま。これはどういう事ですか？」
「怖い顔しないで。ちょっと野暮用なの。悪魔さん達がここで大きな催ししているって言うじゃない？だからぁ、ちょっと気になっちゃって。にゃん♪」
黒歌は手を猫みたいにして可愛くウインクをする
「ハハハハ！久しぶりだねい、闇皇（やみおう）の蝙蝠い」
今度は聞き覚えのある声が何処からか発せられる
その正体はヴァーリの仲間で孫悟空の末裔――――美猴（びこう）だった
「あん時の孫悟空じゃねぇか。魔王主催のパーティを狙ったテロか？」
「いんや、そう言うのは俺っちらに降りてきてないねい。ただ、冥界で待機命令が出ていてねぃ。俺も黒歌も非番なのさ。そしたら、黒歌が悪魔のパーティ会場を見学してくるって言い出してねぃ。なかなか帰ってこないから、こうして迎えに来たわけ。ＯＫ？それと――――」
話し終えた美猴が突然、木の方に視線を向けて言い始めた
「気配を消しても無駄無駄。俺っちや黒歌みたいに仙術知ってると、気の流れの少しの

変化だけでだいたい分かるんだよねぃ」
「だとよ。出てこいよ、一誠、リアス部長」
美猴と新に言われ、一誠とリアスが木陰から姿を現した
２人を確認した小猫は驚く
「……イッセー先輩、部長」
「美猴、誰、この子達？」
「赤龍帝と闇皇の蝙蝠」
それを聞いた黒歌は目を丸くして、興味津々に見る
「本当にゃん？へぇ～。これがヴァーリを退けたおっぱい好きの現赤龍帝なのね。んで、こっちがヴァーリを退けただけじゃなく、カテレア・レヴィアタンを脱がして堕としたって言う、女性を裸にするのが得意なエッチ蝙蝠ね？」
「黒歌～、帰ろうや。どうせ俺っちらはあのパーティに参加出来ないんだし、無駄さね」
「そうね。帰ろうかしら。ただ、白音はいただくにゃん。あの時は連れていってあげられなかったからね♪」
黒歌が小猫を見て目を細める
小猫はそれを見てビクつかせていた
新は小猫を庇うように拳を黒歌に向ける

「待ちな。小猫は俺達リアス・グレモリー眷属の仲間だ。小猫の姉だからって連れて行かせる訳にはいかねぇな」
「いやいや、勇ましいと思うけどねぃ。流石に俺っちと黒歌相手に出来んでしょ？今回はその娘もらえればソッコーで立ち去るんで、それで良しとしようやな？」
一誠とリアスは憤怒の表情で前に出る
「ふざけんなよ！そんな事、誰がするか！」
「この子は私の眷属よ。指一本でも触れさせないわ」
「あらあらあらあら、何を言っているのかにゃ？それは私の妹。私には可愛がる権利があるわ。上級悪魔さまにはあげないわよ」
場の空気が一変して、リアスと黒歌がお互いに睨み合う
一触即発の空気を帯びてきたが、先に睨みを止めた黒歌が言う
「めんどいから殺すにゃん♪」
その瞬間、言い表せない感覚が襲ってきた
リアスが苦虫を噛んだ表情で黒歌に言う
「……黒歌、あなた、仙術、妖術、魔力だけじゃなく、空間を操る術まで覚えたのね？」
「時間を操る術までは覚えられないけどねん。空間はそこそこ覚えたわ。結界術の要領があれば割かし楽だったり。この森一帯の空間を結界で覆って外界から遮断したにゃ

ん。だから、ここでド派手な事をしても外には漏れないし、外から悪魔が入ってくる事もない。あなた達は私達にここでころころ殺されてグッバイにゃ♪」
「ハッ。残念だが、俺はそう簡単には死なねぇよ。逆に、あんたを裸にして乳首を拝ませてもらうぜ」
「……先輩。こんな時にまでエッチな事を言わないでください」
新は久々に小猫に突っ込まれたが、気にせず聞き流す
「いや～ん♪エッチな蝙蝠さんにゃ。でも、面白いにゃん。敵でも脱がして骨抜きにするって噂は本当だったみたいだにゃん♪」
黒歌は胸を押さえながら体を揺らすが、表情は余裕を浮かべている
結界で閉じ込められたので戦う以外の選択肢は存在しない
やるしかなかった……
「リアス嬢と兵藤一誠がこの森に行ったと報告を受けて急いで来てみれば、結界で封じられるとはな……」
「タンニーンのおっさん！」
見上げるとタンニーンがいた
どうやら結界が完全に張られる寸前に入り込んだようだ
「ドス黒いオーラだ。このパーティには相応しくない来客だな」

美猴が空のドラゴンを見て歓喜する
「おうおうおう！ありゃ、元龍王の『魔龍聖（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）』タンニーンじゃないかい！まいったね！こりゃ、もう大問題だぜ黒歌！やるしかねぇって！」
「嬉しそうね、お猿さん。良いわ。龍王クラス以上の首２つと闇皇（やみおう）の首１つを持っていけば、オーフィスも黙るでしょうね」
龍王の首２つ＝タンニーンと一誠
闇皇（やみおう）の首１つ＝新
敵はしっかりとリサーチ＆カウントしていた
美猴は足元に金色の雲――――筋斗雲（きんとうん）を出現させ、タンニーンがいる空へ飛び出していく
更に如意棒（にょいぼう）を手元に出して、タンニーンに攻撃を仕掛ける
タンニーンは巨体に似つかわしくない速度で回避し、大質量の火炎を美猴に浴びせた
『タンニーンめ、ブレスの威力を抑えているな』
「マジかよドライグ！あの威力で抑えてるのか!?」
籠手に宿るドライグの言葉に驚く一誠だが、美猴は炎をくらってもまだ生きていた
「アハハ！やるねぃ！元龍王！」
「ふん！何者かと思えば孫悟空か！このタンニーンの一撃を受けきるとは、なんとも楽

しませてくれるわ！」
「美猴ってんだ！よろしくな、ドラゴンの大将！」
「クククク。猿ごときが言ってくれる。豚と妖仙はどうした？仲違いか？」
「八戒と悟浄の末裔の事かい？ハハハハ！俺っちの一族の奴らも含めて、皆保守派さね！どいつもこいつも現状に満足なのさ！けど、俺っちは楽しい事が大好きでねぃ！だからこそ『禍の団』の誘いも喜んで受けて白龍皇ヴァーリと行動を共にしてたりしてんだよねぃ！」
「フン！白龍皇と何を企んでいる？噂では貴様達の部隊だけ別行動を許されていると言うではないか！オーフィスの『蛇』も与えられていない唯一のチームとも聞いた！」
「聞きたきゃ俺っちに勝ってみなよ！」
「言うか猿めッ！ここは『あの世』と呼ばれし地獄こと冥界だ！貴様ら雑魚が後悔するには最高の場所だと知れッ！」
タンニーンと美猴が轟音を上げながら、空中で激闘を繰り広げ始めた
とりあえず孫悟空の邪魔はなくなったが……問題は黒歌だった
妖艶な笑みを見せているが、全身からドス黒いオーラを滲み出している
新は小猫を後ろにいるリアスの所へ下がらせる
「にゃん♪白音は随分とあなたの言う事に素直みたいだけど？あなた、白音の彼氏か何

かにゃ？」
「違う。俺は小猫の仲間だ。小猫をお前に渡す訳にはいかねぇんだよ。お前は過去に、苦しんでいた小猫を助けようとしなかった。何故だ？あんたは小猫の姉なんだろ」
「だって、妖怪が他の妖怪を助ける訳ないじゃない。ただ、今回は手駒が欲しいから白音が欲しくなっただけ。あなたやそこの紅い髪のお姉さんより、私の方が白音の力を理解してあげられるわよ？」
　姉の黒歌の言葉に小猫は首を横に振る
「……イヤ……あんな力いらない……黒い力なんていらない……人を不幸にする力なんていらない……」
　震えて涙を流す小猫を、リアスは一層強く抱きしめる
「黒歌……。力に溺れたあなたはこの子に一生消えない心の傷を残したわ。あなたが主を殺して去った後、この子は地獄を見た。私が出会った時、この子に感情なんてものは無かったわ。小猫にとって唯一の肉親であったあなたに裏切られ、頼る先を無くし、他の悪魔に蔑まれ、罵られ、処分までされかけて……。この子はツラいものをたくさん見てきたわ。だから、私はたくさん楽しいものを見せてあげるの！この子はリアス・グレモリー眷属の『戦車（ルーク）』塔城小猫！私の大切な眷属悪魔よっ！あなたに指一本だって触れさせやしないわっ！」

リアスの言葉を聞いた小猫は涙を抑えされなかった
一誠も大泣きし、新はグッドサインを向けた
「……行きたくない……。私は塔城小猫。黒歌姉さま、あなたと一緒に行きたくない！私はリアス部長と一緒に生きる！生きるの！」
今までに無かった叫びで、小猫は絶縁とも言える宣言を黒歌に放った
それを聞いた黒歌は苦笑した後、冷笑を浮かべる
「じゃあ、死ね」
「――――ッ！マズイッ！」
黒歌から発生した霧をヤバいと感じた新は闇皇（やみおう）に変異して、手でもっと下がれとジェスチャーをするが……
「――――あっ」
「……これは」
一誠の隣にいたリアスと小猫がその場で膝をつき、一誠は何が起こったのか全く分からなかった
「ふーん、赤龍帝（せきりゅうてい）と闇人（やみびと）の力を宿しているから効かないのかしら？この霧はね、悪魔や妖怪にだけ効く毒霧にゃん。毒を薄くしたから、全身に回るのはもう少し苦しんでからよ。短時間では殺さないわ。じわじわっと殺してあげるにゃん♪」

「ど、毒霧!?」
「チッ。なんてエグい殺り方をしやがる!」
ドンッ!
後ろにいたリアスが魔力の弾を撃ち、黒歌を霧散させた……が、手応えを感じなかった
「良い一撃ね。でも無駄無駄。幻術の要領で自分の分身ぐらい簡単に作れるわ」
霧の中に次々と黒歌の分身が生まれる
新は闇皇剣（やみおうけん）を出して、魔力を刀身に込めていく
「チッ。こうなりゃ全部斬ってやるまでだ!一誠!お前も手伝え!ブーステッド・ギアを起動させろ!」
「分かった!ブーステッド・ギア!」
一誠の左腕に赤い籠手が出現するが、いつも鳴る筈の音声が聞こえず、宝玉も薄黒くなっていた
「そんな!ブーステッド・ギアが動かねぇ!?」
「ったく、何やってやがんだドライグは!こっちもオーバーワークで寝てんのかよ!?」
「あらら、赤龍帝（せきりゅうてい）ちゃんは神器（セイクリッド・ギア）も動かずじまい?でも、私は撃っちゃうにゃん♪」
黒歌の幻影の１つが、毒で苦しんでいるリアスと小猫目掛けて魔力を撃ち放つ

新は赤く光る刀身を持った剣で斬り払う
「切り裂けェェェェェェェェェェェェェッ！」
赤い魔力が更に巨大な刀身を作り、新はその剣で黒歌の分身全てを切断する
「へぇ。分身を作っても無駄みたいね。なら、これはどうかにゃん？」
黒歌は掌(てのひら)から無数の魔力を撃ち出した
新はマントでガードをするが、絶え間なく降り注ぐ魔力のせいで攻撃に転じる事が出来ない
「小猫。さっきお前言ったよな？人を不幸にする力なんていらないって。そいつは間違ってるぜ。力が人を不幸にするんじゃねぇ！力の使い方を間違えた奴が人を不幸にするんだ！」
新は攻撃を受けながら小猫に言い聞かせる
「小猫！勇気を振り絞ってよく言った！お前の道はお前で決めるものなんだ！後は自分の力を使いこなせ！そして、俺達や他の皆に幸せを与えてやれ！お前は塔城小猫！俺達の立派な仲間だァァァァァァァッ！」
ゴォォォォォォォォォッ！
新の叫びに応えるかの様に莫大な量の魔力が柱となって噴き出し、黒歌の魔力を打ち消した

「にゃんっ!?何なの!?この巨大な魔力は!?」
黒歌は突然の出来事と、吹き荒れる魔力に驚愕する
一誠とリアスは前に見た事があった……
これは――――新の力が覚醒する兆しである
「新が、また進化する……!?」
「キタぜキタぜ！２つ目の力が覚醒してきやがったァァァァァァァァッ！」
両目を赤く光らせる闇皇剣の柄の蝙蝠
新は剣を天に翳して、覚醒した『力』の名を唱える
『進化する昇格』ッ!!『戦車』ッ!!」
闇皇剣が強い魔力を放ちながら、蝙蝠型の盾に姿を変えていく
盾が新の左腕に装備されると、マントが離脱して幾つもの破片に分離
破片は堅牢そうな鎧と化して右腕と胸部、両足の脛にまとわりつく
更には足にキャタピラが具現化され、戦車の様な風格を現す闇皇が誕生した
「待たせたな！こいつが『進化する昇格』第２段！『闇　皇の金剛盾戦車』だ！」
新は左腕に装着した武具『闇皇盾』の口を開かせ、蝙蝠の両目が黒い光を放つ
ギュゴォォォォォォォォォォォォ……！
凄まじい吸引音と同時に一誠達の周りを包んでいた毒霧が蝙蝠の口へ吸い込まれて

いく

黒の魔力は吸収と反発を司り、新は吸収の魔力で毒霧を盾に吸い込ませているようだ

「……っ!?嘘でしょ!毒霧を吸い込んでる!?」

「ただ吸い込むだけじゃねぇ。吸収した力を自分の魔力に変換させる。これでもう毒霧みたいなものは通用しねぇ。黒歌!仲間の小猫を泣かした罪は体で償ってもらうぜ!」

「……アハハハハ!面白いじゃないの!なら、妖術仙術ミックスの1発お見舞いしようかしら!」

黒歌の両手にそれぞれ違う力が集中され、そのまま2種類の波動を撃ち出した

新は盾の蝙蝠の口を閉じ、今度は両目を赤く光らせる

ドドンッ!

2つの波動をくらってしまうが、新は全くダメージを受けておらず、ただ土埃が付いただけだった

「効かない!?かなりの妖力を練り込んだのよ!」

「それで終わりか?今度はこっちの番だ!」

魔力が盾から右腕に流れ込み、新の拳が赤いオーラに包まれていく

新はキャタピラを起動させ、黒歌との距離を詰めていく

『騎士』形態の様な神速移動とはいかないが、かなりのスピードで進んでいく

「調子に乗らないでよッ！」
黒歌が先程の魔力を幾重にも撃ち出してくるが、新は盾を構えず鎧で弾きながら突き進み――――
「オオオオオオラァァァァァァァァァァァァッ！」
ブゥゥゥンッ！ビュオオオオッ！
ビリビリビリッ！
新は吸収し変換させた魔力＋自分の魔力を帯びた右拳を黒歌の胸元に突きだし、寸前で静止させた
止めた余波と膨大な魔力のせいで黒歌の着物が消し飛び、白く綺麗な裸体が現れる
この結果に勿論、一誠は狂喜乱舞した……
「ウッヒョホオオオオオオオオオオオオオオオオッ！おっぱいゲットだぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「――――ッ。いやんっ、これはヤバヤバにゃん」
黒歌は危険を察知して飛び退こうとする
新が左腕の盾を右手で掴んで引っ張ると、チェーンが繋がれた状態で左腕から分離した
「この盾は攻防一体の武器だ！逃げられやしねぇぞ！」

ビュゥゥウンッ！
ブーメランのような中距離武器にもなった盾は回転しながら飛び、黒歌の肉体を捕らえる
「えっ？きゃっ！」
両手を封じられた状態で黒歌は引き寄せられ、新の眼前まで連れ戻された
ムニュッ
新は黒歌の豊満な乳房を右手で鷲掴みにする
「あっ……いやんっ。ちょっと強くないかにゃ……？」
「今の俺にあんたは勝てねぇよ。このまま引き下がれ。次は拳を叩き込むぜ？それともピーがお好みか？」
「ひにゃんっ……分かったわ。だから、解いてくれない？チェーンが痛いにゃ」
黒歌は潤んだ瞳で懇願してきた
新はチェーンを解き、盾を元の位置に戻す――――その刹那
「かかったにゃん♪」
「――――っ？うおっ！」
黒歌は一瞬の隙を突いて背後に回り、新の左腕に関節技をかける
黒歌の仕掛けた罠に引っ掛かってしまった

「新！」
「先輩！」
「フフッ。ごめんね？ちょっとズルしちゃったにゃん♪」
「なぁに、戦いに策は付き物だ。それに――――――フンッ！」
ゴキッ！
なんと新は自ら極（き）められた腕の関節を外し、関節技から脱出
黒歌に拳を突き出したが、飛んでかわされる
「……恐ろしい子ね。まさか自分から関節を外すなんて……」
「相手の技から抜け出すには、これぐらいの事をしねぇとな。それに――――――」
ゴキゴキンッ！クキッ……
新は外した関節を元に戻し、グルグルと肩を回す
「関節なんざ、後でハメ直せば良いんだよ」
黒歌は新の強さと思考に戦慄を覚えてしまい、１歩引き下がる
すると、後ろで待機している一誠は未だに狂喜乱舞の最中だった……
「よっしゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！ぷるんぷるんの巨乳おっぱいでぇっ、元気１００倍だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ）　Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン）　Ｂｌａｎｃｅ（バランス）　Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!!』

籠手から音声が響き渡り、一誠の全身を赤いオーラが覆っていく
なんと一誠の不調は黒歌のおっぱいを見ただけで解消されてしまった……
赤い全身鎧（ブレート・アーマー）を装着し終えた一誠は決めポーズを取る
「禁手（バランス・ブレイカー）、『赤龍帝の鎧（ブースティッド・ギア・スケイルメイル）』ッ！元気おっぱいでここに降臨っ！」
禁手（バランス・ブレイク）化した一誠の全身から力が吹き出し、変態（イッセー）中心にクレーターが出来上がった
『相棒、酷い。俺はそろそろ本格的に泣くぞ』
一誠の変態ぶりにドライグも涙声でそんな事を言うしか無かった
新は呆れと怒りに身を震わせながら拳を握り、盾で吸収した力を右拳に流し込む
「一誠、歯ぁ食いしばれ♪――――このクソドラゴンがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ぶげぁぁぁぁぁぁっ!?」
コークスクリュー状に放たれた新の拳が一誠の顔面に炸裂
一誠は木々をへし折りながら吹っ飛ばされた
「いってー！何すんだ新！ようやく禁手（バランス・ブレイク）化出来たんだから結果オーライだろ！」
「じゃぁかしいボケェッ！今までのイジメを全部無駄にしてんじゃねぇか！真剣な空気をぶち壊してんじゃねぇ！」
新と一誠の口論に黒歌は唖然とする

２人が言い争っていると、空間に裂け目が生じる
その裂け目から背広を着たメガネの若い男が現れる
彼の手には極大なまでに強い聖なるオーラを放つ剣が握られている
「全員そいつに近づくな！手に持っている物が厄介だぞ！」
タンニーンが叫ぶ
「聖王剣コールブランド。またの名をカリバーン。地上最強の聖剣と呼ばれるコールブランドが白龍皇（はくりゅうこう）のもとに……」
メガネの若い男が握っているのは地上最強の聖剣らしい
しかも、腰にも一振りの剣が存在している
「そこまでです、美猴（びこう）、黒歌（くろか）――――って、黒歌（くろか）は何故裸なんですか？」
「このエッチな蝙蝠さんに脱がされちゃったにゃん♪」
黒歌は妖艶な笑みを浮かべながら新の腕にしがみつく
「二刀か、鞘に収めている方も聖剣だな？」
タンニーンの問いに男は腰の帯剣を指差した
「こっちは最近発見された最後のエクスカリバーにして、８本中最強のエクスカリバー。『支配（エクスカリバー・ルーラー）の聖剣』ですよ」
なんと腰の剣は行方不明になっていた最後のエクスカリバーだった

これで事実上、新達は全てのエクスカリバーを目撃した事になる
「そんなに話して平気なの？」
「ええ、実は私もそちらのお仲間さんに大変興味がありましてね。赤龍帝殿、闇皇の蝙蝠殿、聖魔剣の使い手さんと聖剣デュランダルの使い手さんによろしく言っておいてくださいますか？いつかお互い、いち剣士として相まみえたい――――――と」
「ちょっと待ってにゃん」
男性がコールブランドと言う剣で空を斬ろうとしたが、黒歌が待ったをかける
男と美猴は怪訝そうに首を傾げた
黒歌の視線が新に向けられる
「……っ？な、何だよ？」
「ねぇ蝙蝠さん。私達のところに来る気はない？お姉さんが歓迎してあげるにゃん♪」
「敵である俺を勧誘するたぁ大した度胸だな。残念だが、俺はテロリストさんのお仲間になる気は――――――」
「私とエッチ出来るって言ったら？」
ザッ！ザッ！
新は一瞬、1歩足を黒歌の方に寄せたが、我に返って足を引っ込めた
「……なんて恐ろしい洗脳話術をしやがる……！」

「新！今あなたそっちに行こうとしたわね!?」
「チガイマス。イマノハクロカノセンノウワジュツニマドワサレタンデス」
「片言で誤魔化さないで！イッセーにも困ったけど、あなたって本当に節操無しね！」
リアスはプンスカご立腹、小猫は痛い程のジト目で新を睨んでいた
「ふふっ。じゃあ、最後にお顔を見せてくれないかにゃ？」
黒歌はコンコンと新の頭部を覆っている兜を小突く
何故だ？と思いながらも、新が兜のみを解除した刹那――――
チュッ……
黒歌の唇が新の唇と重なった
そう、キスである
「「「――――っ!?」」」
「んちゅ……ちゅっ、ちゅぱぁ……れろぉ……ちゅるっ、ンフフ。たくさんの女の子を食べてきた大人の味にゃん♪」
しかも、舌を絡ませるディープキス
新は隙を突かれた事に動揺して口元を押さえた
「ぬがぁぁぁ

一誠大絶叫、リアスは呆然とし、小猫に至っては物凄い殺気が漂っていた
「じゃあね。次に会った時はもっとエッチな事をしてあげるにゃん♪」
黒歌が美猴と聖王剣使いの所へ走っていき、男が聖王剣で空間に裂け目を作る
「ちょ、ちょっと待てやゴラァ！爆弾投下どころか、核兵器落としといて後始末を人に押しつける気か!?」
「じゃあ今すぐ来てにゃん。と言っても、あなた逃げられないかもね。また会えるのを楽しみにしてるにゃん♪」
黒歌はウインクをして美猴達と共に裂け目の中へ消えていった
結界も消滅して一件落着に思えたが……まだ終わっていない
「新？女性だからって敵とキスするなんて無神経過ぎるんじゃないかしら？」
「……節操無しのドエッチ蝙蝠先輩」
「ち、違ぇって！逆にやられたんだぞ！俺は被害者だぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「リアス嬢、今はそれどころじゃないぞ。会場から嫌な気配が漂っている……まさかとは思うが、闇人か……？」
タンニーンが険しい顔をして言った
魔王主催のパーティ会場に闇人がいる……
それだけでも大問題だった

更にその場で襲撃を受ければ悪魔側にとっては大打撃となる
「急いで戻るぞ！とてつもなく嫌な予感がする！」
タンニーンの言葉に全員が同意し、パーティ会場に戻る事にした
その際、新はリアスから『正座したままで来なさい』と無茶振りを言われ反論しようとしたが、リアスと小猫の剣幕に勝てず……
やむを得ず正座したままパーティ会場まで戻る羽目になってしまった……

闇人襲来、『チェス』のメンバー

時間を少し戻し、新と小猫、一誠、リアスがいなくなった会場にて
４人がいなくなった事に最初に気づいたのは祐斗だった
パーティ会場では魔王サーゼクスの挨拶が開始される寸前で、アーシアとゼノヴィアも不審に思っていた
「イッセーくんと新くん、どうしたんだろう?もう魔王さまの挨拶が始まるのに」
「それが……イッセーさんはお知り合いの方を見たから挨拶に」
「うん。私もそう聞いた。新はいつの間にか、いなくなっていたんだ」
「何だろう……嫌な胸騒ぎがしてならない」
魔王サーゼクスが舞台に立ち、マイクを手に挨拶をしようとした瞬間――――事件は起こった

コオオオオオオ……

突如床に輝く魔方陣

それは誰も見た事が無い紋様だった
悪魔達が遠ざかり、青く輝く魔方陣から何者かの声が聞こえてくる
『ごきげんよう悪魔の諸君。ここら一帯は少しの間、我々が占拠させてもらったよ』
魔方陣から青い光の柱が発生し、光が止むと８人の人影が現れた
祐斗達は勿論、サーゼクスもよく知ってる顔ぶれだった
「君は……『２代目キング』の……！」
「蛟大牙（みずちたいが）だ。パーティの最中に済まない」
悪魔達が戦慄する
全魔族の天敵である闇人（やみびと）――――その重鎮組織『チェス』がパーティに堂々と乱入してきた
「闇人（やみびと）だと!?」
「バカな！警備は何をやっていたんだ！」
狼狽（うろた）える悪魔達に大牙はパンパンと静かにさせる様な手拍子を打つ
静寂に包まれたのを確認してから、大牙は口を開く
「魔王サーゼクス・ルシファー。厳重に警備をしていたつもりだろうが、我々にしてみれば子供が作ったバリケードの様な物だ。もう少し気を引き締めねば、我々闇人（やみびと）には勝てないぞ」

「『2代目キング』。魔王である私を狙ったテロ行為と受け取って良いんだね？」
「我々がここに来たのはただの挨拶だ。魔王主催のパーティは、我ら『チェス』のメンバーを紹介するのに相応しい機会だと思ったからな。奇襲などと言う姑息な手段は使わん。どうしても戦いたいと言うなら、その者だけかかってくれば良い。無駄に種族を減らすだけだと思うがな」
自信満々に言い放つ大牙
乱入しておきながら挑発じみた言葉に悪魔達は腹を立てる
しかし、サーゼクスは皆を落ち着かせる
今、向こうに戦う意思が無いなら無駄な争いをするべきではない……と
「少しは利口になったものだ。改めて自己紹介といこう。オレは闇人（やみびと）の『2代目キング』、蛟大牙」
次に水色の長髪をした、おしとやかで綺麗な女性が言ってくる
「私は『チェス』の『2代目クイーン』を務める、アスカ・シャーベットと申します」
「キヒヒッ。ボクは『ビショップ』の神風（かみかぜ）だよ～。よろしくね～？」
「俺は『ナイト』の神代剣護（かみしろけんご）。腐りきった世を正す、神に成り代わる男だ」
神代剣護の名にゼノヴィアは表情を強張（こわばわ）らせた
かつての上司が、自分を本気で殺そうとした男が目の前にいる……

ゼノヴィアの手が震えを増した
次に口を開いたのは忍者装束に身を包んだサングラスの男だった
「某は『ルーク』。姓は風魔、名をヤタロウ――――風魔小太郎の子孫にござる」
風魔小太郎とは戦国時代、北条家に仕えていた忍の軍団、風魔一党の頭領の名前及び伝説と呼ばれた忍者である
途絶えた筈の風魔の血が現代に蘇り、闇人の手に渡っていた……
「私は『ポーン』の村上京司。どうぞお見知りおきを」
「村上京司!?あの時死んでいなかったのか!?」
現存している村上京司の姿に祐斗達は驚いた
人身売買のオークション時、光帝の鎧を纏った八代渉に斬られ絶命したと思っていたのだろう
動揺せざるを得なかった
ギュイイイインッ!
「次は俺の番だＺＥ！Ｉｔ，ｓ　Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅ!」
三ツ又槍の様なエレキギターを豪快に鳴らしているのは、魔人態であろう姿をした異形の存在
額から伸びる巨大な２本の角に金色の目

胸部には化け物の様な口を象ったアーマーに、翼の様な両肩
悪魔のごとき黒い体躯は禍々しさを放つが、その者の行動に拍子抜けとなった
「HEY！HEY！HEY！俺は『ポーン』の阿久津野大庵だZE！ダイアンって呼んでくRE！」
独特過ぎる口調とエレキギターの音で、真剣な空気が台無しになってしまったが……
大牙は然程気にしていない様子でいた
最後も同じく、魔人態らしき姿をした白い異形の闇人
氷の如く冷たそうな青い目を持ち、両肩には爪のような武器が生えている
「俺は『ポーン』のストレイグ・ギガロプス。まぁ、しがない殺し屋ってところだな」
これで『チェス』のメンバー全員が名乗りを終えたのだが……神風が挙手してきた
「どうした『ビショップ』？」
「いやさぁ。このまま帰っちゃうのはボク的に納得がいかないんだよね～。乱入してまでやる事がただの自己紹介で終わっちゃうとか……何か嫌なんだよねぇ」
不機嫌そうな顔つきで吐き捨てる神風
そして頭に電球マークを出現させ、何かを閃かせた
「そうだっ。新しく『チェス』に加わった『ポーン』2人の力をクソ悪魔共に見せつけてやろうよ♪このままイベント無しで帰るのは逆にシラケるし。うん、そうしよう！勿論

オッケーだよね？」
「Ｙｅａｈ！俺の相棒のギター『エレク』で会場を熱狂させてやるＺＥ！」
「悪魔を痛めつけられるなら大歓迎だ」
新参者の『ポーン』２人は神風の提案に乗り、戦闘体勢に入る
大牙は神風の自分勝手振りに腰と額に手を当てて嘆息した
「ちょっと待て！さっきまで戦う気は無いって言ってたクセに何なんだよ！」
神風の煽りに猛反論する者がいた――――――――　匙だった
「キヒヒッ。活きの良さそうなクソ悪魔がいるね～♪ボクの言う事に何か文句でもあるのかい？」
「あるに決まってんだろ！闇人ってのはお偉いさんの言う事を１つも守れない種族だってのか？」
「キヒヒッ。クソ悪魔の分際でなかなか言うね～？別に良いでしょ。『キング』だって文句言ってこないんだし。大丈夫だよ、今日は殺したりしないから♪もしかしてビビっちゃったかな～？」
「だ、誰がビビってるだと!?」
「落ち着きなさい、サジ」
見下す言動に匙は激昂してしまうが、挑発に乗ってはいけないとソーナ会長が手で制

止する
神風はそれを面白くなさそうな目で見ていた
「な～んかちょっとムカつくな……ストレイグ。あのメガネのお姉さんにヤっちゃって」
「ほう。良いんだな？」
ストレイグと呼ばれた白い闇人（やみびと）は両腕に巨大な爪型の武器を出現させ、掌から氷柱が飛び出す
その照準はソーナ会長だった
「――――ッ！会長！」
匙はソーナ会長に向かって飛んでくる氷柱を全て弾いたが――――
「主を守る『兵士（ポーン）』ってか？良いねぇ、隙だらけで」
ガゴォッ！
隙を突いたストレイグの掌打（しょうだ）が匙の顔面を地面に叩きつけた
「サジッ！」
「弱いな。こんな掌打（しょうだ）すらかわせねぇとか。ま、お前の血と泣き声で気分を晴らさせてもらおう――――おっ？」
ガキィィィンッ！

ストレイグの爪が誰かの攻撃を防ぐ
「君って卑怯な闇人だね。流石に嫌気が差してきたよ」
「お前が噂に聞いた聖魔剣の使い手か。悪魔がそんな偽善を語るとは驚いたぜ」
祐斗の聖魔剣とストレイグの爪が火花を散らし合い、２人は距離を取る
「お前もなかなかの血と泣き声を見せてくれそうだ」
「ＨＥＹ！ＨＥＹ！ＨＥＹ！俺も燃えてきたＺＥ！」
シャー……
２本角を生やした黒い闇人は自前のギターから刀剣を取り出す
どうやら『エレク』と呼ばれる三ツ又槍型のギターは仕込み刀も備わっているようだ
妖しい色の刀身を持った剣は濃い禍々しさを放つ
「いくＺＥ！Ｒｏｃｋ，ｎ　Ｒｏｌｌ！」
ダイアンは剣と三ツ又槍で突いて、祐斗に魔力の斬撃を飛ばしまくる
祐斗は聖魔剣で全ての斬撃を弾き返す
「ＹＡＨ！お前スッゲーＮＡ！全部防いでるＺＥ！なら、こいつはどうＤＡ!?」
黒い闇人は仕込み刀を戻し、エレキギターを弾いて衝撃波を生み出す
豪快な音は祐斗だけじゃなく、周りの悪魔達にも被弾してしまう
祐斗は地面から聖魔剣を幾重にも出し、壁の様な遮断物を作って防御した

「チッ。あいつ、少しは周りにも気を配れっての」
ストレイグは飛び退いて大牙達がいる魔方陣へ
エレキギターの出す衝撃波は敵味方問わず襲い掛かり、周囲のテーブルも破壊していく
大牙はそろそろ潮時かと『ルーク』の風魔ヤタロウに指示を出す
『ルーク』。『ポーン』を止めてくるんだ」
「御意に」
『ルーク』が一瞬で姿を消し、ダイアンの腕を押さえる
「おっ？何だＹＯ？」
『キング』のご指示で貴殿を止めに来た。引き上げ命令でござる」
「マジＤＥ？もう帰るのＫＡ？まぁ、命令だったら仕方ねぇＫＡ……ＯＫ」
命令通りにギターを止めて魔方陣へ戻っていく
青い光に包まれながらも、大牙はサーゼクスの方を向く
「魔王サーゼクス。我々は必ず全魔族の頂点に立つぞ。闇人こそが全世界を統べるに相応しい魔族と言う事を証明する」
『チェス』が魔方陣によって姿を消していく
一時の静寂に包まれ、ストレイグにやられた匙が目を覚ました

主の前で不甲斐ないところを見せてしまい、匙は悔しさにまみれてパーティ会場の床を拳で叩く

魔王主催のパーティは闇人(やみびと)の乱入によって急遽中止と形で幕を閉じた……

リアス・グレモリーＶＳソーナ・シトリー

シトリー眷属とのゲーム決戦前夜

新達は『禍の団（カオス・ブリゲード）』や闇人（やみびと）に襲来された失態についての会議を終えたアザゼルの部屋に集まり、最後のミーティングをしていた

美猴（びこう）と黒歌（くろか）の襲来はリアス眷属とタンニーンで追い払った事で一応の決着は着いた

アザゼルは新の覚醒した力について訊いてくる

「新。またあのデタラメな力が覚醒したのか？」

「ん？あぁ、『戦車（ルーク）』の能力に特化した――――攻めにも守りにも使える形態だ。盾は一応半飛び道具にもなるぜ？」

「俺は制限時間があるのに新は無制限とか……ぐすっ、なんでこいつはヒトが行く先の先まで行ってるんだよ!?」

一誠は突っ伏しながら床を叩く

「しかも、あと２つ力が眠っているのよね？覚醒の条件っていったい何なのかしら？」

「残念ながら、それはまだ分からねぇんだよな～。自分でも」

「まぁ何にしろだ。これでグレモリー眷属の戦力はアップしたに違いない。話を変える

ぞ？リアス、ソーナ・シトリーはグレモリー眷属の事をある程度知っているんだろう？」
　アザゼルの問いにリアスは頷く
「ええ、大まかなところは把握されているわね。例えば、新やイッセー、祐斗、朱乃、アーシア、ゼノヴィアの主力武器は認識しているわ。フェニックス家との一戦を録画した映像は一部に公開されているもの。更に言うならギャスパーの神器（セイクリッド・ギア）も小猫の素性も割れているわ」
「ま、ほぼ知られているわけか。で、お前の方はどれぐらいあちらを把握してる？」
「ソーナの事、副会長でもある『女王（クイーン）』の事、他数名の能力は知っているわ。一部判明していない能力の者もいるけれど」
「不利な面もあると。まあ、その辺はゲームでも実際の戦闘でもよくある事だ。戦闘中に神器（セイクリッド・ギア）が進化、変化する例もある。細心の注意を払えばいい。相手の数は８名か」
「ええ、『王（キング）』１、『女王（クイーン）』１、『戦車（ルーク）』１、『騎士（ナイト）』１、『僧侶（ビショップ）』２、『兵士（ポーン）』２で８名。まだ全部の駒は揃っていないみたいだけれど、数ではこちらが少し有利ね」
　次にアザゼルは事前に用意したホワイトボードに何かを書いていく
「レーティングゲームはプレイヤーに細かなタイプをつけて分けている。パワー、テクニック、ウィザード、サポート。この中でならリアスはウィザードタイプ。いわゆる魔力全般に秀でたタイプだ。朱乃も同様。木場はテクニックタイプ。スピードや技で戦

う者。ゼノヴィアはスピードに方面に秀でたパワータイプ。一撃必殺を狙うプレイヤーだ。アーシアとギャスパーはサポートタイプ。更に細かく分けるならアーシアはウイザード、ギャスパーはテクニックに近い。小猫は言わずもがな、パワータイプだ。イッセーもパワータイプだが、サポートの方にもいけるぞ。ギフトの力でな」

一誠はたくさん覚える事が出てきたので困惑するが、いくつかのタイプがある事は理解出来た

残ったのは新1人、彼のタイプは――――

「新。お前はサポート以外なら全タイプを兼用出来る万能型だ」

「はぁ～ん、万能型ね。」

その他、パワータイプはカウンターに1番気をつけないといけない

悪くすればカウンター1発で形勢が逆転されるなど、何事も相性があると説明を受ける面々

しかし、新はふとある事を言い出す

「アザゼル。ソーナ会長の眷属にカウンター使いがいるとしたら、俺や一誠にぶつけてくるかもしれないってのか？」

「そうだ。お前らの絶大なパワーじゃ、カウンター食らったら1発でアウトだ」

「けどよ、相手が女なら可能性は低いぜ？ほら、俺達2人は女を平気で裸にするし」

新の言葉に全員が苦い表情となった
特に小猫は「……女性の敵ですから、絶対に戦いたくないと思われます」と鋭く痛い一言を添えてきた
最後のまとめを終え、全員がシトリー眷属との試合に備えた

――――――――決戦日

魔方陣でジャンプして到着したのはレストランとも思える場所
そこは新も見覚えがある場所だった
『皆様、この度はグレモリー家、シトリー家の「レーティングゲーム」の審判（アービター）役を担う事となりました、ルシファー眷属『女王（クイーン）』のグレイフィアでございます。我が主サーゼクス・ルシファーの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します。早速ですが、今回のバトルフィールドはリアス様とソーナ様の通われる学舎（まなびや）「駒王学園」の近隣に存在するデパートをゲームのフィールドとして異空間にご用意致しました』
ゲームの会場は駒王学園近くのデパートだった
両陣営の本陣はリアス側が2階の東側、ソーナ側が一1階の西側となっており、新と

一誠が『プロモーション』する際は1階まで行かなければならない
更に特別ルールとして、回復品である『フェニックスの涙』が両陣営に1つずつ支給されている、ゲーム開始前に30分の作戦タイムがある、バトルフィールドとなるデパートを破壊し尽くさないなど、ルール制限も付け加えられた
派手な戦闘を行えないのは、リアス側にとって結構な痛手になる
ゼノヴィアのデュランダル、一誠のブーステッド・ギアで高めたドラゴンショット、朱乃の雷と言った高火力の技や武器を持つ者が多い
更にギャスパーの神器（セイクリッド・ギア）も暴走でゲームが台無しになってしまうのを防ぐため使用禁止
パワータイプや強力な神器（セイクリッド・ギア）を持っているリアス陣営は圧倒的不利な現状に陥った
レーティングゲームはパワーが大きければ良いと言うものではない
バトルフィールドやルールによって有利にも不利にも働く
「今回は私達にとって不利なルールかもしれないわ。けれど、これをこなせなければこれからのゲームに勝ち残る事なんて出来ない。『「兵士（ポーン）」でも「王（キング）」を取れる』――――これはチェスの基本ルールでもあり、レーティングゲームの格言よ。つまり、『やり方次第では誰でも勝てる可能性がある』と言う事を示唆しているわ」
「そうですわね。実際の戦場でも、このような屋内戦が今後あるかもしれません。そう

なった場合、今日この日の様に力が完全に発揮出来ない事もあるでしょうし。良い機会かもしれませんわね。チームバトルの屋内戦に慣れておくのに今回の戦闘は最適ですわ」

リアスと朱乃の話し合いを聞いて、新と一誠はなるべくド派手な戦闘をしないように心掛ける

そして作戦タイムが始まって１５分後、ゲーム開始５分前に集合するようリアスから言われ、一旦解散して各自待機する事になった

新は堅苦しい事があまり好かないので気疲れしてしまい、家具等が置いてある店のマッサージチェアで寛ぐ

「やれやれ。今回は厳しい戦いになりそうだな……一誠の神器（セイクリッド・ギア）も強力だが、俺も新しい力が覚醒したから無闇に使えねぇな。ま、セーブして健闘していこうかね」

「新さん。随分と余裕ですわね」

朱乃が笑顔で新に抱きついてきた

「お、朱乃か。そう言う朱乃だって余裕そうじゃねぇか」

「……戦う勇気はありますわ。……私に流れるもうひとつの力を今回使うかもしれないから、それが怖いの。嫌なのよ。だから、新さん……ううん、新。私に勇気をください……。あなたから勇気を貰いたい……」

突然の変化に新は朱乃を抱きしめる
自分の中に流れる堕天使の力を使う決心をつけたのか
しかし、彼女の目は切なさを醸し出している
「朱乃。勇気はついたか？」
「まだ……キスして……」
新は朱乃に勇気を与えるべく、彼女の不安を取り除くように唇を合わせる
軽いキスからディープキスに移行し、卑しい水音が静かに響く
「朱乃……ちゅ、ちゅむ……れろ……ぢゅるっ」
「あふ……んん、ちゅむ……はむっ、ちゅぱぁ……ちゅぷ……ぷはぁ……」
新は朱乃をマッサージチェアに座らせる様に場所を入れ替え、背もたれごと朱乃を倒す
「新……ここで、スるの……？」
「ここで朱乃の処女を貰う訳にはいかねぇよ。朱乃とは……誰にも邪魔されない場所でシたいんだ。俺が初めて惚れた女だからな……だから、今はこれで勘弁してくれ」
新は朱乃の制服のボタンをゆっくり外していく
開くと色っぽい下着が眼前に現れ、朱乃も艶やかな表情を見せる
彼女のブラを掴みズラし上げる

ピンク色の乳首と白い艶を備えた乳房を新は優しく撫でる
「んっ、あ……ぁんっ。新ァ……もっと、もっと私に……勇気をください……」
「あぁ、いくらでも持っていけ。そして乗り越えてくれ」
新は強弱をつけながら朱乃の胸を揉んでいき、再びキスをする
お互いに息継ぎをする事さえ忘れ、舌を絡め合う
すると、朱乃は新の首に両手を回して露出した乳房に寄せる
「新……勇気をありがとう。大好き……」
「礼には及ばねぇよ。その代わり、いつかお前の処女を……誰にも邪魔されない場所で――――――」
「……新先輩、そろそろ集合です」
「――――――っ!?」
ソファーの陰から小猫がヒョコッと現れ２人は大慌て
新は飛び起きた勢いで後頭部から落下してしまった
「いってー！小猫！ビックリするじゃねぇか！」
「……試合前に盛らないでください。エッチ先輩」
「あらあら、小猫ちゃんに見られちゃいましたわ。新さん、ありがとう。もう大丈夫ですわ」

いつもの調子に戻った朱乃は笑顔で集合場所へ歩みを進める
新は痛めた後頭部を擦りながら起き、集合場所へ行こうとしたが……今度は小猫が新の手を握る
「……私にも勇気をください」
よく見ると、小猫の手が震えている
小猫も内に封じていた力を使おうとしているが、猫又の力に呑み込まれそうな恐怖を感じている
新は何も言わずに手を握り返す
「……猫又の力を使ってみようと思います」
「猫又の力……まだ怖いか」
「はい……姉さまのようになるのは嫌です。けど、このままでは皆さんのお役に立てないかもしれません。だから使おうと思います」
決意の眼差し
小猫の目を見た新は、残った手で頭を優しく撫でる
「小猫。今からお前に二つ名を付けてやる。いつか必ず猫又の力を使いこなせる様な二つ名だ」
「……何です？」

「よく聞け。お前の二つ名は――――――ヘルキャットだ。冥界猫と書いてヘルキャット。赤龍帝、闇皇の蝙蝠、紅髪の滅殺姫、雷光の巫女に続くイカした二つ名だ！」

「……ヘルキャット」

新は1度小猫の手を離し、自身の胸に拳を当てて宣言する

「俺も小猫を見習って宣言してやる！もし、猫又の力で暴走しそうになっても俺が止めてやる！俺の闇皇の力も仲間のために使いたい！それに、黒歌が来ても俺が必ず助ける。任せろ。何度やって来ようが小猫には指1本触れさせねぇ。だからもう怖がる必要は無い。何度でもお前を助けてやるよ！」

「……でも先輩、姉さまにキスされてました」

ギクゥッ！

新は痛いところを突かれて固まった

「い、いや……あれは何と言うか不意打ちされたと言うか油断はしてなかったんだが――――ヒィッ！」

新は妙な寒気を感じたので後ろを見てみると、黒いオーラを出しながら笑顔を作っている朱乃がいた……

「新さん……？敵さんとそんな事をしていたのですか？ゼノヴィアちゃんや小猫ちゃんならまだ許せますが……小猫ちゃんのお姉さんと……？うふふふ、綺麗な女性となら

誰にでもキスしちゃうんですかぁ……？」
「怖ええええ！メッチャ怖ええええ！」
朱乃の迫力にビビる新
そんな新に朱乃はゆっくりと近づいていく
「そんな事しちゃう新さんには……オ・シ・オ・キ。んちゅうううう」
朱乃が新を抱き寄せてキスをする
ただ1つ違うのは、魔力込みのディープキスだった事……
新は激しい吸引力にジタバタするも、小猫にガッチリ拘束されているため逃げられず
結果、魂まで吸い取られたかの様に窶れた状態で集合場所へ移動する羽目になった
……

動き回る闇皇、新技炸裂！

ゲーム開始時刻

なお、今回のゲームの制限時間は3時間となっているので悠長にする暇は無い

リアスが椅子から立ち上がり、気合いの入った表情で言う

「指示はさっきの作戦通りよ。イッセーと小猫、祐斗とゼノヴィアで二手に分かれるわ。イッセー達が店内からの進行。祐斗達は立体駐車場を経由しての進行。ギャスパーは複数のコウモリに変化しての店内の監視と報告。進行具合によって、私と朱乃とアーシアがイッセー側のルートを通って進むわ」

全員が耳に通信用のイヤホンマイクを付ける

４人が二手に分かれて進んでいった中、新の役割はと言うと――――

「あの～……俺だけ役割を与えられてないんすけど？」

「あなたは今回、単独の遊撃部隊よ。臨機応変に対応してちょうだい」

「単独？それは勝手にやれって言うのか？」

新の言葉にリアスは先程と一変して表情に陰りを見せる

「ええ、今の私じゃ……まだあなたを使いこなせないかもしれないの……ごめんなさい」

「いや……そんな気落ちしないでくれよ。それに、フェニックス戦でも単独行動しちまった訳だし」
新は頭を掻きながらリアスを慰め、リアスは頬を朱に染める
「ありがとう。もうあなた達に無様な姿を見せられないわ」
「それでこそ『王(キング)』だ。んじゃ、行ってくるぜ！」
新は俊足で駆けていった……
単独行動はバウンティハンター時代からやっているが、今回はチーム戦での単独行動
新はいつも以上に気を引き締めて店内を徘徊する
「結構足音が響くな。空中を飛びながら移動した方が良さそうだ」
そう言って闇皇(やみおう)に変異し、黒いマントを翼に変えて浮遊し始める
羽音を立てない様に静かに飛び回る
「よぉし。この状態なら敵にも気づかれずに――――――」
『リアス・グレモリー様の「僧侶(ビショップ)」1名、リタイヤ』
なんと開始早々味方のリタイヤ通告が流れてきた
アーシアはリアスや朱乃と一緒にいるから違う
そう考えた結果、やられたのはギャスパーのようだ
「おいおい、早すぎるだろ。ちょっくら急ごうか」

天井近くを飛びながら徘徊していると、誰かと交戦している一誠と小猫の姿が視界に映る

新は急降下していき、地面の数十センチ手前で翼をマントに戻して降り立つ

「新手か！げっ!?よりにもよって竜崎かよ！」

一誠と戦っていたのは匙だった

しかも、匙の右腕には黒い蛇が何匹も巻きついており、以前の『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』と形が違っていた

「新！悪いけど、匙とはサシで決着をつけたいんだ！邪魔をしないでくれ！」

「分かった。こんな真剣勝負の場を邪魔する訳にはいかねぇな。思う存分やっちまえ！」

一誠の言葉を汲んでやる事にし、小猫と匙の後輩らしき女子との戦いに目を向ける

パンッ！

小気味の良い音が響き渡り、匙の後輩が膝を落とす

「……気をまとった拳であなたに打ち込みました。同時にあなたの体内に流れる気脈にもダメージを与えたため、もう魔力を練る事は出来ません。更に言うなら内部にもダメージは通ってます。……もう、あなたは動けません」

「外部と内部を同時に攻撃する技か……これが、小猫の本当の力」

新が感心する中、匙の後輩の体が消えてなくなる
致命的なダメージを負ったため、リタイヤ転送されたのだ
「よくやったな、小猫」
「……新先輩。私、頑張って冥界猫(ヘルキャット)になります！」
「おう、その意気だ。一誠も負けんなよ！じゃあここはもう大丈夫そうだな」
踵(きびす)を返して飛ぼうとする新に小猫が呼び掛ける
「……先輩。何処へ？」
「ここはお前らに任せる。俺は立体駐車場に向かうわ。頑張れよ！」
激励を送り、新はマントを翼に変えて飛び去っていった

「さて……ここでは鬼が出るか蛇が出るか？」
立体駐車場を羽音を立てずに飛行する新
すると3人の人影を見つけ、その先には隠れている祐斗と倒れているゼノヴィアの姿があった……
「ゼノヴィア……!?やられたのか……！」

仲間のやられた姿に新は兜の中で歯を食いしばる
感情を押し殺しつつ、新は敵側の駒を視認する
「あれは『女王(クイーン)』の真羅椿姫(しんらつばき)か。グラマーな体してるから覚えてるな。あとの2人は『戦車(ルーク)』の由良(ゆら)と、『騎士(ナイト)』の巡(めぐり)か」
新は低空飛行に切り替え接近していく
ジリジリと祐斗が隠れている物陰に近づくシトリー眷属はまだ新に気づいていない
「――――ッ!後ろから何か来ます!」
しかし、寸前のところで『騎士(ナイト)』の巡が気づき、それに合わせて残りの2人が後ろを向いた
「チッ!バレたか!それでもお構い無し!」
シトリー眷属3人はすぐに散開するが、新はその内の1人――――真羅椿姫に狙いを定め服を切り裂く
「竜崎新。まさか単独で行動していたのですか?」
「その通り。ほ～、黒の下着か。なかなかそそるぜ」
椿姫の切り裂かれた胸元から黒いブラが見え隠れしている
彼女は訝しげな顔をするが、決して攻撃体勢を解こうとしなかった
長刀(なぎなた)を構えてその場に佇む

新は隠れている祐斗に現状の報告を促した
「ごめんよ新くん。まさかカウンター使いを２人も投入してくるとは思わなかった……。ソーナ会長は、まず僕達を完全に潰すつもりだよ」
「なるほど。聖魔剣（せいまけん）とデュランダルを持ってるお前らは確かに脅威だから、本命と読んで当然って訳か。その様子だと、ゼノヴィアは……」
新の問いに祐斗は無口になった
新はそれを肯定の意味で受け取る
おそらく、ゼノヴィアはもう戦える状態では無いだろう……
「分かった。そんじゃ、仲間の仇討ちをさせてもらおうか！」
新は『闇皇（やみおう）の鎧』から闇皇剣を取り出し、剣先をシトリー眷属３人に向ける
「由良、巡。彼は１番の強敵です。全力でいきますよ！」
「「はいっ！」」
３人は新を囲う様な陣形を取る
「さぁて……誰から裸にしてやろうか」
卑猥な発言に巡は１歩引き、椿姫は長刀を構えたまま微動だにしない
ダッ！
「はぁっ！」

ここで『戦車（ルーク）』の由良が先陣を切って突っ込み、新に拳を放つ
新は上体を反らして回避し、巡の日本刀を闇皇剣（やみおうけん）で止める
椿姫が長刀で斬りかかって来るのを見て巡を突き放し、長刀を剣で叩く様に左へ払う
「よっと！」
「まだまだ！」
新は勢いを利用して由良の足を狙うが、由良はジャンプして回避
そのまま新に蹴りをくらわせた――――――かに見えた
「残念賞！」
くらう寸前で由良の蹴り足を左手でキャッチし、巡に向かって投げつける
「後ろが空いてますよ？」
ガキィィンッ！
虚を突かれたせいか、新の剣が椿姫の長刀で飛ばされる
トドメと言わんばかりに長刀を振り下ろす椿姫だが、新は身を低くして椿姫の手を蹴る
その衝撃で椿姫の手から長刀が離れ、新はダッシュで剣を拾った
「そろそろやってやるか！」
闇皇剣（やみおうけん）の刀身に魔力を溜め、柄の蝙蝠の両目が赤い輝きを放つ

新はその剣で椿姫に斬りかかろうとした
「それを待ってました。『追憶の鏡(ミラー・アリス)』！」
そう言った椿姫の前に、巨大な鏡が出現する
新は何かヤバいと察知し、兜の口を開いて弱い威力の魔力弾を放つ
その魔力弾が鏡を割った瞬間、衝撃波が新を吹き飛ばした
「ぐあぁぁぁあっ！ヒュウッ、いって～な……。何とか最小限のダメージに留めたが、そいつは厄介だな……カウンター系の神器(セイクリッド・ギア)か」
「あなたの言う通り、私の神器(セイクリッド・ギア)はカウンター系神器(セイクリッド・ギア)の『追憶の鏡(ミラー・アリス)』。鏡を割った攻撃を倍増させ、そのまま相手に跳ね返す神器(セイクリッド・ギア)。咄嗟に威力の低い攻撃に転じるとはお見事ですね」
「これは俺の推測だが、ゼノヴィアもさっきの鏡で仕留めたな？」
「はい。彼女の聖剣とデュランダルのパワーを利用させてもらいました。ゼノヴィアさんは今に転送されるでしょう。次はあなたの番です」
淡々と新の問いに答える椿姫は長刀を構える
巡と由良も並び、新に迫ろうとする
新は剣を杖代わりに突き立てて立ち上がった
「思った以上に強敵だな。だったら……修行で開発した新必殺技でもお披露目してやろ

うか」
新の発言にシトリー眷属３人は足を止めた
新は闇皇剣（やみおうけん）の刀身に魔力を込めていく
ただし、今度は赤い魔力ではなく黒い魔力を……
そして黒く染まった剣を地面に突き刺す
ズザザザザザザザザー！
剣を突き刺した瞬間、地面が漆黒の闇に塗り潰されていき、シトリー眷属３人に迫っていった
椿姫、由良、巡は散開しようとしたが……足元から闇に捕まってしまう
「なっ、何これ!?」
「闇が体にまとわりついていく……!?」
「くっ……！斬っても斬れない……！」
闇は次第に３人の体――――頭部以外の部分を完全に覆っていき、彼女達の動きを封じた
「どうだ？これが俺の新しい技だ。その名も『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』」
「これは……相手の動きを封じる技ですか？だとしたら、私達には何のダメージも与えられないのでは？」

椿姫の質問に新はクスクスと笑うだけ
動きを封じる技では無さそうだ
「少し違うな。今に分かるぜ」
新は突き刺した剣を引っこ抜き、刀身を上から手でゆっくりと擦る
手が柄の蝙蝠に触れた瞬間、シトリー眷属3人を捕らえていた闇が消えていった――
――彼女達を裸にして
椿姫のグラマーなボディ、くびれた腰に豊満な乳房(おっぱい)とピンク乳首
由良の引き締まった肢体、適度なサイズの乳房(おっぱい)とピンク乳首
巡の白く丸みを帯びた細身の体、由良と同じく適度なサイズの乳房(おっぱい)とピンク乳首が一斉に公開された
「えっ!? いやぁぁぁぁぁぁぁぁんっ!」
「わ、私達の服が!?」
「きゃあっ! い、いったい何が……?」
巡、由良、椿姫は恥ずかしさのあまり自分達の裸体を手で隠す
新は得意気に先程の技を説明に入った
「どうだ? この『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』は剣から闇を発生させて対象物を捕らえ、”俺が脳内で考えたものだけ”を喰らい尽くす。俺が”相手の魔力を喰え”と考えれば魔力を喰らい、

”腕を喰え”と考えれば腕を喰らう。つまり、今喰ったのはお前らの衣類全てだ。一誠の『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』みたく派手じゃねぇが、遠く離れた相手も捕らえる事が出来る。俺はいつも女相手には接近して裸にしていたが、カウンター使いや接近戦に長けた女だと効かない可能性が生じる。だから遠近両用の技を開発した」

「迂闊でした……っ。まさかこの様な技を編み出していたなんて……」

「もう、エッチ！変態！性欲魔！ドスケベ！」

椿姫は想定外の事態に歯噛みし、巡は涙目で罵倒を飛ばすが……新はふんぞり返って一蹴する

「何とでも言え！勝負の世界は常に非情ナリ！」

物陰に隠れている祐斗は額に手を当てて『新くん、君は1度自分の力について考え直す必要があるよ……』と憐れみの目を新に向けたが、本人は改心する気全く無し

そんな祐斗をよそに、新は剣を鎧の中にしまって指を鳴らす

「このまま乳房（おっぱい）をモミクチャに揉みしだいて放置してやっても良いんだが、バトルフィールドがデパートとなると洋服店があるだろうな。替えの服なら腐る程ある……そこへ行かれる前にリタイヤさせておこうか。ゼノヴィアの仇討ちだからな」

「新くん。ギャスパーくんを忘れてるよ？」

「あぁ、ついでにやっといてやるか」

ギャスパーは”ついで”扱いにされていた
裸のシトリー眷属3人に1歩1歩近づいていく
3人はまともに戦える状態じゃないため動けない
「洋服店に行けば着替えられますが、目の前にいる彼を何とかしない限りは……」
「まずは――――1番厄介なあんたからだ。真羅椿姫副会長！」
新は『女王（クイーン）』の椿姫をリタイヤさせようと拳を振ろうとした――――その時
「副会長！逃げてください！」
「ひでぶっ!?」
由良が意を決して飛び込み、新を押し倒してマウントポジションを取る
由良はその体勢のまま、新の左腕を体で押さえつけた
「巡！竜崎新の右腕を押さえて！」
「ちょ、ちょっと待ってよ由良！こんな格好じゃ恥ずかしくて戦えない！」
「今はそんな事を言ってる場合じゃない！早く！」
「なんかデジャヴだぞこれ!?クソッ！」
新は空いた右手で由良に掌底（しょうてい）を打ち込もうとしたが、覚悟を決めて飛び掛かった巡に阻まれる
「副会長！急いで着替えてください！この場は私達が食い止めますから！」

「……ですが、それではあなた達が！」
「構いません！私達は囮になります！だから急いで！」
椿姫は由良の言葉に苦しい表情をしながらも戦線を離脱
シトリー眷属の『女王（クイーン）』は店内へ走り去っていった
「巡、もっと強く押さえつけるんだ！力が強い……！」
「ぐすんっ……もう何にでもなって！」
裸の美少女2人にしがみつかれる
男にとっては夢の様なひとときである
だが、今回ばかり新は心を鬼にした
「今回は時間がねぇんだよ。それに言った筈だ――――――――勝負の世界は常に非情だと」
ドゴッ！
新は唯一封じられてない足で巡の背中を蹴る
蹴られた巡が離れ、空いた右手で由良にもう一度掌底（しょうてい）を放つ
由良は上体を起こして掌底（しょうてい）を回避するが、逆にその動作が新の狙いだった
モニュッ……ムニュムニュ……
「あっ、ぁんっ……」

胸を揉まれて感じた由良は、新の左腕を押さえていた手を離して自身の胸を押さえる
「ヘッドバット！」
ゴキンッ！
新はその隙を突いて上体を起こし、由良にヘッドバットをくらわせる
強固な兜での頭突きは由良に致命傷を与え、彼女の体が光となって消えていく
「由良！」
「お次はそっちだ！」
新は間髪入れずに巡の乳房（おっぱい）を揉もうとした
巡はそれに怯んで目を瞑ってしまう――――が、新はフェイントを掛けていた
「脳天チョップ！」
「ふぎゃっ！」
巡の脳天を手刀で打ち、彼女もリタイヤさせた
「ヒュウッ。ちょっと手こずっちまったか？」
「まだ余裕がありそうに見えるんだけど」
「注意すべきはあの鏡だけだったな。あとは普通の能力でも俺なら充分に勝てる」
「新くん、僕は君の強さが羨ましいよ……」
「そんじゃまぁ、ここは片付いたから店内に戻るわ」

「君だけ唯一単独行動なんだよね？油断しないように頼むよ」
「ご忠告あんがと」
バサッ！
新は再三、マントを翼に変えて店内に戻っていく
リタイヤした数は互いに2名ずつ
どちらが先に『王（キング）』を取るのか……

ゲーム決着！新ＶＳソーナ

ショッピングモール中心の中央広場に到着した新

まだ他のメンバーは来ていない様子から、自分が１番乗りだと悟る

「ごきげんよう、竜崎新くん。いずれ来るだろうと思っていました。ただ、単独でこちらに来るのは予想外でしたが」

「そう言うソーナ会長こそ、本陣を離れるとは大胆だな。オマケに結界まで張ってやが――っ？」

新は結界を発生させているシトリー眷属『僧侶（ビショップ）』の１人に目をやる

白髪美少女『僧侶（ビショップ）』の持っているバッグからラインの様なものが何処かへ伸びていた

新は頭の中で先程見かけた匙の神器（セイクリッド・ギア）を思い出す

匙の『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』は一誠の腕に巻きついていた１本だけでなく、２本のラインが存在していた……

新はストレートにそのラインについて追求してみる

「そこの『僧侶（ビショップ）』さんよぉ。その黒いラインは何処へ繋がっているんだ？」

『――――ッ！』

ソーナ会長を含めた3人が驚いた表情で目を見開く
「そうか。やはりそいつは匙の神　器（セイクリッド・ギア）――――『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』だな？そこまで驚いてるのを見ると、こんなに早く策を見破られるとは思わなかったってところか？」
「竜崎くん。あなたは単に女性を裸にするだけのヒトかと思っていましたが、そんな甘いヒトではなかったみたいですね……良いでしょう」
ソーナ会長がバッグを持っている『僧侶（ビショップ）』に目で指示を出す
コクリと頷いた『僧侶（ビショップ）』の女性がバッグから何かを取り出した
それは赤い液体の入ったパックのようなもの……
一目見ただけで輸血パックだと断定できた新は目を見開いた
「……ッー!まさかとは思うが、一誠の血か!」
「ご名答です。兵藤くんはあなたと同じ様に人間がベースとなっている転生悪魔。人間は体に通う血液の半分を失えば致死量です。レーティングゲームのルール、ゲーム中に眷属悪魔が戦闘不能状態になると、強制的に医療ルームへ転送されます」
「つまり、一誠をダメージでは倒さず、レーティングゲームのルールで倒すと言う事か……!」
新が拳を震わせる中、ソーナ会長は更に続ける
「サジは神器（セイクリッド・ギア）を用いて、兵藤くんの血を少しずつ少しずつ吸い取っていたのです。対

象のエネルギーを吸い取るのが本来の能力である神器（セイクリッド・ギア）で血液を吸い続けるには、相当な修業と緻密（ちみつ）なコントロールがいりました。しかし、サジはそれを完遂させたのです。もう手遅れです。兵藤くんは医療ルームへ転送されるだけの血を失いました」

「チッ、完全にやられたな……一誠」

新は額に手を当てて首を振る

「本当は竜崎くんも同じ罠でリタイヤさせたかったのですが、あなたの力はリアスの眷属でトップクラスを誇っています。フェニックス戦での記録映像でも、あなたは大きな破壊をせずに相手の眷属の大半を圧倒する実力を見せていました。今回のルールとあなたの力量から、サジの神器（セイクリッド・ギア）で倒す標的を兵藤くんにしたのです」

「なるほど。一誠の攻撃は殆どが高火力で派手なものばかり。デパートを破壊してはいけないと言うルールの縛りを利用した見事な策だ……。流石はソーナ会長――――――だが、俺のこいつは攻略出来るか？」

ズオオオオオオオオ……！

新は闇皇剣（やみおうけん）を出現させ、突き刺す様な動作をする

黒く染まった刀身から闇が発生し、ソーナ会長と『僧侶（ビショップ）』２人に襲い掛かる

「黒い闇……!?」

「会長！どんどんこちらに侵食してきます！」

闇は結界を少しずつ喰らっていき、直径３センチ程の穴を開けたところで一気に結界内へ侵入する
「ソーナ！花戒（はなかい）！草下（くさか）！またさっきの……！」
「おっと副会長！２回目乙！」
ズオオオオオオオオ！
新は剣で薙ぎ払う様な動作をして椿姫にも闇を飛ばす
素早く行動に転じれなかった椿姫は再び闇に捕まってしまった
「くっ……またこの闇に……！」
「う、動けません……！」
「何なんですかこれは……！」
椿姫、花戒、草下の３人を捕らえたが……ただ１人、ソーナ会長だけは何故か捕まえられなかった事に新は不審に思う
「何故ソーナ会長だけが『暗黒捕食者（ダークグリード）』に捕まってねぇんだ……？少し揺さぶりを掛けてみるか」
シャー……！シャー……！
新が刀身を手で擦ると、３人を捕らえている闇が蠢（うごめ）き出す
――闇は捕らえた女性（獲物）の衣服をモシャモシャと喰らい始めた

「えっ……嘘!?私達の服を食べてる!?」
「いやぁぁぁっ!やめてぇぇぇっ!」
「ソーナ会長、教えてもらおうか。本物のあんたはいったい何処にいるんだ?」
新の言葉にソーナ会長がこれ以上ない驚きの表情を見せた
新はやはりな……と前置きをしてから話を続けた
「俺の『暗黒捕食者(ダークグリード)』が効かない訳がようやく分かったぜ。そこにいるソーナ会長は偽物なんだろ?俺は”この場に存在する結界及びソーナ会長とシトリー眷属全ての衣類を喰らえ”って指示を出している。にもかかわらず、闇が目の前にいるソーナ会長を捕らえられないのは――――実体が無いからだ。実体が無い幻か映像なら闇が捕らえられないのも合点がいく」
「……ッ!なんて方法で私の策を見破るんですか……!しかも、その技はあまりにも破廉恥です!」
「悪いけど、これが俺の戦い方だ。せっかく着替えてきたのも無駄になっちまったな?真羅椿姫(しんらつばき)副会長?」
「――――っ?!椿姫、あなたも竜崎くんの技に……!?」
「ごめんなさいソーナ……。竜崎新はグレモリー眷属で要注意すべき存在だと言う事は分かっていたけど、彼は規格外過ぎる存在だったわ……」

『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』の闇は動けない３人の服を容赦なく喰らっていく
映像らしき会長はどうする事も出来ず、ただ目の前の光景を見ているしかなかった
……
「さぁて、そろそろ仕上げといくか！」
「い、いやっ！やめてっ！」
「見ないで！見ないでください！」
『僧侶(ビショップ)』の花戒と草下は涙混じりに叫ぶが、新は無情にも刀身を擦っていた手を柄の蝙蝠に触れさせる
闇が消え、捕らえられていた椿姫、花戒、草下は裸で解放された
闇から解放されたと同時に彼女達のおっぱいがプルンプルン揺れる……
「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「いやぁぁぁぁぁぁっ！」
「また裸にされた……」
『僧侶(ビショップ)』２人は裸体を隠す様にうずくまり、椿姫は両手で乳房(おっぱい)と下を隠す
結界が消えると同時に、偽物のソーナ会長も消えた
「結界で作り出した囮だったのか……あとは本物のソーナ会長の居場所だ」
新は尋問すべく２人の『僧侶(ビショップ)』の所に歩みを進めた

シトリー眷属の花戒と草下は怯えた表情で後ろへ下がっていく
「い、いや……これ以上はやめて……っ」
「お願いします……もうエッチな事はしないで……」
「じゃあ本物のソーナ会長が何処にいるか教えてくれ。教えてくれたら直ぐに消えるからよ」
これ以上自分達では打つ手が無い事を悟った椿姫、花戒、草下の3人は揃って屋上へ続く階段を指差した
「屋上か。よし、ちょっと待ってろ」
そう言うと新は屋上へ向かわず、別の場所へ走っていく
怪訝そうに窺うシトリー眷属3人
すぐに新が何かを抱えて戻ってきた
無造作に彼女達の前に落としたのは――――女性用の衣服と下着類だった
「……っ？これは？」
「ソーナ会長の居場所を教えてくれたから少しばかりの礼だ」
「私達の為にわざわざ持ってきてくれたんですか……？」
「そゆ事～。適当に持ってきたから合うかどうかは分からねぇけど、無いよりマシだろ？」

『僧侶』の花戒と草下は頬を紅潮させ、新から目を逸らして服や下着を漁る
「……２人とも胸デカいな」
「――――ッ！あんまり見ないでください……恥ずかしい……」
「男のヒトの前でこんな格好……恥ずかしいです……」
２人が恥じらいながら自分に合う衣服を探している中、椿姫が話し掛けてくる
「あなたって変わった男性ですね。女性を裸にしたかと思えば、代わりの服を持ってきたりと――――ぁんっ。ヒ、ヒトが話をしている途中で……んんっ。胸を触らないでください……っ」
「マジ泣きされるのが好かねぇだけだ。じゃあな」
新は椿姫の乳房をひと揉みしてから屋上へ続く階段を上っていった
椿姫が熱のこもった視線を向けながら「エッチ……」と呟いた事など、新は知る由もない……

「まさか椿姫でも止められなかったなんて……竜崎くんを侮っていたわ……」
屋上にいるソーナ会長は苦虫を噛み潰した顔になっていた

綿密に練った作戦を見破られただけならまだしも、椿姫を始めとする自分の眷属が新に手も足も出なかったから……

「さっき竜崎くんが出していた闇、あれで椿姫や他の皆も裸にしたのかしら……。このままじゃ、私も裸にされちゃう……竜崎くんに見られちゃう……」

ソーナ会長は自身の胸を押さえる

しかし、『王(キング)』として引き下がる訳にもいかない

ここで逃げれば自分の夢を果たす事など到底叶わないだろう

ソーナ・シトリーは覚悟を決めた

「裸にされても……それは負けじゃない。私は彼に勝って、それを夢への1歩に繋げてみせる!」

意気込みを胸に秘めて立ち上がるソーナ会長

そこへ丁度、闇皇姿(やみおう)の新が到着した

「来ましたね。竜崎くん」

「やっと本物に会えたな。ソーナ会長。もう残ってるのは会長1人だけだ」

「……サジは赤龍帝(せきりゅうてい)に勝ちました」

「あぁ、上ってる途中でアナウンスを聞いた。これでも結構動揺してんだぜ?」

フフフと笑い合う新とソーナ
ソーナは周囲に水のオーラを集め、新は闇皇剣（やみおうけん）に赤い魔力を集中させる
「……では、始めますか？」
「勿論。会長の裸、じっくり拝ませてもらうぜ」
ソーナは集めた大量の水を変化させ、鷹や大蛇、獅子、狼、そして巨大なドラゴンを幾重にも作り出す
「セラフォルー様は氷、ソーナ会長は水の魔力を得意とする……か。聞いてはいたが、ここまで繊細な技術は初めて見たな」
「さて、竜崎くん。私の水芸、とくと披露しましょうか！」
ソーナが手を向けると、水で形成された生物達が一斉に襲い掛かる
新は水の生物達を斬り払いながら、ソーナの所へ突き進む
「簡単にはやられませんよ！」
ソーナは水柱を発生させて新を囲う様に閉じ込め、生物達は四方八方から突っ込んでいく
「オォォォォオオオッ！」
新は赤い魔力で巨大な刀身を作り上げ、周りの柱や生物を両断する
斬られた柱と生物は水に戻り、大きな音を立てて地面を濡らす

「そろそろいくぜ。『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』！」
黒い魔力を帯びた剣が闇を生み出し、ソーナのもとへ迫る
「――――ッ！出ましたね……ならば！」
ソーナが巨大な螺旋状の水流を２つ作り、それらを闇に向かって放つ
２つの水流で闇を打ち消す魂胆であろう
次第に闇の勢いが衰えていく
「さぁ、これであなたの闇も――――――ッ！竜崎くんがいない!?」
闇を打ち消したのも束の間、新の姿が地上から消えていた
空や周りを見渡しても姿を確認出来ない
その時だった……
ズズズズズ……！
何かがせり上がって来る不気味な音に反応したソーナは後ろを向く
「わ、私の影から!?」
「残念だったな。『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』は俺自身を闇の中に潜ませる事も出来るんだよ。もっとも、使えるのにかなり時間を食っちまったけどな」
完全に虚を突かれてしまったソーナは逃げられず、『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』の闇に捕らえられてしまった

新は発生させた闇の中に隠れ、ソーナの影に繋げると言う妙技を見せた
「まさか、こんな方法があったなんて……！」
「さぁてと。学園でも名高い生徒会長様の裸。とくと拝ませてもらおうか！」
闇がソーナの衣服と下着を喰らい終わり消えていく
新の宣言通り、ソーナは裸にされた
白い肌、大き過ぎず小さ過ぎずの適度な乳房（おっぱい）、ピンクの乳首、引き締まった腰、弾力抜群であろう可愛らしい尻
ソーナの全てが新に見られた……
「――――ッ！いやんっ！」
ソーナはうずくまる様に自分の裸を隠す
新は一礼をしてから勝利を手にする為、ソーナに近付こうとする
しかし、意を決したかの様な表情を見せたソーナは立ち上がり――――
「まだ終わってませんよ？竜崎くん」
「えっ？うおっ！マジで!?」
ソーナはゆっくりと両手を離し、隠していた裸体を見せつける
頬を紅潮させながらも、戦う意思を捨てていなかった
「竜崎くん。あなたは必ずその闇を使ってくると思っていました。裸にされた女性は大

抵戦意を無くすと考えていたのでしょうが、私はそんなにヤワじゃありませんよ？それなりの対策はあります！」

ソーナが手を上に翳すと、周りの水が引き寄せられ体にまとわりついていく

水流はソーナの胸と下を隠す衣服と化した

「なっ!?」

「どうですか？水を変化させる能力を駆使した水の衣服です。格好は少し恥ずかしいですが、水がある限り何度でも復元が可能となります」

ソーナの秘策に新は拍手を送る

「こいつぁ参ったぜ。普通ならここで諦めるもんだと思っていた。ソーナ会長、あんたの乳首だけでなく――――――強い信念と覚悟を見せてもらったぜ！」

「私は負けません。冥界に誰もが通えるレーティングゲーム専門の学校を設立する夢を叶えるため、サジや他の皆の覚悟も背負っています！だから、負ける訳にはいきません！」

「悪いが……俺も負けられねぇんだ。初のレーティングゲームで苦い敗北を味わっちまったからな。リアスも一誠も、心の底から悔しがっていた。今度こそ勝利を収めて次へ進ませてやりたいんだ！」

お互いに負けられない理由を叫び、最後の攻撃を仕掛けようとする

「ところでソーナ会長」
「何ですか？竜崎くん」
「その水の服――――――どことなくセラフォルー様の格好と似てる気がするんだが……意識して作った？」
「――――っ!?」
　ソーナは急に顔を真っ赤に染めた
　新は適当な事を言ったんだが、どうやら図星らしい
「なななな、いきなり何を言い出すんですか!?こんな肝心な時に不謹慎です！お姉さまは関係ありません！」
「ハハハハハ！スマンスマン。これは俺が悪かった」
　ゴオオオオオオオッ！
　気を取り直して新は再び剣に赤い魔力を込め、ソーナも水を集めて特大の水流を何本も作り上げる
「よしっ、負けても恨まないでくれよ？ソーナ会長ッ！」
「望むところですよッ！」
　新が持つ赤く巨大な刀身の剣と、ソーナの放つ水流の群れがぶつかり合った

『ソーナ・シトリー様の投了（リザイン）を確認。リアス・グレモリー様の勝利です』

勝者、面会、帰省

レーティングゲーム終了後

結果はリアス陣営の勝利で幕を閉じた

しかし、リアス陣営はギャスパー、ゼノヴィア、アーシア、一誠と半数を取られてしまい、ゲームに圧倒的と言われていたグレモリー眷属は評価を下げてしまった

特に開始早々ギャスパーを失った事と、赤龍帝（せきりゅうてい）の力を宿した一誠がやられた事に上は評価を下げた

初勝利を収めたものの、腑に落ちない結果となってしまった

新は現在、一誠が転送された病室へ向かっている

その途中で誰かを待っている様子でいる鎧を着た銀髪女性の姿が目に入った

「……？誰だあれ？結構俺好みの女だな」

品定めしていると、銀髪の女性が新に気づき近づいてくる

「あなたが闇皇（やみおう）の蝙蝠ですね？はじめまして」

「あ、これはどうもご丁寧に。しかし、あんたは何者だ？俺はあんたみたいな綺麗な女と面識は無い筈なんだが」

「き、綺麗……？わ、私が、ですか……？」
「あぁ、ストレートの銀髪も顔立ちも、体のラインも俺好みで申し分無いぜ？なんか気に障ったか？」
銀髪の女性は俯き、体がプルプルと震え出す
新が下から顔を窺ってみると、女性は何故か大粒の涙を溢れさせていた
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！その様な言葉……今まで生きてきて、初めて言われましたぁぁぁぁぁっ！」
「うぉわあっ!?いきなりビックリさせんな！で、あんた名前は？」
女性は涙と鼻水を拭い、自己紹介を始めた
「ぐすっ……すみません。取り乱してしまいました。私はヴァルハラ神族にお仕えする戦乙女（ヴァルキリー）のロスヴァイセと申します。今日は挨拶に伺いました。また後程」
ロスヴァイセと名乗った女性はお辞儀をしてその場を去った
新は一誠が転送されたであろう病室のドアをノックする
「はーい、どうぞ」
一誠の声を確認し、ドアを開けて中に入る
「よぉ一誠、リアス」
「新。どうだった？ソーナと戦った感想は」

リアスに聞かれた新は、両手を腰に当てて答える
「純粋に強かったぜ。戦略も申し分無かった」
「そう……ね。私も気付けなかったわ……」
「ま、そう気を落としなさんな。『王』と言えど完璧じゃねぇのは誰だって同じだ」
「新、お前にも見せてやりたかったよ。俺の新必殺技を」
怪訝そうに首を傾ける新に、一誠は新必殺技の活躍を話し始めた
一誠の新必殺技――――その名も『乳語翻訳』
女性の胸の声を聞くと言う何ともバカみたいな技である
新が屋上に向かった後、一誠達は椿姫率いるシトリー眷属3人と対峙し、『乳語翻訳』でソーナの居所を見破ったらしい
新は『乳語翻訳』の全貌を聞いて、空いた口が塞がらなかった……
新も自分の新技『暗黒捕食者』の説明をしたところ、一誠は尊敬し、リアスに嘆息された
「イッセー、今言った技はゲーム時には封印よ」
「えぇぇぇぇぇっ!?部長！何で俺だけなんですかぁぁぁぁぁぁっ!?」
「だって、女性悪魔と戦えなくなってしまうでしょう？新のは自分の思考で何とか変えられるけど、イッセーのは女性限定だもの。だから禁止」

一誠は酷く落ち込むが、新が「実戦なら使い放題じゃねぇか」と耳打ちした瞬間に元気を取り戻した
「けど、やっと1勝したわ」
「そうだけどよ、こっちも一誠やアーシア、ゼノヴィア、ギャスパーと半分も取られちまったんだ。いくら強力な眷属がいても本番で力を発揮出来なくちゃ意味が無い。勝つ時もあれば負ける時もあるって事が分かったんじゃねぇか？」
「ええ……でも、朱乃と小猫、2人がこの試合で自身の壁を越えてくれた。こんなにも喜ばしい事はないわ」
修行時にも悩みを抱えていた2人が封じていた力を使った
朱乃は『雷の巫女』から『雷光(らいこう)の巫女』に、小猫は猫又の力を解放
苦い勝利をしても、得るものは大きかった
新も少しホッとする
コンコン……
病室のドアがノックされ、一誠が返事をする
現れたのは白いヒゲを生やした隻眼の老人だった
「じいさん、誰っスか？」
「……っ!?じいさん、何者だ？こんな静かですげぇ気は初めてだ」

「わしは北の田舎ジジイじゃよ。闇皇(やみおう)の蝙蝠、お主はちと1人で突っ走り過ぎじゃ。少しは控えておけ」
　老人がヒゲを擦りながら言う
「オーディン様ですね？初めてお目にかかります。私、リアス・グレモリーですわ」
「オーディン!?オーディンって、あの北欧神の主神か!?」
「えっ!?このじいさん、そんなに偉い神様なの!?」
　新と一誠は驚きの目をオーディンに向ける
　北欧神の中で最強と謡われるオーディンが、自分達の眼前にいる事にビビった
「サーゼクスの妹じゃな。試合見ておったぞ。お主も精進じゃな。しかし、ううむ……デカいのぉ。観戦中、こればかり見とったぞい」
　オーディンはリアスの胸をいやらしい目付きで見る
　その様子に気付いた新と一誠は猛抗議しようとしたが、いつの間にか入室していた銀髪の女性がハリセンでオーディンを叩く
「もう！ですから卑猥な目は禁止だと、あれ程申したではありませんか！これから大切な会談なのですから、北欧の主神としてしっかりしてください！」
「……まったく、隙の無いヴァルキリーじゃて。わーっとるよ。これから天使、悪魔、堕天使、ギリシャのゼウス、須弥山(しゅみせん)の帝釈天(たいしゃくてん)とテロリストや闇人(やみびと)対策の話し合いじゃった

な」
　オーディンが頭を擦りながら半眼で呟く中、新は銀髪の女性が先程会った女性だと気付く
「あんたさっきの……確かロスヴァイセ、だったか？」
「またお会いしましたね」
　ロスヴァイセがお辞儀をする
「なんじゃお主、闇皇（やみおう）の小僧と会っておったのか？」
「はい。オーディン様をお待ちしていた際に」
「ほ～う。お主はこういう男が良いのか？闇皇（やみおう）の小僧はおなごを裸にしてからバリボリ喰うと聞いたぞい？」
「チョォットマッタ。どっかおかしくね？バリボリ喰わねぇよ？違う意味では喰うけど」
　オーディンの言葉を聞いたロスヴァイセは顔を赤くしながら1歩下がった
「じょ、女性を裸にしてから食べる……？まさか、あなたが噂に聞くエッチ蝙蝠なんですか!?女性を裸にするなんて不埒です！そういう事は、女性と結婚してからじゃないといけません！非人道的です！」
「俺、もう悪魔だから人の道外れてんだけど……？」

「ロスヴァイセ、男と言う生き物はみな性欲が盛んなのじゃ。エロエロなのじゃ。相変わらず生真面目で堅いのぉ。そんなじゃから、勇者の1人や2人ものに出来んのじゃ」

オーディンが嘆息しながら言うと、ロスヴァイセは瞳を潤ませながら叫んだ

「ど、どうせ私は彼氏いない歴＝年齢の戦乙女（ヴァルキリー）ですよ！好きで処女やってる訳じゃなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁいっ！私だって、カッコイイ彼氏とエッチな事したいのにいいいいいいいいいっ！うぅぅ！」

ロスヴァイセは自虐し、新に会った時と同じ様に泣き出してしまった

その後オーディンは「世は試練だらけじゃが、楽しい事もあるぞい。存分に楽しんで、存分に苦しんで前に進むのじゃ」と言い残してからロスヴァイセと共に病室をあとにした

「彼氏いない歴＝年齢の処女ヴァルキリーねぇ……」

「新？今の女性も狙うつもり？」

「まぁな、あれは堕ちたら激しくなりそうだ。男に免疫が無い分、反動が一気に来るだろうな」

「あなたって……本当に女性を食べて生きてる様なヒトね……」

後に新は『エッチ蝙蝠』だけじゃなく、リアスから『女性喰いの蝙蝠』と言う二つ名を付けられてしまった……

しかし、本人は好きに呼べば良いと別に気にする事も無かった

「アザゼルさんよぉ、いきなり呼び出して何の用だ？もうすぐで俺達は人間界に帰るんだけど」

新は冥界の土産屋でレイナーレ達の土産（酒と温泉の元）を買い終わった後、突然アザゼルに呼び出された

レーティングゲーム前にミーティングを行った部屋に輝く魔方陣

それは今まで見た事が無かった紋様だった

「そうメンドくさがるなよ？お前がいないと話にならねぇんだ」

「いったい何処へ行くんだよ？まずそれを教えてくれ」

「冥界の牢獄――――カテレア・レヴィアタンのところだ」

新は意味が分からなかった

何故わざわざテロリストの身柄が拘束されている場所に行かなければならないと……

新はその理由をアザゼルに聞いてみた

「実は以前からカテレアに『禍の団（カオス・ブリゲード）』の情報について訊いてるんだが、未だに黙秘を続けてんだよな～。……そこで理由を訊いてみたんだ」
「ふむふむ」
「そしたら――――『闇皇（やみおう）の蝙蝠が来てくれるなら話します』って意地張ってやがるんだ」
「ますます意味が分からん……」
「とにかく、貴重な情報を聞き出すには新の協力が必要だって事。な？頼むよ」
新は顔をしかめながら頭を掻く
だが、今は『禍の団（カオス・ブリゲード）』の情報を少しでも多く手に入れるのが先決
新は渋々了解した
「よっしゃ。じゃあ早速向かうぞ」
アザゼルが魔方陣の中に入り、新も続いて足を踏み入れる
そして魔方陣が光り輝き、新とアザゼルは部屋から姿を消した

冥界のとある牢獄

その最奥の独房にカテレア・レヴィアタンがいるらしく、途中の道々には魔力を封じる術式が幾重にも張り巡らされていた
「ここから先は魔力を一切使えない。つまり、カテレアもお前も人間並みの力に下がっちまうってこった」
「どうりで不快な感じになると思っていたが、そういう事かい。こりゃあ『ビッグロック』よりも厳重だな」
２人して最奥の独房に向かってしばらく進んでいくと、見張りが立っている扉の前に着く
「こん中にカテレアがいるぞ。『禍の団（カオス・ブリゲード）』のチーム構成やら何やら、出来る限り多くの情報を聞き出してこい」
「へいへい」
「んじゃ、時間を掛けてゆっくりと――――――な？」
最後の意味深な言葉に目を細める新は、扉を開けて独房の中に入る
そこの魔力封じの術式はより強力で、新は一瞬目眩を起こしてしまう
「ったく、何処にいんだよ。明かりが蝋燭の火数本だけって……懐中電灯くらい寄越せよな」
チャプッ……

ぶつくさ文句を言ってると、ふいに水音が聞こえてきた
その方角を見てみると、湯気が立ち上ってる場所で女性らしき人影が
「何をしてんだテロリスト風情が」
「――――っ？ようやく来てくれましたね、闇皇（やみおう）の蝙蝠。けれど、あなた方にはプライバシーと言うものが無いのですか？女性の入浴を無断で覗くなんて破廉恥極まりない」
「テロリストが独房で風呂入ってる事自体おかしいだろ。何なんだこの独房は」
「仕方ないじゃですか。ずっと体を洗えないなんて冗談じゃありません。アザゼルに言って作ってもらいました」
要はカテレアの我が儘によって作られた独房らしい
普通、捕縛されたテロリストに決定権などは無い筈なのだが……
「まぁ、そこは一旦置いておこうか。手っ取り早く本題に入る。『禍の団（カオス・ブリゲード）』の情報を聞かせてもらうぞ」
「……良いでしょう。ですが、少し待っていただけます？裸ではお話に気が散ってしまうので、せめてタオルぐらいは巻かせてください」
ザパッ……
カテレアは湯から上がり、側に置いてあったタオルを体に巻きつける
タオルからはみ出る上乳が存在感を強調しており、濡れた太股（ふとも）が色っぽく見える

「これはこれで良いな」
「いやらしい視線ですね……流石はエッチ蝙蝠」
「もう何かその名前定着しつつあるから何も言わん。さてと、じゃあまずは……『禍の団』の組織構成について教えてくれ」
新はメモ帳とペンを手に持ってカテレアに訊く
「まず『禍の団』は3つの組織に分類されています。1つは白龍皇ヴァーリが率いるヴァーリチーム。彼らは唯一単独での行動を許可された特殊な部隊です。まぁ白龍皇のスペックを見込んで許可を出したのでしょう。2つ目は私が所属していた旧魔王派――――現魔王に恨みや不満を抱いた者の集まりです」
「あんたレヴィアたん様にすげぇ敵意むき出しだったもんな」
「お黙りなさい」
殺気のこもった一言を放つカテレアに、新はあと1つの構成組織について訊いた
「あと1つは……英雄派と呼ばれています」
「英雄派？そいつはどんな集まりなんだ？」
「詳しくは分かりません。『禍の団』と言っても、利害が一致しているから手を組んでいるだけの関係ですので、他の組織には干渉する事は殆ど皆無です。ただ、英雄派の特徴は……構成員が人間で統一されていると聞いています」

〝人間がテロ組織に加入している〟
その情報に新は複雑そうな表情になった
「普通の人間じゃねぇ事は確かだな……察するに、そいつらは神器（セイクリッド・ギア）の所有者か？」
「殆どそうですね。中には神滅具（ロンギヌス）を所持している者も」
神をも葬る神器（セイクリッド・ギア）――神滅具（ロンギヌス）
一誠やヴァーリと同種の神器（セイクリッド・ギア）が英雄派の中に存在する……
「ふぅん……だが、目的は一緒なんだろ？世界を破滅と混沌に導くだっけ？闇人（やみびと）と大差ねぇな。要は気に入らない奴を殺して自分達が好き勝手に出来る世界を作り上げようとしているだけ。そんな考えは古臭い」
「好き勝手に言ってくれますね……もし魔力封じの術式が無かったら、あなたを消し飛ばしていますよ？」
「術式があろうが無かろうが、今のあんたじゃ俺には勝てねぇよ。新しい力も覚醒して更に強くなったからな。やるだけ無駄だ」
カテレアは憎々しげに舌打ちをする
「その英雄派って奴らは、まだ表立った動きを見せていないのか？」
「……ええ。まだ特には」
「なるほどね……まぁ、今は組織の構成が判明しただけでも儲けだな」

「……もう行ってしまうのですか？」
新が立ち上がろうとしたところ、カテレアが何故か物欲しげな眼差しで見ている
新は何となく美味しそうで嫌な予感がした
「……何だ？」
「あなたは最低なヒトですね。以前、あれだけ私を辱しめておきながら責任を取らずに帰り、今もまた帰ろうとしている」
「何が言いたい？」
「悪魔から何かを得るには、相応の対価を払わなければなりません。ですので、偉大なるレヴィアタンの血を引く私に対価を払ってくださいと言っているのです」
「捕まってる時点で偉大なるもクソもねぇだろ。……あ～はいはい。その偉大なるレヴィアタン様は何をお望みで？」
「……わ、私と……性交をなさってください」
新はうんうんと頷き、カテレアの肩に手を置く
カテレアはすぐに始まるのかと思いドキッとしてしまうが――――
「ちょっと待ってろ。アザゼルから頭の薬を貰ってきてやる。出来るだけ即効性のやつをな」
「何ですかその憐れみの目は！別に頭がおかしくなった訳ではありません！」

「当然だろ。あれだけエロを否定してたお前が、いきなり『セッ○スしましょう』とか言ってきたらおかしいと思うわ」
「そ、それはあなたのせいでもあるんですよ！あなたのせいで……わ、私はすっかりあの感覚を忘れられなくなって、毎日体が疼いてしまうのです……。独房の中で……毎日自分を慰めてばかりで……」
カテレアはモジモジしながら自分の胸を揉み、下のアソコを弄る
新の目の前で……
「ダメだこいつ、早く薬を射ってやらないと……」
「そんな手遅れの人を見る様な目をやめなさい！だから、あなたに責任を取って欲しいのです！」
「いやいやいやいや、流石に独房の中でセッ○スなんてした事ねぇから俺困るんだけど？」
「ご心配には及びません。アザゼルにもこの事は一応話していますから扉と鍵は堅牢、最奥ですので音が漏れる事もありません」
「アアアアアアザアアアアアアゼエエエエルゥゥゥゥゥゥッ！」
新は超ダッシュで扉へ向かい叩きまくる
すると、扉の小窓が開いてアザゼルの目が視界に映った

「クソ堕天使！こいつはてめぇの差し金かゴラァ！」
「今さら何言ってんだよ。カテレアを脱がして乳揉みまくったクセにぃ。カテレアがどうしてもって言うから汲んであげた訳よ。お前も男なら据え膳食っちまえ☆それまでこっから出さねぇから」
「見張りィィィィッ！その男に監禁罪を適用するべきだ！牢にぶちこめぇぇぇぇぇぇっ！」
「……ぐ、グーグー……」
「狸寝入りしてんじゃねぇ！しかもバレバレだろうがぁぁぁぁぁぁっ！あっ！コラ！閉めんな！開けろアザゼルゥゥッ！」
新は完全に逃げ道を失ってしまった……
とりあえずカテレアの所に戻り、不機嫌に座り込む
「いい加減覚悟を決めてください……私だって、男性に初めてをあげる覚悟を決めたんですから……」
「お前処女だったのか……あ～もう、良いんだな？」
「偉大なる真のレヴィアタンの血を引く私に二言はありません！で、では……お願いします……っ」
２人の性交を小窓から眺めたアザゼルは「若いって良いよなぁ……」と１人黄昏てい

たりする……

カテレアから『禍の団（カオス・ブリゲード）』の情報を聞き出した翌日、新は帰り支度を終えてグレモリー家私有の列車に向かおうとしていた

途中でセラフォルー・レヴィアタンとソーナ率いるシトリー眷属と鉢合わせした

彼女らもシトリー眷私有の列車に乗って人間界へ帰るらしいので、丁度良かったから共に駅へ行く事にした

「あ～……やっと人間界へ帰れる。久々に酒でも飲もっと」

「竜崎くん？いけませんよ。あなたは高校生なんですから飲酒は控えてください」

「生徒会の前で飲酒宣言をするなんて、大した度胸ですね」

ソーナ会長と椿姫副会長のメガネがキラリと光る

新は欠伸をして「へいへ～い」と生返事

「もうっ、ソーナちゃんは堅すぎるの。新くんもゴメンね？」

「いやいや、ソーナ会長らは生徒会だから当然だろうけどさ。冥界に来た時ぐらいは羽目を外した方が良いんじゃねぇの？」

「そんな事を言ってると日常生活でも怠け癖がついてしまいます。そうならないように、常日頃から規律正しくしていなければなりません。お姉様もいい加減に竜崎くんから離れてください」
「ぶ～っ。ソーナちゃんったら、新くんにおっぱい見られてもあんまり変わらないのね」
セラフォルーから放たれた空気が凍る一言
ソーナは湯気を噴きながら顔を真っ赤にし、匙はこの世の物とは思えない形相でグキグキと首を新の方向に向けた
「リュウザキ……？オマエ、カイチョウニナニヲシタ……？カイチョウノオッパイヲミタノカ……!?」
「おぉっと!?匙の顔がＲ１８指定になってるぅ!?」
「お姉様!?こんな場所でいきなりなんて事を言うのですか!?」
「つ～んっ。ソーナちゃんは少し堅すぎるの。そんなんじゃ彼氏なんて出来ないよ？」
「今は彼氏がどうとか関係ありません！」
ソーナは姉のセラフォルーと口論する中、匙は全身をガクガクと痙攣させながら新を睨んでいた
「竜崎ぃ……会長に何をしやがった……？会長のおっぱいを見たのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……!?」

「セラフォルー様よ！あんた何爆弾落としてくれてんだ!?匙が一誠みたく暴走起こしそうになってる！」
「匙、ソーナだけじゃなく、私達も竜崎新くんに裸を見られてしまいました」
「副会長ォォォォォッ！余計な油を注ぐなァァァァァァッ！」
　椿姫副会長は悪戯な笑みを浮かべ、匙は更に全身をガクガク震わせて新に詰め寄った
「竜崎ぃィィィィィィィッ！俺はなぁ！俺はなァァァァァァァッ！おっぱいなんてまだ1度も見た事ねぇんだぞォォォォォッ！触った事もねぇんだぞォォォォォッ！それを、それをお前は自由気ままにィィィィィィィッ！しかもぉ！会長だけじゃなく、椿姫副会長のおっぱいも見ただとォォォォォッ!?」
「私だけじゃない。由良、巡、花戒、草下も竜崎新くんに裸を見られました」
「殺しィィィィィィィッ！」
　匙は魔力を迸らせて新に殴り掛かるが、逆に魔力弾で吹き飛ばされてしまう
「椿姫副会長！あんたゲームの事を根に持ってるのか!?」
「あなたが破廉恥な事をするからですよ。自業自得です。これに懲りたら、2度とあの様な事はしないでください」
「だが断る！」
「迷い無く言いましたね……だから『エッチ蝙蝠』と言う名前を付けられてしまうんです

よ？」
「構わねぇよ。男がエロいのは自然の摂理。椿姫副会長もそんなんじゃ、彼氏が出来た時に長続きしませんぜ？」
　言われた途端に椿姫はソーナと同じくらい顔を真っ赤にした
「おっと、もう発車時間ギリギリじゃねぇか。んじゃ、急ぐわ。リベンジしたかったらいつでも言ってくれや」
　新はそれだけ言い残して帰りの列車に乗った
「ねぇねぇソーナちゃん、椿姫ちゃん。皆は新くんにリベンジ申し込みたいの？」
「……そうですね。いずれ彼との再戦をしたいものです」
「このまま彼に勝てずにいるのは後味が悪いですので……」
「フフッ。じゃあ、その時はお姉ちゃんに言ってね？いつでも手伝ってあげるから☆」

　帰りの列車の中、新は窓の景色を眺めながら座っている
　右には朱乃が腕にしがみつきながら熟睡しており、左にはゼノヴィアが頭を新の肩に寄せながら眠っている

行きと殆ど変わりない状況だった
ただ1点だけ違うのは……
「にゃん♪」
ほぼ無表情だった小猫が満面の微笑みを見せながら、新の膝に座っていた
猫耳をピコピコ動かしながら
リアスから聞いた話によると、これは猫又の副作用らしい
「しっかしまぁ、あの小猫がこんな可愛い顔をしてくれるとは予想外だ」
「にゃにゃん♪」
ドフッ！小猫は笑顔で新の鳩尾にタックルするように抱きついた
いくら可愛くても『戦車（ルーク）』
バカ力は健在だった
「ちょっ、タンマ小猫……鳩尾はやめろ。リバースしちまう……」
こうして冥界での生活は終わり、新達は人間界へ戻ってきた
地下ホームに着き、新は腰を数度回し、一誠は背伸びをする
ふと、一誠がアーシアに振り返ってみると、アーシアは謎の優男に言い寄られていた
「アーシア・アルジェント……。やっと会えた」
「あ、あの……」

「おいおいおい！アーシアに何の用だ！」
一誠はすぐに２人の間に入る
新は優男の顔を見て思い出す
「お前、ディオドラ・アスタロトって奴じゃねぇか？確か、現ベルゼブブが出た家の」
「……あ、思い出した。若手悪魔の会合でいた！」
そう、ディオドラ・アスタロトは過去にアーシアが助けた悪魔
アーシアが教会を追放される切っ掛けとなった悪魔だった
「アーシア、僕はキミを迎えに来た。会合の時、挨拶出来なくてゴメン。でも、僕とキミの出会いは運命だったんだと思う。僕の妻になって欲しい。僕はキミを愛しているんだ」
ディオドラ・アスタロトは一誠達の目の前でアーシアに求婚した

第6章　体育館裏のホーリーとロックンローラー
転生天使イリナと一誠の大親友

「えー、このような時期に珍しいかもしれませんが、このクラスに新たな仲間が増えます」

２学期が始まったある日、女子の転校生が来ると言う情報にクラスの男子はワクワクしていた

一誠は朝からアーシアがディオドラ・アスタロトの嫁に行ってしまう夢を見たらしいのだが、今はもうすっかり立ち直って転校生が来るのを待っていた

先生に促されて入室してきたのは栗毛のツインテール美少女だった

『おおおおおおおおおおおおおおおおおっ！』

殆どの男子は歓喜の声を上げるが、新や一誠達は喜びより驚きの方が大きかった

首から下げている十字架を見て間違いないと確信

「紫藤（しどう）イリナです。皆さん、どうぞよろしくお願いします！」

転校生の正体はエクスカリバー強奪事件の時に会った紫藤イリナだった

何も知らない男子がフィーバーする中、先生が手を叩いて言う

「静かに静かに！驚くのはまだ早い。実はな、今日はもう1人――――体験入学生が来ている！」

更に驚きの事実を告げられ、クラス内は一気に騒然となる

「先生！その体験入学生も女子ですか!?」

「いや、そっちは男子だ」

体験入学生は男だと言う事実を告げられた瞬間、男子のテンションが一気にダウン

『ふざけんなよ……』

『男なんざ来んなよ……』

『マジうっぜぇ……』

『いっぺん死んでこい……』

明らかに不機嫌な顔で悪口を飛ばす男子面々

だが、先生はそれを無視して入室を促す

「じゃあ、入ってきなさい」

ギュイイイイインッ！

いきなり耳を壊す様なギター音が響き、ドアが勢い良く開けられる

「YAH（ヤー）！HEY（ヘイ）！HEY（ヘイ）！HEY（ヘイ）！体験入学で来たZE（ぜ）！皆よろしくNA（な）！」

派手にギターを鳴らすのは頭髪の中央前部分を白く染め、オールバック気味の髪型を

したイケメンだった
その姿を見た一誠は思わず席を立ち――――――
「お、お前、まさかダイアンか!?」
「おー!久しぶりだＺＥ(ぜ)！一誠！マッツン、モットンも元気にしてたＫＡ(か)!?」
何故か一誠はこの男を知っている様子、ダイアンと呼ばれた男も一誠だけじゃなく、松田や元浜を知っている
「なぁ一誠、あいつは誰なんだ？知り合いか？」
「あいつは俺の昔のダチだよ。阿久津野大庵(あくつのだいあん)。ギタリストを目指してアメリカ留学していたんだ」
新と一誠の２学期は朝から波乱が巻き起こりそうになっていた

――――――

「ちょっと来てくれ」
休み時間、新が男子や女子から質問攻めを受けているイリナの手を引き、一誠、アーシア、ゼノヴィアと共に人気のない場所へ連れ出した
紫藤イリナは一誠の幼馴染みで、幼少時に外国へ引っ越し、プロテスタント専属の聖

剣使いになった
以前のエクスカリバー強奪事件以来会っていなかったが、こんな形で再会するとは誰も思っていなかっただろう
「おひさ～、新くん、イッセーくん、それにゼノヴィアも！」
ガバッとイリナがゼノヴィアに抱きつく
「ゼノヴィア！元気そうで良かった！立場上複雑だけど、素直に嬉しいわ！」
「ああ、久しぶりだね、イリナ。元気そうで何よりだよ。イリナが胸に下げた十字架がチクチクと地味なダメージを与えてくるのは天罰だろうか……」
元聖剣コンビの再会にゼノヴィアも笑みを見せていた
新は何故イリナがここに来たのか切り出す
「紫藤イリナだったな？神様を狂信する信徒が、悪魔の学舎に何か用か？つーか、いつから俺を名前で呼ぶ様になった？」
「おい、新。そんな言い方は無いだろう？」
新はハッキリ言って神様を好いていない
不機嫌が少し混じった言動にイリナはシュンと落ち込む
「そんな事言わないでよ……。今はもう新くんやイッセーくんを敵視したりしてないから……来て早々にそんな事言われたら哀しくなっちゃう……」

「おろ？以前なら飛び掛かってきたのに、ヤケに大人しくなってんな。冗談だ冗談。気にしなさんな」
「ところで、イリナは何でここに？」
「ミカエル様の命により使いとしてここに転校してきたの。詳しくは放課後に。場所は噂の旧校舎で、ね？」
　イリナは可愛くウインクをした
　そんな時、何者かの手によってイリナのスカートがバッと上げられる
「ヒュウッ♪スパッツＫＡ。良いね良いＮＥ♪スポーティーで元気良さそうだＺＥ♪」
　さっきの体験入学生――――――阿久津野大庵、通称ダイアンがいつの間にか参上していた
「いやぁっ！エッチィッ！」
　イリナは素早くスカートを庇って新と一誠、２人の後ろに隠れる
「よぉ一誠！こんな所で何してたんＤＡ？彼女達とエロエロトークＫＡＩ？」
「ちげーよ。ってか、本当に久しぶりだな、ダイアン。来るなら来るって言ってくれれば良いのに」
「お前を驚かそうと思ってたんだＹＯ～♪」
　ダイアンは自前のエレキギターを軽く鳴らす

「イッセーくん、このエッチな人とお知り合いなの？」
「え？あぁ、阿久津野大庵。俺達は昔からダイアンって呼んでるんだ。お前、ギタリストになる為にアメリカ留学していた筈だろ？」
「勿論だＺＥ？そして……とうとう去年にデビューを果たしたんだＺＥ！Ｙｅａｈ！」
ギュイギュイギュイギュイギュイギュイギュイギュイギュイギュイイイイイイ！
エレキギターを奏でて嬉しさを表現するダイアン
懐からジャンッ！と言う感じでＣＤを見せつけた
パッケージにはダイアンが大きく映っており、曲名は『ダイアン，ｓ　Ｓｈｏｃｋ～興奮への衝撃～』と書かれていた
「ＣＤデビューしたのか!?スゲーじゃねぇか！」
「まだまだ出番は少ないけどＹＯ、これからどんどんＢＩＧなギタリストになって紅白やＭＣも目指していくＺＥ！応援よろしくＮＡ！」
ダイアンはニカッと歯を見せながらポーズを決める
彼はその後、クラスの女子から注目を集め、得意のギター演奏を披露しに行った
新はリアスに紫藤イリナが来た事をメールで伝えたら、向こうは既に知っていたらしい

「紫藤イリナ。あなたの来校を歓迎するわ」
放課後の部室、オカルト研究部メンバー全員、顧問のアザゼル、ソーナ会長が集まってイリナを迎え入れていた
「はい！皆さん！初めまして――――――の方もいらっしゃれば、再びお会いした方のほうが多いですね。紫藤イリナと申します！教会――――――いえ、天使様の使者として駒王学園（くおうがくえん）に馳せ参じました！」
パチパチパチと部員全員が拍手を送る
その後はイリナが「主への感謝～」とか「ミカエル様は偉大で～」等と話し始め、皆は苦笑しながらも聞いてあげていた
新は聞きたい事を容赦なく訊く
「お前はさ、聖書に記された神様が死んだ事は知ってるんだろう？」
「新ぁぁぁぁっ！いきなりそれはいかんでしょう!?」
新に突っ込む一誠を見て、アザゼルは嘆息して言った
「アホか。ここに来たと言う事は、そういうのを込みで任務を受けてきた筈だ。いいか、この周辺の土地は三大勢力の協力圏内の中でも最大級に重要視されている場所の１つ

だ。ここに関係者が来ると言う事は、ある程度の知識を持って足を踏み入れている事になる」
つまり、神の消滅を既に認知していると取れる
「勿論です、堕天使の総督様。安心して、イッセーくん、私は主の消滅を既に認識しているの」
「意外にタフだな。あれだけ神、神、神と豪語していたのにショックを受けてねぇんだな」
新の言葉の後、イリナは両目から大量に涙を流した
「ショックに決まっているじゃなぁぁぁぁい！心の支え！世界の中心！あらゆる物の父が死んでいたのよぉぉぉぉっ!?全てを信じて今まで歩いてきた私なものだから、それはそれは大ショックでミカエル様から真実を知らされた時、あまりの衝撃で7日7晩寝込んでしまったわぁぁぁっ！あああああああ、主よ！」
イリナはテーブルに突っ伏して大号泣
新は地雷を踏んでしまったなと言わんばかりに顔を逸らした
元教会出身のアーシアとゼノヴィアは共感し、3人でガシッと抱き合う
そして、ふとイリナが立ち上がり、祈りのポーズをする
すると、彼女の体が輝き、背中から白い翼が生えた

全員はその事に驚くが、アザゼルだけは顎に手をやりながら冷静に訊く
「――――紫藤イリナと言ったか。お前、天使化したのか？」
「天使化？そんな現象があるんですか？」
一誠がアザゼルに訊くと、アザゼルは肩をすくめた
「いや、実際には今まで無かった。理論的なものは天界と冥界の科学者の間で話し合われてはいたが……」
「はい。ミカエル様の祝福を受けて、私は転生天使となりました。なんでもセラフの方々が悪魔や堕天使の用いていた技術を転用してそれを可能にしたと聞きました」
三大勢力の協力態勢は天使に転生させる技術にまで進んでいた
更にイリナが話を続ける
「四大セラフ、他のセラフメンバーを合わせた１０名の方々は、それぞれＡ（エース）からクイーン、トランプに倣（なら）った配置で『御使い（ブレイブ・セイント）』と称した配下を１２名作る事にしたのです。カードで言うキングの役目が主となる天使様となります」
「分かりやすく言うと、『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』の天使バージョンってとこか」
新は腕組みをしながら感心する
因みにイリナはＡ（エース）らしく、左手の甲にＡの文字が浮かんでいた
更に将来、『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』と『御使い（ブレイブ・セイント）』のゲームも見据えているらしい

悪魔ＶＳ天使のゲームも可能になる
新たなゲーム革命に全員が楽しそうにしていた
「その辺りの話はここまでにしておいて、今日は紫藤イリナさんの歓迎会としましょう」
ソーナ会長が笑顔でそう言う
イリナの歓迎会が行われようとしていた矢先――――
ピリリリリリリッ！
ピリリリリリリッ！
突如鳴る携帯の着信音
鳴ったのは一誠の携帯電話で、発信者はもう１人の幼馴染み――――ダイアンだった
「はい、もしもし？」
『よぉ一誠！何してんＤＡ？』
「これから部活の皆と歓迎会をやろうとしてるんだけど。お前も来るか？」
『Ｏｈ！Ｓｈｉｔ！そうだったのＫＡ。悪かっＴＡ、また明日かけ直すＺＥ！』
ガチャッ、ツー……ツー……
「イッセー、誰からの電話だったの？」
「今日体験入学に来ていた、俺の昔のダチです。呼びたかったけど、なんか忙しいらしく

て」
「へ～、イッセーのお友達なら是非会ってみたいわね。どんな子？」
「凄く良い奴ですよ。俺の――――大親友です」

――――――

「化け物め！滅してくれるわ！」
悪魔祓い達が一斉に武器を持って斬りかかっていく
黒い化け物は居合いの構えをしたまま1歩も動かず――――

バッ！ズドドドドドドドドドドドドドッ！
怪物が腕を振り抜いた刹那、悪魔祓い達の顔や首、心臓と言った全ての急所に鋭利な何かが刺さり血が噴き出す
悪魔祓い数十人を一瞬で殺した黒き怪物
それは一誠が電話で言っていた、大親友のダイアン……
一誠の大親友とやらは怪物となってしまっていた……
「イマイチだったNA、こいつらの魂HA。少ない学園ライフぐらいは、親友とゆっくりさせてくれYO？」

ディオドラ・アスタロト

イリナが転校、ダイアンが体験入学に来て数日経った放課後の部室
リアスは部員全員が集まった事を確認すると、記録メディアらしきものを取り出した
「若手悪魔の試合を記録したものよ。私達とシトリー眷属のものもあるわ」
眼前に巨大なモニターが用意され、アザゼルがその前に立って言う
「お前ら以外にも若手達はゲームをした。大王バアル家と魔王アスモデウスのグラシャラボラス家、大公アガレス家と魔王ベルゼブブのアスタロト家、それぞれがお前らの対決後に試合をした。それを記録した映像だ。ライバルの試合だから、よーく見ておくようにな」
アザゼルの言葉に皆が真剣に頷き、まずはサイラオーグとグラシャラボラス家のゼファードルの勝負を見た
その映像で見たのは――――圧倒的な力だった
ゼファードルの繰り出す攻撃全てがサイラオーグに弾かれ、サイラオーグの拳が相手の防御術式を破壊していく
一撃一撃がとてつもない破壊力を有しており、建物に突き刺さればソレが崩壊し、周

囲の景色も吹き飛ぶ
この試合を見て、新は更に驚いた
サイラオーグは拳と蹴りしか使っていない事に……
「……凶児（きょうじ）と呼ばれ、忌み嫌われたグラシャラボラスの新しい次期当主候補がまるで相手になっていない。ここまでのものか、サイラオーグ・バアル」
祐斗はあまりの光景に目を細めた
新も目を細め、拳を震わせていた
映像だけ見ても、強いと言う気迫を感じたのだろう
「そういや、あのヤンキー悪魔ってどのぐらい強いんですか？」
一誠の問いにリアスが答える
「今回の六家限定にしなければ決して弱くはないわ。と言っても、前次期当主が事故で亡くなっているから、彼は代理と言う事で参加している訳だけれど……」
更に朱乃も説明に入る
「若手同士の対決前にゲーム運営委員会が出したランキングでは、1位がバアル、2位がアガレス、3位がグレモリー、4位がアスタロト、5位がシトリー、6位がグラシャラボラスでしたわ。『王（キング）』と眷属を含み平均で比べた強さランクです。それぞれ、1度手合わせして、一部結果が覆ってしまいましたけれど」

「このサイラオーグだけは抜きん出ていると言う事か。もしかしてライザー・フェニックスより強いのか？リアス」
新が訊くとリアスは淡々と答える
「両者がやってみないと分からないけれど、私の贔屓目で見てもサイラオーグの方が強い気がするわ」
不死身の能力を持つライザー・フェニックスより強いと言われるサイラオーグ・バアル
新と一誠はそれを聞いて戦慄した
次にアザゼルが各勢力のパラメーターを表したグラフを出す
グラフはパワー、テクニック、サポート、ウィザード、『キング』と表示された
最も注目したのはサイラオーグのパワー
どんどんグラフは伸びていき、遂には部室の天井にまで届いた
「なんて極端且つ異常な伸び方だ……サイラオーグ以外の中で1番パワーがあるニワトリの数倍はあるぞ」
「やっぱ天才なんスかね？このサイラオーグさんも」
「いや、サイラオーグ・バアルはバアル家始まって以来の才能が無かった純血悪魔だ。バアル家に伝わる特色の1つ、滅びの力を得られなかった。滅びの力を強く手に入れたの

は従兄弟のグレモリー兄妹だったのさ。それにサイラオーグは、家の才能を引き継ぐ純血悪魔が本来しないものをして、天才共を追い抜いたのさ」

「本来しないもの？」

アザゼルは真剣な面持ちで言い放った

「凄まじいまでの修行だよ。サイラオーグは尋常じゃない修練の果てに力を得た稀有な純血悪魔だ。あいつには己の体しか無かった。それを愚直なまでに鍛えたのさ」

殆どの上級悪魔は皆才能に恵まれていたが、サイラオーグだけは才能に恵まれていなかった

彼が若手悪魔ナンバー1でいられるのは、徹底的に行った修練の賜物だろう

何とも皮肉で衝撃的な事実である……

「奴は生まれた時から何度も何度も打倒され、敗北し続けた。華やかに彩られた上級悪魔、純血種の中で泥臭いまでに血まみれの世界を歩んでる野郎なんだよ。新、お前と同じ様にな」

アザゼルがいきなり新に話を振る

部員全員の視線が新に集中した

「ん？俺か？」

「そうだ。お前は今でもバウンティハンターなんて仕事をしてんだろ？あれは常に自分

が強くならないと死ぬ職業だ。お前も血の滲(にじ)む様な修業をしていた……そうだろ？」
　アザゼルの言葉に新は頷き、昔話を始める
「あぁ、そうだよ。俺は幼少から外国で親父に鍛えられて育ってきたんだ。いや、あれは虐待に近かったな……。笑顔で激流に放り込まれたり、岩だらけの谷底に突き落とされたり、１０頭近くいたヒグマやライオン、更には巨大な鮫と戦わされたり、武器を持ったゴツいオッサンと素手で戦わされたりと、あれは正に地獄の１丁目だった……。何度死神から手招きされたことか……っ」
　新は遠い目をして天井を見た
　よく見たら新の目は光を失いかけている
　サイラオーグ同様、壮絶な過去に皆が深刻な表情で黙り込む
「新……あなたもツラい思いをしてたのね……」
　ぎゅうううっ
　リアスが新を自分の胸に抱き寄せる
　チラリと一誠を見てみると、一誠は大量の涙を流しながら新を賞賛していた
「新……！お前もそんなツラい思いを……！ってか、お前の親父さん鬼畜過ぎる……！」
「部長。どさくさに紛れて新さんを誘惑しないでください」
　ぎゅうううっ

今度は朱乃が新を胸に抱き寄せた
「ツラかったでしょう……新さん。でも大丈夫。今は私がいますわ……」
「ちょっと朱乃。新は私の眷属なのだから、主の私には慰めてあげる権利があるのよ」
「やーですわ。今私は新さんの温もりを感じていますわ」
その後もゼノヴィアと小猫が新を慰め、我に返ったところでサイラオーグとゼファードルの試合の映像が終わった
結果はサイラオーグの圧勝で、アザゼルは静まり返る空気の中で言った
「先に言っておくがお前ら、ディオドラと戦ったら次はサイラオーグだぞ」
「――――っ！マジっスか！」
一誠が驚くのも無理はない
相手は若手悪魔最強の男
戦うには早すぎると思うぐらいである
「少し早いのではなくて？グラシャラボラスのゼファードルと先にやるものだと思っていたわ」
「奴はもうダメだ。ゼファードルはサイラオーグとの試合で潰れた。サイラオーグとの戦いで心身に恐怖を刻み込まれたんだよ。もう奴は戦えん。サイラオーグはゼファードルの心――――精神まで断ってしまったのさ。だから残りのメンバーで戦う事にな

る。若手同士のゲーム、グラシャラボラス家はここまでだ」
新と一誠はリアスが「ライザーより強いかもしれない」と言う発言の意味を理解出来た
いくら不死身でも精神が崩壊すれば復活出来なくなる
新も一応追い詰めたが、サイラオーグ程ではなかった
「お前らも充分に気をつけておけ。あいつは対戦者の精神も断つ程の気迫で向かってくるぞ。あいつは本気で魔王になろうとしているからな。そこに一切の妥協も躊躇も無い」
アザゼルの忠告を全員が染み込ませる様に受け止め、リアスは深呼吸した後、改めて言う
「まずは目先の試合ね。今度戦うアスタロトの映像も研究の為にこの後見るわよ。対戦相手の大公家の次期当主シーグヴァイラ・アガレスを倒したって話だもの」
「大公が負けた？あそこも見た限りじゃそんなに弱くはなかった筈だが……」
「私達を苦しめたソーナ達は金星、先程朱乃が話したランクで2位のアガレスを打ち破ったアスタロトは大金星と言う結果ね。悔しいけれど、所詮対決前のランキングはデータから算出した予想に過ぎないわ。いざ、ゲームが始まれば何が起こるか分からない。それがレーティングゲーム……けれど、アガレスが負けるなんてね」

そう言いながらリアスが次の記録映像を再生させようとした時――――部室の片隅で転移用魔方陣が展開した

「――――アスタロト」

朱乃がぼそりと呟き、部室の片隅に爽やかな笑顔を浮かべる優男が現れた

「ごきげんよう、ディオドラ・アスタロトです。アーシアに会いに来ました」

――――

部室のテーブルにリアスとディオドラ、顧問としてアザゼルも座り、朱乃がお茶を淹れてリアスの傍らに待機する

他の皆は部室の片隅で待機

何処と無くライザーの時と似ている雰囲気を醸し出している

「リアスさん。単刀直入に言います。『僧侶（ビショップ）』のトレードをお願いしたいのです」

トレードとは『王（キング）』同士で駒となる眷属を交換出来るルールの1つで、同じ駒同士なら可能なシステムである

「いやん！僕のことですか!?」

「んな訳ねぇだろヘタレ女装」

新と一誠は揃ってギャスパーの頭を叩く
ディオドラが欲しがる『僧侶』は十中八九アーシアだろう
『僧侶』と聞いた瞬間から、アーシアは一誠の手を強く握っている
嫌だと言う主張の表れであろう
「僕が望むリアスさんの眷属は――――『僧侶』アーシア・アルジェント」
やはりディオドラは躊躇いなくアーシアを選択してきた
「こちらが用意するのは――――」
ディオドラが自分の下僕が載っているカタログらしきものを出そうとしたが、リアスは間髪入れずに言う
「だと思ったわ。けれど、ゴメンなさい。その下僕カタログみたいなものを見る前に言っておいた方が良いと思ったから先に言うわ。私はトレードをする気は無いの。それはあなたの『僧侶』と釣り合わないとかそういう事ではなくて、単純にアーシアを手放したくないから。私の大事な眷属悪魔だもの」
真っ正面からリアスは言い放ったが、ディオドラは淡々と訊いてくる
「それは能力?それとも彼女自身が魅力だから?」
「両方よ。私は、彼女を妹の様に思っているわ」
「――――部長さんっ！」

リアスの言葉にアーシアが口元に手をやり、瞳を潤ませる
「情が深くなって、手放したくないって理由はダメなのかしら？私は充分だと思うのだけれど。それに求婚した女性をトレードで手に入れようとすると言うのもどうなのかしらね。そういう風に私を介してアーシアを手に入れようとするのは解せないわ、ディオドラ。あなた、求婚の意味を理解しているのかしら？」
迫力のある笑顔で問い返すリアスだが、ディオドラは笑みを浮かべたままだった
その笑みは逆に不気味さを匂わせる……
「――――分かりました。今日はこれで帰ります。けれど、僕は諦めません」
ディオドラは立ち上がりアーシアのもとへ近寄る
当惑しているアーシアの前に立つと、その場で跪いて手を取ろうとした
「アーシア。僕はキミを愛しているよ。大丈夫、運命は僕達を裏切らない。この世の全てが僕達の間を否定しても僕はそれを乗り越えてみせるよ」
訳の分からない事を抜かしてアーシアの手の甲にキスしようとするディオドラ
そこで新は頭、一誠は肩を掴んでディオドラを制止させる
「何が運命は僕達を裏切らないだ？アーシアはもう俺達の仲間なんだよ。俺達の主様が拒否ってんだから大人しく帰れ。古くせぇロマンチシズムを語ってねぇでよ？世間知らずのアホ坊っちゃん」

新は更に挑戦的な物言いをするが、ディオドラは笑みを浮かべながら言う
「放してくれないか？薄汚いドラゴンと蝙蝠に触れられるのはちょっとね」
「ふんっ、それがてめぇの本性か」
一誠はキレそうに、新は右手に闇皇（やみおう）の鎧を展開しようとしたが、アーシアがディオドラの頬にビンタを炸裂させる
アーシアは一誠に抱きついて叫ぶ様に言った
「そんな事を言わないでください！」
ディオドラの頬はビンタで赤くなっていたが、それでも奴は笑みを止めない
ここまでされても笑みを絶やさないとなれば不気味を通り越して畏怖感が沸き上がってくる
「なるほど、分かったよ。では、こうしようかな。次のゲーム、僕は赤龍帝（せきりゅうてい）の兵藤一誠を倒そう。そうしたら、アーシアは僕の愛に答えて欲し――――」
「お前に負ける訳ねぇだろッ！」
一誠は面と向かって言い切る
その時アザゼルの携帯が鳴り、いくつかの応答の後にアザゼルは告げる
「リアス、ディオドラ、丁度良い。ゲームの日取りが決まったぞ。５日後だ」
その日はそれで終わり、ディオドラは帰っていった

一誠は新たな決意のもと、ゲームへの気合いを入れだした

ダイアンの正体

次の日、新と一誠のクラスは体育祭の練習に励んでいた

イリナとゼノヴィアがグラウンドを爆走している中、一誠、松田、元浜の３人は躍動する女子達の胸を卑しい目で観察していた

「やっぱ、おっぱいは揺れる時が最高だよな……」

「ああ、あの動きに勝る瞬間は無いな……」

「大きい小さいにかかわらず、揺れ動くおっぱいは人類の宝と言えよう……」

新は流石に付き合いきれずに距離を取っていると、体験入学生のダイアンが走り終わったイリナとゼノヴィアに近づいていく

「ＨＥＹ！お二人ＳＡＮ。今日穿いてるパンツの色を教えてくＲＥ――――って、一誠が言ってたＺＥ？」

「おい一誠、あのダイアンとか言う奴がお前の名前を使ってゼノヴィアとイリナのパンツの色を聞き出そうとしてるんだが」

「なにぃっ!?ダイアン！お前はなんて良い奴なんだ！」

「良いのかよっ!?」

再びイリナ達がいる方向を見てみると、ダイアンがイリナに追い掛けられていた
どうやら失敗したようだ……
逃げ切ったダイアンが一誠達の所に来る
「スマン一誠。失敗しちまっＴＡ」
「気に病むなダイアン。失敗を乗り越えてこそ、おっぱいもパンツも応えてくれる時が来る筈だ！」
「ＹＡＨ！そうだＮＡ！Ｎｅｖｅｒ　Ｇｉｖｅ　Ｕｐ！の精神でいくＺＥ！」
「次、阿久津野。スタートラインに着け～」
Ｎｅｖｅｒ　Ｇｉｖｅ　Ｕｐの精神は先生の呼び掛けによって掻き消された
ダイアンの他に松田も呼ばれ、計４人がスタートラインに立つ
「ダイアンくーん！」
「頑張ってーっ！」
「こっち向いてーっ！」
女子達の黄色い声援にダイアンは大きく手を振る
そんな中、同じスタートラインに立っている松田以下３人は闘志を燃やす
「おのれダイアン……！昔は『スカートめくり大使』とか言われてたくせに女子達から好かれやがって……！パンチラ激写で鍛えた走力で恥をかかせてやる！」

パンッ！
スタートの合図が鳴り、松田以下３人は最高のスタートダッシュを決め、ダイアンは少し遅れた
「ハハハハハハ！どうだイケメン野郎！ギターが弾けるだけの能無し男とバカにされるがいい！」
松田が余裕と汚い顔でダイアンをバカにしていると、ダイアンのスピードがグングン上昇していき、あっという間に３人を大きく引き離した
「Ｙｅａｈ！いっちゃ～ＫＵ！」
「な……っ!?あ、あんな所から一気に……」
「そ、そんな……現役野球部の俺が……っ」
「……ガク……ッ」
松田以下２人はｏｒｚのポーズで沈み、ダイアンのもとに女子達が集まる
一誠もあまりの速さに驚き、訊いてみる事にした
「ダイアン。お前、そんなに足速かったっけ？」
「Ｏｈ、知らなかったのＫＡ？俺スポーツ全般は得意なんだＺＥ？」
この一件から、ダイアンは放課後に体育会系部活に片っ端から勧誘され体験入部し、部員達のプライドをズタズタにしてしまったとか……

その夜、一誠はイリナとダイアンをオカルト研究部の部室に呼び、部員達にダイアンを紹介する事になった

その際ダイアンは近くのファーストフード店で食べ物を買って皆に分けるつもりだったのだが……

「おいおい、ポテトとジュースしかねぇぞ……」

人数分のポテトLサイズとジュースLサイズしか買っていない事に絶句した

「え？なんDE？ポテト美味いJAN」

「ダイアン、せめてハンバーガーぐらい買えよ……」

新と一誠は呆れながらも歩みを進め、オカルト研究部の部室に到着した

「Wow！なんかスッゲーNA！」

「いらっしゃい。あなたがイッセーの言ってたお友達ね？私はリアス・グレモリー。オカルト研究部の部長を務めてるの」

「スッゲー美人さんJAN！あっちにもこっちにも美少女だらKE！良いNA～、お前羨ましいNA～」

ダイアンは興奮の連続で一誠も笑顔になるが、ただ1人――――祐斗だけは何故か浮かない顔をしていた

「ん？どうした木場？なんか怖い顔になってるけど」

「イッセーくん……聞いて良いかな？彼、名前はなんて言うの？」
「名前？阿久津野大庵。俺はダイアンって呼んでるけど、それがどうし――――」
ザッ！
一誠から名前を聞いた途端、祐斗は部室の片隅に置いてあった剣を取り、刃先をダイアンに向けた
突然の行動に部員達は驚きを見せ、一誠は怒りの形相で詰め寄る
「何してやがんだ木場ァ！いくらお前でも、俺のダチに剣を向けるなんて許さねぇぞ！」
「イッセーくん、落ち着いてよく聞いて。彼は――――僕達の敵だ」
「どういう事だ祐斗。いきなり言い出すから、それなりの根拠があるのか？」
「ん？お前――――もしかしてパーティ会場にいた聖魔剣使いＫＡ!?スッゲー知り合いがいるんだな一誠！」
一誠は耳を疑った
何故初対面である筈の祐斗を知っているのか……
一誠はゆっくりとダイアンの方を向いた
「ダイアン……？お前、なんで木場の事を知ってるんだ……？木場とは初対面なんだろ……？なんで……」
「イッセーくん。ツラい現実を突き付ける様で悪いけど……言うよ？彼は以前、冥界で

行われたパーティに襲撃してきた『チェス』の一員、闇人(やみびと)なんだ」

『――――ッ！』

祐斗の言葉に全員がダイアンから距離を取った

部員の殆どが臨戦態勢を取る中、一誠は信じられない様に呆然とする

「おい、嘘だろ……？嘘だろダイアン……？嘘なんだよな？なぁ、頼むよ。嘘だと言ってくれよ！」

「闇人(やみびと)……あ、確かそんな名前だったっＫＥ(け)？」

一誠の願いは速攻で裏切られた

久々に会った親友が闇人(やみびと)になっているなど……信じたくもないだろう

だが、容赦ない現実が目の前にある事には変わりない

「ここじゃ話が進まないかもしれない。外に出ようか？」

「外？ＯＫ！でも、ちょっと待っててくＲＥ(れ)。ポテト食いたいかＲＡ(ら)」

殺気が立ち込める中、ダイアンは意にも介さずポテトとジュースを貪(むさぼ)る

一誠はその場に立ち尽くしたまま、まだ目の前の状況を信じられずに――――信じたくないと涙を流していた

――――

ポテトとジュースを胃袋に収めたダイアンとオカルト研究部全員は結界を張ったグラウンドの中にいる
祐斗は聖魔剣を抜き、ダイアンはギターを持ったまま棒立ちしている
「んで、この結界の中で何をするんＤＡ？」
「まず質問に答えてくれ。闇人の君はここに何をしに来たんだ？」
ドスを効かせた声音でダイアンに訊く祐斗
ダイアンは何故そんな事を聞かれなきゃいけないのか理解出来ないと言った様子で答える
「何をしＮＩ？親友の一誠がいる学校に来たかっただけなんだけＤＯ。それが何かいけねぇのＫＡ？」
「そもそも闇人がここに来る事自体いけないよ」
「俺は一誠と親友なんだＺＥ？親友に会いに来ちゃダメなのＫＡ？」
「それは君の正体を確かめてから決める事だ」
少しの静寂が包み込み、ダイアンはギターで悲しげなメロディーを奏でる
「ＯＫ。どうやら話が通じない相手らしいＮＡ」
ダイアンの体が音を立てて何かに変異していく

少し経って現れたのは、冥界のパーティで見たのと同じ――――――祐斗が戦った『チェス』の『ポーン』だった……

その光景を目にした一誠は首を何度も横に振った

「嘘だよな……？ダイアン、なんで……なんでお前が闇人になってんだよ……！」

「なんでっＴＥ……俺の夢を叶えるためだＹＯ」

ダイアンはここから自分が闇人になった経緯を話し始める

中学卒業後、ギタリストを目指すためにアメリカへ留学

バイトをしながら数多くのオーディションを受けた

しかし、現実はあまりにも厳しく……ダイアンの魂を込めたギターと歌を否定され、オーディションに受かったのはただ上手いだけ、顔が良いだけの連中だった

落とされた回数は１００を超え、ダイアンは一時期自殺を考えた……

そこへ『ビショップ』と名乗る少年から「君の夢や欲望を叶えたいなら、ボクらの仲間になってみる？」とスカウトされた

溺れる者は藁をも掴む……ダイアンはその思いで一１本の藁――――――闇人の力に手を出してしまい、『チェス』の一員になった……

そこからダイアンの人生は逆転、念願のデビューを果たしてＣＤも売れるようになり、今まで自分をバカにしていた連中も音楽界から姿を消した

ただし、夢を叶える代わりに『チェス』の『ポーン』となって冥界、天界、人間界の支配に加担するのを条件に出され、拒否をすれば今までの功績を無にすると言われた……

「俺にとってこの力ＨＡ……たった１本の藁なんだＹＯ！たった１本しかない命綱なんだＹＯ！何度も落とされていく内に、自分の力じゃどうしようもない事に気付いちまったんＤＡ！だから、俺は悪魔に魂を売ってでも夢を叶えたかっＴＡ！夢を叶えて一誠にも俺の魂を聞かせてやりたかったんＤＡ！それの何がいけないんだＹＯ!?」

強い熱意と悔しさを交えて論ずるダイアン

その気持ちは理解出来ないものではなかった……ただ、やり方を間違えてしまっただけ

「一誠、お前なら分かってくれるだＲＯ？自分だけじゃどうする事も出来ない事態に遭遇したら、誰かに助けを求めるだＲＯ!?それと同じじゃねぇＫＡ！」

「同じじゃねぇよ……！例えどうしようもなくても、手を出しちゃいけねぇものだってあるんだよ！ダイアン！お前は自分に負けて、闇人の力に手を出しちまったんだ……！俺だってハーレム作りたいって夢を持ってる！でも、それは自分の力で叶えたいんだ！俺も訳あって悪魔になっちまったけど、この世界を支配してまでハーレムを作りたくない！だってよ、ハーレム作ったって……女の子達が悲しい顔をしてたら嬉しくないだろ

!?」

「――――ッ！悪魔？一誠が悪魔だＴＯ……？」

ダイアンは一誠が悪魔になっている事を知り、額を押さえて首を振る

「ゴメン、俺も騙すつもりはなかったんだ……。ただ、これだけは分かってくれ！俺はお前を親友だと思ってる！だから、その親友のお前と戦いたくない！頼む！もう誰かを苦しめて、自分の夢を汚さないでくれ！」

一誠は必死でダイアンを説得する

ダイアンは金色の目から流れる涙を拭い、一誠の顔を見る

「一誠、お前ってＳＡ……昔と変わってねぇＮＡ。バカでもまっすぐＤＥ……その強い意志が羨ましいＹＯ。そして……今俺の中で、お前がとても大きな存在に見えＴＡ！お前を２度も裏切る様で悪いＧＡ、俺はお前を打倒すＲＵ！強くなったお前を超えてみたいんＤＡ！」

ダイアンは仕込み剣を右手で抜き、左手に持った三ツ又槍と共に構えを取る

一誠は考え直す様に言おうとするが、新に止められる

「一誠。ツラいだろうが、あいつはもう引き下がるつもりはねぇだろうよ……。覚悟を決めろ。ゼノヴィアにもいずれ……神代剣護と戦わなきゃならねぇ日が来るんだ……」

一誠は涙を拳で拭い、祐斗の所に歩みを進める

覚悟を決めた顔でこう言った
「木場、下がってくれ。ダイアンは俺が止める」
「……彼、相当強いよ？」
「関係ねぇよ。あいつは俺のダチだ。ダチが横道に逸れたら殴ってでも連れ戻す。それが親友の俺がやらなきゃいけない事だ」
一誠の決意に祐斗は剣を鞘に収めて後ろへ下がる
「ダイアン。闇人（やみびと）である以上、手加減は出来ねぇ。全力で殴るぞ？」
「俺は今、ようやくお前と並べたかもしれNA（ない）I。そしてお前は答えてくれTA（た）。だから、そんなお前に俺は勝ちTA（たい）I！」
一誠はブーステッド・ギアを起動させ、パワーを充電する
対するダイアンは構えたまま動かず、攻撃を仕掛けてこない
一誠はその姿勢にダイアンの心境が予想出来た
『全力でお前を倒したいから、お前も全力を出してくれ』と……
時間が経つ毎にパワーが溜まり、一誠は準備を整えた
「いくぞダイアアアアアアアアンッ！」
『Welsh（ウェルシュ） Dragon（ドラゴン） Balance（バランス） Breaker（ブレイカー）!!!!』
音声と共に一誠の全身が赤いオーラに包まれ、『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）』が具現化する

「……ッ！スゲェ……！スゲーＹＯ！一誠！ビシビシ力を感じるＺＥ！」
ダイアンは剣と三ツ又槍から鋭い魔力の波動を一誠に飛ばす
一誠は堅牢な鎧で弾き返しながら距離を詰め、右拳打を振るう
ダイアンはそれを槍先で防御し、逆手に持ち替えた剣で突き刺す
一誠はギリギリで回避し、腹に拳を放つ
「ガハッ……！や、やるじゃねぇＫＡ……俺も負けていられないＺＥ！」
ダイアンは剣を順手に持ち替え、柄の部分で一誠の脳天を叩く
下を向いた頭を蹴り上げ、２本の武器を合わせたエレキギターから魔力の塊を放ち、一誠を吹き飛ばした
「ぐっ……！ゲホゲホッ！すげぇパワーだ……！あんな細い剣で、中にまで衝撃を与えやがった……」
「『Ｒａｐｉｄ　Ｓｔｉｎｇｅｒ』！」
ダイアンの剣と槍の突きによる斬撃が無数に飛ぶ
一誠は回避出来ず、両腕を交差して防御した
「まだまＤＡ！『Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｓｈｏｃｋ』！」
エレキギターの音波が長い蛇の様な形となって地面を抉りながら突き進み、大爆発を引き起こす

しかし、一誠はその爆発を耐え抜いた
「俺だって、まだまだこんなもんじゃ倒れねぇぞ！」
「やっぱり強いＮＡ、一誠。だったら……こいつを使うしか無さそうＤＡ」
ダイアンは刀をギターに収め、居合いの構えを取り静止する
一誠は静寂な迫力に気圧され、なかなか前に出れない
離れ技のドラゴンショットを撃とうとした瞬間――――
シュッ！ズドドドドドドドドドドドッ！
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
一誠の鎧に無数の何かが突き刺さり、傷口から血が流れ出てくる
「イッセー！」
「イッセーさん！」
直ぐ様アーシアが一誠に駆け寄る
何が起こったのか、一誠は全く理解出来なかった
「な、何だ……!?今、全身を何かで貫かれたかの様な痛みが……！」
勝負ありと判断したのか、新と祐斗が止めに入る
「今日はここまでにしてくれ。今のでとりあえず勝負は着いた。一誠、さっきくらった技は今のお前には――――いや、俺達でも避けれねぇかもしれない」

「え？どういう事だ？」
「僕でも躱せるかどうか分からないよ。でも、技の正体だけは分かった。彼が剣を振った瞬間――――剣先が飛んできたんだ」
〝剣先が飛んできた〟
その言葉を聞いても一誠は分からず、ダイアンが前に来て説明をする
「そいつの言う通り、俺の仕込み剣は魔力を形成させたものＤＡ。一度鞘である『エレク』の中に収めれば変幻自在の武器となＲＩ、俺の意志で飛ばす本数も自在に変えられＲＵ。これが俺の中で一番の必殺奥義『牙流転生』ＤＡ」
ダイアンが仕込み剣をギターに収め、魔人態の姿を解除する
「一誠。今日は俺の勝ちだったけＤＯ、俺はお前がここで終わるような男じゃないと思ってＲＵ。だから、もっと強くなって、お前の夢を……魂をぶつけてくＲＥ！」
「勿論だ！ダイアン、俺達は親友、だよな？」
「Ｙｅａｈ！」
親友の２人はお互いの強さを称え握手を交わす
悪魔の道に入った一誠と、闇人の道に入ったダイアン
２人が行く道は違えど、絆だけは失っていない

冥界テレビ出演

　ダイアンとの戦いを終えた次の日、深夜の悪魔稼業で新は一誠と合流し、自販機の前で座っていた
「上級悪魔か……」
「どうした一誠？いつもより浮かねぇ顔をしてるな。やっぱり親友が闇人（やみびと）だった事が響いてるのか？」
「それもあるけどよ……上級悪魔について考えてたんだ。自分達以外の悪魔を見下してる様な態度が目立つから……」
　悪魔社会、基本的に旧家の上級悪魔は転生悪魔や下級悪魔をよく思っていない
　一誠はチャリを漕いでいる時も、それについてばかり考えていたらしい
「なぁ新。俺はさ、アーシアの事は……大事な仲間だと思ってる」
「どうしたいきなり？んなもん当たり前だろ」
「じゃあさ……もし、アーシアが無理矢理連れてかれそうになったらどうする？」
「拉致った奴を殺す。世界規模でぶっ殺す。上級悪魔でもぶっ殺す」
「……そうだよな。アーシアだってあいつの、ディオドラにビンタかましてくれたんだ

よな……俺のために」
「あぁ、そうだ。あんなに健気で意志を強く持てる女は何よりの宝だ。そして大切だ。その想いに応えてやるのが男の務め――――ッ！」
話の途中で気配を感じた新と一誠はその場を飛び退く
闇夜から姿を現したのはラフな格好の男だった
「おひさ、赤龍帝、闇皇の」
「てめぇは何時ぞやの孫悟空じゃねぇか」
「美猴！なんでお前が！」
新は殺気が無い事に気付いたが、一誠は警戒をやめない
「ま、相棒の付き添いでさ」
美猴が後ろに顔を向ける
そこから現れたのは白ワイシャツ姿の白龍皇ヴァーリだった
「２ヶ月ぶりだ、兵藤一誠、竜崎新」
「ヴァーリッ！」
一誠は警戒を高めるが、新は口笛を鳴らして言う
「よぉ、白龍皇さん。こんな夜更けに何か用か？」
「たまたま近くを通りかかったから、挨拶をしに来ただけだ」

「どうせなら、ここでこの前の続きやるか？」
「随分と戦闘的じゃないか、兵藤一誠」
「こちとら将来の未来計画のためにお前が邪魔で邪魔で仕方ないんだよ」
「上級悪魔になる事か？心配しなくてもキミなら数年もしない内に上級悪魔になれるんじゃないかな。っと、今日はそういう事を言いに来たわけじゃない」
怪訝に思う一誠を余所に、新は何なんだと訊いてみる
「レーティングゲームをするそうだな？ディオドラ・アスタロトには気をつけた方が良い」
「どういう事だ？」
「記録映像は見たのだろう？アスタロト家と大公の姫君の一戦だ」
ディオドラが帰った日、新達はディオドラ対アガレスの試合記録映像を見た
結果はディオドラの勝ちだったが、その過程を見て全員が訝しげに思った
ディオドラだけが急激にパワーアップし、アガレスとその眷属を撃破した
アザゼルとリアスは「ディオドラはあそこまで強い悪魔ではなかった」――――と意見が一致
短時間でそこまで強くなるのはおかしいと新も疑う程に
「ドーピングでもしてたりして」

「案外そうかもしれないぜぃ？」
新は十中八九ドーピングはしてるだろうと睨んだが、詳しい正体までは流石に分からない
とにかく用心するしかなかった
「まぁ良いか。帰るぞ、美猴（びこう）」
「待てよ。それだけを言いに来たのか？わざわざ？」
「さっきも言っただろ。近くに寄ったから、未来のライバル殿に忠言をしに来ただけさ」
「じゃあな。なぁヴァーリ。帰りに噂のラーメン屋寄っていこうや～」
ヴァーリは美猴（びこう）を引き連れて立ち去ろうとしたが、いきなり立ち止まり振り返った
「そうだ。ちょうど良かった。闇皇（やみおう）、黒歌（くろか）がお前に対して言っていた事だが」
「あぁ、あのグラマーな女か。何だ？今度お茶でもしようってのか？」
「いや――――『今度会ったら本気で犯す』だと。お前は凄いな。敵でも女に好かれるのだから」
黒歌（くろか）の伝言に新は特大の寒気を感じた……

「冥界テレビ？」
『ええ、そうよ。取材が入ったから、冥界のテレビ番組に私達が出るの。若手悪魔特集で出演よ』
家に帰った直後、新はリアスから話を切り出された
内容はテレビ出演が決まった報告
因みにリアスは今入浴中で――――朱乃、ゼノヴィア、小猫も一緒だった
先に風呂から上がって会話内容をコッソリ聞いたレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトはヒソヒソと話し合う
いくつかの応答の後、新はカシスオレンジを飲みながらソファーに座る
「アラタ、テレビ出演って本当なの？」
「あぁ。当日は一誠の家に集合して、そっから魔方陣でジャンプするんだと」
「アラタ芸能界デビュー？くぅ～っ！羨ましいな～！うちも出た～い！」
「我が儘言うな。若手悪魔特集だから、出れるのはグレモリー眷属だけなんだよ」
ムスッと頬を膨らますミッテルトは新の膝に座る
「ズルいズルい～。うちらだってチヤホヤされたいのに。もうっ」
「いじけんなよ。冥界産の酒と温泉の素を買ってきてやったんだから、機嫌直せよ？」
「アラタが買ってきたアレか。なかなか良い代物だ。肌がこんなにツヤツヤになった」

カラワーナがタオルを取って堂々と裸を見せつける
レイナーレとミッテルトも負けじとタオルを取った
「どうアラタ？私の肌もこんなに綺麗になったのよ？」
「うちだってこんなに！ツルツルなんだから！」
「おーおー。乳首が輝いてるぜ」
堕天使３人組は新とイチャつき始めた
レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの乳房（おっぱい）をそれぞれ揉みまくり、濃厚なキスもしていく
「はぁ……アラタ、好き」
「うちも大好き♪」
「私も、アラタが好きだ」
「可愛らしい事言ってくれるじゃねぇか。このぉっ」
新は再び３人の乳を揉んでいると、入れ替わりで風呂に入っていたリアス、朱乃、ゼノヴィア、小猫がタオルを巻いた姿でやって来た
「……新、随分と良いご身分ね？主を差し置いて３人もの女性を侍らせてるなんて」
リアスは迫力ある笑みを浮かべ、新はフフンと鼻を鳴らして言う
「男が何故（俺）、女の乳を揉むか……それは――――そこにおっぱいがあるからだ」

「真面目な顔でそんな台詞を言われるとは思わなかったわ」
「あらあら、私達だけ除け者なんてズルいですわ」
「新、私も混ぜてくれ」
朱乃とゼノヴィアはイチャつきに参加するべく、タオルを投げ捨てて裸で新に抱きつくが、小猫は「……失礼します」と言い残し、複雑そうな表情で部屋に戻っていく
一方でリアスは――――ムッとした表情で新を堕天使3人組から引き離し、自分の胸に密着させた
その行動が火種となり、周囲の空気がピリピリし始める
「ちょっと、アラタを独り占めしないでよ」
「いいえ、私はこの子の主よ。私にはこの子を躾(しつけ)する義務があるわ。これから部屋に戻って女性への接し方について話をしないといけないの」
「あらあら、リアスったら。随分な言い訳ですこと。新さんは私のおっぱいを所望していますのに無理矢理引き離すなんて無粋ですわ」
「いつ新がそんな事を言ったのかしら?」
リアスが紅いオーラを揺らめかせ、朱乃も負けじと雷のオーラをバチバチと迸(ほとばし)らせる
「新さんへの愛が通じた私には彼の目を見ただけで分かるのよ」
「そんなの自分勝手な憶測じゃない!だいたい朱乃の胸を常日頃から触ってる新は、そ

ろそろ私の胸を欲しいと思っている筈よ！」
「それこそ屁理屈ね！新は私の胸をいつまでも触っていたくなる程気持ち良いって言ってくれたわ！」
「新は正直で女ったらしだから、そう言ったに過ぎないのよ！って、新を呼び捨てに!?」
「良いじゃない！２人っきりの時はいつも呼んでるわよ！新アラタ新アラタ新アラタ！リアスのバカ！」
「朱乃のおたんこなす！今日と言う今日は許さないんだから！」
リアスと朱乃が取っ組み合いの喧嘩を始めようとした矢先……「それは違うわね！」と異論を唱える者がいた――――レイナーレだ
「分かってないわ！アラタは私のおっぱいが好きなのよ！それに、私はもう２回もアラタと交わったんだから」
ピクッ……
レイナーレのセッ○ス発言にリアスの片眉が上がり、朱乃も迫力ある笑みを浮かべた
「……でしたら、私は今ここで３回――――いえ、倍の４回新と肌を重ねますわ」
「……ッ！ダメ！ダメよ！私の目が黒い内はそんな事させないんだから！」
「朱乃さん！抜け駆けはズルいぞ！新は私と子作りをするんだ！」
「子作りってどーゆー事!?アラタ！うちとのセッ○スを忘れたの!?」

「落ち着けミッテルト。アラタ、エッチは許すが子作りは聞き捨てならないな。ちゃんと説明をしてもらおう」
「え～、ちょっとマチナサイ。いっぺんに言われても……」
「冗談じゃないわ！アラタ！今すぐ私とエッチしなさい！」
「新、誰が本妻なのかをリアスと堕天使の皆さんに分からせてあげましょうね？」
「ちょっと！どさくさに紛れて新に覆い被さらないで！」
その日は壮絶な女同士のヌードレスリングが行われ、新は縮こまるしか出来なかった

テレビ収録当日
新達が魔方陣で冥界でジャンプすると、到着した場所は都市部にある大きなビルの地下
プロデューサーに連れられてビルの上層内に着くと、廊下の先から見知った顔が歩いてくる
「サイラオーグ。あなたも来ていたのね」
リアスが声をかけたのはバアル家の次期当主サイラオーグ・バアルだった

その後ろには金髪ポニーテールの女性でサイラオーグの『女王(クイーン)』が控えている
新と一誠好みの以下略……
「リアスか。そっちもインタビュー収録か？」
「ええ。サイラオーグはもう終わったの？」
「これからだ。おそらくリアス達とは別のスタジオだろう。試合、見たぞ。お互い新人丸出し、素人臭さが抜けないものだな」
苦笑するサイラオーグの視線が新と一誠に移る
「どんなにパワーが強大でもカタにハマれば負ける。相手は一瞬の隙を狙って全力で来る訳だからな。とりわけ神器(セイクリッド・ギア)は未知の部分が多い。何が起こり、何を起こされるか分からない。ゲームは相性も大事だ。お前らとソーナ・シトリーの戦いは俺も改めて学ばせてもらった。だが、お前達とは理屈無しのパワー勝負をしたいものだよ」
サイラオーグは2人の肩をポンっと叩き、去っていった
軽く叩かれただけでも重みを感じる
若手最強の悪魔に期待され、新と一誠は番組が始まる前から緊張してしまった
その後、スタジオらしき場所に案内され、スタッフが声をかけてくる
「えーと、木場祐斗さんと姫島朱乃さん。それに竜崎新さんはいらっしゃいますか？」
「あ、僕です。僕が木場祐斗です」

「私が姫島朱乃ですわ」
「俺が竜崎新だ」
　３人が揃って手を上げる
「あなた方に質問がそこそこいくと思います。３人とも人気上昇中ですから」
「マジっスか！」
　一誠が驚きの声をあげるとスタッフは頷く
「ええ、木場さんは女性ファンが、姫島さんには男性ファン、竜崎さんはかなりの女性ファンが増えてきているのですよ」
「ほう。そりゃまた何故に？」
「ここだけの話、その女性ファンの多くは竜崎さんに脱がされたい、いじめられたいと強く所望しているらしくて……」
　新の女性ファンはドＭが多かった様です（笑）

「あ～、疲れた……」
　収録後、全員が楽屋でぐったりしていた

特に新はこの手のものに慣れておらず、楽屋に入るなり壁に凭(もた)れて魂が抜けたかの様になっていた

質問の時も「エッチ蝙蝠さ～ん！」とか「私を脱がして～！」だの黄色い声が飛んできたりしたからてんてこ舞い

一誠の方もお客の子供達から「ちちりゅーてー！」「おっぱいドラゴン！」って声をかけられていた

『乳龍帝(ちちりゅうてい)』と言う二つ名にドライグはマジ泣きしてしまったとか……

こうして取材も終わり、ディオドラとの一戦が間近に迫っていった

卑劣なディオドラ

「そろそろ時間ね」
リアスがそう言って立ち上がる
決戦当日、新達はオカルト研究部の部室に集まっていた
アーシアはシスター服、ゼノヴィアは黒いボンテージ風の戦闘服、そして新はいつものロックミュージシャン服と準備万端
他の皆は駒王学園の夏服だった
中央の魔方陣に集まり、転送の時を迎える

「……着いたのか？」
目を開けて視界に飛び込んで来たのはとてつもなく広い場所だった
ギリシャにありそうな神殿の様な風景で、後方に入り口があった
「……おかしいわね」

対戦相手であるディオドラの現れる気配がせず、リアスが怪訝そうに言う
他のメンバーも訝しげに思っていると、神殿とは逆方向に魔方陣が出現する
しかも、1つだけじゃなく辺り一面、新達を囲うように
「……アスタロトの紋様じゃない！」
祐斗が剣を構え、朱乃も手に雷を走らせる
「……魔方陣全て共通性はありませんわ。ただ――――」
「全部、悪魔。しかも記憶が確かなら――――『禍の団（カオス・ブリゲード）』の旧魔王派に傾倒した者達よ」
魔方陣から大勢の悪魔が現れ、新達を激しく睨み付ける
だが、それは序章に過ぎなかった……
バサッバサッバサッ！
ブブブブブブブブブブッ……！
上空から聞こえる羽音
見上げてみると鳥類、昆虫類などの生物を象（かたど）った化け物の軍勢が空を覆い尽くしていた
その数はおよそ１０００匹
『禍の団（カオス・ブリゲード）』の悪魔達と合わせると敵の数は２０００以上になる

「『禍の団』だけじゃなく闇人まで!?何だ、何がどうなってやがんだ！」
「忌々しき偽りの魔王の血縁者、グレモリー。ここで散ってもらおう」
悪魔の1人がリアスに挑戦的な物言いをする
その数秒後、突然アーシアの悲鳴が聞こえた
振り向いても、そこにアーシアはいない
「イッセーさん！」
空から聞こえてきた声
上を見るとアーシアを捕らえたディオドラ、その隣には魔人態の村上京司がいた
「やあ、リアス・グレモリー。そして赤龍帝。アーシア・アルジェントはいただくよ」
「久しぶりだな、諸君。この間はよくも私のビジネスを潰してくれた。その罪を償ってもらうぞ」
「村上！てめぇ、まだ生きてやがったのか！」
「アーシアを放せ！このクソ野郎！卑怯だぞ！つーか、どういうこった！ゲームをするんじゃないのかよ!?」
一誠の叫びにディオドラは醜悪な笑みを見せる
「バカじゃないの?ゲームなんてしないさ。キミ達はここで彼ら――――『禍の団』のエージェント達と闇人に殺されるんだよ」

「その通り。いくら力量が高い君達であろうと、この数の上級、中級悪魔を相手に出来まい。更に言ってしまえば、この闇人達は単なる量産型ではないぞ。上級、中級悪魔と互角以上の力を持った改良品だ。クックックックッ、名門らしく華々しく死んでくれたまえ」
「ディオドラ。あなた、『禍の団』だけでなく闇人とも通じたと言うの？最低だわ。しかもゲームまで汚すなんて万死に値する！何よりも私の可愛いアーシアを奪い去ろうとするなんて……ッ！」
激昂したリアスのオーラが一層盛り上がる
新と一誠も戦闘態勢に入った
「彼らと行動した方が、僕の好きな事を好きなだけ出来そうだと思ったものだからね。ま、最期の足掻きをしていてくれ。僕はその間にアーシアと契る。意味は分かるかな？赤龍帝、僕はアーシアを自分のものにするよ。追ってきたかったら、神殿の奥まで来てごらん。素敵なものが見られる筈だよ」
「一誠！アスカロンをゼノヴィアに渡せ！」
「おう！」
新の呼び掛けに反応した一誠は籠手を出し、先端から聖剣アスカロンを取り出してゼノヴィアに渡した

「アーシアは私の友達だ！お前達の好きにはさせん！」
ゼノヴィアは素早く宙に浮かんでいるディオドラと村上に斬りかかろうとした
村上が左腕を水平に掲げると、異変が起こる……
グキグキグキッ……ドバァァァァァッ！
鈍い音が発せられ、村上の左腕からトゲだらけの蔦が皮膚を突き破り、鎧の様にまとわりついて巨大な腕を作っていく
そして拳撃1発で聖剣ごとゼノヴィアを地面に叩き落とした
「どうだね？私の新しい腕は。以前の戦いで光帝の鎧を宿す者に肉体を殆ど斬られたから再生したのだよ。お陰でこれ程逞しい腕と体が出来上がった。だが、君達は簡単に殺しはしない。光帝の鎧の宿主分も含めて、バラバラの肉塊にしてくれよう」
「イッセーさん！ゼノヴィアさん！イッ――――」
助けを請うアーシアだったが無情にも空間が歪み、次第にアーシア、ディオドラ、村上の姿が消えていった
「アーシアァァァァァァァァッ！」
「一誠！今は目の前の敵を片付けるのが先だ！」
新は一誠に檄を入れ、一誠も頷いて囲っている悪魔と闇人の軍勢と対峙する
打開策を考えていると、新が何かの気配に気付く

気配がする方向を見てみると、ローブ姿の隻眼ジジイが朱乃のスカートを捲ろうとしていた
「てめぇこのクソジジイ！」
バゴッ！
新は朱乃のスカートを捲ろうとしていたジジイに膝蹴りをぶち込んだ
「キャッ！あ、新さん？」
朱乃を庇う様に立つ新
ジジイは蹴られた頭を擦りながら平然としている
「もう少し年寄りを労らんかい。減るもんじゃあるまいし」
「喧しいわジジイ！朱乃の体は俺のもん――――って、あんたはオーディンじゃねぇか！」
そう、そこにいたのは北欧の主神オーディンだった
「オーディン様！どうしてここへ？」
「俺だっているＺＥ！」
ギュイギュイギュイギュイギュイイイイイインッ！
聞き覚えのあるギターの音色
オーディンがいる方向とは別の方向を見てみる

一誠の親友であり、『チェス』の『ポーン』でもあるダイアンが魔人態で参上していた
闇人の幹部がいる事に皆動揺したり、警戒したりするがダイアンは手を向ける
「Ｗａｉｔ！Ｗａｉｔ！安心してくＲＥ！今回だけ俺は味方だＹＯ！」
「味方？どういう事？」
「話すと長くなるから手っ取り早く言うＺＥ？このゲームが『禍の団』に乗っ取られた
だけじゃなＫＵ、『チェス』の誰かが『禍の団』と結託したらしいって疑惑があったん
だＹＯ！俺は『キング』の命令でここに来たんＤＡ！」
『禍の団』と結託……今さっき村上がいたんだが、間違いなくそいつだよな」
「村上ＫＡ……。最近裏で何かしていると思っていたＧＡ、やっぱり俺達を裏切ろうと
していたのＫＡ」
　ダイアンが一足地面を踏み、オーディンが髭を擦りながら言う
「今、運営側と各勢力の面々が協力態勢で迎え撃っとる。ま、ディオドラ・アスタロトが
裏で旧魔王派と闇人の手を引いていたのまでは判明しとる。先日の試合での急激なパ
ワー向上もオーフィスに『蛇』でも貰い受けたのじゃろう。だがの、このままじゃとお
主らが危険じゃろ？救援が必要だった訳じゃ。しかしの、このゲームフィールドごと強
力な結界に覆われててのぅ、そんじょそこらの力の持ち主では突破も破壊も難しい。特
に破壊は厳しいのぅ。内部で結界を張っているものを停止させんとどうにもならんの

じゃよ」
「じゃあ、爺さんとダイアンはどうやって入っていたんだよ？」
「ミーミルの泉に片方の目を差し出した時、わしはこの手の魔術、魔力、その他の術式に関して詳しくなってのう。結界に関しても同様。こっちの小僧はわしの力を利用してついてきただけじゃ」
オーディンが左の隻眼を見せると、そこには水晶が埋め込まれ、目の奥に輝く魔術文字は寒気を覚えさせた
「相手は北欧の主神と闇人（やみびと）の幹部だ！討ち取れば名が揚がるぞ！」
旧魔王派の悪魔達が一斉に魔力の弾を撃ってきた
オーディンは杖を1度だけトンと地に突き、ダイアンがエレキギターを鳴らす
ボボボボボボボンッ！
向かってきた無数の魔力弾が全て消滅した
中には上級悪魔もいるが、2人は余裕をかましている
「本来ならば、わしの力があれば結界も打ち破れる筈なんじゃがここにいるだけで精一杯とは……。はてさて、相手はどれ程の使い手か。ま、これをとりあえず渡すようアザゼルの小僧から言われてのう。まったく年寄りを使いに出すとは、あの若造はどうしてくれるものか……」

オーディンはグレモリー眷属人数分の小型通信機を渡す
「ほれ、ここはこのジジイとファンキーな小僧に任せて神殿の方まで走れ。ジジイが戦場に立ってお主らを援護すると言っておるのじゃ。めっけもんだと思え」
オーディンが杖を新達に向けると、薄く輝くオーラが発生する
「それが神殿までお主らを守ってくれる。ほれほれ、走れ」
「ここは俺達に任せＮＡ（な）！」
「でも、爺さん！ダイアン！たった２人で大丈夫なのかよ！」
一誠が心配を口にするが、オーディンは愉快そうに笑い、ダイアンはギターを振り回すだけだった
「まだ十数年しか生きていない赤ん坊が、わしを心配するなぞ――――」
「Ｎｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍ（ノープロブレム）！俺が強いのは一誠だって知ってるだＲＯ（ろ）！」
オーディンの左手に槍が出現し、ダイアンは上空にいる闇人（やみびと）の軍勢に居合いの構えを取る
「――――グングニル」
「『牙流転生（がりゅうてんせい）』ッ！」
ブゥゥゥゥゥゥゥゥンッ！
ズドドドドドドドドドッ！

悪魔達に向かって槍から極大のオーラが放出、剣から鋭利な魔力が無数に闇人を襲う
オーディンの槍によって悪魔達が数十人消し飛び、空を飛んでいた闇人も数十人地に落ちてきた事に、一誠は自分の目を疑った
「Ｗｏｗ！やるじゃねぇか、ジイＳＡＮ！」
「なーに、ジジイもたまには運動しないと体が鈍るんでな。さーて、テロリストの悪魔どもと怪物ども。全力でかかってくるんじゃな。この老いぼれは想像を絶する程強いぞい」
神と『チェス』の強さに悪魔達は安易に攻めてこなくなった
リアスが一旦足を止め、この場を受け持ってくれた２人に頭を下げる
「すみません！ここをお願いします！それと、あなたもありがとう！」
「Ｄｏｎ，ｔ　ｍｉｎｄ！裏切り者を成敗するたＭＥ、親友を殺させはしＮＡＩ！Ｇｏ！一誠！今は神殿へ向かって走ＲＥ！」
「ダイアン……すまない！」
「っしゃあ！神殿へ行くぞ！」
新達は神殿の方へ走り出し、その間にオーディン＆ダイアンと悪魔、闇人達との戦いが再開された

神殿の入り口に入り、全員がオーディンから貰った通信機を耳に付ける

『無事か?こちらアザゼルだ。オーディンの爺さんから渡されたみたいだな。言いたい事もあるだろうが、まずは聞いてくれ。このレーティングゲームは「禍の団(カオス・ブリゲード)」旧魔王派と闇人(やみびと)の襲撃を受けている。そのフィールドも、近くの空間領域にあるＶＩＰルーム付近も旧魔王派の悪魔と闇人(やみびと)だらけだ。「禍の団(カオス・ブリゲード)」は予測していたが、敵対している闇人(やみびと)が結託して攻め込んでくるのは予想外だった。現在、各勢力が協力して連中を撃退している』

どうやら観戦している方も襲撃を受けているらしい

『最近、現魔王に関与する者達が不審死するのが多発していた。裏で動いていたのは「禍の団(カオス・ブリゲード)」の旧魔王派。グラシャラボラス家の次期当主が不慮の事故死をしたのも実際は旧魔王派の連中が手にかけてたって訳だ』

つまりグラシャラボラス――――ゼファードルの家柄の関係者は『禍の団(カオス・ブリゲード)』に殺されたと言う事だ

更にアザゼルは話を続ける

『首謀者として挙がっているのは旧ベルゼブブと旧アスモデウスの子孫だ。捕まえたカ

テレア・レヴィアタンが同じだった様に、旧魔王派の連中が抱く現魔王政府への憎悪は大きい。このゲームにテロを仕掛ける事で世界転覆の前哨戦として、現魔王の関係者を血祭りにあげるつもりだったんだろう。ちょうど、現魔王や各勢力の幹部クラスも来ている。襲撃するのにこれ程好都合なものはない。闇人(やみびと)はそこを突いて「禍(カオス)の団(ブリゲード)」と一時結託したんだろう。先日のアスタロト対大公アガレスの一戦からも今回の件を予見出来る疑惑は生じていたんだよ』

つまり、グレモリー眷属の試合は最初から旧魔王派に狙われ、闇人(やみびと)は後から共通の敵を倒す等と唆(そそのか)して結託したと言う事になる

そしてターゲットは現魔王とその血縁者リアス、観戦に来ていた各勢力のボス、オーディンもターゲットの1人であろう

「では、あのディオドラの魔力が以前よりも上がったのは?」

『オーフィスの力を借りたんだろう。ディオドラがそれをゲームで使った事は奴らも計算外だったろうな。それ故、グラシャラボラス家の一件と併せて、今回のゲームで何か起こるかもしれないと予見が出来たんだ。しかし、奴らは作戦を途中で覆さないばかりか、闇人(やみびと)と共闘に走りやがった』

ディオドラはやはりドーピング、『禍(カオス)の団(ブリゲード)』のトップの力でパワーアップして試合に勝っていた

どこまでも卑劣な悪魔だ

『あっちにしてみればこちらを始末出来ればどちらでも良いんだろうが。俺達としてもまたとない機会だ。今後の世界に悪影響を出しそうな旧魔王派を潰すにはちょうど良い。闇人（やみびと）は「チェス」がいるから何とも言えないがな。現魔王、天界のセラフ達、オーディンのジジイ、ギリシャの神、帝釈天（たいしゃくてん）とこの仏どもも出張ってテロリスト共を一網打尽にする寸法だ。事前にテロの可能性を各勢力のボスに極秘裏に示唆して、この作戦に参加するかどうか聞いたんだがな。どいつもこいつも応じやがった。どこの勢力も勝ち気だよ。今全員、旧魔王派と闇人（やみびと）相手に暴れてるぜ』

どこの勢力もテロには屈しないと言った姿勢のようだ

「……このゲームはご破算って訳ね」

『悪かったな、リアス。戦争なんてそう起こらないと言っておいて、こんな事になっちまっている。今回、お前達を危険な目に遭わせた。一応、ゲームが開始する寸前までは事を進めておきたかったんだ。奴らもそこで仕掛けてくるだろうと踏んでいたからな。案の定その通りになったが、お前達を危ない所に転送したのは確かだ。この作戦もサーゼクスを説得して、俺が立案した。どうしても旧魔王派の連中をいぶり出したかったからな』

「もし俺達が死んだらどうするつもりだったんだ？」

新が何気なく訊くと、アザゼルは真剣な声音で言った

『俺もそれ相応の責任を取るつもりだった。俺の首で済むならそうした』

アザゼルは死ぬつもりで旧魔王派を引き寄せていた……

一誠は先程起きた重大な事をアザゼルに伝える

「先生、アーシアがディオドラと村上に連れ去られたんです！」

『――――っ。そうか。どちらにしてもお前達をこれ以上危険な所に置いておく訳にはいかない。アーシアは俺達に任せておけ。そこは戦場になる。どんどん旧魔王派の連中と闇人（やみびと）が魔方陣で転送されてきているからな。その神殿には隠し地下室が設けられている。かなり丈夫な造りだ。戦闘が静まるまでそこに隠れていてくれ。後は俺達がテロリストを始末する。このフィールドは「禍の団（カオス・ブリゲード）」所属の神滅具（ロンギヌス）所持者が作った結界に覆われているために、入るのは何とか出来るが出るのは不可能に近いんだよ。神滅具（ロンギヌス）「絶霧（ディメンション・ロスト）」。結界、空間に関する神器（セイクリッド・ギア）の中でも抜きん出ているためか、術に長けたオーディンのクソジジイでも破壊出来ない代物だ』

「先生も戦場に来ているんですか？」

『ああ、同じフィールドにいる。かなり広大なフィールドだから、離れてはいるが』

「アーシアは俺達が救います」

一誠はいの一番且つ真っ直ぐに言うが、新は一応の警告を出す

「一誠、今がどういう状況か教えてやるよ。これはゲームなんかじゃなく、本物の殺し合いとなったんだ。おそらくリタイヤ転送も無い。アザゼルに俺達を助ける手段も無いんだぞ」

新はバウンティハンターである為、殺し合いや本物の戦場がどんなものなのかを知っている

それはいつ死ぬか分からない危険な世界

新の表情に真剣さを感じた一誠だが、諦めの文字は微塵も無かった

「それでも、アーシアは俺の仲間だ！家族なんだ！助けたいんだ！俺はもう２度とアーシアを失いたくない！」

一誠の覚悟を聞いた新とアザゼル

次に新はリアスの方を向くと、リアスが不敵な笑みで言う

「新、アザゼル先生、悪いけれど私達はこのまま神殿に入ってアーシアを救うわ。ゲームはダメになったけれど、ディオドラとは決着をつけなくちゃ納得出来ない。村上京司にもね。私の眷属を奪うと言う事がどれ程愚かな事か、教え込まないといけないのよ！」

更に朱乃も続く

「アザゼル先生？私達、三大勢力で不審な行為を行う者に実力行使する権限があるのでしょう？今がそれを使う時では？ディオドラは現悪魔勢力に反政府的な行動を取って

いますわよ？」
「だそうだ。これでも止めるか？堕天使総督さんよぉ」
新は最初から止める気は毛頭無く、アザゼルは嘆息した
『……ったく、頑固なガキどもだ……。ま、良い。今回は限定条件なんて一切無い。だからこそ、お前達のパワーを抑えるものなんて何も無い。存分に暴れてこい！特にイッセーと新！赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の力を裏切り小僧のディオドラと村上に見せつけてこいッ！』
「オッス！」
「当たり前だ！」
２人は気合いの入った一声で答えた
『最後にこれだけは聞いていけ。大事なことだ。奴らはこちらに予見されている可能性も視野に入れておきながら事を起こした。つまり多少敵に勘付かれても問題の無い作戦でもあると言う事だ』
「相手の方に隠し球があるって事か」
『ああ、それが何かはまだ分からないがこのフィールドが危険な事に変わりはない。新の言う通り、ゲームは停止しているからリタイヤ転送は無い。危なくなっても助ける手段は無いから肝に銘じておけ。――――充分に気をつけてくれ』

ここでアザゼルからの通信が切れる
敵は自信があるから、今回のテロが予想されていても強引に仕掛けてきた
何をしでかすかも分からないが、アーシアを助けなければならない事だけは理解出来る
「小猫、アーシアは？」
「……あちらからアーシア先輩とディオドラ・アスタロト、村上京司の気配を感じます」
全員が無言で頷き合い、神殿の奥へ向かって走り出した

死闘開始！最凶のタッグ!?

広大な神殿の中を進み、新しい神殿を目指す
それを何度か繰り返していると、前方からフードを深く被ったローブ姿の小柄な人影が１０人程現れた
『やー、リアス・グレモリーとその眷属の皆』
神殿の中にディオドラの声が響く
一誠は辺り一面を見渡した
『無駄だ赤龍帝。私とディオドラ・アスタロトは最奥の神殿にいる。それまで私達は暇なのでな、少し遊ぼう。中止になったレーティングゲームの代わりだ』
今度は村上の声が聞こえてき、ディオドラがルールを説明する
『お互いの駒を出し合って試合をしていくんだ。１度使った駒は僕達の所へ来るまで使えないのがルール。後は好きにして良いんじゃないかな。第１試合、僕は「兵士」８名と「戦車」２名を出す。因みにその「兵士」達は皆既に「女王」に昇格しているよ。ハハハ、いきなり「女王」８名だけれど、それでも良いよね？何せリアス・グレモリーは強力な眷属を持っている事で有名な若手なのだから』

「無茶苦茶だな。いきなり『女王(クイーン)』８人と『戦車(ルーク)』２人と戦うのかよ」
「フードを被って顔を隠しているけど、性別は知ってるぞ。確か『兵士(ポーン)』８人は全員女の子だ」
一誠は無駄な事だけ覚えているようで……
「良いわ。あなた達の戯(ざ)れ事に付き合ってあげる。私の眷属がどれ程のものか、刻み込んであげるわ」
リアスはディオドラと村上の提案に快諾した
「部長、相手の提案を呑んで良いんですか?」
「アホか一誠。ここは応じなくちゃいけねぇんだよ。アーシアが人質に取られているからな。ディオドラ、お互いの駒を出し合うんだったら、形だけで参加するのは有りか?」
『構わないよ』
ディオドラの返事に新は不敵な笑みを浮かべながら頷く
「リアス。ここは俺と一誠、小猫、ゼノヴィア、ギャスパーを出させてくれ。俺に考えがある」
新はリアスを呼んで耳打ちする
すると、リアスは苦笑いした
「あなたって本当に外道ね……良いわ、新に任せる」

「へへっ、流石『王(キング)』。話が分かるな。よし、今呼ばれた奴ら集合～」
呼ばれた4人が新のもとに集まり耳打ちされる
一誠は新の提案とリアスの承諾に打ち震えた
改めてリアスに確認を取ってみても、リアスは頷くだけだった
一誠は心の中で叫んだ
俺達はこいつらに勝てる！と……
『じゃあ、始めようか』
ディオドラの合図と共にディオドラの眷属が一斉に構える
「……新先輩。本当に私達は戦わなくて良いんですか？」
「も、も、もしかして僕達は役立たずなんですかぁぁぁぁぁ!?」
「ちげぇよ。形だけでの参加も有りってルールを利用したチーム編成だ。次に残っているのは『女王(クイーン)』1人に『僧侶(ビショップ)』2人、そして『騎士(ナイト)』2人だ。記録映像で見た限りじゃ大した事は無さそうだから、リアスと朱乃、祐斗だけでも充分なんだよ。だから、序盤の内に駒を消費しておく必要があるんだ。俺達パワータイプはな。さっき言った通り、ゼノヴィアは『戦車(ルーク)』2人を、俺と一誠で『兵士(ポーン)』8人をやる。良いな？」
ゼノヴィアは頷きデュランダルを解放、アスカロンと二刀流の構えをしてディオドラの『戦車(ルーク)』2人と対峙する

すると、ディオドラ眷属『戦車(ルーク)』が黒い球体を数個地面に転がす
その球体から爬虫類の様な闇人(やみびと)が１０体も出てきた
しかし、ゼノヴィアは臆する事なく鋭い眼光を敵に向ける
「アーシアを返してもらう。私は……友と呼べる者を持っていなかった。そんなものが無くても生きていけると思っていたからだ。神の愛さえあれば生きていける、と」
ディオドラの『戦車(ルーク)』２人と爬虫類闇人(やみびと)１０体がゼノヴィア目掛けて走り出す
ゼノヴィアは動じずに独白を続けた
「そんな私にも分け隔て無く接してくれる者達が出来た。特にアーシアはいつも私にも微笑んでくれていた。この私と『友達』だと言ってくれたんだ」
『戦車(ルーク)』２人と闇人(やみびと)の攻撃を躱(かわ)しながら、ゼノヴィアは憂いに満ちた瞳を見せる
「……私は最初に出会った時、アーシアに酷い事を言った。魔女だと。異端だと。でも、アーシアは何事も無かった様に私に話し掛けてくれた。それでも『友達』だと言ってくれたんだ!だから助ける!私の親友を!アーシアを!私は助けるんだ!」
ドオンッ!
デュランダルから吐き出される波動が『戦車(ルーク)』２人と闇人(やみびと)を弾き飛ばす
ゼノヴィアはデュランダルを天高く振り上げて涙混じりに叫んだ
「だから!だから頼む!デュランダル!私に応えてくれっ!アーシアがいなくなった

ら、私は嫌だ！アーシアを失ったら私は……ッ！お願いだ！私に！私に友達を救う力を貸してくれッ！デュランダァァァァァァルッ！」

ゼノヴィアに応える様にデュランダルは聖なるオーラを何倍にも膨れ上がらせた

ゼノヴィアの周囲はデュランダルの聖なるオーラだけでヒビ割れていく

「私はデュランダルをうまく抑える事なんて出来ないと最近になって理解した。木場の様に静寂な波動を漂わせる様になるには長期間かかるかもしれない。それならば、今は突き進めば良い。私はデュランダルの凄まじい切れ味と破壊力を増大させる事にしたんだ」

ゼノヴィアが宙でデュランダルとアスカロンをクロスさせると、デュランダルの波動がアスカロンに流れ、２本の聖剣は莫大なオーラを発生させる

「さあ、いこう！デュランダル！アスカロン！私の親友を助けるために！私の想いに応えてくれぇぇぇぇぇっ！」

デュランダルとアスカロンが光の柱を迸らせ、ゼノヴィアはそれをディオドラの『戦車（ルーク）』２人と闇人（やみびと）の方へ振り下ろした

２つの聖なる波動が津波と化し、『戦車（ルーク）』２人と闇人（やみびと）を全て飲み込む

神殿が大きく揺れ、揺れが収まると柱や壁は丸ごと崩壊しており、『戦車（ルーク）』２人と闇人（やみびと）は全て消滅していた

たった一撃で……

ゼノヴィアは疲弊した様子で肩で息をする

威力故に反動も凄まじいと言う事であろう

「ゼノヴィア、よくやった!後は俺達に任せろ!『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』ッ!『騎士(ナイト)』ッ!」

「俺もプロモーション!」

新は『闇皇の神速槍騎士(アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト)』に変異し、一誠は『女王(クイーン)』に昇格した

『Ｂｏｏｓｔ(ブースト)!!Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ(エクスプロージョン)!!』

更に一誠はブーステッド・ギアで倍加した魔力を脳に集中させる

「煩悩解放!イメージマックス!広がれッ!俺の夢空間ッ!『乳語翻訳(バイリンガル)』ッ!」

一誠を中心に謎の空間が展開していく

「ヘイ!『兵士(ポーン)』のおっぱいさん達、右から順にこれから何をしようか教えてちょうだい!」

一誠は目を閉じて敵『兵士(ポーン)』のおっぱいに話し掛ける

すると、一誠にしか聞こえない声で心の内が吐露される

『２人しか出てこないの?だったらまず、邪魔なエッチ蝙蝠を倒しちゃおう♪』

『３人がかりで一気にたたんじゃえ!』

『エッチ蝙蝠、倒す倒す!』

声を聞いた一誠はそれを新に伝える
「新！あの子とあの子とあの子はお前を狙っているぞ！」
「合点だ！『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』ッ！」
新は一誠が指差した『兵士（ポーン）』3人を槍から発する闇で捕らえ、動きを封じる
新は抵抗出来ない様に『兵士（ポーン）』達の魔力を吸収する
一誠は次に逆側にいた『兵士（ポーン）』の声を聞く
「君達は何を考えているのかな？」
『わーお、あの子達捕まっちゃった！これじゃ、私達がドラゴンを狙っているのもバレちゃうかも！』
『もしかして、これが噂のおっぱいの声を聞くドラゴン？こわーい！まさか、心を読まれるのを防御術式で対策してきたのに無駄なの？』
『ドラゴンに気づかれちゃう！』
一誠はふむふむと首を動かし、新に指示する
「新！こっちの3人は俺を狙ってくる！いけるか!?」
「モチのロンだ！」
ズズズズズズズッ……！
『兵士（ポーン）』3人を捕らえている闇から別の闇が生まれ、一誠を狙おうとしていた3人がその

場で捕らえられ魔力を吸収されていく
残りは2人、新は容赦無くその『兵士』2人も闇で捕らえ、魔力を吸い尽くした
「ウハハハハハハハハハハハッ!圧倒的じゃないか!『女王』となった『兵士』8名が何も出来ずに俺達の連携攻撃の前に沈もうとしているぞ!」
「そうだ一誠!お前の『乳語翻訳』と俺の『暗黒捕食者』!この2つを組み合わせれば、恐れるものなんざ何もねぇッ!俺達は最強の!いや、最凶のコンビだ!ヒャッハッハッハッハッハッハッハッハッ!」
新と一誠は悪役丸出しの邪悪な笑い声をあげた
小猫からのツッコミもあったが、2人は気にしなかった
何故なら、これはアーシアを救う為の勝負だから……
全員の魔力を吸収した闇は、『兵士』8人を吊し上げる様な形に変化する
新は槍を地に突き刺し、一誠と共にゆっくりと歩みを進める
「ぐふふっ、『洋服破壊』♪」
バババッ!
魔力を奪われ身動き出来ない『兵士』1人に一誠が軽く触れると、ローブが消し飛んで全裸となった
「イ、イヤァァァァァァァァッ!」

「あれま、美少女ちゃんだ！フードで分からなかったけど、ディオドラも良い女の子を集めてたんだな～（嬉泣）」
「ああ。しかもこの娘、良い体してやがる」
一誠は感極まって涙を流し、新はじっくりと裸体を鑑賞する
「さて、ここで俺の新しい必殺技を見せてやろうかな」
「必殺技？」
「修業ん時に開発した技だ。『絶頂させる手（エクストリーム・ハンド）』の改良版。その名も『絶頂させる超振動（エクストリーム・シンドローム）』だ！」
新が右手に魔力を集中させると、とてつもない振動が発生する
「で、これはどう言った技でありましょうか？ワトソン――――じゃなかった。新くん」
「お教えしよう。ホームズ――――もとい、一誠くん。これは自分か吸収した相手の魔力を超振動に変換させ、敏感ポイントに当てる事で相手に快感を与える技なのだよ。しかも、その威力は魔力の強さによって変わる」
一誠はヒゲを伸ばす様な仕草で訊くと、新は顎ヒゲを擦る様な仕草で答えた
「ほうほう。それはどの様な感じで？」
「百聞は一見にしかず。今から実演してみせよう」
新は裸にされた女の子『兵士（ポーン）』に近付き、左手で敏感ポイントを探す

「ひっ……! いやぁ……あ、んんっ!」
「ふむふむ、右の乳首か。それではレッツラゴ～♪」
ブブブブブブブブブブブッ!
新の超振動クローが裸の『兵士(ボーン)』の右乳首を捕らえ、絶大な快感を与えていく
その振動に耐えられず、彼女は身を捩(よじ)らせながら絶叫する
「あひぃいいいいっ!あぁぁぁぁっ!ダメェェェェェェッ!そんなっ、強くしにゃいでェェェェッ!イヤァァァァァァッ!止めてェェェェェェッ!」
ビクンビクンッ!
ほんの十数秒で裸の『兵士(ボーン)』はイってしまい、全身を痙攣させながら崩れ落ちた
倒れた後も恍惚な表情を浮かべている……
「新……お前はなんて素晴らしく恐ろしい男だ……。俺、鼻血を出し過ぎて死ぬかもしれない……」
「ふっ。そんな簡単に鼻血を出す様じゃまだまだ青いな。さ、次だ」
新と一誠は次の獲物――――もとい、『兵士(ボーン)』に近付いて『洋服破壊(ドレス・ブレイク)』で服を消し飛ばす
「やめてぇっ!見ないでぇ!」
「おおっ!こっちは大きいおっぱいだ!ありがたやありがたや～」

「え～、それでは～、処刑開始しま～す」
新はさっきと同じ様に敏感ポイントを探し、今度は脇の下に超振動クローを当てる
２人目の『兵士』(ポーン)も約１０秒で絶頂に達して股から潮を噴かせた
新と一誠の鬼畜コンボに残されたディオドラ『兵士』(ポーン)達はブルブルと震える
しかし、泣こうが喚(わめ)こうが２人の最凶コンボは止まらない
『洋服崩壊』(ドレス・ブレイク)♪」
「きゃあああああああああっ！」
ブブブブブブブブブッ！
ビクンビクンッ！
『洋服崩壊』(ドレス・ブレイク)♪」
「いやあああああああああああっ！」
ブブブブブブブブブブッ！
ビクンビクンッ！
『洋服崩壊』(ドレス・ブレイク)ったら『洋服崩壊』(ドレス・ブレイク)♪」
「きゃあああああああああああっ！」
ブブブブブブブブブブッ！
ビクンビクンッ！

リアス達はあまりの酷さに目を背け、ディオドラの『兵士(ポーン)』達に合掌した……

「あ、あひぃっ……あっ、ぁぁんっ……」
「んんっ……はぁっ、しゅ、しゅごすぎぃ……」
「もっと……もっとしてぇ……」
　数分後、裸にされたディオドラの『兵士(ポーン)』達は完全に戦闘不能状態となり、新は鎧を解除する
「新。俺、お前と組んだら世界中のおっぱいを支配出来る気がしてきた……」
「奇遇だな。俺もお前と組めば世界中の良い女を支配出来そうだ」
　一誠は感極まった一筋の涙を流し、新はやり遂げた様な顔で互いの手を握り合う
「アザゼル先生が言ってたんだ。『おっぱいを制する者は世界を制する』って……」
「……良い言葉だな、それ」
　2人はアザゼルの言葉を感慨深く心に刻み、リアス達のもとへ戻る
「まず1つだけ言わせてちょうだい。いろんな意味で酷いわ」
「何を言うか。さっきも言っただろ。勝負の世界は常に非情だと」

「そうですよ部長。アーシアを助ける為には仕方がない事なんです」
正論を述べても鼻血を垂れ流しているので台無し
とにもかくにも第1試合は完勝を収め、次なる神殿へ行こうとした
ギュウッ……
「……っ？何だこの圧迫感？」
新がふと足元を見てみると、ディオドラの『兵士（ポーン）』8人が新の足にしがみついていた
「もっと……」
「え、延長戦を希望します……」
「こ、今度は優しくして……」
皆が続きを希望していた
最早ただの雌犬である……
急がないといけないので、新は縄を取り出して『兵士（ポーン）』全員の両手を後ろに縛り、それぞれの縄の端を柱にくくりつけた
「全部終わるまでそこで待ってろ。良いな？」
『はい……』
女の子『兵士（ポーン）』8人は艶っぽい返事をして、終わるまで放置される事になった……
今度こそ、全員が次なる神殿へと歩みを進める

「新?まさかあの『兵士(ポーン)』全員を家に連れていくの?」
「まさか。マスターの酒場で住み込みのバイトをさせるんだよ。収入源も増えて一石二鳥だ」
「あなたって人は……底無しの欲望を持ってるのね……」
「そりゃどうも〜♪」

悲劇の真相

「まずは1勝か」
「あれだけ不利な戦況だと思ったのに、完勝しちまったもんな。制限無しの俺達って凄いわ……」
これで敵は『女王(クイーン)』、『騎士(ナイト)』２人、『僧侶(ビショップ)』２人にディオドラとなった
一方こちらはリアス、朱乃、祐斗の３人
どう使い分けていくかがポイントだ
次の神殿へ入り、ある程度進んだところで足を止める
２番目に待っていたのは３人の敵だった
「……映像の一件から僕の記憶が正しければ、『僧侶(ビショップ)』２名と『女王(クイーン)』です」
第２試合の相手は『女王(クイーン)』と『僧侶(ビショップ)』２人のようだ
必然的に第３試合は『騎士(ナイト)』２人が出てくるであろう
「待っていました、リアス・グレモリーさま」
ディオドラの『女王(クイーン)』がフードを取って顔を見せる
碧眼(へきがん)且つブロンドヘアーの美人で新と一誠好みのお姉さんだ

『僧侶』は片方が女性で、もう片方が男性だったがフードのせいで顔が見えない
この2人はサポートタイプで魔力もかなり高め、『女王』も炎の魔力が凄まじいので強敵と言える
「あらあら。では、私が出ましょうか」
「後の『騎士』2人は祐斗がいれば充分ね。私も出るわ」
1歩前に出たのはリアスと朱乃、学園で二大お姉さまと呼ばれる2人が並んだ
「あら、部長。私だけでも充分ですわ」
「何を言っているの。いくら雷光を覚えたからって無茶は禁物よ？ここでダメージを貰うよりは堅実にいって最小限の事で抑えるべきだわ」
滅びの力と雷光
強力な力の持ち主が共闘するなら安心確実である
すると、小猫が突然前に出た
「……朱乃さん！その人達に完勝したら、新先輩がデートしてくれるそうです！」
珍しく大きな声でそんな事を言い放つ
「小猫？お前いきなり何を――――――」
カッ！
バチバチバチバチッ！

電気が辺り一面に散らばり出す
発生源の方向を見てみると、朱乃が雷光のオーラを身に纏っていた
「……うふふ。うふふふふふふふふふふふ！新さんとデート出来る！」
朱乃は迫力ある笑みを浮かべながら周囲に雷を走らせる
「うおぉぉいっ！こっちまで雷が来てんぞっ!?」
「朱乃！あなたねぇ！」
「うふふ、リアス。これも私の愛が新さんに通じた証拠よ。もう認めるしか無いわね？」
朱乃が強気でそんな台詞を言い、場の雲行きが怪しくなっていく
「な、な、何を言っているの！デ、デ、デート1回ぐらいの権利で雷を逆らせる卑しい朱乃になんか言われたくはないわ！」
「何ですって？未だ抱かれる様子も無いあなたに言われたくもないわ。その体、魅力が無いのではなくて？」
「そ、そんな事は無いわ！私の体だって魅力的って言ってくれたわよ！」
「じゃあ新さんと一緒に寝た事はあるの？無いでしょ？」
痛い所を突かれたのか、リアスは固まってしまう……
「一緒にお風呂に入ったりした？」
「……」

「リアス、困ったお姫様ね。それくらいの事も出来てないのに新さんを束縛しようとするなんて。それじゃあまりにも彼が不憫で可哀想だわ」
「……うぐぅ……っ」
「あ、あれ？リアスが泣いてる？」
「ぶ、部長！しっかりして下さい！新！お前からも何か言ってやれよ！……何かこっちまで悲しみが移ってきそうだ……」
新と一誠が珍しくオロオロする中、朱乃は頬に手を添えながら口撃（こうげき）を続ける
「ふふんっ、私は今すぐにでも新さんと舌を絡ませる事だって出来るわよ？舌だけじゃなく、彼のお口の中を隅々まで舐めるわ」
「朱乃！ダメ！ダメよ！あの子の口にあなたの舌が入るなんて想像もしたくないわ！」
「……なんて会話してるんだ、部長と朱乃さん……」
「ちょっ、間接的に恥（は）ずい……」
新は手で顔を覆い隠し、一誠は開いた口が塞がらなかった
そんな口論が続く中、相手の『女王（クイーン）』が全身に炎のオーラを纏いながら激昂する
「あなた方！いい加減にしなさい！私達を無視して男の取り合いなどと――――――」
「うるさいっ！」
ドゴォォォォォォォォォォォォン！

リアスと朱乃が特大の一撃を『女王(クイーン)』と『僧侶(ビショップ)』２人に撃ち放った
滅びと雷光(らいこう)の魔力がうねりながら敵を容赦無く包み込み、周囲も木っ端微塵に吹き飛ばした
プスプス……
煙を立ち上げながら『女王(クイーン)』と『僧侶(ビショップ)』の２人は床に倒れ込んでいる
彼女達はリアスと朱乃の口論の犠牲者となってしまった……
「……酷いなこりゃ」
「うん。俺達が言うのもなんだけど、酷い一戦だったな……」
新と一誠はその光景を見て、背中に多量の汗を流した
２人の震えが治まらないまま朱乃はいつもの様子で新に歩み寄る
「新さん。今度の日曜日、デートしましょうね♪」
朱乃はいつもの笑顔で新に言う
「いや、待ちなさい。今のは小猫が勝手に――――」
「……デート、してくれないの……？」
目を潤ませる朱乃、これには流石の新も敵わず……
「……分かった。今度の日曜日な？」
「――――ッ！はい！新さん！」

最高の返事を聞いた朱乃は小さく跳ねる
「ちょっと！新！」
「――――っ？な、何すか？」
「……何でもないわ」
リアスは新を呼んだかと思えば複雑そうな顔でそっぽを向く
第２試合も完勝したので全員は更に奥の神殿へと歩みを進めていった

――――――――――ブゥゥゥンッ

「クックックッ。ディオドラ・アスタロトの『女王（クイーン）』がこれ程簡単に負けるとはな。君達にはまだまだ働いてもらおう。そっちの男は……いらないな」
グバァッ！
バキッ！
ガシュグチャッ！ゴリッ！バリッ！ヌチャヌチャヌチャ……
――――――――――

新達が次なるバトルステージ――――ディオドラの『騎士(ナイト)』２人がいるであろう神殿に足を踏み入れた時、見覚えのある人影が視界に映り込む
「や、おひさ～」
「フリードッ！」
「クソ神父、お前まだ生きてたのか」
そいつはアーシアの一件とエクスカリバー強奪事件の一件で敵対した白髪神父フリード・セルゼンだった
「まだ生きてたんだなって言ったっしょ？イエスイエスイエス、僕ちんしぶといからキッチリキッカリしっかりちゃっかり生きてござんすよ？」
「相変わらず言語能力がメチャクチャだな。ってか、何でお前がここにいる。ここにいる筈の『騎士(ナイト)』２人はどうした？」
新が訊くとフリードはニヤケながら口をもごもごし始める
そしていきなりペッと何かを吐き出した――――人の指だった
「俺さまが食ったよ」
「……何言ってんだ？こいつ、食った……？」
一誠はフリードの言葉が理解出来なかったが、新は理解した様に首を小さく横に振る
「遂にそこまで堕落したか……フリード」

「……その人、人間を辞めてます」
小猫も気付いたようで鼻を押さえ、目元を細めて言った
すると、フリードはニンマリと口の端を吊り上げて人間とは思えない形相で哄笑をあげる
「ヒャーハハハハハハハハハハハハハハハッ！てめえらに切り刻まれた後、ヴァーリのクソ野郎に回収されてなぁぁぁぁぁあっ！腐れアザゼルにリストラ食らってよぉぉぉぉおっ！」
ボコッ！グニュリッ！
フリードの肉体の各部分が不気味に盛り上がっていく
角みたいなものが隆起し、腕や脚も膨れ上がる
「行き場無くした俺に村上の旦那が手ぇ貸してくれたんだ！旦那！俺がもっと強くなれるように力を与えてやるってさ！力をくれるって言うから何事かと思えばよぉぉぉぉおっ！きゅはははははははっははっ！合成獣（キメラ）だとよっ！ふはははははははっははははっ！」
背中の片側にコウモリの様な翼、逆側には巨大な腕が生えて、顔は原型を留めない程変形して凶暴な牙も生えてくる
変化を遂げたフリード・セルゼンは人間の面影等を一切残さない巨大なモンスターと

なった

村上の所業に全員が表情を強張らせ、不快感を明らかにする

「村上に体を改造されたって事か。どこまでエグい真似すりゃ気が済むんだ……！」

「ヒャハハハハハハハッ！ところで知ってたかい？ディオドラ・アスタロトの趣味をさ。これが素敵にイカレてて聞くだけで胸がドキドキだぜ！」

突然フリードがディオドラの話をし始めた

「ディオドラの女の趣味さ。あのお坊っちゃん、大した趣味でさー、教会に通じた女が好みなんだって！そ、シスターとかそう言うのさ！」

ディオドラの女の趣味

シスター

その2つで一誠はすぐにアーシアと直結した

フリードは大きな口の端を吊り上げながら続ける

「しかも狙う相手は熱心な信者や教会の本部に馴染みが深い女ばかりだ。俺さまの言ってる事わかるー？さっきイッセーくん達がぶっ倒してきた眷属悪魔の女達は元信者ばかりなんだよ！自分の屋敷にかこっている女共もおんなじ！ぜーんぶ元は有名なシスターや各地の聖女さま方なんだぜ！ヒャハハハ！マジで趣味良いよなぁぁっ！悪魔のお坊っちゃんが教会の女を誘惑して手籠めにしてんだからよ！いやはや、だからこそ悪

魔でもあるのか！熱心な聖女さまを言葉巧みに超絶上手い事やって堕とすんだからさ！まさに悪魔の囁きだ！」

「……ようやく分かったぜ。ディオドラは最初っからそのつもりで、アーシアを教会から追放させるよう仕組んでやがったんだな？」

新の言葉に全員が反応し、フリードは哄笑をあげる

「そっ！そいつの言う通り、アーシアちゃんが教会から追放されるシナリオを書いたのは、元をただせばディオドラ・アスタロトなんだぜ～？シナリオはこうだ。昔々あるところのある日、シスターとセッ○スするのが大好きなとある悪魔のお坊っちゃんは、チョー好みの美少女聖女さまを見つけました。その日からエッチしたくてたまりません。でも、教会から連れ出すにはちょいと骨が折れそうと判断して、他の方法で彼女を自分のものにする作戦にしました」

他の方法と言う単語に一誠は嫌な予感がし、見事にそれが当たってしまった……

「聖女さまはとてもとてもおやさしい娘さんです。神器（セイクリッド・ギア）に詳しい者から『あの聖女さまは悪魔をも治す神器（セイクリッド・ギア）を持っているぞ』と言うアドバイスを貰いました。そこに目をつけた坊っちゃんは作戦を立てました。『ケガした僕を治すところを他の聖職者に見つかれば聖女さまは教会から追放されるかも☆』と！傷痕が多少残ってもエッチ出来りゃバッチリＯＫ！それがお坊っちゃんの生きる道！」

――――あの時、彼を救った事、後悔してません
ふと、一誠の脳内に笑顔でそう言ったアーシアが思い出される
一誠を嘲笑うかのように、フリードはトドメとばかりに言い放った
「信じていた教会から追放され、神を信じられなくなって人生を狂わされたら、簡単に僕のもとに来るだろう――――――と！ヒャハハハハ！聖女さまの苦しみも坊っちゃんにとってみれば最高のスパイスなのさ！最底辺まで堕ちたところを掬い上げて犯す！心身共に犯す！それが坊っちゃんの最高最大のお楽しみなのでした！今までもそうして教会の女を犯して自分のものにしたのです！それはこれからも変わりません！坊っちゃん――――――ディオドラ・アスタロトくんは教会信者の女の子を抱くのが大好きな悪魔さんなのでした！ヒャハハハハッ！」
一誠の心の底で、言い表せない程の憎悪が沸き上がった
握りしめる拳からは血も噴き出している
フリードを激しく睨み1歩前へ出ようとしたが、新に肩を掴まれ制止させられる
「一誠。その想いはディオドラをブチ殺すまで取っておけ」
「新！お前はこれを黙っていろって言うのか！」
一誠が新の胸ぐらを掴んで猛反論
新と心境は同じだが、それを押し殺して一誠に言う

「アーシアを嵌めたのはフリードじゃねぇ、ディオドラだ。ここで無駄に体力を使うもんじゃねぇって言ってんだよ」
「新くんの言う通りだよ、イッセーくん。君のその想いをぶつけるのはディオドラまで取っておいた方が良い。ここは僕が行く。あの汚い口を止めてこよう」
　迫力のある歩みで祐斗は一誠の横を通り過ぎ、モンスターと化したフリードの前に立って聖魔剣（せいまけん）を一振り創り出す
「やあやあやあ！てめぇはあの時俺をぶった斬りやがった腐れナイトさんじゃあーりませんかぁぁぁっ！てめぇのお陰で俺はこんな素敵なモデルチェンジをしちゃいましたよ！でもよ！俺さまもだいぶ強くなったんだぜぇぇ？ディオドラの『騎士（ナイト）』２人をペロリと平らげましてね！そいつらの特性も得たんですよぉぉぉっ！無敵超絶モンスターのフリードくんをよろしくお願いしますぜぇ、色男さんよぉぉぉっ！」
　祐斗は聖魔剣（せいまけん）を構えると冷淡な声で一言だけ言う
「君はもういない方が良い」
「調子くれてんじゃねぇぇぇぇぞぉぉぉぉっ！」
　憤怒の形相となったモンスターフリードは全身から生物的なフォルムのやいばを幾重にも生やして祐斗に襲い掛かろうとしたが――――その瞬間……
　フッ！

祐斗が視界から消え――――

バッ！

眼前にいたモンスターのフリードは無数に切り刻まれて四散した

静寂な怒りを灯した祐斗はフリードに攻撃の暇を与えなかった

「――――んだ、それ。強すぎんだろ……」

頭部だけになったフリードは床に転がり大きな目をひくつかせていた

一瞬で勝負終了

目で捉えきれない神速の動きで切り刻んだのだろう

「ザマァねぇな、フリード。力を求め過ぎた野郎の哀れな末路だ」

「……ひひひ。ま、お前らじゃ、ディオドラの計画も村上の旦那も、その裏にいる奴らも倒せないさ。何よりも神滅具所持者と『チェス』の恐ろしさをまだ知らねぇんだからよ……。ひゃはは――――」

「続きは地獄の閻魔大王にでも聞かせとけ」

ドオオオンッ！

笑っていたフリードを魔力で消し飛ばした新

焦げ痕だけが残り、新は首を鳴らす

全員がディオドラと村上の待つ最後の神殿へ走り出した……

オーフィス、サーゼクス

同時刻、アザゼルはレーティングゲームのバトルフィールドで旧魔王派の悪魔と闇人(やみびと)をある程度片付けていた
数も少なくなったので後は部下に任せて、ある場所へ向かう
フィールドの隅に人影を1つ視認すると、その人影の前に降り立つ
腰まで伸びた黒髪の小柄な少女
黒いワンピースを身に着け細い四肢を覗かせている
アザゼルはその少女に対して目を細め、静かに言う
「――お前自身が出張ってくるとはな」
黒髪の少女はアザゼルの声に反応し、顔を向けて薄く笑う
「アザゼル。久しい」
「以前は老人の姿だったか？今度は美少女さまの姿とは恐れ入る。何を考えている？――――オーフィス」
そう……彼女こそが『無限の龍神(ウロボロス・ドラゴン)』オーフィスであり、『禍の団(カオス・ブリゲード)』のトップ　である
彼女の視線は神殿の方に向けられている

警戒を高めるアザゼルにオーフィスは言葉少なに答えた
「見学。ただ、それだけ」
「高みの見物ね……。それにしてもボスがひょっこり現れるなんてな。ここでお前を倒せば世界は平和か？」
アザゼルは苦笑しながら光の槍を突きつけるが、オーフィスは首を横に振る
「無理。アザゼルでは我を倒せない」
「へへっ、ハッキリ言ってくれる。――――だろうさ。俺だけじゃお前を倒しきれない」
「では、２人ではどうだろうか？」
２人の前に羽ばたきながら降りてきたのは巨大なドラゴン――――元龍王のタンニーンだった
彼も旧魔王派及び闇人（やみびと）一掃作戦に参加しており、それを終えてここに来たようだ
タンニーンは大きな眼でオーフィスを激しく睨む
「せっかく若手悪魔が未来を懸けて戦場に赴いていると言うのにな。貴様が茶々を入れると言うのが気に入らん！あれ程世界に興味を示さなかった貴様が今頃テロリストの親玉だと!?何が貴様をそうさせたと言うのだ！」
アザゼルもタンニーンの意見に頷き問いただす
「暇潰し――――なんて今時流行らない理由は止めてくれよな。お前の行為で既に被害

が各地に出てるんだ。仕舞いには闇人(やみびと)とまで手を組みやがって」
オーフィスがトップに立ち、その力を様々な危険分子に貸し与えた事によって各勢力は多大な被害を受けている
死傷者も日に日に増し、無視など出来る筈も無いレベルに……
だが、アザゼルはどうしても理解出来なかった
今まで世界の動きを静観していた最強の存在が何故今になって動き出したのか？
それもテロリストとして……
オーフィスから出た答えは予想外のものだった
「――――静寂な世界」
「は？」
アザゼルが再び問い返すとオーフィスは真っ直ぐ見つめて言った
「故郷である次元の狭間に戻り、静寂を得たい。ただそれだけ」
次元の狭間――――それは人間界と冥界、人間界と天界の間にあるような次元の壁の事で、世界と世界を分け隔てる境界線
そこには何も無く、無の世界とも言われている
「ホームシックかよと普通なら笑ってやる所だが、次元の狭間と来たか。あそこには確か――――」

「そう、グレートレッドがいる」
どうやらオーフィスはグレートレッドと呼ばれる者をどうにかして、次元の狭間に戻ろうとしているようだ
それを条件に旧魔王派や他勢力の異端者に懐柔されたと考えが付く
アザゼルの思考が何かを出そうとした時、オーフィスの横に魔方陣が出現し、何者かが転移してくる
現れたのは貴族服を着た1人の男
男はアザゼルに一礼してから不敵に笑んだ
「お初にお目にかかる。俺は真のアスモデウスの血を引く者。クルゼレイ・アスモデウス。『禍の団(カオス・ブリゲード)』真なる魔王派として、堕天使の総督である貴殿に決闘を申し込む」
アザゼルは頭をポリポリと掻きながら呟く
「首謀者の1人……旧魔王派のアスモデウスが出てきたか」
アザゼルの言葉が気に入らなかったのか、クルゼレイは全身からドス黒い魔のオーラを迸らせた
恐らく彼もオーフィスの『蛇』を貰い受けたのだろう
「旧ではない！真なる魔王の血族だ！カテレア・レヴィアタンの敵討(かたき)ちをさせてもらうッ！」

「カテレアの男か何かか。やれやれ、元カレに成り下がっちまったってのに殊勝だな」
「……っ？どういう意味だ？」
　クルゼレイが片眉を吊り上げて訊くと、アザゼルは含み笑いをして答えた
「なぁに、俺ん所の教え子に無類の女好きっつーか――――テクニシャンがいるんだわ」
　アザゼルの言うテクニシャンとは勿論――――新の事である
　アザゼルは他人事みたくニヤケながら語り始めた
「もうカテレアはすっかり堕ちたぜ？終末の怪物の１匹と言われていたが、今じゃただの発情期のメスだ。もっと分かる様に言ってやろうか？教え子にあんな事やこんな事をされたってこった（笑）」
「何……っ！汚れた堕天使たる貴様の下にいる者が、カテレア・レヴィアタンにあんな事やこんな事、そんな事にどんな事をしただと……!?」
「いや、そんな事とどんな事はしてねぇけど」
「……許さんッ！ここで貴様を消した後にそいつも殺してくれる……ッ！」
　憤怒にまみれたクルゼレイは殺意のオーラを噴出させる
　アザゼルは「やれやれ」と嘆息した
「まあ良いぜ。タンニーン、お前はどうする？」
「サシの勝負に手を出すほど無粋ではない。オーフィスの監視でもさせてもらおうか」

「頼む。さて、混沌としてきたが……俺の教え子どもは無事にディオドラのもとに辿り着いている頃かな」
　その言葉を聞いたオーフィスは首を横に振る
「ディオドラ・アスタロトにも我の蛇を渡した。あれを飲めば力が増大する。倒すのは容易ではない」
「ハハハハハハハハハハハッ！」
　アザゼルはオーフィスの言葉に大爆笑した
「何故、笑う？」と怪訝に首を傾げ(かし)るオーフィスにアザゼルは告げた
「蛇か。そりゃ結構だ。だが、残念な事にそれじゃ無理だな」
「何故？我が蛇、飲めばたちまち強大な力を得られる」
「それでも無理だ。先日のゲームじゃルール上、力を完全に発揮出来なかったがな。一部例外もいたが、そう言う事だ」
　アザゼルはファーブニルの宝玉と自ら製作した人工神器(セイクリッド・ギア)の短剣を取り出し構えた
「さて、ファーブニル。付き合ってもらうぜ。相手はクルゼレイ・アスモデウスだ！いくぜ、禁手化(バランス・ブレイク)ッ！」
　短剣と宝玉が光り輝き、アザゼルは黄金の全身鎧(プレート・アーマー)に包まれた

いざ出陣しようとした矢先、乱入してくる転移用魔方陣があった
そこから現れたのは――――紅髪（べにがみ）の王サーゼクス・ルシファー
「サーゼクス、どうして出てきた？」
「今回結果的に妹を我々大人の政治に巻き込んでしまった。私も前へ出て来なければな。いつもアザゼルばかりに任せていては悪いと感じていた。――――クルゼレイを説得したい。これぐらいしなければ妹に顔向け出来そうにないんでね」
「……お人好しめ。――――無駄になるぞ？」
「それでも現悪魔の王として直接訊きたかった」
サーゼクスの真剣な面持ちにアザゼルは構えていた槍を引いた
一方、サーゼクスを視認したクルゼレイは更に憤怒のボルテージを上げる
「――――サーゼクス！忌々しき偽りの存在ッ！直接現れてくれるとはッ！貴様が、貴様らさえいなければ我々は……ッ！」
「クルゼレイ。矛を下げてはくれないだろうか？今なら話し合いの道も用意出来る。前魔王の血筋を表舞台から遠ざけ、冥界の辺境に追いやった事、未だに私は『他の道もあったのでは？』と思ってならない。前魔王子孫の幹部達と会談の席を設けたい。何よりも貴殿とは現魔王アスモデウスであるファルビウムとも話して欲しいと考えている」
サーゼクスの言葉は実に真摯な物だった

しかし、それはクルゼレイの感情を逆撫で激昂させる
「ふざけないでもらおう！堕天使どころか天使とも通じ、汚れきった貴様に悪魔を語る資格など無いのだ！それどころか俺に偽者と話せと言うのか!?大概にしろッ！」
アザゼルは嘆息してクルゼレイに言う
「よく言うぜ。てめえら『禍の団（カオス・ブリゲード）』には三大勢力の危険分子が仲良く集まっているじゃないか。あまつさえ、俺達を滅ぼそうとした闇人（やみびと）にまで手を伸ばしやがって」
「手を取り合っている訳ではない。利用しているのだ。忌まわしい天使と堕天使は我々悪魔が利用するだけの存在でしかない。闇人（やみびと）と共に動いているのは、ただ共通の利害が一致しただけに過ぎない。事が終われば用済みだ。相互理解？和平？悪魔以外の存在はいずれ滅ぼすべきなのだ！それを何故分からない!?悪魔こそが！否（いな）！我々魔王こそが全世界の王であるべきなのだよ！オーフィスの力を利用する事で俺達は世界を滅ぼし、新たな悪魔の世界を創り出す！その為には貴様ら偽りの魔王どもが邪魔なのだ！」
典型的な悪の親玉的思想を語り続けるクルゼレイ
現魔王と旧魔王の考え、認識、その他諸々は根底から相違しており……その溝は深く、決して埋まる事は無いだろう
サーゼクスは寂しげな目で呟いた
「クルゼレイ、私は悪魔と言う種族を守りたいだけだ。民（たみ）を守らなければ、種族は繁栄し

ない。甘いと言われても良い。私は未来ある子供達を導く。――――今の冥界に戦争は必要無いのだ」

「甘いッ！何よりも稚拙な理由だッ！それが悪魔の本懐だと思っているのか!?悪魔は人間の魂を奪い、地獄へ誘い、そして天使と神を滅ぼす為の存在だッ！もはや話し合いは不要ッ！サーゼクスよ！偽りと偽善の王よッ！ルシファーとは！魔王とは！全てを滅する存在だッ！滅びの力を持っていながら、何故横の堕天使に振る舞わない!?やはり貴様は魔王を語る資格など無いッ！この真なる魔王であるクルゼレイ・アスモデウスがお前を滅ぼしてくれるッ！」

それが現魔王（サーゼクス）と旧魔王（クルゼレイ）の子孫、両者最後の話し合いとなった……

サーゼクスはオーフィスにも語りかける

「……オーフィス。貴殿との交渉も無駄なのだろうか？」

「我の蛇を飲み、誓いを立てるのなら。もう1つ、冥界周囲に存在する次元の狭間の所有権、それ全て貰う」

つまりは服従と冥界の閉鎖がオーフィスの要求であろう

冥界を背負う現魔王がそんな要求を安易に応じる事など出来ない

サーゼクスは天を仰ぎ瞑目する

次に目を開けた時――――彼の瞳には背筋が凍りつく程の冷たさが映り込んでいた

それを確認したクルゼレイは距離を取り、両手に巨大な魔力の塊を作り出す
「そうだ！それで良い！その方が分かりやすいのだよ、サーゼクスッ！」
クルゼレイは最初から話を聞く気など無く、戦う事を望んでいた
憎き存在を自らの手で滅ぼす為に
サーゼクスは右手を突き出し、掌(てのひら)を上に翳(かざ)す
そこに魔力が圧縮していき、サーゼクスの魔力は徐々に滅びのオーラを放ち始める
サーゼクスは強い口調で言った
「クルゼレイ、私は魔王として今の冥界に敵対する者を排除する」
「貴様が魔王を語るなッ！」
クルゼレイが巨大な魔力を両手から掃射したと同時に、サーゼクスは掌(てのひら)に生まれた魔力を無数の小さな球体に変えて前方へ撃ち出した
クルゼレイの攻撃はサーゼクスの魔力に触れた途端、削り取られた様に消滅していく
撃ち出した小さな魔力の球体は意志を持つかの如く宙を縦横無尽に動き回り、クルゼレイの攻撃を打ち消していった
消しきれなかった攻撃はサーゼクス自身が避けたり、防御障壁を作って防いでいく
クルゼレイの口内へ滅びの球体が1つだけ入り込んだ
ドウッ！

クルゼレイの腹部が1度だけ膨れ上がり、それが収まると同時に彼の魔力が一気に減少する
サーゼクスがボソリと呟いた
「――――『滅殺の魔弾』。腹に入っていたオーフィスの『蛇』を消滅させてもらった。――――これで絶大な力を振るえないだろう」
パワーアップの源である蛇を消された事で、先程まで余裕を見せていたクルゼレイに焦りの色が生じる
サーゼクスが魔王に選ばれた理由の1つは――――圧倒的な威力を誇る消滅魔力
触れた物を全て消し、塵芥すら残さない絶対的な滅び……
決して力を溢れさせず、最小サイズに留めて複数同時に操る
緻密なコントロールと並外れた才能が必要技術をサーゼクスは有していた
「おのれ！貴様といい、ヴァーリといい、何故こうも『ルシファー』を名乗る者は恵まれた力を持っていながら、我々と相容れないッ!?」
クルゼレイは毒づきながらも再び両手に魔力を放出しようとしたが――――
ギュパンッ！
滅びの球体の1つがクルゼレイの腹を丸ごと削り取った……
触れるだけで周囲の物を根刮ぎ消す滅びの魔力、小さくとも威力は絶大だった

「……な、何故……本物が偽者に負けねばならない……？」
クルゼレイは口から血を吐き出し、無念の血涙を流していた
サーゼクスは瞑目し、ゆっくりと手を横に薙ぐ
その瞬間、クルゼレイは宙を飛び回る無数の球体にその体を全て打ち消されていった
……

「あ～りゃりゃっ。やっぱ殺られちゃったよ、クルゼレイさん。キヒヒッ♪真なる魔王だの全世界の王だの言ってた割りには全っ然大した事無いじゃぁん？ホントに旧魔王派って後先考えず怨恨ばっかりで動くから、勝手に自滅してくれて助かるよ。キャハハハハハッ♪さてと、そろそろボクも神殿に向かおうかな？シャルバっちも来る頃だし。グレモリー眷属を殺した後でそのまま旧魔王派も壊滅させちゃおっか♪」

神殿の戦い、第３の覚醒

新達が辿り着いたのは最深部にある神殿
その内部に入っていくと、前方に巨大な装置らしきものが姿を現す
巨大な円形型の装置で、あちこちに宝玉が埋め込まれており、怪しげな紋様と文字が刻まれていた
「アーシアアアアアアアアアッ！」
一誠が叫ぶ
装置の中央にはアーシアが張り付けられていた
「やっと来たんだね」
「ちゃんと来てくれたようだな」
装置の横からディオドラと村上が姿を現す
一誠は禁　手（バランス・ブレイカー）のカウントダウンを開始し、新は闇皇（やみおう）と化した
「……イッセーさん？」
一誠の声を聞いてアーシアが顔を向けた
彼女の目元は腫れ上がっており、尋常じゃない量の涙を流したと思える程に目が赤く

なっていた
「ディオドラ。てめぇ、アーシアに事の顛末を話しやがったな？」
新が先程フリードが語った事について訊くと、ディオドラはニンマリと微笑む
「うん。全部アーシアに話したよ。ふふふ、キミ達にも見せたかったな。彼女が最高の表情になった瞬間を。全部、僕の手のひらで動いていたと知った時のアーシアの顔は本当に最高だった。ほら、記録映像にも残したんだ。再生しようか？本当に素敵な顔なんだ。教会の女が堕ちる瞬間の表情は、何度見てもたまらない」
アーシアがすすり泣き、村上は手に持ったグラスのワインを飲む
「ディオドラ・アスタロト、君は本当に欲深い男だ。しかし、アーシア・アルジェントにはまだ希望が残っている。それがリアス・グレモリーとその眷属。特に赤龍帝は我々にとっても邪魔であり不快な存在だ」
「本当は堕天使の女――――レイナーレを殺し、僕の駒を与える予定だったんだ。けど、村上京司の考えもなかなか魅力的でね。もしキミ達がいなかったら、アーシアを闇人に転生させた後で僕の駒を与えて眷属にしていたよ。村上京司はアーシアの回復能力を分析して新しい力を開発出来ればそれで良いと言っていたからね。僕もアーシアを抱けるなら、それぐらいの事は容易に目を瞑るよ」
「黙れ」

一誠の口から普段発せられない様な低い声音が出た
新もアーシアを弄んだディオドラと村上に対して殺意を燃やし、全身に膨大な魔力を注ぎ込む
２人の我慢が限界に達しようとしているにもかかわらず、ディオドラは下劣極まりない言動を止めない
「アーシアはまだ処女だよね？僕は処女から調教するのが好きだから、赤龍帝のお古は嫌だな。あ、でも、赤龍帝から寝取るのもまた楽しいかな？キミの名前を呼ぶアーシアを無理矢理抱くのも良いかもしれ――――」
「黙れエエエエエエエエエッ！」
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』
一誠の中で怒りが弾け飛び、２分と経たずに禁手と化した！
新も全身に溜めた魔力を解放し、エメラルド色の目を強く光らせる
「ディオドラァァァァァァァッ！てめぇだけは！絶対に許さねぇッ！」
「ディオドラ、村上。てめぇらは怒らせる相手を間違えたな。遺言があったら、今の内に唱えておけやッ！一誠！俺は村上をぶっ殺す！お前はディオドラをぶっ殺せ！」
「言われなくても分かってらぁ。部長、皆、絶対に手を出さないでください」
「新、イッセー。全員で倒すわ――――と言いたいところだけれど、今のあなた達を止め

られそうもないわね。手加減してはダメよ」
リアスは最高の一言を発してくれた
一方でディオドラは楽しげに高笑い、全身からドス黒いオーラを出していた
「アハハハハ！凄いね！これが赤龍帝！でも、僕もパワーアップしているんだ！オーフィスから貰った『蛇』でね！キミなんて瞬殺――――」
一誠は背中の噴出口から火を噴かして瞬間的に距離を詰め、ディオドラの腹に強烈な拳を鋭く打ち込んだ
「……がっ」
「ほう、速いな」
村上が感心してる間にディオドラの体はくの字に折れ曲がり、口から血と共に内容物を吐き出した
「さて、一誠の方は問題ねぇわな。お前はどうする？村上」
新が拳を向けながら言うと、村上は軽く跳んで眼前に着地
魔人態に変貌した村上は、口から光を放つ４つの球体を吐き出し手に取った
「……っ？何なんだそいつは？」
「これか？これは先程デュランダル使いが消滅させた『戦車』２人の魂と、フリードが食い殺した『騎士』２人の魂だよ。魂は肉体が消滅してもあちこちを彷徨くんだ。それと

……」

村上が手を地面に向けて魔方陣を展開する

そこから現れたのはリアスと朱乃の攻撃によって黒焦げにされた碧眼ブロンドヘアーの『女王（クイーン）』と女性『僧侶（ビショップ）』だった

ディオドラと戦っている一誠以外の全員が村上を訝しげに見る

「まずはこの魂から蘇生させるとしよう。『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』」

村上が光の球体に魔力を流し込むと、４つの球体は次第に人の――――女性の形を成していき、ディオドラの『戦車（ルーク）』２人、『騎士（ナイト）』２人が肉体を取り戻して復活した

――――全裸で――――

「ん……。っ？ここは何処……？私達、死んだ筈じゃ――――ッ！きゃあっ！な、なんで裸なのっ!?」

「いやぁっ！でも、どうして……？」

「私の術で復活させてやったのだよ。ほら、君達も起きたまえ」

村上が倒れているディオドラの『女性（クイーン）』と『僧侶（ビショップ）』を軽く蹴ると、２人がゆっくりと目を覚ました

「ううん……。こ、ここは何処なんですか？あ、あなたは……」

「単刀直入に言うよ。君達にもう１度チャンスを与えよう。私と共にリアス・グレモ

リーと眷属を殺すのだ」
　村上の言葉にディオドラ眷属６人が一斉に顔を向けるが、新の気迫と先程倒された恐怖に体を震わせる
「む、無理です……！あんな強い悪魔達に勝てる筈がありません……！」
『女王（クイーン）』の弱気な言葉に他の５人も戦いたくないと言わんばかりに首を横に振る
　村上はその様子を見て嘆息した
「困ったな。それならば――――コレを使うしかないようだ」
　村上が取り出したのは禍々しい形をした銃の様な道具
　新は真っ先に訊いた
「おい。その銃はいったい何なんだ？」
「あぁ、これは私と神風（かみかぜ）で開発した新兵器だよ。『魔銃（マガン）』と言って、対象物を強制的に闇人（やみびと）へ変異させる銃だ」
　村上の言葉に一誠以外の全員、そしてディオドラ眷属６人は絶句した
　村上が『魔銃（マガン）』の銃口をディオドラの『女王（クイーン）』に向ける
「い、いやぁっ……！お願いだから、やめて……！」
「安心したまえ。すぐに他の５人も仲間にしてやる」
　ドオンッ！

村上は涙を混じらせた懇願を嘲笑い、引き金を引いてディオドラ『女王（クイーン）』の胸に黒い弾丸を埋め込ませる

残った５人は眼前の恐怖から逃げようとしたが、背中に１発ずつ弾丸を食らってしまう

次第に弾丸を撃ち込まれたディオドラ眷属の６人に異変が起こる

「あ、あああぁ……！いや……！助けて……イヤァァァ

しかし、村上はその言葉をただ嘲笑う

「フハハハハハハッ！下劣だと？お前達が言えた義理か？悪魔も醜い欲望を晒け出して生きているではないか！ディオドラ・アスタロトが良い例だ！彼は実に素晴らしい！自分の欲望に忠実だからな！欲しい物の為にはどんな手段も使う！私も同じ事をしたまでだ！自らの欲望に従う事の何が悪い！欲望は我ら闇人（やみびと）の糧であり、貴様ら悪魔の糧でもあるだろう！だから、私が欲望を分け与えてやったまでだ。フハハハハハハッ！」

「――――ッ！この……外道ッ！あなたは村上京司と言う名の皮を被った、下劣極まりない化け物よッ！」

「貴様ら悪魔も同じ化け物だろうが！その化け物が化け物に説教か！これは傑作だ！笑いの最優秀賞が取れるぞ！フハハハハハハッ！」

バカにするかの様に大きく哄笑をあげる村上に、リアス達は怒りを抑えられなかった

特に新は……

「村上ィッ！てめぇ！生かしてはおけねぇっ！ぶっ殺してやる！」

「ハッハッハッ！その台詞は彼女達を殺してから言いたまえ！」

闇人（やみびと）に強制変異させられたディオドラ眷属6人が新に襲い掛かる

彼女達は自分で止める事が出来ず、自由が効かないまま涙を流すしかなかった

「チクショウ！こんなにやりづらい相手はねぇぞ！」

「もういや……こんな化け物の姿に……」
「お願いです……私達を殺して……っ」
　ディオドラの眷属達は自分達の醜い姿に耐えられず、新に殺害を依頼する
　だが、新はそれを拒絶した
「何バカな事言ってやがるんだ！自分から殺してくれなんて言うんじゃねぇ！」
「だけど！こんな醜い姿じゃ生きていけない……！」
「私達はもう化け物ですから、遠慮する必要は……」
「そんなの、そんなの悲し過ぎるだろうが！ぐわぁぁぁぁっ！」
　新は大蛇の尻尾攻撃を脇腹に食らい、リアス達の横の壁に激突する
「新！もう黙って見ていられないわ。残念だけど、彼女達を――――」
「ま、待て……！まだ俺はくたばっちゃいねぇ！ここは俺がやる！」
　新は剣を杖代わりに立ち上がり、刀身に黒い魔力を流す
「一か八かの賭けだ……！『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』で闇人（やみびと）の力を吸い取ってやる！」
「あなた正気なの!?そんな無茶をして、何が起こるか分からないのよ!?」
　リアスは新のトンでもなく無謀な考えに激昂するが、新はやめるつもりなど毛頭無かった
「悪いなリアス。俺は女の――――女が助けを求めて流す涙を見ちまったら、放ってお

けねぇ質なんだよ……！村上の野郎に無理矢理闇人にされたまま、死なせてやる訳にはいかねぇんだッ！」

ズオオオオオオオオッ！

剣から発せられた闇が変異させられたディオドラ眷属を捕らえ、闇人の力を吸収しようとする

だが、制御不能となった闇人の力を吸収するなど簡単には出来ず、新の肉体が激しい痛みに襲われる

「ぐあぁぁぁぁっ！うっ……！ぎぃぃぃぃっ……！さ、流石に無謀過ぎたか……！けど、ここで逃げたら男が廃れるよなぁっ！『プロモーション』ッ！『僧侶』ッ！」

新は『兵士』の能力『プロモーション』を使って魔力に特化した『僧侶』に昇格

魔力に特化した駒の力で『暗黒捕食者』の吸収力を高め、闇人の力を吸収するつもりでいるのだろう

彼は痛みを紛らわせるように絶叫を口から放った

「オオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「まさか失敗作共の魔力を吸い取るつもりか？つくづく間抜けな男だな！そんな失敗作共を救って何の意味がある！手っ取り早く殺せば良いものを！やはり君達悪魔共の思考は狂っているな！フハハハハハハッ！」

新の行いに村上は哄笑をあげるが、新は聞く耳を持たずに魔力を吸い続ける
「女としての生き方をてめぇに奪われたこいつらを……このまま死なせてたまるか！無謀だろうが何だろうが、俺はこいつらを助けるんだァァァァァァァァァァッ！」
ゴォォォォォォォォォッ！
新から凄まじい質量の魔力の柱が噴き上がり、ディオドラ眷属６人にある闇人（やみびと）の力が剣だけでなく、新の肉体にも吸収されていく
「――――っ!?バカな！失敗作共の魔力が……闇人（やみびと）の力がどんどん消えていくだと!?」
異変に気付いた村上は驚きの表情を見せる
リアス達も新の魔力の質に気付いた
”また進化するのではないか?”と……
「……ッ！おいおい。土壇場でキテくれるとはな……！だが、今はこいつらを元に戻してくれよッ！」
ギュオォォォォォォォォォォォォッ！
吸収速度を上げる新
ディオドラ眷属達は化け物の肉体から、元の女性の肉体へ戻っていく
「嘘……私達、元に戻れたの!?」
「夢じゃないわ……！紛れもなく元の体よ！」

「あ、ありがとうございます！なんてお礼を言ったら良いか……！」
裸である事を気にせず、ディオドラ眷属達は新に近づく
新は自分達が入ってきた神殿の入り口を指差す
「今は危ねぇから、この場から逃げな。ずっと先にお前達の仲間の『兵士』がいる。そこでジッとしてろ」
「はい……。このご恩はいつかきっとお返します」
ディオドラの『女王』が『戦車』２人、『騎士』と『僧侶』を引き連れて神殿を出ていく
信じ難い事態を目撃した村上は怒りに身を震わせる
「ふざけるな……ふざけるなアアアアアアアアアアッ！貴様ら悪魔共に負ける私ではないのだよ！超魔身ッ！」
村上は魔人態からドラゴンに近い超魔身態へと変貌した
咆哮をあげると周囲の壁に亀裂が生じる
「さ～て、新しく覚醒した力をお披露目してやるか！『進化する昇格』ッ！『僧侶』ッ！」
新が叫ぶと、闇皇剣が赤と黒の魔力に包まれ銃の形に変形していく
蝙蝠の顔が銃口となった武器を掴むとマントが分離し、蝙蝠の顔を象ったキャノンと

なって両肩に現れ、更に胸部には両翼型のプレートが装着される
新の３つ目の覚醒形態が降臨した
「これが『闇皇の鎧』の『僧侶』形態――――『闇 皇 の 魔 導 銃 僧 侶』か！村上！この闇皇銃で、てめぇに風穴開けてやらぁ！」
新が銃口を村上に向け、先程吸収した魔力を闇皇銃に充填していく
村上は全身から茨を出して突っ込んでくる
「この私が付け焼き刃の力に負けると思っているのかッ！串刺しとなって死ぬが良いッ！」
銃口の蝙蝠の目が強く光り、新は叫びながら引き金を引いた
「フルバーストオオオ

慟哭(どうこく)する村上

その肉体は僅かな頭部以外、完全に消滅していった……

アーシアを救え！

新ＶＳ村上の戦いよりも一足先に開戦の火蓋を落とした一誠はディオドラの腹に拳を打ち、その拳を捻り込んで
内臓にもダメージを与える
ディオドラは口から内容物を血と共に吐き出す
「瞬殺がどうしたって？」
一誠が拳を引きながら訊くと、ディオドラは腹を押さえて後退りしていく
さっきまでの余裕は完全に消え去っていた……
「くっ！こんな事で！僕は上級悪魔だ！現魔王ベルゼブブの血筋だぞ！キミの様な下級で下劣で下品な転生悪魔ごときに気高き血が負ける筈が無いんだッ！」
ディオドラは手を前に突き出し、無限に等しい数の魔力弾を発射する
一誠は避けずに魔力弾の雨の中を１歩１歩進んでいく
被弾しても全く意に介さずディオドラとの距離を詰める一誠
「ありがとうよ、タンニーンのおっさん。あの修行、効果があったなんてもんじゃねぇ。

あいつの攻撃が全く怖くない」
『そうだ。龍王との修行はお前を相当鍛え込んだ。シトリーとの一戦はその修行を活かし切れなかったが、制限無しならば力を出し切れる。鎧の防御力もシトリー戦の頃に比べてだいぶ安定してきた。単純なパワー勝負なら、現在のお前はかなりの物だよ』
「ああ、ドライグ。匙との勝負ではパワーを発揮出来なかった。けど……今なら違う！こいつ相手なら殺意全開でぶん殴れるッ！」
ディオドラは魔力の攻撃を止めて距離を取ろうとする
しかし、一誠は背中の噴出口から魔力を噴かして直ぐにディオドラに追いつく
その瞬間、ディオドラは幾重もの防御障壁を作り出した
「ヴァーリの作った障壁よりも薄そうだな」
バリンッ！ゴンッ！
一誠の拳打が防御障壁を全て壊し、ディオドラの顔面へ一撃を与えた
殴られた勢いでディオドラの体が床に叩きつけられる
ディオドラは顔から血を流して涙を溢れさせた
「……痛い。痛い。痛いよ！どうして！僕の魔力は当たったのに！オーフィスの力で絶大なまでに引き上げられた筈なのに！」
一誠は泣き言を無視してディオドラの体を引き上げ、オーラを纏った拳を腹に叩き込

む

更に顔面にも叩き込み、次の一撃をくらわせようとした

「こんな腐れドラゴンに僕がぁぁぁっ！」

ディオドラは左手を前に突き出し、分厚いオーラの壁を発現させた

一誠の拳がその壁に当たり、勢いを殺されそうになる

「アハハハハハハッ！ほら見た事か！僕の方が魔力は上なんだ！ただのパワーバカの赤龍帝（せきりゅうてい）が僕に敵う筈が無いんだよッ！」

「――――そのパワーバカのパワーを見せてやろうか？」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

グシャッ！
ディオドラの左手を叩き折り、その勢いのまま顔面に拳を打ち込んだ
鋭く突き刺さった一撃にディオドラは柱まで吹き飛ばされ背中から激突
床に落ち、地べたを這いずりながら叫んだ
「ウソだ！やられる筈が無い！アガレスにも勝った！バアルにも勝つ予定だ！才能の無い大王家の跡取りなんかに負ける筈が無い！情愛が深いグレモリーなんか僕の相手になる筈が無い！僕はアスタロト家のディオドラなんだぞ！」
ディオドラが手を上へ突き上げると、一誠の周囲に円錐状の魔力が幾重にも出現する
切っ先を向け、ミサイルの様に襲い掛かる
一誠は身を屈めたり横っ飛びで回避、或いは拳や蹴りでトゲを弾き飛ばすが、切っ先は意志を持ったかの如くうねり始める
そして鎧の隙間から一誠の肉体を刺し貫いた
一誠は自分に突き刺さったトゲを両手で引き抜いていき、傷口から血が滴(したた)り落ちる
同じ攻撃をしようとするディオドラに一誠は瞬時に距離を詰めて蹴りを放つ
鈍い音を響かせ、ディオドラの右足を完全に粉砕した
「ちくしょおおおおおおおっ！」
苦痛に顔を歪ませるディオドラは手に魔力を集め始めた

どうやら最大限に溜めた魔力の波動を撃ち出すつもりだろう
一誠も手にドラゴンのオーラを集束させ、赤い閃光を走らせた
同時にディオドラの魔力弾も撃ち出され――――お互いの一撃が宙でぶつかり合う
「いっけえええええっ!」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!』
神器（セイクリッド・ギア）から増加された力が流れ込み、一誠のドラゴンショットのパワーが底上げされる
そして赤い閃光はディオドラの極大な魔力弾を打ち消した……

ドシャッ……
新の『一闇皇の魔導銃僧侶《アーク・カイザー・ウイザルドバスター・ビショップ》』によって僅かな頭部以外の肉体を消滅させられた村上京司（むらかみきょうじ）は、目をひくつかせながら魔銃（マガン）と共に地面に転がった
「ぐがぁっ、あああ……何故だ……? 何故、私がこんな無様な姿に……! 三嶋の子孫や貴

様ら悪魔は……何故、我々の邪魔ばかりいいいいいっ……！」
ガク……ッ
首だけになった村上は新とリアス達を憎しみの眼で睨むも、徐々に白目となり――――絶命した
ドゴォォオオオオオオンッ！
神殿が大きく揺れる
見てみると、一誠が床に拳を叩きつけて巨大なクレーターを作っていた
ディオドラは血まみれで左腕と右足が折れており、歯をガチガチ鳴らしていた
完全に一誠に恐怖している……
一誠はディオドラの胸ぐらを掴み、素顔を晒して睨み付ける
「2度とアーシアに近づくなッ！次に俺達のもとに姿を現したら、その時こそ、本当に消し飛ばしてやるッ！」
『相棒。そいつの心はもう終わった。そいつの瞳はドラゴンに恐怖を刻み込まれた者のそれだ』
ドライグの声に一誠はディオドラを放す
ディオドラはガチガチと震えるだけだった
「一誠。そっちも片付いたみたいだな」

「新。ってか、何その姿？また覚醒したのか？」
「ああ。『僧侶（ビショップ）』の能力に特化した形態だ。今さっきこいつで村上を殺した」
「そっか。俺もこいつを充分に殴り飛ばした」
新達は全員アーシアが捕らえられている装置へ駆け寄る
そしてアーシアを装置から外そうとしたが――――少しして祐斗の顔色が変わる
「……手足の枷が外れない」
「何だと!?」
「クソ！外れねぇ！」
一誠はアーシアと装置が繋がっている枷を外そうとしたが、赤龍帝（せきりゅうてい）のパワーでも外れず、新やリアス達の攻撃を受けてもビクともしなかった
その時、ディオドラが言葉少なく呟く
「……無駄だよ。その装置は機能上1度しか使えないが、逆に1度使わないと停止出来ないようになっているんだ。アーシアの能力が発動しない限り停止しない」
「どういう事だ？」
「その装置は神滅具（ロンギヌス）所有者が作り出した固有結界の1つ。このフィールドを強固に包む結界もその者が作り出しているんだ。『絶霧（ディメンション・ロスト）』、結界系神器（セイクリッド・ギア）の最強。所有者を中心に無限に展開する霧。その中に入った全ての物体を封じる事も、異次元に送る事す

ら出来る。それが禁手（バランス・ブレイカー）に至った時、所有者の好きな結界装置を霧から創り出せる能力に変化した。『霧の中の理想郷（ディメンション・クリエイト）』、創り出した結界は1度正式に発動しないと止める事は出来ない」

祐斗はディオドラに問いただす

「発動の条件と、この結界の能力は？」

「……発動の条件は僕か、他の関係者の起動合図、もしくは僕が倒されたら。結界の能力は――――枷に繋いだ者、つまりアーシアの神器（セイクリッド・ギア）能力を増幅させて反転（リバース）すること」

反転（リバース）とは名前の通り、能力の質を逆転させる力

例えるなら、これを使えば聖なる力は魔の力に変わり、魔の力は聖なる力に変わる

実はシトリー戦にて、アーシアがリタイヤに追い込まれた要因はこの反転（リバース）にある

絶大な回復能力が逆転すれば……それは致命傷レベルの物と化す

それに気付いた祐斗は更に問いただした

「効果範囲は？」

「……このフィールドと、観戦室にいる者達だよ」

「――――ッ！やべぇぞ！アーシアの回復能力は悪魔や堕天使さえも治すんだろ!?それが増幅されて反転（リバース）されたら――――」

「……各勢力のトップ陣が全て根こそぎやられるかもしれない……ッ！」

衝撃の事実に全員が青ざめた
そんな事になれば人間界、天界、冥界は主導者を失い、闇人がここぞとばかりに攻め込んで来る
「会長との一戦でそんな作戦が思い付かれたのか！」
「……いや、随分前からその可能性が出ていたようだよ。ただ、シトリーの者がそれを実際に行った事で計画は現実味を帯び、闇人幹部からの知恵を借りた事で確信に変わったそうだ……」
それを聞いたリアスが怒りで顔を歪める
「堕天使の組織に潜り込んだままの裏切り者がソーナに『反転』を貸す事でデータを集め、利用していたかもしれないのね！」
「じゃあ……グラシャラボラスの不審死どころか、ソーナ会長との戦いも、お前も、全部『禍の団』と闇人が絡んでやがったのか！」
更に神滅具が創った装置も『禍の団』の者が関与しており、ドライグから『絶霧』はブーステッド・ギアよりも高ランクで禁手に至って創られた装置の破壊は無謀である事を告げられ、一誠は床を叩いて悔しがる
「イッセーさん、私ごと――――」
「バカな事言うんじゃねぇッ！次にそんな事言ったら怒るからな！アーシアでも許さな

い！」
「で、でも、このままでは、先生やミカエル様が私の力で……。そんな事になるくらいなら、私は――――」
「俺は……俺はッ！２度と、アーシアに悲しい思いをさせないって誓ったんだ！だから絶対にそんな事をさせやしない！俺が守る！ああ、守るさ！俺がアーシアを絶対に守ってやる！」
アーシアの肩を抱き、泣きながら言う一誠にアーシアも感極まって涙を溢れさせるが、非情にも装置が動き出す
全員が再度魔力の弾を装置にぶつけるが、やはりビクともしなかった
「くそっ！どうしたら良いんだ！このままじゃ――――」
「……いや、待てよ。一誠！１つだけ手はあるぜ！」
突然新が攻撃を止めて、そんな事を言い出した
「直接的な力がダメなら、ブーステッド・ギアの力で高めた妄想の類（たぐい）から生じる特殊技ならどうだ？そう……一誠の『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』で枷を破壊するんだ」
全員が新の答えに絶句した
「見てみろ。この枷はアーシアにピッタリとくっついている。もしかしたら、こいつもアーシアが身に付けている物の一部として破壊出来るんじゃないか？」

「そ、そんな事が可能なの……？」
　リアスは恐る恐る訊くが、新は豪語した
「可能か不可能かじゃねぇ。やるかやらないかだ！やらなきゃ分かんねぇんだよ！」
「ちょ、ちょっと待て新！それはつまり、ここでアーシアを裸にしろって言ってるのか!?」
「そうだ！アーシアを装置から解放する手段はそれしかねぇんだよ！アーシア！今から一誠がお前を裸にするが、我慢出来るよな？」
　新が確認を取ると、アーシアはコクリと頷いた
「はい……イッセーさん。お願いします」
「……っ!?良いのかアーシア!?」
「大丈夫です……。イッセーさんになら、何をされても構いません……。新さんや皆さんに見られても、我慢しますッ！」
　アーシアの確認に一誠が一旦新の顔を見やり、頷いてからアーシアを捕らえている枷に触れた
「高まれ、俺の性欲！俺の煩悩！『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』ッ！禁手（バランス・ブレイカー）ブーストバージョンッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

一誠の鎧の宝玉が赤く輝き、枷に触れている手に流れ込んでいく
「一誠！思い浮かべろ！アーシアの全裸を！半端なイメージじゃ意味がねぇ！全力で思い浮かべろ！」
「分かった！アーシアの全裸！何も纏っていない生まれたままのアーシア！俺はそれを脳内に保存しているぞオオオオオオオッ！」
「あ、あの……あんまり言われると恥ずかしくなってきます……」
アーシアが顔を赤く染め、一誠は鼻血を噴き出しながらアーシアの全裸を強くイメージしていく
「もっとだ！もっと思い浮かべろ！」
「キメが細かくてスベスベな白い肌！」
「柔らかい体！」
「そして綺麗な！」
「ピンク色の！」
「乳首いいいいいっ！」
バギバギバギバギンッ！
バババッ！
アーシアの両手両足を捕らえていた枷は木っ端微塵に吹き飛び、同時にアーシアのシ

スター服も消し飛んだ
「……で、出来た……ッ！」
「……イッセーさん！」
　アーシアは裸で一誠に抱きつく
　アーシアが装置から解放されたために、装置の動きも止まった
「イッセーさん！新さん！ありがとうございます！」
「い、いや～……破壊出来て本当に助かった。これでダメだったら正直どうしようかと思ってた……」
「新！お前失敗すると思ってたのかよ!?コラ！待ちやがれ！」
　逃げる新を追い掛ける一誠
　アーシアは朱乃が魔力で出した新しいシスター服に着替え、再び一誠に抱きついた
「信じてました……。イッセーさんが来てくれるって」
「当然だろう。でも、ゴメンな。ツラい事、聞いてしまったんだろう？」
「平気です。あの時はショックでしたが、私にはイッセーさんがいますから」
　笑顔で嬉しい事を一誠に言うアーシア
　ゼノヴィアも目元を潤ませ、アーシアと抱き合う
「部長さん、皆さん、ありがとうございました。私のために……」

「アーシア。そろそろ私の事を部長と呼ぶのは止めても良いのよ？私を姉と思ってくれて良いのだから」
「――――っ。はい！リアスお姉さま！」
今度はリアスとアーシアが抱き合う
ギャスパーは大泣きし、小猫が頭を撫でる
これでようやく終わった
「さて、アーシア。帰ろうぜ」
「はい！と、その前にお祈りを」
アーシアは天に向かって何かを祈る
一誠が何を祈ったかを訊くと、「内緒です」と返された
笑顔で一誠のもとへ走り寄るアーシアだったが――――突如、まばゆい光の柱が発生する
光の柱が消え去ると――――
「……アーシア？」
そこには誰もいなかった

主よ。お願いを聞いてくださいますか？
どうか、イッセーさんをずっとお守りください
そして――――
どうか、これからもずっとイッセーさんと一緒に楽しく暮らせますように――――
―

覇龍

一瞬何が起こったのか、全員は理解出来ずにいた
そんな時に2つの声が聞こえてくる
「キヒヒヒヒヒヒッ。神滅具(ロンギヌス)で創られたものが神滅具(ロンギヌス)の攻撃で壊れちゃったね～♪ま、手抜きだったから仕方無いか～♪」
「霧使いめ、計画の再構築が必要だ」
独特の笑い声と聞き覚えの無い声
上を見てみると、そこには見覚えのある少年が軽鎧(ライト・アーマー)とマントを身に着けた男と共に浮いていた
そいつの名は――――
「――――神風(かみかぜ)ッ！」
「おっひっさ～♪グレモリーのお姉さん達～。元気にしてましたか～？今日はスペシャルなゲストを連れてきたよ～」
カプリンチョを食べながら地に降り立つ『チェス』の一員にして『ビショップ』の称号を持つ闇人(やみびと)

そして宙に浮いたままでいる男は――――

「お初にお目にかかる。私の名前はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く正統なる後継者だ。先程の偽りの血族とは違う。ディオドラ・アスタロト、この私が力を貸したと言うのにこのザマとは」

「ディオドラ・アスタロトくんもザマァ無いよね～？シャルバっちからオーフィスの蛇を貰ったのにボッコボコ、アガレスのお姉さんとの試合でも無断で蛇使っちゃってさ～。予見されて計画台無し、愚行が過ぎるよね～？」

今回の首謀者――――旧ベルゼブブと共にやって来た神風

『禍の団（カオス・ブリゲード）』と通じているのは村上だけではなかった

ディオドラが2人に懇願するような顔で言う

「シャルバ！闇人（やみびと）の『ビショップ』！助けておくれ！キミ達が加われば赤龍帝（せきりゅうてい）を殺せる！旧魔王と現魔王、それに闇人（やみびと）の幹部が力を合わせれば無敵だ！頼むよ！」

神風はディオドラにゆっくり近づき一言だけ発した

「やだ♪」

グバァァァッ！バキグチャッ！

突如、神風の右腕が狂暴な獣の形と化してディオドラの上半身を噛み砕いた

その後、神風は嫌気丸出しの顔で吐き捨てる

「ボクが君みたいなクソカス悪魔を助けると思ってたの？せっかくシャルバっちからアーシアちゃんの神　器（セイクリッド・ギア）について教えてもらっといてさ、たかが知れてんだよヴァ～カ。君みたいなゴミクズはボクの餌になってろ」
「ふんっ、哀れだなディオドラ」
冷淡に吐き捨てるシャルバ
彼もディオドラを見限っていたようだ
残った下半身も喰った神風は腕を元に戻し、今度は絶命した村上に近寄り魔銃（マガン）を回収する
「村上さん。あなたもヴァカだよね～？超魔身（ちょうましん）も完成してないのに先走るとか。ったく、『チェス』の面汚しだよ」
グシャアッ！
神風は冷酷な目で頭部のみとなった村上を踏み潰した
肉と血が飛び散って床を汚す
「さ・て・と♪グレモリーのお姉さん。本当はボクのおっぱい枕にしてあげたいんだけどぉ、シャルバっちから言われててさ。お姉さんを殺さないといけないらしいんだ～。理由は現魔王の血筋を滅ぼすためだって」
「グラシャラボラス、アスタロト、そして私達グレモリーとシトリーを殺すと言うのね」

リアスの問いかけに神風は笑顔で頷いた

「そうだよ～♪ボクも最初は断るつもりだったんだけどぉ、闇人(やみびと)を頂点に導くにはやっぱ邪魔な奴らを消すのが必要な事だと思ったからさ～。今回の計画に加担したって訳♪キヒヒッ。効率良くやるなら、やっぱ協定も大事だよね～♪ねぇ、シャルバっち？」

「その通りだ。不愉快極まりないのでね。私達真の血統が貴公ら現魔王の血族に『旧』などと言われるのが耐えられないのだよ。まあ、今回の作戦はこれで終了、私達の負けだ。まさか神滅具(ロンギヌス)の中でも中堅クラスのブーステッド・ギアが上位クラスのディメンション・ロストに勝つとは。想定外としか言えない。まあ、今後のテロの実験ケースとして有意義な成果が得られたと納得しよう。クルゼレイが死んだが問題無い。――――私がいればヴァーリがいなくても充分に我々は動ける。真のベルゼブブは偉大なのだから。さて、去り際のついでだ。――――サーゼクスの妹よ、死んでくれたまえ」

「シャルバ・ベルゼブブ……！直接現魔王に決闘も申し込まずにその血族から殺すだなんて卑劣だわ！神風！あなたもこんな事をして恥ずかしいと思わないの!?」

リアスの怒声を聞いてもシャルバは口の端を吊り上げ、神風は爆笑するだけだった

「それで良い。まずは現魔王の家族から殺す。絶望を与えなければ意味が無い」

「キャハハハハハハッ！ボクはただシャルバっちも『禍(カオス)の団(ブリゲード)』も”利用”してるだけ。現魔王を殺しておけば、考えが古臭い旧魔王なんざ簡単に殺せる。だ・か・ら、そ

れまで存分に利用するだけで～す♪シャルバっちも同じ考えでしょ？」
「その通りだ。今は闇人よりも現魔王どもが邪魔で仕方ない」
「――――この外道ッ！村上京司より遥かに腐ってる！何よりもアーシアを殺した罪！絶対に許さないわッ！」
「キャハハハハハハッ！絶対に許さないとか、古臭いんですけど～？チョー受けちゃうよ！キャハハハハハハッ！」
リアスは激昂して全身から紅いオーラを迸らせる
他の皆も殺意を明らかにして戦闘態勢に入るが――――
「アーシア？アーシア？」
一誠だけはフラフラと歩きながらアーシアを呼んでいた
「アーシア？何処に行ったんだよ？ほら、帰るぞ？家に帰るんだ。父さんも母さんも待ってる。か、隠れていたら帰れないじゃないか。ハハハ、アーシアはお茶目さんだなぁ」
覚束ない足取りでアーシアを探す一誠
しかし、いくら呼んでもアーシアはいない……
「アーシア？帰ろう。もう誰もアーシアをいじめる奴はいないんだ。いたって、俺がぶん殴るさ！ほら、帰ろう。体育祭で一緒に二人三脚するんだから……」

正直言って、とても見ていられなかった
小猫とギャスパーは嗚咽を漏らし、朱乃も顔を背けて涙を頬に伝わせる
リアスは一誠を優しく抱き、何度も頬を撫でる
「なになになぁに?あまりのショックで壊れちゃったのかな～?その死んだ魚みたいな目、チョー受けるんですけどぉ♪キャハハハハハハッ！」
「……許さない。許さないッ！斬るッ！斬り殺してやるッ！」
叫びながらゼノヴィアがデュランダルとアスカロンでシャルバに斬りかかる
「神風ェェェェェェェェェッ！」
新も殺意全開で神風に突っ込むが、攻撃は両手で防がれた
「無駄だ」
「鬱陶しいんだよ」
ドガァァァァァァァァァァァァァッ！
神風の掌(てのひら)から1本角の生えた獣型の雷が放たれ、新は神殿の壁まで吹っ飛ばされた
シャルバは聖剣の二刀を光り輝く防御障壁で防ぎ、ゼノヴィアの腹部に魔力弾を撃ち込んだ
ゼノヴィアは床に叩きつけられ、二振りの聖剣が床に突き刺さる
「ぐっ……！アーシアを……返せよ……！コンチクショウガァァァァっ……！」

「……私の……友達なんだ……ッ！……優しい友達なんだ……。誰よりも優しかったんだ……ッ！どうして……ッ！」

新は膝をつき、ゼノヴィアは手元から離れていった聖剣を握ろうとする

神風は一誠に向かって非情な事を言い放った

「赤龍帝（せきりゅうてい）～。まだ今の状況を理解出来てないのか～い？だったらボクが分かり易く教えてあげるよ。アーシアちゃんは次元の彼方に消えていきました～。つ・ま・り、アーシアちゃんは死んじゃいました～♪ドンドンパフパフ～♪どう？意味分かるぅ？あ、ゴメンゴメン。もう精神が壊れたから言っても分かんないかぁ？君って頭悪いから気付いてあげられなかったよ！キャハハハハハハッ！」

「下劣なる転生悪魔と汚物同然のドラゴン。全くもってグレモリーの姫君は趣味が悪くてかなわないな」

一誠が神風とシャルバをジッと見つめ続ける

無表情で見続ける姿は異様だった

『リアス・グレモリー、今すぐこの場を離れろ。死にたくなければすぐに退去した方が良い』

「どういうこった！・ドライグ――――っ!?な、何だこの嫌な魔力は……!?」

怒号を発する新はすぐに異変を感じ取った

そしてドライグの声は神風とシャルバに向けられる
『そこの小僧と悪魔よ。神風、シャルバと言ったか？お前は選択を間違えた』
一誠はリアスを振り払い、怨敵（おんてき）を真っ直ぐに見た
ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！
神殿が大きく揺れ、一誠が血の様に赤いオーラを発していく
それは最大級に危険なオーラだった
そして一誠の口から老若男女、複数入り交じった呪詛のごとき呪文が発せられる
『我、目覚めるは――――』
〈始まったよ〉
〈始まったね〉
『覇の理（ことわり）を奪いし二天龍なり――――』
〈いつだって、そうでした〉
〈そうじゃな、いつだってそうだった〉
『無限を嗤（わら）い、夢幻（むげん）を憂（うれ）う――――』
〈世界が求めるのは――――〉
〈世界が否定するのは――――〉
『我、赤き龍の覇王（はおう）と成りて――――』

〈いつだって、力でした〉
〈いつだって、愛だった〉
≪何度でもお前達は滅びを選択するのだなッ！≫
一誠の鎧が鋭角なフォルムを増していき、巨大な翼まで生えてくる
両手両足から爪が伸び、兜からは角がいくつも形作られていく
その姿はドラゴンそのものだった
全身の宝玉から絶叫に近い声が老若男女入り乱れて響く
「「「「「「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――――――――――――――」」」」」」
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ!!!!!!!!!!!!』
一誠の周囲――――床、壁、柱、天井が赤いオーラによって破壊されていく
「ま、まさかこれが……!?アザゼルの言ってた『覇龍』か!?」
「ぐぎゅあああああああ

しかし、一誠の宝玉の1つから刃が生まれ、神風の右腕を切断した
「チィッ！鬱陶しいなクソドラゴンッ！」
神風は一誠を蹴り飛ばす
肩の肉を食い千切られたが、すぐに右腕と共に再生する
一誠は壁に四肢で着地すると、食い千切った肉を床に吐き捨て――――今度はシャルバに噛みついた
「ぬうううっ！おのれっ！」
シャルバは右腕で光の攻撃を放とうとするが、別の宝玉から赤い鱗に覆われた龍の手が出現し、シャルバの右腕を止める
ブチブチブチッ！
宝玉から飛び出た龍の手がシャルバの右腕を引き千切る
更に肩の肉を食い千切って床に着地する
「げごぎゅがぁぁ、ぎゅはごはぁっ！ぐおおお

神風は楽しそうに笑いながら獣型の雷を１００体放ち、シャルバは残った左腕で極大な光の一撃を放った

その瞬間、赤龍帝（せきりゅうてい）の翼が広がり光り輝く

『Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ（ディバイド） Ｄｉｖｉｄ!!』

白龍皇（はくりゅうこう）の力――――――力を半減させる音声が何度も響き、雷の獣達とシャルバの攻撃はペンライト程の弱々しさとなった

「うひ～！白龍皇（はくりゅうこう）の力まで使うの!?キャハハハハハハッ！完全にイカレてるよ君は！」

「ヴァーリの力か！おのれ！何処までもお前は私の前に立ち塞がると言うのだなッ！ヴァーリィィィィィッ！」

まだ楽しそうに笑っている神風と怒りに吼えるシャルバ

シャルバが今度は魔力の波動を撃つ

しかし、絶大な魔力の波動は翼の羽ばたきだけで弾かれた

赤龍帝（せきりゅうてい）の兜に生まれた口が大きく開き、口内の奥からレーザーの砲身が出てくる

ビィィィィィッ！

赤いレーザーが一直線に伸びてシャルバの左腕を吹き飛ばす

神風は寸前で横に回避した
レーザーは神殿の床や壁、天井を一直線に抉り、その場所から爆発が巻き起こる
「ぬあああああがあああああっ！」
咆哮を上げながら全身にオーラを発生させる一誠
オーラを漂わせるだけで周囲が大きく抉れ、巨大なクレーターとなる
「ば、化け物め！こ、これが『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』だと言うのか!?冗談ではない！わ、私の力はオーフィスによって前魔王クラスにまで引き上げられているのだぞ!?データ上のブーステッド・ギアのスペックを逸脱しているではないか！」
「暴走状態でこの威力か～。キャハハハハハハハハッ！こりゃ面白いねぇ！」
シャルバの顔が遂に恐怖に包まれた
瞳には怯えの色が強く、完全に一誠を恐怖の対象として捉えている
一方の神風は余裕を見せつけ、狂ったように哄笑を上げる
新は呆然としており、リアス達も怯えていた
「なんて禍々（まがまが）しさだよ……あれはもう一誠じゃねぇ……ただの怪物だ……！」
赤龍帝（せきりゅうてい）は両翼を広げ、鎧の胸元と腹部を開き、そこからレーザーの発射口が姿を現す
赤いオーラが発射口に集まり、横に広がった翼も赤い光を辺り一面に放つ
「くっ！私はこんな所で死ぬわけには！」

シャルバは残った足で転移魔方陣を描こうとするが――――その足が動きを停める
「……と、停めたのか！私の足を！」
鎧の眼が赤く煌(きら)めいていた
まるでギャスパーの神器(セイクリッド・ギア)と同じように……時間停止の能力でシャルバの足を停めた
増大を続けるオーラの危険性に、新はこのままではマズイと直感した
「リアス！ここを離れるぞ！ここにいたら巻き込まれちまう！」
「イッセーを置いていくって言うの!?そんな事出来る訳ないでしょうッ！」
「このままだと全員が死ぬぞ！それでも良いのかッ!?」
新はリアスの胸ぐらを掴んで説得させるが、ドライグから声が聞こえる
『闇皇(やみおう)の！直に膨大な魔力が放たれる！もう間に合わないぞ！』
「マジかよ！チキショウがァッ！だったら――――俺の中にある全魔力を盾にして防ぐッ！全員俺の後ろに隠れろ！」
「無茶よ新！防げるかどうかも分からないのに――――」
「黙れリアス！間に合わねぇんだったら、やるしかねぇだろうが！さっさと隠れろ！」
新はリアスを無理矢理後ろにやって全員の前に立ち、両手を前に出して巨大な蝙蝠型のバリアーを張る

「新さん！」

「先輩！」

「心配すんな朱乃、小猫。俺を誰だと思ってやがる？俺はこんな事じゃ死なねぇよッ！」

魔力を特化した『闇皇の魔導銃僧侶（アーク・カイザー・ウィザルドバスター・ビショップ）』で作られた盾なら多少の被害を防げるかもしれない

新はそう考えてリアス達を真後ろに避難させたのだ

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

神風の繰り出した巨大な雷獣と赤龍帝の発射した膨大な魔力がぶつかり合った
一頻り衝突音と火花が散った後――――巨大な雷獣は赤い砲撃に貫かれ神風を飲み込む
そして砲撃はそのままシャルバにも向かっていく
「バ、バカな……ッ！真なる魔王の血筋である私が！ヴァーリに一泡も噴かせていないのだぞ!?ベルゼブブはルシファーよりも偉大なのだ！おのれ！ドラゴンごときが！赤い龍め！白い龍めェェェェッ！」
シャルバは怨嗟を吐き捨てながら赤い閃光に包まれていった……

おっぱいドラゴンの歌

「……こ、ここは……？」
　気が付いた時、新は目の前が真っ暗で何か柔らかいものを感じていた
「ダ、ダメですよ……こんな所で恩を返せだなんて……」
　か細い女性の声
　顔を上げて確かめてみると、先程救出裸のディオドラ『女王（クイーン）』を押し倒してる様な形になっていた
「……っ？お前、なんでここにいるんだ？」
「『兵士（ポーン）』の娘達と合流した直後に凄い衝撃があって、私達も吹き飛ばされたんです……」
　周りを見ると、他のディオドラ眷属達も土埃だらけで体を起き上がらせていた
　新は痛む体に鞭を打ち、飛び起きてリアス達を探す
　すぐに見つかったが、他の皆もボロボロになっていた
「おい、しっかりしろ」
「うぅん……あ、新？無事だったのね？」
「何とかな」

少しすると朱乃達が体を起こしてくる
全員の無事を確認したが……問題は一誠だった
「――――ッ！そうよ、イッセー！イッセーは!?」
リアスが辺りを見回すと、遥か先にいる赤龍帝（せきりゅうてい）の姿を視界に捉えた
鎧からプスプスと黒煙を立ち上げている……
雷獣を貫いたものの、完全に打ち消す事は出来ずまともに浴びてしまったのだろう
「あ～……クソッ。買ったばかりのカプリンチョが、ぜ～んぶ無くなっちゃったよ……最悪」
底冷えさせられる声が聞こえてきた
”そんなバカな……!”
誰もがそう思った
しかし、神風（かみかぜ）は生きている……体にいくつかの焦げ痕が付いてはいるが、あれだけ膨大な魔力の攻撃を受けても死んでいなかった……
「シャルバっちはどうでも良いよ……チッ。クソ悪魔のクソドラゴンが……ボクのカプリンチョを消し飛ばすなんてさ～、ムッカツクなぁ？ムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくなムカつくな！ムカつくよなぁぁぁ

怒りを露にしながら吠え、神風の肉体が変貌していく
全身が鎧のような皮膚になり、腕や足が禍々しい形となっていく
腰から蠍と百足の尻尾、背中から腕が８本も突き出してくる
腹が裂けて凶暴な牙を生やした口が現れ、自身の顔が３本角の獣の様な頭部に変質し、右隣から獅子を、左隣からはユニコーンを象った頭部がせり上がってくる
フリードの合成獣姿なんか生やさしいと思える程の異形さ、醜悪さ、禍々しさを出していた……
「何なんだよアレ……全部メチャクチャじゃねぇか……！」
「……ボクは闇人の中でも好奇心とか探求心が旺盛でね。様々な獣や幻獣の遺伝子を採取して、自ら改造を施したんだよ。改造に改造を重ねて出来た闇人の最高傑作がボク自身さ」
「自分をそこまで改造するなんて……まともじゃないわ……！」
リアス達は神風の自己改造に戦慄する
神風は気にせず赤龍帝に向かって歩みを進めていく
ただ歩いているだけなのに、１歩１歩踏む度に地面が揺れる
「赤龍帝～……さっきのアレさぁぁぁぁぁぁ。少し痛かったんだけど……？痛かったんだけど……痛かったんだけどオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

ギュビュウッ！
ガシャアアアアアンッ！
神風が巨体に似合わぬスピードで距離を詰めて、赤龍帝の頭部を掴み地面に叩きつける
神風はゆっくり手を離し、今度は全ての腕が拳を作り上げた
「お前のせいでさ～……カプリンチョがぁ～……全部消し飛んだの……どうしてくれるんだよオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
ドゴッ！ガゴッ！バギッ！グシャッ！
巨大な１０本の腕が赤龍帝を容赦無く殴り、その度に赤龍帝の体から鮮血が飛び散っていく
異常過ぎる力にリアス達は恐怖にまみれて怯えた
新は何とか動こうとするが、魔力を使い果たしてしまったので思うように動かない……
「キャハハハハハハッ！クソドラゴンの赤龍帝なんざグチャグチャになっちゃえッ！身体中の血液を全部吐き出しちゃえッ！骨も内臓も全部潰れて蛸みたいな軟体生物になっちゃえエエエエッ！キャハハハハハハッ！」
神風の拳で赤龍帝の鎧がどんどん変形していく……

このままでは一誠が死んでしまう……が、リアス達の体が動いてくれない
まるで拒絶反応を起こすように……
「動いて……！動いてよ……！私の体なのに、どうして動かないのよ……!?」
神風は拳を止めて赤龍帝の頭を掴み上げる
そして掴んだままリアス達の所に歩み寄り、赤龍帝を眼前に落とす
「それは本当に恐怖している証拠だよ。人間だろうと悪魔だろうと、恐怖にまみれたら頭では分かっていても体が動かないものなんだよ。つまり、ボクの実力が上だと……自分達じゃ勝てないと本能が理解してるって事。ま、そんな事はどうでも良いや」
神風は赤龍帝の頭を踏みつける
徐々に力を入れていき、地面に深くめり込ませていく
「クソッ……！魔力を使い果たしたせいで動けねぇ……！」
「グレモリーのお姉さん。そこでガタガタ震えながら見といてね？今からお姉さんの大事な下僕の赤龍帝をグチャグチャのジャムにしてあげる。大きな絶望を与えた後で、お姉さん達を殺してあげるよッ！キャハハハハハハッ！」
「やめて……やめてエエエエエエエエッ！」
リアスが吐き出した涙混じりの叫びに聞く耳を持たず、神風は思いっきり足を振り上げた……その刹那――――

「おやめなさい」
ドオオオオオンッ！
何者かが放った魔力弾が神風の振り上げた足――――――正確には脛（すね）にヒットした
「イッテーッ！脛痛い！脛痛い！弁慶痛いいいいいいっ！誰だよ邪魔するのは!?」
神風は魔力弾が降ってきた方角を向く
すると、上空から女性らしき人影が降りてきた
優しげな瞳をした水色の長髪の女性
その人物に祐斗は見覚えがあった……
「あ、あなたは確か『チェス』の――――――」
「お久しぶりです、グレモリーの皆さま方。初めましての方もいらっしゃると思いますので、名乗らせていただきます。私の名前はアスカ・シャーベット。『チェス』の『2代目クイーン』を務める者です」
なんと現れた女性は冥界のパーティ時に襲撃してきた闇人（やみびと）の『クイーン』だった
神風は直ぐ様、不機嫌な形相で『クイーン』に詰め寄る
「ちょっと『クイーン』！せっかく今チョー良い場面だったのに、なんで邪魔すんのさ!?」
「もう勝負は着いています。意識の無い人をこれ以上叩く必要はありません。だから止めました」

「甘い！甘いよ『クイーン』！そんな平和主義紛いの考えじゃ、他の種族をつけ上がらせるだけなんだよッ！今ここでグレモリーの主戦力の赤龍帝を殺しちゃえば――――――」

「……神風くん？」

闇人の『クイーン』アスカ・シャーベットの髪がうねうねと意志を持ったかのように蠢く

底冷えさせられる声を発し、神風や新達を戦慄させた

「言う事を聞いてください。じゃないと――――怒りますよ？」

ゾクッ……

アスカ・シャーベットの目は恐ろしい程に冷たく感じるものだった

新とリアス達は直視していないにもかかわらず、体に震えが生じた

「……わ、分かったよ。やめれば良いんでしょ？やめれば」

神風が魔人態を解除して少年の姿になる

すると髪の蠢きが治まり、アスカ・シャーベットはニッコリと優しい微笑みを見せた

「分かってくれて何よりです。神風くんは良い子ですね」

「そりゃ分かるよ。今はとりあえず、『クイーン』を怒らせたくないからさ……ってか、どうして『クイーン』がここに？」

「ちゃんと分かってくれたなら私も怒りません。それと新しく入った黒い『ポーン』の方が来て欲しいとご連絡がありまして」
黒い『ポーン』とは、おそらく一誠の親友であるダイアンの事だ
神風は不機嫌な形相で舌打ちをする
「では、帰りますよ。グレモリーの皆さま方。またお会いしましょう」
アスカ・シャーベットが手を空に向けると空間に穴が開き、神風の手を引っ張って穴の中に飛び込んでいった
２人が入った後、空間に開けられた穴が徐々に閉じて無くなる
「アスカ・シャーベット……『２代目クイーン』……か。何か今までとは違う雰囲気を出してたな……」
女好きの新でさえ、アスカ・シャーベットに恐怖を感じたのだから、彼女の実力は相当なものの筈
しばらくすると、ボコボコに痛めつけられた一誠が四つん這いで起き上がる
辺りをキョロキョロと見回し、天に向かって悲哀に包まれた咆哮をあげた
自我を失ってもアーシアを失った悲しみだけは残っている
ディオドラ、村上、シャルバ、神風もおらず、戦いは終わった筈なのに鎧が解除されない

新達はどうすれば良いのか分からず、ただ咆哮を見ているしかなかった

「困っているようだな？」

誰かの声が聞こえ、再び空間に裂け目が生じる

そこから出てきたのは白龍皇ヴァーリと孫悟空の美猴、そして背広を着た聖王剣コールブランドの所有者

新達は戦闘態勢を取ろうとするが、先程『２代目クイーン』の気に当てられたせいで体が動かない

だが、ヴァーリは手を前に出して言った

「やるつもりはない。見に来ただけだ。赤龍帝の『覇　龍』を。と言っても、あの姿を見るに中途半端に『覇　龍』と化したようだ。『覇　龍』の現象がこの強固な作りのバトルフィールドで起こったのは幸いだったな。人間界でこれになっていたら、都市部とその周辺が丸ごと消える騒ぎになっていたかもしれない」

「……この状態、元に戻るの？」

「完全な『覇　龍』ではないから戻る場合もあれば、このまま元に戻れず命を削り続けて死に至る場合もある。どちらにしても、この状態が長く続くのは兵藤一誠の生命を危険にさらす事になる」

そんな話をしている中、美猴が見知った少女を抱えて歩み寄る
美猴から渡された少女はアーシアだった
「アーシア!」
「アーシアちゃん!」
リアスと朱乃を始め、皆がアーシアのもとに集まる
気絶しているようだが、息はしていた
この事態に皆が涙を流す
「けど、どうしてだ?」
「私たちがちょうどこの辺りの次元の狭間を探索してましてね。そうしたら、この少女が次元の狭間に飛んできたのですよ。ヴァーリが見覚えがあると言いまして、ここまで連れてきたのです。運が良かったですね。私達が偶然その場に居合わせなかったら、この少女は次元の狭間の『無』にあてられて消失していくところでした」
偶然とはいえ、アーシアが無事に戻ってきた事に変わりはない
ゼノヴィアはアーシアを大事そうに抱きかかえ、嬉し涙を流した
「じゃあ、後は一誠だけか」
「アーシアの無事を伝えればあの状態を解除出来るかしら」
「危険だ、死ぬぞ。ま、俺は止めはしないが。そうだな……何か彼の深層心理を大きく揺

さぶる現象が起これば何とかなりそうだが……」
「おっぱいでも見せれば良いんじゃね？」
横で頭を掻いていた美猴が言う
新は「それしか無いのか……？」と顎に指を添えてリアス達の方を見やった
「ただ、あの状態ではな。ドラゴンを鎮めるのはいつだって歌声だったが……」
「あ～……そうか……。それに赤龍帝（せきりゅうてい）の歌なんて、そう都合良く――――」
「あるわよおおおお！」
新の言葉を遮って飛んできたのは、転生天使の紫藤イリナだった

飛んできたイリナは、何やら立体映像機器をリアスに渡した
イリナの話によると、サーゼクスとアザゼルが用意した秘密兵器らしい
「よく分からないけれど、お兄さまとアザゼルが用意したのなら、効果が見込めるかもしれないわね」
リアスが映像機器を下に置いてボタンを押すと、空中に映像が映し出される
『おっぱいドラゴン！はっじっまっるよー！』

映像に映し出されたのは禁手（バランス・ブレイカー）状態の一誠

そして一誠のもとに子供達が集まって――――

『おっぱい！』

一誠と子供達のダンスが始まり、宙にタイトルと歌詞が表示されたのだが――――

全員の目玉が飛び出した……（特に新が）

な　ん　だ　こ　れ　は

「おっぱいドラゴンの歌」

作詞…アザ☆ゼル

作曲…サーゼクス・ルシファー

ダンス振り付け…セラフォルー・レヴィアたん

作詞材料提供者…竜崎新（笑）

「なんで俺の名前載ってんのオオオオオオオオオオッ!?しかも（笑）って何だアアアアアアアアアッ!?」

とある国の隅っこに
おっぱい大好きドラゴン住んでいる
お天気の日はおっぱい探してお散歩だ☆
ドラゴン　ドラゴン　おっぱいドラゴン
もみもみ　ちゅーちゅー　ぱふんぱふん
いろいろなおっぱいあるけれど
やっぱり　おっきいのが一番大好き
おっぱいドラゴン　今日も飛ぶ

全員が呆気に取られていた
これはおそらく冥界テレビ局で一誠だけ別撮りで撮影したものだろう
「作詞と作曲した奴！何してやがんだァァァァァァァァァァッ！だいたい俺こんなもん提供しとらんわァァァァァァァァァァッ！」
「……新くん、これは……？」
「知らねぇッ！全く知らねぇェェェェェェェェッ！濡れ衣だァァァァァァァァァァッ！俺はこんなもん――――――」
「……うぅ、おっぱい……」

一誠が頭を抱えながら言語を発した
新はそれを見て、何かがトンだ……
「ケヘヘヘヘヘッ……そうかい、そうかい……。お前らがそうするなら、もうヤケクソだ……。イリナァァァァァァァァァァッ！」
「は、はいいいっ！」
新の怒号にイリナは背筋を伸ばして返事する
「流せェェェェェェェェッ！もっと曲を流せェェェェェェェェッ！こうなりゃ逝くところまでとことん逝けェェェェェェェェッ！」
「は、はい！任されました！」
再び映像機器の再生ボタンが押された

※すみませんが、ここからは歌を省略させていただきます
「うぅ、おっぱい……もみもみ、ちゅーちゅー……ず、ず、ずむずむ……いやーん……ポチッと」
新の精神は限界に達し、前に出ようとしたヴァーリを手で制する
「どうした？闇皇（やみおう）の」
「……コロス」

「ちょ、ちょっと新くん!?」
「こんのクソボケドラゴンがァァァァァァァァァァッ！俺に恥をかかせやがってエェェェェェェッ！てめぇの血はアッ！何色だァァァァァァァァァァッ！」
怒りを爆発させる新は闇皇(やみおう)姿で飛び出し、一誠の顔面に強烈な飛び膝蹴りを食らわす
その後も、マウントポジションを取って魔力込みの拳、掌打、鉄槌などでフルボッコにしていく
「……祐斗先輩。今の新先輩、凄く怖いです」
「うん……僕もそう思ってるよ。さっきの神風や『2代目クイーン』よりも怖いね……」
一誠を殴っている新は兜の口が大きく開いており、鎧が返り血で染まっていく
やがて一誠はピクリピクリと痙攣するだけとなり、鎧が強制解除されて新に引きずられていく
新が向かった先は――――――リアス
鮮血を浴びまくった新は彼女の眼前に立ち、引きずっていた一誠の足を放す
リアスが恐る恐る訊いてみた
「あ、新……大丈夫……？」
「アア？大丈夫？何がだ？俺は至って冷静だぜ。何も変わっちゃいないし、何も変わっていない。いつもと同じ様に一誠のアホみたいなおっぱい嗜好に呆れておっぱいの道

におっぱいはあらずとか何とか言ってる間にブチキレてマウントポジションのフルボッコおっぱいしてたら夜おっぱい時におっぱいをおっぱいしておっぱいしていたら何が何なのか訳が分からなくなっておっぱいにおっぱいはおっぱいでおっぱいのおっぱいがおっぱいだって言っちまってる俺自身にまたムカっ腹が立っちまったアアアアッ！」

度重なる心労によって新の精神は再び憤慨を取り戻してしまい、ギロリと一誠の方に視線を向けた

「やっぱりもう2、3発ぐらい殴っておこうか――――フルパワーで」

「新、落ち着いて！これ以上は見てられない！」

「じゃあ教えてくれよォ。どうやったら俺の怒りは治まるんだ？もうこいつを殴る蹴る潰すしか思い付かねぇんだヨォォォォォォォォ……ッ！」

理不尽とも言える新の問いにリアスは冷や汗を流す

すると、朱乃が近付いていき――――

「リアス、ちょっと失礼」

「え？あ、朱乃？あなた何を――――」

バッ！プルルンッ……

朱乃は背後からリアスの制服の胸元を広げた

ブラジャーごと掴んでいたのでリアスの美麗なおっぱいが解放される
一瞬、事態を理解出来なかったが……暫くして目を丸くする
「ひゃあ!?ちょ、ちょっと朱乃!?」
「リアス、今はジッとしてて。新さんを落ち着かせる為ですわ。さあ新さん、心を鎮めて下さい」
「……スマン」
リアスのおっぱいと乳首を見た事で新は落ち着きを取り戻し、トボトボと歩き去っていった
歌が何度目かのサビに突入した所でヴァーリが新に訊く
「……リアス・グレモリーの胸はお前と兵藤一誠の制御スイッチか何かなのか?」
「お前、それは酷い言い草だろ!」
「良いんだよ孫悟空……!ヴァーリ……!もう笑うだけ笑ってくれ……!フヒェヒェヒェヒェヒェヒェヒェヒェ……!（泣）」
自虐に陥ったのか、新は美猴と共に爆笑する（新は泣きながら）
こうして一誠はおっぱいドラゴンとなった……

アポカリュプスと暗躍する陰謀

「うーん。あれ？何がどうなったんだ？なんで体のあちこちが痛いんだ？」
恐慌状態に陥った新が九分九厘落ち着いた後、一誠が目を覚ました
記憶がない分は祐斗から説明を受けたが、やっぱり覚えておらず
アーシアも無事でゼノヴィアに抱きつかれている
「兵藤一誠。無事だったようだな」
「ああ、なんだか、世話になっちまったようだな」
「ま、たまには良いだろう。それよりもそろそろだ。空中を見ていろ」
新と一誠が訝しげに空を見ていると――――
バチッ！バチッ！
空間に巨大な穴が開き、そこから巨大な何かが姿を現す
「よく見ておけ、兵藤一誠。あれが俺が見たかったものだ」
空中をとてつもなく巨大な生物――――真紅のドラゴンが雄大に泳いでいく
『赤い龍』と呼ばれるドラゴンは２種類いる。１つはキミに宿るウェールズの古のドラ

ゴン――――ウェルシュ・ドラゴン。赤龍帝（せきりゅうてい）だ。白龍皇（はくりゅうこう）もその伝承に出てくる同じ出自のもの。だが、もう1体だけ『赤い龍』がいる。それが『黙示録』に記されし、赤いドラゴンだ」

「『黙示録』っつーと、アポカリプスか？」

「闇皇（やみおう）の言う通り。『真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）』グレートレッド。『真龍』と称される偉大なるドラゴンだ。自ら次元の狭間に住み、永遠に飛び続けている。今回、俺達はあれを確認する為にここへ来た。レーティングゲームのフィールドは次元の狭間の一角に結界を張ってその中で展開している。今回、オーフィスの本当の目的もあれを確認する事だ。シャルバ達の作戦は俺達にとって、どうでも良い事だった」

「もしかして、あれを倒す事がお前の目標か？」

新が訊くと、ヴァーリが真っ直ぐな瞳で言った

「俺が最も戦いたい相手――――『Ｄ×　Ｄ（ドラゴン・オブ・ドラゴン）』と呼ばれし『真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）』グレートレッド。俺は『真なる白龍神皇』になりたいんだ。赤の最上位がいるのに、白だけ1歩前止まりでは格好がつかないだろう？だから、俺はそれになる。いつか、グレートレッドを倒してな」

ヴァーリは自身の夢を語る

テロ組織に身を置いているのもグレートレッドと言うドラゴンを倒すためだった

「グレートレッド、久しい」
新達のすぐ近くに黒髪黒ワンピースの少女が立っていた
「……っ？誰だあのチビッ娘？さっきまでいなかったぜ」
ヴァーリがその少女を確認して苦笑した
「――――オーフィス。ウロボロスだ。『禍の団（カオス・ブリゲード）』のトップでもある」
「なっ！『禍の団（カオス・ブリゲード）』のトップ!?あれがか!?」
驚きを隠せない新
オーフィスは指鉄砲の構えで撃ちだす格好をした
「我は、いつか必ず静寂を手にする」
その直後、アザゼルとタンニーンが降ってくる
「先生、おっさん！」
「おー、イッセー。元に戻ったようだな。新がブチキレてボコボコにするもんだから怖かったが、お前ならあの歌やで『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』から戻るかもなんて思っていた。アーシアの乳を吸いたいって考えで禁手（バランス・ブレイカー）に至った大馬鹿野郎だからな。あの歌の作詞をした甲斐があったぜ」
「アザゼル！俺はあの修業ん時以上に殺意が沸いた事はねぇッ！何してくれてやがんだ！俺がどんだけ恥をかいたか分かってんのかゴラァッ！」

「スマン新。お前は女に対して色々経験済みなもんでな、名義を勝手に使わせてもらった」
　新はアザゼルに対して特大の殺意を浴びせた
　アザゼルとタンニーンは空を飛ぶグレートレッドに視線を向ける
「懐かしい、グレートレッドか」
「タンニーンも戦った事あるのか？」
「いや、俺なぞ歯牙にもかけてくれなかったさ」
　タンニーンでも相手にならないドラゴン……
　余程強さがあるのだろう……
「久しぶりだな、アザゼル。クルゼレイ・アスモデウスは倒したのか？」
「ああ、旧アスモデウスはサーゼクスが片付けた。……まとめていた奴らが取られれば配下も逃げ出す。シャルバ・ベルゼブブの方もイッセーが『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』で片付けたみたいだしな」
「お兄さまは？」
「結界が崩壊したからな。観戦ルームに戻ったよ」
　アザゼルがオーフィスに言う
「オーフィス。各地で暴れ回った旧魔王派の連中は退却及び降伏した。――――事実

上、まとめていた末裔共を失った旧魔王派は壊滅状態だ」
「そう。それもまたひとつの結末」
オーフィスは特に驚く様子も無く言った
1つの派閥が消えたのに痛くも痒くも無いと言った様な感じである
「お前らの中であとヴァーリ以外に大きな勢力は人間の英雄や勇者の末裔、神器（セイクリッド・ギア）所有者で集まった『英雄派』だけか」
「『英雄派』……。カテレアが教えてくれた組織の名前か」
新は以前、アザゼルに連れられてカテレアが投獄されている牢に行き、そこで『禍の団（カオス・ブリゲード）』の情報を聞いていたので、名前くらいは知っている
「さーて、オーフィス。やるか？」
アザゼルが光の槍をオーフィスに向けるが、オーフィスは踵（きびす）を返した
「我は帰る」
どうやら戦う気は無いらしい
新と一誠はホッと胸を撫で下ろした
「闇皇（やみおう）の蝙蝠」
「ん？どわっ!?な、何だよ？」
オーフィスがいつの間にか新の足元にいて、新を見上げながら言う

「『闇皇(やみおう)の鎧』、特異。倒した闇の力、奪い取れる」
「倒した闇の力を奪い取る?どういうこった?」
新はその意味をさっぱり理解出来なかった
そんな新にオーフィスは更に衝撃的な事を言う
「気を付ける。『初代キング』、目覚めつつある」
『――――っ!?』
全員がその言葉に驚愕した
『初代キング』とは闇人(やみびと)の王であり、悪魔、天使、堕天使の三大勢力を滅ぼそうとした張本人
その邪悪過ぎる存在が封印から解かれようとしているらしい……
オーフィスの言葉に真っ先に反応したのはアザゼルだった
「オーフィス!それはいったいどういう事なんだよ!あの『初代キング』が封印から解かれるのか!?」
「いずれ、分かる」
オーフィスは意味深な言葉を言い残して消え去っていった
ヴァーリ達も退散しようと聖王剣(せいおうけん)使いが作った次元の裂け目に入ろうとしていた
「兵藤一誠。――――俺を倒したいか?」

「……倒したいさ。けど、俺が超えたいものはお前だけじゃない。同じ眷属の木場も超えたいし、ダチの匙もダイアンも――――新も超えたい。俺には超えたいものがたくさんあるんだよ」
「俺もだよ。俺もキミ以外に倒したいものがいる。闇皇の蝙蝠や闇人の『2代目キング』もそれに入ってる。おかしいな。現赤龍帝と現白龍皇は宿命の対決よりも大切な目的と目標が存在している。きっと、今回の俺とキミはおかしな赤白ドラゴンなのだろう。そういうのもたまには良い筈だ。――――だが、いずれは」
「ああ、決着つけようぜ。部長のおっぱいを半分にされたら一大事だからな」
一誠が拳をヴァーリに向けて言い放った
「木場祐斗くん、ゼノヴィアさん。私は聖王剣の所持者であり、アーサー・ペンドラゴンの末裔。アーサーと呼んでください。いつか、聖剣を巡る戦いをしましょう。では」
聖王剣使いが自分の名前を紹介し、先頭で次元の裂け目に入る
「やっぱりキミは面白い。強くなれよ、兵藤一誠」
「じゃあな！おっぱいドラゴン！闇皇の！それとスイッチ姫！」
「なっ！何よその呼び名は！」
謎の呼び名――――スイッチ姫に新は肩をビクッと反応させた
「へへっ、良い呼び名だろ！この呼び名は今さっき闇皇と大笑いしていた時に思い付い

た名前だ！『スイッチ』は闇皇（やみおう）の、『姫』を付けたのは俺だぜぃ？」
ヴァーリと美猴も次元の裂け目へと消えていった
新も大事にならない内にその場から立ち去ろうとしたが、リアスと目が合ってしまった……
「……新。ちょっと待ちなさい」
「マチマセンッ！」
新は超ダッシュで逃げる様に――――と言うか逃げた
しかし、それを逃がさない鬼（リアス）
「コラッ！待ちなさい新アアアアアアアアッ！」
「ヒィィィィィッ！怖エエエエエエエッ！」
リアスが般若の形相――――もとい、般若その物の顔をしながら魔力込みの足で新を追い掛ける
新も足に魔力を注ぎ、リアスを撒くまでリアル鬼ごっこが続いた……
オーフィスが言っていた”『闇皇（やみおう）の鎧』は倒した闇の力を奪い取れる”と言う言葉を気にする暇も無いまま……

――――

「ヴァーリ、幹部連から連絡入った。シャルバの野郎、瀕死だけど生きてやがったぜぃ」
「そうか、美猴。何にせよシャルバは急ぎ過ぎた。徹底抗戦を唱え、現魔王派に追放された先人達も急ぎ過ぎた。――――目先の怨恨だけで動くから滅ぶ」
「旧魔王派の奴ら、お前さんをトップに入れたいとさ。どうすんの？」
「今のポストで充分だと伝えてくれ。これ以上、前魔王の血族としての役職を増やしたくない」
「あーあ、旧魔王派、これでほぼ瓦解だわ。他の派閥とか闇人が台頭してくんぜ、こりゃ」
「カテレア、クルゼレイ、シャルバ。――――お前達は嫉妬深過ぎだ。誇りある前魔王の血族として生きるのなら、その生き方も誇り高くするべきだった」
「で、赤龍帝んとこの癒しの姉ちゃんを助けた理由は？お前らしくもねぇし」
「――――気紛れだ。それだけの事さ」

「シャルバ・ベルゼブブの策が落ちたよ。白龍皇ヴァーリも上に立たないってさ」
「そうかそうか。『禍の団』旧魔王派は殆ど終わりって事だ。ま、うちのところにいる

『絶霧（ディメンション・ロスト）』の使い手が手を抜いたのが悪かったな」
「よく言うよ。そう命じたくせに。で、どうする？そろそろ英雄と勇者の末裔の集まりである僕達英雄派も事を起こすかい？――――曹操（そうそう）」
「さーて、どうするか。――――今は人材集めの方が楽しいんだけどね」
「初代と同じだね。でも近い将来必ず動かなければいけなくなるよ。あなたに宿っている物がそれを許さないから。その最強の神滅具（ロンギヌス）――――」
「――――『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』か。この矛先にあるのは、覇（は）か、それとも――――」
「ねーねー、曹操」
「どうしたジャンヌ？」
「一足先に会いたい子を見つけちゃったの。だからぁ、会いに行っちゃって良いかな？この子♪」
「これは……噂に聞いた闇皇（やみおう）の蝙蝠――――竜崎新か。確か竜崎総司の息子だったな」
「竜崎総司と言えば、闇人（やみびと）の王である『初代キング』を悪魔、天使、堕天使と共に封印した唯一の人間だったよね？凄いな。彼もある意味英雄と呼ばれる存在だよ」
「ジャンヌ。この男がどうかしたのか？」
「ふふっ。お姉さん好みの可愛い子なんだもん♪引き込みたいと思わない？」
「まぁ、竜崎総司も英雄に近いからな。しかし、珍しいな。お前が男に興味を持つとは」

「そうなのよ。お姉さんをこんなにキュンキュンさせたこの子、絶対欲しいわ。……ちゅっ♪」

「そうか。『禍の団（カオス・ブリゲード）』と村上京司（むらかみきょうじ）が繋がっていたのか……」
「うん。まぁ、村上さんはグレモリーのお姉さん達に殺られちゃったんだけどね。以前からコソコソやってたみたいだよ」
「『チェス』の一員が減ってしまったのは痛手だが……村上は欲に走り過ぎた。冷たいかもしれないが、当然の報（むく）いだ。欲望しか見てないから身を滅ぼす」
「キヒヒッ。正論を述べるね～『2代目キング』♪」
「しかし、『禍の団（カオス・ブリゲード）』旧魔王派が潰れたのも好都合だ。邪魔になりそうな危険因子は1つでも確実に潰していこう。『ビショップ』、いつもの様に人材集めをよろしく」
「OK～♪」
スタスタスタ……
「……あ～あ。ホンッッッットつまんないよね～、『2代目キング』のやり方は……。まぁ良いや。アレが『キング』の立場でいられるのも今だけなんだし。やっぱり長（おさ）に相

応しいのは『初代キング』だよね～。さ・て・と、封印解読に魔銃（マガン）の改良、それとボク専用の神器（セイクリッド・ギア）製作……忙しくなるかも。キヒヒッ♪」

第7章　放課後のラグナロクとテンプテーション
男は顔で笑い、心で泣く

「いらっしゃいませ～」
「おう、姉ちゃん。ビール2本とつまみを適当に持ってきてくれ」
「かしこまりました。少々お待ちください」
ディオドラとの戦いが終わった次の日の夜、場所は新行きつけの酒場
そこでは新が助けたディオドラ眷属総勢１４名がパンツ＋エプロンと言う奇抜なスタイルで接客業をしていた
新が酒場のマスターに話を通し、ウェイトレスとして働かせているのだ
更に酒場の隣に寮を設立し、ディオドラ眷属達をそこに住まわせた
因みにウェイトレスの制服は度々マスターの趣向によって変更されるので、客の請け合いもバッチリだとか
「アラタ、こんなに多くの女性を侍らせたの？色欲魔ね」
「アラタのエッチ～。浮気者～♪」
「アラタ、少し自重しないと体が保たないぞ」

「良いじゃねぇか別に。人手が増えた事で売り上げと収入がグンと伸びるんだからよ」
新はボンテージ姿のレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトに反論する
シフト交代制で働いてるので、今の堕天使3人組は客の立場にある
「ぶ～っ。皆うちよりおっぱい大きい……ちょっと嫉妬しちゃう」
「それにしても、まさかこの娘達全員が元シスターや聖女だなんてねぇ……ディオドラ・アスタロトってアラタに似てるわ」
「失礼だな。俺は人の弱味につけ込んだりしねぇよ。正々堂々と正面から言ってセッ○スするんだ」
「自信満々に言わなくても良いんだが、そうだな。アラタはそんな奴じゃない」
隣に座っていたカラワーナが新の腕にしがみつく
逆隣(ぎゃくどなり)のレイナーレも対抗心を燃やしてしがみつき、ミッテルトは下から潜り込んで新の膝に座る
「アラタがどんなであろうと、私達はアラタを慕う。レイナーレ様やミッテルトも同じように」
「そうね。アラタだから私達は好きになっちゃったのよね。ちゅっ……ふふっ。アラタの味♪」
「あ～！レイナーレ様ズルい！うちも～！んちゅ～♪」

新は酒を飲みながら3人のキス攻めを受け、それを見た客達はヒューヒューッ！と盛り上がった

「あ、あの本当にありがとうございます。お仕事だけじゃなく、この様な住まいまで提供してくださるなんて」

「気にすんな。これから酒場で働いてもらうんだから、これぐらいの配慮は当然だろ？」

新はレイナーレ達を先に帰らせ、ディオドラ眷属達を寮に連れていき談笑をしていた

地下にはプライベートプールに大浴場、生活に必要な物は全て完備されている豪華な寮

ディオドラ眷属達は勿体ないぐらいの優遇を受けていた

「あの……本当にありがとうございます。もし良かったら、私達にご奉仕を申し付けください。いつでも、お待ちしております……」

ディオドラ眷属の『女王（クイーン）』が頬を朱に染めて頭を下げると、他の女性達も頭を下げる

新は当然イエスと答えた

「分かった。時間が空いたらな。なるべく俺もスケジュールを合わせるから」

『はい。アラタ様』
新の固有スキル『女堕とし』は敵でさえも効力を発揮する
ディオドラ眷属達は完全に堕ちた……

この日の深夜、新は眠れずにいた
裸で寝ている堕天使3人組や朱乃とゼノヴィア、可愛らしいパジャマを着て寝ている小猫がいても眠れなかった
その理由はオーフィスの言葉が気になっていたから
去り際に言った”『闇皇の鎧』”は倒した闇の力を奪い取れる”『初代キング』が目覚めつつある”と言う発言が頭から離れずにいた
だが、何処にどう封印されているのか分からないのでどうする事も出来ない
「倒した闇の力って、いったいどういう意味だ……？何か重要な事には違いないだろうが……クソッ、考えても埒が明かねぇ」
新はベッドから抜け出して1階に降りる
冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで電子レンジで温める

ホットミルクを作っているのだ
「やっぱ眠れない時はホットミルクだよな」
電子音が鳴り、中からホットミルクを出すが……予想以上に熱かったので少し置いて冷ます
一通り冷めたところでホットミルクを飲み干し欠伸をする
「ふあ～あっ。さて、寝るかな――――っ？リアス、どうした？」
密かに忍び寄る足音を聞き取って振り向くと、寝間着姿のリアスが階段から降りてきた
「ちょっと眠れなくて、新も私と同じ理由かしら？」
「あぁ。今ホットミルクを飲み終えたところだ。飲むか？」
「そうね、いただくわ」
新は別のカップに牛乳を注ぎ、それを電子レンジで温める
電子音が鳴り、温まったカップを「ほい、出来たぞ」と渡す新
リアスはそれを受け取り、一口飲む
一息ついたところでリアスが話を切り出す
「……気になってるのね、オーフィスの言葉」
「あぁ、気になるさ。何たって『禍の団（カオス・ブリゲード）』トップからの言葉だからな。それに……アザ

ゼルからもオーフィスの事は聞いた。昔はジジイだったらしい。どういう経緯を辿ればジジイからゴスロリ美少女に性転換――――」

「本題からズレてるわよ」

迷走しかけた新の頭をパコッと軽く叩いたリアス

「スマン、そうじゃなかった」と前置きしてから再び本題に取り掛かる

「……正直言って……かなり不安だな。何たって悪魔、天使、堕天使を纏めて滅ぼそうとした魔族の親玉が復活するかもしれねぇって言われたんだ。気にならねぇ方がおかしい。その上、倒した闇の力を奪い取れるってのも……どういう意味なのかサッパリ分からねぇ。分からねぇ事だらけだ」

新はいつもらしからぬ弱気を混ぜた発言をする

やはりオーフィスの言葉や、日に日に異常な速度で進化を続けてしまう力に嫌でも不安を募らせてしまうのだろう

リアスも沈んだ表情で「そうよね……」と返すしかなかった

ところが、新は自ら両頬を叩く

「だから――――今考えても分からねぇ事は取り敢えず考えねぇようにした。解決案が見つかってねぇのに考えた所でどうにかなるって訳じゃねぇ、今後の活動に集中出来なくなっちまう。それに――――」

「それに？」
「今の鎧（コイツ）の所持者は俺だ。この力がどんな物だろうと使うのは俺であって『初代キング』じゃない。俺は鎧（コイツ）をリアスや一誠、仲間を守る為に使っていきたい。今の俺に出来る事はそれだけだ」
真っ直ぐな眼で天井を仰ぎながら語る新にリアスは微笑みを見せる
新の隣に座り、彼の手を握る
「そうね、深く考え過ぎていたわ。新がそうやって強気になっているとこっちも強気になれそう。不思議ね」
「嬉しい言葉ありがとな。ふわぁ～ぁ」
ホットミルクが効いてきたのか、新の口から大きな欠伸が出た
「そろそろ寝るか」と階段を上がって部屋へ戻っていく新の背中をリアスはジッと見つめる
リアスも自室に戻ろうとした――――その時だった
通信用魔方陣が展開され、リアスの前に見覚えある人物の映像が映される
それを見たリアスは仰天した
「お、お母さまっ!?」
『リアス、今何時だと思ってるの？そんなに大声を出してはしたないわよ』

なんと相手はリアスの母親――――ヴェネラナ・グレモリー
リアスが仰天するのも無理は無かった
「お母さま、いったいどのような用件で？」
『あら、母が娘の心配をしてはいけないのかしら？男の人と1つ屋根の下で暮らす娘が気になるのは当然よ』
ヴェネラナが頬に手を添えながら続ける
『ところで、リアス？』
「何でしょう、お母さま？」
『新さんにはもう処女を捧げたの？』
「――――ッ!?」
母の口から出た発言にリアスは顔から湯気をボッと噴かした
その反応を見てヴェネラナがクスクスと微笑む
「おおおおおお母さま！いきなり何を言い出すんですか!?」
『年頃の娘が男の人と一緒に住んでいるのよ？しかも相手が新さん、竜崎総司さんのご子息なものだから既に処女を頂いたのかと思って♪でも、その反応だとまだみたいね？』
ヴェネラナの問いに顔を真っ赤にしながら無言で頷くリアス

ヴェネラナはやれやれと言った感じで首を横に振った

『まあ良いでしょう。最初は一緒にお風呂に入ったり、一緒に寝たり、少しずつステップを踏んでいきましょう。ただ――――』

「ただ？」

『リアスも少しは男性の心理と言うものを学びなさい。いつまでも助けられるだけでは「王（キング）」は務まりませんよ？』

「だ、男性の心理……？」

『そう、たまには新さんを甘えさせてあげなさい。――――彼、ああ見えて寂しがり屋なんですから』

ヴェネラナの言葉にリアスは疑問符を浮かべる

新が寂しがり屋とはいったいどういう事なのか……？

「新が寂しがり屋？今までの彼を見る限り、とてもそんな風には見えませんけど……」

『分かってないわね、リアス。男の人とは顔で笑っても心で泣く生き物です。それに新さんはまだ１８歳、幼い頃からバウンティハンターと言う過酷な世界を生きてきたのよ。親から離れ、孤独に近い人生を１０年以上……それがどんなにツラい事か想像出来る？』

リアスは思わず口をつぐむ

上級悪魔として生まれ、何不自由無く生きてきた自分には想像出来ない世界……
バウンティハンター＝賞金稼ぎとは実力主義の蹴落とし合戦の様なものだ
賞金首を捕まえ、時には殺して報酬を貰う
それは相応の実力が無ければ直ぐに淘汰されてしまう
新は一誠達と出会うまでは心の底から信じ合える仲間もおらず、死と隣り合わせの生活を送ってきた……
『心の拠り所が無ければ強さも発揮されません。新さんが多数の女性と肉体関係を持っているのは周知――――ですが、それは裏を返せば他者からの癒しと愛情を求めているんだと思います』
「そう、なのですか……？」
『リアス、本当に彼を大事に想っているのなら、あなたからも歩まなければなりません。いつまでも守ってもらうのが「王（キング）」ではありません。彼の心の拠り所になってあげなさい』
「……」
『1人じゃ出来ないのなら私も手伝ってあげましょうか？母と娘で新さんを慰めるのも悪くありませんね♪でも、こんなおばさんの体でも喜んでくれるかしら？』
「お、お母さま……!?」

『ふふっ、それはまた今度話しましょうか。それじゃあリアス、しっかりね』
ヴェネラナからの通信が終わり、リアスから溜め息が漏れる
暫くソファーに座っていると、新が再び階段から降りてきた
どうやらリアスが戻ってこないので様子を見に来たのだろう
「どうした、リアス？まだ眠れないのか？」
「いいえ、お母さまから連絡が入ったから少し話してただけよ」
「そっか、じゃあもう寝ようぜ。眠くて敵わねぇや」
何度めかの欠伸をしながら部屋に戻ろうとする新
しかし、リアスは彼の袖を掴んで制止させる
「ん、何だ？」と訊いてくる新に対し、リアスは少ししして決心したかの様な面持ちで言った
「……今日は、私の部屋で一緒に寝なさい」

「へ～、中は意外と少女趣味なんだな」
ベッドに腰掛けリアスの部屋を見渡す新

リアスの口から出たから突然の同衾宣告を断れず、言われるがままリアスの部屋に足を踏み入れた

上級悪魔の息女だから高級な家具や置物ばかり置かれているのだと思っていたのか、何度も部屋の内装を見渡す

可愛らしい机やスタンドにクッション、更に本棚にはオカルト研究部らしく悪魔の歴史事典や魔術に関する書物もあるが、少女漫画も収納されていた

『花より月見男子』『君に届け隊』『彼氏彼女の頭上』など、有名なタイトルの漫画がズラリと並んでいる

一通り見渡した所で横になり、少し経ってからリアスが奥の着替え部屋から出てくる

下着が見えるネグリジェ姿はいつもの凛としたリアスとはまた別次元の魅力を引き出していた

少し顔を赤らめながらも新の隣で寝る

「……今思えば、新と一緒に寝るのって初めてだわ。あんなに凄い事シたのに……」

「凄い事？」

「ほ、ほら……朱乃を入れた3人で水着を買いに行ったじゃない。その時に……」

「確かにそうだな。俺もリアスと一緒に寝るのは初めてだ。今夜はお互いの初めてを更新したって訳だ」

新は軽く笑ってリアスの頭を優しく撫でる
そのお陰で緊張が解(ほぐ)れ、リアスがクスッと笑う
「そうね。さあ、明日も早いから寝ましょうか」
「おう。さっきのホットミルクで眠気倍増だから……直ぐに眠れそう……ｚｚｚ」
程無くして直ぐに新から寝息が漏れ、やがて泥の様な深い眠りについた
無防備で自然体の寝顔を見せる新にリアスは静かに体を近付け、包み込むように抱き寄せる
「もう寝てる……。いつもの新ならエッチな事するのに。……お母さまの言った通り、表に出してないけど……この子も本当はいっぱいいっぱいなのかもしれないわね。『初代キング』の事も……これからの事も……」
リアスが寝ている新の頬を優しく撫でる
「新、あなたには今まで励まされてばかりだったわ。その恩に報いたい。だから、私もあなたの力になってあげたい……。独りで抱え過ぎないで……あなたも誰かを頼ってね……？」
新の頬にキスをした後、リアスも深い眠りについた

『新さんがなかなか戻ってこないと思ったら、ここにいたのね。リアスってば新さんの温もりを独り占めするなんて羨ましいわ。……でも、今夜は譲ってあげる。あんな話を聞いた後で連れ戻すのは流石に出来ないもの。ゆっくりお休みなさい』

ムフフなリゾート

とある日の夜

『やあ、竜崎新。イザベラだ。以前渡したチケットなんだが』

「おう。何とか話をつけて許可を貰ったぜ。その代償として、帰ってから1週間何でも言う事を聞かなきゃいけなくなったがな……」

『ふふっ。それは災難だね。それじゃあ明日の朝9時に魔方陣でジャンプするから、以前キミと修業する際に行った酒場の前で会おう』

「へいへい。んじゃっ」

イザベラとの会話を終えてスマホを切った新

冥界のパーティで貰ったリゾートホテルのチケットを見る

集合場所は酒場、時間は朝9時と決まった

「うふふ。新さんが帰ってきた時が楽しみですわ♪」

「うん、新。いっぱい命令するから覚悟しておけよ?」

「……先輩に耳掃除してもらって、先輩に膝枕してもらって、先輩に抱っこしてもらって、先輩にナデナデしてもらって先輩にアーンしてもらって、とにかくいっぱい命令し

ます」
　朱乃は頬に手を添えながら笑み、ゼノヴィアはビシッと指を差して言い、小猫は呟いてガッツポーズをする
「アラタが1週間、私達の言いなりになるなんて素敵ね。まずはお酒を買い占めてもらおうかしら」
「そうだな。当然アラタの自腹で」
「やった～！お寿司に焼き肉行きた～い！」
　レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトは新の財布を空にさせようとしていた
「何だろうな……得る物よりも、失う物の方がデカい気がするのは何故だ……」
「新、今更後悔しても遅いわよ。あなたが決めた事じゃない。勿論、私のリクエストも忘れないでよね？」
　自ら出してしまった逃れられない末路を悔やみ、新は遠い目で天井を見つめたのだった

翌日の朝9時、一足早く酒場に到着した新が待機していると魔方陣が輝く

その中からミラ、イルとネル、雪蘭（シュエラン）、カーラマイン、イザベラが姿を現した
「お、来たか。修行の時以来だな」
「おはよう。実はあの後レイヴェルも誘ってみたんだが……真っ赤な顔して断られてしまったよ」
イザベラが頬を掻きながら言う
「ハハッ、レイヴェルらしいな」と笑い飛ばし、新も魔方陣の中へ
そして到着したのはとある常夏の島の巨大なリゾートホテル
新はスケールのデカさに口をアングリさせた
「デ、デケ～……これがレアなホテルか……？」
「そうだよ。さ、早く水着に着替えて海へ繰り出そう。せっかくのリゾートだからな」
新＋ライザー眷属6人はホテルで手続きを済ませた後、水着に着替える事に
新は一足早く場所を取って待機していた
因みに水着は赤と黒が混じったトランクスタイプ
「か～っ、良いねぇ常夏。青い空、白い雲、眩しい太陽。その3つが惜しみもなく輝いてやがるぜ」
しかし、新が見たのは青い水着の女性の胸と白いビキニ女性の尻、そして赤いビキニ女性がブラを外して日光浴している姿だった

堪能していると、ライザー眷属の誰かが先にやって来た
「「お兄さん、お待たせ♪」」
最初にやって来たのはスクール水着姿のイルとネル
胸には平仮名で自分の名前が書かれたタグを貼っており、浮き輪を装備している
「おっ、ようやく来たか」
「どうどう？お兄さん、私達の水着♪」
「可愛い？それともセクシー？」
「少なくともセクシーは違うが、可愛いぞ」
新に褒められたイルとネルは大喜びでジャンプ
その直後にまた1人がやって来る
「お、お待たせ……新さん」
「おぉっ。こりゃまた大胆に」
次に来たのはミラで、ピンクのビキニとスカートを合わせた水着を着ていた
成熟途中の体にビキニを包ませては、マニア相手に高評価を得るだろう
「ど、どう？買ったばかりの新しい水着なんだけど……」
「いや～、予想外だ。まさかビキニをチョイスするとは、恐れ入った」
新が純粋に褒めるとミラは頬を赤く染めた

その様子を見て膨れっ面のイルとネルは照れているミラの背後に回り――――

「えいっ♪」

ビキニの紐を外した

ミラのビキニは砂の上に落ち、小振りな乳房（おっぱい）と乳首が丸見えになった

「――――っ!?キャアアアアアアアアアアッ!」

ミラは屈むように乳房（おっぱい）を隠し、ビキニを拾って着け直した

「ちょっと!何するのよ!?」

「大人びてるから罰ゲーム!」

「ビキニなんてズルいもん!」

「そんな事してるから、いつまで経っても子供なのよ!」

「「言ったな～!この～!」」

双子とミラは人目を憚（はばか）らずに喧嘩を始めてしまい、新は拳骨を振り下ろして無理矢理止めた

「リゾートに来てまで喧嘩するんじゃねぇ。分かったか?」

「「はい……」」

怒られた3人の頭にタンコブが出来上がり、残りのライザー眷属3人も合流してくる

カーラマインは清楚な白いハイレグ水着、雪蘭（シュエラン）は胸元が大きく開いたミニスカチャイ

ナドレス風の水着、そしてイザベラは肩紐が無い黒ビキニと言うラインナップで参上した
「ほ～、絶景だなこりゃ」
「わ、私はこう言うのはあまり得意じゃないんだ。お前にジロジロ見られると恥ずかしい……」
「カーラマイン。せっかく海に来たんだから、もう少し柔らかくなれ」
「そうよ。今日はパァ～っと遊びましょ」
斯くして、新＋ライザー眷属６人はリゾートを満喫する事になった
ミラ、イルとネルの監視役として新が付き添い、４人は海へ繰り出す
ミラは浅瀬を優雅に泳ぎ、イルとネルは浮き輪に乗ってプカプカと浮く
「ん～、気持ち良い～♪」
「あれ？お兄さんは？何処に行っちゃったの？」
２人はキョロキョロと辺りを見回すが、新の姿は何処にも――――否、潜ってイルとネルのすぐ側まで接近していた
「ジョーズ再来！」
「「キャアアアアアアアアアッ！」」
バッシャアアアアンッ！

新は映画に出てくる人喰い鮫の様に飛び出してイルとネルを浮き輪から放り出した
「あぶあぶっ！た、助けてぇ！お兄さん！」
「ブクブクッ！あ、足が付かないよ～！」
「スマンスマン、やり過ぎた。ほら、俺に掴まれ」
新が近付くと、イルとネルはガシッとしがみついた
「……ぐすんっ、酷いよお兄さん……」
「怖かったよぉ……」
２人は目を潤ませて新を見る
新は泣きそうになっている２人の頭を優しく撫でた
「悪かったよ。機嫌直してくれ」
「じゃあアイス買ってくれたら許してあげる♪」
やはり子供（笑）である
「おい、ミラ。今からアイス買いに行くけど来るか？」
「あ、はい。行きます」
４人は早速売店へ向かった
イルとネルはバニラアイス、ミラはストロベリー、そして新はチョコを購入したのだが――――その際に店員から「５００円になります」と言われた

１個２００円のアイス４個で合計８００円の筈なのにおかしいなと思った新の視界に貼り紙が入り、それにはこう書かれていた
「小学生以下はアイス半額！」と……
１００円×３＋２００円＝５００円で計算は合ってた
「……良いもん。これくらいじゃ怒らないもん」
「私達は大人のレディなんだから……」
「そうよ。ただ他の皆より成長が遅れてるだけ……」
「そうだな。あと、あんまり力入れたらアイス潰れるぞ」
アイスを買ったのに3人はムスッと頬を膨らませたままだった
しばらく歩いていると、カーラマインと雪蘭（シュエラン）が男に言い寄られている姿が目に入る
新は「あぁ言う奴っているんだよな～」と言って歩み寄る
「ねぇ良いじゃん。ちょっと付き合うだけで良いからさ」
「悪いけど、私達人を待ってるから」
「潔（いさぎよ）く去れ。男らしくないぞ」
「そんな堅い事言わないでよ～。お茶しようって言ってるだけじゃ～ん」
「爆撃アイス発射ーッ！」
ベチョッ！

キンキンに冷たいチョコアイスがナンパ男の眼球にヒット！
ナンパ男はアイスの冷たさに転がり回り、新はその隙にカーラマインと雪蘭（シュエラン）を回収した
「ごめんなさい。あの男がしつこくて困ってたの。ありがとう」
「まったく、あの軟弱な男ときたら。少しは竜崎新を見習ってもらいたいものだ」
一行が集合場所に戻ると、イザベラがうつ伏せになって日光浴をしていた
「よっ、イザベラ」
「竜崎新、ちょうど良かった。サンオイルを塗ってくれないだろうか？」
そう言って新にオイルを渡し、イザベラはブラの紐を外す
新はイザベラの綺麗な背中にオイルを垂らし、馴染ませる様に塗っていく
「あ……ぁんっ。慣れているのか、凄く気持ち良いぞ……」
「いやはや、抜群の触り心地だな」
「……前にも塗って欲しいな」
ゴプッ！
思わぬ発言に新の口からあり得ない音が吐き出された
イザベラは胸を手で隠しながら起き上がり、他の人達には見えない様に――――新にだけ乳房（おっぱい）を見せる

乳首が太陽の光でより強いピンク色に輝く
新は勿論、躊躇(ためら)う事なくオイルを塗っていく
「ぁんっ……！はぁんっ……あっ、ぅぅんっ……や、やっぱり、キミに触れられると……気持ち良さが違う……！ひゃんっ……！」
「流石にこれ以上やったら気付かれそうだな。公開プレイするほど俺はアブノーマルじゃないんでね」
新は素早く塗り終わり、イザベラは恍惚な表情でブラを着ける
「はぁ……はぁ……。まだ興奮が収まらない……やはり、キミの手は天性の逸材だな……」
「「むぅ～！お兄さん！私達にもオイル塗って！」」
対抗心を燃やしたのか、イルとネルは水着をズラし始めた
「おいおいおいおいっ。人目に付くからこれ以上は――――」
「イザベラ姉さんだけってのもズルいわね。新さん、私にも塗って」
「わ、私もだ。遠慮せず好きなだけ塗ってくれ」
「それなら私も。でも、この水着上手く外せるかしら？」
何故かミラ、カーラマイン、雪蘭(シュエラン)も参戦してきた
結局、新はオイル塗りを断る事なく実行し、気付けば夕暮れ時になっていたとか……

海でのひとときが終了し、一同はホテルへ
豪華な夕食に舌鼓(したつづみ)を打ち、混浴風呂で新が皆の乳房(おっぱい)を揉みしだいたりと大変な部分もあって、浴衣に身を包んだ全員は広大な和室部屋へと案内された
「わぁ～！広～いっ！」
「すげぇな、この部屋。俺ん家のリビングよりあるぞ」
豪華な様相にイルとネルがはしゃぎ回る
部屋には既に人数分の布団が敷いてあり、古風な感じが何とも言えなかった
「そうだっ。お兄さん♪」
「アレやってみようよ。アレ♪」
イルとネルが浴衣の帯を持って新に言う
新は何をやりたいのか察し、２人の帯を掴んだ
「いくぞ～。良いではないかハリケーンッ！」
「「あ～れ～！お代官様～！ごむたいな～！」」
解き放たれた独楽(コマ)の様に回転するイルとネルは、勢い余って裸になり壁に激突してし

まう
「ふぎゅっ！いった～……」
「お姉ちゃん、大丈夫？あ、いやんっ♪」
イルとネルは恥ずかしがるものの、裸体を隠そうとしなかった
すっかり慣れてしまった賜物(たまもの)だろうか……
「お兄さん。私達だけじゃなくて♪」
「皆にもやってあげようよ♪」
「……そうだなぁ」
３人は悪い顔で他の４人の方を向き、手をワシャワシャと動かす
「え？ちょ、ちょっと待って……」
「まさか、私達も……？」
「捕まえろ～ッ！」
「「ラジャ～ッ！」」
新の号令を合図にイルとネルは獲物を捕まえにかかる
まず最初に捕まったのはミラだった
「ちょっとコラ！離しなさいよ！」
「ダ～メッ。お兄さんにあ～れ～してもらうの」

「お兄さん。思いっきりやっちゃえ～♪」
「言わずもがな！良いではないかハリケーンッ！」
「イヤァァァァァァッ！目が回るゥゥゥゥゥゥッ！」
犠牲者1号となったミラは大回転し、イルやネルと同じ様に裸になって倒れる
「うぅぅっ……エッチ！こうなったらヤケよ！」
「ハハハッ！次の贄（にえ）を出せぃっ！」
ミラが加わって再び獲物を捕獲、今度は雪蘭（シュエラン）が犠牲となった
「ね、ねぇ？落ち着きましょ？お願いだから落ち着いて？」
「お兄さんいっけ～！」
「次は大技だ！ジャイアントスイング式良いではないかハリケーンッ！」
「キャァァァァァァァァァァァァッ！」
新は帯の両端を持って雪蘭（シュエラン）をジャイアントスイングの要領でぶん回す
次第に解き放たれた雪蘭（シュエラン）は浴衣が脱げて、裸で布団にダイブする結果に
「いった～い！もう！少しは手加減してよ！」
「ハハハッ！この調子で増やしていくぞ！次の獲物を捕らえろ！」
「お～っ！」
「なっ！私か!?だが、そう簡単には捕まらんぞ！」

カーラマインは『騎士』のスピードを使って逃げようとするが――――

「反則を使う輩には厳罰！」

ガシッと闇皇姿の新にあっさり捕まってしまった

「コ、コラッ！その姿になるのは卑怯だぞ！男なら正々堂々と――――」

「残念、先に能力を使ったのはお前だ。お前はペナルティとしてその場で脱がしてからくすぐりの刑だ」

「くすぐりっ!?や、やめてくれ！私はくすぐりだけはダメなんだ！」

「ならば尚更！一斉に脱がせ～ッ！」

「「「お～ッ！」」」

イルとネル、ミラ、雪蘭はカーラマインの浴衣を豪快に脱がして、それぞれ四肢を掴んで動きを封じる

新は適度に伸びた爪を用いてカーラマインをくすぐっていく

「ひゃぁぁぁぁぁっ！あひぃぃぃぃぃっ！やめてっ、やめてぇっ！くすぐったいぃぃぃぃ……！らめぇぇぇぇぇぇっ！」

粗方くすぐり終わって解放すると、カーラマインは崩れ落ちて荒い呼吸をする

「あふんっ……はぁっ、竜崎新……お前は鬼畜だ……」

「そりゃどうも☆さて、残るはお前だけだ。イザベラ」

新以下４人はイザベラをジリジリと囲って逃げられない様にする
「ふふっ、甘いぞ竜崎新」
イザベラが不敵に笑むと、自ら帯を外して浴衣を脱いだ
白くて綺麗な裸体が現れ、打つ手が無くなってしまった
「くっ……！その手があったか……！負けた……」
新はｏｒｚの体勢で両手を床に付ける
「せっかくの機会なんだ。竜崎新、実はキミに頼みたい事がある」
「んっ？何だ？」
イザベラの言葉に顔を上げる新
イザベラは何やらモジモジし、他の５人も同様の動きをする
「ん？どうしたんだよ」
「……じゃ、じゃあ言うよ？竜崎新。私達を抱いて欲しい」
衝撃的な懇願に新は目を見開いた
胡座(あぐら)をかいて座り、話を続けさせる
「もしかして、俺をこのリゾートホテルに誘ったのは……その為か？」
「うん……。ライザー様の眷属でありながら、キミに触れられた感覚が忘れられない
……っ。だから、抑えられないこの気持ちをぶつけてたかった。無理を承知で頼んでい

る！お願いだ！私達を抱いてくれ！」
「「お願いお兄さん！私達を大人にして！」」
「お願いします！」
「私も……出来るならお前に抱かれたいんだ！」
「私もお願いします！」
イザベラ、イルとネル、ミラ、カーラマイン、雪蘭（シュエラン）は頭を下げて懇願した
新は全員の頭を撫で、顔を上げさせる
「無理だなんて全然思っちゃいねぇよ。俺は歓迎するぜ？女の真剣な気持ちを汲んでやるのも男の務めだ」
それを聞いたライザー眷属達はパァァッと表情を明るくさせた
一気に７Ｐ……これは大変な作業になる事間違いなし
「でも、いくら新さんでも体力保つかな……？」
「その点に関しては心配無用。こんな時のために持参してきたドリンクがある」
取り出したのは「超強靭体力赤マムシン！」と言うタグが書かれた精力剤
１本飲めば何時間でも出来るドリンクで、盛（さか）った人やカップルに大人気の品（笑）である
「キミはそんな物まで持ち歩いているのか。準備が良いんだな」

「後はコンドームも常備している。男の嗜(たしな)みだからな。んじゃ、始めるか？」
「うん。でも、明かりを消させて」
イザベラが部屋の電気を消すと、月光だけが広大な部屋を照らす様になり、幻想的な美しさを醸し出す
ライザー眷属６人はゆっくりと近づき、新に身を委ねた……

「乳龍帝おっぱいドラゴン」鑑賞会

ライザー眷属達との甘いひとときを堪能して帰還した数日後、グレモリー眷属＋イリナ＋アザゼルは兵藤家の地下一階にある大広間でとある作品の観賞会が行われていた

『ふはははは！遂に貴様の最後だ！乳龍帝よ！』

『何を！この乳龍帝が貴様ら闇の軍団に負ける筈がない！行くぞ！禁手化！』

一誠そっくりのヒーローが赤い鎧姿へと変身を遂げた

巨大モニターに映る作品は『乳龍帝おっぱいドラゴン』と言う特撮作品で、冥界で絶賛放送中の子供向けヒーロー番組らしく、放送開始から視聴率が５０％を超えたとか

「……始まってすぐに冥界で大人気みたいです。特撮ヒーロー、『乳龍帝おっぱいドラゴン』」

新の膝に座っている小猫が尻尾を振りながら言う

しかも、右には朱乃が腕にしがみつき、左にはゼノヴィアが手を握って作品を観賞している

新はライザー眷属達とリゾートに行く際、朱乃達に何でも言う事を聞くと約束していたのでそれを実行している

出遅れたリアスは新の近くでプス～ッと頬を膨らませていた

「すげぇな……グレモリー家が著作権を仕切ってんだろ？これは稼げるわ」

「……見てください。新先輩をモデルにした新番組もあります」

「は？」

小猫が言うので見てみると、画面の中にいる新そっくりの男が闇皇に変身してマントを翻した

『「おっぱい」――――それは無限のエナジーを秘めた神秘の存在。１人の男は、おっぱいへの渇望を力に変えて、世界を制する！Ｂｕｓｔ　Ｏｎ　Ｙｏｕｒ　Ｈａｎｄ!!!その手でおっぱいを掴めッ！』

バックがカラフルな爆発に彩られ、タイトルが出てくる

その名も『蝙蝠皇帝ダークカイザー』

あらすじを簡単に説明すると――――冥界に伝わる伝説の鎧を受け継いだ若手悪魔リューザック・アラタ２世は、冥界を滅ぼそうとする邪悪な敵――――『十二死徒』と戦うヒーローである

女性とおっぱいへの愛を守る為、蝙蝠皇帝ダークカイザーとなって十二死徒と戦い続ける特撮作品らしい

『ぐっ……！やはり十二死徒の相手はキツいか……ッ！』

『ハハハハハッ、ダークカイザーよ。ここまで抗(あらが)った事は褒めてやろう。だが、もう終わりだ。おとなしく冥界と共に滅びろ』

『ダークカイザー！来たわよ！』

巨大な幹部怪人が迫り来るピンチの中、ヒロインが登場する

登場したのは――――リアスにそっくりの姫だった

『き、来てくれたのか！スイッチ姫！』

『さあ、私の胸を触って。あなたは無敵のダークカイザーなのよ！負けないで！』

蝙蝠皇帝ダークカイザーがスイッチ姫の胸を指で押したり手で撫でる

すると……ダークカイザーの全身から赤いオーラが噴出され、力を取り戻し――――

そのまま巨大な幹部怪人を真っ赤な波動で倒した

『遂に十二死徒(じゅうにしと)の１人を倒した……。だが、これはまだ始まりに過ぎない。残りの十二死徒(じゅうにしと)も倒して、冥界に平和を取り戻す！世界中の女性とおっぱいを守ってみせる！スイッチ姫、この戦いが終わったら……私と結婚してくれますか？』

『……ええ、喜んで……』

スイッチ姫がダークカイザーの頬に口付けを施したと言う場面で、右下に次回へ続くの文字が表示される

新は驚愕の展開に目玉が飛び出しそうになった

「なんでお前が部長にキスされてるんだよぉぉぉぉぉぉぉぉっ！しかも結婚んんんんんんんんんんんっ!?ふざけんじゃねぇぇぇぇっ！」
「チゲーよ！これ俺じゃねぇから！つーか、落ち着け！」
一誠を押さえる新にアザゼルが笑って話す
「新は女性悪魔に絶大な人気があるんだよ。大抵はマゾだが、純粋に惚れてるって女もいるみたいだぜ？」
「はぁ～、なんか複雑だな。子供向け番組で認知されるってのは。なぁ、リアス。リアス？」
新はリアスを呼び掛けるが、リアスは顔を真っ赤にしてため息混じりに呟いていた
「……もう、冥界を歩けないじゃない」
「そう気を落とすなよスイッチ姫（笑）」
バシンッ！
面白半分でスイッチ姫と呼んだ新が頭を叩かれた
「元は新のせいじゃない！あなたがあんな名前を付けるから！」
「いや確かにそうだけどよ、『スイッチ』は俺で『姫』を付けたのはあの孫悟空モドキだぜ？」
「『スイッチ』の方が酷いのよ！」

「そんな事言ったら俺の方がヒデェだろ？エッチ蝙蝠とかエロ蝙蝠とか呼ばれてんだぞ。公衆の面前でこんな名前呼ばれたら恥ずいっつーの」

新は首を振って形だけ嘆く

「でも、イッセーさんが有名になるなんて自慢です」

「そうだな。私達眷属の良い宣伝になる」

アーシアとゼノヴィアは楽しそうにしており、イリナもはしゃいで変身ポーズを取りながら言ってくる

「幼馴染みがこうやって有名になるって鼻高々でもあるわよね。そういえばイッセーくんって小さい頃は特撮ヒーローが大好きだったよね。私も付き合ってヒーローごっこしたわ」

「確かにやったなぁ。あの頃のイリナは男の子っぽくて、やんちゃばかりしてた記憶があるよ」

「やんちゃ娘が今や美少女様か。そりゃ一誠もビックリするわな。よくよく見たら最近可愛らしく見え――――」

感心するかの様に瞑目した刹那、ある記憶がフラッシュバックされる

目の前にいる誰か……その誰かに手を伸ばす顔の見えない誰か……

『何だ……？今の記憶……』

何故、急にこんな記憶が自分の脳裏を過るのか……？

そんな事を考えている最中、イリナが顔を真っ赤にしている

「もう！新くんったら、そんな風に口説くんだから！そ、そういう風に女の子を口説いていったのね……？怖い潜在能力だわ！堕ちちゃう！私、堕天使に堕ちちゃうぅぅぅっ！」

イリナの翼が白と黒に点滅し始める

これが天使が堕天使になる前兆らしい

それを見たアザゼルは豪快に笑う

「ハハハハ、安心しろ。堕天歓迎だぜ。ミカエル直属の部下だ。ＶＩＰ待遇で席を用意してやる」

「いやぁぁぁぁっ！堕天使のボスが私を勧誘してくるぅぅぅっ！ミカエル様、お助けくださぁぁぁいっ！」

イリナが涙目で天に祈りを捧げていると、アザゼルが今度は新に何かを言おうとしていた

「そういえばよ、新は天使の女とヤった事あるか？」

「いや、流石にそれはねぇけど……」

「お前を天界に送り込んだら女堕天使を大量生産出来るかもしれねぇなぁ……」

「そのヤバい目で俺を見るな！俺は堕天使製造工場じゃねぇし、大体そんな事したら協定が崩壊すんだろーが！」
「いやいや、女天使達も満更じゃないみたいだぜ？ミカエルから聞いたところじゃ、毎日堕天しそうになってるってよ。だからさ、その縛りを解いちまえ♪」
「いやぁぁぁぁっ！助けてミカエル様ぁぁっ！天界は最大の危機を迎えようとしていますぅぅぅぅっ！」
　イリナが自分の体を守る様な姿勢で天に助けを請う
　新はアザゼルの話についていけず、話を戻そうとする
「とにもかくにも、リアスが有名になるのに遺憾なんざねぇだろ？『王（キング）』ってのは実力だけじゃねぇ。カリスマ性も重視されるんだから」
　そう言った新の首をリアスは後ろから絞める
「変な意味でのカリスマ性なんて冗談じゃないわよ！」
「く、首首っ！魔力を込めて絞めるなぁぁぁ……！」
　とか言いつつも、新は背中に伝わるリアスの胸の感触を味わう
　すると、朱乃が首を絞められている新の腕を掴んで胸に引き寄せる
　新は柔らかなクッションに顔を埋めた
「新さん。部長と仲良くするのも良いですけれど、約束を果たしてもらわないと困りま

すわ」
「約束って、デートの事だったよな？勿論ＯＫだ」
新の答えに朱乃はより一層強く抱き締める
「嬉しい！じゃあ、今度の休日にデートね。うふふ、新さんとデート♪新さんとデート♪」
新が朱乃の胸から脱出した時、ゼノヴィアや小猫から鋭い視線が送られ、リアスも若干頬を膨らませているのが見えた……

昼休み、新は一誠の他、松田（ハゲ）と元浜（メガネ）、アーシア、ゼノヴィア、イリナと共に弁当を食べていた
「そういや、もうすぐ修学旅行だぜ。班を決めないとな」
元浜が卵焼きをつまみながら言う
新達２年生は修学旅行シーズン間近、行き先は京都
ここ最近『禍の団（カオス・ブリゲード）』や闇人（やみびと）関連の事件でゴタゴタが繰り返されているので新と一誠はすっかり忘れがちになっていた

「えっと、３、４名で組むんだっけ？」
　一誠が言うと松田が頷く
「そうそう。泊まるとこが４人部屋らしいからな。ま、俺ら３人は嫌われ者で竜崎がストッパーだからな」
「一誠はともかく、ハゲとメガネのストッパーかよ。不愉快極まりないぜ」
　新は唐揚げを頬張りながら不服そうに愚痴るると、松田と元浜も新への不満をぶつける
「俺達もその点は同感だ。こんなリア充と相部屋だなんてよ。妬まし過ぎて唐揚げと塩鮭じゃあ足りないぐらいだ」
「その通り。肉じゃがとふりかけご飯、加えてガールフレンドを１０人程紹介してもらわなければ割に合わん。竜崎には梅干しの種とキャベツの切れ端で充分だ」
　松田と元浜はしれっと新の弁当のオカズを横取りした挙げ句、腹の足しにもならない具材を放り込む
　これに対して新は冷静なドＳ対応をする
「喉が渇いたな。一誠、悪いがちょっとだけ机を離してくれるか？このバカ２人の鼻から鼻血（ジュース）を出させる。３０～４０発シバくだけでお手頃な鼻血（レッドジュース）の完成だ」
「落ち着け新、貴重な昼休みを流血沙汰で潰すのは良くない！それに殴る回数も多過ぎる！」

「分かった、じゃあ放課後に作るとして。シバくのは８０発でチャラにしてやるか」
「結局殴る上に回数が２倍に増えてんじゃねぇか！ハゲにメガネ、命がある内に頭下げとけ！」
「「だが断る！」」
パキ……ッ
意地でも謝らない宣言をした結果、バカ２人は見事に手首の関節を外された……
のたうち回るハゲとメガネを他所に新は財布を開き、「後でパンでも買うか」と席に着いた
「エロ３人組と竜崎。修学旅行の時、うちらと組まない？美少女４名でウッハウハよ？」
ここでメガネを掛けた女子が話し掛けてきた
彼女の名は桐生藍華（きりゅうあいか）、アーシア達以外で新達と気軽に話せる数少ない女子でアーシア達とも仲が良く、「男子の尊厳」に関わるものを数値化出来ると言うスキルを持っているらしい
彼女独自の調査によると、新の数値は「∞（インフィニティ）」で測定不能だとか……
「いてて……ああ、お前以外美少女３人組な」
外された手首を擦（さす）りながら松田がウンウンと頷くが、すかさず桐生に頭を叩かれた
「うっさい！まあ、こいつは置いといて。兵藤、アーシアがさ。ね？」

「イッセーさん、ご一緒してくれますか？」
　笑顔でアーシアが訊いてくると一誠は「勿論。ＯＫに決まってるだろ！」と元気良く返事をした
　更には弁当そっちのけで抱き合う一誠とアーシア
「あ、あんたら、体育祭終わってから更に仲良くなったわね……。四六時中ラブラブ光線出しながら話しているし」
「ふふふ。俺とアーシアは一心同体！常に共にあるのさ。な？」
「はい。イッセーさんとずっと一緒です」
　アーシアから貰ったウインナーを頬張り、更にラブラブな雰囲気を見せる一誠だった
　ディオドラからの奪還以降、２人の仲は一気に進展したようだ
「まあ、そう言う事だから、あんたらと組むわ。純情で基本申し出が断れないアーシアを兵藤や竜崎以外の男子に任せられそうに無いし。それにゼノヴィアっちとイリナさんもその方が良いでしょ？」
「うん。私も新と一緒が良いな」
「新くんとイッセーくんの２人が一緒だと面白いしね！」
　特大サイズの弁当を食べるゼノヴィア、
　パンを食べているイリナも桐生の意見に賛成する

「クソォォォォォオオオッ！何故こうもイッセーや竜崎ばかりモテるのか!?ああ、神様は無慈悲だぜ！俺だって美少女にだきつかれてぇよぉぉぉぉっ！」

涙を流して慟哭する松田に新は「お前らには無理な話だな」と一蹴する

「うーむ、周りの女子に竜崎フラグ、最近はイッセーにもフラグが建ち始めているように思えてならない……。そんなもの視認出来たら全力を用いてハンマーで叩き壊すんだけどな……」

元浜は呪詛のように呟き、メガネをくいっと上げる

モテない男の僻みほど見苦しいモノは無い（笑）

「ま、お前らはモテない顔の方が映える運命なんだよ。例えるなら俺は月９ドラマの主役顔、一誠はバラエティでも活躍出来る熱血学園番組のセンターポジションに進化したのさ。諦めな」

「納得出来るか！それを言うなら俺達だって進化する筈だ！ゴールデン番組顔にな！」

「そうだ！何百回めのプロポーズ顔にもなれる筈だ！」

「ハッ、無理無理。お前らはどう足掻いたって火曜サスペンスの死体顔止まりだ（笑）」

残酷な一撃に松田と元浜は机に突っ伏して泣く

桐生がメガネをキラリと光らせながら宣言した

「てなわけで、修学旅行はこの８人で行動しましょう。清水寺！そして金閣寺銀閣寺が

私達を待っているわ！」

放課後の部室にて、下校時間を間近にした新達はお茶をしながら修学旅行の話をしていた

ところが、一誠の親友であるダイアンは体験入学期間が終了してしまったので既にクラスからいなくなってしまっていた……

闇人（やみびと）、しかも『チェス』の幹部であっても親友

せめて修学旅行を一緒に満喫したかったと一誠は言っていた

「そういえば2年生は修学旅行の時期だったわね」

「部長と朱乃さんは去年何処に行ったんですか？」

「私達も京都ですわよ。部長と一緒に金閣寺、銀閣寺と名所を回ったものですわ」

リアスが頷きながら続ける

「そうね。けれど、意外に3泊4日でも行ける場所は限られてしまうわ。あなた達も高望みせず、詳細な時間設定を先に決めてから行動した方が良いわよ？日程に見学内容と食事の時間をキチンと入れておかないと痛い目に遭うわね」

「するてぇと、リアスは時間を計算せずにあちこち見て回ってたのか？」
「そうですわね。部長ったら、これも見るあれも見るとやっていたら、最後に訪れる予定だった二条城に行く時間が無くなってしまって、駅のホームで悔しそうに地団駄踏んでいましたわ」
　朱乃が小さく笑い、新が大きく笑うとリアスは頬を赤らめた
「もう、それは言わない約束でしょう？」
「いやいや、気持ちは分かるぜ。初めて訪れた場所は見たい所とか一杯あるからな。俺もバウンティハンターの仕事とかで各地を回ったぜ。札幌、名古屋、徳島、淡路、ロンドン、中国にブラジルまで。世界各国を飛んで行ったっけ」
　新はバウンティハンター時代を思い出し余韻に浸る
　そこでふと、ある事を思い出した
「各地で作った女達は元気にしてっかな……？」
「新、あなたは仕事でも女性と関係を作ったの？」
「いや～、依頼内容をこなしたら報酬金を貰う手筈だったんだけど、足りない事が分かったら体で払うって言ってきた女もいたんだよ。まぁ当然ゴチになった。その半分が女子高生や女子中学生だったな」
「チクショオオオオオオオオオオオッ！なんで、なんでお前だけがそんな美味しい思い

をしてんだアアアアアアアアッ！その有り余った幸せを寄越せエエエエエエエッ！」

怒り狂った一誠が新を殴ろうとしたが、ヒョイヒョイと回避される

リアスが苦笑したところで全員の携帯が同時に鳴った

全員はそれが何を意味しているのか知っているため、顔を見合わせる

リアスが息を整えた後、真剣な声音で言った

「――――行きましょう」

英雄派との戦い、オルレアンの乙女

町にある廃工場
そこにグレモリー眷属＋イリナが訪れていた
既に日は落ちていて、空は暗くなりつつある
薄暗い工場の中に気配が多数存在し、それらは殺意と敵意に満ちていた
「――――グレモリーの眷属か。嗅ぎ付けるのが早い」
暗闇から黒いコートを着た男が現れ、周囲から人型の黒い異形の存在がおよそ１００体程姿を覗かせていた
「『禍の団（カオス・ブリゲード）』――――英雄派ね？ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。三大勢力にこの町を任されている上級悪魔よ」
「ああ、存じ上げておりますとも。魔王の妹君。我々の目的は貴様達悪魔を浄化し、町を救う事だからな」
「はっ。テロリスト風情が言ってくれるじゃねぇかよ」
男――――『禍の団（カオス・ブリゲード）』の英雄派構成員はゴミを見るような目で新達を見る
ここ最近、英雄派が各勢力の重要拠点を度々襲来してくる事件が多発しており、新達

はそれらを迎撃している
先程話した男の横からサングラスの男と中国の民族衣装みたいな服を着た男が出てきた
異形の方は戦闘員のポジションで実力は下級悪魔じゃ相手に出来ない程強い
倒すには中級悪魔以上の実力が求められるが、新達は既に中級～上級悪魔並の力を持っている
一誠は禁手（バランス・ブレイク）化してから前衛として前に出る
フォーメーションは一誠と祐斗が前衛、新とゼノヴィアは少し離れた場所で補助をしつつ攻撃を仕掛ける
中衛にイリナ、小猫、ギャスパーは前衛のフォローと後衛の守護及びサポート
そして後衛にリアス、朱乃、アーシアの３人
リアスは司令塔兼支援攻撃役、朱乃も後方からの支援役でアーシアは回復役となる
新も闇皇（やみおう）に変異し、黒いコートの男が手から白い炎を発した
「――――っ。また神器（セイクリッド・ギア）所有者か」
祐斗が目を細めて言った
「困ったものね。ここのところ、神器（セイクリッド・ギア）所有者とばかり戦っているわ」
リアスは嘆息するが、瞳には決意がみなぎっている

新も闇皇剣(やみおうけん)を出して魔力を注ぐ
炎を揺らす男が攻撃を仕掛けた瞬間、一誠は魔力噴出口から火を噴かしてダッシュし、炎も弾き飛ばした
「っしゃあ！俺達はザコ退治だな！ゼノヴィア！」
「分かっているとも！」
新はアスカロンを持ったゼノヴィアと共に戦闘員を倒しにかかる
斬り捨てた戦闘員は消える様に霧散していく
「ザコ戦闘員は引っ込んでろ！」
戦闘員を粗方倒した新はサングラスの男と対峙する
「貴様が闇皇(やみおう)の蝙蝠か。ある方から貴様だけは生け捕りにするよう命じられているのだが……無傷での生け捕りは不可能と見る」
「何だ？さっきまで俺達を卑下する様な目で見てたクセによ。物好きな奴もいるんだな」
新は相手が神器(セイクリッド・ギア)所有者だけあって簡単には仕掛けない
様子見のためか適当な小石を拾い、微量の魔力を込めてサングラスの男に投げつける
ズヌンッ……
すると、工場内の影が伸びて小石を飲み込んだ

新は驚きながらも、空気が震えて何処からか出る微量の魔力を察知した
アーシアの影が蠢(うごめ)き、影から先程投げた微弱な魔力付きの小石がアーシアのお尻にヒットする
「きゃっ！」
「――――ッ！どうしたアーシア！」
「なるほどな。影で飲み込んだものを他の影に転移させる神器(セイクリッド・ギア)か」
「攻撃を受け流すタイプの防御系だね。厄介な部類の神器(セイクリッド・ギア)だ」
分析する新と祐斗が目を細めながら呟く
アーシアのスカートの一部が焦げて穴が開く
白いパンツがチラチラと見えてしまった
「だ、大丈夫です、イッセーさん。スカートのお尻がちょっと焦げただけです」
「すまねぇアーシア。後で詫びる――――ッ！皆！光が来るぞッ！」
新がそう叫び、ある地点を見ると、民族衣装の男が青く光る矢を撃とうとしていた
光の矢が放たれ、空中で軌道を変えながら迫ってくる
「光なら任せてちょうだいな！」
一誠の後方からイリナが光を放ち、相手が撃った光の矢を相殺(そうさい)する
朱乃は氷の槍を作って光使いへ放り投げるが、影が伸びて槍を吸い込む

リアスの影から氷が出てくるが、リアスは何事も無く避けた
「ギャスパーくん！データは？」
「は、はいいいっ！で、出ました！そ、そちらの方が炎攻撃系神器（セイクリッド・ギア）『白炎の双手（フレイム・シェイク）』！そっちが防御、カウンター系神器（セイクリッド・ギア）『闇夜の大盾（ナイト・リフレクション）』！さ、最後にあちらが光攻撃系神器（セイクリッド・ギア）『青光矢（スターリング・ブルー）』ですぅっ！」
ギャスパーはアザゼルが開発した神器（セイクリッド・ギア）スキャンマシンで敵の神器を分析して皆に伝えた
「光使いが厄介だな。よしっ、ここはこいつだな……」
新は刀身に黒い魔力を込めて闇を発生させる
新の得意技『暗黒捕食者（ダークネス・リード）』の闇の中に入り、工場内の影を伝っていく
ターゲットは周囲の影で守られていた光使い
その影から飛び出した新に敵は仰天する
「何だと!?今何処から――――」
「不意討ち御免！」
新は光使いを剣で斬り払った
「くっ！おのれ！」
「新！部長からの指示だ！今からドラゴンショットを撃つ！来たらそいつを影の中で爆

散させてくれ！」
「影の中で？分かった！来い！」
一誠は影に向かって赤い魔力の弾を撃ち込む
魔力の弾が影に吸い込まれていった
「新！ドラゴンショットが来るわよ！」
「合点承知！」
新も掌（てのひら）から魔力の弾を発射した
ドオオオオンッ！
「ぐわっ！」
爆音が響き、影使いがボロボロになって吹っ飛ばされた
「影の中で攻撃が弾ければどうなるか試してみたのだけれど、どうやら処理出来ずに自分のもとへ来てしまったようね。攻撃そのものは受け流す事が出来ても、弾けた威力までは受け流す事が出来なかった」
リアスが不敵な笑みを浮かべていた
感心するのも束の間、今度は緑色の光の矢が飛んできた
「吸収アンド反発！」
咄嗟に新は吸収の魔力を使って光の矢を剣に吸収させ、そのまま工場の外へ反発させ

た

「チッ。どうやら外にもう1人いるみたいだな。ま、影が消えただけマシか」

「す、凄いですう！今の攻撃だけで神器（セイクリッド・ギア）データが出ました！『緑光矢（スターリング・グリーン）』ですう！」

「そちらは私がやろう。小猫、付いてこい。相手の位置は気で探れるな？」

「……はい、ゼノヴィア先輩」

ゼノヴィアが小猫を引き連れて工場から飛び出し、一誠は炎使いを拳で打倒した

「……ぬおおおおおっ！」

倒した筈の影使いが立ち上がり絶叫した

男の体を黒い影が包み込み、更に広がって工場内全てを包み込もうとしていた

だが、影使いの足元に見た事も無い魔方陣が展開され、影使いはこの場から消え去った

戦闘が終了し捕らえた炎使いと光使い、更にゼノヴィアと小猫が捕まえたもう1人の光使いを魔方陣で冥界に転送させた

「冥界への移送も終わり。まあ、今回も良い情報を得られそうに無いでしょうね」

実は倒した神器（セイクリッド・ギア）所有者は戦闘で負けた瞬間、英雄派としての記憶を消されているらしく、事件を解決してもなかなか情報を得られずにいた

「しっかし、何度も何度も同じ様な展開だな。英雄派はこんな事をして何の意味があるんだ？」

「実はさ、私も変だなーと思ってたのよ」

新の言葉にイリナが続く

「私達を本気で研究して攻略するなら、2、3回ぐらいの戦いで戦術家はプランを組み立ててくると思うの」

「確かにそれが普通だな。だが、それが4回目、5回目と続くって事は――――俺達を何かの練習道具に利用しているって仮説が浮かび上がるな。そう……禁手（バランス・ブレイカー）とかに」

新の言葉に全員の顔が強張り、一誠が狼狽した声を出す

「……で、でもよ、俺達にぶつけたくらいで禁手（バランス・ブレイカー）に至れるのか？」

「充分過ぎる材料が揃ってるだろ。まず紅髪（べにがみ）の滅殺姫（ルイン・プリンセス）。赤龍帝（せきりゅうてい）に闇皇（やみおう）の蝙蝠、雷光（らいこう）の巫女、聖魔剣使（せいまけん）い、デュランダルとアスカロン、時間を停めるヴァンパイアに仙術使いの猫又、優秀な回復要員もいる。相手から見れば俺達はイレギュラーの宝庫。英雄派の人間にとっては未知の強敵で尋常じゃない戦闘体験って訳だ。ぶっちゃけ経験値稼

ぎってヤツ？」
「経験値稼ぎね……ああもう、分からない事だらけね。後日アザゼルに問いましょう。私達だけでもこれだけ意見が出るのだから、あちらも何かしらの思惑は感じ取っていると思うし」
ここで結論は出なさそうなので、魔方陣を展開して根城である部室に戻った
そして、帰り支度をする中で朱乃が鼻歌を歌っている
「あら、朱乃。随分ご機嫌ね。S的な楽しみが出来たの？」
「いえ、そうではなくて、うふふ。明日ですもの。自然と笑みがこぼれますわ。デート、明日新さんは私だけの彼氏ですわ」
そう、明日は休日で新が朱乃とデートをする日である
空気が一瞬で変わり、女性陣からの視線＋一誠の血涙込みの視線が新に放たれた……

――――――――――――――――廃工場

「キヒヒッ。いや～、良いデータが揃ってきたよぉ♪英雄派の方々サンキュ～。これでボクの新兵器の開発も進む♪キヒヒッ。偶然、封印の楔(くさび)も見つかったしマキシマムハッピ～♪ウワォッ！封印の楔はあと2本……必ず見つけて破壊してやるよ」

「ありがとうございました～」
新は帰る途中、コンビニに寄って買い物をしていた
買ったのは冷たいココアとコンドーム
万一の事態に備えていた
人気(ひとけ)が無い空き地の土管に座り、ココアを飲む
「はぁ……朱乃とデートか。リアス部長も一誠を誘えば良いのに」
ココアを飲み干して空き缶になったソレをゴミ箱に向かって投げるが――――突然空気を切る様な音が発生し、缶が４つの欠片に分かれた
「誰だ？いるんだったら姿を見せな。剣で缶を斬って終了かよ？」
新は気配のする場所に向かって呼び掛ける
物陰から剣を携えてる金髪の若い女性が姿を見せた
見た感じは異国の剣士に近い風貌である
「アハッ♪凄いわね。今のでどんな攻撃かも分かっちゃったなんて。うーん♪お姉さん感激っ♪」

楽しそうに笑う女性に新は口笛を吹く
「こんな夜更けに何か用か？悪いがセッ◯スの誘いなら、また今度にしてくれ。明日は大事な用事があるんだ」
「うふふ、噂通りにエッチなのね。竜崎新♪」
初対面なのに自分の名前を知っている
それに違和感を覚えた新は素朴な疑問をぶつける
「あんた……『禍の団（カオス・ブリゲード）』英雄派のメンバーか？」
「ア・タ・リ♪私はジャンヌよ。よろしくね♪」
可愛らしくウインクするジャンヌに新は片眉を吊り上げた
「ジャンヌって、まさか……『オルレアンの乙女』と呼ばれた聖ジャンヌ・ダルクか？」
「うーんっ☆またまた大当たり♪お姉さんは英雄ジャンヌ・ダルクの意志と魂を引き継いでるのっ。そこまで知ってるなんて、お姉さんキュンキュンしちゃうわ♪」
ジャンヌは心底嬉しそうな表情で腰を振る
「んで、聖ジャンヌ・ダルク様が俺に何用で？」
「冷たい事言わないでよ。用ってのはね？ハッキリ言っちゃうと坊やを私達のチームに引き込みに来たの♪」
「……寝言は寝てから言うものだぜ」

「寝言じゃないもん。私は本気よ」
　ジャンヌが腰に携えたレイピアを抜く
「英雄派の人間は俺達みたいな化け物を毛嫌いしてるんじゃなかったのか？」
「んー、確かにそうだけど、それは一部の者だけ。知らないかもしれないけど、君のお父さん――――竜崎総司は私達の間じゃ英雄って呼ばれてるのよ。だ・か・ら♪君を勧誘しに来たの」
「あの親父が英雄!?マジかよ……知らなかった。けど、勧誘なら俺の答えは決まってる――――ＮＯだ。テロリストになるのは嫌なんでな。セッ○スの相手ならいつでも言ってくれや」
「アハッ♪もうお姉さん、君が気に入っちゃった。だからぁ、力ずくで連れてっちゃおっ♪」

――――――――――――

「――――っ。……っ？」
「どうかしたの、朱乃？」
「あら、リアス。今……何だか新さんにまた女性と深い関わりを持ちそうな予感がピン

と来てね……」
「……朱乃、あなた最近おかしな能力が目覚めつつあるわね……」
「うふふ、リアス？好きな人に対する事は自然と身に付く物よ？」

深夜の空き地
新は突如、『禍の団（カオス・ブリゲード）』英雄派のジャンヌに勧誘されたが断った
しかし、ジャンヌは力ずくで引き込もうと攻撃体勢を取っているのが現状である
「力ずくってのは一番難しいんじゃねぇのか？ジャンヌ」
「うーん、そうかもしれない☆でもー、お姉さん負けないわよ？こう見えて結構強いんだから♪」
新にウインクを送るジャンヌ
新は仕方なく闇皇（やみおう）に姿を変えて構える
「へー、それが『闇皇（やみおう）の鎧』なんだー。お姉さん楽しみでまたキュンキュンしちゃうな♪」
「褒めてくれてあんがとさん。引き返すなら今の内だぜ？」
「引き返す？冗談ポイッ♪お姉さんがせっかく目をつけたんだから、諦めないわよ！」

ビュンッ！
ジャンヌが素早く動いて細剣――――レイピアを振るう
新は鎧に覆われた両手両足の爪でレイピアを防いで火花を散らす
「チッ！人間とはいえ、侮れねぇな！流石は英雄の子孫と言ったところか！」
「凄い凄い！お姉さんのスピードに軽くついてきてくれてる！もう感激っ！」
新の蹴りを回避して距離を取るジャンヌ
新は右手から闇皇剣(やみおうけん)を出して刀身をジャンヌに向けた
「こっからはガチだ。裸にされても恨むなよ！」
「恨んだりしないわよ。寧ろ大歓迎♪お姉さんをスッポンポンにしたいならやってみて！」
レイピアと闇皇剣(やみおうけん)が何度もぶつかり合って火花を散らしていく
新は剣戟だけじゃなく拳や蹴りも加えるが、ジャンヌは人間離れした反射神経を駆使して攻撃をかわす
「そぉれぇっ！」
「なんのっ！」
ジャンヌは横薙ぎの一撃を放つが、新は体を反らして回避するついでにサマーソルトの要領でレイピアを蹴り上げた

その直後に新も横薙ぎの剣戟を見舞うが、ジャンヌは後ろに跳んでかわした――――
かに見えた
パラッ……
「あら？いやんっ♪」
ジャンヌの服の胸元がパカッと割れ、白いブラジャーが露出する
ジャンヌは少し顔を赤らめて露出した部分を隠すと同時に、落ちてきたレイピアが新の剣で破壊された
「さーて、剣が無くなっちまったら戦えねぇよな。それとも、潔(いさぎよ)く裸になりたいか？」
「んー、どうしよっかなー？お姉さん困っちゃうなー♪」
ジャンヌは前屈みになって露出した胸をギュッと寄せる
見せつける様に谷間を強調させている
新の目測によると、ジャンヌのバストはDカップぐらいらしい
「ダーメっ。アーくんが私達のところに来てくれないと」
「ア、アーくん……？何なんだよ、アーくんって？」
「坊やの愛称よ。竜崎新だから、アーくん♪それともリューくんの方が良いかしら？」
「ん～……まぁ、好きに呼んでくれや」
「うふふ、それじゃアーくん。お姉さんをキュンキュンさせてくれたお礼に特別サービ

スしちゃう♪」
　ジャンヌがその場でクルッと1回転してポーズを決めながら言った
「聖剣よ！」
　ババババッ！
　ジャンヌの周りの地面から無数の剣が突き出てきた
　新は一目でそれを九分九厘、神器（セイクリッド・ギア）だと悟った
「しかも、俺達悪魔が苦手な聖剣に関する神器（セイクリッド・ギア）か。厄介な神器（セイクリッド・ギア）持ってんな」
「はーい、その通りよ♪お姉さんの神器（セイクリッド・ギア）は『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』。アーくんのところにいる魔剣のヒトが使う神器（セイクリッド・ギア）の聖剣バージョンよ。どんな聖剣でも創れるわ♪」
「魔剣を創る神器（セイクリッド・ギア）があれば、聖剣を創る神器（セイクリッド・ギア）があっても別におかしくはねぇよな。全く、あんたがテロ組織にいる事が勿体無いぜ」
「あら、お姉さんを心配してくれるの？意外と優しいのね。でも、アーくんはこれから私達のチームに入るのよ♪ちょっと痛くても我慢してねっ！」
　ジャンヌは地面に生えた聖剣を引き抜いては投げ、引き抜いては投げを繰り返す
　投擲（とうてき）された聖剣の雨霰（あめあられ）に対し、新はマントで身を隠す様にガードする
　攻撃が止んだのでマントを元に戻すと、ジャンヌの姿が何処にも無かった
「逃げたか……？いや、違うな」

「大当たりっ！」
上からジャンヌが聖剣を構えて落ちてくる
新は回避が間に合わず、闇皇剣(やみおうけん)で迎撃するしかなかった
「オオラァッ！」
ザシュッ！
バキンッ！
何かを斬る音と金属音が同時に鳴り、新の右肩から血が滴(したた)り落ちる
「チッ。ちょっと間に合わなかったか。だが、ただじゃ斬られねぇよ俺は」
新が振り返る
ジャンヌの手にしている聖剣は半分程の長さに折られていた
折られた剣先は新の右肩に刺さっており、新はそれを引っこ抜いて投げ捨てる
「わおっ。お姉さん結構力一杯刺したのに、ちょっとしかダメージになってないの？」
「ガキん時から鍛えて、悪魔になってからはトンでもなく強くなったんだよ。鎧ごしだからダメージも最小限で済んだ。それに――――お返しと言っちゃ何だが、俺も斬らせてもらったぜ？」
ピシッ……ストンッ
ジャンヌの下の服が裂けて地面に落ちた

聖剣の刃先を折った直後に切り刻んだのだろう
「あら、今度はパンツまで見えちゃった♪このまま戦うにしても動きづらそうだし、脱いじゃおっと♪」
なんとジャンヌは鼻歌を歌いながら上下の服を取り払った
完全な純白下着姿になり、新に見せつける様に胸を寄せて持ち上げる
「どう？お姉さんの下着姿は。なかなかセクシーでしょ♪この下も見てみたい？でも、ダーメっ。アーくんが私達のところに来てくれたら見せてあ・げ・る♪」
「自分から脱いどいてソレかい。別に構わねぇよ。俺が脱がしてやるから」
「アハッ♪やっぱりそう来るんだ。じゃあ、お姉さんちょっと本気出しちゃお。禁手化（バランス・ブレイカー）♪」
再びジャンヌの周りの地面から聖剣が無数に飛び出し、それらが集まって何か巨大な物体を作り上げていく
しばらくして出来上がったのは――――巨大なドラゴンだった
聖剣で作られたドラゴンに新は目が飛び出しそうになり、顔を引きつらせた
「おいおい……冗談だろ？何つぅもんを作ってくれてんだ……」
「可愛いでしょ？聖剣で作ったドラゴンちゃんよ♪『断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）』。亜種（あしゅ）の禁手化（バランス・ブレイカー）よ♪」

「亜種？本来の禁（バランス・ブレイカー）手とは違うのか？」
「それは教えてあげないっ。いっけー！ドラゴンちゃん！」
聖剣ドラゴンが巨大な爪を振り下ろして新を潰そうとするが、新は横っ飛びで回避して銅を斬る
しかし、体躯の差か……傷は付いても大したダメージにはならない
ドラゴンの踏みつけや爪をかわしながら、打倒する策を考える
そして、ある策を思い付いた
「んじゃ、出てきて早々悪いが退場してもらうぜ！」
刀身に赤い魔力を集め、攻撃を避けながらドラゴンの足を何度も斬っていく
攻撃を回避して足を斬ると言う行動を繰り返していくと、聖剣ドラゴンの様子が一変する
「どうしちゃったの？ドラゴンちゃん？」
ドスゥゥゥン……
聖剣ドラゴンが左膝を地に付ける
よく見ると、左足には無数の傷と抉（えぐ）れた痕跡があった
「やはりな。いくらデカくても同じ箇所ばかり攻撃していけば体勢を崩せる。そして、動きが鈍ればこっちのもんだ！」

新は赤い魔力で巨大な刀身を作り飛び上がる
聖剣ドラゴンの頭上より少し上から降下していき、ドラゴンを一刀両断にした
聖剣で作られたドラゴンは儚い音を立てながら崩れ、土煙を上げる
「ケホケホッ。うっそー……私のドラゴンちゃんが負けちゃった」
「ドラゴンだけじゃねぇ。あんたも負けだ」
バッ！ガシッ！
土煙の中から両手が飛び出し、ジャンヌのブラジャーとパンツを掴む
正体は言うまでもなく新
ビリッ！ブチィッ！
力一杯引き千切ると、ジャンヌの裸が展開された
揺れる乳房（おっぱい）、ピンク色の乳首、くびれた腰、柔らかそうな尻
全ての肢体が聖ジャンヌ・ダルクと呼ばれるに相応しい物だった
「――――っ。いやんっ♪エッチ♪」
ジャンヌは裸体を手で隠し、新は闇皇（やみおう）の姿を解除する
「……っ？どうして鎧を解いたの？」
「これ以上戦えない女を痛めつける程、俺は腐れ外道じゃないんでな。裸を見れたから帰るわ」

「……うふふ、アーくんってエッチだけど優しいのね。敵の私にそんな気遣いをしてくれるなんて」
「褒めてもお前らのところに入るつもりはねぇよ。じゃあな」
新は帰ろうとしたが、ジャンヌにズボンの裾を掴まれる
「……何だよ？」
「流石に裸じゃ寒いの。何か着るものちょうだい♪」
新は嫌そうな顔をするが、仕方ないと思い学生服の上着を渡す
ジャンヌはそれを受け取るとすぐに袖を通しボタンを止めた
「うーん、ちょっと小さいけど良いや♪お姉さん、まだまだアーくんを諦めないわ。今日は負けちゃったけど、次はぜーったい勝っちゃうもんっ♪バーイっ。ちゅっ♪」
ジャンヌは投げキッスをしてその場を去っていった
新はジャンヌのテンションに少しついていけず、ため息を漏らす
「なんか……黒歌（くろか）にそっくりな女だったな」
新は疲れたので、とりあえずもう1本飲み物を買う事にした……

「たっだいまー」
「戻ったのかジャンヌ。って、どうしたんだ?その格好は」
「んー、勧誘に失敗してー、裸にされちゃった♪彼、強かったわ。ますます欲しくなっちゃう♪」
「ジャンヌを退けるとは、なかなかやるね。曹操、今の内に耳に入れておきたい情報があるんだ。最近、闇人が各地で楔みたいな物を破壊しているらしいよ。おそらく……彼らの『初代キング』を封印してる楔を」
「『初代キング』か……。いずれ復活の時は近いだろうな。『2代目キング』とも戦ってみたいが、『初代キング』が復活するとなると……熾烈な戦いが始まるかもしれない。気を抜かずに探りを入れていこう」
「はーい。うふふ、待っててね、アーくん。次は必ずお姉さんのものにしちゃうから。そしたら、エッチな事をしてあげるっ。ん～……ちゅっ♪」

朱乃とデート

休日、遂に訪れた朱乃とのデート日
新は先に待ち合わせ場所である駅近くのコンビニの前に到着していた
自前のバイクを駐車場に停め、朱乃が来るのを待つ
服装はいつも私用で着ているロックミュージシャン風の服
同じ服でも季節に合わせた素材を使っているので、春夏秋冬この服である
時計が午前１０時になろうとした時、フリル付きの可愛らしいワンピースを着た女性がやって来た
「あ、朱乃」
「ゴメンなさい、新さん。待たせちゃったかしら？」
朱乃はいつものポニーテールではなく、髪を全て下ろしていた
新はいつもと違う朱乃に見とれてしまう
「……どうしました？新さん。もしかして変？」
「い、いや……その、何つーか……見とれてた。あまりの可愛さに」
新は頬を掻きながら正直な気持ちを言う

朱乃はそれを聞いてパァッと顔を明るくさせた
「今日だけ新さんは1日私の彼氏ですわ。出る前に堕天使さん達に話したら悔しそうにしていましたわ」
堕天使――――おそらくレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの事だろう
新は苦笑いするしかなかった……
「……ねぇ、今日は2人だけのデートだから……新って呼んでも良い？」
「あぁ、勿論だ。今日はよろしくな朱――――乃……」
ふと、新の視界に紅色の何かが映り込んだ
よく見てみると、電柱の陰からサングラスと帽子を被った紅髪（べにがみ）の女性（リアス）が新達を窺（うかが）っていた
更にレスラーの覆面をした2人の人影（ゼノヴィアと小猫）、その内の1人は猫耳を出している
紙袋を被った怪しい奴（ギャスパー）と普段着の祐斗に、メガネをかけた金髪女性（アーシア）の隣で血涙（けつるい）を流している一誠
もしかしなくても、それはオカルト研究部のメンバーだった……
「あいつら……尾行してきやがったのか……」
「あらあら、尾行するにしては多過ぎね」
朱乃も気付いていたらしく、見せつける様に新に身を寄せた

バキッ……
後方からした鈍い音
恐る恐る振り返って見ると――――怒りに震えている様子のリアスが電柱にヒビを入れていた……
あまりにも凄い気迫に新は『見なかった事にするんだ……』と自分に言い聞かせ、とりあえずこの後の自分が生きている事を願った……
「ま、まぁ、とりあえず行こうか」
「ええ」
２人は町へ繰り出していった……

デートを始めてから3時間
その間の朱乃は終始年頃の女の子だった
洋服店に行っては「ねえ、新。これ似合う?」「それともこっちかしら?」と洋服を比べて新に訊いたり、露店で買ったクレープを一緒に食べて「美味しいね、新」と訊かれたりした

今日の朱乃は新でさえも戸惑いを見せざるを得ないぐらい可愛い女の子だった
終始朱乃と手を繋いでのデートに新も珍しく赤面する程だった
新はチラチラと尾行してくるリアス達を気にしていたが、せっかくのデートなんだと首を振って、今日を目一杯楽しむ事を決めた
「朱乃。次はゲーセンに行くぞ！俺も今日はとことんやってやる！」
「うん」
その後、２人はゲーセンに向かってレースゲームやガンシューティング、足で音楽に合わせてステップを踏むゲームなどを遊び尽くした
一通り遊び終わって出たが、紅髪の追跡者達は未だに尾行を続けている
新はしばらく歩いてからチラッと確認し、悪戯（いたずら）な笑みを浮かべる
「朱乃、リアス達を撒くぞ」
「そうね。撒いちゃいま――――――きゃっ。新？」
新は朱乃をお姫様抱っこで抱え、リアス達を撒こうと走り出す
リアス達も新と朱乃が逃げると知るや否や、急いで追い掛ける
数分走ったところで物陰に身を隠し、リアス達の様子を窺（うかが）う
「もう！何処に行ったのよ！あの２人は！」
「……先輩が朱乃さんを抱っこしてました」

「朱乃さんを抱えたまま私達を撒くとは、流石だな……」
「何としてでも見つけるわよ！ここから分かれて探して！見つけたら携帯に連絡をちょうだい！」
リアス達はそれぞれの方向に散開していった
それを確認した新と朱乃は一拍置いてから道路に出る
「へへっ。上手く撒いたみたいだ」
「うふふ、そうね。新の腕の中、凄く気持ち良かったわ……」
朱乃が朱に染まった頬に手をやりながら言う
表面上、笑みを見せている新だが……心の中では『俺、このデートが終わったら確実に死ぬかもな……』とかなりビビっていた
散開する時にリアスが小声で「新、帰ったら洗いざらい吐かせてあげるわ」と凄まじいプレッシャーを放っていたのだ
新曰く、その迫力は悪鬼羅刹すら可愛く見えるとか……
「と、とりあえず現状の確認だ。えっと……」
がむしゃらに走り回ったので周囲を見渡してみると「休憩○円」「宿泊○円」「一泊○円」の文字が書かれた看板があちこちに存在している
辺りにある建物は全てラブホテルだった

「あらららららら……ホテル街まで来ちまったのか。デートっつっても、流石にここは
　　」
「……入ろう」
　朱乃の呟きに新は2度見、朱乃は追い討ちをかけるように新の真正面から言った
「……入ろう。ホテル、入りたいの……」
「朱乃?それは意味が分かって言ってるのか?」
「分かってる……分かってるから、入りたいの……」
　朱乃が新の胸に顔を埋めて抱きつく
　彼女の顔は真剣そのもの
　新は意を決して言った朱乃の覚悟を無駄にしてはいけないと汲み、朱乃と同じ様に
真っ正面から言った
「分かった。じゃあ、入るか」
「……ッ!はい!」
　嬉しさを極限まで出した朱乃は新に強く密着する
　新は朱乃の手を握り、ホテル街の奥へと入っていった……

ホテルの一室にやって来た新と朱乃
部屋にあるのはダブルベッドとバスルームで、朱乃は興味津々に部屋を見渡す
「……意外とある物って少ないのね」
「ラブホはそう言うもんなんだよ。ＡＶ見る為のテレビやベッドとバスルーム。普通はそれぐらいしかねぇからな」
「新は何度も来た事があるの？」
「ま、まぁ……バウンティハンター時代は依頼人の報酬で何度か」
「うふふ、戸惑ってる新。可愛い♪」
「……っ!? へ、変な事言うんじゃねぇよッ！このおっ！」
からかわれた事に怒った新は朱乃のワンピースを脱がしていく
スルリと朱乃の体から離脱し、あっという間に下着姿となった
「もう、新ったら……強引ね♪急がなくても、ちゃんと脱ぐから」
朱乃はブラジャーのホックを外し、パンツも脱ぐ
いつも見ている筈の乳房（おっぱい）、乳輪、乳首、腰、尻
新の目にはそれらがとても美しく、いやらしい物に見えた
「やっぱラブホの力ってすげぇな……。朱乃の裸はいつも見てきたのに、今日はいつも

より色っぽく見えちまう……」
「嬉しい事言ってくれるのね、新……。もう、スる？それとも、シャワーを浴びてから？」
「無論シャワーを浴びてからだ。今、物凄く朱乃の体を洗ってやりたい」
新の言葉に朱乃は微笑み、２人でバスルームへ入る事になった……

オーディン来訪

「ん……あぁ……もう朝か」
午後3時から午後11時まで朱乃と性交した新は、弱りきった体を起こそうとする
しかし、朱乃と繋がったまま寝てしまったので、どうしたら良いのか困惑する
「すげぇ良い寝顔だな、朱乃……」
「……んんっ。ふわぁ……あ、新。うふふ、おはよう♪昨日はいっぱい愛してくれてありがと」
「おはよう朱乃。昨日は魂まで搾り取られるかと思ったぞ……」
「うふふ、だって……ずっと待ちわびてたんだから。その分も補充しないと」
朱乃が新の鼻をチョンとつつく
『朱乃とのセッ○スは命を賭ける必要がありそうだ……』と新は改めて思い知らされた
「朱乃。そろそろ起きねぇか？」
「あんっ。まだ新とくっついていたいのに……いけずね♪」
新はベッドから出て腰を回したり首を鳴らしたりする

朱乃も体を起こし、裸で新と向き合う
「新、ここを出る前にキスして……」
「ハハッ……しょうがねぇな。ちゅむっ……」
２人は体を密着させて唇を合わせる
ついばんだり、舌を絡めたりして好きと言う表しを往復させる
唇を離すと、唾液の糸が橋を作り上げた
「うふふ、またおっきくなってますわ」
「確かになってるけど、しばらく充電させてくれ。マジでガチで頼む」
「そうですわね。お楽しみは待った方が良いですわよね？じゃあ、眠気覚ましにシャワー浴びてきますわ。ちゅっ♪」
朱乃は新の唇に軽くキスしてバスルームに入った
新がトランクスとズボンを穿いた直後、新のスマホが鳴る
ピッ
「もしもし？リアス。どうしたんだ？」
『新？やっと繋がったわね。実はイッセーの家にオーディン様がいらしてるのよ。急いでイッセーの家に来て。あなたもいないと会談が始まらないから』
「あぁ、分かった。準備が出来たらすぐに行くわ」

『……その様子だと、朱乃と最後までシたのね？』
「……ノーコメント」
『ふ～ん、そういう答えを出すなんて……良い度胸よね……？小猫とゼノヴィアはむくれてるわよ』
「そ、そすか……」
『ちゃんと責任を取るのよ？あなたは只でさえ、性欲が旺盛で節操無しなのだから』
「分かってる。朱乃は絶対に手放さねぇよ」
『そう、それなら良いわ。それじゃあね。――――帰ったらゆっくり、ゆっくりと聞かせてもらうから……』
ガチャッ……
新はスマホをポケットにしまい、シャワーを浴びている朱乃のシルエットを見ながら決意を固めた
朱乃は絶対に幸せにすると……そして――――
「……死ぬ時はリアスのおっぱい揉んで死んでやる」
自分の命に究極の危機が訪れる事を覚悟した……

一誠の家の最上階に設けたＶＩＰルームに入った新と朱乃
来て早々、朱乃はガタイの良い男に詰め寄られた
「おい朱乃、何なんだその男は。いったい誰なんだ」
「いや！離して！」
朱乃が激しく抵抗しているのを見て、新は男の腕を掴んで朱乃を解放させた
「おい、オッサン。朱乃が嫌がってんだろ。つーか、オッサン誰だ？」
新はドスを利かせた目を向けながら男に訊く
「今日はオーディン殿の護衛として来ている。堕天使組織グリゴリ幹部、バラキエル――姫島朱乃の父親でもある」
「なっ!?あ、朱乃の親父さん!?」
新はあまりに予想外の答えに驚いた
オーディンはそれを見て楽しそうに笑いながら爆弾級の言葉を投下した
「ほっほっほっ、闇皇（やみおう）の小僧。朝帰りとは……お主なかなかやるのぅ」
その場にいた全員が反応して新の方を向いた
特に朱乃の父親、バラキエルは真っ先に反応して朱乃に詰め寄った
「何だと!?朱乃！それは本当なのか!?」

「そうです！私はこの新さんと生涯を共に過ごすと誓いました！邪魔をしないでください！」
朱乃が新の腕に強くしがみつき、バラキエルは怒りを孕んだ顔で新を睨む
「……この話はまた後でする」
バラキエルは爆発しそうな怒りを堪え少し離れる
「もう！オーディンさまったら、いやらしい目線を送っちゃダメです！こちらは魔王の妹君なのですよ！」
付き人と思われるヴァルキリーがハリセンでオーディンの頭を叩く
オーディンは頭をさすりながら半眼で言う
「まったく堅いのぉ。サーゼクスの妹と言えばべっぴんさんでグラマーじゃからな。そりゃ、わしだって乳ぐらい見たくなるわい。と、こやつはわしのお付きヴァルキリー。名は――――」
「ロスヴァイセと申します。日本にいる間、お世話になります。以後、お見知り置きを」
ロスヴァイセが挨拶してくれた
新が軽くお辞儀をすると、目が合ったロスヴァイセは再び挨拶をする
その様子を見たリアスと朱乃が新の頬をつねる
「新さん？あのヴァルキリーさんとお知り合いなんですか？」

「そう言えば冥界に行った時に会っていたわね。……朝帰りしたばかりなのに大したものね、新？」
「ちょっ、顔怖いっ。ちょっと見知った程度だよ」
「彼氏いない歴＝年齢の生娘（きむすめ）ヴァルキリーじゃ。そういえば、以前のレーティングゲームが終わった後では珍しく男に声をかけておったのぅ。しかも、その闇皇（やみおう）の小僧にじゃ」
　オーディンはいやらしい顔をしながら追加情報をバラす
　ロスヴァイセは酷く狼狽し出した
「そ、そ、それは関係ないじゃないですかぁぁぁぁっ！わ、私だって、好きで今まで彼氏が出来なかった訳じゃないんですからね！好きで処女な訳ないじゃなぁぁぁぁいっ！うぅぅっ！」
　ロスヴァイセがその場に崩れ落ちて床を叩き出す
　新は不憫に思ったのか、呆れ顔でオーディンに抗議してあげた
「オーディンのジイサン。あんま付き人をいじめてやんなよ。終いにはストレスで胃に穴が開いちまうぞ」
「うぅぅっ！竜崎さぁぁぁぁんっ！また励ましていただいてありがとうございますぅぅぅぅっ！」

ロスヴァイセは涙と鼻水を垂らして礼を言うが、新は朱乃の頬をつねられていた
「まあ、戦乙女（いくさおとめ）の業界も厳しいんじゃよ。器量良しでもなかなか芽吹かない者も多いからのぉ。最近では英雄や勇者の数も減ったもんでな、経費削減でヴァルキリー部署が縮小傾向での、こやつもわしのお付きになるまで職場の隅にいたのじゃよ」
オーディンはうんうん頷きながら言い、アザゼルがやり取りに苦笑しながらも口を開いた
「爺さんが日本にいる間、俺達で護衛する事になっている。バラキエルは堕天使側のバックアップ要員だ。俺も最近忙しくて、ここにいられるのも限られているからな。その間、俺の代わりにバラキエルが見てくれるだろう」
「よろしく頼む」
言葉少なにバラキエルが挨拶をくれた
「爺さん、来日するにはちょっと早すぎたんじゃないか？俺が聞いていた日程はもう少し先だった筈だが。今回来日の主目的は日本の神々と話をつけたいからだろう？ミカエルとサーゼクスが仲介で、俺が会談に同席――――と」
「まあの。それと我が国の内情で少々厄介事……と言うよりも厄介なもんにわしのやり方を批難されておってな。事を起こされる前に早めに行動しておこうと思ってのぉ。日本の神々といくつか話をしておきたいんじゃよ。今まで閉鎖的にやっとって交流す

らなかったからのぉ」
　オーディンが長い白ヒゲをさすりながら嘆息する
　どこの勢力でも厄介事の1つや2つはあるようだ
「厄介事って、ヴァン神族にでも狙われたクチか？お願いだから『神々の黄昏（ラグナロク）』を勝手に起こさないでくれよ、爺さん」
「ヴァン神族はどうでも良いんじゃが……。ま、この話をしていても仕方ないの。それよりもアザゼル坊。どうも『禍の団（カオス・ブリゲード）』は禁手化（バランス・ブレイク）出来る使い手を増やしているようじゃな。怖いのぉ。あれは希有（けう）な現象と聞いたんじゃが？」
　グレモリー眷属は新以外驚いて顔を見合わせていた
「やっぱり度々起こる各勢力への襲撃は、神器（セイクリッド・ギア）所有者を禁手（バランス・ブレイカー）にさせるためか」
「ああ、レアだぜ。だが、どっかのバカが手っ取り早く、それでいて恐ろしく分かりやすい強引な方法でレアな現象を乱発させようとしているのさ。それは神器（セイクリッド・ギア）に詳しい者なら1度は思い付くが、実行するとなると各方面から批判されるためにやれなかった事だ。成功しても失敗しても大批判は確定だからな」
「何ですか、その方法って」
「リアスの報告書で概ね合っている。下手な鉄砲も数打ちゃ当たる作戦だよ。まず、世界中から神器（セイクリッド・ギア）を持つ人間を無理矢理かき集める。殆ど拉致だ。そして洗脳。次に強

者が集う場所――――超常の存在が住まう重要拠点に神器（セイクリッド・ギア）を持つ者を送る。それを禁手（バランス・ブレイカー）に至る者が出るまで続ける事さ。至ったら強制的に魔方陣で帰還させる。お前らの対峙した影使いが逃げたのも禁手（バランス・ブレイカー）に至ったか、至りかけたからだろう」

以前、新達と戦った影使いはやはり禁手（バランス・ブレイカー）になろうとしていたようだ……

アザゼルが更に続ける

「これらの事はどの勢力も、思い付いたとしても実際にやれはしない。仮に協定を結ぶ前の俺が悪魔と天使の拠点に向かって同じ事をすれば批判を受けると共に戦争開始の秒読み段階に発展する。自分達はそれを望んでいなかった。だが、奴らはテロリストだからこそ、それをやりやがったのさ」

新は話を理解し、一誠は納得がいかないような顔でアザゼルに訴えかけていた

「自分はその様な目に遭って禁手（バランス・ブレイカー）に至りましたけどって訴えかけるような顔だな、イッセー」

「そりゃそうですよ、先生」

「だが、お前は悪魔だ。人間より頑丈なんだぜ？」

「それでも死にかけました！」

「おーい、一誠。それを言っちまったら俺なんか、神代剣護（かみしろけんご）にデスカリバーで胸を貫かれたんだぞ？」

「その後で反則紛いの力に覚醒したんじゃないか！俺をお前みたいなイカレ野郎と一緒にしないでくれ！」
「よし、お前ちょっと表に出な。覚醒した3つの力でボコボコにしてやっから」
新が親指でドアを指し示すと、一誠は瞬時に土下座した
「どちらにしろ、人間をそんな方法で拉致、洗脳して禁手（バランス・ブレイカー）にさせるってのはテロリスト集団『禍の団（カオス・ブリゲード）』ならではの行動ってわけだ」
「それをやっている連中はどういう輩（やから）なんですか？」
一誠の問いにアザゼルが続ける
「英雄派の正メンバーは伝説の勇者や英雄さまの子孫が集まっていらっしゃる。身体能力は天使や悪魔、闇人（やみびと）にひけを取らないだろう。更に神器（セイクリッド・ギア）や伝説の武具を所有。その上神器（セイクリッド・ギア）が禁手（バランス・ブレイカー）に至っている上に、神をも倒せる力を持つ神滅具（ロンギヌス）だと倍プッシュなんてものじゃ済まなくなる訳だ。報告では、英雄派はオーフィスの蛇に手を出さない傾向が強いようだから、底上げに関してはまだ分からんが」
「オーフィスの蛇を使わないテロリストか……どちらにしろ強敵である事には変わりねぇな」
その後、話が一段落終わったところでアザゼルとオーディンは堕天使経営のおっぱいパブに行き、新、朱乃、バラキエル以外の皆は空気を読んだのか、その場を去る

「竜崎新と言ったな。少し席を外してくれないか。朱乃と話がしたいのだ」
「……良いぜ」
新が立ち去ろうとした時、さっき席を外すよう言ってきたバラキエルが何故か呼び止めた
「聞かないのか？私と朱乃の事を」
「親子の会話を盗み聞きするのは趣味じゃないんでな。俺はそこまでセコくねぇんだよ」
新は再び踵を返すが、バラキエルが「待て！」と強く呼び止めた
「さっき言ったのは撤回しよう。君も同席してくれ。訊きたい事がある……」

「単刀直入に訊くぞ。君は朱乃をどう思っている？」
新、朱乃、バラキエルのみとなった部屋
新はバラキエルの問いに真剣かつ簡潔な答えを出した
「朱乃は俺が愛する女だ」
「だが、君は各地で多くの女性と関係を持っているじゃないか。中にはアザゼルの部下

だった堕天使もいる……君は朱乃もその中に入れるつもりか？」
怒気が含まれたバラキエルの言葉に、新は首を横に振った
「違うな。朱乃だけは違う。朱乃は唯一、俺が自分から惚れた女だ。他の女達とは違う――――かと言って、他の女を見捨てる気は毛頭無い。俺は欲深い生き物なんだ。欲しいと思った女は必ず傍に置く。それが俺の愛情表現だ」
「今の世に、その様な一夫多妻制の考えが許されると思っているのか！」
バラキエルは怒りを露(あらわ)にして、両手に雷光(らいこう)を纏わせる
新はそれでも臆する事なく反論する
「許されないのは百も承知だ。その時は世界を敵に回してでも守り通す。本気で守りたい物は何があろうと守る。例え相手が誰であろうとな……」
「その相手が私でもか？」
「あんたがそうしたいのなら」
断言する新、次にバラキエルは朱乃に訊く
「朱乃。お前はこの少年をどう思っている？」
「私もこの方――――竜崎新の事が好きです。愛しています。この方以外の男性なんて考えられません。あなたが私と新さんの仲を引き裂くと言うのなら――――私は死にます」

「「なっ!?」」
朱乃の真剣な言葉にバラキエルだけでなく、新も驚いてしまった
「ちょ、朱乃!それ本気で言っているのか!?」
「だって……だって、やっと私を支えてくれる……こんな私を本気で愛してくれる男性に出会えたんですよ?私はあなたと離れたくない!離れるなんて嫌!そんな事になるくらいなら死んだ方がマシよ!」
朱乃は涙を流しながら新を強く抱き締める
「……朱乃」
「来ないで!触らないで!私からこの人を取らないで!今の私には彼が必要なのよ!だから、ここから消えて!あなたなんて私の父親なんかじゃない!」
今までに無かった朱乃の強い叫びにバラキエルは雷光を止め、瞑目して言った
「……すまん」
自分の娘に言われたのがショックだったのか、バラキエルの背中が寂しそうに見えた
その会話を陰からコッソリ聞いていた紅髪(べにがみ)の女性(リアス)も姫島父娘(おやこ)の確執の深さ、そして朱乃の覚悟と本気を思い知らされた……
『朱乃は……そこまで新の事を……。私にはまだまだ足りてないのかしら……』

一誠の家を出て自宅に戻った新と朱乃
新は朱乃に話があると言って、リアスと小猫、ゼノヴィアには出掛けてもらった
レイナーレ達も酒場でのバイトでいない
完全に朱乃と2人っきりになった……
新は覚悟を承知で朱乃に言う
「朱乃……お前の過去を、話してくれないか？」
「――――ッ！」
朱乃は驚きと動揺を隠せなかった
自分の好きな人から、自分の思い出したくない過去について話して欲しいと言われたのだから当然の反応であろう……
予想通りの反応に、新は朱乃を優しく抱き締めながら謝った
「気持ちの整理がついてない時にこんな事を言ってすまねぇ……。でもよ、朱乃が好きだから……朱乃が本気で俺を愛してくれるからこそ、お前の口から聞きたいんだ。朱乃の過去を……バラキエルとの確執を……」
「うぅっ……新さん……あらだざぁん……！ぐすっ、ひぐっ……わがりましだ……ぐ

しゅっ、話します……」
朱乃が涙を拭き、自分とバラキエルの過去について話してくれた
朱乃の母は日本のとある有名な寺の巫女だった
名前を姫島朱璃（ひめじましゅり）と言い、朱乃はお母さんの姓を名乗っている
朱乃のお母さんがいる寺の近くにある日、敵勢力に襲撃されて重傷を負ったバラキエルが飛来し、朱璃は傷ついたその堕天使幹部を救い、手厚く看病した
その時にバラキエルと親しい関係になり、朱乃の身に宿した
バラキエルは朱璃と生まれたばかりの朱乃を置いていく訳にもいかず、近くで居を構え、そこから堕天使の幹部として動いていた
3人は慎ましい生活ながらも充実して幸せな日常を送っていたが、幸せは長く続かなかった……
朱乃のお母さん――――朱璃の親類は黒い翼を持つ堕天使の幹部に娘が洗脳されて手籠めにされたと勘違いし、とある高名な術者達をけしかけたと言う
バラキエルは何とか退（しりぞ）けたが、やられた術者達は堕天使と敵対している者達へバラキエルの住まう場所を教えた
運が悪くその日、バラキエルは家におらず、敵対勢力は朱乃と母が住まう家を躊躇せずに攻撃

バラキエルが駆けつけた時には、朱乃は命がけで庇った母のお陰で助かったが……母の朱璃は命を落としてしまい、朱乃は敵対勢力に自分の父――――堕天使の幹部がどれだけ他の勢力に恨みを抱かれているかを語られ、現実を突きつけられた

それ以来、朱乃は堕天使に対して良いイメージを持たなくなり、殺された母親の無念を抱いてバラキエルに心を閉ざした

それから数年後、堕天使とのハーフでもある朱乃は住む家も追われ、天涯孤独の身となって各地を放浪し、リアスと出会ったと言う……

「……」

話し終えた朱乃は、新の胸に顔を埋めて泣いた

溢れんばかりの涙を新はシャツで受け止める

「すまねぇ……ツラかったろう？嫌だったろう？でも、よく話してくれた。気持ちが落ち着くまで泣いてくれ……いつまでも待ってやるから……」

抱き締めながら朱乃の頭を優しく撫でる

今の新に出来る事はそれしか無かった……

「新……キスして、お願い……」

新は拒まず朱乃の唇に自分の唇を合わせる

朱乃が落ち着くまで、朱乃の涙が止まるまで……新はキスを続けた

次の日、新達グレモリー眷属はグレモリー家主催の冥界イベントに主役として参加していた
そのイベントとは握手とサイン会
新達の前には長蛇の列が出来ており、ファンの子供1人1人にサイン色紙を渡して握手もする
『乳龍帝(ちちりゅうてい)おっぱいドラゴン』の主役である一誠と『蝙蝠皇帝ダークカイザー』の主役である新は双方共に鎧姿だった
サイン色紙を受け取り、握手を交わした子供達は満面の笑みを浮かべる
「おっぱいドラゴン！頑張ってね！」
「ダークカイザー！ありがとー！」
一誠は子供達の喜びを見て鎧の中で号泣、新も照れ臭そうに笑う
「スイッチ姫のおっぱい！スイッチ！」
「きゃっ」
２人の近くで同じくサインと握手をしていたリアスから小さな悲鳴が上がった

どうやらイタズラ坊主がリアスのおっぱいをつついていたようだ
一誠はそのイタズラ坊主に嫉妬していたが、新に「子供のやる事に嫉妬してどうする」と諌められる
別の場所では祐斗もいた
祐斗は『乳龍帝おっぱいドラゴン』内での敵役『ダークネスナイト・ファング』の姿でファンの女性に応対していた
更に獣っ娘衣装を着る小猫の所には大きな友達がたくさん並んでいる
小猫は『ヘルキャットちゃん』としてダークカイザーの味方役になっていた
暫くしてイベント終了し、楽屋のテントへ戻る
慣れない作業に疲れたのか、新は鎧を解除して直ぐに肩を落とした
そこへスタッフが近づいてくる
「新さま、お疲れ様ですわ」
「お、サンキュー、レイヴェル」
レイヴェルからタオルを受け取り汗を拭く
レイヴェルは新達が冥界でイベントをすると聞き、アシスタントとして協力していた
「こ、これ修業の一環ですわ！それに冥界の子供達に夢を与える立派なお仕事だと思えるからこそ、お手伝いをしているのです！べ、別に新さまやグレモリー眷属の為ってわ

けじゃありませんわ！」
「子供達に夢を与える仕事、か……。案外悪くねぇな。昔の俺じゃあ少しも考えられなかったよ。毎日毎日、自分が生き残る為に戦って金を稼いで……全部自分主義の生活だったんだ」
「そう、だったのですか……」
「あぁ。だから、あんな小さな手で一生懸命握手されちまったら――――その夢を壊しちゃいけねぇって痛感したよ」
新は子供達と握手した自分の手を見つめ、子供の夢を真剣に守っていこうと決意を固める
そこへリアスが新の楽屋テントへ入ってきた
「新、そろそろ人間界に帰還する時間よ」
「おう、そうだったな。この後オーディン爺さんの護衛だっけ」
「そう、早く戻らないといけないわ。レイヴェルもお疲れ様。今日はありがとう」
「い、いえ、勉強の為ですから」
「じゃあレイヴェル、また今度な」
「はい、イベントの時は呼んでください。わ、私でよろしければ手を貸して差し上げますから」

そんなやり取りをした後、新はリアス達と共に人間界へ帰っていった

戦闘訓練！やっぱり新は強過ぎた

オーディンの日本観光兼護衛が終わり、新はとあるトレーニング場で戦闘訓練を行っていた

その内容はアザゼルが出した鬼畜極まりないメニューだった……

「はあぁぁぁぁぁぁっ！」

「えぇぇぇぇぇぇいっ！」

ゼノヴィアがデュランダル、イリナが光の剣で闇皇姿（やみおう）の新に左右から斬りかかる

「うわっと！」

新はまずデュランダルを回避してゼノヴィアを蹴り飛ばし、イリナの光剣を魔力込みの裏拳で破壊してから腕を掴んで投げつける

「……にゃあ」

ビシュッ！

背後から小猫の拳が繰り出され、新は寸前に察知して回避

その勢いを利用して回し蹴りを打ち込む

「雷光（らいこう）よッ！」

「チィッ！吸収！」
朱乃の手から雷光が放たれる
新はすぐ両手に黒い魔力を集中させて雷光を喰らう
多少ダメージを受けたが、雷光は新の両手に吸い込まれた
「反発！」
ビガガガガガッ！
新はお返しと言わんばかりに吸収した雷光を朱乃に放つ
しかし、朱乃の雷光よりスペックが劣るので避けられてしまう
「はぁッ！」
今度はリアスが魔力の弾を無数に放ち、新はマントと拳で弾き返していく
アザゼルが出したトレーニングメニューとは、リアス、朱乃、小猫、ゼノヴィア、イリナの５人を新と戦わせる事
しかも、新は闇皇剣（やみおうけん）と『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』、更には『プロモーション』を使ってはいけないと言う制限を課せられている
「ったく、これ鬼畜過ぎんだろ。アザゼル……後で殴るぞ……」
新は肩で息をしながら、この場にいないアザゼルに愚痴を言う
「はぁ……はぁ……全然当たらないわね……」

「私の雷光ですら、吸収されてしまいますわ……」
「前々から思っていたのだが……新、強すぎないか……？」
「……先輩、少しは手加減してください……」
「はぁ……はぁ……悪魔は光が苦手な筈なのに、全くダメージを受けてない……新くんって、本当に壊れキャラよ……」
リアス、朱乃、ゼノヴィア、小猫、イリナが順番に愚痴を入れる
「訓練と言っても、少しでも隙を見せれば瀕死確実だなこりゃ……しゃーねぇ。本気でいくか」
新は全身から赤い魔力のオーラを漂わせ、反撃の体勢を取る
女性陣５人を見やって誰から攻めようか模索する
魔力を込めた脚力で飛び出して行き、
その先にいたゼノヴィアに赤いオーラを纏わせた拳を振る
ガキィィィィンッ！
「ぬっ、くぅぅぅぅ……！」
ゼノヴィアはデュランダルで防御するが、新の右足の蹴りによってデュランダルを飛ばされる
蹴り足を前に降ろし、腰の捻りを利用した左の発勁（はっけい）をゼノヴィアの腹に打ち込んだ

ドオンッ！
ビリビリビリッ！
魔力込みの発勁(はっけい)によってゼノヴィアの戦闘服はバラバラになり、裸になったゼノヴィアはトレーニング場の壁に叩きつけられた
「うぐっ……！ゲホゲホッ！」
「お次はっと！」
新は瞬時にその場から消え、今度は近くにいたイリナに狙いを定める
イリナは裸にされる危険を察知し、上空に飛んで光の槍を無数に放つ
新は降り注ぐ槍の雨を回避しつつ、飛び上がってイリナの背後に回り、強烈な両足蹴りでイリナを地面に落とす
「そらよっと！」
新は両腕に魔力で作った鎌を出現させ、X状に切り裂く
イリナの戦闘服も細切れになり、白みを帯びた乳房(おっぱい)とピンクの乳首及び裸体が展開される
イリナの裸は1度見た事あるものの、新は人生で初めて天使の裸を見た
「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！エッチィィィィィィィィィィッ！」
イリナは慌てて裸体を手で隠す

合掌した後、新は次なる標的に向かって走り出した
「次はお前だ！小猫！」
「……させません！にゃあっ！」
縦横無尽に高速移動しながら小猫との距離を詰め、小猫の拳を体を捻って回避すると同時に先程ゼノヴィアに食らわせた発勁（はっけい）を打ち込む
その衝撃で小猫も裸にされてしまい、更に新は小猫の両手を後ろで拘束したまま朱乃に向かって突っ込む
「これぞ秘技『小猫シールド』ッ！」
「ズ、ズルいですわ新さん！小猫ちゃんを盾に！」
朱乃は攻めあぐねた
一直線に向かってくる新に雷光を放てば、小猫まで巻き込んでしまう
すると、盾にされている小猫が朱乃に向かって叫んだ
「……朱乃さん！構いません！私ごと先輩を撃ってください！」
「――――ッ！ゴメンなさい小猫ちゃん！」
ズドオオオオンッ！
朱乃の雷光（らいこう）が放たれ、巨大な爆発と煙を上げる
犠牲を払っての攻撃で新を倒した――――かに思えたが、煙が晴れると……倒れてい

る小猫しかいなかった
「えっ!?あ、新さんがいませんわ！」
「ここにいるぜ？」
新はいつの間にか朱乃の背後に回っており、魔力を込めた手で衝撃波を放って朱乃も裸にした
衝撃波のせいで朱乃の乳房（おっぱい）がプルンプルンと大きく揺れる
「後はリアス、お前1人だけだ！」
「近づけさせないわッ！はあぁぁぁぁぁっ！」
リアスが再び無数の魔力弾を放ってくる
新はそれを拳やマントで弾き返しながら距離を詰めていく
「くっ！どうしてあなたって、こんなデタラメに強いのよ！」
「お喋りしてる暇はねぇぞ――――って、何だ!?足が凍ってやがる!?」
あと少しのところで急に両足が凍らされ、地面と繋がっていた
後ろを見てみると、朱乃が掌（てのひら）を広げて新の足元に氷の魔方陣を展開していた
「隙ありですわ、新さん。私は裸にされたぐらいで怯みませんわ」
「ナイスよ朱乃！新！くらいなさい！」
ドオオオンッ！

動けない新にリアスは特大サイズの滅びの魔力を撃ち放った
新は氷から抜け出そうとするも、強力なせいでなかなか抜け出せない
リアスが勝利を確信した刹那――――
「しゃーねぇよな！ハッ！」
ドガァァァァァンッ！
新は自ら足元に魔力弾を撃って氷を破壊し、横っ飛びで脱出した
「嘘でしょっ!?自分の足ごと氷を撃つなんて！」
「まだまだ経験が足りねぇんじゃねぇのか？リアスッ！」
隙が生じたリアスに新は距離を詰めて、強大な魔力を集中させた右拳をリアスの胸の前に放つ
拳圧と魔力でリアスの衣類は全て吹き飛び、乳房(おっぱい)もプルンプルンと揺れる
「俺の勝ちだな」

「はぁ……、新ってイッセーよりスケベなだけじゃないわね。やり方が酷いわ」
トレーニング終了後、女性陣はアーシアが持ってきた着替え代わりのバスタオルを巻

き、スポーツドリンクを飲んでいる
「リアス部長の言う通りだぞ。新、酷すぎる。裸にするならまだしも、裸にした小猫を盾にするなど……」
「……新先輩には良心と言うものが無いのですか？」
「新くんのエッチスケベ変態蝙蝠！ミカエルさまに言いつけちゃうんだから！」
ゼノヴィアと小猫は拗ね、イリナは胸を押さえながら喚く
闇皇（やみおう）から戻った新はペットボトルの水を頭から被る
「ぷはぁっ。仕方ねぇだろ？こちとら必死でやらなきゃ死ぬ様なメンバーを相手にしてんだから。にしても朱乃、よく小猫ごと俺を撃てたな？」
「はい。例え訓練でも情けをかけてしまっては失礼だと思いまして。でも……ゴメンなさいね、小猫ちゃん」
朱乃が小猫に謝るが、小猫はジッと新を睨みながら言う
「……気にしないでください、朱乃さん。全部先輩が悪いのです」
「新。あなた女性と戦う時、もう少し戦い方を選べないの？」
腕を組むリアスの意見を新は一蹴した
「バトルスタイルを変える気はねぇよ。乳首を拝めた上、戦闘不能状態に追い込める。一石二鳥の戦い方だと思わねぇか？」

「新さん酷いです」
「新くんのエッチ」
「外道だな」
「鬼です」
「鬼畜」
「うふふ、外道ですわね」
順番にアーシア、イリナ、ゼノヴィア、小猫、リアス、朱乃から責められ、新は顔をしかめた
「アーシアまでひでぇわ……。あんまそんな事言ってるとマジでグレるぞ」
「お～い、訓練は進んでるか～？ってリアス、お前ら全員裸にされたのか？」
そこへ鬼畜トレーニングを考案したアザゼルがやって来た
「アザゼル、あなたが用意した相手は鬼畜過ぎるわ。女性を躊躇無く裸にするもの」
「……私は先輩に裸にされた後、朱乃さんの雷光の盾にされました」
「私だっておっぱいを新くんに見られました。今すぐ天界で裁判を起こすべきです」
「私は盾にされた小猫ちゃんに雷光を撃った事で心に深い傷が……」
「おぉーいお前らー？さっき俺を罵っておきながら、更に罵りを入れますかー？いい加減にしてくれないとマジで泣きますよー？」

「あー分かった分かった」
　アザゼルは詰め寄ってきた女性陣を落ち着かせる
「それはまた後で話すとして、新。ちょっと来てくれ」
「……っ？」
　新は言われるがまま、アザゼルについていった
　少し離れた場所でアザゼルが真剣な面持ちで話を始める
「朱乃の事、お前に頼めるか？」
「――――ッ」
「俺が悪かったんだ。あの日、バラキエルを招集したのは俺だ。どうしても奴じゃないとこなせない仕事だった。だから、無理を言って呼び寄せたんだよ。その僅かな間に……。俺が朱乃とバラキエルから、母と妻を奪ったんだ」
「……だからあんたは、バラキエルの代わりに朱乃を見守ろうと？」
　新の問いにアザゼルは何も言わなかった
　新はそれを肯定と解釈する
「実はさ、話は朱乃から全部聞いたんだ。やっぱりまだ……バラキエルさんを許せないみたいだった」
「――――ッ。お前、本人から訊けたのか？」

「あぁ。グショグショに泣きながら話してくれたよ……。泣き止むまで数時間かかっちまった……」
「となると……お前、朱乃と一線を超えたな？ちゃんと責任を取れよ？」
「分かってる。朱乃は俺が初めて自分から惚れた女だ。絶対に不幸になんかさせねぇ」
「……そいつを聞けて安心した。頼むぜ？闇皇（やみおう）の蝙蝠さまよぉ」
アザゼルが新の肩をポンッと叩く
新は当たり前だと返事をして立ち上がって去ろうとした
「ま、それはそうとして……朱乃はどうだった？」
「……はっ？」
「言葉通りだ。朱乃とセッ○スしたんだろ～？感想を聞いてんだよ。朱乃のおっぱいとか尻の感触は？」
「……少しでもあんたを見直した俺がバカだった」
「んな事言うなって！レイナーレともセッ○スしやがったくせに～。良いじゃねぇか、話しちまえよ！」
「やなこった！誰が話すかよ！朱乃の感触は俺のもんだ！」
新はしつこく訊いてくるアザゼルから逃げた

北欧の悪神ロキ

「日本のヤマトナデシコは良いのぉ。ゲイシャガール最高じゃ」
オーディンが来日して数日経ったある日の夜
新達グレモリー眷属、アザゼル、オーディン、ロスヴァイセはスレイプニルと言う８本足の軍馬の馬車に乗って空を移動していた
外には護衛として祐斗、ゼノヴィア、イリナ、バラキエルが空を飛んでついてきている
テロリスト等を迎え撃てる様にするためだ
朱乃は無言で新に寄り添っている
未だにバラキエルに対して気が立っている様だ
新は何も言わず、朱乃の肩に手を回す
「オーディンさま！もうすぐ日本の神々との会談なのですから、旅行気分はそろそろお収めください。このままでは帰国した時に他の方々から怒られます」
「まったく、お前は遊び心の分からない女じゃな。もう少しリラックスしたらどうじゃ？そんなだから男の１人も出来んのじゃよ」

「か、か、彼氏がいないのは関係ないでしょう!す、好きで独り身やっているわけじゃないんですからぁぁぁっ!」
涙目になるロスヴァイセ
新はため息をついてからオーディンに言う
「ジイサンよ。少しは労ってやれや。女をいじめるなんざ趣味悪いぜ」
「りゅうざぎざぁぁぁぁんっ!分かっていただけますよね!この人酷いですよね!?」
「闇皇(やみおう)の小僧。お主やけにロスヴァイセを擁護(ようご)するのぅ?」
「ジイサンがひでぇだけだ。いつかストレスでやられんぞ」
新が嘆息しながら言ったその時――――突然馬車が停まり、皆が不意の出来事に態勢を崩した
態勢を崩したロスヴァイセを新は右腕で確保する
「おい、大丈夫か?」
「は、はい。ありがとうございます……」
「しっかし、いったい何だ?テロか?」
「分からん!だが、こういう時は大抵ロクでもない事が起こるもんだ!」
ロスヴァイセとアザゼルは警戒し、外にいるバラキエル達も戦闘態勢になる
新も闇皇(やみおう)と化して戦闘準備に取り掛かり、一誠も禁(バランス・ブレイカー)手のカウントをスタートさせ

る

　すると、前方に黒いローブを身につけた若い男が浮遊しており、その姿を確認したロスヴァイセは心底驚き、アザゼルは舌打ちをしていた

　男がマントを広げ、口の端を吊り上げて高らかに喋りだした

「はっじめまして諸君！我こそは北欧の悪神（あくしん）！ロキだ！」

「ロキ？ロキってあのロキか？」

　ロキとは北欧神話に出てくる悪戯の神で、世界を滅ぼす神としても有名である

　アザゼルが黒い翼を羽ばたかせて馬車から出ていく

「これはロキ殿。こんなところで奇遇ですな。何か用ですかな？この馬車には北欧の主神オーディン殿が乗られている。それを周知の上での行動だろうか？」

　アザゼルが冷静に問い掛けると、ロキは腕を組みながら口を開いた

「いやなに、我らが主神殿が、我らが神話体系を抜け出て、我ら以外の神話体系に接触していくのが耐え難い苦痛でね。我慢出来ずに邪魔をしに来たのだ」

　悪意満々の宣言にアザゼルは口調を変えた

「堂々と言ってくれるじゃねぇか、ロキ」

「ふはははは、これは堕天使の総督殿。本来、貴殿や悪魔達と会いたくはなかったのだが、致し方あるまい。――――オーディン共々我が粛正を受けるが良い」

「お前が他の神話体系に接触するのは良いってのか？矛盾しているな」
「他の神話体系を滅ぼすのならば良いのだ。和平をするのが納得出来ないのだよ。我々の領域に土足で踏み込み、そこへ聖書を広げたのがそちらの神話なのだから」
「……それを俺に言われてもな。その辺はミカエルか、死んだ聖書の神に言ってくれ」
　アザゼルは頭をボリボリ掻きながらそう返す
「どちらにしても主神オーディン自らが極東の神々と和議をするのが問題だ。これでは我らが迎えるべき『神々の黄昏（ラグナロク）』が成就出来ないではないか。ユグドラシルの情報と交換条件で得たいものは何なのだ」
「ひとつ訊く！お前のこの行動は『禍の団（カオス・ブリゲード）』もしくは闇人（やみびと）と繋がっているのか？って、それを律儀に答える悪神（あくしん）さまでもないか」
　アザゼルの問いにロキは面白くなさそうに返した
「愚者たるテロリストや闇人（やみびと）と我が想いを一緒にされるとは不快極まりないところだ。己の意志でここに参上している。そこにオーフィスの意志は無い」
「……『禍の団（カオス・ブリゲード）』や闇人（やみびと）じゃねぇのか。だが、これはこれでまた厄介な問題だ。なるほど、爺さん。これが北が抱える問題点か」
　アザゼルが馬車の方に顔を向けると、オーディンがロスヴァイセを引き連れて馬車から出ていき、足下に魔方陣を展開して空中を移動していく

「ふむ。どうにもの、頭の固い者がまだいるのが現状じゃ。こういう風に自ら出向く阿呆まで登場するのでな」
「ロキさま！これは越権行為です！主神に牙を向くなどと！許される事ではありません！然るべき公正な場で異を唱えるべきです！」
ロスヴァイセは瞬時にスーツ姿から鎧に変わりロキに物申すが、悪神は聞く耳を持たない
「一介の戦乙女ごときが我が邪魔をしないでくれたまえ。オーディンに訊いているのだ。まだこの様な北欧神話を超えた行いを続けるおつもりなのか？」
返答を迫られたオーディンが平然と答える
「そうじゃよ。少なくともお主よりもサーゼクスやアザゼルと話していた方が万倍も楽しいわい。日本の神道を知りたくての。あちらもこちらのユグドラシルに興味を持っていたようでな。和議を果たしたらお互い大使を招いて、異文化交流しようと思っただけじゃよ」
「……認識した。なんと愚かな事か。――――ここで黄昏を行おうではないか」
ロキから凄まじいまでの敵意が放たれる
新は抗戦の宣言と解釈してマントを翼に変え、馬車から飛び出していく
「おい！新!?相手は北欧の神様だぞ!?」

「一誠、ビビってもしょうがねぇだろ?あの悪神(あくしん)ロキは敵なんだ。さっさと――――」
ドガァァァァァァアンッ!
話してる途中でロキに波動が襲い掛かる
ゼノヴィアがデュランダルを振って聖なるオーラを飛ばしたようだ
「先手必勝だと思ったのだが、どうやら効かないようだ。流石は北欧の神か」
ゼノヴィアの言葉通り、ロキは何事も無かったかのように浮いていた
「聖剣か。良い威力だが、神を相手にするにはまだまだ。そよ風に等しい」
祐斗は聖魔剣(せいまけん)を創り、イリナも光の剣を手に発現させた
それを見てロキは笑う
「ふははっ!無駄だ!これでも神なんでね、たかが悪魔や天使の攻撃では――――ッ!」
「あらよっとぉっ!」
ザシュッ!
ロキの突き出した左手を新が闇皇剣(やみおうけん)で傷を付ける
虚を突かれたロキは新をジッと見た
「悪いな。ヤバそうだったから不意討ちさせてもらったぜ?」
「そうだった。ここには赤龍帝(せきりゅうてい)だけではなく、貴様もいたな。闇皇(やみおう)の蝙蝠――――こ

れはまた面白い限りだ。嬉しくなるぞ。とりあえず笑っておこう。ふはははは！」
　ロキが嬉しそうに笑う中、カウントを終えた一誠が禁手（バランス・ブレイク）化と同時に背中のブーストを噴かして空へ
　リアスと朱乃も翼を広げて馬車から出てくる
「紅い髪。グレモリー家……だったか？現魔王の血筋だったな。堕天使幹部が２人、天使が１匹、悪魔がたくさん、赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の蝙蝠も付属。オーディン、ただの護衛にしては厳重だ」
「お主のような大馬鹿者が来たんじゃ。結果的に正解だったわい」
　オーディンの一言にロキは頷き、不敵な笑みを一層深めた
「よろしい。ならば呼ぼう。出てこいッ！我が愛しき息子よッ！」
　ロキがマントを広げて高らかに叫ぶと、空間に歪みが生じる
　その歪みから１０メートルぐらいはありそうな灰色の狼が現れ、眷属全員が全身を強張（こわば）らせた
「……ハハッ。やっぱそうだよな。間違いねぇ、あれは神喰狼（フェンリル）か！」
　新の一言に全員が驚愕と同時に納得した
「フェンリル！まさか、こんなところに！」
「……確かにマズいわね」

「イッセー！新！そいつは最悪最大の魔物の1匹だ！神を確実に殺せる牙を持っている！そいつに噛まれたら、いくらその鎧でも保たないぞ！」
祐斗とリアスは警戒態勢をより一層強め、アザゼルが声を荒らげる
ロキがフェンリルを撫でながら言う
「そうそう。気をつけたまえ。こいつは我が開発した魔物の中でトップクラスに最悪の部類だ。何せ、こいつの牙はどの神でも殺せるって代物なのでね。試した事は無いが、他の神話体系の神仏でも有効だろう。上級悪魔や伝説のドラゴン、闇人（やみびと）の王の鎧でも余裕で致命傷を与えられる」
ロキの指先がリアスに向けられる
「本来、北欧の者以外に我がフェンリルの牙を使いたくはないのだが……。まあ、この子に北欧の者以外の血を覚えさせるのも良い経験となるかもしれない」
新はその言葉に歯軋りをしながら理解した
――――リアスを狙うつもりだと
「――――魔王の血筋。その血を舐めるのもフェンリルの糧（かて）となるだろう。やれ」
オオオオ

に変異して、フェンリルよりも速くリアスの前に移動し、牙に触れないようフェンリルを闇皇槍(やみおうそう)で止めた
「新！」
「新さん！」
リアスと朱乃から悲鳴が上がる
フェンリルの力は凄まじく、流石の新も余裕が無かった
「ぐぅぅっ！こんのクソ犬がぁぁぁぁ……！調子こいてんじゃねぇぇぇっ！」
新は両肩の刃を伸ばしてフェンリルの目を斬りつけた
フェンリルは攻撃をくらいながらも新を噛み砕こうとしている
「新！」
『ＪＥＴ(ジェット)!!』
一誠が背中のブーストから火を噴かしてフェンリルに向かう
「俺のダチに――――何しやがるんだァァァァァァァァァァァッ！」
ドゴンッ！
一誠がフェンリルを横から殴り飛ばした
しかし、フェンリルは首を振って血を払い、平気そうな顔をしている
「サンキュー、一誠。助かったぜ」

「気にすんな。これぐらい――――――ごぶっ」
一誠が突然血を吐いた
よく見てみると鎧の腹部に大きな開いていた
それを見た新はすぐにフェンリルを見やる
「イッセー！」
「くそっ！一誠が殴った瞬間に奴も爪で攻撃してたのかよ！祐斗！すぐに一誠を！」
体勢を崩しそうになった一誠を祐斗が支え、馬車にいたアーシアが回復のオーラを作り出す
「闇皇（やみおう）の蝙蝠。フェンリルの動きを追い越すとは恐るべき事だ。赤龍帝（せきりゅうてい）の付属かと思っていたが、実際は違うようだ。今の内に始末しておこう」
「ロキィィィィィィッ！」
ロキがフェンリルに指示を送ろうとした瞬間、アザゼルとバラキエルが光の槍と雷光（らいこう）を大出力で放った
「フェンリルを使わずとも、堕天使2人程度では我の相手は無理だ」
魔方陣が盾となって空中に大きく広がり、アザゼルとバラキエルの攻撃を容易に防いだ
「――――ッ！北欧の術かッ！術に関しては俺らの神話体系よりも発展していたっけな

！流石は魔法、魔術に秀でた世界だ！」
アザゼルが憎々しげに吐き捨てる
「だったら、同じ術式で！」
ロスヴァイセがロキと同様の魔方陣を何重にも展開して、縦横無尽の魔法攻撃を放つ
しかし、ロキの防御魔方陣はロスヴァイセの攻撃を難なく防ぐ
「では、次はこちらの手番だな」
「ふざけんじゃねぇぞ……！悪神（あくしん）にクソ犬がアッ！これ以上好きにはさせねぇ！」
新が怒りにまみれて槍を構え、鎧の口が自然と開く
その時、視界に光が一閃流れて――――
『Ｈａｌｆ（ハーフ）　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ（ディメンション）！』
グババババンッ！
フェンリルを中心に空間が大きく歪み、フェンリルは動きを封じられた
だが、すぐに牙で歪みを噛み切って解き放つ
「兵藤一誠、竜崎新、無事か？」
「ヴァーリ！」
新達の目の前に現れたのは白龍皇（はくりゅうこう）のヴァーリ
その横から金色の雲に乗っている美猴（びこう）も出てきた

「――――ッ！おっとっと、白龍皇(はくりゅうこう)か！」
ロキがヴァーリの登場に嬉々として笑んだ
「初めまして、悪の神ロキ殿。俺は白龍皇(はくりゅうこう)ヴァーリ。貴殿を屠(ほふ)りに来た」
「二天龍(にてんりゅう)が見られて満足した。今日は一旦引き下がろう！」
そう言ってロキはフェンリルを自身のもとに引き上げさせ、空間に大きな歪みを作る
「だが、この国の神々との会談の日！またお邪魔させてもらう！オーディン！次こそ我が子フェンリルが、主神の喉笛を噛み切ってみせよう！」
ロキとフェンリルがこの場から姿を消したと同時に一誠は意識を失い、新はガクリと肩を落とした

「……新先輩、ご無事で良かったです」
「すまねぇな、小猫」
新達は現在、駒王学園(くおうがくえん)近くの公園に集まっており、一誠は馬車の中でアーシアの治療を受けている
「オーディンの会談を成功させるにはロキを撃退しなければいけないのだろう？このメ

ンバーと赤龍帝、闇皇の蝙蝠だけではロキとフェンリルを凌げないだろうな。しかも英雄派の活動のせいで冥界も天界もヴァルハラも大騒ぎだ。こちらにこれ以上人材を割く訳にもいかない」

新はヴァーリの声がした場所に歩みを進める

見てみると、その後方に美猴、聖王剣の使い手アーサー、そして黒歌がいた

特に黒歌を見た瞬間、新は顔を引きつらせた……

「は～い。エッチ蝙蝠くん。久しぶりにゃぁぁん♪」

黒歌が新に抱きつき、豊満な乳房を押し当てる

隣にいた小猫は隠れる様に黒歌を睨み、新は黒歌に抱きつかれたままヴァーリに訊いた

「ヴァーリ、お前がロキやフェンリルを倒すってのか？」

「残念ながら、今の俺でもロキとフェンリルを同時には相手に出来ない。だが――――」

「なぁるほど……分かったぜ。二天龍と俺が手を組めば話は別ってか？」

ヴァーリの考えを察した新の言葉にリアス達は驚愕した

そして言葉も出ないリアス達にヴァーリは言う

「今回の一戦、俺は兵藤一誠、竜崎新と共に戦っても良いと言っている」

「キヒヒヒヒッ。北欧の悪神(あくしん)ロキとフェンリル、赤龍帝(せきりゅうてい)と闇皇(やみおう)の蝙蝠に白龍皇(はくりゅうこう)の合戦か～。トンでもないイベントに出くわしちゃったよ～♪ボクも参加したいところだけれど、封印の楔(くさび)破壊とデータの収集が最優先なんだよね～。だから、死なないでよ～？その方が良いデータ取れるから。キャハハハハハハハッ♪」

渉と祐希那と3人の魔族

翌日、兵藤家の地下1階の大広間にグレモリー眷属＋イリナ、アザゼル、バラキエル、シトリー眷属――――そしてヴァーリチームと言う異様な面々が集まった
リアスはヴァーリ達の同席に反対していたのだが、サーゼクスの意見を聞いて渋々承諾
オーディンとロスヴァイセは別室で本国と連絡を取り合っている
早速皆はロキ対策について話し合いを始めた
「単刀直入に訊くぞヴァーリ。俺達と協力するのは何故だ？」
新は皆が思っていた1番の疑問をヴァーリにぶつけ、それに対してヴァーリは淡々と答える
「ロキとフェンリルと戦ってみたいだけだ。美猴達も了承済みだ。この理由では不服か？」
それを聞いたアザゼルは怪訝そうに眉を寄せる
「まあ、不服だな。だが、戦力として欲しいのは確かだ。今は英雄派のテロの影響で各勢力ともこちらに戦力を割けない状況だ。英雄派の行動とお前の行動が繋がっているっ

て見方もあるが……お前の性格上、英雄派と行動を共にする訳ないか」
「ああ、彼らとは基本的にお互い干渉しない事になっている。俺はそちらと組まなくてもロキとフェンリルと戦うつもりだ。組まない場合は、そちらを巻き込んでででも戦闘に介入する」
　要約すると組むなら共闘、組まないなら新達ごとロキを攻撃すると言う意味だ
「……まあ、ヴァーリに関しては一旦置いておく。さて、話はロキ対策に移行する。ロキとフェンリルの対策をとある者に訊く予定だ」
「ロキとフェンリルの対策を訊く？」
「そう、あいつらに詳しいのがいてな。そいつにご教授してもらうのさ」
「そいつは誰なんだ？」
　新が挙手して訊く
「五大龍王の１匹、『終末の大龍（スリーピング・ドラゴン）』ミドガルズオルムだ」
「まあ順当だが、ミドガルズオルムは俺達の声に応えるだろうか？」
「二天龍、龍王――――ファーブニルの力、ヴリトラの力、タンニーンの力で龍門（ドラゴン・ゲート）を開く。そこからミドガルズオルムの意識だけを呼び寄せるんだよ。本来は北欧の深海で眠りについているからな」
「もしかして、お、俺もですか……？正直、怪物だらけで気が引けるんですけど……」

匙も一応、五大龍王の一角ヴリトラの魂が宿る神　器（セイクリッド・ギア）を所有している
「まあ、要素の１つとして来てもらうだけだ。大方の事は俺達や二天龍に任せろ。とりあえず、タンニーンと連絡が付くまで待っていてくれ。俺はシェムハザと対策について話してくる。お前らはそれまで待機。バラキエル、付いてきてくれ」
「了解した」
そう言ってアザゼルとバラキエルは大広間から出ていき、残されたのはオカルト研究部と生徒会、ヴァーリチーム となった
「赤龍帝（せきりゅうてい）！」
「な、なんだよ」
「この下にある屋内プールに入って良いかい？」
軽い質問に一誠は返す言葉が見つからず、新は少しばかり吹く
その後はリアスが『スイッチ姫』と言う呼び名に対して美猴（びこう）を叩いて一悶着が起こったりする
新はそこから視線を外し、もう一組のやり取りに目を向けた
「……」
「……にゃん♪」
小猫が警戒しながら姉の黒歌（くろか）を睨み、黒歌は妖艶に笑みを浮かべていた

小猫の後ろにはギャスパーがブルブル震えて隠れている
新は近づいて両者の間に入った
「おい、黒歌。まだ小猫を無理矢理連れて行こうとする気か？そうはさせねぇけど」
新が黒歌に睨みを利かせて言うと黒歌は一瞬キョトンとして、すぐに悪戯な笑顔でジロジロ見る
「へー。最初に会った時よりお顔が凛々しくなっている様な気がするにゃん。女の子を知っているのに、そんな風に変わっちゃうのかにゃん？」
「あれから覚醒した力は３つに増えたからな。もし小猫に何かしようなら――――――――」
ペロッ
話を遮る様に黒歌は新の頬を舐めた
新は不意の出来事に思わず驚いてしまう
「う～ん♪大人の味にゃん。リューくんがかっこよくなってくれて私は嬉しいにゃん♪」
「こんの……いきなり舐めやがって、どういうつもりだ？ってか、リューくんって何だよ？」
「闇皇の蝙蝠って呼びにくいの。竜崎新だからリューくん♪どうかにゃ？良い呼び名で

しよ？」
　新は好きにしてくれやと言って頭を掻く
　ジャンヌも同じ様な理由でそんな感じの呼び名をつけていやがったなと思い出した
「ねねね、リューくん。私と子供作ってみない？」
「……マタセンノウワジュツヲカケルツモリカ？」
　片言モードと化してしまった新に構わず、黒歌（くろか）は続ける
「私ね、もうリューくんにメロメロなの。裸にされておっぱいを揉まれた日から、リューくんの事しか考えられなくなっちゃったにゃん。それにリューくんは『闇皇（やみおう）の鎧』を持っているし、きっと強い子供が出来るにゃん♪だから、私とエッチしないかにゃ？」
「……一応訊いておくが、何か裏がある訳じゃ無いんだな？」
「むう、失礼な事を言うのね。じゃあお買い得サービス、妊娠するまでの関係で良いからどうかにゃ？」
「よし買ったゴブァッ！こ、小猫……背骨はマジでやめろ……！」
　新が誘惑に負けた瞬間、小猫が新の背骨に拳を打ち込んで止める
「……姉さまに新先輩の……ごにょごにょ……は渡しません」
　新は小猫が何を言ったのか聞き取れなかった（背骨の痛みが原因で……）
黒歌（くろか）はにんまり笑って２人に手を振り、ヴァーリのところへ行った

新はある事をするために、少し部屋を離れようとする
部屋の片隅では朱乃が終始ため息をついていたが、今の新にはどうする事も出来ず、無念に思いながら部屋を出た

『はい、もしもし。あ、新さん。お久しぶりです』
「いきなりすまねぇな、渉。実は折り入って頼みがあるんだ」
新が電話している相手は、以前村上京司との戦いで会った八代渉
『闇皇の鎧』と対を成す『光帝の鎧』を宿した闇人と人間の混血児である
新はロキとフェンリルとの戦いについて渉に説明した
『そうなんですか……北欧の悪神ロキがそんな事を……分かりました。微力ながら、僕達もお手伝い致します』
「本当か!?ありがてぇ。やっぱ頼んでみるもんだな」
『恐縮です。あ、1つだけ訊きますよ?今新さん達は何処にいますか?』
「何処に?一誠ん家の地下1階の大広間だけど、それがどうかしたのか?」
『一誠さんの家の地下1階、大広間ですね?明日もそこで会議とかしますか?』

「するんじゃね？つーか、なんでそんな事を訊く必要があるんだ？」
『分かりました。では、また明日お伺いします』
その言葉を最後に渉からの通信が途絶える
新は「なんか話を聞かない奴だな」と嘆息した

翌日の朝、朝食を済ませた新達は再び地下の大広間に集合していた
シトリー眷属もグレモリー眷属も本日は学校を休まないといけない
「オーディンの爺さんからのプレゼントだとよ。――――ミョルニルのレプリカだ。ったく、クソジジイ、マジでこれを隠してやがった。しかしミドガルズオルムの野郎、よくこんな細かい事まで知ってたな」
アザゼルが不機嫌極まりない様子で呟きながら現れた
アザゼル、タンニーン、一誠、ヴァーリ、匙は昨日ミドガルズオルムと言う五大龍王の１匹からロキとフェンリルの対策情報を聞きに行っていた
ミドガルズオルムは元来、ロキが作り出したドラゴンで強大な力を持っているが、巨体と怠け癖から使い道が見出だせず、普段は海で眠るように促されているらしい

ミドガルズオルム曰く、ダディことロキは雷神トールの持つミョルニルを撃てばなんとかなり、ワンワンことフェンリルは魔法の鎖グレイプニルで捕らえられるらしい
更にそれを強化するダークエルフの住む場所も教えてくれた
新はアザゼルから簡潔な説明を受け、ミョルニルとやらのレプリカを指でつつく
「これが伝説の武器のレプリカかぁ？なんか日用大工で使うハンマーにしか見えねぇんだが……」
「ミョルニルは北欧の雷神トールが持つ伝説の武器だ。こいつはそのレプリカ、こんな見てくれでも神の雷が宿っているのさ」
「はい、オーディンさまはこのミョルニルのレプリカを竜崎新さんにお貸しするそうです。どうぞ」
新は「俺？」と自分を指差し、ロスヴァイセからミョルニルのレプリカを受け取る
「んで、これどうすりゃ良いんだ？」
「オーラを流してみてください」
ロスヴァイセに言われて、新は魔力をミョルニルに流していく
すると、ハンマー頭の部分がどんどん大きくなっていく
両手で振り回すのに最適なサイズになったが――――
「重っ！これ重っ！」

「レプリカって言ってもかなり本物に近い力を持っている。本来神にしか使えないんだが、バラキエルの協力でこいつの仕様を悪魔でも扱えるよう一時的に変更した。無闇に振り回すなよ？高エネルギーの雷でこの辺一帯が消え去るぞ」
「マジっスか！うわー、怖い！」
一誠はアザゼルの言葉を聞いて戦慄する
すると、新のスマホから着信音が発生し、ハンマーを置いてから手に取ると、昨日電話した八代渉からの着信があった
「もしもし」
『あ、新さん。おはようございます』
「おー、渉か」
『どうも。今から参りますので、少し待っててください』
「今からって、どうやってここに来る――――」
ブゥゥゥゥンッ
話してる途中で空間がブレ、龍の紋様が描かれた扉が新達の眼前に現れる
扉が開かれると、携帯電話を持った八代渉他、純白の髪を持つ渉の仲間、高峰祐希那（たかみねゆきな）と見知らぬ女性が３人ヒョコッと出てきた
「こうやって来ました」

「どうやって来たんだ!?」
その場にいる誰もが驚き、アザゼルは怪訝そうな目で渉達を見た
「新、こいつら知り合いか?」
「あぁ、俺の『闇皇(やみおう)の鎧』と対を成す『光帝(こうてい)の鎧』を宿した八代渉(やしろわたる)。闇人(やみびと)と人間のハーフで俺達の仲間だ。にしても、後ろにいる女達は誰だ?俺好みの女ばっかりじゃん」
渉の後ろにいるのは藍色のストレートヘアーに金色の瞳、更に頭部に犬みたいな耳を生やした女性
翡翠色のサイドテールに藍色の瞳を持つお姫様
紫色のショートヘアーで軍服を着た小柄な女の子がいた
しかも、3人とも――――胸が大きかった
「おおっ!おっぱいデカいギャブァッ!」
一誠が欲望に逆らわず本音を吐こうとした瞬間、祐希那の鉄拳制裁が下され侮蔑の視線を向けられる
「エロい目をするな!この変態ゴキブリ!」
「渉の言ってた通りね。来て早々エロい目で見られたわ」
「まったく、妾(わらわ)を不潔な目で見ようなど万死に値するのだ!この汚らわしい愚民風情が!」

「小生は幻滅したであります。特に赤龍帝の力を宿す者にはガッカリであります。龍の力を宿す者はいつでも雄々しさがありましたが、その男からは全く感じられないであります」

一誠は殴られた上、ボロクソに罵られて床に突っ伏しながら泣いた

渉は４人を落ち着かせる

「落ち着いてよ、祐希那、フェリス、アリス、ロコ。一誠さんは確かにスケベでホモだけれども――――」

「だから俺はホモじゃねぇぇぇぇぇぇっ！うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」

渉に追い討ちをかけられた一誠は床を叩きまくって泣く

話が進まないので新が訊く事に

「渉、まず紹介してくれ。その女達は誰だ？」

「僕の仲間で、彼女達は特異な魔族の生き残りなんだ。『人狼族』のフェリスに『人魚族』のアクエリアス、そして『鉄人族』のロコ。ほら、皆も自己紹介して」

渉に言われて、まず藍色ストレートヘアーの女性が言う

「『人狼族』の生き残り、フェリスよ。よろしく」

次に翡翠色サイドテールのお姫様が胸に手を当てて言う

「妾は『人魚族』の生き残り、名をアクエリアス。渉からはアリスと呼ばれておるのだ。

精々妾を敬うが良い」

最後に紫色のショートヘアー娘が敬礼しながら話す

「小生は『鉄人族』のロコであります。本日は作戦会議に参加したく参上しましたであります」

「一応私も言っておくわ。高峰祐希那(たかみねゆきな)よ。よろしくね」

全員の自己紹介が終わり、新は渉に素朴な疑問をぶつけた

「渉、そのドアはいったい何だ?どうやってここに来たのか教えてくれや」

「そうですね。簡単に説明しますと、僕達は飛竜(ひりゅう)ワイバーンの扉を使ってここに来ました」

『ワイバーン?』

聞き慣れない単語に首を傾げた面々をよそに、渉は説明を続ける

「ワイバーンは『初代キング』が昔に使っていた魔物の1匹で、闇人(やみびと)が作った人工的な飛竜なんです。『初代キング』が封印された事で機能停止していたのですが、今は僕達の住居兼移動手段となっています。更にこのワイバーンの部屋には擬態や空間魔術が施されていて、普段は別の建物に化けたり、自分達が行きたい場所を告げる事で空間を繋いで自由に行き来出来るのです。昨日、新さんから場所を聞いたのはワイバーンの扉をここに繋げるためだったんですよ」

「か～、便利な魔物だこと。どこ○もドア付きか」
　新は質問を続けようとするが、アザゼルが割り込んできた
「渉と言ったか？お前さん、新と同じ様に『光帝の鎧』を宿してるそうだな。チョイと見せてくれねぇか？」
「ええ、良いですよ」
「ちょっと渉！何でもかんでもホイホイ言う事を聞かないで！」
「祐希那、新さん達は僕達の仲間みたいなものなんだよ？ただ名前を言うだけじゃ戦力になるかどうか分かってもらえないじゃないか。それに、僕達の力を見せる事も必要だと思うよ」
「は～、渉ってホントお人好しよね」
「まぁ、そこが渉の良いところでもあるのだが……」
「小生もそう思うであります」
　祐希那、フェリス、アリス、ロコの４人が苦笑する
　渉は早速、『光帝の鎧』を身に纏って赤い眼光を輝かせる光帝の蝙蝠となった
「へぇ～、これが闇皇の蝙蝠と対を成す『光帝の鎧』か。初めて見たよ。いつか戦ってみたいものだ」
　ヴァーリが興味津々に見ながら楽しげに言う

涉は恐縮ですと頭を掻き、祐希那達の方を向く
「せっかくだからフェリス達の力も見せてあげようよ」
「ん～、涉がそう言うなら。よっ」
フェリスの体が青い光を放ちながら一振りの剣へと姿が変わり、その光景を見た全員が驚きを隠せなかった
「あれ？その剣、この前見た魔剣じゃねぇか！今の女が剣の正体か!?」
「うん。魔狼剣(まろうけん)フェンリオスはフェリスでもある。人狼族は主となる者と契約を交わす事で、その人の武器に姿を変えられる珍しい魔族なんだ。アリスとロコも同じだよ？2人とも頼めるかな？」
「うむ、涉がそう言うなら良いぞ」
「小生も賛成であります」
アリスが緑色に、ロコが紫色に輝きながら武器に姿を変える
涉は鎧の口でフェンリオスを咥え、2丁拳銃に姿を変えたアリスと巨大な拳を象(かたど)ったハンマーに変わったロコを持つ
「魔海銃(まかいじゅう)アリエスと魔鉄槌(まてつつい)ロンド。以上が僕の主力武器だよ」
「へー、スゲーな。で、契約って何をしたんだ？」
ドキッ！

契約と言う単語を聞いた祐希那、元の姿に戻ったフェリス、アリス、ロコは気まずそうに目線を逸らした
「ん？どうした？なんで黙ってんだ？」
「えっと確か……契約と言うのはお互いの体を――――――」
『わぁぁぁぁぁぁぁっ！』
渉は何か言おうとしたが、慌てた４人の女性に口を塞がれた
新はその様子を見てまさかと思い……核心を突いてみた
「もしかして……セッ○スか？」
「デカい声で言うなーッ！」
答えを隠蔽するかの様に祐希那が叫び、残った３人が顔を赤く染める
どうやら新の予想は的中したようだ……
「バ、バカな……！また俺より先に童貞ををををををををををを……！」
「そそそそそ、そんなななななな……！おおおおおお俺なんか、乳房すら見た事が無いのにににににににに……！」
「やべぇ！一誠と匙が現実を受け切れずに壊れかけている！」
一誠と匙は全身を痙攣させて後頭部から床に倒れた

『初代キング』の甘言

「北欧の術式はそこそこ覚えた。ロキの攻撃にいくらか対抗出来る筈だ」
「短期間で凄いですね。白龍皇(はくりゅうこう)さん」
一誠宅最上階のＶＩＰルーム
新、一誠、ヴァーリ、渉はロキ戦に向けてトレーニングしていた
因みに匙はヴリトラの神器(セイクリッド・ギア)関連でアザゼルにグリゴリの研究施設に連れて行かれた――――と言うか、拉致られたらしい
ヴァーリは手に持っていた本を読んで北欧の魔術を覚え、渉はシャドーで格闘技を行(おこな)っている
空を切る音が鳴り続ける中、新と一誠は精神統一の座禅を組んでいた
「しかし、悪神とはいえ『神』と戦う事になるとはな」
「よく覚えておくと良い。良い神もいれば、悪い神もいる。ま、良い神ってのも物の見方を変えれば、邪(よこしま)に見えてしまう事もあるが……」
「なんでこう平和を嫌う奴がいるんだろうな？普通に暮らしてセッ○ス出来てれば良いってのによ」

涉もそうですよねと返事すると、ヴァーリが本を閉じて言った
「キミ達にとっての平和が、苦痛と感じてしまう者もいると言う事だ」
平和が苦痛……人と立場によってそう感じる者は少なからずいる
ヴァーリもその内の1人だろう
「ヴァーリさんも今の世界は嫌ですか？」
「退屈なだけだ。だから、今回の共同戦線は楽しくて仕方がない」
「嫌になるよな。強い奴がわんさかいるんだからさ」
「世界はいつだって平等に事を作らない。強い弱いがあるから世界なんだろうよ……」
「闇皇（やみおう）の言う通り。だからこそ世界は面白いんだ。俺は誰よりも強くなる」
ヴァーリの夢は”最強”と言う頂（いただき）1点のみの様だ
「俺は――――最強の『兵士（ポーン）』になって、上級悪魔になれれば良いや。俺だけのハーレムを作るんだ」
「俺も上級悪魔ぐらいだな。最上級になっちまったら色々と面倒だし」
「ハハハ、キミ達らしい答えだな」
「そうですね。純血の闇人（やみびと）もそんな夢を持てれば幸せになれると思うのですが……」
涉の沈んだ表情に新はある質問を投げつける
「涉。これはあくまで俺の推測だが、あの3人の種族は――――」

「……はい。人狼族、人魚族、鉄人族は闇人(やみびと)の『初代キング』に絶滅させられてしまったんです。運良く生き残った彼女達は路頭に迷い、僕と出会ったんです。僕の中に眠る血を持った魔族の長(おさ)が彼女達から、この汚れた血を持つ闇人(やみびと)が祐希那から――――主や仲間を奪ったんです。だから、僕は悲しみの連鎖を止めたい。これ以上祐希那達も、冥界も天界も人間界も……悲しみや絶望に沈ませたくないんです。父さんの意志を継いで、闇人(やみびと)を変えてあげたい……！父さんが間違ってなかった事を証明したいんです！

闇人(やみびと)にも平和を望む者がいると！」

「光帝(こうてい)の蝙蝠。それがキミの目標なのかい？」

「……いけませんか？」

怪訝そうに訊く渉に、ヴァーリは首を振った

「良いんじゃないかな？もっとも、それを実現するにはキミ自身が心身共に強くならないといけないが」

「分かっています。僕は闇人(やみびと)を変える為に戦っている。父さんの夢を守るために……あ、ごめんなさい。しんみりさせちゃいましたか？」

「いや、俺だってお前の親父さんの願いを叶えてやりたいよ。協力するぜ」

「俺もだ。それに、もう1個目標がある。ヴァーリや新を必ず超える」

「ハハッ！デカく出やがったな一誠！良いぜ？いつかガチで戦ってみようじゃねぇか」

新は鼻を指で擦り、ヴァーリは嬉しそうな笑顔で言う
「ああ、俺のところまで来たら良い。キミが強くなる度に俺は嬉しいよ。才能が無くて、弱い赤龍帝だと失望した時期もあったが、キミは今までの赤龍帝とは違う成長をしてきている。ドライグと対話しながら、赤龍帝の力を使いこなそうとする者はおそらく初めてだろう」
「本当かドライグ？」
『その通りだ。お前は歴代の中で1番俺と対話する宿主だ。俺の力に溺れず、過信せず、赤龍帝の力を使いこなそうとしている』
ドライグの言葉にヴァーリが続いた
「ただ思うがままに強力且つ凶悪な力を振るう宿主ばかりだった。最終的にドライグの力に溺れ、戦いで散っていった」
『お前は歴代で1番才能の無い赤龍帝だ。パワーも何もかも弱い。――――だが』
「歴代で1番力の使い方を覚えようとしている赤龍帝だ」
ドライグとヴァーリにそう言われた一誠は少し照れた
新も称賛の意味で一誠の肩を叩く
「うむうむ。いいのぅ。青春だのぉ」
「オーディンのジイサン。いつの間に」

突然現れたオーディンは感心している様子だった

「今回の赤白は個性的じゃい。昔はみーんなただの暴れん坊でな。各地で大暴れして、勝手に赤白対決なんぞして周囲の風景を全部吹っ飛ばしながら、死におった。『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』も好き勝手に発動しおってな。山やら島やらいくつ消えたかの。闇人（やみびと）の『初代キング』も同様じゃ。自分が最強だと誇示して数多くの魔族を滅ぼそうとしおった。滅ぼすだけではなーんにも変わらぬと言うのにのぉ。その反面、闇皇（やみおう）の小僧と光帝（こうてい）の小僧も赤白と同じく個性的じゃ」

「光帝（こうてい）の小僧って、僕の事ですか？」

「お前しかいないだろ」

新がペチッと渉の頭を叩き、オーディンの後ろに付いてきていたロスヴァイセも言う

「確かに片方は卑猥なドラゴンで、片方はテロリストと言う危険極（せきりゅうてい）まりない組み合わせ（はくりゅうこう）ですけど、意外に冷静ですね。出会ったら即対決が赤龍帝と白龍皇だと思っていました」

「卑猥だってよ～、一誠」

「うっせー。新なんか俺よりエロいじゃねぇか」

「そうだったな」

ハハハと笑い合う2人

すると、オーディンがヴァーリと渉にいやらしい目付きをしながらある事を訊く
「ところで、白龍皇と光帝。お主らは……どこが好きじゃ？」
「何の事だ？」
「何ですか？」
首を傾げながら聞き返すヴァーリと渉
オーディンはロスヴァイセの胸、尻、太ももを指差していく
「女の体の好きな部分じゃよ。こっちの赤龍帝は乳が好きで、闇皇は女の裸体その物を愛でておる。お主らもそういうのがあるんじゃないかと思うてな」
「心外だ。俺はおっぱいドラゴンなどではない」
「おっぱいドラゴン……って、何ですか？」
ヴァーリは心底心外そうな表情を浮かべ、渉はおっぱいドラゴンの名に再び首を傾げた
「まあまあ、お主らも男じゃ。女の体で好きな部分ぐらいあるじゃろう」
「……あまり、そういうものに感心が無いのでね。強いて言うならヒップか。腰からヒップにかけてのラインは女性を表す象徴的なところだと思うが」
「僕は……太ももでしょうか。いつも祐希那達にしてもらってる膝枕は、とても寝心地が良いので」

「……なるほどのぉ。ケツ龍皇（りゅうこう）と太もも光帝（こうてい）じゃな」
『……ぬ、ぬおおおん……』
　オーディンがボソリと呟いた呼び名に、ヴァーリの神器（セイクリッド・ギア）に宿る白龍皇（はくりゅうこう）アルビオンが無念の涙を流している
「元気出してください。人生山有り谷有りですよ、ケツ龍皇（りゅうこう）さん」
『うあぁぁぁ

「もうやめてやれよ！二天龍のライフは０どころかマイナス超えてるって！」
　いつまで経っても終わらないおっぱいドラゴンネタに対して一誠はオーディンに、新は渉にツッコミを入れた

――――――――竜崎家

『……めろ……目覚めろ……の……よ』
「……ん？何処だここは……？ヤケにモヤモヤしてやがる……」
　新は自宅に戻っていつも通りに寝ていた筈なのだが、何故か意識だけは宇宙空間の様な場所にいた……
　何がどうなっているのかさっぱり分からないまま、新は”声”の正体を探る
「誰なんだ？勝手に人の意識を支配しやがって。姿を見せやがれ」
『クッハッハッハッハッハッハッ。その様に挑発的な口を開けるとは大した器量だ。お望み通り、不完全だが姿を見せてやろう』
　新の眼前に黒いモヤが集合し、それが骸骨の様なドラゴンの頭部の様な形となって現れた
「……？何なんだてめぇは？ドライグやアルビオンみたいな魂か？」

『余を汚ならしいドラゴン共と一緒にするな。余の名はバジュラ・バロム――――全てを統べる闇人の「初代キング」なり』
『初代キング』の名に新は目を見開いた
何故闇人の『初代キング』が自分の意識の中で話し掛けてきたのか……
そもそも、封印されている『初代キング』が何故目の前にいるのか理解出来ずにいた
『初代キング』ことバジュラ・バロムは気味悪く口の端を吊り上げながら笑う
『そう睨み付ける必要は無い。今の余は忌々しい封印のせいで肉体と魂の大部分は無いが、僅かな欠片となった魂が「闇皇の鎧」に残っているお陰で話が出来ておる。本来なら貴様を噛み砕きたいところだが……安心しろ。今の余は話しか出来ぬ』
「……俺に何の用だ？」
『なぁに、余の鎧を使用するゲスな輩がどんな顔をしているか見に来ただけだ。後は……この鎧の本来の力を教えといてやろうと思うてな』
新は目を細め、バジュラは口から黒いモヤを吐いて宙に漂わせた
吐き出された黒いモヤが幾つもの水晶に形を変え、新の周りを浮遊する
『「闇皇の鎧」は所有者の欲望の強弱により、殺した闇人から術を奪い使用する事が出来るのだ』
「殺した闇人から術を奪う!?オーフィスが言っていたのはこいつの事だったのか!?」

『オーフィスか、その名を聞くのは久しいな……。静寂を手にするなどと、くだらない幻想を掲げる老いぼれめ。欲望が存在する限り、静寂は誰の前にも現れはしない。哀れな奴だ』

　バジュラは吐き捨てるようにオーフィスを罵り、先程の話題に戻す

『闇は全てを喰らい飲み込む欲望の象徴。名の通りに殺した者の術なども己に取り込む』

「殺した闇人(やみびと)から奪った術ってのは？」

『なんだ？興味があるのか？いいだろう。よく聞くが良い。貴様も欲深い者よのう……余から力の正体を訊くとは』

「てめぇの鎧も奪われて、今は俺の所有物になってんだ。どう使おうが俺の勝手だろ」

　バジュラは新の言葉を聞いて高らかに笑う

『クッハッハッハッハッハッハッハッ！余の鎧を無断で使っておきながら己の我が儘、欲望に従うか！訊こう。貴様の欲望は何だ？』

「欲望？欲望っつったら、セッ○スだよ。良い女の乳房(おっぱい)や尻を揉みまくって、堕としてセッ○スしまくる。それが俺の今望む欲望だ」

『性交か。では何故冥界、天界、人間界を支配せぬ？世を己の物にすれば女など飽きる程抱けると言うのに、何故実行しない？』

「バーカ。悲しい顔した女を抱いたってお互い満たされねぇだろうが。んなもん嬉しくねぇだろ」
『クッハッハッハッハッハッハッ！』
バジュラはさっきよりも大きく高笑いした
新はよく笑う『初代キング』だなと嘆息する
バジュラは新に顔を近付け、ニヤケを見せながら言う
『貴様のような輩は初めて見たぞ。破壊欲、殺戮欲、支配欲に捕らわれず性欲を振りかざすとは……まぁ良いだろう。話を戻してやる。現時点で貴様が使用出来る闇人（やみびと）の術は「霊魂復活（ソウル・リバイヴ）」のみだ』
「『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』って……村上が使っていた術か!?お前ら闇人（やみびと）は全員、個人特有のスキルを持ち合わせてんのか!?」
『ククク。持つ者もいれば持たざる者もいる。運良く貴様は魂と肉体を甦らせる術を手に入れた――――と言う訳だ。良かったじゃないか』
「な、何がだよ？」
『その「霊魂復活（ソウル・リバイヴ）」を使えば、貴様が抱いた女の母を復活させられるぞ？あの娘は母が恋しい様だなぁ？ならば、倫理に背いて貴様が復活させてやれ』
新はバジュラの提案に再び目を見開く

確かに『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』を使えば朱乃の母――――朱璃(しゅり)を復活させられるかもしれないが、そんな事をして本人は喜ぶのだろうか……

死者の魂を勝手に使うような真似をして良いのか……

そして何より、『初代キング』の提案に裏があるんじゃないかと様々な疑問が新の頭を巡回する

「……何が狙いだ？」

『クククッ。使う事に恐れているのか？何も怖がる事は無い。貴様は必ず「霊魂復活(ソウル・リバイヴ)」を使ってくれるだろう。予言してやる』

「それは俺達にとって良い意味か？それとも悪い意味なのかどっちだ？」

『クククッ、さあな……。余は楽しみにしているぞ？』

バサッ……

深夜、新は目を覚まして体を起こす

先程まで『初代キング』を名乗る怪物に『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』を使って朱乃の母を甦らせろと言う話を持ちかけられた

新も出来るならそうしてやりたいと思うが、『初代キング』の提案を簡単に受ける訳にはいかないと葛藤する
「……？朱乃……？」
新は朱乃が部屋にいない事に気付いた
リアス、堕天使３人組、ゼノヴィア、小猫はスヤスヤと寝ているが……朱乃だけ見当たらない
不審に思った新は部屋を出て朱乃を探しに１階へ降りる
リビングのソファーに座る朱乃を視界に捉え近づいていく
「……新さん」
「朱乃、どうかしたのか？ボーッとしちまってる様だけど――――ッ」
言い切る前に新は朱乃に押し倒され、朱乃は身に付けてる白装束を脱ぎ捨てた
そして耳元で呟く
「――――抱いて」
新は一瞬固まり、朱乃が目線を合わせる
だが、新には朱乃が自暴自棄に陥ってる様に見えた
虚ろな表情でキスしようとしてくる朱乃の肩に手を置き制止する
「……どうして？私の体は魅力ない……？」

「んな事ねぇよ。朱乃の体は乳房(おっぱい)も尻も、どこも気持ち良い。毎日触っても飽きないぐらいだ。でもよ……今のお前を、そんな悲しげな顔をしている朱乃を抱く事は出来ねぇ。今のお前はただヤケクソになって抱かれようとしてるだけだ」

「――――っ」

新の言葉に朱乃は一瞬正気を取り戻した

新は真剣な目付きで朱乃を見ながら言い聞かせる

「お前は俺に触れられる時、いつも笑顔だったよな。俺は朱乃の笑顔を見る度に温かな気持ちになれた。けどよ、今のお前を抱いたところで誰が幸せになる？お互いに傷付くだけだ。自分を安っぽく売りつけてんじゃねぇ。お前は――――俺が初めて自分から好きになった女なんだよ」

一筋の涙が彼女の頬を伝い、新は朱乃を優しく抱き締めた

「いつもの朱乃に戻ってくれ。お前が安心するまで側にいてやる。だから……」

「……ぐすっ、新さぁん……ゴメンなさい……！ゴメンなさい……！ひぐぅ……うぅっ……」

抱くこと2時間、朱乃はようやく落ち着きを取り戻し、新の隣に座っている

「新さんも、眠れなかったのですか……？」

「……まあな。チョイと信じられない奴から信じられない提案を渡されちまってな」

「誰……ですか？」
「……闇人（やみびと）の『初代キング』だ」
朱乃は信じられない様な顔になった
今『初代キング』は封印されているのだから、聞いたら誰もが驚く事態であろう
新は事実だと前置きをしてから話を続けた
「ついさっき夢……と言うか、意識の中で話されたんだ。この鎧の中に奴の魂の欠片が残っていたらしく……今はこういう形でしか話せないだと」
「それで何を言われたんですか……？」
朱乃の問いに新は一瞬躊躇（ためら）ったが、伝えなければならないかもしれないと感じ、話す事を決意した
「朱乃、お前の母親――――姫島朱璃を、村上から奪った『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』で復活させろと……」
「――――ッ！母さまを……母さまを甦らせる事が出来るの……？」
朱乃の瞳から涙が流れ出る
新は更に話を続けた
「出来るかもしれねぇんだ。ただ……『初代キング』が何のためにそんな事を言ったのか分からねぇ……。それに、こんなおぞましい闇の力で死者を甦らせて……朱乃やバラキ

エルさんは本当に喜ぶのだろうかと、怖くなっちまったんだ……。そりゃ子供なら誰だって母親に会いたいと思うし、生き返らせる事が出来るんだったら速攻でそうしてやりたい。でもよ……本人の意思を無視してまで、邪道な手段で甦らせて、何のためになるんだって……そんな事を思い始めたら、どんどん分かんなくなってきちまったんだ……！俺のこの力は、皆を幸せにするものなのか……不幸にしちまうものなのかって……！頭ん中がグチャグチャに……！」

頭を押さえながら前のめりになる新

出来るなら朱乃の母を甦らせてやりたい……しかし、邪道に堕ちてまで誰かを甦らせる事は間違っていないのか……

交差する思いに苦しむ新を、朱乃はさっきの自分にしてくれた様に優しく抱き締める

「無理をなさらずに……新さん。私も出来るなら母さまに会いたい……でも、その力を使って……もし新さんまで失う事になってしまったら……私だけじゃなく、リアスやイッセーくん、皆が悲しみを背負ってしまいます……。自分を保って……」

「朱乃ぉ……。すまねぇ、お前を慰めたのに……今度は逆に慰められちまった……！」

新は感謝の意を込めて強く抱き締める

朱乃もそれに応え、ギュッと力を入れた

「ねぇ……新。今夜は手を繋いで寝て良い？」

「あぁ、実は俺もそうしたかったんだ」

２人は互いに手を繋いで寝室に戻り、翌朝起きるまで握った手を離さなかった……

決戦開始！ＶＳロキ

「おっぱいメイド喫茶希望です！」
「却下」
一誠が出した意見はリアスに見事却下される
この日の部活動は学園祭で催す予定の出し物についてだった
なかなか決まらず、新はイベントなどの催しを考えるのは若干苦手なので、壁にだらしなく凭(もた)れている
部室の隅でお茶を飲んで会議を静観していたアザゼルが、外の夕暮れを見てボソリと呟く
「……黄昏か」
それを聞いた皆は真剣な面持ちになった
部活終了のチャイムが学園中に鳴り響く
「神々の黄昏(ラグナロク)にはまだ早い。――――――お前ら、気張っていくぞ」
『はい！』
「おう！」

アザゼルの言葉に新達は気合いを入れ、決戦の時を迎える

決戦の時刻となった夜
グレモリー眷属はオーディンと日本の神々が会談すると言う都内のとある高級ホテルの屋上にいた
周囲のビルの屋上にはシトリー眷属が各々配置についているが、匙だけはまだ来ていなかった
グリゴリの研究施設で特訓をしているらしい
アザゼルは会談での仲介役のため、オーディンの側におり、その代わりにバラキエルが新達と同じく屋上で待機
ロスヴァイセも既に鎧姿でいる
上空にはタンニーンとワイバーンに乗った渉達が、普通の人間に視認されない術を施して待機中
ヴァーリ達は少し離れた所で待っている
作戦はロキを二天龍とミョルニルを使える新で相対し、フェンリルはグレモリー眷属

とヴァーリチーム、渉チームでグレイプニルの鎖を使って動きを止めてから撃破する
１番の決め手であるミョルニルを撃ち込めば倒せる
新は腰にロキ対策必須の武器をぶら下げていた
「――――時間ね」
リアスが腕時計を見ながら呟く
会談がスタートし、後はロキが来るのを待つのみとなった
「小細工なしか。恐れ入る」
ヴァーリが苦笑した直後、ホテル上空の空間が歪んで大きな穴が開いていく
歪みから姿を現したのは―悪神ロキとフェンリル
真正面から、しかも堂々と出てきた
「目標確認。作戦開始」
バラキエルが通信機を通してそう言うと、巨大な結界魔方陣が展開される
ロキは不敵に笑み、抵抗を見せないでいる
やがて、新達は光に包まれ――――目を開けると、そこは岩肌ばかりの広大な土地だった
戦場となる場所は古い採石場跡地で、現在は使われていない
前方にロキとフェンリルを確認したところで、新は闇皇（やみおう）に変異

一誠は禁手（バランス・ブレイカー）のカウントを始めた

「逃げないのね」

リアスが皮肉げに言うとロキは笑う

「逃げる必要は無い。どうせ抵抗してくるのだろうから、ここで始末した上であのホテルに戻れば良いだけだ。遅いか早いかの違いでしかない。会談をしてもしなくてもオーディンには退場していただく」

「貴殿は危険な考えにとらわれているな」

「危険な考え方を持ったのはそちらが先だ。各神話の協力などと……。元はと言えば、聖書に記されている三大勢力が手を取り合った事から、全てが歪み出したのだ」

「話し合いは不毛か」

バラキエルが手に雷光を纏わせ、１０枚もの黒き翼が展開していく

『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ） Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） Ｂａｌａｎｃｅ（バランス） Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!』

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ（バニシング） Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） Ｂａｌａｎｃｅ（バランス） Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!!』

一誠は赤龍帝（せきりゅうてい）の力、ヴァーリは白龍皇（はくりゅうこう）の力を具現化した全身鎧（プレート・アーマー）を装着

二天龍と闇皇（やみおう）が同時にロキの前に出ると、ロキが歓喜した

「これは素晴らしい！二天龍と闇皇（やみおう）がこのロキを倒すべく共同すると言うのか！こんなに胸が高鳴る事はないぞッ！」

「ほざいてろ、すぐに墓場に輸送してやる。『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』！『騎士（ナイト）』！」
新は闇皇（やみおう）から『騎士（ナイト）』形態――――『闇皇（アーク・カイザー）の神速槍騎士（ジェットスピア・ナイト）』に形態変化して神速移動を開始
ヴァーリも光の軌道をジグザグに生みながら高速でロキとの距離を詰めていき、一誠も負けじと背中のブーストを噴かす
「赤と白に闇皇（やみおう）の競演ッ！こんな戦いが出来るのはおそらく我が初めてだろうッ！」
ロキは喜びながら魔方陣を展開し、魔術の光を幾重にも放出した
新は神速の槍で貫き、ヴァーリは飛び回って全攻撃を回避
一誠は攻撃をものともせず詰め寄る
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

攻撃が止んだ後、ロキがいた場所には底の見えない穴が開いていた
「あっぶねぇぇぇっ！この威力が初手かよ！一撃が半端ねぇ……」
「ふはははは！」
高笑いが聞こえてきた方向を向くと、ローブのみがボロボロになったロキが宙に浮いていた
「ヨ○スケ参上ッ！」
「ぬぅっ!?」
ザシュッ！
縦横無尽に神速移動していた新が、赤い魔力を注いだ槍でロキの死角から背中に傷を付けた
傷を付けたと言っても、精々5センチ程度で大きなダメージには至らない
「ふむ、二天龍も危険だが……やはり闇皇(やみおう)である君が1番危険な様だな」
「そりゃどうも。今のは挨拶みたいなもんだ。今度は腹を貫いてやる」
「新！例の秘密兵器は!?」
「おっ、そうだそうだ。すっかり忘れてたぜ」
新は腰に付けていたミョルニルを持ち、魔力を送って闇皇槍(やみおうそう)と同じサイズにする
ロキはミョルニルを見て目元をひくつかせた

「……ミョルニルか。レプリカか？それにしても危険な物を手にしている。オーディンめ、それ程までに会談を成功させたいか……ッ！」
「さ～て、神をも倒せる雷（いかずち）ってヤツを試してやるか！」
背中のジェットを噴射してロキに向かい、ミョルニルを振り下ろした
ドオオオオオオンッ！
ミョルニルの一撃はロキに避けられ、地面に巨大なクレーターを作っただけだった
「……っ？何だ？雷出ねぇじゃん。おっかしいな……ウンともスンとも言わねぇ」
「ふははは。残念だ。その槌（つち）は力強く、そして純粋な心の持ち主にしか扱えない。貴殿には邪（よこしま）な心があるのだろう。だから、雷が生まれないのだ。本来ならば重さすらも無く、羽のように軽いと聞くぞ？」
「マジで……？俺、心当たりがあり過ぎるわ……あいたたたた～」
純粋な心――――つまり、この場にいる3人にミョルニルは使えないと言う事らしい……
「そろそろ、こちらも本格的な攻撃に移ろうかッ！行け！我が僕（しもべ）フェンリルよ！」
ロキがフェンリルに指示を出した瞬間、リアスが手を挙げた
「にゃん♪」
黒歌（くろか）が周囲に魔方陣を展開し、巨大且つ太い魔法の鎖グレイプニルが出現

それを新、一誠、ヴァーリ以外の仲間達が掴み、フェンリルの方へ投げつける
ダークエルフによって強化された鎖はフェンリルに巻き付いていき、対象物を捕獲した
「景気付けだよ！祐希那！フェンリルを動けなくなる程に凍らせて！アリスはそのサポートを！」
「心得たのだ！水流よ！」
「任せて！『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』ッ！」
ドバシャアアアアアッ！
パキィィィィィンッ！
アリスの両手から放たれた水流がフェンリルと周囲を濡らし、祐希那の神器（セイクリッド・ギア）が水と共に捕縛されたフェンリルを凍結させる
神をも殺す狼は巨大な氷の造形物と化した
「――――フェンリル、捕縛完了」
バラキエルがそう言い、新はミョルニルをロキに向ける
「へっ、フェンリルは封じたぜ？後はお前だけだな、ロキ」
「仕方無い。スペックは劣るが――――出てこい！スコルッ！ハティッ！」
ロキが両腕を広げて叫ぶと、２つの歪みが生じて灰色の獣が２匹出てきた

オオオオオオオオオオンッ！
オオオオオオオオオオンッ！
「何だと!?フェンリル・ツインズ!?」
２匹の新たなフェンリルにヴァーリ以外の全員が驚きの顔となった
「ヤルンヴィドに住まう巨人族の女を狼に変えて、フェンリルと交わらせた。その結果生まれたのがこの２匹だ。親よりも多少スペックは劣るが、牙は健在だ。充分に神、そして貴様らを葬れるだろう」
「畜生！聞いてねぇよ！ミドガルズオルムもそんな事は言ってなかったぞ!?」
「一誠！文句言ったところでどうにもならねぇよ！」
「さあ、スコルとハティよ！父を捕らえたのはあの者達だ！その牙と爪で喰らい千切るが良いっ！」
ロキが２匹の子フェンリルに指示を出した
１匹はヴァーリチームの方へ、もう１匹はグレモリー眷属の方へ向かっていく
「祐希那！アリス！そっちは任せたよ！フェリス！ロコ！あのフェンリルを止めに行こう！」
「オッケー！」
「了解であります！」

ワイバーンから降りた渉は『光帝の鎧』を纏って光帝と化し、フェリス、ロコは魔狼剣フェンリオスと魔鉄槌ロンドとなって渉の腕に装備された

1匹の子フェンリルが牙を向けて噛み付こうとするが、渉の魔鉄槌がそれを阻止する

「おぉい!?子フェンリルの牙を真っ正面から受けたぞ!平気なのか!?」

「心配は無用です。魔鉄槌ロンドは堅牢さなら、どんな武器や防具にも負けないんでッ!」

ズシャッ!

魔狼剣フェンリオスで子フェンリルの左目を切り裂き、上から振り下ろすように口を突き刺す

「せーのぉっ!」

ブゥンッ!

ドガアァァッ!

フルスイングされた魔鉄槌が子フェンリルの右頬を打ち砕き吹っ飛ばした

その拍子で子フェンリルの口から離れ、空中を回転しながら落ちてきた魔狼剣を渉はキャッチする

「す、すげぇ……!あの化け物と互角に渡り合ってる……!」

「やるじゃねぇか、渉。一誠!俺達も負けてらんねぇぞッ!」

「チッ。なら、ついでだ。こいつらの相手もしてもらおうか」
そう言ったロキの足元の影が広がり、影から体が細長いドラゴンが複数現れる
それを見たタンニーンが憎々しげに吐いた
「ミドガルズオルムも量産していたかッ！」
「マジかよ！しかも5体！」
量産型のミドガルズオルムが一斉に炎を吐くが、タンニーンの火炎で全て吹き飛ばされる
ヴァーリチームとグレモリー眷属も子フェンリル達と死闘を演じていた
バラキエルが極大の雷光を天から子フェンリルに落とすが、灰色の狼はダメージを受けても平気な様子で攻撃を再開
一方で黒歌がもう1匹の子フェンリルの足元をぬかるみに変えて動きを封じ、美猴の如意棒とアーサーの聖王剣、渉の魔狼剣と魔鉄槌のコンビネーションで押していた
そんな時だった……
「きゃあっ！」
「うぐっ！」
「祐希那！アリス！」
量産ミドガルズオルムの1匹が祐希那とアリスを吹き飛ばし、親フェンリルを捕らえ

ている氷と鎖を破壊していく
「マズイ！ここはお願いします！ワイバーン！」
グオォォォォォンッ！
渉の呼び掛けに応えたワイバーンが祐希那とアリスを掴んで救出
解放された親フェンリルは周りを見渡し獲物を探す
そして風を切りながら移動し――――――
バグンッ！
「ぐはっ！」
フェンリルの牙が白銀の鎧ごとヴァーリの体を貫いた
「ふはははははっ！まずは白龍皇（はくりゅうこう）を噛み砕いたぞ！」
「ヴァーリッ！畜生が！」
一誠がヴァーリを救出するべく突貫していくが、前足の爪で鎧を切り裂かれた
「ごふっ！痛えぇぇぇ……ッ！」
傷を押さえる一誠
新はすぐに向かいたかったが、ロキが放つ魔術攻撃のせいで救出に行けない
「ふはははは！赤龍帝（せきりゅうてい）の体も切り裂いたぞ！次は闇皇（やみおう）だ！」
「こんのクソ神があぁぁぁぁぁぁぁっ！」

怒りに震える新と支給されたフェニックスの涙を傷口にかける一誠
ヴァーリはフェンリルに噛まれたまま、新と一誠に話し掛ける
「……兵藤一誠、竜崎新……ロキと、その他はキミと美猴達に任せる。この親フェンリルは――――俺が確実に殺そう」
ヴァーリの言葉を耳にしたロキが笑う
「ふはははははっ！どうやってだ！既に瀕死ではないか！強がりは白龍皇の名を貶めてしまうのではないか？」
「――――天龍を、このヴァーリ・ルシファーを舐めるな」
ヴァーリがロキを睨むと同時に、鎧の各宝玉が七色に輝き始めた
「我、目覚めるは――――」
〈消し飛ぶよっ！〉
〈消し飛ぶねっ！〉
「覇の理に全てを奪われし、二天龍なり――――」
〈夢が終わるっ！〉
〈幻が始まるっ！〉
「無限を妬み、夢幻を想う――――」
〈全部だっ！〉

〈そう、全てを捧げろっ！〉

「我、白き龍の覇道を極め――――」

「「「「「「「「「「汝(なんじ)を無垢の極限へと誘おう――――――ッ！」」」」」」」」」」

ヴァーリは唱えた

二天龍により封じられし力を……!!!!!!

『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ(ジャガーノート ドライブ)!!!!!!!』

最強形態発現!?

「うわぁぁっ！眩しい！」
「これがヴァーリ、白龍皇（はくりゅうこう）の『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』か！体が麻痺しちまいそうだ！」
親フェンリルの口に捕らえられたヴァーリから大出力の光が溢れ、フェンリルの体躯ごと呑み込んでいく
「黒歌（くろか）！俺とフェンリルを予定のポイントに転送しろッ！」
光を放つヴァーリは黒歌（くろか）にそう叫ぶと、黒歌（くろか）は手をヴァーリに向けて指を動かす
すると、魔法の鎖グレイプニルがヴァーリの方に転移され、やがて巨大な光と化したヴァーリとフェンリルを魔力の帯らしきものが包み込み、夜の風景に溶け込むように消えていった
おそらく、何処か別の場所でフェンリルを倒すつもりなのだろう
「とりあえず、フェンリルはヴァーリが何とかしてくれるか。後はロキを――――」
「朱乃！」
突然聞こえたリアスの叫び声
振り向いてみると、子フェンリルの1匹が朱乃に噛み付こうとしていた

「一誠！ロキを頼む！あんのクソ犬がァッ！」
新は背中のジェットを最大級に噴かして子フェンリルに向かっていく
「隙ありだな！」
「やらせるかよっ！」
背後からロキが新を狙い撃とうとしたが、一誠はドラゴンショットで阻止する
回避したロキは一誠に魔術を撃ち放つ
「そうはさせん！」
「その通りです！」
ゴオオオンッ！
タンニーンの火炎とロスヴァイセの魔術がロキの魔術を打ち消す
その間に新は神速移動で距離を詰めるが、子フェンリルの牙は朱乃に襲い掛かる寸前だった
「朱乃オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
必死の叫び虚しく、無情にも子フェンリルの牙が朱乃に迫る……
ザシュッ！
肉に牙が突き刺さる音
子フェンリルの牙の餌食となったのは――――――朱乃を庇う形で背中から貫かれた

バラキエルだった
「ごふっ!」
口と傷口から大量の血がこぼれる
「……どうして?」
「……お前まで失くす訳にはいかない」
バラキエルの声に朱乃は何とも言えない表情となっていた
新は槍で子フェンリルの右目を刺し、腹に蹴りを入れて吹っ飛ばす
新はアーシアに回復のオーラを飛ばすよう指示を出し、アーシアから放たれた淡い光がバラキエルを包む
朱乃は酷く狼狽した
「……私は……私はっ!」
「……しっかりしろ、朱乃。まだ戦いは終わっていないのだぞ」
涙を流す朱乃を見て、新は悔しそうに歯を食い縛った
朱乃を守る、不幸にさせないと言っておきながら、また涙を流させてしまった自分が情けないと怒っているのだろう……
そんな時、あの”声”が頭の中に流れてくる
『クックックッ。力が足りない自分に腹を立てているのか?』

『……ッ！『初代キング』！てめぇ、こんな時に何の用だ！』

新は皆の集中を途切れさせないように頭の中で『初代キング』に会話する

『なぁに、そろそろ「霊魂復活（ソウル・リバイヴ）」を使わせてやろうと思うて出てきただけだ』

『ふざけんじゃねぇ！てめぇの言う事なんざ聞いてる暇はねぇんだよ！さっさと失せやがれ！』

『あの娘の本心を知りたくないのか？毛嫌いしている輩（やから）が瀕死になったのに狼狽しておる。本当に疎（うと）んでいるなら、捨て置く筈だ。クックックッ』

『それと「霊魂復活（ソウル・リバイヴ）」に何の関係があるってんだ……！』

『簡単だ。あの娘の母親をここに甦らせ、母親本人から父親の事を話させれば良い。実の母の言葉なら、娘も信じるであろう？』

『初代キング』の誘惑に新は首を振ろうにも振れなかった……が、『初代キング』は甘言を止めない

『貴様はあの娘を守りたいのだろう？それも立派な欲望の1つだ。ならば、欲望を満たせ』

『……おい。1つ聞かせろ。「霊魂復活（ソウル・リバイヴ）」を使ってお前や俺に何のメリットがある？』

『メリットか……。余の場合は封印されている残りの魂と同化、貴様は残った力を手に入れられる、と言ったところか？』

『残った力が手に入る……？本当なんだろうな……？』
『疑うなら使わなければ良い。ただ……その場合は確実にあの娘も仲間も殺られるぞ。それでも良いのか？』
嫌味ったらしく言う『初代キング』、しかし……今迷っていれば待っているのは死あるのみ
迫り来る最悪の事態を避けられるならと、新は決意を固めた
『……やってやろうじゃねぇか。この結果が何を生み出すか分からねぇが、俺は――――朱乃の本心を知りたい。それを知った上で守り通す！』
『クッハッハッハッハッハッハッ！それで良い！形は違うが、良い欲望を持った！存分に使え！』
『初代キング』の声が止み、新は全身から魔力を漂わせる
「……新、さん……？」
「朱乃、先に謝っておく。俺は今から――――倫理を踏み外す」
新が意識を集中させて目を閉じると、何かの風景が映し出される
『――――あんたがたどこさ。ひごさ、ひごどこさ』
小さな家の庭で、まりつきをしている女の子が見える
『朱乃、どこ？』

朱乃そっくりの女性が小さな子――――朱乃を呼ぶ
（あれが……朱乃の母親……）
『母さま！』
朱乃が母――――朱璃（しゅり）に勢い良く抱きついた
『母さま。父さまは今日のいつごろ帰ってくるの？』
『あら、朱乃。父さまと何処に行くの？』
『早く帰ってきたら、一緒にバスに乗って町へ買い物に行くの！』
〈寂しかった〉
朱乃の声が聞こえ、場面が変わる
バラキエルと小さな朱乃が風呂に入っていた
『父さまの羽、嫌いじゃないよ。黒いけど、つやつやで朱乃の髪の毛と一緒だもの！』
『そうか、ありがとう。朱乃』
〈いつも父さまがいてくれたら、良かったのに〉
再び聞こえてくる朱乃の声
再度場面が変わる
『ねえ、母さま。父さまは朱乃のこと好きかな？』
『ええ、もちろん』

微笑みながら朱乃の髪を優しくとかす母
〈たまにしか父さまに会えなかったから〉
そして、場面が急変する……
畳が大きく抉(えぐ)れた室内で、術者らしき者達が複数で小さな朱乃と母の朱璃を囲んでいた
（こいつらが朱乃の母親を……）
『その子を渡してもらおう。忌々しき邪悪な黒き天使の子なのだ』
『この子は渡しません！この子は大切な私の娘です！そして、あの人の大切で大事な娘！絶対に！絶対に渡しません！』
『……貴様も黒き天使に心を穢(けが)されてしまったようだ。致し方あるまい』
『母さまぁぁぁぁっ！』
次に映されたのは血まみれのバラキエル
術者を全て殺し、その身は鮮血に濡れていた
朱乃は息絶えた母親の体を揺らし、嗚咽(おえつ)を漏らしていた
『……朱璃……』
『触らないでっ！』
バラキエルが震える手で妻に触れようとするが、小さな朱乃が怒りをぶつける

『どうして！どうして母さまのところにいてくれなかったの!?ずっとずっと父さまを待っていたのに！今日だって、早く帰ってくるって言ったのに！ううん！今日はお休みだって言っていたのに！父さまがいたら、母さまは死ななかったのに！』

幼き娘にとって、母の死は何よりも痛い……

その痛みを無理矢理緩和させようと、幼い朱乃はバラキエルに怒りを露(あらわ)にする……

『あの人達が言ってた！父さまが黒い天使だから、悪いんだって！黒い天使は悪い人なんだって！私にも黒い翼があるから悪い子なんだって！父さまと私に黒い翼が無かったら、母さまは死ななかったのに！嫌い！嫌い！こんな黒い翼大嫌い！あなたも嫌い！皆嫌い！大嫌いっ！』

〈父さまが悪くない事ぐらい分かってた。けど――――。そう思わなければ、私の精神は保たなかった……。私は……弱いから……。寂しくて……ただ、3人で暮らしたくて……〉

新が手をゆっくり伸ばし光の球体を掴む

そこから”声”が流れてくる……

『朱乃に……朱乃に言葉を届けたい。あの人の事を伝えたい……』

新は決意を固め、意識を現実に戻した

手には意識の中で掴んだ光の球体が

「聞かせてやってくれ……あんたの声を朱乃に！バラキエルに！聞かせてやってくれェェェェェェッ！」

新は光の球体に魔力を流し込んでいく

この術は倫理を踏み外すかもしれない非道なもの

だが、新に迷いは無かった

どんなに蔑まれても、どんなに反対されても構わない……

ただ、本人の口から朱乃とバラキエルに聞かせてやりたい

その一心で新は叫んだ

「彷徨(さまよ)いし魂よ！今こそ姿を取り戻せ！現世(げんせ)に甦り、声を聞かせてくれ！

『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』ウウウウウウウウッ！」

天に向かって光の球体を翳(かざ)す新

やがて光は人の形を成していく……

そこにいる誰もが信じられない様な目を向けた

朱乃の母――――姫島朱璃(ひめじましゅり)がこの世に生を受けたのだから……

「う……ううん。……ここは……何処？どうして、私は生きてるの？それに……どうして裸？」

「……ッ！母……さま？母さま……!?」

「朱璃……朱璃なのか……!?ほ、本当に……」
朱乃とバラキエルが驚きながら涙を溢れさせる
「もしかして、あなたが甦らせてくれたのですか……?」
「あぁ、どうしてもあんたの口から直接……朱乃とバラキエルさんに言葉を届けさせてやりたかったんだ……」
新は許されない事をしてしまったかもしれない……
だが、彼は後悔などしていなかった
自分が決めた事だから悔いを残さずに……
朱璃は朱乃に優しく声をかけた
「朱乃。何があっても、父さまを信じてあげて。父さまはこれまで他者をたくさん傷つけてきたかもしれない。――――――でもね。私と朱乃を愛してくれているのは本当なのだから。だから、朱乃も愛してあげて」
朱璃が優しく抱き締めながら朱乃に言う
母の腕の中で朱乃は止めどなく涙を流した
「母さま……ッ!私は……ッ!父さまともっと会いたかった!父さまにもっと頭を撫でてもらいたかった!父さまともっと遊びたかった!父さまと……父さまと母さまと……3人で……ッ!」

バラキエルが傷だらけの体を起こす
「朱璃……！朱璃……！」
「あらあら。あなたったら、そんなに泣いてはしたないですよ?」
「無理を言わないでくれ……ッ！お前が……お前が目の前にいるんだぞ……ッ！堪えられる訳が無いだろ……ッ！」
「いやだわ。私を忘れてしまった訳では無いのでしょう?」
「当たり前だ……ッ！うぐっ……お前の事を……朱乃の事を……1日たりとも、忘れた事など無い……ッ！」
涙にまみれ、震える手を朱乃と朱璃に伸ばす
朱乃と朱璃はその手を取った
「朱乃、父さまを許してあげてね。父さまは、まだ泣き虫ですから」
「……母さまぁ……！……父さまぁ……！」
――――その時だった
ドクンッ……！
パァァァァァァッ
新の体に何かの力がはね上がり、腰に付けていたミョルニルが極大の光を発していた
『クックックッ。どうやらこの娘を守りたいと言う想いが通じたのだろう。欲望は欲望

でも、他者を救う欲望とは恐れ入った』
「じゃあ……今の俺には、ミョルニルが……」
『使えるぞ。ただし、1度しかチャンスは無いがな。そして貴様に眠る新たな力が覚醒した。余は気分が良いぞ。これでようやく魂の欠片が同化出来そうだ。では、いずれ会おう』
それだけ言い残した『初代キング』バジュラ・バロムは新の頭の中から完全に消え去った……
「覚えの無い波動を感じるな。闇皇(やみおう)の蝙蝠。やはり君は1番の危険人物だ！」
ロキが再び自分の影を拡大させて、量産型ミドガルズオルムの一団を出現させる
新はそれらを睨み付けた
「これ以上、良い場面の邪魔はさせねぇ。ロキも、てめぇらも――――全部ぶっ倒す。
『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』ッ！『女王(クイーン)』ッ！」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！
新から凄まじい魔力のオーラが噴き出し、変化が始まる
胸部に禍々(まがまが)しい蝙蝠型のプレートが装備され、左腕は『戦車(ルーク)』形態、右腕は『騎士(ナイト)』形態に変貌し、『僧侶(ビショップ)』形態のキャノンが両肩に備わる
手と脚には鋭利な刃と爪が生え、マントも刃を持った4枚の翼に変わる

新の中に潜む最後の形態が明らかとなった……

「遂に、遂に覚醒したぜ。『騎士(ナイト)』、『僧侶(ビショップ)』『戦車(ルーク)』の特性を全て備えた『女王(クイーン)』形態――――『闇(アーク・カイザー・オーバーカタストロフ・エンプレス)皇の極限破滅女帝』。今の俺は、神をも葬れそうだ」

「マジか！何なんだよ!?そのメチャクチャヤバそうな姿！」

「お兄さまやサイラオーグと互角の力……!?あまりにも魔力が巨大過ぎる……ッ！」

ただその場にいてるだけなのに、一誠やリアス達は肌が火傷しそうだった

ロキは嬉々として高笑いを続ける

「ふはははは！面白い！面白いぞ！それが闇皇(やみおう)の新しい力か！しかぁし！いくら力を得た君でも、神をも殺す牙が相手ではどうかな?スコル！ハティ！あの者を牙で噛み砕き、爪で葬ってやれ！」

ロキの指示を受けた2匹の子フェンリルが新に襲い掛かる

2匹の牙が新に突き刺さる瞬間――――

グシャアアッ！

バキインッ！

ギャオオオオオオオオオオオオオオンッ！

2匹の子フェンリルが口から血を吐きながら地面を転がる

新の手には――――子フェンリルの牙が握られていた……

ロキは激しく狼狽する
「な、何が起きたのだ……？スコルとハティに何をした!?」
「何をした？ただ殴って歯を引っこ抜いただけだ」
「歯を引っこ抜いただと!?バカな！親より劣るとはいえ、神をも殺す牙だぞ!?それに触れて無傷だと!?」
「おかしいと思うわな。けど、これが現実だぜ？何せ俺は――――バグだからな」
『女王（クイーン）』形態となった新の力に全員が戦慄する
圧倒的な力……そう表現するしかなかった
２匹の子フェンリルは再び新に噛み付こうとするが、尋常ならざる気迫と破壊力で心が折れ、全身が震え出す
「どうした！スコルとハティ！早く奴を噛み殺せ！」
「無駄だ。犬ってのは、自分より強い者に服従するもんなんだよ。つまり、そいつらはもう俺とは戦いたくないと言ってるんだ。けどよ、犬の命乞いなんざ――――いらねぇんだわ」
コオオオ

「消し飛びやがれ！」
ゴバアアア

ましたから』
「あれ、やっぱり匙ですか!?いったい何をしたらあんな姿に!?」
『彼にヴリトラの神器（セイクリッド・ギア）を全部くっつけました』
〝また、そんな無茶を……〟と一誠は口元を引きつらせた
『ヴリトラは退治されて神器（セイクリッド・ギア）に封じ込まれる時、何重にもその魂を分けられてしまった。そのため、ヴリトラの神器（セイクリッド・ギア）所有者は多いのです。だが、種別で分けると「黒い龍脈（アブソーブション・ライン）」、「邪龍の黒炎（ブレイズ・ブラック・フレア）」、「漆黒の領域（デリート・フィールド）」、「龍の牢獄（シャドウ・プリズン）」、この４つです。これらの神器（セイクリッド・ギア）が多少の仕様違いで各所有者に秘められていたのですよ。そして、我が組織グリゴリが回収し、保管していたヴリトラの神器（セイクリッド・ギア）を匙くんに埋め込みました。あなたとの接触でヴリトラの意識が出現していたので全ての神器（セイクリッド・ギア）が統合されるかもしれないとアザゼルは踏んだのです。結果、ヴリトラの意識は蘇りましたが、蘇ったばかりで暴走してしまったようですね。しかし、匙くんの意識は残っているようなので、あなたがドライグを通じて語りかければ反応する筈です。後はあなたにお任せします。出来ますか?』
「……ええ、何とかやってみます。いざとなったら、力ずくで匙を止めます」
ヴリトラの黒い炎がロキの動きを封じてる間に、新が1歩1歩近付いていく
シェムハザの話によれば、ヴリトラは直接的な攻撃よりも特異な能力を多く持ってお

り、五大龍王（ごだいりゅうおう）の中でパワーは弱いが、技の多彩さと異質さは1番らしい
一誠は自分の神器（セイクリッド・ギア）を通して、匙の意識へ接触を試みる
『匙、匙聞こえるか？』
『……うぅ。ひよ、兵藤か……？俺、今どうなっている……？なんだか、とてつもなく熱くて体が燃え尽きてしまいそうなんだ……』
『意識をしっかり保てよ！せっかく格好良く登場したんだから、最後まで仕事をしてからぶっ倒れてくれ！』
『……どうすればいい？』
『何か見えるか？』
『……黒い炎の中に、得体の知れない魔術か何かを感じる。それで黒い炎を消し去ろうとしている……』
『そいつは敵の親玉だ！消し去られるな！強く念じて、そいつを繋ぎ止めてくれ！後は新が決着をつけてくれっから！』
一誠が新に檄（げき）を送る
「新！今がチャンスだ！ミョルニルをぶち込んでやれェェェェェェッ！」
「当たり前だ！今の俺は――――止まらねぇよ！」
バサッ！

新が刃の様な翼を広げ、ロキのところへ向かう
ロキは魔術の一撃を放つが、新の左腕に備わる盾によって消し去られた
「く、来るな！来るなァァァァァァァッ！」
ボオウンッ！
焦りを見せたロキが炎を打ち破り、空中高く浮かび上がる
「くっ……！我にここまで恥をかかせるとは！覚えておくが良い！三度(みたび)ここに訪れて混沌を――――」
ビガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！
特大の雷光がロキを包み込んだ
新が後ろを向くと、朱乃とバラキエルがお互いに手を握り、黒い翼を出していた
「朱乃……ッ！やっと和解してくれたか……」
煙をあげて落下してくるロキに、新は神速で近づいていき雷が宿ったミョルニルを振り上げた
「や、やめろ！やめろぉぉぉぉぉぉぉっ！」
「死にさらせ悪神がァァァァァァァァッ！」
ドンッ！
ドガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

ミョルニルがロキへ打ち込まれた刹那、大質量の雷がロキを呑み込み焼き焦がす
ボロボロになったロキは地面に墜落、新も地上に降り立って『女王(クイーン)』形態を解除した
「だは～……疲れた……」
新は仰向けに寝転がり、母親に抱きつく朱乃の姿を見て「良かったな……朱乃」と呟き、笑みをこぼした

放置された戦乙女

『「初代キング」が!?』
戦いが終結した直後、新は全員から何故『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』が使用出来るのかを訊かれ、その経緯を話した
勿論、自分の意識の中で『初代キング』に会った事も含めて……
「今は消えてっけど……『初代キング』がなんで俺にそんな事を言ったのか、皆目見当がつかねぇんだよな……」
「ふざけないで！あんた、なんて事してくれたのよ！」
怒りを溢れさせ、新の胸ぐらを掴むのはフェリス
アリスとロコもご立腹の様子だった
『初代キング』はあたし達の種族を滅ぼした張本人なのよ!?」
「このたわけ者が！万が一『初代キング』が封印から解かれたらどうするつもりなのだ！」
「そうであります！奴の恐ろしさは底無し沼と同じであります！」
「ちょっとやめなよ皆！」

激昂している3人を渉が止める
「気持ちは分かるけど、新さんに八つ当たりしても解決しないよ！」
「で、でも、渉！」
「それに、仮に『初代キング』が封印から解かれても、一誠さんや新さん、僕達皆でまた倒せば良いじゃない。このメンバーなら、きっと何だって出来る筈だよ。ね？」
渉の言葉に3人はぐぬぬと唸り、新を解放した
「まったく、本当に渉ってお人好しね……」
「ありがとう、フェリス、アリス、ロコ」
「すまねぇ、渉。朱乃の事を考え過ぎて……バカやっちまった」
「気にしないでください。新さんだって新しい力に覚醒したじゃないですか。頑張っていきましょうよ」
渉の励ましに「サンキュー……」と軽く一礼した後、新は朱乃、バラキエル、朱璃のもとへ
「新さん、でしたよね？」
「あ、初めまして。竜崎新です」
「すみませんが、何か羽織る物を貸していただけますか？裸では寒いので」
そう言われて新は学生服の上着を脱いで手渡す

「……今でも信じられません。私がこの地に立っている事が、生き返った事が……」
「母さま、全部現実です。新さんが甦らせてくれたんです」
バラキエルの肩を持つ朱乃が笑顔で言うと、朱璃も優しげな笑顔で返す
「そうね。朱乃、もうこんなに大きくなったのね……嬉しいわ」
「私も嬉しいです……母さま……」
朱乃とバラキエルは心底安らいだ様な表情となる
新は家族の対話を邪魔してはいけないなと離れ――――
「待て、竜崎新」
――――ようとしたところで、バラキエルに呼び止められた
「……っ？何すかバラキエルさん？」
「君は娘が――――朱乃の事が好きか？」
ストレートな質問が来た
それに対し、新もストレートな答えを告げる
「はい。好きです。朱乃は俺が初めて自分から惚れた女性です」
「……そ、そうか……」
バラキエルは照れ臭そうに笑い、朱乃は顔を真っ赤にした
朱璃は頬に手を当てて笑んでいる

「朱乃、良い殿方ね。私も何だか好きになってしまいそう」
「――――っ!?しゅ、朱璃!?私の元から離れるのか!?おのれエロ蝙蝠!」
「ちょーっ!?バラキエルさーん!?」
「うふふ、冗談です」
　ホッとする新と落ち着きを取り戻したバラキエル
　朱乃は何かを決意した様子でバラキエルと朱璃に話し掛ける
「父さま、母さま、私……」
「分かってるわ。朱乃、あなたも新さんが好きなのでしょう?」
「……はい。それに今、私は新さんのお家に居候させてもらっています。でも、父さまと母さま、3人で暮らしたいと――――」
「朱乃?あなた、好きになった殿方を置いていくつもりなの?」
「え……?そ、そんな事しません!ただ……また3人で暮らせるから――――」
「ダメよ。好きになった人を置いて家族と暮らすなんて。新さんと結婚すれば話は別だけれど」
『結婚っ!?』
　新、朱乃、バラキエルは目玉が飛び出すぐらい驚愕した
「私はこの人と一緒に暮らすけど、朱乃はどうするの?居候をやめて私達と暮らす?そ

れとも、結婚して私達の所に戻るまで新さんの家に住む？」
朱璃は迫力ある笑顔で朱乃に言う
それを聞いた朱乃は……
「……母さま。私、新さんの居候を続けます！そうですわよね、新さんと結婚すれば、父さまと母さまにご紹介も出来ますわ！」
「チョオットマッテクレィアケノォッ!?ソレハハナシガヒヤクシスギテネェカイ!?」
「結婚なんて、私は認めんぞ！」
「あなた、親なら娘の成長を見守ってください。朱乃が好きになった殿方なんですよ？」
「ぐぬぬ……！りゅ、竜崎新……娘を、よろしく頼むぞ……」
バラキエルが震える手を差し出す
新は恐る恐る握手をしようとしたが、突然両肩に圧迫感が襲い掛かる
後ろを向いてみると、ゼノヴィアと小猫がいた……
「新、結婚とはどういう事だ？私との子作りはどうなるんだ？」
「……新先輩。納得がいく説明をしてくれるまで逃がしません」
怖い形相で睨む２人
しかし、その２人よりも怖いオーラを出す女性（ひと）がいた
揺らめく紅髪（べにがみ）の『王（キング）』――――リアスがズンズンと新に迫り来る

「新……？結婚ってどういう事かしら？私の断りも無くそんな事をしようだなんて……。これはもう説教だけじゃ足りないわよね？」
「き、貴様……！今の話はどういう事だ……！子作りだと……!?朱乃を好きだと言っておきながら……！」
「……秘技！生身でクロッ〇アップ」
ズビュウンッ！
新は命懸けの全力ダッシュで逃げた
「待て新！説明をするんだ！」
「……先輩。逃げないでください」
「待ちなさい、新！今日と言う今日は許さないんだから！」
「待て！エロ蝙蝠め！やはり娘は渡さん！」
「バラキエルさん！あんた傷はどうした!?フェンリルに貫かれたんだろ!?」
「そんな傷！朱乃を守るためなら痛くも痒くも無いわぁっ！覚悟しろ！」
デュランダルを振り回すゼノヴィア、猫又モードの小猫、紅いオーラを放出するリアス、雷光を纏うバラキエルとの鬼ごっこは修復作業が終わるまで続いた

「キヒヒヒヒヒッ。だいぶデータが揃ってきたよぉ♪」
「神風よぅ。俺達こんな所で油売ってて良いのか？」
「良いの良いの～♪ボクの作品が完成間近になってきてるから。それに……『初代キング』の波動を感じたからね」
「『初代キング』って、あの『初代キング』か？」
「そうそう♪何故かは分からないけど、見学に来といて良かったよぉ～♪んじゃ、僕はこれから7本目の封印の楔を破壊しに行ってくるから。その間、コレを君に預けておくよ」
「……っ？こいつは？」
「改良した魔銃（マガン）だよ。今度は生物だけじゃなく、金属や機械なんかの無機物も闇人（やみびと）に変異させる事が出来る。これで闇人（やみびと）の勢力が格段に上がる筈だよ♪こっちのデータも欲しいから、ボクが出掛けてる間に使用しまくっといてね～」
「へいへい。魔銃（マガン）を使ってあいつらの妨害とデータ収集を俺にやらせようってか？けど、タダ働きはゴメンだぜ。ちゃんとそれなりの報償金払ってもらう事になるが？」
「キヒヒッ。良いよ良いよ～♪もうすぐで『初代キング』を封印から解き放てるんだから。いくらでも払ってあげるよ。楽しみだな～♪」

「もう、終わりだわ！」
修学旅行の話し合いをしているオカルト研究部の部室中央で悲鳴をあげる銀髪の女性がいた
その名を――――ロスヴァイセ（笑）と言う
「うぅぅぅぅっ！酷い！オーディン様ったら、酷い！私を置いていくなんて！」
彼女は会談を終えたオーディンに放置されてしまったらしい
今頃気付いている筈なのだが、何の連絡もやって来ない
「リストラクチャリング。通称リストラ、か……」
「うわぁぁぁぁぁぁんっ！リストラ！これは紛れもないリストラよ！私、あんなにオーディン様のために頑張ったのに日本に置いていかれるなんて！どうせ私は仕事が出来ない女よ！処女よ！彼氏いない歴＝年齢よ！ふぇぇぇぇぇぇんっ！」
もう完全にヤケクソモードになっている
「あ～……どうしたもんかねぇ、これは」
「何言ってるの新。こういう時こそ、あなたの出番でしょう？1番女性の扱いに長けて

いるのだから」
「ここまで自暴自棄になった女を宥めるのは、なかなか難易度が高ぇよ？例えるならパンパンに膨らんだ風船ってトコだな。針でちょっと刺しただけで破裂しちまう」
「う わぁぁぁぁぁぁ んっ！ 私 は こ れ か ら ど う し た ら 良 い の よオオオ

「おいリアス、なんで住居で俺を指差してんの？」
「ウソ！保険金がこんなに……？こっちのは掛け捨てじゃない！」
「そうなの。それに新はバウンティハンター、新の父親はトレジャーハンターをしていて金銭面では申し分無いくらい裕福、更には宿泊寮も設立しているのよ。そこに住まわせてもらったらどう？」
「えっ!?宿泊寮を!?まさか、竜崎さんは隠れた経営者なのですか!?」
「いや、そんな気分は毛頭無いが……ま、住みたいって言うなら良いぜ。今は満室だから増改築すれば問題ねぇ訳だし」
それを聞いたロスヴァイセはさっきまで落ち込んでいた様子が嘘のように消え、パァァッと表情が明るくなった
リアスがポケットから紅い駒を取り出す
「――――そんな訳で、冥界で一仕事するためにも私の眷属にならない？あなたのその魔術、『戦車（ルーク）』として得る事で動ける魔術砲台要員になれると思うの。ただ駒の消費が１つで済めば良いのだけれど」
全員がリアスの申し出に驚くのも無理がなかった
その『戦車（ルーク）』はリアスにとって最後の駒だったから
しかし、テクニックは申し分無いので利益は大きい筈である

「……どこか運命を感じます。私の勝手な空想ですけど、それでも冥界の病院であなた達に出会った時から、こうなるのが決まっていたかもしれませんね」
　ロスヴァイセが紅い『戦車（ルーク）』の駒を受け取ると、背中から悪魔の翼が生えた
「皆さん、悪魔に転生しました。元ヴァルキリーのロスヴァイセです。グレモリーさんの財政面も含め、将来の安心度、素敵な住居もあるので悪魔になってみました。どうぞ、これからもよろしくお願い致します」
「と言う訳で、皆、私――――リアス・グレモリーの最後の『戦車（ルーク）』は彼女、ロスヴァイセとなりました」
　リアスが笑顔で改めて紹介し、全員が快く迎（こころよ）え入れた
「ところでさ、飛び級してるって……実際の歳はいくつなんだ？」
「じゅ、１８ですけど……」
「俺の１個年上!?２０歳ぐらいだと思ってた」
「竜崎さん！それは私が見た目より老けてるって言いたいんですか!?酷いです！」
「あぁ、スマンスマン。てか、名字で呼ばなくても良いんだぜ？もう仲間なんだから下の名前で呼んでくれても構わねぇよ」
「そ、そうですか。コホン……で、では！これから寮でお世話になります！新さん！」
　新はいつかバウンティハンターの他、経営者としてもやっていけるのかと自身の中で

考えた……

オリキャラ紹介編（随時更新予定）

オリジナルキャラクター紹介（主人公）

名前……竜崎新（りゅうざきあらた）
年齢……１７歳
身長……１７３cm
体重……６３kg
種族……人間？→転生悪魔？後にリュオーガ族の末裔と判明
ランク……『変異（ミューテーション）の駒（レース）』の『兵士（ポーン）』
イメージＣＶ……緑川光

本作の主人公、少し逆立てた金髪とロックミュージシャンの様な私服が特徴。
生まれてから直ぐ父親の竜崎総司（りゅうざきそうじ）に賞金稼ぎ（バウンティハンター）としての教育を施され、人間時代から超人的な運動能力を身に付けている。外国である程度任務をこなしてから総司に独立を命じられて日本へやって来た。当初は高校に通わずバウンティハンターやカジノ、競馬などギャンブル三昧の稼ぎで生活していたが、一誠やリアスと関わった事で駒王学園入学と同時にオカルト研究部へ入部。

性格は生まれながらのドSで、一誠の悪友である松田と元浜には容赦無く関節外しや急所攻撃を実行する。（襲撃したり、ムカつく言動をしなければ放置するらしい）

更に性欲旺盛でエロと女性の扱いに長けており、僅か１２歳で童貞を卒業した。

経験豊富な上に各地で様々な女性と肉体関係を築いてきた。学園では『女堕としのマエストロ』と呼ばれている。基本的には来る者拒まずで自分が定めた或いは自分に好意を寄せる女性ならば年下・同い年・年上・人妻・ロリっ娘・悪魔・堕天使・妖怪など年齢種族問わずに愛する浮気性。豊富な経験から繰り出すテクニックの餌食にした女性を高確率で惚れさせると言う特技を持つ故に自分から惚れる事は極めて稀である。（自分から惚れた相手は朱乃のみ）

生まれた時から闇人（やみびと）の王が使っていた『闇皇（やみおう）の鎧』を宿し、最初は正体を知らずに使用していたが村上京司（むらかみきょうじ）との戦いで正体を知った。悪魔に転生してからは反則的な力ばかりに目覚めている。

右籠手には固有武器の闇皇剣（やみおうけん）が収納されており、赤（破壊）と黒（吸収＆反発）を操る。

キャラクター及び鎧のイメージは仮面ライダーダークキバ、闇皇剣（やみおうけん）はザンバットソード

名前の由来は『仮面ライダーカブト』の加賀美新（かがみあらた）

―『闇皇の神速槍騎士(アーク・カイザー・ジェットスピア・ナイト)』―

『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』によって1番目に覚醒した『騎士(ナイト)』形態。闇皇剣(やみおうけん)から闇皇槍(やみおうそう)と呼ばれる西洋槍に変化し、自身の素早さ及び攻撃速度を上げる戦法を得意とする。マントは戦闘機のウイングを模した翼となり、両肩・両腕・両足から隆起した刃物での遠距離攻撃も可能。コカビエル戦で発現してコカビエルを圧倒、当初はオカルト研究部からも畏怖された

―『闇皇の金剛盾戦車(アーク・カイザー・ソリッドシールド・ルーク)』―

『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』によって黒歌戦で2番目に覚醒した能力。武器も闇皇剣から闇皇盾(やみおうたて)に変化した攻防一体の『戦車(ルーク)』形態で、名の通り戦車の特徴が鎧に見られる。更に盾は相手の魔力などを吸収して自分の力に変換したり、体の各部位に流す事も出来る。

―『闇皇の魔導銃僧侶(アーク・カイザー・ウイザルドバスター・ビショップ)』―

『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』によって3番目に覚醒した『僧侶(ビショップ)』形態。変化した闇皇銃(やみおうじゅう)と両肩の砲身を組み合わせた銃撃戦を得意とし、吸収した魔力を放射する能力も持ち合わせている。武器イメージは『冒険王ビィト』の才牙サイクロンガンナー

―『闇皇の極限破滅女帝』―

ロキ戦で発現した『女王』形態。『騎士』の右腕、『戦車』の左腕、『僧侶』のキャノン砲を合わせ持った姿となる。攻撃、防御、速度、魔力のどれもが格段に上がるので消費が激しく、発現直後の新は戦闘終了後に疲弊しきっていた。

元ネタは仮面ライダーキバ・ドガバキフォーム

――『魔剣の闇焔皇』――

京都で『禍の団』英雄派、神風一派と対峙した際に新が発現した『女王』形態。魔剣将官・伊坂威月が有する焔の能力を取り入れ、鎧に炎と猛禽類の様な意匠が加わった形状となる。展開出来る翼も6枚に増え、武器も剣の他、左腕に盾が追加された。

昇格する際の呪文は『我、目覚めるは闇と焔を受け入れし、魔の皇なり。無限の欲望を喰らい、不屈の闘志を糧に力を望まん。我、闇に染まりし焔を纏う皇となりて。汝らを光無き漆黒の闇へと堕とそう』

イメージモデルはＳＩＣ版の仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ＋ウルザードファイヤー

実はリュオーガ族と呼ばれる一族の末裔で、『災厄の漆黒竜』オニキスの欠片から創

られた。

リュオーガ族としての本名はゼノン・ブラック・ドラグニル

オリジナルキャラクター紹介（仲間編）

名前……八代渉（やしろわたる）
年齢……推定外見１６歳
種族／分類……ハーフ闇人（やみびと）（父親…闇人（やみびと）、母親…人間）／渉チーム
身長……１６３㎝
体重……５２kg
イメージＣＶ……宮田幸季

肩まで伸びた茶髪にアホ毛と深紫色の目がチャームポイントで、新の『闇皇（やみおう）の鎧』と対を成す『光帝（こうてい）の鎧』を宿している。
闇人（やみびと）と人間の間に産まれた混血児少年。
中性的な顔立ちをしている為、初見では一誠から女の子と間違えられた。（直後に真の性別を知らされた一誠は泣き崩れた）
終始丁寧な言葉遣いを使い、性格は一言で言えば天然ボケ。
新や一誠、アザゼルの間違った知識を鵜呑みにし過ぎたり、唐突に強大な攻撃を放つので空気を読むのは苦手である。

普段は温厚だが一誠と同じぐらい熱い性格の持ち主であり、怒った時は口調が強くなる。

お惚けキャラでありながら実は隠れハーレム達成者。高峰祐希那の他、武器として契約した人狼族のフェリス、人魚族のアクエリアス（通称アリス）、鉄人族のロコと共に行動しており、４人とも渉に好意を寄せているが……超絶的鈍感な為、本人は気付いていない。

元ネタは『仮面ライダーキバ』の紅渡

特色――――『光帝の鎧』……『闇皇の鎧』と対を成すもう１つの鎧で渉の父――――三嶋昇の遺産。渉が１０歳を迎えた日に渡された。

戦闘スタイルは前述のフェリスを魔狼剣フェンリオス、アリスを魔海銃アリエス、ロコを魔鉄槌ロンドに変え、それらをシフトチェンジしながら戦う万能型

元ネタは仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム

名前……高峰祐希那

年齢……１７歳

種族／分類……人間→転生悪魔（戦車（ルーク））／渉チーム
身長……１６７㎝
体重……あんた死にたいの？
イメージＣＶ……伊藤かな恵
腰まで伸びた白髪のロングヘアーと琥珀色の瞳が特徴の渉のお世話係。元々は眷属悪魔だったが、３年前に主と眷属仲間を全員殺されて精神崩壊にまで至った。（白髪はその時の後遺症）
出会った渉は彼女を１年に亘（わた）って看病し続け、そのお陰で精神崩壊から立ち直れた。以降は渉のチームメイトとして同行している。
性格は典型的なツンデレかつツッコミ気質で、エロ全般を毛嫌いしているが、渉には膝枕をしたりと渉にだけは寛容。自分の精神が通常に戻るまで看病してくれた渉に好意も寄せているが、渉の朴念仁さが災いして気付かれていない。
所有する神器（セイクリッド・ギア）は氷の斧型かつ対象物を任意で凍らせる事が出来る『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』

名前……フェリス

年齢……推定外見２０歳
種族／分類……人狼族／渉チーム
身長……１７４cm
体重……噛み潰すわよ？
イメージＣＶ……井上麻里奈
藍色のストレートヘアーに金色の瞳、頭部に犬耳を生やした魔族・人狼族の生き残りたる女性。男勝りな性格で渉の世話焼きお姉さん（２号）。
『初代キング』に一族を滅ぼされ、行き場を無くした時に旅をしていた渉と出会い、彼と契約を交わして魔狼剣フェンリオスとなった。
元ネタは仮面ライダーキバのガルルセイバー

名前……アクエリアス
年齢……推定外見１３歳
種族／分類……人魚族／渉チーム
身長……１４５cm

体重……妾のトップシークレットを詮索するでないわ！
イメージＣＶ……花澤香菜
翡翠色のサイドテールに藍色の瞳をした人魚族の姫君（ひめぎみ）で、図々しい口調とワガママな性格をしている。一人称は妾（わらわ）。
彼女の一族も『初代キング』に滅ぼされ、行き場を無くした時に渉と出会い、契約を交わして魔海銃（まかいじゅう）アリエスとなった。
元ネタは仮面ライダーキバのバッシャーマグナム

名前……ロコ
年齢……推定外見１４歳
種族／分類……鉄人族（てつじん）／渉チーム
身長……１５０cm
体重……３００kg
イメージＣＶ……白石涼子
紫色のショートヘアーで軍服を身に纏った軍人気質な鉄人族の少女。一人称は小生（しょうせい）。

上記の2人と同じく『初代キング』に一族を滅ぼされ、渉と契約を交わして魔鉄槌(まてっつい)ロンドとして行動を共にしている。
元ネタは仮面ライダーキバのドッガハンマー

名前……飛竜(ひりゅう)ワイバーン
種族／分類……人工魔獣／渉チーム
闇人(やみびと)によって作られた魔獣で元々は『初代キング』の物だったが、封印されたと同時に機能停止して眠っていた。その後は渉チームの住居兼移動手段となっている。
擬態と空間移動の術式が施されており、好きな場所に繋がる扉がある。新曰く『どこ○もドア』
元ネタは仮面ライダーキバのキャッスルドラン

名前……竜崎総司(りゅうざきそうじ)
種族／分類……人間？後に変異型闇人(やみびと)と判明／バウンティハンター→トレジャーハ

ンター

年齢……５３歳

身長……１８５㎝

体重……６８kg

イメージＣＶ……山寺宏一

爽やかな青年風の男性で、作中の主人公・竜崎新の父親。三つ巴の大戦に乱入してきた闇人（やみびと）の『初代キング』の封印を悪魔、天使、堕天使の三大勢力と共に貢献した唯一の人間であり、『禍の団（カオス・ブリゲード）』英雄派からも〝英雄〟と称されている。

『初代クイーン』の協力を得て『初代キング』から『闇皇（やみおう）の鎧』を奪い取り、その力を使って『初代キング』を封印し、闇人（やみびと）の戦力を激減させた。（どの様にして『闇皇の鎧』を奪ったかは未だに不明）

元々は一流のバウンティハンターだったが、争い事をあまり好まない性格の為、世界中を旅して隠された財宝を集めるトレジャーハンターに転職した。非戦闘派ではあるが、小猫のパンチを指２本だけで止める程、実際はかなりの実力者と窺える。

性格は新以上の女好きで、過去にリアスの母――ヴェネラナ・グレモリーの胸を触ろうとして吹き飛ばされた事がある……。（本人曰く、あの時は流石に死ぬかと思ったらしい）

サーゼクスの事を〝ゼクスくん〟、セラフォルーを〝ちゃん付け〟で呼ぶなど、四大魔王の面々とはかなり親しげ。

新に『闇皇(やみおう)の鎧』を移植させたのだが、その経緯も未だに語られていない……。幼少時より新にバウンティハンターのノウハウを教え、無茶とも言える特訓を施し、独り立ち出来るようにと日本へ移送させた。現在はとある異国に建てた別荘で妻と共に暮らしている。

名前の由来は仮面ライダーカブトの天道総司(てんどうそうじ)

実は『闇皇(やみおう)の鎧』使用による副作用で肉体が闇人(やみびと)化してしまっていた。

魔人態(まじんたい)は鬼と蝙蝠が混じった様な姿で両腕にはシールド状の刃物が備わっており、そこから放つ斬撃やブーメラン、更に全身から解き放つ衝撃波などを武器とする。

イメージモデルはバットファンガイア

名前……竜崎梓(りゅうざきあずさ)

種族／分類……人間／専業主婦

年齢……５０歳

身長……１４４㎝
体重……３６㎏
イメージＣＶ……井上喜久子
前述の総司の妻で、新の母親。何処かフワフワした雰囲気の小柄な少女の様な見た目をしている。
総司と同じく常人離れした若々しさの持ち主で、初見では誰もが驚く。（新曰く、あまり一緒に映りたくない）
一誠達の前に姿を見せたのは授業参観の時だけで、それ以降は総司と共に別荘で暮らしている。

オリジナルキャラクター紹介（闇人編）

闇人……生物が秘めた欲望や邪な感情が集まる事で覚醒する魔族。三大勢力と同じく純正種が非常に少なく、人間やはぐれ悪魔などを転生させて数を増やし始めた。その多くが『魔人態』と呼ばれる異形の姿で転生を終えるが、適合者は自身の姿を維持したまま転生出来る上に『人間態』と『魔人態』を自在に切り替えられる。

また、特異な能力を発現している者も稀に存在し、自身の能力を高めきった者は『超魔身』と言う強化術を会得出来る。ただし、多用し過ぎると暴走を起こしてしまうと言うリスクを伴う。

『チェス』……大半を闇人で占める闇人の重鎮組織。トップの『2代目キング』、幹部に『2代目クイーン』、『ナイト』、『ビショップ』、『ルーク』、『ポーン』の上位陣が下位の闇人を統制している。

目的は『初代キング』時が〝悪魔、天使、堕天使の三大勢力および自分達以外の異形を絶滅させる〟だったが、封印され『2代目キング』に代わってからは〝異形達の頂点に立つ〟と言う目的に変更された。以降は『2代目キング』の意思に納得いかず離反、反

乱を企てる者もいるらしい。

名前……蛟大牙（みずちたいが）
年齢……推定外見２０歳前後
種族／分類……純血闇人（やみびと）／チェス『２代目キング』
身長……１７６㎝
体重……６９kg
イメージＣＶ……浪川大輔

魔族（まぞく）・闇人（やみびと）を束ねる『２代目キング』の異名を持つ青髪の若い男。かつて悪魔、天使、堕天使の大戦に乱入して封印された『初代キング』と生死不明の『初代クイーン』との間に生まれた純正闇人（やみびと）。

一見、冷徹さを窺えるが実は他人からの振りを律儀に受け取る性格で、ギャグ要素を含めた発言を素のまま言う。父親である『初代キング』の意向をあまり快く思っておらず、自分なりに闇人（やみびと）を頂点に導くと言った目的で活動している。

『闇皇（やみおう）の鎧』、『光帝（こうてい）の鎧』よりも前に実験として創られた最初期型の鎧――『蛇神皇（じゃしんおう）の鎧』を宿しており、細身の剣を使った剣戟と蛇型の魔力を使いこなす。

更に強化形態として『超魔身（ちょうましん）』の上位術――『超魔鎧身（ちょうまがいしん）』を独自に会得しており、欠

片ではあるがケツァルコアトル、バジリスク、ニーズヘッグ、ヒュドラの魂を宿している。

超魔鎧身への呪文は『我、目覚めるは覇道を追い求めし蛇神の皇なり。無限を掴み取り、夢幻を与える覇道を築く。我、蛇と龍の魂と共に蒼き皇となりて、汝らを未だ見ぬ蒼白の未来へ導こう』

名前の由来は『仮面ライダーキバ』の登大牙

鎧のイメージは仮面ライダーサガ

名前……アスカ・シャーベット

年齢……推定１９歳

種族／分類……人間→闇人／チェス『２代目クイーン』

身長……１６４㎝

体重……乙女の秘密は遵守してくださいね？

イメージＣＶ……田中理恵

『２代目クイーン』の異名を持つ水色の長髪の女性。物静かで優しげな雰囲気が魅力的

だが、怒るとチェスの中で最も恐ろしいらしい……。

実は陰陽師（おんみょうじ）の派生――鬼髪師（きはつし）の出身で、自身の毛髪を自在に伸ばしたり武器にする事も可能。更に１２体の式神を操る星宙（そら）の巫女とも呼ばれている。羞恥心はやや少な目で、一誠に『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』されても殆ど平然としていた。

使役する式神は十二星座が基となる。

①蠍座のソード……蠍の外見をした刀使い。べらんめぇ口調、刀に毒を染み込ませる。

②双子座のジェミニ……一本角を生やした異形の兄弟。青いのが兄で赤いのが弟。それぞれが氷と炎を操る上、合体も出来る。

③牡牛座のタウラス……金色の巨大な牛。突進攻撃が得意。

④山羊座のカプリコーン……長い顎ヒゲを蓄えたヤギの老人。変に間が長い……。筋骨粒々のボディに変身すると口調も変わる。

⑤乙女座のヴァルゴ……天使の様な外見をした魔法少女っぽい娘。自称『虐殺ガール』でトゲ付きバットが武器。

⑥水瓶座のコーラル……長い布１枚を纏った半裸の女性。水の入った壺から熱湯を浴びせる。

⑦蟹座のキャンサー……背中に甲羅を背負った少女。性格はギャスパー似のひきこ

もり、得物の鋏は空間を切り裂く。

⑧牡羊座のウール……2頭身サイズで円(つぶ)らな瞳をした羊。丸まってからトゲを突き出して攻撃する。

⑨魚座のパイシーズ……双頭の巨大なウツボ。アスカ曰く、2歳を迎えたばかりらしい……。

⑩天秤座のリブラ……右手に青い皿、左手に赤い皿を吊るした女性。重力を操る。青い皿が光ると軽くなり、赤い皿が光ると重くなる。

⑪射手座のサジタリオン……全身を鎧で覆われたケンタウロス。弓矢での射撃が得意。

⑫獅子座のレオーグル……黒い体躯に白い鬣(たてがみ)を持った獅子の獣人。身の丈ほどある大剣を使う。

名前……神風(かみかぜ)

年齢……推定外見14歳

種族／分類……闇人(やみびと)／チェス『ビショップ』→神風一派リーダー

身長……１５７㎝
体重……５１kg
イメージＣＶ……岡本信彦

『チェス』で『ビショップ』の肩書きを持つ少年で雷を操る。かなりの甘党でいつもお菓子を持ち歩いている。お気に入りはグ〇コのカ〇リコに似たチョコ菓子カプリンチョ。〝キヒヒッ〟が口癖で相手を徹底的に挑発、小馬鹿にする陰湿で嫌な性格をしているが、データ収集に関してはピカイチ。

無生物を闇人（やみびと）に転生させる武器――魔銃（マガン）を独自に開発したりと技術力はグリゴリと同等なマッドサイエンティスト。修学旅行編では新たに寄生した生物を暴走させる生物兵器――黒後家蜘蛛（ブラックウィドウ）や、相手の神器（セイクリッド・ギア）をコピーする『邪眼の闇籠手（ネメシス・ギア）』を開発した。

何度も新や一誠達の前に現れてきたが、『２代目キング』である大牙の意思に離反して神風一派を結成した。『初代キング』を復活させる事に執心している。そして遂に修学旅行編で『初代キング』の復活に成功、更にはブラックウィドウを飲み込んで超魔身（ちょうましん）も会得した。

魔人態（まじんたい）時の姿は全身が硬質な皮膚に覆われた巨大な合成獣（キメラ）の様な姿（三本角が生えた頭部、右には獅子の頭部、左にはユニコーンの頭部がせり上がる。腰から蠍とムカデの尻尾、背中に８本の腕）になり、超魔身態（ちょうましんたい）は神々しくも禍々しい騎士の様な外見となる。左

腕の武具からは雷撃の矢を放って急所を撃ち抜き、獣の牙を模した胸部からは超高火力の雷撃を吐き出す。
超魔身態のイメージはグレートワルズ＋サジタリウス・ゾディアーツ
キャラクターイメージは逆転検事２の猿代草太（さるしろそうた）

名前……神代剣護（かみしろけんご）
年齢……２５歳
種族／分類……人間／チェス『ナイト』→神風一派
身長……１７８㎝
体重……７３kg
イメージＣＶ……稲田徹
太陽のような赤い髪と左頬に付いた傷が特徴の男。左手は義手になっている。元ヴァチカン法王庁直属の凄腕エクソシストで『灼熱（エクスカリバー）の聖剣（イグニッション）』の使い手。ゼノヴィアとイリナの上司でもあり、他の信徒からにとっては憧れの存在だった。
だが、神に仕える信徒としての生き方や救った人々の思念に疑問を持ち始め、悩む毎

日に心を侵されていき――――三つ巴の大戦で神が死んで今までの祈りや人助けが全て無駄だった事を知ってしまい絶望。そこへ現れた神風が彼の聖剣を邪聖剣（じゃせいけん）に改造。以降は自分が神に成り代わる為に結託し、『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』を携（たずさ）えた。修学旅行編終盤で『チェス』を離反、神風一派に身を置いた。

『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』の柄にはめられた十字架を顔に付ける事で『黒十字の鎧（こくじゅうじ）』を展開出来る。

鎧のイメージは仮面ライダーイクサ・セーブモード

名前……村上京司（むらかみきょうじ）

年齢……推定外見２８歳

種族／分類……人間↓転生闇人（やみびと）／チェス『ポーン』

身長……１８０㎝

体重……７１kg

イメージＣＶ……小西克幸

新と一誠が最初に対峙した闇人（やみびと）。神風に負けず劣らずの外道な性格で、殺した相手の血を吸って咲く魔性の薔薇を栽培しており、闇オークションも主催するビジネスマン。

グレモリー眷属と幾度も激戦を繰り広げた強者でもある。
魔人態は全身に茨が巻き付いた様な姿で、薔薇を変化させたサーベルでの剣戟や多彩な技を使う他、魂を用いて死者を復活させる『霊魂復活』や超魔身も会得している。超魔身時は植物が混ざった巨大なドラゴンの様な姿となる。
光帝こと八代渉に1度殺されたが、命を2つ持っていたので復活を果たし、今度はディオドラ・アスタロトと結託して復讐の機会を窺っていた。だが、激昂した新の『僧侶』形態の砲撃で絶命した挙げ句、神風に役立たずと吐き捨てられ踏み潰された。
魔人態のイメージはローズオルフェノク

名前……阿久津野大庵――通称ダイアン
種族／分類……人間↓転生闇人／チェス『ポーン』
年齢……16歳
身長……172㎝
体重……65kg
イメージCV……鈴村健一
髪の前中央部分を白く染めたオールバック気味の少年で、一誠の中学時代の同級生。

一誠程ではないがスケベであり、初対面のイリナのスカートを捲ったりパンツの色を聞こうとした。中学時代のあだ名は『スカートめくり大使』。アメリカンな性格で語尾をローマ字表記（例として〝～だＺＥ〟）にしたり、英単語を織り混ぜた話し方をする。

中学卒業後はギタリストを目指す為にアメリカへ留学したが、オーディションに何度も落ちてしまい自殺未遂に至るまで追い込まれていた所を神風にスカウトされ、闇人に転生した後チェスの『ポーン』となってしまう。後述のストレイグ・ギガロプスと同じく幹部の中では新参者。

彼もまた一誠が１度死んで悪魔に転生した事を知ってショックを受けたが、それでも親友に変わりないと言う気持ちを表し、良き好敵手として練磨し合う事を誓った。

魔人態は軽鎧を着込んだ角付きの悪魔の様な姿をしていて、自前のエレキギターを武器として扱う。衝撃波を使う他、ギターから仕込み刀を抜き取る事で鞘となるギター本体は三ツ又の槍と化す。必殺剣は居合いの構えから抜刀して幾重もの剣先を放つ『牙流転生』。

魔人態のイメージモデルは仮面ライダーアーク＋カプリコーン・ゾディアーツ

名前……風魔ヤタロウ

年齢……推定外見２６歳（推定実年齢５００歳以上）
種族／分類……人間→転生闇人／チェス『ルーク』
身長……１９０cm
体重……８９kg
イメージＣＶ……草尾毅

忍者装束にサングラスを掛けた盲目の男で、伝説の忍と呼ばれた風魔小太郎の子孫。魔人態はヤタガラスを模した姿をしている。
強かな傭兵的性格で相手を確実に倒す事を信条としており、その為なら自らの肉体を傷付ける事も厭わない。風魔小太郎の子孫を名乗るだけあって様々な忍術を使いこなす。不意を突く攻撃と忍術を駆使してロスヴァイセを追い詰めたものの、ロスヴァイセの捨て身の攻撃により頭部が千切れ、そのまま絶命した。その際、「某を破ったおなごの顔を一目だけでも見たかった」と盲目を悔いる様な台詞を言い残した。

名前……ストレイグ・ギガロプス
年齢……推定３００歳
種族／分類……はぐれ悪魔→転生闇人／殺し屋→チェス『ポーン』

身長……２０６㎝
体重……１４１kg
イメージＣＶ……高木渉

氷の様な青い眼孔と白い体躯が特徴の闇人。チェスの幹部にしては珍しく人間態が無く、最初から魔人態の姿をしている。典型的な外道で高峰祐希那の主と眷属悪魔を殺害した張本人。殺した理由も〝闇人の力を試したかったから〟と実に腐りきっている。神風から魔銃を受け取ってからはデータ収集の為に乱用してきた。氷の魔力と爪を使った肉弾戦を得意としている。

バトルゲーム時、再び祐希那を殺すと意気込むが激昂した渉の猛攻に成す術無くやられ、最期は渉と祐希那の合体技により跡形も無く消滅した。

名前の〝ギガロプス〟とは巨人のモンスター『ギガンテス』と一つ目の巨人・サイクロプスを掛け合わせている。

イメージモデルは仮面ライダーレイ

名前……バリー・デスペラード
年齢……不明

種族／分類……魔銃（マガン）→転生闇人（やみびと）／武器→チェス『ポーン』→神風一派
身長……２００㎝
体重……９９kg
イメージＣＶ……千葉一伸
元々は神風に製造された武器だったが、ストレイグ・ギガロプスによって意思を吹き込まれ転生した闇人（やみびと）。右腕の長剣と左腕の銃を武器にして戦う。
生物および無生物を闇人（やみびと）に強制転生させる力を有している。
バトルゲーム時に誕生して早々ストレイグ・ギガロプスを見限り、彼に銃弾を打ち込んで暴走させた。
名前の由来は『メダロット』に登場する機体・ガンデスペラード
イメージモデルはＴＧ（テックジーナス）ブレードガンナー

名前……アドラス・ヴェルメリオ
種族／分類……サラマンダー族の亜人（あじん）→転生闇人（やみびと）／神風一派
身長……１８１㎝
体重……７９kg

イメージＣＶ……伊藤健太郎
赤い髪を炎の様に逆立てた龍人（りゅうじん）。浮遊する２つの円盤と炎を武器として扱う。口が悪く相手を侮蔑、挑発するような言動が絶えない。
名前のヴェルメリオはポルトガル語で〝赤〟を意味する。

名前……メタル・Ｄ（ディー）・アズール
種族／分類……リザードマン族の亜人→転生闇人（やみびと）／神風一派
身長……１８５㎝
体重……１０４kg
イメージＣＶ……高橋広樹
神風一派に属するリザードマン族出身の闇人（やみびと）で、全身を鎧で覆い固めている。
紳士的な口調で話すバトルマニアで、主に肉体強化の技を駆使した攻撃を得意とする。
名前のアズールとはスペイン語で〝青〟を意味する。

名前……ガーラント・グリンベルデ
種族／分類……ナーガ族の亜人（あじん）→転生闇人（やみびと）／神風一派
身長……３００㎝
体重……４１０kg
イメージＣＶ……石野竜三

上記の２人と同じく神風一派に属する子分口調の闇人（やみびと）。ナーガ族の出身で巨大な人型の蛇の様な姿をしている。伸縮自在の両腕と全身や口から出すトゲを武器とする。名前のグリンベルデとは〝緑〟の英語『グリーン』とドイツ語の『ベルデ』を掛け合わせている。

名前……バジュラ・バロム
年齢……推定５０００歳以上
種族／分類……闇人（やみびと）の真祖・『初代キング』／神風一派
身長……２６３㎝
体重……１２２kg

イメージCV……若本規夫

三つ巴の大戦時に悪魔、天使、堕天使の三大勢力を滅ぼそうとした闇人（やみびと）の長（おさ）で、骨で構成された人型サイズのドラゴンの様な姿をしている。一人称は余（よ）もしくは我。

〝闇人（やみびと）こそが最強の魔族〟と言う危険思想のもとで三大勢力どころか全ての異形にまで牙を向けようとしたが、三大勢力と『闇皇（やみおう）の鎧』を奪った竜崎総司によって封印された。しかし、魂の欠片は鎧に残留していた上、現所有者の新が鎧を使用し続け進化させてきた影響により、当初は新の意識内のみの存在だったが……神風が各地にある封印の楔（くさび）を破壊した為に戒めが解けた。更に神風の作った神器（セイクリッド・ギア）――『邪眼の闇籠手（ネメシス・ギア）』を依り代に完全復活を果たして新達の前に初めて姿を現した。

闇を用いた攻撃を得意としており、具現化させた闇の爪での肉弾戦が主な戦闘スタイル。復活したばかりにもかかわらず、グレモリー眷属と『禍の団（カオス・ブリゲード）』英雄派を纏めて圧倒するほど戦闘力は極めて高い。

名前の由来はデュエルマスターズの進化クリーチャー『超龍バジュラ』と『悪魔神バロム』

イメージモデルは冥府神ドレイク

名前……伊坂威月（いさかいづき）
年齢……推定外見３８歳（実際はおよそ３５００歳）
種族／分類……純正闇人（やみびと）／魔剣将官（まけんしょうかん）
身長……２０３㎝
体重……１２９kg
イメージＣＶ……藤原啓治

かつて三つ巴の大戦時に割り込み、悪魔、天使、堕天使の三大勢力を滅ぼそうとした『初代キング』の腹心として仕えていた男。人間態はオールバックの髪にサングラス、黒いスーツの上から黒コートを羽織り、エージェントの様な厳（いか）つい風体をしている。

三つ巴の大戦時、『初代キング』が封印された直後――自ら編み出した次元転移術（じげんてんいじゅつ）を使用してて別次元の世界であるフロニャルドへと逃げ延びた。

紳士的かつ知的な口調だが性格は戦闘と破壊を好む生来非道の悪人で、フロニャルドを「価値無き無意味な世界」と称して消滅させようとした。

真の姿――魔人態は黒と青を貴重とした禍々しい怪鳥の様な風貌をしており、蒼い焔（ほのお）と自前の長剣を巧みに操る。自らの意思で自由自在に羽も飛ばせる他、胸の中央にある目玉を輝かせる事で念動力も発生させる。更にフロニャルドの魔物を喰い続けた事

により、不老不死の再生能力も得た（ただし、使い過ぎると回復スピードが遅くなる）。
必殺技は長剣に蒼い焔を纏わせ、X字に切り裂いて斬撃を飛ばす『魔剣技クロスフレイム』。燃え盛る6枚の翼と併用する事で更に手数が増え、パワーも増す。
当初は新を含めフロニャルド陣営を圧倒していたが、〝自分達の世界を守りたい〟と言う思いで一丸となった新とフロニャルド陣営の苛烈な連続攻撃を受け続け、再生能力が遅延化。苦戦させられた事に憤りを感じた彼は渾身の魔剣技クロスフレイムでフロニャルド陣営を返り討ちにした。その後、新との一騎討ちに持ち込んだが……自らの焔を逆に利用された新の攻撃を受けて倒れる。しかし、不死身であるがゆえに時間を置けばいずれ甦る事を言い残し、撤退しようとするが――――新の『暗黒捕食者（ダークグリード）』によって喰われ、体内に閉じ込められる形で完全敗北した。
その後、京都で精神体として新の意識に度々現れては力について助言を送り、新の『女王（クイーン）』形態を昇華させてから今度こそ完全に消滅してしまった。
キャラのイメージ元は戦国ＢＡＳＡＲＡの松永久秀
外観イメージはピーコックアンデッド
技のイメージはマッドトリン

名前……オッパイジャー1号・斬撃のコジュウロウ
年齢……おっぱいを愛する者に年齢などいらん
種族／分類……純正闇人（やみびと）／無し→乳闇戦隊オッパイジャー
イメージCV……石田彰

新撰組の羽織を着込んだ狼型の闇人（やみびと）。首に巻いたマフラーの色は赤で、乳闇戦隊（ちちやみせんたい）のリーダーを務めている。元々は闇人（やみびと）の中でも落ちこぼれだったのだが、自分と同じ境遇にいる後述のリョウマ、ノブナガと出会い、更に新と一誠の戦法（スケベ技）を模範した独自の必殺技を開発した結果、女性に対して無双の強さを発揮するようになった。

戦闘スタイルは闇虎徹（やみこてつ）と呼ばれる日本刀を用いた剣術を得意とする。

ライザーを復活させる修行の最中に現れ、同伴していた新、一誠、渉を結界に閉じ込め、ライザー眷属を終始圧倒した。しかし、レイヴェルを泣かした事で新達の怒りに火を点けてしまい、新のクロス・バーストによって吹き飛ばされてしまった。

3人とも辛うじて生きており、現在は新と一誠に「次に遭ったらおっぱいについて語り合おう」と言い残して各地を放浪している。

劇中では語られてないが、好きなおっぱいは美乳（びにゅう）タイプらしい。

必殺技はオーラを溜めた日本刀から剣戟波（けんげきは）を放ち、それに触れた女性の衣服を細切れ

にする『洋服斬壊（ドレス・スラッシュ）』
イメージ元ネタはメダロットの登場機体シンセイバー
名前の由来は片倉小十郎

名前……オッパイジャー2号・迫撃のリョウマ
イメージCV……矢尾一樹
年齢……ワタシは永遠の17歳なのだよ！
種族／分類……純正闇人（やみびと）／無し→乳闇戦隊オッパイジャー
犀（サイ）の様な甲冑で身を固めた闇人（やみびと）で、マフラーの色は青。ノリの良さそうな性格で発言や仕草がいちいち大袈裟である。
メンバーの中でも防御力が非常に高く、相手の攻撃を受けてから反撃に移ると言った後手の戦法を得意とし、特に女性との戦闘に於いてはしつこいぐらい粘着質になる。大袈裟な名前を付ける割に普通のパンチやキックを放つが、威力は桁違いに高い。終始祐希那を圧倒していたが、後で参戦した渉の本気の一撃で倒れた。
好きなおっぱいは巨乳タイプ

必殺技はオーラを溜めた拳で女性の衣服を粉砕する『洋服破拳（ドレス・ナックル）』
イメージモデルは仮面ライダーガイ
名前の由来は坂本龍馬

名前……オッパイジャー3号・銃撃のノブナガ
年齢……教えて欲しいだと？くだらん
種族／分類……純正闇人（やみびと）／無し→乳闇戦隊オッパイジャー
イメージCV……置鮎龍太郎
甲角（かぶとづの）を生やした闇人（やみびと）で、マフラーの色は黄色。機械の如く冷徹な口調で、しばしば相手を見下す発言をする。前述のコジュウロウ、リョウマと共にライザー眷属を圧倒するが、怒りに燃えた一誠の拳打一撃で遠くの岩にまで吹き飛ばされて敗北。
オーラと銃剣を用いた遠距離戦を得意とする。
好きなおっぱいは貧乳タイプ
必殺技は銃剣からオーラの弾丸を放ち、着弾した女性の衣服を消滅させる『洋服消弾（ドレス・トリガー）』
イメージモデルは冥府神サイクロプス

名前の由来は織田信長

オリジナルキャラクター紹介（地獄兄弟編）

名前……幽神正義（ゆうがみまさよし）
年齢……１９歳
種族／分類……人間／ＳＳ（ダブルエス）級賞金首『地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）』
身長……１７８㎝
体重６２kg
イメージＣＶ……三木真一郎

ボサボサの黒髪に赤いメッシュを入れ、ボロボロの革コートに拍車付きのブーツと――ならず者の様な服装をした若い男。カップ麺を主食としていて、コンビニ・スーパーマーケット通いは欠かせないらしい。

実は一誠、松田、元浜と同じ出身中学――私立影車学園（しりつかげぐるまがくえん）の３年生兼生徒会会長で人望も厚かったが、松田と元浜の策略によって覗きの濡れ衣を着せられ、後述の弟である悪堵（あくと）と共に自主退学と言う形で学園を追い出された。その後は父親にも見限られ、母親はショックで昏倒――そのまま精神も壊れて去年に死亡。両親も学園生活も失った

が……皮肉にもその時の怒りと憎しみにより神器（セイクリッド・ギア）が覚醒、放浪人およびお尋ね者にまで堕落した。

所有する神器（セイクリッド・ギア）は左足を覆う脚甲型の『蹴獄の足枷（スマッシング・ギア）』で、それを用いた足技主体の戦法を得意とする。

禁手（バランス・ブレイカー）はエメラルドグリーンに輝く全身鎧（プレート・アーマー）――『蹴獄の緑鎧（スマッシング・ギア・ビリディスメイル）』。当初はそれだけだったが……一誠に対する怒りと憎しみによって背中からは翅（はね）、両肩からは触手状に伸縮自在な鉤爪が生え、足にも刃が隆起していくなど――凶悪な進化を重ねている。（ドライグ曰く、神滅具（ロンギヌス）に化ける可能性がある）

怒りと憎しみをぶつけるが如く悪堵と息の合ったコンビネーションで一誠を追い込んでいくが、目の当たりにした一誠の不屈の精神に翻弄され、その前に誘拐したアーシアの優しさを思い起こして一時退却。しかも、分け隔て無く接してきたアーシアに今まで培（つちか）ってきた猜疑心や憎しみの心を揺るがされた挙げ句――彼女に惚れてしまった。駒王町（くおうちょう）から去った後日、アーシアにライラックの花を贈り、密かに自身の恋心を打ち明けた。（もっとも、一誠とアーシアはその事に気付いていない……）

名前の由来は〝歪み〟と〝正義〟

元ネタは『仮面ライダーカブト』の矢車想（やぐるまそう）

鎧のイメージは仮面ライダーキックホッパー＋グリラスワーム

名前……幽神悪堵（ゆうがみあくど）
年齢……１７歳
種族／分類……人間／ＳＳ（ダブルエス）級賞金首『地獄兄弟（ヘルブラザーズ）』
身長……１７３cm
体重……５９kg
イメージＣＶ……柿原徹也
ボサボサの茶髪に白いメッシュを施した幽神正義（ゆうがみまさよし）の弟。正義と同じようにならず者スタイルの服装をしている。喧嘩っ早い性格で相手を挑発する態度が絶えない。元私立影車学園の１年生兼生徒会副会長だったが……前述の一件で暴走し、何人もの生徒を病院送りにしてしまった。その後は正義と共に神器（セイクリッド・ギア）が目覚め、お尋ね者に成り下がった。
所有する神器（セイクリッド・ギア）は右手を覆う籠手型の『拳獄の手錠（ライジング・ギア）』で、それを用いたボクシングやムエタイなど掴み技を得意としている。
禁手（バランス・ブレイカー）は兄の正義と同系統の全身鎧（プレート・アーマー）――『拳獄の銅鎧（ライジング・ギア・ブロンズメイル）』

名前の由来は〝歪み〟と〝悪(あく)どい〟
元ネタは『仮面ライダーカブト』の影山瞬(かげやましゅん)
鎧のイメージは仮面ライダーパンチホッパー＋仮面ライダーザビー

オリキャラ紹介（イッセー眷属候補編）

名前……ユキノ・アンジェル
種族／分類……人間／元『禍の団（カオス・ブリゲード）』構成員
年齢……１８歳
身長……１６３㎝
体重……５２kg
イメージＣＶ……大浦冬華

白と青を基調とした服に身を包み、水色がかった銀髪ショートヘアーの美少女。元々は『禍の団（カオス・ブリゲード）』の別動隊として動いていたが、後述のシド・ヴァルディによって拠点を潰された為、逃亡してきた。

物腰が柔らかい口調で誰に対しても敬語で話し、イッセーやリアス達に対しても〝～様〟と敬称を付ける。また胸もイッセー好みに大きく、その柔らかさはイッセー曰く天然素材１００％のフカフカ枕。

所有する神器（セイクリッド・ギア）は自分自身または肉体の一部を動物へと変化させる『獣達の楽園（ゾーオン・ガーデン）』

シドの追撃から逃れる為に鉄の森へと逃げ込み、そこで大公からの依頼を受けたイッ

セー達と出会う。最初はシド・ヴァルディに対して恐れを抱いていたが、自分達を守るべく立ち向かうイッセーに心を動かされ、シドに立ち向かう事を決意。

後にイッセーの眷属に立候補し、重要参考人として冥界に移送された。余談だが、彼女には生き別れの姉がいるらしい……。

イメージモデル及び名前の元ネタはフェアリーテイルのユキノ・アグリア

名前……ディマリア・ロディーナ

種族／分類……人間／元『禍の団（カオス・ブリゲード）』構成員

年齢……２２歳

身長……１６６㎝

体重……５１kg

イメージＣＶ……茅野愛依

右腕に籠手、左腕に羽飾り、腰布とチューブトップを胸に巻き付けた露出度の多い金髪の女騎士。

前述のユキノと同じく元『禍の団（カオス・ブリゲード）』の別動隊構成員で男勝りな性格をしている。尚、

胸はユキノよりも大きい。
所有する神器（セイクリッド・ギア）は視界に入れた物質または生物の速度を一定時間任意に加速、減速させる『速度世界の眼差し（ツァイト・カリキュレート）』
彼女も当初はシドを恐れていたが、イッセーに突き動かされて共闘し、神器（セイクリッド・ギア）を駆使してイッセーをサポートした。
その後、ユキノと同じくイッセーの眷属に立候補し、重要参考人として冥界に移送された。
イメージモデル及び名前の元ネタはフェアリーテイルのディマリア・イエスタ

名前……　チェルシー・ルビナス
種族／分類……人間／元『禍の団（カオス・ブリゲード）』構成員
年齢……２０歳
身長……１５７㎝
体重……４９kg
イメージＣＶ……名塚佳織

オレンジのロングヘアーに赤いリボン付きのヘッドホンを着用し、常に棒付きキャンディーをくわえている美少女……と見せかけた成人女性。別動隊メンバーの中で1番小柄である。（当然、胸も程よく小g――ギャアっ！）

年齢とは裏腹に小悪魔的な仕草や笑顔を振り撒き、明るく社交的な性格をしている。

所有する神器（セイクリッド・ギア）は空間に視認不能な爆弾を設置し、起爆させる『爆炎の舞踏会（ロード・エクスプロジオーネ）』、サイズと数も自在に調節出来る。

彼女も最初はシドを恐れていたが、イッセーに惹かれて恐怖を克服。上述の神器（セイクリッド・ギア）でシドを牽制した。

その後もイッセーを気に入って眷属候補に立候補し、ユキノ達と共に重要参考人として冥界に移送された。

イメージモデル及び名前の元ネタはアカメが斬るのチェルシー

オリキャラ紹介（リュオーガ族編）

後述の『災厄の漆黒竜（インフェルニティ・ドラゴン）』オニキスによって創造された古代の一族でドラゴンの血と力を受け継いでおり、人間と然程変わらない姿の者、人外染みた姿をした者と分かれている。リュオーガ族特有の痣が体の何処かにある。

他の種族から忌み嫌われ、迫害を受け続けた結果――――〝自分達以外の種族は滅びるべき敵〟と言った歪んだ思考を持つようになってしまった。

一族の中には竜の力を最大限にまで引き出せる者がいるが、多くの者が力に耐えきれず自壊、または病や他種族による駆除にて命を落とし、現在生き残った者は後述の５人しかいない。

封印される前は『竜獄の宴』と呼ばれる催し物を常々開催し、招待客を殺害し続けていた。

四大魔王と竜崎総司に関する者としてグレモリー眷属・シトリー眷属の抹殺を目論み自分達の居城フローズンパレスに誘き寄せたが最終的には敗れ、現在は敵対しない事を条件に南極へ隔離されている。

種族名の由来は竜王＋牙

元ネタは『コロッケ！』のビシソワーズ家

名前……ラース・フレイム・ドラグニル
種族／分類……リュオーガ族／リュオーガ族の長、『竜星（りゅうせい）の間』の主
年齢……推定外見２０歳
身長……１７４㎝
体重……６０kg
イメージＣＶ……宮野真守

リュオーガ族の筆頭、外見が新に似た金髪緑眼の青年。涼しげで優しそうな雰囲気を出しているが本性は冷酷で残忍、自身達以外の種族は滅ぶべきだと豪語している。火竜（かりゅう）の血と力を受け継いでいる為、炎を使った戦法を得意とする。後述のオニキスの力が解放されたのを機に砂漠の奥底から他の４人と共に復活、肩慣らしに街や村をいくつも滅ぼす。グレモリー、シトリー眷属、アザゼル、竜崎総司、セラフォルーの前に現れて四大魔王と竜崎総司に報復を宣告。セラフォルーとソーナを人質にして、自分達の居城――南極に聳（そび）えるフローズンパレスに招待した。

そこでリュオーガ族特有のゲーム『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』を開催、グレモリー、シトリー眷属の抹殺を目論んだ。『竜星の間（りゅうせい）』のくじを引き当てたリアス、朱乃、渉、祐希那を人間の姿のままでも圧倒していたが、更に絶望感を与えるべく竜の力を解放――――竜人態（りゅうじんたい）へと変貌。竜奥義『消滅の十字火竜（クリアー・ザ・グランドクロス）』でリアス達を瀕死へ追い込んで勝利した。

その後、グランドフィナーレで新、一誠と対峙。圧倒的な力で追い詰めていく途中――――レモネードが祐斗達に苦戦していた事に腹を立て、彼女もろとも新達を殺そうと上述の竜奥義を放った。しかし、新達どころかレモネードも死んでいない事に激昂、レモネードを助けたニトロを無慈悲にも消滅させた。

ラースの所業に怒る新と一誠に対し、遂に究極態を披露。凄まじい猛攻で新の左腕を喰い千切り、一誠も瀕死へと追いやった。自分の勝利を確信し、哄笑していた最中――――復活した新が未知の形態へ進化したのを見て動揺・激昂した。新を〝出来損ないの雑種〟と貶して叩き伏せようとするが……自分と互角以上の力に押され、仲間との想いを乗せた新の拳に敗れ、城外まで吹き飛ばされた。

その後は自害を図ろうとしたが、レモネードの制止と新の言葉によって独り善がりの愚かさを痛感、心の底から負けを認めた。

決戦後、お互い敵対および干渉しない事を条件に他の４人と共に南極へ隔離された。

名前の由来は憤怒を意味する英語Ｗｒａｔｈ（ラース）、フェアリーテイルに出てくる姓『ドラ

グニル』
竜人態のイメージモデルは龍皇子サラマンデス
究極態のイメージモデルはｓｉｃ版仮面ライダーウィザード・オールドラゴン

名前……アノン・アムナエル
種族／分類……リュオーガ族／『泉の間』の主
年齢……推定外見１９歳
身長……１６７㎝
体重……５９kg
イメージＣＶ……山口勝平

右目にモノクルを着けた手品師風の少年。陽気な口調で語尾に「～ニャ」と付けて喋る。ステッキを武器とし、その場にいる者を疑似空間に転送したり相手を捕らえる拘束具を生み出したりと様々な術を使い、瞬間移動や幻影を駆使した不意討ちおよびトリッキーな戦法を好む。『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』では『泉の間』を守護している。
トリッキーな戦法と竜奥義『魔術師の幻影（トリッキー・レディオ）』で新と一誠を翻弄していく最中、新の左腕にリュオーガ族の証である痣を発見し、自身の首筋にもある痣を見せつけて新を困惑

させた。新の出生の秘密を暴露して新を放心させ、言葉巧みに洗脳しようとしたが……一誠の叱咤激励を受けて吹っ切れた新に背後から剣で貫かれ、泉の中へ沈んだ。

決着がついたと思われた刹那、怒りと憎しみをさらけ出して最後の足掻きとばかりにステッキから極大の砲撃を見舞うが――――新のクロス・バーストと一誠のドラゴンブラスターによる波状攻撃で跡形も残らず消滅した。

決戦後は新の計らいによって『霊魂復活（ソウルリバイヴ）』で蘇生された。

名前の由来は『遊戯王ＧＸ』のアムナエル

名前……ニトロ・グリーゼ
種族／分類……リュオーガ族／『血溜（ちだま）りの間』の主
身長……２３７㎝
体重……３１２kg
イメージＣＶ……檜山修之

暴走族の様な風貌をした異形で〝爆進帝王〟と自称している。テンションがかなり高く、他のリュオーガ族も彼のノリにはあまりついていけないらしい。頭も悪く慣用句

などの使い方をよく間違える。（※例として年寄りの冷や水?年寄りの冷奴（ひややっこ）など）
　更には暴走もとい妄想癖も激しく、ギャスパー、小猫、仁村の３人は脳内で〝自身に好意を寄せる後輩キャラ〟と位置付けており、特にギャスパーに対しては異常なまでの愛情を見せる。（しかも、ギャスパーが男の娘と発覚しても全く気にしていない）
『血溜りの間』ではギャスパー、小猫、仁村、ロスヴァイセと対峙し、体の頑丈さに任せたゴリ押し戦法で４人を苦戦させる。更に鋼鉄の様な鱗に覆われたトカゲの様な竜人態へと変貌し、圧倒的な防御力で打撃砲撃を無力化していった。（なお、この姿になると嗅覚も飛躍的に上昇するらしい）
　序盤は圧倒していたが、ギャスパーの奇策に振り回されてから形勢逆転。小猫と仁村に関節を外されたせいで自慢の豪腕が使えなくなり、ロスヴァイセの魔術砲撃によるピンポイント攻撃で胸部の鱗を砕かれ、心臓が露出。そこへ小猫と仁村の打撃が加わり、更に開いた口から体内へロスヴァイセのフルバーストが炸裂し、全身から火を噴いて倒れた。
　その後はリュオーガ族の掟に従って自分を殺すよう進言したが、ギャスパーの叱咤を受けて改心。グランドフィナーレでは乱入してラースの竜奥義からレモネードを救い、仲間を殺そうとするラースに異を唱え激昂した。
　果敢にも立ち向かっていくがラースに胸を貫かれ、『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』によって跡形も無

く消された。終戦後、新のアノンと同じ様に『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』で蘇生された。
名前の由来はニトログリセリン
通常態のイメージモデルは銃頭サンバッシュ
竜人態のイメージモデルはサンゲイザーファンガイア

名前……長光重蔵(ナガミツ・ジュウゾウ)
種族／分類……リュオーガ族／『月影(げつえい)の間』の主
身長……２４４㎝
体重……５１２kg
イメージＣＶ……岩崎征実

全身が灰色１色に染まった異形、相手を萎縮させる様なドスの利いた声音を発する。戦闘スタイルは主にパワーに任せた力押しタイプだが――全身を覆った外殻を剥がす事で速度が上昇し、剣術を使用する。頭部には２本の巨大な角が生えており、そこから雷を放つ事も可能。
『月影の間』にて裕斗、ゼノヴィア、イリナ、由良、巡と対峙し、上述の２つの形態で健闘、更に竜奥義『満月一閃(まんげついっせん)』で５人を戦闘不能寸前まで追い詰めた。〝他人と馴れ合う

〝事を心底嫌い、裕斗達を侮蔑したが……チームプレイを駆使した裕斗達の猛攻に押され始め、形勢逆転。再び出した竜奥義『満月一閃』もデュランダルの波動と合わさった斬撃によって打ち砕かれた。

致命傷を受けてもなお、戦意を消さずに向かっていくが、裕斗から「傷だらけの相手をこれ以上斬るのは剣士の主義に反する」と言われ、リュオーガ族の誇りを守るべく自ら刀で顔面を刺し貫き、警告とも取れる言葉を遺して灰となって消えた。（その際、裕斗はリュオーガ族の生き方に対して静かな怒りを見せていた）

イメージモデルはドラゴンオルフェノク

キャラクターイメージは龍が如くシリーズの郷田龍司

竜奥義のイメージは牙鬼萬月（きばおにまんげつ）の牙陵道（がりょうどう）・萬月斬

名前……レモネード・フォールン

種族／分類……リュオーガ族／『人形の間』の主

身長……１４４㎝

体重……４１kg

イメージＣＶ……野中藍

リュオーガ族の紅一点。背中を大きく露出させたゴスロリ服を着込み、髪をツイン

テールに束ねている。事ある毎に「……クスッ」と小さく笑う癖があり、おっぱいのサイズはイッセー曰く小猫以上アーシア未満らしい。『竜獄の宴』では『人形の間』を守護している。

視認が困難な糸状のオーラを用いて物体を飛ばす他、対象人物に接続して操る戦法を得意とする。その中でも竜奥義『道化の遊戯』は相手の思考までも手に取るように分かる。

『人形の間』にて開始早々、匙を『道化の遊戯』で操って椿姫、花戒、草下を翻弄し追い詰めるが、糸を見破られて切断され、反撃に出た匙の黒炎をくらった。――しかし、彼女はリュオーガ族に伝わる〝竜の呼吸法〟を会得しており、逆に黒炎を喰らって『火竜の息吹』で4人を一瞬で戦闘不能に追い込んだ。

その後はグランドフィナーレにも参加、新と一誠以外の残存メンバーを相手にするが、多勢に無勢ゆえかラースに助けを求める。しかし、それがラースの怒りに触れ、彼の竜奥義で消滅させられそうになるが――寸前でニトロによって救出される。自分の代わりに死んだニトロを見て発狂し、大いに泣き叫んだ。

終戦後は自害しようとするラースを止める、〝独りになりたくない〟と言う思いをぶつけるなど年相応の態度を見せた。

名前……『災厄の漆黒竜（インフェルニティー・ドラゴン）』オニキス

イメージCV……玄田哲章

リュオーガ族を生み出し、悪魔、天使、堕天使だけでなく他のドラゴンからも忌み嫌われた漆黒の悪竜（あくりゅう）。大昔に滅ぼされ、残された欠片は新＝ゼノン・ブラック・ドラグニルを創造する為に使用された。

サイラオーグ戦で初めて具現化され、暴走した新が変異した。リュオーガ族戦でも新の精神内に現れ、負の感情と力を撒き散らすよう示唆する。

イメージモデルはレッドアイズ・ブラックドラゴン

第８章　正々堂々のチェックメイトとセカンドキング

闇皇と戦乙女と魔銃

「これはどういう事なんですか！」

とある休日

朝一番でロスヴァイセが新に怒鳴っていた

「な、何がどうなんだよ？」

「何故あの寮には女性しか住んでいないのですか！新さん、まさかあの女性達を……は、侍らせたのですか!?節操が無さ過ぎます！不謹慎です！」

どうやら、宿泊寮の住人が女性（元ディオドラ眷属）しかいない事を問い質しているようだ

会話の内容を聞いていたレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトは首を振って嘆息した

「あなたねぇ、アラタは元々こういう男なのよ。ここや寮に住むからには知ってて当然でしょ？」

「そうだ。皆それを承知で住んでいる。何の問題も無い筈だ」

「問題大有りですよ！例えば、その……エ、エッチな事をしたりとか……」

「うちらはぜ～んぜん気にしないも～ん。アラタがエッチで浮気性なのは知ってるしい。そんな事ばっかり気にしてるから、考え方が古臭いって言われるの、おばさん♪」
「おばっ、おばさん!?わ、私はおばさんじゃなぁぁぁぁぁぁぁぁい！まだ１８歳です！処女です！私だって素敵な彼氏とエッチな事したいのにいいいいいいいいいいっ！うわぁぁぁぁぁんっ！」
　ロスヴァイセはミッテルトのおばさん発言に泣き出し、自虐的な発言をしてしまう
　リアスは腕を組んで考え込む
「ロスヴァイセ、確かに新は多くの女性を侍らせているわ。でも、今それを問いただしても彼は改善しないの。元からこういう子なんだから」
「あらあら、ロスヴァイセさん。そんなにお堅いとやっていけませんわよ?」
　朱乃が新に抱きついてロスヴァイセに言う
「朱乃さん！あなたは良いんですか!?浮気されているのですよ!?」
「うふふ、これが新さんなのですよ?新さんは欲深いお人。他の女性を見捨てない主義を持っているのですから。それに、父さまと母さまにも許可は得ていますわ♪」
「私も問題は無い。新の事が好きだし、子作りが出来るなら」
「……郷に入っては郷に従えです。先輩はエッチですから、自分の主義を曲げるつもりは無いそうです」

ゼノヴィアと小猫も参戦し、ロスヴァイセはワナワナと震える
「新さん！やっぱりあなたは節操無しのエッチ蝙蝠ですね！もう結構です！今から私は新しい住居を探しに行きます！」
「住居って、宛があんのかよ？……聞いてねぇし」
新の言葉を聞く前にロスヴァイセは出ていってしまった……
しばらく静寂が流れ、リアスが新の肩に手を置く
「新、追い掛けて連れ戻して来て。元々はあなたが原因なんだから」
「俺何にも悪い事してないんだけどな……」
「なんかメンドイおばさんね、アラタ」
「元ヴァルキリーだから仕方ねぇよ。あ～……留守番頼むわ。探しに行ってくる」
「新さん、ロスヴァイセさんもこの家に住ませるのですか？」
「いや、それは本人次第だ。とにかく、行く宛も帰る宛も無い女を放ってはおけねぇだけだ」
新は自前のバイクを走らせ、ロスヴァイセを探索しに行った

『さぁ、いらっしゃいいらっしゃい！本日の目玉商品はこのサイクロンジェットクリーナー！強力なパワーでどんな小さなゴミや埃も楽々吸引！用途に合わせた付け替えノズル複数を付けて、たったの９８００円！９８００円だよ～！』

某家電製品店で店頭販売されている最新型の掃除機

それを住居の屋根の上から見下ろす男――――闇人がいた

「サイクロンジェットクリーナーか。この魔銃の実験第１号に相応しいかもな」

神風から魔銃を渡された闇人――――ストレイグ・ギガロプスは店員が持ち場を離れた隙にサイクロンジェットクリーナーを強奪

人気の無い場所で実験を開始した

「さあて、改良した魔銃の威力を試させてもらうか」

ドオンッ！

目玉商品サイクロンジェットクリーナーに黒い弾丸が埋まり、やがて異変が起こる……

掃除機が魔力を帯び、人型の異形と化していく

右手に吸引ノズルを持ち、背中に貯蔵タンクが備わった闇人が製造された

それを見たストレイグは感心した様子で見る

「なかなか良いじゃねぇか。人間や他の種族だと反抗するかもしれないが、こうした機

械なら忠実な闇人(やみびと)になるって事か」
「機械より完璧な物はありません。闇人(やみびと)の敵は全て片付けます。私の掃除機で」
「ますます気に入ったぜ。この魔銃(マガン)ってヤツは。よし、適当に暴れてこい。データも色々採取しなくちゃならねぇからな」
「良いですよ。適当に暴れてきます。私の掃除機で」

その日の夜、ロスヴァイセは疲弊した様子で公園のベンチに座っていた
「はぁ……散々歩き回ったのに1軒も見つからなかった……。マンションは高くて手が出ませんし、アパートも手頃なのがありません……」
ロスヴァイセは新しい住居となりそうなマンションやアパートを探し回ったのだが結局見つからず
家賃が高いとケチってしまったり、満室だったりで住居を確保出来なかった
「勢いで出ていってしまいましたが、どうしましょう……このまま帰るなんて事は出来ないですし……。かと言って、このまま野宿と言うのも……へくしゅっ」
くしゃみをするロスヴァイセ

とりあえず寒さを凌げる場所を探す事にした
「そこのお姉さん。掃除機は如何ですか？」
「……っ？掃除機――――って、何なんですかあなたは!?」
ロスヴァイセは当然驚いた
掃除機の様な人型の異形が目の前におり、話し掛けてきたのだから
「私、目玉商品の闇人(やみびと)らしいのです。今なら９８００円ですけど、買います？」
「何を言っているのですか!?それに闇人(やみびと)と言いましたね！」
「そうですよ。他の種族を殺す闇人(やみびと)ですが何か？」
「闇人(やみびと)なら、倒します！」
ロスヴァイセは戦闘態勢を取り、闇人(やみびと)は掃除機のノズルを左手にバウンドさせながら首を左右に往復する
「はいはい。戦いますか。じゃあ手っ取り早く終わらせましょうか」
「元ヴァルキリーの力を受けてみなさい！」
ロスヴァイセは周囲に魔方陣を展開して魔術砲撃を放つ
四方八方から降り注ぐ攻撃に対し、闇人(やみびと)は右手の吸引ノズルを構えた
「吸い込みましょうか」
ズイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！

凄まじい吸引音を放ち、ロスヴァイセの放った魔術攻撃が全てノズルに吸い込まれていく

「――――っ!?わ、私の攻撃を吸い込んでる!?」

狼狽するロスヴァイセを他所に、闇人(やみびと)は攻撃を吸引し終えた

「あまり強くないですね。お返ししましょう」

そう言うと、背中のタンクに溜められた魔力がノズルから発射される

魔力が枷の様な形となってロスヴァイセの四肢を捕らえ木に貼り付けた

「きゃあっ!な、何なんですかこれは!?」

「それは今さっき吸い込んだ魔力を枷状にした物です。余程の力が無いと外れませんので」

闇人(やみびと)は自慢気に説明した後、床用のアタッチメントを取り付けて先端をロスヴァイセに向ける

「な、何をする気なんですか?」

「何って――――脱がします」

ズイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ!

ビリビリビリィッ!

ロスヴァイセの上半身を覆うスーツが掃除機に吸い込まれ、ブラジャーが露出した半

裸姿となった
「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！なんて事をするんですか！このスーツ高かったんですよ!?タイムセールで買った特売品なのにいいいいいいっ！」
「面白い女性ですね。裸にされる事よりも服の方が大事ですか。それじゃ続けましょう」
今度はロスヴァイセの鎧の腰垂れを吸い込み、続けてストッキングも吸い込んでいく
ロスヴァイセの衣類は上下の下着と靴下だけになった
「では最後に、そのブラジャーを吸い込んじゃいましょうか」
「ひっ!?や、やめてください！私、まだ誰にも裸を見られた事が無いんです！素敵な彼氏もいないのに裸を見られるなんて嫌です！」
「厳密に言えば“ほぼ”裸にします。私はね、女性のパンティと靴下だけは残す主義なんですよ。そこのところ、お間違えが無いように」
ズイイイイイイイッ
掃除機のノズルがロスヴァイセのブラジャーをゆっくり吸引していき、プチプチとブラジャーが裂けていく
「い、いやぁっ……！助けて！助けて！新さぁん！」
ロスヴァイセは涙目になりながら思わず新の名を叫ぶが、当然ここにはいない

闇人はおかしそうに嘲笑う
「無駄ですよ。誰かを呼んだとしても、闇人の私に敵う訳が――――」
「ウィリーライダー！」
ドガッ！
バイクの前輪が激突し、闇人は地面を転げ回る
バイクに乗った輩がヘルメットを外し、正体を明らかにした
「よっ、ロスヴァイセ」
「……ッ！新さん！」
「ったく、あちこち探し回ったぜ。それにしても、お楽しみの最中だったか？乳首見せてるし」
「えっ？」とロスヴァイセは視線を闇人の方に移す
――――闇人のノズルにブラジャーがくっついている――――
自分の胸に視線を移すと、ブラが無くなっていた
「……ひぐっ、ぐすっ……み、見ましたね……？見ましたね……？ふえぇぇぇぇぇぇぇぇんっ！新さんに見られたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「だ～もう、泣くなっつぅの」
新は闇皇になってロスヴァイセを捕らえている枷を破壊

ロスヴァイセは解放された直後に胸を隠して泣きじゃくる
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！まだ素敵な彼氏とキスもエッチな事もしてないのに裸を見られたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！どうしてくれるんですか！新さん！責任取ってください！」
「俺のせいなの!?俺が悪いの!?無茶苦茶な事言わないでくれる!?」
「無茶苦茶なんかじゃありません！だいたい、あなたは女性の裸を見たのにお詫びの言葉すら言わないのですか!?最低です！」
「助けに来た俺が何故責められなきゃならないんだ!?」
「夫婦漫才はそこまでにしてもらえますか？」
バイクで吹っ飛ばされた闇人が起き上がる
「つーかロスヴァイセ、何なんだ？あの掃除機みたいな化け物は？」
「ぐすん……闇人らしいです……」
「闇人？あんな奴は今まで見た事がねぇぞ……ま、どちらにしろやるしかねぇわな！」
新は闇皇剣を出して構える
しかし、闇人の方は戦う気が無い様子を見せる
「あ～あ、何だかシラケてしまいましたよ。この辺で失礼させていただきます」
ズドドドドドドドッ！

ノズルから魔力の塊が無数に撃ち放たれ、新は全部を剣で切り裂く
切り終わると、闇人（やみびと）の姿が何処にも無かった……
「チッ、逃げやがったか。ほら、ロスヴァイセ。もう泣くなって」
新は闇皇（やみおう）の姿を解除し、上着のコートをロスヴァイセに着せる
「帰るぞ」
「か、帰るって……？私、出ていって――――――」
「関係無い。その様子じゃ見つからなかったんだろ？だったら、寮に住めよ」
ロスヴァイセは新の慈悲深い言葉に涙を流した
「い、良いんですか!?私が自分から出ていったのに、新さんは許してくれるんですか!?」
「許すも何も、住まいの無い女を放っておけない質（たち）なんだよ。俺は」
「うううっ！新さんは優しいです！オーディン様とは大違いですぅぅぅぅっ！うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
「はぁ……よく泣くヴァルキリーだこと……」
その後、ロスヴァイセは新の中では『泣き虫ヴァルキリー』と言う不名誉な称号を付けられてしまう……

「と言う訳で、今日から新さんのお家に厄介になります。皆さん、よろしくお願い致します」
ロスヴァイセの言葉に驚く面々と頭を掻く新
実はバイクで帰る途中、ロスヴァイセは寮じゃなく新の家に住みたいと言い出した
新は最後の確認を取ったが、もう決めたらしい
ちょうど1階に使ってない部屋があるので、そこをロスヴァイセの部屋にした
「よろしくね、ロスヴァイセ」
「はい、よろしくお願いします」
「あらあら、また騒々しくなりそうですわね」
「ロスヴァイセさんも新の家に……ライバルが多くて大変だな」
「……どうして先輩の上着を着てるんですか？」
小猫が1番の疑問をロスヴァイセにぶつける
すると、ロスヴァイセは頬を赤く染めて――――
「新さんに……見られました……」
明らかに誤解を生む発言をした
新は違うと説明しようとしたが、7人の気迫にビビってしまう

「新、あなた何をしたの？詳しく聞かせてもらうわよ」
「新さん？ロスヴァイセさんの恥ずかしいところを見たのですか？」
「うん。説明してもらうぞ」
「……言い逃れは出来ませんよ？」
「アラタ！至高の堕天使の私を差し置くってどういう事よ!?」
「アラタ。何を見たのか話してもらおう」
「ぶ～っ！うちよりおばさんを選ぶって言うの!?エッチしたのに酷い酷い！」
「ちょ、ちょっと待て！攻撃態勢を解けお前ら！俺は何も――――ってロスヴァイセ！何勝手に逃げようとしてんだ！誤解を招く説明をすｎアーーーーッ！」
　新はその日――――リアス、朱乃、ゼノヴィア、小猫、レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトから長時間に渡る説教と魔力込みのつねりを食らう羽目に……

こだわりＶＳ熱意

放課後のオカルト研究部にて
新は休日に遭遇した闇人(やみびと)について、グレモリー眷属＋イリナに話をしていた
あれ以来、異形の闇人(やみびと)は駒王学園周辺のあちこちで出没し、次々と人を襲っている
女性の場合は衣類を、男性の場合は魂を抜き取っているらしい
「なんて素晴らし――――いや、許せない野郎だ」
「一誠、いくら素晴らしくても相手は闇人(やみびと)だぜ？出現ポイントをまとめてみた。駒王学園周辺の公園や路地裏に廃工場跡など、主に人気の少ない場所に出没している」
新は地図を広げ、出現ポイントに赤ペンで印を付ける
「次に出現するポイントを予想して、そこに囮を仕掛けるっての１番効果的だと思うんだが……」
「女性だと警戒が薄いけど、脱がされるから……ね」
リアスが考え込む
確かに出現ポイント周辺に女性を配置するのは危険が大き過ぎる
しかし、これ以上犠牲者を増やす訳にはいかない

やむを得ない選択を迫られていた
「……決めた。私が囮になるわ」
「ぶ、部長が!?」
なんとリアスが自ら囮役に立候補してきた
あまりに予想外の展開故に一誠どころか、新さえも驚いた
「リアス、良いのか？こう言うのはギャスパーが適役だと思うんだが」
「そうですよ部長！仮にギャスパーが脱がされても痛くも痒くもありません！」
「ひ、酷いですぅぅぅ！ぼ、ぼ、僕が裸にされても良いだなんてぇぇぇ！も、もしかして……僕のお胸を見たいんですか!?」
「「誰が男の裸で喜ぶかッ！」」
息ピッタリのツッコミを終えた所で再びリアスが話を切り出す
「虎穴に入らずんば虎子を得ずよ。誰かがやらないと、どんどん犠牲者が増えていくわ。何より、私達の町で好き勝手しているのが許せないの。異存は無いわね？」
「怖ぇな。流石は『王』様」

すっかり日没になった時刻
リアスは闇人が出没したポイントを巡回し、新達は隠れて尾行する
通信機で連絡を取り合い、闇人が出現したら一気に討伐する手筈である
そして人気が少ない公園に差し掛かった時――――奴が現れた
「そこのお姉さん。掃除機は如何ですか？今なら９８００円とお買い得ですよ」
「間に合ってるわ。それに、闇人と商談する気分じゃないの。出てきて」
リアスの呼び掛けで新達が闇人の前に現れる
闇人は見回すと、後ろを向いて誰かを呼び掛けた
「面倒臭い事になりましたよ、ストレイグさん。悪魔達が出てきちゃいました」
「構わねぇよ。寧ろ、出てきてくれた方が実験データを多量に採取出来る」
暗闇の中から白い体躯を持った闇人が姿を見せる
その正体は『チェス』の『ポーン』、ストレイグ・ギガロプスだった
「……ッ！君は冥界のパーティで会った闇人……」
「おぉ、あん時の偽善を語った『騎士』か。知らねぇ奴もいるだろうから、教えといてやる。俺は『チェス』の『ポーン』をしているストレイグ・ギガロプス。現役の殺し屋ってところかな？」
「やっぱり『チェス』が絡んでやがったか。何が目的なんだ？」

新が訊くとストレイグは魔銃をくるくる回しながら答える
「さぁな。俺は神風から魔銃を使いまくる様に言われただけ。強いて言えば、データ採取だな」
「その為だけに女の子達を裸に――――ゲフンゲフン！人を襲ったってのか！」
「俺は闇人だぜ？人間や他の種族を痛め付けて何が悪い。理由も必要ねぇだろ。それとも、納得する理由を言ってくれなきゃ嫌だってか？あぁ？」
ストレイグは嘲笑の目を向けながら平然と言う
「……狂った思想ね」
「狂ってんのはお前らとこの世界だ」
ストレイグは掌から氷柱を数本出し、それらを空へ放り投げて魔銃で撃ち抜く
撃ち抜かれた氷柱は禍々しい闇人に変貌して地上に降り立った
「――――ッ！あれは確か、対象を闇人に変異させる銃……」
祐斗が憎々しげに言うと、ストレイグは魔銃を見せつける
「あぁ、神風が改良を加えたのさ。今までは生物しか闇人に転生出来なかったが、今度は無機物も闇人に転生させられるんだよ。因みにこの魔銃を使って転生させた闇人は力だけなら上級悪魔レベルだ。精々死なずに遊んでやってくれよ？」
ストレイグは闇人と言う置き土産をして、この場から消えた

新は闇皇、一誠は禁手化となって戦闘準備に入る
「やれやれ、戦いますか。まぁ良いでしょう。どうせ我々の邪魔をする気でしょうから、今の内に――――――おぐっ」
ドガアアアアアンッ！
機械の闇人が何らかの攻撃で地面を抉る様に吹っ飛ばされた
その正体を確認すると、デュランダルを振った後のゼノヴィアが視界に入る
「先手必勝だ」
「ロケットスタート過ぎんだろッ！」
新と一誠の同時ツッコミが炸裂
しかし、闇人は前面が少し凹んでいるだけで大きなダメージにはなっておらず、ノズルを杖代わりにして起き上がった
「……話をしている途中で攻撃を仕掛けるなんて、マナー違反ですよ。よくも邪魔をしてくれやがりましたね……ぶっ殺しますよ？」
冷静な口調に怒りが混ざる
闇人から魔力の塊が放たれたのを合図に戦闘が始まった
「一誠！俺とコンビであの掃除機を殺るぞ！」
「分かった！」

グレモリー眷属＋イリナは氷柱闇人（つららやみびと）、新と一誠は掃除機闇人（やみびと）の方へ向かう
「部長やアーシアのおっぱいをてめぇなんかに見られてたまるか！」
一誠は拳を突き出すが、闇人（やみびと）はノズルで払う様に回避して、そのまま左側頭部を打ち抜く
体勢を崩された一誠はよろけ、刃物と化したノズルが襲い掛かる
「させっかよ！」
新はノズルを蹴り上げ、その隙に一誠が腹部に拳を打ち込む
「ぐぬぅ……！やりますね。なら、これはどうですか！」
「二刀流!?」
ノズルが双剣に分かれ、右の剣が新、左剣が一誠の腕に切り傷を付けた
一旦距離を取った2人の腕から血が滴（したた）り落ちる
「チッ、遠近両用の武器かよ。掃除機のくせに厄介だな」
「舌打ちをしたいのはこちらの方ですよ。まったく、女性を脱がしているだけなのに、何故邪魔をするのか微塵も理解出来ません」
「ふざけんな！女の子を裸にするのは俺の専売特許なんだぞ！」
一誠の最低な発言に、新は他人事では無いので苦笑するしかなかった
すると、闇人（やみびと）がこんな事を一誠に訊いてくる

「では訊きましょう。あなたは女性を裸にする技などをお持ちですか？」
「当たり前だ！俺が編み出した技、『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』は女の子が身に着けている物なら何だって消し飛ばす！こいつを使えば女の子の裸が見放題！どうだまいったか!?」
「イッセー、敵に自慢する技じゃないでしょう……」
リアスが氷柱闇人（つららやみびと）に滅びの力を撃ちながら嘆息する
一誠の熱弁を聞いた掃除機の闇人（やみびと）は、バカにする様な笑い声をあげた
「では質問を変えましょう。その技を使わずに、女性を裸にする場合はどうしますか？」
「えっ？そ、それは……まず上着を脱がして、次にスカート→靴下→ブラを取っておっぱいを拝み、最後にパンツだ！」
「一誠、自分の性癖を暴露して恥ずかしくねぇのか？ま、俺も脱がすの大好きだが」
「なるほど、あなたは全裸が好きなのですか。『同志』と言いたいところですが――――拘（こだわ）りが浅いですね」
「何だと!?ブラジャー→パンツを脱がすのが基本だろ！」
「脱がす順番ではなく、〝脱がした後〟がですよ。確かに女性の全裸は美しいですが、それだけに拘（こだわ）っていては未熟なんですよ。ホッ」
ズイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！
掃除機闇人（やみびと）のノズルが吸引を始める

狙いは――――――アーシアだった……

アーシアのパンティと靴下以外の衣類は全て吸い込まれ、アーシアの乳房(おっぱい)が丸見えとなった

「いやっ！」

「アーシア！今日も良いおっぱいですッ！」

アーシアはすぐに胸を隠し、直視した一誠は鼻血を噴く

掃除機闇人(やみびと)は恥じらうアーシアを指差しながら、何やら説明を始めた

「見てみなさい。恥ずかしがって胸を隠すと、おっぱいが寄せられて更なるボリュームを増すのです。小さくても大きくてもおっぱいの魅力がアップします。更にパンティは言わば、人格の象徴。彼女の純白の下着は清純さを表しています。女性によって下着は千差万別、十人十色(じゅうにんといろ)です。清純さから色っぽさ、幼さにワイルドさ、下着1枚でその全てを知る事が出来ます。そして靴下、これを残す事で女性の脚線美を極限まで引き立てるのです。全裸にも魅力があるように、パンティと靴下を残してこその魅力も見えてくると言う訳なのですよ。がっついて全裸にするのは男性として、まだまだ未熟な証拠です」

掃除機闇人(やみびと)の演説が終了する

パンツ＋靴下着用の魅力を思い知らされた一誠はワナワナと震え出す

「パ、パンティと靴下を残してこその魅力……!?た、確かに今のアーシアは全裸の時より可愛く見えてしまう……!手で隠して寄せられたおっぱいもボリュームが増しているし、靴下が只でさえ綺麗なアーシアの脚を、更に綺麗に魅せている……!ま、負けた……!俺は浅はかな男だったのか……」

「イッセー!?どうして落ち込んでるの!?」

「クソッ!この掃除機、女の裸に対する答弁だけで一誠の心を折りやがった!かなりデキるぞ!」

「ええっ!?そうなの!?」

部の中で比較的常識人な祐斗も流石に目が飛び出す程驚き、一誠の鎧の宝玉が徐々に輝きを弱めていく

神器（セイクリッド・ギア）は所有者の想いの強さで威力を増すのだが、一誠は心を折られてしまって力を発揮出来ず、立ち直れずにいる

掃除機の闇人（やみびと）は追い討ちをかける様にノズルを女性陣に向けた

「あなたをパンティと靴下着衣の魅力に沈めてあげましょう」

ズイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ!

広範囲を巻き込む吸引が発生し、氷柱闇人（つららやみびと）を倒し終えたリアス、朱乃、小猫、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセのパンティと靴下以外の衣類が全て吸い込まれた

「――――あっ」
「あらあら」
「……変態！」
「んっ？」
「イヤァッ！エッチ！」
「きゃあっ！ま、また……！」
眼前に広がるパンティと靴下を残された女性陣の裸体市場
一誠はそれを見て鼻血だけでなく、口からも血を吐き出した
「ゴブァァッ！」
「おぉいっ!?そこまでダメージ!?」
新も驚愕してしまい、一誠の鎧が徐々に解除されていく
「ダ、ダメだ……女の子の裸に対するこだわりが違い過ぎる……！」
「気を落とすな一誠！お前はそんな簡単に諦める男じゃねぇだろ!?」
「無駄ですよ。パンティと靴下着衣の魅力を思い知った彼は、２度と立てないでしょう。女性の裸に対する拘(こだわ)りと魅力に気付けなかったのが、彼の敗因です。さて、そろそろ魂を抜き取ってしまいましょうか」
闇人(やみびと)が吸引ノズルを一誠に向けて歩み寄る

新は自分がやるしかないと剣を取り出して切っ先を向けた

「イッセーさん！負けないでください！」

背後から飛んでくる激励

アーシアが恥ずかしがりながらも一誠に声援？を送っていた

「イッセーさん！自分を見失わないでください！もっと自信を持ってください！」

「ア、アーシア……」

アーシアの激励を受けた一誠は自分を取り戻し、鎧を修復させながら立ち上がる

「……そうだ。アーシアの言う通りだ。相手のこだわりがどうであろうと、俺は俺のこだわりを貫く！俺は――――――女の子を脱がす時は全裸が良いんだアアア

「くらえぇぇぇっ!ドラゴンショットオオオオオオオオオオオオオッ!」
ズバアアアアアアアアアアアアアアアンッ!
一誠の手から高密度のドラゴンショットが撃ち放たれる
闇人(やみびと)は負けじとドラゴンショットを吸引していく
「イッセーのドラゴンショットを吸い込んでいる!?」
「なかなか高密度の魔力ですね。ですが、私のサイクロンジェットクリーナーで見事に吸いきってみせましょう!」
「負けてたまるかアアアアアアアアアアアアアアア

「いっけエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」
気合いと共にタンクが崩壊し、闇人は赤い閃光に包まれていった……
ドラゴンショットが止み、一誠は鎧を解除する
僅かな肉体だけとなった闇人が一誠を見上げる
「どうやら、私の拘りよりもあなたの熱意の方が上だった様ですね……完敗ですよ」
「あんたも強かったし、良いこだわりを持っていたぜ」
「ククッ、あなたの様な人には、もう少し違う形で会いたかったですよ……。最後に１つだけ、下着姿の女性を脱がす時……ブラジャーから取りますか？」
「ああ、俺はブラジャー→パンツ派だ」
「……私もですよ。『同志』」
サー……
最後の拘りを伝えた闇人は砂と化した
一誠はその砂に合掌する
「……強かったな、こいつは」
「あぁ、そして後ろの皆は大体こう思ってるだろう。酷い戦いだったと……」
一誠の中で新しい友情が芽生え、闇人に抜き取られた魂は元の持ち主に戻り、事件は無事解決した

リベンジ！新ＶＳシトリー眷属！

刻は放課後、場所は生徒会室
新は生徒会役員――――シトリー眷属に呼び出されていた
「竜崎くん。今後一切、女子更衣室の中での警護を禁じます」
「え～……マジすか？」
呼び出しの内容は、以前から新が行(おこな)っている女子剣道部員の更衣室警護について
主に一誠、松田、元浜の変態３人組を追い払うためにやっていたのだが、報酬も貰っていた事と女子更衣室にいる事が生徒会にバレてしまったのである
「竜崎くん。あなたは少し禁欲的にならなければなりません。只でさえ、あなたはエ……エッチなのに女性に囲まれています。間違いを犯してしまわない為にも制限する必要があると、私達生徒会は判断したのです」
「おのれ！レーティングゲームで勝てなかったからって学園の権力を振りかざすとは卑怯だ！」
「そこまで言うなら、こうしませんか？」
ソーナが顎に両手を添えて言う

「私達はいずれ、竜崎くんにリベンジをしたいと思っていました。ちょうど良い機会です。もし竜崎くんが私達に勝てたら、バイク通学ぐらいは許可してあげましょう。ただし私達が勝った場合、竜崎くんにはしばらくの間、生徒会に入ってもらって模範生としてのイロハを学んでもらいます」
「何だと!?そんなのゴメンだ！大体、俺はオカルト研究部に――――」
「ご心配なく、リアスには既に話しました。遠慮なく使って良いそうです。『新にもデスクワークをさせた方が良い』と言ってましたので」
「おのれリアスゥウアアアアアアアアアアッ！」
ソーナが悪戯っぽい笑みを浮かべ、新はこの場にいないリアスに怒りの叫びをぶちまけた
やがてガクッと肩を落とし、諦めてリベンジの提案に乗る事に
「……で、メンバーは？」
新が室内を見渡すと、シトリー眷属の全員が挙手していた
どうやら全員が新へのリベンジの意思表示があるようだ
「冥界でのレーティングゲームでは不覚を取ってしまいましたが、あれから鍛練を積んできました。『女王（クイーン）』の意地にかけて、あなたにリベンジを申し込みます」
「私も君とのリベンジの為に秘策を編み出した。負けないつもりでいるよ」

「私だって2度と負けないわ！」
椿姫、由良、巡がそれぞれの思いを言い、匙も新に面と向かって言った
「俺もお前と戦ってみたい。冥界では兵藤としか戦えなかったけど、俺はもうあの時とは違う！ヴリトラの意識が覚醒した力で、お前と戦ってみたい！兵藤だけじゃなく、お前も超えてみたいんだ！」
匙の言葉に新は不敵に笑み、一呼吸置いてから口を開く
「……分かった。その申し込み、受けて立つぜ」
ドバンッ！
新が承諾したのと同時に、生徒会室の扉が勢い良く開けられる
「話はぜ～んぶ聞いたわよ☆」
やって来たのはソーナの姉にして四大魔王の1人、セラフォルー・レヴィアタン
魔王少女のコスチュームで可愛らしく横チェキをしている
「お姉さま！またその様な格好で！」
「気にしちゃダメだよ？それより、新くんにリベンジするんだよね☆お姉ちゃんに任せなさい！」
セラフォルーがドンと胸を叩いて言い張る
「じゃあセラフォルー様。リアス達もゲームに参加で？」

「ううん。新くんＶＳソーナちゃん達の変則レーティングゲームよ☆」
「い、１対８!?それ明らかに俺の方が不利じゃねぇか！」
「大丈夫♪試合数を分けて、一試合に出せる人数を２人までに制限するってルールを付けるから。だから、１人ずつ対戦していったら８試合、２人ずつだと４試合で終わるわ☆休憩も挟みつつね。新くんは冥界でのレーティングゲーム、１人で殆どソーナちゃん達を退けたんだから、ちょうど良いでしょ？」
「それでも俺が不利な事に変わりは無いんだが」
　セラフォルーは、う～んと考える仕草をして数秒後に何かを思い付いた
「じゃあソーナちゃんを選手から外して賞品にしてあげる！新くんが勝ったら……ソーナちゃんとチューして良いわよ☆」
『なっ!?』
　セラフォルーの発案に生徒会全員と新は目玉が飛び出しそうなぐらい驚愕した
　特に匙は……「○×▲◆〆○ゝ!?」と言葉にならない声を発しながら
「お姉さま!?なんて事を言い出すんですかッ！」
「だって、それぐらいしないと新くんだって受けてくれないでしょ？」
「だからと言って……キ、キスは……」
「じゃあ――――私が新くんにチューしちゃおっかな～♪」

セラフォルーがズイッと新に近付いてキスしようとした時、顔を赤く染めたソーナが机を叩く
「わ、分かりました！その条件で良いですから、恥ずかしい真似はやめてください！」
「じゃあ決まりね☆サーゼクスちゃんに言ってくる」
悪戯な笑みを浮かべたセラフォルーは生徒会室を出ていく
匙は自我を取り戻してから「竜崎！お前には絶対負けねぇぞおおおおお！」と憎悪と嘆きの宣戦布告を新に浴びせ、新はそれを受ける事に……

新ＶＳシトリー眷属と言う変則マッチが開始される時刻となった夜
観客席となるモニタールームにはグレモリー眷属＋イリナとアザゼル、戦闘に参加しないシトリー眷属がいた
バトルフィールドは『ドラグ・ソボール』に出てくる大会の闘技場そっくりの場所で、かなり広大な造りとなっている
ルールは数試合に分けての団体戦で、シトリー眷属は一試合に1人もしくは2人で新と戦う

新は少なくても3試合以上戦わなければならない過酷なルールである
ウォーミングアップする新は匙の手首に付いている腕輪を不審に思い、それが何なのか訊いてみた
「匙、その腕輪は何だ?」
「これか?アザゼル先生が開発した腕輪だよ。今の俺は兵藤――――赤龍帝(せきりゅうてい)の力が無いと暴走を起こしやすいって言われてさ、こいつは赤龍帝(せきりゅうてい)の力を一時的に宿らせている腕輪なんだ。簡単に言えば制御装置ってトコだな」
匙が説明を終えると、アザゼルからアナウンスが入る
「よし、お前ら準備は出来たか?審判役(アービター)としてグレイフィアがそちらに転送されてくる。それまでは各自、作戦会議をしておけ」
シトリー眷属は順番とメンバー編成を話し合い、新は通信機を使ってリアスに話し掛けたが、「今回の戦闘であなたに教える事は無いわ」と一蹴されてしまう
シトリー眷属の作戦会議が終了したと同時に審判役(アービター)のグレイフィアが魔方陣から現れる
「どちらかが降参或いは戦闘不能になるまで戦闘は続行となります。尚、今回は両陣営特別に『プロモーション』を『王(キング)』の承認無しで行えますが、竜崎新さんは特異な力のため、解除を宣告しなければ他の駒に昇格出来ません」

「ま、実戦と同じって事か」
「更に、今回のレーティングゲームの勝者にはソーナ・シトリー様から祝福のキスが送られます」
グレイフィアの後ろにある特等席に賞品発案者のセラフォルー、『優勝賞品！』と書かれた襷（たすき）と水着を着せられたソーナが座っていた
「恨みますよ、お姉さま……実の妹をこんな晒し者に……」
「新く～ん！頑張ってね～♪ソーナちゃんのチューで足りなかったら、私もチューしてあげる～☆」
涙目のソーナを他所にセラフォルーは笑顔で新に手を振る
新は「後でソーナ会長に胃薬送ってやろうかな……」と同情した
「では第1試合、シトリー眷属は誰が出ますか？」
「1番手は私が出よう」
「翼紗（つばさ）先輩、私も出ます！」
「良いんだね、留流子？彼と戦うにはそれなりの覚悟が必要だよ。間違いなく脱がされるからね」
「あぅ……そうでした……っ。元士郎先輩にサヨナラを伝えてからでも良いですか……？」

まず出てきたのは『戦車(ルーク)』の由良翼紗(ゆらつばさ)と『兵士(ポーン)』の仁村留流子(にむらるるこ)
新も気を取り直して舞台に上がる
「私は君に破れて以来、秘策の開発と鍛練を続けてきた。それを見せてあげるよ」
不敵な笑みを浮かべる由良に、新は指の関節を鳴らして構えを取る
「第1試合、始め!」
グレイフィアの合図と共に新は闇皇(やみおう)と化し、由良の拳と激突する
今までとは違う力量に新は一旦距離を置く
「どうだい?今日まで特別硬い金属を相手に鍛えてきた拳だ。攻撃力、防御力は以前とは違う。もちろん蹴りも!」
由良はダッシュで距離を詰め、左の蹴りで新の右脇腹を狙う
新はそれを右足でカットし、拳を打ち込もうとするが飛び退いて回避される
「確かに以前とは段違いだな。鎧を着けてるってのに、ビリッとしやがる」
「ふふっ、褒めてくれてありがとう。さあ、留流子も遅れを取らないように」
「は、はい!」
仁村は『女王(クイーン)』に昇格して駆け出し、徒手空拳で対抗する
華麗な動きを交えた体捌きを見せ、バレエの様な後ろ蹴りを見舞った
新はそれを十字受けで凌ぎ、後方に飛び退いて着地する

「へっ、なかなかやるじゃねぇか。それじゃあ……こっちも新しい技を試してみるか」
パンッと手を叩く新に警戒する由良と仁村
鎧からオーラを滲み出させ、バチバチと赤黒い電撃が迸る
「どうやら早くも来そうだね」
「ま、まさか……あのスケベな技ですか……!?」
仁村は反射的に胸を隠す動作をする
恐らく新の技は前以てソーナから聞いていたのだろう
発動される前に止めようと慌てて走り出そうとするが……
「残念だが、そうは問屋が卸さねぇッ！」
新が手を勢い良く前に突き出した瞬間、足下に大きな紋様が展開される
両翼を広げ、口を開けた蝙蝠の如く禍々しい紋章が地面を滑る様に移動し――仁村の背後に回る
「え!?な、なに!?きゃあっ！」
仁村の体は紋章に引き寄せられ、自由を奪われたかの様に磔にされる
更に赤黒い電撃が彼女の体を少しずつ焦がしてダメージを与えていく
「留流子！今助けるよ！はあっ！」
急いで駆け付けた由良が魔力を帯びた拳で紋章の破壊を試みるも……逆に弾き返さ

れ、地面に打ち付けられた
新しい技の全貌にグレモリー眷属とシトリー眷属の全員が驚愕した
そこへ新が得意気に説明を始める
「成功だな。これが俺の新しい技――――『闇皇紋章(エンブレム)』だ。吸収と反発の力を組み合わせる事で相手を引き寄せたり張り付けたりする事が出来る。ま、電撃はオマケみたいな物だ」
説明を終えた新が手を引くと、それに呼応するように仁村の体が紋章から解き放たれ、新の方へ引き寄せられる
新は飛んできた仁村に拳打をくらわせ、再び紋章に叩き付ける
何度も何度も引き寄せては蹴りや拳打、掌底(しょうてい)を叩き込み、最後の仕上げに取り掛かった
仁村を紋章ごと仰向けに寝かせ、彼女の真上に同型の紋章をもう１つ出現させた
「え、え……!?嘘……!?」
「――――ヘル・プレッシャーッ!」
新が右手を振り下ろすと――――宙に出現した紋章が勢い良く降下し、仁村を押し潰す様に直撃すると同時に爆発を引き起こした
爆風と土煙(つちけむり)に支配されるフィールド

暫く経つと煙が晴れ……服がボロボロの仁村が咳き込んでいた
先程の技をくらったならば、無傷で済む筈が無い
そんな自分の状態を怪訝そうに見る仁村
「……っ？見た目ほどダメージが無い？もしかして失敗？」
「いきなりフルパワーでやる訳にはいかなかったからな。服や下着が破ける程度に調節したんだよ」
「……えっ？」
ヒュンッ
パラパラパラ……ッ
新が右手を薙いで風を送った瞬間、仁村の服が細切れと化し、あっという間に下着姿となる
そして……ストライプ模様のブラとパンツも細かく分裂した
自己主張控え目なおっぱい、小振りなお尻、後輩キャラならではの可愛らしい裸体が無事展開（笑）
仁村は一瞬、自分の身に何が起こったのか理解出来なかったが、直ぐに正常な思考を取り戻す
「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

自分の状態に気付いた仁村は地面にへたり込み、丸見えのおっぱいを手で隠した
その際、一誠はアーシアに両目を塞がれてしまい、匙も他のシトリー眷属に両目を塞がれた
一方で新はご馳走さまのハンドポーズで一礼する
「綺麗な乳首だったぜ」
「うぅ……っ。竜崎先輩、酷いです!元士郎先輩だって見てるのにぃ……っ」
「さて、そろそろ対君用の秘策を実行するとしようかな」
「ほう。そいつはいったいどんな――――――」
シュルシュルッ……
由良が突然制服の上着を脱いだ
怪訝そうに見る新、由良は次にスカートを下ろしていく
『部長!アーシア!今だけ、今だけは目を開けさせてくださぁぁぁぁい!』
『ダメよ、イッセー』
『ダメです!エッチな目を向けてはいけません!』
どうやら一誠はリアスとアーシアに目を塞がれている様子
匙も控えているシトリー眷属に目隠しをされた
プチ……プチ……

由良は次にシャツのボタンを1つずつ外し、それを床に落とす
「んしょっ……と」
靴と靴下も脱ぎ、由良は青いブラジャーとパンティだけの格好になった
「ヒュウッ♪それが秘策ってヤツか？」
「そうだよ。ここから反撃に移させてもらう！」
下着姿の由良が拳と蹴りの乱舞で新を追い詰める
しかし、新は冷静にかわしながら由良の胸に視線を向けている
『こんな格好で戦うたぁやるなぁ。どれ、ちょっと揉んでやるか』
下心が出た新は隙を突いて由良の胸に手を伸ばす
「引っ掛かったね」
「なにっ？」
ガシッ、ドサッ！
由良は狙っていたかの様に新の左手を取って足を払い、体勢を崩した新に腕ひしぎ十字固めを極めた
「ふふっ、いくら鎧が堅牢でも関節までは変わらないみたいね」
「なんのっ！」
新は右足の爪先で由良を突き刺そうとするが、寸前のところで回避される

「ふぅ、危なかったよ」
「俺に関節技を極めるとはな」
　新は拳打を繰り出し、由良はそれをいなしていく
『まぐれにしては綺麗に狙っていたよな……。もういっぺん試してみるか』
　新は拳打の途中で由良の胸を揉まんとするが、また狙っていたかの様に由良は回避して右腕を取り、今度は三角絞めを極める
「さあ、どうする?今度はまともに反撃出来ないよ?」
「なら、まともじゃない反撃をするまでだ」
　スッ……
「ひっ!?ちょ、ちょっとダメ……ッ!パンツの中に手を突っ込んじゃ……ぁぁんっ!」
「今だ!」
　新は由良のパンツの中に手を突っ込んで尻を撫で回し、集中力が途切れた一瞬を狙って三角絞めから逃れた
　しかし、やり方が汚い……
「き、君は恐ろしい男だな……女性の下着の中に躊躇(ためら)い無く手を突っ込むなんて……」
『新さん!不埒過ぎます!』
『……先輩。少しは自重してください』

ロスヴァイセと小猫から注意されるも、新は一切気にしない
「何度も言ってるだろ？勝負は常に非情だと」
「……そう言う意味でも凄いね、竜崎新。じゃあ恥ずかしいけど――――――奥の手を使わせてもらうよ？」
プチンッ……スルッ……
由良はブラのホックを外して肩紐を少しずつズラしていく
「ちょっと翼紗先輩!?何してるんですかっ!?」
「え!?な、何だ？何が起きてるんだ？」
『部長ぉぉぉぉ！アーシアァァァァ！手を退けてくださいいいいいいいっ！』
由良がブラジャーを外してゆっくりと乳房（おっぱい）を見せつける
これには流石に新も驚愕せざるを得なかった
「さあ、遠慮なく来たまえ。どんなに胸を触られようと、私は負けないよ」
「そうかい。んじゃ、遠慮なく揉ませてもらうぜ！」
新は由良の胸を揉まんとダッシュで駆ける
しかし、これは由良の作戦だった……
『思った通り。竜崎新は女性と戦う時、少なからず相手の胸を揉む傾向が目立つ。下着だけで2度も引っ掛かったから、裸の胸なら考えず真っ先に向かってくる。私の勘は当

たっていたようだ。後は手を取った勢いを利用しての回転肘、それを全力で彼のコメカミに打ち込めば勝てる！』
新の右手が由良の胸に触れようとした時、由良はここぞとばかりに左手で掴んで体を捻り、回転肘を打ち込みにいく
勝利を確信した由良だったが、エメラルド色の眼光が怪しく光った
「残念賞！」
バチィンッ！
新の左掌打が由良の回転肘打ちを防いだ
「なっ!?そんなっ！」
「悪いな。実は引っ掛かったフリしてたんだよ」
ドゴォッ！
新の右膝が由良の脇腹に食い込み、由良は呻きながら膝をついた
「まだやるか？」
「……いや、まいったよ。私達の負けだ……」
「そっちは？」
「ひ……っ。こ、降参します！」
「ソーナ・シトリー様の『戦車』、『兵士』戦闘不能。竜崎新の勝利です」

審判役(アービター)のグレイフィアから勝利宣言が挙げられる
新は堂々とガッツポーズするが、正直言って勝利内容はいろんな意味で酷いの一言に尽きる……
第1試合を終えた新は仁村を抱きかかえ、由良を背負ってシトリー眷属の方へ歩いていく
「……っ。こ、こんなお姫様みたいな事……初めて……」
「どうして、私を運んでくれるの？それに……君レベルの悪魔ならもっと他に戦い方がある筈なのに、何故打ち合いを？」
「少しの間、まともに動けねぇだろ？だから、運んでってやるよ。それに秘策とやらが気になってな、どうしても早く終わらせるのが嫌だった。あんたの戦いに合わせたかったんだ」
それを聞いた由良はクスッと笑みを浮かべる
「君はエッチなだけじゃなく、優しくて強いんだね。そんな事を言われたら惚れちゃうよ？」
「構わねぇよ。俺浮気性だから」
「ふふっ、浮気も男の甲斐性でしょ？」
コンコンと鎧の頭部を叩く由良

新は何だと思い、頭部の鎧を解除した――――その時

チュッ……

由良の唇が新の頬にくっついた

「……は?」

「私の気持ちだ。是非受け取って欲しい」

「わわ……っ、翼紗先輩、大胆……っ」

由良はしばらく新の腕から離れずに抱き締め、新は黒い笑顔を浮かべているリアスと朱乃から見つめられる感覚に襲われ背筋を凍らされた……

『新?この試合が終わったら家でジックリ訊く必要がありそうね。楽しみにしてなさい』

『うふふ♪新さん、ゆっくりジックリと聞かせてもらいますわ♪』

「……オテヤワラカニ……」

リベンジ続編！新ＶＳ匙！

「次は私達が出るわ。行くわよ、桃」
「はい。巴柄」
第２試合、シトリー眷属側から出てきたのは日本刀を使う『騎士』の巡巴柄と『僧侶』花戒桃のコンビ
新は闇皇剣を出し、自らの爪で刀身を研いで待機する
『新、これが終わったら分かってるわね？』
『新さん？試合が終わったら家でお話がありますのでから、じっくりしっぽり訊かせてもらいますわ♪』
新にとって、それは死刑宣告に近い言葉だった……
「第２試合、始め！」
グレイフィアの声を合図に巡が日本刀を構え、花戒が両手に魔力を蓄積させていく
「ん？そっちの花戒とやらは戦わねぇのか？それなら２人出てくる事に意味が無いと思うんだが」
「私が桃と一緒に出てきたのには、ちゃんと意味があるわ。桃！」

「準備完了よ、巴柄！」
呼ばれた花戒が巡の日本刀に魔力を流し込んでいく
２人分の魔力を促された日本刀は濃い密度のオーラを揺らめかせる
その後、花戒は再び両手に魔力を蓄積して盾の様に形成する
「なるほど、攻撃と防御を分担させたか」
「じゃあ、行くわよ！」
「行きます！」
２人がその場を駆け出し、巡は魔力を帯びた日本刀で斬りかかる
繰り出された剣戟を闇皇剣（やみおうけん）で防ぐ新
そのまま押し返して一太刀を見舞おうとするが、２人の間に割って入った花戒が両手に形成した盾状の魔力でガードする
新は一旦飛び退いて左手に魔力の塊を生み出し、花戒に向けて撃ち放つ
花戒は向かってきた魔力をズラす様に受け流した
「はあっ！」
次に彼女は手に持った盾状の魔力をフリスビーの様に投げつけた
新は『闇皇紋章（エンブレム）』を発動し、飛んできた魔力を打ち消す
そのまま『闇皇紋章（エンブレム）』を地面に打ち付けて爆発させ、フィールドの瓦礫を２人に飛ば

した
「きゃあっ！」
「桃！」
花戒はギリギリ回避したが、新は見逃さず２人に追撃する
「そろそろやってやるか。『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』ッ！」
ズオオオオオッ……！
新が周囲を斬る様に剣を振り、発生した闇が巡と花戒を捕まえた
「きゃあっ！ま、またこの技!?」
「また裸にされちゃう……いやぁ……っ」
この時点で最早勝負は着いたと言っても過言では無い
新は最後の仕上げに取り掛かった
「ほいっと」
巡と花戒を自分にしか見えない角度に移動させ、２人の両手を上げさせる
左手で刀身を擦って柄に触れると、２人の裸体が展開された
花戒の巨乳と巡の美乳がプルプルと揺れる
『……ひぐっ』
「……え、ナイテル……?」

普通なら悲鳴が先なのだが、巡と花戒はいきなり泣き出してしまい、新は思わず困惑する
「お願い……もう降参するから、許して……」
「ちょ、待った待った待った!分かった!降ろすから!降ろすから待ってろ!」
新は２人のマジ泣き姿に焦り地上に降ろす
巡と花戒は地上に降りても泣き止まなかった
「ソーナ・シトリー様の『騎士(ナイト)』、『僧侶(ビショップ)』、戦意喪失。竜崎新さんの勝利です」
グレイフィアは審判(アービター)として勝者の名前を挙げ、新は未だに泣いている巡と花戒を見て狼狽する
そこである事を思い出した
「あの、グレイフィアさん。由良と仁村が何処に行ったか知ってます?」
「お二人なら奥の更衣室で着替えております」
「そっか。よし」
新は背中のマントを取り外して巡と花戒に渡し、２人は新の行動にキョトン顔になる
「……っ?どういう事ですか……?」
「貸してやるよ。これから休憩に入るみたいだし、次の試合が始まるまで時間があるからな。それまで貸すから、早く着替えてこい」

「……ありがとうございます。やっぱり竜崎くんって、変な人ですね。あの時と同じです……。私や、憐耶、副会長を裸にしたのに着替えを持ってきてくれたり……」
「前にも言った筈だ。マジ泣きしてる女をいじめる程、俺は腐れ外道じゃねぇって」
巡と花戒は顔を朱に染めて、渡されたマントで裸体を隠しながら更衣室へ向かった
休憩時間終了後、由良、仁村、巡、花戒が着替えを終えて戻って来る
「あの、これ……ありがとうございました」
「ゴメンね……私達が泣いちゃったから、何だか気を遣わせちゃったみたいで……」
「気にすんな。俺がやってる事だから」
新はマントを取って所定の位置に戻り、再び闇皇になる
「次は私達ですね。行きますよ、憐耶」
「はいー。頑張りますー」
長刀を携えて出てきたのは生徒会副会長にしてシトリー眷属『女王』の真羅椿姫と『僧侶』の草下憐耶
椿姫はメガネをキラリと光らせている
「次は椿姫副会長か。なら、ちいとばかし本気出すか」
新は肩をぐるぐる回す
「第3試合、始め！」

椿姫は長刀を構え、新は『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』を使って『僧侶(ビショップ)』形態に昇格
『闇　皇　の　魔　導　銃　僧　侶(アーク・カイザー・ウィザルドバスター・ビショップ)』に変異した
「また新しい力を手に入れましたか。さっきの破廉恥な技を使わないつもりですか?」
「なぁに、こいつの力も少しは使いこなさないといけねぇからな」
新は闇皇銃(やみおうじゅう)と両肩の銃口を椿姫に向ける
「おそらく遠距離型の姿……私の神　器(セイクリッド・ギア)、『追憶の鏡(ミラー・アリス)』を警戒しているようですね。相性が良いとは思えないのですが?」
「ま、それはお楽しみって事で!」
新はマントを翼に変えて上昇し、椿姫に魔力の弾丸を撃ち放つ
椿姫は最小限の動きで回避、憐耶は結界を張って防ぐ
「遠距離で私を倒せる程、甘くはありませんよ」
「流石『女王(クイーン)』。冷静且つ少ない動きで攻撃を避けたか。ま、こいつの本領発揮はこれからだぜ」
「私だってちゃんと特訓しましたよー」
闇皇銃(やみおうじゅう)と両肩キャノンの銃口が黒い魔力を帯びていく
「一気に高密度の魔力を撃ちますか。しかし、それで私の『追憶の鏡(ミラー・アリス)』は破れませんよ?」
「そいつはどうかな!くらえエッ!」

３つの魔力の帯が椿姫と憐耶に向かっていくが、椿姫は直ぐ様『追憶の鏡（ミラー・アリス）』を出現させる
「『追憶の鏡（ミラー・アリス）』、跳ね返しなさい！」
「残念！曲がれェッ！」
新の意思が通じた様に放たれた黒い魔力の帯が『追憶の鏡（ミラー・アリス）』を避けて椿姫と憐耶に向かう
「――――こんな事がっ!?」
「あっ――――またエッチな予感が……」
予想だにしなかった銃撃に椿姫と憐耶は対処出来ず、黒い魔力に飲み込まれてしまった
新が行った銃撃の軌道変化にシトリー眷属及びモニタールームにいる大半が驚愕した
黒い魔力が消えると、椿姫と憐耶の衣類も全て消えていた
「――――っ。きゃあっ！まさか、こんな隠し球を……撃った魔力を曲げるなんて……」
「練習した甲斐があったぜ。一直線じゃ、カウンターで簡単に跳ね返されちまうから、どうしても変則的な動きを加えたかったんだ」
「それにしても……女性を裸にする様な行為をやめるつもりは無いのですか？」

「これじゃあ服がいくらあっても足りないよぉ……っ」
「やめるつもりはねぇよ?これが俺だからな。あんたらみたいに綺麗で良い体を拝むのに必要だし」
性欲に忠実な新の言葉に椿姫と憐耶は頬を朱に染める
「……エッチ」
「副会長!これに着替えてください!」
由良と巡が駆け寄って椿姫と憐耶に代わりの服を差し出す
２人は服を受け取り、椿姫は何やら熱を帯びた視線で新を見つめる
「ん?どうした?」
「……ッ!い、いえ……何でもありません。あまりジロジロ見ないで……恥ずかしいから……」

そして迎えた第４試合
新の最後の相手は匙
ハッキリ言って強敵である事は間違いない

『黒邪の龍王(プリズン・ドラゴン)』ヴリトラの魂を宿した神器(セイクリッド・ギア)４つを全て結合し、ヴリトラの意識を覚醒させている

更にソーナのキスが賞品になっている――――厳密には、セラフォルーの独断で賞品にされている故、匙にとって絶対負ける訳にはいかない試合である

「竜崎……お前には絶対に負けねぇぞ。会長のファーストキスを奪われてたまるか」

「言うようになったな？チェリーの童貞。悪いが勝負は勝負だ。こっちも殺す気でいかせてもらうぜ。死んでも恨むなよ？」

「第４試合、始め！」

グレイフィアの合図と同時に匙は『女王(クイーン)』に『プロモーション』し、新も『進化する昇格(エボルシオン・プロモーション)』で最凶の『女王(クイーン)』形態――――『闇皇の極限破滅女帝(ダーク・カイザー・オーバーカタストロフ・エンプレス)』になった

新は挨拶代わりに右腕を横薙ぎに振る

風圧と衝撃が匙及び後ろにいたシトリー眷属を襲う

「きゃあっ！え、服が切れてる!?」

「片腕を振り下ろしただけでこの衝撃……!?彼のスペックはいったいどこまで上がると言うの……!?」

匙は腕にラインを束ね、交差させて防ぐが……勿論無傷で済む訳が無い

初撃で匙の両腕は既に血に染まっていた
「ぐうぅぅっ……! いってぇぇぇぇぇぇぇぇっ!」
「どうした匙。今のはただの衝撃波だぜ?こんなんで倒れる奴じゃねぇだろ」
「あ……当たり前だッ!」
匙の足下に黒い炎が出現し、新の足に絡み付く
「こいつは――――熱くはねぇが、動きを封じる炎だったよな?」
「ああ、そうだ!こいつもオマケでくらえ!」
匙の左腕からラインが伸び、新の右腕に絡まる
これは『黒い龍脈(アブソーブショット・ライン)』の能力だろう
「動きを封じた上で、お前の魔力を根こそぎ奪ってやる!」
「言ったな?何があっても離さねぇんだな?」
挑発的な言動の後、新は全身から凶悪なオーラを発した
魔力を吸い取るラインが繋がっている状況でこの行動は一見すれば自殺行為に等しい筈……
「ああ!このラインは死んでも離さな――――ぐっ!?がぶあぁっ!」
突然、匙が苦しみを訴えながら血を吐き出す
何が起きたのかさっぱり理解出来ない面々

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！な、何なんだこの力は……っ!?体が、爆発しそうだ……ッ！あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

匙は思わずラインを切り離して腕を押さえる

よく見ると、左腕に無数の傷が浮かび上がって血が滲み出ていた

「匙、確かにお前の『黒い龍脈（アブソーション・ライン）』は強力だ。相手の力を吸い取る能力、この炎もかなり強い。けどよ、物事には限度ってもんがある。お前は勝つ為に俺の魔力を吸い取ろうとしたんだろうが、この『女王（クイーン）』形態は悪神（あくしん）ロキを一方的に倒しちまった力だ。いくら吸い取ろうとしても、肉体が耐えられなきゃ意味を成さねぇ。お前の肉体が俺の魔力に耐えられなかったんだろうな」

新は両肩の銃口を炎に向け、吸収の魔力で炎を吸い込む

左腕を翳（かざ）し、装着している盾が凄まじい音を立てながら回転し始める

「オオオオオオオオオオッ！」

新がそのまま左拳を突き出すと、回転している盾から炎の竜巻が発生して匙を飲み込んだ

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

竜巻の中で不規則に飛ばされる匙

上昇してから一気に降下し、炎の竜巻は匙ごと地面に激突した

やがて炎の竜巻が止み、抉り掘られた地面と血まみれでボロボロの匙が中で横たわっていた

「……がはっ！ゴホゴホッ！な、なんてパワーだよ……！兵藤と、レベルが全然違う……！」

「どうする？まだ続けるか？」

「お、俺は……俺は！会長の『兵士』なんだ！冥界での一戦で、赤龍帝の兵藤をリタイヤに追い込めた！ライバルの兵藤と並ぶ事が出来たんだ！次は――――竜崎！今度はお前を超えてみたい！お前とも並んでみたいんだ！だから――――まだ倒れたくない！」

匙は激痛に苛まれている全身を起こして黒い炎を拳に纏わせる

新は匙の決意を受け止め、拳を握り締めた

「いくぞぉぉぉぉっ！竜崎イイイイイイイイイイイイイイッ！」

ドガアアッ！

匙の黒い炎を纏った拳が新の顔面にヒットする

新は拳を握り締めたまま、１歩も動かずに匙の拳を受けた

その一撃は鎧を通り越して生身に響き、兜の隙間から血が垂れる

「……良いじゃねぇか。強い拳で」

「竜崎……？なんで避けようともしなかった!?」
「本気で打ち出す拳を避けたら失礼だと思ったからだよ。昔はそんな事、微塵も考えてなかったけどよ……。一誠からお前との話を聞かされたら、避ける訳にはいかねぇよ。だが――――俺の拳はもっと痛いぜ？しっかり受け止めろォッ！」
新は匙の顔面に拳を打ち込み、匙は壁に深くめり込んでしまった……
これで新の勝利が確定した……誰もがそう思った時――――
「ま……まだ、まだ……ッ！」
壁から抜け出し、フィールドに降り立つ匙
彼はまだ戦意を消していなかった……
顔中から血が流れ落ち、足取りは覚束(おぼつか)ない
何より……彼の眼は鋭く真っ直ぐに新を捉えていた……
そしてその場を駆け出し、握り締めた拳を突き出してくる
「竜崎ィィィィッ！」
「何だ、匙？」
「1つ聞かせろッ！お前は――――主(あるじ)さまのおっぱいを揉んだのかッ!?女の人のおっぱいはマシュマロみたいに柔らかいのかッ!?女の人の体は崩れないプリンの如くと言うのはマジなのかッ!?」

突然飛んできた変な質問に新は吹きかけるが、「あぁ、マジだ」と答える
匙は攻撃の手を休めず吼えた
「ちくしょぉぉおおおおおっ！お前らはいつもそうだ！兵藤はアーシアさんのおっぱいを揉んだって言うし、竜崎は主さまだけじゃなく学園中の女子のおっぱいを揉んだって聞かされてよぉぉおおおおおっ！」
「……何か話に尾ビレ背ビレ付いてねぇか？」
匙はラインをフィールドのブロックに接続し、力の限り振り回す
一斉に向かってくるブロックに対して、新は右足に翼型のオーラを纏い――――蹴りで粉砕した
粉々になったブロックの雨が降り注ぐ中、匙が突っ込んで黒炎の拳を新の腹に打ち込む
新は込み上げてきた血の塊を吐き捨てた
「俺だって、俺だって揉んでみたいんだよぉぉおおおおおっ！乳房すら見た事無いんだぞ！乳首なんて一生拝めるか分からないんだ！それを！それをお前らは自由気ままに見やがってぇぇぇぇぇぇっ！同じ時期に『兵士（ポーン）』になったってのに……なんでこうも違うんだよぉぉおおおおおっ！」
「自由気ままにって……さっきのは？」

「見えなかったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！皆に目を塞がれて見えなかったんだよぉぉおおおおおおっ！」

嫉妬やら羨望やらを交えた魂の叫びを発する匙は遂に悔し涙を垂れ流す

「でもな！1番はおっぱいじゃない！先生だ！先生なんだよ！俺は先生になるんだ！先生になりたいんだ！その為に俺は兵藤に勝った！夢に1歩踏み出せたんだ！次は！次は お 前 に 勝 ち た い！ お 前 に 勝 っ て！ も う 1 歩 踏 み 出 す んだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

自身の夢を吠え続ける匙

彼の尋常ならざる覚悟を理解した新は左腕の盾を捨て、オーラを高める

「そこまでの覚悟を聞かされた以上、俺もそれに応えねぇとな」

冷徹な声音の直後、新は『闇皇紋章（エンブレム）』を発動した

地面を滑るように匙の背後へ移動し、匙を引き寄せ拘束する

赤黒い電撃をその身に浴び、苦痛に表情を歪ませる

その間、新は右手に赤いオーラを集めて構える

「こいつは俺からの敬意だ。しっかり受け止めろォッ！」

新は地面を蹴ってその場を駆け出し、オーラの滾（たぎ）った拳に力を入れる

距離が近付いた瞬間、反発の力で匙の体を前方に飛ばした

「――――ヘル・クラッシュッ！」
ドゴォッ！
新の強烈な拳打が寸分の狂い無く匙の腹に深々と食い込んだ
匙は後方に思いっきり吹き飛ばされ、再び『闇皇紋章（エンブレム）』に叩き付けられる
「が……ッ！」
今の匙はもはや戦える状態ではない……
肋骨は砕け、指や腕はあらぬ方向にねじ曲がり、歯も足も折れている……
そんな状態になっても匙は諦めの色を微塵も出さなかった……
これには流石の新も畏怖せざるを得ない
「……やれやれ、恐ろしい気迫だな」
最後の一撃とばかりに新は両足に大質量のオーラを滾（たぎ）らせる
翼型のオーラを纏った凶悪な蹴りが匙に狙いを定めた
「――――バースト・エンドォォォォォォォォォォォォッ！」
ミサイルの如く飛び出した新の両足は匙の腹に直撃
そのまま連続で蹴りを食らわせ続け、紋章を破壊しながら壁に大激突した
明らかにやり過ぎとも取れる攻撃に言葉を失う面々
立ち込める粉塵が晴れると……まず新が姿を見せた

沈黙したままゆっくりと歩き去っていく

「匙、それが俺からの激励だ。本気で夢を叶えたいなら、本気で俺を超えてみたいと思うなら――――もっと強くなれ」

匙に労いの言葉を贈る新

その言葉が聞こえていたのか、匙はボロボロになりながらも真っ直ぐな眼で新を捉え続けた……

「ソーナ・シトリー様の『兵士(ポーン)』、戦闘不能！竜崎新の勝利です！」

「ソーナ会長、セラフォルー様」

「竜崎くん……」

新は試合終了後、匙が運び込まれた医療ルームの前でソーナとセラフォルーに出くわす

最凶の『女王(クイーン)』形態で鬼畜を通り越した攻撃を打ち込んでしまったから相当なダメージになっている筈

心配で様子を見に来たのだった

「それで、匙は?」
「今は眠っています。2、3日安静にすれば直に目が覚めるそうです」
「そっか……。すまねぇ事をしちまった……。あれ、ただの虐殺にしか見えなかったろ?」
「いえ、今サジはとても安らかな表情をしていました。竜崎くんが自分の出した本気に応えてくれたのが、嬉しかったのでしょう」
ソーナが微笑む
新も匙の様子を聞いて安堵した
「ねぇねぇ、ソーナちゃん♪忘れてな～い?新くんとのチュー☆」
『あ……』
セラフォルーの言葉で2人は忘れていた事を思い出してしまった
――優勝賞品、ソーナとのキス――
「ソーナ会長、嫌なら別に――――」
「い、いいえ!サジだって竜崎くんと本気でぶつかったのですから……!わ、私も……んちゅ……」
ソーナは顔を真っ赤にして新の両頬を押さえ、唇を合わせた
「んっ……んちゅ、ちゅぱ……くちゅるっ、ちぅ……」

初々しいキスではなく、舌を絡めるキスに新は興奮してソーナの水着のブラを外す
「ひゃんっ……！ダ、ダメよ竜崎、くん……キスだけって……！ぁんっ……」
「あ、悪い。つい興奮して……」
「……本当に竜崎くんはエッチですね」
「う～っ、ソーナちゃん大胆！私だって、んちゅ～っ☆」
セラフォルーも新とキスを交わし、口内で舌を絡める
「ちゅむ……んちゅぱ……くちゅっ、はむっ……ぢゅう……はぁ～、新くんとのチュー……気持ち良い。クセになっちゃう☆」
「良いんすか？セラフォルー様まで」
「良いの良いの♪私だって新くんとチューしたかったもん☆」
「ハハッ……そうすか。まぁ、キスは貰ったんで失礼」
新は一礼してからその場を去っていった……
「ねぇ、ソーナちゃん。キスしたから今度は新くんとエッチしちゃう？」
「……ッ！お姉さま!?何を――――」
「好きになっちゃったでしょ？新くんの事☆お姉ちゃんなんだから、それくらい分かるよ☆」
「……はい。私は彼が――――竜崎くんが好きです」

「やっぱり♪新くんって節操無いけど、時々優しいから惚れちゃう娘もいるよね～☆」

――――――――――竜崎家

「ちゅむ……ちゅぱちゅぷぅ……っ、はむ……れろぉ……。はあ……、朱乃、交代よ」
「ちゅぷるっ、ちゅむ……れろぢゅぅ……ちゅぱくちゅ、れろぉ……うふふ、新さん？まだまだキスしてくださいね？」
「リアスさん、朱乃さん……そろそろ口が痛くなってきたんすけど……」
「休憩は認めないわよ？」
「やーですわ。ソーナ会長とキスした分以上のキスをしないと気が済みませんわ」
「新、私もキスするぞ……ちゅむ、ちゅるっ……ちゅぱぁ……ぁふ……ちゅぷぴちゃ……じゅるるっ」
　新はリアスと朱乃とゼノヴィアから寝るまでキスをされ続け、翌朝に唇が筋肉痛を起こしたと言う……

バトルゲーム開幕！

「グギャアアアッ！」
「ゴギュガアアアッ！」
町で闇人の襲撃が続き、オカルト研究部は度々その討伐に当たっていた
炎や氷柱、鋼鉄、土塊など――――無機物系闇人の残骸が辺り一面に存在する
数も多かったため、流石に疲労も蓄積していた
「ふう、闇人の襲撃が後を絶たないわね」
「あの魔銃ってヤツが厄介だな。何でも闇人に変えちまうんだ。闇人にとって、大きな戦力増大アイテムだろうよ」
神風が改良を加えた魔銃は生物及び無機物を闇人に強制変異させる銃で、現在は『チェス』のストレイグ・ギガロプスが所持している
奴は魔銃のデータをかき集める為だけに、闇人を製造して町を襲撃させていた
「はぁ、こんなに数が多くちゃキリが無いな。流石に俺達だけだと……」
「確かにな。よし、渉にも連絡しておくか」
新はスマホで渉に連絡を取り、闇人の襲撃が多発している事を報告する

『そうだったんですか……分かりました。僕達もそちらに向かいます』
「すまねぇな。世界中を転々としてるところに」
『別に良いですよ。僕達だって仲間なんですから、遠慮なく言ってきてください』
「助かるぜ。じゃあな」
新はスマホを切って、皆に渉も闇人（やみびと）の討伐に協力してくれる事を報告
討伐戦力と範囲が大幅にアップする事は間違いないだろう
全員が魔方陣で根城であるオカルト研究部の部室に戻っていった

『ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！死ね死ね死ねエェェェェェェェッ！』
『これが闇人（やみびと）の力か！最高過ぎるぜ！』
『この力があれば、どんな奴でも殺せる！』
『まだ獲物が残ってたのか？お前も今すぐ送ってやるよ。こいつらのいる地獄になぁッ！ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！』

ガバッ！

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……またあの悪夢が……いつになったら……」

「祐希那？凄い汗だよ」

「渉……またあの悪夢を見ちゃったのよ……」

飛竜ワイバーンを根城としている八代渉（やしろわたる）と高峰祐希那（たかみねゆきな）

祐希那は3年前に起きた闇人（やみびと）襲撃の悪夢を見てしまい、汗だくになっていた

自分の目の前で主や仲間が殺されていき、血の海に沈む惨状が寝てる時にフラッシュバックされる

祐希那は精神崩壊から立ち直れても、何日も続く悪夢のフラッシュバックからは解放されずにいた……

「渉……私、早くこの悪夢を忘れたい……！寝る度に主や仲間の断末魔を聞くのはもう嫌……！」

「祐希那、落ち着いて。大丈夫だよ、必ず見つけよう。祐希那の主と仲間を奪った闇人（やみびと）を――――祐希那と僕達の手で狩る。祐希那の悪夢を終わらせよう。他の人達に、そんな思いをさせないためにも……」

渉は祐希那の頭を優しく撫でて励ます

祐希那の体の震えが次第に止んでいく
「……ありがとう、渉。少しシャワー浴びてくるわ」
祐希那は終わらせるべき事を胸に秘め、心から渉に感謝した
脱衣場で汗まみれのパジャマを脱ぎ捨て、浴室へ入る
シャワーから出たお湯を浴びながら長い白髪を丁寧に洗い、汚れを落としていく
「あっ、シャンプー切れてる……。仕方無いなぁ、もう」
祐希那は空のシャンプーボトルを持って、一旦浴室から出ようとしたその時――――
脱衣場の扉が開く
「ファッ!?渉ッ!?」
「ごめん祐希那、シャンプー取り換えるの忘れてた。これ使って。あと新しい入浴剤も買ってみたんだけ――――」
「このタイミングで言わないでよバカァッ！別に今じゃなくても良いでしょ!?」
「うん、そうだったね」
「確信犯!?さては、あのエロバカコンビ（兵藤と竜崎）に何か吹き込まれた!?」
「えっと、女の子がお風呂に入った時が狙い目だとか言ってたけど……どういう意味か分かる？」
「私に聞くなーッ！そしてドアを閉めて出てけーッ！」

「あ痛っ。分かったから氷の塊は投げないで」
バタン……ッ
「ったく、あのエロバカどもは余計な事を……。てか、思いっきり私の裸見てたのに無反応って――――あの朴念仁……私だって一応女なんだからね……」

翌日の放課後
オカルト研究部に郵便物が届いたので、リアスはすぐにメンバー全員を招集させた
「部長、いったい何があったんですか？」
「この部室に来てみたら、こんな物が置かれていたのよ」
リアスが皆に見せた物は――――「果たし合い」と書かれた1本のビデオテープで、裏には『チェス』の『2代目キング』と差出人の名前があった
「随分と古風な事をしやがるな。『2代目キング』は」
「そうね、あまりにも正々堂々としてるわ。再生するわよ？」
リアスがメンバーの頷きを確認した後、ビデオデッキにテープを入れて内容を公開する

画像の乱れが終わった直後、『チェス』の『2代目キング』こと蛟大牙（みずちたいが）の姿が映った

『……ん？もう始まっているのか？えっと……何々、テレビを見る時は部屋を明るくして、なるべくテレビから離れて見るようにしてくれ……で良いのか？』

「注意書から始めてる……」

何やら出鼻を挫かれた感覚で全員が拍子抜けとなるが、映像に映る『2代目キング』蛟大牙（みずちたいが）は台本らしき物を持ちながら話を続ける

『リアス・グレモリーと眷属の者達へ。お前達の力の成長にオレは「2代目キング」として注目せざるを得なくなってきた。オレは一目置かれているお前達を超えた上で、闇人（やみびと）を頂点に導くつもりだ。その余興代わりと言っては何だが、本日深夜0時にお前達の学舎（まなびや）のグラウンドにてバトルゲームを行（おこな）いたい。悪魔達の間で流行っているレーティングゲームの様な催しだ』

「バトルゲーム？何かの罠かしら？」

「いや、こいつはそんな姑息な手段を使う奴には見えねぇ。本心から言ってるんだろう」

『試合形式とルールについては後程、我々「チェス」が到着してから説明に入る。メンバーは好きなだけ連れてきて構わない。ゲームとはいえ戦いだ、覚悟の無い者は即刻辞退する事を勧める。では、深夜0時にまた会おう。えっと……尚、このビデオテープは最後まで再生すると自動的に爆発する仕掛けとなっているらしいから気を付けてくれ。

それでは――――――』

果たし合いの説明が終わったかと思いきや、大牙は台本を見ながら何かを言い出した

『それではお楽しみください……？「鱒代、ビームソードを手に入れる」、「波彦、カツラを買いに行く」、「鱈利、パラシュートが開かない」の３本……何なんだこれは？』

「「サ〇エさん風!?しかも、スッゲェ気になるタイトルだ！」」

新と一誠が同時にハモり、リアスは苦笑しながらビデオを止めた

「ぶ、部長！１タイトル、１タイトルだけ見ましょうよ！」

「そうだ！あんだけ気になるタイトルを発表されて見なかったら後味が悪い！ギリギリまで見るんだ！」

「あなた達ねぇ……真面目に考えなさい。闇人のトップが直に来るのよ？」

「それにバトルゲームと言う名目も怪しい気がしてなりませんね……」

祐斗が顎に指を当てながら考え込む

だが、『２代目キング』の蛟大牙は少し変わり者である事は殆どの者が承知している

三大勢力会談の時も、真正面から悪魔、天使、堕天使のトップを打ち破ると豪語していた

新の言う通り、姑息な手段を使う奴には見えない

「何にしろ、今はこのバトルゲームとやらを受けるしか無さそうね」

「そうですわね。三大勢力の重要拠点に自ら乗り込んで来るのですから、警戒態勢を整えておく必要はありそうですが」

リアスはとりあえず、深夜１１時３０分に再び駒王学園に集合する事を皆に伝えた

新と一誠はその話を聞きながら、ビデオを再生しようとしてアーシアと小猫、ギャスパーに止められているが……

「イッセーさん！ダメですってば！」

「……先輩。気をしっかり保ってください」

「爆発しちゃいますからダメですぅぅぅ！」

「１タイトルだけ！１タイトルだけだから！」

「小猫！分かってくれ！俺はどうしてもこの話が気になるんだ！ギリギリまで見させてくれ！」

『はぁ……』

リアス達全員が額を押さえて嘆息する中、下校時刻のチャイムが鳴った

もうすぐで深夜０時になる時刻、オカルト研究部のメンバー全員がグラウンドに待機

していた
教師としての仕事を終えたロスヴァイセも鎧姿となっている
「そろそろ来る時間ね」
リアスが腕時計を確認し、その時刻が0時となった
パアアアアアアッ……
眼前に青い魔方陣が展開され、その中から闇人(やみびと)のトップ――――『チェス』のメンバーが姿を現す
『2代目キング』の大牙、『2代目クイーン』のアスカ・シャーベット、『ルーク』風魔ヤタロウ、『ナイト』神代剣護(かみしろけんご)、『ポーン』ストレイグ・ギガロプスとダイアンの6人
新は1人足りない事に気付いた
「おい。『ビショップ』の神風がいないじゃねぇか」
「神風は他に用事があるから出られないそうだ。詳しくは知らんが」
「ふ～ん……」
怪訝そうに見る中――――竜の紋様が入った扉が出現し、そこから渉達が出てきた
「お待たせしました」
「おぉ、渉。来てくれたか」
「――――っ？闇皇(やみおう)。そいつは？」

「そういや知らなかったか。こいつは八代渉。俺やお前のと同じ鎧を宿す――――人間と闇人のハーフだ」
「人間と闇人のハーフ……そうか。村上が言っていた”三嶋の子孫”とはそいつの事か。『光帝の鎧』を宿す者……そいつらも参加するのか？」
「そうだが、問題でもあんのか？」
「いや、構わないぞ。『光帝の鎧』を宿す者とやらの実力も見てみたい」
大牙は渉達の参加も認めるが、渉は祐希那の様子が少しおかしい事に気付く
「……？どうしたの祐希那？」
「い、いや……何か、嫌な気配が……」
渉だけが祐希那の手が若干震えてる事を気に掛け、大牙はバトルゲームの説明を始める
「ルールは至ってシンプルだ。試合回数は全部で７戦。７戦の内４勝した方が勝利となる。ここにあるルーレットを回して互いに出場する者とバトルフィールドを決める。バトルフィールドはレーティングゲーム同様、異空間だから好きなだけ暴れても構わない。尚、死亡に関しては自己責任だから気を付けてくれ。あと、お前達の選手を決めるルーレットには赤い星の出目がある。それは好きなメンバーを３人まで投与出来るボーナスだ。出た時は上手くメンバー編成を行うと良い」

大牙が指差す先には、禍々(まがまが)しい顔が3つ並んだルーレットが存在する
「選ばれるのはランダムか」
「新、俺はあの水色の髪をした女の子と戦いたい」
一誠がニヤケながら指差す
新はその方角に顔を向けると、『2代目クイーン』のアスカ・シャーベットが優しげな微笑みを見せた
しかし、新は何故か背筋に微量の寒気を感じる
「一誠、選ばれるのはあくまでランダムだ。必ず来るとは限らない」
「そっか……そうだよな」
「では、第1試合の組み合わせとフィールドを決めるぞ」
大牙が指を鳴らすと3つのルーレットが回転を開始し、新達の前にスイッチが現れる
「何だこりゃ？」
「スイッチを止める権利はそっちに譲ろう。好きなタイミングで押すんだ」
「ほう。んじゃ、ポチッとな」
新は3連続でスイッチを押し、ルーレットが止まる
第1試合、グレモリー側――――木場祐斗、『チェス』側――――ダイアン、バトルフィールドは砂漠フィールドとなった

「木場とダイアンか……負けんなよ、木場」
「奴の剣はとにかく速い。どう攻略するかがポイントだな」
「うん、そうだね」
ルーレットの目が光り、祐斗とダイアンが異空間にある砂漠フィールドに転送される
２人が転送された先は辺り一面が砂一色の砂漠
ダイアンは早速魔人態になり、祐斗は聖魔剣を一振り創り出す
『このフィールドでのルールは単純明快。相手を戦闘不能状態にする、もしくは相手が降参の意思を提示した時点で勝敗が決まるぞ。第１試合――――始め！』
グレモリー眷属ＶＳ『チェス』のバトルゲームが幕を開けた
「ＨＥＹ！この砂漠フィールドだＴＯ、Ｋｎｉｇｈｔ自慢のＳｐｅｅｄは発揮されないみたいＤＡ。どうすＲＵ？」
「そんな心配はいらないよ。大地の聖魔剣！」
祐斗は手にした聖魔剣を言葉にした聖魔剣に創り変え、眼前の砂に突き刺す
すると、砂漠一面が蠢いて平地を作り上げていく
砂漠フィールドが平地に変わった事で、『騎士』のスピードを存分に発揮出来る様になった
「Ｗｏｗ！フィールドを無理矢理変えちまったのＫＡ！イカしてるＺＥ！」

ダイアンは右手に仕込み刀、左手に三ツ又の槍を携えて構える
「一誠のダチのＫｎｉｇｈｔ。冥界の時は一部しか見せていなかったＧＡ、今日は俺の魂を燃やすＺＥ！」
シュバババババッ！
ギギィンッ！
ガキンッ！
ダイアンの手が見えなくなる程速く動き、祐斗の聖魔剣と火花を散らし合う
ダイアンと祐斗の剣速は殆ど互角のようだった
「流石に速いね。僕が速度で押されるなんて思わなかったよ」
「まだまＤＡ！俺の魂はこっからだＺＥ！」
ダイアンは距離を取り、三ツ又の槍に螺旋状の魔力を練る
３つの矛先から螺旋状の魔力がうねりながら突き進み、祐斗を飲み込もうとする
「――――ッ！風の聖魔剣！」
祐斗はすぐに別の属性を持つ聖魔剣を創り、自身を覆うような竜巻のバリアを発生させる
ダイアンが放った３つの螺旋状の魔力は竜巻のバリアに弾かれ霧散していった
だが――――

「真上がガラ空きだＺＥ」
ダイアンは祐斗が作った竜巻の真上で居合い斬りの構えを取っていた
祐斗は上空を見上げる
「『牙流転生』ッ！」
ズドドドドドドドドッ！
ダイアンの仕込み剣の刃先から無数の鋭利な形をした魔力が放たれ、祐斗の全身に隈無く突き刺さる
「ぐうぅぅぅっ！」
「竜巻の張ったのは失敗だったＮＡ！逃げ場を自ら閉ざしちまっＴＡ！」
「そう思うかい……？ふっ！」
ザァッ！
なんと祐斗が竜巻の流れに乗ってダイアンのいる上空に駆け上がっていく
まるでスケートでもするかの様に……
よく見ると、祐斗の両足から剣が張り付いていた
「Ｗｈａｔ!?まさか剣をスケート靴代わりＮＩ!?Ｕｎｂｅｌｉｅｖａｂｌｅ!!」
「竜巻を張った時、君が上空に回り込む事は予測していたよ」
祐斗の一聖魔剣《せいまけん一が神々しい光と禍々しいオーラの両方を纏っていく

しかし、ダイアンも剣をエレキギターにしまい、大音量と魔力を同時に流す
「Ｄｅａｄｌｙ　Ｄｒａｇｏｎ!!」
エレキギターから巨大なドラゴンを象った魔力が祐斗に襲い掛かり、聖魔剣と正面からぶつかり合った
ドオオオオオオオオンッ！
引き起こされた大爆発はダイアンと祐斗を巻き込み、２人を地上に突き落とした
「Ｓｈｉｔ……まさＫＡ、あんな方法で俺に攻撃を仕掛けてくるなんＴＥ。最初から牙流転生をくらう覚悟でいたのＫＡ？」
「まあね……君のあの技は並大抵の速度じゃ躱せないと思ったんだ。それに上空では身動きが取れないから、竜巻の流れを利用すれば何とかなると踏んでいたんだけど……至近距離で攻撃を切り替えるとは恐れ入ったよ」
「Ｇｒｅａｔ!流石は一誠のダチＤＡ。それに……俺の『エレク』にヒビが入っちまってるＹＯ」
ダイアンの武器、魂とも言えるエレキギターに一筋の亀裂があった
祐斗の聖魔剣のオーラがダイアンのギターにまで届いていたのだろう
「Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｄ……ヒビが入っちまったら良い音色が出せなくなっちまうＹＯ……。Ｓｏｒｒｙ!Ｇｉｖｅ　ＵｐするＺＥ！勝負に勝ちたいけＤＯ、ギターが壊れた

ら元も子もねぇＹＡ（や）」
「え？良いの？」
「Ｙｅｓ（イエス）」
ヤケにあっさりした態度で降参を宣言したダイアン
グレモリー側は1勝し、祐斗とダイアンが砂漠フィールドから帰還する
「やったな木場！」
「足から剣を出すって発想には驚いたぜ」
「イッセーくんとの訓練で使った手段が役に立ったよ」
一誠と新が祐斗を賞賛し、次の組み合わせを決めるルーレットが作動する
新はさっきと同じ様に3連続でスイッチを押した
グレモリー側――――ゼノヴィア
『チェス』側――――神代剣護（かみしろけんご）
バトルフィールド――――浮き島フィールドの組み合わせとなり、ゼノヴィアにとって最悪の相手が来てしまった……
「……剣護さん」
ゼノヴィアと剣護が転送され、海に浮かぶ巨大な島の上に立つ
『この浮き島フィールドでは、先に相手を海に落とした方が勝ちとなる』

簡単なルール説明の後に笛が鳴り、第2試合が始まったが――――ゼノヴィアは何故かデュランダルを出そうとしなかった
「ゼノヴィア、どういつもりだ?」
「剣護さん……今のあなたは、本当に優しかった剣護さんではないのですか……? 誰よりも神を信じ、誰よりも人を救う心が強かった剣護さんは……」
ゼノヴィアは悲しみを含んだ表情で剣護に問い掛けるが、剣護は当然の如く吐き捨てる
「ゼノヴィア。まだ神を信じているとでも言うのか? 神なんざ俺達をチッポケなゴミとしか認識せず、手を差し伸べたりすらしなかったクズだ。信じていれば必ず救われるなんて言葉はまやかし、存在しないクズにすがり付くゴミ共が生み出した幻想なんだよ」
「剣護さん! どうしてそんな考えしか持てないんですか!?」
「それが現実だからだ。ゼノヴィア、神を信仰すると言うバカな考えを捨てた方がよっぽど利口だ。悪魔になった今でも信仰心を持っているなど、あまりにもバカげている。大体、悪魔は神の敵だろうが。敵が敵を信仰するとは……笑えるな」
剣護の言葉がゼノヴィアに痛々しく突き刺さる
悪魔になるまでは悪魔を滅してきた身、その自分が破れかぶれで悪魔に転生した今もなお、神に祈りを捧げている

ゼノヴィアは何も言い返す事が出来なかった
そんな彼女に剣護は無慈悲な膝蹴りを腹に叩き込む
「がはっ……！ゲホッ……！」
「さっさと落ちて塩水でも飲んでろ。今のてめぇなんざ、眼中にもねぇ」
ドボンッ……
もしかしたら、この組み合わせが決まった時から勝負は着いていたのかもしれない……
ゼノヴィアにとって剣護は上司であり憧れの存在
そんな男が自分の敵となり、神に対しての信仰心を一切合切捨てた
ゼノヴィアはツラ過ぎる現実を前に、戦意喪失してしまっていたのかもしれなかった……
勝者と敗者がフィールドから帰還し、イリナがゼノヴィアに駆け寄る
「しっかりしてゼノヴィア！ゼノヴィア！」
「……すまない。私は、まだ弱いままだ……。剣護さんは敵だと、分かっている筈なのに……」
「ふんっ。力の無い奴が俺の前に存在してる事自体目障りなんだよ。さっさと隠居でもしてこい、クソガキが」

「……ッ！剣護さん！」
ショックを受けるゼノヴィア、激昂寸前のイリナを新と一誠が押さえた
「ゼノヴィア、奴の言う事なんか気にするな。お前はお前のやりたい事を貫け」
「イリナも落ち着け。次にあいつが選ばれたらぶっ倒せば良いんだ」
「……」
その様子を見た剣護は更に吐き捨てた
「俺をぶっ倒す？自惚れんな小物。特に赤龍帝（せきりゅうてい）、てめぇなんざ俺の足下にも及ばねぇよ。ゼノヴィアと同レベルだ」
「……てめぇの方が小物だろッ！」
一誠の怒りに剣護は平然とした様子で下がる
勝敗は1対1のイーブン
まだバトルゲームは始まったばかりだ……

悪夢にピリオドを打て

「次の組み合わせだ」
　ルーレットが本日3回目の回転を始める
「ポチッとポチッとポチッとな♪」
　今度はリズム良くスイッチを押してルーレットを止めた
　グレモリー側――――赤い星
『チェス』側――――ストレイグ・ギガロプス
　バトルフィールド――――雪原フィールド
　グレモリー側はボーナスの赤い星マークが出た
「こちらはストレイグ。そっちは赤い星が出た事で自由にメンバーを3人まで出せるぞ」
　大牙の言葉で新達は誰を出すか話し合いを始めた
「さて、誰が出る？」
「う～ん……ん？祐希那、どうしたの？」
「……」

　渉はまた祐希那の様子がおかしい事に気付き、肩を揺するが反応が無かったので強く呼び掛ける
「祐希那、祐希那？祐希那！」
「――――っ!?ど、どうしたのよ？渉」
「それは僕の台詞。さっきから変だよ？」
「だ、大丈夫よ……大丈夫」
　祐希那は平常心を装うが、渉は異常な状態にあると見抜いた
　そんなやり取りを他所にストレイグは――――何故か手で顔を押さえて笑っていた
「ちょっとあんた。何がおかしいってのよ？」
「いやいや、俺はツイてるぜ。まさかよぉ――――あん時邪魔してくれた奴と殺し損ねた女に、こんな偏狭な町で出くわすたぁな」
『――――っ？』
「何処かで聞いた声だと頭ん中で引っ掛かってたんだよ。だが間違いねぇ。そこの茶髪、覚えてるか？」
　渉はストレイグの目をジッと見てみる
　ハッと何かに気付き、疑問を真っ先にぶつける
「君はまさか……3年前の……？」

「あぁそうだ。3年前、獲物を殺してる途中でてめぇにやられたんだよ。その女を殺す直前でな！」
祐希那もこの時点で理解出来た
彼女の腹の中で耐え難い何かが煮え滾(たぎ)る
震えながら、歯を食い縛りながらストレイグを睨んだ
「まだ思い出せねぇなら、話してやるよ。3年前の――――あの日を」

――――3年前、とある屋敷

ザシュッ！
ズチャッ！
グジャッ！
ドスッ！
バキグチャッ……！
生々しくエゲつない音が屋敷中に鳴り響く
夥(おびただ)しい量の血を浴びた闇人(やみびと)が腕を広げながらゲスな哄笑(こうしょう)をあげる
「ハーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！これが闇人(やみびと)の力か！最高過ぎるぜ

！」

下品な笑い声を止めない闇人(やみびと)に主と仲間を殺された少女は、恐怖に支配された体を動かせずに泣いていた

怯え、震え、その全てが少女の思考すら奪う

「あ……あぁぁ……皆が、皆が血まみれに……っ」

「あぁ？ま～だ1匹残ってやがったのか。お前もすぐに殺してやるよ。俺に血と肉の感触を覚えさせてくれよ！ハーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

闇人(やみびと)が赤黒い血に染まった爪を振り下ろした刹那、一筋の光が間に割り込んできた

「何だてめぇは！」

「君も闇人(やみびと)だね？僕は君達を狩る、『光帝(こうてい)の鎧』を宿す者」

「なぁに格好つけてやがんだクソがぁっ！」

もう一方の爪で『光帝(こうてい)の鎧』の宿主を殺そうと突き出すが、闇人(やみびと)の凶刃(きょうじん)が届く前に彼は右手に鎧を纏って目を潰す

「ぐぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！て、てめぇ！俺の目をおぉぉぉ！ふざけやがって！この代償は高く付くぞ！」

闇人(やみびと)は潰された目を押さえて姿を消す

乱入者(光帝)は腕を元に戻すと、庇った少女に声を掛ける

しかし、少女の顔はまるで魂が抜けたかの様な状態に陥っており、いくら呼び掛けても返事をしてくれなかった
「う……うぅ……」
「……っ？まだ息が……ッ！しっかりしてください！」
血まみれで倒れている男に近付く少年
男は弱々しい声で少年に話す
「わ、私はもうダメだ……その子を――――祐希那(ゆきな)を……」
「祐希那？あの女の子ですか？」
「祐希那を……助けてやってくれ……。私では守り切れなかった……主の私が、手も足も出なか――――ゴフッ！」
「もう喋らないでください！誰か！誰かいませんか!?」
「無理だ……この屋敷にいる者は、祐希那以外……全員殺された……たった1人の闇人に……！残っているのは……血にまみれた骸(むくろ)だけ――――ゴボッ！」
男が少年の肩を掴み、最後の力を振り絞って願いを託す
「祐希那を……祐希那を頼む……！遠くへ、逃げ……」
カクッ……
少年の肩を掴んでいた手が離れて地に落ちる

少年は未だに放心状態にいる少女――――――祐希那に再び声を掛ける
「君の主から頼まれたよ……君を守ってくれって……僕は八代渉」
「……や・し・ろ・わ・た・る……？」

――――――――現代に戻る

「あんたが……あんたがあの時の……ッ！」
「君があの時の闇人(やみびと)だったのか……姿が違ってるから分からなかったよ……」
「そりゃそうだ。目を潰された怒りと憎悪で姿が変わっちまったんだ。分かる訳ねぇわな。だがよ、安心したぜ……てめぇはともかく、そこの女は自殺したと思っていたが……生きているたぁ好都合だ」
「……1つ、聞かせてくれない？何で祐希那の仲間を殺したの？」
渉の問いにストレイグは低レベルな答えを出した
「何で殺したか？誰でも良かったんだよ。新しい力を手に入れたら試すのが当然だろ。そんな事も知らねぇのか？」
”闇人(やみびと)の力を試す”
その為だけにストレイグは祐希那の主と仲間を殺した

答えを聞いた祐希那は煮えくり返った感情を抑えられなかった
「ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
祐希那は神器（セイクリッド・ギア）――――『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』を手に持ってストレイグに斬りかかる
ストレイグは氷を纏わせた爪で斧を止める
「あんただけは……ッ！あんただけは絶対に許さないッ！斬り殺してやるッ！」
「殺すだぁ？ハッ！たかが屋敷にいた奴らを殺したぐらいで何怒ってやがる！闇人（やみびと）が他の種族を殺すのは当然だろうが！」
「ウアァァァ

祐希那が斬りかかる直前、新と一誠はそれぞれの武器を展開していた
リアスも朱乃も、その場にいた殆どがルールを無視してストレイグを攻撃しようとしていた……
ストレイグを許せないのは皆同じであるが、渉と祐希那が転送された以上、戦うのはその2人……
新と一誠は「絶対勝て！」と画面に映る2人に檄(げき)を送った
そしてバトルフィールドとなる雪原に3人の戦士が現れる
「祐希那、少し落ち着くんだ」
「渉！この状況でどう落ち着けって言うの!?今目の前に、目の前に私の主と仲間を殺した奴が――――っ」
祐希那は激昂して渉の胸ぐらを掴むが、渉の温厚色が皆無の顔に思わずビビる
いつもは小動物のようにホンワカ且つ天然ボケキャラの渉だが、今の彼にそんな様子は微塵も無かった
「わ、渉……？」
「祐希那、君の気持ちは痛い程分かるよ。でも、怒りに囚われたままじゃ絶対に勝てない。ここは――――僕がやる」
渉は静かな怒りと共に『光帝(こうてい)の鎧』を纏う

開始の合図が鳴り、ストレイグは氷の爪を両手に作り出した
「ハッ！てめぇが出てくるか。丁度良いぜ目を潰してくれた礼をしなきゃなぁ？てめぇは目だけじゃねぇ。合体ロボットみたくバラバラにしてや――――」
ビュンッ！
ドゴォッ！
ストレイグが言い終わる前に渉は高速のダッシュで詰め寄り、鳩尾に拳を捻り込んだ
完全に油断していたストレイグは激痛に顔を歪め、後退りして吐瀉物をぶちまけた
「ガボゲボォッ……！い、1発入れたからって調子こいてんじゃねぇぞ！」
「君、ただ自分の力を試したくて祐希那の主と仲間を殺したんだね……」
「あぁ!?それの何が悪いってんだ！」
渉は歩みを止めずストレイグに訊く
「君は――――大切な人を失った事はある？」
「あ？いねぇよバカが！」
「誰かを1年間、看病した事は……？」
「いつまで気色悪い事抜かしてやがんだ！んなもんある訳ねぇだろうが！」
ストレイグが氷柱（つらら）で作られた爪を突き出す
渉は拳にオーラを纏わせ、氷の爪を砕いた

「誰かに心を壊された事はあるかい？」
「クソがァァァァ！説教ならあの世でしやがれェェェェェェェッ！」
ストレイグは先程のよりも巨大な爪を作り、渉を潰そうとするが――――――再び拳で打ち砕かれる
「君のあまりにも幼稚過ぎる考えで――――――祐希那は1度精神が壊れたんだぞ！」
ドゴッ！
バゴッ！
渉は祐希那が辿った苦しみの道をストレイグに叫びながら拳を入れていく
「祐希那の精神が崩壊して受け答えすら出来なかった！人形みたいに虚ろな目になっていたんだ！食事も喉を通らず、一睡も出来ない日が何ヵ月も続いた！何ヵ月も泣き止まない時だってあった！」
渉の拳が顔面と鳩尾に集中砲火する
「祐希那の――――――1人の女の子の人生を狂わせておいて、ただで済むと思うなアァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！」
渉のアッパーがストレイグの顎を打ち抜く
自分の心情を代わりに、しかも必死に語り続ける渉に祐希那は自然と涙を溢れさせていた

「渉……まさか、私の代わりにそいつを……？」
「祐希那だって女の子なんだぞ！オシャレしたり買い物したりするのが当たり前なんだ！主や仲間と一緒に楽しい日々を送れたんだ！なのに君は――――祐希那からソレを奪った！女の子としての人生を奪ったんだ！」
「ほざけクソがぁっ！」
ストレイグが掌から氷柱を飛ばす
渉はその全ての氷柱を拳で弾き返した
「娯楽の為だけに祐希那の主と仲間、数多くの人達を殺してきた罪は――――あまりにも大きい！」
渉の蹴りがストレイグの鳩尾に命中
ストレイグは血が混じった内容物を吐き出す
「君は消えなければならない闇人だ。だから――――僕が消す」
「ペッ！闇人が他の種族を殺すのは呼吸をすんのと同じなんだよ！自然且つ重要な行動なんだよバカが！くたばれやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ストレイグが地面を突き刺して何本もの氷柱を渉に向かわせる
隆起しながら突き進む氷柱
渉はその氷柱を――――オーラを帯びた蹴りで消し飛ばした

消し飛ばした直後に距離を詰めてストレイグの鳩尾にまた拳を入れる
「が……ガボアァッ！」
「ハアァァァ

魔銃がゴキゴキと不快な音を立て、魔力を帯びて闇人に変異していく
右手に剣を携え、左手が銃となり、禍々しい風貌の異形となった
外界でこの様子を見ている新達は驚愕の表情となっていた
「あの銃が闇人にっ!?どうなってやがる!」
「つーか、あんなの有りなのか!?」
ストレイグは実験の成功に哄笑をあげた
「ヒャハハッ……! ハッハッハッハッハッハッ!こいつぁ良いぜ!魔銃の闇人だ!今まで調子に乗ってきた事を後悔させてやる!さぁ行け!あのガキをぶっ殺せ!」
ストレイグは闇人と化した魔銃に指示を出す
しかし、変異した闇人は軽く首を横に振る
「チッチッチッ……ザコごときが、このバリー・デスペラードに命令を下すとはお笑いだ」
「んだと……?ザコとは俺の事かぁ!?」
「俺の前にいるお前に言ったんだ。『チェス』の座に着いている者として恥を知れ。力は貸してやるがな」
闇人になった魔銃――――バリー・デスペラードは挑発的な物言いをする
ストレイグはイライラを募らせながらも、バリーに渉達を殺すように言う

「とにかく、今はあのガキ共をぶっ殺せ！お前を闇人（やみびと）にしてやったのは俺だ！俺の命令を聞け！」
「あぁ、その点については感謝しておく。力も貸してやろう。その代わり――――お前がいる『チェス』の座を貰う」
ズドドドドドドッ！
魔銃（マガン）――――バリーがストレイグに黒い弾丸を撃ち込み、ストレイグは状況を理解出来ないまま倒れた
「……っ!?味方を撃った!?」
「何なのあいつは……？いきなり『チェス』を殺すなんて……」
渉も祐希那も、外にいる新達も突然の事に頭が混乱する
だが、バリーと名乗った魔銃（マガン）は淡々と口を開く
「殺してはいない。ただ――――こいつに力を与えただけだ。そろそろ変化が起きるぞ」
グググ……ッ！
撃たれた筈のストレイグが体を震わせながら起き上がる
ストレイグの様子は誰が見ても分かるぐらい異常になっていた
「ハ、ハハ……！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ……！力が！力が

湧いてきやがる！湧いてきやがるよオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
ブチブチッ！
グニュリッ！
ストレイグの両肩の爪が分離し、全身から幾重もの氷柱（つらら）が飛び出して口が裂け始める
ストレイグは魔銃（マガン）の力で凶暴化してしまったようだ
「ヒャハハハハハハハハハハハハ！どうだ!?俺は更にパワーアップしたぞ！これが魔銃（マガン）の力か！金色のクソガキ！俺のこの姿を見て怯えろや！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」
ストレイグは渉を見下して大笑いするが、渉はジッとストレイグを睨んで一言だけ冷静に言い放つ
「君、目が曇ってるよ」
「遺言はそれだけかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
激昂したストレイグが口と両手、浮遊する爪から巨大な氷柱（つらら）を発射する
「あの2つの爪からも!?逃げて渉！」
祐希那が逃げるように叫ぶが、渉は魔力の盾を形成する
しかし、盾は巨大な氷柱（つらら）の群れに難なく破壊された
「ヒャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ぜエエエエエッ！」

今度は雪の結晶を手裏剣みたいに投げ、渉を串刺しにしようとする

渉はそれらを最小限の動作だけで回避した

「祐希那。君の代わりに奴を殴ったけど、少しは落ち着いてきた？」

「それどころじゃ無いでしょ!?渉！あのゲスがパワーアップしちゃったのよ!?なんでそんな余裕でいられるの！」

「祐希那、前に教えた筈だよ？力を得るだけなら誰にでも出来るけど、それを使いこなすには冷静になって本質を知る必要があるって」

渉は更に言い聞かせる様に続ける

「焦りが生じるのは相手の力に呑まれているから。奴の目を見ればすぐに分かる。焦っている事がね」

「……？」

祐希那は渉に言われた通り、凶暴化したストレイグの目を見る

渉と戦っているストレイグの目を……

「……あれ？分かる。あいつの目に焦りが……」

「激情のまま攻撃し続けても当たらない。それがどんどん募って焦りとなっていくんだ。さっきまでの祐希那みたいにね……」

祐希那はさっきまでの自分の様子を思い出した
自分も怒りのままにストレイグを殺そうとして、周りを全く見ていなかった……
涉はそれをやめさせ、教える為に自分が先に出たと言えよう
「涉は……この事を気付かせるために……？」
「祐希那。今の君は1人じゃない……僕やフェリス、アリス、ロコ、新さん達もいる。もう――――1人じゃないんだ」
涉が手を差し伸べ、祐希那はその手を取る
祐希那の瞳から涙が溢れてくる
その涙は悲しみや憎しみが一切無い……嬉しさを表した涙だった
「涉、ありがとう。もう大丈夫。私も一緒に戦って良い？」
「もちろん。僕と祐希那の手で――――祐希那の悪夢を終わらせよう」
涉は祐希那の手を握って彼女を立ち上がらせる
もう祐希那の心に恐怖心は無かった……
側にいてくれる仲間(涉)が、自分を精神の崩壊から救い出してくれた恩人(涉)がいるから……
彼女は向き合う事が出来た――――彼女自身の悪夢の根源に
「さあ、祐希那の為に出血大サービスだ。フェリス、アリス、ロコ、準備は良い？」
『勿論よ！』

『いつでも来いなのじゃ！』
『出撃準備、完了であります！』
涉の体内に宿る魔狼剣、魔海銃、魔鉄槌も高々と声を上げ、涉は彼女達を体内から排出する
３つの光球が涉の周りを飛び交い、やがて融合を始める
鎧の胸部は紫電の色彩に変化し、左腕は刃が連なった紺碧の腕へと変わり、右腕は翡翠色の鱗と水の膜に包まれた
３体の魔族との融合により、最強の光帝が誕生した……
今まで見た事の無い姿に祐希那は勿論、グレモリー眷属も唖然とする
「わ、涉？何その姿？！」
「僕の隠し技さ。フェリス、アリス、ロコの力を直接憑依させた強化形態――――――『三魔族憑依』。消費が激しいから普段は使わない様にしてるんだけど、祐希那の為に使うよ」
涉が両手を前に翳すと胸部から紫電が走り、魔鉄槌ロンドが飛び出した
水平に浮かぶ得物を握り締め、石突きの部分から紫電の球体を幾つも生み出す
涉は魔鉄槌ロンドで紫電の球体を、凶暴化したストレイグに向けて打った
打たれた紫電の球体は猛スピードでストレイグに直撃し、その後もピンボールの如く

縦横無尽に跳弾を繰り返しながらストレイグを痛めつける
「ガッ!?グブゥッ!ゴホアッ!」
魔鉄槌ロンドをしまい、次は右腕から魔海銃アリエスを具現化させる
足から水流を噴射させて滑らかに移動し、円の動きでストレイグを翻弄する
未だに紫電の球体が飛び交う中、渉は滑りながら魔海銃アリエスを乱射
魔力を帯びた水の弾丸が寸分の狂い無くストレイグに命中する
「調子に乗るんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!」
激昂したストレイグは地面から氷のトゲを無数に出現させ、紫電の球体を全て貫く
だが、渉は事前に攻撃圏外へ後退しており無傷だった
左腕から魔狼剣フェンリオスを出し、刀身にオーラを溜め込んで斬る
三日月型の斬撃が氷のトゲを破壊してストレイグの腹を切り裂く
切り口から噴水の様に血が噴き出し、ストレイグは腹を押さえてうずくまる
「つ、強い……っ」
「祐希那、ボーッとしてちゃダメだよ?さあ、行こう。悪夢を終わらせに」
「……っ!……ええ、渉」
祐希那が大きく頷き、２人は互いの手を握ったままストレイグの攻撃を避ける
ストレイグは更に技を乱発するものの、２人には一切通用しない

「チクショウ！何故だ!?何故攻撃が当たらない!?闇人（やみびと）の力を得た俺が！更に魔銃（マガン）の力でパワーアップした俺が何故勝ってる気がしない!?それに何より――――」

ストレイグが渉と祐希那の目を見た

２人の目は勝利を確信したかのような自信に満ち溢れている

「何故そんな勝ち誇った目で俺を見ていられるんだ!?俺に恐怖した女までもが何故なんだ!?やめろ！怯えろ！泣きわめけ！俺の攻撃でくたばりやがれェェェェェェッ！」

ストレイグが氷柱（つらら）を幾重にも混合させたドリル状の魔力を渉と祐希那に向けて撃ち放つ

「力の焦点がズレたまま技を撃っても、その力はフルに発揮されない。僅かな隙さえあれば簡単に崩せる。祐希那、君の神　器（セイクリッド・ギア）の力と――――僕の魔力を合わせるよ」

「ええ、渉」

祐希那は渉に神　器（セイクリッド・ギア）の力を流し、渉は受け取った力に自分の魔力を合わせて増幅させる

「凍（い）てつく波動にて全てを止め、輝く波動にて全てを打ち消す――――シャイニング・ブリザードオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

渉のマントが翼のように広がり、吹雪と光を交えた波動がストレイグを技ごと包み込む

「俺は……俺はもっと血と肉を味わうんだ……ッ！血と肉をぉ……ッ！」
祐希那の精神を崩壊させた闇人（やみびと）は跡形もなく消えていった……

風魔と2代目クイーン

第3試合が終了して戦績は2勝1敗
勝利を手にするには、あと2勝必要となる
「見ててスカッとしたぜ、渉」
「圧倒しちまったもんな。しかも、あんな隠し技まで持ってたなんてやるじゃねぇか」
「うん、ありがとう。でも……ちょっと予想外だったね。また強そうな闇人が増えちゃって……」
渉に合わせて全員が『チェス』陣営に視線を向ける
ストレイグが死に際に魔銃を闇人化してしまい、その闇人が『ポーン』の称号を強奪した
魔銃の闇人――――バリー・デスペラードは右手の剣と左手の銃を擦り合わせて新達を窺っている
思わぬアクシデントが発生したが、『2代目キング』の大牙は特に気にする素振りを見せなかった
「次の組み合わせだ」

大牙は指を鳴らし、それを合図にルーレットが回る
新は適当なリズムでスイッチを押した
グレモリー側はロスヴァイセ
『チェス』側は風魔(ふうま)ヤタロウ
バトルフィールドは悪霊フィールドになった
「次は私ですか。行ってきます」
「気張ってこいよ、ロスヴァイセ」
新が手を振るとロスヴァイセは静かに頷いてバトルフィールドに転送された
転送された場所は周りに古い寺や家屋などがあり、江戸時代を表している様な風景だった
『このフィールドでは建造物が崩壊すると悪霊が出現してプレイヤーを無差別に襲ってくる。悪霊の強さは破壊された建造物の大きさに比例しているから注意を払う事を勧めておこう』
つまり、派手に戦えば戦う程悪霊が出現して不利になる可能性が生じると言う事である
戦闘開始の合図が鳴り、ロスヴァイセがスーツから戦乙女(ヴァルキリー)の鎧姿へ変わる
『ルーク』のヤタロウはソッとサングラスを外した

「北欧の神に仕えていたヴァルキリーか。貴殿らの力――――拝見させてもらおう」
バサッ！
ヤタロウの背中から漆黒の翼が展開され、自身を両翼で包み込む
翼が広がると――――そこにいたのは左手に鉤爪を装備し、鴉（カラス）の特質を持った闇人（やみびと）
しかし、1ヶ所だけ普通の闇人（やみびと）とは違う点があった……
「……ッ！あなた、目が……ッ!?」
ロスヴァイセが驚愕するのも無理は無い
何故なら――――眼前の闇人（やみびと）の目は既に潰れていたのだから……
痛々しい傷痕に触れながらヤタロウが言う
「そう、某（それがし）は元から目玉が無いのでござる。しかし……目玉が無くとも貴殿を骸（むくろ）にする事など容易し。いざ参る」
ヤタロウが鉤爪をロスヴァイセに向け、ロスヴァイセも戦闘態勢を取る
少しの静寂を過ごした直後、ヤタロウはその場から姿を消した
「――――ッ！……上!?」
ロスヴァイセは気配を察知して上空を見上げる
ヤタロウは鉤爪から矢を3発放つ
「初手ですか。はぁッ！」

ロスヴァイセは防御の魔方陣を展開して矢を防いで攻撃に転じようとしたが、ヤタロウは既に空から姿を消していた
「遅い」
「後ろに!?」
ヤタロウがロスヴァイセの背後から矢を放った
ロスヴァイセはギリギリで回避するが矢は思ったより強力で、ヴァルキリーの鎧が少し破損してしまう
ヤタロウは左手を上に掲げ、鉤爪に日光を集める
「風魔流極意、『閃光空矢射(せんこうからやうち)』ッ！」
鉤爪から光を結集させた矢が撃たれ、ロスヴァイセに向かっていく
悪魔にとって光は猛毒
一撃でも食らえば多大なダメージとなる
光の矢はロスヴァイセに当たらず、建造物を破壊していった
「グバアアアー！」
「ゲギャアアアー！」
「……っ!?しまった！悪霊が！」
建造物が破壊された事により悪霊が出てきてロスヴァイセに襲い掛かる

ロスヴァイセは魔術で悪霊を滅していくが、数が多いせいで苦戦してしまう
「ふっ、ならば！」
ヤタロウはコレを利用するべく、次々と寺や家屋を破壊して悪霊を解放させていく
『ゴギュガアァァァ！』
１００体近い数の悪霊が一斉にロスヴァイセに向かう
ロスヴァイセは周囲に魔方陣を展開し、魔術の一斉砲撃を行った
悪霊を退治しているロスヴァイセに、ヤタロウは死角から近づいて首を掴み地面に叩きつけた
「う……ぐっ……！」
「安心せよ。苦しませはせぬ……一瞬にて、貴殿の息の根を止めてやろう」
ギラリと光る鉤爪
ヤタロウは弓を引く様に左手を後ろにやり――――――ロスヴァイセの顔面を突き刺そうとした
ドゴッ！
ドスッ！
「ぐッ！ぬうぅぅ……ッ！」
「負ける訳にはいきません！」

ロスヴァイセの膝がヤタロウの腹にめり込み、それによって鉤爪の狙いが右にズレて難を逃れた
ヤタロウは態勢を建て直すべく飛び退く
「女と甘く見てしまっていた。某の攻撃をここまで躱した者は嘗てござらぬ」
「私もこんなに防戦を強いられたのは初めてです。それにしても――――随分と卑怯な戦法を取るのですね……。いきなり背後から攻撃したり、悪霊達を利用したりと……」
ロスヴァイセの言葉にヤタロウは鉤爪を向けながら答えた
「正々堂々と言う見栄など不要。相手を確実に葬る――――それが忍の極意にござる。風魔流極意、大羽紫禁呪炎ッ！」
ヤタロウが両翼を広げ、炎を纏った羽を射出する
ロスヴァイセは防御の魔方陣で防いでいく
ヤタロウは立ち込める爆煙を利用してロスヴァイセの背後に――――
「それは読めています！」
「なぬっ!?」
先読みしたロスヴァイセの魔方陣から光の帯が発射され、ヤタロウの左翼を撃ち抜いた
左翼が半分以下の大きさになってしまい、ヤタロウは苦痛に顔を歪める

「……なるほど。死角を突く某(それがし)の戦法に意識を集中させて気配を読み取ったか。敵ながらアッパレでござるな」
「すみませんが、一気に勝たせてもらいます！」
ロスヴァイセが再び魔術の一斉砲撃の構えを取り、周囲の魔方陣から大量の砲撃を放った
妙な事にヤタロウは1歩も動かず、ロスヴァイセが撃った魔術砲撃を食らう
辺り一面が爆煙に包まれ、ロスヴァイセは警戒を強めるが――――
ガシッ！
「そ、そんな！正面から!?」
「相手を仕留める為なら、腕や翼などくれてやろう」
ロスヴァイセの腕を掴んでいるヤタロウの右腕と鉤爪はボロボロ、両翼も殆ど原形を留めていなかった
それでもヤタロウは破損した鉤爪をロスヴァイセに向ける
「もうこれ以上は戦っても無駄です。降参した方がよろしいのでは――――」
「まだ勝負は着いておらぬ。某(それがし)の肉体が無くなる時、その時こそが某(それがし)の敗北なのだ……ハァァァ

鉤爪に大気中の微量な水分を結集させ、ヤタロウは1本の矢を作り上げた
「水分で矢を!?マズイ!」
「某(それがし)の勝ちだ!風魔流極意、十方暮鋼崩(じっぽうくれはがねくずし)ッ!」
ドシュウウンッ!
水の矢はロスヴァイセが咄嗟に出した何重もの防御魔方陣を貫いたが、胸部の鎧に少し突き刺さった程度に防がれた
ロスヴァイセ本人は後方に飛ばされたものの無傷で済み、体を起こす
「はぁ……あ、危なかった……」
「本当にそう思うか?」
ヤタロウの言葉を不審に思っていると、矢は消え――――胸部の鎧が錆びていく事に気付いた
「……っ!?私の鎧が錆びて――――っ!?」
「この水の矢の前では如何なる防御の術も崩し、相手の鎧などの防具を腐敗させ破壊する。貴殿の北欧魔術には打ってつけだ」
ヴァルキリーの鎧――――水の矢が刺さった部分は隈無く錆び、簡単に崩れて地に落ちる
「新さんやイッセーくんみたいな技じゃなくて良かった……」

アンダースーツまでは破壊されておらず、ロスヴァイセは心の底から安堵した
しかし、防御の魔方陣が効かないとすれば水の矢を防ぐ手段は皆無
ヤタロウは2本目の水の矢を作って構える
「さぁ、どうする？最早防御の魔方陣は某（それがし）に効かぬぞ」
「うっ……」
打つ手が無い事に焦りを感じるロスヴァイセ
外にいる新はアドバイスを送った
『ロスヴァイセ、お前は「戦車（ルーク）」だろ！その特性を考えて戦え！防御だけが取り柄じゃねぇだろ！』
「『戦車（ルーク）』の特性……あっ、そうでした！新さん、ありがとうございます！」
ロスヴァイセは新の意図を察して拳に魔術のオーラを纏わせる
『戦車（ルーク）』の特性は攻撃力と防御力の向上
『戦車（ルーク）』になった事でロスヴァイセの魔術は防御力だけじゃなく、攻撃力も増している
「――――っ。突貫するつもりか？無駄な足掻きを」
ヤタロウは水の矢と魔力で宙に手裏剣を作り、それらをロスヴァイセに向けて乱射した
ロスヴァイセは怯む事なく突き進み、矢を回避し手裏剣を魔術の砲撃で弾きながら距

離を詰めていく
「先程と気迫がまるで違う……！良かろう、この極意にて貴殿を葬ってしんぜよう！風魔流極意、羽黒大魔砲ッ！」
ヤタロウは矢と手裏剣を放ち続けながら嘴を開き、不気味なオーラを集結させる
「黄泉路へ逝けェェェ

千切(ちぎ)れて地面に落ちる
「ま、まさか某(それがし)と同じように捨て身の戦法を取るとは……っ！風魔の血は、某(それがし)の代で潰(つい)えるのか……。ロスヴァイセ、と申したか？某(それがし)を破ったおなごの顔……是非一目(ひとめ)だけでも見たかったでござる……」
そう言い残した後、ヤタロウは安らかに息を引き取った

「やりました、新さん！あなたのアドバイスのお陰です！」
「見事なパンチだったぜ、ロスヴァイセ」
新がロスヴァイセの頭を優しく撫でると、ロスヴァイセは頬を赤く染めて照れた
すると、小猫が間に割り込んで新の手を握る
「……ロスヴァイセさん。先輩からのナデナデは私の特許です」
「す、少しくらい良いじゃないですか！小猫ちゃん！」
２人の『戦車(ルーク)』が睨み合っているにも拘(かか)わらず、ルーレットは回り出す
「新、今度は俺に押させてくれ。どうしても――――俺はあの『２代目クイーン』のお姉さんと戦いたい！」

「別に構わねぇけどさ、必ず選ばれるとは限らねぇよ。それに、あの『２代目クイーン』……。な～んか嫌な予感がしてならねぇ」
新は用心深く『２代目クイーン』をマークし、アスカ・シャーベットは再び微笑みを見せる
一誠は気合いを入れてスイッチを押した
グレモリー側――――兵藤一誠
『チェス』側――――アスカ・シャーベット
「い　よっ　しゃ　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　願　い　が　通　じたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「マジで!?すげぇ！で、バトルフィールドは？」
バトルフィールド――――棺桶フィールド
『棺桶フィールド……？』
不気味過ぎるフィールドに全員が口を揃えて言った
しかし、一誠のテンションは最高潮に達している
「イッセー、あと１回勝てば私達の勝ちよ。思いっきりいきなさい！」
「はい、部長！行ってきまーすっ！」
選ばれた２人が棺桶フィールドに転送される

その名の通り――――巨大な棺桶が2つある以外、何も無いフィールドだった
『2代目キング』の大牙からルール説明が告げられる
『この棺桶フィールドでは、先に相手を棺桶に入れた方が勝ちだ。逆に言えば、相手を棺桶に入れない限り勝負は終わらない。よって、相手を殺してから入れても構わないぞ』
「あ、相手を殺してでも棺桶に……物騒なルールだな。ま、今の俺は負ける気がしねぇけど。グフフッ♪」
一誠が気味悪い笑みを浮かべるには理由がある
それは――――絶対に勝てる自信があるからだ
『洋服破壊(ドレス・ブレイク)』と『乳語翻訳(バイリンガル)』、この2つを使えば”女性相手”なら確実に勝利出来る
一誠は籠手を出してカウントを始める
「初めまして。あなたが赤龍帝(せきりゅうてい)さんですね？私は『チェス』の『2代目クイーン』を務めるアスカ・シャーベットと申します」
「アスカさんか。俺はリアス・グレモリーの『兵士(ポーン)』、兵藤一誠です！悪いけど速攻で勝たせてもらいますよ！」
『Welsh Dragon Balance Breaker(ウェルシュドラゴンバランスブレイカー)!!!!!』
籠手が強い輝きを放ち、一誠は禁手(バランス・ブレイカー)状態となる
そして一気に勝負を仕掛けた

「いくぜ、『乳語翻訳』ッ！さあ、アスカさんのおっぱいちゃん！これから何をするつもりなのか聞かせてちょうだい！」
謎の空間が『２代目クイーン』アスカを包み込み、一誠にしか聞こえないおっぱいの声が流れてくる
『とりあえず、しばらくは様子を見ましょう』
相手が攻撃する素振りを見せない事に一誠は疑問符を浮かばせた
『乳語翻訳』は完璧に決まった筈……
「どうしました？赤龍帝さん」
一誠は首を振って考えるのをやめた
様子を見る――――つまり、仕掛けて来ないなら一気に決めるべきだと結論付けた
相手を油断させる様にトコトコ歩いていく一誠
そして、アスカ・シャーベットの肩に触れた
『洋服破壊』ッ！」
ババババッ！
その瞬間、アスカ・シャーベットの服が下着ごと消し飛び、綺麗な裸が目の前に現れた
白みを帯びた美麗な裸体に弾むおっぱい、モデルの如くくびれた腰、瑞々しい張りの

お尻に一誠は盛大に鼻血を噴かした

「――――――っ？」

「おおっ！結構おっぱい大きい！そして脳内に保存しました！アハハハハハハ！この技の前ではどんな女性も裸になるのだ！」

グレモリー側の殆どが嘆息する中、一誠はトドメにドラゴンショットを撃とうとした

――――だが……

ガシッ

「……え？な、なんで恥ずかしがらないの!?アスカさん、あんた裸になってるんだぞ!?」

『――――――っ!?』

全員が目を飛び出させた

普通なら裸にされた女性は戦意を喪失する筈なのだが……『２代目クイーン』のアスカは裸体を隠す事もせずにドラゴンショットを撃とうとした一誠の手を掴んで転がした

その後、自分の現状を観察する

「不思議な技ですね。女性に一切のダメージを与えず、洋服だけを消し飛ばす技ですか。

確かに大抵の女性は戦うどころじゃありませんね」
「か、隠さないだと!?普通の女の子なら『キャーッ！』とか、『イヤーッ！』って言って裸を隠すのに……全く隠さない……!?」
　一誠は信じられない光景を目にしながらも、鼻血だけはしっかり出していた
「ア、アスカさん?あんた恥ずかしくないの?裸なんだぞ?スッポンポンの丸裸！おっぱいもお尻も丸見えなんですよ!?」
「まぁ多少恥ずかしいですけど、大丈夫ですよ?」
　一誠はかつてない歓喜とショックを同時に受けた
　裸でも大丈夫、『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』が効かない女性が存在した……
　一誠は思わず後ずさる
「そ、そんな……そんなバカな……！俺の完璧なコンボが破られた……」
『お、おい一誠！ショック受けてる場合じゃねぇだろ！』
『イッセー！しっかりしなさい！』
『イッセーさん！しっかりしてください！』
　ショックに打ちのめされてた一誠に必死で呼び掛ける３人
　一誠はハッと我に返って立ち上がった
「そうだ！逆に考えれば、俺はおっぱいもお尻も見放題じゃないか！お姉さんに隠す気

が無いって事は、このまま拝み続けても問題は――――っ？」
一誠がアスカの裸を眺めようとした矢先、彼女の水色の長髪が急速に伸びている事に気付く
「では、お返しに」
微笑むアスカの髪の毛が巨大な拳となって一誠を壁まで殴り飛ばした
「ガハッ！な、何だ今のは……!?!鎧が欠けたぞ……!?!」
一誠の腹部の鎧が瀬戸物みたいに割れて破片が落ちる
アスカ・シャーベットは元の髪の毛に戻し、露出している胸と下を髪の毛で包む
最低限の箇所だけ衣服代わりの髪の毛で覆い隠した
「これなら、赤龍帝（せきりゅうてい）さんも気にしないで済みますよね」
「な、何なんだ……！髪の毛が生き物みたいに動いて、デカい拳になったり……体にまとわりついたり……」
『そうか！分かったぞ一誠！その女の正体が！』
新が一誠に向かって叫ぶ
『その女はおそらく――――鬼髪師（きはつし）だ！』
「鬼髪師（きはつし）？」
聞き慣れない単語に一誠及びグレモリー陣営がざわめく

『新、何なの？その鬼髪師って？』
『簡単に言えば、陰陽師の一種だ。自らの毛髪を武器やらに変化させる特異な陰陽師。それが鬼髪師だ……。それに陰陽師の類なら式神も持っている可能性が――――』
「ご名答です」
　アスカが円を描く様に手を回すと、１２の宝玉が出現する
「黄道十二星座の力を持つ式神を操る女性陰陽師――――『星宙の巫女』。私はその最後の１人です」

前のページ　次のページ

鬼髪師アスカ・シャーベット

「し、式神？『星宙の巫女』って？」
「では、まずはこの子から。蠍座の式神、ソード！」
選ばれた宝玉以外の宝玉が消え、その宝玉から蠍の外見と刀を持った式神が姿を現す
「オイラはソード！蠍座の式神だ――――って！姐さん!?なんで裸になってるんすか!?」
「あ、これですか？これはそこにいる赤龍帝さんが」
「何だとぉっ!?テメェコラ！よくも姐さんを！刺し身にしてやっから覚悟しやがれい！」
ソードと名乗る式神の刀が紫に変色し、雫を垂らす
雫が地面に落ちると、音を立てて穴を開けた
「地面が溶けた!?まさか毒か!?」
「その通り！オイラの毒は何でもかんでも溶かす！テメェの鎧だって３秒でドロドロにしてやんよ！」
ソードがダッシュして毒が染み込んだ刀を横薙ぎに振るう

一誠は間一髪でかわすが、毒の液体が付着した部分は見事に溶ける
「げっ！」
「オラオラァ！」
ソードの刀を避けても、飛び散る毒の液体が鎧を溶かしていく
一誠は危険を感じて遠距離から攻撃を繰り出す事にした
「ドラゴンショットォッ！」
一誠のドラゴンショットがソードに命中し、ソードは煙を上げながら地面を転がる
「くっそぉ！姐さん、一旦引き下がらせてもらいますよ！次の式神でボコボコにしてやってくだせぇ！」
ソードは元の宝玉に戻ってアスカの体内に帰還
アスカは次なる式神を召喚する
「次はこの子達。双子座の式神、ジェミニ！」
今度は1本角の赤い怪人と1本角の青い怪人が出てきた
「僕はジェミニ・ザ・ボルケーノ！」
「俺はジェミニ・ザ・フロスト！双子の兄弟で俺が兄貴だ！」
ハイテンションに自己紹介をした後、２人はアスカの方を向く
「わあ！ご主人様が裸だ！どうしようフロスト！今すぐ犯したいよ！」

「落ち着けボルケーノ！俺だって犯したいんだ！」
「自分達を召喚した人の前で何言ってんだ!?」
一誠は思わずツッコミを入れてしまった
「コラッ。そんな下品な言葉はダメでしょ？めっ」
「ゴメンなさ～い」
アスカがチョンとジェミニ兄弟の頭を叩く
ジェミニ兄弟が一誠の方を向いて気合いを入れ直した
「よーし！ご主人様にもっと褒めてもらうために、あの赤いのをやっつけちゃおうよ！」
「おう！俺達の攻撃でやっつけてやろうぜ！」
弟が炎のレーザー、兄が氷のレーザーを一誠に放つ
一誠は背中のブーストを噴かして上空に逃れるが、既に頭上にはジェミニ兄弟が先回りしていた
「合体！ハイブリッド・ジェミニ！」
兄弟が手を合わせると、体が細かなパーツに分解されて1体の怪物――――右半身が炎、左半身が氷に覆われた式神と化した
「なっ！何だありゃ!?」
「特大パンチを食らえェェェェェェェェェェェッ！」

バゴォッ！
ハイブリッド・ジェミニの両拳が一誠の腹に打ち込まれ、一誠は血反吐を吐きながら地面に落下した
ジェミニはソードと同じ様に宝玉に戻ってアスカの体内に入る
「赤龍帝さん。降伏した方が良いですよ？私とジェミニの攻撃をまともに受けてしまっては立てないでしょう」
アスカが降伏を勧めるも、一誠は痛む体に鞭打って起き上がる
「ゲホゲホッ！た、確かに凄い力だ……。こんな凄い力を持っているのに、なんで闇人と組む必要があるんだ！なんで他の種族を平気で殺す様な奴らと一緒に行動してるんだ！」
一誠は怒気を含ませながらアスカに訊く
アスカは一拍置いてから答えた
「それは――――私が『クイーン』の力に選ばれてしまったからです。お話によると、『初代クイーン』の力は自ら他種族の女性を選抜し、その人を『２代目クイーン』にするそうなんです。ですから、選ばれた以上は『２代目クイーン』を務めないといけません。それに――――」
再び一拍置いた後、アスカは屈託の無い微笑みで答えた

「私は闇人(やみびと)こそが、世界から争いを無くす事が出来る種族だと思っています。だって、力を見せて私達に勝てない事を理解させてあげたら――――争うなどと言う考えは誰も起こせないでしょう?」

ゾクッ……

一誠は言葉では表せないような寒気を感じた

〝争いを無くす為に闇人(やみびと)といる〟

その考えに誰もが戦慄を覚えた……

「今、最も力があるのは闇人(やみびと)です。その闇人(やみびと)と共に争いを考えている人達を打ち負かしていけば、いずれ争いは無くなります。私は平和な世を作る為に生まれたのです」

「そんな考え……理解出来ねぇよ!争いを無くしたいのは俺達だって同じだ!」

「でも、それには力が必要です。何者にも負けない力が……あなたはそれをお持ちですか?」

一誠は直ぐに答えられなかった

今の自分には絶対勝てると言う様な力が無い

新やヴァーリ、渉など一誠より強い実力を持つ者は多々存在する

「それでも、それでも俺は部長達と一緒に戦うんだ!『禍(カオス)の団(ブリゲード)』や闇人(やみびと)から人間界、冥界、天界も守らなくちゃいけないんだ!」

「心構えは認めましょう。牡牛座の式神、タウラス！」
３つめの宝玉から金色の牛の怪物が出現し、荒い鼻息を鳴らす
「ブモモオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
地震を起こしながら突っ込んでくる化け物牛に対抗するべく、一誠はブーステッド・ギアで力を溜める
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!!!!』
倍増させた力を拳に集めてグッと握り締め、突進してくるタウラスに全力の拳打を突き出した
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
ドガアアアアアアアアアアアアアンッ！
凄まじい衝撃音の直後、一誠は地面を抉りながら飛ばされ、タウラスは折れた角を押さえて泣き喚く
タウラスもアスカの体内へ戻っていった
「まさかタウラスが力負けするとは思っていませんでした……。パワーだけなら１番であるこの子を……なかなかのパワーをお持ちですね。では次」
アスカがまた別の宝玉から式神を召喚する

「山羊座の式神、カプリコーン！」

宝玉から出てきたのは――――杖をつきながらプルプルと震え、長いアゴヒゲを生やしたヤギの老人だった……

「いてて……んっ？何あれ？ヨボヨボの爺さん？」

「お～……久しぶりじゃのう～……アスカちゃんや～……」

「お爺様、出番ですよ」

「そうかそうか～……ワシの出番かの～……。若いの……ワシは山羊座の式神、カプリ……コーンじゃ」

「なんで今タメを作った？しかも長え！」

独特過ぎるキャラに一誠はついていけそうになかった

「あの、爺さん？あんまり無理しない方が良いんじゃないか？」

「ワシを年寄り扱いするでない。こう見えてもまだ８３２７億９６５１万４８９２歳じゃぞ。まだまだ若造には負けておらんぞい……」

「歳取り過ぎだろ！年齢からして負けそうな予感がするんだけど!?」

「な～に を 言 う か。ワ シ は 山 羊 座 の 式 神、カ プ リ コー……ンじゃっ！」

「またタメを作った！しかも、なんで力強く!?」

カプリコーンは1歩1歩とゆっくり歩き、少し進んだ所で足を止める
「ふい～……どうも最近疲れるのが早いのう……」
「爺さん、やっぱり無理しない方が……」
「ま　～　た　ワ　シ　を　年　寄　り　扱　い　す　る　か。　仕　方　無　い　の　う……フンッ！」
ボコボコボコッ！
気合いを入れた瞬間――――なんとヤギの老人が一気に筋肉ムキムキのマッスルボディになり、一誠の目が飛び出した
無論、外で見ているグレモリー陣営も……
「どうじゃ？これで少しは若く見えるかいのう？」
「何だ今のミラクルは!?しかも口調までガラリと変わっちまってる！」
カプリコーンは一誠に膨れ上がった自慢の筋肉を見せつけて杖をくるくると振り回す
「さてと、若造。ワシが稽古をしてやるから存分にかかってくるが良い。なぁに、手加減ぐらいはしてやるわいのう」
「言ったな！こっちだって手加減はしねぇぞ！」
一誠はブーストを噴かしてダッシュし、カプリコーンの顔面に拳をぶち込んだ

しかし、カプリコーンは微動だにしないどころか――――鼻血すら出ていなかった……

「フォッフォッフォッ。これでＭＡＸかいのう？まだまだ痒いわい」

「げっ！嘘だろっ!?」

狼狽する一誠にカプリコーンは杖で突きまくる

一誠は何とか杖の攻撃を回避しようと動くが、それを見破っているかの様にカプリコーンは突きをヒットさせる

「ほぉれい！フルスイングじゃわいのうっ！」

バキッ！

フルスイングした杖が一誠の首に叩き込まれ、一誠は一瞬意識を失う

「がっ……！――――ッ！うぐあぁ！いってぇぇぇぇ……ッ！」

「ま～だまだじゃわいのう。アスカちゃんや、後は任せるぞい」

カプリコーンは宝玉に戻りアスカの体内へ還る

「では、そろそろお開きにしましょうか」

「……っ!?ふ、２つも!?」

アスカが２つの宝玉を前方に出現させる

２体の式神を呼び出されては流石に敵わないと察した一誠はすぐに阻止しようとす

る――――が、今までのダメージが一誠を妨害する
「や、やべぇ……！体が思う様に動かねぇ……！」
「ラストはこの子達です。水瓶座の式神、コーラル！乙女座の式神、ヴァルゴ！」
　アスカが２つの宝玉を頭上に浮かせ出現させたのは――――水が入った壺を持つ半裸の綺麗な女性と、天使のコスチュームに身を包んで翼を生やした可愛らしい少女だった
「ふおぉぉぉぉぉっ！どっちも好みのタイプだ！このお姉さんと女の子になら――――」
「虐殺ガール、ヴァルゴちゃん！け～んざんっ☆」
「虐殺ガール!?名前怖い！やっぱ嫌だ！死にたくない！」
　一誠はヴァルゴの名乗りを聞いて戦闘態勢を維持
　すると、水瓶座の式神コーラルが前に出てくる
「随分と傷だらけね、坊や。いらっしゃい、お姉さんが癒してあげるわ」
「は～い♪」
『ちょっとイッセー！敵の誘いに易々と乗ってどうするのよ！』
『イッセーさん！ダメですぅ！』
　リアスとアーシアの制止は虚しく空振り、一誠は呆気なくコーラルの側まで近寄った

「じゃあ、いくわよ？」
ポコポコポコポコ……！
壺に入っている水が気泡を弾けさせ、湯気まで出していく
その事に気付いた一誠は恐る恐る訊いた
「あ、あの……なんでソレから湯気が……？今から何をかけるおつもりで？」
「――――熱湯よ♪」
ザバアアアアアッ！
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！アッチィィィィィィィィィィッ！癒されるどころか更にダメージがアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
壺いっぱいの熱湯をぶっかけられた一誠は全身を擦りながらのたうち回る
「坊やは煮沸消毒をご存知じゃなくて？」
「煮沸消毒はこんなやり方じゃない！癒してくれるって言ったのに騙されたチキショウ！」
「ラストはヴァルゴちゃん、いっきま～す！ヴァルゴちゃんステッキ～♪」
乙女座の式神ヴァルゴが手に出現させたのは――――ステッキの成分が皆無と言えるトゲトゲのバットだった
トゲ付きバットを見た一誠の脳内で警報が鳴り響く

「見るからに痛そうな武器だ！あんなの絶対くらいたくない！」
「ヴァルゴちゃんのマジカル処刑！お歌に合わせていくよ～♪月曜日は隕石落ちて～♪」
ドドドドドオオオンッ！
隕石の大群が一誠に激突
「火曜～日はマグマにダイブ～♪」
ドパアアアアアンッ！
地面からマグマが噴き出し、一誠が呑み込まれる
「水曜日は津波を受けて～♪木曜日はサボテンリンチ～♪」
何処からともなくやって来た津波が一誠を壁に叩きつけ、人型のサボテン軍団が針だらけの腕と脚でフルボッコに
「金曜日はジェ○ソン襲来♪土曜～日は岩石落とし♪」
ギュガガガガガガガッ！
ゴゴゴゴゴゴォォォォッ！
巨大な仮面男の２枚刃チェーンソーで前面を斬られ、大量の岩石が頭上から落下
一誠はもう血だらけのグロッキーとなっていた……
「……もう、俺のライフは――――」

「日曜日はお日様ビーム♪」
ズビイイイイイイッ！
ヴァルゴの頭上で輝く太陽が巨大な熱線を放射し、一誠の倒れている場所が大爆発を起こした
虐殺のフルコースを召し上がった一誠は最早虫の息……グレモリー陣営はその惨状に表情を強張らせていた
「お疲れ様です。もう勝負は着いたようなものですから、お戻りください」
「は～い☆」
「お言葉に甘えて」
２体の式神がアスカの体内へ帰り、アスカは黒煙をあげている一誠にゆっくりと近付いていく
「では、棺桶に入れさせていただきます。よいしょっ」
髪の毛を伸ばして一誠を持ち上げ、棺桶に移動しようとする
『イ、イッセー！起きなさい！イッセー！』
『イッセーさん！起きてください！』
呼び掛けも効かず、敗北へのカウントダウンが迫っていく
新はこれしかないと思い、一誠に向かって叫んだ

『一誠！よく聞け！もし、この試合に勝ったら――――――アーシアが乳首を吸わせてくれるらしいぞッ！』

『――――――っ!?』

新が出したトンでもない提案にグレモリー眷属全員は目が飛び出しそうなぐらい驚愕し、一誠の身に奇跡が起こった……

「アーシアの――――――おっぱいイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！乳首イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

「えっ？」

ズバズバッ！

一誠が驚愕の復活を遂げ、籠手から聖剣アスカロンを伸ばしてアスカの髪の毛を切る

脱出した一誠は即座に叫んだ

「新！本当なのか!?マジなのか!?マジでアーシアがおっぱいを吸わせてくれるのか!?」

『ああ、マジだ（笑）』

「いよっしゃあぁぁぁ

一誠のスケベな想いに籠手も連続で音声を発する
アスカは切られた髪の毛を再生させた
「これが噂のおっぱいドラゴンの力ですか。凄いですね、おっぱいで瀕死の状態から復活なんて聞いた事ありません」
「それが俺の強みです」
「ふふっ。では、その敬意を評して……一撃で終わらせてあげましょう」
アスカが微笑みながら宣言する
一誠は力を倍増させ続け、最大出力のドラゴンショットを備える
「アーシアのおっぱいを吸うため、一気に決めさせてもらうぜ！」
「元気が良いですね。では――――」
アスカが右手に高密度の魔力を纏わせ距離を詰めていく
一誠はカウンターの要領で待ち構え、ドラゴンショットを撃ち出そうとした
『ボディ狙いか！なら、カウンターでドラゴンショットを――――っ!?』
一誠がドラゴンショットを撃とうとした瞬間、アスカが急激に身を低くして突っ込んできた
狙いはボディではなく――――
「失礼」

ゴキィィィィンッ！

一誠の股間だった……

「Φ☆＜┣◆＊÷℃仝三ызｏ∽◇……！」

『……』

試合を見ていた全員が固まり、一誠は泡を吹いてうつ伏せに倒れた

『あ、新くん……もし彼女と当たって、アレを食らわされたらおしまいだよ……』

『祐斗、今は言わないでくれ……只でさえ腹をフォークで抉られてる気分なんだ……』

アスカが髪の毛で倒れた一誠を持ち上げ、棺桶に入れる事に成功

第５試合は『２代目クイーン』アスカ・シャーベットの勝利に終わった

強運こそ勝利のカギ!?

「タ、タマが……タマが……」
「イッセーさん、すぐに治しますから頑張ってください」
アーシアが一誠の負傷箇所、股間に淡い光を当てている
体の傷は殆ど癒えたが、まだ股間だけはまとわりつく様な痛みを駆け巡らせていた
「しかしまぁ、なんてエグい事を……あれ程躊躇わず股間を狙い打つ女は初めて見た」
新は畏怖の目で『2代目クイーン』アスカ・シャーベットを見る
因みにアスカは既に魔力で作った服に着替えていた
「向こうは2勝しちゃったけど、まだ勝機を失った訳じゃないよ」
「そうは言うがよ、祐斗、一誠にくらわせたアレが何度もフラッシュバックしちまう現状で余裕を構えていられねぇんだが……」
「……そ、そうだね」
第6試合の組み合わせを決めるルーレットが回り出す
「今世紀最大の賭けだ。あの女とは流石に当たりたくない」
新がそう願ってスイッチを押す

グレモリー側――――竜崎新
『チェス』側――――アスカ・シャーベット
「何故だアアアアアアアアアアアアアアッ!?」
新の慟哭がグラウンドに響き渡り、バトルフィールドはゴールフィールドに決定した
「チクショウ……俺の願いが泡みたいに弾けた……」
「あらあら。元気を出してください、新さん。私が慰めて差し上げますわ」
朱乃が新を自身の胸に抱き寄せて頭を撫でる
新は微量の安らぎを得たが、すぐにバトルフィールドに転送される
場所はサッカーグラウンドの様なフィールドで、それぞれの側にはゴールが設置されていた
更に、少し離れたサークル内に１０個の箱が存在する
『ここでは相手をゴールに叩き込む事で箱を選ぶ権利が与えられる。１０個の内、１つだけ”勝利”と書かれた人形が入ってる箱を先に引き当てた方の勝ちだ』
「確率は１／１０か。その人形を引き当てるまで試合は終わらないとなれば、長期戦になるのは必須か……」
新は即座に闇皇と化し、アスカは式神の宝玉を出現させる
開始の合図と同時に新が掌から魔力の弾を撃ち放った

「蟹座の式神、キャンサー！」
宝玉から甲羅と鋏を持った少女が出現し、背中の甲羅で魔力の弾を弾き返す
「はうぅぅぅ……わたしはただの蟹なんですぅぅぅ……。暴力はやめてください！！！！！！……」
「何かギャスパーみたいな娘だな……悪いが、今回だけ手加減は一切しねぇ！」
「ひいいいいいい！やめてくださいいいいいっ！」
ブウンッ！
キャンサーが巨大な鋏を振るうと斬撃が発生し、空間が斬れる
新は危険を察知して横っ飛びで回避した
「あっぶね～」
「ひいいいいいいん！もうダメですぅぅぅぅ！お家に帰りますぅぅぅぅぅ！」
キャンサーは泣きながらアスカの体内に戻り、次なる宝玉が出現する
「牡羊座の式神、ウール！」
ポヨンッ♪
コミカルな効果音の直後に、フワフワで二頭身サイズの羊が現れた
しかも、円（つぶ）らな瞳で新を見つめている……
「ムキュ～ッ♪」

「な、何だこのゆるキャラみたいな式神は……」
「モキュ～ッ♪」
牡羊座の式神ウールがピョンピョン跳ねながら新に向かっていく
新はこんなゆるゆるの式神を攻撃したら反感を買いそうだと攻撃姿勢を解く
しかし、それは大きな間違いだった……
「ムキュキュ～ッ♪」
ギュインッ!
式神が球体になった上、ドリルみたいなトゲが一斉に隆起
回転を加えながら新の腹に突っ込んだ
「ゴバアアッ!やり方キタネェ……ッ!」
ボスッ!
完全に油断していた新はゴールネットまで吹っ飛ばされ、アスカに箱を選ぶ権利を与えてしまった
『ヒデェ!あの羊ヒデェよ!』
「よしよし、頑張りましたねウール。ゆっくり休んでね」
アスカは式神を戻してからサークル内にある１０個の箱の内１つを選ぶ
箱の中身にはハズレと書かれた紙があった

「あ、ハズレですね。じゃあもう一戦始めましょうか」
「ゴホ……ッ！そうだった、当たりを引かない限り終わらねぇんだった。まだ勝機はある！」
「まだまだいきますよ。魚座の式神、パイシーズ！」
「魚座か……。さっきみたいなゆるキャラだったら、今度は手加減抜きで殺ってやる――――――っ!?」
出てきたのは、ゆるキャラとは無縁の姿を持つ双頭のウツボ
新の予想は見事に裏切られた……
「ピギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
「ゴギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
「怖ッ！顔怖ッ！何処の怪獣だよこいつは!?」
「怪獣じゃありません。この子達はまだ2歳を迎えたばかりです」
「こんな図体デカくて幼児!?ってか来んじゃねえええええええっ！」
新は襲い掛かってくる双頭のウツボの噛みつきを躱し、目を剣で斬りつける
ウツボは苦しがって顔を地面に擦り付けた
「大怪獣バトルをしてる気分だぜ。オォラァッ！」
新は追い討ちに巨大な魔力の弾をもう一方の頭に放つ

　両目を潰された頭は何度も首を振って苦しむ
「戻りなさい、パイシーズ。天秤座の式神、リブラ！」
　双頭のウツボが体内へ還り、今度は右手に赤、左手に青色の天秤皿を吊るした女性が姿を現す
「リブラ。あの人の周辺の重力を変えなさい」
「分かりました。重力プラス」
　赤い皿が光り、新は上から発生する重力に体の自由を奪われる
「ぐぎぎぎぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……ッ！か、体が押し潰される……ッ！重力変化の式神か……!?」
「はい。リブラは対象物の重力を自在に操る式神です。そして――――――」
　アスカの髪の毛が徐々に伸びながら新に向かっていく
鬼髪師（きはつし）の能力で新を縛り上げた
「このままゴールに入れさせていただきます」
　アスカはハンマー投げの要領で捕縛した新を振り回し、ゴール一直線に投げる
　だが、新は重力の範囲から解放されたのを見逃さず地面に魔力の弾を撃って、その爆風で自身を跳ね上げさせた
「危ねぇ危ねぇ。んじゃ、お返しさせてもらうぜ！」

新はマントを翼に変えて低空飛行しながら、高速でアスカに体当たりをかます
「きゃあ！」
『2代目クイーン』と言えど女性……体重までは一般女性と変わらず、アスカはゴールネットまで吹っ飛ばされた
「よしっ、次は俺が箱を選ぶ番だな。確率は1／9（きゅうぶんのいち）……こいつにするか」
新は選んだ箱の蓋を開けるが、中身は空っぽのハズレだった
互いに1つずつ開け、残る箱は8つとなった
アスカが土埃を払いながら言う
「純粋に強いですね。流石は『闇皇（やみおう）の鎧』の宿主です。では、私の持つ式神の中で1番強い2人を出しましょう」
今までとは違う雰囲気を滲み出す宝玉を2つ、アスカは前方に出現させた
「出でよ！射手座の式神、サジタリオン！獅子座の式神、レオーグル！」
アスカの呼び声に応え現れたのは――――全身を鎧で覆われたケンタウロスと、黒き体躯に白色の鬣（たてがみ）を持った獅子の獣人
サジタリオンは弓矢、レオーグルは大剣を携えていた
「我が輩を呼び出すとは、相当の手練れであろうな？アスカ」
「まさか二強と呼ばれし我々が、同時に呼び出されるとは思わなかった」

「サジタリオン、レオーグル、彼は『闇皇(やみおう)の鎧』の宿主です。あなた達なら彼を退(しりぞ)けられるかと」

レオーグルが大剣を片手で振り回し地面に突き刺すと、フィールド全体に大きな亀裂が入る

「貴様がそれ程言うのなら、文句は言わぬ」

「私もだ。現闇皇(やみおう)の力、とても興味深い」

「すげぇ重圧だ……今までの奴らとは別格か……! 必死でやらねぇと負けちまうよな!」

新は剣と全身に魔力を駆け巡らせ、一気に突っ込んでいく

獅子座の式神レオーグルに闇皇剣(やみおうけん)を振り下ろすが、片手で持った大剣に阻まれる

「ぬぅ……なかなかの力量だな。だが、我が輩を斬るには少し温(ぬる)いな」

「だったら、これならどうだ!」

ドゴッ!

新の魔力を帯びた渾身の蹴りがレオーグルの顔にヒットする

レオーグルの口から少量の血が一筋流れた

「……我が輩に蹴りを入れる者なぞ、いつ以来だろうな。今まで戦った奴らは我が輩の気迫に臆して戦意喪失する者ばかりだった。久々に血が煮え滾(たぎ)る!」

ドゴオォッ！
レオーグルの左拳が新の腹にめり込み、新は血と共に内容物を吐き出す
「ゴバァァッ！な、なんつーパンチだよ……！」
「レオーグル！頭を下げろ！」
後方からサジタリオンの弓が無数の矢を放ち、新の全身に突き刺さる
新は数メートル飛ばされ、痛みに苛まれながらも矢を引き抜く
「我が獅子の咆哮で吹き飛ぶが良い」
レオーグルが大口を開けて魔力を口内にチャージしていく
新は足を負傷したせいで回避行動が取れず、迎撃するしかなかった
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
「迎え撃つか！その勇気は称賛してやろう！」
新が放った帯状の魔力とレオーグルの咆哮が同時に発射され、２つの巨大な力がぶつかり合う
序盤はほぼ互角だったが、後からレオーグルの咆哮が新の魔力を押していく
「ぐっ……！やべぇ……！押し戻される……!?」
ドガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！
２つの巨大な力が大爆発を起こし、新は爆風で吹き飛ばされてゴールに入ってしまっ

た
「ふう、久々に血が煮え滾(たぎ)る者だったぞ」
「そうですか。あなたにそこまで言わせるなんて、やはり彼は凄い人ですね。では――
――箱を選びましょうか」
サークル内の箱を1つ選ぶアスカ
箱の蓋を開けてみると――――
「あ、当たりました」
「なぬっ!?」
なんと当たりの人形を引き当てられ、新の敗北が決まってしまった
「運も実力の内、と言いますね。この場合」
「チッ。もう終わりか。まぁ良い、我が輩は寝るぞ」
「次の機会に持ち越すとしよう」
レオーグルとサジタリオンが宝玉となってアスカの体内に戻る
2人はバトルフィールドからグラウンドに帰還した
「スマン。負けちまった……」
「新、そんなに気を落とす事は無いわ。まだ負けた訳じゃないわよ」
「そうだぜ、新。次に勝てば良いだけだ!」

リアスと一誠が励ましを送り、新は苦笑する
いよいよ最後の組み合わせを決めるルーレットが回転する
リアス、新、一誠がそれぞれ一回ずつスイッチを押した
グレモリー側――赤い星
『チェス』側――蛟大牙（みずちたいが）
バトルフィールド――タイムフィールド
迎えたラストゲーム――遂に闇人（やみびと）の『２代目キング』が選ばれた……

ラストゲーム！超魔鎧身！

「オレの出番が来た訳だが、そっちは赤い星だったな。誰が出てくる？」
「３人まで選べるんだよな。なら――――俺と一誠、そして渉の３人だ」
新と呼ばれた一誠、渉が一歩前に出る
「気を付けて、渉。相手は闇人（やみびと）のトップよ」
「ありがとう祐希那。新さんと一誠さんがいるから、大丈夫だよ」
「新、しっかりね」
「新さん。勝ったらキスしてあげますわ♪」
「嬉しいけどよ、俺さっきの試合で殆どボロボロです……」
新が肩で大きく息をしていると、アーシアから回復の光が送られる
「少ししか回復出来ないかもしれませんが、イッセーさんも頑張ってください！」
「サンキュー、アーシア。一誠、お前も気張れよ」
「分かってる。分かってるけど……まだ股間が痛むかも……」
４人がバトルフィールドに転送される
到着した場所は巨大かつ不気味な時計がそびえ立つ広大なフィールドだった

辺りを見渡す3人に、大牙がルールを説明する
「このタイムフィールドでは、時計がランダムに決めた制限時間までに立っていられた者が勝ちとなる。つまり、タイマーが0になった時にオレが起きていなかったらお前達の勝ち。逆にお前達が起きていなかったらオレの勝ちだ」
大牙が指を鳴らすと、時計がランダムでタイマーを設定し始める
制限時間は２０分となった
「お前達は確か『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』の力を持っていたな。『王（キング）』から承認が下りないと『プロモーション』出来ないと……。許可を貰え。その間、待っておく」
「随分と余裕じゃねぇか？まだ疲れが完治していないが為のハンデか？」
「いや、本気のお前達と戦わなければオレのプライドが許さん。『2代目キング』として、全力のお前達と戦わずして頂点を名乗れないだろう？」
「ありがたいぜ」
「部長！『プロモーション』の許可を！」
リアスが2人の『プロモーション』を承認し、新と一誠の全身に力が流れる
「最後だからな、『女王』形態でいくぜ！『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』！『女王（クイーン）』！」
「俺も『女王（クイーン）』にプロモーションッ！」
『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ） Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） Ｂａｌａｎｃｅ（バランス） Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!!!!!』

「では僕も」

新は『闇皇の極限破滅女帝』、渉は光帝『三魔族憑依』に変異し、一誠は『赤龍帝の鎧』を纏う

大牙も全身から青いオーラを漂わせ、『蛇神皇の鎧』を具現化した

「三大勢力会談の時は共闘していたが、今回やっとお前達と戦う事が出来る。お互い、死力を出し尽くそう。――――フンッ！」

ガキィィィンッ！

大牙のチェーン状に伸びた細剣が一誠の鎧の前面に傷を付け、新が両肩のキャノンから魔力の塊を連続で放出する

大牙は円を描く様にチェーン状の刃を回して魔力弾を防ぐ

一誠がお返しと言わんばかりにブーストで加速させたタックルをするが、大牙は何重もの防御障壁を作って一誠を弾き飛ばす

「魔狼剣フェンリオス！」

「光帝の力、見せてもらおうか」

渉の魔狼剣と大牙の細剣がぶつかり衝撃波を生む

大牙は再び刃先をチェーン状に伸ばし、それを渉の首に巻き付けて放り投げ、掌から蛇型の魔力を撃ち放つ

涉は投げられながらも、魔狼剣(フェンリオス)に魔力を流して向かってきた蛇を両断する
「ドラゴンショットオッ！」
「フルバーストッ！」
一誠がドラゴンショット、新が闇皇銃(やみおうじゅう)と両肩のキャノンから高密度のレーザーを大牙に向けて発射
大牙は背後から来る攻撃を察知して突きの構えを取る
「スネーキングベノムッ！」
細剣を力強く突き出すと、切っ先から紫色の蛇型魔力が大口を開けて2人の攻撃に突貫していく
3つの魔力はそれぞれの攻撃を相殺し爆煙を撒き散らした
「かなり高密度の魔力だ。以前に会った時とはまるで次元が違う」
「「当たり前だ！」」
前方から一誠、後方から新が大牙に突っ込み、涉は上空から奇襲してきた
新は『戦車(ルーク)』形態になっている左手に魔力を蓄積させ、涉は魔海銃(まかいじゅう)アリエスを両手に持つ
「ヘル・クラッシュッ！」
「シャイニングマグナァァァァァァァムッ！」

まず渉が二丁拳銃から水と光を混ぜた特大の魔力を撃つ
輝く水柱は大牙を包み、新と一誠が前後からの同時拳打をくらわせる
２つの拳が生み出す衝撃は周りの地面を殆ど抉り取る程の威力を見せた
光の水柱が消え去り、大牙の腹と背中には新と一誠の拳がめり込んでいる
「……凄まじいな、この拳打の威力は。不覚にも衝撃と痛みで顔を歪めてしまった」
「クソッ！『女王（クイーン）』形態で殴ったっつうのに！」
大牙は２人の拳を掴んで投げ飛ばす
新と一誠は体勢を立て直して着地、渉も地上に降り立った
「マジかよ……あれだけの攻撃をくらって、倒れねぇなんて……」
「やっぱり奴は強ぇな。『２代目キング』は名前だけじゃねぇって事だ」
「でも、少なくとも全くダメージを受けていないと言う訳では無いですよ」
渉の言葉通り、大牙は倒れはしないものの――――無傷では済まなかった
肋骨が何本か粉砕されたのか口元を手で押さえ、地面に血を吐き捨てる
「３人を同時に相手するのは流石に無謀だったか。仕方ない――――アレを使わせてもらおう」
大牙は息を吸うと同時に両腕を前方でクロスさせる
ゆっくりと息を吐きながら両手を元に戻す

「以前、村上京司が使用した闇人の強化変異――――超魔身を知っているか？」
「超魔身って……あのバカ強い化け物みたいな姿か」
「あぁ、奴のアレは未完成の段階だった。オレは超魔身を独自にパワーアップさせ、オレだけの超魔身を作り上げた。赤龍帝や白龍皇の『覇　龍』と少し似た様な感じだな」
　大牙が全身から複数の魔力を放出し、それらが様々な姿の蛇を形成していく
　そして一誠と新が知っている様な呪文を唱え始めた
「我、目覚めるは覇道を追い求めし蛇神の皇なり！」
『頂点に立つのが――――』
『お前の性だ』
「無限を掴み取り、夢幻を与える覇道を築く！」
『我が魂らは――――』
『貴様の糧となろうぞ』
「我、蛇と龍の魂と共に蒼き皇となりて――――」
　大牙の纏っている『蛇神皇の鎧』が青白く強い輝きを放って形状を変えていく
「「「「汝らを未だ見ぬ蒼白の未来へ導こう――――ッ！」」」」
「超魔鎧身ッ！」

ゴオオオ

それぞれの翼から火炎、水柱、土石流、竜巻を発生させる
『うわぁぁぁぁぁっ！』
新、一誠、渉は四元素の渦に呑み込まれてしまい、抉られる地面と共に飛ばされた
「ぐっ……！なんつー威力だ……！しかも、あれだけ巨大な力を簡単に制御してやがる……」
「しかも、ドライグやアルビオンとは違う魂を４つも取り入れてるって……」
「でも、やるしか無いですよね！」
渉が１番に飛び出し、魔鉄槌（まてつつい）ロンドに雷を迸（ほとばし）らせて振り下ろす――――が、大牙は攻撃を右手のみで防いだ
「まだまだぁっ！」
新が突っ込み『騎士（ナイト）』形態の右腕で神速の拳（ヘル・クラッシュ）打を連続で繰り出す
大牙は空いたもう片方の手で蛇型の拳を作り、新の拳（ヘル・クラッシュ）打に対抗する
まるで蛇の首が９つある様な姿を彷彿させた
「なかなか速く強力な拳だ」
「片手で相殺していくとか……お前もデタラメなぐらい強ぇな！一誠！」
「分かってる！今度は最大出力だ！いくぜェェッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！！！

「お前達の力も見事だった。先の試合でダメージを負っているとはいえ、ここまでの力を発揮出来るとは……。やはりお前達こそが、オレの覇道への最終目的となろう」

ビーッ！ビーッ！ビーッ！ビーッ！

突然、何かを知らせるブザーの様な音が大きく鳴る

視線を向けると、時計のタイマーが０の数字を表示していた

「タイムアップ、か……。互いの人員が立っているので、この勝負は引き分けだ」

「引き分けか。けど、勝負内容じゃ俺達の負けみたいなもんだ」

「あぁ、あいつの超魔鎧身（ちょうまがいしん）は強かった。俺達もまだまだ強くなる必要がある」

「僕も祐希那達と一緒にもっともっと強くなります」

「その意気だ。オレも『２代目キング』として、覇道の頂点に立つ者として――――お前達が強くなるのを待つぞ」

光がフィールドを包み、４人は元の世界に帰還していった

――――オカルト研究部の部室

「３勝３敗１引き分け、結果的に勝敗は決まらなかったけど……新とイッセーが苦戦を強いられるとはね……」

「奴はスゲーよ。一誠が暴走を起こした『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』にオリジナルの要素を取り入れたんだからな。今の大牙はヴァーリと互角以上の力を持っているかもしれねぇ」
「ヴァーリは『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』を使いこなし、大牙はソレを独自に改良して新しい力にした……。新もそうだけど、俺の周りにいる奴って本当にデタラメばっかりだよな」
「そう言うな。お前だって二天龍の一角を宿してんだろ？『兵士（ポーン）』の可能性は未知数、チェスと同じだろ？」
「新さん。明日は休日ですから、少し付き合ってくださいませんか？」
「ん？別に構わねぇけど」
「うふふ、楽しみですわ♪」

――――――――――――『チェス』の拠点

「アスカ、バリー・デスペラードとやらは何処に行ったんだ？」
「それが分からないのです。気付いた時には既に……」
「そうか。しかし、グレモリー眷属はやはり侮れないな。『チェス』のメンバーが２人も逝ってしまった。我々も気を引き締めなければ……躓（つまず）いてしまっては、覇道の頂点に辿り着けない」

――――――――――とある洞窟

「キヒヒッ♪これで破壊した封印の楔(くさび)は7本。『初代キング』が復活を遂げるまで――――あと1本だね～♪で、君は何者だい？」
「俺の名はバリー・デスペラード。あんたが製造した魔銃(マガン)だ。白い『ポーン』に闇人化(やみびと)された」
「白い『ポーン』？あぁ、ストレイグか。もしかして、あの役立たずは死んだの？」
「そうだ」
「キヒヒッ。良いよ良いよ～♪あんな役立たず。でも、最高の置き土産をしてくれたね～♪封印の楔も残り1本になったし、これから最高のパーティが始まるよ」
「封印の楔？それは何だ？」
「『初代キング』を封印している楔だよ。もう場所はリサーチ済み♪様々且つ特殊な力の場――――日本の有名なスポット、京の都……そこに最後の楔がある……！キャハハハハハ♪待っててよぉ『初代キング』……！」

第８・５章　異界転移のドッグデイズとヘルブラザーズ
宿命始動、２つの危機

先日、朱乃と朱璃（しゅり）の母娘（おやこ）を性的な意味で食べ終えた新は1人競馬場で大穴を当てていた

最近はバウンティハンターの仕事もパッタリ来なくなり、暇を持て余している

メインレースが終わり、ゲートを出て飲み物を買った

「はぁ……昨日は想像を絶する程疲れたわ……。俺は1ダースの鉛筆かっての……」

ついでに買った栄養ドリンクを一気飲みし、新はバイクに跨（また）がって次の暇潰しスポットへ向かうのだが、その途中の空き地で見知った顔の女性達――――ライザー眷属を見つけた

「いくぞ！カーラマイン！」

「来い！シーリス！」

ガキィンガキィンッ！

剣と剣がぶつかり合って金属音が発生し火花が散る

シーリスとはライザー・フェニックスの眷属で、カーラマインと同じ『騎士（ナイト）』である

違う方向からも打突音がするので見てみると――――　猫耳『兵士』のニィとリィが棍使いの『兵士』ミラ、『戦車』の雪蘭と打ち合う姿が見える
更に別の場所ではチェーンソー双子のイルとネル、『戦車』イザベラ組が3人の『兵士』シュリヤー、マリオン、ビュレントと組み手を行っていた
その近くでは『女王』のユーベルーナと『僧侶』の美南風が瞑想をして集中力を高めている
どうやらライザー眷属総出で特訓中のようだ
「はぁ……はぁ……カーラマイン、お前最近強くなってないか？以前は私と殆ど変わらなかったと言うのに」
「竜崎新に鍛えられたんだ。お陰で私達の力は向上した」
「竜崎新？あの『闇皇の鎧』を宿した男か」
「ああ、私達に戦い方を教えてくれてな。今では闇人に対抗出来る様になってきたぞ」
「そうだったのか……。私も、その男に教わった方が良いのだろうか……」
ブウンブウンッ！
新はエンジンを噴かして修業中の彼女達に近づく
「よー、元気そうだな」
「……っ？誰だお前は？」

「おいおい、これじゃ分からねぇのかよ。ほれっ」
新が頭部を覆っていたヘルメットを外して顔を見せると、真っ先に双子(イルとネル)が反応して駆け寄ってきた
「お兄さんだ！わ～い！」
「すご～い！カッコいい～！」
新はバイクを降りてイルとネルの頭を撫でる
新は大体把握してはいるが、一応何をしていたのか訊く事に
「この空き地で何してんだ？」
「見ての通り、修業だ。シーリスが相手して欲しいと言うので打ち合っていたんだ」
「久しいな、闇皇(やみおう)の蝙蝠。私を覚えているか？ライザー様の『騎士(ナイト)』、シーリスだ」
「あぁ、覚えてるぜ。見事な乳首と裸だったからな」
新のセクハラ発言にシーリスは顔をしかめ、得物である大剣を構える
「カーラマインから聞いたぞ。お前、カーラマイン達を鍛えてやったそうだな。私にも教えてくれないだろうか？私自身の強さがどれ程のものなのか……。お前に裸にされて体を撫で回されて以来――――私は悔しかった。あれ程簡単にあしらわれたのは初めてだ。だから、私も自分を高めたい」
「私達だって鍛えたんだからね！」

「次はもうあんな負け方はしないにゃ！」
続くように猫耳『兵士（ポーン）』のニィとリィが啖呵を切り――――シュリヤー、マリオン、ビュレントの『兵士（ポーン）』３人も挙手して加わる
ご指名を受けた新は自信ありげにこう言った
「人気者はツラいぜ。よしっ、丁度良い暇潰しになりそうだ。相手してやるか」

――――ＶＳ『騎士（ナイト）』シーリス――――

新は大剣を構えたシーリスと向かい合い、右手に『闇皇（やみおう）の鎧』を展開する
「私だって、あれからどうかしてる程鍛えたんだ。はあっ！」
ババババババババッ！
シーリスが『騎士（ナイト）』特有のスピードを活かし、幾つもの残像を作り上げる
「多くの残像を生み出す程の速度を手に入れたのか。やるじゃねぇか。そおらよぉっと！」
新は右手から魔力の弾を発射して全ての残像を撃ち抜く
しかし、シーリス本人の姿が何処にも見当たらない
殺気を探る新――――そして、上を見上げて彼女を見つけた

「もらったぁっ！」
「甘いぜ」
　ガキイィィィンッ！
　金属音と閃光の後、新とシーリスが互いに背中を向けている
　新が右手を横薙ぎに振るとシーリスの大剣が手から離れ、ついでに彼女の服が消し飛んだ
「あっ……いやんっ！」
　可愛らしい悲鳴をあげて裸を隠すシーリス
　新は右手を元に戻してシーリスに歩み寄る
「残像を作ったのは良かったが、やはり攻撃に無駄な動きが目立つな。大振りだと簡単に隙を作ってしまい、敵にチャンスを与えちまう。ソレを無くす様に細かな動作を身に付ける必要があるな」
　新はシーリスの欠点と対処法を的確に説明する
「お、お前はいつも女を裸にする……どうしてこんなふざけた戦法しかしないんだ？」
「俺は良い女を傷付けるのが好かないだけだ。お前だって立派な裸体を持ってんだ。その裸体に傷を付けたくねぇの」
「……それは私を褒めているのか？こんなガサツで剣を振り回すような女を……？」

「『騎士(ナイト)』以前に女だろ、お前だって」
ハッキリ告げる新にシーリスは顔を紅潮させた
1、2回視線を逸らした後、再び新の目を見る
「不思議だな、お前は。カーラマインや他の皆がお前を好きになる理由が分かった気がする……」
「あ、聞いたのかよ?」
「聞いたさ。どうやら私も……お前を――――いや、あなたを好きになってしまった……」
ムニュンッ
シーリスが新に胸を押し付ける様に抱きつく
不意を突かれた新は一瞬ギョッと驚愕してしまった
「まさか、シーリスまで堕ちるとは……竜崎新、キミは本当に女を堕とすのが得意だね」
「お兄さんのエッチ蝙蝠♪」
「少しは節度を持ってくださいよ」
「私達だけじゃ物足りないの?」
イザベラ、イルとネル、ミラ、雪蘭(シュエラン)がからかう様に言ってくる
カーラマインだけは少し狼狽していた

「シ、シーリス！前までは竜崎新に興味無いと言っていたじゃないか！」
「うるさい、気が変わったんだ。私は今日から竜崎新を師匠と呼び慕う。よろしいですか？師匠」
「師匠ねぇ……まぁ悪くねぇけど」
「やった♪では、これからもよろしくお願いします。師匠」
「いい加減に離れろ！シーリス！」

――――ＶＳ『兵士（ポーン）』ニィ＆リィ――――

「この前の借りを返してあげるにゃ！」
「今度はあの時みたいにはいかないにゃ！」
猫耳『兵士（ポーン）』のニィとリィが挟撃体勢を取りながら言う
新は首、肩、腕、脚を鳴らしてから闇皇（やみおう）に変貌
ギラリと爪と眼孔を光らせて構える
「良い度胸だ、かかって来な」
新の挑発にカチンときたニィとリィは両サイドからの挟撃を開始した
鋭いパンチと蹴りを連続で出し続けるが、新は焦りを全く見せずに鎧の腕で受けた

り、いなして体勢を崩す
「スピードは及第点だが、お前らもまだ動きに無駄があるな。そろそろ決めさせてもらうぜ」
新は右籠手から闇皇剣(やみおうけん)を取り出し、刀身に黒い魔力を流し込んでいく
黒く染まった剣を地面に突き刺し、得意技――――『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』を発動させた
剣から放たれた闇が地面を滑り、彼女達をあっという間に捕らえる
「にゃ、にゃにこれぇ!?」
「力が……入らにゃいぃ……!」
ニィとリィは何とか抜け出そうともがくが、闇に力を吸い取られるせいで徐々に体が言う事を聞かなくなる
新は仕上げとばかりに刀身を爪で擦り、横薙ぎに払う
その瞬間に闇は霧散し、捕らえていたニィとリィを全裸で解放した
自分達の痴態に気付いたニィとリィは慌てて裸体を隠す
新は即座に距離を詰めて彼女達の前に立ち――――胸を鷲掴みにした
右手でニィのおっぱいを、左手でリィのおっぱいを交互に揉み比べる
「ひにゃぁんっ!や、やめてぇ……っ。にゃにこれぇ……っ!?ふわぁぁっ!」
「ひにゃぁぁ……っ!こ、声が……おしゃえられにゃいぃ……っ。ふみゅぅぅんっ!」

「ふ～ん……リィは少しボリュームと張りがあって、ニィは感度が高いようだな。乳首の方はどうだ？」
新はニィとリィの乳首を指先でなぞる様に動かす
その手技に彼女達の顔は次第に蕩けていき……トドメにデコピンで乳首を弾いた
「「はひゃあぁんっ！」」
２人揃って喘ぎ声を発してしまい、裸体を痙攣させた後――――背中から地面に倒れた
蕩けきった表情で艶っぽい息遣いをしている姿はＡＶ女優に負けない程の色気が出ていた
「……ま、また負けたにゃぁ……っ」
「お、覚えてにゃさいよ……っ」
「やる気があるならいつでも相手になってやるぜ？拳でもベッドの上でもな」

――――ＶＳ『兵士（ポーン）』シュリヤー、マリオン、ビュレント――――

「悪いが速攻で決めさせてもらうぜ。実を言うと昨日から体力使い過ぎてヤバいんだ」
「あら、わざわざ自分が不利な事を教えるなんて。サービスかしら？」

「それでも手抜きは致しませんわ」
「速攻で終わらせるのはこっちの台詞よ！」
シュリヤー、マリオン、ビュレントの『兵士（ポーン）』3人が炎の翼を広げながら滑空し、手から炎の魔力を放つ
3つの魔力が合わさった相乗攻撃は螺旋を描きながら突き進む
新は前方に『闇皇紋章（エンブレム）』を出現させて炎の螺旋を受け止めた
そして両足に赤いオーラを纏い、両足蹴り（バースト・エンド）で紋章ごと炎を押し戻していく
紋章と炎は蹴りで吹き飛ばされ、絶句する3人の目前で爆散
3人はその爆発に巻き込まれる……
やがて爆煙が晴れると――――シュリヤー、マリオン、ビュレントの衣服は爆発の余波で全て消し飛んでしまい戦闘不能状態となっていた
「う、嘘でしょ……。一撃で……？」
「ま、またこの様な格好……恥ずかし過ぎます……っ」
「あんなに特訓したのに、まだこの人には勝てないって言うの……？」
「魔力を混合させるのは悪くない発想だ。けどな、それを防がれた後の反応と防御面が欠けてる。今後はその点を中心に鍛えていった方が良い」

――――ＶＳ『女王（クイーン）ユーベルーナ』＆『僧侶（ビショップ）美南風（みはえ）』――――

「残ってるのは私達だけのようね？私もあれ以来、爆発の魔力と魔法を鍛えてきたわ。雪辱を晴らす為に」

「では、よろしくお願いします」

いよいよ最後、その相手は『女王（クイーン）』ユーベルーナと『僧侶（ビショップ）』美南風（みはえ）

開始早々、ユーベルーナは杖を振るって新の周りに幾つもの魔方陣を展開する

「いきなり爆発か！」

新は瞬時に察知するものの、逃げ場を絶たれているのでどうする事も出来ない

更に美南風（みはえ）が両手を広げ、自分の周囲に魔方陣を多数展開した

魔方陣を輝き始めると同時に一斉攻撃が始まった

何重もの爆発と帯状の魔力が新に襲い掛かり、大規模な爆煙が立ちこもる

「さあ、これでもまだ余裕を持てるかしら？」

ユーベルーナが冷笑を浮かべて攻撃の中心地点を確認するが――――そこに新の姿は無かった

消し飛んでしまった……？

いや、そんな筈は無い

そう思って辺り一帯を見渡していると――――足元の影が蠢(うごめ)き出す
「残念だったな、俺はここだ」
「――――っ！ま、まさか影に……!?」
影から聞こえてきた新の声に気付くが時既に遅し、影から『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』が発生してユーベルーナと美南風(みはえ)は自由を奪われる
技が決まったと同時に出てくる新
実は爆発の魔力をくらう寸前で『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』を足元に放ち、闇の中に隠れて一斉攻撃を免れていたのだ
「それじゃあ仕上げだ」
新は即座に剣の刀身を爪で1往復擦る
先程のニィ&リィ戦と同じ様にユーベルーナと美南風(みはえ)は全裸のまま解放された
色気たっぷりのお姉さんボディと清楚な和風美少女ボディに新もグッドサインを向ける
「あ……っ、またはしたない姿にされてしまいました……っ」
「あん……っ。もう、エッチなボウヤね」
「さてと、たっぷり堪能させてもらった所で悪いが……そろそろ帰らないといけねぇんだ。じゃあな、また何かあったら言ってくれ」

新はサッとバイクに跨がってヘルメットを被り、エンジンを掛けて走らせる
マフラーから煙を上げながら空き地を去っていった
「私達も参加した方が良かったか……」
「何だ、カーラマイン。竜崎新に脱がされたかったのか？」
「なっ!?何を言うんだイザベラ！私はそんな安っぽい女ではない！」
「そうか、私は脱がされても構わないのだが」
「最近恥じらいの感じ方がおかしくなってないか？」
「ふふっ、これも彼のせいだろうね。竜崎新に脱がされると心まで裸になってしまう。私達全員、彼に攻略されてしまうかもしれないな」

『それで？新、今から帰ろうとしたけど緊急の仕事が入ったからもう暫く帰れないですって？本当でしょうね？』
「ハイ、ホントウデス。チカッテウソハイイマセン」
『……嘘は言ってないようね。分かったわ。ただし、仕事を終えたら直ぐに帰ってきなさい。良いわね？』

「はい、了解しました」
リアスからの通信を受け取り、通話を切る新
帰ろうとした矢先にバウンティハンター協会から緊急の任務が飛び込んできた為、未だにバイクを走らせていた
その任務とは――――〝ある遺跡の調査〟らしい
リアスの怒気を帯びた声を聞いて「早く終わらせないと殺されそうだ……」と呟く新は、更にバイクを加速させて現場へ向かった
この任務が自分の身に降りかかるトンでもない事態への予兆だと知る由も無いまま……
現場に到着した新はヘルメットのバイザーを上げて周囲を見回す
到着した問題の地点は荒れ果てた遺跡
協会からの話によると不定期ではあるが、ここで多くの人が行方不明になっているらしい
一見すれば何の変哲も無い遺跡なのだが……新は真剣な面持ちになる
「何だぁ……？この異様な『気』の流れは……。突っ立ってるだけなのにビリビリしやがる……」
周囲を取り巻く『気』の流れの異常さに警戒心を強め、バイクをゆっくり走らせる

人の気配が一切感じらない遺跡を走り続けること２０分、遂にはこんな光景まで目にしてしまう……

「あれは――――転移用の魔方陣？けど、何なんだ……この数は……？」

言葉を失うのも無理はない

広大な遺跡のあちこちに転移用魔方陣らしき物が展開されていれば、誰だって驚く

異様を通り越して不可解な現状を目の当たりにする新

すると……崩壊した遺跡の陰から複数の闇人（やみびと）が姿を現す

形状はネズミ型、何度も見かける量産タイプだ

怪訝そうに窺（うかが）っていると……量産闇人（やみびと）は転移用魔方陣の上に立ち、そのまま光に包まれて消えていった

その一部始終を見た新は「また闇人（やみびと）絡みか」と静かにバイクを走らせ、魔方陣の近くで停止する

「何があるのか分からねぇが、闇人（やみびと）が出入りしてるって事は確かだな。相次ぐ行方不明も闇人（やみびと）が絡んでるのか……。ここで調査しない訳にはいかねぇよな」

新は思いきって転移魔方陣の上に乗ってみた

しかし、いくら待っても魔方陣はウンともスンとも言わず……時間だけが過ぎていく

ただ待つだけではやはりダメかとスマホを取り出し、一誠達に連絡しようとした――

――その時……突如魔方陣が輝き始め、新とバイクを包み込む

不意討ちをくらった新は「嘘だろ!?こんな時に!」と急いで連絡を入れようとするが……徐々に体が消えていく

「ちょっ、待て!まだ転移するなあぁぁぁぁぁぁぁ――――」

叫び虚しく、新はバイクと共に転移魔方陣によって遺跡から姿を消されてしまった……

複数の転移魔方陣、それに出入りする闇人(やみびと)

それらが意味するモノとはいったい何なのか……?

「ここが駒王町(くおうちょう)か。本当にここにいるんだろうな?相棒」

「確かだぜ、兄貴。この町に俺達の人生を狂わせた奴らがいる。俺達を陥れておきながら、自分達はのうのうと学園ライフを満喫してやがる。そんなクソ野郎どもがなぁ……っ」

「相棒、怒りを見せるのはウォーミングアップを済ませてからだ。今じゃ奴は人気者らしいからなぁ」

「あぁ、良いよなぁ。どうせ俺達なんか……」
「どうせ俺達は忌み嫌われる賞金首、こんな町なんざ汚してやる……」
「汚してやろうぜ、あいつらごと……」
「「まずはお前からだ、兵藤一誠ェ……！」」

一誠が怨敵!?地獄から来た兄弟

『お掛けになった電話は、電波の届かない所にあるか、電源が入っていないため掛かりません』

新から帰りが遅くなる事を伝えられてから約1時間

リアスは催促するように何度も何度も新のスマホに電話を掛けるが、いずれも出なかった

遂には膨れっ面で机に突っ伏してしまう

「もう、何度電話しても出てくれないなんて。新はいったい何をしてるのよ……」

「リアス部長からの連絡にも応答が無いのか。私も電話とメールを繰り返し送っているのだが、未だに返事が来ていない」

因みにゼノヴィアはこの時点で既に１００通以上のメールを送ったらしい

大半がソワソワする中、朱乃だけが何故か冷静な雰囲気だった

「あらあら、リアスってば。まるで結婚したてなのに浮気されてると思い込んだ新妻(にいづま)みたいな感じになっているわよ?」

「……っ!?に、新妻って……!べ、別にそんな意味じゃ……っ。私はあの子の『王(キング)』だか

ら心配してるだけよ!」
「心配って、どんな?」
「た、例えば……向こうでまた女性と……ゴニョゴニョ……したりとか……」
「うふふ、リアスは純情ね♪」
「朱乃は心配じゃないの?」
「私は大丈夫よ。それに――――もし新さんが浮気していても、それは彼の性分。素直に受け止めて最後に愛してもらえるなら何も問題は無いわ」
朱乃は頬に手を添えてにこやかに浮気公認を宣言する
リアスは複雑そうな表情となり、それを見た朱乃はからかうように耳打ちする
「心配しなくても、正妻のポジションは譲りますわ♪」
「ひゃあっ!?あ、朱乃!」
リアスは真っ赤になって慌てふためき、朱乃はウフフと微笑む
そんな時、リアスの携帯電話に着信音が鳴る
リアスは直ぐに通話ボタンを押して確認するが……相手はアザゼルだった
「……もしもし?」
『随分と機嫌が悪いな。俺が何かしたのか?』
「いいえ、新じゃなかったのが残念に思っただけよ……。それで、何か用かしら?」

『用も何も、「禍の団（カオス・ブリゲード）」の奴らが集まって何かしようとしてんのを見つけたから知らせておこうと思ったんだよ』
『禍の団（カオス・ブリゲード）』の名を聞いたリアスは机から跳ね起き、アザゼルに詳しい事情を訊く
「それで『禍の団（カオス・ブリゲード）』は何を？」
『詳しい事はまだハッキリ分かっちゃいない。何せ俺も偶然見掛けた部下からの連絡を受けたんでな。場所が近いから、お前らに報告して取っ捕まえてもらおうと連絡した次第だ』
「そうだったの。良いわ、場所は？」
『2駅ほど離れた神社だ。テロリスト共にしては良い密談場だったが、運が悪かったな。後はお前達に任せる。取っ捕まえたらたっぷり尋問してやらぁ。じゃあな』
アザゼルからの連絡が切れ、リアスは早速出動の準備を始めた

問題の神社に辿り着いたグレモリー眷属＋イリナは気配を消しながら散策を開始
新との連絡がつかない以上、新抜きでやる他無い
まずは草陰から『禍の団（カオス・ブリゲード）』構成員の様子を窺（うかが）う事にした

相手の数は約１０人程
以前の三大勢力会談時に襲ってきたのと同じ様な魔術師連中が辺りをキョロキョロと見回し、まるで誰かを待っているようだった
割合は男性５人と女性５人である
それを見た一誠はある事を思い付いた
「部長、ここは俺に任せてください。良い考えがあります」
「……イヤらしい顔になってる事に関しては目を瞑るとして、イッセーに任せるわ」
リアスからの承諾を受けると一誠は直ぐに『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』を出して力を高める
そして自分の脳に魔力を流し込み――――『乳語翻訳（パイリンガル）』を発動させた
そう、一誠のアイディアとは女魔術師に『乳語翻訳（パイリンガル）』を使って胸の内を探ると言うものだった
これなら相手側の狙いや行動も筒抜けになる
一誠は瞑目して女魔術師のおっぱいの声に耳を集中させた
『まだかなー？闇人（やみびと）の皆さん♪』
『私達と手を組みたいって言うから、せっかく出向いてあげたのにねー』
『早くしないと誰かに見られちゃうよぉ。女を待たせるなんて最低ねぇ』
『でも、そろそろ来てくれる筈よ。楽しみ楽しみ♪』

『禍の団(カオス・ブリゲード)』が待っているのは闇人(やみびと)だと知った一誠は直ぐにリアスに知らせる
「闇人(やみびと)と手を組む為に……。それならあまり時間を掛けない方が賢明ね。一気に取り押さえましょう」
リアスの言葉に全員が無言で頷き、戦闘体勢に入る
草陰から飛び出して散開、魔術師達を取り囲んだ
「しまった！悪魔どもに嗅ぎ付けられたか！」
「仕方無い！やれ！」
魔術師達は一斉に魔術の攻撃を一誠達に放ってきた
リアスは滅びの魔力で打ち消し、朱乃とロスヴァイセは防御障壁で防ぐ
祐斗は聖魔剣(せいまけん)、ゼノヴィアはデュランダル、イリナは光の剣で魔術を斬り伏せた
ギャスパーは双眸(そうぼう)を赤く光らせて砲撃を停め、一誠は籠手で殴って霧散させる
自分達の魔術が瞬殺された事に魔術師達は言葉を失う
「お次はこちらの番ですわ」
朱乃は手から雷光(らいこう)を迸(ほとばし)らせ、ロスヴァイセが魔術砲撃を放つ
これにより魔術師2人は戦闘不能
小猫は瞬時に距離を詰め、魔術師の1人を拳で殴って気絶させる
祐斗とゼノヴィアも魔術師を1人ずつ斬り払った

そして残された女魔術師5人は……
「くっ！何故こちらの攻撃が当たらない!?」
「私達の行動が読まれているのか!?」
「あぁ、その通り！あんた達のおっぱいが俺にしか聞こえない声で喋ってくれているのさ！」
一誠は『乳語翻訳（バイリンガル）』のお陰で女魔術師達の行動を先読み出来ており、向かってくる魔術をものともせず避けきっていた
そして隙を見て女魔術師達の体にタッチしていき、もう1つの必殺技を高々に叫ぶ
「『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』ッ！」
ババババッ！
女魔術師達の衣服が一瞬で弾け飛び、その衝撃で豊満なおっぱいがプルンプルンと揺れる
女魔術師達は全裸の恥ずかしさに耐えられず、手で裸体を隠してその場に屈み込んだ
「ぐふふっ♪『乳語翻訳（バイリンガル）』からの『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』、やはりこのコンボは最強だ！」
あっという間に場を制圧し、リアスが女魔術師達の眼前に立つ
「抵抗は無駄よ。おとなしく投降してもらうわ」
「くっ……！」

状況はリアス達が圧倒的に優勢、『禍の団』は諦めるしかなかった
そんな時――――不穏な空気が走り、朱乃が警戒しながらリアスに告げる
「部長、複数の気配が……。それに数も多いですわ」
「ええ、闇人ね？」
リアスの指摘は見事に的中
草陰や木々の後ろから闇人がわんさか現れる
それも前に見たネズミ型ではなく、固そうな外殻に覆われた甲殻類の如き姿の闇人だった
それを率いるのは若い男3人組
どうやらこの集団の頭角のようだ
『禍の団』の男性魔術師が傷を押さえながら闇人集団にすがり寄る
「ようやく来たか……っ。は、早く我々を助け――――」
ドズッ！
闇人の男は有無を言わさず魔術師の腹を右手で貫いた
その右手は大きな鉤状に変化していて、先端から血が滴り落ちる
突然の出来事に全員が呆気に取られ、魔術師は金魚のように口をパクパクさせながら絶命した……

右手を引き抜いた闇人は侮蔑の視線で吐き捨てる
「せっかく『禍の団』の情報やら何やらを聞き出そうと思ってたんだが、こんなに早く嗅ぎ付けられるとはな。構わねぇ、全員殺して証拠隠滅しろ」
殺意満載の言葉を発した男の体がメキメキと不気味な音を立てる
男は赤い体躯と触角、両手に鉤爪を持った海老のような闇人に変貌を遂げた
連れの2人もそれぞれ青い海老型闇人と黄色い海老型闇人に変異し、右手の鉤爪を研ぐ
赤海老闇人が爪を振るのを合図に量産闇人の軍勢がリアス達に襲い掛かっていった
「アーシア、ギャスパー、小猫！あなた達は魔術師を安全圏へ避難させて！今回の件の証人として、みすみす失う訳にはいかないわ！」
「は、はい！」
「が、頑張りますぅぅぅ！」
「……了解です」
アーシア、ギャスパー、小猫の3人は指示通り捕まえかけた魔術師達を連れて少し離れた社の中へ避難させようとする
リアスと朱乃は滅びの魔力と雷光、ロスヴァイセは魔術砲撃で闇人を迎撃するが……
闇人は直撃をくらっても怯む様子を全く見せなかった

聖魔剣、デュランダル、光の剣で斬りつけても量産闇人の勢いは止まらない
特に一誠は禁 手のカウントが終わるまで手出しが出来ないので、ひたすら避けるしか方法は無かった
幾度も避け続け――――ようやくカウントが終了する
「よっしゃ、反撃開始だ！禁 手 化ッ！」
『Ｗｅｌｓｈ Ｄｒａｇｏｎ Ｂｌａｎｃｅ Ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』
『赤 龍 帝 の 鎧』を纏った一誠は今までのお返しとばかりに拳や蹴り、ドラゴンショットで量産闇人を吹き飛ばしていく
だが、赤龍帝のパワーでも量産闇人はなかなか倒れない
苦戦を強いられる中、一誠は先程までいた3人の海老型闇人がいない事に気付く
「ぶ、部長！あの変な海老野郎がいません！」
「何ですって!?まさかアーシア達の所に……イッセーはそっちを追ってちょうだい！こっちは私達で食い止めるわ！」
一誠は直ぐ様背中のブーストを噴かして量産闇人を蹴散らしながら建物の中へ突入する
木造の壁を破壊して飛び込むと、小猫とギャスパーが量産闇人及び3体の海老型闇人相手に奮闘している姿が視界に入った

猫又モードの小猫が打撃戦を繰り広げ、ギャスパーは無数のコウモリとなって撹乱している

しかし、3体の海老型闇人(やみびと)は量産タイプよりも更に手強く、小猫の『気』を纏った攻撃をいくら受けても平然としており、尚も果敢に向かっていく

小猫の拳も硬い外殻によって出血が止まらず、次第に勢いも落ちてきた

「……ギャーくん、動きを停めて」

『任せて、小猫ちゃん!ぼ、僕の眼で――――』

無数のコウモリとなっているギャスパーの眼が赤く輝きかけた刹那……3体の海老闇人(やみびと)は口から何かを連続で吐き出した

吐き出された物体はコウモリギャスパーの顔にヒットし、ギャスパーの変身が強制解除される

「ふぇぇぇぇぇっ!な、何なんですかこれぇぇぇぇっ!?ネバネバして取れないよぉぉぉぉぉ!」

どうやら吐き出された物体は視界を封じる粘着弾らしく、くらってしまったギャスパーはのたうち回る

そこへ量産闇人(やみびと)が群がり、ギャスパーを殴る蹴る等でリンチしていく

「ギャーくん!」

助けに向かおうとした小猫だが、赤海老闇人(やみびと)の不意打ちをまともに受けてしまい……
鉤爪で切り裂かれる
よろめいて直ぐ青海老闇人(やみびと)が強烈な蹴りを加え、黄海老闇人(やみびと)が右手の爪で叩き付ける
最後に赤海老闇人(やみびと)の横薙ぎの一撃で小猫は壁際まで吹っ飛ばされてしまった……
「案外チョロかったな」
「あぁ、さっさとこいつらを殺して向こうも片付けるぞ」
3体の海老型闇人(やみびと)は男性魔術師を全員殺し、次のターゲットをアーシアと女魔術師に定める
目の前の惨状と恐怖に震え出す女魔術師
アーシアは彼女達を庇うように両手を広げて立ち塞がるが、海老型闇人(やみびと)はケラケラと嘲笑う
「大した力も無いくせに健気だな」
「安心しな、女は必要だから殺さねぇよ」
「精々、神風さんや俺達の肉奴隷になってくれや」
ゲスな言葉を並べて爪を伸ばしてくる闇人(やみびと)に一誠は怒りを滾(たぎ)らせ、背中のブーストを噴かしたタックルで突き飛ばした
続けてギャスパーと小猫にリンチしている量産型の軍勢にもドラゴンショットを浴

びせて吹き飛ばす
「俺のアーシアと後輩に何しやがんだッ!アーシア、大丈夫か!?」
「はい、大丈夫です!」
「そうか、良かったぁ……。あいつら全員俺が引き付けておくから、アーシアはギャスパーと小猫ちゃんを治療してくれ!」
一誠の指示にアーシアは直ぐギャスパーと小猫に駆け寄り、淡い緑色の光を発生させる
『聖母の微笑(トワイライト・ヒーリング)』の輝きでギャスパーと小猫の傷が回復していく
その間に海老型闇人(やみびと)3人が起き上がり、先程ドラゴンショットをくらった筈の量産闇人(やみびと)軍団も集まってきた
集団で襲い掛かってくる量産型に対し、一誠は拳や蹴りで対抗するものの――――やはり多勢に無勢、数が多過ぎて捌きれない
量産型に混ざって飛び込んできた黄海老闇人(やみびと)の突きをくらい、後退(あとずさ)ったところで背後から青海老闇人(やみびと)が鉤爪を振るい攻撃
その直後に赤海老闇人(やみびと)の爪が一誠の鎧を切り裂く
弄(もてあそ)ばれるかの如く集団リンチを受け続ける一誠は血を吐きながらも必死で抵抗した
量産闇人(やみびと)が一誠の動きや視界を制限させる中、3体の海老型闇人(やみびと)は自らの爪に魔力を

注ぎ込む
バチバチと電撃を迸らせた爪を振り上げ、3体同時に駆け出す
一誠は何とか量産闇人を退けるが――――3つの凶悪な爪は既に目の前まで迫っていた……
「……ッ!?ヤベ――――っ」
ズガガァァァァァァァンッ!
海老型闇人の三位一体攻撃が炸裂
『赤 龍 帝 の 鎧』は大きく砕かれ、一誠は外まで吹っ飛ばされてしまった
かなりのダメージを受けたせいで禁 手が強制解除される
「――――ッ!?イッセーッ!もう、どきなさいっ!」
一誠の危機にリアスは激昂して滅びの魔力を撃つが、更に増えた量産闇人に行く手を阻まれる
祐斗達が向かおうとしても量産闇人は飴玉に集る蟻のように立ち塞がった
突き破られた壁から3体の海老型闇人が飛び出し、青海老型と黄海老型が倒れている
一誠を捕らえ、無理矢理起こす
「ここまでボロボロだと赤龍帝とやらも形無しだな」
赤海老闇人が再び爪に電撃を迸らせる

一誠にトドメを刺そうとした瞬間――――鈍い音と共に量産闇人(やみびと)の1体が宙を飛んで爆散した
その場にいた全員の視線が鳥居の方を向き、そこから2人の男が現れる
カチャカチャと音を鳴らす拍車付きの靴にボロボロの革コート
1人はボサボサの黒髪に赤いメッシュを施し、もう1人も同じ様なボサボサの茶髪に白いメッシュを入れていた
ならず者と言う雰囲気がピッタリの2人組の登場に全員が訝(いぶか)しげな表情となる
「何だ、あいつらは?」
「誰だろうと構わん。殺れ」
赤海老闇人(やみびと)が指示を出すと量産闇人(やみびと)はその2人組に襲い掛かっていった
黒髪の男は左足、茶髪の男は右腕を光らせる……
その部分に現れたのは――――緑色の脚甲と褐色に染まった籠手だった
リアスが思わず声を荒らげる
「あれは……神器(セイクリッド・ギア)!?」
そう、男達が出したのは紛れも無い神器(セイクリッド・ギア)
黒髪の男は脚甲に覆われた左足で蹴りを繰り出し、茶髪の男は右腕を豪快に振るって量産闇人(やみびと)を吹っ飛ばす

「行くぜ、相棒」
「あぁ、兄貴。ぶっ潰してやろう」
２人の男は脚甲と籠手を更に強く輝かせ、ある言葉を唱えた
「「禁手化（バランス・ブレイク）！」」
驚愕する一誠達を他所に、２人の男は全身鎧（プレート・アーマー）に覆われていく
数秒後、彼らは禁手（バランス・ブレイカー）たる鎧人（よろいびと）になった
黒髪の男は鮮やかなエメラルドグリーンの全身鎧（プレート・アーマー）に赤い眼孔を光らせ、茶髪の男は銅褐色（どうかつしょく）の全身鎧（プレート・アーマー）で銀色の眼孔を輝かせる
２人の鎧人（よろいびと）は向かってくる量産闇人（やみびと）を片っ端から叩き始めた
緑の鎧人（よろいびと）は強烈な足技で圧倒し、褐色の鎧人（よろいびと）は荒々しいパンチで突き進む
危険度を認識した海老型闇人（やみびと）は一誠を放り投げ、彼らの駆逐に乗り出す
突き出した爪を緑の鎧人（よろいびと）が蹴りで払い、そのままサイドキックを打ち込んだ
褐色の鎧人（よろいびと）も重いパンチのラッシュで闇人（やみびと）を一方的に殴りまくる
足技と拳打のコンビネーション、その強さは闇人（やみびと）を全く寄せ付けなかった
「そろそろ殺るか」
緑の鎧人（よろいびと）の一言を合図に２人のオーラが高まる
緑の鎧人（よろいびと）は左足にオーラを流し込んで高く跳び上がり、褐色の鎧人（よろいびと）は右腕にオーラ

を滾らせた
「エクスプロード・スマッシュッ！」
先に高く跳び上がった緑の鎧人がオーラを纏わせた蹴りを量産闇人に見舞うが、ただそれだけでは終わらなかった
蹴りの勢いを利用して回転しながら縦横無尽に跳び回り、次々と量産闇人に蹴りを打ち込んでいく
大半に蹴りを打ち込んだ鎧人が着地した直後――――蹴りをくらった闇人は1匹残らず爆散した
「エクスプロード・フィストッ！」
次に褐色の鎧人がオーラの迸るパンチで量産闇人1体を殴り飛ばす
飛ばされた闇人は炎を噴かせながら他の量産闇人に激突し、ピンボールのように跳ね回る
二次被害を受けた闇人も炎に包まれ、最初に餌食となった闇人が鎧人の所に戻ってきた
それを見計らった鎧人は強烈なアッパーで上空にはね上げ、闇人は空中で木っ端微塵に消し飛ぶ
炎に包まれた闇人達も爆発し、量産型は見事に全滅した……

「あれだけの数を……たった2人で……っ？」
信じられないような声音でそう漏らす祐斗
2人の鎧人は次の獲物を海老型闇人3人に決めて歩み寄る
青海老闇人と黄海老闇人が前に出て、先程と同じく爪に電撃を迸らせていく
対して2人の鎧人も再びオーラを滾らせた
先に闇人が飛び上がって必殺攻撃を見舞おうとするが……鎧人の方が動きは早かった為、それぞれ必殺キックと必殺パンチをくらって爆発
飛び散った血飛沫を拭う鎧人に残った赤海老闇人が襲い掛かり、鉤爪で串刺しにしようとした
2人の鎧人は寸前で鉤爪を防ぎ、そのまま自ら体勢を崩す
「相棒、上にはね上げろ」
「分かってるさ、兄貴」
2人は赤海老闇人の腹に足を当て、巴投げの要領で空中にはね上げた
飛ばされた闇人はジタバタもがきながら落ちてくる
そして射程距離に入った所で緑の鎧人は後ろ回し蹴り、褐色の鎧人は捻り拳打でトドメを刺した
同時攻撃を受けた闇人はダメージを限界まで超え、全身から血を噴きながら爆散

血と肉が周りに散乱する
まさに圧倒的と言わざるを得ない実力だった……
土埃(つちぼこり)を払う鎧人(よろいびと)はヨロヨロと起き上がる一誠の方を向く
「誰だか知らないけど……助かったよ」
「……誰だか知らない……？お前は良いよなぁ、兵藤ォ……」
「えっ？なんで俺の名前知ってんの？何処かで会ったっけ？」
キョトンとする一誠に鎧人(よろいびと)は揃って溜め息をつく
「呑気で良いよなぁ、俺達の人生狂わせといてよぉ……。なあ、兄貴？」
「あぁ、兵藤……お前はいつもそうだよなぁ……。どうせ俺達なんか……」
「お、俺があんたらの人生を狂わせた？話がさっぱり見えないんだけど――――」
「どうせお前も俺達の事をバカにしてるんだろ？」
「だったら、笑えよ……。笑ってみろよ……あぁ？」
ギロリと睨みを利かせる2人の鎧人(よろいびと)
次第に足取りを速くし――――
「「笑ってみろよォォォォォォォォォォォォッ！」」
怒りにまみれた叫びを上げて一誠に襲い掛かっていった

ここは何処!?不可解過ぎる世界

「オラァッ!セェッ!」
いきなり一誠に襲い掛かってきた2人組の鎧人に一誠は防御だけはしようとするが、彼らの猛攻に気圧されて上手く立ち回れない
連続で繰り出される蹴りの嵐、重く芯まで響く拳打をくらい続ける一誠
緑の鎧人の回転蹴り、褐色の鎧人のパンチで一誠は再び吹き飛び、背中から地面に倒れた
「ゲホッ、ゲホッ!」
「イッセー!」
「イッセーくん!」
リアスは滅びの魔力を飛ばし、祐斗は神速で駆け出す
それに気付いた褐色の鎧人は滅びの球体をパンチのラッシュで打ち消し、祐斗の聖魔剣は緑の鎧人が左足の蹴りで受け止める
「邪魔だァッ!」
緑の鎧人はそのまま祐斗の聖魔剣を払い、連続蹴りを繰り出す

蹴り足から半月状の斬撃が放たれ、紙一重で聖魔剣(せいまけん)を盾にした祐斗を吹っ飛ばした
「木場ッ!イリナ、私達も加勢するぞ!」
「了解よ、ゼノヴィア!」
「おっと、てめぇらもぶっ飛びなッ!」
褐色の鎧人(よろいびと)が2人の前に立ち塞がり、オーラを滾(たぎ)らせた両腕を連続で突き出すと――
――球状の波動が幾重にも撃ち出される
ゼノヴィアとイリナは咄嗟に得物を横に構えて防ごうとするが、物量の多さと威力の強さに押し負けてしまう
リアス、朱乃、ロスヴァイセも防御障壁を展開したものの……連続波動に破壊され吹っ飛ばされた挙げ句、木々に叩き付けられた
「ぶ、部長……!皆ぁ……!」
次々と仲間がやられるのを見てしまった一誠は悔しさで拳を打ち付け、気力で立ち上がろうとする
だが……褐色の鎧人(よろいびと)が一誠の髪を掴んで無理矢理起こし、その状態で何度も拳を打ち込む
裏拳や肘も使って一誠をタコ殴り、更にはロシアンフック
脳を揺さぶられ、ふらついた所に緑の鎧人(よろいびと)の足技が追い打ちを掛ける

左右の蹴りで一誠を痛め付け、首を掴んでの膝蹴り
そして一旦突き放してからダッシュの飛び蹴りで木に叩き付けた
２人の猛攻に一誠はダウン寸前
しかし、鎧人は無情にもオーラを滾らせた
「「死ね、兵藤オ」」
バチバチと迸る左足と右腕でトドメを刺そうとした直前――――建物の中からアーシアが飛び出し、一誠を庇うように立ち塞がった
その瞳からは涙が頬を伝い、流れ落ちる
「ア、アーシア……！よせ……逃げろ……ッ！」
「お願いです……っ。もう、やめてください……！これ以上、イッセーさんと皆さんに……酷い事をしないでください……っ」
両手を広げ、必死に懇願するアーシア
２人の鎧人はアーシアをジッと睨み付ける
その直後、緑の鎧人が吐き捨てるように呟いた
「兵藤、お前は良いよなぁ。お前なんかの為に泣く奴がいて。……俺達は涙もとっくに涸れ果てたってのに」
そう言って直ぐに鎧が解除され、元の姿に戻る黒髪の男

続くように褐色の鎧人も茶髪の男に戻った
「兄貴。この女、相当なお人好しみたいだぜ。俺達の人生を狂わせたクズ野郎を庇ってやがる」
「おめでたい女だ……。哀れで情けない」
２人は一誠を庇うアーシアを侮蔑の視線で罵る
興を削がれたのか、彼らは踵を返して立ち去ろうとした
「待ちなさい！あなた達はいったい何者？どうしてそこまでイッセーに敵意を向けているの？」
傷だらけで起きたリアスが訊くと、２人はゆっくりと振り返り――――自分達の名を明かす
「俺達は地獄から来た兄弟……幽神正義」
「同じく幽神悪堵」
黒髪の男は幽神正義、茶髪の男は幽神悪堵と名前が判明し――――正義は最後にこう言い残した
「俺達兄弟はその男――――兵藤一誠を含めた３人のクズに人生を狂わされ、地獄を見てきた。その復讐の為に地獄から舞い戻ってきたんだよ……」
「兵藤、必ずお前らを地獄に叩き落としてやる。俺達が見てきた地獄以上の地獄にな

……」

幽神兄弟は憎しみの言葉を残して神社を立ち去る

圧倒的な実力と一誠に対する異常な敵意を見せつけた地獄の兄弟……

「幽神……兄弟……？何処かで聞いたよう……な……」

何故自分にあれ程の敵意と殺意を向けているのか？

奴らの人生を狂わせたとはどういう事なのか？

いろいろ模索するが全身の痛みで思考が追い付かず、途中で意識を失う一誠だった

……

「……何なんだ、ここは……？」

一方、こちらは謎の転移魔方陣に呑み込まれてしまった新

転移された先は今までに見た事の無い場所だった……

青々とした空、多い繁った木々の隙間から見える果てしなく広大な平地

遥か遠くに聳(そび)え立つ立派な城

おとぎ話にありそうな神秘的な光景に開いた口が塞がらない

「こんな景色の良い国がまだあったのか……。っーか、何処の国だ?」
側にあったバイクに跨(また)がり、エンジンを噴かしてだだっ広い平地へ抜け出す
『こんな国があるなら、もっと早く見つけておけば良かったな』と緩く歯噛みしたその時
――――遠くの方から爆発らしき轟音が聞こえてくる
音を聞いた新は直ぐに目を細め、フルスピードで現場に向かった
走らせること十数分、音の現場付近に到着した新は異様な光景を目にする
見覚えのある黒い異形の集団が民兵らしき者達を次々と倒し、その先にある城や砦に侵攻しようとしていた
黒い異形の正体は――――新が見た闇人(やみびと)であり、更には別種(甲殻類版)の闇人(やみびと)もいる
これだけでも異様な光景だが、不可解な現象がその戦場で起こっていた……
民兵全員に獣らしき耳や尻尾が生えていたり、吹き飛ばされた者が煙に包まれた直後
――――丸っこい動物の姿に変わって目を回したりしている
『……何処のファンタジーだよ……』と新は処理が追い付かず、怪しさ満載の光景を見つめ続けていると――――奮闘を続ける人影を見つけた
「くそっ!こいつらいったい何匹いるんだ!?やたらと強い上にどんどん数が増え続けている!」
「魔物――――にしては雰囲気が禍々(まがまが)しいよね……。いったい何処から――――」

「お喋りは後だ、勇者！一刻も早くこいつらを蹴散らして姫様の城に向かうぞ！」
勝ち気な口調で怒鳴るのは若草色の髪に垂れた耳、双剣を武器に立ち回る少女
背中合わせにいるのは金髪に青いハチマキとマント、棒を構えた少年
闇人（やみびと）に囲まれた２人はオーラを迸（ほとばし）らせ、それぞれの背中に紋様を出現させた
「豪熱炎陣掌（ごうねつえんじんしょう）ッ！」
「烈空十文字（れっくうじゅうもんじ）ッ！」
金髪の少年は手から特大の炎を、垂れ耳の少女は双剣から十字型の斬撃を飛ばす
両者の攻撃は数多（あまた）の闇人（やみびと）を巻き込んで大爆発を引き起こした
これで少しは状況を打開出来ただろうと思っていた２人だが……闇人（やみびと）はピンピンしていた
中にはケラケラと嘲笑う個体もいる
少し出血した程度の傷具合で致命傷に至らず、金髪の少年と垂れ耳の少女は愕然とする……
「……まともにくらった筈なのに１匹も倒せていないだと……っ」
「さ、さすがにちょっとショック……。――――あ！でも見てよ、エクレ！１匹は倒せたみたい！」
金髪の少年が指を差した方向には、全身に亀裂が生じてブルブルと震えている闇人（やみびと）が

いた
　エクレと呼ばれた双剣の少女は溜め息をつく
「このアホ勇者、1匹だけ倒しても仕方無いだろう……」
　溜め息混じりにそう言っていると――――2人が魔物と勘違いしている闇人（やみびと）に異変が起こる
　全身に隈無く亀裂が走った直後、外殻がボロボロと崩れ落ち――――青と赤が入り交じった蜘蛛の様な姿へと変貌を遂げた
　その変貌ぶりに2人は目玉が飛び出しそうなくらい驚愕する
「な……何か姿が変わっちゃったんだけど……!?ナニコレ!?」
「私が知るか!この魔物どもの性質が理解出来ん!」
　激しく狼狽する中、蜘蛛闇人（やみびと）は指と肩に生えた脚をワシャワシャと蠢（うごめ）かせながら2人の方へ歩いていく
　ただでさえピンチの状況が更に悪化の一途を辿る
　そんな時、遠くの方角から砲撃音が響き――――闇人（やみびと）の軍勢に炸裂
　爆発と爆煙に包まれる闇人（やみびと）
　少年と少女が砲撃の飛んできた方角を見てみると――――そこにはたくさんの砲台と民兵が並び、ダチョウに似た大型の鳥類に乗る獣耳少女がそれらを指揮していた

遠目で見た新は『あれは〇ョコボか!?』とツッコミを入れる
「勇者さま～!エクレ～!リコッタ・エルマール、ただ今救援に駆けつけたであります～!」
「ありがとう、リコ!」
「救援か!助かる!」
２人の喜びの声にピコピコと獣耳を動かす小柄な少女――――リコッタ・エルマール（通称リコ）は持っている銃を構え、民兵達も砲台を闇人（やみびと）の軍勢に向けた
再び砲撃が放たれ、闇人（やみびと）に直撃しようとした時――――爆煙の中から糸が出現して周りにいた量産闇人（やみびと）２匹を捕らえる
糸は捕まえた闇人（やみびと）を空中に放り投げ、砲撃の被弾を防いだ
捨て石に利用された２匹の闇人（やみびと）は流石に耐えきれず、空中で爆発霧散した
爆煙が晴れ、中から変わり身を使った蜘蛛の闇人（やみびと）が姿を見せる
「あの魔物、なんて奴だ……っ。自分の仲間を盾に……!」
若草色の髪を持つ少女――――エクレが闇人（やみびと）の行為に明らかな怒りを表した
そんな事知るかとばかりに蜘蛛闇人（やみびと）は両手をリコ達に向ける
次の瞬間、手首の穴から無数の塊が弾丸の如く放出され――――砲撃手達はその塊をくらってしまう

直撃を受けた民兵達は全員丸っこい動物と化し、リコと呼ばれる少女も被弾した○ョコボもどきから振り落とされた
派手に尻から地面に叩き付けられ、リコは涙目で自分の尻を擦る
「はうぅ……痛いでありますぅ……」
リコが痛がるのも束の間……先程と同じ糸が空を泳ぎ、リコの華奢な体を捕らえる
空気を切るような音と共にリコは引っ張られていき、糸を発した蜘蛛闇人が両手でキャッチする
「グシュルルルルル……ッ」
不気味な唸り声を発した後、蜘蛛闇人の口が裂け始め――――捲れ上がった長い牙がワシャワシャと蠢く
ここまで来ればこの闇人が何をしようとしているか直ぐに分かるだろう……
そう……蜘蛛闇人はリコを補食する気だった
「リコ!リコォッ!」
「えぇい!邪魔だ貴様ら!退けぇッ!」
勇者と呼ばれる金髪少年とエクレは助けに向かおうとするが、闇人の軍勢に邪魔されて思うように進めない
何度打ちのめそうが直ぐに起き上がり、２人の邪魔を続ける

その間にも蜘蛛闇人(やみびと)はヨダレを垂れ流し、今にも喰らわんとリコを己に近付けていった

「はひぃぃぃぃぃっ！じ、自分は美味しくないでありますぅぅぅぅっ！」

補食の恐怖に泣き叫ぶリコ

闇人(やみびと)の口がリコを頭から喰らおうとした刹那――――蜘蛛闇人(やみびと)の側頭部に黒い物体が猛スピードで激突してきた

不意打ちに反応出来なかった蜘蛛闇人(やみびと)は見事に吹き飛び、解放されたリコが何者かに抱きかかえられる

その正体は言うまでもなく――――バイクに乗った新だった

「よっ、もう大丈夫だ。目を開けろ」

「……ほぇ……？」

「あれ？何だろう、あの人……」

「何なんだ、次から次へと……！しかも、あの妙なセルクルは何だ!?」

状況を全く理解出来ていない3人を他所に、新は一旦リコを下ろしてからバイクを降りる

彼の視線の先には――――補食を阻害され激昂する蜘蛛闇人(やみびと)と量産型の軍勢がいきり立っていた

「ここが何処だろうが、どうなってんのか分からねぇが……女を泣かすテメェらを放っておく訳にはいかねぇよな」
怒気を帯びた言葉を発する新は全身のオーラを高め、『闇皇の鎧』に身を包む
新の変貌ぶりに3人は仰天する
蜘蛛闇人は両手首から無数の弾丸を放出
新は籠手から闇皇剣を出して凄まじい速度の剣捌きで斬り払っていく
業を煮やした蜘蛛闇人は左手から糸を伸ばし、先程破壊した砲台を複数引き寄せ――――新の真上に落とした
それに気付いた新は刀身に赤いオーラを注ぎ込み、自分に向かってくる砲台を1つ残らず両断した
最後の1つを2つの塊に分断した刹那、蜘蛛闇人が飛び込んできた
砲台を投げつけたのはフェイク、その隙に至近距離でトドメを刺すつもりなのだろう
「甘いな」
直ぐに目論見を察知した新は振り下ろした剣を逆手に持ち替え、カウンターの要領で蜘蛛闇人の腹を貫いた
傷口から鮮血が噴き出し、蜘蛛闇人は苦しそうに呻きながらもがく
新は再び剣の刀身に赤い魔力を滾らせ、思いっきり振り上げた

腹から頭部を裂かれた蜘蛛闇人(やみびと)はピクピクと痙攣する
「そろそろ終わりにするか。そこの3人、伏せてろ！」
仕上げを宣告した新は赤い刀身からオーラを解き放ち、巨大な刀身を作り上げる
新は金髪の少年、エクレ、リコに避難警告を出して剣を振り抜いた
言葉の意図を悟ったエクレは「2人とも伏せろっ！」と身を屈め、残った2人も頭を低くして地に伏せる
一方、新が振り抜いた剣は周りにいた闇人(やみびと)を全て斬り払った
巨大な刀身が元に戻り、新が爪で刀身を擦(こす)ったのを合図に爆発が起こり――――蜘蛛闇人(やみびと)を含めた全ての闇人(やみびと)が爆(は)ぜる
「す、凄い……。あれだけたくさんいた魔物を一瞬で……」
顔を上げて驚嘆の言葉を漏らす金髪少年
エクレは訝しげに目を細め、リコはポカ～ンと口を開けていた
一仕事を終え、コキコキと首を鳴らす新は兜のみを解除して深呼吸する
「すう～……はぁ～。終わった終わった。で、大丈夫かお前ら？」
とりあえず目の前の危機を脱した3人はコクリと頷き、新は残党がいないか確認する様に辺りを見渡す
そこへエクレが歩み寄っていく

「貴様、いったい何者だ?何処から来た?この妙なセルクルは何だ?」
「初対面の奴にいきなり質問攻めかよ。つーか、聞きたい事があるのはこっちも同じだし……名前聞きたきゃ、まず自分から名乗るのが礼儀ってもんじゃねぇのか?」
男勝りな口調で問い詰めてくるエクレに反撃する新
エクレはグヌヌと顔をしかめるが、そうしなければ話を進められないと思い、自己紹介を始めた
「私はビスコッティ騎士団親衛隊隊長エクレール・マルティノッジだ」
「僕はシンク・イズミ。地球からやって来ました。あと、勇者してます」
「ビスコッティ国立研究学院主席兼砲術士、リコッタ・エルマールであります」
他の2人――――シンクとリコも自己紹介を終えるが、聞いた事の無い単語のオンパレードに新は首を傾げる
『ビ、ビスコッティ騎士団?聞いた事ねぇな……。それに地球からやって来た?何言ってんだ金髪は?』
「こちらは名乗ってやったぞ。だから、貴様も名乗れ」
「竜崎新だ。新って呼んでくれ。ところで、ここは何処なんだ?なんて国だ?」
新は至って率直な疑問をぶつけてみたが、エクレは〝何を言ってるんだ、こいつは?〟と言う感じでシンクやリコと顔を見合わせる

エクレはとりあえずその質問に答える事にした
「ここはフロニャルド大陸南部に位置するビスコッティ共和国のフィリアンノ領だが」
「ふ、ふろにゃるど……？フィリアンノ……？」
また聞いた事の無い地名に疑問符が出現し続ける
すると、ここで金髪の勇者――――シンクが話し掛けてきた
「あの～、もしかしてアラタさんって――――僕と同じ様に地球からやって来たんですか？」
「は？意味分かんねぇ、ここ自体地球上のどっかの国じゃねぇの？」
「いえ、ここ……異世界なんです」
「異世界……？いせかい……イセカイ……異・世・界……？」
壊れたラジオの如く〝異世界〟と言う単語を繰り返し、ようやく1つの結論に至れた
「おい、まさかとは思うが……俺、地球とは全く別の世界に来ちまったのか……？」
「はい……そうなります……」
「そうなるだろう」
「そうであります」
シンク、エクレ、リコが揃って出した返答に新は額に手を当ててふらつき……蒼天の下で力の限り叫んだ

「嘘だろぉぉぉ

幽神兄弟

「……はふぅ。これで傷が癒えました」
「サンキュー、アーシア。……悪いな、部長や皆の怪我を治すのに無理させちまって……」
オカルト研究部部室で一誠が治療を終えたアーシアの頭を撫でる
アーシアは頬を赤く染めて照れる
しかし、現状は芳しくないものだった……
『禍の団』の魔術師と闇人の目論見を阻止する筈が一変
闇人が魔術師達を裏切り、窮地に陥った所へ神器を持った2人組――幽神兄弟の襲撃を受けた
幽神正義、幽神悪堵は突然出てくるや否や、その場にいた闇人集団を圧倒し、一誠達にも襲い掛かった
なす術無くボコボコにされてしまったオカルト研究部だったが、彼らは一誠を庇うアーシアを見た途端に戦闘意欲を落とし去っていった……
そして今、新不在のオカルト研究部＋イリナの治療をようやく終えた所である

捕縛した『禍の団』の女魔術師達は冥界に移送され、アザゼルが尋問を行ったのだが――

「『禍の団』の奴らも闇人から話を持ち掛けられて乗っかっただけらしい」と大した情報も得られず、進展が無かった結果にリアスは歯噛みする

アザゼルも話を聞き、宙に映像を出して幽神兄弟について調べ始めた

「幽神……幽神……ゆうがみ……？――――っ！そう言えば！」

「イッセー、心当たりがあるの？」

ずっと幽神兄弟の名を反芻していた一誠が突然何かを思い出す

自分の記憶を探り続け、幽神兄弟の事を覚えている限り絞り出す

「中学の時、すっげぇ珍しい名前の兄弟がいたんです！んで、そいつらの名前も幽神で……確か兄が生徒会会長、弟が生徒会副会長だったんですよ！」

「イッセーと同じ中学出身、しかも生徒会……。どうしてそんな2人がイッセーをあそこまで敵視しているの？」

「そ、そこまでは俺にも分からないんです……。ただ……あの頃から俺達は毎日の様に幽神兄弟に追い掛けられていたのは覚えてます。主に校則違反とか覗き関連で……」

容易に想像がつきそうな追いかけっこの図に苦笑する面々

ここで祐斗がある一点に気付く

「そう言えば、イッセーくんを含めた3人に復讐するって言ってたけど……。後の2人は誰なんだろう？」

祐斗の言葉に一誠は再び記憶を探っていく

中学時代、自分と同じ様に幽神兄弟に追い掛けられていたのは――――あのハゲ（松田）とメガネ（元浜）

自分とこの2人が幽神兄弟を生徒会追放にまで追い込み、復讐の鬼にしてしまった何かがあるのか……？

そんな事を考えていると、1つの転移魔方陣が出現――――中から冥界に行ってたアザゼルが現れた

「お前ら、その幽神兄弟って奴らの正体が分かったぞ」

「先生、調べたんすか？」

「ああ、前に名前を聞いた事があったから気になって調べてみたんだ。イッセー、お前トンでもない奴らに狙われてるみてぇだぜ？こいつを見な」

アザゼルが宙に映像を出して、ある資料画面を提示する

それはバウンティハンター協会のホームページで、そこから賞金首リストを開いてみると――――危険視されている賞金首の名前がズラリと並んで出てきた

その中にはあの幽神兄弟の名前も……

名前をクリックすると彼らの写真やプロフィール、所有する神器（セイクリッド・ギア）や賞金額も出てくる

「奴らはバウンティハンター協会でも危険視されているＳＳ（ダブルエス）級の賞金首だ。天界や冥界の追撃部隊だけじゃなく、はぐれ悪魔や同じ賞金首まで勝手気ままに殺し回っているから最大級に質（たち）が悪い。奴らの戦いに巻き込まれて死んだ人々、滅びた町も幾つかある。その桁外れな強さと並々ならぬ横暴さから通称『地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）』と呼ばれ、どの勢力からも畏怖されてる」

次にアザゼルは彼らが所持している神器（セイクリッド・ギア）の説明を始めた

「まず兄の幽神正義（ゆうがみまさよし）、こいつの神器（セイクリッド・ギア）は脚力を爆発的に飛躍させる『蹴獄（スマッシング・ギア）の足枷』。戦闘スタイルは文字通り足技、テコンドーやサバットの様に破壊力重視の蹴りを使う。んで、お前らが見た鎧姿は禁手（バランス・ブレイカー）の『蹴獄（スマッシング・ギア）・ビリティスメイル』の緑鎧。イッセーの禁手（バランス・ブレイカー）と同系統の鎧だ。次に弟の幽神悪堵（ゆうがみあくと）、こっちは腕力を向上させる『拳獄（ライジング・ギア）の手錠』だ。ボクシングにムエタイの腕技を駆使した戦闘スタイルとは相性抜群。こいつの禁手（バランス・ブレイカー）も兄と同様の鎧姿――――『拳獄（ライジング・ギア）・ブロンズメイル』の銅鎧』と、まさに名実共に兄弟神器（セイクリッド・ギア）って感じだ」

「それ程にまで各勢力から危険視されている人物だったのね……」

改めて幽神兄弟の実態を聞かされたリアス達は苦虫を噛み潰した様な表情となり、アザゼルが皆に１つの助言をする

「こいつらとイッセーに何が遭ったかは知らんが――――もし、こいつらがお前らを挑発しようが喧嘩を売ってこようが絶対に人前では手を出すなよ？ありゃ典型的な自己中どもだ。人目を憚らず仕掛けてくる事も充分に考えられる。良い解決案が浮かぶまではなるべく手を出さずにいろ」

一誠は「は、はあ……」と生返事するしか無く、他のや皆も腑に落ちない様子だったが無闇に自分達の正体をバラしたり、周りの者を巻き込む訳にもいかない

今後は暫く幽神兄弟の行動に注意を払いつつ、新の行方を捜査する事となった

「ウヒャヒャヒャ！竜崎が風邪で休みだと！朝から幸せな気分だ！なあ、元浜！」

「その通り。毎日夜中に丑の刻参りをして呪いを掛けた甲斐があったと言うものだ」

翌日、朝から教室で下卑た笑い声を上げるのは一誠のクラスメートの松田と元浜

モテ男の新を目の敵にしている2人にとってこれ以上の吉報は無いだろう

因みに丑の刻参りとは夜中の1時から3時頃に行われる日本古来の呪術である

そんなくだらない会話が飛び交う中、一誠は幽神兄弟の事で頭がいっぱいだった

『あいつらが俺だけじゃなく、松田と元浜にまで恨みを持ってるんだとしたらヤバいよ

な……。そもそも、俺達があの兄弟にした事って何だ……？人生を狂わされたって――

――』

「おい、イッセー。さっきから何難しい顔してんだ？」

考えてる途中で松田が一誠の頭を小突く

一誠は頭を擦りながら「別に何でもねぇよ」と誤魔化す

自分達の事情や幽神兄弟の事を話す訳にもいかず、秘密裏に処理するしか無い

様々な交錯に疲労も溜まる一方だった……

「……お前らは呑気で良いよなぁ」

「呑気？呑気どころか活気に溢れているぞ！何たって竜崎が休みなんだからな！」

「そうだ！後は美少女とのフラグが建てば俺達は勝ち組なのだ！女を食い荒らす竜崎がいない今が最大のチャンス！今年こそフラグを建てるぞ！」

何処までも最低なハゲとメガネである（笑）

そこへ登校したての桐生藍華が教室に入ってきた

「無理無理、あんたらのスケベ心丸出しの顔で好かれるのは発情期の動物くらいなもんでしょ？」

「何だと桐生！はっ、そう意気がっていられるのも今の内だ！竜崎さえいなければ――

――」

「丑の刻参りで呪いを掛けるようなエロバカと話したがる相手がいると思う？」
桐生の一言に教室内の全員がウンウンと頷き、松田（ハゲバカ）と元浜（メガネバカ）は一瞬でアウェーとなった
呪いを掛けようが掛けまいが、忌み嫌われる事に変わり無い（笑）
「「チクショウ！何故俺達がこんなに責められなきゃいけないんだ！」」と嘆く松田（ハゲの1号）と元浜（メガネの2号）を放置した所で、桐生がこんな事を言い出す
「そう言えば今朝、正門辺りにこの町じゃ見慣れない2人組を見たわね。近くでテレビの撮影でもやってんのかしら？」
「あ、私も見た」
「私も。俺様系のイケメンって感じよね」
桐生の話に村山と片瀬も便乗し、イケメンと聞いた女子達が一斉に窓へ向かう
「あ、ホントだー！」
「カッコイイ～！」
「でも、なんで着てるコートがボロボロなんだろ？」
「それに……何かこっち見てるような……。もしかして恋人探し？私だったらどうしよう～♪」
〝着てるコートがボロボロ〟と言う言葉に一誠はいち早く反応し、まさかと思い窓から正門辺りを覗く

正門に凭(もた)れかかる2人の姿を視認した瞬間――――目を見開いて驚いた

『幽神、兄弟……!?』

そう、神社で一誠達をボロボロにした幽神正義と幽神悪堵が正門から一誠のいる教室をジッと窺(うかが)っていたのだ……

幽神兄弟の確認に一誠だけでなく、続くように窓の外を見たアーシア、ゼノヴィア、イリナも戦慄する

「ん、何だイッセー。どうした？まさか俺達の恨み手帳に名を乗せる程のイケメン野郎が現れたのか？」

「ならば、そのイケメン野郎の面(つら)を拝んでやるとするか。今後の丑の刻参りの為にな」

ゲスな発言を繰り返す松田と元浜が窓の外を覗き込む

遠目に映る幽神兄弟の姿を確認した瞬間、2人の酷い顔が更に酷さを増した……

汗だくで口をアングリさせ、目玉が飛び出し、鼻水も何処ぞのガキ大将の如く垂れ流していた

ガタガタと震え始めた松田と元浜は自分達の席に戻り――――

「え？お、おい、どうした？」

「……イッセー、今日俺早退するわ」

「俺も……。実は今すぐ裏口から早退しないと死んでしまう病を患(わずら)っているんだ……！

じゃ、そう言う事で」
「命は大事にしろよ……？」
「ちょっ!?ちょっと待て！松田、元浜！」
松田と元浜は逃げるように教室から出ていった……
しかし、これでハッキリした事が分かる
一誠だけじゃない、松田と元浜も幽神兄弟とのイサコザに関わっている……
２人の尋常じゃない怯えようからソレを悟った一誠
後は何が遭ったのかを思い出すだけ……
思考を働かせていると幽神兄弟の方へ歩いていく３人――――ソーナ、椿姫、匙の姿が視界に映った

「失礼ですが、うちの学園に何か御用でしょうか？」
見慣れない２人組の連絡を受けたソーナは椿姫と匙を同行させ、幽神兄弟に話し掛ける
対して幽神正義はソーナの方を向くが、鼻を鳴らすように軽く笑い「人を待ってるだ

けだ」と簡潔に答えた
今度は匙が話し掛けてみる
「待ってるって……この学園の生徒か？」
「それ以外に誰がいるんだよ？別に俺達は何もしちゃいねぇ。ただここで待ってるだけだ。それとも何だ？俺達がここで誰かを待ってちゃいけねぇ訳でもあんのか？」
幽神兄弟・弟の悪堵が敵意をむき出しにしながらソーナ達を睨み付けるが、兄・正義が「よせ」と悪堵を一旦諌(いさ)める
そこで正義は目的を明確に伝える事にした
「――――兵藤一誠がここにいる筈だ。そいつをここに呼んでもらおうか」
『……ッー』
一誠の名が出た事に3人は目を見開く
幽神兄弟の要求にソーナ達は小声で話し合い、改めて兄・正義と向き合う
「兵藤くんにどういった御用で？私達が彼に伝えておきます」
「そんな必要は無い。今すぐここに連れてこい」
「ですから、伝言なら私達が――――」
「そうか……。なら、仕方ねぇよなぁ……？」
ジャキ……ッ

幽神兄弟はソーナ達以外には見えない角度でそれぞれの神器（セイクリッド・ギア）を出現させた
いきなり神器（セイクリッド・ギア）を出されたソーナ達に緊張が走る
「あ、あんたら……！いったい何の真似を――――」
「ここに兵藤がいるのは調べがついてる。奴を逃がす為の時間稼ぎでもしようと言うのなら――――俺達は今すぐ暴れるぞ。この学園内にいる奴らも、周りの奴らも巻き添えにするが……それでも良いか？この町を守ってる悪魔ども」
「兵藤を呼ぶか、俺達に殺られるか。俺は別にどっちでも良いぜ？」
幽神兄弟は学園の生徒全員と周囲の人々を盾に、ソーナ達に脅しを掛けた
卑劣な手段を用いる幽神兄弟に歯軋りする匙
しかし、今この場で騒ぎを大きくするのはまずい
ソーナは1つの提案を幽神兄弟に出した
「……分かりました。でしたら、せめて放課後まで待っていただけますか？放課後には生徒も少なくなりますので」
「つまり、放課後に兵藤を出せると言う訳か。良いだろう、お前達の提案に乗ってやる」
ソーナの提案を受け入れた正義は再び正門に背中を預け、その場で待つ事にした
ひとまずこの場は何とか凌いだソーナ達は学園に戻っていく
「良いのか、兄貴？あいつらの提案を受けるなんて。この学園の奴らごと兵藤を――――

―悪魔どもをぶっ潰せるチャンスなのによ」
「確かにそうだが、それじゃあ面白くないだろ。復讐と言う料理は冷ませば冷ますほど旨味を増す。……分かるか相棒？俺の言いたい事が」
「――――ッ。あぁ、分かったぜ。そう言う事なら……そっちの方が面白そうだな。兵藤の歪んだ顔が目に浮かんできそうだ。やってやろうぜ、兄貴」
「その意気だ、相棒。兵藤共々、奴らを地獄に叩き落としてやる」

昼休み、一誠達は落ち着かない様子で弁当を食べている
落ち着かない理由は言わなくても分かるように、幽神兄弟が正門辺りで見張りを続けているからだ
一誠が出てくるまでは断固として動く気は無い様子……
しかも、昼飯のカップ麺やらハンバーガーやらを持参してくる辺り用意周到である
更に授業と時間が進み、日も暮れてきた時刻――――外は強い雨に包まれていた
人が少なくなり、ようやく表立った行動が出来るようになった一誠達
そこへ匙がやって来る

「やっぱり会長の言ってた通り、雨が降ってきたな」
「……？　匙、どういう事だよ？」
「あいつらと話した後、会長から言われたんだ。『今日は特に強い雨が降るから、それまで少しでも時間稼ぎしましょう』って。この雨の中で延々と待ち続ける奴なんていないだろ？」
「そうだったのか。さっすがシトリーの『王（キング）』！」
「あの２人組が帰ってからゆっくり対策を練れば良いさ。さて、そろそろ様子を見てみるか」
そう言って匙は窓の方へ歩み寄り、窓の外を見た
この強い雨の中、普通ならキツくなって帰る筈……そう読んでいたのだが――――奴らは普通じゃなかった……
「……ッ！……嘘だろ……っ？まだいる……ッ」
『――――ッ！？』
後退りする匙の言葉を聞いた一誠、アーシア、ゼノヴィア、イリナは我が耳を疑い窓の外を見る
その言葉に偽りは無く――――幽神兄弟は未だに正門から離れず、雨に打たれながら一誠達がいる教室を睨み付けていた……

尋常じゃない執念を持つ幽神兄弟に危険を感じた一誠は……思い切って彼らの前に出る決意をした
このまま放っておいても彼らは延々と待ち続けるだけで埒が空かない
そう判断しての行動だろう……
「匙、俺ちょっと行ってくる」
「ま、待てよ兵藤！あいつらの狙いはお前なんだぞ!?わざわざやられに行くってのか!?」
「そうかもしれない……けど、ここまで来たら知らない訳にはいかないんだ！あいつらと俺に――――何が遭ったのか……ッ。知らなきゃいけないんだ！」
一誠は匙の制止を振り切り、ダッシュで教室を出ていく
「ま、待ってください！イッセーさん！」とアーシアも一誠についていってしまう
取り残された匙、ゼノヴィア、イリナはひとまずリアスとソーナに連絡する事にした
一誠が雨の下の外へ飛び出し、アーシアも傘を指して同行する
正門前に到着すると、待ってましたとばかりに幽神兄弟が一誠の方を向いて口の端を吊り上げた
「やっと来たか、兵藤ォ」
「今朝から待ってた甲斐があったぜ。あれから約１０時間ぐらいか、時間稼ぎでもしてたつもりだろうが無駄だったな」

どうやらソーナの目論みは最初から見透かされていたようだ……

一誠が口を開く

「幽神……俺がこんな事を聞くのもおかしいと思うけど、俺達――――お前らに何をしたんだ？」

幽神兄弟が元いた中学の生徒会を追放された原因が自分にもあるなら、一誠はそれを思い出さないといけない

しかし、自分の記憶を振り絞っても思い出せなかった以上……幽神兄弟本人に直接確かめるしか無い

突然の質問に幽神兄弟の動きが一瞬止まり――――次第に不気味な笑い声を上げた

「ハッハッハッハッハッハッ……こいつは驚いた。まさか覚えていないとは。まあ、所詮そんなものか……俺達に対する念は……」

「兄貴、やっぱりこいつはクソ野郎だ。それも想像以上のクソ野郎、自分が何をやらかしたのかまるで分かっちゃいねぇ」

「……そう、なんだ。実は……本当に覚えてないんだ。だから！だから教えてくれないか？俺達がお前らに何をしちまったのか……」

一誠の頼みに幽神兄弟は互いに顔を見合わせ、兄・正義が話を振る事になった

今から約３年前――――当時の幽神正義は中学３年で生徒会会長、幽神悪堵は中学１

年で生徒会副会長として功績を積み重ねていた
　今とは風貌が全くかけ離れた模範生で、生徒だけでなく教師からの人望もあった
「あの時から覗き常習犯のお前達と毎日鬼ごっこしたものだ。３日に１度全ての更衣室を調べ回り、見つけた覗き穴や覗きスペースを封鎖していった。だが……覗き穴を見つけて塞いでも直ぐに別の穴を空ける。そう考えた俺達は兵藤、松田、元浜を捕らえて１００００枚の反省文をプレゼントしてやったな。１ヶ月毎日やらせて」
　それは反省どころか完全に拷問レベルである……
　１ヶ月続けた結果、３人の腕は見事に筋肉痛となり……まともに覗き行為も出来なくなった
　一誠は「今度はあいつらに見つからないようにしないとな……」と警戒を強めるだけだったが、松田と元浜は復讐してやると心に誓っていた
　ある日、３人は懲りずに新しい穴を作り、女子更衣室を覗こうとしていたが……中にいる女子達に先に気付かれてしまう
『誰、そこにいるのは！』
『やべっ！今日は早く気付かれた！』
『イッセー！今回は二手に分かれて逃げるぞ！後で連絡して落ち合おう！』
『分かった！』

松田に言われたイッセーは素早くその場を離れるが、松田と元浜は無言で頷くと――

――覗き穴の前に何かを落としていった

『ヒャッヒャッヒャッ、今回の俺達は一味違うぞ』

『幽神め、俺達と同じ反省文の苦しみを味わうが良いさ』

そそくさと立ち去る松田と元浜

彼らがこれ見よがしに覗き穴の前に落としたのは――――盗んだ生徒会長・幽神正義と副会長・幽神悪堵の生徒手帳だった……

その頃、幽神兄弟は誕生日を迎える母親の為に生徒会の仕事を早く切り上げ、商店街を歩き回っていた

いざプレゼントを何にしようかと意気込んだ直後、悪堵は生徒手帳が無くなっている事に気付く

『あれ、兄貴。俺の生徒手帳が無い』

『何?お前もか。俺のも無いんだが……学校の何処かに落としたのか?』

『とりあえず戻って探そうぜ』

幽神兄弟は自分達の生徒手帳を探しに学校へ戻る事にした

心当たりがある場所を一通り探したものの、一向に見つからず……

正義は腕を組んで唸る

『これだけ探して見つからないとはな』
『兄貴、明日落とし物窓口に聞いてみようぜ。もしかしたら誰か拾ってるかもしれねぇし』
そうだなと言おうとした矢先、後ろから『やっぱり会長と副会長のだったんですか』と怒声が聞こえてくる
何事かと思い振り返ってみると、そこには多くの女子生徒が怒りや落胆の視線で見ていた
彼女達の様子に正義は『どうした？そんなに怖い顔して、何か遭ったのか？』と訊く
それに対して1人の女子が生徒手帳を突きつけながら言う
『惚けないで下さい！会長と副会長でしょう!?覗いてたのは！生徒会の仕事を早めに切り上げのが、まさかこれの為だったなんて……！』
『なっ!?ど、どうして俺達が！それに仕事を早く切り上げたのは――――』
『言い訳なんて聞きたくありません！会長じゃないと言うなら、どうして会長と副会長の生徒手帳が覗き穴の前に落ちてたんですか！』
『先輩、酷いです！生徒会長として尊敬してたのに……！』
『お二人が実はムッツリスケベな事は知ってましたけど……それでも卑怯な真似だけは決してしない、真っ直ぐで素敵な人だと思ってました！あなた達はそれを裏切ったんで

すか!?幻滅です!』
『サイテーよ!これじゃあ変態3人組と同じじゃない!』
『そうよそうよ!』
身に覚えの無い濡れ衣を着せられ、女子生徒から侮蔑の視線と罵倒を受ける幽神兄弟
必死に弁明するが誰からも信じてもらえず、騒ぎを聞いた男子生徒まで幽神兄弟を責め立てる
『何だよ、結局幽神もあいつらと同じかよ』
『実はグルになって盗撮とかもしてたんじゃね?』
『あり得るー!うっわー、ドン引きするわー!』
『ち、違う!違う!俺達は何も――――』
『うっせー、性犯罪者が喋るな!』
『人権侵害ー!』
『実刑判決ー!』
普段から幽神兄弟の活躍が気に入らない連中がいたのか、次々と紙クズや靴、鞄が幽神兄弟に飛んでいく
予想以上に大きくなってしまった騒ぎにも負けず、何とか落ち着かせようと思った刹那――――ガンッと鈍い音が鳴った

『……あ、兄貴……？頭から何か出てる……っ』
『え……？』
正義は足元に転がった物――――未開封の缶ジュースを見て言葉を失い、側に垂れた血が視界に映る
自分の額を手で触れると……やはり血が付着していた
先程の缶ジュースで額が切れてしまったのだろう……
そんな事態になったにもかかわらず、男子生徒は更に野次を飛ばす
『命中～！』
『さすが野球部エース！ナイスピッチング！』
『悪党成敗～！』
『あ、兄貴……兄貴……！』
悪堵は首をフルフルと横に動かし、悲壮から徐々に怒りへと感情を変えていく
足元の缶ジュースを拾い――――そのまま握り潰した……
因みに中身が入った缶ジュースを握り潰すには凡そ１００kg以上の握力が必要らしい
缶を投げ捨てた悪堵は腹の底から怒号をぶち撒けた
『ふざけんなゴラアアア

怒り狂った悪堵は缶ジュースを投げた男子生徒の顔面を殴り、髪の毛を掴んで壁に何度も叩き付けた

悪堵の凶行に多くの生徒が悲鳴を上げ逃げ回る

『だ、誰か止めろぉ！ぐばあっ！』

『警察だ！警察を呼べぇ！へぶぅっ！』

『このクソ野郎どもがあぁっ！クソ野郎どもがアァァァァァァァァァァァッ！』

『やめろ悪堵ォ！そんな事しても何も変わらない！』

『そうだとしても！こいつだけは！こいつだけはぜってぇ許さねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！』

『駄目だ！やめろおォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！』

悪堵は正義に缶ジュースをぶつけた男子生徒の右腕を捉え、その腕に肘を振り下ろした……

その男子生徒は利き腕をへし折られた事により、出場が決まっていた甲子園を断念するどころか野球生命まで絶たれた

他にも顔面骨折、内臓破裂の生徒が病院に運ばれ――――幽神兄弟は警察に連行

傷害事件として公(おおやけ)にすれば学校の名誉に傷が付き、残された生徒にまで迷惑が掛かる

校長と教頭は自主退学を勧め、幽神兄弟はそれに応じるしかなかった……

彼らの順風満帆な生活はあっという間に転落人生へと早変わり、母親もショックで昏倒してしまい、幽神兄弟は家を出てしまった

「それから俺達にこの神器（セイクリッド・ギア）が目覚めた。やり場の無い怒りと憎しみから生まれた神器（セイクリッド・ギア）だ。そして……俺達は地獄に落ちて誓った。俺達を陥れた奴らに復讐してやるとなぁ……。あの後、犯人は直ぐに分かったよ。日頃から俺達に恨みを抱き、尚且つ俺達の生徒手帳を盗む機会があって帰宅部の奴ら――――それがお前らなんだよ、兵藤ォ」

全ての顛末（てんまつ）を話し終えた正義は一誠を鋭い眼孔で睨み付ける

一誠はその衝撃の事実に絶句していた……

次に正義は自身の前髪を上げて額を見せる

額にはその時に負った大きな傷痕が残っていた……

「兵藤、お前に分かるか？人の為に役立とうと滅私奉公してきたのに、たった1日で地獄に落とされた俺達の無念が……怒りが……憎しみがぁ……！何で俺達が疑われなきゃならないんだ？何で誰も俺達の話を聞いてくれないんだ？何より――――何で忌み嫌われていたお前が人生を満喫してんだよォォォ

一旦息を整え、再び一誠の方を向く
「……兵藤、まずはお前からだ。人気者になってのぼせ上がったお前をこれ以上無い地獄に叩き落としてやる。もうお前は俺達の復讐から逃げられない。ジワジワ追い詰めて……潰す」
冷淡な声音で締めた正義は踵(きびす)を返し、悪堵も兄の後を追う
立ち去ろうとする幽神兄弟に一誠は待ったを掛ける
「……分かった。そこまで俺を憎んでいるなら……俺は逃げねぇ！ただ……今は、今は俺だけを狙え！松田と元浜は非日常とは無関係なんだよ！もし、不満なら……俺が引っ張り出して謝らせる！いや、俺も一緒に土下座でも何でもするさ！だから――――頼む！周りの人達を巻き添えにしないでくれッ！」
強い雨の中、一誠は地面に手を付けて精一杯の土下座をした
頭を地面に擦り付け、必死に幽神兄弟に頼み込む
それを見た正義は「考えといてやる」と一言だけ呟き、悪堵と共に駒王学園(くおうがくえん)を去っていった……
ひとまずここでの暴動を食い止める事が出来た一誠は、そのまま地面にへたり込んで大きく息を吐いた
アーシアがハンカチで一誠の額に付いた泥を拭き取る

「イッセーさん、大丈夫ですか？」
「あ、あぁ……。サンキュー、アーシア。……俺、今まで知らなかったのがバカだよな……。松田と元浜があんな酷い事してたのも、幽神が俺に対してそんな考えを持ってたなんて……。あれじゃ恨まれても仕方無い、よな……」

「兄貴、さっきの兵藤ヤバかったよな。あまりにも可笑し過ぎて笑いそうになっちまったぜ。まさか、土下座までして俺達に頼み込むなんてよ。で、どうすんだ？」
「決まってるだろ。ただ潰すだけじゃ面白くない。奴の大事な物を全部壊した上で地獄に叩き落とす」
「ハハハッ！流石は兄貴、あっさりと約束を破る気満々か！」
「約束？バカを言うな。兵藤が土下座する前から俺の答えは決まっていた。俺はもう奴を許す気など無い。地獄に落ちた時から許す・許してもらうと言う概念は捨てたんだからな。異論は無いな、相棒？」
「良いぜぇ、兄貴となら誰だろうとぶっ潰せる。潰してやろうぜ。兵藤も、周りの連中も、町の奴らも全て！」

「そうだ……。もう俺達に残されたの道は1つしか無い。――――地獄に落ち続けるだけだ……ッ」

ようこそフロニャルド！三国の領主

「異世界って何だよこれ……？もしかして俺はバックトゥＴＨＥ未来しちまったのか……？どうすりゃ良い？どうすりゃ帰れる？ど〇でもドアとかあるのか？それともタイムマシン？」
闇人（やみびと）の軍勢を蹴散らしたのは良いものの、現在地が異世界の見知らぬ土地だと知らされた新はパニックに陥っていた
　右往左往する新に金髪の少年――――シンク・イズミが声を掛ける
「あの～、アラタさん。とりあえず今は落ち着いてください」
「……何だよ、何か良い道具でもあるのか？だったら早くど〇でもドアを出せ。それで地球に帰れる」
「いや……ど〇でもドアとか無いですから……。アラタさんも召喚の儀式を受けてここに来たんですよね？」
「儀式？んなもんしてねぇよ。勝手にここに飛ばされちまったんだ」
　新の返答にシンク、エクレ、リコは揃って顔を見合わせる
「ねえ、エクレ。召喚の儀式を受けずにフロニャルドへ来る方法なんてあった……？」

「あるわけ無いだろう。さっきの魔物もそうだが、召喚の儀式を行わずに来たこいつに関しても謎が多過ぎる……。1度城へ戻って姫様にお話ししてみるしかないな」
「そうだね。アラタさん、これからお城へ戻るんですけど……良かったら一緒に来ませんか?そこでなら連絡も通じますし」
「……連絡?は?スマホ使えるのか?」
「はい。お城なら向こうの世界との交信が出来ますよ。僕達の携帯がこの世界でも使えるようになったのは全部リコのお陰なんです」
「えへへ、褒められちゃったであります〜♪」
シンクがリコの方を向いて説明し、褒め言葉を貰ったリコは嬉しそうに犬耳をピコピコ動かす
連絡手段が使える事を知った新は急げとばかりにバイクへ駆け寄り、ヘルメットを被ってエンジンを入れる
「そうと分かりゃあ、さっさと案内してくれ」
「まったく……気持ちの上がり下がりが激しい奴だな。それにしても……貴様のセルクルは変わった鳴き声を出すのか」
「あの〜、エクレ?アラタさんが乗ってるアレはセルクルじゃなくてバイクって言う乗り物なんだよ?」

「ば、ばいく……？」
「乗り物――――機械でありますか!?」
　エクレは聞いた事の無い名前に疑問符を浮かべ、リコは目を爛々と輝かせてバイクを凝視し始めた
「す、凄いでありますぅ！こんな乗り物が向こうの世界にあるのでありますか!?」
「え？あ、あぁ……あるけど」
「ん～っ！感激でありますっ！このような未知なる機械に出会えるとは……！自分の尻尾の付け根と研究心がキュンキュンを通り越してギュインギュインなのでありますよぉ～っ！」
　感極まったリコは犬耳のピコピコ速度が増し、尻尾に至っては残像が映るんじゃないかと言うぐらいに激しく揺れていた
　新はそんなリコの様子にキョトン顔、シンクは苦笑い、エクレは呆れるように嘆息した
　興奮真っ只中のリコはキラキラした目で新の方に向き直す
　新はその瞳に危険な思想が潜んでいるのを察知した
「アラタさま！「嫌だ」是非「ダメだ」とも「無理」その「却下」ばいく「断る」と呼ば「ふざけんな」れる「拒否」機械「諦めろ」を調べ「無茶を言うな」させて「家帰って寝

ろ」欲しいであります――――って、断るのが早いでありますよ！しかも、言い終わる前に１０回も断られたのは初めてであります!?」
「嫌だダメだ無理却下断るふざけんな拒否諦めろ無茶を言うな家帰って寝ろ」
「更に繰り返されたでありますぅ……。何故でありますかぁ……？」
「目を見りゃ分かる。その目は大抵ロクでもない事を考えてる奴の目だ」
「そんな事ないであります！ただちょ～っと分解して隅々まで調査するだけでありますよ」
「分解する時点でロクな考えじゃねぇだろ！キラキラした目で言える事か！」
「大丈夫であります！分解して調査すれば、直し方もいずれ分かる筈であります！自分が保証しますから、ばいくを分解させて欲しいのでありますぅ～♪」
「それ以上言ったら、ピコピコ動いてる耳と尻尾を引っこ抜くぞ？」
新は諦めが悪いリコに本気の脅しを掛けた……
指をポキポキ鳴らし、鋭い目で睨み付けると……危険を察したリコは直ぐに分解おねだりを止めた
リコの耳と尻尾が萎(しお)れ、ウルウルとした涙目で新とバイクを見る
「……」
「……その目は卑怯だろ。……分かった。代わりに乗せてやるから、それ

で良いか？」
「の、乗せてくれるのでありますかっ!?感激でありますぅ～っ！」
新は仕方無しにバイクの搭乗を許可し、リコは再び犬耳と尻尾を激しく動かした
リコが新の背中にしがみついた所でシンクとエクレもセルクルに跨がり、目的地の城へと向かった
リコはバイクの走り心地に終始感動していたとか……
走り始めて数十分、新はシンク達に闇人の出現について話を切り出した
「闇人？さっきの魔物の事ですか？」
「そうだ」
「聞いた事の無い部類だな……。どう言った連中なんだ？」
「簡単に言えば、お前らが言う魔物よりも質の悪い化け物だ。因みに今倒した闇人は俺達の間じゃザコの部類、アレよりも強い奴らが俺達の世界にはワンサカいるんだよ」
「えぇっ!?」
「な……っ！アレでもまだ弱い方なのか!?そんな奴らがいったい何処から――――」
「そこが問題なんだよ。俺は元いた世界で見た事が無い魔方陣を見掛けた。闇人がその中に消えていくのもな。んで、調べようとしたらこのザマって訳だ。ただ……引っ掛かる点がある」

「引っ掛かる点？」
「あいつら下級の量産タイプは転移魔方陣なんか使えない筈だ。なのに、この世界に出てくるのは……黒幕が潜んでるって事だ」
新はこの世界に自分以外の何者かがいると睨んだ
先程全滅させた量産型に転移魔方陣は使えない、奴らは純粋な戦闘の為だけの存在だから……
しかし、問題はまだある
何者かがいたとすれば、どうやってこの世界まで来たのか？
ここは天界、冥界、人間界と違って完全な別世界ゆえに、普通の転移魔方陣では来られる筈が無い
様々な思考を張り巡らせていると、目的地――――フィリアンノ城が見えてきた
門前で警備をしていた兵士達に挨拶を済ませ、城の中へと足を踏み入れる
中庭のような場所を歩いていると、シンク達が乗っていたセルクルと同じ巨鳥の群れを見掛けた
その内の1羽は黒い体毛をしている
「なぁ、シンク？あの黒い○ョコボと羽根のデカい○ョコボは何だ？」
「黒いのはレオ閣下の愛騎ドーマで、他はパスティヤージュ公国のブランシールですよ。

レオ閣下とクーベル様も来てるみたいだね」
「レオ閣下？クーベル様？誰だそれ？」
「ガレット獅子団領国領主とパスティヤージュ公国第一公女であります」
つまりはお偉いさんである
そうこうしてる内に装飾が凝った扉の前に到着し、シンクが扉をノックする
中から「どうぞ」と女性の声が聞こえ、シンクが扉を開けた
広間の様相は如何にも王族が住みそうな豪華な造りで、中央のテーブルを囲うようにそれぞれの国の領主や騎士達が並んでいる
「ただいま、姫様」
「姫様、ただいま戻りました」
「ただいまであります」
「お帰りなさい、シンク、エクレ、リコ。……？そちらの方はどなたでしょうか？」
ドレスを着込み、ピンク色の髪から犬耳を生やしたお姫様が訊くとシンクが答える
「あ、この人はアラタさん。僕とナナミ、ベッキーと同じように地球から来た人です」
「竜崎新だ。初めまして」
「はい、初めまして。ビスコッティ共和国代表領主ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティと申します」

新は〝舌を噛みそうな名前だな〟と聞こえない様にツッコミを入れとく
周りを見渡していると黒いショートヘアーの少女が近づいてきた
「ねぇねぇシンク、私達と同じって事は――――この人も召喚されたって事？」
「いやぁ……実は……アラタさんは召喚の儀式無しでここに来ちゃったみたいで……」
『何だって!?』
シンクの一言で広間の全員が異口同音に驚愕した
次第にざわめきが強さを増していく
「召喚の儀式を受けずにやって来たとはどういう事じゃ？クーベル、お前は知っておるのか？」
「ウチは初耳じゃ！ミルヒ姉は!?」
「わ、私も初めて聞きました！」
長い銀髪に猫耳を生やした古風な少女を筆頭に、茶髪にリスのごとき耳と尻尾を生やした小柄な少女も驚きを隠せず、先程自己紹介したミルヒもただ驚くだけだった
周りのざわめきが止まらない中、パンパンと手を叩く者が現れる
栗色の長い髪を三つ編みに纏め、着物の上から半纏（はんてん）を羽織った出で立ちの女性
当然この女性にも動物の耳が生えている
「皆の衆、少し静かにするでござる。あまり騒がれてはその者も話が出来ないでござる。

ここはひとまず、皆の自己紹介から始めてはいかがでござるか？」
その女性の言葉に皆が肯定の意で頷き、一旦静まる
「では、改めて。拙者はビスコッティ騎士団隠密部隊頭領ブリオッシュ・ダルキアンでござる。以後、お見知りおきを」
栗色の髪の女性――――ブリオッシュ・ダルキアンに続くように出てきたのは金髪に忍び装束の活発そうな少女だった
しかし、新はその少女の〝ある部分〟に目を奪われる……それは――――ドドンと主張しているおっぱいだった
「……胸デカっ」
「拙者もお館様と同じくビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネ、皆からはユッキーと呼ばれているでござる♪よろしくでござる」
「あ、あぁ、よろしく」
次に前へ出たのは黒いショートヘアーの少女と茶髪のツインテール
尚、彼女達はシンクと同じ様に地球からやって来たらしい
「ガレット獅子団領国の勇者ナナミ！因みにシンクの従姉妹――――お姉ちゃんです♪」
「初めまして。シンクの幼馴染みでパスティヤージュの勇者、レベッカ・アンダーソンで

す。よろしくお願いします」
「あぁ、よろしく」
一頻り挨拶を終えるが、まだまだ自己紹介は続く
「次はワシらの番じゃな」と長い銀髪に猫耳を生やした古風な少女が言う
「ワシはガレット獅子団領国領主レオンミシェリ・ガレット・デ・ロワじゃ。レオ閣下と呼べ」
〝また長ったらしい名前が来たな……〟と心の中でツッコミを入れておき、同時に〝随分と高圧的な態度だな〟と文句を言いそうになるが……彼女もなかなかの巨乳かつ胸元が大きく開いた衣装だったので、そのまま流す事にした
次に出てきたのはレオ閣下と同じく銀髪に猫耳を生やした少年で――――
「俺様はガレット獅子団領国王子ガウル・ガレット・デ・ロワ様だ！」
「あー、はいはい。よろしくー」
「何だよ、やけにそっけ無い態度だな」
「男の自己紹介に興味ねぇし、そんなデケェ声で言わなくても良いから」
「んだとコラァ！」
「やめんか、ガウル！」
レオ閣下がガウルの頭に拳骨を落として諌める

「すまんの、ワシの弟が無礼を働いて」
「あんたの弟か。王子って柄には見えねぇな」
「ハッハッハッ！ハッキリ言う奴じゃのう！」
「姉上まで笑ってんじゃねぇ！」
ガウルは怒るが呆気なくスルーされ、次は彼の傍らにいる3人の少女達が前へ
向かって右にいるのは黄色い前髪と茶髪に虎の耳を生やし、アホ毛が特徴の少女
左には金色の長髪にウサ耳を生やし、先程のユッキーやレオ閣下に負けず劣らずのナイスボディを持つ少女
最後に中央には黒猫のごとき耳と尻尾を生やした寡黙そうな少女が佇んでいた
「我ら、ガレット獅子団領！」
「ガウ様直属～」
「……秘密諜報部隊」
「「ジェノワーズ！」」
何処かで見たような戦隊ものの決めポーズをするジェノワーズに、新はとりあえず軽めの拍手を贈っておく
ジェノワーズは戦隊もののポーズを解除し、それぞれの自己紹介を始めた
「まいどおおきに！うちはジェノワーズの関西弁の方、ジョーヌ・クラフティや！」

まず虎耳の少女が元気良く挨拶を決め、ウサ耳の少女が丁寧にお辞儀する
「ジェノワーズの弓矢担当ベール・ファーブルトンです～」
ムギュリと寄せられた彼女の巨乳に目を奪われつつ、最後の黒猫少女に視線を向ける
「……ノワール・ヴィノカカオ、よろしく」
「あぁ、よろしく」
新はジェノワーズ3人と握手を交わすついでに彼女達のおっぱいを視察する
ウサ耳少女ベール＝巨乳
虎耳少女ジョーヌ＝隠れ巨乳
黒猫少女ノワール＝貧乳
一瞬でサイズとランクを見極めた新は『一誠がここに来たら叫びそうだな。「おっぱいヒャッハァァァ

「……デケェ尻尾だな」
「お、何じゃ？ウチの尻尾の良さが分かるのか？なかなか良い奴じゃな～♪」
フリフリと嬉しそうに尻尾を振るクーベル
最後にクーベルの隣に座っていた美少女が立ち上がる
金髪で青い瞳の中に何故か☆マークが見えており、彼女もまた特徴が濃いキャラのようだ
「初めまして、パスティヤージュ公国の英雄王アデライド・グランマニエなのです～。アデルと呼んでくださいなのです～」
「英雄王とはまた大層な肩書きだな。とりあえず、これで全員か」
「いや、ちょっと待て。まだ俺が残ってるだろ」
無理矢理終わらせようとする新に待ったを掛けたのは若い男だった
異様な風貌をした銀髪の男に対し、新はパタパタと払うように手を振る
「あー、はいはい。どうせお前もそこのチビ王子と同じ俺様系の偉そうな奴だろ？もう見ただけで充分だから説明の必要無しっ」
「誰がチビ王子だぁ!?」
「お前、男相手だとドライだな!?まあ、気持ちは分からなくもないが……せめて名前ぐらい言わせろ。魔王ヴァレリア・カルバドスだ。皆からはヴァレリーと呼ばれてる。以

上、自己紹介終わりっ」
長かった自己紹介がようやく終了
気疲れしたせいか新は深い溜め息を吐く
「アラタ殿と申されたか。早速で申し訳無い、お主は如何様な方法でこのフロニャルドにやった来たのか説明して貰いたいでござる」
ダルキアンが話を切り出し、新は自分が知ってる限りの事を話した

「う～む……紋章術ではなく〝まほうじん〟とやらでここに……」
「その……〝やみびと〟と呼ばれる魔物も、こやつがいた地球からフロニャルドに侵入してきたとは……」
ダルキアンとレオ閣下は共に怪訝そうな顔付きとなり、口元に手を当てる
新は「もうこれで話は済んだか？」と皆に訊くが、シンクが挙手して〝ある事〟について問い掛ける
「あの～、さっき僕達を助ける時にアラタさん――――妙な姿になってましたよね？コウモリみたいな感じの……。アレっていったい何なんですか？」

「あぁ、あれは俺の戦闘体勢。『闇皇(やみおう)の鎧』だ」
「やみ、おう……？え～っと……」
「まあ、深く考える必要は無いな。俺は味方だから。それよりシンク、お前言ったよな？城に行けば向こうの世界と連絡取れるって。これ以上待つのは御免だ、さっさとその方法を教えろ」
「え？あ、はい。姫様、良いですか？」
「はい、良いですよ」
　ニッコリと優しげな笑顔で許可をかれたミルヒに感謝しつつ、シンクは案内係にリコを連れて新と共に広間を後にした
　少しの静寂が流れ、ダルキアンとレオ閣下が真剣な面持ちとなる
「ダルキアン、あのアラタとか言う奴の波長――――どう思う？」
「ふむ……シンク殿やナナミ殿、レベッカ殿と同じく異世界からやって来た者にしては――――少し禍々(まがまが)しい気配にござる」
「ただのガキではないのが一目見て分かった。後は……」
「彼がどう言った者か見極める、でござるな？」
「分かってるなら話は早い。――――手合わせしてみるか」

「本当にこんな所でスマホが使えるのか？」
「勿論ですよ。僕が最初に飛ばされてきた時もリコのお陰で連絡取れたんですから」
シンクとリコの案内で連れてこられたのは――――昔、シンクが最初にフロニャルドへ飛ばされてきた場所
フィリアンノ城のその場所は、今や地球との連絡が繋がるエリアとなっており、ここでならスマホが通じるらしい
半信半疑でスマホを起動させてみると……いきなりアンテナが満タン状態となった
「んんっ!?マジで電波通った!?スゲェ！」
「さあ、思う存分ご友人方と交信でありますぅ！」
「助かった～！じゃあ早速……」
新は急いで電話登録帳からリアスの携帯番号を選択して電話を掛ける
コール音を聞いて待機していると……
『もしもし！新!?新なのね!?』
「フゥオオオオオオオオオオオオオオオッ！繋がったァァァァァァァァァッ！」
見知らぬ異世界で連絡が取れる事に思わず狂喜乱舞する新

直ぐ様リアスとの会話に戻る

『新！新なのよね!?いったい何処にいるの!?』

『新さん？リアス、その電話……新さんからなの!?ちょっと替わって！』

『落ち着いて朱乃！まずは新から話を聞かないと！……ゴホン。新、あれから全然連絡が繋がらないから心配したわ。今何処にいるの？』

「何処って……なんかフロニャルドって言う異世界に来ちまったみたいで――――あれ？もしもし？もしも～し」

『……アーシア、ちょっと回復の光を当ててちょうだい。どうやら新は頭を強く打って錯乱してるみたいだわ』

「いや、俺だって信じられねぇけど事実だから！本当に異世界らしいんだよ、ここは！――――って、何かポワポワ来てんだけど……」

どうやら本当にアーシアの治療が行われているようだ……

とにかく新は今自分が置かれている状況を必死に説明し、闇人絡みの事態に巻き込まれた事を話した結果――――ようやく信じてもらえた

「だから、今はそっちに帰れそうに無いんだ。何より闇人の襲撃を受けている以上、放っておく訳にはいかない」

『そう……分かったわ。あなたが無事でいてくれただけでも良い報せよ。なら、早く解

決して早く帰ってきなさい』
「あぁ、脳細胞がトップギア並みに解決してやる。じゃあな」
通話ＯＦＦにした新は仲間との通話に安堵し、胸を撫で下ろす
「サンキュー、リコ。お陰で心配の種が１つ消えたぜ」
新は感謝の意を示してリコの頭を優しく撫でる
リコは「エヘヘでありますぅ♪」と喜びつつ照れ隠しに頬を掻き、尻尾を振る
改めてこの異世界――――フロニャルドに来てしまった新は黒幕の解明を果たすべく、シンク達と行動を共にする事となった

悲鳴が鳴り響くそこはビスコッティ共和国からだいぶ離れた暗き森林
薄い暗闇に彩られた森の中で次々と倒れるのは――――魔物と呼ばれる生物達
フロニャルドでは特殊な加護――――フロニャ力（ちから）が偏在しており、その力が弱い場所で生息している存在が〝魔物〟と呼ばれている
その魔物達が傷と血にまみれて倒れていく……
薄い暗闇の奥から出てきたのは――――シンク達を襲ったのと同じ闇人（やみびと）の軍勢だっ

た

そう、奴らが魔物達を殺していたのだ……

動かなくなった魔物に群がり、死体を貪り喰らう

喰い終えた途端、闇人に異変が起こり……その体に亀裂が走っていく

硬い外殻が割れ、中から突き破って出てきたのは――――変異を終え、姿を変えた闇人だった

黄色と黒、銀色が混ざり合った蜘蛛型の闇人2体に、前腕が異様に長い紫色の闇人

更には白い体躯で形の違う角や牙を生やした闇人が3体も生まれた

「経過は順調のようだな」

森の奥から突然聞こえてくる声に闇人の軍勢が畏まるように膝を付く

どうやらこの声の主こそが奴らの親玉と言えよう……

「この世界の魔物とやらは大変都合が良い。我々より数段弱くて、素晴らしい養分と化してくれる。お陰で永きに亘って苦しめられてきた傷と痛みも癒えた。下級の量産型もこれだけパワーアップしてくれる、何とも素晴らしい世界だ。それにしても――――まさか私と同じ様にこの世界へ飛んできた者が居ようとは……。丁度良い、完治記念に私自ら出向いてみようか」

暗闇の復讐劇

時刻は２０時４２分頃、未だに強い雨が降り続けている夜のこと
アダルトビデオが売ってるちょっとアレな店から大量のエロＤＶＤを買い漁って出てくる２人の少年
一誠のクラスメートの松田と元浜だった
彼らは今朝、幽神(ゆうがみ)兄弟の姿を視認した直後――――逃げるように早退していたのだが……
「ったく……こんな嫌な日に限って新作が大量入荷してくるとは、ツイてないな」
「そう言うな、松田。早いとこ帰ってイッセー抜きの観賞会と行こうじゃないか。購入したてのＤＶＤを見ていれば、今朝の事だって忘れられる筈だ」
松田と元浜は登校して早々仮病を使い早退した後は自宅にて待機し、幽神兄弟がいなくなったであろう時刻を見計らってエロＤＶＤを買いにやって来たのだ
余程彼らと対峙する事を避けているのだろう
それも当然、この２人は幽神兄弟を失脚させた張本人なのだから……
再び会えばどんな目に遭わされるか分からない

傘を差していざ帰還しようとした――――その時、交差点の向こう側に傘も差さずに佇んでいる人影を見つけた

次々と横断歩道を横切る車に遮られながらも、気になった2人はその人影を視界に入れる

俯(うつむ)いたまま立ち尽くす不気味な人影……

「……な、なあ、松田……。どうやら俺は疲れが溜まってるみたいだ。あ、あそこに見覚えのある奴が見える……」

「も、元浜……俺も見えてるぞ……。しかも、今朝見たばかりの奴だ……っ」

次第に2人の手が震えを増していき、顔も強張(こわば)る

交差点の向こう側で佇んでいる人影がゆっくりと俯かせていた顔を上げ……松田と元浜の2人を睨んだ

2人の予感は見事に的中、人影の正体は今朝見たばかりの人物――――幽神正義(ゆうがみまさよし)だった……

「お前らは良いよなぁ、表舞台に立てて……。どうせ俺達は日向の道を歩けず、暗く深いドン底の地べたを這いずり回る事しか出来ない……」

不幸にまみれた言葉を吐く幽神正義の目には明らかな殺意が潜んでいた

危険だと察知した松田と元浜は慌てて交差点から逃げるように走り去っていく

その様子を見た正義は――――ただ不適に笑むだけだった
「無駄だ。もう暗闇は俺達の狩り場（テリトリー）、何処にも逃げられない。俺達から逃げられやしないんだよ……っ」
不気味な台詞の直後、大型トラックが彼の前を横切る
そしてトラックが通過し終わった後、そこに幽神正義の姿は何処にも無かった……

どのくらい時間が経っただろうか、松田と元浜はゼーゼーと息を切らしながら雨の中を走り続ける
全力で走っていたせいか、すっかり傘は折れ曲がってしまったので途中で捨て去り、買ったばかりのエロＤＶＤを濡らさないよう懐（ふところ）にしまう
「ど、どうだ……っ!?撒いたか……!?」
「はあ……はあ……っ！も、もう追って……来ないよな……？」
後ろを向いて幽神正義が追って来ないかどうか確認していると――――路地裏から空き缶が２人の足下に投げ付けられた
空き缶の音にビビって立ち止まり、路地裏の方に視線を移した

そこから姿を現したのは――――幽神正義の弟、幽神悪堵（ゆうがみあくど）
敵意むき出しの視線で松田と元浜を威嚇、手に持ったジュース缶（中身入り）を握力で握り潰す
握り潰した缶を2人の足下に転がし、親指を立てた手で首を切るような動作を見せつけた
無言ながらも言いたい事は伝わる……
〝お前ら殺す〟
「「……ッ！」」
松田と元浜は恐怖に駆られて再び走り出した
2人の背中を見据える悪堵はスマホの通話機能をオンにする
「……兄貴、今度は南西の方角に向かっていったぜ？」
兄・正義に逃走情報を教えた悪堵は路地裏の奥へと姿を眩ました
それから幽神兄弟の追い込みが始まり、松田と元浜の行き着いた場所に次々と現れる
先回りしては2人を待ち伏せ、逃げれば再び先回りして待ち伏せ
まるでハンティングの如くジワジワと2人の体力と精神を削っていく……
松田と元浜は逃げ回ってる内に人気（ひとけ）が目立たない高架下までやって来た
もう2人は会話が出来ない程に疲弊しきっており、元浜に至っては顔がヤバい様相と

なっていた

壁に凭(もた)れて呼吸を落ち着かせようとするが――――狩人(幽神兄弟)は一時(いっとき)たりとも待つつもりは無かった……

「あ……ああ……っ」

ガタガタ震える松田と元浜の前に現れた幽神兄弟

遂に獲物が狩人に追い詰められた……

「何処へ逃げても無駄だ。暗闇は俺達の狩り場(テリトリー)、常に目を配らせている。たとえ今日逃げ切ったとしても、ジワジワと追い詰めていく……。猟犬の様になぁ……」

「追い詰めて追い詰めて、最後はテメェらの喉を噛み切る！」

幽神正義の左足、幽神悪堵の右手から閃光が迸(ほとばし)り――――神器(セイクリッドギア)に包まれる

松田と元浜は勿論ソレが何なのか知らない――――と言うより、頭の中が恐怖で支配されているので思考を巡らせる事が出来ない

「た、頼む……。許してくれよ……！まだあの事を根に持ってるのか!?」

「あれはちょっとした仕返しのつもりだったんだ！あんな事になるとは思ってなかったんだよ！」

２人は恐慌状態で謝罪しようとするものの、地獄に堕とされて廃(すた)れた狩人(幽神兄弟)は聞く耳を持たない……

「……ハッ、今更そんな事を言うなよ」
「あぁ、もう遅過ぎる」
「俺達はもう……誰かを許す気は無い……。誰かに許されようとも思っちゃいない」
「「俺達と同じ地獄に堕ちてみるか？」」
高架下の暗闇の中、狩人（幽神兄弟）の凶悪な左足と右手が獲物に突き刺さった……

「部長！新から連絡があったって本当なんですか!?」
「ええ、とりあえず彼の無事は確認出来たわ。ただ問題なのは……新が飛ばされた世界でも闇人（やみびと）が出没している事ね」
駒王学園（くおうがくえん）から幽神兄弟が立ち去った後のオカルト研究部部室、新から連絡を受け取ったリアスはその全貌を皆に報告していた
行方不明だった新が無事だと言う吉報を受けて安堵する面々
新側の問題はひとまず大丈夫ではあるが……問題は幽神兄弟の方である
リアスは幽神兄弟が一誠達3人に恨みを抱（いだ）き続けるようになった切っ掛けを問い、一誠は正門前で幽神兄弟から話された事を打ち明けた

「……なるほど、それであそこまでイッセー達を恨んでいたのね……」
「でも、その話が本当だとすれば――――イッセーくんには非が無いように思えるんだけど……」
祐斗の言葉は尤もで、実際は一誠が知らない内に行われていたもので、主な原因は松田と元浜にある
しかし、悪魔に転生したとはいえ成功の人生を歩いている一誠を許せずにいた
仮にその事を問い質したとしても、性根が歪みきったあの兄弟は何を言っても耳を傾けてはくれないだろう……
「新の事も心配だけど、その幽神兄弟をマークしておいた方が良さそうね。ここまで足を運ぶぐらいだから、このまま大人しくしてるとは到底思えないわ」
リアスが腕組みしながら言う
一誠も一応松田と元浜に連絡だけでも入れようとするが、２人の電話には繋がらなかった
嫌な予感が膨れ上がりそうな気配がする中、リアスの携帯電話が鳴る
「もしもし？あら、アザゼル。いったいどうし――――何ですって……!?」
「……っ？部長、いったいどうしたんですか？」
一誠が怪訝そうに訊くと、通話を終えたリアスは怒りと共に苦虫を噛み潰したような

剣幕と化す
　一誠の中で不確かだった嫌な予感が形を成そうとしていた……
「イッセー……どうやら彼らに先を越されてしまったわ……っ」
「そ、それって……まさか……っ」
「――――あなたのお友達がたった今緊急搬送されたそうよ」

　アザゼルからの通達を受けて飛び出したオカルト研究部＋イリナ
　松田と元浜が瀕死の重態で発見され、堕天使系列の病院に緊急搬送されたのを聞いて急いで転移用魔方陣で病院の前に到達し、一誠はいの一番に病院内へと駆けていった
　受付のカウンターにはアザゼルの他にソーナ、匙、真羅椿姫（しんらつばき）も来ている
　一誠はアザゼルに駆け寄って松田と元浜の容態を訊く
「先生！松田と元浜は?!」
「今さっきグリゴリの医療班が手術を終えたばかりだ。何とか助かったが……ヒデェ状態で運び込まれたそうだ」
　アザゼルが一誠を2人のいる集中治療室に案内する

部下の医師から許可を得て、〝面会謝絶〟の札が貼られた扉を開けて中に入る
一誠の目の前には――――痛々しい包帯姿で横たわり、弱い呼吸を続ける松田と元浜の姿があった
あまりにも酷い状態の2人を見てしまった一誠は放心したままくず折れる
「両手両足だけじゃなく指も全部折られた上に、喋れないようにとアゴまで砕かれてる。肋骨も全て折られた挙げ句何本か肺に突き刺さっていたらしい。内臓破裂も数ヵ所、もし発見が遅れてたら……マジでヤバかったそうだ」
アザゼルが上着のポケットから1枚の紙を取り出し、一誠に渡す
一誠は無言でその紙を開いて中身を確認する
紙には血文字でこう綴られていた……
〝俺達の狩り(復讐)はまだはじまったばかりだ。先にこのクズ2人を地獄に叩き落としてやったよ。次はお前の番だ。俺達が憎いならここから2駅離れた町、全ての元凶となった場所まで来い。たとえ逃げたとしても地獄の底まで追い掛けてやる。――地獄から甦(よみがえ)った兄弟より――〟
「……地獄から甦った兄弟……」
「このフレーズからして間違い無く幽神兄弟の仕業だな。しかし、こいつは流石に引いたぜ……。あいつらは仮にも人間だってのに、ここまで出来るもんなのか?」

アザゼルは幽神兄弟の残虐行為に顔をしかめる
一誠は徐々に怒りを身を震わせ、歯を食い縛って幽神兄弟からの挑戦状を握り潰す
鬼の様な形相で集中治療室から出ようとした
「行くのか？」
「当たり前ですよッ！あいつら……俺のダチをやりやがったんだ！絶対に許さねぇッ！」
「ここまで挑発的な文面を露骨に書いてんだ。罠かもしれねぇぞ？」
「じゃあ何だ！先生はあいつらを黙って見過ごせって言うんですか!?」
「そこまで言ってねぇ――――」
「俺は今すぐ行く！行ってあいつらをぶちのめしてやるッ！」
一誠はアザゼルの助言に耳を傾けず、集中治療室から飛び出した
残されたアザゼルは眉根を寄せて「バカ野郎……」と哀愁の言葉を呟くしかなかった

駒王町(くおうちょう)から2駅離れた町に到着したオカルト研究部＋イリナ、ソーナ、椿姫、匙は置き手紙に記された場所へ辿り着いた

そこはかつて一誠や松田、元浜、幽神兄弟が通っていた市立影車学園(かげぐるまがくえん)
時刻は既に深夜を回ってるだけあって周りには人の気配が全く無い
一行は少し錆びれを含んだ正門を開けて敷地内に足を踏み入れる
周囲を警戒しつつ進んでいると――――前方から人の気配が……
カチャカチャと鳴る拍車付きの靴にダメージ入りのコートを羽織り、黒髪に赤いメッシュを入れたならず者の様な男
一誠は憎き男の名を絞り出す様に呟いた
「幽神、正義……ッ！」
血が出そうな程に拳を握り締める一誠を見つけた正義は鼻を鳴らして笑う
一誠は松田と元浜を瀕死寸前まで追い込んだ怨敵に向かって叫んだ
「幽神ッ！なんで俺のダチをやった!?あいつらは非日常とは関係無いんだよッ！なんでやりやがったんだ!?」
激昂に包まれた一誠の問いに対し、正義は軽く嘲笑うのみ
そして、ようやく出た言葉も一誠の怒りを更に掻き立てるものだった……
「兵藤、お前は言葉を話せない犬とした約束を律儀に守るのか？」
つまり……一誠が土下座しようが何をしようが、最初から約束を守る気など無かったと言う事だ

無慈悲で卑劣な言葉に一誠だけでなく、リアス達も怒りの色を濃くする
「ふざけんなアアア

機器で位置情報を伝え、逃げられないよう包囲網を作り討伐すると言ったものだ
話し合いの結果、チーム分けは以下の様になった
1班…リアス&祐斗
2班…朱乃&ロスヴァイセ
3班…ゼノヴィア&イリナ
4班…小猫&ギャスパー
5班…ソーナ&椿姫
6班…一誠&アーシア&匙
班が決まった所で作戦を開始するべく、それぞれが別々の入り口へ向かった
一誠、アーシア、匙の3人は正面の入り口から校舎内に侵入し、1階を探索していく
未だに怒りを抑えられない一誠に匙は少し不安を抱える
「……兵藤、アーシアさんが怖がってるぞ。一旦落ち着いてくれって」
「匙、今だけはどうしたって怒りを抑えられないんだ……ッ!あいつらは、幽神兄弟は!俺のダチを傷付けやがったんだ!松田と元浜は……俺達の事情には全く関係無い奴なんだぞ!?そいつらを傷付けられて黙っていられると思うのかッ!?」
「……分かってる。確かにその兄弟がやった事は絶対に許せねぇよ。俺だって、会長だって腸(はらわた)が煮えくり返る思いだ……!けどよ、それを吐き出すのはそいつらをぶっ倒す

時まで取っておくんだ。今は奴らを探す事に意識を集中させろ」
匙も唇を噛み締めながら一誠を宥めつつ自分が秘めてる怒りを少し吐き出す
一誠は匙の言葉に同意し、幽神兄弟の探索を再開させた

「こ、小猫ちゃん……っ。絶対に手を離さないでぇぇぇ……」
「……ギャーくん、手汗が気持ち悪い」
３階を巡回している小猫＆ギャスパー
２人は蛍光灯がチカチカ光る不気味な雰囲気の廊下を歩いていた
相変わらずビビりのギャスパーは身を震わせ、小猫の手を離すまいとしっかり掴んでいる
周囲を警戒して捜索を続けること３０分、突然ギャスパーが立ち止まった
立ち止まった場所は――――トイレの前
「……どうかした？」
「あ、あの……小猫ちゃん……っ。ぼ、僕……おトイレに行きたくなってきちゃったよぉ……」

「……じゃあ待ってるから、してきて」
「でも、男子用と女子用――――どっちに入ったら良いの？」
ギャスパーの質問に小猫は「……男子用」と半目で答えるも、ギャスパーは物凄い勢いで首を横に振った
「もももも、もし男子用トイレで僕に何か遭ったら……どうすれば良いのぉぉぉ!?」
「……」
「もし男子用トイレで襲われたら――――小猫ちゃんは助けに来てくれるよね!?」
「……やだ。乙女の恥」
「ふえぇぇぇぇぇんっ！じゃ、じゃあ女子トイレに入っても良いよね!?それなら小猫ちゃんだって中に――――」
「……ギャーくんの変態」
「酷いよ小猫ちゃぁぁぁん！おトイレだけでも許してぇぇぇぇ！」
泣きじゃくるギャスパーに小猫はハァ……と溜め息を吐く
このまま漏らされても困るので仕方無く女子トイレの使用を許可する
ギャスパーは直ぐに女子トイレの中へ入り、小猫はトイレの前で見張りと警戒を続けた
……彼女の真上で逆さまに立っている緑の鎧人（よろいびと）に気付かないまま……

「はうぅぅ……。何とか間に合ったよぉぉ……」
個室の便器で用を足し終えたギャスパーは水洗レバーを引いて水を流し、パンツを穿いて個室から出る
鏡付きの洗面台の前に立ち、蛇口から水を出して手を洗う
ギャスパーのヘタレ根性のせいか、それとも幽神兄弟の怖さゆえにか頻りに自分の背後をチラチラ確認してしまう
「うぅぅぅ……夜の学校はいつもなら慣れてるのに、イッセー先輩のお知り合いの人が怖くて……ここも怖く感じちゃうよぉ……」
天敵に狙われてる小動物の如く震えるギャスパーは鏡や天井にも視線を巡らせる
ふと鏡に映る情けない姿の自分を暫くジッと見つめ、決意したかのように両頬をパシンと叩く
「怖がってばかりじゃダメだ……！僕だってグレモリー眷属の男子なんだ。イッセー先輩や新先輩のように、側にいる女の子を守らなくちゃ……！イッセー先輩の血だってあるし、見つけたら僕の眼で停めてみせる……！」

決意を固めたギャスパーは再び蛇口を捻って水を出し、その水で顔を洗う
2、3回顔に水を浴びた後、自前のポシェットから可愛らしい柄のハンカチを取り出して顔の水気を拭う
「……よしっ。僕だってやれば出来るんだ。いつまでも泣いてばかりの僕じゃ……ナイン、ダ……っ」
顔の水気を拭い去ったギャスパーの動きが止まり、震えが増していく
それは何故か……？
答えは簡単――――鏡に映った自分の他、壁に背を預けてギャスパーを睨む緑色の鎧人（よろいびと）を見つけてしまったからだ……
行動がワンテンポ遅れたギャスパーは一瞬停止した思考を取り戻し、双眸（そうぼう）を赤く輝かせようとするが……先に蹴り足で目元を斬られて視界を塞がれる
ギャスパーの目を封じた鎧人（よろいびと）は鳩尾（みぞおち）に膝蹴りを見舞った
ギャスパーは血と胃液を吐き出してしまい、そのまま足技で良いように痛めつけられる
トイレの床に倒れ伏したギャスパーを見下ろす鎧人（よろいびと）――――幽神正義（ゆうがみまさよし）はギャスパーの背中を踏みつけた
「ザマァ無いな、兵藤の女装後輩。最初からお前らの動きなんてお見通しなんだよ。暗

闇は俺達の狩り場(テリトリー)、誰が何処に居ようが手に取る様に分かるのさ」
「かは……ッ！」
「トイレの前にいた猫女は既に血祭りだ。死んではいないだろうが、両腕両足と首の骨をへし折ってやった。当分動く事は出来ない。その上この学園にはお前ら悪魔や天使、堕天使どもの通信を遮断する妨害電波を流してある。内外共に連絡手段は封じさせてもらった」
「――――ッ！こ、小猫ちゃんが……ッ」
「なぁ、笑えるか？笑えるよなぁ？笑いたきゃ……思いっきり笑えよ」
グシャ……ッ
正義は容赦無しにギャスパーの顔面を踏み潰した
トイレの床に血溜まりが出来上がり、正義は血だらけになったギャスパーを端の個室に放り込む
先に始末した小猫も引き摺ってギャスパーと同じ個室に放り込んでドアを閉める
一仕事終えた狩人(幽神正義)はスマホを取り出し、通話機能をＯＮにした
通話の相手は勿論、弟の幽神悪堵(ゆうがみあくど)
「相棒、そっちはどうだ？俺は２人仕留めたぞ」
『流石は兄貴だ。俺もシトリーの「王(キング)」と「女王(クイーン)」を仕留めたぜ？あいつら夜目(よめ)が利く悪

魔のくせに大した事ねぇや』
「よし……このまま奴らを追い込んでいくぞ。仲間を1人ずつ確実に仕留めて兵藤の精神を破壊してやれ。怒りと憎しみにまみれて精神が壊れた奴程、地獄に叩き落とすのは簡単だからな」
『分かってるさ、兄貴。その為にあのクズ2人を先にボコったんだろ？兵藤や他の奴らの怒りと憎しみが増えれば――――俺達の神（セイクリッド・ギア）器も進化していく』
「あぁ、地獄に堕ちて這い上がって来た俺達の怒りと憎しみも混ざれば……進化の速度が早まる。俺達の屈辱ごと、それをたっぷりくらわせてやるんだ……！」
　スマホの通話機能をＯＦＦにした正義は次の獲物を探すべく、暗闇の中へと消えていった……

フロニャルド陣との手合わせ開始!

「うっはは〜! 速いのじゃ〜っ!」
「しっかり捕まってろよ? 振り落とされないようにな!」
リアス達との連絡を終えた新は現在、中庭でバイクに興味を持ったクーベルを乗せて走り回っていた
リコから話を聞いたクーベルは目を光らせて「ウチも乗せるのじゃ〜!」と半ば強引に迫ってきたのだ
梃子どころかブルドーザーで押しても微動だにしなさそうな雰囲気にやむ無く搭乗を許可し、今に至る
初めて見る異世界の機械にクーベルだけでなく、ミルヒにユッキー、ガウルやジェノワーズ達も興味津々だった
その中でもリコは爛々と目を危険な具合に光らせており、瞳の奥には〝やっぱり隅々まで調査したい、分解したい〟と言う危険な願いが映っていた……
「ん〜っ! やっぱりあの未知の機械を隅々まで研究したいでありますぅ〜っ!」
「あはは……。リコがいつも以上に輝いてるよ……」

シンクが苦笑していると、先程まで大広間にいたレオ閣下とダルキアンがやって来た
彼女達が自分の方に近付いてくるのに気付いた新はバイクを停め、エンジンを切りスタンドを立てる
「およっ？もう終わりなのか？」
「あぁ、ちょっとな」
「ぶ～……っ。つまらんのじゃぁ」
新は膨れっ面のクーベルをスルーしてレオ閣下とダルキアンに話し掛ける
「んで、俺に何か用か？」
「うむ。アラタ殿、フロニャルドに来て早々申し訳ないが――――お主に折り入って頼みがあるのでござる」
「頼み？頼みって何だ？」
新の問いにレオ閣下が胸を張って答えた
「率直に言うぞ？ワシらと手合わせしてもらいたい」
『――――っ!?』
レオ閣下の言葉に誰もが驚愕に包まれる
新は「何でだ？」と訊くと、レオ閣下は淡々と告げた
「単にお主がどう言った者なのかを見極めたいだけじゃ。なんと言うか……お主はただ

のガキではない、そう直感出来る」
「それに先程の話では〝やみびと〟とやらの軍勢をたった1人で鎮圧したお主の力量にも興味が湧いてきたのでござる。是非、拙者達との手合わせをお願い申すでござる」
ダルキアンも微笑みながら新に手合わせを申し出る
うーんと考え込む新を他所に、ガウルやナナミも名乗りを挙げた
「待てよ姉上!そんな面白そうな展開に俺を出さねぇつもりか!?俺にもやらせろ!」
「レオ様、そんな楽しそうなイベントを聞かされたら私だって参加したくなっちゃいますよ〜!」
「ガウル、ナナミ、勿論お主らが参加したいと言うなら構わんぞ。どうせならこの場で参加したい者を集めようじゃないか」
レオ閣下の発言にナナミは子供の様に『やった〜!』とはしゃぎ回り、新はテンションの高い空気についていけなかった
そこで説明係(シンク)に訊いてみる事に……
「シンク、手合わせって一応勝負の事だよな?なんで勝負でテンションが上がってるのか説明してくれ」
「え〜っと……フロニャルドでは戦興行(いくさこうぎょう)と言うのがあってですね。この世界じゃ国同士の戦いはスポーツの一環なんですよ。僕らの世界が考えてる戦争とは全く違うもの

で、簡単に言うと費用さえ払えば誰でも参加出来るお祭りイベントみたいなんです」
「国同士の戦いがスポーツぅ？プロレスみたいなもんか？」
新はフロニャルドの戦と自分達の世界の戦の価値観及び違いに少し羨ましいなぁと思ったりする
染々とフロニャルドのホンワカさに浸っていると、ダルキアンが再び話し掛けてきた
「アラタ殿、宜しいでござるかな？」
「ん～……まぁ良いか。この国の領主や騎士がどれぐらい強いのか興味あるし」
「うむ？それはワシらに対する挑戦と見ても良いのか？」
新の言葉にピクッと反応したレオ閣下が迫力ある視線を向ける
若干ピリピリした空気の中、新は腕組みしながらハッキリと告げた
「それぐらいの器量が無かったら領主なんか務まらないんじゃないか？」
カチーン……ッ
レオ閣下の頭に何かが当たるような音が響き、ただでさえ気まずかった空気が更に険悪な感じになってしまった
「フッフッフッフッフッ……お主はハッキリ言ってくれるなぁ？そこまで言うなら〝何人〟相手でも問題は無かろう？」
「ん？おぉ、集団戦は得意分野だ」

「うむ、よく言った!ならば直ぐに模擬戦の仕度せいっ!」
レオ閣下が高らかに叫ぶと兵士達が急いで外へ飛び出し、模擬戦の準備を始めた

パン!パン!パン!
広大な草原にてカラフルな花火が小気味良く打ち上がり、新はその中央に立たされていた
キョトンとした顔で周りを見渡していると上空に映像が出現し、画面の中の男性が意気揚々と実況を開始する
『さあ!急遽開催が決まりました!異世界からやって来た謎の戦士アラタを歓迎する、参加者自由型の模擬戦を行(おこな)いますっ!実況及び解説は私、お馴染みガレット獅子団の熱き報道員フランボワーズ・シャルレーがお送り致します!』
暑苦しそうな実況につられて周りの兵士達も大歓声を上げる
新は『何かレーティングゲームみたいな空気だな』と若干落ち着かない様子でいた
『さて、今回のルールをご説明致しましょう!ルールは簡単!それぞれ三国からエントリーした者達が戦士アラタと戦い、戦闘不能もしくは降参させた者の勝ちとなります

！』
「ん？ちょっと待て！俺1人で戦うのか!?」
新の物言いに実況のフランボワーズは『その通りっ！』とグッドサインしながら答えた
新は理不尽な扱いに激怒しようとしたが、実況は止まる事無く次へ次へと進んでいく
『えー、長話はここまでにして。それではいよいよ！第1試合の選手を発表致します！』
「おいコラ話を聞けッ！」
『まずは我らがガレット獅子団から、王子ガウル・ガレット・デ・ロワ殿下！そしてノワール・ヴィノカカオ、ジョーヌ・クラフティ、ベール・ファーブルトンこと――――ジェノワーズ！』
ガウルは民兵達の上を飛び越えてフィールドに参上し、ジェノワーズも同じ様にフィールドに降り立った
新は欠伸しながら投げやりな拍手を送る
「あ～あっ、随分と派手な登場の仕方だな」
「当たり前だろ！戦いってのはなぁ、ド派手に見せるもんなんだよ！」
ガウルはビシッと指差しながら言い、ジェノワーズも「その通り！」とハモってポーズを決める

新はフロニャルド人の何処までも楽天的な思想がちょっと羨ましいなぁと思ったりする

シンク達が見守る中、遂に開戦の狼煙(のろし)が上げられた

『それでは早速ー!・勝負開始ーっ!・』

実況のフランボワーズが高々と試合開始の合図を送ると同時に花火が打ち上がり、ガウルとジェノワーズは各々の武器を構えた

ガウルは素手、ノワールはナイフ、ジョーヌは身の丈以上ある大斧、ベールは弓矢とラインナップは多数

新は考えるのはやめたとばかりに首や指、肩、足を鳴らし――――早くも闇皇(やみおう)に変異する

ガウル達は勿論、ミルヒやレオ閣下、実況は驚きを隠せなかった

『な、な、なんとーっ!?謎の戦士アラタが光った途端、この世の物とは思えない禍々(まがまが)しき姿へと変わったーっ!もしかして、これが異世界ならではの力なのでしょうかーっ!?場内はどよめきに包まれておりますっ!』

「うるせぇ実況」

鬱陶しかったのか、新は暑苦しい実況を一蹴した……

闇皇(やみおう)姿の新を目の当たりにしたジェノワーズ――――特にジョーヌとベールは少々ビ

ビり気味になってしまう
「な、何か思ってた以上に凄い威圧感やねんけど……」
「強そうで怖いです～……っ」
２人は弱気を吐いているが……ガウルは逆に今にも飛び出しそうなぐらい興奮していた
「うおぉおおおおおっ！面白ぇ！そんぐらいじゃなきゃ戦いは盛り上がらねぇんだ！行くぞ、てめぇら！輝力武装！獅子王爪牙アッ！」
ガウルの背中にフロニャルド特有の紋様が現れ、彼の四肢に爪のごときオーラが宿る
爪状のオーラを装備したガウルは地を蹴って飛び出し、新との距離を詰めていく
「くらいやがれぇぇぇぇっ！」
気合い充分且つ勢い良く右手を突き出してきたが……新の視点から見たガウルの攻撃は――――
「単調だな」
そう酷評した新は直ぐ右手に魔力を流した拳打でガウルの爪状のオーラを砕いた
たった一撃で自分の爪を粉砕された事に、ガウルは言葉を出す事すら出来なかった
『あーーーっとぉ!?何と言う事でしょう！ガウル殿下の十八番、獅子王爪牙がたった一撃で砕かれてしまったーっ!?』

「ほう……言うだけの実力、いや――――思ってた以上に力の差があるようじゃな」
この結果にレオ閣下も楽しみでありながらも眉を寄せる
一方のガウルは悔しそうに歯を食い縛りながら怯まず攻撃を続けた
「ナメんなァッ!」
蹴りを放ってきたガウルに対し、新は右腕でガード
その後はガウルの連続攻撃を余裕で躱し続けていく
「アカン!ガウ様がピンチや!ベル、うちらも行くでぇ!」
「了解です～」
ここでジョーヌとベールが参戦
ベールは弓具で矢を放ち、ジョーヌは飛び上がって大斧を振り下ろす
それに気付いた新は右籠手から闇皇剣を取り出し、飛来してきた矢を全て斬り払い――――ジョーヌの大斧も軽々と受け止めた
大斧ごとジョーヌを弾き返した新は剣をクルクルと回す
「まあまあって所か」
「……隙あり」
背後から気配と姿を消していたノワールがナイフで奇襲を仕掛けてきたが……新はそのまま剣で防ぐ

振り向きざま横薙ぎの剣を振るうが、ノワールは間一髪頭上に飛んで回避
「……輝力武装、セブンテイル！」
ノワールの背中にもフロニャルドの紋様が出現、彼女の尻尾が７つに分かれ――――
先端に刃が付いた
伸縮自在になったその尻尾が豪雨の如く新に襲い掛かっていく
しかし、新は爪で研いだ刀身に魔力を流し込み、高速の剣捌きで全て斬り落とした
ガウル達のもとに着地したノワールは「……強い」と一言だけ漏らした
『つ、強い！強すぎます！ガウル殿下の怒濤の攻撃だけでなく、ジェノワーズの連携プレーをいとも簡単に凌いだーっ！これが異世界の戦士アラタの実力かー!?本人は余裕である事を示すかの様にストレッチをしております！』
「だからうるせぇ実況」
ストレッチを終えた新は剣を右籠手に収納し、拳をパキポキと鳴らす
「ガウル、悪いがこれじゃあ俺の相手は務まらねぇようだな」
「んだとぉっ!?そいつは俺が弱いって言いてぇのか!?」
「そうじゃねぇよ。フロニャルド、だっけ？ここじゃお前は強いかも知れねぇが……所詮は井の中の蛙、俺のいた世界には俺以上に強い奴がゴロゴロいる。それに……」
「あ？それに何だよ？」

「……俺はこの世界が羨ましい。命賭けた戦争じゃなく、人を楽しませたいと思う戦興行ってヤツは良い考えだと思ってる。向こうでもそう言った物はあるけどさ……そこでは自分の夢と理想も賭けなきゃならねぇ。勝てば前進、負ければ終わり。そんなシビアな世界だ……。俺はそれよりもハードな弱肉強食の世界を生き抜いてきた、死に物狂いでな……」

新は今自分が素直に思っている事を吐露し始めた

新は元々バウンティハンターとして他人を蹴落とす毎日を送ってきた……

生きるか死ぬかの瀬戸際、一本橋より狭い綱渡り人生

だからこそ、フロニャルドの思想が羨ましく思えるのだ

ガウル達を始め、シンク達は新の言葉に染々としてしまう

話を終えた新は気持ちを切り替えて構えを取った

「だから見せてやるよ。向こうで鍛えたパワーとスピードをなぁ」

急に悪役っぽい口調と化した新は全身からオーラを溢れさせ、その場を駆け出した

幾重もの残像を生み出しながらガウルとジェノワーズを翻弄し、ガウルの背後に出現

「オラァッ!」

ドゴッ!

オーラを集めた新の蹴りはガウルの背中にクリーンヒットし、ガウルは空中へ放り出

された
突然の事態にジェノワーズも反応出来ず、気付いた時には新の姿はそこになかった
新は空中へ飛んだガウルを待ち構える様に先回りして、今度は拳打で更に高く殴り飛ばす
再び吹っ飛ばされたガウルの頭上に回り込み、強烈な肘打ちで地面へ叩き落とす
隕石の如く落ちてきたガウルに対し、地上に先回りした新は両拳に魔力を流し込んだ
そしてトドメの両手突きをガウルの腹に深々と食い込ませた
「……ッ！」
もはや悲鳴も出せない程のダメージを受けたガウルは白目を剥いて気絶
新は戦闘不能になったガウルをポイッと投げ捨てた
死～ん――――もとい、シ～ンとなった場内……それでもフランボワーズだけは頑張って実況を務めた
『しゅ、瞬殺……瞬・殺です！ガウル殿下、まさかまさかの瞬殺です！異世界の戦士アラタの動きが早過ぎて見えなかったと思っていたら、決着がついてしまっていたーっ！驚きを通り越した驚きの結果に場内も静まり返っております――！』
「さてと、次はお前らだな」
「「ひいっ！」」

「……ギクッ」
完全に萎縮してしまったジェノワーズは蛇に睨まれた蛙の様に固まっていた
新は問答無用とばかりに両掌(てのひら)から『闇皇紋章(エンブレム)』を展開、ジェノワーズの両サイドに位置付けた
新が両手を交差させると紋章が物凄いスピードでジェノワーズを挟み込み――――
爆発した
これぞ挟み込み版『ヘル・プレッシャー』である
『おーーーっと!ジェノワーズ、異世界の戦士アラタの攻撃をまともにくらってしまったーっ!しかし、フロニャルドではフロニャ力(ちから)による加護がございますので、フロニャ力(ちから)が強い場所では負傷はしませんし、死者も出ません!』
「は?そうなのか?」
『その通り!その代わり、ダメージの具合は騎士達の防具破壊によって分かるのです!』
防具破壊……その言葉の意図を察した新は直ぐ様ジェノワーズの方に視線を直す
爆煙が晴れると――――そこには装備どころか衣服、下着すら失った一糸纏わぬジェノワーズの姿があった
「わお」
「ふえぇ～んっ!」

「イヤやーっ！」
貧乳つるぺたボディのノワール、隠してもはみ出してしまう程の巨乳ベール、健康的なプロポーションのジョーヌ
ジェノワーズ３人の裸に場内は大歓声に満ち溢れた
『ジェノワーズ、装備完全破壊！異世界の戦士アラタの攻撃はいとも簡単に装備完全破壊レベルに達する様です！ジェノワーズのセクシーショットを導いた異世界の戦士アラタに拍手ー！』
盛大に響いてくる拍手に新は照れ臭そうに頭を掻いてお辞儀する
せっかくなのでと、新は勝利の保養に裸となったジェノワーズの所へダッシュした
「いやーん、異世界人のえっち～」
「見ちゃいやんです～！」
「ちょっ、ホンマに見んといてーっ！」
「ハハハッ、だが断る！これは勝者の特権だからな！それにしてもノワールって言ったか、お前隠さないとは大した物だな」
新の言葉通り、ベールとジョーヌは自身の裸体を隠そうとしているのだが……ノワールだけは少し赤らめているだけで、しっかり隠してはいなかった
「……ガウルが見てたらちょっと恥ずかしい……」

「ガウル?ああ、あいつなら今担架で運ばれていったよ。心配か?そりゃそえか、さっきはちょっとやり過ぎちまったもんな……」

新は苦笑しつつ担架で運ばれているガウルに申し訳無いと言う念を送った

新の戦いぶりを見たレオ閣下は楽しそうに口の端を吊り上げていた

「アラタ、お主の実力を見せてもらったが……正直言って圧巻じゃ。ガウルを軽くあしらうとはのう。だが……まだ実力の半分も出しておらぬ所を見ると――――真の実力は相当な物じゃろうな。もし、ワシを失望させるようなら許さんぞ?」

仁義無きハンティング

「理科準備室か……。ここにもいないな」
「そ、そうみたいね……」
２階の理科準備室を捜索しているのはゼノヴィアとイリナ
薬品棚から漂う独特な匂いに包まれた室内を見渡す
普通の学園でさえ不気味な雰囲気を醸し出しているが……ここは特に不気味だった
棚に並べられた動物のホルマリン漬けや標本、人体模型に作り物の骸骨
更には危険そうな薬品と理科室に関する定番の代物がより不気味さを演出している
ゼノヴィアとイリナは警戒しながら幽神兄弟の捜査を続けるが……
カタン……ッ
「んひぃっ!?」
ちょっとした物音で過剰に反応してしまうイリナに対し、彼女の肩に手を置くゼノヴィア
「ああ、すまない。今のは私が何かを蹴ってしまったようだ」
「ほ……っ。驚かさないでよ、ゼノヴィア」

「イリナ、もしかして怖いのか？」
「そ、そんなわけないでしょ！理科準備室が不気味だからビックリしちゃっただけよ……」
「そう言えばイリナは昔から突発的な脅かしに弱かったな。小さい頃、お化けに変装した剣護さんを見て大泣きしてたのを思い出したよ」
「も、もう！言わないでよ！忘れようとしてたのに！それにゼノヴィアだって怖がって、剣護さんの寝床にコッソリ潜り込んでたじゃない！」
「なっ!?あ、あれは怖がった訳じゃないぞ！剣護さんが寒そうにしていたから暖めていたんだ！」
　自分達の黒歴史が引き金となり、子供の様に喧嘩するゼノヴィアとイリナ
一頻(ひとしき)りの喧嘩を終えた２人は息を整え、理科準備室を出ようとしたその時――――何かが動いた様な物音が微かに聞こえてくる……
　ゼノヴィアは亜空間からデュランダルを取り出して剣先を音がした方角に向ける
　暗闇が支配する室内は不気味過ぎる程に静まり返っており、イリナも光の剣を出して周囲を警戒し始めた
　――――天上に逆さまの状態で張り付いている緑の鎧人(よろいびと)に気付かないまま……
　ピュウッ♪

軽快そうな口笛の音を聞いたゼノヴィアとイリナが天上に視線を移した刹那――――
――彼女達の眼前に液体の入った薬瓶が飛んできた
天上に逆さで張り付く鎧人(よろいびと)は石を投げて薬瓶を破壊し、中に入っていた液体を彼女達にぶちまけた
液体はゼノヴィアの目元とイリナの頬や服に飛び散る
「うあぁぁぁっ！」
「熱(あつ)……っ！嘘……これって硫酸!?」
皮膚を焼く音と異臭に液体の正体が判明
そう……投げられた薬瓶の中身は硫酸だった
イリナの頬と衣服の所々が焦げ、ゼノヴィアは焼かれた目元を押さえて苦しむ
奇襲を成功させた鎧人(よろいびと)――――幽神正義(ゆうがみまさよし)は体勢を反転してゆっくりと降り立つ
「こうも上手くいくとは呆気ないな」
「ひ、卑怯よ！硫酸をかけるなんて！」
「卑怯？ハハハッ、地獄に堕ちた俺達兄弟には最高の褒め言葉だ」
正義はゼノヴィアを狙って左足での蹴りを繰り出した
イリナはそうはさせないとばかりに光の剣で正義の蹴りを防ぐ
イリナしか戦線に立てないのを利用して左右の蹴りラッシュを見舞う正義

光の剣は蹴りを受ける毎に削ぎ落とされていき、徐々にイリナの体にも蹴りによる爪痕が刻まれる
「うぐ……っ！ゼ、ゼノヴィア！イッセーくんとリアスさんに連絡を――――」
「無駄だ。ここら一帯にはあらゆる通信を遮断する妨害電波を流してある。外からも内からも連絡は出来ない。残念だったな！」
バキィンッ！
正義の左足がイリナの剣を砕く
光の剣を砕いた蹴り足は勢いのまま頭上に上がり――――イリナの脳天に振り下ろされた
カカト落とし（別名ネリチャギ）をくらってしまったイリナは顔面から床にくず折れ意識を失う
「ぐ……っ！イリナぁ……！貴様だけは許さん！斬り殺してやるッ！」
視界が塞がれたままであるにもかかわらず、ゼノヴィアはデュランダルを振りかぶった
しかし、目の見えない剣士の剣戟など当たる筈も無い……
軽々と柄を蹴り上げられ、デュランダルは天上に突き刺さる
得物を失ったゼノヴィアに対し、正義は容赦無くサイドキックを叩き込んだ

左右の連続蹴りから無慈悲な膝蹴りに繋げ、強烈なローキックでゼノヴィアを転がす
髪の毛を掴んでゼノヴィアを無理矢理起こし、今度は壁際に叩き付けるように蹴り飛ばした
そこから更に左右の連続蹴りを繰り出していき、ダウンすらさせず痛め付ける
トドメに左足を高く上げ、ゼノヴィアの鎖骨に振り下ろした
カカト落としによってゼノヴィアの鎖骨は砕ける……
それでもゼノヴィアは軋む体に鞭を打つかの如く起き上がろうとするが……
「なぁ、おかしいか？おかしいなら笑えよ。笑ってみろよ？なぁ」
グシャ……ッ！
惨(むご)い一撃、正義はゼノヴィアの頭を踏みつけて意識を刈り取った
その後は懐(ふところ)からスマホを取り出し、倒れ伏したゼノヴィアとイリナをカメラモードで撮影する
撮影が終わると今度は通信チャットを起動させて弟の幽神悪堵(ゆうがみあくど)にメッセージを送る
『デュランダル使いと天使を仕留めた。相棒はどうだ？』
メッセージを送ってから数秒後、悪堵からのメッセージを受信
『流石は兄貴。こっちは雷光(らいこう)の巫女と戦乙女(ヴァルキリー)を撃破した所だ。証拠写真掲載』
向こうはどうやら朱乃とロスヴァイセを仕留めたようだ

直ぐに悪堵から例の証拠写真が送られてくる
朱乃とロスヴァイセが血だらけで横たわっている痛々しい姿を映された画像が……
すかさずメッセージを送り返す正義
『良いぞ、次はリアス・グレモリーと聖魔剣使いだ。２人がかりで仕留める』
『了解、兄貴』
チャットを終えた正義はスマホを懐に戻し、ゼノヴィアとイリナを一瞥してから理科準備室を去っていく
「フンッ、狩りは終盤だな」

「……部長、やはり繋がりません。通信用の魔方陣も機能しないとなると――――」
「私達をおびき寄せたのはこの為だったのね。何処までも卑劣極まりないわ……」
裕斗の言葉に苦虫を噛み潰した様な顔付きとなるリアス
通信機器も通信用魔方陣も使えない現状、仲間達の安否が気になる……
嫌な予感を過らせる中、リアスと裕斗は薄暗い廊下を早足で駆け始めた
階段に差し掛かろうとしたその時――――２人の目の前に空き缶が飛び出してきた

小気味良い金属音に足を止め、裕斗は聖魔剣を一振り創る
「そんなに急いで何処に行くんだ。デートかぁ？だったら俺も混ぜてくれよ」
嫌味な言い方をしながら階段を降りてくる1つの人影
クルクルと缶コーヒーを回しながら出てきたのは銀色の眼孔を光らせる褐色の鎧人（よろいびと）
――――幽神悪堵（ゆうがみあくと）だった
その姿を目にしたリアスはオーラを高め、裕斗は聖魔剣の切っ先を向ける
「随分と余裕を持った出方ね。私の管轄で勝手な真似をしておきながら、それ程までに自信があるのかしら？」
「無かったらワザワザ出てこねぇよ。てめぇらはもう俺達兄弟の狩り場（テリトリー）の中だ」
憎まれ口を叩きながら悪堵は頭部を覆っている兜のマスクのみを解除し、缶コーヒーを開けて飲む
缶コーヒーを飲み干すと再びリアスの方を向く
「幽神悪堵、あなたの兄――――幽神正義は何処にいるの？」
「さぁな。兄貴ならその辺で散歩でもしてるんじゃねぇのか？」
口の端を吊り上げ、悪どさ満載のニヤケ面でふざけた回答をする悪堵
真面目に答える気が無いのは分かりきっていた事だが……リアスの怒りのゲージが上がる

「聞いてみただけとは言っても、やはり不愉快ね。それなら力ずくで聞かせてもらうわ！」
リアスは全身から赤いオーラを噴出させようとするが、悪堵が掌(てのひら)を向けて待ったを掛ける
「おいおい、良いのかぁ？あんまりド派手な攻撃しちまうと――――ここが崩れてお仲間が瓦礫の下敷きになっちまうぜ？」
悪堵の言葉にリアスはオーラの噴出を中断せざるを得なかった
まだ学園の中には一誠達がいるので、滅びの魔力の様に強大な力を振る舞えば建物は簡単に崩壊し――――仲間が潰される……
そこで裕斗が1歩前に出た
「部長、彼は僕が引き受けます。その間に1階へ降りてイッセーくんを呼びに行ってもらえますか？」
「……分かったわ。気を付けるのよ、裕斗」
「おっと、そう簡単に行かせると思ってんのかァッ！」
兜のマスクを装着状態に戻した悪堵はその場を駆け出し、リアスに殴り掛かろうとした
裕斗は瞬時に察知して悪堵の右拳を聖魔剣で止める

「悪いけど邪魔はさせないよ」
「カッコつけるじゃねぇか、騎士(ナイト)野郎オッ！」
悪堵は続けざまにパンチのラッシュを浴びせていく
重いストレートやフック、アッパー、裏拳、肘打ち等を連続で繰り出すが、裕斗は全ての打撃攻撃を聖魔剣で受け流す
距離を詰められているので悪堵の方が有利な状況にある
そこで裕斗は悪堵の足元から大量の聖魔剣を出現させ、悪堵を自分とリアスから遠ざけようとする
悪堵は足元から出てきた聖魔剣を飛び退いて回避
その隙にリアスは翼を広げ、一誠を呼びに行くため窓から外へ飛び出そうとした――
――その時……
「バカめ」
「――――っ？」
まるで自分達の仕掛けた罠に引っ掛かった様な台詞を吐き捨てる悪堵
一瞬理解出来なかったリアスだが……視線を前方に移した瞬間、もう1人の狩人――
――幽神正義(ゆうがみまさよし)が飛び込んできた
オーラを集束させた左足がリアスの腹に深々と食い込み、彼女に血反吐(ちへど)を吐かせる

完全に油断していたリアスは後方の壁に激突し、裕斗もその一瞬の惨事に気を散らせてしまう
「交通事故にご用心ッ！」
ドゴォッ！
悪堵は裕斗が自分から目を逸らした隙を突いてダッシュで詰め寄り、強烈なブローを急所である肝臓に打ち込んだ
脇腹を殴られ、内臓にも響く衝撃を受けた裕斗は膝をついて悶絶
呼吸も少しおかしくなり、口から血の塊を吐き出す
どうやら先程の一撃で肋骨も折れ、その折れた肋骨の何本かが彼の肺を傷付けてしまったのだろう……
悪堵はダメ押しに裕斗の膝頭（ひざがしら）に拳打を叩き込んで膝を砕く
裕斗の最大の武器であるスピードを奪い尽くした……
「ぐあぁ……っ！」
「へへッ、残念だったな！実は予（あらかじ）め兄貴と打ち合わせしてたんだよ。てめぇらのどっちかが仲間を呼びに行こうとしたら、屋上で待機してる兄貴がそいつに蹴りをぶち込むってな。狙いも時間もドンピシャだぜ」
「……全て計算ずくだったと……!?」

「俺達は暗闇を狩り場(テリトリー)にしてる狩人だ。必ず獲物を追い詰めて……ぶっ潰すッ！」
悪堵は裕斗の髪の毛を掴んで無理矢理立たせる
リアスは直ぐに裕斗を助けようとするが先程の一撃で体が言う事を聞かない……
悪堵は捻りを加えたアッパーを裕斗の腹に打ち込み、宙へ浮かせる
浮いた裕斗の真下へ素早く潜り込み、オーラを集めた右腕を高速且つ連続で突き出した
裕斗の全身に拳の痕が刻み込まれていく……
悪堵はトドメとばかりに右腕にオーラを纏わせ、落ちてきた裕斗を回転式のバックハンドブローで吹っ飛ばす
後方へ吹っ飛ばされた裕斗は壁を突き破り、幾つもの教室を貫通していった
「裕斗……っ！裕斗ッ！」
悲痛な叫びを上げるリアスに対し、正義は左足で彼女の首元を押さえ付けてギリギリと踏みにじる
「どうした、リアス・グレモリー。自分の下僕がやられて苦しいか？ハハッ、噂通りの甘ちゃんだな。たかが自分の手足となる道具(道具)にそんな感情を抱(いだ)くとはよぉ」
「下僕の心配するより、てめぇ自身の心配をした方が良いんじゃねぇのか？もう残ってんのはてめぇと兵藤、生徒会のヤロー1人とあの金髪クソ女だけだぜぇ？」

「の、残ってるのはって……どういう事……!?朱乃は……小猫は……!?」
幽神兄弟の言葉に憤りを覚えたリアスは沸々と沸き起こる怒りのまま、真意を問いただす
リアスの問いに幽神兄弟はただ嘲笑うだけだった
ここで正義がスマホを取り出して〝証拠写真〟を見せつける
あまりにも酷く、ゲスな行いにリアスの怒りは更に上昇した
「俺達はまともにやり合うつもりなんか無い。狩りは用意周到に準備し、尚且つ獲物を追い詰めて狩る。正面から突っ込むなんざバカのやる事だ。お前らはそのバカの代表格だな」
ドォオンッ！
自分の眷属を嘲笑、侮蔑されたリアスは掌から小さいながらも破壊力がある滅びの球体を放った
滅びの球体は正義の顔面に直撃し、頭部が爆煙に包まれる
正義が数歩後退した隙にリアスは両手に滅びの魔力を集める
「兄貴!?」
「私の可愛い眷属をここまで侮辱するなんて万死に値する！消し飛びなさいッ！」
リアスは両手に集めた滅びの魔力を正義に向かって解き放った

しかし……爆煙に包まれながらも正義は莫大なオーラを纏った蹴りで、リアスが放った滅びの魔力を霧散させた
一撃で消された事に絶句する中、正義の頭部を覆っていた爆煙が徐々に晴れる
大きく割れた兜の隙間から見えてきた正義の顔
彼の額にある昔の傷痕から血が垂れ、眼はこの世の物とは思えない程に血走っていた……
形容し難い鬼気迫る気迫にリアスは膠着してしまう
「キレてるか？そりゃそうだよなぁ。だが……俺達の怒りと憎しみは――――――お前らみたいな一発芸とは格が違うんだよぉ……ッ！」
ドゴォッ！
正義の膝蹴りがリアスの腹に深々と食い込み、リアスは血と内容物を吐き出して倒れ――――そのまま意識を失った
狩りを終えた正義は血の混じった唾を吐き捨て、その場を立ち去ろうとする
「兄貴、大丈夫か？血い出てるぞ」
「昔の古傷が開いただけだ。別にどうと言う事は無い。少し時間を食ったが……後は兵藤を含めた3人だ」
正義は立ち去る前にリアスの服のポケットから携帯機器を取り出し、着信履歴や電話

帳を調べる
その中から一誠の番号を見つけ、直ぐ様発信
コール音が数回鳴った後、一誠が電話に出た
『もしもし、部長?大丈夫ですか?何か今凄い音が鳴ったんですけど――――』
「人違いだ、俺はお前の部長じゃない――――兵藤」
正義の声を聞いた途端、一誠の口調に怒気が走る
『幽、神……ッ!なんでお前が部長の携帯に出てんだ!?部長に何しやがった!?』
「チョイと眠ってもらった。他の奴らもおやすみタイム、後はお前ら3人だけだ。兵藤、1分以内に体育館へ来い。来なかった場合はお仲間が事故死する事になるぜ」
『おい、待て!幽神――――』
一誠の言葉を無視して通話を切る正義
リアスの携帯機器を放り捨て、窓から体育館の方を見やる
一誠が来るのを確認する為だ
そして……急ぎ足で体育館の中へ入っていった一誠、アーシア、匙の姿を確認すると
――――口の端を吊り上げた
「行くぜ、相棒。最後の獲物を狩りに」
「あぁ、兄貴となら誰が相手でもブッ潰せるぜ」

暗闇を狩り場（テリトリー）にする狩人――――幽神兄弟は薄暗い廊下の闇の中へ消えていった……

スゥパァ脱衣タァイム！

「うぅ……エラい目に遭ったわぁ……。ヴァレリーさんまでやって来たし……」
「直ぐにアデル様が止めてくれたお陰で助かりましたね～」
「……危険行為の罰」
ジェノワーズの３人――――ジョーヌ、ベール、ノワールはバスタオルを体に巻いて選手用のテントで水を飲んでいた
素っ裸にされた直後、「あいつだけズルいから俺も見る！」とヴァレリーが下心満載の顔で走ってきたが……英雄王アデルの活躍（？）により強制退場をくらい、今は遠くの大木に鎖で括り付けられている
一方、新は次の試合の準備として水を飲み干しストレッチを終えた所だった
『さあさあさあ！１回戦を悠々と勝利した異世界の戦士アラタに挑む次なる挑戦者は――――ビスコッティ騎士団親衛隊隊長エクレール・マルティノッジ！そして同じくビスコッティ隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネの２名です！ビスコッティの中でも指折りの実力者相手にどう立ち向かうのか、目を離さずにご覧いただきたい所です！』
若草色の髪に垂れ耳を生やした少女エクレール、金髪に狐耳の忍者娘ユッキーが声援

の飛び交うフィールドを歩き、新と対峙する
「にんにん♪アラタ殿、模擬戦と言えど手加減は無しでござるよ?」
「そんな失礼な事しねぇよ。最初から最後までクライマックス&ショータイムを見せてやるぜ」
新は直ぐ様『闇皇(やみおう)の鎧』を展開して鎧姿となり構えを取る
エクレールは二対の短剣、ユッキーは忍者刀を抜いた
『三者が準備万端を迎えました!それでは第2回戦、始めー!』
実況の開始の合図と共にエクレールとユッキーはその場を駆け出し、持ってる得物で新に斬り掛かっていった
新はエクレールの短剣を十字受けで止め、ユッキーの忍者刀を右足でガードする
そのまま2人を弾き飛ばした新は掌(てのひら)から魔力弾を無数に撃ち放った
エクレールとユッキーは素早い身のこなしで魔力弾の雨を躱(かわ)していく
「ユキカゼ!同時に紋章術を撃つぞ!」
「了解でござるっ」
直後にエクレールは上空へ飛び上がり、ユッキーはジグザグに動きながら新を翻弄しようとする
2人の背中に紋章が出現し、エクレールの双剣にエネルギーが集まっていく

ユッキーは両手にエネルギー状の手裏剣を展開させた
「閃空大一文字ッ！」
「ユキカゼ式忍術！閃華風裂ッ！」
エクレールが双剣を振るうと十字型のエネルギー波が解き放たれ、新目掛けて降下していった
ユッキーの投げたエネルギー状の手裏剣も地面を削りながら突き進む
彼女達の相乗攻撃に新は体内の『悪魔の駒』を昇格させた
『進化する昇格』――――『戦車』ッ！」
昇格を唱えた直後に新は赤い光に包まれ、左手に蝙蝠を象った闇皇盾、足にキャタピラを装備した重厚な『戦車』形態と化した
その変貌に再び会場が沸き上がる
『な、な、なんとーっ!?また異世界の戦士アラタの姿が変わったーッ！まるで行く手を阻む壁や砦のごとき重厚な姿ッ！異世界の戦士を甘く見ていましたーッ！』
実況の熱弁はさておき、『戦車』形態となった新は盾に魔力を流し込み――――巨大な盾へと変化させて２つの紋章術を真正面から受け止める
火花が激しく飛び散る中、新の盾は２つの紋章術を見事に打ち消した
「なっ……！我々の紋章術をいとも簡単に……!?」

「す、凄いでござるぅ！」
「今度はこっちの番だッ！『進化する昇格』（エボルシオン・プロモーション）――――『僧侶』（ビショップ）ッ！」
新は再び駒を昇格させ、蝙蝠型の拳銃――――闇皇銃（やみおうじゅう）を握り締め、両肩に砲口を備えた砲撃特化型の『僧侶』（ビショップ）形態に姿を変える
実況や会場の興奮を無視して、銃口と砲口に魔力をチャージさせていく
赤黒く渦巻き、高密度にチャージされた魔力は解放寸前にまで至った
「散弾式フルバーストトオオオオッ！」
ドドドドドドドドドドドドドドッ！
闇皇銃（やみおうじゅう）とキャノン砲から解き放たれた魔力の帯は生物の如くうねりながら縦横無尽に飛び交い、エクレールとユッキーへ降り注がれた……
「――――ッ」
２人は声を出す暇も無く魔力の大爆発に包み込まれ、爆風が民兵達を吹き飛ばす
やがて爆煙が晴れて２人の姿が見え始め――――後はこの世界ならではの展開に
バババッ！
エクレールとユッキーの衣装が下着ごと木っ端微塵に吹き飛び、見事に素っ裸となった
控えめなおっぱいと小振りなお尻でありながら引き締まったボディラインのエク

レール
呪縛から解放されたかの如く揺れる爆乳おっぱいとムッチリしたお尻を持つユッキー
２人の魅力的な裸に新も口笛を吹く
「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
「おろろっ？いや～んでござるぅ」
エクレは絶叫を上げて屈む様に裸体を隠し、ユッキーは頬を赤く染めて爆乳おっぱいを隠そうとする
しかし、爆乳過ぎる為か腕から乳肉がはみ出てしまい……ガード出来るのは殆ど乳首までが限界だった
新はムニュムニュと形を歪ませるユッキーの爆乳を近くで観察する
「こんなデッケェおっぱい見た事ねぇぞ……。朱乃よりデカいんじゃねぇか？」
「ア、アラタ殿ぉ～……あんまり見られると恥ずかしいでござるよぉ～……」
恥じらいながら身を捩らせるユッキー
一方、エクレは涙目で新を睨み付けていた
「こ、このエロ戦士めぇ……ッ！」
「おいおい、それがこの世界のシステムなんだから仕方ねぇだろ？……ふむふむ、結構良

い体してんな」
「ジロジロ見るなバカぁぁぁぁぁぁぁっ！」
宙に浮かぶ画面に映されているエクレの絶叫が会場に響き渡る……
エクレは全力疾走でフィールドを離れ、警護の女性から貰ったバスタオルを体に巻き付けた
ユッキーも爆乳おっぱいを揺らしながら選手用のテントへ避難してバスタオルを貰う
〝大ダメージで女性が裸になる〟と言う素敵な設定とおっぱい＆裸祭りに新の戦闘意欲がどんどん上がっていく
「よっしゃあっ！次は誰だ？どっからでも掛かって来いッ！」
新の呼び掛けに応えるかの如く3つの人影が飛び出してきた
着地したメンバーは――――この世界では勇者と呼ばれる者達だった
「ビスコッティ共和国勇者、シンク・イズミ！見・参ッ！」
「ガレット獅子団領勇者、ナナミ！参・上ッ！」
「パスティヤージュ公国勇者、レベッカ！行きまーすッ！」
『第3回戦！異世界の戦士アラタに挑むのは、なんと三国の勇者達だーーーっ！ビスコッティ、ガレット、パスティヤージュが誇る勇者達の連合軍に異世界の戦士アラタは

どう立ち向かうのかーっ!?』
シンク、ナナミ、レベッカがそれぞれの武器を出現させる
シンクの武器はビスコッティに伝わる神剣(しんけん)パラディオン
形態変化も可能で、シンクはそれをロッド状にして構えた
ナナミはガレットの宝剣エクスマキナ、こちらもシンクのパラディオンと同様ロッド状に変化出来る
そしてレベッカはパスティヤージュの神剣メルクリウス
こちらは箒の様な乗り物に変化出来るらしく、開始早々レベッカはメルクリウスに乗って空を飛んだ
『それでは注目の第3回戦、開始ーーーーーッ！』
「行きますよ、アラタさん！」
「ガレット魂、見せちゃうよーっ！」
「良い度胸だ！行くぜ！」
新は通常形態に戻って駆け出し、闇皇剣(やみおうけん)を横薙ぎに振って斬撃を飛ばす
シンクは右、ナナミは左に横っ飛びで斬撃を回避するが新は狙いを1人に絞って先回り
狙ったのは――――シンクだった

振り下ろされた剣をシンクはロッドで受け止めるが、強い衝撃が手から腕に伝わる
「うぐぐ……っ!す、凄いパワーだ……!」
「おいおい、こんなんで音を上げるのか?勇者の名が泣くぜ」
「なんの……!勝負はこれからですよっ!」
負けじとシンクは受け流す様にロッドを傾け、新の体勢を崩しに掛かる
よろめいた新の後頭部をロッドで打とうとしたが、直ぐに反応した新は地面に伏せる形で回避
そのまま足払いでシンクを転がし、倒れた彼に拳を叩き込もうとした
「そうはさせないよーっ!ブーメランスラーーーッシュ!」
ナナミはロッド状のエクスマキナをブーメランに変え、新に向かって投げた
風を切る音に気付いた新は飛来してきたブーメランを剣で弾き返す
その隙にシンクは蹴りを放って新を後退させる
ただしダメージを与えられないものの、現状の窮地を脱出するには充分だった
「シンク、こうなったらアレ使っちゃおう!合体紋章術!」
「うん、ベッキー!」
「オッケー!任せて!」
シンクは急いでナナミの所へ

新はそれを阻止しようとするが、上空から飛来してくる弾丸の群れに行く手を阻まれる
箒の様な乗り物に乗って空中に滞在しているレベッカ目掛けて幾重もの斬撃を放つ
レベッカも負けじと砲術で対抗した
「バレットカーーーードッ！」
カードから解き放たれたレーザーが斬撃と衝突、火花を散らしながら相殺させる
その間にシンクとナナミは全身から輝力のオーラを発して紋章砲を撃つ寸前だった
シンクは炎、ナナミは水の輝力をそれぞれ掌に集めて――――解き放った
「豪熱ッ！」
「海王ッ！」
「「相陣掌ーーーーーッ！」」
２人から放たれた炎と水のエネルギー砲が螺旋状に絡まりながら飛んでいく
大地を抉りながら突き進んでくる紋章砲に対し、新は両手に赤黒いオーラを極限にまで滾らせた
新はオーラの滾った強烈な打撃――――ヘル・クラッシュでシンクとナナミが放った紋章砲を殴り……
「オオオオオオオオオオオオッ！」

腹の底から発した気合いと同時にもう一撃加えて空の彼方へと殴り飛ばした
いや、正確にはレベッカがいる方角へ……
「ええっ！嘘お!?」
「「ベッキー！輝力武装ッ！」」
レベッカの危機にシンクとナナミはお互いの武器を光らせた
シンクのパラディオンはフライングボードの様な乗り物に、ナナミのエクスマキナはスケート靴へと変化
それぞれ炎と水流を噴かして空中へ飛び出し、高速でレベッカの所へ
殴り飛ばされた螺旋状の紋章砲がレベッカに直撃する寸前でシンクとナナミは救出に成功
紋章砲は今度こそ空の彼方へ消えていった……
「ふう、間に合って良かった～」
「ベッキー、大丈夫？」
「う、うん……ありがとう」
ホッとするのも束の間、3人の頭上に回り込む1つの人影
3人が頭上に視線を移すと……速度特化の『騎士』形態にプロモーションした新が闇皇槍を構えていた

しかも、その槍には大質量のオーラが渦巻いており、今にも放出されそうだった
「「えーーーーーっ!?」」
「3人纏めてくらいなッ！」
ゴオオオオォォォォォォォォッ！
新が槍を突き出した瞬間、槍先から莫大なオーラの渦が三国の勇者3人を呑み込み――
――真下の大地に激突
3度めの爆発は更に大規模で、吹き飛ばされた民兵達が〝けものだま〟と呼ばれる丸っこい動物の姿へ変わる程だった
『し、信じられません！三国が誇る勇者3人を凌駕してしまう程の強さと、多彩な姿！いったい異世界の戦士アラタは何処までこの快進撃を続けるのでしょうか!?そして、それを止める者は現れるのだろうかーーーーーッ!?』
「だから、うっせぇ」
実況のフランボワーズにツッコミを入れつつ、ゆっくりと地に降りる新
トコトコと土煙の方へ歩いていく
目的は無論、この後で起こる展開を間近で見る為だった（笑）
暫くして煙が晴れ、3人の姿が見え始める
まずは尻餅をついた状態のナナミ

見事な全裸祭り――――と思いきや……防具は消し飛んでいるものの、防御力が高かったのか青い肌着だけが残されていた
この結果に新は思わず「チッ」と舌打ちしてしまう
次に姿を確認出来たのはレベッカ
彼女の方は……衣装が全て消し飛んでいた
あどけなさが残る美少女の裸に新は親指を立てる
「ふえぇぇ!?」
自分の現状に気付いたレベッカは悲鳴を上げて裸体を手で隠す
だが、問題は彼女の格好ではなく――――体勢だった
レベッカは今……トランクス一丁で目を回しているシンクの上に乗っていると言う状態である……
ナナミもその事に気付いて「ベッキー、下、下!」と指摘する
レベッカが下に視線を移すとようやくシンクと自分の現状に気付き、顔が真っ赤になっていく
その時、シンクが「う～ん……」と目を覚まそうとしたが――――
「シ、シンク! 見ちゃダメーーーっ!」
「え!?な、何!?いきなり真っ暗になっちゃったよ!?」

間一髪の所でシンクの両目を塞いだレベッカ
しかし、それは自身の裸を解放させてしまう結果となった……
「……何か絵的にかなり危ないよな、その体勢」
「あのさ、ベッキー？シンクの両目を塞いでると……見えちゃってるよ？胸とかお尻とか」
「うぅぅ……っ、何とかしてくださいナナミさ～ん！」
「よしっ、勇者ナナミにド～ンと任せなさい！」
裸を隠せず、新に凝視されているレベッカを助けるべくナナミが行動を開始
まずは新の目を塞ごうと試みるが……新は〝そうはいかん〟とばかりに避け続ける
ムッと頬を膨らませるナナミは次なる陽動作戦を思い付いた
ナナミは「イェイっ♪」と横チェキしてセクシーなポーズを決める
恐らく自身のセクシーアピールで新の注意を惹き付けようとしているのだろう……
「アラタさん、女の子の裸を見てるのは目に毒だよ？見るなら肌着まで見えてもＯＫなお姉さんの方にしときなさい♪」
「ナナミ、お前何歳？」
「１６だけど」
「俺は１８だし酒も飲めるから大丈夫だ」

「ええっ！私より年上だったの!?」
「その通り。それに俺は経験豊富だから女の裸を見て鼻血出すなんてベタな反応はしねぇよ。つまり……何の問題も無い」
「う～ん……私もスタイルはそれなりに自信あると思うんだけどな～……」
肌着姿を歯牙にも掛けてもらえない新に何となく負けた気分になってしまうナナミ
何とか注意を自分に逸らせないものかとセクシーポーズを続けていると……ナナミの肌着に細かな亀裂が幾重にも発生し始め――――遂にはババッと消し飛んだ
どうやらナナミの方もダメージは衣装完全破壊にまで達していたようで、油断していたナナミはモロに裸を公開してしまった……
「えっ?……あれっ?」
「おおっ」
この美味しい展開を見逃す筈も無く、新は直ぐに視線をレベッカからナナミへと移した
ナナミは一瞬、何が起きたのか理解出来ずそのまま静止していたが……数秒後に自分の現状を理解し、露(あらわ)になった胸を手で隠す
「あちゃ～っ……。み、見た?」
「あぁ、バッチリと。綺麗な形だったぜ」

「いや～……褒めてくれるのは嬉しいけど……。さすがに裸は恥ずかしいから、あんまり見ないで欲しいかな……」
「だが、断る！こんな美味しい場面を見ないのは寧ろ男として失礼だ。良い女の裸はいつまでも見ておきたい」
「わ～ん！ベッキ～！私もピンチになっちゃったよ～！」
レベッカから注意を逸らせたのは良かったが、今度は自分に注目されてしまうと言う結果になってしまった
ジックリ観賞に浸っていると……何処からか風を切る様な音と、何かが落ちてくる様な不気味な音が聞こえてくる
新はその方角に視線を移すと――――トゲ付きの巨大な鉄球が視界に飛び込んできた
「うおおっ!?」
咄嗟に横っ飛びで回避する新
元いた場所に巨大な鉄球がズシンとめり込む
突然の奇襲にいきり立つ新は犯人を探すべく周囲を見渡す
すると……1人の美少女が颯爽と参上し、ビシッと指を突きつけてきた
「これ以上のエッチな行為はダメなのですっ！」

巨大な鉄球と言う危ない武器を使ってきたのは、瞳に☆マークが入っているパスティヤージュの英雄王――――アデライド・グランマニエだった

アデルはレベッカとナナミにバスタオルを渡して再び新と向き合う

「異世界の戦士さん、英雄王としてこれ以上の狼藉を見過ごす訳にはいかないのです！次の試合、この私がお相手するのです！」

『で、出たーーーーーッ！パスティヤージュ最強の英雄王アデライド・グランマニエが名乗りを上げてきたーーーーーッ！』

「うむ、そろそろ拙者達もご相伴させてもらうでござる」

「ダルキアン、お主と共闘するのは久々じゃな。ワシもアラタの実力に疼きが止められん！」

アデルの他、ビスコッティからはブリオッシュ・ダルキアン、ガレットからはレオ閣下が参戦の意を表してフィールドに現れる

『これはトンでもない事になりました！ビスコッティ、ガレット、パスティヤージュ最強の3人が勢揃い！ガレット獅子団の猛将ゴドウィン将軍も真っ青にならざるを得ない猛者達の連合！異世界の戦士アラタはこの後、歩いて帰れるのでしょうか!?』

「は？そこまで言う!?」

仰天する新を差し置いて、レオ閣下は愛用の武器でありガレットに伝わる宝剣――――

――魔戦斧（ませんぶ）グランヴェールを豪快に振り回す
ダルキアンは大太刀を背中の鞘から引き抜き、アデルは右手に銃、左手には先程の鉄球を変化させた片手剣を携（たずさ）える
３人の立ち振舞いに新も唾を飲み込んだ……
「アラタよ、覚悟は出来ておるか？ワシら３人と同時に戦えるなど滅多に無いぞ」
「いざ、尋常に勝負でござる」
「正義の鉄槌、受けてもらうのですっ♪」
にこやかに言うが気迫は歴戦の戦士以上だった……
新は〝時間を掛けたらこっちが不利になる〟と察したのか、最初からフルパワーを出す事に
「……あんたらがトンでもなく強いってのは直ぐに分かった。だから……最初から全力でやらせてもらうぜ。あんたら相手で全力じゃなかったら、逆に失礼だからな！
『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』――――『女王（クイーン）』ッ！」
新は駒を最強の『女王（クイーン）』に昇格させ、姿を変えていく
『騎士（ナイト）』形態の右腕、『戦車（ルーク）』形態の左腕、『僧侶（ビショップ）』形態のキャノンが両肩に出現
手と脚に刃と爪が生え揃い、背中のマントが４枚の翼へと変わった
変貌を遂げた新を見たレオ閣下、ダルキアン、アデルに緊張が走る……

「ほう……まだこんな力を秘めておったのか……。このワシに緊張を走らせるなど、大したものじゃ」
「この禍々しくも凄まじい気迫……一瞬の油断が敗北に繋がりそうでござるな」
「それでも英雄王として負けられないのですっ！」
ビスコッティ、ガレット、パスティヤージュ最強の３人がオーラを発したのを合図に
――――新は翼を広げて飛び出していった
一瞬で距離を詰め、至近距離からの砲撃を放つ
しかし、３人は間一髪の所で散らばって回避
そこで新は散弾式のフルバーストを放った
生物の如く縦横無尽に飛び交う魔力の帯をレオ閣下はグランヴェールで一閃
ダルキアンも大太刀に輝力を纏わせて切り払い、アデルは銃と片手剣を駆使して霧散させた
こちらの番だと言わんばかりに着地したレオ閣下はグランヴェールを地に叩き付け、紋章を描き出す
巨大な紋章が光り輝き、次第に火柱を発生させる……
「くらええっ！獅子王！炎陣！大・爆・破アアアアアッ！」
無数の火柱から火炎弾の雨が降り注ぎ、新ごとフィールドが火の海へと変わり果て―

――――最後に特大の爆発が巻き起こる
ダルキアンとアデルは何とか回避していたお陰で巻き添えにならなくて済んだものの、レオ閣下に物申した
「いきなり大技とは、全く容赦無しでござるな？」
「レオ閣下、危ないのです！私達まで巻き込まれたらどうするのです!?」
「ハッハッハッ、お主達なら心配無用だと思ったまでじゃ。それに……あのガキのオーラは危険極まりないものだったから、チマチマしていてはこっちがやられると思ったのじゃ」
レオ閣下が真剣な目付きで炎の海を眺めながら言う
新の実力を悟った上での大技使用にダルキアンとアデルも言い返せなかった
勝負はもう決まったかと思ったその矢先――――炎の海が一瞬で消し飛ぶ
そこには兜の一部が割れているものの、全身からオーラを揺らめかせる新の姿があった……
「ふぅ～……今のは流石に効いたぜ。トンでもねぇ威力だな」
「……ッ！ワシの最大技をまともにくらって立っているとは……ッ！なんて奴じゃ……ッ！」
「俺もそれなりの礼を尽くしてやる。しっかり受け止めてくれやッ！」

新は全身から莫大なオーラを放出させ、再び翼を広げて飛び出す
高密度のオーラを纏わせた両脚を突き出し、猛烈な回転を加えながら突き進む
ヘル・クラッシュに並ぶ必殺技――――バースト・エンド（きりもみ式）である
対するレオ閣下、ダルキアン、 アデル紋章砲の準備に取り掛かった
「獅子王烈火爆炎斬ッ！」
先にレオ閣下のグランヴェールから巨大な火の鳥が飛び出していき、ダルキアンの大太刀は凄まじいエネルギーを発しながら巨大な刀身と化す
「神狼滅牙――――封魔断滅ッ！」
エネルギーにより巨大な刀と化した大太刀が振り下ろされ、次はアデルの銃口にエネルギーが圧縮されていく
「本邦初公開なのです！グランマニエブラスターーーーーッ！」
銃から放たれたとは思えない程のエネルギーが放射され、一直線に突き進む
火の鳥、巨大なエネルギー刀、砲撃の3コンボがきりもみ回転しながら突っ込んでくる新に襲い掛かる
やがて3つの攻撃が同時にぶつかり――――激しい閃光がフィールド全域を照らした
予想を超えた衝撃に新は歯軋りをするが、ここまで来た以上負ける訳にはいかない

「オオオォォォォオオオ

新はすかさずその方角に視線を向ける
そして待ち望んでいた結果が視界に収まった
爆煙の中から現れたダルキアンは一糸纏わぬあられもない姿となっていた……
結っていた髪も解け、ボリュームのある豊満なおっぱい、程良く括(くび)れた腰付きにスラリとした美脚
まさに女神と思っても相違無い程美しく、僅かに頬を染めて身を捩(よじ)らせるその姿は艶(なまめ)かしさ満載だった
「う〜む……何とも言えぬ恥ずかしさでござる……」
「それはこの世界のシステムだから文句は言えないだろ?さてと、お次は――――」
次に煙の中から見えてきたのは尻餅をついた状態で咳き込む英雄王アデル
彼女もダルキアン同様、衣服を全て消し飛ばされた全裸の姿だった
ダルキアンに負けず劣らずのおっぱいと美麗なボディーラインを備えたアデルもまた綺麗の一言に尽きる
「あわわわわわ……っ!ダ、ダメなのですぅ〜っ!」
手で隠したおっぱいが寄せられた事で更にボリュームが増す
残るはただ1人……レオ閣下だけ
そのレオ閣下も煙の中から徐々に姿を現したが――――防具が壊れただけで、露出の

多い下着類は残されていた
期待外れの結果に新は肩を落とす
「ふぅっ、一応紋章術での防御を試みたが……それも容易く砕かれるとはのぅ。凄まじい力じゃ。ワシはまだまだ物足りなくて続行したい所じゃが、それではちとサービスが過ぎてしまうのじゃ。よって――――ワシも降参じゃ」
小さな白旗を揺らして降参を宣言したレオ閣下
ようやく全ての勝負が終わり、安心感から疲れがドッと出てくる
「それにしても……ジェノワーズ、垂れ耳（エクレ）、ユキカゼ、ナナミ、レベッカ、アデルにダルキアンと――――これだけの女を見事に剥くとは大したものじゃのぅ。お主とはまた戦いたいものじゃ。今度は一騎討ちでな」
「へぇ……っ。随分と好戦的なお姫様だこと。まあ、滅多に無い機会だもんな。今日は取り敢えず勘弁してくれよ？レオ閣下」
「うむ」
レオ閣下が手を差し伸べ、新はそれに応じて握手を交わす
良い感じで終わろうとしたその時――――
バババッ！
レオ閣下の下着がものの見事に消し飛び、遂にレオ閣下の裸もお披露目となった

シミ1つ無い雪の様な白い柔肌、揺れる豊満なおっぱい、肉付きが良さそうなお尻はまさに芸術品とも言える程だった
「おぉっ!?」
着衣感が無くなった事に気付いたレオ閣下は自分の現状に驚き、ダルキアンとアデルは苦笑する
新は握手に応じた為、至近距離でレオ閣下の裸を目撃出来た
「おやおやレオ姫、最後の最後に油断したようでござるな」
「早くタオルを持ってきてくださいなのですぅ〜!」
レオ閣下は突発的事態に握手したまま立ち尽くしていたが、ハッと我に返って握手している手を振り払い胸を隠す
「あっ、勿体ねぇ」
「……アラタ、ワシとて女じゃ。いつまでも裸を見られるのは良い気分ではないのじゃ……」
「そうか?俺としてはいつまでも見ていたいんだが」
「まったく……このスケベっ」
この時、恥ずかしがるレオ閣下の表情が可愛過ぎて全国民が萌えたらしい
斯くして新はフロニャルド陣との模擬戦を快勝で終わらせる事に成功、参加した女性

全員の裸も拝めて大満足だった

人間なれど悪魔の如し

「何処にいやがる！幽神ッ！隠れてないで姿を見せろオッ！」
電話で指定された体育館に到着するや否や、一誠は怒気を含めて叫んだ
電灯が1つも点いていない薄暗い体育館全体に一誠の怒声が木霊する
匙もアーシアの前に立って周囲を警戒しながら体育館内を見渡す
幽神兄弟が一向に姿を現さないまま、ただ時間だけが過ぎていく……
そんな時、再び一誠の携帯が音を鳴らす
憤(いきどお)りを隠さず画面を見てみると……一誠の怒りが更に込み上がる
「……んだよ……っ。何なんだよ、これ……っ！」
ワナワナと震える一誠
横から携帯の画面を見たアーシアと匙も言葉を失う
送られてきたのは――――血だらけの無惨な姿で横たわるリアス達だった……
幽神兄弟はそれぞれ倒した相手をスマホで撮影し、その写真を一誠の携帯に送ってきたのだ
あまりにも醜悪、悪趣味、ゲスな行(おこな)いに一誠はもはや我慢の限界――――いや、限界

どころの話じゃなかった……

怒りのまま自分の携帯を握り潰し、『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』を展開

「幽神イィィィィィィィィィィィッ！」

ドゴォォォォォォォォォンッ！

一誠は自らの足元に左拳打を叩き込んで巨大なクレーターを作り上げる

床の破片が散乱して宙を舞い、地に落ちた所で一誠が再び吼える

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！幽神イィィィッ！」

「……最初に見た時からヤバそうな雰囲気は分かってたけど、こいつら腐ってる……ッ！本当に人間なのかよ!?俺達よりもよっぽど悪魔じゃねぇか！いや――――悪魔でもエグい真似はしねぇぞ！」

匙も幽神兄弟の所業に堪忍袋の緒が切れて左手に神器（セイクリッド・ギア）――――『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』を出現させる

黒い炎を纏いし蛇が何重にも絡み付いた腕を突き出し、臨戦態勢に入った

一誠も禁手（バランス・ブレイカー）へのカウントを始め、オーラを高め続ける

カウントが終わろうとしたその刹那――――翡翠色の斬撃と赤銅色の波動が壁を大きく大破させて飛び込んできた

しかも、その矛先はアーシア

「――――ッ！アーシアッ！」
「アーシアさんっ！」
一誠と匙はアーシアを庇うように前へ飛び出し、籠手と黒炎で２つの攻撃を防ごうと試みる
だが……充分に力を乗せていない状態で攻撃を受けた為か、２人は斬撃と波動の直撃でそれぞれ腕に大きな裂傷を負ってしまった
宙を舞った後、背中から床に落ちた一誠と匙
傷口から血を滴(したた)らせながらもゆっくりと立ち上がる
「イッセーさん！匙さん！す、直ぐに治療を――――」
「アーシア、ダメだ。向こうは待つ気なんて無いみたいだ……！」
一誠の言葉通り、向こうは治療を行(おこな)っている最中でも攻撃を仕掛けてくるだろう
土煙の中から人徳を捨て去った狩人――――幽神兄弟が姿を現した
それぞれの脚甲と籠手が鈍く怪しい光を点滅させている……
彼らは既に禁(バランス・ブレイカー)手となっており、兜のマスクを解除して素顔の眼で睨んでいた
「幽、神イイイイ……ッ！」
「兵藤オ、何だその面(ツラ)は？卑怯だと言いたいのか？」
「お前、言ってたよな……！俺を――――俺達を〝クソ野郎〟だって……！俺から見れ

ば、てめえらの方が最低最悪のクソ野郎じゃねえかッ！俺に文句があるなら、直接俺に仕掛けてくれば良いだろうがッ！げふ……ッ！なんで……なんで周りを巻き添えにするんだよぉッ!?」

血を吐き、痛みが走る傷を押さえながら一誠は幽神兄弟に問う

だが……彼らにとってその問いは愚問中の愚問

正義が不適に笑いながら答えた

「兵藤、今のお前は燦々と輝き照らす太陽の下を歩いている様なものだ。人気を集めて正義漢(せいぎかん)気取り、日向の道を歩く奴はいずれ誰かに好かれる。だがな……どうせ俺達は日向の道を歩けず、影に隠れ住む事しか出来ない。そして太陽の光を浴びれない俺達は――――誰の眼にも留まる事無く、いずれ朽ち果てる。そんな俺達が正攻法を使った所で何の意味も無い……」

「だったら、ブッ潰してやるよ。太陽も……てめえらも全部なぁ！」

正義と悪堵はこの世の全てと決別する様な言葉を吐き捨ててから、顔をマスクで覆い隠す

ギラリと鋭い眼孔を光らせ、それぞれの相手(獲物)に向かって歩いていく

「俺は兵藤を殺る」

「じゃあ俺は生徒会のクソ野郎だ」

獲物を決めた狩人(幽神兄弟)がズカズカと歩み寄る
一方、一誠と匙は先程のダメージで上手く立ち回れずにいた
悪堵は匙の髪の毛を掴んで無理矢理引っ張り起こすと、右拳打を鳩尾に叩き込んだ
血と胃液を吐き出す匙の顔面を更に打ち抜き、壁際まで殴り飛ばす
匙は何とか意識を保ちながら悪堵の拳を躱(かわ)そうとした
回避出来た悪堵の右拳(一撃目)と左拳(二撃目)が壁を抉り、悪堵は瞬(またた)く間に距離を詰めてボディーブローを打ち込む
一方、正義は体育館の床の一部を足で削り取り――――そのまま蹴って一誠の顔面に命中させた
左の瞼(まぶた)を切られ、傷から垂れる血が目に入る
片目を塞がれた一誠に正義は嘲笑の意を込めた挑発をする
「どうした?·兵藤、さっさと来いよ。それともお寝んねするか?――――添付画像の奴らと同じ様になぁ」
正義の言葉に沸騰し続けていた一誠の怒りは遂に爆発し、全身から赤いオーラを放出させた
「てめえええええええええええええええええええええええッ!」
『Welsh(ウェルシュ) Dragon(ドラゴン) Balance(バランス) Breaker(ブレイカー)!!!!』

赤い閃光が一誠を包み込み、『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）』が具現される
ディオドラ・アスタロト戦以来の怒り心頭で禁手（バランス・ブレイク）化した一誠を見ても、正義は「クク……ッ」と嘲笑するだけだった
「来いよ、兵藤ォ。怒りのまま、憎しみのまま……俺達をブッ飛ばしてみろよ？」
「うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
怒りにまみれた一誠は背中の噴射口を噴かして正面から正義に突貫しようとする
だが、目に血が入っているせいで距離感が全く掴めず、上手く力を乗せられない
突き出されてきた拳を軽やかに避けた正義は足を引っ掛け、一誠を転ばせた
その際、何発もの蹴りを入れておくと言ったオマケ付きで……
無様だなと一瞥する正義に対し、一誠は立ち上がって再度魔力を噴かして拳を振るい続ける
『おい、相棒！熱くなり過ぎだ！攻撃が乱れている！奴はわざとお前を怒らせて攻撃の鋭さを鈍らせているんだ！いや、それだけじゃない……。何か得体の知れない気配まで奴の神器（セイクリッド・ギア）から滲み出ている！一旦距離を置いて――――』
「黙ってろドライグッ！」
『相棒っ!?』
「こいつだけは……こいつらだけは絶対に許せねぇんだよ！直接俺に何も言わないで周

りの人達を巻き込みやがったこいつらを……俺のダチや仲間を傷付けたこいつらを見て平静になれって言う方が無理だ！」

一誠はドライグの忠告を耳に入れず正義への攻撃を続けた

しかし、目に血が入ったせいで距離を掴めていない相手の攻撃など簡単に避けられる

正義は一誠の拳打を躱したついでに蹴りを入れ、更にサイドキックを叩き込んだ

一方、悪堵は匙の顔面を潰そうとパンチのラッシュを続けており、体育館の壁を次々と抉っていた

距離を取ろうとしても直ぐに追いつかれてしまい、ボディーに打撃を入れられる

このままでは不利だと考えた匙はまず悪堵の四方から黒炎を出して囲む

ヴリトラ系 神器（セイクリッド・ギア）の1つ――――『龍の牢獄（シャドウ・プリズン）』で動きを封じ、悪堵の頭上へ跳んで解呪の難しい炎――――『邪龍の黒炎（ブレイズ・ブラック・フレア）』を放つ

悪堵は二重の炎に包まれ、更に追い込みとばかりに『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』が絡み付いた

「はぁ……はぁ……これならどうだ！ヴリトラ系 神器（セイクリッド・ギア）の三重奏！これでお前の力を吸い尽くしてやる！」

「それがどうしたぁ……？」

ゴオオォォォォォォォォォォォォッ！

不気味な声音と共に囲っていた黒炎が描き消され、炎の中から褐色の鎧人（よろいびと）が飛び出し

てきた
更に悪堵は自身に絡み付いた『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』を思いっきり引っ張って匙を引き寄せる
放り出されるかの如く飛んできた匙に右拳打を叩き込み、壁に叩き付けた
匙の左腕から繋がっているラインを再度引っ張り、飛んできた匙をもう一度殴り飛ばす
「オラオラァッ！まるでチェーンデスマッチだぜぇッ！ハハハハハハハッ！」
引き寄せては殴り飛ばし、引き寄せては殴り飛ばすと言う鬼畜な攻撃を繰り返す悪堵
哄笑を上げながら匙を殴り続けていき、飛び散った血が悪堵の鎧や床、壁に赤い斑点を描く
「が……っ、かは……っ」
「おいおい、どうしたぁ？もうグロッキーかよ。だらしねぇぞぉ!?」
悪堵はラインを利用して背後から匙の首を締め上げる
そのまま匙の脇腹――――急所である肝臓にアッパーを打ち込んで内臓を痛めつけ、肋骨も破壊していった……
正義も負けておらず、猛然と繰り出される一誠の打撃を全て足技で弾き返し、脛や膝に蹴りを入れていく
一誠が地を踏み出した瞬間、その足を踏み台にした飛び膝蹴りを顔面に叩き込んだ

顔を押さえて苦悶する一誠の背後に回り込み、膝裏を蹴って体勢を崩す
直後に一誠の後頭部を掴んで延髄に飛び膝蹴りをくらわせ、そのまま顔面を地面に叩き付けた
その衝撃で一誠の鼻は折れ、先程切られた瞼(まぶた)の傷が更に広がって血が流れ落ちる
息つく暇も無く正義は一誠のアゴを蹴り上げて無理矢理立たせ、オーラを滾(たぎ)らせた左足でのダッシュキックを打ち込もうとした
「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
『Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)Ｂｏｏｓｔ(ブースト)!!!!!!』
籠手から何度も音声が鳴り響き、力を倍増させた拳打で対抗する一誠
背中の噴射口から魔力を噴かせて飛び出し、正義の蹴りと一誠の拳打が真正面から激突する
しかし、正義は空いた右足で一誠のパンチを斜め下から蹴って弾き、その勢いで左後ろ回し蹴りを鳩尾にくらわせた
強烈な痛みと圧迫感に一誠は前のめりに崩れそうになるが、正義がアゴを蹴り上げ――
――そのまま一誠を踏み潰す様にストンプを決める
更に両足で一誠の顔面を踏みつけ、自らを独楽(こま)の如く回転させる
某虎マスクが編み出した残虐技の応用により、血飛沫(ちしぶき)が飛んで床を赤く汚す……

一頻(ひとしき)り回転を終えた正義は飛び退き、一誠は顔を両手で押さえながら悶え苦しむ
「あああが……ッ！め、目が……目が見えねえぇ……ッ！」
「気分はどうだ、兵藤。痛いか？苦しいか？最悪か？ポカポカ暖かい日向の道を歩いてきたお前らからすればそうだろうが……俺達が味わってきた地獄はこんなもんじゃないんだよ。どれだけ泣こうが喚(わめ)こうが、血反吐(ちへど)を吐こうが誰も手を差し伸べてくれない――――そんな世界だった。路傍の石ころと同じ様に蹴飛ばされ、踏みつけられ、誰からも見捨てられる……。分かるかぁ？そんな地獄に落とされた俺達の屈辱が……俺達の惨めさがぁ……！」
正義の憤(いきどお)りに呼応するかの如く左足の脚甲が強く発光し、悪堵の右籠手からも同じ光が放たれる
その光が正義の両肩と悪堵の左腕にも転移して変化を及ぼす
グキグキと気味悪い音を鳴らした直後――――正義の両肩から鉤状の触手が生えて一誠の両腕を刺し貫き、悪堵の左腕からは鋭い針が連続で射出されて匙の全身に突き刺さった
幽神兄弟は自分達が所持する神器(セイクリッド・ギア)の新たな変化に狂喜の笑い声を上げる
「ハハハハハハハッ！兄貴ィ！見てみろよ！俺達の神器(セイクリッド・ギア)がチューンアップしちまったぜ！」

「そうだ、俺達の怒りと憎しみだけじゃない……！お前ら全員の怒りと憎しみも相まって進化スピードが飛躍的に上がり、新しい能力を得た……！お前らの仲間を1人1人潰してきたのはこれを待っていたからなんだよ！フハハハハハハッ！皮肉だな、兵藤ォ！俺達を憎んだ結果――――俺達の神（セイクリッド・ギア）器が進化したんだよぉッ！」

正義は左右の蹴りから弧月状の斬撃を飛ばして一誠の全身を切り裂き、悪堵は左腕から生えた一際太い針で匙の両大腿部を刺し貫いた

一誠と匙はもはやボロボロ、まともに戦える状態ではなかった……

それでも幽神兄弟は攻撃を止めない

アーシアはあまりの凄惨さに嗚咽を漏らしながらくず折れ、「お願いです……もうやめてください……っ」と、か細い命乞いをするしか無かった……

正義は鉤状の触手を抜いて一誠を転がし、悪堵は匙の胸ぐらを掴む

「兄貴、そろそろトドメを刺してやろうぜ」

「ああ。まずはそいつからだ」

死刑宣告のごときやり取りを聞いてしまった一誠は何とか体を起こそうとするものの、散々やられてきたダメージと傷のせいで動く事すら出来ない

幽神兄弟の神（セイクリッド・ギア）器に危険な密度のオーラが集束されていき――――

「エクスプロード・フィストォッ！」

オーラの滾った右アッパーが匙の腹に深々と食い込み、匙は大量の血を吐き出しながら空中に飛ばされる

正義は車輪の様に前方へ回転したまま飛び出し、回転により威力を上乗せした左足でのカカト落としを繰り出した

「や……やめろぉ……！やめろぉぉぉおおおおおおお……ッ！」

「エクスプロード・スマッシュッ！」

グシャアッ！

オーラを滾らせた左足が匙を踏み抜き、彼の骨を粉々に粉砕した……

匙の体は極端なくの字に折れ曲がり、床に半分ほど埋められた形へと成り果てた

その惨状を見た一誠は腹の中を尖った物で掻き回される様な耐え難い怒りに陥り、血を噴き出す足に鞭を打って立ち上がり――――怒号を吐いた

「うあああぁぁぁ

「エクスプロード・スティングッ！」
ズブシャアァッ！
危険なオーラを纏った針が一誠の鎧をいとも容易（たやす）く貫通し、針の先端が飛び出す……
腹に風穴を開けられた一誠は再度口から血を吐き出した
悪堵の鎧にビチャビチャと掛かるが、当人はそんな事を気にせず針を引き抜く
次に正義がいつの間にか爪のごとき刃物を生やした左足にオーラを集め、一誠に飛び掛かっていった
凶悪な形へと変化し、頭上にまで掲げた左足を振り下ろした
「エクスプロード・ファングッ！」
ザシュウウッ！
左足から生えた凶悪な爪が一誠の前面を切り裂き、刻み込まれた裂傷から血が噴き出す
徹頭徹尾ボロボロにされた一誠の禁（バランス・ブレイカー）手が強制的に解除され、一誠は背中から倒れていった……
「イッセー、さん……っ？イッセーさん……！イッセーさんッ！」
アーシアは転びながらも一誠のもとへ駆け出すが、悪堵に捕まってしまう
「……アー、シア……っ。てめぇら……アーシアにっ、手を出すんじゃ……ねぇ……ッ

！」
「ほう、まだそんな減らず口を叩けるのか？大した奴だな。並大抵の奴ならここで泣いてみっともなく命乞いをするものだが……バカにはそんな選択肢は無いか。まあ良い、まだお前の大事な物を全て壊した訳じゃないからな」
正義は意味深な言葉を聞かせてアーシアに歩み寄る
悪堵に両手を掴まれているアーシアのアゴをくいっと上げて睨み付け、一誠を見下ろしながら言う
「兵藤、お前の目の前でこの女を弄んだら……もっと惨めになるだろうなぁ」
「――――ッ！……やめろ、やめろ幽神ィッ！ゴポ……ッ！ぶはぁっ！アーシアは……アーシアは……ッ！」
「ハハハッ！兄貴、兵藤を見てみろよ！何だ、あの焦り様は！そんなにこの女が大事かぁ？それを聞いたらますます壊したくなってきたぜ」
「相棒、簡単に壊したら面白くない。この女をゆっくりジックリと嬲って、嬲り続けて兵藤にこれ以上無い屈辱と敗北感を与えてやるんだ。兵藤、何も出来ず動けないまま、この女がお前の大好きな猥褻行為で汚されるのを目に焼き付けておけ。お前も俺達と同じ様に――――地獄へ落ちろ」
そう言った後、正義はアーシアの制服を胸元から引き千切る

アーシアの雪の如く白い柔肌(やわはだ)が露(あらわ)となり、一誠は正義が何をしようとしているのか感付いてしまった

〝アーシアを犯す気だ〟と……

ふざけるなとばかりに歯を食い縛り、芋虫の様に這いずってでも止めようとするものの、今までの傷とダメージでまともに動ける筈も無く……途中で止まってしまう

幽神兄弟はそんな一誠を嘲笑い、アーシアへの辱しめを続行する

スカートも破り捨て、アーシアはあっという間に下着姿へと変わり果てた

「……っ」

「……」

何故か流れる無言の静寂

アーシアは一瞬悲鳴を上げそうになるが、動きの止まった正義を見て疑問符を浮かべる

「……？」

「あ、兄貴。次どうすんだよ？」

「今考えてる、ちょっと待ってろ」

正義はジッとアーシアを見つめ、その場で暫く静止する

そしてようやく動いたかと思えば……アーシアの胸を指でチョンチョンと突っつく

だけだった

くすぐったい感覚にアーシアは「ひゃん……んん……っ」と艶かしい声を上げ、幽神兄弟はその声にビクッと過剰な反応をしてしまう

そんな幽神兄弟の様子を見た一誠は頭の中で1つの可能性を過らせた

〝もしかして、女の子に不慣れなんじゃないか……？〟

そこで一誠は一か八かの賭けに出るべく、痛む体で地を這っていく

ゆっくりゆっくりとアーシアの足元まで近付き、ソッと足に触れて――――アレを発動させた

「洋服……崩壊……ッ」

指を鳴らした瞬間、可愛らしい下着がものの見事に消し飛んでアーシアは全裸になった

小振りながらも成長途中のおっぱいが『洋服崩壊』の衝撃でぷるぷると揺れる

「「……ッ！……ッ！」」

突然の全裸現象に幽神兄弟は絶句した挙げ句――――ブシャアアッと兜の隙間と言う隙間から血を噴き出した

恐らく鼻血だろう……

幽神兄弟は鼻と目を押さえながら後退りしていった

「あ、兄貴……ッ！何か見ちまった……ッ！小さい山みてぇなのが２つとプックリしたピンク色がぁ！」
「ぐぅ……ッ！俺もだ……！まさか、今のが本物の……おっぱいってヤツなのか……!?ヤ、ヤバい……！目に焼き付いて離れん！」
幽神兄弟が苦しんでいる（？）間にアーシアは直ぐに一誠の所へ駆け寄り、回復の光を当てる
次第に腹や肩の傷が塞がり、出血も治まっていく
そうはさせないと向き直す幽神兄弟だったが……アーシアの小振りなおっぱいを見て再び血が噴出
何度も首を横に振って意識を集中させようとするが、どうしてもアーシアのおっぱいに視線が移ってしまう……
「ダメだ兄貴！どうしたってあの女の方に目が行っちまう！」
「チクショウ……ッ！相棒、一旦出直すぞ！このままじゃ俺達の方が不利になる！兵藤！この屈辱は必ず返すからな……！覚えてろ……ッ！」
幽神兄弟は捨て台詞を残し、壁を破壊してその場から逃げていった
何とか窮地を脱した一誠は安堵の溜め息を吐く
「はぁ……上手くいって良かったぁ……。大丈夫か、アーシア？」

「は、はい。私は大丈夫です。イッセーさん、そんな体で動いちゃダメですよ……」
「へへ……アーシアや皆を守る為なら、こんな傷どうって事無いさ。それよりゴメンな？いきなり裸にしちまって……」
先程の『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』について謝罪する一誠をアーシアは優しく抱き締める
「良いんです……。イッセーさんが無事なら」
「あぁ……本当良い娘（こ）だよ、アーシア……。おっぱいも気持ち良い……っ」
アーシアの優しい言葉とおっぱいに感涙を流す一誠
その後、回復した一誠はアーシアと共に校舎内を歩き回り、負傷したリアス達にも回復治療を施した
勝負は殆ど敗北を喫した様なものの、一誠は打倒幽神兄弟への秘策を立てる事にした

蒼き翼と焔の闇人

「ふぅ～っ、なかなか良い湯だな」
「やっぱり運動して疲れた後の温泉は最高ですよね」
模擬戦が終わって時刻はすっかり夕暮れに近付いてきた頃、新達は疲れを癒す為に結晶鉱山と呼ばれる場所の秘湯に浸かっていた
因みに少し離れた位置の温泉には女性陣が入っており、ヴァレリーはエッシェンバッハ城へ強制送還されたとのこと……
「なあ、シンク、ガウル。ちょっと聞きたい事があるんだが」
「はい？」
「何だよ？」
「お前ら――――あの中の誰かとセッ○スしたか？」
「「ブッ!?」」
突然の猥談を振られ、シンクとガウルは盛大に口から何かを吹き出して噎せた
そんな２人に追い討ちを掛ける様に新が訊く
「最近の中学生はマセてんのが多いし、この世界でも色恋沙汰はあるのかと思ってな。

んで、実際の所どうなんだ？」
「ちょっ、ゲホゲホ！新さん!?そんなハッキリと言わないでくださいよ！ビックリするじゃないですか！」
「だいたいそんな事したら殺されちまうよ！」
「えー、マジかよー」
「じゃ、じゃあアラタさんはどうなんですか!?」
　ここでお返しとばかりにシンクが問いただし、ガウルも便乗する
「そうだ！おめぇはそのセッ○スってやつをした事があんのか！」
「あぁ、あるぜ」
　即答に仰天するシンクとガウルに構う事無く、新は話を続けた
「童貞なんざ１２歳の時に喪失したぜ。まあ、良い思い出があるとは言えねぇけどさ……。最初こそ勝手は分からなかったが、経験を重ねていけば自然に上達していく。今までシテきた女の数はザッと１００人以上だな」
「ひゃ、１００人!?」
「アラタさん、それってただの浮気じゃないですか！良いんですか、そんな事して!?犯罪ですよ!?」
「……フッ、ガキのお前らにはまだ分からねぇか。女が寂しがっている時、涙を流してい

る時、その寂しさと涙を拭うのが男の役目なんだよ。泣いてる女を放っておくなんて野郎はクズだ。ダメ男と言われようが最低と貶されようが、俺はそんなクズになりたくねぇし――――泣いてる女を放っておけない性格ってだけさ」

新の熱意ある持論にシンクとガウルは反論の材料を見つけられなかった……

〝泣いてる女を見過ごせない〟と言う気持ちは自分達にもある

自分達とは違う大人（？）の考えに感慨深い何かを受けたのだった

「凄いですね……僕らとは全然違うと言うか、大人ですね」

「あぁ、ただのスケベ野郎じゃなかったんだな」

「うるせぇっ。……それはさておき、お前らはどうだ？セッ○スした事が無いのは置いといてやる。好みの女とかはいねぇのか？教えろよ」

「い、いねぇよ！いたって教えねぇし！」

「アラタさん、あんまり根掘り葉掘り訊くと嫌われますよ？」

「お前らそれでも男か！くそったれ、こうなりゃ白状するまで津波の刑にしてやるッ！」

「「ぶわっぷ！子供かよ!?」」

新は2人の煮え切らない態度に業を煮やしてお湯を掛けまくった……

一方こちらは女湯、模擬戦不参加組と参加組全員が温泉の気持ち良さにホンワカ気分となっていた
「気持ち良いですね～♪」
「皆さんとこうしてお風呂に入るのってなかなか無いんじゃないですか？」
「そう言えばそうだね～」
「うむ、やはり戦いの後の風呂は格別じゃな」
「しぁわせ～でありますぅ～♪」
のほほんと団欒に浸っていると、クーベルがバチャバチャとレオ閣下に近付いていく
「レオ姉っ、アラタはどうじゃった？強かったんか？」
「なかなか楽しませてくれる男だったぞ。強さも勇者として申し分無い程じゃ」
「くぅ～っ！もし勇者として召喚されていたら絶対ウチのもんにしとったのにぃ～！」
「ハハハッ、そうじゃのう。だがアラタはかなりの曲者じゃからな。お主の手に負えるか？」
「うむ、アラタ殿は滅法強い上に貪欲そうでござったな」
そんなガールズトークで和気藹々（わきあいあい）と盛り上がりを見せる中、エクレはキョロキョロと何やら警戒しているようだった

「エクレール、どうかしましたか？」とミルヒが尋ねてみる
「すっとこ勇者はともかく、あのエロバカ者が覗きに来ないとも限りません。警戒は怠らないように」
「なのですっ。彼はヴァレリーと同じくらいエッチなのです。覗きに来ようものなら――――正義のお仕置きなのですっ」
エクレは新に対して警戒心を最大限に働かせており、アデルも銃を持って臨戦態勢に入っていた――――その時、木々の奥からガサガサと言う音が聞こえてくる
エクレとアデルはそれぞれの武器を持ち、剣先と銃口を音の方角へ向けた
ナナミもタオルを体に巻いて宝剣エクスマキナをブーメランに変化させる
誰もが新が覗きに来たのだと思っていたが、全く違った事態を目の当たりにする……
暫く音のした方角を見ていると――――草や花、木がどんどん枯れていく光景が見えた……
枯れる速度が早まる毎に音も近付いてくる
レオ閣下、ダルキアン、ユッキーも厳戒態勢に入った
「……ダルキアン、どうやらアラタではなかったようじゃが……」
「で、ござるな……。この気配、今まで討ってきた魔物とはまた異質でござる……」
「お館様、だんだんこちらに近付いてきてます……」

警戒が強まっていき、遂に草や花を枯らす〝音〟の正体が姿を現す……
髪をオールバックに逆立て、黒のスーツにロングコートを羽織り、上下を黒一色で占めてサングラスを掛けた厳(いか)つい風体の男
まるで何処かのエージェントの様に只ならぬ気迫を発しながら、枯れた花を摘まみ取った
「花とは無意味な生命(いのち)だ。咲き誇るまで時と惰眠を貪(むさぼ)り、咲けば後は枯れ逝くのみ……。そんな儚き生命(いのち)を愛(め)でても虚しいだけ。形ある物はいつか壊れる……」
男は摘み取った花を手から発する炎で炭へと変えた
蒼く燃え盛る炎は花を一瞬で喰らい、主の手に還る
「貴様、何者じゃ？フロニャルド人でない事は分かるが」
レオ閣下がドスを利かせた声音で尋ねると、男は「これは失礼」と前置きをしてから名を語った
「私の名は伊坂威月(いさかいづき)。ただのしがない放浪者……と言った所で信じてはもらえないだろう？」
「うむ、貴様からは禍々(まがまが)しき気配が感じられる。ここまで露骨に嫌な気配を目にしたのは初めてじゃ」
「君は人を見る目がある、それは実に良き事だ。では率直に言おう。……私も君達が呼

んだ勇者やここに迷い込んだ男と同じ――――この世界に流れ着いてしまった者だよ」
「迷っておるなら早々と貴様のいた世界に戻れば良かろう？」
「それが出来れば苦労はしない。何せ私がここに流れ着いたのは偶発的な事象が重なってしまった結果なんでね。勿論、自分でも帰る方法を模索してみたが……生憎向こうにいる同胞をこちらに転送するぐらいしか出来ないのだよ」
「向こうにいる同胞……？」
今まで疑問しか残らなかった伊坂の言葉だったが、次の奴の言葉を聞いた途端――――確信と怒りを覚える事に……
「君達も何度が対峙し、苦戦した覚えがあると思うのだが？」
「……っ。あの突然出てきた魔物か……！」
「その通り。正しくは闇人だがね。私もその類だ」
皮肉めいた口調で自ら闇人である事を明かした伊坂に、エクレ（タオル着用済）が双剣の切っ先を向ける
「ここ最近出没しているあの妙な魔物の群れは……貴様の差し金だったのか！」
「否定するつもりは無い。事実なのだから」
「よくもいけしゃあしゃあと！」
激怒したエクレが温泉から飛び出して双剣を振り下ろした

伊坂は瞬時に自分の手元に長剣を出現させ、エクレの剣戟を防ぐ
そこから幾重もの剣戟を見舞うエクレだが、伊坂はその場に静止したままエクレの太刀筋を全て防いでいく
「くっ……！この……！」
「なかなかの太刀筋だが、迫力に欠ける。この程度の技量ならば向こうの世界には掃いて捨てる程いる」
「ならば……この一撃はどうじゃ！」
全身からオーラを発するレオ閣下は魔戦斧（ませんぶ）グランヴェールを横薙ぎに払ってエネルギーの刃を飛ばす
大気を切りながら猛進してくる刃を見た伊坂は左手を向けて先程見せた蒼い焔（ほむら）を放った
蒼い焔は飲み込む様に飛んできた刃と衝突し、互いに霧散
エクレの双剣を捌きながらの動作にレオ閣下は舌打ちをした
「なめてくれるな……！」
「世を知らない子供に世を教えてやるのが大人の務めだ。気に障ったかね？」
エクレを弾き飛ばした伊坂は背中から青い翼を広げ、そこから何枚もの羽を頭上に射出する

浮かび上がった羽が全てレオ閣下やエクレ達の方を向き、ミサイルの如く襲い掛かっていく
皆がそれぞれの武器で羽を切り払ったり撃ち落とす中、ダルキアンとユッキーが挟撃を開始
素早い動きで距離を詰め、大太刀と忍者刀で仕留めようとするが――――それも難無く防がれてしまう
「1つ聞かせてもらいたい。お主の目的は何でござるか？」
「目的か……。強いて言うなれば――――この世界の崩壊、かな？」
「フロニャルドの……崩壊？」
「そう、流れ着いてから見てきたが……この世界には価値無き物が多過ぎる。興業、交流、平穏、その全てが不愉快に映ったのでね……壊させてもらおうと思ったのだよ」
「たったそれだけの理由で……っ」
「子供は無邪気に蟻を踏み潰したりするだろう？それと全く同じ事だ」
伊坂のあまりにも幼稚で身勝手な言い草にレオ閣下を始めとするフロニャルドの騎士達は憤(いきどお)りを見せた
それはナナミとレベッカも同じ
「そんな事を聞かされちゃ、勇者として黙って見てられないよね！」

「行きますよ、ナナミさん！」
ナナミとレベッカも参戦し、レベッカは得意技〝バレットカード〟を発動させた
レーザーが軌道を描きながら伊坂を攻め、ナナミも紋章術を発動させる
「海王熱湯水陣掌ーーーーッ！」
温泉の湯が水流となって伊坂を飲み込み、バレットカードの雨が次々と被弾する
しかし一閃の後、水流共々レーザーが切り払われ……伊坂は余裕と言った表情を見せつけていた
「全然効いてない……っ」
「では、次はこちらの番と行こうか」
伊坂は長剣を自分の前で横向きに掲げ、刀身に蒼い焔を纏わせる
不気味に揺らめく焔が宿った長剣をXの軌道を描く様に振るった
長剣から放たれた蒼い焔の斬撃は回転しながら突き進み――――そこにいた全員を巻き込む規模の大爆発を起こした……
その衝撃で木々や草花は塵と化し、温泉は1滴残らず蒸発
晴れた爆煙の中から現れた女性陣全員は傷だらけで地に倒れ伏せていた……
それを見た伊坂は刀身を撫でながら言う
「如何かな、我が魔剣技――――クロスフレイムの威力は？」

「……がは……っ」

「おやおや、この程度で弱りきるとは興醒めだな」

伊坂は倒れているレオ閣下を踏みつけた

「知っているかね？この世の中、2つの人種が存在する。1つは奪う強き者、もう1つは奪われる弱き者だ。自然界に於ける弱肉強食と同じ、弱き輩は強き者の為に朽ちて養分となるしかない。その理は決して覆らず――――変えてはならない法律。君達はその法律違反の模範とも言うべき愚者の集まりだ。強さを誇らしく提示出来る戦を興業、交流などと称して汚している。戦争の本懐は奪い尽くして生きるか、奪われて途絶えるか……その二者択一の分かれ道なのだよ」

「それは……貴様のみが納得する持論だろう……っ！このフロニャルドに……その様な考えは必要無い……ッ！」

「ならば消えたまえ。今まで我慢して見てきたが……やはりこの世界は平和に毒され過ぎている。これからの時代に――――万年平和ボケの世界などいらない」

冷淡な声音を吐いた伊坂は長剣に蒼い焔を纏わせ、踏みつけているレオ閣下を刺し貫こうと構えた

その時、伊坂は背後からやって来る気配を察知して焔を纏った長剣で斬りつける

斬られた波動は霧散されたものの、伊坂の注意をレオ閣下から逸らす事が出来た

波動を放ったのは――――この騒動を聞き付けた新、シンク、ガウルの3人だった
新は既に闇皇状態、シンクとガウルも輝力を滾らせていた
「姫様！皆！」
「てんめぇ……よくもやってくれやがったな！」
「随分と失礼な挨拶だな。大人に対する礼儀を知らないとは」
「お前みたいな奴にはそれで充分だ。それより……てめぇか？ここに闇人を呼び寄せてる黒幕は」
新の問いに伊坂は「そうだが」と全く躊躇う事無く肯定する
見慣れない魔方陣による闇人の転送及び襲撃の黒幕をようやく突き止め、新は早速剣の切っ先を向けた
「まずはぶちのめさせてもらうぜ。俺がここに来ちまった原因はてめぇにあるからな」
「姫様達を傷付けた事、勇者としても……男としても許さない！」
「ボコボコにしてやっから覚悟しとけよ！」
「私の破壊を好むか。いや感心感心……それでこそ戦の真髄だ」
青い翼を広げた伊坂は超スピードで3人に詰め寄り、長剣を振るう
新はその剣戟を得物で防ぎ、何度も斬りつけようとした
伊坂はそれを難無く捌き、シンクとガウルの同時攻撃もいなす

シンクは神剣パラディオンを2本の短槍に変えて追撃、ガウルも輝力武装(きりょくぶそう)の爪で殴打を繰り返した
しかし、3人の相乗攻撃をいとも簡単にいなしていく伊坂
その異常な強さに焦りの色が濃くなる……
「こいつ……今までの闇人(やみびと)とは違う!強いのは強いが……何だ、この粘りつく様な感覚は……!?」
「君もそこの猫姫と同じ様に人を見る目がある。若いのに大した物だ」
鍔迫り合いに持ち込んだ所で伊坂が左拳を新の腹に打ち込み、一瞬怯んだ隙を突いて焔を噴かせる
焼かれた新は後方へ飛ばされ、伊坂は魔剣技クロスフレイムの構えを取る
蒼く燃え滾(たぎ)る焔(ほむら)の剣を2度振るい、灼熱の斬撃を飛ばした
新は魔力を流した剣で迎撃を試みたが……凄まじい威力に押され、吹き飛ばされてしまう
伊坂は更にシンクとガウルにも魔剣技クロスフレイムを放ち、防御姿勢だった2人を下す
新は血を滴(したた)らせながらも立ち上がり、再度伊坂に斬りかかった
伊坂は素手で剣先を掴んで止めるが――――新は剣戟を囮にして、両拳に赤黒いオー

ラを滾(たぎ)らせる
「ヘル・クラッシュッ！」
鈍く重い打突音が鳴り、伊坂が地面を滑る様に吹き飛ぶ
数メートル後方で踏み留まった伊坂は腹を押さえ――――不敵な笑みを浮かべた
「先程の私と同じ手法を真似たか。君は戦いに精通している様だね。流石だよ。……その礼として私の本来の姿を見せてあげるとしよう」
そう言うと伊坂の体が蒼い焔に包まれ――――本来の姿を現した
黒と青を基調とした禍々しき体躯、両肩から雄々しく生えた羽、胸の中央で妖しく光る目玉
怪鳥の化身へと変貌した伊坂からは尋常ならざる重圧が放たれていた……
その威圧感に新は息を呑む
「今日はほんの挨拶なんでね。この一撃で締めにさせてもらおう」
伊坂は本日４度めとなる魔剣技クロスフレイムの構えを取る
今度は先程までと違って蒼い焔の量が多くなり、より危険性が増していく
新は『闇皇紋章(エンブレム)』を幾重にも展開し、更に『戦車(ルーク)』形態となって盾を構えた
完全防御体勢が整った直後、伊坂は魔剣技クロスフレイムを放つ
蒼く燃え滾(たぎ)る斬撃は紋章を軽々と突き破り、『戦車(ルーク)』形態の盾すらも砕いた……

斬撃をくらった新は血を吐き出し、元の姿に戻されてしまう

伊坂は長剣を体内に戻して怪鳥の姿から人間の姿に変わり、新を見据えながら言った

「君には不思議な魅力がある。私が最も嫌悪している正義感とやらを持っておきながら、その鎧の本質と波調が合っている。『初代キング』とは別の意味で欲深き心の持ち主だ」

「『初代キング』……っ。そこまで知ってるって……何者なんだよ、てめぇは……!?」

「正式に名乗っておこうか。私はかつて『初代キング』の右腕とまで謳われた魔剣将官――伊坂威月」

ここに来て伊坂の更なる正体が発覚し、思わず新は舌打ちをする

「つまり『初代キング』の側近ってヤツかよ……。トンでもねぇＶＩＰがこの世界に潜んでやがったな……」

「では、今日はこの辺で失礼するとしようか。明日の正午、君達が抱える三国に総攻撃を仕掛けさせてもらう。せめて残りの余生を悔いで占められないよう過ごしたまえ。私はね、物を壊す時は残骸すら残らぬよう灰にする性分なのだよ。それゆえ……私は焔を好む」

伊坂が指を鳴らすと蒼い炎が渦巻き、治まると同時に伊坂の姿が消えていた

フロニャルドに突如出現した闇人であり、『初代キング』の側近とまで言われた男――

――伊坂威月（いさかいづき）

底知れぬ恐ろしさと強さに新は歯を強く噛み締めた……

アーシア誘拐！

「ですから、部長！部長や朱乃さん、女の子皆がセクシーな衣装を着れば――――」
「ダメよ。あなただって集中出来なくなってしまうじゃない」
幽神兄弟との一戦後、オカルト研究部部室に戻った一誠はリアスに幽神対策のアイデアを掲示していた
その内容は〝リアス達がセクシーな格好をして戦う〟と言った下心満載のアイデアであっさり却下
無慈悲な断言に一誠は大いに泣き崩れた……
因みにアーシアは全員の傷を癒す為に『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』の過剰使用で疲弊しきってしまい、朱乃やロスヴァイセに介抱されている
「しっかし、見事にやられたもんだな。まんまと幽神兄弟の策に嵌められた挙げ句、全員フルボッコとは。イッセーの機転が無かったらマジで全滅してたぞ？」
アザゼルの指摘に一誠は勿論、リアス達も言葉を詰まらせる
「ったく、厄介な神器（セイクリッド・ギア）だぜ。自分や相手の怒りと憎しみを吸収して変化していくとはよ。今まで煽ってきたのは神器（セイクリッド・ギア）を成長させる為だったって事か」

「先生、何か良いアイデアは無いんスか?」
「そうだな。まあ、奴らの弱点が分かっただけでも儲けものだし、そこを突けば何とかなりそうなんだが……。問題はその弱点なんだよなぁ。……プッ、まさか女の裸を見ただけで撤退する程の童貞兄弟だったとはな!・1番手っ取り早いのはありったけ呼び集めた女をイッセーの『洋服崩壊(ドレス・ブレイク)』で裸にするって方法だな。そうすりゃ童貞兄弟は鼻血で行動不能になるだろう」
「やっぱそれしか無いですよね!?先生!」
「だが、それをやったらお前はそっちに目が行って集中出来なくなるわな。実現性が低過ぎる」
〝ガーン!〟と言う響きが似合いそうな顔でショックを受ける一誠
一誠が立てた幽神対策は僅か数分で全て白紙に戻された……
「まあ何にせよ、今日はもう奴らが来る事も無いと思うが……念のため警戒は怠らん様にしとけよ?特にイッセー、奴らの標的はあくまでもお前なんだからな」
「……はい」
そう、幽神兄弟はまだ一誠を狙っている
自分達の人生を狂わされ、地の底を徘徊させられた恨みはそんな簡単に消えたりするものではない……

全員が今後も幽神兄弟に対して最大限の注意を払う事になった

「アーシア、今日ぐらい悪魔稼業は休んでも良かったんだぞ？昨日今日と皆を回復させて疲れてんだから」
「すみません、イッセーさん。ご心配をお掛けして……」
数十分後、小さな街灯のみで照らされる夜道を自転車で走る一誠としがみつくアーシア
追い討ちを掛ける様に悪魔稼業の知らせ――――アーシアの指名が入ってきて、一誠は疲弊したアーシアの付き添いとして同伴していた
内容は単なるお悩み相談で、それを終えた一誠とアーシアは帰路の途中で公園に自転車を停める
一誠はベンチにアーシアを座らせ、暫しの休憩を取ろうとした
「少ししたら帰ろうな、アーシア」
「はい」
ゆったりと休憩する一誠とアーシア

良い雰囲気が築けそうな時、アーシアがある話を切り出す
「あの……イッセーさん」
「どした、アーシア?」
「イッセーさんは……あのご兄弟さんの事、どう思いますか?」
一誠は誰の話なのか即座に理解出来た
アーシアの言う〝ご兄弟さん〟とは恐らく幽神(ゆうがみ)兄弟だろう
一誠は敵意を表す苦々しい顔付きとなった
「……中学の頃は嫌な奴らだなぁってぐらいは思ってた。けど、今は許せねぇよ。俺達の事情に全く関係の無い松田と元浜を傷付けようが平然としやがって……。あれが〝人間〟のままでいられるのが不思議なくらいだ」
「イッセーさん……」
「心配すんなって!もし、あいつらが襲って来てもアーシアは絶対守ってやるよ!」
「いえ、それは嬉しいんですけど……どう言ったら良いのでしょうか。あの人達――――何だかとても悲しい目をしていたような気がするんです」
アーシアの意味深な言葉に一誠は間の抜けた表情となる
アーシアは何を思ってそんな事を言うのだろうか?
「確かにあの人達が今までしてきた事はいけない事ですし、怖い人達だって事も分かり

ます。ただ……」

「ただ？」

「以前の私と境遇が似ているんです。誰かの為に頑張ってきたのに認められなかったり……拒絶されたりと……経緯はまるで違うかもしれませんけど、何となく似ている――――そんな気がするんです。あの人達の目は……今まで見てきた中で1番悲しげな感じがしました……」

憂いの表情で言葉を紡ぐアーシア

以前の彼女も幼き頃に両親に捨てられ、孤独に生きてきた

神器（セイクリッド・ギア）が目覚めた途端、教会へ連れ出され……身勝手に聖女として担がれ、奇異の視線も浴びてきた

悪魔――――ディオドラを助けてしまった事で魔女と貶され、蔑まれ、追放された……

そんな状況に遭っても彼女は耐えてきたのに神は不在と知らされ、今までしてきた〝祈り〟は全て無駄だったと――――普通ならばこの時点で何もかも信じられなくなってしまう……

幽神兄弟も元を辿ればアーシアと殆ど同じ境遇なのかもしれない

アーシアはアーシアなりに幽神兄弟の心意を読み取ったのだろうか……

しかし、アーシアと幽神兄弟は境遇こそ似ているものの、決定的に違う所がある
アーシアは地獄の底の様な境遇に落とされても自分が信じてきた物への祈りを止めなかった
不在だと分かった今でも神への祈りを続けている
だが、幽神兄弟は逆に自分達以外の信じられる物を全て放棄
一誠どころかこの世の全てを憎み、自ら最底辺まで堕ちた……
アーシアは不遇に立ち向かったが、幽神兄弟はそこから目を背けた――――それがアーシアと幽神兄弟の〝決定的な違い〟だろう
「あの人達にもまだ信じられる何かがあったら……私みたいに救われたかもしれないんです……。救える筈だった人達を救えなかったのは、ちょっとツラいです……っ」
話を続けるアーシアの目に涙が浮かび、彼女はそれを指で拭う
「ごめんなさい、イッセーさん……。しんみりさせちゃいました……？」
「いや、アーシアのせいじゃねえよ。何かさ、そう言われると……あいつらもある意味では〝被害者〟だったのかなって……。俺達みたいに部長や仲間がいなかったから。1人でもあいつらの側に誰か居てくれたら――――あんな風に歪まなかったのかもな……」
〝あの時、自分が少しでも証言すれば良かったのかもしれない〟

今更ながら一誠は幽神兄弟に対して申し訳ない念を抱いてしまった

少しして一誠は何かを決意したかの様に勢い良く立ち上がる

「よし！こうなったらさっさと幽神を取っ捕まえて――――あの時なにも言ってやれなかった事を詫びる！それで向こうの気が晴れるとは思えないけど、俺がスッキリしねえからな」

「イッセーさん……ふふっ、イッセーさんらしいです」

「アーシアのお陰だよ。よっしゃ、心配の種が１つ消えたところで何か飲むか？ちょうどそこに自販機があるし」

「良いですか？なら、お茶をお願いします」

「オッケー。俺はコーラでも飲もうかなっと」

一誠は飲み物を買うべく近くの自販機まで走っていった

数メートル離れた先の自販機に辿り着くものの――――なんと全ての飲み物が売り切れていた……

一誠はキョロキョロと辺りを見渡し、少し離れた場所のコンビニを発見

「アーシア、ちょっとそこのコンビニで買ってくるから待っててくれー！」

一誠はアーシアに一声掛けてからコンビニを目指して走っていった

ベンチで座って待つアーシアに睡魔が訪れ、次第に瞼が少しずつ落ちていく

まだ疲労が抜けていなかったのだろう
そんな彼女の背後に赤と銀の眼孔が現れた……

「お待たせアーシア。お茶買ってきた――――って、アーシア?」
飲み物を買って戻ってきた一誠だが、ベンチにはアーシアの姿が無かった
一誠は直ぐに公園の周りを走ってアーシアを探すが見つからず、アーシアの携帯に電話を掛けてみる事に
コール音が１０回ほど鳴った後、ガチャリと電話に出た様な気配が一誠の耳に走る
「もしもし、アーシア?今何処にいるん――――」
『よぉ、さっきぶりだな。兵藤ォ』
ピクッと青筋が立ちそうな声音が耳に入り込んでくると同時に一誠は目を見開いた
一誠は思わず通話相手の名前を口ずさむ
「……ゆ、幽神……っ!なんでまたお前が……!?」
『獲物が安心しきっている時こそ絶好のチャンスであり、狩りの鉄則だ。俺達があっさり引き上げたと高を括って外に出た挙げ句、コンビニなんぞに行ったのが間違いだった

なぁ？』

「……っ!?まさか……今日来た依頼も、あの自販機も!?」

『あぁ、そうさ。あの後、直ぐには引き上げないでお前らの動きを監視してたんだよ。なかなか大変だったぜ？この女の契約相手を見つけるのは。何たって近くに公園と自販機、コンビニがある場所なんて一握りぐらいしか無いからな。お陰で財布も軽くなっちまった。まあ、その甲斐あってお前のストッパーを手に入れる事が出来たから良しとするか』

急に来た悪魔稼業の依頼も、自販機の全ジュース売り切れも、全ては幽神兄弟の仕業だった……

それもアーシアの身柄を確保する為の伏線……

絶句したまま立ち尽くす一誠に幽神正義（ゆうがみまさよし）は続ける

『兵藤、女を返して欲しかったら明日の午後４時――――町外れの教会跡に１人で来い。そこで今度こそケリをつける。良いか、１人で来いよ？誰か１人でもお前の仲間を連れてきたと分かったら、この女の命は無いと思え。それまでは丁重に扱っといてやる。じゃあな』

ガチャリと切れる電話

一誠はまたしても幽神兄弟に一杯食わされてしまい、歯痒さあまりに自分の携帯を地

面に叩き付けた
　街灯も消えかかった暗い夜に一誠の怒号が響き渡る……
「くっそォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ!」

　一方、こちらはアーシアを誘拐し終えた幽神兄弟
　一誠に指定した町外れの廃教会を一時的なアジト代わりに使用しており、アーシアの携帯を放り投げた所だった
　古びた椅子に腰掛ける幽神正義(ゆうがみまさよし)とシャドーボクシングを続ける幽神悪堵(ゆうがみあくど)
　アーシアは今、横長の椅子の上でスヤスヤと眠っていた
「ったく、呑気な女だぜ。拉致られたってのに気付かねぇで寝てやんの」
「まあ、こいつは典型的な回復役で体力は然程(さほど)無いからな。昨日今日と神器(セイクリッド・ギア)を使い続ければ、いつか倒れるのは分かっていた。しかし……まさかここまで鈍いのは予想外だ」
　あどけない寝顔で眠っているアーシアを見やる幽神兄弟
　意識の無い彼女は寝返りを打とうとした

しかし、寝かされている場所は幅が狭い横長の椅子だったので寝返りを打てば落ちるのは確実

体が反射的に動いてしまったのか、正義は椅子から転がり落ちるアーシアをキャッチした

フニュッ

その時、彼の手に柔らかな感触が広がる……

正義の手はしっかりとアーシアの可愛らしい胸を掴んでいた

「……っ！……っ!?」

手の感触を知った正義の血流が乱れ始め、同時にあの出来事までフラッシュバックさせてしまう

一誠の『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』によって全裸になったアーシアの姿が重なり、正義の血流が更に暴れる

ゆっくりアーシアを床に下ろし終えた直後、正義は火消し用のバケツに直行し――――ブシャアアアッと鼻血を噴出した

バケツは1分も経たない内に鼻血で溢れ、正義は血を流し過ぎたせいで倒れる

「あ、兄貴!?大丈夫か!?」

「か……っ、かは……っ。気を付けろっ、相棒……。油断したら死ぬぞ……」

「このクソ女、よくも兄貴を――――っ！」

悪堵が眠っているアーシアの胸ぐらを掴み、起こそうとした途端に固まる

それは制服がはだけ、彼女の胸元を包み込んでいる純白のブラジャーを直視してしまったからである

女の子に対しての免疫力が皆無な悪堵は当然――――

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアアッ！

ブシャアアアア……ッ！

まるで殴り飛ばされたかの如く宙を舞いながら鼻血を噴き出し、悪堵も床に倒れ伏した

何とか輸血を終えた正義が悪堵に輸血パックを手渡す

ここで幽神兄弟による鼻血劇場の音で目が覚めたのか、アーシアがゆっくりと起き上がって瞼(まぶた)を擦る

「うん……っ。あれ、私いつの間に寝ちゃってたんですか……？――――っ。あ、あなた達は……っ」
「目が覚めたようだな、生殺し女。お前のせいで相棒が失血死寸前だ」
「え？……きゃあっ！ど、どうしたんですか!?凄い血です！」
「自分の胸に（ブシャアァァァッ）――――自分の胸に聞いてみろ……っ。俺達が一般市民なら、あんたを殺人未遂で通報してるところだ」
〝自分の胸〟と言う単語にアーシアは自分の胸元を確認し、ようやく胸元がはだけていた事に気付く
恥じらって制服の胸元を直し、幽神兄弟もようやく落ち着きを取り戻した
因みに鼻血は火消し用のバケツ５個に溜められている……
「さて、やっと話が出来る状態になったな。率直に言う。お前には兵藤を独りで来させる為の人質になってもらう。余計な邪魔さえ入らなきゃ、あんたは無事に帰れるって寸法だ」
「……っ。どうして、どうしてそこまでイッセーさんを……」
「理由なんざ簡単、劣等生のくせに満足な人生を送ってるあのクソ野郎が気に入らないんだよ。奴の大事な物を全部ぶっ壊してやらないと気が済まないぐらいにな……。その１つでもあるお前を確保しておけば、兵藤の下手な小細工も封じる事が出来る」

「明日の午後４時、人質のてめぇの前で腐れ兵藤の公開処刑をしてやらぁ。特等席で楽しみにしてな」
明確な敵意を吐き出す正義と嘲笑う悪堵
すると、ここでシリアスな空気を壊す音が……
くきゅるるるぅ……っ
鳴ったのはアーシアのお腹だった……
恐らく『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』の過剰使用によるエネルギー不足の表れだろう
空腹の間近で聞かれたアーシアは顔を真っ赤にする
せっかくの空気を台無しにされた正義は呆れた表情で「腹減ってるのか?」と訊き、アーシアは無言で頷くしかなかった
「まあ良い、俺達も血が足りないから飯にしようと思ってたところだ。相棒、アレを持ってきてくれ」
「はいよ」
悪堵は隅に置かれていた段ボール箱を引き摺ってくる
中を開けてみると……大量のカップ麺が入っていた
悪堵は１つずつ取り出して床に置いていき、正義はガスコンロとヤカンを用意して火を点ける

「お前は何にする？初心者は定番の塩、醤油、味噌、豚骨辺りが無難だが」
「何だか凄い数ですけど……いつも食べてるんですか？」
「当たり前だろ。で、味はどうする？お前が決めないなら俺が決めるぞ」
「あの……私、こう言う食べ物は初めてでよく分からないんです」
「なにっ？カップ麺を食った事が無いのか？初めて聞いたぞ、そんな奴……。もう良い、お前は塩味な」
　正義は再び呆れた表情でカップ麺（塩味）にお湯を注ぎ、アーシアの前に置く
「兄貴、今日は何味にする？カレー、チャーシュー麺、麻婆豆腐（マーボーどうふ）味にゴーヤチャンプルー味、ピザ味、味噌煮込み味、チゲ鍋味、クリームシチュー味ってのもあるぜ」
「相棒、俺が買ってあったハヤシライス味と宇治金時味はどうした？」
「その2つなら昨日、兵藤を待ち伏せてた時に兄貴が食ったじゃねぇか」
「なら、サーロインステーキ味とポテトサラダ味は？」
「それは一昨日に食って無くなった」
「ぐ……っ！だったらお好み焼き味とハニートースト味は……！」
「3日前に食って無くなった」
　好物（美味しそうとは思えない味）のカップ麺が底を突いていた事に正義は歯軋りをする

すると、ここで悪堵が1つのカップ麺を取り出した
高級感溢れたゴールドカラーのカップ麺を掲げ、得意気に語り始める
「兄貴、そんなのはいつでも買える。コンビニやスーパー、専門店を数百件探し回って見つけてきた逸品がある。それがこの――――世界三大珍味カップ麺だ!」
「世界三大珍味カップ麺……!?聞いた事無いぞ、そんな味は!」
「へへへっ。こいつはあまりにもコストが高過ぎるから、発売後たった2日で製造中止になった幻のカップ麺だ。中には勿論――――世界三大珍味のフォアグラ、キャビア、トリュフが入っている。しかも!トリュフは黒と白の両方だ!」
「まさか……こいつを手に出来る日が来るとは……っ!相棒、やっぱりお前は最高の弟だ!」
「よせやい、兄貴。弟として当然の働きだ」
悪堵は世界三大珍味カップ麺の蓋を半分剥がしてお湯を注ぐ
自分もトムヤムクン味とイタリアンバジル味のカップ麺にお湯を注ぎ、3分間待つ
3分後、全てのカップ麺の蓋が開けられ――――容器から匂いを伴った湯気がフワリと漂う
特にトムヤムクン味とイタリアンバジル味は酸味と香草の香りが鼻腔(びこう)をくすぐる
正義はアーシアに割り箸を渡してから自分も割り箸を裂いて食べ始めた

世界三大珍味カップ麺を啜(すす)り、喉に通らせた直後に一言……
「美味いッ！」
「やっぱそうだろ、兄貴？」
「こいつは今まで食べてきたカップ麺の中でも5本の指に入る美味さだ。まずは開けた途端、鼻にやって来るトリュフの香りが食欲を掻き立て、スープに染み込んだキャビアの塩気とフォアグラの出すコクが絶妙にマッチしている。太麺はその3つの要素を絡めるのに最適だ」
「兄貴がそれだけ饒舌になるなんてな、良い仕事してるぜ」
悪堵もトムヤムクン味のカップ麺を勢い良く啜り始め、アーシアは見よう見真似で割り箸を裂こうとする
不器用ながらも何とか裂く事に成功し、渡された塩味のカップ麺を食べ始めた
割り箸で掴んだ麺をチュルチュルと啜っていく
直後、カップ麺を初めて食べたアーシアは衝撃を受ける
「ほ、本当にお湯を注ぐだけでこんな美味しい食べ物が出来るんですか……!?す、凄いですっ！お米やパンでは真似出来ない生成法があるなんて初めて知りました！」
「大袈裟だな、そこまで言う奴は初めて見た」
「ああ、主よ。これで空腹に苦しむ多くの人達を救えます……」

感激のあまり天に祈りを捧げるアーシアに幽神兄弟は「潰れた教会跡で祈るかよ……」と吐き捨て、カップ麺を啜っていく

完食しそうな量にまで達した時、正義がふとアーシアに問いを投げ掛けた

「何故お前の目には陰りが無い?」

「え……陰り、ですか……?」

唐突な質問にアーシアはキョトン顔になり、正義は構わず続ける

「最初に出くわした時から気になっていた。お前は俺達と同じ――――いや、俺達以上の地獄を味わってきた目をしている。なのに、お前の目には陰りが無いどころか、寧ろ光すら感じる。何故だ?何がお前をそこまで維持させる?人から裏切られ、蔑まれ、貶されてきた奴は全て陰りや暗闇が目の奥底に潜んでいた。一片の陰りすら無い奴なんて……この世に存在しない」

正義は半ば怒りをぶつけるような口調でアーシアに質問攻めをする

〝自分達以上の酷い境遇にいたならば、廃れるのが当たり前〟と考える正義は陰りの無いアーシアが理解出来ず、その理由を聞かずにはいられなかった

アーシアは箸を止める

「えっと……やっぱり、誰かを恨み続けても傷付くだけだと思うんです……」

「傷付く?怪我なんて直ぐに治るが?」

「体の傷はそうですけど、心に負った傷は簡単には治りません……。傷付くのもあなただけじゃありません。……あなた達のご両親だって――――」
「残念だが、父親も母親もとっくの昔にいなくなっている」
遮る様な正義の言葉にアーシアは固まり、悪堵がその理由を話す
「クソ親父は俺達が退学になった途端、見限って他の女を作って逃げたし、母さんは同じ時期に精神が壊れて入院――――んで、去年死んだ」
「……っ」
「俺達はとっくの昔に何もかも失ってんだ。親も、家も、学園の立場も。あの頃から傷だらけなんだよ。今更傷の1つや2つ増えた所でどうって事はねぇ。俺達にとって寧ろそれは好都合だ。〝失う物が無い〟＝〝弱味を突かれない、リスク無しで前に出れる〟って方程式が出来上がるのさ」
「つまり、お前達のように守るべき物など無いからこそ――――どんな手段でも躊躇(ためら)わずに済むと言う事だ」
幽神兄弟の持論にアーシアは言葉が出せず、ただ悲哀の視線を向けるだけだった……
その後、幽神兄弟は食べ終わったカップ麺を放り捨てて長椅子に横たわる
どうやら寝るようだ
「お前もさっさとそいつを食べて寝ろ。明日はお待ちかねの日だからな。一応言ってお

くが、逃げようとしても直ぐに連れ戻すぞ。怪我したくなければ大人しく人質になっているんだな」

そう言って正義は瞼(まぶた)を落とし、悪堵も眠りについた

「……イッセーさん……私、この人達をどうにかして救ってあげたいです……っ。だって、誰も周りにいないまま生きていくなんて――――悲しすぎます……っ」

フロニャルド大戦！伊坂軍の進撃

「明日の正午に三国へ総攻撃、か……」

フロニャルド崩壊を目論む闇人（やみびと）――――伊坂威月（いさかいづき）の奇襲と宣戦布告を受けてから数時間後、新達は何とか応急処置を終えてフィリアンノ城の広間へと集まっていた

ビスコッティ、ガレット、パスティヤージュの主要人全員が伊坂への対策会議に乗り出しているのだが……伊坂の異常な強さを目の当たりにした者達は表情を歪めっぱなしだった

しかも、その時でさえ伊坂は本気を出していない……

「兵隊だけでも手を焼く者が多いと言うのに……っ。ワシらの攻撃が全く通用せんとは……！」

「うにゅ～……あんな奴にウチらは勝てるのか……？怖くなってきたのじゃぁ……」

レオ閣下は悔しげに机を叩き、クーベルは悄気（しょげ）た顔となっていた

落ち込んだ空気を振り払おうとミルヒが切り出す

「み、皆さん！元気を出して下さいっ！まだ時間はあります！ここで落ち込んでいても事態は変わりません！三国共に力を合わせて、私達の国を――――フロニャルドを守り

ましょうっ！」
「そうだよ！姫様の言う通り、諦めちゃダメだ！」
ミルヒとシンクの激励で落ち込み気味だった空気に生気が戻り、新も作戦の提案を補助する
まずは前衛部隊に新、シンク、エクレ、ナナミ、ガウルと言った近接戦闘や攻撃に長けたメンバーを配置
後衛にはベッキー、リコの砲術部隊やベールの弓兵隊など遠距離攻撃に長けた部隊を置く
パスティヤージュの空騎士部隊も上空から、ノワール、ダルキアン、ユッキーの隠密部隊は地上から敵を撹乱させ虚を突く
兵士達は騎士の援護に徹底し、適度な交代を挟みながら囲って闇人（やみびと）を討ち取る
大まかな作戦が出揃った所で全員が戦（いくさ）の準備を始めた

「奴の魔剣、俺の『戦車（ルーク）』形態でも防ぎきれないと分かった以上……守りに転じるのはやめた方が良さそうだな」

月光が照らす中、新は中庭を散歩しながら伊坂対策を練ろうとしていた
伊坂の魔剣技(まけんぎ)クロスフレイムに『戦車(ルーク)』形態は全く歯が立たなかったので、防御しても無駄だと悟る
良い対策案が浮かばないまま辺りをウロウロしていると、見知った人影を見つける
「おお、アラタか」
「レオ閣下か。奇遇だな」
人影の正体はレオ閣下だった
月が浮かぶ夜空をジッと眺め、真剣な面持ちとなっている彼女に新は話し掛ける
「不安か？明日の戦い」
「……そう言うアラタはどうなんじゃ？恐れておらんのか？」
「そりゃ誰だって少なからず恐れるだろ。あんな強い奴は初めてだ。レオ閣下はどうだ？」
「ふんっ、ワシは早くもウズウズしておるぞ。先程の借りを奴に返してやらねば気が収まらんからのう」
腕組みしながらレオ閣下は勇猛な立ち振舞いを見せる……が、新はとっくに気付いていた
――彼女に怯えの色が潜んでいる事に

新は歩み寄って彼女の尻尾を掴んだ
「ひゃわあっ!?」
「嘘つけ、尻尾が震えてんじゃねぇか」
「や、やめんか！女の尻尾をいきなり掴む奴があるか！放せ！」
「じゃあ本音を言ってみろ。そうしたら放してやる」
新は掴んだ尻尾を指で擦り始めた
レオ閣下は全身を駆け巡る言い難い快感に悲鳴を上げ、新を殴ろうとするが避けられる
「ひ、卑怯者……ッ！そうまでして……っ、ワシにっ、何を言わせるのじゃぁ……ッ!?」
「本心を語れって言ってんだよ。虚勢を張ってもバレバレだ。俺は今まで多くの戦いを見てきたが、死ぬかもしれない戦いを〝恐くない〟なんて言う奴は何処にもいなかった。……お前もそうだろ？」
新の問いにレオ閣下は沈黙する
諭す様な言い方にレオ閣下は次第に虚勢を和らげ、心の奥底に隠していた感情を解き放つ
「……お前は大した男じゃな。まだ会って間も無いと言うのに」
「やっと話す気になったか」

「うむ……こんな気持ちは星詠み以来じゃ」
レオ閣下は以前、シンクがこのフロニャルドへ召喚されるより前に〝星詠み〟と呼ばれる占いの様な儀式を行った事がある
その占いではビスコッティの宝剣の所有者――――ミルヒの死が予言され、更にシンクが召喚された事でシンクもその予言に加えられてしまった
しかも、日に日に死の未来予知はハッキリと見えてしまうようになり、2人を守る為、未来予知を変える為に戦を仕掛けてビスコッティの宝剣を押収しようとした
だが……それすらも失敗し、親友であるミルヒを危険に晒してしまった
星詠みの未来予知に恐怖を隠せず、その未来を変えようとした行動が結果的に裏目に出て魔物を復活させてしまった
レオ閣下は今でもその時の責任、軽薄さ、恐怖を忘れられずにいる……
更に伊坂が現れた事で当時の自分の心音が甦ってしまったのだ
国の領主として、騎士としてそんな姿を見せたくない、見られたくないばかりに虚勢を張っていたが……新はそれを見破った
「そんな事があったのか」
「そうじゃ。だが……あの男の出す気配はその時の魔物を遥かに凌駕しておる……。底知れぬ恐ろしさを……」

次第にレオ閣下の表情が陰りを増していき、腕組みを解除して震える手を押さえつける
「全くもって情けない……。このワシともあろう者が、ガレットの領主たるワシが震えておる……。自分では死線を潜り抜けてきたと思っておったが――――甘かった……っ」
「それで良い、それが普通なんだ。恐いものは恐い。大事なのはその恐怖から逃げずに立ち向かう事だ」
新はレオ閣下の肩に手を置く
「目を逸らさず最後まで立ち向かった奴にだけ勝利の女神は降りてくれる。俺はそう信じて戦ってきた。向こうの世界でもな。自分の力を信じない奴に結果なんて現れねぇよ」
「自分の力を信じる、か……。確かにそうじゃな。始まる前から弱気になるなどワシらしくもない。アラタのお陰で目が覚めたぞ、礼を言う」
「ようやく良い顔付きに戻ったな、レオ閣下」
新がレオ閣下の頭を優しく撫でると、彼女は頬を赤く染める
「こ、こら！領主の頭を軽々しく撫でるな！」
「ハハッ、悪い悪い。さて、調子が戻った所で明日に備えて寝るか」

新は先程長考していた魔剣対策を明日に延期し、明日の戦いに向けて英気を養うべく寝る事にした
レオ閣下は新を呼び止め、最後にこう言い残す
「明日の戦――――必ず勝つぞ。民を、国を、フロニャルドを守る為に」
「あぁ」
新は軽く手を振ってから城内へ戻っていった

翌朝、既に目を覚ました新は軽いトレーニングを行っていた
瞑目し、意識を集中させたシャドーの組み手
拳や蹴りを振る舞い、籠手から出した剣で何度も大気を斬るような動きをする
「朝から気合い入ってますね、アラタさん」
そこへやって来たのは――――勇者の扮装を整えたシンクだった
シンクの声を耳にした新は目を開き、剣を杖代わりに地へ突き立てる
「シンク、お前もトレーニングか？」
「はい。あと、朝食にアラタさんの姿が無かったのでこれも持ってきました。ナナミと

ベッキーが作ってくれたサンドイッチです」
シンクが小さなバスケットを開けると美味しそうなサンドイッチがズラリと並んでいた
ちょうど空腹だった新はサンドイッチに手を伸ばし、大口を開けて頬張る
よっぽど美味しかったのか、続けてサンドイッチを口に入れ咀嚼――――ものの5分で全てのサンドイッチを平らげた
「ん～、美味かった。……シンク、これからお前らには想像も付かないぐらいの熾烈な戦いが始まる訳だが――――どう思ってる？」
和やかな表情から一転して真剣な顔付きで問う新
それに対してシンクは下唇を噛む
「勿論、正直言って恐いですよ。いつもの戦興業でもない、ましてや今までの魔物討伐とは大違いだって事ぐらい分かります……。でも、僕達は勇者です。勇者がいつまでも恐がっている訳にはいきませんよ」
「中学生のくせに一端の口を開くじゃねぇか。まあ、それぐらいの器量が無いとな」
「それじゃあ姫様の所に行きましょう」
作戦の見直しをする為に大広間へ向かおうとしたその時――――ドオンッ！と言う爆発音と地響きが2人の意識を引き付けた

突然の音に新とシンクは周りを見渡す
すると、エクレからの通信が入った
「エクレ！今の音は何!?何があったの!?」
『敵の襲撃だ！昨日の怪物どもがフィリアンノ城を攻撃している！』
「なんだって!?どうしてこんな早くに！」
『ゴチャゴチャ言ってる暇は無い！ガレットもパスティヤージュも襲撃を受けているんだ！さっさと加勢しに来い！』
突然の音の正体は敵――――つまり伊坂軍の攻撃だった
新は直ぐ闇皇（やみおう）に変異、マントを翼に変えて空へ飛び出す
空中から見えたのは夥（おびただ）しい数の闇人（やみびと）がフィリアンノ城を攻撃及び進軍している光景だった……
ビスコッティの兵士達も果敢に挑んでいくが、敵の圧倒的な数と力に押され次々と〝けものだま〟と化していく
城外の様子を見た新は舌打ちをして降りる
「外で敵がウジャウジャしてやがる。数は凡（およ）そ２００匹はいるだろうな。それがガレットとパスティヤージュも同じ数だとすれば――――総勢６００匹、下手すりゃもっと多いかもしれねぇ」

「ろ、６００……っ」
シンクは今までに無い敵のスケールに顔をしかめる
しかし、だからと言って怯んではいけない
ここで怖じ気付けば伊坂軍にフロニャルドを破壊されてしまう……
シンクは自ら両頬を叩いて気合いを入れ直す
「行きましょう、アラタさんっ！あんな奴らにフロニャルドを壊させはしない！」
「よく言った、シンク。まずはここら一帯の掃除と行こうか！」
新とシンクは急いで城の外へと通じる通路へ向かう
そして城門から外へ出ると、直ぐ近くでエクレとリコが闇人（やみびと）の軍勢と交戦しているのが見えた
双剣で量産型の闇人（やみびと）を次々と斬り払い、リコの砲撃が敵を撃ち貫く
「エクレーっ！リコーっ！」
「あ、勇者さまー！アラタさまー！」
「遅いぞバカ！」
「ヒーローと勇者は遅れてやって来るものだぜ？さぁて、ゴミ掃除の時間だ！」
新は籠手から出した闇皇剣（やみおうけん）を握り、素早く飛び出して闇人（やみびと）の軍勢を斬っていく
刀身に魔力を込めて切れ味を向上させているので、１匹１匹（ひとたち）を一太刀で確実に仕留め

る

シンクも負けてられないとばかりに神剣パラディオンをロッドに変え、輝力(きりょく)を流して打ち込んでいく

昨日とは打って変わった重い攻撃に量産型は悶え苦しむ

更にエクレの双剣から放たれた十字の斬撃とシンクの紋章砲が敵を切り裂き、焼き払う

「昨日は良いようにされたが、今度は油断しない！」

「気合い入ってるね、エクレ！」

「ザコ相手なら大丈夫みたいだな。おっと、次は少しキツそうだぞ？」

新の忠告を聞き、視線の先に目を向けると……量産型とは違う２匹の闇人(やみびと)が佇んでいた

しかも、そいつらは昨日シンク達が手を焼いていた蜘蛛型の闇人(やみびと)

体色は黄色と黒、銀色が混ざり合った物だが姿形は瓜二つだった

「あれは昨日の！色違いまでいるのか！」

「でも、やるしかないよ！」

「よし、右の奴は俺が仕留める。シンクとエクレは左の奴を頼むぜ。リコは後方から援護射撃だ、良いな？」

「オッケー！」
「あぁ！」
「はいっ、でありますぅ！」
シンクとエクレは黄色と黒の模様の蜘蛛闇人（やみびと）Aに、新は銀色の蜘蛛闇人（やみびと）Bに向かっていった
闇人（やみびと）Bは口から糸を手元に吐き出し、何かの形を作っていく
暫くすると糸が音を立てて硬質化していき、棍棒の様な形の武器となった
闇人（やみびと）Bが棍棒を振りかぶって殴り掛かるが、新はその攻撃を剣で弾く
剣と棍棒の激しい打ち合いが始まり、けたたましい金属音が響き火花が散る
新は次の剣戟と同時に魔力込みの蹴りを繰り出して闇人（やみびと）Bを後退させる
退いた隙に刀身を赤い魔力でコーティング、破壊力を向上させた剣で斬りかかった
闇人（やみびと）Bは持っている棍棒を投げつけたが、リコの砲撃によって弾かれる
その直後、赤い刀身の剣が闇人（やみびと）Bを縦一文字に切り裂き、２つの塊に分断した
ビクビクと痙攣を起こし、闇人（やみびと）Bは息絶える
「こいつら程度のザコに時間は掛けられねぇんだよ。本当の敵はまだこの先にいるんだからな」
あっという間に闇人（やみびと）Bを片付けた新はシンク達の方に視線を動かす

闇人Aを相手にシンク達は意外にも優勢で、着実にダメージを与えていた
闇人Aが口や手から放つ弾丸も、捕獲せんと吹き出した糸も回避しながらロッドで打ちのめし、双剣で斬りつける
度重なる攻撃を受けて激昂したのか、闇人Aは口から大量の糸を空に向かって吐き出す
その直後、糸は幾重にも分裂して矢の形となり――――雨の如く降り注いだ
矢の豪雨に対してシンクは神剣パラディオンをロッド→盾　状に変えて防ぎ、エクレは双剣で弾いていく
矢の豪雨が止んだのを見計らってシンクが盾から二対の短槍に変え、エクレと共に輝力を高める
「「烈空ダブル十文字ッ！」」
シンクの短槍、エクレの双剣から十字状のエネルギー波が放たれ――――闇人Aの体躯を微塵に切り裂いた
十字状のエネルギー波はそのまま周りの闇人達を吹き飛ばし、遠い彼方へと消える
切り裂かれた闇人Aは指や足をバタつかせるが……直ぐに動かなくなった
闇人を倒したシンクは大いに喜ぶ
「やったね、エクレ！」

「はしゃぐなバカ！敵はこいつらだけじゃない！この先にまだあの男が控えているんだぞ！」
「エクレの言う通りだ、シンク。俺達の本当の敵はこいつらなんかじゃねぇ。――――伊坂だ」
新の見据える視線の遥か先に伊坂がいる
それは遠くからでも漂ってくる異様な気配で理解出来た……
「ここから先は覚悟を決めた方が良い。……死んでもおかしくない相手だからな」
新の警告に思わず唾を飲み込む面々だが、ここまで来て引き返す訳にもいかない
否、引き返してはいけない……
シンク、エクレ、リコは無言の決意を固める
「……良い面構えだ。行くぞッ！」

――――――――――――――――――――

「ここまで来るとは大したものだ。やはり兵隊だけでは遊びにもならないか」
「あまりワシらを見くびらない方が良いぞ。こんな物で止まりはせん！」
闇人軍の親玉――――伊坂威月が対面しているのはガレットの領主、レオンミシェリ・

ガレット・デ・ロワ
その弟ガウル・ガレット・デ・ロワと親衛隊ジェノワーズ、更にはガレット獅子団の剛力将軍ゴドウィン・ドリュールもいた
レオ閣下は愛騎のドーマから降りて強く言い放つ
「その上、不意討ちとは随分姑息な真似をしてくれたものじゃな」
「不意討ち?まさか、今の状況の事を言っているのかね?」
「それ以外に何がある!」
「ふむ……これはつまり、気が変わったのだよ。正午に攻めようと思ったが早朝に変更した。ただそれだけの事だ」
悪びれる様子を微塵も見せない伊坂にレオ閣下は勿論、ガウル達は憤(いきどお)りを隠せなかった
「てめぇ……ふざけやがって!」
「おやおや、この程度の事で怒るか。もっと気持ちに余裕を持たねば大人にはなれんぞ?」
「殿下を侮辱する事はぁっ、このゴドウィン・ドリュールがゆぅぅぅるさんんんんんっ!貴様ぁ!尋常に勝負せぇぇぇいっ!」
巨大な戦斧から鎖で繋がれた鉄球を振り回しながら伊坂に言い放つゴドウィン将軍

かなりの暑苦しさを誇るゴドウィン将軍の宣告に伊坂は〝やれやれ〟と言った様子で首を振る
「致し方ない、か……。では、かかって来たまえ」
「んぶるるるぁぁぁぁぁぁぁっ!」
ゴドウィン将軍が戦斧を振るい、鉄球は伊坂目掛けて突き進んでいく
風圧だけで地面を抉り、止めに入ろうとした量産型の闇人(やみびと)も吹っ飛ばす
伊坂は直立不動のまま――――巨大な鉄球をまともにくらった
鈍く重い激突音が空気を震撼させ、ゴドウィンは手応えありと口元を笑ますが……伊坂は指2本で鉄球を止めていた
「大したパワーだ。パワーだけなら充分に及第点だな」
「な……ッ!」
伊坂は指を鉄球にめり込ませ、もう左手で手刀を作り――――そのまま鉄球を真っ二つに断ち切った
指にめり込んだ鉄の塊を捨て、全身から炎の如く揺らめくオーラを発する
足下から蒼い焔(ほむら)が噴き上がり、伊坂は人間の姿から魔人態(まじんたい)――――怪鳥の化身へと変貌を遂げた
その姿を目にした途端、レオ閣下もガウルも昨日の事態を頭の中に過(よぎ)らせてしまう

武器を持つ手に僅かばかりの震えが生じる……

それに気付いた伊坂は自前の長剣を出現させて口元を手で押さえる

「おっと失敬、まだ君達から怯えの色が抜けていないのかと思うと――――――つい笑ってしまった。許してくれ」

「……ッ！今は何度でも言うが良い。それでもワシらは一筋縄にはいかんぞ！」

「ほお……では、見せてもらおうか。この無価値で無意味な世界を守りたいと願う君達の全てを……」

伊坂の長剣から焔が噴いたのを合図にガレット獅子団の領主、王子、精鋭部隊が果敢に突っ込んでいった

ムッツリ兄弟（笑）の苦難

「くそったれ、やりやがったな。まさかこんなにも早く行動した上に唯一の回復役であるアーシアを盾にするとは……」

偽の依頼先（正確には脅されていたらしい）から戻ってきた一誠は直ぐ様アーシアが幽神兄弟に拐われた事を報告し、アザゼルを始めとするオカルト研究部のメンバーが苦々しい顔付きとなった

特に一誠は自分が居たにもかかわらず、アーシアを拐われてしまったので自分の不甲斐無さを思い知らされてしまう

「イッセー1人を来させる為にアーシアを拐うなんて、何処まで卑劣な真似をすれば気が済むのかしら……ッ！」

リアスは幽神兄弟の所業に我慢の限界を迎えそうだった

だが、ここで全員が派手に動けば幽神兄弟に気付かれ、アーシアの身に危険が及ぶ事になるだろう……

やはり要求通り一誠が1人で幽神兄弟の指定した廃教会に向かうしか無い

「それまでアーシアさんが無事でいるかどうかが問題だね……」

「幽神の野郎……アーシアに何かしやがったら、ただじゃおかねぇ……ッ！例えば――――」

※ここからは一誠の勝手な妄想が入ります

『はぅぅ……っ、やめてください……っ。こんな格好で……な、何をするつもりなんですか……？』

『俺達に鼻血を噴かせたお返しだ。溜まりに溜まったこの鼻血をお前にぶっかけてやる』

『兄貴、スポイトに入れ終わったぜ。ジワジワとぶっかけてやろうじゃねぇか』

『よぉし、まずは腹にかけてやれ』

ピュッ！ピュッ！

『ひゃあぁっ！はうぅ……な、生暖かいですぅ……っ』

『次は足だ』

『俺は脇の下にかけるぜぇ』

『へうぅぅ……っ。だ、駄目ですぅ……！そんなにかけないでください……っ』

『ゴフッ……！なんて破壊力のあるエロさだ。相棒、覚悟は良いな？ラストは――――』

『あぁ、俺達を生死の狭間に追いやった――――あの乳だな。おらおら、おとなしく両手を広げろよ！』

『いやぁっ！や、やめてください……っ！ここだけは……』
『『恨むなら俺達を殺しかけたその乳を恨みな！』』
ピュッ！
――――妄想が途切れる――――

「あんのゲス野郎どもおぉぉぉぉっ！アーシアのおっぱいに何をぶっかけてんだあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「イッセーくん、今物凄くスケベな事を考えてないかい……？」
一誠は自身の妄想の内容に吼え、その様子を見た祐斗は頭を痛め、小猫に至っては「……最低です」と毒づく始末……
アザゼルは顎に手を当てて何か良い手は無いかと模索する
「せめてアーシアの安否だけでも知れれば良いんだが……。いっその事こっちも奇襲を仕掛けてみるか……？」
「奇襲？まさか俺が単身でって事すか？」
「俺が考えてるのとは少し違うが、まあ概ねそんな所だ。とりあえずリアスや他のメンバーは絶対待機な」

イッセー以外出撃禁止とも取れるアザゼルの言葉にリアスが〝納得いかない〟と言った様子で待ったを掛ける

「それはいったいどういう事なの？」とリアスが問いただすとアザゼルはノートパソコンを開き、幽神兄弟が所持する神器（セイクリッド・ギア）の項目を映像に出しながら答えた

「奴らの神器（セイクリッド・ギア）は敵味方問わず怒りと憎しみを吸収し、自らのパワーに変換するって話しただろ？怒りと憎しみが多ければ多いほど際限無く発揮する。ただでさえ激情に流され易いってのに、お前らが行っても幽神兄弟にとっては絶好の餌だ。アーシアを盾に煽りまくって怒らせようとするだろうな。さっきの二の舞になっちまう」

アザゼルの言う事は尤（もっと）もだった

眷属への情愛が深いリアス、仲間意識が強いグレモリー眷属全員から集められた怒りと憎しみの濃度は幽神兄弟の禁手（バランス・ブレイカー）を更に進化させてしまう程の物だった……

集団で攻め込んでもアーシアを盾にされれば攻撃が出来なくなってしまい、全員が幽神兄弟のリンチを受ける事は必至

故に一誠が単身で行くしか方法は無いのだが……

「あー、どうせならこっちも奴らの弱点を突いてやりたいんだけどなー」

アザゼルがふと漏らした言葉の意図を察した一誠は目を爛々と輝かせ、リアスは腕を組んで嘆息する

「幽神兄弟の弱点――――と言っても、女性の裸でしょ……？」
「そう言うこった。イッセーの『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』で女を全裸にして幽神兄弟に鼻血を噴かせる。……自分で言っといてなんだが、やっぱいろんな意味でバカらしいや。イッセーの技もそうだが、女の裸を見ただけで大量の鼻血を噴かすとか何処の純情くんだっつうの」
「要はあいつら、木場みたいにムッツリスケベだって事スよ！」
「イッセーくん、それはどういう意味かな？」
祐斗は一誠に静穏な怒りのオーラを発し、それに気付いた一誠は即土下座していた……
その間にアザゼルは何かを思い付いた
「イッセー、名案を思い付いたぞ。幽神兄弟が指定した時間は午後４時、場所は町外れの教会跡だったよな？」
「え？はい。そうですけど」
「よーし、明日その時間まで普通に過ごしとけ。具体的な作戦はまた明日に話すからな」
アザゼルの悪巧み顔にリアスを始めとする一誠以外のメンバーが苦笑するしか無かった……

翌朝、幽神兄弟の仮アジトでもある廃教会
そこに囚われているアーシアは割れた窓から射し込む日光によって目を覚まし、大きな欠伸(あくび)をする
「お、起きたか」
カチャカチャとコンロやヤカン、フライパンを用意しているのは幽神兄弟の弟、幽神悪堵(ゆうがみあくど)
アーシアは半開きの目を擦り、兄の幽神正義(ゆうがみまさよし)がその場に居ない事に気付く
「あの……、あなたのお兄さんは？」
「ん、兄貴か？兄貴なら直ぐそこの小川で魚を獲ってるぜ。朝飯の追加メニューだ。お前、何味にする？薄口醤油味でも良いならそれにするけどよ」
カップ麺初心者のアーシアは勧められるがまま頷くしかなく、悪堵は自分が食べるきつねうどんと正義が食うであろうたぬきそばのカップ麺を用意
ヤカンをコンロに乗せ、火に掛ける
暫くしてお湯が沸き、1度ヤカンを下ろしてから今度はフライパンを乗せる
「さてと、塩焼きかムニエルにでもするか」

「あ、あの～……」
「あ、何だ？」
「もし良かったら……お食事の用意、私もお手伝いして良いですか？」
アーシアの突然の言葉に悪堵は一瞬固まるが、直ぐに我に返って「何でだよ？」と訊く
「だって、あんなに美味しい食べ物を貰ったの初めてで……。そのお礼がしたいんです」
「か～、本当に変な女だぜ。たかがカップ麺1個でそこまで言えんのか？まあ、良いか。じゃあカップ麺にお湯を注(そそ)げ」
「は、はいっ」
アーシアは慣れない手付きでカップ麺の封を開け、表記されている作り方の注意書を読みながら手順に従う
正義が食うであろうカップ麺（たぬきそば）のかやく袋を開けて粉末を入れる
手こずりながらも何とか粉末スープを入れ終えた所で正義が戻ってきた
網には程好(ほどよ)い大きさの川魚が3匹入っている
「おっ、兄貴」
「相棒、あいつはいったい何してんだ？」
「あぁ、何か自分も手伝いたいとか言い出したもんでよ。ちょうど良いから手伝わせて

んだ」
「自分から手伝うだと？全く……数奇な女だ――――」
言い切ろうとした瞬間、正義は言葉を止めてアーシアの手元を凝視した
その理由は……アーシアがたぬきそばに必ず付いているサクサクの天ぷらを器に入れ、お湯を注ごうとしていたからだ……
カップ麺玄人とも言える正義にとっては衝撃的な光景、川魚が入った網を落とし――――絶叫した
「それを入れるなアアアアアアアアアアアアアアッ！」
熱湯が口から流れ落ちたと同時に正義は神速のダイビングキャッチでたぬきそばを救出するものの、その熱湯は背中に直撃した
アーシアは先程の絶叫と正義の登場に驚いてヤカンから手を離してしまい、ヤカンから零(こぼ)れた熱湯が正義へ更なる追い討ちを掛ける
「あ、兄貴ッ！？」
「ぐ……ッ！……心配するな、カップ麺は無事だ」
「きゃあっ！？ご、ごめんなさい！背中にお湯が……す、すぐに治療しますっ！」
「そんな事はどうでも良いッ！お前……今たぬきそばに於いて、やってはならない事をしようとしたんだぞ……ッ！」

　正義は怒りを表しながら器に入っていた天ぷらをつまみ上げる
「カップ麺の天ぷらは〝後乗せ〟が鉄則なんだ！先にお湯を入れてしまったら、天ぷらのサクサクとした食感を殺す事になる！中には柔らかい天ぷらの方が良いと言う奴もいるだろうが、徐々にスープを吸って柔らかくなるのに――――何故先にお湯を入れる必要があるんだ！〝後乗せ〟ならどちらの食感も味わえると言うのに……ッ！そもそも天ぷら自体が揚げた物で――――」
「あちゃ～……始まっちまったよ、兄貴のたぬきそば理論……」
　カップ麺（主にたぬきそばのルール？）を知らな過ぎたアーシアに説教するかの如く、正義は〝たぬきそばの天ぷら後乗せ理論〟を唱え続けた
　15分ノンストップで持論を唱え続けた正義はようやく口を止めて深い溜め息をつく
「――――と言う事だ。カップ麺の天ぷらは〝後乗せ〟が原則、分かったな？」
「あ……はい」
「分かったなら良い。さっさと飯にするぞ」
「ま、待ってください！」
　アーシアの呼び止めに溜め息をつきながら「何なんだ？」と尋ねる正義
「背中、火傷してる筈です！治療しますから上着を脱いでください！」

「……いらん。水で冷やせば充分――――」
「ダメですッ！ちゃんと治療しないと痕(あと)が残っちゃいます！それに……その火傷は私のせいで付いてしまったんですから、私に治療させてくださいっ！」
いい加減にしろとばかりに断ろうとする正義だったが、アーシアは引き下がる様子を微塵も見せず――――逆に正義の方が気圧(けお)されるぐらいの迫力だった
お人好しのバカだと侮っていたアーシアの決意固き眼差しに、正義は遂に折れた……
「……分かったよ」と不本意ながらも上着を脱ぎ捨て、アーシアに背中を向ける
火傷した患部にアーシアは手を当て、淡い緑色の光を発した
アーシアの『聖母の微笑(トワイライト・ヒーリング)』によって火傷が消えていく
「……お前は本当に変な女だな。敵である俺の怪我を治すとは。恩でも売るつもりか？」
正義の皮肉な発言にアーシアは首を横に振った
「怪我をして困っている人に――――良い人も悪い人も関係ありません。私が治したいと思ったから治すんです」
「……っ」
濁りや陰りが一片も無いアーシアに正義は何も言えなかった
〝この世の中、こいつみたいな奴がもっと多く居てくれたらな……〟と不覚にもそん

な考えを過らせてしまう程に……

その時、正義の目から温かい何かが頬を伝う

無意識に指でそれを拭い取ると――――小さな雫があった

それはもう心身共に枯れ果てた自分には無縁だと思っていた〝涙〟だった……

捨てた筈の感情が自分の目から微かに流れ落ちる

アーシアの優しさに触れたからだろうか……

『……っ。こんな……こんな事が……っ』

一瞬揺らぎそうになった正義だが〝信じられない、あり得ない〟と自分に言い聞かせ、甦りそうだった感情を押し殺した

アーシアの治療が終わると直ぐにカップ麺を並べ直し、獲ってきた魚の調理に取り掛かる

「……とりあえず礼は言っておく。飯にするぞ」

――――――――――――――――――――――――

それから数時間の刻が流れて時刻は午後３時１０分、一誠は校門で待つアザゼルと合流

リアスを含めた残りのメンバーは部室にて待機させられている
一誠とアザゼルはお互いの顔を見合わせて無言で頷き、アーシア救出に向かった
町外れの廃教会付近まで来た所で足を止める
「ところで先生？昨日言ってた名案ってヤツをそろそろ教えてもらえませんか？」
「おぉ。ちょうどお前の面がニヤケてるし、そろそろ良いだろう。名案ってのはアーシアを奪取する為に幽神兄弟の弱点を突くって所だ」
それを聞いた一誠はグフフと変態成分１００％の笑みを浮かべる
「何度も言うが、奴らがアーシアを拐ったのはお前を誘き寄せる為だ。だが……恐らくそれだけに留まらないだろうな。そこで、また盾にされないようにアーシアを救出させる時間稼ぎ兼退路要員の助っ人を呼んどいた」
「その助っ人、やっぱり女の子ですよね？」
「あぁ、しかもお前が知ってる顔ぶれだ」
その言葉の意味が何なのか気になる一誠だったが、答えは直ぐに訪れた
何かが羽ばたく音が複数こちらに向かってくる
バサバサと降り立つ助っ人らしき者達
一誠は内心ワクワクしながら振り返るが、助っ人の１人――――露出度の高い黒ボンテージを着た堕天使を見て顔色を変えた……

「せ、先生……まさか、助っ人って――――」
「その通り。いま新が世話してやってるレイナーレと元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』の女どもだ」
そう、アザゼルが呼んだ助っ人とは……一誠の元カノであり一誠を1度殺した堕天使レイナーレ
一誠が顔を青ざめるのも無理は無かった……
更に彼女の周りには元ディオドラ眷属の『兵士（ポーン）』８名がいた
彼女達もレイナーレ同様、新の紹介した寮に住み着き、酒場でウェイトレスとして働いている
余りの衝撃に固まっている一誠の肩にアザゼルが手を置く
「イッセー、一応グリゴリの若い女にも声を掛けてみたものの……見事に全滅しちまったんだよ。やっぱお前の『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』が1番の拒否理由になってた。んで、もう残ってるのはこいつらしかいないと思って呼び寄せたって事だ」
「そ、そうなんですか……。ちょっと複雑っス……」
「まあ、そう固い事言うなって。アーシアを救出する人員はこいつらしかいないんだ。これ以上の適役は無いと思うぞ？それにだ」
「それに？」

「素材自体は悪くないだろ？」
「……勿論っスッ！」
溜めはあったものの納得出来た一誠は親指を立てる
アザゼルはレイナーレと元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』８名にアーシア救出の作戦内容を説明する
「――――と言う具合だ。頼めるか？」
「勿論です！アザゼル様のご命令とあらば、断る理由などありません！」
レイナーレはアザゼルの提案を直ぐに承諾したが、元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』８名は嫌そうな顔をしていた
「どうしてこんな事を」
「こんなスケベ男の為にしなきゃいけないなんて」
「アラタ様だっていないし」
「これなら戻った方がマシかも」
やはり予想通りの反応を見せたが、アザゼルにとっては想定内
そこでアザゼルは決定的な言葉を放った
「安心しろ、この任務の特別報酬は新だ」
「……え？先生、それどういう意味――――うおおっ!?目の色が変わってる!?」

〝特別報酬＝新〟と聞いた瞬間、元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』８名は目を輝かせて円陣を組む

レイナーレもその事についてアザゼルに聞く

「アザゼル様、その報酬は私も同じですよね？」

「あぁ、勿論だ。好きにヤっても構わねぇ」

「ちょっ！このヒト新を餌にしやがった！良いんスか!?勝手にそんな事言って！」

「心配すんな。この場にいない新が悪いんだよ」

「酷（ひど）ッ！これ殆ど人身売買じゃないですか！」

「何言ってんだ。あいつ１人の犠性（ぎせい）でアーシアが助かるなら安いもんだろ？」

「鬼だ……ここに鬼がいる……。しかも犠牲の〝牲〟が〝性〟に変わってるし……」

アザゼルの容赦無き贈賄行為に一誠は〝あいつ帰ってきたら死んじゃうんじゃないか……？〟と顔を引きつらせた

アザゼルは幾重もの翼を広げて飛び立つ

「俺がしてやれるのはここまでだ。イッセー、アーシアを助け出したら――――思う存分ぶちのめしてやれ。その為の作戦でもあるんだ」

「……っ。はいっ！」

一誠に檄（げき）を贈ったアザゼルはそのまま飛び去っていった

いざ、作戦を開始しようとした所で一誠がある事に気付く
「あれ、何か人数が少ないような……。もっと他にいなかったっけ？ロングヘアーのお姉さまとかゴスロリ服を着た娘（こ）とか」
「ええ、カラワーナとミッテルトね。いるけど酒場が忙しいから残ってもらったのよ」
因（ちな）みにその酒場はレイナーレ達が来てから売り上げが大幅にＵＰ（アップ）しており、店長（マスター）手作りのコスプレ衣装を着た彼女達も評判が良い
尚、衣装アイデアの提供源は新が大半だったりする（笑）
「それじゃあ、さっさと行きましょうか。……こっちの私の方が良い？イッセーくん♪」
「いや、出来れば素の方で……」
一誠は気を取り直してアザゼルから聞いたアーシア救出作戦の下準備に取り掛かった

「すぅ……すぅ……」
「この女、人質って立場を忘れてんのか？呑気に寝てやがる」
「全くだな。思った以上に図太い神経だ」

幽神（ゆうがみ）兄弟はアーシアの寝顔を眺めながら言う
　朝のちょっとした騒動からは特に何事も無く過ごし、現在の時刻は午後４時１分
　２人にとって楽しみの時間がとうとうやって来た……
悪堵（あくど）は一誠に対する牽制の為にアーシアを連れていこうとするが、正義（まさよし）から待ったを掛けられる
「どうした、兄貴？」
「……この女はこのままにしておこう」
「何でだよ？これからあのクソ兵藤が来るんだぜ。こいつを盾にして――――」
「このままにしろって言ったのが分からないのか？相棒」
　正義から発せられたドスの利いた声と迫力ある眼差しに、悪堵は動きを止めてしまう
　いつもなら嬉々として相手に必ず勝てる手段を行使してきた筈なのに……今はそれを拒否した
　すかさず正義はこう言う
「今の俺達なら充分に兵藤を倒せる。あれから禁　手（バランス・ブレイカー）に変化が加わっただろ？それに今の奴は独りだ。独りで来た兵藤をボコるぐらい俺達兄弟だけで事足りる。それに……」
「それに？」

「ボロボロにした兵藤をあの女に見せつけてやるのも面白そうじゃないか」
「ハハッ！さっすが兄貴、言う事が違くてエグいぜ！」
笑い飛ばす悪堵は早速右手に神　器（セイクリッド・ギア）――――『拳獄の手錠（ライジング・ギア）』を出現させ、正義も左足に『蹴獄の足枷（スマッシング・ギア）』を出す
我先にと外へ飛び出していく悪堵
正義は数歩進んで立ち止まり、眠っているアーシアの方を向く
「……本来の俺だったら有無を言わさずこいつを連れて、兵藤のストッパーにしてやるのに……。何だろうな……急に調子が狂っちまった」
彼らしくない哀愁漂う台詞を吐きながら眠っているアーシアに近付き――――彼女の頭を優しく撫でる
「お前の様な人種にもっと早く会っていたら、俺達は変われたかもしれないな……」
とうの昔に捨てた感情を甦らせてくれたアーシアに背を向け、正義は外へ向かう
その間際に「お前が作った魚のムニエル、涙が出る程美味かった」と言い残して……

外へ出て悪堵と合流した正義は視線の先からやって来る人影を見据えた

「来たか、兵藤」
　幽神兄弟の前に現れた一誠は１０メートル手前の距離で足を止め、キッと幽神兄弟を睨む
「幽神、アーシアは無事なんだろうな？怪我１つ負わせてみろ。俺はてめぇらを許さねぇぞ……！」
「ふんっ、眠り姫を助けに来た王子様のつもりか？兵藤。安心しろ、奥でぐっすり眠っている」
「言う通りに来たんだから、アーシアを返せ！」
　一誠の物言いに悪堵はゲラゲラと笑う
「おいおい兵藤？そんな事言われて俺達が素直に返すと思ってんのかぁ？」
「最初はそのつもりだったが、気が変わった。返すのはお前をここで潰してからだ」
　正義は親指を立てた右手を下に向け、悪堵はシャドーボクシングをしてから攻撃の構えを取る
　普通なら幽神兄弟の言い草に腹を立てる一誠だが……今回は予想通りの反応だとばかりに頷いた
「へっ……やっぱそう来たか。だったら、遠慮なんかしなくて良いんだよな」
「何がおかしい。気でも狂ったか？」

「俺達が憎過ぎて逆に笑っちまうってか？」
「アーシアは絶対に返してもらう。お前らをぶん殴るのはそれからだッ！」
一誠が声を張り上げた刹那、正義は複数の異様な気配を察知して周りを見渡す
複数の人影――――元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』8名が幽神兄弟を囲む様に降り立ち、レイナーレも中央に降り立つ
「なるほど、あなた達が『地獄兄弟（ヘルブラザーズ）』ね。噂通りの悪人顔だわ」
「「ブッ！」」
レイナーレを見た幽神兄弟は即座に何かを吹き出し、視線を逸らす
レイナーレは何故彼らがそうするのか理解出来ずにいたが、一誠は予想通りの結果にガッツポーズをした
「ぐっ……！兵藤！随分と姑息な真似をしてくれるな……！」
「うっせ！お前らだって散々卑怯な手を使ってきたくせに！これはその報（むく）いだと思い知れッ！」
そう言って一誠は『赤龍帝の籠手（ブースステッドギア）』を展開した左手を上に掲げる
その動作を見た元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』の女の子達は顔をしかめた
この時、正義は一誠が何をやろうとしてるのか気取（けど）ったが――――遅かった
「くらえっ！『洋服崩壊（ドレスブレイク）』ッ！四方八方裸体の陣ッ！」

一誠が指を鳴らすと同時にレイナーレ、元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』８名の衣服が全て消し飛び、全員が見事に全裸へと変わった

多種多様な女の子の裸やおっぱいが眼前に現れたのを目撃した幽神兄弟は無論――

――ブッシャァァァァァァッと勢い良く鼻血を噴き出して体勢を崩す

足元に血溜まりが完成し、一誠は鼻血を出しながら得意気に語り始めた

「アハハハハハハハッ！ざまーみろ！これがお前らへの秘策だ！実はここへ来る前に、この娘（こ）達にタッチして『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』の準備を終えていたのさ！いつでも発動出来るようにな！これでお前らはまともに動けないし、その隙にアーシアを救出できる上におっぱいが見放題！これぞ俺の夢の集大成――――『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』四方八方裸体の陣だァッ！」

「ぐっ……！ゲフゥッ！やってくれたな……兵藤オ……ッ！だが……お前はやはりバカだ……ッ。そんな事をすれば、あの女どもだって動けんだろう……！助っ人の意味が全く――――なぁっ!?」

正義は途中で素っ頓狂な声を上げてしまう

その理由は黒髪を結わえた元ディオドラ眷属『兵士（ポーン）』Ａが目の前まで飛び込んで来たからだ

自分が全裸である事もお構い無しに正義の顔面へ蹴りを入れる

不意討ちをくらった正義は背中から倒れ、鼻を手で押さえる

「あ、兄貴……！大丈夫……な訳ねぇ――――うおぉッ!?」
悪堵も正義と同じ様に素っ頓狂な声を上げた
茶髪にリボンを付けた『兵士』Bが小振りなおっぱいを揺らしながら走り、悪堵に拳を見舞おうとする
悪堵は何とか回避したものの、次にやって来た赤い髪の『兵士』Cにパンチを入れられる
よろめいた直後、正面から紫色の髪をした『兵士』Dの膝蹴りが顔面に炸裂
悪堵は顔面を押さえながら苦しむ
正義は直ぐに援護しようとするが、自分の前に金髪の『兵士』Eが立ち塞がる
しかも、素っ裸のおっぱいやアソコも丸見えだったので鼻血の噴出度が一気に増加した挙げ句、アゴを蹴り上げられてしまう
「がふっ……くそぉ……！何なんだ、こいつらは……!?」
「あーら、この程度の事で取り乱すなんて。思った以上に純情なお子様ね」
毅然とした態度でレイナーレが光の槍を手元に作り、それを正義に投げつける
正義はギリギリで躱し、光の槍は後方の木に突き刺さった
正義は手で目を覆ったままレイナーレに問いただす
「お、お前ら……何でそんな状態なのに向かって来れるんだ!?何で誰1人隠そうとしな

いッ!?」
「別に私はあなた達に見られた所で何の問題も無いし、服なんて後で作れば良いだけの話よ」
レイナーレは裸体を一切隠さず正義の物言いを一蹴
元ディオドラ眷属『兵士』８名も羞恥心はあるものの、報酬の為に今だけは耐え忍ぶ
一方で一誠は相変わらず鼻血を出しながら、この桃源郷を目に焼き付けようとしていた……
「こ、これやぁ……！これこそまさに！俺が夢見たおっぱい天国やぁぁぁ……っ！」
「ほら、いつまで見とれてるのかしら？あの奥にアーシアがいるんでしょ？早く行きなさい」
「おっと、そうでした！じゅるり……っ。じゃあな幽神！ププッ、鼻血の噴き過ぎで死ぬなよ！お前らは俺がブッ飛ばしてやるからな！」
一誠はヨダレと鼻血を拭ってアーシアのいる廃教会内へと走っていく
それを見た悪堵は「待ちやがれッ！」と叫んで追い掛けようとするが、『兵士』Ａに先回りされる
やむを得ず方向転換しようとした矢先、緑髪のツインテールの『兵士』Ｆと水色の髪をした『兵士』Ｈが手元に魔方陣を開いて魔力弾を飛ばしてきた

悪堵は魔力弾を右腕で殴って弾き返す
その隙に『兵士』Fと『兵士』Hは距離を詰め、拳打と蹴りを入れた
更に『兵士』Aが強烈な裏拳を叩き込み、悪堵はよろめいて膝をつく
前方から長い髪を靡かせる糸目の『兵士』Gが走ってきた
「ブシャァァァァァ……ッ。くそったれ……！この露出狂どもがぁ……っ！」
悪堵はヤケクソ気味にパンチを放つも、勢いが無い為直ぐに受け止められてしまう
その上、何発も打撃を入れられ――――右手を捻られて転がされた
『兵士』Gは悪堵を起こして強烈な平手打ちを頬にくらわせる
悪堵は正義の近くまで転がり、肩を借りて起き上がった
正義はこの芳しくない状況に歯軋りする
端から見れば裸の美少女達に囲まれたハーレム状態だが、幽神兄弟にとっては死活問題
「兄貴……ヤベェよ……っ。血が足りなくなってきた……！」
「くそぉ……ッ！こんな事で……俺達がぁ……ッ！」
歯軋りをどうしても止められない正義
そんな中、建物内に侵入していた一誠がアーシアを抱きかかえて飛び出してきた
それを見た正義のコメカミに青筋が浮かぶ

「へへッ、アーシアは返してもらったぜ！幽神ッ！今までよくも卑怯な手でやってくれたな。どうだ、散々バカにしてきた奴に出し抜かれた気分は？まあ、こんな素敵なおっぱいがいっぱいの策に引っ掛かって幸せ者だろうな、このムッツリ兄弟！」

今までのお返しと言わんばかりの罵倒に鬼の形相へと成り変わる幽神兄弟

特に正義の怒りは尋常じゃなかった

色仕掛けで惑わす彼女達を憎み、ふざけきった策を立案した一誠を憎み、そして何より……一誠の策にしてやられた自分自身を憎んだ

あらゆる方向に対する怒りと憎しみがかき混ぜられ――――遂に弾けた……

「おのれぇ……ッ！兵藤オオオオ……ッ！兵藤オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

怒り狂った様に正義は天に向かって咆哮を解き放つ

その声量や雰囲気は餓えた獣の如し……

正義の怒りに呼応したのか、左足の脚甲が激しく光り輝き――――軈て幾重もの刃がせり上がってきた

更にその光が正義を包み込み、彼を禁手（バランス・ブレイカー）の鎧人（よろいびと）へと変貌させる

だが、それだけでは終わらなかった……

右足と両腕にも刃が隆起し、両肩からは鉤状の爪が伸びてくる

そして背中から昆虫の様な翅(はね)が広がって羽音を鳴らす
真っ赤に光る双眸(そうぼう)が一誠を捉え、全身からオーラを放つ
オーラによる風圧が外壁を割り、木々を裂き、地を抉る……
「な……何だよ、このオーラ……!?昨日のあいつとは全くの別物みたいだ……ッ！」
一誠はアーシアをレイナーレ達に委ね、彼女達に退却するよう促す
レイナーレもこれ以上は足手まといになると理解し、元ディオドラ眷属達と共にアーシアを連れて去っていった
変化が終わった正義は全身から漂う殺気を鎮めて一誠を睨み付ける
「これで邪魔者は居なくなった。兵藤ォ、お前はもう殺すだけじゃ飽き足りない。お前が死ぬまで……地の果てまでも追ってやる……。自分から死にたくなるような苦痛と屈辱を永遠に味わわせてやる……ッ。今日がその記念すべき1日めになるだろうなぁ……ッ！」
「ハ、ハハッ……ヒャハハハハッ！兵藤！てめぇはもう終わり！終了！ジ・エンドだぁ！兄貴が完全にキレちまったぜぇ？ここまでキレた兄貴を見たのは俺も初めてだ！五体満足で帰れると思うなよぉ!?」
悪堵も右腕の籠手を光らせて禁手(バランス・ブレイカー)となった
その直後、悪堵の背中にも同じ様に翅(はね)が生え広がる

昨日とは比べ物にならない迫力を見せつける地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）に一瞬怯んでしまう一誠

そこへドライグが語りかける

『相棒、奴らの波動がより凶悪性を増してしまったようだな。特にあの緑色の方はまずい事に成りかねん』

「まずい事？何だよそれ？」

『奴の尋常ならざる怒りと憎しみで成長の伸び代が大きくなっている。下手すれば化けるかもしれんぞ。――――「神滅具（ロンギヌス）」に』

「ロ、『神滅具（ロンギヌス）』に!?冗談だろ！正義の神器（セイクリッド・ギア）にも、ドライグやアルビオンみたく何かが宿ってるってのか!?」

『そこまでは知らん。ただ……その〝何か〟が奴の憎悪で創造されてしまう可能性もある。あくまで可能性の話だが……神器（セイクリッド・ギア）自体、謎が多いからな。そう言った事例が起きてもおかしくない』

〝正義の神器（セイクリッド・ギア）がもしかしたら『神滅具（ロンギヌス）』に至るかもしれない〟

それは神と魔王が居なくなった現在ならあり得ない話じゃなかった

現に一誠は相反する白龍皇（はくりゅうこう）の力の移植に成功し、祐斗も聖と魔が融合した聖魔剣（せいまけん）を創り上げた

可能性があったからこそ実現出来た事例である

「だったら……そうなる前に倒すしかないって事だよな！ドライグ、行くぞォッ！
禁手化（バランス・ブレイク）！」
『Welsh（ウェルシュ） Dragon（ドラゴン） Balance（バランス） Breaker（ブレイカー）!!』
『赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）』から赤い閃光が迸（ほとばし）り、一誠は禁手（バランス・ブレイカー）――『赤龍帝の鎧（ブースステッド・ギア・スケイルメイル）』を身に纏った
相対する赤龍帝（せきりゅうてい）と地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）
彼ら以外居なくなった教会跡に小雨（こさめ）が降り始める……

闇皇の蝙蝠ＶＳ魔剣将官

「くそッ、次から次へと出てきやがるな」
「キリが無いでありますぅ～！」
フィリアンノ城から緊急出陣した新、シンク、エクレ、リコは大元たる闇人（やみびと）――――
伊坂威月（いさかいづき）がいるであろう場所を目指していた
しかし、道中にはまだまだ大量の闇人（やみびと）が構えており、蹴散らしても蹴散らしても向かってくる敵軍に手こずっていた
体力を温存しつつ伊坂の所へ行きたいのだが、現状はすこぶる芳しくない……
そんな時、闇人（やみびと）軍の中から何かが急速に伸びて襲い掛かってきた
シンクは神剣（しんけん）パラディオンを盾に変型させて防ぐ
新は伸びてきた物体を掴んで思いっきり引っ張った
引きずり出されたのは――――毒々しい紫色の体躯を持つ闇人（やみびと）で、新が掴んでいるのはそいつの右腕だった
その闇人（やみびと）は左腕を伸ばして新を刺そうとする
新は伸びてきた左腕も掴んで防ぎ、そのまま背負い投げの要領で地面に叩きつけた

「チッ、また来やがったか」
舌打ちする新の視線の先には――――強化されたであろう闇人(やみびと)が3体も走ってきた
それぞれ形の違う角や牙を生やした闇人(やみびと)は新達を翻弄するかの如くジグザグに走行しながら向かってくる
その上、量産型の軍勢も後を絶たない
大技で一気に屠(ほふ)ってやろうかと魔力を上げようとしたその時――――新達の後ろから風を切る様な音が凄まじい勢いで前方の闇人(やみびと)軍を吹き飛ばす
背後を見てみれば大剣を振り下ろした姿勢のダルキアンと忍者刀を構えるユッキーがいた
「ダルキアン卿！ユッキー！」
「皆の衆、ここは拙者とユキカゼに任せるでござる」
「後から直ぐに追い掛けるから心配無用でござる～♪」
「すまねぇ、恩に着る！」
新達は2人の厚意に甘んじて先を急ぐ事に
ダルキアンとユッキーは自分達を取り囲む闇人(やみびと)の軍勢に対し、お互いの背中を守る様にして武器を向けた
「さて、拙者らは未知なる魔物の討伐と参るでござる」

「心得ましてござる！」
４体の強化闇人を陣頭にした軍勢が一斉にダルキアンとユッキーへ飛び掛かっていき――――
「神狼滅牙、封魔断滅ッ！」
「紋章術、封魔陣ッ！」
２人の強大な紋章術の餌食となった……

――――

「はぁ……はぁ……はぁ……」
「おやおや、その程度の力しか出せないのかね？猫姫くん」
少し前に戦闘を始めたレオ閣下率いるガレット獅子団が誇る戦士陣……しかし、伊坂は焦る様子を微塵も見せず自前の剣の刀身を磨く
劣勢になっているのはガレット獅子団の方だった
先陣を切ったゴドウィン将軍は地に倒れ、レオ閣下とガウル、そしてジェノワーズも満身創痍で息を切らす
あまりにも実力差があり過ぎるせいか、伊坂は〝やれやれ〟と言った感じで嘆息する

「これではこの世界を崩壊させるのも安易過ぎてつまらないな。……やはり見所があるのは私と同じくここへ飛んできた闇皇ぐらいか。君達では少々役不足かもしれん」
「好き勝手に言ってんじゃねぇよ、この野郎ッ！」
侮辱された事に怒ったガウルが輝力武装の爪を出して駆け出す
ギラギラと闘志を迸らせて爪を振るった……しかし、ガウルの攻撃は悉く躱されてしまう
しかも伊坂はその場から1歩も移動せず、上半身の動きだけで……
「君の攻撃は単調でつまらない。まるで子供が駄々をこねて繰り出す打撃のようだ。君には少し外の世界の戦い方も教えた方が良いかな」
そう言うと伊坂はガウルの蹴りを屈んで回避した際に足元の地から砂を一握り採取
次にガウルが爪を突き出そうとした瞬間、左手の中に忍ばせていた砂をガウルの目に投げつけた
目の中に異物を入れられたガウルは視界を封じられ、目元を手で押さえる
その隙に伊坂は長剣の柄でガウルの鳩尾を突き、更に膝蹴りを入れた
目の痛みと窒息感に苛まれ、膝をつくガウル
そんな彼に伊坂は容赦無く長剣を振り下ろした
だが、それは間一髪レオ閣下の魔戦斧グランヴェールの乱入によって止められた

「おや、間一髪防いだか。感心感心」
「貴様ぁ！目潰しなど姑息な真似をしおって！」
「姑息？いったい何がだね？まさか猫姫は私が正々堂々と戦うのを期待していたのか？残念だが、私はそんな殊勝な計らいをする人柄では無いのでね」
バサッ！
伊坂は背中から青みがかった黒い両翼を広げ、翼から羽を幾重にも射出した
至近距離にいたレオ閣下とガウルはまともにくらってしまい、皮膚を切り裂かれる
そこへジェノワーズが２人を助けるべく一斉攻撃を仕掛けてきた
ジョーヌは輝力武装で雷の爪を手に纏い、ノワールはセブンテイルを展開
ベールは弓を構えて光の矢を無数に放った
「いくでぇ！虎王拳ッ！」
「……セブンテイル！」
「フラッシュアロ～ズ！」
まず無数の矢が上空から伊坂に向かって降り注いでいく
伊坂は左手から黒い霧を噴射し、壁の様な形を形成させる
更に自らの羽を１枚取り、それに焔を纏わせ――――霧の方へ投げつけた
焔に包まれた羽が霧の中へ入った瞬間、次々と爆発を引き起こして光の矢の群れを簡

単に消し去った
「この霧は私が調合した爆薬でね。よく燃える代物だよ」
伊坂は余裕を浮かべて説明しながらジョーヌの攻撃を躱(かわ)し続ける
ノワールの7つに分かれた尻尾による追撃も軽やかに回避し、剣戟で彼女達を突き放す
すると、ここで伊坂が溜め息をついた
「……やはりつまらないな、君達の戦い方は。もっと鬼気迫る臨場感に包まれるのが本来の戦(いくさ)と言う物だ。ままごと遊びを戦いと勘違いしている君達の戦い方はあまりにもヌルい。君達が苦労して退治したと吹聴する魔物とやらも、ただ君達が〝弱い〟から〝強く感じた〟だけじゃないのかね？」
またもやフロニャルドに対する侮辱を始めた伊坂にレオ閣下は怒りに震えて拳を握り締め、ジェノワーズも怒り心頭で再び連携攻撃を仕掛けていった
しかし、伊坂は長剣に焔を纏わせ――――円を描く様に回転斬りでジェノワーズを薙ぎ払う
吹き飛ばされたジェノワーズは地面を滑る様に転がされた
「やれやれ、何とも無様な」と伊坂が嘲笑う中、フロニャルド陣の援軍が空から飛来してきた

「レオ姉～！加勢しに来たのじゃ～っ！」
「レオ様～！ガウく～ん！」
来てくれたのはパスティヤージュ軍、先頭を絨毯の如き乗り物で飛んでいるのはパスティヤージュ国の領主クーベル
そして箒に乗っているのがパスティヤージュ国の勇者レベッカ
彼女達の周りにはブランシールと呼ばれるセルクルに酷似した大型の鳥が多数飛んでおり、その背中にはパスティヤージュ国の騎士達が搭乗していた
クーベルは自身が所持する宝剣（ほうけん）――――天槍（てんそう）クルマルスの銃口を地上にいる伊坂に向け、レベッカもライフルの様な晶術銃（しょうじゅつじゅう）ウィッチキャノンを構える
「ガーネットスパーク最大火力じゃ～！レベッカ、準備は出来とるか!?」
「いつでもＯＫですよ、クー様！」
「うむ！キャラウェイ、リーシャ！一斉射撃なのじゃ～！」
「「はいっ！」」
パスティヤージュ晶術騎士団の騎士でエッシェンバッハ騎士団の指揮隊長キャラウェイ・リスレと、飛空術騎士団の隊長リーシャ・アンローベもクーベルに続くように銃を構え、他の騎士達も同様に構える
全ての銃口にエネルギーが集められていき、射撃準備が整った

「ガーネットスパーーーーーークッ！」
「ウィッチキャノン！アステリズムストラーーーーーイクッ！」
クーベルとレベッカ、パスティヤージュ軍の騎士全員が強力なエネルギー砲を伊坂に撃ち放った
四方八方から迫り来る砲撃に伊坂は余裕の態度を崩さず、自前の長剣に蒼い焔を纏わせる
剣を横薙ぎに振るうと――――剣から巨大な炎の鳥が飛び出して砲撃を全て打ち消した
「にょおっ!?」
「そ、そんなぁっ！」
一斉射撃を容易く消された事に驚くパスティヤージュ軍に炎の鳥は勢いを止めず襲い掛かり――――騎士達を1人残らず呑み込んだ……
炎に焼かれたブランシールは〝けものだま〟と化した騎士達と共に地上へ落下していく
しかし、伊坂は生き延びている輩を見逃さなかった
間一髪クーベルを救出したレベッカとリーシャに狙いを付けた伊坂は両翼を広げ、高速で空へ飛び出す

彼女達の眼前で静止した伊坂は再び焔の剣を構えた
「空の散歩は楽しめたかい？」
「い、いつの間に!?」
「では、君達もそろそろ落ちたまえ」
焔の剣が２度振るわれ、Ｘ（エックス）字の斬撃――――魔剣技クロスフレイムがクーベル達を襲った
大きな爆発と炎が噴き上がり、クーベル達は墜落してしまう
しかも……先程の攻撃が致命的ダメージを与えたせいか、彼女達の衣服が見事に砕け散った
「にょわぁっ!?」
「ひゃあぁっ！」
「きゃあぁっ！」
クーベル、レベッカ、リーシャは悲鳴を上げて自分達の裸体を隠す
しかし、相手は戦闘狂……墜落していても容赦などしない
両翼を畳み、まるで戦闘機の様に降下してきた
燃え盛る焔の剣を構え、３人一緒に屠（ほふ）ろうとする
その瞬間、遠くから一筋の閃光が轟音と共に突き抜け――――クーベル達を救出、伊

坂の剣戟は空振りに終わった

3人を救出したのはボード状の乗り物に乗ったシンクと闇皇(やみおう)に変異済みの新

シンクはレベッカを抱え、新はクーベルとリーシャをそれぞれ左右の脇に抱える

「ベッキー、大丈――――ぶじゃないその格好！」

「ええっ？シ、シンク？……ッ！いやぁぁっ！見ちゃダメぇッ！」

「ちょっ！ベッキー！今だけはやめて！危ないから！」

「……ごめんなさい」

顔を真っ赤にして胸を隠すベッキーとなるべく彼女の方を見ないようにするシンク

まるで付き合いたての初々しいカップルみたいな空気でした……

「熱々だな、お二人さん」と新が茶化していると、クーベルがペチペチと鎧を叩いてくる

「あ、どうした？」

「の、のうアラタ……。助けてくれた事に関しては礼を言うのじゃ。じゃから……早く降ろしてもらえんかのう？いつまでもスッポンポンは恥ずかしいのじゃぁ……」

「それにどさくさに紛れてお腹周りを揉むのはやめてください！セクハラは犯罪です！」

「えー、緊急事態って事で勘弁してくれよ」

新は地上へ降りて2人を解放すると……助かったと言う安堵からか、クーベルはポロ

ポロと涙を流し始めた
「おいおい、どうした？そんなんでよく国の領主が務まるな。厳しく言うようで悪いが――――泣いてる暇なんか無いんだよ」
「うぅ……っ、確かにそうじゃぁ……。そうなのじゃが……やっぱり怖いのじゃぁ……っ。あんなのにウチらが勝てるとは思えんのじゃぁ……っ」
泣きじゃくるクーベルに新は兜を解除、素顔のまま言い聞かせる
「皆そう思ってる、気持ちは同じなんだよ。でも……誰かが戦わないと本当にこの世界は滅ぼされるぞ。良いのか？お前の大好きな国が、大好きな人が滅ぼされても良いのか？」
「……うにゅう……」
「俺は何の因果でこの世界に来ちまったのかは分からねぇけど、これだけは言える。身勝手な理由で滅ぼされて良い世界なんて１つも無い。だから俺は守る。守ってやるから今は泣き止め！泣くのは終わってからにしろ！」
新は再び兜を直して伊坂の所へ向かう
「随分と遅い到着じゃないか。そんなに我が軍に手こずっていたのかね？」
「少なくとも俺は手こずっていない。シンク、後の２人は何処に行った？さっきから姿が見えないんだが」

「あ、エクレとリコはベッキーを連れて服を取りに戻ってます」
「そんな事してる場合かよ……。ったく、しょうがねぇな」
新は悪態をつきながらも剣を取り出し、切っ先を伊坂に向ける
「……なあ、おっ始める前に1つ質問して良いか？」
「何かな？」
「昨日お前はこの世界を滅ぼすって言ったよな？滅ぼした後はどうするんだ？」
「何故そのような事を訊く？」
「単純な疑問だ。ここを滅ぼした後はどうする？俺やシンク達を殺した後、誰もいなくなった世界で何をする？ただ滅ぼすだけならバカでも出来るからな。……他に別の目的があるんじゃないのか？」
新は伊坂の目論見（もくろみ）にもっと探りを入れた
伊坂も元々は何らかの方法でこの世界に飛ばされてきた
それならここから元の世界に戻る方法を探すのが必然なのに、この世界を滅ぼす事を優先している
新はそれが解せなかった
質問に対して伊坂はこう答える
「君の言う事は尤（もっと）もだ。私も君と同じく向こうの世界から飛ばされてきた。だから、ま

ずやるべき事は〝この世界から向こうの世界へどうすれば戻れるのか？〟――――それを探す事だった。しかし、飛ばされてきた当時の私はそうする暇が無かったのだよ」
「どういう意味だ？」
「君も向こうの世界の者なら知っている筈だ。悪魔、天使、堕天使による三竦みの大戦を。そして……その大戦に我々闇人（やみびと）が乱入して悪魔、天使、堕天使を全滅させようとした事を。私はその大戦で生き残った者の内の１人だ」
「……ッ!?あの三竦みの戦争の生き残り……!?」
　伊坂のカミングアウトに新は目を見開かせて驚くしかなかった
『初代キング』が封印された闇人（やみびと）の勢力はガタ落ち、純正闇人（やみびと）の殆どが三竦みの戦争で死に絶えた筈
　なのに、異世界に逃げ延びて健在していた……
　どういう事なのか尋ねる前に伊坂が説明に入る
「『初代キング』が封印された時はもう逃げの一手しか無かったな。それだけ『初代キング』の力は大きかった。右腕として貢献してきた私も絶望に駆られ、重傷を負い、他の者達と同じ様に駆逐されてしまうのかと嘆いたものだ。そこで私は当時未完成だった次元転移（じげんてんい）の術式を使った」
「次元転移（じげんてんい）？」

「簡単に言えば過去から未来へ無理矢理移動させる術。君達が使用している転移魔方陣の上位版だと考えれば分かり易いだろうね。その次元転移で私は〝三竦みの戦争が終わった未来〟へ逃れようとした。しかし、未完成だった上に重傷を負ったせいで力を完全に制御出来なかったのが災いしたのか……術が大きく乱れ、間違ってこの世界に飛ばされてしまった――――と言う事だ。まあ、手違いはあったものの、これで良かったのかもしれないな。お陰で大戦時の傷を癒せただけでなく、更に強化出来たからね」

伊坂の意味深な言葉に訝んでいると、伊坂は自身の首に長剣を宛がい――――そのまま首を斬り落とした……

突然の凶行に周りは悲鳴を上げ、新とシンクは呼吸すらも忘れてしまう程愕然としただが、それ以上の光景を直ぐ目の当たりにする

首を斬り落とされた伊坂の体は独りでに動き、地に落ちた伊坂の首を拾い上げる

更には斬り落とされた筈の伊坂の首が不気味にほくそ笑み、新とシンクに視線を向けた

「この様に首を斬り落とされても私は死なずにいる。これはある意味、この世界が与えてくれた産物と言う事だ。〝魔物〟と呼ばれる存在と作用を知った私はそいつらを殺し、喰らい続けた」

「……魔物を……喰った……？」

その言葉にシンクは更なる衝撃を受けた
このフロニャルドには民や自然、国に実害を与える〝魔物〟と呼ばれる脅威が存在しており、正体は各地の精霊や動物が何らかの原因で突然変異し、凶暴化した物だと言われている
通常ならば戦って元に戻せるのだが……伊坂はそれらを殺した挙げ句、喰らってきた事を暴露した
「我々闇人（やみびと）にとって生物の血肉は食糧であり治療薬でもある。手近な魔物を喰らい続けた結果――――この実態に気付けた。かつて多くの魔物を退治し続けた剣士も今の私と同じ様に〝死なない体〟となったのだろう？」
「死なない体となった剣士？誰だよ？」
「……ダルキアン卿と、そのお兄さんのイスカ・マキシマさんです……」
ダルキアンの名を聞いた新に戦慄が走る
昨日まで剣を交わした相手が魔物の血によって不死身になってしまった等と聞かされては無理もない……
伊坂は首を元通りに接合しながら話を続けた
「そう、ブリオッシュ・ダルキアン――――本名ヒナ・マキシマは幼少時に故郷を魔物に滅ぼされ、兄のイスカ・マキシマと共に魔物を退治し続けた。その際に浴びた魔物の血

によって〝不老不死の呪い〟を受けたそうだ。そこで私はもう1つのプランを思い付いた。魔物を退治する君達を滅ぼした後、私と同じ様に他の闇人(やみびと)にも魔物を喰わせ、不死の軍団を作る事も出来ると。私はそのプランの成功者第1号だ。そして不死身と化した軍勢を率いてこの世界を脱出する。それが私の今の計画だ」

「マジ、かよ……」

伊坂の計画に新は畏怖せざるを得なかった……

ただでさえ凶悪な闇人(やみびと)が不死身になってしまったら、もはや対処しようが無い

だが、それは新に〝この男を絶対に逃がしてはならない〟と言う決意を固めさせた

改めて剣を構えようとした時、シンクの様子がおかしい事に気付く

「……そんな事の為に……そんな事の為に、あなたはフロニャルドを……姫様達を滅ぼそうとしてるのか……!」

「何か問題でも?」

「魔物だって……元々は優しい精霊や動物達なんだ……!今なら元に戻せるんだ!元に戻せる命を……あなたは奪ってきたのか……ッ!」

「弱き命など所詮強き者に喰われる宿命。その死骸が私達の強さの向上に繋がるなら本望じゃないのか?」

無慈悲で冷酷な伊坂の言葉に――――シンクは遂に怒りを爆発させた

「命をッ！命をバカにするなあぁぁぁぁぁぁっ！」
シンクは地面を蹴って凄まじいスピードで飛び出し、神剣パラディオンで斬り掛かる
伊坂は神剣パラディオンの一撃を片手で止めた
「おやおや、君も感情に流され易い人格だな。そこで無様に呻いている猫王子くんと同じか」
伊坂は両翼から幾重もの羽を射出してシンクの体を切り刻む
無数の羽をくらったシンクは飛ばされ、地を滑る様に転がる
追い討ちに伊坂は蒼き焔の渦を解き放つが、それは新が振り下ろす剣によって掻き消された
「本当にトンでもない事を企んでいるな。今まで会ってきた闇人（やみびと）の中じゃ最悪の部類だ」
「フッ、私から言わせれば君達の方こそ最悪だと思えてならんよ。神聖なる戦いを興行等に堕落させているのだから」
「ヘッ、この世界が気に入らないならさっさと出ていけば良いだろ。破壊させてたまるかよ！」
ダッシュで距離を詰めた新は横薙ぎの剣戟を見舞うが、伊坂の長剣がそれを止める
刀身に魔力を込めて何度も斬り掛かれば、伊坂も同じ様に焔を纏った長剣で対抗して

きた
高速で苛烈な剣戟合戦が始まり、辺りに金属音と火花、打ち付けた時の余波が飛び交う
伊坂が両翼を広げて空へ飛び上がると、新もマントを翼に変えて空中へ飛び出した
地上から空中へ剣戟合戦の場を代えた2人
激しく打ち合うその光景はまさに死闘と呼べるものだった
「やはり君が1番の障害になり得るね。何せ『初代キング』が所有していた鎧を纏っているのだから。しかし、不死身と化した私に勝てるかな?」
伊坂は焔の長剣を振るって炎の鳥を幾重にも出す
それぞれが意思を持っているかの如く自在に動き回り、四方八方から襲い掛かる
新は避けながら『僧侶』形態にチェンジ
両肩のキャノンと銃を別々の方向に向け、高密度に高めた魔力を掃射した
炎の鳥は魔力で掻き消したが、伊坂は既に魔剣技クロスフレイムの構えに入っていた
2度振るわれた長剣からX字の斬撃が直進、新を地面へ落とした
めり込んだ地で血反吐を吐く新の鎧にはXマークが刻み込まれ、その近くに伊坂が降り立つ
「どうした。もう終わりかね?」

「ガハ……ッ！ま、まだまだ……ッ！こんな傷、なんて事はねぇよ！」
体を起こした新は再び伊坂に斬り掛かったが、焔の長剣で防がれる
しかし、新は予測していたかの様に剣から手を離して徒手空拳に切り替え、魔力を込めた打撃や蹴りで伊坂の腹を集中攻撃
更に両手を合わせた掌打（しょうだ）で伊坂を吹き飛ばした
１度手放した剣を再び握り、自分も飛び出して伊坂の腹を貫く
強烈な連続攻撃、普通なら重傷は否めないが……
「なかなか素晴らしい攻撃だ。こう言う過激さこそ、戦いの醍醐味だ。しかも、不死身と化した私を相手にしているのに全く戦意を落とさない。大した闘争心だ」
「俺は１度、不死身の奴と戦った事があるからな。何度でも復活するなら――――何度でも殺してやる！ただ、今回はそう簡単にはいかねぇようだが」
「分かっているじゃないか」
ギンッ！
伊坂の胸にある目玉が妖しい輝きを放った瞬間、新の体が独りでに宙を舞う
動かそうとしても自分の意思では動いてくれない……
伊坂が両翼から無数の羽を射出しながら言う
「念動力（サイコキネシス）と言う超能力をご存知かな？触れずに物体を動かす力だ。私の胸にある眼はそ

の力を発する事が出来る」
「くそったれ……！エスパータイプかよ……！」
悪態をつく新の周りで構えている無数の羽は一回り大きくなった刃と化し、一斉に新の全身へと突き刺さった
傷痕と口からまた血を吐き出す新を、伊坂は容赦無く地面に叩きつける
頭を掴んで持ち上げた伊坂は先程のお返しとばかりに、焔の拳で新を殴り飛ばす
殴り飛ばされた新は岩に激突し、崩壊した岩の破片に埋め尽くされる
伊坂の圧倒的な力にシンクも動けなくなった……
「そ、そんな……アラタさん……！」
「ここで終わりにするのも一興だが、遅れてやって来た者達も歓迎してやらねばならんようだな」
新と戦ってる間に終結したフロニャルド陣営を見据える伊坂
ビスコッティの領主ミルヒ、闇人（やみびと）の討伐を終えたダルキアンとユッキー
ガレットの勇者ナナミにパスティヤージュの英雄王アデルと魔王ヴァレリー
装備を直してきたレベッカとエクレ、リコも戻ってきた
だが、目の前の惨状を見て言葉を失う……
ボロボロにされたガレット軍とパスティヤージュ軍、傷だらけのレオ閣下達

更には瓦礫に埋もれた新
残酷な光景にミルヒは涙を流した
「酷い……っ」
「酷い？随分と甘い考えを言うものだな、犬の姫様。私の元いた世界では当たり前の光景だぞ。君達が遊びでやっている戦いとは次元が違う」
「貴様ぁ！姫様を侮辱するなぁっ！」
激昂したエクレが鞘から双剣を抜いて斬り掛かろうとする
伊坂は全身から焔のオーラを噴き出し、両手を広げると同時に莫大な規模の衝撃波を解き放った
伊坂を中心とした衝撃波はフロニャルド陣営を呑み込み、大地も木々も全て焼き尽くす
衝撃波が止んだフィールドには傷だらけで横たわる勇者や騎士達の姿があった……
装備もボロボロにされ、圧倒的な力の前に戦意は萎えかけていた
伊坂は自らの羽を１枚千切(ちぎ)り、火を点けたそれを煙草(たばこ)代わりに吸う
一服を終えた伊坂は周りを見渡しながら更に罵倒を重ねる
「やはり何も出来ないではないか。平和と言う理想を掲げた所で力が無ければ灰塵(かいじん)に帰(き)するのみ。それを無理強(むりじ)いする方がよっぽど悪だ」

「ふ、ふざけるな……！身勝手に命を食い荒らし、愚弄する貴様に善悪を区別する資格などありはせぬ……ッ！」
レオ閣下が魔戦斧(ませんぶ)グランヴェールを杖代わりにして体を起こし、両手で握り直すが――
――伊坂はフッとその場から姿を消し、レオ閣下の眼前に現れた
「戦いを嬉々としているが、心の底では臆病風に吹かれている。粗末な力しか持ってない猫姫」
ドンッ！
伊坂の蹴りがレオ閣下の防具を砕き、彼女は血を吐いて地面に突っ伏す
「レオ様……レオ様ぁ！」
「如何にも守られてばかりの情けない微弱な犬姫」
ドゴッ！
瞬時に移動した伊坂は倒れていたミルヒを蹴り飛ばし、直ぐにまた消えるように移動
踞(うずくま)っていたクーベルの尻尾を掴み、そのまま持ち上げる
「ひにゅうううっ！」
「領主の威厳も力も足りない無力なげっ歯類の姫」
伊坂はクーベルを投げ捨て、シンクの前へ足を運ぶ
「そして偽善ばかり並べ立てる脆弱(ぜいじゃく)な勇者もどき」

伊坂の拳がシンクの腹に深々と刺さり、シンクは血と共に内容物を吐き出した
一瞬空中に浮いたシンクの体が地上に落ち、背中を伊坂に踏みつけられる
もはや面白味は無いと思ったのか、伊坂はシンクを足で小突いて転がし、両手を広げながら言う
「これで分かっただろう？この世界がどれだけ無駄で無力で無価値な物に覆われているか。偽りの戦（いくさ）で支えられている世界など必要無い。……と言っても、口で諭すのは無駄骨の様だな」
伊坂は再びレオ閣下の所へ歩み寄り、仰向けに倒れている彼女の首筋に長剣を向けた
「見せしめにまず猫姫の首を飛ばすとしよう」
「……ッ……ッー」
「ハハッ、怯えているのかね？心配しなくても良い。痛みは一瞬で消える」
長剣が伊坂の頭上に到達した刹那、風を切る音と共に振り下ろされた
レオ閣下は情けないと頭では分かっているものの、本能から来る恐怖に勝てず……自分の最期を悟って目を閉じた
ズシュッ……！
肉を切り裂く不快な音
そして自分の頬に水滴が落ちた様な感覚で不意に目を開けてみると――――伊坂の

凶刃を両腕で防ぐ者の姿があった……
「……ッ。ア、アラタ……ッ」
「やれやれ、君もしぶといね」
「悪いが、いつまでも寝ていられねぇんだ……ッ！」
新は腕に食い込んだ長剣を強引に押し返す
兜は半分割れ、鎧もボロボロ、全身蜂の巣状態で血を流し続ける新
伊坂は長剣を振って刀身に付着した血を落とす
「まだ抗(あらが)うつもりかね？いくら足掻(あが)いた所で今の私を滅ぼす事は出来ない。不死身と化した時点で私が滅びると言う運命は既に尽きた。諦めた方が利口だと思うのだが？」
「生憎(あいにく)、俺はそんな事を素直に聞き分ける頭を持っていない……。今、俺の頭の中にあるのは――――テメェをここでぶっ倒すッ！それ以外考えてねぇよッ！」
「そこまでしてこの弱き者達と平和ボケの世界を守りたいのか？」
「少なくとも俺やテメェみたいな外から来た奴に、このフロニャルドの存在を否定する権利は無い。いや、寧ろこう言う世界はあるべきだ。国中の人々が明るく楽しく暮らせる世界……。それを部外者が邪魔したり、破壊するのは大間違いだ！――――この世界の在り方はこいつらが決める事なんだよッ！」
新は腹の底から叫び、伊坂の思想を真っ向から否定する

彼の熱弁にシンク達は勿論、フロニャルドの騎士達全員が心を打たれた
対して伊坂は頭を痛める動作の後、再度長剣に焔を纏わせる
「では、仕方が無い。ここで灰になってもらおうか。異世界の風に乗って散りたまえ」
「そうはいかねぇ。こんな良い世界を破壊させてたまるか！俺が１番嫌ってる奴の技をパクってでも止めてやるッ！」
そう言うと新は剣を構え、全身から溢れ出す魔力のオーラを刀身に集める
刃から電撃に酷似した魔力が迸（ほとばし）り、バチバチと広がる
伊坂も迎撃すべく長剣に焔を纏わせ、更に出力を上げた
準備が完全に整った瞬間――――お互いの必殺剣（ひっさつけん）が同時に繰り出された
「クロス・バーストオオオッ！」
「クロスフレイムッ！」
地面を斬る様に振るった新の剣から出た波動は大地を抉りながら突き進み、伊坂の剣から放たれたＸ（エックス）字の斬撃は大気を焦がしながら猛進していき――――２つの技が激突した刹那、辺り一帯は巨大な閃光と爆煙（ばくえん）に包み込まれた

希望の赤龍帝、絶望の地獄兄弟

ポツリポツリと小雨が降り始めた教会跡
寂れた教会の前で小さな雨粒に打たれながら対峙している3人の男がいた
虚を突いてアーシアの救出に成功した赤龍帝・兵藤一誠
その策に嵌められた憤りで更なる進化を得た幽神正義
傍らには弟の幽神悪堵
3人は各々の禁　手の鎧に身を包み、戦闘開始のタイミングを計っていた
正義は足首を回すストレッチをしながら言う
「……いよいよだな、兵藤。今日この場でお前を完膚無きまでに叩き潰してやる。俺達兄弟の汚点の始まり、元凶、原因であるお前をなぁ……」
「ハゲとメガネのクズどもと同じ様に、判別不可能な面に整形してやるぜ?その後はテメェが吐き出した血反吐の上をゴキブリみたいに這わせてやる」
悪堵は右手の開閉を繰り返して指を鳴らす
一誠は固唾を飲み込んで右足を引き、突撃の構えを取った
小雨の音以外何も無い静寂の空気……

その中で1人の――――赤き眼孔が光った（正義）

「「――――ッ！」」

赤く小さな輝きを合図に3人が凄まじい勢いで地を蹴って駆け出し――――正義は左足での蹴りを、悪堵は右の拳打を見舞おうとした

一誠は反射的に両拳を突き出し、それぞれ繰り出されてきた一撃めと衝突

その刹那、打撃の余波が雨粒を掻き消した

鎧を劈（つんざ）き、骨まで達する衝撃が一誠の顔を歪ませる

『……ッ！威力が昨日とは段違いだ……！』

兜の中で歯を食い縛り、力負けしないよう必死に耐える一誠

対する幽神兄弟は体幹を回して蹴りと拳打の威力を底上げさせた

インパクトが跳ね上がった2つの打撃に一誠は吹き飛ばされ、滑る様に後方の塀に激突

瓦礫と土煙を頭から被り、それを腕で振り払う

起き上がろうとした矢先――――前方から鋭い斬撃と波動弾が飛んできた

一誠は横っ飛びで回避しようとするが、運悪く左足に食らってしまい装甲と肉が弾け飛ぶ

抉られたふくらはぎを手で押さえ、欠けた部分の鎧を形成し直す

その間に幽神兄弟は一誠を挟み込むような立ち位置に着いた
一誠は直ぐに両掌に魔力を溜め、更に倍加の力を促す
『Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ!!』
全身から赤いオーラを揺らめかせ、魔力の滾った右手を正義に、同じく左手を悪堵に向けた
掌に集められた魔力は徐々に質量を増す様に鳴動していき――――一誠の叫びと同時に解き放たれた
「ツイン・ドラゴンショットオオオオオッ!」
両手から膨大な質量の赤い魔力が帯状に放たれ、標的たる幽神兄弟に向かっていく
正義は左足の脚甲を光らせて突き出た爪に黒みがかった緑色のオーラを纏わせ、悪堵も左腕から隆起した針に危険な密度のオーラを集束させた
眼前にまで迫ったドラゴンショットを正義は左ハイキックで両断
悪堵も左腕の針の一撃で真っ二つに裂いた
ドラゴンショットを退けた正義は背中の翅を羽ばたかせ、上空へ飛び出す
地上に残った悪堵は左腕の針を一誠に向け、無数の針を射出した
そこから更に背中の翅を広げ、先に飛ばした針の群れを加速させる様に追い風を送り

込む
　速度が上乗せされた針の群れは貫かんとする勢いで一誠の鎧に突き刺さり、一誠は苦悶の声を上げる
「ぐっ、がぁあぁぁ……ッ！」
「まだまだお寝んねするのは早えぞ！」
　悪堵の左腕にオーラが流れ込み、再び幾重もの針をミサイルの如く射出した
　ただし、今度のは先程飛ばしたのとは様相が違い――――血走ったような目玉が付いていた
　一誠は撃ち落とそうと魔力弾を放つが、針の群れは意思を持ったかの様に散開して飛び回る
「な、何だよこれ！」
「残念だったな、兵藤！こいつはさっきのヤツとは違って自由自在に動き回るんだよ！ついでだ、こいつも食らわせてやらぁッ！」
　悪堵が左腕を構え直すと、隆起した針が一回り肥大化する
　静かに鳴動を始めた悪堵の左腕に危険を察知した一誠は直ぐに阻止しようとするが、周りを飛び交っていた針の群れが一誠の両足を刺し貫く
　その上、群れの内の２本が足の甲を貫いているので動く事が出来ない……

そうしてる間に悪堵は左腕のチャージを終えてしまった
「準備良いぜ、兄貴！」
悪堵がそう叫ぶと、上空で待機していた正義は羽音を立てながら高速で急降下していく
左足からは既に高密度に溜めたオーラが漂っており、一誠を照準に捉えている
突き刺さった針のせいで動けない一誠の背中に錐揉(きりも)み回転しながら激突した
鎧ごと背中から腹を突き抜ける衝撃により、一誠は口から多量の血を吐き出す
骨や内臓を隅々まで破壊せんとばかりに強烈な回転を加え、一誠を無理矢理悪堵の方へと押し進めていく
「射程距離だ、相棒！」
「任せな！エクスプロード・パイルッ！」
ドシュウウンッ！
オーラか滾(たぎ)る悪堵の左腕から炸裂音と共に肥大化していた針が打ち出され、まるで杭の様に急激なスピードで伸びていく
それを見た正義は巨大杭と自らの蹴りで押し進めている一誠の距離が近付いたのを見計らい、一誠を踏み台にしてその場から離脱
蹴飛ばされた一誠は勢いを止められないまま巨大杭に腹を貫かれてしまった……

ゴプッ……！

一誠の口から血の塊が飛び出し、悪堵の左腕に着弾する

寸分の狂い無く鎧ごと一誠の腹を貫いた針を引き抜いた悪堵は、血を拭いながら嘲笑う

「ハッハッハッハッハァッ！ザマァねぇよなぁ？兵藤、結局テメェは飼い主や腐れ仲間と共に来ようが単独で来ようが、卑怯な手を使おうが使わなかろうが俺達には勝てなかったんだからよぉ」

正義が羽音を立てて一誠の背後に降り立ち、蹠（うずくま）っている一誠を見下ろして言う

「兵藤、お前は何か苦労した事があるか？筆舌に尽くし難い物事に耐えた経験があるか？挫折と屈辱にまみれた道を歩いた事があるか？嘲笑、嫌悪、哀れみの視線を四六時中浴びた事があるか？……ある訳無いよな。お前は今後の人生や将来など考えず、目先だけを見て生きてきた典型的な劣悪思考の持ち主。昔の俺達は両親と教師、生徒、世間からも期待され続けた。プレッシャーも半端じゃなかった。目の前だけじゃなく、先の先の事まで考えてやらなきゃならなかった……。常にプレッシャーを感じながら生きてきた俺達が落ちこぼれ、何も考えずにやりたい放題やって来たお前らは順風満帆な生活を送っている……こんな理不尽な差別が許されると思ってんのか……っ？」

徐々に怒りの色を滲ませた正義は一誠の脇腹を蹴る

風穴を開けられた腹部に激痛が駆け抜け、一誠は声にならない絶叫を漏らしてもがき苦しむ

「だが……お陰で俺達は世の中のシステムに気付く事が出来た。落ちぶれた奴が地の底から這い上がるには他者を蹴落とすしか無い。そして落ちこぼれ人生を圧倒的に覆すには――――相手を徹底的に憎み、地の底の底まで落とすしか無い！俺達は既にお前の手によって落ちる所まで落ちた！後はもう引きずり込むだけだ！お前も！お前の主人も！仲間も！親も！お前に関わってるもの全てを地の底に引きずり落としてやる……ッ！」

正義が一誠の最も負傷している腹部を足で捻る様に踏みにじる

一誠は苦し紛れにその足を掴んでツイスト攻撃を止めようとする

「幽、神……ッ！そんな考え……間違ってる……ッ！」

「何だと？」

「相手を憎みきるのが、落ちこぼれの勝ち方だって……？そいつは大きな間違いだ……ッ！俺だってなあ……俺だって最初はド〇クエの序盤に出てくるスライム並みだったんだよ……。魔力が低過ぎるから転移も出来ない、悪魔になっても自分の翼で飛べない、初めて出来た彼女には1度殺されたし……初参戦のレーティングゲームも俺が弱かったから負けちまった……ッ。悔しかったよ、心底自分の弱さを呪ったよ……ッ。

けど、相手を憎むだけじゃ強くなんかなれない！負けたくないから、仲間を守りたいから必死に鍛えてきたんだッ！」

「守るだと？ふんっ、全てを失った俺達から言わせればくだらない考えだな」

「くだらくなんか……ない……ッ！」

声を絞り出し、正義の足を何とか払い除けた一誠

立ち上がって戦闘体勢を整えるものの、その肉体は傷だらけ血だらけ……

それでも一誠は幽神兄弟に向かって叫ぶ

「〝守る〟ってのは〝立ち向かう〟事と同じなんだ……ッ！自分の前を塞ぐ壁や障害、困難に！なのに……お前らは〝ただ逃げ回ってる〟だけじゃねえかッ！何もかも他人のせいだと決めつけて、自分のダメな部分を認めないどころか目を背けてる！自分に言い訳ばっかして他人の大事な物を傷付けたり、壊して逃げ回ってる様にしか見えねえんだよッ！悔しいなら、本当に悔しいなら乗り越えろよ！逃げるだけじゃ何も解決しないんだよッ！」

一誠の放った一言一句に耳が痛くなったのか、正義は大きな舌打ちをした

「……いつから妄言じみた説教をするようになった？仮面優等生のつもりか？〝今からでも遅くない、やり直せる〟とでも言って過去の罪を帳消しに出来ると思ってるのか？笑わせるな、兵藤。俺達兄弟が失った物はもう２度と元には戻らないんだよ。全て遅過

ぎた……」

「そんな事は――――」

「〝そんな事は無い〟とでも言うつもりか?……ナメてんのか、クズの分際で。そいつはクズの常套句、手を貸す義理を欠片たりとも見せない奴の言い訳だ!1度死んだ信頼、人間関係は2度と戻せないッ!どれだけ誠意を示そうが認めない、認めようとしない奴は星の数ほど存在する!立ち向かえだと?それが出来たらこんな苦労してないんだよッ!誰もそのスタートラインに立つ事すらさせなかった!その状況を作ったのが他でもない貴様らなんだよォッ!結局は貴様らも同じ穴のムジナ!自分が犯した過ちから逃げてるだろうがッ!それを言うに事欠いて立ち向かえ!?ふざけるなクズがァッ!恥を知れッ!俺達を許さないなら、最後まで冷徹な態度を貫け!偽善も甚だしいんだよッ!他人の人生を壊した奴が偉そうに説教するなァッ!」

声を荒らげてありったけの怒りを吐き出す正義の剣幕に一誠は沈黙、畏怖するしかなかった……

あの時、救いの手を差し伸べなかったのは事実……

幽神兄弟を許さないと決意した一誠の心に乱れが生じ、いつの間にか動きを止めてしまっていた

一誠の背中に重い何かがのし掛かる様な錯覚が起こり、言い難い罪悪感に苛まれる

正義は尚も怒り、憎しみ、恨み辛みを吐露しながらズカズカと一誠の方へ歩み寄っていく

「このクソ悪魔、ド悪魔が。下手くそに人の神経を逆撫でしやがって……ッ！そう言うのが1番不愉快だ！お前が口に出してるのは詭弁！建前！偽りで塗り潰した身勝手な正義感でしかない！心の奥底では他の奴らと同じ様に〝死ねば良い〟と嘲笑ってんだろうがッ！」

「ち、違う！そんな事は――――」

「いい加減に気付けよ。……アーシアって言ったか。俺達があの女を拐ったのを知った時、お前の中で腹を掻き回される様な感覚が沸いた筈だ。もっと言えば俺達があのハゲとメガネをやった時、お前はこう思った筈だ――――〝殺してやる〟と」

その言葉に一誠は更に固まり、幽神兄弟に対する感情を思い起こした

確かに緊急搬送された松田と元浜の姿を見た時、一誠の頭の中は激しい怒りで埋め尽くされていた

〝幽神兄弟が憎い、殺してやる〟と思ってもおかしくない程に……

核心めいた感情を突かれた一誠は無意識に顔を俯かせた

その様子を図星だと捉えた正義は嫌悪して唾を吐き捨てる

「やっぱりそうだったんだな。綺麗事を並べた所で結局同じ、上っ面だけの正義を掲げ

てる偽善者――――それがお前の正体なんだよッ！」

ドゴッ！

正義のダッシュキックが一誠の腹に突き刺さる

先程風穴を開けられた腹部に更なる激痛が駆け巡り、一誠は意識を手放しそうになった

追撃を止めない正義は一誠の頭を両手で掴み、渾身の左膝蹴りを顔面に見舞った

その衝撃で一誠の兜は儚い音を立てて砕け、顔の右半分が露出する

膝蹴りの一撃で倒れそうになる一誠に正義は追い討ちを掛けた

距離を詰める様に跳び、右膝を一誠の首に密着させ――――そのまま全体重を掛けて押し潰した

呼吸の通り道である気管を潰された一誠は呼吸困難に陥り、首もとを押さえて苦しむ

しかし、それでも正義の凶行は止まらない……

両肩から鉤状の触手を伸ばして一誠の大腿部を左右共に貫き、完全に動きを封じる

そして左足に凶悪且つ膨大なオーラを集めてトドメの構えを取った

悪堵も横に並んで右腕に凶悪なオーラを流し込んだ

「分かったか、兵藤？恨み憎しみを向けない奴なんてこの世に存在しない。当然、それが当たり前なんだよッ！お前はその当たり前に対する認識が甘かった！いや、寧ろ理解す

らしていなかった！生きている限り、誰かを恨まない憎まない人生なんて物は存在しないッ！」

〝やっぱり、誰かを恨み続けても傷付くだけだと思うんです……〟

憤(いきどお)りを吐き出す正義の脳裏にアーシアの言葉が再生された

昨夜アーシアに言われた言葉が鮮明に甦(よみがえ)り、正義を支配している怒りと憎しみの感情を揺らがせようとする……

『何故こんな時にあの女の言葉が、あの悲しげな顔が頭を過(よぎ)ってくるんだ……!?俺は、俺達はあの女に悲しまれる覚えは無いのに……ッ！』

理解不能の事態に歯軋りした後、アーシアの虚像を振り払うかの如く首を横に振り――――矛先を一誠に向けた

『俺には……必要無い……ッ。地獄に落ちた俺達には……ッ！誰かからの哀れみも！感傷も！同情も！……何もいらない……求めていないんだ……ッ！』

正義はトドメの一撃を与えるべく背中の翅(はね)を羽ばたかせ、前方へ突き進む

両足を封じられて動けない一誠の心を完全に折ろうと、正義は〝自分への言い聞かせ〟も含めた罵倒を吐き出した

「お前が積み重ねてきた偽りの正義感もこれまでだ！世の中のシステムを理解してないあの女の言葉も全て打ち消してやる！〝落とす側〟と〝落とされる側〟しか存在しな

い世界に〝救い〟があると勘違いした挙げ句、絵空事の妄言虚言を吐き連ねやがって！祈った所で誰も救えねぇんだよォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」

ピク……ッ

正義の暴言に一誠の右手の指が一瞬だけ動き、徐々に握り拳を作っていく

放出するオーラの轟音と共に迫り来る鎧人の蹴り足に対し、一誠は――――

「ウアァァァ

もあったのに……それでも周りの人達を恨んだりしなかった！憎まなかった！凄ぇよ……充分凄ぇんだよアーシアは……ッ！お前らの事も救いたいって言ってたぐらいだ……ッ！優しい娘なんだよッ！そのアーシアの優しさをバカにすんじゃねぇッ！」

「嘘だ……嘘だッ！嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ！そんなのは自分の点数稼ぎ！偽りの感傷！理想を他に押し付けて陶酔しているだけに過ぎないッ！」

「兄貴の言う通りだ！世の中には生きてる奴全員が救われる方法なんて無ぇんだよッ！」

「アーシアはそんな打算で動くような娘じゃないッ！アーシアがいたから、俺はここまで来れた。部長や皆を守れるぐらい強くなりたいと思えた！アーシアの優しさに嘘偽りなんて無い――――全部本物なんだッ！」

一誠の反論に幽神兄弟の気迫が薄れてしまう

一誠の心を折るつもりで放った罵倒が逆に発破を掛け、自分達の士気が揺らがされた……

精神攻撃は不利だと判断した正義は地を踏み鳴らし、両肩から伸びる鉤状の触手を左足に絡ませていく

螺旋状に絡み付いた触手は硬質な装甲へ変化し、高速回転を始める

「いい加減もうウンザリだ！希望に恵まれたお前らの戯れ言などォッ！この一撃で砕い

てやるッ！行くぞ、相棒ッ！」
「ああ、兄貴！あの腐れ兵藤の希望なんて叩き潰してやろうぜッ！」
悪堵の右腕にも鋭い爪の如き刃が生え、凶悪なオーラに包まれていく
どうやらその攻撃を最後の一撃にするようだ
一誠も今までに無いオーラを放出し、拳打の構えを取る
「俺は守るッ！何があってもアーシアを！部長を！皆をッ！理不尽な悪から守ってみせるッ！俺はグレモリー眷属の『兵士（ポーン）』で、赤龍帝（せきりゅうてい）・兵藤一誠ッ！そして――――子供達のヒーロー『おっぱいドラゴン』なんだッ！逃げてばかりの腑抜け兄弟なんかには負けねえッ！」
「ほざけ、エセヒーローのクズがァッ！そんな偽善と詭弁を振り撒いて生き残れると思ってんのかァッ！」
正義と悪堵――――絶望を糧（かて）にする地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）は翅（はね）を広げて飛び出す
猛然と回転する左足、禍々（まがまが）しい刃を生やした右腕が赤龍帝（イッセー）を殺さんとする勢いで突き出された
「エクスプロード・ギムレットオオオオオオオオオオオッ！」
「エクスプロード・フィストオオオオオオオオオオオオッ！」
今まで培（つちか）ってきた怨嗟（えんさ）を全て吐き出すが如く放たれた幽神兄弟の一撃……

その様相は――――まるで彼らの背後に死神や怨念の化身が幻影となって映り込み、一誠を引き摺り込もうとしているようだった……

とてつもない気迫、決死の攻撃、覚悟を決めた殺意……！

並々ならぬ重圧（プレッシャー）が一誠を圧殺（あっさつ）しようとする

しかし、覚悟を決めたのは一誠も同じだった

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

せるッ！」
「「寝言は寝てからほざけェッ！兵藤オォォォオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」」
「幽神ィィィ

どうやら先程の一撃合戦で多大なダメージを受けてしまったようだ
気に食わない結果に悪堵は舌打ちしてから血の塊を吐き捨てる
「……生きてるか、相棒……」
「何とか、な……。兄貴もヒデェ状態じゃねぇか」
兄の幽神正義(ゆうがみまさよし)も死は免(まぬが)れたものの、無事と言う事は無かった
彼の現状は悪堵よりも酷いもので、自慢の左足はあらぬ方向に折れ曲がっており、折れた骨が足の甲から飛び出していた……
動かせない左足を引き摺り、悪堵に肩を貸してもらう
兄弟共にボロボロで、恐らくこれ以上の戦闘は不可能に近い……
「ところでよぉ……兄貴、クソ兵藤は……殺ったのか？」
悪堵の問いに正義はふて腐れ気味に鼻を鳴らし、「しぶとい野郎だ、あいつは」と後ろを指差す
指が示す先にいた一誠も幽神兄弟と同じくボロボロだった……
鎧は既に破損、顔も全身も血だらけ、最後の拳打に使った両腕は指1本動かせない状態……
それでも一誠の目は〝諦め〟の意思を見せなかった
「ぬぁぐぁぁぁぁ……ッ！はぁ……はぁ……。ど、どうしたんだよ……ッ。もう……

もう終わりか……ッ？まだやるってんなら――――」
「まだ動くのか……ッ？呆れた野郎だな……。その両腕、どう見ても使い物にならない筈だ……。足もガクガクで体はボロボロ……。なのに……何故そこまで……ッ？」
「……決まってんだろ。こんな所で倒れたら、さっきの啖呵が嘘になっちまう……っ。アーシアを、部長を、皆を守れるぐらい強くなりたいなら……ここで倒れちゃダメなんだよ……ッ！」
一誠の不屈の姿に正義は目元をひくつかせた
ここまで執拗に追い詰め、徹頭徹尾叩けばどんな相手でも意気消沈して戦闘の意思を失い、無様に許しを乞う筈――――それが正義の持論だった
しかし、目の前にいる一誠はボロボロの状態にされても許しを乞うどころか、まだ戦うつもりでいる……
〝なんでこいつはここまで立ち上がれるんだ……!?何がこいつを動かすんだ……!?〟と憎々しげに自問を繰り返す
そして、ふと彼の頭に過ったのは――――アーシアの存在だった
『……思えば俺が余計な事を考え出したのも、兵藤の力が急激に増したのも……全部あのアーシアって女が関わっていた……ッ。あの女の存在が兵藤をここまで引き立てたのか……ッ？あの女の〝優しさ〟ってヤツが……』

微かな疑問がどんどん大きくなり、正義自身の概念が揺らぐ
すると、正義は自分でも思いも寄らない事を言ってしまう
「兵藤」
「何だよ？まだ何か言いたい事があるのか？」
「お前はあの女――――アーシアがそんなに好きなのか？」
「ブバシュッ!?」
不意を突かれた質問に一誠は目玉が飛び出す程動揺し、口から何かを吹き出す
悪堵も突然の言動に訳が分からず、ただ呆然としていた……
「で、どうなんだ？」
「なななななんでいきなりっ、そそそそんな事を訊いてくるんだよ!?」
「あの女をここまで擁護するのは、そう言う事じゃないのか？」
「い、いやまあ……た、確かにアーシアは良い娘で最近はおっぱいの発育も良くなってきたなぁとは思うけど！そ、それは大事な仲間でもあり家族の一員でもあるからってだけで！そそそそんな好きとか嫌いとかは……いやいやいやいや！嫌いじゃない！嫌う訳無いだろ!?アーシアみたいな良い娘を誰も嫌う訳が無い！ただ、その俺としては――――」
真っ赤な顔でテンパり続ける一誠を見て、正義は不覚にもプッと軽く吹いて笑ってし

まう
「……ハハッ、やはりそうか。アーシア・アルジェントォッ……フハハッ……。面白い女だ」
「あ、兄貴？」
「相棒、帰るぞ」
「えっ？ひょ、兵藤はどうすんだよ？トドメ刺さねぇのか？」
「お互いこんな状態だと、どの道まともに動けなくなる。そうなったら他の奴らにとって格好の的だ。今は潔く引いてやろうじゃないか」
　正義の撤退宣言に悪堵は納得いかないと抗議しそうになるが、負傷具合を考慮すれば正義の言葉は一理ある
　一誠に勝っても捕まったり、殺されたら元も子もない
　今は生き残るのを優先させる為、正義の提案に賛成した
　一誠は正義のあっさりとした引き上げに
　言葉が見つからず、ただ間抜けに開いた口も塞がらなかった
「兵藤、今回は引き分けと言う事で見逃してやる。アーシア・アルジェントのバカみたいな優しさに感謝するんだな。今時(いまどき)あんな女はいない。誘拐した俺の背中の火傷を治し、捨てた筈の感情を思い出させるくらい――――バカで優しい女だ」

最後にそう言い残し、地獄兄弟（ヘルブラザーズ）は塀を飛び越えて去っていった……

暫く突っ立っていた一誠は一応助かった事を認識してから脱力

座り込んで安堵の溜め息を吐いた

その後、やはりジッとしていられず駆け付けてきたリアス達に保護され、部室まで運ばれた後はアーシアの治療を受けて傷は完治

一誠と幽神兄弟による因縁の決着は持ち越しの上に妙な形で中断されてしまったが、それもまた1つの結末としては悪くないのかもしれない……

勇者と悪魔の競演！

「な、なんて凄まじい爆発だ……っ！あの男……まだこれ程の力を出せるのか……ッ!?」

爆風と衝撃に煽られながらレオ閣下は恐々と言葉を絞り出す

自分達では到底届かないのかもしれない力の差を見せつけられ、異世界の戦士（アラタ）と異世界の化け物（伊坂）の次元の違いを改めて思い知らされる

やがて爆煙が晴れていき、新と伊坂の姿が皆の視界に入った

新は先程の剣技（クロス・バースト）で体力を大幅に消費したせいか、疲弊している様子だった

更に伊坂の剣技（クロスフレイム）を少しばかりくらったのか、左腕の鎧は破損しており、血が腕を伝って地面に滴（したた）り落ちる

一方、伊坂は右肩が少し削られただけで――――その傷も直ぐに自前の再生力で完治

つまり、望んだダメージを与えられなかったと言う訳である……

「……チッ、やっぱり直ぐ再生するのか」

「なるほど。剣の刃に自らの魔力を集中させ、そのまま破壊力に変換した強力な斬撃を放つ――――と言った所か。シンプルな構造でありながら破壊力のある剣技、見事な物だ」

「……一瞬でそこまで解析されるとは思わなかったぜ」
「この無価値な世界を調査し尽くした私には簡単過ぎるよ。……さて、長話はこのくらいにして始めようじゃないか。無価値な世界を懸けた勝負を」
「あぁ、そうさせてもらおうか」
新は再び剣を構え、闘志に満ちたオーラを放出し始める
いざ戦おうとしたその時、シンクやナナミ、レベッカが新の横へ並び立つ
「……っ?シンク、ナナミ、レベッカ」
「アラタさん、僕達も一緒に戦わせてください」
「ここで頑張らなきゃ勇者の名が泣いちゃうよね」
「私達も守ります!この国を、フロニャルドを」
フィリアンノ、ガレット、パスティヤージュ――――三国の勇者が揃い踏みとなり、新は勿論共闘の申し入れを承諾した
すると、3人はポケットからそれぞれ色の違うクリスタルの様な結晶を取り出す
シンクのは紅、ナナミのは緑、レベッカのは紫と言うカラーリングだった
「おい、何なんだそれ?」
「これは僕達をパワーアップさせる英雄結晶と呼ばれる物です。アデルさんから貰いました」

「私もアデルさんから貰ったよ。精霊結晶って言うんだ♪」
「私はヴァレリーさんからこの魔神結晶を貰いました」
シンク、ナナミ、レベッカがそれぞれの結晶を前に掲げると、３つの結晶からまばゆい光と強いオーラが解き放たれる
三国の勇者は力強い言葉――――発動の台詞を読み上げた
「英雄結晶ッ！」
「精霊結晶ッ！」
「魔神結晶ッ！」
「「発動ーーーーッ！」」
それぞれの結晶は光と化して３人を包み込み、変化が起こる
少年少女の体が急成長して成人となり、放っていたオーラも強さを増していた
変貌を遂げたシンクは如何にも勇者らしい凛々しさとなり、炎のオーラを揺らめかせる
ナナミはレオタードの様な衣装に身を包み、水と氷のオーラを漂わせる
レベッカは結っていた髪が長いストレートヘアーとなり、瞳に☆マークが出現
パワーアップを果たした三国の勇者に新は目玉が飛び出しそうなくらい驚いた
「す、スゲェな……。この世界は何でも有りかよ……」

「この姿になれるのは一時的だけど、その間だけ全ての能力がアップします。これなら勝てる可能性は高くなりますよ」
「ちなみにガウくんとクー様も使えるんだよ?」
「……ハハッ。本当に面白いな、この世界は」
闇皇(やみおう)の他、パワーアップ勇者3人が加わってフロニャルド陣営は活気付く
更にガウルとクーベルも英雄結晶を発動して成人化する
蒼い英雄結晶を発動したガウルは髪が伸び、雷のオーラを迸(ほとばし)らせる
クーベルも体が成長して光のオーラを味方につけた
「シンク!俺様を置いてきぼりにしてんじゃねえぞ!」
「ウチだって加勢するのじゃ〜!」
次々と成人化を果たしたシンク達を見て、伊坂はパチパチと拍手をする
「これはこれは、素晴らしい見せ物だ。散り際の手品とは粋な計らいをするね」
「散るのはお前だ、伊坂ッ!」
新は剣を振るって斬撃を放つが、伊坂も長剣から出した斬撃で相殺する
その隙に爆煙を突き抜けたシンクとガウルが伊坂に攻撃を仕掛けた
伊坂は瞬時に反応して神剣パラディオンと雷の爪を長剣で防ぐ
更に焔を噴かせて2人を焼こうとするが、シンクとガウルは寸前のタイミングで飛び

退いて回避
２人と入れ替わる様にナナミが前に出て棒状の神剣エクスマキナを華麗に振るう
連続で繰り出してくる棒捌きを伊坂は長剣で躱したり弾き返したりする
伊坂が攻撃に転じようとする寸前、ナナミの頭上を飛び越してきた新、シンク、ガウルは初動作を止める様に攻撃を仕掛けた
新の蹴り、シンクの炎の剣、ガウルの雷の爪が伊坂に直撃して後退させる
体勢を建て直す伊坂にユッキーの忍術とノワールの輝力技が繰り出された
「ユキカゼ式忍法、影分身の舞～ッ！」
「……セブルテーーイルッ！」
ユッキーは忍術で無数の影分身を出現させ、ノワールは輝力武装で７つの尻尾を展開
まずユッキー本人と影分身による連続攻撃で伊坂の動きを封じ、ノワールの７つの尻尾で畳み掛ける
手数の多さに伊坂は防戦を強いられ、更にその間にクーベル達の砲撃準備が整った
「ガーネットスパーク、最大火力の乱れ撃ちじゃ～ッ！」
「バレットカーードッ！」
「フラッシュアロ～ズ！」
クーベル、レベッカの晶術とベールの紋章術による一斉射撃が伊坂に降り注ぐ

苛烈な砲撃の嵐に伊坂は両翼で防ぎきろうとするが、更なる追い打ちを掛けられる
「リコ、拙者達も続くでござるっ！」
「了解であります～！」
宙へ飛び上がったユッキーとリコは大量の砲弾や花火を伊坂目掛けてばら撒き、お互いの拳を合わせた
「「繚乱大百華（りょうらんだいひゃっか）ーーーッ！」」
２人から波動が発せられた刹那、伊坂の周囲にばら撒かれた砲弾と花火が着火して次々と大きな爆発を引き起こす
そこへガウルとジョーヌが並んで輝力の爪と大斧に力を込め、背後に紋章を展開する
「「双雷爆砕波（そうらいばくさいは）ッ！」」
２人の武器から発射された紋章砲は伊坂に直撃、凄まじい爆発と火柱を生む
息も吐（つ）かさぬ連続攻撃には流石に一溜まりも無いだろうと思うが……伊坂は火柱を一閃して姿を現した
両翼を広げ、無数の羽を空中へ舞い上がらせる
焔を纏った羽の群れは伊坂の合図で一斉にフロニャルド陣営へ襲い掛かっていく
その群れの前にミルヒとレオ閣下が出てきてお互いの宝剣を交差する
ミルヒの聖剣（せいけん）エクセリード、レオ閣下の魔戦斧（ませんぶ）グランヴェールから輝かしい光が走る

「駆け巡れ、断罪の刃！」
「天に輝け、封魔の剣！」
「エクスグランディア・フィナーレッ！」
交差する２つの宝剣から螺旋状のエネルギー波が解き放たれ、向かってきた羽の群れを跡形も無く一掃した
技を打ち消された伊坂は「……何だと？」と訝しげに呟く
「貴様らヒヨッ子だけに活躍させんぞ！」
「私達だって自分達の国を、この世界を守りたいのです！」
どんどん活気の勢いが増していくフロニャルド陣営
伊坂は面白くないとばかりに焔を噴かせるが、今度は英雄王アデルと魔王ヴァレリーが出てきた
「ヴァレリー、行くのですよ～ッ！」
「おうよ！魔王紋ッ！」
ヴァレリーは足元に独特の紋章を展開し、そこから帯状の魔力を放出
魔力は伊坂の腕に絡み付いて動きを止め、そこへアデルは銃口から凄まじい威力の砲撃を繰り出した
伊坂は極大の砲撃に包まれ、全身から黒煙が上がる

更に『騎士（ナイト）』形態に昇格した新とダルキアンによる神速の剣戟が伊坂をめった斬り
伊坂は自身を阻害している魔力を焔の剣で切り払い、新とダルキアンに極大の蒼い焔を飛ばす
そうはさせないと前に出てきたのはシンクとエクレ
お互いが双剣を交差させてエネルギーを溜める
「「烈空ダブル十文字ッ！」」
炎の十文字と緑の十文字が並ぶように飛び出し、蒼い焔を切り裂きながら突き進む
２つの斬撃をくらった伊坂の前面に十字型の裂傷が広がった
伊坂の背後から『騎士（ナイト）』形態の新が地面スレスレの高速移動で向かってくる
彼の上にはレオ閣下とダルキアンが乗っており、そのまま魔戦斧（ませんぶ）グランヴェール、大太刀、槍の三重攻撃で同時に伊坂を斬りつけた
更にそこへシンク、ナナミ、レベッカが畳み掛ける
まずはナナミがブーメラン状の神剣エクスマキナを投げる
ブーメランは縦横無尽に軌道を変えながら伊坂を連続で斬りつけ、シンクはパラディオンから炎を出して炎の刃を作り上げた
「炎王剣（えんおうけん）ッ！」
「ウィッチキャノーンッ！」

レベッカの砲撃が伊坂を貫き、シンクの炎の刃が伊坂の腹を切り裂く
ブーメランがナナミの手元に戻ったタイミングで新は『戦車』に昇格
攻守に特化した形態で拳に赤黒い魔力を集束させ、両足のキャタピラで地を鳴らしながら駆けていく
伊坂は正面から来る新の気配に気付き、左手から焔を噴かせようとする
「魔神閃光波アッ！」
新の後方からレオ閣下の叫び声が轟き、グランヴェールから放たれた矢の形をしたエネルギー波が伊坂の左手に突き刺さる
そのせいで焔を噴かせられず、新の拳打をまともにくらった
後方へ飛ばされ地を転がる伊坂
直ぐに左手に刺さった矢を抜いて立ち上がるも、シンクとガウルが輝力全開で向かってきていた
「豪雷烈火天下封滅斬ッ！」
ガウルは輝力武装の『獅子王爪牙』を展開し、シンクは『豪熱炎陣掌』を伊坂に放つ
凄まじい炎が伊坂を呑み込み、ガウルが輝力の爪で炎もろとも伊坂を切り裂く
最後にシンクが炎の剣で袈裟斬りをくらわせた
後退りする伊坂の眼前に新は滑り込み、『僧侶』形態にプロモーション

銃口を伊坂に密着させ、魔力を急速充填する
引き金を引いた瞬間――――銃口から高密度かつ大質量の砲撃が解き放たれ、伊坂の全身を焼き焦がす
砲撃が止むと……伊坂の首や腕、両翼などはあらぬ方向にねじ曲がったまま煙を噴かしていた
自慢の再生能力で負傷箇所を元に戻していくが、流石にここまで熾烈な攻撃をくらい続けた伊坂にも疲弊の色が生じる
力が抜けたように片膝を地に付けてしまい、フロニャルド陣営を睨み付けた
「……何故だ?何故この私が膝を付いた?何故不老不死に成り果てた私が押されなければならない?闇皇(やみおう)ならまだしも、こんな無意味な世界に巣食う獣人(じゅうじん)風情の攻撃で、私が焦っている……?……何だ、この不愉快な気分は……!」
口調に怒気が混ざり始めた伊坂は全身からかつて無い程の焔を噴かせ、それを生物の如く蠢(うごめ)かせる
ジリジリと肌を焼く熱気、熱風にフロニャルド陣営は顔を歪めるが……目はまだ死んでいなかった
各々の武器を構えて伊坂と対峙する
「私はこの世界の魔物を喰らい、不死身となった闇人(やみびと)だ……!この世界の獣人ごときに

遅れを取る筈が無い……！いや、寧ろ圧倒的に進んでいるのだ……！文明も、技術も、能力も、歴史も全て。なのに……何故君達はそんな輝かしい目を向けられる？〝不死〟と言う存在に恐れを、恐怖を抱かないのか……？」

「簡単だろ。俺とこいつらには守らなきゃならない物がある。だが、お前は壊す事しか考えてない。つまり――――守るべき物を何1つ持ってないって事なんだよ。自分の背中に守りたいと思える物があれば、誰だって必死になれる。強くなりたいと錬磨するんだよ。肉体だけじゃなく精神もな。余裕を持て余していると精神はいずれ澱み腐っていく。テメェは自分の傲りに溺れて、フロニャルドを見くびった。こいつらの芯の強さを甘く見たのが運の尽きだったな！」

通常形態に戻った新は先程の剣技――――クロス・バーストの準備に取り掛かる

刀身に赤い魔力を流し込み、バチバチと電撃の様な魔力が周囲に迸る

更にシンク、ナナミ、レベッカ、クーベル、ミルヒ、レオ閣下の6人が並び立ち、それぞれが持つフロニャルドの宝剣を構えた

レベッカとクーベルは銃口にエネルギーをチャージ

シンク、ナナミ、ミルヒ、レオ閣下も刃に輝力を蓄積させていく

「アラタさん！僕達も力を貸します！」

「皆で一緒に行っくよ～！」

シンク達の割り込み参加に新は笑みながら頷き、波状攻撃の準備が整った
「行くぞ！全ての宝剣の力を合わせろッ！」
「はい！フロニャルドの宝剣よ、悪しき者に浄化の光を！」
「「「三国の勇者の力を１つにッ！」」」
神剣パラディオン、エクスマキナ、メルクリウス、聖剣エクセリード、魔戦斧グランヴェール、天槍クルマルスに眩い光が宿り、遂に６つの宝剣を持つシンク達と新による波状攻撃が走る
「「「ヒーローブレイブ・スラーーーーシュッ！」」」
「クロス・バーストオオオオオオオオオオオオッ！」
新の剣から地を這うが如く巨大な斬撃が放たれ、その後を追うように宝剣から６つの波動が突き進む
６つの波動は新の斬撃と交わり――――より強力な１つの波動と化す
風を切り、地を抉りながら突き進んでくる波動に対して伊坂は魔剣技クロスフレイムの構えを取り、長剣をＸ字に２度振るった
灼熱の焔を纏った蒼い斬撃が巨大な波動に正面から激突するが……力負けしてしまい霧散と言う結果に
波動はその先にいる伊坂に直撃、更に直撃した後も６つの波動へと分散して再び伊坂

に突き刺さる
伊坂を中心に周囲が爆発の炎に呑み込まれ、黒煙と粉塵が舞い上がった
「お、思ったより凄い攻撃になったね……」
「そうですね……。でも、これならきっと――――」
シンクとミルヒの言葉を遮る様に「いや、まだだ」と警告を発する新
剣の切っ先を爆煙に向け、警戒を更に強める
シンク達フロニャルド陣営も立ち込める爆煙に視線を集中させた
その時……爆煙を掻き分ける様に伊坂が姿を現した
全身から煙と血を噴かしているものの、未だ決定打に至らず――――不気味な笑い声を漏らしていた
「……ハッハッハッハッハッハッハッハッ……。面白い、実に面白い……ッ。先程まで私に手も足も出なかったと言うのに……。これが君達の言う〝守る為の力〟とやらか……ッ。陳腐な志がここまで跳ね上がらせるとは、意外でならんよ……ッ！」
「……ッ!?あれだけの攻撃を受けてるのに、まだ倒れんのか……ッ!?」
「そ、そんなぁ～！」
伊坂の尋常ならざる打たれ強さに恐々とするレオ閣下とナナミだが、ちょっと待った
と新が手を差し伸べる

「落ち着け、全く効いてないって訳じゃねぇよ。見てみろ、さっきと比べて傷の治りが徐々に遅くなってやがる。あの御自慢の再生力も結局は本人の器量次第だ。このまま押していけば、いずれ力尽きるッ！」
「フフッ、確かに理屈は合っている。このままでは私が不利になるだろう。……ならば、こちらも本気を出させてもらおうか。非礼の詫びだ、総力をもって君達を灰にしよう……ッ」
そう言った直後、伊坂の体がメキメキと嫌な音を立て、全身から滲み出ているオーラが徐々に強まっていく
そして……伊坂の背中の肉を突き破り、４枚の翼が大きく広がり――――総計６枚の翼が焔に包まれ、異様な邪悪さと熱気を振り撒く
伊坂の邪悪なオーラと剣幕に気圧(けお)されそうになる面々……しかし、それでも戦いの意志を消したりはしなかった
「……これを見てもまだ戦意を消さないか。……良かろう。ならば、味わってくれ――――絶望と恐怖を……ッ！」
ゴオオオオオオオオオオオオッ！
伊坂が力強い台詞を吐いた直後、焔に包まれている６枚の翼が更に大きく伸びた
更に伊坂は長剣を横に掲げ、蒼い焔を纏わせる

今まで何度も煮え湯を飲まされてきた魔剣技――――クロスフレイムの構え……
新とフロニャルドの宝剣を持つ6人は再び波状攻撃の体勢を取る
伊坂は長剣を2度振るい、X字の斬撃を解き放った
だが、それは今までの斬撃とは違っていた……
剣を振るう動作に合わせて6枚の翼も同じ様にX字の軌道を描き、焔の斬撃を飛ばしてきたのだ
新達に襲い掛かっていく7つの斬撃……
それに対して新とシンク達は先程と同じ波状攻撃を放ち、伊坂の強化魔剣技(クロスフレイム)と激突させた
しかし……波状攻撃はいとも簡単に打ち消されてしまい、新を含めたフロニャルド陣営は7つの斬撃が起こした爆炎に飲み込まれる
破砕音と悲鳴が飛び交い、辺り一面が炎に包まれた……
不気味に笑う伊坂は長剣の一閃で炎を薙ぎ払う
彼の前には死屍累々と横たわり、呻き声を上げる者達の姿があった
鎧の大半の部分が破壊された新、ダメージにより英雄結晶の効果が切れたシンク達、フロニャルド陣営は壊滅的な深手を追ったようだ……
先程まで追い詰めていたのに、たった1度の攻撃で形勢逆転されてしまった

かなりの力を使ったのか、伊坂は大きく息を吐く
「死は免れたか……。だが、今のをくらってしまってはもう立ち上がれまい。潔(いさぎよ)く諦めたまえ」
「……ペッ。誰が諦めるかよ……ッ」
新は剣を杖代わりにして体を起こす
血を流し、骨も折れている体で伊坂に剣を向ける
「俺は……諦めねぇぞ……ッ。このまま死んでたまるかよ……ッ！」
「粋がるのも若さゆえ、か……。そんなボロボロの状態でよく言えたものだ」
「……余裕ぶるのもそこまでにしとけ。お前こそ――――足が笑ってんじゃねぇか」
新の指摘は核心を突いていた
ここまで殆ど余裕の態度しか見せてなかった伊坂の足は小刻みに震えている……
自分の両足に視線を向け、言葉を失う伊坂
「そりゃそうだろうな……。御自慢の再生能力も焔も、結局は自分の力。あれだけ多くの攻撃をくらって再生、傷を治しながら俺達に攻撃を繰り返していけば――――莫大な消費で疲れも出てくるよな……ッ」
「……ッ。〝点滴、石穿(うが)つ〟か……。ならば、それまでに君を片付ければ良いだけの話だ」

伊坂は長剣に蒼い焔を纏わせ、新も負けじと刀身に魔力を込めた
ジリジリと距離を狭(せば)め、斬り込みのタイミングを計る……
数秒の静寂が過ぎた刹那、２人は同時に斬り込み――――お互いの剣戟が火花を生んだ
新は焔の長剣を押し退けて伊坂の腹を横一文字に斬る
腹から血を噴き出す伊坂は負けじと長剣を振り下ろし、新の左肩に食い込ませた
剣と熱による痛みが押し寄せ、新は歯を食い縛って耐えようとする
伊坂は追い討ちに胸の目玉を妖しく輝かせ、再び新に念動力(サイコキネシス)を掛けようとした
「……ッ！させるかアッ！」
新は自らの肩に食い込んだ剣を掴んで動きを止め、持っていた剣で伊坂の胸部――――第３の目玉を刺し貫いた
突き刺された傷から血が噴き出し、伊坂は苦悶に満ちた呻き声を漏らす
「ぬぅぅあ……ッ！ぐっ！」
「はぁ……はぁ……これでもう念動力(サイコキネシス)は使えねえだろ……ッ！……ハァッ！」
新はそこから更に魔力を刀身に流して伊坂を吹き飛ばし、三度斬りかかる
伊坂も焔の長剣で迎え撃ち、新に斬りかかっていった
熾烈な剣戟合戦――――否、防御を捨てた斬り合いが始まり、２人はダメージを無視

して剣を振るい続けた
肉を切り裂かれ、血が飛び散る事などお構い無し
〝残された力の全てを振り絞って目の前の敵を倒す〟――――新どころか伊坂もその考えに染まっていた……
あまりにも凄惨で過激な斬り合いにシンク達は呆然と見守るしかなかった
斬り合いが続く中、新の剣が弾き飛ばされ――――伊坂の長剣が彼の左脇腹を捉える
肉と骨を焼かれ、激痛に襲われる新……しかし、自らの左腕で長剣を挟み込み逃げられないようロックした
空いた右手に魔力を集めて拳を作り、伊坂の顔面を殴り続ける
まさに〝肉を切らせて骨を断つ〟……決死の覚悟を持ってるからこそ出来る業(わざ)だった
魔力込みの拳打を連続でくらい続けている伊坂の手が緩み、長剣を手放してしまう
一瞬の隙を見逃さなかった新は拳を打ち込んだ直後、脇腹に食い込んでいた長剣を引き離し、そのまま伊坂をめった斬り
血を吐きながらも伊坂を斬り続け、徐々に追い詰めていく
伊坂は手から炎を放って新を一瞬遠ざけ、直ぐに自らの両翼を広げた
両翼から次々に射出される羽は焔を纏い、群れを成して新に照準を合わせる

一斉射撃の予兆を見た新は、何か良い手は無いのかと瞬時に頭を働かせた
そう考えてる新の足に突然の違和感が……
素早く視線を足元に向けてみると――――先程弾き飛ばされた新の剣があった
伊坂が無数の羽をミサイルの如く発射させた瞬間、新は地面に落ちてた剣を蹴り上げ自らも跳ぶ
右手に持ってた長剣を伊坂に投げつけ、更にその勢いを利用した回転蹴りで今度は自前の剣を伊坂に飛ばす
羽は何枚か足を掠(かす)めたものの、２本の剣は伊坂の２枚の翼をそれぞれ貫いた
度重なる打撃と刺突(しとつ)、ダメージに伊坂は膝からくず折れそうになる
新は最後の勝負を仕掛け、両足に高密度の魔力を流す
空中高く飛び上がり、最大限にまで魔力を高めた両足での蹴りを繰り出した
「バースト・エンドォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
大気圏を突き破って落ちてくる隕石の様な速度で伊坂に突っ込んでいく新
伊坂は両翼に刺さった剣を抜き取り、残った４枚の翼から極大の焔を解き放つ
螺旋状に突き進む４つの焔が急速落下してくる新とぶつかる
一進一退、ほぼ互角の力で競り合う２人……
「負けねぇ……ッ！負けねぇ……ッ！負けてたまるかァァァァァァァァァァァァ

アッ！」
全ての力を吐き出すかの如く吼えた新は自ら回転を加え、伊坂が出した焔を纏わせる
焔は命を吹き込まれた様にうねり、新の両足に吸い込まれていく
「……ッ！何だと……ッ」
絶句する伊坂、両足に焔を纏った新はそのまま伊坂の頭上へ迫る
体勢を入れ替え、両足でのつま先落とし――――炎の蹴りは寸分の狂い無く伊坂の脳天に直撃した
強烈な蹴りをくらった伊坂は地面に叩きつけられ、着地した新は両足を覆った焔を振り払って一言
「……燃える蹴りってのも悪くねぇな」
フロニャルド陣営が言葉を出せない中、新は伊坂の方へ視線を向ける
暫く時間が経過した後、地に伏せていた伊坂が体を起こし始めた
その様子にフロニャルド陣営はざわつくが、新は攻撃に転じようとしない
何故なら――――起き上がった伊坂には異変が生じていた
闇人の姿と人間時の姿が次々と映り変わり、力を制御しきれない雰囲気だった……
「……何故、だ……ッ？何故、この私がぁ……私がっ、敗れる……ッ？」
自分の身に起きた敗北と言う現象……それを信じられない伊坂は本来の姿――――

闇人(やみびと)の姿に戻って倒れた
近くまで歩み寄った新は伊坂を見下ろす
「さすが不死身、あれだけ打ち込んだってのに死んでねぇとは……」
「ハハッ……。確かに死んではいないが……私の負けは明白……ッ、今回ばかりはそれを認めざるを得ない……。しかし……私が不死身である事に変わりない……ッ。今回はおとなしく引き下がるが、次に相見(あいまみ)える時を楽しみにしておこう……ッ」
伊坂は負けたものの、このまま逃げて傷を治してから再び来るつもりでいた
せっかくここまで来たのに逃げられてしまっては意味が無い……！
何としても伊坂を逃がす訳にはいかない――――と言いたいが、新も魔力と体力を消費し過ぎて立っているのもやっとで、シンク達も余力など残っている筈が無い
痛恨の失態……誰もがそう思った時、新が1歩前に出た
「伊坂ァ……ッ。テメェみたいな悪党を……見過ごすと思うか……ッ？」
「しかし……不死身の私をどうすると言うのだ……？殴ろうが斬ろうが、私は復活出来る……ッ。君にそんな力があるのかね……ッ」
皮肉めいた口調で煽る伊坂に新は剣の切っ先を向け――――闇を生み出した……
これは新の得意技――――『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』である
〝何故今この技を使うのか？〟……新はその意図を明かす

「……俺は前に闇人(やみびと)にされた女達を助けた事があった。その時は闇人(やみびと)の力をこいつで喰って、女達を元に戻した……。あの時使った方法を利用して――――伊坂、テメェを喰らって封じ込める」

〝伊坂を自らの体内に封じ込める〟

常軌を逸した考えにシンク達はおろか、伊坂さえも言葉を失った

確かに新は以前、村上京司(むらかみきょうじ)によって強制的に闇人(やみびと)へ転生させられた元ディオドラ眷属の女性を、その方法で助ける事に成功した

しかし、今回は状況が違う

喰らおうとしているのは力だけではなく、伊坂そのもの……

喰らえるかどうか分からない上、その後で何が起きてもおかしくない……

「……正気の沙汰じゃないな」

「ギャンブルと同じだ……。何が起こるか分からない、だから懸けるんだよ……ッ。少しでも可能性がるなら、俺はそれを信じて戦う……ッ。テメェみたいに計算してからじゃないと動けない様な奴に――――勝利の女神は微笑んでくれないんだ」

「……ッ。……ハハッ、これは参った。真理を突かれてはこちらも形無(かたな)しだ……」

言い返せない事を認めて自嘲する伊坂

新は剣を伊坂に突き立て、闇で覆い隠す

握り手に力を込め、必死に念じて伊坂を喰らい始めた……
もはや限界を超えた死に体寸前、それでも新は伊坂を野放しにしたくない想いを糧(かて)に喰らい続ける
不穏な音が鳴る最中、闇にまみれた伊坂は最期にこう言い残した
「守りたいと言う欲望……今まで感じた事の無い欲望……。その欲望で私が満たされるのなら、それもまた一興か……」
フロニャルドを震撼させた異世界の闇人(やみびと)――――伊坂威月(いさかいづき)は完全に喰われ、文字通り消滅した
決着の瞬間が訪(おとず)れ、新は自分の体に異常が見当たらないか確かめる
「……はぁ、やっと終わったか……」
魂まで出てきそうな溜め息を吐き、フラフラな足取りでシンク達の所へ戻る
そこへレオ閣下が真っ先に新へ駆け寄った
「アラタ！お主……あの男を、倒したのか……？」
「倒したって言うより……封じ込めたって言った方が良いか……。まあ何にせよ、この世界を破壊するって目論見(もくろみ)は阻止した……ッ。俺の……いや――――俺達の勝ち　だ……ッ」
全てが終わり安堵した瞬間に力が抜け、レオ閣下を押し倒す様な形で倒れ込んでしま

う

「ワリィ……ちょっと寝させてくれ……ッ。正直もう指1本すら動かせねぇんだ……」

「まったく、しょうがない奴じゃのう……。しかし、お主の大義を讃えたがってる者達がいるようじゃが?」

レオ閣下の言う通り、シンク達を始めとするフロニャルド陣営には歓喜が渦巻いていた

一斉に押し寄せ、力が抜けきっている新を胴上げ

喜びの喧騒など耳に入る筈もなく、何度も宙に打ち上げられる中――――新は大事な点を思い出した

――〝そう言えば、ここからどうやって帰れば良いんだ?〟――と……

帰還

闇人(やみびと)の伊坂威月(いさかいづき)を見事に倒し――――もとい封印に成功し、フロニャルドは最大の危機から逃れる事が出来た

それから1日経ったある日、新はフィリアンノ城の空き部屋のベッドに横たわっていた

伊坂を自らの体内に封じ込めた後、半日以上も意識を失い、今やっと目が覚めた所である

フロニャルドの問題は解決したものの、今度はここからどうやって帰還するのかを模索していた

「……ダメだ、疲れ過ぎて考えが纏まらねぇ……」

やはり寝覚めたばかりで頭が回る訳でもなく……転移魔法の類(たぐい)も使えない

こう言う場合は専門家に聞くのが妥当だと結論付け、ベッドから出ようとした時――

――ドアをノックする音が鳴る

新が「誰だ?」と訊いてから扉が開かれ、2人の人物が入ってくる

「アラタさん、目が覚めたみたいですね」

「お見舞いに来たであります～」
部屋に入ってきたのはシンクとリコだった……が、新は2人の手に握られている物体を見て顔をひくつかせる
コップに並々と注がれた謎の液体……
ボコボコと小さく泡立ちながら怪しい色の煙が漂っていた
「アラタさんが元気になるようにドリンクを作ってきましたよ」
「これを飲めば疲労回復、元気いっぱいであります～♪」
新が「おい……それは何を入れて作った……？」と恐る恐る尋ねると、2人は自信満々に答えた
「勿論、疲労回復に効果のある薬草とハーブをバランス良く調合したであります♪」
「僕は持ってきた青汁の粉末とサプリメントとプロテインを混ぜて、隠し味にヨーグルトを加えました」
「病人に病原菌を飲ませて殺す気か!?どっちも疲労回復の効果を発揮する色じゃねぇだろッ！」
「えー、でもこれを飲んだ方が良くなりますよ？」
「アラタさま、せっかく作ったんですから飲んでいただきたいであります！」
〝自分に体力が戻ってるなら力一杯拒絶したい〟と思っている新だが……2人のキ

ラキラした視線が新を追い詰める
仕方無くシンクとリコが持ってきた疲労回復ドリンク（らしき液体）のコップを持ち、ゆっくりと飲んでいく
ドロドロと喉を通り過ぎる感覚はもはや液体にあらず、何故か時折固体らしき食感も混ざり込んでくる……
その味も凄まじく、新は何度も吐き出しそうになったが堪えて謎の液体2つを飲み干した
「ブブハァ！はぁ……はぁ……はぁ……っ。おえぇぇぇぇぇぇぇ……っ」
「どうです？元気が出たでしょ？」
「出るかボケェッ！クソ不味（まず）い！飲みづらい！そしてクソ不味（まず）いの3拍子ッ！後味も最悪の4連コンボだ！」
「はぅぅ、やっぱりお料理は薬品や機械油の調合のように上手くいかないのでありますぅ」
「おかしいなー。普通ならこれで元気が出る筈なのに」
「寧ろトドメを刺されそうになったぞ!?……ったく、これからどうやって帰ったら良いのか分からねぇってのに、余計な体力を使わせんな……」
新が不貞腐（ふてくさ）れ気味に放った発言にシンクとリコは気まずい表情となる

後で聞いて判明したのだが、フロニャルドには向こうの世界から召喚した者を送り返す事が出来る〝送還の儀〟と呼ばれる方法があり、シンク・ナナミ・レベッカはそれでフロニャルドから元の世界に帰還しているらしい

本来なら新もその方法で帰れる――――筈だったのだが、〝送還の儀〟には幾つかの条件を満たしてないといけない

その条件とは『儀式は召喚主が行う』『儀式は勇者を召喚後16日以内に行う』『勇者は品物だけでなく経験・記憶なども含めフロニャルドで得たものを元の世界に持ち帰ることはできない』『送還した勇者を再びフロニャルドに召喚することはできない』の4つである

新は元々フロニャルドの召喚の儀で呼ばれた勇者ではなく、あくまで伊坂が張っていた転移魔方陣によってここに飛ばされた者

つまり……ミルヒ、レオ閣下、クーベルの誰からも召喚されていないので〝送還の儀〟の条件に当てはまらない――――ゆえに〝送還の儀〟で帰還させる事が出来ないのだ

フロニャルドでもこの様な前例は皆無なので対処しようが無い……

「それでも俺は帰らなきゃならねぇ。向こうで仲間達を待たせてるからな」

「ではアラタさま、自分がビスコッティ国立研究学院で調べてみるであります！もしか

したら、資料・文献を読んでいけば何かお役に立ちそうな情報があるかもしれないのでありますぅ！」

「おぉ、気が利くじゃねぇか。よしっ、早速行ってみるか」

「あ、でもアラタさんはフロニャ文字読めないでしょ？僕も一緒に――――」

「ガキに勉強教えて貰う程バカじゃねぇよ。こう見えても仕事柄、外国を転々と渡り歩いて来たんだ。英語はソコソコ話せるんだよ」

シンクの忠告を無視した新はリコと共に国立研究学院に足を運んだが、資料の1冊を読み始めた途端に後悔

全く見た事の無い文字の連なりに頭がパンクした挙げ句……

「Ｈｅｙ，ｗｈａｔ ｉｓ ｔｈｉｓ ｌｅｔｔｅｒ？ Ｉｔ ｉｓ ｔｈｅ ｌｅｔｔｅｒ ｏｆ ｗｈａｔ ｃｏｕｎｔｒｙ？ Ｎｏ，ｉｎ ｔｈｅ ｆｉｒｓｔ ｐｌａｃｅ ｉｓ ｉｔ ａ ｔｈｉｎｇ ｔｏ ｂｅ ａｂｌｅ ｔｏ ｃａｌｌ ａ ｌｅｔｔｅｒ？ Ｓｕｃｈ ａｎ ｉｎｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｂｌｅ ｌｅｔｔｅｒ ｄｏｅｓ ｎｏｔ ｈａｖｅ ｗｈａｔ Ｉ ｓａｗ ｓｏ ｆａｒ!? Ｉ ｄｏ ｎｏｔ ｋｎｏｗ ｉｔ ａｔ ａｌｌ Ｉ ｄｏ ｓｔｒａｎｇｅ ｆｏｒｍ，ａｎｄ ｗｈａｔ ｉｓ ｗｒｉｔｔｅｎ！」

「おお落ち着いてくださいでありますぅ！」

何故か英語でリコに説明を求めてしまい、知恵熱まで出る始末に……
蒸気でも噴き出しそうな状態にまで陥った新は一旦休憩してから再度資料を探す
リコも資料・文献を読み漁るものの、ヒントは1つも得られずにいた
「はふぅ……。やはり前例が無い事態ゆえ、有力な情報がなかなか見つからないであります……」
溜め息を吐いて資料探しを再開しようとした時、椅子に座って書物の1つを熱心に読んでいる新が彼女の視界に入る
先程まで1字たりともフロニャルドの言語――――フロニャ文字が読めなかった筈……
怪訝に思ったリコはコッソリと背後に回って確認してみた
新が読んでいる書物は――――フロニャルド人（女性）の性知識に関するちょっと卑猥な本だった……
目を通した瞬間、リコは顔を真っ赤にして書物を取り上げる
「はわわわわっ！こ、これは違うのでありますぅ！あくまで研究に用いる参考書の様な物で、決していかがわしい気持ちは――――」
「やっぱりこのホンワカ世界でもこう言った本はあるんだな。……興味あるのか、リコ？」

「ほえぇ!?そ、そんな事は……」
慌てて弁明しようとするリコを無言で見つめる新
1分くらい見つめた所で、遂にリコは折れた
「……お恥ずかしながら……少しだけ興味……あります……」
「よしよし」
新は慰めの意でリコの頭を優しく撫で、リコは恥ずかしさと嬉しさのあまり尻尾を大きく振る
気を取り直して資料探しを再開させようとした時、リコが突然「ひゃあっ」と軽く悲鳴を上げる
その理由は新がリコの背後に回って、彼女を抱き締めたからである
耳元に優しく息を吹き掛けられたリコは華奢な体をプルプルと震わせる
「ひん……っ。ア、アラタさまぁ……。くすぐったいでありますぅ……っ」
「興味あるなら――――してみるか?」
「ほえぇっ!?で、でも……」
「俺はリコに感謝してるぜ?右も左も分からない俺にフロニャルドの事を教えてくれたり、仲間との通信が出来る様にしてくれたり。今だって前例が無いのに、俺が元の世界へ帰れる方法を解明しようと必死になっている。俺はそう言う女が好きだ。リコは―

――――どう思ってる？勿論、無理にとは言わない。嫌なら嫌とハッキリ言えば良いさ」
優しい声音で問い掛ける新にリコの耳と尻尾は再び振る速度を早める
そしてリコは新の手にそっと触れた
「……アラタさまが自分を助けてくださったあの時、不思議な感じになったのであります……。アラタさまの〝ばいく〟を見た時とはまた違ってて……尻尾の付け根だけじゃなく、胸の中がキュ～ンって締め付けられる様な感じがしたであります……。い、今も……そのキュ～ンと同じ感じになってるでありますぅ……」
「そう、それが〝相手を好きになる〟って感覚だ」
「はぅぅ……っ」
新は更なるモーションを掛けるため、右手をリコの服の中へと忍ばせる
腹部から右手を這わせ、徐々に胸へ進めていき――――胸に到達
膨らみかけの小さな胸を直に優しく揉み、リコの反応を窺う
彼女は先程のモーションからピクピクと体を震わせるが、抵抗の気配は無かった
「どうする？やめるなら今の内だが」
最後の通告を言い渡す新にリコは首を横に振った
〝やめてほしくない〟と言う素振り……つまりＯＫの合図だった
新は肯定の意を受け取り、リコを一旦抱えて床に寝かせる

彼女のリボンを解き、シャツのボタンを1つずつ外していく
ボタンが外れる度にリコの心臓の鼓動は早くなり、顔に緊張の色が走る……
そして新はリコのシャツを取り払い、リコの膨らみかけの小さな胸が露となった
「……っ。ア、アラタさまぁ……っ」
「そう言えばリコの裸を見るのはこれが初めてだったな。じっくり拝ませてもらうぜ？」
「へうぅ……っ。そ、そんなに見られると恥ずかしいでありますぅぅ……っ」
「何言ってんだ。これからもっと過激な事をするんだぜ？」
新は顔を近付け、そのままリコの唇に自らの唇を重ねた
優しく軽く啄む様なキス
リコは顔が爆発しそうなくらい感極まっていた
優しいが一瞬の呼吸もさせない新のキスにリコはすっかり蕩けさせられる
ようやく唇が離れると唾液の糸が輝き切れる
「さて……学院首席さん。これから始めさせてもらうぜ？良いか？」
「……はい。よ、よろしくお願いしますであります……っ」
神聖な研究学院の一室で性の勉強会が始まった

性の勉強会を終えた新はリコと共に資料探しを再開したものの、やはり有力な情報は見つからずじまい……

国立研究学院からフィリアンノ城に戻る為、バイクで駆けていた

先程の余韻に浸りきっているのか、リコはしっかりと新の腰にしがみついている

「あれだけ探して収穫無し、か……。さて、どうしたものかな……」

新はあらゆる可能性の思考を駆け巡らせる

伊坂は正規の方法じゃなく、独自の転移魔方陣で兵隊をここに送ってきた

それと同じ様に正規の方法が使えないなら――――〝自分達ならではの方法〟で戻れるのかもしれない……

可能性が０％じゃなければ……そう考えた新はフルスピードでフィリアンノ城へ爆進する

「ひゃあっ！ア、アラタさま？どうしたでありますか？」

「向こうにもいるんだよ。リコと同じ様に研究熱心な奴が１人。ただ……危険性が一気に高くなるけどな。この際だ、背に腹は替えられない！」

新の脳裏に浮かぶのは自分達オカルト研究部の顧問兼堕天使総督

その総督が嫌味に笑っているイメージだった……

フィリアンノ城に戻った新は急いで城の通信可能エリアに足を運び、スマホを起動させて向こうの世界にいるリアス達と連絡を取る

発信して直ぐに繋がり、リアスの声が聞こえてくる

まず新はこのフロニャルドで起きた戦いの経緯を打ち明けた

『それじゃあ闇人(やみびと)の問題は解決したのね？』

「あぁ、そうだ。後はここから元の世界へ戻るだけなんだが……生憎(あいにく)こっちの方法は条件をクリアしてねぇから使えないんだ。だから、アザゼルに代わって貰いたいんだよ」

『そこから戻れないかもしれないと言う状況下なのに、随分と冷静でいられるわね』

「出来ない事を嘆いても帰れる訳じゃない。正規の方法がダメなら発想を変えてやるしかねぇんだよ」

『……分かったわ。ただ、アザゼルの事だからあまりいい方法じゃないと思うけれど』

リアスはそう言った後にアザゼルと交代し、アザゼルが電話に出る

頼み事をする前に新は闇人(やみびと)――――魔剣将官伊坂威月(まけんしょうかんいさかいづき)が三竦みの大戦に関わっていた事を話す

『「初代キング」の右腕か……。そう言えば聞いた事あったな。あの大戦以来消息不明になってたが、まさか別次元の世界に逃れていやがったとは驚きだぜ。しかも未完成だっ

た次元転移の術を使うとは……』
「そこでだ、アザゼル。伊坂が使った次元転移の術式を大至急調べてくれないか？俺がここから元の世界へ帰るとなれば、もうその術式に頼るしかねぇ」
『分かった。なら、今日中にその術式の仕組みを調べて、そいつを応用したマシーンでも作ってみるか。良い実験にもなりそうで腕が鳴るぜ……！』
アザゼルの悪どい声音を新はスルーしつつ「じゃあ頼んだぜ」と言って電話を切ってスマホを懐にしまう
こちらではこれ以上何も出来そうに無いので、後はそれまで待つのみとなった……
大きな廊下を歩いていると、向かいの方向からシンクが走ってきた
「あ、いたいた――！アラタさーん、探しましたよー！」
「ん？あぁ、シンクか。どうした？」
「ついさっき通信でレオ閣下がアラタさんに話があるから、ヴァンネット城に来てくれって」
「そうか。じゃあ待たせちゃ悪いから――――」
そう言うと新は闇皇に変異し、更に速度に特化した『騎士』形態にプロモーションした
両翼を展開し、背中のブースターから火を噴かせ一気に飛んでいった

「うわぁ～……便利」

――――――――――――――――――――

出発してから僅か2分、ヴァンネット城に到着した新はレオ閣下の従者ビオレ・アマレットの案内で部屋の前まで来ていた

大扉を開けると玉座に腰掛けているレオ閣下を視界に捉える

「ご苦労じゃったな、ビオレ。下がってよい」

「それでは失礼します」

ビオレは一礼してからレオ閣下の部屋を立ち去り、新とレオ閣下の2人だけとなった

「わざわざ来てもらってすまなかったな、アラタ」

「国の領主からの呼び出しに応じない訳にはいかないだろう。……で、話ってのは何だ？」

「うむ。……だが、これから話す事は異世界人と領主としてではなく、あくまで個人的なものじゃ。出来れば他の者には漏らさないでほしい」

レオ閣下の真剣な面持ち(おもも)に新は承諾し、本題に入る

その内容とは――――――――

「――――〝俺から見てレオ閣下がどう映った？〟何でそんな事を？」
「うむ……。お主は向こうの世界では強かろう？」
「ま、まぁ弱くはないが……上には上がいるな。実際俺より強い奴は何人か心当たりあるし」
新の言葉にレオ閣下「そうか……」と弱々しく呟く
何だか様子がおかしいなと思った新は探りを入れてみる事にした
「……もしかして、伊坂に言われた事をまだ引きずってるのか？」
「――――っ」
核心を突かれたのか、レオ閣下の耳がビクッと震える
部屋の中で数分間沈黙が続き、重苦しい空気の下でようやくレオ閣下が口を開く
「……奴に言われたのじゃ。――――〝戦いを嬉々としているが、心の底では臆病風に吹かれている〟と……。あの時はただの戯言に過ぎないと自分に言い聞かせておったが……」
「何も言い返せなかったのが悔しかった、と？」
レオ閣下は無言で小さく頷き、徐々に内に秘めた思いを吐露していく
「ワシに敵う者などおらぬだろうと高を括っておった……。じゃが、伊坂と言う男の力に圧倒された時……ワシは恐れてしまった……。強い相手と戦えば自然と気持ちを昂

らせておったワシが……初めて恐怖した……っ」
「……」
「本物の戦(いくさ)を目の当たりにした時……頭の中が真っ白になってしまった……っ。フロニャルドの魔物とは次元が違う……本物の魔物の強さ、恐ろしさに……！」
次第にレオ閣下の体が震え始め、彼女の脳裏に伊坂の姿や言葉が甦(よみがえ)る
恐怖心を徹底的に焼き付けられ、領主としての面影は見当たらず……ただ過去の記憶へ刻まれた伊坂に恐怖していた
新は無言でレオ閣下に歩み寄り、正面から優しく抱き締める
突然のハグにレオ閣下はハッと我に返り、顔を赤くした
「ア、アラタ……っ？」
「吐き出したい事は全部吐き出せ。それを責めたりしない。あんたも領主以前に1人の女だ。ツラい事があるなら言え。俺でよかったら聞いてやる」
新はレオ閣下の頭に手を置き、彼女の気持ちを落ち着かせるべく優しく撫で続ける
新の温もりにレオ閣下の表情が和(やわ)らぎ、落ち着きを取り戻す
「……スマンのう……最後までお主には敵わんな」
「なぁに、俺んとこにも似た様なお姫様がいるよ。そいつにそっくりだ。いつも主として気丈に振る舞ってはいるが、実は少し寂しがり屋で意地っ張り……凛々しい見た目と

は裏腹に可愛い所もある女さ」
新にはレオ閣下がリアスとダブって見えたのだろう……
強く言葉を持ち掛け、優しい動作で気持ちを宥めていく
暫くするとレオ閣下の表情がいつもの状態に戻り、新も手を離した
「……お主のお陰で気が楽になった、感謝する」
「気にすんな、泣いてる女を泣き止ませるのは男の仕事だ。……話はこれで全部か？じゃあ――――」
部屋から立ち去ろうとしたその時……レオ閣下が「待て」と呼び掛け、扉に鍵を掛ける
振り向いたレオ閣下はそのまま新に歩み寄り、彼の手をギュッと握る
「……？どうした？」
「……お主は……ワシをここまで揺さぶっておきながら、何もせぬつもりか……？このワシを昂らせた責任くらい取れ……っ」
レオ閣下の顔は明らかに紅潮しており、新に注がれる視線も熱が入っていた
この流れは間違いなく……
「今だけは……今だけは領主としての立場を忘れさせてくれぬか……？」
「それってどういう――――」

「アラタ……ワシと契ってくれ……っ」
レオ閣下の口から放たれた言葉に新は一瞬息を詰まらせた
彼女は当惑している新の手を自身の胸に当て、心臓の鼓動を聞かせる
「感じるじゃろう……？ワシの心臓の音が……っ。この高鳴る鼓動と気持ち、お主以外では抑えられんのじゃ……」
「……」
「……ダメだろうか？やはり、異界の者同士で体を合わせるのに抵抗があるか……？」
恥ずかしそうにしながらも物欲しそうに見つめてくるレオ閣下の視線
それは男ならば一撃でＫＯされる威力を秘めていた……
レオ閣下の意思を汲んであげるべく、新は彼女の申し入れを承った
「……分かった。あんたが本気だって言うなら、断る方が失礼だ。喜んで受けよう。ただし、条件が２つある」
「う、うむ……何でも申してみよ……」
「１つは主導権を俺に委ねる事。そしてもう１つ、これからはレオって呼ばせてくれ」
「……も、勿論じゃ」
「それじゃあ遠慮無く」
新はレオを抱きかかえると近くにあったベッドの上に寝かせ、自分は覆い被さる様に

位置へ付く
レオの上着に手を掛け、ボタンを1つ1つ外していく
窮屈そうな服を取り払い、スカートも脱がしていく
あっという間に下着姿にされたレオは更に顔を紅潮させる
「良いか？」
「う、うむ……出来れば優しくしてれ……っ」
「勿論だとも」
新はまず彼女と唇を重ね、優しいキスを繰り返していく
最初は軽いタッチ程度だったが、徐々に濃厚なキスに移行する
舌で口内を舐められ、今まで感じた事の無い感覚にレオの緊張と鼓動が激しくなる
ギュッとシーツを握り締め、言い難い快感と羞恥心を誤魔化そうとするが出来る筈も無い……
新はキスしながらレオのブラジャーに手を伸ばし、後ろのホックを巧みに外す
そして支えが無くなったブラジャーを一気に取り払い、パンツも器用に脱がす
「――――っ!?」
何が起こったのか理解出来ぬまま、レオは一糸纏わぬ姿を晒された……
ジックリと裸体を凝視する新と目を合わせられないのか、レオは目を閉じて顔を横に

向ける
『こいつ思ったより可愛い反応するな……』
火が点いた新はレオの豊満な胸を揉んでいく
揉む度にレオの口から火照った吐息が漏れ、体がピクピクと跳ね上がる
準備が整った所で新は最終通告を出した
「覚悟は良いか?これから何をされるか、分からない訳じゃねぇよな?」
「……うむ。た、頼むぞ……?」
本日2回目の情事が始まった

「ふぅ……。大丈夫か、猫姫さん?」
「はぁ……まだ体が火照(ほて)っておるようじゃ……」
情事を終えた新はズボンを直し、まだベッドで横たわっているレオの頭を撫でる
レオは嬉しそうに尻尾を振る
「アラタ、ワシの我が儘を聞いてくれて助かる。その……気持ちよかったぞ……っ」
「こう言う我が儘なら大歓迎だ。さてと……そろそろフィリアンノ城に戻るか」

「ならば、その前に風月庵に寄っていくと良い。ダルキアンから上質の果物酒が手に入ったと聞いてな。アラタは酒を飲めるのか？」
「愚問だぜ？酒は男を磨く水、女の次に好物さ」
「ほぉ……なら、ダルキアンの酌に少し付き合ってやってくれ」
「あぁ、サンキュー」
新は軽く手を振ってから部屋を立ち去っていった……
レオはようやく体を起こし、巻いていたシーツをはだけて伸びをする
「フフンっ。アラタ、軽々しく受けていると後悔するぞ？奴のくだは長いからのう」

再び『騎士』形態で飛ぶこと2分
新は森の奥地にあるダルキアンとユッキーの住み処――――風月庵に到着した
闇皇から元の姿に戻り、首を鳴らしているとダルキアン及びユッキーが姿を見せる
半纏や忍者装束ではなく、浴衣・ミニスカ着物と言った出で立ちだった
「にん♪我らが住み処、風月庵にようこそでござる♪」
「話はレオ姫より聞いているでござる。アラタ殿、上質の果物酒が入っているゆえ」

「あぁ、俺は酒には目が無い方だ」
「その前に案内したい場所があるでござる。ついてきてくだされ」
言われるがままダルキアンとユッキーの後を追う新
少し歩いた先に――――湯気が立ちこもる何かが見えてきた
そう、露天風呂である
「ここは風月庵(ふうげつあん)きっての秘湯でござる。どうでござろう?湯に浸かりながら果物酒(くだものざけ)を呑むのは」
「へぇ〜、なかなか風流じゃねぇか。勿論頂くぜ」
新は直ぐに服をバサバサと脱ぎ捨て、露天風呂に浸かる
丁度良い湯加減に唸り、ダルキアンが提供してくれたフィリアンノ国産の果物酒(くだものざけ)を飲む
独特の香りと果物の酸味、甘味が合わさった美酒に満足気な表情となる
「く〜っ、美味いな!まさか異世界の酒を飲めるとは」
「如何でござるか?露天風呂と果物酒(くだものざけ)の塩梅(あんばい)は」
「最高だ、帰るのも惜しいぐらいにな」
「それは良かったでござる♪では……お館様」
「そうでござるな、ユキカゼ。せっかくなので――――拙者達も湯と酒をいただくとす

るでござる♪」
　ダルキアンとユッキーの発言に酒を吹き出しそうになる新
　噎せてる間に2人は衣服を脱いでいく
　その艶姿に新は目を奪われ、酒を飲んでいた手も止まる
　サラシと下着も脱ぎ、2人はとうとう生まれたままの姿となった……
「おろ?アラタ殿、どうしたでござるか?戦場では拙者達の肌を充分見たのでござろう?」
「いや……つい見とれちまった」
　照れ臭そうに頭を掻く新にダルキアンとユッキーはクスクス微笑む
　2人が湯に浸かると……彼女達の見事なおっぱいが浮かんでいた
　プカプカと浮かぶ魅惑の果実、神がかった状況に新は生唾を飲む
　ダルキアンとユッキーも果物酒を飲み始め、天を見上げる
「アラタ殿」
「ん、何だ?」
「レオ姫と伽をしたそうでござるな♪」
「ブーーーーッ!」
　追撃をくらった新は口に含んでいた酒を吹き出した……

頬を赤く染めるダルキアンとユッキーは更に畳み掛ける
「やはりそうでござったか。いやはや、通信に出たレオ姫が艶(つや)やかに見えたゆえ、探りを入れてみたのだが……まさか本当にしたとは驚きでござる」
「土地神(とちがみ)の我ら、こんなにドキドキしたのは初めてでござる～♪」
「ゲホゲホッ！あの猫姫もう喋ってたのかよ!?」
「いや、拙者がそう尋ねたらあっさりボロを出したでござるよ」
テンパり過ぎだろ……と額に手を当てて嘆息する新にダルキアンが寄り添う
「しかし、戦(いくさ)以外興味を示さなかったレオ姫が乙女になったのは喜ばしい事でござる。アラタ殿のその妙技……拙者達も興味が湧いてきたでござる♪」
「アラタ殿っ、是非ともお披露目お願い申すでござる～♪」
ユッキーが新の背中に体を密着させてきた
フロニャルド1番の爆乳が背中を刺激し、新は一瞬で答えを導き出した
〝据え膳喰うべし!!〟
「……よし、じゃあ遠慮なんかしねぇけど良いか？」
「無論。そうでなければお相手は務まらないでござる♪」
「いざ尋常に、でござるっ♪」
湯気立つ露天風呂で2人の土地神(とちがみ)との情事も味わう新だった……

3回目の情事が終わり、風月庵(ふうげつあん)の2人と別れてフィリアンノ城に戻ってきた新はアザゼルからの連絡を受けていた

「もう出来たのか？」

『おう。急ごしらえで不安定だが、この際贅沢は無しだ。次元転移(じげんてんい)の原理を応用した召喚マシーンが完成したぜ。今から作動させるから一旦通信を切るぞ。それと余分な物は持ち込むな。負荷が掛かり過ぎてマシーンがイカレちまったら終わりだ』

「何っ!?じゃあバイクは――――」

『無理、諦めて新車を買え。じゃあな』

アザゼルからの通信が切れた途端、新はガクッと頭(こうべ)を垂れた

車検に出したばかりで長年乗用してきた愛車を手放す事になろうとは……

しかし、これも自分が元の世界に戻る為……涙を呑んで決めるしかなかった

「……向こうの準備が整った。これでお別れだ」

「アラタさん、今度は勇者としてここに来てください。そうすれば気兼ねしないで済みますよー」

「レオ様に召喚されたら、私と一緒に戦おうねー！」
「クー様も皆も楽しみにしてます」
シンク、ナナミ、レベッカから励ましの言葉を受け取り軽く会釈して手を振る新
次にリコの所へ歩み寄る
「リコ、俺が持ってきたバイクはお前にやるよ。どうせ持っていけないからな」
「ふええっ？よ、よろしいのでありますか？」
「あぁ、分解しても怒らねぇ。好きなだけ調べろ」
「分解は……しないであります！だって……だって……アラタさまがフロニャルドに来てくださった証でありますから……」
「そうか。ま、それも良いか」
新はリコの頭を優しく撫で、リコは尻尾を振って喜ぶ
そこへレオが新に声を掛けてきた
「アラタ、お主には本当に感謝しておる。今度は勇者としてここに呼んでやろう」
「あー！レオ姉ズルいのじゃ～！ウチだってアラタを召喚したいのじゃ～！」
「ハハッ、その時は宜しく頼むぜ？レオ、クーベル」
クスクス笑っていると頭上にグレモリーの紋様をした魔方陣が開かれる
どうやらアザゼルの作ったマシーンが上手く作動したようだ

赤く発光する魔方陣の中に足を踏み入れ、そのまま中央に歩みを進める
中央に立つと同時に新の体も輝き始め、魔方陣の光と共に姿を消していった……
「行っちゃったね」
「うん。アラタさんは本当に強い人だったよ。僕も……僕達も負けてられないや！」

「新っ！」
「新さんっ！」
そして赤い光から解放され、元の世界に戻ってきた新はオカルト研究部の部室にてリアスと朱乃に抱きつかれていた
すぐ側にはアザゼルが作ったであろう召喚マシーンが煙を噴いて破損していた……
「いやー、上手く作動して良かったな。もし途中でマシーンがイカレちまったら微粒子の状態で死んでたぞ」
「危な過ぎるだろ!?影も形も残らずに死ぬのは御免だ！」
「まあまあ、無事に戻れたんだから良いじゃねえか」
ケラケラと笑うアザゼルに殺意を向けていると、アザゼルが「あ、そうだ」と何か思

い出したかの様に部屋の隅に置かれていた段ボール箱を持ってくる
「何だそれ、ギャスパーの同類でも届いたのか？」
「それどういう意味ですかぁぁぁっ!?ひどいですぅぅぅっ！」
「いや、オカルト研究部宛に届いたんだが……差出人が幽神なんだよ」
幽神の名を聞いて一誠達に緊張が走る
新はフロニャルドに飛ばされていたので幽神兄弟を知らず、アザゼルから詳細とこれまでの顛末を聞く
「俺がいない間にそんな事があったのか……。そんな奴から来た荷物を受け取って大丈夫なのかよ？」
「その点は心配無い。届いて直ぐに調べたが毒物も爆発物の反応も無かった」
新が恐る恐る段ボール箱を開けてみると――――中には大量のカップ麺とライラックの花束の他、二つ折の手紙が添えられており、その手紙にはこう綴られていた
『アーシア・アルジェントへ、飯を作ってくれた礼だ。新発売のカップ麺を送る。中にある花束だが、部屋の隅にでも飾っておいてくれ。兵藤とはいずれ決着を付けるが、今だけこの町から手を引いてやる。幽神正義より――――追伸、火傷を治してくれてありがとう』
「……っ。幽神の奴、素直に言いたいなら言えば良いのに。アーシア、お望み通りこの花

をどっかに飾っといてやろうか」
「はい、イッセーさん」
一誠とアーシアは段ボール箱の中にあったライラックの花束を持って花瓶に生けておく
ライラックの花束を見た新やリアスはコッソリと耳打ちする
「ねえ、新。紫のライラックの花言葉って確か……」
「あぁ、そうだ。……一誠の奴、少しは焦った方が良いな」
「あらあら、アーシアちゃんも罪な娘ですわね」
「「……？」」
ヒソヒソと話し合う皆にキョトンとする一誠とアーシア
２人は知らなかった
紫のライラックの花言葉は――――『恋の芽生え』『初恋』である事に……

「なあ、兄貴。どういう風の吹き回しだよ？あの女の所にカップ麺を送るなんて」
「飯を作ってくれた礼ぐらい返してやろうと思っただけ、ほんの気紛れだ」

「んな事する必要あったかぁ？しかも、わざわざ買った花まで添えてよぉ。あれ、ライラックって花じゃなかったか？確か花言葉は『初恋』……って、まさか兄貴、あのアーシアって女に惚れたのか？」
「……そうだな」
「ゑ……っ!?おいおい、マジかよ……？」
「そう言う感情はリンゴが木から落ちるのと同じで、ある日突然やって来る物なんだろう」
「か～っ、兄貴の趣味は分からねぇ」
「あぁ、自分でも驚いている。あれだけ忌み嫌っていた筈なのに好きになっちまうとは……。全く罪な女だよ、アーシア・アルジェントは……」

第9章　修学旅行のパンデモニウムとファーストキング

闇皇と天龍と大王の拳

「んっ……ぁん……っ。はぁ……アラタ……っ。もっと……もっと揉んでぇ……っ」
「レイナーレ様～、そろそろ代わってくださいよ～！ウチもアラタにマッサージされたい～っ！」
「我慢しろ、ミッテルト。私だってマッサージされたいが、今はレイナーレ様の順番なんだ」
　修学旅行を目前にしたある日の夜
　新は自室のベッドの上で性的なマッサージを行(おこな)っていた
　レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの堕天使3人組は既に全裸になっており、今はレイナーレが新のマッサージを受けている最中
　カラワーナとミッテルトは待機中だが、感じているレイナーレを羨ましそうに見つめ、もどかしさから自分達の胸を揉んでしまっている……

新はレイナーレと濃厚なキスを交わしながら彼女の胸を揉み、乳首を摘まみ指で擦る
「どうだ？気持ち良いか？」
「き、気持ち……良過ぎるのぉぉ……っ。私の感じる所、全部知られちゃってる……っ。ぁはぁっ！んぁぁんっ！……はぁ……はぁ……っ、ビクンってイッちゃった……っ。交代の合図ね……」
「やった～！次はウチの番！」
上手く力を入れられないレイナーレが四つん這いで離れ、ミッテルトと交代
ミッテルトは新の膝の上に座り、自ら新の手を小振りな胸に持っていく
小生意気な小動物のミッテルトだったが……マッサージが始まった途端、急に可愛らしい娘へと変貌する
「ふゃぁぁぁ……っ！アラタの指っ、良いよぉ……！ウチのロリおっぱい……虜(とりこ)になっちゃってるよぉ……っ」
顔はすっかり紅潮して蕩け、身体(からだ)をピクピクと震わせるミッテルト
そんな彼女に新はもっと攻め立てるべく、鎖骨に舌を這わせながら指を乳首に埋没させていく……
その刹那、ミッテルトの華奢な身体(からだ)がビクンっと腰を跳ねさせた
「ぁ……っ、はぁ……っ。嘘ぉ……もうイッちゃった……っ。交代したくないのにぃ

……っ」
「ワガママ言うな。さあ、アラタ。次は私の番だ」
「おう」
新はミッテルトを抱きかかえて少し横に寝かせ、カラワーナがベッドに上がって仰向けに寝転がる
寝転がった拍子に揺れる豊満な胸を鷲掴み、強弱を付けて揉んでいく
カラワーナの口から艶っぽい吐息が漏れ、次第に快楽に溺れた喘ぎ声も聞こえてくる
「んぁ……っ。ふっ、ふわぁぁ……っ！ぁん……っ。だ、駄目だ……っ！声をっ、抑えられない……っ。きゃっ……」
「見た目と違って本当に可愛い声出すよな」
ナチュラルに核心を突かれたカラワーナは恥ずかしさのあまり顔を逸らす
新はそんな彼女に追い討ちを掛ける
固くなったカラワーナの乳首を舌で一舐めしてから甘噛み――――不意を突かれたカラワーナは大きく腰を跳ねさせた
「はぁぁんっ！……んぁ……っ、ぁぁっ……っ。こ、この鬼畜め……っ。弱い所ばかりい……っ」
「結局全員直ぐにイッちゃったのね……」

崩れた正座で座り込むレイナーレが身体をピクピクさせているカラワーナとミッテルトに視線を移す

ベッドに横たわり〝来て……〟と言わんばかりの甘えた表情で両手を伸ばし、新はレイナーレに覆い被さった

「アラタが突然いなくなったから、おかしくなるかと思ったのよ……？帰ってきたのは嬉しいわ。でも……また直ぐにいなくなるなんて……っ。どれだけ女を泣かす気……っ？」

「仕方ねぇだろ、修学旅行なんだから。それに家を空けるのもたかが3日ぐらいだ。そんなの我慢しろよ」

「アラタのいない3日がどれだけ長いと思ってるのよ……っ」

「その通りですわ」

突然第四者の声が聞こえてくる

周りを見回すといつの間にか部屋に入ってきた朱乃がベッドの上で新に迫っていく

髪を下ろし、薄生地の浴衣を着崩した朱乃は四つん這いでジリジリと近付く

「新さん……を、ください……。もうすぐ新さんは私を置いて京都に行ってしまうのですね……」

悲しそうな声音を発しながら新の首に手を回し、そのまま柔らかな身体を密着させる

「丸二日、あなたのいない日があるのですよ……？私、寂しくて死んでしまうかもしれない……」
「ちょっと！私の方が寂しいわよ！あなたは学園でアラタに触れられるだけまだマシじゃない！私達は家にいる時しかアラタに触れられないのよ？！」
「……そうですわね。だから、３泊４日分の新さんを一緒に補充しません？」
「ほ、補充？」
「そう、補充。新さんの肌に触れて、新さんに触れられて、新さんの男を感じて、私達は女である事を体験するのよ」
刺激的過ぎる言葉のオンパレードに新だけでなく、レイナーレ達も心臓の鼓動が早くなる
朱乃は新の指に自分の指を絡ませるよう重ねてくる
「私も新さんのマッサージ……受けたい……っ。おっぱいも……お尻も……うぅん、好きな所を好きなだけ揉みほぐして……っ。あなたの舌を身体中に這わせて舐めて……っ。蕩けきるぐらい感じさせて……っ」
「……っ！あ、朱乃……っ」
エロ過ぎる朱乃のお陰で新は沸き上がる性欲の衝動に抗えず、彼女の胸を力一杯揉みしだく

朱乃は「あはぁぁんっ！」と軽くイキ声を発してしまい、新にされるがまま身体を委ねる

堕天使3人組はその光景を羨ましそうに見つめた

「す、凄い……。あんなメチャクチャに揉まれて……気持ち良さそう……っ」

「うわぁ……アラタ、すっげー興奮してるし……。さっきの台詞も超エロ過ぎてウチらもドキドキしてるよぉ……」

「ま、まずいな……。こんなの見せつけられたら……また濡れてきてしまう……っ」

レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトは局部を手で押さえてモジモジと身体を捩らせる

そんな3人を見た朱乃は休憩ついでに言ってきた

「はぁ……はぁ……っ。うふふ……じゃあ、ここにいる皆さんでしましょう？」

「朱乃、良いのか？」

「断る方が変ですわ。新さん……私と堕天使さん達に……もう一度あなたの男を――――」

「朱乃？何をしているのかしら……？」

鬼気・殺気を感じる程の恐ろしい声音に気付いた新は首をギギギ……と動かす

開けられた部屋のドアからリアスが赤いオーラを迸らせていた……

凄まじい迫力に長い紅髪(べにがみ)までザワザワと蠢(うごめ)き、流石(さすが)の新も畏怖せざるを得なかった
朱乃は「うふふ」と妖艶に笑みながら自分の黒髪をさらっと手で撫でる
「あらあら、こわーいお姉さんが私と新を睨んでいますわ。きっと私達があまりにも熱々だから嫉妬しているんですわね。うふふ」
「私がちょっとお風呂に行っている間にこんな事をするだなんて、随分と大胆になったわね？さすが欲にまみれた堕天使と言った所かしら？」
「私はいつだって大胆ですわよ？そ・れ・に……」
朱乃は着崩れていた浴衣を取り払い、全裸となって新を自分の胸に抱き寄せる
それだけじゃなく、新の耳や頬をチロチロ舐めながらリアスに向かってトゲのある言葉を飛ばす
「新さんに抱かれてもいないあなたがどうこう言える立場なのかしら？」
「……っ!?」
「私だけじゃないわ。この３人も既に新さんとエッチしてるのよ？順番こそ負けてるけど、私は気にしないわ。でも……リアスは？まだ抱かれていないでしょ？それとも怖がってるの？普段から気丈に振る舞っているのに、ここぞって時には意気地(いくじ)が無いのねぇ？」
「……っ！……っ！……っ！」

只でさえ殺気溢れるリアスから更に赤いオーラが噴き上がる
痛い所を抉られたせいか、目にはうっすらと悔し涙が……
想像以上にヒートアップしてしまった現場に新の背中は冷や汗でグッショリ濡れていた
「……そうです。朱乃さんばかりズルいです」
3度めの乱入発生
気付けば新の背中にピッタリと身体を寄せる小猫がいた
白装束を着込み、猫耳と尻尾を生やしながらスリスリと自身の身体を新の背中に擦り付ける
「小猫、最近妙に気配を消して俺にくっついてくるのが上手くなったな……?」
「……私だって先輩と離れるのは……。新先輩、仙術の治療を一気に数日分おこないます……」
「ちょっ、猫コラァ！ロリ枠はウチで間に合ってるっつーの！アラタはウチのロリおっぱいが良いんだから、ツルペタ猫は引っ込め！」
「……淫乱な堕天使より純真な猫の方が良いに決まってる」
「はぁぁぁぁ？悪魔の時点で何処が純真!?アラタの前で裸になれないチビ猫が偉そうに！」

「……なれるもんっ」
シュルシュル……ッ
布が肌から滑り落ちる音
小猫は顔を赤くしながらも白装束を脱いで裸になり、小さな裸体を新の背中に密着させた
更に上下に擦り続け、小猫の尻尾が新の右腕に巻き付く
「先輩……っ、どうです……？私だって……これくらい出来ますよ……っ？」
「小猫……いつの間にここまで……」
「うぅ～っ！アラタァ！せめて視線だけはウチのおっぱい見ててぇ！ほらっ、綺麗なロリおっぱいでしょ!?」
リアスＶＳ朱乃が発端となったのか、小猫ＶＳミッテルトの戦いまで始まってしまった……
それを見たリアスはブルブルと体を震わせ、頬を膨らませる
「こ、小猫までそんな過激な事を……っ。一緒にお風呂に入ったり、一緒のベッドで寝るだけじゃレベルが違うの……？新は私のなのに……」
「あらあら、リアス。そう言う所がいけないのよ？そんな上から目線だけじゃ男の人は振り向いてくれないわ」

「……うぐぅ……っ」
「朱乃、もう勘弁してやれ。そろそろマジ泣き入りそうだ……」
バタンッ！
更に扉を開ける音、そこに現れたのはゼノヴィアだった
この修羅場とも言える光景を見たゼノヴィアは言う
「凄いなこれは……。リアス部長だけでなく、朱乃さんに小猫、堕天使の3人まで……。出遅れてしまったが関係無い。新！私も参加するぞ！まずは裸になれば良いんだな!?」
「待て！これ以上事態を悪化させるな！」
「君さえ良ければ、この場で小作りしても構わない！とうっ！」
速攻でパジャマを脱ぎ捨て全裸になったゼノヴィアは新の足にしがみつく
普通ならば全裸の美少女達に抱きつかれ、囲まれているこの状況は幸せの一言に尽きるが……とてもそんな空気ではなかった……
異常過ぎる状況にリアスは堪(たま)らず叫んだ
「もう！あなた達！どうして主(あるじ)の私の言う事が聞けないの！」
リアスは主の権限を主張するが、その程度で黙る者は1人としていない
「「だって、私の――――」」
「新さんよ！」

「……先輩です！」
「新だ！」
「違うの！私のなのぉぉぉぉっ！」
涙目のリアスの訴えが家中に木霊する中、新は「こんな調子で修学旅行大丈夫なのか……？」と小さく呟くしかなかった

「将来的にはグレモリー領に北欧魔術の学舎を設立したり、悪魔の女性からヴァルキリーを輩出したりと新しい事業をしてみたいと思っております」
「天使の私が上級悪魔のお屋敷にお邪魔出来るなんて光栄の限りです！これも主と……魔王さまのおかげですね！」
ロスヴァイセが自身で思い描いている未来予想図を語り、イリナがはしゃぐ
修学旅行間近になり、グレモリー眷属＋イリナはリアスの両親と共にグレモリー家のダイニングルームでお茶会をしていた
眷属が全て揃ったので、記念としてリアスの両親に紹介する事になった
優雅に紅茶を楽しみながらの世間話に新と一誠は固くなってしまい、他愛もない会話

を続けていった
お茶会を終えた後に転移用魔方陣で帰ろうとしたが、サーゼクスが戻って来たと言うので挨拶に向かう
そしてサーゼクスともう1人――――客人として来ていたサイラオーグを見かける
「お邪魔をしている。元気そうだな、リアス、赤龍帝。そして闇皇」
「相変わらずスゲェ覇気だな。普通の状態にしてるだろうが、ビシビシ感じてるぜ」
「ええ、来ていたのなら一言言ってくれても良かったのに。けれど、そちらも元気そうで何よりだわ」
リアスが兄――――サーゼクスに挨拶をした後、サイラオーグがここに来た理由を訊く
「お兄さま、サイラオーグがここに来ていたのは……？」
「うむ。バアル領特産の果物などをわざわざ持ってきてくれたのだよ。従兄弟に気を遣わせてしまって悪いと思っていたところだ。今度是非ともリアスをバアル家のお屋敷に向かわせようと話していたのだよ」
サーゼクスが言う
サイラオーグはサーゼクスから見れば母方の従兄弟である
「今度のゲームについていくつか話してね。リアス、彼はフィールドを用いたルールは

ともかく、バトルに関しては複雑なルールを一切除外して欲しいとの事だ」
　サーゼクスの言葉を聞いてリアスは驚き、新が真っ先にサイラオーグに問う
「それってよ、不確定要素を全部受け入れるって事か？大王家の次期当主さん」
「ああ、そういう事だ。時間を停めるヴァンパイアも、女の服を弾き飛ばし、心の内を読む赤龍帝の技も、規格外と言われる闇皇の力も、俺は全部許容したい。お前達の全力を受け止めずに大王家の次期当主を名乗れる筈が無いからな」
　サイラオーグのカミングアウトに新以外の全員が息を呑み、新は口笛を吹いた
「うむ、ちょうど良い。サイラオーグ、イッセーくんか新くん――――どちらかと少し拳を交えたいと言っていたね？」
「ええ、確かに以前そう申し上げましたが……」
「軽くやってみたら良い。天龍の拳と闇皇の拳、その身で味わいたいのではないかな？」
　サーゼクスの言葉に一誠は驚愕し、新は片眉を吊り上げた
　若手悪魔ナンバー1と言われるサイラオーグと組み手
　普通ではあり得ない事態だ
　サーゼクスがリアスに訊くと、リアスは暫し考え込み、意を決した様に答えた
「……お兄さま……いえ、魔王さまがそうおっしゃるのでしたら、断る理由がありませんわ」

「決まりだね。さて、サイラオーグ。どちらとやりたい？」
サーゼクスはサイラオーグに訊くが、新が挙手してきた
「何かな？新くん」
「どっちかなんて言わず、俺と一誠の両方とやりましょうよ」
新の発言に一誠の目は飛び出し、リアス達も驚愕した
新は頭を掻きながら続ける
「どうせ手合わせなんだろ？だったら、２人いっぺんに相手した方がお得だぜ？大王家の次期当主さん」
その誘いにサイラオーグは不敵且つ気迫溢れる笑みを浮かべながら答えてくれた
「良い機会を貰った。存分に見せましょう、我が拳を……ッ！」

グレモリー城の地下にある広いトレーニングルーム
リアス達は少し離れた場所で待機し、新と一誠とサイラオーグは中央で向かい合う
サイラオーグが貴族服を脱いでグレーのアンダーウェア姿になる
筋骨隆々の肉体が２人に重圧を与える

一誠は籠手を出して禁手（バランス・ブレイカー）のカウントを開始、新は直ぐ様闇皇（やみおう）に変異した
そしてカウントが終了し、一誠は『赤龍帝の鎧（ブースティッド・ギア・スケイルメイル）』に身を包ませ、ドラゴンの翼を広げて攻撃の構えを取る
「一誠、とりあえず初手だ。同時に行くぞ」
「おう！」
新と一誠は揃って飛び出し、逃げる素振りを見せないサイラオーグの顔面に拳をくらわせた
新はすぐに後方へ飛び退き、一誠も背筋に寒気を感じて下がる
「……マジかよ。傷1つ付いてねぇや……」
「かなり力を込めたのに……無傷だなんて……」
サイラオーグは2人に殴られた部分を指で擦（さす）る
「良い拳だ。真っ直ぐで、強い想いが籠められた純粋な拳打。並の悪魔ならこれで終わる。だが――――」
眼前にいたサイラオーグが消え、新は瞬時に危険を察知して横に飛ぶ
「――――俺は別だ」
一誠は背後の声を聞いて両腕をクロスしてパンチを受ける――――が、鎧の籠手は1発の拳で砕けてしまった

体勢を崩された一誠はブーストを噴かして距離を取り、新はサイラオーグの左頬に魔力入りの肘鉄をぶち込んだ
だが、サイラオーグに目立ったダメージは無かった……
「ハハッ……ヤバ過ぎるだろ？サイラオーグ、肘鉄食らっても無傷とかマジかよ……」
「俺の武器は3つ。頑丈な体、動ける足、そして体術だ」
新は肘を下ろし、感心した様子で訊く
「その強さを得るまで、相当鍛えまくったんだな？」
「己の体を信じてきただけだ」
「……凄いです。サイラオーグさん」
一誠と同じ様に、魔力の才能を持たずに生き抜いてきた男
残された自分の肉体だけをひたすら鍛え、次期当主にまで上り詰めた
それは生半可な覚悟で出来るものではない……
「――――良いぜ。そこまで強いなら、何処までやれるか試したくなっちまうよ！『進化する昇格（エボルシオン・プロモーション）』！『女王（クイーン）』！」
「俺だって負けていられない！『戦車（ルーク）』にプロモーションッ！」
新は『女王（クイーン）』形態の『闇（アーク）・皇（カイザー）の極限（オーバー）破滅（カタストロフ）女帝（エンプレス）』に、一誠は『戦車（ルーク）』にプロモーションした

「『戦車(ルーク)』だと？」

一誠の昇格にサイラオーグは怪訝な表情になる

それは新も同じだった

「一誠、何故に『女王(クイーン)』にならなかったんだ？」

「実は現ベルゼブブ様から個人的にアドバイスを貰ったんだ。それをチョイと試してみたくて」

サイラオーグが瞬時に消え、一誠は踏ん張ってオーラを全身に纏う

新は上空に飛んでサイラオーグの気配を探す

『Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト)!!』

一誠は倍増したドラゴンのパワーを防御に回して拳に力を込める

ゴッ！

正面に現れたサイラオーグが一誠の腹にボディブローをめり込ませた

「オォラァァッ！」

ガゴッ！

新はサイラオーグが攻撃を放った直後に、脳天を『戦車(ルーク)』形態の左拳で打ち抜く

一誠も歯を食い縛って痛みに耐え、サイラオーグの顔面に右ストレートを打ち込んだ

ブッ！

サイラオーグの鼻から血が噴き出す

「なるほど……赤龍帝（せきりゅうてい）は『戦車（ルーク）』へ昇格したか。誤った判断でもなさそうだ。こちらも力を込めて拳を放ったのだが、お前の『戦車（ルーク）』としての攻撃と防御は見事だった。多彩な『女王（クイーン）』よりも攻守のみが高まる『戦車（ルーク）』の方がパワータイプのお前に似合っているのかもしれないな」

サイラオーグは次に背後にいる新を見た

「闇皇（やみおう）の拳も見事だった。北欧の悪神（あくしん）ロキを圧倒した『女王（クイーン）』の力、実に見事だった」

「サイラオーグだってスゲェよ。『女王（クイーン）』形態の拳を受けても平気そうにしてやがるとは」

「ハハッ。今日はここまでにしておこう。これ以上続けると歯止めが効かなくなってしまう。それはあまりにも勿体無い。お前達は今何かに目覚めようとしている最中なのだろう？」

「あ、バレた？一誠はどんなのか知らねぇが……俺の場合は当たってるぜ。以前、大牙（たいが）が使ったオリジナルの『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』――――アレに対抗出来る力を模索してるところだ」

サイラオーグが貴族服を拾い、２人の肩に手を置いた
「ならば、それを得てからだ。最高の状態で殴り合う。それこそが、俺の求める赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）との戦いだ」
サーゼクスに挨拶をした後、サイラオーグはこの場を去っていった
緊張感がすっかり解けた新と一誠は鎧を解除
サーゼクスが近づいて訊いてくる
「どうだったかな？彼の一撃は？」
「……似てました。俺の拳にそっくりで驚きました」
「確かに一誠と同じで、俺も驚いた。足りないものを補おうと練り上げたからこそ、力強い一撃……」
「そう、全てがストレートな攻撃。それは悪魔にないものだ……因みに彼は両手両足に負荷のかかる封印を施して戦っていた」
サーゼクスの告白に一誠は衝撃を受け、新は思わず吹き出してしまう
「アレでハンデ有りかよ……やべぇな、マジで強え」
「彼はもうプロの『王（キング）』と比べても何ら遜色（そんしょく）は無い。『禍の団（カオス・ブリゲード）』のテロも闇人（やみびと）の襲撃も何度か防止し、悪魔側に勝利をもたらしている。しかし、君達も大したものだよ。あのサイラオーグと拳を交えて尚も戦闘意識を失わないとは。彼と相対した者の中には軽

い手合わせでも戦意を喪失した者が出た程だ。自慢の魔力が通じず、肉体のみで圧倒されれば、高い魔力こそがステータスの悪魔では心が折れてしまう。上級――――位(くらい)が高い家の者程プライドが高く、1度折れたら再起が難しい」

「俺は……もう負けたくないだけです。レーティングゲームで負けたくない。俺、ゲームではまともに勝てた事が無いんです。新みたいに……」

ディオドラ戦はノーカウント

ライザー戦、ソーナ戦の両方で一誠は黒星だった

一誠は悔しさを押し込んで決意を秘め、新は現『女王(クイーン)』形態を何とか昇華させようと決心した

迎えた修学旅行当日

東京駅、新幹線のホームの隅に新達は集まっていた

見送りに来た朱乃は、来て早々に新とキスをする

「んちゅ……寂しくなっちゃいますわ。新さん」

「……先輩。私もナデナデしてください」

「へいへい」
新は小猫の頭を優しく撫でる
因みにレイナーレ達も見送りに来ていた
レイナーレはいつもの様に天野夕麻(あまのゆうま)に変装しており、新に抱擁(ハグ)する
「アラタ、京都のお酒買ってきてね？」
「修学旅行、満喫してくるんだ」
「帰ったらウチらにい～っぱい話を聞かせてね♪」
カラワーナとミッテルトが笑顔で言う
リアスが旅に出る2年生全員にカードみたいな物を渡した
「これが噂の？」
「ええ、これが悪魔が京都旅行を楽しむ時に必要な、所謂(いわゆる)『フリーパス券』よ」
京都と言えば名所は寺
更にパワースポットも多いらしく、悪魔が歩き回るには不都合な事が目立ってしまう
京都の裏事情を牛耳る陰陽師(おんみょうじ)及び妖怪やらが悪魔にフリーパス券を発行してくれているのだ
「私達の時もそうだったけれど、キチンとした形式のある悪魔にならこのパスを渡してくれるの。グレモリー眷属、シトリー眷属、天界関係者、あなた達は後ろ盾があって幸

せ者なのよ?」
「グレモリーさまさまだな」
全員がフリーパス券を制服の裏ポケットに入れ、準備が整う
アーシアの携帯が鳴り、同じクラスの桐生から呼び出しが掛かる
「では、リアスお姉さま。私達、行ってまいります!」
「行ってきます」
「行ってきまーす!」
アーシア、ゼノヴィア、イリナの3人がリアスに別れの挨拶をして新幹線の方へ
祐斗も一礼してから自分のクラスが集まっている方へ去っていき、一誠もアーシアの後を追っていった
新も新幹線に乗るべく立ち去ろうとした時、リアスが呼び止める
「ん?どうした」
「……強がってみたけれど、私も朱乃と同じなのよ。あなたがいない間、寂しいわ」
「大袈裟(おおげさ)だな。たかが3泊4日の修学旅行に……でも、そう言ってくれる相手がいるだけで嬉しいぜ。帰ったらリアスにもマッサージしてやろうか?」
「ふふっ、正直に言ってくれるのね」
チュッ……

苦笑した直後、リアスが新の唇に自分の唇を重ねた
不意を突かれた新は一瞬思考が停止してしまい、ハッと我に返る
「いってらっしゃいのキスよ。もう、何を驚いているの。過去にいろんな女性とキスしてきたでしょ？」
「……いきなりだったから〝やられた〟って思っただけだ」
「ふふっ、可愛い♪私はこれで充分。あなたが京都に行っても寂しさに耐えられるわ。いってらっしゃい、新」
「あぁ、行ってくる」
こうして新達の修学旅行は始まりを迎えた

修学旅行、いざ京都へ！

新幹線が東京駅を出発してから１０分ぐらい経過した頃、ウキウキした表情で松田が
「俺、実は新幹線初めてなんだよな！」と前の席で呟いていた
松田と元浜は以前、幽神（ゆうがみ）兄弟に手酷く痛めつけられ、グリゴリ経営の病院に搬送されたのだが……卓越した治療技術で既に完治していた
ただし、幽神（ゆうがみ）兄弟に関する記憶を少々改竄（かいざん）――――幽神（ゆうがみ）兄弟が神器（セイクリッド・ギア）持ちの賞金首である事は伏せられた
新は車両の１番後ろの席に座っており、一誠は松田と元浜の後ろの席で、身を乗り出して談笑している
新の隣には誰もおらず、ゼノヴィアとイリナは通路を挟んだ向こう側にいる
京都までまだ時間があるので一眠りしようかと席を傾ける直前、ゼノヴィアがこちらに近付いて隣の席へ座った
「新、先に言っておきたい事があるんだ」
「何だよ」
「今、私はデュランダルを持っていない。――――丸腰だ」

「デュランダルを持っていない？何でだ？」
「うん。なんでも正教会に属している錬金術師がデュランダルの攻撃的なオーラを抑える術を見つけたらしくてね。天界経由であちらに送ったんだ」
正教会とはキリスト教会の派閥の１つで、エクスカリバー強奪事件の際には協力してくれなかった
ゼノヴィアが皮肉げに笑む
「あの正教会が協力的になってくれたとはね。恐らくミカエル様を始めセラフの方々の口添えがあったのだとは思うが、それでもあそこの錬金術師に鍛え直してもらえるのならば、これ程の機会も無いと感じたんだ」
「例の協力態勢から派閥間も狭まったって事か。頭が固い老害共も流石にミカエル様の意見には逆らえないよな」
「聖剣の能力を下げずに攻撃的なオーラだけを抑える術。実に興味深いところだね。……まあ、持ち主である私が未だに抑えられないと言う不甲斐なさが際立つわけだが……。これで『騎士』とは何とも情けない……。私は死んだ方がマシか……？ああ、主よ」
「自虐に走るのも大概にしとけよ。何か遭ったら一誠からアスカロンを借りれば良いじゃねぇか」

「うん、そうだね」
やり取りを終えてゼノヴィアは元の席に戻っていき、新は瞑目して眠りの体勢についた
その寸前で一誠が祐斗と何か話している声が聞こえてくるが、眠気が僅かに勝(まさ)って新の意識をブラックアウトさせた

「……ん? 何だ……? また意識の中へダイブしちまったのか」
真っ暗な空間の中で佇む新
そこは以前『初代キング』が進言してきたのと同じ状況下だった
〝また来るのか?〟と辺りを警戒していると、新の直ぐ近くを徘徊する火の玉から声が発せられる……
『ごきげんよう、現闇皇(やみおう)くん』
「その声……っ! まさか……伊坂か!? 何でお前が!?」
『おやおや、自分で喰らっておきながら忘れるとは感心しないな』
なんと火の玉の正体は新が飛ばされたフロニャルドで対峙した闇人(やみびと)――――

魔剣将官と呼ばれた伊坂威月だった……

伊坂は新の猛攻で大打撃を受けた末、『暗黒捕食者』によって新の鎧と体内に封じ込められた

その伊坂が新の意識の中に現れている……

「テメェ、完全にくたばったと思ってたのに……まだ何か企んでやがるのか？」

『そう睨まないでくれ。今の私ではどうする事も出来んよ。「初代キング」と同じで肉体を失い、魂だけの存在になっているのでね』

「……で、俺の意識の中に出てきた目的は何なんだ？」

新が訝しげに訊くと伊坂は意味深な含み笑いをしてから言う

『単純に君に興味が湧いてきたのだよ。破壊と殺戮、支配欲を象徴とする「闇皇の鎧」を宿して自我を維持していられるのは君が初めてだ。過去に君の父親――――竜崎総司は「初代クイーン」から鎧を奪い、三つ巴の大戦時に我々と対抗してはいたが……彼はまだまだ歪な感じだったよ。……どうやら君には自分でも想像がつかない程の潜在能力があるのかもしれんな。それがいったいどう言った物なのかは見当も付かないがね』

「俺の潜在能力……？」

『まあ、何にせよ今の君には規格外の力を発現させても問題は無いと言う事だ。これから先の戦いは過酷さと苛烈さを増していくだろう。その中でも君は凄いスピードで成

長を遂げている。普通ならばあり得ない程のね。私としてはこうなった以上、途中で君に死滅してもらう訳にはいかない。私の力も使うと良い。それが同族の力をも奪う「闇皇(やみおう)の鎧」の本質だからね』

伊坂がそう言い残した瞬間、火の玉は鳥の様な形となって蒼い輝きを発した……

ハッと目を覚ますと、新幹線の中だった

今さっきのやり取りで何か変わった事は無いかと思い、人目が付かないように籠手を具現させてみる

――発現させた右籠手には鳥の羽の如き意匠が加わっていた――

「あの野郎、何のつもりだ……?」

疑問を口ずさんでいると前の席で「う、うおおおおっ!おっぱい!」と松田の叫ぶ声が耳に入ってくる

〝あのハゲ、遂に薬物にでも手を出したか?〟と容赦無く毒づく新が立ち上がってみると……松田が隣の席にいる元浜とじゃれている光景を目撃してしまった

「うわっ!松田!何をする!俺の乳を揉んで何が楽しい!」

「はっ！俺はいったい何を……。急に乳を求め出して……それで……」
「松田、お前そこまでおっぱい欠乏症にかかって……。よし、今夜ホテルの部屋でエロＤＶＤ観賞会をしよう！機材は全て荷物に積んである！」
　その話を聞いて一誠も「マジか！」と身を乗り出していた
「おおっ！イッセー！それでこそだ！よーし！この日の為に入手した『桃色爆乳景色・金閣寺』と『肌色巨乳模様・銀閣寺』を見ようぜ！」
「「おおっ！」」
　一誠と松田は元浜の言葉に大きく返事をし、クラス女子からは「死ねエロ３人組！」
「新幹線の中までキモい！」などと罵られていた
「俺はあの作品、１０歳の時に見たな……」

『間もなく京都に到着致します』
　到着のアナウンスが流れ、新幹線が駅のホームに停車
　新達は荷物を持ってそのまま外へ出て、桐生の先導で改札口まで移動して潜っていく
「おおっ！広いなー！」

「見ろ、アーシア！伊〇丹だ！」
「は、はい、ゼノヴィアさん！伊〇丹です！」
興奮気味のゼノヴィアとアーシアはあれこれと指を差して反応し合っており、イリナも「天界にもこんな素敵な駅が欲しいわ！」と違う目線で興味津々となっていた
「集合場所はホテル1階ホールだったわね。ほーら、男子ぃ、あとアーシア、ゼノヴィアっち、イリナさんも駅に夢中になるのも良いけど、さっさと集まらないと午後の自由時間無くなるわよ！はい、竜崎も缶コーヒー飲んで集合ー！」
「ふわぁ……あぁ、分かってる」
班の纏め役である桐生に声を掛けられ、飲み干した缶コーヒーをゴミ箱に捨てて集合する
全員が集まった所で桐生はしおりを出して位置を確認していた
「えーと、ホテルは駅周辺なのよね……。今出てきたのが西改札口だから……バス停方面に出て、右方向に動きながら……」
「とりあえず、外出ようぜぇ。いつまでも駅ん中じゃ前に進めねぇし」
「松田、知らない土地で迷ったら大変なのよ。1人の判断ミスで容易に戦死者が出るわ」
「ここは戦場かよ！」
「いや、松田。桐生の意見は正しい。チームワークは大切だ。ここはボスの桐生に任せ

よう。京都は既に私達に牙を向いているかもしれない」
「お前らノリノリだな……」
桐生とゼノヴィアの説得力ある凄みに新は頭を掻いて欠伸をする
駅内で「キャー！痴漢！」などと女性の悲鳴が聞こえ、男性が「お、おっぱいを……！」と痴漢行為した挙げ句、周りにいた男性達に取り押さえられている光景があった
「京都も物騒だな」
「ああ、元浜。何処にでも変態はいるもんだな」
「俺の前にもいるぞ。変態とハゲの変態とメガネの変態がな」
「何だと竜崎!?俺達よりも変態のくせに！」
「モテる男の余裕かチクショウ！今に見てろよ！」
「新！さらっと俺も仲間入りさせんな！否定はしないけど」
「よし、把握！いざ行かん！」
桐生の先導のもと、新達は京都駅を出て古都へと歩み出した
京都駅に着いて、そこから数分歩いたところに大きな高級ホテルが見えた
その名も「京都サーゼクスホテル」……
少し離れたところには「京都セラフォルーホテル」が建っている
入り口に立つボーイに学生証を見せ、ホールまで案内された

きらびやかで豪華絢爛な造りのロビーを見て、松田、元浜、桐生は圧倒される
クラス全員がホールの床に座り、先生達の注意事項に耳を傾ける
「百円均一のショップは京都駅の地下ショッピングセンターにあります。何か足りないものがあったら、そこで済ませるように。お小遣いは計画的に使わないとダメです。学生の内から豪快なお金の使い方をしてもロクでもない大人になるだけですよ。お金は天下の回り物。あれやこれやと使っていたらすぐに無くなります。だからこそ１００円で済ませなさい。――――百均は日本の宝です」
ロスヴァイセが生徒達に百均ショップを熱く語っている
ロスヴァイセは教師に就任してすぐに生徒からの人気を得て、更に歳が近いため「ロスヴァイセちゃん」と親しみを込めて呼ばれていたりする
前に立つ教師の最終確認が終わり、生徒達が従業員から部屋のキーを受け取っていく
新も自分の部屋のキーを取りに行こうとした矢先、アザゼルに呼び止められた
「新、お前の部屋なんだが」
「何だ？聞いた話じゃ一誠は一人部屋らしいな。しかも、ボロボロの和室。まさか同室って訳じゃねぇだろうな？」
「いや、そうじゃない。お前だけ部屋無しになっちまった」
「同室より酷い結果で返された!?部屋無し!?何でだよ！」

「いやー、旅行資金の遣り繰りが災いしちまったのかなー？」
わざとらしい態度に舌打ちをしていると、アザゼルの懐から何かがはみ出しているのが見えた
新は直ぐにはみ出した何かを取り出してみる
それは元浜が先程新幹線の中で叫んでいたタイトルのエロＤＶＤだった……
「……なるほど、そう言う事か」
「あ、バレた？悪いな。この作品はまだ見てなかったもんでつい」
「……ちょっと殺ってくる」
「おーい、せっかくの修学旅行なんだ。流血沙汰は程々になー？」
アザゼルの勧告を無視して新は松田と元浜の首根っこを掴み、人気の少ない非常階段に連れていく
「な、何だ竜崎！俺達が何をしたって言うんだ!?」
「しらばっくれんな。もうネタは上がってんだよ」
「遂に気付いたか……。だが、勘違いするな。これはな、お前に対する嫌がらせではない。俺達の大願を成就させる為に仕方無く行った適切な措置なのだ」
「言い訳はお前らを殺してから聞いてやる」
一誠は止めようとしたが時既に遅し……松田と元浜は非常階段の奥に連れていかれ

た

その直後、一誠の携帯が鳴って画面を確認すると……2通のメールが来ていた

Ｍｅｓｓａｇｅ　ｆｒｏｍ　松田『たすてけ』

Ｍｅｓｓａｇｅ　ｆｒｏｍ　元浜『たそけて』

「……うん、あいつら『助けて』って打ちたかったんだろうな……」

一誠は悲哀に満ちた表情で携帯を閉じてから自分の部屋に足を運び、数秒後に新が非常階段から戻ってくる

彼の顔には返り血らしき物が頬や額に付着しており、ポケットティッシュで拭き取っていた

「ったく、修学旅行ぐらいバカな真似を控えろっての。さて……部屋無し状態をどうするか。俺だけ別のホテルに泊まるってのもな……」

「新さん」

どうするか考え込んでいるとロスヴァイセに呼び止められた

「何だロスヴァイセ？何か用か？」

「はい、先程アザゼル教諭からお話は聞きました。こちらの手違いでお部屋が無いそうですね？」

「そうなんだよ。とあるバカ2人のせいでな。んで、仕方ねぇから自腹で一人部屋借り

ようと――――――」
「いいえ！無駄遣いはいけません！さっき言ったばかりですよ！そう言う無駄遣いを繰り返しているとロクでもない大人になってしまうんです！」
「じゃあ、どうすれば良いんだよ？」
「無駄遣いさせない為にも……新さんは私と同室していただきます！」
新は一瞬理解出来なかった
普段も同じ家に住んでると言うのに、旅行先でも何故？と言う心境だった
ロスヴァイセが続けて言う
「一人部屋だと……あなたは”絶対”部屋を抜け出して他の女生徒を襲うと考えたのです」
「”絶対”を強調してハッキリ言いやがるな……ッ」
「それだけじゃありません！新さんが一人部屋なのを良い事に、ゼノヴィアさんが夜這いに行くかもしれない可能性だってあります。ですから教師として、責任を持って私が新さんを監視します」
「あ～……確かにあり得るな。昨日の夜だってそうだ。あいつのキス、今までで1番激しかったぜ……どういう訳か、朱乃と同じ様に魔力を込めてやがった」
そのお陰で朝、少し唇が痛かったとか何とか……

「あ、新さんとチュー……ハッ！で、ですから！女生徒達の貞操を守るため、ゼノヴィアさんの夜這いを阻止するために、新さんは私と同じ部屋と言う事です！異論はありませんね!?」

慌てて弁論するロスヴァイセに、新は頭を掻きながら答えた

「ん～、まぁ良いけどよ。美人の女教師と相部屋なんて滅多にねぇ状況だからな。喜んで」

答えを聞いた瞬間、ロスヴァイセの表情が明るくなった

その様子を見ていた村山、片瀬、桐生含める女子生徒数名から黄色い声が飛び交う

「ロスヴァイセちゃんが竜崎くんとあんなに親しく話してる！」

「まさか、付き合ってるの!?教師と生徒のイケナイ恋愛!?」

「竜崎もやるわね～。後輩、同学年、先輩の次は新任教師のロスヴァイセちゃんだなんて」

「兵藤×木場きゅん×竜崎くんも売れ筋だけど……新作は竜崎くん×ロスヴァイセちゃんに決まりね！」

「近い内に結婚とかしちゃうかも！」

新はこの黄色い歓声をとりあえず聞き流す事にした……

「新さんと結婚……新さんと結婚……」

「おーっ、見ろ、アーシア、イリナ。珍しいものがたくさん店頭に並んでいるぞ」
「わー、かわいい狐ばかりですね」
「ここでお土産ちょこっと買ってもお小遣い足りるかしら？」
午後になり、京都駅から一駅進んだ稲荷駅に到着した新達一行
アーシア、ゼノヴィア、イリナの教会トリオは早速京都の空気を堪能している
「美少女トリオの京都風景。まずは1枚目！」
先程ボコられ復活した松田（顔に包帯を巻いている）がアーシア達を撮影していると、ゼノヴィアが新を呼ぶ
「新、一緒に写ってくれ」
「あぁ、良いぜ？」
「イッセーさんもこちらへ」
「おう、アーシア」
新の腕にゼノヴィア、一誠の腕にアーシアがしがみ付き、松田は怨恨の視線を向けたままシャッターを切った

一番鳥居を抜け、本殿を進み、稲荷山に登れる階段に足を踏み入れた
歩き始めて数十分
「……ぜーはー……ま、待ってくれ……。ど、どうしてお前達はそんなに動けるんだ……？」
元浜（松田と同じく包帯付き）は既にグロッキーとなっており、松田が嘆息しながら言う
「おいおい、元浜。情けないぞ。アーシアちゃん達だってまだ元気だってのに」
松田は元々運動神経が良い方なので体力には自信がある
新達も悪魔なので基礎能力は人間より上
夏休みに特訓もしたから余裕だった
途中にある休憩所の店を見ながら登っていく
「わりぃ、俺チョイとお先にてっぺんまで行ってみるわ。新も来るか？」
「おうよ。競争しようぜ」
新と一誠は他の皆に断りを入れてから階段を勢い良く駆け上がった
そして頂上らしき場所に出ると、そこには古ぼけたお社（やしろ）があった
辺りは木々に囲まれており、まだ日が出ているのに薄暗い
２人は手を合わせてから下山しようと、お社で手を合わせた

『おっぱいをたくさん見て触れますように！彼女が出来ますように！アーシアとエッチ出来ますように！』
『世界中の良い女とセッ○ス出来ますように。天使の美女美少女とセッ○ス出来ますように。とにかく良い女とセッ○ス出来ますように』
卑猥かつ正直な願いを念じた……
新と一誠は互いの念が分かったのか、ハイタッチを交わしてその場をあとにしようとした
「……京の者ではないな？」
突然の声に反応して周囲に気を配らせる
「人間じゃねぇな、この気配。出てきやがれ」
新が挑発的に告げ、一誠が身構えていると……巫女装束を来た少女が現れた
金髪に金色の目をしており、頭部には獣の耳が生えていた
獣耳の少女は２人を激しく睨み、吐き捨てるように叫ぶ
「余所者め！よくも……ッ！かかれっ！」
掛け声と共に林から黒い翼を生やした頭部が鳥の輩と、神主の格好をして狐の面を被った奴等が大量に出現した
「おおっと！何だ何だ!?」

「カラス天狗に狐、妖怪か。妖怪様が何の用だ？」
「母上を返してもらうぞ！」
「は、母上？何を言ってんだ！俺達はお前の母ちゃんなんて知らないぞ！」
一誠が少女にそう叫ぶが、少女は問答無用と言った様子だった
「ウソをつくな！私の目は誤魔化しきれんのじゃ！」
「ったく、メンドクセェ事になったな」
新は闇皇(やみおう)に変異して、襲ってきた天狗達を拳と蹴りで吹き飛ばす
「どうした、２人とも」
「何々？妖怪さんよね？」
ゼノヴィアとイリナが合流し、手には土産屋で買ったと思われる木刀を手にしていた
少し遅れてアーシアも駆けつける
「……そうか、お前達が母上を……もはや許す事は出来ん！不浄なる魔の存在め！神聖な場所を穢(けが)しおって！絶対に許さん！」
少女が怒りを一層深めて叫ぶ
話し合いは出来そうに無かった
「一誠はアーシアの所に行ってやれ。俺は単独でも平気だ」
「分かった！でも、あまり派手にやらないでくれ！部長から言われてるんだ！」

「分かってる！」
新がマントを翼に変えて飛び上がり、カラス天狗達の攻撃を躱しながら拳と蹴りで打ち落とす
一誠達も特に苦戦する様子は無かった
少女は不利だと悟り後方に退き、憎々しげに睨んだあと手をあげる
「……撤退じゃ。今の戦力ではこやつらに勝てぬ。おのれ、邪悪な存在め。必ず母上を返してもらうぞ！」
少女がそれだけ言い残すと、一迅の風と共に消え去った
この京都で起こって欲しくない何かが起こりそうな予感がした……

「キヒヒッ。ここが京都か～♪いや～、良い空気と場所だね～♪」
「神風。この地に残り1本となった封印の楔があるのか？」
「そうだよ。でもね、京都は特殊な力場だからさ～。ここにある封印の楔は、東西南北の何処かにある4つの結界石で守られているらしいんだよね～。バリー、まずはそれを破壊しに行こう♪」

「４つの結界石か」
「キヒヒッ♪まっ、その点については心配無いよ。ボクの隠し玉達にも来てもらうから。３人ともかなりの手練れで、ボクの計画にあっさり乗ってくれたんだよ。いや～、やっぱり持つべき者はイエスマンだね♪」

修学旅行初日の夜、食事を終えた新は自販機でココアを買い、飲みながら今日の出来事を考えていた
新達は妖怪の襲撃を受けた後、松田達と合流し、警戒しながらも伏見稲荷での観光を終えた
ホテルに戻ってからこの事をアザゼルとロスヴァイセに報告するが、「何故京都で襲撃を受ける？」と困惑していた
新達が京都に旅行するのは事前に伝えてある筈らしい
アザゼルはもう一度確認を取ると言って戻り、向こうにいるリアスにも報告すべきかどうか迷ったが、アザゼルが「まだ何か起こったか分からない。余計な心配をあいつに与えるな」と言われ踏み留まった

確かに今の段階では情報量が少な過ぎるので動くのはリスクが高い
更に新には伊坂の一件もある……
右籠手に羽の様な意匠が加わっただけだが、体には何の変化も無い
「自分でも想像がつかない程の潜在能力、か……」
伊坂の放った意味深な言葉を解読しようとするが、こちらも情報不足な為に分かる筈も無かった
今分からない事を考えても仕方無いと吹っ切り、新はココア缶をゴミ箱に捨てて動く
「……そろそろ頃合いだな。この時間、女子が風呂に入る時間だ。――――覗きに行くか」
堂々と覗き宣言、女風呂に続く階段を下りようとした時……非常階段から喧騒が聞こえてくる
その非常階段も女風呂への近道で、新は扉を開けて降りてみる
すると、階段の踊り場で一誠とジャージ姿のロスヴァイセが対峙しているのが見えた
どうやら一誠も同じ事を考えていたらしい
ロスヴァイセが新に気付いたのか、攻撃体勢を取る
「あなた達がお風呂場に行く事なんて最初から分かりきっている事ですから。教師として女生徒の裸を死守します!」

「ロスヴァイセさん……。いくら仲間でもこれだけは譲れません。――――俺は女風呂を覗きます」
「一誠、そんなお前に良い情報がある。耳を貸せ」
疑問符を浮かべる一誠に新はコッソリと耳打ちする
その直後、一誠は「マジか!?恩に着るぜ!」と感謝して来たばかりの道を戻っていった
ロスヴァイセが怪訝そうに訊く
「新さん、イッセーくんに何を吹き込んだのですか?」
「あぁ、あいつには『誰にもバレずに女風呂を覗ける絶好のスポットがある』と伝えたのさ。……まあ、そいつは真っ赤な嘘だけどな」
「……?どうして嘘の情報を?」
「ロスヴァイセ、俺はガキの頃に親父からこう言われたんだ。――――『女湯を覗く時は、友を欺け!自分だけが覗ければそれで良い!』ってな」
「最低な考えじゃないですか!」
「関係ねぇよ!よく言うじゃねぇか。騙される方が悪いって」
一誠を出し抜いた新は悪人顔で持論を述べる
「だいたい、新さん!あなたはリアスさんや朱乃さんの裸体を毎日の様に拝んだり、尚且

つ触ったりもしているのだから、それで充分でしょう！」
「甘いな。良い女がそこにいるなら、女の裸がそこにあるなら行く。それが男ってモンだぜ？」
「んもう！この女ったらし！因みにですが、私を突破してもシトリー眷属の2年女子の方々が見張ってます。最終手段ですが、匙くんが龍王に覚醒して新さんを止めます。――どちらにしろ、お風呂を覗く事なんて出来ないのですよ」
女風呂には既に強力な防衛陣が整っているようだ
しかも、最終手段が匙の龍王覚醒……厳戒過ぎる態勢に新は溜め息を吐く
「ったく、少しは見逃してくれても良いんじゃねぇのか？それぐらい寛容じゃないと彼氏なんていつまで経っても出来ねぇよ。つーか、出来ても直ぐに別れ話切り出されるぞ」
新の核心を抉る様な台詞がスイッチとなったのか、ロスヴァイセは狼狽し始める
「かかかかかかかかかかか、彼氏の事は今関係無いじゃないですか！ど、ど、どうせ私なんて処女の元ヴァルキリーですよ！私だって将来有望でカッコイイ彼氏とエッチな事したいのにいいいいっ！」
絶叫と共にロスヴァイセが全身から魔力を放つ
「やべっ、流石に言い過ぎたか……」と自粛する新だが、ロスヴァイセは涙目で完全にス

イッチが入ってしまった
非常階段を大きく揺らす程の迫力に、新は右籠手を発現する
「もう許しませんからね！」
ロスヴァイセの手元から放たれた電撃が非常階段を縦横無尽に走る
籠手で電撃を薙ぎ払いながら飛んでくる魔術攻撃を回避していく
その間に新は手元に黒い魔力――――闇を纏わせ、準備を整えた
「行くぜ。『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』ッ！」
新の手から闇が解き放たれ、電撃や魔術攻撃を飲み込みながら這い回り――――ロスヴァイセを完全に捕らえる
「……ッ！こ、これはあのエッチな技!?」
「ご名答だが、もう遅いぜ？さあ、仕上げだ」
新が右手を振り払った刹那、ロスヴァイセを包んでいた闇が霧散した
ロスヴァイセを裸にして……
ロスヴァイセの裸を吟味する新
彼女の美麗（びれい）なおっぱいは形から大きさ、ピンク色の乳首まで見事だった
美脚にくびれた腰とスレンダーなボディラインは、まさに芸術品とも相違無い程に
「う、うぅ……」

「……え？泣き入った？わ、悪かったな……つい」
平謝りする新にロスヴァイセは泣きながら激怒する
「ついで済ませるつまりですか!?あ、あのジャージは特売の時に９８０円で買ってきた物なんです！い、今だと３倍以上するかもしれないのに！ブラジャーやパンツだって、安い時に買ってきたんだからーっ！」
「キレる所そっち!?俺に裸を見られてる事よりもジャージの方にキレるのか!?」
「ハッ！やだ！お、お嫁に行けなくなっちゃいます！」
ようやく自分の現状に気付いて裸を手で隠すロスヴァイセ
新は頭を掻きながら再び失言してしまう
「行く宛があるとは思えないんだが」
「……っ!?」
その言葉を聞いてロスヴァイセがワナワナと震え出す
「い、今なんて言いました……？行く宛が無い……？あ、新さんは私がずっと独身でいると思ってるのですか……？う、うわあぁぁぁぁぁぁんっ！酷いですぅぅぅぅっ！」
ロスヴァイセはあまりのショックに泣き叫び、涙目でポカポカと新を叩きまくる
暴走したロスヴァイセに新は気圧（けお）されてしまう
「いてっ、いてっ！悪かった！悪かったって！謝るから落ち着け！」

「うわあぁぁぁぁぁぁぁんっ！人が1番気にしてる事を平然と言うなんてぇぇぇぇぇっ！新さんのバカァ！鬼！悪魔！鬼畜！エッチ！変態！サディスト！性欲色魔！」
「悪かったって言ってるだろ！頼むから少しは落ち着――――おわぁっ！」
「きゃっ！」
そうこうしてる内に足が縺れてしまい、新とロスヴァイセは倒れ込む
新は仰向けに倒れ、ロスヴァイセは新を押し倒す様な体勢となった
ムニュリとのし掛かるロスヴァイセのおっぱいに新の視線は釘付け
ロスヴァイセは一瞬間の抜けた表情となるが……直ぐに顔を真っ赤にして湯気を噴き出す
新が起き上がろうとした矢先、何故かロスヴァイセは新にしがみついてきた
「なっ!?お、おい！ロスヴァイセ！何してんだ！これじゃ起き上がれねぇだろ！」
「だ、駄目です！今起きたら新さんに裸を見られちゃいますっ！ひゃぁ……っ！あ、新さん……！太股でそんな所を擦らないで下さい……っ！」
「だったら今すぐ退けよ！もし、こんな所を誰かに見られたら――――」
「りゅ、竜崎……？何してんの……？」
第三者の声に冷や汗ダラダラで首を動かす新
下の階段から風呂上がりであろう寝間着姿の桐生、更には村山や片瀬、その他女子数

名が顔を赤くして新とロスヴァイセの現状を見ていた……

「ロ、ロ、ロスヴァイセちゃんが裸で竜崎くんを押し倒してるっ!?」

「ロスヴァイセちゃんが攻めなの!?まさかの攻守逆転っ!?」

「次の新作は竜崎くん×ロスヴァイセちゃんじゃなくて、ロスヴァイセちゃん×竜崎くんだったなんて……！」

「ロスヴァイセちゃん、もう寿退職しちゃうの!?」

村山、片瀬の女子達が盛り上がる中、桐生は思わずスマホで新とロスヴァイセがくんずほぐれつしている現場の写真を撮った

「……これはまた凄い特ダネに出会っちゃったわね。非常階段からバレずに竜崎んとこ――――ロスヴァイセちゃんの部屋に押し掛けてみようかな～と思ってたら、まさかこんなイチャラブシーンを見せつけられるなんて……。修学旅行だから浮かれるのは分かるけど、いくら何でも大胆と言うか……手が早過ぎると言うか……」

「ちょっ、待て！今なんで写メった!?その写真をどうする気だ!?」

「あ、大丈夫大丈夫。思わず撮っちゃったけどばら蒔いたりしないから。……それじゃ、お邪魔しました……。仲良くごゆっくり～……」

桐生達はそそくさと非常階段を出て自分達の部屋へと戻っていった――――大きな誤解を抱いたまま……

顔をひくつかせる新は未だにしがみついているロスヴァイセに怒りの丈をぶつける
「どうするんだよ！今ので完全にあらぬ誤解を受けたぞ!?」
「ご、誤解ですって……？新さんは私を裸にしておきながら誤解の一言で済ませるつもりなんですか!?もう許しません！責任を取っていただくまで絶対逃がしませんからね！乙女心を傷付けた罪は重いんですから！」
「あーもう！分かった、分かったよ！そんなに嫁に行きたきゃ俺ん所に来れば良いだろ！」
「……え？そ、そんな……こんな場所でいきなり告白だなんて……。わ、私と新さんは教師と生徒で……っ。新さんから見たら、私なんてまだ不束者（ふつつかもの）で……。そ、それにご両親にもまだご挨拶が……っ」
半ばヤケクソ気味で言い放った新の台詞に困惑するロスヴァイセ
いつもの新らしからぬ言葉の選択ミス、ハプニングの連続で脳の処理に狂いが生じてしまったのだろう……
改めてロスヴァイセを退かそうとする新のもとに近付く影――――見てみるとアザゼルがそこにいた
「あー、楽しんでいるところすまない」
「これが楽しんでいる様に見えるか？早くこの妖怪子泣きヴァルキリーを何とかしてく

れ」
「プクク……ッー子泣きヴァルキリーって……ッー それより俺とお前達に呼び出しが掛かった。近くの料亭に来ているそうだ」
「呼び出し？ 誰からだ？」
「魔王少女様だよ」
魔王少女＝セラフォルー・レヴィアタンの方程式が即座に出てきた
やはり何か遭ったなと悟り、アザゼルは「直ぐに来いよ。乳繰り合うのはそれからにしてくれ」と伝えてから立ち去っていく
「別に乳繰り合ってる訳じゃ無いってのに……。ま、とりあえず行くか」
「行くって何処へ……きゃあっ!?」
新に抱きかかえられたロスヴァイセは軽く悲鳴を上げる
新はロスヴァイセをお姫様抱っこしたまま非常階段の扉を開き、誰もいない事を確認してから部屋へと直行していった
「しっかり捕まってろよ？ 部屋に着いたら直ぐに着替えて、アザゼルが言ってた料亭に来い。俺は先に行ってるからな」
「は、はい……」
ロスヴァイセを抱えて素早い動きで走り抜ける新

彼の腕の中でロスヴァイセはますます鼓動が高まったとか……

『……男の人に抱えてもらうって、こんなにも安らぐのですね……っ。新さんの腕……力強いのに、優しい感じがします……っ』

不穏な京都

「新！よくも嘘の情報を教えやがったな！」
「うるせぇ。俺だってあの後大変だったんだよ」
一誠は嘘情報の件で新に問い詰めるが、新は適当に受け流しながら歩く
ホテルを抜け出たグレモリー眷属＋イリナはアザゼル先導のもと、街の一角にある料亭『大楽（だいらく）』に来ていた
どうやらここに京都入りしているセラフォルー・レヴィアタンがいるらしい
中に通され、和の雰囲気が漂う通路を抜けると個室が現れる
戸を開けると着物姿のセラフォルー・レヴィアタンが座っていた
「ハーロー！新くん、赤龍帝（せきりゅうてい）ちゃん、リアスちゃんの眷属の皆、この間以来ね☆」
いつもながらテンションの高い挨拶をくれるセラフォルー・レヴィアタン
着物姿もなかなかの物で、長い髪も和服に合うよう結っている
匙を含めたシトリー眷属も来ていた
「よう、匙。京都はどうだ？午後何処か行ったか？」
「こちとら生徒会だ。今日の午後は先生方の手伝いで終わったよ」

匙が溜め息混じりにそう言うが、それは生徒会メンバーであるが為に仕方無い
「ここのお料理、とても美味しいの。特に鶏料理は絶品なのよ☆新くん達も匙くん達もたくさん食べてね♪」
新達が席に着くや否やセラフォルーがどんどん料理を追加してくる
新達はホテルで夕食を済ませたばかりなのだが、料理の美味さに箸が進む
「……で、セラフォルー様は何でここに来たんだ？」
「京都の妖怪さん達と協力態勢を得る為に来ました☆」
新の問いにセラフォルーは横チェキで答えるが、箸を置いて可愛い顔を少々陰らせる
「けれどね……。どうにも大変な事になっているみたいなのよ」
「大変な事？」
「京都に住む妖怪の報告では、この地の妖怪を束ねていた九尾（きゅうび）の御大将（おんたいしょう）が先日から行方不明なの」
新達はその一言を聞いて昼間の出来事を思い出した
『母上を返せ！』と訴えてきた少女の言葉が鮮明に蘇（よみがえ）る
「――――っ。それって……」
一誠の言いたい事が分かったのか、セラフォルーがコクリと頷く
「ええ、アザゼルちゃんからあなた達の報告を耳にしたのよ。恐らくそう言う事よね」

アザゼルが杯の酒を飲んでから言う
「ここのドンである妖怪が拐われたって事だ。関与したのは――――」
「十中八九『禍の団』……もしくは闇人よね」
セラフォルーも真剣な面持ちで言う
昼間の獣耳の少女――――九尾の娘の母親が『禍の団』か闇人に拉致されたようだ
新達を襲撃してきたのはその連中だと勘違いしたのだろう……
「お、お前ら、また厄介な事に首突っ込んでるのか？」
「バカ言うな。こっちは巻き込まれた側――――謂わば被害者だ」
目元をひくつかせる匙の言葉に首を軽く横に振って返す新
アザゼルが忌々しそうに吐き捨てる
「ったく、こちとら修学旅行で学生の面倒見るだけで精一杯だってのに。やってくれるぜ、テロリストと闇人どもが」
『よく言うよ……。舞妓と遊ぶぞーって速攻で消えてたくせに……』
『職務放棄かよ。後でチクって減給処分でも食らわせておくか？』
新と一誠はやれやれと言った感じで愚痴をこぼし合い、セラフォルーがアザゼルの杯に酒を注ぎながら言う
「どちらにしてもまだ公にする事は出来ないわね。何とか私達だけだ事を収束しなけれ

ばならないの。私はこのまま協力してくださる妖怪の方々と連携して事に当たるつもりなのよ」
「了解。俺も独自に動こう。ったく、京都に来てまでやってくれるぜ。クソッタレどもが」
再び酒を飲みながらアザゼルは毒づく
舞妓と遊べなくなるかもしれないのが相当許せないのだろう……
修学旅行の初日から厄介事に巻き込まれてしまった新達
出来る事なら無事に修学旅行を終えたい所だが、何かやらないといけないと言う衝動に駆られる
「あ、あの、俺達は……？」
一誠が恐る恐る訊くと、アザゼルは息を吐きながら苦笑した
「とりあえず、旅行を楽しめ」
「え、でも……」
遠慮がちな一誠の頭をアザゼルが手でわしゃわしゃと撫でる
「何か遭ったら呼ぶ。でも、お前らガキにとっちゃ貴重な修学旅行だろ？俺達大人が出来るだけ何とかするから、今は京都を楽しめよ」
アザゼルの一言に一誠はグッと感慨深い衝撃を受けてしまった

普段はちゃらけた総督なのに、こう言う時だけ良い事を言ってくれる
「そうよ、赤龍帝(せきりゅうてい)ちゃん、ソーナちゃんの眷属ちゃん達も。今は京都を楽しんでね。私も楽しんじゃう！」
セラフォルーも笑顔でそう言ってくれる
余計な心配を掛けない為にも新達は観光を継続する事に決めた
「じゃあ、そろそろホテルに戻ろうか。明日は清水寺とか色々見て回るから早いし」
「あ、一誠達は先に戻っててくれ。俺はまだアザゼルに話があるんだ」
「話？話って何だよ？」
「まあ、ちょっとした大人の語り話ってヤツだ」

「なるほど……お前の中に『初代キング』の側近とやらがいるのか」
「あぁ、新幹線の中で眠ってたら奴が来たんだ。『俺に想像もつかない様な潜在能力がある』って言い残してな……。んで、籠手を出してみればこのザマだ」
一誠達が一足先にホテルへ戻った後、新は酒を飲みながら籠手を出す
新幹線の中であった事がどうしても気掛かりになっており、アザゼルには一応話した

方が良いかもしれないと思って切り出したのだ

羽の意匠が加わった籠手を見たアザゼルは顎に手を当てて考え込む

「肉体は消滅したが、魂になって新の体内に定着出来たってのか……？そもそも『闇皇(やみおう)の鎧』は倒した闇人(やみびと)の能力を喰らうだけで、闇人(やみびと)その者を取り入れるなんて出来ない筈……。いや、こいつもまだまだ分からない事だらけだからな。神器(セイクリッド・ギア)と同じくイレギュラー要素に目覚めつつあるとすれば……」

「で、どう思うんだ？アザゼル」

「ん？あー、新。お前の職業柄気になってしまうのは仕方無い事だが……それについては修学旅行を終えてから考える方が良いだろう。調べようにも大掛かりな調査と機器がいるかもしれん」

「おいおい、『禍の団(カオス・ブリゲード)』に闇人(やみびと)が絡んでるかもしれないって時に――――」

「確かにそうだ。だがな……お前も駒王学園(くおうがくえん)の生徒だ。年に1度しか無い修学旅行、ガキの時にしか味わえない貴重な物を辛気臭(しんきくさ)いまま終わらせるのは勿体無い。言ったろ？俺達大人が出来るだけ何とかするから、今は京都を楽しめって」

アザゼルの言葉に新は何も言い返せなかった

新はバウンティハンターと言う職業上、数ヶ月前までまともに遊んだ事など無かったいや、遊んだとしても心の底から楽しめる余裕が無かった……

賞金首を探して狩る、それが今までの新が送ってきた日常
だが、今は歴(れっき)とした学生となり、信じ合える仲間も出来た
その仲間達と共に送る修学旅行を台無しにしたくはない……
諌められた事で〝今〟の大切さを思い知らされた新は自嘲する
「俺もまだまだガキだな……。自分の事ばかり考えて、周りを見てなかった。……そうだよな、今はこの修学旅行を楽しまないと損だよな」
「そう言う事だ。ほら、飲め飲め」
アザゼルが酒を勧め、新は徳利(とっくり)の酒を一気に飲み干す
京都の地酒(じざけ)はなかなか味が良くて自然と飲むペースも早くなる
空(から)になった徳利が1本、2本、3本と増えていく
「すご～い！新くんってお酒に強いのね☆」
「なかなかの酒豪じゃねぇか。新、お前今まで酔った事は無いのか？」
「あぁ、よっぽど強い酒を飲まない限りは酔わねぇ」
新はそう言って4本目の酒を飲む
そこへセラフォルーが新の隣へ寄ってきた
「新くん☆もっと美味しいお酒があるけど飲みたい？」
「どんな酒だ？」

「それはね……コ・レ♪」
シュルシュル……ッ
セラフォルーは帯を緩めて着物をはだける
腰まで着物がはだけた事により、セラフォルーのおっぱいが丸見えとなった
アザゼルも突然の脱衣に「おおっ」と声を漏らし、ガン見する
「セラフォルー様、ブラ着けてなかったのか？」
「着物は下着を着けるとラインが出てカッコ悪いから、着けてないの♪ちょっと待ってね……」
セラフォルーは右手で自身の胸を寄せて谷間を作り、その谷間に徳利の酒を注ぎ込む
谷間に溜まっていく酒……
準備を整えたセラフォルーは上目遣いで新を誘った
「これがお酒の1番美味しい飲み方だって……。新くん、飲んでみたい……？」
新は考えるよりも体を動かし、酒が溜まった谷間に顔を近付けた
それは愚問だと言わんばかりに近付き、舌で酒を味わう
最初は小さく少しずつ堪能し、徐々に吸い上げていく
卑しい水音（みずおと）が和室の静寂な空気を壊し、アザゼルはそれを肴（さかな）に酒を飲む
「おーおーっ、まさかこんなオイシイ場面を見れるとはな。く～っ、俺も混ざりて～！」

「うん……っ。ぁ……っ、はぁ……っ。新くんが……私のおっぱい……舐めてる……っ。……ぁんっ！そ、そこは……ダメぇ……っ」
「ふぅっ……絶品だったぜ。セラフォルー様」
「……お粗末さまでした☆」
顔を紅潮させるセラフォルーに新の性欲が掻き立てられる
もう一口イケそうと踏んでセラフォルーに迫ろうとしたその時――――
「新さん、いつまで話してるんですか？早くホテルに戻っ……て……？」
「「あ」」
戸を開けてきたのはロスヴァイセ
一誠達と先にホテルに戻ったのだが、恐らく新が遅いので連れ戻しに来たのだろう
そんな彼女が目にしたのは飲んだくれているアザゼル、着物をはだけて裸同然の格好でいるセラフォルー
そしてセラフォルーに迫ろうとしている新だった……
「な、な、なななななな何をしているんですかーっ!?」
「これか？これは乳酒（ちちざけ）と言って、日本古来より――――」
「そう言う事を聞いてるんじゃありません！新さん！あ、あなた……レヴィアタン様になんて破廉恥な事を！」

「大丈夫、私はまだ処女だよ☆」
「それ以前の問題です！だいたい新さん、あなたは学生なんですからお酒を飲んじゃいけません！未成年の飲酒は法律で禁じられているんです！」
「俺、見た目は学生でも中身は大人って事で」
「そんな屁理屈が通るわけ無いでしょう!?アザゼル教諭！あなたも教師なんですから止めてくださいよ！」
「え～、別に良いじゃねぇか。お前だってさっき新と乳繰(ちちく)り合ってたくせにぃ」
アザゼルが先程ホテルで起こった事で茶化すと、ロスヴァイセは顔を真っ赤にして狼狽し始めた
「……ッ！と、とにかく！戻りますよ新さん！いつまでもここにいたらダメダメになってしまいます！リアスさんに言い付けますよ!?」
「ぐ……っ、それは困る……。まあ、話も終わったし、大人しく引き上げよう」
腰を上げた新はロスヴァイセに引っ張られながら部屋を出て、ホテルへ戻っていった

「良いですか、新さん？修学旅行では団体行動が必須なんです。1人が身勝手な行動を

すれば同じ班の人達に迷惑を掛ける事になります。そもそも新さんは普段から健全な学生の領域から逸脱し過ぎです。飲酒は勿論、競馬などの賭け事は一般の高校生に相応しくありません」

ホテルに戻って早々、新はロスヴァイセから説教を受けていた

彼は昔から説教の類が嫌いなので終始顔を歪める

「――――と言う事なのですよ?新さん、聞いてました?」

「え?あぁ、聞いてた聞いてた」

「本当ですか?まあ、良いでしょう。これに懲りたら自粛してくださいね。では、もう消灯時間ですので寝ましょうか」

「あぁ、そうしよう。眠くて敵わねぇや」

新は即座にベッドに入って電気を消し、ロスヴァイセはホテル備え付けの浴衣を持って脱衣場へ向かう

ジャージは先程のひと悶着で新に喰われたので、着る物はそれしか無かった

「い、言っておきますけど……覗いたら許しませんよ……?」

「分かってるって。覗かねぇし、先に寝るから早く着替えてきな」

ロスヴァイセは新に警告してから脱衣場に入り、スーツを脱いでいく

ハンガーに干してから浴衣を着込み、新を警戒しつつ脱衣場を抜け出した

スー……スー……
微かに聞こえてくる寝息
見れば新は僅か数秒で眠りに落ちていた
先程飲んだ酒で眠気が早まったのだろう
「もう、寝てるんですか……？」
あまりにも呆気ない寝落ちを不審に思ったロスヴァイセは近付いて新の寝顔を確認する
新は本当に寝ており、寝息もハッキリと確認出来た
ロスヴァイセは一応安心したものの、何故か腑に落ちない心境に……
その後、新の寝顔をジッと眺める
「……新さんの寝顔ってこんなに無防備なんですね……。普段は凛々しく見えてたのに……」
普段の新とは違うギャップにロスヴァイセの視線に熱が帯び始める
好奇心を揺り動かされ、もっと顔を近付けていく
「……これが男の人の……新さんの匂い……っ。汗と……何なのでしょうか……？よく分からないけど、凄く安心させられる匂いです……」
夢中で新の匂いを嗅いでいく内に、体が自然とベッドの中に吸い込まれる

掛け布団を捲(めく)り、ロスヴァイセはゆっくりと新の隣へ侵入していく……
途中で我に返り慌てふためくが、先程新に抱きかかえられた感触を思い出し、ロスヴァイセを先へ先へと誘(いざな)う
そして遂に新の隣で寝そべる事に成功した
新の胸板に手を添え、更に顔を近付ける
「新さんの心臓の音が聞こえる……。胸板もガッシリしてて、凄く逞(たくま)しい……っ。男の人の隣が……新さんの隣がこんなに安らぐなんて……っ。む、胸が張り裂けそう……っ。でも――――少しだけ、もう少しだけ……このままでいても良いですよね……？」
ロスヴァイセは教師の立場を忘れて新の心地(ここちよ)好さに身を委ねる
新の心音、温もりを感じてる内に自然と微睡(まどろ)んでいった……

翌朝、目を覚ました新は状況を理解出来ずにいた
〝何故ロスヴァイセが俺のベッドで寝てるんだ？〟と……
隣のベッドには彼女が入った形跡が全く見当たらない

そこから〝ロスヴァイセは最初から新のベッドで寝ていた〟と言う結論が割り出された

新は起こそうと手を伸ばしたが、気持ち良さそうに寝ているロスヴァイセの安らかな表情を見て――――手を引っ込めた

彼女の髪をそっと撫で、起こさない様にベッドから抜け出る

「起きた時の反応を見てやろうかなと思ったが、起こすのも可哀想だな。良い寝顔なんだ。もう少し夢を見させてやろう」

いつもならちょっかいを出す新だが、ロスヴァイセの寝顔があまりにも可愛く気持ち良さげだったので見逃す事に

なるべく音を立てない様に着替え、準備を終えてから部屋を後にした

「じゃあ、野郎ども！行くわよ！」

「「おおーっ！」」

「朝からノリが良いな、ふわぁ……」

桐生がメガネをキラリと輝かせながらバス停を指差し、新を除いた男子陣が雄叫びを

上げた
２日目は京都駅前のバス停から清水寺行きのバスに乗る事から始め、１日乗車券を買って他の生徒達と共に並びながらバスを待つ
乗車した後、見知らぬ街の風景を眺めながら下車予定のバス停に到着
周辺を軽く探索してから坂を上って清水寺を目指す
「ここ三年坂って言って、転ぶと3年以内に死ぬらしいわよ？」
桐生がそう言うとアーシアが「はぅぅぅっ！それは怖いです！」と怖がって一誠の腕に掴まった
確かにアーシアはドジな所が多いので一誠の腕に掴まるのが安全だろう
微笑ましい光景を見ていると、ゼノヴィアも新の腕に掴まってきた
「どうした、ゼノヴィア？」
新が怪訝そうに訊くと、ゼノヴィアは表情を変えずとも若干震えて言う
「……日本は恐ろしい術式を坂に仕込むのだな」
「ただの言い伝えだ。こんなのをいちいち信じてたらキリが無い。なんなら、試してやろうか？そこのバカ２人を転がして」
「やめろ竜崎！俺達を実験台に使うな！」
「お前に転がされたら、３年どころか今すぐ死んでしまいそうだ！」

生け贄に差し出されそうになる松田と元浜が激昂しながら後ずさる
冗談を交えつつ坂を上り切り、仁王門を潜った
「見ろ、アーシア！異教徒の文化の粋を集めた寺だ！」
「は、はい！歴史を感じる佇まいです！」
「異教徒バンザイね！」
アーシア、ゼノヴィア、イリナの教会トリオが興奮気味に失礼な事を言い合っていた
新と一誠も清水の舞台から景色を眺める
「ここから落ちても助かるケースが多いらしいわよ」
「へー。つーか、落ちる人いるの？」
「さあね。落とす人は私らのすぐ側にいるみたいだけど」
桐生の言葉に嫌な予感を過らせた一誠がバッと横を見てみると……松田と元浜の首を掴んで持ち上げている新の姿があった……
「何してんのお前は!?」
「助かるケースが多いなら、見てみたいと思ってな」
「やめてやれよ！」
ドSな新の暴走を止めつつ、安全と合格の祈願や恋愛成就を願う小さな社に向かう
賽銭箱に小銭を入れて細やかな願いをした

「兵藤、アーシアと恋愛のクジやってみたら？」
桐生に促され、一誠とアーシアは恋愛のクジを引く
「大吉だって。将来安泰。俺達お似合いだってよ、アーシア」
一誠が掻い摘まんでクジの内容を伝えると――――アーシアは頬を赤く染めて大喜びしていた
「はい！嬉しいです！……嬉しいです、本当に……」
クジを大切そうに抱いて涙ぐむアーシア
その様子に一誠も嬉しくなり、もう一度ここの仏様に拝んでおく
「熱々だな」
「良かったな」
「ええ、良かったわ」
「私も何だか安心したわ」
横で新が茶化す様に言い、ゼノヴィア、イリナ、桐生が嬉しそうに頷いていた
「……俺達、蚊帳の外じゃね？」
「泣くな、松田よ。ホテルに帰ったらイッセーを殴れば良い」
松田と元浜が隅でどんよりと重い空気を醸し出す
その後は寺を一回りし、記念の品を手軽く買ってからバス停に歩みを進めた

「次は銀閣寺。パパッと行かないと時間なんてすぐに過ぎてしまうわよ」
桐生が時計を見ながら先導する
気付けば時刻はいつの間にか午前１０時を過ぎていた
新達は銀閣寺行きのバスに乗り、清水寺を後にした

「銀じゃない!?」
銀閣寺に到着し、寺を見たゼノヴィアが開口一番に叫んだ
そのショックぶりは尋常じゃなく、開いた口が閉じない程だった……
「そう言えばゼノヴィア、家で『銀閣寺が銀で、金閣寺が金。きっと眩しいんだろうな』って目を輝かせてたな」
「そ、そうなのか……」
新と一誠がヒソヒソ話し合う中、アーシアが震えるゼノヴィアの肩を抱いて慰め、桐生が銀閣寺について説明する
「建設に携わった足利義尚（あしかがよしひさ）が死んだから銀箔貼るの止めたとか、幕府の財政難で中止になったとか、諸説あるけど銀箔じゃないわね」

清水寺と同じく銀閣寺も一回りしようとした時、静かな場所に似合わないギターの音が聞こえてきた

一誠は何処か聞き覚えのある音楽に耳を傾ける

「この音色(ねいろ)……まさか――――」

一誠は思わず音のする方角へ駆け出し、新達も一誠の後を追い掛ける

人だかりがある地点に辿り着き、人混みを掻き分けて見ると……そこには一誠のダチとも言うべき男――――否、闇人(やみびと)がいた

「Ｙｅａｈ！今日は俺の遠征ストリートライブに来てくれて嬉しいＺＥ(ぜ)！Ｔｈａｎｋ Ｙｏｕ！」

大声で観客達に手を振るのは前髪の中央部分を白く染めたオールバックのイケメン

それは以前駒王学園(くおうがくえん)の体験入学に来ていた一誠の幼馴染み――――阿久津野大庵(あくつのだいあん)、通称ダイアンだった

一誠は親友との思わぬ再会に驚愕した

――

「よっ、久し振りだＮＡ(な)！一誠！まさか京都で会えるとは思ってなかったＺＥ(ぜ)！」

「俺もだよ！何も急にいなくなる事は無いだろ？」
「Ｓｏｒｒｙ。仕事のオファーが山積みでＳＡ、直ぐに戻らないといけなかったんＤＡ。許してくＲＥ」
ダイアンが手を合わせて一誠に謝る
その後は桐生からサインをねだられ、色紙や土産品に自分の名前を書き込んでいく
サイン入りの土産品を渡した所でダイアンが話を切り出す
「ところＤＥ、一誠とＦｒｉｅｎｄ達はどうして京都ＮＩ？」
「修学旅行さ。ダイアンはライブで京都に来てたのか。いや～、親友が有名になってくれると俺も鼻が高いよ」
「Ｏｈ、それもあるんだけどＹＯ……。実は『２代目キング』からある任務を受けＴＥ、調査も込みで京都に来たんＤＡ」
先程の明るい様子から一転、ダイアンの真剣な面持ちに一誠達は怪訝そうに窺う
「ある任務って？」
「最近ビショップの神風が独断で動いて何かしてるって話を聞いてＮＡ。日本各地で目撃されてる上に破壊活動も行っていたそうだＺＥ」
神風の名を聞いて新達はピクッと反応する
神風とは『２代目キング』が纏めている闇人の組織『チェス』に於いて『ビショップ』

の肩書きを持った少年
最後に対峙したのはディオドラ戦で、彼は裏で『禍の団』旧魔王派と繋がっていた
『覇龍』で暴走した一誠を圧倒した難敵でもある……
新が舌打ちして毒づく
「あのクソ野郎まで京都の何処かに潜んでやがるのか……」
「ダイアン、神風の目的とか分からないか？」
「そこまではまだ分かってなI。ただ、何か良からぬ事を企んでいるのは確かDA。一誠も気を付けてくRE。何か遭ったら俺も協力するZE」
「本当か!?助かる！」
「困った時はお互い様、Give and takeだZE？じゃあ、俺はまだ仕事が残ってるからそろそろ行くZE」
ダイアンは足早にその場を去っていった
本来なら敵である筈の闇人なのに協力してくれる……
親友の心意気に一誠は思わず涙が出そうになった
「良いダチを持ったな」
「あぁ」

「金だっ！今度こそは金だぞ！」
金閣寺に到着し、寺を見たゼノヴィアがまた開口一番に叫んだ
先程とは一転、「金だぞぉぉっ！」と物凄くはしゃいでいた
他の生徒達も金閣寺に来て撮影しており、松田も夢中でカメラで撮っている
新と一誠も写メールを駒王学園にいるリアス達に送信
見て回った後はお土産を買い、お茶屋で一休みする
「どうぞ」
和服の女性が淹れたての抹茶と和菓子を運んできてくれた
抹茶のほろ苦さが和菓子の味をより引き立てる
「うん、悪くないわね」
「少し苦いです」
「……金ピカだった」
イリナは抹茶を気に入り、アーシアは少し苦手かちょっとずつ飲む
一方、ゼノヴィアは金閣寺によっぽど感動したのか目を爛々と輝かせていた
「ゼノヴィア、記念に祈っておきましょう！」

「そうだな」
「私もお祈りします！」
イリナの提案にゼノヴィアは頷き、アーシアも続いて「「ああ、主よ！」」と天に祈った
時刻は既に午後2時、時間が早く感じる
「キャー、痴漢！変態！」
「お、おっぱいを！おっぱいをくれ！」
女性の悲鳴を聞いて新と一誠がお茶屋を出てみると、男性が係の人に取り押さえられていた
同じく休憩所から顔を出している松田が呟く
「痴漢かー。そう言えばさ、朝のテレビニュースでもやってたぜ、痴漢報道。祇園（ぎおん）の方で痴漢があったらしいぞ。昨日の駅の事といい、ちょっと多いな」
そう言う松田に元浜がメガネをくいっと上げながら物申す
「お前が何を言う松田よ。行きの新幹線で俺に襲い掛かってきたくせにな」
「いや、何だかさ、あの時は寝ぼけていたと言うか、意識がおかしかったと言うか、やたら乳に触りたかったんだよな。何だろう、あの感覚」
「それは青春だな」

「なるほど、若さゆえの過ちかー」
　そんなやり取りを見ていると、ふいに新のスマホが鳴った
「もしもし。どうした、朱乃？」
『もしもし、新さん。いえね、大した事ではないのだけれど……。ちょっと気になった事を小猫ちゃんが言っていたの』
「気になる事？」
『さっき金閣寺の写メを送ってくれましたよね？その写真の写っているらしいのよ』
「……写っている？」
『ええ、風景に狐の妖怪が何体か写っているみたいなの。何か起こっているの？狐の妖怪自体は京都では珍しくないのだけれど……』
　朱乃の少し心配げな声音に新は周囲に対する警戒心を強めた
「大丈夫だ、心配するな」
『そうですか。では……何か遭ったら連絡をくださいね？』
　やり取りを終えて電話を切り、新は先程の写メを確認
　普通の金閣寺にしか見えないが、猫又の小猫だからこそ分かるのだろう
　怪訝そうに窺う一誠に先程の会話内容を伝え、アーシア達にも伝えようとした
　お茶屋の方を振り返ると――――松田、元浜、桐生が眠っていた

疲れからの眠りではない……現にアーシア達は起きている
それどころか、ゼノヴィアが女性店員を睨み付けていた
女性の方に視線を送ると……女性の頭に獣耳が生えているのが見えた
尻尾も確認し、周りは既に獣耳を生やした連中で普通の観光客はその場で倒れ込むように寝ている
「どうやら金閣寺も縄張りだったようだな」
新が低い声音で攻撃態勢を取り、ゼノヴィアもバッグから祐斗に貰った聖なる短剣を取り出してアーシアを背後に隠す
一誠も左手を構え、籠手を出現させようとした時――――「待ってください」と聞き覚えのある声が
そこにはロスヴァイセがいた
「ロスヴァイセ、どうしてここに？」
新を見たロスヴァイセが一瞬顔を赤くし、気を取り直して息を吐きながら言う
「え、ええ。あなた達を迎えに行くようアザゼル先生に言われました」
「先生に？何が起こっているんですか？」
一誠が周囲に目を配らせながら訊く
不思議な事に、周囲の妖怪達からは昨日襲ってきた時の様な敵意を感じない

その事に気付き、攻撃態勢を解く

「停戦です。と言うか、誤解が解けました。――――九尾のご息女があなた達に謝りたいと言うのです」

ロスヴァイセがそう言った直後、獣耳の女性が1人――――前に出て深く頭を下げる

「私は九尾の君に仕える狐の妖(あやかし)でございます。先日は申し訳ございませんでした。我らが姫君(ひめぎみ)もあなた方に謝罪したいと申されておりますので、どうか私達についてきてください ませ」

「ついてきて欲しい？何処に？」

「我ら京の妖怪が住む――――裏の都です。魔王様と堕天使の総督殿も先にそちらへいらっしゃっております」

どうやら観光してる間にアザゼルが誤解を解いてくれていたようだ

「キヒヒッ♪やっほ～、お疲れさ～ん♪首尾はどうだい？」

「問題ねぇよ。お前が言ってた西の結界石(けっかいせき)ってヤツはブッ壊してきたぜ？途中、警備の妖怪どもが来ややがったが、オレ様の炎で燃やしてやったよ」

「私も東の結界石の破壊に成功したよ。彼と同じく妖怪達に邪魔されたが、直ぐに片付いた」
「あっしも南の結界石を破壊しやした。邪魔が入りやしたが、問題無く始末しやした」
「後は封印の楔（くさび）を解（と）くこの北の結界石だけか……。だが、見た所こいつはそう簡単に壊せそうにないようだが？」
「キヒヒッ、そ・こ・で♪完成したばかりのコレの出番だねぇ」
「……？何だ、その不気味な籠手は？」
「ボクが製作した神器（セイクリッド・ギア）だよ♪さあ、動け――――『邪眼（ネメシス・ギア）の闇籠手』」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）』
「キヒヒッ……！じゃあ行くよ？最後の結界石、大破壊作業開始～！」

九尾のお姫様

新達が足を踏み込んだのは異界とも言える場所だった
江戸時代の町並みを再現したかの如く古い家屋が建ち並び、扉や窓、通り道から面妖な生物達が顔を覗かせている
金閣寺の人気の無い場所に設置してあった鳥居を潜り抜け、この薄暗く独特の空気を醸し出す空間
そして、そこの住人――――妖怪達が新達を迎えた
狐の女性の案内で歩く新達
薄暗い道のりを灯火(ともしび)が先の先まで転々と続いている
「うきゃきゃきゃ」
「うおっ！ビックリした！」
突如提灯(ちょうちん)に目と口が現れ笑い出し、不意を突かれた一誠は驚愕してしまう
「すみません。ここの妖怪達はイタズラ好きで……。害を成す者はいないと思いますが……」
「ここは妖怪の世界なのか？」

新が素朴な疑問を投げ掛け、狐の女性が答える
「はい、ここは京都に住む妖怪が身を置く場所です。悪魔の方々がレーティングゲームで使うフィールド空間があると思いますが、あれに近い方法でこの空間を作り出していると思ってくれて構いません。私達は裏街、裏京都などと呼んでおります。無論、ここに住まず表の京都に住む妖怪もおりますが」
つまりは悪魔のゲームフィールドに近いと言う事だろう
「……人間か？」
「いんや、悪魔だってよ」
「悪魔か。珍しいなや」
「あのキレイな外国の娘っ子も悪魔か？」
「龍だ、龍の気配もあるぞ。悪魔と龍……」
「待て。あの男からはヤバげな匂いがするぞ……」
「んだ、闇の匂いだぁ……」
妖怪達の話し声が聞こえてくる
ここは妖怪の領域、悪魔が珍しいのだろう
……特に新は危険視されているかの様な言い方をされている
家屋が建ち並ぶ場所を抜け、小さな川を挟んで林に入り、そこを更に進むと巨大な赤

い鳥居が出現した
その先に古さと威厳を感じさせる大きな屋敷が建っており、鳥居の先にアザゼルと着物姿のセラフォルーがいた
「お、来たか」
「やっほー、皆☆」
２人の間には金髪の少女――――昨日襲ってきた九尾の娘がいた
巫女装束ではなく、戦国時代の姫が着る様な豪華な着物に身を包んでいる
「九重(くのう)さま、皆様をお連れ致しました」
狐の女性は直ぐに炎を出現させて消えた
九重と呼ばれる姫が1歩出てきて言う
「私は表と裏の京都に住む妖怪達を束ねる者――――八坂(やさか)の娘、九重と申す」
自己紹介をした後、深く頭を下げてきた
「先日は申し訳なかった。お主達を事情も知らずに襲ってしまった。どうか、許して欲しい」
そう謝る九重に一誠は困り顔で頬を掻き、新は既に気にしてないかの如く欠伸をしていた
「ま、良いんじゃねぇのか？誤解だって分かった事だし」

「うん。せっかくの京都を堪能出来れば問題無いよ。もう2度と邪魔をしないならね」
「そうね、許す心も天使に必要だわ。私はお姫様を恨みません」
「はい、平和が1番です」
　ゼノヴィア、イリナ、アーシアも彼女を許す事に
「てな感じらしいんで、俺も別にもう良いって。顔あげてくれよ」
「し、しかし……」
　どうやら昨日の一件を相当気にしている様子だ
　一誠は膝をついて九重に目線を合わせて言う
「えーと、九重で良いかな？なあ九重、お母さんの事心配なんだろう？」
「と、当然じゃ」
「なら、あんな風に間違えて襲撃してしまう事もあるさ。勿論、それは場合によって問題になったり、相手を不快にさせてしまう。でも、九重は謝った。間違ったと思ったから俺達に謝ったんだよな？」
「勿論だとも」
　一誠は九重の肩に手を置き、笑顔で続けた
「それなら俺達は何も九重の事を咎めたりしないよ」
　九重は一誠の言葉を聞くと顔を真っ赤に染めてモジモジしながら呟いた

「……ありがとう」
　立ち上がる一誠にアザゼルが小突いてくる
「流石（さすが）おっぱいドラゴンだな。子供の扱いが上手だ」
「ちゃ、茶化さないで下さいよ。これでも精一杯なんですから！」
「いやいや、さすがおっぱいドラゴンだ」
「はい、さすがです！感動しました！」
「本当、見事な子供の味方よね」
　照れる一誠にゼノヴィア、アーシア、イリナが頷きながら賛辞を贈り、新もアザゼルと同様に一誠を茶化す
「一誠、いつの間にかロリで始まってコンで終わる道に足を踏み入れたな（笑）」
「ちょっ、新！何だそのニヤニヤした顔は!?それにその言い方、なんかムカつく！ロリコンって言いたいならハッキリ言えよ！」
「じゃあ一誠、お前には今日からロリコンドラゴンの名前を進呈してやる」
「本当にロリコンって言いやがったチクショウッ！」
「ま、負けていられないわ！こんな所でまでおっぱいドラゴンの布教だなんて！魔女っ子テレビ番組『ミラクル☆レヴィアたん』の主演としては負けていられないんだから！」
　セラフォルーに変な対抗意識を燃やされている中、九重が照れながら言った

「……咎(とが)がある身で悪いのじゃが……どうか、どうか！母上を助ける為に力を貸して欲しい！」

――――それは少女の悲痛な叫びだった

――――――

今は全員屋敷に上がっており、大広間で九重を上座にして座っている
「ま、各勢力が手を取り合おうとすると、こう言う事が起こりやすい。今回はその敵役がテロリストか闇人(やみびと)どもだったわけだ」
アザゼルが不機嫌そうに言う
平和な日常を願うアザゼルはテロリストを絶対に許さない姿勢、恐らく腹の中は煮えくり返っているだろう
九重の両脇には先程の狐の女性と鼻の長い山伏(やまぶし)姿の老人がいた
老人は天狗の長で古くから九尾の一族と親交が深いらしい
「総督殿、魔王殿、どうにか八坂姫を助ける事は出来んのじゃろうか？我らならばいくらでも力をお貸し申す」
天狗の老人が1枚の絵画を見せる
それには巫女装束を着た金髪の綺麗な女性が描かれていた
頭部には獣耳も付いている
「ここに描かれておりますのが八坂姫でございます」
『マジか！おっぱい超デカいじゃん！』
『あぁ。こんなサイズは見た事が無い。朱乃よりもデカいぞ』
『こ、こんなデカ乳のお姫様を拐(さら)ってテロリストどもは何を……。ひ、卑猥な事をしてい

たら俺が許さん！』
『お前が1番卑猥だろ』
　描かれていた八坂を見た一誠は大興奮し、新はそんな一誠を小突く
「八坂姫を拐った奴らが未だにこの京都にいるのは確実だ」
「どうしてそう思うんですか？」
　疑問を投げ掛ける一誠にアザゼルは頷きながら説明する
「京都全域の気が乱れていないからだ。九尾の狐はこの地に流れる様々な気を総括してバランスを保つ存在でもある。京都ってのはその存在自体が大規模な力場だからな。九尾がこの地を離れるか、殺されていれば京都に異変が起こるんだよ。まだその予兆すら起きていないって事は八坂姫は無事であり、拐った奴らもここにいる可能性が高いって訳だ。セラフォルー、悪魔側のスタッフは既にどれくらい調査を行っている？」
「つぶさにやらせているのよ。京都に詳しいスタッフにも動いてもらっているし」
　アザゼルが新達を見渡すように視線を向ける
「お前達にも動いてもらう事になるかもしれん。人手が足りな過ぎるからな。特にお前達は強者との戦いに慣れているから、対英雄派及び対闇人の際に力を貸してもらう事になるだろう。悪いが最悪の事態を想定しておいてくれ。あと、ここにいない木場とシトリー眷属には俺から連絡しておく。それまでは旅行を満喫してて良いが、いざと言う時

は頼むぞ」
『はい！』
「おう」
アザゼルの言葉に新達は応じる
九重が手をついて深く頭を下げ、同じ様に両脇にいる狐の女性と天狗の老人も頭を下げる
「……どうかお願いじゃ。母上を……母上を助けるのに力を貸してくれ……。いや、貸してください。お願いします」
九重の声は涙で震えていた……
いくらお姫様と言えど、まだ母親に甘えたい年頃
健気な姿を見た一誠は心の底で怒りを込み上がらせた
『「禍の団（カオス・ブリゲード）」の奴ら、会ったら絶対に取っ捕まえてやる！』
『あぁ、２度と立ち直れなくなるぐらい叩き潰してやる』
『あんな乳の大きいお姉さんを拐うなんて許さん！そして……助けたらきっと八坂さんが何かご褒美をくれるんじゃないか?!』
新と一誠は瞑目して八坂を助けた後の事を想像した……
『うふふ、お主が赤龍帝（せきりゅうてい）か？わらわを助けてくれたようじゃな？さて、どんな褒美をくれ

ようか……。何じゃ、わらわの体ばかり見おって……。そうか、お主はわらわの体を所望するか。ふふふ、良かろう。極上の喜びを教えてやるぞ？』

着物を妖艶にはだける八坂を脳内再生させた一誠は鼻血をタラリと垂れ流す

しかし、新の妄想はもっと過激な物だった……

『はむ……ぢゅるるっ……。ぅぶ……っ、ぷはぁ……。お主のコレはまこと元気じゃのう……。こんなにもそそり立っておる。わらわの中にお主のを入れさせてもらうぞ？……んぁぁあんっ！あっ、はぁ……こ、これが闇皇（やみおう）の……っ。なんと堅く逞（たくま）しいのじゃ……。腹の中まで火傷してしまいそうじゃ……っ』

瞑目しながらウンウンと頷く新の妄想は八坂とのセッ○スだった……

「……イッセーさん、エッチなこと考えてませんか？」

「……新さん、エッチな妄想は禁止です」

アーシアとロスヴァイセがジト目で一誠と新を見る

２人の勘の鋭さに新と一誠は頭を振って切り替え、英雄派と闇人（やみびと）との戦闘を覚悟した

「ったく、今日は色々あり過ぎたな」

その夜、夕飯も風呂も終えた新は食後のコーヒーを自販機で買っていた
妖怪の世界で過ごした後、新達は再び金閣寺に戻った
寝ていた松田達を起こして観光を再開
ホテルに戻ってからは祐斗とシトリー眷属を加えて今後の事について話し合い、明日は予定通りの観光地巡りをする
ただし、ホテルにいつでも戻れる転移用魔方陣の携帯簡易版を持っていき、アザゼルの連絡次第では観光を中止してホテルに戻らなければならない
因みに明日は嵐山方面を回る予定で、そこで九重が観光の手伝いをしてくれる事になった
初日に襲撃してきた時の謝罪と言う意味合いも含めての観光案内らしい
最初は断るつもりだったのだが、アザゼルに受けておくよう言われた
冥界と妖怪の協力態勢を結ぶ交流の第一歩ゆえに、その厚意を受ける事にした
飲み終えたコーヒー缶をゴミ箱に捨て、歩きながら考える
「さて、寝るまで時間があるな……。何をしようか？ロスヴァイセはシトリー眷属と風呂の警備に当たってるし……」
とりあえず一旦部屋に戻ろうかと歩みを進め、部屋のドアを開けた
「おおっ、新。やっと戻って来たか」

「お邪魔してるね、新くん」
　ベッドの上には寝間着姿のゼノヴィアと、同じく寝間着姿で髪を下ろしたイリナが座っていた
　突然の侵入者――――もとい来訪者に新は直ぐさまドアを閉める
「ゼノヴィア、イリナ、何でここに？」
「すまん。ロスヴァイセさんが女子風呂の警備に当たってる間に遊びに来たんだ。そしたら、新がいないから部屋で待ち伏せた次第だ」
「わ、私は止めようとしたんだけど……」
「あー、もう良い。みなまで言うな。修学旅行にこんな嬉しいハプニングは付き物だ。……だが、外には見回りの教師がいるんだぞ？」
「ああ、男性教諭か。天使と悪魔の力でこの部屋に結界を張った。この部屋は誰が近寄っても何事も起きていないと感じるようにした。問題無い。ここで艶のある声を漏らしても誰も来ないぞ」
「よく分からないけど、ここは神聖で魔力に満ち溢れた空間よ！」
　ゼノヴィアとイリナが親指を立ててそう言ってくる
　新は額に手を当てて嘆息するが、直ぐに「まぁ良いか」と開き直った
「……で、何する？野球拳でもするか？」

「や、野球拳って……あの野球拳!?」
「野球拳、桐生から聞いた事あるね。ジャンケンで負けた方が服を脱ぐ遊び、修学旅行でする乙な物だと。君らしい考えだね」
　イリナが胸を庇うような動作をし、ゼノヴィアが感心するように頷く
　新は2人がいるベッドに腰掛け、どうすると訊く
「うん。それも良いが、まず聞きたい事が1つある」
「何だよ?」
「新、東京駅のホームでリアス部長にキスされていたね?」
　唐突過ぎる質問に新は〝まさか見られていたとは……〟と固まる
「……まあ、キスされたのは認める。油断してたからな」
「そうか。じゃあリアス部長の次は私だ。キスか、性的な事か。で、その次がイリナだ」
「え!?私も!?ウソ!」
　ゼノヴィアの言葉にイリナは目玉が飛び出る程の驚きを見せる
「良い機会だ、イリナ。お前も男を知っておけ」
「知ったら私、堕天しちゃうんですけど!?」
「そこは気合で乗り切れ。案外堕ちないで済むかもしれない」
「気合で!?そ、そうなのかしら……。けどけど、ひ、卑猥な事しちゃったらミカエル様の

Aたる私は……！」

ブツブツと独り言を呟きながら葛藤するイリナにゼノヴィアは説得を続ける

「新はお買い得だぞ、良い男だ。あと名うてのバウンティハンターで闇皇だ。お前が闇皇の子を産めば天界的には戦力となるんじゃないか？」

「……新くんの……子供……。天界の戦力……」

ゼノヴィアの説得にイリナは遂に悩みだしてしまい、ゼノヴィアは部屋の電気を消して新との距離を詰める

「よし……。まずは……キスからか？」

「え!?ゼノヴィア、もうキスをするの!?」

「ああ、そうだ。私は新と子作りの練習をするぞ。修学旅行でそう言う事をするのも乙だと桐生も言っていたじゃないか」

「そ、そ、そうだけど！これは確かにイベント的だわ！けれど、私は天使でミカエル様の配下で……クリスチャンなのよ！エ、エッチな事は……」

「では見ていてくれ。天使に見られながらの子作り。ふふふ、天に選ばれた子供が作れるとは思わないか？イリナ、そこで貴重な悪魔の子作りを見守っていてくれ。出来れば聖なる演出を賜りたい」

そう言いながらゼノヴィアは寝間着を脱ぎ出し、無駄の無い完璧なボディラインが露

出していく
ゼノヴィアの一言を受けてイリナは天使の翼と頭の輪を出現させ、気分を盛り上げる程度の光量を発する
「――――っ。任せて！私、ガブリエル様みたいに生命の神秘の瞬間に立ち会いたいと思っていたの！ああ、これも三大勢力、天界への、主への信仰に繋がるんだわ！」
天に祈り始めたイリナが見守る中、ゼノヴィアがブラジャーを外す
薄い布から解放されたおっぱいが激しく揺れ、ゼノヴィアはそのまま新に抱き付く
抱き付いたまま上下に動かして新の胸板と自分のおっぱいを擦り合わせる
「……ぁふ……やはり、男の肌は――――お前の肌は心地好いな。触れているだけで自分が女なのだと思える」
「……ッ。……ここまで来たらもうジッとしていられねぇよな」
「ん？どうし――――んんっ!?」
完全にスイッチが入った新はゼノヴィアの首に左腕、腰に右腕を回して逃がさないようロックしながら唇を重ねた
不意を突かれたゼノヴィアは一瞬動転、そんな彼女を意に介さず濃厚に舌を絡める新
最初から激しいキスにゼノヴィアはピクピクと体を跳ねさせた
「あ、新くん……っ。あんなにも激しくゼノヴィアを……っ」

イリナは目の前で行(おこな)われているキスシーンにパンク寸前
唇を離し、繋がった唾液の糸を吸い上げた新はゼノヴィアを押し倒す
脇の下から丁寧に舌を這わせ、彼女にもどかしい快感を与えながら左手でおっぱいを揉む
「はぁっ……ぁ、あぁぁ……っ。ひゃんっ！んんっ……あ、新ぁ……っ。私の身体で……興奮してるのか……っ？嬉しいよ……。君にこう言う事をされると……恥ずかしいぐらい、自分がどんどん女になっていくのが分かる……っ」
「ゼノヴィア、こんな展開でするのもどうかと遠慮がちになってたが……関係ねぇ。お前の処女――――貰うぞ？」
「――――っ！……ああ、貰ってくれ」
感極まるゼノヴィアは新の申し出を受け入れ、新は直ぐにゼノヴィアのパンツを脱がした
何も身に着けていない……裸のゼノヴィア
彼女は天使に見守られる中で愛する男に処女を捧げた……

「はぁ……はぁ……あっ、ぁはぁ……っ」
「あわわわわわわわ……っ」
事を終えたゼノヴィアは荒い息遣いで横たわり、終始見ていたイリナは顔を真っ赤にして狼狽(うろた)える
ズボンを直した新はゼノヴィアの頭を優しく撫でる
「ゼノヴィア、大丈夫か？少しやり過ぎちまった……」
「……ううん、気にしないでくれ。私は嬉しいよ。君の熱いのが……私の中に注がれて……」
微笑みを見せるゼノヴィアが新の首に腕を回し、再び濃厚なキスをする
暫くお互いをジッと見つめ合う2人を他所にイリナはこの部屋からの脱出を図っていた……
「じゃ、じゃあ私はこの辺で――――」
ガシッ！
逃げようとした天使(イリナ)の腕を悪魔(ゼノヴィア)が瞬時に捕まえる……
恐る恐る振り返るイリナにゼノヴィアは悪戯な笑顔を見せていた
「私だけ新に抱かれるのも不公平だろう？せっかくだ、イリナも抱かれると良い」
「えぇぇぇぇっ!?む、無理無理っ！あんな激しくされたら絶対に堕ちちゃう！こ、心の準

備だって出来てないよぉぉ……っ！」
「ふむぅ……確かに。あれはイリナには刺激が強過ぎるかもしれないな……」
珍しく考え込むゼノヴィアだったが、一拍置いて直ぐにポンと手を叩く
「よし、新。優しくイリナを抱いてやってくれ」
「ちょっとゼノヴィア!?」
「激しくされるのがダメだったら、優しくされるなら問題無いだろう？」
「そ、そう言う問題じゃなくて――――きゃあっ!?」
ゼノヴィアは有無を言わさずイリナをベッドに引きずり込み、動かせないようにと両手を押さえる
準備を整えたゼノヴィアは新に言う
「さあ、新。存分に抱いてやってくれ」
「え？あ、あぁ……。まあ、ここまで来たらイリナにもしてやらないとな」
「あ、新くん……落ち着いて、ね？考え直しましょ……？」
イリナは新を落ち着かせようとするが、目の前にいる新はもう止まらない
寝間着を掴み、ゆっくりと捲っていく……
少しずつ見えてきた白い肌と下乳（したちち）
イリナが狼狽してる間に新は彼女の寝間着を一気に捲り上げた

眼前に現れたイリナの裸……ゼノヴィアに負けず劣らずの大きなおっぱいにピンク色の乳首がより映える
新は早速イリナのおっぱいに手を伸ばし、優しく揉み始めた
「イリナの胸、すげぇ柔らかいな……。張りがあって瑞々(みずみず)しい、天使にピッタリの揉み心地だ」
「……っ！ぁ……っ、やぁぁ……っ」
物理的な恥ずかしさと精神的な恥ずかしさにイリナはまともに顔を直視出来なくなった
新は尚もイリナのおっぱいを揉み続け、胸に顔を密着させて彼女の匂いを嗅ぐ
イリナのかぐわしい香りを堪能した後は乳首を摘まむ
「ひぃんっ！」と悲鳴を上げて身体を跳ねさせるイリナ
天使の翼が白と黒に点滅を始める……既に堕ちるか堕ちないかの瀬戸際まで来ていた
「……私、初めてだから……こう言う時、こんな事されたら……分からないよ、新くん……っ。……わ、私を堕とす気なのね……？」
普段は天真爛漫であるイリナが見せた〝女の顔〟
髪を下ろしているせいか艶っぽさも倍以上……流石の新もグッと来てしまう

「やべぇ……すっげぇ可愛い……」
「う、うん……。何故か私までドキドキしてきたよ……。イリナの女の顔、初めて見たぞ……」
ゼノヴィアも緊張する中、新はイリナの乳首に唇を近付けようとした
「私、堕ちちゃう……。ああ、主よ、この私をお許しに――――」
もはや堕天寸前、天使の自分に別れを告げようとした時だった……
「なななな、何をしているんですかーっ!?」
ガゴンッ！
突然新の後頭部に衝撃と打撃音が走り、不意を突かれた新は意識を失い、イリナのおっぱいの上に顔を埋(うず)めるよう倒れた
彼の後ろには顔を真っ赤にしたジャージ姿のロスヴァイセが鈍器を振り下ろした状態でいた
「あ、ロスヴァイセさん」
「部屋の前に結界が張られているから、解除してみれば……ゼノヴィアさん！イリナさん！何をしているんですか!?教師の部屋で……こ、こ、こんなハレンチな事を！」
「見ての通り、新に抱かれて処女を捧げたのだが？ちなみにイリナは抱かれる寸前まで行ってたぞ」

退却準備と言わんばかりにせっせと着替えるゼノヴィア
ロスヴァイセは先程の言葉を聞いて狼狽する
「しょ、処女を捧げたって……っ。ゼ、ゼノヴィアさん!?あなた、まさか――――」
「ああ、新に私の処女をあげた。一足遅かったね」
自信満々に言い放つゼノヴィアと特大のショックを受けたロスヴァイセ
ゼノヴィアは放心状態のイリナを連れて部屋を出て、最後にこう言い残した
「ロスヴァイセさん、新がその気になったら覚悟を決めた方が良いぞ?新は優しいのも激しいのも得意だからね……」

その後、皆が寝静まったであろう時間帯
気絶させられた新は未だベッドの上で眠っており、ロスヴァイセは1人遅めのシャワータイム
ゼノヴィアとイリナが立ち去ってからは新を介抱し、ベッドに寝かせたものの……モヤモヤが残り続けていた
ゼノヴィアの言葉を気にし過ぎて全く集中出来ず……結局直ぐに出てきてしまった

しかも、着替えを持たずに入ってしまったので今はバスタオル1枚のみ
バスタオルを身体に巻き付け、恐る恐る脱衣所から出る
「……まだ気絶してるみたいですね……。さ、さすがにちょっとやり過ぎましたか……」
今更とはいえ新を心配するロスヴァイセ
顔色を窺おうと近くまで寄っていく
「……もうっ、新さんがそんなに無防備で節操が無いから……こんな事になってしまったんですよ……？少しくらい反省してください……っ」
膨れっ面のロスヴァイセが新の鼻先を指で小突いた
自分のベッドに戻ろうとする寸前、ロスヴァイセは再び気絶してる新の方を向く
佇むこと数分、ロスヴァイセは行動に移る
「……新さんには少し課題を与えなければなりませんね……」
パサ……ッ
ロスヴァイセは巻き付けていたバスタオルを取り払い、一糸纏わぬ姿で新のベッドに潜り込んだ
ベッドの中で自分の身体を密着させ、太股を絡ませる
「こ、これで良いです……。勘の良い新さんなら起きる筈です……っ。起きて襲ってきたら直ぐに――――」

「……悪いな、もう既に起きてんだよ」
ビクッと反応したロスヴァイセがゆっくりと顔を向けると……目をパッチリ開けた新がロスヴァイセを見つめていた
最初から気付かれていた事を知ったロスヴァイセは茹で蛸の如く真っ赤になり、慌ててベッドから逃げようとしたが……新の足が逃がすまいとロックする
「ロスヴァイセ、教師が生徒の寝込みを襲うなんて随分と大胆な事してくれるよな？」
「ち、違います！私はそんな……ひゃあっ!?あ……新さん……ゼノヴィアさんとしたのに、なんでもう大きくなってるんですか……!?」
「おまっ、知ってたのかよ……。まあ……何だ、成り行きでしちまったし。それに……ロスヴァイセが裸でベッドの中に潜り込んで、引っ付かれたら誰だって興奮するだろ。と言うか、離れなくて良いのか？」
「……あ……え……その、これは……そう！新さん、あなたを鍛え直す為の課題ですっ！ば、罰として今の私に手を出さないで寝てください！少しでもエッチな事をしようとしたら……私だけじゃなく、帰ってからリアスさんと朱乃さんにもお説教してもらいますからね！」
ロスヴァイセは無理矢理言い逃れをしてこの場を治めようとする
新はポカーンと口を開けたままだったが、リアスと朱乃に知られたら間違い無く死ぬ

と悟り……「分かった、おとなしく寝るよ」と言って瞼(まぶた)を閉じた
何とか誤魔化したロスヴァイセは安堵の溜め息を吐き、新の寝顔を覗き込む
寝息を確認すると自らの手を新の背中に回し、身体を先程よりも強く密着させる
「……私、教師失格だわ……。教え子にこんな事しちゃうなんて……っ。……でも、今だけ……今だけは教師失格でも良いです……。この男性(ひと)の温もりを、このまま独占したいから……」

急襲、英雄派！

『はぁ……昨日は美味しい思いをしたな』

翌朝、新達はホテルを出て京都駅に向かっていた

新は昨夜の事を思い出しながら缶コーヒーを飲む

昨夜はゼノヴィアと交わり、イリナとは未遂で終わったものの天使のおっぱいを味わい、更にその後は裸のロスヴァイセと添い寝すると言う〝リア充爆発しろ〟並みの体験を済ませたのだ

一方、隣にいた一誠は何やら浮かない顔をしており、アーシアも一誠をチラチラ見ては顔を赤くしている

挙動不審ぶりにピンと来た新は一誠を呼んで詰め寄った

「一誠、アーシアとセッ○スしたのか？」

「ブゴプァッ!?」

新のストレート過ぎる問いに一誠の口から何かの塊が飛び出す

ゲホゲホと噎せる一誠は呼吸を整えてから喋る

「い、いきなり何を言い出すんだよ!?」

「明らかに挙動不審なんだよ、お前とアーシア。で、どうなんだ?ヤったのか?」
「い、いや……それが……」
先程より気落ちする一誠は話すかどうか迷ったが、性に関しては鋭い新相手じゃ隠し通せないと諦めて話す事にした
実は昨夜の就寝時間前、一誠の部屋にアーシアが遊びに来ていたのだが、その直後に松田と元浜がやって来た為――――思わずアーシアを連れて押し入れの中に隠れた
2人が部屋を出た後、アーシアが一誠の腕を掴み、次第に良いムードになって――――キスをした
自然にお互いの唇を重ね、一誠はアーシアの愛しさと大切さを痛感させられる……
その後、アーシアは大胆にも一誠を押し倒し、こう告げてきた
〝私……イッセーさんの子供が欲しいです……っ〟
いつも健気なアーシアの口から放たれた大胆な台詞に一誠は湯気を噴き出し、更にアーシアが直ぐ寝間着を脱いで裸になった事で多量の鼻血を噴射
空気が薄く狭い空間の中で裸のアーシアから子作り宣言されれば、一誠でなくともパニックに陥るだろう……
急展開に困惑する一誠はとりあえず押し入れから出た方が良いんじゃないかと考え、出ようとしたが……棚板に頭を思いっきりぶつけてしまう

その衝撃と鼻血による血液不足および酸欠で倒れてしまい――――アーシアに介抱されて終わりと言う結果になってしまったそうだ……

「……」

「アーシアに『子供が欲しい』と言われてドキッとしたし、嬉しかった……本当に感動したんだよ！……でも、何て言うか……俺は肝心な所で不甲斐無いよな……」

「あぁ、全くその通りだ」

新は呆れた顔でバッサリ吐き捨て、一誠も溜め息を吐く

「そこまで良い感じになったってのに、何で行かなかったんだよ？このまま甲斐性無しで終わっても良いのか？」

「それは自分でも分かってるよ。でも、あと1歩が踏み込めない……」

一誠にはまだ心の奥底で何かが邪魔しているのだろうか……？

その〝何か〟が一誠の心を縛り付け、アーシアとの発展を阻害しているのだろうか……？

新は探りを入れてやろうかと思ったが、これは一誠自身の問題、自分が首を突っ込んで世話するのは野暮

自分自身で解決しなければ意味が無いと諌(いさ)めて何も言わない事にした

新が一誠の肩を叩く

「この話題はもう良い、今は修学旅行を楽しめ。悩むのは向こうに帰ってからにしろ」
「そ、そうだな……。そうしよっか」
「おい、イッセー。竜崎と何を話し込んでたんだ？」
松田が一誠の顔を覗き込みながら訊いてくる
「いや、別に……。って、お前と元浜もすげー顔だよな……」
「あぁ、ただでさえブサイクな顔が更にブサイクになったな」
「うるせぇ、ほっとけ！」
「これは名誉の負傷だリア充め、爆ぜろ」
一誠が言うように松田と元浜の顔は腫れ上がっており、絆創膏だらけだった
２人は昨夜、女風呂を覗けるスポットとやらに行ったのだが……そこは既に生徒会――シトリー眷属に押さえられていた
それでも突貫したらしく、ボコボコにされてこのザマ……
新と一誠は気を取り直して観光を再開、今日は嵐山方面に行く予定だ
一誠が「天龍寺までは？」と桐生に訊ねると、彼女は予定表を見ながら答える
「えーと、京都駅から嵐山方面行きに乗って、最寄りの駅で降りるわ。そこから徒歩で到着ね」
「了解。じゃあ、駅まで行くか。部長も言ってたけど、観光各所への移動はバスと電車な

んだな」
「まあ、観光地はそんなもんだろ」
新達は京都駅で嵐山方面行きの電車に乗り、最寄り駅で降りた後は天龍寺まで徒歩
看板が出ているので迷う事無く到着した
大きな門を潜って境内を進み、受付で観光料金を払っていた時だった
「おおっ、お主達、来たようじゃな」
聞き覚えのある幼い声、振り返れば巫女装束姿の金髪少女――――九重が立っていた
獣耳と尻尾は一般人がいるので隠している
「九重か」
「うむ。約束通り、嵐山方面を観光案内してやろうと思うてな」
松田と元浜が九重を見て驚く
「はー、可愛い女の子だな。なんだイッセー、お前現地でこんなちっこい子をナンパしてたのか?」
「失敬だな、このハゲめ」
「……ちっこくて可愛いな……ハァハァ……」
「自重しろ!スターダスト変態ッ!」
ドゴッ!

危険な息遣いになっていた元浜を新が飛び膝蹴りで仕留める
一誠は密かに親指を立てるが、九重に抱き付く者がいた
「やーん!可愛い!何よ兵藤、何処で出会ったのよ?」
「は、離せ!馴れ馴れしいぞ、小娘め!」
「お姫様口調で嫌がるなんて最高だわ!キャラも完璧じゃないの!」
頬擦りしてくる桐生を九重は嫌がるが、桐生は一層喜んでいた
嘆息する新と一誠は桐生を引き離して話題を再開させる
「こちらは九重。俺やアーシア達のちょっとした知り合いなんだ」
「九重じゃ、よろしく頼むぞ」
一誠は改めて九重を紹介し、九重はえっへんと若干ふてぶてしい態度を取る
「あ、グレモリー先輩繋がり?それなら分かるかも。あのホテルだって先輩の親御さんが経営している会社と関係あるって話だし」
「ま、まあ、そんな所だ。それで九重、観光案内って何をしてくれるんだ?」
一誠が訊くと九重は胸を張って自信満々に答える
「私が一緒に名所へついて回ってやるぞ!」
「じゃあ、早速天龍寺を案内してくれよ」
「勿論じゃ!」

斯くして、九重の案内による名所巡りが始まった

「いやー、回った回った」
そう言って息を吐くのは松田だった
新達は九重の薦めた湯豆腐屋で昼食を取っている
あの後、九重の案内で天龍寺を回って大方丈裏(だいほうじょううら)の庭園や雲龍図(うんりゅうず)を見た
それから二尊院(にそんいん)に竹林の道、常寂光寺(じょうじゃっこうじ)も見て回り、秋模様の嵐山は新達だけでなく観光に来ていた人々を魅了していた
「ほら、ここの湯豆腐は絶品じゃ」
九重が湯豆腐を掬って器に入れてくる
器に入れてもらった湯豆腐を食べる新達
「んー、美味いなー!」
「あぁ、やっぱり湯豆腐は出来立てが1番美味い。これで日本酒が飲めれば最高なんだけどな」
「新、お前学生なんだから少しは自重しろよ」

新と一誠が和気藹々と湯豆腐を堪能する中――――

「和の味がする。悪くない」

「はい、いつも食べているお豆腐とは違って風味が新鮮で美味しいです」

「お豆腐良いわよねぇ……」

ゼノヴィア、アーシア、イリナもご満悦の様子

ふと、新はイリナの方を見るが――――イリナは視線が合った途端に赤面してしまう

イリナは今朝から新と目が合う度にこんな調子なのだが、教会関係者で天使のイリナにとって昨夜の出来事は大事件

新は昨夜のイリナの可愛さを噛み締めながら湯豆腐を口に運ぶ

「あ、イッセーくん。新くん」

偶然隣の隣の席で昼食を取っていた祐斗に声を掛けられる

「おおっ、木場か。そういや、今日はお前の所も嵐山攻めるんだったな」

「うん。天龍寺行ってきたのかい？」

「ああ、見事な龍が天井にあったぜ」

「僕もこれから渡月橋を見てから午後は天龍寺に行こうとしていた所なんだ。楽しみだな」

「渡月橋か。俺達もこれ食べたら行く予定だ」

などと話していたら「秋の嵐山、風流なもんだぜ」と言う聞き覚えのある声が聞こえてきた
声の正体はアザゼルで、しかも昼間から日本酒を飲んでいた
「おう、お前ら、嵐山堪能しているか？」
「先生！先生も来てたんですか？って、教師が昼酒はいかんでしょう」
「そうだ。俺に寄越せ」
「新はもっとダメだろ！」
一誠が酒飲みの２人を非難していると「その通りです」とアザゼルの対面に座る女性――ロスヴァイセが同意した
「その人、私が何度言ってもお酒を止めないんです。生徒の手前、そう言う態度は見せてはならないと再三言ってはいるのですが……」
「まあ、そう言うな。嵐山方面を調査した後でのちょっとした休憩だ」
どうやらアザゼルは嵐山で『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人（やみびと）の調査をしていたようだ
「だがな、ロスヴァイセ。ちったぁ要領良くいかないとよ。そんなだから男の１人も出来ないんだぜ？」
アザゼルの一言にロスヴァイセは真っ赤になってテーブルを叩いた
「か、か、彼氏は関係無いでしょう！バカにしないでください！もう、あなたが飲むぐら

いなら私が!」

ロスヴァイセがアザゼルの杯を奪って酒を飲み干す

見事な飲みっぷりを見せた直後――――

「ぷはー。……だいたいれすね、あなたはふだんからたいどがダメなんれすよ……」

「なっ!?酔っぱらった!?たった1杯の酒で!?」

新を始め、一誠も驚いてるのを他所にロスヴァイセは2杯めの酒を注ぎ、再び豪快に飲み干す

目が座っているロスヴァイセはアザゼルに絡み出した

「わらしはよっぱらっていやしないのれすよ。だいたいれすね、わらしはおーでぃんのクソジジイのおつきをしてるころから、おさけにつきあっていたりしててれすね。……だんだんおもいだしてたきた。あのジジイ、わらしがたっくさんくろうしてサポートしてあげたのに、やれ、おねえちゃんだ!やれ、さけだ!やれ、おっぱいだって!アホみたいなことをたびさきでいうんれすよ。もうろくしてんじゃないかってはなしれすよ!ヴァルハラのほかのぶしょのひとたちからはクソジジイのかいごヴァルキリーだなんていわれててれすね、やすいおきゅうきんでジジイのみのまわりのせわしてたんれすよ?そのせいれすよ!そのせいでかれしはできないし、かれしはできないし、かれしはできないんれすよぉぉぉぉぉ!うおおおおおおおんっ!」

大号泣するロスヴァイセに新達はどうしたら良いのか分からず、アザゼルは頭をポリポリ掻きながら言う
「分かった分かった。お前の愚痴に付き合ってやるから、話してみな」
「ほんとうれすか?アザゼルせんせー、いがいにいいところあるじゃないれすか。てんいんさーん、おさけじゅっぽんついかでー」
ここまで酒癖の悪いロスヴァイセに「「まだ飲むの!?」」と揃って驚く新と一誠
アザゼルが溜め息混じりに言う
「お前ら、さっさと食って他に行け。ここは俺が受け持つから」
新達は顔を見合わせ、昼食を素早く済ませて店を後にした
店を出る寸前、酔ったロスヴァイセが「ひゃくえんショップ、サイコーれすよー!アハハハハ!」と爆笑してるのが聞こえた……

「ロスヴァイセちゃん、凄い事になってたな」
「ああ、あれは相当酒癖が悪いぞ」
店を抜け出て渡月橋を前にした頃、松田と元浜もロスヴァイセの酒癖の悪さに若干引

いており、桐生も頷いて同情していた
「きっとロスヴァイセちゃんも若いながらに苦労してんのよ。相手があのアザゼル先生じゃ、溜まったものをぶつけたくもなるわね」
『原因はアザゼル先生だけじゃないんだけどね……』
『元雇い主のオーディンも相当なエロジジイだったからな。確かヴァルハラじゃ、あのジジイの付き人になるまで窓際族だったって言うし……』
新と一誠がヒソヒソ話し合っていると「お主達の眷属は大変なのが多いのか?」と九重に訊かれてしまい、2人は「「……ちょ、ちょっとな」」と返すしかなかった
ロスヴァイセの話は一先(ひとま)ず置いておき、数分程観光街を歩くと桂川が姿を現す
歴史を感じさせる古風な木造に加え、赤々としている山の風景が秋を感じさせてくれる
「知ってる?渡月橋って渡りきるまで後ろを振り返っちゃいけないらしいわよ」
桐生がそう言ってくるとアーシアが聞き返す
「何でですか?」
「それはね、アーシア。渡月橋を渡っている時に振り返ると授かった知恵が全て返ってしまうらしいのよ。エロ3人組は振り返ったら終わりね。真の救いようの無いバカになるわ」

「「うるせえよ！」」
一誠、松田、元浜が異口同音に叫ぶ姿に新は爆笑、桐生は気にせず説明を続ける
「あともう1つ。振り返ると男女が別れるって言い伝えもあるそうね。まあ、こちらはジンクスに近いって話だけど――――」
「絶対に振り返りませんから！」
桐生の説明を遮ってアーシアが涙目で一誠の腕を掴む
「だ、大丈夫だよアーシア。言い伝えだって」
一誠がそう言うものの、アーシアは首を横に振って「絶対に嫌」と一誠の腕を強く掴んだ
何とも微笑ましい光景を見守る新――――すると、新の腕にも誰かがしがみついてきた
「ん？どうした、ゼノヴィア？」
「……私も振り返らないぞ……っ。新と別れるなんて絶対に嫌だ……っ」
プルプルと震える可愛らしいゼノヴィアに新は思わずプッと吹き出してしまう
そんな調子で渡月橋を渡っていると、少し前方に祐斗の班もいた
渡っている最中、アーシアとゼノヴィアは頑(かたく)なに振り返る素振りを見せない
「クソ。イッセーとアーシアちゃん、もろカップルじゃないか……！」

「悔しいところだが、あれは既にバカップルの領域に入りつつあると思うぞ」
「竜崎はもう爆ぜてしまえば良いのに……!」
「それだけじゃ物足りん。豚の餌にでもしてやりたいぐらいだ」
「お前ら、ここを渡りきったら殺すから覚えておけよ?」
背後で野次を飛ばしてくる松田と元浜にドスの効いた脅しを掛ける新
一誠もバカップルと呼ばれ殴ってやりたい衝動に駆られるが、アーシアの為にここは我慢する
「気にせんで良いと思うのじゃが……。男女の話は噂に過ぎんのじゃ」
九重もそう言う中、渡月橋を無事に渡りきって反対岸に到着
アーシアとゼノヴィアは大きく息を吐いて落ち着いたようだが、帰りもここを渡らなければならない
反対側はどう攻略していくのか、そんな風に周りを一望したその時――――突如、ぬるりと生暖かい感触が新達を包み込んでいった……

「……何だ、今のは……?」

新が訝(いぶか)しく思って周囲を見渡すと――――自分と一誠、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、九重、そして離れた位置にいる祐斗しか周辺に人がいなかった
松田、元浜、桐生、更に他の観光客もまるっきりいない
突然の現象に全員が驚き身構える
少ししてから新達の足下に霧が立ち込めてくる
「――――この霧は」
霧を見て驚くアーシア
「……この感じ、間違いありません。私がディオドラさんに捕まった時、神殿の奥で私はこの霧に包まれてあの装置に囚われたんです」
「――――『絶霧(ディメンション・ロスト)』」
祐斗が新達の方に歩み寄りながらそう言いつつ、その場で屈(かが)んで足下の霧を触る
「神滅具(ロンギヌス)の1つだった筈だよ。先生やディオドラ・アスタロトがそれについて話していただろう?恐らく、これが……」
「お前ら、無事か?」
空からの声、見上げるとアザゼルが黒い翼を羽ばたかせて飛んで来た
新達のいる所に降り立つと翼をしまいながら言う
「俺達以外の存在はこの周辺からキレイさっぱり消えちまってる。俺達だけ別空間に強

制的に転移させられて閉じ込められたと思って間違い無いだろう。……この様子だと、渡月橋と全く同じ風景をトレースして作り出した別空間に転移させたのか？」
「ここを形作っているのは悪魔の作るゲームフィールドの空間と同じ物ですか？」
レーティングゲームのフィールドと酷似しているように思えてならない一誠はアザゼルに訊く
「ああ、三大勢力の技術は流れているだろうからな。これはゲームフィールドの作り方を応用したんだろう。――――で、霧の力でこのトレースフィールドに転移させたと言う訳だ。『絶霧（ディメンション・ロスト）』の霧は包み込んだ物を他の場所に転移させる事が出来るからな。……殆（ほとん）どアクション無しで俺とリアスの眷属を全員転移させるとは……。神滅具（ロンギヌス）はこれだから怖いもんだぜ」
アザゼルの説明の後、九重が震える声で口を開く
「……亡くなった母上の護衛が死ぬ間際に口にしておった。気付いた時には霧に包まれていた、と」
「おい、早速来たようだぜ。例の奴らが」
新がそう言って視線を渡月橋に向けると、渡月橋の方から複数の気配が現れる
薄い霧の中から人影が幾つも近付いてきて姿を現す
「初めまして、アザゼル総督、そして赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）」

挨拶してきたのは学生服を着た黒髪の青年で、学生服の上から漢服を羽織っていた
見た目だけなら新や一誠と1つか2つぐらいしか変わらない
青年の手には槍が握られていたが――――槍からは不気味なオーラが出ている……
その男の周囲には似たような学生服を着た若い男女が複数人いる
悪魔やドラゴン、闇人とはまた違った異様なプレッシャーを放っている
「お前が噂の英雄派を仕切ってる男か」
アザゼルが1歩前に出て訊くと、中心の青年が肩に槍の柄をトントンと乗せながら答えた
「曹操と名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫、一応ね」
「曹操……魏武帝、魏の奸雄と言われた曹孟徳か」
新も曹操についての基礎知識を口走り、仰天する一誠がアザゼルに訊ねる
「先生、あいつは……？」
「全員、あの男の持つ槍には絶対に気を付けろ。最強の神滅具『黄昏の聖槍』だ。神をも貫く絶対の神器とされている。神滅具の代名詞になった原物。俺も見るのは久し振りだが……よりにもよって現在の使い手がテロリストとはな」
『――――ッ!?』
アザゼルの言葉に全員が酷く狼狽し、曹操の持つ聖槍に驚きの視線を向けた

「あれが天界のセラフの方々が恐れている聖槍(せいそう)……っ!」
「私も幼い頃から教え込まれたよ。イエスを貫いた槍。イエスの血で濡れた槍。――――神を貫ける絶対の槍っ!」
イリナが口元を震わせながら言い、ゼノヴィアも低い声で続ける
彼女達教会関係者からしてみれば『黄昏の聖槍(トゥルー・ロンギヌス)』はまさに究極の存在はと言っても過言ではない
「あれが聖槍……」
一誠の隣にいるアーシアが虚ろな双眸(そうぼう)で槍を見つめていた
まるで槍に魅了され、意識をが吸い込まれていくように……
そこへアザゼルが素早くアーシアの両目を手で隠した
「アーシア。信仰のある者はあの槍をあまり強く見つめるな。心を持っていかれるぞ。聖十字架(せいじゅうじか)、聖杯(せいはい)、聖骸布(せいがいふ)、聖釘(せいてい)と並ぶ聖遺物(レリック)の1つでもあるからな」
九重が憤怒の形相で槍を持つ青年――――曹操に叫ぶ
「貴様!1つ訊くぞ!」
「これはこれは小さな姫君(ひめぎみ)。何でしょう?この私ごときで宜しければ、何なりとお答えしましょう」
曹操の声音は平然としているが、明らかに何かを知っている様な口調だった

「母上をさらったのはお主達か！」
「左様で」
あっさりと認める曹操、やはり『禍の団（カオス・ブリゲード）』の仕業だったようだ
「母上をどうするつもりじゃ！」
「お母上には我々の実験にお付き合いしていただくのですよ」
「実験？お主達、何を考えておる!?」
「スポンサーの要望を叶える為、と言うのが建前かな」
それを聞いて九重は歯を剥き出しにして激怒、目にはうっすらと涙を溜めている
母親をさらわれた挙げ句、実験の材料にされそうになっているのだから無理もない
「スポンサー……？オーフィスの事か？それで突然こちらに顔を見せたのはどういう事だ？」
アザゼルが問い詰める
「いえ、隠れる必要も無くなったもので実験の前に挨拶と共に少し手合わせをしておこうと思いましてね。俺もアザゼル総督と噂の赤龍帝（せきりゅうてい）殿と闇皇（やみおう）殿にお会いしたかったのですよ。それともう１つ目的があるんだ」
そう言って曹操は視線を新に向け、それに気付いた新が〝俺？〟と言った感じで自分を指差す

「その通り。竜崎新、君もある意味英雄の子孫と言っても過言ではない。竜崎総司――
――悪魔、天使、堕天使と共闘したとはいえ、最凶最悪の魔族・闇人の『初代キング』を封じ込めた唯一の人間。我々英雄派の中でその行為を讃える者が多い上にリクエストも絶えない。なので、彼の子孫である竜崎新の身柄を確保するのも今回出てきた目的の1つさ」
「新が英雄の子孫!?」
今まで知らなかった事実に一誠も他の仲間も驚きを隠せず、アザゼルは顎に手を当てて考察する
「なるほどな。確かにあいつは英雄と言われても相違無い。英雄派の奴らが竜崎総司の子孫たる新を狙うのも合点がいく。親父さんのお陰で偉い奴らに目をつけられちまったもんだな、新」
「ったく、良い迷惑だぜ」
舌打ちする新は曹操に指を突きつけて言い放った
「悪いが俺はテロリストの仲間入りなんざ御免被るぜ」
「ハハッ、やっぱそうだよな。分かりやすいぜお前。そう言う事だ、英雄派。九尾の御大将を返してもらおうか。こちとら妖怪との協力提携を成功させたいんでね」
アザゼルが手元に光の槍を出現させ、新達も戦闘態勢に入る

新は闇皇(やみおう)に変異し、一誠は禁(バランス・ブレイカー)手のカウントを始めてから取り出したアスカロンをゼノヴィアに渡す
アスカロンを受け取ったゼノヴィアは前方に出た
ここで新はロスヴァイセがいない事に気付く
「アザゼル、ロスヴァイセはどうした？」
新の問いにアザゼルは嘆息する
「あいつもこちらに転移してるが、店で酔い潰れて寝てる。一応強固な結界をあいつに張っておいたから早々酷い事にはならんだろう」
「そ、そうか……」
新達が構えても英雄派は一向に構える様子を見せない
すると、曹操の横に小さな男児が並び、曹操がその男児に話し掛けた
「レオナルド、悪魔用のアンチモンスターを頼む」
男児は無表情で小さく頷く
その直後、男児の足下に不気味な影が現れて広がっていく
影は更に渡月橋全域に至るまで広がり、その影が盛り上がって形を成していく
腕、足、頭が形成されていき、目玉が生まれて口が大きく裂けた
その数はざっと１００以上……

「ギュ」
「ギャッ！」
「ゴガッ！」
耳障りな声を発して現れた黒ずくめのモンスター軍団
二足で立ち、肉厚な全身に鋭い牙と爪を持っていた
生唾を飲み込みながら驚愕していると、アザゼルがぼそりと呟いた
「――――『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』か」
アザゼルの言葉に曹操が笑みを見せる
「ご名答。そう、その子が持つ神器（セイクリッド・ギア）は『神滅具（ロンギヌス）』の１つ。俺が持つ『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』とは別の意味で危険視され、最悪の神器（セイクリッド・ギア）だ」
またしても現れた神滅具（ロンギヌス）所有者……
自分のとヴァーリのしか知らない一誠は頭がパンクしそうになる
カウントが終わった所で禁手（バランス・ブレイク）化、赤いオーラが鎧を形成させた
「せ、先生、何がなんだか……」
混乱する一誠にアザゼルが説明を始める
「あの男児が持っている神器（セイクリッド・ギア）はお前のと同じ『神滅具（ロンギヌス）』だ。神滅具（ロンギヌス）は現時点で確認されているもので１３――――。グリゴリにも神滅具（ロンギヌス）の協力者がいるが……。その

神滅具（ロンギヌス）の中でもあの神器（セイクリッド・ギア）は性質――――能力が『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』や『白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）』よりも凶悪なんだよ」

「それは一誠のよりも強いって事か？」

「直接的な威力ならイッセーとヴァーリの神器（セイクリッド・ギア）の方が遥かに上だ。ただ、能力がな……。木場の『魔剣創造（ソード・バース）』、あれは如何なる魔剣も創り出せる能力だった。それは分かるな？」

「は、はい」

『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』がそれと同様だ。如何なる魔獣をも創り出す事が出来る。例えば、怪獣映画に出てくるような全長１００メートル、口から火炎を吐く怪物。それを自分の意志でこの世に生み出す事も出来る。自分の想像力で好きな怪物を生み出せるとしたら、最悪極まりないだろう？そう言う能力だ。使い手次第じゃ、一気にそんなバケモノを数十、数百の規模で創り出せるんだよ。『絶霧（ディメンション・ロスト）』と並ぶ、神器（セイクリッド・ギア）システムのバグが生んだ最悪の結果とも言われている。『絶霧（ディメンション・ロスト）』も能力者次第では危険極まりない。霧を国家規模に発生させて、国民全てを別空間――――次元の狭間辺りに送り込めば一瞬で国を１つ滅ぼすなんて事も可能だろうからな」

「そ、それってどっちも世界的にヤバい神器（セイクリッド・ギア）じゃないですか！」

仰天する一誠の言葉にアザゼルも苦笑する

「まあ、今の所どちらもそこまでの事件は前例が無い。何度か危ない時代はあったけどな。しかし、『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』、『絶　霧（ディメンション・ロスト）』、『魔　獣　創　造（アナイアレイション・メーカー）』。……神滅具（ロンギヌス）の上位クラス４つの内、３つも保有か。それらの所有者は本来、生まれた瞬間に俺の所か、天界か、悪魔サイドが監視態勢に入るんだが……。２０年弱、俺達が気付かずにいたってのか……。それとも誰かが故意に隠したのか……。確かに過去の神滅具（ロンギヌス）所有者に比べると、現所有者はほぼ全員、発見に難航している面が目立つな」

アザゼルは一誠の方に視線を移す

確かに一誠も当初は「危ない神器（セイクリッド・ギア）を持っているから殺す」→「実は違った」→「いや、やっぱり神滅具（ロンギヌス）所有者だった」と言った感じで何度も評価が覆（くつがえ）った

アザゼルの呟きは続く

「……何か、現世に限って因果関係があるのか？元々の神滅具（ロンギヌス）自体が神器（セイクリッド・ギア）システムのバグ、エラーの類（たぐい）と言われているからな……。ここに来てそれらの因果律が所有者を含めて独自のうねりを見せて、俺達の予想の外側に行ったとかか？それは勘弁願いたい所だが……、イッセーの成長を見ていると現世の神滅具（ロンギヌス）全体に変調が起き始めていると感じてしまっても不思議は無いな……。バグ、エラーの変化、いや、進化か？どちらにしろ、神器（セイクリッド・ギア）研究や神器（セイクリッド・ギア）システムを司っているわりに俺も含め、お互い甘いよな、ミカエル、サーゼクス」

「先生、その凶悪神器（セイクリッド・ギア）の弱点は？」
「本体狙いだ。――まあ、本人自体が強い場合もあるが、神器（セイクリッド・ギア）の凶悪さ程じゃないだろう。それに『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』は現所有者がまだ成長段階であろうってのも大きい。やれるならとっくに各勢力の拠点に怪獣クラスを送り込めている筈だからな」
「倒すなら成長しきってない今って事か。とにかく出てくるアンチモンスターとやらを全部潰していけば良いんだろ」
新はコキコキと指や手、首を鳴らし、アザゼルの言葉を聞いた曹操は苦笑していた
「あららら。何となく『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』を把握された感があるな。その通りですよ、堕天使の総督殿。この子はまだそこまでの生産力と想像力は無い。――ただ、1つの方面には大変優れていましてね。相手の弱点を突く魔物――アンチモンスターを生み出す力に特化しているんだな、これが。今出したモンスターは対悪魔用のアンチモンスターだ」
曹操が手をフィールドに存在する店の1つに向けると、アンチモンスターの1匹が口を大きく開けて一条の光――光線を放った
その瞬間、店が吹き飛んで強烈な爆風を巻き起こす
「光の攻撃――。こいつは！」
爆風の中、アザゼルが叫んだ

「曹操、貴様！各陣営の主要機関に刺客を送ってきたのは俺達のアンチモンスターを創り出すデータも揃える為か！」
「半分正解かな。送り込んだ神器（セイクリッド・ギア）所有者と共に黒い兵隊もいただろう？あれはこの子が創った魔物だ。あれを通じて各陣営、天使、堕天使、悪魔、ドラゴン、各神話の神々の攻撃を敢えて受け続けた。雑魚一掃の為に強力な攻撃も食らったが、お陰でこの子の神器（セイクリッド・ギア）にとって有益な情報を得られた」
「あの黒いバケモノはデータ収集の為の囮だったって事か」
「禁手（バランス・ブレイカー）を増やしつつ、アンチモンスターの構築も行（おこな）った。お陰で悪魔、天使、ドラゴンなど、メジャーな存在のアンチモンスターは創れるようになった。――――悪魔のアンチモンスターが最大で放てる光は中級天使の光力に匹敵する」
今まで英雄派が小規模な攻撃を仕掛けてきたのは神器（セイクリッド・ギア）所有者の禁手（バランス・ブレイカー）使いを増やすのと同時にアンチモンスターを創り出す為のデータ収集
用意周到で計算高い……
憎々しげに睨むアザゼルだが、一転して笑みを作り出した
「だが、曹操。神殺しの魔物だけは創り出せていないようだな？」
「……」
アザゼルの一言に曹操は反論しない

一誠が「どうして分かるんですか？」と訊くとアザゼルはニヤけながら答える
「やれるならとっくにやってる。こうやって俺達に差し向けてくるぐらいはな。各陣営に同時攻撃が出来た連中がそれを試さない訳が無い。それに各神話の神が殺されたら、この世界に影響が出てもおかしくないものな。――まだ、神殺しの魔物は生み出せていない。これが分かっただけでも収穫はデカい。恐らく、闇人《やみびと》のアンチモンスターも現段階では創り出せていないだろう。闇人は現時点じゃ数が少ないから、データを集めにくいんだろうな」
「つまり、対神用のアンチモンスターと対闇人用のアンチモンスターはいないって事だ」
「な、なるほど！あ、でもいるよね。神殺しの魔物なら」
新と一誠の脳裏に神殺しの魔物――『神喰狼』が過る……
曹操は槍の切っ先を新達に向けた
「神はこの槍で屠るさ。さ、戦闘だ。――始めよう」
それが開戦の合図となった――！

魔帝ジークと神風一派

『ゴガァァァァァッ！』
不気味な鳴き声を唸らせたアンチモンスターの群れが突っ込んできた
祐斗とゼノヴィアが前線に立つ
「木場、悪いが聖剣を一振り創ってくれ」
「了解。キミは二刀流の方が映えるからね」
祐斗が素早く手元に剣を一振り創り出すと、駆け出したゼノヴィア目掛けて放り投げる
空中で聖剣をキャッチしたゼノヴィアはアスカロンとの二刀流で敵陣に突っ込んでいった
ゼノヴィアの豪快な斬戟（ざんげき）でアンチモンスターが大量に消えていく
アンチモンスターの1匹が口を大きく開けて光線を放とうとしたが――――放たれた光線はゼノヴィアの前方に入った祐斗の聖魔剣（せいまけん）によって弾かれた
弾かれた光線が離れた位置にある建物を崩壊させる
「このぐらいの光なら、当たらなければ問題じゃない」

「いや、当たる前に倒せば良いだけだ」
二刀流でアンチモンスターを切り払いながらそう返すゼノヴィア
同じ『騎士(ナイト)』でもバトルスタイルは全く違う
「曹操、お前は俺がやらしてもらおうか！」
アザゼルがファーブニルの宝玉を取り出し、素早く人工神器(セイクリッド・ギア)の黄金の鎧を身に纏った
１２枚の黒い翼を展開すると、高速で曹操に向かっていく
「これは光栄の極み！聖書に記されし、かの堕天使総督が俺と戦ってくれるとは！」
曹操は桂川の岸に降り立つと不敵な笑みで槍を構えた
槍の先端が開くと光り輝く金色のオーラが刃を形成され、この空間全体の空気が震える
アザゼルの光の槍と曹操の聖槍がぶつかり、強大な波動が生み出された
その衝撃で桂川が大きく波立ち、舞い上がった水飛沫(みずしぶき)が周囲に雨の如く飛び散っていく
アザゼルと曹操は攻め合いながら川の下流の方へ向かって岸を駆けていった
「一誠！曹操は一先ずアザゼルに任せて、俺達は残りの相手をやるぞ！」
「あ、ああ！分かった！」

現在の戦力メンバーは新、一誠、祐斗、ゼノヴィア、イリナ、アザゼルのみ
司令塔のリアス、リアスのサポート兼後方支援の朱乃、打撃＋サポートの小猫、索敵＋サポートのギャスパー、魔法攻撃の砲台役であるロスヴァイセはここにいない
まずは回復役のアーシアと九重を守る壁役を作らねばならなかった
チームバランスが著しく低い中、新と一誠はこの場に適した戦術を導き出そうと頭を働かせる
まず浮かんだのは新だった
「ゼノヴィア！お前はアーシアと九重の護衛に回れ！聖なるオーラを飛ばしてこっちに近付く敵を倒すんだ！」
「――――っ。了解だ！」
ゼノヴィアが新の指示に応じて素早く後方に下がり、アーシアの護衛に入った
一誠も負けじと頭をフル回転させ――――アンチモンスターへの対策案を発する
「木場！お前、光を喰う魔剣が創れたよな？」
「え？うん。――――そうか！」
一誠の問いに祐斗は直ぐに理解し、闇の剣――――『光喰剣（ホーリー・イレイザー）』を足下に何本か創り出して仲間の悪魔達に放り投げる
「その剣は普段、柄（つか）のみだ！闇の刀身を出したい時は剣に魔力を送ってくれ！」

祐斗からの補足説明もあり、新と一誠も追加指示を送る
「ゼノヴィア、危うくなったらそいつを盾代わりに光を吸え！」
「アーシアも不慣れかもしれないが、そいつを持っているんだ！無いよりマシだ！」
「やるな、新！」
「は、はい！」
ゼノヴィアは柄のみの闇の剣をスカートのポケットに入れる
新は早速闇の刀身を出し、闇皇剣（やみおうけん）との二刀流で向かってきたアンチモンスターを切り払う
一誠は祐斗から貰った闇の剣をアスカロンが抜けた籠手の穴に嵌め込み――――闇の盾を作り上げた
「なるほど、考えたな一誠。後は……イリナ！ゼノヴィアの代わりに祐斗と前線に立て！天使のお前なら光は弱点じゃないだろ？」
「じゃ、弱点じゃないだけでダメージは受けるんだけど、悪魔ほどの傷は貰わないわ。――――分かった！私、やってみるよ！ミカエル様のA（エース）だもん！」
イリナは純白の翼を羽ばたかせてゼノヴィアがいた前衛ポジションに行く
光の剣を出現させたイリナは空中を飛び回ってアンチモンスターを撹乱し、隙を見て一気に屠（ほふ）っていった

新と一誠は中衛として戦う
「『僧侶(ビショップ)』にプロモーションするぜ、アーシア！」
「はい！」
アーシアの同意を得て一誠が『僧侶(ビショップ)』に昇格する
『僧侶(ビショップ)』になった理由はドラゴンショットの強化、単純ながら威力はお墨付きである
「行くぜ、ドラゴンショット乱れ撃ち！」
一誠は闇の盾を構えつつ、右腕から中規模のドラゴンショットをアンチモンスターと英雄派目掛けて乱れ撃ちで放った
英雄派の連中は避けていくが、アンチモンスターは砲撃を受けて大量に消え去っていく
闇の盾で光線を防ぎ、九重の方に放たれた光線もドラゴンショットで撃ち落とす
「九重！もう少し後方に下がれ！」
「す、すまん」
「さて、デカいのを打ち込んでやるか。――――クロス・バーストッ！」
新が魔力を刀身に流した剣を振るい、地を這うような斬撃がアンチモンスターを大量に屠(ほふ)る
ゼノヴィアも聖剣の波動を放って前方にいるアンチモンスターを撃破する

しかし、レオナルドと呼ばれる少年は足下の影から何度も何度もアンチモンスターを生み出していく
大量のアンチモンスターが放つ光線を打ち込まれても、すかさずアーシアが回復のオーラを飛ばしてくれるので大事には至らない
新は思う存分アンチモンスターを滅多斬り、一誠もドラゴンショットの乱れ撃ちでアンチモンスターを退治する
向かってくるのはアンチモンスターだけで、英雄派の連中は未だに攻撃の姿勢を見せていない
高みの見物のつもりか？
そう思っている新と一誠のもとに襲来する人影が複数現れた
制服姿の女の子数名が槍――――或いは剣を携えて突貫してくる
「赤龍帝と闇皇の相手は私達がします！」
「――――っ。やめておけ、女性では赤龍帝と闇皇には勝てないよ！」
腰に何本も帯剣した白髪の優男がそう叫ぶが、新と一誠は既に迎撃準備を整えていた
「一誠、準備は良いな？」
「当たり前だ！乳よ、その言葉を解放しろッ！『乳語翻訳』ッ！」
一誠は脳内に送った魔力を英雄派女子達に向かって解き放った

その瞬間、一誠を中心に謎の空間が広がっていく
「さあ、お嬢さんのお乳達！俺に心の内を話してごらん！」
『動きで翻弄した後、連携攻撃を叩き込むのよん』
『私は右から攻めるぞな』
『こちらは正面からなんだな』
一誠はおっぱいの声を聞いた直後に開眼して、その手を新に伝える
「よっ、ほっ、新！連携攻撃が来るぞ！そっちの子は右、そっちは正面からだ！」
「サンキュー」
新と一誠は仕掛けてきた英雄派女子達の攻撃を全て避けた
英雄派の女子達が驚愕する
「バカな！私達の動きが把握されている!?」
「読まれる筈が無い！私達の連携は完璧な筈だ！」
驚く英雄派女子達に一誠は不敵な笑みを見せた
「読んだのさ！否、喋ってくれた！あんた達のおっぱいがな！そして食らえ！『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』ッ！」
一誠はもう1つの技の名を叫ぶ
実は避けると同時に英雄派女子達の服に触れていたのだ

バババッ！
英雄派女子達の服がものの見事に弾け飛び、彼女達は裸になった
「い、いやぁあああああああっ！」
「魔術で施された服が……まるで役に立たないなんて！」
英雄派女子達が悲鳴を上げて自身の裸体を手で隠す
鍛えているのか、素晴らしいプロポーションをしていた
英雄派女子達は恥ずかしさのあまり、近くの家屋に逃げ込もうとしたが……そうはさせんとばかりに新が構える
「悪いがそうはいかねぇ。『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』ッ！」
突き出した闇皇剣（やみおうけん）から闇が発生し、逃げる英雄派女子達を捕らえた
しかも、足を封じて後ろ手に縛（こ）るように……
「いやぁあああっ！な、何これ!?」
「闇が私達を捕らえてるの!?」
「そんなぁ……！これじゃ、隠せない……っ！」
足を封じられて転けた英雄派女子達は恥ずかしがりながら身を捩（よじ）らせる
「ぐふふっ、相手が女の子なら俺の妄想と手は止まらない！ここまで技が決まると気持ち良い事この上無いぜ！『乳語翻訳（バイリンガル）』で動きを読んで『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』で服を弾き飛ばし、新

の『暗黒捕食者(ダーク・グリード)』で動きを封じておっぱい見放題!・新、俺達のコンボは無敵だな!・」
「え?・あぁ、そうだな」
「さ、最低な技じゃな。こんなに酷い技を見たのは生まれて初めてじゃぞ……」
九重が新と一誠の技を見て呆れていた
小さい子にそんな事を言われ一誠は少し凹(へこ)むが、新は一切気にしなかった
「やはり、女では赤龍帝(せきりゅうてい)と闇皇(やみおう)には勝てないか。恥辱にまみれても戦い抜く鋼の精神が必要になるけど……若い女性ではなかなか難しいね。流石(さすが)だよ、おっぱいドラゴン、エロ蝙蝠。ウワサの乳技(ちちわざ)と裸技(はだかわざ)を見させてもらった。男には通じないけどね」
白髪の優男が冷静に分析しながらそう言う
「誰が男にやるもんかよー・」
「それ以前に乳技(ちちわざ)と裸技(はだかわざ)って……何か嫌なネーミングだな……」
一誠は憤慨しながら返し、新は不満げな声で呟く
優男はニッコリ笑んだ後、他の英雄派のメンバーに言う
「皆も気を付けてほしい。今の赤龍帝(せきりゅうてい)は歴代で最も才能が無く、力も足りないが――――。その強大な力に溺れず、使いこなそうとする危険な赤龍帝(せきりゅうてい)だよ。強大な力を持ちながら、その力に過信しない者ほど恐ろしい物は無いね。あまり手を抜かないように。闇皇(やみおう)も同じだよ。力を使いこなすだけでなく、オリジナルの形へと昇華させている。未

知数な分、危険性も極めて高いから充分に注意してくれ」
「……敵にそんな事を言われたのは初めてだな」
「あ、ああ……何かこそばゆい感じ……」
新と一誠の言葉に優男は首を傾げる
「そうかな？キミ達が思っている以上に現赤龍帝と闇皇の存在は危険視されるに値する物だと僕達は認識しているけどね。同様にキミ達の仲間の眷属と――――ヴァーリも。……さて、僕もやろうかな」
白髪の優男が1歩前に出て腰に携えていた鞘から剣を抜き放つ
「初めまして、グレモリー眷属。僕は英雄シグルドの末裔、ジーク。仲間は『ジークフリート』と呼ぶけど、ま、そちらも好きなように呼んでくれて構わないよ」
〝ジークフリート〟――――それは北欧神話『ニーベルングの指環』に出てくる主人公で、倒した竜の血を浴びて不死身になった英雄の名前である
ジークフリートの顔をずっと怪訝そうに見ていたゼノヴィアが何か得心したような表情となる
「……何処かで見覚えがあると思っていたが、やはりそうなのか？」
ゼノヴィアの言葉にイリナが頷く
「ええ、だと思うわ。あの腰に帯刀している複数の魔剣から考えて絶対にそう」

「どうした？あの白髪イケメンに覚えがあるのか？」
　新の問いにゼノヴィアが答える
「あの男は悪魔祓い（あくまばら）――――私とイリナの元同胞だ。カトリック、プロテスタント、正教会を含めて、剣護（けんご）さんと並ぶトップクラスの戦士だ。――――『魔帝（カオスエッジ）ジーク』。白髪なのはフリードと同じ戦士育成機関の出だからだろう。あそこ出身の戦士は皆白髪だ。何かの実験の副作用らしいが……」
　悪魔祓いと言う肩書きに一誠はフリードを思い出し、嫌な気分になってしまう
　更にはゼノヴィアとイリナの上司――――闇人（やみびと）サイドにいる神代剣護（かみしろけんご）と同等の実力の持ち主……
「ジークさん！あなた、教会を――――天界を裏切ったの!?」
　イリナの叫びにジークフリートは愉快そうに口の端を吊り上げた
「裏切ったって事になるかな。現在、『禍の団（カオス・ブリゲード）』に所属しているからね」
「……なんて事を！教会を裏切って悪の組織に身を置くなんて万死に値しちゃうわ！」
「……少し耳が痛いな」
　ジークフリートの言葉にイリナが怒り、そのイリナの言葉にゼノヴィアはポリポリと頬を掻いていた
　元々ゼノヴィアも破れかぶれで悪魔になった身分である……

ジークフリートはクスクスと小さく笑った
「良いじゃないか。僕や神代剣護さんがいなくなった所で教会にとはまだ最強の戦士が残っているよ。あの人だけで僕と剣護さん、デュランダル使いのゼノヴィアの分も充分に補えるだろうし。案外、あの人は『御使い』のジョーカー候補なんじゃないかな？――――と、紹介も終わった所で剣士同士やろうじゃないか、デュランダルのゼノヴィア、天使長ミカエルのA――――紫藤イリナ、そして聖魔剣の木場祐斗」
教会関係者だった3人に宣戦布告するジークフリートは手に持つ剣に不気味なオーラを纏わせた
そうこうしてる内に祐斗が神速で斬り込む
ガギィィィインッ！
聖魔剣を真っ正面から受けて尚、ジークフリートの剣は不気味なオーラを微塵も衰えさせなかった
「――――魔帝剣グラム。魔剣最強のこの剣なら、聖魔剣を難無く受け止められる」
鍔迫り合いを見せる両者
直ぐに飛び退いて体勢を立て直した後、再び火花を散らしながら壮絶な剣戟を繰り広げ始めた
「……木場と互角!?」

「いや、違うな。少しずつジークフリートの方が押している」
一誠の言葉を否定する新
新の言う通り、祐斗の表情が少しずつ厳しい物になっていくのが見て取れた
神速で動く祐斗の動きをジークフリートは見切り、目で追えない程のスピードで斬りかかっても当然の様に受け止めていた
祐斗のフェイントを織り混ぜた攻撃もジークフリートは最小限の動きだけでいなし、自身の魔剣を繰り出す
祐斗は避けるだけで精一杯、カウンターも出来ない状態だった
「うちの組織では、派閥は違えど『聖王剣(せいおうけん)のアーサー』、『魔帝剣(まていけん)のジークフリート』として並び称されている。聖魔剣の木場祐斗では相手にならない」
「あのアーサーと同格!?じゃ、じゃあ今の木場では……」
「チッ、加勢した方が良いか?――――っ」
加勢しようとした新の視線の先に、祐斗とジークフリートの剣戟に乱入する者がいた
ゼノヴィアが横からジークフリートに斬りかかり、祐斗の加勢をする
「ゼノヴィア!」
「木場!お前1人では無理だ!悔しいかもしれないが、私も加勢する!」
「――――っ。ありがとう!」

「私も！」
祐斗はゼノヴィアとの同時攻撃に乗り、更にイリナも参戦して3対1のバトルとなる
剣の切っ先が見えない程の斬戟が四者の間で起こるが、3人相手でもジークフリートは魔剣1本でいなしていき、数を物ともしない
祐斗が神速で分身を生みながら撹乱させて死角からの攻撃の構えを取り始め、ゼノヴィアは上空から強大なオーラを纏った聖剣で斬りかかった
更にイリナが空を滑空しながら、背後から光の剣で突き刺そうとする
この同時攻撃に勝利を確信する新と一誠だが、ジークフリートは背後から迫るイリナの攻撃を振り返らずに魔剣で防ぐ
更に空いた手で腰の帯剣を1本抜き放ち、上空から斬りかかってきたゼノヴィアの剣を1本破壊する
祐斗が渡した聖剣がガラスの如く儚い音を立てて砕け散った
「――――バルムンク。北欧に伝わる伝説の魔剣の一振りだよ」
ジークフリートは余裕の表情で言うが、まだ祐斗の死角からの攻撃が終わってない
両手は2本の魔剣で塞がっているので避ける術が無い
横薙ぎの一閃がジークフリートの横腹に入る寸前――――
ギィィィィンッ！

金属音が鳴り響く……
祐斗の聖魔剣はジークフリートが新たに鞘から抜いた魔剣によって防がれていた
「ノートゥング。こちらも伝説の魔剣だったりする」
3本目の魔剣よりも驚くべき事がある……
既に2本の魔剣を持っているジークフリートが何故3本目の魔剣を持てるのか……？
その答えは――――ジークフリートの背中から生えた3本目の腕が魔剣を握っていたからだ
銀色の鱗に包まれた腕……それはまるでドラゴンの腕のようだった……
驚く新達にジークフリートは笑みながら言う
「この腕かい？これは『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』さ。ありふれた神器（セイクリッド・ギア）の1つだけれど、僕のはちょいと特別でね。亜種（あしゅ）だよ。ドラゴンの腕みたいな物が背中から生えてきたんだ」
『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』!?確か俺の『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』の下位版だったよな？亜種って……背中から腕が生えてくるのかよ！」
「伝説の魔剣に亜種『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』での三刀流……何処の海賊狩りだよ、チクショウ」
ジークフリートの魔剣に神器（セイクリッド・ギア）の正体を知った祐斗の表情がより厳しい物に変わる
「……同じ神器（セイクリッド・ギア）使い。けれど、あちらは剣の特性どころか、その神器（セイクリッド・ギア）の能力すら

まだ出していない、か」
「ついでに言うなら、禁手（バランス・ブレイカー）にもなっていないけどね」
残酷な報告が追い討ちを掛ける……
確かに実験を繰り返していた英雄派の構成員が禁手（バランス・ブレイカー）になれない筈が無い
ジークフリートは素の状態で祐斗、ゼノヴィア、イリナの3人を圧倒していた
困惑する一誠の前にアザゼルが降り立った
同様に英雄派の中心に曹操が戻ってくる
チラリと2人が攻撃を打ち合いながら向かった下流方面を遠目に見やると――――
煙が上げる焦土と化していた……
アザゼルは恐らく英雄派が創った空間だからと遠慮無しに攻撃を打ち込んだのだろう
アザゼルの鎧は所々壊れており、黒い翼もボロボロだった
一方、曹操の方も制服や羽織っている漢服が破れていた
しかし、伝説の存在でもある堕天使の総督と一戦交えて負傷が少ない事に驚きを隠せない……
「……これが英雄派のトップ……」
「……心配するな、イッセー。お互い本気じゃない。ちょっとした小競り合いだよ」

「小競り合いで下流の地域が崩壊しているんですけど!?」
「面白ぇ。なら、俺も少し手合わせしてみるか」
そう意気込む新は闇皇剣に魔力を注入し、強大な電撃を迸らせる
先程アンチモンスターに放った剣技――――クロス・バーストの体勢だ
新が攻撃を仕掛けてくると知った曹操は口の端を吊り上げ、聖槍の切っ先を新に向ける
切っ先に集まる輝かしいオーラが刃となっていく……
「――――っ！皆、離れろ！あいつらデカいのを撃つつもりだ！」
アザゼルの呼び掛けで新を除く全員が後方に飛び退き、新は高密度の魔力を帯びた剣を振るった
「クロス・バーストォッ！」
剣を振るった刹那、巨大な斬撃が地を抉りながら猛進していく
曹操は「面白いっ！」と発して聖槍から光り輝く刃を撃ち放った
衝突する聖槍の刃と赤い斬撃が天と地を揺り動かす……
激しい火花を散らしながら押し合う２つの攻撃、その威力はまさに互角……
剣を握る手を震わせる新は更に力を込め、曹操も同様に技の威力を底上げさせる
その瞬間、２つの攻撃は巨大な爆発を生み――――攻撃の余波を受けた新が後方に吹

き飛ぶ

直ぐに体勢を立て直す新だが――――右腕の鎧が完全に破壊され、剣を握る手を伝って血が滴(したた)り落ちる……

曹操の方は軽く息を切らす程度でダメージは少なかった

「……クソッ。結構な威力を放ったってのに、あの程度の傷かよ……。参ったぜ……」

舌打ちする新に曹操は首をコキコキ鳴らしながら言う

「今のは良い威力の攻撃だったよ、竜崎新。仲間の眷属悪魔達もね。これが悪魔の若手でも有名なリアス・グレモリー眷属か。もう少し、楽に戦えると思ったんだが、意外にやってくれる。俺の理論が正しければ、このバカげた力を有するグレモリー眷属を集めたのは兵藤一誠と竜崎新――――キミ達の力だ。兵藤一誠は身体機能と魔力の才能は無いかもしれないが、ドラゴンの持つ他者を惹き付ける才能は歴代でもトップクラスだと思うけどね。ほら、ドラゴンは力を集めるって言うだろう？キミの場合は良くも悪くもその辺が輝いていたって事だよ。竜崎新も未知なる力――――『闇皇(やみおう)の鎧』を宿してる上に戦闘のプロ。更に兵藤一誠と同じく他者を惹き付ける才に恵まれている。連続する名うての存在の襲来、各龍王との邂逅(かいこう)、そして多くに支持されている『おっぱいドラゴン』と『蝙蝠皇帝』が良い例だ。『王(キング)』無き眷属をこの状況で冷静に対処出来た。まだ稚拙で穴だらけとも言える手配だが……手慣れたら怖くなるかもしれない」

曹操が新と一誠に槍の切っ先を向けてくる
「だから、俺達は旧魔王派のように油断はしないつもりだ。将来、兵藤一誠は歴代の中でも最も危険な赤龍帝になると確信している。竜崎新も危険度ナンバーワンの闇皇(やみおう)だ。そして、眷属も同様。今の内に摘むか、もしくは解析用のデータを集めておきたいものだ」
英雄派は今まで新達が相手にしてきた旧魔王派とは根本的に違う……
旧魔王派などは基本的に小馬鹿にしてきたので、その隙を突いて勝ってきた
アザゼルが曹操に改めて問う
「1つ訊きたい。貴様ら英雄派が動く理由は何だ?」
「堕天使の総督殿。意外に俺達の活動理由はシンプルだ。『人間』として何処までやれるのか、知りたい。そこに挑戦したいんだ。それに悪魔、ドラゴン、堕天使、闇人(やみびと)、その他諸々、超(ちょうじょう)常の存在を倒すのはいつだって人間だった。――――いや、人間でなければならない」
「英雄になるつもりか?って、英雄の子孫だったな」
曹操は人差し指を青空に真っ直ぐ突き立てた
「弱っちい人間の細(ささ)やかな挑戦だ。蒼天(そうてん)の下(もと)、人間のまま何処まで行けるか、やってみたくなっただけさ」

英雄派は今まで新達が相手にしてきた旧魔王派とは根本的に違う……
旧魔王派などは新達を小馬鹿にしてきたが、今まではその隙を突いて勝ってきた
アザゼルが嘆息しながら新と一誠に言う
「……イッセー、新、油断するなよ。こいつは――――旧魔王派、シャルバ以上の強敵だ。お前らを知ろうとする者はこれから先、全て強敵だと思え。特にこいつはその中でヴァーリと同じぐらい危険性が抜きん出ている」
「ヴァーリと同じぐらい……」
「まあ、最強の聖槍を持っているだけでも相当な強敵だろうよ」
アザゼルが揃った事で両陣営が改めて身構える
英雄派は未だにアンチモンスターを生み続けている
第二波の戦闘が始まろうとしたその時――――新達と英雄派の間に1つの魔方陣が輝かせながら現れた
今まで見た事の無い紋様……
「――――これは」
アザゼルは何か知っているようで、怪訝に思っている新達の眼前に現れたのは――――魔法使いの格好をした可愛らしい女の子だった
帽子にマント、まさに魔法使いの格好で歳は中学生くらい

女の子はクルリと新達の方に体を向けると、深々と頭を下げてきた
ニッコリと笑顔で新達に微笑み掛ける
「初めまして。私はルフェイ。ルフェイ・ペンドラゴンです。ヴァーリチームに属する魔法使いです。以後、お見知りおきを」
「ヴァ、ヴァ、ヴァーリチームゥゥゥゥ!?何でヴァーリの仲間がこんな所に!?」
仰天する一誠を他所に、アザゼルが魔法使いの女の子――――ルフェイに訊く
「……ペンドラゴン?お前さん、アーサーの何かか?」
「はい。アーサーは私の兄です。いつもお世話になっています」
「アーサー……あの聖王剣(せいおうけん)使いの妹か。へー、こんな可愛い妹がいたのか」
新が感心する中、アザゼルは顎に手をやりながら言う
「ルフェイか。伝説の魔女、モーガン・ル・フェイに倣(なら)った名前か?確かにモーガンも英雄アーサーペンドラゴンと血縁関係にあったと言われていたかな……」
ルフェイが目を爛々と輝かせながら新に視線を送り、新に近付くと手を突き出してくる
「あ、あの……私、『蝙蝠皇帝(こうもりこうてい)ダークカイザー』のファンなのです!差し支えないようでしたら、あ、握手してください!」
新は突然握手を求められて若干反応に困るが、とりあえず「サ、サンキュー……」と

だけ呟いて握手に応じた
握手してもらったルフェイは「やったー！」と物凄く喜ぶ
曹操側も呆気に取られるが、曹操が頭をポリポリ掻きながら息を吐く
「ヴァーリの所の者か。それで、ここに来た理由は？」
曹操の問いにルフェイは屈託の無い満面の笑顔で返した
「はい！ヴァーリ様からの伝言をお伝え致します！『邪魔だけはするなと言った筈だ』――――だそうです♪うちのチームに監視者を送った罰ですよ～」
ドウゥゥゥゥゥゥゥンッ！
ルフェイが可愛く発言した直後、大地を揺り動かす程の震動がこの場を襲う
ガゴンッと何かが割れる音
そちらに視線を送ると、地面が盛り上がって何か巨大な物体が出現する寸前だった
地を割り、砂を巻き上げながら姿を現したのは――――雄叫びを上げる巨人らしき物だった……
『ゴオオオオオオオオオオオオオオオッ！』
無機質な物で創られたようなフォルムに腕も脚も太く、全長１０メートルはありそうな石の巨人
アザゼルが巨人を見上げて叫ぶ

「――――ゴグマゴクか！」
「はい。私達のチームのパワーキャラで、ゴグマゴクゴッくんです♪」
「ゴッくんって、そんな可愛らしく呼ばれてるの!?あれが!?」
「アザゼル、あの石の巨人は何だ？」
　新の問いにアザゼルがゴグマゴクについて説明を始めた
「ゴグマゴク。次元の狭間に放置されたゴーレム的な物だ。稀に次元の狭間に停止状態で漂ってるんだよ。何でも古の神が量産した破壊兵器だったらしいが……。全機が完全に機能停止だった筈だ」
「あんなのが次元の狭間にいるんですか!?機能停止って、あれ動いてますけど！」
「ああ、俺も動いているのを見るのは初めてだ。問題点多過ぎたようでな、機能停止させられて次元の狭間に放置されたと聞いていたんだが……動いてるぜ！胸が躍るな……ッ！――――そうか。ヴァーリが次元の狭間で彷徨いていたのはグレートレッドの確認だけじゃなかったんだな」
　アザゼルの意見にルフェイが答えた
「はい。ヴァーリ様はこのゴッくんを探していたのです。オーフィス様が以前、動きそうな巨人を次元の狭間の調査で感知したとおっしゃっておられまして、改めて探索した次第です」

「先生、次元の狭間ってあんなのやグレートレッドがいるんですね……」
「次元の狭間は、ああ言う処分に困った物が行き着く先でもある。グレートレッドも次元の狭間を泳ぐのが好きなだけで実害は無いぞ。各勢力でもグレートレッドはブラックリストや各種ランキングに入る事は無い。あれは特例だ。つつかず自由に泳がせておけば良いものを……」
アザゼルがそう呟く中、ゴグマゴクが英雄派の方を向き、ルフェイがゴグマゴクに指示を出す
「ゴッくん、あの人達にお仕置きしちゃってください♪」
『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』
雄叫びを上げるゴグマゴクが巨大な拳を振り上げる
曹操や英雄派の連中が身構えた途端――――再び渡月橋の中心で魔方陣が輝きながら現れた
しかも、今度は3つ……
「今度は何だ？またヴァーリチームの誰かか!?」
一誠の言葉にルフェイは訝(いぶか)しげな表情となる
「いえ……ヴァーリ様のチームは今のところ、ヴァーリ様、美猴(びこう)様、兄のアーサー、黒歌(くろか)さん、フェンリルちゃん、ゴッくん、私の7名だけです」

実に濃過ぎるヴァーリチームのメンバー紹介を受ける
では、これらの魔方陣はいったい誰なのか……？
疑問に思っていると魔方陣から何者かが姿を現す
現れた3人は異形の姿をしていた……
真ん中に立つのは炎の様な髪を揺らめかせる人型サイズのドラゴン、その者の周囲には円盤らしき武器が2つ浮遊している
右隣にいるのは全身を鎧と刃物で固め、兜の隙間から鋭い眼孔を覗かせた――――同じく人型サイズのドラゴン
左隣には2人よりも一回り大きく、爬虫類の様な頭をした全長3メートル程はありそうなドラゴン
突然現れたこの3人のドラゴンにアザゼルが切り出す
「お前ら、いったい何者だ？」
アザゼルが問い詰めると炎の髪を揺らめかせるドラゴン→鎧と刃物を纏ったドラゴン→爬虫類の様なドラゴンが順番に答えた
「ケケケッ、オレ様は神風一派（かみかぜいっぱ）に属するサラマンダーの闇人（やみびと）、アドラス・ヴェルメリオ様だ」
「私は、同じく神風一派に属するリザードマン族出身の闇人（やみびと）、メタル・D（ディー）・アズール」

「あっしも神風一派に属する闇人のガーラント・グリンベルデと申しやす。因みにあっしはナーガ族出身でございやす」
「サラマンダー、リザードマン、ナーガって……全部ドラゴン関連のモンスターじゃないか!?」
「しかも、その全員が闇人で神風絡みかよ……」
一誠が仰天し、新が憎々しげに吐き捨てる
サラマンダーとは炎の精霊とも呼ばれ、溶岩の中を住み処にしている蜥蜴やドラゴンのモンスター
リザードマンは二足歩行する竜人の魔物で、ナーガはインド神話に伝わる蛇の姿を持ったドラゴンである
その3種族出身の闇人が神風一派を名乗って現れてきた……
3人の闇人の登場に曹操が訊ねる
「闇人3人が京都まで御足労を掛けるとは、何かの悪巧みかい？」
「よぉく分かってんじゃねぇか、『禍の団』のクソ英雄。ああ、そうだよ。オレ様達がここに来たのは、てめぇらに朗報を伝える為だ」
下卑た笑いを見せるアドラスは、その調子のまま中指を突き立てて〝朗報〟とやらを口に出す

「てめぇらがモタついてるお陰で――――『初代キング』復活の準備が整ったぜぇ？もう終わったな、てめぇら」

『――――っ!?』

アドラスの口から出た衝撃かつ最悪の報せに全員が絶句する

新達と英雄派の反応を見たアドラスは大爆笑、メタルとガーラントもクスクスと笑う

「良い反応をありがとう、悪魔と英雄派の諸君。君達が牽制し合っているお陰で神風一派の目的は最終段階まで終えたよ。手薄になった警備を突破して『初代キング』を封じ込めている結界石を破壊したんだ」

「神風が言ってやした。『禍の団』が表立てば、そいつを隠れ蓑にして結界石を破壊すると……。狙いはドンピシャでございやしたね。囮役、ご苦労さんでございやした」

嫌味タップリに言ってくるメタルとガーラント

新達どころか、英雄派まで『初代キング』を復活させる準備の囮に使われていた……

アザゼルが悔しげに言う

「クソッタレ……ッ！あのガキの計画はもうそこまで進んでたのかよ……ッ！」

「俺達まで囮に使われていたとは、見事に一杯食わされたな……」

曹操も嵌められた事に怒りの色を見せる

報告を終えたアドラス達が帰ろうとした矢先、ルフェイが前に出て言う

「あなた方もヴァーリ様の邪魔をするのですか？」
「邪魔ぁ？ヒャハハハッ！邪魔なのはてめぇらの方だろ？怪我しねぇ内に帰んな、クソガキ」
「ムッ、感じが悪い人達ですね。ゴッくん、お願い」
ルフェイはゴグマゴクに攻撃指示を出すと、ゴグマゴクは応じて巨大な拳を振り上げる
そこへ神風一派の1人、メタルが嬉々として前に出た
「ゴーレムか、面白そうだな。私が行こう」
「時間掛けんなよ」
「勿論さ！『装甲強化（アームド・アップ）・壱式（レベルワン）』ッ！」
力強い台詞を発した直後、メタルの両腕が円錐状の装甲に強化される
前に飛び出し、迫り来るゴグマゴクの巨大な拳に強化された左手を突き出した
空を切る音と共に衝突音が響き――――メタルが拳打を思いっきり振り抜く
ゴグマゴクは後方に吹き飛び、大きな音を立てて倒れ込んだ
倒れたゴグマゴクにルフェイが駆け寄る
「――――ッ！ゴッくん！」
「嘘だろ!?あの巨体を一撃で吹っ飛ばした!?」

一誠はメタルの強さに驚愕、拳を振り抜いたメタルは首をコキコキ鳴らして不満げに漏らす
「意外に歯応えが無くて残念だな」
「ヒャハハハッ！大した事ねぇなぁ！こうなりゃオレ様達もデッケェ花火ぶっ放してやろうぜぇ！」
「それじゃ、あっしは『禍の団（カオス・ブリゲード）』にやりやすので、アドラスは悪魔どもにぶっ放してくだせぇ」
ガーラントが英雄派の方を向いて全身から邪悪なオーラを発する
「『拡散する蛇の群れ（オロチ・スプレッド）』オッ！」
オーラが巨大な蛇の群れと化して英雄派に襲い掛かっていく
英雄派の連中は直ぐに飛び退いて攻撃を回避、蛇の群れは付近の家屋や地面を破壊した
「おーおー、派手にやってんなぁ！オレ様も行くぜぇっ！」
アドラスが新達の方を向き、２つの円盤を自身の前で円を描くように回転させる
次第に炎が噴き上がり、アドラスが濃密なオーラを発しながら回転する円盤の中心に勢い良く手を伸ばした
「サラマンダー・キャノオオオオオンッ！」

ゴオオオオオオオオオオオオッ！

回転する円盤から大質量の熱光線が発射され、新達の方に向かっていく

熱光線の危険度を察知したアザゼルは「まずい！避けろォッ！」と叫んで横っ飛びした

一誠達も横っ飛び、新も直ぐに避けようとしたのだが――――ある事に気付いてしまった

自分の後ろに先程『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』で裸にして『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』で捕らえた英雄派女子がいる……

動きを封じられている彼女達が逃げられる訳が無い……

新が避ければ彼女達は間違い無く死ぬ……

「――――ッ！……死なせてたまるかよッ！」

新は前方に『闇皇紋章（エンブレム）』を壁の如く多量に展開し、更に魔力を促（うなが）す

アドラスが発射した熱光線は『闇皇紋章（エンブレム）』の壁に衝突

膨大な熱量によって壁と新自身が焼かれていく……

「ぐあぁぁぁぁぁぁあっ！ぐっ……！ぎ、オオオオオオオオオオオオオ

しかし、それでも新は魔力を最大限にまで上げて何とかアドラスの熱光線を相殺させた
『闇皇紋章(エンブレム)』の壁が砕け散った直後、鎧も強制解除され、全身ボロボロの新は英雄派女子の所に歩み寄る
「……だ、大丈夫か……？」
「どうして、どうして私達の盾になったの……？私達は敵なのに……」
「関係ねぇよ……っ。俺は……殺されそうになってる女を、放っておけないだけだ……っ。例えそれが……敵でもな……」
『――――ッ』
新の行動と言葉に英雄派の女子は心を打たれ、頬を赤く染める
無茶を働いた新は血の塊を口から吐き出し、その場に倒れ込んだ
その姿に一誠達は絶句するが、アドラスは非情にも嘲笑(あざわら)う
「ヒャハハハッ！見たかよ、今の！あいつ敵を庇ってぶっ倒れやがった！本物のバカだぜ！」
「……ッ！貴様ァッ！」
新を侮蔑するアドラスに怒り心頭のゼノヴィアが飛び出していくが、アドラスは２つの円盤を操ってゼノヴィアの剣戟を防ぎ、腹に円盤を激突させる

空中で攻撃をくらったゼノヴィアは地に転がり落ちる
アドラスは更に哄笑を上げて侮蔑した
「たかが1人殺ったぐらいでキレてんじゃねぇよ！ボケが！何ならいっそ、てめぇら纏めてブッ殺して――――あ？何だ、この霧は？」
周りを見渡していると、英雄派の1人が手元から霧を発生させていた
制服の上にローブを羽織った青年――――その男こそが『絶霧（ディメンション・ロスト）』の使い手だった
英雄派の全員と新を薄い霧で包み込み、曹操が霧の中から言う
「少々、乱入が多過ぎたか。――――が、祭りの始まりとしては上々だ。アザゼル総督！我々は今夜この京都と言う特異な力場と九尾の御大将を使い、二条城で1つ大きな実験をする！是非とも制止する為に我らの祭りに参加してくれ！」
楽しそうに宣言する曹操、英雄派、新の姿が徐々に見えなくなっていき、アドラス達も退き時かと悟って一誠達に宣告する
「おい、クソ悪魔ども！次は二条城って所で会おうぜ！『禍の団（カオス・ブリゲード）』もてめえらも、オレ様達がブッ殺してやる！」
「戦いの時が来るまで、ゆっくりと体を休めておきたまえ」
「あっしらは一筋縄じゃありやせんからね。精々（せいせい）頑張ってくだせぇ」
アドラス達は魔方陣の中へと沈み、その姿を消した

それと同時に全員の視界が霧に包まれる
「お前ら、空間が元に戻るぞ！攻撃を解除しておけ！」
アザゼルからの助言が飛び、一誠達は急いで攻撃態勢を解いた……

一拍空けて霧が晴れた時、そこは観光客で溢れた渡月橋周辺だった
何事も無かったかの様に橋を往来していく
「おい、イッセー。どうした、すげー険しい顔になってんぞ？ってか、竜崎の奴いねぇじゃん。何処行った？」
一誠の顔を覗き込む松田が新の不在に気付く
一誠は「……いや、何でもないよ。新は速攻でトイレに向かった」と誤魔化した
他のメンバーも表情が険しく、ルフェイとゴグマゴクの姿は何処にも無かった
恐らく霧が晴れたと同時に消えたのだろう
ガンッ！
アザゼルが電柱を横殴りしていた
「……ふざけた事を言いやがって……ッ！京都で実験だと……？舐めるなよ、若造が！」

「……母上。母上は何もしていないのに……どうして……」

マジギレするアザゼルに、体を震わせる九重

八坂だけでなく、新まで英雄派に捕まってしまった……

英雄派と神風一派の襲来、二条城での実験、そして『初代キング』の復活……

一誠達の修学旅行は思いがけない波乱の展開を迎えそうになっていた……

二条城へ向かえ！

「アザゼル先生！どういう事なんですか!?新さんが……新さんが捕まったって――――
うっぷ……っ」
「良いから一先ず落ち着け」
就寝時間間近、一誠の部屋にグレモリー眷属（新不在）＋イリナ、シトリー眷属、アザゼル、セラフォルーが集まっていた
八畳一間の部屋に１０人以上の人数はとにかく狭く、立ち見する者もいる
昼前にすこぶる酔っていたロスヴァイセは顔を真っ青にしながらも参加していた
酔い覚ましの薬を自分で調合して飲んだのだが、それでも体調万全には戻っていない
アザゼルが皆を見回してから部屋の中心に京都の全体図を敷く
「現在、二条城と京都駅を中心に非常警戒態勢を敷いた。京都を中心に動いていた悪魔、堕天使の関係者を総動員して、怪しい輩（やから）を探っている。京都に住む妖怪達も協力してくれているところだ。未だ英雄派と神風一派は動きを見せないが、京都の各地から不穏な気の流れが二条城を中心に集まっているのは計測出来る」
「不穏な気の流れ？」

「ああ、京都ってのは古来、陰陽道(おんみょうどう)、風水に基づいて創られた大規模な術式都市だ。それゆえ、各所に所謂(いわゆる)パワースポットを持つ。晴明神社の晴明井(せいめいい)、鈴虫寺の幸福地蔵、伏見稲荷大社の膝松さん、挙げればキリが無い程に不思議な力を持つ力場に富んでいる。それらが現在、気の流れが乱れて二条城の方にパワーを流し始めているんだよ」

「ど、どうなるんですか?」

匙が生唾を飲み込みながら訊く

「分からんが、ロクでもない事は確かだ。奴らはこの都市の気脈を司っていた九尾の御大将を使って『実験』とやらを開始しようとしているんだからな。それを踏まえた上で作戦を伝える」

アザゼルの言葉に皆が頷き、アザゼルが改めて告げる

「まずシトリー眷属。お前達は京都駅周辺で待機。このホテルを守るのもお前達の仕事だ。一応このホテルは強固な結界を張っている為、有事の際でも最悪の結果だけは避けられるだろう。それでも不審な者が近付いたら、シトリー眷属のメンバーで当たれ」

『はい!』

アザゼルの指示にシトリー眷属の皆が返事をする

「次にグレモリー眷属とイリナ。いつも悪いが、お前達はオフェンスだ。この後二条城の方に向かってもらう。正直、相手の戦力は未知数の上、あの神風一派も来る。危険な

賭けになるかもしれないが、優先すべきは新と八坂の姫を救う事。それが出来たらソッコーで逃げろ。奴らは八坂の姫で実験を行うと宣言しているぐらいだからな。……まあ、虚言の可能性も高いが、あの曹操の言動からすると恐らく本当だろう。――――俺達が参戦するのを望んでいるフシが多分にあったからな」

「お、俺達だけで戦力足りるんですか？」

一誠がそう質問する

確かにこちら側の戦力は圧倒的に低い

新も英雄派に拉致された挙げ句、神風一派も来る事を考えれば絶望的だった

しかし、そんな状況でもアザゼルは不敵に笑う

「安心しろ。テロリスト相手のプロフェッショナルを呼んでおいた。各地で『禍の団』相手に大暴れしている最強の助っ人だ。それが加われば奪還の可能性は高くなる」

「助っ人？誰ですか？」

「トンでもないのが来てくれる事だけは覚えておけ。これは良い報せだな」

アザゼルが口の端を愉快そうに吊り上げた

ここまで言うのなら相当な手練れが来るに違いなさそうだ

「それとこれはあまり良くない報せだ。――――今回、フェニックスの涙が３つしか支給されなかった」

「み、3つ!?た、足りなくないですか!?一応、対テロリストと対闇人(やみびと)なんですし！」

匙が素っ頓狂な声を上げてアザゼルに問う

「ああ、分かっている。だが、世界各地で『禍(カオス)の団(ブリゲード)』がテロってくれるお陰で涙の需要が急激に跳ね上がってな。各勢力の重要拠点への支給もままならない状態だ。元々大量生産が出来ない品だったもんでな、フェニックス家も大変な事になっているってよ。市場でも値段も高騰しちまって只でさえ高級品なのに、頭に超が2つは付きそうな代物に化けちまった。噂じゃ、レーティングゲームの涙使用のルールも改正せざるを得ないんじゃないかって話だ。お前達の今後のゲームに影響が出るかもしれない事だけ頭の隅に置いておけ」

テロが多ければ怪我人も増え、それによって回復アイテムたるフェニックスの涙の需要が高くなっても不思議じゃない、寧ろ当然の事でもある……

アザゼルが話を続ける

「これは機密事項だが、各勢力協力して血眼になって『聖母の微笑(トワイライト・ヒーリング)』の所有者を捜している。レアな神器(セイクリッド・ギア)だが調査の結果、アーシアの他に所有者が世界に何人かいると発覚しているからな、スカウト成功は大きな利益になる。冥界最重要拠点にある医療施設などには既にいるんだが、スカウトの1番の理由は――――テロリストに所有者を捕獲されない為だ。優秀な回復要員を押さえられたらかなりマズい。現ベルゼブブ――――ア

ジュカも回復能力について独自に研究しているそうだが……。まあ、良い。それとグリゴリでも回復系人工神器（セイクリッド・ギア）の研究も進んでいる。実はアーシアに陰で回復の神器（セイクリッド・ギア）について協力してもらっていてな。良い結果も出ている」

アザゼルの言葉にアーシアが照れていた

実はアーシアは陰で冥界の役に立っていたりする

「てな訳だ。この涙は――――オフェンスのグレモリーに2個、サポートのシトリーに1個支給する。数に限りがあるから上手に使ってくれ」

『はい！』

アザゼルの指示に皆が返事をした所で、アザゼルの視線が匙に移る

「匙、お前は作戦時、グレモリー眷属の方に行け」

「お、俺っスか？」

匙が自身を指で差す

予想外の指名だったが、直ぐに自分の役目を理解した

「……龍王、ですか？」

「ああ、そうだ。お前のヴリトラ――――龍王形態は使える。あの黒い炎は相手の動きを止め、力まで奪うからな。ロキ戦のようにお前がグレモリーをサポートしてやってくれ」

「そ、それは良いんですけど、あの状態って意識を失いかけて暴走気味になりやすいんです」
「問題無い。ロキの時と同じ様にイッセーがお前の意識を繋ぎ止めてくれるだろう。イッセー、その時は匙に話し掛けて何とかしろ。――――天龍なら、龍王を制御してやれよ」
「は、はい！」
1度は出来た事、一誠は気合を入れて返事をした
ここでイリナが手を上げてアザゼルに質問する
「あの、この事は各勢力に伝わっているのですか？」
「当然だ。この京都の外には悪魔、天使、堕天使、妖怪の者達が大勢集結している。奴らが逃げないように包囲網を張った。――――ここで仕留められるなら、仕留めておいた方が良いからだ」
「外の指揮は任せてね☆悪い子がお外に出ようとしたら各勢力と私が一気に畳み掛けちゃうんだから♪」
アザゼルの言葉に続く様に明るく抹殺宣言するセラフォルー
有事になったら大暴れしそうな雰囲気だった……
「それと駒王学園（くおうがくえん）にいるソーナにも連絡はした。あちらはあちらで出来るバックアップ

をしてくれているようだ」
「先生、うちの部長達は？」
一誠の質問にアザゼルは顔を少し顰めた
「ああ、伝えようとしたんだが……タイミングが悪かったらしくてな。現在、あいつらはグレモリー領にいる」
「何かあったんですか？」
「どうやら、グレモリー領のとある都市部で暴動事件が勃発してな。それの対応に出ているようだ」
「ぼ、暴動!?まさか『禍の団』!?」
「旧魔王派の一部が起こした暴動だ。『禍の団』に直接関与している輩でもないらしい。それでも暴れているらしくてな、あいつらが出ていった訳だ。一応、将来自分の領土になるであろう場所だからな。――それにグレイフィアが出陣したと報告を受けた。まあ、あのグレイフィアが出たとなると、相手の暴徒共もおしまいだろう。正確かどうかは分からないが、グレモリー現当主の奥方もその場にいるそうだ。――グレモリーの女を怒らせたら大変だろうさ」
「まあ、『亜麻髪の絶滅淑女』、『紅髪の滅殺姫』、『銀髪の殲滅女王』が揃っちゃうのね☆うふふ、暴徒の人達、大変な事になっちゃうわね♪」

アザゼルが若干体を震わせながらそう言い、セラフォルーが楽しげに不吉極まりない二つ名を連呼した

絶滅、滅殺、殲滅……まさに〝絶対に触れてはいけない〟を体現したかの様なフレーズである……

アザゼルは黄昏(たそが)れるように「……新(あいつ)も将来大変だな」と明後日の方角を向いてボソリと呟いた

アザゼルが咳払いして改めて皆に告げる

「と、俺からの作戦は以上だ。俺も京都の上空から独自に奴らを探す。各員1時間後までにはポジションについてくれ。怪しい者を見たら、ソッコーで相互連絡だ。――死ぬなよ？修学旅行は帰るまでが修学旅行だ。――京都は俺達が死守する。良いな？」

『はい！』

全員が返事をしたところで作戦会議が終わる

新と八坂姫の救出、難易度の高い任務に一誠達は気合を入れ直した

ここでロスヴァイセが呟く

「……早く新さんを助け出さないと……」

「そうだな、あいつを失うのは大きな損害になりえん。これを機に奴らが――」

「違います……っ。もし、新さんが捕まってる八坂姫と遭遇したら――絶対エッチな

事をしてしまうじゃないですか……っ」
『あ、あり得そうで怖い……』
ロスヴァイセの酷い言い掛かりに全員の意見が見事に一致してしまった……

その頃、新は英雄派の一時的なアジトで未だに眠りから覚めずにいた
右手を負傷した挙げ句、乱入してきた神風一派のアドラスが放った熱光線を防いだものの、その身を焼かれて重傷を負った
その後は『絶霧（ディメンション・ロスト）』に包まれ、英雄派のもとに連れ去られていたのだ
暫（しばら）くした後、体を襲う痛みで目覚める
痛む傷を押さえ、手を突っ張らせて起き上がる
「……ここは……？確か、あの熱光線を受けて――――」
「お、目が覚めたようだな。竜崎新。一応、応急処置はしたんだが傷の塩梅（あんばい）はどうかな？」
声を掛けてきたのは曹操
彼の周りには先程対峙したジークフリートにローブを羽織った『絶霧（ディメンション・ロスト）』使いの青

年の他、以前新と会ったジャンヌ、そして見慣れない2メートルはある巨体の男がいた
新は咄嗟に飛び退いて攻撃態勢を取ろうとしたが……鎧どころか籠手すら現れない
不審に思って自分の体を見てみると――――首輪の様な装置が付けられている事に気付く
「曹操、この首輪はいったい何だ？俺に何をした？」
「やれやれ、傷を負っても闘争心を衰えさせないとは。流石（さすが）バウンティハンター、血気盛んだね。キミに付けた首輪は対象者の異能を封じる装置だよ。ここで暴れられると困るんでね。少しの間だけおとなしくしてもらうよ」
「チッ、敵陣の真っ只中か……。状況は最悪だぜ……」
「そう言えば紹介が遅れたな。紹介しておこう。このローブを羽織ってるのがゲオルク――――『絶霧（ディメンション・ロスト）』の使い手だ」
曹操がローブを羽織った青年――――ゲオルクを指差す
「既に会っていると思うが、彼女はジャンヌ。キミの大ファンだそうだ」
「うふふ、やっとお姉さんのもとに来てくれたわね♪アーくんっ♪」
ジャンヌは嬉しそうに新に抱き付き頬擦りする
「そして最後にこっちがヘラクレス。英雄ヘラクレスの魂を引き継いだ男だ」
曹操が近くにいたヘラクレスを指差し、ヘラクレスがズシズシと歩み寄る

「へっ、こんなガキが今まで危険視していた闇皇(やみおう)かよ。力が使えねぇ今じゃ、ただのクソガキだな」
「ちょっとヘラクレス。私のアーくんをバカにしないでくれる？アーくんは大事なゲストなんだから」
「俺は本当の事を言ったまでだぜ。そんなクソガキに何が出来るってんだ」
ヘラクレスの罵声に新は少しキレ、寝床から体を起こしてヘラクレスを睨み付ける
「あ？何だ、何か文句あんのか？」
「口の聞き方に気を付けろよ、筋肉ダルマ。力を使えなくてもテメェを沈めるぐらい出来るんだよ」
「ハハハハッ！やってみろよ、腐れ悪魔が！今のてめぇに何が――――」
ヒュッ！ゴキンッ！
新はヘラクレスが言葉を言い切る前に素早く拳を打ち込んだ――――ヘラクレスの股間に……
人体の急所を攻撃されたヘラクレスは悶絶、新は微塵も容赦せず股間への集中砲火を続けた
拳と蹴りの乱舞で股間をいたぶった後、重いローキックでヘラクレスを転がし――――トドメに股間を踏みつけた

「……が……っ！」
鈍い悲鳴を上げるとヘラクレスは白目を向いて気を失い、新は気絶したヘラクレスに吐き捨てる
「どんなに鍛えようが、男はソコをやられたら1発で倒れるんだよ。学習しておけ」
「……実際は１０発以上入れてたけどね……」
曹操は顔を逸らして吹き出すのを堪え、ジークフリートが苦笑しながら『龍の手』の腕を背中から生やし、気絶したヘラクレスを引きずっていく
ジャンヌはよほどスカッとしたのか、引きずられていくヘラクレスに向かって舌を出す
「やっぱり最高ね、アーくんは♪」
「いやー、スマない。ヘラクレスはああ言う男なんでね。しかし……キミは本当に面白い男だ。力を封じられてもこれだけ噛み付けるなんて」
「あの筋肉ダルマが油断してただけだ」
「実に正直で面白い。ジャンヌ、彼をあの部屋に案内してあげてくれ。彼女も退屈しているだろうから、良い話し相手になると思うんだ」
「はいはい」
曹操の指示とジャンヌの案内で連れていかれる新

廊下らしき道を暫く歩いていると、如何にも何かを閉じ込めていそうな冷たく重い鉄の扉の前に到着した
「アーくん、悪いけど暫くこの部屋でおとなしくしててね？」
「何だ、牢屋か？」
「そうよ。――九尾のお姫様付きのね♪」
ジャンヌの言葉に新の眉がピクッと動く
ジャンヌは鉄の扉を開け、新はおとなしく中に入る
新が足を踏み入れた直後、ジャンヌが扉を閉めて鍵を掛ける
最後に「何か必要な物があったら言ってねー♪」と言い残し、ジャンヌはその場を去っていった
薄暗い牢屋の中を見渡すと、奥の方で座り込んでいる女性を発見
頭部に獣耳を生やし、巫女装束を身に纏った金髪の女性……
その人こそ九重の母――八坂だった
新が歩み寄ると、それに気付いた八坂が警戒した口調で言う
「……何者じゃ」
「あんたが八坂姫か。安心してくれ。俺は竜崎新、俺もあんたと同じく捕まった側の者だ。九重から話を聞いて助けようとしたが、このザマだ」

「九重!?お主、九重の知り合いか!?九重はっ、わらわの娘は無事なのか!?」
九重の名を聞いた途端、激しく狼狽する八坂姫
「あぁ、九重は無事だ。俺の頼もしい仲間がガードしている」
「そうか……良かった……っ。取り乱してすまぬ……。てっきり、娘まで捕まったのかとばかり……」
張り詰めた気が抜けたのか、八坂は安堵の溜め息を吐く
新は八坂の前に座り込んで胡座(あぐら)をかく
「本当にすまんのぅ……。わらわのせいでお主までこんな所に……」
「いや、気に病む事は無い。あんたのせいじゃねぇよ。俺が油断しちまっただけだ」
「しかし……」
「それに直ぐ助けが来るって。今はそれを信じて待つしか無いけど――――必ずあんたを助ける」
力強く発言する新
微塵も諦めを見せない様子に八坂は訊ねる
「……何故、そこまで言い切れるのじゃ……?こんな絶望的な状況やのに……」
「あいつらを……一誠達を信じられるからだ。昔の俺は他人を簡単に信じたりしなかった……。でも、あいつらと会ってからは心の底から信じ合える様になれたんだ。だか

ら、捕まっている今でも諦めたりはしねぇ」
そう断言する新に感銘を受ける八坂
少し前まで固い表情だった彼女に柔らかな笑みが生じる
「……強いんやねぇ」
「悄気(しょげ)た顔の女を放っておけないし、落ち込んだままだと美人が台無しだぜ？」
「ふふっ、不思議やわぁ。お主のお陰で少し気が楽になったわぁ」
「そいつは良かった」
この後、新は八坂を元気付ける為に会話を続け、八坂の表情にだんだん明るさが戻っていった

ホテル入り口、ロビーで仲間と合流した一誠は自動ドアの先で集まっていたシトリー眷属を見掛ける
「元ちゃん、無理しちゃダメよ」
「そうよ、元ちゃん。明日は皆で会長へのお土産買うって約束なんだから」
「おう、花戒(はなかい)、草下(くさか)」

「元士郎、テロリストと闇人にシトリー眷属の意地を見せてやるのよ？」
「分かってるよ、由良」
「危なくなったら逃げなさい」
「足なら鍛えてるよ、巡」
匙が仲間に激励を貰っている
匙も夏休みが明けてから眷属同士で仲良くなったのだが、肝心のソーナとの進展は無かったらしい……
溜め息を吐く一誠の肩に祐斗が手を置く
「部長不在の今、仮としての僕達の『王』はイッセーくんだ」
「――――っ！マ、マジかよ！俺が『王』!?良いのか、それで!?」
突然の発言に驚愕し、自身を指差しながら問い返す一誠
「何を言っているんだい。キミは将来部長のもとを離れて『王』になろうとしている。それならこの様な場面で眷属に指示を送るのは当然となるんだよ？」
「そ、それはそうかもしれないが……」
〝俺に部長の代わりが務まるのか……？〟と疑問に思う一誠に祐斗が言う
「昼間の渡月橋での一戦、新くんと土壇場の判断とはいえ、僕達に指示を出した。それが最善だったか、良案だったかは分からないけれど、僕達は無事に今ここにいる。だから、

僕は少なくとも良い指示だったと思える。――だからこそ、新くんも捕まっている今夜の一戦、僕達の指示をキミに任せようと思うんだ」
「そうだな。私やイリナ、アーシアは指示を仰いだ方が動ける。咄嗟とはいえ、部長の欠けたチームを上手く纏めたと思うぞ」
「うんうん。けど、無茶をして飛び出し過ぎるのはダメよ？」
「そうです。無理は禁物です」
ゼノヴィア、イリナ、アーシアが続いて一誠を評価する
「このチームに入って間も無い身なので、チームでは先輩のイッセーくんに任せます」
ロスヴァイセもそう言ってくれる
一誠は改めて眷属――仲間の良さの感銘に浸っていると……ゼノヴィアが手に持つ得物に視線が行った
魔術文字らしき物が記された布にくるまれた長い得物……
ゼノヴィアが視線に気付いて得物を見せる
「ああ、これか。先程教会側から届いたばかりだ。――改良されたデュランダルだよ。いきなり実戦投入だが、それも私とデュランダルらしくて良いだろう」
誇らしげに見せるゼノヴィア
その後で匙が合流し、他のシトリー眷属からも激励を貰った

ホテルの入り口を出ようとした矢先、思いがけない人物が一誠達の前に現れた
「ＨＥＹ！一誠、待ってたＺＥ！」
「――っ!?ダイアン!?お前どうしてここに!?」
驚く一誠の前に現れたのは昼間に会った一誠の親友――ダイアンだった
未だに警戒する祐斗達を前に、ダイアンは掌を向けて言う
「話は一誠のＴｅａｃｈｅｒから聞いたＺＥ。神風が『禍の団』と共に現れたらしいじゃねぇＫＡ。俺も一緒に行かせてくＲＥ」
「アザゼル先生、いつの間に……。ああ、お前が来てくれるなら百人力だ！」
「イッセーくん、本当に彼を連れていくのかい？だって彼は――」
「木場、ダイアンは俺のダチだ！ダイアンは人を騙す様な真似はしないっ！頼むっ、この通り！こいつを信じてくれっ！」
深々と頭を下げる一誠に祐斗は少し戸惑い、ダイアンも続くように頭を下げる
少し考えてから祐斗は結論を出した
「……そこまで頼まれたら、断れないよね。分かった、キミの言葉を信じるよ」
「――っ！サンキュー、木場！じゃあ、宜しく頼むぜ、ダイアン！」
「ＯＫ！任せてくＲＥ！」
頼もしい助っ人が１人増えた所で京都駅の方へ向かっていく

ホテルを出て京都駅のバス停に着き、ここからバスに乗って二条城へ向かう予定である

一誠達は冬服の制服姿で、ゼノヴィアとイリナは教会製の戦闘服を下に着込んでいる

いざとなったら制服を脱いで動きやすくするらしい

ロスヴァイセは未だに「うっぷ……」と口を手で押さえ、時折襲ってくる吐き気と戦っていた……

バス停でバスを待っている時、一誠の背中に何かが飛び乗ってきた

「赤龍帝（せきりゅうてい）！私も行くぞ！」

飛び乗ってきたのは巫女装束の少女――――九重だった

「おい、九重。どうしてここに？」

一誠の肩に肩車の格好で座る九重は一誠の額をペチペチ叩きながら言う

「私も母上を救う！」

「――――っ！お、おいおい！危ないから待機しているよう、うちの魔王少女様や堕天使の総督に言われたろ？」

「言われた。じゃが！母上は私が……私が救いたいのじゃ！頼む！私も連れて行ってくれ！」

一誠はすぐアザゼルに連絡しようかと考えたが、九重の気持ちも分からなくはない

……

それに九重の存在が八坂を助ける切っ掛けになるかもしれない

そう考え、九重の意志を尊重しようとしたその時――足下に薄い霧が立ち込めてきた……

同時にぬるりとした生暖かい感触が全身にまとわりつく

昼間にも味わった霧――『絶霧（ディメンション・ロスト）』

この現象を把握した時には、霧は一誠達の全身を覆（おお）っていた……

一誠とダイアンの共闘！

気付けばそこは京都駅のホームだった
周囲に視線を配らせる一誠、人気（ひとけ）が無い……否、肩に乗っかっている九重と一誠の隣にダイアンがいた
「……こ、ここは地下のホームか？」
「ああ、どうやら昼間の現象をまた食らったようだな」
「Ａｍａｚｉｎｇ（アメイジング）……。京都駅のホームそのままじゃないＫＡ（か）……」
「じゃ、じゃあ、ここも別の空間に創られた疑似京都なのか？きゃつらの持つ技術は凄まじいのう」
九重の言う通り、何の予兆も無しに一誠達を包み込む霧の使い方の巧みさ、京都駅周辺にも同様の疑似フィールドを創り出す技術は驚嘆するものだ
ふいに一誠の携帯の着信音が鳴る
「もしもし、木場か？今何処だ？この奇妙な空間に転移してるんだよな？」
『うん。こちらは京都御所。ロスヴァイセさんと匙くんも一緒だよ。そちらは？』
「九重とダイアンと一緒で、京都駅の地下ホームだ。ちょっと待て、今地図を出す」

一誠は九重を肩から下ろし、眷属全員に渡された地図を懐(ふところ)から出してホームの床に広げる
「このフィールド、まさか広大か？丁度この二条城中心にした地図が範囲じゃないか？」
『そうだね。二条城を中心に京都の町を広大に再現しているんだと思う。ゲームのフィールドでもこのぐらい広いのがあるから不思議じゃないけど、やはりレーティングゲームのフィールド空間を徹底的に研究しているようだ』
「木場、合流は二条城で良いか？」
『うん、了解。アーシアさん達への連絡はそちらが取るかい？彼女達もこちらに着いていると思うからね。僕達は英雄の方々から招待されたようだから』
「こちらからかけてみる。そちらは外の先生達に連絡を取ってくれ。ったく、唐突なご招待だぜ」
祐斗との連絡を終え、アーシア達とも連絡が取れた
教会トリオが仲良く集まっていたようで、アーシアの傍にゼノヴィアとイリナがいるので安心出来た
そちらにも二条城での合流を伝えた後、もう一度祐斗から連絡が届く
外のアザゼル達とは連絡が取れなかったらしく、一誠もかけてみたが繋がらなかった
どうやら携帯などの連絡手段が通じるのは疑似フィールド内にいる者に対してのみ

で、外部との連絡は取れないようだ
これ以上考えても仕方無いので、まずは皆との合流を目指す
昼間の観光帰りはホテルへ帰る手段として、二条城近くの地下鉄から電車に乗って京都駅まで帰ってきた
線路沿いに進んでいけば地下から二条城前の地下鉄駅まで行ける
移動の都合が整ったところで一誠は籠手を出現させ、禁手（バランス・ブレイカー）のカウントを始める
ダイアンも魔力を高めて魔人態（まじんたい）――――２本の角を生やし、漆黒の体躯に軽鎧（ライト・アーマー）を着込んだ悪魔の様な姿と化した
『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ）　Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン）　Ｂａｌａｎｃｅ（バランス）　Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!!!!!!!!』
一誠が赤い閃光に包まれ、オーラが鎧の形に形成される
それを見ていた九重が感心するように言う
「うむ。昼にも見たが天龍の鎧は赤く美しいな。これが伝説の龍なのだな」
「九重、俺がお前のお袋さんを何とか救うからさ。俺の傍を離れちゃダメだぞ？九重の事は俺が守るからさ」
「う、うむ！よきに計らえじゃ！」
一誠の一言を聞いて九重は顔を真っ赤にし、そのやり取りを見ていたダイアンが肘で一誠の腹を小突く

「一誠～♪いつからロリで始まってコンで終わるアレになったんだＹＯ～？」
「な……っ、ダイアン！お前まで新と同じ事を……っ！」
「一誠は巨乳より幼女を選んだのＫＡ？あまりＣｈｉｌｄ過ぎるのは止めておけＹＯ？ロリコンは犯罪だからＮＡ☆」
「ロリコンじゃねぇって言ってんだろ!?俺は今も昔も巨乳派なんだよっ！」
「巨乳派なＲＡ、１人ぐらい俺にも紹介してくれＹＯ。さっき会ったあのＣｕｔｅな金髪ＧｉｒｌとかＳＡ」
「金髪ガール……？――――っ、アーシアの事か!?ダメだダメだ！うちのアーシアちゃんは渡しません！親友でもそれだけは許さん！」
一誠とダイアンがワイワイ言い合う中、九重はボソリと「……私だって母上みたくボインボインになる筈じゃ……」と呟いていた
その時、一誠達に敵意を送る誰かの気配を感じる
ホームの先に視線を送ると、英雄派の制服を着た男性が歩みを進めてきた
男は目と鼻の位置で足を止め、笑みを見せる
「こんばんは、赤龍帝殿。俺の事は覚えてくれているかな？」
「一誠、あの男を知ってるのＫＡ？」
「……いや、覚えは無いな。若干、記憶が……悪いな」

一誠の答えに男は苦笑する
「まあ、そうだろう。あんたにとってみれば俺なんて記憶にも残らない程の雑魚なんだろうさ。――けどな、あの時に得た力によって、俺はあんたと戦えるようになった」
そう言った直後、男の影が意志を持ったようにウネウネと動き出す
それを見て一誠はふと思い出した
黒いコートを着て影を自在に操り、他の影から攻撃を転移させた神器（セイクリッド・ギア）所有者を……
「思い出した。俺の町を襲撃してきた影使いの神器（セイクリッド・ギア）所有者か！」
一誠の言葉に影使いの男は含み笑いを見せる
「ご名答。俺はあの時、あんた達にボコボコにされちまった。でも、今は違う。あんた達にやられた悔しさ、怖さ、自分への不甲斐なさが俺を次の領域に至らせてくれた。見せてやるよ。本当の影の使い方を――」
底知れない重圧を感じ、男の周囲にある柱や自動販売機などの影が不気味に動き出した
そして男は低い声音で一言呟（つぶや）く
「――禁手化（バランス・ブレイク）」
ズズズズズッ……

男から放たれるプレッシャーが増し、周囲の影が男を包み込んでいく
徐々に影が形を成していき、鎧のような物が形成される
それはまるで一誠の禁手（バランス・ブレイカー）と同じ……影で作った全身鎧（プレート・アーマー）だった
「――自分のような禁手（バランス・ブレイカー）だ。そうは思ったのかな？」
一誠の心を見透かしたように、影使いの男は愉快そうに呟く
「そう、あんた達にやられた時、俺はより強い防御のイメージを浮かべた。あんたみたいな鎧が欲しいと感じたよ。それだけ赤龍帝の攻撃力は恐ろしくて力強くて感動的だった。――『闇夜の大盾（ナイト・リフレクション）』の禁手（バランス・ブレイカー）状態、『闇夜の獣皮（ナイト・リフレクション・デス・クロス）』。さあ、赤龍帝、あの時の反撃をさせてもらうぜ？」
影の鎧は生きているように各部位が蠢（うごめ）いており、影に覆われた顔は眼光を鋭く一誠達に向けていた
一見すれば影のモンスターである
一誠とダイアンは揃って攻撃態勢を取った
「さてと……アーシアがいないからプロモーションは出来ない。ったく、作戦開始早々ツイてないと言うか……」
「一誠、ビビってんのKA（か）？」
「いや、それは大丈夫。こちとら強敵と戦い過ぎて殆ど緊張しなくなってきてるからな。

これも良い修行だ。――プロモーション無しでやってみる！」
「ＯＫ！それでこそ一誠だＺＥ！」
一誠は拳を握り、背中のブーストを噴かして影使いに突貫していく
ダイアンもエレキギターの仕込み刀を抜いて、一誠に続くように飛び出す
一誠は猛スピードの拳打、ダイアンは突きを繰り出すが――２人の攻撃が相手の体を通り過ぎる……
男は煙の様に霧散していき、当たった手応えも全く無い
何事も無かったかの如く佇む影使い
一誠は直ぐ様振り返り、ダッシュして男の背後から跳び蹴りを食らわせようとするが
――これも相手の体を通り過ぎただけで終わってしまう
元の位置に戻ってきた一誠は改めて体勢を取り直した
「この影の鎧に直接攻撃はおろか、どんな攻撃も無駄だ」
男は嘲笑した口調でそう言ってくる
直接攻撃が無意味だと理解しても逃げる訳にはいかない
一誠は手元から小規模のドラゴンショットを乱れ撃ちで男に放つが――ドラゴンショットは男の体の中に消えていった
まるで吸い込まれたかのように……

「――――っ！しまった！こいつの元々の能力は！ダイアン！」
直ぐに予感した一誠はダイアンに呼び掛けるが、ホーム内の物陰からドラゴンショットの乱れ撃ちが転移され、一誠とダイアンに襲い掛かってくる
呼び掛けに反応したダイアンは仕込み刀でドラゴンショットを切り裂き、一誠は九重を脇に抱えて、向かってくるドラゴンショットを避けたり蹴飛ばしてやり過ごす
「くそっ！こっちの能力も相変わらずか！」
「一誠！気を付けＲＯ！」
ザワザワザワ……ッ！
更にホーム内の影が意志を持ったように一誠の方に向かっていった
鋭い刃と化した影が一誠を襲おうとした時、ダイアンがオーラを高めて居合いの構えを取る
「『牙流転生』ッ！」
ダイアンが力強く抜刀した直後、仕込み刀から飛び出した幾重もの鋭い魔力の刃が影を切り裂いていく
しかし、数が多過ぎるので全てを切り払う事は出来ず、影の１つが一誠の左足に巻きつき縛ろうとしていた
槍の様に鋭く形成された影も大量に迫ってくる

「まだまだ！」
一誠は籠手からアスカロンの刃を出現させて足を縛る影を切り払い、後方に飛び退いて体勢を立て直す
ダイアンも襲い掛かってくる影を切りながら飛び退き、一誠と並び立つ
「……こいつは思ったよりＥａｓｙじゃないＮＡ」
「厄介だな、テクニックタイプってところか。俺が最も苦手なタイプだ……」
「ハハハハ！やるなぁ。さすが赤龍帝。そっちの闇人もなかなかの腕前だ。けど、そちらの攻撃もこちらに効かない。持久戦になれば俺の勝ちだ！」
確かにこのまま消耗戦を続けていけば、いずれ一誠の鎧は解除されてしまう
魔法の類が使えない２人にとって相性最悪の相手だ
「えいっ」
ボオッ！
一誠の脇に抱えられていた九重が手を前に突き出し、男に小さな火の球を放つ
影使いの男は避ける素振りを見せずに火の球を手で掴んで握り潰した
「これは小さな狐の姫様。狐火ですかな？この程度の熱量では、俺には無駄ですぞ？熱さが足りない」
「お、おのれ！」

影使いの男は嘲笑い、九重は悔しそうに歯噛みする
……ここで一誠がある事に気付いた
――――〝熱さが足りない〟――――
それはつまり、影の鎧を装着していても〝熱さ〟は感じると言う事だろう……
何となく攻め手を見つけた一誠はダイアンにコッソリ話し掛ける
「ダイアン、炎系の技ってあるか？」
「ある事はあるＺＥ。何か良い秘策があるのＫＡ？」
訊いてくるダイアンに一誠は耳打ちし、攻め手を教えられたダイアンは親指を立てる
一誠は背中からドラゴンの翼を生やして九重を包み込んだ
「ドライグ、九重を翼で何とか頼む」
『それは良いが。相棒、どうするつもりだ？』
一誠は大きく息を吸って空気を溜め込み、腹の中で小さな火種を作り出した
『Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ

ダイアンが仕込み刀を鞘であるエレキギターに収め、一誠は腹に生まれた大火力の炎を口から一気に噴き出した

ボオオオオオオオオオオオオオオッ！

大質量の炎がホーム内を包み込み、更にダイアンもエレキギターの音色を響かせて魔力を高める

「行くＺＥ！『Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｓｏｕｌ』！！！

直接攻撃は受け流す事が出来ても、炎の高熱までは受け流せない……
一誠は『赤龍帝の鎧（ブースティッド・ギア・スケイルメイル）』――――ドラゴンの鎧を纏っているので熱に強く、ダイアンも結界を張っていたのでノーダメージ
「……龍の炎……」
ドラゴンの翼に包まれている九重がボソリと呟いていた

プスプスと煙を上げる地下ホーム、至る所が黒焦げになっていた
影使いの男は煙を上げて倒れ伏しており、既に影の鎧は解除されている
全身にかなりの火傷を負っていた
まともに戦う事も出来ないだろう……
「……強い。禁手（バランス・ブレイカー）になっても……天龍には届かないと言うのか……」
影使いの男が体を震わせながら立とうとする
「まだやるのか？それ以上やったらあんた死ぬぞ！」
一誠の忠告を聞き入れずに男は何度も転びながら立ち上がろうとした
「……死んでも良い。あいつの……そ、曹操の下（もと）で死ぬのなら本望だ……」

その叫びは心の底からの物だった
「あんたは曹操に洗脳されていないのか？」
「ああ、そうだよ……。俺は俺の意志で曹操に付き従っている……。何故かって？くくくく……」
男が苦しそうに息を上げながら話し始める
口の中も熱で痛んでいるにもかかわらず、男は話した
「……神器（セイクリッド・ギア）を得た者の悲劇を知らない訳じゃないだろう？……神器（セイクリッド・ギア）を持って生まれた者は誰しもその力によって良い人生を送れた訳じゃない……。俺のように影を自在に動かす子供が身内にいたらどうなると思う……？気味悪がられ、迫害されるに決まってるだろう。俺はこの力のせいでまともな生き方が出来なかったよ。……でもな、この力を素晴らしいと言ってくれた男がいた」
「それが曹操って奴（か）KA」
「この力を持って生まれた俺を才能に溢れた貴重な存在だと言ってくれた……。……英雄になれると言ってくれた……。今までの人生を全て薙ぎ払うかのような言葉を貰ったらどうなると思う……？――――そいつの為に生きたいと思っちまっても仕方無いじゃないか……ッ」
絞り出すように男はそう独白した

そこまで曹操を慕っていても、曹操はテロリスト

今も九重の母親――八坂を拉致して〝実験〟とやらを行おうとしている

「利用されているだけかもしれないんだぞ？」

「それの何処が悪い？奴は、曹操は！俺の生き方を、力の使い所を教えてくれたんだぞ……？それだけで充分じゃないか……ッ！それだけで俺は生きられるんだ……ッ！クソのような人生がようやっと実を得たんだぞ……ッ！それの何処が悪いってんだよおおおおっ！赤龍帝ッ！」

ただ黙って聞く一誠達に男は涙を流し、思いの丈を吐き出した

「……クソのような扱いを受けて、クソみたいな生き方を送ってきた俺達神器所有者にとって、あいつは光だった……ッ！俺の力が、悪魔を、天使を、神々を倒す術に繋がるんだぞ……ッ！こんな凄い事が他にあるってのか……ッ!?それにな……悪魔も堕天使もドラゴンも元々人間の敵だ……ッ！常識だろうが！そしてあんたは――悪魔でドラゴンだ！人間にとって脅威でしかないッ！そこにいる奴に至っては闇人だッ！人間どころか――悪魔や堕天使にまで牙を向けているバケモノッ！そんな奴と仲良しごっこなんかしやがって……ッ！結局、お前ら皆――人間の敵なんだよおおおおっ！」

〝脅威〟……確かに一誠もダイアンも人間から見れば恐ろしい存在だろう

曹操は神器（セイクリッドギア）によって悲劇の人生を送ってきた所有者に生きる道を与えた……
それはこの男にとっても人生の転機だったのかもしれない……
男は足をガクガクと震わせながらも立ち上がり、一誠達の方にゆっくりと歩みを進めてくる
敵意も消えていなかった
「俺達人間を舐めるなよ……ッ！悪魔……ッ！闇人（やみびと）……ッ！」
侮蔑する叫びを上げて少しずつ近付いてくる
一誠とダイアンは拳を握り締め、同時に歩みを進めた
２人揃って男の顔面にパンチを繰り出す
「そうだな。俺は悪魔で――――」
「俺は闇人（やみびと）ＤＡ（だ）」
ゴウッ！
一誠とダイアンの一撃を食らった男は後方に大きく吹き飛び、ホームの柱に背中を強く打ち付ける
そのまま気を失い、その場に突っ伏した
倒れる男に一誠は呟いた
「あんたのやってる事で泣く奴がいる。どんな理由でも俺はそれを殴り飛ばすだけだ」

「俺も同じＳＡ。一誠を――――ダチを傷付けるような奴は絶対に許さなＩ」
男を一瞥した後、２人は暗がりの線路の先に視線を向けた
その先を進めば二条城前に出られる
「九重、行くぞ」
「うむ！」
一誠は九重を背中に乗せ、ドラゴンの翼を広げて線路の先へ飛び出した
ダイアンも走って一誠の後を追っていく

「ふうっ……。久し振りによう話したわぁ。ほんまおおきに」
「いや、礼には及ばねぇよ」
一方、英雄派のアジトらしき場所の牢屋に入れられている新と八坂は談笑で盛り上がっていた
あの後も京都の名所について語ったり、修学旅行の事を話したりしていた
次第に八坂は新との距離を詰め、遂にはその手を握っていた
「八坂姫？」

「そんな仰々しい呼び方はせんでええんよ？……八坂って呼んでくれて構わんえ？」
「じゃ、じゃあ……八坂」
「……っ。やっぱええわぁ。お主のような強くて優しい男にそう呼ばれると……なんや不思議と身体が火照ってまう……」
八坂は滑らせる様に自らの手を新の手→肩→頬に持っていき、身体も新の方に向ける
先程まで九尾の御大将の顔をしていた八坂姫――今ではすっかり女の顔になっている
「……なあ、闇皇殿……。ほんまにわらわを助けてくれるんかえ……？お主も捕まってるこの状況で……」
「あぁ。腕を取られようが足を取られようが、必ず八坂を助ける。勿論、九重も、この京都も。英雄派の好きにはさせねぇよ」
「……じゃあ、これは約束の証やねぇ……」
チュ……ッ
突然の不意打ちキス、八坂の柔らかい唇が新の唇と重なっていた
一瞬呆然と止まってしまった新は唇が離された途端、目をパチクリさせる
「……や、八坂……ッ？」
「ふふっ、可愛ええ顔やのう」

「……参ったぜ。そんな事されたら、余計に火い点いちまうじゃねぇか」
新は照れて頬を掻き、八坂は美麗な微笑みを見せる
そんなやり取りの直後、牢屋の扉が開かれて誰かが入ってきた
――曹操とジャンヌだった
「おや、お取り込み中だったのかな？」
「もうっ、アーくんったら。いつの間に九尾のお姫様とイチャイチャしてたの？そう言う事なら混ぜて欲しかったのに」
「空気読めない奴らが来たか……。で、何の用だ？」
「そうカリカリしないでくれ。キミのお友達が二条城の前に到着したんだ。――そろそろ開戦だから、連れていこうとね」
曹操の言葉で理解出来た
一誠達が来たんだと……
いよいよ……二条城を舞台にした英雄派との決戦が始まる……

「神風、グレモリー眷属が二条城に着いたようだ」

「キヒヒッ、ようやく来たね～♪お祭りパーティの役者が全員揃ったよ♪グレモリー眷属も英雄派も、ボク達が纏めてぶっ潰してやろうよぉ」

「僕が倒した刺客は本丸御殿（ほんまるごてん）で曹操が待っていると倒れる間際に言っていたよ」

祐斗が走りながらそう言う

一誠達は二条城の敷地内を進み、二の丸庭園を抜けて本丸御殿に続く『櫓門（やぐらもん）』を潜（くぐ）った

辿り着いたのは古い日本家屋が建ち並ぶ場所

英雄派の気配を探る一誠達に声が投げ掛けられる

「禁手（バランス・ブレイカー）　使いの刺客を倒したか。俺達の中で下位から中堅の使い手でも、禁手（バランス・ブレイカー）使いには変わりない。それでも倒してしまうキミ達はまさに驚異的だ」

庭園に曹操の姿が見え、建物の陰からも英雄派の構成員が姿を見せる

勿論、そこには新もいた……

「――――っ！新！無事か!?」

「よう、一誠。それなりの歓迎は受けたが、何とか無事だ」

「はーい、お姉さんから離れちゃダメよ?」
ジャンヌが新を胸元に引き寄せてギュッと抱き締める
その様子を見たゼノヴィアとイリナ、ロスヴァイセからジト目の視線が注がれチクチクと新を責める
「母上!母上!ご無事でしたか!」
九重の叫び声、九重の視線の先に抵抗出来ないよう手を封じられた八坂が佇(たたず)んでいた
「九重!九重!」
「母上ぇぇぇぇっ!」
九重が涙を流しながら八坂に駆け寄ろうとする
その時、新の視線の先———遥か後方の空中に人影らしき物がいて、キラリと光る何かを向けていた
新はそれに気付いて咄嗟に九重に向かって叫んだ
「待て!九重っ、止まれ!止まるんだッ!」
ドオンッ!
闇夜の世界で映える二条城に1発の銃声が鳴り響く……
突然の銃声に一誠達どころか、英雄派すら呆気に取られる
駆け寄ろうとしていた九重の足が止まり、八坂の体が静かに後ろへ倒れ込んだ……

ドサッ……と力が尽きた様に倒れる八坂
彼女の胸には1つの弾痕が刻まれていた……
「……母上？母上……母上ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
無情の銃声が親子の再会を壊し、いたいけな少女に悲鳴を上げさせた……

大混戦！グレモリーＶＳ英雄派ＶＳ神風一派

「嘘、だろ……？」
一誠が声を震わせてそう呟く
助けに来て早々、八坂が撃たれ……九重が泣き叫びながら母親の体を揺する
悲痛な叫びを上げて泣きじゃくる娘
一誠達は言葉を失い、新は顔を引きつらせた後に憤慨する
「曹操ォォォオオオオッ！」
怒りの咆哮を曹操に解き放ち、激昂したまま問い詰めた
「テメェッ！いきなり殺るとはどういうつもりだ!?これがテメェらの言ってた〝実験〟とやらか!?ふざけんなァッ！」
英雄派の連中までもが硬直している中、曹操が口を開いた
「……違う。こんな事、俺達の予定には無かった。俺達じゃないとすれば――――奴らか」
曹操が銃声のした方角を見上げる
先程まで空を漂っていた人影が闇夜の世界に降り立つ
数は５人……その者達は――――神風一派

「キヒヒッ♪こんばんわ～、グレモリー眷属と英雄派の皆さ～ん♪」
一派のリーダー格――『ビショップ』神風がわざとらしい笑みを浮かべて挨拶してくる
彼の周りには渡月橋で対峙した闇人（やみびと）のアドラス、メタル、ガーラントの他、『ポーン』の称号を持つ闇人（やみびと）――バリー・デスペラードがいた
八坂を銃撃した首謀者の登場に新も一誠達も怒りの色を濃くする
「どう？どう？どう～？驚いちゃったぁ？突然の九尾のお姫様銃・撃ッ！グレモリー眷属は予想通りの反応だね～♪助ける相手を殺されてぇ、激おこプンプン丸ですか～？キャハハハハハハッ！」
「キミが噂に聞く闇人（やみびと）の『ビショップ』とやらか。……噂以上の外道ぶりだな。せっかく我々が捕まえてきた九尾の御大将を殺してしまうとは」
曹操の言葉に神風はベロリと舌を出して嘲笑う
「褒めてくれてどうもありがと～♪でも、残念～。殺したんじゃなくてぇ、君達の実験とやらに拍車を掛けてやろうと思ってお手伝いをしたの」
〝実験に拍車を掛ける〟
意味深で不気味な言葉に全員が目を細めた
その直後、銃撃によって倒れた八坂に異変が起きる……ッ

「う……うう……っ！」
「……母上？母上……！お怪我は……っ、お怪我はありませんか!?」
「く、九重……っ！離れよ……っ！離れるのじゃ……っ！はや、く……っ！」
八坂の体が大きく脈動を始め、八坂は苦しそうに呻きながら九重に離れるよう警告する
九重は首を横に振って拒否するが……八坂はやむを得ないとばかりに九重を突き飛ばした
尻餅をつく九重
八坂の体から邪悪で禍々(まがまが)しいオーラが滲み出てきた
「キヒヒッ♪突然だけどグレモリー眷属と英雄派の皆さん。ブラックウィドウって知ってるかなぁ？」
〝ブラックウィドウ〟……聞き慣れない単語に訝しげな顔付きとなり、神風が得意気に説明し始める
その手にはカサカサと蠢(うごめ)く蜘蛛がいた……
不気味な漆黒の体が赤い砂時計模様を映えさせている
「ブラックウィドウってのは黒後家蜘蛛(くろごけぐも)の英名さ。強力な神経毒を持ってる上に、こいつのメスは交尾した後でオスを喰らうんだよ。交尾した相手のオスを自ら喰らう残虐

性から『黒衣の未亡人』と呼ばれているの。酷いよね～♪交尾した相手を喰うなんて。だ・け・ど♪ボクはそこに目をつけてもっともっと恐ろしい物に改良しちゃいました～♪バリーがさっき九尾のお姫様に撃ち込んだのはぁ――――それを弾丸に変えた物でぇす♪」

神風の言葉を聞いて直ぐ様八坂に視線を移す面々

八坂の胸にブラックウィドウと同じ赤い砂時計模様が浮き上がってきた……

「キヒヒッ！ブラックウィドウは寄生した相手の潜在能力を極限まで引き出して暴走させるのさッ！命が尽きるまでねぇっ！キャハハハハハッ！まさにオスを無慈悲に喰らう『黒衣の未亡人』らしい作用でしょ～!?」

「何だとッ!?」

仰天してる間に八坂の様子がどんどん危うくなっていき、終(しま)いには絶叫を上げた……

「う……うぅぅ、うあああああああっ！」

八坂の体から莫大な黒いオーラが放出され、着ていた着物が全て弾け飛ぶ

ドス黒いオーラが八坂を覆い隠し、徐々に姿を変貌させていく

９つの尻尾が膨れ上がり、大きさも増していく

夜空の下に現れたのは――――狐の上半身と９つの尻尾を持った巨大な蜘蛛の怪物だった……

デカさは１０メートル程だが、９つの尻尾がある分、より大きく見える
狐の瞳は感情を灯しておらず、下半身を担当する蜘蛛の眼は妖しく輝いていた
想像を絶する鬼畜な所業によって生み出された怪物……
絶句する新達を他所に神風は哄笑を上げて言う
「キャハハハハハハッ！どうですか、英雄派の皆さ～ん！君達の実験の目的も調査済みさ！この京都は存在自体が強力な気脈で包まれた大規模な術式発生装置！各名所のパワースポットが霊力、妖力、魔力に富んでいて、都市その物が巨大な『力』になってる！だから、色んな異形や妖怪が集まってくる訳だね～！疑似空間にもかかわらず、気脈のパワーを流し込む辺りは流石（さすが）だよ！そして、九尾の狐は妖怪の中でも最高クラス！京都と九尾は切っても切れない関係だからね♪ここならではの実験なんでしょ～？」
神風の問いに曹操は息を吐いて〝実験の目的〟を吐露し始めた
「その通りだよ。――――都市の力と九尾の狐を使い、この空間にグレートレッドを呼び寄せる。本来なら複数の龍王を使った方が呼び寄せやすいんだが、龍王を数匹拉致するのは神仏でも難儀するレベルだ。――――都市と九尾の力で代用する、それが今回の実験の目的さ」
たった今明らかになった英雄派の目的……
〝拉致した八坂の力と京都の力を使ってグレートレッドを呼び寄せる〟

スケールのデカさに新達は言葉を失うばかりだった
英雄派の行動を調べていたらしい神風は愉快そうに笑う
「キヒヒッ。グレートレッドって確か次元の狭間を泳ぐだけで、実害は無いんだよねぇ？そんな奴を呼び寄せてどうするのかな～？」
「ああ、あれは基本的に無害なドラゴンだ。――だが、俺達のボスにとっては邪魔な存在らしい。故郷に帰りたいのに困っているそうだ」
ボスとはオーフィスの事だろう
新と一誠の脳裏にゴスロリ少女姿のオーフィスが思い出される
「……それでグレートレッドを呼び寄せて殺すのか？」
一誠の問いに曹操は首を捻る
「いや、流石にそれはどうかな。とりあえず、捕らえる事が出来てから考えようと思っているだけさ。未だ生態が不明な事だらけだ。調査するだけでも大きな収穫を得るとは思わないか？例えば『龍喰者』がどれぐらいの影響をあの赤龍神帝に及ぼすのかどうか、とか。まあ、どちらにしろ１つの実験だ。強大な物を呼べるかどうかのね」
――ドラゴンイーター――
また初めて聞く単語に新と一誠は訝しくなり、今度は曹操が神風に問う
「それで、俺達の実験を利用しようとしてる闇人の『ビショップ』くん。キミ達の目的も

聞かせてくれないか？――――と言っても、概ね察しはついているけど」
「キヒヒッ♪さっすが英雄派のリーダー、君が思ってる通りだよ。暴走させた九尾の力を利用して――――『初代キング』を復活させる。封印の楔は全て破壊したから、後はここで超絶バトルを開始して『力』の波動を辺り一面にばら蒔くだけ。早い話、ここでグレモリー眷属も英雄派もブッ殺しちゃおうってわけ！キャハハハハハッ！」
神風が両腕を広げて下卑た哄笑を上げる
新と一誠は怒りに震えた
「お前らがあのデカいドラゴンを捕らえたら、ロクでもない事になりそうなのは確かだな。それに――――『初代キング』の復活なんてさせるかよ。九尾の御大将を返してもらうッ！親子の再会を踏みにじりやがって！」
「ああ、絶対に許さねぇぞッ！」
２人の台詞の後にゼノヴィアが剣を構える
鞘の各部位がスライドして変形を始めた
スライドした部分から大質量の聖なるオーラが激しい音を立てて噴出し始める
更に刀身をオーラが覆い尽くし、極太のオーラの刃と化していく
新しいデュランダルからビリビリと力強い波動が走る
「新とイッセーの言う通りだ。貴様達が何をしようとしているのかは底まで見えない。

だが、貴様達の思想は私達や私達の周囲に危険を及ぼす。――ここで屠(ほふ)るのが適切だ」

ゼノヴィアの宣戦布告に祐斗が頷く

「意見としてはゼノヴィアに同意だね」

「同じく！」

イリナも応じて光の剣を作り出し、匙が嘆息しながら言う

「グレモリー眷属に関わると死線ばかりだな……。ま、学園の皆とダチの為か――」

匙の腕、足、肩に黒い蛇が複数出現して体を這い出した

全身に黒い蛇を纏った匙の足下から黒い大蛇も出現する

大蛇は匙の傍(かたわ)らに位置すると黒い炎を全身から迸(ほとばし)らせてとぐろを巻く

匙の左目が赤くなり、蛇の如き目になっていった

「……ヴリトラ、悪いが力を貸してくれ。兵藤がフォローしてくれるそうだからよ、今日は暴れられそうだぜ？」

そう呟く匙の周囲にも黒い炎が巻き起こり、大蛇が低い声音で喋り始めた

『我が分身よ。獲物はどれだ？あの聖槍(せいそう)か？それとも狐と蜘蛛が混じった化け物か？どれでも良いぞ。我は久方ぶりの現世(うつしよ)で心地よいのだよ。どうせなら、眼前の者共を全て我が黒き炎で燃やし尽くすのも良かろうて』

言葉を話せる程に意識が復活した龍王の一角ヴリトラ
ヴリトラは相手を捕らえ、動きを封じる力を得意としている
とりあえず暴走させられた八坂を捕らえて欲しいと一誠が言おうとした瞬間――
ズォォオオオオオオッ！
ゼノヴィアが天高く掲げるデュランダルがオーラを大きく噴出させる
極太の上に天を突こうかとばかりに膨れ上がった聖なるオーラの刀身が誕生していた
「――初手だ。食らっておけッ！」
「――ッ!?ちょっ、待てゼノヴィア！俺まで巻き込む――」
新の叫びは届かず、無情にもゼノヴィアは巨大な聖なるオーラの剣を英雄派と神風一派の方に振り下ろした
新デュランダルの一撃が本丸御殿の家屋を丸ごと吹き飛ばし、勢いは止まらず遥か前方までオーラの波動が大波となって建物、公共物、風景を飲み込んでいった
攻撃が終わった後、眼前は悉く消滅し、城外の建物や道路も跡形も無く崩壊していた
ゼノヴィアは「ふー」と肩で息をして額の汗を手で拭う
オーバーキルの攻撃に一誠は興奮気味で言う
「おい、ゼノヴィア！1発めから飛ばし過ぎだろ！」

すると、ゼノヴィアはＶサインを作りながら返した
「開幕の１発は必要だ」
「ロキの時もいきなりだったよね!?」
「安心しろ。これでもまだ威力を調整した方だ。その気になればこの周辺を丸ごと薙ぎ払えてしまうからな。私としては新の本気の攻撃やイッセーの本気のドラゴンショットを目指しているんだが。なかなか難しい。うん、２人のパワータイプの戦い方は私の理想だ」
「うん、じゃない！俺と新はここまで破壊魔じゃないぞ！ってか、新まで巻き込まれちまったぞ!?どうすんだよ！」
１番肝心な事にゼノヴィアは「あっ」と今思い出したかの如く口を開いた
その時、建造物跡の地面から腕が突き出てくると、一気に土が盛り上がって下から新と複数の英雄派メンバーが現れる
薄い霧が覆っており、どうやらそのお陰で無傷で済んだようだ
最初に地面から腕を突き出してきた巨体の男が首をコキコキ鳴らし、後方で曹操が槍で肩をトントンと叩く
「いやー、良いね♪と言うか、闇皇(やみおう)も苦労人だね」
「……マジで危なかった。ってか、ゼノヴィア！少しは考えろよ！今の俺は力を封じら

れているんだ！まともに食らったら死ぬぞ!?」
「うん、スマない」
「スマない、じゃねぇだろぉぉおおっ！何だよそのバカげた威力は!?」
「この新しいデュランダルは錬金術により、エクスカリバーと同化したものだ」
ゼノヴィアに続くようにイリナが説明を始める
「私が説明するわ。大雑把に言うと、デュランダルの刀身に教会が保有していたエクスカリバーを鞘の形で被せたらしいの！エクスカリバーの力でゼノヴィア使用時のデュランダルの攻撃的な部分を外へ漏らさず覆う。そして覆っているエクスカリバーとデュランダルを同時に高める事で2つの聖剣の力は相乗効果をもたらして――――凶悪な破壊力を生み出すのよ！」
「……つまり、デュランダルとエクスカリバーの合体聖剣って事か」
「その通り。――――エクス・デュランダル。この聖剣をそう名付けよう。ま、初手で倒せる程だったら苦労も無いな」
ゼノヴィアがデュランダルを翳しながらそう言って視線を斜めに移す
先程の一撃を防いだ英雄派と同じく、神風一派も生きていた……
神風は既に魔人態（まじんたい）の合成獣（キメラ）姿となっている
ただ1つ違うのは――――神風の左手に籠手が装着されていた……

ドス黒く禍々しいフォルムの甲に血走った大きな目玉が浮かんでいる
他の闇人(やみびと)達も無傷だった
「キヒヒッ♪最高だよ、グレモリー眷属ぅ♪やっぱそうじゃなきゃ潰し甲斐が無いよねぇ♪英雄派のリーダーさん、君から見てどうすかぁ？」
「彼らはもう上級悪魔の中堅――――いや、トップクラスの上級悪魔の眷属悪魔と比べても遜色が無い。魔王の妹君は本当に良い眷属を持った。レーティングゲームに本格参戦すれば短期間で２桁台――――十数年以内にトップランカー入りかな？どちらにしても、末恐ろしい。シャルバ・ベルゼブブはよくこんな連中をバカにしたものだね。あいつ、本当にアホだったんだな」
曹操の言葉にジークフリートが苦笑する
「古い尊厳にこだわり過ぎて下から来る者が見えなかった、と言った所でしょ。だからヴァーリにも見放され、旧魔王派は瓦解したわけさ。――――さて、どうするの？僕、今の食らってテンションがおかしくなってるんだけど？」
「そうだな。とりあえず、実験をスタートしよう。暴走させられてるから上手く行くかどうか分からないけど」
曹操が槍の石突きで地面を叩くと怪物となった八坂の足下が輝き出した
「九尾の狐にパワースポットの力を注ぎ、グレートレッドを呼び出す準備に取り掛かる。

――――ゲオルク！」

「了解」

曹操の一言に制服の上からローブを羽織った魔法使い風の青年ゲオルクが手を突き出した

ゲオルクの周囲に各種様々な紋様の魔方陣が縦横無尽に出現し、羅列された数字や魔術文字が物凄い勢いで回転する

「……魔方陣から察するにざっと見ただけでも北欧式、悪魔式、堕天使式、黒魔術、白魔術、精霊魔術……なかなか豊富に術式が使えるようですね……」

ロスヴァイセが目を細めながら呟く

九尾の足下に巨大な魔方陣が展開する

九尾が雄叫びを上げ、狐の双眸（そうぼう）が大きく見開いて危険な色を含み始める

全身の毛も逆立っていた

「グレートレッドを呼ぶ魔方陣と贄（にえ）の配置は良好。後はグレートレッドがこの都市のパワーに惹かれるかどうかだ。龍王と天龍が1匹ずついるのは案外幸（さいわ）いなのかもしれない。曹操、悪いが自分はここを離れられない。その魔方陣を制御しなければならないんでね。闇人（やみびと）に暴走させられてるから、思ったよりキツくてねぇ」

ゲオルクの言葉に曹操は手を振って了承する

「了解了解。さーて、どうしたものか。『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』のレオナルドと他の構成員は外の連合軍とやり合っているし。彼らがどれだけ時間を稼げるか分からない所もある。外には堕天使の総督、魔王レヴィアタンがいる上、セラフのメンバーも来ると言う情報もあった。――ジャンヌ、ヘラクレス」
「はいはい」
「おう！」
　曹操の呼び掛けに未だ新を抱き寄せているジャンヌと巨体のヘラクレスが前に出た
「彼らは英雄ジャンヌ・ダルクとヘラクレスの意志――魂を引き継いだ者達だ。ジークフリート、お前はどれとやる？」
　曹操の問いにジークフリートは抜き放った剣の切っ先を祐斗とゼノヴィアに向ける
　どうやら最初から相手を決めていたようだ
「私はここでアーくんとイチャイチャしたいんだけどねー」
「あ、新さん！またあなたは女性をたぶらかしてるのですか!?こんな状況で不潔です！」
「俺捕まってる立場なんだけど……」
　ロスヴァイセの叱咤を受けて頭（こうべ）を垂れる新
　それを見てジャンヌが顔を笑ませた
「決めた。私はあの銀髪お姉さんにしようかな。何かアーくんの事知ってそうだし」

「じゃあ俺は天使の姉ちゃんだな！」
「んで、俺は赤龍帝っと。いや……どうせなら」
パキンッ
何を思ったのか、曹操は新の首に付けられた異能を封じる装置を外した
予想だにしなかった展開にグレモリー陣営がざわつく
「……どういうつもりだ？」
「簡単だよ、闇皇。俺は赤龍帝ともキミとも戦いたい。その為には首輪を外さなくちゃダメだろ？それに――――相手は俺達だけじゃないからさ。そのまま殺られちゃったら後味悪いでしょ？」
「共通の敵がいるゆえの利害の一致、か。……良いぜ、その誘い受けてやる。死んで後悔するなよ？」
「ははっ、ＯＫ。そっちのヴリトラくんはどうする？」
曹操が匙に視線を送る
匙の炎が勢いを増すが、一誠が手で制する
「……匙、お前は九尾の御大将だ。何とか、あそこから解放してやってくれ」
「俺は怪獣対決か。……あいよ。兵藤、死ぬなよ」
「死ぬかよ、そっちも気張れ」

「これでもここに来る前、『女王（クイーン）』に一応プロモーションしてんだからさ。最初から気合は充分だッ！――――『龍王変化（ヴリトラ・プロモーション）』ッ！」

匙の体が黒い炎に包まれ、巨大に膨れ上がっていく

漆黒の炎は形を成していき、細長い東洋タイプのドラゴンへと変貌した

九尾の御大将と真っ正面から対峙し、黒い炎が魔方陣を囲んで薄暗いオーラを放ち始める

「キヒヒッ♪グレモリー眷属も英雄派もやる気満々だね～。ボク達も負けてられないや。さて、誰を選ぶ？ボクは勿論、英雄派のリーダーと赤龍帝と闇皇さ」

「オレ様は金髪と銀髪の姉ちゃんを殺るぜ！」

「では、私は天使のお嬢さんとウドの大木を」

「あっしはあの剣士３人を相手にしやす」

「俺は余った『ポーン』をいただくとするか」

アドラスがロスヴァイセとジャンヌ、メタルがイリナとヘラクレス、ガーラントが祐斗とゼノヴィアとジークフリートの所へ散開する

残されたバリーはダイアンの所へ飛ぶ

相手が決まったので一誠はアーシアに言う

「アーシア、九重を頼む」

「はい」
「九重、アーシアを頼めるか？」
「う、うむ。じゃが――――」
「ああ、分かってる。お前のお母さんは俺が――――俺達が助けるッ！」
任せろと親指を立てて応じ、背中からドラゴンの両翼を出す
曹操の眼前に降り立ち、新と並ぶ
「一誠、ムカつくが曹操の計らいで首輪を外してもらえた。存分に暴れてやろうぜ」
「それは良かった。何せ俺達の相手はボス級ばかりだ」
少しした後に神風も近くに降り立ち、不気味な哄笑を上げる
「キヒヒッ♪何だろね、このドリーム過ぎる対戦メンバーは。早くブッ殺したくてウズウズしちゃうよ♪」
「とりあえず質問良いか？――――お前のその籠手、何なんだ？」
一誠の質問に神風は口の端を吊り上げた
「これかぁい？これはボクが開発した神器（セイクリッド・ギア）だよ。今まで集めてきた神器（セイクリッド・ギア）データをベースに作り上げたのさ。――――『邪眼の闇籠手（ネメシス・ギア）』と名付けてるよ。カッコいいでしょ～？能力だって凄いよ？大抵の神器（セイクリッド・ギア）の能力ならコピー出来ちゃうんだ♪こんな風にね！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）』

籠手から無機質な音声が流れると同時に神風のオーラがグンと強くなる

それを見た新と一誠は驚愕してしまう

「まさか、俺の『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』の能力を!?」

「まあねぇ♪『魔剣創造（ソードバース）』とかもコピーしてるよ～。ま、『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』みたいな上位クラスの神滅具（ロンギヌス）はコピー出来ないし、禁手（バランス・ブレイカー）の再現も出来ないけど――それでも本家の能力より強いよ～？」

「相変わらず反則染みてるな」

新は一言発してから闇皇に変異する

「曹操、お前は見て分かる。実は強いだろ？」

「弱くはないかな。弱っちい人間だけどね」

「嘘こけ。先生とやり合った奴が弱い筈ねぇだろ」

「ハハハハ、そりゃそうか。でもあの先生はチョー強かったけど？俺もまだまだと思うよ、おっぱいドラゴンに蝙蝠皇帝」

一頻り言い合いした後、一瞬の静寂が流れる……

刹那、龍王化した匙と九尾の化け蜘蛛が咆哮と共に仕掛けた

黒い炎が九尾の周囲を完全に包囲し、炎が怪しげな揺らめきをすると九尾の全身から

オーラが放出される
苦しむ様子を見せるが、九尾の化け蜘蛛は上半身と下半身の口から凄まじい火炎を吐き出した
匙も負けじと黒い炎を吐き出し、２つの巨大な火炎が空中でぶつかり大爆発を引き起こす
『クソッ！ロキの時みたいに上手く炎の結界が使いこなせない……！』
『集中しろ、我が分身よ。我の力は高い集中力が必要となる。……だが、それだけでもあるまいよ。都市の力を得た上に暴走させられた九尾の膨大な妖力もそうだが、あの魔法使いが展開したこの魔方陣も怪しげな結界効果を発揮しているな。少々術式が複雑で厄介だ……。これが大きく邪魔をして我の炎を無効化しようとするようだが……。都市、九尾の力、神滅具（ロンギヌス）と魔術の混合に禍々しき蜘蛛か……。力を散らそうとしても都市から流れてくる力で直ぐに復調してしまう。これではこちらの方が保たぬな』
匙とヴリトラの会話が一誠の『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』を通して聞こえてくる
九尾だけでなく京都のパワースポットからの力、魔方陣、ブラックウィドウといっぺんに相手をするのは荷が重す過ぎるようだ
一誠は譲渡が必要かと訊くが、暴走の危険性がある為いらないとヴリトラに返される
大怪獣決戦が繰り広げられる中、グレモリー眷属と英雄派、神風一派は睨み合ったま

ま動かない
まず最初に動いたのは祐斗とゼノヴィア、ジークフリート、ガーラントの４人
金属音と共に火花を散らし始める
背中から亜種『龍（トウワイス）の（・）手（クリティカル）』を生やし、三刀流となったジークフリートが祐斗とゼノヴィアの剣戟を最小限の動きだけで受け止め、鋭い突きを繰り出す
そこへガーラントが割って入るように両腕を伸ばし、ジークフリートの突きを止めて振り回す
ジークフリートを放り投げた直後、口から鋭利なトゲを連続で発射
祐斗とゼノヴィアは飛んで来るトゲを全て切り払う
ゼノヴィアはデュランダルの鞘の一部に手を掛けると――――そこから柄の部分が現れて引き出す
引き出された柄から刃が生え、エクスカリバーの１本を持って二刀流に変更
２人がかりで高速の剣戟を見舞うが、ガーラントの全身は思った以上に堅牢で全くダメージを与えられない
「そんな剣戟じゃ、あっしの体は傷１つ付きやせんぜ？」
伸ばした腕を横薙ぎに払って２人を遠ざけるガーラント
そこへ笑みを浮かべたジークフリートがやって来る

「面白くなりそうだね。よし、大サービスだ！――――禁手化（バランス・ブレイク）ッ！」
ズヌッ！
ジークフリートの背中から新しく3本の銀色の腕が生えてきた
新しい腕は帯剣してあった残りの剣を抜き放つ
ジークフリートは三刀流から六刀流へと戦闘スタイルをチェンジした
その姿はまさに阿修羅の如し……
「魔剣のディルヴィングとダインスレイヴ。それに悪魔対策に光の剣もあるんだよ。これでも元教会の戦士だったからさ。これが僕の『阿修羅と魔龍の宴（カオスエッジ・アスラ・レヴィッジ）』。『龍の手（トウワイス・クリティカル）』の亜種たる神器（セイクリッド・ギア）は禁手（バランス・ブレイカー）もまた亜種だったわけだ。能力は単純だよ。――――腕の分だけ力が倍加するだけさ。技量と魔剣だけで戦える僕には充分過ぎる能力だ。さて、キミ達は何処まで戦えるかな？」
祐斗とゼノヴィアを心配している中でロスヴァイセとジャンヌ、アドラスも激戦を繰り広げていた
ロスヴァイセは北欧魔術式フルバーストを2人に放つが、ジャンヌは殆ど視認出来ない程の速度で軽々と避け、アドラスは二対の円盤から放たれる炎で打ち消していた
「くっ！なかなかやりますね……！」
「ねーねー、銀髪のお姉さんはアーくんとどう言った関係なのかなー？」

「えぇっ!?ど、どうして今そんな事を!?戦いの最中ですよ！」
「彼女じゃないなら、お姉さんが貰っても良いよね？」
「……ッ!?い、いけません！不純異性交遊は教師として許しませんっ！」
「ふふっ、真っ赤になっちゃって可愛い♪」
「てめぇら、オレ様を放っといて呑気にくっちゃべってんじゃねぇぞ！」
アドラスが円盤から炎の渦を発生させ、ロスヴァイセとジャンヌを焼き殺そうとする
ロスヴァイセは防御の魔方陣で防ぎ、ジャンヌは先程と同じ様に高速の動きで回避
不敵に笑むジャンヌが叫んだ
「――――聖剣よ！」
アドラスの足下から聖剣が幾重にも生えてくる
アドラスは全身を貫かれるが、自身の体の炎で聖剣を溶かしていく
その様子を見てジャンヌがおかしそうに笑った
「やるやる！へぇ、見くびってたな」
「ハッ！どうしたぁ？クソカス人間の攻撃はそんなもんかよ？毛ほども効かねぇぜ」
「ムッ、言ったわね。分かった。お姉さんもジーくんみたいに大サービスで見せちゃう。
――――禁手化（バランス・ブレイク）♪」
可愛く笑むジャンヌの足下から聖剣が大量に生み出され重なっていく

ジャンヌの背後に聖剣で創られた巨大なドラゴンが誕生した
これが彼女の神器（セイクリッド・ギア）――――『聖剣創造（ブレード・ブラック・スミス）』の亜種禁手（バランス・ブレイカー）――――『断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）』である
聖剣ドラゴンの登場にロスヴァイセは厳しい表情をするが、アドラスは狂喜に口の端を吊り上げていた
ドゴオンッ！ドオオンッ！
炸裂音が何度も響く合戦を繰り広げているのはイリナとヘラクレス、メタルの3人だった
イリナは光の槍を幾重にもメタルとヘラクレス目掛けて放つが、両者共に拳打でその攻撃を弾き返していた
特にヘラクレスの拳打は打ち込む度に爆発しており、まるで爆弾でも握って拳を出しているようだった
「ハッハッハーッ！良いねぇ！良い塩梅の攻撃じゃねぇかッ！」
光の槍を打ち落としたヘラクレスはメタルにも爆発の拳打を打ち込み、大きな爆発と共にメタルが爆（は）ぜる
しかし、メタルは爆煙の中から飛び上がって飛んでいるイリナにスクリューアッパーを仕掛けた

イリナは驚きながらも身を捩(よじ)ってそれを回避するが、拳の余波がイリナの制服の胸元を切り裂く

着地するメタルが感心した様子で言う

「ほう、あれを咄嗟に避けるとは。流石はミカエルに仕える天使だ。その純白の翼も美しい」

「こ、これでもミカエル様のＡ(エース)なんだから！舐めないで！」

「うんうん、素晴らしいよ。そちらのウドの大木くんもなかなかの威力だ」

「俺の神器(セイクリッド・ギア)は攻撃と同時に相手を爆破させる『巨人の悪戯(バリアント・デトネイション)』ッ！このまま爆発ショーをしても良いんだけどよォ。どいつもこいつも禁手(バランス・ブレイカー)になったら、流れ的に俺もやっとかないと後でうるさそうでな！悪いが、一気に禁手(バランス・ブレイカー)になって吹っ飛ばさせてもらうぜ！おりゃあああああッ！禁手化(バランス・ブレイク)ウゥウッ！」

ヘラクレスが叫ぶと同時にその巨体が光り輝き出す

光が腕、足、背中で肉厚の物を形成し――――無数の突起物と化した

それはまるでミサイルのように……

「これが俺の禁手(バランス・ブレイカー)ッ！『超人による悪意の波動(デトネイション・マイティ・コメット)』だァァァァァアッ！」

ヘラクレスの攻撃照準がイリナとメタルに向けられ、イリナは周りを巻き込まないようにと動いて距離を取る

一方、メタルは嬉々としてミサイルが撃ち出されるのを待っていた
「ハハハハッ！素晴らしい！無差別攻撃と来たか！久々に血が滾(たぎ)るよッ！『装甲強化(アームド・アップ)・弐式(レベルツー)』ッ！」
力強い発言と共にメタルの両足が強化され、動きが素早くなる
ヘラクレスの全身から生えたミサイルが発射態勢となって撃ち出されていく
そうはいくか！とばかりに新は剣技(クロス・バースト)、一誠は砲撃(ドラゴンショット)の構えを取る
ミサイルを少しでも撃ち落とそうとした時――
「おっと、キミ達の相手はこっちだ」
瞬時に移動してきた曹操が槍の僅かな挙動で２人の手を上に弾(はじ)く
そのせいで２人の攻撃はあらぬ方向に飛んでいってしまい、その間にもヘラクレスから撃ち出されたミサイルがイリナとメタルに襲い掛かる
ドッゴォオオオオオオオオオオオオオンッ！
無数のミサイルは地上と空中で巨大な爆破を巻き起こし、激しい爆風が辺り一帯を襲う
爆煙の中から見えてくる２つの人影……
イリナはボロボロになりながらも上手く着地していた
メタルの方は体が少し欠けているものの、致命傷には至ってなかった

「……ハハハハ、ハハハハハハハハハッ！良いぞ、良いぞぉッ！ウドの大木にしては上出来だアッ！」
狂喜に吼えるメタルが駆け出し、ヘラクレスと真っ正面から殴り合う
ヘラクレスも嬉々として受け入れ、壮絶な打撃合戦を始めた
爆発が何度も巻き起こる中、一誠はアーシアに回復の指示を送り――――イリナのもとに緑色のオーラが届く
回復出来たイリナはアーシアに「ありがとう」と親指を立てた
「……クソッタレ、どいつもこいつも禁（バランス・ブレイカー）手かよ！」
「良いだろ？　禁（バランス・ブレイカー）手のバーゲンセールってやつは。人間もこれぐらいインフレしないと超常の存在相手に戦えないんでね」
心中を見透かした様に曹操が愉快そうに笑い、槍をクルクルと回して距離を取る
一見すれば隙だらけなのだが、なかなか攻め立てる事が出来ない……
「お前も奴らみたいにここで禁（バランス・ブレイカー）手になるのか？」
一誠がそう訊くと曹操は首を横に振った
「いやいや。そこまでしなくてもキミ達は倒せる。だが、今日は充分に赤龍帝と闇皇を堪能するつもりだよ」
「……こいつはまた舐められたもんだ。でも、俺達をバカにしているようには思えない

な」

「ああ、どうやればキミ達の力を引き出して戦いを満足出来るか考えているところだ。1つ、仲間が赤龍帝を倒せるある説を唱えた。時間を早める神器（セイクリッド・ギア）で攻撃する。禁手（バランス・ブレイカー）の制限時間がどんどん早まっていき、満足に戦えないまま鎧は解除されてしまう。仲間が持つ能力にそう言う制限時間のある者に効果がある神器（セイクリッド・ギア）があるのさ。時間の経過を一気に加速させて、浪費させる事が出来る。ただ、それだけの能力だ。直接的な攻撃力も特異な効果も無い。ただただ、制限時間を操作出来るだけだ。しかし、時間制限のあるキミには決定的な打撃となる。――だが、恐らくこれでは赤龍帝を倒せない。キミは神器（セイクリッド・ギア）を深く知ろうとしている。もし、自ら禁手（バランス・ブレイカー）を解除して10秒毎に倍加していく禁手（バランス・ブレイカー）前の能力にそれを付加しようとしたら……？瞬時に倍加していく厄介な存在と化すだろうな。勿論、禁手（バランス・ブレイカー）状態で食らった攻撃が禁手（バランス・ブレイカー）前の神器（セイクリッド・ギア）にそう言う影響を及ぼすかどうか不透明だ。けれど、神器（セイクリッド・ギア）の深奥に潜る赤龍帝なら、その可能性を叶えそうでね」

「長い御託をグダグダと……。何が言いたいんだ？」

新が問うと曹操は肩を竦めて答えた

「案外、姑息な手よりもストレートな攻撃の方がキミ達を無理なく倒せるんじゃないかって話さ。――キミ達はテクニックタイプを注意深く警戒していて、そのタイプで

は逆にやりづらいんじゃないかなってね」
悉く核心めいたものを突く曹操の分析力に新と一誠は末恐ろしいものを感じた
「だが、そんな兵藤一誠にも決定的な弱点が２つある。――――龍殺しと光だ。ドラゴン、悪魔、２つの特性を有するキミは凶悪な分、自然と弱点も多くなってしまうわけだ。俺はこの弱点ってのに注目していてね。この世に無敵の存在なんていないと言う証明をしてみたいと感じてもいる。ま、この話はここまで。――――さて、やろうか」
「キヒヒッ、やっと終わったぁ？もう待ちくたびれたよぉ。他の皆も頑張ってるってのに、ボク達だけが話し込んでたらシラケちゃうからねぇ」
神風がそう言って視線を移すと、ダイアンとバリーも熾烈な激戦を繰り広げていた
ダイアンはご自慢の『牙流転生』で幾重もの剣先を飛ばし、バリーは銃撃と剣戟で全て打ち落とす
お互いが１歩も退かない勝負だ
曹操が槍の切っ先を向け、菓子を貪っていた神風が全身に凶悪な雷を迸らせる
「アーシア！『女王にプロモーションだ！』」
「はい！」
一誠はアーシアからの同意を得て『女王』となり、新も『女王』形態となる
一誠はドラゴンの翼を展開して背中のブーストを勢い良く噴出させた

拳を突き出したまま猛スピードで曹操に一撃を繰り出そうと突貫していくが、曹操は槍を器用に回しながら当たる寸前で身を軽やかに躱(かわ)した
直線的な攻撃には対応出来るようだ
新も素早く飛び出して剣で斬りかかろうとするが、神風の雷撃が3人に襲い掛かってくる
瞬時に察した新は剣戟を中断して横へ飛び、一誠と曹操も飛び退いて回避する
神風は手元に生み出した雷で大剣を創り、横薙ぎに振るう
新はそれを『戦車(ルーク)』形態の盾で受け止めるものの、力負けして吹っ飛ばされる
一誠は再びドラゴンショットを撃とうとするが曹操に手を蹴り上げられ、先程と同じ様に空振りに終わってしまう
ズンッ！
一誠の腹部に深々と突き刺さる聖槍……
一誠は「ごふっ」と腹から込み上がってきた大量の血を吐き出す
「弱くはないんだけどね。真っ正面からの戦いだとまだ隙が多いな。それに仲間を気遣い過ぎる」
「悪かったな！」
吹っ飛ばされた新が巨大に伸ばした刀身の剣を曹操目掛けて振り下ろす

曹操は咄嗟に剣戟を回避するが――――ズシュッと鈍い音を立てて曹操の左腕が宙を舞った
見てみれば、いつの間にか接近していた神風が雷の剣で曹操の左腕を切り飛ばした形になっていた……
「美味しい所を美味しいタイミングでかっさらうって良いよねぇ？」
「……やれやれ、横からの食い逃げは気に入らないかも！」
ズシュッ！
曹操がお返しとばかりに神風の右肩を聖槍で貫く
神風は空いているもう片方の手で聖槍を払い除け、お互いに距離を取った
その間に一誠に緑色のオーラが飛んできて、一誠の意識を保つ
それでも腹の傷口は塞がらず、一誠は直ぐにフェニックスの涙を腹の傷にかけた
傷がようやく塞がり、新が一誠を肩を持って立たせる
宙を舞っていた左腕をキャッチした曹操が軽く笑いながら言う
「赤龍帝。今死にかけたのが分かったかい？聖槍に貫かれて、キミは消滅しかけたんだ。案外、すんなりと逝くだろう？」
〝消滅しかけた〟……その言葉に２人の体の内側から震えが生じる
「よく覚えておくと良い。今のが聖槍だ。キミ達がどんなに強くなってもこの攻撃だけ

は克服出来ない。――――悪魔だからね。たとえヴァーリであろうとも悪魔である限り聖槍のダメージは絶対だ」

「キヒヒッ！確かに痛いねぇ……ッ！まともに食らえばボクでも危ないかな？でもさぁ、君にも弱点ってのがあるんだよね～♪どんなに強くても、聖槍を持っていても所詮は人間。生身の人間だから一撃当てれば勝てちゃうんだよ～？」

「ハハハハ、確かにその通りだ」

自嘲する様に笑う曹操が聖槍を地面に刺し、懐（ふところ）から見知った小瓶を取り出す

蓋を取り払い、中の液体を傷口に振り掛けて左腕を切断面にくっつけようとした

左腕は傷口から煙を立てながら何事も無かったかの如く元通りになる

その小瓶は――――フェニックスの涙だった……

「フェニックスの涙……？何でお前がそれを持ってるんだ!?」

「裏のルートで手に入れた。ルートを確保し、金さえ払えば手に入る物さ。フェニックス家の者はこれが俺達に回っているなんて露程（つゆ）も思ってないだろうけど」

只でさえ貴重なアイテムがテロリストの元に渡っている……

そんな事実を知ってしまった新と一誠は怒りを明らかにした

怒りに打ち震えていると……神風の籠手から邪悪なオーラが一層強く滲み出てきた

……

待ってましたとばかりに神風が哄笑を上げる

「キャハハハハハハハァッ！来たよキタよ来たよォッ！やっと来たぁ！遂に待ち望んでた展開がキタァァァァァァアッ！予想よりも早いけど、この際何でもアリアリだよねぇっ！」

ブチブチブチィッ！

哄笑を上げた途端に神風は自ら籠手で覆った左腕を引きちぎり、それを頭上に放り投げる

籠手は空中で静止して浮遊し――――血走った目玉がギョロギョロと泳ぐ

「さあさあさあっ！いよいよだよォッ！――――『初代キング』の復活だァァァァァァアッ！」

『――――っ!?』

闇夜の激戦区を見下ろす空で血走った目玉が妖しく輝き、空がドス黒いオーラに包まれていった……

『初代キング』復活！超魔身神風！

「な、何なんだ……この寒気がする程のオーラは……っ？」

幾多の死線を乗り越えてきた新でも震えを覚えるオーラは空を黒く塗り潰し、神風の左腕だった籠手から放たれる妖しい輝きが一層強くなっていく

目玉も新達や英雄派を見下ろし、睨み付ける

やがて黒いオーラが吸い込まれるかの如く籠手に集まり、1度吸い込まれたオーラが何かを形成していく……

胴体、肩、腕、足、尻尾の様に見える部位が形作られ――――首の長い頭部も出来上がる

左腕の籠手以外がオーラで形成された異形はゆっくりと地に降り立ち、闇夜の空に向けて口を開く

コォォォオオオオオオ……ホォォォオオオオオオオオオオ……ッ！

唸り声にも聞こえる呼吸音は重々しく、その場にいる者の体を強張(こわば)らせる程に禍々(まがまが)しい……

次第にオーラがハッキリとした外郭を成し、復活する『初代キング』の姿が明らかに

なっていく
　オーラが静かに晴れて現れたのは――全身が骨で構築され、ドラゴンの様な頭部を持った異形
　言うなれば人型サイズの骸骨ドラゴン……
　頭部だけではあるが、新は1度目にした事がある
　ロキと戦う前、自分の意識内にて会った『初代キング』を……
「……ッ。あの時と同じ……骸骨のドラゴン……ッ」
　闇夜の下にゆっくりと姿を見せたその異形こそ全ての闇人(やみびと)の長(おさ)であり、嘗(かつ)て悪魔、天使、堕天使の三大勢力を苦しめた欲望と邪念の化身……
『初代キング』――バジュラ・バロム
　眼光を妖しく輝かせ目覚めたバジュラ・バロムは両手の開閉を続け、更に長い頭部を傾けてゴキゴキと音を鳴らす
「オオオオオオオオ……ッ。久し振りの下界だな……。この澄みきった空気――吐き気と怒りが蘇ってくるぞ……ッ」
　全身からドス黒いオーラを滲み出させる『初代キング』は右手を自身の眼前にまで持っていき、力を込めて握る
　そして握った手が開かれた刹那――『初代キング』を中心に突風が巻き起こった

サークル状に発生した突風が新達や英雄派を煽り、建物の破片や土塊(つちくれ)を吹き飛ばす
「……ッ。何だよ、今の……？あれだけの動作で突風を引き起こしたのか!?」
「なんて圧力だ……ッ。肌がビリビリしてきやがる……！」
『初代キング』の力量に仰天する一誠と歯を噛み締める新
他のグレモリー眷属も戦慄する中、神風が『初代キング』に近付いていく
「ヤッホ～！久し振りだねぇ、『初代キング』！」
「ん？おぉ、神風か。久しいな。貴様が余(よ)をこの現世に蘇らせたようだな」
「キヒヒッ♪その通り～！感謝してよね～？ここまで来るのにだいぶ時間掛かっちゃったからさぁ。でも、やっと苦労が報われたねぇ♪……で、どうする？」
「そうだな。せっかく復活したのだから、肩慣らしに少し遊んでやるとするか」
そう言うと『初代キング』がギロリと新達と英雄派を見据える
最初の獲物は誰が良いかと品定めをしていると……ヘラクレスが歩みを進めてきた
「ヘヘッ、闇人(やみびと)のキングさんよぉ。俺が遊び相手になってやろうか？」
「ほう……。命知らずのガキがいるようだな。あまり虚勢を張らん方が身の為だぞ？勢い余って殺してしまうかもしれんからな。そこの者は下がれ」
「は、はい」
先程までヘラクレスと打撃合戦をしていたメタルは『初代キング』の指示に従い、直

ぐ様距離を取る
ヘラクレスは笑みを浮かべながら拳同士を打ち付け、『初代キング』は〝かかって来い〟と言わんばかりに指をクイクイと曲げて挑発する
「復活したばかりで悪いが、もう1回あの世に逝ってなッ!」
ヘラクレスは駆け出すと同時に拳を『初代キング』の顔面に打ち込み――――攻撃した部分を爆破する
何度も何度も拳を叩き込み、砂塵を巻き上げる程の爆発を発生させた
爆発と煙に包まれる『初代キング』……
ヘラクレスは一旦距離を取って追い討ちに禁手（バランス・ブレイカー）となり、全身からミサイルを射出した
全てのミサイルが爆煙の中にいるであろう『初代キング』に命中し、更なる大爆発を引き起こす
壮絶な攻撃を終えたヘラクレスは高らかに笑う
「ハッハッハーッ!どうよ!?いくら闇人（やみびと）のキングだろうと、ここまでやりゃあ木っ端微塵に吹き飛んでるだろ!もう少し歯応えがあんのかと思ってたのによぉ、トンだ期待外れだぜ!」
ヘラクレスは『初代キング』に罵倒を飛ばす

普通の者ならこれだけの猛攻を受ければ粉微塵になっているだろう
〝普通の者〟なら……
爆煙の中にうっすらと見えてくる異形の影……
高らかに笑っていたヘラクレスの表情が固まる
「――――英雄と名乗っているわりにはくだらん攻撃だな。ただ埃(ほこり)を巻き上げただけか」
全く効いてなかったのか、愉快そうな声音を漏らして爆煙から現れる『初代キング』……
あれだけの攻撃をまともに受けたにもかかわらず、無傷で悠然と佇んでいた……
『初代キング』は『邪眼の闇籠手(ネメシス・ギア)』の目玉を輝かせ、籠手から無機質な音声が響く
『Up(アップ) Date(デート)』
「今、貴様の神器(セイクリッド・ギア)をコピーしてやったぞ。今度はこちらの番だ」
ゴッ！
ドガガガガガガガガガガッ！
『初代キング』が右拳を地面に打ち込んだ瞬間、そこから爆撃が連鎖反応するかの如く突き進み、ヘラクレスを呑み込む
爆発の波に呑まれたヘラクレスはなす術無く宙へ放り出され、それを追って『初代キング』が飛び出す

ヘラクレスの鳩尾(みぞおち)に爆撃の拳打を突き刺し、爆発のオマケ付きで地面に叩き落とした
彗星の様に落ちたヘラクレスは血を吐いて直ぐに意識を失う……
メタルの攻撃にびくともしなかったヘラクレスをたった2発で沈めた『初代キング』
その恐ろしさにグレモリー陣営と英雄派の顔色が変わる……
「歯応えが無いのは貴様の方だったようだな。英雄のガキ」
気絶しているヘラクレスを一瞥した後、『初代キング』はズシズシと足音を鳴らして他の英雄派メンバーとグレモリー眷属の方に近付いていく
「さあ、ガキども。せっかく余が復活したんだ。楽しませてくれ。――神風、貴様はそのまま3人を相手にしろ。赤龍帝と現闇皇はお前にとって因縁深いのだろう?」
「キヒヒッ、良いのかぁい?」
「構わん、その間に邪魔者は片付けておこう」
「オッケ~♪バリー、アドラス、ガーラント、こっちに戻ってきな。そいつらは『初代キング』の遊び相手になっちゃうから♪」
神風に呼ばれた3人の闇人(やみびと)は頷いてから持ち場を離れ、メタルの近くに降り立つ
『初代キング』は手をゴキゴキと鳴らし、牙が剥き出しの口を開く
「悪魔と英雄の狩り、たっぷり楽しませてもらおうか。直ぐにくたばるでないぞ?」
ニヤリと不気味な笑みを見せた直後、『初代キング』は残りの英雄派メンバーとグレモ

リー眷属の狩猟に取り掛かっていった
新と一誠は直ぐに向かおうとするが、神風が立ち塞がる
「クソッ!そこをどけェッ!」
「キヒヒッ、退(ど)くわけないじゃぁん?君達の相手はボクだって言ってんの。……さてと、君達のお仲間や英雄派がやられるのも時間の問題だし――ボクも本気出していこうか。さっきの槍のお返しも兼ねてね」
神風がゴソゴソと懐(ふところ)を探り、何かを取り出す
それは先程見せた赤い砂時計模様の蜘蛛――ブラックウィドウ
神風はそのブラックウィドウを喰らい、バリボリと噛み砕く
神風がいったい何をしようとしているのか理解出来ない新と一誠、曹操も警戒して槍を構える
一頻り噛み終えた神風は喉を鳴らす様にブラックウィドウを飲み込む……
その直後、神風のオーラに邪悪さと力強さが増し――爆発的に膨れ上がった
「キャハハハハハハハハッ!光栄に思いなよ!ボクの超魔身(ちょうましん)を拝めるのは――君達が最初だアッ!」
「「ちょ、超魔身(ちょうましん)だとっ!?」」
新と一誠が異口同音に驚愕する

超魔身(ちょうましん)とは自身の力を高めきった闇人(やみびと)のみが会得する強化術であり、通常時の何倍にも力が跳ね上がる
合成獣(キメラ)姿の神風がドス黒いオーラに包まれ、繭の様な状態になる
そして直ぐに亀裂が入り、そこから光が漏れ出す
繭が破裂して誕生したのは――超魔身態(ちょうましんたい)となった神風だった
今までの醜悪な姿とは全く違い、寧ろ神々しさを含ませていた
純白を基調とした体躯、獣の牙が上下に生え揃ったかの様な胴体、右腕から伸びる鋭利な刃、左腕に折り畳まれた弓矢の如き武具、両肩から生える荒々しい翼
それはまるで神　器(セイクリッド・ギア)が発現する禁　手(バランス・ブレイカー)の全身鎧(プレート・アーマー)を彷彿させる出で立ちだった
……
全身から滲み出てくるオーラも今までの比じゃない……
「――さあ、始めようか」
無邪気さを少し消した声音で言う神風
新は一誠にアイコンタクトを送り、一誠もそれに応じる
数秒後、2人は攻撃を開始した
「行くぞ、一誠ッ!一瞬の隙も与えるな!」
「分かってる!」

新は闇皇剣(やみおうけん)を神速で振るって幾重もの斬撃を飛ばし、一誠は両手からドラゴンショットを乱れ撃ちで放つ
２人の同時攻撃に神風は不敵な笑みを浮かべた
「キヒヒッ！もうそんな攻撃が通用すると思ったら大間違いなんだよッ！」
神風は両足からオーラを噴射して残像が映る程の超高速移動を始め、全ての斬撃とドラゴンショットを余裕で躱(かわ)す
新と一誠は怯まず斬撃とドラゴンショットを連続で繰り出すが、一向に当たる気配は無い
神風は２人の攻撃を回避しながら左腕の弓矢を展開し、黒く帯びた雷を発生させ凝縮していく
「食らいな！ボルテックアローッ！」
左腕の弓矢から幾重もの雷撃が放たれ、驟雨(しゅうう)の如く降り注ぐ
夥(おびただ)しい数の雷撃は新と一誠の腕や足を容易(たやす)く貫き、全身を電撃で痛めつける
「「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」」
絶叫と共に新と一誠は吹き飛び、地面を削りながら転がる
雷撃が止み、神風はゆっくりと２人の所へと歩み寄っていった
倒れている新と一誠を見下ろしながら嘲笑する

「キヒヒッ♪どうだい、ボクの超魔身態(ちょうましんたい)は?なかなか強くて格好いいでしょ?こいつは君達や『2代目キング』の鎧を基に発現した姿なのさ」
「ぎ……ッ!クッソオオオッ!」
新は吼えて魔力を滾(たぎ)らせた拳を打ち込もうとするが、神風は瞬時に消えて新の脇腹を右腕から伸びる刃で切り裂く
更に周囲を神速で移動しながら新を切り刻み、白い体躯に血が飛び散る
「キャハハハハハハハハハッ!言った筈だよ!今のボクに君達の攻撃なんか通用しないってねぇっ!」
左腕の弓矢を新の腹に突きつけ、至近距離で雷撃の矢を放つ神風
雷撃は新の腹を突き破り、一直線に後方へ消えていく……
新の口から大量の血が吐き出され、新は膝から崩れ落ちる
「新!新ァァァァァァッ!」
「キヒヒッ!次は君の番だよ、赤龍帝エェッ!」
「チクショウ……ッ!チクショオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」
『Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト)

それを見た神風は含み笑いをしてから両手を広げ、胸部となっている獣の牙に膨大なオーラを集束し始めた
禍々しいオーラが渦巻き、神風は一誠に向かって凝縮されたオーラを解き放つ
「――サンダースマッシャァァァ

細かく震える一誠の体が前へ倒れ込む
「あ……ぁあ……っ」
まだ意識はあるようだが、とても立ち上がれる状態ではない……
新も意識は絶たれていないが、腹を撃ち抜かれたのでまともに動かす事も出来ない……
２人を圧倒した神風は腹を押さえて含み笑い、後に哄笑を上げた
「キィィィヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャアアアアアアアアアアッ!どうだぁい!?これがボクの超魔身(ちょうましん)の力だ!ブラックウィドウを喰って得たボクの力だァッ!キャハハハハハハハハハッ!」
哄笑を終えた神風が右腕の刃を曹操に向ける
「さぁぁて、次は君の番だよ。聖槍(せいそう)使い、さっきの借りを万倍にして返してあげるからねぇ!」
「……これは予想以上に厄介な相手となりそうだな」
「ほう……神風、赤龍帝(せきりゅうてい)と現闇皇(やみおう)を沈めたのか。なかなかの手腕ではないか。こちらは早々に沈んでしまったので暇なくらいだ」
神風の背後に『初代キング』の姿が
後ろを見てみると英雄派のジークフリートとジャンヌ、アーシアと九重を除くグレモ

リー陣営＋イリナ＆ダイアン――全員が地に倒れ伏していた……

全員が全身血だらけ傷だらけとなっている……

「クハハハハハッ。神風、この『邪眼の闇籠手（ネメシス・ギア）』とやらは実に面白い。奴らの神器（セイクリッド・ギア）を簡単に複製するとはな」

「キヒヒッ♪当たり前だよ～。クソ堕天使総督の頭じゃ絶っっっ対に作れない代物、そんじょそこらの神器（セイクリッド・ギア）とは訳が違うのさ」

「しかし、もう殆どが呆気なく終わってしまったな。昔の悪魔どもはもっと殺気に満ち溢れていたのだが……拍子抜けだ。それだけ奴らの力が衰えたのか、それとも我らが力を付け過ぎたのか……。いずれにせよ、この分だと京都を滅するのも容易（たやす）いわ」

『初代キング』はつまらんとばかりに大きな欠伸（あくび）をして、神風の前に移動する

神風が「どうしたの？」と訊くと、『初代キング』はこう返した

「神風、スマぬがさっきの話は無しだ。あの聖槍使（せいそう）いとやらは余が相手をしよう。退屈でならんのだ」

「え～、マジですかぁ？せっかく借りを返そうと思ってたのにぃ」

「ならば、あの黒炎の龍――ヴリトラとやらを仕留めてはどうだ？あやつも悪魔どもの差し金であろう？」

『初代キング』バジュラ・バロムが視線を移す

見てみると――――龍王化した匙が九尾蜘蛛の９本の尻尾に縛られ、苦痛の声を漏らしていた

それを見た神風はやれやれと呆れた感じで溜め息を吐く

「あ～あっ、これじゃ本当に拍子抜けだよね。あいつら弱過ぎ」

「まあ、仕方あるまい。それが今の悪魔どもの力量と言う事だ。――――聖槍使いのガキから見てどうだ?」

バジュラからの質問に曹操は肩を聖槍でトントンと軽く叩きながら答える

「強い。強いよ、彼らは。悪魔の中でもなかなかの物だ。けど、その力では闇人どころか、英雄の力を持つ俺達にさえも勝てない」

「聖槍使い、貴様らは我々闇人に勝てるとでも?」

「――――勝つさ。悪魔や堕天使、ドラゴン、妖怪、闇人は人間の敵だからね。なら立ち上がらないとさ。――――人間が魔王やドラゴンを倒すのはごく自然な事だ。それが俺達英雄派の基本的な行動原理さ」

聖槍の切っ先をバジュラに向ける曹操

バジュラは大口を開けて哄笑する

「クハハハハハッ!面白いッ!脆弱な人間風情が何処まで抗えるか、余が見定めてやろうぞッ!」

バジュラの全身から膨大な闇のオーラが噴き出し、両腕を広げながら飛び立つ
曹操は飛び退いて体勢を立て直し、切っ先にオーラを集中させた聖槍で貫こうとする
聖槍の刃は飛び出してきたバジュラの胸に突き刺さるが――
「……バカな。『黄昏の聖槍(トゥルー・ロンギヌス)』が貫けない……？」
「確かにその聖槍とやらの威力は凄まじい。並大抵の異形なら塵と化すだろう。だが……余を誰だと思っておる？余は全ての闇を喰らい、闇を操る王。欲望を無限に貪る(むさぼ)魔族――闇人(やみびと)の真祖(しんそ)だぞ。人間ごときの力で消せる程――薄い闇ではないわァッ！」
バジュラは全身から放出した闇のオーラを右手に纏わせ――巨大な闇の爪を具現する
闇の爪を曹操に向かって振り下ろす
曹操は咄嗟に聖槍を引いて自らも飛び退き、闇の爪の凶刃(きょうじん)を回避した
バジュラは地面に大きな爪痕を刻み、曹操を追い掛けるべく飛び出していった
聖槍と闇の爪が激しくぶつかり合い、攻撃の余波が疑似京都を揺さぶる
神風はその様子を見てキヒヒッと笑う
「あ～らら、テンションフォルテッシモって感じだね～。こりゃ邪魔しない方が安全かな？さ・て・と」
「神風、あのヴリトラを始末しやすか？グレモリーんトコの癒しの聖女さんが仲間を回

復させていやすが……どうしやす？」
ガーラントの進言に神風は視線を移すと――確かにアーシアが血まみれになった仲間達の回復に勤しんでいる姿が視界に入る
必死に呼び掛け、涙を流しながら傷を癒していた……
神風はその様子をチラッと見た後、〝もう良いよ〟と言った感じで首を横に振る
「どうせ回復させたところでボク達には勝てないんだし、放っておいて大丈夫だよ。それより――あのヴリトラを今の内に始末しちゃおっか♪」
アーシアを意に介さない神風が左腕の弓矢を構え、先端に雷撃のオーラを集束させていく
狙うはヴリトラ……
いざ雷撃の矢を放とうとした刹那――神風の顔面に小さな火球（かきゅう）が当たる
神風は当たった部分に手を当て、火球放った犯人――九重に視線を移した
「……何、君？邪魔したいの？邪魔するんだったらぁ――殺すよ？」
怒気を含めた声音を放つ神風に九重は一瞬ビクッと震えるが、それでもそうはさせんとばかりに両手を広げて立ち塞がる
「母上を……母上を元に戻せ！このうつけものどもっ！」
「なになになぁにぃ？ボク達に歯向かうってのぉ？君みたいなチビで雑魚の狐ちゃんが

？キャハハハハハハハハハッ！笑っちゃうよね～ッ！ねえ、皆も笑ってあげなよ」
哄笑する神風に続き、アドラス、メタル、ガーラント、バリーも九重を嘲笑う
九重が神風達に勝てる筈が無い……
分かりきっているだけに悔しく、歯噛みするしかなかった……
それでも九重はそこから1歩も退かない
「そこを退きなよ、狐ちゃん。マジで死ぬぞ？」
「ど、退かぬ！絶対に退かんぞっ！貴様らに母上を……この京都を好きにはさせんのじゃっ！」
「や、やめろ……九重……ッ！」
新と一誠が声を絞り出して九重に警告する
腹に穴を開けられた新、全身から煙を上げている一誠
その2人の呼び掛けに九重は首を横に振って叫ぶ
「私も九尾の娘じゃ！母上とお主達が苦しんでおるのに……何もせぬなど出来んのじゃっ！」
「キヒヒッ♪健気だねぇ～、狐ちゃん。でもさぁ、残念だけど君なんかが喧嘩売ってきたところでな～んにも出来ませぇ～ん♪」
神風は九重に見向きもせず左腕の弓矢をヴリトラに向ける

九重は小さな火球を放ち続けるが、勿論効く筈も無い……
よほどウザかったのか、神風の機嫌がどんどん悪くなっていく
「……あのさぁ、もう殺して良い？マジでウザくなってきたんだけど」
「なんなら、あっしが狐の遊び相手になりやしょうか？」
「……良いよ。好きにやっちゃって」
神風から了承を得たガーラントはズンズンと九重の方へ歩いていき、右腕を伸ばして九重を捕まえる
「何をするのじゃ！離せっ！」
「はいはい、弱っちい狐の嬢ちゃんはおとなしくしててくださいやし。じゃねぇと――――死にやすよ？」
ガーラントは伸ばした右腕を蛇に変化させて九重に巻き付き締め上げた
九重は締め付けられる圧迫感に苦痛の声を漏らす
「……っ！あぁ……っ！が……っ！」
「九重っ、九重……ッ！」
一誠がガーラントの所業に怒りを滾らせて立ち上がろうとする
新も腹部の傷穴から出てくる血を顧みず、剣を杖代わりにして立とうとしたが……2人の足に雷撃の矢が直撃

足を撃たれた新と一誠は再び倒れ込み、神風が吐き捨てる
「往生際が悪いんだよ。もう立ってるだけでもやっとのくせにさ、見苦しいよ？そこで無様にくたばってなよ」
神風は直ぐにそっぽを向いて、九尾蜘蛛の尻尾に縛られているヴリトラに照準を合わせた
「母上……っ！目を、覚ましてくだされ……っ！九重です……っ！九重はっ、ここにいます……っ！母上ぇぇぇぇ……っ！」
「チッ、鬱陶しい嬢ちゃんでやすね」
ガーラントに締め付けられながらも九重が必死に呼び掛けるが、九尾蜘蛛は視線すら合わせようとしない……
アーシアは涙を流しながら必死に仲間達の治療を続けている……
「クソ……ッ！クソ…ッ！こんな所で……諦めてたまるか……ッ！」
新は無理をして立ち上がるが、撃ち抜かれた足のせいで満足に動けない
一誠も自分の体に鞭を打って鎧を形成し直し、背中のブーストを噴かして突撃していった
しかし、如何せん勢いが出ず――スピードもかなり遅い
気配に気付いた神風は右腕から伸びる刃で一誠の前面を切り裂き、更に脇腹を蹴って

吹っ飛ばす
血を飛び散らせながら一誠はアーシアの前まで転がる
「――――ッ!イッセーさんっ!」
アーシアは直ぐに一誠の回復も始めたが、立て続けに回復を行(おこな)っていたので次第に疲労も溜まっていく
一誠は悔しさのあまり兜の中で涙を流し続けた……
「……なんで俺は弱いんだ?肝心な時にいつも……っ!九重のお母さんを――――助けるって言ったのに……っ!」
自分の情けなさを呪うかの如く悔恨(かいこん)を吐き出す一誠
英雄派も神風一派も新達を全く相手にしていない……
ここまで来たのに圧倒され、見向きすらされないこのザマ……
一誠は悔しさのあまり地面に握り拳を打ち付けた……
そんな絶望的な状況に落ちたにもかかわらず、新は足から血を噴かせながらも立ち上がった
だが、新自身も既にボロボロである……
腹に穴を開けられ、足も撃ち抜かれて骨は折れている
鎧も大部分が破損しており、顔からも流血……

そんな痛々しい姿でも、彼の目にはまだ戦える事を表す戦意の炎が灯(とも)っていた

「約束は……死んでも守らなきゃならねぇ……ッ！本当に大事な物を守りたいならっ、こんな所でくたばる訳にはいかねぇんだ……ッ！そうだろ、一誠ッ!?」

新は一誠に檄を飛ばす

「お前は赤龍帝(せきりゅうてい)――――おっぱいドラゴンなんだろッ!?だったら立てよッ！お前も俺も――――今じゃ冥界のヒーローだろうがッ！悔しいなら……悔しいなら立ち上がれッ！いつまでも寝てんじゃねぇぞッ！」

「新ァ……ッ！分かってる……分かってるよ……ッ！ここで立たなきゃいけない事ぐらい……ッ！」

〝諦めたくない！〟

〝ここで終わりなんて嫌だ！〟

心の底から沸き上がる思いはあるものの、奴らに手が届かない……

その堪(たま)らなく溢れる悔しさが出てきたその時――――

『泣いてしまうの？』

誰かの声が聞こえてきた……

超絶進化！三又成駒と闇焔皇

『随分とお困りの様だな？現闇皇くん』

「……その声、伊坂か？こんな時に何の用だ……？……いや、寧ろ良いタイミングか……ッ」

この危機的状況下で新に語りかけてきたのは――闇人・魔剣将官の伊坂威月

新は藁にもすがる思いで伊坂に話し掛ける

「……教えろよ。お前が新幹線の中で言ってた新しい力――お前の力ってヤツを……」

『クククッ、良かろう。だが……それには赤龍帝の協力が必要不可欠なのでね。彼の力を借りれば発現が可能となる』

「一誠の協力……？」

怪訝に思いながら新は一誠の方に視線を移す

同じタイミングで一誠も誰かと話している様子が窺えた

一誠の内に語りかけてくる誰か……

声の主は女性最強の赤龍帝と呼ばれる者――エルシャだった

一誠の神器（セイクリッド・ギア）の内部にいる先輩

「この声は……エルシャさん？」

『ええ、そうよ。どうして泣いているの？』

「……俺、悔しくて……。どうしてこんなに自分が弱いのか……。肝心な時に全く役に立てないんです……」

『そう、それは悔しいでしょうね。けれど、忘れたの？以前、堕天使の総督が言っていた事を――――。あなたは可能性の塊だと――――』

その時、アザゼルから言われた事が一誠の脳裏に蘇る

あれはロキと出会う直前の頃――――

≪――――俺はお前の可能性を信じている。歴代の赤龍帝（せきりゅうてい）はどいつもこいつも力に呑まれて死んでいった。お前の才能は歴代最低かもしれない。だがな、女の乳で禁手（バランス・ブレイカー）になったお前を俺は可能性の塊だと思っている≫

≪おっぱいドラゴン！結構な事じゃねぇか。ドラゴンでそんな新しい二つ名を得られたのは随分久しい事なんだぞ？身体能力、魔力がヴァーリや他の伝説のドラゴンに劣っていたとしても違う側面からお前だけの方法で赤龍帝の力を使いこなして強くなっていけば良い。これからも努力と根性、そして意外性から活路を見つけていけよ≫

あの時、アザゼルは一誠にそう言っていた

〝自分だけの側面から自分だけの方法で赤龍帝の力を使いこなせば良い〟と……

「……俺は……おっぱいドラゴンだから」

『そうよ、それがあなた。現赤龍帝であり、おっぱいドラゴン。私とベルザードが見た可能性！さあ、今こそ解き放ちましょう！あなたの――――いいえ、あなた達の可能性を！』

「あ、あなた達？」

怪訝そうな声音で聞き返す一誠にエルシャは高々と宣告した

『あなたと同じく未知の可能性に恵まれた人がいるじゃない！』

「……それって新の事ですか？」

『そうよ！他人の可能性を見たのは初めてだわ！彼も可能性を持っているの！あなたと同じ――――おっぱいによる可能性を！』

堂々と宣言するエルシャに一誠が吹きかけた刹那、一誠の懐から強い光が溢れ出す

懐から取り出された宝玉が一層強く輝き、この一帯全てを揺らす程の光量となった

「……何だ？」

「何だ、この光は？今まで見た事も無い強き力を感じるぞ」

激戦の真っ只中だった曹操とバジュラも手を止め、一誠の方に顔を向ける

神風一派全員も疑問に満ちた顔で止まっていた

新は〝何か嫌な予感がするな……〟と冷や汗を垂らす

宝玉から光が照らされ、何かを映し出していく
それは次第に人の形を成していき、数が増えていった
『その宝玉はこの京都で様々な人間の間を巡ってきた。あれらはその者達の残留思念が人の形になったものよ』
「つ、つまり、俺のせいで痴漢になった皆さんの残留思念って事ですか……？」
その単位は１０００人を超えそうな規模だった……
更に――
『おっぱい……』
『お、おっぱい』
『おっぱいーん』
『凄い、おっぱい』
『大変なおっぱい……』
残留思念が突然〝おっぱい〟と口走り始めた……
遂には呪詛のように呟きながら、ノロノロとおぼつかない足取りで動き出し――何かの陣形を取っていった
「「「「「おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっ

ぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい」」」」」

〝これは酷いっ！〟

まさにそう言うしか無い異様な光景だった……

おっぱいと連呼しながら残留思念達が儀式めいた様相で円陣を作り並んでいる

「……おっぱいゾンビか？」

「面妖だな。流石の余でも見た事が無い酷さだ」

曹操が呟き、バジュラは開いた口が塞がらなかった

一方、神風はこのカオスな光景にやられたのか――――弓矢を構えられなくなり、自らの膝を叩いて大爆笑していた……

「……嫌だァ……ッ。あの流れに入りたくねぇ……ッ！」

ここからの展開を恐れた新は拒絶の意思を表すが……伊坂が反対する

『それは出来ない事だ。君も赤龍帝と同じく女性への渇望で進化していった。ここから更なる進化を遂げるには――――多少の無茶ぶりにも答えてもらわないといかんな』

「ふざけんなッ！俺は一誠みたいにアブノーマルじゃねぇんだ！正常なんだよ！」

『ここで動かなければ新しい力を手に入れられず、死ぬだけだと思うのだが？どうするかね？恥を忍んで新しい力を得るか、恥を忍ばずに死ぬか』

伊坂の説得に新は葛藤の歯軋りを鳴らす

確かにここでやらなきゃ八坂を助ける事も出来ずに全員死ぬ……
悩みに悩み抜いた末、新は苦渋の決断を下した……
「……分かったよ、やりゃあ良いんだろ?」
『その意気だよ、現闇皇(やみおう)くん。行きたまえ』
新の覚悟が決まったのを他所におっぱいゾンビが消え、今度は中央に紋様が刻まれて魔方陣と化した
新は伊坂の指示通り魔方陣の近くに向かい、一誠の隣に立つ
「……一誠、これで何も打開出来なかったらお前を殺すからな」
「何で俺のせいになるのっ!?てか、目がマジだ……ッ」
一誠を睨む新の両目には〝殺〟と言う一文字が浮かび上がっていた……
衝撃的な出来事の連続と理不尽な殺害宣告に思考が追いつかない一誠
そこへ伊坂が新に語りかけてくる
『では、呼びたまえ』
「……何をだよ?」
『この珍妙な魔方陣を介し、君が進化の糧にしてきた女性への渇望を。まだしっかりと味わっていない欲望を呼び寄せたまえ。血の様に紅(あか)く美しい女性(ひと)を――――』
その言葉を聞いて新の脳裏に過(よぎ)るのは……紅髪(べにがみ)の『王(キング)』

新は誰が呼ぶのかハッキリと分かったが、呼ぶ為の呪文が何なのか訊ねる
すると、一誠の籠手を介してエルシャがトンでもない事を言い出した
『さあ、一緒に叫んで！召喚（サモン）、おっぱい！――――と』
「絶対嫌だ」
「即答？てか、そんな酷い呪文なんすか！？」
『まずは彼の可能性を開くのよ！さあ、一緒に叫んで！』
尚も続くエルシャの説得に心が折れたのか、新は諦めて酷い呪文を唱える事に……
勿論、一誠もその召喚に参加するしかなかった……
「……新、準備出来た？」
「もう知らね……。ここまで来たんだ、何でも来やがれ……」
決意が揺らがない内に新は一誠と共にエルシャが言った召喚の呪文を同時に唱えた
「召喚（サモン）ッ！おっぱいいいいいッ！」
すると、魔方陣が輝き出した
魔方陣におっぱいの形をした象形文字や「おっぱい」と書かれた文字まで浮かび上がってくる
魔方陣の中央が一瞬の閃光に包まれた直後、魔方陣から現れたのは――――
「ぶ、部長ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！？」

「やっぱりな……」
紅髪の部長ことリアスが召喚された事に一誠は目玉が飛び出す程驚き、新は顔をひくつかせる
しかも、呼び出されたリアスは着替えの最中だったのか上下下着姿だった
風景が変わった事に気付いたリアスは仰天し、周囲に目線を配らせる
「な、何事!?ここは何処?ほ、本丸御殿……?きょ、京都?あ、あら、新にイッセーじゃないの?どうしてここにって、私がどうしてこんな所に!?しょ、召喚されたの!?え?え?」
酷く狼狽しているリアス
新も一誠も、果てには曹操や神風一派の全員も呆気に取られていた……
そんな状況にもかかわらず、伊坂が真面目そうな声で新にこんな事を言い出した
『――吸いたまえ』
「……は?」
頭がストップしかけた新に伊坂は再び言い放つ
『彼女の乳を吸いたまえ。それで君は新しい力を得る』
「……ッ」
もはや何かを言う事すら放棄した新は――初めてこれまでの人生を呪った……

〝一誠と出会ってから、俺はおかしくなっちまった……〟
過去に戻れるなら一誠と会った事実を抹消したいぐらいに……
しかし、今は四の五の考えてる暇は無い
そんな時、エルシャも一誠に語り出す
『彼の準備は整ったわ。さあ、あなたの可能性はこっちよ』
「え？こっちって何――――」
パァァァァァァァァァァッ！
突然放たれる強い金色の輝き
その出所は――――リアスの身体だった……
「な、何なの!?光が私を包み込んでいくわ！」
驚きの連続で困惑しているリアス
そんな彼女に次ぐ犠牲者がもう1人、一誠の傍にいた……
「ええっ!?わ、私も光ってます!?」
「ア、アーシアもぉぉぉ

『――――つつきなさい』
「え……？」
『あなたはそちらの金髪シスターさんのお乳をつつきなさい』
「つ、つつくんですか？」
『そうよ、つつくの。――――ポチッと』
「ポチッと!?いやいや、つついてどうするの!?」
　驚愕する一誠などお構い無しにエルシャは続ける
『あなたの可能性を導く新たな最後の決め手。それは彼女――――アーシア・アルジェントの乳首なの。あれはスイッチ――――。あなたの可能性と言う名の扉を開く為のスイッチなの。もっと言ってしまえば、リアス・グレモリーのスイッチが彼専用なら――――アーシア・アルジェントのスイッチはあなた専用。そしてアーシア・アルジェントは第2のスイッチ姫、いいえ――――スイッチ聖女（シスター）なの』
　〝ダメだ、頭がおかしい〟
　流石の一誠もそう思うしかなかった……
　それも束の間、エルシャは更におかしな事を言い放つ
『リアス・グレモリーのおっぱいとアーシア・アルジェントのおっぱいはあなた達の可能性に触れ、次のステージに進んだのよ。限界を超えたおっぱい。スイッチ姫とスイッチ

聖女（シスター）の限界を――――。第2フェーズに突入したと言っても良いわ』
「ごめんなさい、意味が分かりません」
次々と理解不能な言葉が飛び交うこの状況にもう涙を流すしかなかった……
エルシャと伊坂がそれぞれの相手に言っていく
『あれをつつく事であなたは変わる。劇的な変化を遂げるわ』
『彼女を吸う事で君は新しい力を得る。欲望を解放し、更なる昇華へ繋がるのだ』
『あなたの中の「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」はあと一押しで力を解き放つ。その一押しが――――』
『私の力と一体化した新しい闇皇（やみおう）が誕生する。君が護（まも）りたいと言っていた存在を全て護れる力が手に入る。力を手にするには――――それなりの対価と覚悟が必要なのだよ』
「……覚悟、か……」
新は悟った様に言葉少なに呟き、一誠もようやくこのカオスな状況を理解した
〝今はやるしかない〟
新と一誠の決意がシンクロした瞬間だった……
新はリアス、一誠はアーシアのもとに歩み寄り、頭部のマスクを解除する
「……新？」
「……イッセーさん？」
２人は怪訝な表情で首を傾（かし）げる

新と一誠はそんな彼女達に真っ正面から言った

「――リアス、お前の乳を吸わせてくれ」

「――アーシア、おっぱいをつっかせてくれ」

「「――ッ！」」

2人(新と一誠)の言葉にリアスとアーシアは絶句した、無理も無い反応である……

しかし、暫(しばら)く考えた後に言う

「……よく分からないわ。よく分からないけれど……分かったわ！」

「……はい。イッセーさん……す、好きなだけつっいてください！」

〝スゲェ！言葉が通じた！〟

新と一誠のツッコミがシンクロする

2人は互いに顔を見合わせてから、他の奴らには見えない位置に移動する

それを確認したリアスがブラジャーを外し、アーシアも制服の胸元を開いてブラジャーを外す

リアスの豊かなおっぱいとアーシアの成長しつつあるおっぱい

見知っている筈のおっぱいなのだが……そのおっぱいに起きている変化を見て驚いた

――ピンク色の乳輪と乳首が淡い桃色の輝きを放っている……っ

「……こ、これが第2フェーズの現象ってヤツなのか……ッ」
「スゲェ……！つつくだけでご利益がありそうだ……ッー！」
新と一誠は初めて知った――――〝おっぱいって光るんだな……〟と
『うおおおおおんっ！うわぁぁぁぁぁあんっ！うおおおおおんっ！』
一誠の籠手に宿るドライグは大号泣していた……
こんな状況ではもう泣くしかないだろう……
しかし、それでもやらねばならない時がある
まずは一誠が鼻血を噴出させながらアーシアの乳首をつつく
成長途中でありながらも極上の柔らかさ、乳首の感触、指がおっぱいに埋まっていく光景
それら全てが一誠の全身を駆け巡り、最大級の快楽を与える
新も続くようにリアスのおっぱいに舌を這わせ始めた
今まで何度も味わった事はあったが、今回は格段に違う
舌を動かす度に小さく震えるリアスの身体
もう片方のおっぱいを揉みつつ、舌を乳首に這い上がらせる新
そして新が最後の一噛み、一誠が一押しをした刹那――――
「……ぁふん……っ」

彼女達の口からトドメの艶声(つやごえ)が……

カッ！

リアスとアーシアのおっぱいがまばゆい閃光を放ち始める

「こ、これは……！あ、あああああああああっ！」

「す、凄いです……！あ、あああああああああんっ！」

リアスとアーシアのおっぱいから放たれた輝きが疑似空間全体を桃色に照らしていき、更に極大の桃色閃光が全てを包み込んでいった……

光が止むと、アーシアは息を切らしながら横たわっており、リアスはこの空間から消えていた

同様に魔方陣も消えていく

「あ、あの、エルシャさん。部長は？」

『元の場所に帰っていきました』

「この為だけに呼ばれたのか!?」

２人は帰ったら即土下座しようと心に誓う

「……何だったんだ、あれは？」

「非常に解(げ)せぬ茶番だったな」

曹操もバジュラも今の現象にどう対処して良いのか分からずにいた

そんな時、新と一誠の全身が徐々に脈動していく

『来たわね。さあ、行きましょうか！』

エルシャが叫ぶと一誠の鎧の各部位にある宝玉から赤い閃光が溢れ出てくる

新の方は背中から炎の様なオーラが両翼の如く広がり、そのまま全身を包み込む

２人の体の内側から力強い何かが沸き上がってくる

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』や『超魔身（ちょうましん）』の様な戦慄さは一切無く、今までに感じた事も無い力の波動だった

「ドライグ、これは――」

『ああ、俺も感じるぞ、相棒……。懐かしいものを思い出させてくれる。これは――本来の俺のオーラだ。激情に駆られ、「覇」の力に身を任せたものじゃない。呪いでも負の感情でもない。これは――俺が肉体を持っていた頃の気質だ。ただただ、白いあいつに勝ちたかった頃の――』

ドライグの楽しそうな声音が聞こえた直後、新と一誠から迸（ほとばし）ったオーラが２人と周囲を包み込んでいった

――――――――――――――――――――

新はまた意識の中へとダイブしたのか、周りは黒一色の真っ暗な空間だった
周囲を見渡す新の前に見覚えのある炎が現れる
蒼い炎で構成された鳥……
それは新幹線でも見掛けた――意識の中で変化した伊坂だった
『さあ、これで新たな力への道は整った。後は君が唱えるだけだ』
「唱える……？」
『新たな力への呪文――唄と言っても良いかな。頭の中に流れてくる呪文を唱えたまえ。それが切っ掛けとなろう』
「……伊坂、お前はどうなるんだ？」
『私はこれから君と一体化するのだ。よって――老兵は消え逝くのみ。それだけだよ』
つまり、完全に消えて無くなると言う事なのだろう……
伊坂の思わぬ発言に新は言葉が出なかった
以前まで憎き敵だったのに、消え逝くと知った途端――複雑な情に駆られる……
『不思議だな。私に対して君がそんな顔をするとは』
「うるせぇ。逝きたいならさっさも逝っちまえ」
『クククッ、そうさせてもらおう。私の力を存分に振るいたまえ』

遺言とも取れる最期の言葉を残した伊坂は新と重なる様に同化していった……

「オオオオオオオオオオオオオオオッ！」
「いくぜぇぇぇぇぇぇぇっ！ブーステッド・ギアアアアアアアッ！」
意識が戻ってきた新と一誠が吼え、極大のオーラが辺り一帯に解き放たれた
新の鎧から、一誠の神器（セイクリッド・ギア）から力が溢れ出てくる
「グレモリー眷属の底力、見せてやるぜェェッ！」
新の体が空中に浮かび上がり、自動的に『女王（クイーン）』形態となる
そして頭の中に流れてくる呪文を唱え始めた
「我、目覚めるは闇と焔（ほのお）を受け入れし、魔の皇（おう）なり！」
新の背中から炎が噴き上がり、６枚の翼と化す
「無限の欲望を喰らい、不屈の闘志を糧（かて）に力を望まん！」
足の鎧が炎に包まれ、炎の様な意匠猛禽類の様な爪を生み出す
「我、闇に染まりし焔（ほむら）を纏う皇となりて――――」
炎が全身を伝って統一性の無かった鎧が左右対称の形状となり、中央に赤い宝玉が埋

まった盾が左腕に出現する
「――――汝(なんじ)らを光無き漆黒の闇へと沈めようッ！」
両肩にも猛禽類の羽の様な意匠が加わり、兜のマスク部分が赤いバイザーに覆われる
変化が終わり地上に降り立つ新
炎の如く赤いバイザーの奥に潜むエメラルドの眼孔を輝かせ、６枚の翼を収納する
「あ、新の鎧が変わった……」
「これが新しい力……。前『女王(クイーン)』形態に伊坂の力を同化させ、１段階進化させた『女王(クイーン)』形態――――『魔剣の闇焔皇(アークブレイズ・ロスト・エンペラー)』……と言ったところか」
右手を開閉し、馴染み具合を確認した新は一誠に言う
「何ボーッとしてんだ、一誠。目の前の奴らをぶちのめすんだろ？さっさとしな」
「ああ、当たり前だ！ドライグッ！」
『そうだな。久し振りに俺の力を見せつけてやろうではないかッ！』
「赤龍帝の力、とくとぶっ放してやろうぜッ！」
『Desire(デザイア)！』
『Diabolos(ディアボロス)！』
『Determination(ディターミネイション)！』
『Dragon(ドラゴン)！』

『Ｄｉｓａｓｔｅｒ！』（ディザスター）
『Ｄｅｓｅｃｒａｔｉｏｎ！』（ディシクレイション）
『Ｄｉｓｃｈａｒｇｅ！』（ディスチャージ）
『ＤＤＤ

静かに鳴動が始まり、赤龍帝のパワーが砲口に集まっていく

「一誠、気合い入れてるじゃねぇか。俺も負けていられねぇよなッ！」

新は左腕に装着された盾の宝玉に手を伸ばすと――宝玉から剣の柄が飛び出し、それを掴んで引き出す

出てきたのは自前の得物――闇皇剣（やみおうけん）だが、赤と黒が入り交じった様な刀身に変わっていた

そして盾の宝玉を曹操とバジュラに向けると、宝玉に灼熱のオーラが渦巻いて球状と化す

２人して膨大なエネルギーの一撃を作り出していく……

「……あれは、マズいな」

「ほう……これは面白い」

曹操はボソリと呟き、バジュラは嬉々とした表情で笑む

新の盾と一誠のキャノンにエネルギーが充填された――

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

「吹っ飛べェェェ

バジュラを飲み込んだ2つの砲撃は遥か後方に飛んでいき――――空間全体を震わせる程の大爆発と共に背景の町並みを吹き飛ばしていった

激しい光が止んだ後に残った物は――――全身から黒煙を上げるバジュラだけだった……

先の風景は消滅し、疑似空間にもダメージが及んだのか空間が歪み出していた

その時、静止していたバジュラが口から血の塊を吐き出す

「……英雄派のガキ共が作った疑似空間を歪ませる程の一撃か……。闇を纏わなければ、我が身は6割消滅していたかもしれんな……」

バジュラが自嘲する様に吐き捨てる

侮(あなど)っていたせいで思わぬ打撃を食らってしまったようだ……

とりあえず一矢報(いっしむく)いた新と一誠

「一誠っ、俺は八坂を止める！曹操は任せる！やれるか!?」

「当たり前だ！そっちこそ死ぬんじゃねぇぞッ！」

お互いに檄を送り合い、それぞれの任務を果たすべく飛び出していった――――まずは新

八坂を救う前に……ガーラントに捕らえられている九重を救わなければならない

新はガーラントに狙いを定め、6枚の翼を畳んで急降下していく

ザシュッ！
肉が斬られる音と共に宙へ飛ぶガーラントの腕と――巻き付かれた九重
九重を空中でキャッチし、巻き付いていた腕を取り払う
「た、助かったのじゃ……」
「よし、次はお前の母親だ」
ガーラントが傷口を押さえる中、神風が哄笑を上げて言う
「キャハハハハハハッ！あの化け物蜘蛛になった九尾のお姫様を救うってぇ？無理無理無理♪そんなもん、いったいどうやるのぉ？」
「そいつを今から見せてやるよ」
新は手にした闇皇剣（やみおうけん）に力を流していくと――刀身が赤と黒の耀きを放つ
「――喰らってやるぜ。八坂に寄生したブラックウィドウってヤツをッ！」
２色の波動を纏った剣を頭上に掲げ、そのまま九尾蜘蛛に振り下ろした
「喰らい尽くせッ！――『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』オォッ！」
ズオォォオオオオオオオオオオオッ！
振り下ろされた剣から解き放たれた闇は刀身と同様、赤と黒に入り交じっていた
その闇が九尾蜘蛛の全身を余す事無く包み込んでいく
ゴキュ……ゴキュ……と不気味な音を立てながら、闇がそのサイズを縮めていく

神風は〝まさか……っ〟と思いながら凝視していると――――闇が人型のサイズにまで小さくなった
人型にまで縮んだ闇を抱え、着地した新は九重と闇を下ろす
「へへッ、どうやら上手くいったみたいだな?」
新の一言を合図に闇が霧散すると――――そこには人の姿に戻った八坂がいた……
その光景に神風一派どころか、九重も驚きを隠せなかった
「は、母上が……母上が元の姿に……っ」
「ナ、ナニコレ……?どういう事!?なんで……どうやってブラックウィドウの力を消したの!?」
「簡単だ。――――喰ったんだよ。今の力でな」
新は端的に説明するが、神風は全く理解出来なかった
そればかりか悔しげに地団駄を踏みまくる
「何なんだよ、何なんだよコイツらは!?」
「クッハッハッハッ……。全く面白いガキどもだ。余の予想を遥かに超える成長ぶりだな……」
『初代キング』バジュラは足元に闇を広げ、闇は神風一派全員の足元を覆い尽くす
「ここは退(ひ)くぞ、神風。先の砲撃が予想以上に我が身を焼いたのでな、このまま続ければ

全滅するやもしれん」
『初代キング』らしからぬ言動に神風は「ハァッ!?」と憤(いきどお)りの感情を明らかにする
猛反論しようとした矢先にバジュラが神風を手で制して言う
「あの力はまだムラがあるようだが、ロクに調査・研究・対処していない現状で相手にするのは利口ではない。貴様の言いたい事も分からなくはないが、見くびると大局を見失い――己の破滅を招くぞ？」
「……ッ」
バジュラの言葉に神風は苦虫を噛み潰した様な呻き声を上げ、〝今は仕方無く〟指示に従う事に……
足元に広がった闇がバジュラ含む神風一派の全身をどんどん沈めていく
「現闇皇(やみおう)、面白い力を見せてもらった。今宵は潔(いさぎよ)く退いてやる。またいずれ見(まみ)える時は――我々も本気で潰すとしよう。楽しみにしておれ」
そう言い残し、神風一派は闇の中に飲まれ消えていった……

京都大戦終幕！

「モードチェンジ！『龍星（ウェルシュ・ソニックブースト・ナイト）の騎士』ッ！」

一誠はドラゴンの翼を羽ばたかせて曹操に向かう

背中のブーストの数が増え、魔力の火を噴出させながら飛んでいく

「――――装甲パージッ！」

一誠がそう叫んだ途端、鎧各所の厚い装甲が外れて流線型のフォルムへと化した

全身に掛かるGに吐きそうになるが――――

「てめえに体当たりするぐらいなら問題ねえよなァァァッ！」

『Boost（ブースト） Boost（ブースト） Boost（ブースト）

曹操を捕まえた状態で飛び続ける一誠
「――やっと捕まえたぜ。これなら文句ねぇだろ？」
「――全く、キミは正面から本当に突っ込んでくるんだなッ！だが、その装甲の薄さで俺の槍は耐えられないだろうッ!?パワーアップ早々悪いが、これで終わりだッ！」
確かに今の装甲では聖槍に耐えられない、触れただけで消滅しかねないだろう
一誠は再び内で『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』のシステムを変更させた
「モードチェンジッ！『龍剛の戦車（ウェルシュ・ドラゴニック・ルーク）』ッ！」
赤いオーラが一誠を包み込み、外した分の装甲を修復させていく
だが、それだけに留まらず――更に鎧を分厚い仕様にしていく
両腕も通常形態の5、6倍はあろうかと言う極太の様相となった
モードチェンジした事で神速が止まり、一誠と曹操は空中に投げ出された
曹操の槍が一誠を捉え、光の刃が向かっていく
一誠は分厚くなった右籠手を盾代わりにして聖槍の一撃を受け止めた
籠手に突き刺さったものの、貫く事は出来なかった
「――もっと出力を上げないと、この鎧は壊しきれないと言うのかッ！上級悪魔なら瞬殺出来る出力なんだぞッ！」
そう叫ぶ曹操に一誠は分厚くなった左の拳を構えた

「おっぱいドラゴン舐めんな、このクソ野郎オオオオオオオオッッ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

過ぎるのだ。特に連続で形態を変えたせいか、拍車が掛かった。慣れれば消耗も軽減されていくとは思うが』
「そうかよ、ドライグ。まだまだ修行の余地があるって事か」
「一誠、随分と疲れてるみたいじゃねぇか。――――ま、俺も他人事じゃないか」
一誠の隣に降りてきたのは新
６枚の翼を収納し、曹操が落ちた場所を見据える
地面に叩き付けられた衝撃で出来たクレーターの中から曹操が上がってくる
鼻と口から出血しているが、それを拭って首を鳴らす
「これは赤龍帝殿。先程は失礼した。驚くべき変化を遂げたようだ。充分な強さを土壇場で得るなんてね。槍で守らなければ死んでいたよ」
「クソッ！死んどけよっ！」
曹操自身は生身なので、直撃を受けていたら勝っていただろう
『『悪魔の駒』のルールを逸脱したキミだけの新たな特性か……。まるでイリーガル・ムーブだな」
聞き覚えの無い単語に一誠は首を傾げた
「イリーガル・ムーブ？って、何だ？」
一誠が疑問を口にすると新が答える

「チェス用語で〝不正な手〟と言う意味だ。お前の攻撃は明らかに『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』のシステムに不正する様な手に見えたからな。その点は俺も同じか。『王（キング）』の承認無しで昇格してるんだからよ」

『俺としてはトリアイナだと感じたが』

「トリアイナ？どういう意味だ？」

『トリアイナ、ギリシャの海神ポセイドンが持つ三又の矛（みつまたほこ）の事だ。トライデントと言う名の方が知られているかもしれんな。先程の３種の駒による連続攻撃が三又の矛の様な鋭さを感じた』

「イリーガル・ムーブ（イリーガル・ムーブ・トリアイナ）にトリアイナ、か……。良いね。じゃあ、こいつは『赤龍帝の三又成駒』とでも名付けようかな」

先程の単語２つを掛け合わせた名称を作り出した一誠

まだまだ伸びしろもありそうだ

「怖いな。直接的な攻撃力は『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』無しのヴァーリにそろそろ匹敵するかな？いや、彼も日々成長しているから、現在は分からないが……。それと予想以上にスタミナとオーラを消耗する。使いこなすにはまだまだと言う事かな。いや、使いこなせたとしてもその消耗は尋常ではないか……。あと１０分も禁手（バランス・ブレイカー）状態が保たないと見た」

曹操は冷静に一誠の新形態による攻撃方法を分析

一誠は息を吐いてから曹操に言った
「あんた、やりにく過ぎるんだよ。ちょっと俺達の事を舐めたかと思うと、今度は冷静に見てくるしさ」
「いや、キミを少しでも軽んじた俺が愚かだった。本当に済まなかった。強大な力に溺れず赤龍帝の深奥を知ろうと動いているキミはやはり強敵だ。反省をしなければならない。それに闇皇（やみおう）もトンでもない力を発揮している。まさか、暴走していた九尾を容易く止めるなんてね。――――楽しい。ヴァーリと個人的に一戦して以来の戦闘高揚かもしれない。やはり、伝説のドラゴンや魔物と戦うのは最高だな。俺が心底英雄の子孫だと言う証拠か」
「楽しい、か……。俺の知り合いにもそんな奴がいたよ。俺が1番嫌ってる野郎と同じ台詞を言いやがって。曹操、お前はこのまま全勢力と激戦をするつもりか？」
新の問いに曹操は首を横に振った
「冗談。この戦力では長期戦に向かない。1人の力が強くても、流石に各勢力が協力した兵力には勝てないさ。そちらに大損害は出せるだろうが、こちらは全滅だ。不意打ちを狙った一点突破の方が効率が良い。だからこの組織にいるのは割が良いわけさ」
「『禍（カオス）の団（ブリゲード）』に身を置いているのはそう言う理由かよ。ったく、食えない奴だぜ」
バジッ！バジッ！

突然空間を震わせる音が鳴り響く
見上げてみると――空間に穴が生まれつつあった
空間に現れた裂け目を見て、曹操が嬉しそうに笑む
「どうやら始まったようだ。あの魔方陣、そしてキミ達や闇人（やみびと）の膨大なパワーが真龍（しんりゅう）を呼び寄せたのかもしれないな」
曹操が皮肉げにそう言ってくる
不覚にも新と一誠のパワーアップ現象がこの裂け目を生み出してしまったのだろうか……？
「ゲオルク、『龍喰者（ドラゴン・イーター）』を召喚する準備に取り掛かって――」
そこまで言いかけた曹操が言葉を止める
その目が細くなり、空に出来た次元の裂け目を見て疑問の生じた表情となる
「……違う。グレートレッドではない？……あれは、それにこの闘気……ッ！――――西海龍童（ミスチバス・ドラゴン）、玉龍（ウーロン）かッ！」
空間の裂け目から姿を現したのは――十数メートル程ある、体が細長い東洋タイプのドラゴンだった
曹操は五大龍王の一角の登場に驚いていたが、直ぐにその視線はドラゴンの背に向けられる

新と一誠もそれに釣られてドラゴンの背に視線を移した
そこには小さな人影らしきものが1つあり、人影がドラゴンの背中から降りてくる
何事も無かったかの如く地上に降り立った人影が言う
「大きな『妖』の気流に『覇』の気流、それに禍々しく残っていたであろう『闇』の気流。それらによってこの都に漂う妖美な気質がうねっておったわ」
小さな人影は年老いた男性の声音でこちらへゆっくりと近付いてくる
現れたのは金色の体毛にサングラス、法衣を纏った猿の様な人物だった
手には長い棍の様な得物を持っており、首には大きい数珠がぶら下がっていた
煙管を吹かしながら不敵な笑みを浮かべる
「おー、久しい限りじゃい。聖槍の。あのクソ坊主がデカくなったじゃねーの」
猿の老人がそう言うと、曹操は目を細めて笑んだ
「これはこれは。闘戦勝仏殿。まさか、あなたがここに来られるとは。各地で我々の邪魔をしてくれているそうですな」
「坊主、イタズラが過ぎたぜぃ。儂がせっかく天帝からの使者として九尾の姫さんと会談しようと思っていたのによぉ。拉致たぁ、やってくれたもんだぜぃ。ったく、関帝となり神格化した英雄もいれば、子孫が異形の業界の毒なんぞになる英雄もいる。『覇業は一代のみ』とよく言ったもんじゃ。のぅ、曹操」

「毒、ですか。あなたに称されるのなら大手を振って自慢出来るものだ」
曹操が畏敬の念を持って接しているように思えるやり取りを見て、一誠は疑問の声を出す
「……誰だ、あの猿の様な……じいさん?」
「一誠、闘戦勝仏(とうせんしょうぶつ)の名で気が付かないのか?あのじいさんは恐らく……孫悟空。しかも、初代のだ」
「しょ、しょ、しょ、初代の孫悟空ぅぅぅぅぅぅっ!?あ、あの猿のじいさんが西遊記で有名な……ッ!」
一誠は新の発言に心底仰天する
アザゼルが言ってた強力な助っ人とはこの初代孫悟空の事だったのだ
初代孫悟空が新と一誠の視線に気付いたのか、シワクチャな口元を笑ませる
「赤龍帝(せきりゅうてい)と闇皇(やみおう)の坊や。よー頑張ったのぉ。良い塩梅(あんばい)の波動だ。だが、もう無理はしなくて良いぜぃ?儂が助っ人じゃい。後はこのお爺ちゃんに任せておきな」
初代孫悟空が曹操達に歩み寄ろうとする
そこへ霧使いの魔法使い――ゲオルクが初代孫悟空に向かって手を突き出した
「――捕縛する。霧よッ!」
初代孫悟空を包み込む様に『絶霧(ディメンション・ロスト)』の霧が集まるが――

「――――天道（てんどう）、雷鳴をもって龍のあぎとへと括（くく）り通す。地へ這え」
呪文を呟き、棒で地面を1度叩くと――――霧があっという間に消え去る
僅かな挙動だけで神滅具（ロンギヌス）の霧を消してしまった……
「まだ神器（セイクリッド・ギア）の練り方が弱いの。そこの赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）の様に対話したらどうじゃい？」
「――――ッ！あの挙動だけで我が霧を……ッ！神滅具（ロンギヌス）の力を散らすか！」
「槍よッ！」
ゲオルクが仰天していると、隙を突いたかの様に曹操が聖槍の切っ先を伸ばして奇襲を図ったが――――初代孫悟空は指先1つで聖槍を止めた
「……良い鋭さじゃわい。が、それだけだ。まだ若いの。儂の指に留まる程では他の神仏も滅（めっ）せられんよ。――――貴様も霧使いも本気にならんで儂にかかろうなどと、舐めるでないわ」
初代孫悟空の言葉を聞き、曹操は笑みを引きつらせていた
「……なるほど、バケモノぶりは健在のご様子ですな……。周囲に広く認知されているのは若い頃の強さだと聞く。今は如何程（いかほど）ですかな？」
曹操の問い掛けに初代孫悟空は不敵に肩を竦（すく）めるだけだった
そこへようやく意識を取り戻した英雄派のメンバー達、ジークフリートが曹操に告げる

「曹操、ここまでにしよう。初代孫悟空は『禍の団（カオス・ブリゲード）』のテロを何度も防いでいる有名人だ。これ以上の下手な攻撃はせっかくの人材が傷付くよ」
「退却時か。見誤ると深手になるな」
曹操は槍を下ろし、英雄派メンバーが素早く1ヶ所に集結
ゲオルクが足下に巨大な転移魔方陣を展開し始めた
曹操が捨て台詞を吐く
「ここまでにしておくよ。初代、グレモリー眷属、赤龍帝（せきりゅうてい）、闇皇（やみおう）、再び見（まみ）えよう」
逃げようとする曹操
だが、新と一誠はこのまま逃すつもりは更々無かった
新は剣の刀身に魔力を流し、一誠はオーラを集めて左籠手にキャノンを生み出し、残った魔力を装填する
2人の様子を見て初代孫悟空が笑う
「儂の役目、坊や達がやるかい？まあ、ええ。あの坊主にお仕置きしてみぃ？一時だけ力が出るよう、お爺ちゃんが手伝ってやるわい」
そう言って初代孫悟空が棒の先で新と一誠の鎧を軽く叩く
その直後――――2人の全身からオーラが噴き出してきた
一誠が曹操にキャノンの照準を合わせる

「――お咎め無しで帰れると思うのか？こいつは京都での土産だッ！」
バシュウウウウウウウンッ！
籠手のキャノンから濃縮された魔力の一撃が撃ち出され――
「俺からも土産をくれてやる。景気付けに貰っておけッ！」
剣から放たれた魔力の斬撃が一誠の撃ち出した砲撃と螺旋状に交わり、より強力な一撃と化す
曹操の盾になろうとヘラクレスやジャンヌが前に出るが――
「曲がれェェェェッ！」
一誠の叫びに応じたのか、撃ち出された魔力の一撃が軌道を変えて曹操の顔面を捉える
完全に油断していたのか、顔を撃たれた曹操が負傷した部分を手で覆う
右目から鮮血を散らし、右目を手で押さえながら狂喜に顔を歪ませた
「……目が……。赤龍帝ェェェェッ！闇皇オオオオッ！」
曹操は槍を構えると、力強い言葉――呪文の様なものを唱え出した
「――槍よッ！神を射貫く真なる聖槍よッ！我が内に眠る覇王の理想を吸い上げ、祝福と滅びの――」
呪文を唱える途中でジークフリートが曹操の口と体を手で押さえる

「曹操っ！唱えてはダメだッ！『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』の禁手（バランス・ブレイカー）――――いや、『覇輝（トゥルース・イデア）』を見せるのはまだ早いッ！」

ジークフリートの声に曹操は激情を収めて深く息を吐いた

「――――退却だよ。『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』――――レオナルドも限界の時間だろう。流石にこれ以上の時間稼ぎは外のメンバーでも出来ないだろうしね。各種調整についてもこれで充分データを得られるし、良い勉強になったよ」

曹操が負傷していない左目で新と一誠を捉える

その視線は鋭いものだった……

「分かっているさ。初代殿、そして赤龍帝（せきりゅうてい）、闇皇（やみおう）――――否、兵藤一誠。竜崎新。ここいらで俺達は撤退させてもらおう。全く、ヴァーリの事を笑えないな。彼と同じ状況だ。キミ達は何故か土壇場でこちらを熱くさせてくれる」

転移魔方陣が一層輝きを増し、曹操が消える間際に言う

「――――2人とも、もっと強くなれ。ヴァーリよりも。そうしたら、この槍の真の力を見せてあげるよ」

それだけ言い残し、英雄派はこの空間から消えていった

英雄派と神風一派が去った事で疲弊が一気に押し寄せてくる

一誠はその場に腰を下ろした

「はぁ……はぁ……何とかなったけど……。色々あり過ぎて大変だ」
「あぁ。神風に『初代キング』……曹操率いる英雄派――――厄介な奴らだぜ」
「特に曹操は強い以上に――――不気味だよな……」
「ま、今はこの戦いが終わっただけマシだろ？あれを見てみな、母と娘の感動の再会だ」
新が指差す方向に視線を移す一誠
新の力により元の姿に戻った八坂は九重に抱きつかれていた
「母上ぇぇぇっ！母上ぇぇぇっ！」
「よしよし、九重。もう泣かんでも良い。終わったと言うのに、お前はいつまで経っても泣き虫じゃな」
八坂は優しく九重を抱き締め頭を撫でる
感動の場面を見た一誠は思わず涙を溢れさせた
「うぅ……九重ちゃん、良かった……」
皆の治療を終えたアーシアも涙を流し、初代孫悟空が締めの言葉を言う
「ま、何はともあれ、解決じゃい」
こうして九尾の御大将救出作戦は色々な波乱を巻き起こしながら幕を閉じた……

――――――

修学旅行最終日、前夜に大激戦をしたせいか、治療を終えた後で寝ても全く疲れが取れなかった新達は、疲弊しきった体を引きずって最終日の土産屋巡りを敢行した
息を切らしながら京都タワーも見て土産も買い、遂に京都を離れる時が来た
ちなみにダイアンは最終日の朝に一足早く戻っていったとか
京都駅の新幹線ホームで九重と八坂が見送りに来ていた
九重が八坂と手を繋ぎながら笑顔で一誠を呼ぶ
「赤龍帝」
「イッセーで良いよ」
一誠がそう言うと、九重は顔を真っ赤にしてモジモジしながら訊いてくる
「……イッセー。ま、また京都に来てくれるか？」
「ああ、また来るよ」
発車の音がホームに鳴り響き、九重が一誠に叫ぶ
「必ずじゃぞ！九重はいつだってお前を待つ！」
「闇皇殿、お主も来てくれるか？今度は九重と共に裏京都も案内しよう」
「あぁ、楽しみにしてるぜ。京都の地酒でも飲み交わそう」
それを聞いて八坂はクイクイと手招きし、新にコッソリ耳打ちした

「……その時に夜伽の相手もしてくれんか？お主の優しさと強さに、わらわは虜になってしもうたのじゃ……」
「――ッ。勿論、お相手願うぜ」
八坂から嬉しい誘いを受けた新
八坂はこれから初代孫悟空と会談をするつもりであり、セラフォルーも京都に残って妖怪側と改めて交渉するようだ
新達は新幹線に乗り込み、ホームで九重が叫んだ
「ありがとう、イッセー！皆！また会おう！」
手を振る九重に新達も手を振り、新幹線の扉が閉じる
発車しても九重は笑顔で手を振り続けた
新は戻るまでの時間を寝て過ごそうとシートへ行こうとした
「しまったぁぁぁぁぁぁあっ！」
「あ？どうした一誠？」
「八坂さんにお願いして……お礼のおっぱいを見せてもらうの忘れてたぁぁぁぁあっ！」
「……アホか。寝る」
新はもう諦めモードで吐き捨て、自分のシートへ足を運んだ

「うわぁぁぁんっ！九尾のおっぱいいいいいっ！」
未練がましく一誠は扉にかじりつき、無念の叫びを発したのだった……

京都から帰還した新達は兵藤家に呼び出され、その一室でリアスに怒られていた
正座をする新と一誠にアーシア、ゼノヴィア、祐斗、イリナも反省状態だった
ロスヴァイセは帰還して早々、新の家の部屋で寝込んでいるので不在
リアスが半眼で問い詰める
「なんで知らせてくれなかったの？――――と言いたい所だけれど、こちらもグレモリー領で事件が起こっていたものね。でも、ソーナは知っていたのよ？」
「そ、それはスマないと思ってる……」
説明は京都での戦いが終わった直後に全て済んだのだが、朱乃も小猫も少々ご立腹の様子だった
「こちらから電話をした時に、少しでも相談が欲しかったですわ……」
「……そうです。水臭いです」
「で、でも、皆さん無事で帰ってきたのですから……」

ギャスパーのフォローに一誠は思わず泣いてしまう
「まあ、イッセーは現地で新しい女を作ってたからな。しかも九尾の娘だ」
椅子に座るアザゼルが場を混乱させるような事を口走る
「そ、そんなのじゃありませんよ！ったく、人聞きが悪いな、先生は！」
「でもよ、あの八坂を見た限りじゃ、将来相当な美人で巨乳に育ちそうだぞ？」
「……そ、そうかもしれません。けど！俺はちっこい子への趣味はありませんって！」
一誠とアザゼルのやり取りを見て笑う新
そこでアザゼルが「あ」と何かを思い出したようだった
「そういや、学園祭前にフェニックス家の娘と光帝が駒王学園に転校してくるそうだぜ？」
「フェニックス家の娘って――レイヴェルか。それに渉もか？」
新の問いにアザゼルが話を続ける
「ああ、リアスやソーナの刺激を受けて日本で学びたいと申し出てきたらしい。学年は1年だったか。もう手続きは済みそうだって話だったな。小猫と同学年か。猫と鳥でウマが合わなさそうだが……それを見るのも一興か」
「……どうでも良いです」
アザゼルの一言に小猫は不機嫌な様子だった

リアスも嘆息し、苦笑していた
「まあ、良いわ。皆、無事に帰ってきたと言う事でここまでにしておきましょう。詳しくは後でグレイフィアを通じてお兄さまに訊いてみるわ。さて、もうすぐ学園祭よ。あなた達がいない間、準備も進めてきたけれど――ここからが本番よ。それに――サイラオーグ戦もあるわ。レーティングゲーム、若手交流戦では最後の戦いと噂もされているけれど、絶対に気は抜けないわ。改めてそちらの準備にも取り掛かりましょう」
「「「「はい！」」」」
リアスの言葉に皆が大きく返事をした
学園祭も大事だが、サイラオーグとの一戦も間近に控えている
「イッセーくん、体力が復調したら手合わせしてくれないかい？京都で自分の不甲斐無さを痛感したからね。キミの力を借りたい」
「ああ、木場。ゲームの日まで模擬戦の繰り返しだな。新も参加するよな？」
「あぁ。ただ――明日、明後日はダメだ。用事があるからな」
新の言葉に一誠が「用事って何だよ？」と訊くと、新は財布から〝ある物〟を取り出して皆に見せた
取り出しのは銀色に輝く免許証の様な物
リアスがそれを見て訊く

「新、それは何なの？」
「こいつはバウンティハンターのライセンス、そろそろ更新しないといけないんだ。その為に協会本部まで行ってくる」
新は簡単にバウンティハンターのライセンスについて説明を始めた
バウンティハンターのライセンスはランクを証明する為や、情報を集める為に必要不可欠なもので———ランクが高ければ高い程知り得る情報が多くなったり、報奨金の額も上がったりする
ランクは下からF、E、D、C、B、A、AA（ダブルエー）、S、SS（ダブルエス）、SSS（トリプルエス）と10段階に分かれており———新は上から3番目のSランクに位置している
一誠が新のライセンスを見ながら感嘆の声を上げる
「へー、新ってやっぱ凄いんだな」
「しかも、S級からはライセンスが豪華になっていくんだ。S級はシルバー、SS（ダブルエス）級はゴールド、1番上のSSS（トリプルエス）級はプラチナカラーって具合にな」
「でも、今の強さならもっと早い段階で上がってててもおかしくね？」
「バウンティハンターのランクアップは強さじゃなく、任務成功率の高さによって決められるんだ。いくら強くても、任務を失敗し続ければランクは上がらないんだよ。それにライセンスを更新する際はメディカルチェックも受けなきゃならねぇんだ。健康状

態と共に個人データの入力も済ませた後、協会本部の役員から承認を受けて――初めてライセンスを発行・授与出来る」
「ふ～ん、意外とめんどくさいんだな」
「あぁ。そんな訳でリアス、帰還したばかりで悪いな。明後日の夜には戻る」
「そう、分かったわ。気を付けてね」
「新さん、美味しい料理を用意してお待ちしてますわ」

――――――――

「京都での計画は失敗だったけれど、もう1つの計画の方は調整がまた進んだよ。近い内にお披露目出来そうだね、曹操」
「そうか、それは何よりだ。ジークフリート」
「予定通り、1つは僕が貰うよ。――曹操も使うかい？」
「俺はこの槍で充分だよ」
「――で、赤龍帝と闇皇にやられた目はどうだい？」
「……ダメだな、もう使い物にならない。ふふっ、やられたもんだ」
「フェニックスの涙をわざと使わないなんてね……。では代わりの眼を用意しよう。い

ずれ眼の代償でも彼らに支払ってもらうのかい？」
「まさか、三流の敵役でもあるまいし。良い勉強になっただけさ。この眼のキズは記念だ。――兵藤一誠とヴァーリは俺にとって最高の二天龍だ。楽しいなぁ、全く」

「――って訳DE、神風は『初代キング』と共に行っちまったんDA」
「そうか……。遂に父さんが復活してしまったのか……。神風の奴、このまま父さんに取り入るつもりか？いや……ここまで事を隠してきたんだ。俺の首を取る気でいるのか……それとも――」
「どうします？もう『チェス』はあなたを含めて私達3人しか残ってませんよ」
「3人？神代剣護はどうした？」
「彼も……その神風くんの方についたみたいです」
「……どうやら俺の方針は悉く気に入られなかったと見える……。こうなると『2代目キング』の名折れだ」
「そんな事はありません。あなたは自分で決めた道を貫こうと言ったじゃないですか。私もダイアンくんも、それに共感したから――あなたについていくと決めたのです。

王に必要なのは力だけではありません。――誰かを動かす強い心も必要なのです」
「……そうだな。その点に関しては赤龍帝と闇皇を見習わないといけないな」

――――――

「チッキショウ……ッ。せっかく良い所までいったのに……！グレモリー眷属ホント邪魔！あ～もうっ！カプリンチョ無くなったアッ！買ってくる！」
「荒れておるな、神風。貴様がそこまで怒り狂うのを見るのは久し振りよのう」
「キング、何で撤退なんかしたのさ？あのまま全員ブッ殺しちゃえば良かったのに！」
「ああ、その事なんだが――どうも余の力が上手く発揮出来ておらん」
「力が発揮出来てない？あれだけ強い闇を発してたのに？」
「あれではまだ軽い方じゃ。本来ならばあの疑似空間全てを飲み込む程、深く濃い闇を生み出す事が出来る筈なのに――あの程度しか出せんかった。恐らく……奴か、あの女狐め。まだ余に抗うか。――神風、ブラックウィドウとやらは量産出来るか？」
「今回の戦闘でデータは粗方揃ったよ。後はまた改良を加えるだけさ」
「よしよし、今後はその蜘蛛が我々の切り札になり得るだろう。頼むぞ？」
「任せといてよ」

2297　京都大戦終幕!

第9・5章　蘇らないフェニックスとカオスレンジャー

特別コラボ編！異世界から来た銀魔人！

＝ディープホール　バビロン遺跡＝

魔界の闇黒(あんこく)世界ディープホール
大昔に造られた建物が立ち並ぶ遺跡
その中に1人の男が何かを捜し、石の棺(ひつぎ)を抉(こ)じ開けた
「あったぞ……ついに見つけたぞ!!」
男は棺の中にあった正八面体を手に持ち、狂喜する
「これで、これで……俺の夢が果たされる!!更なる力を得ることが出来るッ!!ハハハハハッ、ハーハッハッハッハッハッハッハッハッ！」
狂った様に笑う男は別世界へ侵略する為に、アカラナ回廊(かいろう)を使い別世界へと行く

――――銀色の魔人と闇の蝙蝠、奇跡の共闘が起きる

――

＝魔界中央　ハンター教会本部＝

鋼弥、アルス、リオ、カナン、シェリル、ドルキー、望紅が集まり、大魔王ルシファーから依頼書が渡されたのだ

――――ドクロ付きの依頼書である

「これが渡されて、呼び出されたメンバーを考えれば相当な依頼ってことか？」

ドルキーはそう言う。

鋼弥がドラゴネルの討伐（契約という形で完了した）依頼もドクロ付きだ。

内容を読んでみないとわからないので、封を開ける。

「とある危険人物がアカラナ回廊を渡り、異界へと潜り込んだとのことだ」

危険人物がアカラナ回廊を渡る。

アカラナ回廊は人間や魔界人が入れば、時空のうねりに飲まれ消滅するか別の世界へと飛ばされる。

かつて葛葉ライドウはアカラナ回廊を探索していたのだ。

「しかし、アリスといい、ウァラクといい……こんだけ魔界の悪魔が異界に彷徨うとなるとマズくないか？」
「それでも我々は異界へと向かい悪魔討伐するまでだ」
望紅の言葉にアルスはそう答える。
場所を特定し、いざ異界の扉へ向かう――――――。

某国にあるバウンティハンター協会本部にて
新は自分のライセンスを更新する為、メディカルチェックを受ける者達が集まる待合室に来ていた
診断前の書類に必要事項を書き、それを受け付け係に提出する
受け付け係の女医が書類の確認を済ませると、新に番号札を渡す
「ではこちら、５７番の番号札を持ってお待ちください」
女医から番号札を受け取った新は呼ばれるまで室内カフェで一服する事に
注文したホットココアとチーズケーキをテーブルに置き、ゆっくりと寛ぐ
そんな時、周りにいるバウンティハンター達からの話し声が聞こえてくる

「おい、見てみろ。あいつが竜崎新だ」
「ああ、あのリアス・グレモリーの眷属になった男か。幼少の頃からバウンティハンターとしての訓練を受けてきたと言う……」
「あの若さでＳＳ級（ダブルエス）にランクアップか……。若造のくせに成り上がりとは良い御身分だな」
「だが、実力は本物だぞ。『禍の団（カオス・ブリゲード）』や悪神（あくしん）ロキをも退（しりぞ）けたと聞く。凄まじい成長速度だ」
「こりゃ近い内にＳＳＳ（トリプルエス）級への昇格試験も来そうだ。もしかしたら、役員からの推薦昇格なんて事も……」
非難めいた声も多少あるものの、新の功績・実力は賞賛されているようだ
「いよいよＳＳＳ（トリプルエス）級にリーチか……」
一息ついた所で新の番号が放送で流れ、新はメディカルチェックに行く
視力検査、聴力検査、血圧検査、脳波検査、ＣＴスキャン等々――――様々な検査を済ませた結果……健康状態に異常は確認されなかった
最良の結果でメディカルチェックを終える事が出来た新は、次に協会本部の役員達が待つ大広間へ足を運んだ
「竜崎新殿。本日までの貴方の任務成功率、功績を統合して考慮した結果――――Ｓ級か

らＳＳ(ダブルエス)級への昇格を容認致します」
「ライセンスの発行は明日の午後１９時に完了しますので、また明日協会本部へ」
ライセンス更新の手続きを済ませた新は協会本部から外へ出る
ポッカリと時間が空いてしまったので、とりあえず何処に行こうか思索する
「さてと……何処で暇潰そうか。カジノに競馬、ゲーセンも良いな」
財布の中身を見て最初の暇潰しスポットに足を運ぼうとした矢先――――何らかの気配を察知する
禍々(まがまが)しいオーラとぶつかり合う、この世のものとは違う魔力の波動を感じた新は辺りを見渡す
「……気になる波動だな、こいつは。……仕方ねぇ、行ってみるか」
新は財布をしまって闇皇(やみおう)に変異し、波動の出所(でどころ)を目指して飛び立った

＝廃工場＝
たどり着いた場所は廃工場だ。
ＣＯＭＰを使い、どの世界や現在地を調べる鋼弥。

「ここは駒王町のようだな俺たちや崇仁たちが住む世界が違うが……」
例えば鋼弥たちが知っている駒王町がＸ世界とする。
佐藤崇仁がいるのがＹ世界とする。
そして、新たに着いたこの世界はＺ世界と名付ける。
「……この世界の記録とポインターはこれでＯＫだ」
ＣＯＭＰを操作して登録完了する。
鋼弥たちは周囲を警戒している、何やら邪悪な気配がするからだ。
姿を現したのは……動物や海洋生物を模した怪人たちである。
「悪魔とは違う存在ね……」
「テレビで見た特撮の怪人ってやつかい？」
「人間とも違う感じですね」
それぞれ武器を構え、能力を解放する。
憶することは無く魔の者たちを刈る眼だ。
「何者かは知らないが、退いて貰うよ」
リオは魔方陣を描いてマハラギダインを放ち、異形達を焼き払う。
焼ききれない者たちがいるが、そこは前衛が得意な者たちの出番だ。
アルスはサーベルを構えて怪物たちの両腕を斬り飛ばし、頭を斬り捨てる。

ヒュンっと払い、襲ってくる者たちをまた斬る
「オラオラっ!!退きやがれ!!」
ドルキーはトゥインクルスライサーを構え、横水平にブン投げて斬る。
風で操作し、角度調整をした手裏剣は敵を巻き込み斬る。
「ハァッ!!」
カナンは回し蹴り、チョップ、エルボーとその華奢な身体とは思えない強烈な一撃で敵を叩きこむ。
怪人たちは一斉に飛び掛かるが、カナンは深呼吸して――――
「ドラゴンハウル!!」
咆哮による衝撃波で飛び掛かってきた者たちを一斉に吹き飛ばす。
シェリルは兜の隙間から目を光らせ、大刀を振りかざして薙ぎ払う。
剣術ではなく力技で繰り出される一撃なので敵は粉々になる。
「オリャア!!」
望紅は気合が入った炎のローキック、火炎弾を放ち植物系の怪人を焼き払う。
噛みついてかかろうとするが、跳躍し炎の踵(かかと)落としを決める。
「死にたい奴から、かかって来い……」
鋼弥は凍るような視線で怪人たちを睨む。

一瞬だけたじろぐ怪人達だが、飛び掛かっていく。
両手を軸にして、両足を開き――――
「真覇豪旋脚!!」
独楽（コマ）の様に回転して敵を蹴り飛ばす。
ものの数分で片付き、怪人たちは全滅した。
「こいつらはいったい何なんだ？アタシたちが知っている悪魔じゃあ、どれも見た事ない」
望紅が倒した怪人の頭を鉄パイプで突っつく。
「もしかして、ディープホールから逃げ出したと言う可能性もあるわね。あの世界は未開の地が多くあるから」
あらゆる憶測が浮かび上がるが、どれも根拠はない。
その時――――先ほどよりも大型の怪人が出現し、リオに襲い掛かろうとする。
「リオ!!」
鋼弥がいち早く駆けつけてリオの前に立ち構えるが――――大型の怪人の首がゴロリッと斬れて地に落ちた。
其処に立っていたのは――開いた翼を彷彿させる肩。
――背中を守護する漆黒のマント。

――エメラルド色に光る目と全てを噛み砕きそうな口。
――あの怪人を斬り捨てだろう黒い剣を手にしていた。
禍々(まがまが)しい異形の蝙蝠を模した鎧の人物が立っていた。
全員が警戒し、いつでも迎撃出来るように攻撃態勢を取る。
すると鎧の人物は鎧を解き、中を見せる。
少し逆立てた金髪とロックミュージシャンの様な私服の男性だ。
(師匠が悪ガキと言いそうだな……)
そんな事を思いつつも、目の前の人物に話しかける。
「仲間を助けてくれて、ありがとう」
礼を言う鋼弥、相手は――――
「ああ、気にすんなって」
ニシシッと笑う男。
ここではゆっくりできないので近くのホテルへ向かう

＝近くのホテル　大人数用客室＝

「俺の名前は竜崎新。バウンティーハンターだ」
「バウンティーハンターねぇ、俺らの様な何でも屋のハンターと似たような職業か？」
ドルキーがそう聞き返すと、新は「そんなものだ」と言う。
「もう1つあるが、俺はリアスの眷属。”兵士（ポーン）”の役割だ」
「リアス・グレモリーの眷属になっている者か。時に、あの怪人たちが何者か知っているか？」
アルスが尋ねると新は答えた。
「あれは闇人（やみびと）という怪物、いや……元は人間だ」
新の”人間”という事に言葉に鋼弥たちは驚愕した。
まさか襲ってきた怪物たちが元々は人間だというのが誰が予想できたのか。
「簡単に説明すると闇人（やみびと）は万物が秘める邪な（よこしま）感情、あらゆる欲望が集結――それらが覚醒する事で誕生する魔族の一種だ」
「じゃあ、俺たちはバケモノになった人間を倒していたという訳か……」
知らなかったとはいえ、元人間を殺してしまったことに罪悪感を感じる鋼弥たち。
新はそれに察したのか――
「気にするな、と言っても……気休めにしかならないけどな。闇人（やみびと）にされちまったら元

に戻す方法はほぼ無い。倒すことでしかあいつらを楽にさせられる方法なんだよ」
新は鋼弥たちにそう言う。
「で……お前らはいったい何者なんだ？」
「ああ、そのことも話をしよう」
鋼弥たちは自分たちが何者なのか、何処の出身者なのか、自分たちの目的を話した。
新もまた情報を交換した。
「魔界の出身、ここと は別の駒王町や勢力の事情……この世界に逃げ込んだ危険人物を追ってきたのか」
「この世界には闇人（やみびと）と呼ばれる三勢力共通の敵勢力が存在するのか……」
互いの情報を知り、納得する双方。
こちらの世界にいるリアスたちはとある事情のため力は貸せないようだ。
仮に会ったとしても余計な混乱をさせるわけにもいかないので、良かったとも言えるが……。
明日から本格的に捜査が始まる

夕ご飯を食べ終えてくつろぐ男性陣。
女性陣はお風呂に入ってゆっくりと体と心を休めるようだ。
新はスッと立ち上がり部屋を出ようとする
「何処かへ行くのか？」
「ふふふ、あんたら女性陣の裸を見るためよ」
その言葉に呆れる鋼弥とアルス。
「……莫迦か貴様は」
「……そういうのはよくないぞ」
帽子を深く被るアルスと両手を組んでため息をつく鋼弥。
「新。悪い事は言わねぇからそれだけはやめておいた方がいいぜ。特にカナンと望紅にバレたら八つ裂き刑だ」
ドルキーは止めるように注意するが……新は勿論止まらない
「何を言う。女が風呂に入っているのならばそれを見るのが男ってもんだろ」
新は力説するが、鋼弥達はシラーっとしていた。
「まぁ、鋼弥は朱乃と付き合ってあの豊満な胸を顔で埋めているだろうよ？」
ニヤニヤッとしながらドルキーの言葉に鋼弥は顔を赤くして反論する
「な、何を言う!?」

「否定すんなって、実際にどうなのよ？あの豊満な胸で味わってんだろ～？」
「さっきの戦闘でクールに決めているけど、案外ムッツリスケベか」
ドルキーの言葉に便乗してからかう新。
「あ、新まで、何を言うんだ!!」
「とにかく……俺は行くぞ。いざ桃源郷へ!!」
新は風呂場へ猛ダッシュしていく
「骨は拾ってやるぞ……」
ドルキーはアーメンと十字に切る
鋼弥とアルスはため息をついて、トランプの大富豪の続きをする事にした……。

＝大人数用大浴場＝

湯気がたちこもる浴場。
リオ、カナン、望紅、シェリルは戦いの垢を落とすために湯船に浸かっている。
「いいお湯です」

「疲れが取れるわね」
リオとカナンの胸がプカプカと浮いている。
望紅は自分の胸をさするが……悲しいかな、全然無い事に落胆する。
「いいさ、いいさ……まだ成長できるから……」
泣きながらも今後の成長に期待するしかない。
すると、ドアが開かれる。
一同は振り向くと……其処に立っていたのは新であった（下に水着を履いてます）
「「キャアアア

新は1人だけ風呂場にあってはならないものを目撃する。
それは――――シェリルだ
風呂に入っているのに鎧を脱いでいない……。
「ちょっ!?鎧を付けたまま風呂に入っているのか!?」
逆に言えば、あの鎧の下にどんな身体が……と興味が湧く新だが――――シェリルは大刀を持ち構える。
ドンッと新に近づき大刀を振り下ろすが、新は避ける。
「あぶねー。いきなり攻撃するか?」
「正当防衛だろうが!?なに堂々と風呂場に入ってんだよ!?」
「このド変態!!」
望紅は火炎弾、カナンは風呂桶や石鹸を投げまくるが新は華麗に避ける避ける。
その隙にシェリルが近づき、横水平に斬りかかるが新は跳躍してシェリルの頭上を跳び越す。
シェリルは新が反対側に着地するとみて、剣を振るうが既に距離を離されていた。
「どれ……その鎧の中身を見せて貰おうか!!」
闇皇の剣を顕現させて新は加速する。
シェリルは迎え撃つ準備をして、大刀を構えて振り下ろす――――

ガギィィンッ!!
鎧の接合部分だけをピンポイントに突き――鎧は音を立てて外れた。
それだけではなく、彼女が着ていた戦闘用レオタードまで切られた。
薄紫色の長髪、大きな胸に引き締まった腰、弾力がある臀部(おしり)。
シェリルの裸体が新に見られて、眼がグルグルとなり――
「おお♪」
「い、い、イヤァァァ

「……だが、連携は最悪な状態だぞ」
アルスの言う通り風呂場に堂々と潜入し、挙句の果てにはシェリルの裸体を見るという事をしたのだ。
女性陣達からフレンドリーファイヤーされてもおかしくない状態である。
先が思いやられそうなだと、心配になる鋼弥。
明日に備えて、就寝する。

～翌日～
昨日の浴場突撃事件で女性陣たちに睨まれている新。
そんな事件を起こした本人は気にしていない様子である。
「……何で止めなかった？」
「止めたさ。新がズタボロ雑巾にされるかと思ったけどまさか生還するとは思わなくてさ」
望紅の剣幕した表情に怯みつつも返答するドルキー。
「裸体を隠さなきゃいけない状況に全力の攻撃なんかできるわけないでしょ!?」

カナンは頬を赤くして、涙目になって反論する。
「一番ショックが大きいのはシェリルさんですよ……」
鎧を修復して装着しているが、裸を見られたショックが大きいのか膝を抱えて座り込んでいた。
流石に悪い気がしてきたのか、新は後頭部をポリポリとかく。
「あ～、流石に悪かったよ。許してくれとは思わないけど……」
謝罪の言葉を聞いて４人は〝う～ん〟と考えて――――
「これからの行動で許してあげるわ」
「次にセクハラしたらマジで殴るな」
カナンと望紅はそう言う。
鋼弥とアルスはやれやれ、という顔をして捜査を開始する。

――――――――――――――――――――

二人一組となって、異変が無いか捜査する。
チーム分けのメンツはドルキー＆望紅、リオ＆アルス、カナン＆シェリル、鋼弥＆新だ。

それぞれ、散開し調べるが――――

「中々、見つからねぇなぁ……」

「気配も感じない」

鋼弥と新の二人。

闇人（やみびと）がいたら異変のボスにたどり着けるのだが……それもいない。

「ところでさ、鋼弥は朱乃と付き合っているのか？」

「……付き合っている。朱乃が堕天使のハーフという事を明かして、弱さを知った。だから、命をかけて守ると心に決めた」

鋼弥の決意を聞いて新は感心していた。

付き合った時期を考えれば、三大勢力が和平準備した時のだ。

「そういう新は誰かと付き合っているのか？」

「付き合っているというか、俺の家にはリアス、朱乃、小猫、ゼノヴィア、ロスヴァイセと一緒に暮らしているな」

「それは一誠が言うハーレムというものか。多くの女性と関係を持つのはあまり良い気がしない……」

「お前みたいに1人を愛する奴がいれば、そう言う奴もいる。俺は多くの女性を愛する。それに俺は欲深い生き物なんだ。欲しいと思った女は必ず傍に置く――――それが俺の

愛情表現だ」
「愛情表現は賛同できないが、新なりの愛し方なのだな」
そんな会話をしているとＣＯＭＰのアラームが鳴り響き、起動する。
無数の点が向かっており、次々と消えていく。
鋼弥と新は共にその場所へと向かった。

たどり着くと辺りは闇人（やみびと）の死体だらけだ。
他のメンバーも合流して、警戒しながら進む。
死体の山から誰かが来る。
髪はオールバックにして、ギザギザの歯が特徴の男だ。
手には白い槍を持っている。
「よぉ？お前たちも世紀の目撃者となりに来たのか？」
「世紀の目撃者？何言ってやがるんだ？」
「この死体の山はお前がやったのか？」
「ああ、小賢しくも俺を狩りに来たんだろうが、返り討ちにしてやったよ」

ニィッと笑う男。
新は睨みながら問う。
「で、誰なんだお前は？」
「そんなに知りたければ教えてやろう……。俺はオルガム!!オルガム・ザーディムだッ!!」
オルガム・ザーディム――その男の名前を聞いて驚く魔界組。
「まさか!?風と森林の国に疫病を流行らせて多くの死者を出した魔界人!?」
「けど、シンディさんが捕まえてディープホールへ追放された筈!?」
驚くのも無理はなかった。
鋼弥達が見た当時は白衣を着ていた研究者のような姿だ。
今の姿とまるで別人だったのだ。
「くくくく……。あの奈落世界に追放されても、復讐を忘れなかった。あの生意気な女を食い殺すまで、俺は強くなったのよ。そして……疫病を司る悪魔パズズと地獄の女神ラマシュトゥのデビルソースを食らい……」
オルガムの体が変貌する。
背中から鷲の翼と頭が生え、嘴（くちばし）が開かれると鋭い牙が並び立つ。
獅子の鬣（たてがみ）、毒々（どくどく）しい紫色の爪と鉤爪、バビロニア風の衣装を身に纏い――４ｍもあ

る怪物へと変わり果てた。
【力を得たのだ!!我が名は疫病王オルガム・ザーディム!!畏(おそ)れ、敬(うやま)い、頭(こうべ)を垂れよ!!血と贄を捧げよぉぉぉぉ!!】
「バビロニア神話において疫病を司る二大悪魔を喰らい、力を得たのか……!!」
ただの人がデビルソースを喰らっても失敗してスライムになる。
オルガムは力への渇望、復讐によってパズズとラマシュトゥを喰らい、人を捨て悪魔へとなったのだ。
しかし……
「お前は王ではない。人でもない悪魔でもない……ただの化物だ」
「ああ、闇人(やみびと)なんかよりも酷い化け物だな」
鋼弥は拳を握り締め、新も剣を振り回して構える。
【貴様らの血肉を喰らってやるわ!!】
バケモノと化したオルガムが鋭い爪で引っ掻きに掛かるが、一同は散開。
まず鋼弥は素早い動きで掻い潜り、拳と蹴りを放つ。
続けて新は剣による斬撃を連続で与える。
【そんなもの……効かぬわ!!】
オルガムは風を放って2人を弾く。

【くたばれっ!!マハザンダイン!!】
強烈な風を放ち、切り裂く風の刃は木々や廃墟の建物を切断する。
「近づけない……!!」
オルガムはリオへと強襲し、リオが鷲掴みされて捕まる。
「リオ!!」
【くくくく、こいつから溢れる魔力を使えば俺の計画に大いに役立つ!この鎗――マルテを使ってなぁ!!】
オルガムは翼を広げて旅立とうとするが、新たちは阻止しようと飛び掛かる。
【貴様たちはコイツらと相手にするがよい!!】
オルガムは口から黒い玉を2つ生み出し、罅が入り割れる
サソリの尻尾を持つトカゲ――ムシュフシュ。
七つの頭を持つ毒蛇――ムショマッヘ。
二体の邪龍が威嚇の声をあげて立ちふさがる。
「鋼弥、新!!俺の風で追いつかせる!!」
ドルキーの両手から竜巻を生み出し――
「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!」
二人目掛けて撃ち、二人はタイミングよく竜巻に乗り跳躍してオルガムの後を追う。

「我々はこいつらを始末するぞ!!」
アルスはサーベルを抜き放ち他の面子も武器を構えた。

リオは目を覚ますと、縛られて身動きが取れない
彼女の眼前でオルガムがニタニタと嗤っている。
【くくく……空をみるがいい】
リオは薄暗くなった空を見る。
其処には複雑に描かれている魔方陣があった。
【あれはなぁ、生贄を捧げたその時――――疫病を蔓延する方陣だ。この世界は疫病が流行り、何もかもが苦しむ世界となる。そして、そのマイナスエネルギーを喰らい――――俺は神をも凌ぐ力を得る!!】
マルテと呼ばれる鎗を手にし、高々と宣言する。
【今こそ、この世界に疫病が蔓延する世界を!!】
鎗を天高く突き上げ、縛り付けているリオに突き刺そうとする。
「きゃあああああああああああああああああああああああ!!!!」

リオは来るであろう死と痛みに悲鳴を上げ目を閉じるが――――

――ガシッ!!

目を開けると……鎗の刃を止める鋼弥、闇皇の鎧を身に纏った新が立っていた。

「女をそんな風にするんじゃねぇ……よっ!!」

新は鎗を持っている手を剣で斬りおとし蹴飛ばす。

オルガムは翼を巧みに使い、吹き飛ばされるのを阻止する。

【無駄な事を……この世界は俺の住みよい世界になるのだ】

オルガムは切り落とされた手を拾い上げ、くっつけて再生する。

鋼弥はリオを解放させ、鎗を拾い切っ先をオルガムに向けた。

「貴様の住む世界は無いっ!!」

剣を横に振るい構える新も――――

「人様の世界で、んな事をやるんじゃねぇ!!」

（ＢＧＭ：大魔導陣の激闘）

――

ムシュフシュとムショマッへと戦うアルスたち。
両者とも最大の特徴は強力な毒を持っている。
二匹は口から毒ガスのブレスを放ち、毒地帯にしようとする。
ドルキーの風で毒の息を押し返し、望紅は火炎弾を連続で放ち、二匹の顔面に当てる。
カナンがムショマッへに飛び掛かり、右手を鉤爪に構える。
「ドラゴンクロー!!」
勢いよく振りかざし、ムショマッへの七本の首のうち三本を引き裂く。
追撃にアルスはサーベルを構えて――――
「デス・アンダルシア!!」
刀身が黒いオーラに包まれて、真横一閃に薙ぎ払い四本の首を斬り飛ばす。
シェリルは大刀を横に構えて、回転斬りしてムシュフシュの両目を斬り潰す。
兜だけを外すと髪は右手に絡まり、ランスとなる。
「はああああああああああああああっ!!」
一撃必鎗（いちげきひっそう）。
鎗は鱗を突き抜けてムシュフシュを仕留めた。

新の怒涛の斬撃でオルガムにダメージを与えるが、すぐ元に戻ってしまう。
「こいつ、どうなっているんだ!?」
「再生能力を持っているのだろうな」
鋼弥はマルテを構えてオルガムの両手両足を貫く。
鎗捌きに関してはタオが教えてくれたから、素人とは思えない動きを見せる。
しかし、敵の再生能力は早く……直ぐに修復する。
【調子に乗るなよ!!小僧どもが!!】
オルガムはマハザンダインを放ち新と鋼弥を弾く。
【デスサイクロン!!】
悪しき禍々しい竜巻を放ち、鋼弥と新を飲みこみ激しく傷をつける。
「今、回復を……!!」
【テンタラフー!!】
激しい閃光がリオの前で弾き、吹き飛ばされる。
立ち上がろうとするが、眩暈(めまい)を起こして行動に移せない。
「混乱魔法……!!」
【貴様は後からだ。まずは、そこの二人から喰らってやる!!】

猛禽類の眼で狙いを定め急降下、鋭い爪で串刺しに掛かろうとする。
「新……この鎗に俺たちの魔力を送るぞ……」
「勝機はその鎗か……」
「このマルテは奴が遺跡から発掘したもので、使い方までは知らない……」
最後の望みに鋼弥と新はマルテを持ち上げて魔力を送る。
するとマルテの形状が変わり、刃先が枝分かれした鎗剣となった。
「オルガム、お前はこの鎗を知らないだろうな。この鎗は病魔を操る者たちを葬り、シンディ師匠が使っていた鎗だ!!」
鋼弥と新は柄を掴んで一緒に飛び、投擲の構えをする。
「「貫けぇぇぇ

多くの者たちを疫病で苦しめ搾取したマグネタイトがキラキラと四散した。
遅れて来たアルスたちは討伐が成功したのを確認し、鋼弥と新を介抱する。

鋼弥達の一件が解決し、別れの時がやって来た。
ゲートの前にいる鋼弥たち、新は見送りに来たのだろう。
「約束だ、受け取ってくれ」
報酬金を新に手渡す鋼弥。
「サンキュー。まぁ、俺はそれ以上に得たからいいけどね」
新がリオ達の方を見ると、女性陣達は手で体を隠して引き下がる。
アルスとドルキーは苦笑いをする。
「新、いつかまた……会える時を待っている」
「おう。その時は魔界の美女とか紹介してくれよ?」
「機会があったらな」
鋼弥と新は拳をコツンっとぶつけ合う。
そして……鋼弥たちがゲートに入ると何もなかったかのように閉じる。

いつか、二人が再会する刻が来るまで――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ただいま」
「お帰りなさい、新。……あら、そのお酒はどうしたの？」
自宅に帰ってきた新を迎えたのはエプロン姿のリアス
新が持っている酒瓶に指を差す
「あぁ、こいつか。臨時収入が入ったんで買ってきた。俺の昇格祝いってヤツだ」
新は懐（ふところ）から発行されたばかりのライセンスを見せつけた
キラキラと輝くゴールドカラーの免許証
晴れてＳＳ（ダブルエス）級のバウンティハンターになった証である
「ふふっ、おめでとう。そう思って私達も準備して待っていたわ」
リアスの案内でリビングに向かう新
そこで目にしたのは――――テーブルいっぱいに並べられたご馳走の数々
朱乃の得意料理である肉じゃが、サラダの盛り合わせから特上寿司に至るまで豪華な料理で埋め尽くされている

朱乃とゼノヴィアが新の手を引っ張り、腰を下ろした新の膝の上に小猫が座る
「新さん、お帰りなさい♪」
「新、昇格おめでとう」
「……先輩、早く座って食べましょう。もうお腹が空きました」
「新くん、合格おめでとー！」
「教え子の合格、私も教師として鼻が高いです」
イリナがクラッカーを鳴らして祝い、ロスヴァイセも賛辞を贈ってくれる
「アラタ、良いお酒を買ってきてくれたのね。私が注いであげるわ」
「あ～っ！レイナーレ様、ズルい～っ！うちにも注がせて～っ！」
「慌てるな、ミッテルト。酒はまだまだあるぞ」
買ってきた酒をレイナーレとミッテルトがグラスに注ぎ、残りの酒をカラワーナが持ってくる
和気藹々（わきあいあい）とした歓迎に新は口元を笑ませた
リアスも新の隣に座り込む
「じゃあ――新の昇格をお祝いしましょう」
「ありがとな、リアス。こんな盛大に祝ってくれて……」
新はこれまでバウンティハンターのランクが昇格しても――嬉しいと感じた実感

が無かった……

自分のランク昇格を孤独に祝ってきたからだ……

昇格しても周りには誰もおらず、常に独りで酒を飲んできただけ……

胸がポッカリと開いた様な時間を過ごしてきた新にとって――――今の状況は何物にも変えられない大切な時間となる……

沸き上がる嬉しさを噛み締め、酒が注がれたグラスを手に持つ

「今日は無礼講だ！とことん飲むぞ！乾杯ッ！」

「「「「乾杯っ！」」」」

ライザー復活作戦！ドラゴンの庭園

某国のとある町
人気(ひとけ)の無い広場で睨み合う複数の人影があった
片方は三人一組の異形チーム
真ん中にいるのは――――狼の様な頭部に赤いマフラーを巻き付けた獣人らしき者
ダンダラ模様の羽織(はおり)を着込み、右肩には『闇』――――左肩には『誠』の文字が刻まれていた
更に背中には日本刀を背負っており、それを右手に持って鞘から抜き放つ
その者の右隣にいるのは犀(サイ)の様な異形だった
首には青いマフラー、西洋甲冑に酷似した外見に左肩から突き出した赤い角
重厚そうな外観の異形が拳同士を打ち付ける
３人めは金色の体躯に甲角(かぶとつの)を生やした異形だ
先程の２人と同じく首に黄色のマフラーを巻き付け、携(たずさ)えた長い銃剣に弾丸を込めて銃口を相手に向ける
一方、その３人チームと対峙しているのは――――体重１００kgをオーバーしそうなデ

ブの村長だった
「おいっ、おぉまえらっ。俺の許可無くこの町に入るんじゃないっ。入りたければ、俺の作ったラーメンを食えっ」
無駄にカッコつけて喋る村長
ラーメン屋でも営んでいるのか、頻りにラーメンを食べるよう推し進めてくる
しかし、３人の異形は全く意に介さない
「そんな物、誰が決めた。俺達の邪魔をするな」
「その通り、我々は崇高なる目的の為に日夜頑張っているのだ」
「貴様のような如何にもモブで殺られ要素満載のデブに用は無い。消え失せろ」
異形達の敵意を浴びたデブ村長は「あぁんっ!?」と言いながらキレた
許さんとばかりに袖を捲り、地を踏み鳴らして構える
「思い知らせてやるっ！俺の編み出した拳法をぉ、うぅけてみろっ！必殺！バク転しながら連続湯切り＆大ジャンプ後に回転を加えながらチャーシューを刻み、盛り付けをしながら百烈ビンタの舞いいいいいいいいいいいいいいいいいっ！」
デブ村長はまず３人の周囲をバク転で回りながらラーメンの湯切りを行い――――その場で大ジャンプ
空中で体を回転させながら隠し持っていたチャーシューを手で刻み、丼に盛り付け

ながら誰もいない空間に物凄い速度の往復ビンタをかました
〝アァァチョチョチョチョオオオオオオオオオオッ！〟と奇声を発して宙に舞い続け、完成したラーメンを片手に着地する
「――――ドヤッ♪」
デブ村長の気持ち悪いドヤ顔に異形３人はそれぞれオーラを滾(たぎ)らせ――――日本刀、銃剣、拳を構える
「……だから、どうした。ただ無駄な動きでラーメンを作ってただけじゃないか」
「……下には下がいるものだな」
「残念な事にこれ以上は付き合わないよ。モブくんの宿命だからね」
異形３人がそれぞれの武器から大質量のオーラを解き放ち、それらがカッコつけていたデブ村長に向かっていく
三位一体(さんみいったい)の波状攻撃が迫り来る中、デブ村長は――――
「マンマァァァ

「用が無いなら、さっさと次の場所へ行くぞ」
「ああ、全ては我らの大願を成就させる為……」
異形達３人は意味深な台詞を残してその町を去っていった……

修学旅行も終了し、季節は秋
とある休日の部室に珍しい客人が来訪してきた
「ご、ごきげんよう」
頭の両端にドリルの様な縦ロールをした美少女――レイヴェル・フェニックス
上級悪魔フェニックス家の息女が訪れてきたのだ
「ごきげんよう、レイヴェル。突然ここに来るなんてどうかしたの？」
「はい、リアス様。突然の来訪、申し訳ございませんわ」
どうやら事前連絡も無しで来訪してきたらしい
レイヴェルは暫し恥ずかしそうにモジモジした後、意を決したかのように口を開いた
「実は兄の事についてご相談がありまして……」
新、一誠、リアスはその言葉を聞いて顔を見合わせる

「ライザーについて？」
リアスがそう訊くと、対面に座るレイヴェルは頷いた
「はい。兄があの一件以来、塞ぎ込んでしまったのはお耳に届いているとは思うのですが……」
「ああ、あれか」と端的に吐く新と気まずそうな顔をする一誠
あの一件とは――1学期に起こしたリアスの婚約騒動である
親同士が決めた縁談により、リアスとレイヴェルの兄――ライザー・フェニックスは許嫁の関係だった
しかし、リアスは自由な恋愛を求めてその関係を破談させる為にライザーとレーティングゲームで対決する事になった
色々な経緯があって婚約は破談となり、縁談の話は白紙に戻った
だが、問題はそのライザーだった
婚約パーティに殴り込んできた新と一誠に打倒されたばかりか、その後に乱入してきた闇人（やみびと）のビショップ――現在は神風一派のリーダーを務める神風に再起不能寸前までボコボコにされた……
それからと言うもの……ライザーは新と一誠に負けた事、リアスを失った事、更に神風にボコボコにされた事で酷く塞ぎ込んでしまった

それは半年近く経った今でも変わらない
沈黙を破るようにリアスが口を開く
「ライザーは……あれから治っていないのね」
リアスの一言にレイヴェルは再び頷き、紅茶の入ったカップに口を付けてから言う
「……本来なら、ここへ来るのも筋違いかもしれません。けれど、兄の治療に何が良いか色々と参考意見を各所で尋ねたところ、リアス様に相談した方が良いと言う意見が少なくありませんでした。他の方法を試しても大して効果もありませんでしたし……」
「私の所？どういう事？」
「兄の心身……精神的な所を直すのなら、リアス様の眷属が持つ……所謂『根性』を習った方が良いのでは？と、そのように意見をいただいたものですから」
〝根性〟と言う答えを聞いて一誠やリアス達は一瞬間の抜けた顔となり、新はクククッと笑った
確かに新と一誠はその点に関しては飛び抜けている
少し緩和した場の空気にレイヴェルの溜まっていたものが吐き出される
「と言うかですね、兄は情けないんです！1度ぐらいの負けで半年近くも塞ぎ込むだなんて……！ドラゴンと闇人が怖いそうなんですよ？あれからレーティングゲームにも参加してませんし、ゴシップ雑誌に好きな事を書かれ放題！新さまとイッセーさまにや

られたトラウマでドラゴン関係に一切触れなくなりましたの。オマケに闇人に関しては名を聞いただけで震える始末……！恨むのならまだ話は分かります。怖がっているのですよ？男なら負けを糧にして前を向けば宜しいのに！本当に情けなくて情けなくて！」

息も尽かさぬマシンガントークに全員が目をパチクリさせる……

相当不満が溜まっているようで、ライザーの状況も酷いと見て取れる

「……でも、いちおう私の兄なものですから」

最後にそう締め括るレイヴェル

心根ではやはり心配している……

ここに来たのも純粋に兄が心配だからなのだろう

新と一誠は互いに顔を見合わせ、立ち上がってからレイヴェルに言う

「そう言う事なら俺達に任せろ。な、一誠？」

「ま、まあ、俺達がやっちまった事だから、立ち直らせるのもやらなきゃいけないと思うし。それに『根性』だろ？根性と言えば俺達だ。悪魔なのに山籠りしたり、常に四苦八苦三昧だしさ。そう言うのは慣れてる」

「四苦八苦してるのはお前だけだろ」

新の指摘に一誠はウグッと唸る

「新、イッセー、これは私の――――」
リアスが「自分がやる」と言いそうだったので、新は手で制止した
「心配するな、俺に良い案がある。ドラゴンと闇人（やみびと）――――両方を克服させる良い案がな……」
「やべっ、新が悪い顔になってる……」
新の企み顔を察して戦慄する一誠
どうやら直ぐにプランが練り上げられたようだ……
レイヴェルはパァッと明るい表情になっていたが、ハッと気付いたように咳払いした
「し、し、仕方ありませんわね。それでは新さまとイッセーさまに頼んで差し上げてよ？せいぜい上級悪魔の為に励んでくださいな。……い、一応お礼を言ってあげますわ」
「あぁ、更生させてやる」
未だに悪い顔を続ける新
リアスは息を吐いてから1度頷いた
「分かったわ。新とイッセーを中心にして、ライザー立ち直り作戦ね」
こうして新達によるライザー復活作戦が幕を開けた

――――

「はぁ……でっけぇぇぇぇぇっ」
一誠は眼前に聳え立つ大きな城に圧倒されていた
冥界のフェニックス家を訪れた新達グレモリー眷属＋イリナ
人間界からグレモリー領へ転移した後、魔方陣を介して何度もジャンプして到着したのだ
『フェニックスの涙』でだいぶ稼ぎを得ているようで、城の大きさからもその様子が窺える
城門が重い音を立てながら開いていき、新達は中へ進んだ
城内の庭園を抜けると、家の者が住んでいる居住区に出る
豪華な造りの扉の前にドレス姿のレイヴェルと使用人数人が待っていた
「ごきげんよう、ようこそフェニックス家へ」
「ごきげんよう、レイヴェル。確かライザーはこの区画に住んでいたわよね？」
「はい、ここから入ってそちらまで行けますわ」
レイヴェル先導のもと、扉を抜けて中を進む
高い天井に豪華なシャンデリア、値が張りそうな絵画に像が辺りに見える
「これはリアス様。お久しゅうございます。それと久しいな、竜崎新」

第３者の声に視線を向けると、階段の前に見知った女性が立っていた
顔の半分だけに仮面をした女性――ライザー眷属の『戦車（ルーク）』イザベラだ
「久し振りだな、イザベラ」
「噂は色々と聞いている。もうまともにやっても私では勝てないだろう」
「あーっ！お兄さ～んっ！」
更に２人分の声が聞こえ、新の背中に抱きついてくる
イザベラと同じライザー眷属の『兵士（ポーン）』で、お揃いの体操服とスパッツ姿のチェーンソー姉妹――イルとネルだった
「お兄さん、来てくれたの？」
「嬉しい～っ！」
「ハハッ、お前らも久し振りだな。よしよし」
新はイルとネルの頭を優しく撫でる
一誠は新のハーレム状態に嫉妬し、悔し涙を１滴流す……
イザベラの案内で新達は階段を上り、広い内部を進んでいく
「イザベラ、ライザーはあれから普段何をしているんだ？」
歩きながら問うと、イザベラは嘆息しながら答えた
「部屋にこもり、１日中レーティングゲームの仮想ゲームをしているか、チェスの強い領

民をわざわざ家に呼び寄せての一局だ」
中を進んで１０分、レイヴェルとイザベラが火の鳥らしきレリーフが刻まれた扉の前で止まる
レイヴェルが扉をノックする
「お兄さま、お客さまですわよ」
一瞬反応が無かったが、直ぐに中から声が聞こえてくる
『……レイヴェルか。今日は誰とも会いたくない。嫌な夢を見たんだ……。とてもそう言う気分じゃない』
それを聞いてレイヴェルは溜め息を吐くが、気を取り直して告げる
「――リアスさまですわ」
一拍開けてガシャーンと中から何かを落とす音が響いてきた
『――っ！……リ、リアスだと……？』
予想外の客だったのか、ライザーの声は酷く狼狽していた
リアスが扉の前に立って言葉を投げ掛ける
「ライザー。私よ」
『……今更何をしに来た、リアス？俺を笑いに来たのか？』
声のトーンは低い――否、それどころか恨めしい声音だった

「……少しお話をしましょう。顔を見せてちょうだい」
リアスがそう言った後、ドタドタとこちらに向かってくる足音が聞こえ――――扉が勢い良く開かれる
中から出てきたのは髪がボサボサでだらしない格好のライザーだった
顔には無精髭も生えている
「振った男にキミは何を話すと言うんだ……!?」
据わった目に怒り口調のライザーだが、視線が新と一誠に移ると途端に顔色を変えた
「せ、せ、せ、赤龍帝ぇぇぇっ！や、や、闇皇までぇぇぇっ！」
ライザーは２人に指を突きつけて絶叫に近い声を発する
「よう、ライザー。随分と堕落したみたいだな」
「ど、どうも、こんにちは」
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
新と一誠は挨拶するが……ライザーは２人の顔を見るなり悲鳴を上げて部屋の中へ逃げていき、天蓋付きの豪華なベッドに潜り込むと叫びだした
「か、帰ってくれぇぇぇぇっ！あの時の事を思い出すのは嫌だ！もう嫌だ！あんなみすぼらしい思いを２度としたくない！」
全員がライザーの様子に驚いたのは勿論、酷く当惑してしまった

否、その様子を見てサディストの心に火を点けた者が約1名……
新は悪い顔をしながらライザーが潜り込んでいるベッドに近付き――
「闇人（やみびと）」
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
「ドラゴン」
「ひぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「神風」
「嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！やめてくれぇぇぇぇぇぇっ！」
「神風がドラゴンと闇人（やみびと）の軍勢を引き連れて襲来」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「……新、やめてあげてちょうだい。余計に傷が広がるから……」
リアスが嘆息しながら新を止め、新は「へいへい」と言って戻る
イルとネルが揃ってライザーを宥めるが、ライザーはベッドの中でプルプルと震えるだけだった
「ライザーは生まれた時からまともな勝負では負けた事が無かったから」
リアスがそう言うとレイヴェルも頷いた
「はい。新さまとイッセーさまに真っ正面からやられてしまったのが体にも心にも大き

く爪痕を残してしまったようですわ」
「でも、ライザーさんも強かったですよ。今だと……どっちが強いかな？」
一誠の疑問に祐斗が口を開く
「今のイッセーくんなら、仮にライザー・フェニックス氏が万全でも引けを取らないよ。いや、恐らく勝てる。精神的な要素――根性が勝っているし、天龍を相手にするプレッシャーで相手は精神を徐々に磨り減らして不死身の特性が揺らぐだろうね。フェニックスの力は不死身の特性が大きなファクターでもあるから、氏にとってそこが揺らぐのは大きな打撃だよ」
「……俺と戦うってそんなに怖いの？相手が新なら分からなくもないけど」
「伝説のドラゴンと言うのと、何を起こすか分からない点だけでだいぶ怖いよ。新くんの場合は……不死身の特性を逆手に取って容赦無く攻撃し続けるから、かな……？」
一誠と祐斗がチラリと新の方を見やると……新は2人の考えを察したのか、再び悪い顔で鼻を鳴らす
一方でレイヴェルはライザーをベッドから出す為、掛け布団を取り払おうと奮闘していた
「お兄さま。リアスさま達がせっかくいらっしゃったのですから、ベッドから出てください！」

「か、帰れ！帰ってくれぇぇぇっ！」
ライザーはそう叫ぶだけだった
「とりあえずライザーを無理矢理外に出すか」
新はそう言って闇皇（やみおう）に変異し、ズカズカとベッドまで歩いてライザーの頭を掴む
ベッドから強引に引きずり出し、扉から部屋の外へ連れ出していく
「い、嫌だ！助けてくれぇっ！殺されるぅぅぅっ！」
「心配するな、殺したりしねぇよ。――たぶん」
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
「新の奴……絶対楽しんでますよね……？」
「ええ、彼の性格からすれば間違いないわね……」

庭で荷物を纏める新と一誠
準備が整った所で一誠が新に訊く
「で、具体的にはどうするんだ？」
「あぁ、さっき連絡したら直ぐに来るって言ってたからな。もうすぐだ」

新が答えてから少し経つと、遠くの空から大きな影が1つ襲来してきた
大きな地響きを立てながら着地する巨大なドラゴン――それには見覚えがあった
「あれ？これって――ワイバーンじゃないか。まさか、呼んだのって……」
「そう、あいつだ」
新と一誠が話している最中、横でライザーが叫んだ
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！ド、ド、ドラゴン……ッ！」
怯えるライザーを他所に、着地したワイバーンが体の一部に扉を出現させる
ドラゴンのレリーフが刻まれたドアからワイバーンの主が姿を現す
「新さん、一誠さん、お久し振りです」
「おう、元気そうじゃねぇか」
ワイバーンの扉（新曰（いわ）くど〇でもドア）から出てきたのは『光帝（こうてい）の鎧』を体内に宿すハーフ闇人（やみびと）――八代渉（やしろわたる）だ
直ぐ後に渉の保護者を自称する白髪の美少女――高峰祐希那（たかみねゆきな）も降りてくる
「いきなり呼び出して、いったい何の用？」
「今日は2人に是非手伝ってもらいたいと思ってな。とあるヘタレ坊っちゃんの更生だ」
「お手伝いですか。良いですよ」

涉は快く了承してくれた
新はライザーを渉達の前まで引っ張ってくる
「紹介してやる。今回お前の更生を手伝う2人だ」
「ライザーさん、でしたよね？新さんからお話は聞いてます。初めまして、僕はハーフ闇人の八代渉と言います」
「……ッ!?や、や、ややややや闇人……ッ!?ひいいいいいいいいいいいっ！嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ライザーは渉の正体を知った途端に悲鳴を上げて逃げようとするが、そうはさせんとばかりに新がライザーの頭を掴む
ライザーの現状を改めて目撃した渉は苦笑し、祐希那はポカーンと口を開けていた
「これは……思ったより酷いですね」
「どんな目に遭えばここまでヘタレになるのよ？」
新はまずライザーがヘタレに至った顛末を軽く説明
祐希那は「情けないわね」と一蹴する
祐希那も昔は闇人のストレイグ・ギガロプスに精神を壊されトラウマを抱えていたが、渉の看病と手助けのお陰ですっかり回復しきった経験もある
2人はこれ以上無いうってつけの助っ人だろう

「一誠さんもお手伝いを？」
「まあ、そんな所。根性を身に付けさせたいと家の人が言っているからさ」
「そうですね。修行するには人が多い方が便利ですもんね」
「うん。俺としては山籠りするのかなぁと思ってるんだけど、新がとっておきの修行スポットに連れていくって言うから任せっきりだ」
　つまり、細かい事は一切放棄して強引に修行させると言うのが今回のライザー更生プランである
「い、嫌だぁぁぁぁぁぁっ！」
　捕まってたライザーが新の手を振り払い、炎の翼を広げて逃亡を図るが――――渉の指示で動いたワイバーンに素早く捕獲されてしまった
　一見すれば補食されそうな鳥である（笑）
「逃げちゃダメですよ」
「ひいいいいいいいいいいいいいっ！」
「それじゃ、俺達も行ってくるぜ」
「部長、アーシア、行ってきます！」
　新と一誠も荷物を纏めてワイバーンに乗り込み、リアス達に暫しの別れを告げる
「新、何か困ったら必ず連絡して」

「おう、分かってる」
「イッセーさんも無茶だけはしないでください！」
「おう、アーシア！」
「私も付いていきますわ！兄を……一緒に立ち直らせたいのです！」
新と一誠がリアス達に暫しの別れを告げる中、レイヴェルが1歩前に出て決意の一言を発する
レイヴェルの決意が灯った眼差しを見た新は愉快そうに口元を笑ませた
「良い目をしてるな。良いぜ、一緒に来いよ。この際だ、他の眷属も一緒に鍛えてやる！」
新の一言にレイヴェルは嬉しそうに「はい！」と元気良く応じてくれた
レイヴェルは素早く魔力で自分のドレスを動きやすい服装にチェンジさせていく
探検家の服装に着替えたレイヴェルは他のライザー眷属達も呼び寄せ、ワイバーンに乗り込んだ
一方でライザーは往生際悪くワイバーンの手の中で暴れている
「い、嫌だぞ！なんで俺が修行なんて泥臭い真似をしないといけないんだ!?」
「これもお兄さまの為なのですよ。我慢なさって下さい」
「俺の眷属達！俺を助けろ！命令だぞ！」

ライザーは同じくワイバーンに乗り込んだ眷属達に助けを求めるが……
「ライザー様、今回は我慢なさって下さい。私達もお手伝いしますから」
「「ファイト、オー！」」
――――手を振って応援してくれるだけだった
それを見てライザーは目玉が飛び出す程のショックを受ける
「お、お前ら！薄情者ぉぉぉぉっ！助けてぇぇぇぇっ！」
遂にワイバーンが庭から飛び立ち、冥界の空へ
ここで一誠は新にこれから何処へ向かうのか尋ねる
すると、新は少し楽しそうな顔でこう答えた
「俺達バウンティハンターの世界でも有名な修行場――――〝ドラゴンの庭園（ていえん）〟だ」
「ドラゴンの庭園？」

冥界のフェニックス家から飛び立って約４０分
ワイバーンは新が提案した修行場――――ドラゴンの庭園へと降り立った
「うわー、すっげー！」

一誠は眼前の光景を目にして呆気に取られていた
目の前で怪獣サイズのドラゴンの他、中型サイズ、二足歩行サイズ、小動物サイズと多種多様なドラゴン達が飛び回ったり走り回ったりしている
「ここは正式な名前こそ無いが、様々なドラゴン達が住んでいる事から――――通称〝ドラゴンの庭園〟と呼ばれている。今のライザーを鍛えるには持ってこいの修行スポットだ」
「凄いですね。いろんな形のドラゴンが飛び交ってますよ」
「こんな場所があったなんてね」
渉も目の前の景色に心を打たれ、祐希那も興味津々
すると、レイヴェルの肩に1匹の小さなドラゴンが停まる
蝶の如く綺麗な羽を畳み、レイヴェルに柔和な笑顔を送る
「新さま、このドラゴンは何ですの？」
「そいつは『妖精龍（フェアリー・ドラゴン）』。人懐（ひとなつ）っこくて人気があるドラゴンだ。歓迎してくれてるんだよ」
「なあ、新。あのフワフワ浮かんでるヤツは何だ？」
一誠がそのドラゴンに指を差して訊く
まるで風船の様に膨らんだ体で宙を漂（ただよ）い、お茶目に舌を出しているドラゴンがいた

「あれは『風船龍（バルーン・ドラゴン）』。文字通り風船の様に膨らんだドラゴン、無害でおとなしい奴だ」
「新さん、ドラゴンの種類に詳しいんですね」
「俺も昔、ここで鍛えまくってたからな。その時に種類を覚えた。他にも尻尾が珍味として扱われる『怠け龍（スロース・ドラゴン）』、霧を操（あやつ）る『濃霧龍（ミスト・ドラゴン）』、果物の実を作る『作物龍（フルーツ・ドラゴン）』と――――ざっと数えて１００種類のドラゴンが集まってるんだ」
「ド、ド、ドラゴンが……っ。ドラゴンがこんなにたくさん……っ」
説明している新の隣でライザーは顔を真っ青にしていた
そんなライザーの頭を掴み、新は一言告げた
「ライザー、このドラゴンの庭園でお前を1から鍛え直してやる。なーに、不死身なんだから死にそうになっても大丈夫だろ？まずは走り込みだ」
「……うぅ、なんてこった」
ライザーは首を横に振りながら顔を両手で覆っていた
一誠はこれから始まる新の修行（イジメ）に苦笑するしかなかった……

修行開始！乳闇戦隊襲来

早速1日めの修行が始まり、それぞれが新の立てた修行メニューをこなす事になった
まずは『兵士（ポーン）』組
新が用意してきた相手となるドラゴンは――――集団で獲物を仕留める『駿足龍（レッサー・ドラゴン）』
姿形がトカゲに酷似した二足歩行型のドラゴンである
『兵士（ポーン）』組の課題は素早い動きの相手を捉える事だ
敢えて三組に分けてそれぞれのコンビネーション向上を図（はか）ってのメニューである
チーム分けは棍（こん）使いの少女ミラとチェーンソー姉妹のイルとネル……Aチーム
猫耳少女のニィとリィ……Bチーム
踊り子シュリヤーとメイドのマリオンとビュレント……Cチーム
3チーム共に苦戦していた
「1匹1匹の動きに惑わされず、常に視野を広くして見ろ！相手を観察する目を養（やしな）うのも戦いに必要な要素だ！」
「は、はいっ！」
「頑張ろっ、お姉ちゃん！」

ミラ、イル、ネルのAチームは小柄な体格を利用して『駿足龍（レッサー・ドラゴン）』の攻撃を掻い潜り、着実に成果を伸ばしていく
ニィとリィのBチームはお互いの背中をカバーしながら得意の体術を叩き込んでいた
「「負けないにゃ！」」
2人のコンビネーション攻撃が1匹を吹っ飛ばし、ドミノ倒しで『駿足龍（レッサー・ドラゴン）』が足を取られる
シュリヤー、マリオン、ビュレントのCチームも負けじと『駿足龍（レッサー・ドラゴン）』の群れを三位一体（さんみいったい）の熱風で払い除ける
「私達もあの子達に負けてられないわ」
「ライザー様だって厳しい修行をしているんですもの」
「私達も甘えてばかりはいられないわね」
どうやら『兵士（ポーン）』達の修行は順調のようだ
新は少し離れた場所に移動し、続いては『戦車（ルーク）』組の修行
イザベラと雪蘭（シュエラン）が相手にするのは――全身が硬い岩石で構成された『鉱石龍（ストーン・ドラゴン）』
2人に課せられた課題は打撃力の向上だ
イザベラと雪蘭（シュエラン）は共に拳や蹴りの連打を浴びせるが、『鉱石龍（ストーン・ドラゴン）』には全く効いていな

い様子……

『鉱石龍(ストーン・ドラゴン)』は低く吼え、尻尾で2人を潰そうとする

2人は何とか尻尾の一撃を回避するが、相手の体に傷1つ付けられないでいる……

「一点に攻撃を集中して打ち込んでみろ！攻撃する箇所を定めてないからダメージが少ないんだ！」

「分かった」

「ええ、やってみるわ」

イザベラと雪蘭(シュエラン)は『鉱石龍(ストーン・ドラゴン)』相手に課題を続行

こちらも順調なので再び移動する

続いては『騎士(ナイト)』組――カーラマインとシーリスだ

彼女達の相手は槍の様に鋭く尖った嘴(くちばし)を持つ『嘴飛龍(スピア・ドラゴン)』

猛スピードで飛来してくる『嘴飛龍(スピア・ドラゴン)』に押され気味になっていた

「カーラマインは速度は早いが、力負けし易い！正面から受け止めるんじゃなく受け流す術(すべ)を身に付けろ！シーリスは剣の振りを小さく鋭くする事を頭に入れろ！大振りは隙だらけだ！」

「受け流す、か……。御指南感謝する！」

「御意です、師匠！」

最初は押され気味だった2人も徐々に動きが良くなっていく
新は三度移動する
『女王』と『僧侶』の魔法組に課せられた課題は魔力の継続時間を伸ばす事
その為に用意されたドラゴンは――魔法や魔力を喰らう『魔食龍』
常に魔力を放出し続け、『魔食龍』に喰わせると言った内容だ
「魔法を多々使う以上、魔力切れは避けなければならない。長距離マラソンと同じ原理だ。魔力が無くなったら元も子も無い。ペース配分を考えて放出していけ」
「思った以上にキツいわね……」
「少しでも気を抜くと、一気に力が抜けてしまいます……」
ユーベルーナと美南風は少々苦戦しているようだ
ライザー眷属達の修行内容はこれが全てである

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！助けてくれぇぇぇぇっ！」
「なんで俺までぇぇぇぇっ!?」
絶叫を上げて逃げ惑うライザー

何故か巻き込まれた一誠も必死で逃げる
２人の背後から迫ってくるのは……全身が赤い鱗に覆われた巨大なドラゴンだった
他のドラゴンよりも幾分か小さい頭に大きく裂けた口
太い腕と足で大地を揺るがす程の突進を続けていた
このドラゴンは『赤恐龍（レッド・ドラゴン）』と呼ばれ、ドラゴンの庭園で最も狂暴なドラゴンとして恐れられている……
鱗はとても硬く、ライザーの炎も全く効いていなかった
その上――――『赤恐龍（レッド・ドラゴン）』の背中には渉、祐希那、レイヴェルの３人が乗っかっている
「ほらほら、遅いって言ってんでしょ！」
「ライザーさーん、一誠さーん、行きますよーっ！」
ビュオオオオオオオオオオオオオッ！
バチバチバチッ！
祐希那は神器（セイクリッド・ギア）――――『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』を振るってブリザードを吹かせ、渉は魔鉄槌（まてつつい）ロンドから雷の球体を幾重にも放つ
恐怖の三重奏にライザーどころか一誠までも恐々としていた……
「うわぁぁぁぁっ！凍る！俺の炎が凍るぅぅぅぅっ！雷も襲ってくるぅぅぅぅっ！」
「新の野郎ぉぉぉぉっ！後で覚えとけ――――ぎゃあああああっ！あっぶ

ねええええっ！」
「ライザーさん、修行中の掛け声は『ドラゴン！』と『ヤミビト！』ですよー！さんっはいっ、ドラ・ゴン！ヤミ・ビト！」
「お兄さま！これぐらいで音を上げてどうしますの！ほら、ドラ・ゴン！ヤミ・ビト！」
渉達に同伴しているレイヴェルもライザーに檄を飛ばす
そこへ様子を見に来た新が声を掛ける
「どうしたどうした！そんなんじゃ踏み潰されるぞ！」
「あ、新！このドラゴンおかしいだろ！殴っても蹴っても倒れないし、なんで俺まで巻き込まれなくちゃいけないんだよっ!?」
「そりゃそうだ。『赤恐龍』は頭が悪い分、パワーが飛び抜けてる上に頑丈だからな。それに――――面白そうだから一誠も巻き込んでみた」
「これじゃタンニーンのオッサンの方がまだマシだぁぁぁぁっ！」
そんな恐怖の鬼ごっこをすること1時間
休憩時間となり、一誠は息を切らしながら水分を補給する
その横でライザーは倒れながら「……し、死ぬ……」と絶え絶えの声を発していた
一誠はまだまだ走れそうなのに、このザマである
「なっさけないわね、このぐらいで。まだ1時間しか経ってないでしょ？」

「ライザーさん、休憩が済んだらもう1度頑張って走りましょう」
涉と祐希那が言うと、ライザーは不機嫌そうに声を荒らげる
「う、うるさい！修行なんて野蛮人のする事だ！」
「何言ってんスか。悪魔だって練習すれば強くなるんですから、やっておいて損は無いですよ？」
一誠も声を掛けるが、ライザーは変わらず愚痴を飛ばす
「俺は生粋の上級悪魔だぞ？受け継いだ血と才能を重んじて貴族らしく生きてこそ上級悪魔だ！それに魔王を輩出したグレモリーの者を許嫁に出来る程の家柄だぞ！それがこんな泥臭い真似をしないといけないなんて……！やってられるかッ！」
ライザーは炎の翼を広げてその場から逃げようとするが――――
「逃げんじゃねぇッ！」
バリバリバリバリッ！
新は剣技クロス・バーストで逃げようとしたライザーを撃ち落とした……
迸る斬撃をくらったライザーは黒煙を上げながら墜落する
「逃げようって気は起こさねぇ方が身の為だぜ？」
「こ、殺す気かぁ!?」
「この程度で甘ったれてんじゃねぇ。次は俺も修行に参加するから覚悟しとけよ」

「ふ、ふざけるな！貴様まで加わったら本当に死んでしまうぞ!?」
「死ぬ？誰が？冗談は顔だけにしな」
「鬼だ……ここに鬼がいる……っ」
新のイジメ加入に恐々とするライザーの肩をポンと叩く一誠
その目は憐れむかの如く澄んでいた……
「頑張りましょう……。俺も1度味わった地獄ですから」
「余計に嫌だぁぁぁぁっ！」

「あれがかの有名な『乳龍帝おっぱいドラゴン』と『蝙蝠皇帝ダークカイザー』か。噂通りの面構えだ」
「我らにとっても懐かしい修行場を訪れた甲斐があったと言うものだ。あのライザー・フェニックス氏も来ているぞ」
「聞いた話によると、あの男は今ドラゴン恐怖症と闇人恐怖症を患っているらしい」
「我々から見ても情けない限りだ。エリートの挫折は立ち直りが遅い。その点、我々は違う。落ちこぼれからここまで這い上がって来たんだからな」

「よし、今日はこんな所か」
夕暮れ時、ようやく1日目の修行が終わりを迎えてライザー眷属達はホッとする
一方でライザーは全身ボロボロで倒れていた……
その理由は新のイジメにあり、『赤恐龍（レッド・ドラゴン）』の追走と渉・祐希那の攻撃に加え、新も容赦無しに攻撃してきたのだ
流星群の様な魔力弾の嵐、連続で放たれた剣技（クロス・バースト）
どれも高密度で撃ってきたのだから疲労度は半端じゃなかった……
そして何故か一誠も強制的に巻き込まれ、仰向けになって呼吸を整えている
「はぁ……はぁ……疲れた……」
「お疲れ様です、一誠さん」
渉が水とタオルを一誠に渡し、受け取った一誠は水を飲んで汗を拭（ぬぐ）う
そこへ祐希那とレイヴェルが鍋と皿一式を持ってワイバーンから降りてきた
「皆お疲れさま。夕食を持ってきてあげたわよ」
「私と祐希那さまでお作り致しましたわ」

レイヴェルが全員にご飯の盛られた皿を配り、祐希那が寸胴鍋を石の上に置く
メニューはキャンプの定番料理――カレーである
「おおっ、美味そう！」
「それもただのカレーじゃないな。この良い匂い……『作物龍（フルーツ・ドラゴン）』のフルーツも入れたのか」
「そうよ、修行の合間に採ってきたフルーツを入れて煮込んだわ」
祐希那が順番にカレーのルーをかけていく
そして実食（じっしょく）
「ん～っ、おいし～っ！」
「ホント、美味しいわ」
「ピリッとした辛さの後にフルーツの甘味が来るとは……見事だ」
祐希那とレイヴェルが作ったカレーに全員が大絶賛
新と一誠も思わず食が進む
「ほら、ライザーさんも食べましょう。美味しいですよ？」
「お兄さま。せっかく作ったのですから、いい加減起きてください」
「こ、こんな時に食欲なんか出るわけないだろ……」
ライザーは疲弊した体をようやく起き上がらせるが、疲労が溜まり過ぎて食欲が出な

いでいるようだ
　そうしてる間に新と一誠はカレーをおかわり、２皿目に突入した
「で、新。明日も同じ様なメニューで行くのか？」
「そうだな。だいたい４、５日は今日と同じメニューをする予定だ。そこから先はまた追々（おいおい）考えていく」
「じゃあ４、５日はお前のイジメの餌食か……」
「今のライザーはドラゴンと闇人（やみびと）に対する恐怖心を取り除かなければどうにもならねぇ。そこを治さない限り、次のステップには進めねぇんだよ」
「ドラゴンと渉と新のトリプルコンボか……。更に酷くなりそうな予感しかしない……」

「ひ、ひいいいいいいいっ！」
　修行を始めてから３日目に突入
『赤恐龍（レッド・ドラゴン）』に追われるライザーは相変わらず悲鳴を上げて走っていた
　その背中にいる渉が逃げ回るライザーと一誠に容赦の無い攻撃を幾重にも放つ

一誠は徐々に慣れてきたのか、避けたり打ち返したりするが――――ライザーはこちらに関してはまだまだだった……

神風の雷が脳裏に甦(よみがえ)ってしまい、すぐ逃げに転じてしまう……

一通りイジメを終えた新は岩場で休憩しており、そこへレイヴェルが差し入れを持って現れた

「……兄は如何(いかが)でしょう？」

「まだまだ時間掛かりそうだな。まぁ、文句言ってもやる事はやれている。一誠もタンニーンとの修行を始めた時はあんな感じだったからな。後は慣れだ」

「そうですか……。少し安心しました」

レイヴェルの表情が少し緩和し、新は差し入れのパンケーキを食べる

「このパンケーキ、美味いな」

「ほ、本当ですか……？」

「あぁ、嘘なんか言わねぇ。素朴でありながらこの仄(ほの)かな甘味……。なかなか出せるものじゃねぇよ。マジで美味い」

素直な感想を述べた新

それを聞いてレイヴェルは口元に手を当てて自慢げに笑む

「と、当然ですわ！私のパンケーキが食べられるなんて新さまは幸せ者ですわよ！感謝

しながら味わってもらいたいものですわ！」
「はいはい」
「な、何ですか！その反応は！もう！せ、せっかく朝早く起きて……」
「朝早く？」
「い、いえ！こんなもの少しの時間で何個でも作れます！今日はたまたま目覚めるのが早かっただけですわ！」
レイヴェルの可愛らしい反応を見て新はクスクスと笑い、パンケーキをもう1つ食べる
そんな光景を他所にライザーは『赤恐龍（レッド・ドラゴン）』と渉の追撃で吹き飛ばされ『ぎゃあああっ！』と悲鳴を上げていた
パンケーキを食べ終えた新が修行（イジメ）に参加しようとしたその時――――何かの気配を察知する
一旦修行の中止を呼び掛け、皆を集めた
「……？どうかしたのか、新？」
「気付かないか、一誠？何かいる気配だ……。それも3つ、かなり強力な奴らの気配……」
そう言われて気配を探るよう集中してみると、一誠もその気配に気付いた

涉と祐希那も警戒を強め、ライザー眷属も主とレイヴェルの周りを固めていく
だが、その警戒心は一気に崩される事になる……
「「オッパイジャンプッ！」」
突如飛んできた意味不明の単語と共に現れた３人組
赤、青、黄色のマフラーを首に巻いた異形３人が新達の眼前に佇み、彼らを引き立てるかの如くマフラーを靡かせるそよ風が吹く
のっけから強烈なインパクトを放つ異形の登場に新達の表情が固まる
「な、何だお前ら……？」
現れてきた異形３人組に一誠が恐る恐る声を掛けてみると……赤いマフラーをした狼型の異形はフッと鼻を鳴らして答えた
「我々が何者か、それを知るにはまずコレを聞いてもらおう」
そう言った赤いマフラーの異形が何処からか小型の機械を用意してスイッチを押す
すると、機械から音楽が流れていく……
まるで日曜日の朝から始まる戦隊物の様な軽快かつ力強い音楽が流れ、更に機械が映像らしき物を宙に映し出す
『史上最高の夢を掴む為、１つの志を共に行く者達がいた！新メンバーを募集する中、大きなお友達の夢と希望と情熱を背負い――――戦う！乳闇戦隊ッ！オッパイジャーッ

！』

な　ん　だ　こ　れ　は

その一言が新達の心中でシンクロし、歌と映像の全貌が映し出される

「乳闇戦隊（ちちやみせんたい）オッパイジャーの歌」

作詞・作曲その他諸々（もろもろ）……オッパイジャー3人

パ・イ・オッツ！（サイコーだァァ！）
パ・イ・オッツ！（揉むんだァァ！）
光を遮（さえぎ）り　闇を駆け抜ける
地獄の底から　這い上がりし3人
そんな我らはオッパイジャー！
おっぱい求める戦士さ♪
巨乳も♪（イエス！）美乳も♪（ＯＫ！）ちっぱい♪（ゴチです！）
全てのおっぱい愛するぜ♪
巨乳フェチとか　ちっぱい好きとか

偏(かたよ)りある奴ぁ負け組さ！
おっぱいが好きなら全てを包め！
どの胸にも夢と希望が詰まってる♪
至宝のおっぱい探す為　　止まらず挫けず突き進め！
揉むぞ！吸うぞ！摘まむぞ！しゃぶるぞ！
乳闇戦隊オッパイジャーッ！

歌と映像が終了した直後、赤いマフラーの異形がポーズを決めて名乗る
「オッパイジャー・1号！斬撃(ざんげき)のコジュウロウッ！」
次に青いマフラーをした甲冑型の異形がポーズを決めて名乗る
「オッパイジャー・2号ッ！迫撃(はくげき)のリョウマッ！」
最後に黄色いマフラーをした甲角(かぶとづの)の異形がポーズを決めて名乗る
「オッパイジャー・3号！銃撃(じゅうげき)のノブナガッ！」
異形3人がそれぞれの立ち位置に着いて最後の名乗り口上を叫ぶ
「3つの闇が光を飲み込み！」
「大願成就の道を行く！」
「乳闇戦隊(ちちやみせんたい)！」

「「オッパイジャーッ！」」
チュドォォォォォォォンッ！
ポーズを決めた3人の背後でカラフルな爆発が巻き起こる……
渉が軽く拍手をする中、彼以外の全員がどういうリアクションをすれば良いのか分からず困惑していた
「……一誠。お前の趣味をとやかく言うつもりは無いが、せめて知り合いだけは選んだ方が良い……」
「ちょっ、待ってくれ。俺にあんな痛い連中の知り合いなんかいねぇよ!?」
「――とまあ、我々の事を分かってくれた所で」
「1ミリも理解してないんだけどっ!?」
一誠のツッコミを無視して機材を片付けるオッパイジャー
片付けを終えた所で改めて対峙する
「何故この場に我々オッパイジャーがいるのか、聞きたいだろう？」
「いや、別に聞きたくね――」
「特別に教えてやろう。我々オッパイジャーは……常に女の子のおっぱいを求めているのだ」
オッパイジャー・1号ことコジュウロウが新の言葉を遮(さえぎ)り、自分達の行動理念を自信

満々に述べていく
「女の子のおっぱいには夢と希望と愛が詰まっている。我々オッパイジャーは全ておっぱいを制覇する為に日夜戦い続けているのさ」
次にオッパイジャー・2号ことリョウマが指を差し、オッパイジャー・3号ことノブナガが肩に銃剣を乗せながら言う
「そして、次のターゲットにしたのが――――君達ライザー・フェニックス眷属だよ！」
「主のライザー・フェニックスが弱体化してる今なら俺達の敵ではないと判断し、ここまでやって来たと言う訳だ」
「……言ってる事が全然分からねぇけど、俺達の敵だって事だけは分かるぜ」
「そうですね。しかも、このオーラ……3人とも闇人（やみびと）ですね」
どうやらオッパイジャーとは3人の闇人（やみびと）による戦隊のようだ
〝闇人（やみびと）〟と言うフレーズを聞いてしまったライザーは途端に顔を青くし、ガタガタと震え始めた
主とレイヴェルを守ろうと集まるライザー眷属
新達も戦闘体勢に入るが……
「まず邪魔者には退場してもらおうか」
コジュウロウが手を出したのを合図に、残りの2人も同じく手を出して闇のオーラを

発する
オッパイジャー3人のオーラが交わり――――ドーム状の結界を展開していく
広がるドーム状の結界はライザーとレイヴェル、祐希那、ライザー眷属達を飲み込み
――――新、一誠、渉を外に弾き飛ばした
「な、何だ!?なんで俺達だけ!?」
一誠と渉は直ぐに籠手を出して結界を殴るが……バチバチと跳ね返されてしまう
新も参戦するが、殴っても蹴っても全く寄せ付けない……
「どうなってんだ、これ!?」
「僕達の攻撃が全然効いてません……」
「フフフッ、教えてやろう。この結界は我々が苦労と努力の末に編み出した特殊な結界、女の子と弱い奴以外は全て結界の外側に放り出す術だ。我々を倒さない限り、この結界を解く事は出来ん」
コジュウロウが自信満々に説明してくる
つまり、外側に放り出された新達ではどうする事も出来ず、結界の中にいる祐希那達が奴らを倒すしかない
祐希那がオッパイジャーを憎々しげに睨む
「女と弱い奴しか入れない結界って、要するにアンタ達は卑怯でスケベな最低野郎って

事じゃない！」
「果たしてそうかな？最初に言っておこう。我々は――――か～な～りい、強い！」
何処かで聞いた事ある様な台詞を吐くコジュウロウを筆頭に、リョウマとノブナガも構える
ここで祐希那はライザー眷属の『兵士（ポーン）』組を集めて作戦会議をする
「ちょっとお願いがあるんだけど。まず８人であのドスケベ達の動きを止めて欲しいの」
「私達で？その間あなたはどうするの？」
「成果を上げたのはアンタ達だけじゃないわ。少しでも良い――――私が禁手（バランス・ブレイカー）化を完了する時間さえあればね。禁手（バランス・ブレイカー）になってあいつらを瞬殺してやるわ」
「なるほど、分かりました」
作戦会議を立て終え、ライザー眷属『兵士（ポーン）』８人が飛び出す
祐希那は少し下がって神器（セイクリッド・ギア）――――『全凍結の氷斧（フリズド・クレバス）』を具現化した
氷斧を自身の前に掲げ、力を溜め込んでいく
「ほう、なるほど。そう言う事か……」
「神器（セイクリッド・ギア）を出してきたと言う事は――――彼女は禁手（バランス・ブレイカー）の準備をしているみたいだね」
「あの８人は時間稼ぎか。どちらを先に潰す？」

「決まっている。――――『兵士』８人からだ！散開ッ！」
オッパイジャーが散り散りになってそれぞれの相手に向かっていく
コジュウロウの相手はミラ、イル、ネル
リョウマの相手はニィとリィ
ノブナガの相手はシュリヤー、マリオン、ビュレント
開戦の火蓋が切って落とされた
コジュウロウは背中に背負った不気味な日本刀を鞘から抜き放ち、ミラの棍とイル、ネル姉妹のチェーンソーを同時に受けきる
３つの武器を押し退け、左掌から闇のオーラを濃縮した波動を連続で放つ
３人はかろうじて避けたものの、間髪入れずに斬りかかってくるコジュウロウに防戦を強いられてしまう……
「「このオオカミさん、強すぎぃぃ！」」
「……強い……っ」
「我が妖刀……闇虎徹。今宵の虎徹は血ではなく――――乳に餓えている」
コジュウロウがそんな格言を残す中、オッパイジャー・２号のリョウマはニィとリィの攻撃を真っ正面から受けていた
防御……と言うよりもいちいちポーズを決めて２人の連打を物ともしていない

「ハッハッハッハッハッ！ワタシのボディに君達の攻撃が通るかな？」
「くっ！このぉ！にゃんで全然効かないのよ!?」
「こいつ体が硬過ぎるにゃ！」
ニィとリィも苦戦を強いられ、その様子を見ながらオッパイジャー・３号のノブナガが嘲笑う
「フンッ、所詮我々の敵ではないか」
ライフルに近い形の銃剣を構え、照準を合わせる
シュリヤー、マリオン、ビュレントは手元から炎の魔力を解き放つが……銃剣から吐き出された弾丸がその全てを撃ち砕く
更にノブナガが闇のオーラを出現させると、オーラが幾重にも分かれて同じ様な銃を形成する
一斉射撃が繰り出され、３人は多重の防御魔方陣を展開
だが、驟雨（しゅうう）の如く降り注いだ弾丸には敵わず……防御魔方陣はあっさりと破壊されてしまう
「では、そろそろ見せようか。我々の必殺技を！」
そう言ってコジュウロウが自身の妖刀に闇のオーラを纏わせ構えた
同じくリョウマも自らの拳に、ノブナガも得物である銃剣に闇のオーラを集束させる

その質量は外にいる新達も分かる程の濃さだった……
そして――奴らの必殺技とやらが放たれる……
「――『洋服斬壊（ドレス・スラッシュ）』ッ！」
「――『洋服破拳（ドレス・ナックル）』ッ！」
「――『洋服消弾（ドレス・トリガー）』ッ！」
ザンッ！
黒い闇の剣戟波（けんげきは）がミラ、イル、ネルの体を通過し――
ゴオッ！
闇を纏った拳打がニィとリィの腹部に寸止めされ――
ドンッ！
銃剣から放たれた闇の弾丸がシュリヤー、マリオン、ビュレントに命中する……
その刹那――
バババッ！
彼女達の衣服が跡形も無く吹き飛び霧散していった……
その衝撃で衣服と下着の中に閉じ込められていたおっぱいがプルプルと揺れる
一瞬何が起こったのか分からず止まっていた彼女達だが、自分の身に起きた現象を理解した途端――顔を真っ赤にする

「キャァァァァァァァァァァッ！」
「イヤァァァァァァァァァァァァッ！」
「なっ、何よこれぇ!?」
ライザー眷属『兵士（ポーン）』の殆どが悲鳴を発して裸体を手で隠そうとする
なお、外にいる一誠は「ふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」と鼻血を噴かして狂喜乱舞
新も「おおっ♪」と感心していたりする……
「コラァッ！見るなスケベ２人！死ねッ！渉も見ない！」
「え？あ、ごめん」
渉は祐希那に叱咤されて直ぐに目を手で覆い、オッパイジャー３人が高らかに言う
「どうだ？これが我々の必殺技だ。闇人（やみびと）の中でも格下の我々が強くなるには――――相手の、特に女の子の尊厳を奪う術（すべ）を身に付けなければならなかった。そこで模倣したのが……レーティングゲームで見た赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の脱がし技だ」
「赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）を見習い、我々オリジナルの脱がし技を編み出したのさ♪」
「特に女に対しては効果が絶大だ」
「最っ低ね！最低のカスどもよ、アンタ達は！死ねッ！そこの２人もついでに死んでッ！こんな技を作らせた責任を取って死んで！」

「おいおい、俺に火の粉を飛ばすな。一誠だけに飛ばしてくれ」
「待て、新！俺だけに責任を押し付けるな！」
新と一誠が外で口論する中、オッパイジャー3人は祐希那を指差して言う
「前菜にもならなかったな。今度はお前が出てみるか？氷のお嬢さん」
「君は先程から禁手（バランス・ブレイカー）になろうとしているね？分かるよ、その高密度のオーラ」
「慌てずとも直ぐに相手してやる。さっさと禁手化（バランス・ブレイク）するが良い」
挑発気味の言動を飛ばされた祐希那は怒りを孕み、更にオーラを高めていく
そして――――
「見せてやろうじゃない。私の禁手（バランス・ブレイカー）を……！アンタ達、覚悟しなさいッ！――――禁手化（バランス・ブレイク）ッ！」
力強い一言が唱えられた瞬間、祐希那の全身を青白い閃光が包み込んでいった……

女の子を泣かすのは最大の罪だ！

青白い閃光がドーム状の結界を照らしてから暫(しばら)く経った後、祐希那の禁(バランス・ブレイカー)　手が披露される

視点によって異なる色の輝きを見せる軽(ライト・アーマー)　鎧が腕、足、胸などを覆い、頬や頭部を保護する兜も形成されていく

まるで神話に出てくる戦乙女(ヴァルキリー)の如き神々(こうごう)しい様相だった

外に弾き出された新達、果ては敵であるオッパイジャーの3人も感服してしまう程に……

「これが私の禁(バランス・ブレイカー)　手――――『極光(アウローラ)に凍(ヴァナディース)える戦姫(ドレッサー)』よッ！――――アンタ達、覚悟は出来てんでしょうね!?」

戦姫と化した祐希那の全身から氷のオーラが滲み出てくる

禁(バランス・ブレイカー)　手のオーラで牽制を掛けるつもりだったのだが……オッパイジャーの3人は逆に打ち震えていた

「……素晴らしい。素晴らしい程に綺麗で強いオーラを感じるぞ。女の子でここまで強いオーラを放つ者などいなかった」

「最近の女の子は直ぐにヘタレ込んでしまうからね。こう言うお嬢さんと戦える日が来るのを楽しみにしていたのだよ！」
「強い女を仕留める事も我々のレベルアップに繋がる。良い機会だ。……で、誰がやる？」
「当然、俺だ。後のフェニックス眷属はお前らがジャンケンで決めろ」
コジュウロウがそう言うと――――リョウマとノブナガは「ズルいぞ！」と猛反論
仕方無いのでコジュウロウもジャンケンする事に……
「じゃあ1番最初に勝った者が氷姫（こおりひめ）、残った2人が他のフェニックス眷属――――それで良いな？」
「よぉし、では始めよう！」
「「ジャンケンポンッ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！」」
オッパイジャー3人はこの緊迫した状況下でジャンケンを始めた……
油断ならないのか能天気なのか分からないチームに開いた口が塞がらない面々……
ジャンケンは暫（しばら）く続き……勝敗が決定する
「やったーッ！ワタシが氷姫（こおりひめ）だーッ！」
勝ったのはオッパイジャー・2号のリョウマ

負けたコジュウロウとノブナガは残ったライザー眷属を相手にする
「さ～て、氷姫（こおりひめ）のお嬢さん。ワタシが相手だよ。何ならフェニックス眷属のお嬢さん方と共闘しても構わないよ？」
「アンタ1人で私と戦うって訳？バカにしてんの？」
「いやいや、寧ろこれぐらいの方がスリリングだと思ってね」
飄々とした態度に怒りを見せる祐希那
1歩前に出ようとしたその時……ライザー眷属の『戦車（ルーク）』――――イザベラと雪蘭（シュエラン）も出てくる
「私も手伝おう」
「加勢するわ」
「そう？ありがと。悪いけどこんな変態集団、さっさと終わらせるわ」
「ほう、『戦車（ルーク）』のお嬢さん方も参戦かい？良いよ良いよ～。どんどん加勢してくれたまえ」
リョウマは3対1の勝負を嬉々として受け入れるようだ
それと同時にカーラマイン、シーリスの『騎士（ナイト）』コンビはコジュウロウ、『女王（クイーン）』ユーベルーナと『僧侶（ビショップ）』美南風（みはえ）はノブナガと対峙する
緊迫した空気が渦巻く中、リョウマは呑気に準備体操で体をほぐし――――

「オッパイジャァァァァァァァ、にっ号！迫撃のォォォォォォ――――リョウマッ！行きまーすッ！」

片足立ちで何処かへ飛び立つかの様なポージングを決めた……

そのふざけた言動がよほど癇(かん)に障(さわ)ったのか、祐希那はコメカミに青筋を浮かべる

「……ソッコーで潰すっ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！

祐希那は全身から青いオーラを迸(ほとばし)らせ始めた

結界内の空気が震撼した刹那――――祐希那は地を蹴って飛び出し、リョウマの顔面に氷で覆われた拳を打ち込んだ

リョウマの体が宙に浮き、祐希那は追撃とばかりに両手を合わせて打ち下ろす

地面に叩きつけたリョウマの腹に膝落としを決め、背中を蹴り飛ばす

「そこの2人！ボーッとしないっ！」

祐希那の指摘にイザベラと雪蘭(シュエラン)もハッと我に返り、飛んできたリョウマに拳打や蹴りの乱舞を入れていく

2人の同時攻撃で浮かび上がったリョウマの頭上に巨大な氷山が出現する

祐希那の両手が青白く輝き、氷山がリョウマを押し潰す様に落下した

「まだまだぁっ！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

更に上空から幾重もの氷柱(つらら)が降り注いでいく
息も尽かさぬ連続攻撃……
粉塵と氷の破片がリョウマのいた場所に舞い、祐希那は肩で大きく息をする
結界の外で一部始終を見ていた一誠は祐希那の禁(バランス・ブレイカー)手の威力に身震いした
「……こ、怖いな。あの禁(バランス・ブレイカー)手……」
「渉、お前もこれから大変そうだな」
「そうでしょうか？それにあの禁(バランス・ブレイカー)手は僕や新さん、一誠さんの鎧を基に発現させたらしいですよ？」
「そ、そうなんだ……。でも、これ以上無いくらい頼りになるな。一瞬で倒しちまったもん」
一誠が安堵する中、結界内の祐希那も額の汗を拭(ぬぐ)い、フンッと鼻を鳴らす
「まず1人終了！次はアンタ達よ！変態ども！」
コジュウロウとノブナガに指を突きつける祐希那――――だが……当の2人は肩を竦(すく)めるだけだった
「まさか、あれだけの攻撃で倒せたと思っているのか？」
「おめでたい女だ」
「はぁ？何余裕かまして――――」

バコォォォンッ！
祐希那が言い終わる寸前に発生した破砕音
その方向へ顔を向けてみると――――氷山を木っ端微塵に破壊したリョウマの姿があった……
「はぁい、お嬢さん♪」
「……っ!?」
祐希那だけでなく他の面々も絶句する
あれだけの攻撃を受けたにもかかわらず、リョウマは殆どダメージを受けていない……
多少の凹(へこ)みや傷が目立つ程度だった……
「ウォーミングアップはそこまでかな？なかなか良い動きをしていたよ。では、こちらも反撃させてにもらおうかな！」
屈伸やストレッチをするリョウマに対し、祐希那は攻撃体勢を固める
だが……
「サァァァイクロォォォォォォン――――キィィックッ！」
ドンッッ!!
爆発でも起こすかの如く地を蹴って飛び出したリョウマ

その速度は瞬(またた)く間に祐希那との距離を詰める程で、祐希那も反応すら出来なかった……

気付いた時には――――リョウマの膝蹴りで吹き飛ばされていた

「――――っ!?」

近くの岩に体を打ち付けられる祐希那

禁　手(バランス・ブレイカー)の鎧には亀裂が生じていた……

全身を蝕(むしば)む蹴りの衝撃のせいで口から血が飛び出す

「――――祐希那ッ！」

「あいつ……なんて速さだよ……!?」

「どうやら口先だけじゃなさそうだな……」

完全に見くびっていただけに歯軋りをする新

その間にもイザベラと雪蘭(シュエラン)が飛び出し、リョウマに攻撃を仕掛けていく

彼女達は拳や蹴りの乱舞を繰り出すが、リョウマは次々と攻撃を防ぐ

硬い鎧に覆われた腕や足が次第にイザベラと雪蘭(シュエラン)の動きを鈍らせる

「ハッハッハッハッ！良いね良いねえ、君達！まだまだ元気いっぱいじゃないか！しかぁし！」

リョウマの拳にオーラが集まっていく

再びあの技を繰り出すつもりだろう
イザベラと雪蘭（シュエラン）は身の危険を察知して退避しようとするが……リョウマの並外れたスピードに追いつかれ――
「おっぱい解放！『洋服破拳（ドレス・ナックル）』ウッ！」
ドンッッ！
ババババッ！
リョウマの『洋服破拳（ドレス・ナックル）』が見事に決まり、イザベラと雪蘭（シュエラン）の衣服が全て消し飛んだ
プルプルと揺れる彼女達のおっぱい
雪蘭（シュエラン）は羞恥に耐えきれず顔を赤らめ、イザベラも下の大事な部分を手で隠す
「いやぁっ！」
「く……っ！」
「ん～、良いおっぱいだねえ♪サァァァイクロォォォォォォン・エルボォォォォォォォッ！」
リョウマは強烈な肘打ちでイザベラと雪蘭（シュエラン）を吹っ飛ばし、地面に叩きつける
倒れ伏す彼女達に迫るリョウマ
そこへ復活した祐希那がリョウマの周囲に氷柱を出現させて取り囲む
「舐めんじゃないわよッ！」

手を振り下ろすと同時に氷柱の群れが四方八方からリョウマに降り注いでいく
しかし、リョウマはその場で体を丸めて高速回転を始める
まるで円盤の様な体勢になったリョウマは飛来してくる氷柱を全て弾き返していった
氷柱を全て破壊した直後、祐希那の方へ猛然と突進
激突と同時に祐希那を捕まえ、空高く飛び上がる
「離しなさいよ！この変態！」
「氷姫のお嬢さんはトンだじゃじゃ馬みたいだね。でも、ワタシはそう言うのも好きだよ。サァァァイクロォォォォォン・ドライバァァァァァァァッ！」
リョウマはその体勢のまま後方に回転し、加速しながら地面へ落下していく
一瞬で地面に激突……砂煙を大量に巻き上げた
晴れた砂煙の中から見えたのは――――投げ終えた体勢のリョウマと頭から地面に突き刺さり、上半身が完全に埋もれた祐希那だった……
あまりにも凄惨な光景にレイヴェルは思わず目を背ける
「どうやら勝負は着いたようだな。ならば、こちらも手早く終わらせるとしよう」
「ああ。あの女はこれ以上戦えまい」
付近で残りのライザー眷属と戦っていたコジュウロウとノブナガも必殺技の体勢に

入り――――発動

コジュウロウの剣戟波（けんげきは）――――『洋服斬壊（ドレス・スラッシュ）』がカーラマインとシーリスの鎧と衣服を粉々に刻み、ノブナガ『洋服消弾（ドレス・トリガー）』がユーベルーナと美南風（みはえ）の衣服を消滅させる……

あっという間に裸にされた彼女達も行動不能となり、その場にへたり込む

「ふむふむ、あの娘達も良いおっぱいをしている。さて……氷姫のお嬢さんは――――」

リョウマは祐希那の足を掴んで地面から引っ張り出す

祐希那の体は既にボロボロ……

全身が血と傷にまみれ、呼吸も弱まっていた

「おやおや、大丈夫かい？もしかして気絶しちゃったのかな？よし、ワタシが心臓マッサージをしてあげよう♪」

そんな事を言いつつ祐希那の胸に手を伸ばそうとするリョウマ

その刹那――――祐希那が目を覚ました

「触んなぁっ！」

「ホゲェッ!?」

危機感から目覚めた祐希那の不意打ち

手から出した氷の塊をリョウマの顔面にぶつけ、更に爆発させた

その勢いでリョウマは後方に吹き飛び、祐希那も解放される

だが、ダメージは深刻なもので……もう殆ど避ける気力など残されていない
その上……吹き飛ばされて倒れたリョウマが飛び起き、ズダンっと着地
兜が多少損壊しただけで決定的なダメージには至ってなかった
祐希那の表情から絶望の色が見え始める……
「嘘、でしょ……!?顔面に、まともにくらわせたのに……!?」
「フッフッフッ、良いね良いねえ♪そう来なくちゃ♪」
「リョウマ、お前は本当に嫌な性格をしているな。しつこ過ぎる」
コジュウロウからの指摘にリョウマは「いや～、それ程でも♪」と剽軽（ひょうきん）に返す
祐希那は自分が赤ん坊扱いされている事に腹を立てるが……実力差のせいで反論する気力すら湧かない
〝このままでは本当にまずい……〟
そう思っていても体が言う事を聞いてくれない
リョウマは肩を回し、またポーズを決めて言う
「お乳を頂戴――――とおっ！」
珍妙なポーズを決めてから「さあ、これでフィニッシュだ！」と叫んで技の体勢に入る
兜の口元が開き、その中に膨大なオーラが集束していく

どうやらレーザーの様な砲撃を出すつもりだ
祐希那も危険だと分かっていても、体が動かない事に焦りを隠せなかった
その間にもチャージが完了したリョウマは技名を叫ぶ
「サァァァイクロォォォォォオン・ブラストォッ！」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオッ！
リョウマは口から極太のレーザーを放射
レーザーは真っ直ぐ祐希那の方へ飛んでいく
諦めかけたその時……祐希那を救出する人影と――――リョウマの頭上にもう1つ人影が現れた
1人は祐希那を抱えてレーザーを回避したイザベラ
もう1人はリョウマの脳天に炎の蹴りをくらわせた雪蘭（シュエラン）
真上から攻撃されたショックで口が閉ざされ、リョウマは遮断させられたレーザーの暴発を受けて倒れる
それでも先に照射したレーザーは結界を突き破り、空の彼方へと消えていく
突然の救出劇に祐希那はイザベラに詰め寄った
「ちょっとアンタら……私を助けたの……？そんな格好で……!?恥ずかしくないの!?あんな変態どもに見られて――――」

「勿論、恥ずかしいさ。だが……今だけは恥を捨てなければどうにも出来ないと思ったんでね」
「何その潔さ……」
「いつまでも恥ずかしがってたら相手の思う壺よ。それに……まだ倒せていないんだから……」
憎々しげにリョウマを睨む雪蘭
そう、リョウマはまだ完全に倒れていなかった……
マスクから煙を吐き出し、煤を振り払う
「ブヘッ……今の不意打ちはなかなか良かったよ♪真上からまともにくらったので口が閉じてしまった。お陰でマスクが真っ黒焦げ」
「……本当にこいつらしつこいわね。だんだん嫌になってきたわ……」
「それが我々オッパイジャーの強みだ」
リョウマの右隣にコジュウロウが並び、逆サイドにノブナガが並び立つ
「苦戦してるようだな、リョウマ？」
「おぉっと、手出しは無用だよ、お二人さん。彼女達はワタシの相手だからね」
「元よりそのつもりだ。……しかし、フェニックス眷属の女の子がこれ程強いのは想定外だ。大抵の女の子ならおっぱい丸出しの時点で戦意を失うと言うのに……見事だ。

それに引き換え――――」

コジュウロウはイザベラと雪蘭（シュエラン）の勇姿を賞賛した後、未だにレイヴェルの後ろで震えているライザーに視線を移す

「ライザー・フェニックスは情けない限りだ。自分の眷属が戦っていると言うのにその体（てい）たらく。不死身の不死鳥フェニックスが聞いて呆れる」

「不死身の不死鳥から〝不〟を省いて『死身（しみ）の死鳥（しちょう）』とでも改名しておけ」

コジュウロウとノブナガがライザーに野次（やじ）を飛ばす

侮蔑と嘲笑の意を込めた野次にレイヴェルはキッと2人を睨み付ける

「兄を……お兄さまを侮辱する事は許しませんわよ！今のお兄さまは確かに情けないですわ。負けたショックで半年以上も塞ぎ込んで、ドラゴンと闇人（やみびと）を怖がって……。それでも――――嫌々ながらも克服しようと励んでいますわ！そんなお兄さまをバカにしないでくださいっ！」

「レ、レイヴェル……」

「ほう。そこまで言うなら……お前自身はどうだ？」

コジュウロウは手にした日本刀にオーラを流し、それを斜めに振り上げて剣戟波（けんげきは）――――『洋服斬壊（ドレス・スラッシュ）』を放つ

剣戟波がレイヴェルを通過した刹那――――レイヴェルの衣服が下着ごと消し飛んだ

プルンとしたおっぱいが揺れる
「え……っ?……いやぁっ!」
レイヴェルは裸にされた事に気付くと悲鳴を上げて胸元を隠す
その様子を見たコジュウロウは冷淡に吐き捨てた
「それが答えだ。裸にすれば何も言えなくなる生娘(きむすめ)同然。どれだけ気丈に振る舞おうが強く出ようが、一手で弱さをさらけ出す。おとなしくした方がまだ可愛いげがあるものを――出る杭は打たれると言うヤツだ」
更なる精神的な追い打ち……自身の檄を無駄に過ぎないと覆(くつがえ)されたレイヴェルは悔しさのあまり涙を浮かべる
コジュウロウの差別的な言動に怒りを露(あらわ)にする祐希那
許せないとばかりに突貫しようとしたその時……後方よりとてつもない衝撃音が聞こえてきた
天地を揺るがす程の衝撃に全員の視線がそちらに移る
見てみると――新が結界に拳を叩きつけ、亀裂を生じさせていた……
「バカな……っ。我々の結界にヒビを……? 何故だ!? 我々の力の全てを集めて作った結界が――」
「おい、テメエら。今レイヴェルを泣かしたな?」

ドスを利かせた声音で問う新
コジュウロウが「それがどうした？」と返した途端――新は拳の勢いを上げ、亀裂を更に広げていく
明らかに怒っている新の気迫にオッパイジャーだけでなく、一誠も祐希那もビビり始めた
「テメェらは男に於いて絶対にやっちゃいけねぇ事をやった」
「女の子を裸にする事か？それはお門違いだな。我々の必殺技は赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の戦いを基に具現化させた物だ。それをとやかく言われる筋合いなど――」
「そうじゃねぇ。女を裸にするってのは確かにバカバカしい考えだと思われるが、それは男なら誰もが見る夢だ。俺だって他人の事は言えねぇ。……だが、俺が言いたいのはそう言う事じゃねぇ」
新の拳の威力が更に上がり、ドーム状の結界全体にまでヒビが広がっていく
「今テメェらはレイヴェルを――女を泣かした」
「……？まさか、そんな事で我々の結界を破壊する程の力を……!?」
「男に於いて最も罪深いものは女を泣かす事だ！レイヴェルのひた向きな思いを傷付け、踏みにじったのが――許せねぇだけだァッッ！」
バリィィンッ！

最後の一押しが結界を粉砕し、儚く散った結界は粒子となって消え去る……
その光景にオッパイジャー3人は絶句、祐希那は思わず「……凄い……」と小さく呟き、レイヴェルは新の言葉に感極まっていた
「バ、バカな……！我々の結界が……!?」
驚くオッパイジャー3人を他所に新は闇皇に変異、渉も光帝と化し、一誠も禁手化して『赤龍帝の鎧』を纏う
「一誠、渉、一瞬で決めるぞ。俺は赤マフラーをやる。良いな？」
「おう！あいつらがおっぱい好きなのは良いが――――女の子を泣かしたのは男として許しちゃおけないよなッ！」
「じゃあ僕は青いマフラーのヒトを倒します。一誠さんは黄色いマフラーのヒトをお願いしますね」
相手を決めた新達はそれぞれ分かれて歩んでいく
新はコジュウロウ、渉はリョウマ、一誠はノブナガと対峙する
「フ……フフッ、慌てる事は無い。我々には常におっぱいへの渇望と言う力があるのだ。たとえ君達が強くとも、ワタシのストロングなボディの前には効かないッ！」
「では、試してみましょうか？」
先陣を切ろうとしたリョウマだが、渉は高速移動で距離を詰め――――光り輝くオーラ

を集めた拳をリョウマの腹に思いっきり打ち込んだ
打突と共に衝撃が体を突き抜け、リョウマの体がくの字に曲がる
言葉どころか息すら出来ないような一撃……
筆舌に尽くし難(がた)い攻撃をくらったリョウマはピクピクと震え――――そのまま地に倒れ伏す
「な……っ!?リョウマを一撃で……!?」
「こんな事が……奴らの力は想像以上だと言うのか……!?」
あっという間にリョウマをKOされ、戦慄するコジュウロウとノブナガ
新が指を突きつけて言う
「俺達の前で女を泣かしたのが運の尽きだったよ。覚悟しとけ」
「ぐ……っ！むざむざとやられる俺達ではないッ！」
ノブナガは銃剣から無数の銃弾を放ち、更に周囲にも銃の形をしたオーラを幾重にも形成して撃ちまくる
一誠は両腕をクロスしてガードを固めたまま、背中のブーストを噴かせて前進
無尽蔵に降り注ぐ銃弾をものともしない
「俺の銃弾を弾き返しているだとッ!?」
「ブッ飛べェェェェッ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！！！！！！』

ドゴオオオンッ！

一誠は威力を倍増させた拳をノブナガに打ち込む

ノブナガは咄嗟に銃剣を前に出して威力を緩和させようとするが……一誠の拳打はそれを無視してノブナガを後方に大きく吹き飛ばす

ノブナガは遠くの岩に激突し、崩れた岩の下敷きとなった

「ノブナガも一撃で……っ!?何なんだ、このパワーは……!?」

「さあ、覚悟は良いか？」

新は籠手から闇皇剣（やみおうけん）を取り出し、バチバチとオーラを迸（ほとばし）らせる

必殺剣技（クロス・バースト）の構えだ

それに対し、コジュウロウも自身の日本刀にオーラを集束させる

「負けてたまるか……！我々オッパイジャーが負ける訳にはいかん！男の希望を！夢を背負って戦わなければならないんだッ！」

「なら……その夢と希望を見つめ直してこい。泣かした女のおっぱいを見ても――――ただ虚（むな）しいだけだからな」

コジュウロウが日本刀を振るって強烈な剣戟波（けんげきは）を飛ばす

同時に新もクロス・バーストを解き放った
新の必殺剣技が向かってくる剣戟波（けんげきは）を飲み込み、そのままコジュウロウを巻き込む
「こ、これが……おっぱいドラゴンと蝙蝠皇帝……っ。我々はまだ足元にすら及んでなかったのか……っ」
激しい爆音と共にコジュウロウは後方の湖に転落、水没していった

それから数日、オッパイジャーを撃退した新達は修行を再開
ライザーもドラゴンと闇人（やみびと）に対する恐怖心を克服しつつ、何とか修行メニューを終える事が出来た
そして迎えた修行最終日
新達は寝床となる洞窟を抜け出し、ある場所に向かっていた
「ぐふふっ。今頃部長達も来て温泉に入ってる筈だ。新、お前って本当に良い奴だな。わざわざ温泉の場所を教えてくれるなんて」
「今まで禁欲してばかりだったから、これぐらいは良いだろ。リアス達に連絡を寄越しといて正解だったぜ」

「ああ。……でも、渉まで参加してくれるとは意外だな」
「いや、僕もついていった方が良いのかなぁって。それにライザーさんは連れていかなくて良かったんですか？」
渉がそう訊くと新は前方を睨む
「あいつの事だ、恐らくは――――やはりな。先に抜け出してやがった」
「何っ!?」と声を荒らげる一誠
新の言う通り、視線の先には炎の翼を羽ばたかせて飛ぶライザーの姿が――――否、ライザーだけではない……
なんと撃退した筈のオッパイジャー3人までライザーと同行していたのだ
予想外の展開に新も驚き、急いで向かうとライザー達が接近に気付く
「チッ！バレたか！」
「あっ！その物言い！やっぱり温泉を覗く気か！」
「覗いて何が悪い！温泉に入る女がいるなら、それを覗くのが男だ！」
「それが貴族のする事かぁぁぁあっ！しかも、何でそいつらと一緒にいるんだよ!?」
一誠がオッパイジャーに指を差して問い詰めると、オッパイジャーはこう答えた
「「おっぱいへの探求心が、この男を同志と認めたのだ！」」
つまり、完全に利害の一致でライザーと同盟を結んだらしい

「それに我々も覗きたいのだ。おっぱいがあるから」
「体を痛めて来た甲斐があったよ」
「早く行かねば女達が温泉から出てしまうぞ」
「俺だってリアスの乳を見たいんだ！貴様らだけが堪能するだなんて許されない事なんだよ！」
ライザーもオッパイジャーも自分達の意思を吐き出し、攻撃の体勢を取った
新はフッと含み笑いをする
「その心意気は認めてやる。ただし……行くのは俺達だけだ」
「えっ、そうなんですか？」
「そうだ！部長や朱乃さん、アーシア達のおっぱいをあんたらに見せてたまるか！」
「「「上等だッ！」」」
斯くして……ライザー＆オッパイジャー同盟ＶＳ新、一誠、渉の大バトルが空中で幕を開けた
一進一退の攻防は十数分に亘って続いたが……力及ばず、ライザー＆オッパイジャー同盟は新達３人の波状攻撃をくらって墜落
しかし、落ちていった先にはリアス達が入っているであろう温泉があった
急いで追い付くと――――ライザーとオッパイジャー３人は頭から落下したのか、足だ

け逆さまに飛び出ていた
新と一誠は鎧を解除してガッツポーズ、渉も〝一応やっといた方が良いのかな〟とノリでガッツポーズした
「……凄い音がしたから誰かと思えば、新とイッセーじゃないの」
聞き覚えのある声に振り向くと、そこには全裸のリアスがいた
更には――
「うふふ、新さんも一緒に入りませんか？」
「イッセーさんもいらっしゃったのですか？」
「さすが新だ。私達の温泉を覗きに来たか」
朱乃、アーシア、ゼノヴィアもいた
まさに楽園と言うべき秘湯に一誠は歓喜の涙を流し、新もウンウンとリアス達の裸を眺めていた
「……新さま、お兄さま？」
「ア、アンタら……何してんのよっ!?渉まで!?」
突如レイヴェルと祐希那の声が聞こえてくる
そちらへ視線を送ると――全裸のレイヴェルと祐希那もいた
２人ともおっぱいの大きさはなかなかの物で、特に祐希那の全裸は稀少価値が付く程

美麗だった
一誠はレアな裸を見れた事に感激の鼻血を噴かし、新もしっかりと吟味する
それに気付いたレイヴェルと祐希那は胸元を隠しながら顔を真っ赤にした
レイヴェルの背に炎の翼が展開され、祐希那の手元に氷の斧が具現化される
「あ、やべ……っ」
「……？」
「新さまのエッチィィィッ！」
「死に腐れド変態どもがァァァッ！」
ゴオオオオオオオオッ！
ビュオオオオオオオッ！
レイヴェルから特大の火炎、祐希那から極大の吹雪をくらった新達は温泉で爆(は)ぜた
……

かろうじて生き延び、洞窟に帰還したが丸焦げの新、一誠、渉と疲労困憊(ひろうこんぱい)のライザーとオッパイジャー

ふいにオッパイジャー1号ことコジュウロウが言う
「今回は我々の完敗だ。素直に敗北を認めよう。ただ……いずれ彼女達のおっぱいを見せてもらいたい」
「俺もリアスの事は諦める。だから、今度1度だけリアスの乳を見せてくれ」
「ふざけるな！この野郎！」
「こいつらのスケベ根性には負けそうだぜ……」
その後、ライザーはこの一件でドラゴン恐怖症と闇人(やみびと)恐怖症を克服し、オッパイジャー3人も放浪の旅を続けるべく去っていった
その際、新と一誠に「いずれ、おっぱいについて語り合おう」と言い残した

第１０章　学園祭のライオンハートとブラックドラゴン

不死鳥と光帝、転入する！

「ずむずむいやーん！」

「「「「「「ずむずむいやーん！」」」」」」

ステージに立つ一誠の掛け声に客席の子供達も最高の笑顔で反応した

学園祭をもくぜんにして、新達は冥界の旧首都――ルシファードにある大型コンサート会場のステージ中央でショーを繰り広げていた

「乳龍帝(ちちりゅうてい)おっぱいドラゴン&蝙蝠皇帝ダークカイザー」のコラボショーである

通常は代役がコスチュームを着て執(と)り行(おこな)っているのだが、サーゼクスからのオファーで本物が出演する事になった

流石に魔王直々のオファーを断れる筈も無く……

「行くぜ、ドラゴンキック！」

「「「「「「キーーーーーーックッ！」」」」」」

「くらえ、カイザーパンチ！」
「「「「「「パーーーーーーンチッ！」」」」」」
敵役の怪人に新がパンチ、一誠が蹴りのアクションをすると子供達も大きく反応してくれる
子供達の反応には自然と高揚感が溢れてくる
会場は満員御礼、ステージには派手な舞台装置と演出が施されており、アクションをする度に爆発が起こったりする
新と一誠の他にもリアスことスイッチ姫や悪役ダークネスナイト・ファングの祐斗がステージ上に立っていた
リアスが手を振ると子供達やファンの男性陣が歓声を上げ、祐斗の方には子供達のお母さん方を始めとする多くの女性ファンがついていた
「「「「「「おっぱいドラゴーーーーーーンッ！」」」」」」
「「「「「「ダークカイザーーーーーッ！」」」」」」
それでもやはり……子供達の声援には堪(たま)らないものがあると2人はステージ上でほくそ笑む
ヒーローショーで大方の出演を終えた新と一誠は舞台裏で一息つく
「ふぅー。無事にショーが終わって良かったな」

「あぁ。こう言う事は初めてやったが……案外悪くないな」
今までギスギスしたシビアな世界に入り浸っていた新にとってこう言ったショーは新鮮
子供達から声援を受けるなんて事は皆無だった
改めて自分の人生観が変わって良かったと染々(しみじみ)噛み締める
そんな時、通路の方から「やだぁぁぁぁぁっ！」と子供が大声で泣き叫ぶ声が聞こえてくる
壁の隅から顔を覗かせてみると……裏口で子連れのお母さんがスタッフと話していた
「おっぱいドラゴンとダークカイザーにあいたいよ！」
子供が地団駄を踏んでぐずり、お母さんもどうして良いのか分からないようだ
「すみません。握手とサイン会の整理券配布は既に終わってまして……」
スタッフが謝りながらそう告げる
恐らく握手とサイン会の整理券配布に間に合わなかったのだろう
「そ、そうなんですか……。もう終わっちゃったんだって」
お母さんが子供にそう告げると、子供は一層目に涙を溜めて「やだぁぁぁぁぁっ！」と泣き叫んだ

手には鎧装着時の２人を模した人形を大事そうに持っていた
泣き叫ぶ子供を見て一誠は居た堪れなくなり、解いたばかりの鎧を再形成する
本来ならこの様な特例をしてはいけないのだが、一誠の姿を見た新は「やれやれ、仕方ないな」と言葉少なに呟いて自身の鎧を形成
再びそれぞれの鎧を着込んだ新と一誠は裏口の方へ出ていく
「どうかしたんですか？」と一誠が声を掛けると母子とスタッフが振り返った
「おっぱいドラゴンとダークカイザーだっ！」
子供は先程の泣き顔から一転して笑みを見せ、スタッフが新と一誠に事情を説明する
「あ、兵藤さん、竜崎さん。いえ、こちらのお母さんとお子さんがサイン会の整理券配布に間に合わなかったようでして……」
一応の確認を取った後、一誠は子供の前で片膝をついて訊く
「キミ、名前は？」
「……リレンクス」
「リレンクス、俺達に会いに来てくれてありがとう。えーと、何か書く物ありますか？」
スタッフに訊くとマジックペンを受け取り――――
「この帽子。俺のデザインが入った帽子、これにサインしても良いかな？」
一誠がリレンクスの帽子を指差すと、リレンクスは３度も頷いた

帽子にサインを書き終えた一誠は新にもペンと帽子を渡す
「新も書いてあげなよ」
「あぁ。そうだな」
新もリレンクスの帽子にサインを書き、そのままリレンクスの頭に被せた
輝くような笑顔でリレンクスは帽子を何度も脱いでは被るを繰り返す
お母さんが「ありがとうございます!」とお礼を言い、一誠はリレンクスの頭に手を置いて告げる
「リレンクス、男の子が泣いちゃダメだぞ? 転んでも何度も立ち上がって女の子を守れるぐらい強くならないとさ」
「僕にも出来る?」
リレンクスの問いに新も強く告げる
「諦めなかったら強くなれる。俺もおっぱいドラゴンもそうして強くなっていったんだ。泣いてばかりじゃ強くなれない。それを忘れるなよ?」
「うんっ!」
そう言った後、2人はスタッフと共にその場をあとにした
スタッフは困惑した表情をしながら苦言を口にする
「兵藤さん、竜崎さん。なるべくこう言うのは控えてください。全ての方に応対するの

は無理なのですから……特例を作ってしまうとちょっと……」
「すみません。気を付けます」
「本当にすまない」
新と一誠は頭を下げてスタッフに謝る
スタッフもそれを分かってくれたのか、それ以降は何も言わず持ち場に帰っていった
「格好良かったわよ、２人とも」
リアスの声が聞こえ、視線を送るとリアスの姿があった
リアスは歩み寄って新と一誠の頬を撫でる
「少し軽率だったけれど、それでもあの子の夢をあなた達は守ったわ」
「はいっ、ありがとうございます！」
「何か照れ臭くなっちまうな……」
「あら？ごきげんよう、リアス、新さん、一誠さん。ここで何をしているのかしら？」
通路の奥から見知った女性が姿を現す
亜麻色（あまいろ）の髪のリアスにそっくりな女性――ヴェネラナ・グレモリー
「お、お母さま！ミリキャスまで！いらっしゃってたの？」
母親の登場が予想外だったのか、リアスは素（す）っ頓狂（とんきょう）な声を上げて驚いていた
その横には小さな紅髪の少年ミリキャス・グレモリーもいた

「ええ、1度グレモリーが主催するイベントを直に見ておきたかったものですから。ミリキャスも見たいと言っていたのです。新さん、一誠さん、盛り上がっていましたわね。良いショーだったと思いますわ」
「そ、そうすか……どうも」
「あ、ありがとうございます！」
新は頬を掻きながら軽く会釈し、一誠は豪快に頭を下げて礼を言う
ヴェネラナはヒールをコツコツ鳴らしながら歩み寄る
「新さんと一誠さんを模した特撮番組は我がグレモリー家の財政を担う大切な産業となる事でしょう。そして、冥界の子供達にとっても大切な物になっていますわ。これからもグレモリーの一員として冥界の為、我が家、我が娘の為に奮闘してもらえると助かります」
「勿論です、粉骨砕身の精神で頑張りたいと思います！」
「ここまで大事になった以上、無下にはしませんよ。ヴェネラナさん」
「ふふっ、良いお返事ですわ。さすがグレモリー家の男子です。けれど――――新さん」
ヴェネラナが優しげな瞳を向けながら人差し指で新の顎を擦る
その色っぽい仕草に新の片眉がピクッと動く
『ヴェネラナさん』と言うのはいただけないわね。私の事はお義母さまか、母上と呼ぶ

こと」
「え……い、いや……どうもその呼び方は慣れてなくて……」
「何も失礼な事などありませんわよ？寧ろ共に社交界に出た時、その様な呼び方ではグレモリー家全体が恥をかきます。リアス、教えがなっていないのではなくて？」
ヴェネラナの表情が一転して厳しいものになり、ヴェネラナの睨みを受けてリアスが言う
「申し訳ございません、お母さま。ですが――」
「そこで『ですが』が入るだなんて……。伴う男子を入れるのですから、そこをちゃんとしないでどうするの？殿方がそれを望むのだから、そこを管理するのも当主たるあなたの役目です。他にも増えるとしたら、今からキチンとしなければダメよ。お父様の時はキチンと私が手綱を握ったものです。強く魅力的な女性が心を奪われるのは世の常。サーゼクスは魔王ゆえにグレイフィアのみでしたが、彼は別に魔王を目指しているわけではないのよね？ならば問題も無いでしょう。……まさか、まだ決め手を欠いているのかしら？もう、強引な所は私に似たと思ったのに、最後の最後で詰めが甘いだなんて……。1度そう言う関係になれば周囲の女性の主導権も得られるでしょう。リアス、最後まで私やグレイフィアが介入しなければ進められないのですか？」
ヴェネラナの不満のマシンガントークにリアスは困惑している様子だった

暫く続き、コホンと咳払いした所でヴェネラナは説教を終えたが……今度はリアスと内緒話をする

『リアス、前にも言いましたよね？新さんの心の拠り所になってあげなさいって。ここであなたがしっかりしなくてどうするの？』

『そ、それはそうですけど……』

『思い切って誘ってみなさい。女にとって恋の勝負時は日常から始まってるのよ？このまま朱乃さんやゼノヴィアさん達にリードを許して良いの？』

『うぅ……っ』

『まったく……我が娘ながら情けないですね。私なら迷わず新さんにアタックするのに』

『お、お母さま!?』

『あなたが出来ないと言うのなら、代わりに私が新さんの相手をしてあげようかしら？ふふっ、若い男の人の腕に抱かれるのも乙と聞きますし♪』

『もうっ、お母さま！ご冗談はやめて！』

暫く男子禁制とも取れる内緒話が続き、リアスが赤面した顔でコホンと咳払いする

「……さ、さて、帰ったら学園祭の準備よ？」

スタスタと急ぎ足でその場をあとにするリアス

新と一誠もついていき、ヴェネラナは娘(リアス)のウブな反応にクスクスと微笑んでいた

翌日、新と一誠は学校の1年生の教室前にいた
小猫とギャスパーのクラスにレイヴェル、そして別のクラスだが渉と祐希那もこの学園に転入してきたのだ
２人は生粋のお嬢様育ちであるレイヴェルの事が気になり、休み時間を利用して様子を見に来た
「あら、新とイッセーも様子見？」と声が聞こえたので振り返ってみると、リアスも来ていた
「ぶ、部長もですか？」
「ええ、ちょっと気になって」
「だろうな。見てみろ、早速取り囲まれて質問攻めをくらっている」
レイヴェルの性格だから高圧的な物言いをしてるのかと思いきや……言い寄ってくる女子達にどう対応したら良いのか四苦八苦しているようだ
返答はしどろもどろ且つ視線も泳ぎまくる

そんなレイヴェルの視線が新達の方に向かれ、途端に「失礼しますわ」と席を立って新達の方に近付いていく
レイヴェルは新とリアスの手を取るとそのまま廊下まで進み、曲がった所で手を離す
「どうした、レイヴェル？」
新が訝しげに訊くと、レイヴェルは気恥ずかしそうな表情で頬を染める
「……て、転校が初めてですので……ど、どう皆さんと接したら良いか分からなくて……。わ、私、悪魔ですし、人間の方々との話題が見つからなくて……」
確かに悪魔――それも上級悪魔のお嬢様が人間界の平民が通う学校に転校してくれば話題も見つかりづらい
新は直ぐに1つの案を思い付く
「そう言う事なら小猫に――」
「……呼びましたか？」
「はやっ」
新の近くに小猫とギャスパーがいた
どうやら新達を追ってきたようだ
直ぐ様新は小猫に頼み込む
「小猫、レイヴェルの話し相手と言うか……学校生活でのフォローをしてくれ。同じ学

年で同じクラスだろ？頼むよ」
新の頼み事に何故か若干不機嫌そうな顔になる小猫
眉根を寄せ、三角口になっているが少し考えた後に言う
「……。……新先輩がそう言うなら、別に良いですけど……」
「サンキュー、小猫。そう言う訳でレイヴェル、これから小猫がフォローをして――――」
「……ヘタレ焼き鳥姫」
新の言葉を遮って小猫がそう呟く
一瞬空気が凍り、レイヴェルのコメカミに青筋が浮かび上がる
「い、今、何とおっしゃいましたか……？」
「……ヘタレ」
「あ、あ、あなたね！フェニックス家の息女たる私にその様な物言いだなんて……！」
「……そんな物言いだから、いざと言う時にヘタレるんじゃないの？もっと決心を持って人間界に来たと思ったのに……。新先輩の手を煩わせるなんて……世間知らずの焼き鳥姫」
ブチン！
レイヴェルから何かがキレる音が聞こえてきた……
不気味なオーラを漂わせ、ロール状の髪もウヨウヨと動き始める

「むむむむむ！わ、私は新さまの手を煩わせるような事なんて……！こ、この猫又は……！」
「……焼き鳥」
２人の背後で猫と火の鳥が激しく睨み合ってる様な映像まで見えてくる……
〝犬猿の仲〟ならぬ〝猫鳥の仲〟と言う新しい方式が完成してしまった
「あうううううっ……こ、怖いですう！」
ギャスパーは小猫とレイヴェルの迫力に恐れて一誠の背後に隠れた
一誠も冷や汗を垂らしながらビビっている
新はやれやれと首を横に振り、間に入って２人の頭を優しく撫でるが……目だけは強い睨みを利かせていた
「初日から喧嘩すんな」
「「……すみません」」
とりあえず恐々とする雰囲気を諌(いさ)めた新だが、小猫とレイヴェルはプイッとお互いに顔を逸らした……
そこへ隣のクラスから見知った男女がやって来る
言うまでもなく、レイヴェルと同じ様に転校してきた八代渉と高峰祐希那だ
「新さん、一誠さん、皆さん、こんにちは」

「外が騒がしいから見に来てみれば、やっぱりね」
「よう、渉。夫婦揃っての登場か」
新の茶化し言葉に渉は〝?マーク〟を頭に浮かべるが、祐希那は顔を真っ赤にして反論する
「ふ、夫婦じゃないしっ！いや、聞こえは良いんだけど……そう言う誤解される様な事を平然と言わないでくれる!?」
「世話好き女房が今更何を言ってんだか。何処からどう見ても夫婦にしか見えねぇぞ（笑）」
「――――っ！（声にならない呻き声を発している）」
「新、あまり彼女を困らせないで」
リアスが嘆息しながら新に注意すると、新は「へいへい」と生返事をして茶化すのを止めた

放課後、オカルト研究部はレイヴェル、渉、祐希那の入部挨拶の後、学園祭の準備作業に入った

オカルト研究部が学園祭で披露する出し物は「オカルトの館」
旧校舎全体を使って様々な催(もよお)しをすると言う案になった
お化け屋敷や占い部屋、喫茶店からオカルトの研究報告等々……皆が出した案を採用しての出し物である
今は旧校舎を学園祭仕様に改装している
魔力を使えば短時間で完成するが、リアスは出来るだけ手作りでやりたいと言っていた
その意見に賛同して新達も準備作業に入っている
女子は主に衣装作りや部屋の模様替えを担当
新、一誠、祐斗、渉は男手として旧校舎の外で大工作業を担当する事になった
トンカチやノコギリを使って木材を切り分け、組み合わせたりしている
「ところでイッセーくん、新くん。ディハウザー・ベリアルって知ってるかい？」
「名前だけなら。王者だろ？レーティングゲームの」
一誠の答えに祐斗は頷く
「そう、正式なレーティングゲームのランク1位。現王者(チャンピオン)。ディハウザー・ベリアルだよ。ベリアル家現当主であり、ベリアル家始まって以来の怪物。もう長いこと頂点に君臨し続ける本物のゲーム覇者。――――皇帝(エンペラー)ベリアルと称されている方さ」

「皇帝（エンペラー）か、御大層な呼び名だな」
「ランキングが２０位から別次元と言われ、トップ１０（テン）となれば英雄とさえ称される。その中でもランキング５位から上は不動とも言われていて、ほぼ変動が無い状態で業界に長期間君臨しているんだ。特に３位のビディゼ・アバドン、２位のロイガン・ベルフェゴール、１位のディハウザー・ベリアルは現魔王に匹敵する力量を持つ最上級悪魔の中の最上級悪魔だよ。お三方は大規模な戦争でも起きない限りは動かないと言われてはいるんだけどね。ゲームの特性で研磨され、数多くの試合の末に生み出された結晶だって褒め称えられているよ」
　レーティングゲームが生み出した結晶――――それが現魔王クラスの実力を持つ３人……
　将来レーティングゲームでの制覇を目指しているリアスや新達にとって大きな壁となるだろう
「アバドンとベルフェゴールって聞いた事無い御家の名前だな」
　疑問を口にする一誠に祐斗が再び答える
「それはそうだね。番外の悪魔（エキストラ・デーモン）だから。彼らは現政府に関わりたくないのが御家の特色だけど、中には異端もいたって事だよ。家とはほぼ縁切（えんき）り状態でゲームに参加しているみたいなんだ」

特殊な事情を抱えながらも参戦している悪魔もいる
それだけレーティングゲームに魅力があると言う事だろう
「でもよ、サーゼクス様や他の魔王様もゲームに参戦出来ればランキングは変わっていたんだろうな」
「仕方無いよ。ゲームのルール上、魔王は参戦出来ないからね。魔王の眷属ならば参戦出来るけど、その方々もその気が無いって話だから。あくまで魔王の眷属として生きると言うのが四大魔王眷属の皆さんの理念だそうだよ。それに実戦とゲームは似て非なるもの。悪魔の実戦不足を補う為に設置されたゲームだけど、ゲームはゲームで特殊なルールも多いし、実戦とは戦術、戦略の巡らせ方も違う物だと僕は思う。だから、実戦で強くてもゲームでは成績が上がらないなんて珍しくないと感じるんだけどね」
「確かにそうだ。実戦にルールなんて制限は存在しないが、ゲームにはルールがある。それらを踏まえた上で戦っていかなきゃならない。実戦で出来る事がゲームじゃ出来なくなるからな」
新の言葉に祐斗も頷いた
実戦経験は豊富かもしれないが、ゲームでの特殊ルールには全く慣れていない
そう言う点がシトリー戦では顕著に出ていた
「どちらにしても部長やキミ達が将来ゲームで覇者を目指すなら、ディハウザー・ベリア

ルは避けては通れない大きな壁。悪魔の世界で上へ行くつもりなら、現トップランカーは全て倒すべき存在と想定していた方が良いね。まあ、部長の『騎士（ナイト）』である僕もいずれ、その世界に飛び込まないといけない訳だけどさ」

「その前にサイラオーグとの試合だ。本格参戦がまだ先である以上、まずは眼前の試合に臨まねぇとな」

新の言葉に一誠も祐斗も大きく頷く

――と、ここで新が作業の効率化を上げる為に一旦作業を中断し、電動工具を取りに用具室へ向かう

新校舎に到着して数分、用具室で電動ドリル等の工具を一式拝借してきた新

その道中、女子2人に呼び止められる

振り返ってみると……そこにいたのは同じクラスの剣道部女子――村山仁美（むらやまひとみ）と片瀬奈緒（かたせなお）だった

「ん、どうした？何か用か？」

「う、うん……っ。あ、あのね……竜崎くん……」

「こ、これ……受け取ってください……っ」

新は2人から差し出された1通の手紙を素直に受け取る

手紙を新に渡した村山と片瀬は顔を真っ赤にしたまま立ち去っていく

工具を置いて手紙の内容を確認する新
それは紛れもなくラブレターだった
「〝私達の気持ちを伝えたくて、このお手紙を書きました。明日の夜１９時、学園の剣道場に来てください。お待ちしています。村山仁美と片瀬奈緒より〟――――か……。参ったぜ、こりゃ」
「何が参ったのかしら？」
突然の声に新は〝ンゴプッ!?〟と意味不明の言葉を発して慌てふためく
己の背後を見てみるとリアスが腕を組んで仁王立ちしていた……
しかも、その眼はジッと睨み付けている……
「リ、リアス……どうしてここに？」
「あなたにも話があるから、イッセーと祐斗に聞いてここまで来たのよ。それより……これは何かしら？」
ヒョイッと新から手紙を奪い取るリアス
手紙の内容を確認するや否や、ユラユラと全身から危険なオーラが滲み出てくる……
眼だけが笑っていない笑顔を作り、ズカズカと新に歩み寄る
「これってラブレターよね？しかも、２人の女子からお誘いを受けるなんて良い御身分ね、新」

「え？ま、まぁな……。モ、モ、モテる性（さが）ってヤツ……？アハハハハハ……」
「もっと嬉しそうにしても良いのよ？あなたの性格上、私は全っ然気にしてないから」
「しょれなりゃ頬をちゅねるな、イテテテテテテテテテッ！」
リアスから制裁を受ける新の頬が伸びる伸びる（笑）
不機嫌そうな顔をしていたリアスだったが……一頻りつねり終えた後で手を離し、少し寂しげな表情となる
「……明日あなたにも来てもらいたいと思っていたのだけれど、そのお誘いを断る訳にもいかないでしょう……？」
「何か遭ったのか？」
「サイラオーグの執事がね、個人的に私と新とイッセーにお願いがあるんですって。さっき連絡を貰ったのよ。でも……」
「おいおい、俺がリアスみたいな良い女からの誘いをほったらかすと思ってんのか？心外だな」
「……えっ？」
「俺はな、女からのお誘いは滅多に断らねぇタチなんだよ。村山と片瀬の誘いも受けるが、リアスの頼み事も聞く。どちらか片方の誘いを捨てるなんて選択肢は俺の中には存在しねぇ」

新の答えにポカーンと口を開けるリアス
直ぐにクスッと笑い、自然と笑みがこぼれる
「もう、本当にあなたって自由気ままなんだから。……でも、それが新なりの答えなのね……。ありがとう、じゃあ明日はあなたも同行してくれる？」
「勿論だ、リアス。じゃ、作業の続きを済ませるか」
新は工具を持ち直して作業の続きをするべく旧校舎の方へ向かう
「……はあ……悩み過ぎていた自分がバカみたいに思えてならないわね……。でも、お陰で決心がついたわ。私もいい加減踏み出していかなきゃ……」

「……また戻ってきてしまったか、この町――駒王町（くおうちょう）に……」
「兄貴、ま～だあのアーシアって女の事が気になってんのかよ。俺達は一応お尋ね者の『地獄兄弟（ヘルブラザーズ）』なんだぜ？」
「分かってる。分かってはいるが……自然とここに足を運ばせちまったんだよ、相棒」
「恋は盲目ってか？ったく、何処ぞの黒足コックかっつぅ話だよ。そんなに好きならさっさと告（コク）って兵藤から奪い取りゃ良いんじゃねぇの？」

「そんな単純に出来れば苦労などしない。だいたい……どう伝えたら良いのかさえ分からんのに……」

『ねえ、仁美。とうとう渡しちゃったけど……大丈夫なの？何だか不安になってきたわ……』

『きっと大丈夫よ、奈緒。雑誌に載ってたもん。〝緑のインクで書いたラブレターを渡せば、想いは実る〟って』

「……緑のインクで書いたラブレター……？」

「女子供（おんなこども）のおまじないかよ、くだらねぇなぁ。あんなもん迷信に決まってんだろ。なあ、兄貴。……兄貴？」

『いらっしゃいませ～。何かお探しですか～？』

『ああ、緑色のインクってあります？』

「思いっきり信じてんのかいっ！」

サイラオーグの母

明くる日の事
新と一誠とリアスの3人は冥界のシトリー領に来ていた
自然豊かな林道を豪華なリムジンが進んでいく
「今回のこの件はお母さま経由なのよ」
話によると、サイラオーグの執事が折り入って話があるとグレモリー家に伝え、それをヴェネラナが了承しリアスに伝えたらしい
リアスの母――――ヴェネラナは元々バアル家の出身、サイラオーグの執事はその伝(つて)でヴェネラナに話を持ち掛け、ヴェネラナも話を受諾したのだろう
「何の用で呼び出されたかは分からんが、シトリー領に入るのは初めてだな」
「そうだな。自然豊かって感じがする」
「ええ、シトリー領は数ある上級悪魔の領土の中でも自然保護区が多い所ですもの。美しい景観の場所がたくさんあるわ。今度、皆で来ましょう」
確かに行く先に広がる山々は色の木々に囲まれており、如何に大自然に恵まれているのかが分かる

車窓から外を眺める新と一誠にリアスは続ける
「そして、医療機関が充実している領土の1つでもあるわ」
「医療ですか」
「ええ、これから向かう先も冥界でも名だたる病院の1つよ」
「病院？俺達は病院に向かっているのか？」
予想外の答えに新と一誠はお互いの顔を見合わせる
その理由を聞き出そうにも今は聞き出しづらく、現地に着けばいずれ分かるだろうと思い聞き出すのをやめた
やがてリムジンは拓(ひら)けた場所に出ていき、巨大な病院の入り口で停まる
車から降りると執事姿の中年の男性が新達を迎え入れた
「お待ちしておりました」
「ええ、案内してちょうだい」
リアスがそれだけ言うと中年の男性は「どうぞ、こちらに」と歩き出していき、そのあとを3人はついていく
広い院内を進んでいき、エレベーターに乗り込む
そこでリアスが静かに口を開いた
「私の母がバアル家の出である事は知っているわよね？」

「あぁ、リアスとサイラオーグはいとこ同士なんだろ？」
「ええ、そうよ。うちの母はサイラオーグのお父様――バアル家現当主の姉だから。腹違いなのだけれどね。サイラオーグのお父様が本妻の息子、私の母が第二夫人の娘。そして、おばさま――サイラオーグのお母さまは元７２柱であり、上級悪魔の一族、ウァプラ家の出なの。獅子を司る偉大な名家よ」
「ウァプラ……獅子を司る一族、か……。如何にもサイラオーグらしい血筋だな」
会話をしている内にエレベーターが上階に止まり、扉を抜けるとそこは病室のフロアだった
更に進むこと数分、執事に連れられてとある一室の前に辿り着く
「ここでございます」
中に入っていく執事とリアス
新と一誠も後からついていくと――個室のベッドに綺麗な女性が眠っていた
「……ごきげんよう、おばさま」
リアスは眠る女性に悲哀に満ちた眼差しを向けていた
〝おばさま〟と言うワードに新はその女性が何者なのかを察した
「……この方はミスラ・バアル様。サイラオーグ様の母君でございます」
やはりサイラオーグの母親……

生命維持装置の様な呼吸器を付けたまま眠っている点を見ると、体の何処かに異常があるようだ
執事が花束を持ったまま、目から涙を流す
「……今日、ここへお呼びしたのは他でもありません。リアス様、赤龍帝殿、闇皇殿、どうかこの方を……ミスラ様を目覚めさせる為にご助力願えないでしょうか……？」
突然執事に泣かれ、当惑する新と一誠
そんな２人にリアスは語り始める
「２人にも分かるよう、少しだけ話すわ」
それは一組の母子が辿った激動の運命だった……
サイラオーグはバアル家当主の父親と獅子を司る名門ウァプラ家の母親の間に生まれた
次期当主が生まれたと周囲は大変喜んだそうだ
しかし……生まれて直ぐサイラオーグにツラい現実が突きつけられる……
魔力が皆無に等しく、バアルの特色である『消滅』の力を持っていなかった
代々より当主は魔力に恵まれ、『消滅』の力を持つ事が当然とされていたのだが――
サイラオーグはそれを持たずに生まれてきてしまった
失意に暮れるサイラオーグの父親は怒りを妻に向けた

『我が一族が持つ滅びの力を何処に置いて、こんな欠陥品を産んだのだ!?』

――欠陥品

魔力と滅びを持たずに生まれただけでサイラオーグは父親に見捨てられ、同様にその子を産んだ母親も蔑まれるようになった

――欠陥品を産んだバアル家の面汚し、と……

「……あまりにも酷いものでした。当時のバアル家の者は、私を含めたウアプラ家からの従者達を除き、殆どの者がサイラオーグ様とミスラ様を侮蔑し、差別したのです」

うっすらと目に涙を浮かべながらリアスも言う

「当時のグレモリー家もその噂を聞いて、母がおばさまとサイラオーグをグレモリーの領土に保護しようとしたのだけれど、あちらに強く拒否されてしまったらしいわ。――――本筋の者でもなく、嫁に行った者がバアル本家の事に口を出すな、と」

グレモリーには滅びの力を色濃く受け継ぎ、冥界で活躍していたサーゼクスがいたのだが、バアル家にとっては面白くなかったそうだ

本家の子供が特色を受け継がず、嫁に行った者の子の方に遺伝してしまった……

バアル家にとってこれ程痛い皮肉は無い

「大王であるバアル家は世襲ではない現魔王を除けば、家柄的にはトップに君臨する上級悪魔。なかなか他の御家でも口出しが難しいわ。そしてプライドが何よりも高く、周

囲の目を気にする。おばさまとサイラオーグは厄介者でしかなかったのよ」
その後、ウァプラ家がサイラオーグの母親とサイラオーグの帰還を求めたが、バアル家からの返事は残酷なものだった……
「サイラオーグ様だけは渡す訳にはいかないと、ご当主様はおっしゃったのです。家の恥を出す訳にはいかないと。その様な提案をミスラ様が飲める訳がございません。ミスラ様の保護が無ければ幼いサイラオーグ様は幽閉され、独り蔑まれて生きていかねばならなかったからです。ミスラ様は故郷の助力を断り、サイラオーグ様と私達一部の従者のみを連れてバアル領の辺境へと移り住む事になったのです」
バアル領の辺境ならば本家にとっても目の届く位置にあり、何よりも外部にサイラオーグを晒す事も無い
その点からバアル本家はバアル領の奥地に母子が移り住む事を認めた
家の援助がほぼ無い中、サイラオーグは片田舎(かたいなか)で母親と暮らし始めた
「上流階級育ちのミスラ様にとって、助力無しでの田舎暮らしはお辛(つら)いものだったでしょう。それでも立派にサイラオーグ様を育て上げました。それはとても厳しく、時に優しく、サイラオーグ様を教育なされたのです」
魔力が皆無に等しい悪魔は何処へ行っても良い待遇は受けない
田舎に移り住んでもサイラオーグは差別の対象にされた

同世代の下級、中級悪魔の子供達よりも魔力が劣っていた為、その者達にいじめられたと言う

「それでもミスラ様は泣いて帰ってくるサイラオーグ様に強く言い聞かせておいででした」

――魔力が無くとも、あなたには立派な体があります。足りないと思うのなら、その足りないものを何かで補いなさい！腕力でも良い、知力でも良い、速力でも良い、補ってみなさい！あなたは誰が何と言おうとバアル家の子。たとえ魔力が無かろうと、滅びの力が無かろうと――

「――諦めなければいつか必ず勝てるから。以前、サイラオーグから聞いた言葉よ。母から教わった大事な言葉だって言ってたわ」

〝諦めなければいつか必ず勝てる〟

それは新にとっても、一誠にとっても胸の奥にまでズッシリと来る言葉だった

「裏では何度も謝り続けていたのです。滅びの力を持たさずに産んでごめんなさいと。ミスラ様は眠りにつくサイラオーグ様の横で何度も何度も泣き続けられておられました……。サイラオーグ様はそれを察しておられてもいたのでしょう。ある日突然、泣くのをお止めになられたのです。そして、何事にも真っ正面から立ち向かっていったのです」

自分をバカにした者達に、自分が足りないものに、サイラオーグは正面から立ち向かい、何度も倒れ続けながらも立ち上がっていき――そしてサイラオーグはそこで夢を掲げた

――実力があればどんな身の上の悪魔でも夢を叶える事の出来る冥界を作りたい、と……

悪魔業界も実力社会だが、実質は上流階級とそれ以外で世界が丸っきり違う

たとえ力を持っていても出自が下級ならば望める生き方を出来る者は少ない

古い家柄を持つ上級悪魔からの下級、中級悪魔に対する差別は未だに残っている

サイラオーグが受けた差別は想像を超える程凄まじく、如何に自分達が恵まれている方なのかを痛感させられた

サイラオーグが中級悪魔とまともに勝負が出来るようになってきた頃、サイラオーグの母親の体に異変が起こる……

「……悪魔がかかる病(やまい)の1つなのよ。症例は少ないけれど、その病気にかかると深い眠りに陥(おちい)り目を覚まさなくなってしまう。そして、徐々に体が衰弱していき、死に至る。だから、こうやって医療機関で人工的に生命を維持しなければならないの」

リアスが寂しげに目元を細めながらそう言った

あらゆる方法を模索したが結局治療方法は見つからず……それでもサイラオーグは

突き進むしかなかった
「その後、体を鍛え上げたサイラオーグは満を持してバアル家に帰還し、旦那様と後妻様の間に生まれた弟君を実力で下して、次期当主の座を得られたのです」
滅びの力を宿していたと思われる弟を倒し、今の地位を手に入れたサイラオーグ
ここで1つの疑問が新の頭に浮かび上がる
「サイラオーグはその弟を倒してバアル家に帰還したんだよな？なら、サイラオーグの母親はどうしてここに？ここの方がバアル領の病院よりも医療環境が良いって事か？」
「それもあるけれど……バアル領だとおばさまを狙う者がいるでしょうから」
「狙う!?な、なぜにそんな物騒な！」
「次期当主の座を奪われたサイラオーグの弟を始め、滅びの力を持たずに次期当主になったサイラオーグを疎む輩はバアル家周辺に多いわ。病気のおばさまは良い的になってしまう。だから、ソーナの伝を頼ってサイラオーグはシトリー領におばさまを移したの」
大王家次期当主の権力争いは未だに継続している……
悪魔社会の裏は想像以上に泥沼化してるようだ
執事が涙をハンカチで拭いながら言う
「あなた方をお呼びしたのは他でもありません。ミスラ様のご病気の治療にご助力願え

ないでしょうか？なんでも赤龍帝殿は女性の胸に秘められた声を聞く技を、闇皇殿は邪悪な『気』などを喰らう技をお持ちになられているとのこと。お二人のパワーが奇跡を呼び込むと聞きましたもので。是非、お願い致します。担当医の了解は取っております」

執事にそんな事を言われるが……つまり、ここで『乳語翻訳（パイリンガル）』と『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』を使って欲しいと言われてるようなもの……

新と一誠はお互いに顔を見合わせながら困惑する

それもその筈、この２人の技は元々がエロ技なのだから……

しかも、それを病人――――サイラオーグの母親に向けて使って欲しいなど無茶ぶりにも程がある……

シリアスな話をしていたのに一転していつものバカ展開……

リアスが頬を赤く染めながら言う

「……つ、通じるかどうか分からないけれど、医師の了解が取れているのなら物は試しね。新とイッセーの技は何度も奇跡を起こしているし、もしかしたらと言う事もあるわ。おばさまに技を掛けてみてちょうだい、新、イッセー」

リアスにそこまで言われると断る理由も無い……

執事も頭を深く下げて懇願している中、新と一誠は覚悟を決めた

「分かりました。何処までやれるか分かりませんが、やってみましょう！」
「はぁ……最近こんなアホな展開ばっかりだよな……」
新はガックリと肩を落とす
まずは一誠が籠手を出現させて力を溜め込む
ある程度溜めた所で技を発動させた
『乳語翻訳（バイリンガル）』！」
一誠を中心に謎の魔力空間が広がっていき、一誠はサイラオーグの母親に語りかけた
「サイラオーグさんのお母さん、俺にだけ聞こえる声で答えてください！げ、元気ですかーっ！」
『……』
訊いてみたものの返事は無し
「今度は鎧になって訊いてみます！」
禁手化（バランス・ブレイク）して鎧を発現する一誠
赤龍帝のパワーを脳内に送って更に魔力を高める
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
「今度こそ！サイラオーグさんのお母さんのおっぱい！どうぞ、俺に話し掛けてみてく

ださい！」
サイラオーグの母親が赤いオーラに包まれていく
パワーを上げて再度訊いてみるが――やはり反応は無かった
病気で意識を失っている者に対しては効かないのだろうか……？
「……すみません、ダメでした」
鎧を解いて謝る一誠
「次は俺か」と新も闇皇に変異し、籠手から刃先を出した
その刃先から黒い闇が出現し――サイラオーグの母親を包み込む
暫く病気の根源を探っていくが、元々原因不明の難病なので根源が分からなければ対処も難しい……
新の方も一誠と同じく発展無しで終わってしまった
「……俺の力でもダメだった、すまん」
「……何をしているんだ、お前達は」
突然の第三者の声
振り返ってみると、そこにいたのはサイラオーグだった……
「そうか、すまないな」
事の顛末を知ったサイラオーグは小さく微笑みながら新達に礼を言う

病室で話し込むのも迷惑なので、休憩フロアに移動していた
「ごめんなさい、新とイッセーにあなたの事を話したわ。ゲーム前だと言うのに……。それに今日は何も役に立てなかったわね」
申し訳なさそうに謝るリアス
ゲーム前にサイラオーグの過去を話したので余計な感情を新と一誠に持たせてしまったかもしれないと思っているのだろう
「構わんさ。来てくれただけで充分だ。母も喜ぶだろう。それに72柱に連なる家では珍しくない事ではない。次期当主を巡る争いなんてものはな。それがたまたま現代の大王家で起こっただけの事だ」
サイラオーグは自分の過去をまるで大した事が無かったかのように言う
自らの過去を一蹴してしまう辺り、流石だと言わざるを得ない……
「シトリー家とグレモリー家には世話になっている。それに関しては感謝の念が尽きない」
「良いのよ、それぐらいさせてもらうわ」
「だが、ゲームは別だ。次のレーティングゲーム、勝つのは俺のチームだ。余計な感情は捨ててくれ。俺が欲しいのは同情でも手加減でもない、本気のグレモリー眷属だ」
堂々と大胆不敵に宣言してくるサイラオーグは自身の拳に視線を落とす

「俺には肉体(これ)しか無かった。だから、負ければ全部失う。ここまで積み上げてきた物が崩れるだろう。家が持つ『消滅』の魔力を受け継げなかった俺にとって、勝ち続ける事こそが唯一の道だった。だから俺は拳(これ)で勝つしか無い。格好は悪いが、それが不器用な俺のお前達との戦い方だ」

サイラオーグは戦意に満ちた瞳を向けてそう言う

新は口の端を吊り上げ、一蹴は生唾を飲み込むとサイラオーグに向けて発した

「俺は手加減なんてしねぇよ。サイラオーグが過去にどんな事を体験してきたとしても、それはゲームとは関係無い。それに最初から手加減や同情だけでお前に勝てるとも思っちゃいない。全力で倒しに行く、覚悟しとけ！」

「俺も上級悪魔になる事が夢です！最強の『兵士(ポーン)』になりたい！その為にはあなたを倒さなければならないと思うんです。いや、きっとそうです。だから、俺は俺の野望の為にサイラオーグさんと戦います！」

新と一誠の言葉を聞いてサイラオーグが満足そうに笑んだ

「それで良い。ああ、それで充分だ。そして、やはり京都で何かを得たな？瞳から強さを見て取れる。リアス、兵藤一誠、竜崎新、俺も夢の為、野望の為、ゲームに臨もう」

「ええ、私は負けないわ」

サイラオーグの一言にリアスも大胆に答えた

その後、サイラオーグと執事に別れの挨拶をしてから帰路についた
帰りのリムジンの中、新は車窓から森を眺めつつ今の自分と過去の自分の心境を振り返る
バウンティハンター時代、新には決まった夢が無かった……
ただ生きる為に賞金首を捕らえ、時には殺し、金を得て酒や娯楽に注ぎ込む
毎日がその繰り返し……
仕事をしている時、酒を飲んでいる時、ギャンブル等をしている時、女を抱いている時は気持ちが高ぶっていたが――それ以外は虚しさが多かった……
夢を見ず、自ら(みずか)を奮起させる希望も無く、ただ毎日を自堕落に送ってきた……
〝昔の俺って、思った以上に情けなかったんだな……〟
新は心の中でそう自嘲する
しかし、今は違う……
リアス・グレモリーに出会った事で劇的に変わった――否、〝変われた〟と言った方が正しい
眷属悪魔に転生したお陰で仲間が出来た
心の底から笑い合えるようになった
毎日が楽しいと思えるようになった

自分の夢と希望が生まれ、一緒に目指してくれる友がいる
そして何より――――社会の吹き溜まりとも取れる世界から足を踏み出す事が出来た……
リアスに出会っていなければ、今でもバウンティハンターとして余生を送っていただろう
金はあれど、目指す夢や掲げる目標も無い自堕落な一本道を……
〝ありがとう……リアス……〟
自然と小さく呟いてしまった本音
隣にいたリアスは一瞬だけ聞き取れたのか、胸の奥が疼く様な感覚に襲われる
真っ直ぐな感謝の念を聞けた事にリアスは小さく微笑んだ

約束の時間午後１９時頃、新は正門を飛び越えて駒王学園の敷地内に侵入
誰もいない事を確認し、学園内の剣道場へと向かう
シトリー領の病院から人間界に戻ってきた後、新はそのままリアス達と別れて駒王学園にやって来たのだ

学園内に侵入し、剣道場の中に入ってみると――部活終わりなのか、剣道着を着たままの村山と片瀬がいた
２人ともソワソワしており、落ち着かない様子である
新は扉に鍵を掛けてから２人の方に歩み寄っていく
「待たせちまったか？」
声を掛けると２人はその質問に対して首を横に振る
村山と片瀬は深呼吸して自分達が新を呼び出した本題に入る
「あ、あの……竜崎くん……っ。こ、こんな時間に呼び出してごめんね……？」
「きょ、今日来てもらったのは他でもないの……っ。竜崎くんに伝えたい事があって……」
顔を赤らめ、頻りに手をモジモジさせる村山と片瀬
こう言う時の顔や仕草を新は知っている……
村山と片瀬は意を決して自分達の想いを吐き出した
「「私達……好きですっ、竜崎くんの事が好きですっ！」」
予想していた言葉が見事に的中した
しかし、問題はここからである
もし、彼女達に自分と付き合って欲しいと言われたらどうするのか……？

新自身は人間ではなく悪魔、新達の事情に彼女達を巻き込む訳にはいかない
今までの自分なら考える間も無く、肉体関係だけに留めていただろう
だが、新は悩んだ末……こう言った
「……そう言ってくれて、ありがとう。……お前達はこれからどうしたい？」
今後の事を彼女達に訊くと言う選択肢を取った
〝彼女達自身がどうしたいのか？自分とどう言った関係になりたいか？〟
それを彼女達の口から聞く事にした……
だが、逆に村山と片瀬はこんな事を聞きいてきた
「じゃ、じゃあ……竜崎くんは……す、好きな人とかいる……？」
この質問で新の気持ちを確かめるつもりなのだろうか
新の好きな女性……自分の中で浮かび上がったのは――初めて自分から惚れた姫島朱乃
新は朱乃の優しさと温もりに支えられ、人に愛される幸せを掴む事が出来た……
そして……もう1人浮かび上がったのは――紅髪の主、リアス・グレモリー
リアスには自分の新しい道を授かった……
自堕落へと向かう一本道から抜け出し、仲間と共に生きる輝かしい道を貰った……
リアスに出会えたからこそ、初めて自分から女性を好きになる事が出来た

彼女にも助けられ、支えられたお陰で今の自分がここにある
新は本心を彼女達に向かって伝えた……
「……いるぜ、２人」
「「――――っ。ふ、２人……？」」
「あぁ、１人は初めて俺が自分から惚れた女。そして、もう１人は……〝初めて自分から惚れる〟と言う感情を俺に与えてくれた女だ。俺は心の底から……そいつらに惚れている。だから……」
心を痛めるも、新は本心を打ち明けようとした……その時、村山と片瀬の瞳から一筋の雫が落ちた
彼女達は顔を上げて言う
「……そう、だよね。竜崎くん、優しくてカッコいいもん」
「好きな女性がいても、おかしくないよね……」
「村山……片瀬……」
ポロポロと落ちていく涙
新は彼女達に掛けてやるべき言葉を見つけられないまま、立ち尽くすしかなかった……
それでも彼女達は内に秘めた想いを伝える

「でもね……それでも……私達は竜崎くんに気持ちを伝えたかったの……っ。届かなくなっちゃう前に……」
「私達の気持ちを聞いてくれただけでも……嬉しい……っ」
「……」
村山と片瀬は徐々に新に近付いていき――その身を寄せる
「私達の最後のワガママ……聞いてくれる……？」
「……女が涙を流してまで言ってくれるワガママを……断る訳ねぇよ」
新は村山と片瀬をソッと抱き締め、彼女達のワガママを受け入れる事に……
その内容は――
「「私達の処女を……貰ってください……っ」」
「……あぁ、良いぜ」
新は勿論その申し入れを受けた
まずは村山の唇を指でソッと触れ、これからキスをすると言う合図を送る
村山は瞑目したまま受け入れる体勢を保ち……自分の唇が新の唇と重なった
『……っ。し、しちゃった……竜崎くんとキス……っ。――っ!?嘘……!?し、舌が絡んで……っ』
新のキスは実に濃厚で達者なもの

しかも丁寧に舌を絡めてきたので、村山は頭がパンクしそうになる
新は脳内処理が追いつかない村山の道着に手を掛け、慣れた手つきで脱がしていく
洗練されたテクニックを目の当たりにした片瀬も顔を赤らめ、その様子をジッと見つめる
あっという間に下着も全部脱がされた村山は文字通り一糸纏わぬ姿にされた……
ようやくキスから解放されたが、新の濃密なキスの気持ち良さに腰を抜かし、その場にへたり込む
「……はぁ……はぁ……あ、あれ……？いつの間に……脱がして……」
「さてと、次は――――」
「え、あ……ちょ、ちょっと待っ――――んううっ!?」
喋る暇すら与えない新は片瀬の口も自(みずか)らの唇で塞ぎ、彼女の口内を舌で蹂躙していく
その快楽性から抵抗など出来る筈も無く、村山と同様に脱がされていった……
もう充分だろうと新が唇を離すと、片瀬はストンとへたり込み、後ろに倒れそうになる
倒れかけた片瀬の背中を村山が支えた
「こ、こんなの……凄すぎる……っ」
「ダ、ダメ……頭の中が……真っ白……っ」

「しっかりしな。本番はこれからなんだぜ？」
駒王学園の剣道場で夜の部活動（セッ○ス）が始まった……

「……か、書けた。遂に書けたぞ……っ」
「やっとかよ、兄貴。昼間から書き始めたってのにどんだけ時間掛かったんだよ。もう夜じゃねぇか」
「仕方無いだろ……言葉を選ぶのは結構大変なんだ……」
「へいへい、兄貴の慎重さには呆れたぜ。で、いつ渡すんだよ？」
「あ、ああ……会えた時に渡そうかと――――」
「はあ……兄貴ぃ、アーシアって女は駒王学園って所に通ってんだろ？そこに行って渡せば良いだけじゃねぇか」
「こ、こう言う物を渡すのは……その、雰囲気とかが大事だろ？」
「……何か兄貴がどんどんヘタレてる様な気がするぜ……」

「ただいま」
「おかえり、新」
「新さん、おかえりなさい。何処へ行ってましたの？」
「ん？……あ、あぁ、ちょっとデートに」
「あらあら、お盛(さか)んですわね♪でも……私に一言も言ってくださらなかったのはいただけませんわ。新さん、罰として今日は私と一緒にお風呂に入ってくださいね？」
「……ははっ、分かったよ。……っ」
「……？どうしたの、新？私の顔に何か付いてるかしら？」
「い、いや、何も……。あー、最近は寒いからなー。早く風呂入ってサッパリしするか」
スタスタスタ……ッ
『……新さん、今明らかにリアスを見て動揺してたわね。今日シトリー領に行ってた間に何か遭ったのかしら？――――っ。うふふ、そう言う事ね……。良かったわね、リアス。新さん、知らず知らずの内にあなたを好きになったみたい♪私だけの〝特別〟が無くなったのは悔しいけど……許してあげるわ。後はあなたの頑張り次第よ、リアス』
『今日の新……ちょっと様子がおかしかったわね。何か遭ったのかしら？今日の帰り、小さい声でいきなり〝ありがとう〟って言ってきたぐらいだし……。でも、凄く嬉し

かった……っ』

記者会見

「うーん、やはりトリアイナのコンボは『僧侶(ビショップ)』が1番のネックか」
休憩中、一誠はおにぎりを頬張りながら祐斗にそう言った
祐斗は汗を拭きながら答える
「そうだね、トリアイナ版『僧侶(ビショップ)』はチャージが問題だ。『騎士(ナイト)』と『戦車(ルーク)』はそれぞれの使うタ」タイミングさえ間違えなかったら相手に大きなダメージを与えられると思うよ。砲撃も発射後に上手く曲げられる様になれば虚を衝(つ)ける」
グレモリー眷属はグレモリー領の地下にある広大な空間でトレーニングに励んでいた
一誠と祐斗は実戦形式の模擬戦をして、ひと休みしている所だった
遠くではゼノヴィアのトレーニングにロスヴァイセが付き合い、ギャスパーと小猫がそれぞれのサポートに回っていた
それをリアスと朱乃がアドバイスを掛けながら見守り、アーシアはイリナと神聖な儀式について話し込んでいる
一方、新は渉と模擬戦を繰り返していた

お互いが全力でぶつかり、休憩を殆ど挟まずにぶっ続けでやり通している
火花と剣戟の音が延々飛び交い、その勢いは回を重ねる毎に苛烈さを増していった
「しっかし、スゲェよなぁ……あの2人。もう何時間も打ちっぱなしじゃないか？」
「一応オーバーワークで倒れないように注意はしてるんだけどね。――あ、終わったみたいだよ」
新と渉の打ち合いがようやく終わり、新は息を切らしながら座り込む
ペットボトルの水を頭から被って肉体を冷却させる
水気を飛ばした後、呼吸を整え始めた
「新、いくらゲームが近いからって追い詰め過ぎじゃないか？下手したらぶっ倒れるぞ」
「……あぁ、分かってる。けど、相手が相手だ。サイラオーグは……俺が今まで見てきた相手の中では、恐らく最強クラスに匹敵する。油断出来ないからな……。それに……サイラオーグを超えるぐらいにならないとあいつには――」
「……？」
「いや、何でもない」
何かを言い掛けようとした新に一誠は疑問符を浮かべる
休憩を終えて再度トレーニングに戻ろうとした時、「今日はここまでよ」とリアスが制止してきた

「明日は記者会見だもの。あまり練習ばかりしていると、明日酷い状態で記者達の前に出る事になるわ」

〝……記者会見……？〟

その一声に新は片眉を吊り上げ、一誠は目をパチクリさせる

間の抜けた顔をしている２人にリアスが微笑みながら追加情報を告げる

「あら、言ってなかったかしら。ゲーム前に私達とサイラオーグのところが合同で記者会見をする事になったのよ。テレビ中継されるのだから、変な顔しちゃダメよ？」

「聞いてねー……っ」

「え、えええええええええええっ!?」

初めて聞いた情報に２人は呆気に取られた

次の日の夜、学園祭の準備を含んだ一連の活動を終えた後に新達が向かったのはグレモリー領にある高級ホテル

現在、新達は上階の控え室で待機していた

広い一室、高級家具一式が揃い、テーブルの上には見た事も無いフルーツ盛りやケー

キ、お菓子などが並んでいる
このホテルの2階ホール会場にてグレモリーとバアル、両眷属の合同記者会見が開かれる
内容は至ってシンプル、ゲーム前の意気込み会見だそうだ
ソファーに座り込む新、彼の膝の上でケーキをモグモグと食べる小猫
特に緊張している様子は無さそうだ
アーシアやロスヴァイセは鏡の前でメイクの調整に夢中になっており、ゼノヴィアは簡単な薄化粧だけで済ませていた
リアスと朱乃は準備万端で、化粧を済ませたせいか艶のある雰囲気を出していた
「ギャスパーくんはいつもの女子の制服で良いのかい？」
「は、はい。今更男子の制服を着てもなんなので……て言うか、出たくないですぅぅぅっ！引きこもりの僕には記者会見なんて場違い過ぎて耐えられません！」
祐斗とギャスパーも身支度が終わっていたようだが、ギャスパーは早速段ボール箱の中に逃げ込んだ……
記者会見の時間は刻一刻と迫り、新も最終確認を済ませようかと思っているのだが――
――小猫は一向に新の膝上から離れようとしない
新の視線に気付いたのか、小猫はほんのり頬を赤く染める

「……今日は焼き鳥がいないから新先輩の膝上にいたいんです」
それを聞いて朱乃は微笑ましそうにしていた
「あらあら。小猫ちゃんったら、レイヴェルちゃんに新さんを取られると思っているんですわね」
「そうなのか?」
新が訊くと小猫は口を可愛く尖らせながら答える
「……先輩は優しすぎるから、困る事も多いんです」
「小猫、俺は取られる側より取る側だって知ってるだろ?」
小猫は不満げな表情のままだが、尻尾をフリフリと振っているので少しは機嫌を直してくれたようだ
控え室の扉が開かれて「皆さん、そろそろお時間です」とスタッフが声を掛けてくる
通路を進んでいくと、見知った人物と出くわした
「あ、リアス先輩に兵藤、竜崎、オカルト研究部の面々じゃないか」
「匙!お前何やってんだ?」
「言ってくれるぜ……。まあ、仕方無いか。こっちはあんま注目されないまま決定したわけだしな」
匙が溜め息を吐きながら続ける

「俺の所も対アガレス戦のゲームをするのさ。その記者会見を今日やるんだ」
「は？」
「な、なにいいいいいっ!?は、初めて聞いたぞ！」
片眉を吊り上げる新と驚く一誠にリアスは首を傾げながら言う
「言ってなかったかしら？ソーナの所も私達の試合と同時期にシーグヴァイラ・アガレスとゲームをやるのよ。あっちもアガレス領で湖上に浮かぶ島々が会場だったかしら」
「……最近、事前情報の提供が滞ってないか？」
新がジト目でリアスを見ていると匙が苦笑する
「だから言ったろ？注目されてないって。そりゃ、そっちはおっぱいドラゴンとリアス先輩と闇皇で有名なグレモリー眷属と、あの若手ナンバーワンのサイラオーグ・バアル眷属の一戦だもんな」
「元ちゃん、行きましょう。遅れちゃまずいし。リアス先輩、それではごきげんよう」
シトリー眷属の『僧侶』花戒がそう言うと、匙は「じゃあ、俺達はこれで」と頭を深く下げてからその場をあとにした
新達はそのまま通路を抜けて会場となるホールに姿を現す
拍手の中、広い会見場に入った瞬間――――闘気が満ちているのか、ピリッとした緊迫感が肌を走る

会見席の上には悪魔文字で「サイラオーグ・バアルＶＳリアス・グレモリー」と書かれた幕があり、既にバアル眷属は揃っていた
間を空けて、バアル陣営の隣席に新達が座る
リアスが中央、右隣に朱乃、左隣に新と一誠と言う注目される位置取りで
サイラオーグの体からは張り詰めた気合が発せられていた
表情もかなり険しく、病院で会った時とはまるで別人である
『両眷属の皆さんが揃ったところで、記者会見を始めたいと思います』
司会がそう言って記者会見がスタート
ゲームの概要、日取りなど基本的な事が司会によって改めて通達され、その後は両『王（キング）』であるリアスとサイラオーグが意気込みを語る
会見は無事に進み、遂に両眷属の注目選手への質問が始まった
男性人気の高いグレモリー眷属女性陣が質問に一言返し、女性人気の高い祐斗も難なく返していく
そして……質問が遂に新にも向けられた
『冥界の人気者おっぱいドラゴンこと兵藤一誠さんと並ぶ「蝙蝠皇帝ダークカイザー」こと竜崎新さんにお訊きします』
「はい」

いつもは堅苦しい場面が苦手な新もこの時だけは不真面目な様子を見せず、淡々とした態度でこなしていく予定だったのだが……

『今回もリアス姫の胸をつつくのでしょうか？つつくとしたら、どの場面で？』

〝ナ　ニ　ソ　ノ　シ　ツ　モ　ン　？〟

予想の斜め上を一気に駆け上がるような質問に新の頭の中が一瞬真っ白になる

顔を引きつらせている間にも記者の質問は続く

『特撮番組同様、リアス姫のお乳をつついたり、揉みしだくとパワーアップすると言う情報を得ています。それによって何度も危機的状況を乗り越えてきたと聞いているのですが？』

『ひでぇ質問だな！』

新と一誠のツッコミが心の声でシンクロした……

しかし、一誠はこれが自分に対する質問じゃなかった事に内心安堵する

新は今にもキレそうな雰囲気を出していたが、グッと堪えて何とか質問に対する答えを見出だそうとする

しかし、先程のアホな質問のせいで頭が混乱しているせいか、上手く言葉を出せず考え込む

遂には身体機能までおかしくなってきたのか――――〝ブシュンッ！〟とクシャミま

で出てしまった
「失礼」と切り返そうとする新だったが……その〝クシャミ〟がまずかった
『ぶちゅう!?今ぶちゅうと言おうとしてませんでしたか!?それってつまり、ぶちゅうぅぅぅっと吸うと言う事ですか、胸を!?』
突然フラッシュが大量にたかれ、記者達もざわめきだした！
これには流石に平静を保つ事など出来ず……
「何を勘違いして聞いてんだぁぁぁぁぁぁぁっ!?このバカ記者どもがっ！今のはただのクシャミだろ!?」
怒鳴り散らす新だが、その勘違いはまたトンでもない方向にズレ始める
『それはリアス姫のお乳を吸うと言う意味ですか!?』
「なんで〝クシャミ＝吸う宣言〟になるんだよ!?」
『つついたり揉むとパワーアップするとしたら、吸うとどうなるんですか!?冥界が崩壊するとかあり得るんでしょうか!?』
「知るかバカ野郎ッ！」
『リアス姫！これについてコメントをお願いします！』
「……し、知りません！」
リアスは最大レベルに赤面し、恥ずかしそうに顔を両手で覆い隠した

隣の席では朱乃が堪えきれずに吹き出している
『サイラオーグ選手はどう思いますか？』
バカ記者の1人がサイラオーグにまで質問を振った
サイラオーグは真面目な表情で答える
「うむ、リアスの乳を吸ったら闇皇（やみおう）は恐ろしく強くなりそうだな」
『おおおおっ！』
「そんな事を真面目に言ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
記者会見は張り詰めた雰囲気から一気に砕け、笑いに満ちた状態で幕を閉じた……
「ハハハハハハハ！」
記者会見後、会見場の裏手に集まるグレモリー眷属とバアル眷属
そこでサイラオーグが豪快に笑っていた
「いや、すまん。しかし、お前達と絡むと楽しい事ばかりが起こるな。戦闘前だから闘志を纏って会場入りしたんだが、すっかり毒気を抜かれてしまった。いやいや、逆にリラックス出来たぞ」
「もう！サイラオーグも変な事言わないでちょうだい！」
赤面して涙まで浮かべているリアスはサイラオーグに怒っていた
よほど恥ずかしかったのだろう……

新も会見での失態がよほど堪えたのか、ゲンナリと頭を垂れていた……
「良いではないか。結果的に血生臭い会見ではなく、話題性に富んだものになったではないか。明日の朝刊の見出しが楽しみだ」
「全然楽しみじゃねぇよ！」
サイラオーグはフーッと笑顔で息を吐く
「なるほどな。これがグレモリー眷属と戦うと言う事か。会見でもコメントで戦わねばならないとは思わなかったぞ」
「す、すみません、こんな調子で……決してバカにするつもりはなくて……」
一誠は謝るが、サイラオーグは首を横に振る
「そんな事は無い。気にしないぞ、俺は。逆だ。あんなにも注目を集める場所であれだけの事を起こすお前達に未知のものを感じる」
サイラオーグは踵を返し、手を振って新達のもとを去っていく
「今夜は楽しかった。次に会うのは決戦の時だな。――――空で会おう」
記者会見も終わり、刻々とサイラオーグとのゲームの日が迫っていく

「……ったく、明日の冥界の朝刊、読みたくねぇ……」
新は自宅の大浴場に浸かりながら記者会見時の事をボヤいていた
思いも寄らない方向に進んでしまった記者会見の内容を思い出してしまうので、気分転換も兼ねて風呂に入る事にした
しかし、試合が近いせいか思ったようにスッキリせず、日に日に高揚しているのも原因なのかもしれない
……夢を懸けての一戦……
そう思うと余計に気分が解れなかった
「あぁっ、クソッ！俺らしくもねぇ！……こんなに悩むなんてな」
新はモヤモヤ気分をどうにか払拭出来ないものか思索に耽っていると、風呂場の扉が開かれる
扉を開けて現れたのは――――全裸のリアスだった
バスタオル1枚すら纏わず、自身の体を隠そうともしないリアス
「あら、新じゃない。ちょうど良かったわ。一緒に入らせてちょうだい」
「別に構わねぇけど」
リアスは広い浴槽に入り、新の隣に座り込む
新は湯船に浸かったリアスの裸体に視線を配らせた

艶っぽさが以前より拍車を掛けている様に見え、水気を含んだ紅(あか)い髪が優雅に払われる

その艶(なまめ)かしい仕草と容姿に思わず息を呑んでしまう新……

「二人きりね。ここで新に押し倒されたら、私、どうなっちゃうのかしら？でも、新は私達の裸なんて見慣れているから、そうでもないのかしら？」

「――っ。そんな事は無い。状況次第じゃ俺だってグッとくるものがある」

「ふふっ、そうみたいね。新の焦り顔って新鮮」

チャプチャプと湯を揺らして新に密着するよう近付いていくリアス

湯の中で新の手を握り、ジッと見つめる

すると、リアスがこんな事を聞いてきた

「ねえ、新。新にとって私は……何なの？」

「ど、どうした急に――」

「答えて」

リアスは真剣な表情で新に質問の答えをせがんだ

新はこれまで募(つの)らせていた心情を包み隠さず、嘘偽りを含ませず言った

「リアスは俺にとって最高の主であり――今の俺に変えてくれた大恩人だ」

「……？今のあなたに変えた？どういう事？」

「そうだ。昔の俺はとても褒められる様な生き方をしていなかった。バウンティハンターの任務とギャンブルで金を稼ぎ、酒を飲んで飯を食って、女を抱いて――――その日暮らしの毎日を送ってきた。夢も目標も持たない自堕落な生活に囚われ、そこから抜け出そうとしなかった。人生の負け犬だったんだ……」

新は今まで隠してきた心情を吐露し、リアスも初めて知る新の嘘偽り無き心情に言葉を出せなかった

いつも堂々と振る舞い、自分や朱乃達を幾度も助けてくれた新が弱音を吐いている……

沈んだ表情の新は俯(うつむ)かせた顔を上げ、リアスの方をジッと見る

「でもな……そんな情けない俺を変えてくれたのがリアスだ。リアスに出会ったから――――リアスの『兵士(ポーン)』になったから、今の俺がいるんだ。仲間が出来て、学校に行けて、毎日が楽しいと思える様になった。初めて〝自分から女性(ひと)に惚れる〟と言う感情を芽生えさせてくれたのもお前だ。だから、俺は朱乃の優しさと温もりを知る事が出来た……っ」

話が進むにつれて涙を落としていく新は――――改めて告白する

「今頃気付いたんだ……っ。リアス、俺は……俺は……お前にも惚れていたんだって……っ」

「――――っ」
新の口から出てきた告白の言葉
リアスは胸を締め付けられる様な感覚に襲われた
しかし、それは痛く苦しいものではなく――――嬉しさから来るものだった……
言葉を詰まらせていた彼女に新は涙を拭って言う
「本当に……本当にありがとう、リアス……っ。今ならハッキリ言える……っ。俺は――――お前が好きだ」
「――――っ！」
終始言葉を詰まらせるリアス
次の瞬間、目から大粒の涙をポロポロと流していく
「……先に言われちゃったわね……っ。私が先に言おうと思ってたのに……」
「……え？」
「ズルいヒトね、新は……。いつもいつも先を越してばかり……。でも、お陰であなたを本当の意味で知れた様な気がする……」
リアスが新の頬を撫でる
「嬉しい……嬉しいの……。本当のあなたを知れて……っ。そのあなたに好きって言われて……っ」

「じゃ、じゃあ……リアス……そう思って良いのか？」
　新の問いにリアスは頷いた
「新、私もあなたの事を愛している……。誰よりもずっと、あなたの事が好きよ……っ」
　リアスの唇がゆっくりと新の唇に近付いていく……
　最高の雰囲気に包まれ、キスしようとしたその時――――新の視界に亜麻髪（あまがみ）の女性……笑みを浮かべながら２人の様子を窺（うかが）っているヴェネラナ・グレモリーが映り込んだ
　無論、ここは風呂場なので彼女もバスタオル１枚すら纏っていなかった
　思わぬ人物の存在に新は目玉が飛び出し、その様子を見て怪訝に思ったリアスは後ろを向いて仰天する
「お、お、お母さまっ!?いつからそこに!?」
「あら、あなた達が湯船に浸かった時からいましたのよ。でも……気付かないのも無理ありませんね。あんなラブラブな雰囲気を出していたのだから、見てる私まで恥ずかしかったもの♪」
　最初から今までのやり取りを母親に見られたいたリアスは顔中を真っ赤にし、頭から湯気を放出する
　そんな娘を他所にヴェネラナは新に近付いていく
「新さんもよく言えましたね。今の言葉は嘘偽りが無い本心からのものだと確信しまし

た。では、どうぞ続きを♪」
「母親の前で娘にキスしろだと!?いくら俺でも難易度が――高過ぎる事は無いか」
以前姫島朱璃・朱乃母娘とセッ○スした事を思い出し、平静になりつつある新
一方のリアスは未だに顔を赤く染めていた
〝もう、どうにでもなれ〟とばかりに新はリアスの唇に自分の唇を重ねた
惚けていたリアスはキスされた事に気付き、そのまま新の舌に口内を犯されていく
「んぅぅん……っ、んちゅ……くちゅ……ひゃむっ、ちゅぱぁ……っ」
イヤらしいキスの音が風呂場に響き渡り、次第にリアスの体も火照り始めた
新の調子が戻ってきたのか、リアスのおっぱいを右手で揉んでいく
堪らない感触に舌の動きもヒートアップ、更にねちっこく責める
数分間続いたキスがようやく終わってみると……リアスはスッカリ蕩けた表情になっており、元々あった艶っぽさも倍増していた
「はぁ……はぁ……はぁ……っ」
「凄く情熱的なキスでしたわね、新さん。リアスもやっとスタートラインに立てましたね。こんなにトロトロになって……可愛いわ♪」
「お……お母さま……っ、からかわないでください……っ」
「でもね、リアス。本番はここからよ?今こそ――新さんに抱かれなさい。私もお手

伝いしてあげるから」
　ヴェネラナの宣告にリアスは再び今日一番の仰天具合を見せ、ヴェネラナは更に続ける
「良いですか、リアス？この絶好の雰囲気に辿り着いたら後は押しの一手のみです。ここで押さなければチャンスは訪れませんよ？」
「……っ。そう、ですね。お母さま」
　最初こそ戸惑っていたものの、ヴェネラナの言葉に諭されたリアスは意を決した表情で新に懇願した
「新、こんな形で申し訳ないけれど……お願い……私を抱いて……っ」
「……あぁ、良いぜ。と言うか、ここでグズグズしてる方が恥だからな。よろしく頼む」
「ふふっ、ようやく願いが叶ったわね、リアス。せっかくなので私も一緒によろしいかしら？」
「え？」
「あなた達のやり取りを見てたら、私も欲しくなってしまったんですもの♪」
　新に四つん這いでにじり寄るヴェネラナ
　大人の女性特有の色っぽさが新の性欲を更に掻き立て、リアスの隣に並ぶ

紅髪(べにがみ)の主と亜麻髪(リアスあまがみ)の母親(ヴェネラナ)
嘗(かつ)て無い極上の相手に新は気合いを入れた
「新……初めてだから、出来るだけ優しくしてね……？」
「私は激しくても構いませんのよ？」
「それじゃ――――ゴチになりますか」

――――――――――――（※情事中の台詞を一部掲載）

『はひゃぁぁぁんっ！ひぃっ！ふあぁっ、ぁぁあんっ！やぁぁ……っ！バ、バカぁぁ……っ。新ぁぁ……っ！やひゃひくひてってっ、言ったのにぃぃぃ……っ！りょおひて強くしゅるのぉぉぉ……っ！こ、こんにゃの……おかひくなるぅぅぅ！』

『はぁぁぁあっ！あっ、あはぁぁ……っ！新さんの……凄いぃぃぃ……っ！私の弱い所ばかり……くひぃんっ！攻められて……奥も……っ、中も熱い……っ！』

『あぁぁぁ……っ、もう……ダメぇ……っ！イッ、イッちゃう……イッちゃうのぉぉっ！お母ひゃまに見られながらっ、イッひゃう！らめぇっ、らめなのぉぉぉぉ！』

『んぁぁぁぁんっ！はぁぁぁっ、はぁぁぁっ！む、娘と一緒にぃ！イ、イクっ！イキますぅ！激しいのが久しぶりにキちゃうぅぅぅっ！』

『らめぇぇぇっ！おかひぃぃぃっ！かりゃだがおかひぃぃぃっ！ビクビクしてりゅのにっ、ま……またイッひゃう！ひぃっ！ひやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！』

『あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！あ、あらたさぁん！私もうっ、出ちゃうっ！吹き出ちゃうっ！上と下から両方吹き出ちゃうのぉぉっ！』

「はぁ……はぁ……はぁ……こ、こんなに疲れたのは久々だ……っ」

グレモリー母娘（おやこ）とのセッ〇スを終えた新は腰を落とし、深々と呼吸を続けていた

リアスとヴェネラナも横たわりながら細かく身震いしており、艶（なまめ）かしい息遣いとなっていた

新は2人の身体に付着した液をお湯で洗い流し、暫くしてリアスとヴェネラナがようやく体を起こす
「はぁ……何だか若返った気分ね……っ。凄かったわ……っ。ねえ、リアス？また機会があればもう1回しましょ？」
「も、もうこんな恥ずかしい体験は1度で充分ですっ！」
「あら、そう？残念ね……。さっきの可愛く乱れてたあなたをもっと見たかったのに……。まあ、良いでしょう。では新さん、娘を――リアスをこれからもよろしくお願いしますね？」
「勿論ですよ、ヴェネラナさん」
「私としてはお義母さま、もしくは母上と呼んでいただきたいのですが――今は良しとしましょうか。では」
そう言うとヴェネラナは転移魔方陣を展開し、魔方陣が輝くと同時に消えていった
風呂場に取り残された新とリアスはお互いに顔を見合わせる
「新……改めてお礼を言わせて。ありがとう……っ」
「いや、こっちの台詞だ。俺の方こそ……ありがとう、リアス」
その後2人は無言のまま顔を近付け――キス、しようとしたその時……扉の方で音がする

「ちょ、ちょっと、押さないでよゼノヴィア！」
聞こえてきたのはイリナの声
見てみると……風呂場の扉から朱乃やゼノヴィア達が顔を覗かせていた
それに気付いた新とリアスは酷く仰天した
「お、おめでとう、新、部長！これが噂に聞く３Ｐとやらか！最初から最後まで見せてもらったぞ！」
「あわわわわわ……ほ、本当に凄かったわね！まさに目を覆いたくなる恥ずかしさ！」
ゼノヴィアがギクシャクしながらも賛辞を贈り、イリナは目元を手で覆い隠す
「うふふ。リアスとそのお母さまを一緒にだなんて……素敵でしたわ、新さん♪」
「……新先輩、エッチだけは器用ですね」
朱乃は頬を赤く染め、小猫も可愛く毒づく
「あああああ新さん……っ、こ、こ、こんな所でなんてイヤらしい事を……っ。ふ、不純過ぎる異性交遊は今日だけですからねっ!?」
先程のセッ〇スをバッチリ見たロスヴァイセは取り乱しながら〝余計なお世話〟を体現した台詞を口走る
「アラタ、日に日にレベルを上げているわね。私を最初に抱いてもうここまで……」
「アラタ～っ！次はレイナーレ様とウチらで４Ｐして～！」

「この調子だと、この家の女性全員と――――なんて状況も近いな」
レイナーレ、ミッテルト、カラワーナもマジマジと見ていたらしい……
絶句する新の隣でリアスがプルプルと全身を震わせていた
「もう！あなた達！私の貴重で大切なワンシーンだったのに！どうしてくれるのよ！しかも、今までの事を見てたなんて……っ！これも新のせいよ！こんな所で告白してエッチするんだもの！」
「え！俺のせい!?」
「「「「と言う事にしましょうか」」」」
覗き見してた皆が同意の言葉を上げ、締まりの無い終わりを迎えてしまった……
しかし、それでも想いを伝えた新とリアスは今日の喜びを噛み締める

一誠のトラウマ

明くる日の放課後、部室に来ていた新は顔を引きつらせて溜め息をついていた
その理由は冥界の新聞にある……
『ダークカイザー、スイッチをぶちゅうううっと吸う!?』
予想していた通り、酷い見出しで発行されていた冥界新聞
一面がその内容に関する文章で埋め尽くされていた……
「……酷いな、これ」
一誠が苦々しい表情をしながらそう言ってくる
しかし、いつまでも新聞の記事を気にしている時間は無い
これからアザゼルと共にレーティングゲームに関するミーティングがあるのだ
部室に来ているのは新と一誠、祐斗、ギャスパーの４人のみ
他の皆はまだ来ておらず、同じクラスの教会トリオは学園祭の準備作業に使う布地を求めて新校舎の方に行っている
「よー、ギャスパー。クラスでの２人の様子はどうだ？」
「は、はい……。小猫ちゃんとレイヴェルさんは事ある度に口喧嘩ばかりですぅ。いつ

も静かな小猫ちゃんが、レイヴェルさんが相手だと容赦無いツッコミを入れてばかりなんですぅ……」
「相変わらず犬猿ならぬ猫鳥の仲ってか」
「で、でも、人間界での生活に不慣れなレイヴェルさんに文句を言いつつも小猫ちゃんはキチンと面倒を見てあげていますし、レイヴェルさんも小言を呟きながらも小猫ちゃんのあとをついて回っていますよ……？」
「そうか。何だかんだ言っても交流は出来てるようだな」
「うーん。乙女心は複雑怪奇ってヤツか……」
そんな風に天上を仰ぎながら呟く一誠
すると、ギャスパーが若干落ち込み気味で言ってきた
「……ぼ、僕は小猫ちゃんのようにレイヴェルさんのお役に立てそうにないです。と、と言うか、プライベートでも戦闘でも皆さんのお役に立てそうにもなくて……」
「お前の眼は今回のゲームで解禁されているし、俺の血を入れた瓶も携帯出来るようになったじゃないか。それでも不安か？」
一誠が訊くとギャスパーは頷いた
「……僕はイッセー先輩や新先輩のように勇気も力もありませんし……祐斗先輩のように剣も使えません……。せめてサポートだけでもお役に立てたら幸いなのですが……

ぼ、僕、男子として恥ずかしい気持ちでいっぱいですぅぅぅっ！」
女装しているがギャスパーも男、グレモリー眷属の役に立ちたいのだろう
一誠はそんな弱気のギャスパーに檄を込めて言う
「ギャスパー！俺が今から言う事を胸に刻め！『グレモリー眷属男子訓戒その1！男は女の子を守るべし』！ほら復唱！」
「お、男は女の子を守るべし！」
「よし、次！『グレモリー眷属男子訓戒その2！男はどんな時でも立ち上がる事』！」
「お、男はどんな時でも立ち上がる事！」
「最後！『グレモリー眷属男子訓戒その3！何が起きても決して諦めるな』！」
「な、何が起きても決して諦めるな！」
「よしよし、それを胸に刻んでグレモリー男子らしく戦えば良いのさ」
「は、はい！ぼ、僕、これらを胸に刻んで頑張りますぅぅぅっ！」
一誠から与えられた訓戒で気合が入ったギャスパー、祐斗も小さく笑っていた
「良いね、それ。僕も胸に刻もうかな」
「そうしとけそうしとけ。何があっても諦めないのがグレモリー眷属の男子だぞ。新も一緒にどうだ？」
「俺は暑苦しいのは苦手なんだよ」

そんな風に盛り上がる中、アザゼルやリアス達が入室してきた
来るべきバアル戦に備えたミーティングが始まり、一誠が挙手してアザゼルに質問する
「サイラオーグさんにも先生みたいにアドバイザーが付いてるんですか？」
「ああ、一応あっちにもいるぞ。皇帝さまが付いたそうだ」
「――――っ！……ディハウザー・ベリアル」
アザゼルの一声に真っ先に反応したリアス
ディハウザー・ベリアルはリアスにとってレーティングゲームで各タイトルをゲットする為に超えなければならない壁……
将来的に新や一誠にとっても大きな壁となるだろう
「まあ、リアスや新、イッセーが上級悪魔としてゲームに参加するのならば、正式参戦後の大きな目標と見ておいて良いだろう。眷属のメンバーも主がゲームに参加する以上は避けて通れない相手だろうしな。さて、お前達、サイラオーグ眷属のデータは覚えたな？」
アザゼルの言葉に全員が頷いた
アザゼルは立体映像を部室の宙に展開、バアル眷属の面々がパラメータ付きで表示されていった
アザゼルがそれを見ながら言う

「あのグラシャラボラス戦では能力を全部見せていない者もいたようだ。まあ、あの試合は途中でグラシャラボラスのガキ大将がサイラオーグ相手にタイマンを申し込んだしな。実質、サイラオーグが勝負を決めたようなものだ。それにサイラオーグ達はお前達と同じ、悪魔では珍しい修行をするタイプだ。グラシャラボラス戦の時とは明らかにレベルアップしているだろう」

バアル眷属もまた悪魔では珍しい努力を積み重ねるタイプで、グレモリー眷属と同じくトレーニングをして力を上げている

現時点では記録映像の時よりもパワーアップしているだろう

「あいつら、闇人（やみびと）や『禍の団（カオス・ブリゲード）』相手にも戦っているって話だからな。危険な実戦も積んでいる。『出来るだけ若手を戦（いくさ）に駆り出さない』って宣言してたサーゼクス達四大魔王の意向も虚しいか。ま、お前達みたいに無茶な戦闘に出くわす若手もいるしな」

アザゼルが苦笑いしながらそう言う

確かに今まで相手にしてきたのは悪神（あくしん）や最強の神滅具（ロンギヌス）、更に全魔族の天敵とも言える闇人（やみびと）と――――いずれも化け物揃い

運命だとしても悲惨を容易に超えたレベルだった……

ここで険しい表情のロスヴァイセが呟く

「……この相手の『兵士（ポーン）』、記録映像のゲームには出てませんよね？」

新達が視線を一点に向けると――そこにはサイバー作りの仮面を被った者が映し出されていた
名前も本名ではなく『兵士(ポーン)』と表記されている
サイラオーグの陣営は『女王(クイーン)』1、『戦車(ルーク)』2、『騎士(ナイト)』2、『僧侶(ビショップ)』2、『兵士(ポーン)』2とこちらの陣営と数は同じである
「記者会見でも記者がこのヒトの事であろう質問をサイラオーグ・バアルに向けていましたね」
しかし、記者会見時にこの仮面の『兵士(ポーン)』はいなかった
その事に関してアザゼルが口を開く
「……そいつは滅多な事ではサイラオーグも使わない『兵士(ポーン)』だそうだ。情報も殆ど無くてな。仮面を被っている為に何処の誰だか分かりもしない。今回初めて開示された者だ。って事は今度のゲームで使うって事だろう。サイラオーグもこいつを出来るだけ他者に引き合わせないようにさせているようだからな。ただ1つだけ噂で流れているのは――消費した『兵士(ポーン)』の駒が6つだか、7つと聞く。ゆえに奴の『兵士(ポーン)』はこいつを含めた2人だけなんだそうだ」
『6つ!?7つ!?』
異口同音で全員が驚愕の声音を出した

仮に７つだとすれば相当な手練れか、潜在能力を持っている事になる
「データが揃っていない以上、この『兵士（ポーン）』には細心の注意を払って臨むべきだ。ただでさえ、今回はどんな選手でも参加出来るんだからな。……サイラオーグの隠し球、虎の子ってところか」
　その後はリアスが先頭に立ってゲームの戦術と相手への対策を皆に話していき、議題を一通り終えた所で一誠が挙手してアザゼルに疑問をぶつける
「先生、俺達が正式なレーティングゲームに参加したとして、王者と将来的に当たる可能性は……？先生の目測でも良いですから」
「お前達はサイラオーグと合わせて、若手でも異例の布陣だ。と言うのも正式に参戦もしていないのにこれだけの力を持ったメンツが集まっているんだからな。しかも実戦経験――特に世界レベルでの強敵との戦闘経験がある。その上、全員生き残ってるんだからな。そんな事滅多に起こらないし、久方ぶりの大型新人チームと見られている。本物のゲームに参戦してもかなり上を目指せるだろうよ。トップ１０（テン）入りは時間の問題だろうな」
　堕天使の総督直々から太鼓判を貰い、気恥ずかしい気分の新達にアザゼルは続ける
「だが、その分、冥界からの注目も大きい。今度のゲームは冥界中がお前達を見ているぞ。闇人（やみびと）、悪神ロキ、テロリストを止めているお前達はただでさえ有名人だ。更に記者

会見であれだけの盛り上がりも見せたんだからな、冥界の住人は新しい息吹に悪魔の未来を見ている。勿論、ゲームの現トップランカーもお前達やサイラオーグ達に注目し、将来の敵になるであろう者の研究を始めるだろう。良い傾向だ。殆ど動かなかったゲームのランクトップ陣、遠くない未来にお前達やサイラオーグが差し込んでくれるかと思うと今からワクワクしちまうよ」

アザゼルが愉快そうに笑んだ後に言う

「――変えてやれ、レーティングゲームを。ランキング１０（テン）以内も皇帝（エンペラー）も、お前達若手がぶっ倒して新しい流れを作るんだよ」

ミーティングも終えた放課後、アザゼルとロスヴァイセはまだ教師としてやる事があるからと先に抜けていき、残った面々で学園祭の準備に取り掛かる

学園祭の準備を始めようとした矢先、テーブルの上に光が走る

光は円を描き、見覚えのある紋様をした魔方陣へと変わる

「……フェニックス？」

小猫がそう呟いた

小猫の言う通り、展開されたのはフェニックスの魔方陣だった
テーブルに収まるサイズの連絡用魔方陣
誰なのかと怪訝に思っていると、魔方陣から立体映像が投写され、高貴そうな雰囲気と面持ちをした若い女性の顔が映し出されていく
「お母さま！」
レイヴェルが素っ頓狂な声を出した
そこに映し出されたのはフェニックスの現当主の夫人
つまりはライザーとレイヴェルの母親である
『ごきげんよう、レイヴェル。急にごめんなさいね。なかなか時間が取れなくて、こんな時間帯になってしまったわ。人間界の日本ではまだ学校のお時間よね』
「は、はい、そうですけれど、突然どうされたのですか？」
『リアスさんと闇皇（やみおう）さんはいらっしゃるかしら？』
フェニックス夫人からの指名を受け、リアスが映像の前に立つ
「ごきげんよう、おばさま。お久しぶりですわ」
『あら、リアスさん。ごきげんよう。久しぶりですわね。それと……』
キョロキョロと見渡すフェニックス夫人
新は視界の入る位置に移動する

「初めまして、竜崎新だ」
『こちらこそ、ごきげんよう。こうしてお会いするのは初めてですわね、闇皇の竜崎新さん。このような挨拶で申し訳ございませんわ』
「それで俺に何か用が？」
『ええ、改めて挨拶だけでもと思いまして……。本来なら娘のホームステイ先の竜崎家と学園を取り仕切っているリアスさんのもとにご挨拶をしに行くべきなのですが、何分こちらも外せない事情がありまして……』
「……ほら、フェニックスの涙の需要が高まっているから、それで時間が無いんじゃないかなって……」
祐斗がコッソリと耳打ちしてくる
フェニックス家はフェニックスの涙の製造を行っている大本
昨今の闇人やテロリストの影響で特需になっており、生産が間に合わずフェニックス夫人もそれに駆り出されているらしい
リアスが微笑みながら返す
「そんな事ありませんわ、おばさま。お気持ちだけで充分です。レイヴェルの事はお任せください」
『……本当にごめんなさいね、リアスさん。うちのライザーのゲーム後のケアから、レイ

ヴェルの面倒まで見ていただいて……。それと竜崎新さん。特に娘をよろしく頼みますわ」

新の事を強調しつつ、フェニックス夫人の視線が新に向けられる

「リアスさんを始め、皆さんに任せておけば娘のレイヴェルは何の不自由も無く人間界の学舎(まなびや)で過ごせるでしょう。しかし、それとは別にあなたへお願いしたいのです。人間界で変なムシが付かないようどうか守ってやってくれないでしょうか?数々の殊勲を立てていらっしゃる闇皇(やみおう)が傍に付いていてくださるなら、私も夫も安心して吉報を待てるのです』

「変なムシ、か……。分かった、任せてくれ。レイヴェルは俺が守るよ」

新がそう言うとフェニックス夫人はパァッと明るい表情となり、レイヴェルは顔を最大にまで真っ赤にしていた

『感謝致しますわ。……レイヴェル』

「はい、お母さま」

『あなたのすべき事は分かっていますね?リアスさんを立て、諸先輩の言う事を聞いて、その上で竜崎新さんとの仲を深めなさい。フェニックス家の娘として、家の名を汚さぬよう精一杯励むのですよ?』

「勿論ですわ!」

レイヴェルが気合の入った返事をし、フェニックス夫人が新に話し掛ける
『最後に竜崎新さん。上級悪魔になる事が目標と聞きました』
「まあ、一応目指してはいる」
『娘は現在、私の眷属「僧侶(ビショップ)」となっておりますわ。ライザーとトレードしましたの』
「あぁ、レイヴェルからも聞いた」
『よーく覚えておいてくださいまし。娘はフリーですわ。私の「僧侶(ビショップ)」です。ライザーの手持ちではありません。よろしい？』
「はい」
それを聞いてフェニックス夫人は満足そうに頷いた
『こちらの用事は済みました。リアスさん、竜崎新さん、皆さん、突然のご挨拶を許してくださいましね。それではもう時間ですわ。レイヴェル、人間界でもレディとして恥ずかしくない態度で臨みなさい』
「はい、お母さま」
『それでは、皆さん。ごきげんよう』
連絡用魔方陣が淡い粒子となって消え、嵐のようなフェニックス夫人の挨拶が終わった

「新、突然どうしたんだ？話があるって」
ミーティングが終わった放課後、旧校舎の空き部屋にて一誠が新に話し掛ける
この部屋は学園祭の時に擬似的なお祓いをする場所で、学園祭の準備作業をする際に新が「俺と一誠でここを担当する」と言ってきたのだ
祐斗とギャスパーは外へ買い出しに行っているので、今は新と一誠しかいない
「一誠、最近アーシアと上手くいってないのは何故だ？」
「――――っ」
核心を突かれたのか、一誠はビクッと反応を見せたが直ぐに視線を逸らす
新の言う通り、修学旅行以降――――アーシアの様子がおかしかった
一誠を見ている時のアーシアの瞳には時折哀しさが孕んでいたのだ……
それに気付いた新は修学旅行時に一誠がアーシアに子作りをせがまれた事を思い出し、その話題を出した時の一誠の様子もおかしかった事に気付く
あそこまで上手くいきかけてたのに一誠は踏み出せなかった……
こう言った問題は自分で解決しなければならないのだが、時間が経てば余計に拗れてしまうだろうと危惧した新は手っ取り早く話をつける事にしたのだ

「このままの状態を維持していると、いずれアーシアを傷付ける事になる。しがらみに捕らわれたままで良いのかよ？」
「……新には関係無いだろ」
一誠は視線を逸らしながら冷たく返す
埒が空かないと判断した新は更なる核心を突く
「当ててやる。――――まだレイナーレの事を引きずってるのか？」
「――――っ！」
先程よりも強く反応する一誠
彼の脳裏に忌まわしい記憶が浮かび上がる……
『死んでくれないかな？』
その瞬間、顔中に嫌な汗が噴き出してくる
一誠の頬を伝う涙……それを見て新は〝やっぱりそうか〟と理解した
一誠が涙を拭いながら呟く
「……初めての彼女だったんだ……。告白された時、本当に嬉しかった。……あいつと付き合って、俺、すげえ頑張ったんだ。初めてのデートとか、念入りにプラン立ててさ。

将来の事だって真剣に悩んだ。バカみたいにクリスマスとかバレンタインの事まで妄想して、1人で脳内お花畑満開だった」

一誠は心の奥底にしまい込んでいた感情を吐き出す

「でも、あいつ、敵でさ……！俺の事殺してさ……！悪魔になった俺をすげえ冷たい目で見てきてさ……！あれらの事が本当に芝居だったって分かって……」

一誠の目から次々と流れ落ちてくる涙

話せば話す程、レイナーレとの記憶がフラッシュバックされていく

「……俺、怖いんだ。本当は女の子と仲良くなるのが怖いんだ……。また、またあんな事になっちまうんじゃないかって……！アーシアも、皆も優しくしてくれるけど……1歩踏み込んで仲良くなろうとしたら、拒否られてバカにされるんじゃないかって……！皆が悪くないって頭じゃ分かってる！皆、良いヒトばかりだ！だけど、ダメなんだ！もっと知ろうとするとブレーキが掛かる！」

一誠は顔を手で覆った

今の最低な自分の顔は誰にも見せられない……

未だに過去に捕らわれ、引きずっている情けない男の姿を見せたくない……

それでも一誠は本音の一言を呟いた

「……あんな思いは2度と……嫌なんだ……っ」

いつも〝ハーレム王になりたい〟と宣言していた一誠が――――実は〝女の子と仲良くなる勇気が無い〟事を打ち明けてしまった……

そんな一誠に新はこう語りかけた

「一誠、過去ってのは戻れないし、やり直す事も出来ない。だから、過去なんだ。いつまでも過去を悔やみ、過去に怯えていれば何かが変わるのか？」

「……」

「道端で転んだらどうする？――――〝起き上がる〟しかないだろ。今のお前は過去に躓(つまず)いて転んでいるだけだ。起き上がろうとせず、手足をジタバタさせているだけに過ぎない。前に進む事を放棄しようとしているんだ。そんな奴がハーレム王どころか、たった1人の女とも仲良くなれる訳が無い。一誠、お前はそんな事で良いのか？」

「……っ」

キツい言い方をする新、その一言一句が一誠の心にグサグサと突き刺さる

端から見れば言い過ぎだと思われるが、今の一誠を立ち直らせるにはこれしか無い

「最初に出会った頃から今日まで、アーシアはお前をずっと見てきた。なのに、お前が目を逸らしてどうする？過去の呪縛なんか振り払え。アーシアの事が本気で好きなら、いつまでも泣きベソかくな。縛りやしがらみを突き崩して前に進め」

「――――っ」

新なりの激励、その言葉の重みに一誠は何も言えなかった……
暫く静寂が流れるこの場に――癒しの声が届く……
「私は――イッセーさんの事が大好きですよ」
「――っ!?」
突然聞こえてきた声に思わず顔を上げる一誠
彼の前にいたのは――アーシアだった
アーシアの登場に一誠は絶句したまま狼狽し、新が説明に入る
「なんでアーシアがいるのかって？実はな……俺がコッソリ呼んでおいたんだよ。〝一誠の本心を聞き出すから、陰に隠れて聞いてくれ〟ってな。本当はお前の口からハッキリと聞き出せたら呼ぶつもりだったんだが……どうやらアーシアの方が先走ってしまったようだな」
頭をポリポリ掻く新
アーシアは呆けている一誠に歩み寄り、一誠の手を優しく握る
「イッセーさん、私はイッセーさんとずっと一緒にいたいです。バカになんてするわけないです。尊敬してます。慕ってます。1番頼れる男性です。この先、ずっと未来でもイッセーさんと一緒に暮らしたいって心の底から思っていますよ」
アーシアの笑顔と言葉が一誠の心に巣食っていた呪縛を氷解させていく……

「だから、勇気を持ってください。イッセーさんならきっと大丈夫。ここまで頑張ってこれたイッセーさんなら、心の奥にある壁も突破出来ます」
一誠は顔を引きつらせて再び泣き始めた
その涙は悔恨、怯えから来るものではない
自分にとっての安らぎがずっと身近にいた事を気付かされ、温かい何かが自分の中を満たしてくれた……
その安心感、安堵から流れてくる涙……
こんなに良い子が自分と一緒にいてくれる……
それだけでも充分に過去を振り払えた……
一誠は涙を振り払い、気を引き締めて言う
「ありがとう、アーシア。改めて約束しよう。――――ずっと一緒だ。1万年後も一緒にいよう、アーシア。俺もアーシアが大好きだ」
「――――っ！は、はい！ずっと一緒です！私もイッセーさんが大好きです！」
アーシアはそう告白しながら涙をポロポロとこぼした
新は〝ようやく立ち直れたか〟と肩を竦め、踵を返して去ろうとする
「お邪魔虫はそろそろ退散させてもらうぜ？暫くはアーシアとイチャラブして心を休めな」

「……新、本当に、本当にありがとう。それから……ゴメンな。お前にも迷惑掛けちまって……」
「俺はただ切っ掛けを与えただけだ。これから先はお前の足で進め」
一誠の抱えていた問題が解決し、運命の決戦も刻一刻と迫っていた……

「んで、兄貴。いつ渡すんだよ、それ？書き終わってからもう随分時間が経ってんぞ？」
「あ、ああ……近々駒王学園（くおうがくえん）で学園祭が開催されるらしくてな。そこで渡そうかと……」
「その学園祭に行くつもりなら、わざわざ手紙書く必要無かったんじゃねぇの？」
「仕方無いだろ……。書くのも渡すのも初めてだから勝手が分からん……」
「か～っ。情けねぇよ、兄貴。だいたい、あのアーシアって女は兵藤が好きなんじゃねぇの？なのに、それを渡してどうなるってんだよ？断られてオシマイってオチが見え見えなんだけど」
「……そうだろうな」
「だろうなって……まさか断られるの分かって出すつもりかよ!?」
「ああ」

「兄貴はそれで良いのか……？マジで好きなんだろ？アーシアって女が」
「……分かっている、分かっているさ。だがな、俺ではアーシアに本物の笑顔を与えてやれない。他人を蹴落とし、血に染めてきた俺ではな……。アーシアの隣にいるべきなのは俺じゃない――――兵藤だ」
「兄貴……」
「良いんだ、相棒。これは俺のケジメの問題だ。俺が決めたから、そうするだけさ。自分の中に何かをつっかえさせたままではダメなんだ。溜まった感情（もの）は出し切る、今がその時だからな……」
「実らない恋、か……。ったく、まるでオペラ座の怪人じゃねぇか」
「幻滅したか？」
「いや、ただ……以前より良い顔付きになったなって。昔の兄貴は出刃包丁みたいに鋭かったぜ。それが丸まったって言うか……」
「それも――――アーシアのお陰だ。捨てた筈の感情を取り戻させてくれた女……。俺はその女に惚れたんだ。ヒトらしい感情ってのも――――案外悪くない」

空中都市アグレアス

「スゲーよな、本当に空に島が浮いてんだから」
ゲーム当日、新達は空中都市に続いているゴンドラの中から上空に浮かぶ島を眺めていた
空に浮かぶ島、そこにある都市アグレアス
島を浮かばせている動力は旧魔王の時代に作られた物らしい
今回行われるレーティングゲームの舞台がこの空中都市だ
「実はな、今回のゲーム会場設定は上の連中がモメたらしくてな」
空を眺めながら言ってくるアザゼルに全員が視線を集中させる
「モメた？会場の……決定にですか？」
一誠の問いにアザゼルは頷く
「現魔王派の上役はグレモリー領か魔王領での開催を望んだ。ところが、ここに血筋を重んじるバアル派がバアル領での開催を訴えてな。なかなかの泥仕合になったそうだ。現魔王は世襲じゃないからな。家柄、血筋重視の上級悪魔にとっちゃ、大王バアル家ってのは魔王以上に名のある重要なファクターなんだよ。元７２柱の１位だからな」

「旧魔王に荷担してた悪魔達も過去にそんな事を言って悪魔内部でモメてたんですよね？なんで同じような事をするんだろう……」

一誠がそう訊くとアザゼルは手でジェスチャーを入れながら嘆息する

「あれはあれ、これはこれ、ってな。大人ってのは人間界でも冥界でも難しい生き物なんだよ。体裁、趣（おもむき）、まあ、未だ貴族社会が幅を利かせてる悪魔業界じゃ色々とあるわな」

「チッ、これだから貴族社会ってのは嫌なんだよ」

「……それで結局アガレス領……」

新が毒づき、小猫がボソリと呟く

「ああ、大公アガレスは魔王と大王の間を取り持ったって話だ。中間管理職、魔王の代行、大公アガレス。時代は変われど、毎度苦労する家だぜ」

しかも、今回のレーティングゲームは魔王ルシファーと大王バアルの代理戦争と言っても過言ではない

表向きは〝おっぱいドラゴン＆ダークカイザー＆スイッチ姫ＶＳ若手最強サイラオーグ〟と一般大衆を注目させる煽り文句を立てており、裏では多くの政治家が絡んでいるらしい

「めんどくさいっスね。俺らは俺らの野望があって臨んでいるのに……」

「お前達はそれで良い。それで充分だ。仮にお前達が負けたとしても政治的にサーゼク

スが不利になるなんて事は無いさ。ただ、大王家の連中が少し甘い汁を吸うだけの事。それとサイラオーグの後ろについた奴らも良い思いするかな」
「サイラオーグの後ろに政治家か」
「体1つでここまでのし上がってきたあの男が今更政治家の意見に左右されはしないだろうがな。ただあいつ自身、上を目指す為のパイプ作りとして関係を持っているんだろう」
夢、野望を叶える為には政(まつりごと)にも関与しなければならない
だが、納得出来ない物もある……
「頭ごなしにしか物事を考えられない貴族、1度捨てた男に今更群がる政治家。俺の1番嫌いなタイプだ」
「だよな。捨てた挙げ句に散々蔑(さげす)んだくせに……身勝手にも程がある」
新は怒りを孕ませて吐き捨て、一誠も顔をしかめた
「複雑だろうが、それで良いんだよ。苦労した分、やっと注目されたと思ってやれば良いじゃないか。どんな理由があろうと名のある者に認められる事は1つの成果だ。後は結果次第だが……。お前達はあいつの事を気にせず全力で行け。自分の目的を果たす為にがむしゃらに行かないと奴には勝てん」
アザゼルの言う通り、これは自分達の夢を繋げる為の試合

相手はサイラオーグ、余計な感情や考えを入れて勝てる相手ではない

「でも、大王派はサイラオーグ・バアルの夢を容認するのでしょうか？彼は能力さえあれば身分を超えて、どんな夢でも叶えられる冥界を望んでいるんですよね？」

「……元1位とか家柄にこだわる大王派が容認すると思うか？あくまで表向きに協力すると言って、裏じゃ蔑んでいるんだろうさ。奴らが欲しいのは現魔王に一矢報いる為の駒。奴らにとって見ればサイラオーグの夢はそれに心酔する者を集め、それを後押しする自分達を支持してもらう政治道具だ。サイラオーグもそれは認識しているんだろう。それでも1つでも上へ向かえるならとパイプを繋げたんだろうな。純粋で我慢強い男だ」

何処までも身勝手で不愉快きわまりない事情だが、サイラオーグは夢を叶える為に敢えてそれを呑んだ

その心中は計り知れないものだろう……

ここで一誠が1つの疑問を口にする

「今更ですが、このゲーム、テロリスト――英雄派とか闇人（やみびと）に狙われるなんて事は？」

「あるだろうな。これだけ注目されているし、会場には業界の上役が多数揃う。狙うならここだ。英雄派にとっちゃ、お祭り騒ぎに自慢の禁手（バランス・ブレイカー）使いを投入する事は大きな行動になるだろう。闇人（やみびと）――特に神風（かみかぜ）と『初代キング』も便乗してやって来る確率

が高い。一応、警戒レベルを最大にして会場を囲んでいるんだがな。ま、杞憂に終わるかもしれん」
襲撃があり得る事を平然と答えるアザゼルだったが、新達は〝杞憂に終わるかもしれない〟と言うワードに疑念を抱く
「どうしてそう言い切れますの？」と朱のが訊くと、アザゼルは頬を掻いた
「……ヴァーリと『２代目キング』から個人的な連絡が届いてな」
『――――っ！』
その場にいる全員が驚いた
「ヴァーリと大牙（たいが）からですか？」
「ああ、短くこう伝えてきやがった。『あのバアル家のサイラオーグとグレモリー眷属の大事な試合だ。俺も注目している。お前達の邪魔はさせないさ』――――だとさ。愛されてんな、イッセー、新」
「や、やめてくださいよ！気持ち悪い！」
「そうだ！俺をイッセーのホモ事情に巻き込むな！」
「てめコラ！」
新の冗談に猛抗議する一誠を他所にアザゼルは話を続ける
「どちらにしてもあいつらがそう言ってきた以上、曹操と神風に牽制をしているのは確

かかもしれない。あちらもヴァーリチームと『２代目キング』と相対してまでこの会場潰しなんてしやしないだろうからな。あの伝説級のバケモノが集まる白龍皇（はくりゅうこう）チームが相手じゃ大きく犠牲が出る。そんなもの、得でもないならやらない確率が高い」

「……ヴァーリと大牙に守られてるって事かな」

「元々曹操はここを狙っていないって事も考えられるさ。隙を狙われる可能性もあるから他の勢力も自分の陣地を警戒してるってところだ」

腑に落ちないながらも安心して試合が出来ると言った具合で安堵する一誠

しかし、未だ真の平和は遠い道のりである

そうこうしている内にゴンドラは空中都市に辿り着いた

空中都市アグレアスに数多存在する娯楽施設

その中でも一際巨大な会場――アグレアス・ドームがあった

現在新達はそのドーム会場の横にあるホテルに移動していた

通路を進んでいる途中、向こう側から不穏な空気と刺すような冷たいオーラを放ちながら歩いてくる集団が見えた

フードを深く被り、足元すら見えない程に長いローブを着込んだ不気味な集団
集団の中央に司祭服を着込んだ者がいるのだが……その者の顔を見て一誠は絶句した
「が、骸骨……？」
そう、集団の中央にいる者の顔は骸骨だった
骸骨の司祭は新達を眼前で足を止め、目玉の無い眼孔の奥を光らせる
≪これはこれは紅髪のグレモリーではないか。そして、堕天使の総督≫
「これは冥界下層――地獄の底こと冥府に住まう、死を司る神ハーデス殿。死神をそんなに引き連れて上に上がってきましたか。しかし、悪魔と堕天使を何よりも嫌うあなたが来るとはな」
ハーデスとはギリシャ神話に伝わる冥府の神、オリュンポス十二神の内の一柱である
≪ファファファ……、言うてくれるものだな、カラスめが。最近上で何かとうるさいのでな、視察をとな≫
「骸骨ジジイ、ギリシャ側の中であんただけが勢力間の協定に否定的なようだな」
≪だとしたらどうする？この年寄りもロキのように屠るか？≫
ハーデスを囲むローブの集団が殺意を放ってくるが、アザゼルは頭を振って嘆息する
「オーディンのエロジジイのように寛容になれって話だ。黒い噂が絶えないんだよ、あ

んたの周囲は」
≪ファファファ……、カラスとコウモリの群れが上でピーチクと鳴いておるとな、私も防音対策をしたくもなる≫
明らかに敵視した蔑み……
ハーデスが視線を一誠に移す
≪赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）か。白い龍（バニシング・ドラゴン）と共に地獄の底で暴れ回っていた頃が懐かしい限りだ……。まあ良いわ。今日は楽しみとさせてもらおうか。せいぜい死なぬようにな。今宵は貴様達の魂を連れに来た訳ではないんでな≫
それだけ言い残してハーデスは新達の前を通り過ぎていく
一誠は額の汗を拭って息を吐き、新も張り詰めていた空気を解いた
「……北欧時代に先輩のヴァルキリーからハーデス様の話を聞いてはいましたが……魂を掴まれているような感覚は生きた心地がしませんね」
ロスヴァイセが恐々とした様子で呟く
「そりゃな。各勢力の主要陣の中でもトップクラスの実力者だからな」
「……先生よりも強いんですか？」
「俺より強いよ、あの骸骨ジジイは……。絶対に敵対するなよ、お前ら。ハーデス自身もそうだが、奴の周囲にいる死神（グリムリッパー）どもは不気味だ」

「ロキと同じ悪神(あくしん)か」
新がそう呟くとアザゼルは首を横に振る
「いや、単に悪魔と堕天使……と言うよりも他の神話に属するものが嫌いなんだろうな。人間には平常通りに接する神だよ。冥府には必要な存在だ。俺は嫌いだがね」
どうやらアザゼルもハーデスをあまり良く思っていないようだ
すると……今度は豪快な笑い声が聞こえてくる
「デハハハハハ！来たぞ、アザゼルゥッ！」
「こちらも来たぞ、アザゼルめが！ガハハハハハ！」
体格が良くヒゲを生やした老人２人が駆け寄ってアザゼルにまとわりつき、アザゼルが半眼で嘆息する
「……来たな、ゼウスのオヤジにポセイドンのオヤジ……。こっちは相変わらずの暑苦しさ満開だな。ハーデスの野郎もこの２人ぐらい豪快で分かりやすかったら良いのによ」
やって来たのはギリシャ神話の主神(しゅしん)ゼウスと海の神ポセイドンだった
「嫁を取らんのか、アザ坊！いつまでも独り身は寂しかろう！」
「紹介してやらんでもないぞ！海の女は良いのがたくさんだぁぁぁっ！ガハハハハハハハハッ！」

「あー、余計な心配しなくて良いって……」
いつも人をからかっているアザゼルがこの２人相手に押され気味……何とも新鮮な光景である
そこへ「来たぞ、お前達」と聞き覚えのある声が
振り返ってみると小さなドラゴンが宙に浮いており、その傍(かたわ)らには渉と祐希那もいた
「その声、タンニーンのおっさんか！ちっちゃくなっちゃって！」
「ハハハ、元のままだと何かと不便でな。こう言う行事の時は大抵この格好だ」
「渉と高峰も来てたのか」
「はい。タンニーンさんに同行すると言う形ですけど、僕達も応援してます」
「渉がどうしてもってうるさくて」
「あれ？行こう行こうって誘ったの祐希那じゃ――――」
「だっ、バカ！うっさい！」
八代夫婦（笑）の夫婦漫才は今日も絶好調のようだ
「相手は若手最強と称される男だが、お前達が劣っているとは思っていない。存分にぶつかってこい」
「勿論さ！俺達の勝利を見届けてくれよ！」
タンニーンからの言葉に一誠は自信満々に返す

その時ロスヴァイセが「あっ！オーディン様！」と素っ頓狂な声を上げる
ロスヴァイセが指を向ける方向にはオーディンの姿があった
オーディンはロスヴァイセの姿を見た途端に「これはマズい！」と叫んでその場から走り去っていく
それを見てロスヴァイセが吼えた
「ここで会ったが１００年目！待てぇぇぇぇぇっ、このクソジジイィィィッ！その隣にいる新しいヴァルキリーは何なのよぉぉぉぉぉっ！」
ヴァルキリーの鎧姿と化したロスヴァイセは逃げ去るオーディンを追い掛けていってしまった……
「……新、お願い、ロスヴァイセを止めてきて」
「はぁ……分かった」
試合開始前だと言うのにホテルは予想以上の賑わいを見せた……

ゲーム開始時間目前、新達はドーム会場の入場ゲートに続く通路で待っていた
ゲートの向こうから会場の熱気と明かりが差し込んでくると同時に観客の入り乱れ

た声も聞こえてくる
戦闘服はお馴染みの駒王学園(くおうがくえん)の制服だが、ゲームの為に用意された特別仕様
耐熱、耐寒、防弾、魔力防御など、あらゆる面で防御力を高めた作りである
新は普段着ているロックミュージシャン服、ゼノヴィアは自前の戦闘服、アーシアもシスター服だが作りは特別仕様の制服と同じ
ロスヴァイセはヴァルキリーの鎧姿で待機していた
リアスが重い口を開く
「……皆、これから始まるのは実戦ではないわ。レーティングゲームよ。けれど、実戦にも等しい重さと空気があるわ。ヒトが見ている中での戦いだけれど、臆しないように気を付けてちょうだいね」
『さあ、いよいよ世紀の一戦が始まります！東口ゲートからサイラオーグ・バアルチームの入場ですッ！』
「「「「「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」」」」」
声援と歓声がこちらにまでビリビリと伝わってくる
バアル眷属の入場にドーム会場は大きく震えた
「……緊張しますぅぅぅっ！」
「……大丈夫、皆カボチャだと思えば良いってよく言うから」

緊張するギャスパーと落ち着いた小猫のやり取り
「ゼノヴィアさん、イリナさんがグレモリー側の応援席で応援団長をやっているって本当なのですか？」
「ああ、アーシア。そのようだぞ。なんでもおっぱいドラゴンとダークカイザーのファン専用の一画で応援のお姉さんをすると言っていた」
どうやらイリナは応援団長と言ったポジションで参加しているらしく、レイヴェルもファン専用の席にいるらしい
『そしていよいよ、西口ゲートからリアス・グレモリーチームの入場ですッ！』
「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」」」」」
既に観客はヒートアップ
皆も気持ちを切り替えて表情を厳しくしていた
「ここまで私についてきてくれてありがとう。――さあ、行きましょう、私の眷属達。勝ちましょう！」
「「「「「はいッ！」」」」」
ゲートを潜り、大歓声の中――新が目の当たりにしたのは広大な楕円形の会場の上空に浮かぶ２つの浮島だった
フィールドに浮く岩の１つにバアル眷属が揃っている

『さあ、グレモリーチームの皆さんもあの陣地へお上がりください』
アナウンスに促され、階段を上がって自分達の陣地となる岩の上に辿り着く
陣地には人数分の椅子と謎の台が1つ、後は一段高い所に設けられた移動式の魔方陣
会場に設置された巨大モニターにはイヤホンマイクを耳に付けた派手な格好の男性が映り込んだ
『ごきげんよう、皆さま！今夜の実況は私、元７２柱ガミジン家のナウド・ガミジンがお送り致します！』
実況の紹介に会場は大歓声に包まれる
『今夜のゲームを取り仕切る審判役（アービター）にはリュディガー・ローゼンクロイツ！』
宙に魔方陣が出現し、魔方陣から銀色の長髪に正装と言う出で立ちの若い男が現れた
こちらも女性を中心に凄まじい歓声が上がる
「……リュディガー・ローゼンクロイツ。元人間の転生悪魔にして、最上級悪魔。しかもランキング７位……」
小猫がボソリとそう呟く
元人間の転生悪魔でありながら最上級悪魔、更にはレーティングゲームのトップランカー
同じ元人間の転生悪魔である一誠から見れば憧れとも取れる

「グレイフィアさんじゃないのか。いつも俺達の参加するゲームで審判（アービター）を務めていたのに」
「大王家が納得する訳ありませんわね。グレイフィア様はグレモリー側ですから」
新の呟きに朱乃が答える
そう、グレイフィアはサーゼクスの『女王（クイーン）』
家柄重視の大王家にとっては目障りなのだろう
グレイフィアが不正を働くとは思えないが、大王側の上役はそう言う所をつついてきそうだ
『そして、特別ゲスト！解説として堕天使の総督アザゼルさま！更にはかつて闇人（やみびと）との大戦で「初代キング」の封印に貢献してくださった英雄、竜崎総司（りゅうざきそうじ）さんにお越しいただいております！どうも初めまして！』
画面一杯に映し出される見知った男２人に新達は唖然としていた……
アザゼルと新の父親――総司がニッコリと笑顔で挨拶をする
『いや、これはどうも初めまして。アザゼルです。今夜はよろしくお願い致します』
『どうも初めまして。世界のアイドル竜崎総司です。アザゼルくん同様、よろしくお願い致します♪』
「何してんの先生ええええっ!?」

「親父も何してんだぁぁぁっ!?」

実はアザゼルは事前に〝特別な仕事が入ったのでＶＩＰルームには行けない〟と言っていたのだ

理由を一切聞いていなかった新達が驚いている間、実況者によるアザゼルの紹介が始まる

『アザゼル総督はサーゼクス・ルシファー様を始め、各勢力の首領の方々と友好な関係を持ち、神器（セイクリッド・ギア）研究の第一人者として業界内で有名ではありますが、今日の一戦、リアス・グレモリーチームの専属コーチをされた上でどう注目されているのでしょうか？』

『そうですね。私としましては両チーム共に力を出し切れるのかと言う面で――――』

アザゼルの営業スマイル込みの紹介が終わり、カメラがその隣にいる端整な顔立ちに灰色の髪と瞳をした男性を映す

『更に、もう一方お呼びしております！レーティングゲームのランキング第１位！現王者！皇帝（エンペラー）！ディハウザー・ベリアルさんですッ！』

「「「「うおおお

『ごきげんよう、皆さん。ディハウザー・ベリアルです。今日はグレモリーとバアルの一戦を解説する事になりました。どうぞ、よろしくお願い致します』
『早速ですが、グレモリーチームのアドバイザーをしておられたアザゼル総督とバアルチームのアドバイザーをしておられた王者にそれぞれ見所を教えていただけると助かります』
『そうですね、グレモリーチームと言えば、まずはおっぱいドラゴンとダークカイザー、そしてスイッチ姫！なわけですが――――』
『はい、サイラオーグ選手は「王（キング）」としても優秀だとは思いますが、それ以上に選手としてもチーム最強を誇り――――』
　実況の質問に両者が答える最中、リアスは画面越しにディハウザー・ベリアルを真剣な表情で見る
　ディハウザー・ベリアルはリアスの将来の目標であり、彼女自身の夢を叶える為に必ず超えなければならない大きな壁……
　リアスは決意に満ちた表情をする
「いつか必ず――――。けれど、今は目の前の強敵を倒さなければ、私は夢を叶える為の場所に立つ事すら出来ないわ」
「……良い面構えになったな、リアス」

リアスを称賛する新も気持ちを切り替え、サイラオーグとの戦いに精神を集中させた

その間にも実況による解説が進む

『まずはフェニックスの涙についてです。皆さまもご存じの通り、現在テロリスト集団「禍の団（カオス・ブリゲード）」、危険視されている魔族・闇人（やみびと）の連続テロにより各勢力間で緊張が高まり、涙の需要と価格が跳ね上がっております。その為、用意するだけでも至難の状況です。しかーーーーしっ！』

実況が巨大モニターに指を突きつける

そこに映し出されたのは高価そうな箱に入った2つの瓶

『涙を製造販売されているフェニックス家現当主のご厚意とバアル、グレモリー、両陣営を支持されるたくさんの皆さんの声が届きまして、今回のゲームで各チームに1つずつ支給される事になりました！』

「「ワーーーーーーーーッ！」」

その報せに会場が再び沸き上がる

嬉しい報せだが、逆に考えればバアルチームも1度だけ1名の復活が可能となる

恐らく、使うのはあちらの『王（キング）』……つまり――

「……サイラオーグ・バアルを2度倒す覚悟を持たないといけないみたいだね」

祐斗が険しい面持ちでそう呟いていた

バアルチームの最大戦力は何と言ってもサイラオーグ
『王』であるサイラオーグを生き残らせるのが基本条件、そうなると必然的に涙の使用はサイラオーグだと分かる
こちらも『王』であるリアスが最後まで残らないと意味が無いので、フェニックスの涙をリアスに使用するのがセオリーだろう
ここで気になっていた話題が展開する
『このゲームには特殊ルールがございます！特殊ルールをご説明する前にまずはゲームの流れからご説明致します！ゲームはチーム全員がフィールドを駆け回るタイプの内容ではなく、試合方式で執り行われます！これは今回のゲームが短期決戦を念頭に置いたものであり、観客の皆さんが盛り上がるように設定されているからです！若手同士のゲームとはいえ、その様式はまさにプロ仕様！そして、その試合を決める特殊ルール！両陣営の「王」の方は専用の設置台の方へお進みください』
促されたリアスとあちらの陣地にいるサイラオーグがそれぞれの設置台前に移動し、設置台から何かが機械仕掛けで現れた
巨大モニターに映し出されたのは――――サイコロだ
『そこにダイスがございます！それが特殊ルールの要！そう、今回のルールはレーティングゲームのメジャーな競技の１つ！「ダイス・フィギュア」です！』

「「ダイス・フィギュア？」」

聞き慣れない単語に新と一誠は訝しげになり、祐斗が『ダイス・フィギュア』について説明する

「本格的なレーティングゲームには幾つも特殊なルールがあるからね。僕達のやってきたのは比較的プレーンなルールのゲームだ。その他に今回みたいなダイスを使ったり、フィールド中に設置された数多くの旗を奪い合う――『スクランブル・フラッグ』と言うルールもあるよ。ダイス・フィギュアはダイスを使った代表的なゲームなんだ」

『ご存じではない方の為に改めてダイス・フィギュアのルールをご説明致します！使用されるダイスは通常のダイス同様６面、１から６までの目が振られております！それを振る事によって試合に出せる手持ちが決まるのです！人間界のチェスには駒の価値と言うものがございます！これは基準として「兵士」の価値を１とした上での盤上での活躍度合いを数値化したもの。冥界のレーティングゲーム、悪魔の駒でもその価値基準は一定の目安とされておりますね！勿論、眷属の方が潜在能力以上の力を発揮して価値基準を超越したり、駒自体にアジュカ・ベルゼブブ様の隠し要素が盛り込まれていたりして想定以上の部分も多々ありますが！しかし、今回のルールではその価値基準に準じたもので執り行います！まず、両「王」がダイスを振り、出た目の合計で出せる選手の基準が決まります！例えば出た目の合計が「８」の場合！この数字に見合うだけの価値

を持つ選手を試合に出す事が出来ます！複数出場も可能です！「騎士（ナイト）」なら価値は３なので、２人まで出せますね！駒消費１の「兵士（ポーン）」ならば場に８人も出せます！勿論、駒価値５の「戦車（ルーク）」１名と駒価値３の「騎士（ナイト）」１名も合計数字が８なので出す事が可能です！数字以内ならば違う駒同士でも組ませて出場が可能と言う事です！そして複数の駒を消費された眷属の方もその分だけの価値となりますので、グレモリーチームであれば「兵士（ポーン）」の駒を７つ使われたと言う赤龍帝（せきりゅうてい）の兵藤一誠選手が駒価値７となります』

「つまり、出た数字に応じて出せるメンバーも決まってくるって事か」

『試合が進めば手持ちも減りますので、出せる選手の数字にも変化があると思いますので、それはその都度お互いの手持ちと合致するまで振り直しとなります！また「王（キング）」自身の参加は事前に審査委員会の皆さまから出された評価によって出場出来る数字が決まります！無論、基本ルール通り「王（キング）」が負ければその場でゲーム終了でございます！』

「数字次第ではサイラオーグが出張ってくる事もあると言う事か」

「てか、『王（キング）』の出場は審査委員会の評価で決めるって何だ？」

一誠が疑問を口にしていると、朱乃が補足説明をしてくれる

「説明の通りですわ。事前にゲームの審査委員会が部長とサイラオーグ・バアルがダイス・フィギュアで、どのぐらいの駒価値があるか評価を出しているのです。それによって両者が試合に出場出来る数字が決まりますわ。これは『王（キング）』の自身の実力、手持ちの

眷属の評価、対戦相手との比較などから算出されるそうです。だから、ゲームによって『王（キング）』の数字は変動しますわ」

『それでは、審査委員会が決めた両「王（キング）」の駒価値はこれですッ！』

実況が叫ぶと巨大モニターにリアスとサイラオーグの名前が悪魔文字で表示され、駒価値となる数字も表示される

『サイラオーグ・バアル選手が12！リアス・グレモリー選手が8と表示されました！おおっと、サイラオーグ・バアル選手の方が高評価ですが、逆に言いますとＭＡＸの合計が出ない限りは出場出来ない事になります！』

「……内容で巻き返すだけだわ」

このゲームではサイラオーグの方がリアスよりも評価が高いようだ

逆に言い換えれば、大きな数字が出たら誰かと組み合わせて出場出来るので単独でしか出場出来ないサイラオーグよりも優位になるかもしれない

「12が出たら確実にサイラオーグさんが来るのかな？」

一誠がそう言うと、祐斗は難しそうな顔をした

「サイラオーグさんが必ずしも出るとは限らないかも。特に序盤（オープニング）はね」

「何でだ？」

「それで勝利出来たとしても場合によっては評判が少し落ちる。ワンマンチームはあま

り評価されないからね。ゲームでは眷属の力をフルに活用してこそ評価されるもの。しかも『王（キング）』自身のワンマンゲーム進行だったら、冥界メディアも黙ってはいないだろうから、『王（キング）』の将来自体が危ぶまれる事になる。更に生中継だ。それとこれだけの観客を目の前にしてそんな事をすれば評判はたちまち下がっていくだろうね」

勝つだけじゃなく見せ方も重要、世間の評判も視野に入れないと将来が暗転してしまう……

プロの世界は頭で考える以上にシビアだと思い知らされる一誠だった

『それともう1つルールを。同じ選手を連続で出す事は出来ません！これは「王（キング）」も同様です！』

「最初の数字が12だとしても、サイラオーグ自身が序盤（オープニング）から出てくるなんて事は無いと思うわ。彼の性格上、きっと自分の眷属をキチンと組み合わせて見せてくる。その為に厳しいトレーニングを重ねたのでしょうから。でも、きっと彼自身も出てくる。合計数字次第だけれど、何処かのタイミングで仕掛けてくるでしょうね。バトルマニアなのは確かだと思うから」

リアスがアーシアに視線を向ける

「このルールだとアーシアを単独で出すのも、組んで出すのも悪手ね。どちらも回復役のアーシアを集中的に狙うでしょうから。ここに残ってもらって勝って帰ってきた者

を回復する役に回した方が得策だわ。これはこちらの利点の1つね、フェニックスの涙を使わずに回復出来るなんて。ゴメンなさい、アーシア。試合には出せないわ。ここで帰ってきた者を回復してあげてちょうだいね。それも立派なゲームでの役目よ」

リアスにそう言われたアーシアだが、嫌な顔せずに笑顔を見せていた

「はい、お姉さま。私、ここで皆さんのケガを癒します！だから、皆さん、無事に戻ってきてくださいね」

「「「「「「勿論」」」」」」

アーシアの激励に皆が声を合わせた

「逆にアーシアが出てこない事は向こうにも読まれるだろうな。そうだろ、リアス？」

「ええ、こちらは実質戦闘要員が９名となるわ」

『さあ、そろそろ運命のゲームがスタートとなります！両陣営、準備は宜しいでしょうか？』

実況者が煽り、審判（アービター）が手を大きく挙げた

『これより、サイラオーグ・バアルチームとリアス・グレモリーチームのレーティングゲームを開始致します！ゲームスタート！』

開始を告げると共に観客の声援が会場中に響き渡る

遂にサイラオーグとのレーティングゲームが始まった……

オープニングゲーム開始！

『それでは、両「王（キング）」の選手、台の前へ』
審判（アービター）に促され、リアスとサイラオーグがダイスの置かれた台の前に立つ
『第1試合を執り行います。出場させる選手をこれより決めます。両者共にダイスを手に取ってください』
リアスがダイスを手に取り、審判（アービター）の掛け声を合図に両者がダイスを振った
台の上で転がり、その動きが止まる
２つのダイスが表した数字は――――
『リアス・グレモリー選手が出した目は――――2！対するサイラオーグ・バアル選手が出した目は1！合計3となり、その数の分だけ眷属を送り出す事が出来ます！さあ、両陣営最初に出す眷属は誰なのか!?』
『作戦タイムは5分。その間に出場選手を選出してください。なお、「兵士（ポーン）」のプロモーションはフィールドに到着後、昇格可能となります。試合ごとにプロモーションが解除されますので、その都度フィールドでプロモーションを行（おこな）ってください』
審判（アービター）の宣言後に作戦タイムが始まり、両陣営が謎の結界に覆われた

その結界は防音対策として作戦が外に漏れないようにする為のものであり、更に外部に口元を読心術で読まれないよう、各選手の顔には特殊なマークが付くように加工されている

表情からも作戦が詠まれないように配慮され、まさに本場のゲーム仕様

リアスが皆を見渡すように言う

「あちらはこちらが祐斗を出すと既に読んでいるでしょうね」

「ど、どうしてですか？」

一誠が疑問の声を上げると新が説明に入る

「ダイスの合計数字が3である以上、こっちが出せる選手は5人と限定される。『騎士（ナイト）』の祐斗とゼノヴィア、『僧侶（ビショップ）』のアーシアとギャスパー、そして『兵士（ポーン）』の俺だ。アーシアとギャスパーは元々サポートタイプだから単独で出せる筈も無い。前衛になる奴と組ませてこそ真価を発揮するからな。その2人は除外。そうなると必然的に俺か祐斗、ゼノヴィアしか選択肢が無くなる訳だ。それで祐斗になるって事は――――」

新の言葉にリアスが続く

「ゼノヴィアはパワータイプの『騎士（ナイト）』だから、あちらの『騎士（ナイト）』2名、『僧侶（ビショップ）』2名、『兵士（ポーン）』1名と単独で戦う場合、テクニック――――ハメ技を貰うリスクが高いのよ」

「そう言う事。俺が出るってのも有りだがダイスの合計数字が3だから、どの道単独で

戦うしかない。俺としても今後の展開の為に体力は残しておきたいし、何よりゼノヴィアは後先考えずに力任せで突っ走る脳筋（のうきん）ゴリ押しタイプ。手の内を晒し過ぎる訳にもいかないから、必然的に臨機応変に対応出来る祐斗を出すのがデメリットも少なくて済む」

「おい、それはどういう意味だ新！まるで私が何も考えずに戦っているみたいな言い方じゃないか！」

「実際そうだろ？今までのお前の戦い方を見ても、そうとしか思えん。頭を使って戦った事があるか？」

ゼノヴィアの異を軽く一蹴した新が視線を配らせると……他の皆はゆっくりとゼノヴィアから視線を逸らした

どうやら皆も新と同じ事を考えていたらしい

その事実にゼノヴィアは〝ガーンッ！〟とショックを受けて涙目になり、遂には拗ねてしまった……

「……酷いぞ、新」

「悪いとは思ってるが、言える事は言わせて貰う」

「読まれていても行かなきゃね。――――行くよ」

祐斗が襟元を直しながら1歩前に出る

「初戦から負けるんじゃねぇぞ？」
一誠の煽りに祐斗は「当然勝つよ」と笑顔で答える
そして制限時間終了間際、祐斗が魔方陣の上に立つ
それと同時に魔方陣が光りだし、祐斗の姿が消えていった
1番大きな映像に広大な緑の平原が映し出され、そこには祐斗と青白い炎を全身から放つ馬に乗った甲冑騎士がいた
『おおっと！第1試合の出場選手がバトルフィールドに登場です！フィールドは見渡す限りの広大な平原！この緑広がる原っぱが第1試合の舞台となります！合計数字3によって両陣営から選ばれたのは――グレモリー眷属の神速の貴公子！木場祐斗選手です！リアス姫のナイトが登場です！』
「「「「「「「「「キャァァァァァァァァァッ！木場きゅぅぅぅぅんっ！」」」」」」」」」
実況に煽られて観客の女性達が黄色い歓声を上げる
対するバアル眷属の甲冑騎士は馬を歩かせ、兜のマスクを上げて顔を見せた
「私は主君サイラオーグ・バアル様に仕える『騎士（ナイト）』の1人、ベルーガ・フールカス！」
「フールカスは馬を司（つかさど）るのが特色の家だったわね」
「馬か、如何にもって感じがするな」
「僕はリアス・グレモリー様の『騎士（ナイト）』、木場祐斗です。どうぞ、よろしく」

フールカスが手元のランスを天に翳(かざ)す
「……名高き聖魔剣(せいまけん)の木場祐斗殿と剣を交える機会を主君からいただき、剣士冥利に尽きるばかり」
「こちらこそ、貴殿との一戦を楽しみだと思えます」
お互いの名乗りが終わったところでアザゼルはバアル眷属の馬について説明を始める
「――『青ざめた馬(ペイル・ホース)』、地獄の最下層ことコキュートスの深部に生息すると言う高位の魔物ですな。名だたる悪魔や死神が跨(また)がるものとして語り継がれている。死と破滅を呼ぶ馬とも言われています」
「私も聞いた事があるよ。あれを乗りこなすのは簡単じゃない。気性が荒く、気に入らない者は主でさえ蹴り殺すと言われてるからね」
総司もフムフムと顎に指を当てて説明に参加する
「私の愛馬――アルトブラウの脚は神速。木場殿、いざ尋常に勝負願いたい」
『第1試合、開始してください！』
審判(アービター)の合図と共に両者が距離を取り――フールカスと馬の姿が消えた
祐斗も気配を感じるような姿勢で聖魔剣を構え、更に距離を取ってから神速で動き出した

両者の姿は既に高速で何かがぶつかっている程度のものしか認識出来ない状態で、フィールドに現れるのは得物同士がぶつかった時に生じる火花と金属音のみ
無数の剣の波動とランスの突撃で平原が抉られ、遂に両者が鍔(つば)ぜり合う形で姿を見せる
「我がアルトブラウの脚を持ってさえも互角が良いところとは……恐るべし、リアス姫のナイト！」
「そちらこそ、馬とのコンビネーションが抜群ですね。馬を斬ろうにもランスが届き、あなたを屠(ほふ)ろうにも馬がそれを許さない。足場を消し去るしかないか！」
そう言った祐斗は体にオーラを纏わせ、周囲の地面から聖魔剣の刃を幾重にも発生させた
だが、フールカスの馬が空中高く飛び出して聖魔剣の刃を回避する
どうやら空中も自在に駆け回れるようだ
間髪入れずに祐斗が次なる聖魔剣を振りかざす
「雷の聖魔剣よッ！」
天が光り、雷がフールカス目掛けて降り注ぐ
しかし、フールカスはランスを上空に投げつけ、避雷針代わりにして雷をやり過ごす
ランスを手放したフールカスは馬の炎の鬣(たてがみ)に手を入れ、２本めのランスを取り出す

「貴殿の聖魔剣がどれだけ悪魔にとって必殺の効果を持っていようと――――当たらなければ意味は無いッ!」

飛び出していくと同時にフールカスと馬が幾重にも姿を増やした

複数のフールカスを前に祐斗は剣先を鈍らせていた

顔色も険しいのを察するに……恐らくどれが本物か見極められていないのだろう

複数のフールカスが縦横無尽に高速で動き回り、祐斗に攻撃を加えていく

最初は剣で受け流すものの、四方八方から飛んでくる攻撃に流石の祐斗も次第にダメージを受けていく

祐斗は二振りめの聖魔剣を創り出し、二刀で大きくオーラを弾けさせた

その勢いで周囲の平原が吹き飛ぶが、フールカスは上手く避けて距離を取っていた

幻影を消して再び一騎になるフールカス

「……初手からあまり勢い良く手の内を見せるのは嫌だったんだけどね……。どうやら、出し惜しみしていたら必要以上の体力を失いそうだ。ゼノヴィアの事を言えないな」

自嘲するように息を吐く祐斗

そして聖魔剣を消して聖剣だけを創り出し、堂々と宣言する

「僕はあなたよりも強い。この勝負、いずれは僕があなたの動きを捉えるだろう。けど、

その為にはスタミナをかなり消耗する。今後の戦いを考えると短期決戦(ブリッツ)で仕留めた方が効率が良い」

「自信満々のようですな。確かに貴殿の才能は私とアルトブラウをいずれ上回る。だが！ただではやられませんぞ！後続の為、手足の1本でも切り落とし、体力を奪う！」

一方、フールカスも後続の為に少しでも戦力を削ぎ落とす腹積もりだ

我が身を犠牲にしてでも……

「そう、だからこそ、あなたが怖い。覚悟が完了した使い手ほど怖いものはありませんから。僕は――――もう1つの可能性を見せようと思います。――――禁手化(バランス・ブレイク)」

聖剣を携え、静かに呟いた刹那――――祐斗は聖なるオーラに包まれ、地面から聖剣の刃が幾重にも出現

まるでドラゴンをモチーフにしたかの様な甲冑騎士達が地面に生えた聖剣を手に取り、祐斗の周囲に集まっていった

甲冑騎士達に囲まれた祐斗は宛(さなが)ら騎士団を仕切る団長の如し

それを見たフールカスは驚愕の声音を発する

「……ツ！バ、バカな!?禁手化(バランス・ブレイク)だと!?貴殿の禁手(バランス・ブレイカー)は『双覇の聖魔剣(ソード・オブ・ビトレイヤー)』の筈！何故違う禁手(バランス・ブレイカー)となれる!?」

確かに祐斗の禁手(バランス・ブレイカー)は本来『双覇の聖魔剣(ソード・オブ・ビトレイヤー)』だが、それはあくまで『魔剣創造(ソード・バース)』の

禁手（バランス・ブレイカー）

実は祐斗には後天的に得たもう1つの能力がある

得心したかの様にフールカスが口から漏らした

「……ッ！まさか、『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』の禁手（バランス・ブレイク）化か……ッ!?」

「――――『聖覇の龍騎士団（グローリィ・ドラグ・ルーラー）』、『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』の禁手（バランス・ブレイカー）にして亜種（あしゅ）です」

そう、祐斗はコカビエル襲来事件の際に元同胞の魂から聖剣使いの因子を譲り受け、聖剣を生み出す神器（セイクリッド・ギア）も得た

その結果――――『魔剣創造（ソード・バース）』と『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』、2つの神器（セイクリッド・ギア）を持つ剣士が誕生してしまったのだ

そこで祐斗は『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』の禁手（バランス・ブレイカー）の発現を思い付き、一誠に協力してもらったらしい

聖魔剣より劣る聖剣で一誠と本気の組み手を繰り返し続け――――遂に至った

この新能力は使い手と同じ速度と技量を龍騎士団に付与出来ると言うもの

現状では速度のみだが、まだまだ伸びしろはある

「これに至る為に自前の聖剣のみで赤龍帝（せきりゅうてい）と戦ったけど……ふふふ、肝が冷えたよ。死さえ覚悟した。だって、イッセーくんは本気で殺しに来てくれたからね。そのお陰で2度めの禁手（バランス・ブレイカー）になれたんだけど」

別の映像では実況席のアザゼルが面白そうに顎に手をやっていた

『本来、「聖剣創造」の禁手は聖剣を携えた甲冑騎士を複数創り出す（ブレード・ブラックスミス）（バランス・ブレイカー）「聖輝の騎士団」と言うものだ。木場選手の能力はそれを独自のアレンジで亜種として発現出来たようだ。しかも龍の騎士団！かーっ！木場、お前な、イッセーの影響受け過ぎだぞ！大きなお姉さん達が喜ぶ展開だな！』

『腐女子の皆さんも鼻血を出すくらい喜びそうだねぇ。２人を題材にしたＢＬ本が高く売れるんじゃないかな？』

「やめてくださいよ！気持ち悪いッ！」

アザゼルと総司の解説に抗議する一誠

そうこうしてる内に祐斗が龍騎士団を従えてフールカスの前に立つ

「フールカス殿！いざ参ります！」

「くっ！まだここで終わる訳にはいかん！」

祐斗が龍騎士団と共にその場を駆け出し、フールカスも複数の幻影を作って飛び出した

祐斗の龍騎士団とフールカスの幻影がぶつかり――――

ギィィィィンッ！

一振りの金属音が鳴り響く

お互いが生み出した龍騎士団と幻影は消失……
一拍後、フールカスの体が光に包まれていく
甲冑が肩口から腹部に掛けて砕けており、傷口から聖剣のダメージをであろう煙を上げていた
「……見事だ」
それだけ言い残すとフールカスは光と共にフィールドから消え、審判（アービター）が告げる
『サイラオーグ・バアル選手の「騎士（ナイト）」１名、リタイヤです！』
第１試合はグレモリーチームが制した

『初戦を制したのはグレモリーチーム！さあ、次の試合はどうなるのでしょうか！』
祐斗が魔方陣から帰還したところで再び両『王（キング）』がダイスを転がす
出た目はリアスが６でサイラオーグが４、合計数字は１０となった
『おおっと！今度の合計数字は１０！両陣営、１０までの選手を出せる事になります！勿論、複数での選出もＯＫな数字です！』
作戦タイムを利用してリアスが第２試合のメンバーを選出する

「手堅くいきましょう。ロスヴァイセ。それとサポートに小猫。２人にお願いするわ」
「分かりました」
「……了解」
選ばれたのは『戦車』のロスヴァイセと小猫、合計数字をフルに活用した陣形だ
２人が魔方陣で転送され、映像に映し出されたフィールドは巨大な柱が林立する薄暗い神殿内らしき場所だった
対するバアル眷属は軽　鎧に帯剣と言う出で立ちの金髪優男と身の丈が３メートルはありそうな巨人
「俺はサイラオーグ様の『騎士』の１人、リーバン・クロセル。こちらのデカいのは『戦車』のガンドマ・バラム。この２人でお相手する」
「……」
無言で佇む巨人――ガンドマ・バラムはガタイも良く、特に前腕が極太サイズで顔立ちも人間より怪物に近い
因みにバラムは怪力が特色の悪魔で、まさに長所を特化させた『戦車』だ
更に『騎士』――リーバン・クロセルは断絶した元７２柱クロセル家の末裔
現政府は様々な理由で断絶してしまった御家の末裔がいないかどうか捜索しており、人間界に住む上級悪魔には断絶した家の末裔を保護する役目も担っている

新が通信機を介して小猫とロスヴァイセにエールを贈る
「小猫、ロスヴァイセ、油断するなよ」
「はい、任せてください」
「……新先輩、この試合に勝ったらナデナデしてもらえますか？」
「あぁ、良いぜ」
「……全力で勝ちに行きます」
それを聞いて小猫のやる気が最高潮に達した
審判（アービター）が試合開始を告げたと同時に小猫は全身に闘気を纏わせ――猫耳と２つに分かれた尻尾が出現する
これは小猫の新技――『猫又モードレベル２』
仙術によって全身に闘気を纏わせる事で一時的に身体能力を上昇させる
小猫が素早く飛び出し、ガンドマ・バラムの顔面に一撃を加えた
豪快な音が鳴り響くが――バラムは全く怯まない
「……ぬんっ！」
バラムが豪快に腕を横殴りに薙ぎ払う
小猫は素早く攻撃を避け、後衛からロスヴァイセの魔法攻撃がバラムに突き刺さる
炎、雷、氷、風など様々な属性の魔法攻撃が全弾命中するが――目立ったダメージ

は無し
どうやら防御力もかなりの物だ
「……魔法に対する防御も高い。何だか最近この手の相手に出くわしてばかりですね！」
ズゥゥゥゥッ！
突然ロスヴァイセごと周囲がブレ出し、ロスヴァイセがその場で膝をついた
まるで上から何かに押し潰されているかの如く……
「隙アリだ、お姉さん」
バアル眷属の『騎士（ナイト）』リーバン・クロセルが双眸（そうぼう）を光らせながら言う
「……重力の能力……っ！」
ロスヴァイセは重くなった体でも足下に魔方陣を展開しようとした
だが、クロセルがそうはさせんと手元に魔方陣を展開させ、氷がロスヴァイセの足を包み込む
「……そう言えば、魔法剣士でしたね！」
「俺はクロセルと魔法使い、人間の血も宿す混血でね！ついでに剣術も得意だ！もう1つ、重力の方は神器（セイクリッド・ギア）さ！――――『魔眼（グラビティ・ジェイル）の生む枷』！」
「彼の神器（セイクリッド・ギア）は視界に映した場所に重力を発生させるもの！彼があなたから視線を外

さない限り能力は続く! 気を付けて!」
リアスがイヤホンマイクを通してロスヴァイセに告げる
ギャスパーの時間停止程ではないにしろ、相手の動きを止めるには充分なものだ
その横では小猫がバラムの大振りな攻撃を躱しながら的確に仙術パンチを入れている
「……分かってますよ。クロセルの神器(セイクリッド・ギア)についてはアザゼル総督からも伺(うかが)ってます。
――視線を媒介にする能力は弱点も分かりやすい!」
ロスヴァイセが重力に苦しみながらも震える手元に魔方陣を展開させようとしたが
――
「甘いぜ、お姉さん! 鏡よ!」
クロセルも手元の魔方陣から瞬時に鏡を出現させ、ロスヴァイセが放った閃光を防ごうとする
「自分の能力の性質上、弱点を補う力ぐらいは持ち合わせている。鏡を召喚させてもらったよ」
そう口元を笑ませるクロセルだったが……ロスヴァイセの足下にある魔方陣がより強く輝き出す
鏡で反射された閃光はバラムに命中

その瞬間、ロスヴァイセとバラムが光に包まれていく
光が収まると――ロスヴァイセとバラムの位置が入れ替わっており、バラムはクロセルの重力に捕らわれていた
「上手い！お互いの位置を交換する魔法！鏡に反射させたのはその魔法の発動条件！最初から反射されるのを読んでの転移だ！」
「なるほど、相手の講じた対策を逆に利用した一手か。流石だ、ロスヴァイセ！」
新と祐斗がロスヴァイセの見事な攻撃に賛辞を贈る
「小猫ちゃん！攻撃は通ってますか!?」
「……はい。もう魔法に対する防御力が展開出来ない程、あの大きなヒトのオーラと内部を乱しました」
「了解です！フルバースト、２人とも食らいなさい！」
ロスヴァイセが前方に幾重もの魔方陣を展開し、あらゆる属性魔法のフルバーストをクロセルとバラムに撃ち放った
フィールドを壊さんばかりの攻撃が止み、塵芥（じんかい）が周囲に巻き起こる
それも静まると、そこに横たわっていたのは――クロセルだけだった
――〝バラムがいない？〟――
そう疑念が生じた刹那……

「……隙があるって……さっきも言ったろ……？倒したと……思っている時が1番隙を生む……」

倒れている瀕死のクロセルの目が怪しく光り、ロスヴァイセと小猫が重力に捕らわれる

そこに現れたのは血だらけで満身創痍のバラム……ッ！

「……ぬぅぅぅぅんっ！」

最後の一撃とも言える巨大な拳が小猫に突き刺さった

その光景に新の瞳孔が開かれる……

「小猫ッ！」

リタイヤの光に包まれるクロセル、バラム

そして小猫も……

ロスヴァイセは横たわる小猫を抱きかかえた

「……良かった。ロスヴァイセさんが残っていればグレモリーはまだ戦えます……」

「……ゴメンなさい、小猫ちゃん」

「……謝らないでください、ロスヴァイセさん。嬉しいです……。私、役に立てました……2人も倒せたんですから……。ただ、後で新先輩にナデナデしてもらえないのが……残念です……」

それだけ言い残し、小猫はクロセル、バラムと共に転送の光に包まれ消えていった

新は唇を噛み締め、怒りと悔しさを内に押し殺す

「小猫……よく頑張った。後は任せろ。この試合が終わったら……好きなだけ撫でてやるからな」

『サイラオーグ・バアル選手の「騎士（ナイト）」1名、「戦車（ルーク）」1名、リアス・グレモリー選手の「戦車（ルーク）」1名、リタイヤです』

第2試合を制したものの、グレモリー側にも遂に犠牲が出てしまった……

そしてこの時、怒りと悔しさに震える新は気付いていなかった

後方に映る自身の影が蠢（うごめ）き、血の様に赤い双眸（そうぼう）をを怪しく輝かせていた事に……

中盤戦突入！ギャスパーの覚悟！

『第2試合を終えて、バアル側は眷属が3名、グレモリーは1名リタイヤ。グレモリー優勢ですが、まだ分かりません！ゲームは始まったばかりだからです！』

「2人とも冷静だね。小猫ちゃんがやられても感情をあまり表に出さなかった」

「……悔しいさ。だけど、溜めようかなって思ってよ。こう言うのは後で爆発した方が良いだろう？」

「俺も一誠と同じ意見だ。今喚(わめ)いた所で勝てる訳じゃない。小猫のツケは纏めて払わせてやる」

新と一誠の一言を聞いて祐斗は小さく笑った

「怖いね。でも、僕もその意見に賛成だ」

第3試合のメンバーを決める為、両『王(キング)』がダイスを振る

今度の合計数字は5

作戦タイムに移行しようとした時、サイラオーグが審判(アービター)に告げてきた

「こちらは『僧侶(ビショップ)』のコリアナ・アンドレアルフスと『兵士(ポーン)』のミリーバ・アンドレアルフス、この姉妹を出そう」

サイラオーグが即座にバトルフィールドに出す選手を宣言してきた
その事に観客もどよめき、モニターに相手の『僧侶(ビショップ)』と『兵士(ポーン)』が映し出された
ウェーブの掛かったロングの金髪にOLの様なビジネススーツを着込んだグラマーな女性が『僧侶(ビショップ)』――――姉のコリアナ・アンドレアルフス
金髪のショートヘアにフリルを施したミニスカドレスを着た美少女が『兵士(ポーン)』――――妹のミリーバ・アンドレアルフス
サイラオーグが選抜したアンドレアルフス姉妹に一誠は即座に反応する
「おぉっ、美人のお姉さんと可愛い女の子だッ！」
『これは出場宣言でしょうか！サイラオーグ選手、その理由は？』
実況がそう訊くと、サイラオーグが新と一誠の方に視線を向けた
「兵藤一誠と竜崎新のスケベな技に対抗する術を彼女達姉妹が持っているとしたら、どう応えるだろうか？まあ、この場合は合計数字が5だから竜崎新に限定されてしまうが」
サイラオーグの言葉に観客がざわめき、アザゼルが食いついてくる
『ほお！面白い宣言じゃねぇか！イッセー選手と新選手は女に対して無類の強さを発揮する。その理由は「洋服崩壊(ドレス・ブレイク)」と「乳語翻訳(バイリンガル)」、「暗黒捕食者(ダーク・グリード)」に集約されるのだが……』
『特に兵藤一誠選手は面白いですね。聞いた話では、毎回新しい技を閃(ひらめ)いてくるとか』

皇帝（エンペラー）ベリアルも興味津々の様子だった

『あれは頭がスポンジなので吸収率がとても良いんだ。元がカラカラに乾いたスポンジなせいか、教えた分すぐに吸い取ってな。頭の中にエロ以外余計な知識が入ってなくて空っぽってのがここまで恐ろしいものかと思ったよ』

「「「「アハハハハッ！」」」」

アザゼルの解説に会場内の観客が爆笑した

公開処刑同然の羞恥プレイを食らわされた一誠は恥ずかしさのあまり顔を赤くし、新も観客と同じく大爆笑していた……

『スポンジドラゴン！』

観客の誰かが珍妙なニックネームを叫ぶ

「うるさーい！誰っスか!?今スポンジドラゴンって言っただろう！何でもかんでも○○ドラゴンって付けるんじゃなーいッ！」

一誠が異を唱えても観客席は爆笑に包まれるだけだった……

そこへ新が――――

「そうだ！スポンジと言ったらスポンジポブだろ！」

「そう言う問題じゃねえぇぇぇっ！」

『じゃあ間を取ってスポンジポブゴンはどうかな？』

「親子揃ってイジるなぁぁぁぁっ！」
新と総司の冷やかしに一誠が涙目で抗議するが、２人は聞き流す
その後、新が椅子から立ち上がって襟元を整える
「良いぜ。その挑戦、受けてやるよ」
サイラオーグの挑戦を受諾する新にリアスは額に手を当てて困り顔をしていた
「……まったく。罠だろうけれど、どうなの？実力的にはあなたの方が圧倒的に上でしょうけれど、恐らく相手は何かを企んでいるわ」
「例えそうだとしても、俺は行くぜ。サイラオーグと戦う前の前哨戦だ。それに興味もある。俺に対抗出来る女がどれ程の者なのかってな」
「……分かったわ、行ってきなさい。私もあなたの技を破ると言う相手の術が気になるわ。でも、決して気を抜かないでね」
「あぁ、行ってくるぜ」
新は笑みを見せてから転移魔方陣に向かう
新の出陣に子連れの観客席が今まで以上に沸き上がり、新はバトルフィールドに転送されていった
到着したのは広大な花畑だった
色彩の鮮やかな花が一面に咲き誇る場所

前方に相手の『僧侶』と『兵士』――例のアンドレアルフス姉妹を確認した
『第3試合、開始してください！』
試合が始まると同時にミリーバ・アンドレアルフスが『女王』にプロモーションして魔力を底上げする
新は両手両足に鎧を展開し、その場を駆け出した
それに応じてアンドレアルフス姉妹も走り出し、魔力での攻撃を放ってくる
投げ槍の様な氷の魔力が幾重にも撃ち放たれ、新は全て弾き飛ばしていった
ミリーバが魔力を纏わせた打撃や蹴りを見舞うが、新はそれも難無く防ぐ
隙を見て反撃を繰り出すも、コリアナの魔力攻撃によって阻まれてしまう
一旦距離を取る両者、新は首や手をコキコキと鳴らす
「成る程、流石は姉妹ってところか。まさに阿吽の呼吸だな」
「そっちもやるわね、坊や」
「コリアナお姉様。このヒト、強いです。プロモーションしてないのに、『女王』にプロモーションした私を軽くあしらうなんて」
淡々と語るコリアナと気を引き締めるミリーバ
〝そろそろ本気を出すか〟と新は『闇皇の鎧』を全身に展開する
赤黒いオーラが体を包み込み、闇皇と化した

『出ました！おっぱいドラゴンと対になるヒーロー、ダークカイザーッ！会場では子供達が更に興奮の一途！』
実況が叫び、バトルフィールドの上空にも映像が現れて子供達の姿が映し出される
『ダークカイザーーーーーッ！頑張ってーーーーッ！』
子供達の声援に新は兜の中で笑みを浮かべていた
やる気も向上したところで籠手から闇皇剣（やみおうけん）を取り出し、早速『暗黒捕食者（ダーク・グリード）』の準備に取り掛かる
刀身に黒い魔力を流し、技を発動しようとしたその時――――突如コリアナが自身の服のボタンに手を掛け、脱衣し始めた
上着を1枚脱ぎ捨てるコリアナ
最初は本気を出す為に上着を脱いだのかと思っていたのだが――――それは違った
上着だけでなくスカートも脱いでいく
あまりの展開に新は攻撃の手を止めてしまった
「……どういうつもりだ？」
「ふふっ、見て分からない？脱いでるのよ」
「流石はお姉様、見事な脱ぎっぷりです。では私も！」
なんと妹のミリーバも腰のリボンを解（ほど）き始めた

スルスルとリボンを落とし、衣装を脱いでいく
『おおっと！これは！バアルチームのコリアナ・アンドレアルフス選手とミリーバ・アンドレアルフス選手が、突然脱ぎ出した！男性のお客さんも無言でガン見している状態です！アザゼル総督、これはいったい！』
『……』
アザゼルも他の男性客と同じくガン見状態だった……
「新、何をしているの！今の内に攻撃すれば決着は直ぐに――」
イヤホンマイクからリアスの指示が届くが……新は取り出した剣を地面に突き立て、寄り掛かって待機する様な体勢を取った
完全に攻撃の意思を捨てている……
「ちょっと、新!?どうして攻撃の手を止めるの!?」
「悪いが俺には出来ないな。目の前で脱いでいく女を攻撃するなんて、男の尊厳を汚す大罪だ。それに……自ら脱衣してくれる女を裸にするって選択肢も存在しない。寧ろ――それを見届けるのが男の義務だッ！」
目の前の神掛かった光景に新は力説し、断固として攻撃しない事を宣言する
この最高のシチュエーションは男にしか理解出来ない……
ここでアザゼルが力説を始めた

『これがサイラオーグ眷属の用意したイッセーと新の技封じか！なんて、恐ろしい術だ！目の前で美女美少女が1枚1枚脱いでいく。男にとっちゃ、目の前で1枚1枚服を脱いでいく女ってのは最高の状態だ。ストリップショーと言うジャンルが確立する程、男ってのは服を取り払っていく女性に夢中になっちまう生き物だ。ドレス・ブレイクやダーク・グリードで一気に裸にするなんて事は愚行に等しい！スケベの心理を捉えた的確で正確な攻め手！これ程のものか、バアル眷属！』

『会場と放送を見ている男性客は今頃股間を押さえて前屈(まえかが)みになってるだろうね♪』

総司の指摘通り、殆どの男性客が反応済みの股間を悟られまいと前屈みになっていたりする……

「イッセーさんっ、見ちゃダメですぅ！」

「お願いだ、アーシアッ！男として、男としてこの光景を目に焼き付けたいんだぁぁぁぁぁっ！」

どうやら陣営にいる一誠はアーシアに目を塞がれているようだ

〝……最低です〟

「――――ッ？今、小猫のツッコミが空耳で聞こえたような……」

そんな中、アンドレアルフス姉妹は下着姿となっていた

コリアナはエロス溢れる上下黒の下着

ミリーバは可愛さを強調する上下白の下着
対照的なエロスは男の性欲を更に加速させる……
『ちなみに、このストリップショーですが、お子様も見ているのでそろそろ特殊な加工を施して放送しますのでご了承ください』
小さなお子様には安心、大きなお友達は残念賞（笑）
新も期待の視線を向ける中、アンドレアルフス姉妹は遂に下着へ手を伸ばした
ミリーバはブラジャーのホックに手を掛け、それを外していく
一方、コリアナはパンツの方に手を掛けた
「姉妹と言えど性癖は違うのか……」
マジマジとアンドレアルフス姉妹の脱ぎ方、性癖の違いを吟味している時だった
「違うだろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
突如響き渡り、新の耳をも劈く叫び
それは嘆きと同時に怒りに似た感情も孕んでいた
その叫び声の主は――――グレモリーの陣営にいる一誠だった……
アーシアに目を塞がれている筈だが、恐らく指の隙間から今の様子を見たのだろう
「違う！違うよ、お姉さんッ！ブラジャー外してからパンツでしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！」

「空気読め、黙ってろカスが」
新は八つ当たりするかの如くイヤホンマイクを投げ捨てた
突然の出来事に呆気に取られ、手が止まるアンドレアルフス姉妹
「悪かったな、ウチの一誠(バカ)が余計な事を言って。あまり気にするな」
「そ、そう?じゃあ続けるわね」
気を取り直してコリアナは脱ぎかけたパンツを下ろし、ブラジャーも完全に脱ぎ捨てた
ミリーバもブラジャーを外して地面に落とし、パンツを素早く脱いでいく
最後の1枚も脱ぎ捨てたアンドレアルフス姉妹は文字通り丸裸となった
しかし、それでも隠そうと言う仕草を一切見せない
堂々とした立ち振舞いに会場中の男性客が沸き上がり、新もパチパチと賞賛の拍手を贈る
「お見事。……で、ここからどうするつもりなんだ?」
「ふふっ、ここからはオトナの時間よ。――ミリーバ」
「はい、コリアナお姉様」
アンドレアルフス姉妹は手を前に出して魔方陣を展開する
その瞬間、魔方陣が強い輝きを生み出し――その場にいる3人を覆い隠す様に黒い

結界が形成されていく
　ドーム状の黒い結界が完全に新、コリアナ、ミリーバの３人を包み込んだ
『おおっと！コリアナ選手とミリーバ選手の作り出した結界が自分達もろとも竜崎選手を閉じ込めたぞ？いったい何が始まると言うのでしょうか！このレーティングゲームの場でまさかの床勝負に発展かーっ！？』

「私達姉妹が形成した特製の結界よ。これで外からの通信と視界を遮断したし、私達姉妹を倒さない限り出られないわ」
　自信満々にそう言ってくるコリアナに対し、新は不思議そうに結界の中を見渡す
「つまり、アンタら２人を倒せば良いだけだろ？だったら簡単だ」
「あら、つれない坊やね。こ～んなに美味しそうなものが目の前にあるのに」
　コリアナは艶（なまめ）かしい仕草をしながら自身の胸を寄せて上げる
　ムニュムニュと形を歪める果実（おっぱい）に視線は釘付け
　更にコリアナは新の方に歩み寄っていく
「ねえ、坊や。そんな暑苦しい鎧を脱いで、お姉さん達とイイコトしましょ？」

その誘惑の言葉に新は当然――鎧を解除した……
男の本能には抗えない……
「で、イイコトってのは何だ？」
「それはね……手を貸して」
コリアナの甘言に新は右手を伸ばす
すると……コリアナが新の右手を掴み、そのまま胸元へ寄せて――挟んだ
おっぱいに埋もれる新の右手……
これはまさしく――疑似パ○○リである
「おぉっ」
「ふふっ……、どう？ 坊やの手とお姉さんの身体が1つになった感触は？ 夢心地でしょ？」
「す、凄いです……コリアナお姉様。なんて大胆な攻め……っ」
「ミリーバ、あなたもやってみたら？」
「は、はい！ お姉様に負けないよう頑張りますっ！」
姉に促されたミリーバは新の左腕を掴み、袖を捲り上げる
素肌を出した左腕に――自らの胸を擦り付け始めた……
コリアナとは違って小振りなおっぱいでインパクトに欠けるが……プニプニと小振

りならではの威力を発揮する
これこそがアンドレアルフス姉妹の切り札――――〝おっぱいホールド〟である
健気に頑張るミリーバを見て火が点いたのか、コリアナは新の右手の指を舐め始めた
妖艶な舌使いで丁寧に指先を舐め、奥までくわえ込む
〝本番行為ではない〟のにもかかわらず……結界の中でイヤらしい水音が響き渡る
「んちゅ……ぢゅるる……っ。くちゅちゅぱぁ……。んぱぁ……っ、坊やの指、美味しいわね。それに逞(たくま)しいわ」
「コリアナお姉様……このヒトの腕、凄いです……っ。擦ってるだけなのに、こちらが変になってしまいそう……」
「なるほど、色仕掛けか。一誠や他の男なら鼻血が大量噴出してゲームオーバーだろうな。だが――――」
新は素早くコリアナとミリーバのおっぱいホールドから抜け出し、コリアナの背後に回る
背後から右手でコリアナのおっぱいを鷲掴み、左手で彼女の恥部をロック
「ひゃんっ！……え？な、何……？」
「この俺に色仕掛けで挑んだのは大間違いだったな。久々に震えさせてやる」
そう言った直後、新の両手が魔力と強い振動を帯び始めた

久々に出てきた新の妙技――『絶頂させる超振動(エクストリーム・シンドローム)』
振動が始まった瞬間、コリアナの全身に快楽の電流が流れる
「ひぃいっ！な、何これぇ……!?坊やの手っ、き、気持ち良すぎるぅ……っ！ダ、ダメぇ！壊れちゃうッ！お姉さんの胸がっ、アァッ！大事なトコも壊れちゃうぅぅっ！」
泣きが入っても新の攻め手は止まらない
新はトドメとばかりに右手の指を乳首に埋没させ、左手の指を恥部の入り口に侵入させていき――両方同時に振動を放った
「――ッ！ひぅぅぅぅっ！」
エロい叫びと共にコリアナの身体が強く跳ねる
ビクンビクンッと跳ねが治まった後、その場にへたり込み、背中から倒れた
その後も細かい痙攣を抑えられず、コリアナは艶(なまめ)かしい息遣いのまま行動不能となる
……
「お、お姉様が……あんなにも乱れて……」
「さて、次は――そっちの番だ」
新は素早くミリーバの背後に回り込み、抱擁する様な形で捕らえた
新の両手がミリーバの小振りなおっぱいを包み、ガッチリとロックする
「ひっ!?……あ、あの……せめて、せめて優しくシていただけないでしょうか……？」

「そいつはちょっと叶えられないな。俺、結構ドＳなんでね。そうやって戸惑う女の顔を見ると……ついイジメたくなっちまうのさ」
新は両手から超振動を放ち、ミリーバにも容赦無く快楽の電流を流す
「んきゅうううううううっ！」
短時間で何度も身体を跳ねさせるミリーバ
新は倒れる彼女の身体を抱きかかえ、コリアナの元へ歩み寄っていく
未だハァハァと息を立てるコリアナの隣にミリーバを下ろし、こう告げた
「今回は勝負だからな。悪く思わないでくれ」
そう言った後、アンドレアルフス姉妹が行動不能になった為――――結界が崩壊していき、元のバトルフィールドへと戻る
新は勝利を表すかの様に腕を上げ、審判（アービター）が倒れているアンドレアルフス姉妹を見て告げた
『サイラオーグ・バアル選手の「僧侶（ビショップ）」１名、「兵士（ポーン）」１名、色んな意味でリタイヤです』
第３試合は酷い方向で新が勝利を収めた……

「酷い勝負だったよ」
「俺は羨ましい限りだ、チクショウッ！」
陣地へ帰ってきてから祐斗の苦笑いと一誠の嘆きが新を出迎えた
そんなやり取りはさておき、次の合計数字が発表される
今度の数字は８
「８か。私が出よう」
ゼノヴィアが１歩前に出てきた
『騎士（ナイト）』であるゼノヴィアは駒価値３なので、勿論出場する事が出来る
「ええ、そうね。そろそろゼノヴィアに任せようかしら。ゼノヴィアと共に行くのは祐斗か、ロスヴァイセが適任かしら」
リアスもゼノヴィアの申し出に応じ、祐斗とロスヴァイセに視線を向ける
どちらを出そうか決めようとした時、ギャスパーが恐る恐る挙手した
「……ぼ、僕が行きます。え、えっと、そろそろ中盤（ミドルゲーム）ですから……何が起こるか分かりませんし……、ゆ、祐斗先輩とロスヴァイセさんは強いですから、後半に向けて控えていただいた方が良いかなって……」
皆がギャスパーの意見に目を丸くしていた
あのギャスパーが自主的に意見してくるとは誰も思わなかったのだろう

確かにギャスパーの言う通り、強力な祐斗とロスヴァイセは後半の展開に取っておいた方が得策かと思える
それにギャスパーの目は決意の色に満ちていた
「じゃあ、ギャスパー、ゼノヴィアをサポートしてくれるかしら？あなたの邪眼（じゃがん）やヴァンパイアの能力でゼノヴィアをサポートして欲しいの」
リアスにそう言われ、ギャスパーが呟く
「……ぼ、僕、男子だし、小猫ちゃんの仇を討たなきゃ！」
ギャスパーは全身を震わせながらも良い気迫と気合を放っていた
「うん、頼りにしているぞ、ギャスパー」
「は、はい、ゼノヴィア先輩！」
第４試合の出場メンバーはゼノヴィア＆ギャスパーと言う異色のコンビで決定した

２人が転移魔方陣から到着したバトルフィールドは岩だらけの荒れ地だった
足場があまり良くないフィールドだ
２人の眼前にバアルチームの相手が現れる

痩せ型のひょろ長い体格の男性と不気味なデザインの杖を携(たずさ)えた美少年

ひょろ長い男性が『戦車(ルーク)』で、杖を持った少年が『僧侶(ビショップ)』である

『グレモリーチームは伝説の聖剣デュランダルを持つ「騎士(ナイト)」ゼノヴィア選手、一部で人気の「僧侶(ビショップ)」な男の娘(こ)、ギャスパー選手です！』

「「「うおおおおっ！ギャーくぅぅぅんっ！」」」

実況の言うように観客席の一部からギャスパーに応援を送る男性ファンがいた

ちなみにゼノヴィアも同性からの支持が多いらしい

『対するバアルチームは、なんと！両者共に断絶した御家の末裔と言うから驚きです！「戦車(ルーク)」のラードラ・ブネ選手、「僧侶(ビショップ)」のミスティータ・サブノック選手。それぞれ断絶した元72柱のブネ家とサブノック家の末裔です！アザゼル総督、バアルチームには複数の断絶した家の末裔が所属しておりますが……』

『能力さえあれば、どんな身分の者でも引き入れる。それがサイラオーグ・バアルの考えだ。それに断絶した家の末裔が呼応したと言う事でしょうな。断絶した家の末裔は現悪魔政府から保護の対象でありながらも一部の上役に厄介払いと蔑まれているのが実情。他の血と交じってまで生き残る家を無かった事にしたい純血重視の悪魔なんて上に行けばたくさんいますからね』

『ハハハハ、全くその通りです』

アザゼルの皮肉げなコメントに実況は困り顔となっていた
皇帝（エンペラー）ベリアルは笑っていたが……
「その通り、我が主サイラオーグ様は人間と交じってまで生き永らえた我らの一族を迎え入れてくれた」
「サイラオーグ様の夢は僕達の夢」
バアル眷属両者の瞳は使命感に燃えており、固い信念の様な物も感じられる
『第４試合、開始してください！』
審判（アービター）の宣言後、両チームが素早く構えて攻撃を開始させた
「ギャスパー、コウモリに変化して！ゼノヴィアはその後に攻撃！」
リアスが陣地からそう指示する
ギャスパーが無数のコウモリに化けてフィールド中に散らばり、ゼノヴィアが早々に幾重ものデュランダルの波動を相手の『戦車（ルーク）』と『僧侶（ビショップ）』に放った
その攻撃を両者が回避し、サブノックが杖から複数の炎の魔力を放つ
「させません！」
フィールド中に飛び回る無数のコウモリの眼が赤く輝き、炎の魔力を停止させる
その隙にゼノヴィアがデュランダルの波動で振り払い、相手の攻撃を打ち消した
「ラードラ！サイラオーグ様の指示が届いた！先に剣士だ！僕は準備する！」

「了解！」
サブノックが後方に下がり、全身に禍々(まがまが)しいオーラを迸(ほとばし)らせる
更にラードラがサブノックを守る様に立ち、衣服を破り捨てた
壁役にでもなるのかと思っていた、その矢先――
ボゴッ！ドンッ！
ラードラのひょろ長い体が突然盛り上がり、異様な体格へと変貌していく
どんどん膨れ上がり、尻尾が生え、翼も背中から出現する
口元は牙がむき出しになり、手の爪が鋭利になっていく
ギャオオオオオオオオオオオオンッ！
咆哮を上げる黒く巨大な怪物――ドラゴンがゼノヴィアとギャスパーの前に立ち塞がった
「……ブネは悪魔でありながら、ドラゴンを司(つかさど)る一族……。けれど、変化出来るのは家の血を引く者でも限られた者……。よりによって……っ！」
リアスが苦虫を噛み潰した様な表情をしていた
以前のグラシャラボラス戦でも見せなかった能力に度肝を抜かれた
『ドラゴン変化は情報にも無かった！サイラオーグめ……、その眷属を鍛え上げて覚醒させたか！』

『凄いね。人間との混血児は純血と比べて能力差があるのに、その壁を超えた。「戦車（ルーク）」もそうだが、彼にここまで力を引き出させたサイラオーグも見事だね』

アザゼルと総司も感嘆のコメントをする

巨大なドラゴンとの攻防が始まり、ゼノヴィアは聖剣の波動と共に直接攻撃もドラゴンに放つが、堅牢な防御力に阻まれて決定打を作れない

「ギャスパー！あれを撃つ！時間を稼いでくれないか！」

ゼノヴィアがギャスパーにサポートを促して後方に下がり、無数のコウモリがドラゴンを包み込む

ドラゴンは口から大質量の火炎を吐くが、ギャスパーは上手く散って回避した

ゼノヴィアがデュランダルを天高く掲げ、パワーをチャージし始めた時――――サブノックが叫んだ

「ここだッ！聖剣よッ！その力を閉じよッ！」

サブノックの手にした杖が怪しく光り、不気味な光がゼノヴィアを包み込む

体に気味の悪い模様が浮かび上がり――――ゼノヴィアの手元が震え、遂にはデュランダルを下に降ろしてしまった

「……これは何だ……。デュランダルが反応しない……！」

ゼノヴィアの体に起こった現象に驚く新と一誠

すかさず相手の『僧侶(ビショップ)』に視線を向けると、サブノックが窶(やつ)れた表情で言う
「……僕は人間の血も引いていてね。――――神器(セイクリッド・ギア)『異能の棺(トリック・バニッシュ)』。最近になってようやく使えるようになった呪いの能力だよ……」
『「異能の棺(トリック・バニッシュ)」、自分の体力、精神力などを極限まで費やす事で特定の相手の能力を一定時間完全に封じる神器(セイクリッド・ギア)だな。――――バアルの「僧侶(ビショップ)」は自分の力と引き替えにゼノヴィア選手の聖剣を使う力を封じたようだ』
アザゼルから説明が入る
サブノックの急激な窶れ具合はゼノヴィアの聖剣を使う能力を封じた代償のようだ
「……本当なら聖剣を封じた余波で、彼女自身にも聖剣のダメージを与えさせようと思ったんだが……。聖剣使いとしての才能は思った以上に濃かったようだ……」
ふらつきながらも苦笑するサブノック
ダメージを与えられなかったとは言え、デュランダルを封じられたのは痛恨である
何も出来なくなってしまったゼノヴィアにドラゴンが容赦無く襲い掛かる
無数のコウモリがゼノヴィアを包み込み、誰もいなくなった地面にドラゴンの踏みつけが炸裂
どうやらギャスパーのナイスアシストでゼノヴィアを何処かの岩陰に避難させたようだ

「……すまない、ギャスパー。だが、どうやら私は役立たずになりそうだ」
「そ、そんな事無いです！ゼノヴィア先輩の方が僕よりもずっと部長のお役に立ちますよ！」
　ギャスパーはゼノヴィアを励まし、腰の小さなポシェットから小瓶やチョークなどの道具を取り出した
「ぼ、僕、この手の呪いを解く方法をいくつか知ってます！」
　ギャスパーは手元に小さな魔方陣を展開させ、ゼノヴィアの体に当てる
　魔方陣を通してゼノヴィアにかかった神器（セイクリッド・ギア）の呪いを調べているようだ
「逃がさん！何処だ！」
　ドラゴンが地響きを立てながらゼノヴィアとギャスパーを捜し回る
　見つかるのは時間の問題だ……
「ギャスパー、ゼノヴィアの呪いは解けそう？」
「……分かりました。はい、僕流の解呪方法なら手持ちの道具で何とかなりそうです」
　ギャスパーはそう言ってゼノヴィアを中心にチョークで魔方陣を描いていく
　見慣れない紋様を描き、最後に小瓶を持った
　だが、それは一誠の血が入った小瓶で、ギャスパーの力を底上げするアイテム
「今描いた魔方陣にこのイッセー先輩の血を馴染ませる事で、呪いは解けると思います。

ただ、解呪出来るまで少し時間が掛かりそうですけど……」
「ま、待て、ギャスパー。その血を使えばお前は――――」
困惑するゼノヴィアにギャスパーは満面の笑みを見せた
「ゼノヴィア先輩、僕、役目を見つけました」
「ギャスパー……？」
魔方陣を完成させたギャスパーは岩陰から飛び出していった
単身で囮になるつもりだ……しかも、一誠の血を飲まずに……！
「ぼ、僕が時間を稼ぎます！呪いが解けたら、そのままデュランダルをチャージしてください！」
「無謀よ！ギャスパー！隠れなさい！」
リアスが叫ぶが、ギャスパーは決意に満ちた表情で走り出した
「ダメですぅっ！ぼ、僕が時間を稼がないとダメなんですぅっ！部長が勝つにはゼノヴィア先輩の力が必要なんですぅっ！」
「いいから、早く逃げてッ！」
リアスの叫びは届かず、ギャスパーの眼前にドラゴンとサブノックが迫っていた
「見つけた、ヴァンパイアめ。あの剣士は隠したか。だが、この周辺にいるのだろう？火炎を撒き散らせば出てくるだろうか」

巨大なドラゴンに迫られ、ギャスパーは全身を震わせたが――逃げる素振りも見せず、手を前に出して魔力を撃つ格好となった
「あ、暴れさせるわけにはいきませんっ！」
「単独で臨むか。その勇気、敬意を払うべきもの。たとえ震えていようと勇気が無ければドラゴンの前に立つ事すら出来ないものな」
ドラゴンが口から巨大な火炎を吐き出した
ギャスパーは防御魔方陣でそれを防ごうとするが……
「うわああぁぁぁぁぁあがあっ！」
防御魔方陣が破られ、火炎に吹き飛ばされていく
火炎の一撃で火傷を負いながらも、ギャスパーはよろよろと立ち上がった
「……まだ、まだ大丈夫です！」
「ギャスパー！無理はよせ！」
ゼノヴィアが堪らず叫んだ
「剣士の声か？この辺にいるのか？剣士め、何処だ？」
ドラゴンがゼノヴィアの声を聞いて、辺りを見渡し始めた
「あああああああっ！」
ギャスパーが悪魔の翼を展開して飛び出し、ドラゴンの腕に食らいつく

「――ッ！離せ！いつでも倒せるお前と違い、デュランダル使いは直ぐにやらねばならん！あの呪いは有限だからな！」
ドラゴンは空いている手でギャスパーを捕まえ、力一杯握り潰す
メキメキと嫌な音が辺りに響き渡る……
「うわぁっぁぁあぁぁぁぁっぁっ！」
ギャスパーが激痛に絶叫し、あまりに凄惨な光景にリアスは目を背けてしまう
「……もうやめて！」
アーシアも顔を手で覆う
ドラゴンは握り潰したギャスパーを地面に投げ捨てた
激痛で息も出来ない状態にされても……ギャスパーはドラゴンに食い下がる
「……痛い……痛いけど……。まだ……僕は……グレモリー眷属の……男の子だから……。……ゼノヴィア先輩、待っていてください……」
ギャスパーの覚悟に、映像のゼノヴィアは声と気配を完全に押し殺すが……その目には涙が込み上げていた
「邪魔だ！」
ドラゴンに蹴られていくギャスパー
それでもまだ這いつくばる……

「……グレモリー眷属男子……訓戒……その1……男は女の子を守るべし……ッ！」
その言葉は部室で一誠がギャスパーに教えたものだった
「……グ、グレモリー眷属男子……訓戒……その2、男はどんな時でも……立ち上がること……ッ！」
手元に魔方陣を展開させようとするが、サブノックはフラフラになりながらもギャスパーを杖で横殴りにする
「諦めろ、キミでは我々には勝てない」
無情の一声を聞いても、ギャスパーは岩につかまり立ち上がろうとしていた
「……グレモリー……眷属……男子……訓戒……その3……何が起きても……決して諦めるな……。……ゼノヴィア先輩は……僕が守らないと――――」
ズンッ！
非情な一撃……ドラゴンの踏みつけが容赦無くギャスパーを潰した
足を退けてみると、ギャスパーはボロボロになっていた……
とても戦える状態ではない、リタイヤも近いだろう……
あまりの光景にリアスは映像からも目を背けるが――――新が肩に手を置く
「……リアス、目を背けるな。背けずに見てやってくれ。ギャスパーはお前を勝たせる為に……死ぬ覚悟であの場にいるんだ。その覚悟を見届けるのが『王（キング）』の責務だ……」

一誠も溢れる気持ちを抑えられずに言った
「引きこもりで、誰よりも怖がりなあいつが、今誰よりも一生懸命頑張ってるんです……！見てやってください……！」
新と一誠の訴えにリアスは涙を溢れさせようとしたが――それを我慢して映像に視線を送った
「分かったわ。ゴメンなさい、新、イッセー、ギャスパー……」
アーシアと朱乃は嗚咽を漏らし、ロスヴァイセも目にうっすらと涙を浮かべる
祐斗は唇を噛み、そこから血が滲んでいた
「まだ動くか。その勝利への執念、恐れ入る。これ以上の攻撃はあまりに残酷と言える。良いだろう、一気に楽にしてやろう」
ドラゴンが口から火炎を吐こうとしたその時……
「――そうはさせない」
極大かつ異様なオーラを放ちながらゼノヴィアが岩陰から姿を現した
デュランダルから迸る聖なるオーラは、映像越しでも寒気がする程の質量……
呪いの紋様が体から消えており、ゼノヴィアは既に意識を失っているであろうギャスパーを抱き寄せた
「――よくやったぞ、ギャスパー。男だな。――すまなかった、私が不甲斐ないばか

りにお前にこんな――――」
ゼノヴィアは涙を流してギャスパーに謝る
呪いが解かれた事を知ったサブノックが杖の先端を向け、ドラゴンも両翼を広げて構えた
ゼノヴィアが静かに立ち上がり、ボソリと呟く
「……足りなかった」
エクス・デュランダルの鞘がスライドしていき、攻撃形態へと姿を変えていく
「私には覚悟が足りなかったようだ。だから、あんなものに捕らわれた。仲間の為に、部長の――――主の為に持つべきだった死ぬ覚悟がギャスパーよりも足りなかった。こいつの方が私なんかよりもずっと覚悟を決めてこの場に立っていた！自分があまりにも情けない……ッ！私は自分が許せなくて仕方がないんだ……ッ！」
ゼノヴィアの言葉はグレモリー眷属全員に突き刺さった
覚悟を決めてきた筈なのに、まだ足りなかったのかもしれない……
ギャスパーの奮闘がそれを教えてくれた
「なら、どうすれば良い？どうすればこいつの思いに応えられる？」
呪詛のように呟きながら涙を拭うゼノヴィア
「そうだな。それしか無いだろう。すまない、ギャスパー。――――せめてお前の為にこ

いつらを完全に吹き飛ばしてやろう！それがお前への応えだと思うからなッ！」
エクス・デュランダルから生み出された極大のオーラが天高く立ち上る
「そうはさせるかッ！今度はこの命を代償にもう一度あの『騎士（ナイト）』の能力を封じる！」
サブノックが杖を構えて神　器（セイクリッド・ギア）を発動しようとしたが――その体が意識ごと停止する
不測の事態にドラゴンがギャスパーに視線を向ける
ギャスパーはリタイヤの光に包まれながらも、双眸（そうぼう）を赤く輝かせていた……
「停止の邪眼（じゃがん）かッ！バカな！」
「お前達はギャスパーに負けたんだッ！」
ゼノヴィアはデュランダルをドラゴンと停止したサブノック目掛けて解き放ち、大質量の聖なるオーラの波動が相手2人を飲み込んでいった
『サイラオーグ・バアル選手の「戦車（ルーク）」1名、「僧侶（ビショップ）」1名、リアス・グレモリー選手の「僧侶（ビショップ）」1名、リタイヤです』
第4試合の終わりを告げるアナウンス
ここまでに新達は後輩2人を失った……

何が「勝ちましょう」だろうか
私――――リアス・グレモリーは自分の甘さを痛感した
1番覚悟を決めていたのはこの子達だった
この子達は、最初から死ぬつもりでここに立っていたんだ
仲間の為に……私の為に……
そして、勝つ為に……
私は……なんて最低な『王（キング）』だろうか
貧弱で、貧相で、あまりに酷い主
――――私も覚悟を決めよう
泥にまみれようと、地べたを這いずろうと、このゲームを制する事を――――

ダメだ……これ以上、耐えられない……耐えたくない……
新はその念に駆られていた……
ここまでの激戦で後輩2人を失い、〝次にまた誰かを失うんじゃないか〟と言う重圧

が彼の心を押し潰す

〝助けたいのに助けられない〟と言う無念が、腹立たしさが胃の中を掻き回す

新は元々、ルールの無い世界を生きてきた……

自分の好きな様に生き、好きな様に戦う

バウンティハンターは自堕落的な要素が強い反面、自由な方向性に見舞われていただが、悪魔の世界に足を踏み入れた事を初めて後悔したかもしれない……

レーティングゲームと言う名の戦場には……ルールが、縛りが存在する

鎖(ルール)に縛られ、動けないせいで大事な後輩2人を失った……

それも目の前で……

いつもなら助けられる距離なのに、手を伸ばす事すら出来ない……

イヤダ

ハナセ

オレヲ　コノ　イマワシイ　クサリ　カラ

カイホウ　シロ

ナゼダ

ナゼ　カイホウ　サレナイ

ナゼ　タスケラレナイ

アア　ニクイ
メノマエデ　ウバッタ　ヤツラガ　ニクイ
オレヲ　トメテイル　コノ　クサリガ　ニクイ
コンナ　クサリデ　トメラレテイル　オレ　ジシンモ　ニクイ
コワシタイ　クサリヲ　コワシタイ
ワガママな呪詛が彼の頭の中を駆け巡る……
その怒りと憎しみが呼応するかの様に――新の影が色濃く彩(いろど)られ、口を開け始めた
今以上に誰かを失えば、爆発しそうな程に……

怒りの咆哮

第４試合を終えて残った眷属はグレモリーチームがリアス、朱乃、祐斗、ゼノヴィア、アーシア、ロスヴァイセ、新一誠の８名

バアルチームはサイラオーグ、『女王（クイーン）』、仮面の『兵士（ポーン）』のみとなっていた

『さあ、戦いも中盤（ミドルゲーム）を超えようとしているのかもしれません！サイラオーグ・バアル選手のチームは残り３名！対するリアス・グレモリー選手は８名となっています！グレモリーチームが有利ですが、バアルチームも残りのメンバーが強力です！巻き返しとなるか！』

「木場、相手方の『兵士（ポーン）』は駒消費７だったか？」

一誠が祐斗に確認を取ると、祐斗は頷いた

「うん。不気味だね。少なくとも今まで出てきたバアル眷属よりも強敵なのは確かじゃないかな」

第５試合の出場選手を決める為のダイスシュートが始まり、合計数字が９となる

「あちらも遂に３人。９と言う事は『女王（クイーン）』か『兵士（ポーン）』しか出てこられないわ。……『兵士（ポーン）』はまだ出さないと私は思うの」

「……何か根拠はあるのか？」
新の問いにリアスは答える
「サイラオーグはあの『兵士（ポーン）』を出来るだけ使いたくないと思っているような気がするわ。まるで出てくる気配が感じられない。温存しているとしても温存し過ぎよ。『兵士（ポーン）』が出られる試合は何度もあったし、ロスヴァイセと小猫が戦った第２試合に投入してきても良いと思ったわ」
「となると、相手は次に『女王（クイーン）』ですか、部長」
「ええ、祐斗。サイラオーグの『女王（クイーン）』――クイーシャ・アバドン。『番外の悪魔（エキストラ・デーモン）』アバドン家の者が来るでしょうね」
サイラオーグが次に出す選手――クイーシャ・アバドンは『番外の悪魔（エキストラ・デーモン）』アバドン家の出身
強力な悪魔の一族らしく、レーティングゲームの現役トップランカー３位もアバドン家
家自体は現政府と一定の距離を取っていて、冥界の隅でひっそりと住んでいるらしいが……
「――私が行きますわ」
朱乃がリアスにそう進言する

「――朱乃、良いの？相手の『女王（クイーン）』はアバドンの者よ？記録映像を見る限りでも相当な手練れだったわ」
リアスの言う通り、クイーシャ・アバドンはグラシャラボラス戦で絶大な魔力とアバドン家の特色――『穴（ホール）』を使って他者を圧倒していた
『穴（ホール）』とはどんな物でも吸い込む厄介極まりない代物で、その先は異界に続いているらしい
「俺が行きましょうか？勝てる算段はあるんですけど」
一誠がそう言うが、朱乃は首を横に振った
「それは例のトリアイナを使ったものでしょう？まだ出してはダメよ、イッセーくん。もっと大きな数字が出た時――終盤（エンドゲーム）で見せてこそですわ。それまでは私が何とか相手戦力を削りましょう。後ろに祐斗くんやゼノヴィアちゃん、ロスヴァイセさん、そして部長とイッセーくん、新さんが控えてくれているからこそ、出来る無茶もあるんです」
笑顔で言う朱乃だったが、新は内心では気が気でなかった
しかし、そこまで言われてしまったら返す言葉も思い付かない……
「……分かったわ、朱乃。お願いするわね」
「ええ、リアス。勝ちましょう、皆で」
「……朱乃。やっぱり、ここは俺が――」

新が寸前で朱乃を呼び止め、代わりに出場すると申し出ようとするが――朱乃が人差し指を新の唇に押し当て、発言を止める
「ご心配してくださってありがとうございます。ですが、私は負けません。必ず勝ちます。リタイヤしていった小猫ちゃんとギャスパーくんの為に出来る事は――勝利を持ち帰る事です」
それは以前、新がライザーとのレーティングゲームでリアスに放った言葉だった
もう少しで勝利を収められそうだった時、リアスが投了（リザイン）した事で新は激怒し、『王（キング）』と言う立場の責任を諭した……
自分が放った言葉が――今度は自分の心中に突き刺さる……
その後、新は何も言えず、転送される朱乃を見送るしか出来なかった
朱乃が着いた場所は無数の巨大な塔が並び立つフィールドだった
眼前の塔の頂上にはバアルチームの『女王（クイーン）』――クイーシャ・アバドン
「やはり、あなたが来ましたか、雷光（らいこう）の巫女」
「ええ、ふつつか者ですが、よろしくお願い致しますわ」
審判（アービター）が出現して両者を見据える
『第５試合、開始してください！』
試合開始が宣言された瞬間、朱乃とアバドンは翼を羽ばたかせて空中へ飛び出してい

き――――魔力による壮絶な撃ち合いが始まった
朱乃が炎を魔力を大質量で撃てば、相手は氷の魔力でそれを相殺する
更に朱乃が水を使えば、相手は風で相殺
魔力による空中戦は殆ど互角だった
しかし、まだ油断は出来ない……
相手はアバドン家の特色――――『穴』を使っていないからだ
朱乃が魔力で空に暗雲を作り出し、そこから大質量の雷光を放った
閃光が走り、アバドンを雷が包んでいく――――寸前で空間に歪みが生じて『穴』が開かれ、大質量の雷光は為す術無く『穴』に吸い込まれていく
「ここですわ！これならどうでしょう！」
朱乃はこの機会を狙っていたのか、更に天に雷光を走らせる
大質量かつ幾重もの雷光が周囲一帯を襲い、周りの塔を次々と吹き飛ばしていく
フィールドの大半を覆う程の雷光がアバドンに襲い掛かる
直撃を受ければ致命傷は必至、しかも今度は避ける場所が無い
皆が朱乃の勝利を確信した――――が、アバドンが『穴』を広げ、更に複数の『穴』を周囲に展開させた
巨大な『穴』と周囲に現れた複数の『穴』が朱乃の雷光を全て飲み込み、その光景を

見て朱乃は絶句していた
アバドンが冷笑を浮かべて言う
「私の『穴(ホール)』は広げる事も、幾つも出現させる事も出来ます。そして『穴(ホール)』の中で、吸い込んだ相手の攻撃を分解して放つ事も出来るのです。――この様にして」
朱乃を取り囲む様に無数の『穴(ホール)』が現れる
「雷光から雷だけを抜いて――光だけ、そちらにお返ししましょう」
ビィィィィィィィッ！
無数の『穴(ホール)』から朱乃に向けて幾重もの光の帯が撃ち放たれた……
悪魔にとって光は猛毒にして必殺……
朱乃は光に包まれていく
『リアス・グレモリー選手の「女王(クイーン)」、リタイヤです』
無情に告げられるアナウンスに新は拳を握り締め、歯を食い縛った――血が出る程に……

「吸い込むだけではなく、あの様にカウンターにも使えるのか」

祐斗が絞り出した声音でそう言う
朱乃を失った事でグレモリーチームは衝撃を受けていた
あの雷光が決まれば勝っていたのだが、アバドンの『穴(ホール)』を甘く見ていたのが敗因となった……
『……クソッ!やっぱり、あの時に俺が出ていれば良かったんだ……ッ!無理にでも止めていれば……ッ!』
新は朱乃を向かわせてしまった事を激しく後悔していた
「……気を取り直しましょう。終盤(エンドゲーム)に差し掛かっているのだから、気は抜けないわ」
リアスは自分にも言い聞かせる様にそう言った
第6試合の出場選手を決めるダイスシュート
合計数字は――――遂に最大の12が出た
『出ました!遂に12が出ました!この数字が意味する事は、サイラオーグ選手が出場出来ると言う事です!』
実況の声に観客が大いに沸き上がり、それに呼応するかの様にサイラオーグが陣地で上着を脱いだ
戦闘用に用意した黒い戦闘服、鍛え抜かれた体格が浮き彫りとなっていた
サイラオーグの戦意に満ちた双眸(そうぼう)が新達に向けられる

「イッセーくん、新くん。この試合、僕とゼノヴィアとロスヴァイセさんでサイラオーグさんと戦うよ」
『騎士（ナイト）』２人で６、『戦車（ルーク）』１人で５、合計は１１
「出来るだけ相手を消耗させるつもりだ。キミと新くんと部長の為に」
「祐斗！あなた、まさか……」
リアスが言わんとする事を察して祐斗は頷いた
「僕単独ではサイラオーグ・バアルには勝てません。そんな事は重々承知です。では、僕の役目は？簡単です。出来るだけ相手の戦力を削ぐ。この身を投げ捨ててでも――――。ゼノヴィア、ロスヴァイセさん、付き合ってくれますか？」
祐斗のゼノヴィアとロスヴァイセが当然と言わんばかりに頷く
「ああ、勿論だ。新とイッセーと部長が後ろに控えていると言うだけでこんなにも勇気が持てるとはな。朱乃副部長の想いがよく分かる」
「役目がハッキリしている分、分かりやすくて良いですね。――――出来るだけ、長く相手を疲弊させましょう」
３人とも覚悟が決まった顔をしていた
そんな彼らを見て新は必死に自分の中に沸き上がってくる感情を抑え込む
〝行かせたくない〟

〝出来るなら自分も出て戦う〟

そう進言しようとしたのだが、ここで彼らの覚悟を無下にしてはいけない……

「……なら、せめて新を加えるか、イッセーと祐斗か、ゼノヴィアが組めば――――」

リアスがそう言うが、祐斗は首を横に振る

「ダメです。イッセーくんと新くんをここで出す訳にはいきません。出してしまえばルール上、２人の内どちらかが連続で出場する事が出来なくなってしまいます。だから、次の次の試合はアーシアさんを出して直ぐにリザインする。そうすれば、後続の２人に繋げる事が出来ます。だからこそ、ここが正念場です。――――僕達がサイラオーグ・バアルの力を削ります」

「それにやれるなら倒す！」

「そうだね、そのつもりでもある」

リアスは覚悟を決めたのか、大きく息を吐いた

「お願いするわ、３人とも。サイラオーグに少しでも多くダメージを与えてちょうだい。……ゴメンなさい。さっき心中で覚悟を決めたばかりなのに、またあなた達に教えられてしまったわ……。本当に私は甘くて、ダメな『王（キング）』ね」

リアスの自嘲に祐斗は首を横に振った

「僕達は部長と出会って救われました。ここまで来られたのも、部長の愛があったから

こそなんです。――あなたに勝利を必ずもたらします。僕達で」
祐斗はそれだけ言い残し、ゼノヴィアとロスヴァイセと共に転移魔方陣へ向かっていき、バトルフィールドへと転送された

3人が到着したのは湖の湖畔だった
腕組みをして先に待機していたサイラオーグが3人を見て笑う
「リアスの案か？」
どうやらサイラオーグはグレモリー側の思惑を認識していたのだろう
祐斗達は何も答えないが、サイラオーグは感心するように口の端を吊り上げる
「そうか。リアスは一皮剥けたようだ」
組んだ腕を解いてサイラオーグが3人に告げる
「お前らでは俺に勝てん。良いんだな？」
「ただでは死にません。――最高の状態であなたを赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）に送り届けるッ！」
「良い台詞だッ！お前達は何処までも俺を高まらせてくれる……ッ！」
審判（アービター）から試合開始が宣言された刹那――サイラオーグの四肢に奇妙な紋様が浮かび

上がる
「これは俺の体を縛り、負荷を与える枷だ。――これを外させてもらおう。全力でお前達に応えるッ!」
淡い光がサイラオーグの四肢から漏れて紋様が消失した瞬間、サイラオーグを中心に周囲が弾ける
風圧が巻き起こり、足下が激しく揺れてクレーターと化す
湖の水も大きく波立っていた
クレーターの中心で白く発光するサイラオーグの体
まるで闘気でも纏っているかのようだった
『……なんて奴だ。闘気を纏ってやがる。しかもここまで可視化する程の濃厚な質量……』
『となりますと、サイラオーグ選手は気を扱う戦闘術を習得していると?』
『いや、サイラオーグが仙術を習得していると言う情報は得ていない』
アザゼルの解説に皇帝(エンペラー)ベリアルも続く
『はい、彼は仙術を一切習得していませんよ。あれは体術を鍛え抜いた先に目覚めた闘気です。純粋にパワーだけを求め続けた彼の肉体はその身に魔力とは違う、生命の根本と言うべき力を纏わせたのです。彼の有り余る活力と生命力が噴出して、可視化したと

言って良いでしょう』
サイラオーグは過酷な修行の果てに魔力とは違う、純粋なパワーの波動を身に付けたのだ
サイラオーグから放たれるプレッシャーに3人も表情を険しくする
「一切、油断をしないッ！貴様達は取られても構わない覚悟を決めた戦士だ。生半可な相手じゃない。――――取られても良い覚悟で戦うッ！それこそが俺であり、相手への礼儀だ！」
その場の地面を大きく削ってサイラオーグの姿が消える
「させません！」
ロスヴァイセが縦横無尽に魔方陣を展開させ、魔法のフルバーストを撃つ体勢となった
祐斗はサイラオーグの動きを捉えたのか、「ロスヴァイセさん、そっちです！」とその方向に聖魔剣（せいまけん）の切っ先を向ける
そこへロスヴァイセのフルバーストが撃ち込まれ、その先にサイラオーグが出現した
様々な属性の魔法とゼノヴィアの聖なる波動も混ざる様に乱れ飛んでいくが――――
「ふんっ！」
空を殴り付ける音と共にサイラオーグが魔法攻撃を次々と拳で打ち返した

サイラオーグは高速で魔法と聖なる波動の雨を掻い潜り、ロスヴァイセとの距離を一気に詰めていく
回避行動もままならず、サイラオーグの拳がロスヴァイセの腹部を直撃
その瞬間、周辺一帯の空気が振動する程の鋭い一撃だった……
ヴァルキリーの鎧がその勢いで無惨にも砕け散り、ロスヴァイセは拳の勢いによって湖の遥か彼方まで吹っ飛ばされてしまった
同時に体がリタイヤの光に包まれ、湖に落ちる……
「――――まずは1人」
「うおおおおおっ！」
ロスヴァイセが消えていく中、ゼノヴィアがサイラオーグに正面から斬り掛かる
サイラオーグは一瞬で姿を消してゼノヴィアの背後に現れ、そのまま蹴り飛ばそうとするが、ゼノヴィアは身をよじって蹴りを躱す
回避しても蹴りの勢いは空気を大きく震わせ、前方の湖を真っ二つに割る程の風圧を見せつけた
「――――相手の動きが速すぎるッ！」
「まずはちょこざいな魔法の使い手から撃破したが……さて、剣士が2人。しかも聖剣の使い手だ」

不敵に笑むサイラオーグを見たゼノヴィアと祐斗が全身からオーラを迸らせる
「木場――――ッ！こいつはヤバいッ！全力中の全力でなければ勝てないぞッ！」
「分かっているよ、ゼノヴィア！後先考えるのはよすべきだ！余力を残すなんて事を頭の片隅に浮かべただけでやられる……ッ！それ程の相手だッ！」
２人の緊迫ぶりを見てサイラオーグは満足そうな笑みを見せた
「それで良い。俺の拳を止めてみせろッ！」
サイラオーグはその場を勢い良く飛び出し、闘気を纏わせた拳で祐斗に殴り掛かる
祐斗は前方に聖魔剣を幾重にも張り巡らせて壁を作るが――――拳の一撃で呆気なく破壊されていく
「――――ッ！聖魔剣がッ！」
「やわいな。これでは俺の攻撃は止められんぞ」
近距離は危険だと感じた祐斗はその場を高速で駆け出すが、サイラオーグも追い掛ける
バキンッ！
鈍い金属音――――祐斗が聖魔剣ごとサイラオーグの一撃を食らってしまい、聖魔剣も儚く折れていく……
「長所を伸ばしつつ、技術への探求も忘れない、か。何よりも主への、仲間への想いが強

い。――良い『騎士(ナイト)』だ。リアス、お前が妬ましくなる程の『騎士(ナイト)』だよ、こいつは。……だが、防御。唯一お前の弱点だったな、木場祐斗。しかし、この一撃を不覚と思う事はない。――この拳はお前でなくとも耐えられないものだからな」

「デュランダル――ッ！」

祐斗の窮地にゼノヴィアがデュランダルを振るい、サイラオーグ目掛けて複数の聖なる波動を放った

「聖剣の波動かッ！面白い！俺の覇気と伝説の聖剣が生み出す波動！どちらが上か勝負ッ！」

サイラオーグが身に纏う闘気をより強く盛り上げ、デュランダルの波動を真っ正面から受けた

その結果は――無傷

サイラオーグの闘気は微塵も薄まる気配を見せない……

その様子にゼノヴィアは全身を震わせる

「――っ。真っ正面からのあの攻撃で無傷。……バケモノだ」

「良い波動だ。だが、俺を止めさせるにはまだまだ足りない」

「ゼノヴィア、コンビネーション行くよ！」

祐斗がゼノヴィアにそう告げて、2人がかりでサイラオーグに剣を放つ

聖魔剣とエクス・デュランダル、二振りによる高速の剣戟(けんげき)をサイラオーグは最小限の動きで避けていく
祐斗は距離を取って素早く聖魔剣から聖剣にチェンジ、禁手(バランス・ブレイカー)の龍騎士団を出現させた
「行けぇぇっ！」
祐斗の命を受けて複数の龍騎士団が高速でサイラオーグに向かっていく
「新しい禁手(バランス・ブレイカー)かッ！是非もないッ！」
サイラオーグは真っ向から龍騎士団を迎え撃ち、高速の斬戟(ざんげき)を掻い潜りながら龍騎士団を次々と破壊していく
「数が多く、速さもある！だが、俺が相手では硬さが足りない！」
龍騎士団を拳と蹴りだけで全て破壊したサイラオーグ
流石の祐斗もサイラオーグの常軌を逸した体術に戦慄していた
「才気溢れる動きだ。可能性に満ち溢れた攻撃を感じる。――しかし、この場では俺の方が上だ」
２人の斬戟を避けきったサイラオーグの掌底(しょうてい)がゼノヴィアの腹部に入り、回し蹴りが祐斗の脇腹に入った
２人の体からメキメキと耳障りな音が発せられ……その場で血を吐いて地面を転が

る

――――〝力の権化〟――――

闘気を纏い、２人の前に立ち塞がるサイラオーグの姿はまさに鬼神の如く……

祐斗が血を吐きながらも小さく笑った

「……イッセーくんと新くんはこんな１発を受けて、まだ真っ直ぐに進めたのか……。やっぱり、凄いや……」

そう言いながら祐斗は軋む体に鞭を打って立ち上がっていく

「……体はまだ動く……。良かった、まだ戦える。まだ相手を削れる……ッ！」

手元に聖魔剣を創り出す祐斗

それに応じてゼノヴィアもよろめきながら立ち上がった

「……まだ、寝てはいられないか」

「さあ、削ろうか、ゼノヴィア。少しでもイッセーくんと新くんの為に、部長の為に、剣を振るおう」

剣を構える２人に闘気を纏った鬼神（サイラオーグ）は最高の笑みを浮かべていた

「まだ楽しませてくれるのか……ッ！」

「ああ、楽しませてやるさ……！」

ゼノヴィアがそう言う中――――なんと彼女の背後からロスヴァイセが出現した！

その手には透明な刀身の剣が握られている
「油断しましたね！近距離からの魔法フルバーストならどうです!?」
ロスヴァイセが魔法陣を無数に展開し、近距離から魔法を撃ち放った
けたたましい炸裂音と共にサイラオーグの体から爆煙が上がる
実は先程サイラオーグが倒したロスヴァイセはデュランダルの鞘と化しているエクスカリバーの１つ――擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）が化けたもので、今出てきたのが本物のロスヴァイセである
所持者をも透明に出来るようになった透明の聖剣（エクスカリバー・トランスパレンシー）の力を活用したのだ
持ち主であるゼノヴィアの合意さえあれば、聖剣因子が無い者でも短時間だけ各エクスカリバーの恩恵を受けられる
いつ、この様な作戦の下準備が行われていたのか？
それはロスヴァイセが魔法のフルバーストをサイラオーグに放っている最中――ゼノヴィアも聖なる波動を撃ち込んでいたあの時、波動の中に擬態と透明のエクスカリバーを紛れ込ませていたのだ
それらをロスヴァイセが上手く手に取って自分の擬態を作り、本人は透明と化してサイラオーグの隙を狙っていた
即席にもかかわらずこの見事な連携攻撃

近距離から魔法のフルバーストをまともに受けたサイラオーグは体の表面に血を滲ませながらも体勢を立て直す
「……アナウンスが無いので怪しくは感じていた。リタイヤするかどうかのギリギリの状態で、光に包まれながら湖の底で気絶しているだけかと思っていたのだが……。――見事だ、お前達」
サイラオーグが3人の連携を褒めていたが……その直後に眼光が鋭さを増す
右の拳を強く握り締め、ゆっくりと引いていく
全身を覆う闘気が拳に集中していき、一気に右腕が盛り上がる
「敬意を払うと共に、これを送りたい」
危険を察知したのか、3人がその場から急いで退避するが――
ドォォォォォォォォォォォォォォンッ！
サイラオーグの拳が放たれた瞬間、前方の地面が遥か先まで大きく抉られていた
『リアス・グレモリー選手の「戦車（ルーク）」1名、リタイヤ』
「――ッ!?」
今の一撃でロスヴァイセがリタイヤとなった……
拳圧によって生まれた腕の煙を振り払い、サイラオーグが再び拳を構える
「……こいつはかすっただけでも相手に致命傷を与える拳打だ。生半可な攻撃ではこい

つを止められん！」
闘気を大きく纏った右ストレートが再び解き放たれ、祐斗とゼノヴィアが同時に斬りかかった
狙いは――――サイラオーグの右腕
祐斗の聖魔剣がサイラオーグの右腕に振り下ろされるが、闘気のみで刀身を砕かれていく
ゼノヴィアのデュランダルも闘気に相殺されて、深くまで斬り込む事が出来なかった
歯噛みするゼノヴィアだが、デュランダルの柄を祐斗も握り締め――――その瞬間にデュランダルが莫大な閃光とオーラを解き放ち、サイラオーグの右腕を切断
闘気を纏ったままの右腕は切断されても消滅せず、地面に落ちただけだった
「見事だ。右腕はお前達にくれてやろう。これで俺は否応なくフェニックスの涙を使わねばならない。――――万全の態勢で決戦に臨みたいからな」
それだけ言ってサイラオーグはゼノヴィアを蹴り上げ、宙に浮いたところを左拳と蹴りの連打を浴びせ――――最後に地面へと叩き付ける
ゼノヴィアの目からは完全に光が消え去り、意識を持っていかれた……
祐斗もその空中コンボを目の当たりにして距離を取ろうとするが、サイラオーグに顔面を掴まれる

サイラオーグは祐斗を地面に勢い良く叩き付け、そのまま走り出す
祐斗の体で地面を抉りながら突き進み、宙に蹴り上げたところで左の正拳突きを腹部に深々と突き刺した
その一撃は周辺の空気を震わせる程豪快な音を発し、正拳の余波は祐斗の体を突き抜けて後方の湖を大きく弾けさせた
「……僕達の役目は……これで充分だ。……後は……、僕の主と、僕の親友があなたを屠(ほふ)る……」
それだけ言い残し、祐斗とゼノヴィアは光に包まれていった……
「――――見事としか言いようが無い。お前達と戦えた事に感謝する」
サイラオーグが切断された右腕を拾いながらそう言う
その言葉には一切の偽りが無く、感謝の念が含まれているようだった
『リアス・グレモリー選手の「騎士(ナイト)」2名、リタイヤです』
無情のアナウンスが告げられる中、グレモリーの陣地から新の姿が消えていた……
「……ッ。新……？」

ゲボォ……ッ！
ゴボビチャァ……ッ！
ゲボガボゲボォ……ッ！
新は今、陣地の外にあるトイレで口から大量の血を吐き出していた
次々と仲間がやられていく姿を目の当たりにした結果――耐え難い怒りと憎しみ、助けに行けない自分の不甲斐なさと悔しさで胃の中は掻き回され、ズタズタになっていたのだ……
内容物と共に流れる大量の血
新は歯軋りも止められなかった
「……ッー……ッー・レーティングゲームには……ルールがある……ッ！ルールがあるから、縛りがあるから助けに……行けない……ッ！分かってはいた……ッ！分かっていた筈なのに……ッ！アアァァァァァァァァァァァァッ！」
ガシャァンッ！
新は堪らず洗面台の鏡を全て叩き割り、壁や床、個室トイレまでも破壊していく……
単なる八つ当たりなのは分かっている
こんな事をしても無駄なのは分かっている
分かっているが……それでもドス黒い感情の爆発を止められない

血が出るまで殴り続け、壁に額を連続でぶつける新
額からも血が流れ、顔も憤怒に歪んでいた
「……こんな事を耐えなきゃならないのか……ッ!?こんな苦痛を……ッ!」
ヤッテラレルカ
モウ　タエタクナイ　ハキダシタイ
コノ　イカリ　ヲ　コノ　ニクシミ　ヲ
スベテ　ブチマケテ　ヤリタイ
コロシテ　ヤリタイ
ナカマ　ヲ　ウバッタ　アイツ　ヲ
コ　ロ　シ　テ　ヤ　ル
ブ　チ　コ　ロ　シ　テ　ヤ　ル　！
新の中で再び黒い感情と呪詛が駆け巡る……
「……朱乃、こんな時でもお前は……笑顔で言えるのか……?皆の為に勝利を持ち帰るって……」
悲しみに暮れる新は天井に視線を流す
確かにリタイヤしていった者達の為に出来る事はそれしか無い
その者達の覚悟を無駄にしない為にも……

それでも……それでも許す事が出来ない……出来る筈も無い
新はキッと自ら叩き割った鏡を見つめ、蛇口から出た水で顔を洗う
「……何が起ころうと、何があろうと、俺は勝ってみせる。たとえ俺が俺でなくなったとしても――――サイラオーグに勝つ……ッ！覚悟しとけよ、サイラオーグ……ッ！」
トイレの扉を勢い良く開け、リアス達がいる陣地に戻っていく新
彼の背後に映る影はよりハッキリと禍々しい形を現し、翼と手の様なものを広げ――――新自身にも聞こえない咆哮を解き放った……

最終試合、始まる！

「新、何処に行ってたの？……急にいなくなったから心配したのよ」
「……さっきトイレで出すものを出してきた所だ」
トイレから戻ってきた新は平静を装(よそお)って答えた
だが、リアスは新の様子がおかしい事に気付いていた
――〝彼の体から明らかな殺意が発せられている〟――
その矛先は言わずもがな……サイラオーグに向けられていた
『さあ、終盤(ラストゲーム)も終盤！両「王(キング)」はダイスをシュートしてください！』
実況に促され、リアスは台の前に立ってダイスを転がす
出た目は5、サイラオーグの方は4
合計数字は9となった
サイラオーグ側は勿論『女王(クイーン)』を出してくるだろう
「……よしっ、部長、ここは俺が――」
出場を申し出ようとした時、一誠がドンッと突き飛ばされる
突き飛ばした犯人は――新だった

転移魔方陣の前まで歩みを進め、一誠が新に声を掛ける
「お、おい、新！何すん――――」
「俺が出る。邪魔するな」
一誠は異を唱えようとしたが、新の異様な気迫と眼力（がんりき）に怯んでしまう……
その様子にリアスとアーシアも小さく体を震わせていた
新は何も言う事無く、バトルフィールドへ転送されていく

転送されたバトルフィールドは人気（ひとけ）の無いコロシアムの舞台上だった
相対するように現れたのはサイラオーグの『女王（クイーン）』――――クイーシャ・アバドン
無言で佇（たたず）む新に彼女は怪訝な様子を見せる
「竜崎新（りゅうざきあらた）　あなただけが出てきましたか。兵藤一誠（ひょうどういっせい）と組んで出てくると読んでいましたが、意外ですね。それに――――妙な落ち着きを見せますね。女である私が相手ならば、もっと喜ぶのかと思ったのですが……」
「……あぁ、嬉しいぜ。美人なら大歓迎だ」
新はわざとらしい笑みを浮かべる……が、直ぐに溜め息を吐いて打ち明ける

「――――と言っても、実は結構いっぱいいっぱいなんだ。ここまで試合を見てきて、仲間がやられていくのを見て……正直叫びたかった。さっきまで本当にギリギリだったんだ……。歯を食い縛り過ぎて口の中がズタズタ、胃も掻き回されたように狂っちまって……トイレで血反吐ぶちまけて、ようやくスッキリさせたんだけどよ……」

明かされた新の心中にリアス達は言葉を失う……

新はここにいる誰よりも悲しみ、怒りを内に秘めていたのだ

それを表に出さず、ここまで堪えてきた

「出来る事なら、このやり場の無い怒りをあんたにぶつけてやりたい。だが、それはただの八つ当たりになっちまう。どうせなら……敵の総大将に一気にぶつけてやりてぇんだ」

『第7試合、開始してください！』

試合開始が告げられ、クイーシャ・アバドンは特に何もせずに新の行動を待った

「闇皇、『女王』に昇格しなさい。私の主サイラオーグ様はあなたの本気の姿を所望している。ならば『女王』の私もそれを望みましょう」

強い覚悟を見せるクイーシャ・アバドン

新は一拍置いてから闇皇に変異し、京都で発現した『女王』形態の呪文を唱え始めた

「我、目覚めるは闇と焔を受け入れし、魔の皇なり」

背中から6枚の炎の翼が生え――

「無限の欲望を喰らい、不屈の闘志を糧（かて）に力を望まん」

足も炎に包まれ、猛禽類の爪が鋭利に伸びる

「我、闇に染まりし焔（ほむら）を纏う皇となりて――汝（なんじ）らを光無き漆黒の闇へと堕とそう」

左手に宝玉付きの盾が出現し、兜のマスクが赤いバイザーに覆われる

――『魔剣（アークブレイズ）の闇焔皇（ロスト・エンペラー）』――

京都で発現した『女王（クイーン）』形態である

展開された6枚の翼を収納し、盾の宝玉から剣を取り出す

「さあ、お望みの姿になってやったぜ。ただ……先に言っといてやる。この姿でも俺は――あんた相手には本気を出さない」

「――っ。何ですって？」

「〝本気の姿〟にはなったが、〝本気を出す〟とは言ってない。あんたじゃ今の俺には勝てないからな」

「……言ってくれますね。私の『穴（ホール）』を甘く見過ぎてはいませんか？」

舐められてると思ったのか、言葉に怒気を含ませるクイーシャ・アバドン

しかし、それでも新は意に介さずこう言った

「甘く見てねぇよ。……けどな、それでもあんたは俺には勝てない。ただ、それだけの事

だ」
新は取り出した剣に高密度の魔力を走らせ、更に炎を纏わせて引くように構える
クイーシャも全身から魔力のオーラを迸らせ、『穴』出現の準備を整える
新は高密度の魔力と燃え盛る炎を帯びた剣を振り下ろした
X字の軌道を描くように2度斬り、最後にバチバチと魔力を帯びた剣で地面ごと斬り払う
「ブレイジング――バーストオォオオオオオオッ！」
斬り払った瞬間、Xを描いた炎の剣戟波と電流の如く迸る斬撃が合わさり――より高い破壊力を秘めた剣戟波が放たれた
突き進む度に地面を破壊し尽くし、眼前のクイーシャ・アバドンを飲み込まんと向かっていった
「無駄です！」
クイーシャはすかさず前方に巨大な『穴』を幾重にも出現させ、新の放った剣戟波を飲み込もうとした
……だが、『穴』を出しているクイーシャに苦悶の表情が浮かび上がり、前方に出現している全ての『穴』が崩壊の悲鳴を上げていた
『穴』の数を増やそうが規模を大きくしようが、新の剣戟波の勢いを止める事が出来ない

……

「ど、どうして……っ！私の『穴』が……っ!?」

「どんな魔力だろうがキャパシティ――限界って物があるだろ？あんたの限界を超える攻撃をしたまでだ」

新は左手の盾から炎の球体を出現させ、剣でそれを突く

「ブレイジング――シュートオオオオオオオッ！」

剣で突かれた炎の球体は真っ赤に燃え滾りながら空を進み、先に放った剣戟波の後ろを押す

２つの超絶技がクイーシャの『穴』を端々から打ち砕いていく

やがて……全ての『穴』が新の剣戟波、炎の球体と共に雲散霧消……跡形も無く消え去った

目の前で起きた信じられない現象にクイーシャは戦慄する

「そんな……私の『穴』が……っ！こんな簡単に……っ!?」

「言っただろ。あんたじゃ今の俺には勝てないって」

距離を詰めた新がクイーシャの眼前に力一杯剣を振り下ろす

刹那、空を斬った剣圧がクイーシャに襲い掛かり、彼女の服を散り散りに散らしていき――後方のコロシアムを吹き飛ばした

剣圧による破壊が止み、新は眼前のクイーシャを睨み付ける
一方、クイーシャは新との実力差にすっかり萎縮していた
「あ……あ……」
声を震わせ、足も動かせず、ただ石像の様に立ち尽くすだけ……
自分の裸体にも気が回らない程、目の前の脅威（アラタ）に戦慄しきっている
新は剣を収め、激昂のオーラを滲ませながら言う
「分かったろ？俺はこの怒りをあんたじゃなく、サイラオーグにぶつけてやりたいんだ。だから……邪魔なんだよ」
いつになく冷徹で残酷な発言をする新
今の彼には余裕など微塵も無いのだろう
〝これ以上、邪魔するな〟と言う最終警告とも取れる言葉にクイーシャは遂にへたり込んでしまった
「……申し訳ありません、サイラオーグ様……っ」
クイーシャの弱々しい声にサイラオーグも映像越しに『いや、気に病む事はない。よく頑張った』と慰みの言葉を贈り、審判（アービター）にクイーシャのリタイヤを表明する
『サイラオーグ・バアル選手の「女王（クイーン）」、繊維喪失――もとい戦意喪失によりリタイヤです』

クイーシャのリタイヤが決定された直後、新は兜のバイザーとマスクを解除して大きく息を吐いた
「あんたには悪い事をしたな。今のはリタイヤしていった仲間達の分って事で許してくれ」
「……恨むつもりはありません。私の方があなたを舐めていたのかもしれませんね。過信ゆえの敗北……情けない限りです」
「まあ、状況が状況だし、俺も冷静じゃなかったからな。それと――なかなか良いおっぱいしてるぜ」
新の言葉にようやく自分の裸体に視線を向けたクイーシャ・アバドン
顔を赤く染め、露（あらわ）になりっぱなしだったおっぱいを手で隠す
「……先程までの気迫が嘘みたいですね」
「と言っても、まだ怒りを収めちゃいないがな」
クイーシャ・アバドンの体がリタイヤの光に包まれ、バトルフィールドから消えていった
モニターの映像にサイラオーグが映り込み、新はそちらに視線を向ける
『……万が一にもクイーシャが殺されると感じれば、強制的にリタイヤさせるつもりだったんだが。冷静だな、闇皇（やみおう）』

「冷静？そう見えるか？ようやくお前と戦えるんだ。遠慮無く怒りを吐き出させてもらうぜ……ッ！」

全身から怒りのオーラを溢れさせたまま、モニターに映るサイラオーグを睨み付ける

やはり、まだ怒りを鎮めてはいなかった……

それを理解したサイラオーグは嬉しそうに笑んだ

『……なんて目を向けてくれる……ッ！殺意に充ち満ちているではないか……ッ』

サイラオーグはカメラ目線で訴え始める

『赤龍帝と闇皇、この２人と拳を交える瞬間を俺は夢にまで見た。――――委員会に問いたい。もう良いだろう？この男達をルールで戦わせなくするのはあまりに愚だ！――――俺は次の試合、こちらの全部とあちらの全部での団体戦を希望する……ッ！』

サイラオーグの提案に会場の観客席がどよめく

一拍空けて戦闘を再開させるよりは、継続したテンションのままで決闘に持ち込みたいと言う思惑だろう

サイラオーグとしても片方だけではなく、赤龍帝と闇皇両方と戦いたいと強く願っている

それならば、次を団体戦にした方が分かりやすい上にこのテンションを継続出来る

「私もそれで良いのなら、それで構わないわ」

リアスも団体戦の提案を承諾し、そこから数分間の時間が流れ――――実況席に一報がもたらされる

『え、はい。今、委員会から報告を受けました！――――認めるそうです！次の試合、事実上の決定戦となる団体戦です！両陣営の残りメンバーの総力戦となります！』

その報告に会場が沸き上がった

『――――だそうだ。やり過ぎてしまうかもしれん。死んでも恨むなとは言わんが、死ぬ覚悟だけはしてくれ』

「俺も一誠も殺す気で行くぜ。そうじゃないとお前に勝てないし――――リタイヤしていった仲間に顔向け出来ないんだよ」

『たまらないな……ッ』

――

闇皇（やみおう）・『女王（クイーン）』形態の新と既に鎧姿の一誠、リアスは団体戦のフィールドとなる広大な平地に降り立っていた

実況が声を震わせる

『さあ、バアルＶＳグレモリーの若手頂上決定戦も遂に最終局面となりました！サイラ

オーグ選手によってもたらされた提案により、団体戦となった最終試合！バアル側は「王」サイラオーグ選手と、謎多き仮面の「兵士」レグルス選手！対するグレモリー側はスイッチ姫こと「王」のリアス選手と、全ての女性を虜にする匠なおっぱいカイザーこと「兵士」の闇皇・竜崎新選手！そして皆の味方おっぱいドラゴンこと「兵士」の赤龍帝・兵藤一誠選手！』

「こっちの紹介ひでぇな！」

「おい実況！勝手な肩書き作ってんじゃねぇ！なんだ、おっぱいカイザーって!?」

紹介は酷かったものの、観客席の子供達からは応援が飛び交う

ちなみにアーシアは陣地に置いてきた

回復役は真っ先に狙われる為、試合のメンバーに入れておくにはリスクが高過ぎる

その上、敵はサイラオーグと駒消費７の『兵士』

集中砲火を受ければ大ダメージは確実なので、今回ばかりアーシアは控えに回してきたのだ

『……では、開始してください！』

遂に背後の試合が始まり、一誠と相手の『兵士』は素早く『女王』に昇格

新、一誠、リアスは構えるが、サイラオーグは小さく笑うだけだった

「リアス、先に言っておく事がある。お前の眷属は素晴らしい。妬ましくなる程お前を

想っている。それゆえに強敵ばかりだった。こちらは俺とそちらの『兵士』２人。そちらも似たようなものだ。――終局に近いな」

サイラオーグが新と一誠の前に立つ

「兵藤一誠、竜崎新。遂にだな」

「あぁ、グレモリー城の地下でやり合って以来だ。あの時は敵わなかったが……今は違う。おれも一誠もあの時より更に強くなった」

「恨みはありません。妬みもありません。これはゲームですから」

一誠はサイラオーグに指を突きつける

「――けど、仲間の仇を取らせてもらいます。俺達の大事な仲間を屠ってきたあなたを無心で殴れる程、俺は大人じゃないんですよ……ッ！」

「サイラオーグ、今までの鬱憤を纏めて吐き出させてもらうぜ。お前の方こそ――死ぬ覚悟はしておけよ……ッ！」

新と一誠の台詞を耳にしたサイラオーグは心底打ち震えている様子だった

「極限とも言える台詞だ……ッ！だろうな。お前達は少なくとも仲間の敗北に耐えられる男ではない。よくぞ、ここまで耐えた。爆発させろ。ああ、それで良い。それでこそ、決着と思える戦いの始まりに相応しいッ！」

ゴオオオオオオオオオオッ！

まず一誠が背中のブーストを最大にまで噴かして正面からサイラオーグに向かっていく

サイラオーグも全身に膨大な闘気を纏わせ、地面を蹴って飛び込んできた

クロスカウンターの要領でお互いの拳が顔面に直撃

鎧越しにでも中身を吹き飛ばしそうな衝撃と激痛が頭部に伝わり、兜も破壊される

しかし、一誠の拳打はこれだけでは終わらない

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

増大されたパワーが拳に宿り、インパクトの勢いを底上げする

辺り一帯に乾いた音が木霊する程、一誠のパンチは小気味良く打ち込まれた

サイラオーグの鼻から血が噴出し、口の端からも血が流れ出る

その直後、続くように新も拳と足に絶大な魔力を宿して飛び出す

一瞬で距離を詰め、赤黒く輝く拳をサイラオーグの顔面に打ち込む

打ち抜いた際に体を回転させ、すかさず顔面に魔力を宿した蹴りを入れた

サイラオーグの体が少しよろめき、口元の血を拭う

「双方共に練り上げられた拳だ……ッー気迫が体に入り込んでくるようだ。悪魔になって少ない月日の中、どれだけ自分を苛（いじ）め抜いた!?生半可な想いで鍛えられたものではな

い！」
そこから新と一誠、サイラオーグの殴り合いが始まった
近距離での拳と蹴りの乱舞
「実戦で練られた攻撃か！余念が無い分、的確に確実にこちらの中心点を狙ってくるな！」
何度かの近距離戦を終え、一定の距離を保ったところで相手側の『兵士（ポーン）』が視界に映り込んだ
リアスと対峙している『兵士（ポーン）』が仮面を静かに取り払う
新や一誠と歳があまり変わらないであろう少年の顔
しかし、それは直ぐに変貌する……
ボゴッ！ベキッ！
体中から音を発して少年の体が盛り上がっていき、姿を違う物に変化させていった
金色の体毛が全身から生えていき、腕と脚が肥大化
口が裂けて鋭い牙を覗かせ、尻尾も生えてくる
ガゴォォォォォォォォォォォォォンッ！
そこに現れたのは巨大な1匹のライオンだった
5～6メートルありそうな巨体、額には宝玉のような物が埋め込まれている

金色のライオンは鬣(たてがみ)を雄大に靡(なび)かせ、リアスの眼前に立つ
『おおおっと！バアルチームの謎の「兵士(ポーン)」、その正体は巨大な獅子だったーッ！』
『まさか、ネメアの獅子か!!いや、あの宝玉はまさか……！』
アザゼルが何かを得心して驚きの声音を発し、実況が尋ねる
『……元々はギリシャ神話に出てくる元祖ヘラクレスの試練の相手なんだが……。聖書に記されし神があの獅子の１匹を神器(セイクリッド・ギア)に封じた。そいつは１３ある「神滅具(ロンギヌス)」に名を連ねる程の物になった。極めれば一振りで大地を割る程の威力を放ち、巨大な獅子にも変化出来る――――「獅子王の戦斧(レグルス・ネメア)」！敵の放った飛び道具から所有者を守る力も持っていたな。しかし、所有者がここ数年、行方不明になっていると報告を受けていたが、まさかバアル眷属の「兵士(ポーン)」になっていたとは……！』
驚くばかりの展開だが、サイラオーグは首を横に振る
「いや、残念ながら所有者は死んでいる。俺が『獅子王の戦斧(レグルス・ネメア)』の本来の所有者を見つけた時、既に怪しげな集団に殺された後でな。神器(セイクリッド・ギア)となる斧だけが無事だった。所有者が死ねばいずれ消滅するであろうその戦斧(バトルアックス)は、あろうことか意志を持ったかの様に獅子に化け、所有者を殺した集団を根こそぎ全滅させていた。俺が眷属にしたのはその時だ。獅子を司(つかさど)る母の血筋が呼んだ縁(えん)だと思ってな」
サイラオーグの母の実家ウァプラは獅子を司る一族

まさに運命の出会いだったと言う事だ

『……所有者抜きで単独で意志を持って動く神器（セイクリッド・ギア）……しかも神滅具（ロンギヌス）だと!?更に悪魔に転生出来てしまった！獅子が凄いのか、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）が凄いのか……。どちらにしろ興味深い！実に興味深いぞ！うーん、そりや俺達も把握出来ない訳だ。クソ！なんでまた現世に限ってこんなレアごとばかりが神滅具（ロンギヌス）に起こるんだ!?って言うか、サイラオーグ！今度その獅子を俺の研究所に連れてこい！すげー調べたい！』

アザゼルは解説の立場をすっかり忘れて研究者としての顔となっている……

「所有者無しの状態のせいか、力がとても不安定でな。このゲームまで、とてもじゃないが出せる代物ではなかった。敵味方見境無しの暴走状態になっては勝負どころじゃなくなるからな。今回、出せるとしたら俺と組めるこの様な最終試合だけだった。いざと言う時、こいつを止められるのは俺だけだからな」

サイラオーグがそう話す

どうやら『兵士（ポーン）』を出し渋った理由はその為だったようだ

出すとしても制止出来るサイラオーグと共に出なければならない……

「……どちらにしても、私の相手はその神滅具（ロンギヌス）って事ね」

新と一誠、リアスがアイテニ向かっていく

新と一誠がサイラオーグに拳を繰り出し、リアスが滅びの魔力を獅子に撃ち込む

サイラオーグとの打撃合戦、２人がかりで打ち込み続けるが……サイラオーグは倒れる様子を見せない
両者共に殴られ蹴られ、口の中に血が溜まっていく
更に攻防を繰り返す中で、２人はサイラオーグのちょっとした異変に気付いた
「新、サイラオーグさんの右からのパンチ――――左に比べて若干遅い様な気がするぞ……」
「あぁ、それに威力も左より少し低い気が……」
サイラオーグの右腕の異変に２人は先程の試合の経緯が脳裏に過った
〝デュランダルで切断された時の影響が出始めている……？〟
どうやらフェニックスの涙でも回復しきれていなかったようだ
――――最高の状態であなたを赤龍帝と闇皇に送り届けるッ！
あの時に言った祐斗の台詞が再生され、一誠は鎧の中で涙を溢れさせる
再びサイラオーグが右の拳を放った時だった
「俺の仲間はッ！弱点の無いあんたに弱点を作ったッ！その右腕の事だッ！」
サイラオーグの右ストレートが伸びきった瞬間を狙って、一誠は右腕にパンチを放つ
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

増大した一撃がサイラオーグの右腕の勢いを奪い、その体を少しだけよろめかした
「龍剛（ウエルシュ・ドラゴニック・ルーク）の戦車ウウッ！」
『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ）　Ｓｏｌｉｄ（ソリッド）　Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）!!!』
赤いオーラが膨れ上がり、一誠の体が肉厚の鎧に包まれた
極大サイズの拳でサイラオーグにアッパーを打ち込み、撃鉄も撃ち込んで威力を上げた
派手な爆発音と共にサイラオーグの体が空高く投げ出される
「景気付けだアッ！」
新も炎の翼を広げて舞い上がり、両手両足に魔力を促す
無防備となったサイラオーグに拳打と蹴りの嵐を見舞っていった
拳、蹴り、肘打ち、膝と暇（いとま）を与えない連続攻撃にサイラオーグは口から血を吐く
更に新がサイラオーグを蹴り上げた直後、追撃とばかりに一誠が内の駒を変化させる
「龍牙（ウエルシュ・ブラスター・ビショップ）の僧侶ウウウウッ！」
『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ）　Ｆａｎｇ（ファング）　Ｂｌａｓｔ（ブラスト）!!!』
通常の鎧に戻り、背中にバックパック、肩にキャノンが形成され、砲口をサイラオーグに向ける
「ドラゴンブラスタアアアアアアッ！」

ズバァァァァァンッ！
絶大なオーラの砲撃が解き放たれ、サイラオーグは空中で体勢を立て直して翼を展開し、左キャノンの砲撃を躱すが――右のキャノンから放たれたドラゴンブラスターに巻き込まれた
空中で煙を上げながらゆっくりと地に降り立つサイラオーグ
全身にかなりの怪我を負ってはいるが、決定打と呼べるものではない……
砲撃が当たる直前、闘気で全身を包み込んでダメージを和らげたのだ
サイラオーグは満足そうな笑みを浮かべる
「――強い。これ程のものか……ッ！」
新と一誠の攻撃に満足そうだった
生半可な攻撃では倒せない以上、次はどう攻めようかと考慮していた……その時、
「キャッ！」と言う悲鳴が上がる
リアスの悲鳴だ
そちらに視線を向けてみると――地面に膝をつく血染めのリアスの姿が……っ

獅子王豪誕！変貌する新！

膝をつく血染めのリアス
獅子(レグルス)はダメージを負いながらもリアスの前に立ち塞がる
『リアス・グレモリーはこのままいけば失血でリタイヤとなるだろう』
「……テメェ、対話も出来るのか」
『助けたければ、フェニックスの涙を使用するしかない』
やろうと思えばやれる筈なのに追撃をしない獅子
恐らくフェニックスの涙を使わせる為に〝敢えて〟トドメを刺さないつもりなのだろう
バアル側は既に使用している
どうやら新と一誠、サイラオーグの対決を見守る一方で憂いを絶とうとしているようだ
「……『余計な事を』と言えば、俺の『王(キング)』としての資質に疑問が生まれるな。良いだろう、それは認める。だが、この2人との一戦はやらせてもらうぞ、レグルス」
『分かっております。申し訳ございません、主を思ってこその行動でございます』

攻撃を再開しないレグルスとサイラオーグ
新と一誠は警戒しながらもリアスに近付き、ポケットからフェニックスの涙が入った小瓶を取り出した
「……情けないわ。私が……あなた達の枷になるなんて……」
リアスは悔しそうにしていた
『王(キング)』として獅子に抵抗出来なかった自分が心底許せないのだろう
新はフェニックスの涙をリアスに振り掛け、リアスの怪我が消失していく
リアスの感じる悔しさと同様に、新も憤(いきどお)りを感じざるを得なかった
フザケヤガッテ……ッ！
ドコマデ　オレ　ヲ　オコラセル　キダ　コイツラハ……ッ！
ドス黒いオーラが滲み始めたその時、獅子(レグルス)が叫ぶ
『サイラオーグ様！私を！私を身に纏ってください！あの禁(バランス・ブレイカー)手ならば、あなたは赤龍帝(せきりゅうてい)と闇皇(やみおう)を遥かに超越する！勝てる試合をみすみす本気も出さずに――――』
そう叫ぶレグルスに対し、サイラオーグは怒号を飛ばした
「黙れッ！あれは……あの力は冥界の危機に関しての時のみに使うと決めたものだ！この男達の前であれを使って何になる!?俺はこの体のみでこの男達と戦うのだ！」
……どうやらサイラオーグはまだ強くなれるらしい

現状でも充分過ぎる程の強さを有するこの男が禁手（バランス・ブレイカー）――――即ち（すなわ）〝本気〟を出したらいったいどうなるのか……？

新は余計な強さを与えてしまっては勝利が遠退いてしまうと察し、早急に攻撃に移ろうとするが……一誠に肩を掴まれる

「……一誠？」

怪訝に睨む新を出し抜き、一誠はサイラオーグに向かって言い放った

「――――獅子の力を使ってください」

その発言に新どころかリアスも驚いていた

〝ふざけるなッ！〟

新がそう言い出すのを遮るかの如く一誠は続ける

「新、お前の言いたい事は分かる。皆がせっかく作ってくれた勝利へのチャンスを捨てる事になっちまう。けど……俺は……俺達はそれを使ったサイラオーグさんを超えなければ意味が無い！今日、この日まで培（つちか）ってきた意味が無いんだ！」

「……ッ」

「――――今日、俺は最高の状態のサイラオーグさんを倒して勝利を掴むッ！掴みたいッ！俺達は夢の為に戦ってんだッ！本気の相手を倒さないで何になるんだよッ!?」

一誠の心からの叫びに新は何も返せなかった……

昔の新なら散々毒づいて一蹴していたに違いない
しかし、一誠の叫びに確かな核心を突かれた以上――拒む理由は無い……
サイラオーグは2人の反則的な力を許可してくれたのだ
ならば、こちらにもサイラオーグの本気を拒否する権利など無い……
自嘲する様な舌打ちをした後、新も腹を括った
「……分かったよ、バカ野郎。こうなりゃ、とことん付き合ってやる。あの獅子にも殴り飛ばす理由がたった今出来たからな」
「すまない、新。宣言した以上、責任を持って勝つさ！」
「よし、じゃあ負けたらお前が隠してる秘蔵のエロ本とＤＶＤを校内にばら蒔いた上で処分してやる」
「ちょっ!?そんなッ！リスク高過ぎッ！」
「うるせぇッ！それが嫌なら死んでも勝つぞッ！」
新に秘蔵のエロ本とＤＶＤを人質に取られた一誠は〝絶対負けられないッ！〟と気合いを入れ直した……
一拍後、サイラオーグが不気味な笑みを見せた
「……すまなかった。心の何処かでゲームなのだと、2度めがあるのだと、そんな甘い考えを頭に思い描いていたようだ。なんて愚かな考えだろうか……ッ！」

ドンッ！
サイラオーグの体に気迫がみなぎっていく
「この様な戦いを終生一度あるかないかと想像すら出来なかった自分があまりに腹立たしいッ！レグルスゥゥゥッ！」
『ハッ！』
主の呼び声に応える獅子が全身を金色に輝かせ、光の奔流と化してサイラオーグに向かう
「よし、では行こうか。俺は今日この場を死戦と断定するッ！殺しても恨むなよ、兵藤一誠ッ！竜崎新ッ！」
サイラオーグが黄金の光を浴びながら高らかに叫んだ
「我が獅子よッ！ネメアの王よッ！獅子王と呼ばれた汝(なんじ)よッ！我が猛(たけ)りに応じて、衣(ころも)と化せエエエエッ！」
『禁手化(バランス・ブレイク)ッ！』
「禁手化(バランス・ブレイク)ウウウウウウッ！」
フィールド全体を震わせる程の衝撃が走り、まばゆい閃光が辺り一面に広がっていく
神々(こうごう)しい閃光が止んだ時、前方に現れたのは金色の姿をした獅子の全身鎧(プレート・アーマー)だった
頭部の兜には鬣(たてがみ)を思わせる金色の毛がたなびく

胸に獅子の顔と思われるレリーフがあり、意志を持っているかの様に目を輝かせた

「――獅子王の戦斧の禁　手、『獅子王の剛皮』！兵藤一誠、俺に本気を出させてくれた事に関して心から礼を言おう。だからこそ、お前に一撃をくれてやる。――あの強力な『戦車』で攻めてみろ」

そう言いながら1歩1歩近付いてくるサイラオーグ

鎧に闘気を纏わせて近付く姿は圧倒的な存在感を出していた

『ある意味であれが直接攻撃重視の使い手にとって究極に近い形だからだろう。力の権化である鎧を着込み、それで直接殴る。だから、どうしても果てがあの様な形になる』

ドライグがそう言ってくる

打撃がメインならば、鎧で身を固めた方が攻守共にバランスが良いのだろう

肉薄する距離でサイラオーグが一誠に言う

「さあ、1発打ってみろ」

「……後悔しないでくださいよ。ＭＡＸで打ち込むんで！龍剛の戦車ウウッ！」

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ!!!』

一誠の鎧が分厚くなり、巨大な拳を振り上げ――サイラオーグに向かって打ち抜く

肘の撃鉄も撃ち鳴らし、インパクトの威力を上げる――だが、一誠の巨大な拳はサイラオーグの左手に軽々と止められてしまった……

その光景に衝撃を受ける一誠
「いや、まだだ！ここからだ！」
一誠はもう一度撃鉄を撃って拳の威力を上げるが……サイラオーグの掌底（しょうてい）によって無惨に破壊されていく
「……これで限界か」
サイラオーグがそう呟いた刹那――
ガギャァァァンッ！
サイラオーグの拳が分厚い鎧を砕き、一誠の腹部に突き刺さる
肉体を隅々まで破壊するような一撃……
一誠は口から大量の血を吐き出し――倒れた
「……ッ！一誠ェェェェッ！」
倒れた相方の名を叫び、また腹の中を掻き回される様な感覚が新の怒りを触発させる
ゴオオオオオオオオオオオオオオッ！
新の全身から膨大なオーラが噴き出し、炎の翼を展開して飛び出す
「サイラオーグゥゥゥゥゥゥッ！」
「今度はお前か、竜崎新！さあ、闇皇（やみおう）としての本気を見せてみろッ！」
新は両手両足に炎を纏わせ、サイラオーグに拳（ヘル・クラッシュバースト・エンド）打と蹴りの乱舞を見舞う

息も尽かさぬ体術コンボを繰り出すが……その全ての攻撃はサイラオーグの拳によって弾かれていく
一撃一撃与える度に鎧が削られ、衝撃が骨を貫く
痛みのせいで攻撃が鈍りそうになるが堪(こら)えつつ、炎の翼を広げてサイラオーグに向ける
6枚の翼が刃物の如く鋭利な形と化し、サイラオーグに降り注ぐ
サイラオーグは両腕をクロスして炎の翼による刺突を防ぎ、それらを払い除けた
「どうした、こんなものか？」
淡々と告げてくるサイラオーグ
新は歯を喰い縛って次なる攻撃へ移行する
足元に翼を広げた生物の紋章――『闇皇紋章(エンブレム)』を展開し、地面を滑らせてサイラオーグの背後に放つ
『闇皇紋章(エンブレム)』はサイラオーグを捕らえ、バチバチと追撃の電流を流す
勿論、これだけではサイラオーグを倒せないし……終わらせるつもりも無い
新は更に上下左右にも『闇皇紋章(エンブレム)』を作り、全方向からサイラオーグを押し潰しに掛かる
しかし……

「ムンッ！」
バリィィィンッ！
サイラオーグを捕らえていた紋章は気合いのみで破壊され、上下左右から襲い掛かってくる紋章をサイラオーグは拳で破壊する
悉く破壊され続ける自分の技を目の前に……新は焦りを感じざるを得なかった
「……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
全身から莫大なオーラを迸らせ、爆発的な勢いで飛び出す新
両足に全てのオーラを集束させ、巨大な翼型のオーラを形成する
更に回転も加えてサイラオーグに突っ込んでいく
「面白い、受けて立ってやるぞッ！」
サイラオーグは嬉々として受け入れ、闘気を纏わせた右拳を繰り出した
巨大なドリルと化した新の蹴りとサイラオーグの拳が正面から激突
衝撃が周りの地面を吹き飛ばし、闘気とオーラの渦が暴れ回る
拮抗状態――――かと思いきや、新の蹴りの勢いが徐々に死んでいき、遂には血飛沫が飛び交う
サイラオーグの拳に鎧と自分の足が耐えきれなかった……
サイラオーグは一旦手を引き、再度闘気を纏わせた右拳を繰り出し――――新の両足を

破壊した
不規則な動きで地面を跳ね回る新
リアスのいる場所でようやく止まったものの、状態は極めて芳(かんば)しくない……
足はグシャグシャで骨も飛び出しており、全身からも血が噴き出している
鎧も無惨に破壊され、今にも目から光が消えそうだった
「新……ッ？新……ッ！……いや……イヤァァァァ……ッ！」
嗚咽を漏らしながら死に体寸前の新を抱き寄せるリアス
サイラオーグは右手の指を開閉させて言う
「リアスの為、仲間の為によく戦ったが……ここまでだったか」
意識が朦朧とする中、新の中に再び黒い感情が蔓延(はびこ)る

オレハ　コイツニ　カテナイ　ノカ……？
ココマデ　キタノニ　オワッテ　シマウ……？
イヤダ
イヤダ

マケタクナイ
カチタイ
カチタイ
コイツヲ　タオシタイ……ッ！
コイツラ　ヲ　タオシタイ……ッ！
チカラ　ガ　ホシイ……ッ！
コイツラ　ヲ　タオセル　チカラガ……ッ！
ホシイ……ッ！ホシイ……ッ！
コイツラ　ヲ　タオス　チカラガ……ッ！
タオスチカラガ　タオスチカラガ　タオスチカラガ　

コロス　コロス　コイツラ　ヲ　コロス……ッ！
コロシテ　コロシテ　コロシテ　コロシテ
コロシ　キル……ッ！
コロシツクシテヤル……ッ！
その瞬間、新の意識はドス黒い〝何か〟に喰われていった……

カシャッ……カシャッ……
「……ッ！あ、新……？」
「ほう、あれを受けてもまだ立とうと言うのか。流石だな」
驚くリアスに口の端を吊り上げるサイラオーグ
その理由は――ボロボロになっている筈の新がまだ立ち上がってくるからだ……
しかし、覚束無い足取りの上に血を滴らせ、兜の割れた部分から覗かせる目は光を失っている
そんな状態であるにもかかわらず立ち上がる新だが……様子がおかしい

全身から徐々に黒いオーラが滲み出てきており、新自身を包み込もうとしていた
その様子を怪訝に思っていた刹那――
グオオオ

それに解説のアザゼルも知る由も無く、我が目を疑っていた
リアスも新の身に何が起きたのか全く理解出来ず、ただ呆然としているだけだった
『サイラオーグ様、これはいったい……？』
「分からん。分からんが……闇皇（やみおう）はここで終わるつもりは無いらしいな」
サイラオーグは眼前の黒竜（ドラゴン）に対して構えを取る
黒竜は赤い目を妖しく輝かせ、右腕を引くような動作をする
打撃でも繰り出すのかと思慮した刹那――右腕を足元の地面に突き刺した
一見意味不明の行動に思った矢先、サイラオーグの足元の地面から震動が伝わってくる
「――ッ！下かッ！」
ボゴォッ！
気付いた時には既に遅し、地面から漆黒の右腕が伸びてサイラオーグの首を掴む
そう、地面に突き刺した右腕が地中を突き進み、地面を突き破って来たのだ
伸びた右腕が土を巻き上げて地上に現れ、黒竜は次の行動に移る
右腕を急激に縮め、その勢いを利用して飛び掛かり――サイラオーグの顔面に強烈な膝蹴りを食らわせた
サイラオーグの鼻から血が噴き出すも、右腕と足を掴んで引き剥がしに掛かる

首から右腕が離れようとした時――――黒竜が大口を開けてサイラオーグの右肩に噛みつく
牙を深々と食い込ませ、鎧ごと肉を喰い千切ろうと頻りに頭を振り動かす
「ぐ……ッ！何と言う凶暴性……！それに……このビシビシと伝わる敵意は何だ……？まるで、目の前の敵を全て滅ぼさんとするような気迫だ……っ！」
「グルルルルル……ッ！グルルルルル……ッ！」
唸り声を上げつつ肉を喰い千切ろうとする黒竜
サイラオーグは掴んでいた手を離し、黒竜の腹部に拳を打ち込んだ
衝撃が背中を突き抜け、黒竜は後方に吹き飛ばされる
その際、鎧ごとサイラオーグの肩の肉を喰い千切り、起き上がった直後に口から吐き出す
「グガァァァ……ッ！グルルルルァァァァァァッ！」
怒りを見せたのか、黒竜の体にドス黒いオーラがまとわり付く
ドス黒いオーラを纏った黒竜は地を蹴って飛び出し、サイラオーグ周辺の宙を高速で飛び回る
サイラオーグは構えを崩さず、黒竜から溢れ出ている殺気を読み取った
背後から黒竜が鋭い爪を突き出してくるが、サイラオーグは殺気を頼りに攻撃を回避

する
ところが……またも信じられない現象が――
「……ッ!?」
流石のサイラオーグも驚くであろう……
――黒竜の体を覆っているドス黒いオーラが腕の様な形となってサイラオーグに襲い掛かってきたのだから――
不意を突かれたサイラオーグは黒い爪の一撃を受け、後方に吹き飛ぶ
何とか足を踏ん張らせて地面を滑り、体勢を立て直した
腹に刻み込まれた裂傷から血が滴(したた)り落ちる
『サイラオーグ様!』
「心配するな、レグルス。傷は深くない。……それにしても、何だ今のは?攻撃を躱(かわ)したと思ったら――ドス黒いオーラだけが全く別の動きをしてきた……っ。まるで、あのオーラに意思でも宿っているかの様に……」
漆黒のオーラの危険性を察知するサイラオーグ
黒竜は漆黒のオーラを揺らめかせながらサイラオーグを睨み付け、オーラの質を高める
すると……全身を薄皮の様に覆っているオーラから6本の巨大な腕が生えてくる

オーラで形成された巨腕（きょわん）
その姿はまさに異形の阿修羅の如く……
黒竜が吼えた瞬間、漆黒の巨腕が波動を撒き散らしながら一斉にサイラオーグへと向かっていく
波動による爆撃がサイラオーグの逃走経路を遮断し、６本の巨腕が薙ぎ払おうと猛威を振るってくる
サイラオーグは拳と蹴り、体術を駆使して防いでいこうとするが――巨腕の１つがサイラオーグの後頭部を襲撃
不意を突かれたサイラオーグの体がよろめいた刹那、６本の巨腕が群がってサイラオーグをなぶり殺しに掛かる
四方八方から殴られ、切り裂かれ、叩き潰され、追い討ちとばかりに波動も食らわされるサイラオーグ
公開処刑同然の凄惨な光景だった
あまりにも先程の新とは掛け離れ過ぎた攻撃に実況及び解説、果ては観客席までもが静まり返る……
リアスもどうして良いのか分からず、ただ体を震わせる
そんな状況でもサイラオーグは戦意を消していなかった

「しつこい腕だな！」
ガシッ！
サイラオーグは巨腕の1つを受け止めると――――闘気を纏わせた拳を振り下ろし、漆黒の巨腕を霧散させた
襲い掛かってくる残り5つの巨腕も闘気を纏わせた拳打と蹴りで打ち砕く
漆黒の巨腕を全て消し去ったサイラオーグはダッシュで駆け抜け、黒竜の腹部に闘気を纏った強烈な拳を打ち込んだ
捻り込み、内部も破壊する一撃
その衝撃は後方の地面をも抉り、黒竜の口から吐き出された血がサイラオーグに降り掛かる
頭から吐血を浴びたサイラオーグが視線を黒竜の頭部に向けると――――黒竜は怒り、憎しみ、恨み、殺意を孕んだかの様に赤い双眸（そうぼう）を輝かせた
「コ　ロ　ス……ッ。コ　ロ　シ　キ　ル……ッ。ワ　ガ　ハ　ド　ウ　ヲ　ハ　バ　ム　モ　ノ　ハ……ダ　レ　デ　ア　ロ　ウ　ト　ホ　ロ　ボ　ス……ッ！」
新の声とは違う〝何者かの声〟が黒竜の口から吐き出され、黒竜は再びオーラで漆黒の巨腕を形成

６本の巨腕がサイラオーグを薙ぎ払おうと猛威を振るってきた
サイラオーグは咄嗟にガードして直撃を免れるものの、滑る様に後方へ吹き飛ばされる
その隙に黒竜が口を開き、そこへ漆黒のオーラを集束させていく
螺旋を描く様に集まるドス黒いオーラ
どうやら砲撃めいた物を繰り出すつもりだろう
予備動作を見たサイラオーグはその威力を察知したのか、闘気をより一層強く高めた
気に入らんとばかりに黒竜は漆黒の巨腕を無数の波動と共に解き放ち、サイラオーグを急襲
巨腕と波動の爆撃を打ち返していくサイラオーグに向けて――――黒竜が砲撃を繰り出した
ゴバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！
ドス黒く膨大な質量のオーラが黒竜の口から解放され、前方のサイラオーグを飲み込んだ……ッ！
砲撃の余波が辺り一帯を破壊し、凄まじい爆風が巻き起こる
黒竜の口から煙が漏れ、目が妖しく輝く
爆煙が晴れると――――先の砲撃を耐えきったサイラオーグの姿が見えた……

鎧の所々が破損しており、全身から血を流してはいるが……サイラオーグは無事だった

ペッと口から血の塊を出したサイラオーグが深く息を吐く

「……なんと凶悪な威力だろうか……っ。飛び道具に抵抗があるとはいえ、何度も貫っては鎧が保(も)たんぞ」

『奴が範囲を狭めなかったのが不幸中の幸(さいわ)いだったようですね』

「まあな。……それにしても、あの力はいったい何なのだ？悪魔でも闇人(やみびと)でもない異質な力……。その上、この突き刺さる様な悪意、敵意、殺意、とても先程までの竜崎(りゅうざきあらた) 新とは思えん。何か得体の知れない存在が奴の中に巣食っているのか……？」

「ホ　ロ　ビ　ロ……ッ。ホ　ロ　ビ　ル　ガ　イ　イ……ッ！コ　ノ　リ　ュ　ウ　ノ　ハ　ド　ウ　ヲ　ハ　バ　ム　モ　ノ　ハ、ア　ト　カ　タ　モ　ナ　ク　ホ　ロ　ビ　ロ……ッ！ソ　レ　ガ　リ　ュ　ウ　ノ　イ　チ　ゾ　ク　ニ　ハ　ム　カ　イ　シ、オ　ロ　カ　モ　ノ　ノ　シ　ュ　ク　メ　イ　ダ……ッ！」

――――――アザゼルｓｉｄｅ

『竜の一族……？何の事だ？新の奴にいったい何が起こってんだ……？あの姿と力は、悪魔どころか闇人（やみびと）さえも生易しいと思える程の凶悪さを感じやがる……っ。何が遭ったのかは知らんが、こいつは横で汗垂れ流してる親父さんを問い詰めた方が良いかも知れねぇな』

――――――

甦る赤龍帝と闇皇

サイラオーグとのレーティングゲーム最終戦
その最中に起きた突然の暴走――謎の黒竜と化してしまった新にリアスは未だに呆然としていた
一誠も倒れ、新も暴走してしまった現状で自分はただ震えている事しか出来ないのか……？
分からない事が多過ぎる……
目の前にいる黒竜は怨恨(えんこん)めいた視線をサイラオーグに浴びせ、全身からドス黒いオーラを揺らめかせている
再び攻撃に移ろうとしたその時――黒竜の体が膝から崩れ落ちる……ッ
足に裂傷が生じて血が噴き出し、口からも血の塊を吐き出す
恐らく、先程――暴走前に受けた攻撃によって出来た傷が開いてきたのだろう
治ってもいない状態でこんな事になれば、傷の悪化など必然
下手をすれば死んでもおかしくないレベルだ……
しかし、黒竜は不気味な笑い声を発しながらドス黒いオーラの質を緩めない

〝あの状態でまだ暴れるつもりでいる〟
〝このままにしてたら、新は死んでしまう……ッ〟
そんな考えが過った瞬間、リアスは飛び出し、黒竜の前に両手を広げて立ちはだかる
自身の前に立つリアスに黒竜は口を開いた
「ナ　ン　ダ、キ　サ　マ　ハ？ワ　シ　ノ　ジ　ャ　マ　ヲ　ス　ル　ノ　カ？」
「私は……私はあなたの主、リアス・グレモリーよ。そして、あなたは新。私の眷属『兵士（ポーン）』で……私の大事な――――」
「シ　ラ　ヌ　ワ。キ　サ　マ　ノ　コ　ト　ナ　ド、ミ　ジ　ン　モ　キ　ョ　ウ　ミ　ガ　ワ　カ　ン。ワ　ガ　リ　ユ　ウ　ノ　イ　チ　ゾ　ク　ノ　ハ　ド　ウ　ヲ　ジ　ャ　マ　ス　ル　モ　ノ　ハ、ス　ベ　テ　ホ　ロ　ボ　ス……ッ。ホ　ロ　ビ　ル　モ　ノ　ノ　ナ　マ　エ　ナ　ド、オ　ボ　エ　ル　カ　チ　モ　ナ　イ……ッ」
黒竜はリアスなど眼中に無いとばかりに冷徹に吐き捨てる
黒竜の声、気迫、目付きに畏怖するリアスだが……引き下がりはしない
「いいえ、どんな姿になろうと……あなたは私の大事な『兵士（ポーン）』――――新なのよ」

頑なに主張を変えないリアスに黒竜はドス黒いオーラを強め、リアスを威嚇する

「ワシハキサマノヨウナコムスメゴトキノゲボクニアラズ。クダラヌヨマイゴトヲマキチラス ナ。ソノクチヲトジヌトイウナラ――キサマヲナブッタノチニ、ソノキャシャナゴタイヲカミチギルゾ……?」

威圧してくる黒竜

ドス黒いオーラも更に強まり、危険性も格段に上がる……

「イマソコヲドケバ、キサマノホロビヲアトマワシニシテヤル。ドケ」

「……退かない。退く訳が無いでしょう?私は……私の大事な眷属を見捨てたりしない……ッ!」

「マダワカラヌカッ、コノウツケガァッ!」

ゴオオオオオオオオッ！

黒竜は憤(いきどお)りを見せ付ける様に吼え、ドス黒いオーラによる衝撃波をリアスに浴びせた

その風圧によってリアスの服は引き裂かれ、周囲の地面も削り取られる

リアスはその並々ならぬ気迫に震えるものの、決して引き下がろうとはしなかった

「ワガハキヲアビタダケデフルエルコムスメフゼイガ、マダヨマイゴトヲホザクカ……ッ！ブザマナスガタヲサラシテモナオ、イイハルツモリカッ!?キサマノシルヤカラガ、ドコニイルトイウノダ!?」

「目の前にいるわ！私の目の前に……っ。……愛する男性(ひと)を見間違える筈が無いもの……っ」

「アイダト……？タワケタコトヲ。ワガリュウノハドウニ、ソンナクダラヌモノハソンザイセン。クチヲトザサヌナラ――ノゾミドオリ、

キ　サ　マ　カ　ラ　ホ　ロ　ボ　シ　テ　ク　レ　ル　ワ　ッ！」

黒竜がオーラから漆黒の巨腕を生み出し、６つ全てがリアスを取り囲む様に蠢く

流石にまずいと感じたサイラオーグは飛び出そうとするが、リアスが手を向けて制止させる

「リアス、お前1人で何とかするつもりか？無茶だ。今の奴は……竜崎新ではない〝何か〟なんだぞ」

「今はそんな事、考えてる暇は無いわ。それでも……この子は新なのよッ！例えどんな姿になっても！私の……私の愛する男性に変わりないッ！主として、彼を愛する者として！今の彼を放っておくなんて出来ないッ！」

涙を流して訴えるリアスに黒竜は更なる怒りを見せた

「ク　ダ　ラ　ヌ　ッ！ク　ダ　ラ　ヌ　ワ　ッ！コ　ノ　イ　ミ　キ　ラ　ワ　レ　タ　ノ　ロ　ワ　レ　シ　イ　チ　ゾ　ク　二、ソ　ノ　ヨ　ウ　ナ　ザ　レ　ゴ　ト、ゲ　ン　ソ　ウ　ナ　ド　イ　ラ　ヌ　ッ！」

「何度だって言うわ！私は彼を――新を愛してるッ！だから……戻ってきなさい！あなたは……私の愛する男性はそんな弱いヒトじゃないでしょッ！」

「キ、キ・サ・マ　ア　ア　ア

イ　ス　ル　ガ　ヨ　イ　ワ……ッ！」

意味深な捨て台詞を残し、黒竜の頭部が元の新へと戻っていった……

一誠は今、白い世界――――神器（セイクリッド・ギア）の内部にいた

周囲を見渡すと歴代の所有者達の姿があったが……何やら黒いオーラを立ち上らせ、怨恨めいた顔付きとなっていた

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）……』

『……覇龍（ジャガーノート・ドライブ）だ』

『あの男を倒すには覇龍（ジャガーノート・ドライブ）しかない』

白い世界の上空に映像が映し出される

そこにはリアスに抱きかかえられている血塗（ちまみ）れの新、その近くで倒れている一誠自身の姿が……

２人とも鎧を破壊され、口から大量の血を吐き出していた

本気を出したサイラオーグの一撃を食らい、一誠の意識は神器（セイクリッド・ギア）の内部にいる

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』

『覇（ジャガーノート・ドライブ）龍　しかないだろう』
『そう、それしかない』
『あの男はそれを求めている』
歴代の所有者達が椅子から立ち上がり、黒いオーラを纏わせながら不気味な笑みを見せていく
すると、一誠の体にも黒いオーラが出現し――全身を覆っていく
同時に内側からドス黒い感情が溢れてきた
恨み、辛（つら）み、憎しみが一誠の中で高まっていく……
心までも力に呑み込まれそうになったその時――映像の奥から子供達の泣き声が聞こえてくる
『おっぱいドラゴンとおっぱいカイザーが死んじゃったーっ！』
『やだよーっ！』
『立ってよーっ！』
子供達の悲痛な叫び……新までもが倒れたと言う最悪の知らせ……
意識が黒いものに支配されそうな時、１人の声が白い世界に響き渡った
『泣いちゃダメーッ！』
映像が移り変わり、帽子を被った子供が映し出された

見覚えのある子供
それはヒーローショーでサイン会に参加出来なくて泣いていた男の子――――リレンクスだった
『おっぱいドラゴンとおっぱいカイザーが言ってたんだ！男は泣いちゃダメだって！転んでも何度でも立ち上がって女の子を守れるぐらい強くならなくちゃいけないんだよ！』
それは新と一誠が泣いているリレンクスに言い聞かせた言葉だった――――
その一声を聞いて他の子供達も立ち上がる
『おっぱいドラゴンが負けるもんかッ！おっぱい！おっぱい！』
『おっぱい！立ってよォ！おっぱいカイザーっ！』
『おっぱい！カイザーっ！』
『おっぱいドラゴン！』
『ちちりゅーてーっ！』
『かいざーっ！』
新と一誠を呼ぶ必死な声、そこへ聞き覚えのある声も入ってくる
子供達のいる観客席で応援団長をしていたイリナだった
『そうだよ！皆！２人は――――おっぱいドラゴンとおっぱいカイザーはどんな時でも立

ち上がって強敵を倒してきたの！だから、応援しよう！信じよう！おっぱいドラゴンとおっぱいカイザーは皆のヒーローなんだからっ！』

涙で顔をクシャクシャにしながら、イリナは必死で子供達に訴える

『皆、おっぱいドラゴンとおっぱいカイザー好き？』

「「「

子供達の呼び声に一誠は自(おの)ずと涙を流していた……

その時、また声が聞こえてくる

視界に映ったのは金髪の少女――アーシアだ

『……イッセーさん……ッ。たくさんの子供達がイッセーさんを呼んでます……ッ。私も、イッセーさんが大好きです……ッ。だから、負けないでください……ッ』

涙を流し、一誠に祈りを捧げるアーシア

強い想いがヒシヒシと伝わってくる……

『さあ、現赤龍帝の兵藤一誠。暴れよう。「覇龍(ジャガーノート・ドライブ)」を発動しよう』

歴代の所有者の1人が黒いオーラを纏いながら言ってくると同時に子供達の呼び声も更に高まっていき、あの男――サイラオーグの声も聞こえてくる

『どうした、兵藤一誠。竜崎新。――終わりか?これで終わりなのか?そんなものではないだろう?――立ち上がってみせろ。お前達の想いはそんなに軽いものではない筈だッ!』

歴代の所有者達は子供達やサイラオーグの声を聞いても邪悪なオーラを揺るがさない

『さあ、あの者を破壊しよう。覇道の力で――』

「うるせーよ。聞こえないのか?俺を、俺達を呼ぶ声が――。あんなに大勢の子供達

の声が」
『いや、天龍は覇王となる事が本来の道程。あり得ない。そんな事はあり得ない』
「違う――――。俺は……覇王になんてならねぇ。俺は兵藤一誠！ただのスケベで、行くならやらしい王様になってやるッ！」
『否、覇王こそが、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）こそが、この神器（セイクリッド・ギア）に組み込まれた本来の――――』
『――――良いじゃないか』
　歴代所有者の言葉を遮ったのは白い光に包まれた男性
　その者が一誠に向かって言う
『僕は歴代アルビオンの１人だ』
「アルビオンの……歴代の先輩？」
『そう、あなたはあの時、アルビオンの宝玉をブーステッド・ギアにはめ込んだ。あの宝玉に僕の残留思念が少しだけ乗っていたみたいなんだ。本来の僕はディバイン・ディバイディングの方にいるだろうけどね』
　歴代アルビオンが一誠に手を差し伸べる
『――――赤龍帝、これも何かの縁（えん）だ。あなたを助けよう。僕が持つ半減の力で、ブーステッド・ギアに渦巻くものを抑えてみせるよ』
「良いのか？俺は赤龍帝で、ヴァーリじゃないのに……」

一誠の言葉に歴代アルビオンが笑む

『あなたは面白い。歴代最強の赤龍帝お二人が笑いながら消えていったのも頷けるんだ。呪いを吹き飛ばす程の熱意と可笑しさのあるあなたなら、天龍を、いや、二天龍自体を新しい可能性に導けるのかもしれない。――だからこそ、あなたはヴァーリ・ルシファーと共に新たなドラゴンになるべきだ』

歴代アルビオンが手を天高く翳すと、淡い白銀の光が白い空間に広がり、歴代赤龍帝達の黒いオーラを取り払っていく

それだけじゃなく憎悪、恨み、怨恨も徐々に減っていった

『させるか！憎しみが！悲しみが！恨み辛みこそが赤龍帝の神器（セイクリッド・ギア）なのだッ！呪いを内に込め、怨嗟を吐きながら負を撒き散らす事が天龍の――』

恨み言を未だ止めない歴代赤龍帝に一誠は言った

「――おっぱい。俺はこれに救われた。そして、これからもそれを求めていくぜ」

歴代の赤龍帝達は最後の抵抗とばかりに覇龍（ジャガーノート・ドライブ）の呪文を唱え始めた

『我、目覚めるは覇の理（ことわり）を神より奪いし、二天龍なり――』

しかし、一誠はその呪文に応えず、独自に考えた呪文を唱え始めた

「我、目覚めるは覇の理を捨て去りし、赤龍帝なり！」

『無限を嗤（わら）い、夢幻（むげん）を憂（うれ）う――』

「無限の希望と夢を胸に抱え、王道を往く！」
『我、赤き龍の覇王と成りて――――』
「我、紅き龍の王者と成りて――――」
『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――――ッ！』
「汝らに誓おうッ！真紅の光り輝く未来を見せると！」
一誠が最後に唱えた一節に歴代の赤龍帝達は晴れたような表情となった
『――――未来。未来を見せる……だと』
「そうだ！俺が見せてやる！いや、俺と見よう！俺と共に見せてやろうぜ！仲間に！友に！俺を好きといってくれた娘に！子供達に！俺達が未来を見せてやるんだよッ！」
『未来……。僕達が……未来を……！破壊ではなく、未来を……！』
「行こうぜ、先輩達！――――俺は赤龍帝でおっぱいドラゴン！兵藤一誠だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」
一誠の体が紅色のオーラに包まれていった……

――――――――――――――――――――

「イッセー……その姿は……」

目が覚めると、一誠は紅いオーラに包まれていた
その様子を見て驚いている様子のリアス
一誠も気になって全身を見てみた
鎧の色が赤から鮮やかな紅と化し、形状も少し違っていた
『おおっと!赤龍帝が紅いオーラに包まれたと思ったら、鎧を変質させて立ち上がったーーーっ!』
復活した一誠の傷は消えており、破損した部分も復活
黒い感情に飲まれそうになりながらも子供達の声援、アーシアの声、そして何より歴代アルビオンの助けを経て戻ってきたのだ
『相棒!』
「おおっ、ドライグ。どうした?」
『お前の意識が神器(セイクリッド・ギア)の深奥に吹き飛ばされ、俺もそちらに向かおうとしたのだが、歴代の所有者の意識が濃くなって侵入出来なくなっていたのだ。そして、目が覚めたと思ったら、こんな事になっている!内部で何が起きた?所有者が抱いていた呪いの殆どが消失しているのだぞ?』
「――――っ。そうか、アルビオンの先輩のお陰だ」
『アルビオンの宝玉を奪った時に微かに残っていた残留思念か。あれが神器(セイクリッド・ギア)の深奥

で動いた……』

「そうみたいだな。よく分からないけど、アルビオンの先輩が俺に協力してくれたんだ」

『それで、お前は赤龍帝の力が解放されている状態で「女王（クイーン）」に昇格出来たのか』

ドライグの言葉に一誠は内の駒を探ってみた

無理だと言われていた真『女王（クイーン）』にいつの間にかなっている

驚く一誠にアザゼルの声が届く

『赤いオーラ……。いや、赤ではない。もっと鮮やかで気高い色。あれは――。――――真紅のオーラ。そう紅だ。「紅髪の魔王（クリムゾン・サタン）」と称される男の髪と同じ色――――。あいつにだけ許された奇跡か……ッ！』

一誠の変貌ぶりを見てサイラオーグが言う

「――――『真紅の赫龍帝（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）』と言ったところか。その色は紅と称された魔王様と全く同じもの。――――リアスの髪の色と同じだ」

「部長のイメージカラーと言っても過言では無いっすよ。さて、後は――――」

復活を果たした一誠はリアスに抱き寄せられている新に視線を移し、そこから周辺にも視線を向ける

神器（セイクリッド・ギア）の深奥でも見た光景に疑念を抱き、現状についてリアスに訊ねようとした

「部長、まず言わせてください」

「な、何？イッセー」
「復活早々、丸見えのおっぱいをありがとうございますッ！」
一誠は深々と頭を下げてアホ丸出しな台詞を吐く
そう、今のリアスは服が破れ、殆ど全裸に近い格好をしていた
勿論、おっぱいも丸見えである……
一誠のブレなさにリアスも流石に苦笑する
「ところで部長、このフィールドの荒れ具合は……」
「え、ええ。あなたが倒れた直後に新がサイラオーグとね……。激しかったわ」
リアスは新が謎の黒竜と化した事は伏せ、サイラオーグと激闘があった事実のみを一誠に伝えた
未だに意識が目覚めない新に対し、一誠は何とか起こす方法が無いものかと思索する
暫くしてから何かを思い付いた
「……よしっ！今こそサイラオーグさんがくれた制限解除を活用する時だ！部長、新をもっと強く抱き寄せてください！それもおっぱいに顔を埋める様な感じで！」
「え？こ、これで良いの……？」
リアスは一誠の言う通り、新の顔を自分のおっぱいに埋める様に強く抱き寄せた
一誠は心中で〝くっ！自分で言っておきながら、羨ましいぞ新！〟と悔しさを表す

が、今は堪え忍ぶ
そして、サイラオーグの方を向いてこう言った
「サイラオーグさん、少しだけ時間を貰いますよ？あなたを倒したいのは俺だけじゃないんでね。――ヒーローが２人揃わないと盛り上がらないでしょう？」
そんな台詞にサイラオーグは不敵な笑みを浮かべた
「言ってくれるじゃないか、兵藤一誠。その申し出を受け入れよう。そうじゃなければ、俺自身も納得せん」
「ありがとうございます。それじゃあ行きますよ、部長ッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

「さあ、新！部長の声を聞け！そして起きろ！お前もこんな所で終わる男じゃないだろ⁉いつまでも寝てんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！」

〝ここは何処なんだ……？〟

〝俺は何故こんな所にいる……？〟

新の意識は真っ暗な世界に覆われていた

何も見えず、何も聞こえない無明無音（むみょうむおん）の暗闇……

死んだのか、生きているのかさえ分からない

暗闇を彷徨（さまよ）う新

〝何も見えない……何も見えない……〟

暗闇によって不安が増していく中、小さな赤い輝きが視界に映り込んだ

コ　チ　ラ　ニ　コ　イ

オ　マ　エ　ノ　イ　バ　シ　ョ　ハ　コ　コ　ダ

イ　マ　イ　チ　ド、ノ　ロ　ワ　レ　タ　チ　カ　ラ

ヲ　ト　キ　ハ　ナ　テ

無明無音の暗闇で唯一届いた聞き覚えの無い声

「誰なんだ……？誰が俺を呼んでるんだ……？分からない……分からない……。けど、行けば何か分かるのか……？」

ソ　ウ　ダ

コ　チ　ラ　ニ　ク　レ　バ、ナ　ヤ　マ　ズ　ニ　ス　ム

サ　ア、コ　チ　ラ　ニ　コ　イ

何も分からず、ゆっくりと声のする方向に導かれる新

近付くにつれて赤い輝きが強くなっていく

ウ　ケ　イ　レ　ロ

オ　マ　エ　ノ　シ　ュ　ク　メ　イ　ヲ

ノ　ロ　イ　ニ　ミ　チ　タ　シ　ュ　ク　メ　イ　ヲ

……ッ

謎の声に誘われ、赤い輝きに吸い込まれそうになった刹那――今度は聞き覚えのある声が届いてくる

『……新……ッ！新……ッ！』

必死に呼び掛けてくる女性の声

それは謎の声には無い心地よさを孕んでいた……

「……誰だ……？他に俺を呼んでるのは……。この声……何処かで聞いた事がある……」

新は聞き覚えのある声がする方向へ視線を変える

すると、前方に映像が映し出された

紅い髪の女性――リアスに抱かれている自分自身の姿……

それを見て徐々に記憶が鮮明となっていく

「……そうだ……。俺はサイラオーグと戦ってたんだ……。けど、サイラオーグに叩きのめされて……意識を失って……」

ソ　ン　ナ　モ　ノ　ニ　ミ　ミ　ヲ　カ　タ　ム　ケ　ル　ナ

謎の声が阻害しようとするものの、リアスの声もハッキリと聞こえてきた

『新、イッセーが目覚めたのよ？だから、あなたも早く起きて……ッ』

「――ッ。そうか、一誠は起きたのか……。また何か奇跡でも起こしたのか？」

ミ　ミ　ヲ　カ　タ　ム　ケ　ル　ナ　ッ！

ク　ダ　ラ　ヌ　コ　エ　ニ　マ　ド　ワ　サ　レ　ル　ナ　ッ！

激昂する声を他所に新はリアスの声を聞き続ける
『皆、あなたを求めてるのよ？勿論、私も……っ。だって、私はあなたの事が……っ』
リアスの声だけ聞こえていたのが、徐々に周りの声もハッキリと聞き取れるようになってくる
子供達の呼び声……一誠の呼び声……
自分を求めてくれる声が心地良い
虚ろだった意識が生気を取り戻し、紅い光が新を包み込む
ソ　ノ　ヒ　カ　リ　ヲ　ウ　ケ　イ　レ　ル　ナ　ッ！
キ　サ　マ　ハ　ノ　ロ　ワ　レ　タ　シ　ュ　ク　メ　イ　ニ　サ　カ　ラ　ウ　ノ　カ　ッ!!
しつこく言ってくる謎の声に新は「うるせぇ」と吐き捨てる
「誰だか知らねぇが、俺は戻らなきゃならねぇんだ。子供達が、一誠が、何より――リアスが待ってるんだよ。惚れた女をいつまでも待たせるなんざ、男として失格だ」
マ　タ　ア　ノ　コ　ム　ス　メ　カ　ッ！
イ　マ　イ　マ　シ　イ　ッ！イ　マ　イ　マ　シ　イ　ゾ　ッ！

ダガ、キ　サ　マ　ハ　ノ　ガ　レ　ラ　レ　ヌ
イ　ズ　レ、ノ　ロ　ワ　レ　タ　シ　ュ　ク　メ　イ
ニ
オ　シ　ツ　ブ　サ　レ　ル　ガ　ヨ　イ　ワ　ッ！

血の如く赤い輝きが消失していくと同時に、紅い光が新を導くように照らしていく

「待っててくれ、リアス。何があったか知らねぇが、今お前の所に戻るぜ。俺はリアス・グレモリーの『兵士（ポーン）』――――竜崎新だッ！」

紅い光が強く輝き、暗闇の世界が強く紅く照らされていった……

赤龍帝!・闇皇!・獅子王!・大・団・円!

紅い光に包まれた新
真っ暗だった視界が少しずつ鮮明に映り、仄(ほの)かな温もりも感じてくる
覚えのある甘い香りが鼻腔(びこう)をくすぐり、新は意識を取り戻していく
「……リアス……?」
「――――ッ!新……ッ」
新の目覚めに感極まったのか、彼をギュッと強く抱き締めるリアス
窒息しそうになる程の圧迫感に苛(さいな)まれるが、リアスのおっぱいの心地よさの方が勝(まさ)っているので何も文句を言わない
『おおっと!闇皇(やみおう)がスイッチ姫のおっぱいフラッシュを浴びて、奇跡の大復活を果たした――――っ!』
実況が叫び、観客席も大歓声に満ち溢(あふ)れる
新が復活したところで一誠がフウッと息を吐く
「新、1人だけ羨ましい思いしやがって!シャキッとしろよ!」
「んぁ……一誠?お前は後でアーシアにやってもらえば良いじゃねぇか。さてと……」

新はリアスの胸から離れて起き上がり、首や肩、手をコキコキと鳴らす
先程のおっぱいフラッシュが効いたのか、体中の傷が癒えていた
「ようやく起きたか、闇皇。やはりそう来なくては面白味に欠けると言うものだ」
不敵に笑みながら言うサイラオーグ
復活早々、新は全身からオーラを解き放って闇皇と化し、赤いオーラが全身を覆っていく
「惚れた女の前で無様な格好を晒す訳にはいかねぇんだよ。リアスは、リアス・グレモリーは俺が惚れた女だ。惚れた女を勝たせる、守る、その為に戦う。俺は――――」
赤いオーラが『真・女王』の形態を形成し、新はその最中に天高く叫んだ
「惚れた女の目の前でお前を倒すッ！俺はリアス・グレモリーが好きだッ！好きな女の夢を叶える為に――――サイラオーグッ！俺は――――俺達はお前を倒すッ！」
新の告白を聞いたリアスは今までに無いくらい顔を真っ赤にさせ、一誠は「妬けるぜ、こんちくしょうっ！」と地団駄を踏む
サイラオーグは豪快に笑った
「ハハハハハハハハハハッ！リアスの胸が発する光を浴びて何かに目覚めたようだな。ならば俺はそのお前達を倒し、我が夢の糧とするッ！」
「行くぞ、一誠ッ！」

「当たり前だ!新こそ気合い入れてけよッ!」
新と一誠は莫大なオーラを纏って神速で飛び出していった
『Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!』
真・『女王』と化した一誠のスピードは凄まじいもので、飛び出した余波だけで周辺の風景が吹き飛びそうになっていた
サイラオーグも全身に闘気をみなぎらせる
『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!』
攻撃力と防御力もトリアイナ版『戦車』と同格のポテンシャルを出せる上に消費も従来の物と比べて少ない
どちらも伸びしろに余裕がありそうだ
『相棒!まだこの状態での鎧の防御力が安定していない!脱皮直後の蟹みたいなものだ!無理をすると本体に膨大なダメージが伝わるぞ!』
ドライグからの説明を受けるが、今は後先の事など考えてる暇は無い
一瞬たりともそんな事を考えてはサイラオーグに勝てないのだ
新も両手両足に高密度のオーラを集束させ、一誠と共にサイラオーグを殴った
三者によって始まった壮絶な打撃合戦
バカげる程に単純で威力に満ち溢れ、防御など知ったことかと言わんばかりの殴り合

いがフィールドを大きく震わせ、大地を裂き、次元に穴を開けていく

己の魂を懸けた殴り合いに実況が叫んだ

『殴り合いですッ！壮絶な殴り合いがフィールド中央で行われておりますッ！華麗な戦術でもなく、練りに練られた魔力合戦でもなく、超々至近距離による子供のような殴り合いッ！殴って、殴られて、ただそれだけの事が頑丈なバトルフィールド全体を壊さんばかりの大迫力で続けられておりますッ！観客席は総立ち！スタンディングオベーション状態となっておりますッ！ただの打撃合戦に老若男女が興奮していますッ！よくやるぜ、お前らアアアッ！』

「「「

リアスの為に……自分達の為に……

「俺達はッ!あんたを倒して上に行く……ッ!」

一誠の右腕が紅いオーラに包まれ、トリアイナ版『戦車(ルーク)』の腕が形成される

肘の撃鉄(げきてつ)を打ち鳴らして威力を倍増させた

『Ｓｏｌｉｄ(ソリッド)　Ｉｍｐａｃｔ(インパクト)　Ｂｏｏｓｔｅｒ(ブースター)!!!!』

サイラオーグの腹部に一誠の拳が突き刺さり、獅子の鎧が砕けて生身にも食い込んでいく

そこをすかさず新も追撃を加える

灼熱のオーラを纏わせた拳をサイラオーグな顔面に打ち込み、地面へ叩き付ける様な勢いで打ち抜いた

２人のコンボを食らったサイラオーグが膝をつく

「どうした、足よ!何故震える!?まだ!まだこれからではないか!」

地を大きく踏み込んで立ち上がるサイラオーグ

まだ全身に闘気を纏わせてくるが、先程よりも質量が減ってきている

――この男に勝てる!――

新と一誠は勝利が近付いている事を感じた

「保(も)て、保て俺の体よ……ッ!この様な戦い、今心底味わわずに大王バアル家の次期当主

が名乗れると思うのか……ッ！」
迫り来るサイラオーグに一誠が拳を繰り出し、新は足に強烈なローキックを放つ
この極限状態で２つの同時攻撃を処理するのは至難の技
一瞬だけ隙が生じたサイラオーグの足に新のオーラを纏ったローキックが炸裂
鎧ごと相手の足を破壊し、間髪入れずに一誠の拳がサイラオーグの顔面に鋭く突き刺さった
拳の勢いで後方に吹き飛ばされるサイラオーグ
新は左腕の盾から剣を取り出し、一誠は両翼からキャノン砲を展開した
双方共に魔力をチャージしていく
「一誠ッ！決めるぞ！」
「当たり前だ！」
新と一誠の魔力チャージが完了し、２人の技が同時に解き放たれた
「ブレイジング・バーストオオオオオオオオオオッ！」
「クリムゾンブラスタアアアアアアアアアアッ！」
『Ｆａｎｇ（ファング）　Ｂｌａｓｔ（ブラスト）　Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』
紅色のオーラと灼熱の剣戟波（けんげきは）が放射され、サイラオーグを飲み込んだ
強大な爆発を生み出した後、煙が止み、地を大きく抉って出来たクレーターの中央に

サイラオーグが倒れていた
その瞬間、会場が歓声に満ち溢れる
もう立てないだろうと勝利を確信したその時――2人の視界に女性が1人出現し、サイラオーグの傍らに立って何かを話しかけていた
しかも、新と一誠以外は気付いておらず、その女性は2人にしか見えていないようだった
『――なさい』
女性は静か且つ確かな口調で言葉を発してきた
その時――信じられない事にサイラオーグの体が僅かに動いた……っ
そしてボロボロの顔を上げる
目は虚ろだが、瞳の奥にはまだ強い意志が残っている
『サイラオーグ』
女性がサイラオーグを呼び続ける
2人はその女性の顔に見覚えがあった
それもその筈、現れた女性はサイラオーグの母親――ミスラ・バアルだった
まるで寄り添う様に息子のサイラオーグを見守っている
その口が新と一誠にだけ聞こえる声で静かに言葉を発する

それは必死に戦う息子を労い、心配する母親の優しい激励――ではなかった

『立ちなさい。立ちなさい！・サイラオーグ！』

サイラオーグの母親の表情は厳しく、誇り高く、気丈なもの

放たれたその声は応援などではなく、息子を叱咤するものだった

『あなたは誰よりも強くなると私に約束したでしょう？・』

再びサイラオーグの体が動く

その動作は徐々に確かになっていき、手から腕、足が動いて体も持ち上がり始めた

『夢を叶えなさい！・あなたの望む世界を、冥界の未来の為に、自分が味わったものを後世に残さない為に、その為にあなたは拳を握り締めたのでしょう！』

その言葉がサイラオーグに届いているのか、もしかしたら聞こえていないのかもしれない

だが、それでもサイラオーグの体が動いていく

『たとえ生まれがどうであろうと結果的に素晴らしい能力を持っていれば、誰もが相応の位置につける世界――。それがあなたの望む世界の筈です！・これから生まれてくるであろう冥界の子供達が悲しい思いを味わわないで済む世界――ッ！・それを作るのでしょう！・』

徐々に消えていく中、サイラオーグの母親は最後に一瞬だけ微笑みを浮かべた

自慢の息子を見る母親の顔……

『さあ、行きなさい。私の愛しいサイラオーグ。あなたは――私の息子なのだから』

その刹那、地を大きく踏み締め、血を撒き散らしながら眼前の漢が完全に立ち上がる

「オオッッッッ!!」

獅子が咆哮を上げた……

それは雄々しいが、何処か悲哀にも感じる

透き通る程に見事な獅子王の咆哮……

会場が大きく震え、新と一誠も心底打ち震えた

恐怖や戦慄とは違う……高揚、興奮と矛盾するかの様な感情が渦巻き、両者の細胞を沸き立たせた

――まだ戦えるッ!――

そう考えるだけで力が沸き上がり、全身を駆け巡っていく

「兵藤一誠ッ! 竜崎新ッ! 負けんッ! 俺はッ! 俺には叶えねばならないものがあるのだッ!」

ボロボロの状態でサイラオーグが向かってくる

新と一誠もそれに呼応して飛び込んだ

「俺だって！負けられねぇんだよォォォォォォッ！」

再び始まった殴り合い

２人は全身全霊の拳を振るうが、何度殴ってもサイラオーグは倒れない

戦意に満ちた双眸（そうぼう）を薄めないまま、新と一誠に拳を打ち込む

ダメージが蓄積している筈なのに、その威力は２人の気力と体力を根こそぎ奪っていくような一撃ばかり

「クソッタレ……ッ！何処にこんな力が眠ってやがるんだ……ッ⁉」

新と一誠が何度打ち込んでもサイラオーグは一瞬たりとも攻撃の手を緩めない

滅びを持たない大王――サイラオーグ

滅びの魔力を持たずとも、ここまで恐ろしい者は後にも先にもこの漢（おとこ）だけだろう

これまで新と一誠は数々の強敵と出くわしてきた

白龍皇（はくりゅうこう）ヴァーリ・ルシファー

闇人（やみびと）の『２代目キング』蛟大牙（みずちたいが）

『ビショップ』神風（かみかぜ）

『禍（カオス・ブリゲード）の団』英雄派の首魁――曹操

復活した闇人（やみびと）の『初代キング』バジュラ・バロム等々……

サイラオーグは腕力、速力、防御も強いが今まで戦ってきた相手とは違う決定的な差

がある
それは――――勝利への執念
〝負ければ全て終わる〟
〝2度目は無い〟
〝今日死んでも良い〟と言う覚悟
夢の為に全てを賭けた漢の意地
後退と言う選択肢を捨てた強靭な精神がこの漢の背中を後押ししている……
――――俺には肉体しか無かった。だから、負ければ全部失う。ここまで積み上げてきた物が崩れるだろう。家が持つ『消滅』の魔力を受け継げなかった俺にとって、勝ち続ける事こそが唯一の道だった。だから俺は拳で勝つしかない。
――――格好は悪いが、それが不器用な俺のお前達との戦い方だ。
「……サイラオーグ。今のお前は誰よりも強く、誰よりも勇ましく、誰よりも誇りに思える男だ……ッ。だからこそ――――俺は、俺達はそんなお前に勝ちたいッ!どれだけの悔しさ、歯痒さを噛み締めながら積み上げてきたかは分からねぇッ!だがな、それでも同情なんかしねぇッ!」
「全力でぶつかる事がサイラオーグさんへの礼儀で、俺の――――俺達の意地だッ!俺にだって夢があるッ!部長をゲーム王者にして……俺もいずれ王者になる……ッ!誰よ

りも強くなる！俺は！最強の『兵士』になるんだァァァァァァァァァァァァァッ！」
２人とも鎧を維持する力を失いつつも、サイラオーグに拳を打ち込む
芯にまで響く程の一撃
サイラオーグはふらつき、体を揺らすが……まだ倒れない
追い討ちを掛けるように新と一誠のよろいが強制的に解除される
両者共にふらつきながらも、最後の力を振り絞って生身で向かっていく
生身の拳でサイラオーグに立ち向かおうとした時だった
『赤龍帝……闇皇……もういい……』
サイラオーグの鎧の胸部にある獅子が声を発してきた
『……我が主は……サイラオーグ様は……』
獅子が目の部分から涙を溢れさせる
その事を不審に思い、サイラオーグに視線を移すと――サイラオーグは拳を突き出し、新と一誠に向かおうとしたまま意識を失っていた……
意識を失っても瞳は戦意に満ちており、ギラギラしたものを浮かべていた
『……サイラオーグ様は……少し前から意識を失っていた……』
「……何だって……っ。じゃあ、どうして前に進もうと……？」
『それでも……嬉しそうに……ただ嬉しそうに……向かっていった……。……ただ、

真っ直ぐに……あなた方との夢を賭けた戦いを真に楽しんで……』
「……意地だけで戦ってたのか、この獅子王(おとこ)は……」
意識を失ってまで、ただ前に――――
夢を叶える為に――――
新と一誠は知らない内に頭を深く下げていた
ボロボロの状態でありながら、戦意を消さないその獅子王(おとこ)に敬意を示して……
「……サイラオーグ。俺はあんたを誇りに思うよ。あんたは――――真の漢(おとこ)だ……」
「……ありがとう……、ありがとうございましたぁぁあッッ!」
『サイラオーグ・バアル選手、投了。リタイヤです。ゲーム終了、リアス・グレモリーチームの勝利です!』
最後のアナウンスが伝えられ、会場が熱気に包まれる
それと同時に新の視界が真っ暗になった……

「……ここは?」
目が覚めると見知らぬ天井が見えた

一誠は周囲を見渡し、自分が包帯姿で個室のベッドにいる事を理解する
「起きたか」
聞き覚えのある声
隣を見てみると包帯姿のサイラオーグがいた
更に逆隣には同じく包帯姿の新がいるが、こちらは未だに眠ったままである
怪我はともかく、消耗し過ぎたので無理もない
「サイラオーグさん……。と、隣のベッドだったんですね」
「偶然にもな。病室なら余っているだろうに。サーゼクス様かアザゼル総督か、体力が回復するまでの話し相手としてマッチングしてくれたのかもしれないな」
「ははは、流石にベッドでまで戦いたくありませんよ……」
そんな世間話の後にサイラオーグは「……負けたか」と呟く
彼の表情は実に晴れやかなものだった
「……悪くない。こんなにも充実した負けは初めてかもしれないな。だが、最後の一瞬はよく覚えていない。気付いたらここだった」
「俺も……正直、記憶が飛び飛びで」
「1つだけハッキリしている。――とても最高の殴り合いだった」
「俺も新もボコボコになって、ボコボコにしてやって、変に気分が良いです」

　お互いに包帯姿で笑みを見せていると、サーゼクスが入室してきた
「失礼するよ」
「サーゼクス様」
「やあ、イッセーくん、サイラオーグ。本当に良い試合だった。私もそう強く思うし、上役も全員満足していたよ。将来が実に楽しみになる一戦だった」
　サーゼクスが2人に激励を送った後、近くの椅子に腰を下ろす
「さて、イッセーくんにお話があるんだ。サイラオーグ、暫し彼と話して良いだろうか？」
「俺は構いません。……席を外しましょうか？」
「いや、構わないよ。キミもそこで聞いておいて損は無いかもしれない」
　サーゼクスが真面目な顔で話を始めた
「イッセーくん、キミ達に昇格の話があるのだよ」
　一誠は今言われた言葉の意味を理解出来なかったが、サーゼクスは話を続ける
「正確に言うとキミと新くん、木場くんと朱乃くんだが。ここまでキミ達はテロリストや闇人（やみびと）の攻撃を防いでくれた。三大勢力の会談テロ、旧魔王派のテロ、神のロキですら退（しりぞ）けた。そして先の京都での一件と今回の見事な試合で完全に決定がされた。――――近い内にキミ達4人は階級が上がるだろう。おめでとう。これは異例であり、昨今では

稀(まれ)な昇格だ」
「へ……？しょ、しょ、昇格ぅぅぅぅっ⁉お、俺が昇格⁉え⁉プロモーションとかじゃなくてですか⁉」
一誠の問いにサーゼクスが笑む
「それだけの事をキミ達は示してくれた。まだ足りない部分もあるが、将来を見込んだ上でと言う事だよ」
「受けろ、兵藤一誠。お前はそれだけの事をやって来たのだ。出自など関係無い。お前は――――冥界の英雄になるべき男だ」
「そ、そんな事を言われても俺は……」
混乱する一誠を見てサーゼクスも苦笑する
「うむ。詳細は今後改めて通知しよう。キチンとした儀礼を済まして昇格といきたいのでね。会場の設置や承認すべき事柄もこれから決めていかないといけないのだよ」
ふとサーゼクスが未だに眠っている新に視線を移した
『今、問題なのは〝彼〟の方だな……。イッセーくんにも話しておいた方が良いだろうか？……いや、いっぺんに話し過ぎても混乱するだけだ。アザゼルからの連絡を待ってみよう』
サーゼクスは少し考えた後、「では、これで失礼する」と言い残して退室していった

「アザゼル」
「ああ、サーゼクスか」
「随分と機嫌が悪そうみたいだが」
「機嫌も悪くなるさ。あのインドラ――帝釈天(たいしゃくてん)が曹操と通じていたのを自分からバラしやがったからな。胸くそ悪いったらありゃしねぇ。オマケに新の親父さんにも逃げられる始末だしよ……っ」
「連絡やメディアの情報で聞いたよ。――新くんが突然、漆黒のドラゴンに変貌したらしいね」
「ああ、その事で問い詰めようとしたら『私はこれから虹色の角を持つ巨大牛を探しに行くんだ!』ってふざけた言い訳抜かしたんで捕まえようとしたんだ。そしたら、バカみたいに癇癪玉(かんしゃくだま)を投げ付けて逃げたってオチだ」
「やはり先手を打ってきたようだね、総司さん」
「サーゼクス、お前は何か知っているのか?」
「……アザゼルには話しておいた方が良い、と言うより隠しきれないな。昔、私は総司さ

んと共にあの力を持つ者達と会った事がある」
「あの力を持つ者達？」
「ああ、決して野放しにしてはいけない呪われし一族――ドラゴンの血を受け継いだ竜人（りゅうじん）の一族だ」
「呪われた竜人の一族……それが新とどう関連してるんだ？」
「そこは総司さんに直接確かめたい。アザゼル、何とか総司さんの足取りを掴んでもらえないだろうか？非常に嫌な胸騒ぎがしてならない」
「分かってる、最初からそのつもりだ」

迎えた駒王学園（くおうがくえん）の学園祭当日
旧校舎を丸ごと使ったオカルト研究部の出し物は大盛況だった
喫茶店、占いとお祓いの館、お化け屋敷は長蛇の列
激戦の後で忙しいコーナーを行ったり来たりと疲労が溜まっている体に鞭を打ち付けた
あの激戦の後、負けたサイラオーグは上層部のパイプを失った事を聞かされた

敗者にいつまでも群がる程、お人好しじゃない
悪魔は本来合理的な生き物、利用価値が無いと判断すればあっさりと切り捨てられる
……
ただ大王家次期当主の座は変動しなかった
今回の一件で大王家がどう動くかは分からないが、無下にする事はまず無いだろう
その報せだけは唯一の救いとも言える
勝者は得る物を得られるが、敗者は失う
これが悪魔業界の厳しさだ……
そんなこんなで学園祭は終盤に差し掛かり、キャンプファイヤーが焚かれた校庭で男女が楽しく踊っていた
新と一誠は疲れた体で部室に戻る
部室にはウェイトレス姿から制服に着替えたリアスやアーシア、オカルト研究部の面々が揃っていて打ち上げ用のケーキを切り分けていた
「新、イッセー、お仕事お疲れ様」
「レイヴェルさんが作ってくださったケーキ、皆さんで食べましょう」
そう言ってアーシアが切り分けたケーキを乗せた皿を新と一誠に配る
和気藹々(わきあいあい)とした空気で打ち上げが始まろうとしたその時、部室の扉が開かれ――意外

な人物が入室してきた
「ん？……あれ？幽神（ゆうがみ）？」
一誠が入室してきた人物の名を呼ぶ
そう、やって来たのは以前一誠と対峙した男であり、『地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）』の兄――幽神正義（ゆうがみまさよし）
思わぬ人物の登場に皆は一瞬身構えるが、殺気らしき気配が微塵も感じられない
そればかりか正義はアーシアの方をチラチラと窺（うかが）っている
ドアの陰から彼の弟――幽神悪堵（ゆうがみあくと）がヒョコッと顔を出して「じゃあ兄貴、後は頑張れよ」とだけ言ってその場から去る
いったい何が始まるのだろうかと怪訝に見ている中、正義はアーシアの前に立つ
「ア、アーシア……きょ、今日もお日柄が良くて光栄だな……」
「あ、はい。どうもありがとうございます。来てくださったんですね」
「お前がやってる喫茶店とやらは入れなかったが、まあ……その……来た」
妙に挙動不審ぶりが目立つ正義の様子に首を傾（かし）げる一誠
事態を把握し思わずニヤケる新
正義はボロボロのコートのポケットから何かを取り出そうとしたが……決意を固めた表情でそれを元に戻す
「アーシア・アルジェント。今日はお前に言いたい事があって来た」

「はい、何でしょうか?」
「単刀直入に言う。……俺はお前の事が好きだ」
正義の突然の告白に一誠は顔芸のまま固まり、他の面々も呆然とする
「「「「えぇぇぇ

「兵藤、必ず、必ずアーシアを幸せにしろ。もし出来なかったら――その時は貴様を許さないからな。覚えておけ」
正義は踵を返して部室から去っていき、固まっていた一誠が正気に戻る
「え、え？幽神⁉ちょっと待て、何この居たたまれない空気は⁉」
「おーおー、スゲェな」
あたふたする一誠とニヤケる新
「……ある意味、男らしい告白ね。大勢いる中で堂々と……」
「あらあら♪」
思わず顔を赤くするリアスと微笑む朱乃
「は、初めて見たぞ。これが噂の三角関係とやらか……」
「なんてドラマチックなの！イッセーくんに恋のライバル出現ね！」
素っ頓狂な事を言い出すゼノヴィアとイリナ
他の面々も苦笑したりアワアワしたりと反応は様々
一方、アーシアは顔と頭から湯気を噴き出して今にも倒れそうになっていた
「これ、なんて羞恥プレイ⁉トンでもない爆弾落として逃げんなよぉぉぉおおおおおおっ！」
一誠はこの場から立ち去った幽神正義に羞恥の慟哭を放ったのでした……

「兄貴、どうだった。フラれた感想は?」
「心のつっかえが取れたせいか、妙に清々(すがすが)しい気分だ」
「そう言っておきながら泣いてるじゃねぇか」
「ん?……ああ、良いさ。人としての感情が甦った証だ」
「ったく兄貴の恋の花は見事に散っていったってか……」
「相棒、俺達は元から花じゃない。花を支えるだけの地面だ。何も無い地面など虚しいだけ。花があるからこそ地面も映えるし、地面があるから花も綺麗に咲ける。俺達は地面、アーシアは花。そして、兵藤は花を輝かせる太陽みたいなものだな」
「んで、結局苦労して書いた手紙は渡せなかったのかよ?」
「あそこまで来たら成り行きでそうなってた。いや、そうした方が良かったと言うべきか。……さて、そろそろ行くか」
「その前にカップ麺買って行こうぜ。奢るから」
「すまないな、相棒。なら、期間限定の『ちょっとしょっぱい塩レモン味』を頼む」
「ハハハ、失恋の味ってか?」

「総督殿」
「よー、打撃王」
アザゼルは冥界の用事ついでにシトリー領の病院に足を運び、院内の売店で花を物色しているサイラオーグと会った
「……一からか」
アザゼルの問いにサイラオーグが頷く
「ええ。問題ありません。慣れていますのでね」
「うちの一誠（バカ）は心配してたけどな」
「伝えておいてください。――直ぐに追い付くと」
負けたにもかかわらず、清々しさに満ちた笑顔で答えるサイラオーグ
彼なら直ぐに追い付き、再び良い試合を見せてくれるだろう
そこに執事らしき者が息を切らしながら姿を現した
その表情は歓喜の涙に濡れている
「どうした？」

「サイラオーグ様……ミスラ様が……」

その病室に駆け付けてきていた医師や看護師が驚愕の表情を浮かべ、口々に「奇跡だ」「信じられない」と漏らしていた

ベッドを覗けば――――そこには長い眠りから目を覚ました女性が窓から風景を眺めていた

サイラオーグは体を震わせ、下の売店で購入した花を床に落としながらベッドに近付いていく

それに女性――――サイラオーグの母親、ミスラ・バアルも気付いた

「……母上、サイラオーグです。お分かりになりますか?」

「……ええ、分かりますよ……」

息子の頬を撫でようとする母の手

震えるその手をサイラオーグの大きな手が取った

「……私の愛しいサイラオーグ……。……夢の中で……あなたの成長をずっと見続けていたような気がします……」

母親は静かに笑み、一言だけ続けた
「……立派になりましたね……」
「……っ」
母親のその一言を聞いたサイラオーグの目から一筋の涙が零(こぼ)れた
「……まだまだです、母上。……元気になったら、家に帰りましょう。あの家に……」

第11章　氷城決戦のリュオーガとドラグーン

呪われた一族の影……

砂を撒き散らす風が目立つとある某国
そこに屋台を構える何処かで見た事あるような面影を持つキノコヘアーのデブとい○りや○介似のたらこ唇ジジイが無意味なパフォーマンスを練習していた
「いいくぞぉっ！必殺！バク転とでんぐり返しを交互にしながら湯切りを行(おこな)って空中半回転捻りのチャーシュー刻み、味付け卵とメンマを乗せつつ歌舞伎仕込みのアゴ肉プルプル＆キノコヘアー回しいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！」
デジャヴかな、キノコヘアーのデブはバク転とでんぐり返しを交互に行いながら麺を湯切り、空中へ飛んで体を捻りながらチャーシューを適度な厚さにスライス
そこから味付け卵とメンマを乗せて着地し、最後に歌舞伎役者よろしく、伸びたアゴ肉とキノコヘアーを高速でぶん回した
器から飛び散るラーメンの汁を上手く器に戻し、最後にクルッと一回転
「はぁ……はぁ……はぁ……っ。――――決まったな。ドヤッ♪」
「エキセントリックなキレじゃ、流石は師匠！わしも負けてはおれん！ほぉぉぉぉっ！

必殺！でんぐり返しするけど遅くて息切れが激しいが、それでも頑張ってリップクリームを塗りたくって自慢の下唇テッカテカにするぞストリィィィィィィィィィムッ！」
」
たらこ唇ジジイはゆったりとした動きででんぐり返しをしながら指に挟んだリップクリームを唇に塗り、砂地に汚ならしいキスマークを付けていく
終わった後に砂粒だらけの唇を指で弾いて砂を落とし、リップクリームを袖にしまう
「はひぃ……ふへぇ……ほぉぉ……どうじゃっ？」
「流石はおぉれの弟子だっ。見事なたらこ唇、感服するぞっ。これで俺の弟――村長がいれば我がラーメン真拳とお前のリップクリーム真拳をより広く伝授出来たのに……。死んでしまった弟のたぁめにもっ、この屋台とラーメン真拳、リップクリーム真拳を世界に広めようっ。そしてゆくゆくは世界の大企業に――」
大いなる（？）野望を無駄に掲げようとした矢先、不穏な空気を察知したデブ村長の兄――キノコデブ店長
辺りを見回してみると……いつの間にか5人の人影に囲まれていた
5人の内の1人――誰かの面影を彷彿とさせる緑眼の青年が前に出る
「何だおぉまえらはっ。おぉれのラーメンを食いに来たのか？」
「師匠のラーメンを食いたいなら、わしのリップクリームとセットで買えぃ。今なら

たったの３００００円だ。安いじゃろぅ？」
悪質な押し売りを行うキノコデブ店長とたらこ唇ジジイ
緑眼の青年は鼻で笑い飛ばす
「やはり醜悪だな。この世界に跋扈している――〝人間〟と呼ばれる生物は」
「あぁん？」
「人間だけじゃない。悪魔も天使も堕天使も――いや、全ての生物が醜い。醜過ぎて吐き気が沸いてくる」
「なぁにを言っとんじゃおぉまえはっ」
緑眼の青年が次第に全身からオーラを発生させていく
灼熱を帯びたオーラが砂塵を吹き飛ばし、雲をも揺るがす
右手をゆっくりと前に突き出し……炎を発生させる
「この世に僕達――リュオーガ族を崇めない生物など必要無い。醜き生物は塵芥も残さず滅びろ」
「ま、まてっ。値段が高いなら２９９９９円にまけてやるっ。話し合え――――マンマァァァ

ゴオオオ

「あら、新。どうしたの？」
リアスは声を掛けるが新は無反応、顔を俯(うつむ)かせたまま立ち尽くしている
怪訝に思っていると……突如新の体が震え始め、ドス黒いオーラが滲み出てくる
メキ……メキメキ……ッ
新の体から発せられる不快な音と共に始まる異変
手から腕、足から膝、腰から背中、そして頭部も変化していく……
リアスの目の前に現れたのは変貌した新――――漆黒のドラゴン
サイラオーグとの戦いで見た……あのドラゴンだった
「あ、新……っ」
「ホ　ロ　ボ　ス、ホ　ロ　ボ　シ　テ　ヤ　ル……ッ。ワ　ガ　ハ　ド　ウ　ヲ　ハ　バ　ム　モ　ノ　ハ、ノ　コ　ラ　ズ　ホ　ロ　ボ　シ　テ　ク　レ　ヨ　ウ　ッ！」
ドス黒いオーラが無数の巨腕を解き放ち、リアスを切り刻もうと飛来してくる
漆黒の巨腕が周囲の地を破壊していき、リアスを追い詰める
元々が新である為か、リアスは攻撃を躊躇(ためら)って後退(あとずさ)りするだけだった
すると、足が何かにぶつかるような違和感が走る
後ろを振り向いてみると……リアスは絶句した

彼女の視界に映ったのは――――死屍累々に横たわる仲間達の骸(むくろ)……っ
一誠、アーシア、朱乃、祐斗、小猫、ゼノヴィア、イリナ、ギャスパー、ロスヴァイセ、レイヴェル、渉、祐希那、アザゼル
リアスを除く全員が血まみれの亡骸(なきがら)と化していた……
茫然自失のリアスを漆黒の巨腕が捕らえ、服を引き裂く
恐怖に怯える彼女に漆黒のドラゴンが顎(あぎと)を大きく開け、リアスを噛み砕こうとした

……と言った場面で急転して目を覚ましたリアス
背中を湿らせる嫌な汗、どうやら先程のは単なる夢だったようだ
しかし、新が漆黒のドラゴンに変貌したのは事実
事実も混ざった嫌な夢を見てしまった……
隣に視線を移すと――――そこにはスヤスヤと寝息を立てて眠っている新の姿があった
そして周りには朱乃やゼノヴィア、小猫、レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトが新にすがり付く様に眠っている

因みに堕天使3人組は全裸で、リアスも寝る時は全裸である
イリナとロスヴァイセ、レイヴェルはまだ心の準備が整ってないせいか別の空き部屋を使っているらしい
「……はぁ……嫌な夢を見ちゃったわね……」
リアスは新が漆黒のドラゴンに変貌した事を今でも信じられなかった
それもただのドラゴンではなく……あらゆる生物に対して怒り、憎しみ、恨み、妬みに満ちたオーラを孕んでいた
〝新は普通の人間じゃなく、元から異形だった……？〟
次第にそんな事まで考えてしまうリアス
とりあえず嫌な汗を流そうと1階の風呂場へ向かう
脱衣場の扉を開けると――――パジャマ代わりのジャージを脱ぎ終えたロスヴァイセが今まさに風呂に入ろうとしていた
「リアスさん？」
「あら、ロスヴァイセじゃない。どうしたの？」
「ええ、実は嫌な夢を見て汗をかいてしまったのでお風呂で洗い流そうと思いまして」
「嫌な夢？」
「はい。信じられない話なんですけど……新さんが突然ドラゴンの様な異形に変わっ

て、私達に襲い掛かってくる夢を……」
なんとロスヴァイセもリアスと同じ様な夢を見たらしく、リアスは思わず「……あなたも？」と返してしまう
その言葉に疑問を感じたロスヴァイセにリアスは自ら夢の内容を打ち明けた
〝自分は夢だけじゃなく、現実に新が漆黒のドラゴンに変貌した様を目撃した〟事も含めて……
その後、湯船に浸かるも重苦しい空気が場を支配する……
「リアスさんは目の前で見たのですね……」
「……ええ。あの時は新を止めたい一心で飛び出していったけど……。今思えば、新がいったい何者なのか疑念が尽きないの……」
「新さんには話したのですか？」
「……こんな事、言える訳が無いわ。サイラオーグとの試合の事を聞いても〝1度倒れて、イッセーに起こされるまでの記憶は無い〟って言ってたわ……。自分がドラゴンに変貌した時の記憶は丸っきり無いみたい……」
仮に言ったとしても新がショックを受けるだけ……
自分の正体が化け物じみたドラゴンである事を打ち明けられれば、恐らく新は自暴自棄になってしまうだろう

見かけによらず、新は繊細なハートの持ち主なのだから……
この事はなるべく新には伝えず、尚且つ有力な情報を入手するしかない
分からない事が多過ぎるゆえ、まずは情報を集める事が先決だ
汗を流し終えたリアスとロスヴァイセは湯船から上がり、風呂場を出ようとした
風呂場の扉を開けると……洗面台で顔や頭を洗い流す新がいた
突然の新の登場にビクッと反応するリアスとロスヴァイセ
蛇口から出てくる水を止め、タオルで頭と顔を拭いた新が２人に気付く
「ん？リアス、ロスヴァイセ。どうした、朝風呂か？」
「え、ええ。たまにはと思って。珍しいわね、新がこんなに朝早く起きるなんて」
リアスは何とか平静を装って聞いてみると、新がタオルを洗濯機に放り込んで言う
「いや、何か変な夢を見ちまってさ。……俺がリアスや一誠達を殺すって言うおかしな夢を……」
「――――っ」
まさかのシンクロ……新までもがリアス、ロスヴァイセと同じ夢を見て目が覚めた
……
もはや不吉の前兆としか言えないぐらいの事象にリアスとロスヴァイセは言葉を出せなかった

「――まあ、所詮夢は夢でしかないけどな。あり得ねぇよ、俺がリアス達を殺すなんて。今の俺がいるのもリアスや一誠達のお陰だ。そんな薄情者になる訳――どうした、２人とも？顔色悪いぞ」

新はリアスとロスヴァイセの様子がおかしい事に気付き、手を差し伸べようとするが……

彼女達の目に映ったのは――夢で見た漆黒のドラゴンの幻影

新と重なったドラゴンの幻影が色濃く映り、伸びてきた手を思わず振り払ってしまう

手を振り払われた事に新も一瞬呆然としてしまい、リアスがハッと我に返る

「ごめんなさい……新」

「……いや、こっちこそ悪かった。多分サイラオーグとの戦いの疲れが残ってんだ。今日明日は休日だから、ゆっくり体を休めようぜ。たまにはリフレッシュも必要だし。さーて、久し振りにカジノや競馬を楽しむか」

〝違う、新が悪いんじゃない……〟

リアスがそう言う前に新はイソイソと脱衣室から出ていく

玄関を開ける音、エンジンを掛ける音が順番に聞こえ、バイクを走らせる音が徐々に遠ざかっていく……

その時の音はいつもより悲しさを孕んでいる様だった……

「……さっきのリアスの目、明らかに俺を怖がっていたな。サイラオーグとの戦いが終わってから感じていた違和感はこれだったのか……。あの時、サイラオーグと戦ってる時に、何が遭ったんだ……？記憶が途切れていた間……俺が何かやらかしたのか……？」

ピリリリリリリッ！ピリリリリリリッ！

「――――っ。……もしもし」

『新ちゃぁぁぁあんっ……。聞いてよぉぉぉぉっ……。総ちゃんがぁ、総ちゃんがいないのぉぉぉぉぉぉっ！』

「何だ、母さんか。親父がいない？いつもの様に遊びに行ってるんじゃないのか？」

『いつもはそうだけど、違うのぉぉぉぉ……っ。さっきから電話してるのに全然繋がらなくてぇぇぇ……っ』

「電話に出ない？……確かに妙だな、母さんからの電話には出てた筈……。で、いつからいなくなった？」

『ぐすん……っ。新ちゃんが出てた〝れぇてぃんぐげぇむ〟が終わってから……』

「レーティングゲームの後……サイラオーグとの試合が終わってから、か……」
『お願いいい、新ちゃぁぁぁあんっ！総ちゃんを探してぇぇぇ……っ。このままじゃ総ちゃん不足でママ死んじゃうウウウうっ！』
「あー……分かった分かった。俺が探しておくから、泣くな。いい歳こいてみっともない」
『ふえぇぇぇぇんっ……。お願いいいいいっ……』
「はいはい、じゃあな。――――ったく、せっかくの休日がパァかよ。何処に行きやがったんだ、あのクソ親父は」

時刻は午前１０時、新が単独で父親――――竜崎総司（りゅうざきそうじ）を探している中、リアスはオカルト研究部のメンバーを部室に集めていた
今日は休日なので幸（さいわ）いにも他の生徒はいない
一誠は新が来ていない事を指摘するが、アザゼルが「まずはこいつを見てほしい」と言い、〝ある映像〟を映し出す
――――それはサイラオーグとの試合で起きた新の暴走を記録したものだった……

一誠が倒れ、果敢に挑んでいった新もサイラオーグに打ちのめされた直後……フラフラと起き上がり――漆黒のドラゴンへと変貌
怨恨、怨嗟を撒き散らすかの如く苛烈な攻撃がバトルフィールドを支配し、リアスにも食って掛かろうとしていた……
一誠だけでなく、他の者も映像を見て愕然とする
リアスの必死の働きによって暴走は治まったものの、新が漆黒のドラゴンに変貌したのは事実
この事象から〝新はドラゴン系統の神器（セイクリッド・ギア）を宿しているのではないか？〟と言う指摘が浮上したが、アザゼルはその可能性は無いと判断
仮にドラゴン系統の神器（セイクリッド・ギア）を宿しているなら、何らかの形で具現していなければならない
一誠の『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』、ヴァーリの『白龍皇の光翼（デイバイン・デイバイディング）』が良い例だ
しかし、新はそう言った物を具現せずに漆黒のドラゴンに変貌した……
つまり、神器（セイクリッド・ギア）は持ち合わせていないと言う事になる
映像が消え、困惑する一誠達にアザゼルが告げる
「新の正体が何なのか知る為にも、捕まえておかなきゃならない奴がいる。――新の父親だ。奴は新がドラゴンに変貌した時、何かを得心した様な顔付きをしてやがった。

明らかに何かを知っている」
「じゃあ……新の親父さんは、新の正体を知ってて俺達に預けたって事すか!?」
「その可能性は高い。理由は分からないが、恐らく俺達を隠れ蓑にしようとしてたんだろうな。だが、サイラオーグとの試合で新の正体が露見、追求されるのを恐れて行方を眩ましたって所だ。とにかく、竜崎総司を捕まえなきゃ話が進まん」
「なら、話は早い。要は新の父親を捕まえれば良いのだろう?」
いの一番に重要事項を切り出してきたのは――――ゼノヴィアだった
先程の映像を見ても、まるで関係ないと言わんばかりの様子だ
「ゼ、ゼノヴィア?何とも思わないの?新くんのあんな姿を見て……」
イリナが恐る恐る訊いてみると、ゼノヴィアは堂々と返した
「確かに最初は驚いたが、例え新の正体が人間でなかろうとドラゴンであろうと――――私の好きな男には違いない。こんな事で私の新に対する気持ちが揺らぐわけ無いだろう」
ゼノヴィアの潔(いさぎよ)く、男よりも男らしい言葉に全員が反論出来なかった……
沈黙していた朱乃もゼノヴィアに続くように言う
「そうですわね。新さんは新さんですもの。私だって彼を愛していますわ。正体が何であろうと、その気持ちに偽りなんてありませんわ」

朱乃も自分の嘘偽り無い気持ちを吐き出し、リアスが1歩前に出る
「そう、あの子は私の『兵士（ポーン）』――グレモリー眷属の新よ。今朝は情けない態度を取ってしまったけれど、あの子の全てを受け止めなければならないわ。その為にも……まずは彼の父親から全て聞き出しましょう」
リアスの一言にオカルト研究部の全員が頷き合い、まずは竜崎総司の捜索に専念する事を決めた
その時、アザゼルの耳に連絡用の魔方陣が展開される
「俺だ。……で、場所は？……そうか、分かった」
連絡用の魔方陣が消えると、アザゼルが見回しながら皆に言う
「喜べ。部下から竜崎総司らしき人物の目撃情報が入った」
「えっ、マジすか!?で、場所は？」
「ここから15駅離れた町にある遊園地――モシキューハイランドだ」

「オッサン、その情報は確かなのか？」
「ああ、本当だよ。ホームレス仲間の何人かがアンタの親父さんを見掛けたって。電車

の乗り継ぎ方を考えると……行き先はモシキューハイランドだな」
「……モシキューハイランド。前に母さんが話してたな。親父と何度もデートした場所……。助かったよ。流石、裏世界の情報屋は情報に困らねぇ。ほら、代金」
「毎度ありっ」
「さて、行き先は決まったな。飛ばして行くか」

「相変わらず汚い生物ばかりだ。こうして見ていると、今すぐにでも一瞬で滅ぼしてやりたくなるよ」
「おいおい、ラース。まずは俺達を砂ん中に閉じ込めやがったクソッタレどもを見つけるのが先だぜ？漢らしくバシッと見つけて！ドガッとぶっ飛ばして！グシャッとぶっ殺す！遊ぶのはそれからでも遅くねぇぜ？」
「僕もニトロの意見に賛成だニャ♪弱っちい生き物は後で纏めて殺すのが1番爽快だニャ♪」
「そう、殲滅遊びはそれからの方が良い。逃げ惑う弱者達の叫びは何よりも楽しいからね」

「せやったら、早(はよ)う見つけようや」
「……見つけた」
「何や、見つけてたんかい。何処や？」
「……ここから少し先、人が多く集まってる場所。乗り物、食べ物、いっぱいある」
「ふぅん、良い所に逃げてくれたものだね。これから楽しみだよ。竜崎総司、四大魔王と共に滅ぼしてあげよう」

さあ、お前の嘘を数えろ！

「着いたわ。ここがモシキューハイランドね」
時刻は午後１３時３０分
リアス達（新を除く）オカルト研究部一行は駒王町（くおうちょう）から１５駅離れた町にある遊園地――モシキューハイランドにやって来た
その目的は勿論、竜崎総司の捜索及び捕獲の為である
今回は長期戦が予測されるので、シトリー眷属＋αも捜索に加わる事に……
その＋αがまた問題だった……
「……アザゼル。１つ聞いておきたいのだけれど」
「何だ？」
「ソーナ達はまだ分かるとして――どうしてセラフォルー様まで呼ぶ必要があったのかしら？」
そう、リアスの言う通り……ソーナ達シトリー眷属の傍（かたわ）らにはあの魔王少女――セラフォルー・レヴィアタンがいる
苦々しい顔をするソーナの隣で「モシキューハイランドに魔法少女☆レヴィアたん降

臨♪」とポーズを決めているセラフォルー
　アザゼルはフフンと悪人顔で告げる
「魔王少女さまに手伝ってもらえば面倒事も手っ取り早く片付くと思ってな」
「下手したら別の意味でこの遊園地その物が片付いちゃいますよ!?」
「心配すんな、イッセー。あくまでそれは最後の手段にしとくから」
「……その最終手段が下される前に終わらせないと大変な事になるぞ……」
　一誠はセラフォルーの出番が来ない事を祈りつつ、竜崎総司の捕獲に尽力を注ぐ事を固く決意
　早速、何組かに分かれて竜崎総司の捜索に取り掛かった
　しかし、捜査は思った以上に難航
　至る所を探しても聞き込みをしても有力な手掛かりを掴めず、時間だけが虚しく過ぎていく……
「……全然見つからないな」
「〝木を隠すなら森の中〟とはよく言うけど、ここまで探して見つからないのもおかしいよね」
　1時間程捜索を続けていた一誠、祐斗、渉の3人はベンチに座ってジュースを飲んでいた

他の皆も思った様に成果を上げられず、未だ捜索を続けている
「人混みの中は絶好の隠れ場所だと思うんだけどな」
「ここに来た人達も〝そんな人は見てない〟って言ってましたよね。後、話を聞く必要があるとすれば……ここのスタッフさんとか、ですかね？僕、ちょっと聞いてきます」
ジュースを飲み終えた渉は近くで風船を配っている着ぐるみのマスコットキャラ達に聞き込みを開始
ただし、着ぐるみキャラは人前で喋ってはならないのでジェスチャーを駆使していた
まずはモシキューハイランドの定番キャラ、黄色いネズミを模した〝モシチュー〟に話を窺(うかが)ってみる
渉が「この写真の人、知りませんか？」と訊くと、モシチューはポンッと手を叩いて〝向こうでそれらしい人を見掛けたよ〟とジェスチャーで伝える
渉は軽く会釈してから一誠と祐斗の所に戻る
「どうやら向こうで見掛けたらしいですよ」
「本当か？」
「えーっと、案内図で言うとこの辺りですね。アイスクリームの所です」
渉が指を差した場所はモシキューハイランドの中でも人気があるアイスクリームの売店

モシチューはそこで竜崎総司らしき人物を見たらしい
考えるよりまず行動、一誠達はそのアイスクリームの売店に行ってみた
歩いて数分、目的のアイスクリーム屋付近に着いた３人は列の中に潜む不審人物を発見
分かりやすい変装と言わんばかりの帽子と付けひげメガネを装着した男……
「……あれがそうか？」
「……だろうね。誰がどう見ても〝変装してます〟ってオーラを出してるよ」
暫く様子見していると、アイスを買って列から出てきた男は近くのベンチに座り、アイスを食べる為に変装グッズを取り外した
その男の素顔は――――紛れも無く竜崎総司本人だった……
間違いない事を（一応）確認した３人は直ぐに総司の所へ駆け寄り、取り囲む様に位置付く
「やっと見つけたぞ、新の親父さん」
「ん？……っ」
総司の手が止まり、見つかった事に気付いた彼は急いで変装グッズを身に付ける
「ソコォノセイショォネン達、ワッタァシニ何か用デスカ？」
「急に外国人みたいな喋り方しても意味ないだろ!?しかも、物凄く似非（えせ）っぽい！」

「総司さん、大人しく捕まった方が身の為ですよ」
「ソォジィ？ノーＮＯノ～！ワッタァシはタダノカンコウキャク、アメェリカから来まァしたフランソワーズ・花子・ピピオロイ３世（３５歳）、通称ジョナサンでぇす。竜崎ナントカさんではアァリマセェン」
「異議ありぃ！国籍性別名前年齢全部に堂々と嘘をつくな！どう考えてもフランソワーズ・花子で通称ジョナサンはおかしいだろ！」
「ウォーカー・シーン・ダ・トローン？」
「木場、渉、こいつ今すぐブッ飛ばして良いか!?」
一誠はもう我慢の限界なのか握り拳を震わせ、流石に祐斗も限界だったのか手元に短剣を創り出していた
ヤバい空気を察知した総司は変装グッズを取り外す
「わ、分かった。分かったよ。ふざけるのはやめるよ。もうふざけないし逃げない――――と言うのは嘘でした食らえ癇癪玉ァァァッ！」
派手な炸裂音が鳴り響き、煙が一誠達の視界を遮る
一誠達が怯んだ一瞬の隙を突いて総司はその場から猛ダッシュで逃げた
「あっ、逃げやがった！待てコラァ！」
「部長！総司さんを見つけました！」

『良いわ。プールエリアに追い込みましょう。今の季節、そこは使われていないから退路を絶つのよ。見失わない様に追い掛けてちょうだい！』

リアスからの指示を受けた3人は急いで総司を追い掛けていった

他の皆も連絡を取り合いながら総司をプールエリアに追い詰めるべく逃走経路を狭(せば)めていく

発見から数十分、遂に総司をプールエリアにまで追い込んだ

プールエリアに入った瞬間、アザゼルとセラフォルーが2人がかりで結界を張り、プールエリアから脱走出来ない様にする

結界に阻まれた総司はあっという間にオカルト研究部とシトリー眷属に囲まれてしまった

「ア、アハハ……いやー、私ってモテモテだなー。こんな大勢の女の子達に迫られるなんて」

「ふざけていられるのも今の内よ。あなたには色々と聞きたい事があるわ」

「な、何かな聞きたい事って？私の趣味？好きなお酒の銘柄？それともスリーサイズ？」

「ふざけるのもいい加減にしろよ！だいたい男のスリーサイズなんか知りたくもねぇっ！気色悪いっ！」

相変わらずふざけた態度の総司にイライラを募(つの)らせる一誠

リアスは手っ取り早く核心を突く事にした
「あなた、新の正体を知ってるんでしょ？」
「――――っ」
リアスの言葉に総司の顔から剽軽（ひょうきん）の色が消え、額を手で押さえる
「あっちゃ～、やっぱりソコを突いてきましたか……。アザゼルくんがチクったのかな？言っておくけど、人のプライベートはあまり詮索しない方が良い。アザゼルくんみたいに土足で踏み荒らしていると友達無くすよ？」
「そうね。でも……嘘で固めているあなたよりはマシだと思うわ」
リアスに一蹴された総司は「おっと、こりゃ1本取られたね」と苦笑する
リアスは更に問いただす
「教えなさい。新はいったい何者で、あの力は何なの？どうしてあなたはソレを隠そうとしてたの？知ってる事を全て話してもらうわ」
「でもさ、リアスちゃん。それを知った所でどうするの？」
リアスの質問に対して総司は質問で聞き返してきた
声のトーンも低く、剽軽とした態度は完全に失せていた
「私はね、君達になら〝新を任せても良い〟って思ってるんだ。良いお友達に巡り会えた。そう思ってるんだよ。だから――――だからこそ、この問題に君達を巻き込みたくな

いのさ」
「それが新の正体を隠す事と関係があると言うの？」
「世の中には知らない方が良い事情だってある。それが自分の子供に関する事情なら尚更だ。親と言う生き物はね、子供を守る為なら何処までも汚れる事が出来るんだよ」
あくまでも自ら話すつもりは無いと言った態度を維持し続ける総司
そこまでして話したくない事情とは如何なるものなのか……？
「アザゼルの言う通り、腕ずくで話してもらうしか無いみたいね」
「あ～らら、思い通りにいかないからって無理矢理聞いちゃうの？それも人に嫌われる要素だよ？」
「俺達だけじゃなく、新にまで嘘をつく様なアンタに言われたくねぇよ！」
怒りを飛ばす一誠に総司は首を横に振る
「大人には大人の事情ってものがあるのさ。それに首を突っ込みたがるのは子供の悪い癖だよ。そして言葉だけで分かってくれないのもね……」
そう言いながら上着を脱ぎ捨て、首を回したり手首の柔軟体操を始める
「出来るだけ君達を傷付けたくなかったんだけど……君達が腕ずくで来るなら、こっちもそれ相応の対処をしないとね」
使用されていないプールエリアに緊張の空気が流れる……

普段は剽軽で掴み所の無さそうな人物なのだが、この日だけは違っていた
仮にも相手は三つ巴の大戦時に闇人の封印に協力した唯一の人間
しかも、全盛期は『闇皇の鎧』を奪い、それを使っていた……
ゆえにその実力は未知数
「……始める前に1つだけ言っておきたい事がある」
『……？』
「私の肉体――結構引き締まってるでしょ？」
「んな事どうでもいいわっ！」
思わず突っ込んでしまう一誠に総司が続ける
「兵藤くん、リアスちゃん。以前ゼクスくんの前で言った事、覚えてる？」
「覚えてるって何を？」
「ほら、私は昔、闇人の力に呑まれかけた酷い親だって話さ」
恐らく授業参観の時の話だろう
確かに総司はあの時、新に『闇皇の鎧』を宿させた事も、その際〝闇人の力に呑まれかけた〟と自嘲するように話していた
「あれね、実は嘘」
「また嘘かよ！アンタ嘘ばっかりだな！」

「そう、嘘。私の肉体は――――とっくの昔に人間をやめちゃったんだ」
　総司の放った意味深な台詞にリアスは少し考えた後、ハッと気付く
「あなた、まさか……」
「この姿は新だけじゃなく、君達にも見せたくなかったよ……。でも、仕方無いよね。君達がそうさせちゃったんだから……」
　不気味な声音と共に総司の体からユラユラとオーラが滲み出てくる
　血の様に赤く、闇の様に黒いオーラが総司の全身を包み込んでいく……
　ゆっくりと螺旋を描き、霧散するオーラの中から現れたのは――――紛れも無い1人の闇人だった
　鬼と蝙蝠が合わさった様な形相、背中からは骨を模した両翼が広がり、両腕には爪の様な刃物が生え揃っている
　何処かの皇帝とも思える程の出で立ちをしているが、全身の禍々しさがプラスイメージを打ち消していた
　目の前に竜崎総司だった異形が現れた瞬間、張り巡らされた結界内も夜が明ける前の仄かに暗い風景――――暁に染まっていく……
「私の肉体はね、『闇皇の鎧』を宿したお陰で力に蝕まれちゃったのさ。そりゃそうだよね。〝何の免疫も無い普通の人間〟が異形の力を使えば、感染してこんな事になってし

まう。でも、運良く自我だけ失わなかったのがせめてもの救いかな」
「じゃ、じゃあ……俺達と初めて会った時、既に……？」
「正確には――――〝ゼクスくん達と一緒に『初代キング』を封印した後から〟だよ。」
想像だにしていなかった衝撃の事実にざわめきが止まらない……
闇人(やみびと)と化した総司はオーラを揺らめかせながら1歩1歩近付いてくる
「君達には悪いけど……これ以上先へ踏み込ませる訳にはいかない。これは新の為であり、君達の為でも――――」
ズオオオオオオオオオッ！
喋ってる最中に噴き出る光の柱
その正体は――――ゼノヴィアが掲げているデュランダルから放出された聖なるオーラだった
ゼノヴィアがデュランダルを降り下ろすと、聖なるオーラが巨大な奔流となって闇人(やみびと)と化した総司を飲み込み、爆発を引き起こす
「またかよっ、ゼノヴィア！いつも開始前にデュランダルをかますな！空気読めないにも程があるぞ！」
「イッセー、相手が話し合いに応じないと分かった以上、実力行使しかないと思うが？」
ゼノヴィアは一誠の忠告を逆に論破する

グゥの音も出ない反論だが、確かにこれは空気を読めないにも程があるフライング……

しかし、そんなフライングスタートを切ったゼノヴィアのデュランダル攻撃も徒労に終わる

モクモクと立ち込める爆煙の中から異形の輪郭が映り――――闇人総司が姿を現した

「イケナイ娘だね。年上の話は最後まで聞くものだよ」

「――――っ。無傷か……。最近、私の開幕デュランダルは無傷で終わってばかりだから流石にヘコむな……」

皮肉げに言うゼノヴィア

総司は全身に付着した土埃を払い落とす

「じゃあ次は私の番だ。――――最初から本気で行くよ？」

そう口走った刹那、総司の姿がブレてリアス達の視界から消える

視認出来ない程のスピードで総司はゼノヴィアの死角に回り込み、右の掌底を食らわせた

鈍く重い音と共にゼノヴィアの体が宙に浮き、飛び上がった総司が強烈な蹴りで彼女を後方へ吹き飛ばす

一瞬で空中から地面へ叩き付けられたゼノヴィアは地にめり込み、口から血ヘドを吐

く

「ゼノヴィアっ!?」

「余所見はいけないなぁっ!」

全員が度肝を抜かれた中、総司は次の標的をリアスに定めて再び高速移動を開始

またも掌底で吹き飛ばそうとするが、禁 手(バランス・ブレイク)化した一誠と祐斗、そして光帝(こうてい)に変異した渉の三重防御によって防がれた

ただ、予想以上に総司の力が強かったのか……掌底の威力が3人の肉体をジリジリと痛めつける

「健気だね、でも言った筈だよ? 最初から本気で行くってさぁ!」

「――――っ!? 部長! 離れ――――」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!

祐斗がリアスに逃げるよう促(うなが)す刹那、総司は全身から莫大なオーラを放出した

凶悪なオーラが一誠、祐斗、渉を呑み込み、リアスもろともプールの壁に叩き付けた

一気にエース陣3人を退(しりぞ)ける程の破壊力……

総司の猛攻は止まる事を知らない

朱乃の雷光、ロスヴァイセの魔術フルバースト、シトリー眷属の一斉攻撃を回避及び体術で打ち砕いていく

その後、総司は両腕の爪の様な刃物にオーラを集中させ――ブーメランの如く赤い刃を幾重にも放った
縦横無尽に舞う刃物が結界内にいる全員を切り刻み、グレモリーとシトリーの両眷属を蹴散らした総司は肩を回す
「確かに君達の強さは破格だ。感心するものがある。けどね……全盛期だった『初代キング』の軍勢に比べたら、まだまだかな」
「あの野郎……ッ！なんて強さだ……ッ！本当に５０代のオッサンの強さかよ!?」
「ソーたぁんっ！もうっ、総司くんっ！」
妹に危害を加えられた事にプンプンと怒りを見せるセラフォルー
直ぐに加勢しようとするが、アザゼルに止められる
「落ち着け、セラフォルー！今結界を解けば、奴は確実に逃亡を図るぞ！」
「でもでも！このままじゃソーたんが！リアスちゃん達が！」
「俺だって助けてやりてぇよ……！あの野郎、どちらか１人でも欠けるようにワザとやってやがる！性質の悪いオヤジだな！」
総司の作為を見抜いただけにアザゼルは堪えるよう歯を食い縛る
それでも総司は逃亡の為、自身が抱えている〝新の正体〟を厳守する為に非情の鬼と化す

３度行われる高速移動でグレモリー、シトリーの両眷属を１人ずつ痛めつけていく
殴る、蹴る、地面に叩きつける等の凶行をひたすら繰り返す総司
セラフォルーどころかアザゼルも我慢の限界を迎えようとしていた……
「どうした、アザゼルくん！早く助けに来たまえ！このままだと大事な教え子達が病院送りになってしまうよ！それでも良いのかい!?」
「ぐ……ッ！」
「まだだ……！まだ終わっちゃいねぇッ！」
アザゼルに呼び掛ける総司の背後から轟音を噴かして来たのは――――トリアイナ版『騎士』の一誠だった
瞬時に距離を詰めてトリアイナ版『戦車』に昇格しようとするが――――その前に拳を掴まれてしまう
総司は一誠の右腕関節に打撃を入れて機能を鈍らせ、更に捻り上げて動きを封じる
そこからオーラを溜めたパンチや蹴りの連打を浴びせ、再び絶大な威力を誇る赤い波動を放出した
その破壊力ある波動をまともに食らった一誠は吹き飛ばされ、禁手の鎧も粉々に砕けてしまう
全身傷だらけで地を転がり滑る一誠

総司はアザゼルに警告を入れた
「アザゼルくん！これでも君は助けないつもりかい!?だったら強硬手段を取るまでだ！そこを退かないなら、ここでリアスちゃん達を殺すよっ！」
「なっ、てめぇっ！」
総司の卑劣な要求にアザゼルが怒りを露にする
今ここで総司を逃がせば次は確実に対策を打ってくる
しかし、要求に呑まなければ総司は本気でリアス達を殺すだろう……
〝八方塞がり〟――――まさにこの状況に相応しい表現だ……
「さあ選べっ、アザゼルくん！私を逃がして全員を助けるか！それとも私を逃がさずに全員を殺すか！決めろッ！」
苦渋の選択を強いられたアザゼル……
〝総司の要求を呑まざるを得ない〟
そう判断し、やむ無く結界を解こうとした……その時――――空から何かが降ってきた
降ってきた〝何か〟の正体に気付いたアザゼルはよしと言った表情で結界を解いた
アザゼルの表情を不審に感じた総司は空から降ってきた〝何か〟に視線を移す
それは――――出来る事なら今自分が最も会いたくない人物だった……
「遠くの方で嫌な気配がするから飛んで来てみれば……何なんだよ、こいつは」

既に鎧を纏った新が自分の前に立ちはだかる
新に出くわさず逃げたかったのだが、それは叶わず終い……
その一点だけ観念したのか、総司は自ら魔人態を解除して元の姿に戻る
「――ッ!?お、親父……っ?親父が……何で……」
「……結局……こうなっちゃうんだね……」
総司はもはや弁明の気力すら沸かない……
新は目の前にいる父親と周りで倒れているリアス達を見て現状を解析
〝何が遭ってこうなったのか〟は分からないが――1つだけハッキリしている
〝自分の父親がリアス達を傷付けた〟
この一点を理解した新に怒りが煮え滾ってくる
「……親父、テメェがやったのか?テメェがリアスを……一誠を……皆を……ッ!」
「……そうだよ、私がやった。しつこく追ってくるからね。我慢出来なかったんだ」
子供じみた理由を吐き捨てる総司
勿論、それは本当の理由を隠す為の虚偽である
しかし、その虚偽は新の怒りに拍車を掛けてしまった……
「細かい事は取り敢えず後回しにしてやる。まずは……リアス達をこんな風にしやがったテメェをぶちのめすッ!五体満足で帰れると思うなよッ!」

怒りのオーラを解き放つ新（むすこ）を前に、総司も覚悟を決めて再び魔人態（まじんたい）へ変貌する

『新、こんなにも敵意を……殺意を私に向けてくるなんてね……。それだけリアスちゃん達を大事に想っているって事かな……。安心したよ。今は余計な事を考えず、存分に私を殴ってくれ。君がどれだけの強さになったか、父親として確かめさせてもらうよ。願わくば……そのまま私を殺しても構わない。それで君の正体を守れるなら――――』

新ＶＳ総司！忍び寄る竜の一族！

モシキューハイランド、現在使用されていないプールエリアで史上最悪の親子喧嘩が始まろうとしていた
闇皇姿（やみおう）の新と闇人化（やみびとか）した父親――竜崎総司
親（総司）と子（新）によるガチ喧嘩……
開始の怒号を放ったのは――新だった
「いくぞ、クソ親父ィィィィィィィィィィィィッ！」
足にオーラを溜め、爆発的な勢いで飛び出した新は右の拳打を見舞おうとする
総司もすかさず右拳にオーラを溜め、新と殆ど同じタイミングで拳打を放った
両者の拳がお互いの顔面に打ち込まれた瞬間、突き抜けた衝撃がプールの壁や床、備品等を破壊する
一旦距離を取って口から血を吐き捨て、再び壮絶な殴り合いを始めた
ノーガードの拳、蹴りが空を切り、お互いの体を痛めつけていく
新が右の拳を放った瞬間、総司はそれを左手で防ぎ、続けて放たれた左の拳も右手で止める

殴り合いを中断した総司は全身から莫大なオーラの波動を放出した
禁手（バランス・ブレイカー）状態の一誠ですら耐えられなかった波動をまともに食らってしまう
極大の波動に呑み込まれ、後方へ吹き飛ばされていくが……『騎士（ナイト）』形態に変異し、出現した槍先に魔力を集中させ、そのまま波動の中を突き進む
一点集中の突撃によって波動を裂き、推進力を活かした飛び蹴りを総司の鳩尾（みぞおち）に食らわせた
攻撃の手が止まった所ですかさず『戦車（ルーク）』形態に昇格
攻防特化の姿になった新は巨大な拳を振り下ろし、総司を地面に叩き付けた
クリーンヒットしたかに思えたが……総司は両足を踏ん張らせてダメージを最小限に抑え、新の顔面を鷲掴み
地面に思いっきり叩き付けてから高速で引きずっていく
分厚い装甲を削り、空中へ放り投げてから自分も飛び――――縦横無尽の空中コンボを見舞った
そして真上から急降下、その勢いを利用した蹴りが炸裂
新の体が〝くの字〟に折れ曲がり、総司はそのまま踏み潰すよう落下した
踏み潰された新を中心に亀裂が広がり、大地が爆（は）ぜる
「グボハ……ツ・クッソォッ！」

新は全身を駆け巡る痛みに耐えながら今度は『僧侶(ビショップ)』形態になり、両肩の砲口と銃から魔力弾を撃ちまくる
砲撃の連射を浴びた総司は退(しりぞ)くものの、負けじと両腕の刃物からブーメラン状の波動を幾重にも解き放つ
飛来してくる刃を新は全て撃ち落とす
お互い1歩も引かない苛烈な攻撃の嵐にリアス達はすっかり萎縮気味となっていた……
「はぁ……はぁ……なかなか強くなってるじゃないか、新。私は嬉しいよ」
「今更褒められても嬉しくねぇし……まだまだ殴り足りねぇんだよ！」
「その意気だよ……。その意気で――――もっともっと力を出し切れェェェェェッ！」
ブゥウンッ！
総司は駆け出しながら右手に剣(つるぎ)状のオーラを出現させ、大きく振りかぶった
危険を察知した新は横っ飛びで回避、総司の剣戟はさっきまで新がいた場所を深々と切り裂いた
総司は先程一誠達を圧倒した高速移動で新に斬りかかる
視認出来ない速度で動き回る総司を捉(とら)えられず苦戦する新は『女王(クイーン)』形態の呪文を唱え始めた

「我、目覚めるは……ッ！闇と焔を受け入れし、魔の皇なり……ッ！」
しかし、その間にも総司が斬りかかってくるのでスムーズに唱えられない
それでも何とか呪文を唱え続け、ようやく最後の部分を口に出す
「――汝らを光無き漆黒の闇へと沈めよう……ッ！」
新の鎧が火柱を噴いて変質していき、『女王』形態――『魔剣の闇焔皇』となった
火柱の火力で高速移動を止められた総司に新はオーラを溜めた剣戟を見舞う
同じくオーラの手刀で応戦する総司
殴り合いの次は激しい剣戟合戦が開始された
休む暇も与えず、より苛烈さを増していく両者
お互いの刃が衝突した刹那、新は6枚の炎の翼を広げ、刃物の如く鋭く研ぎ澄ませて総司を突き崩す
総司はプールの壁に叩きつけられ、新は追撃とばかりに剣で刺し貫こうとした
だが、総司はギリギリ身を捻って刺突を躱し、その勢いで新の後頭部を掴んで壁に叩き付ける
剣を手放してしまった新は総司の腕を取って投げ返す
「いくぞ、この野郎オオオオオオオオオオッ！」

立ち上がろうとする総司の顔面に強烈な膝蹴りを入れる新
「ぐ……ッ！負ける訳にはいかないんだよォッ！」
新の肩を掴み、引き寄せて右肘を叩き込む総司
新はタックル気味に総司を壁に叩き付け、顔面に掌打（しょうだ）のラッシュ
負けじと総司は両手を捕まえて掌打を止め、新に頭突きを連続で繰り出す
腕を掴み、その場で高速回転した後――――思いっきり投げ飛ばした
地面を転がり回る新に総司はふらつきながら言う
「新……これ以上お前を……この先へ踏み込ませる訳にはいかないんだ……っ。ここから先には本物の修羅（しゅら）の道が待ち構えている……っ。だから、出来れば諦めて欲しい……っ」
「もうテメェの秘密主義はウンザリだ……！ここで全部吐いてもらうぜ……ッ！」
新は全身から莫大なオーラを噴出させ、全ての翼を広げて飛び出した
対する総司も極大のオーラを爆発させ、駆け出していく
再び壮絶な殴り合い、蹴り合いを始めた両者
拳や蹴り、それぞれ一撃を放つ度にオーラが飛び交い周囲を爆破する
何度も殴り、何度も蹴る2人の姿はもはや親子喧嘩の域を遥かに超えていた……
お互いに顔面を殴り合い、脇腹を蹴り合う

次に放たれた総司の左拳打を新は躱すが――その攻撃はフェイントで、総司はその勢いを利用して右の裏拳を新の側頭部に命中させた
不意を突かれた挙げ句、脳を揺らされた新の動きが一瞬だけ鈍り、総司は好機と見て両手で新の首をロック
その体勢で新の腹に膝蹴りの連打を叩き込む
腹部の装甲を砕かれ内部にまで衝撃が伝わり、新の口から血が飛び散っていく
トドメとばかりに顔面への飛び膝蹴りを見舞おうとしたが――寸前で新が首のロックから逃れる
総司が右拳を放つと同時に新はカウンター気味に肘打ちを入れた
肘と拳の衝突
しかし、充分に力が乗っていなかった拳は負けてしまい、ミシミシと嫌な音を立てる
恐らくヒビでも入ったのだろう……
痛めた拳を押さえる総司に新は容赦無く重いハイキックを見舞った
クリーンヒットしたハイキックで総司は吹っ飛ばされ、地を転がる
よろめきながらも起き上がろうとする総司に――新は追撃の拳打を食らわせた
壁に叩き付けられた総司を追い掛け、更に拳や蹴りを打ち込んでいく
総司も抵抗の拳を放つが呆気なく防がれ、一方的に殴られ蹴られる

新は総司を壁から引き離し、オーラを溜めた拳で打ち抜いた
ドゴォッと鈍く重い衝突音と共に宙を舞う総司……
背中から地面に落ちた総司を新が無理矢理起こし、首を掴んで詰め寄る
「さあ、クソ親父ッ！もうテメェの負けだ！観念しやがれッ！」
「……ま、まだ、まだまだ……だよ……っ」
全身ボロボロで血だらけになっているにもかかわらず、総司はまだ勝負を続けるつもりでいた
ここまで追い詰められているのに降伏の意思を示さない……
総司は新の手を振り解き、拳を握り締めて殴りかかる
しかし、その勢いは先程よりも圧倒的に弱々しい……
もはや勝負の行方は明らか
それでも降伏しようとしない総司に新は苛立ちを見せる
「いつまで見栄張ってんだ、クソ親父ッ！」
新の拳が総司の顔面に直撃するも――今度は倒れない
踏ん張りを効かせ、尚も新に立ち向かおうとしている……
「まだ……まだ、負けないよ……っ」
顔も体もボロボロの筈なのに負けを認めようとしない……

〝なんでここまで立ち向かってくるのだろうか？〟
新は理解出来なかった……
徐々に戦闘心が薄れてしまい、拳の握りも甘くなる
「どうしたんだい……？ま、まだ勝負はついてないよ……。私が許せないんだろ……？だったら、遠慮しないで殴って来なよ……っ」
総司は新に殴ってくるよう促すが、新は拳を握らないどころか――構えすら解いてしまった
兜のマスクを収納して素顔を見せ、父親に問い掛ける
「……親父、まさかとは思うけど――わざと殺されようとか思ってんじゃねぇだろうな？」
「――ッ」
核心を突かれたのか、総司は何も答えようとしなかった
父親の真意を知った新は怒りに震え、声を荒らげる
「ふざけんなバカ野郎ッ！テメェ、何考えてんだよッ！」
「さあねぇ……何を考えてるんだろうねぇ……」
「いい加減にしやがれッ！そうやっていつもいつも答えをはぐらかしてんじゃねぇッ！テメェは嘘を嘘で塗り固めて……いったい何がしたいんだッ！」

新の質問に対して総司は闇人(やみびと)の姿を解き、人間の姿に戻る
「何がしたいって……？新――――君を修羅の道から遠ざけたいだけさ……。父親としてね」
〝修羅の道〟
意味深な言葉に新だけじゃなくアザゼルも眉根を寄せる
アザゼルは総司に問い掛けた
「その〝修羅の道〟ってのはいったい何の事だ？それだけでも教えられないのか？」
「……」
総司は気まずそうな表情で黙り込んでしまう
それだけでも新の正体に繋がりかねない事情なのだろうか……？
アーシアによる回復を終えたリアス達オカルト研究部及びシトリー眷属全員の視線に囲まれ、1度逸らした視線を戻す
「それは――――」と総司が何かを口ずさもうとした刹那……体の奥底からゾッと震える異様な気配が突如プールエリアを呑み込んだ
それは今まで感じた事など無い邪悪で異質なものだった……
「な、何だこの吐き気を催(もよお)す様な気配は……ッ!?」
新を始め、アザゼルやリアス達も突如襲ってきた〝気配〟に警戒心を最大限に強める

が、一瞬でも気を緩めたら討ち取られそうな気配に戦慄してしまう
特にその類に殆ど免疫が無いアーシアは疲労も重なったせいか今にも倒れそうで、一誠に支えられていた
気配の正体に気付いた総司は舌打ちし、セラフォルーも結界を解いて降りてきた
「この気配……っ、もしかして……ッ？」
「――ッ？心当たりあるのか、セラフォルー？」
「心当たりどころじゃない……ッ。この気配……まさか――」
セラフォルーが何かを得心した瞬間、ブゥゥンッと空気が震撼する様な音が鳴り、セラフォルーを取り囲むかの如く不気味なリングが現れ、セラフォルーを拘束する
不意を突かれたセラフォルーは成す術無く捕らえられ、その体が宙に浮かぶ
「きゃあっ！」
「お姉さまっ!?」
セラフォルーを捕らえたリングは彼女を離れた場所に連れていき、その下で閃光が走る
迸った光の中から――得体の知れない何者かが１人ずつ現れていく
「ニャハハハハハッ♪四大魔王の１人、セラフォルー・レヴィアタン――確保だニャ～♪」

まず出てきたのはシルクハットを被り、右目にモノクルを付けた手品師の様な風貌をした少年

「……綿菓子、美味しい」

次に出てきたのは胸元を空けたゴスロリ服に身を包み、前髪で片方の目を隠したツインテールの少女

綿菓子やらポップコーンやらをモグモグと食べている

「爆・進・熱・血ウゥゥッ！爆進帝王――――ニトロ様のお出ましだぜベイベェェェェェェッ！」

やたらとテンションの高い３人目は――――爆音を鳴り響かせるバイクに跨がった異形の男

レザー系統のファッションにバイクメットの様な頭部、一見すると暴走族の総長みたいな出で立ちだ

「何や、大した事無さそうな奴らやのう」

次に現れたのもまた異形で、こちらはより異形らしい不気味さを醸し出していた……

鮮やかな色合いなど皆無の灰色で統一された全身に左右の側頭部から大きな角を生やし、竜頭を模した両腕

歩く度に地を震わせる程の威圧感も孕んでいた……

そして最後に現れた人物――その者に皆は驚愕せざるを得なかった
何故なら――現れたのは新に酷似した緑眼の青年だからだ……
事件の度に世界各国を飛び回る『サトラッ！』な検事の如く法衣（ほうえ）に似た服を纏い、優しげな雰囲気を出しながらも、その目には冷たい感情が見え隠れしていた
突如現れた５人の異様なオーラに全員が戦慄する中、緑眼の青年が口を開く
「初めまして、四大魔王に仕える下等生物（あくまども）共」
「お前ら、いったい何者だ？」
アザゼルが問いただすと緑眼の青年を始め、他の４人も一斉に嘲笑う
「これはこれは、知識の欠片も無い下等生物が紛れ込んでるようだね。僕達はリュオーガ族。そこにいる男とセラフォルー・レヴィアタン含めた四大魔王によって封印された――由緒正しき竜の一族だよ」
「リュオーガ族……？」
緑眼の青年が男――総司を指摘しながら言うと、新達は総司と緑眼の青年を交互に見る
緑眼の青年は胸に手を当てながら自分達の正体を語り始めた
「僕はリュオーガ族の長（おさ）――ラース・フレイム・ドラグニル」
「僕はアノン・アムナエルだニャ。宜しくニャ～♪」

「俺はリュオーガ族の爆進帝王ッ！黒き弾丸ッ！爆進熱血漢ォッ！ニトロ・グリーゼだァァァァァァッ！」
「ワシは長光重蔵」
「……レモネード・フォールン」
全員の紹介を終えた直後、リュオーガ族の1人――アノン・アムナエルが手元にステッキを出現させる
「ここは少し狭いニャ。僕のマジックでもっと良い場所に変えてあげるニャ♪――――テジ・ナ～・ニャッ！」
アノンはリズミカルにステッキを振り、何処かで聞いた事のある台詞を言いながら上空に向けてステッキを翳す
その瞬間、ステッキから眩い閃光が解き放たれ――――プールエリア全てを包み込んだ
再び目を開けてみると……プールエリアから一転、色彩豊富な花が広がる草原へと変わり果てた
遠くには幾つもの山々が連なっており、土地その物を変えたアノンの技量に舌を巻いてしまう
「どう、驚いたかニャ？僕の力でここにいる全員を疑似空間に転送してみたニャ♪さっきの場所は狭かったからニャ～」

「一瞬でこれだけの規模の疑似空間を作っただと？相当な使い手じゃないと出来ない芸当だぞ……ッ」
「とにかく、セラフォルー様を放しなさいッ！」
リアスが指を突きつけながらセラフォルーの拘束を解くよう言うが、アノンは「や～なこった、パンナコッタだニャ～♪」と舌を出して拒否する
ふざけた態度にリアスだけじゃなく、その場にいた全員が怒りの色を見せた
次にリーダー格のラース・フレイム・ドラグニルが手を広げて言う
「僕達リュオーガ族はそこにいる男――竜崎総司とセラフォルー・レヴィアタン含めた四大魔王に封印されていたんだ。冷たく暗い砂の中でね。その鬱憤を晴らさない限り……僕達の気が治まる事は無い」
ラースが指を鳴らすとセラフォルーを捕らえているリングが反応し、彼女の体を締め上げる
苦痛に顔を歪めるセラフォルーにソーナが「お姉さまッ！」と叫ぶ
その一言を聞いたラースは眉根をピクッと動かし、ソーナに視線を移した
「ふぅん、そこのメガネを掛けたお嬢さんはセラフォルー・レヴィアタンの親族かな？……良い事を思い付いたよ」
「――ッ！やめてっ！ソーナちゃんには手を出さないでっ！」

ラースの悪巧みを察知したのか、セラフォルーが珍しく声を荒らげる
しかし、相手は聞く耳すら持ってくれない……
「アノン。あの娘、セラフォルー・レヴィアタンの親族を狙え」
「ＯＫ～♪テジ・ナ～・ニャッ！」
アノンがステッキを振るった瞬間、ソーナの姿が消え――ラースの近くに転送されてしまった
突然の転移に皆も驚愕し、ラースが転送されてきたソーナの首を掴む
「あ……ッ、が……ッ！」
「やめてぇっ！ソーナちゃんを放してっ！あなた達の狙いは私でしょ!?ソーナちゃんはっ、リアスちゃん達は関係無いのっ！」
「悪いけど、そうはいかないよ。君は僕達を封印した奴らの１人。君に関わりのある者は――１人残らず殺してあげる。ここで殺すだけじゃつまらないから、ゆっくりとお仲間を嬲り殺しにするよ。――僕達流の〝おもてなし〟でね」
ラースはソーナの首を締め、彼女を気絶させる
リュオーガ族の非道な行為と思考にリアス達は更に怒りを滾らせた
「セラフォルー様どころかソーナまで……ッ。許さないッ！消し飛びなさいッ！」
リアスは手元から膨大な質量の消滅魔力を解き放ち、他の皆も魔力の一斉攻撃を撃ち

放った
幾重にも向かってくる魔力の群れに対し、ラースは右手を向けた
「――――『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！
ラースの右手から灼熱の火柱が放射され、リアス達が放った魔力を一瞬で相殺（そうさい）――――蒸発させた……
全員の一斉攻撃がたった1人の……たった一撃で全て掻き消されてしまった……
その実力に再び皆が戦慄し、ラースがフッと冷笑を浮かべる
「これが君達の実力かい？まるで話にならないな」
「うるせぇッ！会長とセラフォルー様を放しやがれェェェェェッ！」
怒号を上げながら突っ込んでいく匙、それに続くシトリー眷属と新、一誠、渉
その前に立ち塞がるのは――――
「ニトロ、ジュウゾウ、少し遊んであげなよ」
「おおっ！爆進帝王ッ！出撃だァァァァァァッ！」
「つまみ食いには丁度ええか」
バイクから飛び降りたニトロと地響きを鳴らしていくジュウゾウ
まずはニトロが匙の前に立ち塞がり、打ってこいと挑発する

「そこをどきやがれッ！」
「そんなにあの嬢ちゃんを助けたいか？漢(おとこ)なら拳で語りなベイベェ！」
「ああ、やってやるよ！オラァッ！」
　匙は黒い炎を纏わせたパンチをニトロに放つが――――ガゴッと鈍い音が鳴り響き、匙の拳から血が噴き出す
　苦痛に悶える匙を見てニトロがチッチッチッと指を振る
「拳の打ち方がなっちゃいねぇなぁ。拳ってのはこう打つんだよッ！鉄(てつ)・拳(けん)・制(せい)・裁(さい)イイイイイイッ！」
　グシャァッ！
　ニトロの拳が匙の顔面に鋭く突き刺さり、遥か後方にまで吹っ飛ばす
　その光景を見た新、一誠、渉は仇討ちとばかりに3人がかりでニトロを叩く
　しかし、拳を打てど蹴りを放てど……逆に新達の方がダメージを受けてしまう
「……ッ！何なんだ、こいつの体の硬さは……!?まるで鉄でもぶん殴ってるみたいだ……ッ！」
「ヒャッハーッ！この俺の耐久力はリュオーガ族一(いち)ッだ！堅牢鉄壁ッ！金剛無双ッ！何人(なんぴと)たりとも俺を止められやしねぇぜベイベェェェェェェェッ！」
　ドドドドドドドドドドドドドッ！

ニトロはすかさず高速で動き回り、新達に連続の打撃コンボを食らわせた
それぞれ三方向に吹っ飛ばされ、直ぐにアーシアとレイヴェルが駆け寄る
一方、シトリー眷属の相手を務めるのは灰色の異形――――長光重蔵（ナガミツ・ジュウゾウ）
竜頭を模した豪腕を振り回す度に地が抉（えぐ）られていく
「小賢しいんじゃあッ！」
ジュウゾウが豪腕を地面に突き刺すと――――そこから衝撃波が放たれ、シトリー眷属に向かっていく
更に頭部の角から雷撃を迸（ほとばし）らせ、二重攻撃でシトリー眷属を痛め付ける
圧倒的な力でねじ伏せたニトロとジュウゾウ
総司との戦いで疲弊しているとはいえ、たった２人で新達を返り討ちにしてしまった
……
ラースが「そこまで」と言うと２人は元の場所に集まり、５人を照らす様に光が走る
「今のはほんの挨拶代わりさ。今度は僕達の本拠地で殺してあげるよ。今夜０時、南極に来なよ。そこに聳（そび）える城――――フローズンパレスに招待してあげよう。この２人を返して欲しいなら、そこで僕達のパーティーに出席するんだ。ただし、〝今この場にいるメンバーのみ〟で来るようにしてね。他に助っ人を連れてこようものなら――――」
ラースが右手を遠くの山々に向け、先程リアス達の一斉攻撃を相殺させた熱線を放射

一瞬の閃光が山の根元で走った刹那――――極大の爆発と火柱が山々を呑みこみ……
跡形も無く消した
「彼女達があの山と同じ運命を辿る事になる。じゃあ、期待して待ってるよ。下等生物の諸君」
冷笑を浮かべて言い終わった直後、空間全体が光で包み込まれ――――ラース達は消えた
先程まで花畑だった疑似空間も元のプールエリアに戻っている
突如現れた凶敵リュオーガ族……
彼らに捕まったセラフォルーとソーナ……
更にリュオーガ族は四大魔王と総司に並々ならぬ因縁と恨みも持ち合わせている……
まだ判明出来ていない事象があるのに、一時も待ってくれない……
新達は四大魔王、総司、リュオーガ族の因果に巻き込まれてしまった……

凍てつく居城、フローズンパレス！

『……』
「……」
時刻は２３時３０分、場所はオカルト研究部の部室にて
全員の治療が終わった後、アザゼルは通信魔方陣でサーゼクスを呼び出していた
総司の確保、彼と因縁があるリュオーガ族の襲来、そしてセラフォルーとソーナが拉致された経緯も伝える
通信魔方陣に映ったサーゼクスは険しい表情をしていた
自分自身にも隠し事をされていた事に対する不満、セラフォルーとソーナがリュオーガ族に拉致されたと言う芳(かんば)しくない現状……
様々な要因が交錯したせいで終始顔をしかめている
『……総司さん。あなた知っていたんですか？彼らが地上に出てきた事を』
「……」
『どうしてそれを私達に伝えなかったんですか？』
「……」

サーゼクスの質問に全く応じようとしない総司
サーゼクスは瞑目して首を振り、セラフォルーとソーナの救出を優先させようと話を切り出した
そこでリアスから質問が飛ぶ
「お兄さま、あのリュオーガ族とは何者なのですか？〝四大魔王に封印された〟と言っていましたが」
『……こうなってしまった事も含め、総司さんが話さない以上、私から話す他無いだろう。彼ら――――リュオーガ族とは我々四大魔王と総司さんが命懸けで封印した悪しき竜の一族だ』
「――――ッ！お、お兄さまが命懸けで……っ？」
規格外の強さを誇る四大魔王が命懸けで封印した一族……
衝撃の事実に困惑する一同
サーゼクスはリュオーガ族を封印した経緯も話し始めた
まずリュオーガ族とは様々なドラゴンの血と力を受け継いできた亜人であり、ある1匹のドラゴンによって創造された古代の一族である
そのドラゴンとは――――『災厄の漆黒竜（インフェルニティ・ドラゴン）』オニキス
悪魔、天使、堕天使だけでなく、同じドラゴンからも忌み嫌われた異質な存在だった

……

冥界が保管している資料によると、そのドラゴンは大昔に滅ぼされ、リュオーガ族の人々も次第に数を減らしていったらしい

寿命を迎えた者、病で倒れた者、己の力に耐えきれず自壊した者……

その様な経緯を経て――残ったのがたった５人

リアス達が対峙したあの５人だ

彼らはリュオーガ族の中でも類い稀なる戦闘力の高さと凶悪さを持ち合わせており、名のある人間や悪魔、天使、堕天使のみならず、あらゆる種族を滅ぼそうと暗躍

悪行を嗅ぎ付けた四大魔王は総司の協力を得てリュオーガ族を止めに掛かった

しかし、リュオーガ族の力は想像以上のもので……四大魔王及び全盛期の総司でさえも苦戦させられる始末……

激しい死闘は三日三晩、お互い飲まず食わずで続けられたが――倒す事は出来なかった

そこで総司と四大魔王は彼らが油断した一瞬の隙を突いて特殊な封印術を施し、リュオーガ族を砂漠の奥底に封じ込めた……

『――とまあ、こんな所だ』

「その封印ってのは自然に解かれたのか？」

アザゼルがサーゼクスに訊くが、サーゼクス曰く――〝総司さんと我々の５人掛(がか)りで施したのだから、そう簡単には解かれない〟らしい
アザゼルは〝封印が何故解かれたのか？〟と訊くものの、理由は不明……
誰かが解いた線が無い以上――封印は自然に解かれた事になってしまう……
何が切っ掛けで封印が解かれたのだろうか……？
時刻は２３時４５分、宣告された時間まで残り１５分
一先(ひとま)ず封印に関しての問題はさておき、セラフォルーとソーナの救出を最優先する事に
リアス達は転移魔方陣を開いてリュオーガ族が指定した地――南極へと飛ぶ準備をする
「竜崎総司、アンタも来てもらうぜ？一応、向こうのご指名があったんだからな」
「……分かってるよ」
総司以外の全員が転移魔方陣の中に入る中、総司は最後に〝皆に聞きたい事がある〟と言ってきた
下唇を噛み締める様な表情の後、総司は重く閉ざしていた口を開く
「……この先、何が起ころうと――新を任せても良いんだね？」
「どういう意味？」
「言葉の通りさ。リュオーガ族はゼクスくん達や私でさえ封印するので精一杯だった。

恐らく、君達が今まで出くわした中で最悪の相手になるだろう……。何が起こってもおかしくない。だから……どんな事態になっても新だけは見捨てないでくれ……っ。たとえ、私が死ぬ事になってもね……」

今までに無い程真剣な面持ちの総司

まるで自ら命を絶つ様な宣言にリアス達は言葉を失う

しかし、総司の言葉にサーゼクスは異論を飛ばす

『総司さん、まさかとは思いますが……死ぬ前提で向かおうとしているのですか?』

「……今の私に出来る事は――――もうこれぐらいしか無いんだ。せめてリアスちゃん達だけでも生きて帰れるよう努める……。この問題に巻き込んでしまった私の責任だからさ。その為なら、私は命を捨てられる……」

罪滅ぼしのつもりなのだろうか……総司はこれから始まろうとするリュオーガ族との戦いで命を捨てるつもりらしい

だが、サーゼクスは〝それは許さない〟と一蹴した

『総司さん、ご自分の命を捨ててまで守ると言うのは――――あなたのエゴに過ぎない。嘘にまみれたまま、リアスや私達に嘘をつき続けたまま死ぬのは許さない』

「ゼクスくん……?」

『――――生きて帰ってきてください。あなたの償いは生きて帰って、我々に真実を話し

てもらう事です。勿論、相応の罰は受けてもらいます。生きて……自分の過ちや罪と向き合う。それが正しい償い方です。……死んでも罪は消えません』

〝死んでも罪は消えない〟――――確かにその通りだ……

犯した間違いや罪はいつまでも当人の心だけでなく、被った者の心にも残る

総司の〝命を捨てる償い〟はただの自己満足、根本的な償いには至らない……

不明点を残したまま消え逝くのは逃避行と同じ

本当に償いたいなら――――生きるしか無い

生きて自分の過ちと向き合い、心を浄化する

それが罪を犯した咎人を解放する唯一の行為……

総司は今まで嘘をつき、逃げてきた自分を恥じた

「……分かったよ。約束しよう。ごめんね、ゼクスくん。そして……ありがとう」

軽く会釈してから転移魔方陣の中に入り、新達は南極へ転送されていった

サーゼクスは通信魔方陣を介して見届ける……

時刻は２３時５２分

新達は無事南極に辿り着いた
大きな吹雪も無く、まるで歓迎するかの如く夜空の下で輝くオーロラ
神秘的な光景に目を奪われつつも、リュオーガ族が指定した居城を探す
「でもさ、こんな所に城なんてあるのか?」
一誠が素朴な疑問を口に出してから暫く辺りを見渡していると———新が「あったぞ」とある方角に指を差す
その先に聳(そび)え立つ氷の城
西洋の地で見掛けるようなデザインをした門の周辺にドラゴンの氷像が並列している
恐らくこれがリュオーガ族の拠点だろう……
その時、氷の地に似つかわしくない音が響いてくる
マフラーから煙を噴かすエンジン音
鋼鉄の馬(バイク)に跨がった異形が新達に近付いてくる
目の前で停車し、バイクから華麗に飛び降りて着地
そしてピストルサインをした右手を新達に突きつけた
「待たせたな、ベイビー。リュオーガ族の黒き弾丸、爆進帝王(ばくしんていおう)、爆進熱血漢(ばくしんねっけつおとこ)、剛力無制限(ごうりきむせいげん)、ニトロ・グリーゼ様のお出迎えだアッ!」

ビシッとポーズを決めるニトロだが、新達は冷めきった反応だった……

冷めた視線に気付いたのか、ニトロは軽く舌打ちする

「んだよ、その反応は。ノリが悪い奴らだぜ。ここは形だけでも拍手すんのが礼儀じゃねぇのか？」

「そんな気分になれると思ってるの？私達はセラフォルー様とソーナを取り返しに来たのよ」

リアスは怒りを孕んだ声音で一蹴するも、ニトロは全く臆せず「あぁ、そうだったな」と軽く受け流す

「安心しな、〝今は〟無事だ」

「今は……？どういう意味？」

「あの嬢ちゃん２人はこれから始まる〝パーティーの賞品〟って事さ。万が一お前らが生き延びれば、嬢ちゃん２人は解放。負ければＴｈｅ　Ｅｎｄ（エンド）――嬢ちゃん共々死んでもらうって寸法だ」

「てめぇ……ふざけやがって！」

「会長もセラフォルー様もお前らの道具じゃねぇんだよっ！」

激昂する一誠と匙はニトロに殴りかかろうとするが、新に制止される

こんな所で始めても意味が無い上にセラフォルーとソーナが人質に取られている

下手に動けば2人の安全は保証されない……
新は一誠と匙にその事を説明して2人を落ち着かせた
一方、ニトロは品定めするかの如くリアス達を眺めている
特に小猫、ギャスパー、仁村留流子（にむらるるこ）に対する視線には妙な熱があった
『……ッ。な、何か凄く嫌な予感がしますぅ……』
「さて、そろそろ案内するぜ。ついてきな。ラース達も待ちくたびれてる頃だろうよ」
ニトロは再びバイクに跨がってエンジンを噴かし、ゆっくりと城の方に向かっていく
新達もニトロの後を追い、城門の前まで辿り着いた
「おーい、開けてくれ！」
ニトロが声を掛けると大きな音を立てて門が開き、中へ案内される
城の中までも氷一色で占め尽くされていた
床、壁、柱、天井、あらゆる装飾全てが氷で作られており、幻想的な美しさを引き立てる
そこへ螺旋階段からコツコツと降りてくる人影
「……ようこそ、私達の居城――フローズンパレスへ」
やって来たのは胸元の開いたゴスロリ服に身を包んだツインテールの少女――レモネード・フォールン

にこやかな微笑みを見せ、スカートの裾をたくし上げて一礼する
「おう、レモネード嬢。ラース達は？」
「……ラースとアノンはおもてなしの準備、ジュウゾウは先に自分の部屋で待機してる」
「そっか。じゃあ、後は大広間へ案内するだけだな。任せても良いか？俺は愛機のメンテナンスをしてやらねぇといけねぇからよぉ」
「……大丈夫。後はやっとくから準備してて」
ニトロはレモネードにバトンタッチした後、「頼むぜ」と一言告げてからバイクで螺旋階段を駆け上がっていく
恐らく〝自分の部屋〟に向かうのだろう
案内を請け負ったレモネードは「……こっち」と呟いて新達を先導し、新達も彼女の後に続く
「……あの娘、只者じゃないな」
ふと一誠がそんな事を言い出した
新は直ぐに一誠の意図を察し、匙と渉は疑問符を頭に浮かべる
「兵藤、あいつらの力が半端じゃないのはさっき知ったばかりだろ？何でいちいち――」
「分かってないな、匙」

「……？どういう事ですか、一誠さん？」
未だに疑問が解けない匙と渉に対し、一誠はレモネードを見ながら〝只者じゃない理由〟を説明する
「見てみろ、あの娘の服――あんなに背中を露出させてるじゃないか」
「……は？」
思わず間の抜けた返事をする匙
一誠の言う通り、レモネードのゴスロリ服は胸元だけでなく背面も大きく開いており、腰辺りまで露出していた
一誠は更に熱弁を続ける
「しかも！あの娘のおっぱいは恐らく小猫ちゃん以上アーシア未満のサイズ！そんなサイズであるにもかかわらず、胸元と背中の開いたゴスロリ服を着こなしている！ああ言ったエロい服は普通なら巨乳の美少女かお姉さんが着る物だ！成長途中のおっぱいを持つ女の子はまず恥じらって着ない！着てくれない！その原因はおっぱいの小ささを気にしてしまうからだ！だが……あの娘は毅然としてる上にこれでもかってぐらい見せてくれているッ！これは自分に自信が無いと到底出来ない事なんだよッ！」
「……お前、そんな事考えてたのか？」
「そんな事とは何だッ！もし、あの服を会長さんが着たらどうなると思うっ!?」

一誠の力説に匙はゴスロリ服を着たソーナの姿を思い浮かべ――――

「ぐはっ！た、確かにスゲェ破壊力だ……ッ！いつも清楚な会長があんな露出度の高い服を着たら……とんでもない事になっちまう！」

「そうだろそうだろ!?うちのアーシアちゃんにも言えるぞ！いつも控えめなアーシアが積極的な小悪魔に……くぅっ！思い浮かべただけでたまらんッ！」

「兵藤、お前アーシアさんにあんな服を着せようと……!?」

「アーシアがエロい服を着てくれるなら、俺はどんな苦行にも耐えてみせるッ！それが男ってもんだろ!?」

「くそぉ……！お前は何処まで先を行くつもりなんだ……ッ！同じ『兵士（ポーン）』なのに……ッ！」

「盛り上がってる所に水を差すようで悪いが、そろそろ止めないと――――始まる前に死ぬぞ？」

一誠と匙は声のした方向を見る

そこには新が小猫の折檻を食らっている姿……

腕があらぬ方向に捻（ひねる）り上げられ、関節の可動域を超えていた

恐らく一誠の〝あの娘のおっぱいは恐らく小猫ちゃん以上アーシア未満のサイズ！〟が彼女の地獄耳に入り、新は八つ当たりの贄（にえ）にされてしまったのだ……

半眼でジロッと睨む小猫
一誠と匙は身の危険を感じ、これ以上の話はするまいとばかりに口を塞いだ
そんなバカなやり取りをしてる間に大広間へ到着
レモネードが「……座って」と巨大かつ豪華なテーブルの周りに並び立つ椅子へ先導する
新達は言われるがまま席に着いた
そこへやって来たのは――――ラース・フレイム・ドラグニルとアノン・アムナエル
ラースは軽い会釈で挨拶する
「ようこそ、下等生物の諸君。寒い中ご足労いただいてありがとう」
「俺らを労ってるつもりか？いくら取り繕ってもクセェ憎悪がプンプン匂ってきやがるぜ」
アザゼルが挑発の意を込めて言うが、ラースは冷笑を浮かべるだけだった
「1番臭いのは穴だらけの脳みそと不細工なヒゲを蓄えた君だと思うよ。腐れ堕天使ごときがリュオーガ族のおもてなしを汚さないでくれ」
「……早速綻びを出しやがったな、このゲス野郎」
「リュオーガ族のおもてなしを受けるのは腐れ下等生物の義務さ。腐敗に爛れて腐りきった頭でしか考えられないド腐れ堕天使には理解出来ないだろうね」

敵意どころか殺意を沸騰させるラースの言動
アザゼルは何とか堪えて様子を窺い、今度はリアスが訊く
「セラフォルー様とソーナは無事なんでしょうね？」
「おっと、下等生物の腐れ悪魔はお友達の心配かな？アノン」
「ＯＫ～。テジ・ナ～・ニャッ！」
アノンがステッキを振るうと〝ボンッ！〟と言う音と共に大きな鳥カゴが出現した
その中にはセラフォルーとソーナの姿が……
「あ！リアスちゃん！皆～っ！」
「セラフォルー様！ソーナ！」
「この通り無事だよ。そもそも四大魔王を簡単に殺しちゃったら、つまらないじゃないか。君達のもがき苦しむ姿を見せつけてから殺す。そうしないと面白くないし、気が晴れないからね」
吐き気を催すラースの嗜好にグレモリー眷属とシトリー眷属のボルテージが上がる
今ここで始めるのかと思いきや、ラースが掌を向けて首を横に振る
「やれやれ、前座すら始まってないのにコレか。如何にも下等生物と言える短絡的な思考だよ。まずは――僕達のおもてなしを味わってもらわないと」
ラースが指を鳴らすとアノンとレモネードが何かを宙に浮かべて運んでくる

１つ１つ丁寧に置いていくそれは――綺麗に盛り付けられた料理の数々
見栄えはフランス料理の如く豪華さを強調していた
突然の料理提供に全員が少し困惑気味の表情となり、配り終わるとラースは得意気に口を開く
「１人につき６皿ずつ用意している。手前の左から『トリュフとマッシュルームのゼリー寄せ』、『牛フィレ肉とフォアグラのロッシーニ』、『舌平目（したびらめ）のムニエル、パプリカ達のピュレー添え』。奥の３品は左から『エスカルゴのソテー、ガーリックとバジルのソース』、『オマール海老を夕暮れの海に浮かべて』、そして最後が『男爵イモのビシソワーズ』。リュオーガ族自慢の歓迎料理さ。本番を始める前に歓迎料理を振る舞う――――それがリュオーガ族の習わしだよ」
「敵に料理を食わせるなんざ、変な習わしだな。毒でも入れてんじゃねぇだろうな？」
疑り深くアザゼルは探りを入れるが、ラースは淡々と返す
「そんな事はしないよ。自ら恥（みずか）を晒す様な真似で君達を殺せば、リュオーガ族の汚点になる。それでも気に召さないなら――――腐れ堕天使の分だけ下げても構わないね？」
「まあ待て、もう少し様子を見させてもらおうか」
ラースが〝アザゼルの分だけ〟下げようとした瞬間、アザゼルは〝やめてくれ〟と言わんばかりに料理を死守する

食い意地の張った弁明に呆れ顔のリアスが小猫に訊く
「小猫、どう？」
「……毒の類が入ってないのは確かです」
猫又モードの小猫が慎重に匂いを嗅いだ結果、ラースの宣告通り毒は入ってない様子
とりあえず料理を食さないと先へ進めない
新達はナイフとフォークを手に取り、恐る恐る料理を口に運ぶ
各々がリュオーガ族の歓迎料理を一口ずつ食べた……
ゴキュッとなる喉の音
その直後――――絶叫が氷の城内に響いた
「「「美味アアアア

一誠と匙に至っては美味過ぎて涙が出てしまう程だった

「……蕩けます……にゃぁ……」

「ぼ、僕！エスカルゴって初めて食べましたぁぁぁ！こ、こんなに美味しいんですかぁぁ!?感動ですぅぅぅ！」

小猫の猫耳が蕩ける様に垂れ下がり、ニンニクを克復中のギャスパーも感極まる

他の者達もあまりの美味さに悶絶寸前となっていた……

「そ、そんなに美味しいの!?」

その様子を食い入る様に見ていたセラフォルー

匙が震えながら料理の美味さを実況しようとするが、美味過ぎた為に思考力と言語がおかしくなる

「か、会長！セラフォルー様！ヤバいっすよ……ッ！もう……に、肉がニクの２９デＮＩＫＵ荷九仁区弍久煮苦ウウウ

ムスッと拗ねるセラフォルーを他所に料理を食べ終えたリアス達
その殆どが心地良さそうな表情になっていた
「どう？リュオーガ族のおもてなしは堪能してくれたかい？」
「料理は悪くなかった。これで終わってくれるなら最高なんだが……そうじゃないんだろ？」
アザゼルの探りを掛けた言葉にラースは〝当然だよ〟冷笑を浮かべる
「料理を振る舞ったのはあくまで前座に過ぎない。パーティーを始める前に最期の晩餐を満喫させてあげようと気遣ってあげたんだ。ここからが僕達リュオーガ族の主催するパーティーの始まりだ」
ラースは先程と同じ様に指を鳴らす
すると、奥の扉が独りでに開き――中から呻き声が聞こえてくる
重厚な足音と共に現れたのは……全身が氷で覆われた巨大なドラゴン
生暖かい吐息が牙の隙間から漏れ、鋭い眼孔が新達を睨み付ける
まさに天国から地獄と言う表現が相応しい……
「僕達が飼っている『氷結竜（アイス・ドラゴン）』さ。並の上級悪魔も余裕で殺せる。今まで招待してきた奴らも殆どコイツの餌になっちゃったよ。……君達はどうかな？」
何処までも悪趣味なラースのやり口にリアスは怒りを孕み、自ら挑もうとしたが……

今まで沈黙してきた総司が前に出る
「リアスちゃん、ここは君達が出る時じゃない。まだ後にラース達が控えている。私が行くよ」
「……親父？」
「せめてこんな時ぐらい、君達の助け船になってやりたいんだ。ここから先は……君達に任せるよ」
そう告げた後、総司は全身からオーラを迸らせ――闇人の姿と化した
「おや？竜崎総司、その姿はどうしたんだい？」
「私は既に引退した身なんでね。その代わりと言うべきかな」
「ふぅん。まあ、ド腐れ悪魔どもと組んでた時代よりは良い姿じゃないか」
ラースが再三指を鳴らすと同時に氷のドラゴンが雄叫びを上げて突っ込んでいった
城の床にヒビを入れながら突進してくるドラゴン
総司は両手に赤いオーラを集束させ、刃物状に研鑽する
頭上から振り下ろされる爪の一撃を十字受けで防ぎ、横薙ぎに切り払った
５本の指が宙を舞い、氷のドラゴンが苦痛に叫ぶ
その隙に総司が両手でドラゴンの腹を突き刺し、力を込めた刹那――赤いオーラが背中を突き破り、氷のドラゴンは儚い音を立てて崩れ落ちていく……

巨大なドラゴンを一撃で滅ぼした総司
実力はやはり折り紙付きで衰えていなかった様だ
破片の崩落によって舞い上がる氷霧
その僅かな隙間から――――ラースが右手を構えていた……っ
狙いは……リアス達……っ
「――――『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！
皆を嘲笑い、ラースの手から放たれた火柱は文字通り火竜の形となって襲い掛かる
総司は氷霧で視界を奪われた新達の前に割り込み――――火竜に呑み込まれた……っ
「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」
「……ッ！親父イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」
氷の場内に親子の絶叫と無慈悲な火竜の咆哮が延々と響き渡る……っ

竜獄の宴、始まる

リュオーガ族の拠点とも言うべき氷の城――――フローズンパレス内で響き渡った絶叫

ラースの放った『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』が消え去り、残されたのは黒煙を立ち込める総司の姿……

黒焦げになった全身から血が噴き出し、総司の肉体が闇人（やみびと）から人間の姿に解除される

倒れ伏す総司、父親の名を叫んで駆け寄る新

一誠はアーシアに緊急治療を施す様に言い、アーシアは直ぐに総司の治療に取り掛かった

ラースの非道な行（おこな）いに憤怒の形相となる面々だが、ラース本人は全く意に介さず冷笑を浮かべるだけだ

「フフフ……ッ、本当に愚かだね、その男は。自（みずか）らを犠牲にしてクズ共の盾になる。――――それはこの世で最も賢くない生き方だよ。単純な思考だけで生きるバカの末路、こんな奴が存在する事自体――――可笑しくて笑っちゃうよ」

「……ッ。テメェ……ッ！」

「思ってた以上に外道ね……っ。四大魔王に直接挑まず、関係者から殺そうとするなんて！」
「それじゃあ意味が無いよ。言っただろ、最大級の屈辱と悔しさを与えてやらないと気が済まないって」
ラースの言動に新は勿論、リアス、一誠、その他のメンバーはキレる寸前
ラースは鬼気迫る殺気を当てられても毅然とした態度のまま、話を続ける
「僕達が憎いか？ならば、今から行う本番で怒りをぶつけてくれると良い。僕達リュオーガ族の宴――『竜獄の宴』でね」
ラースが指を鳴らすと新達の前にボックスが出現する
テレビ番組のくじ引き等で使われるようなボックスだ
「その箱の中には僕達5人がそれぞれ守護する部屋の名を記した紙が入っている。君達はそれを引いて部屋に入り、僕達と戦う。参加人数は自由に決めて良いよ。部屋から出られるのは勝利者側のみ、敗者は即座にこの広間へ追い出される。まあ、このルールが適用された相手はいないけどね。何せ……今まで招待した客は全員が弱すぎて死んでしまったから。そして、最後は勝ち残った者同士で戦う。――これが『竜獄の宴』だ」
「つまり、お前ら1人1人に対して複数で挑んでも文句無しって事か。随分と余裕ぶってやがるな」

「その通りさ、ド腐れ堕天使。君達を殺すなんて余裕なんだよ。僕達にとっては。精々シラケさせない程度には足掻いて欲しいものだね」
度重なるラースの挑発に不快感を見せるアザゼル
ラースはアノンとレモネードを呼び寄せ、それぞれの部屋に戻るよう指示
残ったラースも自身の部屋へと戻っていった
残された新達はラースが用意したボックスの前に立つ
「まずは参加する人数を決めなきゃな」
「部長、メンバー編成はどうします？」
「そうね……。まずアーシアとレイヴェルはここに残しておきましょう。回復要員を参加メンバーに入れても、彼らには絶好の標的になるわ。それを踏まえるとここで負傷者の治療に専念してもらう他無いわ。アーシア、レイヴェル、頼めるかしら？」
「は、はい！皆さんの治療はお任せください！」
「私も異存はありませんわ！少しでも皆様のお役に立てるなら！」
「なら、念のため俺も残るとするか。万が一の保険って事で」
「先生、アーシアとレイヴェルをお願いします」
大広間に残るのは未だ治療を受けている戦闘不能状態の総司、回復要員のアーシアとレイヴェル、そして護衛役にアザゼル

それ以外のメンバーが『竜獄の宴』の参加者となった

さあ、いよいよ部屋割りの始まり

まずは新がボックスの中から1枚引く

引いた紙には何も書かれていなかったが、徐々に文字が浮かび上がってくる

新の行く部屋は――『泉の間』

次にリアスが1枚引く

リアスが引いたのは――『竜星の間』

更に一誠達も続いてボックスから紙を引いていく

数分後、全ての部屋割りが決定した

『竜星の間』……リアス・グレモリー、姫島朱乃、八代渉、高峰祐希那

『泉の間』……兵藤一誠、竜崎新

『月影の間』……木場祐斗、ゼノヴィア、紫藤イリナ、由良翼紗、巡巴柄

『血溜りの間』……ギャスパー・ヴラディ、搭城小猫、ロスヴァイセ、仁村留流子

『人形の間』……真羅椿姫、匙元士郎、花戒桃、草下憐耶

「ぼ、ぼ、僕達の部屋だけ嫌なネーミングですぅぅぅ！何ですかっ、何が血だらけになっちゃうんですかぁぁぁぁぁぁ!?」

涙目で訴えてくるのはギャスパー

確かに『血溜りの間』は名前から嫌な予感しか漂ってこないが……
「文句言うな、ギャスパー。ここでグダグダ言っても始まらないぞ？」
「小猫とロスヴァイセもいるんだ。俺達に比べればマシだろ」
「ふぇぇぇぇっ、先輩達のポジティブさが羨ましいですぅぅぅ……っ」
嘆いていても決まったものは仕方無い、全員がそれぞれに割り当てられた部屋の前に立ち――――扉を開けて中に入る
凍てつく氷の城で悪魔と忌まわしき竜人達による恐怖の宴が始まる……っ

「ここが『竜星（りゅうせい）の間』ね」
小さく輝く星が無数に散りばめられた部屋はリアス、朱乃、渉、祐希那が引き当てた『竜星（りゅうせい）の間』である
まるで宇宙空間にでもいる様な部屋で、様々な星座が薄暗い光景の中で映えていた
ゆっくり部屋を散策していると、柱の陰から1つの人影が……
「ようこそ、僕が守護する『竜星（りゅうせい）の間』へ」
「……なるほど。ここはあなたの部屋って事ね」

リアスが睨む視線の先にいたのはラース・フレイム・ドラグニル
ラースの存在を確認するとリアス達は即座に臨戦態勢に入った
ラースは不適な笑みを浮かべ――――背中から大きな両翼を広げる
「フフッ、僕の部屋を引き当てた事を後悔するんだね。君達は所詮、リュオーガ族復活を記念する生贄(いけにえ)でしかないのさ」

「ここが『泉の間』か？」
「何か随分と穏やかな場所だな」
新と一誠が引き当てた『泉の間』は、これから死闘が始まると言うのにあまり似つかわしくない場所だった
並列した木々に囲まれた泉、空を飛び交う鳥達
仄かに漂ってくる花の香りが先程まで滾(たぎ)っていた闘争心を緩めていく
「それより、この部屋の主は5人の内の誰だ？一向に姿が見えねぇな」
「ズバリ！あのレモネードって娘(こ)に違いない！この風景とあの娘を照合してみろ！見事にマッチするぞ！グフフッ、俺達の相手でありますように♪」

一誠がバカな妄想をしていると「残念だったニャ～♪」と特徴的な声が聞こえてくる
２人の目の前で空間が歪み、そこからこの部屋の主――――アノン・アムナエルが姿を現した
「この『泉の間』は僕の部屋なんだニャ。レモネードは別の部屋にいるニャ」
「ちくしょぉぉぉぉぉぉぉっ！俺の密かな期待を裏切りやがってぇぇぇぇっ！」
「密かどころか思いっきり下心にまみれてんじゃねぇか。まあ、世の中そんなに甘くねぇって事だ」
「それにしても僕の相手はお二人だけかニャ。これはもう勝ったも同然だニャ。」
アノンはステッキを器用に回し、先端を新と一誠に向ける
「『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』を心逝（こころゆ）くまで楽しんでもらうニャ♪」

「ここが私達が引き当てた『血溜りの間』ですか」
ロスヴァイセ、小猫、ギャスパー、仁村が引き当てた『血溜りの間』
そこは広大な荒野と言った様相であり、名前ほど恐ろしい場所には見えない
その筈なんだが……ギャスパーは未だに『血溜りの間』と言う不吉なイメージに囚わ

れ、ビクビク震えている
すると、遠方から土煙が発生してこちらに向かってくる
先程聞いたエンジン音と共に鋼鉄のバイクから『血溜りの間』の主が勢い良く降り立つ
「爆・進・熱・血ウウウウウッ！リュオーガ族一の韋駄天野郎オッ！黒き弾丸ッ！爆進帝王ッ！爆進熱血漢ッ！ニィトロ・グリィィィゼェェッ！参ッ上オオオオオオオッ！」
ビシバシとポーズを決めて大地を震わせる様な大声で叫ぶ『血溜りの間』の主――ニトロ・グリーゼ
最早〝ついていけない〟を通り越して〝ウザい〟ハイテンションぶりに小猫は顔をしかめて「……うるさいです」と毒づく
しかし、当人はそんな事を一切気にせず自分の相手になる小猫、ギャスパー、ロスヴァイセ、仁村を見渡す
「――フッ、やっぱりな。だからベイビー達は俺の部屋を引き当てたんだな」
「……？」
４人全員が疑問符を浮かべていると、ニトロが小猫、ギャスパー、仁村の３人に指を差してこんな事を言う
「そこのベイビー達――俺に惚れてんだろ？」

一瞬で空気が凍結する一言……
何故そう言う話になるのか全く意味が分からなかった……
対応に困惑するギャスパーとドン引きする仁村、そして侮蔑の視線を向ける小猫
それでもニトロは独自の脳内展開を語り始めた
「隠さなくても良い、俺には分かる。ベイビーちゃん達は素直になれないだけのツンデレ後輩キャラだ。なかなか本音を言い出せない、そうだろ？だが、安心しな。俺はそんなベイビーちゃん達も包み込む。愛ってのは――ぶつけてナンボだ」
「……キモい」
過去最上級の罵倒を浴びせる小猫だが、ニトロは全く動じない――と言うより全く聞いていなかった……
しかも、男の娘であるギャスパーにも目を光らせており――ニトロはキラリとウインクし、大量の☆マークを3人に浴びせようとした
危険を察知した小猫は即座にギャスパーを盾にして回避、盾にされたギャスパーは☆マークを全て被弾してしまう……
「フギャッ！」と悲鳴を上げて仰け反るギャスパー
ニトロの爆走、もとい――暴走魂が駆け足と共に加速していく……
「さあっ！俺と愛を育（はぐく）もうぜベイベェェェ

エエエエエエッ！」
「ひっ、ひいいいいいいいっ！な、何か怖いですううううううううううううううううっ！」

薄暗い夜の下、巨大な満月が舞台となる草原を照らす『月影（げつえい）の間』
巨大な満月を背後にあぐらをかいて座り込むのは『月影の間』の主――長光重蔵（ナガミツ・ジュウゾウ）
この部屋を引き当てた祐斗、ゼノヴィア、イリナ、由良、巡の５人はジュウゾウの静か威圧感に押され気味になっていた
ゼノヴィアはデュランダルを取り出して一気に斬りかかろうとするが、険しい表情を浮かべる祐斗に止められる
「皆、もう少し後ろに下がって」
「木場、どういう事だ？」
「あのヒト、無防備に座っている様に見えるけど……隙が無い。もし、僕達が一歩でも攻撃範囲に足を踏み入れたら――間髪入れずに殺られる……」
祐斗の言葉に緊迫感が走り、全員が固唾を飲み込む

安易に攻めてこないのを気取ったジュウゾウはゆっくりと立ち上がった
「迂闊に飛び込んでくるアホやあらへんか。少しは頭の切れる奴もおるようやのう」
「そんな人達は嫌と言う程見てきたものでね。気配ぐらいは読みますよ」
「ほぉ……毛ぇ生えた程度のガキにしちゃあ、えぇ度胸しとるやないか。その方が殺し甲斐もある。丁度ええ、久々に骨のある奴と手合わせしたかった所や。――暴れさせてもらうで」
ゴウッッ！
ジュウゾウは挨拶代わりに全身から殺気を放ち、祐斗達にプレッシャーを与える……

「ここが『人形の間』ですか」
椿姫、匙、花戒、草下の４人が足を踏み入れた『人形の間』
そこは他の４つと違ってかなりファンシーな造りになっていた
部屋のあちこちに置かれた熊やパンダ、犬、猫などのヌイグルミ
童話に出てくる様相のベッド
まるでおとぎ話のお姫様が住んでいるような部屋だった

匙達は早速部屋の主を探そうとするが、何処にも見当たらない
何処かに隠れているのだろうか？
警戒しながら辺りを見回していると〝ミシ……ッ〟と何かが軋む音が聞こえた
音のした方向に視線を移すと――――いつの間にかベッドに『人形の間』の主が座り込んでいた
この部屋の主はゴスロリ少女――――レモネード・フォールン
一同は気配も無く現れた彼女に驚く
「い、いつの間に!?」
「……私の部屋へいらっしゃい。遊びましょう？」
レモネードはスッと右手を前に掲げる
その直後、匙達は妙な視線を浴びせられている事に気付き、ゆっくりと後ろを振り返ってみると――――先程見たヌイグルミ達が独りでに歩き始めた
それだけならまだしも、異変は終わらない……
可愛らしいヌイグルミ達がプルプルと震え、不快な音を立てながら肥大化していく
まるで水を吸い続けてふやけた水死体の様な体躯に成り果て、可愛らしい要素は完全に消え去ってしまった……
醜悪なバケモノと化した人形達を前に匙達は身構え、レモネードはクスクスと不気味

に微笑む
「……私の可愛いお人形、いっぱい遊んであげてね？」

場面は大広間へ戻り、回復要員として残ったアーシアとレイヴェル
お目付け役のアザゼルに先程ラースの『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』で身を焼かれた総司
総司の傷はアーシアとレイヴェルの治療によって何とか回復し、意識を取り戻したものの体力は消耗していた
新達がいない事に気付き、同時にアザゼルから『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』が始まった事を告げられる
それを聞いた総司は顔を青ざめ、止めに入らんとばかりに体を動かそうとした
「おい、怪我人はジッとしてろよ。大体、あんな奴らを1人で相手にしようとしてたのか？自殺行為だぞ」
「ダ、ダメだ……ッ！ダメなんだ……ッ！君達は彼らの恐ろしさを全く分かっていないッ！この『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』で何人もの戦士や強者が殺されたんだ！彼らの得意とする領域で戦ってはいけないッ！」

激しく狼狽する総司
リュオーガ族の恐ろしさを知っており、皆の命を思って止めに行こうとするが……体が思うように動かない上、アーシアとレイヴェルに止められてしまう
だが、総司の思惑はそれだけではなかった
『それに――――もし、新が〝アレ〟に気付いてしまったら……自分の正体を知らされたら――――ッ！』
そんな一悶着しているとアザゼル達の前にスクリーンが出現し、『竜星の間』の様子が映し出される
画面の中に映るラースがアザゼルに告げてくる
『不参加の君達にはお友達が公開処刑されるのをそこでゆっくり見物すると良いよ』
「今の内に大口叩いてな。後悔するのはどっちか、すぐに分かるからよ」
『フッ、ド腐れ堕天使は随分と自信満々だね。僕はね……君の様な自信家の鼻っ柱をへし折るのが大好きなんだ。ここだけじゃなく、他のお友達が嬲り殺しにされるのを見て後悔するが良いさ』
そう言っているとラースが何らかの気を察知したのか、フムフムと小さく頷き始める
その後に口の端を吊り上げた
『どうやら早くも動きがあったみたいだよ。その映像を映してあげるよ』

ラースが指を鳴らすと別のスクリーンが出現し、徐々に部屋の様子が明らかになっていく

画面に映り込んだのはバケモノと化した人形を相手に奮闘している椿姫達

中継されているのは『人形の間』

人形達に攻撃を仕掛けていくが、どれも決定打を与えられず……時折防戦を強いられる場面も目立つ

そんな中、匙が黒炎（こくえん）を纏わせた拳を繰り出そうとする

少しは優勢になるだろうと思った矢先――――信じられない光景を目撃してしまう……

匙の黒炎付き拳打によって吹き飛ばされたのは――――椿姫の方だった……っ

その光景に言葉を失うアザゼル

しかも、椿姫だけじゃなく花戒と草下にも黒炎を放つ

何故、匙が味方を攻撃している……っ!?

アザゼルの顔から先程までの余裕が消え、アーシアも信じられない光景を見て口元を手で覆ってしまう

「な、何やってんだよっ、あいつは!?そっちじゃねぇだろっ！」

『無駄だよ、君達の声は聞こえやしない。僕が聞こえないように設定してるのさ。逆に

言えば、僕が好き勝手にいじれば聞こえるように出来る。でもね、今はそんな事しないよ。そこでおとなしく見て――絶望するんだね』

「貴様……ッ！」

憤慨するアザゼルを他所に、画面の中の匙は椿姫達を次々と攻撃していく

椿姫達は相手が匙であるがゆえに反撃も出来ず、ただ人形と匙の攻撃を凌ぐしかなかった

次第に疲弊も増していき、人形達に囲まれてしまう

何故、匙は味方に牙を向くのか……？

いったい、何が彼をそうさせるのか……？

アザゼル達は何も分からぬままま、この残酷な光景を見届けるしかなかった……っ

人形使いレモネード

リュオーガ族による『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』が開始されて早々、動きがあった『人形の間』
椿姫、花戒、草下の３人は思いがけない事態に苦戦を強いられいた……
突如、匙が敵側に寝返り攻撃を仕掛けてきたのだ
バケモノ人形と共に取り囲み、椿姫達の退路を断つ匙
「元ちゃんっ！どうしちゃったの!?目を覚ましてっ！」
「私達は味方だよっ!?」
花戒と草下が必死に呼び掛けるが、匙は一向に返事をしない
ただ苦しそうに顔を歪め、歪（いびつ）な動きをするだけ……
そんな匙の後方で悠々と高みの見物をしているレモネード
〝彼女が何らかの方法で匙をコントロールしているのではないか？〟
椿姫はそんな疑念を脳裏に浮かべるが、どの様にしてコントロールしているのか……
その方法が分からない
次々と襲ってくるバケモノ人形の攻撃を回避しながら頭を働かせるが、この苦しい状況が思考を鈍らせる

『いずれにしても、何とか匙を解放させなければ……っ！しかし、どうやって匙を……？』

バケモノ人形の猛攻に耐え続ける椿姫、花戒、草下の3人をただ眺める事しか出来ない匙

そう、椿姫の読み通り――――彼は自分の意思での行動を封じられていた……っ

言葉を発せず、指1本すら自分の意思で動かせない

『クソ……ッ！クソ……ッ！チクショウ……ッ！口どころか指1本動かせないなんて……ッ！こんなの有りかよ……っ!?副会長や花戒、草下に伝える事も出来ず、操られて自滅だなんて……ッ！ふざけんなよ……っ！』

悔しさ、嘆き、憤(いきどお)りを心中で吐露し続ける匙

言葉と行動を封じられ、操作されてはいるが――――思考だけは己の物だった

しかし、それらは相手に伝えられなければ意味が無い……

どれだけ心中で叫んでも、結局届かない

主犯であるレモネードを睨み付けようにも、それすら叶わずただ操られる……

惨めな程の愚かさ、不甲斐なさ、まさに今の匙はレモネードの操り人形――――道化だった

『……クスクスクス、無理よ。あなたはもう自分の意思ではどうにも出来ない。全部、私

の思いのまま……』

レモネードの指に呼応して躍り続ける哀れな道化(匙)

匙の心中を読み取り、面白がる

『……どう？これが私の竜奥義(りゅうおうぎ)――「道化の遊戯(サイコ・ストリングス)」。目に見えないほど細いオーラの糸で相手を操れる』

そう、匙はやはりレモネードによって操られていた

彼女の指から伸びたオーラの糸が匙に接続し、意のままに操っていたのだ

更にオーラの糸は視認が難しいほど細い

周りにいるバケモノ人形達もこの能力で動かしていた

レモネードは『道化の遊戯(サイコ・ストリングス)』で幾多の戦士、強者達を葬(ほうむ)ってきた

単独ならばその者の動きを止め、バケモノ人形で嬲(なぶ)り殺し

複数なら、その内の1人を操って同士討ちさせる

彼女自身は自(みずか)ら手を汚す事無く、相手同士の共食いによって自滅

操られ、仲間を屠(ほふ)り、惨めな最期を遂げる……

哀れな道化人形を演じる舞台、それがこの『人形の間』

彼女の前ではどんな戦士だろうと――たちまちオモチャにされ、操り人形と成り下がり……最終的には死に果てる……

『……クスクスクス、どんなに抵抗しても無駄。あなたは私の操り人形。私の為に踊って、遊んでね？』

『クソォ……ッー・クソォ……ッー・クソッ、クソッ、クソッー・チクショウッ！』

腹の底で怒りを露(あらわ)にする匙だが、自分の意思ではどうする事も出来ない

その間にも椿姫達はバケモノ人形の猛攻で傷付いていく

衣服が薄皮と共に斬られ、彼女達の肢体が徐々に露(あらわ)になってきた

匙は思わず釘付けになってしまい、顔を赤らめる

元から女性に対しての免疫力が低い匙にとって今の状態は死活問題

視線すら自力で逸らす事も出来ないのだから椿姫達の肢体を直視してしまう……

そんな匙の心境に気付いたレモネードは口元を押さえてクスクスと笑う

『……あなた、見掛けによらず純情さん。女の子とまともに手を繋いだ事も無いのね』

『……ッ!?な、何でそんな事が……ッ!?』

『……私とあなたは今、繋がってる。この糸を介して、あなたの心も分かるの。「道化の遊戯(サイコ・ストリングス)」は相手を操るだけじゃない。その人の心中まで暴いちゃうの。……あなたの心が手に取る様に分かる』

『ひでぇよっ！プライバシーの侵害だっ！』

匙の心中を隅々まで暴いたレモネードは何を思い付いたのか、バケモノ人形の動きを

ストップさせる
力無く停止するバケモノ人形を不審に窺う椿姫達に操られた匙が襲い掛かる
両手に黒炎を纏わせた匙の拳を何とか回避するものの、やはり攻撃する事が出来ない
椿姫に向かって繰り出される黒炎の拳を花戒と草下が防御魔方陣で止めようとする
拳が防御魔方陣に直撃し、バチバチと魔力が迸る
「元ちゃんっ！お願いっ、もうやめてっ！」
花戒が必死に呼び掛けるが、その願いは今の匙には届かない
レモネードは指を動かし、匙にもう一度黒炎の拳を繰り出させて防御魔方陣を壊す
破壊された防御魔方陣の破片が花戒と草下の肌を斬り、再び彼女達の肌の露出度が上がる
レモネードは好機と見て匙を花戒の眼前まで動かし――――
モニュウッ
――――花戒の胸を鷲掴みさせた
一瞬、何が起こっているのか分からなかった花戒だが……数秒後に正常な思考を取り戻し現状把握
顔がみるみる赤く染まっていき、絶叫した
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！げ、元ちゃんっ!?なななななんで何でっ!?」

「さ、匙っ!?こんな時に何をやっているんですかっ！」
『んぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！ち、違うチガウチガウっ！俺の意思じゃないんですよ！って言っても伝えられないんだったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！やめろォッ！俺の体で遊ぶなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』
心の中で叫べど、届く筈も無い上にレモネードも止めるつもりは毛頭無い
『……クスクス。どう、初めて触った感触は？』
レモネードの操作によって匙は花戒の胸を揉み続ける、揉み続ける、揉み続ける（笑）
次第に花戒の息遣いが艶(なまめ)かしくなっていき、紅潮の色が強くなる
「げ……元ちゃん……っ。ダメぇ……ダメよぉ……っ。副会長達も見てるのに……っ。こんな……竜崎くんみたいに……エッチになっちゃ……」
『ぬおおおおおおっ！誤解だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！俺の意思じゃないのにいいいいいいいいっ！』
屈辱のあまり血涙(けつるい)まで流れてきた匙
しかし、そんな抵抗も虚しく空振り、おっぱいの感触が匙に言葉に出来ない心地好さを与える
『……ああ……っ、操られているのは分かっているのに、この状況をもっと味わいたいって思ってる俺がいる……っ！情けねぇ……っ、情けねぇのに……っ。これが、これ

が兵藤の言ってたおっぱいの素晴しさなのか……っ』
ムニュムニュと形を歪める花戒のおっぱいを直視、鼻血まで垂れてくる始末
レモネードは葛藤する匙を見てクスクスと笑い、更なる追い討ちを掛ける
花戒のおっぱいから手を放させ、今度は草下のおっぱいを匙に揉ませた
「いやあぁぁっ！げ、元ちゃん……ダメだよぉぉ……っ。――――あんっ。そ、そこはぁ……っ」
『チクショォォォォォッ！憎い！抵抗すら出来ない自分が憎いっ！でもチョー気持ち良いとか思っちまうよォォォォォッ！』
「匙っ！いい加減にしなさいっ！」
見るに見兼ねた椿姫が薙刀の柄で匙の頭を横殴り
匙は草下から離れるが、直ぐに体勢を立て直す
『……クスクスクス、今度はあの人にしようね』
『――――ッ！よ、よせ……っ、やめろ！やめてくれ！副会長は洒落にならない！殺されるウウウウウウウ！』
レモネードの企みに心中では抗うものの、どうにもならない
不規則な動きで椿姫に近付いていき――――隙を突いて彼女のおっぱいに顔を埋めた
「……っ!?こ、この……っ！」

椿姫は薙刀で斬ろうとするが、匙は彼女にまとわりつく様に回避し、薙刀の届かない背後に回って再びおっぱいを鷲掴みにした
もはやただの痴漢行為である……
「やっ、やめなさい匙っ！ぁ……っ、何処に手を入れて……ゃん……っ！」
『ヤバいヤバいヤバいヤバい……っ！殺される！絶対後で殺されるゥゥゥゥゥゥ！』
『……クスクスクス、あなた可愛い♪』
レモネードは空いた手で口元を押さえつつ笑い、匙から滝の様な冷や汗が流れてくる
花戒と草下が駆け寄って引き離そうとするが、匙はなかなか離れない
悪戦苦闘する2人の目に〝ある物〟が映り込む
それは――――僅かに光を反射する糸
ユラユラとオーラを漂わせる糸が匙から伸びている
それを追っていくと頭上から、そして頭上からレモネードの方へ伸びている事に気付く
遂に匙が乱心したカラクリを見破った
「副会長！これです！この変な糸が元ちゃんを操っていたんです！」
「糸……っ？やはり、彼女が操っていたのね……っ。……魔術や暗示の類（たぐい）ではなく、直接コントロールしていたなんて……っ。しかし、元凶さえ分かれば！」

椿姫は持っている薙刀にオーラを集め、切れ味を高めた薙刀を匙の頭上へ振るう
プツッと何かを斬った感触もあり、同時に匙が操り地獄から解放された
「あ、あぁ、動ける！自由だぁぁぁ

やがて黒炎は周囲の黒炎と合わさってレモネードを飲み込んでいった
轟々(ごうごう)と燃え盛る『黒邪(ブリズン)の龍王(ドラゴン)』ヴリトラの黒炎
一矢報いた匙は踵(きびす)を返して椿姫達に土下座する
「本当にスンマセンした！マジでスンマセンした！ただ、あれは俺の意思じゃなくて――」
「え、ええ。それは分かっています。だから、もう顔を上げなさい」
コホンと咳払いする椿姫と苦笑する花戒、草下
何はともあれ、これで『人形の間』での戦いが終わり――
ギュオオオオオオオオオオオオ……っ
否、終わっていなかった……っ
不気味な音がレモネードのいた場所から響いてくる
見てみると――匙の放った黒炎が独りでに渦巻き、レモネードの口へと吸い込まれていた……っ
想像だにしてなかった事態に度肝を抜かれ、絶句する
何が起きたのか全く理解出来ず、黒炎は急速な勢いでレモネードに吸い尽くされた
チュルッと黒炎の端を啜(すす)り、舌を出して苦い顔をする
「……この黒い炎、美味しくない」

「な、何で……何で俺の炎が……っ？」
「……私達リュオーガ族には〝竜の呼吸法〟がある。その呼吸法を習得すれば、こんな風に炎や水を吸い込んで――――返す事も出来る」
クスクスと笑みを浮かべるレモネード
彼女の背中からドラゴンの両翼が広がり、一気にオーラの質が高まる
更にレモネードの口から閃光を放つ炎が出現し、それがどんどん大きくなっていく
危険を感じた椿姫は全員で防御魔方陣を展開するよう指示
椿姫自身も『追憶の鏡（ミラー・アリス）』を展開して攻撃を跳ね返す準備を整える
だが……っ
「――――『火竜の息吹（フレア・ブレス）』」
ゴオオッ!!
華奢な少女の口から吐き出された極大の炎が『人形の間』全体を閃光で覆った……

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！
『人形の間』の扉が大きく吹き飛び、極大の炎の帯が城の壁を突き破って空の彼方へと消

えていく
突然の爆音に身構えるアザゼル
「な、何だ!?今の爆発は!?」
不穏な空気がアザゼル達を支配し、嫌な予感を過らせる
その嫌な予感は見事に的中してしまう……
爆煙の中から複数の人影が飛び出し、アザゼル達の前に落ちる
それは血と傷にまみれ、死に体寸前となった匙、椿姫、花戒、草下の４人だった……
あまりにも酷い状態に絶句するアーシアとレイヴェル
扉の前にはレモネードが佇み、つまらなそうに吐き捨てる
「……その人達、弱かった。それに、探してる人もいない。ハズレ」
「何、だと……っ!?」
激しい敵意を孕んで睨み付けるアザゼルだが、今は匙達の治療を優先させなければならない
放心しているアーシアに回復を呼び掛け、ハッと我に返ったアーシアは急いで回復を施す
その間にレモネードは城の上部に浮遊しているフィールドへ登っていく
各部屋の勝者はそこへ上がり、最終戦が始まるまで待機するらしい

初戦はいきなり黒星を付けられてしまった……
大事な教え子をボロボロにされたアザゼルは拳を氷の床に叩き付け、亀裂を入れる

「フフフッ、どうやら早くも決着がついたようだ。それも君達にとって悪い知らせのようだ」
場面変わって『竜星(りゅうせい)の間』
レモネードの勝利を確信したラースは嫌な笑みを浮かべて報告し、リアス達の戦意を削ぎ落とそうとする
しかし、リアス達は逆に仲間の仇と言う形で戦意を高めた
「そう……なら、その分をあなたにぶつけてやるわ！」
リアスは怒りで底上げした特大の消滅魔力を放ち、朱乃も特大の雷光を解き放つ
渉は魔狼剣(まろうけん)フェンリオスを逆手に持って上空から急降下、祐希那も肥大化させた氷の斧を横薙ぎに振るう
ラースは慌てる事無く、背中から展開した両翼で消滅魔力と雷光を切り裂いた
次に自身の両腕を赤い鱗に覆われた皮質に変化させ、左右の手で魔狼剣フェンリオス

と氷の斧を掴んで止める
余裕綽々のラース・フレイム・ドラグニル
「この程度だと残りの部屋も直ぐに終わりそうだね。精々哀れに踊って散り果てるが良いさ、下等生物(あくま)ども」

再び場面が変わって『泉の間』
この部屋の主であるアノン・アムナエルと交戦中の新と一誠は先程の爆音に気を取られていた
どの部屋で誰がどうなったか知る術(すべ)も無く、一誠は不安に駆られる
その様子を見ていたアノンはステッキをくるくると回して笑う
「ニャハハハハッ♪早くも脱落者が出ちゃったのかニャ～？そう心配しなくても、直ぐにお友達の所へ逝かせてあげるニャ」
「うるせぇ！部長や俺達がお前らなんかに負ける訳ねぇだろ！」
憤慨した一誠は禁手(バランス・ブレイカー)――――『赤龍帝(ブーステッド・ギア・スケイルメイル)の鎧』を展開
背中のブースターを噴かして飛び出し、アノンにオーラのこもった拳打をくらわせよ

うとした
しかし、アノンが指を鳴らした瞬間――アノンの姿が忽然と消え、空振(からぶ)った一誠の一撃はただ岩を破壊しただけで終わった
周りを見渡すと別の方向からアノンが出現
すかさず新も『闇皇(やみおう)の鎧』を展開して剣で斬りかかる
だが、その剣戟もアノンの体を素通りしてしまい……斬った筈のアノンは揺らめきながら消えていく
幻影――即(すなわ)ち偽物
今斬ったのは偽物だった
再びアノンの高笑いが聞こえ、今度は正面にその姿を現す
2人が再三の攻撃を試(こころ)みた刹那――アノンが1人、2人、3人……否、無限に増えていく
夥(おびただ)しい数のアノンが新と一誠を取り囲む
『どうかニャ？これが僕の竜奥義(りゅうおうぎ)――『魔術師(トリッキー・レディオ)の幻影』だニャ。本物の僕はこの中にいるけど、見つけられるかニャ～？』
一斉に喋り出す幻影アノンの群れ
その中に本物のアノンも混じっている

見た目だけで見分けるのはまず不可能
「だったら……全部ぶっ倒すまでだ！」
「俺と一誠の得意分野をナメるなよ」
偽物の群れに本物が混ざっているなら全て薙ぎ払う――――２人はそう言う結論を出した
口で言うのは簡単だが実際は難しい
ましてや相手は四大魔王ですら苦戦したリュオーガ族
アノンの群れは高笑いと共に空中を縦横無尽に飛び回り、２人に攻撃を仕掛けていった
オーラを纏わせたステッキでの刺突（しとつ）や打突、ステッキから噴き出る炎、アノン自身の蹴りも飛んでくる
幻影アノンの群れによる手数は圧倒的に多く、対処しようにもキリが無い
その上、攻撃して幻影を消しても本体が直ぐに新しい幻影を生み出していく
向こうの攻撃は食らうのに新と一誠の攻撃は全て通じない……
消えては現れ、消えては現れを繰り返す悪循環の無限ループ
更にアノンはマントを翻（ひるがえ）して消えると２人の死角から現れ、背中や腹をステッキで突きまくる

瞬間移動マジックの様な移動術を駆使した不意討ち
手品の如く多彩な技と手数で新と一誠を圧倒していく
幻影の群れに苦戦する新と一誠の死角からステッキを構えるアノン
ステッキに螺旋状のオーラが宿り、凶悪な刺突武器と化す
その標的に狙われたのは一誠だった
「弱そうな奴からご退場願うニャッ！」
急加速で滑空し、ステッキで串刺しにするべく向かっていく
当の一誠は幻影アノンの対処に精一杯で背後から向かってくる本物のアノンに気付いてない
それを見た新は幻影アノンをはね除け、滑空してくるアノンを迎撃しようと斬りかかる
だが……アノンは軽やかに躱し、逆に新の左腕をステッキで串刺しにした
ステッキから迸るオーラが新の左腕を焼き払い、その部分の鎧を粉微塵に砕く
「ぐあぁぁぁぁぁぁっ！」
「ニャハハハハッ。他人なんか守ってバカだニャッ！」
その後、アノンはステッキを横薙ぎに振って新を泉に殴り飛ばす
新はそのまま泉に落下、大きな水飛沫を打ち上げる

新がやられた事に憤慨した一誠はドラゴンショットの構えを取るが……アノンはステッキを勢い良く伸ばして妨害

急速に伸びたステッキが一誠の鎧を砕き、腹に深々と食い込ませた挙げ句――そのまま地面に叩きつけた

一誠の口から血反吐（ちへど）が飛び散る

恐らく今の一撃で肋骨が1本折れたのだろう……

負傷した腹を押さえながらユラユラと立ち上がる一誠

そのすぐ後に泉から上がってくる新

「ぐ……っ！あの野郎……完全に遊んでやがる……！」

「こっちは全力で攻撃してるってのに……全然通用しない……っ。マジでバケモンだな……」

余裕綽々の態度を見せるアノンに苛立つ新と苦い顔となる一誠

新は貫かれ、ステッキのオーラで焼かれた左腕を押さえていると――ある違和感に気付く

不自然に捲れた皮膚に注目してみると……左腕の皮膚の下から〝何か〟が見えている

「こいつは……人工皮膚？」

人工皮膚とは文字通り自身の細胞組織から作られた皮膚ではなく、主に牛や豚のコラーゲン等を用いて作られた皮膚であり、重度の火傷や傷痕を隠す為にある
新は気になって人工皮膚をむしり取ってみる
人工皮膚の下から出てきたのは――1つの痣だった
まるで口を開けたドラゴンの様な形をした痣
何故自分にこの様な痣があるのか疑問に思っていると――
「ニャ、ニャ、ニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャアアアッ!?そ、その痣は!?」
初めて余裕を崩し、素っ頓狂な声を上げるアノン
新の左腕に刻まれたドラゴンの痣に見覚えがあるのだろうか……？
新だけでなく一誠もドラゴンの痣に注目する中、アノンは何かを洞察するかの如くブツブツと独り言を唱え――何かに至った様に笑い始めた
「……そうか、そうか。ラースが言ってたのはこの事だったんだニャ。……ニャハッ♪ニャハハハハッ！なんて運命の巡り合わせなんだニャ！最高だニャ！」
突然狂った様に笑い出し、新に歩み寄っていくアノン
新と一誠は訝(いぶか)しげに見る
アノンは新の肩に手を置いてウンウンと頷く
「嬉しいニャ、嬉しいニャ♪まさか、こんな所で会えるなんてニャ～♪」

「放せ！急に馴れ馴れしくしてきやがって。何のつもりだ？この変な痣がテメェらに関係あるのかよ」
「そ・れ・が♪関係大有りなんだニャ～。だってさ――ほら」
アノンが襟元を広げると――彼の首にもドラゴンの痣があった……っ
目を見開いて驚く新と一誠に更なる事実が告げられる
「ニャハハッ、驚くのも無理は無いニャ。その痣は僕達と同じ――リュオーガ族の者である証なんだニャ」
「……リュオーガ族の……証だと……っ？」
その言葉とリュオーガ族の証たるドラゴンの痣――２つの事実が１つの結論に至らせる
信じ難く、信じたくない事実が……
新の考えを代弁するかの様にアノンが口を開く
「その通り、君の本当の名はゼノン・ブラック・ドラグニル。僕達リュオーガ族の一員であり――ラースの弟なんだニャ」

新＝ゼノン・ブラック・ドラグニル

「嘘、だろ……？新がお前らと同じ……リュオーガ族……っ？」
衝撃の事実発覚に一誠も混乱していた
新の左腕に刻まれたドラゴンの痣、同じくアノンの首元に刻まれた痣がリュオーガ族の出自である事を証明
新は己に突きつけられた事実をどうしても信じられなかった……
ワナワナと震える新にアノンは話を続ける
「ありゃりゃ～？今でも信じられないって顔をしてるニャ。でも、その痣が何よりの証拠だし、君がリュオーガ族と言う事実を曲げる事は出来ないんだニャ」
ゆっくりと歩み寄って新の顔を覗き込むアノン
新の顔は困惑、混乱、疑心によって完全に平常心を失っていた
「ほらほら、せっかく同じ仲間と再会出来たんだから、もっと嬉しそうにして欲しいニャ♪」
「……ふ……ふざけんな……っ。だったら、なんで俺が〝今〟ここにいるんだよ……？お前らリュオーガ族はサーゼクス様、四大魔王に封印されたってのに……。なんで俺だ

けが……」
「それは当事者に聞くのが1番手っ取り早いニャ。ラース」
アノンが指を鳴らすと空中に映像が現れ、ラースの姿が映る
「ラース、お望みの切り札――君の弟とご対面だニャ」
『フフッ、やはり〝あの男〟は詰めが甘かったようだね。僕の思惑通りに事を運んでくれて嬉しいよ。そして……やっと会えたね。我が弟――ゼノン・ブラック・ドラグニル』
「黙れ……っ。俺は……俺は……」
『だいぶ混乱してるようだね。まあ、無理も無いか。でもね、君がリュオーガ族であり僕の弟である事実は明白なんだよ。全ては〝あの男〟が招いた結果なのさ。ここは僕よりも彼に聞くのが良い。それに皆にも聞かせてやろうじゃないか』
ラースの申し出にアノンは異を唱えるまでもなく了承、他の部屋の映像も映し出す
特に一回り大きい映像の中には――大広間で待機しているアザゼル達の姿があった
勿論、竜崎総司の姿も……
ラースは皆に聞こえるよう、総司に〝新＝リュオーガ族〟の真相をバラす
『やあ、竜崎総司。見えるかい？君1番恐れていた事態が発生したよ』

『……ッ！』

「……親父……俺が、俺がこいつらと同じ種族だって……本当なのか……？」

放心状態で訊ねてくる新に総司は目を泳がせ、顔を逸らす

何も語らない総司に対して新は困惑、疑心から一転して怒りの色を強くする

「……いい加減にしろ……ッ！いつまで隠し事を作れば気が済むんだよ……ッ!?俺はいったい何なんだよッ!?言えよッ！そうやって黙ってるつもりかッ!?」

『……っ』

「俺はぁ……ッ！俺はいったい……誰なんだよ……ッ！わけ分かんねぇよ……ッ！何が本当で！何が嘘なんだよッ！俺の人生は……テメェの嘘で踊らされてたのかよ……ッ!?」

総司への憎しみと悲しみを孕んだ新の言葉が映像を通して響き渡る……

平常心を失った新はすっかり心神喪失に陥り、自分の父親どころか何も信じられなくなっていた……

自分の正体、存在さえも……

『おい、これで良いのか？いつまで隠したまま逃げるつもりなんだ？』

居ても立ってもいられなくなったアザゼルが総司の胸ぐらを掴み、自身も怒りをぶつける

『これがお前の見たかったものか？新が――――自分の息子があんな状態になる事を望んでいたのか⁉嘘っぱちも大概にしろよ！今まで隠し続けてきた結果が今の状況なんだぞ！このままアイツが壊れても良いってのか⁉』

激昂するアザゼルに対し、総司は頑なに口を閉ざす

しかし、口を閉ざせば閉ざすだけ不信感が強まり、自分に対する新の目も光を失っていく

そして、遂に――――

『……もう、これ以上は限界みたいだね……。分かった……全て話すよ……』

とうとう観念したのか、総司は新の出生について重く閉ざしていた口を開いた

時を遡ること１８年前、場所は人気が一切無い広大な砂漠

当時３５歳、闇皇姿の総司は四大魔王と共にリュオーガ族を討伐するべく奮闘していた

しかし、彼らの力は常軌を逸する程の凶悪さを誇り、三日三晩の死闘も苦戦を強いられっぱなしだった

体力も限界に近く、状況は非常に芳(かんば)しくない……

『くっ……まさか、彼らがこれ程の力を有していたとは……っ！』

『ゼクスくん……っ。このままジリ貧状態が続けば、いずれ押し切られてしまうよ……！』

相手に聞こえないよう会話するサーゼクスと総司

他の四大魔王も疲労はピークに達しており、殺られるのも時間の問題

そこで総司は最後の賭けを思い付き、サーゼクスに耳打ちする

それは――――総司が単独でラースを押さえ、四大魔王で残りの４人を押さえつつ封印術を施すと言ったものだった

四大魔王は四方からリュオーガ族を取り囲んで総司に魔力を流し込み、総司が闇皇(やみおう)の力と魔力を融合させて５人を封印する……

これならリュオーガ族を封印出来るのだが、一瞬たりとも気を抜けない上に僅かなミスでも犯せば瞬(またた)く間に頓挫

封印の要(かなめ)である総司が集中砲火を受ければ失敗は必至……危険極まりない賭けである

『――――っ！総司さん、いくらなんでも無茶が過ぎます……！それではあなたが危険に――――』

『今、ゼクスくん達を失えば冥界にとって大打撃になるだろ？心配無用さ、きっと成功する。いや……成功させなきゃダメだ！このまま奴らを野放しにしたら、人間も、悪魔も、全ての生物が滅ぼされてしまう……！ここ一度だけ腹を括ってくれ！』

総司の必死の説得により最後の賭けを承諾したサーゼクス

セラフォルー・レヴィアタン、アジュカ・ベルゼブブ、ファルビウム・アスモデウスら他の四大魔王にも通信用の小型魔方陣で作戦を伝える

全員の了解を得て、総司は全身から極大のオーラを放出させた

「何をするつもりか知らないけど、無駄だよ。君達には勝ち目など無い」

ラースを先頭にリュオーガ族が攻撃を仕掛けていった

５人全員が竜型の波動を解き放ち、総司を最初の亡き者にしようとする

総司は自ら突っ込んでいき、リュオーガ族が放った波動の中に飛び込む

正気の沙汰とは思えない行動……

怪訝そうに窺(うかが)うラースに掴み掛かる手

竜型の波動の中からボロボロの総司が飛び出し、ラースの両手を封じた

ラースは即座に手を振り払おうとするが、総司の手から鎖状のオーラが出現してラースの手、足、体にまとわりつく

他の４人も総司の目論見を阻止する寸前、四方にいた四大魔王が放った縄状の魔力に

捕まり、動きを封じられる
総司を中心に封印の魔方陣が徐々に描かれ、強い輝きがリュオーガ族を包み込んでいく
「……これで……君達も終わりだ……っ！」
「終わり？」
「そうさ……っ。この封印術で君達をこの砂漠の奥底に閉じ込める……っ！一瞬でも動きを止められれば、発動条件は満たせる……っ！」
総司は全身から放出したオーラを封印の魔方陣の紋様に流し込み、力強く封印の言葉を唱えた
「――――我らが定め し理（ことわり）にて、邪悪なる者達に永久（とわ）なる眠りを与えよッ！」
それが引き金となり、リュオーガ族の足が封印の魔方陣に飲み込まれていく
ラース以外の４人は抜け出そうと足掻（あが）くものの、縛りから逃れられないまま沈んでいった
残るはラースただ１人……
彼もまた抗（あらが）えず封印の魔方陣へ沈んでいく
否、正確には〝抗う素振りすら見せなかった〟と言った方が正しいか……
抵抗の意思を微塵も見せないどころか、寧ろ余裕を保っていた

あまりにも不審な彼の態度を怪訝そうに窺っていると、ラースは総司にしか聞こえないように話し掛けてきた

「フフフッ、本当にこんな封印術で僕達を封じ込めるとでも思っているのかい？詰めが甘かったね。僕達を封印しても無駄、君達の終わりが長引くだけさ」

「……どういう意味だ？」

「君にだけ教えてあげるよ。ここから北西に約１００㎞地点に小さな社（やしろ）がある。――――そこで新たな命が誕生するよ。僕達リュオーガ族の創造主――――『災厄の漆黒竜（インフェルニティ・ドラゴン）』オニキス。その欠片から作られし最後のリュオーガ族がね」

ラースの言葉を聞いて総司は絶句した

ここまで自分達を苦しめ、他の生物を滅ぼしてきた種族が新しい命を作った……

だが、どうにも解せない事がある

ラースは何故このタイミングで総司に話したのか……

自ら手の内を晒すような真似をしたのか……

それが気掛かりでならない総司はラースに問い詰めた

「何故、何故その事を私にだけ教えるんだ……？自分の首を絞めるのと同じだぞ……っ」

「心配ご無用。僕達が封印されようとも新たなリュオーガ族がいずれ君達を殺すさ。たとえしくじろうと……力さえ発動すれば僕達も甦（よみがえ）る。災厄の化身たる我が弟の力が発

動すればね……フフフッ」
　ラースの体が完全に沈む直前、最後にこう言い残す
「それに――――君は〝人間〟だろ？人間ごときが目の前の命に対してどう動くのか、少し興味があるのさ。……楽しみにしているよ」
　意味深な台詞を残し、ラースは砂の奥底に消えていった
　捨て台詞とは到底思えない内容に固まる総司
　リュオーガ族の封印が完了し、多大な疲労感から全員がその場にへたり込んだ
「はぁ～……危なかったよぉ～……」
「全く……恐ろしい奴らだったな」
「ぜぇ……ぜぇ……もう、ダメ……っ。動けないよ……」
　セラフォルー、アジュカ、ファルビウムの３人は息切れ必至
　サーゼクスも肩で大きく息をしていた
　これで平和を保てるだろうと安堵するのだが、固まっている総司を怪訝そうに窺う
　声を掛けられた総司はハッと我に返り、サーゼクスの方を向く
「ど、どうしたんだい、ゼクスくん？」
「それはこちらの台詞ですよ。切羽詰まった様な顔をしてどうしたんですか？」
「い、いやな～に、今日が妻の誕生日だった事をすっかり忘れててね。たった今思い出し

てプレゼントをどうしようかと悩んでいたんだ。じゃあ私はこれで。妻は心配性で泣き虫だから、早く帰ってやらないと大泣きしてしまうんでね」

「そ、そうですか。大変ですね」

総司は急ぐように鎧を修復し、その場から飛び去っていった

確かに今日は彼の妻――竜崎梓（りゅうざきあずさ）の誕生日なのだが、彼がこれから向かうのは自宅ではなく……ラースが明かした北西約１００㎞地点にある社だった

全速力で空を飛び、雲すら蹴散らしながら社を目指す

飛行を初めて数時間、ようやく社に到着した総司はそこで〝ある物〟を見つけた

祭壇らしき石の上に祀（まつ）られた漆黒の塊

否、漆黒の卵と言った方が正しい

「……これが、新たなリュオーガ族の……」

恐る恐る近付いていくと……卵に亀裂が生じる

ヒビはどんどん広がっていき、亀裂の隙間から微かな光が漏れる

小さな手がゆっくりと卵の殻を破り、徐々に姿を現していく

卵から生まれたのは――小さな赤ん坊だった

姿形は人間の赤ん坊と全く変わらない

しかし、この赤ん坊こそが紛れも無いリュオーガ族の切り札

それもラースが言っていた『災厄の漆黒竜（イヴィルニティ・ドラゴン）』オニキスの欠片によって創られた存在である……

「アウウウっ？ウウウっ」

生まれたばかりの赤子は外の世界が珍しいのか、頻りに首を動かして周りの景色を眺める

総司は祭壇へ歩み寄り、その赤ん坊をジッと見つめた

他の生物を無慈悲に殺し、自分達を散々苦しめたリュオーガ族の新しい勢力

〝今ここで殺さなければ……〟

そう直感した総司は右籠手に爪状のオーラを形成させ、ゆっくりと頭上へ掲げる

「……ンウウウっ？」

勿論、赤ん坊は総司の行動の意味を全く理解していない

ただ首を少し傾けて総司を見つめているだけ……

「……ツー……ツー」

総司の心は揺らいでいた

たとえ怨敵リュオーガ族と言えど、目の前にいるのは生まれたばかりの赤子

何も知らない純真無垢の赤ん坊を殺す――――それはまともな人間が成せる業（わざ）ではない……

心中で葛藤が続き、やがて爪状のオーラが輝きを失い――――遂には消えた
地面に膝をついて兜を解除する総司
「……出来る訳っ、無いだろ……っ。この子は……この子には何の罪も無い……！生まれたばかりの赤ん坊をっ、一瞬でも〝殺さなければ〟って……考えてしまった……！」
のし掛かってくる罪悪感に負け、振り上げた拳を諌めた総司だが……このままにしておく訳にもいかない
冥界政府で保護してもらう事も考えたが、恐らく上役は直ぐに危険と判断して処分と言う最悪の手段を取るだろう
このまま逃がすのも難しく、危惧していた力もいずれ目覚めてしまう……
悩んだ末に総司は覚悟を決め、ある決断をした
闇皇(やみおう)から元の姿に戻り、自分の両手にオーラを集める
「私に宿る『闇皇(やみおう)の鎧』を……この子に……っ」
総司が取った方法とは――――自身の体に宿っている『闇皇(やみおう)の鎧』を蓋代わりとして赤ん坊に移植し、リュオーガ族の力を抑えようと言うものだ
異形の力を他の異形の力で抑え込むと言う前代未聞の方法……
しかし、リュオーガ族の力を抑えられたとしても『闇皇(やみおう)の鎧』も元々は闇人(やみびと)から奪い取った力である

敵対する闇人と衝突するのは必至
過酷な運命の重荷を背負わせない為とはいえ、あまりにも理不尽な押し付け……
しかし、総司は後悔などしなかった
「生まれたばかりの命を消す外道になるぐらいなら……私は敢えて――この子を守る非道になろう……っ！」
総司は自らの体から放出された闇皇のオーラを赤ん坊に与える
『闇皇の鎧』は赤ん坊の体内へ静かに入っていった
光が止み、移植は無事に終了したが――総司の体に異変が生じる……っ
「ぐっ！ぐあっあぁぁぁぁぁぁ……！や、やはり……私の体をっ、蝕んでいたのか……！」
そう、これまで『闇皇の鎧』は総司の体を蝕み続けていたのだ
普通の人間が異形の力を宿せば侵食されるのは必然
今までその兆しが見られなかったのは鎧自体が蓋の役割を果たしていたから
だが、その蓋を外した途端――蝕んでいた力が一気に爆発
総司の体をとてつもない速度で人間から異形へと変貌させていった……
「ぐあああぁぁぁぁぁぁ

絶叫を解き放つ総司の腕が、足が、体が人の形を崩し――彼を異形の闇人(やみびと)に変えた
自我を失わなかったにしろ、人間の領域から踏み外した総司は自分の手を眺める
闇人(やみびと)に変わり果ててしまった事を理解し、頭(こうべ)を垂れる
「……ハハッ、これで私もバケモノの一員か……っ。こんな恐ろしい姿、梓には見せられないなぁ……」
ガクリと気を落とす総司
そんな彼の手に触れる小さな手……
「アウウウッ、ダッ、ウウウっ」
無垢ゆえの行動か、赤ん坊は異形と化した総司の手に触れ――指をキュッと握り締める
この行動に特別な意図は無い
だが、今の総司にとってはこれ以上無い励ましだった
無垢な赤ん坊の手が総司の傷心を癒す
自然と涙を流す総司は赤ん坊を優しく抱きかかえ、嗚咽を漏らした
「……ありがとう……っ。ありがとう……っ！励ましてくれて……！」
総司は闇人(やみびと)から人間の姿に戻り、社をあとにする
腕の中に抱えた赤ん坊と共に……

「梓、ただいま」
「あ～っ！総ちゃんっ、おかえりなさ～い！遅いから心配しちゃった～！あれ？その子はどうしたの？」
「うん、帰る途中で見つけたんだ。この子……捨て子なんだ」
「優しい総ちゃん素敵っ☆もしかしてその子、新しい家族になるの!?」
「そのつもりだよ。ダメ、かな……？」
「ううん！嬉しい！私のお誕生日に赤ちゃんが出来るなんて最高～！で、で、名前は？まだ決まってないの？」
「実はもう決めてあるんだ。この子の名前は――――新（あらた）。〝新しい人生を歩めるように〟と言う意味を込めて……竜崎新（りゅうざきあらた）。どう？」
「新ちゃん、良いお名前っ☆ね、ね、私にも抱っこさせて～」
「うん、良いよ」
「はぁ～い。今日からあなたは新ちゃんよ～。宜しくね～」
「アウウウっ♪」

二者択一、偽りと本物

『……これが君の出生の全てだ』

総司の口から明かされた新の出生と経緯

一誠達はその話に衝撃を受け、言葉を失う

その中でも最もショックが大きいのは――――新だった

自分が本当にリュオーガ族である事

リュオーガ族を創ったドラゴンの欠片より生み出された事

何より……自分のせいで総司が闇人化(やみびとか)してしまった事に自責の念が重くのし掛かってくる

「……俺が……俺のせいで親父が……？親父があんな姿になったのは……俺のせい……っ」

呪詛の如く呟いて自分を責める新

膝からくず折れ、顔を俯かせる

そんな新を見てラースは更なる追い打ちを掛けた

『そうだよ、ゼノン。君のお陰で竜崎総司は自らの首を絞める事になったのさ。〝人間

〝の心の弱さを利用して、君を赤ん坊のままけしかけた。人間とは無垢で弱い生物を前にすると――何故か情を注いでしまうと言う心理を持っているからね。そこに突け込めば、後は復活の時が来るのを待つだけ。そして竜崎総司は僕の予想通り……赤ん坊だった君を殺さず、育てると言う行動を取った。それが自らを破滅へ追い込むとも知らずにね……』

不気味な冷笑を浮かべるラースは更に続ける

『ゼノン、君は最初から騙されていたのさ。そこにいる男は君と何の繋がりも無い。ただの他人、偽善行為を働いて善人ぶってるだけの男なんだよ。表向きは君の父親と言っているが、本心では君を育てた事を後悔しているだろう。君のせいで四大魔王の1人が僕達の手中に落ち、お友達も危険に晒されているのだから』

『おい！てめぇ、ふざけんな――』

激怒したアザゼルが何かを言う前にリアス達の映像を消し、ラースは新を自分達の側に貶(おとし)めようとする

『きっとお友達も同じ事を思っているよ。〝こんな奴を入れたのが間違いだった〟ってね』

「あ……アァァ……っ！アァァァァァァァァ……ッ！」

グサグサと突き刺さる罵倒に耐えきれず、新は悲鳴を吐き出す

次第に目の陰りが強くなり、崩壊寸前となっていた……
ラースは新を引き込む役目をアノンに託し、自ら映像を消す
アノンは早速新の洗脳に取り掛かった
「ゼノン、ツラいの分かるニャ。今まであいつらに騙されてきたんだからニャ～。でも、もう大丈夫だニャ。あんな偽物の家族や下等生物なんて見限って戻ってくるニャ。僕達リュオーガ族――本当の家族の所に」
「……ホントウノ……カゾク……っ」
「そうだニャ♪君も僕達もリュオーガ族。同じ種族だから家族だニャ。嘘偽りの無い本当の家族、君の居場所はここだニャ」
甘言で誘惑してくるアノン
心のバランスを崩した新はアノンに手を伸ばそうとした……
その時――「新！そいつらの誘いに乗るんじゃねぇッ！」と叱咤を飛ばしてくる者がいた
一誠は兜を解除して新に訴えかける
「新！お前は親父さんが本当にそんな事を考えてると思ってんのか!?お前をここまで育ててくれた親だろ!?そいつらの話を真に受けるな！」
「……」

「何が偽物だ！何が本当の家族だ！新の親父さんはなぁっ、自分を汚れ役にしてまで新を守ろうとしてたんだよ！たとえ血が繋がってなくても、新を想う気持ちだけは本物なんだよ！それに比べてお前らはどうだ!?何も知らない新を利用して、弱味を作って、それに突け込んだ最低のクソ野郎じゃねぇかッ！」

ザシュッ！

一誠の右足に肉を貫く感触と激痛が走る

アノンは手持ちのステッキの先端を伸ばし、槍の如く一誠の足を貫いた

一誠は膝をつき、傷口から血が流れていく

「たかが悪魔ごときに何が分かるのかニャ？君達悪魔だって嘘偽りの塊だニャ。人間を騙して命を喰らい、自分達の肥やしにしてきてるくせに。聖人君子になったつもりで説教垂れるなんて虫酸が走るニャ」

「ぐ……っ！新ァッ！お前このままで良いのかっ!?そいつらに言われっぱなしで！お前、俺に言ったよな！〝過去は戻れない、やり直す事も出来ない〟って！」

それはサイラオーグとの決戦前、新が過去のトラウマに怯える一誠に放った言葉だった

「過去を悔やんで怯えた所で何も変わらない！そう教えてくれたのは新じゃないか！俺が過去に躓いた時、立ち上がらせてくれたんだろ！そのお前が躓いてどうすんだよ!?」

「……っ」
「過去がどうだろうと俺も！部長達も新を見捨てる訳が無いだろ！」
一誠の檄を鬱陶しいと感じたアノンはステッキを伸ばして負傷した足を横殴り
一誠を転がした上でステッキから球体型の波動を放つ
一誠は両腕をクロスして受け止めようとするが力負けしてしまい、腕の鎧が大きく砕け散る
「ま～だそんなまやかしの言葉を言うつもりかニャ？醜い醜いっ、見苦しく足掻く生き物ほど醜い物は無いニャ」
「あ、新ァ……ッ！お前はお前だろ……！リュオーガ族だろうと何だろうと――――お前は俺達の仲間……ッ！部長の『兵士（ポーン）』で、俺達の仲間なんだ……ッ！自分を信じろよ……！過去の呪縛なんか――――振り払えェェェェッ！」
腹の底から声を出して新に呼び掛ける一誠
アノンは聞くに堪えないとばかりに耳を掻き、一誠の言葉を否定する
「無理無理、君達には何にも出来ないニャ。ゼノン、あんな暑苦しい奴の話を聞く必要は無いニャ。所詮、偽物は偽物。本物の家族には勝てないんだニャ。これ以上、君に変な知恵を吹き込もうとするあいつを殺してあげるニャ」
アノンはステッキにオーラを集め始めた

鋭い刃物と化したステッキを一誠に向ける
「ゼノン、今から僕があの男を殺してあげるニャ。嘘偽りの言葉を連ねて君を騙し、引き込もうとする汚らわしい悪魔をね」
「……」
「新アッ！お前はもう独りじゃないッ！親父さんが！俺が！部長が！皆がいる！誰も――誰もお前を見捨てたりしないッ！お前を信じて、ここにいるッ！だから……信じるのをやめんなッ！」
「もうウザいニャ。偽物だらけの下等生物は――ここで消えるニャッ！」
アノンはその場を蹴って飛び出し、刃と化したステッキを構える
一誠は足を負傷しているので動く事が出来ない
迫り来る一撃に思わず瞑目してしまい――肉を貫く音が走った……
だが、不可解な事に……一誠の体に痛みは走らなかった
疑問に満ちたまま目を開けてみると、刃と化したステッキは寸前の所で止まっていた
それだけじゃなく、一誠は更に驚くべき事態を視界に捉えた
――〝アノンの腹から刀身が突き出ている〟――
突き出た刀身から血が滴(したた)り落ち、アノンも一誠と同じく何が起きたのか理解出来ずにいた

引きつった顔で視点を自分の腹に移し、突き出た刀身に驚愕する
「な……な……っ、なん、で……ッ!?」
アノンは震えながら背後に視線を移した
そこには自分を剣で刺し貫く新の姿が……っ
「ゼ、ゼノン……っ?どうして……僕を……!?」
「……一誠、お前の説教――――心に響いたぜ。また俺の言った言葉が俺自身に返ってくるとはな……」
先程まで染まっていた目の陰りは消え、口調も徐々に自分らしさを取り戻していく
「さっきはマジで心が壊れそうになった……。親父だけじゃなく自分の事まで信じられなくなっちまったからな……。でも、一誠の言葉で目が覚めた。過去なんて関係ねぇ。俺は俺だ。俺を信じてくれる奴がいるなら……信じきれる仲間がいてくれるから、俺も――――俺の信じる道を行くだけだッ!」
完全復活を果たした新に一誠は涙ながらに笑みを浮かべ、アノンは予想外の展開に激昂した
「ゼ、ノン……ッ!貴様ァァァァァァァァァ……ッ!リュオーガ族をっ、家族を裏切るのかァァァァァァァッ!」
「俺はゼノンなんて名前じゃねぇッ!俺は竜崎新ッ!リアス・グレモリーの『兵士(ポーン)』!そ

して――竜崎総司の息子だッ！」
新は剣を力強く振るい、アノンを泉の方へ投げ飛ばす
泉に落ちたアノンは水飛沫を上げて沈み、落水地点が血に染まっていく
リュオーガ族と決別した新は憑き物が取れた様に凛々しい表情となる
暫く天を見上げた後、改めて一誠の方を向いた
「一誠、すまなかった。俺が1番しっかりしなきゃいけねぇってのに……」
「何言ってんだよ。新には散々借りを作りっぱなしだったからさ、これでおあいこだ！」
グッドサインを向ける一誠
新は軽く笑って照れ隠しに頭を掻く
とにもかくにも――『泉の間』の主アノンを倒した2人は部屋の扉へ向かおうとした
その刹那、後方より大きな音が発せられて泉から水柱が噴き上がる
音に反応した2人が視線を向けると――泉の中から倒した筈のアノンが出てきた
……！
腹の傷から血を流しながらも戦意は消えておらず、それどころか目が血走っていた
ギリギリと歯を食い縛り、怨恨を孕んだ顔付きはまさに鬼の形相
全身から激しい怒りを伴(ともな)ったオーラを噴かし、ステッキを新と一誠に向けた

「まだだ……ッ!まだだニャッ!この僕がッ!貴様らごときに負ける筈が無いんだニャアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

アノンはステッキを頭上に掲げ、先端に激しいオーラを集束させていく

莫大な質量のオーラがステッキに集まり、圧縮され、周りの風景を揺らす

一目でヤバいと踏んだ新と一誠は二手に分かれて逃げようとするが、アノンが先手を打つ

「逃げるのは無しだニャッ!逃げれば――――こいつを外にいる奴らにぶちかましてやるニャッ!」

「なっ!?きたねぇぞ、この野郎!」

「チッ、あいつ強硬手段を取りやがった……!」

もし、ここで回避行動を取ればアノンは外で待機しているアーシア達にオーラの塊を放つだろう

卑劣な手段で新と一誠の行動を封じるアノン

２人は腹を括って迎撃を試みた

まず、新は『闇皇(やみおう)の鎧』を形成し直して剣を握り、一誠はトリアイナ版『僧侶(ビショップ)』に昇格

それぞれ剣戟(クロス)・波(バースト)と砲(ドラゴン)撃(ブラスター)の構えを取った

魔力のチャージが完了し、準備を整えた2人は泉の中のアノンを見据える
「一誠、俺達の技を合わせるぞ」
「おう！派手にぶっ放してやるぜ！」
「くたばれぇっ！裏切者がァァァ

「僕が……っ、僕がこんな奴らに……っ！負ける……!?嘘だ――――嘘だァァァ

「……ッ！あなた、自分の仲間に対して言う言葉がそれなの!?」
ラースの冷酷な素振りに異を唱えるリアスだが、ラースは冷淡に言い放つだけだった
「役立たずの間抜けなど仲間じゃない。価値を見出だせない者は死ぬ。それがリュオーガ族の掟だ」
「……酷いですわね」
「あんた、腐ってるわ……！」
「今のは流石に腹が立ちましたよ」
朱乃、祐希那、渉もラースの言動に嫌悪感を表す
しかし、ラースは当然意にも介さなかった
「アノンが死んだのは奴自身が弱かったからだ。弱い奴は死ぬ。ただそれだけの事さ。それに――――リュオーガ族の真価に辿り着けたのは僕とジュウゾウ、ニトロの３人だけ。僕達に比べれば後の２人など単なるお飾りに過ぎないんだよ」

爆進帝王ッ！ニトロ・グリーゼエエエエエエエエッ！

ここまでのあらすじ

それは1つの平凡な日常から始まった

『ひぃぃぃ！新学期初日から遅刻だなんて最悪で　すぅぅぅ！』

『……ギャーくんが着替えに時間掛けるから』

『もう、２人とも早く走って！時間ギリギリなんだから！』

通学路を激走する３人の女子高生がいた

無口なツンデレ娘――――塔城小猫（とうじょうこねこ）

弱気で泣き虫な留学娘――――ギャスパー・ヴラディ

ツインテールな活発娘――――仁村留流子（にむらるるこ）

授業開始のチャイムまで１０分、自分達の学舎（まなびや）まであと僅かな距離

曲がり角を曲がった矢先、３人はドンと誰かにぶつかって尻餅をついてしまう

『いたた……っ。――――っ！いやぁ！パ、パンツが見えちゃうぅぅ！ふぇぇぇんっ！』

３人はパンツを見られまいと直ぐにスカートでガードし、ぶつかった人物に謝る

『ったく、何処に目ぇ付けてんだ。お前らは』

ふてぶてしい声音を発してくるのは同じ学舎に通い、尚且つ1番の不良先輩――ニトロ・グリーゼ
不器用な物言いしか出来ないが、決して根が悪い方では無い
ニトロは3人を起こして学舎とは真逆の方へ歩いていく
『先輩、今日もサボりですか？』
『勉強なんてダルくてやってらんねぇよ。単位だけ取ってりゃ文句ねぇだろ？ベイビー達は急げよ、遅刻すんぞ』
『……それはダメです。先輩も一緒に』
『そ、そうですよ！内申にも響いちゃいますから！一緒に行きましょう！』
3人はニトロの手を無理矢理引っ張って学舎まで連れていく
彼女達がここまで甲斐甲斐しく彼の世話を焼く理由――それは3人とも彼に想いを寄せているからだ
しかし、ニトロには壮大な夢があった
〝愛用のバイクで世界中の国々を回る〟
世話を焼かれる内に彼もまんざらではなくなってきたのだが、全国制覇を目指している彼はその想いにまだ答えられない
――とは言うものの、それを表に出すのも照れ臭いので黙ってばかりいた

そして、ニトロは卒業と同時に旅立ってしまい……彼女達はとうとう想いを告げられなかった
何年後に戻ってくるのかは分からない
いつか自分達の前に戻ってきてくれる事を信じて待ち続けた
だが……残酷な知らせが彼女達に襲い掛かる
『……え……先輩が事故に……？』
そう、彼――――ニトロ・グリーゼは旅の途中で交通事故に巻き込まれてしまい、半死半生の状態になったと言う
知らせを聞いた彼女達は直ぐに彼が入院している病院へ飛び、病室で彼と再会
ベッドに横たわる彼の状態は実に酷く、面影すら感じられない程だった……
顔中に包帯を巻き、両腕両足もギプスに覆われ、呼吸器と点滴の管が彼の生命の灯火（ともしび）を維持している
あまりにも痛々しい姿に彼女達は泣き崩れた
〝助かる可能性は五分五分〟
医師からもそう伝えられ、絶望が増大する
ベッドで眠る彼の周りを死神が徘徊し、携えた鎌を首元に突きつけ――――今にもその命を刈り取ろうとしている幻影が見えてくる程に……

しかし、崩れかけた彼女達は諦めなかった
〝想いを伝えられないままなんて嫌〟
３人の想いが一丸となり、彼の見舞いを続けた
学業に就職活動と繁忙期の合間に病室を訪れ、彼に励ましの言葉を贈り続ける
彼が目を覚ますその時を信じて……
そして１年後の卒業式当日、彼が目を覚ましたと言う通知を受けた
卒業式を終えた彼女達は直ぐに病院へ向かい、生死の境目から無事に帰還してきた彼と対面する
〝これでようやく彼に想いを伝える事が出来る〟
３人とも高鳴る気持ちを胸に秘め、彼に駆け寄ったのだが――――
『……君達は……誰……？』
再会したのも束の間、生死の境目から帰還してきた彼の口から出た言葉は彼女達に衝撃を与えた
なんと彼は事故の時、脳にダメージを負ってしまい、その後遺症で自分の名前を含めた全ての記憶を失ってしまったのだ……
ようやく戻ってきたのかと思いきや、死神は往生際悪く爪痕を残していた
ツラい現実に再び打ちのめされる３人だが、それでも諦めなかった

〝3人であの頃の様に甲斐甲斐しく世話を続けよう〟
いつか必ず自分達の事を思い出してくれる……その日が来るのを信じて、彼の世話を焼き続けた
そして、遂にその日が訪れたのだった
『……小猫……ギャスパー……留流子……』
『――ッ！……先輩……っ！』

――と言う物語がニトロの頭の中で展開しているらしい……

「思い出したぜベイベェェェ

最大レベルに上げていた
命懸け（笑）の鬼ごっこでギャスパーは生き残れるのか……？
その時、ギャスパーがフィールドとなる荒野の出っ張りに躓(つまず)き転んでしまう
好機到来と見たニトロはジャンプし、クルクルと回転しながらギャスパーの真上へ飛んだ
「逃がさないぜベイベェェェェェェェェ

「完全にギャスパーくんを女の子と勘違いしてますね……。まあ、パッと見ただけで見抜けないのは否めませんが」
「……でも、このままじゃギャーくんが変態の毒牙に」
そこで小猫は思いきってギャスパーの性別の発表を試みた
一誠でさえ〝ギャスパーは男〟と言う事実に泣き崩れ、大いに憤りを吐き散らした
この暴走マシーンが知れば、もはや怒り爆発どころの騒ぎではなくなるだろう……
ただ、そのリスクと引き換えと言っては何だが……ショックに打ちのめされる事も僅かながら期待している
フゥッと呼吸を整え、小猫が1歩前に出た
「次はツンデレ猫が相手か？俺はお前らに順列なんか付けねぇ。来たけりゃ俺の胸に飛び込んで来な」
「……色々間違っていますが、あなたは1つだけ大きく間違っています」
「何だよ？」
「……あなたが追い回してるギャーくんは男の子です」
遂に打ち明けてしまったギャスパーの性別
鬼が出るか蛇が出るか分からない賭け……
ニトロの怒り大爆発――と思いきや、ニトロは「へ～、そうなのか」と短絡的な返

事をする
　あっけらかんとした反応に誰もが耳を疑った
「……ギャーくんは、男の子ですよ……？」
「ふ～ん、だからどうしたってんだ？そこのベイビーが男だろうが女だろうが関係ねぇ。愛ってのは理屈じゃねぇ――――フィーリングなんだよ」
　表情は分からないが、恐らく決め顔で自身の恋愛持論を語ったニトロ
　彼の男気溢れる返答に小猫はギャスパーの肩に手を置く
「……あのヒト、性別を無視してギャーくんが好きみたい」
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?嘘だと言ってよぉぉぉぉぉぉっ！」
「……無理」
　ギャスパーにとって残酷な現実が襲い掛かり、ツッコミ担当の小猫ですら諦めてしまう程の暴走――――もとい爆進帝王ニトロ・グリーゼ
　ギャスパーの恐怖度が更に上昇する
「ぼ、ぼ、僕はちゃんとした男の子ですぅ！女の子じゃありません！お……お○ん○んだって付いてるんですからぁ！」
「構わないぜベイビー。愛は理屈も倫理も乗り越えてこそ輝くもんだぜ？それによく言うじゃねぇか。〝嫌よ嫌よもすき焼きの内〟ってな（キラリ）」

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃんっ！このヒト打つ手がありませぇぇぇぇぇんっ！」
「それに言葉の使い方も間違っています」
教員免許を持っているロスヴァイセがそこを指摘すると、ニトロは〝やれやれ、分かってねぇな〟と言わんばかりに両肩を竦める
「こう言うのは気持ちが大事なんだよ。熱い気持ちでぶつかりゃ相手に伝わる。それにケチ付けるなんざ〝年寄りの冷奴（ひややっこ）〟ってヤツだぜ、オバサン」
「と、年寄り……っ？オバサン……っ!?」
恐らくニトロは〝年寄りの冷や水〟と言いたかったのだろうか……
しかし、ロスヴァイセはその間違いよりも〝年寄り〟と〝オバサン〟発言に反応し、プルプルと体を震わせる
〝ヤバい〟と直感した小猫はギャスパーと仁村を連れて遠くへ避難
そしてロスヴァイセは数百単位の魔方陣を展開し――
「私は……っ、オバサンじゃなぁぁぁ

「どうして誰も彼も私をオバサンって言うのよぉぉぉ

る

爆煙と砂塵が薙ぎ払われ、その中からニトロが姿を現す

目立った外傷は特に無く、ポンポンと砂埃を払っていた

「ヘッ、ヒステリックはみっともないぜ?」

「……っ!あれだけ撃ち込んでも倒れない……っ。最近の私達はこの手の輩に遭遇してばかりですね……」

ニトロの尋常ならざる防御力にロスヴァイセは悔しそうに歯噛みし、小猫達も警戒する

ニトロは余裕を持った様子で拳を鳴らす

「さ〜て、そろそろこっちも本気を出してやるか。アノンが殺られちまった以上――その仇を取らねぇとなぁ」

そう言いながらニトロはボタンを外し、革製の上着を脱ぎ捨てる

何をするつもりなのかと警戒を高める中、ニトロは自分達リュオーガ族について語り始めた

「俺達リュオーガ族は古来よりドラゴンの血と力を受け継いできた一族だ。そして、ごく稀にドラゴンの力を具現化出来る奴もいる。ただ、その力はあまりにも強過ぎて危険な為、耐えきれず自壊した奴らが大勢いた。それが俺達リュオーガ族の数が少ない原因

とも言える。その力をコントロール出来たのは……たった3人だけだった」
語るに連れてニトロの全身から不気味なオーラが漂い始め、大地も細かく振動していく
「見せてやるぜ……っ。俺達リュオーガ族の真価をよぉ……っ！」
ニトロは両腕を前で交差させて力を溜め込み、開くと同時に雄叫びを上げた
「本・能・覚・醒ェッ！竜・人・解・放ォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
咆哮するニトロの体が不快な音と共に別の性質へと変貌していく
鎧の様な鱗に覆われ、禍々しいトゲが隆起
顔を覆うマスクをぶち破って出てきた頭部は口元が尖り、鋭い牙と眼孔を明らかにする
まるで蜥蜴とドラゴンを合わせた様な竜人が小猫達の前に現れた……
やがて変貌を終えた竜人ニトロは小猫達を睨み付け、ズシズシと重厚な足音を立てながら歩いていく
ロスヴァイセはもう一度無数の魔方陣を展開し、あらゆる属性の砲撃を放った
ニトロ目掛けて一斉に向かっていく砲撃の嵐
だが……直撃を受けてもニトロはその歩みを止めなかった
まるで無人の道を我が物顔で歩くが如し

ロスヴァイセの砲撃など全く意に介してなかった……
この結果にロスヴァイセも驚愕せざるを得ない
「そんな……全く効いてない!?」
「当たり前だ。この姿になった俺の体はどんな攻撃も寄せ付けねぇんだよ。炎だろうが氷だろうが、雷だろうが魔力だろうが一切効かねぇ」
「……なら、体の内部から効くようにします」
「塔城さん、私も手伝います!」
小猫と仁村が同時に飛び出していく
小猫は仙術の気を、仁村は魔力を自らの両手両足に纏わせた打撃を繰り出す
これに対してニトロは仁王立ちのまま微動だにせず、２人がかりの打撃を全て受けたいくら打撃を入れても効果は得られないどころか、逆に彼女達の体がダメージを受ける
先程とは比べ物にならない硬さに圧倒されていた
「おイタはその辺にしときな、ベイビー」
ニトロはトゲの生えた太い右腕を豪快に振るって、小猫と仁村を纏めて吹っ飛ばす
鈍い衝撃と共に殴り飛ばされた２人は宙を舞い、地面に叩きつけられる
急いで駆け寄るギャスパーとロスヴァイセ

２人の体を起こすと――腕や腹部に痛々しいぐらいの傷穴が開けられていた
傷穴からドクドクと血が流れ、大地に滴(したた)り落ちる
「一撃で酷い傷……っ」
「そう言えば教えてなかったな？何故この部屋が『血溜りの間』と呼ばれているのか」
ニトロは右腕に付着した彼女達の血を舐め取り、この部屋――『血溜りの間』の由来について語る
「この部屋で俺と戦い、俺の攻撃をくらった奴らは身体中の血液を１滴残らず外へ排出しちまうんだよ。そして穴だらけの体から流れ出た血は――やがて大地を真っ赤に染めていく。これが俺の守護する部屋――『血溜りの間』の正体って訳だ」
そう……実はこの部屋の大地は所々赤い部分が目立っており、それはこの部屋で敗れた者達の血によって出来たもの
まさしく血の墓場……
吐血を繰り返す小猫と仁村の傷穴を塞ぐべく、ロスヴァイセは緊急用に持っていたフェニックスの涙を振り掛けた
少量ではあるものの、２人の傷穴はみるみる内に塞がっていく
何とか助かった２人だが、形勢は圧倒的に不利……
どんな攻撃も寄せ付けないブッ飛んだ暴走竜人ニトロ

今まで以上の恐怖が彼女達を押し潰そうとしていた……

「さあ、ベイビー。この腕で抱き締めてやるから、俺の胸に飛び込んできな（キラリ）」

「いいいい嫌ですぅ！そ、そんなゴツゴツした腕で抱き締められたら死んじゃいますぅぅぅ！」

一方通行過ぎる愛情は成立しない件について

『血溜りの間』の守護者ニトロ・グリーゼの豪腕を食らってしまった小猫と仁村の回復を待つ中、竜人化したニトロは危険な視線をギャスパーに放っていた

鋭い眼孔でギャスパーを睨み、口元をベロリと這う舌

その姿は恋に溺れたと言うより完全に獲物を補食する獣の様だった……

危機感と恐怖が限界を振り切りそうなギャスパーは体をガクガクと震えさせる

ロスヴァイセは小猫と仁村、ギャスパーを死守する為に単独で立ち向かう

「またアンタか。何度かかって来ても無駄だぜ。俺にはどんな攻撃も通用しねぇ。そこを退いた方が怪我しなくて済むぜ？」

「そうはいきません。生徒を守るのも教師の務めです」

「先公？ 堅物の先公ごときがヒトの恋路を邪魔すんなよ。俺の愛はいつでも何処でもハリケーンミキサーなのさ」

「あなたの言い分は理解出来ませんが、押し付けるだけの行動を〝愛〟とは言いません。ただの独り善がりです」

「俺は今まで障害を蹴散らして生きてきたモンでな。邪魔するってんなら――――容赦し

ないぜ？」
ズンズンと重厚な足音を響かせるニトロ
ロスヴァイセは再度自分の周りに無数の魔方陣を展開し、そこからあらゆる属性の魔術砲撃を繰り出した
しかし、傷1つ負わなかったニトロには砲撃どころか如何なる攻撃も通用しない事は目の当たりにした筈……
全く歩みを止めないニトロに砲撃が直撃する寸前――――全ての砲撃が拡散してニトロの周囲で幾重もの爆発を起こす
凄まじい量の爆煙がニトロを包み込み、視界を奪う
「おいおい、目眩ましかよ。何のつもりだぁ？」
ニトロを取り囲む爆煙を隠れ蓑にロスヴァイセは気配を殺して距離を詰めていく
遠距離からではニトロに致命的なダメージを与えられないと踏んだロスヴァイセは至近距離で全力の砲撃を放つと言う危険な賭けに出たのだ
小猫と仁村、2人がかりの打撃を食らってもビクともしなかったので不安は多々あるが、何もしないで全滅するよりは危険を冒してでも突破口を探る方が良いと判断したのだろう
ロスヴァイセは目元に小型魔方陣を展開して視覚を強め、ニトロの位置を割り出す

呼吸を整え、いざニトロの死角を突こうとしたその瞬間――

ズオッ！

「――ッ⁉」

突然彼女の体に衝撃が走る

背後から何者かに捕まったかの様な圧迫感……

固い地に叩き付けられ、押さえ付けられたまま視線を背後に移す

「これは……尻尾……ッ⁉」

そう、ロスヴァイセを捕縛したのは長い尻尾だった

アリジゴクやクワガタの顎みたく二又に分かれた先端がガッチリとロスヴァイセの体を押さえ付けている

〝こんな尻尾がいつの間に現れたのだろうか……？〟

そう疑問を抱いている内に爆煙が薙ぎ払われ、尻尾の持ち主が目の前に現れる

そこに立っていたのは――その場所から動く事も振り返る動作すらしてないニトロだった……

ニトロの腰から伸びている尻尾がロスヴァイセを捕まえている

尻尾の正体に言葉を失うロスヴァイセ

ニトロは不適に笑みながら〝上半身のみ〟を彼女の方に向けた

「残念だったな、先公さんよぉ。俺はリュオーガ族の中でも特に鼻が利くんだよ。この部屋に入ってから数分でお前ら全員の匂いは覚えたからな。犬の嗅覚が人間の1億倍ってんなら――俺のは約５０億倍。薄まった血の匂いも嗅ぎ分けられるぜ？」

「……ッ！まさか、嗅覚だけで私の位置を……ッ⁉」

「血を流さそうが流すまいが、俺からは逃げられねぇ。そして、血を流した時が最期って訳だぁッ！」

ニトロの尻尾がロスヴァイセを空中高く放り投げ、ニトロも追うように高く飛び立つ

「さあ、ショータイムだッ！」と二トロが大口を開け――ロスヴァイセに噛み付いた

ヴァルキリーの鎧をバリバリと噛み砕き、鋭い牙を彼女の肉体に深く食い込ませる

噛み付かれた衝撃と激痛により口から血を吐くロスヴァイセ

しかし、これだけでは終わらない……

ニトロは肉を喰い千切りながらロスヴァイセを再度上空へ放り投げ、旋回して再び噛み付く

噛み付いては放り投げ、噛み付いては放り投げの繰り返し

噛み付きによる空中での公開処刑を繰り広げる……

あまりにも凄惨な攻撃にギャスパーも放心状態となってしまう

そんな事を尻目にニトロは噛み付き攻撃を続行、ロスヴァイセの血肉を喰らう

「へへッ、アンタの腕はなかなか引き締まってて噛み応えがあるぜ」
腕に続いて太ももに噛み付き、牙を食い込ませる
「太ももは脂が乗っててジューシーだぜ。ま、人体の中で1番ウメェのは――――ここだぁッ！」
ニトロがロスヴァイセの脇腹に勢い良く噛み付く
全身を噛み痕と血だらけにされたロスヴァイセの顔が苦痛に歪む
「コレコレ。この脇腹って部分は脂が丁度良い感じに乗ってるからウメェんだよなぁ」
ニトロは噛み付いたまま猛烈な回転を加えてロスヴァイセの脇腹の肉を喰い千切り、自慢の豪腕で彼女を地面に叩き落とす
血を撒き散らしながら落ちたロスヴァイセ
何とか痛む体を起こすものの、流れ出る血が止まる事は無い……
少ししてニトロも地に降り立ち、喰い千切った肉を咀嚼して飲み込んだ
「分かったか、先公さんよぉ？この俺に死角なんて物はねぇのさ」
〝強過ぎる……っ〟
ロスヴァイセは心中でニトロの驚異的な強さに戦慄
ニトロはトドメを刺そうとロスヴァイセに歩み寄ろうとした矢先、『そうはさせませんっ！』とギャスパーが無数のコウモリに変化してニトロの周りを飛び交う

そして全ての眼を赤く光らせ、『停止世界の邪眼(フォービトゥン・バロール・ビュー)』を発動させた
ニトロを停止させ、その内の複数のコウモリがロスヴァイセを小猫と仁村のもとへ運んでいく
しかし、ギャスパーの必死の活躍も僅か数秒で終わってしまう……
「おいおい、ベイビーちゃんはコウモリ――ヴァンパイアだったのか。ますます可愛いじゃねぇか」
『……っ!?そ、そんな……僕の眼が効いてない……っ!?』
停止の邪眼の効力を受けているにもかかわらず、ニトロは悠々と体を動かして周囲を飛び交うコウモリに狙いを定める
太く長い尻尾を自在に動かし、飛んでいた全てのコウモリをはたき落とす
はたき落とされたギャスパーは元の姿に戻され、更にニトロの長い尻尾がガッチリと挟み込み拘束
宙を浮くギャスパーはニトロの眼前まで引き寄せられる
「ようやく捕まえたぜ、ベイビーちゃん」
「んーっ!んーっ!」
ギャスパーは必死にもがいて脱出を試みるが、ガッチリと拘束されているので抜け出せない

精々片手が限界だった
そんな中、ニトロの体の前面からメキメキと嫌な音が発せられる
前面の鱗が裂け始め、食虫植物ハエトリグサの如く奇怪な様相が露(あらわ)となった……
その中には真っ赤に輝き、ドクドクと脈動する心臓の様な物も見えるが、ギャスパーは〝来ないで〟とばかりに足をバタつかせる
「さあて、ベイビーちゃん。両腕(こっち)で抱き締められるのと裂(こっ)けた前面(ちょ)で抱き締められるの――どっちが良い？」
「どっちも嫌ですぅぅぅぅっ！死んじゃいますぅぅぅぅっ！」
「じゃあ間を取って両方」
「もっと嫌ですぅぅぅぅっ！」
「しょうがねぇ。百歩譲って〝今は〟チューだけにしといてやろう」
ギャスパーの必死の抵抗も虚しく、ニトロは両手でギャスパーの頬を押さえ込み、ゆっくりと顔を近付けていく
端から見ればキスと言うより、完全に補食する画にしか見えない……
徐々に迫り来る最大の危機にギャスパーの精神は崩壊寸前
打撃、砲撃、時間停止すら効かない竜人にギャスパーは貞操を奪われてしまうのか……

『で、でも……ここで頑張らなきゃ……っ。僕だって、僕だってグレモリー眷属の男子なんだ……っ！』

恐怖を必死に押さえ込み、ギャスパーは尻尾の拘束から脱した片手で腰にぶら下げたポシェットの中を探る

そして〝ある物〟を手に取った

「お、何だ？俺にプレゼントかい？」と余裕ぶるニトロの不意を突き、手に取った〝ある物〟をニトロの鼻孔に挿した

その〝ある物〟とは――――ギャスパーが弱点克服の為に常備しているチューブニンニクだった

グニュウっと絞り出された中身がニトロの鼻孔内に侵入し……鼻を劈(つんざ)いた

「ヌグアアア

「あのヒト、今までに無い苦しみ方をしていますね……。いったい何をしたんですか？」
「は、はいいっ。僕が持ってたチューブニンニクを鼻に挿しちゃいましたっ」
ギャスパーの回答に皆は苦笑い
今まで全く怯みもしなかったニトロがチューブニンニク1本でのたうち回っている……
しかし、これは単なる気休めに過ぎず、打撃や砲撃では致命傷を与えられない事に変わりない
「……体の外が効かないなら、体の中を攻撃するしか無さそうです」
「つまり、体内を直接攻撃すると言う事ですか。でも、どうやって――――」
「あ、あのっ、その事で僕に1つ考えがありますっ」
真っ先に挙手するギャスパー
彼の決意を込めた表情に皆が注目し、早速ギャスパーからその〝考え〟とやらを聞き出す
一方、ニトロは鼻を地面に擦り付けてニンニクの匂いを消そうとしていたが……消せずにまだ苦しんでいた
〝フンッ！フンッ！〟と鼻を鳴らして中のニンニクを追い出す
「チッキショウ……ッ！鼻がいてぇ！ヴァンパイアがニンニク使うとか聞いた事ねぇよ

……っ！あー、鼻がいてぇっ。目にも沁みるぜ」
鼻の中に侵入したニンニクは追い出せたものの、強い匂いはまだ残留しており、自慢の嗅覚が使い物にならなくなってしまった
辺りを見回すニトロだが、ギャスパーの姿を発見出来ず徘徊する
所々にある岩を破壊しながら捜索を続けること数分、やはり見つからない
「おーい、かくれんぼでもしようってのか？あれだけイタズラしといて、逃げの一手かぁ？ベイビーちゃんは照れ屋だなぁ」
未だに暴走した妄想脳を抱えてるニトロが執拗に捜索を続けていると……彼の視線の少し先にギャスパーが現れた
ギャスパーを見つけたニトロはニヤリと口の端を吊り上げ、ズシズシと歩み寄っていく
「見～つけ～た～ぜ～、ベイビーちゃ～ん♪」
「こ、怖くないです……っ。僕だって、やれば出来るんです……っ」
小動物の様に震えるギャスパー
まだニトロに対しての恐怖が拭い切れてないようだ
「さっきのプレゼントは効いたぜ。お陰で鼻の中がニンニクの匂いでいっぱいになっちまった」

歩く度に危険なオーラを強め、指や口、更に胸部の口も開閉させる
「イタズラしたベイビーちゃんにはお仕置きが必要だよなぁ？」
「あああ、あなたの思い通りにはなりませんよっ！僕達はこの部屋を出て、先に進まなくちゃいけないんですっ！」
「へへッ、言うじゃねぇか。だがよ、打撃も砲撃もベイビーちゃんの能力も効かねぇ俺にどんな勝算があるってんだ？」
余裕綽々でニトロがそう言った矢先――――
ドオンッ！
「ヌオッ⁉」
突然の炸裂音と共にニトロの体勢が崩れる
その原因は背後にいたロスヴァイセの魔術砲撃
嗅覚を麻痺させられたせいで彼女の気配に気付けなかった
ロスヴァイセの放った砲撃がニトロの両足――――正確には両膝の裏を直撃していたのだ
両膝の裏、即ち関節を攻撃されたニトロはそのショックで膝をついてしまう形になる
これがギャスパー達の考えたプランA……『膝カックン作戦』である
勿論、ギャスパーだけの知恵で行われた作戦ではない

『装甲が硬い相手にも弱点はある。人型に共通する弱点――――それは関節。以前、新さんに教えてもらった事が役に立ちましたね』
実はロスヴァイセはバウンティハンターとして戦闘に経験豊富な新から〝並外れた防御力を持つ者に有効な攻撃法〟の1つを享受していた
魔術砲撃メインなので使う場面が無いと疑っていたが、思いも寄らぬ所で役に立った
ここから更に畳み掛ける
ロスヴァイセの砲撃による膝カックンが成功した直後、小猫と仁村が素早く接近し、それぞれニトロの右腕と左腕を脇固めに極めて倒す
小気味良い音を鳴らして倒した後は直ぐに距離を取った
ヒットアンドアウェイを駆使した戦法が見事に成功
しかし、倒されたニトロは余裕の笑みを浮かべている
「おいおい、何度言ったら分かるんだ？俺にはどんな攻撃も効かねぇって言ってんだろ」
立ち上がるニトロだが、直ぐに自分の腕の異変に気付く
〝両腕が肘の辺りから言う事を聞かず、ただ垂れ下がっている〟
動かそうとしても関節を外された腕は全く動かない
「お、おい、どうなってんだこりゃ？痛くも痒くもねぇのに、なんで動かねぇんだ⁉」
これには流石に驚いたのか、ニトロは声を荒らげる

「……さっきのであなたの関節を外しました。いくら体が強くても、関節はそうじゃありません」
関節は人体共通の弱点
殻や甲羅に覆われている甲殻類も外は硬いが、その継ぎ目――関節を曲げれば容易く折れる
ギャスパー達はそれを基にニトロへの対策を編み出した
それでもニトロは強気で言い放ってくる
「ヘッ、腕が使えねぇってんなら尻尾(コイツ)を使うまでだアッ！」
ニトロが勢い良く尻尾を伸ばして小猫と仁村を挟み潰そうとするが――その尻尾の動きが停まる
突然の停止に驚愕するニトロが後ろを振り返ってみると――ギャスパーが双眸(そうぼう)を赤く輝かせていた
「なっ、何でだ……っ⁉ベイビーの能力は俺には効かねぇ筈……っ⁉」
「確かに〝あなた自身〟を停めようとしても、強過ぎて出来ませんでした。だから、〝体の一部だけ停める〟事に集中したんですっ！あなたの尻尾を僕が停める！これは……その為の準備だったんです！」
見事なチームプレイを魅せたギャスパー

最大の武器である豪腕と尻尾を封じられたニトロに抵抗する術は無い
ここから怒濤の反撃が始まる
まずはロスヴァイセが手元に魔方陣を展開し、そこから無数の魔術砲撃を放つ
砲撃は効かねぇと高を括るニトロだったが、今までの砲撃とは違う
「確かに漫然と撃ち込んでは硬い装甲は突破出来ません。即ち！」
ロスヴァイセが手を動かすと――――呼応する様に砲撃の群れが1列に並び、一直線にニトロの胸部へ集中砲火を浴びせた
同じ場所へのピンポント砲撃
一点に集中させた砲撃は次第にニトロの装甲に亀裂を生じさせる
「――――っ⁉お、俺の鱗にヒビが……っ⁉バカなッ！」
信じ難い現象に驚くニトロ
ダメ押しとばかりに小猫と仁村が亀裂部分に拳と蹴りを打ち込んだ
渾身の威力によって更に亀裂が拡がり――――遂には砕け散ってしまった
胸部の装甲を砕かれ、ニトロの赤い心臓がむき出しになってしまった
待ちに待った好機、小猫と仁村は渾身の力を込めて赤い心臓に打撃を加える
重い衝撃が迸(ほとばし)り、ニトロは体を仰け反らせて口から大量の血を吐き出した
そこへロスヴァイセが素早く接近し、ニトロの開いた口の中に手を突っ込む

「小規模ですが至近距離でのフルバースト、受けてみなさいっ！」
ズドドド

月影の武士、長光重蔵

「や、やりましたねっ、僕達の勝ちですぅっ！」
「……今回はギャーくんの大金星」
「そうですね。かなり苦戦を強いられましたが……ようやく先へ進めます」
「先輩達の分まで頑張りましょう！」
『血溜りの間』で勝利を収めたギャスパー、小猫、ロスヴァイセ、仁村の４人は奥へと続く扉を見付け、先へ進もうと歩み出す
その途中、後ろでズズ……ッと何かを引きずってくる様な音が聞こえてくる
「ま、待てよ……っ」と彼女達を呼び止める声
声の主は先程猛攻を受けたばかりのニトロだった
驚異的な生命力にギャスパーは身震いしてしまうが、当の本人はもう戦える状態ではない
全身から血を流し、足取りもフラフラ
尻尾も思い通りにならず引きずったままである
「あれだけの攻撃を受けて、まだ動けるのですか？」

「へへッ、安心しな……っ。お前らの勝ちだよ……っ。言い訳なんざ一切しねぇ……。ただ、なんでそのまま部屋を出ようとするんだ……？」
「……どういう事？」
小猫の問いにニトロが出した答えは――――
「勝った奴の権利さ……。なんで負けた俺を殺そうとしねぇんだ……？おかしいだろ」
ニトロの言葉に全員の表情が固まり、話が続けられる
「……？なに固まってんだ？当然だろ。負けた奴に生きる価値なんかありゃしねぇ。それがリュオーガ族の掟だ……。このまま生きてても、いずれラースやジュウゾウが俺を殺す。いつ死のうが同じって事だ。だからよ、俺の命をお前らにくれてやんのさ……」
〝負けた者は死〟――――それは古来より定められたリュオーガ族の掟
竜の力を扱えない者や生き残れなかった者に価値など無い
ゆえに彼らは身内であろうと負けた者、力を扱えない者を自らの手で裁いてきたのだ
そしてニトロもギャスパー達に敗北、負け犬の仲間入りを果たしてしまった
そうなれば道は１つ、死ぬしかない……
掟を遵守した結果、彼らの種族は少数しかいないのだ
自ら死を受け入れる体勢のニトロにギャスパーは納得がいかない様子を浮かべた
「……どうした？早く殺れよ。お前らだって邪魔な奴らは殺してきたんじゃねぇのか？

単にその数が増えるだけだ。俺らは所詮、誰からも忌み嫌われ、誰からも好かれない呪われた一族……。そんな奴らが死んだところで悲しむ奴はいやしねぇ……。――あ、レモネード嬢だけか？悲しんでくれるのは……。けど、掟は大事だからな。花ぐらい添えてくれるだろう……」

ブツブツと呟くニトロに対し、ギャスパーは意を決した表情で歩み寄り――ニトロの頬を叩いた

パチンっと乾いた音が小さく響き、ギャスパーのビンタに小猫達はおろか――ビンタを食らったニトロさえも驚きを隠せなかった

一瞬呆然とするニトロ

ギャスパーはニトロの頬が思いの外痛かったのか、痛んだ手を擦りながら言う

「僕達はあなた達を殺しに来たんじゃありませんっ！ソーナ会長とセラフォルー様を助ける為に来たんですっ！それに……そんな事で〝死ぬ〟とか〝殺して欲しい〟とか言っちゃダメですっ！そんな事を言い出したら……僕なんか１００回ぐらい死んじゃってますっ！」

「……」

「僕だって最初は自分の力を使いこなせなくて、人に迷惑ばかり掛けて……何もかも嫌になって消えてしまいたいって思ってました……っ。でも、イッセー先輩はそんな僕を

励まして、力をコントロールする練習にも熱心に付き合ってくれました！部長さんも僕を温かく迎え入れて、今……凄く幸せなんです。だから……イッセー先輩の為にも、部長さん達の為にも、僕は頑張っているんですっ！あなたにも心配してくれる人がいるなら――その人の為を思って生きなきゃダメですぅっ！」

誰かに励まされ、叱咤激励を受けてきたギャスパーが珍しく相手に異を唱える

暫く呆然としていたニトロだが、脱力から尻餅をついて小さく笑った

「……まさか、敵側のベイビーちゃんにそんな事を言われるとは――――〝死んじゃダメ〟だなんて説教されるとは思わなかったぜ。……本気(マジ)で惚れちまったよ」

心身共に敗北を認めたニトロは出口の扉を示し、奥に進むよう促す

ギャスパー達は扉を開いて奥の広間へ進んでいった

パタリと扉が閉まり、部屋で独り黄昏(たそが)れるニトロは自分達には無いギャスパー達の信念と強さを羨(うらや)ましいと噛み締めた

「……ただ、ラースとジュウゾウ相手には説教なんざしないでくれよ……。あいつらは俺みたいなバカと頭の出来が違うし、強さも半端じゃねぇ……。俺なんて、あの2人に比べりゃ赤ん坊みてぇなもんさ……」

――――――――――――――――――――

ドゴオオオオンッ！ドゴオオオオンッ！
けたたましい爆音が鳴り響く『月影(げつえい)の間』
この部屋に当たった祐斗、ゼノヴィア、イリナ、由良、巡の５人は逃げの一手に専念し切っていた
……と言うのも、『月影の間』の番人――――長光重蔵(ナガミツ・ジュウゾウ)の攻撃が凄まじく、一撃一撃が膨大な破壊力を伴っている為、なかなか攻められずにいる
掠(かす)めただけでもダメージは否めず、まともに食らえば致命傷となるだろう……
巨大な爪を振り翳(かざ)し、夜空に漂う雲を切り裂き、地を抉り取っていく
大振りの攻撃を中断したジュウゾウは立ち止まり、退屈を体現するかの如く首を回す
「つまらんのう、ワレェ……。こんなんでワシらに啖呵切んなや。クソガキが」
只でさえドスの利いた声音に苛立ちの色も混ざり、ジュウゾウは唾を吐き捨てる
「ガキの遣いに付き合うつもりは無いんじゃ」
子供扱いされる祐斗達だが、隙を取れない相手ゆえに反論も出来ない
どうにか突破口を開けないか、思考を重ね続ける
そこでゼノヴィアがデュランダルを大きく掲げ、聖なるオーラを溜め始めた
「付き合うつもりが無いのはこちらも同じだ。お望み通り、一撃で沈めてやる」

「減らず口だけは一人前やのう」
攻撃の手を待つ程ジュウゾウはお人好しではない
巨大な2本の角から雷を迸(ほとばし)らせ、ソレをゼノヴィアに向けて放つ
祐斗は直ぐに雷の聖魔剣(せいまけん)を複数創造し、空に投げる
投げられた聖魔剣が輝きを放つと、雷が全て聖魔剣に吸収されていく
雷の聖魔剣が避雷針代わりとなって雷を防いだ
遠距離攻撃を防がれたジュウゾウは直接ゼノヴィアを叩く事に
巨大な爪を持った両腕を広げて突進していく道中、上空からイリナ、前方から由良と巡が壁となって立ち塞がる
更に祐斗も聖魔剣から聖剣に得物を変え、禁手(バランス・ブレイカー)の龍騎士団を具現化
ジュウゾウの周囲を取り囲み、龍騎士団を総突撃させる
上空から降り注ぐイリナの光撃、龍騎士団の手数、由良と巡のコンビネーションプレイにジュウゾウはすっかり翻弄されてしまう
素早い標的を捉えられず、時間だけが過ぎていく
「よしっ、チャージ完了だ！」
後方からゼノヴィアの呼び掛けが聞こえてくる
見てみれば、デュランダルは夜空を突き刺さんばかりの聖なるオーラを噴き上がらせ

ていた
イリナ、由良、巡は一斉にその場から離れ、祐斗はジュウゾウを押さえるよう龍騎士団に指示を出す
ジュウゾウは力任せに1体ずつ引き剥がしたり、頭を砕いたりして龍騎士団を排除するが……
「これで――――終わりだッ！」
ゼノヴィアが一気にデュランダルを振り下ろすと、蓄積された聖なるオーラが轟音と共に放出された
まばゆい光を伴うオーラの奔流に飲み込まれていくジュウゾウ
その威力は夜空に漂う雲を全て霧散させる程凄まじいものだった……
膨大な一撃を放った為、ゼノヴィアは疲労から肩で息をする
一気に勝負が決まったかに思えたが――――世の中そんなに甘くはない……っ
聖なるオーラの奔流が過ぎ去った後、ジュウゾウは体から煙を噴かせながらもその場に現存していた
並大抵の者なら塵(ちり)1つ残らず消滅するであろう攻撃を耐えきった
衝撃の事態に目を見開く一同、ゼノヴィアも皮肉げに吐き捨てる
「……本当にバケモノだな、アレを耐えるとは」

その場で静止していたジュウゾウはゆっくりと首を鳴らし、肩も回す
煙を噴かしていた体や顔にヒビが入り、破片がポロポロと落ちる
「今のはええ威力やったわ。ええ威力やったが……精々ワシの贅肉と皮を剥がす程度やな」
ジュウゾウが〝贅肉および皮〟と表す全身の外殻が剥がれ落ち、中から灰色1色に染まった細身の竜人が姿を見せた
重厚なマッシヴスタイルから一変、スマートなフォルムを描いたジュウゾウは指を開閉させる
「それが貴様の正体か」
「せや、9割の奴らはこの姿を見せる前に潰してきたからのう。退屈しとったんや、久々に暴れさせてもらうで」
ジュウゾウが右手を地に向けてオーラを出すと――――そこから一振りの日本刀が出現
鮮やかな色合いなど皆無な日本刀を握り、試しとばかりに1回、2回と空(くう)を斬る
恐らくここからがジュウゾウの本領発揮だろう
祐斗達は目を逸らさず身構える
そよ風が足元の草原をざわつかせた刹那――――ジュウゾウの姿が一瞬でその場から

消え去った
「――――っ⁉消えた⁉」
突然の消失に驚く一同、全員が周囲を見渡してもジュウゾウの姿は何処にも無い
そんな中、祐斗は感覚を研ぎ澄ませて消えたジュウゾウを探しに掛かる
すると、一瞬だけブレた姿が見えたのか、神速の足でゼノヴィアの横に滑り込んで聖魔剣を斜めに振るう
ガキンッと金属音が鳴ったと同時にジュウゾウが姿を現した
一瞬で間合いを詰め、ゼノヴィアを切り払おうとしていたのだろう
祐斗以外の４人は全く見えなかった為か、驚愕せざるを得なかった
「ほう、ワシの動きについてきよったか。ガキの割には大したもんやな」
「これでもグレモリー眷属の『騎士（ナイト）』なんでね。まさか剣術を使うとは驚きですよ……っ」
「ふんっ、冥土の土産として受け取れや」
ジュウゾウは風を切る様な音を発すると共に姿を消す
再び高速移動で斬りかかってくるのだろう
ジュウゾウを追うべく祐斗も速度には速度で対抗
２人の姿が消えた草原で火花が散り、金属音が鳴り響く

夜空の下で超高速の剣戟合戦が繰り広げられている……
時折、２人の姿が見え隠れしたりするが、基本的に肉眼だけで見極めるのは不可能だろう
高速の剣戟合戦が一旦終わり、離れた位置で２人の姿が現れる
ジュウゾウはまだまだ余裕がありそうだが、祐斗は苦しい表情を浮かべていた
それもその筈、祐斗は手数と速度に特化している分――腕力は然程無い
ゆえに剣の一撃一撃は軽く、なかなかダメージを与えられない
一方でジュウゾウは腕力、速度、技量も充実した上にドラゴンの性質からか、耐久力も優れている
剣戟の威力は圧倒的に上回っており、紙耐久しか無い祐斗は一太刀でも浴びれば一貫の終わりだろう……
ジュウゾウは日本刀に妖しげなオーラを流し、円を描く様に一周させる
夜空を照らす満月がそれに応えるかの如く輝きを増し、軌跡上に刃状のオーラが幾重にも出現していく
「竜奥義（りゅうおうぎ）――『満月一閃（まんげついっせん）』ッ！」
豪快に日本刀を振り下ろすと、周囲に浮遊していた刃状のオーラが祐斗達目掛けて一斉に襲い掛かっていった

祐斗はすかさず自分とゼノヴィア達の前に多量の聖魔剣を創造し、防御壁を張ったが……

ジュウゾウの放った剣戟波は予想を遥かに超えた威力ゆえ――――容易く突破されてしまった

多大な爆撃を生み出し、祐斗達を切り刻んでいく

竜奥義が止んだ後、ジュウゾウは日本刀を肩に乗せて一息入れる

祐斗達は全身傷だらけになりながらも何とか立ち上がり、戦闘の意思を消さずにいた

「ワシの奥義をまともに食らっても、まだ倒れへんか。根性だけは一人前やのう」

「こんな所で……止まってる暇は無い……ッ！私達は先へ進まなければならないんだ……っ！」

「イッセーくんも、新くんも……待ってるからね……っ。ここで足止めを食らってるようじゃ、彼らと並べないよ……っ」

「ふんっ、さっきから聞いとりゃ随分と連れに執心しとるようじゃのう。ワシに言わせりゃあ――――群れとる事自体くだらんのじゃ」

祐斗達の言動に強い嫌悪感を表すジュウゾウ

それは彼らリュオーガ族がこれまで他種族から受けてきた仕打ちから成るものだった

ドラゴンは元来より最強最悪の魔物として世界中に知れ渡っており、その力を有するだけで虐(しいた)げられ、蔑(さげす)まれ、憎まれ、恨まれた挙げ句――何度も駆逐されそうになった……

自壊した者もいれば、他種族によって駆逐された者もいる

誰からも拒まれ、受け入れられる事など無かった

〝周りの者全てが敵〟

いつしかリュオーガ族にはそんな危険思想が刷り込まれていった

「ワシらは元から拒絶されとったんや。そんな奴らがいる世界なんぞ――ぶち壊したるわ」

「その為にこんなバカげた事を……」

「バカげた？甘チャンのガキがよぉ言うわ。オドレらも結局同じやんけ。自分らに害を与えるモンに牙向けてきたんちゃうんかい」

ジュウゾウの言い分に祐斗達は言葉を詰まらせた

確かに自分達も平和な生活を壊したくないゆえに、歯向かってきた者達を討伐してきた

はぐれ悪魔、闇人(やみびと)、『禍(カオス)の団(ブリゲード)』ｅｔｃ……

自分達や周りを脅かす存在と敵対し続け、滅ぼした事もしばしば

「オドレらは正義を気取っとるつもりやろうが、結局根本的な考えはワシらと変わらん。いつまでも害を与えてくる奴らは――消すしか無いやろ？薄っぺらい上っ面だけで誤魔化す生き方しか知らんガキがほざくな。反吐が出るわ」

「……確かに、僕達も似た事をしてきましたよ。それは否定したくても出来ません。……でも、あなた達のように最初から拒絶して、ひねくれた考えを改めようとしない者ほど――タチが悪いものはありません」

祐斗は真っ直ぐ剣の切っ先を向けて言い放つ

「それに……僕達はソーナ会長とセラフォルー様を助ける為にここへ来た。その気持ちを変えるつもりは無い！」

「……」

祐斗の一喝にジュウゾウは舌打ちし、祐斗と同じ様に日本刀を突きつけて言う

「せやったら、その考えごとぶった斬ったるわ。甘ったれた考えだけで生き残れると思うなや。悪魔も人間も――ワシらの手で残らず狩り殺ったらァッ！」

怒号を共に飛び出すジュウゾウ

祐斗達も負けじと一斉に走り出していく

満月が彩る夜空の下で今一度剣戟が鳴り響いた……

竜人の誇り

夜空の下に揺らめく草原で熾烈な合戦が行われていた
『月影の間』の主――長光重蔵ＶＳグレモリー・シトリー陣営
双方の攻防は更に激しさを増していた
ジュウゾウは日本刀からの斬撃と自身の左手から繰り出す三日月型の波動で殲滅を図る
祐斗、イリナ、巡は素早い動きを駆使して躱し、ゼノヴィアと由良は飛んでくる斬撃と波動を得意のパワーで弾き返していく
〝先程まで憔悴していた筈の奴らが、急に自分と拮抗状態になってきている〟
ジュウゾウは目の前の現状に腹を立て、更に攻撃の度合いを上げる
「ちょこまかウロチョロと――鬱陶しいんじゃあァッ！」
左手から放たれる夥しい数の三日月波動は上空に舞い上がり、豪雨の如く降り注ぐ
それを見てゼノヴィアはデュランダルを横に掲げ、莫大な量の聖なるオーラを解き放つ
気合いと共に振り抜かれるデュランダル

振り抜いた余波と聖なるオーラによって三日月型の波動が全て霧散していった
ジュウゾウは更に腹を立て、八つ当りするかの　如く日本刀を一振りした直後――
再び姿を消した
高速移動での直接攻撃に切り替えたのだろう
「木場、また奴が消えたぞ！」
ゼノヴィアの呼び掛けに祐斗は1度頷いた後、瞑目して集中力を高める
動きを肉眼だけで追おうとしても力で押され消耗戦になれば、いずれは動きについていけなくなってしまう
そこで祐斗は精神を落ち着かせて、最小限の動きでジュウゾウの凶刃（きょうじん）を捉えようと考えた
その場から動かず、奴が〝斬り掛かってきた瞬間〟を捉える……
微かな風がジュウゾウの殺気を運び、祐斗は瞬時に動いた
ガギィィィンッ！
自身の真後ろを振り抜き、そこから響いた金属同士の打ち付ける音
――祐斗の刃を日本刀で受け止めるジュウゾウがいた
憎々しげに舌打ちをするジュウゾウに対し、祐斗は次なる一手を仕掛けた
「――『魔剣創造（ソード・バース）』ッッ！」

ザシュッ！
足元から突き出てくる聖魔剣の刃が――――ジュウゾウの右足の甲を貫いた
更にダメ押しとばかりに祐斗は自らの右足、正確には靴底に短い聖魔剣を創り、残ったジュウゾウの左足をソレで刺し貫いた
完全にジュウゾウの動きを封じ、最大の好機が生まれる
「今だ！」
「ああっ！」
ゼノヴィアが聖なるオーラを濃縮させたデュランダルを振りかざし、ジュウゾウを横に薙ぎ払おうとする
相討ち覚悟かと思われた矢先、ゼノヴィアの後ろから翼を生やしたイリナが先回りして祐斗を確保
寸分の狂いが無いタイミング――――祐斗自身がデュランダルの圏内から離脱した刹那、ジュウゾウの腹にデュランダルの刃が深々と食い込んだ
ジュウゾウ血の塊を吐き散らし、豪快に後方へと吹き飛ぶ
「……やってくれたのう……っ、ガァキ共ォォォ

スを逃がすなぁっ！」
降り立つ祐斗の一声で全員の士気が上がり、一気に攻勢に転じた
イリナの放った光輪や光の槍がジュウゾウに命中し、爆煙を生む
その煙の中から飛び出した巡の剣戟がジュウゾウの前面を切り裂き、彼女の後ろから来た由良の重い打撃がジュウゾウを打ち抜く
滑りながら煙から出てきたジュウゾウに剣戟を加える祐斗
指1本、まばたき、呼吸の動作すら与えない程の連続攻撃を仕掛けていき……最後にゼノヴィアが飛んでくる
「くらえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
濃密なオーラを纏ったデュランダルによる一撃がジュウゾウを斬り、余波はジュウゾウの周囲を大きく抉り取る程の威力だった
ジュウゾウも斬撃や三日月型の刃を飛ばすも、波に乗った彼らを捉える事は出来なかった
「が……っ、何でじゃあ……っ。このワシがぁ……たかが悪魔ごときのぉ、半人前のガキ共に押されとるやとぉぉ……ッ！」
「確かに僕達は個人的な実力なら、あなた達より遥かに劣っている。だけど、独りの力だけでは限界がある。足りないなら、補えば良い。自分の力だけで足りないなら、誰かに

支えてもらえば良い。それが――――僕達がここまで来れた強みだ！」
祐斗の言葉にジュウゾウは怒りに震えた
歪んだ思想しか持たない彼らにとってその言葉は〝自分達の生涯を全否定する〟様なものだからだ
リュオーガ族は他種族から拒絶されてきたのに対し、眼前の悪魔達は受け入れられ、他種族と共存している
更に自分と渡り合える程の実力を身に付けている
強さこそ全てのジュウゾウにとって、これ程の屈辱は他に無かった……っ
「ガァァァ

更にはその刃と日本刀から滲み出てくるオーラが怨恨めいた顔の様な物を形成していた……
明らかな怒りと殺意を孕ませた一撃
尋常ならざるプレッシャーに嫌な汗がドッと吹き出る……
だが、それでも退く訳にはいかない
向こうで待っている仲間達の為にも……
祐斗達は1ヶ所に集い、それぞれの武器を合わせて力を高める
ジュウゾウに対抗する合わせ技の下準備を行い――――時は満ちた
「死ねやァァァ

「デュランダルッ！奴の刃を――――全て斬り払えええええええええええええっ！」
振り下ろされたデュランダルから極大の聖なるオーラが噴き出し、先に放った合わせ技の斬撃と混じり合う
威力が格段に底上げされた斬撃は怨念の刃を次々と蹴散らし、その主までも飲み込んでいった
獣の咆哮にも似た断末魔を上げるジュウゾウ
聖と魔のオーラに全身を焼かれ、斬撃が消えた頃には既に勝敗はついていた
黒い煙と血が噴き出しており、日本刀を杖代わりにして立つ事すらままならない
だが、それでも奴は向かってくる……
途中で何度も躓き転んでもお構い無し
「ま、まだじゃァ……っ、ワシはぁ……まだ、負けとらんぞぉ……っ」
いったい何処からそんな執念が沸き出るのだろうか？
並々ならぬジュウゾウの気迫に戦慄する一同
しかし、もう勝負は見えたも同然
祐斗はせめてもの情けと一太刀、ジュウゾウの前面を斬り払った……
斬り傷から噴き出る血が草原を真っ赤に染め、ジュウゾウの体が後ろに下がる
膝をつき、今度こそ勝負は決したと思ったが――――

「ま、まだ、まだじゃァ……っ」
「――――ッ!?」
なんとジュウゾウはまだ向かってくる……っ
戦意を消さず、体を起こして祐斗達の前に立ち塞がる
祐斗の肩を掴む左手には、もはや力などある筈も無い
しかし、奴の眼だけは戦いを止めようともしていなかった
祐斗は戦慄しながらもジュウゾウの左手を斬り飛ばした
宙を待った異形の左手は地に落ち、ジュウゾウはより一層苦しむ
もうこれ以上の追撃は無用……と言うよりは酷なものだ
消えかけた命を更に踏み躙るなど、悪魔でも躊躇う所業だろう……
そんな気も知らぬジュウゾウはしぶとく祐斗達に突っかかっていく
「……もう、やめましょう」
祐斗は堪らず発した
その一言にジュウゾウは足を止め、震えながら問う
「何でじゃあ……っ、ワシは……まだ動いとるぞ……っ。いつまで良い子ぶるつもりじゃぁ……っ」
「今のあなたに勝ち目はありません。これ以上向かってきても、ただ命を削るだけです」

「訳の分からん事をほざくなや……っ。敵にトドメ刺さんと、勝ったつもりでいるんか……っ？たかだか数年しか生きとらんクソガキがぁ……」
片腕を失った状態にもかかわらず、ジュウゾウは怒りに満ちた眼と日本刀を祐斗に向ける
「それで情けを掛けたつもりか!?敵の首を殺らん悪魔が何処におるんじゃぁ！」
「僕達は弱った相手を痛めつけるなんて悪趣味を持ち合わせていない。それに……そんな事をしても意味が無い」
「意味が無い、やと……？」
「ええ。あなたがどれだけ戦意を向けようと、肉体がソレについていけない程のダメージを受けている。そんな相手を斬るのは剣士の主義に反する」
祐斗は聖魔剣をしまい、先に続く扉の方へ歩みを進める
他の皆も先を急ぐべく祐斗の後を追った
だが、祐斗の取った行為はジュウゾウにとってプライドを著しく傷付けられ、踏み躙られるものだった……
「……こんの……クソガキがぁ……っ、待たんかい……っ」
ジュウゾウの呼び掛けに振り向く一同
ジュウゾウは手に持っている日本刀を自身の前に掲げ――

「……オドレらに、ワシを殺る覚悟が無いなら……せめて目に焼き付けとけ……っ。これが――ワシなりのケジメじゃぁ……ッ！」

次の瞬間、止めようとした祐斗の目の前でジュウゾウは自ら日本刀を顔面に突き刺した

度肝を抜く光景に祐斗とゼノヴィアは絶句、イリナと巡はあまりの凄惨さに目を逸らした

後頭部から突き出た刀身を伝い、ポタポタと血が流れ落ちていく

刀を顔面に突き刺したまま、ジュウゾウは祐斗達に言い放つ

「……ワシらリュオーガ族にとって……敵の情けを受けて生きるのは最大の恥や……っ。そんなもんで誇りを腐らせるぐらいやったら――潔く死んだ方がマシじゃ……ボケがぁ……っ」

足取りをふらつかせ、ジュウゾウは最期の言葉を遺す

「この先……そんな甘ったれた根性で、生き残れると思わん方がええぞ……っ。ワシらも大概やが……この世には、オドレらの想像を遥かに超えた奴らがウヨウヨいるんじゃ……っ。精々、足を掬われんように……しとけよ……っ」

事切れたジュウゾウは前のめりに倒れ、その肉体が灰となって消えて逝く……

『月影の間』の主の死を悟ったのか、夜空の中で輝く満月も次第に色を失い……部屋が不

気味な暗さに包まれる
　不本意ながらジュウゾウの最期を見届け、リュオーガ族の歪みきった思想と誇りを知った祐斗達は気持ちを切り替えて先へと進む
『誇りを腐らせるぐらいなら死んだ方がマシ……？どうしてそんな歪んだ考えしか持てないんだ。地を這って、血反吐（ちへど）を吐いてでも生き延びようとしている者だっている……。僕だってその1人だ。生き方はそれぞれある、その生き方を否定して壊す権利は誰にも無い筈だよ……』
　僅かに映った灰を見上げる祐斗は、ジュウゾウに対して静かな怒りを表した
『あなたは自ら死ぬ事で誇りを保つと言うなら――――僕は最期までグレモリー眷属の剣として生きる。それが僕の誇りだ』

火竜ラース・フレイム・ドラグニル

『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』による勝ち抜き戦

ここまでグレモリー&シトリー陣営は3勝1敗で駒を進めており、今は祐斗達も大広間にて新達と合流を果たしているだろう

残るは1枠……

『竜星の間（りゅうせい）』にいるリアス、朱乃、渉、祐希那とリュオーガ族のリーダー格――――ラース・フレイム・ドラグニル

どちらかが勝者となり次へ進める

戦場となっている『竜星の間』は星々を散りばめた空以外荒れ果てていた……

林立する柱も今では瓦礫の欠片と化しており、部屋の面影は微塵も残されていない

リュオーガ族の長の名は伊達じゃなく、リアス達も4人がかりであるにもかかわらず苦戦を強いられた

体も服もボロボロで呼吸も荒く、疲弊しきっている

一方、ラースはまだまだ余裕と言った様子を見せていた

赤い鱗に覆われた両腕で自らの翼を手入れする程に……

「アノンに続いてニトロとジュウゾウも敗(やぶ)れたようだね。全く……無能な奴らばかりで嫌気が差してくるよ」
ラースは相変わらず負けた者に対して辛辣な台詞を吐き捨て貶(けな)す
自分の眷属を大事にするリアスにとってラースの言動は許せないものだった
「あなたはそうやって誰もを見下し、貶してきたと言うのね。それを同じ種族の者にも向けるなんて……非道ね」
「上位の生命体が下等生物を見下ろすのは当然の権利さ。その中で頂点に君臨すべきなのが――――僕達リュオーガ族、由緒正しき真のドラゴンの血族さ」
「はぁ？由緒正しい？バッカじゃないの！アンタみたいな自己中が上位だの下等だの、勝手に決めてんじゃないわよッ！私はアンタみたいに遊びでヒトを殺す奴らが大っ嫌いなのよ！」
ラースに猛反発する祐希那は尋常じゃない程の怒りを見せる
ただ、それは無理もない
祐希那は元々眷属悪魔だったが、闇人(やみびと)のストレイグ・ギガロプスに主と仲間を皆殺しにされた挙げ句、その時の恐怖とショックで精神が崩壊してしまったと言う過去があったのだから……
ラースもまた娯楽の為に殺戮を行(おこな)う愉快犯的な嗜好を持っているようなので、彼女に

とっては最も許しがたい人格なのだろう
「そんな腐った考えしか持たないから省かれてんのが分かんないの⁉」
「穴だらけの脳みそを抱えた口汚い腐れ悪魔にそんな事を指摘される筋合いは無いね。下等同士の馴れ合いは醜く、浅ましく、そして最も許しがたい罪だよ。種を失いたくないが為に共存などと言う逃げ道に踏み込んだ臆病者の末路……。その罪は君達が輪廻転生しなければ拭い去れない。君はそうだな……来世でパンダに生まれ変わると良いよ。それも白黒模様が逆のパンダ、見世物として笑い者にされ、下等生物共に指を差されながら生きていくんだね」
「勝手に人の来世を語るな！しかも、来世が白黒逆のパンダって何よ⁉」
「気に入らないならシマウマの方が良かったかい？縞模様無しのシマウマになれるよう祈っておくと良いよ」
「お言葉ですけど、僕達はあなた方に負けるつもりはありません。それに縞模様無しのシマウマって――それはただの白いウマです」
「どうでも良い事を真顔で言うなぁっ！」
　相変わらず炸裂する渉の天然ボケと祐希那のツッコミ
駒王学園（くおうがくえん）一の夫婦漫才は伊達ではない（笑）
　ラースは〝もう付き合ってられない〟とばかりに右手を向け、高熱の炎を溜め込む

リアス達が何度も見てきたラースの炎――――『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』
ラースの右手から放たれた炎は竜の形となってリアス達に襲い掛かっていく
渉はすぐさま前に出て体内から魔狼剣（まろうけん）フェンリオスを取り出し、逆手に持つ
刀身に金色のオーラを纏わせ、向かってくる火竜を一刀両断に切り裂いた
２つに分断された火竜はあらぬ方向へ飛んで霧散していく
次に渉はその場を駆けながら２丁拳銃型の武器――――魔海銃（まかいじゅう）アリエスを取り出した
魔狼剣（フェンリオス）を口にくわえ、魔海銃（アリエス）を両手に携（たずさ）える
足元から水流を噴かし、滑る様にラースの周囲を回りながら弾丸を連続で撃ち込む
しかし、ラースは焦る事も無く全ての水弾を叩き落としていった
渉は魔狼剣と魔海銃を体内に戻し、魔鉄槌（まてつつい）ロンドを取り出す
石突きの部分から雷の球体を発生させ、それをフルスイングでラースに向かって打ち飛ばした
祐希那も負けじと氷斧を振るい、幾重もの氷柱を飛ばす
リアスも消滅魔力を撃ち放ち、朱乃もラースの頭上から雷光を落とす
前方と上方から来る同時攻撃にラースは――――余裕の表情を揺るがさない
「――――『火竜の鉤爪（イグニ・クロー）』」
ラースの両足が炎で覆われた爪と化し、前方の波状攻撃を切り裂く

頭上から降り注ぐ雷も蹴り上げて霧散させた
悉く(ことごと)力の差を見せつけてくるラースにリアスは歯噛みしてしまう
両足を元に戻したラースは広げた両翼に炎を纏わせ、斬撃を放つ
「――――『火竜の翼撃(フレイム・スパーダ)』」
灼熱の炎を帯びた斬撃がリアス達を焼き殺さんと向かっていく
リアス達は先程以上に力を込めた攻撃で迎撃する
４人の一斉攻撃は何とか炎の斬撃を相殺したが……その分の消費は激しい
長期戦に持ち込まれては不利になってしまう
『渉、一か八かだけど……一気に全力を出して倒しに行くわよ。このままだとこっちが先に倒れるわ』
『……そうだね。これ以上時間を掛けるのは得策じゃないよね』
コッソリと話し合う渉と祐希那
作戦を確認した後、渉は少し後ろにいるリアスと朱乃にも指でサインを送る
〝僕達が時間を稼ぎますので、魔力を溜めてください。合図したら全力で攻撃を放ってください〟
サインを送られたリアスと朱乃は無言で頷き、深呼吸してから構えに入る
「何を企んでいるのかは知らないけど、無駄な足掻きはやめた方が良いよ。苦しまずに

済むからね」

「ええ、そうですね。ではお言葉に甘えて――全力で決めさせてもらいますよッ！」

渉は魔狼剣、魔海銃、魔鉄槌を同時に排出し、３つの光を鎧に纏わせる

左腕は刃が連なった紺碧の腕に変化、右腕は翡翠色の鱗に包まれ、胸部は紫電色の様相へと変貌

３体の魔族の力を同時に引き出した強化形態――『三魔族憑依（トリニティ・スタイル）』

一方、祐希那も氷斧を前に掲げて禁手（バランス・ブレイク）化を唱えた

青白い閃光が彼女を包み込み、氷の軽鎧（ライト・アーマー）を形成する

禁手（バランス・ブレイカー）――『極光に凍える戦姫（アウローラ・ヴァナディース・ドレッサー）』

氷の戦姫と最強の光帝が肩を並べ、オーラを解き放つ

先陣を切った渉は左腕から無数の斬撃を放ち、右腕から螺旋状の水流を放射

それらは寸分の狂いも無くラースに直撃及び爆（は）ぜる

祐希那が氷斧を地に突き立てると下から巨大な氷の牙が飛び出し、ラースに強襲

ダメ出しとばかりに頭上からも巨大な氷山を落とす

渉も紫電をバチバチと迸（ほとばし）らせ、全速力で突っ込んでいく

爆煙の中から出てきたラースに雷付きの拳打と蹴りを見舞う

勿論、一撃二撃では留まらない

息も尽かさぬ乱舞でラースを追い詰めようとする
ただし、短期戦で決着をつける為にはかなりのスタミナを消費してしまう
度外視した配分のせいで全身に痛みが走る……
しかし、目の前の竜人(ラース)を倒す為に今だけは耐え抜く
渉はラースを上に打ち上げ、自らも高く飛び上がる
両足に翼状のオーラを纏わせ、急降下しながらラースに必殺の蹴りを食らわせた
何度も何度も蹴り抜き、トドメにラースを地に叩きつけた
叩きつけた衝撃で地面も爆(は)ぜ、渉は上空で魔力を溜めていく
「皆さんっ、今ですッ！」
「「ええっ！」」
渉の合図でリアスと朱乃が最大級の攻撃をラースに向けて撃ち放った
祐希那も氷斧を振るって青白い波動を飛ばし、渉も上空から紫電・水流・斬撃の３つを融合させた極大のオーラを解き放った
全身全霊全力の攻撃が地面にめり込んでいるラースを容赦無く飲み込む
凄まじい爆発と爆風が巻き起こり、その様はまさに終焉の如し……
一斉砲撃が終わった後、渉がリアス達の側に降り立つ
流石に魔力を使い過ぎたのか、全員の疲弊度が半端じゃなかった

「はぁ……はぁ……予想以上に、魔力を使っちゃいました……」
「ええ。でも、それぐらいじゃないと厳しかったでしょうね」
肩で大きく息をする一同
流石のラースもこれだけの一斉攻撃を受けては一溜まりも無い
誰もがそう思った時だった……
グググ……っ
「……やってくれたじゃないか。下等生物の分際で」
「「「――――っ!?」」」
〝信じられない〟……そんな言葉しか頭を過らせない様な光景だった
あれだけの攻撃をまともに受けたラースがゾンビの如く体を起こしてきたのだ
流血しているものの、本人は至ってピンピンしていた
ラースは全身に付着した土埃（つちぼこり）を払い、キッとリアス達を睨み付ける
「今のは流石に痛かったなぁ……。下等生物ごときがこの僕に――――っ」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！
ラースの口調に怒気が孕み始めたと同時に部屋全体が揺れる
凄まじい殺気を含んだオーラが漂い、リアス達を威圧する
「――――虫ケラ共がァッ！そんなにお望みなら一瞬であの世に送ってやるッ！俺を怒ら

せた事を悔いながら、惨(むご)たらしく死んで逝けェェェェッ！」
一人称が〝僕〟？〝俺〟に変わったラース
激昂した彼は吼えながら自らを変貌させていく
真っ赤な鱗が全身に広がっていき、両翼や爪が雄々しく生える
腰からは尻尾も伸び、頭部もドラゴンの様なフォルムと化していく
変異を終えたラースは文字通りの竜人となった……
火竜をそのままヒト型にしたかの様な姿
鮮やかな翡翠色の双眸(そうぼう)からは僅かな怒りを見せる
同時に熱気が充満し、リアス達の肌をジリジリと焼く
「……なんて凶悪なオーラ……っ」
「覚悟しろよ、下等生物。こうなってしまった以上――――もう優しくはないからな」
変貌を遂げた赤き竜人ラースは再び右手をリアス達に向けた
右手から解き放たれる『火竜の咆哮(デリート・プロミネンス)』
だが、それは先程とは比べ物にならない威力だった……
凶悪な形相の火竜が大口を開けて牙を見せつけ、地を蒸発させながらリアス達に向かっていく
渉は瞬時に彼女達の前に出て魔狼剣(フェンリオス)と魔鉄槌(ロンド)を同時に取り出す

魔力を高めた2つの武器で死守しようとするが――予想を遥かに超える威力だった為、押し退けられて火竜に呑み込まれる
「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
「渉ッ！きゃあッ！」
余波だけでリアス、朱乃、祐希那を後方に吹き飛ばす程の威力……
直撃を食らってしまった渉は無事では済まされないだろう……
火竜が消え去ると、渉の鎧は大きく崩壊していた
遠退く意識を無理矢理呼び覚ますが、体が言う事を聞かない
全身が焼け爛れ、血も噴き出す
「……っ！渉ッ！渉ッ！」
「まだ息が残っているか。アレを食らえば大抵の輩は消滅するのだが、今までの下等生物よりはマシだったようだな。ならば――こいつでトドメを刺してやろう」
ゴオオオオオオオオ……ッ！
ラースが右手を上に掲げると、灼熱のオーラがうねりながら上空に集まっていく
生き物の様に蠢きながら〝巨大な何か〟を形成する
頭、首、胴、脚、尻尾と形作られたのは――巨大な十字架に磔にされた火竜だった
……

禍々(まがまが)しく燃え盛る磔の火竜が双眸(そうぼう)をギラリと妖しく輝かせ、リアス達を睨み付ける
もはや言葉も出せないぐらい恐々とするリアス達
ラースは哄笑を上げた後に言う
「俺にコイツを出させただけでも及第点をくれてやる。ただ、残念だよ。この先で繰り広げられる地獄を貴様らは見る事が出来ないんだからなぁ」
「……っ？ど、どういう事よ⁉」
「あと1回、俺は他のリュオーガ族より多く変身出来る。つまり、四大魔王を追い詰めた俺の力は――――こんな物ではないんだよ」
絶望的な報せにリアス達は愕然とするしかなかった
徹頭徹尾打ちのめされた彼女達に更なる追い討ちが襲い掛かる……っ
「絶望に満ちて滅びろ、下等生物共オッ！竜奥義(りゅうおうぎ)――――『消滅の十字火竜(クリア・ザ・グランドクロス)』ッッ！」
赤き竜人の放った十字架ドラゴンは雄叫びを上げながら強襲
『竜星の間』は十字架ドラゴンが引き起こした大爆発に包まれていった……っ

決するメンバー、怒れる火竜

フローズンパレスの第2大広間
そこは『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』の前哨戦を勝ち抜いたメンバーが待機する場所であり、『泉の間』を切り抜けた新と一誠は他の面子（メンツ）との合流を果たしていた
現在グレモリー・シトリー陣営で勝ち残ったメンバーは新、一誠、祐斗、ゼノヴィア、イリナ、小猫、ギャスパー、ロスヴァイセ、由良、巡、仁村
リュオーガ族の勝ち残り組はレモネードのみ
戦力的には新達の方が有利だが……今までの戦いで疲労も蓄積している為、まだ油断は出来ない
今はとりあえず傷の治癒を優先、残り少ないフェニックスの涙を少しずつ分け合って傷を癒す
傷は癒せても緊迫感を取り払えない新達を尻目に、レモネードはソファーらしき物に座って紅茶を飲んでいる
「随分と余裕があるな、あの娘……」
「ああ、不気味なぐらいにな」

レモネードの様子を窺(うかが)いつつ牽制する新と一誠
レモネードは視線に気付いたのか、２人の方を向いてクスッと微笑む
そこへ祐斗が新に呼び掛ける
「……さっき部屋の中で見せられたけど、新くん。――――君がリュオーガ族だって言うのは本当？」
「……どうもそうらしい。こいつが証拠だってよ」
新は苦々しい顔付きで左腕に刻まれたリュオーガ族の痣を祐斗達に見せる
ラースの策略で祐斗達も新の正体を知ってしまっただけに複雑な表情となる
「……本当ならあんまり見せたくないんだがな。あんな奴らと同じだなんて――――」
「クスッ……それは無理」
「おわぁっ⁉」
いきなり新の背後にまで迫ってきたレモネードに驚く一同
彼女は相変わらず意味深な含み笑いを見せつけている
「……その痣は私達リュオーガ族の証。それがある限り、あなたはゼノンで私達の家族。竜の一族の血と運命からは逃げられない」
そう言いながらレモネードは首の後ろに結ばれている紐に手を掛け、ゴスロリ服の結び目をほどく

一誠は即座に反応し、鼻の下を伸ばしながらガン見
結び目が完全に解かれてゴスロリ服の上部がはだける
白く透き通る様な綺麗な肌を見せたレモネード
しかし、本当に見せたいのは彼女のおっぱいにあるリュオーガ族の痣だった
「ウヒョッホォォォォォッ！思った通り、うちのアーシアと同じぐらい素晴らしいおっぱいッ！くぅぅぅうう、堪りませんなぁっ♪」
「イッセーくん、ジロジロ見たら失礼だよ」
紳士な祐斗は手で目元を隠しながら一誠に忠告するが、一誠は目を逸らすつもりなど微塵も無い
「何良い子ぶってんだ、ムッツリスケベめ！あの娘がおっぱいを見せてくれるのなら、男は黙っておっぱいをガン見する！それが礼儀ってもんだろ！」
「君がそこまで言うなら止めないよ。……新くんの二の舞になりたいならね」
祐斗の言葉に疑問を抱いた一誠がふと新の方を見てみると――――新は小猫の折檻を食らっている最中だった……
仮面（ペルソナ）の貴公子顔負けのタ〇ーブリッジ（本気バージョン）で新の背骨が限界を超えるまで曲げられる……
「……新先輩、今はエッチぃの禁止です」

「ガ……ッ、ガ……ギ、グ……ッ、ゲ、ゴ……ッ！」
目の前の惨状を見てしまった一誠は顔中から汗を流し、背中も冷や汗でグッショリと濡れる
祐斗が一誠の肩に手を置き、〝……ね？〟と諭す様に一言だけ告げた後、一誠は何も言わずに下を向いた
やがて背骨の鳴る音が止み、小猫の折檻から解放された新は地に落ちてピクピクと体を痙攣させる
完全に白目を剥いており、次の戦いに支障が出そうな程ヤバい状態だった……
レモネードはゴスロリ服を着直してクスクスと笑う
「……あなた達も不運。ゼノンを側に置いた事を後悔する、絶対に」
「後悔？」
「……私達は誰からも愛されず、拒まれてきた呪われし一族。特にゼノンは創造主の欠片から作られた存在。……いずれ、その力が目を覚ます時――あなた達も拒絶する。他のヒト達と同じ様に。……だから、ゼノンは私達のもの。これ以上苦しみたくないなら……ゼノンを私達に返して」
レモネードは警告とも取れる台詞を一誠達に言い放つが、ゼノヴィアがそれを真っ先に一蹴する

「断る。新をお前達に渡すつもりなど無い。勿論、新を拒絶する気も無い」
「……どうして？あなた達は悪魔。……どうして違う種族のヒトがゼノンを受け入れられるの？ねえ、どうして？」
「新は――私が惚れた男だ。惚れた男を敵に渡す女が何処にいる」
またもゼノヴィアの一般男子よりも男らしい台詞が炸裂
聞いてるだけでも赤面ものであるが、一誠達もその決意は同じ
「そうだ、新は俺達の大事な仲間なんだ！正体が何であろうと変わらない！オカルト研究部の一員で――俺達の仲間だッ！」
一誠も自身の気持ちを吐き出し、皆も同意を表すよう頷く
一誠達の返答にレモネードは首を傾げた
「……分からない。あなた達は〝家族〟じゃないのに、どうして一緒にいられるの？」
「理屈ばかり押し付けるお前達には分からんだろうな」
「……」
ゼノヴィアや一誠の考えを理解出来ないレモネードはソファーに戻って座り直し、何度も首を傾げる
その間に新は「……問題無い、この川を渡れば良いんだろ？」と危なげな独り言を呟いていた

更に昔つるんでた仕事仲間達が川の向こうで「こっち来いよぉ！」と元気溌剌(はつらつ)な様子で呼んでいるらしい……

「待て、新ッ！その川を渡っちゃダメだ！死ぬぞ！」

「……よお、ノクス。随分と雰囲気変わったじゃねぇか。背中に骸骨なんか乗せちまって。……ニルス、上手そうなスープだな。何の骨でダシ取ってんだ？……グラさんもこんな川の側(そば)で筋トレとは精が出てるな。……アゼム、からかうのも大概にしとかねぇと殴るぞ？骸骨と一緒に茶化しやがって」

「ヤバいヤバいヤバいっ、新が骸骨を同伴させた人達と喋り始めたぁぁぁっ！」

一誠は急いで授業で習った心肺蘇生法を実施、何とか生還させる事に成功した

意識を整えた矢先、考え事をしていたレモネードが再び席を立つ

「……でも、どの道あなた達に勝ち目なんて無い。アノン、ニトロ、ジュウゾウに勝っても、まだラースが残ってる。あなた達もラースには勝てない。……ラースと戦ったヒト達、皆死んじゃったから」

レモネードは紅茶が入っていたティーカップの縁(ふち)を指でなぞる

1周、2週、3周させてからティーカップを指で軽く叩いた瞬間――パリンっと儚い音を立てて割れた

「……このカップと同じ。私が壊しても、物は無くならない。……でも、ラースは残さな

い。跡形も無く消しちゃうの。それは嫌でしょ？……ラースと戦ってるあなたのお友達、皆消えちゃう。……良いの？」

僅かばかりの心遣いなのか、レモネードは今すぐにでも諦めるよう進言してくる

しかし、一誠は「そんな事は無い！」と叫ぶ

「部長も、朱乃さんも、渉も、高峰も生きてここに来る筈だ！あんな奴に負ける訳が――」

「随分と買い被っているようだな、腐った下等生物ごときが」

耳に届いた辛辣な言葉遣い、背筋に寒気が走る……

新達が後ろを振り返ってみると、扉に凭れかかる赤き竜人――――ラースの姿が視界に入った

登場もそうだが、何より今の彼の姿に圧倒されてしまいそうになるだろう

「あれがラース……？さっきまでと姿が全然違うじゃないか……ッ！」

「一誠、姿だけじゃねぇ。殺気も桁違いだ……ッ」

異様な姿と気迫にたじろぐ一同を尻目に、ラースがゆっくりと歩みを進める

「……おかえり、ラース。その姿、久しぶりに見た」

「この姿になるまでも無いと思っていたが、そうもいかなかったんだ。まあ、どちらにしろ丁度良い。矮小な頭しか持たない下等生物共に更なる絶望と恐怖を植え付けてやら

ないとね」
ラースがここに来た――それは即ち〝リアス達の敗北〟を意味する……
新達にとっては悲報でしかない
その悲報を知らされた新と一誠の拳に怒りが宿った
ラースは嫌味な含み笑いを見せつけながら言う
「君達のご主人は本当に残念だよ。これから始まる最高のショーを見れずに、跡形も無く消えてしまったんだからね」
「……テメェ……ッ！」
新と一誠の怒りは爆発寸前
特に新からはドス黒い感情が沸き上がってくる……
そう、サイラオーグとの戦いで爆発した敵意、殺意、怨恨が彼の内を全て蝕もうとしていた
〝もう一押しだ〟と言わんばかりにラースは再び指を鳴らし、宙にアザゼル達の映像を映し出す
画面に映ったアザゼルが視線をラースに向ける
『……ここで出てくるとは、何の用だ？』
「ド腐れ堕天使の腐敗した耳と頭に入れておきたい情報を伝えようと思ってね。君の教

え子――紅髪の下等生物共は消滅させてもらったよ、僕の手でね」
皮肉な笑みを浮かべてラースは冷酷な知らせを画面越しに伝える
アザゼルは一瞬目を見開き、顔を下に俯かせた……
絶望したであろうアザゼルを肴にラースは更に嘲笑う
「ハハハッ、由緒正しき竜の一族に歯向かった当然の報いさ。だが、まだ終わらせないよ。残りの下等生物を死よりも惨たらしい絶望の底へと叩き落としてやる。そうすれば、腐りきった顔も少しは綺麗に映るだろう。どうした?怒りに狂い過ぎて声の出し方すら忘れてしまったか?」
徹頭徹尾煽ってくるラース
こんな陰湿な挑発をしてる時点で〝由緒正しき〟等とよく言えたものだ
大広間にいるグレモリーとシトリー陣営が怒りに震える中、画面に映っているアザゼルも徐々に震え出し――
『……ハーッハッハッハッハッハッハッハッ!』
――何故か大口を開けて高らかに笑い始めた
解せない事態に訝しげな顔付きになるラース
「……何の真似だ?突然笑いだすとは、まさか狂い過ぎて逆にハイになってしまったのか?」

『ハッハッハッハッハッ！……いやぁ、スマンスマン。お前さんの自信満々の顔付きと台詞、俺の横にある光景とあまりにも噛み合わないもんだから、可笑しくて可笑しくて』
「何……っ？」
アザゼルの意味深な言葉にラースは映像を〝アザゼルの隣〟に移す
映像の中には〝消滅させた筈のリアス達が存在している〟画が映っていた……
確かに酷い傷だらけではあるが、しっかりと生存している
「……ッ！生きてる……ッ、あ、新ッ！部長も！朱乃さんも！渉も！高峰も生きてる！生きてるぞッ！」
「……ッ……あぁ……ッ」
一誠は狂喜乱舞して新の肩を揺さぶり、新も感極まって一筋の涙を流す
他の皆も嬉し泣き、喜ぶ中――ラースだけは愕然としていた
「……何故だ……ッ。何故あのゴミ虫どもが生きている……ッ？あの攻撃をまともに食らって生きている筈が無い……ッッ！」
『俺だってビックリしてるさ。突然ボロボロのこいつらが戻って来たんだからよ』
アザゼルさえ知らないリアス達の生存の理由
実はラースが十字火竜を放った時、ラースは即座に背を向けて勝利の扉を潜ろうとしていたのだ

確かに技の威力は凄まじく、まともに受ければ消滅は免れなかったであろう
だが、一瞬の傲慢の隙を突いて渉は賭けに出ていたのだ
まず背中のマントを取り外し、自分ごとリアス達をそれで覆い隠して防御の術式を最大限にまで付加
更に体内に宿りし三魔族の力も借りて二重の超強化、外部からの攻撃を遮断
幾分かダメージが返ってきたものの、消滅を免れた上に『竜星の間』からの脱出に成功した……
ラースとの戦いはリアス達の敗北ではあるが、生存の成功により少なからずもラースの思惑に一矢報いる事が出来た
『俺の教え子達を侮り過ぎていた様だな。ええ、由緒正しき竜の一族さんだっけ？相手の状態も確認せず、よくもまあ勝利者を気取って散々煽れたもんだよなぁ？お前の思惑は大ハズレ、マヌケなのもお前の方だったみたいだな！ハハハハハハッ！』
「うわぁ……先生、ここぞとばかりに言いたい放題……。でも、グッジョブ！俺もスッキリしたぜ！」
ラースの失態がよほど気に入ったのか、アザゼルは下卑た笑い声を上げ続け、一誠は密かに親指を立てる
赤っ恥をかかされたラースは――――自分の足下に亀裂を生じさせる程怒りに震え、

掌(てのひら)から出した炎で画面を焼き消す
相当堪えたのだろう……彼の顔は憤怒に歪みきっていた……っ
「……調子に乗りやがってぇ……ッ、このド腐れクソゴミクズ堕天使がァ……ッ！あぁ？生きてたから何だ？目の前のゴミ虫どもを消した後で殺せば何の問題も無い……ッッ！寧ろ、四大魔王への凝った手土産が増えただけの事だ……ッ！焼き払い、消滅させるだけでは生温(ぬる)い……ッ！この世のありとあらゆる苦痛を芯にまで響かせ、引き裂き削り――――鏖殺(おうさつ)してくれるァ……ッッ！」
完全に頭に血が昇ったラース
今にも全てを消し飛ばしそうな具合のオーラを見せつけてくる
新達も気を引き締め直して構えに入る
「何でもお前の思い通りにいくと思ったら大間違いだ。その証拠に、見事に足を掬(すく)われたな」
「ざまあみろ！俺達はそう簡単にやられやしないんだよッ！」
「黙れェッ！死に体寸前のカスどもがァッ！手負いの貴様らなど、直ぐにでも滅ぼしてやるッ！だが、その前に――――相応しい舞台を見せてやらないとなぁ……ッ」
ラースが指を鳴らした途端、足場が揺れ始めた
そして徐々に光が皆を囲い、移動を開始する

到着したのは最初に足を踏み入れた大広間――――つまりアザゼル達が今いる場所の真上

空中に浮かぶ氷上のフィールドで最終戦が始まる……

「このフィールドが『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』の終盤――――最終局面（グランドフィナーレ）の舞台だ。ここから先は前哨戦の様に容易い物だと思うなよ？貴様らを血反吐（ちへど）の上で踊り狂わせてやる……ッ。そして最期となるこの場で無様に這いつくばりながら、自らの浅はかさと愚かさに溺れて逝けエエエエエッ！」

凍える氷城内に浮かぶ舞台（フィールド）にて、忌まわしき竜の宴が終局に向けての始まりを奏でた……

グランドフィナーレ、非情なる火竜

遂に迎えた『竜獄の宴（ドラゴニック・ヘルズ）』最終局面（グランドフィナーレ）、宙に浮かぶ氷上のフィールドでの死闘
グレモリーとシトリー陣営のメンバーは新、一誠、祐斗、ゼノヴィア、イリナ、小猫、ギャスパー、ロスヴァイセ、由良、巡、仁村
皆の前にラースとレモネードが立ちはだかる
ラースとレモネードがそれぞれ離れた位置に移動し、ラースが口を開く
「さあ、始めようか。下等生物ども。貴様らの悲鳴と苦痛を枯れるまで発してもらうぞ。せっかくのゲストにも絶望を与えてやりたいからな」
そう言いながらラースが上を指差すと――――上空には球状の結界に捕らえられたセラフォルーとソーナがいた
彼女達を救う為にも絶対に負けられない
新は真っ先にラースの方へと歩みを進めていった
「新、俺もそっちに行くぜ」
声を掛けてきたのは一誠だった
一誠の意外な選択に新が訊ねる

「なんでこっちに来た？お前なら向こうに行きそうだと思ってたんだが」
「確かにあのレモネードって娘の方が俺も戦いやすいと思ったけど……部長や渉を酷い目に遭わせたあの野郎を放っておくのが嫌だったんだ。１発ぶん殴ってやらないと気が済まない」
　決意を固めた表情で言い放つ一誠に新は口の端を少し吊り上げた
「分かった。なら、遠慮無くぶちのめしてやろうぜ」
「当たり前だ！って事で木場！そっちは皆に任せる！」
「分かったよ、無茶だけはしないでほしい――――と言っても、君達の場合じゃ難しいかもね」
　祐斗は一誠の提案を了承した後、残ったメンバーと共にレモネードの方へと進む
　ラースの眼前に並び立つ新と一誠
　彼らの無謀とも言える思考にラースは嘲笑した
「やはり頭の中まで腐りきってる様だな、下等生物ども。アノン程度に苦戦してた奴らが僕を相手にするなど――――」
「粋がるのもそこまでだ。バカの一つ覚えみたいに下等生物下等生物言いやがって。その生意気な口を閉じねぇと舌噛むぞ？」
　新は闇皇（やみおう）に、そして一誠も禁手（バランス・ブレイク）化して鎧を具現化

２人が拳を突き出してラースに言い放った

「「俺達を舐めるなよッ！」」

「……良いだろう、お望み通り原型が無くなるまで甚振(いたぶ)り尽くして殺してやる……ッ。弱小な種族に生まれ、リュオーガ族に抗(あらが)い牙向けた事を――――地獄の奥底で後悔しろォッ！」

ゴオオオッッ！

遂に最終局面(グランドフィナーレ)が始まった……っ

ラースは熱風を放つと同時に両翼を広げて飛び出し、新と一誠も拳を固めて駆け出した

新と一誠、両者の拳がラースのボディに深々と突き刺さる

強烈な打突音と衝撃がラースの背中を突き抜けるが、ラースは両手で新と一誠の頭を掴み、そのまま冷たい床へ叩き付けた

更にお互いの体をぶつけさせてからフィールドの端へ投げ飛ばし、右手を開いて灼熱の炎を溜め込む

「――――『火竜の咆哮(デリート・プロミネンス)』ッ！」

右手から放たれた灼熱の火竜が２人を喰らおうと突き進んでくる

それを見て瞬時に新は剣に魔力を溜め、一誠もトリアイナ版『僧侶(ビショップ)』にチェンジして

砲口を向ける
「――――クロス・バーストォォッ！」
「ドラゴンブラスタァァァァァァァァァァァッ！」
赤い剣戟波と赤い砲撃が襲ってくる火竜と衝突、大規模な爆発を生み出した
爆煙の中を突っ切る2人、先に出てきたのは一誠だった
一誠は即座に『僧侶（ビショップ）』からトリアイナ版『騎士（ナイト）』にチェンジしており、神速の勢いでラースとの距離を詰める
「アスカロンッ！」
『Ｂｌａｄｅ（ブレード）!!』
左の籠手から龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖剣アスカロンの刃を出してラースに斬りかかる
それに対してラースは手に炎の爪を纏わせて防ぐ
『火竜の鉤爪（イグニ・クロー）』は足だけでなく手にも応用する事が可能なようだ
一誠はありったけの力を込めるがラース本体には届かない
「こんな細い剣、貴様もろとも蒸発させてくれるッ！」
「これで終わる訳ねぇだろッ！新アァァァッ！」
一誠が叫んだ直後、爆煙の中からラースの頭上に飛び出してきた新
濃密なオーラを纏わせた両足での蹴りをラースの顔面に入れる

更にそこから左右の蹴り、カカト落としなどを乱舞で繰り出し滅多打ち
「景気付けだァッ！『龍剛の戦車』ウウウウッ！」
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ!!!!』
一誠も負けじとトリアイナ版『戦車』の腕を形成
撃鉄を鳴らして巨大な拳でラースを上空にはね上げた
新はここから更に追い込みを掛ける
「――我、目覚めるは闇と焔を受け入れし、魔の皇なり！無限の欲望を喰らい、不屈の闘志を糧に力を望まん！我、闇に染まりし焔を纏う皇となりて、汝らを光無き漆黒の闇へと堕とそう――――ッ！」
呪文を唱え終えた新は『女王』形態となり、６枚の翼を広げて飛び立つ
ラースの眼前に素早く回り込み、左腕の盾から超高熱の火球を出現させ――――魔力を高めた剣と同時に解き放つ
「――――ブレイジング・シュートォォォォォォッ！」
魔力を高めた高熱の螺旋砲撃がラースを呑み込み、凍てつく床ごと爆散する
新と一誠によるオーバーキル染みた連携攻撃
こんなのをまともに食らってしまえば大抵の者は見事に戦闘不能に陥ってしまうだろう……

大技の連続使用で疲弊し、呼吸を整える新と一誠
彼らの表情は険しいままだった
その理由は言うまでも無い……
あれだけの猛攻をまともに受けた筈のラースが平然とした様子で立ち上がったのだから……っ
自身に付着した汚れを取り払い、可笑しそうに嘲笑う
「やはり脆弱だな。これだけやっても僕の鱗に傷1つ付ける事が出来ない。所詮その程度が君達下等生物の限界だったと言う訳だ」
「……ッ⁉あれだけ打ち込んでもピンピンしてんのかよ……ッ」
「ムカつくが、認めるしかねぇな。こいつ――強い。サイラオーグと互角……いや、もしかしたらそれ以上かもしれねぇ……ッ」
ラースの異常とも言える桁違いの強さに改めて戦慄させられる2人
「今度はこっちの番だ」とラースは熱を帯びたオーラを全身から排出し、巨大な何かを複数形成し始めた
やがてオーラは巨大な腕の形となり――それが6本完成する
ユラユラと蠢(うごめ)くのは炎で形成された6本の巨腕
それを見た時、一誠の脳裏に〝これとよく似た物〟が過(よぎ)る

――――〝サイラオーグとの戦いで新が出した漆黒の巨腕〟――――

それと同じ技をラースが見せつけてきた……

「焼け滅びろ――――『火竜の阿修羅』ッッ！」

灼熱の巨腕が襲ってくると同時に炎が幾重にも放出される

とてつもない絨毯爆撃に新と一誠は避ける暇も無く、爆撃と巨腕による殴打を食らってしまう

爆撃で飛ばされた所を巨腕が薙ぎ払い、叩き落とし、殴り潰す

たとえ巨腕を回避したとしても無尽蔵に降り注いでくる炎が全身を焼き焦がす

僅か一手でボロボロに追い詰められた新と一誠

かろうじて瞬殺は免れたものの、受けたダメージは相当なものだろう……

２人とも鎧が大きく破損しており、口から血の塊を吐き出す

熱と痛みで意識が遠退きそうになるが、首を振り自ら頬を叩いて呼び覚ました

「ぐ……ッ！なんてパワーだ……ッ！少しでも防ぐのが遅れたら、死んでたぞ……ッ」

「さっきのアノンって奴もバカみたいに強かったけど……こいつはそれ以上の強さだ……ッ！」

「当たり前だろう？僕は四大魔王を死の淵まで追い詰めたんだ。君達など、あいつらに比べれば虫ケラ――――いや、微生物以下。見せしめにしても小さ過ぎるぐらいだ。もっ

とも、セラフォルー・レヴィアタンにとっては大きな絶望となるだろうけどね。君達を見るに堪えない程の死骸へと作り替えてやる。それまではこの凍てつく舞台で踊ってもらうぞ？僕達にとって君達も、他の奴らもそれ以上の価値を持たない――人形でしかないんだよッ！」

ラースは両手を広げ、狂気に満ちた声音で叫ぶ

「踊り狂って、もがき苦しみながら最期に壊れ死ぬ！これこそっ、底辺で這いつくばる下等生物どもが輝く最高の見世物だ！フハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

もはや狂ってるとしか言い様が無いラースの思考に新と一誠は歯を噛み締め、是が非でも止めなければならないと奮起する

鎧を形成し直し、いざ行かんとしたその時――離れた位置から悲鳴が聞こえてくる

悲鳴の主は――意外にもレモネードだった

右腕の傷を押さえ、疲弊した様子である

いくら力が強くても多勢に無勢では無理もない

祐斗達も傷が目立ってはいるが、状況的には祐斗達の方が有利だ

「……この人数相手に持ち堪えただけでも相当だよね」

「ああ。だが、後ひと息だ」

レモネードを取り囲む様に位置付く祐斗達

一方、レモネードは息を切らしながらラースに呼び掛ける
「……ラース、お願い。あなたの力を分けて。……このヒト達、ちょっと強い。だから、あなたの炎を呑めば勝てそう」
そう、彼女はリュオーガ族に伝わる〝竜の呼吸法〟を会得しているので、形無きものを吸収する事でより強い攻撃を生み出せる
実際『人形の間』でも匙の黒炎を喰らい、一瞬で匙達を圧倒した
彼女の要求にラースは———舌打ちをした
「……そうか、そうか。レモネード、お前もあいつらと同じく腑抜けたか」
「……ラース？」
ラースは上空に飛び上がり、両手を広げた
そこから炎を噴き出し、何かを形成し始める
「だったら、今すぐ———下等生物もろとも消してやるよ……ッ！」
『———ッ⁉』
ラースから生み出された炎が巨大な十字架を作り、そこに禍々しく燃え盛る火竜も出現する
磔（はりつけ）にされた巨大な火竜
それはリアス達を一撃で沈めた凶悪極まりないものだった……っ

だが、それよりもラースの思惑に皆が絶句している

――〝レモネードごと新達を殺すつもりだ〟――

トンでもない行動に出たラースに一誠が叫ぶ

「ちょっ、ちょっと待てよ！おい！あの娘はお前の仲間なんだろ⁉そんな物を放ったら、あの娘まで――」

「ああ、消し飛ぶ。だから何だ？そいつごと貴様らを殺すんだ、当然だろ」

ラースはレモネードに対して侮蔑の視線しか送らないばかりか、一誠の言葉を全否定する

「何が仲間だ。下等生物ごときに遅れを取り、あまつさえ助けを求めるなど、情けないを通り越して哀れそのものだ！そんな弱っちい奴など――リュオーガ族には必要無いんだよッ！弱っちいから他の連中も貴様らゴミクズごときに呆気なく負けたんだッ！死んで当然！寧ろ死ねッ！弱々しい態度を見せる様な奴は一族の恥だッ！汚点だッ！存在自体が腹立たしいゴミクズ以下のクソ虫めッ！どいつもこいつも腑抜けやがって！せめて下等生物と共に葬(ほうむ)られるのが本望だろッ！」

「テメェ……ッ、狂ってやがる……ッ！」

あまりにも身勝手過ぎるラースの言い分に新だけでなく、全員が怒りに顔を歪めた

レモネードは未だに信じられず言葉を失い、ただ立ち尽くすだけだった

ラースは醜悪な笑みを浮かべ――――セラフォルーにも言い放つ
「セラフォルー・レヴィアタンッ！そこから見ているが良いッ！何も出来ないまま、貴様の可愛がっている下僕どもが跡形も無く消し飛ぶサマをなァッ！」
「ダ、ダメェッ！やめてぇッ！」
「滅びろゴミクズどもォッ！竜奥義（りゅうおうぎ）――――『消滅（クリア）の十字火竜（ザ・グランドクロス）』ッッ！」
燃え盛る十字架の火竜が吼えながらフィールド上の全員に襲い掛かっていき――――
極大の爆発を引き起こした
氷城内にも衝撃と爆風が行き交うだけでなく、崩壊したフィールドは瓦礫と化し、下で待機していたアザゼル達に降り注ぐ
フィールド上だけでなく、下にいるアザゼル達をも巻き込んだラースの卑劣極まりない攻撃
ラースはゆっくりと降下しながら爆煙を翼の羽ばたきで掻き消す
〝消し飛んだか〟と言わんばかりの醜悪な笑みで降り立ち、新達の消滅を確認しようとしたが――――ラースは己の目を疑った
――――〝奴らが消滅していない……ッ？〟――――
瓦礫の山々の中からボロボロの新達が出てくる
思わぬ結果にラースは不快さと苛立ちを募（つの）らせる

「カハ……ッ、危なかった……ッ！防御に全力をつぎ込んでなかったら……ッ！」
どうやら寸前の所で皆は防御魔方陣を展開して消滅を免れたのだろう
だが、それよりもラースの機嫌を損ねた事態が起こっていた
「……ッ！貴様ァ……ッ、何のつもりだァ……ッ？――――ニトロォオッ！」
ラースの視線の先を見てみると――――そこには庇う様にレモネードを抱える竜人がいた
『血溜りの間』で敗北した者の介入に皆が驚く
ニトロはレモネードをゆっくりと下ろし、ラースを睨み付ける
「何となく嫌な予感がしたんで来てみりゃ、どうやら正解みてえだな……！それより何のつもりだァッ！ラース、何でレモネード嬢まで殺そうとしやがったァッ⁉」
「負け犬と弱者などリュオーガ族には必要無いッ！下等生物ごとき相手に弱音を吐いた時点でクズ！役立たず！ゴミ！負け犬だッ！ニトロ、お前も本来なら自害してる身だ。それを敵に情けを掛けられて生きてやがる。目障りなんだよ、クズが！」
ラースの言葉にニトロは拳を震わせ――――遂にキレた
「テメェ……漢の風上にも置けねぇ……ッ！そんな事でレモネード嬢をォ……ッ！ようやく分かったぜ……、ベイビーちゃんの言ってた意味が……ッ！」
「ああ？」

「〝誰かの為に戦った〟からベイビーちゃん達は強くて、俺達が相手でも諦めなかった！心配してくれる奴がいるから、そいつの為に戦い、そいつを守るって想いがベイビーちゃん達を強くしたんだ！ラースッ！テメェにはそれが分からねぇのかァッ⁉」
「ゴミクズごときの言葉に毒された貴様が何を言う！負けた奴は死ね！それがリュオーガ族の掟だッ！」
「その掟に縛られて何人もの同胞が死んでいった！そんな掟――もうゴメンだ！これ以上減らしたら、俺達は本当の意味で滅びる！いい加減変わらなきゃ、変わらなきゃいけねぇんだよォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
ニトロは大きく叫びながらラースに向かって突っ込んでいく
固めた拳を突き出そうとした刹那――ラースの右手がニトロの胸を貫いた
堅牢だった鱗を容易く貫き、背中から突き出た手から血が滴(したた)り落ちる
手を引き抜くラース、風穴を開けられたニトロは血を吐きながらヨロヨロと後ろに下がる
「もう良い、見るに堪えない。今の貴様は目障りだ。――消えろォッ！」
ゴオオオッ！
ラースの手から容赦無く放たれる『火竜の咆哮(デリート・プロミネンス)』
火竜はニトロを呑み込み、体を端々から崩壊させていく……っ

この時、ニトロは不思議と満足感に満ちていた
〝今までは自分の為だけに戦ってきた〟
〝誰かを守る事がこんなにも勇気と力をくれたのか〟
畏怖していたラースに立ち向かえたのもギャスパーの言葉があったから
そして、それを教えてくれたのはギャスパーが守りたいと……一緒にいたいと言う仲間……
仲間がいる事の素晴らしさにニトロは感謝の念を抱いた
『……もし、俺達がリュオーガ族じゃなかったら……ベイビーちゃんも、ベイビーちゃんの仲間も、俺達と仲良くしてくれたかな……。へへッ、こうやって誰かの為に戦って、誰かを守って死んじまうのも……悪くねぇ……っ』
最期に安らかな気分を味わう事が出来た漢（ニトロ）は無慈悲な火竜に体を壊され――――消えて逝った……っ

ラース、究極の変身！

静まり返る城内
無慈悲に放たれた『火竜の咆哮（デリート・プロミネンス）』が同族である筈のニトロを跡形も無く消し飛ばしたのだ
信じ難（がた）いラースの所業に新達は絶句、レモネードに至っては――
「……い、いや……っ。いやぁ……っ。いやぁぁぁ

い領域を侵している
新と一誠は怒りのオーラを滾(たぎ)らせてラースに立ち向かう
「テメェ……ッ、いい加減にしろよ……ッ！好き勝手にしやがって……ッ！」
「俺もここまでムカついたのは初めてだ……ッ！何が竜の一族だ！てめぇはただの鬼畜野郎じゃねぇか！仲間を平気で殺しやがって！」
「ああ？さっきから何度も言ってるだろ？弱い奴はリュオーガ族には必要無い！そこで泣きべそかいてるクズも、俺に歯向かってきたクズもいらねぇんだよッ！」
泣き崩れ放心しているレモネードを貶(けな)し、既に消え去ったニトロをも侮辱するラース
もはや我慢の限界を超えた2人は鎧を形成し直す
「……何でリュオーガ族が嫌われてるのか分かった。お前がそうやって次々と何もかも消していったから、危険視されたんじゃねぇか！」
リュオーガ族の事情は全く分からない一誠だが、それだけはハッキリと告げる
身勝手に命を奪い続けてきた者を誰が迎え入れるだろうか――――否、迎え入れる訳が無い
頭から種族を否定し、気に召さないものを一切合切消していけば当然の結果だ
それを未だに理解しようとしない、改めようともしないのが1番の害悪である
「てめぇみたいな奴は絶対に許さないッ！許してたまるかッ！」

「黙れ！悪魔に身を堕としたゴミクズが俺に説教するなッ！許すも許さないも、弱っちいのが1番の罪だ！リュオーガ族に弱い奴はいらん！弱い奴は死ね！それがリュオーガ族の掟であり、この世界にも言える事だ！弱者が我が物顔で蔓延る世界など虫酸が走るッ！死にたくないなら――――常に強者でいろォッ！単純な事だろうがッ！」

もはや何を言っても聞く耳持たないラース

こんな危険な奴を野放しにしてはいけない

「一誠の言う通りだ……！テメェを野放しにしたら、それこそ終わりだ！ぶちのめして、ぶちのめして、もう一度砂漠に沈めてやるッ！2度と出られないぐらいになァッ！」

絶対に倒すと言う決意を更に固くした2人は攻撃態勢を取るが、ラースは無駄だと言わんばかりの哄笑を上げる

「本当に何処までもお気楽なゴミクズどもだな。〝今の俺〟にすら勝てない貴様らが、この先の圧倒的な絶望を目にしても同じ台詞が言えるか？」

――――〝今の俺〟――――

突然出てきた意味深なワードに新が「どういう事だ？」と訊ねると、ラースは右手の人差し指を立てて言う

「あと1回」

「「……っ？」」

「あと1回、俺は他のリュオーガ族よりも多く変身出来る」
「「な……っ⁉」」
そう、リアス達と戦った時でも彼は言っていた……っ
あと1回、変身出来る事を……
今の状態だけでも充分な脅威だと言うのに、この上まだ進化を隠し持っていた
驚愕する2人の前でラースは全身から今まで以上に濃密なオーラを漂わせる
「光栄に思えよ、クズども！俺が究極の姿を見せるのは――――四大魔王とやり合った時以来だからな！そして……貴様らの最期に相応(ふさわ)しいフィナーレを飾ってやるよォッッ！」
ドンッッ！
ラースの体から放たれる衝撃波と熱を帯びた莫大なオーラが足元の氷を吹き飛ばし、その場にいる全員に多大な威圧感を与える
そして、異変が始まった……
まず胸部の肉が異様な形に盛り上がり、それがドラゴンの頭部へと変化していく
大口を開けて甲高(かんだか)い唸り声を発するドラゴンの頭部が赤い目を光らせる
次に背中の両翼が更に大きくなり、腕と足も一回り肥大化
肥大化した腕と足の先に鋭利な爪も生え揃う

臀部から伸びる尻尾も更に重厚な様相となり、氷を叩き割る
胴体上にある頭もより攻撃的で凶悪なフォルムへと変化する……
変異していく度に衝撃波が巻き起こり、新と一誠はその気迫に圧されてしまう
「なんてオーラだ……っ！さっきまでとは全然違う……っ！」
恐々とする新と一誠の前に真の力を発揮したラースが現れた
胴体上と胸にドラゴンの頭部、巨大化した両翼、全てを薙ぎ払い切り裂かんとする様な爪
これがサーゼクスやセラフォルーら四大魔王を追い詰めたラースの究極態……っ
「さあ、宴の始まりだ。貴様らがどんなに泣き叫んでも――俺は決して容赦しないぞ」
余裕を孕んだ態度のラースだが、全身から滲み出てくるオーラには並々ならぬ殺意が混じっている
一誠も今の状態では勝てないと踏み、即座に真・女王への呪文を唱え始めた
「我、目覚めるは、王の真理を天に掲げし赤龍帝なり！無限の希望と不滅の夢を抱いて王道を往く！我、紅き龍の帝王と成りて！――――汝を真紅に光り輝く天道へ導こう――――ッッ！」
『Ｃａｒｄｉｎａｌ　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ!!!!!!』
赤いオーラが迸り、一誠はサイラオーグとの戦いで発現した真紅の鎧を展開した

『真紅の赫龍帝（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）』

共に最強の形態と化した新と一誠だが、それでもラースは嘲笑の様子を見せていた

「聞いた事はあるぞ、確か『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』だったか？滅びたドラゴンをザコが宿した所で所詮ザコはザコ。使い手がクズでは話にならないな！」

「言ってろ！その生意気な面をブッ飛ばしてやるッ！」

『Ｓｔａｒ（スター）　Ｓｏｎｉｃ（ソニック）　Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』

一誠は背中のブースターから火を噴かして神速の勢いで飛び出す

拳を固め、力を込めた一撃をラースの顔面に見舞った――その瞬間、なんとラースの顔面をすり抜けていった……！

何が起きたのか分からずラースの真後ろで止まり、振り返る一誠

よく見ればラースの姿が少し透けている……

「まさか、残像……ッ！」

新は瞬時に理解した

〝ラースが残像を残して一誠の攻撃を回避したのだ〟と……

一誠は急いでラースを探そうと辺りを見回そうとした矢先――背中に強い衝撃が走る……ッ

死角からラースが一誠に豪腕の一撃を食らわせてきたのだ

そのまま目にも止まらぬ速度で新も巻き込み上昇
2人を上へ放り投げた後、素早く頭上に先回りし――合致させた両手で殴り落とす
まるで隕石の如く落とした新と一誠に対してラースは追撃を止めない
両足を広げて一気に降下――2人の腹を踏み潰す……ッ！
声にならない悲鳴と共に血の塊が吐き出され、氷の床を赤く染める
再び跳躍して2人の前に降り立つラース
「フンッ、やはり弱いな」
必死に体を起こそうとする新と一誠
ラースはそれを見下しながら尻尾で1度地面を叩く
新は一誠にアイコンタクトを送り、一誠もそれに頷く
『Ｓｔａｒ（スター）　Ｓｏｎｉｃ（ソニック）　Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』
新と一誠は限界まで速度を上げ、ラースの前から消えるように高速移動を開始した
ラースはその場から1歩も動かず、ただ静止しているのみ……
空を切る音が幾重にも響き、一陣の風がラースの頬を通り過ぎた刹那――
ドゴッッ！
鈍く重い打撃音が鳴った……
ただし、それは新と一誠がラースに一撃を与えた音ではなく――〝ラースが新と一

誠に爪での一撃を与えた音〟だった
「が……ッ、嘘、だろ……ッ⁉」
「これが俺と貴様らの実力差だ」
そんな事あってたまるかと新は蹴りを、一誠は拳打を繰り出す
しかし、その瞬間にラースの姿が消え、２人の攻撃は空振りに終わる
直後に一誠はラースの豪腕で薙ぎ払われ、城の壁に叩き付けられる
すかさずラースは新の腹に強烈な膝蹴りを叩き込み、肘を振り下ろす
重過ぎる二撃を入れられた新の骨は大きな悲鳴を上げ、肋骨も何本か折れた
太い尻尾が新の胴体に絡み付き、宙に浮かされる
後は豪腕の拳で滅多打ち、ラースは何度も何度も新を殴打していく
「フハハハハハハハハハッ！ゼノンッ！どうやらお前は生き方を間違えたな！おとなしく俺の軍門に下っていれば、弟として迎え入れてやったものを！くだらない情に流され、こんなゴミクズどもの傷を舐め合った事を後悔するが良いッ！」
爪で引っ掻き、殴り、尻尾を振り回して冷たい地に叩き付ける
それはもはや戦いではなく、一方的な虐殺だった……
真の姿となったラースの強さ、恐ろしさに誰もが絶句するしかなかった
リアスも朱乃も、他の皆も、アザゼルでさえもプレッシャーに当てられて動く事が出

来ない
「……コイツは……本物のバケモノかよ……っ」
恐々と口に出すアザゼル
一頻り虐殺を終え、意識が消えかけているズタボロの新にラースは更なる凶行を重ねる
胸から生えたドラゴンの頭部が大きく口を開け――――新の左腕を噛み千切った……っ！
「アアアア

は――

「あ、ああ……っ、イヤァァァ

「――――ッ⁉嘘だろ……ッ⁉クリムゾン・ブラスターの中を……ッ⁉」
ラースの規格外とも言える行為と強さに驚愕せざるを得ない一誠
尚も放射し続けるが、ラースは意にも介さず爆進
赤いオーラの中から飛び出したラースが巨大な爪での一撃を見舞う
強烈な打突を食らった一誠は砲撃を中断させられ、更に脇腹に鋭い蹴りを打ち込まれる
凶悪なまでに鋭利な爪先が一誠の脇腹を砕き、左の膝蹴りが腹部に突き刺さる
衝撃で口から血と共に内容物を吐き出し、間髪入れず豪腕で叩き伏せられた
跳躍したラースは容赦無く巨大な足で一誠を踏み潰す
1発、2発、3発と念入りに踏み潰した……ッ
鎧は粉々に砕かれ、身体中の穴と言う穴から血が噴き出し、遂に一誠の目から光が消えてしまった
ピクリとも動かなくなった一誠を見て、ラースは冷酷に吐き捨てる
「フンッ、つまらん。やはり紛(まが)い物のドラゴンなど、この程度でしかなかったな」
完膚無きまでに2人を圧倒したラース
アザゼルは歯をギリギリと鳴らし、手元に巨大な光の槍を生み出す
「よくも……よくも俺の教え子をやりやがったなァァァァァァァァアアアッ！」

幾重もの翼を羽ばたかせて突貫するアザゼルだが、ラースの振るった爪により――――光の槍は呆気なく砕かれた

そのまま横薙ぎの豪腕で殴り飛ばされ、壁に激突する……

一矢報いる事すら出来ない……

そんな自分をアザゼルは激しく呪った……ッ

「チクショウ……ッ！チクショォォオオオオオオオ……ッ！」

「腐れ堕天使、貴様にはその無様な泣きっ面がお似合いだ。残った奴らも無様に、そして惨めに泣いてろ。リュオーガ族に歯向かった事を――――この俺に歯向かった事を悔やみ、呪い、地獄の奥底で懺悔しろ！それが貴様らの最期の生き方だッ！」

哄笑と嫌味を放ち続けるラースに対し、もはやリアス達には成す術が無い……っ

天地を引っくり返しても、この規格外のバケモノには敵わない

そんな念がリアス達の精神を蝕む

「今の内に思い付く限りの懺悔をしておけよ！貴様らは一片たりとも姿形が残らなくなるからなァ！この世で俺に勝てる奴などいないッ！凍てつく城内で飾られる下等生物どもの懺悔、叫び、嗚咽、断末魔ッ！グランドフィナーレに相応しい最高の協奏曲だッ！フハハハハハハハハハハッ！」

凍える城内で忌々しき竜人が愉悦に浸り、高笑いを上げる……っ

徹底的に嬲(なぶ)られ、屍(しかばね)の如く動かなくなった赤龍帝(イッセー)
左腕を喰い千切られ、火竜に全身を焼かれた闇皇(アフタ)
もう彼らに奇跡が起こる事は無いのか……？
リアス達はこのまま悪しき竜人に滅ぼされてしまうのか……？
だが、この時――――意識の消えた新には異変の予兆が現れていた
左腕を喰われた傷痕が静かに微弱な鳴動を起こし、そこから〝黒い何か〟が蠢(うごめ)いている事を――――リアス達はおろか、ラースさえも気付いていなかった……っ

新の究極変身！超越の黒竜帝！

「貴様……アッ！貴様だけはっ、貴様だけは絶対に許さんッ！……殺してやる！斬り殺してやるッッ！」

新の惨状に怒り狂ったゼノヴィアがエクス・デュランダルを振りかざして斬りかかる

聖なるオーラを爆発させながら斬ろうとするが、ラースは爪の一振りでデュランダルを弾き飛ばした

そして太い左足の蹴りがゼノヴィアの腹に深々と食い込み、彼女を吹っ飛ばす

内臓にまで至ったのか、彼女の口から血の塊が吐き出される

ラースは依然として哄笑を上げ、戦意の消えかけた皆を見下す

「ゴミカスどもがどれだけ抗(あらが)おうと無駄だ！貴様らは俺に滅ぼされる運命なんだよ！既に決まった運命(さだめ)に逆らうのは愚か者のやる事だ！全く愚か極まりないバカどもだよな？腐れ堕天使も、斬りかかってきたクソ女も、そしてゼノンも！結局は余計な物が混じり合った失敗作だったな！」

「……失敗作、ですって……っ？」

ラースの辛辣な罵倒にゆっくりと首を向けるリアス

「その通りだろ？人間のくだらん情に流され、悪魔なんぞに媚び諂(へつら)ったゼノンなど失敗作だ！せっかく我らが創造主たる『災厄の漆黒竜(インフェルニア・ドラゴン)』の欠片から作ってやったのに、恩を仇で返しやがって。まあ、ゼノンはこの場で殺処分して欠片を回収――後でもう一度作り直すさ。今度は俺に従順なペットとしてなぁ！」

何処まで下劣なのだろうか……

自らの復活の為に作った新を失敗作呼ばわり

ここまで外道な性格は見た事が無いだろう

リアスは怒りに任せて消滅魔力をラースに放つが、爪の一薙ぎでいとも簡単に掻き消されてしまった

悔し涙を流すリアスに向かってラースは言う

「所詮、これが貴様らと言う愚かな下等生物の限界だ！弱い者同士で共存し合って何になる⁉結果的に種族の血を汚し、力を衰退させただけじゃないか！その愚行を犯しただけでなく、貴様らは俺に歯向かった！リュオーガ族の逆鱗に触れてしまった時点で――――貴様らは滅びへと消え逝く運命(さだめ)なんだよ！フハハハハハハハハハッ！」

一寸の光すら射さない暗闇の世界
新の精神はまたもこの暗闇に放り込まれてきたようだ
見渡しても暗闇ばかり、他には何も存在しない……
『目が覚めたようだな？』
聞き覚えのある声が耳に飛んでくる
ゆっくりと振り返ってみると――そこにはなんと自分と同じ姿の黒い塊が佇(たたず)んでいた
血の如く赤い双眸(そうぼう)を輝かせ、ジッと見据えている……
「……誰なんだ、お前は……っ？」
『俺か？――俺はお前だ。そして……お前は俺デ　モ　ア　ル』
そう言うと黒い塊が蠢(うごめ)き人の形を変えていく
禍々(まがまが)しい両翼が揃い、長い腕と爪、尻尾も生えてくる
目の前に現れたのはサイラオーグとの戦いで発現した紅き眼の黒竜……
これこそが新の元となった『災厄の漆黒竜(インフェルニティ・ドラゴン)』オニキス
「これが……俺、だと……ッ」
『ソ　ウ　ダ。キ　サ　マ　ハ　ワ　シ　ノ　カ　ケ　ラ
カ　ラ　ツ　ク　ラ　レ　タ　ソ　ン　ザ　イ。ソ　シ

テ、イ　マ　ノ　キ　サ　マ　ハ　セ　イ　ト　シ　ノ　ハ
ザ　マ　ニ　イ　ル。ア　カ　キ　リ　ュ　ウ　ノ　コ
ゾ　ウ　ニ　ヒ　ダ　リ　ウ　デ　ヲ　ク　ワ　レ、ヤ
カ　レ　タ』

大きく映り込む氷城内の映像

そこには左腕を失い、リアスに抱き抱えられている死に体寸前の自分が映っていた

リアスの前で哄笑を上げ続けるラース

一誠も満身創痍で倒れ伏しており、ピクリとも動かない……

壮絶な光景を目にした新にドス黒い感情が沸き上がってくる

『ニ　ク　イ　カ?ア　ノ　コ　ゾ　ウ　ガ　ニ　ク　イ
カ?ナ　ラ　バ、ワ　ガ　チ　カ　ラ　ヲ　カ　イ　ホ　ウ
シ　ロ。ス　ベ　テ　ノ　モ　ノ　ニ　ハ　カ　イ　ト
ホ　ロ　ビ　ヲ　モ　タ　ラ　ス、ソ　レ　ガ　ノ　ロ
ワ　レ　シ　リ　ュ　ウ　ノ　イ　チ　ゾ　ク　ノ　ハ
ド　ウ　ダ』

オニキスの周りから黒い霧状のオーラが漂い、新の体にまとわりつく

抵抗しようと振り払ってもキリが無く、徐々に全身が黒い霧に呑み込まれていく

『サ　ア、カ　イ　ホ　ウ　シ　ロ。ワ　ガ　チ　カ　ラ　デ
ホ　ロ　ボ　セ。オ　ノ　レ　ノ　ホ　ン　ノ　ウ　ヲ
ト　キ　ハ　ナ　テ。イ　カ　リ、ニ　ク　シ　ミ、ウ　ラ
ミ、ツ　ラ　ミ、カ　ナ　シ　ミ、エ　ン　サ　ヲ　ハ　キ
ツ　ラ　ネ　ロ。ハ　バ　ム　モ　ノ　ヲ　ス　ベ　テ
メ　ッ　セ　ヨ。ソ　レ　ガ　ノ　ロ　ワ　レ　タ　リ
ユ　ウ　ノ　イ　チ　ゾ　ク　ノ　ハ　ド　ウ　デ
ア　リ、サ　イ　ヤ　ク　ノ　ケ　シ　ン　タ　ル　ワ　レ
ノ　ホ　ン　ブ　ン　ダ　……ッ』

既に腕も足も黒い霧に覆われ、残すは顔のみとなった

意識が遠退く中、ふと新の眼に映ったのは――自分の傍らで涙を流しているリアスと朱乃の姿……

片時も離さず、新が目を覚ましてくれる事を信じて待っているようにも見えた

涙を溢れさせる彼女達の姿を見て――徐々に意識が戻っていく

「……そうだ……ッ。俺はもう……あの頃の俺とは違う……ッ。リアスが……朱乃が……皆が待ってくれているんだ……。こんな俺を受け入れてくれる……温かくて、優しいあいつらが……ッ」

自分の中に渦巻いていたドス黒い感情が薄まり、まとわりついていた黒い霧を引き剥がす

オニキスはそれが気に入らないのか、激昂して新に詰め寄る

『マ　タ　ア　ノ　コ　ム　ス　メ　ド　モ　カ　ッ！ウ　ケ　イ　レ　ル　ダ　ト？ソ　ン　ナ　モ　ノ　ハ　マ　ヤ　カ　シ　ニ　ス　ギ　ヌ　ワ　ッ！キ　サ　マ　ハ　ワ　シ　ノ　カ　ケ　ラ　ヨ　リ　ウ　ミ　ダ　サ　レ　タ　ブ　ン　シ　ン！ス　ベ　テ　ノ　モ　ノ　ニ　イ　ミ　キ　ラ　ワ　レ　テ　キ　タ、ノ　ロ　ワ　レ　シ　イ　チ　ゾ　ク！イ　マ　サ　ラ　ナ　レ　ア　ウ　ナ　ド　ア　リ　エ　ヌ　ッ！』

「それはお前が自ら周りを拒絶してきたからだろ？一切合切拒絶する奴が受け入れられる筈が無い。だから、お前は滅ぼされたんだ」

『イ　ク　タ　ノ　ゾ　ク　ブ　ツ　ガ　マ　ザ　リ　ア　ッ　タ　ザ　ッ　シ　ュ　ゴ　ト　キ　ガ、ク　ダ　ラ

ヌ　ヨ　マ　イ　ゴ　ト　ヲ　ッ！』

「雑種……？雑種で結構。……俺は色んな要素を受けて育ってきたんだ。竜でありながら人間として育ち、気付けば悪魔に転生。更には闇人（やみびと）の力まで受け継いだ。確かに呪いたくもなる……だが、そんな俺を受け入れてくれる女がいる。一緒に笑ってくれる仲間がいる。そいつらの為なら――俺も有りの儘（まま）の俺を受け入れる！たとえ呪われた血を宿していようと、それが俺の生きてきた証なら――俺は歩んでいく！新しい道を作り上げる！滅びにしか繋がらねぇ道だけを歩くなんざ真っ平ゴメンだ！」

強く言い放つ新の体から赤い閃光が漏れ出し、中からゆっくりと何かが出てくる

出てきたのは――自身の『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』

それに手を翳（かざ）すとオニキスの黒い霧が『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』に集束していき、更に駒自体にも変化が訪れる

丸い『兵士（ポーン）』の駒が流線形に尖り、２本の角が隆起してくる

宛（さなが）らドラゴンを駒に描いた様な物だった……

信じられない現象を目の当たりにしたオニキスは絶句する

『バ　カ　ナ　ッ⁉ワ　ガ　チ　カ　ラ　ガ、ゾ　ク　ブ　ッ　ト　チ　ョ　ウ　ワ　シ　タ　ダ　ト　ッ⁉』

「言ってたよな？俺はお前で、お前は俺だと。だったら……こいつはこれから俺の力で

あり、お前の力でもある。この力で――――俺はあいつらと共に生きるッ！」

新たな形と化した『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』を握り締め、滅びのみの運命（さだめ）を覆（くつがえ）した

またしても呑み込まれず、腑に落ちないオニキスは牙を剥き出しにしながら捨て台詞とも取れる怒号を吐く

『イ　マ　イ　マ　シ　イ　ッ！ア　ノ　コ　ム　ス　メ　ダ　ケ　デ　ナ　ク、キ　サ　マ　マ　デ　ッ！イ　マ　ニ　ミ　テ　イ　ロ！イ　ズ　レ、キ　サ　マ　ハ　ノ　ミ　コ　ン　デ　ク　レ　ル　ッ！ホ　ロ　ビ　ユ　ク　サ　ダ　メ　ニ　ア　ラ　ガ　ッ　タ　コ　ト　ヲ　コ　ウ　カ　イ　スル　ガ　ヨ　イ　ワ　ッ！』

「俺自身に呑み込まれてたまるかよ！力の使い方を決めるのは――――いつだって俺なんだからなッ！」

変化した『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』から強く赤い閃光が解き放たれた――――

意識の狭間から現実に戻り、新は赤く発光しながら体を起こした
リアスは困惑しつつも彼の復活に感極まり、ラースは舌打ちをする
「まだ息があったか、虫ケラめ。あのまま朽ち果てていれば余計に苦しまずに済んだものを。だが、腕も喰い千切られ、焼け焦げた今の貴様に何が出来る？」
「……何が出来るって？決まってんだろ。――――テメェをブッ飛ばす！俺はもう逃げないって決めたんだ！この忌まわしい血とやらも変えてみせるッ！それが俺の生き様だアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
力強く絶叫を放つ新
喰われた左腕の傷から大量の黒いオーラが噴き出し――――新たな腕を形成していく
更に全身からも黒いオーラが爆発、新の全身を覆っていった
赤い閃光を解き放ちながら黒いオーラが彼を未知の形態へ至らせる……っ
大きく鋭利に盛り上がった両肩、硬い装甲の様な皮膚と外骨格
悪魔とドラゴンが混ざった様な頭部に２本の角
相容れる事の無い呪われた竜の力を最大限に引き出した新は今まで以上の迫力を醸し出していた……

竜の血、人間の情、そして悪魔との想いが混ざり合い生まれた――奇跡の姿
今まさに彼は定められた滅びの運命を超えた……っ
「な……何、だと……っ⁉何なんだ、その姿は……っ⁉リュオーガ族の力でありながら、下等生物どもの力も感じられるだと……っ⁉」
予想だにしてなかった事態にラースは初めて動揺を見せた
リアスや他の皆も新の今までに無い姿と力の余波に言葉を失う
未知の変異を遂げた新は自分の姿を確認した後、裂けた口から咆哮を天に放った
透き通るような咆哮を発し、ラースを見据える
「リアスから貰った『悪魔の駒』と俺の中にある竜の血を混ぜた。その結果がコレだ。俺はもうただの『兵士』じゃない。自分の血を受け入れる事で未知の領域に達した――駒の名は『竜兵士』。そして、これが竜の血を解放した真の『女王』形態――『超越の黒竜帝』。俺の運命が呪いに満ちてるって言うなら……その道を変えてやる」
「バカな……ッ！リュオーガ族の血がッ、創造主の血が下等生物の力と調和したとでも言うのかッ⁉あり得ないッ！あってたまるかッ！由緒正しい竜の血が雑種ごときにッ！ゼノンッ！貴様のような半端者ごときにいいいいッ！」
「半端者？あぁ、俺は半端者だよ。リュオーガ族の生まれでありながら人間に育てられ、

闇人(やみびと)の力を宿し、悪魔に転生した。だがな、そのお陰で俺はここまで変われたんだ。この姿は謂わば――――俺の人生その物。妬みと恨みだけで生きてきたようなテメェとは違うんだよッ！」

「……許さん、許さんぞォッ！ゼノンッ！半端者の貴様ごときが、由緒正しい竜の血を汚すなどォォォォォォォォォォッ！」

怒りが臨界点を超えたラースは凄まじい量のオーラを発しながら飛び立ち、巨大な両の爪で串刺しにしようとする

新は黒いオーラを両手に纏わせ、迫ってきたラースの爪を防ぐ

先程までとは違い、いとも容易く止められた事に驚愕するラース

「種族がどうとか、由緒正しいとか、いつまで偏(かたよ)った考えをひけらかしてんだよ」

「ああっ⁉」

「そのくだらねぇ考えがお前らを孤立させたって言ってんだ！いい加減古いしがらみや縛りを捨てろよ！自分の考えだけが通ると思ってんのか⁉いつまでも自分勝手に振る舞えば、最後には独りになっちまうんだよォッッ！」

バギンッッ！

新の拳がラースの爪を叩き割り、続けて繰り出した拳がラースの腹に突き刺さる

その威力でラースは苦痛に歪み、1歩2歩と後退していく

「黙れェェ……ッ！黙れ黙れ黙れェェッ！半端者風情が俺に説教するなァァァ

新も漆黒の巨腕で打ち合い、黒いオーラを放射し続けた
氷城内で起こる絨毯爆撃同士の競り合い
しかし、新は爆撃の嵐の中を突き進んだ
高密度に高めた黒いオーラを両手に纏わせ、ラースに向かって突っ走っていく
爆撃の余波をくらい、竜の力に体を痛め、傷が裂け血を噴きながらも――彼はその走りを止めない
「もうここで終わらせてやるッ！リュオーガ族の因縁も！くだらない掟も！しがらみも！お前の凶行もッ！この拳で砕いて止めるッ！それが――――テメェの弟として生まれた俺の責任だァッッ！」
「抜かせェェッ！このクズがァァァ

ない、親父の想いも、リアスや一誠、朱乃、皆の想いを受けてここまで来た！この拳は俺だけの一撃じゃねぇ！ここにいる全員の想いを乗せた一撃だッ！独り善がりで何も分かろうとしないお前に――――この一撃は防げやしねェェェ

終戦と悲痛な結末

ラースを下し、見事『竜獄(ドラゴニック・ヘルズ)の宴』を終わらせる事が出来た新
ラースが倒れた事によってセラフォルーとソーナを捕らえていた結界が消え去り、新は早速セラフォルーからお礼のキスを受けたりしていた
「お姉さま、はしたない事はやめてください」
「え～っ、どうして？新くんが頑張ったから出られたのにぃ☆ソーナちゃんもチューしたいの？」
「ち、違いますっ！」
ソーナは顔を真っ赤にしてセラフォルーを連れていき、リアス達と共に負傷者の治療に移った
新は最後の一撃によって空いた穴から飛び降り、雪の上で仰向けに倒れているラースの元へ向かう
余力が残っていないせいか、ラースは元の姿に戻っていた
体から流れたであろう血が雪を赤く染めている
新を視認したラースは無理にでも体を起こそうとする

「まさか、この俺が……貴様のような半端者に、打ち負けるだと……っ。竜の血を受け継いできた俺が……汚れた雑種ごときにいいい……っ。何故だ、何故なんだ……っ！何故ここまでの力を出せる……っ⁉あんな、あんな下等生物との馴れ合いが……貴様にそこまでの力を……っ⁉」

ラースは自分の敗北が認められず、ひたすら疑問を繰り返した

〝何故、ゼノンが自分に勝てたのか？〟

〝何故、自分がゼノンに負けたのか？〟

〝何故、自分達と違ってゼノンが計り知れない力の加護を受けたのか？〟

ラースにはどうしても理解出来なかった

もがき続けるラースに新は言う

「ラース、俺がお前に勝てたのは――仲間がいてくれたからだ。一緒に笑ってくれて、泣いてくれて、たまに叱ってくれる。そんな奴らが俺の心を支えてくれた。俺は知らず知らずの内にその感情を受けて育ってきた。だが、お前は自分の価値だけが絶対だと豪語し、周りを全て拒絶してきた。お前に助けを求める声も、お前を叱ってくれる声もあったのに――お前はそれを認めなかった。認めたくなかったから、怒りや憎しみで誤魔化そうとした。恨みや妬み、憎しみだけで彩られた力はいずれ壁にぶつかる。それが……純血が雑種に負けた要因だ」

「……ッッー認めたくなかった……っ？この俺が……下等生物や、雑種を……？」
ラースの中で様々な過去が脳裏を過っていく
〝何故、自分達だけが忌み嫌われたのか？〟
〝何故、他の生物どもは因果を捨てて馴れ合っているのか？〟
〝何故、他の種族と共存が出来るのか？〟
〝何故、馴れ合っている奴らがこんなにも憎らしいのか？〟
ラースは気付かぬ内に共存を果たしている他の種族達に嫉妬していたのかもしれない
その嫉妬がいつしか心身共に染み付き、己の価値観を生み出した
彼は拭い去れぬ嫉妬に取り憑かれ、周りを見失っていたのだ……
その事を新に教えられたラースは屈辱にまみれた涙を流す
「アアアア

「……ラース……ッ、ダメ……ッ」
ラースの手を止めたのは――――レモネード
彼女が必死にラースの手を抑えている
「何故だ……ッ、何故止める……ッ？お前まで、俺に生き恥を晒すつもりか……ッ。こんなクソみたいな恥を受けて、惨めに生きるぐらいなら死んだ方がマシだ……ッ！離せ……ッッ！」
「ダメッッ！イヤッッ！絶対に離さないッッ！」
頑なに拒否するレモネードは自身の感情をラースにぶつけた
「……もう、嫌……ッ。ラースまで死んじゃったら、私、独りになっちゃう……ッ。アノンも、ニトロも、ジュウゾウもいなくなって……ラースまでいなくなるなんて嫌……ッ。私達、家族でしょ……っ？これ以上、家族が壊れるなんて、見たくないよぉ……っ」
レモネードの目から溢れんばかりの涙が落ち、寒さでそれらが氷の粒と化す
呆然とするラースに再び新が言う
「ラース、分かっただろ？この娘がここまで言ってんだ。殺されそうになっても、お前を家族だと言ってくれる。家族ってのは――――1人でも欠けたらダメなんだよ」
「あ、アァァァ……ッ。アァァァ……ッッ」

もはや認めるしかなかった……完全なる敗北
ラースは目元に手を当て、嗚咽を漏らしながら泣いた
喉を刺し貫こうとしていた手も下ろし、自害を中断する
「レモネード……許してくれるのか……？この俺を……？」
「……許すも何も、家族でしょ……っ」
「だが、俺はニトロを殺した……ッ。今更俺に何が――――」
「その事なら任せろ」
ラースの言葉を遮った新は体の痛みを無視して鎧を展開
魔力を振り絞りながら手を前に翳すと――――3つの光る球体が現れる
久々に使用する闇皇(やみおう)の鎧が持つスキル――――
「彷徨(さまよ)いし魂よ、今こそ現世に甦(よみがえ)り、姿を取り戻せ！――――『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』ッッ！」
球体に魔力が吹き込まれ、ラースとレモネードの前に降りると人型を形成していく
閃光が徐々に止むと――そこにはアノン、ニトロ、ジュウゾウの姿が……
思いがけない事態にレモネードは言葉を失い、直ぐに歓喜の涙を流す
「……アノン……ッ。ニトロ……ッ。ジュウゾウ……ッ」
「こ、こんな事が……ッ？ゼノン、お前……ッ」
「俺は雑種だから、色んな力が混ざってるからな。こう言う事だって出来るんだよ……。

それに……女の悲しい涙は見たくないしな……」
「……ッ、スマない……ッ。スマないい……ッ。ゼノオオオン……ッ」
新は最後の最後で自分なりの気遣いを見せたが、無茶を働いてアノン達を甦(よみがえ)らせたので魔力が底を尽き、意識も途切れ途切れになる
吹雪の音も耳に入らなくなり――そこで完全に意識が消えていった……

「……ッ。……ッ？」
次に目を覚ましてみると、自分の視界には真っ白な天井が見えた
見知らぬ天井の下にあるベッドで横たわっており、痛む体を起こす
身体中に巻かれた包帯を見つめ、今自分がいる場所を見回してみる
〝お気付きになりましたか〟と声を掛けてきたのは――グレイフィアだった
「グレイフィア……さん（一応）。あの……リアス達は？」
「3日前に治療を終えました。皆さんご無事です。私から連絡を入れておきましたので、今こちらに向かっているところです。ここはシトリー領にある医療施設の特別病棟です」

「そうか、もう大丈夫なんだな――って、3日前？」
「ええ、新さんはあの後、3日間意識不明だったんですよ」
自分が3日間も眠っていた事を知らされ驚く新
詳細を聞こうと身を乗り出した瞬間、体が悲鳴を上げる
「あまり無理をならさないでください。あれだけの戦闘で体を酷使した挙げ句、魔力を使い果たしていたのです。本来なら生きてる事でさえ奇跡に近いのですから」
「よく生きてたな、俺……」
「お聞きしたい事は私の方から説明させていただきます。まずはリュオーガ族の5人、彼らについてはサーゼクス様とセラフォルー様が冥界の上役に報告を済ませました。彼らの要望に応え、今後一切敵対及び干渉しない事を条件に、南極へ隔離される事になりました。2度と三大勢力と敵対する事はありません」
ラース達はどうやら南極に閉じ込められるものの、下手な干渉を受けなくなったらしい
向こうから条件を出してきたゆえ、ひとまずは安心だろう
「次にあなたのお父上――竜崎総司（りゅうざきそうじ）さんについてですが……」
「親父はまた逃げたんですか？」
「――彼はリュオーガ族の存在と新さんの正体を隠蔽していた件で冥界に投獄されま

した」
一瞬意味が分からなかったが、時間が経つに連れて自分の父親が捕まったと理解する
「……捕まった？親父が……？嘘だろ？なぁ、冗談だよな？冗談だって言ってくれよ……ッ！」
「お気持ちはお察し致しますが、事実です。ただ、こうしなければ新さんにも手が及んでいたかもしれなかったんです」
グレイフィアの話によると新が倒れてから1日目、今回の1件でリュオーガ族の存在と新の正体を隠蔽していた事が冥界政府に露呈
上役から総司に対する処分と新の身柄を拘束せよと言い渡され、冥界政府の役人達が押し寄せてきたらしい
一時その場にはグレイフィアだけでなく、サーゼクスやセラフォルー、総司、リアス達もいた
冥界政府が下した処分は――竜崎総司の確保と処刑、並びに竜崎新の確保と隔離地域への幽閉と言う理不尽極まりないものだった……
勿論サーゼクスやセラフォルー、リアス達は異議を飛ばしたが『政府の判決は覆(くつがえ)らない』だの、『危険種族の細胞が入り交じった者を表に出してはならん』等と自分勝手な言い分ばかり述べてまともに話を聞こうともせず、新を確保しようとした

その時、総司は役人達に対してこう言ったらしい
『もし、ここで息子を連れて行くと言うのなら――――君達も、そのお偉いさん方も殺しに行ってしまうよ？冥界政府全てを敵に回してでも、新を連れて行かせやしない』
「彼は本気でした。全世界の全てを敵に回す事も厭わない覚悟で……新さん、あなたを政府の手から守り、冥界へ移送されたのです」
「親父が……そんな事を……ッ」
空白の時間の中で起きた真意を知った新はガクリと頭を垂れ、放心する
サーゼクスとセラフォルーのフォローもあって最悪の事態は免れたようだが、投獄されたショックはやはり大きい
そしてサーゼクスとセラフォルーによって最大限の譲歩がされたとはいえ、新自身にも冥界政府から処分が下された
内容は〝退院後より2週間、リアス・グレモリー眷属としての活動を禁ずる〟と言う謹慎処分
退院してから2週間は悪魔稼業への参加と介入が出来ない
隔離地域への幽閉が無くなったものの、処分から逃れられた訳ではなかった
「……ッ」
「新さん、今あなたが抗議しても……下された処分は覆りません。敢えて心を鬼にして

申し上げます。どうか息子(あなた)を想う親の気持ちを無駄にしないでください」
グレイフィアから厳しく諭される新は言葉無く頷いた
確かに今動いたところでどうする事も出来ない
最悪の処分を免れただけでも幸運と考える他無い
納得いかないが、今は決定された処分の内容に従うしかなかった……
「……グレイフィアさん、ありがとうございます。あなたがそうやって言ってくれなかったら、俺……飛び出してた」
「今回の1件、私だって納得いかない点はあります。お力になれず申し訳ありません」
グレイフィアが謝罪した直後、病室の扉が開かれてリアスが入室してきた
特別病棟は狭いので大所帯は入れず、一誠達はひとまず外で待機する事に
新の姿を確認したリアスは直ぐ様彼に抱き着いた
「良かった……ッ。新……ッ。新ァ……ッ」
「おぉ、リアス。見舞いに来てくれてサンキュー。と言っても、そんなに泣く事はないだろ」
「だって！この3日間、面会謝絶であなたに会えなかったのよ⁉なのに、グレイフィアだけ新の病室に入れるなんて不公平だわ！」
「は？そんな事あったのか？」

「はい、今の新さんは魔力を使い果たしたせいで身体機能が著しく低下しています。それゆえ、あなたの中に眠る竜の血が再び暴走しないとも限りません。私はストッパー役としてここにいたのです」
「ストッパー役って……また物騒な――――」
ズオ……ッ！
突如、新の背中から漆黒の巨腕が2本飛び出し、リアスとグレイフィアに襲い掛かる
いきなりの事態に新とリアスは仰天
グレイフィアは巨腕の1本を特殊な術式を施した包帯で縛り上げるが、もう1本の巨腕はリアスに当たる寸前だった
グレイフィアは直ぐ様、巨腕とリアスの間に割って入ったが……巨腕の爪がリアスとグレイフィアの服を切り裂く
リアスのおっぱいだけでなく、グレイフィアのおっぱいまでもが公開された
「グレイフィアっ⁉」
「ご心配無く、もう慣れましたので」
グレイフィアは慌てる様子も見せずにもう1本の巨腕も同じ包帯で拘束
包帯に掛けられた術式が光ると漆黒の巨腕が苦しむ様に蠢き、新の体内に戻っていく
面会謝絶だったのは漆黒の巨腕が不意に発動し、周りの者達を傷付けてしまう恐れが

あったからだ
事態を収拾させたグレイフィアが咳払いする
クールに振る舞っているものの、やはり裸にされたのは恥ずかしいようだ……
「面会謝絶だったのはこれが原因です。さっきのように新さんの竜の血が暴走して――
――女性の衣服を切り刻んでしまうからです」
「あ、新！あなた……グレイフィアにまでなんて事を！」
「ゑッ⁉俺のせいなの⁉」
「あなたの力でしょ！私になら何をしても許せるけど……グレイフィアにまで……ッ」
「落ち着いてください、リアス。あくまで不可抗力ですので、大きく咎めはしません」
「な、なら！私も今から新の看護をするわ！こんな状態でグレイフィアと２人っきりだなんてダメよっ！」
リアスはグレイフィアを警戒しながら新を胸元に抱き寄せる
乙女チックな反応を見せるリアスにグレイフィアはくすりと微笑む
「リアスは本当に新さんの事が好きですね。少しからかい過ぎたかしら」
「グレイフィアさん、からかってたのか⁉心臓に悪いぞ……」
「ちなみに言っておきますと、今までに私の裸を見た殿方はサーゼクスと新さんだけですよ？」

「な……ッ」
「もうっ、グレイフィアッ！いい加減に服を着てちょうだい！」
処分と言う重い罰が下されたにもかかわらず、最後はいつものノリがやって来た事に拍子抜けした新だった……。

シャカリキ・シャカリキィ！
バッド・ゲーマーッ！
シャカット・リキット・シャカリキスポーツ♪
「はいは～い、もしも～し。たった今拠点の制圧に成功したよ？んで、次は？……駒王学園（くおうがくえん）に潜入？それって何だか面白そうだね♪……え、〝例の件〟も継続しながら？ちょっと難易度高くな～い？ま、良いけどね♪」
ガッチャーンっ♪
「最近はヌルゲーみたいな任務ばっかりで退屈してたから、丁度良いや。難易度高いゲーム程、攻略し甲斐があるってもんだし♪さーて、〝例の件〟と合わせて――何日でクリアしてやろっかな？」

第１２章　謹慎休暇のメモリアルとバッドゲーマー転校生、シド・ヴァルディ

『話は聞かせてもらったわよ、アラタ。あなた――――元から普通の人間じゃなかったみたいね？』
「まあな。……幻滅したか？」
『そんな訳無いじゃない。寧ろ、至高の堕天使の私にはピッタリの相手よ』
シトリー領の医療施設、新は連絡用のスペースにてレイナーレからの電話を受けていた
勿論、彼女達にも新の正体が露呈したのは言うまでもない
それを知っても尚、彼女達の気持ちに変動は無かった
『たとえ、あなたが何者であっても私の愛するヒトに変わりは無いでしょ？』
「フッ、ありがとな」
『アラタ～っ！早く退院してよね～っ。退院したら、レイナーレ様とウチらがネグリジェで御奉仕してあげるっすよ～？』
『私達はいつまでも待ってるぞ』

堕天使3人娘から暖かなエールを受け取った新は微笑みながら電話を切る
リアスだけじゃない、皆が待ってくれている
帰る場所と迎え入れてくれる仲間の嬉しさが心に染み渡っていく……
「……退院したら、久々に飲み明かすか」
「竜崎さん、お手紙が来てますよー」
看護婦から呼び掛けられた新は受付に向かい、自分宛と思しき封筒を受け取る
早速、開封してみると――中に入っていたのは1枚の真っ黒な紙だった
それを確認した途端、新の顔が険しさを増す
「おいおい、穏やかじゃねぇ依頼だな……。退院間近だってのにコイツが来るとはよ……」
リュオーガ族との1件を終えたのも束の間、まだ見ぬ波乱が新に押し寄せつつあるようだ……

「それじゃあ、新はまだ退院出来ないのか？」
「ああ、少なくとも後2日は掛かるらしい。退院してからも2週間、活動出来ないから

な。寂しいものだ」
新がシトリー領の医療施設に入院してから数日、一足先に完治した一誠はアーシア、ゼノヴィア、イリナと共に学舎（まなびや）への道を歩んでいた
いつもなら隣にいる筈の新が今はいない
ゼノヴィアは憂いを含んだ表情で空を見上げる
「……大切な人を亡くすと、きっとこんな気持ちになるんだろうな……」
「ゼノヴィア、言っておくけど新くんはピンピンしてるからね？」
イリナが半ば呆れつつ指摘していると、背後から何かが猛スピードで走ってくる音が
気になって後ろを見てみると――ＢＭＸ（競技用自転車）に乗った誰かが突っ込んでくる
「アーシアッ、危ないっ！」
「ひゃあっ！」
一誠はアーシアを自分の元に引き寄せ、ゼノヴィアとイリナも壁際に避ける
４人の間を猛スピードで通過した人物はその先で停止
自転車から降りて一誠達の方へ走ってくる
「いやー、ゴメンゴメン。大丈夫だった？」
「おい、あんた危ないだろ！あんなスピードで走ってきて！」
「急いでたもんだから、本当にゴメンね？許して」

軽々しい謝り方をする少年
一誠は異議を唱えようとしたが、その少年が自分達と同じ駒王学園(くおうがくえん)の制服を着ている事に気付く
しかし、彼は今まで1度も見た事が無い人物だった
〝マゼンタ〟と呼ばれるピンクに近い色合いの髪を逆立て、デフォルメされた様な目の模様が入ったゴーグルを着用している
こんな派手な格好ならば直ぐに注目が集まり、名前も少なからず耳にする筈だろう
「それ、俺達と同じ制服だよな？」
「うん、そうだよ。僕はシド・ヴァルディ。ピカピカの1年生さ。気軽にシドって呼んでね。君達は？」
「俺は兵藤一誠。こっちはアーシア、そっちの2人がゼノヴィアとイリナ。皆2年生だ」
「へ～、意外。君達先輩なんだぁ。宜しくね～」
初対面なのに馴れ馴れしく絡んでくる転校生――シド・ヴァルディのノリに一誠達は終始押され気味となる
シド・ヴァルディは「じゃあね、先輩」と軽く手を振って停止させた自転車に乗り、再び猛スピードで駆けていった

「聞いたか、元浜よ！竜崎は事故で入院して、暫くは来れないそうだ！」
「ザマァみろ、リア充野郎め！遂にあの男に天罰が下ったのだ！女子を独り占めした報いだ！」
昼休み、ゲスな笑い声を上げるのは一誠の悪友、松田（ハゲ）と元浜（メガネ）
常日頃から新を逆恨み、折檻もくらい続けてきた彼らはここぞとばかりに新をディスる
ちなみにクラスメイト達にも表向きには〝新は交通事故に巻き込まれ、入院中〟だと伝えている
「あ、そうだイッセー。聞いたか？1年に妙な転校生が来たって話」
「ん？ああ、今朝そんな奴に会ったぞ」
「全く空気を読まない転校生野郎だ。転校生ってのは女子オンリーと相場が決まってるんだよ！野郎の転校生なんざ誰得だ！せっかく憎きリア充野郎が入院してるってのに。しかも、そいつがまた結構なイケメン野郎とか……死ね！」
「その通り！イケメンは死ねば良い！」
「お前らホント最低だな……」

いつもの如くバカ騒ぎする松田と元浜に呆れていると、教室の扉が開いて「お邪魔しま～すっ♪」と剽軽な声が聞こえてくる
入室してきたのは一誠達が今朝会ったばかりの転校生――シド・ヴァルディだった
転校生の登場に教室中がざわつく
「おい、あいつが例の転校生じゃないか？」
「派手な髪型で分かりやすいな。てか、ゴーグルって校則違反じゃね？」
「カッコいいと言うより可愛い系に近いよね。小動物みたい」
「小動物系年下彼氏……捨てがたいジャンルね」
「今度の新作本のメインは彼にしましょうっ。年下＋可愛いの組み合わせは正義よ」
怪しげな会話がチラホラ聞こえる中、シドは一誠を見つけるとスタスタ近付いてきた
だが、そこへイケメン嫌いの松田と元浜が彼の行く手を遮る
「おうおうおう、この1年坊主。先輩の俺達に挨拶すら無しとは礼儀がなっちゃいないな」
「この教室に入りたければ、前金としてダッシュで焼きそばパンと飲み物を買ってくる事だ。勿論、お前の金でな」
何処ぞのチンピラみたいな台詞を吐きながらシドを威嚇するゲス２人
女子から非難の罵声が飛んでこようがお構い無し

松田と元浜の威嚇を受けているシドは――――何故か急に笑い出した

その様子に松田と元浜は「何がおかしい！」と訊ねると……シドが思わぬ反撃を発した

「このクラスって面白いよね。ク〇ボーとノ〇ノコが制服着てるもんっ」

「ファっ⁉」

「「「「「ブフゥッ！」」」」」

ク〇ボー、ノ〇ノコ発言に松田と元浜は顔芸を発動し、教室にいた大多数の人間が盛大に吹いた

ちなみにク〇ボー、ノ〇ノコとは皆さんご存知スーパーマ〇オシリーズに出てくるザコキャラの名称である

松田＝ク〇ボー、元浜＝ノ〇ノコ発言に教室中が笑い声に満ち溢れ、当の２人は赤っ恥をかいた

「ほらほら、早くキ〇コ王国に行ってマ〇オの邪魔しないとク〇パに怒られちゃうよ？」

「「誰がク〇ボーとノ〇ノコだぁっ⁉」」

怒り狂った松田と元浜はシドをブッ飛ばそうと飛び掛かるが――――シドは人間業とは思えない高さの大ジャンプを披露

そのままク〇ボー（笑）とノ〇ノコ（笑）を頭から踏みつけた

「スーパーマ〇オ再現～♪」とシドは2人を踏み潰した後、一誠達の方へ歩み寄る
「兵藤一誠、だっけ？呼ぶ時はイッセー先輩で良いよね？」
「え？ま、まあ……何でも良いけどさ」
「じゃあ、これからも何かの縁があるかもしれないから――――握手っ♪」
シドはやや強引に一誠の手を取って握手を交わす
少し長めの握手を交わし、アーシア、ゼノヴィア、イリナとも握手をする
握手を終えたシドは踵を返して教室を出ようとするが、途中で止まりキョロキョロと周りを見渡す
「そう言えば……先輩達にもう1人、いたよね？竜崎って人」
「新の事か？あいつは入院中で今はいないんだ」
「ふ～ん。……ま、良いや。じゃね～」
何とも軽いノリで教室を出ていく転校生シド
床では彼に踏み潰されたク〇ボーとノ〇ノコが「この恨みはらさでおくべきか……っ！」と呪いの言葉を発していた

「その転校生なら、私のクラスにも来たわ」
「え、部長の所にもですか？」
「僕のクラスにも来たよ。あと、ギャスパーくんと小猫ちゃんも彼に会ったらしいね」
放課後のオカルト研究部はシド・ヴァルディの話で持ちきりだった
あの後、リアスや朱乃、祐斗だけでなく、小猫とギャスパーもシドと対面したらしい
更にはソーナ達生徒会や教師であるアザゼルとロスヴァイセの所にも顔を出していた
転校初日で学園の有名人達に挨拶及び握手を交わす行動力にすっかり注目が集まり、各学年にも彼の噂が行き渡る
「俺達の隠れファン？……にしても挨拶が大雑把過ぎるよな……」
「ここには何人もの異能者が正体を隠して学園生活を送っているけれど、その中で私達をピンポイントに選別ってのも妙よね……。まるで私達を見定めるかの様に……」
シドの動きを不審に思うリアス
リアス達の正体を知っておきながら近付いてきたと言う事は――――彼もまた異能者の類か……？
そんな考えを頭に過らせる一同
考え込んでいると通信用の魔方陣が浮かび、医療施設にいる新が映った

「よう、新。具合は良さそうだな。どうした？」
『ああ、ちょっと緊急の話があってな。コイツを見てくれ』
新はそう言って自分宛に届いた真っ黒な紙を皆に見せる
アザゼルが「何だそりゃ？」と訊くと新が説明に入る
『コイツはバウンティハンター協会経由で届いた依頼書だ。ただ……この黒い紙は滅多に来ない代物で、来た時は相当危険な任務が絡んでるとも言われている。普通の依頼書なら難易度は下級～中級レベル。赤い依頼書は上級レベル。んで、この黒い依頼書は失敗確率９０％以上の超難関ミッションだ』
「９割以上失敗って、何でそんな危ない物が新に届くんだよ⁉」
『知らねぇよ、いちいち顔芸を見せるな。傷に障る。と言う訳で、明日退院直後にこの任務の為、俺はまた出掛けなきゃならねぇんだ』
「ちょ、ちょっと待ちなさい新！あなた、謹慎中なのよ⁉」
リアスが新の謹慎処分について指摘すると、新はチッチッチッと指を振ってこう答えた
『甘いな、リアス。俺が禁止されているのは〝リアス・グレモリー眷属としての活動〟だ。〝バウンティハンターとしての活動〟は禁じられてねぇから問題無い』
「あ、あなたってヒトは……本当に悪い面で頭を働かせるわね……」

『褒めてくれてサンキュー』
謹慎処分の抜け穴を利用した新の狡猾さにリアスは嘆息する
「バウンティハンター協会経由って事は、正式な依頼主は誰なんだ？」
『それが妙な事に――――正教会からだ』
正教会からのバウンティハンター協会経由で届いた依頼書に全員が訝しげな表情となった
特にイリナは1番の動揺を見せる……
「正教会からお前に依頼？どういう風の吹き回しだ？」
『分からねぇ。詳しい事は明日、現地で訊くしかねぇんだよ。そう言う事だから、学園生活の復帰にはまだ少し時間が掛かる。それだけ伝えておこうと思ってな』
「分かった、じゃあ切るぞ」
アザゼルが通信を切ろうとした時、イリナが待ったを掛けてきた
「新くん、正教会からの依頼って本当？」
『ああ、本当だが？』
「なら――――その任務に私も付き添わせてっ！」
イリナの唐突な発言に部室内がざわつき、画面の中の新も驚愕する
「正教会からの依頼なら、きっと天界にも関連性があるって事だよね？だったら私もつ

いていった方が――――」
『バカ野郎！ガキの遊びじゃねぇんだよ！さっき説明したじゃねぇか！失敗確率９割以上の危険な任務が絡んでるって！下手すりゃ死ぬかもしれねぇんだぞ⁉そんな危険な任務に巻き込めるか！』
　新は黒い依頼書の危険性を盾にイリナを説得しようとするが、彼女は１歩も引き下がらない
「新くんだってまだ万全じゃないもんっ！そんな状態で行く方がよっぽど危険よっ！私は付添人として行くのっ！それなら文句無いでしょ⁉」
『ったく、ああ言えばこう言う……ッ！』
　イリナの粘りに苛立ちを見せる新だったが……このままでは水掛け論になりかねないので、諦める事にした
『チッ、分かったよ。ただし付き添いは１人までだ。急いでチケットをもう１枚手配するから準備しとけよ』
　ふてくされ気味で通信を切る新
　屁理屈を押し通したイリナはＶサインを決める
「良かったじゃないか、イリナ。一足早く新婚旅行に行けるとは」
「な……ななななっ、何言い出すのよゼノヴィアっ⁉そそそそ、そんな、新婚旅行だな

んて……。あくまで私は付添人なんだから……」
「どうせならそのまま新に抱かれると良い。友として応援するぞ」
「いやいやいや！そんな事になったら堕天しちゃうんですけど⁉」
斯くして、新の緊急任務にイリナの同伴が決定したのだが……新婚旅行発言にリアスはムスッと頬を膨らませていた
『今度、新が退院したら私も何処かに連れていってもらいたいわ……』
『あらあら、リアスってばヤキモチですわね♪』

「うん、こっちは順調だよ。先輩達の能力データは握手した時に採取したから。あ、竜崎って人がいなかったなぁ。そこだけ失敗？」
『Ｎｏｎ　Ｎｏｎ　Ｎｏｎ。問題ありませんよ。こちらの網に引っ掛かってくれましたので』
「へぇ～、良かったじゃん。教会相手にわざわざ騒ぎを起こした甲斐があったね」
『Ｏｕｉ。ですから、もう少しあなたの武器をお借りしますよ？Ｓ，ｉｌ　ｖｏｕｓ　ｐｌ・ｉｔ』

「良いよ良いよ～。僕は僕で楽しんでおくから。それに――――ゲームはじっくり楽しまないとね♪」
『ええ。では、Ａｄｉｅｕ（アデュー）』
　ガッチャーンッ！
「向こうも準備万端みたい。さ～て、僕も早く……イッセー先輩達と遊びたいなぁ♪」

新の悲しきメモリー

不審な点が多い少年――シド・ヴァルディが駒王学園(くおうがくえん)に転校してきた翌日、シトリー領の医療施設より退院してきた新は空港にいた
緊急の上、危険な任務なので最低限の荷物と回復用のポーション一式も持ってきてもらうようリアスに伝えている
今は荷物とイリナが来るのを待っている最中だ
待ってる間、新は協会経由で届いた黒い依頼書を見直す
「……懐かしい場所だな。まさか、ここから依頼が来るとは」
物思いに耽(ふけ)っていると〝新が言った最低限の荷物〟を持ったリアスと〝明らかに大き過ぎるリュックを背負ったイリナがやって来た
「新くん、お待たせ～」
「お待たせって……何なんだ、そのデカい荷物は？何を持ってきたんだ？」
「何って旅の必需品よ。着替えにパジャマ、歯ブラシにシャンプー、リンス、石鹸。それから……乙女の嗜(たしな)みで替えの下着も――」
「いらねぇよ！何泊するつもりなんだ⁉明らかに最低限のレベルを超えた量だろ！」

「でもでも！下着ぐらいは良いでしょ⁉これでもかなり減らしたんだから！」
「ほぉ……んで、リュックの中には何着入ってんだ？」
「えっと……２０着ぐらい？」
「そんなにいるかァッ！」
　出発前から体力を使ってしまいそうなやり取りに新は頭を痛め、リアスから自分の荷物を受け取る
「任務が終わり次第、連絡入れてから飛行機で戻ってくる。ただ、何日掛かるかは分からないが……なるべく急ぐ」
「でも、よほど危険な任務なんでしょ？気を付けるのよ」
「安心しろ、死んだりしねぇから」
「なら……無事に帰ってくるおまじないをしてあげる」
　リアスは新の頬に手を添え、そのまま自分の唇を重ねた
　突然のキスを目撃したイリナは顔を赤くして呆然とする
　リアスは舌で彼の唇を優しく舐めた後、自分の唇に人差し指を添えて言う
「……足りないなら、何度でもしてあげるけど？」
「これ以上したら飛行機に乗り遅れちまうよ。帰ってきたら、また頼むぜ？」
　新は荷物と共に嬉しいおまじないを受け取り、イリナにチケットを渡してゲートに向

かっていった
「新くん……さっきリアスさんとキスしてたでしょ？」
「キス？いいえ、単なるおまじない痛たたたたっ！脇腹をつねるな！地味に痛いっ、地味に痛いっ！」

離陸してから約３時間半、２人はようやく目的地である異国に到着した
空港を出て依頼書に同封されていた地図を確認、目的の場所――とある教会を目指して足を進める
肌寒い風が吹く中、道中でホットコーヒーなどを買って飲む
「フゥ……ここのコーヒーは相変わらず美味いな。昔のままだ」
「新くん、この国に来た事あるの？」
「バウンティハンター時代、任務でよく駆り出されたからな。色々な国を飛び回ったが、その中でもここは頻繁だった。これから向かう所は俺がよく立ち入ってた教会だ」
「ふ～ん、それにしても……お酒まで買っちゃって。もしかして、仕事中に飲むの？ダメだよ、一応未成年――」

「いや、こいつは手向け用だ」
〝手向け〟……主に神仏や死者に対して使われる言葉にイリナの口が止まる
この地で果てた者への供物なのか……？
そうこうしてる内に地図に記載されていた教会に着くが、新は教会へは入らず裏の方へと進む
教会の裏に足を進め、そこで見たのは――
「……お墓？」
「そうだ、この教会の裏は――この国で死んだ奴らを弔(とむら)う墓場になってんだ。病死した子供、事故で死んだ夫婦、バウンティハンターの仕事に巻き込まれた市民……色んな人達がこの墓の下に眠っている」
新とイリナの目には夥(おびただ)しい数で並列している墓標が映った
かなり年代が古い物もあれば、真新しい墓標もある
新は端の方へ進み、５つ並んだ墓標の前で足を止めた
買ってきた酒の封を開け、右から順番に注いでいく
名前は右の墓標から『ノクス・レギオン　享年２０』、『スピット・イグニルス　享年２４』、『グラント・イーグリード　享年３２　』、『アゼム・ロフト　享年２１』、『ミツルギ・ディスカビル　享年１９』と刻まれている

中身が空っぽになると酒瓶を置き、静かに瞑目及び合掌する
「新くん、このお墓は？」
「あぁ、昔の仕事仲間だ。俺がまだＡクラスだった頃によくつるんでた。腐れ縁ってヤツだ」
「じゃあ、この人達も事故か病気で……？」
「いや……殺された。その内の１人は――俺が殺した……」
新の口から出てきた凄惨な過去
それに呼応するかの如く、冷たいそよ風が頬を撫でる……っ

時を遡ること約４年前
Ａクラスになったばかりの新は協会からの依頼でとある地に足を運び、人々に害を成す魔物の討伐を行っていた
持ち前の『闇皇の鎧』を駆使して挑むも、流石に相手の数が多いせいで疲れが見え始める
「はぁ……はぁ……チクショウ！どれだけいるんだよ、こいつらは⁉」

数の多さと鬱陶しさに怒る新
魔物数匹が雄叫びを上げて飛び掛かろうとしたその時――――頭上より剣の群れが出現して魔物を串刺しにする
一瞬呆気に取られるが、直ぐに攻撃の主を見つける
「随分と手こずってる様だな。Ａクラスになったのを良い事に、足元が疎(おろそ)かになってんじゃないか？」
現れたのは黒髪の青年
彼の周りには多種多様な剣が浮遊しており、全ての切っ先が魔物達に向けられていた
青年の名はノクス・レギオン
新と同じＡクラスのバウンティハンターで召喚魔術(しょうかんまじゅつ)に長けている
召喚魔術のタイプは２種類に分かれ、１つは契約を交わした魔物などを使役するタイプ
もう１つは彼の様に武器などの物体を瞬時に呼び出すタイプがある
ノクスは召喚した武器を巧みに操り、魔物を掃討していく
「やっぱ俺、武器召喚に関しては最強ってか？」
「何だよ、人の手柄を横取りしてんじゃねぇ」
「うっわ！助けてやったのにそんな態度を取りますかね⁉相変わらず感じ悪っ」

不機嫌そうにするノクスの背後から魔物の1匹が迫り来るが――――魔物は彼に届く前に分断される
２つに裂かれた魔物の間に映ったのは刀を鞘に収める眼鏡の男
逆立てた茶髪に強面(こわもて)の面構えをしていた
その男は切れ長の目でノクスを睨み付ける
「言ったそばから、お前も疎かになってるぞ。背後の魔物に気付かんとは情けない」
「そん時はお前がサポートしてくれんだろ？ニルス」
スピット・イグニルス――――それが男の名前だ
彼もまたＡクラスのバウンティハンターであり、こちらは剣術の使い手
鮮やかな抜刀術で次々と魔物を斬り捌(さば)いていく
少し離れた地点では豪快な音が響き、魔物の群れが宙へと吹っ飛ぶ
「ヌハハハハハハッ！仲良き事は良いじゃないか！だが、ニルスの言う通り、もう少し自分も気を付けた方が良いぞ！」
巨大な盾を豪快に振り回す筋骨隆々(きんこつりゅうりゅう)の男はグラント・イーグリード
実に分かりやすい典型的なパワーファイターだ
彼の後ろでは金髪の青年がハンドガンとショットガンで魔物を仕留めていた
「そうだよっ。僕達に美味しいトコ持ってかれちゃっても良いのかなー？」

銃使いの青年はアゼム・ロフト、主に後方支援を担当している
更に違う地点では貴族服を着た青年が1本の剣で魔物の群れを斬り倒す
「我が友――――ア・ラータとは言え、独り占めはやめてもらおう！この俺こそがバウンティハンターの頂点に立つ男だからな！さあ、有象無象の魔物達よ！我が魔剣(まけん)スコルピオスの錆としてくれようッ！」
テンション高めで魔物の討伐に没頭しているのはミツルギ・ディスカビル
元々は名門貴族の出身だが、退屈な貴族暮らしに飽きてバウンティハンターに転職を果たした奇人且つナルシストである
彼らは皆Aクラスのバウンティハンターであり、良くも悪くも新が知り合った中で唯一気を許せる〝仲間〟
当の本人は〝単なる腐れ縁〟としか見ていなかったようだが、それでも心強い者達だ
やがて魔物の掃討が完了し、新は鎧を解除する
「……ったく、また報酬が山分けされるのかよ。このハイエナどもが」
「それ失礼じゃね？お前1人で片付けられる数じゃなかっただろ」
「実際、単独で仕留め切れるではなかったからな」
「チッ」
「ヌハハハハハ！そんなに嫌そうな顔をするな！お陰で手っ取り早く片付いたじゃな

いか！」
「そうそう♪今日の晩飯はパァ～っと豪勢な物でも食べようよ」
「ならば、俺オススメのレストランに行こうではないか！」
新の都合など全く無視の上、やたらと干渉してくる５人に新は表面上は嫌そうな顔になるものの……内心では悪くないと感じていた
これも１つのチームの形であろうと思っていたが……　ある日を境に崩壊する事になる……
その要因は〝新の親友兼ライバル〟を自称するミツルギ・ディスカビル――彼の持つ魔剣スコルピオスが引き金となった
スコルピオスはただの魔剣ではなく、正確には毒魔剣と呼ばれる代物で、使い手の肉体に身体能力を活性化させる毒を常時流し続ける能力を持っている
これにより所有者の身体能力を何倍にも向上させるのだが――大きな落とし穴が存在した……
それは毒に適応出来ない者が使うと徐々に毒に犯され、最後には自我を失った怪物になってしまうと言う副作用だ……
ミツルギはそれに気付かず魔剣スコルピオスを使い続け――遂に己の身を以て魔剣の恐ろしさを実感した……

単独任務終了後、全身に激痛が走り……ミツルギの体を異形へと蝕(むしば)む
「な……っ⁉そ、そんな……俺が、俺が怪物に……っ⁉」
右腕は魔剣と同化し、左腕からも化け物じみた爪が生える
意識も朦朧(もうろう)としてきた彼は最後の力を振り絞って新へ連絡を入れた
僅かに残っている理性が消えない内に今すぐ来るよう伝え、携帯機器を投げ捨てる
数分後、やって来た新はミツルギの異変に絶句
彼の肉体は殆ど人間の原型を留めておらず、顔の左半分だけが残されていた……
「何なんだよ、これ……っ。いったい何が遭ったんだ⁉ミツルギッ！」
「お、おお……我が友よ……っ。見ての通り……俺は怪物になってしまったんだ……。魔剣スコルピオスを制御出来なくて、このザマだ……っ。いずれ、俺は人としての意識を失うだろう……。だから、最期に……友であるお前に頼みがある……っ」
消え逝く意識の中、彼が残す遺言は――――
「俺を……お前の手で葬(ほうむ)ってくれ……っ」
「……ッー……ふざけんなよ……っ。何勝手な事を言ってやがんだ！そんなの出来る訳無いだろ！」
「俺は魔物(やつら)と同じになりたくないッ！俺の意識が無くなれば、俺は人を殺してしまう……ッー今まで倒してきた魔物(やつら)と同じ様に……人を殺した化け物として死ぬのが嫌な

んだッ！」
僅かに残ったミツルギの眼から流れる涙
悔しげに思いの丈を吐露する彼にはこうするしか方法が無かった……
「頼む……アラタ……っ。俺は最期まで……〝人間〟でいたい……っ」
自分の手が誰かの血で汚れる前に……彼は心だけでも〝人間〟としての領域を守りたいのだろう
彼の思いを聞いた新は唇を噛み締めた
血が出る程に、歯が割れそうになる程に悔しさを表す
そして……決意を固め終えた新は『闇皇(やみおう)の鎧』を纏う
「……分かったよ。腐れ縁、だもんな……。ミツルギ……お前の最期の望み……俺が叶えてやる……っ。友として……ッ！」
「……それで良い……我が友よ……っ
その台詞を最後にミツルギは完全な異形の怪物と化し、呻き声を上げた
新は手元に剣を出現させ、赤いオーラを纏わせる
変わり果てた友に向かって歩み寄り、徐々に足を早めて剣を振り翳(かざ)す
「アアアア

「ミツルギを殺した俺は……勿論咎められたよ。怒り狂ったノクスにタコ殴りにされて、人殺しだの面汚しだの言われた。そこからあいつらとは疎遠になって、俺はこの国での任務を全て放棄したんだ。自棄（ヤケ）になった俺は酒とギャンブルに溺れ、そうしてる内にあいつらも殺されたって訳だ」

「……っ」

イリナはなんて声を掛ければ良いのか分からなかった

こんな壮絶な仲間殺しの過去を話されては無理もない……

しかし、イリナは精一杯声を絞り出す

「新くん、その……魔剣の方はどうなったの……？」

「魔剣スコルピオスは忽然と消えちまったよ。俺がミツルギを殺して、泣き喚（わめ）いてる間にな……」

「……」

「仲間殺しの罪に背を向けたせいで、俺はあいつらも死なせた……。だから、２度とそんな事にならないように――俺はもう逃げない。過去も今も受け止めて、俺はリアス達

と共にいたい」
話を終えた新はイリナの肩に手を置く
「今回の任務、頼りにしてるから、お前も俺を頼ってくれよ?」
「も、勿論よ!私に任せちゃって!」
いつもの調子に戻ってくれた新に合わせてイリナも沈んだ気持ちを切り替え、教会の正門に戻っていった

正教会のシストラとガブリエルさま

「ねえ、新くん。今更思った事なんだけど……新くんって死者を甦らせる技を持ってたよね？それを使えば――――」

「あぁ、やってみたさ。ロキとの戦いの後で何度も。だが……出来なかったんだ」

実はロキ戦後、新は『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』でハンター時代の仲間の蘇生を試（こころ）みたが全く効果が無く、『初代キング』から失敗の理由を訊いてみた

――――『霊魂復活（ソウル・リバイヴ）』は対象者の魂を媒介に死者を復活させる――――

――――使用する際、対象者の魂が既に消滅してる場合は効果が適用されない――――

『初代キング』からそう言われたのだ

「つまり、あいつらの魂が完全に消えてしまった以上、復活させる事が出来ないって訳だ」

「……ゴメン、せっかく気持ちが切り替わったのに無神経な事言っちゃって……」

「気にするな。出来ない事をいくら嘆いても仕方無い。……ただ、何であいつらの魂が消えていたのかが引っ掛かる……」

未練を遺した魂はそう簡単に消滅したりしない

自然消滅と言う根拠が消去されたのなら、人為的に魂を消された事になる……
誰が何の為にそんな事をしたのか……
手掛かりが全く無いので今は保留しておき、目の前の任務に集中する
扉を開けて聖堂の中に踏み入れる新とイリナ
そこで待っていたのは老神父とシスター服を着た美少女だった
白と黒を基調としたコートを羽織り、口元に髭を蓄えた老神父が2人に軽く会釈する
「ようこそ、いらっしゃいました。私は当教会の神父を務めるユナイト・キリヒコと申します。日本からの御足労、ありがとうございます。Ｍｅｒｃｉ」
にこやかな笑みを浮かべる老神父
その目を見た途端、新は微かな違和感を覚えた
『……何だ、このまとわりつく様な違和感は……？』
「いえいえ、こちらこそメルシーです！」
「おい、イリナ。Ｍｅｒｃｉはフランス語で〝ありがとう〟って意味で、別に今使わなくても良いんだよ」
「え、そうなの？……新くんってフランス語も話せるの？」
「少しだけな。ハンター時代は散々海外遠征してきたから、大体の外国語は話せる」
新の意外な才能に舌を巻くイリナ

老神父――――ユナイト・キリヒコに対する簡単な挨拶を終えたところで、新は隣のシスターに視線を向ける

黒いシスター服に包まれた美少女は新の視線に気付くとオドオドした様子で頭を下げる

灰色がかった青い瞳は非常に綺麗で、頭のベールからアッシュブロンドの髪が見えた

「こちらの方はロシアの正教会からお越しいただいたシストラさまです」

「……は、初めまして……。わ、私は……ミラナ・シャタロヴァです……。あの、ガブリエルさまのA（エース）をしています……。ほ、本日はよろしくお願いします……っ」

『……何だ、この可愛過ぎる生き物は……。容姿だけじゃなく声まで可愛い……っ。萌え要素の塊じゃねぇか……っ』

ロシアの正教会から派遣されたシストラ――――ミラナ・シャタロヴァの萌え要素ぶりに唖然と立ち尽くす新

声も外見もそうだが、何より新の視線を釘付けにしたのは――――シスター服に隠された彼女のおっぱいだった

『……シスター服は体型を隠すから分かりにくいと言われるが、俺の目は誤魔化せん。……あれはかなりの巨乳だ……！』

久々に女性のスリーサイズを解析する洞察力を発揮する新だが、ミラナは新の視線に

気付き――――

「あうっ」

恥ずかしがって胸元を手で隠した

可愛い悲鳴と仕草に内心ホッコリする新

しかし、横からイリナに耳を引っ張られてしまう

「痛たたたたっ！何するんだよ⁉」

「新くん、今エッチな目であの人を見てたでしょ⁉ダメダメ！ガブリエルさまのA（エース）なのよ⁉ガブリエルさまと言えば、ミカエルさまと同じ四大セラフの1人！天界一の美女にして天界最強の女性天使！全ての女性天使の憧れなんだから！」

「そんな御大層な天使の部下が来るとは……。しかも、その娘も転生天使――――依頼を受けてヨカッタッ！」

新は嬉しい情報を手に入れ、心の底から歓喜した

自分達も簡単に自己紹介を終わらせ、早速本題に入る

「んで、依頼内容は何なんだ、爺さん？」

「ちょっと新くん⁉神父さまにそんな――――」

「いえいえ、お気になさらず。風の便りで聞いた竜崎新さまにご依頼したのは他でもありません。ここ最近、数々の教会で神父やシスターが襲われる事件が多発しておりまし

て……。昨夜、この国の教会の信徒にもその牙が……」
「被害状況は？」
「……神父は見習いを含め５７人が消息不明、シスターは４９人が襲われ、計１０６人が被害に遭いました……」
「そこまでの被害が出てるなら、三大勢力の面々も放っておく筈が無いだろ。何でわざわざ俺に依頼を？」
「何ぶん、手掛かりが少なく相手も分からず、更には事態の鎮圧に来ていただいた三大勢力のエージェントも返り討ちに遭ってしまわれて……。そこで思いきってバウンティハンター協会にご依頼を……」
　どうやら神父・シスターだけでなく、派遣された三大勢力のエージェントまでも被害に遭ったようだ
　そう考えると被害総数は甚大とも言える……
　中でも特に気になるのは神父の失踪
　同じ被害に遭ったシスターは襲撃を受けただけに対し、神父は被害人数全てが消息不明となっている
解せない点が多いが、大体の内容は把握出来た
「とりあえず、まずは被害に遭ったシスターから話を聞いてみるか。嫌な思いを呼び起

こすが、話を聞かない事には手の打ちようが無い。爺さん、シスター達は何処に？」
「はい、この近くの病院に入院しております」
「よし、ちょっと行ってくる。イリナはここで待ってろ」
「待って！私もついていった方が――――」
「いや、相手の正体がまだ分からん以上、大所帯で動くのは危険だ。イリナはシストラ――ミラナだっけ？彼女と一緒にここで待機しといてくれ。こう言った場面では単独の方がリスクが少なくて済む」
「むぅ……っ、分かったわよぉ……」
頬を膨らませて不機嫌顔になるイリナ
新は直ぐに機嫌直しに取り掛かる
「そう機嫌を悪くしないでくれ。さっきも言っただろ？頼りにしてるって。ミカエルさんのA（エース）だろ？」
「も、勿論よ！ミカエルさまのA（エース）の名に恥じないよう、私も頑張っちゃうから！」
「その意気だ、スーパーエンジェル」
イリナの機嫌が直ったところで新は病院に向かうべく外へ出た
1歩踏み出したその時、目の前がまばゆい光に包み込まれる
「な、何だっ、この輝きは……!?それに……この心まで安らぐ様な優しいオーラは……

!?」
突然の閃光とオーラに新は思わず怯んでしまう
イリナとミラナもその気配に気付いて外へ飛び出してきた
彼らの前に現れたのは――複数の翼を背に持つ美女だった……
ウェーブの掛かったブロンドヘアーにおっとりした雰囲気を纏った美女
更にグラマーな肢体、至宝とも言える爆乳の持ち主……
まさしく絶世の美女……否、それだけでは片付けられない程の美しさと母性を醸し出していた
目の前に現れた美女を見てイリナがワナワナと震える
「う、嘘でしょ……!?あ、あああああなたは――ガブリエルさまっ⁉」
ガブリエル――先程イリナが話していた天界一の美女にして天界最強の女性天使
超ＶＩＰ級の来訪に新も驚く
「……ガ、ガブリエルさま……っ？あの……どうしてこちらに……？」
「私もミラナちゃんのお手伝いをと思いましてぇ。来ちゃいましたぁ」
間延びした声音で来訪の理由を言うガブリエル
イリナはガッチガチに緊張した様子でガブリエルに挨拶する
「は、はははははハジメマシテっ、ガブリエルさま！」

「あら～、あなたはミカエルさまのAちゃんですね？初めまして、ガブリエルと申しますぅ」
ガブリエルは柔和な笑みを浮かべて頭を下げる
その時、ガブリエルの爆乳が大きく揺れ、新の視線は釘付けに……
「……デケェェェェェェェェ……っ」
「あら？そちらの殿方はどちら様ですかぁ？」
「……わ、私と一緒にお仕事をしてくださる……協会の人です……」
「まあ、そうなんですかぁ。初めまして～。四大セラフのガブリエルと申しますぅ」
新は「え？あ、あ、どうも……」と緊張気味で挨拶を返す
落ち着かないのも無理はない
新の視線はガブリエルの爆乳おっぱいに集中しきっていた……
ガブリエルは一瞬キョトンとした表情で見ていたが、暫くして新の視線に気付く
嫌がる素振りを見せないどころか、優しげな微笑みを浮かべて――
「あらあら、お仕事の前にエッチな事を考えてはいけませんよ～？めっ♪」
人差し指で新の鼻を小突く
その瞬間、新の心の中の何かがブレイクされ……ガクンと膝から崩れ落ちた
「あ、新くん⁉どうしたの⁉」

「……は、初めてだ……っ。この俺が……女を前に崩れ落ちるなんて……っ。これが……天界一の美女の力なのか……っ。まるで魂まで洗われるかのように――――」
「新くんっ！頭から魂みたいな物が抜けかけてるんだけど!?ダメダメ！逝っちゃダメェッ！戻ってきてぇっ！」
傍(かたわ)らでイリナが呼び戻そうと叫び、目から光が消えた新は任務に取り掛かる前に昇天しかけた……。

『Ｏｈ(オー)　ｌａ(ラ)　ｌａ(ラ)。まさか、四大セラフのガブリエルが出向いてくるとは……。予想外の事態ではありますが、貴重なデータが取れる良い機会です。それにミカエルのＡ(エース)とグレモリー眷属の「竜兵士(ドラグーン)」……。Ｔｒ(トレ)・ｓ(ビ)　ｂｉｅｎ(アン)……！』

「とりあえず、シスター達から話を聞けたが……それでもまだ手掛かりは少ない方か」
何とか自力で魂を戻した新は被害に遭ったシスターから話を聞く事に成功し、裏路地

で今回の事件について推察してみた
彼女達に共通した点は――胸に銃口の様な傷痕が2つ付いていた事である
何かの武器か牙状の物で刺された傷に見えるが、傷自体は浅く致命傷に至ってない
その点からシスターの殺人が目的じゃない事が窺(うかが)える
〝単純な殺人事件なら、黒い依頼書で来る筈が無い〟
そう考えると……本件の黒幕は何が目的なのだろうか……？
「……それにしてもクセェなぁ。いくら裏路地だからって、この臭さはヒデェな……。まるで肉でも腐った様な……。――――ッ？」
肉が腐った様な匂い――――そう考えを至らせた瞬間、新は真っ先に匂いの元を捜索し始めた
自分がいる裏路地はただでさえ汚い上、人が通る事などまず無い
新はハンター時代、現場で事件を推察する時はなるべく目立たない場所、人が敬遠する場所でよく行(おこな)っていた
裏路地などは相手に気取られない様にする為の隠れ蓑にもなる
裏路地の奥、そこで新は散乱したゴミの中で佇(たたず)むゴミ箱を見つけた
匂いの元はこのゴミ箱から出てるようだ……
警戒しながら恐る恐る蓋を開けてみる

「――――ッ！……そう言う事かよ……ッ！」
ゴミ箱の中に入っていた〝モノ〟を見て、新の顔付きが変わる

――――――――――――――――――――――――――――――――

急いでイリナ達の所へ戻ってきた新
扉を勢い良く開け、ズカズカと歩みを進める
「あ、新くん。話はどうだったの？」
イリナが声を掛けてくるが、新は構わず足を進める
目指す先は――――老神父ユナイト・キリヒコ
「……どうやらまだ動いてなかったようだな」
「……？どうされました？何か忘れ物でも――――」
ドガッッ！
なんと新は有無を言わさず老神父を殴り飛ばした！
突然の凶行にイリナ、ミラナが悲鳴を上げ、ガブリエルは呆然と立ち尽くす
「あ、新くんっ⁉いいいいきなり何をしてるの⁉神父さまを殴るなんて罰当たりだよぉ！」

「あぁ、罰当たりだろう。こいつが〝本物の神父〟だったらな」
「え……どういう事？」
事態が飲み込めない彼女達に対し、殴られた老神父は頬を擦(さす)りながら起き上がる
「……Ｏｈ　ｌａ　ｌａ(オーララ)。いきなり殴ってくるとは酷いですね。私はあなたに何処かで恨みでも買いましたか？」
「名前すら知らねぇよ。ただ……悪い奴はどう隠したって匂うんだよ。薄汚い詐欺師・ペテン師染みた血の匂いがな……っ」
睨む新と微かに笑う老神父にイリナ達は困惑しきっていた
「ね、ねぇ、新くん。いったい何がどういう事なの？分かるように説明してよ」
「手っ取り早く言ってやるよ。――こいつは偽者だ」
「ええっ⁉に、偽者⁉」
「あぁ、本物はとっくに殺されてたよ。念のため証拠写真も撮ってきたんだが――とても人に見せられる代物じゃねぇ。何せゴミ箱の中で腐ってたからな……。それにしても悪趣味な野郎だぜ……。自ら(みずから)〝殺した神父〟に化けるなんてよ……！」
そう、新が裏路地で見つけたゴミ箱の中に入っていたモノとは――今〝目の前にいる老神父その人〟だった……！
彼らの前にいる老神父は偽者、本物の神父は入国する前に殺されていたのだ

「もう既に証拠(ネタ)は上がってんだ。いい加減正体を見せたらどうなんだ？」
「ええ、良いですよ」
偽神父はあっさり承諾し、自ら正体を明かす
偽神父の体から幾重もの黒いモヤが帯状となって飛び出し、その中から本体が現れた
袖口が黒く染まった白いコートを着込み、回路図のごとき模様が刻まれた不気味なゴーグル
茶髪をオールバックに逆立てた青年がゴーグルを額の位置まで上げる
「▪ａ(サ)　ｖａ(バ)　？改めて初めまして。私の名はユナイト・キリヒコと申します。先程の姿は偽者でしたが、この姿と名前は本当ですので――――以後、お見知り置きを」

ユナイト・キリヒコ

老神父に成り済まし、正体を現した謎の青年ユナイト・キリヒコ
彼の登場に教会内が緊迫した空気となる……
「許せない！神父さまを手に掛けたその罪、ミカエルさまに代わって成敗してあげるわ！それに私達を魚みたいに言うなんて失礼よ！」
しかし、ここでトラップ発動――『転生天使の天然ボケ』
先程の『▪ａ　ｖａ』を魚の鯖と勘違いしたのだろう……
イリナの間違った指摘に新は額に手を当てて嘆息、キリヒコはクスクスと笑う
「……イリナ、さっきあいつが言った『▪ａ　ｖａ』は〝調子どう？〟って意味のフランス語だ」
「え……っ？……し、知ってるわよ！わざと間違えただけだもんっ」
「嘘つけ！知らないなら知らないって言え！」
一向に認めようとしないイリナは頬をプクーッと膨らませる
そんな中、キリヒコはコートの内側から武器らしき物を取り出し――右手に装着した

ゲームパッドの形をした装置(デバイス)だが毒々しい色合いをしており、先端には2門の赤い銃口がある
その武器を見た途端、新は直ぐに察した
「シスター達の胸にあった傷痕はそいつの刺し傷か」
「Ｏｕｉ(ウィ)。Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ(マドモアゼル)には気の毒な事をしましたが、データ収集の為にはやむを得ません。あなた方からも取らせていただきますよ？Ｓ'ｉｌ(シル) ｖｏｕｓ(ブ) ｐｌ(プレ)・ｉｔ」
紳士的に一礼した直後、キリヒコは右手に装備した装置(デバイス)から光弾(こうだん)を発射した
赤い光弾は高速で直進してくるが、新とイリナは間一髪で躱(かわ)す
標的を失った光弾は壁に着弾して焼け跡を残す
その後もキリヒコは連続で光弾を放っていく
新は直ぐ様『闇皇(やみおう)の鎧』を展開
光弾を剣で弾き返し、イリナも光の槍や光輪(こうりん)を投げて応戦する
ミラナはガブリエルを護衛する為、前方に光力で作った防御壁を張る
キリヒコは光弾を放ちながら次なる攻撃手段に移った
左手の袖から黒い触手を伸ばし、先端を刃物状に変形させ――――新の頭上へ勢い良く振り下ろした

頭上から迫り来る凶刃(きょうじん)に気付いた新は刀身で受け止めるが……
待ってましたとばかりにキリヒコが装置(デバイス)の銃口を向け、光弾を撃ち放つ
隙を突かれた新に赤い光弾が直撃――かと思いきや、新の前方に光力の防御壁が出現
「……危ないところでした」
防御壁の発生源――ミラナが左手を新の方に向けていた
新は「助かったぜ」と一言だけ礼を言うと、ミラナは恐縮そうに頭を下げる
新は受け止めていた触手を横へ弾き返し、距離を詰めていく
イリナも白い両翼を広げ、空中からキリヒコの背後へ回り込む
キリヒコはそれを見て右手の装置(デバイス)の向きを反転させた
装置(デバイス)の向きが変わった瞬間――ノコギリの様な刃が飛び出してくる
先程の触手も左腕の袖口に戻ると再び刃物状に変化
新の剣を装置(デバイス)から飛び出した刃で、イリナの光の剣を左手のブレードで受け止める
「なかなかやりますね。とても良いデータが取れそうですよ」
ギュイイイイッ、ギュガガガガガガガガッ！
新の剣を止めているノコギリ状の刃が突如回転を始め、火花を散布させる
「クソッ！チェーンソーだと!?」

通常の刃物同士なら鍔迫り合いでも互角の勝負が出来るのだが――――チェーンソーの回転力が相手ではそうもいかない……

新の剣が火花と共に弾き飛ばされ、後方の床に転がり落ちる

キリヒコは好機と見てイリナを蹴り飛ばし、装置(デバイス)のチェーンソーで新に斬りかかった

先程と同じ様にミラナの防御壁が出現する……しかし、キリヒコは構う事無く回転する刃を突き立てた

その威力は凄まじく……僅か数秒で回転刃が防御壁に切り込みを入れ――――防御に転じた新の腕ごと切り刻む

金属を削り、肉を抉(えぐ)り、血の噴き出す音が教会内に響き渡る……っ

「――――ッ!新くんっ!!」

「Ｏｈ　ｌａ(オー ラ)　ｌａ(ラ)。少し切り過ぎてしまいましたか?」

手を広げて余裕そうな態度で首を僅かに傾(かし)げるキリヒコ

新は抉り切られた腕を押さえるが、流れ出てくる血は止まる事を知らない……

憤(いきどお)ったイリナは再び宙へ飛び、光の槍を複数投擲する

キリヒコは装置(デバイス)のチェーンソーで難無く切り裂き、光の槍を霧散させた

更に装置(デバイス)の向きを反転させ、赤い銃口をイリナに向ける

再び光弾の銃撃を準備する……ただし、今度は一回り巨大な光弾

赤い光弾が真っ直ぐに突き進み、直撃と同時に爆発する
撃ち落とされたイリナは苦痛に満ちた表情で起き上がる
「この人、強い……っ」
「強いだけじゃねぇ……得体の知れない感じがしてならねぇんだ……。この異質な雰囲気、何かが根本的に違う……っ」
キリヒコの不気味な雰囲気と圧倒的な強さに思わずたじろぐ2人
しかし、これはまだ序の口に過ぎないのだろう……
キリヒコが不敵な笑みを浮かべながら再度装置(デバイス)の銃口を向けた――その時、彼の足元から大質量の光が放出される
まばゆく強い光に包まれたキリヒコ
彼を呑み込んだ光の発生源は――ミラナだった
「……これ以上、お二人を傷付けさせませんっ」
「あ、ありがとうっ、ミラナさん！」
「スゲェ光力(こうりょく)だな……。見てるだけで熱い」
「ミラナちゃんの光力は強いですよぉ？まともに受けたら最上級悪魔さんでも溶けちゃいますから」
ミラナの意外な実力に舌を巻く新

流石はガブリエルのＡ(エース)だけあって規格外の光力だった
足元からの放出は続くが……１拍置いて光の帯が縦に両断される
霧散した光の中から装置(デバイス)のチェーンソーを振り抜いたキリヒコの姿が見え、驚愕する
最上級悪魔すら消し去る威力を持つミラナの光力を退(しりぞ)けたキリヒコは装置(デバイス)の向きを戻す
「……Ｔｒ▪ｓ　ｂｉｅｎ(トレビアン)。素晴らしい威力ですね。今まで遭遇したどの天使よりも濃密なモノでしたよ。しかし、悪魔は滅ぼせても私を滅ぼすには至らない。その上――良いデータを取らせていただきますよ？」
ドスッ
何をトチ狂ったのか……キリヒコは自分自身に装置(デバイス)の銃口を刺し込んだ
突然の自傷行為に戦慄する一同
装置(デバイス)から不気味な吸収音が聞こえ、吸収が終わると引き抜く
自身の腹にポッカリと銃口の傷痕が残るが……それも黒いモヤによって修復されていく
キリヒコは装置(デバイス)を見て何かを見定めると、フムフムと小さく頷(うなず)いた
「思った以上に良質なデータが取れました。今日はここまでにしておきましょう。こちらも少し準備を整えてきますので」

「……ナメられたもんだな」
「今あなた方を殺すのは得策ではありません。それでは、また明日お会いしましょう。――Ｍａｐｕｃｅ（マピュース）」
キリヒコは装置（デバイス）の銃口から黒い霧を散布して新達の視界を遮（さえぎ）る
霧を振り払うと……既にキリヒコはその場から姿を消していた
「チッ、敵の気紛（きまぐ）れに救われた様だな……。〝また明日来る〟って事は、このまま帰る訳にもいかなくなっちまったよ」
「そうね……。ところで新くん。最後にあの人が言ってたマピュースって……どういう意味？」
「あぁ。アレは侮蔑の１種だ。確か日本語に直訳すると――『私の可愛いノミちゃん』だったかな」
「ノッ、ノミ⁉なんで私達がノミなのっ⁉」
「知らね。イリナが飛び回るからじゃないか？」
「もうっ、サバって言ったりノミって言ったり！あの人、最後まで失礼よ！」

謎めいた敵――ユナイト・キリヒコが自発的に退散してから約1時間
新は持参してきた回復のポーションを飲んで自分達の傷を治し、ゴミ箱に捨てられていた本物の神父の死体を丁重に埋葬した
あまりにも無惨な状態だったのでイリナ達に手伝わせる訳にもいかず、単独で処理を施したようだ
一仕事終えた新はこれからの動向を考察する
「奴がまた来る以上、この国に少しばかり滞在しなきゃならねぇんだよな。まずはホテルでも探すか」
「そ、そうね！着替えをたくさん持ってきて良かったわ！」
「あ、そうだ。ミラナとガブリエルさんはどうするんだ？」
「わ、私達ですか……？えっと、滞在の予定が無かったので……何も用意してないんです……」
「ミラナちゃん、でしたらお二人とご一緒するのはどうでしょうか～」
ガブリエルの提案に新とイリナは〝へっ？〟と間の抜けた表情になる
「私も四大セラフとして先程の殿方は見過ごせません。被害の拡大を止める為にも、一緒にいる方が安全だと思いますぅ」
「ええっ⁉ダ、ダメですよっ、ガブリエルさま！天使と悪魔が一緒のホテルに泊まるなん

て！そっちの方が危険です！」
「どうしてもダメですかぁ？」
「あの……私からもお願いします……っ」
ガブリエルが軽く会釈、ミラナが深々と頭を下げて懇願してくる
その際に2人のおっぱいが大きく揺れ、新は「良いっすよ」と迷わず承諾した
「新くん⁉今ガブリエルさまとミラナさんの胸を見て判断したでしょ⁉」
「あぁ、悪いか？」
「開き直らないでっ！さっきも言ったけど、ガブリエルさまは四大セラフなの！もし、新くんがエッチなハプニングを起こしたり、エッチな事をしてガブリエルさまが堕天したら……天界勢力の基盤が大きく崩れるかもしれないのよ⁉」
「そこまで大それた事はしねぇよ――多分」
「多分⁉する気だったの⁉」
「とりあえずホテルを探すか」
「お願いだから私の話を聞いて！」
イリナの説教をスルーしながら新は宿泊可能なホテルを捜索
しかし、運の悪い事にどのホテルも満室で選択肢が悉く狭まっていく
やっと宿泊可能なホテルを見つけたものの、ツインルーム1つしか空いておらず……

そこに泊まるしかなかった
ツインルームとは言え４人で宿泊するには些か狭い上に若い男女同伴
イリナは多少の危険を心配するが、ガブリエルとミラナは初めてのホテル宿泊に興味津々の様子だった
「じゃあ、これから何か買ってくるから適当に寛いでて良いぞ。ついでに何か欲しい物があったら買ってきてやる。それにリアスにも連絡しておかないとな」
「え、新くん、スマホは？」
「バッテリーが切れちまったから、今充電してる」
そう言って下のロビーで電話を借りて、リアスに今回の経緯と今後の予定を報告
連絡を終えた後は一旦ホテルを出て、近くのコンビニで飲食物を買う
次にイリナから頼まれた物を買いに雑貨店へ向かった
買う物はガブリエルとミラナの着替えと歯ブラシ
イリナが持ってきた着替えで事足りるのではないかと思ったのだが……２人のおっぱいがデカ過ぎてサイズが合わないらしい……
仕方無くＬＬサイズの寝間着２着と歯ブラシを買い込み、両手に抱えてホテルへ戻る
器用にドアの鍵を開けて中に入ると――――
「あらぁ？」

「……っ？……っ」

そこで見たのはこの世の楽園

丁度風呂上がりであろうガブリエルとミラナが自分達のパンツを穿こうとしていた所だった……

特にミラナは新の入室に驚いて体を震わせた為か――――シスター服の下に潜んでいた爆乳がぶるんっと揺れる

見事な爆乳と肢体に新は目を奪われた

裸を見られたミラナは「……ぁう……っ」とまたまた可愛らしい悲鳴を発して自分の手でおっぱいを隠す

だが、彼女の隣には真打ちが控えていた

そう……ガブリエル

彼女の裸体は一目で老若男女全てが魅了されるのではないかと言うぐらい見事過ぎるモノだった……っ

おっぱいの大きさは勿論、色艶（いろつや）張り、瑞々（みずみず）しさ、神々（こうごう）しさ――――どれを取ってもパーフェクト

その神秘的な衝撃に新は心身の底から打ち震えた

「……っ。ダ、ダメです……っ。ガブリエルさまのお肌を……そんなに見ちゃぁ……っ」

ミラナが顔を赤くしながらガブリエルの前に立ち、新の視界からガブリエルの裸体を死守

しかし、ガブリエルの裸は死守出来ても自分自身が無防備だった……

「い、良いのか？ミラナ……乳首も丸見えなんだけど……」

「……あうっ。……で、でも、ガブリエルさまのお肌を守れるなら……わ、私の胸でよろしければ差し出します……っ」

『ゴハァッ！な、何だこの健気過ぎる自己犠牲の精神は……ッ！まさかの自分から差し出し⁉ヤバい、ヤバ過ぎる……ッ！これ以上何か言われたら理性が吹っ飛びそうだ……ッ！』

最大のピンチを迎える新

このままでは理性が飛んで2人に襲い掛かってしまう……

そんな時、この危機的状況を打開してくれる天使が浴室のドアを開けて参上した

「ミラナさん、さっきから何を……あ、新くんッ⁉ガブリエルさまとミラナさんに何を⁉」

彼女達と同じく風呂上がりで全裸のイリナが素っ頓狂な声を上げた

新は即座に着替えが入ったレジ袋をガブリエルとミラナに投げ渡し、イリナを引き寄せてからの壁ドンコンボを行う

軽く悲鳴を上げるイリナを逃がすまいと新は顔を近付けた
「イリナ、このまま……お前の体を見させてくれ」
「え……ええっ……⁉そ、そんな……こんな状況で……？ま、待って！私……心の準備だって出来てないのに……っ」
「良いから見させてくれ……ッ！今この場を凌げるのはお前しかいないんだ……ッ！」
「は、はい……っ」
新の鬼気迫る顔付きにイリナは何も考えられないまま承諾してしまい、その間にガブリエルとミラナは寝間着を取り出す
僅かに水滴が付着したイリナの裸を凝視し続ける新
イリナは熟れた苺の如く顔を赤面させる
『あ、新くん……そんなに私の裸を見たかったの……？ど、どうしよう……っ。このままじゃ私、襲われちゃう……⁉ガブリエルさまとミラナさんが見てる前で……ダメだよ、こんなの……っ。確かに新くんはエッチなのがたまに傷だけど……何もこんな状況で……っ。顔が近い……っ、呼吸も荒い……っ、足が太ももに当たってるぅ……っ。ダ、ダメぇ……私、堕ちちゃうぅぅ……っ』
もはや天使としての人生はこれまでと瞑目するイリナ
その直後、「着替えましたぁ」と間延びしたガブリエルの声が聞こえてくる

買ってきた寝間着姿のガブリエルとミラナを確認し、新はホッと一息入れた
「ふう、助かったぜ。お前のお陰で――――あれ？イリナ？イリナさーん？」
真っ赤に染まって湯気を噴き出しているイリナに新の呼び掛けは一切届かなかった
……

俺だってハーレムしたいんだよおおお！ｂｙイッセー

「へ～、そっちで竜崎先輩と紫藤先輩に会ったんだ。良いな～。しかも、四大セラフのガブリエルとそのＡ付きって豪華なコンボだね」

『Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ。お陰でとても有意義なデータが取れましたよ。そちらの方は如何です？』

「うん、楽しめそうだよ。早く先輩達と遊びたくて待ちきれないよ♪」

『Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、仕事に私情を挟み込むのはあまりよろしくないんですけどね』

「それは無理だね♪〝自由にやって良い〟のが今いる組織の行動理念でしょ？」

『……それもそうですね。仕事さえこなせば後は自由、これ程までに都合の良い組織は他にありません。では、そちらもご自由に。Ｓａｌｕｔ』

ガッチャーン！

「さ～てとっ、そろそろ僕も鉄の森に向かおうかな～。――――悪党狩りに。ノーコンティニューでクリアしちゃうよ？」

――――

「何か嫌な予感がするとは思っていたけれど、こう言う事って異様な頻度で起こりやすいわね。それにこんなタイミングで大公からの依頼も来るなんて……ツイてないわ」
新とイリナが謎の敵――ユナイト・キリヒコと一戦交え、連絡を寄越して数十分、部室にいるリアス達は大公からの依頼を承(うけたまわ)っていた
その内容は〝潜伏している『禍(カオス)の団(ブリゲード)』構成員の捕縛〟だった
「新の事が気になるけど、こっちも見過ごしておけないわ。直ぐに出発するわよ」
「部長、場所は？」
「ここから約２０㎞離れた森林――鉄(くろがね)の森と呼ばれる所よ」
レイヴェルとアザゼルを連絡要員として部室に残し、リアス達は鉄(くろがね)の森へと出発した
ちなみに鉄(くろがね)の森とはハンター達の間で〝蟲(むし)の巣窟(そうくつ)〟と呼ばれ、危険地域として認知されている広大な森林地帯である
蟲の巣窟――その名の通り昆虫型のモンスターが多く生息しており、奴らの体が鉄の様に硬い事から鉄(くろがね)の森と言う別名が付けられたのだ
更に一般的な森林地帯よりも遥かに広大な為、遭難する事もしばしば
身を潜めるにはうってつけの場所だ
リアス達は３つの班に分かれて捜索する

振り分けは一誠、祐斗が1班
リアス、朱乃、アーシア、ロスヴァイセが2班
ゼノヴィア、小猫、ギャスパーの3班となった
別々の方角から捜索を開始する
時折襲い掛かってくる昆虫型のモンスターを撃破しつつ、奥へ奥へと進んでいく
「久しぶりだね、イッセーくんと2人っきりになるのは」
「こんな時に気色悪い事言うなよ。はあ……俺はつくづく新が羨ましい……っ。あいつはいつもいつも可愛い女の子に囲まれて……」
「君にはアーシアさんがいるじゃないか。まだ何か不満でも？」
「アーシアは良い娘だよ！最高さ！俺には勿体無さ過ぎるぐらいに！……それでも、それでも俺はハーレム王を目指したいんだよ！なのに……浮かんでくるのはお前との妄想カップリングだの、渉との先輩×後輩だの、挙げ句には転校したてのシドとカップリングさせようってＢＬ好きの魔の手が……っ。アアアアアアッ！これ以上、俺の周りで♂(オス)度なんて上がらないでくれェェェェェェェェっ！俺だってハーレムしたいんだよぉぉぉぉっ！」
一誠は自分の不遇さに頭を振り乱しながら絶叫、否定出来る材料が見つからない祐斗は苦笑するしかなかった

そうこうしてる内に一誠と祐斗は木に寄り掛かっている何者かを発見する
白と青を基調とした服に身を包み、水色がかった銀髪のショートボブヘアーの女性
所々が汚れていてボロボロになっている……
ただならぬ状態に2人は直ぐに駆け寄った
「大丈夫ですか？随分ボロボロだけど、何か遭ったんですか？」
「……は、はい……。昨日から逃げ回ってここに潜伏してたのですが……バレるのも時間の問題で……」
どうやら彼女は〝何か〟から逃げ回っていたようだ
一誠と祐斗は顔を見合わせる
『なあ、木場。ひょっとして潜伏している「禍の団（カオス・ブリゲード）」って……まさか、この人の事か……？』
『確証は無いけど、昨日から逃げ回ってると言った辺り、その可能性はあるね。それにしても……僕達以外に彼女を追ってる者がいるのが少し引っ掛かるね……。とにかく、彼女を保護してあげよう。話はそれからだよ』
祐斗は応急処置用に持っていたフェニックスの涙（少量）を彼女に飲ませる
彼女の傷はみるみる内に癒えていき、ようやく立ち上がる
「ありがとうございます。あなた方は命の恩人です。失礼ですが、お名前をお伺いして

もよろしいでしょうか？」
「あ、はい。兵藤一誠です」
「僕は木場祐斗です。あなたは？」
「私はユキノと申します。……そのお名前、もしかして――リアス・グレモリー様のご眷属の兵藤一誠様と木場祐斗様ですか？」
銀髪の女性――ユキノがそう訊ねると２人は小さく頷（うなず）くしかなかった
２人がグレモリー眷属だと知ったユキノは力が抜けた様にその場でへたり込む
「……良かった……。じゃあ、私達は助かるんですね……」
「え？助かるって……私達？」
「他にも誰かいるんですか？」
「はい、一緒に逃げてきた私のパートナーです。あの……お願いします……っ。私達を保護してください……っ」
突然の懇願に一誠と祐斗は言葉が出なかった
やはりユキノは『禍（カオス）の団（ブリゲード）』の一員なのかもしれない
しかし、事情が事情なだけに放っておく訳にもいかない
２人は少し話し合った後に承諾した
「ええ、その場所まで案内してください」

「……っ。ありがとうございます……っ」
ユキノは目にうっすらと涙を浮かべて頭を下げる
今までにはあまり無かった状況に困惑しつつも、一誠はユキノを抱きかかえて歩き出す
ユキノの連れは森の奥にある洞穴にいるらしい
ユキノをお姫様抱っこで抱えている一誠は彼女の柔らかさに悶々としてしまう
『おおおおおおっ、おっぱいが……おっぱいが当たってるぅぅぅぅ！この人、結構なボリュームがあるぞぉ……っ！それにメチャクチャ可愛いっ！まるで天使か妖精みたいな可愛さだ！く～っ！俺も将来、こんな可愛い娘を眷属にしたいっ！』
「あ、あの……すみません、運んでいただけるなんて……。重くありませんか？」
「いえいえいえ！全っ然！寧ろ柔らかくて気持ち良いです！」
「イッセーくん、本音が出てるよ」
一誠の欲望丸出しな台詞にユキノは顔を赤らめる
「あ！す、すいません！つい本音が……」
「い、いえ……お気になさらず……。この状態ですから、しょうがないですよね……」
恥じらいはするものの、決して怒ったりしないウブな反応に一誠は更に悶々とする
それどころかユキノは落ちない様にと腕の力を強め、より体を密着させてくる

そのお陰でユキノのおっぱいが一誠の胸板に押し付けられ、形を歪めていく
『フオオオオオオオオオオオオオオオッ!!おっぱいが更に密着ううううっ!ヤバいって!俺の股間にも響いてくる!そうだ!こう言う時は円周率を数えれば良いんだっ。よし、円周率は3．14……あ、これ以上知らねぇや!別のを数えよう!おっπ(パイ)＝3．14、おっπ(パイ)＝3．14……ダメだぁ!余計におっぱいの事しか考えられねぇぇぇぇぇぇぇっ!』
頭の中がおっぱいで埋め尽くされ、心中で乱舞しているとユキノが言っていた洞穴に到着
ユキノが声を掛けると———中から出てきたのは2人の女性だった
「ユキノ、無事だったか。ん?その2人は何だ?」
1人はツリ目で金髪の女性
右腕に籠手、左腕に羽飾りを着け、腰布を巻いた露出の多い女騎士だ
チューブトップと呼ばれる布を巻き付けただけの胸がドドンと豊満さを主張してくる
「あれ、グレモリー眷属の兵藤一誠と木場祐斗じゃない?どうしてその2人がここに?」
次に出てきたのは小柄な美少女
オレンジ色の長髪にリボン付きのヘッドホンを着用し、棒付きのキャンディを口にく

わえている
　一誠は心中でヒャッハー状態となり、歓喜の涙を流す
「おい、ユキノ。何故グレモリー眷属の連中がここにいる？」
「まさか、あいつらの差し金……？」
　２人の女性が険しい顔付きとなって警戒態勢に入るが、ユキノが直ぐに止める
「ち、違いますっ。お二人には私から説明しました。私達を保護してくれます」
「……ユキノがそう言うなら、信じてみよう。私の名はディマリアだ。宜しく頼む」
「命あっての物種だもんね。私はチェルシー、エスコートはお願いね？」
　簡単な自己紹介を終えたディマリアとチェルシー
　祐斗はひとまずリアスに報告する為、通信用の小型魔方陣を展開するが――――聞こえてくるのは雑音のみ
「……おかしいな、全く通じないよ」
「まさか、部長達に何か――――」
「いえ、この森は奥に行けば行く程に磁気が大きく乱れるのです。機器は勿論、術式を含めた通信手段は使えないんです。森の入口に行けば通信は使えます」
「どっちにしろ、この森を出ないと連絡が通じないって事か」
「そうみたいだね」

森の入り口を目指すべく歩き出した一向
薄暗い木々の道を進んでいく
「そう言えば聞きそびれたんだけど、ユキノさん達は何で追われてるんだ？」
「はい……。私達は元々『禍の団（カオス・ブリゲード）』の別働隊として動いていたんですが……拠点を次々と攻め込まれて、必死で逃げてきたんです……。私達以外の人は皆殺されて……っ」
ユキノの表情に陰りが強く出始め、ディマリアとチェルシーの顔も沈んだ表情となる
どうやらあまり思い出したくない内容らしい
「その人の強さと恐ろしさは……忘れたくても忘れられません……っ」
「三大勢力以外にも『禍の団（カオス・ブリゲード）』を討伐する組織が……？相手は何人だったんですか？」
祐斗が訊くとユキノは口元を震わせて答えた
〝……1人です……っ〟
「ひ、1人っ⁉たった1人でユキノさん達を⁉」
一誠は目玉が飛び出しそうなくらい驚き、ユキノは無言で小さく頷く
それ程の者が彼女達をつけ狙う理由、その目的は何なのか？
謎を残したままだが、一向は森の入り口付近にまで辿り着いた
〝これで助かる……っ〟
ユキノ達が安堵して心を緩めたその時――何者かが空から地上へと着地してきた

砂煙が足元に舞い、足を止める一誠達
「やあ、イッセー先輩。奇遇だねー」
その軽いノリの声音には聞き覚えがあった
最近知ったばかりの声、制服姿……
眼前の人物は紛れも無く、駒王学園（くおうがくえん）に転入してきた少年――――シド・ヴァルディだった
「お前……シド⁉何でお前がここに⁉」
当然驚いた一誠は問いただすが、シドは陽気に手を振るだけ
ふざけた態度に物申そうとした時、ユキノ達の異変に気付く
全身を震わせ、この世の終わりの様な表情となり、歯もガチガチと鳴らしている
その様子を見て祐斗はいち早く察した
「……なるほど、どうやら彼が話の主犯みたいだね」
「え？それじゃあ――――」
「……はい……っ。あの人が……あの人が……っ、私達の拠点を……全滅させたんです……っ」
絞り出された彼女の言葉に木々がざわつく……

ゲームスタート！――ＶＳシド・ヴァルディ

「あれれ、どうしたのかなー？そんな引きつった顔しちゃって」
「……シド、お前いったい何者なんだよ……？どうしてユキノさん達を狙うんだ？」
「どうしてって言われてもねぇ、僕は上の人から『禍（カオス）の団（ブリゲード）』の構成員と拠点を潰すように言われたから、それを実行してるだけ」
一誠の質問に対して茶を濁した様な答えを出すシド
祐斗はリアス達を呼ぶべく通信用の魔方陣を展開するが……また雑音しか流れない
奥地ならともかく、今いる場所は森の入り口付近
通信が使える筈なのに使えない……
祐斗の行動を見ていたシドが種明かしをする
「無理だよ、木場先輩？この辺り一帯には通信を遮断する結界が張ってあるんだ。通信機器も通信魔方陣も一切使えないよ♪」
「……いったい何が目的なんだい？」
「さ～、何だろうねー？とりあえず〝今は〟その人達の身柄かな？――渡してよ、それ」

シドが人差し指をユキノ達に向けて、渡すよう促(うなが)してくる
体を震わせるユキノ達を見た一誠は祐斗よりも先に答えを出す
「シド、お前なんかにこの人達は渡さねぇぞ！」
「――？どうして、先輩？その人達は『禍(カオス)の団(ブリゲード)』、〝この世界を破壊する〟なんて時代遅れな名目で動いてるロクデナシなんだよ？それに『禍(カオス)の団(ブリゲード)』なんて所詮〝はみ出し者の集まり〟。いらない人達の寄せ集めみたいな物さ。そんな人達をどうこうした所で誰か怒る？寧ろ良い事じゃん。いらない物を処分する事の何が悪いのさ？」
無邪気なシドの口から無慈悲な言葉が次々と出てくる
彼の言う通り、元々『禍(カオス)の団(ブリゲード)』は三大勢力を追われた危険因子が集まって出来た組織
平穏を願う一誠達や三大勢力にとっては目の上のたんこぶ
シドはそれを率先して除去しようとしている
普通ならば邪魔をしようとは思えない、寧ろ願ってもないチャンスだ
『禍(カオス)の団(ブリゲード)』の根絶が少しでも進展するなら、ここは彼の用件を呑むべきとも言える
無論、一誠とて頭の中では分かっていた……
だが、ユキノ達の苦に満ちた顔を見た途端――目先のメリットを消し飛ばした
「お前が何処の誰かも分からないのに、〝はい、そうですか〟と簡単に渡せるかよ。それ

に――――泣いてる女の子に助けを求められたら、男として逃げる訳にはいかねぇんだよッ！」

一誠の放った一言にユキノ達は心を打たれ、一筋の涙を流す

祐斗は肩を竦めるものの、彼女達をシドに渡さないと言う一誠の意思に賛同する

シドの要求は見事に一蹴され、一誠はユキノを下ろして禁手（バランス・ブレイカー）となった

「……プッ。アハハハハハハハハハハハッ！イッセー先輩、面白いね！そんな理由でその人達を庇うんだ⁉ねえ、それってかなりの無理ゲーだと思うよ？」

「無理かどうかなんて分からねぇだろ！」

「ううん、分かるよ。だって――――僕と先輩達じゃレベルが違うんだもん。でも、良いよ。それならそれで――――遊んであげる」

低いトーンで最後の言葉を放った直後、シドは額のゴーグルを目元まで下ろして着用

その瞬間、口元がマスクで覆われ、駒王学園（くおうがくえん）の制服がプロテクター付きのアンダースーツへと変化する

次にシドが1本の木に手を向けると、手元に黒い魔方陣が展開される

そこから流れた黒い粒子が木を包み込み、サイズを縮小――――武器へと変化させた

現れたのは片手で持てるサイズのハンマー

シドの能力に一誠の目が点になった

「な、何だあれ⁉何で木が武器に⁉」
「樹木を武器に変えた……？おそらく錬金術の類だろうけど、あんな短時間での錬成は初めて見るよ」
シドが木から錬成したハンマーをクルクルと回した直後、その場をダッシュして一気に距離を詰める
あまりの速度に反応が遅れた一誠
シドはハンマーでの一撃を一誠に見舞った
鈍く重い音が大きく鳴り、ハンマーの衝撃が骨まで伝わってくる
「ぐあ……っ！」
「反応遅いね、イッセー先輩」
シドは返しの振りでハンマーを一誠の腹に叩き込む
腹部の装甲を容易く砕き、力を込めて一誠を後方へと吹っ飛ばす
祐斗は聖魔剣を一振り創って駆け出し、シドに剣戟を見舞う
即座に察知したシドはハンマーの持ち手部分にある引き金を押す
すると、ハンマーの天辺から刃が飛び出して剣状の武器へと変貌
祐斗が振った聖魔剣の一撃をその刃で止める
「……その武器は自在に変化出来るようだね」

「木場先輩、この程度で驚いてもらったら困るよ」
そう言ってシドは空いた左手を地面に向け、先程と同じ黒い魔方陣を展開する
黒い粒子が足元の地面の一部を覆い、シドの手元に集束
次に出現したのは———1丁の銃だった
左手で銃を掴んだと同時に、銃口を祐斗に向けて撃ち抜こうとする
祐斗は刀身が大きめの聖魔剣を自身の足元から出現させ、盾の様に構える
引き金を引いた刹那、銃口が火を噴き———銃弾が雨霰(あめあられ)の如く掃射される
激しい弾幕射撃で盾代わりの聖魔剣に亀裂が入り———バラバラの破片と化した
聖魔剣は破壊されたが、祐斗はいち早くその場から離脱しており銃弾を食らわずに済んだ
「へー、やるねぇ先輩」
シドは相変わらず無邪気な口調で声を掛けてくる
祐斗もこれまで以上に苦戦を強いられ、苦々しい表情となる
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!」
シドの背後からブースターを噴かして飛んでくる一誠
拳を握り締め、力を倍増させた拳打を打ち込もうとするが———シドは軽々と飛んで回避

本当なら一誠もドラゴンショットやドラゴンブラスター等の大技を使いたいところなのだが、周囲にはユキノ達、森の中には未だ捜索中のリアス達もいる
技の余波による二次被害、巻き添えを避ける為にも砲撃系の大技を使う事が出来ないのだ
それに対してシドはお構い無し、一切遠慮せずに使用してくるだろう……
彼自身の強さだけじゃなく状況的にも形勢不利に陥っていた
空中でシドは再度黒い魔方陣を展開し、最初に出したハンマー型の武器を別の武器へと錬成
現れたのは――――１対の鎌の様な武器
それらが背中合わせで合体し――――弓の様な武器となる
右手で弓を、左手で銃を構えて着地と同時に一斉掃射
黒い矢と銃弾による弾幕射撃が一誠と祐斗に襲い掛かる
一誠は直ぐにトリアイナ版『戦車』の両腕を形成し、弾幕射撃を防ぐ
苛烈な一斉掃射を防いでる隙にシドが再び仕掛ける
左手に携えた銃の銃身が伸びてライフルの様な形となり、銃口にパワーが集束する
右手の弓を上に構えて撃つと――――１本の黒い矢が無数の矢に分裂し、一誠の頭上から降り注ぐ

祐斗はもう一振り聖魔剣を創り、二刀流で切り払うおうと試みるが……数が多過ぎる為に防ぎ切れない

勿論、一誠も頭上から降り注がれる矢の雨を対処出来ない

そればかりか、シドの構えたライフルから強烈なパワーショットが放たれ――両腕の鎧がいとも簡単に破壊される

両腕から血を流す一誠は鎧を形成し直す

「くそ……っ！こいつ、俺達の攻撃を簡単に躱しやがる……っ！」

「それだけじゃないよ。……別の攻撃への転じ方、武器の錬成速度も早い……っ。ここまでの強さを持っていながら、今まで三大勢力にマークされてなかったのが疑わしく思えるよ……」

険しい表情の２人、シドは武器をクルクル回して余裕を見せ続ける

「アハハッ♪ほらほら、もっと頑張ってよお。そんなんじゃ全然楽しめないじゃん？」

「楽しむだと？何言ってやがる！」

「何で怒ってるの？これは僕と先輩達との勝負だよ。ゲームは真剣にやって楽しんでこそ面白い物でしょ？」

「てめぇは遊びでこんな事するのかよ！遊びで人を殺したりすんのかッ！」

「固い事は考えずに楽しんだ方が人生って楽なんだよ？先輩さぁ、もっともっと心に余

裕を持って生きた方が良いと思うよ。余裕を持たない人に限って、あっさりと死んじゃったりするからさ♪」

「ふざけるなァァァァァァッ！」

怒り心頭で飛び出す一誠

シドはまたもや黒い魔方陣を展開、黒い粒子で銃を包み込んだ

また他の武器に錬成――かと思いきや、今度は武器ではなく1枚の黒いメダルに錬成した

そして錬成後、自身のマスク部分に投入口が現れ……黒いメダルが吸収される

『Ｈａｎｓｈａ（反射）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

まるでゲームアナウンスの様な音声がシド自身から発され、彼の前に1枚の透明な壁が出現する

一誠は構う事無く、力を増大させた拳を叩き込もうとしたが――隔てられた透明の壁によって阻まれる

硬い感触を感じた瞬間、打ち込んだ衝撃が自分にはね返り、一誠は大きく吹っ飛ばされた

いったい何が起きたのか……？

「イッセーくん!?」

「が……っ！いってぇぇ……っ！何だ、今のは……⁉攻撃を跳ね返した……⁉」
「まさかとは思うけど……今のが彼の神器（セイクリッド・ギア）……？」
「神器（セイクリッド・ギア）？何それ？僕の力をそんな物と一緒にしないで欲しいな」
神器（セイクリッド・ギア）を〝そんな物〟と一蹴するシド
どうやらシドが今まで使用してきた力は神器（セイクリッド・ギア）の類（たぐい）ではないようだ
「神器（セイクリッド・ギア）じゃないなら、その力はいったい……？」
「フフン♪それじゃあネタバレしてあげちゃおうかなー？僕の力の正体を」
シドは得意気に自分の能力について話し始めた
「かつて人間達が卑金属を貴金属に変成、不老不死の薬や万能薬の製造を夢見て解明しようとしたけど、現代科学では計り知れず未だ深奥の解明に至れてない奇跡の学問――錬金術。僕が今使ってるのは、その錬金術を独自に進化させた錬金術の究極態。その名も――『深淵の闇錬成術（パーフェクト・アルケマイズ）』」
「パーフェクト・アルケマイズ……っ？」
「そっ♪自分の強化装備、強化アイテムをあらゆる無機物から錬成出来る何でも有りの錬金術さ♪」
つまり、シドは〝どんな場面・戦況に於いても自分専用のアイテムを作り出せる〟と言う事だ

シドのチート染みた能力に一誠と祐斗の顔が険しさを増す
だが、２人にとって嫌な報せはこれだけではなかった……
「それともう１つ、先輩達に良い事を教えてあげるよ。僕は今〝とある組織〟に所属していてね、そこで幹部として働いてるんだけどぉ。この程度の力を持った奴は僕を含めて――後１２人いるんだよ」
「――――っ⁉」
「しかも、その内の１人がさっき言った〝上の人〟で、僕達に指示を送る司令官的な感じかな？んで、その上に組織のトップがいる。その人の強さは君達で言う所の魔王クラス、もしくは神クラスかな。ちなみに僕は５番目か６番目ぐらいの強さだよ」
シドの口から出てきた組織の構成図
幹部だけで１２人（その内の１人が指示役）、その上に君臨するトップ
総計１３人の猛者……想像を遥かに超えた戦慄が２人の全身を駆け巡る……っ
「まあ、滅多に会う事は無いだろうけど。僕に苦戦してるようじゃ全員を相手にするなんて無理だね。あまり深く首を突っ込まない事をオススメするよ？じゃないと――――本当に死んじゃうからね？」
警告とも言える台詞を冷淡に吐き捨てるシド
スケールのデカさ、脅威を体現するかの様に木々のざわつきが増していく

「……イッセーくん、今の話を聞いてどう思う？」
「どうもこうも……震えっぱなしだよ……！こいつみたいに強い奴らが１３人もいるって普通に反則だろっ⁉」
「だよね……。彼女達がそんな大規模な組織の標的にされてるなんて。僕もさっきから手汗が出続けているよ……っ」
「ねっ？無理ゲーでしょ？だからさ、今の内に諦めて――――その人達を渡してよ。それだけで僕は帰るからさ」
　シドは再度ユキノ達を渡すよう２人に促すが……一誠と祐斗はお互いに顔を見合わせ――――答えを出す
「でも、今まで僕達が対峙してきた相手も大概ヤバかったよね。闇人（やみびと）、悪神ロキ、英雄派にリュオーガ族……どれも規格外だった」
「ああ、バカみたいに強い奴らと出くわすのは――――もう慣れた！それがまた１つ増えただけだ！」
「たとえ相手が誰であろうと逃げるつもりは無いッ！」
　一誠は拳、祐斗は聖魔剣をシドに向けて力強く言い放った
　その言葉を受けてシドは――――より一層歓喜に打ち震えているようだった
「先輩……っ。僕をここまで楽しませてくれるなんて嬉しいよ……っ。そんな風に答え

てくれたのは初めてさ。やっぱり勝負（ゲーム）は――楽しまなくちゃ滾（たぎ）らないよッ！」

VSシド・ヴァルディ　後編！勇気を貰った乙女達

一誠と祐斗の奮起、立ち振舞いに歓喜するシド
再度『深淵の闇錬成術（パーフェクト・アルケマイズ）』を発動し、手持ちの鎌を他の武器へと変えていく
次に出てきたのは1本の剣――――炎と氷が混ざり合った様な造形だ
「くそ……っ、次から次へと……っ！」
イラつく一誠をよそにシドは剣を振るい、膨大な質量の火炎を周囲に放つ
周りの木々が火に包まれ、パチパチと悲鳴を上げ――――崩れていく
無造作に倒れる木々が一誠と祐斗、ユキノ達の頭上より襲い掛かる
燃え盛る倒木での無差別攻撃……
祐斗は持ち前の速度と剣捌きで倒木を切り払う
一方、一誠はユキノ達を庇いつつ、拳と蹴りで倒木を破壊していく
だが、数が多い為か何本かの倒木が直撃し、一誠の体を痛めつける
その隙を見逃さないシド
「先輩っ、守りながら戦うのは大変だよねぇ！」
剣を逆手に握り、再び振るうと――――今度は凍えるような冷気が発生

凄まじい勢いで地面を凍らせ、そのまま一誠の全身を氷で捕縛する
四肢を封じられた一誠は何とか抜け出そうとするが、微動だにしない
シドが地面に張られた氷の上を滑りながら向かってくる
その際、また錬成術で強化アイテムの黒いメダルを生み出し――マスク部分に投入する
『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』
音声が発せられると同時にシドの体が大きく脈動、鬼気に満ちたオーラが滲み出てくる
「攻撃力の倍増なら、こっちも負けてないよ！そのまま砕いてやる！」
「そうはいかない！――『魔剣創造（ソード・バース）』ッ！」
地面から大量の聖魔剣が飛び出し、シドの行く手を阻む壁の様に形成される
二重、三重と聖魔剣の壁を聳（そび）えさせる祐斗
シドは氷炎一体の剣を構え、力強く横薙ぎに払う
彼の一撃は三重に張った聖魔剣の壁を容易く破壊した
どうやら先程飲み込んだ黒いメダルは言葉通り、攻撃力を倍増させる強化アイテムの様だ
遮蔽物を木っ端微塵に破壊した時――その場にユキノ達の姿は無かった

しかし、シドは一誠への攻撃を最優先
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!』
一誠は力を倍増させ、自身を捕縛している氷を強引に壊してシドに右の拳打を放った
攻撃力を倍増させた者同士の一撃が正面衝突する……っ
「先輩、さっきの人達を逃がす為に囮役を買って出たの？その選択はあまり賢くないと思うんだけど！」
「うるせぇっ！ユキノさん達に攻撃が飛び火しないよう一旦遠ざけただけだ！」
「その時点で負けフラグが立ってるんだよ！」
シドが更に力を込めて剣を振り下ろし、一誠の右手を叩き伏せる
体勢を崩した一誠に返しの剣戟が襲い掛かる……っ
無防備な腹部に食い込む横薙ぎの剣
シドは思いっきり振り抜いて一誠を宙へ跳ね上げた
「イッセーくんッ！」
「今度はそっち行くよッ！」
『Ｋｏｕｓｏｋｕ（高速） Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』
シドはまたもや錬成した黒いメダルを飲み込み、今度は自身のスピードを上げてきた

幾重もの残像を生み出しながら高速移動で攻める
祐斗も負けじと自前のスピードで応戦、高速且つ熾烈な剣戟合戦を繰り広げる
しかし、シドのスピードが予想以上に速かったのか……徐々に押され気味となり――
―振り抜いた一撃で聖魔剣を粉々に砕かれた
シドは振り抜いた勢いを利用して後ろ回し蹴りを祐斗の腹に叩き込む
一瞬の隙を突かれた祐斗は吹き飛んで転がり、口から血を吐き出す
元々耐久力が乏しい祐斗にとって通常の蹴りですらダメージは大きい上、先程の蹴りで肋骨が何本か折れたようだ
同時に宙へ跳ね上げられた一誠が地面に落ち、鎧の破片が舞う
「アハハハハッー先輩達、もう終わり?これじゃあ面白味に欠けるよ」
余裕綽々で挑発するシドに対し、一誠と祐斗は険しい表情で歯噛みするしかなかった
圧倒的とも言える力の差、手も足も出ない歯痒さが２人の思考を鈍らせる……
シドは再度ハンマー状の武器を木の破片から錬成して刃を出し、二刀流スタイルで飛び出した
シドが眼前まで迫ってきた……その刹那――
ドガァァァァンッ!
「フギャッ⁉」

「「……っ⁉」」
なんと突然、シドが目の前で爆ぜた……！
爆煙の中から不規則に転がり回るシド
一誠と祐斗から少し離れた距離で停止し、起き上がってブヘッと黒い煙を吐き出した
「ちょっとちょっと、邪魔したの誰？」
シドが不機嫌そうに呼び掛けると爆破の実行犯が姿を現す
それは……先程一誠が逃がした筈のユキノ、ディマリア、チェルシーの3人だった
その内の1人、チェルシーがドヤ顔で腕を組む
「は～いっ、犯人は私で～したっ♪」
小悪魔な笑顔で自白するチェルシー
よく見れば、いつの間にか彼女達の表情からシドに対する恐怖が消えているように思える
「お姉さん、何のつもり？さっきまでブルブル震えて怖がってたのに」
「……今でも怖いわよ？正直言って、今すぐにでもこの場から逃げ出したい気分。でもね……私達のせいでこの人達が死んじゃったら申し訳無いもん。だから――――私達も逃げずに戦おうって決めたの」
チェルシーが一誠の手を取って起こす

「果敢に立ち向かっていくあなた達を見て、勇気が沸いてきたわ。ありがとっ♪」
　可愛い笑顔を見せるチェルシーに続き、ユキノとディマリアも凛々しい顔付きで言う
「私達も一緒に戦わせてください。微力とは思いますが……ここまでしていただいたあなた方の恩に応えたいのです」
「元々は私達の問題に巻き込んでしまったんだ。その尻拭いをさせてほしい」
　ここに来て彼女達に戦意の火が灯り、一誠と祐斗は当然断る理由も無く受け入れた
「ありがとうございますっ、ユキノさんッ！」
「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」
「ありやりや、まさかの展開だねー。でも……それはそれで面白いから有りかもッ！」
　シドは嬉々とした様子で再び突っ込もうとする
　チェルシーがピストルサインを彼に向け、撃つ様な仕草をした瞬間――またまた爆破現象が起こる
　しかも、今度は1回だけで終わらず2回、3回、4回と連続で爆発する
「まただ！またシドが爆発に呑み込まれたぞ⁉」
「チェルシーさん、ひょっとして……それが君の力かい？」
　祐斗の指摘にチェルシーは得意気な顔で自分の能力を明かす
「そう♪君達が言ってた神器（セイクリッド・ギア）ってヤツよ。空間に見えない爆弾を仕掛けて爆破させ

る――――『爆炎の舞踏会(ロンド・エクスプロジオーネ)』。規模も数も自由自在に調整出来るわ」
「ス、スゲェ……。お茶目に見えてエグい物をお持ちで……」
恐々とする一誠
人は見かけに寄らないとはまさにこの事だ
しかし、シドが爆煙を切り払って姿を現した
「でも残念!僕を倒すには力不足だよ!」
シドは2本の剣を振り下ろして斬撃を放つ
2つの凶刃が地を抉りながら突き進んでくる
「私に任せろ!」
そう叫んで前に出てきたのはディマリア
彼女は両目を光らせて向かってくる斬撃を睨む
すると……2つの斬撃が突然ゆっくりとした速度になる
まるでスローモーションでも見ているかの如く
動きが遅くなった斬撃を一誠と祐斗が側面から打ち払う
「い、今のは何だ⁉シドの放った斬撃が遅くなったんだけど!」
「私の神器(セイクリッド・ギア)は『速度世界の眼差し(ツァイト・カリキュレート)』。視界に入れた物の速度を一定時間加速、または減速させる能力よ」

「それって人体にも効くんですか?」
「勿論。次はお前達の速度を速めよう!」
ディマリアが一誠と祐斗を視界に入れると……2人の体が不思議な感覚に包まれ、2人揃ってその場から駆け出す
凄まじい速度で動き回る一誠と祐斗に翻弄されるシド
動きを捉えようとしてもなかなか捉えられない
「スゲェェェェェッ、テープの早回しみたいいいいいいいっ」
「ちょっ、速い!速い!先輩達速過ぎっ!」
「よし、私も参戦だ!」
ディマリアは鞘にしまっていた剣を取り出し、刀身に映った自分自身を視界に収める
その結果、彼女自身の速度も上がり、3人がかりでシドを翻弄
そして一斉攻撃を仕掛ける
行動速度が速まった事で手数も増し、一誠、祐斗、ディマリアの連続攻撃がシドに炸裂した
「ドベバブロロロロロラロッ」
呂律も回らない程の連続攻撃を受けたシドは最後に上空へ飛ばされ、一定時間が経過したので一誠達の速度が元に戻る

「次はお前の番だ、ユキノっ！」
「はいっ！――――獣化（アニマル・フォーゼ）……女豹（パンサーレディ）ッ！」
ディマリアの呼び掛けに答えたユキノはそう言って駆け出す
その直後、彼女に異変が起こる
頭部に動物の耳、臀部（でんぶ）から尻尾が生え、体に斑（まだら）模様が広がっていく
まるでファンタジーに出てくる獣娘の様な姿と化したユキノはしなやかに跳び、シドの体を鋭い爪で切り裂く
「獣化（アニマルフォーゼ）――――鳥姫（ハーピィガール）ッ！」
変化はそれだけに留まらず、今度は両腕が翼と化し、足も猛禽類の様相へと変わる
真上から急降下してシドの顔を足爪で捕まえ、そのまま地面へと叩き付けた
体を旋回させて綺麗に着地、元の姿に戻る
一誠は驚きを隠せない
「ス、スゲェェェェェッ！今のは⁉今のも神器（セイクリッド・ギア）なんすか⁉」
「はい。私は動物の特性を自由に扱う事が出来ます。『獣達の楽園（ソーオン・ガーデン）』――――それが私の神器（セイクリッド・ギア）です」
「スゲェ……スゲェよ！可愛くて綺麗な上にこんなにも強いなんて……！」
「そ、そんなに褒められると……照れちゃいます……っ」

一誠の反応に戸惑いつつも微笑みを見せるユキノ
ディマリアとチェルシーも同じく頬を紅潮させていた
しかし、喜ぶのも束の間……シドはまだ倒れていない
『……フフフ……ッ。アハハハハ……ッ！ナニコレ、面白い！面白いよ！さっきまで怖がってたお姉さん達が僕に立ち向かってきてる！イッセー先輩の言葉、檄を受けてから急転、劇的な変化を見せた！……やっぱりイッセー先輩は面白いねぇ……！僕も心が滾(たぎ)ってくるよ！』
シドは狂喜に満ちた雰囲気で黒い魔方陣を開き、手持ちの剣２本を媒介に新たな錬成をする
武器とも黒いメダルでもない……もっと大きな物質への錬成……
「先輩ッ！ここまで僕を楽しませてくれたお礼だよ！この攻撃に耐えられたら、今日は僕の負けって事にしてあげるッ！」
そう言ってシドが錬成したのは――ＢＭＸ(競技用自転車)
それは一誠達が初めてシドに会った時、目にした物……
ＢＭＸは意思を持ったかの様にシドの頭上へ行き――
「シャ～カ～リ～キ～大・変・身ッ！」
シドの掛け声と同時にＢＭＸが分離

後輪パーツは右肩、前輪パーツは左肩に、胸部にプロテクターが装備され――――ヘッドギアが頭部に装着される
まるで鎧の如くＢＭＸがシドと一体化し、更に強力な姿へと変貌を遂げた
シドのパワーアップを見て一誠達は言葉を失う
シドは右肩の後輪を取り外して構える
周囲を揺らす程のオーラがシドから溢れ、それは手にしたホイール状の武器にも伝染する
デカい攻撃が来ると察した一誠は直ぐに前に出て力を倍増させる
何度も何度も音声を鳴り響かせ、限界まで力を高めていく
「もう呆れるしか無いよな……っ。まだそんな力を隠し持ってたなんて……！」
「アハハッ！イッセー先輩、僕はこれでもまだ本気じゃないよ！でも……こんなに心が滾ったのは久しぶりさ！そのお礼だよ！」
お互いが力を高め切った所で一誠は背中のブーストを噴かし、シドは大きく振りかぶった
「ソリッド・インパクトォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！」
「クリティカル・ストラァァァ

肥大化させた一誠の右拳

両者が正面衝突し――――森が揺れた……

襲撃のキリヒコとデンジャラスなゾンビ

一誠とシド、両者の技の激突は膨大な爆発と衝撃波を生み出し……周囲に林立していた木々を隅々まで破壊

祐斗、ユキノ達もその余波を食らってしまい、後方に吹き飛ばされる

爆煙が晴れると――両者の姿があった

一誠は右腕を痛めたのか下に垂らしており、拳から血が流れている

鎧も強制解除され、疲弊と傷の具合が激しい

一方、シドはゴーグルとプロテクターの破損があるものの――大きなダメージは受けていなかった

「アハハ……っ！やっぱりイッセー先輩は面白いねー♪最っ高だよ」

「はぁ……はぁ……男に褒められても嬉しくねぇんだよ……っ。そんな事より……どうだ？耐えてやったぞ、このバトルジャンキーが……っ」

「うんうん。今回は僕の負けだね。約束通り退いてあげるよ。じゃあね、イッセー先輩。――また明日♪」

シドは掌から転移用と思われる魔方陣を開き、それを潜って姿を消した

とりあえず難を逃れた一誠
脱力感がグッとのし掛かり、その場に座り込む
祐斗とユキノ達も駆け寄る
「おう……木場。大丈夫か……？」
「肋骨が折れた程度、かな……。イッセーくんよりはマシだよ。……それにしても、厄介な事になってきたね」
「シドみたいな奴が後１２人もいるとか……反則過ぎるだろ……っ。よく無事でいられたな、俺達……」
「彼の気まぐれで助かったと言うのが皮肉だね……」
その通り……シドはまだまだ本気を出していなかった上、彼自身が定めたルールによって一誠達は助かったのだ
まともに戦っていれば無事では済まなかっただろう……
疲労困憊の一誠の体勢が崩れそうになり――ユキノが支えに入る
一誠の顔は……ちょうど彼女のおっぱいに埋もれる形となった
「……私達の為にここまで傷付いて……本当に申し訳ありません……っ。何とお詫びを致しましょうか……」
『ふおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！お、おっぱいがぁ！ユキノさんのおっぱい

がクッションンンンンンンンンッ！なんて心地よさなんだ……！まるで天然素材１００％のフカフカ枕……っ！く～っ！さっきまでの傷と疲れが癒されていく……！やっぱりおっぱいは最高だ……！』

重傷でありながら下心全開の一誠（笑）

祐斗は一誠の顔を見て心境を察したのか、苦笑するだけだった

「イッセーくん、今なら通信が使える筈だから部長達を呼ぶね？早くアーシアさんに手当てしてもらわないと」

そう言って祐斗は通信用魔方陣でリアス達に連絡を入れる

数分後、リアス達も一誠達と合流を果たし、アーシアによる治療も進んだ

その際に現状までの経緯を説明する

「そう、彼には逃げられてしまったのね」

「逃げられたと言うより、自分から逃げたって感じですかね……。それでも余裕ぶってましたけど」

「まさか、こうも簡単に敵が侵入してくるなんて……それも学園の生徒に成り済まして……っ。不覚だわ……！」

リアスはシドやシドの背後に潜む組織に対して憤(いきどお)りを見せる

自分の管轄にあっさりと侵入された事がよっぽど悔しいのだろう

「……で、彼女達が今回の1件での証人――――『禍の団』の構成員ね」
「は、はい。リアス・グレモリー様ですね？この度はありがとうございました。兵藤一誠様と木場祐斗様は私達の恩人です」
「……妙な気分ね。『禍の団』からお礼を言われるの」
リアス達オカルト研究部はユキノ達の腰の低さ、そしてテロリストとは思えない程の礼儀正しさと感謝の意に少々戸惑い気味
何はともあれ、彼女達の無事により大公からの依頼は成功に終わった
一安心する一誠にユキノがコッソリ呼び掛け、小声で話してくる
『今回は本当にありがとうございました。お仕事はいえ、見ず知らずの私達の為に……』
『いやいやいや、何のこれしきっ。ユキノさん達が無事でいられて何よりですよ。ただ……やっぱり冥界へ移送される事になるんで、その点だけはどうしても……』
『気に病む事はありません。遅かれ早かれ、そうなる筈でしたから。今は命があるだけで充分過ぎます』
『この人、良い女性過ぎるッ！涙が出そうだ……！』
一誠が感涙を流していると……ユキノが更に耳打ちしてくる
『あの、私などが大変おこがましいと思うのですが……1つ、お願いがあります』
『……？』

『もし、あなたにその気があれば……いつか私達をあなたの眷属にしていただけませんか？』
『ふぁっ⁉』
予想だにしない申し出に一誠の目が飛び出し、ユキノは話を続けた
『私達がもう一度勇気を持てたのは……あなたのお陰なんです。あなたの言葉が、戦ってる姿が、私達の心に火を灯してくださった……。あなたに貰った命を――――あなたの為に捧げたいんです……っ。……ダメ、でしょうか……？』
頬を紅潮させ、注がれるユキノの眼差しに一誠は断れる理由など無かった
寧ろ願ったり叶ったり
一誠が『こ、こちらこそ大歓迎っす！』と答えた途端、ユキノの表情がパァッと明るくなる
そこへチェルシーが割り込んでくる
『やっぱりね、そんな事だろうと思ってたわ。ユキノが君を見てる時の顔――――完全に恋する乙女の顔してたもん』
『マ、マジすか……』
『と言っても、ユキノに限った事じゃないんだけどね。……私も君の事が気に入っちゃった♪私も予約して良いよね？』

『も、勿論！美人も美少女も大歓迎っす！』
『フフッ、ありがと♪』
一誠の了承にチェルシーは可愛らしい笑みを見せる
最後にディマリアもストレートに伝えてきた
『私もお前の眷属になりたい。この命を救ってくれた恩人だ。何処までもついていきたい』
『そ、そこまで言われると逆に照れるな……っ。じゃあ、約束します！必ず上級悪魔になるから――その時こそよろしくお願いしますッ！』
『ああ、楽しみにしているぞ』
こうして一誠の将来の眷属が３人も確定し、彼が目指すハーレム王へ１歩近付いたのだった
程無くしてユキノ達は事情聴取のため冥界へ移送され、一件落着を迎える
「グフフ……っ、遂に俺にも春がキタ……！あんな可愛い娘達が将来、俺の眷属に……」
「むぅっ、イッセーさん……何かエッチな事を考えてます」
「うえぇっ⁉ア、アーシア⁉い、今の見てたの……？」
「はい……見てました。やっぱりお胸の大きい女性が良いんですか……？」
「ちょっ、そう言う訳じゃない事も無いけど！俺にとってアーシアが１番さ！アーシア

をぞんざいにするなんてあり得ない！いつまでも一緒だ！だから、機嫌直して！お願い！」
「……ふふっ。冗談ですよ、イッセーさん」
「冗談か……勘弁してくれ……」
一誠もちょっと悪戯を仕掛けてきたアーシアには敵わないようだ（笑）

翌日、協会の依頼でイリナを連れて某国に足を運んでいた新
ユナイト・キリヒコの襲撃を1度は退けたものの、追い返せた訳ではない
また来る事を宣言してキリヒコ自ら退いていったのだ
同じく正教会からの遣いでやって来たミラナ・シャタロヴァとガブリエルも巻き込まれ、事態は更に複雑化
彼女達と共にホテルで夜を明かしたのだが……残念な事に新は快眠出来なかった
――と言うのも、同じ部屋でイリナ、ミラナ、ガブリエルが寝ており……気になり過ぎて眠れなかったのだ
特にガブリエルとミラナの寝間着は着崩れ、より扇情的な姿になっている

眠気も重なっているせいか、新の思考力は著しく低下
睡眠欲を最優先してしまい、二度寝する
しかも、イリナの傍で……
「ん……っ。……っ？……ふえっ⁉」
違和感から目を覚ましたイリナは仰天する
それもその筈……目と鼻の先で新が寝ており、手と足も彼女自身の体にガッチリと絡ませていた
恐らく日頃の寝相癖が出てしまったのだろう……
イリナは何とか新をどかそうとするが、寝ている新はテコでも動かない
「ちょっ、あ、新くん……！ダメだって……！ガブリエルさまもミラナさんもいるのよ……？こんな所を見られたら――――」
「……あらぁ？お二人は仲良しさんですねぇ」
「あうぅっ、だ……大胆です……っ」
時既に遅し、いつの間にか起きていたガブリエルとミラナは現状を目撃
顔を極限にまで真っ赤に染め、穴があったら入りたい衝動に駆られたイリナは――――
ひとまず叫んだ
「新くんのバカァァァァアアアッ！」

「イリナ、そろそろ機嫌直してくれよ。眠かったんだ、仕方無かったんだ」
「仕方無いじゃないもん！死ぬほど恥ずかしかったんだからね⁉あんなに絡ませてくるから襲われるかと思ったのよ⁉」
プンスカ怒るイリナを宥めようとする新だが、イリナはなかなか機嫌を直してくれない
彼の頬にはイリナに付けられたビンタの痕が生々しく残っていた……
ホテルを出た矢先――新は外の違和感に気付く
得体の知れない不気味な雰囲気
首筋にネットリと絡みつく様な重苦しい空気がそこら一帯に充満している……
「早速お出ましか」
「またサバの人ね……」
〝いい加減サバから離れろ〟と言いたい所だが、新は敢えて言わないでおく事に
暫く辺りを警戒していると……問題の人物が姿を現した
「Ｂｏｎｊｏｕｒ、皆さん。良い夜を過ごせましたか？」

「出やがったな、悪趣味野郎」
「お褒めいただき光栄です。……それにしても、朝から女性を囲んでホテルに宿泊ですか。精が出てますね」
「ち、違うもんっ。ここに泊まったのは他に宿泊先が無いから――――」
「別に隠さなくても宜しいですよ、Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ。首にキスマークがしっかりと付いてるじゃないですか」
「ふぇぇっ⁉嘘ぉっ！」
イリナは慌てて自分の首筋を押さえるが、直ぐにキリヒコが「Ｏｕｉ、嘘ですよ」と言う
カマを掛けられ、赤っ恥をかいたイリナはムムムッとキリヒコを睨み付けた
「もうっ、本当にあなたって失礼な人よ！純真な乙女をからかうなんて！天罰よ！ミカエルさまに代わって断罪しちゃうんだから！アーメンッ！」
イリナは手元に光の剣を出して斬りかかるが、キリヒコは軽やかに躱す
颯爽と何処かへ逃げていくキリヒコ
イリナは「待ちなさいっ！」とプンスカ怒りながら追い掛けた
「ったく、すっかり奴のペースに乗せられてるな……」
嘆息しつつ新もガブリエル、ミラナと共に２人を追い掛ける

暫く鬼ごっこが続き――ある場所に入った時点でキリヒコが足を止める
そこは昨夜、キリヒコと戦った教会――つまりは最初の場所
ただし、今回はその裏にある墓地……死者が眠る領域に誘い込まれた
「とことん悪趣味だぜ……。死者を弔う厳粛な墓地でやろうってのか？ＴＰＯってモノを弁えろよ」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ。これは失礼、墓標の設置場所に時間を掛けない様にと配慮したつもりなのですが……お気に召しませんでしたか？」
あざとく嫌味な笑みを見せるキリヒコに新は内心で沸々と怒りを煮えたぎらせる
それもその筈……この墓地にはかつての仲間の墓標も立てられている
わざとらしく新が戦いにくい場所を選んだキリヒコの手腕と嗜好にイリナ達も顔をしかめた
新は噴き出しそうになる怒りを静かに抑え、『闇皇の鎧』に身を包む
それを見てキリヒコもコートの内側から例の装置を取り出し、右手に装着した
「今日まで実に良いデータが集まりました。その中でもやはり――〝人の死〟はそそられるモノです。苦痛に呻きながらの死、目の前の恐怖に発狂しながらの死、何が起きたのか理解出来ないまま遂げた死、どれも興味深く見応えのあるモノでした。本日はその死の集大成をお見せ致します」

「データの集大成……？」

「――――『闇異培養』」

疑問を浮かべていると、キリヒコが左手で装置に触れる

その刹那、装置の銃口から黒いモヤが噴出され――――

『Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｚｏｍｂｉｅ　Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　Ｕｐ……!!!』

おどろおどろしい音声が発せられた直後、黒いモヤが繭の如くキリヒコを覆い隠していく

不気味な繭が蠢き、ボコボコと形を歪めた末――――内部から破裂

繭を破って出てきたのは異形への変貌を遂げたキリヒコだった

白と黒の骨で構成された様な装甲、血の如く真っ赤な右目と相反する水色の左目

その姿は宛ら継ぎ接ぎだらけの死霊の如き様相だ

禍々しいオーラを発しながら歪で不気味な動きを見せる

昨日よりも遥かに危険な匂いを漂わせるキリヒコに新達は戦慄せざるを得なかった

……

やがて動きを止めたキリヒコが指先を新達に向ける

「では、始めましょうか。あなた方がどの様な恐怖を沸き立て、どの様に乱れていくのか拝見させていただきますよ？――――Ｂｏｎｎｅ　ｃｈａｎｃｅ」

ＶＳキリヒコ　死者への冒涜

死霊の化身とも言える姿に変貌したユナイト・キリヒコは右手の装置（デバイス）を構え、銃口から赤い光弾を発射
新とイリナは自前の剣で光弾を切り裂き、ミラナは光力で構成した防御壁で防ぐ
だが、これはほんの小手調べに過ぎない
キリヒコは銃撃を中断し、ゆっくりと歩みを進める
新は剣を握り締め、刀身に赤いオーラを流していく
その場を駆け出した新は赤く染まった剣を水平に構える
横一閃の剣戟が空を走り――――異形キリヒコの腹部を切り裂いた
紫色の血を噴き出し、仰け反るキリヒコ
しかし……
『……斬った手応えはあるのに、何だこの違和感は……？』
不審な予感を警戒する新
そして、その違和感は直ぐにやって来る
ズチュ……ッ！

肉が蠢(うごめ)く音が不気味に響いたと思えば……切り裂かれたキリヒコの腹部がみるみる内に再生していく
離れた肉同士が元通りに接合され――傷は跡形も無く消えた
「な……ッ⁉」
「如何(いかが)ですか？今まで蓄えてきた死のデータによる再生能力。勿論、これらはまだ伸び代がありますので今後も集めさせていただきますよ」
悠々と歩みを進めるキリヒコに対し、新は連続で剣戟を見舞う
しかし、いくら斬ってもキリヒコの体は直ぐに再生していく
反則的な再生能力の前に成す術が無く、剣を左手で止められる始末……
キリヒコは空いた右手で新の顔や腹部を殴打しまくり――装置(デバイス)の銃口を腹部に押し付けた
銃口が火を噴き、赤い光弾が新の腹を撃ち貫く
血反吐を吐く新
キリヒコは更に前蹴りで新を後方へと吹き飛ばした
墓標の１つに背中から激突し、壊れた墓標ごと地に倒れ込む
次にイリナが空中から攻めてくる
光力で構成した槍や光輪をキリヒコ目掛けて投げつける

キリヒコは装置（デバイス）の向きを反転させて、チェーンソーの刃で1つ残らず切り裂いていく
その隙に距離を詰めたイリナが光の剣を縦に振り下ろした
「アーメンッ！」
イリナの剣がキリヒコを真っ二つに分断する
だが、中央から分かれたキリヒコの体はそれでも効いておらず……何事も無かったかの如く閉じられ再生した
「無駄ですよ、Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ（マドモアゼル）。どんな攻撃を受けようとも、直ぐに再生を果たします」
「もうっ、そんなの反則よ！ズルいっ！」
規格外過ぎるキリヒコの能力に頬を膨らませるイリナ
キリヒコがイリナに斬りかかろうと1歩踏み出した瞬間――――地面から膨大な光のオーラが噴出してキリヒコを呑み込む
ミラナがサポートを入れてくれたようだ
サポートとは思えない程の強い光撃（こうげき）すら物ともしないキリヒコは光の中から飛び出す
光によって焼け焦げた体も修復され、首を横に振る
「……そんな……。これでも効かないんですか……？」

「ミラナちゃん、下がってください。私もお手伝いします～」
そう言ってきたのは天界最強の女性天使ガブリエル
彼女が両手を前に掲げると――――手元から極大の光の奔流が放たれた
ミラナの倍以上ある光撃はそのままキリヒコに直撃……上半身を完全に消し飛ばしてしまった
美麗な外見からは想像もつかない破壊力にイリナは勿論、新も言葉を失う
『……下手すりゃ消滅ＥＮＤ（エンド）じゃねえか……？』
心中でそんな風に考えていると……残存しているキリヒコの下半身から異変が起きる
禍々しい色の粒子が噴き上がり、消滅させられた上半身を元通りに形成していく
僅か数秒足らずで完全再生を果たしたキリヒコは両手を広げてアピールする
「どうです？天界最強の女性天使と名高いガブリエルの光撃ですら、私を滅ぼせない。ゾンビに不死身の能力は付き物てすからね」
「も～っ！ズル過ぎるっ！それじゃあ永遠に倒せないって事⁉」
「Ｏｕｉ（ウィ）。少なくともあなたの様なじゃじゃ馬の自称天使では傷１つ負わせる事も出来ないでしょう」
「じ、自称天使⁉」

「私の個人的な意見に過ぎないと思いますが、天使とは淑(しと)やかで清楚溢れる存在だと聞いております。しかし……あなたからはそう言った個性が微塵も出ておりません。況(ま)してや、ご自分を天使天使と公言してる時点で疑わしい物です」

キリヒコの物言いにイリナはプク～っとまた頬を膨らませる

確かにイリナは事ある毎に「私は天使なのよ！」と言いふらしている為、冥界関係者からは信用を得られていなかったりする

〝何か反論の材料でもあれば良かったんだが……〟と新もイリナに関して痛い所を突かれたので黙するしか無かった

「正直に言ってみたらどうです？〝自称〟天使さん」

「自称自称って言わないで！私は正真正銘本当の天使なのよっ！ほら、ちゃんと天使の翼だって生えてるもんっ！これこそ私が天使の証拠よ！」

「おや？このお酒、良い銘柄ですね。年代物ですか」

「無視しないでよ！もぉおおおおっ！このヒト本当に失礼過ぎ！」

『乗せられるなって、イリナ……。お前じゃ性格的に敵わん』

新は痛む傷を押さえつつ、墓標に手を掛けながらゆっくりと体を起こす

キリヒコの人を小馬鹿にする態度にイリナは腹を立て、光の剣で何度も斬りかかった

しかし、それは焼け石に水……

いくら斬ってもキリヒコの傷は直ぐに再生して元通りになる為、無駄打ちに終わってしまう
その内に息を切らすイリナ
キリヒコは〝やれやれ〟と言った様子で首を振り嘆息する
「少し大人しくしてもらいましょうか」
キリヒコの全身から紫色の禍々しいオーラが滲み出てくる
そのオーラはまず右手の装置（デバイス）に集まり、次に足下へと集束していく
『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ（インフェクション）　Ｃｒｉｓｉｓ（クライシス）　Ｄｅａｄ（デッド）……!!!』
おどろおどろしい音声が発せられた刹那、足下に集まったオーラが隆起し――キリヒコの分身を生み出す
１体、２体、３体とその数はどんどん増殖を繰り返していき……最終的には３０を超える数となった
「ゾンビにはもう１つ特性がありましてね。再生能力と――圧倒的な繁殖力。蓄積された死のデータによる力、とくとご覧あれ。――Ｂｏｎ（ボン）　ｖｏｙａｇｅ（ヴォヤージュ）」
キリヒコが右手を前に掲げた瞬間、分身ゾンビの群れがイリナ、ミラナ、ガブリエル目掛けて突き進んでいく
地面と同化した足で水平に移動し、掴みかかろうとする

イリナ達は光の剣や光撃でゾンビを消そうとするが……消しても消しても直ぐに復活されてしまう
無限とも言える再生能力と繁殖力の前に成す術が無かった
やがて分身ゾンビの1体がイリナの手を捕らえ、それを引き金に次々と分身ゾンビが群がって絡み付いてくる
「やっ！ちょっと……離して！離してったら――――やぁんっ！ど、何処触ってるのよ⁉いやぁぁぁぁ！ヌメヌメして気持ち悪いよぉぉぉ……！」
分身ゾンビに嫌悪感を示す中、ミラナが救出を図るも――――死角からやって来た分身ゾンビに捕らわれ、遂にはガブリエルですらも分身ゾンビの群れに捕まってしまった
「テメェ……まさか人質を取ろうってのか？」
「Ｎｏｎ　Ｎｏｎ　Ｎｏｎ。その様な無粋な真似は致しません。彼女達には大人しくしてもらうだけです」
新が怪訝に思っていると再びイリナ達の悲鳴が聞こえてくる
その方向に視線を移すと……或光景が視界に入った
――――〝分身ゾンビがイリナ達の衣服を溶かしている〟――――
再生能力、繁殖力と並ぶゾンビならではの能力……腐蝕
つまり、物質を腐敗・崩壊させる能力だ

分身ゾンビが触れている部分は煙を上げて溶け、イリナ達の肌が大きく見えてくる
「いやぁぁぁぁ！服が……服が溶けてるぅぅぅぅっ！」
「……いやぁ、こんなの卑猥だよぉ……」
「やん……っ。もう……ダメですぅ……っ」
やがて分身ゾンビに全ての衣服を溶かされた彼女達は全裸となり、羞恥にまみれてへたり込んだ
イリナは涙目でキリヒコを睨み、ミラナとガブリエルは恥じらって胸と下を手で隠す
キリヒコの手腕に新はワナワナと震える
「こいつ……天才か……っ⁉」
「お褒めいただきありがとうございます」
キリヒコが右手を上げると分身ゾンビの群れはイリナ達の元を離れ、キリヒコ本体の前に集合する
手を前にやった直後、先程と同じ様に水平移動しながら新の方へ向かっていく
新は魔力のオーラを流した剣で分身ゾンビを切り払っていくが……やはり効果は薄い
片っ端から消しても直ぐに復活してくる
その内、分身ゾンビの1体が新の剣を掴み――体を妖しく光らせ始めた

「言い忘れてました。それ――――爆発しますよ？」
「なっ――――」
ドオオオオオオオオオオオオオオオンッ！
分身ゾンビの自爆に巻き込まれた新
まともに爆発を食らってしまい、宙を舞ってから地に叩き付けられる
破損した鎧と共に血肉も飛び散り、口から血反吐を吐く
キリヒコ本人だけでも厄介極まりないのに分身ゾンビの多様性に舌打ちをした
「せっかくですので、少し趣向を凝らしてみましょう」
『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ（インフェクション）　Ｃｒｉｓｉｓ（クライシス）　Ｄｅａｄ（デッド）……!!!!』
再び不気味な音声が発せられ、足元の禍々しいオーラから分身ゾンビを形成し始める
身構える新だが……浮き上がってくるゾンビを見て絶句した
キリヒコが形成したのは――――新の嘗（かつ）ての仲間達
墓標に名を刻まれた５人のハンターだった……っ
「……嘘、だろ……っ？何でそいつらが……？」
「この技は死人を作り、操る事も出来るのですよ。〝その者の名前〟を知っていれば簡単に作れます」
腐敗した肉、飛び出た骨の体躯でこの世に具現化された５人のハンター

彼らはキリヒコの指示により新の方へ一斉に向かっていく
愕然としていた新はハッと我に返り、５人の襲撃を回避する
何度も襲ってくる攻撃を悉く躱す
ただ、それだけ……彼らに攻撃の刃を一切向けない
『やめろ……！やめてくれ……っ！こいつらはもう死んでるんだ……！眠らせてやれよ……っ！何で……何で死んだこいつらと戦わなきゃいけないんだ、俺は……っ⁉』
彼らへの攻撃を拒絶する新
それでもゾンビと化したハンター達は攻撃の手を休めない
キリヒコの指示通りに動く操り人形として動くのみ……
キリヒコの手腕、策略、精神攻撃を目の当たりにしたイリナは――涙を浮かべて憤る
「酷い……！酷いよ、こんなの……！死んだ人を無理矢理戦わせるなんて……！」
キリヒコはその場で新が右往左往するのを高みの見物
当然、新はそんな彼に激昂した
「貴様ァァァ

ハンターゾンビの1体を捕獲
自分の元へと引き寄せ――――新の剣戟を防ぐ盾にした
「ア、アァァァァァァ……ッー・グラさん……ッー・グラさん……ッ！」
死人とはいえ、嘗ての仲間を斬ってしまった新は途端に錯乱
上下に分断された仲間は地に崩れ落ちる
「Ｊｅ（ジュ） ｓｕｉｓ（スイ） ｄ（ディ）・ｓｏｌ（ソレ）・。あなたのご友人を盾にさせてもらいましたよ」
悪びれる様子も無く簡単な謝罪で済ませるキリヒコ
それだけでは留まらず、装置（デバイス）の銃口を残りのハンターゾンビ達に向けた
そして……赤い帯状の光線が新の嘗ての仲間を撃ち抜いた
それも、わざわざ新の目の前で……っ
口から腐敗した血が吐かれ、新の顔に飛び散る
キリヒコの攻撃を受けたハンター達は再び死に、その惨状を見せられた新は絶叫した
「ウァァァァァァ

しかし、キリヒコは全く容赦せず分身ゾンビの群れをけしかける
「逃げてっ、新くんッ！」
イリナが必死で叫ぶも、今の新には届かない……
既に死んだ身とはいえ、自らの手で仲間を殺してしまい、更に目の前で再び仲間を殺された……
そのショックで今まさに新の精神は崩壊を迎えようとしている
未だ発狂を続ける新にはまとわりつく分身ゾンビの群れ
全ての分身が新の所へ集結し――――
「Ａｕ（オルボアール）ｒｅｖｏｉｒ」
冷淡な一言が発せられた直後、全ての分身ゾンビが爆発四散した

罪を認める勇気

キリヒコの生み出した分身ゾンビによる爆殺刑が執行され、新は瀕死寸前となっていた

鎧も肉も爆ぜ、腕も言う事を聞かないのか垂れ下がったまま微動だにせず……

目の色も死人と同じ物になろうとしていた

新の惨状にイリナは絶句、ミラナとガブリエルはあまりの凄惨さに目を背けてしまう

それでもキリヒコの凶行は止まらない……

『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ　Ｃｒｉｓｉｓ　Ｅｎｄ……!!!』

再び装置から不気味な音声が鳴り、紫色の粒子がキリヒコにまとわりつく

薄皮の鎧の如く全身を覆われ、より一層強いオーラが彼の右足に集まる

両手を広げ、前傾姿勢を取り――その場を駆け出した

紫色の粒子に染まった右足を前蹴りで叩き込み、新の体が極端な〝くの字〟に折れ曲がる

蹴りの衝撃が全身に行き渡り、墓標を複数巻き込んで吹き飛ばされた

口から大量の血が吐き出され、鎧も大破

地に倒れ伏した新の元にイリナが駆け寄る
必死で呼び掛けるが新はまともな反応な出来ず、焦点が定まってない視線でイリナを見つけた
「……イリ、ナ……？」
「――――ッ！新くん……っ！しっかりして……っ」
「ワリィ……な……。俺の任務、だってのに……お前を、こんな事に巻き込んじまって……っ」
新の口からイリナへの謝罪の言葉が出てくる
本来ならこの任務は新に命じられたもので、悪く言ってしまえばイリナは無関係
以前の自分なら誰も巻き込まずに済んだのに、彼女の決意の固さに負けて同行を許可してしまった
その結果、イリナを危険な目に遭わせてしまった……
自責の念に駆られる新にキリヒコは更なる追い討ちを浴びせる
「実に滑稽ですね。死人と化した者に対して感情的になったり、取り乱したりするのは愚行の極みです。所詮、死人は死人でしかない。死んだ者に対する謝罪、自責、罪の意識など抱える時点で弱々しい。口も聞けない死人に何を恐れ、何を遠慮する必要があるのでしょうか？」

冷酷に言い回しながらキリヒコは墓標の上に腰掛ける
何処までも死人を侮辱する言動にイリナは腹を立てた
「あなた、最低よッ！新くんの仲間を利用して……人の傷を更に痛めつける真似をして……何とも思わないの⁉」
「古来より死体の活用法は肥料にするか、灰にして海へ流すか、或いは今の様に捨て駒として利用するか――――それだけです。逆に何故あなた方は心を痛める必要があるのですか？そうしなければ、死人が化けて出てくるとでも？死人に気を掛けた結果が今の彼の惨状です。死人に心を揺るがさなければ、そんな事にはならなかったでしょうに」
平然と死体への冒涜を言い放つキリヒコ
足を組み、意味不明と言わんばかりの素振りで首を横に振る
それに対してイリナは涙を浮かべて猛反論した
「新くんは今……償おうとしてるのよ……っ。仲間の人が死んだのは自分のせいだって、思い詰めて……責任を感じてるから……！２度と後悔したくないから償おうとしてるの！今までは目を背けていたけど、そのままじゃ重い十字架からは解放されない！だからっ、新くんは必死に立ち向かおうとしてるのよ！その為に私達と一緒に生きていくって言ったの！そんな新くんを……バカにしないでよッッ！」
墓地にイリナの怒声が響き渡る……

昨日この国に訪れた時、イリナに話した自分の過去と今後の決意を――――今度は彼女が代弁
ミラナとガブリエルも思わず聞き入って一筋の涙を浮かべる
しかし、キリヒコは冷ややかな態度しか出さなかった
「あなた方の考えはとても理解出来ませんね。死人に感情移入したところで、何の糧になるのでしょうか？この状況を切り抜けられるとでも？」
「そ、そうよっ！新くんはあなたなんかに負ける人じゃない！今までだって、どんなピンチも切り抜けてきたんだもんっ！」
「では、それを証明してください。その間だけお待ち致しましょう」
キリヒコは腕組みの姿勢で待機
勢いで言ってしまったイリナは新の復帰法を模索し始めた
しかし、残った回復のポーションを使用しても完治には至らず
何より新の精神が弱りきっていた
彼の精神が落ち着きを取り戻さない限り、勝機は無いだろう……
何か新の精神を落ち着かせ、活気を取り戻す方法が無いかと考えるイリナ
刻一刻（こくいっこく）と時間が過ぎる中、ある点に着目する
『も、もう……これしか無いわ……っ。死ぬ程恥ずかしいけど、新くんの意識を呼び覚ま

すには……っ！』

覚悟を決めた表情でイリナは意識混濁状態の新を抱き寄せ――――自身の胸へと押し当てた

イリナの突然の行動にミラナは唖然、ガブリエルは「あらまぁ」と顔を紅潮させ、キリヒコに至っては呆然としていた

「……Ｐａｒｄｏｎ？」

首を傾げるキリヒコを尻目にイリナはグイグイと新の顔を自分の胸へ押し付ける

顔から火が噴き上がりそうな羞恥に耐え、更に強く押し付ける

「ほ、ほらっ、新くん！いつまでも寝てないで、早く立ち上がって！リアスさん程じゃないけど……わ、私のおっぱいで目を覚まして！」

「あぅあぅあぅぅ……っ。そ、そんな卑猥な事を……っ？大胆過ぎます……っ」

「でも、何だかとても愛に満ちてる様な気がしますぅ。蝙蝠さんを助ける為にご自分の身を捧げる――――愛無しでは出来ませんよぉ」

ミラナは目元を手で覆いながらも指の隙間からチラチラと窺い、ガブリエルは興味津々に見つめる

一方、キリヒコは事態を全く理解出来ず……その様子をただ眺めているだけだった

「……Ｍｏｎ　ｐａｕｖｒｅ。窮地に追い込まれると理解不能な行動に走ると言う心理

は聞いた事ありますが。まさか、ここまで酷い物とは……」
まるで可哀想な人を見る様な哀れみの視線を向けるキリヒコ
チクチクと刺さるその視線をイリナは耐え忍び、新の意識が目覚めるのを待つ
だが、当の新は小声を漏らすだけでまだハッキリとした意識が戻らない
「お願いよ、新くん……っ。目を覚まして……！新くんも――――新くんの仲間も侮辱されたままで良いの……？私達と一緒に生きていくって決めたんでしょ……？その決意を壊されちゃダメ……ッ！」
より強く新を抱き締めるイリナ
見かねたキリヒコは装置（デバイス）からチェーンソーの刃を出現させる
「茶番ですね。想いだの気持ちだの、曖昧なモノでは何１つ覆（くつがえ）せませんよ。Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ（マドモアゼル）」
唸り声を上げて回転する刃を掲げ、イリナの頭上目掛けて振り下ろした
その刹那――――チェーンソーの刃が止められた
ガリガリと削る音がけたたましく鳴り響く
「……最近の俺は、女を泣かせてばかりでダメだな」
ハッキリと聞こえてきたのはイリナが抱き寄せている新の声
目に強い輝きを取り戻し、チェーンソーの凶刃を掴んで止めていた

竜の力を解放し、変貌した左手で……っ
「……ッ！新くん……っ！」
「イリナ……お前の声、しっかりと届いたぜ。ありがとう。後は――――俺に任せろッ！」
チェーンソーの刃ごとキリヒコをはね除け、新は立ち上がって全身から黒いオーラを解き放つ
膨大なオーラに身を包み、リュオーガ族との戦いで発現した真・『女王(クイーン)』形態となる
――――『超越(インフェルニティ)の黒竜帝(オーバー・ドラグニル)』――――
忌まわしき竜の力を解放した姿で佇(たたず)む彼にもう迷いなど無かった
キリヒコは再度紫色の粒子を足元へ流し込み、新の仲間達をゾンビとして強制的に甦(よみがえ)らせた
また新の精神を追い詰めた上で爆殺しようという魂胆だろう……
しかし、新は躊躇(ためら)う事無くハンターゾンビを右手から放射する黒い火竜で焼き払った
「Ｏｈ(オー)　ｌａ(ラ)　ｌａ(ラ)。今度はご友人を何の躊躇いも無く焼き殺しましたか」
「……あいつらはもう死人だ。これ以上、この世で悪用させたくないんだよ。――――先に地獄で待っててくれ。俺はお前達を利用したコイツをブッ倒すッッ！」
新は黒く燃え滾(たぎ)る炎を両手両足に纏わせ、キリヒコ目掛けて突き進んでいく
右の拳打を打ち付け、左の拳打も叩き込む

拳、蹴り、拳、蹴り、また拳、蹴りとキリヒコにゴリ押しのラッシュを食らわせていく

連続で打ち込む乱舞がキリヒコの体を浮かせ、衝撃があちこちへ飛び交う

『……ッ？先程とは打って変わって、一撃一撃が重くなってる……？肉体は再生しても、その衝撃が内部にまで浸透していく……ッ。いったい何処にそんな力が……ッ？』

余裕から一転、復活した新の攻撃に予想外の反応を示すキリヒコ

新は間髪入れずキリヒコを上空に打ち上げ、自身も飛び上がる

背中から漆黒の巨腕を6本具現化、巨大な拳を形作って一斉に叩き込んだ

その後も急降下して強烈な膝蹴りを食らわせ、後方に跳んで着地する

漆黒の巨腕をオーラ状に分解し、自らの右腕に纏わせる

キリヒコは肉体を再生させて起き上がり、再び装置（デバイス）から不気味な音声を鳴らす

『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ（インフェクション）　Ｃｒｉｓｉｓ（クライシス）　Ｅｎｄ（エンド）……!!!』

紫色の粒子を全身に纏い、その場を走り出した

新も同じく駆け出し、キリヒコの蹴りに対して右腕を力の限り突き出した

黒い火竜と化した右腕が――――紫色に染まったキリヒコの蹴りと正面衝突

膨大な火花と爆音が飛び散り、爆発の余波が両者を吹き飛ばした

転がりながらも体勢を立て直す新とキリヒコ

損傷した肉体を再生させるキリヒコに身構える新だが……キリヒコはソッと構えを解いた

「……Ｊｅ（ジュ）　ｖｏｉｓ（ヴォワ）。正直、驚きましたよ。あの状態からここまでの力を出せるとは。実にＴｒ（トレ）・ｓ（ス）　ｂｉｅｎ（ビアン）なデータが採取出来ました」

含み笑いを見せるキリヒコが装置（デバイス）の銃口を自分に挿し込み、受けたダメージをデータとして回収する

そして、満足そうな様子でこう言ってきた

「今回はこの辺にしておきましょう。今ここであなたを滅ぼすのが惜しくなりました。これからも良いデータを取らせていただきますよ？では、またお会いしましょう。――Ｓａｌｕｔ（サリュー）」

キリヒコは紫色の粒子と化して、その場から姿を消していった

脅威が去った事で力が抜けたのか、新は元の姿に戻って座り込む

大きく息を切らしていると、イリナが駆け寄ってくる

「やったね、新くんっ！」

「やったとは言えないだろ……。まだ向こうは余裕がある感じだった。ただの気紛れで助かっただけだ……」

皮肉にもその通り、キリヒコの実力はまだまだこの程度ではない筈……

一時的に切り抜けただけにしても、何とか追い払う事は出来た
とりあえずキリヒコの襲撃を潜り抜けた新はホッと一息つく
そこへガブリエルとミラナも歩み寄ってきた
「凄かったですよぉ。まさしく愛の奇跡ですねぇ」
「は、はい……っ。イリナさんの……お、おっぱいがあなたを救ったんですね……」
ミラナの言葉にハッと我に返ったイリナは顔を赤くし、〝忘れてたっ！〟と言わんばかりに丸見えのおっぱいを隠す
すると、ミラナは自分のおっぱいを見つめて新に訊く
「あ、あの……私のおっぱいでも……あの様な奇跡を起こせるのですか……？」
「ちょっ、ミラナさんっ⁉」
「もし、出来るなら……必要なら申して構いません……っ。私も平和を守れるなら――
――あなたにおっぱいを差し出します……っ」
「ぶふっ！マジでッ⁉」
トンでもない申し付けに新の口から何かが吹き出した
すると、今度はガブリエルが――
「では、その時は私もご一緒によろしいですか～？」
「ええっ⁉ダ、ダメですよ！ガブリエルさまのおっぱいをそんな簡単に……！」

「でもぉ、イリナちゃんを守った時の蝙蝠さん、カッコ良かったですよぉ。私もお二人の愛の奇跡を応援しますぅ」
ブルンブルンと揺れるガブリエルのおっぱいとムギュ～っと寄せられるミラナのおっぱい
破壊力抜群のおっぱいに新は「おお……っ」と手を伸ばして籠絡されそうになっていた
危機感を察知したイリナは即座に新をグイッと引き寄せる
「ダメダメダメェッ！絶対にダメです！それより新くん！急いで私達の服を買ってきて！」
「俺、この中で1番の重傷なんだけど……？」
「あぅ……お願いします。買ってきてください……っ」
「お願いしま～す」
「トホホ……っ。最近の俺ってホント締まらねぇよな……」
新は痛む体に鞭を打ってイリナ達の服を買いに行った

「今回は有意義なデータと共に、非常に興味深い物が見れました。普通の者なら死に絶えてもおかしくない傷を受けたと言うのに――――女性の裸体で復活するとは。今までに類を見なかったイレギュラーな現象……。実にＴｒ・ｓ（トレビアン）ｂｉｅｎです。もしかしたら、我々――――『拾弐の魔凶（ツヴェルフ・テラーズ）』が集められる日もそう遠くないかもしれませんね」

職権乱用も犯罪だからやめようね？

ユナイト・キリヒコとの戦闘が終わった翌朝、新とイリナは帰りの飛行機が待つ空港へと赴(おもむ)いていた

ミラナとガブリエルも見送りに来ており、フライトまでの時間を彼女達と過ごす事に

キリヒコが姿を消してからバウンティハンター協会からの連絡が届いた

任務は無事終了したものの、キリヒコを取り逃がした事により結果は失敗に終わった……

報奨金も出ず、完全に無駄骨だったが――――生きていただけでも不幸中の幸い(さいわ)

売店でお土産を買い揃えた新がゲート前に戻ってくる

「じゃあ、俺達はここで。また何かあったら遠慮無く言ってくれ」

「は、はい。その時はまた……よろしくお願いします」

「お二人もお気をつけて～」

ミラナとガブリエルの見送りに新は手を振り、イリナは頭を下げて搭乗ゲートへと向かっていく

「今回の1件、まだまだ分からない事が多過ぎる。奴の引き際の良さといい、目的の曖昧

さといい……まるで俺達を下調べするかの様な……」
「もしかして『禍の団』の構成員なのかな?」
「分からん。とにかく今は1つでも多く情報が欲しい。向こうに戻ったら即情報収集だ。今回の任務は思った以上に出費が嵩んじまったから、その分の情報で埋め合わせしねぇと」
「情報収集ってお金掛かるんだね……」
「業界の性ってヤツだ」

これまで一誠がシド・ヴァルディ、新がユナイト・キリヒコと言う謎多き敵と対峙してきたが……その同時刻、実は世界各地で大規模な被害が出ていたのだ
否、事細かに言えば〝被害〟の一言で片付けられないのかもしれない……
彼らは『禍の団』だけでなく、はぐれ悪魔やはぐれ悪魔祓い、海賊、果ては異能を持たない人間のテロ組織にまで牙を向け、内戦内乱などを強制的に終結させていた
1つ……とある国に攻め込んできた武装集団を殲滅する者がいた
「早くっ、早く撃て!増援を呼べぇ!」

「無理だ……！どの隊も全滅してる……！」
「何なんだよ、ありゃ……⁉人間じゃねぇ！バケモノだ！」
恐怖に駆られながら銃を乱射する武装集団
その視線の先にいるのは――――1人の異形染みた者だった
黒と銀を基調とした体躯に赤き眼を光らせ、右手をゆっくりと前に翳す
その瞬間、視界が0になる程の冷気が周囲一帯を包囲し、武装集団を根刮ぎ凍らせていった
絶望の顔で凍結された武装集団を見据え、今度は刃と一体化した弓の様な武器を取り出す
目の前の獲物に狙いを定めると風が集束していき、放たれた風は武装集団を粉微塵に砕いた
武装集団の殲滅を終えたであろう異形は体を光らせ、その姿を解除する
中から現れたのは――――白銀色の長髪、その右側をお下げに纏めた眼鏡の男性
指で眼鏡を直す仕草をしながら口を開く
「虫ケラでも凍らせて砕くと綺麗ですね。皆さんへのお土産に持っていきましょうか。それとも……この国自体をお土産にしましょうか」
不敵な笑みを浮かべる男の周り……否、国その物が氷で覆われていた

１つ……とある国の領海に海賊の大艦隊が攻め込もうとしていた
その数は凡そ１００以上
頭目らしき男が下卑た笑い声を上げる
「ヒャッヒャッヒャッヒャッ!良いか野郎共!あの国には億単位の金塊があるって噂だ!そいつを根刮ぎかっさらっちまえば、一生遊んで暮らせるぜ!気合い入れろや!」
「「「「ヒャッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」」」」
大いに盛り上がる海賊だが、その歓喜もやがて悲鳴と絶望に変わる……
意気揚々と攻め込まんとしたその時、部下の１人が慌ててやって来る
「か、頭(かしら)ぁ!西の方角から敵がトンでもないスピードでこっちに向かってきます!」
「敵襲だぁ?この大艦隊に喧嘩を売るとは命知らずなバカだ!で、相手は何隻だ?」
「そ、それが……何て言ったら良いのか――――あぁ!もう近くまで来てる!」
部下の言葉に頭目が視線を向けると、激しい水飛沫(みずしぶき)を上げながら近づいてくる影が１つ
その正体を見て頭目どころか部下達も驚愕した

「よ、鎧武者が走ってくる⁉バカな！海の上を走ってきてるだと⁉」
そう、頭目の言う通り――――敵の正体は海上を物凄い速度で激走してくる鎧武者だった
漆黒の甲冑に身を包んだ鎧武者は激走しながら大艦隊を片っ端から破壊していく
炎上し、沈んでいくのを目の当たりにした頭目は直ぐに迎撃を指示した
機関銃と大砲を漆黒の鎧武者に向けて一斉射撃
しかし、全弾命中してもお構い無し
漆黒の鎧武者は意にも介さず飛び上がり――――両腕を交差させる
「天下五剣、壱の太刀――――鬼斬イイイイイイイイイッ！」
交差させた両腕を振り抜くとX型の斬撃が飛び、艦隊を紙の如く切り裂いた
ここまでで屠った艦隊は５７隻
半分以上を数分で撃沈させ、残りの艦隊も――――
「天下五剣、弐の太刀――――数珠丸ウウウウウウウウウウウウウッ！」
身の丈以上に伸びた腕で1隻残らず2枚に切り下ろし、頭目が乗っている船に降り立つ
圧倒的な破壊力になす術無く震える海賊
「そ、そんな……俺の艦隊が……たった1人の鎧武者に沈められた……⁉」

「魑魅魍魎の如く跳梁跋扈する信念無き悪党よ。貴様らのような弱き悪に――――生きる資格など無い」
「た……助けて……っ！何でもするから……助けてくれぇ……っ」
「見苦しきもまた罪。海賊ならば、海で果てる事を誉れに思えッ！」
１００以上の艦隊を率いる海賊は1人の鎧武者によって僅か１０分で壊滅し、海の藻屑となった……

「帰ってきて早々、色んな事が起こり過ぎて追い付かねぇな。そのシドって転入生にも……」
「新も新で大変だったんだな」
新とイリナが帰国した直後の夜、オカルト研究部部室にてお互いに起こった経緯を話し合っていた
一誠は転入生シドの正体、新は突如出現したユナイト・キリヒコについて
彼らに関する情報は少しでも欲しいのだが、多くの情報屋を回っても入手出来なかった

「オマケにこんな騒ぎは俺が行った国や、ここだけじゃないみたいだ。これも情報屋でゲットしたんだが、相当酷い被害でな。〝人間のテロ組織〟を壊滅させる為とはいえ、国ごと凍り漬けにされたって話だ」

「く、国ごと⁉しかも、人間のテロ組織相手に⁉」

一誠は勿論、リアス達も驚愕せざるを得なかった

悪魔だけでなく三大勢力とて、人間社会の事柄にはあまり干渉しないのが暗黙のルール

だが、異能を持たない人間界のテロ組織相手に堂々と姿を現し、壊滅させると言う所業を平然と行う輩がいる

「これだけじゃない。他にも１００隻以上の海賊船をたった1人で沈めたとか、町や村に潜伏したはぐれ悪魔を住民ごと殲滅したとか、もうメチャクチャな被害だらけだ。世間では〝悪党狩り〟なんて言われてるが……」

沈黙が続く中、最も憤りを見せたのはアザゼルだった

机を叩き、苦虫を噛み潰した様な表情をしていた

「ふざけやがって……！相手は〝普通の人間〟だぞ？異能者や異形が人間社会で表立つのはタブー行為だってのに……平然と巻き込むなんざ、正気の沙汰じゃねぇ……！」

人間社会をなるべく自分達の事情に巻き込まないよう日々務めているアザゼルに

とって、この被害は許せないものがあるのだろう
最低限のルールすら守ろうとしない輩のやり方にアザゼルは怒り心頭だった
新は一誠にシドについて話を振る
「一誠、そのシドってのはどんな奴なんだ?」
「……油断ならねぇくらい強かったよ。錬金術の使い手だったかな。えーっと、確か――――」
「『深淵の闇錬成術(パーフェクト・アルケマイズ)』だよ、イッセー先輩」
「そうそう、それそれ。……ハイ?」
横から聞こえてきた覚えのある声に一瞬止まり、恐る恐る隣を見てみる一誠
そこにはいつの間にか部室内に入り込んだ問題の転入生――――シド・ヴァルディがいた
一誠は「わぁぁぁあっ!」と素っ頓狂な悲鳴を上げて飛び退き、シドは軽く手を振って挨拶する
シドの登場に全員が驚き、警戒態勢を取った
「アレアレ~?先輩達、そんなおっかない顔してどうしたの?」
「随分と余裕ぶってられるな、敵陣のど真ん中で。どういう神経してんだ、お前は」
アザゼルは平静を装(よそお)いながらシドに探りを入れようとする

「そう言う神経だと思うよ」
「まさか生徒に化けて来るとは恐れ入ったぜ……。誰の差し金だ？大人しく吐いた方が身の為だと思うが……あっさり吐く訳無いか」
「教えて欲しい、先生？交渉するには材料が必要だよ」
「教えなきゃお前に退学処分をプレゼントするぞ。転校して数日で退学になれば、お前さんの目論見もパアだろ」
「先生～、それって職権乱用なんじゃないの？いけないなぁ、仮にも教師が生徒に脅しを掛けるなんて。……まあ、別に良いんだけどね。駒王学園に潜り込んだのは僕が勝手にやってる事なんだし。イッセー先輩達と接触出来るなら、形は何でも良かったわけ」
アザゼルの職権乱用に一切動じないどころか、シドは深い目的も無しに駒王学園に潜入していた事を自ら明かす
丸っきり腹の底が見えないシド
「……でも、流石にそれは面白くないからね～。そっちがそう来るなら、僕も遠慮無くやっちゃうよ？この町の人達を巻き込んで――――先輩達と思いっきり遊んじゃおっかな～♪」
シドは無邪気な笑みを浮かべつつ、邪気に満ちた発言をする
アザゼルの脅しに対する抑止力か……シドは宣戦布告とも取れる脅しを浴びせてき

た

シドの強さは一誠から皆に伝わっており、そんな輩が町中で暴れれば被害は甚大なモノとなる

リアスはジッとシドを睨み付けるが、下手に手を出せば即戦闘開始となってしまう

それだけは何としても避けたい

「……用件は何だ」

アザゼルは沸々と煮える感情を抑え、相手の話を聞く事に

すると、予想外の答えがシドの口から飛び出す

「うん。先輩達に僕達の事を少し教えてあげようかな～っと思って、ここに来たんだよ」

なんと自ら情報を売りに来たらしい……!

予想の斜め上を行く発言に全員が眼を丸くする

これも余裕が成せるジョークだろうか……?

「そこの先輩――竜崎先輩が見てた記事あるでしょ?それ、全部僕のお友達がやった事なんだ」

「はあ⁉こ、これ全部がお前の仲間の仕業なのか⁉」

「言ったでしょ、イッセー先輩?〝うちには僕程度の幹部が１２人いる〟って。竜崎先輩も外国で会った筈だよ」

その言葉に新は1つ思い当たる節を脳裏に過らせた
それはイリナと共に出くわした――あの男……
「……ユナイト・キリヒコか……ッ！」
「正解♪僕とキリヒコ、その記事の主犯3人も同じ幹部さ。どう、驚いたでしょ？」
驚くどころか言葉も出ない……そう言った雰囲気が部室内を支配し、沈黙させる
シドは話を続けた
「でさ、先輩達も僕達の情報は欲しいよね？だからさぁ……〝ある条件〟を飲んでくれるなら、もう少し教えてあげても良いよ♪」
「ある条件？」
「もう一度、僕と遊ぼうよ。今度はイッセー先輩と竜崎先輩の2人がかりで♪」
シドが提示してきた条件とは――新と一誠との手合わせ、つまりは勝負だ
ますます彼の狙いが分からなくなる……
だが、逆に言えばこれはまたとないチャンスかもしれない
未だ正体を把握してない状態でシドの属する組織とぶつかるのは極めて危険
ならば、敢えて彼の誘いに乗り……彼の口から情報を引き出す事が出来れば、僅かながらも事前対策が講じれる
新は一誠にそう耳打ちして共闘を提案

一誠も新の進言を了承した
「……良いぜ、相手になってやるよ」
「ちょっと、新⁉あなたは戻ってきたばかりなのよ⁉これ以上、体を酷使するのは――」
「リアス、今は少しでも情報が欲しいんだ。目の前に情報の欠片が転がっているなら、俺は迷わず拾いに行く。ましてや相手から差し出してくれるなら尚更だ。……頼む、ここは俺と一誠に任せてくれ」
新が頭を下げ、一誠も同じくリアスに頭を下げる
リアスは少し考えた後、ここまで強く言う新を信じる事に……
「……分かったわ。ここはあなた達に任せてみましょう」
「スマねぇ、リアス。――と言う訳だ」
「うんうん♪楽しみだな～♪それじゃあ……まずは握手しよっ」
そう言ってシドは自分勝手に新と握手を交わし、窓から外へ出ようとする
「じゃあ、イッセー先輩。今度は本気でしても大丈夫だよ？3人だけの勝負(ゲーム)だからさ。気兼ね無く楽しもうよ♪」
先に窓から外へ出ていくシド
シドのペースの早さに呆れつつ、新と一誠も外へ出る準備を始めた

「新、あいつはマジで強い。俺が戦った時も本気を出していなかったんだ……」
「そうか。……それでも今はやるしかない。奴の口から少しでも情報を引きずり出してやろうぜ」
「当たり前だ！今度は本気でやってやる！」

『さ～てとっ、竜崎先輩のデータもある程度は採取出来たかな？この「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」って要素も面白いよね～♪「騎士（ナイト）」、「戦車（ルーク）」、「僧侶（ビショップ）」……2人ともそれぞれ特有の形態を持っている。端から見ればチート全開だろうけど――――こりゃ僕の進化にも役立つデータの宝庫だね、ラッキ～♪』

新＆一誠ＶＳシド！

夜の校庭にて、情報提供の交換条件としてシドと再び相見(あいまみ)える事となった一誠
今回は新と組んでのリベンジマッチ、気兼ね無く本気で取り組める
「それじゃイッセー先輩、竜崎先輩、準備はＯＫ？」
相変わらず余裕綽々な態度のシドは準備運動をしていた
新は即闇皇(やみおう)に変異し、一誠も禁手化(バランス・ブレイク)した
戦闘準備は万端、２人の様子を見たシドも額のゴーグルを下ろして戦闘形態と化す
リアス達は少し離れた場所で待機、外部に被害が及ばないよう結界を張っている
双方の準備が整ったところでシドは早速能力を発動させた
――『深淵の闇錬成術(パーフェクト・アルケマイズ)』――
シドは校庭の土を媒介に錬成術を施(ほどこ)し、強化アイテムを生成する
生成したのは剣にも可変するハンマー型の武器と氷炎一体(ひょうえんいったい)の剣
シドの錬成術の多様性に驚くしかなかった
「まるで武器のバーゲンセールじゃねぇか。一誠、お前こんなの相手にしてたのか」
「気を付けろよ、あいつマジで強いんだ！」

「んじゃ、いっくよ～ッ！」
シドは逆手に持った氷炎一体の剣を2度振るい、一際(ひときわ)大きい炎の弾と氷柱を幾重にも飛ばす
新と一誠は飛来してくる氷柱を拳や蹴りで砕き、炎の弾は剣戟波(けんげきは)とドラゴンショットで相殺
その間にシドは素早く一誠の背後に回り、右手のハンマーを勢い良く振り下ろした
しかし、その打撃は即座に反応した新の蹴りによって防がれる
ハンマーを防がれたのを見るや否や、左手の剣で斬りかかる――――が、今度は一誠がそれを拳打で防ぐ
両方の攻撃を防がれたシドに新と一誠の同時攻撃が炸裂
互いに魔力を込めた拳をシドの腹に打ち込み、シドは後方へ飛ばされる
シドは即座に次の攻撃へ転向
ハンマーを銃に、剣を弓に錬成し直して弾幕射撃を開始した
無数に飛んでくる弾丸と矢に対し、一誠が前に出る
「『龍剛(ウエルシュ・ドラゴニック・ルーク)の戦車』ウウウウッ！」
一誠は鎧を肉厚な装甲に変化させ、肥大化した両腕で弾丸と矢を防ぐ
分厚い装甲で弾幕射撃を防いだ後、装甲をパージさせてトリアイナ版『騎士(ナイト)』形態に

変化――神速の体当たりをシドにかました
吹き飛ばされたシドに対して新は追い討ちを掛ける
剣に赤い魔力を促し、一気に振り抜いた
地を抉りながら走る剣戟波がシドを捉え、凄まじい放電と共に爆破する
一誠も負けじとトリアイナ版『僧侶』に昇格、両肩のキャノンに魔力を集束させていく
倍加の音声を何度も鳴らし、高密度に溜めた魔力を一気に解き放った
「ドラゴンブラスタァァァ

「……喜んでやがるぞ、あいつ」
「ヴァーリと同じバトルマニアだからな……。しかも、あんな強い奴らがあと１２人もいるんだぞ？」
「頭が痛くなってくるな……後でお前にも頭痛薬を進呈してやる」
共に肩で息をする中、シドは跳び起きて腕をブンブン回す
「ここまで心が滾ったのは久々だなぁ。お陰で僕も更に強くなれそうだよ」
「……どういう意味だ？」
新が訝しげに訊くと、シドは両手に錬成術の魔方陣を開く
「先輩達のデータは充分に採取させてもらったよ。そして、先輩達の体内にある『悪魔の駒』ってヤツのデータもね。２人のイレギュラー色が濃く出てる――最高のデータだよ。戦う前にサッと解析して分かったんだけど、相当な無茶をしてきたんだね」
「戦う前に……？あの短時間で俺達の能力を解析したって言うのか⁉」
「うん、そうだよー。でも最近はつまんないデータばかりだったからさぁ、この『悪魔の駒』って物には俄然興味が湧いたよ。しかも、様々なイレギュラー現象を引き起こした先輩達はまさに情報の宝箱みたいな物さ。だから僕も――先輩達の様に強くなれる」

シドは黒い魔方陣を開いた両手を合致させ、双方から出た黒い粒子を混ぜ合わせる
やがて１つの魔方陣が出来上がり、シドの眼前に聳(そび)える
「先輩、もっと心を踊らせてあげるよ」
黒い魔方陣がシドを飲み込む様に通過していく
そこからシドに異変が生じる……っ
魔方陣から出てきたのはメタリックブルーのスマートなボディ、それに反比例するかの如く巨大な両肩アーマー
先程までとは全く違う様相のシド・ヴァルディが姿を見せた
シドの異変に度肝を抜かれる面々、シドはその場でクルッと回って右手でシュートサインを決める
「これが先輩達の『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』のデータを解析・応用して僕の『深淵の闇錬成術(パーフェクト・アルケマイズ)』と組み合わせた形態――『連携操師(パズリング・フォーム)』だよ♪」
両手を広げてアピールするシド
まさかの事態に誰もが言葉を失った……
「あれ～？ダンマリ決め込んじゃってどうしたの？せっかく僕も先輩達の様に進化したんだから――無理矢理にでもテストプレイに付き合ってもらうよ」
低い声音で告げてくるシドに対し、新と一誠は身構えた……と同時にシドの姿が　ブ

レてその場から消え、２人の腹部に衝撃が走る
気付けばシドは２人の間に割って入り、拳打と蹴りを食らわせた体勢だった
「が……っ！何だと……っ⁉」
「さっきより動きが速くなってやがる……っ⁉」
あまりにも速いシドの動きに呆気に取られる新と一誠
シドは得意気に現時点での自分について話し始めた
「この『連携操師（パペリング・フォーム）』は『深淵の闇錬成術（パーフェクト・アルケマイズ）』に特化させた形態なんだ。当然、通常形態（ノーマル・フォーム）の時よりも格段に戦闘力は上がってるよ。その上――こんな事も出来るのさ！」
シドは自分を中心に黒い波動を放つ
その瞬間、周囲の土から無数の何かが飛び出し、シドの周りに集まる
周りに浮遊するのは――シドが使用する強化メダル
様々な効果をもたらす黒いメダルが幾重にも錬成され、シドの周りを漂う
「普段は1度に1枚ずつしか使用出来ないけど、この姿になれば強化メダルを大量に錬成する事が出来るんだよ。更に――強化メダルを組み合わせて使う事もね」
「「組み合わせる……？」」
シドが両手を翳（かざ）すと周囲に漂っているメダルは呼応する様に動き、縦横無尽に交差を繰り返す

そして、その内の３枚がシドの手元に集まり――――メダルをマスク部分に投入した

『Ｓｈｉｎｓｙｕｋｕ（伸縮）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｊｕｍｐ（ジャンプ）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｋｏｕｔｅｔｓｕ（鋼鉄）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

３種類の音声が鳴り、シドは空中高く跳び上がった

脚力を強化したジャンプは圧巻の一言に尽きるモノだった

跳び上がった直後、今度はシドの体が金属の様な色合いと化した

パワーアップを遂げたシドが拳を突き出すと――――彼の腕が凄まじい勢いで伸びていき、新に強烈な一撃を与える

左手も同じく伸びて一誠の腹に突き刺さり、更には両足も伸びて２人に蹴りを食らわせた

トドメとばかりに両手両足を一斉に伸ばし、４点打撃で２人を吹っ飛ばすシド

地に降り立ち、決めポーズを取る

「どう？『連携操師（パズリング・フォーム）』の必殺技――――パーフェクト・コンボの威力は。脚力強化、肉体の硬化と伸縮化、それぞれの強化メダルを組み合わせて繰り出すから、威力も底上げされるんだよ」

「何だよ、あれ……っ！反則過ぎんだろ……ッ！」

新が憎々しげに吐き捨てる
シドのバカげた強さに一誠も歯を噛み締めた
リアス達も思わず飛び出しそうになるが、アザゼルに止められる
今出たところでシドには全く敵わないからだろう……
「さ～て、次のコンボは何にしよっかな～」
シドは再び強化メダルを大量に錬成して、メダルの選別に取り掛かる
そうはさせじと新は痛む体を無理矢理起こし、剣戟波を放つ
しかし、シドは前方にパズルピースの様なシールドを張って簡単に防ぐ
そうしてる間にも選別が終わり、再び3枚の強化メダルをマスク部分に放り込む
『Ｋｏｕｓｏｋｕ（高速）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』
『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』
『Ｔｏｕｍｅｉ（透明）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』
音声が鳴った直後にシドの姿が端から透明化していき、完全に見えなくなる
そして地面を削る勢いで高速移動し、新に連続攻撃を見舞う
攻撃力を上げ、透明にもなったシドは容赦無く新をフルボッコにしていく
流石の新も成す術が無いのか、シドの攻撃によって宙を舞い続けるだけだった
最後の蹴りで校舎にまで吹っ飛ばされた新

鎧も強制解除され、傷だらけで地に倒れ伏した
「新っ⁉新アッ！」
リアスが叫びながら新に駆け寄り、朱乃達も後に続く
辛(かろ)うじて息はあるものの、ダメージが予想以上に凄まじく何度も血を吐き出す
急いでアーシアが治療に取り掛かる
「アハハハハッ。竜崎先輩はここで脱落だねぇ」
「……シドォッ！てめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
怒りに燃える一誠は立ち上がって倍加の音声を何度も鳴らす
それを見たシドは高揚感を高めた
「イッセー先輩、あんまり僕を楽しませちゃいけないよ？」
不気味に言うシドは前方に先程と同じ魔方陣を展開し、それを潜(くぐ)る
そこから再び彼に変化が訪れる……っ
今度は顔が反転し、両肩の巨大なアーマーが分離――両手に装備される
『連携操師(バズリング・フォーム)』とは対照的なメタリックレッドを基調とした形態
両肩アーマーをグローブとして装着した手をぶつけ合い、肩を回す
「こっちは打撃に特化させたもう１つの形態――『鉄拳闘士(ファイター・フォーム)』。イッセー先輩は殴り合いが好きなんでしょ？さあ……遊ぼうぜ！」

嬉々として駆け出すシドに対し、一誠も背中のブーストを噴かして突っ込んでいく
一誠は力を溜め込んだ拳を突き出す
シドも同じく炎に包まれた拳を繰り出し、両者の拳打が正面から激突する
バチバチと火花と衝撃の余波が飛び散り――――やがて一誠の拳が悲鳴を上げる
ミシミシと不快な音を立てる骨
一誠は激痛に耐えながらも拳を引かないが、シドの拳打の威力に押し負けてしまう
拳を弾かれた一誠に追い討ちを掛けるべく、シドは滑り込む様に一誠の懐(ふところ)に迫った
そこから猛烈な拳打のラッシュ
腕が何本もあるかの様に見えるパンチを次々と打ち込み、一誠の鎧を端々から破壊していく
最後に強烈なアッパーカットが一誠の顎に直撃
空中高く跳ね上げられた一誠は不規則に回転し、そのまま地面に落下する
一誠の鎧も強制解除され、シドは右手を高々と上げた
「ゴポッ……。なん、なんだよ……こいつの、強さは……っ⁉」
「イッセー先輩～、僕の勝ちだね♪」
「イッセーくんっ！」
後ろから祐斗が聖魔剣(せいまけん)で斬りかかるも、シドの拳打で簡単にへし折られる

しかし、祐斗は一誠の救出を最優先
折られた聖魔剣をシドに投げつけ、その一瞬の間に一誠を抱(かか)えてリアス達の所へ戻る
シドの圧倒的な強さに攻めあぐねるリアス達
警戒が強まる中、シドは元の姿に戻った
「そう恐い顔しないでよ。大丈夫、先輩達を殺すつもりなんか無いから。殺したらまた遊べなくなっちゃうもん。今日はここまで。約束通り、僕達の事を少しだけ教えてあげるからさ」
自ら戦闘の意志を解いたシドにアザゼルが問い掛ける
「……お前らの目的は何だ？これだけの力を持っておきながら、何故今まで出てこなかった？」
「ん～、目的？とりあえず今は〝僕達が邪魔と判断したテロ組織や害悪の抹殺〟ってところかな？」
「テロ組織が他のテロ組織を壊滅させるだと？聞いた事ねぇよ、そんな話」
「だろうね。でも必要な事らしいよ。こっちもこっちで色々あるからさ。んで、もう１つ。今まで僕達が出てこなかった理由は単純。――――最近結成されたばかりなんだよ、僕達の組織は」
シドの言葉に耳を疑うアザゼル

秘匿にしてきた訳でもなく、単に結成されたのがごく最近だった為……
呆れ果てる様な理由を持っておきながら、圧倒的な戦力を見せつけてくる
新興勢力でありながら底知れぬ組織……
未知の強敵にアザゼルも冷や汗が止まらない
答え終わったシドは転移用の魔方陣を展開
魔方陣の光に包まれながら、最後にこう言い残す
「あ、そうそう。僕達の組織名、教えてあげるね。――造魔（ゾーマ）。〝魔〟を〝造〟ると書いて造魔（ゾーマ）。先生も先輩達も、これから仲良くしていこうよ。生き延びたかったらね」
そう言ってシドは魔方陣の中へと姿を消す
シド・ヴァルディ……ユナイト・キリヒコ……
その2人が所属する組織――造魔（ゾーマ）……
背景が見えぬ新興勢力にアザゼルは顔を歪めっぱなしだった

胎動する造魔、拾弐の魔凶

シドとのリターンマッチ後、新と一誠はアーシアの治療によって何とか事無きを得た
しかし、これから先の事を考えると喜ぶ暇など無いだろう……
シド・ヴァルディ、ユナイト・キリヒコの様に規格外の強さを備えた猛者がまだ１０人も背後に控えている
そして、それらを凌駕する者の存在も……
未だ謎に満ちた組織――造魔（ゾーマ）
新は治療を終え、自宅に戻ってからも造魔（ゾーマ）に関する情報を調べようとした
パソコン、スマホ、情報屋、あらゆる伝（つて）を使って造魔（ゾーマ）に関する情報をかき集めるべく動いた
だが、それも無駄な努力に終わる……
造魔（ゾーマ）に関する情報はテロ組織・武装勢力の壊滅、内乱の鎮圧による功績しか書かれていない
情報屋を巡っても誰もが口を閉ざすか、逆に〝何も聞かないでくれ〟だの〝死にたくない〟だの言う者もいれば、金を渡して追い返してくる者もいた

想像以上に造魔(ゾーマ)勢力の網が蔓延(はびこ)っているようだ
何1つ進展が無いまま自宅のリビングに戻り、土産として買ってきた酒とチーズをテーブルに並べる
グラスに酒を注ぎ、6片に切り分けられたチーズを1つ、口に放り込む
グラスの酒を一気に飲み干す新
情報を1つすら仕入れられなかったイライラ――――ではなく、寧(むし)ろ〝予想通りだったかもしれない〟と言う虚無感でいっぱいだった
『当然と言っちゃ当然か……。あれだけ派手にやらかしてる勢力だ。情報面でも達者なんだろうな……。口止めはお手の物か。いや、無理も無いか……』
今までに無い壮大な規模の脅威が潜んでいる事に新は溜め息しか出なかった
飲まなきゃやってられんとばかりに酒を注ぎ、飲み干し、チーズを食べる
それで満たされるのは腹だけで、目の前の問題が解決に満たされる事は無い
酒を飲んで上の空、そんな状態を繰り返していると――――誰かがリビングに下りてきた
「あら、こんな遅くに独りで酒飲み？随分と良いご身分ね」
「……レイナーレか」
「じゃっじゃ～んっ♪うちもいるっすよ～」

下りてきたのはリアス達と同じく新の家に住んでいる堕天使のレイナーレとミッテルト
今は就寝時間をとうに過ぎているのだが、新の気配に気付いて下りてきたのだろう
彼女達は新の隣に座り、いつの間にか用意してきたグラスに酒を注ぐ
「独り占めは感心しないわね。お土産なら私達に貢ぐべきでしょう」
「ん～、このチーズ激ウマ～♪レイナーレ様も1つどうっすか？」
レイナーレが酒を飲み、ミッテルトはチーズを食べる
酒盛りに参加した彼女達は早くも酒瓶を1本空け、2本目に突入
新は造魔の事が気掛かりで2人を止めようともしなかった
「……いつもなら注意してくるのに、何か遭ったの？」
新の様子を不審に思ったレイナーレが早速訊いてくる
新は浮かぬ表情で言う
「……ここ最近、死に目に遭い過ぎて嫌な予感しかしないんだよ。今までは何とか生き延びてきたが、いつか終わりが来るんじゃないか……俺でさえ敵わない脅威が降りかかってくるんじゃないかって……。不安に押し潰されそうなんだ……」
「随分とらしくない事を言うじゃない。以前のアラタはそんな弱気じゃなかったわよ？」

「上には上がいるって事を思い知らされてんだぞ。誰だって弱気に――」
「その不利な状況を何度も覆してきたのがアラタでしょ？私を抱いたあなたはそんな弱い男じゃない。いつも強くて、ぶっきらぼうでも優しい――素敵なヒトよ」
「……」
「気負うのは分かるけど、今それに押し潰されたらどうする事も出来ないわ。クヨクヨ悩むのはアラタらしくない。――自分を見失わないで」
いつも叱られてばかりのレイナーレに諭され、新は不覚にも自分の現状に嗤ってしまった
確かにここ最近は自分らしさを忘れていた
リュオーガ族の生まれである事に心を壊しそうになり、今も未知の組織――造魔に対する焦りを御せなかった
分からない事を放置するのも良くないが、1番大事なのは自分らしさを忘れない事
脅威に押し潰され、自分らしさが見えなくなれば一気に消されるかもしれない……
大前提を忘れかけていた新は我に返り、レイナーレに頭を下げる
「……すまない、またネガティブ思考に捕らわれちまった。お前の言葉で目が覚めた、助かったよ」
「な、何よ、急に改まって……。ただ弱々しいアラタを見たくなかっただけよ」

「そうそう♪アラタはエロエロに生きてこそ、でしょ？」
ミッテルトが新の膝に座り込み、上目遣いで顔を覗いてくる
柔らかな感触に浸りつつ、自分も酒盛りを再開させる
「よしっ、吹っ切れたところで飲み直しだ！今日はとことん飲んでやる！」
「ふふっ、そう来なくちゃ」
「うちも～！」
この後、夜通し酒盛りを続けた新は見事に二日酔いを患(わずら)った……（レイナーレとミッテルトは平気）

とある場所のとある浮遊戦艦
船内を進むのは新と一誠を圧倒してきたシド・ヴァルディ
その隣にはユナイト・キリヒコもいた
「如何でした？彼らとのリターンマッチは」
「今回は僕の勝ちだったよ。でも、まだまだ面白くなりそう♪それが楽しみで待ち遠しいよ」

「それは良かったですね。ただ、そのお楽しみが続けば――の話ですが」
「うん。召集されちゃうんだよね、僕達全員が」
「Ｏｕｉ。しかし、それも仕方無い事です。これから大きく動き出す為の下準備ですので」
歩みを進めるシドとキリヒコが足を踏み入れたのは――巨大な広間だった
その広間にはシドとキリヒコを除く造魔の幹部が既に揃っていた
「遅い到着ですね。あなた方でラストですよ。少しは時間を守ったらどうなんですか」
来て早々、白銀の長髪に眼鏡を掛けた男性がシドとキリヒコに時間厳守を忠告してくる
彼の名はシルバー・ゼーレイド
国ごと武装勢力を氷漬けにした張本人である
シドとキリヒコが簡単な詫びを入れ、シルバーは本題へ進もうとした直前――下品な笑い声が飛んできた
「ヒーハハハハハハッ！んな細けぇ事をいちいち気にしてんじゃねぇ！それより、テメェらばかり戦果上げやがってズリィんだよ！少しは俺にも殺らせろや！クソ雑魚どもをブッ殺したくてウズウズしてんだよ！」
黒みがかった緑色の体躯、両の肩、肘、踵から伸びる刃物のごとき爪

胸の中央に埋め込まれた黄色い核が脈動し、血の様に赤い目を光らせ凶悪な口を開く
完全にバケモノの姿を持つのは――――ギルグレイ・ジャーグ
殺戮衝動を抑えようともせず、足踏みしまくる
「下品な言葉は慎(つつし)め、バカ者。我々の品格が疑われるだろう。我々は無差別に餌を喰らう家畜とは違う。崇高な意志と野望を持ってここに身を置き、蔓延(はびこ)る豚どもを狩っているのだ」
ギルグレイの言動に喝を入れたのは海賊の艦隊全てを単独で沈めた漆黒の鎧武者――――牙鬼斬月(きばおにざんげつ)
彼の物言いに対し、ギルグレイは哄笑を上げた
「ハンッー俺達や悪党狩りの組織だぜ？そんな奴らに品格も四角も三角もあんのかよ？古臭(ふるくさ)え侍は頭でっかちで嫌だね！」
「貴様ァ……ッ、我を愚弄するのか！」
「良いぜ、そんなに死にたきゃブッ殺してやるよ」
一触即発の雰囲気……剥き出しの敵意がその場を震撼させる
凄まじい殺気が両者から放たれる中、1人の女性が仲裁する
「お待ちください、ギルグレイ様、斬月様。わたくし達の物語が始まる前にご退場されてはいけません。まだ序章にすら至ってないのですから」

物静かに2人を諌めるのは頭に牛の様な角を生やし、肩口が大きく空いた東洋風の着物に身を包んだ巨乳の女性――セイラ・ネイキッド

斬月は渋々敵意を沈め、ギルグレイは面白くないとばかりに唾を吐き捨てる

「止める必要はねぇだろ、セイラぁ。殺りてぇ奴には勝手に殺らしときゃ良いんだよ」

セイラに文句を飛ばすのはボサボサの茶髪に爬虫類の様な双眸をギラリと光らせる壮年の男――スナイド・コブラ

ただでさえ危険な面子の中で一層危険な雰囲気を漂わせている

「スナイドも煽るな。今日ここに召集されたのは来るべき時に備える為だ。これから行動を起こすであろう『禍の団』を監視し、勢力を突き壊す。ベストなタイミングを計る為に集められたんだ」

龍の仮面を着け、三國志に出てくる様な前掛けと鎧に包まれた異形――スメラギ・リュウゲンが召集の意図を説明する

その隣でタバコを吹かせる異形がもう1人

「英雄を名乗る吹き溜まりが合戦の狼煙を上げ、旧悪魔の狂宴も便乗してくる。阿鼻叫喚の宴を沈めに来るのは正義を騙った偽善の勢力。俺達が総動員で向かえば間違い無く双方に崩壊の祈りが捧げられ、骸が集いし奈落の住民と化す」

骸骨と機械が混ざった様な外見で詩的な表現を繰り出すのは〝死神〟と呼ばれる男

――――ブラッドマン・クルーガー
吹かしていたタバコを床に捨て、足で踏み潰す
「俺達は相手を〝倒す〟のではなく――――相手を〝潰す〟組織だ。今動くのはリーダーの本意に反する事となる。それは指揮官であるお前も同じだろう？ディザスター」
ブラッドマンが〝ディザスター〟と呼ぶ者に視線を移す
白を主体とした全身に風神・雷神の様な出で立ち
明らかに迫力が違うその異形はブラッドマンの意見に首を縦に振った
「その通りだ。『禍の団（カオス・ブリゲード）』等と言う弱小組織程度に今動く必要は無い。かと言って、正義を騙る三大勢力同様、目障りな事に変わりは無い。三大勢力程では無いが、奴らなど簡単に潰せる。焦らなくとも時はいずれ来る」
幹部の中で指揮官に位置するディザスターの言葉を聞いて、より戦意を滾（たぎ）らせる面々
人外だらけの迫力に少しばかりついていけない少女が２人もいた
「改めて思うんだけど……この面子（めんっ）、怖すぎ……ドン引きしちゃうよね……？」
青色の髪にカチューシャを着けた小柄な少女――――レビィ・シャルティアは小動物の如く体を震わせる
特にディザスター、ブラッドマン、スナイドの３人にビビっていた
「しかし、今のあなたも同じ穴のムジナです。いつまでもビビってばかりいられません

よ」

長い黒髪に横一線に揃えた前髪、白一色のミニスカ軍服を着込んだ巨乳美女――カグラ・イザヨイが嘆息しながらも、早く慣れるよう促す

カグラはキョロキョロと辺りを見渡す

「ディザスターさん、そう言えば〝あの人〟は何処に？」

「ん？ああ、〝あいつ〟か。〝あいつ〟ならまた何処かで迷子――いや、放浪してると言った方が良いか」

「今〝迷子〟って言いかけなかった？」

「どちらにしろ、今はここに来れないそうだ。まあ、奴はやる時はやる男だから、あまり気にする事もあるまい」

「もうっ、組織のトップって自覚が無さ過ぎよっ」

レビイが頬を膨らませる中、指揮官ディザスターは幹部11人の前に移動する

「今は『禍の団（カオス・ブリゲード）』の遊びを文字通り、高みの見物とする。理由は単純、奴らが取るに足らん存在だからだ。奴らの腸（はらわた）など直ぐに喰い千切れる。召集を掛けたのはそれぞれの勝手な真似を制止する為だ。揚げ足を取られる様な愚行は見せるな。いずれ造魔（ゾーマ）が表裏（ひょうり）両方の世界を仕切る組織だと言う事を思い知らせてやれ。造魔に噛みつく奴らは――残らず潰せ」

ドスの利いた指揮官（ディーザスター）の声は聞くだけで皆の意識が高められた……
これが造魔（ゾーマ）の中枢を担う幹部――――『拾弐（ツヴェルフ）の魔凶（テラーズ）』の全貌だった

第13章　進級試験のウロボロスとダブルクロス

動き出す各々の道

学園祭、リュオーガ族との戦い、シド・ヴァルディの転入、新興勢力造魔(ゾーマ)の判明
様々なイベントが織り成して直ぐの事だった
彼から〝ある話〟を持ちかけられたアザゼルは滅多にない程間の抜けた顔を出していた
「……そいつは本気なのか、ヴァーリ」
彼――ヴァーリ・ルシファーからアザゼル宛てに開かれたプライベート回線
通信用の小型魔方陣を介して彼の元気そうな顔が見える
『ああ、彼――今は彼女か。彼女はそれを望んでいてね。俺としても興味があるので便宜を図(はか)りたい』
ヴァーリから出されたのは実にトンでもない話で、それは勢力図が塗り替えられてもおかしくないレベルだった
「……お前の事だ。それだけじゃないんじゃないか？」
アザゼルの言葉にヴァーリは苦笑する

『相変わらず鋭い。ゆえに他の勢力からも疎(うと)まれ始めている訳か』
「余計なお世話だ」
『その「余計なお世話」を振り撒き過ぎて「何かを企んでいるのではないか？」と思う者も少なくないと聞くが？』
　確かにアザゼルは各勢力の上層部に疎まれている
　堕天使の総督と言う肩書きだけでも胡散臭い上、当人から各勢力との和平・和議を持ち掛けてきたのだから
　端から見ればいらぬお節介焼き……教え子たる一誠からもそう言われていたりする
「……性分だ。それで背中を狙われるのなら、それはそれで受け入れるさ」
　アザゼルが嘆息しながらそう言う
　ヴァーリも呆れた様な表情をした後、不意に呟いた
『……彼女を狙う者がいてね』
「そりゃな、当然だろう。それこそ星の数だ。だが、滅する事が叶わないからどいつも歯痒い思いをしているんだがな」
『それはそうなんだが、身内から出そうでね。いや、そろそろ仕掛けてくるかな』
　アザゼルの脳裏に聖槍を持った男が過(よぎ)る……
「――――いぶり出す気か？」

『俺の敵かどうか、ハッキリさせるだけさ。まあ、敵だろうな。――ケリをつけるには頃合いか』

最高に楽しそうな笑みを浮かべるヴァーリ

彼はどうしようもない程のバトルマニアなようだ

とある山奥の洞穴

人どころか動物の気配が微塵も感じられない様な場所で話をする者達がいた

1人は青い髪を持つ青年――蛟大牙

三大勢力に疎まれている魔族・闇人の『2代目キング』である

彼もまたヴァーリから話を持ちかけられたアザゼル同様、想像もしなかった話に衝撃を受けていた

「……それは本気なのか？」

「ええ、それが今後の私達の為にもなる最善の道だと考えます」

「だが、それは神風や父さん――『初代キング』だけじゃない。逃げ延びている全ての闇人の反感を買う事になるぞ。実際、俺の下に集ってくれた闇人は少ない。大半は今も

何処かに息を潜(ひそ)み、俺の方針にも反対している。その状況で今言った事を実行すれば間違いなく――――」
「大牙、過(あやま)ちと言う物は誰もが歩む道です。大切なのは過ちを認め、学び、そこからどう進んでいくかです。歩みを止めてしまえば、そこで道は途絶えてしまいます」
真剣な面持ちで危険を警告する大牙を諌(いさ)める女性の声
声の主が薄暗い洞穴の奥から姿を現す
金髪で非常に小柄な少女の姿をしており、頭の中央にピョコンと跳ねたアホ毛、両脇には羽の様な飾りが付いている
「時代と共に生きとし生ける物の概念は自然と変化していきます。今の私達はその流れに取り残され、逆らおうとしてる状態です。風に煽(あお)られ続ける樹木と同じ、いずれは亀裂が生じて倒壊します。最悪の事態を避ける為にも……敢えて死地に飛び込まないといけない時だってあります」
「ならば、俺が行けば良いだけの話だろう。あなた自(みずか)ら危険を侵す必要性なんて無いじゃないか。『初代クイーン』……いや――――母さん」
『初代クイーン』――――自分の母親を睨み付ける大牙
『2代目キング』たる責任感から、そう言った役目を負うのは自分だけで充分だと考えているのだろう

しかし、彼の母親――『初代クイーン』は首を横に振った
「私は今まで隠れて生き延びながら、あなた達が変わっていくのを見てきました。それだけじゃ分からない事だってあります。自分の目で確かめ、自分の耳で聞き、自分の心で感じなければ変える事も変わる事も出来ません。私はそれを確かめたいんです」
「だったら尚更――」
「大牙にはまだ未来があります。封印されていたあのヒトが出てきてしまった以上、私も動かなきゃいけないと思ったんです。そして、今この時こそ最初で最後のチャンスなんです」
「……自分の命を捨ててまでする事なのか？」
「私だってそんなにおバカじゃありませんっ。出来る限り生き延びる方法を考えて行動します」
母親の決意と言葉に大牙は黙り込むしかなかった
『2代目キング』としての認識が甘く、現状に不満を抱く闇人（やみびと）の数の多さ、怨恨の深さを把握しきれていなかった
彼の下に集まる闇人（やみびと）が少ないのも、そう言った認識不足が招いた事態なのだろう
大牙は腕を組んで暫（しばら）く考え、後に腕組みを解いて決心した様な顔付きとなる
「……分かった。ならば、気取られない様に俺が奴らの注意を逸らす。念の為、母さんに

は護衛役を1人同行させてくれ。あいつなら赤龍帝（せきりゅうてい）と交流が深いから頼りになる」
「ふふっ、親孝行ですね～、大牙は」
「俺も母さんと同じく確かめたくなっただけだ。……俺達闇人（やみびと）の行く末を」

その朝、竜崎家の1日は寝床での一戦から始まっていた
目を覚ますと、新のベッド近くで睨み合うリアスと朱乃の姿が見えた
彼女達は既に制服に着替えている
「私の新に朝のキスだなんて！……と、言いたいところだけれど、昨夜はたっぷり甘えさせてもらったから許してあげる」
「あら、それは結構な事ですわね。新さんったら、凄い事をしていたのね？」
朱乃が口元に手を当てながら興味深そうに訊いてくる
しかし、昨夜はそこまでエロい行為に発展したわけではなく……ただ寝る前にお互いキスした後、密着しながら寝ただけと言うシンプルなものだった
普段通りに思える光景の様だが、リアスとも両想いになってから彼女の甘えっぷりの破壊力が増したらしい

『新がキスしてくれないと寝られないの……。ね？お願い。キスして』
『優しく抱き締めて。新、大好き』
――――等と言った艶々な甘え声で寂しがりな猫の如く甘えてくる
それには流石の新も緊張を隠し切れず、直ぐにでも〇〇〇（ピー）してやりたいらしい……
「リアスったら、意外と冷静なのね。もっと嫉妬の炎を燃やしてくれるものだと思っていたのだけれど……。ちょっと反応が面白くないですわ」
「それはゴメンなさいね。けれど、彼は私の新だから、それだけは揺るがないわ」
サイラオーグ戦前の不安定な様子は一切無く、いつもの自信に満ち溢れた調子だった
「あらあら、正妻の余裕ってものを見せつけられてしまいましたわ」
朱乃がそう言い、リアスは小さく笑むと新の頬にキスしてくる
〝ご飯よ、下に下りてきなさい〟と一言だけ残して退室していった
いつもなら火花どころか魔力のオーラを飛び散らせるのだが、今回は特に怒る様子を見せなかった
「ああ見えて少し無理をしている所もあるのよ、彼女」
「無理？リアスに何か遭ったのか？」
新がそう訊くと朱乃はベッドに腰を下ろして呟く
「実はレーティングゲーム、最終戦であまり活躍出来なかったのがリアスにとって尾を

引く結果になってしまったようです」
　サイラオーグとの一戦、リアスは自律する神滅具（ロンギヌス）――『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』の獅子と戦い、致命傷を受けてしまった
「……あなたの枷になってしまったのがとても許せないと、リアスは凄く悩んでいるのです」
「それはただ……相手が悪かっただけなんじゃないのか？リアスも決して弱い訳じゃない。戦術も前以（まえもっ）て作戦を考えていたんだろ？」
「……戦術面では、同時期に行（おこな）われたソーナ会長とアガレスの戦いの方が注目されましたわ。あっちの旗取り合戦――スクランブル・フラッグは派手さや認知度こそ低かったものの、批評家から見れば隠れた名勝負として高い評価を得たそうです」
　勿論、最近出た冥界雑誌で大きく報道されたのは新達とサイラオーグチームとの一戦だが、批評家が書いた記事では長々とシトリーＶＳアガレスに対するゲームの感想が高評価で掲載されていた
「リアスとしてもこれから『王（キング）』として覚える事が多いでしょうけれど、まずはお兄さまの――サーゼクスさまからのアドバイスを聞いて、滅びの力について本格的に研究し始めたそうですわよ」
「修行とはまた違った感じか？」

「リアスとサーゼクスさまの滅びの力は同じ魔力でも性質――性格とも言うのかしら。それが違うのです。サーゼクスさまの力はテクニック、ウィザードタイプの究極と言われています。あれだけ絶大な消滅魔力を手足の様に自在に操るのですから、その技術は悪魔の中でも1、2を争うとまで言われます。逆にリアスの力はウィザードタイプのパワー寄りだから、技術的なものよりも威力に恵まれていると言えます。けれど……」

「決定打の不足――簡単に言えば『必殺技』と呼べる決め手が無いのか」

新の言葉に朱乃は小さく頷く

ただ放つだけでも充分過ぎる程に威力があるのだが……確かに新達がよく遭遇する強者が相手だと考えると、そう言った技を持つべきなのかもしれない

実際、サイラオーグ戦の後で起こったリュオーガ族との一戦でも新の兄――ラース・フレイム・ドラグニルに対して消滅魔力が効いていなかった

更にシド・ヴァルディ、ユナイト・キリヒコ、その2人が属する造魔（ゾーマ）と言った強敵が続々と出現している

この先、必殺技たる決め手が無ければ相当ツラいだろう……

「それを模索しているようですわよ。……私もバアル戦では情けない姿を見せてしまいましたし……」

朱乃が沈んだ声音でそう漏らすが、新は首を横に振って言う
「いや、相手の『女王』は相当な手練れだったぞ」
『穴』と呼ばれる能力を使うアバドン家の『女王』――クイーシャ・アバドン
若手上級悪魔の眷属『女王』の中でもトップクラスの使い手と言う噂も立っており、朱乃との試合でも雷光を『穴』の中で雷と光に分解して勝利を収めた
「新さんは彼女を相手に一瞬で勝負を決めてしまったけれど……」
「あー、あの時は俺も少しキレてたからな……」
仲間が次々とリタイヤしていくのを見た新は手加減もあったとは言え、怒りの猛攻で相手『女王』を圧倒した
こう言った点は将来『王』になった場合、足枷になってしまう事が多い
冷静さを維持するのも大事な要素だ
リアスと朱乃の向上意欲に対し、新自身も思う所はあった
リュオーガ族との戦いで竜の力を解放させたと言えど、まだまだ未熟な点を抱えている
ユナイト・キリヒコ、シド・ヴァルディの2人に圧倒されてしまった新も彼らに対抗出来る術を身に付けるべきだと考えた
『このままじゃダメだよな……。闇皇の力、竜の力、それらをもっと上手く使いこなさ

ねぇと……』

自身の向上について模索していると、朱乃が顔を近付けてきた

「どうしました、新さん？」

「いや、俺も少し思う所があってな。リアスや朱乃と同じく――――自分の力について模索しようと思ってんだ。この先、険しい事態が続くだろうし……。俺の為にも、お前達を守る為にももう少し先へ踏み込むべきなんだろうなって」

「……新さんなら、きっと出来ますわ。リアスが夢中になるヒトなんですから」

そう言って朱乃は新の鼻先にキスをする

「朝はこれで充分ですわ。うふふ♪」

朝から朱乃の微笑みに癒され、新も1階に下りようかと思った矢先――――扉の陰から顔を覗かせるゼノヴィアと視線が合った

「ぬっ、朱乃副部長が朝から猛攻撃をしているぞ！」

「何ですって⁉嘘！そう言うのって朝っぱらからでも良いの⁉」

いつの間にかイリナも顔を覗かせて驚いている様子だった

〝朝からテンション高ぇな～〟と今まで得られなかった幸せを感じつつ、リアス達のパワフルな猛攻に苦笑する新

色々あるけど、この幸せをいつまでも味わっていきたいと切に思う朝だった

昇格試験の話

朝食時、リアスを筆頭に下宿している女子の多くがテキパキと動いてテーブルに朝のメニューを置いていく
今日のメニューは卵焼きと味噌汁、焼き鮭と言う和食の定番だった
ローテーションしながら料理を振るってくれるので、新は毎朝美味い朝食を腹に収めている
今までは自分独りで用意し、簡易で彩(いろど)りも無い朝食を摂っていた
その殆どが１０秒チャージのパックゼリー、リンゴもしくはバナナ＋コーヒーだけと言ったラインナップ
昔の自分とは１８０度違う朝に染々(しみじみ)と幸せを噛み締めている
「新のお弁当はこれね♪」
満面の笑みを浮かべながらリアスが昼飯用の弁当を新の前に置く
昼の弁当はリアスと朱乃の交代制、時折レイヴェルも手伝いに参加している
小猫、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセ、レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトは主に食べる係なので参戦しない

普段はリアスと朱乃が交代制で作っているのだが、当面はリアスに一任されたそうだ
弁当の中身もハートの形に乗せた桜でんぷを定番に、手間を掛けたおかずが目白押し
ついでに言うと一誠の弁当もアーシアが毎日作っているらしく、昼飯時に広げれば揃って「愛妻弁当かよ！」と松田(ハゲ)&元浜(メガネ)に言われたりする
「さしずめ『正妻弁当』と言ったところでしょうか……。私もいずれは祖国流のお弁当を披露する時が来るかもしれませんね」
ロスヴァイセが顎に手を当てながらそう言っていた
ヴァルハラ式の弁当の中身とはいったいどんな物なんだろうか？
そんな事を考えている新の視界にレイヴェルが映り込み、彼女は弁当箱に料理を詰め込んでいた
「レイヴェル、その弁当は誰のだ？」
「これはギャスパーさんへの差し入れですわ。お一人で朝練をしているそうですから」
「朝練？あのギャスパーが？」
疑問の声を上げる新の隣にリアスが腰を下ろして説明する
「サイラオーグ戦、リュオーガ族との1件で自分の力不足を強く感じてしまったと言って、あなた達との合同訓練の他にも自主メニューでしているようなのよ。ハードワークにならない程度に体を1から鍛え始めたの」

その話に朱乃も続く
「力を使いこなして、あの領域に至りたいと気合を入れてましたわ。その為には体を1から作り直すと、朝から筋トレと走り込みをしているそうです。それに渉くんと祐希那ちゃんも暫く鍛練に勤しむそうですわ」
どうやらギャスパーは神器を禁手にしたいようだ
サイラオーグ戦での試合を相当気にしているからこそ、自分の力量の足りなさを許せなかった
ゼノヴィアも真剣な眼差しで言う
「うん。あいつは男だ。きっと強くなるに決まっているさ」
身近でギャスパーのサポートを実感したのはゼノヴィアであり、あの試合で隙を突かれてピンチに陥った彼女を救ったのもギャスパーだった
渉の方もリュオーガ族との1件で力不足を実感したのだろう
強くなりたいと思い、自ら動くのはとても良い事だ
「……小猫さん？顔色が優れませんわよ？」
レイヴェルが小猫の顔を覗き込んでいる
彼女が言うように小猫の顔色があまり良くない
顔が赤く、若干ツラそうな顔をしている

小猫本人は「……何でもない」と簡素に返すが、それでもレイヴェルは心配そうに小猫の額に手を当てる
「でも、ちょっとお顔が赤いですわ。風邪ではなくて？そうですわね……、フェニックス家に伝わる特製のアップルシャーベットを作ってあげますわ。実家から地元産のリンゴが届きましたの。それを使って特別にこの私が作ってあげますわね！」
小猫はレイヴェルの手を除けると一言告げる
「……ありがた迷惑」
それを聞いてレイヴェルは頭の縦ロールを回転させる程の勢いで怒り出した
「んまー！ヒトの好意を即否定だなんて！猫は自由気ままで良いですわね！」
「……鳥頭には言われたくない」
「……と、鳥頭って！確か日本では鳥頭とは物忘れの激しい方を指しましたわよね……？」
「よく勉強しているようだから、褒めてあげる」
「んもー！この猫娘は……ッ！」
小猫とレイヴェルの口喧嘩もすっかり日常の一部となっていた
事ある度に言い合いをするものの、仲が悪い訳ではない
小猫も日常面でレイヴェルを助けているし、レイヴェルも小猫を頼っている

謂わば良いケンカ友達のようだ
２人の微笑ましい風景を見ている新にゼノヴィアが口を開く
「ところで新」
「何だ、ゼノヴィア」
「そろそろ子供の名前について考えないか？」
ブフッ！
新の口から盛大に何かが吹き出し、噎せながらゼノヴィアに物申す
「いきなり何を言い出してんだ⁉」
「だって、私と新はもう子作りをした仲じゃないか。流石に1回で子供を宿すとは思っていないさ。だが、これからの事を踏まえて、子供の名前を考えるぐらいはしても良いと思うんだ」
さも当然の様に言ってくるゼノヴィア
確かに新は修学旅行の時にゼノヴィアとセッ〇スしたが、あまりにも突然過ぎる発言に脳の処理が追い付かない
横で聞いていたイリナもその時の記憶を思い出してしまい、顔を真っ赤にして湯気を噴き出す
「男の名前として候補に挙げているのは『新一』と『新介』、女なら『希望』と『歩夢』だ

な。男の方は両方とも〝新〟の名を取り入れてみた。女の方は新の〝新しい人生を歩めるように〟と似た様な意味を付けてみた。希望を捨てない『希望』と夢に向かって歩くと言う意味を踏まえた『歩夢』。どちらも1週間掛けて考えた名前だ」

「だから、そう言うのは早すぎんだよ！あと飯時に振る話題じゃねぇ！」

その会話を聞いてリアスは顔を真っ赤にしており、他の皆もクスクスと笑っていた

「リアス部長も新と性交をしたなら、子供の名前を考えておいて損は無い。洋名なら私の考える和名と被らなくて済む」

「そ、そうね……。わ、私も考えておこうかしら……っ」

「おい、リアス！無理に話題に乗っからなくて良いんだよ！」

「……そう言った話はあまりしないでくださいね。学校でもいつも通りにするように」

コーヒーを飲みながらロスヴァイセが冷静なツッコミを入れてくる

騒がしいやり取りの中、小猫は新とリアスを見つめ――途端に俯いた

「……子供……赤ちゃん……」

その日の深夜、兵藤家上階のＶＩＰルームにて場所を移し、サーゼクス、グレイフィ

ア、アザゼルと言うお偉方が集結してきた
　そのメンツが真面目な顔でグレモリー眷属を全員集め、話を切り出した
「先日も話した通り、新くん、イッセーくん、木場くん、朱乃くんの４名は数々の殊勲を挙げた結果、私を含めた四大魔王と上層部の決定のもと、昇格の推薦が発せられる」
　そう、新、一誠、祐斗、朱乃に昇格の話が持ち上がってきたのだ
　実際に話を振られたのはサイラオーグ戦が終わって直ぐだったのだが、度重なるゴタゴタのせいで詳細を聞けずにいた
　悪神ロキや『禍の団（カオス・ブリゲード）』、闇人（やみびと）と戦っていた事が大きな功績になったらしい
「昇格なのだが……本来、殊勲の内容から見ても中級を飛び越えて上級悪魔相当の昇格が妥当なのだが、昇格のシステム上、まずは中級悪魔の試験を受けてもらいたい」
「上級!!俺達、上級悪魔相当なんすか!!」
「一誠、さっきから百面相が絶えないな」
　隣で座っている祐斗と朱乃も驚いているが、一誠程の狼狽っぷりではない
　新も驚きつつ冷静に一誠を諌めていると、アザゼルがグラスの酒を飲みながら言う
「イッセーと新と木場と朱乃は殊勲だけ考えれば上級悪魔になってもおかしくないんだが、悪魔業界にも順序があるらしいからな。特に上がうるさいそうでな。お前らに特例を認めておきながらも順序は守れと告げてきたそうだ。――――とりあえず中級悪魔に

なって、少しの間それで活動しろ。その内、再び上から上級悪魔への昇格推薦状やらが届く筈だ。なーに、中級の間に上級悪魔になった時の計画を練り出せば良い」
「ちゅ、中級とか、じょ、上級悪魔……っスか！お、俺にそんな資格があると……？」
一誠の問いにサーゼクスが笑顔で頷(うなず)く
「うむ。テロリストと闇人(やみびと)、悪神ロキの撃退は大きな功績だ。そしてバアル戦でも見事な戦いぶりを見せてくれた。何よりも新くんとイッセーくんは冥界の人気者『蝙蝠皇帝ダークカイザー』と『乳龍帝(ちちりゅうてい)おっぱいドラゴン』でもある。昇格の話が出てもおかしくないのだよ。いや、寧ろ当然の結果だろう」
「昇格推薦おめでとう、新、イッセー、朱乃、祐斗。あなた達は私の自慢の眷属だわ。本当に幸せ者ね、私は」
リアスも心底嬉しそうな笑みを浮かべていた
自慢の眷属が評価されて最高の喜びを感じているのだろう
「イッセーさん、新さん、木場さん、朱乃さん、おめでとうございます！」
「うん、めでたいな。自慢の仲間だ」
「中級悪魔の試験とか、とても興味があるわ！」
「ぼ、僕も先輩に負けないように精進したいですぅ！」
アーシア、ゼノヴィア、イリナの教会トリオも喜び、ギャスパーも前向きなコメント

を発する
「私も早く昇格して、高給で安定した生活が欲しいところです」
「ライザーお兄さまのチームではもう太刀打ち出来ない程の眷属構成になってしまいましたわね」
　相変わらず堅実な目標のロスヴァイセ、レイヴェルも賛辞を贈る
「フェニックスの所は長男がトップレベルのプレイヤーじゃないか。あそこのチームはバランスが良い」
「うちの長兄は次期当主ですもの、強くなくては困りますわ。それはともかく、流石リアスさまのご眷属ですわ。短期間で４人も昇格推薦だなんて。ね、小猫さん？」
　レイヴェルが小猫にそう投げ掛ける
「……当たり前。――――おめでとうございます、新先輩、イッセー先輩、祐斗先輩、朱乃さん」
　笑顔を見せる小猫だが、心なしか若干テンションが低い
　新達の昇格の話は純粋に喜んでいるようだが……新は訝しげに小猫の表情を見る
「ま、その４人以外のグレモリー眷属にも直に昇格の話が出るさ。お前らがやってきた事は大きいからな。強さって点だけで言えばほぼ全員が上級悪魔クラス。そんな強さを持った下級悪魔ばかりの眷属チームなんざレア中のレアだぜ？」

アザゼルが言うように他のメンバーにも昇格が大いに有り得る
あれだけの死線を越えてきたのだから当然と言えば当然だろう
祐斗と朱乃が立ち上がり、サーゼクスに一礼した
「この度の昇格のご推薦、まことにありがとうございます。身に余る光栄です。――――リアス・グレモリー眷属の『騎士(ナイト)』として謹んでお受け致します、魔王サーゼクス・ルシファーさま」
「私もグレモリー眷属の『女王(クイーン)』として、お受け致します。この度は評価していただきまして、まことにありがとうございました」
祐斗と朱乃はしっかりと厚意を受け取る
サーゼクスが「新くんとイッセーくんはどうだろうか?」と聞き、まず一誠が深々と頭を下げた
「勿論、お受け致します!本当にありがとうございます!……正直、夢想だにしなかった展開なので驚いてますけど、目標の為に精進したいと思います!部長の期待にも応えられて満足です!」
次に新も立ち上がって素直な心境を述べる
「俺も受けます。俺もリアスの……リアス・グレモリー眷属でいる事を誇りに思います」
「おやおや、新くん。私の手前でもリアスの事は名前で呼んでくれて構わないよ」

「え、良いんすか？」
「ハハハ、寧ろ呼んでくれたまえ！私も嬉しいし、見ていて幸せな気持ちになれる」
「も、もう！お兄さま！茶化さないでください！」
リアスは顔を赤く染め、立ち上がってプンスカ怒る
サーゼクスがグレイフィアに話を振ると、彼女はいつもと変わらないクールな表情のまま言った
「私風情が分に過ぎた事など言えません。……ですが、この場の雰囲気ならば名前で呼び合っても差し支えないかと」
「……グレイフィア……お義姉(ねえ)さままで」
流石のリアスもグレイフィアにそう言われては顔を赤くして黙るしかなく、サーゼクスはウンウンと頷いていた
「よしよし。それならばついでに私の事も義兄上(あにうえ)と呼んでくれて構わないのだよ！さあ、呼びたまえ！新くん！お義兄(にい)ちゃんと！」
「俺はそんなキャラじゃありません」
即座に〝お義兄ちゃん〟呼びを一蹴する新とハリセンでサーゼクスの頭を叩くグレイフィア
隣でその様子を笑って見ていたアザゼルは息を吐くと改めて言う

「てな訳で来週、イッセー、新、朱乃、木場の４人は冥界にて中級悪魔昇格試験に参加だ。それが１番近い試験日だからな」
「来週ですか、早いですね」
　想像以上に早い日程に祐斗がそう言い、朱乃も続く
「中級悪魔の試験って、確かレポート作成と筆記と実技でしたわよね？実技はともかく、レポートと筆記試験は大丈夫かしら」
「マジかよ、レポートに筆記試験？勉強ものは苦手だ……」
　試験内容に気を落とす新と不安になる一誠
「心配するな。筆記は朱乃と木場なら全く問題無いだろう。悪魔の基礎知識と応用問題、それにレーティングゲームに関する事が出されるが、今更だろうしな。レポートは……何を書くんだ？」
　アザゼルがグレイフィアに訊ねると、グレイフィアは１歩前に出て説明し始めた
「試験の時に提出するレポートは砕いて説明しますと、『中級悪魔になったら何をしたいか？』と言う目標と野望をテーマにして、『これまで得たもの』と絡めて書いていくのがポピュラーですね」
「何だか、人間界の試験みたいですね」
「つーか、人間界の試験その物っぽいな」

新がそう言うとサーゼクスが頷く
「中級悪魔に昇格する悪魔の大半は人間からの転生者なのだよ。その為、人間界の試験に倣った物を参考にして、昇格試験を作成している」
最近は転生悪魔も多く、昇格するのも元人間ばかりなので、それに合わせて試験内容を決めているのだろう
アザゼルが膝を叩くと新達を見渡す
「何はともあれ、レポートの締め切りが試験当日らしいから、まずはそれを優先だ。だが、イッセー！新！」
「は、はい？」
「何だよ？」
アザゼルが新と一誠に指を突きつけて言う
「お前らはレポートの他に筆記試験の為の試験勉強だ！基礎知識はともかく、１週間で応用問題に答えられる頭に仕上げろ！安心しろよ。お前らの周りには才女、才児が何でもござれ状態だ」
２人の肩に手を置くリアス
「任せない、新、イッセー。私が色々と教えてあげるわ」
「イッセーくん、僕も改めて再確認したいから一緒に勉強しよう」

「あらあら。じゃあ、私も一緒に勉強ね」
試験勉強面での心強い味方に安堵する中、一誠が残りの試験について言う
「えーと、じゃあ実技の方は？」
その途端にアザゼル、サーゼクス、グレイフィアがキョトンとした表情で顔を見合わせた
新はいち早くその理由を察し、アザゼルが「それは必要ないんじゃないか？」とごく当たり前のように言う
「え……でも、俺的に1番得点を稼げそうな所なんで是非ともトレーニングとか欲しいところなんですけど！」
一誠がそう言ってもアザゼルは手を横に振るだけだった
「だから、いらないって。ぶっつけ本番にしとけ。そこは試験当日じゃないと分からないかもな。新、朱乃、木場、お前らも実技の練習はいらんからレポートに集中しとけよ」
アザゼルの言葉に朱乃と祐斗は返事をし、不安に駆られる一誠が恐る恐る手を上げて質問する
「あのー、最後に1つだけ。……まことに恥ずかしい話なんですけど、もし落ちたらどうなるんですか？推薦取り下げですか？」
「いいや、そんな事は無いよ。1度挙げられた推薦は、仮に来週の試験で落ちても受かる

まで何度でも挑戦出来る。よほど素行の悪い事でも無い限りは推薦の取り下げは起こらないよ」
　とりあえず安心出来る条件のようだ
　サーゼクスが力強く言う
「それに私は新くんとイッセーくんが次の試験で合格すると確信している。突然の事で不安かもしれないが、全く問題無いのではないかな」
　魔王からの太鼓判を貰った新と一誠は気合を入れ直す
「俺、頑張ります！絶対に中級悪魔になります！そして、いずれ上級悪魔にもなります！」
「俺もです。上級悪魔だけじゃなく、プロのバウンティハンターも目指していきます」
　新は上級悪魔とバウンティハンターのトップを、一誠はハーレム王への野望を改めて再燃させる
　そんな時、ふとロスヴァイセが立ち上がった
「さて、話が纏まったところで、私は少しばかり出掛けようと思います」
「そう言えば、さっきからスーツ姿で気になってたんだが……何処に行くんだ？」
　新が訊くとロスヴァイセは遠くに視線を送るようにして言う
「――――北欧へ。一旦帰ろうと思います」

「例の件ね？」
リアスの言葉にロスヴァイセは静かに頷く
「ええ、このままでは力不足だと思いますから。グレモリー眷属は強者と戦う機会が多い。今のままでは、私は役立たずになりかねません。――『戦車（ルーク）』の特性を高めようと思います」
どうやら『戦車（ルーク）』の特性を高めるべく、北欧に戻るらしい
アザゼルが訊く
「ロスヴァイセ、ヴァルハラにアテがあるのか？」
「はい、そちら専門の先輩がいましたので。……ヴァルキリー候補生時代、攻撃魔法の授業を重点に単位を取っていたのがここに来て徒（あだ）になりました」
ロスヴァイセもバアル戦やリュオーガ族戦後、思う事が多かったようで、実力を発揮しきれなかった事を悔いていた
ちなみに魔力と魔法は似ているようで違うらしい
魔力は悪魔が自らの力で超自然現象を起こす力で、具現化出来るだけのイメージ力がとても必要とされる
複雑または強力な魔力をイメージして具現化すれば、その分だけそれを操るだけの高い技術も必要となる

対して魔法は超自然現象を発生させる法則を術式、法式で操る力
魔方陣を展開させ、術式と法式を常に計算出来るだけの演算能力が重要となる
「リアスチームのバランスを見ると魔法の使い手はいた方が良い。出来る事なら『兵士（ポーン）』か『僧侶（ビショップ）』でロスヴァイセの長所を伸ばした方が良かったかもしれないけどな。リアスの眷属は圧倒的に火力が高いが、全体的に見ると防御面が薄く、テクニック――ハメ技にやられやすい。過去、実戦でもゲームでもそれにつけ込まれているからな。要はチーム全体的に脳みそまで筋肉傾向なんだよ。『やられる前にやれ』ってな。それを魔法で補うのは良い事だ」
アザゼルからの評価に全員が苦笑い……リアスも恥ずかしそうに顔を赤く染めていた
確かに新達は特攻タイプばかりでテクニックタイプに翻弄されてばかり
新も多少は心得ているが、最近は手数よりもゴリ押し戦法が目立ってきている……
そこでサーゼクスがこんな事を言い出す
「だが、そちらの方が好みだと言うファンはとても多い。戦術タイプのチームやテクニック重視のチームだと一目では判断が付きづらく、派手さも少なめな為か、玄人のファンが好むからね」
「だな。リアスとサイラオーグのチームは派手さを売りにしつつ、戦術を高めた方が将

来のプロ戦で盛り上がるぞ。何はともあれ、そのパワーを補う力は必要だ。ロスヴァイセがヴァルハラに行っても良いんだろう、リアス？」
　アザゼルの問いにリアスは同意する
「ええ、自ら伸ばしたい点があるのなら、断る理由は無いわ」
「ありがとうございます。あ、それと学園の中間テストの方は既に問題用紙を作成しておきましたのでご心配なく」
　ロスヴァイセの報告に新と一誠が〝ヤバい！〟と焦った顔をする
「やべぇ！そうだ、中間テストもあるんだった！」
「体育祭に修学旅行、学園祭、これだけでも手一杯だったってのに……リュオーガ族の1件と任務もあったからな。勉強なんざ、する暇もねぇよ……」
　特に新はバウンティハンターの職も抱えている為、通常よりも忙しさが倍以上になっていた
　ゲンナリした様子で頭（こうべ）を垂れる新をよそに、サーゼクスがレイヴェルに言う
「レイヴェル、例の件を承諾してくれるだろうか？」
「勿論ですわ、サーゼクスさま！」と即座に快諾するレイヴェル
　例の件とは何か、新がサーゼクスに訊くと――――
「レイヴェルに新くんのアシスタントをしてもらおうと思っているのだよ。いわゆる

『マネージャー』だね」
「マネージャー？」
「新くんもこれから忙しくなるだろう。人間界での学業でも、冥界の興行でも。グレイフィアはグレモリー眷属のスケジュールを管理しているが、それでも身は1つだ。どうしても賄えきれない部分も今後増えるだろう。特に細かい面で。それならば、今の内から新くんにはマネージャーを付けるべきだと思ってね。そこで冥界に精通し、人間界でも勉強中のレイヴェルを推薦したのだよ」
　確かに今後はそう言う物も必要になってくるだろう
　冥界でも人気があるのだから、需要は高まってくる
「早速で悪いのだが、レイヴェル、中級悪魔の試験について新くんをサポートしてあげてほしい」
　サーゼクスからの申し出にレイヴェルは立ち上がり、自信満々に手を上げた
「分かりました。このレイヴェル・フェニックスめにお任せくださいませ。必ずや新さまを昇格させてみせますわ！早速、必要になりそうな資料などを集めてきます！」
　言うや否やレイヴェルは部屋を飛び出していく
「レイヴェルにとっちゃ、将来の自分の生き方にも大きな意味を持つからな、お前の昇格は」

「スケジュール管理ねぇ……俺の苦手分野が勢揃いだな」
新が苦い顔付きで愚痴をこぼす
基本的にその場凌ぎの生活で生きてきたのだから、苦手意識が強いのだろう
しかし、マネージャーの存在は生活を見直す良い切っ掛けにもなる
「小猫、油断しているとお前の大好きな先輩がレイヴェルに取られちまうぞ？」
アザゼルがニヤニヤ顔で小猫を煽る
新はアザゼルを止めようとするが、当の小猫は顔を俯かせ、心ここにあらずの状態だった
小猫の無反応ぶりに皆が一様に首を傾げる
『小猫、やっぱり何か変だよな……』

「はぁ……中間テストに中級悪魔の試験、連続発生とか萎える……っ。ただでさえ苦手なモンばっかりだってのに……いっその事、中間テストを捨ててやろうか」
「聞き捨てなりませんよ、新さん？」
「あ、ロスヴァイセ。聞いてたのか……」

「ダメですよ、せっかく用意したんですから。文句を言わずにちゃんと試験勉強もして下さい」
「へいへい、分かりましたよーだ」
「もうっ、生返事ばかり。私はこれからヴァルハラに発つんですから、もう少し――――」
「分かってるって。真面目にやりますよ、ロスヴァイセ先生」
「……もう少し、お話に付き合っていただけませんか？大事な話があります」
「ん？ああ、良いけど」

試験勉強ほど嫌な物は無い！

「で、話って何だ？」
昇格試験の話が終わって自宅に戻ってきた直後、新はロスヴァイセの部屋に呼び出されていた
２人揃ってベッドに腰を下ろし、ロスヴァイセは真剣……と言うより緊張感が滲み出ている
チラチラと新の顔を窺(うかが)っては目を泳がせ、手をモジモジさせている
「どうした、ロスヴァイセ？話があるんじゃなかったのか？」
「そ、そう急かさないでください……っ。心の準備と言うものだってあるんですから……」
「今更何言ってんだよ。京都じゃ俺と一緒に寝たくせに」
「――――っ⁉も、もう！その話は忘れてください！」
ロスヴァイセが顔を真っ赤にして叫ぶ
恥ずかしい過去を蒸し返される前にと、ロスヴァイセは改めて話を切り出す
「新さんは……今の私をどう思いますか？」

「……？どうって――――」

「京都でも、バアル戦でも、リュオーガ族の時も……私は実力不足だと痛感させられました。正直、攻撃魔法には自信があったんです。それを悉く、いとも簡単に防いでしまう相手が次々と現れて……。なのに、私は相手の攻撃を全く防ぎ切れず、皆さんの足を引っ張る始末……。本当に……自分が情けないです……っ」

今にも泣き出しそうな声音で自身の内に抱えていた不安を漏らすロスヴァイセ

度重なる強者との連戦で自分の実力を発揮しきれなかった事を相当悔いているようだ

特に痛感させられたのはリュオーガ族のニトロ・グリーゼと戦った時だ

いくら攻撃魔法を撃ち込んでも全く効かず、一方的に痛めつけられた

小猫、ギャスパー、仁村のサポートが無ければ完全に詰んでいただろう……

更にシド・ヴァルディ、ユナイト・キリヒコ、造魔とまだ見ぬ脅威がこれからも顔を出してくる

当然、今のままでは勝ち目など皆無……

「もっと、もっと強くならなくちゃいけないんです……っ。生徒を守るのが教師の務めなのに、私は守られてばかりで……っ」

今にも泣き崩れてしまいそうなロスヴァイセ

そんな様子を見た新はロスヴァイセと距離を詰め、彼女の手を優しく握る
「新さん……？」
「ロスヴァイセ、お前も不安で仕方なかったんだな。強くなろうとする気持ちは分かる。だが……あまり気負い過ぎない事だ。追い詰め過ぎると周りを見失う。その視野を消さない事が大切なんだ。それに――――」
「……それに？」
「俺にだって1度も勝てなかった相手がいる」
新の意外な告白にロスヴァイセは一瞬目を丸くした
新にも勝てない人物がいるらしい
「新さんが1度も……？」
「ああ、昔の話だけどな。俺が最も嫌っている奴で、何度やっても勝てなかった。全戦全敗だったよ」
「とても、そうには見えません……。経験豊富な新さんがそこまで……」
「事実だ。上には上がいるって事さ。だから、俺だって他人の事を言えない。これから先……もっと強い敵が現れてもおかしくない。まだまだ強くならなきゃいけねぇんだ」
新は目を細めてロスヴァイセと同じく〝強くならなきゃいけない〟理由を語る
新自身も充分実力を蓄えているが、それでもシドやキリヒコを始め、造魔（ゾーマ）にはまだ届

かないかもしれない……
　不安に駆られていたのはロスヴァイセだけじゃなかった
「俺も自分の力を磨く。だからロスヴァイセ、お前も負けるな」
　新の励ましの言葉でロスヴァイセの中に渦巻いていた不安が和らぎ、次第に彼女の表情に笑みが浮かんでくる
「……ありがとうございます、新さん。何だか自信が出てきました。今まで不安だったのが嘘みたいです。お陰で心置き無く出発出来そうです」
「そいつは良かった」
　ロスヴァイセが荷物を纏めて部屋を出ようとする――――寸前で足を止め、新の方に振り返った
「最後に1つ、よろしいですか？」
「ん、どうした？」
「やっぱり……こう言う事にはちゃんとケジメをつけなきゃいけないと思って……」
「ケジメ？ケジメって何――――」
　チュ……ッ
　突然の不意打ちキス
　しかも、口同士で……ロスヴァイセから……

一瞬呆気に取られてしまった新は反応が遅れ、ロスヴァイセの唇が離れた直後、手を口元へ
ロスヴァイセは火が噴き出そうなぐらい顔を赤く染めた
「ど……どうしても、これだけは新さんに言っておかないと……安心して発てませんので……言わせてください」
「……」
間の抜けた顔をしている新
ロスヴァイセは深呼吸して気持ちを整え――意を決してぶつけた
「好きです……っ。私、ロスヴァイセは……新さんが好きです……っ！強くなって帰ってきますから、そうしたら……今度デート、していただけますか……っ？」
告白と共にデートの約束まで取り付けてきたロスヴァイセ
間の抜けた顔から一転、新は優しげな笑みを浮かべてロスヴァイセの頭を撫でる
「勿論だ。何処へでも連れてってやる」
「――っ。……ありがとうございます、新さん……っ」
ロスヴァイセの目から一筋の涙が流れ、新はそれを指で拭い去る
ロスヴァイセは憂いを絶てたのか荷物を纏めて出発準備を整え、部屋を出ようとする
扉を開けた瞬間――

「話は終わったかしら？」
「あらあら、ロスヴァイセさんも大胆になりましたわね♪」
「ブッ!!」
扉から現れたのは新を見据える様な笑顔で立っているリアスと朱乃
新は目が飛び出し、ロスヴァイセも一瞬驚くが、２人の視線は新に向けられている
危険（主に新の）を察知したロスヴァイセは萎縮しながら部屋を出ようとする
「で、では……あの、行ってきます」
「ええ、行ってらっしゃい、ロスヴァイセ」
ロスヴァイセはそそくさと部屋を出ていき、リアスと朱乃はズカズカと新に歩み寄り
――彼の両腕を２人がかりで拘束
「さあ、新？早速試験勉強の時間よ。そのついでにロスヴァイセと何を話していたのか、聞かせてもらおうかしら」
「うふふ、今夜は寝かせませんわ♪」
「いや、待て。今日はもう遅いから、明日から始めようじゃないか。急がば回れって言うだろ？焦って始めたところで何の解決にも――」
「それとロスヴァイセにキスした件についても、ゆっくり話をしましょうね？」
「いや、違う！あれはロスヴァイセからの不意打ちで、俺がした訳じゃ――痛い！痛い

！爪が食い込む！腕に爪が食い込むゥゥゥッ！」
その後、リアスと朱乃に連れていかれた新は夜通しの質問攻めと勉強地獄を味わった……

「……あー、覚える事多すぎだ」
それから数日後、時刻は昼休み
一誠は教室の自席でそうぼやいていた
机の上には教科書が散らばっており、疲労困憊の様子である
「新、そっちは大丈夫か？目元に隈が出来てるぞ」
「シンパイスルナヨ、イッセイ。アレカラベンキョウシスギテ、オマエノカオノパーツガスベテケイサンシキニミエテシマウグライダ」
「それもう完全にヤバい状態じゃねぇか！しっかりしろぉ！正気に戻れぇ！」
勉強地獄によって壊れかけている新をビンタで修理する一誠
ハッと我に返った新は鞄の中から栄養ドリンクを取り出し、一気に飲み干す
ここまでハードになったのも時期が悪かったとしか言えない……

毎晩、夕食後と悪魔の仕事後は勉強会を開き、皆に教えてもらいながら学校のテストと昇格試験の勉強をしている

ブッキングしているせいで両方やらなきゃならないから、２人の頭は爆発寸前だった

「おー、イッセーが勉強してるぜ」

「無駄だぞ。頭に詰め込んでも元がバカでは理解出来まい」

松田と元浜のバカコンビが一誠の所にイヤらしい笑みを浮かべて登場する

「うっせーな、ハゲにメガネめ。元浜はともかく、松田は俺と同レベルじゃねぇか」

「カカカ、こう言う時は開き直って違う領域に興味を抱くべきさ。ほら！」

松田が懐からエロいパッケージのＤＶＤを取り出す

一誠は素早くそれを奪い取り、パッケージをマジマジと見つめる

「こ、これは……っ！今入手困難な超人気作品――――『真・爆乳戦隊パイオツジャー爆裂生乳戦争編』じゃねぇかぁぁぁぁっ！て、手に入れやがったのか⁉」

「まあ、独自のルートで入手したのだよ。これをこれを手に入れる為に俺は色んな物を犠牲にしたがな。それでもそれだけの価値はある！」

元浜はメガネをキラリと光らせ、松田が一誠の首に腕を回し、そのままイヤらしい顔付きで耳打ちする

「なあ、イッセー殿。もうテストなんて忘れて俺の家で鑑賞会しようぜ？お前ん家、アー

シアちゃんがいるからこう言うの見られる機会無いんだろう？」
確かに家ではプライベートな事が出来にくくなっており、夜もアーシアと過ごす時間が多いのでこう言った物を見る機会が少ない
健全な男子たる者、やはりエロいＤＶＤは見たいようだ（笑）
「言っておくが竜崎、貴様には見る権利すら無いからな」
「その通り。女体に囲まれたお前などテスト勉強で頭を破裂させて死んでしまえば良い」
「別に構わねぇよ負け犬ども。っーか、それ持ってるし」
新の余裕な発言にハゲとメガネは〝チクショウ！リア充め！〟と顔を悔しさで歪ませる
一誠もテストを忘れて鑑賞会を開こうかと決心しようとした時――――メガネ女子の桐生藍華（きりゅうあいか）が一誠の持つエロＤＶＤをヒョイと取り上げた
「あらあらまあ、テスト前だってのにエロ３人組はお盛んね。あら、でもこれ面白そうね。――――どう思う、アーシア？」
桐生の隣にいたアーシアがエロＤＶＤのパッケージを見つめ、途端に顔を真っ赤にさせた
「はぅぅぅっ！イッセーさん！ま、またこんなエッチなものを！あんなにいっぱい持っ

ているじゃないですか！」
「アーシアちゃん、俺のコレクションを何処まで知っているの⁉」
　一誠が驚く中、ゼノヴィアも登場して興味深そうにパッケージを見ていた
「うん、前に新のコレクションをアーシアとイリナと拝見したが、最後にやる事は結局同じだと思うんだ。性交だろう？なあ、イリナ」
「か、過程や雰囲気が大事だって、リアスさんと朱乃さんも言っていたわ！きっとそう言う事なのよ！」
「ふむ。雰囲気か。確かに必要か。ただ抱かれるだけじゃ〝女〟を堪能出来ない、と。そう言う事だな、イリナ」
「って、クリスチャンな私にその手の話を振らないで！大変な事になっちゃうし！けれど、興味もあって……！ああ、複雑な乙女心をお許しください！」
　いつの間にか来ていたイリナも頭を抱えたり、お祈りしたりと忙しい様子
　話からすると、リアスと朱乃も見ているようだ
「新！お前ゼノヴィアやイリナにも見せてたのか⁉」
「いや、２人とも勝手に見てた。ついでにお前がＤＶＤを隠しそうな場所もアーシアにバラしてみた。多分、空き部屋のクローゼットに置いてある使わなくなった家財道具の中とか、そんなもんだろ？」

隠し場所の核心を突かれた一誠はグゥの音も出せなかった……
羞恥に包まれる一誠を松田と元浜は半笑いしつつ、同情的な視線を向けた
「わ、私もエッチになりますから！心配しないでください、イッセーさん！」
大声でそう宣言するアーシア、隣では桐生が意味深な笑みを浮かべていた
『おのれ、桐生までアーシアにエロエロな影響を与えやがって！俺の可愛いアーシアがエロエロになったら……それはそれで最高かな⁉』
――――などと考えていると、教室の扉が勢い良く開かれる
やって来たのは――――1年のシド・ヴァルディだった
「イッセー先輩～、あ～そ～ぼっ♪」
能天気な事を言ってくるシドだが、彼の登場に新達は警戒心を抱く
それもその筈、シドはここに潜入してきた造魔（ゾーマ）の一員
警戒しない方がおかしい上に、こんな公（おおやけ）の場では話せる事も制限される
特に自分達の正体がバラされる事だけは避けたい
「アレアレ？どうしたの、イッセー先輩？あからさまに嫌な顔しちゃってさぁ」
「……悪いけど、お前の相手をする程こっちは暇じゃないんだよ」
「へ～、そのＤＶＤを見るのに忙しいから？」
「違うわ！テスト勉強中だって言ってんだよ！」

「な～んだ、つまんないのぉ」
　不貞腐れるシドに桐生が話し掛ける
「ところでさ、1年くん。兵藤とは妙に馴れ馴れしく話してるけど、お二人はどんな関係？」
　桐生が妖しげな顔付きで訊くと、シドは少し考えた後にこう言ってきた
「そうだねぇ、イッセー先輩とは――――激しくし合った仲かな？」
「ちょ！誤解を生む発言！」
　シドの発言に教室内がざわめき始める
　特に女子からは黄色い声が上がり、桐生が一誠の反応を面白がって更に訊き出す
「激しくし合ったって……シたの？（エロ的な意味で）」
「うん、この前したよ（勝負的（ゲーム）な意味で）。激しかったけど、2度目は僕の勝ちだったからね」
「「「「2度目⁉2回もしたの⁉」」」」
　シドの発言は大いなる勘違いを呼び、女子達の騒ぎ声が一気に加速する
「噂の転校生が野獣兵藤と2回もしたの⁉」
「しかも、1回目は兵藤が攻め！2回目は彼が攻めみたいよ！攻め受け両方ＯＫ！」
「木場きゅんだけじゃなくて、1年の後輩ともイケナイ関係を⁉」

「野獣兵藤×木場きゅん×転校生シドきゅん！新作はまさかの三角関係に突入よ！」
「ちょおおおおおおおおおお⁉何か話があらぬ方向に脱線してるうううううっ⁉」
ＢＬネタ祭りに一誠の顔が百面相を発動し、松田と元浜はゆっくりと後ずさる
「イッセー、お前いつの間にそんな道を歩み始めたんだ……？どんどん遠ざかっていくぞ」
「誤解だ！大きな誤解だ！俺は健全な男子で女体大好き！あいつとはそんな関係じゃねぇ！」
「安心しろ。たとえお前が魔道に足を踏み入れても、俺達は友達未満他人以下だ……」
「一気に格下げすんじゃねぇぇぇぇぇっ！チクショォォォォォッ！俺はホモじゃないのにいいいいいいいっ！」
堪らず一誠は大泣きしながら教室を飛び出していき、シドは一誠の後を追い掛ける
「イッセー先輩、何処行くの～？もしかして駆けっこ？だったら遊ぼうよ～っ♪」
「来　ん　じ　ゃ　ね　ぇ　全　て　の　元　凶ぉぉぉぉぉ！　お　前　の　せ　いだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
嘆息しつつ、新も一誠とシドを追い掛けていった
しかし、発狂した一誠とそれを面白がるシドの足が速いせいで追い付けず、途中で見失ってしまう

〝まあ、あの話題には関わらないでおこう〟と切り替えて戻ろうとした矢先――

「竜崎か」

「ん？匙か」

匙と出くわしたのだった

――――――――――――――――――――

「……兵藤の奴、そこまで荒れてんのか？」

「ああ、最近じゃドライグと同じで情緒不安定になってきている。あいつにもカウンセラーと薬が必要かもしれねぇな」

生徒会室にて嘆息する匙と他人事目線で語る新

実はドライグは一誠がおっぱい関連でパワーアップを続けたせいで、心の病に陥(おちい)ってしまったのだ

アザゼルから専門のカウンセラーを紹介して診てもらい、ドラゴン用の気分を落ち着かせる薬を処方してもらったらしい

今では週一でカウンセラー、1日3回のお薬タイムが欠かせなくなったとか……

「天龍がしっかりしてくれないとヴリトラで暴走した時、大変な事になるな」

「ドラゴンってのは繊細で扱いが難しいんだろ」
「お前が言っても説得力が無いぞ、ドラゴンの欠片から作られたくせに」
「ハハッ、俺は特別製だ」
冗談を交えながら湯呑みのお茶を啜る両者
「そういや、昇格推薦だってな。聞いたぜ。おめでとさん」
「ああ、サンキュー。急な話だから正直よく分からねぇけど」
「ま、俺は妥当かなって思うぜ。お前ら、かなりの死線くぐってるもんな。ロキ戦や京都、リュオーガ族の時では俺もそれに参加したけど、だからこそよく分かるぜ。ありゃ死ぬ。普通死ぬわ。どんだけの強敵揃いだよ、お前らの相手って。神話や歴史に残る連中ばかりじゃないか。それにあの転校生、シドって言ったっけ?そいつもバカみたいに強いって聞いたぞ。しかも、そんな奴らが12人もいる組織って……更にどんだけって感じだ。それを生きて結果出してんだから、当然っちゃ当然だ。飛び級か?既に実力的には上級悪魔クラスだろ、お前と兵藤、木場とかさ」
「いや、昇格に関してはまず中級からだ」
「へー、上が融通利かなかったのかね。会長はお前や兵藤、木場や姫島先輩が飛び級で上級になってもおかしくないって言ってたぜ。赤龍帝に闇皇、聖魔剣に雷光だもんな」
ソーナも匙もそう言った目線で見ていたようだ

　それだけの殊勲を挙げたのなら、当然と言えば当然だろう
「兵藤と木場、お前なんて特にバカみたいに強いもんな。俺、この間木場に手合わせ願ったんだけどさ。強すぎだ。攻撃がほぼ当たらなかったぞ？テクニックタイプのお手本みたいな奴だよな、木場って。その木場とガチンコでほぼ毎日トレーニングしてんだろう？お前ら本当にバケモノだぞ？」
「今度は俺が手合わせしてやろうか。竜の力をもう少し上手く使いこなしたいからな。実験台になれ」
「実験台って時点でヤダよ！上級悪魔クラスっっったけど、お前に関しては最上級悪魔クラス、下手すりゃ魔王クラスだぞ⁉そんな奴の実験台なんざ御免だ！死んじまうわ！」
　ビビりまくる匙に笑う新
　何とも珍しい光景である
　ハァッと息を整えた匙はこんな事を言い出す
「俺も昇格したいところだが、それよりもまずは強くならないとな」
「お前も充分な強さだろ、ヴリトラ持ってるくせに」
「いや、俺だけじゃなくシトリーのメンバー全員で強くなりたいんだ。最近、うちの会長は『神の子を見張る者（グリゴリ）』に相談してんだ。――人工神器（セイクリッド・ギア）についてさ」

「人工神器（セイクリッド・ギア）？」
それは『聖書に記された神』が創ったと言う神器（セイクリッド・ギア）のシステムを真似て、アザゼルが独自に編み出した物である
「ああ、俺達シトリー眷属はさ、アザゼル先生の実験によく付き合っていてさ。１つの成果として、今度シトリー眷属の非神器（セイクリッド・ギア）所有者に人工神器（セイクリッド・ギア）を取り付けてみようって話になったんだ」
「へー、そいつはスゲェな」
「人工神器（セイクリッド・ギア）と言っても本物の神器（セイクリッド・ギア）と比べて出力も安定しないし、回数制限もあるから、まだまだ改良の余地があるんだ。けど、強くなれるのは確かだからやっておいて損無しだ。それに人工神器（セイクリッド・ギア）の研究が進めば近い将来、悪魔の戦力になるかもしれないだろう？それと『反転（リバース）』はもう実験も使用もしてない。負担が大き過ぎるし、神器（セイクリッド・ギア）が身近にある者はそれに手を出すと良くない事が多いからさ」
生徒会は貢献する形でグリゴリの実感も手伝っているようだ
匙は楽しそうに語る
「人工神器（セイクリッド・ギア）にも色々と種類があってさ。俺が貰う訳じゃないけど、知ると楽しいぜ？パワー、サポートなどのタイプ別に始まり、系統も属性系、カウンター系、結界系等々、バリエーションに富んでやがる。俺達の神器（セイクリッド・ギア）みたいにモンスターとかの契約または

封印した人工神器（セイクリッド・ギア）もあるそうだ」
アザゼルは五大龍王の一角『黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）』ファーブニルと契約し、活用していた
あれが恐らく契約、封印系統に分類されるのだろう
『今度、人工神器（セイクリッド・ギア）とやらが出来たら1個パクってやろうか』
などと新が欲張りな事を考えていると、生徒会室に他のシトリーメンバーが帰ってくる
「あー、竜崎くんだ。昇格推薦おめでとー！」
お下げ髪の『僧侶（ビショップ）』草下憐耶（くさかれや）が最初に祝いの言葉を贈り、他のメンバーも「おめでとう」と賛辞を贈る
新も〝サンキュー〟と軽く礼を言い、1年の『兵士（ポーン）』仁村留流子（にむらるるこ）が匙に言う
「元士郎（げんしろう）先輩、会長が例の書類を取りに行けとおっしゃってました。私も後から向かいます」
「あー、あれか。了解、仁村」
更に2年のもう1人の『僧侶（ビショップ）』花戒桃（はなかいもも）が匙に告げる
「元ちゃん、私の用件も会長からの用事なの。私も後で向かうね」
「マジかよ、花戒。ブッキングしちまってるな……。とりあえず、近いところからやっていくか。竜崎、俺行くわ。他の奴と話しながらゆっくりしていってくれ」

そう言うなり匙は早足で生徒会室を後にしていった
新が湯呑みのお茶を啜ってると、花戒と仁村がチラチラと視線を送っている事に気付く
「ん、どうした？」
「竜崎くんが元ちゃんと一緒にいるの、珍しいと思って」
「そうですよ。ちょっと新鮮な感じ」
「たまたま出くわしたんだ。発狂した一誠を見捨てた直後に」
「「何が遭ったの……？」」
口を揃えて問う2人に新は事の経緯を明かし、それを知った生徒会の面々は苦笑い
更に話を続ける
「匙から聞いたぜ。人工神器（セイクリッド・ギア）を取り入れるって？」
「ええ、私達も強くなりたいから。アザゼル先生から〝その時は新（あなた）を実験台に使ってくれ〟と了承も得ています」
「あのクソ教師……と言いたいところだが、その申し出を敢えて受けようか」
疑問符を浮かべる花戒と仁村
新が話を続ける
「俺も自分の力をもっと使いこなしたいから、実戦で磨き上げようと思ってんだ。実戦

練習ならいくらでも付き合ってやる」
「そんな事言って……私達の体が目的じゃないんですか？」
「半分当たり」
　あっけらかんと答える新に、花戒と仁村がプンスカ怒る
「もうっ、竜崎くんは少し自重してください！いつもいつも私達に恥ずかしい思いばかりさせて……」
「桃先輩はまだマシな方です。私なんて裸でお姫様抱っこですよ……？あんな漫画やアニメのヒロインみたいな事されたら……っ」
　羞恥にまみれた過去を思い出し、顔を赤らめる２人
　ジッと新を睨み付ける
「と、とにかく！いつか責任取ってもらいますからね！」
「なるほど、つまり俺も一肌脱げと」
「そう言う事じゃなくて！何で上着を脱ごうとしてるの⁉」
「ハハハッ、冗談だ。からかうのが面白くてつい」
　からかわれた花戒は手に持ってた書類で新をペシペシと叩き、同じく仁村は頬をプクーっと膨らませる
「「……もし、冗談じゃなくなったらどうするの」」

「ん、何か言ったか？」
「な、何でもありませんっ。それより元ちゃんの手伝いに行ってきます！」
「あ、私も行きますっ、桃先輩！」
花戒と仁村はそそくさと逃げるように生徒会室を飛び出していった
その様子を見ていた草下から「あんまり2人をからかわないであげて」とダメ出しを受けていると、『戦車（ルーク）』の由良翼紗（ゆらつばさ）がサイン色紙を取り出してきた
「竜崎、サインをくれないかい？」
「別に構わんが、俺ので良いのか？」
「勿論。この間のバアル戦、記録映像で見て感動したよ。最高の殴り合いだった。それにリュオーガ族の事も聞いて、ますますキミに惚れてしまったよ」
彼女は前々から新のファンらしく、駒王学園（くおうがくえん）にいる男子悪魔――新、一誠、祐斗、ギャスパー、匙の中で誰が1番好みかと言う話題で新だと言う程だった
何でも泥臭い男が好みらしい
職業柄、新は〝泥臭い〟と言うより〝血生臭い〟の方が表現として合っているのだが……そこは割愛（笑）
由良は美少年顔で女子人気が高いのだが、やはり彼女も年相応の女の子の反応を見せてくれる

ちなみに『騎士（ナイト）』巡巴柄（めぐりともえ）はギャスパーの様な年下がタイプらしい
「年下は良いものよ。最近だと転校生のシドくんも捨てがたいわ」
「年下なら何でも有りかいっ」
新がツッコミを入れた直後、由良が悪戯な笑みを浮かべて耳打ちしてくる
「ああ言ってるけど、巴柄は最近キミの事も意識し始めているんだよ。椿姫（つばき）副会長と同じく、冥界で販売されてるキミのグッズを集めてるらしくてね。この前なんて等身大の――」
「ちょっと翼紗⁉何吹き込んでるの⁉やめてぇっ！」
顔を真っ赤にした巡が由良を追いかけ回す
〝等身大の何なのかスッゲェ気になる……〟と新は冥界興行の販売力を危惧した
「私はやっぱり木場きゅん派なんだけど……高嶺の花って感じだよねー」
草下は木場ファンだったのだが、最近では夢と現実をキッチリ分けようかと考えているらしく――
「……それに、強引にされるの嫌いじゃないかも」
「――っ？」
視線に気付いた新がそちらを向くと草下は慌てて目を逸らし、その事に気付いた由良が巡の追撃を躱（かわ）して草下に耳打ちする

「憐耶、今度竜崎にキミの事を紹介しようか？」
「本当⁉でも、副会長の方を先に紹介してあげて。椿姫さん、本気で竜崎くんに恋しちゃってるから」
由良の発案に喜ぶ草下だが、順番をまず『女王（クイーン）』真羅椿姫（しんらつばき）に譲る様子
何やかんやで新も生徒会の面々と打ち解け合っており、最近では両眷属の女子同士で交流も持ち始めている
学園に通う数少ない悪魔同士、交流を持つのは良いコトだ
「竜崎くんが来ていたのですね」
聞き覚えのある声に気付いて振り向くと――そこにはソーナがいた
「あ、会長。邪魔してるぜ」
「ええ。お客さんが来ているけれど、皆に用事を頼みます。椿姫が部活棟で苦戦しているそうです」
「「はい！」」
ソーナ会長の命令を受けて、皆が返事をして生徒会室を飛び出していく
残ったのは新とソーナだけ
途端に静寂に包まれる生徒会室
ソーナ会長は自分の席に戻り、書類に手をつけ始めた

　仕事の邪魔をしてはいけないと感じ、新も退室しようとした矢先――不意にソーナ会長が言う
「リアスに告白したようですね」
「リアスから聞いたのか？」
「ええ、一応。彼女とは幼い頃からの友人ですから。最近は通信用の魔方陣越しに惚気話を聞かされます」
「ハハハッ、そりゃどうも」
　頬をポリポリ掻く新にソーナ会長は真っ直ぐ視線を送りながら言った
「あなたは私が出来そうに無かった事を全て叶えるのね」
「どういう事だ？」
「婚約――ライザー・フェニックスの件、木場祐斗くんの件、ギャスパーくんの件、小猫さんの件、朱乃の件、……リアスが抱えていたものをあなたが全部軽くしたの。……私はあなたよりも長くリアスの傍にいながら、友人でありながら何も出来ませんでした。『上級悪魔だから』『悪魔のしきたりだから』と概念に捕らわれ、それらの壁を私は越えられなかった。……周囲の視線と自分の立場を鑑みて、何も出来なかったのです」
「……会長も会長なりにリアスを心配してたんだな」
「あなたはそれらを意にも介さずに解決していった。私はそれがたまらなく嬉しくて

……、たまらない程に妬みもしたわ。私に出来ない事をあなたは全部解決してしまうのだもの。だからこそ、お礼を言いたいのです。――――リアスを救ってくれてありがとう」

ソーナ会長は息を吐くとクールな表情を緩める

「ねえ、竜崎くん……いえ、プライベートの時は新くんで良いのかしら？リアスをよろしくお願いします。わがままで直線的で短気なところもあるけれど、誰よりも繊細なのよ。傍で支えるヒトが必要です。だからこそ、あなたにお願いしたいの」

「ああ、リアスの事は任せろ。俺にとっても大切な女だ」

「そうね、……私の事もソーナで良いわ。リアスの想い人なら、私にとっても友人も同じなのだから」

「お、そいつは助かる。堅苦しいのは苦手なんでな」

「ふふっ、あなたはいつでも堅苦しさから離れてるじゃない」

新の反応を見てソーナ会長はおかしそうに小さく笑った

普段がクールなので、可愛い笑い方のギャップにやられそうになる

ソーナ会長は息を吐くと一言漏らした

「私も彼氏作ろうかしら」

「お、新鮮な言葉。それなら俺が立候補してみようか――――なんつって」

新が悪戯な笑みを浮かべてそう提案すると、ソーナ会長は急激に顔を赤らめてしまい……邪念を振り払うが如く書類に集中
「新くん、リアスに怒られるわよ……？」
「フッ、説教なら――もう散々くらってるぜ……。あ、ちなみに匙はどうなんだ？」
「弟、と言ったところかしら」
想いが遠いどころか脈なしの心境に新は心中で〝匙、ドンマイ♪〟と吹き出しそうになる
「それとゲームですが、見事でした。あのサイラオーグ・バアルを倒せるなんて、あなたの成長ぶりには驚かされるばかりです」
「そう言ってくれるのはありがたいが、実際のところ5人がかりでやっと倒せたってレベルだ」
「だとしても、結果としてあなた達の勝利です。見事としか言えないわ」
いつに無く褒め言葉を贈ってくれるソーナ会長
実際はソーナ会長の方も凄い
まだ眷属が完全に揃った状態でもないのに、大公アガレスをゲームで倒した
新達とは対照的にゲームのルールとソーナ会長の戦術がピッタリだったのだろう
「ともかく、リアスをよろしくね、新くん。それと昇格推薦おめでとう。私からもお祝い

を言わせてもらうわ」
「サンキュー、ソーナ。リアスの事もそうだが、また何か遭った時は遠慮無く言ってくれ」
「そうね、期待しています。――――頑張りなさい。中間テストもね」
微笑みを見せるソーナ会長
本音を言ってしまえば〝中間テストなんか知らねっ〟と放棄しているところだが、ソーナ会長からの賛辞を無下にする事も出来ず……
新は気合を入れ直し、中間テストも頑張る事にした

「……まさか、あんたがそんな事を言い出すとは……どういう腹積もりだ？」
「むっ、堕天使総督は失礼ですね。これはお互い無駄な血を流さない為の提案なんですよ？そんなに信じられないのですか？」
「生死不明の『初代クイーン』がいきなり出てきて、そんな事言われたら誰だって疑うだろ。1つ訊くが、こいつはあんたの独断か？」
「いいえ、大牙も賛同してくれました。あの子も『2代目キング』として現状の変化を望

んでいます」
「あいつがねぇ……」
「どうです？お互い持ちつ持たれつと言う訳ですし、私自身もあなた達に興味が湧いたからこその提案なんです」
「はぁ……こちとら確実に反感買われる奴の訪問予定を組み立ててるってのに、とんだサプライズゲスト追加かよ……。頭が痛くなってきやがった」

発情小猫と驚愕の訪問

「そう、ソーナとそんな事を話したのね」
夕食後のリビング、新は寛ぎながらリアスに昼間の出来事を話していた
「1つ聞きたいんだが、ソーナにも許嫁って奴はいるのか？」
「いたわ」
「〝いた〟？過去形って事は――今はフリーだよな」
「彼女も私と同様、解消したのよ。少し前の事よ。なんでも勝ったら破談、負けたら即退学と即結婚を条件にチェスの１０番勝負を申し込んだそうなの。自分よりも頭の回らない男と一緒になりたくないと言う思いがあったみたい」
「んで、結局その勝負に勝って破談って訳か」
「圧倒的な全勝で相手の男性のプライドを粉々に砕いたようね。あの次期大公シーグヴァイラ・アガレスに戦術で勝ったソーナだもの、並大抵の者では勝てないわよ。私も今の彼女とのチェス勝負では負け越しそうだわ」
更にシトリー眷属はまだ全員揃っていない
『兵士（ポーン）』数名、『騎士（ナイト）』と『戦車（ルーク）』が1名ずつ余っている

丁度その事についての話題をリアスは口に出した
「そう言えば、新しい『騎士（ナイト）』と『戦車（ルーク）』のアテが出来たとソーナは言っていたわね。交渉してみるそうよ」
「遂にシトリー眷属も戦力増強か。女だったら大歓迎だ」
新がそんな事を考えていると、レイヴェルが両手に大量の教科書を持って現れた
リビングのテーブルにドスンッ！と大量の本が置かれていき、本の山を前にレイヴェルは言う
「今日も昇格試験用の教科書、参考書を出来る限り集めました！あと、駒王学園の中間テスト用の教材もバッチリですわ！」
それを機に朱乃、ゼノヴィア、イリナもやって来て、新の大嫌いな勉強会が始まる
新と朱乃は中間テストと昇格試験の両方、他のメンバーは中間テストの勉強
リアスが新の隣に座って教科書を開こうと――――
「小猫はまだ調子が悪いのね？」
確かに小猫の姿が見当たらない
新は小猫の不調を気にしつつも、勉強に手をつけた

「……クソォ……っ。やる事が多過ぎる……」

嫌いな勉強会を終え、更に悪魔の仕事も終えた新は自室のベッドに突っ伏していた

毎日続けられる勉強会によって精神は削られ、覚える事が多くて頭はパンク寸前

現在リアス達は深夜の勉強会前に英気を養う為の夜食作りをしている

休まる暇も無く勉強&禁欲ライフに新のストレスは徐々に増えていった

溜まってきた情欲を発散しようかと思ったその時――部屋の扉が開かれる

その方向を見てみると……白装束姿の小猫がいた

猫耳と尻尾を出しており、顔も赤くなっていた

「小猫、どうした？休んでなくて良いのか？」

「……」

小猫は新に近付くと、恍惚とした表情のまま白装束の裾をたくし上げた

――THE（ザ）・はいてない――

なんと小猫はノーパンだった……！

小猫のノーパン姿に新は開いた口が塞がらなかった

更に小猫は白装束をはだけさせると、ベッドに上がってきて新に抱き付く
荒い息遣いとほんのり汗ばんだ小柄な体が密着、小猫は耳元でこう囁いた
「……先輩……切ないです」
官能的な台詞を言うと小猫は新の手を取って自分の胸に当てる
小さくても確かな柔らかさが新の手に伝わり、途端に小猫は口から甘い喘ぎ声を発した
「……にゃぁぁ……」
「お、おい、小猫？いったいどうした……？」
あまりにも唐突過ぎる展開に混乱する新
それでも小猫はエロ行動を止めず、新の首筋を舐める
ザラザラした猫特有の舌触りが首を襲う
小猫は切なそうな瞳を浮かべたまま、小さく声を漏らす
「……先輩の……あ」
「あ？」
「赤ちゃんが欲しいです」
「……ＡＫＡＣＨＡＮッ!!」
小猫がまさかの〝赤ちゃん欲しい宣言〟をしてきた……っ

小猫は更に白装束をはだけさせ、もはや全裸にも等しい格好で新に覆い被さった
小振りなおっぱいも新の眼前に……
思わず目の前のおっぱいに手を伸ばしかけた時、新は小猫の顔を見て気付く
熱を帯びた表情だが、瞳に少しだけ陰りがあった
普通じゃない様子が窺える
〝小猫にいったい何が起こっているのか？〟と考え始めた時、部屋の扉が開かれ――
――リアスが入室してきた
リアスはこの光景を見るや否や、ズカズカと足音を立てて勢い良く迫る
「リ、リアス、小猫の様子が――――」
「ええ、分かっているわ」
そう言うとリアスは小猫の首元に手を当て、次に瞳を覗き込み、最後に胸と腹にも手を当てた
暫し考え込み、何かを思い付くと携帯を取り出した
「リアス、何か分かったのか？小猫にいったい何が――――」
「とにかく、専門のヒトに診てもらいましょう。話はそれからよ」
何かを得心しているようなリアスの口振りに、新は頷くしかなかった

「猫又の発情期って事か」
連絡を受けて駆けつけてきたアザゼルが開口一番にそう言った
専門医に診てもらった結果、小猫は子孫を残したいと言う本能の状態になっている――
――そう診断されたのだ
小猫は自室で落ち着いて眠っている
調合してもらった〝気分を和らげる薬〟を飲み、それが効いた
新達は現在、兵藤家のＶＩＰルームでその事について話を聞いている
「発情期、か……」
新がぼそりと呟き、アザゼルが話を続ける
「猫又の女は体が子供を宿せるようになって暫くすると一定周期で発情期に入る。要は猫又の本能が働いて子孫を残す為に子作りしたくなるんだよ。その辺は猫と同様だな。で、猫又の女の特性上、相手は気に入っている異種族の男って訳だ。つまり……お前だ、新」
「俺？」
「小猫はレアな猫又――猫（ねこしょう）？だ。子孫を残すのは良い事だと思うぜ。それが闇皇（やみおう）との

間の子供なら万々歳だ。だが、ちょっと今回はな……」
アザゼルは息を吐いた後に言った
「小猫はまだ小さい」
「……確かにな。いや、最近は少しばかり育ってきたのが分かるぞ。約1㎝程胸が――」
「もう、体の事よ」
リアスが嘆息しながら新にツッコミを入れる
「小猫が小柄って事か」
「ああ、猫(ねこしょう)？の出産は心身共に成熟した状態でないと危険を伴(ともな)う。人間界でも出産は母胎にとって大変な事だろう？小猫はまだ未成熟だ。今のままで新の子を宿したら出産の際に母子共に耐えられずに死ぬ可能性が高過ぎる。それらを含め、もう少し成長してからの方が良いだろう」
以前、小猫は自分の体は小さいけれど子供は作れると言っていたが……体は完全に整っていなかった
だとすれば、本能的に発情期が来るとは思えない
「それなら猫(ねこしょう)？の本能で子作り出来ないと判断してもおかしくない筈だ。だったら何故――」

「女として分からなくもないですわね」
そう言ってきた朱乃に皆の視線が集まる
「きっと、小猫ちゃんは新さんとリアスの関係を見て感情が高まったのだと思いますわ。つまり、『私も負けられない』、『次は私だ』と強く心に思ってしまったのでしょうね」
朱乃の言葉に顔を見合わせる新とリアス
小猫は新とリアスの関係を見て、自分も何かしなくちゃいけないと焦ってしまったのだろう
つまり……
「私と新の影響で体の準備が充分に整わないまま、発情期に入ってしまったのかしら……」
リアスが気落ちさせながらそう呟いた
自分の想いが大事な眷属である小猫を必要以上に刺激してしまったのだと負い目を感じているのだろう
それは新も同じ、もう少し気遣っていればと後悔していた
甘えさせてやるだけでも違った結果になっていた筈なのに、気付いてやれなかった……
アザゼルが場の何とも言えない空気を察して頭をポリポリ掻く

「何はともあれ、発情期を無理矢理抑え込んでもな。薬で抑制し続けても今度は成熟した後に本能が働かなくなる可能性も無い訳じゃない」
今は薬で落ち着かせているが、そればかりに頼って小猫の体を壊す訳にもいかない
アザゼルは新に指を突きつけて告げた
「1番良いのは、小猫の状態が完全に落ち着くまで新自身が耐える事だ」
「……やっぱり、それしか無いか」
「そうだ。オイシイ場面かもしれないが、あいつの体を想うなら小猫の誘惑に耐えろ。万年発情期のイッセーと違って、お前なら自制が利くだろ？」
「ちょ、先生！万年発情期って酷くないっすか⁉」
一誠が異議を申し立てるがアザゼルは華麗にスルー
確かに性欲を制御出来る新ならば、何とか耐えられる筈……とは言え禁欲はやはりツラい物がある
難しい表情でいると、リアスが新の手を握ってくる
「お願い新。小猫の誘惑に負けないで。子作りしちゃダメよ？無事に耐えてくれたら、私がご褒美をあげるわ。ね？」
愛しの女性に懇願されてしまっては気合を入れて耐えるしかない
新はリアスの手をグッと握り返す

「分かった、耐えてやるさ。リアスの褒美――――いや、それ以前にお前と小猫の為にも耐えきってやる」
「ええ、それでこそ私の愛しい新だわ」
両者が暫し見つめあっていると……アザゼルが「バカップルが暑苦しいぞ」と茶々を入れてくる
それに気付いた新とリアスはパッと手を離す
リアスは顔を一気に赤く上気させていた
「見せつけやがって。そう言うのは2人だけの時にやれってんだ。なあ、お前ら？」
アザゼルが一誠達に話を振る
「羨ましい限りっすよ」
「お二人の様子は安心して見てられます」
「良いなーと思いつつも2人の仲を見守れる安堵感は癒されるぞ」
「そうねぇ。見つめ合った時、2人の間に演出的なお花が満開だった気がするわ！」
一誠、アーシア、ゼノヴィア、イリナの言葉に流石の新も恥ずかしくなり、顔を伏せる
「うふふ、浮気へのポイントがまた1つ高まりましたわ」
「今の場面を録画してライザーお兄さまに見せたら悶死しそうですわね。うふふ」

「お前らも不穏な事言ってんじゃねぇっ！」
「……ったく、良い女達に恵まれているな、新は。それとついでの報告だ。――朱乃」
ここでアザゼルが朱乃に話題を振る
「バラキエルは承諾した。俺もそれで良いと思う。後はお前の意志次第だ」
「父が……そうですか。分かりました。これ以上、眷属に迷惑は掛けられませんものね。――ギャスパーくんも頑張っているのですもの、私も近くに必ず」
朱乃の決意に満ちた表情
リアスは知っているような顔ぶりだった
アザゼルは朱乃の言葉を聞いて頷いた
「分かった。――と、それは置いておくとして、他の皆もちょっと良いか」
アザゼルが改まった声音で皆を見渡す
「明日、この家に訪問者を呼ぶ予定だ。リアス、それについての了解を取りたい」
「あら、初めて聞いたわ。突然ね」
「ああ、ちょっとな」
アザゼルの表情はいつになく真剣なものだった
「お前達はその訪問者に確実に不満を漏らす。いや、そいつらに対して殺意を抱(いだ)いてもおかしくない筈だ」

アザゼルの発言に皆が顔を見合わせて驚く
不満どころか殺意を抱くまでの相手とは……？
不意に頭を過ったのは――――ヴァーリチーム
「イッセー、新。お前らが今頭に過ったの集団があるだろう？それで半分正解だ」
「――――っ！先生、ヴァーリ達がまたここに？」
ロキ戦の時は一時的な協力関係だったので争いはしなかったが、基本は敵同士
だが、会って直ぐに殺意を抱く程では無い筈……
「ヴァーリはテロリストですもの。一時共闘したけれど、ここにもう一度用があると言うのなら、戦う準備ぐらいはして当然だわ。けれど極端な話、直ぐに殺意を抱くと言うのは無いのではないかしら。私個人の見解では、敵だけれど英雄派程の危険性は無いと思うわ。会うぐらいならまあ……警戒は最大で行うけれど」
リアスの意見にアザゼルは息を吐きながら頬を掻く
「まあ、ヴァーリチームに関してはお前達も曖昧な立ち位置である事は認識しているだろう。ただな……。今言ってもしょうがない部分があってな。明日の朝まで待ってくれ。それで分かる。だが、俺の願いとしては決して攻撃を加えないでくれ。それだけだ。話だけでも聞いてやればそれで充分なんだ。――――上手くいけば情勢が変化する大きな出会いになるかもしれない。俺も明日の朝、もう一度ここに来る。――――だから

こそ、頼む」
頭を下げるアザゼル
それを見て大いに訝しげに思う一同
話から察するにヴァーリチームと共に来るらしい
新は1つ気になる点をアザゼルに問う
「アザゼル、訪問者はヴァーリチームが同行する〝そいつ〟だけじゃないんだな？」
「……」
「お前は確かそいつ〝ら〟と言ったよな？つまり、訪問者はヴァーリチーム同行の〝そいつ〟の他に〝もう1人〟――来るって事なんだろ？」
新の問いに皆の視線がアザゼルに集まり、アザゼルは渋々認めた
「ああ、その通りだ。ヴァーリチームと共に来る奴と他に……もう1人訪問者を呼ぶ。そいつにも決して攻撃を加えないでくれ」
「ヴァーリチームの他にもう1人って……誰なんですか、先生？」
「それも明日まで待ってくれ。強いて言えば――イッセー、お前の知り合いが付添人だ」
疑問と不安を感じつつ、次の朝、新達は「それら」と出会う事になる

翌朝の兵藤家、新もリアス達と共に集結していた
眠気を我慢しているとインターホンが鳴らされ、ドアを開ける
玄関前に立っていたのは――黒いゴスロリ衣装を着た細身の女子
見覚えがある……否、忘れる筈が無い……ッ
その女の子は一言だけ簡素に漏らした
「久しい。ドライグ」
訪問者の正体に新は絶句、一誠も指を突きつけて叫んだ
「オ、オ、オ、オ、オ、オオオオ

「皆さん、初めまして。闇人(やみびと)の『初代クイーン』――マヤ・トゥルーイブニングと申します。本日は皆さんとお話をしに来ました」
ペコリと頭を下げる『初代クイーン』
当然、その場は驚愕1色に包まれた
「しょ、しょ、しょしょしょしょ、初代クイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ⁉」
再び一誠の絶叫が家中に響き渡る
玄関に集まっていた眷属全員が直ぐ様臨戦態勢に入った
その反応も至極当然である
オーフィスは各勢力に多大な被害を出している『禍の団(カオス・ブリゲード)』のトップ
ここに来る事自体あり得ない話だ
マヤ・トゥルーイブニングと名乗る少女も闇人(やみびと)の『初代クイーン』
闇人(やみびと)も各勢力に攻撃を仕掛けている危険な種族
その『初代クイーン』がオーフィスと共に訪問してきた……っ
あり得ない事態の連続に謎と疑問が駆け巡る
そんな中、アザゼルが新達とオーフィス・マヤ組の間に入った
「ほらほらほら！昨夜言ったじゃねぇか！誰が来ても殺意は抱くなってよ！攻撃は無し

だ！こいつらもお前らに攻撃を仕掛けてはこない！やったとしても俺達が束になっても勝てやしねぇよ！」

アザゼルの言葉にリアスが激昂する

「いくらなんでもこれは非常識だわ、アザゼル！そのドラゴンは各勢力に攻撃を加えるテロリスト集団の親玉！悪魔の世界にも多大な損害を出している謂わば仇敵なのよ⁉どうしてあなたがそんな怨敵をここに招き入れるの⁉その上、闇人も各勢力に多大な被害を出している天敵！同盟にとって重要な場所となっているこの町の、しかもこの家に！オーフィスと『初代クイーン』がここに入れたって事は、ここを警備する者達をも騙して入れたって事よね⁉どうしてそこまでして！」

リアスの言う通り、この町は天界と冥界が協力関係を取り、他勢力との交渉の場にも使われる最重要地点

天使、堕天使、悪魔のスタッフが新達以外にも複数入り込んで場を維持している

そこにこの２人が入れたと言うのは、アザゼルがスタッフを説得したか……騙したかの２つである

天界の使いであるイリナが面食らっている様子から見て――――天界からの事前報告は無い

無論、悪魔サイドからも連絡は無かった

これだけの相手が来るなら事前にサーゼクスからの連絡がある筈……
それが無かったと言う事は――
「アザゼル、お前サーゼクス様や天使長ミカエルに黙って……こんな事をしたのか⁉」
新もアザゼルの真意に気付いて問い詰める
激昂するのも無理は無い……
何せこれは明らかに――
「協定違反だわ、アザゼル！堕天使サイドが魔王さまや天使長ミカエルに糾弾されても文句は言えない程の！誰よりも各勢力の協力を訴えていたあなたが……」
キレていたリアスが途端に語気を鎮めていく
「……協力体制を誰よりも説いていたあなたですものね。このオーフィスと『初代クイーン』の訪問にそれが懸かっていると判断したって事ね？」
リアスはそう言う結論を口にした
確かに最初に出会った時はとても胡散臭く、疑わしい臭いが止まなかったが……今では心底から信頼出来る堕天使の総督
何度も窮地を突破出来たのもアザゼルのお陰であり、新達がここまでの成長を築けたのもアザゼルの知識と協力があったからこそだ
誰よりも面倒見の良いアザゼルが今更裏切るなんて事はある筈が無い

それをリアスは激昂しながらも次第に思い出したのだろう
「ああ、スマンな、リアス。俺はこいつらをここに招き入れる為に色んなものを現在進行で騙している。だが、こいつらの願いは、もしかしたら『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人（やみびと）、両者の存在自体を揺るがす程のものになるかもしれないんだ。……無駄な血を流さない為に、それが必要だと俺は判断した。改めてお前達に謝り、願う。――――スマン、頼む。こいつらの話だけでも聞いてやってくれないだろうか？」
アザゼルが再び新達に頭を下げる
プライドの高いアザゼルがここまでするからには、きっと大きな意味を持つのだろう
「俺は先生を信じます。俺がここにいるのは先生のお陰ですから」
一誠はそれだけ言って籠手を消した
他の皆も顔を見合わせつつも手に持っていた武器をしまった
「……その２人に殺気が無いのは確かだ。話を聞くぐらいなら良いだろう」
「……先生にはいつも世話になっている。その２人に今すぐにでも斬りかかりたいところだが……我慢しよう」
新はポケットに手を突っ込み、ゼノヴィアは腕を組んで瞑目した
「……ミカエルさまに黙ってまでオーフィスと『初代クイーン』を……私としては正直どうしたら良いか分からないけれど、アザゼル先生とリアスさん達を信じるしかないわ」

イリナも複雑な思いを抱きつつも了承した
「もとより、私はイッセーさんとリアスお姉さまを信じるだけです」
「右に同じですわ」
アーシアとレイヴェルも了解した
まだここに来てない祐斗とギャスパー、新の家で寝込んでいる小猫、北欧に一時帰還しているロスヴァイセも同じ気持ちを抱いてくれるだろう
溜め息を吐くリアスはアザゼルに訊く
「それで、上にあげてお茶でも出せば良いのかしら？オーフィスと『初代クイーン』だけなの？例のヴァーリチームは？」
そう訊いた直後、玄関前に小さな魔方陣が出現する
そこから現れたのは魔法使いの被るとんがり帽子にマントと言う出で立ちのヴァーリチームの魔法使いルフェイ
そして灰色の毛並みを持つ大型犬
ルフェイは良しとして、問題は大型犬の方……
サイズが小さくなっているが、その大型犬は――神喰狼（フェンリル）だった
神をもその牙で食い殺す神殺しの狼がルフェイと共にやって来た
「ごきげんよう、皆さん。ルフェイ・ペンドラゴンです。京都ではお世話になりました。

こちらはフェンリルちゃんです」
物腰柔らかく丁寧に挨拶をくれるルフェイ
フェンリルも彼女になついているのか、敵意は無いようだ
更に魔方陣がもう一度展開するとそこからグラマーな美女が登場する
出てきた途端に新に抱き付く
「おひさ～リューくん！相変わらずおっぱいが好きなのかにゃ～？」
「黒歌（くろか）！ったく、スゲェ面子（めんつ）だな……」
出てきたのは小猫の姉、黒歌だった
再度魔方陣が光を放って出現してくる
次に現れたのは――――ギターを携えた少年
「よっ、一誠！久しぶりだＮＡ（な）！」
「……っ！ダイアン⁉お前までどうしてここに⁉」
「今日は『初代クイーン』の付添人として来たんだＺＥ（ぜ）♪」
彼は一誠の親友の１人、阿久津野大庵（あくつのだいあん）
転生闇人（やみびと）でありながらも、一誠と友好関係を続けている
他に登場する気配は無い
どうやらこれで訪問者は全員のようだ

オーフィスは一言だけ漏らす

「話、したい」

それに続いて『初代クイーン』マヤも前に出てくる

「突然の訪問で混乱してる方も多いと思いますが、皆さんとお話をしたくてここまでやって来ました。どうかよろしくお願いします」

「お茶してやれ。このセッティングをする為、俺は他の勢力を騙しに騙してんだからな。これがバレて悪い方向に進んだら、俺の首が本当の意味で飛ぶんだよ」

アザゼルの念押しに新も一誠も腹を括る事にした

こうして、最強の存在と闇人(やみびと)の『初代クイーン』を交え、緊迫したお茶会が行われる(おこな)

……

龍神と『初代クイーン』とのお茶会

兵藤家のＶＩＰルームに集う異様なメンツ
グレモリー眷属（祐斗とギャスパーが駆けつけるも小猫は竜崎家の部屋で休んだまま）＋イリナ、レイヴェル、アザゼル、ヴァーリチームのルフェイ、フェンリル、黒歌、闇人枠のダイアン、そして今回の主役であるオーフィス＆『初代クイーン』マヤ・トウルーイブニングと言う普通ではあり得ない顔ぶれの集まりとなった
「お茶ですわ」
「はい、いただきます」
「Ｔｈａｎｋ－ｙｏｕ」
朱乃が警戒しつつもヴァーリチームとオーフィス、『初代クイーン』マヤ、ダイアンにお茶を淹れる
ルフェイはお茶を口にして、黒歌はお茶請けのお菓子を食べていた
フェンリルはルフェイの近くで寝ている
『初代クイーン』マヤとダイアンも我が家で過ごすかの如く寛いでいた
『緊張感無さ過ぎだろ、こいつら……』

祐斗も合流して後ろに待機している
表情はいつもと変わらないが、感覚を研ぎ澄ませており、何かあれば直ぐにでも飛び出せる気配だった
ギャスパーは小猫の事が心配なので、小猫のもとにいる
一誠は隣に座るアザゼルに耳打ちした
『具体的にどうすれば良いんでしょうか?』
話を聞いてくれと頼まれたものの、どの様な接し方で事を進めれば良いのか見当もつかない
他の皆も顔をしかめ、緊張した状態でこの場に列席している
アザゼルが不安がる一誠にこう返した
『奴はお前に、「初代クイーン」は新に興味を持っている。とりあえず質問されたら返せ。あいつらを理解する良い機会だ』
『って、言われましても!あ、あいつ、テロリストの親玉で世界最強のドラゴンなんでしょう……?しかも先生やサーゼクスさまよりも強いって!』
『暴れる事はしないだろうよ。あれはヴァーリや曹操に比べたら好戦的な意志は無いに等しい。グレートレッド以外にはそう攻撃を加えるもんじゃないだろう。お前らは各勢力の代表として会談をするって事だ。いいか?とにかく良いお茶会にしとけ!いい

な！』

『結局ほぼ丸投げじゃねぇか……』

新は頭を、一誠は頬をポリポリと掻いて当惑するしかなかった

この事態も赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の力が呼び込んだのだろう

実際、彼女達は興味を抱いてやって来たのだから

嘆息していると、オーフィスがジッと一誠を見つめてくる

一誠は口元を引きつらせながら、笑みを無理矢理浮かべて訊いた

「そ、そ、それで、俺に用って何でしょうか……？」

オーフィスはお茶を口にして、ティーカップをテーブルに置くと口を開いた

「ドライグ、天龍をやめる？」

いきなり理解し難い質問が飛ばされてきた

一誠は笑顔を絶やさないまま声を絞り出す

「……いや、言っている意味が……」

「宿主の人間、今までと違う成長している。我、とても不思議。今までの天龍と違う。ヴァーリも同じ。不思議。とても不思議」

どうやら一誠とヴァーリの成長ぶりは把握しているようで、その成長具合を不思議に思っているようだ

オーフィスは話を続ける
「曹操との戦い、バアルとの戦い。ドライグ、違う進化した。鎧、紅色になった。初めて。我の知っている限り、初めての事。だから、訊きたい。ドライグ、何になる?」
首を傾げながら訊いてくるオーフィス
その姿に〝あら、可愛い〟等と思いながらも、どう答えたら良いのか分からなかった
実際は無我夢中で鍛え、おっぱいを求めた末のパワーアップでしかない
そう答えたところでオーフィスが求める回答には繋がらないだろう……
すると、一誠の左手に籠手が勝手に出現
ドライグが皆に聞こえるように声を発した
『分からんよ、オーフィス。こいつが何になりたいなどと、俺には分からん。分からんが……面白い成長をしようとしているのは確かだ』
オーフィスは一誠の籠手に視線を移して話を続ける
「二天龍、我を無限、グレートレッドを夢幻(むげん)として、『覇』の力の呪文に混ぜた。ドライグ、なぜ、覇王になろうとした?」
『……力を求めた結果だろうな。その末に俺は滅ぼされたのだ。「覇」以外の力を高める事にあの時は気付けなんだ。俺の赤が紅になれるなぞ、予想だにしなかった』
「我、『覇』、分からない。『禍(カオス)の団(ブリゲード)』の者達、『覇』を求める。分からない。グレートレッ

ドも『覇』ではない。我も『覇』ではない」
『最初から強い存在に「覇」の理なぞ、理解出来る筈も無い。無限とされる「無」から生じたお前と夢幻の幻想から生じたグレートレッドは別次元のものだったのだろう。オーフィスよ、次元の狭間から抜け出てこの世界に現れたお前は、この世界で何を得て、何故故郷に戻りたいと思ったのだ？』
「質問、我もしたい。ドライグ、なぜ違う存在になろうとする？『覇』、捨てる？その先に何がある？」
　質問を質問で返す鼬ごっこが続く
　会話の内容も全く理解出来ないものだった
　普段のドライグや元龍王のタンニーンは人間臭いところもあるので分かりやすいが、こうして見ると全く別の価値観を持つ存在だと改めて認識される
「……実に興味深い。龍神と天龍の会話なんてそう見られるもんじゃない」
　アザゼルは目を爛々と輝かせて2体の会話を聞いていた
『……ったく、他人に押し付けといて何言ってやがんだ。このクソ教師は』
『落ち着け、新。もうここは相棒に任せるしかないだろう』
　苛つく新を宥める一誠だったが、オーフィスが次に投げつけてきた質問によって事態は激変する

「ドライグ、乳龍帝(ちちりゅうてい)になる?乳揉むと天龍、超えられる?ドライグ、乳を司(つかさど)るドラゴンになる?」

それを聞いたドライグは過呼吸気味となった

『うぅ……こいつにまでそんな事を……。うっ!はぁはぁ……!意識が途切れてきた!カウンセラーを!カウンセラーを呼んでくれぇぇぇっ!』

ドライグは精神的なダメージを受け過ぎて壊れそうになっていた

一誠は懐(ふところ)から薬を取り出して、籠手の宝玉に振りかけた

「落ち着け、ドライグ!ほら、お薬だ!」

『……あ、ああ……す、すまない……。この薬、き、効くなぁ……』

薬をかけられたドライグは気持ちを和らげ、次第に落ち着きを取り戻していく

「我、見ていたい。ドライグ、この所有者、もっと見たい」

まだジッと見つめてくるオーフィス

無表情ではあるが、瞳だけは興味の色に染まっている

〝こっちは一誠に任せておこう〟と新は切り替え、自分も目の前にいる『初代クイーン』と話をする事にした

「……で、『初代クイーン』様はどう言ったご用件で?」

低姿勢な体裁を装(よそお)いつつ、『初代クイーン』マヤに訪問の目的を問いただす

新の問いに対して彼女は足をパタパタさせながら言った
「私もあなたに興味があって、お話を伺いたいな～と思って来ました」
「興味？」
「はい。あのヒト――『初代キング』が使用していた鎧の宿主さんが異質な進化を遂げた事を耳にしまして、それも他の力が混ざり合った独自の路線を描いていると」
新の成長具合も既に知られているようだ
『初代クイーン』マヤは紅茶を一口飲んだ後、こう言い放った
「あなた方に共通しているのはただ1つ――お二人が女性のおっぱいによって窮地を脱しただけじゃなく、未知の進化を遂げたと言う事です」
『さあて、頭痛薬の準備はＯＫだ……』
「女性のおっぱいに対する探求心、それによって得た新しい進化。……そう、名付けて――乳進化ですっ」
『メガシ○カみたいに言うな……』
「……乳進化ですっ！」
〝なんで2回言った？〟と心中でツッコミを入れる新
最初はドヤ顔だったマヤが次第に悲しげな表情となり――涙目になった
「うぐ……っ、ひん……っ、乳……進化っ、ですう……」

「なんで泣くんだよ⁉」
「だって……だって……乳進化(ニューシンカ)って、良い響きじゃないですか……っ。せっかく名付けたのに……誰もっ、反応してくれなくて……っ」
子供の様に泣きじゃくるマヤを見たアザゼルが慌てて新に進言する
『お前っ、バカ野郎！泣かしてどうすんだ！ここで気分を害されたら最悪交渉決裂しちまうだろ！嘘でもおだてろ！ここでしくじれば、せっかくの交渉がパァになる！』
『わ、分かったよ、うっせぇな……』
新は仕方無くお茶菓子を持ってマヤの機嫌直しに取り掛かった
「い、いやー、秀逸な名付け方だな。乳進化(ニューシンカ)か！うんうん、誰も思い付かないネーミングをスパッと言い切る自信！よっ、流石は『初代クイーン』！あんたが大将！」
『新、褒め方が安っぽいぞ……』
なりふり構っていられない新は『初代クイーン』マヤをとにかく褒めまくる
最悪の事態を避ける為に……
褒め言葉に気付いた『初代クイーン』マヤは途端に表情を明るくさせた
「そうでしょう、そうでしょう♪渾身のネーミングですから、やっぱりそう思いますよね～♪」
『チョロいっつーか、テンションの上がり下がり激しいな……』

心中でめんどくさいと思っていると、アザゼルが息を吐いて新と一誠の肩に手を置いた
「てなわけで、数日だけそれぞれの家に置いてくれないか？この通り、オーフィスはイッセーを、『初代クイーン』は新を見ていたいんだとよ。そこに何の理由があるかまでは分からないが、見るぐらいなら良いだろう？」
そんな事を言われて互いに顔を見合わせる新と一誠
助け船を出してもらおうとリアスに視線を送るが――
「２人が良いなら私は構わないわ。勿論、警戒は最大でさせてもらうし、何か遭ったら全力で止めるしか無いでしょうね。それで良いなら、私は……呑むわ、アザゼル」
なんとリアスからＯＫが出た
きっとオーフィスと『初代クイーン』の真意に興味を持ったのだろう
それによって『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人（やみびと）が瓦解する糸口を見つけられるなら、それに越した事は無い
話し合いだけでテロ組織を止められ、無血で戦いが終われるなら……
しかし、そんな簡単にあの曹操と神風が諦めるとは思えない
今は各地で暴動を煽り、幾つか事件が散見する程度で済んでいるが……１歩間違えば大惨事、甚大な被害に発展しかねない

どっち道、彼女達の用件を呑むしかなかった
「……このまま膠着状態って訳にもいかないからな。虎穴に入らずんば虎児を得ず……危ない橋を渡ってでもやってみる価値はある。……良いぜ、俺は」
「……俺もＯＫですよ。ただ試験が近いんで、そちらの邪魔だけはしないでくれるなら」
最低限の条件だけ出して新と一誠は折れた
アザゼルが２人の頭に手を置く
「毎度悪いな、イッセー、新。大切な試験前だってのに、お前らに負担を掛けちまって。――だが、これはチャンスなんだ。上手くいけば各勢力を襲う脅威が緩和されるかもしれん。俺が言える義理じゃないが、オーフィス、『初代クイーン』、黒歌、こいつらは大事な試験前なんだ。邪魔だけはしないでやってくれ」
「わかった」
「はいっ」
「適当に寛ぐだけにゃん♪」
オーフィス、『初代クイーン』、黒歌の三者は了解してくれたが、新と一誠は警戒心を拭えなかった
特に黒歌に対して……
半目で睨み付けている新にルフェイが何かを突き出してきた

サイン色紙を突き出し、モジモジしながら彼女は言う
「あ、あの！この間のバアル戦！感動しました！差し支えなければ、サインをください！」
「そういやこの子、新のファンだったね」
「へいへい」
新は苦笑しながらルフェイのサインに応じた
こうして、新達はトンでもない来客をそれぞれ迎え入れ、試験日まで共に過ごす事となった

オーフィス、『初代クイーン』とのお茶会から数日が経過し、休日も試験勉強をする面々
その様子をリビングの片隅でジーッと見つめてくるゴスロリ少女オーフィス
相変わらず広いリビングにて部員の皆と共に参考書、教科書を広げて中間テストと中級悪魔の試験勉強をしている
なるべく気にしないように勉強しているのだが、チラチラとオーフィスに視線を送っ

たりしていた
敵の親玉が部屋の片隅で待機しているのだから、正直無理もない
だが、敵意も戦意も一切感じられないのは確かだ
黒歌、ルフェイ、フェンリル、『初代クイーン』マヤは現在、兵藤家の地下にある室内プールで遊んでいる（ダイアンは仕事のため不在）
彼女達には無闇に外へ出ない事を申し付けたのだが、黒歌が素直に言う事を聞くとは思えない
そんな危険性を過ぎらせつつ、試験勉強に集中する
今日は調子が良いのか、小猫も顔を出して新達と一緒に中間テストの勉強をしていた
「……小猫ちゃん、大丈夫？」
「……大丈夫だよ、ギャーくん」
気遣ってくるギャスパーに小猫は微笑んで返した
しかし、まだ顔が赤いので体の変化は継続中のようだ
あれから小猫が新のもとに来る事は無くなった
出来る限り顔を合わせないように必死で本能に耐えているようだ
体は望むのに心はそれを拒否する、とてもデリケートな状態にいる……
新は何とかしてやりたいと思うが、今大事なのは小猫に触れないようにする事だ

そんな中、アーシアが立ち上がり、紅茶の入ったティーカップをオーフィスに持っていった
「あ、あの、お菓子ばかりだとあれですから。これ、紅茶です」
オーフィスは無言でカップを受け取り、紅茶を飲む
アーシアはそれを確認すると、ニッコリ笑って戻ってきた
一誠はアーシアに耳打ちする
「ゆ、勇気あるな、アーシアは……」
「そ、そんなに怖い方じゃないような気がしまして……。昨夜もイリナさんがトランプに誘ってましたし……」
「「はぁ⁉」」
一誠だけじゃなく聞き耳を立てていた新も驚き、イリナに顔を向けると、彼女は自信満々な笑みを浮かべてVサインをしていた
「うん、誘ってみたの。最強のドラゴンとトランプ出来たわ！勿論、『初代クイーン』ともね！」
『なんて無駄に行動力のある奴だ……』
『そういやロキ戦の時、ヴァーリチームのアーサーとも普通に話してたな……』
新と一誠はこう言う時どんな相手でも話せる天真爛漫なイリナの性格を羨ましく

思った
もしかしたら、イリナがミカエルのA(エース)に選ばれたのもそう言った理由なのだろう
「……変質、か。伝承に聞くウロボロスとはだいぶ印象が違うね」
「混沌、無限、虚無を冠するドラゴンとは程遠い印象ですわよね」
祐斗と朱乃がそんな事を言い出した
こちらの世界に居続けた結果、大きく変質しまったのだろう
このオーフィスと言うドラゴンは疑問の尽きない存在だ……
その龍神が一誠に興味を持ち、『初代クイーン』も新に興味を持った
彼女達は2人から何を得ようとしているのか？
そんなこんなで勉強会は続いていく

中級悪魔昇格試験を目前に控えた深夜の竜崎家
試験勉強を切りの良いところで切り上げ、試験に備えて早めに寝たのだが……深夜にトイレに立ったところで〝ある部屋〟からいつもと違う空気が流れてくるのを察知した

新は訝しげに思い、部屋の前まで近付く
「――――っ」
「――――っ！」
部屋の中から話し声が聞こえてくる
気配を殺し、ソッと聞き耳を立てる
「ふふん♪一目で白音が発情期に入ったって分かったにゃん。リューくんの遺伝子が欲しくてたまらないのかにゃ？」
「……姉さまには関係の無い事です。ここから出てってください」
「まあまあ。なんだったら、リューくんを落とす方法でも伝授してあげても良いにゃん♪」
『……やっぱり黒歌か、あの性悪猫め』
会話の内容から察するに、黒歌は小猫に何やら吹き込もうとしているようだ
今の小猫はとても繊細なので下手に刺激してもらっては困る
新は入室するタイミングを計ろうとするが――――
「んふふ♪部屋の中を覗いているやらしい蝙蝠さんがいるにゃ～？」
『チッ、気付いてやがったか。まあ、良い』
新は開き直って小猫の部屋に足を踏み入れた

ベッドの前で対峙するパジャマ姿の小猫と黒歌
小猫は猫耳と尻尾を出しており、尻尾は縦横無尽に振り回されていた
興奮状態だと直ぐに分かった
目元も厳しく、顔も赤い
「黒歌、小猫に何を吹き込んでた？」
「心外にゃ。私は白音を見て直ぐに発情期に入っちゃってるって分かったから、様子を見に来ただけよ。姉として当然でしょ♪」
「嘘つけ。お前の事だ。どうせ興味本位で見に来たってところだろ」
「この状態はとても敏感にゃん。たとえば――」
黒歌が不意に小猫の腕を引っ張り――新の方に突き出してくる
小猫は新の胸に飛び込んでくる形となった
「……っっ！」
新の胸に飛び込んだ途端、小猫は切ない表情を浮かべて目元を潤ませる
「……にゃぁぁ……先輩……」
小さな唇から甘く官能的な声音が発され、さっきまで振り回していた尻尾が新の右腕に巻き付いていく
「どんなに我慢していても好きな男の肌に触れてしまえば途端に子作りしたくなってし

まうのよ。――――白音はリューくんの子供が欲しくてたまらない状態になっているにゃ」

黒歌がニヤニヤした表情でそう言い、小猫は身を刷り寄せ、自分の着ているパジャマを脱ぎ出す

小さなおっぱいが見え隠れし、非常に危険な状態となる

「……先輩、私の体じゃ、ダメですか……？エッチ出来ませんか……？私は充分に先輩を受け入れられます……。いろんなところがちっこいですけど、ちゃんとした女の子の体です。だから……先輩の赤ちゃんが欲しいです……」

『ぐっ……！そんな表情でそんな事言わないでくれ……！俺だってシてぇよ！セッ○スしてぇよ！けど、今のお前は危険な状態なんだ……！もし子供を宿したら死んじまうかもしれねぇんだよ……！』

必死に理性を抑える新だが小猫は執拗に体を刷り寄せてくる

後退しようとした新は足元から崩れて尻餅をついてしまい、小猫が覆い被さる様に抱き付いてきた

「……鳥娘には負けたくない……。先輩を取られたくないです……。マネージャーは出来なくても、こうして先輩の欲求を満たす事は出来ると思います……」

小猫は何気無い素振りを見せていたが、内心ではレイヴェルの事を気にしていたよう

だ
同じ学年だからこそ気にしてしまっていたのかもしれない
黒歌はこの様子を楽しそうに笑って見ていた
このまま様子を見守っているのかと思いきや、黒歌は着物の帯を解いて着ている物をはだけさせていく
豊満なおっぱいがぶるんっと揺れて飛び出し、綺麗なピンク色の乳首まで視界に飛び込んできた
彼女のおっぱいはリアスや朱乃にも負けず劣らずのサイズだった
「ふふふ、白音の目の前でリューくんの貞操をいただくのも乙よね」
ペロリと唇を舐める黒歌
彼女は新の体から小猫を取り払うと、代わりに抱き付いてきた
大きなおっぱいが新の体に密着し、形を歪ませる
弾力も感触も極上で、新の理性が吹き飛びそうになるくらいだ
新の上に騎乗する格好の黒歌は見下ろしながら呟いた
「経験豊富だけど、スイッチ姫ちゃんとはまだ1回しかしてないのね？」
「――――っ⁉そんな事まで分かるのか？」
「スイッチ姫ちゃんともう毎晩やりまくりだと思ったんだけどね。そうでもないのか

にゃ。それじゃ溜まってしょうがないわよね。良いわ……お姉さんがキミの相手をしてあげちゃうにゃん♪」
脳が沸騰する様なエロ台詞を呟かれ、抑え込んでいた理性が沸々と煮え滾(たぎ)る
黒歌はお構い無しに新の腹部から舌を這わせ、首筋まで舐め取っていく
ザラつきながらも柔らかく暖かい感触が快感を刺激し、垂れてきた唾液の糸を舐め取る黒歌
「これがリューくんの味。覚えたにゃん。まさかヴァーリよりも早く覚えちゃうなんて、分からないものねー」
黒歌は小猫を手招きするとこう言った
「白音、お姉ちゃんが猫又流の交尾を教えてあげるわ。ほら、この男を舐めて味を覚えるの」
小猫は理性を失いつつあるのか、曖昧な瞳を浮かべたまま黒歌の言う事を聞いて――――小さな舌を新の首筋に這わせていく
「――――っ！――――ッ！」
形容し難い快感が新を襲い、たがが外れた小猫はペロペロと新の体をひたすら舐めていく
止める気配を見せない小猫の首筋を黒歌が指でチョンと突いた

すると、小猫の体が1度だけ跳ね、途端に力が抜けたかの如く新の体に倒れ込んできた

意識はあるようだが、小猫は体から力が抜けてへたり込んでいる様子だった

黒歌は小猫を横に寝かして言う

「とりあえず白音、ここで止めておいた方が良いわよ?他の女に感化されて、その体で発情期が来てしまったようだけれど、その体で子を宿せば母子で死ぬにゃん。どうしてもこの男の子供が欲しいなら――――。私みたいに発情期をコントロール出来る様になるまで待つべきにゃ。ねえ、リューくん。私の方がお得よ?」

〝黒歌みたいに成長すれば発情期を自在にコントロール出来るようになり、それまで子作りは待った方が良い〟

そう宣告され、理性を失いかけていた小猫の瞳に強いものが戻る

「……ダメッ!」

小猫は力の入らない体を必死に揺り動かし、黒歌から新を守るように抱き付く

「……先輩は、私の先輩です。姉さまには絶対にあげません!」

それは小猫の必死の叫びだった

土壇場で理性を取り戻し、強く意見を言い放った小猫を見た新は密(ひそ)かに口元を笑ました

その様子を見ていた黒歌はポカーンと呆気に取られた後、小さく笑んだ
「……ちょっと、そこの黒猫さん？」
突然第３者の声
振り返って見ると――そこにはレイヴェルがいた
「ありゃりゃ、フェニックス家のお嬢さんじゃないかにゃ」
レイヴェルはズカズカと黒歌に近付き物申す
「あなた、小猫さんのお姉さんだそうですね？小猫さんは今とても体調が優れませんわ。その子に何かをするのでしたら、クラスメートの私が許しませんわよ！それに新さまからも離れてください！」
レイヴェルに物申された黒歌は面食らったかの如く暫しキョトンとする
「白音の友達、かにゃ。ふーん。知らない間にこの子を心配する子が次々と増えるのね」
黒歌はレイヴェルの縦ロールを手のひらに乗せてバネを弾ませる様に触った後、「白音の友達に怒られちゃったにゃ♪」と言って舌を出した
着崩れた着物を直しつつ部屋を出ていこうとする
すれ違い様、黒歌はしゃがんで新の耳元で囁（ささや）く
「今の白音は不安定なだけにゃん。無理はさせないで欲しいの」
「――――っ」

優しい声でそれだけ言うと、黒歌はレイヴェルを除けて退室していく
「貴重な猫(ねこしょう)?、大事にしてもらわないと種族的に危機にゃん♪」
後ろでに手を振って去っていく黒歌
『あいつ、もしかして……本当は小猫を心配してたのか……?』
「小猫さん、大丈夫ですか?」
小猫の体調を気遣うレイヴェル
新は「どうしてここに?」とレイヴェルに尋ねると、彼女は頬を赤く染めて恥ずかしそうに答えた
「……そ、その、一応、クラスメートですから、毎晩小猫さんの様子を見に来ていただけですわ!まだ日本に慣れない私の面倒を見るのが小猫さんの役目ですもの!早く復調していただかないと私が困るんです!それだけです!」
素直じゃないが、彼女なりに小猫を心配していたようだ
「……2人ともゴメンなさい。先輩、私のせいで……」
申し訳無さそうに新とレイヴェルに謝る小猫
その時、新は小猫の顔色の変化に気付く
新は「ちょっとスマン」と先に断りを入れてから、手で小猫の頬に触れた
「小猫、体の調子はどうだ?」

新が訊くと小猫は自身の体の変化に気付き、額(ひたい)や腹に手を当てる
「……普通に戻ってます」
〝いつの間にか小猫の発情期が止まっている〟
だから、新が触れても小猫が興奮する様子は見受けられなかったのだ
「……何が起こりましたの？」
レイヴェルも怪訝な様子だったが、新は直ぐに理解した
さっき黒歌が興奮状態の小猫の首筋を指で突いた
その直後に小猫は倒れ込んでしまったのだが、今の様子を見る限り、あの時の黒歌の行動は何らかの術で小猫の発情期を止めたのだろう
姉心ゆえか単なる気まぐれか、真意までは分からない……
しかし、小猫の体が復調しそうなのは確かであり、同時に喜ばしい事でもある
『……レイヴェルと同じで素直じゃねぇな、黒歌も』
試験までの憂いが1つ取れた事に新は心から安堵した

中級悪魔昇格試験

試験日当日、新達は兵藤家の地下にある転移用の魔方陣に集結していた
駒王学園の制服に身を包み、試験に必要な物を入れた鞄も持っている
試験会場となる昇格試験センターに行くのは新、一誠、祐斗、朱乃、レイヴェルの５人
リアスやアザゼル、他の皆も冥界に付いてくるのだが、会場近くのホテルで待機する予定らしい
転移は手順はまず新達受験者が会場まで行き、その後でリアス達がホテルにジャンプ
グレモリー領にジャンプしてから、車か他の移動手段で向かうのかと思いきや、そうもいかないようだ
理由は新達の人気の高さもあるが、それ以上に新とリアスの関係が向こうではなかなかの注目度らしく、人目に付く場所に出るのは避けた方が良いとの事
サイラオーグとのレーティングゲーム中、大衆の面前で告白してしまったのだから無理も無い
マスコミが『身分を超えた真剣恋愛！』と一斉報道し、冥界の住民から注目されてい

た
それゆえに少しでも外に出るとマスコミに囲まれてしまう
リアスはグレモリーの姫君且つ魔王の妹
相手の新は闇皇(やみおう)で『ダークカイザー』、冥界で話題沸騰中の２人が急接近したとなればマスコミも黙ってないだろう
「純血であり、姫でもあって、魔王の妹であるリアスと、それの眷属下僕悪魔であり、闇皇(やみおう)でダークカイザーなお前とは身分違いの恋愛って事になる。貴族社会でそんなニュースが出てみろ。そりゃ挙(こぞ)ってお前達の様子を窺いたくもなるだろう？一般市民の女性の間じゃ、身分違いの恋がキャーキャー言われているようだぞ」
アザゼルはそう言っていたが、冥界ではどちらかと言うと応援ムードらしい
「お兄さまのもとにもマスコミが取材を申し込んできていて大変な事になっているそうですわ」
レイヴェルもそう言っていた
彼女の兄、ライザーはリアスの元婚約者
当時、破談の１件は上流階級の間で有名になっただけでマスコミもそこまで注目していなかった
しかし、今は違う

人気者になってしまった新達のもとに冥界のメディアは挙って集まってくるだろう
そう言う事も考慮して試験会場に直接転移と言う形になった
既にメディアは新達が試験を受けると言う情報を掴んで会場周辺に集まっているらしい
――と、ここで一誠がキョロキョロと辺りを見渡し、ギャスパーだけがいない事に気付く
「ギャスパーは見送りに来ていないのか」
「あいつなら一足早くここで転移して、冥界――グリゴリの神器（セイクリッド・ギア）研究機関に行ったよ」
「――っ。あいつ1人で、ですか？」
思ってもみなかった答えに驚く一誠
アザゼルは頷き、経緯を話す
「バアル戦が終わって直ぐにな。あいつ、泣きながら俺の所に来たんだよ」
『先輩達の様に強くなりたいんです！もう、守られるだけじゃ嫌です……！僕はグレモリー眷属の男子だから、情けない姿だけはもう嫌なんです……！』
ギャスパーはそう言ってアザゼルに懇願してきたらしい
「引きこもりの上に臆病だったあいつが、それだけの決心をして1人でグリゴリの門を

叩いたんだ。生半可な決断じゃないだろう。今頃、研究員指導のもと、自分の神器（セイクリッドギア）と向き合い始めた筈だ」

知らない間に基礎トレーニングだけじゃなく、自分の能力にも向き合う決意を固めていた

堕天使の研究施設にまで行く程に切羽詰まっていたのだろう

ギャスパーの事はひとまずグリゴリに任せるとして、新の視線がオーフィス、『初代クイーン』、黒歌達に向く

「アザゼル、こいつらはどうするんだ？」

「俺達と共にホテル行きだ。さすがに会場まではマズいだろう。それにな。お前らの試験が終わったら、１度サーゼクスのもとにオーフィスと『初代クイーン』を連れていくつもりだ。良い機会だからな。オーフィスと『初代クイーン』もお前らが行くなら付いていくと言っている。だから、お前達も試験が終わったら、その足でサーゼクスの所に行くぞ」

アザゼルは既に先の事まで計画しているようだ

「オーフィスと『初代クイーン』をサーゼクス様に会わせる。――それには大きな意味があるんだな？」

「ああ、少しでも良い方向に向かわせたいからな。無理だと思われていた話し合いが可

能かもしれない。大きな1歩だ。『初代クイーン』はこの提案に友好的だが、オーフィスは何を考えているか分からない。だからこそ、戦いを避けられるかもしれない。上手くいけば敵の組織自体を瓦解させ、分散出来るだろう。そうすれば各個撃破も可能となる。――――オーフィスの『蛇』を失えば、奴らの打倒も予想以上に早まるだろうさ。この案件を申し出てきたヴァーリに感謝したいところだ」

「あいつもあいつで何を考えているんでしょうか。わざわざオーフィスをこちらにけしかけてくるなんて」

一誠の言葉にアザゼルは目を細めて呟く

「……オーフィスを隠そうとしたのかもな。――――脅威から」

気になる台詞を吐いたアザゼル

確かにテロリストの親玉ゆえに狙われるのは当然だが、オーフィスは最強の存在だから下手に手は出せない

しかし、ヴァーリは〝その脅威〟からオーフィスを隠そうとした

見当も付かないが、それはまた試験の後で考える事に

先に新、一誠、祐斗、朱乃、レイヴェルで試験会場へ転移しようとした時だった

「待って」

リアスが新達を引き留める

新のもとに来ると――頬にキスをした
「おまじないよ。新、必ず合格出来るって信じているわ」
「……最高のおまじないを貰っちまったな。合格したら、デートしようか」
「うん、デートしましょう。――約束よ。私、待ってるから」
リアスは満面の笑みを見せてデートの誘いに答えた
「……ったく、人前でイチャイチャしやがって……若いって良いね！」
アザゼルは面白くなさそうに嘆息し、新達は一時の別れを告げて転移の光に包まれていった

光が止むとそこは何処かの広いフロアだった
「ようこそ、お出でくださいました。リアス・グレモリー様のご眷属の方々ですね？話は伺(うかが)っております。一応の確認を出来る物をご呈示(ていじ)ください」
正装をしたスタッフが新達に確認を求めてきた
新達は推薦状と紋様の入った印を見せる
推薦状と印を確認したスタッフに「こちらにどうぞ」と案内され、石造りの廊下を進

む

「ここはグラシャラボラス領にある中級悪魔の昇格試験センターなんだよ」

「戦術家でもあるファルビウム・アスモデウスに倣ってここに中級悪魔の昇格試験センターを造ったそうです」

祐斗と朱乃が歩きながらコッソリと教えてくる

「どちらかと言うと術式に精通したアジュカ・ベルゼブブさまのアスタロト家の領地に試験センターがあるイメージだな」

「アスタロトの領地にも試験センターはあるよ。冥界の各地に昇格試験センターはあるけど、冥界でその筋1番の権威と言えば本来アスタロトで行われる昇格試験だろうね。何せ上流階級の悪魔が通う名門と呼ばれる学校もある程さ。部長もアスタロト領の学校か、魔王領にある学校かで迷ったそうだからね。結局、魔王領の学校にしたそうだけど」

「ふーん、そうなのか。じゃあ、なぜ今回はグラシャラボラス領に?」

「ただ、先日の1件でアスタロト家の権威は失墜してしまったからさ……」

小声でそう漏らす祐斗

やはりディオドラ・アスタロトの1件が尾を引いているようだ……

奴のせいでアスタロト家は危機的状況になった

術式プログラムの第一人者たるアジュカ・ベルゼブブの影響もあって、最悪の事態だけは避けられたが……他の冥界住民や貴族からの目が厳しくなり、アスタロト家の現当主は解任、次期魔王の輩出権利も失ってしまった

更にはアスタロト家と懇意にしている名門ヴァサーゴ家も非難や侮蔑が飛び火してしまい、両家の評判はすこぶる悪くなってしまった……

スタッフに連れて行かれて辿り着いたのは受付らしき場所

窓口がいくつか開かれており、受験者達が受付のスタッフと話していた

「そこの受付で必要事項に記入の上、受験票を受け取ってください。それが終わりましたら、そのまま上階の受験会場に向かってくださって結構です。試験は第一部が筆記、第二部が実技です。お持ちのレポートも筆記試験の前に担当の試験官に提出してください。では、私はこれで。良い結果を」

それだけ言って去っていくスタッフ

レイヴェルは「記入する書類を持ってきますわ」と言うや否や、パタパタと走っていった

「……あんま受験者いないようだな」

「そりゃね。昇格試験に臨める悪魔なんて、今の冥界では少ない方だよ。上級悪魔の試験センターなんてもっと空いているんじゃないかな」

祐斗はそう答える
現在は戦も無いから、悪魔稼業やレーティングゲームで活躍しない限り昇格出来るものではない
特に前者が難しく、後者が主流だ
「イッセーくん、新くん、試験の開始前に1つ」
祐斗が新と一誠の前に立ち、真剣な表情を浮かべる
「どうした？改まって」
「キミ達と出会えて良かった」
「……キモい事を平然と言うようになったな、お前」
一誠が嫌そうな顔で言い、祐斗も半笑いする
「ハハハ、でも、キミ達がいなければ僕は昇格なんて出来なかったと思うよ」
「そうか？お前、充分強いじゃないか。昇格なんて遅かれ早かれだっただろう」
「いや、僕はキミ達の生き様――戦いを見たからこそ、今ここに立っている。僕に無いものをキミ達は見せてくれた。それを知らなかったら、僕はここにいないよ」
一誠は頬を掻きながら息を吐く
「よく分かんねぇや。イケメンの考える事なんざ、俺には理解不能だ。――ただ、一緒に合格しようぜ？俺達、グレモリー眷属の男子だもんな。だろ？ダチ公」

「勿論。どうせならこのまま最上級悪魔まで目指そう。僕も目標が出来たんだ。――――最強の『騎士（ナイト）』になる。キミ達と並べる存在になりたいからね」
祐斗が２人に握手を求め、それに応じて新と一誠は笑った
「ああ、分かりやすくて良いぜ」
「何千年の付き合いになるか分からないけど、冥界に轟く男になろうぜ」
３人の重なった手に朱乃も手を重ねてきた
「うふふ、熱い友情ですわね。――――皆で必ず合格しましょう」
「皆さん、書類を取ってきましたわ！あちらのスペースで記入しましょう！」
レイヴェルに先導され、新達は受付用の書類に必要事項を記入していった

「頑張ってきてください！ここでお待ちしておりますわ」
２階に続く階段でレイヴェルと一時の別れを告げ、新達は上階へ上がっていく
悪魔文字で『中級悪魔昇格試験・筆記試験会場』と書かれた立て札が見え、教室内に入る
皆それぞれ受験票が書かれた番号の席に座っていく

新が「００９」、朱乃が「０１０」、祐斗が「０１１」、そして一誠が「０１２」
４人が並んで席に着くと――――周囲の受験者からヒソヒソと声が聞こえてくる
「……あれって、グレモリー眷属の？聖魔剣（せいまけん）と赤龍帝（せきりゅうてい）、雷光の巫女に闇皇（やみおう）……」
「あのサイラオーグ・バアルを倒した『おっぱいドラゴン』と『ダークカイザー』か！」
「魔王さまからの昇格推薦の噂は本当だったんだな……」
「だから外にカメラを持った奴が何人もいたのか……」
嬉し恥ずかしの内容だが、中にはこんな会話も飛んでくる
「知ってるか？あのダークカイザーなんだが……実は滅びた竜の一族の末裔らしい」
「おお、噂で聞いたぞ！その昔、四大魔王によって封印された一族だとか！」
「闇皇（やみおう）の力に加えて竜の一族の末裔か……もはや次元の違いすら感じるな」
「だが、そんな危険な一族の末裔だと冥界政府が放っておかないのでは……？」
やはりサイラオーグ戦で新の正体は露見しているようだ
不安を感じさせる話もチラホラ聞こえてくるが、今となっては仕方無い
そうこうしてる内に受験者が集まり、試験会場は昇格試験に臨む悪魔で席が埋まっていく
元人間の悪魔に加え、獣人（じゅうじん）らしき者や妖怪、魔物系の悪魔もいる
数は新達を含めて４０人前後

その後に試験官が入室し、試験官の先導のもとにレポートを提出していく
筆記用具を机の上に出し、試験用紙が配られる
「時間です。開始してください」
開始の声と同時に受験者は試験用紙を表に返し、テストを始めた

「あー、あの問題とか卑怯だよなー。んだよ、『レヴィアたん』の第1クールの敵幹部の名前とかさ……」
「こちとら必死に詰め込んできたってのに……あのふざけた問題出た瞬間、机をひっくり返してやろうかと思ったぜ……」
センター内の食堂にて、新と一誠はテーブルに突っ伏して愚痴をこぼしていた
悪魔についての基礎問題などは概ね解いたが、社会学の項目でセラフォルー・レヴィアタンが製作している魔女っ子番組『マジカル？レヴィアたん』についての問題が出てきてしまい、両者は呆気に取られた
更には『おっぱいドラゴン』や『ダークカイザー』についての問題まで出てくる始末……

「冥界は真面目なのかふざけてんのかイマイチ分からん……」
「新さま、お茶のおかわりをいただいてまいりましたわ」
レイヴェルがお茶のおかわりを差し出すと、新はゴクゴクとそれを飲み干す
「サンキュー、レイヴェル。お前のお陰で筆記試験は何とか壊滅せずに済んだ」
「と、当然ですわ！私がマネージャーをしているのですから、合格してもらわないと困りますわ！」
相変わらずのツンツンぶりにクスッと笑う新
次は実技試験、センター内の屋上で行われる
体をほぐす祐斗と「チョー得意分野だ！」と意気込む一誠
新はその様子を見て一誠の肩をポンッと叩く
「一誠、あまり力を入れ過ぎない方が良いぞ」
「え？でも、せっかくの試験だし。俺的に1番点数が取れる――――」
「生真面目過ぎんだよ。……ったく、お前がそうしたいなら別に良いんだけどな」
新達4人は再びレイヴェルと別れて、ジャージに着替えて屋内会場に向かった
広い体育館の様な場所で、受験者がそれぞれ動きやすい服装で準備運動をしていた
新達も各自ストレッチを開始、その後に試験官が集まってくる
受験番号のバッジが付けられ、試験官の1人が説明を始めた

「実技試験は至ってシンプルです。受験者の皆さんで戦闘をしてもらいます。この後、皆さんに抽選してもらい、それによって戦う相手を決めてもらいます。戦闘は総合的な戦闘力などを見るので、相手に負けたとしても合格の目が無くなる訳ではありません。勿論、勝利をしてもらった方が得点は高いです。しかし、戦闘の中身も見ますので、心技体、規定を満たしていればそれ相応の点数を得られます。出来るだけ良い試合をするようにしてください！ルールは簡単です。持てる力で相手と戦ってください。武器の使用は原則的に許可しております。相手を死亡させた場合は失格となりますが、事故による死亡は我々試験官による審議によって是非が決まります。事故死による項目はお手元の参考資料を参照してください。次に――――」

『要は殺さない程度の力量で戦えって事か』

ある程度ルールを把握した新

一方、一誠は〝戦闘の中身〟と言う事に頭を悩ませていた

基本的にゴリ押しの殴り合いしかしてなかったので、こう言った戦闘はどう行(おこな)えば良いのか見当が付かない様子……

そんな事態でも試験官の補足説明がされる

「なお、『兵士(ポーン)』の方は試験センター特例のプロモーション承認カードが発行されておりますので、試合中にプロモーションが出来ます」

「へー、センター特例の承認カードなんてあるんだな」
「アジュカ・ベルゼブブさまはプロモーション用の特例カードをこう言う所に発行していると聞くよ。勿論、ベルゼブブさまでなければその特例カードを作成も出来ないし、ましてやコピーなんて無理と言われる程の代物だけどね」
祐斗がそう説明する
つまり、アジュカ・ベルゼブブ本人でなければ、そう言った類(たぐい)の物を生み出す事は出来ない
「実技試験のルールも基本相手を殺さないように戦えば良いみたいですね。中級悪魔の試験は上級悪魔のと違って、戦術――タクティクス試験が無いので案外シンプルですわね」
朱乃の台詞から上級悪魔の試験には戦術面の試験があるらしい
『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』を得て眷属を作るのだから、それを上手く導く為の能力があるか試験で確認するようだ
試験官の説明も終わり、ここからは抽選
箱の中に手を突っ込み、番号の振られた玉を取る
新の引いた玉は『1』、一誠は『4』
2人とも序盤の試合になるようだ

ちなみに祐斗は『２６』、朱乃は『３２』
全員分かれたお陰で同属対決は避けられた
「試合は二組ずつ行われます！まずは『１』の方と『２』の方、そして『３』の方と『４』の方の試合になります！」
早くも新と一誠の試合順番が回ってきた
祐斗と朱乃から応援を貰いつつ、新と一誠はそれぞれのバトルフィールドに向かっていく
一誠は緊張した状態でいるが……新は慣れている為に緊張は一切無し
そうこうしてる内にそれぞれの相手となる悪魔がフィールドに現れる
一誠の相手は中肉中背の男性、新の相手は５メートルクラスの魔物系だ
「どちらも準備は大丈夫ですね？」
確認した後に試験官の手が上げられ、下ろされた
「始めてください！」
開始と同時に新は闇皇と化し、相手の魔物系悪魔は口から巨大な火炎を吐き出した
飛んでくる火炎を拳で霧散させ、その場を駆け出して蹴りを食らわせる新
相手は魔力で防御魔方陣を展開したが、魔方陣ごと新の蹴りで吹き飛ばされ――会場の壁を突き破っていった

スタッと着地した直後、一誠の方も相手の悪魔を拳打で吹き飛ばしていた
試験官が吹っ飛んでいった相手のもとに向かい、試合を見ていた他の受験者の声が聞こえてくる
「……じょ、冗談じゃない！なんてパワーだ！」
「なるほど、一般的な下級悪魔のレベルを遥かに超越してますね」
「対戦者は不幸と言うしかない。バケモノじゃないか……ッ」
「……パワーだけなら、上級悪魔の上クラスじゃないのか……？」
「これが悪神ロキ、サイラオーグ・バアルを倒した赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の力か……」
――などと言う声が届き、空いた壁の穴から試験官が戻ってきた
それぞれの試験官が首を横に振り、確認した担当の試験官が高らかに告げた
『1』番、竜崎新選手の勝利です！」
「『4』番、兵藤一誠選手の勝利です！」
あっという間に終えてしまった実技試験
新は軽く首を鳴らし、一誠は難なく勝ち取った勝利にポカーンとしていた

打ち上げと強化プラン

　実技試験を終えた新達は連絡用の魔法陣をレイヴェルに展開してもらい、アザゼルに事後報告をする
「せ、先生！実技なんですけど……！」
『おー、どうした。こっちはホテルのレストランで貸し切りの昼酒中だ』
「また昼酒ですか⁉じゃなくて、実技の試験なんですけどね！あ、あの、俺も新も木場も朱乃さんも問題無いと言うか、むしろ俺達……」
『圧倒的、だったろう？』
　にやけるアザゼルの言葉に一誠は頷き、アザゼルは嘆息する
『当然だ。お前らは下級悪魔の中では異例の強さを誇るからな。そこに試験に行くのは強くても中級悪魔の上クラス相当だぞ？で、お前らの実力はと言うと、上級悪魔クラスだ。特にイッセーはトリアイナや真「女王（クイーン）」形態、新もリュオーガ族の力を発揮すればそれ以上のクラスと比べても遜色が無い。まあ、それはサイラオーグも一緒か』
「……知りませんでした。俺――俺達、そんなに強くなっていたんですね」
　試験は新と一誠を始め、祐斗も朱乃も圧倒的な力で勝利を収めた

一誠の場合はやり過ぎてしまったのが申し訳無い程に
アザゼルや新が〝本気を出すな〟と言ったのは――――他の受験者と力の差が生じているからだ
下手をすれば相手の受験者を殺していたかもしれない……
一誠は試験に落ちたくない気持ちと相手に油断しない事で頭がいっぱい且つ気合が入り過ぎていた
『お前らが相手にしてきたのは伝説級がゴロゴロのヴァーリチーム、北欧の悪神ロキと最悪の魔物フェンリル、最強の神滅具（ロンギヌス）「黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）」、全魔族の天敵とも言える闇人（やみびと）、それに四大魔王を追い詰めたリュオーガ族だぞ？そいつらと戦って全員生きて帰ってくるなんざ、正気の沙汰じゃない。異常だって言われて当然のレベルだ。少なくともグレモリー眷属ではお前と木場、朱乃、ゼノヴィア、ロスヴァイセは上級悪魔クラスの実力を持つ猛者揃いだ。その中でも新は一際飛び抜けている。最上級悪魔クラス1歩手前ってところか。仙術の使い方を覚えてきた小猫も直に上級悪魔に匹敵する力になるだろうな』
新達は修羅場を潜り過ぎたゆえに一般的な中級悪魔の実力を大きく超えていた
自分達はとんでもなく強くなっていたんだと改めて実感する
『よくもまあ、これだけのメンツと巡り合ったよ、リアスは。新、お前がここまで強く

なったのもリアスのお陰だろ』
「ああ、リアスは……最高の女だ」
『おい、リアス。新が「リアスは最高の女だ」だってよ』
　アザゼルがいやらしい声音でリアスに話しかける
「おい、クソ堕天使。なに煽ってんだ」
『ははっ！リアスの奴、お前のそれを聞いて真っ赤っかだぞ！ったく、お熱いこって！クソ！涙が出てきやがる！俺、独り身を極めっかな、ちくしょうッ！』
　アザゼルの煽りに舌打ちする新
　アザゼルは気を取り直して話を続ける
『ま、リアスには丁度言ってはいたんだよ。リアス自身が猛トレーニングをして強くなる事も無いってな』
「リアスがトレーニング？……レグルスとの戦いを引きずってるのか」
『お前の惚れた女が持つ1番の武器は巡り合わせの良さだ。グレモリー眷属の豊富さは他の上級悪魔が持つ眷属の比じゃない。ライザーの野郎も言ってた事らしいな。こいつばかりは教えて得られるものじゃない。そいつが生まれながらにして持ってるものが必要だ。そう言うのは今後も続くもんさ。俺的にはさっきも言った生存率の高さを評価したい。修羅場を全員体験して生存するなんざ、奇跡を通り越してイカレてるレベ

ルだ』
「奇跡を超えたレベル、か……」
『何はともあれ試験は終わったんだろう？センターの転移魔方陣でこっちのホテルまで移動してこい。合否はまだだが、こっちで打ち上げをしよう』
アザゼルとの連絡が終わり、一誠は息を吐いた

「てなわけで、試験お疲れさん。乾杯」
アザゼルがそう言うと注がれた酒を飲む
新達はホテルに移動し、貸し切りのレストランで試験後の疲れを労ってもらっていた
レストランには一旦離れているギャスパーとロスヴァイセ以外のメンバーが揃っており、皆レストランの料理に舌鼓を打っている
新も運ばれてきた料理を口に運び、グラスの酒を飲んでいく
横に座るリアスから「どうだった？」と問われる
「ああ、筆記試験は何とかなった。実技も問題無い。強いて言えば一誠がやり過ぎたぐらいか」

「壊してしまった壁の修理代はこちらで払っておくから、気にしなくて良いわ。けれど、今後他の中級悪魔と出会ってイザコザに発展したとしても、いきなり本気で殴りかかってはダメよ？あなた達は現時点でかなりの強さなのだから」

「――だそうだ、一誠。反省しろ」

「いや、俺だけのせいにするなよ！反省するけど……」

新とリアスから注意される一誠に、彼の中にいるドライグがクククッと笑う

『お前の場合、天龍の俺を宿しているだけで常軌を逸しているのに、目標としているライバルが歴代最強の白龍皇（はくりゅうこう）だからな。最初から目標があまりに高過ぎた。その上でそれを目指して力を発揮させていったのだから、知らずの内に他の悪魔をごぼう抜きなんて当然の事だろう。夏の終わりには主であるリアス・グレモリーも超えてしまったではないか。あの女も決して弱いわけではないぞ。――赤龍帝（せきりゅうてい）の成長率が凄まじかっただけだ』

「それでも歴代と比べると成長が遅い方なんだろう？」

『確かに遅い。――が、今までに無い異例の成長を見せているお前を他の赤龍帝（せきりゅうてい）と比べるのもな。未だ成長の頂上が見えないのが恐ろしい程だよ。……まあ、その成長の要因が乳なわけだが……はぁ……』

ドライグがまた深い溜め息を吐く

そんなやり取りに肩を竦めていると、新の視界に微笑ましい一場面が映り込む
「ほら、小猫さん。これとこれとこれを食べた方がよろしいですわ」
「……別に取ってもらわなくても自分で食べられる」
「私だって好きでお世話しているわけではありません。あなたが元気にならないと新さまも心配しますので」
「……分かった。食べる。……ありがとう」
「いいえ、こちらこそ。元気になってもらわないと張り合いがありませんもの」
――と言うレイヴェルと小猫のやり取り
口喧嘩してる割には打ち解け合ってきているようだ
「……我、じーっとドライグを見る」
レストランの隅で一誠をジッと見つめるオーフィス
モグモグとパスタ料理を口に運んでいた
更にもう1人、同じ様な行動を取っている人物がいる……
「私もジ～ッと見ますっ」
「……」
新がチラチラと気にしているその先には――『初代クイーン』マヤがいた
爛々とした目で新を凝視してくるので、新は落ち着かない様子

「……食いづらいんだけど」
「いえいえ、お気になさらず。……そのお肉がとっても美味しそうと思ってるだけです」
「視線は料理に行ってたんかい！おかわりあるから自分のを食え！」
相変わらずマイペースな『初代クイーン』マヤに振り回されっぱなしだった……
黒歌やルフェイ、ダイアン達もレストランの隅でデザートを食べている
フェンリルは姿を見せていないようだが、ルフェイの影の中に潜んでいるらしい
黒歌ははぐれ悪魔であり冥界では指名手配の為、猫耳と尻尾をしまい、服装もルフェイと同室のローブを着込んでいた
サングラスも着けており、更に『気』の質も変えているようなので余程の事が無ければバレないらしい
その術はルフェイやオーフィスにもかけているので、彼女達も怪しまれない
彼女達が神出鬼没なのはこの様に上手く忍び込める能力に長けているからだ
今まで捕まらなかったのも合点がいく
酔ったアザゼルが新、一誠、祐斗の3人に言う
「イッセー、新、木場、お前ら3人はグレモリー眷属でも破格だな」
「破格……ですか」
「とんでもない可能性を持った若手悪魔って事だよ。イッセーは才能こそ無いものの、

赤龍帝(せきりゅうてい)を宿す者。歴代所有者とは違う方向から力を高め、遂に『覇龍(ジャガーノート・ドライブ)』とは真逆の能力に目覚めた。木場は後付けに得たものがあったとはいえ、それでも才能が抜きん出ている。禁手(バランス・ブレイカー)を2つも目覚めさせるなんて信じられない程の才だ。新に至っては戦闘経験豊富な現役のバウンティハンター、更にはリュオーガ族の血と闇皇(やみおう)、悪魔と3つの異なる力を調和させている。しかも3人とも未だ発展途上中ときた。……お前ら、リアスがプロデビューする前に最上級悪魔になるんじゃないか？」

祐斗が遠慮がちに言う

「僕は恵まれています。すぐ近くに天龍――――赤龍帝(せきりゅうてい)のイッセーくんと闇皇(やみおう)の新くんがいますから。練習相手として、これ以上の相手はいません。しかも未だ成長途上の中。彼らと模擬で戦っているだけで光栄ですね」

「笑顔で恥ずかしい事を言うな！……ったく、俺もテクニックタイプの天才のお前が相手だから修行がはかどるよ。俺の弱点はテクニックタイプだからさ」

一誠がそう言った直後、アザゼルが首を横に振った

「いや、お前にはもう1つ大きな弱点がある。と言うよりも露呈された。強力なトリアイナと真『女王(クイーン)』、その弱点はずばりスタミナだ。どちらも使用するには体力とオーラの消耗が激し過ぎる。イッセー、現状で真『女王(クイーン)』の使用時間はどれ程だ？」

「……正直、力が安定しなさ過ぎて攻撃1回で状態が解除される事もあります。制御が

あまりに難し過ぎるんです」
そう、一誠の真『女王』はあまりに制御が難しい
本人曰く、真『女王』の力の安定にはトリアイナ状態での能力向上が必須
パワー出力と防御力を高めたいのなら、トリアイナの『戦車』を使い続けて慣れていくしかない
同じく速度ならトリアイナの『騎士』、砲撃ならトリアイナの『僧侶』
それぞれの駒を成長させる事が真『女王』の力を上げる根底となる
「トリアイナでそれぞれの駒の力に慣れていき、同時に高めていくしかないです。真『女王』は各駒の総括版みたいなものだから」
激しいスタミナ消耗の解消
一誠にとっての1番の課題となるのだが、アザゼルはそれを拭い去る様な事を言う
「力の安定が可能になったとしても直ぐには消耗の根本的な解決にはならないかもしれないな。心身に深刻な影響を与えない為に発現した新しい力だが、とにかく消耗するものが凄まじい。命を削らず、生命的な危険が無い分、体力やオーラを余計に食うんだろうな」
命に関わる代償が無いからこその大きな消耗……
それが『覇龍』以外の選択を突き進んだ一誠の力の答えなのだろう

――――とはいえ、死ぬまで暴れ続ける『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』よりは遥かにマシかもしれない

そこで新が〝ある疑問〟をアザゼルに訊ねた

「そう言えば、サイラオーグが持つ自律した神滅具（ロンギヌス）――――レグルスか。あれも『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』の様な事が出来るのか？確か強力な魔物やドラゴンが封印された神器（セイクリッド・ギア）はその類（たぐい）の事が出来るって言ってたよな？」

「システム上は可能だな。『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』や魔物封印系神器（セイクリッド・ギア）だと覇の獣と書いて『覇獣（ブレイクダウン・ザ・ビースト）』だ。天龍の『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』の方が強力だがな。あれは特異だ。まあ、これらは凶悪だから使用可能になったとしても使わない方が良い。『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』みたいに生命力を神器（セイクリッド・ギア）に吸われて、大暴れした挙げ句に死ぬだろうさ」

同格の力だけに使いづら過ぎるようだ……

「神滅具（ロンギヌス）の事は同盟した今、発見次第三大勢力のトップ陣に知らされる事になっているんですよね？でも、先生はあの獅子がサイラオーグさんの所にいる事を知らなかった。それってバアル側の同盟違反では？」

一誠の疑問だった

確かに『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』は悪魔サイドに属する事になるので、魔王のサーゼクスやアザゼルに報告が入っている筈

しかし、アザゼルがその神滅具（ロンギヌス）の正体を知ったのはサイラオーグとのゲームの時だっ

た

サイラオーグが故意に隠したとは思えない

その事についてアザゼルは息を吐いて言う

「サーゼクスすら知らなかったようだからな。どうにも大王派の連中がサイラオーグに『兵士（ポーン）』の正体を隠すよう打診していたようでな。サイラオーグは魔王に報告すべきだと訴えたようだが、次期当主ともなると現当主によって行動を縛られる部分も出てくる。その上、大王派はゲームでも徹底的に隠すべきだと主張してな。出したとしても正体を晒すな、と」

「でも、最後に出てきて正体を晒しましたよね」

「さすがにサイラオーグも黙っているのが我慢の限界だったらしくてな、使える場面があれば使う気だったようだ。あの終盤戦（エンドゲーム）を誰も予想なんて出来なかっただろうが、それでもああいう形で晒されたわけだ。お陰で現在、大王派は魔王派の連中に相当追及されているようだぜ？グリゴリと天界も同盟関係上、一応の文句を悪魔サイドに発信したけどな」

裏で大王派の上役連中はサイラオーグにレグルスを出さない様に言っていた

だが、真っ正面から本気でぶつかりたかったサイラオーグは獅子を出す事を躊躇（ためら）わなかった

現悪魔の派閥は予想以上に泥沼化しているようだ

一誠はレグルスの話からもう1つ、思い出した事を言う

「……先生、『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』の『覇輝（トゥルース・イデア）』って言うのは？それも『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』や『覇獣（ブレイクダウン・ザ・ビースト）』みたいな現象なんですか？あれにも魔物が封印されている？」

「……あの槍にはな、魔物が封印されているわけじゃないんだ。あれに封印されているのは『聖書に記されし神』の遺志みたいなもんさ。――『神』と言う存在を殺せる槍。始まりの神滅具（ロンギヌス）。それを『聖書に記されし神』は現世に遺した。しかも人間だけの能力――神器（セイクリッド・ギア）としてだ。それが何の為かは俺の組織でも意見が割れているところだな。自分が消滅しても信徒の布教が進められる様に他の神話体系の神々を殺す為の侵略兵器を作ったとか、逆に信徒のもとに襲い掛かってくるかもしれない他勢力の神々に対抗させる為の防衛手段だとか、単に偶然作り出されたとか、説は様々だ。天界でも結論は出ないって話だな。どちらにしてもあの聖槍（せいそう）の後に他の強力な神器（セイクリッド・ギア）が発見されて、神滅具（ロンギヌス）ってものが定義されていったわけだ」

「始まりの神滅具（ロンギヌス）、か……」

「今世に限っては各神滅具（ロンギヌス）の状態が前例の無い変化を見せている。――13種以外の神滅具（ロンギヌス）、14種め、15種めが偶然発現されてもおかしくない流れだ」

〝新しい神滅具（ロンギヌス）が生まれるかもしれない〟

ただでさえ凶悪な位置にある神器（セイクリッド・ギア）が増えていくとなると、畏怖せざるを得ない……

味方として現れてくれれば幸（さいわ）いだが、敵として現れれば脅威に他ならない

「……」

一誠の近くに座るアーシアが何やら考え事をしている様子だった

食事もあまり摂らず、ジュースを延々と少しずつ飲んでいた

一誠が話し掛けると、アーシアは静かに言う

「……私も神器（セイクリッド・ギア）についてもう少し深く知ろうかなって思いまして」

「回復を……強化するって事？」

一誠がそう訊くとアーシアは頷いた

「ギャスパーくんも神器（セイクリッド・ギア）を深く知ろうとアザゼル先生の研究施設に向かったと言いますし、私も次、そこにお世話になろうかなと思ったんです」

バアル戦、リュオーガ族戦以降、グレモリー眷属の皆が自分の能力に更に向き合い始め、奥手のギャスパーですら自らを鍛える為にグリゴリへ向かった

アーシアの回復能力は遠近両方でも凄まじいサポートを発揮するのだが、それでもアーシアはその事に満足出来ていない様子だった

「先生、２つお訊きします。『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』は禁手（バランス・ブレイカー）になる事が可能なのかと言う事

と、私も禁（バランス・ブレイカー）手になれるのか、それが知りたいです」

アーシアの質問を聞き、アザゼルは酒を一口飲んだ後に口を開いた

「1つめの質問だが、ある。『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』にも禁（バランス・ブレイカー）手の状態が予測されている。2つめの質問もＹＥＳだ。いろんなイレギュラーな現象を起こしている赤龍帝イッセーの傍にいれば、修行――努力次第で至れるだろうし、亜種の禁（バランス・ブレイカー）手になる事もセンス次第で可能だろう。――だがな、アーシア。お前の能力は既に完成の域に達しているんだよ」

アザゼルの言葉にアーシアは若干訝（いぶか）しげな様子となる

「それはどういう事なのでしょうか？」

「言葉の通りだ。お前の回復能力は既に極めて高くてな。見ての通り、お前の能力でイッセー達は何度も危険な場面を抜け出ている。アーシアは神器（セイクリッド・ギア）能力を既に引き出しきっていると言って良い。他の『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』所有者と比べても回復能力の高さ、回復の速度、どれを取っても一級品だ。遠距離での回復も平均値を超えたものを叩き出している。仮に禁（バランス・ブレイカー）手になったとしてもそれらのスケールアップのものになるだろうな」

アザゼルの言う通り、アーシアの能力は現時点でも相当なもの

アーシアを狙われない限りは安心して戦闘が出来る

傷を負っても、アーシアの回復を受ければ直ぐに戦線復帰が出来るのを実感している
アザゼルから絶賛され、強くなりたい思いとは裏腹の複雑な表情をアーシアは浮かべていた
そのアーシアにアザゼルは話を続ける
「アーシア、お前は眷属の要だ。回復要員は貴重であり重要。グレモリー眷属――――否、ここにいるメンバーでの戦闘で1番大事なのはお前だ。それは他のメンバーからも聞いて分かっているだろうし、お前自身も自覚しているな？」
アザゼルの言葉にアーシアは頷いた
「では、お前の弱点は分かるか？」
「……回復以外でお役に立てないと言う事でしょうか？」
「いや、少し違うな。お前は回復に専念すべきだ。他の事はイッセー達に任せれば良い。だが、お前は狙われる。回復を潰せばそれだけでこっちが大打撃だからだ。そうなるとお前を守護する為にアタッカーか、後衛が守備に回らないといけなくなる。それは陣形が乱れ、戦闘のテンポが途切れる事に繋がるだろう」
「つまり、アーシアの弱点は自衛の手段が無い事、か」
「新の指摘通りだ。だからこそ、お前が今後伸ばすべきは自分を守る能力を得る事。……そうだな、お前には結界系か、幻術系、または召喚の魔力、魔法が合うかもしれん。

壁となる魔物と契約して召喚すればお前の守備にイッセー達が回らなくても済む。リアス、アーシアは気難しい『蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）』と契約を結んでいるんだろう？」

「ええ、アーシアの使い魔になっているわ」

『蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）』とはアーシアが使い魔の森でゲットした上位ドラゴンの子供

兵藤家でよくアーシアと遊んでいるらしい

「案外、魔物を使役する能力が高いかもしれないな。盲点だった。伝説級の魔物と出会って片っ端から契約を持ち掛けてみるのはどうだろうか？意外にもすんなりいくんじゃないか？壁役となる魔物と言うと――――」

アザゼルは楽しそうにアーシアの能力強化をブツブツと模索し始めた

しかし、アーシアが自力で壁役を召喚すると言う方法は大いに役立つ

バアル戦での最後の団体戦、あそこでアーシアを出せなかったのはアーシアを守る余裕が無いと踏んだからだ

回復役のアーシアは確実に狙われるため、死守しながらの攻防は余裕が無い上にリスクが高過ぎる

ここへ来て眷属全員の強化プランが纏まってきているようだ

新と一誠も負けていられないと決意を固めたその時――――違和感が襲ってきた

全身をヌルリとした嫌な感覚が包み込んでいく

この場の空気が一瞬で変化し、同じ風景なのに全く違う場所に転移したかの様な錯覚を覚える……

アザゼルも同じものを感じたのか、顔を険しくして目線をレストラン内に配らせた

黒歌が新達に近付き、猫耳と尻尾を出してピクピクと耳を動かしている

服装もいつもの着物に戻し、皮肉げな笑みを浮かべていた

「ありゃりゃ、ヴァーリは撒かれたようにゃ。――本命がこっちに来ちゃうなんてね」

黒歌が意味深な事を言った刹那――見覚えのある霧が新達の周囲に立ち込めて、辺りを包み込んでいった

『龍喰者』サマエル

ホテル内のレストランを飛び出していく新達
建物内の人気(ひとけ)が一切無くなっている
京都で2度も体験した〝あの霧〟と全く同一の現象……
新の隣に位置したゼノヴィアが叫ぶ
「新、これはまさか！」
「ああ、ゼノヴィア。こいつは間違い無くあの霧――――『絶霧(ディメンション・ロスト)』ってヤツだ」
思い当たる霧使いの人物を脳裏に過(よぎ)らせ、レストランから広いロビーに到着すると――
――近くに備えられた黒いソファーに堂々と座る2人の男の姿が見えた
刹那、そこから球状の火炎が飛び込んでくる
狙いはアーシアとイリナ
しかし、その火炎は2人に衝突したなかった
何故なら――――オーフィスとマヤが2人の壁になって火炎を難なく打ち消したからだ
「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして♪」
アーシアの礼に笑顔で返すマヤ、対してオーフィスは無反応
ソファーに視線を戻す
見覚えのある学生服にローブを羽織った青年と――――同じく学生服の上から漢服を着た黒髪の青年が新達を見据えていた
漢服の青年は座ったまま槍で肩を軽く叩くと新達に向けて言う
「やあ、久しいな、赤龍帝（せきりゅうてい）、闇皇（やみおう）、それにアザゼル総督。京都以来だ。いきなりの挨拶をさせてもらった。先日のデュランダルのお返しだ」
「やっぱりテメェらか」
「……曹操（そうそう）っ！」
新は曹操を睨み付け、一誠がその男の名を叫ぶ
『禍の団（カオス・ブリゲード）』英雄派のリーダーにして最強の神滅具（ロンギヌス）を持つ男――――曹操
京都で襲撃してきた主犯格、新と一誠が負わせた目の傷は綺麗さっぱり無くなっていた
失明してもおかしくない傷の完治に新は警戒心を強め、曹操は拍手する
「この間のバアル戦、良い試合だったじゃないか。禁手（バランス・ブレイカー）の鎧を纏った者同士、そして呪われたドラゴンの力を解放した者との壮絶な殴り合い。戦闘が好きな者からすれ

ば聞いただけで達してしまいそうな戦いだ。改めて賛辞の言葉を送ろう、グレモリー眷属。若手悪魔ナンバーワン、おめでとう。良い眷属だな、リアス・グレモリー。恐ろしい限りだ」
「テロリストの幹部に褒めてもらえるなんて、光栄なのかしら？複雑なところね。ごきげんよう、曹操」
　リアスは最大に警戒しながらも皮肉げな笑みを見せる
「ああ、ごきげんよう。京都での出会いは少ししかなかったから、これが本当の初めましてかな。あの時は突然の召喚で驚いたが。いやー、なかなかに刺激的だった」
「言わないで！……思い出しただけでも恥ずかしいのだから！」
　曹操の言葉にリアスは手を前に出して「やめて！」と最大限に強調
　とんでもない召喚法で京都に呼び出されたのだから無理も無い
　その発生源は新と一誠……2人は互いに顔を見合わせて苦笑していた
「それで、またこんなフィールドを別空間に作ってまで俺達を転移させた理由は何だ？どうせろくでもない事なんだろう？」
　アザゼルがそう訊くと曹操は視線を新達の後方に向けた
　視線の先にいたのはオーフィス
「やあ、オーフィス。ヴァーリと何処かに出掛けたと思ったら、こっちにいるとは。少々

虚を突かれたよ」
　オーフィスの前に黒歌が立つ
「にゃはは、こっちも驚いたにゃ。てっきりヴァーリの方に向かったと思ったんだけどねー」
「あっちには別動隊を送った。今頃それらとやり合っているんじゃないかな」
　両者の意味深な会話内容を怪訝に思っていると、ルフェイが笑顔で挙手
　コホンと咳払いすると、嬉々として説明を始め、それと同時に彼女の陰からフェンリルが現れて曹操達を鋭く睨み出した
「えーとですね。事の発端は2つありました。1つはオーフィスさまが赤龍帝『おっぱいドラゴン』さんに大変ご興味をお持ちだった事。それを知ったヴァーリさまが独自のルートで『おっぱいドラゴン』さんとの出会いの場を提供されました」
　1つめの発端とやらを話したルフェイは1本だけ出していた指を2本にする
「2つめ、オーフィスさまを陰で付け狙う方がいると言う情報をヴァーリさまが得たので、確証を得る為、いぶり出す事にしたのです。運が良ければオーフィスさまを囮役にして私達のチームの障害となる方々とも直接対決が出来る――――と。……えーとつまりですね」
　遠慮がちにルフェイが曹操達に指を突きつけた

「そちらの方々がオーフィスさまと私達を狙っているので、ヴァーリさまがオーフィスさまをアジトからお連れして動けばそちらも動くでしょうから、狙ってきたところを一気にお片付けしようとしたのです。ただ、オーフィスさまを危険に晒す事も無いので、美猴(びこう)さまが変化された偽のオーフィスさまをヴァーリさまがお連れして、本物のオーフィスさまは『おっぱいドラゴン』さんのお家にお連れしたのです」

ルフェイの言葉を聞いて一誠は曹操、オーフィス、アザゼルへと視線を配り、新は驚きながらも事態の真相を察知した

〝オーフィスを狙っている脅威とは――曹操達の事だった〟

驚愕しているグレモリー眷属達を尻目に、曹操は頷きながら槍で肩を叩く

「ま、ヴァーリの事だから、オーフィスをただ連れ回すわけもないと踏んでいた。どうせ俺達と相対する為にオーフィスを囮にするんだろう――と。だが、ヴァーリの事だ。オーフィスを無闇に囮にする筈も無いと思った。オーフィスが今世野赤龍帝と白龍皇の変異に興味を抱いているのも知っていたものだから、もしやと思って二手に分かれて奇襲をかける事にした。一方はヴァーリを追う。そして俺とゲオルクは赤龍帝側に探りを入れる。――案の定、こちらにオーフィスがいたと来た。それで、この様な形でご対面を果たす事にしたんだよ」

つまり、ヴァーリが本物のオーフィスを危険に晒す事無く偽のオーフィスを囮にして

曹操を誘(おび)き出そうとしたが――曹操はヴァーリの行動に疑念を抱き、グレモリー側にオーフィスがいるかもしれないと予測して自ら赴(みずか)いたと言う事だ
　オーフィスが静かに口を開く
「曹操、我を狙う？」
「ああ、オーフィス。俺達にはオーフィスが必要だが、今のあなたは必要ではないと判断した」
「分からない。けど、我、曹操には負けない」
「そうだろうな。あなたはあまりに強すぎる。正直、正面からやったらどうなるか。――でも、ちょっとやってみるか」
　曹操は立ち上がると聖槍(せいそう)を器用に回し、槍の先端が開かれてまばゆいばかりの光の刃が現れる
　それと同時に曹操の姿が消え、次に現れた時は曹操の槍がオーフィスの腹部を深々と貫いていた
　予備動作無しに致命傷の一撃……曹操は槍を持つ手に力を込めて叫ぶ
「――輝け、神を滅ぼす槍よっ！」
　突き刺したと同時に膨大な閃光が槍から溢れ出していく
「これはマズいにゃ。ルフェイ」

黒歌がそう言うと、ルフェイと共に何かをボソボソと呟き――――新達の周囲に闇の霧が発生する
「光を大きく軽減する闇の霧です。かなりの濃さなので霧をあまり吸い込まないでくださいね！体に毒ですから！でもこれぐらいしないと聖槍の光は軽減出来ません！」
「しかも私とルフェイの二重にゃ」
ルフェイと黒歌がそう説明した瞬間、聖槍から発生する膨大な光の奔流がホテル内に広がっていく
暗い霧の中でも聖槍が放つ光は凄まじく、霧が無ければ攻撃の余波で致命傷とも言えるダメージを受けていただろう
聖槍の光が止んで闇の霧も消え去り、腹部に槍を刺されたままのオーフィスの姿がハッキリと浮かぶ
しかし、オーフィスの腹部から鮮血が溢れるどころか……顔が苦痛に歪む事すら無かった
曹操はゆっくりと槍を引き抜き、オーフィスの腹部は血すら噴き出さずに穴が空いているだけだった
その穴も何事も無かったかの如く塞がり、曹操が呆れ顔で言う
「悪魔なら瞬殺の攻撃。それ以外の相手でも余裕で消し飛ぶ程の力の込めようだったん

だが……。この槍が弱点となる神仏なら力の半分を奪う程だった。見たか、赤龍帝、闇皇？これがオーフィスだ。最強の神滅具（ロンギヌス）でも致命傷を負わす事が出来ない。ダメージは通っている。――――が、無限の存在を削るにはこの槍を持ってしても届かないと言う事だ」

オーフィスその物が無限ゆえに、聖槍でどんなに攻撃しても無意味に終わる

これが無限を司（つかさど）るドラゴン――――オーフィス

曹操が更に話を続ける

「攻撃をした俺に反撃もしてこない。理由は簡単だ。――――いつでも俺を殺せるから。だから、こんな事をしてもやろうともしない。グレートレッド以外、興味が無いんだよ。基本的にな。グレートレッドを抜かした全勢力の中で五指に入るであろう強者――――1番がオーフィスであり、2番目との間には別次元とも言える程の差が生じている。無限の体現者とはこう言う事だ」

ここで1つの疑問が生じる

〝なら、こいつらはその無限をどうするつもりなんだ？〟

倒すにしても無理がある上に、今の口ぶりから曹操自身も勝てないと公言しているようなものだった

疑問が尽きない新達の視界にまばゆい光が映り込む

黒歌とルフェイの足下に転移型魔法陣が発生しており、黒歌が笑みながら言った
「にゃはは、余興をしてくれている間に繋がったにゃ。――――いくよ、ルフェイ。そろそろあいつを呼んでやらにゃーダメっしょ♪」
魔法陣の中心にフェンリルが位置すると、魔法陣の輝きは一層強くなり弾けていく
光が止んだ時、そこにフェンリルの姿は無く、代わりに1人の男が出現していた
ダークカラーが強い銀髪に碧眼(へきがん)の男――――ヴァーリ
「ご苦労だった、黒歌、ルフェイ。――――面と向かって会うのは久しいな、曹操」
ヴァーリと対峙する曹操は彼の登場に苦笑する
「ヴァーリ、これまた驚きの召喚だ」
ルフェイが魔法の杖で宙に円を描きながら言う
「フェンリルちゃんとの入れ替わりによる転移法でヴァーリさまをここに呼び寄せました」
「フェンリルには俺の代わりにあちらにいる美猴達と共に英雄派の別動隊と戦ってもらう事にした。曹操がこちらに赴く事は予想出来たからな。保険は付けておいた。――――さて、お前との決着をつけようか。しかし、ゲオルクと2人だけとは剛胆な英雄だな」
ヴァーリの物言いに対し、曹操が不敵に笑む
「剛胆と言うよりも俺とゲオルクだけで充分と踏んだだけだよ、ヴァーリ」

「強気なものだな、曹操。例の『龍喰者』なる者を奥の手に有していると言う事か？英雄派が作り出した、龍殺しに特化した神器所有者か、新たな神滅具所有者と言ったところだろう？」

ヴァーリの言葉に曹操は首を横に振る

「違う。違うんだよ、ヴァーリ。『龍喰者』とは現存する存在に俺達が付けたコードネームみたいなもの。作った訳じゃない。既に作られていた。――『聖書に記されし神』が、あれを」

それを聞いたローブの青年――ゲオルクが言葉を発する

「曹操、良いのか？」

「ああ、頃合いだ、ゲオルク。ヴァーリもいる、オーフィスもいる、赤龍帝もいる、闇皇もいる。無限の龍神に二天龍、そして呪われた竜の血を継ぐ者。これ以上無い組み合わせじゃないか。――呼ぼう。地獄の釜の蓋を開ける時だ」

「了解だ。――無限を食う時が来たか」

口の端を吊り上げたゲオルクが後方――広いロビー全体に巨大な魔法陣を出現させた

それと同時にホテル全体を激しい揺れが襲い、ドス黒く禍々しいオーラが発生していく

ゾッとする程の寒気、魔法陣から嘗(かつ)て無い程のプレッシャーが放たれる
『……これは、この気配は。ドラゴンにだけ向けられた圧倒的なまでの悪意……っ！』
一誠の籠手に宿るドライグも何かを感じたのか、声が震えていた
新も背中から嫌な汗が噴き出し、震えを必死に抑えようとする
禍々しい魔法陣から巨大な何かが徐々に姿を現していく
十字架に磔(はりつけ)にされ、全身に拘束具が付けられており、その拘束具に不気味な文字が浮かんでいた
目元にも拘束具があり、隙間から血涙が流れている
下半身は蛇や東洋のドラゴンに似た長細い姿、上半身は堕天使
両手や黒い羽、尻尾など、全身のあらゆる箇所に太い釘が打ち込まれていた
その姿はまるで罪を犯した罪人の様だった……
『オオオオ

！」

曹操が1歩前に出て詩を詠む様に口ずさむ

「――曰く、『神の毒』。――曰く、『神の悪意』。エデンにいた者に知恵の実を食わせた禁忌の存在。今は亡き聖書の神の呪いが未だ渦巻く原初の罪――。『龍喰者』、サマエル。蛇とドラゴンを嫌った神の呪いを一身に受けた天使であり、ドラゴンだ。そう、存在を抹消されたドラゴン――」

拘束具を付けられた堕天使ドラゴン――サマエルの名を聞いて、新と一誠以外の誰もが驚愕していた

「……先生、何ですか、あれ……。俺でもヤバいって見ただけでも分かるんですけど」

「アダムとイブの話を知っているか？」

「え、ええ、それぐらいは」

「蛇に化け、アダムとイブに知恵の実を食わせる様に仕向けたのがあれだ。それが『聖書に記されし神』の怒りに触れてな。神は極度の蛇――ドラゴン嫌いになった。教会の書物の数々でドラゴンが悪として描かれた由縁だよ。奴はドラゴンを憎悪した神の悪意、毒、呪いと言うものをその身に全て受けた存在だ。神聖である筈の神の悪意は本来あり得ない。ゆえにそれだけの猛毒。ドラゴン以外にも影響が出る上、ドラゴンを絶滅しかねない理由から、コキュートスの深奥に封じられていた筈だ。あいつにかけられた

神の呪いは究極の龍殺(ドラゴン・スレイヤー)し。それだけにこいつの存在自体が凶悪な龍殺(ドラゴン・スレイヤー)しなんだよ……ッ！」

もはや説明だけで相当危険な代物だと言う事が理解出来る……

究極の龍殺(ドラゴン・スレイヤー)しとも言われるサマエルの登場にアザゼルが怒号を発する

「冥界の下層――――冥府を司るオリュンポスの神ハーデスは何を考えてやがる……？――――ッ！ま、まさか……っ！」

アザゼルの得心に曹操が笑んだ

「そう、ハーデス殿と交渉してね。何重もの制限を設けた上で彼の召喚を許可してもらったのさ」

「……野郎！ゼウスが各勢力との協力態勢に入ったのがそんなに気にくわなかったのかよッ！」

アザゼルが憎々しげに吐き捨てた

話から察するに、どうやらハーデスが英雄派に手を貸したようだ

冥府神ハーデスは確かに悪魔や堕天使を嫌っていたが、これは明らかに他勢力との間に混乱を招く所業である

曹操は聖槍を回して矛先を新達に向けた

「と言うわけで、アザゼル殿、ヴァーリ、赤龍帝、闇皇、彼の持つ呪いはドラゴンを食ら

い殺す。彼はドラゴンだけは確実に殺せるからだ。龍殺(ドラゴン・スレイヤー)しの聖剣など比ではない。比べるに値(あたい)しない程だ。アスカロンは彼に比べたら爪楊枝だよ」

「それを使ってどうするつもりだ⁉ドラゴンを絶滅させる気か⁉……いや、お前ら……オーフィスを……？」

アザゼルの問いに曹操は口の端を愉快そうに吊り上げた

そして指を鳴らし「――喰らえ」と一言だけ告げる

その刹那、新達の横を何かが高速で通り過ぎていき――バグンッ！と何かを飲み込む奇怪な音が発せられた

振り返ると――オーフィスがいた場所に黒い塊が生まれていた

黒い塊には触手のような物が伸びており、それはサマエルの口元に繋がっていた

――サマエルがオーフィスを飲み込んだ――

あまりにも突然の事に当惑するが、英雄派のやる事はまともじゃないのは理解した

「おい、オーフィス！返事しろ！」

一誠が黒い塊に話し掛けるが返事は無し

「祐斗！斬って！」

リアスの指示で祐斗が手元に聖魔剣(せいまけん)を創り出し、黒い塊に斬りかかった

しかし、黒い塊は聖魔剣を飲み込み、刃先を消失させる

「……聖魔剣を消した?この黒い塊は攻撃をそのまま消し去るのか?」
祐斗はもう1本創り、今度はサマエルに繋がる触手――舌を斬ろうとするが……先程と同じ結果になるだけだった
『Ｈａｌｆ（ハーフ）　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ（ディメンション）!』
ヴァーリが背中から光翼――『白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）』を出現させ、音声と共に周囲を歪ませていく
あらゆる物を半分にする半減能力だが、黒い塊とサマエルには全く効果が無かった
次にヴァーリは手元から魔力の波動を撃ち込むが――それも黒い塊に飲み込まれてしまう
「なら、消滅魔力で!」
リアスが消滅魔力を放つが、それすらも意に介さなかった
ゴクンゴクンと不気味な音が鳴り、触手が盛り上がってサマエルの口元に運ばれていく
まるで黒い塊の中にいるオーフィスから何かを吸い取っている様だった
「それなら、禁手（バランス・ブレイカー）の力で!」
一誠は素早く禁手（バランス・ブレイカー）の鎧を身に纏い、通常の『女王（クイーン）』に昇格
オーフィスを包み込む黒い塊に殴りかかろうとした時、アザゼルが強く止めてくる

「イッセー！絶対に相手をするな！お前にとって究極の天敵だ！ヴァーリや新どころじゃないぞ！あれはお前らドラゴンを簡単に屠(ほふ)れる力を持っている筈だ！それにこの塊はどうやら俺達の攻撃を無効にする力を持っているらしい！て言うかな、オーフィスでも中から脱出できない時点で相当にヤバい状況になってんだよ！相手はドラゴンだが、アスカロンは使うな！最凶の龍殺(ドラゴン・スレイヤー)し相手じゃ何が起こるか分からん！」

「……あのサマエルってヤツには文字通り手も足も出せないって事かよ……クソッ！」

「そんな事言ったって、オーフィスが奴らに捕らえられたら大変な事になるんでしょう⁉」

毒づく新と叫ぶ一誠の横でゼノヴィアが素早く飛び出し、デュランダルをサマエルの方に振り放った

絶大な聖剣の波動がサマエルに向かっていくが、それを曹操の聖槍が横薙ぎに振り払う

「またキミは開幕から良い攻撃をしてくれるな、デュランダルのゼノヴィア。だが、2度はいかないさ」

「絶妙なタイミングで放ったつもりだが……私の開幕デュランダルは分かりやすいのか？」

「京都でもやったから警戒されたんだろ。つーか、ゼノヴィア。お前は不意討ち大好き

娘か？」
新が思わずツッコミを入れていると、ヴァーリが白い閃光を放って鎧姿となる
「相手はサマエルか。その上、上位神滅具（ロンギヌス）所有者が2人、不足は無い」
ヴァーリの一言に黒歌とルフェイも戦闘の構えを取り、新も闇皇へと変異
他のメンバーも戦闘態勢に入り、アザゼルもファーブニルの黄金の鎧を身に纏った
黒い塊と舌に攻撃が通じないなら、サマエル本体に直接攻撃するしかない
とにかく、曹操達にオーフィスを奪われるのは絶対に阻止しなければならない
「レイヴェル、お前は1番後方に下がってろ。大事なマネージャーを死なせるわけにはいかない」
新の頼みにレイヴェルはコクリと頷き、後方に下がった
フェニックス婦人にレイヴェルを任せられた以上、何があろうとも彼女に危害を及ぼすわけにはいかない
無論、自分達が死ぬつもりも、誰も死なせるつもりも無い
新達の戦闘態勢を見て、曹操が狂喜に彩（いろど）られた笑みを浮かべた
「このメンツだとさすがに俺も力を出さないと危ないな。何せハーデスからは1度しかサマエルの使用を許可してもらえてないんだ。ここで決めないと俺達の計画は頓挫する。ゲオルク！サマエルの制御を頼む。俺はこいつらの相手をしよう」

「1人で二天龍と闇皇、堕天使総督、グレモリー眷属を相手に出来るか？」
「やってみるよ。これぐらい出来なければ、この槍を持つ資格なんて無いにも等しい」
その直後、曹操の槍がまばゆい閃光を放った――――
「――――禁手化（バランス・ブレイク）」

天輪聖王

力のある言葉を発した曹操の体に変化が訪れる

神々しく輝く後光輪が背後に出現し、曹操を囲む様にボウリング球程の大きさの球体が７つ――――宙に浮かんで出現した

未だ嘗て無い程シンプルで静かな禁手化（バランス・ブレイク）……

「これが俺の『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』の禁手化（バランス・ブレイカー）、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍（ポーラーナイト・ロンギヌス・チャクラヴァルティン）』――――まだ未完成だけどね」

曹操の状態を見て、アザゼルが叫ぶ

「――――ッ！亜種か！『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』の今までの所有者が発現した禁手（バランス・ブレイカー）は『真冥白夜の聖槍（トゥルー・ロンギヌス・ゲッターズ・ルング）』だった！名称から察するに自分は転輪聖王とでも言いたいのか⁉くそったれめが！あの７つの球体は俺にも分からん！」

「俺の場合は転輪聖王の『転』を敢えて『天』として発現させた。そっちの方がカッコイイだろう？」

「天を目指すから〝天輪聖王〟ってか？嫌味なカッコつけ方だぜ……」

ヴァーリが新と一誠の隣に並んで言う

「気を付けろよ。あの禁手（バランス・ブレイカー）は『七宝（しっぽう）』と呼ばれる力を有していて、神器（セイクリッド・ギア）としての能力が7つある。あの球体1つ1つに能力が付加されているわけだ」

その一言に新と一誠は仰天する

「なっ、7つだと⁉」

「2つとか3つとかじゃなくてか⁉」

「ああ、7つだ。それのどれもが凶悪だ。と言っても俺が知っているのは3つだけだが。だから称されるわけだ。最強の神滅具（ロンギヌス）と。紛れもなく、奴は純粋な人間の中で1番強い男だ。……そう、人間の中で」

ヴァーリにここまで言わせる程の聖槍使い……

奴の体から放たれる重圧自体はサマエル程ではないにしろ、油断は一切禁物

新と一誠は京都で曹操に追い詰められたのだから

それも〝通常状態〟の聖槍で……

曹操が空いている手を前に突き出すと――――球体の1つが呼応して曹操の手の前に出ていく

「七宝が1つ――――輪宝（チャッカラタナ）」

小さく呟いた後、球体が消え去り――――ガシャンッ！と何かが派手に壊れる音がロビーに響いた

音のした方に振り返れば――ゼノヴィアのエクス・デュランダルが破壊されていた
「……ッッ！エクス・デュランダルが……ッ！」
突然の事になす術も無くデュランダルが破壊され、制御機能としての鞘となっていたエクスカリバーの部分も四散する
誰もが反応出来ず、エクス・デュランダルの破壊に呆気に取られた
「――まずは1つ、輪宝（チャッカラタナ）の能力は武器破壊。これに逆らえるのは相当な手練れのみだ」
曹操が不敵に一言漏らした次の瞬間――ゼノヴィアの体から鮮血が噴き出ていく……
「ごぶっ」
腹部に穴を開けられたゼノヴィアは口から血を吐き出し、その場にくず折れていく
どう見ても致命傷だった
「ついでに輪宝（チャッカラタナ）を槍状に形態変化させて腹を貫いた。今のが見えなかったとしたら、キミでは俺には勝てないな、デュランダル使い」
曹操の一言を聞いて全員がその場から散開した
「ゼノヴィアの回復急いで！アーシア！」
リアスが直ぐに反応してアーシアに回復の指示を出す

アーシアは呆然と倒れ込むゼノヴィアを眺めていたが、直ぐに我を取り戻してゼノヴィアに駆け寄った
「ゼノヴィアさんッッ！いやぁぁぁぁぁぁっ！」
アーシアは泣き叫びながらゼノヴィアの回復を始める
新はキッと曹操を睨み付け、剣を取り出して飛び出す
一誠も祐斗と共に怒りに包まれながら飛びかかった
「テメェェェェッ！」
「曹操オオオオオオッ！」
「許さないよッ！」
新、一誠、祐斗は同時攻撃を仕掛けるが、曹操は聖槍で軽々とさばき――――再び球体の１つを手元に寄せた
「――――女宝（イッティラタナ）」
その球体が３人の横を高速で通り過ぎ、リアスと朱乃のもとに飛んでいった
リアスと朱乃は反応してその球体に攻撃を加えようとするが――――
「弾けろッ！」
曹操の言葉に反応して球体が輝きを発し、リアスと朱乃を包み込む
「くっ！」

「こんなものでっ！」
２人がまばゆい光に包まれながらも攻撃をしようとする
しかし、リアスも朱乃も手を突きだしたまま何も起こらない
自分の手元を怪訝に窺い、もう一度球体に攻撃を加えようと手を突きだすが……やはり何も起こらない
「女（イッティラタナ）宝は異能を持つ女性の力を一定時間、完全に封じる。これも相当な手練れでもない限りは無効化出来ない。――これで３人」
『女の力を封じる⁉リアスと朱乃でも完封されたって事は――アーシアの回復を封じられたらアウトじゃねぇかッ！』
あまりにも強い『七宝』の力に新は兜の中で歯軋りをする
曹操は高笑い、その表情は完全に戦いを楽しんでいるものだった
「ふふふ、この限られた空間でキミ達を全員倒す――。派手な攻撃はサマエルの繊細な操作に悪影響を与えるからな。出来るだけ最小の動きだけで、サマエルとゲオルクを死守しながら俺１人で突破する！なんとも最高難度のミッションだッ！だが――」
黒歌とルフェイが手に魔力、魔法の光を煌（きら）めかせて、ゲオルクとサマエルの方に突き出していた
防御が薄い彼らに攻撃を加えるつもりだが、そこにも曹操の球体が１つ向かう

「ちょっざいにゃん！」
黒歌がもう一方の手を突き出して迎撃しようとする
「――――馬宝（アッサラタナ）、任意の相手を転移させる」
『転移だと？……まさか！』
曹操の発言と同時に黒歌とルフェイの姿がその場から消え去り、違う場所に出現する
球体の能力を察した新と一誠の目にとんでもない光景が映り込む
手を突き出したままの黒歌とルフェイ
彼女達の手の先がゼノヴィアを回復させるアーシアに向けられていた
攻撃は元々サマエルとゲオルクに向けられていたものだったが、強制転移の影響で矛先が変わっていた
手に灯った攻撃の火は急に止める事など出来ず――――
「ふざけるなよオオオオッ！『龍星の騎士（ウェルシュ・ソニックブースト・ナイト）』ッ！」
『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ）　Ｓｔａｒ（スター）　Ｓｏｎｉｃ（ソニック）!!!』
一誠は瞬時に体内の駒を切り替え、装甲をパージした高速仕様の鎧でアーシアのもとに飛び出していく
高速でアーシアの前に到着し、彼女の壁となる一誠
アーシアはゼノヴィアの治療に夢中で反応すら出来ていなかった

薄い装甲では矛先を変えられた黒歌とルフェイの魔法攻撃に耐えられはしないだろう

それでも一誠は命を賭けてアーシアを守る――――

けたたましい轟音と共に2人の魔法攻撃が容赦無く炸裂

衝撃と激痛が一誠の全身を駆け巡った

薄い装甲の鎧はものの見事に魔法攻撃で破壊され、一誠は大量の血を吐き出す

胸から腹部にかけて黒焦げとなり、肉が弾け飛び、鮮血が溢れ出していく

一誠がくず折れる中で曹操は嘲笑するかの様な笑みを見せた

「赤龍帝、キミの力はもう知っている。バアル戦では不安定で強力な能力にも目覚めたようだが――――。やりようなんていくらでもあるさ。トリアイナのコンボは強力だ。だが、一瞬だけ内の駒を変更するところにタイムラグがある。それを踏襲した攻撃方法で攻めれば俺なら潰せるんだ。――――攻略法が確立すれば数手でキミを詰められるよ」

曹操はトリアイナの特性と一誠の弱点を完璧に把握していた

無防備なアーシアに想定外の攻撃が加われば、そこに一誠が向かうのは明らかだ

そして、高速で動けるトリアイナ版『騎士（ナイト）』の弱点は紙耐久とも言える薄い装甲

それを認識した上で魔法攻撃の強力な黒歌とルフェイを強制転移でアーシアの前に出現させた

そこに一誠が飛び込んでくるのを計算して――――
1度しか見ていないにもかかわらず、一誠の技を全て把握しきっている……
まるで相手にならないとばかりに実力の差を見せつけられた
「イッセーさんッ！」
アーシアが致命傷を受けた一誠に気付き、回復のオーラを飛ばそうとする
しかし、一誠はゼノヴィアの治療を優先させた
「来るなッ！アーシアッ！……俺はまだ良い。先にゼノヴィアを治療しろ……」
「でも！イッセーさん、お腹が……ッ！」
倒れる一誠を見て新は更に怒りのボルテージを上昇させ、鎧を着込んだアザゼルとヴァーリが飛び出す
「ヴァーリィィィッ！俺に合わせろッ！」
「まったく、俺は単独でやりたいところなんだがな……ッ！」
両者は瞬時に曹操との距離を詰め、アザゼルは光の槍、ヴァーリは魔力のこもった拳を同時に撃ち込んでいく
「堕天使の総督と白龍皇の競演！これを御す事が出来れば俺は更に高みを目指せるなッ！」
嬉々としてその状況を受け入れる曹操

アザゼルとヴァーリが撃ち込んでくる高速の攻撃を軽々と避けていく
新はその様子を見て驚愕せざるを得なかった
「あいつ、本当に人間なのか……ッ⁉」
「力の権化たる鎧装着型の禁手（バランス・ブレイカー）は莫大なパワーアップを果たすが――――、パワーアップが過剰すぎて鎧からオーラが迸（ほとばし）り過ぎる！その結果、オーラの流れに注視すれば、次に何処から攻撃が来るか容易に把握しやすいッ！ほら、手にしている得物や拳に攻撃力を高める為、オーラが集中するからねッ！」
曹操が避けながらそう告げてきた
鎧装着型の弱点の指摘に新も攻撃の手を躊躇（ためら）う
確かに自分や一誠の攻撃方法は殆どがオーラを集中させた拳や蹴り、剣の類（たぐい）
曹操の的確な分析力に舌打ちをする新
アザゼルとヴァーリの攻撃を避けきる曹操の右目が金色の輝きを放つ
「邪視（イーヴィル・アイ）と言うものをご存知かな⁉そう、眼に宿る特別な力の事だ！俺もそれを移植してね！赤龍帝と闇皇にやられ失ったものをそれで補っている！俺の新しい眼だ！」
２人の攻撃を避けきった曹操が目線を下に向けた刹那、アザゼルの足下が石化していく
「――――メデューサの眼かッ！」

眼の正体に気付いたアザゼルが舌打ちをした
メデューサとは毛髪が蛇になっており、見た者を石にしてしまう女性型のモンスター
曹操はその眼を移植していたのだ
七宝の能力に聖槍、更には石化の邪視（イーヴィル・アイ）……曹操はもはやチートの塊と化していた
ドズンッ！
鈍い音と共にアザゼルの腹部に聖槍が突き刺さった
黄金の鎧は難なく破壊され、鮮血が迸る
「……ぐはっ！……何だ、こいつのバカげた強さは……ッ！」
アザゼルは口から大量の血を吐き出し、くず折れていく
曹操は聖槍を引き抜きながら言った
「いえ、あなたとは1度戦いましたから、対処は出来てました。――その人工神器（セイクリッド・ギア）の弱点はファーブニルの力をあなたに合わせて反映出来ていない点です」
「アザゼルッッ！おのれ、曹操ォォォォォォッ！」
「両親にバケモノとされて捨てられたキミを唯一拾って力の使い方を教えたのがアザゼル総督だったかなっ⁉育ての恩人をやられて激怒したか！」
ヴァーリが魔力の一撃を繰り出すが――そこにも球体の1つが飛来していく
「――珠宝（マニラタナ）、襲い掛かってくる攻撃を他者に受け流す。ヴァーリ、キミの魔力は強大

だ。当たれば俺でも死ぬ。防御も厳しい。――だが、受け流す術ならある」
ヴァーリの魔力は球体の前方に生まれた黒い渦に吸い込まれていった
全てを吸い取った渦は消失し、小猫の前方に新しい渦が発生する
「――しまった！小猫ォッ！」
曹操の説明に気付いた新は小猫に向かって叫ぶが、急な不意打ちを避ける暇など無かった
発生した渦からヴァーリの魔力が放たれ――
「バカ、なんで避けないの！白音ッ！」
黒歌が悲鳴を上げて小猫の前に立ち、盾となる
爆音がロビー内を駆け巡り、小猫の目の前で黒歌は曹操に受け流された魔力の一撃をまともに食らってしまった
血を噴き出し、煙を上げて倒れていく黒歌
小猫が直ぐ様その体を抱き留めた
「……な、なに、ちんたらしてんのよ……」
消えそうな声音で黒歌はそう言い、小猫が首を横に振って叫ぶ
「……ね、姉さまッ！」
「曹操――、俺の手で俺の仲間をやってくれたな……ッ！」

怒りのオーラを全身に滾(たぎ)らせるヴァーリ
ここまで激昂したのは初めてだろう
「ヴァーリ、キミは仲間想い過ぎる。まるでそこに無様に転がる赤龍帝のようだ。――二天龍はいつそんなにヤワくなった？それと、俺の七宝のいくつかを見た事のあるキミが、能力が把握しづらいのは分かっているよ。――キミに見せていない七宝でわざわざ攻撃しているからな。良かったな？これで七宝の全てを知っているのはキミだけになったぞ」
「では、こちらも見せようかッ！我、目覚めるは、覇の理(ことわり)に全てを奪われし――」
ヴァーリは『覇龍(ジャガーノート・ドライブ)』の呪文を唱え出したが、それを察した曹操がゲオルクに叫ぶ
「ゲオルクッ！『覇龍(ジャガーノート・ドライブ)』はこの疑似空間を壊しかねない！」
「分かっている――。サマエルよ！」
ゲオルクが手を突き出して魔法陣を展開させると、それに反応してサマエルの右手の拘束具が解き放たれた
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ』
不気味な声を発しながらサマエルの右手がヴァーリに向けられ、空気を震撼させる音と同時にヴァーリが黒い塊に包み込まれた

『オオオオオオオッオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ』
サマエルが吼えると黒い塊が勢い良く弾け飛び、四散した塊の中からヴァーリが解放される
しかし、彼の鎧は塊と共に弾け飛んでいき、体中からも大量の血が飛び散っていく
「……ゴハッ！」
ヴァーリはロビーの床に倒れ込んでしまった
白龍皇ヴァーリがなす術も無くやられた……
床に倒れるヴァーリを見下ろし、曹操は息を吐いた
「どうだ、ヴァーリ？神の毒の味は？ドラゴンにはたまらない味だろう？ここで『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』になって暴れられてはサマエルの制御に支障をきたすだろうから、これで勘弁してもらおうか。俺は弱っちい人間風情だから、弱点攻撃しか出来ないんだ。――――悪いな、ヴァーリ」
「……曹操……ッ！」
「あのオーフィスですら、サマエルの前では何も出来ないじゃないか。サマエルだけがオーフィスにとっての天敵だった。俺達の読みは当たってたって事だ」
曹操は肩を槍で軽く叩きながらそう言う
オーフィスを包む黒い塊は未だにオーフィスから何かを吸い上げていた

「……曹操ッ！」
新が憤怒の声音を吐き出して1歩前に出る
曹操は不敵な笑みを見せた
「お、ようやくキミが出てくるか、闇皇。キミの正体を知った時はさすがに驚いたよ。――リュオーガ族、古代の竜の一族を創造したドラゴンの欠片から生まれたキミはまさに規格外だ。バアル戦でもその力の片鱗を見せてもらった。実を言うと、この中でキミが1番の障害になるんじゃないかと踏んでるよ。ただ……キミもとっくに気付いているんだろ？その竜の力を振る舞えない事に」
曹操の指摘は図星だった
確かに竜の力を解放すれば格段にパワーアップを果たすが……それはサマエルの格好の餌食になりやすい
オーフィスを閉じ込め、ヴァーリですら簡単に屠(ほふ)れる力を持つサマエルを前に――新はリュオーガ族の力を振る舞う事など出来なかった
頭に血が上り過ぎるのを抑え、何か有効な手段は無いかと模索する
暫(しばら)くして……新は1つの賭けに出た
「……成功確率は五分五分――仮に成功してもダメージは必至か。かなり危険だが……やってやる……！とにかく一撃でも入れねぇと収まりがつかねぇんだよッ！」

「ハハハ、何か良い手でも見つかったか？来なよ！」
相変わらず嬉々として挑戦を受け入れる曹操
新はまず幾重もの斬撃を曹操に撃ち放った
曹操は全ての斬撃を軽々と躱したり、聖槍で切り払っていく
その最中に新は剣に魔力を流し込み、足下に闇を生み出す
新の得意技――『暗黒捕食者（ダークグリード）』だ
足下に生み出された闇が新を沈めていく
その様子を怪訝そうに眺める曹操
新の体が完全に闇の中へ消えた――次の瞬間、闇は幾重にも分散して曹操の周囲を取り囲んでいく
眼を凝らして闇を見据える曹操に1つの斬撃が飛来する
闇の1つから飛んできた斬撃を寸前で避けるが、次々と闇から魔力の塊や斬撃が飛び交ってくる
「なるほど、そう来たか。四方八方に張り巡らせた闇から攻撃を仕掛ければ、オーラの流れを読みにくいと。だが、それでも戦法がまだ荒いな！出てくる瞬間、微量ながらもオーラは感じ取れるんだよ。仲間をやられ、怒りに燃えていれば尚更だ！」
結局のところ、この攻撃も曹操には通用せず全て避けられていた

それでも新は姿を見せず、執拗に闇からの攻撃を続ける
いつまでも攻撃が当たらない事に痺れを切らしたのか、前方の闇から剣を握った籠手が飛び出してくる
オーラが集まった剣戟は直ぐに気取られ、聖槍で容易に防がれてしまった
だが、曹操の表情が一変する
その顔は不意を突かれ、呆然としているようだった
何故なら、前方の闇から出てきたのは――剣と籠手のみだったからだ
まさにその一瞬、曹操の左側に位置する闇から新が姿を現し、〝籠手を取り外した生身の右拳〟を曹操の顔面に打ち込んだ！
小気味良い音と共に頬を打ち抜かれ、視界が歪む曹操だったが――殴られながらも反応して聖槍を繰り出した
聖槍の刃先が新の鎧ごと脇腹を抉り、血が噴出する
「ぐ……ッ！」
激痛によって新の動きが一瞬止まり、曹操が聖槍の柄の部分で新を突き飛ばす
新は血を撒き散らしながら転がり、曹操は首をコキコキと鳴らす
「今のは良い攻撃だった。オーラを残留させた剣と籠手を囮に使い、オーラを纏ってない生身の攻撃なら俺に届くと踏んだわけだ。さすがは戦闘のプロ、見事な判断力だった

よ。虚を突かれたが……オーラを乗せていない攻撃では、俺を殺せないな。そこだけが失態だ」
「クソッタレェ……ッ！あの状態で的確に腹を抉りやがった……！どういう反射神経してんだよ……ッ」
曹操を憎々しげに睨み付ける新
曹操は余裕を表すかの如く聖槍を回した
『やはりここでサマエルを使用したのは正解だったな。たった1度の使用でオーフィス、赤龍帝、白龍皇、闇皇と多くの障害を封じる事に成功した。後は……これ以上の邪魔が入らないように用心するだけか』

脱出作戦は計画的に

「えーと、これであと何人だ。赤龍帝、闇皇、白龍皇、アザゼル総督を倒した今、大きな脅威は無くなったかな。後は聖魔剣の木場祐斗、ミカエルの天使とルフェイ、闇人と言ったところか」

曹操の圧倒的な力にルフェイはどう出て良いのか分からずにいた

イリナも光の剣を構えたまま怒りの涙を流す

「……よくも！ゼノヴィアを！新くんを！私の仲間をッ！」

「ダメよ、イリナ！闇雲に出れば殺される！」

リアスが今にも飛び出していきそうなイリナを制する

「あの七宝と言うものをどうにかしなければ、攻撃は全てカウンターとしてこちらに返ってくるわ。７つの球体はどれも同じ大きさと形をしているから、何が飛んでくるか読みにくい上に複数でこられたら対応も極めて難しくなる。能力を同時に発動までされたら……。次の手がここまで読みにくい能力に出会ったのは初めてだわ。それらを意図して能力を発現させたとしたら恐ろしいまでの鬼才。――――新やイッセー達をあれだけ簡単に屠(ほふ)れる相手よ。気がおかしくなるぐらいに私達を研究し尽くしてきた強

敵だわ……ッ！」
リアスはこれまでの戦闘から状況を把握していたようだ
そう、新は曹操の読みの鋭さに、イッセー達は七宝の持つ特異な能力にやられた
それだけならまだしも、曹操自身の身体能力、聖槍、邪視（イーヴィル・アイ）も加えた凶悪なコンボを見せつけられた
「イッセーさん！ゼノヴィアさんの治療が終わりました！次はイッセーさんに！」
アーシアが駆け寄るが、一誠は「先に黒歌を頼む」と告げてきた
新や一誠よりも黒歌の方が重傷と見たようだ
アーシアは一瞬当惑するが、コクリと頷いて直ぐに黒歌のもとに向かう
曹操はアーシアを追撃しようともしない
もう勝利が揺るがないと確信していた
ギィィィンッ！
突如、金属音がロビー内に響き渡る
祐斗が聖魔剣で、闇人化（やみびとか）したダイアンが仕込み刀で斬り込んでいた
曹操は２つの剣戟を聖槍で難なく受け止める
「あなたは強すぎる！しかし、一太刀ぐらい入れたいのが剣士としての心情だっ！」
「よくも俺のダチをやってくれた（な）ＮＡ！Ｋｉｌｌ　Ｙｏｕ！」

「良い剣だ、木場祐斗。ジークフリートに届きうる才能か。正直言うと、俺との相性で1番無難に戦えるのはキミだ。強大なパワーは無いが、どんな状況でも臨機応変に振る舞える聖魔剣は特性を突き詰めれば非常に厄介になる。――だが、成長途中の今のキミなら難なく倒せるさ。そちらの闇人(やみびと)くんも彼と同じく速度系の剣士か。何処まで届くか楽しみだ」

曹操が横薙ぎに聖槍を振るう

2人は瞬時に後方へ飛び退き、祐斗は聖魔剣を消失させて聖剣を創り出した

直ぐに龍騎士団を出現させて曹操の方に向かわせる

ダイアンは仕込み刀を鞘にしまい、居合いの構えを取る

「新しい禁(バランス・ブレイカー)　手か！是非見せてくれ！良いデータとなる！」

狂喜する曹操は球体を自在に操って龍騎士団を破壊していく

「――――『牙流転生(がりゅうてんせい)』ッッ！」

ダイアンが居合いの構えから刀を抜き放ち、魔力を帯びた刀身が幾重にも分散して曹操に向かっていく

曹操は龍騎士団を破壊したのと同じ様に、7つの球体を縦横無尽に飛ばし、飛来してくる全ての刀身を弾き飛ばした

新達を死守するように構える祐斗とダイアン

曹操が祐斗とダイアンに向けて聖槍を構えるが――――頭を振って槍を下ろした
「――――やるまでもないか。直ぐに特性は理解出来た。速度はともかく、技術は反映出来ていない状態だろう?そちらの闇人(やみびと)くんも速度はなかなかのものだった。2人とも良い技だ。もっと高めると良いさ」
息を吐いて断ずる曹操
それを聞いた2人は屈辱にまみれた憤怒の形相となっていた
仲間を死守するつもりで剣を構えたのに、相手はそれを意にも介さなかった……
剣士としての誇りを持つ祐斗とダイアン、2人が受けた侮蔑、屈辱、心中は計り知れない……
仲間をバカにされた事に、倒れ伏している一誠も心中でキレていた
「どれだけ取れた?」
曹操がゲオルクに訊ねる
「四分の三強程だろうな。大半と言える。これ以上はサマエルを現世に繋ぎ止められないな」
そう漏らすゲオルクの後方でサマエルを出現させている魔法陣が輝きを徐々に失っていく
どうやらサマエルの召喚には時間制限があるようだ

ゲオルクの報告を聞いて曹操が頷く
「上出来だ。充分だよ」
再び指を打ち鳴らすと、オーフィスを包んでいた黒い塊は四散
繋がっていたサマエルの舌も口に戻り、役目を終えたサマエルが魔法陣の中に沈んでいく
苦悶に満ちた呻き声を発しながら、ヴァーリすらも軽々と屠(ほふ)った究極の龍殺(ドラゴンスレイヤー)しは魔法陣の中へと消え、その魔法陣も消滅していった
塊から解放されたオーフィスは以前と変わらぬ姿だが、オーフィスは曹操に視線を向ける
「我の力、奪われた。これが曹操の目的？」
――〝オーフィスの力が奪われた〟――
その事態に驚愕する一同、曹操は愉快そうに笑む
「ああ、そうだ。オーフィス。俺達はあなたを支配下に置き、その力を利用したかった。だが、あなたを俺達の思い通りにするのは至難だ。そこで俺達は考え方を変えた」
曹操は聖槍の切っ先を天に向ける
「あなたの力をいただき、新しい『ウロボロス』を創り出す」
血を吐きながらアザゼルが言う

「――ッ！……そうか！サマエルを使ってオーフィスの力を削ぎ落とし、手に入れた分を使って生み出す――。……新たなオーフィスか」
　アザゼルの言葉に曹操は頷いた
「その通りですよ、総督。我々は自分達に都合の良いウロボロスを欲したわけだ。グレートレッドは正直、俺達にとってそこまで重要な存在でもなくてね。それを餌にご機嫌取りをするのにうんざりしたのがこの計画の発端です。そして、『無限の存在は倒し得るのか？』と言う英雄派の超常の存在に挑む理念も試す事が出来た」
「……見事だよ、無限の存在をこう言う形で消し去るとはな」
「いえ、総督。これは消し去るのとはまた違う。やはり、力を集める為の象徴は必要だ。オーフィスはその点では優れていた。あれだけの集団を作り上げる程に力を呼び込むプロパガンダになったわけだからね。――だが、考え方の読めない異質な龍神は傀儡(かいらい)にするには不向きだ」
「……人間らしいな。実に人間らしいイヤらしい考え方だ」
「お褒めいただき光栄の至りです、堕天使の総督殿。――人間ですよ、俺は」
　曹操はアザゼルの言葉に笑みを見せ、ゲオルクが満身創痍の新達に視線を向ける
「曹操、今ならヴァーリと兵藤一誠、竜崎新をやれるけど？」
「そうだな。やれる内にやった方が良いんだが……。３人ともあり得ない方向に力を高

めているからな。将来的にオーフィス以上に厄介なドラゴンとなるだろう。だが、最近勿体無いと思えてなぁ……。各勢力のトップから二天龍と闇皇を見守りたいと言う意見が出ているのも頷ける。――今世に限って成長の仕方があまりに異質過ぎるから。それは彼らに関わる者も含めてなんだが……データとしては極めて稀な存在だ。神器（セイクリッド・ギア）」に秘められた部分を全て発揮させるのは案外俺達ではなく、彼らかもしれない

そこまで言った曹操は後光輪と球体を消失させ、踵（きびす）を返してロビーを去ろうとする

「やっぱり止めだ。ゲオルク、サマエルが奪ったオーフィスの力は何処に転送される予定だ？」

「本部の研究施設に流すよう召喚する際に術式を組んでおいたよ、曹操」

「そうか、なら俺は一足早く帰還する」

戻ろうとする曹操

ヴァーリが全身から血を垂れ流しながら立ち上がる

「……曹操、何故俺を……俺達を殺さない……？　禁手（バランス・ブレイカー）のお前ならばここにいる全員を全滅出来た筈だ……。女の異能を封じる七宝でアーシア・アルジェントの能力を止めれば、それでグレモリーチームはほぼ詰みだった」

一旦足を止める曹操が言う

「作戦を止めると共に殺さず御する縛りも入れてみた……では納得出来ないか？正直話すと聖槍の禁（バランス・ブレイカー）手はまだ調整が大きく必要なんだよ。だから、この状況を利用して長所と短所を調べようと思ってね」

「……舐めきってくれるな」

「ヴァーリ、それはお互い様だろう？キミもそんな事をするのが大好きじゃないか」

曹操が自身に親指を指し示す

「赤龍帝の兵藤一誠、闇皇の竜崎新。何年掛かっても良い。俺と戦える位置まで来てくれ。将来的に俺と神器（セイクリッド・ギア）の究極戦が出来るのはキミらとヴァーリを含めて数人もいないだろう。――――いつだって英雄が決戦に挑むのは魔王か伝説のドラゴンだ」

挑戦的な物言いに新も一誠も〝必ず追い付いてやる！〟と固く決意した

曹操がゲオルクに言う

「ゲオルク、死神（グリムリッパー）の一行さまをお呼びしてくれ。ハーデスは絞りかすのオーフィスの方をご所望だからな。……それと、ヴァーリチームの者がやってみせた入れ替え転移、あれをやってみてくれ。俺とジークフリートを入れ替えで転移出来るか？後はジークフリートに任せる」

「1度見ただけだから上手くいくか分からないが、試してみよう」

「流石はあの伝説の悪魔メフィスト・フェレスと契約したゲオルク・ファウスト博士の子

孫だ」

「……先祖が偉大過ぎて、この名にプレッシャーを感じるけども。まあ、了解だ。曹操。……それとさっき入ってきた情報なんだが……」

ゲオルクが何やら険しい表情で曹操に紙切れを渡す

それを見た曹操の目が細くなっていく

「……なるほど、助けた恩はこうやって返すのが旧魔王のやり方か……。いや、分かってはいたさ。まあ、充分に協力してもらった」

あちら側に想定外の事が起きたように思えるようなやり取りの後、ゲオルクは魔法陣を展開させて何処かに消えていった

曹操が新達の方に振り返る

「ゲオルクはホテルの外に出た。俺とジークフリートの入れ替え転移の準備だ。まあ良い。1つゲームをしよう、ヴァーリチームとグレモリーチーム。もうすぐここにハーデスの命を受けてそのオーフィスを回収に死神の一行が到着する。そこに俺の所のジークフリートも参加させよう。キミ達が無事ここから脱出できるかどうかがゲームのキモだ。そのオーフィスがハーデスに奪われたらどうなるか分からない。――――さあ、オーフィスを死守しながらここを抜け出せるかどうか。是非挑戦してみてくれ。俺は二天龍に生き残って欲しいが、それを仲間や死神に強制する気は更々無い。襲い来る脅

威を乗り越えてこそ、戦う相手に相応しいと思うよ、俺は」
それだけ言い残し、曹操はロビーから去っていった
『……ゲームだと……？ふざけやがって……ッ！』
何処までも舐めきった態度の曹操に新と一誠は怒りの感情が止まらなかった

「……駐車場に死神が出現していました。相当な数です」
様子を見に行っていた祐斗が待機場所のホテルの一室に戻り、そう報告する
「……ハーデスの野郎、本格的に動き出したってわけか！」
アザゼルも憎々しげに吐いていた
曹操との戦いの後、怪我人続出のグレモリー眷属、イリナ、アザゼル、ヴァーリ、黒歌、ルフェイ、オーフィス、ダイアン、『初代クイーン』マヤは疑似空間のホテル上階に陣取っていた
６０階まであるホテルの真ん中―――３０階まで移動し、その階層を丸ごとルフェイの強靭な結界で幾重にも覆って陣地とした
同じ階層の別室に怪我人を休ませ、アーシアの治療を待つ

傷を負った新、一誠、ゼノヴィア、アザゼルは既に完治している
黒歌は治療を終えたが、大事を取って別室で休んでいる
そこにはレイヴェルと小猫が一緒にいる
サマエルの呪いを受けたヴァーリは怪我が治っても呪いが解けず、別室で激痛に耐えていた
ルフェイの話によれば解呪（かいじゅ）の術はかけたが、サマエルの呪いはあまりにも強力な為――
――並大抵の術では解けないらしい
最善の処置はしたので後は自然に呪いが解けるのを待つしかないのだが……その間、ヴァーリは呪いによる苦痛に苛（さいな）まれる
ヴァーリですらその状態、新や一誠が受けたら高確率で死んでいただろう……
アーシアは連続での治療で疲労が溜まり、隣の部屋で仮眠を取っている
今は少しでも寝て体力を温存した方が良い
まずはここから脱出する為の作戦を立てなければならない
アザゼルの話によればこの空間は絶霧（ディメンション・ロスト）を持つゲオルクが作り出した空間
絶霧（ディメンション・ロスト）の禁手（バランス・ブレイカー）――――霧の中の理想郷（ディメンション・クリエイト）は霧を用いて固有の結界を創り出す事が出来る
以前、嵐山周辺と二条城を中心にした京の町を再現した空間もその禁手（バランス・ブレイカー）で創った

結界疑似空間らしい
景色だけでなく建造物の内部を細かく再現もある程度は可能だ
休憩または看病しているメンバー以外の者が集結している部屋でルフェイが嘆息した
「本部から正式に通達が来たようです。砕いて説明しますと――――『ヴァーリチームはクーデターを企(くわだ)て、オーフィスを騙して組織を自分のものにしようとした。オーフィスは英雄派が無事救助。残ったヴァーリチームは見つけ次第始末せよ』だそうです」
ルフェイの報告に全員が驚いた
「そう言う事になったのか。英雄派に狙われていた上に、オーフィスの願いを叶えようとしたヴァーリチームの末路がこれか。難儀だな」
アザゼルが息を吐く
今回の1件でヴァーリチームは『禍の団(カオス・ブリゲード)』から一方的に裏切り者されてしまったようだ
オーフィスも〝サマエルで奪った力の方〟が既に『本物』とされ、残ったオーフィスは用済みもしくは偽物と言う事にされてしまった
ルフェイはガックリと項垂(うなだ)れる
「私達はグレートレッドさんを始め、世界の謎とされるものを調べたり、伝説の強者を探

し回ったり、時々オーフィスさまの願いを叶えたりしていただけなのですが……。英雄派の皆さんは力を持ちながら好き勝手に動く私達が目障りだったようです。特にジークフリートさまは私達の事が相当お嫌いだったそうです。何より、元英雄派でライバルだった兄のアーサーがこっちに来たのがお気に召さなかったようでして……」

「そんなイザコザもあったのか。大変だな」

「世界の謎ってナンだ?それに伝説の強者ってのも分かんないんたけど」

一誠がルフェイにそう訊ねる

「はい、次元の狭間を泳ぐグレートレッドさんの秘密に始まり、滅んだ文明――ムー大陸やアトランティスの技術、それに異世界の事について調査していました。北欧神話勢力の世界樹(ユグドラシル)も見てきましたし。そして、伝説の強者とは逸話だけを残して、生死不明となっている魔物や英雄の探索です。時折、組織(テロ)の仕事もこなしてました」

「テロはついでかよ……」

「……殆(ほとん)ど冒険家みたいだな」

「はい、大冒険の毎日ですよ!その末に強者とも戦ってきましたから。ヴァーリさまはドラゴンと言う存在が何処から発生したのか、それを調べようともしているのです。あと二天龍が封じられる切っ掛けとなった大喧嘩の原因も調査してます。それと新しい神滅具(ロンギヌス)が発見できないか、それも調査の対象でした!」

爛々と楽しそうに語り出すルフェイ

『『……こいつらただの暇人じゃねぇか！』』と心中でシンクロする新と一誠だった……

ルフェイは最後に「ヴァーリさまの探求心は総督さまの影響だと思います」と付け加える

それを聞いてアザゼルは息を吐いて目元を細めた

まるでいたずら小僧の報告を受ける父親の顔の如く……

「それにしても総督さま、ここ最近は神滅具（ロンギヌス）祭りですね。――グリゴリにいらっしゃる『黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）』の方はお元気なのですか？」

ルフェイに話を振られたアザゼルは顔を天井に向ける

「……『黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）』、刃（スラッシュドッグ）狗か。あいつには別任務に当たらせている。そちらもそちらで充分に厄介な事件だ。あいつ、ヴァーリの事が嫌いでなぁ」

「はい、お話はうかがっております」

ルフェイがクスクスと笑う

その可愛い笑顔に気持ちが少し和らぎ、一誠はアザゼルにふとした疑問を投げ掛ける

「そういや、先生。1番強い神滅具（ロンギヌス）を曹操が持っているなら、誰かが2番目に強い神滅具（ロンギヌス）を持っているんですよね？」

「ああ、『煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）』。それが2番目に強い神滅具（ロンギヌス）だ。上位神滅具（ロンギヌス）とは、『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』

『煌天雷獄(ゼニス・テンペスト)』『魔獣創造(アナイアレイション・メーカー)』『絶霧(ディメンション・ロスト)』の４種の事を指す。『煌天雷獄(ゼニス・テンペスト)』に関しても既に所有者も割れているし、主に天界が制御しているが……。イリナ、それで奴は――――『御使い(ブレイブ・セイント)』のジョーカーはどうしている？」

話を振られたイリナは首を捻りながら答える

「デュリオさまですか？各地を放浪しながら、美味しいもの巡りをしていると……」

その答えにアザゼルは絶句した

「な……っ。仮にもセラフ候補にも選出されるかもしれない転生天使きっての才児だろうがっ！切り札役(ジョーカー)だぞ⁉ミカエルは、セラフの連中はどうしているんだ⁉」

アザゼルの質問にイリナも困り果て「そ、それは私に言われても……」と呟いていた

一誠が「そのヒトもやっぱり強いんですか？」とアザゼルに訊くと、真っ先にルフェイが反応した

「ヴァーリさまの戦いたい方リスト上位に載ってる程の方です。教会最強のエクソシストだそうです」

「教会最強のエクソシスト……やっぱり相当な使い手か」

ここで元教会の聖剣使いであるゼノヴィアが反応する

「デュリオ・ジェズアルド、教会でも有名な存在だった。直接の面識は無かったが、人間でありながら凶悪な魔物や上級悪魔を専門に駆り出されていたよ。……剣護(けんご)さんにも

負けず劣らずの腕前だったそうだ」

〝剣護〟と言う名前が出た途端、ゼノヴィアの表情が陰る

何故なら剣護――神代剣護はゼノヴィアとイリナの嘗ての上司であり、今は教会を見限って闇人の勢力――神風一派に身を置く男

『灼熱の聖剣』の持ち主でもあるが、その聖剣は今や邪悪な聖剣へと改造されてしまっている……

アザゼルが嘆息する

「神滅具所有者、か。神滅具とは――――『黄昏の聖槍』、『幽世の聖杯』、『赤龍帝の籠手』、『白龍皇の光翼』、『獅子王の戦斧』、『蒼き革新の箱庭』、『永遠の氷姫』、『絶霧』、『煌天雷獄』、『紫炎祭主による磔台』、『魔獣創造』、『黒刃の狗神』、『究極の羯磨』、この13種の事だ。イッセー、よーくメモしとけ」

はいと返事しつつも、メモする物が無い事に気付く一誠……

今までに出会った神滅具は……まだ半分程度でしかない

アザゼルが突然何か閃いたように立ち上がった

「あ！今俺は現世の神滅具所有者の共通点を見つけたぞ。――どいつもこいつも考えている事がまるで分からん！おっぱい脳に戦闘狂、妙な野望を持った自分勝手な奴らば

かりだ！これは後でメモしてやるぞ、くそったれ！」
「……期待した俺がバカでした」
「さりげなくディスられてるな、一誠（おっぱい脳）（笑）」
「（笑）を付けるな！」
「それともう1つ、共通点を見つけた。――神滅具（ロンギヌス）の使い方が従来通りじゃない。殆どの連中が歴代所有者とは違う面を探して力を高めてやがる。……現代っ子は俺達の範疇を超えているのか……？いや、しかし……」
再び独りで考え込むアザゼルだが、途中で何かに気付いて思考タイムを中断する
その理由は――オーフィスがこの部屋に戻ってきたからだ
オーフィスは先程「この階層を見て回る」と言って出掛けていた
それが今ようやく戻ってきた
「――で、具合はどうだ、オーフィス」
アザゼルがオーフィスに問う
「弱まった。今の我、全盛期の二天龍より二回り強い」
「それは……弱くなったな」
「おい待て、弱くなったなの基準値がおかしいだろ」
「封じられる前のドライグ達よりも二回りも強いんでしょ？それで弱くなったって……

以前はどれだけ強かったんですか……」
アザゼルの「弱くなったな」発言に突っ込む新と一誠
特に二天龍の一誠の立場が無い（笑）
「そりゃ全勢力で最強の存在だからな」
「「ソウデシタネー」」
もはやまともに答えるのすらバカらしくなってしまった……
ここで一誠がオーフィスに訊ねる
「なあ、オーフィス。訊きたい事があるんだ。なんで、あの時アーシアやイリナを助けてくれたんだ？」
ロビーに着いて直ぐに曹操達がアーシアとイリナに放った火炎攻撃
それをオーフィスは壁になってアーシア達を守ったのだが、一誠はそれが不可解でならなかった
オーフィスは基本的にグレートレッドとドライグ以外のものに対して興味を示さない
攻撃をしてきた曹操も意に介さなかった程だ
オーフィスは一言だけ答える
「紅茶、くれた。トランプ、した」

「紅茶とトランプって、俺の家での事か？」
　オーフィスは一誠の言葉に頷くだけだった
「そ、それだけで？」
　再び問うも、やはりオーフィスはコクリと頷くだけ
『……こいつ、悪い奴じゃないんじゃないか……？』
　一誠はそんな考えを頭に過らせ、イリナもオーフィスに礼を言う
　オーフィスからの状態を聞いてアザゼルが顎に手をやる
「……しかし、二天龍よりも二回り強いぐらいか。妙だな。曹操は絞りかすと今のオーフィスを蔑んでいたが、正直これだけの力が残っていれば充分とも言える」
　オーフィスは無表情で挙手する
「曹操、たぶん、気付いてない。我、サマエルに力取られる間に我の力、蛇にして別空間に逃がした。それ、さっき回収した。だから今は二天龍よりも二回り強い」
　オーフィスの言葉に全員が度肝を抜かれ、アザゼルが叫ぶ
「お前、この階層を見て回ってくるって出ていったのは別空間に逃がした自分の力を回収する為か⁉」
　オーフィスは頷き、それを見たアザゼルがクククと含み笑いを始めた
「曹操め、あいつはサマエルでオーフィスの力の大半を奪ったと言っていたが、オーフィ

スは力を奪われている間に自分の力を別空間に逃がしていた。それをさっき回収して力をある程度回復させた。それが全盛期のドライグの二回りときたもんだ。オーフィスを舐め過ぎたな、英雄派」

アザゼルを尻目にオーフィスは指先に黒い蛇を出現させる

「力、こうやって蛇に変えた。これ、別空間に送った。それ、回収した。でも、ここからは出られない。ここ、我捕らえる何かがある」

力は回復させたものの、オーフィス捕らえる絡繰りがあるらしい

アザゼルは途端に笑いを止めて息を吐く

「ま、死神がここに来たって事は、ある程度オーフィスの抵抗を想定しての事だろう。それに今のオーフィスは無限じゃない。有限だ。あちらはサマエル以外でオーフィス封じの策があるだろうさ。俺達が依然として慎重になるのは当然だな」

ここでアザゼルがルフェイに訊く

「ルフェイ、お前さんは黒歌と同様、空間に関する魔法に秀(ひい)でていたな?どうにかして外に助けを呼ぶ術は無いものか?もしくは少人数だけでもここから抜け出させる事の出来る方法とかよ」

「ある事はあります。――ですが、黒歌さんが倒れた今、私だけでは限界があります。私と共にこの空間を抜け出る魔法がありますが……共にこの場から離れられるのはお

二人が限界だと思われます。1度、ヴァーリさまとフェンリルちゃんの入れ替え転移をしたのであれからここの結界は強固になっているでしょうから。入れ替え転移をもう一度行(おこな)うのも恐らく無理でしょう。ゲオルクさまはこちらの術式をある程度把握したと思われますので。とっておきの転移魔法をしたとしてもチャンスはあと1度だけです」

脱出できてもルフェイを入れて3人の上、チャンスは1度きりのみ

厳しい条件だった……

「死神と戦いながらオーフィスを逃がすんですか？」

一誠の問いにアザゼルは首を横に振る

「それは無理だ。さっきのオーフィスの話ではこの空間はオーフィスを捕らえる特別な結界のようだ。どうやって生み出したか是非ともご教授願いたいところだが、オーフィスだけは脱出できないだろうな。結界をどうにかして破壊して共に脱出するしかない。それと死神は想像以上に危険だ。実力的にはお前達の方が上だろうが、あの鎌に斬られるとマズい。死神の鎌はダメージと共に生命力を刈り取る。生命力を回復中のイッセーが攻撃を受け続ければ、寿命が尽きて死ぬ事になる。オーフィスだって今は有限だ。鎌に斬られ続ければ弱ってしまうだろう。オーフィスは死守しなければならない。こいつの力をこれ以上他に流出させたら、問題はもっと肥大化する。特に相手があの

ハーデスならな。……かと言って外に助けを呼びに行くメンバーは出した方が良い」
アザゼルの視線がイリナを捉えた
「――――イリナ、お前だけは先に行け。行ってサーゼクスと天界に英雄派の真意とハーデスのクーデターを伝えろ」
「で、でも!先に出るのはレイヴェルさんの方が良いと思います!」
「レイヴェルは脱出できたとしても自分を優先しなくても良いとさっき言っていた。――――俺達の方が基本的に不利だ。あいつらは確実にオーフィスとヴァーリ、そしてイッセーを葬りに来る。奴らにとって龍神と二天龍は消しておきたいものなんだよ。こっちのオーフィスをハーデスに悪用されたら、この世界に何が起こるか分からん!」
アザゼルの言葉にイリナは何か言いたげな様子だったが、言葉を飲み込んで頷いた
恐らく最後まで一緒に戦いたかったのだろう
次にアザゼルはゼノヴィアに視線を向ける
「護衛としてゼノヴィアを連れていけ。エクス・デュランダルの機能をやられてしまったが、デュランダル自体はまだ何とか使えるだろう。結界の外で英雄派の構成員か、死神が待機している可能性があるからな」
「……護衛か」
目を細めるゼノヴィア

アザゼルが言うようにエクス・デュランダルは破壊されている
鞘となっていたエクスカリバーの部分は元となっていた6つの聖剣の芯を残して砕け散り、デュランダルの刀身にも細かな傷が入っていた
この状況下でゼノヴィアは本来の力を発揮出来ない
それは理解しているのだが……それでも悔しそうな表情を浮かべていた
「護衛も立派な任務だ。――――それに、そろそろ天界であれの研究が1つの結論を出す頃だ。それも打診してこい。ついでにデュランダルの修理もな。その事もあるからお前を先に脱出させる。ここの戦いだけで終わりそうにないからな、さっさと直してこい」
アザゼルにそう言われ、ゼノヴィアは静かに頷いた
こうしてルフェイと共にゼノヴィアとイリナが疑似空間から一足早く脱出し、外部に危機的状況を知らせる事となった
ルフェイが転移魔法陣の術式を構築する為、別室に移動
共にゼノヴィアとイリナの基本情報を術式に組み込む為、一緒に別室へ移動する
部屋を出る直前、ルフェイがイリナに鞘に収まった1本の剣を手渡す
「こ、これは！」
驚くイリナにルフェイは微笑(ほほえ)む

それはアーサー・ペンドラゴンが手にしていたエクスカリバー――――『支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）』と呼ばれるものだった

「これを持っていってください。兄から預かっていたものです。お渡しするタイミングが掴めずにいたのですが、良い機会だと思いまして。私達にとって、それは既に用が済んだものなのです」

「良いのか？」

「フェンリルちゃんは手に入れました。制御する為にフェンリルちゃんの力はだいぶ下がってしまいましたが、それでもあれ以上の魔物はいません。――――デュランダルの修理にエクスカリバーを全て使われてもよろしいのではないでしょうか？」

イリナは深く頭を下げた

「……あ、ありがとうございます！ルフェイさん！英雄の血を引く方って、怖い人ばかりだと思ってましたけど、良い人もいるんですね！」

「ふふふ、恐縮です。兄と共に変人とは言われますけど」

ルフェイはそう苦笑し、イリナ、ゼノヴィアと共に脱出魔法陣の術式を組む為、別室に移動した

エクスカリバー7本を使用したデュランダルの復活が待ち遠しくなりそうだ

アザゼルが膝を叩く

「さて、リアス。脱出作戦を構築するぞ。オーフィスを連れて全員生き残るのが目的だ」
「ええ、当然よね」
策士２人が不敵に笑み、作戦タイムが始まった
全員が生存して疑似空間を抜け出す為に――

「英雄派と死神の一行が動き出したようだぞ。俺達も行くのか、神風？」
「キヒヒヒッ♪ま～だ出るのは早いよ。今はグレモリー眷属と英雄派、死神どもが潰し合うのを見物する程度にしておこうよ。ボクら――『初代キング』の本命は『初代クイーン』だもん♪ボクらは後で美味しいトコだけ啜り取ってやるのさ」
「相変わらず卑怯な奴だな」
「賢い奴だけが勝ち組になれるんだよ。バカ正直に真っ向から戦っても疲れるだけ♪横取り、背後からメッタ刺しにしてやれば良いのさ。キヒヒヒッ♪」

脱出作戦ミーティング

リアス、朱乃、アザゼルが例の部屋で作戦を組んでいる間、新は黒歌の部屋に見舞いに来ていた
怪我は既に治ったが、まだベッドで横になっている
ルフェイから聞いた話によれば、オーフィスが兵藤家にいる間、彼女は他者がオーフィスを狙ってこないように神経を尖らせて見張っていたらしい
それは予想以上に体力と精神力を削られたようで、怪我が治っても復調しなかった
今はレイヴェルが黒歌を看ている
本来、真っ先に脱出するべきは客分のレイヴェルなのだが、彼女は小猫と黒歌が心配だからと残る事を選択した
「私は不死身のフェニックス家の者です。そう簡単に死ぬ事はありませんわ」
そう気丈に振る舞い、結局脱出するのはゼノヴィアとイリナになった
「……調子はどうだ？」
新がベッドで横になっている黒歌に訊ね、黒歌は悪戯な笑みを浮かべていた
「あらん、リューくん。お見舞いに来てくれるなんて優しいにゃん」

「まあ、仲間――――小猫を助けてくれたしな」
「たまたまにゃん」
『その〝たまたま〟って名目で妹の名を叫ばんだろ……』
実際、彼女は小猫の危機を身を挺して守ってくれたのだ
ベッドの横にはうつむき気味の小猫が椅子に座っていた
「……どうしてですか？」
小猫はそうボソリと呟き……途端に立ち上がって叫んだ
「どうして私を助けたんですか⁉姉さまにとって私は道具になる程度の認識だった筈です！」
「小猫、落ち着け」
「さーてね。よく分からないにゃん」
「茶化さないでください！……あの時、私を置いていったのに。その後、私がどれだけ周りのヒト達に酷い事を言われたか……。冥界でのパーティの時だって、無理矢理私を連れて行こうとしました……」
普段あまり喋らない小猫だが、内に溜まっていた心情を吐き出していた
「私には姉さまが分かりません……ッ！」
それだけ言い残し、小猫は部屋を飛び出していった

新は直ぐに後を追おうとしたが、黒歌が新の腕を引いて引き留める
「ご安心を。私が追いますわ」
そう言ってレイヴェルが小猫のあとを追っていった
この場は同学年の彼女に任せる他ないだろう
腕を引かれた新は小猫の座っていた椅子に腰を下ろし、改めて黒歌に問う
「……黒歌。以前の主のトコで何があった？」
「別に。嫌な奴だから殺しただけにゃん」
そう言った後、黒歌は笑みを止めて真面目な表情となる
「猫（ねこしょう）？の……私達の力に興味を持ち過ぎたから、目障りになったのよ。私はともかく、当時の白音じゃ私の元バカマスターに仙術を使うよう言われたら断らずに使用して、そのまま暴走しちゃっただろうし。――あの子、正直だから」
そう言う黒歌の目には少しだけ優しげなものを感じた
「とにかく、あいつは眷属の能力向上を目指して、無理矢理な事をしまくってたわね。眷属ならまだしもその身内――血縁者にも無茶な強化を強要したにゃ」
黒歌がお尋ね者になった原因、それは自分のマスターを殺したから
何故その様な事になってしまったのか……
その理由が新にはハッキリと分かった

「そいつから小猫を守ったんだな？冥界で俺達から無理矢理連れて行こうとしたのも――『力』から離そうとしたからなんだろ？……俺が一誠と同じ様に力を引き寄せる闇皇（やみおう）だから」

黒歌には悪意もあり、悪戯心（いたずらごころ）もあり、好奇心の塊なのは見て分かる

新はこの数日、彼女と付き合っていく内にそれだけじゃない感情がある事も感じた

黒歌は新の意見にカラカラと笑う

「……イタズラは生来好きよ？力の使い方も大好き。面白い事も大好き。所詮、私は野良猫にゃん。自由気ままに気の合った仲間達と放浪しながら生きた方が良いだろうし？でも、白音は逆。飼い猫の方が合ってるにゃん。だからさ、リューくん」

黒歌が真っ直ぐな瞳で新に言った

「力の塊になっても良いから、キミもヴァーリみたいにバカ正直なヒトになってほしいのよ。そうすれば、あの子もバカ正直なまま幸せになれるだろうしね」

……彼女はどうしようもないイタズラ猫だ

ヴァーリチームの悪猫（あくびょう）

仙術に飲み込まれて力に陶酔しているところもある

だが、それでも妹――小猫を大事に思っている

「お前は不器用な奴だな」

新が全てを得心したような笑みを見せて言うと、黒歌は途端に口をへの字に曲げてそっぽを向く

「パワーバカのチミに言われたくはないにゃん。これでも『僧侶(ビショップ)』の駒2つ消費の生粋のウィザードタイプよん？――――ま、この話はもういっか。寝るにゃん。それとも、このまま私と子作りでもしちゃうん？怪我した女を無理矢理抱くなんて酷いヒトにゃん♪」

ギシ……ッ

新の手がベッドに乗っかり、ベッドの軋む音を聞いた黒歌は思わず「……え？」と間の抜けた声を発する

次の瞬間、新の唇が彼女の頬に軽く触れた

突然のキスに黒歌は思考が停止、新は含み笑いをしながら言う

「戦闘開始まで養生してな。……あと、今したのは小猫を助けてくれた礼だ。続きがしたいなら、さっさと休んでここを切り抜けてからにしろ」

新は踵(きびす)を返して部屋から去っていっき、黒歌は彼の唇が触れた頬に手を当てる

「……もうっ、リューくんには敵わないにゃん」

新が黒歌の様子を見ている同時刻頃、一誠はヴァーリが休んでいる部屋に足を運んでいた
ヴァーリは上半身だけ起こしており、アーシアのお陰で怪我は完治したが……顔色が恐ろしく悪い
呼吸も荒く、今も苦痛に耐えているようだった
サマエルの呪いがヴァーリの全身を駆け巡っているのだろう
「……お前が一撃であんだけのダメージ受けるなんてな」
一言だけ一誠が漏らすと、ヴァーリは苦笑する
「情けない姿を見せたようだな。曹操を打つ為にここへ来たのだが、このザマだ」
「いや、それだけあの『龍喰者（ドラゴン・イーター）』サマエルって奴の龍殺し（ドラゴンスレイヤー）の力が凄いって事だろう？お前がただでやられるなんて思えないしさ」
本当に為す術が無く、1発受けただけで力の塊とも称されるヴァーリが倒され、その瞬間は一誠の脳裏に鮮明に焼き付けられていた
あの場面、曹操がサマエルを使用したのはヴァーリの抑止する為である
『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』で一気に勝負をつけようとしたヴァーリを止めるにはサマエルを使用する他なかっただろう
「買ってくれているようだな」

「お前の強さは自分が強くなる度によーく分かるようになったからな。まだ追い付けないのが悔しいよ」
「……俺は楽しみだが。早く追い付いてきてくれ」
「相変わらず嫌な余裕だな。で、お前『覇　龍（ジャガーノート・ドライブ）』を超えた力、得たのか？」
「だとしたらどうする？」
「安心した。あの曹操を相手にお前が一矢報えないのは、らしくないだろう？」
一誠の皮肉にヴァーリは「そうだな」と小さく頷いた
「……曹操はゲオルクとサマエルを死守する事と、あの場でド派手な攻撃をせずにオーフィスの力を無事に奪い去る事、それを単独で行（おこな）い、更に俺達を出来るだけ殺さずに攻撃する――その４つの高難度の条件を抱えながら、最小の攻撃のみで俺達全員を圧倒した。サマエルの力があったとしても、それでも奴の力はキミにも理解出来ただろう。――あれが人間の身でありながら、超常の存在に牙を向く者達の首魁だ」
アザゼルとヴァーリを手玉に取り、尚且つグレモリー眷属とヴァーリチームの魔法・魔力コンビも圧倒
京都ではトリアイナで一矢報いたと思っていた一誠だったが……曹操にはまだ届かない事を思い知らされた
悔しさで手を強く握り締める一誠にヴァーリが言う

「相手をよく観察し続けて、弱点を徹底的に研究する。その上で自分達の武器の特性も探究し続けた。それが英雄派。その中心にいるのが曹操と言う聖槍使いの男。あの男の禁手（バランス・ブレイカー）をよく覚えておけ。あれはたとえ独りになっても複数の超常の存在と渡り合える為に奴が研究に研究を重ねて発現させた亜種の禁手（バランス・ブレイカー）だ」

「それに『覇輝（トゥルース・イデア）』とか言うものもあるんだろう？どんだけ強いんだ、あいつ……」

「……『覇輝（トゥルース・イデア）』は俺達で言う『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』と限りなく近しいものだ。極めて遠いとも言えるが……。それを使えば絶大な力を得られるが、暴走と隣り合わせだろう。俺程の魔力――いや、魔法力を持っていないあいつでは『覇輝（トゥルース・イデア）』を操りきれるとは思えないが……」

ヴァーリが更に話を続ける

「防御力はキミや俺の方が奴よりも高いだろう。魔法力も高いわけではない。俺とキミの攻撃は奴の体に直撃すれば曹操を倒せる。ただ、奴は技が抜きん出ているんだ。だが、自分が限界のある『人間』と言う事も誰よりも認識している。……レーティングゲームで言えば、至高のテクニックタイプと称するべきか。まあ、やろうと思えば極大のオーラを槍から放出して周辺一帯を破壊する事も出来るだろう」

弱点攻撃に特化した技と能力、相手を研究して放つ攻撃

今の曹操は一誠の能力を完全に把握しきっているので、一誠の攻撃はまるで当たる気

配が感じられないだろう
ここで一誠がヴァーリに訊ねる
「なあ、ヴァーリ。お前はどうしてオーフィスを俺達の所に送った？利用しようとしただけじゃないんじゃないか？」
「俺が？オーフィスを？」
見当違いの反応を見せるヴァーリ
ヴァーリはオーフィスを囮にして曹操達をいぶり出そうとしたが、オーフィスの意思を汲んでいる上にサマエルの攻撃からオーフィスを解放させようともしていた
曹操だけを狙うなら、あの場でオーフィスなど意にも介さずに曹操へ攻撃を繰り出していた筈……
「……オーフィスの話し相手だっただけだ。時折、寂しそうに見えてな。……いや、何でもない。余計な事を話した。忘れてくれ」
〝オーフィスが寂しそう〟――それは一誠も何となく分かる気がしていた
オーフィスはアーシアやイリナと交流し、構ってくれた２人の危機を救った
その１件でオーフィスは死守するだけの価値があると一誠は確信した
「オーフィスは悪者の親玉だ。いや、『親玉だった』か。それでも俺はあいつを脱出させるよ」

「ハーデスに捕らえられてもまともではない事になるのは目に見えて分かるからな」
「この後、俺は脱出作戦に参加する。ヴァーリ、お前は休んでいるのか？」
一誠が皮肉げに言うと、ヴァーリは不敵に笑んだ
「……休んでいたいところだが、どうしようもなく俺は『白龍皇』でね。――――呪いにまみれた体だが、死神ごときに遅れを取るわけにもいかない。傍観する選択肢は最初から持っていないさ」
如何にもプライドの塊らしい事を口走ったヴァーリに一誠は心底安堵する
「ヴァーリ、いずれ決着はつけようぜ。俺はお前を倒すのが目標の１つだからな」
「ああ、楽しみだよ。兵藤一誠。共にこのような場所で死んではいられないな」
脱出作戦は間近に迫っていた――――

ホテルの一室の窓から外を観てみると、漆黒のローブを着込んだ不気味な雰囲気の者達が多数見上げていた
フードを深く被っていて顔は見えないが、眼光だけはギラギラと輝かせている
いずれも殺意と敵意に満ちていた

手には趣味の悪い装飾が施された大鎌が握られており、それぞれ髑髏(ドクロ)やモンスターの手などが付いている

――死神(グリム・リッパー)

冥府を司る(つかさど)骸骨神ハーデスが引き連れていた者達だ

それらが英雄派に力を貸し、新達に襲い掛かろうとこの疑似空間にやって来た

ハーデスの行動は完全な越権行為

ここに攻めてきた理由はひとまず後回し、このフィールドをどうにか脱出しないといけない

ただ、ゲオルクによって創られた疑似空間を抜け出すには3つの方法しかないらしい

アザゼルがその説明を始める

「3つの方法とは、1つ、術者――ゲオルクが自ら空間を解除する事。これは京都での戦闘が例だ。2つ、強制的に出入りする。これはルフェイや初代孫悟空と玉龍(ウーロン)がやってのけた事だ。さっきも説明したが、こいつは相当な術者でなければ不可能。ルフェイの場合は現状1度が限界で連れて行けるメンバーも限られる。ルフェイの術での3度目の出入りは無理だ。――ゲオルクが結界を更に強固にするだろうからな」

先程の説明通り、この案は採用されるものの、脱出するのは助けを呼びに行くイリナとその護衛のゼノヴィア

そして、3つめは――――

「最後は単純明快。術者を倒すか、この結界を支えている中心点を破壊する事だ。アーシアが捕らえられた時にイッセーが結界装置を破壊したが、あの様に結界の中心となっている装置を壊す」

つまり、結界の核とも言える部分を破壊すれば、この空間は崩壊すると言う事だ

問題は〝その装置が何処にあるか〟

アーシアの時は彼女と繋がっていた装置がそれだったので、壊した瞬間にフィールドに作られた結界は解けた

ここの装置については既にルフェイと黒歌が魔法や仙術で探りを入れている

部屋の床に紙に描いたホテルの見取り図を置き、そこに駒となる物を複数置いて、外部に『目』を作り出すらしい

見取り図に魔術文字を書き、謎の呪文を唱え、謎の灰を撒けば術式は完成

瞑目するルフェイが手を見取り図に向けると、駒がカタカタと動き出し、魔術文字が光り、灰が独りでに動いて見知らぬ紋様を描いていく

「駐車場に1つ、ホテルの屋上に1つ、ホテル内部の2階ホール会場にも1つ、計3つの結界装置が確認出来ました。それらは蛇……いえ、尾を口にくわえたウロボロスの形の像です」

ルフェイが紙に描いた像のデザインをアザゼルは受け取る
円を描くように尾を喰らう蛇の像
報告を受けたアザゼルが言う
「壊すべき結界装置はウロボロスの像か。しかも3つ。相当大掛かりだな。この空間はオーフィスを留める為だけに作られた特別な専用フィールドって事だ。本来のオーフィスなら問題は無かった。力が削がれたオーフィスを封じる前提で結界空間を作ったんだろうな。それでルフェイ、装置の首尾はどうだ？死神の数はさっき調べた時より増えているか？」
「はい、総督。どの結界装置にも死神の方々が集結してます。と言うか、駐車場が1番敵が多いです。曹操さまはこの空間から既に離れてますが、代わりにジークフリートさまがいらっしゃってますし、ゲオルクさまも当然駐車場にいらっしゃいますね」
「駐車場にある装置は、3つある中で1番の機能を発揮しているんだろう。それを直ぐに壊せれば良いんだが……」
ここでリアスがアザゼルに言う
「アザゼル、先程話した作戦通りに行きましょう」
リアスの提案にアザゼルも頷く
「ああ、ったく、えらい方法を考えるもんだぜ、お前もよ。新、お前の惚れた女は誰より

もお前を理解しているようだぜ？」
アザゼルが苦笑しながらそう言い、リアスも何故か自信満々の様子だった
新は〝俺に何かさせるつもりなのか〟？と訝しげに目を細め、そこに朱乃が耳打ちしてくる
「実は……」
新の耳に入ってくるリアスの作戦
「……ハッ、ハハハッ。とんでもない事を考えやがったな……ッ」
仰天した新が漏らしたのはその一言だった
一誠も気になって作戦の内容を教えてくれよと新に進言し、新も耳打ちで一誠に教えた
作戦内容を聞いた一誠は驚くしかなかった
「……すげぇっ、さすが部長！咄嗟にそんな方法を思い付くなんて！」
「ああ、さすがに舌を巻いたぜ」
「さて、皆、集まって」
リアスが部屋の中央に皆が集まるよう告げてくる
全員の視線がリアスに集中、自信満々な笑みを見せた彼女は宣言した
「さあ、私の大事な眷属達。ここをさっさと突破しましょう。その作戦を今から説明す

るわ！」

こうして脱出作戦はスタートしていく――

脱出作戦開始!

ホテル内、ルフェイの結界に覆われた階層――その廊下の一角に新と一誠が立っていた
横には猫耳モードの小猫が瞑目状態で正座している
その近くの部屋にはルフェイとイリナ、ゼノヴィアの姿があり、脱出用魔法陣の準備中だった
扉も開けっ放しの状態
その部屋の窓際には他の作戦メンバーが待機していた
未だ体力の戻らない黒歌と呪いが解呪出来ていないヴァーリもいる
窓から駐車場の様子が1番広く見下ろせる部屋に集まったのは良いが、階層を囲む結界も長くは保たない
既に非常階段の所では死神が結界を壊しており、各部屋の窓辺にも死神が集結している
どちらにしろ、打って出なければどうしようもない
新と一誠は素早く鎧を展開し、後はルフェイの魔法陣が完成次第――作戦開始とな

る

瞑目状態で〝とある物〟を探っていた小猫が立ち上がり、天井の一角と床の一点を指し示した

「……先輩、そことそこです」

「了解」

頷く新

それを確認すると小猫は部屋に入っていこうとするが、新は小猫の手を引いた

先程は黒歌の部屋から飛び出していったが、追い掛けていったレイヴェルと口喧嘩したのか、その後多少スッキリした様子で帰ってきたのだ

「小猫、確かに黒歌は悪い奴だ。仙術に魅入られて力を求めているのも分かる。テロリストに身を置いているあいつが善良なわけがない。――――だが」

新は黒歌の方に視線を向ける

「あいつはやっぱり……小猫の姉なんだよ。野良猫でイタズラ好きで悪い女だが……小猫の肉親である事に変わりはない」

「……姉さまのせいで私はツラい目に遭いました」

どんな理由であれ、主を殺して「はぐれ悪魔」と化した者に対して悪魔の世界は厳しい

それはその家族にも及ぶ
小猫は「はぐれ」となった姉の罪を一身に浴びて心を壊しそうになった……
ツラくないわけがない……
「……姉さまを恨んでいます。……嫌いです。――――でも、私をさっき助けてくれました」
小猫が強い眼差しで新に言う
「今だけは信じようと思います。少なくともここを抜け出るまでは」
予想だにしていなかった小猫の一言に新は「そうか」と軽く笑んだ
新が励ますまでもなく、小猫は強くなっていた
自分で答えを出す程に……
「それで充分だ。もし、これからも黒歌に何か変な事されそうになったら俺に言えよ。1発懲らしめてやるから」
そう言って小猫の頭を撫でると、小猫が新に抱きつく
「……先輩のお陰で強くなれたんです。先輩のお陰でギャーくんも強くなれた。だから、私も強くなろうと思って……」
「なれるに決まってんだろ。俺や一誠でも強くなれたんだ。お前なら直ぐだ」
「……大好きです、先輩……。部長が先にいても、朱乃さんが先にいても、必ず追いかけ

ていきます……。だから――――」
小猫は真っ直ぐに新を見上げて言った
「おっきくなったら、お嫁さんにしてください」
「「「「「えっ⁉そこで逆プロポーズしちゃうの⁉」」」」」
小猫のプロポーズにリアス、アーシア、朱乃、ゼノヴィア、イリナ、レイヴェルが仰天していた
新は心中で『あいつら聞き耳立ててたんかい！』とツッコミ、隣では一誠が「羨ましいぞコンチクショウ！」と地団駄を踏んでいた
勿論、新は小猫の好意は知っているので迷う事も困惑する事もなかった
「ああ、黒歌に負けないぐらいの良い女になれ」
さすがは女たらしでスケコマシの新（笑）
ストレートに自分の意思を伝えた結果、小猫も強く頷いてくれた
「……はい。待っててくださいね、先輩。先輩のお嫁さんになる為、牛乳たくさん飲みます。姉さまに負けないお乳になってみせます」
「……そこから始めるのか。うん、頑張れ」
「――――術式、組み終わりました」
逆プロポーズ劇が終わった直後にルフェイが転移魔法陣の完成を告げる

ルフェイ、イリナ、ゼノヴィアの足下に円形の光が走り、魔法陣が展開していく
小猫も窓際に移動し、遂に作戦が開始される
リアスに視線を向けると――――彼女も頷く
作戦開始の合図だ
新は魔焔版(まえんばん)の『女王(クイーン)』に昇格し、一誠もトリアイナ版の『僧侶(ビショップ)』に昇格
新は左手の盾に炎の球体を生み出し、一誠は両肩に形成したキャノンの砲口を下に向ける
小猫が仙術で屋上と2階ホールにいる死神の気配を察して、位置を把握――――指を示した場所にそれぞれ構える
「一誠、準備は良いか?」
「そっちこそ!」
「よし、行くぞ!」
新達の作戦――――それは新と一誠による同時砲撃
結界装置があるのは屋上と2階ホール会場、そして駐車場の計3ヶ所
それぞれ屋上とホールにチームを分けて装置を破壊? 駐車場に合流すると言う作戦は時間がかかる上、相手にも手の内が読まれるだろう
そこで編み出したのは――――それらを作戦開始と同時に破壊すると言う電光石火の

戦法だった
死神が大量にいる位置目掛けて砲撃を遠し、死神ごと装置を破壊してしまおうと言う作戦だ
「当てるべくは結界装置と周囲にいる死神。一気にぶっ壊していくぞッ！」
「おうっ！」
新は天井、一誠は床に砲撃準備を整える
範囲は広げず、貫通力を高めた一点突破の砲撃を――
「ブレイジング・シュートォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
「ドラゴンブラスタァァァァァァッ！」
ズオオオオオオオオオオオオオオオッ！
膨大な炎とオーラが天井と床にへ一直線に発射され、両者の砲撃がホテルを大きく揺らした
天井と床に大きな穴が生まれ、瞑目していたルフェイが告げる
「屋上とホールに設置されていた結界装置が破壊されました！周囲にいた死神の方々ごとです！これで残るは駐車場の１つだけ！――――転移の準備も完全に整いました！」
その刹那、転移魔法陣も輝きを増してルフェイ達を光が包み込む
「ゼノヴィア！イリナ！頼むぞ！」

「新、死ぬなよ!」
「必ずこの事を天界と魔王さまに伝えてくるから!」
ルフェイ達が疑似空間から消え、脱出の方は成功した
「よし!これで後はあいつらをぶっ倒して装置も破壊すれば終いだ!行くぞ、お前らっ!」
アザゼルが光の槍を横薙ぎして部屋の窓を破壊し、前衛のアザゼル、リアス、祐斗、朱乃が翼を広げて割れた窓から外に飛び出していく
その先には死神が群がる駐車場
鎌を持った死神の群れが空へ飛び出し、アザゼル達と空中戦を開始した
ルフェイ達が転移した事は既にこの空間を作った主――――ゲオルクも認識したのだろう、結界が強固なものへとなった
しかし、それも駐車場の結界装置を破壊すれば終わる
窓際に残ったのは後衛の黒歌、ヴァーリ、オーフィス、アーシア、ダイアン、『初代クイーン』マヤ、そして黒歌をサポートする為の小猫とレイヴェル
黒歌は魔力で堅牢な防御壁を生み出し、それで部屋ごと後衛メンバーを守る
ルフェイの様に階層ごと結界で覆うのは今の黒歌には無理だが、一室ぐらいなら守れるようだ

部屋の周りには死神が近付いているが、部屋を覆う結界の破壊に時間が掛かると判断したのか、ホテルを飛び出してアザゼル達の方に向かっていった
「皆さんのお怪我は私が治します!」
アーシアはこの部屋でダメージを受けた仲間に向けて回復のオーラを飛ばす係だ
彼女も成長しており、オーラで弓矢の形を作り出し、回復のオーラを矢として放てる程になっていた
命中精度も高く、仮に敵に回復のオーラが当たりそうになっても――仲間以外に命中しそうになると自動で霧散するように作り出したそうだ
アーシアの回復能力は敵味方問わず効力を発揮するので、その補足イメージは重要であり、彼女はその手の才能に秀(ひい)でていた
未だ本調子ではない黒歌の体を支える小猫とレイヴェル
2人で黒歌の体を支えていた
「あら、白音。……助けてくれるの?」
「……私を助けてくれた借りを返すだけです。防御の魔法陣に集中してください。仙術でフォローしますから」
「そっちのお嬢ちゃんはどうしてにゃん?」
黒歌に訊かれるレイヴェルは途端に顔を赤らめてツンツンする

「な、何となくですわ!ありがたいと思いなさいな!」
黒歌はそれを聞いてにんまりと笑っていた
「そ。じゃあ、お言葉に甘えちゃう。……白音、今度仙術だけじゃなくて猫又流の妖術とかを教えてあげちゃおうか?……嫌なら良いけどねん」
黒歌が冗談半分にそう言うが、小猫は真剣な面持ちで頷いていた
「……いえ、教えてください。私も仲間を支える為に強くなりたいです。姉さまに頼ってでも前に進まないと――」
小猫も前に進み出している
黒歌との和解とまではいかなくても、小猫の成長に繋がっていく
一方、同じく後衛であるヴァーリの方は――
「禁手(バランス・ブレイカー)でなくとも――」
ドウッ!
手から巨大な魔力の弾を撃ち出し、宙を飛んでいた死神を数体屠(ほふ)る
呪いを受けていてもヴァーリは魔力での攻撃を繰り返し、死神達を四散させていく
「『牙流転生(がりゅうてんせい)』ッ!」
ヴァーリと同じく後衛のダイアンも居合いの構えから魔力で形成された刀身を幾重にも飛ばし、死神を貫く

「我も」
オーフィスも後衛からのサポートに入る
この中でも最強の攻撃力を持つオーフィスがいれば脱出作戦もスムーズになる筈――
オーフィスが手元を光らせた瞬間、けたたましい爆音と破壊が駐車場で巻き起こり、死神の群れだけじゃなくリアス達まで巻き込まれた
煙の中から何とかリアス、祐斗、朱乃が現れて無事を確認
バカげた威力に一誠が文句を言おうと思ったが、オーフィスは首を傾げて自分の手を見ていた
「……おかしい。加減、難しい」
なんと今の一撃は未調整で放ったらしい……
巻き添え必至の攻撃をされては安心出来ず、前衛にしても力が不安定過ぎて何が起こるか分からない
今のオーフィスは不安要素の塊だった……
アザゼルが翼を羽ばたかせて窓際に飛んできた
「おい、オーフィス！お前は戦わなくて良い！その様子じゃサマエルの影響で一時的に力が上手くコントロール出来なくなっているんだろうさ！見学してろ！お前がここで

不安定に力を振るえば敵味方問わず全滅だ！俺達で活路を切り開く！」
アザゼルはそれだけ告げると再び戦場に戻っていき、オーフィスも頷いてその場に座り込む
力が不安定である以上、仕方無いだろう
窓際に立つ新と一誠が再び砲撃の準備を始めようとした時、２人の背中をチョンチョンとつつく者が……
２人が振り向くと、そこには『初代クイーン』マヤが立っていた
「ではではっ、私も見てるだけじゃつまらないのでお手伝いします」
突然のサポート発言に一抹の不安を抱える新と一誠だが……相手の死神の数が多い為、彼女の申し出を受ける事にした
『初代クイーン』マヤは窓際に立つと両手を広げ、足下から闇のオーラを展開
『初代キング』のドス黒い闇と違って彼女の出した闇は――――夜空に輝く星々の様な煌(きら)めきが混ざっていた
その美しさに思わず見惚れていると、『初代クイーン』マヤに変化が訪れる
彼女の着ている衣服が粒子状に霧散し、一糸纏わぬ姿となる
そして粒子が『初代クイーン』の体に再びまとわりつき、先程とは別の衣服を形成した

無数の羽がまとわりついた様な露出の多い衣服
変化を終えた『初代クイーン』はクルリと振り返った
「ふっふ～ん♪どうですか、これが私の戦闘態勢ですっ。今から死神さん達を闇に代わってお仕置きしちゃいますよっ♪」
何処かで見た事ある様な決めポーズをする『初代クイーン』に対し、新と一誠が目を合わせて話し合う
『何かこの人、ノリがセラフォルーさまと似てるよな……』
『ああ、すっげぇドヤ顔してる』
『……それにしても、良い物を見れたなぁ！「初代クイーン」の小振りおっぱい！小さいのに自信満々にしてる素振りもたまらん！こんな極限状態の中に一握りの癒し！まさに砂漠の中のオアシスだっ！』
一誠が卑猥な話をしていると新の背後に小猫が忍び寄り――――チョークスリーパーを極められた
「ぐっ、がぎががが……ッ！なんで俺……っ⁉オチル……！死神を落とす前にオレガオチル……ッ！」
「……先輩、その人のお乳を見ましたね？……まだ私の方が勝ってます」
「今その問題を追及してる場合じゃないだろ……っ⁉イッセイ、アトデブチコロス

……ッ!」

新が怨嗟にまみれた目を向けると一誠は急いで安全圏に避難

『初代クイーン』マヤはクスクスと微笑み、死神の群れに手を向けた

すると……彼女の手の周りに無数の球体が出現し、ゆっくりと空へ飛んでいく

散開した球体は徐々に肥大化し、それに伴って闇のオーラの濃度が増していく

「いきますよ〜っ、えいっ♪」

『初代クイーン』がビシッと指を死神の群れに向けた刹那、球体から帯状のオーラが幾重にも放射され、死神達を一気に撃ち抜いていった

〝綺麗な薔薇にはトゲがある〟

まさにそんな言葉を脳裏に過らせる光景だった……

死神を大規模に屠った『初代クイーン』は新達の方を向いて――――笑顔でVサイン

「どうですか、これが私の実力ですっ。えっへんっ」

『……人って見掛けによらないんだな……』

『まあ、闇人の「初代クイーン」だもんな……。とりあえず俺達も戦線復帰するぞ』

新と一誠は再び砲撃の準備を開始

今度は威力を抑えず、駐車場ごと結界装置を破壊する質量で放つ

「ブレイジング・シュートォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ!」

「ドラゴンブラスタァァァァァァァッ！」

両者の赤い砲撃が駐車場を大きく包み込んでいった――――

乳力（にゅうパワー）炸裂！

新と一誠による2度の砲撃、オーフィスの不安定な一撃で疑似空間がバチバチと悲鳴を上げていた
強力な砲撃を受けても未だに結界が健在なのは装置がまだ破壊されていないのと、使い手のゲオルクの能力が凄まじい証拠だろう
駐車場は見る影も無く崩壊しており、足場なんて無い程にまで地が裂けていた
宙に舞う粉塵も大量である
その駐車場に新と一誠が降り立つ
仲間達は砲撃から生き延びた死神達と戦闘を継続中
粉塵が落ち着いてきたところで戦闘の光景が目に飛び込んできた
祐斗が神速で死神を斬り伏せ、アザゼルは巨大な光の槍で大勢の相手を一気に消し去る
「雷光よ！」
朱乃は指先から膨大な量の雷光を生み出して、死神の大群を一網打尽
「消し飛びなさい！」

リアスも巨大な滅びの弾を幾重にも撃ち出し、風景ごと死神の群れを消滅させていく
彼女達の能力はこの様な集団戦だと遺憾無く威力を発揮する
広範囲に大きく効果を出すので、相手が一点突破の強敵でもない限りは相当な戦果を生み出す
『下級の死神でも下手な中級悪魔よりはよっぽど強いぞ』
籠手のドライグがそう言う
つまり、リアス達はほぼ全員が今いる死神等のランク相手なら余裕で屠(ほふ)れると言う事だ
リアスと朱乃が新と一誠の近くに飛び降りてくる
「イッセー！譲渡でパワーを引き上げてちょうだい！一気に消し飛ばすわ！」
「同じく！お願いしますわ！」
「了解！」
一誠はドラゴンの力を高めて両者の肩に手を置く
一誠の譲渡は2人同時まで可能
『Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト) Ｂｏｏｓｔ(ブースト)

パワーが譲渡され、リアスと朱乃のオーラが大きく膨れ上がった
２人は空高く飛び上がり、死神の大群に極大な滅びの一撃と雷光を解き放った
疑似空間の上空を覆い尽くす程の滅びの渦と雷光の輝きが広がる
リアスと朱乃の２人だけで死神を蹂躙出来そうな勢いだ
『お前達の砲撃とオーフィスの攻撃、更に「初代クイーン」とやらの攻撃でかなりの死神が吹っ飛んだのだが……。あの２人も基本スペックが高いせいか、赤龍帝の力を譲渡するだけでこれだけのものになる』
「結構スタミナは消費したぞ。特にオーラの消耗が酷い」
「ここにいる死神どもを壊滅しなきゃ元手が取れないからな」
「やあ、久しいね。赤龍帝に闇皇」
前方から新と一誠に話し掛けてくる者がいた
魔剣を数多く帯剣した白髪の優男――ジークフリートである
「ジークフリートか。お前が相手をするのか？」
新がそう言うとジークフリートは肩を竦めた
「それは楽しいね。今のキミ達なら僕と良い勝負が出来るだろう。――けど、先にこちらの方々の相手をして欲しいな」
音も無くジークフリートの周囲に死神の群れが集まってくる

リアス達が相手をしている死神に比べるとローブと鎌の装飾が凝っており、殺気も強い
「死神か。鎌に当たったらヤバいんだよな」
「要は当たらなきゃ良いだけだ」
新と一誠はそれだけ確認して迫り来る死神達と対峙した
死神達の鎌による斬戟（ざんげき）を最小の動きで避けきり、新は剣で切り払い、一誠はドラゴンショットで倒していく
更に数を増やされても問題なし、着実に死神を倒す
２人の戦闘を見てジークフリートは驚愕していた
「――――っ！赤龍帝と闇皇の相手は中級クラスの死神なのに！」
『そ、そうなのか。でも、相手できるレベルだぞ？鎌の攻撃は読みやすいし、速度もそれ程でもないから避けられる』
『今までの相手がバカみたいに強すぎたからな。これが一般レベルなんじゃねぇの？』
そんな事をヒソヒソ話しながら死神達を次々と倒していく新と一誠
「驚いたな。通常の状態でも充分に強いなんてね」
「曹操には全く通じなかったけどな」
一誠の言葉にジークフリートは苦笑する

「彼はまたスペシャルだからさ。気にしない方が良い。今のキミでも充分過ぎる程の強者だよ」
　ジークフリートから賛辞が送られる
　この脱出作戦が始まる前、一誠は「俺が曹操に勝つにはどうしたら良いでしょうか?」とアザゼルに訊いた
　一誠の力と神器（セイクリッド・ギア）の事をよく理解しているアザゼルだからこそ訊いてみたらしい
『……今のお前はある意味で曹操よりも強いさ。攻撃が当たればの話だが。……だが、まるで当たる気がしないんだろう?そうだな……奴専用の必殺技でも作って初見で葬るのが1番だろうな。無論、あのバカげた技量を超えられるだけの技ならな』
　ヴァーリですら強敵と賞賛する曹操を倒せるだけの技……逆立ちしても到底思い付きそうにない
『……はぁ、なんで俺を狙う敵って、こんなアホみたいに強い奴ばかりなんだ?俺、少し前までただの高校生だぞ?強ェ野郎ばっかり群がってくるとか……しまいには泣くぞ!』
『――――とか考えてるんだろうな、一誠（コイツ）』
「だから言ったろ?お前は現時点でも相当強いってな」
　そう言いながら新と一誠のもとにアザゼルが下りてきた

「サイラオーグや曹操と戦っていりゃ、このぐらいの死神じゃ束になってもお前の相手にはならないだろうよ。ま、新や俺にとっても同じだ」

≪死神を舐めてもらっては困ります≫

突如駐車場に響き渡る謎の声

不穏な気配を感じて、そちらに視線を送れば――空間に生じた歪みから何かが現れようとしていた

歪みの中心から姿を現したのは、装飾が施されたローブに身を包み、道化師の様な仮面を着けた死神らしき者

ドス黒い刀身の鎌を携(たずさ)え、明らかに他の死神よりも高位の存在だと認識出来た

アザゼルがその者を見て驚愕する

「貴様は……！」

≪初めまして、堕天使の総督殿。私はハーデスさまに仕える死神の1人――プルートと申します≫

「……ッ！最上級死神のプルートか……ッ！伝説にも残る死神を寄越すなんてハーデスの骸骨オヤジもやってくれるもんだな！」

≪あなた方はテロリストの首領オーフィスと結託して、同盟勢力との連携を陰から崩そうとしました。それは万死に値します。同盟を訴えたあなたがこの様な事をすると

は≫
「……なるほど、今回はそう言う事にするつもりか。そう言う理由をでっち上げて俺達を消す気か！その為にテロリストどもと戦っていた俺達に襲い掛かったと！どこまで話が済んでるんだ⁉この道化師どもが！」
≪いずれそんな理由付けもいらなくなりますが、今回は一応の理由を立てさせて頂いただけです。――――さて、私は悪魔や堕天使に後れを取るほど弱くはないですよ≫
「と言うよりもお前ら、単に俺達に嫌がらせしたいだけだろう⁉」
≪ええ、そうとも言いますね。死神にとって悪魔も堕天使も目障りですので≫
「――――ッッ！舐めてくれるもんだなッ！」
≪舐めてはおりません。真剣です。偽者と言う事になったオーフィスをいただきます≫
そう言った直後に最上級死神プルートの姿が消え去り、金属音が聞こえてくる
アザゼルは人工神器（セイクリッド・ギア）の槍で死神の鎌を受け止めていた
「……さっき曹操の野郎にやられたばかりで人工神器（セイクリッドギア）も回復しきってないが、出し渋りは危険を伴（ともな）うな！ファーブニル！もう少し踏ん張ってもらうぞ！」
アザゼルは槍から黄金のオーラを発生させて、素早く全身鎧（プレート・アーマー）を装着
１２枚の黒い翼を展開させ、プルートを空中に押し上げて飛び出していった

駐車場の上空で派手に剣戟を始める両者
死神プルートの動きはアザゼルに負けず劣らずの速度で、漆黒の像が幾重にも残る程だった
「先生！」
「イッセー、来るな！こいつの相手は俺がする！」
そう言うなり、アザゼルはプルートとの空中戦を継続
激突する度に宙が大きく震える
「さて、キミ達の相手は僕じゃないとダメなんだろうね」
今度はジークフリートがそう言ってきた
既に龍の腕が４本生えており、自前の腕と合わせた６本の腕に魔剣を握っていた
ジークフリートの神器（セイクリッド・ギア）能力は腕の本数分の倍加
つまり、４回の倍加を行う事が出来る
身構える新と一誠だが――そこに祐斗が現れ、２人に一言告げる
「悪いね、イッセーくん、新くん。――彼は僕がやる」
祐斗がハッキリと敵意を向けるのは珍しく、目線を真っ直ぐとジークフリートに向けていた
ジークフリートは祐斗の登場と口上に苦笑した

「木場祐斗か。新しい能力を得たそうじゃないか」
「京都であなたに圧倒されたのが個人的に許せなかったもので。赤龍帝と闇皇を相手に修行を重ねたんだ」
「それは面白い」
祐斗は手元に聖魔剣（せいまけん）を新たに作り出し、ジークフリートに構える
ジークフリートも６本の魔剣を祐斗に向けた
祐斗が瞬時にその場から消え去り、金属音が前方から聞こえてくる
ジークフリートが剣を動かす先に火花が生まれていた
高速で繰り出す祐斗の剣戟をジークフリートは最小の動きで捌（さば）いている
祐斗の姿はもはや視認すら出来ない程速いが、以前の戦いではジークフリートに全く届かなかった
それもゼノヴィアと２人がかり……
『何か秘策でもあるのか、木場……』
心配げに見守っていた一誠だが、ジークフリートの衣服に傷が生じていた
僅かだが、祐斗の剣戟がジークフリートに届きつつある
しかし、ジークフリートはまだ余裕の笑みを浮かべていた
「なるほど。以前よりも速度と技量が上がっているね。けれど、キミの剣は僕に切っ先

が触れる程度でしかないだろう」
ジークフリートの頬に一筋の傷が生まれる……
以前よりも攻撃は通じているが、深い斬り込みはまだ届かないようだ……
ジークフリートの魔剣が光る
「ノートゥング・ディルヴィング！」
魔剣の1本を横に薙ぐと剣戟と共に空間に大きな裂け目が生まれ、更に他の魔剣を振り下ろすと地響きと共に大きなクレーターが作り出される
どうやらノートゥングは切れ味重視、ディルヴィングは破壊力重視の魔剣のようだ
「次はこれでどうかな！バルムンク！」
ドリル状の莫大なオーラを纏った魔剣バルムンクを祐斗にむけて突き出すと――――
剣から放たれた禍々(まがまが)しい渦巻きが空間を大きく削りながら襲い掛かっていく
祐斗は得物を聖剣にチェンジすると素早く龍騎士団を生み出し、それらの半分を盾にした
強大な渦巻きのオーラによって、龍騎士団は無惨にも四散していく
残った半数がジークフリートに高速で斬りかかっていく
「ハッ！ダインスレイブ！」
ジークフリートが魔剣ダインスレイブを横に薙ぐと地面から巨大な氷の柱が祐斗に

向かって次々と発生し、龍騎士団を貫いて凍らせていく
儚(はかな)い音を立てて氷と共に龍騎士団は散り逝く
ジークフリートの魔剣コレクションによる攻撃は相変わらずの猛威を振るっていた
残りの龍騎士団がジークフリートに斬りかかるが、ジークフリートは祐斗の創った龍騎士団の弱点を察したのか――――龍騎士団の剣戟を体捌きだけでやり過ごす
「その新しい禁(バランス・ブレイカー)手の弱点は少しの手合いだけで理解できた。――――キミの能力を龍騎士達に反映出来るんだね？けれど、技術はまだ反映出来ていない。速度だけの騎士団ではこの僕に通じるわけもない！」
ジークフリートが最後の1体を軽く受け流そうとしたその時――――ラスト1体の龍騎士は今までの龍騎士とは違い、軽やかな動きを見せてジークフリートの龍の腕を1本切り落とした
同時にジークフリートの体が大きく仰け反り、苦痛にまみれた表情となった
自身を斬った龍騎士に視線を配らせるジークフリート
龍騎士は兜を外す――――そこには祐斗の姿が
「……バカな……ッ！では、あちらのキミは！」
少し離れた位置で龍騎士団に指示を飛ばしている祐斗だが……そちらの方は姿が徐々にぼやけていき、遂には消えていった

龍騎士姿の祐斗は甲冑を脱ぎ捨てると不敵に笑む
「あちらの僕は幻術ですよ。魔力で作り出したもの。本物の僕は龍騎士の鎧を身に纏い、騎士団に紛れ込んであなたが油断するのを待っていたんです」
「マジかよ！あいつ、そんな事をやっていたのか！」
驚く一誠を他所に祐斗が話を続ける
「盾にした時に紛れたんだ。そして、あなたが僕の龍騎士団の弱点を把握して、油断するのを待った。案の定、あなたは僕の能力の弱点を見つけ、油断してくれた。――相手の弱点を探るのが英雄派の戦い方でしょうから。それを逆手に取りました」
この土壇場で自分の能力の弱点を逆に利用した祐斗
ジークフリートは自分の過失に憤慨している様子だったが、それ以上に驚いてもいる
「このダメージ……キミは龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの力を得たのか！」
ジークフリートの言葉に新と一誠も驚き、祐斗が手に持つ聖剣を前に突き出して言う
「ええ。――『龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖剣』、あなたの神器（セイクリッド・ギア）が龍――ドラゴンを冠する以上、例外無くこれには抗（あらが）えない」
「……龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの魔剣、聖剣は神器（セイクリッド・ギア）で創り出すのが1番困難だと言われていたんだけどね。発現してしまったのか。大した才能だ」
「元々龍殺（ドラゴンスレイヤー）しについてはイッセーくんが再び暴走した時用の止める手段の1つとして

ディオドラ・アスタロト戦後すぐにアザゼル先生から打診されていたんだ。龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖剣、または魔剣をね。勿論、龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖魔剣にも出来る」

祐斗は苦笑する

「けれど、その後イッセーくんが『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』をやめて、暴走しない道を選ぼうと模索していたから、僕は龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖魔剣の修行を中断していた。でも、あなたに敗北した後、再び発現を目指したんだ」

祐斗の言葉にジークフリートは悔しそうに歯噛みしていた

よほど虚を突かれたのが屈辱だったのだろう

「さすがね」

いつの間にか新と一誠の近くに下りてきたリアス

そのまま言葉を続ける

「新、イッセー、祐斗と毎回トレーニングしているでしょう?」

「ああ、そうだけど」

「……私はそれが凄いと思うの。あなた達とそこまで付き合える祐斗の実力に感服するわ。今のあなた達は相当な強さを持っている。全力を出し切れば、獅子の神滅具（ロンギヌス）と同化したあのサイラオーグと戦える程よ。そのあなた達と毎回トレーニングに付き合える祐斗をどう思う?」

「生身で俺と新に付き合える時点であいつもバケモノですよ」
祐斗は弱点とされていた防御力を高める事をほぼ捨て、「当たらなければ良い」と言う持論を極めようとしている
防御を捨て、回避に全てを費やしているのだ
「新とイッセーのパワーの陰に隠れてしまうけれど、あの子も相当な手練れに育っているわ。私から見ればあなた達と祐斗は若手悪魔を代表できる程の実力者よ」
自慢の拳属を誇るようにリアスは笑んでいた
「赤龍帝と闇皇との修行が僕をどこまでも高まらせてくれる。一度、彼らとのトレーニングをオススメするよ。――ただし、毎回死ぬ覚悟を持って臨まないといけないけどね。イッセーくんと新くんは手加減なんてしてくれないから」
祐斗にそう言われたジークフリートが息を吐く
「……そうだね。それも考えよう。けれど、まずはこれらを退けてからだよ」
ジークフリートの周囲に霧が発生し、そこから死神の大群が再び姿を現す
ゲオルクが『絶霧（ディメンションロスト）』を介して外部から死神を召喚してきたのだろう
駐車場を埋め尽くす勢いで出てくる死神
「上手く鎌を避けきったキミ達だが、さすがにこの物量をぶつければ鎌も当たるよね」
ジークフリートは愉快そうに笑んでいた

もはや物量作戦、何体やられても鎌さえ通れば良いと言う態勢だ
「……あらあら、これはちょっと大変ですわね」
空中で雷光を落としていた朱乃も新達のもとに合流してきた
新、一誠、リアス、朱乃、祐斗は1ヶ所に固まって構える
死神の数は軽く見積もっても１０００体以上……
駐車場、ホテルの上下、空中にも死神が跋扈(ばっこ)している
アザゼルとプルートの一騎打ちだけ別世界の如く誰も近づかない
一気に斬りかかられたら避けようも無い……
特に新と一誠は先の砲撃によってオーラを消費し過ぎている
次の一手に苦慮していると――――
『やあ、兵藤一誠。ピンチのようだね』
『それは大変だ』
『死神はとても厄介だ』
一誠に話しかけてくる謎の声
それは神器(セイクリッド・ギア)の深奥に眠る歴代所有者のものだった
一誠は目を閉じてそっちに意識を向ける
歴代の所有者達は何故かタキシードにワイングラスと言う紳士の出で立ちで椅子に

座っていた

その内の1人が空っぽのグラスを揺らしながら紳士的な口調で話す

『ふふふ、こんなピンチを抜け出すにはあれしか無いんじゃないかな？』

『そうさ！あれしかない！』

『あれだろう！』

「あれって、まさか『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』とかまた言うんじゃないでしょうね⁉」

危惧した一誠の意見に歴代の所有者達はチッチッチッと指を横に振った

『違う！』

『そう、私達は「覇龍（ジャガーノート・ドライブ）」を卒業したのだ！』

『もっと素晴らしいものをキミ達に教えてもらったからね。――そう』

『『『『『乳力（にゅうパワー）をッ！』』』』』

「……う、うん……？何を言うとるんだぁぁぁぁぁっ⁉何を言い出すかと思えば乳力（にゅうパワー）⁉それは先生が提唱したとんでもないものでして、実証された力とは違うんですよ⁉」

一誠が猛抗議するものの、歴代の所有者達は聞く耳を持たず白い世界の宙に映像を映し出した

そこには見覚えのある乳――と言うより、新の隣にいるリアスのおっぱいだった

……

　歴代の所有者の1人が宙に映し出された乳に指を差す

『――――あの乳に頼ろうじゃないか』

『そうさ、あの乳は未来を守るおっぱいドラゴンと同じ様におっぱいカイザー……否、オッパイザーの源（みなもと）なのだからね』

『私達はキミ達に触れて、おっぱいを嗜（たしな）む紳士になれた。ふふふ、悪くない気分だ』

「ゑっ⁉何を口走っているのこの人達⁉わけが分からないよ！ってか、オッパイザーって何だ⁉新か⁉新の事を言ってんの⁉変な呼び名を次々と生み出さないでくれ！後で俺が殺されるから！」

　嘆く一誠に歴代の所有者達は真剣な表情で言い放った

『――――スイッチ姫のステージを再び上げる時が来たようだ』

　その一言に一誠は言葉を失った

〝エロい事に……否、エライ事になろうとしている……！〟と

「せ、先生っ！大変な事になってる！」

「なんだ、バカ野郎！こっちは死神さまと超絶バトル中だ、くそったれ！って、この会話！タンニーンから聞いた話と被るんだが⁉まさか、あれか⁉あれなのか⁉」

「――――ッ！……今、猛烈に嫌な予感が走ってきた……ッ」

死神プルートの鎌を掻い潜るアザゼルと嫌な予感を察知した新に向かって一誠は言った

「歴代の先輩達が部長のおっぱいを次の段階に進めようって言ってきてるんだ！しかも、新をオッパイザーって呼んでる！」

「ブッ⁉」

それを聞いた新は目玉が飛び出す程に仰天

逆にアザゼルは狂喜乱舞した

「きたぁぁぁぁぁっ！よぉぉぉぉしっ！今すぐやれ！つつけ！揉め！触れっ！しゃぶれっ！ふはははははははっ！おい、英雄と死神ども！うちのオッパイザーとスイッチ姫が噂の乳力を発揮するぞ！グレモリー眷属必勝のパターンだッ！」

「何それ⁉なんで敵を煽ってるの⁉」

「一誠ェェッ！貴様なにを話していた⁉お前の変態スパイラルに俺を巻き込んでんじゃねぇェェッ！変な呼び名も定着させるなァァァッ！」

「おおおお落ち着け新！俺が言ったわけじゃないんだ！先輩達と先生が勝手に呼んでるだけで！」

「……まさか、そんなバカな……」

「なんでジークフリートが戦慄しているの⁉」

『いいか、後輩よ。あの乳に向けて譲渡の力を使う時が来たのだよ』

再び一誠の脳内に聞こえてくる歴代所有者の声

「じょ、譲渡の力……?ギフトを部長のお乳に使えと⁉」

『ああ、そうだよ。キミ達はあのお乳にギフトを使ったらどうなるか、ずっと疑問だった筈だよ。――――それが今解明されるんだ』

〝リアスのおっぱいにギフト〟

確かに以前、リアスのおっぱいに赤龍帝の力を譲渡したらどうなるか?と言う疑問が挙げられた

大きさを増すのか、美しさが増すのか、それとも弾力が増すのか……

いつか必ず解明したいと思っていた議題……

「それを今やって良いと言うのか……!」

一誠は荒れ狂う新の肩を掴み、その疑問の解明を提案しようとする

「なんだ、このクソ野郎!今なら右手以外の骨をへし折るだけにしといてやる!ここを生きて出たら完治した後に左手以外の骨をへし折ってやる!」

〝オッパイザー〟の呼び名を付けられて殺意剥き出しの新に一誠は真剣な面持ちで言った

「新、今こそ……部長のおっぱいに赤龍帝の力を譲渡したらどうなるか?それを解明す

る時が来たみたいだ。俺達の最大の探究心が明らかになる……！」
「――――ッ」
「お前だって今まで気になってきた筈だ！部長のおっぱいにギフトを使ったら、どんな現象が起きるのか！そして、それは今この場を切り抜ける最大の武器になるかもしれねぇんだぞ！」
「……ッ」
「二度三度とは言わない！ただの一度！一度だけで良い！俺の提案を呑んでくれッ！」
まるでカ○ジを彷彿とさせる一誠の必死の説得に新は歯を食い縛り……遂に――――折れた
「……分かった。今だけは、今だけは敢えて恥を被ってやるよ……ッ！」
「ホントすまない。でも、お前ならきっと分かってくれると思ったぜ。じゃあ、早速部長に――――」
「俺から言う。泥舟に乗った以上、トコトン沈んでやる……」
もはやヤケクソになっていた新はリアスに確認を取る
「リアス、聞いてくれ」
「何？今更何が来ても驚かないわ」
威風堂々たる覚悟を見せつけているかの様な佇(たたず)まいのリアス

新は意を決して告げた
「……お前の乳に赤龍帝のパワーを譲渡させてくれ」
「――――っ」
新の言葉に止まるリアス
まさに京都の時と同じ場面……
少し考えた後にリアスは力強く言った
「やっぱり、分からないわ。京都でもよく分からなかったし、今も正直理解が出来ない。――――けれど、分かったわ！私の胸に譲渡してみせてちょうだい！」
リアスの潔さに新は歯を噛み締め、自分自身も覚悟を決めた
鎧の中で号泣し、一誠に向かって叫ぶ
「一誠ッ！こうなった以上、覚悟を決めてやる！」
「よく言った！じゃあ、まずは部長のおっぱいに触れてくれ！お前を通して赤龍帝のパワーを部長のおっぱいに流し込む！」
新は一誠の言う通り、手の部分だけ籠手を消し――――生の手でリアスのおっぱいに触る
準備が整い、一誠は高らかに叫んだ
「いくぜ、ブーステッドギア！新を通して部長のお乳に力を流せぇぇぇぇぇっ！」

新の手から赤龍帝のパワーが流れ、更にそれがリアスのおっぱいに送り込まれる
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』
「いやぁぁんっ！」
赤龍帝の譲渡にリアスが鳴いた――いや、啼（な）いた……
その刹那――リアスのおっぱいが紅いオーラを発し始めた
『Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト） Ｂｕｓｔ（バスト）!!』
一誠の宝玉から聞き覚えの無い音声が鳴り響く
そして、リアスのおっぱいがまばゆい輝きを放った直後――紅い閃光が新と一誠を包み込んだ
アーシアの回復のオーラに似た光
温かな光に包まれた２人に変化が訪れる
「これは――オーラが回復していく！」
先程の連続砲撃で消費されたオーラが回復していき、その光景を見ていたアザゼルが叫んだ

「第3フェーズだッ!・リアス!・お前はッ!・お前の乳は第3フェーズに入ったぞ! 乳力（にゅうパワー）だ!・また1つ俺が唱える乳力の実在証明の証拠が見つかったぜ!」

アザゼルのアホな言葉はさておき、2人は砲撃の準備を始めた

新は竜の力を解放して両手に黒い火竜を形成し、一誠はトリアイナ『僧侶（ビショップ）』に昇格

両者共に死神の大群に照準を合わせる

「いっけぇぇぇぇぇぇっ!」

砲身から放たれる莫大なオーラの砲撃と2匹の黒い火竜が死神達を消滅させていった

今の一撃で死神軍団の三分の一が消えたが、またもやオーラを消費しきってしまったところが――――リアスのおっぱいから再び紅い閃光が一直線に放たれ、2人を包み込む

先程と同じくオーラが即座に回復

『Bust（バスト）Bust（バスト）Bust（バスト）

を回復させる胸、このままでは次にどうなるか分かったものではない！真に恐ろしいのは赤龍帝でも闇皇でもオーフィスでもなく、リアス・グレモリーの胸かもしれない。赤龍帝、闇皇、リアス・グレモリー、この3人が揃うと奇跡レベルの現象が何度でも発現すると言う事か……！その中心となるのが――――あの胸だ！」

「んなアホな事をシリアス顔で叫ぶなッ！」

ジークフリートの考察にリアスの顔は真っ赤っか

空中でプルートと戦うアザゼルも叫ぶ

「さしずめ『紅髪の魔乳姫（クリムゾン・バスト・プリンセス）』と言うべきか！一言で表すなら『おっぱいビーム』！または『おっぱいバッテリー』だな！」

「うるせぇぇぇぇっ！黙って戦え！もしくは死ね！クソ堕天使！」

「変な名称とか付けないでください！あんたが言うとだいたい定着しちゃうんだよ！」

「……そっか、私、遂に『ビーム』で『バッテリー』なのね」

もはやリアスも諦めムードになっていた……

「あの3人を止めるんだッ！」

そう叫ぶジークフリートだが、新と一誠は構う事無く火竜とドラゴンブラスターを撃ち続けた

死神を一気に吹き飛ばし、オーラが尽きれば『おっぱいビーム（笑）』で回復させてい

く

　おっぱいから紅い閃光を放ちながらリアスが言う

「新……、私、何だかもう色々と諦めたわ」

「――――ッ！ど、どういう事だ？」

　リアスは首を振りながら悟りを開いた様な表情で続けた

「いえ、新たな決意表明をした方が良いわね。――――私はあなたが強くなるのなら、この胸を強化オプションにしても良いわ」

「な……っ、俺はお前をそんな風に思った事は1度も無いッ！俺もお前も一誠の変態スパイラルに巻き込まれただけだ！」

　リアスは微笑して頷く

「ええ、分かってる。――――でも、私の胸はそれを選んでしまった。ふふふ、きっとあなたを助けたい私の心中を察して何かが起こってしまったのかもしれないわね」

　その時、新の視界に信じられない光景が映り込んだ

　――――〝リアスのおっぱいが縮んでいく〟――――

「あ、あああああああっ！リ、リアスの乳が縮んでいく⁉」

「な、何だって⁉ああああああああっ！なんて事だ！部長のおっぱいがあああああああっ！」

「あなた達にオーラを送ると同時にサイズが落ちていくのかしら……？けれど、まだこのサイズならオーラは送れる！」
新は砲撃を一時中断してリアスに向かって叫んだ
「やめろ！このままじゃ、お前の乳が消えて無くなってしまう！」
「一時的なものかもしれないわ。一晩眠ればきっと元のサイズに戻っている筈よ！」
「それでも俺は耐えられない！惚れた女の血肉を食い潰す様な真似をするぐらいなら、俺は自ら首を掻き切ってやる！一誠もろとも首を掻き切って死んだ方がマシだッ！」
リアスは泣きながら笑顔を作った
「ありがとう、新。でもね、これで良いのよ！私にとって、あなたと一緒に戦える事が嬉しい事なのだから――――。愛しているわ、新！」
その一言に新は涙を溢れさせた
ここまで言われた以上、男として止まる訳にはいかなかった……
「俺も……俺も愛してるぞ！リアスッ！」
「どこまでも一緒よ！新！」
それを機に送られてくるオーラの質量が上がる――――その代わり……
『……うへへへ、おっぱい、たのちーなぁ』
遂にドライグの精神が壊れた……

ヨロヨロと向きを直す新は怒りを孕ませて叫んだ
「一誠ェェェェェッ！リアスの乳を縮ませ、ドライグまで精神崩壊に追い詰めたこいつらをォッ！跡形も残さず吹き飛ばすぞォッ！元はと言えば、こいつらが喧嘩売ってきたのが原因だからなァァァァァァァァッ！」
「勿論だぁぁぁぁっ！部長のおっぱいとドライグの仇ィィィィィィィィッ！」
完全な八つ当たりに移行した2人はその後も苛烈な砲撃を続けた
疑似空間は新と一誠の連続砲撃によって崩壊しつつあった
「止めろォォォォォッ！あの3人を止めるんだァァァァッ！このままじゃ本当に乳のパワーで構成員が全滅するッ！」
ジークフリートが必死に死神達に作戦を指示するが――――アザゼルもグレモリー眷属に指示を送った
「お前ら、全力でおっぱいデルタフォースを救えッ！そいつらが俺達の要（かなめ）だッ！」
「あの3人の邪魔はさせないよ。せっかく盛り上がっているのだから、邪魔したら悪いだろう？」
「うふふ、羨ましいわ、リアス。私も後で新さんに甘えちゃおうかしら。2人の仲が燃え上がる度に浮気心も更に燃えるわね」
その後もおっぱいデルタフォース（笑）の砲撃は続いた……

狂喜のシャルバ

ぺんぺん草どころか雑草すら生えない程にまで荒廃しきったフィールド
新、一誠、リアス――――おっぱいデルタフォースまたはバストトライアングル（アザゼル命名）のパワーは遂に死神の大群を退(しりぞ)け、残るはジークフリート、ゲオルク、プルートのみとなっていた
だが、この戦果の代償はあまりにも大きかった
――――〝リアスの乳は既にぺったんこ〟――――
乳力を新と一誠に送り続けた結果……リアスの乳は消耗され尽くし、豊満なおっぱいは見る影も無かった
休めばいずれ元に戻るらしいのだが、新と一誠にとっては耐え難いものなのだろう
「これじゃ、小猫ちゃんと変わらないじゃないか……！」
「言うな、一誠。小猫が俺に何か投げてきてる」
ホテルの３０階にある後衛の部屋から物を投げつけてくる小猫
遠いから聞こえる筈もないのだが、何かを感じ取ったのだろう
プルートと距離を取ったアザゼルが新達のもとに降り立ち、同様にプルートもジーク

フリートの側に降り立つ
「さて、ジークフリート、ゲオルク、チェックメイトだな」
光の槍の切っ先を彼らに向けるアザゼル
「……相変わらずバカげた攻撃力だな、赤龍帝、闇皇」
そう言いながら肩で息をするゲオルク
駐車場の結界装置は未だ健在
小規模で強固な防御結界をゲオルクが作り出しており、先程の連続砲撃でも破壊する事は出来なかった
だが、守備に全力を費やしたせいでゲオルクは息切れしていた
装置を覆う結界も歪みだしている
上位神滅具（ロンギヌス）の所有者と言えど限界はある
このまま押し切れば突破は可能だ
ジークフリートも苦渋に満ちた表情を浮かべる――その時だった
この空間にバチバチと快音が鳴り響く
見上げれば空間に歪みが生じて穴が空きつつあった
敵側の援軍かと思ったが、ジークフリート達も訝（いぶか）しげな表情を浮かべていた
どうやら奴らにも想定外の乱入者らしい

次元に穴を空けて侵入してきたのは軽鎧（ライト・アーマー）にマントと言う出で立ちの男
見覚えのある男が新達とジークフリートの間に降り立つ
「久しいな、赤龍帝。――それとヴァーリ」
男は一誠を睨み付け、後衛――ホテル上階の窓際にいるヴァーリも睨み付けた
アザゼルが目を細める
「シャルバ……ベルゼブブ。旧魔王派のトップか」
そう、現れたのはディオドラ・アスタロトを裏で操っていた旧魔王ベルゼブブの子孫
――シャルバ・ベルゼブブ
『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』と化した一誠に葬られたと思っていたが、実は生き延びていたのだ
ジークフリートが1歩前に出る
「……シャルバ、報告は受けていたけど、まさか本当に独断で動いているとはね」
「やあ、ジークフリート。貴公らには世話になった。礼を言おう。おかげで傷も癒えた。……オーフィスの『蛇』を失い、多少パワーダウンしてしまったがね」
「それで、ここに来た理由は？」
「なーに、宣戦布告をと思ってね」
大胆不敵にそう言うシャルバは醜悪な笑みを浮かべて指を鳴らす
すると、再び疑似空間に生じた裂け目から何者かが姿を現す

それもまた、見覚えのある人物だった
骨のみで構成された肉体に目玉が不気味に蠢く左籠手
京都で対峙した骸骨ドラゴン――『初代キング』バジュラ・バロム
「久しいな、悪魔と英雄のガキども」
旧魔王派だけでなく闇人のトップの登場に全員がざわつく
更にその傍らには1人の少年
瞳が陰り、操られている様子だった
その少年とは――英雄派に属する神滅具『魔獣創造』の使い手レオナルド
何故、彼がシャルバや『初代キング』と共にいるのか……？
ジークフリートとゲオルクが驚愕する
「……レオナルド！」
「シャルバ、その子を何故ここに連れてきた？いや、なぜ貴様と一緒にいるのだ⁉それも闇人の『初代キング』と共に！レオナルドは別作戦に当たっていた筈だぞ！連れ出してきたのか⁉」
面食らっている2人にシャルバは大胆不敵に言った
「今件で双方の利害が一致したのでな。少しばかり協力してもらおうと思ったのだよ。――こんな風にね！」

ブゥウウンッ！
シャルバが手元に禍々(まがまが)しいオーラの小型魔法陣を展開させると――――レオナルドの体にそれを近付ける
魔法陣の悪魔文字が高速で動き――――レオナルドが叫んだ
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
絶叫を張り上げて苦悶の表情を浮かべるレオナルド
それと同時に彼の影が広がっていき、フィールド全体を覆う程の規模となっていく
その場で空中に浮き始めたシャルバが哄笑を上げる
「ふはははははははっ！『魔獣創造(アナイアレイション・メーカー)』とはとても素晴らしく、理想的な能力だ。しかも彼はアンチモンスターを作るのに特化していると言うではないか！闇人(やみびと)のビショップと共に英雄派の行動を調べ、人間界で別働隊と共に動いていた彼を拉致してきたのだよ！別働隊の英雄派構成員に多少抵抗されたので殺してしまったがね！それでは作ってもらおうか！現悪魔どもを滅ぼせるだけの怪物をッ！」
レオナルドの影から何かが生み出されていく
影を大きく波立たせ、巨大なものが頭部から姿を現していく
規格外の頭部、胴体、腕、それらを支える圧倒的な脚
フィールドを埋め尽くす程に広がった影から生み出されたのは――――

『ゴガァァァ

その規格外の怪物達の足下に今度は巨大な転移型の魔法陣が出現する
シャルバが哄笑しながら叫んだ
「フハハハハハッ！今からこの魔獣達を冥界に転移させて、暴れてもらう予定なのだよ！これだけの規模のアンチモンスターだ、さぞかし冥界の悪魔を滅ぼしてくれるだろう！」
魔法陣が輝き、巨大なアンチモンスターの群れが転移の光に包まれていく
「止めろォォォッ！」
アザゼルの指示のもと、新達は巨大なアンチモンスター達に攻撃を放つが――――全くびくともしない
攻撃も虚しく終わり、巨大なモンスター達は全て転移型魔法陣の光の中に消えていった
怪物達が消えた途端、フィールドが不穏な音を立て始める
白い空に断裂が生まれ、ホテルなどの建造物も崩壊していく
強制的な怪物の創造と転移に疑似空間が耐えられなくなったのだ
ゲオルクがジークフリートに叫ぶ
「装置がもう保たん！シャルバめ、所有者のキャパシティを超える無理な能力発現をさせたのか！」

「……仕方ない、頃合いかな。レオナルドを回収して一旦退こうか。プルート、あなたも――」

ジークフリートはそこまで言いかけ、既に姿を消していた死神に気付いた

それを知り、ジークフリートが何かを得心した様な表情となる

「……そうか、シャルバに陰で協力したのは……。あの骸骨神の考えそうな事だよ。嫌がらせの為なら、手段を選ばずと言うわけだね。『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』の強制的な禁手（バランス・ブレイカー）の方法もシャルバに教えたのか……？あんな一瞬だけの雑な禁手（バランス・ブレイカー）だなんて、どれだけの犠牲と悪影響が出るか分かったものではない。僕達はゆっくりとレオナルドの力を高めようとしていたのにね……。これでは、この子は……」

それだけ漏らしたジークフリートとゲオルクは気絶したレオナルドを回収し、そのまま霧と共に消えていった

「ったく、あいつら逃げる時はソッコーだな」

新が毒づいていると、今度はホテルの方から爆音が鳴り響く

見上げれば、シャルバが後衛のメンバーに魔力の攻撃を放っていた

「どうしたどうした！ヴァーリィィィィィッ！ご自慢の魔力と！白龍皇（はくりゅうこう）の力は！どうしたと言うのだァァァァッ！フハハハハハハッ！所詮、人と混じった雑種風情が真の魔王に勝てる道理が無いッ！」

シャルバはヴァーリを攻撃していた
今のヴァーリではシャルバに対抗できない
防御の魔法陣を展開させ、防戦一方だった
「……他者の力を借りてまで魔王を語るお前には言われたくない」
芳(かんば)しくない状況でもヴァーリはシャルバを言葉で切り捨てる
「フハハハハハハハハハハハハハハハヒハハハッ！最後に勝てば良いのだよ！さて、私が欲しいのはまだあるのだ！」
オーフィスの方に手を突き出すシャルバ
オーフィスの体に悪魔文字を表現した螺旋状の魔力が浮かび、縄の如く絡み付いた
「ほう！情報通りだ！今のオーフィスは力が不安定であり、今の私でも捕らえやすいと！このオーフィスは真なる魔王の協力者への土産だ！パワーダウンした私に再び『蛇』も与えてもらおうか！いただいていくぞ！」
更に『初代キング』も後衛の『初代クイーン』に向けて濃密な闇を放ち、彼女の華奢な体を捕らえていた
「今の余はあの時とは違う。貴様のおかげで失った分以上の力を手に入れた！今こそ貴様を取り込み、完全なる力を持って悪魔どもを滅してくれるわァッ！」
「んぐ……っ！ダメ、です……！そんな事は……！」

「黙れ！種族の志を失った貴様の話など聞く耳持たぬわ！闇人とは他の種族を喰らい生きる事が本能！その餌と馴れ合う貴様はもはや種にあらずッ！せめて余の中でその光景を見て後悔し続けるが良いッ！」
「させるかよッ！」
新と一誠はドラゴンの翼を広げて、一気にシャルバと『初代キング』に詰め寄る
シャルバは醜悪な笑みを浮かべて言い放った
「呪いだ！これは呪いなのだ！私自身が毒となって、冥界を覆い尽くしてやる……ッ！私を拒絶した悪魔なぞ！冥界なぞ、もはや用無しだっ！もうどうでも良いのだよッ！そう、冥界の覇権も支配も既にどうでも良い！フハハハハハッ！このシャルバ・ベルゼブブ、最後の力を持って魔獣達と共にこの冥界を滅ぼす！」
狂喜に包まれたシャルバはもうまともな目をしていなかった……
思想も何もかも破綻したシャルバは一誠に指を突きつけてきた
「……そうだな、貴殿が大切にしている冥界の子供も我が呪い――魔獣どもによって全滅だよ、赤龍帝！我が呪いを浴びて苦しめ！もがけ！血反吐を吐きながら、のたうち回って絶息しろッ！フハハハハハッ！傑作だな！下級、中級の低俗な悪魔の子供を始め、上級悪魔のエリートの子息子女まで平等に悶死していく！ほら！これがお前達の宣う『差別の無い冥界』なのだろう？フハハハハハッ！」

もはやシャルバは復讐の鬼と化していた……
自分を認めなかった冥界に未練も誇りも捨て、全ての悪魔を滅ぼそうとしていた
そうこうしている内にフィールドの崩壊は進んでいく
遂に壁に複数の穴が空き、フィールドの瓦礫を吸い込みだした
ホテルの室内にいる黒歌が叫ぶ
「もう、このフィールドは限界にゃん！今なら転移も可能だろうから、魔法陣を展開するわ！それで皆でここからおさらばするよ！」
魔法陣を展開する黒歌のもとにグレモリー眷属達が集結
シャルバの攻撃で傷を負ったヴァーリにアーシアが回復のオーラを当てる
未だに哄笑を上げるシャルバ、その近くには捕らえられたままのオーフィス
捕らえた『初代クイーン』を睨み付ける『初代キング』
新と一誠はそれを見て――――互いに目線を合わせた
「新！イッセー！転移するわ！早くこちらにいらっしゃい！」
リアスがそう告げてくるが――――新と一誠は魔法陣の方には行かなかった
怪訝に思っているであろうリアスとグレモリー眷属に新と一誠は告げた
「リアス、悪いが俺はここに残る。ここで『初代キング』を倒す」
「俺もオーフィスを救います。ついでにあのシャルバもぶっ倒します」

新と一誠の言葉に全員が度肝を抜かれた
「僕も戦うよ！」
「２人だけ格好つけても仕方ないのよ⁉」
祐斗、朱乃がそう言ってくるが、新と一誠は首を横に振った
「いや、俺達だけで充分だ。皆はあの魔獣どもの脅威を冥界に伝えてくれ。どっちにしろフィールドはもう保(も)たないだろう」
「それに俺と新なら鎧を着込んでいればフィールドが壊れても少しの間、次元の狭間で活動できる筈だ。ヴァーリもそうやって次元の狭間で活動していた頃があるんだろうから。……今、シャルバを見逃す事も、オーフィスを何者かの手に渡す事も出来ません」
これは自分達にしか出来ないと思ったのだろう
アザゼルの疑似禁手(バランス・ブレイカー)も限界まで来ている
ここでシャルバと『初代キング』を討たなければ犠牲が増えるのは必然
「もう限界にゃん！今飛ばないと転移できなくなるわ！」
黒歌がそう叫ぶ
「兵藤一誠」
アザゼルに肩を貸してもらっているヴァーリ
先程のシャルバの攻撃が体に響いたのか、ツラそうな表情だった

「ヴァーリ！お前の分もシャルバに返してくる！」
一誠の言葉を聞いてヴァーリは口の端を笑ました
「イッセー！新！後で龍門（ドラゴン・ゲート）を開き、お前らとオーフィスを召喚するつもりだ！それで良いんだな？」
アザゼルの提案に新と一誠は頷（うなず）いた
龍門（ドラゴン・ゲート）とはドラゴンを召喚する際に使用される魔法陣の事で、それぞれ対応する色がある
ちなみに新も元々はドラゴンの欠片より創られた者なので、龍門（ドラゴン・ゲート）に適応できる事が判明したのだ（色は赤と黒である）
新と一誠はドラゴンの翼を展開させる
「新！イッセーー！」
リアスの声に振り向く２人
「必ず私のところに戻ってきなさい」
「ああ、勿論だ」
「必ず戻ります！」
それだけ告げて新は『初代キング』の方へ、一誠はシャルバの方へ突っ込んでいった
同時に転移の光が一層膨らんで弾ける

皆の転移は成功したようだ
「一誠！死ぬなよ！」
「分かってる！そっちこそ絶対に死ぬんじゃねぇぞ！」
互いに檄を飛ばし、それぞれの相手に向かっていった

ホテル上空で哄笑するシャルバの眼前に辿り着く一誠
フィールドは既に半分以上が消失している
シャルバは一誠を視界に映すと途端に不快そうな顔となる
「ヴァーリならともかく、貴殿の様な天龍の出来損ないごときに追撃されるとはな……ッ！どこまでもドラゴンは私をバカにしてくれる……ッ！」
『……どんだけ他者を見下しているんだ、こいつは』
「私を追撃するのは何が目的だ⁉貴殿も真なる魔王の血筋を蔑ろにするのか⁉それともオーフィスに取り入る事で力を求めるのか⁉天龍の貴殿の事だ、腹の底では冥界と人間界の覇権を狙っているのだろう⁉」
『……こいつの考える事は血筋だとか、覇権だとか、そんな事ばっかりかよ』

一誠は息を吐いて言う
「難しい事を並べられても俺には全く分からん。オーフィスもどうしたら良いか分からないし、覇権がどうたらなんてのも興味ねぇ。――ただな」
一誠はシャルバに指を突きつけた
「あんた、さっき悪魔の子供達を殺すって言っただろう？それはダメだろ」
一誠の言い分にシャルバは嘲笑う
「それがどうした！当然なのだよ！偽りの魔王が統治する冥界で育つ悪魔など、害虫以下の存在に過ぎない！成熟したところで真なる魔王である私を敬う事も無いだろう！そんな悪魔どもは滅んだ方が良いに決まっているのだ！だから、あの巨大な魔獣でゼロに戻す！あの魔獣どもは『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』の外法（げほう）によって創られた悪鬼のごときアンチモンスターなのだ！闇人（やみびと）の力も得て圧倒的な破壊をもたらしてくれるであろう！穢れの無い冥界が破壊によって蘇（よみがえ）るッ！それこそが冥界なのだよッ！」
「……あんたの妄想はやっぱりよく分からねぇや。――けど、悪魔の子供を殺そうとしているんだろう？」
一誠は内部のオーラを全面に押し出して言った
「じゃあ、ぶっ倒さなきゃなっ！俺、子供達のヒーローやってるからよッ！あんたみてぇな子供の敵は絶対に許しておくわけにはいかないんだよッ！俺は『おっぱいドラゴン』

だからなッッ！」

一誠の言葉を聞いてシャルバの笑みが止まる

「――――っ。……貴殿からのプレッシャーが跳ね上がった。分からん理屈で動く天龍だ。まあ、良いだろう！ならば我が呪いを一身に浴び、この狭間で果てろ、赤い龍ッッ！」

「それはてめえだ、三流悪魔がッッ！」

一誠は体内の駒を紅く爆発させ、呪文を唱える

『真紅の赫龍帝（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）』――――サイラオーグが命名した真の『女王（クイーン）』形態

「――――我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり！」

歴代所有者達の声も聞こえてくる

『行こう！兵藤一誠！』

『ああ、そうだ！未来を――――我らは皆の未来を守る赤龍帝なのだ！』

『紅き王道を掲げる時だッ！』

「無限の希望と不滅の夢を抱（いだ）いて、王道を往（ゆ）く！我、紅き龍の帝王と成りて――――汝（なんじ）を真紅に光り輝く天道へ導こう――――ッ！」

『Ｃａｒｄｉｎａｌ（カーディナル）　Ｃｒｉｍｓｏｎ（クリムゾン）　Ｆｕｌｌ（フル）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!!!』

一誠の体を紅いオーラが包み込み、鎧を紅く染めていく

「――ッ！紅い……鎧だと⁉何だ、その変化は⁉紅……ッ！あの紅色の髪を持つ偽りの男を思い出す忌々(いまいま)しい色だッ！」

そう憎々しげに吐き捨てるシャルバ

鎧の形状が変わると同時に一誠の全身からパワーが溢れ出す

まだ成長途中ではあるが、この場では充分

シャルバが一誠に向けて手を突き出すと空間が歪み、そこから大量の蝿(はえ)らしきものが出現していく

周囲一帯が蝿の群れに埋め尽くされた

「真なるベルゼブブの力を見せてくれようッ！」

吼えるシャルバは大量の蝿を操り、幾重もの円陣を組ませて極大の魔力の波動を無数に撃ち出した

『Ｓｔａｒ（スター）　Ｓｏｎｉｃ（ソニック）　Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』

一誠はそれらを瞬時に躱(かわ)していき、一気に距離を詰めてシャルバの腹部に拳の一撃を入れた

『Ｓｏｌｉｄ（ソリッド）　Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）

Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』

右腕を紅いオーラが覆い、巨大な拳を形成する

肘の撃鉄（げきてつ）を打ち鳴らし、渾身のボディブローがシャルバの腹部に深く食い込む
「ぐはっ！」
その威力にシャルバは堪らず血を吐き出した
「この、下級ごときがぁぁぁぁぁっ！」
シャルバは幾重にも魔法陣を展開し、そこから様々な属性の砲撃を放つ
一誠はそれに対して真っ正面から立ち向かっていった
「こんなもの……ッ！避けるまでもあるかよ……ッ！」
シャルバの放った魔力を拳で打ち落とし、再び神速で距離を詰める
『Ｓｏｌｉｄ（ソリッド）　Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）
Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!』
グゴンッ！とシャルバの顔面に巨大な拳が直撃
一誠のパンチを受けて、シャルバは顔中から血を垂れ流した
それを見た一誠は一言つまらなそうに漏らす
「こんなもんか」
それを聞いたシャルバのこめかみに青筋が幾重にも浮かび上がる
「……何だと……？」
憤怒の形相となったシャルバに一誠は構わず言う

「魔王って言うから、サーゼクスさまやヴァーリみたいな強さがあるのかと思った。ヴァーリと戦った事のある俺だから、『ルシファー』――――魔王って強さがよく分かる。けど、あんたからはあれ程の重圧は感じない」
　シャルバは顔を引きつらせて高笑いする
「言ってくれるものだな……ッ！穢(けが)れたドラゴンごときが……ッ！塵芥(ちりあくた)と同義である元人間の分際で真の魔王を愚弄するとはな……ッ！」
「俺は二天龍の『赤い龍』――――赤龍帝ッ！あんたみたいな紛い物の魔王なんかにやられはしねぇッ！」
「ほざけッ！腐れドラゴンめがァァァッッ！」
　シャルバが魔力を放てば一誠はそれを拳で叩き落とし、一誠が拳打を放り込めばシャルバは大きく仰け反る
　不気味なオーラを漂わせる蝿の群れもドラゴンショットで打ち消していく
　圧倒的なまでに一誠の方が優勢だった
『……こんなもんか。こんなものなのかよ！冥界を語った男――――サイラオーグさんはこんなの喰らっても平気だったんだぞ!!』
　サイラオーグは一誠のパンチを受けても何度も立ち上がり、己の夢の為に進んできた
　それに対してシャルバはただ仰け反るのみ……

己の身体を突き動かすものが一切感じられない……
「シャルバ、あんたには莫大な才能と魔力があるんだろうさ。俺よりも強大なものを持って生まれてきた」
「そうだ！私は選ばれた悪魔なのだよ！魔王だ！真の魔王だ！」
「でも、ダメだ。あんたの攻撃は……己の拳だけで、己の肉体だけで向かってきた漢（おとこ）に比べたらカトンボ以下だ！そんな攻撃じゃ、俺を倒せやしねぇんだよォォォッ！」
ドゴンッ！
今度は手応えを感じる一撃が決まり、シャルバの表情がかつてないほど苦悶に満ちた
『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』無しでもこの実力差……
『何が真の魔王だ！何が「冥界をゼロに戻す」だ！俺が出会い、戦ってきた冥界の男達はこいつほど甘くはなかった！皆、誰よりも強くて厳しかった！』
「クソ天龍が！これならどうだァァァッ！」
シャルバが血を撒き散らしながら手元から魔法陣を展開――そこから1本の矢が飛び出す
高速で一誠に飛来し、鎧を貫通させて右腕に突き刺さった
一誠はその矢を引き抜こうとしたが……途端に激痛が走る
腕を通して全身に言い難い苦痛が広がり、同時に力も抜けていく

「フハハハッハハハッ！苦しいであろう！辛いであろう！当然だ！その矢の先端にはサマエルの血が塗り込んである！ハーデスから借り受けたものだ！いざと言う時のヴァーリ対策用に持っていたのだが……まさかゴミの様な貴殿に使う事になろうとはな……。まあ良い。これで形勢逆転だ。ヴァーリのように魔力が高ければ多少は耐性があるのだろうが……魔力の素養が無さそうな貴殿では直ぐに死ぬぞ」

初めて受ける龍殺しの痛み……

一誠の全身に痛み、寒気、震えが駆け巡る

『こちらにまで響いてきたぞ、相棒。意識が時々途切れそうになる程の力だ……』

魂のみのドライグにもサマエルの呪いが届いているようだ

口から血を吐き出す一誠だが、ギリギリのところで意識を保つ

過去に聖槍の痛みも受けているので今だけは何とか意識を失わずにいる

一誠はドラゴンの両翼を広げ、シャルバに向かって飛び出していく

それを見てシャルバは仰天した

「呪いを受けている筈だ！何故に動く⁉何故に恐怖しない⁉死が怖くないと言うのか⁉」

「うるせぇな……！怖いに決まってんだろう……ッ！だがな、お前を生かしておくともっと怖い事が起こりそうなんだよ！だから、まずはお前をぶっ倒す！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

「あんたは子供達から笑顔を奪おうとした――――。ぶっ倒される理由はそれだけで充分だろッ！俺はな！俺はッ！子供達のヒーローやってる、『おっぱいドラゴン』なんだよッ！あの子達の未来を奪おうとするなら、ここで俺が消し飛ばすッ！」

一誠は翼からキャノンを展開させ、砲撃の準備を始める

静かに鳴動し、砲身に強大な魔力がチャージされていく

シャルバは翼を広げて空に逃げようとするが――――

「吹き飛べェェッ！クリムゾンブラスタァァァ

闇の根源！ＶＳ『初代キング』！

一誠とシャルバの戦いが始まる同じ頃、新と『初代キング』はホテルから離れた空に浮かんでいた

鋭い目で睨み付ける新、牙が剥き出しの口元を笑ませる『初代キング』

その近くには『初代キング』の闇に捕らわれた『初代クイーン』もいる

『初代キング』が牙の隙間から暗黒を吐いて言う

「京都以来よのう、クソガキ。以前とは比べ物にならん程のパワーを感じるぞ」

「……京都の時には無い力を身に付けたからな」

「ならば、その力とやらを惜しみ無く使え。この崩壊するフィールドと共に果てさせてくれるわ」

「最初から時間は掛けねぇよ。一刻も早く戻らなきゃならねぇんだ」

新は全身から竜のオーラを解き放ち、同時に形状を変化させていく

リュオーガ族との決戦で発現された最強の形態――『超越の黒竜帝（インフェルニティ・オーバー・ドラグニル）』

忌まわしき竜の力を解放した新の姿に『初代キング』は更に口の端を吊り上げた

「グハハハハハハハハハッ！良い、実に良い力の波動だ！貴様のような人材が一昔

前に生まれていれば、或いは余が封印などされていなければ――後世の『キング』になれたかもしれんのう」

「テメェには大牙が……息子がいるんじゃねぇのか？」

「ああ、おるぞ。良い跡継ぎになると思っておった。だが……あの愚息はもうダメだ」

『初代キング』の放った〝愚息〟発言に新のオーラが怒りの色を孕み出す

「才に恵まれたにもかかわらず、その力を誇示しないばかりか穏健派に回る始末……。『キング』の器には到底届かぬヘタレじゃ。闇人とは他を喰らい尽くすのがアイデンティティー。その〝我〟を通さぬ者などゴミ同然じゃ。際限の無い欲望を持ち、他種族に牙を突き立てねばならぬ。〝王〟もまた然り。欲を持たぬ王など王にあらず。手に入れたい物があれば、実力で奪ってこそ王の象徴であろう？なのに、貴様ら悪魔や堕天使を含めた勢力は協定と言う逃げ道を渡った。種族の誇りを自ら放棄し、生温い環境下に堕ちた。余から見れば、それこそ愚の骨頂！争いがあるからこそ生物は進化を辿ってきたのじゃ！己が生き延びるにはどうすれば良いか？――他を喰らう他無いであろう。そう言った意味では我が愚息よりも神風の方が見込みがあるわけじゃ」

「そ、そんな……あなたの息子、なのに……っ」

ショックを受けている『初代クイーン』マヤに『初代キング』は非情な侮蔑を浴びせる

「今となっては駒にすらならぬ。余の駒とならぬ以上――――子孫でも同胞でもない。貴様共々消してくれるわ」

「――――ッッ」

一瞬の静寂……頬を伝う涙

マヤは言葉を失い、自分と自分の息子を全否定された……

新の握り拳が更に震えを増す

「……俺、何かこんなのに出くわしてばっかりだな。種族がどうとか、誇りがどうとか、自分優先で周りの奴の事を一切眼中に置かない奴。ラースも最初はそうだった。俺を失敗作だの落ちこぼれだの、勝手に創っといて勝手に決めてよ。迷惑極まりねぇったらありやしねぇ。けど……最後には分かってくれた。ボコボコに殴り合って、言いたい事を全部吐き出して、気付けなかった事に気付けたから……分かり合えたんだ」

「ヨタ話か？」

「ラースも最初はゲス野郎だったが……テメェはそれ以上のクソ野郎だ……！自分の息子を〝ゴミ〟呼ばわりする奴は――――親でも何でもねぇッッ！」

新は全身から竜のオーラを爆発させて一気に距離を詰め、『初代キング』の顔面に強烈な一撃を与えた

更に左の前蹴りを腹部に打ち込み、『初代キング』の体を〝くの字〟に曲げ――――追い

打ちとばかりに下がってきた頭部を右膝でカチ上げた
両手を合わせたハンマーナックルで『初代キング』を叩き落とす新
落下していく『初代キング』は途中で体勢を立て直し、空中に留まる
自分の頭上にいる新を見上げ――口元を歪ませた
「グハハハハハハハハハッ。劇的に強さが増しておるようじゃのう。壊し甲斐がありそうじゃぁ……ッ」
ドスの利いた声音と共に『初代キング』の全身から凄まじいオーラが滲み出てくる
左手の籠手――『邪眼の闇籠手(ネメシス・ギア)』の目玉が一層妖しく輝く
背中から骨の腕が1本生え、周りに無数の聖剣と魔剣(まけん)が出現する
『邪眼の闇籠手(ネメシス・ギア)』は神器(セイクリッド・ギア)をコピーする人工兵器
今出してきたのは恐らくジークフリートの亜種『龍(トウワイス・)の手(クリティカル)』と祐斗の『魔剣創造(ソード・バース)』、ジャンヌの『聖剣創造(ブレード・ブラックスミス)』の能力だろう
「京都で複製させてもらったガキどもの力は悪くない。さて……壊してやるか」
その一言の後、空中に漂う聖剣と魔剣の群れが一斉に襲い掛かっていった
新はそれらを剣で弾いたり、身を捩(よじ)って躱(かわ)していく
だが、その間に『初代キング』は距離を詰め――自前の腕と合わせた3本の腕で殴り掛かる

殴打と共に爆発が起き、爆炎に呑み込まれる新
「ぐ……ッ！こいつはヘラクレスの……ッ！」
「言っただろう？京都で複製させてもらったとなぁ！」
『初代キング』は口から闇の波動を吐き出した
更なる追撃の対処に間に合わず呑み込まれてしまう
爆煙の中から出てきた新は身体中から血を流し、口からも血を吐き出す
『やっぱりあの籠手は厄介だな……ッ。時間も掛けられねぇ、一気に勝負を決めたいところだ……ッ！』
新も背中から漆黒の巨腕を出して『初代キング』に向けて放ち、自らも突貫していく
漆黒のオーラを纏った６本の巨腕が『初代キング』を襲おうとするが……
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）』
ズビィィィィィィィィィィィッ！
無機質な音声が発され、『初代キング』の左手から莫大なオーラが放射された
そのオーラが突き進んできた漆黒の巨腕を全て焼き払い、新の肩を掠（かす）める
今度は『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』の能力を使用してきた
多種多様な『邪眼の闇籠手ネメシス・ギア』の能力に翻弄されるが、それでも『初代キング』の攻撃を掻い潜っていく

ようやく肉薄する距離にまで辿り着いた新は剣に魔力を流し込み、横一閃の剣戟を繰り出した
その瞬間、『初代キング』の体が霧の如く変化して新の剣戟が無力化される
上下に分離した『初代キング』の肉体が元に戻り、再び爆発付きの殴打で吹き飛ばす
不可解な事態にさすがの新も驚かざるを得なかった
「な、何だよ今のは……？剣が効かなかった……ッ？」
「クハハハハハッ。驚いておるな？当然じゃ。この力は京都では見せてなかったからのう。何せ現世に出たばかりで力が不安定だったんでな。ならば、教えてやる。余は肉体を霧状に変化する事で如何なる攻撃も無力化できるのだよ。それゆえに三大勢力も、貴様の親父も余を倒せず――――〝封印〟と言う方法しか成し得なかった」
『初代キング』の全身から濃い闇が霧状に撒き散らされ、周辺一帯に漂い始めた
怪訝そうに周りを見渡す新
すると、突如肉体に異変が生じる……
急に咳き込み、全身が重い倦怠感に襲われる
『な、何だ……ッツ？急に体が疲れてきやがった……っ。目もおかしい……。この黒い霧のせいか……っ？』
「苦しいであろう？余の闇は生きとし生ける物の命を喰らう毒だ。口や肺だけでなく、

皮膚からも入り込み内部から蝕(むしば)む。耐性の無い者ならば数分足らずで死に追いやるぞ。貴様は余の鎧とその力のお陰で幾分か耐えられるだろうが――――死ぬのも時間の問題だ」

「ジワジワ削り取るってのか……ッ！嫌な殺り方だ、クソッタレ……ッ！」

新は両手両足にオーラを纏わせ、『初代キング』に拳と蹴りを何度も放った

しかし、体を霧状に変化させる『初代キング』には全く通用しない

嘲笑うかのように『初代キング』は新を痛めつけていく

霧の状態から伸ばした爪で切り裂き、伸ばした腕で殴る

その度に爆発が新を呑み込み、血飛沫(ちしぶき)が飛び散る

『くそ……おっ。こんなのって有りかよ……っ？こっちの攻撃は当たらねぇのに、向こうの攻撃は当たるって……反則だろ……ッッ』

全く勝機が見えてこない新に対し、『初代キング』は大口を開けて嘲笑う

「無駄な足掻きと言うものだ。京都で余を逃がしたのが運の尽きじゃったのう。神風の助力もあってか、余は本来の力を取り戻した。元々余の肉体は〝闇の塊〟。それは生物が孕む負の感情と密接な関係にある。怒り、憎悪、悲しみ、怨み、嫉妬、欲望、あらゆる負の感情がこの世を彷徨(さまよ)い続け、やがて集結した結果――――余と言う存在が誕生してしまったのだ」

「……っ？どういう事だ……っ!?」
「つまり、闇人の真祖たる余は――――貴様らの様な生物が抱える〝負の感情の集合体〟。ゆえに闇その物と言うわけじゃ」
遂に明かされた『初代キング』の正体……
それは――――人や動物など、この世に生きるもの全てが持つ〝負の感情の結晶〟
怒りや憎しみと言った負の感情が宛もなくこの世を彷徨い続け、それらが次々と同じ負の感情を呼び寄せた
戦争や貧困、飢餓、種族差別、様々な問題が引き金となって負の感情を撒き散らし、不幸にも1つの存在を具現化させてしまった……
それが『初代キング』の誕生であり、闇人と言う魔族の始まりでもあった
「元々は貴様らの理不尽な感情によって生まれた。つまり、我々闇人にもこの世を統治する権利がある。それを貴様らは図々しくも危険視した挙げ句――――淘汰した。心底呆れ果てたものじゃ。貴様らの様に曖昧な倫理観で生きる者など、この世に必要無い」
「だから……テメェら以外の種族や、テメェの考えに賛同しない奴は滅ぼすってのか……ッ!?」
「その通りだ。貴様もマヤも、出来損ないの愚息も、何もかも滅ぼしてやろう」
絶滅を宣告する『初代キング』に新は憤り、全身から発するオーラを更に昂らせた

「そんな話を聞かされたら、黙って見過ごすわけにもいかねぇなぁ……ッ！ここでお前を倒すッッ！」

「グハハハハハハハハハハッ！貴様にそれが出来るのか？貴様の攻撃は余に通用せず、更に我が闇によって体を蝕まれておる！多少抵抗力があったところで死を免れるわけではない！分かるか？余が力を取り戻したその時から――――既に貴様に勝機は無いッッ！」

『初代キング』は霧状の体を利用して腕を伸ばし、鋭い爪で新の脇腹を貫く

肉と血が飛び散り、更に爆破の追撃で新の体が大きく吹き飛ぶ

逃がすまいと『初代キング』は聖剣と魔剣の群れを創り、新に向けて放った

聖剣と魔剣の豪雨が襲い掛かり、新を切り刻んでいく

残虐かつ苛烈な攻撃も苦しいが、何よりも『初代キング』にダメージを与えられないのが大きな要因だった

周囲にまとわりつく闇の霧が体を蝕み、更に霧状に変化して新の攻撃を無力化してくる……

もはや成す術は無いのか……？

『どうすれば……どうすれば奴に攻撃が届く……ッ!?』

新は必死に頭を働かせた結果――――ある方法を思い付いた

しかし、思い付いた策はあまりにも危険で最悪死ぬ恐れもある

『……考えても仕方ねぇ。やってやる……ッ。仮にしくじっても、こいつを止められるなら……ッ！』

意を決した新は聖剣と魔剣の群れを全て打ち払い、『初代キング』を睨み付けた

「何だ、その目は？まだ勝機があるとでも言いたげな目をしておるな」

「僅かな可能性があるなら、それに賭けるしかねぇよ……っ。今までもそうやって生き延びてきたんだからな……ッ」

「今まではそうだったかもしれぬが、余の前では何の意味も無い。貴様はここで無様に果てるのだ」

「無様には死なねぇよ……っ。ここでお前を取り逃がしたら、俺がここに残った意味も無くなる……ッ！」

「その意気こそが無駄な事なのだよ。三大勢力も、余の鎧を奪った貴様の親父でさえも滅する事が出来なかった。たかが独りの悪魔風情に何が出来る？」

「〝何が出来るか〟じゃねぇ……〝何をするか〟だ……ッッ！俺は悪魔の力を持ち、闇皇（やみおう）の鎧を受け継ぎ……そしてリュオーガ族の血を引く者――竜崎新だッ！」

新は――口を大きく開いて自分の周囲に漂っている闇の霧を吸い込み始めた……！

新が思い付いた策――それはリュオーガ族の〝竜の呼吸法〟を駆使して闇を喰らい取り込むと言う荒業だった

ラースとの戦いの後、新は密かに〝竜の呼吸法〟を練習し、荒削りながらも会得していた

完璧に会得していれば吸い込んだものを力に転換できるのだが、今の新では吸い込むのがやっとである

新の行動に捕らえられたマヤどころか、『初代キング』すらも仰天した

「貴様……自分が何をしているか、分かっておるのか……？」

「ああ、分かってる。親父は鎧を宿すまでは一端（いっぱし）の人間だった。だが、お前の鎧に体を侵され、俺に鎧を移した直後に闇人化（やみびと）しちまった。それと同じ事をやってやるんだよ……ッ！」

「――ッ!?バカな……ッ！我が闇は生ける物の体を内より破壊し、命を喰らうものぞ！その闇と同化するなど不可能だッッ！」

「生憎（あいにく）、俺は前に似たような事をやって成功してんだよ。お前の右腕――伊坂を取り込んでやった。だから、この闇を大量に吸い込んでも少しはイケると踏んだ……ッ！」

しかし、いくら耐性が付いたと言えどやはり『初代キング』の闇は想像以上に濃密で、吸い込む度に全身に激痛が走る

血管から悲鳴を上げ、皮膚も所々(ところどころ)裂け始め、血があらゆる箇所から噴出していく
「ダ、ダメです……っ。今すぐやめてくださいっ！それ以上吸い込んだら本当に死んじゃいますよっ⁉」
マヤが必死に呼び掛けるも、新は吸い込みを止めなかった
全ては『初代キング』を倒す為に……っ
闇の霧を吸い込んでいく内に変化が訪れる
新の体が端々から黒く塗り潰されていく
口から始まり頭部、肩、腕、手、胴、足の先まで黒く染まる
やがて周りに漂っていた闇の霧を吸い終わると……新の双眸(そうぼう)が真紅に輝き、眼前の『初代キング』に鋭い眼孔を見せつけた
目の前の事態に『初代キング』は信じられないとばかりに仰天する
「まさか、本当に我が闇を喰(く)ろうたのか……⁉あれだけ濃い闇を一挙に喰らえば即死の筈……ッ！それをこやつは……ッ！」
ワナワナと震える『初代キング』
一方、全身が漆黒に染まった新は全身から闇を噴き出し、『初代キング』に向かって飛び出していく
両の拳からも闇を噴き出させ、殴り掛かる

空を切る様な音と同時にドゴッと鈍い音が発せられる
――『初代キング』に攻撃が通じたのだ
体を霧状に変化させ、新の攻撃を無力化してきた『初代キング』に初めてダメージを与えられた……
「ぐあ……っ！余に攻撃が当たる……っ⁉我が闇を喰らった事で、余と同じ体質の存在になったとでも言うのか……⁉バカな……こんなバカな事、あり得ぬ……ッッ！」
「確かにバカげた方法だよな……ッ。正直、かなり堪(こた)えてる……ッ。今にも意識が吹っ飛びそうな痛みが体ん中を走ってやがる……っ。けどよぉ、今はこうでもしねぇとお前を倒せそうにねぇんだ……ッ！」
痛み、吐き気、震えが止まらぬ体に鞭を打ち付け、新は闇の拳を何度も放り込む
新の拳が打ち込まれる度に『初代キング』の体が大きく唸(うね)り、霧状の体が弾け飛ぶ
異様な強化を遂げ、自分にダメージを与えていく新に――『初代キング』は憤慨した
「おのれェェェェェ……ッ！たかが一(いち)悪魔ごときが、調子に乗りおってェェェェェ……ッ！気に入らぬゥゥゥッ！気に入らぬゾォォォォッ！」
怒り狂った『初代キング』は３本の腕を伸ばし、鋭い爪を突き立てようとする
しかし、その攻撃は新の闇の拳によって弾かれてしまう

新は両足からも闇を噴出させ、『初代キング』の背中から生えた腕に強烈な蹴りを入れた

その蹴りを喰らった腕は根元から千切(ちぎ)れ飛び、空中で霧散した

勢いを付けた新の猛攻は留まらず、更に蹴りも加えて『初代キング』を打ちのめしていく

新もこれまでのダメージと闇の霧を吸い込んだ副作用で全身の痛みと裂傷が進み、口と鼻からも血が噴き出す

今はそれを顧(かえり)みず、目の前の『初代キング』を倒す事に専念していた

「が……ッ！ぐっ、ゴボッ……ッ！ブルァァァァァ……ッッ！何故だ……ッ！何故こんなガキにやられねばならんのだ……ッ⁉余は『キング』、闇人(やみびと)の真祖であるぞッ！浅はかな思考と歴史しか持たぬ害虫風情にやられる事などぉっ、あってはならんのだァァァァァッ！くだらぬ理想や世迷い言をを吐き連ね、弱き輩(やから)同士で群れを作っておるこやつらごときにィィィ……何故に余が押されねばならんのだァァァァァァァッ！」

「弱いからこそ手を取り合うんだよ……っ。大事な仲間がいるから手を取り合い、大事な仲間がいるから互いに助け合う！仲間に支えられてきたから今の俺があるんだッ！テメェの様な独り善がりの奴には絶対に分からねぇ活力が、この世の中にはあるんだ

よッ！」
もう数十発は打ち込んだであろう
新の闇の拳と蹴りの乱舞によって『初代キング』の体はどんどん歪みを増していく
いくつもの穴が空き、左籠手の目玉にも亀裂が入っていた
「おおぉぉぉぉぉぉのれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……ッッ！クソガキがァァァァァッ！」
『初代キング』は新を突き飛ばすと――――自らの頭上に巨大な闇の塊を生み出した
自分の体躯の何十倍もの大きさを持つ闇の球体
その中で今まで喰らってきた人の負の感情が蠢(うごめ)いていた
怒り、憎しみ、怨み、悲しみ、妬み、ありとあらゆる負の感情が呻き声を発する
「滅びろォッ、我が闇によって消え失せろォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
『初代キング』が腕を振り下ろすと、闇の球体は新に向かってゆっくりと進んできた
怨嗟を辺り一帯に撒き散らし、フィールドの崩壊を早めていく
新は迫ってくる闇の球体に対して構えを取った
右手に闇を集め、自らの魔力と合わせる
揺らめく闇と魔力が合わさり――――手から黒い火竜が生み出される
いつものと違って禍々(まがまが)しさが格段に増しており、火竜の目が不気味に輝いていた

「消えるのは――テメェだァァァ

「よぉ……無事か……？」
「それはこちらの台詞です……！あなた、なんて無茶な事を……！」
「俺と一誠は無茶が売りなんでな……。こうでもしねぇと奴に太刀打ち出来なかった……ッ。リアスの前でこんな事したら、間違いなくキレられてただろうな……」
自嘲する新の視界に、遠くの方で噴き上がった紅い帯状の極大な魔力が映り込む
それは一誠の砲撃だと理解できた
「……どうやら一誠（あいつ）の方も勝負が着いたみたいだ……。じゃあ、さっさと向かうか……。もう、身体中が痛（いて）ぇよ……」
「これ以上の無理はダメですっ！私が運んでいきますから、あなたはおとなしくしてください……っ！」
ふぬぬと力（りき）み顔で新を運ぶマヤ
頬を膨らませ、顔を真っ赤にしてフラフラと飛ぶのが精一杯だった……
だらしない格好で連れていかれる新は自嘲する
「……ホント俺って……最後の最後で締まらねぇ事が多いな……っ」

帰る、帰ろう、帰れない……

『初代キング』を倒し、マヤに運び来られた新はホテルの屋上に到達
そこでシャルバを倒した一誠と合流を果たす
「……そっちも終わったのか」
「ああ、お互いボロボロだな……」
サマエルの呪いで全身が痛む一誠、『初代キング』の闇を取り込んだ副作用で全身が黒く染まり、機能が低下していく新
２人はオーフィスを魔力の縄から解放した
「赤龍帝、闇皇、どうして我助けた？」
オーフィスの問いに２人は嘆息しながら言う
「お前、アーシアとイリナを助けたじゃねぇか」
「あれ、あの者達への礼。赤龍帝と闇皇が我助ける理由にならない」
「アーシアとイリナは俺達の大事な仲間だ。それを助けてくれたなら、俺もお前を助ける理由が出来ちまう。――俺はお前が悪い奴には思えなくなってきたんだよ」
「オーフィス、何故あいつらと手を組んだ」

新の問いにオーフィスはこう答えた
「グレートレッドを倒す協力をしてくれると約束してくれた。我、次元の狭間に戻り、静寂を得たい」
あまりにも安易過ぎる口約束に2人は呆気に取られてしまった
「あいつらがお前との約束を果たすわけねぇだろ。随分と利用されたんじゃないのか？」
「グレートレッド倒せるなら、我はそれで良い。だから蛇を与えた」
オーフィスは更に続ける
「赤龍帝の家に行ったのは、我が望む夢を果たせる何か、あるかもしれないと思っただけ。普通ではない成長。そこに真龍、天龍の隠された何かがあると思った。我、なぜ存在するのか、その理由、あると思った」
「……そっか。ようやく分かったわ」
オーフィスの言葉に新と一誠は確信を得た
〝こいつは誰よりも純粋なんだ〟と……
それを旧魔王派や英雄派が担ぎ上げて利用し、闇人(やみびと)も便乗して利用してきた
――自分達の私利私欲の為に
それは世界を手中に収めたり、超常の存在との戦いであったりと様々な思惑が交錯す

る

だが、それはオーフィスにとってどうでも良い事だった

全ては『禍の団（カオス・ブリゲード）』が作り出した借り初め（そ）の首領……

ただ自分の夢に純粋で何も知らないドラゴン

単に強くて無限なだけ――それを皆が恐れてしまい、神聖化してしまった挙げ句、テロリストの親玉に仕立て上げてしまった……

寂しくて可哀想なドラゴン……それがオーフィスなのかもしれない

呪いと痛みの影響で意識が薄れてきた２人

一誠がオーフィスに言う

「なあ、オーフィス。俺と――俺達と友達になるか？」

「……友達？それ、なると、何かお得？」

「せめて、話し相手にはなってやるよ」

「そう。それは楽しそう」

「ああ、楽しいさ。だから、帰ろう――」

――

崩壊していくフィールド
建物が崩れ、瓦礫や風景が次元の穴に吸い込まれていく
新達はそのフィールドを歩いていた……だが、当人達にもう歩く力は残っていない
新はマヤに、一誠はオーフィスに肩を貸してもらって移動していた
『相棒！もうすぐだ！アザゼル達が俺達を呼び寄せる龍門（ドラゴン・ゲート）を開いてくれる筈だ！そうすれば後はあちらが俺達を呼び出してくれる！』
「そうですっ！向こうであなた達の帰りを待っている人達がいるんですよ！ほらっ、しっかりしてくださいっ！」
必死に呼び掛けるドライグとマヤだが、２人の体力はもはや限界を超えている
頭も思ったように回らない……
「……なぁ、オーフィス」
「？」
「お前、帰ったら何がしたい……？」
「帰る？我、どこにも帰るところ無い。次元の狭間、帰る力ももう無い」
「……それなら、俺の家に……帰れば良い」
「赤龍帝の家？」
「……ああ、そうだ。アーシアと……イリナと……仲良くなれたんなら……きっと、他の

……皆とも……」

足が先に進まない……目線が横に……上に傾く……

倒れたのかすらも分からない……

新に至っては――自分の足元に生まれた闇に飲み込まれそうになっていた……

これも『初代キング』の闇を取り込んだ副作用なのだろうか、新の体がゆっくりと沈んでいく

既に膝下までが闇に飲まれている……

マヤは新の右手を掴んで必死に引っ張り上げようとするが、全く上がる気配が無い

「……オーフィス、お前、誰かを……好きになった事はあるか……？」

『相棒、気をしっかりしろ！皆が待っているのだぞ！』

「……『初代クイーン』、もう良い……俺の体は、既に闇の塊だ……このままじゃ……」

「何を言ってるんですか⁉さっき言ったじゃないですか！必ず連れて帰るって！約束したなら、それを破っちゃいけませんっ！皆さんの所に帰りましょうっ！」

新の体が胴まで沈む……

それでもマヤは必死に引っ張り上げようとする……

新は止まりつつある頭を働かせ、最期の手段を取った

肩口まで闇に飲まれたその時――自ら右手を切断した

切断された事で右手だけ離れ、それを掴んでいたマヤは勢い余って後方に転ぶ
「な、何を――――」
「……俺の体の一部……それで龍門（ドラゴン・ゲート）を通れる筈だ……。それで……あんたは助かる……」
沈み逝く新を前にマヤは頻りに首を横に振り、新のもとへ駆け寄ろうとする
だが、新はもう闇の中に消える寸前だった……
「ドライグ、この者は呪いが全身に回っている。――――限界」
『分かっている、オーフィス！そんな事は分かっている！だが、死なぬ！この男はいつだって立ち上がったのだ！なあ、帰ろう！相棒！何をしている！立て！お前はいつだって、立ってきたじゃないか！』
２人の脳裏にそれぞれの想い人が蘇（よみがえ）る……
≪――――新、必ず帰ってきてね≫
≪――――イッセーさん、約束ですよ。必ず戻ってきてください≫
「愛してるぜ、リアス……」
「大好きだよ、アーシア……」
一誠の全てが止まり、新の全てが闇に消える……
「……ドライグ、この者、動かない」

『……ああ』
「……ドライグ、泣いている？」
『……ああ』
「我、少しの付き合いだった」
『……そうだな』
「悪い者達ではなかった。――我の最初の友達」
『……ああ、楽しかった。……なあ、オーフィス。いや、この男の最後の友よ』
「なに？」
『俺の意識が次の宿主に移るまでの間、少しだけ話を聞いてくれないか？』
「分かった」
『この男と、この男の友の事を、どうか覚えておいて欲しい。その話をさせてくれ……』
「良い赤龍帝だった？」
『ああ、最高の赤龍帝だった男と、その友の話だ』

「召喚用の魔法陣を用意できた。――龍門（ドラゴン・ゲート）を開くぞ」

皆の前でアザゼルと元龍王のタンニーンの協力を得て召喚用の儀式が執り行われる
中級悪魔の昇格試験センターにある転移魔法陣フロアにグレモリー眷属と関係者が一堂に会していた
疑似空間での戦闘後、アザゼル達は新と一誠を呼び寄せるだけの魔法陣を描ける場所に移動し、一強制召喚の準備を始めた
元龍王のタンニーンの他、白龍皇たるヴァーリもサマエルの呪いによるダメージに耐えながら魔法陣の隅で待機していた
リアスや他の眷属達はその様子を心配そうに見守っている
疑似空間で生み出された『魔獣創造』のアンチモンスター軍は現実の冥界に出現し、各都市部に向けて進撃を開始した
既に悪魔と堕天使の同盟による迎撃部隊が派遣されたが……規格外の大きさと凶悪な堅牢さに手を焼いていた
魔獣達は進撃と共に数多くのアンチモンスターを独自に生み出し、そこに旧魔王派や闇人の残党が合流
巨大な魔獣達の進行方向にある村や町を襲撃し始めたそうだ
冥府の神ハーデスは英雄派、旧魔王派だけでなく闇人にも裏で力を貸していた
悪魔や堕天使、各神話勢力に一泡吹かせられるなら何をしても良いと言う判断なのだ

ろう……
事態はどんどん深刻になっていき、魔王達も各勢力に打診しているのだが……神々を仕留められる聖槍を持つ曹操の存在がネックとなり、協力を仰げない
もし各勢力の神々や冥界の魔王が聖槍で屠(ほふ)られたら、情勢は覆(くつがえ)ってしまう
それを懸念しているせいで各トップ陣は動きづらい状態となっていた
その為、力のある若手悪魔や最上級悪魔の眷属チームにも超巨大魔獣迎撃の話が届いている
魔王が出られない以上、祐斗達が率先して戦わなければならない
同盟関係にある各勢力からも救援部隊が派遣される
天界からは『御使い(ブレイブ・セイント)』、堕天使サイドからは神器(セイクリッド・ギア)所有者、北欧からはヴァルキリーの部隊などが冥界――悪魔側の危機に応じてくれるようだ
ゼノヴィアとイリナは無事に事件の顛末を各上層部に伝える事が出来た
今は天界でデュランダルの修復に入っている
しかし、このままでは魔獣が魔王領にある首都を破壊しかねない
既に都民の避難が開始されているが、全ての完了が間に合うかどうかは厳しい……
『……キミ達の力が必要だ、イッセーくん、新くん。赤龍帝と闇皇の力を今こそ冥界の為に使わないといけない。――首都ではキミ達の登場を心待ちにしている子供達が多

いんだよっ！だからこそ、帰ってきてくれ！』

「――――よし、繋がった！」

アザゼルがそう叫び、巨大な魔法陣に光が走る

アザゼルの持つファーブニルの宝玉が金色に光り、ヴァーリの体も白く発光し、タンニーンの体も紫色に輝いた

呼応するように魔法陣の輝きが一層広がっていく

力強く光り輝く魔法陣は遂に弾けて何かを出現させようとした

まばゆい閃光が止み、魔法陣の中央に出現したのは――――紅い７つの『兵士（ポーン）』の駒と、うずくまり泣きじゃくる『初代クイーン』のマヤだった……

目の前で起きた現象がまるで理解できない祐斗達

『初代クイーン』が手に持っているのは――――分離させた新の右手だった

『兵士（ポーン）』の駒７つと新の右手を持った『初代クイーン』

それが何を意味するのか未だに理解できなかったが、アザゼルが力無くその場で膝をつき――――フロアの床を叩いた

「……バカ野郎ども……ッ！」

アザゼルの絞り出した声を聞いて徐々に理解し始める

朱乃はその場に力が抜けるように座り込み、リアスは呆然とその場に立ち尽くしてい

た

「……イッセーさんは？……え？」

怪訝そうに窺うアーシア

反応を示さない小猫にレイヴェルが抱きつき、信じられないように首を横に振って嗚咽を漏らし始める

『……卑怯だよ、イッセーくん。新くん。駒だけを、腕だけ帰すなんて……。……ちゃんと戻るって言ったじゃないか……っ』

祐斗の頬を伝う涙が止まらない

その日、グレモリー眷属は赤龍帝（イッセー）と闇皇（アラタ）を同時に失った――――

第１４章　補習授業のヒーローズとブラックウィドウ
赤龍帝、闇皇不在のグレモリー眷属

中級悪魔の昇格試験日から2日程経過した昼頃、木場祐斗はグレモリー城のフロアの一角にいた

グレモリー城は慌ただしく、使用人だけでなく私兵もバタバタと動いていた

理由は現在冥界が危機に瀕しているからだ

旧魔王派のシャルバ・ベルゼブブと闇人（やみびと）の『初代キング』の外法（げほう）によって生み出された『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』の超巨大アンチモンスターの群れは冥界に出現後、各重要拠点及び都市部への進撃を開始した

フロアに備え付けられている大型テレビではトップニュースとして、進撃中の巨大な魔獣が映し出される

『ご覧ください！突如現れた超巨大モンスターは歩みを止めぬまま、一路都市部へと向かっております！』

魔力駆動の飛行船やヘリコプターからレポーターがその様子を恐々と報道している

冥界に出現した巨大なアンチモンスターは全部で１３体、どれも１００メートルを超

える巨獣である
テレビにもそれら全ての様子が克明に報道される
疑似空間では黒いオーラに包まれた人型のモンスター群だったが、冥界に現れてから姿を変えたものがいる
人型の巨人タイプもいれば、四足歩行の獣タイプもいるが――姿形は1体として同じものがいない
人型タイプは二足歩行であるものの、頭部が水棲生物であったり、眼が1つであったり、腕が4本も生えているタイプもいる
一言で表せば合成獣（キメラ）のようだ
四足歩行型の魔獣達も同様にあらゆる生物、魔獣のパーツで体が構成されていた
アンチモンスター群はゆっくりと1歩ずつ歩みを止めぬまま進撃し続けている
このままで行けば重要地点に1番近い魔獣は今日中、他の魔獣達もほぼ明日には都市部に辿り着くだろう
更に厄介なのは――この魔獣達が進撃をしながら小型のモンスターを独自に生み出している点だ
魔獣の体の各部位が盛り上がり、そこから次々と肉を破って小型モンスターが誕生していく

大きさは人間サイズだが、とにかく数が多い
１回で数十体から１００体程生み出され、通り掛かった森、山、自然を破壊し、そこに住む生き物を喰らい尽くしていく
進撃先にあった町や村の住民は今のところ最小の被害で避難できているようだが、町村その物は丸ごと蹂躙されていった
奴らが通った後は何も残らないと言う凄惨な状況に変わる……
同じ創造系の神　器（セイクリッド・ギア）を持つ祐斗も畏怖するばかりだった
上位神滅具（ロンギヌス）――神に匹敵すると称される異能、世界を滅ぼせるだけの能力、その凶悪さを現在進行形で見せつけている
その異形の中でも群を抜いて巨大なのが、冥界――魔王領にある首都リリスに向かっている規格外の魔獣だ
人型であり、他の魔獣よりも一回り大きく、背中に蜘蛛の脚を生やした巨体を有している
『初代キング』がブラックウィドウを寄生させた一際巨大なその魔獣を冥界政府は『超獣鬼（ジャバウォック）』と呼び、その他１２体の巨大な魔獣は『豪獣鬼（バンダースナッチ）』と呼称された
これらはアザゼルがルイス・キャロルの創作物にちなんで名付けたものである
テレビの向こうで『豪獣鬼（バンダースナッチ）』を相手に冥界の戦士達が迎撃を開始していた

黒き翼を広げ、正面、側面、背面からほぼ同時攻撃で魔力の火を撃ち込んでいく
周囲一帯を覆い尽くす質量の魔力が魔獣に直撃
強力な攻撃を繰り広げる迎撃チームは最上級悪魔とその眷属
普通の魔獣ならば、これだけの攻撃を受ければ間違いなく滅ぼされているだろう
しかし――――
『何という事でしょうか！最上級悪魔チームの攻撃がまるで通じておりません！』
戦慄しているレポーターの声……
魔獣は最上級悪魔チームが放った絶大な攻撃を全く意に介してなかった
体の表面にしかダメージを与えられておらず、致命的な傷は一切加える事が出来なかった
迎撃に出ている各最上級悪魔チームはどれもがレーティングゲームの上位ランカー
それでも効果のある迎撃が出来ずじまい……
次々と生み出される小型モンスターを壊滅させるだけで手いっぱいだった
各魔獣の迎撃には堕天使が派遣した部隊、天界側が送り込んできてくれた『御使い（ブレイブ・セイント）』、ヴァルハラからは戦乙女（いくさおとめ）たるヴァルキリー部隊、ギリシャからも戦士の大隊が駆けつけ、悪魔と協力関係を結んだ勢力からの援護を受けている
それによって現状最悪の状況だけは脱している

だが、問題は山積みとなっていた
1つは『超獣鬼(ジャバウォック)』
昨夜、レーティングゲーム王者――ディハウザー・ベリアル率いる眷属チームが迎撃に出たのだが……『超獣鬼(ジャバウォック)』にダメージこそ与えられたものの、歩みを一時(いっとき)しか止められなかった
『超獣鬼(ジャバウォック)』はダメージを速効で再生、治癒してしまい、何事も無かったかの様に進撃を再開させた
その事実は衝撃的なニュースとして冥界中を駆け回り、民衆の不安を煽る結果となってしまった
誰もが「あの王者とその眷属が出撃すれば強大な魔獣も倒れるだろう」と内心で信じきっていた
皇帝(エンペラー)ベリアルと眷属の力は疑いようの無いものだが、それでも止められなかった……
もう1つの問題はこの混乱に乗じて、各地で身を潜めていた旧魔王派によるクーデターの頻発、更にそこへ便乗してきた闇人(やみびと)の襲撃だ
魔獣群の進撃に合わせて現在各都市部で暴れ回っているのだろう
そちらの迎撃にも冥界の戦士達が派遣されており、悪魔世界は混乱の一途を辿っていた

更にこの混乱によって冥界の各地で上級悪魔の眷属が主に反旗を翻(ひるがえ)したと言う報告も届いていた

無理矢理悪魔に転生させられた神器(セイクリッド・ギア)所有者がこれを機に今までの怨恨をぶつけているのだろう

アザゼル風に言えば各地で禁手(バランス・ブレイカー)のバーゲンセール状態、こちらにも各勢力の戦士達が向かっている

だが、魔獣群の進行阻止が最優先の為、これ以上戦力を割(さ)く事は出来ない

都市部と重要拠点が機能を失えば、敵対組織には打ってつけの侵略条件になるからだ

今まさに冥界は深刻な危機に直面している……

旧魔王派のクーデターによる超巨大魔獣の進撃――――それを裏で促(うなが)したのは冥府の神ハーデス

『禍の団(カオス・ブリゲード)』英雄派、闇人(やみびと)――――主に神風一派も現在どこで暗躍しているか分かったものではない

疑似空間では英雄派がハーデスと旧魔王派、闇人(やみびと)に利用されたようだが、計画外の現在でも何をしでかすか危惧しなければならない

魔獣の迎撃に強大な力を持つ神仏や魔王達が赴(おもむ)く事が出来ないのも、曹操が何処で狙っているか予想が出来ないからである

彼が持つ聖槍は神仏や魔王を容易に滅ぼせる
この1件で神仏や魔王が1名でも滅ぼされたら、今後の各勢力情勢に何が起こるか分からない
幸いなのは各地域の民衆の避難が最優先で行われており、大きな死傷者が出ていないところだ
悪魔がこれ以上の打撃を受ければ、種の存続が本格的に危ぶまれる
シャルバ・ベルゼブブ――――旧魔王派が現冥界政府に抱いた怨恨は想像以上のものだった……
『超獣鬼』と『豪獣鬼』の迎撃に魔王さま方の眷属が遂に出撃されるようだ」
突然の声に祐斗が顔を向けると――――そこにはライザー・フェニックスがいた
ライザーは息を吐く
「兄貴の付き添いでな、ついでにリアスとレイヴェルの顔でも見に来たんだが。やっぱり状況が状況だからな。……察するぜ、木場祐斗」
眉をひそめ、深刻な表情をするライザー
どうやら新と一誠の死は既にライザーにも届いているようだ……
グレモリー眷属はこの1件の発端となった事件で新と一誠を失ってしまった
2人はシャルバ・ベルゼブブに拉致されたオーフィス、『初代キング』に捕らわれた『初

代クイーン』マヤを奪還するべく疑似空間に残り、元の世界に戻った祐斗達は龍門（ドラゴン・ゲート）を開いて彼らを呼び寄せようとしたのだが……

戻ってきたのは黒ずんだ新の右手を持った『初代クイーン』、一誠の『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』――

――『兵士（ポーン）』の駒7つのみだった

それらと共に龍門（ドラゴン・ゲート）からサマエルのオーラも少量ながら感知された為、シャルバとの戦闘中にサマエルの呪いを受けたのだと直ぐに得心した

〝魔力に不得手な一誠ではサマエルの呪いを受ければ助かる見込みはまず無い〟

アザゼルからもハッキリとそう告げられた

駒だけが召喚に応じる現象は過去にもあったらしく、その場合も確実に本人は生きていない

天界にも赤龍帝の魂がどうなったのか、調査してもらっていた

宿主が死ねばドライグの魂は自動で次の所有者を求めるらしく、情報は天界にある神器（セイクリッド・ギア）システムのデータベースに登録されるのだが……現世の神滅具（ロンギヌス）所有者の特定が過去よりも非常に困難になっているせいで、それに関する情報がまるで現れなかったと言う……

グリゴリの方でも現在進行形で調査しているが、詳しい情報の期待は薄い

そして、同行していたであろうオーフィスも行方が知れないでいた

そのまま次元の狭間に留まっているのか、またはサマエルの呪いで滅びたか……
龍神の調査は継続中だが、シャルバの手によってハーデスのもとに行った可能性は低いとされていた
何故なら……一誠がシャルバを仕損じる筈が無いからだ
一誠なら命を賭してでも確実にシャルバを仕留める
祐斗を含め、誰もがそれを信じきっていた
新の方は現に『初代クイーン』マヤが帰還してきた
それゆえに『初代キング』を討ち取ったのだと直ぐに得心できた
だが、どれだけ調べても新と一誠の死を拭い去るものが出てこない……
彼らの死は報道されず、一部の者にしか伝えられていない
「痛み入ります。――――部長に会う事は出来ましたか？」
頭を何とか切り替えた祐斗の問いにライザーは首を横に振る
「無理だったな。部屋のドアを開けてくれなかったぜ。呼んでも反応も無かった。……ま、会える状況でもないだろう。愛した男がああいう形になってしまったんだからな」
「……お茶、どうぞ」とフロアに備えてあるテーブルにティーカップを置く小猫
いつもと変わらぬ表情の小猫はフロアの隅にある椅子に座った
「良いかね、レイヴェル。とにかく元気を出すのだよ？」

フロアに更に2名が姿を現す
1人はレイヴェル、もう1人はフェニックス家の長兄にして次期当主――ルヴァル・フェニックス
レーティングゲームでもトップ10内に入った事もある男性で、近々最上級悪魔に昇格するとも噂されている
どうやらライザーは彼の付き添いでここに来たようだ
ルヴァル氏は妹であるレイヴェルを励ました後、祐斗を確認する
「リアスさんの『騎士(ナイト)』か。この様な状況だ。キミで良いだろう」
ルヴァル氏は祐斗に近づき、懐(ふところ)から数個の小瓶――フェニックスの涙を取り出した
「これをキミ達に渡すついでに妹とリアスさんの様子を見に来たのだよ。こんな非非常時だ、涙も各迎撃部隊のもとに出回りこれしか用意できなかった。有望な若手であるキミ達に大変申し訳無く思う。――もうすぐ私は愚弟を連れて魔獣迎撃に出るつもりでね」
フェニックスの兄弟も魔獣の迎撃に出るようだ
確かに不死身のフェニックスは前線の心強い戦力となるだろう
ライザーは「……愚弟で悪かったな」と口を尖らせていた

フェニックス家は現代の上級悪魔にしては珍しく多い４兄弟
長男と三男がゲームに参加し、次男がメディア報道の幹部らしい
祐斗はルヴァル氏からフェニックスの涙を受け取る
「リアスさんもリアスさんの『女王（クイーン）』も彼らの死で酷く落ち込んでいる。こんな時に冷静であるべきは恐らくキミだろうね。情愛の深い眷属でありながら、仲間の死に耐える――。見事だよ」
「ありがとうございます」
そう言われるものの、正直祐斗もいっぱいいっぱいだが……それでも耐えなければならない
何故なら、この場にいないリアスと朱乃がルヴァル氏の言うようにまともな状態ではないからだ
リアスは城の自室に新の右手を持ったまま閉じこもってしまった
朱乃も心の均衡を失い、虚ろな表情でゲストルームのソファに座っている
２人とも話しかけても一切反応を示さない……
新に依存していた２人の心中はあまりあるものだろう……
アーシアも一誠の駒を手に持ち、ゲストルームでずっと泣いている
「……今すぐにイッセーさんのもとに行きたい……。……でも、私がイッセーさんを

追ったら……イッセーさんはきっと悲しむから……。……ずっと一緒だって、約束したんです……。それなら、私もそこに行ければずっと一緒だと思ってしまって……。……イッセーさん……私はどうすれば良いんですか……？」

彼女もまた必死に悲しみと戦っていた

ゼノヴィアとイリナは未だ天界にいるが、新と一誠の死が伝えられているかどうかは分からない

天界の『システム』に影響を与えるであろうゼノヴィア（神の不在を知る）が天界にいられるのは、アザゼルや北欧神話の世界樹――――ユグドラシルの協力で『システム』がある程度補強されたのだが、それでも短期間しかいられない

ギャスパーとロスヴァイセ、渉と祐希那も強化を図る為に出掛けたまま連絡が無い

……少し前まではこれ以上無い程に最高のチームだったグレモリー眷属

今ではその面影すら無い……

チームの要（かなめ）だった新と一誠を失ったのは大き過ぎる……

ルヴァル氏は言う

「我が家としてもレイヴェルを闇皇くんの眷属にしていただきたかったのだよ。出来る事ならそのまま彼のもとに送り出したかった」

「はい、それは存じております」

「……レイヴェルの今後をどうするかはこれからだが、今はここに置いてくれないだろうか？せっかく友人も出来たようだし。小猫さんとギャスパーくん、それに渉くんに祐希那さんだったかな？連絡用の魔法陣越しによく彼女達の事を話してくれていた。とても楽しそうだったよ」

「はい、レイヴェルさんは僕達がお預かり致します」

祐斗の一声にルヴァル氏は笑んだ

「うむ、では行くぞ、ライザー。お前もフェニックス家の男子ならば業火の翼を冥界中に見せつけておくのだ。これ以上、成り上がりとバカにされたくはないだろう？」

「分かっていますよ、兄上。じゃあな、木場祐斗。リアス達を頼むぜ」

ルヴァル氏とライザーはそれだけ言い残してこの場を去っていった

再び静まり返るフロア

レイヴェルが小猫の隣に座り――途端に目元に涙を溜めて顔を手で覆う

「……こんなのってないですわ……。ようやく、心から敬愛できる殿方のもとに近づけたのに……」

小猫がボソリと呟く

「……私は何となく覚悟はしていたよ。……激戦ばかりだから、いくら新先輩やイッセー先輩、祐斗先輩が強くても、いつか限界が来るかもしれないって」

……小猫は心中で既に覚悟を決めていたようだ
あれだけ多くの死線に直面すれば、そう考えるのは当然
小猫の一言を聞いたレイヴェルは立ち上がり、涙を流しながら激昂した
「……割り切り過ぎですわよ……ッ。私は小猫さんのように強くなれませんわ……っ！」
同級生からの激情を当てられた小猫
いつもの無表情が徐々に崩壊し、震えながら涙を流していく
「……私だって……っ。……いろいろ限界だよ！やっと想いを打ち明けられたのに、死んじゃうなんてないもん……っ！新先輩……バカ！バカです……ッ！」
嗚咽を漏らしながら、小猫は制服の袖口で目元を隠した
相当無理をしていたのだろう
懸命に堪えていたものが一気に崩れたかの如く泣き崩れていく
レイヴェルはその小猫の姿を見て、優しく抱き締めた
「小猫さん……ごめんなさい」
「……うぅ、レイヴェル。つらいよぉ、こんなのってないよぉ……」
1年生2人にとって、新の死はあまりにも大きかった
祐斗はそれでも耐えた

ここで泣いても何も変わらない……

「木場祐斗くんか」

第三者の声、振り返れば――――そこには堕天使幹部『雷光』のバラキエルと朱乃の母、姫島朱璃の姿があった

「そうですか、朱乃は……」

祐斗はフロアに現れたバラキエルと朱璃に状況を説明しながら廊下を進む

連れていく先は朱乃がいるゲストルームだ

バラキエルと朱璃も沈痛な表情で、事情を知った上で悲しんでいるのだろう

フロアにいた小猫とレイヴェルにはアーシアのフォローを頼んでいる

正直なところ彼女達もその様な状態ではないのだが……

祐斗は彼女達の前で新や一誠の代わりになれない事を情けなく思っていた

朱乃が滞在する部屋の前に到着し、ドアをノックする

返事は無いが、祐斗とバラキエル、朱璃はドアを開いて入室していく

部屋の中は明かりを灯しておらず、暗がりのままだった

部屋の隅にあるソファに朱乃が座っているが、彼女の双眸は虚ろなままだった……
バラキエルが1歩前に出て、娘の肩を揺する
「……朱乃」
父親の声を聞いたからか、朱乃が初めて反応を示す
「……とう、さま……かあ、さま」
父と母の顔を確認して呟く朱乃
バラキエルはただ黙って頷き、朱乃を抱き締めた
「話は聞いている」
その一言を聞いて朱乃は表情を戻し、父親の胸に顔を寄せた
「父さま……母さま……私……」
涙混じりの声、朱璃は娘の頭を優しく撫でる
「今は泣いて良いのよ、朱乃。あなたが泣き止むまで、私達はずっとここにいますから」
「……うぅ、新ぁ……どうして……」
嗚咽を漏らす朱乃
バラキエルと朱璃がいれば、少しでも回復できるかもしれない
祐斗はこれ以上いても邪魔になると感じて、静かに部屋を去っていった

「――――匙くん」
祐斗がフロアに戻る道中、廊下で匙と出会す
「よ、木場」
「どうしてここに？」
「ま、会長がちょいとリアス先輩の様子を見に来たってところかな。その付き添い。表ですれ違い様フェニックスのヒト達にも会ったけどさ」
「そっか、ありがとう」
ソーナもリアスの様子を見に来ていたようだ
祐斗は匙と共にフロアまで歩き、その中で匙が決意の眼差しで言う
「木場、俺も今回の1件に参加するつもりだ。都市部の一般人を守る」
シトリー眷属も冥界の危機に立ち上がったようだ
実力のある若手悪魔には召集が掛けられており、間違いなく大王バアル眷属と大公アガレス眷属も出るだろう
本来ならば祐斗達も今回の1件に参加しなければならない
祐斗は「僕達も後で合流するつもりだ」と言うが、匙は心配そうに訊いてきた

「……リアス先輩達は戦えるのか？」
今のリアス達を知ればそう言う感想を抱くのは当然
まともに戦える状態ではない……だが、それでも行かなければならない
「戦うしかないさ。この冥界の危機に力のある悪魔全てに召集が掛けられているのだから。僕達は力のある悪魔だ。――やらなきゃダメさ」
祐斗は自分の心情とグレモリー眷属のあるべき姿を重ねてそう吐露した
匙が笑みながら「だよな」と大きく頷く
笑みを浮かべていた彼だったが、一転して表情を怖くする
「兵藤と竜崎を殺した奴は分かるか？」
迫力に染まった瞳で訊いてくる匙に対し、祐斗は答えた
「分かるけど、もうこの世には存在しないよ。――その者はイッセーくんと新くんが倒しただろうからね」
一切の疑いも無く信じきった祐斗の答えに匙は一瞬だけ目元を緩ませた
「そうか。相討ち。いや、負けるわけがねぇ。勝って死んだんだよな？あいつらが負ける筈がねぇんだッ！」
匙は目元から大粒の涙を流し、心底悔しがっていた
気迫に満ちた表情のまま匙が言う

「あいつらを殺した奴らはもういないんだな。だったら、そいつらが属していた『禍の団（カオス・ブリゲード）』と闇人（やみびと）の奴らをぶっ倒せば良いだけか」
「匙くん、キミは……」
「俺の目標だったんだ、あいつらは。あいつらのお陰で俺はここまで頑張れた。アガレスとの戦いでも活躍できた……ッ！身近に同じ『兵士（ポーン）』のあいつらがいたから俺はどんな辛（つら）いトレーニングでも耐えてこられた！」
新と一誠の背中をずっと追いかけていた匙にとって、同期である２人の存在は何者よりも大きかったのだろう
匙は憎悪に包まれた言葉を吐き出す
「俺の目標を――――俺のダチを殺した奴らは絶対に許さない。全員、ヴリトラの炎で燃やし尽くしてやる……ッ！俺の炎は死んでも消えない呪いの黒炎。たとえ刺し違えても命だけは削りきってやるさ……っ！」
匙は凄まじいオーラを内部から滾（たぎ）らせ、今まさに爆発しそうな力を懸命に抑え込む
「死んでもらっては困りますよ」
声がした方に振り向けば、そこにはソーナの姿があった
「会長」
「サジ、感情的になるのは分かりますが、だからと言ってあなたに死んでもらっては困り

ます。――――やるのなら、生きて相手を燃やしなさい」
「はいっ！」
ソーナの言葉に匙は涙を袖で拭い、大きく頷いた
ソーナの視線が祐斗に移る
「私達はこれで失礼します。魔王領にある首都リリスの防衛及び都民の避難に協力するようセラフォルー・レヴィアタンさまから仰せつかっていますので」
最上級悪魔クラスの強者は各巨大魔獣の迎撃に回っている為、政府は有望な若手悪魔に防衛と民衆の避難を要請している
祐斗達も本来そこに行かなければならない
「部長にお会いになられたんですね？」
祐斗の問いにソーナは静かに頷いた
「部屋にこもったきりです。私が問い掛けても反応はあまりありませんでした」
リアスの親友であるソーナでもダメだったようだ……
「代わりにこう言う時に打ってつけの相手を呼んでおきました」
「打ってつけの相手？」
祐斗が訝しげに問い返しても、ソーナは薄く笑みを見せるだけでその者の正体を教えてくれなかった

いったい誰を呼んだのだろうか……？

獅子王の檄

祐斗がフロアに戻ってくると丁度テレビには首都の様子が映し出されていた
避難が続く状況、大勢の人々が冥界の兵隊によって安全な場所に導かれていく
ふいにテレビに首都の子供達が映し出され、レポーターの女性が1人の子供に尋ねた
『ぼく、怖くない？』
レポーターの質問に子供は笑顔で答える
『へいきだよ！だって、あんなモンスター、おっぱいドラゴンとダークカイザーがきてたおしてくれるもん！』
満面の笑顔でそう応える子供の手には――――『おっぱいドラゴン』と『ダークカイザー』を模した人形が握られていた
画面の端から元気な顔と声が次々と現れていく
『そうだよ！おっぱいドラゴンとダークカイザーがたおしてくれるよ！』
『おっぱい！かいざー！』
子供達は不安な顔をしないばかりか、新（ダークカイザー）と一誠（おっぱいドラゴン）が助けてくれると信じ切っていた

『はやくきて、おっぱいドラゴン！ダークカイザー！』

子供達の元気な姿を見た祐斗は口元を押さえ、必死に込み上げてくるものを堪(こら)えていた

『……見ていてくれているかい、イッセーくん、新くん。キミ達を待ち望む子供達の姿……。皆、不安な顔1つ見せていないよ？皆、キミ達が助けてくれると心から信じ切っているんだ……。だからさ、来ないとダメじゃないか……っ！ここにいなきゃ、ダメじゃないか……っ！どうして、キミ達はそこに行けないんだ……っ！キミ達はこの子達のヒーローじゃないか……っ！応えてくれよ、イッセーくん、新くん。この子達を裏切っちゃダメだろう……っ！』

「俺達が思っている以上に冥界の子供達は強い」

突然の声、いつの間にか隣にその漢(おとこ)はいた

「あなたは！」

「兵藤一誠と竜崎新はとてつもなく大きなものを冥界の子供達に宿したのだな。――――久しいな、木場祐斗。リアスに会いに来た」

その漢(おとこ)の名は――――サイラオーグ・バアル

――――

ソーナに呼ばれたと言うサイラオーグは祐斗を連れてリアスの部屋の前に到着する
「入るぞ、リアス」
それだけ言ってサイラオーグはリアスの部屋に堂々と入っていく
室内を進むと……ベッドの上で体育座りをしているリアスの姿があった
表情は朱乃以上に虚ろであり、目元は赤く腫れ上がっていた
あれからずっと泣いていたのだろう……彼女の傍らには黒ずんだ新の右手が置かれている
サイラオーグは近づくなり、つまらなそうに嘆息する
「情けない姿を見せてくれるものだな、リアス」
彼の態度を見て、リアスは不機嫌な表情と口調で訊く
「……サイラオーグ、何をしに来たの……？」
「ソーナ・シトリーから連絡を貰ってな。安心しろ、プライベート回線だ。大王側にあの男達が現在どのような状態か一切漏れてはいない」
大王側の政治家に新と一誠の死が伝われば、どの様な手段で現魔王政権に食ってかかるか分からない
２人は既に冥界にとって大きな存在となっているからだ

サイラオーグはリアスに真っ正面から言い放つ
「――――行くぞ。冥界の危機だ。強力な眷属を率いるお前がこの局面に立たずにしてどうする？俺とお前は若手の最有力として後続の者に手本を見せねばならない。それに今まで俺達を守ってくださった上層部の方々――――魔王さまの恩に報いるまたとない機会ではないか」
もっともな意見を口にするサイラオーグ
普段のリアスならそれを聞いて奮起するのだが、リアスは黒ずんだ新の右手を持って顔を背けるだけだった
「……知らないわ」
「……自分の男が行方知れずと言うだけでここまで堕ちるか、リアス。お前はもっと良い女だった筈だ」
サイラオーグの一言を聞き、リアスは枕を投げて激昂する
「彼がいない世界なんてッ！新がいない世界なんてもうどうでも良いのよッ！……私にとって彼は、あのヒトは……誰よりも大切なものだった。あのヒト無しで生きるなんて私には……」
再び涙を浮かべて表情を落ち込ませようとするが――――サイラオーグがリアスに大きく言い放つ

「あの男が……闇皇の竜崎新が愛した女はこの程度の女ではなかった筈だッ！あの男はお前の想いに応える為、お前の夢に殉ずる覚悟で誰よりも勇ましく前に出ていく強者だったではないかッ！主のお前が、あの男を愛したお前が、その程度の度量と器量で何とする⁉」

サイラオーグの言葉を聞いてリアスは驚いているようだった

構わずにサイラオーグは続ける

「立て、リアス。あの男はどんな時でも立ったぞ？前に出た。ただ、前に出た。赤龍帝と共にこの俺を真っ正面から殴り倒した男を、お前は誰よりも知っている筈だッ！」

好敵手（ライバル）だからこそ分かる事がある……

レーティングゲームでの激戦でサイラオーグは新と一誠の生き様を認識したのかもしれない

「それにお前はあの男達が本当に死んだと思っているのか？」

サイラオーグの問いにリアスだけでなく祐斗も一瞬言葉を失い、その反応を見てサイラオーグは苦笑する

「それこそ滑稽だ。あの男達が死ぬ筈が無い。竜崎新はお前を愛した。兵藤一誠にもそう言った女がいる筈だ。そんな奴らが愛した女を放って死ぬものか。それが『おっぱいドラゴン』と『ダークカイザー』だろう？」

それは根拠も無い不確かな事だが、サイラオーグのその言葉は他の何よりも説得力があるように感じた

サイラオーグは踵(きびす)を返す

「俺は先に戦場で待つ。――必ず来い、リアス。そしてグレモリー眷属！あの男達が守ろうとしている冥界の子供達を守らずして何が『おっぱいドラゴン』と『ダークカイザー』の仲間かッ！」

それだけ言い残すとサイラオーグは部屋から去っていった

ソーナの言う「打ってつけ」とは、こう言う事だったのかもしれない

『……そうだ、彼らが生きている可能性をもっともっと模索しても良いじゃないか。駒だけになったとしても、腕だけになったとしても復活を探す事をしても良いじゃないか！どうして、そんな簡単で分かりやすい事に僕は――僕達は辿り着けなかったんだろう……』

リアスの瞳に少しだけ光が戻り、祐斗の心中にも少しだけ希望が戻った

拳だけで戦い抜いてきた漢(サイラオーグ)だからこそ、彼だけに分かるものがある

祐斗達にはそれが確かに伝わった

城内に〝ある人物〟が現れたと聞いた祐斗は城内地下の一室に向かった
そこにいたのはヴァーリチーム
疑似空間での一戦後、ヴァーリが不調な事もあってグレモリーの当主はサーゼクスとアザゼルの進言で彼らを秘密裏に匿(かくま)っていた
勿論、テロリストである彼らをグレモリー城に置くのは重大問題だが、リアス達を助けてくれた事実のお陰でグレモリーの現当主は一時的な保護を決めたのだ
ヴァーリが身を休めている部屋に入ると、ヴァーリチームの面々と小柄なご老体の姿が視界に入る
その人物は初代孫悟空、祐斗が今会いたかった人物だ
初代孫悟空はベッドで上半身だけを起こしているヴァーリの体に手を当てて、仙術の気を流しているところだった
白く発光する闘気に満ちた手を腹部から胸、胸から首、そして口元に移していく
ゴボッとヴァーリの口から黒い塊が吐き出され、初代孫悟空はそれを透明な容器に入れて蓋をした
その上から呪符らしき物を貼って封印する
取り出されたのはヴァーリの体に巣食っていたサマエルの毒だろう

初代孫悟空が口元を笑ます
「身に潜んでおった主な呪いは仙術で取り出せたわい。これで体も楽になるだろうよぃ。まったく、大馬鹿もんの美猴(びこう)が珍しく連絡なぞ寄越したと思ったら、白い龍(バニシング・ドラゴン)の面倒を見ろとはのぉ」
ベッド横の椅子に座る美猴が半眼になっていた
どうやら初代孫悟空を呼び寄せたのは美猴のようだ
誰よりも初代孫悟空に対して苦手意識を持っていたのだが、ヴァーリを救いたい一心で呼んだのだろう
「うるせぃ、クソジジイ。――――で、ヴァーリは治るんかよ?」
「ま、こやつ自身が規格外の魔力の持ち主だからのぉ。儂(わし)が切っ掛けを与えりゃ充分だろうて」
不調だったヴァーリの体は今の治療で快復に向かいそうだ
「……礼を言う、初代殿。これで戦えそうだ」
ヴァーリが初代孫悟空に敬意を払って礼を口にしていた
初代孫悟空が美猴の頭をポンポン叩きながら言う
「呪いが解けて直ぐに戦いの事を考えるなんぞ、まったくどうして、どうしようもない戦闘狂じゃぃ。――――さての、儂もそろそろ出掛けさせてもらうぜぃ。バカの顔も見られ

た事だしのぅ」
「ジジイ、どっか行くのか？」
美猴の問いに初代孫悟空は煙管を吹かす
「そりゃ、儂はこれでも天帝んところの先兵じゃからのぉ。ちょいと冥界にお遣いじゃわい。――――テロリスト駆除ってやつよ。年寄り使いの荒い天帝じゃしのぉ」
初代孫悟空も今回の1件に力を貸してくれるらしい
これ程心強い申し出もないものだが、引っ掛かるものがあった
祐斗の心中をヴァーリが代弁する
「……初代殿、天帝は曹操と繋がっているのだろう？京都の1件――――妖怪と帝釈天（たいしゃくてん）側の会談を邪魔したと曹操と言う図式は天帝の中ではどういう位置付けになっている？」
ヴァーリの質問に初代孫悟空は愉快そうに笑むだけだった
「さーての。儂はあくまで天帝の先兵兼自由なジジイじゃてな。あの坊主頭の武神が何処まで裏で企んでいるかなんて興味も無いわい。ただのぅ、天帝は暴れんと思うぜぃ？これから先の事は分からんがねぃ。どちらかと言うと、高みの見物だろうよぃ。ま、今回はハーデスがやり過ぎたんだろうぜぃ」
やはりハーデスが今回の1件を操っていたと見て間違いなさそうだ
ヴァーリ達と初代孫悟空の話が一段落ついたところで祐斗が話を切り出した

「初代、おひとつお訊きしたい事があってここに来ました」
「なんだい、聖魔剣(せいまけん)の。このジジイで良ければ答えられる範囲で答えてやるぜぃ？」
「今サマエルの呪いに触れたあなたに訊きたいのです。――――この呪いを受けたドラゴンが生き残るとしたら、どのような状況なのかを」
　仙術と妖術を極めたと称される大妖怪であり、仏にまで神格化された斉天大聖孫悟空(せいてんたいせい)『エデンの蛇』サマエルの呪いに触れてどう感じたのか、祐斗はそれが訊きたかった
「肉体はまず助からねぇだろうねぃ。この呪いの濃度じゃ最初に肉体が滅ぶ。次に魂だ。肉体と言う器を無くした魂ほど脆いものはねぇやねぃ。こいつもちっとの時間で呪いに蝕まれて消滅しちまうだろうよ。さて、問題はここからだぜぃ。――――じゃあ、なんで魂と連結しているであろう悪魔の駒(イーヴィル・ピース)は呪いを受けてなかったか？赤龍帝の事はこのジジイの耳にも入ってるぜぃ。主のもとに駒だけは戻ってきたんだろぉ？」
「はい、駒だけが召喚に応じました」
「その駒からサマエルの呪いは検出されたんかぃ？」
「いいえ、検出されませんでした。サマエルのオーラを感じ取れたのは龍門(ドラゴン・ゲート)からのみです。彼の駒はサマエルの呪いに掛かっていませんでした」
　そう、一誠の駒が帰還した後、アザゼルがその駒を調査した結果――――サマエルの呪いは掛かっていなかった

それを知ったアザゼルは目を細め、そのままグリゴリ本部に戻ったらしい
もしかしたら、その時から一誠の死に疑問の片鱗があったのかもしれない
祐斗を含め誰もが駒だけの帰還――そのケースが生じた場合が例に違わず戦死となる事、新と一誠を失った悲しみ、それらの事実を突きつけられて可能性を捨てきってしまっていた
祐斗の答えを聞いた初代孫悟空は煙管を吹かし、口の端を笑ました
「――て事はだ、赤龍帝の魂は少なくとも無事な可能性があるって事だぜぃ。今あのエロ坊主がどんな状況になっているかは分からんけどねぃ、案外次元の狭間の何処かでひょっこり漂(ただよ)っているかもしれんぜ」
祐斗はその言葉を聞き、内側から湧き上がるものを懸命に抑え込んだ
『まだだ。まだ早い。まだ歓喜するには早いじゃないか……っ！けれど、可能性がある！僕の親友が生きている可能性がある！』
一誠の方は生きている可能性が示唆されるが、まだもう1人の問題が拭い去れていない……
「けどよ、ジジイ。闇皇の方はどうなんだよ？」
「んーむ、蝙蝠坊主の方はまだ分からんのぉ。何せそっちは悪魔の駒(イーヴィル・ピース)じゃのぅて、腕だけ帰ってきたんじゃろ？ここへ来る途中、『初代クイーン』とやらに事情を聞いたぞぃ。涙

と鼻水を垂れ流して聞き取るのに手間取ったがの……」
新が生存している可能性は限りなく低いと見られている……無理もなかった
しかし、初代孫悟空は口の端を笑ます
「ま、そっちの蝙蝠坊主も案外肝っ玉じゃから、赤龍帝と同じく次元の狭間のどっかを漂ってるってオチかもしんねえぜぃ？――――と、美猴はこれからどうすんだぃ？おめえさん達、各勢力からも『禍の団（カオス・ブリゲード）』からも手配されてんだって？」
美猴の横で黒歌が挙手して言う
「私はリーダーについていくにゃん。何だかんだでこのチームでやっていくのが１番楽しいし？」
魔法使いのルフェイも頷く
「はい、私も皆さまと共に行きますよ！アーサーお兄さまは？」
静かなオーラを漂わせるアーサーは笑顔のまま口を開く
「英雄派に興味や未練は微塵もありません。今まで通りここにいた方が強者と戦えるでしょうしね。少なくとも私は曹操よりもヴァーリの方が付き合いやすいですよ」
彼らの言葉を聞いて美猴が改まってヴァーリに言う
「俺っちも今まで通り、お前に付き合うだけだぜぃ？俺らみてぇなハンパもんを指揮できるのなんざおめぇだけさ、ヴァーリ」

チームメンバー全員の残留を聞いたヴァーリは小さく口元を緩ませた
「……すまない」
「らしくねぇし！謝んな、ケツ龍皇（りゅうこう）！」
「やめろ、アルビオンが泣く。ただでさえカウンセラー希望の状態だ」
その光景を見ていた初代孫悟空は煙管を吹かす
「赤龍帝は民衆の心を惹き付け、白龍皇は『はぐれ者』の心を惹き付ける。二天龍、表と裏。お主ら、面白い天龍じゃて」
それだけ言い残して初代孫悟空は退室していった
それを確認してから祐斗はヴァーリに改めて問う
「ヴァーリ・ルシファー、キミはどうするんだい？」
「……兵藤一誠と竜崎新の仇討（かたき）ちと言えばキミは満足するのかな、木場祐斗？」
「いや、ガラじゃないと吐き捨てるだけさ。それに仇がいるとするのなら、それは僕達の役目だ。いいや、僕が討つ」
「なるほど、その通りだ。――――俺は出し切れなかった力を誰かにぶつけたいだけだ。なに、俺が狙う相手と俺を狙う相手は豊富だからな」
ヴァーリはバトルマニアらしい戦意に満ちた不敵な笑みを見せる

ヴァーリ達がいる部屋から出て少し歩くと、見知った人物が祐斗の視界に映る
腕を組み、壁に背を預けているのは――思いもよらぬ兄弟だった
「――ッ。キミ達は……っ！」
「久しぶりだな。冥界中が騒いでるお陰で城内に忍び込むのは簡単だった」
そこにいたのは『地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）』と呼ばれる２人組――幽神正義（ゆうがみまさよし）と幽神悪堵（ゆうがみあくど）
危険度が高い賞金首に認定されている兄弟の登場に祐斗は警戒心を明らかにする
そんな祐斗に正義は制止を掛けた
「殺気を鎮めろ。俺達は貴様らの上司からこの場所を聞いて、やって来ただけだ」
「……アザゼル先生が、キミ達を……」
幽神兄弟を呼んだのがアザゼルである事を知った祐斗は〝とりあえず〟攻撃色を緩める
警戒心を残しておき、正義に訊（たず）ねる
「何をしに来たの？」
「……兵藤一誠が死んだそうだな」
「……先生が喋ったの？」

「いや、奴の口からは聞いていないが――ここへ来る途中、アーシア・アルジェントの様子を見た。……とても声を掛けられる様子じゃなかったが、それを見て大体の事情を把握した」
一誠の死がこの兄弟にも伝わっている……
顔をしかめる祐斗に正義はこう言ってきた
「貴様は本当に兵藤一誠が死んだと思うか？」
その言葉に眉根を潜める祐斗
〝生きている可能性はある〟――初代孫悟空に提示された可能性を言おうとした祐斗の言葉を正義は先に遮(さえぎ)った
「俺は奴が死んだなどと微塵も思っていない。少なくとも――俺の目で確かめるまではな」
「――ッ」
それは〝一誠の死〟を真っ向から否定する発言
サイラオーグと同じく根拠も何も無い――強い意志が感じられるものだった……
祐斗は自然と口を開いた
「……キミもそう思うのか」
「当たり前だ。俺のいない間に勝手に死ぬなど認めん。兵藤との決着がまだついていな

い。たとえ何処にいようが、この俺が目の前に引きずり出してやる」
正義の持論に祐斗は〝このヒトもサイラオーグ・バアルと同じ事を言ってくれるな……〟と心中で打ち震える
根拠が無くとも一誠の死を否定する発言は一縷の希望を宿してくれる
祐斗は真っ直ぐな目で幽神兄弟に言い放った
「……イッセーくんは生きている。可能性が無いわけじゃないんだ。それを信じて僕達は待つよ。――――彼が帰ってくる事を」
祐斗はそれだけ言い残して地下から去っていった
祐斗が去った後、弟の悪堵が正義に訊く
「兄貴、兵藤が死んだと思わないって事をあの女に言わなくて良かったのか？」
「今はそっとしておいてやろう。俺達が言ったところでどうにもならん。今は俺達に出来る事をやれば良い」
そう言った直後、正義の全身から殺気めいたオーラが滲み出てくる
鬼気迫る兄の姿を見て冷や汗を流す悪堵
次の瞬間、正義の左足に脚甲が展開され――――地下の壁に強烈な蹴りの一撃が加えられる
大きな破砕音と共に〝怒〟の一文字が地下の壁に刻み込まれた

「アーシア・アルジェントにあんな顔をさせた奴らを――――見つけ次第、片っ端から蹴り殺す……！相手が誰であろうと、骨の髄まで蹴り砕くぞ、相棒……！」
「あ、ああ……勿論だぜ、兄貴」
怒らせてはならない鬼の気迫は、もはや身内にすら止められないものだった……

地下から戻った祐斗は初代孫悟空からの助言を元に〝ある人物〟への連絡を取り付けようとしていた
「祐斗さん、こちらにいたのね」
背後から祐斗を呼び止めたのはグレイフィアだった
いつものメイド服ではなく、髪を1本の三つ編みに束ね、ボディラインが浮き彫りになる戦闘服を身に着けていた
一目で魔王眷属として出陣する為だと理解できてしまう
「グレイフィアさま。……前線に？」
「ええ、聖槍の手前、サーゼクスが出られない以上、私とルシファー眷属で魔王領の首都に向かう魔獣――――『超獣鬼（ジャバウォック）』を迎撃します。最低でもその歩みを止めてみせます」

他の迎撃部隊も強大な魔獣達を凍り漬けにしたり、強制転移、巨大な落とし穴を作り上げて進行を止めようとした

だが、それら全て失敗に終わっている……

強制転移などの魔力や魔法の類が通じず、それらの術式に対して無効化の呪法も組み込まれているらしい

そこまで凶悪な形式を生み出したものに付与できる……やはり『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』の持つ可能性は危険極まりないものだった

しかし、それでも悪魔の中でも最強と名高いルシファー眷属なら魔獣を止められるかもしれない

ちなみに祐斗の剣の師匠もルシファー眷属の『騎士（ナイト）』らしい

「これをリアスに渡してもらえますか？サーゼクスとアザゼル総督からの情報です」

グレイフィアが祐斗に1枚のメモを渡す

それには悪魔文字で『アジュカ・ベルゼブブ』、『拠点』と走り書きされていた

「現ベルゼブブ――――アジュカ・ベルゼブブさまがいらっしゃる現在地です。アザゼル総督からの伝言も伝えます。『イッセーの駒と新の右手を見てもらえ。あの男なら、その2つに残された何かを解析できるだろう』――――と。リアス達を連れてここに赴（おもむ）きなさい、祐斗さん。アジュカさまならば僅かな可能性でも拾い上げてくれるでしょう」

アジュカ・ベルゼブブは『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』を制作した張本人であり、祐斗が連絡を取りたかった人物でもある

アザゼルはこの状況下でもいち早く情報を集めていた

グレイフィアが微笑(ほほえ)む

「私の義弟(おとうと)になる者がこの程度で消滅など許される事ではありませんから。早く生存の情報を得てリアスを奮い立たせておあげなさい。力のある若手がこの冥界の危機に立たずして次世代を名乗るなどおこがましい事です。私は義妹(リアス)と義弟(アーシアさん)が冥界を背負える程の逸材だと信じていますから」

ルシファー眷属の『女王(クイーン)』は優しくも厳しいヒトだった

アジュカ・ベルゼブブ

深夜、祐斗とリアス、朱乃、アーシア、小猫、レイヴェルの6人はグレイフィアに渡されたメモ書きに記される場所に到達していた
あの後、祐斗はリアスに事の顛末を話して何とか部屋から連れ出す事が出来た
他のメンバーにも同様にグレイフィアからの言葉を伝え、何とかここに連れてきた
全員が藁にもすがる思いでここに来ている……
そこは駒王町から電車で8駅程離れた市街だった
人気の無い町外れに存在する廃ビル――そこがアジュカ・ベルゼブブがいる人間界での隠れ家の1つらしい
この様な廃れた町に魔王の1人がいるとは想像もつかないだろう
廃ビルに足を踏み入れる
1階ロビーには疎らに人気があった
若い男女が幾つかのグループに分かれて話し合いをしている
悪魔ではないが、異様な気配を感じる
ここにいる全員が異能を持つ人間が体に纏う独特の空気を発していた

1つのグループが祐斗達に気付き、携帯を取り出して向ける
1人の男性が険しい表情で驚愕の声音を口にした
「……あいつら、悪魔だぜ。しかも、何だ……この異様な『レベル』と『ランク』は……っ！」
その言葉を切っ掛けにロビー内の全員が携帯を取り出して祐斗達を捉える
全員が携帯の画面を食い入るように見つめており、表情を険しくしていた
彼らが取り出した携帯は異形を計る機能を有しているらしい
ふいに祐斗の脳裏に過ったのはアジュカ・ベルゼブブの性質――趣味だ
人間界で『ゲーム』を開発し、その運営を取り仕切っている
彼らが持つ携帯は恐らくその『ゲーム』に関するツールか何かだろう
それを通して祐斗達の正体を把握した
『……あまり目立つのも嫌だな……』
祐斗がそう感じていると、ロビーの奥から祐斗達と同質のオーラを持つ者が現れる
「申し訳ございません。このフロアは文字通り我らが運営するゲームの『ロビー』の1つになっておりまして……」
スーツを着た女性――悪魔の女性だと一目で理解した
その女性は一礼した後、奥のエレベーターに手を向ける

「こちらへ。――屋上でアジュカさまがお待ちです」

――――――

「話は聞いている。大変なものに巻き込まれたようだ。いや、キミ達には今更な事か。毎度、その手の襲撃を受けていて有名だからね」
「アジュカさまに見ていただきたいものがあるのです」
リアスが懐(ふところ)から新の右手と一誠の駒を取り出そうとした時だった
「ほう、見て欲しいもの。――しかし、それは後になりそうだ。キミ達の他にもお客様が来訪しているようなのでね」
アジュカ・ベルゼブブがリアスを手で制し、庭園の奥へ視線を送る
アジュカの言葉で視線で祐斗達も初めて気配に気付く
庭園の奥から闇より生じたのは――祐斗達と同様の悪魔だった
「人間界のこのような所にいたとはな。偽りの魔王アジュカ」
強大なオーラを体に漂(ただよ)わせている男性が数名
どれも上級悪魔クラスか、それ以上のオーラを感じる
彼らがアジュカ・ベルゼブブを「偽りの魔王」と呼んだだけで正体も知れた
アジュカ・ベルゼブブが苦笑して言う
「口調だけで1発で把握できてしまえるのが旧魔王派の魅力だと俺は思うよ」
「僕もいるんだ」
「オレ様もいるぜぇ?」

聞き覚えのある声が闇夜から聞こえてきた
先程の悪魔達の近くに現れたのは白髪の青年――ジークフリート
彼は祐斗達を一瞥するだけで直ぐにアジュカ・ベルゼブブへ視線を戻す
一方、別の場所から現れたのは神風一派の1人――アドラス・ヴェルメリオ
京都以来の登場だが、その姿が以前と少し変わっていた
表裏が反転した禍々(まがまが)しい目付きとなっており、全身も黒ずんでいた
胸の中央には砂時計型の赤い痣が刻まれている
彼の周りを浮遊している2つの円盤も凶悪な様相となっていた……
アドラスもジークフリート同様、祐斗達を鼻で笑うように一瞥する
彼らの行為を見た祐斗は――腹の中で沸き上がる怒りを懸命に抑え込んだ
「……彼を殺した者達……」
後方で朱乃達の殺気がざわつき始めた
危険な程のオーラが全身から滲み出ている……
それも当然、奴らは新と一誠の仇
怨敵を目の前にして殺意を抱かないわけがない
唯一、アーシアだけが悔しそうに涙を浮かべていた
「初めまして、アジュカ・ベルゼブブ。英雄派のジークフリートです。それとこの方々は

英雄派に協力してくれている前魔王関係者ですよ」
ジークフリートがアジュカ・ベルゼブブに挨拶する
話から察するに、英雄派に加担する魔王派の者もいるようだ
「知っているよ、キミは元教会の戦士だったね、ジークフリートくん。上位ランクに名を連ねていた者だ。協力態勢前は我々にとって脅威だった。二つ名は魔帝(カオスエッジ)ジークだったかな。――それで、俺に何の用があるのだろうか？先客がいるのでね、用件を聞こうか」
テーブルの上で手を組みながらアジュカ・ベルゼブブが静かに問う
ジークフリートは平静としているが、旧魔王派の悪魔達は体から敵意のオーラを迸(ほとばし)らせている
一触即発――アジュカ・ベルゼブブが少しでも不信を口にすれば、直ぐにでも襲い掛かるつもりなのだろう
「以前より打診していた事ですよ。――我々と同盟を結ばないだろうか、アジュカ・ベルゼブブ」
この場にいる祐斗達は驚愕に包まれた
混乱の一途を辿っている現状で現ベルゼブブを相手に同盟を持ちかけてきたのだから無理もない

しかも悪魔全体としてではなく、アジュカ・ベルゼブブ個人との同盟のようだ
ジークフリートは淡々と続ける
「あなたは現四大魔王でありながら、あのサーゼクス・ルシファーとは違う思想を持ち、独自の権利すらも有している。そしてその異能に関する研究、技術は他を圧倒し、超越している。ひとたび声を掛ければサーゼクス派の議員数に匹敵する協力者を得られると言うではありませんか」
実は現魔王政府の中で魔王派は大きく４つに分けられており、それぞれの魔王に派閥議員が従っている
その中で最も支持者が多いのがサーゼクス派とアジュカ派らしい
両派閥は現政府の維持と言う面では協力しているが、細かい政治面では対立も多く、よく冥界のニュースでも報道されている
ジークフリートの言葉を聞いたアジュカ・ベルゼブブは息を吐く
「確かに俺は魔王でありながら、個人的な嗜好で動いている。サーゼクスからの打診も言い付けも悉く破っている。傍(はた)から見れば俺がサーゼクスの考えに反対しているように見えるだろう。今運営している『ゲーム』も趣味の一環だからね」
「その趣味のせいで僕達もかなり手痛い目に遭った」
ジークフリートが苦笑する

どうやらアジュカ・ベルゼブブが制作した『ゲーム』とやらは『禍の団（カオス・ブリゲード）』活動を阻害しているようだ
「それはお互い様だろう」とアジュカ・ベルゼブブが返すと、ジークフリートは肩を竦める
「我々が1番あなたに魅力を感じているのは――あのサーゼクス・ルシファーに唯一対応できる悪魔だからだ。あなたとサーゼクス・ルシファーのお二人は前魔王の血筋から最大級にまで疎（うと）まれ、畏（おそ）れられる程のイレギュラーな悪魔だと聞いている。その一方がこちらに加わってくれればこれ以上の戦力はない」
ジークフリートの意見を聞き、アジュカ・ベルゼブブは顎に手を当てた
少し面白そうに表情を緩和させている
「なるほど、俺がテロリストになってサーゼクスと敵対するのも面白いかもしれない。あの男の驚く顔を見るだけでもその価値はあるだろう」
「こちらも有している情報と研究の資料を提供します。常に新しい物作りを思慮しているあなたにとって、それらは充分に価値のあるものだと断言できる」
ジークフリートの更なる甘言にアジュカ・ベルゼブブは頷く
「そうか。『禍の団（カオス・ブリゲード）』が得ている情報と研究資料。うむ、魅力的に思えるね」
冗談なのか本心なのか危うい状況だったが、アジュカ・ベルゼブブは1度瞑目し――

―目を開くと同時にハッキリと断じた
「――――だが、いらないな。俺にとってキミ達との同盟は魅力的だが、否定しなければならないものなのでね」
否定を聞いてもジークフリートは顔色を変えなかった
周囲にいる旧魔王派の悪魔達は殺気を一気に高め、その様子を見ているアドラスはゲラゲラと笑っていた
ジークフリートがアジュカ・ベルゼブブに訊く
「詳しく訊きたいところだけれど、簡潔にしよう。――――どうしてなのだろうか？」
「俺が趣味に没頭できるのは、サーゼクスが俺の意志を全て汲んでくれるからだ。彼とは――――いや、あいつとは長い付き合いでね。俺が唯一の友と呼べる存在なのだよ。だから、あいつの事は誰よりも知っているし、あいつも俺の事を誰よりもやく認識している。あいつが魔王になったから、俺も魔王になっているに過ぎない。俺とサーゼクス・ルシファーの関係と言うのはつまりそう言う事だ」
アジュカ・ベルゼブブとサーゼクス・ルシファーは旧知の間柄、もっと分かりやすく言えばライバル関係
それゆえに２人の間には、２人にしか分からないものがあるのだろう
それがアジュカ・ベルゼブブの中で確固たるものであり、テロリストとの同盟を破棄

する理由にもなる……
ジークフリートは表情を変えずに頷いていた
あらかじめ、この答えも予想していたのだと思われる
「そうですか。『友達』、僕にとっては分からない理由だが、そう言う断り方もあると言うのは知っているよ」
ジークフリートの皮肉げな笑みと言葉を受けて、旧魔王派の悪魔達が色めき立つ
「だから言ったであろう！この男は！この男とサーゼクスは独善で冥界を支配しているのだ！いくら冥界に多大な技術繁栄をもたらしたと言えど、このような遊びに興じている魔王を野放しにしておくわけにはいかないのだ！」
「今まさに滅する時ぞ！忌々しい偽りの存在め！我ら真なる魔王の遺志を継ぎし者が貴様を消し去ってみせよう！」
怨恨にまみれた言葉を受けてアジュカ・ベルゼブブは苦笑した
「如何にもな台詞だ。もしかしてあなた方は同様の事を現魔王関係者に言っているのだろうか？怨念に彩られ過ぎた言動には華も無ければ興も無い。――つまり、つまらないと言う事だな」
「我らを愚弄するか、アジュカッ！」
現魔王にキッパリと切り捨てられ、旧魔王派の悪魔達は殺気を一層濃厚に漂わせる

既に一触即発を通り越し、戦闘開始と呼べる雰囲気となった
アジュカ・ベルゼブブがテーブルの上で組んでいた手を解き、片手を前に突き出して小さな魔法陣を展開させる
「言っても無駄だとは分かっている。仕方ない、俺も魔王の仕事を久しぶりにしようか。――あなた方を消そう」
「「ふざけるなッ！」」
激昂した旧魔王派の悪魔達が手元から大質量の魔力の波動を同時に放出させた
アジュカ・ベルゼブブはその同時攻撃に動じる事無く、手元の小型魔法陣を操作するだけだった
魔法陣に記された数式と悪魔文字が高速で動いていく
相手の攻撃が直撃する刹那――当たる寸前で魔力の波動が全て軌道を外し、あらぬ方向に飛んでいった
矛先を違えた魔力は深夜の空を切るように放出されていく
その現象を見て旧魔王派の悪魔達は仰天し、アジュカ・ベルゼブブは椅子に座ったまま言う
「俺の能力の事は大体把握してここに赴いているのだろう？まさか自分の魔力だけは問題なく通るとでも思ったのだろうか？それとも強化してきて、この結果だった事に驚い

ているのか……、どちらにしてもあなた方では無理だ」
アジュカ・ベルゼブブの苦笑に旧魔王派の悪魔達は顔を引くつかせる
恐らく強化はしてきているのだろう
過去に起きた前魔王政府とのイザコザでサーゼクスとアジュカ・ベルゼブブは反魔王派のエースとして当時最前線に出ていた歴戦の英雄であり、2人の英雄譚は冥界でも広く伝わっている
サーゼクスは全てを滅ぼす絶大な消滅魔力を有し、アジュカ・ベルゼブブは全ての現象を数式と方程式で操る絶技を持つと言われていた
それを承知の上で旧魔王派の悪魔達は自身を強化してきた筈だが、それでもアジュカ・ベルゼブブには全く通じなかった……
旧魔王派の悪魔達の表情は一転して戦慄に彩られ、アジュカ・ベルゼブブが淡々と語る
「俺から言わせればこの世で起こるあらゆる現象、異能は大概法則性などが決まっていてね。数式や方程式に当てはめて答えを導き出す事が出来る。俺は幼い頃から計算が好きだったんだ。自然に魔力もそちら方面に特化した。ほら、だからこう言う事も出来る」
アジュカ・ベルゼブブが空を見上げる

怪訝に思った旧魔王派の悪魔達や祐斗達も視線を上に向けると……少しずつ風を切る音が大きくなっていく
空より迫ってくるのは――――先程軌道をずらされて飛んでいった魔力の波動
上空から降り注ぐ魔力の波動が旧魔王派の悪魔達を襲い、1人は絶叫すら上げられないまま消滅していった
当たる直前で避けた者達のもとに魔力の波動が追撃を開始する
追撃する波動を見て旧魔王派は驚愕していた
「我らの攻撃を操ったか！」
「こうする事も出来る」
アジュカ・ベルゼブブは魔法陣に刻まれた数式と悪魔文字を更に速く動かし続ける
恐らく魔法陣に刻まれた数式と悪魔文字が現象を計算して操る彼独自の術式プログラムなのだろう
旧魔王派を追撃する魔力の波動が弾けて散弾と化し、他の波動も細かく枝分かれして逃げる旧魔王派を執拗に追う
――――他者が放った魔力をそのまま操り、形式までも容易に変えている
「お、おのれぇぇぇぇっ！」
高速で追ってくる波動を避けきれないと分かった旧魔王派は手元を再び煌めかせ、攻

撃のオーラを解き放つ
だが、アジュカ・ベルゼブブが操る波動は放たれたばかりの魔力を軽々と打ち砕き、旧魔王派の悪魔達の体を貫通させていく
或いは散弾と化した魔力の波動が彼らの体にいくつもの大きな穴を開けていった
速度だけじゃなく、操っている魔力の波動の威力まで変化させている
向かってくる攻撃の軸をずらし、そのまま術式を乗っ取って操る
そこに形式変更を加え、速度と威力も上乗せさせた……
「……これがこの男の『覇軍の方程式』か……」
「軽く動かしてこれとは……いったい、貴様とサーゼクスはどれだけの力を持って……」
旧魔王派の悪魔達はそれを言い残して、無念を抱いた表情で絶命した
これが魔王アジュカ・ベルゼブブの力……
驚嘆を通り越して畏怖の念を抱く程の力量だった
アジュカ・ベルゼブブの視線が残ったジークフリートと神風一派のアドラスに向けられる
「さて、残るは英雄派のジークフリートくんと闇人か。どうするかな？」
ジークフリートは肩を竦めるだけだった
「まだ切り札は残っているので、撤退はそれを使ってからにしてみようと思っているよ」

「オレ様はいつでも良いぜぇ？魔王をぶち殺せるチャンスなんざ、滅多にねぇからよぉ」
ジークフリートの嫌みを含んだ笑みとアドラスの下卑た笑いを見て、祐斗は自分の体の底から沸き立つ激情を感じた
アジュカ・ベルゼブブは２人の物言いに関心を示す
「ほう、それは興味深い。――――だが」
アジュカ・ベルゼブブの視線が今度は祐斗に向けられる
「そちらのグレモリー眷属の『騎士（ナイト）』くん。さっきから彼らに良い殺気を送っていたね」
どうやら祐斗の戦意を察知していたようだ
アジュカ・ベルゼブブはジークフリートとアドラスに指を示しながら言う
「どうだろうか、彼らはキミが相手をしてみては？見たところ、この英雄派の彼だけじゃなく闇人とも面識があるようだ。このビルと屋上庭園は特別に手を掛けていてね。かなりの堅牢さを持ち合わせているよ。多少威力のある攻撃をしても崩壊する事は無い」
祐斗にとって願ってもない申し出だった……
彼の中で駆け巡る抑えようの無い感情……それをぶつけられる相手が目の前にいる
……
祐斗は１歩前に出ていく
「……祐斗？」

「……部長、僕は行きます。もし、共に戦ってくださるのであれば、その時はよろしくお願いします」

それだけ伝えた祐斗は歩きながら手元に聖魔剣(せいまけん)を一振り創り出す

ふいに新と一誠の言葉が祐斗の脳裏を過(よぎ)る

もし、この中の誰かが死んだら、その分だけ皆の為に戦う事を……

強敵続きの戦闘、いつ死んでもおかしくなかった……

『イッセーくん、新くん。いつだって無事に帰ってくるって言っていたのに。キミ達は帰ってこなかった』

2人を失った祐斗は彼なりに眷属を支えようとした

リアス達は2人を失う事で心の均衡を保てなくなると予想できていたから……

1人でも冷静に感情を押し殺して動こうと思った

2人との約束だったから――――

『でも、ちょっとだけ限界なんだ。憎い程の相手が目の前に現れたら、抑える事なんて出来やしない……！こいつらのくだらない計画とやらで僕は大事な友達を2人も失ったのだから……ッッ！』

祐斗にとって生まれて初めて出来た親友だった……

『許せる筈が無いッ！だから、イッセーくん、新くん。少しだけ私情を吐き出させて欲し

い……ッッ！』

聖魔剣を構えた祐斗は憎悪の瞳で怨敵を捉える

「ジークフリート、アドラス。悪いが僕のこの抑えられない激情をぶつけさせてもらう。あなた方のせいで僕の親友は帰ってこられなかった。――あなた方が死ぬには充分な理由だ」

祐斗の殺気を当てられ、ジークフリートは口の端を愉快そうに吊り上げ、アドラスはゲラゲラと下卑た笑いを見せる

「キミからかつて無い程の重圧が滲み出ているね……。面白い。しかし、キミ達グレモリー眷属とは驚く程に縁があるようだ。この様なところでも出会うだなんてさすがに想像は出来なかった。まあ、良いか。――さあ、決着をつけようか、赤龍帝と闇皇の親友ナイトくん」

「オレ様はどっちでも良いぜぇ？てめぇらをぶち殺せるなら、それで良いからよぉ！」

アドラスの周囲に浮いている円盤が黒い炎を纏い、ジークフリートの背中に龍の腕が4本出現する

帯剣している魔剣を全て抜き放ち、異形の手に握らせていく

祐斗は聖魔剣に龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの力を付与させて、その場を駆け出した

高速で接近し、ジークフリートに一太刀繰り出すと――彼は軽々と魔剣の一振りで

受け止める
「……」
祐斗の一撃を受けたジークフリートは目を細めて何かを考え込んでいるようだった
「現状でキミと戦い、勝ったとしても深手は否めないだろうね。それ程までにキミの実力は向上している。キミに勝利したとしても、その後にリアス・グレモリーや姫島朱乃、あそこの闇人の攻撃を貰えば僕は確実に命を落とす。このまま逃げるのも悪くはないんだけど……アジュカ・ベルゼブブとの交渉に失敗して、グレモリー眷属と闇人を相手に何もせずに逃げたとあっては仲間や下の者に示しがつかない、か。難しい立ち位置だね。特にヘラクレスとジャンヌに笑われるのは面白くないんだ」
愚痴ながらジークフリートは懐(ふところ)を探り出す
取り出したのは拳銃――否、ピストル型の注射器だった
ジークフリートは針先を自分の首筋に突き立てようとする格好となり、皮肉げな笑みを浮かべる
「これは旧魔王シャルバ・ベルゼブブの協力により完成に至ったもの。謂わばドーピング剤だ。――神器(セイクリッド・ギア)のね」
「神器(セイクリッド・ギア)を強化すると言う事か」
祐斗の問いにジークフリートは頷く

「聖書に記されし神が生み出した神器（セイクリッド・ギア）に、宿敵である真の魔王の血を加工して注入した場合、どのような結果を生み出すか。それが研究のテーマだった。かなりの犠牲と膨大なデータの蓄積の末に神聖なアイテムと深淵の魔性は融合を果たしたのさ」

ジークフリートは手に握る魔剣グラムに視線を向ける

「本来ならばこの魔帝剣（まていけん）グラムの力を出し切ればキミを倒せたのだろうが……残念ながら僕はこの剣に選ばれながらも呪われていると言って良い。木場祐斗、キミならその意味を理解できるだろう？」

ジークフリートの言うように祐斗にはその理由が分かった

伝承通りならば魔帝剣グラムは凄まじい切れ味の魔剣

攻撃的なオーラを纏い、如何なる物をも断ち切る鋭利さを持ち合わせている

もう１つの特性が龍殺し（ドラゴンスレイヤー）

かの五大龍王『黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）』ファーブニルを１度滅ぼした（その後、北欧の神々によってファーブニルは再生されている）のもグラムの特性ゆえである

何もかも切り刻める凶悪な切れ味と強力な龍殺し（ドラゴンスレイヤー）、その２つの特性を有しているのが魔帝剣グラム

これらの特性を踏まえた上で持ち主であるジークフリートの特徴を捉えると、実に皮肉な答えが生まれてくる

ジークフリートの神器（セイクリッド・ギア）は『龍の手（トウワイス・クリティカル）』の亜種で、禁手（バランス・ブレイカー）もその亜種版
ドラゴン系神器（セイクリッド・ギア）と呼ばれ、名の通りドラゴンの性質を持ち合わせている
通常状態を発現している程度ならグラムを振るうのに問題は無いのだが、能力が上昇する禁手（バランス・ブレイカー）――つまり、ジークフリートは自分の能力を高めれば高める程に魔帝剣グラムとの相性が悪くなっていく
赤龍帝の一誠が籠手にアスカロンを収納し、何事も無く使用する事が出来たのは天界の助力と神器（セイクリッド・ギア）が例外の類にあったからだ
ジークフリートの神器（セイクリッド・ギア）は亜種であったものの、例外の類ではなかった
最強の魔剣に選ばれても、その者が有していた能力までは受け入れられてなかった
まさに運命の悪戯とも呼べる……
ジークフリートがグラムをヒュンヒュンと回す
「……禁手（バランス・ブレイカー）状態で、こうやって攻撃的なオーラを完全に殺して使用する分には鋭利で強固なバランスの良い魔剣なのだけれどね。それではこの剣の真の特性を解き放つ事が出来ない。かと言って力を解放すれば……禁手（バランス・ブレイカー）状態の僕では自分の魔剣で致命傷を受けてしまう。こいつは主の体を気遣うなんて殊勝な事をしてくれないのさ」
ジークフリートがグラムを本格的に使用するのは禁手（バランス・ブレイカー）を解除した時だ
〝威力を抑えたグラムを含む5本の魔剣と1本の光の剣＋禁手（バランス・ブレイカー）の『龍の手（トウワイス・クリティカル）』

〃

〃通常の『龍の手（トウワイス・クリティカル）』で本気のグラムを含んだ魔剣三刀流〃

この場や疑似空間でどちらが祐斗達を相手に立ち回る事が出来るか？

その答えは前者だったと言う事だ

「そう、グラムを使いたければ普通の状態でやれば良い。けれど、禁手（バランス・ブレイカー）六刀流と比べるとそれでは対応しきれないんだよ。特にキミ達との戦いではそれが顕著だ。――――禁手（バランス・ブレイカー）の能力を使わなければ上手く相対できないからね。しかし、禁手（バランス・ブレイカー）状態でも魔帝剣グラムを使用できるようになるとしたら話は別だ」

ジークフリートはピストル型の注射器を自身の首元に近づけ――――挿入させていった

『魔人化』、『闇黒化』

僅かな静寂……そしてジークフリートの体が脈動する
それは次第に大きくなっていき、体そのものにも変化が現れ始めた
奇っ怪で鈍い音を立てながら、ジークフリートの背に生える４本の腕が太く肥大化していく
五指も徐々に形を崩し始め、持っていた魔剣と同化していった
ジークフリートの表情は険しくなり、顔中に血管が浮かび上がる
地に手が届く程にまで長く太く巨大化した４本の腕を背に生やす怪人
その姿は既に阿修羅ではなく、蜘蛛のバケモノの様なシルエットだった
変貌したジークフリートは顔面に痙攣を起こしながら口元を笑ました
『――――「業魔人（カオス・ドライブ）」、この状態を僕達はそう呼称している。このドーピング剤を「魔人化（カオス・ブレイク）」と呼んでいてね、それぞれ「覇　龍（ジャガーノート・ドライブ）」と「禁　手（バランス・ブレイカー）」から名称の一部を拝借しているんだよ』
低く重い声質、既に声すらも変調したジークフリート……
それを見てアジュカ・ベルゼブブが語る

「素晴らしい。人間とは、時に天使や悪魔すらも超えるものを作り出してしまう。俺はやはり人間こそが可能性の塊なのだと思えてしまうよ」
人間でありながら神が作り出したものを肥大化させ、魔王の血肉すらも利用する
〝人間は何処までも欲望を進化させてしまう〟
時に神以上に、悪魔以上に……
魔人と化したジークフリートが1歩足を踏み出す
それだけでこの場の空気が一変し、瘴気(しょうき)が渦巻いていく
魔剣と同化して異常な進化を遂げた4本の腕が大きくしなる
一瞬で攻撃が来ると判断した祐斗は攻撃を視認するよりも前に駆け出した
祐斗がいた場所に渦巻き状の鋭いオーラと氷の柱が生まれ、更に地が抉れて次元の裂け目まで生じていた
各魔剣の相乗攻撃……一瞬でも判断が遅ければ五体が弾け飛んでいただろう
祐斗は前方から感じる異様な寒気を察した
その場で聖魔剣を聖剣に変化させ、禁手(バランス・ブレイカー)の騎士団を1体だけ具現化させる
それを空中で蹴って距離を取る
その瞬間、祐斗がいた空間に極大で凄まじいオーラの奔流が通り過ぎていった
空中で足場にした甲冑騎士は跡形も無く消え去っていく

ジークフリートの方に視線を向けると――――グラムを振るった後だった
攻撃の余波だけでもグラムの一撃は祐斗の全身に痛みを走らせる
もし直撃すれば完全に消滅するだろう
「ヒャハハハハハッ!それが最強の魔剣グラムってヤツの威力か。面白(おもしれ)え!だったら、オレ様も見せてやるとするかぁ!」
ジークフリートに当てられ、興奮したアドラスの全身からドス黒いオーラが噴き上がり、眼前で凶悪な様相の円盤が円を描くように回転を始める
巨大な炎のリング中央から高密度の黒炎が噴き出し、祐斗とジークフリートを纏めて焼き尽くそうとする
祐斗は直ぐに横っ跳びで回避、ジークフリートはグラムを振るって先程と同じオーラの奔流を飛ばす
グラムのオーラと極大の炎が衝突し、爆散する
双方の威力はほぼ互角と言ったところだ……
『へぇ、どうやらキミも僕みたいにドーピングを施してるようだね』
ジークフリートの指摘にアドラスは大口を開けて言い放つ
「あぁ、そうともよ。覚えてるか?京都で九尾の大将をバケモノに変えたブラックウィドウをよぉ」

〝ブラックウィドウ〟――それは神風が独自に製造した生物兵器
寄生した相手の力を限界まで引き上げて暴走させる……
「神風はそいつを更に改良して、オレ様の体に寄生させたんだよ。それがこの形態――『闇黒化（ブラック・ブレイク）』ってわけだ。お陰でこれまでの比じゃねぇ程の力が溢れ出てくるぜ！今じゃ神風一派の殆どがブラックウィドウ寄生済みってわけよ！」
狂ったように哄笑を上げるアドラスは宙に黒炎の球体を４つ出現させ、半数を祐斗に、残りの半数をジークフリートに向かって飛ばす
祐斗は持ち前の速度で振り切ろうとするが、炎の球体はしつこく追尾してくる
一方、ジークフリートに放たれた炎の球体はグラムと魔剣の斬撃によって掻き消され、祐斗を追っていた炎の球体も巻き添えを食らって消失する
祐斗は手元の剣を聖魔剣に戻して瞬時にジークフリートに詰め寄る
横薙ぎの斬撃を放つが軽々と魔剣の１本で受け止められてしまう
極太の腕４本から繰り出される剣戟は破壊力に満ちており、直撃すれば祐斗の体は容易に砕け散るだろう……
唯一、ジークフリートが左手に構える光の剣は光を喰らう聖魔剣で消失させたものの
――魔剣５本はそう簡単に消す事など出来ない
アドラスが放つ黒炎の弾幕が降り注ぐ中、祐斗とジークフリートの剣戟合戦は暫（しばら）く続

いていった
残像を生みながら高速で動く祐斗の攻撃をジークフリートは全て魔剣で防いでいく
時折、振るわれてくるグラムのオーラが祐斗の体を端々から痛めつける
アドラスもそのオーラの余波を食らっているのだが、全く平然とした様子で黒炎の弾幕を撃ち続ける
グラムの波動は地を抉りながら後方まで走り抜け、屋上庭園は幾重ものグラムの波動と黒炎の弾幕によって荒れ地へと様変わりしていた
これだけ多くの攻撃をされても尚ビルが健在なのはアジュカ・ベルゼブブがここを魔力などで堅固に補強しているからだろう
５本の魔剣の刃が一斉に祐斗目掛けて刺し込まれてくる
祐斗はそれらを避けるついでに足先に聖魔剣を創り出し、相手の脇腹に蹴り込む
無論、聖魔剣の仕様は龍殺（ドラゴンスレイヤー）し、直撃すれば形勢が変わる……そう思っていた矢先――
――祐斗の聖魔剣は儚い金属音を立てて砕け散った
その結果を見てジークフリートが不敵に笑む
『――どうやら、強化された僕の肉体はキミの龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの聖魔剣を超えていたようだ』
脇腹に一撃入れた祐斗の足をジークフリートが掴み、そのまま宙に高く持ち上げ――
――勢いに任せたジークフリートの剛力が祐斗を地面へ叩きつけた

更にそこへ魔剣が一振り放たれる
全身を押し潰されていく様な重い衝撃は祐斗の体を突き抜け、地面に巨大なクレーターを生み出した
言い難い激痛が全身を駆け巡り、口から吐き出された大量の血反吐が庭園の緑を赤く染める
地面に叩きつけられた衝撃と魔剣の一撃によって体の各部位が深刻なダメージを受けて痙攣を起こし、骨も相当な数がダメになっているだろう……
それでも祐斗は懸命に意識を繋ぎ止めて足を動かした
その場から一時的に退避した後、体勢を立て直して斬り込んでいく
ジークフリートは2本の魔剣をクロスして祐斗の剣戟を難無く制した
『防御の薄いキミでは、今の一撃で相当な傷を負ったんじゃないかな？』
ジークフリートが低い声音で笑い、クロスした魔剣ごと祐斗を突き押す
体を弾かれた祐斗は足下をふらつかせるが、体中から残った力を総動員させて、ふらつきを止める
ふらつきが止まったと思った矢先――――祐斗の足先が氷に包まれていた
直ぐに聖魔剣を炎の属性に変化させて氷を溶かそうとしたが……地面から突き上がってきた2本の氷柱が祐斗の両足を貫く

そこにジークフリートは更なる魔剣を振り下ろした
足を封じられて避けようの無い祐斗は体を捻り、手元に聖魔剣を複数創造して盾のようにする
しかし、束となった聖魔剣は破壊され――――祐斗の左腕が肩口から切り落とされてしまった……
片腕を切り落とされながらも祐斗は足場の氷を炎の聖魔剣で振り払い、後方に飛び退いた
失った左腕の肩口から大量の血が流れ出てくる……
剣を氷の聖魔剣に変更し、肩口と両足の傷口を凍らせた
応急処置に過ぎないが、止血程度にはなるだろう
祐斗の体は既にボロボロで、自慢の両足にも穴を開けられ無様に膝をついている
「祐斗……ッ！」
沈痛な表情でリアスが祐斗の名を呼ぶ
黒く染まった新の右手を両手で握り、何かを待ち望んでいるようだった……
『……部長、そうやってイッセーくんや新くんを頼ろうとしても彼らはここに来られないんですよ？……あなたが立ち上がらないでどうするんですか。あなたが戦う意志を失えば、眷属にも影響が出てしまう……』

現に朱乃も小猫もハラハラと見ているだけで動けない状態にいる
新と一誠を失って皆が戦う意志を無くしてしまった……
先程の殺意は一時的なものに過ぎず、己の体を突き動かすまでには至ってない
『こんな状況の僕らでは冥界の危機を救うなんて到底出来やしませんよ、サイラオーグ・バアル……ッ！……僕にもイッセーくんや新くんのように誰かを激しく鼓舞できる程の要領があればと思ってならないよ……っ』
「……木場さんまで死んでしまう……。いや……もう、こんなのはいやです……」
アーシアは恐慌状態に陥り、手からは弱々しいオーラが出現するだけでいつもの出量が放出できない
彼女も一誠を失ったショックで神器（セイクリッド・ギア）の能力が一時的に弱まっているのだろう
「そらよぉ！」
アドラスが重ねた円盤から黒炎の鞭を出し、ジークフリートの体を滅多打つ
ジークフリートは魔剣で炎の鞭を弾き返し、アドラスを睨み付ける
『さっきからキミは横槍を入れるのが好きなようだね。木場祐斗を後回しにして、先に僕を消そうって腹積もりなのかな？』
ジークフリートの指摘にアドラスはニンマリと口の端を吊り上げた
「あぁ、そうともよ。そこのクソ剣士はもう放っといても問題ねぇとこまで弱ってんだ。

後でじっくり痛めつけて殺す事にした。てめぇがよっぽど殺したがってるらしいじゃねぇか？クソムカつくてめぇが喜ばねぇように、てめぇを先にぶち殺してやろうって思ったわけよ。そこのクソ剣士とクソ眷属の首がオレ様とてめぇ、どっちかの賞品だ」

『やっぱりキミ達闇人（やみびと）は何処までいっても生け好かない連中だね』

「そいつはてめぇらも同じだろ、クソ人間」

完全に祐斗を眼中から外し、グレモリー眷属の首の賞品取り合戦に移行しようとしていた

かつてない程の屈辱を味わう祐斗……

リアスと朱乃が何とか攻撃を加えようと魔力を放つが――その勢いと威力はあまりにも弱々しく、ジークフリートの一振りに難無く払い除けられ、アドラスに至っては腕さえ振るわずに攻撃を受け止める始末……

小猫の闘気もレイヴェルの炎の翼も力が陰り、能力を発揮できずにいた

祐斗はルヴァル・フェニックス氏から貰ったフェニックスの涙を1つ取り出して傷口にかけていく

瞬時に痛みが和らぎ、傷も塞がっていくが――左腕の再生には至らない

傷は治ったものの、流血による体力の消耗は著しく、足にも力が入らない

祐斗の状態を見てジークフリートは嘲笑した

『酷いな。先日出会った時のグレモリー眷属とは思えない。先程良い殺気を放ってくれたから、木場祐斗との戦いに乱入でもしてくれるものかと期待していたんだけどね。まさか、この程度とは……』

「言ったろ？そこのクソ剣士も、クソ眷属も今やただのゴミカス程度だ。気休めになりやしねぇんだよ」

痛烈な不甲斐なさが身に染みる……

普段ならいる筈の新と一誠がいない……

彼らと共に戦えない事の辛さ、厳しさが祐斗やリアス達の戦意を削ぎ落としていた

『兵藤一誠は無駄死にをしたよ。出涸らしとなったオーフィスを救う為にあの空間に残り、シャルバと相討ちになったんだろう？あれからシャルバの気配が消えたからね。生きていれば僕達に堂々と宣戦布告して、冥界にも旧魔王派の力を宣言しているところだろうから。あのまま兵藤一誠がオーフィスを放置して帰還すれば、今頃態勢を整えて再出撃できただろうに。オーフィスはともかく、シャルバは後で討てた筈だよ。自分の後先を考えないで行動するのは赤龍帝の良くないところだった』

「ヒャハハッ、違ぇねぇな！現闇皇もマヌケだぜ！あんなクソ女の為に自分が死ぬとか、頭がイカレてるとしか思えねぇよ。自己犠牲で得られる物なんざ何1つねぇってのに。全くつくづくバカだよな！」

……ジークフリートとアドラスの台詞を聞いて祐斗の思考は一瞬真っ白になり、次の瞬間にはドス黒いものが体の奥底から沸き上がってきた

――――ヒョウドウイッセイ　　ハ　　ムダジニ　　シタヨ

――――ヤミオウ　　モ　　マヌケ　　ツクヅク　　バカ

『……ふざけるな。……ふざけるなよ……ッ！』

祐斗の心を支配したのは……悔しさ、悲しみ、彼らとの約束した事だった

全身を震わせながらも祐斗は足に力を込めていき、徐々に足が上がり始めた

情けなく震える両足で立ち上がり、喉まで上がってきたものを遠慮無しに天に向けて放った

「オオオオ

〝どんな時でも立ち上がって、皆と共に戦おうぜ〟

『そうだね、新くん。どんな相手だろうと、立ち向かっていかなければならないッ！』

1歩、また1歩と祐斗はジークフリートとアドラスに近付いていく

手元に聖魔剣を創り出しながら――――

「まだだ！まだ戦えるッ！僕は立たないといけないッ！あの男達のようにッ！グレモリー眷属の兵藤一誠と竜崎新はどんな時でも、どんな相手でも臆せずに立ち向かったッ！赤龍帝と闇皇はあなた達が貶していい男じゃないッ！僕の親友をバカにするなッ！」

涙混じりの咆哮を解き放つが、それは勢いしか無い……

ジークフリートはきっぱりと断ずる

『無駄だっ！あの赤龍帝と闇皇のようにいこうとも、キミでは限界がある！ただの人からの転生者では、いくら才能があろうとも肉体の限界が――――ダメージがキミを止める！』

アドラスが大口を開けて下卑た哄笑を上げる

「ヒャハハハハハッ！弱っちいザコがいくら吠えたところで何も変わらねぇんだよッ！クズのゴミカスがそいつらの真似をしても、ただ見苦しいだけだぜ！悪足掻きは止めて、おとなしく死んどけよッ！」

もう祐斗の肉体は限界、剣を握る力すら満足に無い――――だが……

『イッセーくんと新くんはそれでも立ち向かえる筈だ！宿れ！少しでも良いから宿ってくれ……！2人を突き動かしていた意地と気合よ！どうか、少しでも僕に宿ってくれ！』

剣を構えて前に飛び出していこうとしたその時――――視界の隅に紅い閃光が映り込んでくる

そちらに視線を送ると――――

「……イッセーさんの駒が……」

アーシアが手にする一誠の駒が紅い光を発していた

そこから1個だけ『兵士（ポーン）』の駒が宙に浮かび始め、いっそう輝きを増して深夜の暗闇を紅く照らしていく

その駒が祐斗のもとに飛来し、弾けるように光を深めた

あまりの光量に一瞬だけ眼を伏せる祐斗

彼が次に目にしたのは宙に浮かぶ1本の聖剣――――アスカロンだった

「……イッセーくんの駒が……アスカロンに……？」

――――行こうぜ、ダチ公

聞こえてきた一誠の声に涙が溢れる……

「……キミはなんてお人好しなんだろう。たとえ駒だけでも、キミは仲間を……僕を

……ッ！」
「ゴチャゴチャうるせぇんだよっ、クズがァァッ！」
アドラスが祐斗にトドメを刺すべく突っ込んできた
黒炎の刃に変えた腕を振り下ろそうとした――その時、再び何かが祐斗のもとに飛来し、黒炎の刃を止めた
「――新の腕が」
リアスの声に導かれ、祐斗が視線を向けると――リアスが手にしていた新の右手が目の前にあった
〝新の右手〟は一誠の駒と同じように紅い輝きを発しながら、アドラスの黒炎の刃を止めている
更に驚くべき事態が……右手しか無い筈の新の姿が徐々に浮かび上がってくる
「――ッ⁉何なんだ、こいつは⁉」
『……ッッ！バカな……ッ！』
目の前の事態にアドラスもジークフリートも仰天していた
新の幻影は黒炎の刃を振り払い、その紅く輝く右手でアドラスの腹部に重い一撃を放った
輝きを放つ拳によってアドラスの体が曲がり、屋上庭園の端まで吹っ飛ばされる

その後、新の幻影は宙に浮かぶアスカロンを掴み、祐斗に手渡す
――行け、祐斗。お前ならやれる筈だ
祐斗がアスカロンを受け取った直後、新の幻影は消え去り、右手がリアスのもとに戻っていく
アスカロンから伝わる勇気を貰い、祐斗の体に信じられない程の活力が沸き上がってきた
「そうだね、イッセーくん。新くん。行こうよ！キミ達となら、僕は何処までも強くなれるんだからさッ！キミ達が力を貸してくれるならッ！どんな相手だろうと切り刻めるッ！」
自然と足の震えは止まり、アスカロンを握る手にも力を込めて、祐斗はジークフリートに斬りかかる
祐斗の一撃を受け止めながらジークフリートは驚愕に包まれていた
『……ッッ！バカな……ッ！立つと言うのか……ッ！血をあれだけ失えば自慢の足も動かなくなる筈だ……ッ！』
「行けってさ。立てってさ。この剣を通してイッセーくんと新くんが僕に無茶を言うんだ。じゃあ、行かなきゃダメじゃないか……ッ！」
アスカロンから膨大なオーラが解き放たれていく

龍殺(ドラゴンスレイヤー)しの聖剣アスカロンを受けて、ジークフリートの体に変化が訪れる
体から異様な煙を上げ、表情も苦痛にまみれていた
『……何だ、その聖剣から感じる……力は……ッ！』
アスカロンがジークフリートを苦しめている……
『魔人化(カオス・ブレイク)』でグラムの力に対応できるようになったとしても、アスカロンに対しては別だったようだ
更にジークフリートが手に持つグラムが輝きだす
その輝きは攻撃的なものではなく、まるで祐斗を迎え入れるかの様な輝きだった
『――――っ！グラムが！魔帝剣(まていけん)が呼応している⁉――――木場祐斗に⁉まさか、魔人化(カオス・ブレイク)の弊害なのか⁉』
尋常ならざる焦りを見せるジークフリート
驚くべき事に――――この土壇場でグラムは持ち主を再度選び直したのだ……
祐斗はグラムを真っ正面から捉えて叫んだ
「――――来い、グラム！僕を選ぶと言うのなら、僕はキミを受け入れよう！」
祐斗の言葉を受けたグラムがいっそう輝きを解き放つ
その輝きは持ち主であったジークフリートを拒絶するかのように手を焦がしていく
グラムは宙に飛び出し、祐斗の眼前の地面に突き刺さった

それを見たジークフリートは首を横に振って、起きた事を信じられないように言う
『こんな事が……ッ！こんな事があり得るのか⁉駒だけでも赤龍帝はッ！腕だけでも闇皇はッ！戦うと言うのか⁉この男を立たせると言うのか⁉』
せっかくのグラムも片腕だけでは扱う事が出来ない
そう思っていたら、祐斗に近付く者がいた
アーシア、小猫、レイヴェルの３人
小猫が切り落とされた祐斗の腕を持って、肩口に当てる
そこへアーシアが手を向けて淡い緑色のオーラを放出し、レイヴェルが祐斗の体をしっかりと支える
優しい回復のオーラを受けた祐斗の腕は徐々に繋がり、機能を回復させていく
「……イッセーさんが『アーシアも戦え』って、駒を通して言ってくれた様な気がしたんです」
アーシアは必死に泣くのを耐えながら微笑んでいた
「……『仲間を助けてやってくれ』って、新先輩が言ったような気がします」
小猫もそう微笑み、手から仙術による治療の気が送られる
２人のオーラは優しく、慈愛に溢れていた
「私にも聞こえた気がしましたわ。新さまの声が……『小猫や皆を支えてくれ』と。本

当、眷属でもない私にまで……優し過ぎますわよ……っ！」
　レイヴェルは涙を拭い、笑顔を浮かべてそう漏らす
「――――『皆と共に戦ってくれ』、か。そうよね。あのヒトなら、そう言うに決まってるわ」
　リアスが〝新の右手〟を持って前に立つ
　涙に濡れながらも瞳には戦意の火が灯っていた
「さあ、私のかわいい下僕悪魔達！グレモリー眷属として、目の前の敵を消し飛ばしてあげましょうッ！」
　リアスのいつもの口上が戻る
　アーシアのお陰で切り落とされた腕が完全に繋がり、祐斗は眼前に突き刺さったままのグラムを抜き放った
　魔帝剣グラムから絶大な力が伝わってくる……
　グラムとアスカロンの龍殺（ドラゴンスレイヤー）しを同時に繰り出していけば、如何にジークフリートの体が堅牢でも保たないだろう
　祐斗は2本の剣を構えて足に力を注ぐ
「さあ、もう一度戦おうか。けれど、さっきとは違う。――――こちらは僕だけじゃなく、グレモリー眷属だっ！」

リアス、アーシア、小猫、レイヴェルがジークフリートを鋭く見据える
リアスが手から強大な滅びの魔力を解き放ち、それと同時に祐斗も前に飛び出していく
『まだだよ!それでも僕は英雄の子孫として――』
言いかけたジークフリートの頭上で稲光が閃き、夜空を裂くような極大の雷光がジークフリートの全身、その周囲まで飲み込んだ
宙に視線を向けると――そこには6枚にも及ぶ堕天使の黒い翼を広げる朱乃の姿があった
「――これが私の最後の手。堕天使化ですわ。父とアザゼルに頼んで『雷光』の血を高めてもらったの」
朱乃の両手首に光るのは魔術文字が刻まれたブレスレット、魔術文字が金色に輝いて浮かび上がっていた
恐らくそれが本来眠っていた堕天使の血を呼び覚まさせたのだろう
「ゴメンなさい、新。『いつもの笑顔を見せて』――あなたの残してくれた想いまで私は……押し殺そうとしていた……っ!もう大丈夫ですわ。私も戦えます!」
朱乃が決意の眼差しでそう宣言する
グレモリー眷属の「二大お姉さま」が完全復活を果たした

特大の雷撃をまともにくらったジークフリートは全身が黒焦げと化していた
体の至るところから煙を上げている
『魔人化（カオス・ブレイク）』で体が堅牢になったジークフリートにここまでのダメージを与えた――朱乃の雷光は更に威力を増したと言う事だろう
そこに追撃とばかりに先程リアスが放った滅びの一撃が襲い掛かった
ジークフリートの肥大化していた龍の腕が全て弾け飛び消滅していく
「これがトドメだよ、ジークフリートッ！」
祐斗の持つ聖剣アスカロンと魔剣グラムが正面からジークフリートに深々と突き刺さった
ジークフリートは口から血の塊を吐き出す
『……この僕が……やられる……？』
ジークフリートは自身を裏切ったグラムをソッと撫でるが、魔剣は拒絶するように彼の手を焦がすだけだった
それを見てジークフリートは自嘲していた
「勝ったよ、イッセーくん。新くん」
祐斗はそれだけ呟き、２本の剣をジークフリートの体から抜き放つ
ジークフリートの体からは既に血が流れる事はなく――２本の龍殺し（ドラゴンスレイヤー）を受けた

ジークフリートの体は徐々に崩壊しつつあった
体の至るところにヒビが走り、やがて崩れていく
煙を上げながら崩れていく最中、ジークフリートは目を細めて小さく笑った
『……ははっ……兵藤一誠は……竜崎新は……殺しても戦い続ける……ッ！』
ジークフリートは祐斗とリアス達を見据えるが、既に顔にも崩壊の裂傷が生まれていた
「どうしてフェニックスの涙を使用しないんだい？キミ達英雄派は独自のルートで入手できるんだろう？」
確かに所持していてもおかしくないのだが、体が崩壊しつつある現状でもジークフリートは使う素振りすら見せない
ジークフリートは首を横に振る
『……この状態になると、フェニックスの涙での回復を受け付けなくなってしまう……。……理由は未だに不明だけどね……』
つまり極度のパワーアップが出来る反面、回復が一切望めないらしい
『……やっぱりそうさ。……あの戦士育成機関で育った教会の戦士は……まともな生き方をしないのさ……』
それだけを言い残し、ジークフリートの体は脆くも崩れ去っていった

その直後、屋上庭園の端が爆(は)ぜて黒炎が噴き上がる
そこから現れたのは――――新の幻影に吹き飛ばされたアドラス
よほど頭にキテるのか、憎悪の形相で祐斗達を睨み付けていた
「コノヤロォォォッ……ふざけやがってェェェェェェェェェッ！てめえら纏めてぶっ殺してやるッッ！」
アドラスの眼前で円盤が高速で回転し、巨大な円を描く
その中央で極大の黒炎が渦巻いていく
それを見てリアスと朱乃が身構える
「死ねェェェェッッ！クソどもがァァァ

膨大なオーラを迸(ほとばし)らせるアスカロンで斬りかかる祐斗に対し、アドラスは再び腕を黒炎の刃に変えて立ち向かう
アスカロンの刃と黒炎の刃が正面からぶつかるが……アスカロンの刃は黒炎ごとアドラスの腕を切り飛ばした
切り飛ばされた腕は空中で消滅し、アドラスが苦痛にまみれた表情と化す
祐斗はオーラを解き放つグラムで横一閃、更にアスカロンで縦一閃に振り切った
夜空の暗闇に描かれる太刀筋はアドラスの体を十字に裂いた
「……んだよ、こいつらの爆発力は……ッ！ふ、ざ、けん、な……ッ！」
怨恨めいた目で祐斗とリアス達を見据え、アドラスは跡形も残らず消滅していった
……

反撃の狼煙を上げろ！

旧魔王派、ジークフリート、アドラスを退けたリアス達は改めて一誠の駒と新の右手をアジュカ・ベルゼブブに見てもらう事にした

先程アスカロンに変化した駒は役目を終えた後に再び駒へと戻っている

一誠が駒に残した何かと、アスカロンの残留オーラが祐斗達の想いに呼応してあの様な変化を起こしたのではないか？――と、アジュカ・ベルゼブブは語った

新の幻影に関しても同じ現象が働いたとも言えるらしく、それは彼らにしか通じ合えないものが起こしたと言えよう

テーブルの上にチェス盤が置かれ、アジュカ・ベルゼブブは『兵士（ポーン）』の初期位置に一誠の駒を７つ置いた

小型の魔法陣を展開させて調査を始め、少ししてアジュカ・ベルゼブブは興味深そうに息を漏らす

「ほう、これは……」

「何か分かりましたか？」

リアスが訊ねるとアジュカ・ベルゼブブは一誠の駒を指で擦（さす）る

「7つ中、4つの駒が『変異の駒(ミューテーション・ピース)』になっている。1つ1つの価値にばらつきこそあるが……恐ろしい事だ。例のトリアイナの分と真紅の鎧がこれらを現しているのだろうか。兵藤一誠が引き出した天龍と悪魔の駒(イーヴィル・ピース)の組み合わせ――――調和のスペックは想像を遥かに超えるもののようだね。あの時に調整した甲斐があったと言うものだ。先程の現象も実に興味深かった。……彼の意志が駒にダイレクトに反映されているのか。そして竜崎新の右手もその波動を受けて、先程のような幻影が生み出されたんだと思う」

なんと一誠の駒が7つの内、4つが『変異の駒(ミューテーション・ピース)』に変化していた事が明らかとなった

一誠を転生する際、彼に使用した駒は全て通常の駒だった

リアスが所持していた『変異の駒(ミューテーション・ピース)』はギャスパーと新に使用した

この現象もアジュカ・ベルゼブブが『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』に予め仕込(あらかじ)んでいた隠し要素が反映されているのだろう

「それで、その駒と右手から他に何か分かった事は……?」

リアスが再度聞き、祐斗を含めた他の面々もアジュカ・ベルゼブブの言葉に真剣に耳を傾ける

アジュカ・ベルゼブブはハッキリと語られた

「この駒と右手から俺が言える答えはこうだ。――――どんな状態になっているかは分からないが、彼らが次元の狭間で生きている可能性は高いだろうね。この駒と右手の最後の記録情報が『死』ではないからだ。それと赤龍帝ドライグの魂も神器（セイクリッド・ギア）として、まだ残っているようだね。兵藤一誠と赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）は共にあるのだろう。そして、この駒も機能が停止しておらず、まだ使用できる。この駒に刻まれた登録上、彼限定にだけどね。いや、『兵藤一誠に戻せる』と言った方が適切か。次に竜崎新、こちらには彼の魔力と思念が残留している。こちらも何とかすれば『竜崎新に戻せる』だろう」

言葉にならない感情が全身を駆け巡り、全員が言葉を失った中、アジュカ・ベルゼブブは説明を続ける

「この駒を受け入れた器――――つまり、魂と肉体が不安定な状態になっている事だけは確かだろう。サマエルの毒を受けたのなら、肉体は助からないだろうね。それはこの駒からの情報でも確認できる。しかし、次にサマエルの呪いを受けそうな魂が、これを調べる限り消滅してはいないのだよ。肉体が滅びれば直ぐに魂にまで毒牙は迫るのだが……。肉体がダメになってから魂が消えるであろう時間が経過しても魂が無事だったとこの駒が教えてくれている。魂だけではどういう状態か把握しづらいが、アザゼル総督サイドからあのオーフィスが彼に同伴しているかもしれないと聞いている、何が起こっていても不思議ではない。たとえ、どんな形であれ魂だけで生きていてもね」

「魂が無事だったとして、滅んだ肉体は……どうすれば良いのでしょうか？」
祐斗がアジュカ・ベルゼブブにそう問う
「ふむ。彼のご両親は健在かな？もしくは彼の部屋にあるＤＮＡ情報――抜けた体毛の類などでも良い」
「ご両親は健在です。……体毛も探せば彼の自室にあるとは思いますが」
「ならば、まず魂が帰還した後に彼のご両親か、その体毛からＤＮＡを検出して出来るだけ近しい体を新たに構築する必要がある。グリゴリが運営する研究施設でそれが出来るのではないだろうか。再現自体は可能だろう。クローン技術の応用でね」
「……問題は他にあると？」
リアスの問いにアジュカ・ベルゼブブは頷きながら話を続ける
「新しい体に魂が定着するのかと言う点と、その体が神器（セイクリッド・ギア）――赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手を受け入れられるのか。この二点が問題だろうね。前者は仮に拒絶反応を示しても、投薬やその他魔法、魔力による治療で何とかなるだろう。ただし、一生治療が必要になるかもしれないが。１番の問題は次の後者だ。――神器（セイクリッド・ギア）は繊細だ。特に神滅具（ロンギヌス）はね。神器を取り出して移植する技術は堕天使によって確立しているが、新しい体に赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手が移ったとしてもその後にどんな後遺症やらが出るか全く予測できない。とにかく、その新しい体を得た後で魂を定着させて、戻ってきた悪魔（イーヴィル・ピース）の駒を使用すれば

再びキミの眷属として生きられる筈だ。駒でも拒絶反応が起これば、まあ、そこは俺が微調整するので心配しなくても良い。駒がサマエルの呪いにやられていなくて幸いだったね」

つまり、移植は可能で一誠が仮に新しい肉体を得て魂と神器（セイクリッド・ギア）を移し替えたとしても、後遺症やその他の能力の失うかも知れないと言う事だ

「悪魔（イーヴィル・ピース）の駒が機能を停止しておらず、魂と神器（セイクリッド・ギア）が残っていればこれだけの再生は可能だ。逆に言えばこれらが消えてしまったら、さすがに手も足も出なかったけれども。しかし、神器（セイクリッド・ギア）と共にある……？そうか、獅子王（レグルス・ネメア）の戦斧の例があったね。案外あの様な例に漏れず、神器（セイクリッド・ギア）その物だけが残り、そこに魂が留まっているのかもしれない。赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手の中に魂があれば次元の狭間にいようと、暫（しばら）くは耐えられるだろう。今世の神滅具（ロンギヌス）は全て異例の進化を遂げつつあると話には聞いているから、彼もその恩恵に預かっているのだろうね。――例に無い状況であり、強運とも言える」

「うえぇぇぇぇぇぇんっ！イッセーさぁぁぁぁんっ！」

アーシアは大声で泣いていた

それは悲しみではなく、歓喜の涙……

朱乃も小猫もレイヴェルも大粒の涙を流していた

絶望の中、一筋の光明――否、大きな希望が得られたグレモリー眷属

生きている可能性があるなら、彼らは絶対に生きている
それをこの場にいる皆が誰よりも強く認識している
リアスは顔を両手で覆い、喜びの涙を流す
「……新、生きているのね……。そうよね、彼が死ぬ筈ないもの！」
アジュカ・ベルゼブブは調べ終えた駒と右手をリアスに手渡す
「ともかく、これらはキミが持っているべきだ、リアス・グレモリー。もしかしたら、オーフィスと赤龍帝ドライグの力で魂だけでもひょっこり帰ってくるのではないかな？――――俺のってで次元の狭間を調査してもらおう。ファルビウムの眷属に詳しいのがいた筈だからね」
「……はい、ありがとうございます、アジュカさま」
「さて、俺はここから眷属に命令して例の巨大怪獣討伐を指揮するつもりだ。対抗策ぐらいはどうにかしよう。だが、最後に決めるのはキミ達現悪魔とサーゼクス眷属であるべきだ。それでこそ、冥界は保たれる」
アジュカ・ベルゼブブが手を前に出すとリアス達の前方に転移型魔法陣が展開された
「キミ達も行くと良い。冥界は今、力のある若手悪魔の協力が必要な時だろう。なに、彼らなら来るだろうね。それはキミ達が1番よく知っていると思う。そういう悪魔なのだろう、彼らは」

アジュカ・ベルゼブブの言う通り、〝生きているのなら、彼らは必ず帰ってくる。どんな事になろうとも生きてさえいれば彼らは絶対に帰ってくるだろう〟

ここにいる誰もがそれを信じて疑わなかった

『イッセーくん、新くん、僕達は待つよ。だから、必ず帰ってきて欲しい。冥界は――――冥界の子供達はキミ達の帰還を待ち望んでいるんだ！』

――――――

いつものようにマスクを解除しようとするが……解除できない
試しに手の部分だけ鎧を解除してみると――中身の腕が無かった
自分の身に何が起こったか全く理解できない一誠にドライグが言う
『お前の肉体はサマエルの呪いで滅びかけていた。魂だけを抜き出して鎧に定着させている状況だ。現在、魂だけの状態と言える。しかし、成功するかどうかのかなり危ない橋だったぞ』
〝体が滅んだ〟――〝魂だけの状態〟――
ふとその事を考えた一誠は直ぐに――頭を抱えて絶叫した
『……なんてこった！体が無ければアーシアとエッチ出来んじゃないかぁぁぁっ！なんてこったよ！体が無いとおっぱいに触る事も出来ないんだぞ⁉成長途上のアーシアのおっぱい！それに触る事が出来ないなんて、そんなのってないだろォォォォォォッ！』
『……え？そ、それが感想なのか……？』
間の抜けた声を出すドライグに一誠は再度荒ぶる
『「え？」じゃねぇよ！これは死活問題だ！せっかくアーシアと良い関係になれてきたのに体が無いんじゃエロエロな事が出来ねぇじゃねぇかッ！アーシアのおっぱいを手で！生で揉めないなんて死んだ方がマシだぁぁぁっ！鎧だけの状態でどうエッチしろって言うんだよ！アーシアのおっぱいはこれからが本番なんだぞ⁉ただ見守ってい

るだけの状態なんて最悪極まりないじゃないか！……ああ！最近だと通信でユキノさんやチェルシー、ディマリアとも良い感じに話が弾んで、良い関係を築けてきたってのにいいいいっ！ユキノさんの天然素材１００％おっぱいも！チェルシーの美乳おっぱいも！ディマリアの爆乳おっぱいも揉めないままだなんて！チクショウ！最悪鎧プレイでも良いよ、くそったれぇぇぇっ！鎧でおっぱいを感じ取れば良いんだろう⁉』

『あー、えーと……あのだな、相棒』

『んだよ、ドライグ！俺は今最高に悲しみに暮れてんだ！話は後にしてくれ！くっそぉぉぉっ！せっかく、あの偽者魔王のシャルバをぶっ倒して帰還しようと思ってたのに……。あ、そう言えばオーフィスは？あいつを助ける為に俺はあのフィールドに残ったんだろう』

記憶が戻ってきた一誠がオーフィスを探すべくキョロキョロと辺りを見回してみると――オーフィスが「えいえいえい」と赤い地面をペチペチ叩いている姿が見えた

『お、お前、何をしてんだ？』

一誠が近づいて訊いてみるとオーフィスはこう答えた

「グレートレッド、倒す」

オーフィスの一言で一誠は〝今、自分が何処にいるのか〟初めて気付いた

赤い地を駆け、程無くして果てが見えてきた

そこに見えたのは赤い突起物――角だった
更に歩みを進めると巨大な何かの頭部が見えた
何処かで見覚えのある生物……
そう、赤い地の正体は――グレートレッドの背中だった
『……な、なんで俺、グレートレッドの上にいるんだよ……?』
ドライグが嘆息して言う
『お前はシャルバ・ベルゼブブを倒した後、崩れゆく疑似空間フィールドで力尽きた。その後すぐにフィールドも完全に崩れきったのだ。そこに偶然グレートレッドが通り掛かった。そこでオーフィスはお前を連れて、グレートレッドの背に乗ったのだ。ここは次元の狭間だ。ちなみにだが、既にあれから幾日か過ぎている。お前の巡り合わせを考慮すると、グレートレッドを自然に引き寄せたように思えてならんがな……。ただでさえ各伝説級の存在との遭遇率が異常なのだからな。他者を引き寄せる己の力だけで危機を脱するなんて相変わらずお前は読めんよ』
それはもはや深刻を通り過ぎて危険レベルにまで達していた……
オーフィスはグレートレッドをペチペチ叩くのを止めて空を眺める
『何だよ、お前、元の世界に戻らなかったのか?』
「我にとって、元の世界はここ」

『……言い間違えた。冥界、もしくは人間界に戻らなかったのか？どうしてだ？』
「ドライグが共に帰ろうと言った。だから、ここにいる。一緒に帰る」
『……お前、本当に変な奴だな。でも、やっぱり悪い奴じゃねぇよな……。はぁ……。つーかさ、俺、帰れるのかな。先生達からの召喚は無かったのか？』
『あった。しかし、お前の内にあった駒だけがあちらに帰還してな。特異な現象だった。悪魔の駒（イーヴィル・ピース）とは謎の多い代物だな』
『召喚あったんかい！しかも駒だけ帰った!!マジか！あ、本当だ。駒の反応が感じられない！』
『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』も肉体も消え、残ったのは魂と神器（セイクリッド・ギア）とドライグのみ
　完全に消滅していないだけでも幸い（さいわ）だが……
『あの駒があってこその相棒の強さがあるからな』
『その通りだよ……。とりあえず、皆に無事を……無事ってわけじゃないんだけどな……。ま、まあ、生きている事だけは伝えたいところだな。って、俺ってずーっとこのままでも大丈夫なの？』
　一誠の問いに対してドライグが答える
『現在はグレートレッドからパワーを借りている。今は問題ない』
『じゃあ、グレートレッドと一緒じゃなきゃダメって事じゃんか！どちらにしても普通

には帰れないのかよ！あー、こいつはまいったな……』
『そろそろ先程の会話の続きに戻しても良いだろうか、相棒』
『ん？何かあったっけ？』
『ああ、現在の状況の再確認だ』
『現在の状況って……。この状態じゃ、俺はグレートレッドと一生次元の狭間で旅に出なきゃならないんだろう？女の乳も尻も太股（ふともも）も無い世界で永遠に過ごせと……。地獄だぜ。俺のハーレム王の道は遠いな』
『ハハハハ！まだこの状態でもハーレム王を諦めないとは！さすが俺の相棒だ！』
『笑い事じゃねぇ！俺にとっては真剣な事だ！』
『それで良い。それでこそ、歴代所有者の残留思念がお前に全てを託したと言える』
　ドライグの言葉に一誠は一瞬言葉を失い、神器（セイクリッド・ギア）の深奥に意識を向けた
　白い空間が見え、椅子とテーブルも見えてくるが……誰1人としてその場にいない
　ドライグが静かに語る
『……相棒、お前の魂は危機に瀕していた。サマエルの毒でな。肉体は既に手遅れで手放すしかなかった。肉体の次に呪いに犯されるのは魂だ。あのままでは、お前の魂はサマエルの毒によって消滅するところだった。俺もさすがにダメだと思ったぞ。次の所有者のもとに意識が移ると覚悟した程だ』

『……待てよ、じゃあ俺の魂はどうやって助かったんだ？』
『彼らの残留思念がサマエルの呪いからお前の魂を守ったんだよ。彼らが身代わりになって呪いを受けている間に、お前の魂を肉体から抜いて鎧に定着させたのだ。絶妙なタイミングだった。一瞬でも判断が遅ければ、今ここに俺もお前もいない』
『……んだよ、それ……。じゃあ、俺は……先輩達が助けてくれたお陰で、ここにいられるって事なのかよ……ッ！まだ先輩達とろくに話してもいないんだぞ⁉せっかく、あのヒト達は赤龍帝の呪いから解き放たれて、良い顔するようになったんだ！あの疑似空間でも俺にアドバイスくれたし！これからも上手くやっていけそうだって思えたんだ！こんな……こんなお別れなんて無いだろうがよッ！』
『……気持ちは分かる。だから、彼らの最後の言葉を聞いてもらえるか？一応、声だけ残した。――――彼らの最後のメッセージだ』
以前にもあったシチュエーションに嫌な予感を過らせる一誠
籠手の宝玉から映像が映し出され、歴代所有者は晴れやか過ぎる程の満面の笑顔で――
『『『『ポチっとポチっとずむずむいやーん！』』』』
……もはや返す言葉も無かった
『どんだけあの歌が好きなんだよ⁉』

映像の隅で歴代白龍皇の1人も――――
『おケツも良いものだよ、現赤龍帝』
『んなもんヴァーリの野郎に言えよぉぉぉぉぉぉっ！』
そして映像が消える
何とも締まらない歴代所有者の遺言だった……
嘆息する一誠にドライグは言う
『右手側の奥を見ろ』
ドライグに言われて視線を移すと――――そこにはせり上がった肉の塊があった
『あれは？』
『あれは繭だ。いや、培養カプセルと言っても良い』
『繭？培養？何が入っているんだ？』
『ああ、お前の肉体だ。1度滅んだ肉体があそこで新たな受肉を果たそうとしている。グレートレッドの体の一部とオーフィスの龍神の力を拝借して、お前の体を新生させているところだ』
驚きで言葉を失う一誠にドライグは愉快そうに笑った
『お前の体は真龍と龍神によって再生される。――――相棒、反撃の準備に入ろうか』

「……ん……んぁぁ……っ。――――っ？ここは……」

新は体の重い感覚と共に目を覚ました

いつもと違う感覚――『初代クイーン』を帰還させるべく右手を切除した為か、バランスが取れず1度体勢を崩し、改めて起き上がる

『初代キング』を倒し、闇に飲まれて何日が経過したのか、自分が今何処にいるのか？

何1つ見当も付かない中、現状だけは確認しようと辺りを見渡す

視界に広がるのは――霧が立ちこめる薄暗い河原の様な光景だった

枯れ果てた木々と植物に溢れ、生物らしき影もいない

足元や他の地には髑髏（どくろ）が転がっている

「まさか、ここが三途の川ってヤツか……。それともヘルヘルムの森か……。いずれにしろ、俺は死んじまったのか……？」

疑問が頭の中を渦巻く最中、新は何かの気配を察知

重苦しい体を動かして気配がする方向に視線を移す

視線の先に見えるのは――周りに漂っているものよりも少し深く立ち込めた霧の

塊

良からぬ気配に警戒を強めていると……霧が徐々に晴れていく

霧の中から現れたのは――2人の人物だった

片方は骸骨と機械が入り混じったような姿を持つ異形

もう片方は見覚えのある人物……以前、異国で新と対峙した男……

「▪a va(サバ)?お久しぶりですね、Monsieur(ムッシュ)」

「――ッ。お前は……キリヒコ……ッ」

そう、もう1人の人物とは『造魔(ゾーマ)』幹部の一角――ユナイト・キリヒコだった

キリヒコの登場に警戒を更に高める新だが、キリヒコは「Non(ノン) Non(ノン) Non(ノン)」と言いながら両手を向け、敵意が無い事を表す

「今のあなたは我々に敵意を向けている場合ではないでしょう?」

キリヒコの指摘にグゥの音も出せない新はひとまず攻撃体勢を解く

「Merci(メルシィ)。さて、あなたが聞きたい事は多数ある筈ですが……あまり時間を掛けている余裕も無いので、端的に申し上げましょう。ここは〝黄泉(よみ)の国〟――次元の狭間であって次元の狭間でない世界……。冥界、天界、人間界と同じ様に数多(あまた)ある世界の内の1つとでも言いましょう」

「黄泉の国……?じゃあ、俺は死んだのか?」

「その質問に対する答えはＮｏｎ。今のあなたは生きてはいませんが、死んでもいない。この黄泉の国を彷徨っているだけの中途半端な状態です。まあ、あと少し遅れていたら死んでいましたけどね」
「……そうか。とりあえず、死んでないだけ幸いと言う事か」
「他に聞きたい事はありますか？」
　色々訊きたい事は山程あるが、現状を早く知りたい新は質問を３つに絞る
「まず１つめの質問だ。お前の横にいる骸骨は何者だ？」
「彼ですか？彼は同じメンバーの１人と言いましょうか。『造魔』幹部の１人であり、〝死神〟と呼ばれし黄泉の国の番人――ブラッドマン・クルーガー。彼の案内でここまで来たのです」
「――ッ！『造魔』の幹部かよ……ッ」
「Ｎｏｎ　Ｎｏｎ　Ｎｏｎ、あまり毛嫌いしてはいけませんよ？あなたは彼のお陰で完全なる死を免れたのですから」
　意味深な言葉を吐くキリヒコ
　新が視線を移すとブラッドマンは煙草を吹かしながら語り始めた
「……酒と煙草が奏でる歪な旋律を味わう中、死の報せが俺の頭に届いた。次元の狭間を漂うは意識を無くした黒き翼の悪魔、それを見つけた俺は〝死神〟として目の前の悪

魔に審判を下した。『この者はまだ死人(しびと)になる時ではない』――――俺はそう判断した後、次元の狭間から黄泉の国まで連れてきた。そして、キリヒコは幾日も掛けて黒き翼の悪魔より〝闇〟を抽出し、現状に至る」

「……思った以上にめんどくさそうな奴だな」

「彼はこう言った人物ですので、そこはあまり気にしないでください。S'il(シル) vous(ブ) pl・it(レ)」

1つめの質問が終わり、直ぐに2つめの質問を飛ばす

「2つめ、その言い回しを大雑把に解釈すれば俺の中に巣食っていた『初代キング』の闇をキリヒコが取り出したって事になるよな?……どうやって取り出した?」

「以前、あなたと異国で対峙した時を覚えていますか?あの時、私は受けたダメージを〝データ〟として装置(デバイス)に吸収させました。それと同じ要領であなたの中に巣食っていた闇を吸収したのです。思った以上の濃さだったので半分程しか吸収できず、時間も掛かりましたが」

キリヒコが例の装置(デバイス)を取り出す

装置(デバイス)からはドス黒い闇が漂(ただよ)っていた

気になる点がいくつも浮上してくるが、新は『ここから出る方法』を最後の質問としてキリヒコに問いただした

すると、キリヒコは顎に指を添えて答える
「Ｊｅ　ｖｏｉｓ（ヴォワ）、その質問に対する答えは至ってシンプルです。今この場で私があなたの中にある闇を調整します。その調整を受けるのであれば、黄泉の国から生きて出る事が可能です」
確かにシンプルだが、危険な匂いを漂わせるキリヒコの提案に新は疑心暗鬼となる
「……もし、断ったらどうなる？」
「そうなれば、あなたはこのまま黄泉の国を彷徨う事になります。生者（せいじゃ）にも死者にもなれず、黄泉の国の住人となるだけです」
「相変わらず卑怯な奴だな、テメェは……ッ！」
「憤（いきどお）るのも結構ですが、今のあなたには選択の余地などありません。あなたがここから生きて出るには、私の提案を呑むしかないのです。Ｊｅ（ジュ）　ｓｕｉｓ（スィ）　ｄ（ディ）・ｓｏｌ（ソレ）・」
わざとらしい笑みを浮かべるキリヒコに新は歯噛みした
しかし、膠着状態を続けては〝まだ完全に死んでいない〟と言うチャンスを無駄にしてしまう……
良からぬ思惑を孕んでいるのは間違いないが、このまま何もせずにいるわけにはいかない
背に腹は替えられない……新は渋々キリヒコの要求を呑むしかなかった

「……分かった、呑んでやるよ。お前の要求を」
「要求とは人聞きの悪い。お互いにメリットがある提案ですよ。私は良いデータを入手、あなたは生きてここから出られる。悪魔社会で言うところの対価でしょう？」
「何でも良いから、さっさと始めろ」
そう言われるなりキリヒコは装置（デバイス）の銃口を新に向ける
すると、２つの銃口が蛇の如く伸び始め――――新の胸に突き刺さる
次に装置（デバイス）から見た事が無い紋様の魔法陣が宙に連なり、複雑な文字が幾重にも綴（つづ）られていく
それを見てフムフムと頷くキリヒコ
『Ｊｅ　ｖｏｉｓ（ヴォワ）……これは思った以上に良質なデータが取れそうです。――――「初代キング」も最後に良いものを残してくれたようですね。いや、それ以前に……彼の〝闇との適性数値〟が異常に高い。竜の力の影響か、それとも天性の素質か……。どちらにしろ、これ程の素材を放置するわけにもいかない。Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）にはもっと良いデータを出してもらわなければなりませんね。その為にも調整を手早く済ませますか……』
キリヒコが更に複数の小型魔法陣を展開し、高速で打ち込み始めた

魔王の牽制

冥府――それは冥界の下層に位置する死者の魂が選別される場所
そこにアザゼルが赴いていた
冥府はオリュンポス――ギリシャ勢力の神ハーデスが統治する世界である
冥界程の広大さは無いが、荒れ地が広がり、生物が棲息(せいそく)できない死の世界でもある
その深奥に古代ギリシャ式の神殿が姿を見せる
冥府に住む死神(グリムリッパー)の住み処であり、ハーデスの根城でもある『ハーデス神殿』
アザゼルは数人のメンバーと共にそこに足を踏み入れていた
入って直ぐに死神が群がり、アザゼル達に敵意の眼差しを向ける
ここに来た理由は至ってシンプル、ハーデスに抗議する為と、現在危機に置かれている冥界を好きにさせない為の牽制だった
巨大魔獣が暴れている最中に横槍を入れてくるだろうと考えての抑止力
アザゼル達が辿り着いたのは祭儀場らしき場所で、広い場内は装飾に黄金などが使われており、冥府に不似合いな煌(きら)びやかで豪華な作りだった
一際大きい祭壇とオリュンポス三柱神――ゼウス、ポセイドン、ハーデスを象(かたど)った

彫刻
祭儀場の奥から死神を複数引き連れて、司祭の祭服にミトラと言う出で立ちのハーデスが現れた
嫌なオーラを纏っており、連れている死神も相当な手練れであろう
先日襲ってきた最上級死神のプルートは――ここにはいなかった
ハーデスを視認するやいなや、アザゼルの隣にいた男が1歩前に出る
「お久しぶりです。冥界の魔王ルシファー――サーゼクスでございます。冥府の神、ハーデスさま。急な来訪、申し訳ございません」
アザゼルと共に来たメンバーの1人はサーゼクスだった
あの疑似空間から帰還したアザゼルはオーフィスの件を始め、新と一誠の事も包み隠さずサーゼクスに全て話した
サーゼクスはアザゼルからの情報を顔色1つ変えずにただ黙って聞き、アザゼルを咎める事すらしなかった
サーゼクスは進撃する巨大魔獣の群れと各地で暴れ出した旧魔王派および闇人(やみびと)の対応、民衆の保護優先を配下に伝達し終えた後でアザゼルを誘ってきた
「冥府に行く予定だ。アザゼルも同伴して欲しい」――と
この混乱に乗じてハーデスが動き出すのではないかとサーゼクスも勘ぐったようだ

言っても聞かないハーデスを相手にどう出れば良いのか？
その答えが魔王自らの訪問だった
そして、先程入ってきた新と一誠の最新情報もサーゼクスに伝え、その知らせにサーゼクスも安堵していた
眼球の無い眼孔の奥を不気味に輝かせ、ハーデスは笑いを漏らす
≪貴殿らが直接ここに来るとは……。ファファファ、これはまた虚を突かれたものだ≫
その割には余裕があるように思える口調、今ここでアザゼルやサーゼクスと戦う事になっても勝てると踏んでいるのだろう
本来ならミカエルもここに顔を出したいと言っていたが、天使長が地獄の底まで来るのは体裁的にもマズいのでアザゼルが制したらしい
ハーデスの視線がアザゼル達の後方にいる者に注がれる
≪そちらの天使もどきは？尋常ならざる波動を感じてならぬが≫
アザゼル達の後方にいるのは神父服に身を包んだブロンド髪にグリーンの瞳をした青年
その背には１０枚にも及ぶ純白の翼が生えている
「これはどうも。「御使い（ブレイブ・セイント）」のジョーカー、デュリオ・ジェズアルドです。今日はルシ

ファーさまとアザゼルさまの護衛でして。まー、恐らくいらないのでしょうが、『一応』とミカエルさまに命じられたものですから。天使のお仕事っスお仕事」

かなり軽い口調で会釈する変わり者のジョーカー、デュリオ・ジェズアルド

彼は神滅具（ロンギヌス）の１つ『煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）』の所有者にして、空を支配する『御使い（ブレイブ・セイント）』である

≪……噂の天界の切り札か。その身に宿る神滅具（ロンギヌス）は世界の天候を自在に操り、支配できると聞く……。ファファファ、ミカエルめ、まさかジョーカーを切るとはな。ファファファ、コウモリとカラスの首領、それに神滅具（ロンギヌス）が２つ……。この老人を相手にするには些（いささ）かイジメが過ぎるのではないか？≫

『よく言うぜ、これだけ用意しても退けそうな実力持っているくせによ。……そうか、表にいる刃（スラッシュ・ドッグ）　狗も補足されているか。さすがだな、冥府の神さまよ』

≪茶を飲みながらその方らと話すのもやぶさかではないのだが……敢えて訊ねよう。何用か？≫

『……分かってるくせによ。こちらを何処まで逆撫ですりゃ気が済むんだか……！』

サーゼクスはあくまで自然に答える

「先日、冥界の悪魔側にあるグラシャラボラス領で事件がありました。中級悪魔の試験を行（おこな）うセンター会場付近に存在する某ホテルにて、我が妹とその眷属、ここにいるアザゼル総督が『禍の団（カオス・ブリゲード）』の襲撃を受けたのです」

≪ああ、それか。報告は受けているが≫
「そこで総督方は死神からも襲われたと聞き及んでおります」
≪なんでも貴殿の妹君がアザゼル殿と結託して、かのウロボロス――オーフィスと密談をしていると耳にしてな。調査を頼んだのだよ。せっかく、どの勢力も協力態勢を敷こうとしている最中、そのような危険極まりない裏切り行為があっては全勢力の足並みが乱れると言うものだからなぁ。それが和平を誰よりも謳(うた)うアザゼル総督自らとなれば事も大きくなるであろう？敬愛する総督の是非が知りたくなってなぁ、配下の者に調査を頼んだのだよ。仮にそのような裏切り行為があった場合、最低限の警告をするようにも命じただけのこと≫
会話の端々にわざとらしい敬意を払って説明するハーデス
アザゼルにとっては腸(はらわた)が煮え繰り返りそうな物言いだった
ハーデスは肉の無い顎を擦(さす)りながら続ける
≪だが、それは私の早とちりだったようだ。もしそちらに被害が出てしまっていたのなら、非礼を詫びよう。贖罪も望むのであれば何なりと言うが良い。私の命以外ならば大概のものは叶えてやらんでもないが≫
完全に上から目線の物言いと態度
今のアザゼルには効果覿面(こうかてきめん)だった

しかし、それでもアザゼルがハーデスに食っていかない……否、それが出来ないと言った方が正しい

何故なら――すぐ近くでサーゼクスが濃厚なプレッシャーを放っていたからだ

普段は微塵も乱れたオーラを見せないのだが、腹の内では相当荒立っているのだろう……

ハーデスの報告を聞いてサーゼクスは1つだけ頷いた

「そうですか。早とちり……。なるほど。それと良くない噂を小耳に挟んだもので、それの確認をしたくまいった部分もございます」

サーゼクスが改めて、ここに来た本題――不義を問う

「ハーデスさま、あなたが『禍の団（カオス・ブリゲード）』と裏で繋がっていると言う報告を受けています。英雄派、旧魔王派共にあなたが手を貸している――と。かのサマエルを使用したと言うではありませんか。もしこれが本当だとしたら、重大な裏切り行為です。立場は違えど、あれを表に出さない事だけは各勢力で合意だった筈です。私としてもあなたの潔白を疑うつもりは無いのですが、一応の確認としてサマエルの封印状況を見せていただけないでしょうか？」

ハーデスがサマエルを使用したかどうかは封印術式の経過具合を調査すれば直ぐに分かる

潔白なら大昔に施された封印術式、黒なら最近施された封印術式と言う事になる
それが確認できれば、ハーデスを糾弾する口実が得られる
サーゼクスからの問いにハーデスは嘆息した
≪くだらんな。私は忙しいのだ。そのような疑惑を問われている暇など無い≫
ハーデスはそれだけ言い捨てて、この場を去ろうとする
『この野郎、都合の悪い事はガン無視かよ!･』
追い掛けようとするアザゼルをサーゼクスが手で制する
「分かりました。では、それを問うのはやめましょう。しかし、ハーデスさまに疑いの目が向けられているのは事実。ここは1つ、こうしませんか?･冥界での魔獣騒動が収まるまで、私達と共にこの祭儀場にいてもらいたいのです」
サーゼクスはこの場にハーデスを繋ぎ止める案を申し出た
ハーデスが冥界の危機に横槍を入れないよう、事件が収まるまでここで監視をすると言う案
元々アザゼルは巨大魔獣を全て殲滅するまでハーデスを神殿ごと結界で覆う案を検討したのだが、サーゼクスが話し合いの場を一応用意したいと強く訴えかけてきた
被害を最小限に留めたいサーゼクス生来の優しさがそうさせたのだろう
ハーデスは足を止めて、その場で振り返る

≪面白い事を口にするな、若造。そうだな……。これはどうだろう。――――お主が真の姿を見せると言うのなら、考えてやらんでもないが≫
アザゼルはハーデスの注文に一瞬言葉を失い、ハーデスは眼孔を光らせて続ける
≪噂にな、聞いておるからな。サーゼクスと言う悪魔が何故『ルシファー』を冠するに至ったか。それは『悪魔』と言う存在を逸しているがゆえだと≫
一瞬の静寂、それを裂くようにサーゼクスが頷く
「――――良いでしょう。それであなたがここに留まってくださるのならば安いものだ。ただし、身辺の者達は離れさせた方が良い。――――確実に消滅してしまう」
≪ほう、それは面白い。私の周囲にいるのは上級死神だけじゃなく、最上級死神も列している。それでもお主の言(げん)には偽りが無いと思えてならぬな≫
サーゼクスの言葉にハーデスの周囲を守護する死神達が敵意を一層濃くする
サーゼクスは上着を脱ぎ捨て、アザゼルとデュリオに後方に下がるよう視線を配らせた
『……本気でやるつもりか、サーゼクス』
見守るアザゼルとデュリオの前でサーゼクスは魔力を高め始める
滅びの魔力がサーゼクスから発され、その身を紅く紅く染めていく
刹那――――神殿全体が震動し始めた

サーゼクスの魔力を受けて神殿が震えだしたのだろう……
祭儀場の至るところ、壁や床、天井にも激しくヒビが走る
サーゼクスの周囲が彼自身の体から漏れ始めた滅びの魔力によって塵も遺さず消滅していく
サーゼクスの体が紅いオーラに包まれた瞬間、莫大な魔力が場内全体を包み込んだ
神殿の震動が止み、再び静寂が訪れた祭儀場
その中央に現れたのは――――人型に浮かび上がる滅びのオーラだった
滅びの化身となったサーゼクスがハーデスを見据える
『この状態になると、私の意志に関係無く滅びの魔力が周囲に広がっていく。特定の結界か、フィールドを用意しなければ全てのものを無に帰してしまう。――――この神殿が強固で幸いでした。どうやら、まだここは保つようだ』
これがサーゼクスの正体……凄まじい質量の消滅魔力が人型に圧縮した姿
以前、グレモリー家に行った時、サーゼクスの父――――グレモリー現当主がアザゼルに語った事がある
「アザゼル総督。私の息子は――――悪魔とカテゴライズして良いのか分からない、異なる存在なのではないかと時折思っているのですよ」
アザゼルはその時、「それはどういう意味なのでしょうか？」と訊ねた

現当主は目元を細めながらこう続けた

「息子が悪魔の変異体である事は間違いないようです。どうしてそうなったのか。私の血筋に何かがあったのか、それともバアル家の血筋に特異なものが含まれていたのか。それすらも分からないのです。――ただ、サーゼクスとアジュカは現悪魔世界において、たった2人のみの超越者である事は間違いないでしょうな。あの2人は生まれながらにして魔王になる事が運命付けられていたのかもしれません。何せ、それ以外に収まるポストがあり得なかったのですから。それ程にサーゼクスは強すぎた」

アザゼルは固唾を飲み、サーゼクスの正体を目の当たりにしたデュリオは「……ハハハ、これは護衛いらないかな」と苦笑いせざるを得なかった

『これでご満足いただけただろうか、ハーデス殿』

サーゼクスの言葉にハーデスは不敵な笑いを漏らす

≪ファファファ、バケモノめが。なるほど、前ルシファーを遥かに超越した存在だ。魔王と言うカテゴリーすら逸脱するものだ。いや、悪魔ですらあるのか疑わしい程の力を感じる。――お主は何なのだ？≫

『私が知りたいぐらいですよ。突然変異なのは確かなのですけどね。――どちらにしても、今の私ならあなたを消滅できます』

≪ファファファ、冗談には聞こえない、か。この場で争えば確実に冥府が消し去るな

≫

恐ろしくもあるが、今のアザゼルにとっては嬉しい誤算

最悪の場合、アザゼル達でハーデスを力ずくで抑えるつもりだったが、今のサーゼクスなら対応も可能だ

サーゼクスを見据えるハーデスのもとに物陰から死神が1名現れ、ハーデスに耳打ちする

報告を受けたハーデスは祭壇に設置されてある載火台の炎に手を向けた

すると、揺らめきと共に炎に映像が映し出される

そこに映し出されたのは――――とある連中が死神の大群を相手に大暴れしている様子だった

『おらおらおら！・俺っちの如意棒に何処まで耐えられるんでぃ、死神さんよ！』

如意棒を振り回す美猴（びこう）

その横で巨大なゴーレム――――ゴグマゴグが極太の剛腕を振り下ろして死神を一斉に吹き飛ばしていく

更には腕の一部が変形して対魔獣用に仕込まれた機関銃が現れ、火を噴いていた

黒歌、ルフェイの魔法攻撃に続き、アーサーが聖王剣（せいおうけん）を振るって１００単位の死神を屠（ほふ）る

フェンリルも神速で動き回り、大勢の死神を切り刻んでいく
ヴァーリチームが冥府に現れて、死神を相手に抗争を仕掛けてきた
『ああ、何となく予想はしていたさ。あいつらがやられっぱなしなわけがない』
実に良いタイミングだとばかりに密かに口元を笑ますアザゼル
ただヴァーリの姿だけが見当たらない
恐らく別行動を取っているのだろう
≪……貴様の仕業か、カラスの首領よ≫
ハーデスが不機嫌な声音でアザゼルに訊いてくる
アザゼルは堪えきれずに嫌みに満ちた笑みを浮かべて言った
「さあ、知らね」
≪……ッッ！≫
その瞬間、ハーデスが体に纏うオーラの質が激情の色となった
「死神を総動員しなければ白龍皇（はくりゅうこう）の一派は仕留められないでしょうな。それはあなたがここで指揮でもしないとダメでしょうねぇ」
これでハーデスが冥界の危機に横槍を入れられなくなったのが確定した
冥府でヴァーリチームが暴れ回り、サーゼクスまで本気と化しているから冥界への嫌がらせどころではない

アザゼルの意見にサーゼクスが同意する
『ええ、ですから、あなたにはここに留まってもらうしかないのですよ』
迫力と緊張に満ちた空間でサーゼクスは指を1本だけ立てた
『1つだけ。これはあくまで私的なものです。ですが、敢えて言わせていただこう』
滅びの化身は憎悪に満ちた眼光でハーデスを鋭く睨み付ける
視線を向けられていなくとも、この場にいるだけで全身が凍りつきそうな程の敵意を発する……
『冥府の神ハーデスよ。我が妹リアスと我が義弟竜崎新に向けた悪意、万死に値する。この場で立ち合う状況となった時は覚悟していただこう。――――私は一切の手加減も躊躇も捨てて貴殿をこの世から滅ぼし尽くす』
……ハーデスはミスを犯した――――それはサーゼクスを激怒させてしまった事……
アザゼルも光の槍を手元に出現させる
「骸骨神さまよ、俺も一応キレてるって事、忘れないでくれ。まあ、個人的な恨みなんだがな、それでも一応の事を物申しておくぜ？――――俺の教え子どもを泣かすんじゃねぇよ……ッ！」
アザゼルとサーゼクスの敵意を存分に受けてもハーデスは微塵も気配を変えなかった

ともあれ、これでハーデスの件は何とかなるようだ
『若手悪魔ども、後は任せるぜ？それとよ――――イッセー、新、そろそろ帰ってこいや。良い場面を全部取られちまうぜ？』

アジュカ・ベルゼブブの隠れ家からグレモリー城に帰還した祐斗達は気持ちを切り替えて首都に向かう準備を整えていた
少ししてフロアでゼノヴィアとイリナに再会する
「悪い、遅くなったな」
いつもの戦闘服に身を包む2人
ゼノヴィアは布にくるまれた長い得物を携えていた
布には魔術文字と天界の文字も刻まれている――――その中身は修復が終わったエクス・デュランダル
イリナも新しい剣を腰に携行していた
こちらも恐らくアザゼルが言っていた天界で行われていた実験の成果なのだろう
ゼノヴィアはリアスに問う

「部長、新とイッセーは？ある程度の話は家の方に聞いた。魔王ベルゼブブは何と？」
「ええ、イッセーの方は最悪の事態にはなっていないようだわ。――傍らにオーフィスとドライグがいるようだから、何とか連絡だけでも取れれば良いのだけれど……」
「うん、まあ、あいつなら生きてさえいれば帰ってくるだろう。今頃、アーシアの胸を恋しがっている筈だ。それで、新の方は――」
ゼノヴィアが言いかけた時、リアスは龍門で帰還してきた〝新の右手〟をゼノヴィアとイリナに見せる
一瞬言葉を詰まらせるが、ゼノヴィアは毅然とした様子で〝新の右手〟を握り締める
「心配する事はない。今は腕だけだが、あいつも絶対に生きて帰ってくるだろう。何せ、私が惚れた男だからな」
ゼノヴィアの侠気溢れる自信にリアスも頷く
やはり皆が新と一誠の帰還を信じて疑わないようだ
「ふと思ったのだが、部長の胸を揉ませてみたらどうだろう？そうしたら早く帰ってきそうな予感がする」
「それは……あり得そうで逆に怖いわね」
「うん。朱乃副部長や私の胸も揉ませてみようか。いや、イリナの胸も一緒に揉ませよう。少しでも新が早く帰ってくるように」

『……右手しか無い筈なのに、さっきから元気良く跳ねてるように見えるのは僕の気のせいかな？』

「それで、これからどうするの？」

今度はイリナがリアスに訊く

リアスはフロアに備え付けられている大型テレビに電源を入れる

映し出される映像は各領土で暴れ回る巨大な魔獣達だった

時間の経過的にそろそろ重要拠点に辿り着いた魔獣が出てもおかしくない

しかし、祐斗達の目に飛び込んできたのは『豪獣鬼（バンダースナッチ）』相手に善戦する悪魔や同盟関係の戦士達の姿だった

『ご覧ください！魔王アジュカ・ベルゼブブさまを始めとしたベルゼブブ眷属が構築した対抗術式！それによって展開する魔法陣の攻撃が「豪獣鬼（バンダースナッチ）」に効果を与えております！』

上空からヘリコプターで中継するレポーターが危機としてその様子を報道する

『豪獣鬼（バンダースナッチ）』の1体が同盟関係の戦士達の攻撃によって深いダメージを受けていた

アジュカ・ベルゼブブが魔獣への対処法を確立してから数時間、形勢は優勢に転じ始めていた

「……アジュカさまは魔獣が出現して直ぐにファルビウム・アスモデウスさまと連絡を

取り合いながら術式構築作業を開始されて、私達が人間界に行った時には術式プログラムを完成させていたと言うわ」

リアスは画面に視線を向けながらそう漏らす

情報によると『豪獣鬼（バンダースナッチ）』への攻撃戦術はファルビウム・アスモデウスが構築したらしく、頭脳派でもある魔王２人の共同戦線によって各地の『豪獣鬼（バンダースナッチ）』は足が止まり、ダメージを蓄積させていった

『大怪獣対レヴィアたんなのよ！』

チャンネルが移り変わって映し出されたのはセラフォルー・レヴィアタンだった

話によれば冥界の危機に居てもたってもいられなくなったセラフォルーが魔王領を飛び出し、『豪獣鬼（バンダースナッチ）』の１体とバトルを開始してしまったらしい……

レヴィアタン眷属と共に『豪獣鬼（バンダースナッチ）』の１体を一方的に攻撃し続けていた

極大とも言える氷の魔力が画面一杯に広がり、『豪獣鬼（バンダースナッチ）』もろとも広大な荒れ地が全て氷の世界と化していた

他のチャンネルではタンニーンが眷属のドラゴン達と『豪獣鬼（バンダースナッチ）』の１体を追い詰めているところだった

『母上！・頑張ってくだされー！』

更に違うチャンネルでは九尾の狐と化した八坂が『豪獣鬼（バンダースナッチ）』に強大な火炎を食らわせ

ていた
その背には九重が乗っており、多くの妖怪を引き連れていた
京都の妖怪勢力も悪魔世界の危機に助っ人として来てくれたようだ
巨大魔獣達への優勢が功を奏し、混乱に乗じて各地で暴れている旧魔王派や闇人への対抗状況も押し返してきている
『あーっと！遂に！遂に巨大魔獣「豪獣鬼」の1体が活動を停止させましたーっ！』
レポーターの叫声がテレビを通して聞こえてくる
最初に『豪獣鬼』を仕留めたのは皇帝ベリアルが率いる同盟軍だった
画面に映る人型の『豪獣鬼』が地に倒れ伏しており、再び動き出す気配を感じられない
テレビ越しに勝利の叫びが聞こえてくる
『おーっと⁉こちらでも「豪獣鬼」の1体が活動を停止しています！それもたったの6人で！』
レポーターの驚く声につられて場面が切り替わると四足歩行型の『豪獣鬼』が倒れていた
全身が焼け焦げた上に原型が無い程にまで歪みきっている
この『豪獣鬼』を仕留めたのは……なんと新の父、竜崎総司と宿敵だった一族――

リュオーガ族の5人による連合軍だった
『豪獣鬼（バンダースナッチ）』の活動停止よりも、リアス達は総司とリュオーガ族が手を組んでいる事に驚いていた
総司はリュオーガ族の復活および新の正体を隠蔽していた件で冥界に投獄され、リュオーガ族は三大勢力に敵対・干渉しない事を条件に南極へ隔離されていた筈……
実はサーゼクスがアザゼル達と共に冥府へ向かう直前、彼らにも声を呼びかけ協力を求めていたのだ
総司は勿論承諾して一時的に釈放されたが、リュオーガ族（主にラース）は頑（かたく）なに協力を拒んだ
彼曰（いわ）く、「今更協力をしたところで冥界の上役どもは納得しないだろう」との事
しかし、サーゼクスは自（みずか）ら頭を下げてまで彼らに頼み込んだ
――魔王が頭を下げている――
意地っ張りのラースはサーゼクスの姿を見て揺らいでしまい、仕方無く協力態勢を受ける事にした
そして、総司と合流して現在に至る……
思いがけない助っ人の登場に戸惑いながらも、他の連合軍を鼓舞させる結果をもたらしてくれた

この優勢状況なら『豪獣鬼(バンダースナッチ)』は半日しない内に全てカタがつきそうだ
「残る問題は魔王領の首都に向かう『超獣鬼(ジャバウォック)』でしょうね」
聞き覚えのある声が後方から聞こえてくる
振り返るとそこにいたのは――ヴァルキリー姿のロスヴァイセだった
「ロスヴァイセ！」
「ただいま帰還しました、リアスさん」
北欧から遠路遥々(はるばる)駆けつけてきたロスヴァイセは真剣な面持ちで言う
「新さんとイッセーくんの事は先程伺(うかが)いました。まあ、リアスさんと朱乃さんの胸を求める新さん、アーシアさんの胸を求めるイッセーくんならそろそろ帰ってくるでしょう」
ロスヴァイセもゼノヴィアと同じ事を言って彼らの帰還を信じて疑わなかった
ロスヴァイセが帰ってきた今、後は新、一誠、ギャスパーが戻ってくればグレモリー眷属は完全復活となる
一時、それは叶わない事だと思ってしまったが……今は違う
――必ずもう一度皆で集まれる！
――グレモリー眷属がそう簡単にバラバラになる筈が無い！
それはこれからもずっと変わらないものだと確信できた

祐斗も他の皆もグレモリー眷属――――オカルト研究部が集結しつつある事で余裕と自信が戻りつつあった

「皆さま！大変ですわ！」

フロアにパタパタと駆け寄ってくるのはレイヴェルだった

彼女は険しい顔で告げてくる

「……首都で活動中のシトリー眷属の皆さんが都民の避難を護衛している途中で……『禍の団（カオス・ブリゲード）』の構成員と戦闘に入ったそうです！」

それはグレモリー眷属出陣の狼煙（のろし）となった

獅子の王と蛇の皇

魔王領にある冥界（悪魔側）の首都――リリス
今その首都は危機に直面しており、規格外の魔獣『超獣鬼（ジャバウォック）』が接近しつつある
もし到達すれば首都は壊滅的打撃を受け、機能を失うだろう
現在、ルシファー眷属――グレイフィアを始めとするサーゼクスの眷属達が『超獣鬼（ジャバウォック）』の相手をしていた
その戦況は今のところ五分（ごぶ）のようで、決定打を与えぬまでも足止めには成功している
グレイフィアの放った魔力の波動は想像を絶する規模であり、地形その物を消してしまえる程の破壊力だった
だが、『超獣鬼（ジャバウォック）』はそのグレイフィア率いるルシファー眷属でも打倒できない……
それ程にまで怨恨が込められた怪物……
しかし、ルシファー眷属の足止めのお陰で都民の避難はほぼ完了している
シトリー眷属などの若手悪魔は残った人々がいないかどうかを確認する為に派遣されており、中でもサイラオーグは首都で暴れている旧魔王派おやび闇人（やみびと）を相手にしているらしい

グレモリー眷属とイリナはグレモリー城の地下にある大型転移用魔法陣からジャンプをし続けて、首都の北西区画に出た
レイヴェルは本来客分で戦闘に介入させてはならないので、現在グレモリー城に残っている
その事はリアス達もレイヴェル自身も認識しており、レイヴェルは役に立てない事を心底残念がっていたが、言い分を素直に聞き入れてくれた
転移魔法陣でのジャンプで辿り着いたのは区域の中でも1番高い高層ビルの屋上
シトリー眷属に追いつこうとした時、リアス達を呼び止める者がいた
「み、皆さん!よ、よかった!ここにいれば皆さんが来るって堕天使の方々に言われたんですけど、来なくて寂しかったんですぅ!」
涙目のギャスパーがようやく合流し、あとは新と一誠が駆けつければグレモリー眷属は全員揃う
「ギャスパー、トレーニングの成果、期待するわよ!」
リアスにそう言われるギャスパーだったが――何やら伏し目がちで顔色が悪かった
「……は、はい、期待に添えるよう頑張りますぅ。……あれ?イッセー先輩と新先輩は？」

ここにいない新と一誠をキョロキョロと探すギャスパー
どうやらまだ伝わっていないようだ
祐斗がギャスパーに詳細を説明しようとした時、「……あれ！」と小猫がとある方向を指差す
そちらの方角に視線を送ると――――遠目に黒い巨大なドラゴンが黒炎を巻き上げて暴れている様子が見えた
全員がそれを視認すると、そのまま翼を広げて空に飛び出していった

龍王と化した匙の姿が見えた場所――――高層ビル群が建ち並ぶ区域の広い車道に降り立ったリアス達
そこは既に戦火に包まれており、建物や道路、公共物に至るまで大きく破損されていた
被害は酷いが、この区域の避難はほぼ完了しているようだ
「グレモリー眷属！」
聞き覚えのある声に引かれてそちらに振り向くと――――タイヤが外れた1台のバス

を守るようにして囲むシトリー眷属女性陣の姿があった
バスの中には大勢の子供達が乗っていた
「状況は？」
リアスがシトリー眷属の『騎士（ナイト）』巡巴柄（めぐりともえ）に問う
「このバスを先導している最中に英雄派と出くわしてしまいまして……。相手はこちらがシトリー眷属だと分かると突然攻撃を仕掛けてきたんです。バスが軽く攻撃を受けて機能を停止してしまったのでここで応戦するしかなくて……会長と、副会長と、元ちゃんが……っ！」
涙混じりにそう言う巡
その直後にロスヴァイセが右手側を指差す
ショップが立ち並ぶ歩道で英雄派の巨漢ヘラクレスに喉元を掴まれている匙の姿が映り込んできた
既に匙は身体中が血だらけとなっており、意識も失いかけている
その近くで路面に横たわるソーナ、英雄派のジャンヌと戦っている真羅椿姫（しんらつばき）の姿も目に入った
ヘラクレスは匙をつまらなそうに放り捨て、倒れているソーナの背中を踏みつける
悲鳴を上げるソーナ、ヘラクレスは嘲笑い吐き捨てるように言う

「んだよ、レーティングゲームで大公アガレスに勝ったって言うから期待してたのによ。こんなもんかよ」
「ふざけないでッ!子供の乗ったバスばかりを執拗に狙ってきたくせに!それを庇う為に会長も匙も実力を出し切れなかったのよッ!そうするように仕掛けたのはあなた達じゃないのッ!」
椿姫が涙を流しながら激昂、その表情は悔しさと怒りに染め上がっていた
その理由は……ヘラクレスが子供達の乗っているバスを狙った卑劣な攻撃
あまりにも卑劣なヘラクレスに祐斗は内心で爆発しかけていた
この場にいる敵はヘラクレスとジャンヌのみ、曹操とゲオルクの姿は無い
椿姫を聖剣で突き返すジャンヌが嘆息する
「私はそんな事するのやめておけばって言ったけど?まあ、ヘラクレスを止める事もしなかったけれどっ!」
ジャンヌが周囲に聖剣の刃を幾重にも発生させて、椿姫の足場を破壊する
体勢を崩した椿姫のもとにジャンヌの剣が襲い掛かり、祐斗は瞬時にその場を駆け出した
一瞬で間合いを詰めた祐斗は鋭く放たれたジャンヌの一撃を抜刀したグラムで防ぐ
「いい加減にしてくれないかな」

祐斗は低い声音でそう言い、ジャンヌは祐斗が手にしている得物を見て仰天する
「……グラム⁉まさか、ジークフリートが⁉」
「ああ、僕達が倒した。このグラムは僕を新しい主に選んだらしい」
祐斗の腰にはグラムの他、ジークフリートが持っていた魔剣全てが鞘に収まっている
ジークフリートを倒した後、他の魔剣達も祐斗を主として認めたのだ
「へっ！こんな奴らに負けるなんてあいつもたかが知れてたってわけだ」
ヘラクレスはジークフリートを嘲笑うだけだった
どうやら英雄派に仲間意識は殆ど無いようだ……
「英雄派の正規メンバーがやられ続きか。グレモリー眷属にこれ以上関わると根こそぎ全滅しかねないな」
後方から第三者の声
霧と共に現れたのは霧使いのゲオルク
台詞からすると、『魔獣創造』の使い手レオナルドも再起不能と見て取れる
「悪いな、ヘラクレス、ジャンヌ。そのヴリトラの黒い炎が予想よりも遥かに濃かったものだから、異空間での解呪に時間が掛かった。解呪専用の結界空間を組んだのは久し振りだ。――――伝説通り、呪いや縛りに長けた能力のようだヴリトラめ」
「はっ！未成熟とは言え、龍王の一角をやっちまうなんてな！さすがは神滅具所有者っ

てところだな、ゲオルク！」
ヘラクレスがゲオルクを称賛する
祐斗は右手にグラム、左手に聖魔剣を出現させて、２本の剣を振るう
剣から発生した攻撃的なオーラがジャンヌとヘラクレスに向かっていく
両者は軽々と避けるが――そのお陰で隙が生まれた
祐斗は素早く近くの椿姫を抱えて、倒れるソーナと匙のもとに駆け寄った
「速いな！」
ゲオルクの手元に魔法形式の魔法陣が出現
祐斗は聖魔剣を手元から消し、周囲に龍の騎士団を出現させた
騎士団にソーナ、匙、椿姫を運んでもらうよう命じ、騎士団は3人を抱えるとそのままリアス達のもとに向かっていく
あとはゲオルクが放つ炎の球体
祐斗はグラムを両手で握り締め、襲い来る炎の球体を縦に両断した
祐斗の一連の動きを見てゲオルクが驚嘆の言葉を漏らす
「……強い。我ら3人を相手にして尚、仲間も全て救うとは……。これが聖魔剣の木場祐斗か。あの赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）の陰に隠れがちだが、リアス・グレモリーは恐ろしいナイトを有しているな」

「お褒めに預かり光栄……と言えば良いのかな。僕は影で良いのさ。ヒーローはイッセーくんと新くんだ。僕はただのリアス・グレモリーの剣で良い」
「しっかりしてください！」
アーシアがソーナと匙の回復を始めた
アーシアを中心に緑色の淡いオーラが発生していく
「……子供が大事に握り締めてたんだ……おっぱいドラゴンの人形を……ダークカイザーの人形を……ここで……あの子達にケガさせちまったら……俺はあいつらの背中を2度と追いかけられなくなる……」
回復される匙は微かな意識でそう漏らし、心底悔しそうに涙を浮かべていた
「椿姫、私達が彼らの相手をするわ。その間にバスにいる子供達の避難をお願いできないかしら」
リアスが椿姫にそう言う
椿姫は相手、リアス達、子供達を交互に見る
「……けれど」
「お願いします。副会長。あなた達が受けた分は僕達が返しますから」
「……木場くん。はい、分かりました」
椿姫は祐斗の進言を応じてくれた

後は英雄派を倒すのみ
ゼノヴィアが1歩前に出る
「さて、やるか。せっかくデュランダルを鍛え直したんだ。暴れさせないとダメだろう」
ゼノヴィアは持っている得物から布を取り払う
そこにはエクス・デュランダルの姿があった
曹操に破壊されたデュランダルを元に戻し、更に天界で『支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）』もプラスして鍛え直した
圧縮された濃密な聖剣のオーラが静かに刀身を覆っていた……
「こっちも良いものを貰ってきたんだから！」
イリナが腰に帯剣していた剣を抜き放つ
抜刀されるまで正体不明だった剣は――なんと聖魔剣だった
驚く祐斗を見てイリナが微笑む
「ええ、そうよ。これは三大勢力が同盟を結ぶ時に悪魔側が天界に提供した木場くんの聖魔剣から作り出した量産型の聖魔剣なの！これは試作の1本！天使が持てるようにかなりカスタマイズされて作られたようだけれどね。木場くんの聖魔剣ほど多様で強くはないけれど、天使が持つ分には充分だわ！」
祐斗の聖魔剣は思いがけないところで三大勢力の役に立っていた

ゼノヴィアは剣の切っ先をジャンヌに向ける
「ジークフリートに借りがあったんだが、木場や部長達が倒してしまったのなら、仕方がない。――まずはお前からだ、ジャンヌ」
ゼノヴィアの挑戦的な物言いにイリナも同意する
「そうよそうよ！いくら聖人の魂を受け継いだとしても、あなたはダメダメよ！」
イリナもゼノヴィアの真似をして聖魔剣の切っ先をジャンヌに向ける
良いコンビだなと思ったその時――
「なるほどな。じゃあ、お前らはもっとダメダメなんだろうな？ゼノヴィア、イリナ」
ゼノヴィアとイリナを侮蔑する男の声
そこに現れたのはゼノヴィアとイリナの上司であり、『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』の使い手――
――今や神風一派の一員となった神代剣護（かみしろけんご）だった
彼の登場にゼノヴィアとイリナは目を見開く
「剣護さん……っ」
「この騒ぎの真っ只中にいれば会えると思ってたが、こんなに早く会えるとは好都合だ。今度こそてめぇらを切り刻み、焼き殺してやる」
「ちょっとちょっと、そこの熱そうなお兄さん？あの子達は私を指名してるんだから邪魔は――」

言いかけたジャンヌに剣護は鋭い睨みを利かせる
体からも有無を言わさんばかりの殺気を放っていた
「悪いがこいつらは俺の獲物だ。欲しけりゃ力ずくでやるんだな。その時はてめぇも焼き殺す」
「……はいはい。お好きにどーぞ」
「――――と言うわけだ。てめぇらの相手は俺がしてやる」
剣護はそう言ってデスカリバーの柄に付いている十字架を取り外し、自らの顔に装着
十字架から黒いオーラが迸(ほとばし)り、彼の顔と全身を鎧が包み込む
『黒十字(こくじゅうじ)の鎧』を纏った剣護
それでもゼノヴィアは怯まない
「剣護さん、もう私は迷わない。敵が立ち塞がるなら、それら全てを斬る。たとえ、あなたが相手であってもだ」
「ガキが。お前にそれが出来んのか？」
「このエクス・デュランダルには7つに分かれたエクスカリバーの能力が全て付加されている。使いこなせば私は更なる強さを手に入れられる。だが、残念ながら私はバカだ。今すぐにテクニック云々(うんぬん)となっても能力を使いこなせないだろう。だからこそ、これだ」

ゼノヴィアがエクス・デュランダルを振るう
激しい破砕音と共に彼女の前方の路面に大きなクレーターが生まれた
「――――破壊のエクスカリバーとデュランダルのパワーで、あなたを倒す！」
『……ゼノヴィア、もう少しテクニックの方にも目を向けてくれないかな……』
祐斗の視線を感じたのか、ゼノヴィアは不満げな表情となる
「むっ、木場。今お前はパワーバカだと思ったな。だが私から言わせれば、グレモリーのテクニック芸はお前だけで良いと思うんだ。だから私は破壊力だけに費やす！」
『お願いだ！テクニックにも目を向けてくれないかな⁉うちの眷属はパワータイプばかりでテクニックタイプ不足なんだ！僕だけにテクニックタイプを求めるなんてパーティ構成的に間違っているよ！』
「……眷属一の苦労人、祐斗先輩」
「聖魔剣、パワーバカが相手だと苦労するだろ？俺も昔は手を焼いたものだ」
「……あなたも苦労してたんですね」
「まあな。さて、無駄話は終わりだ。ゼノヴィア、イリナ、向こうでケリをつけてやる」
そう言って剣護は素早く別の場所に移動し、ゼノヴィアとイリナも翼を広げて彼を追っていった
相手を取られて不貞腐(ふてくさ)れていたジャンヌが言う

「で、私の相手は誰がしてくれるのかしら？」
「僕達があなたの相手をしましょう」
今度はリアス達の後方から聞き覚えのある声
後ろを向くと――そこには暫く離れていた八代渉と高峰祐希那の姿があった
人工飛竜ワイバーンの持つど〇でもドアでやって来たのか、紋様が描かれた扉が閉まると同時に消える
「渉くん！よくここが分かったね」
「はい、ワイバーンにリアス先輩達がいる場所をお願いして、移動先を直結してもらいました。遅くなってすみません」
「遅くなった分はこれから取り戻すわ。渉、修行の成果をあいつらに見せてやるわよ」
「うん、そうだね」
渉は直ぐに『光帝の鎧』を纏い、祐希那は手元に氷の神器――『全凍結の氷斧』を出現させる
「あらあら、じゃあ私も参戦して良いかしら？――あれを持っているでしょうから、1人でも多い方が良いわ」
朱乃もジャンヌを相手にするようだ
恐らく『業魔人』化を用心して申し出たのだろう

朱乃は両手のブレスレットを金色に輝かせると、背に六翼の羽を出現させる
堕天使化――今はブレスレットによる補助が必要だが、いずれは無くても堕天使化が出来るようになるだろう
渉、祐希那、朱乃からの挑戦にジャンヌは不敵な笑みを見せた
「へー、3人も相手をしてくれるんだ。それにそちらのお姉さんは荒れを知ってるようね。面白いわ！『禁手化（バランス・ブレイク）』！」
力のある言葉を発し、ジャンヌの背後に聖剣で形作られたドラゴンが出現する
ジャンヌが使う『聖剣創造（ブレード・フラックスミス）』の亜種　禁手（バランス・ブレイカー）だ
「ついてらっしゃい！悪魔に闇人（やみびと）に堕天使だなんて！私はモテモテね！」
ジャンヌは嬉々としながら聖剣で作られたドラゴンの背に乗る
ドラゴンはジャンヌを背に乗せると、近くにある高層ビルの壁に手足を引っ掛けて高速で駆け上がり始めた
渉、祐希那、朱乃も翼を広げて追い――直ぐに空高くで激しいぶつかり合いが始まった
残るはヘラクレスとゲオルク
祐斗はゲオルクに問う
「何故あのバスを狙った？と言うよりも何故首都リリスにいるんだい？」

「まず後者の方から答えようか。――見学だ。曹操があの超巨大魔獣が何処まで攻め込む事が出来るか、その目で見てみたいと言うのでね」

ここに来た理由は見学、もしくは見学に来たと言う曹操の付き添い

しかし、その肝心の曹操がいない……何処かで高みの見物でもしているのだろうか？

「では、何故バスを狙った？」

祐斗が再度訊くと、ゲオルクは嘆息するだけだった

「偶然、そのバスと出くわしてな。そうしたら、ヴリトラの匙元士郎とシトリー眷属が乗っていたのだ。あちらもこちらの顔を知っている。まあ、相対する事になってしまうのも否めないだろう」

偶然の相対と言い分を述べるゲオルクだが、ヘラクレスは挑戦的な笑みを見せる

「俺が煽ったって面もあるぜ？偶然、あのヴリトラに出会ったんだ。魔獣の都市侵略の見学だけじゃ、物足りなくなってな。『子供を狙われたくなけりゃ戦え』って言ったんだよ。――で、戦闘開始ってわけだ」

あまりにも稚拙でふざけた理由……匙はそれを受け、子供達を守る為に傷だらけとなった

怒りの感情が祐斗の中で抑えきれない程になったその時――

「英雄派は異形との戦いを望む英雄の集まりだと聞いていたが……どうやら、ただの外

道がいたようだ」
「全くその通りだな。見るに耐えん」
そう言いながら対峙するリアス達の間に現れる男２人
１人は金色の獅子を引き連れ、極大なまでのパワーを有する男
『力』の権化、己の体術だけで祐斗、ゼノヴィア、ロスヴァイセ、一誠、新の５人と打ち合った男――サイラオーグ・バアル
もう１人は蒼く煌めく蛇の幻影を背に発する男
新と一誠を相手に互角の勝負をした『２代目キング』――蛟大牙（みずちたいが）
獅子王と蛇神皇（じゃしんおう）が彼らの前に現れた……っ
「首都で暴れ回っていた旧魔王派の残党を一通り屠（ほふ）ったところでな、遠目に黒いドラゴン――匙元士郎の姿が見えた。ゲームでの記録映像でしか見た事の無い姿だったが、直ぐに理解した。――強大な何かと戦っていると」
サイラオーグは大牙に視線を向ける
「貴様が闇人（やみびと）の『２代目キング』とやらか。噂には聞いている。闇人には珍しく人望に溢れているらしいが」
「獅子王サイラオーグ・バアルか……。力を体現した悪魔、会えた事を光栄に思う」
「ここに来た目的は何だ？火事場荒らしにでも来たとは思えん」

「こんな状況で小悪党のような真似をすると思うか？オレ達は横槍などで名を馳せるつもりは毛頭無い。それに――――」
大牙はハッキリと告げた
「グレモリー眷属、赤龍帝、闇皇は魔獣にも英雄派にも、ましてや神風にもくれてやる相手ではない。オレの好敵手たる相手を消させはしない。自らの手で倒してこそ『キング』の名に相応しい。だから、今はその為に停戦し――――共通の敵を打ちのめすべきと判断したまでだ」
大牙の『キング』の在り方……それは自分自身の手で新や一誠を超える事
他者の横槍を受けてまで王の座に居座るつもりはない
サイラオーグは不敵な笑みを見せ、こう告げる
「いずれ貴様とも打ち合ってみたいものだ」
「オレも俄然興味が湧いてきたぞ。サイラオーグ・バアル」
初見かつ短時間でありながら〝獅子王＆蛇神皇〟と言う呉越同舟が成立してしまった……
サイラオーグはレグルスをその場に留めさせ、上着を脱ぎ捨てて前に出る
大牙も蛇の幻影を内にしまい、蒼いオーラを揺らめかせる
ヘラクレスに視線を向けるサイラオーグ

ヘラクレスも彼からの戦意を受けて、嬉しそうな笑みを浮かべた
「バアル家の次期当主に闇人(やみびと)の『2代目キング』か。バアルの方は知ってるぜ？滅びの魔力が特色の大王バアル家で、滅びを持たずに生まれた無能な次期当主。悪魔のくせに肉弾戦しか出来ないって言うじゃねぇか。ハハハ、そんなわけの分からねぇ悪魔なんざ初めて聞いたぜ！」
ヘラクレスの煽りを聞いてもサイラオーグは微塵も表情を変えない
この程度の戯れ言など、彼の半生からするに幾重にも浴びた罵詈雑言の1つに過ぎないのだろう
「英雄ヘラクレスの魂を引き継ぎし者」
「ああ、そうだぜ、バアルさんよ」
ヘラクレスの方にゆっくりと足を進めながらサイラオーグは断ずる
「――どうやら、俺は勘違いしたようだ。貴様のような弱小な輩(やから)が英雄の筈がない」
それを聞いてヘラクレスの顔に青筋が浮き上がる
今の一言でヘラクレスのプライドが沸き立ったのだろう
「へっ、赤龍帝と闇皇との殴打合戦を繰り広げたらしいじゃねぇか。だせぇな。悪魔っていや、魔力だ。魔力の塊、魔力での超常現象こそが悪魔だと言って良い。闇皇はともかく、それが一切無い赤龍帝とあんたは何なんだろうな？」

ヘラクレスがいくら煽ろうとサイラオーグは眉1つ動かさない
その様子を静観していた大牙は「煽るしか能が無いのか……？」と呟く
それでもヘラクレスの煽りは続く
「元祖ヘラクレスが倒したって言うネメアの獅子の神器（セイクリッド・ギア）を手に入れているって言うじゃねぇか。――――皮肉だな、俺と会うなんてよ。それを使わなきゃ俺には勝てないぜ？」
ヘラクレスの物言いをサイラオーグは再び断ずる
「使わん」
「は？」
更にコメカミに青筋を浮かび上がらせ、ヘラクレスは怒りの口調で問い返すが……
「貴様ごときに獅子の衣は使わん。どう見ても貴様が赤龍帝と闇皇どころか、たった今知り合ったばかりの『2代目キング』よりも強いとは思えないからな」
サイラオーグはただそう断ずるだけだった
それを聞いたヘラクレスは哄笑を上げる
「ハハハハ！俺の神器（セイクリッド・ギア）で爆破できないものはねぇのよ！たとえ、あんたが闘気に包まれたってな！俺の神器（セイクリッド・ギア）にかかれば造作もねぇのよ！」
ヘラクレスが飛び出し、手に危険なオーラを纏わせる

サイラオーグの両腕を掴むと――――神器（セイクリッド・ギア）による爆破攻撃を始めた
ヘラクレスの神器（セイクリッド・ギア）――――『巨人の悪戯（バリアント・デトネイション）』は攻撃と同時に対象物を爆破する能力
爆音と共にサイラオーグの両腕が爆（は）ぜる
「次はてめぇの番だっ！」
ヘラクレスは大牙にも拳を放ち、打撃と同時に爆破攻撃を見舞った
大牙の体も爆破攻撃によって爆ぜる
――――だが、サイラオーグと大牙は平然としていた
「なるほど。――――こんなものか」
「何をするかと思えば、ただの花火か」
肉が爆ぜ、血が噴き出ても彼らは表情を変えなかった
ヘラクレスは完全に激怒した様子で両手のオーラを更に高まらせる
「へへへ、言ってくれるじゃねぇか。じゃあ、これならどうよッ⁉」
そのまま路面に向けて拳を連打で繰り出した
その瞬間、路面ごと大規模な爆破が巻き起こり、サイラオーグと大牙の全身を包み込む
煙、塵と埃、粉塵が渦巻いて辺り一面を激しく覆う
路面は完全に崩壊して瓦礫の山となり、瓦礫の上でヘラクレスが再び哄笑を上げる

「ハハハハハハハッ！ほら、見たことかよ！何も出来ずに散りやがった！これだから魔力もねぇ悪魔は出来損ないってんだよ！たかが体術だけで何が出来るって――――」

そこまで言ってヘラクレスの口が止まる――――その表情は驚愕に包まれていた

煙が止んだ車道の中央で獅子王（サイラオーグ）と蛇神皇（大牙）は何事も無いように立っていたのだから……

全身に軽度のダメージを負い、血を流そうとも両者は表情を一切変えていなかった

「――――こんなものか？」

「さっきより派手になっただけだな」

全く薄れない闘気を目の当たりにしたヘラクレスの表情が軽く戦慄する

「……舐めんな、クソ悪魔がッッ！クソ蛇がッッ！」

毒づくが先程の余裕は無い

そのヘラクレスへ、遂にサイラオーグと大牙は進撃を開始する

重圧を放ちながら、ヘラクレスとの間合いを詰めていく

「英雄ヘラクレスの魂を引き継ぎし人間と言うから、少しは期待したのだが……。どうやら、俺の期待は悉（ことごと）く裏切られたようだ」

ヘラクレスが再び両手を構えるが――――サイラオーグの姿が瞬時に消え去り、ヘラクレスの眼前に現れる

「俺の番だ」
ドズンッ！
重く、低く、鋭いサイラオーグの拳打がヘラクレスの腹部に深々と突き刺さり、その衝撃はヘラクレスの体を通り抜けて後方のビルの壁を難無く破壊する
「――――ッッッ⁉」
予想以上の破壊力だったのか、ヘラクレスは当惑した表情を浮かべた後、苦悶に包まれていく
その場に膝をつき、腹部を手で押さえ、口から血反吐が吐き出される
たった一撃で形勢が逆転してしまった……
「今度はオレの番だ」
次に大牙がヘラクレスの眼前に現れ、右の拳打をヘラクレスの顎に打ち込む
ガゴンッ！と重く鈍い音と共にヘラクレスは宙を舞い、路面に落ちる
こちらも生身での拳……『蛇神皇の鎧』を発動していない
サイラオーグと大牙がヘラクレスを見下ろして言う
「どうした。今の一撃はただの拳打だ。お前がバカにした赤龍帝はこれを食らっても一切怯まずに立ち向かってきたが？」
「こちらもまだ生身のままだぞ。そんな一撃を受けただけで怯むとは情けないな」

それを聞いてヘラクレスはくぐもった声音で不気味な笑いを発し、同時に激情に駆られた憤怒の形相で立ち上がる

「……ふざけるな……ッ！ふざけるなよ、クソ悪魔ごときがァッッ！クソ蛇ごときがよォォォォォッ！魔力もねぇ！神器（セイクリッド・ギア）も使えねぇ！ただの打撃でこの俺が――――」

激昂するヘラクレスは全身を輝かせ、体を包み込む光がミサイルの様な突起物を形成させていく

――――禁手化（バランス・ブレイク）だ

「やられるわけねぇだろうがよォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」

叫びながらヘラクレスは全身のミサイルを縦横無尽に放出していく

リアス達は身の危険を感じて回避の体勢となった

無数のミサイルが町中の至るところを破壊していく

その1発がサイラオーグに真っ直ぐ飛んでいったが――――サイラオーグはそのミサイルを拳だけで弾いて吹き飛ばす

大牙のもとに飛んでいったミサイルも――――大牙拳や蹴りで弾かれ爆散する

向かってくる全てのミサイルを彼らは体術だけで弾いていく……

撃ち出されたミサイルの1つが避難を始めていた子供達のもとに飛来していく

刹那、子供達の前にロスヴァイセが入り込み、前方に強力な防御魔法陣を展開させて

ミサイルの爆撃を完全に防ぎきった
「――――新しい防御魔法です。私は『戦車（ルーク）』ですので、それならば特性――――防御力を高めようと思いまして。故郷で強力な防御魔法をあらかた覚えてきました。特性を活かしつつ魔法を使えば禁（バランス）手（ブレイク）化して破壊力に特化した神器（セイクリッド・ギア）の攻撃でも余裕で耐えられるようです。これは大きな成果ね」
ロスヴァイセが故郷の北欧に帰還した理由は自らの特性を高める為
強固な防御魔法を覚える事によって自身の防御力を底上げした
『グレモリー眷属はどんどん強くなっているよ、イッセーくん！・新くん！』
仲間の強化に喜ぶ祐斗の目に子供達の姿が映り込んだ
「ライオンさん！・がんばってぇぇぇっ！」
「ライオーンッ！・負けないでぇぇぇっ！」
ヘラクレスと対峙するサイラオーグに向けての声援
サイラオーグはその声援が予想外のものだったのか、キョトンとした表情を浮かべていた
更に――――
「……ヘビさんも、ライオンさんのおともだち？」
1人の子供がヘビさん――――大牙にそう訊いてくる

大牙はどう答えたら良いのかさっぱり理解できなかったが……
「あー……まあ、今は味方……だな、多分」
〝今は味方〟――その言葉を聞いた子供達は揃ってウンと頷き……なんと大牙にも声援を贈り始めた
「ヘビさんもがんばれぇぇぇっ！」
「ライオーンッ！ヘビさぁぁぁんっ！」
サイラオーグ以上にキョトンとした表情を浮かべる大牙
子供とはいえ、まさか敵対している筈の悪魔から声援を贈られるなど思わなかったのだろう
子供達からの声援を受けたサイラオーグは嬉しそうに笑いを上げる
「ふはははははははっ！」
サイラオーグの闘気が勢いを増した
「あの子達から『がんばって』と、『負けないで』と言われてしまった。心地よいものだな、兵藤一誠、竜崎新。これが子供達から貰える力か。『2代目キング』、まさかお前にも声援を贈られるとは思わなかったぞ」
「正直言って、戸惑っている。戸惑っているが……不思議と嫌な気分じゃない。寧ろ気持ちが昂ってくる。こんな感覚は初めてだ――悪くない」

自然と笑みをこぼす大牙とサイラオーグは揃って言い放った
「「貴様に負ける道理は一切無くなったぞ、英雄ヘラクレスよ」」
「あぁ⁉ガキにピーチクパーチク言われただけで喜んでんじゃねぇよォォォッ！脳無し大王と腐れ蛇がッッ！」
吼えるヘラクレスの顔面に闘気に満ちたサイラオーグの拳と、蛇のオーラに包まれた大牙の拳が撃ち込まれる
顔の穴と言う穴から血飛沫（ちしぶき）を撒き散らしてヘラクレスは地に膝をつけた
「……何だよ……このパンチは……ッ」
獅子の王と蛇の皇、両者の拳を受ければ受ける程、相手は怯える一方だった
ただのパンチが相手の肉体と精神を抉（えぐ）ってくる
それも深く、芯に届く程に……
「子供から声援すら貰えない者が英雄を名乗るな……ッ！」
「今の貴様には英雄の誇りなど微塵も感じられないな。肩書きだけの英雄などこの世には存在しない。英雄とは――――民から言われて初めて成り立つものだ。それすら理解できんとは哀れだな」
サイラオーグと大牙が迫力に満ちた顔をヘラクレスに向けていた
ヘラクレスは力でも精神でも2人に敵う見込みが無いと悟ったのか、絶望しきった表

情となっていた
しかし、懐(ふところ)に手を入れて何かを取り出す
それはピストル型の注射器――『魔人化(カオス・ブレイク)』とフェニックスの涙だった
フェニックスの涙で全快し、更に『魔人化(カオス・ブレイク)』を使用すればヘラクレスの力は何処まで高まるか分からない
「く、くそったれめがッ！」
毒づきながらヘラクレスは注射器の先端を首もとに持っていくが――その手には迷いがあった
その状況を見てサイラオーグは問う
「どうした、それらを使わないのか？察するに強化できるのだろう？使いたければ使え。俺は一向に構わんッ！それで強くなるのなら、俺は喜んで受け入れようッ！俺はそのお前を超えていくッ！」
堂々たる大王の風貌を見せるサイラオーグ……
そして、獅子王だけでなく――
「オレも構わん。あらゆる強者を正面から打ち倒してこそ、『キング』の座に君臨する者の責務――オレ自身の哲学だ！それを証明せずに『キング』を名乗るなど一族の恥！さあ、かかってこい！オレは逃げも隠れもしないッ！」

蛇の皇も自身が掲げる『2代目キング』の矜持を放った……
ヘラクレスは悔しさに表情を歪ませ、目には涙が浮かぶ程だった
「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおっ！」
大声を張り上げて泣き叫ぶヘラクレスは――『魔人化（カオス・ブレイク）』とフェニックスの涙を路面に捨てた
そのまま拳を構えてサイラオーグと大牙に向かっていく
『魔人化（カオス・ブレイク）』とフェニックスの涙を捨てると言うあまりに予想外の展開……
サイラオーグと大牙はその姿を見て、初めて相手に構えを取った
「最後の最後で英雄としての誇りを取り戻したか。悪くない」
「ああ、オレ達なりに敬意を表しよう」
飛び込んでくるヘラクレスに対し、サイラオーグと闘気、大牙はオーラを滾（たぎ）らせ――
―
「「この一撃で果てるが良いッ！」」
ヘラクレスの腹部に獅子王と蛇神皇の拳が打ち込まれた！
小気味の良い音が一帯に木霊する
完全に意識を絶たれたヘラクレスが路面に突っ伏していく……
獅子王（サイラオーグ）と蛇神皇（2代目キング）――両者の拳は外道に身を落とした相手のプライドを蘇（よみがえ）らせた

ヘラクレスを圧倒したサイラオーグと大牙の姿は雄大に映った
パチ……パチ……パチ……パチ……
突如鳴り響く拍手の音
音がする方向に視線を向ければ――――またもや乱入者の影が……
「いや～、素晴らしいものを見せてもらったよ。まさしく力による圧倒。こんなものを見せられてしまっては――――私も出る他ないだろう」
嬉々として姿を見せたのは神風一派の一員、リザードマンの闇人(やみびと)――――メタル・D・アズールだった

リアス達のいた場所より離れ、崩壊した車道に降り立つゼノヴィアとイリナ
彼女達の前にはかつての上司――――神代剣護がいた
ゼノヴィアとイリナは得物を構え、剣護を鋭く見据える
「……剣護さん、最後にもう一度だけ訊きます。考えを改めるつもりは無いんですか？」
「改心なんざ、とうの昔に捨ててんだよ。今更なにを言ってやがる。分かりきった事だろう。――――今日こそてめぇらを焼き殺してやる」

漆黒の鎧に覆われた剣護は、兜の奥から殺意に満ちた眼孔を妖しく輝かせる

――もう、この人に言葉は届かない……

そう悟ったゼノヴィア（ゼノヴィア、イリナ）とイリナは腹を括り、それぞれの剣の切っ先を剣護（神代剣護）に向ける

２人の弟子と上司による死闘が始まろうとしていた……っ

師弟対決！ゼノヴィア＆イリナＶＳ神代剣護

「ゼノヴィア、イリナ。本気で俺に勝てると思ってんのか？」
「剣護さん、もうあの頃の私達とは違う」
「そうよ、私達だって成長してるんだから！」
「よく言うぜ。悪魔や異端者を見れば〝断罪〟だの〝斬る〟だの、片っ端から斬りまくってたジャジャ馬が今更平和主義を気取りやがって……目障りなんだよ」
剣護は自分の周囲に高熱の火球を幾重にも生み出し、更に『灼熱の邪聖剣（デスカリバー・イグニッション）』にも高熱を帯びさせる
左手を向けると周囲に漂（ただよ）う火球の群れがゼノヴィアとイリナのもとへ飛来し、デスカリバーを振るって灼熱の斬撃を飛ばした
イリナは天使の翼を広げて飛び出し、それらを縫うように躱（かわ）していく
ゼノヴィアはエクス・デュランダルに聖なるオーラを蓄積させ、向かってくる火球と斬撃を一振りで斬り払う
「今度はこちらの番だ！」
ゼノヴィアはその場を駆け出して距離を詰め、エクス・デュランダルを振り下ろす

剣護は右手に持ったデスカリバーで難無く受け止める
ゼノヴィアは更に『破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）』の破壊力も上乗せして力を込めるが、微動だにしない
「ぐ……っ！」
「それで本気を出してるつもりか？―――ッ」
剣護は背後から迫ってくるイリナの気配を察知し、ゼノヴィアを蹴り飛ばす
イリナの量産型聖魔剣による一太刀をデスカリバーで受け流した
ゼノヴィアとイリナは２人がかりで剣戟を繰り出すが、剣護はそれらを片手で防ぎきる
３本の得物が起こす火花が煙臭い空間を彩（いろど）っていく
『何故だ、何故この人にエクス・デュランダルの刃が一太刀も通らない……⁉剣護さんは片手で私とイリナの剣を防いでいる……っ！強くなった筈なのに、どうしてここまで差を見せつけられているんだ……ッ！』
ゼノヴィアは焦燥感に駆られていた……
鍛え直した筈のエクス・デュランダルが、グレモリー眷属に入ってから強くなった筈の自分の力が全く通用しない
何が足りないのか、何かが欠けているのか？

ゼノヴィアの脳裏にそんな思いが過る中、剣護はゼノヴィアとイリナを突き返す
横に構えた得物で何とか防いだものの、ハッキリと実力の差を見せつけられている
剣護はつまらなそうに嘆息した
「お前らの剣は軽すぎるんだよ。いくら強い剣を持とうが、使い手がカス同然なら武器の真価を発揮できない」
「私達の剣が軽いですって?そんな事ないもん!」
「事実だ。ゼノヴィアはデュランダルとエクスカリバーのパワーに頼りきり、イリナは自前の速度だけで剣を振るってきたのが手に取るように分かる。そんな見せ掛けの腕じゃあ振るう剣も軽くなるんだよ」
デスカリバーを握る剣護の手がギリリと強くなる
「昔の俺は聖剣を託された日から、いや……それ以前から教会と人々の為に信じ続け、聖剣を振るってきた。世のため人のため、自分の行いが人を救う力になると本気で信じてな……」
剣護はダッシュで距離を詰め、ゼノヴィア目掛けてデスカリバーを振りかぶった
ゼノヴィアもエクス・デュランダルで応戦するが……刃同士が衝突した瞬間、とてつもない重量感がゼノヴィアの手に襲い掛かってくる
――――デュランダルとエクスカリバーのパワーを合わせたエクス・デュランダルが押

されている――――

『ぐ……っ!剣が、重い……!?』

剣護が振るうデスカリバーの衝撃、重みに驚愕の色を隠せず、更に力負けしてしまい後方に飛ばされる

ビルの壁だった瓦礫に背中を叩きつけられ、痛みと窒息感が込み上げた

「ゼノヴィアッ!」

「人の心配してる場合かよ」

次に剣護はデスカリバーをイリナの頭上に振り下ろしてきた

イリナは量産型聖魔剣を上に掲げ、デスカリバーの刃を受け止めようとする

しかし、剣護が繰り出す剣戟はそのどれもが重く……耐えられるものではなかった

地面へ押し潰されるイリナ……衝撃と痛みに苛まれ、血反吐を吐き出す

それでも剣護は一切容赦せず、義手の左手でイリナを無理矢理起こしてから殴り飛ばす

ゼノヴィアのもとへ転がるイリナ、ゼノヴィアがヨロヨロと駆け寄る

「お前らはただ闇雲に正義を信じて聖剣を振るってきたクチだろう?それを愚直に信じて俺は……１０年、２０年、聖剣を振るってきた。神が死んでからはその過ごした時間さえ無駄となった。お前らに想像できるか?自分の行ってきた事が全部無駄にされる

気分がよぉ」
過ぎ去った時間は戻らないし、戻れない……
剣護は自身の人生の大半を教会と人々の為に捧げてきた
だが、それも今となっては全くの無意味
報われず、神も死んだ今、何を信じて良いのか分からない……
『力』――もうそれだけしか信じられなかった……
ゼノヴィアとイリナには想像もつかないだろう……
拠り所が無く、孤独に彷徨(さまよ)った者の事など当初は考えもしなかった
だからこそ、剣護は教会を見限り、闇人(やみびと)側――神風一派についたのだ
「神がいなけりゃ、俺が神になってやる。この理不尽極まりない世の中を正してやる。お前らもそれを望んでんだろ?だったら、俺の邪魔してんじゃねぇ。――今すぐ消え失せろ……ッッ!」
怨恨にまみれた怒声を吐き出す剣護
理不尽な世の中、理不尽な仕打ち、理不尽な民の反応に対し、刃を向ける……
邪悪な聖剣と化した得物と共に……恨みの炎を燃やす……
それが今の神代剣護……
ゼノヴィアは「……ダメだ……ッ」と言ってエクス・デュランダルを杖代わりにして

立ち上がっていく

「剣護さん……確かに私もイリナも、神の死を知った時は何も考えられなくなった……。今までの自分のやってきた事を全否定されたようだった……っ。けれど、それでも……それでも祈りを捧げる事を止めなかった者を、私もイリナも知っている……ッ」

立ち上がったゼノヴィアは再びエクス・デュランダルを剣護に向ける

「アーシアは異端だと罵(ののし)った私を許してくれた。イリナとも仲良くしてくれた。だから、だから私達もアーシアと共に歩んでいこうと決めたんだ！アーシアがいるグレモリー眷属と共に！仲間と共に！あなたにどう言われようと、どう蔑(さげす)まれようとも、私は歩みを止めない！立ち止まる事だけはしてはならないんだ！剣護さん！あなたは今、立ち止まっているだけなんだ！進む事から逃げ、無用な逃げ道を作り、ただそこに逃げ込んだだけなんだ！」

「――――ッッ」

「剣護さん！あなたの罪は教会を見限った事じゃない！ましてや死んだ神のせいでもない！――――自分が歩こうと思える道を見つけず、人の道を壊してきた事だッ！」

「……何も知らないガキどもが偉そうな口を……ッ！たとえ、それが俺の罪だとしても――――もう戻れねぇんだよ！戻れねぇところまでドップリ浸かってんだよッッ！だったら、後は〝沈む〟か〝死ぬ〟しか道はねぇだろうがッ！」

耳を貸そうともしない剣護にイリナが叫ぶ

「……今からでも遅くないの！剣護さん……！罪を償(つぐな)って、やり直しましょう！あなたにその気があるなら……私も、ゼノヴィアも、アーシアさんも、リアスさんも力を貸します！」

「今更それを信じて何になるッ⁉どれだけの希望を得る⁉所詮、力の無い奴が囀(さえ)ずる希望なんてたかが知れてんだよッッ！俺を納得させたいなら剣で示せッ！力で示せッ！殺す気でかかって来やがれェェェェッッ！」

漆黒の邪悪な剣士(神代剣護)は赤い目を光らせ、高熱の炎が噴き出したデスカリバーを構えて駆け出していく

今までに無い程の熱量……

彼自身の怒りや悲しみを体現したかのような炎がデスカリバーの刃にまとわりつく

ゼノヴィアとイリナも得物に聖なるオーラを流し、真っ向から受けて立とうとする

握る手に力を込め、互いの剣を交差させるようにデスカリバーと刃と衝突した

インパクトの瞬間、衝撃波が周りの瓦礫を吹き飛ばし、足元の地も細かく割れていく

『……何だ？さっきよりも剣の圧力が増してやがる……ッ⁉俺の方が優位に立っていたのに……ッッ！』

迷いが無くなったゼノヴィアとイリナの剣がデスカリバーを押し始めていた……

その事態に剣護は驚愕し、焦り始める
自分のしてきた事を否定された時から、心に隙が出来てしまったのだ
その隙が剣に出てしまい、彼女達の迷い無き剣に押されている……
『……ふざけるな……ッ。ふざけるな……ッ!このまま言われっぱなしで終わってたまるか……ッ!何が共に歩むだ!何がやり直すだ!今の俺に……居場所なんかあるわけねぇだろ……ッ!てめぇらの正義面した欺瞞には――――もうウンザリなんだよッッ!』
ゴオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
吼える剣護のデスカリバーがゼノヴィアとイリナの剣を押し始める
激しい怒りの炎を燃やすデスカリバー
全てを焼き尽くそうとする恨みの炎を前に、ゼノヴィアとイリナは気圧され気味だった
しかし、彼女達は直ぐに迷いを断ち切り、その想いを剣に乗せる
「剣護さん……っ！あなたがどれだけの怒りを孕んできたか、どれ程の悲しみを背負ってきたのか、私達には想像も出来ない……っ。だが、これだけは言える！それを罪の無い人達にぶつけてはいけないっ！」
「あなたが道を間違えたのなら、私達が呼び戻してみせるっ！」
「いっ　けぇぇぇぇぇぇっ！　エ　ク　ス・　デュ　ラ　ン　ダァァァァァァァァァァァァァァァァァァルッッ！」
ゼノヴィアの想い、イリナの想いに呼応したのか、エクス・デュランダルのオーラがドンッ！と跳ね上がり、莫大な聖なるオーラが噴き荒れる
イリナの聖魔剣にもその影響が及び、２人の剣の重圧が増していく
剣護のデスカリバーが少しずつ押し戻される
『……ッッ⁉バ、バカな……ッッ！こんな、こんな事が……ッ⁉』

目の前の事態に驚愕する剣護
認めたくないとばかりに力を込めるが、それでも彼女達の剣を押し殺す事が出来ない……
挙げ句、デスカリバーの刀身に亀裂が生じてきた
小さな亀裂は徐々に刀身を侵食していき、細かな破片が宙に消える
やがて――――儚い音と共に刀身は砕け散り、剣護の体に二筋の剣の痕が刻み込まれた
漆黒の鎧も砕け、傷痕から血も噴き出し、彼女達の迷い無き剣を食らって――――剣護はようやく確信した
『……ああ、俺は……負けたのか』
己の敗北、ゼノヴィアとイリナの成長、それに繋がる強き想い
それら全てを体で実感し、背中から地へ倒れ込んだ
手に持っていたデスカリバーも刀身が砕けて炎を消す
ゼノヴィアとイリナは息を切らしたので呼吸を整え、剣護のもとに歩み寄る
「剣護さん、私達はここまで強くなりました。強くなったから……あなたを止める事も出来た」
「誰にだって間違ってしまう時はあります。でも、それを独りで抱え込まないで欲しいんです……。剣護さんは痛みを、苦しみを独りで背負い過ぎてしまったんです……っ。

私達はそれに気付けなかった……ごめんなさい……っ」
イリナは涙を流して頭を下げ、ゼノヴィアも同様に頭を下げる
そんな2人の姿を見て、剣護は自嘲した
「……バカだったんだな、俺は……。こんな近くに話が出来る部下がいるってのに、そいつらに目を合わさず勝手に暴走していた……。俺はダメな上司だよ……」
「剣護さん、今からでも遅くありません。罪を償ってまた――」
「悪いな、もう……遅かったんだ……」
サァァァァァァァァァ……ッ
砂が落ちるような音が静かに聞こえてくる
よく見ると……剣護の体が端々から砂と化していた……ッ
剣護の異変に絶句するゼノヴィアとイリナ
剣護は自身に起きている異変について説明を始める
「あの小僧にエクスカリバーをデスカリバーに改造してもらった際、1つだけ警告をされたんだ……。デスカリバーの力を乱用すれば、いずれ俺の体はその力に耐えきれなくなり――消滅するってよ……。結局、俺はただ利用されていただけだったんだ……。その事に気付かず、デスカリバーを使い続けた……その結果がコレだ……」
「そ、そんな……ッ！」

「さっきも言ったろ……？もう、戻れないところまで浸かってんだって……ッ。ハハハ……ッ、邪道に走った奴の末路なんて、所詮こんなもんさ……ッ」
剣護の下半身が完全に砂となって消え、それが残った上半身にも及んでくる
かつての上司の惨め且つ唐突な最期に、ゼノヴィアとイリナは泣き崩れる
「嫌だ……っ！嫌だっ！せっかくここまで、あなたを連れ戻せるところまで来たのに……っ！」
「ダメぇ……ッ！そんな、こんなのってないよぉ……っ！」
「おいおい……また泣いてんのか……？昔から泣き虫は変わらねぇな、お前ら……」
剣護は崩れていく右手をゼノヴィアの目元に差し伸べる
指で涙を拭い、イリナの涙も同様に拭い去った
「……まだまだガキだと思ってたお前らが、こんなに綺麗になっちまって……。俺の目が曇り過ぎてたんだな……。お前らは強くなってた、こんな簡単な事に気付けなかったとは……情けねぇ上司だったよ……。デスカリバーは砕けたが、芯は無事だ……。後は天界に渡して、エクスカリバーに直してやれ……」
「剣護さん……っ！そんな弱気な顔など、あなたらしくもない……っ！逝かないでくれ……っ！私はまだ、あなたから学びたい事が山程あるんだ……っ！」
「ミカエルさまにも私達からお願いしてくるから……っ！お願いだから、死なないで

……っ！」

ゼノヴィアとイリナの懇願も虚しく、彼の肉体は

どんどん砂と化していく……

涙を拭った手も砂と化し、とうとう頭だけとなってしまった……

そして――――

「ゼノヴィア……イリナ……お前らは……自慢の部下だったよ……っ」

その言葉を最期に――――神代剣護は砂となって散って逝った……

かつての上司の残骸をゼノヴィアは手で掬うが、砂は指の隙間からこぼれ落ちるのみ

ボタボタと涙も零れ、悲痛に満ちた叫びが彼女の口から吐き出された

「あ……アアアアアア……ッ、ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！」

デスカリバーも使い手を失ったせいか輝きが消え、主に残ったのは柄から伸びる折れた刀身のみ

ゼノヴィアは地に拳を叩きつけ、やり場の無い怒りを吐き出す

「くそ……っ！くそ……っ！くそぉぉぉ……っ！どうして、どうして剣護さんが死ななければならないんだ……っ!!まだやり直せた筈なのに……っ！くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

「うぐ……っ、ひっぐ……っ!こんなの……酷い……!酷すぎるよ……っ!どうして、こんな事に……っ!」

イリナもやり場の無い怒りと悲しみを空振りさせる事しか出来なかった……

ゼノヴィアは砕けたデスカリバーを拾い、懇願するように泣き叫んだ

「なあ、頼む!剣護さんを返してくれぇ……っ!代わりに私の腕をくれてやる……!足でも何でも持っていけば良い!だから……頼むよ……っ!剣護さんを返せぇぇぇ

ゼノヴィアは無意識に『灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）』が同化した真のエクス・デュランダルを握る

――〝泣いてる暇は無いだろ〟――

微かに聞こえてくるのは先程死んだ筈の剣護の声……

――〝行ってこい、ゼノヴィア、イリナ〟――

――〝立ち止まる事だけはしちゃいけないんだろ？だったら、進め〟――

彼女達を鼓舞する声が微かに響く……

エクス・デュランダルから流れてくるオーラは力強さだけじゃなく、優しい温もりも感じられた

思わぬ事態、奇跡に打ち震えるゼノヴィア

涙をゴシゴシと拭い去り、力を入れて立ち上がる

「イリナ、聞こえたか？この剣を通して剣護さんが言ってくれたんだ。行ってこいって」

「うん！私にも聞こえた！剣護さんが……剣護さんが私達の事を応援してくれてる……っ！」

「ああ、そうだ。今は立ち止まってる場合じゃない。この冥界の危機を救わなきゃならないんだ。ここで止まってたら、また剣護さんに怒られてしまう」

ゼノヴィアはエクス・デュランダルを携（たずさ）え、凛とした表情で空を見上げる

「行くぞ、イリナ！部長達のところへ戻ろう！『禍の団（カオス・ブリゲード）』も闇人（やみびと）も残らず倒す！剣護さんの遺志を無駄にしてはいけない！」
「うん！そうよね！新くんとイッセーくんが帰ってくるまで、私達で何とかしなくちゃだもんっ！」
恩師の死を乗り越えたゼノヴィアとイリナは翼を広げ、リアス達のいる場所を目指して飛んでいった

ＶＳメタル！真の強さの意味

「木場祐斗、ヤツも闇人(やみびと)か？」
「ええ、京都で対峙した闇人(やみびと)の１人。ただ……あの男も以前と姿形が変わっています……」
祐斗の言葉通り、メタルも京都で対峙した時とは違う姿になっていた
アドラス同様に目の色が表裏反転しており、全身が更に鋭利かつ刺々しい鎧の鱗と化している
赤い砂時計型の痣――――彼の胸にも邪道に満ちた強化の証明が刻まれていた……
メタルは嬉々とした声音で言う
「今宵の私は幸運に満ちている。若手悪魔の中でも名高き獅子王サイラオーグ・バアルだけでなく、それを打ち破ったリアス・グレモリーとその眷属、果ては『２代目キング』にまで会えるとはね。人生を長く生きていると、こうも素晴らしい体験が出来る！私は今、歓喜に打ち震えているよ！」
メタルは手を広げて演説を終えた後、両の拳を禍々(まがまが)しい武装に変化させる
メタルの能力は肉体強化の術だが……以前とは比較にならない程、凶悪さが増してい

た

「私の相手になってくれたまえ。最近は歯応えの無い奴らばかりで餓えていたところなんだ……ッ！獅子王、『２代目キング』、私を満たしてくれ！〝戦い〟と言う名のスリルで！〝力〟と言う名のサスペンスで！」

狂喜に満ちたメタルが歩み寄ろうとした際、メタルの足が倒れ伏しているヘラクレスに当たる

その事に気付いたメタルは視線をヘラクレスに向け――――敗者と見るや否や踏みつけ始めた

メタルの所業にサイラオーグと大牙は目元を細くする

「これはこれは。いつぞやの能無し木偶の坊くんではないか。この無様な姿を見る限り、彼らとの勝負に負けたのだろう。何とも情けない姿だな、それでも英雄のつもりかね？」

メタルは倒れているヘラクレスを更に踏みつける

１度だけでなく２度、３度……意識の無い敗者を蹴り続ける

「敗者、負け犬、クズ、ゴミカスにはお似合いの格好だ！この際、私が介錯してやろうか⁉」

「やめろ」

サイラオーグの低い一喝にメタルは足を止め、サイラオーグに視線を向ける
「そいつにはもう意識が無い。貴様は既に倒れた者すら甚振(いたぶ)るのか？」
「強者にとって当然の権利なのだよ。弱者や負け犬は徹底的に淘汰される、それがこの世の現状さ。獅子王、キミにも分かる筈だ。力無き者として生まれてしまった悲しき運命(さだめ)の非情さ、冷酷さ、弱者に対する周りからの横暴を。――――私と同じ境遇に生まれたようなものなのだから」
メタルは自分の過去について話し始めた
メタルは元々リザードマンと呼ばれる種族の出身、リザードマンは知能に優れた分、戦闘能力に乏しい難点を抱えていた
ゆえに他の種族から標的にされやすい
狩り、差別、ありとあらゆる迫害や理不尽を受け、幾度となく虐(しいた)げられてきた
「私は呪ったよ。何故こんな弱い種族として生まれてきたのか、何故こんなに力が弱いのか、毎日毎日……訪れる夜の数だけ憎しみが芽生えたよ」
そんな時に現れたのが……あの神風だった
メタルは憎しみの一心で神風の甘言を躊躇無く受け入れ、闇人(やみびと)に転生した
「そこから先は一転、人生が薔薇色に輝いていったよ。まずは私を侮辱した者達を片っ端から殴り殺してやった。肉を潰し、骨を砕き、腸(はらわた)を千切った時の快感は今でも鮮明に

記憶されている。初めて他者を圧倒する力を手に入れた時の愉悦、今まで私を虐げてきた者どもの情けない命乞い、そして……それを完膚無きまでに踏み潰した時の興奮……ッ!甘美だったよ……!まさしく至高!至福!恍惚!生きてて良かったと思える瞬間だぁ……っ」

それからもメタルは復讐劇を続け、やがて……それが終わると今度は戦いに執着するようになった

もっと強い者と戦いたい……もっと強い者を潰したい……もっと戦いを楽しみたい……

そんな暗い欲求を抱えて現在に至る

「〝力〟――――それさえ手に入れれば何だって出来る。腐りきったクズどもを根こそぎ潰し、私をもっと高みへと導いてくれる……ッ!獅子王、キミもその為に〝力〟を手に入れたのだろう?ならば、この気持ちを理解できる筈だ!滅びの力を持たずに生まれてしまい、長きにわたって虐げられてきたキミなら――――」

「貴様と一緒にするな」

メタルの言葉を強く遮ったサイラオーグ

鋭い睨みを放ち、ヘラクレスの時と同様にメタルの思想を断ずる

「俺が強くなったのは〝夢〟を叶える為だ。己の夢、冥界の子供達の夢――――それらを

叶える為に我が体、我が拳を鍛え続けてきた。貴様のようなエゴの塊とは違う。貴様はただ暴力に取り憑かれただけに過ぎない。真っ向から戦う事もせず、理不尽な力を手に入れ、理不尽な暴力を行使した挙げ句、危険な殺戮思想で己を塗り潰してしまった。――今の貴様は暴力に縛られた、生きた亡霊だ」

サイラオーグは拳を構える

「その歪みきった思想ごと、貴様を打ち砕く」

「……悲しいね。〝力〟を手に入れた者同士で分かり合えると思っていたのだが、残念でならないよ。では……この場で屠(ほふ)って証明してあげようかッ！」

メタルは全身から殺気を滾(たぎ)らせ、その場を駆け出した

大牙は「ここは使い時だな」と言ってから『蛇神皇(じゃしんおう)の鎧』を展開する

細剣を呼び出し、刀身を鞭のように伸ばして振るう

しなる刀身がメタルの体を切り裂こうとするが、メタル自身は全く意に介さない

〝ブラックウィドウ〟――神風が作り出した生物兵器によって、より強固な防御力を得たのだろう

迫り来るメタルにサイラオーグは拳に闘気を纏わせ、拳打を放り込んだ

メタルの拳と衝突し、凄まじい衝撃と音が一帯を震撼させる

バキィン！と快音が鳴ると同時にメタルが後方へ飛び退く

見てみると――――武装を固めたメタルの拳が無惨に破壊されていた……っ
たった一撃での破壊、破砕に驚くリアス達
だが、サイラオーグの拳からも血が滴(したた)り落ちる
「なるほど、どうやら口先だけではなさそうだ」
「当たり前だよ、獅子王。私はそこでくたばっているウドの大木とは違う。久々にフルパワーまで出せそうじゃないか！楽しませてくれたまえ！」
メタルが更なる強化を始める
両足の装甲が鋭利さと強固さが増し、メタル自身の速度も上がる
大牙は細剣の刀身を鞭のようにして、メタルを捕獲するが……メタルは力任せの回転力で大牙を空中へ放り投げる
飛び上がり、無防備となった大牙の頭を掴んで――――そのまま彼を地面へ投げつける
土煙が舞い、地面へ叩きつけられた大牙
そこへメタルが急降下して襲い掛かっていく
凶刃と化した足で串刺ししようとした刹那、サイラオーグが高速で距離を詰め、メタルごと足を殴り飛ばす
骨を砕かんとするような音が鳴り、殴り飛ばされたメタルは瓦礫の山に突っ込む
「すまん、助かった」

「なに、気にするな。今は共闘中だ」
サイラオーグのサポートに礼を言う大牙
直ぐにメタルが瓦礫を押し退けて戻ってくる
「ハハハハハハハッ！良い！イイッ！実に良いぞォッ！強き者の〝力〟と〝力〟がぶつかり合う感触！スリル！それらが私を滾らせてくれるッ！もっと、もっと力を出し切ってくれたまえエエッ！」
狂喜に満ちた哄笑を上げるメタルは更なる強化術を発動
全身から無数の刃が生え、攻撃力と凶悪性が増す
その拳を連打で繰り出し、サイラオーグと大牙も応戦する
無数にも見える拳が火花と血を撒き散らし、衝撃の余波が周囲の地を破壊していく
「これなら――――どうだぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
吼えるメタルは両拳をスクリュー状に回転させ、サイラオーグと大牙の腹にそれぞれ打ち込んだ
肉を抉り、肝を潰し、骨を砕くと言わんばかりの拳打……
手応えありとメタルはニヤケるが……サイラオーグと大牙は戦意に満ちた目を輝かせる
そして、両者揃ってメタルの顎に渾身のアッパーを撃ち放った

顎を打ち抜かれたメタルは宙を舞い、そのまま背面から地面に落ちる
鎧の鱗から血が滲み出し、衝撃と痛みで痺れる体を無理矢理起こす
「くは……っ。フハハハッ、ハハハハハハハハッ!やはり素晴らしい!獅子王のパワー!『2代目キング』のパワー!獅子と蛇の競演ッ!この様な形で相対できる事に私は多大な感謝を与えよう!」
「貴様に感謝される筋合いなど無い」
メタルの言葉を一蹴するサイラオーグ
「そんな拳では俺は倒れん。貴様は己の娯楽の為だけに拳を振るっているだけだ」
「それがどうしたのだ?それの何が悪い⁉圧倒的な力で弱者を潰し、砕き、踏み躙る!負け犬が死のうが再起不能になろうが知った事ではない!獅子王、キミもグラシャラボラスの次期当主候補を力で砕き、再起不能にしたと聞く!偉そうに言っておきながら、キミも私と同じ事をしているではないかッ!結局は同じ穴のムジナと言うわけだッ!」
確かにサイラオーグもレーティングゲームでグラシャラボラスの次期当主候補を相手にし、心を折って再起不能にしてしまった
〝痛い所を突いてやった〟と思ったメタルだが、サイラオーグは再び断ずる
「確かに俺の拳で再起不能にしたのは事実だ。しかし、俺は夢を叶える為に負けられなかった。負けられなかったから、全力で向かっていった。ただ、それだけだ」

一瞬でサイラオーグの姿が消え、メタルの眼前に現れる
「全力で向かった末の結果を後悔しない」
サイラオーグの拳がメタルの顔面を捉える
「貴様は遊び心を満たすように力を振るっている！」
サイラオーグの拳がメタルの腹に深々と突き刺さる
「理不尽な暴力は破壊しか生み出さない！だから、俺は――――ッ！」
サイラオーグの拳がメタルの顎を撃ち抜く！
「そんな理不尽が横行しない冥界を作ってみせるッ！」
サイラオーグの拳がメタルを後方のビルへ吹き飛ばすッ！
ビルは倒壊し、めり込んだビルから離脱したメタルはよろめいて膝をつく
もう全身が血だらけとなっており、勝敗が決しようとしていた……
それでもメタルは体を動かし、狂ったように哄笑を上げた
「良いぞ……ッ！イイゾォ……ッ！もっと力を振るいタマエ……ッ！もっと私に打ち込んでキタマエ……ッ！もっと、モットォ、もっと私に戦いの刺激をオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
メタルの全身から膨大かつドス黒いオーラが噴き上がり、異変が始まる……
手足が肥大化し、胴体も巨大化、頭部もサイズに合わせるよう大きくなり、口元が裂

けていく
　全身から生える刃がより凶悪なものと化し、変貌を遂げたメタルが天に向かって咆哮する
『ギュガロロロロロロロロロロロォォォ

「我が獅子よッ！ネメアの王よッ！獅子王と呼ばれた汝よッ！我が猛りに応じて、衣と化せェェェェッ！禁手化ウウウウッ！」

光が弾けた直後、サイラオーグは金色に輝く獅子の鎧を身に纏っていた

『獅子王の戦斧の禁手――『獅子王の剛皮』』

レーティングゲームで新と一誠を相手に互角に渡り合った〝力〟の権化が再び豪誕した

「――――ッ。凄まじい闘気の塊だ。ならば、俺も見せてやらんとな。――――超魔鎧身ッッ！」

サイラオーグの気迫に当てられた大牙も自身の強化形態――超魔鎧身を披露する

背に４枚の翼が広がり、蒼白い輝きを放つ

水晶の如く煌めく全身鎧と化し、胸部に蛇の頭部が出現する

獅子王と蛇神皇が降臨し、眼前に聳える怪物を鋭く睨み付ける

『フハハハハハハッ！それでこそ戦い甲斐があると言うものだッ！』

メタルは狂ったように笑いながらサイラオーグと大牙に向かって巨大な拳を振り下ろす

獅子王、蛇神皇も拳を構え――真っ向からメタルの拳を打ち砕く

極大の衝撃と破砕音が一帯に響き渡り、メタルの拳を覆っている鎧の鱗が無惨に砕け

散る
腕の至る所から裂傷が開き、血が噴き出すのだが……
ジュゥゥウウウウウ……ッ!
不気味な音がグシャグシャとなったメタルの腕から聞こえてくる
音の方に視線を向けると――――先程砕かれたメタルの腕が修復されていくのが見えた
僅か数秒足らずでメタルの腕が完治、当人もその様子に驚くが、直ぐに口元をニンマリと笑ませる
『オオオオ……素晴らしい……ッ。砕かれた腕が再生する程にまで力が上がっているのか。以前なら最強の形態で殴ればダメージがフィードバックしてきたのだが……これは良い!力を使い放題ではないかッッ!』
歪んだ歓喜に震えるメタルは再び巨大な拳を振り下ろした
1発、2発、3発と乱打で繰り出していく
激しい粉塵が舞い上がり、サイラオーグと大牙の姿さえ見えなくなってしまう
メタルはトドメとばかりに巨大な両手を合わせ、より巨大な拳を形成し――――豪快に振り下ろした
地面が爆(は)ぜ、更に追撃の踏みつけも連続で行(おこな)う

苛烈極まりない暴力を終えたメタルは狂喜に満ちた雄叫びを上げる
『ハハハハハハハッ！愉快だ！痛快だッ！爽快過ぎるッッ！惜しむ事無く力を振るえる！何と言う心地よさだろうかッッ！あの獅子王と「２代目キング」を全く寄せ付けないッ！これで潰れてしまうのは残念だが、私は嬉しいぞッ！〝ブラックウィドウ〟の素晴らしさが証明されたのだからなッ！』
哄笑を上げ続けるメタルだったが――突如、足下の地面から腕が飛び出してくる
崩壊した地面の中から出てきたのは――獅子王と蛇神皇の２人だった
鎧は破損し、全身から血が出ているものの……彼らは一切臆する事無く、鋭い眼力でメタルを睨み付けていた
その眼力にメタルは一瞬戦慄した
『……ッ！何だ、その目は……ッ。その強い眼差しは……ッ！』
「やはりな。所詮は他人の手によって得た力、貴様自身の力ではない」
サイラオーグがメタルの得た〝力〟について全否定する
「〝力〟とは己を鍛えた末に、手にするものだ。〝力〟を持たなかったのなら――何故貴様は己の拳で進まなかった？何故他人の〝力〟にすがり付いた？その時点で貴様の強さなど皆無だ」
サイラオーグと同じように大牙もメタルの〝力〟を否定する

「ヒトの手で加えられた〝力〟には限度がある。それすら理解できなかったお前は――――ただ飼い主に尻尾を振るだけの犬だ。自ら可能性を捨て、他人からの施しのみを頼ってきた様な奴に――――オレも、サイラオーグ・バアルも、ましてや誰も倒れはしない」

グギギギギギギ……ッ！

壮大な歯軋りがメタルの口元から聞こえてくる

核心を突かれたせいか、その表情は怒りに彩られていた

『ギュガガ……ッ！口では何とでも言えようッ！虚勢も張れようッ！しかぁし！それも幕引きとさせてもらうぞッ！本当はもう少し楽しんでから出そうと思っていたが、これ以上キミ達を苛めるのも可哀相なんでなッ！私の最強技で引導を渡してやろうッッ！』

そう言ったメタルは全身から殺意を滾らせ、不快な音と共に鎧の形状を変化させていく

四つん這いの体勢となり、鎧の鱗が刺々しく、更に禍々しい様相へと変貌していく

不気味な唸り声を上げつつ、眼前の闇人はこの世の物とは思えぬ異形の怪物と化した

その姿はまるで自我を持った要塞型の怪物、以前の姿の面影は微塵も無い……

変貌しきった鱗から頭部がせり上がり、サイラオーグと大牙を見据える

『サア、吹キ飛ブガ良イッ！打ちたければ打つガイイッ！獅子王モ、「２代目キング」モ、グレモリー眷属モッ！全員マトメテ、我が力のマエニ砕け散れェェェェェェェェェェェェェェ

エエエエエエッッ！』

異形の要塞と化したメタルが獅子王(サイラオーグ)と蛇神皇目(大牙)掛けて猛然と突っ込んでくる

それに対してサイラオーグと大牙は――――闘気とオーラを迸(ほとばし)らせ、受け止めるつもりでいた

無謀とも思える行(おこな)い……

そして、異形の要塞による突撃がサイラオーグと大牙を強襲……！

莫大な爆風、衝撃、破砕が一帯を蹂躙し、大規模の粉塵が舞い上がった

突撃に手応えありと感じたメタルは元の姿に戻り、勝利を確信した歓喜の雄叫びを上げる

「ハハハハハハハッッ！獅子王と言えど、『2代目キング』と言えど、これをくらってしまっては一溜りもないだろうッ！何も出来ずに砕け散ったようだなッ！キミ達の真の実力を見れなかったのは非常に残念だが、その勇敢な態度だけは私の胸に留めておくとしようッ！」

嘲笑い続けるメタル――――その刹那、立ち込める爆煙の中から2人の影が見えてきた……

それは威風堂々とした風格を表す獅子の王と蛇の皇……

視界に捉えたメタルは固まり、絶句した

「なん、だと……ッッ⁉」
目の前にいるのは紛れもなくサイラオーグと大牙
先程の攻撃で鎧は大きく破損し、血も流れているが……戦意が宿った眼を一切曇らせていなかった
メタルの渾身の一撃を受け止めた事でリアス達にも被害は出ず、サイラオーグと大牙はゆっくりと拳を構える
メタルはワナワナと戦慄し、信じられない物を見るような口調で狼狽する
「な、何故だ……⁉何故あの攻撃をまともにくらって生きている……⁉いや、それ以前に何故攻撃を受け止めた⁉何故キミ達は攻撃を仕掛けなかった⁉私を倒したいのだろう⁉」
「ああ、倒す。だが、今の攻撃を避けるまでもないと思ったまでだ。ヒトの手で造られた見せかけの力などに――――屈しはせん」
「お前は力の使い方を大いに間違えた。己の事しか考えてない〝力〟など、すぐに脆く崩れ去る」
獅子王（サイラオーグ）が闘気を纏わせた拳を、蛇神皇（大牙）が蒼白いオーラを纏わせた拳を弓の如く引き――――
「「貴様は最初から眼中に無かったんだッッ！」」

ドゴンッッッッッッッッッ!!
かつて無いほど破壊力に満ちた2つの拳がメタルに撃ち込まれた
筋肉、骨、血管、臓器、ありとあらゆる物を破壊し尽くす一撃……ッ
その衝撃にメタルは耐えられる筈も無く――――彼の心臓が爆発した
口元から大量に血反吐が吐き出され、全身の至る所から傷が裂け、鎧の鱗も粉微塵に砕け散る
文字通り何もかも粉砕されたメタルは……自嘲するように笑った
「ギュガ……ッ、ギュハハハ……ゴプ……ッ！なる、ほど……っ！わたし……では、キミ達に……敵う筈も無かったの、か……ッ！ソレっ、デモ……私は……ッ！」
メタルは機能が停止しつつある体を無理に動かし、手を伸ばそうとする
「すばらしぎ……たた、かいの……日々……ッッ！……ッ」
最期まで戦いと力に取り憑かれた亡霊(メタル)は2人の王によって敗(やぶ)れ、絶命した……
サイラオーグは亡骸(なきがら)となったメタルを見下ろす
「貴様はあまりにも〝力〟に固執し過ぎた。肝心な事を何1つ見ようともしなかった……それが貴様の敗因だ。もっと違う生き方をしていれば、〝力〟の本当の意味に気付けたかもしれんな」

ヒーロー帰還の前兆

サイラオーグと大牙がヘラクレスとメタルを倒し、渉達がジャンヌと戦っている中、残る相手はゲオルクだけとなっていた

無論、曹操が何処から現れるか分からないから油断は出来ない

遠目で極大の雷光と氷の魔力、金色のオーラが高層ビル群の間で暴れているのが見える

未だジャンヌとの交戦が続いているようだ

力を増した渉達がまだここに現れないのもジャンヌが『魔人化（カオス・ブレイク）』を使用したからであろう

リアス達はサイラオーグ、大牙を含め相当な戦力

ゲオルクが『魔人化（カオス・ブレイク）』を使用したとしても勝機は望める

ゲオルクが遠目に倒れるヘラクレスとメタルを一瞥して笑んだ

「強い。これが現若手悪魔か。バアルのサイラオーグ、そしてリアス・グレモリーが率いるグレモリー眷属。まさか、先日会ったばかりで力を増してくるだなんて……。闇人（やみびと）の『２代目キング』も予想以上の力だ。この調子では、そちらの猫又やヴァンパイアも得て

いる情報通りにはいかないか」
グリゴリに行っていたギャスパーはともかく、疑似空間での戦いから小猫は目立った強化があったわけではない
彼女はこれからだろう
話によれば、姉の黒歌から仙術と妖術を習うつもりでいる
軋轢(あつれき)のあった姉から教わるのだから、小猫の決意は揺るがないものになっているだろう
ゲオルクから視線を向けられたギャスパーは――――表情を青ざめさせていた
「……ギャスパー、どうかしたの？」
眷属の変化に気付いたリアスは怪訝そうにしていたが……ギャスパーは次第に表情を崩していき、ポロポロと涙を流し始める
「……すみません、皆さん。……僕……僕！グリゴリの研究施設に行っても……強くなれなかったんです！」
ギャスパーの告白にこの場にいる眷属全員が驚き、彼は嗚咽を漏らしながら吐露する
「皆さんのお役に立ちたかったから……強くなりたかったのに！……今のままではこれ以上は、強くなれないってグリゴリの方に言われて……僕は女の子も守れない……グレモリー眷属男子の恥なんです……っ！」
その場で泣き崩れるギャスパー

ギャスパーの姿を見てゲオルクはつまらなさそうに息を吐く
「亡き赤龍帝も亡き闇皇もこの後輩の情けない姿を見たら浮かばれないだろう」
その一言を聞いたギャスパーは顔だけ上げてキョトンとした様子で漏らした
「……亡き……赤龍帝？……亡き……闇皇？」
ギャスパーは周囲を見渡す
新と一誠がここにいない理由をギャスパーはまだ知らない
「……イッセー先輩は……？新先輩は……？お二人がここにいないのはあの大きな怪物を止めに行っているからじゃないんですか……？」
「ギャスパー、新とイッセーは――――」
真相を知らないギャスパーにリアスが告げようとするが――――サイラオーグがリアスに視線を配らせて首を横に振った
リアスもそれを確認して、言いかけた口を閉ざす
敢えて真実を教えない……この行為の真意は何なのか？
『王（キング）』２人の視線の応答に気付いていないゲオルクは口元を笑ましてギャスパーに話し始めた
「そうか。キミはまだ知らなかったのか。赤龍帝と闇皇は旧魔王の――――いや、今更言い訳をしても仕方ない。俺達『禍の団（カオス・ブリゲード）』と戦い、戦死した。究極の龍殺（ドラゴンスレイヤー）しとされる

サマエルの毒を受けて、だろう。まあ、俺達もその場にいたわけではないから詳しい死因は分からないが、あの赤龍帝と闇皇が死んだとするなら、それだ」
英雄派はまだ一誠が次元の狭間で魂のみの状態で存在する事を知らない
同時に新も死んでいない事を知らない
普通ならサマエルの毒をくらったドラゴンは死ぬのだから当然だろう
リアスが敢えて真実を伝えない事に小猫やアーシア、ロスヴァイセも何となく気付いたようだ
勿論、その真意までは測れないが……
未だゲオルクの言葉は続き、それを耳にすればする程にギャスパーの表情は死んでいく
「悔やむ事はない。あのオーフィスと白龍皇ヴァーリですらサマエルに打倒されたのだから。如何に赤龍帝だろうと、あの呪いには打ち勝てない」
ゲオルクはそう告げた後、軽く笑った
「……イッセー先輩が……死んだ……？」
呆然とするギャスパーの頬を一筋の涙が伝う
全身が震え、視線もおぼろげになっている
尊敬する先輩の死を受けて、思考が絶望に塗り変わっていく……

顔を伏し、沈黙を続けるギャスパー
少し前のリアス達と同様の感情が今ギャスパーを襲っている……
あまりの光景に居たたまれなくなり、小猫が近寄ろうとした時だった――
ギャスパーはふらついた体を上げ、伏せていた顔も徐々に上げた
ギャスパーの表情は感情の宿っていない生気の抜けた状態……だが、ゾクリと冷たいものが背筋を駆け抜けていく
彼は小さく口を開くと一言だけ呟く
それはとても低く、この世のものとは思えない呪詛めいたものだった
≪――――死ね≫
その瞬間、一瞬でこの区域全てが暗黒に包まれた
地面、空、景色、その全てが暗く冷たく、光すら消失してしまう程の暗闇に包まれていく……
ギャスパーの体から暗黒が滲み出ていき、それが周囲を黒く染め上げていった
「……何だ、これは……ッ！」
突然の現象にゲオルクは驚き、周囲を見渡し始めた
先程まで建ち並んでいた建物群は消えて無くなり、リアス達以外の全てが漆黒の闇に変貌していた

「……暴走？　禁（バランス・ブレイカー）手……？いえ、これは違う！ヴァンパイアの力……？でも、これはあまりにも……桁違いな……ッ！」

この光景に魔法に秀でているロスヴァイセも驚くばかりだった

暗黒の領域と化した中央で、より一層闇に包まれた人型が異様な動きをしながらゲオルクに近付いていく

首をあらぬ方向に折り曲げ、肩を痙攣させ、足を引きずりながら1歩ずつゲオルクとの間合いを詰めていく

その双眸は赤く赤く、ただ不気味に輝いていた……

≪コロシテヤル……ッ！オマエラ全員、僕ガ殺シ尽クシテヤル……ッ！≫

発せられた声はギャスパーのものではなく、呪詛、怨嗟、怨念、それらを全て含んだ危険な声だった

サイラオーグが目を見開いて言う

「……赤龍帝の死、闇皇の死と言う切っ掛けがあれば化けるのではないかと踏んでいた。ギャスパー・ヴラディが屈辱に塗（まみ）れる男の目をしていたからだ。何か吹っ切れる事柄が被さればグリゴリでも解放できなかったものが解き放たれると思ったのだ。あの総督の組織が単純に力を目覚めさせられなかったと言うのは考えられないからな」

サイラオーグの言う通り、数々の研究を行（おこな）っているグリゴリがギャスパーを相手にた

だ何も出来なかったと言うのは考えにくい
何かに目覚めつつあるが、その切っ掛けが見つからずに帰した――と言うのが正しいだろう
サイラオーグは眉間を険しくしながらリアスに言った
「リアス、ギャスパー・ヴラディの内に眠っていたものは――俺達の想像を遥かに超えるものだったようだ。これは――バケモノの類だ。……お前は、いったい何を眷属にした……？」
「……ヴァンパイアの名門ヴラディ家がギャスパーを蔑ろにしていたのは……停止の邪眼ではなく、これを知っていたから……？恐怖から……城を離れさせた……？」
リアスは声を震わせながらそう漏らしていた
眼前で黒い化身となったギャスパーが手らしきものを突き出した
ゲオルクが直ぐに反応して魔法陣を展開するが――その魔法陣が闇に喰われていく
「……ッー何だ、これは！魔法でもない！神器の力でもない！どうやって我が魔法陣を消した⁉」
ギャスパーの行動に驚愕するゲオルクは距離を取り、無数の攻撃魔法陣を宙に展開した

あらゆる属性、魔法術式が入り乱れた砲撃がギャスパーに降り注いでいくが……
暗黒の世界に幾つもの赤い眼が縦横無尽に出現して妖しく輝いた刹那、撃ち出された無数の攻撃魔法は空中で全て停止してしまう
停止した魔法の数々が闇に喰われて消失していく
その結果に驚くゲオルク、徐々に顔色が恐怖に彩られていた
歩みを再開する暗黒の化身、現世の生物とは思えない異様な存在感と動きで少しずつゲオルクに近付いていく
ゲオルクは手元に霧を集めていった
『絶霧（ディメンション・ロスト）』の霧でギャスパーを祓うつもりだろう
霧を操ってギャスパーを包み込もうとするが、その霧もまたギャスパーを覆う闇、影、漆黒に喰われていった
≪……喰う……くう……クウ……喰ってヤッた……おマエの霧モ魔法も……効かナイぞ……。全部、クッてやっタぞ……≫
言動がもはやリアス達の知っているギャスパーではない……
上位神滅具（ロンギヌス）の霧でも常闇の存在と化したギャスパーを制する事が出来ないどころか、霧使いのゲオルクがまるで相手になっていない
ギャスパーに割り振られた『変異の駒（ミューテーション・ピース）』――――今ならその意味が理解できる

ギャスパーはこれだけの潜在能力を秘めており、バアル戦での一戦がギャスパー自身を劇的に変えた

それが新と一誠の死と言う情報を切っ掛けに爆発した――

その結果が闇の化身……

『……イッセーくん、新くん、もしかしたら、グレモリー眷属の男子で1番の成長株はギャスパーくんかもしれないよ……。これは……この姿は常軌を逸していると言うレベルではない。悪魔でもドラゴンでもない……ヴァンパイアと分類して良いのかさえ分からない。――あれは違うモノだ』

ゲオルクは思いつく限りの魔法と霧の能力をギャスパーに放っていく

それらも闇に喰われ、また無数の『眼』によって停止されていった

攻撃を全て打ち払われる中、結界空間を作ろうと霧で形成用魔法陣を展開させようともしていたが――――悉く闇に喰われていき、成形が失敗する

ゲオルクの周囲の闇が蠢き、獣のような形に作られていく

1つ目の狼、五翼ある巨鳥、顔に口が2つも付いているドラゴン、足が20本以上ある蜘蛛

そのどれもが生来の生物を逸脱したフォルムだった

異様な生物の群れがゲオルクを囲む

「くっ！我が霧が……ッ！魔法が効かぬッ！何だ、こいつは！いったい何だと言うんだ⁉」
ゲオルクの表情は既に絶望に包まれており、戦いはどう見てもギャスパーの圧勝……
否、もはや勝負と呼べるものではない……
「……これがギャーくんの本当の力……」
呆然と眺めるしかない小猫はそれだけを何とか口から絞り出していた
友達の変化は明らかに様々なものを逸するからだ
「くっ……一時引くしかない！」
ゲオルクは正体と能力が測りきれないギャスパーの相手を諦め、転移酔うの魔法陣を足下に出現させる
ゲオルクの体が魔法陣の輝きに包まれ、飛ぼうとする瞬間――――ゲオルクの体から黒い炎が現れる
黒い炎は執拗なまでにゲオルクに絡み付き、逃さないようにしていた
祐斗はふいに匙の方に振り返る
匙は意識を取り戻したのか、上半身だけ起こしてゲオルクを睨み付けていた
「……逃がさねぇよ。お前ら、俺のダチをやったんだ。――――ただで済むわけねぇだろ！」

ドスの利いた声音で匙は手を突き出す
ゲオルクを捕らえる黒い炎が大蛇を思わすシルエットを作りながら――――怨嗟の呪法と化してゲオルクを包み込んでいく
匙――――黒き龍王の炎をその身に受ければ、命を吸われ、燃え尽きるまで絡み付く……
懐(ふところ)からフェニックスの涙を取り出すゲオルクだったが、その小瓶をも黒き炎は飲み込んでいく
「……ヴリトラの……呪いか……ッ！」
解呪に成功したと思われた黒い炎は消えていなかった
ゲオルクに闇から生み出された異様な獣達が襲い掛かっていく
上位神滅具(ロンギヌス)を所有する絶大な魔法使いは――――闇に喰われていった……

闇が晴れて元の風景――――首都リリスに戻った時、ギャスパーは路面に横たわっていた
ゲオルクの姿は無い……

祐斗はギャスパーに歩み寄り、顔を覗き込んでみるが、スヤスヤと安らかな寝息を立てているだけだった

先程の危険な雰囲気が微塵も感じられない、力を出し切って気絶したのだろう

リアスはギャスパーを抱き寄せて髪をそっと優しく撫でた

「……この子について、ヴァンパイアに訊かなくちゃならない事がいろいろ出来たわね。けれど、ただでさえ吸血鬼は悪魔を嫌う。ヴラディ家が私の質問に答えてくれるかは分からないけれど……。以前に話を持ちかけた時は丁寧に断られたわ」

吸血鬼は悪魔以上に階級を大事にしており、純血とそれ以下を完全に区別している

簡単に言えばグレモリー眷属のような仲間を想いやれる者がいないに等しい

純血と貴族主義、不老不死で夜の支配者

「ヴァルハラに戻った時、興味深い話が聞けました。――なんでもとある吸血鬼の名家が神滅具（ロンギヌス）所有者を保有した事で、吸血鬼同士で争いが勃発してしまった、と」

ロスヴァイセがそう話してくれた

吸血鬼の業界は未だ悪魔や他勢力と交渉すらしない閉鎖された世界らしい

その種族が神滅具（ロンギヌス）所有者を得た……

冥界の危機の裏でもただ事ではない事件が起きているようだ

「……それもそうですが、今後は魔法使いにも気をつけた方が良いでしょう」

目覚めたソーナがそう漏らしていた
「どういう事？」
リアスの問いに、ソーナはメガネの位置を直しながら続けた
「……彼ら魔法使いは実力、才能主義です。その中でも今あなた達が倒した霧使いのゲオルクはトップクラスの実力者でした。そのゲオルクを倒したあなた達に魔術協会が興味を抱いてもおかしくない。ただでさえ、あなた達は強い事で有名なのだから。彼ら魔法使い――――主に召喚系の使い手は実力のある悪魔と契約するのをステータスの１つとしています。特に将来性のありそうな若手悪魔は交渉の場に呼び出されやすい。名うての悪魔は既に先客がいるか、取り引きできたとしても高値となりますから、手のつけられていない若手悪魔を買い漁る魔法使いも少なくないのです。先物買いと言えるでしょうね。――――近い将来、必ずコンタクトを取ってくる筈です」
『魔法使い、か。彼らも彼らで厄介な存在だ。悪魔と魔法使いの関係は古より続くものだけどね。……僕らが彼らの契約対象として見られる……？』
その時、遠目に飛んでくるゼノヴィアとイリナの姿が見えてきた
ゼノヴィアとイリナは翼を畳んでリアス達のもとに降り立つ
「待たせたな、木場」
「ゼノヴィア、イリナさん。……そちらも勝ったようだね」

祐斗の言葉にゼノヴィアとイリナは下唇を噛むように口を閉ざす
祐斗はゼノヴィアが持っているエクス・デュランダルの変化に気付き、同時に戦いの結末を察する
〝神代剣護は恐らく死んだのだろう〟――と
慰みの1つでも言うべきかどうか悩む中、ゼノヴィアが口を開く
「……木場、お前の考えている通り、私達が勝った後、剣護さんは死んだ……。でも、今はそれを悔やんでいる場合じゃない。少しでも早くこの騒動を治めるのが先だ。そうしないと、また剣護さんに怒られるからな」
ゼノヴィアもイリナもかつての上司の死を真摯に受け止め、目の前の問題に切り替えていた
彼女達の強い信念を感じ取れた祐斗もコクリと頷く
その時、背後から気配を感じた
「あらら、ヘラクレスがやられてしまったようね。ゲオルクも……？これはまいったわ」
そこに現れたのはジャンヌ、全身傷だらけで満身創痍の様子だった
よく見ると、ジャンヌは小さな男の子を脇に抱えていた
「コラー！待ちなさーい！」
「卑怯よあんた！子供を人質に取るなんて！」

「……やられましたわね。まさか、あんな所に逃げ遅れた親子連れがいたなんて」
渉、祐希那、そして朱乃が苦渋に満ちた表情で合流する
どうやら戦いの形勢は渉達の優勢だったが、ジャンヌが子供を盾にしてここまで逃げてきたと言ったところだろう
対峙するリアス達とジャンヌ
ジャンヌは手に持つ聖剣の切っ先を子供の首もとに突き立てる
『……悪魔の僕が言える事じゃないが、卑劣だね』
「卑怯だな」
「卑劣な女め、貴様らにはプライドとやらが無いのか」
サイラオーグと大牙は揃って祐斗が心中で抱いていた感想を素直に述べる
ジャンヌがそれを聞いておかしそうに笑う
「悪魔と闇人(やみびと)が言うものではないのではないかしら?ま、義理に厚そうなあなたならそう言うかもしれないわね。バアルの獅子王さん。――とりあえず、曹操を呼ばせてもらうわ。あなた達、強すぎるのよ。私が逃げの一手になるなんてね。てなわけで、この子は曹操がここに来るまでの間の人質。ＯＫ？」
曹操がここに来てしまったら形勢が不利になってしまう……
サイラオーグや大牙がいてくれるのは心強いが、それでも曹操が持つ聖槍(せいそう)に届くかど

うかは分からない
「あら、ボク、案外静かね。怖くて何も言えないのかしら？」
ジャンヌが人質に取っている子供の様子を見てそう漏らしていた
彼女が言うように人質の子供はこの様な状況でも平気な表情だった
「ううん。ぜんぜんこわくないよ。おっぱいドラゴンとダークカイザーがもうすぐきてくれるんだ」
その言葉は一切の怯えも無い、純粋で安心しきったものだった
「ふふふ、残念ね、ボク。おっぱいドラゴンは死んだわ。お姉さんのお友達がね、倒してしまったの。だから、もうおっぱいドラゴンはここには来られないわ」
ジャンヌはそう言うが、彼女自身も心の中でダークカイザー＝新が来ない事を残念に思っていたりする
しかし、男の子はそれでも笑みを絶やさない
「だいじょうぶだよ。ゆめのなかでやくそくしたんだ。ぼくがね、おっきなモンスターをみてこわいっておもってねていたら、ゆめのなかにでてきてくれたんだよ」
男の子は元気に、ただ嬉しそうに語った
「もうすぐそっちにいくから、ないちゃダメだっていってたんだ。まほうのじゅもんをとなえたら、かならずもどってきてくれるっていってたんだよ！」

男の子は人差し指を突きだして、宙に円を描いていく
「こうやって、えんをかいて、まんなかをゆびでおすの！ずむずむいやーんって、これをやればかならずもどってきてくれるって！みんなもおなじゆめをみたんだよ！フィーラーくんもトゥラスちゃんもぼくとおなじゆめをみたんだ！となりのクラスのこもおなじゆめをみたんだ！みんなみんなおなじゆめをみたんだよ！」
〝冥界の子供達が皆同じ夢を見た〟
疑問の尽きない祐斗の前で子供は空に向けて歌を歌い出す
「とあるくにのすみっこに～、おっぱいだいすきドラゴンすんでいる～♪」
――その時、首都の上空で快音が鳴り響いた
見上げるとそこには――宙に次元の裂け目が生じようとしていた……それも２つ……
開いていく空間の裂け口、そこから懐かしいオーラが感じ取れた
それは――まさに子供達が待ち望んでいる英雄（ヒーロー）２人の帰還だった

2人のヒーロー

『――夢？』

「ああ、寝ているうちに変な夢を見たんだよ。大勢の子供達が泣いてんだ。聞いたらさ、でっかいモンスターが怖いって泣いてんだよ。だから、俺はその子達に言ったんだ。指で円を描いて真ん中を押して、ずむずむいやーんってやっていれば俺がそのうち必ず戻っていくからってさ」

一誠の話を聞いてドライグは嘆息する

『……あれほど他者にやられたら嫌がっていたその仕草をお前がやるとはな……』

「仕方ねぇだろ！あんなに大勢の子供を励ますにはそう言うポーズみたいなのが必要だと思ったんだよ！……でもさ、俺がそうやったら、夢の中の子供達の不安な顔が消えてたよ。おっぱいってすげえよな」

『……はぁ、そうだな。――で、どうだ、新しい体は？』

確認してくるドライグ

一誠は繭から取り出したばかりの自分の体に魂を移し替えてもらっていた

以前の体と寸分違わず、手を握って感触も確認する

「よっしゃ！これでアーシアのおっぱいが揉める！……あ、でも、前の体と何が変わったんだ？」

『姿形と一部基本は人間のままだ。普段通りに生活できるだろう。ただし、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）が消失している事で、現在お前は人型のドラゴンと言える。オーフィスの協力があってこそとはいえ、受肉に成功したのがグレートレッドの体なのだからな。小さな真龍（しんりゅう）とも言えるだろう』

「つまり、今の俺はグレートレッドの子供みたいなもんか」

『そこにウロボロスの力が加わっている。この状態でも以前の体より多少は身体能力が向上している。……まあ、元が悪かったからその程度しか強化できなかったとも言えるんだが……』

「元が悪くてごめんなさいね！どうせ、元々はただの男子高校生でしたよ！」

『メリットは今述べた身体能力向上と真龍と龍神の力が加わった事で、今後どのような成長が起こるか予測が立てられなくなった事だろうな。あと、もうグレートレッドから離れても大丈夫だ』

「もともと俺の成長なんて予測できなくねぇか？乳力（にゅうパワー）やら何やらでさ」

『まあ、それはそうなんだが……。デメリットはこれも先程話した通り、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）から得ていた各種能力が無くなった事、グレートレッドとオーフィスの力を得ている為に以

前よりも龍殺しによる危険性が増した事だろうか』
『悪魔の駒』についてはもう一度リアス達に出会ってから対応するので問題ないが、
龍殺しのダメージが増してしまったのは痛手である
龍殺しの痛みは耐え難いものだから、2度と食らいたくないだろう……
一誠はこれからどうするかを考えた
次元の狭間にいても停止状態のゴーレム――ゴグマゴグぐらいしか見つかる物がない
どうやって皆のもとに帰ろうかと思慮している時だった
耳に懐かしいメロディが聞こえてくる……
『……見ろ、相棒』
一誠はドライグに促されて次元の狭間の空を見る
万華鏡の中身のような空に――冥界の子供達の笑顔が次々と映されていく
子供達は指で円を描き、真ん中を指でつつきながら大きな声で〝あの歌〟を歌っていた

とある国の隅っこに
おっぱい大好きドラゴン住んでいる

お天気の日はおっぱい探してお散歩だ☆
ドラゴン　ドラゴン　おっぱいドラゴン
もみもみ　ちゅーちゅー　ぱふんぱふん
いろいろなおっぱいあるけれど
やっぱり　おっきいのが一番大好き
おっぱいドラゴン　今日も飛ぶ

とある町の隅っこで
おっぱい大好きドラゴン笑っていた
嵐の日でもおっぱい押すと元気になれる☆
ドラゴン　ドラゴン　おっぱいドラゴン
ポチッとポチッと　　ずむずむ　　いやーん
たくさんおっぱい見たけれど
やっぱり　　おっきいのが一番大好き
おっぱいドラゴン　　今日も押す

『――――冥界中の子供達の思いをここに投射しているとグレートレッドは言っている』

冥界中の子供達の呼ぶ声に一誠は嬉しさで胸がいっぱいになった……

『グレートレッドは、夢幻を司る……。誰かが抱いた夢を、誰かが見た夢を、誰かが思い描いた夢を、それらを俺達に見せているのだろう。もしかしたら、今際の際にお前が家に帰りたいと思った強烈な願い――夢に反応してグレートレッドは姿を現したのかもしれない』

「ああ、だけど、これはきっと本物だ。子供達が歌ってくれてるんだ……っ！それがここに届いた……っ！俺に届いてきたんだ……っ！」

一誠は子供達の笑顔とその歌を聴いて、込み上げてくるものを抑えきれずにいた

『……不思議だ。あんなにも不快に感じていたあの歌が……今は力強く感じる。……ククク、俺も本格的に壊れてきたか』

「いや、良いんじゃねぇかな、ドライグ。これはきっとそう言うあったかい歌だ。そうさ、俺はとある町の隅っこで、笑いながら、天気の日でも、嵐の日でも、おっぱい探して飛んでいく――おっぱいドラゴンだ……っ！おっぱいが大好きだからよっ！皆のところに帰らなきゃダメなんだよなっ！」

『ああ、帰ろう、相棒。――グレートレッド、頼めるか？この男をあの子達のもとに帰してやってくれないか？』

ドライグがそう頼むと――グレートレッドが一際大きい咆哮を上げる

前方の空間に歪みが生じて、裂け目が生まれていく
そこから大都市の町並みが一望できた
冥界の都市らしき景色から懐かしいオーラを感じ取れる
大事な仲間のオーラ、愛する女性（ひと）のオーラ
一誠は隣にいるオーフィスに言った
「オーフィス、俺は行くよ。俺が帰られる場所へ――」
「そうか。それは……少しだけ羨ましいこと」
寂しげなオーフィスに一誠は手を差し伸ばした
「――お前も来い」
その行為と言葉にオーフィスは驚き目を見開いていた
一誠は笑顔を浮かべて言う
「俺と友達だろう？なら、来いよ。一緒に行こう」
その時、最強と称された存在（ドラゴン）は微笑んだ
「我とドライグは――友達。我、お前と共に行く」
手を取り合う一誠とオーフィス
一誠はオーフィス、グレートレッドと共に次元の裂け目を超えていった

「気分は如何ですか、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）」
「どうもこうも、今でも信じられねぇよ……。嘘みたいに虚脱感が無くなってやがる」
黄泉の国にて、キリヒコ曰く〝調整〟とやらを終えた新は自身の体の復調具合に驚いていた
藁にもすがる思いで受けたキリヒコの調整――その効果は悔しくも覿面（てきめん）、今まで苛（さいな）まれていた虚脱感、震え、寒気、吐き気、痛みなどの症状が全て消えた
唯一復調していない部分は自ら切り落とした右手のみ
その他の機能はいつもと変わらぬ感覚だった
キリヒコは右腕に着けた装置（デバイス）で回収した闇（データ）をチェックする
興味深そうに闇（データ）を見つめた後、新に向かって会釈する
「Ｍｅｒｃｉ（メルシィ）、とても興味深いデータが取れましたよ」
「あぁ、そうかい。用が済んだなら、さっさと俺をここから出してくれねぇか？いい加減向こうがどんな様子なのか気になるんだよ」
「Ｏｈ（オー）　ｌａｌａ（ララ）。相変わらずせっかちなヒトですね。時間にルーズな方は嫌われてしまいますよ？」

「良いから早くしろ」
「……はぁ、Ｏｕｉ　　Ｏｕｉ。ブラッドマン、お願いします」
「承知した。黒翼と竜の血混ざりし悪魔の帰還、か」
ブラッドマンが宙に掌を向ける
直後、ブラッドマンの腕や足、全身から得体の知れない粒子が滲み出てくる
まるでこの世とあの世、幾つもの世界から吐き出された怨嗟、悔恨、怨念、あらゆる負の感情が牙でも向けるように……
あまりの気迫に新は硬直してしまい、手から嫌な脂汗が出てくる
ブラッドマンは自身の体から出てきた粒子を使用して宙に亀裂を刻み込む
ブラッドマンの粒子によって抉じ開けられた次元の裂け目
そこから目に映ったのは――――冥界の都市らしき景色、それと同時に懐かしいオーラも新は感じ取れた
冥界の独特な空気、大事な仲間達のオーラ、共に練磨していく赤龍帝のオーラ
そして、自分の生き方を変えてくれた愛する主のオーラも……
「さあ、これで帰還準備は整いましたよ？後はご自由に」
「ちょっと待て」
新は思わず口をついて〝ちょっと待て〟と言ってしまった

冥界への帰還口が目の前にあるにもかからわず、新は咄嗟に湧いた疑問をぶつける
「キリヒコ、お前は……いや、お前らはいったい何者なんだ……？」
「Ｐａｒｄｏｎ（パルドン）？」
「言葉の通りだ。お前らはいったい何者なんだ。この黄泉の国っておぞましい所に平然としていられるわ、俺の体に巣食ってた闇をあっという間に回収するわ、挙げ句の果てには簡単に次元の裂け目を作ったりするわで頭がついていかねぇ。……本当に、お前らは何者なんだ」
戦慄しつつもキリヒコに問いただす新
その問いに対し、キリヒコは軽く笑い――人差し指を自分の口元にあてがう
「誰でも秘密を抱えているものですよ？Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）であろうと、我々であろうと……ね」
「気味ワリィ奴だな。とりあえず、今回だけは礼を言っておく。だが、忘れるなよ。テメェは敵だ。今度ふざけた真似をしたら――遠慮無く殺す」
そう言い残して新は次元の裂け目を飛び出していった……
少しして次元の裂け目が閉じて消え、キリヒコは踵（きびす）を返す
「では、暫（しばら）くしたら我々もここから出ましょうか。高みの見物です。冥界の危機とやらを止めようとする彼ら、そして……〝英雄〟の名を騙（かた）る無法者達の悪あがきを」

「俺達は参戦しなくて良いのか？『禍の団（カオス・ブリゲード）』は俺達が造ろうとしている新世界には無用な組織だろう」
「Ｏｕｉ（ウィ）、今は彼らに任せるとしましょう。『禍の団（カオス・ブリゲード）』に遅れを取るようなら、そこまでの実力しかなかったと踏ん切りがつくでしょう？」
「……食えぬ男だ、お前は。傀儡（かいらい）どもを手玉に取りし、深淵の闇の伝道師か」
「Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）、彼らなら私をこう言うでしょう。……諸悪の根源――――と」

次元の狭間からグレートレッド達と共に抜け出た一誠は、目の前の光景に度胆（どぎも）を抜かれた
〝自分の視線の先にドデカい怪獣がいる〟――――と
シャルバが外法で作ったアンチモンスターだと直ぐに得心し、後方の都市部と遠目に確認する
アンチモンスターの周辺は既に破壊し尽くされた後であり、地面には大きなクレーターが無数に点在し、山も森も建物も全部無惨に崩壊している

『なんて奴だ……！本当にロクでもない魔王とやらだったな、シャルバの野郎！ぶっ倒して正解だ！』
「ったく、なんて事だ。シャルバって奴は死んで正解だったな」
「ああ！全くその通……り……？」
一誠は突如聞こえてきた声に間の抜けた声を上げてしまい、その方向に視線を向ける
聞き覚えのある声質……そこには冥界中の誰もが知り、赤龍帝（イッセー）と並ぶもう1人のヒーローがいた
一誠は自然とその者の名を口にする
「あ、アアアアアアアア新アアアアアアア

再会をひとまず喜び終えた2人は現状を確認
超巨大なアンチモンスター『超獣鬼（ジャバウォック）』をどうするか考え込んでいると、２人の視界にグレイフィアが映り込む
今グレイフィアは凄まじいオーラを漂わせる者達と一緒にアンチモンスターと戦っていた
グレイフィアと共に戦っているのはまごう事なくサーゼクスのルシファー眷属
新撰組の羽織を着た侍や神の獣と称されし麒麟もいる
『あれは相当な手練ればかりだな……。全員尋常じゃない力量の持ち主だ』
ドライグが感嘆するように言う
しかし、悪魔の中でも最強と名高いルシファー眷属でさえ、アンチモンスター『超獣鬼（ジャバウォック）』に苦戦している……
――と、ここでアンチモンスターが新と一誠が乗っているグレートレッドに気付き、6つの目玉を全て向けてくる
認識した途端に敵意むき出しの視線を送るアンチモンスター
『……何だと？それは本気で言っているのか……？』
「ん？ドライグ、どうかしたのか？」
『……ああ、グレートレッドが「ガン付けられたのであのモンスターが気に入らない」と

言うのだ……』

どうやら『超獣鬼(ジャバウォック)』の視線は赤龍神帝(グレートレッド)の怒りに触れたらしい

『それでだな、相棒。グレートレッドが手を貸すから、あのモンスターを倒そうと言うのだ』

「エエッ⁉倒す⁉あのでっかいのを⁉しかも俺も数に入ってますか⁉」

「俺は入ってなくて助かったような……そうでないような……」

グレートレッドが進言してきたあまりにも無茶苦茶な注文に一誠は嫌な汗が止まらず、新は陰でホッとしていた

オーフィスが言う

「大丈夫、ドライグとグレートレッド、合体すればいい。今のドライグの体、真龍とある意味で同じ。合体できる」

ドライグ、つまり一誠とグレートレッドな合体

冗談なのか本気なのか、オーフィス達の言葉に判断がつかない一誠だが……突如、グレートレッドの体が赤く神々しいオーラを発していく

赤いオーラが一帯を赤く赤く染め、一誠の体もその膨大な赤い光に包まれていった

新は〝何かヤバい！〟と察知して高速で空高く飛び上がった

赤い光が止むとそこにいたのは――――超巨大な禁手(バランス・ブレイカー)状態となった一誠だった

……

その壮大な光景に呆気に取られた新は「……は？」としか言葉が出なかった

『気付いたか、相棒』

『……ん？ああ、気付いたけど、どうして目の前にあの怪物そっくりなのがいるんだ？しかも俺と同じぐらいのサイズ』

『それはそうだろう。――――お前が巨大になったのだからな』

ドライグの報告に一瞬言葉を失い、驚愕する一誠

足下や自分の全身、後方の都市部にも目を配らせ――――

『俺、でっかくなってんのぉぉっぉぉぉぉぉぉっ⁉』

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

驚愕の声音を響かせる一誠と耳を押さえて怒り叫ぶ新

グレイフィア達も巨大化した一誠に気付いたようだ

『ああ、そうだ。やっと理解したか。グレートレッドがお前に力を貸してくれると言ってただろう？あれはこう言う事だ。グレートレッドのサイズでお前を再現させたんだよ。オーフィスが言う通り、合体だな。しかも巨大化でな』

『クソ！合体するならアーシアと合体したかったよ！』

ゴアアアアアアアアアアアアッ！

眼前の怪物が咆哮して一直線に一誠へと突進していく
『クソッタレ！どうすりゃ良い⁉教えろ、ドライグ！』
『要領は同じだ。いつも通りに体を動かせる。グレートレッドは基本の動きをこちらに委ねてくれているようだ。ただ体が大きくなっただけだと思えばいい』
『なるほど、分かりやすい限りだ！』
一誠は突っ込んでくるモンスターに向かって右のストレートを撃ち放つ
モンスターの顔面にクリーンヒットし、モンスターはその一撃で体をよろめかせる
顔を伏せたと思いきや、牙むき出しの口内から危険な火の揺らめきが見えた
『炎を吐く気か！』
『相棒、その炎が後方の都市部に向かったら被害が出るだろう。避けるのはまずいんじゃないのか？』
『んな事は分かってるよ！避けるのが無理なら――』
一誠は右手を前に突き出してドラゴンショットの構えを取る
怪獣の口から大質量の火炎球が吐き出される
『いっけぇぇっ！』
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

増大させた魔力の一撃が火炎球目掛けて放たれる！
火炎球とドラゴンショットがぶつかる手前で一誠は『曲がれぇぇぇぇぇっ！』と念じる
一誠の叫びに呼応するようにドラゴンショットは軌道を変えて下に曲がり――
『今度は上がれっ！』
右手を上方向に突き上げ、ドラゴンショットが真上に軌道を変えていく
一誠が密かに練習していた――撃ち出したドラゴンショットを操る方法である
火炎球の下にドラゴンショットが潜り込み、一気に上へ押し上げる
激しい衝突音を響かせ、火炎球は上空に持ち上げられた
２つの強大な魔力は空を裂き、遥か上空の彼方で弾け――空を爆炎一色に染めた
怪獣は更に咆哮を上げて再突進
しかし、一誠は一切恐れなかった
一誠は突進してきた怪獣の顔面に拳打を撃ち込み、更に側頭部に回し蹴りも入れた
――と、怪獣の目が妖しく輝き出す
『目から光を放つ気か！』
ドライグがそう叫び、一誠は直ぐに体を捻ってその光をやり過ごす
怪獣の６つの目から光の帯が体を掠めて、後方の地に一直線に掃射されていく

刹那――――大きな爆音と共に地が激しく揺れ、遥か地平の彼方まで大きな裂け目が生じ、そこから大質量の火炎が巻き起こっていた
『……相棒、グレートレッドから良い報せがある』
『んだよ、早く言ってくれ！』
『決め技はある。それが決まれば確実に勝てる――――と』
『良いねぇ！そう言うのが欲しかったんだよ！』
『だが、問題はそれをここで放てば、ここいら一帯が全て消滅してしまうそうだ。――――破壊力がバカげていると言っている』
『マジか！……よっぽどのものなんだろうな。やるとしたら、上空にぶん投げて上に向かって使うって感じかな？』
『ああ、それしかないだろうな』
「その役回り、俺に任せてもらえるか？」
作戦を練ろうとした一誠に新が進言してくる
『出来るのか？』
「なーに、こっちには俺だけじゃない――――グレイフィアさんだっているんだぜ？出来ないわけないだろ」
『だよな！じゃあ、頼むぜ！』

新は直ぐにグレイフィアのところまで飛んでいった
「グレイフィアさん！」
「新さん……？するると、あの巨大な赤龍帝は一誠さんですね？お二人とも無事で何よりです。しかし、この巨大化はいったい？」
「説明は後にしてくれ。今はあのモンスターを倒すのが先だ。――倒す術（すべ）がある。協力してくれ」
新の言葉にグレイフィアは一転して戦士の顔付きになった
「聞きましょう。私は――いえ、私達は何をすべきか？」
「俺達でヤツを上空に跳ね上げる。それが出来れば、後は一誠が上に向けて特大なのをぶっ放す――それだけだ」
「なるほど。分かりやすい作戦です。そして、何よりあなたの『特大』と言う言葉は心強いわ。――やりましょう。それぐらい出来ないで、何がルシファー眷属の『女王（クイーン）』か！」
同意したグレイフィアが濃密なオーラを身に纏って飛び出し、新撰組の羽織を着た侍に指示を飛ばす
「総司さん！『超獣鬼（ジャバウォック）』の足を両断してください！」
「了解です、グレイフィア殿」

侍は神速で怪獣の足下に詰め寄り、腰に帯刀する日本刀に手をかけた
一瞬の静寂の後、怪獣の右足は膝から両断されていた
地響きを立てながら倒れていく怪獣へ近付き、ヤツを中心に魔法陣を展開し始める
新はその間に左手に魔力のオーラを集め、追撃準備を整えた
――黄泉の国でキリヒコに〝調整〟とやらをしてもらったお陰か、今までに無い大質量の魔力をスムーズに練り込めている……
怪獣の斬られた足が既に再生を始め、膝から下の断たれた部分を引き寄せようとしていた
その間にグレイフィアを中心にした術式は完成、怪獣の下に巨大な魔法陣が輝き出した
「上にあげますよ！」
「ああ！俺も特大の一撃でサポートする！」
刹那、巨大な怪獣は魔法陣からの衝撃を受けて、遥か上空に投げ出される
景気づけだとばかりに新は左手を前に突き出し――黒い火竜を解き放った
巨大な禁手（バランス・ブレイカー）と化した一誠よりも一回り小さいが、大質量かつ濃密なオーラを吹き荒らす黒い火竜……

それが怪獣の腹に直撃し、更に上へと跳ねあげていった
『よっしゃ、ドライグ！その特大な必殺技を用意しろ！』
『応ッ！任せろ！』
ドライグが応じて直ぐに鎧の胸部分が音を立てながらスライドしていき、何かの発射口が現れる
『……ロンギヌス・スマッシャー。本来、得てはいけない忌々しき技だ』
ドライグが低い声音でそう呟く
静かな鳴動、信じられない程の質量のオーラが胸の砲口に集まっていく
上空の怪獣は顔を向けて目と口から、それぞれ光と炎を吐き出そうとしていた
だが、一誠の方が速い———
『ロンギヌス・スマッシャァァァ

新も一誠のもとへ合流し、2人の頭上にはグレートレッドの姿があった
グレートレッドの目が輝くと、空に歪みが生じていく
その歪みはグレートレッドが潜れる程の大きさとなり、グレートレッドはドライグ
……一誠を視認すると大きな口を開ける
それは初めて耳にするグレートレッドの声だった
＜――――ずむずむいやーん＞
「「――――ッ！」」
新と一誠は絶句するしかなかった……
まさかグレートレッドまでこんな事を言うとは……
＜ずむずむいやーん、ずむずむいやーん＞
ただひたすら〝ずむずむいやーん〟を連呼しながら次元の穴に消えていくグレートレッド
『聞こえん。僕には何も聞こえないもーん』
ドライグに至っては口調が変わるほど現実逃避していた……
「ずむずむいやーん」
いつの間にか2人の近くにいたオーフィスまで〝ずむずむいやーん〟と言ってくる
「んもー！なんで伝説のドラゴンやそれに関わった連中はそんなのが大好きなんだ

よおおおおおおおっ！」
「……そりゃ、あれだ。お前が……悪いんだ……」
赤龍神帝との酷い別れ方に一誠は嘆き、新は諦めたようにツッコミを入れるしかなかった

身分証明って大事だよね！

「快適」
空を飛ぶ禁手（バランス・ブレイカー）状態の一誠、その背に乗るオーフィス
そして闇皇（やみおう）姿の新は『超獣鬼（ジャバウォック）』を倒し、その後の事をグレイフィアに任せて都市部の方に向かっていた
街の至る所から煙が上がっており、建物や道路の破損が視界に飛び込んでくる
人気（ひとけ）が無いのは都市部全域に避難警報が発令されたからだろう
『この混乱に乗じて旧魔王派の残党や闇人（やみびと）などが街で暴れていたとかは考えられないか？もしくは英雄派か』
「なるほどな。その通りかもしれない」
「……西の方」
一誠の背中にいるオーフィスがそう告げてくる
「西？」
「あっち、あのアーシア、イリナと言う者いる」
２人はオーフィスが示した方向に翼を羽ばたかせていった

その方角に数分程進んだ時、懐かしいオーラを感じ取る
少しの間しか離れていなかった筈なのに、酷く長かった気もしてしまう
更に進んだ先の煙が上がっている場所に複数の人影が確認できた
空から懐かしい顔ぶれを確認した新と一誠は中央に降り立つ
皆も空を飛んできた新と一誠の姿を捉えていた
「兵藤一誠!ただいま帰還致しました!」
「ただいま」
大声で叫ぶ一誠と普通に言う新
しかし、周囲を見渡すと――――皆は狐につままれた様にキョトンとしていた
英雄派のジャンヌも2人をキョトンと見ている
『お前らだと認識していないんじゃないか?』
「そんな事あり得るのか?」
「……と、とりあえず、俺達らしい事を言ってみるか」
一誠は兜のマスクを収納し、顔を見せる
「えーと、おっぱい!グレートレッドに乗って帰ってきました!……ほら、新も一緒に――――」
「嫌だ」

「即答すんなよ！おっぱいって言うだけじゃねぇか！お前だと認識されなくても良いのかよ？」
「そんなふざけた身分証明をするぐらいなら、ここから消えた方がマシだ！」
「このままじゃ何も話が進まねぇんだぞ！文句言うな、オッパイザー」
「その名を口にすんじゃねぇぇエエエエエエエエエエエッ！」
〝オッパイザー〟呼ばわりに激昂して一誠を殴ろうとした瞬間だった
「新！イッセー！」
「イッセーさん！新さん！」
「新さん！イッセーくん！」
「イッセーくん！新くん！」
「新先輩！イッセー先輩！」
「新！イッセー！」
「新くん！イッセーくん！」
「新さん！イッセーくんですか！」
「竜崎くん！兵藤くん！」
「竜崎、兵藤、生きてたのかよ⁉」
「新さん、一誠さん、お久しぶりです」

「渉、冷静に挨拶してる場合⁉少しは驚きなさいよ!」
リアス、アーシア、朱乃、祐斗、小猫、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセ、ソーナ、匙が一斉に2人の名を叫び、渉と祐希那は久々の夫婦漫才発動（笑）
〝おっぱい〟と〝オッパイザー〟で確認を取らないと気付かれない事に新と一誠はショックを受けるが――――新のもとに小猫と朱乃が、一誠のもとにアーシアがそれぞれ駆け寄って抱きつく
「イッセーさん!イッセーさんイッセーさんイッセーさんイッセーさん!」
「あらら、アーシア。大泣きしちゃって。待たせてゴメンな」
「先輩……おかえりなさい」
「……お願い。私を置いていかないで……あなたのいない世界なんてもうゴメンなのだから……」
「心配かけて悪かったな、朱乃、小猫」
「うん、私は泣いてないぞ。私が選んだ男は死んでも死なないからな」
「何よ!泣いてるじゃない!私は無理せず泣くもん!うえぇぇぇんっ!」
ゼノヴィアとイリナは涙ぐんでいる様子だった
「やはり、無事だったのですね。さすがです」
ロスヴァイセも新と一誠の帰還を喜んでいた

リアスが涙を流しながら新のもとに歩み寄り、頬に手を当てて一言漏らした
「……よく、帰ってきたわね」
新は頬に触れる最愛の主（ヒト）の手に自分の手を重ねて言った
「当たり前だろ。お前や――――仲間の皆がいる所が俺の生きるべき場所なんだ」
ベチンッ！ベチンッ！
新と一誠の頭を叩く匙、彼もまた大号泣していた
「うわぁぁぁぁぁっ！このバカ野郎どもォォォォッ！俺はな！お前らが死んだって聞いたから、俺はなぁぁぁぁっ！」
「うるせぇっ、鼻水垂らし」
とりあえず匙を軽く殴る新
「グレートレッドらしきドラゴンが上空に出現した時、もしやと感じたのだが……。さすがだな」
「やはり、生きていたか。そうでなければオレの好敵手は名乗れん」
サイラオーグが少し離れたところから手を上げて微笑み、大牙はフムフムと頷いていた
「あっ！」
突然声が上がり、そちらに顔を向ければ――――ジャンヌが虚を突かれたかのような表

情を浮かべていた
「悪いね。イッセーくんと新くんの登場で隙だらけだったからさ、子供は解放させてもらったよ」
　離れた位置で祐斗が小さな男の子を抱えていた
「……お帰り、イッセーくん、新くん。キミ達のお陰でこの子を救えたよ。さすがヒーローだね。キミ達が変わりなしで本当に良かった。グレートレッドと共に来るなんてさすがに読めなかったけどね」
「……まさか、シャルバの奸計(かんけい)から生き残るとはね。恐ろしいわ、赤龍帝」
　一誠を激しく睨み付けるジャンヌは次に新へ視線を向ける
「アーくんも生きてて良かった♪もう会えないかと思って心配してたのよ」
「そりゃどうも。――で、どうする?俺達とやるのか?」
　新がそう挑発すると、ジャンヌは懐(ふところ)からピストル型の注射器――『魔人化(カオス・ブレイク)』とフェニックスの涙を取り出した
「2人とも、気を付けて!あれは神器(セイクリッド・ギア)能力を格段にパワーアップさせるものだ!」
　祐斗が新と一誠にそう説明を飛ばし、ジャンヌは首もとに針を向ける
「……2度目の使用は相当命が縮まるけれど、使わざるを得ないわ」
　そう口にした後、ジャンヌはフェニックスの涙で傷を癒してから針を首に射ち込んで

いった
次の瞬間、ジャンヌの体が大きく脈動する
ジャンヌの体から放たれる重圧が増していき、顔に血管が次々と浮かび上がっていく
ジャンヌは体をよろめかせながらも笑う
「……これで良いわ。力が高まっていくのが分かる！」
彼女が吼えると同時に足下から刃が無数に出現していく
出現した聖剣がジャンヌ自身を覆っていき、眼前に君臨したのは――――聖剣で形作られた1匹の巨大な蛇
頭の部分にジャンヌが上半身だけ露出しており、その姿は蛇型の女モンスター『ラミア』を彷彿とさせていた
「またアレですか。あの状態は厄介ですよ。禁手（バランス・ブレイカー）のドラゴンを使っていた時よりも攻守とスピードが上がりますからね」
先程までジャンヌと戦っていた渉がそう言う
『うふふ、この姿はちょっと好みではないけれど、強くなったのは確実よ。曹操が来るまでの間、これで逃げさせてもらうわ！』
「おい、逃げる気かよ！」
「ここまで来たら逃がさねぇよ！」

一誠は脳内の妄想力を高めて、ジャンヌに向けて久しぶりの夢空間を展開させた
「さあ、久しぶりに行きましょうか！『乳語翻訳（バイリンガル）』！」
一誠はジャンヌの胸に向けて技を放ち、質問を飛ばす
「へい！そこのジャンヌのおっぱいさん！いったいこれからどうするんだい？」
『えーとね。路面を壊して、下水道にでも逃げようかなーって思っててー』
「あら、意外にギャル風で可愛い！って、下水道に逃げる気か！」
「それさえ分かりゃ充分だ。一誠、悪いがここは俺が貰うぜ」
ジャンヌが聖剣で作られた蛇腹を軽やかに動かし、一際大きい聖剣を創り出して路面に突き立てようとしたところに新が立ち塞がる
『あら、アーくん。そんなところにいたら危ないわよ？お姉さんの胸に飛び込むつもりかしら？』
「嬉しい誘いだが、生憎（あいにく）そんな暇はねぇよ。一気に行くぜ！」
新は全身から炎と闇が入り交じったオーラを迸（ほとばし）らせ、左手をジャンヌに向ける
濃密なオーラが手に集まり、竜の形を成していく……
「新技――『黒火竜の晩餐（ブラック・グリード）』……ッ！」
ズオ……ッッ！
新の左手から莫大な質量のオーラで構成された黒い火竜が飛び出し、眼前のジャンヌ

を見下ろす
今のジャンヌを遥かに凌駕するほど巨躯の火竜は両目を鋭く光らせ、大口を開ける
『うそ、でしょ……？』
バクンッッ！
新が生み出した火竜の恐ろしい気迫に動く事すら出来なかったジャンヌは――――
あっという間に火竜に飲み込まれる
〝弱肉強食〟――――まさにそんな場面を目撃した瞬間だった……
ジャンヌが火竜の餌食になる瞬間を見てしまい、その場にいた殆どの者が戦慄した
ゴキュ……ゴキュ……と不気味な音を鳴らす火竜
暫くした後、そのサイズを縮めていく
人型のサイズにまで縮むと火竜はペッと何かを吐き出す
吐き出されたのは――――全裸となったジャンヌだった
尻餅をつくと同時に「きゃあっ」と可愛い悲鳴を上げ、火竜は新の左手へと消えていく
「ヒャッホウ！お姉さんのはだkグビャアッ！……こ、小猫ちゃん……、なんで俺だけ……っ」
「……いつも通り最低（エッチい）です、新先輩」

「渉は見んな!」
「痛い痛い、首が痛いよ」
一誠は喜ぶと同時に小猫に殴られ、小猫は厳しいツッコミ
渉は祐希那に首を曲げられそうになっていた
一瞬で勝負を決めた新にジャンヌが問いかける
「……な、何をしたの?」
「簡単な事だ。さっきの火竜でお前のパワーアップの源(みなもと)やら副作用やらを喰って消した。ついでに服も喰ったけどな」
「どうしてそんな事を?」
「さっきお前、自分で言ってたよな。〝相当命が縮まる〟って。むやみやたらに自分の命を縮めてんじゃねぇ。人間だろうと悪魔だろうと、命は1つしかねぇんだ。もっと自分を大事にしろ」
新の不器用だが思いやりのある説教にジャンヌは思わずときめいてしまい、頬を紅潮させる
「……もうっ、それって反則じゃないかしら」
「何とでも言痛(いた)たたたたたたたたたっ!リ、リアス⁉朱乃⁉なんで俺の脇腹を2人がかりでつねってんだ⁉」

「帰ってきて早々、浮気なんてしてる場合かしら？」
「あらあら、私的には燃えますけど、今はそんな場合ではありませんわよね？新さん？」
「も、勿論分かってるつもりだ。これはあくまで新技のお披露目しようと脇腹が千切れるッ！スンマセンした！勘弁してくれェェェェッ！」
……帰って早々、新は愛しい２人（リアスと朱乃）から手痛い折檻をくらうのだった

「オーフィスの力を借りて……グレートレッドの体の一部で体を再生させた⁉」
「黄泉の国ってところでキリヒコの手を借りて帰ってきた⁉」
お互いの経緯を話して素っ頓狂な声を上げる新と一誠
ジャンヌを退（しりぞ）けた後、ここに来るまでの経緯を皆に話していた
当然、皆は驚いていたが、１番驚いていたのはロスヴァイセだった
「……生きているとは思いましたが……まさか、ここまで常軌を逸した助かり方をしているとは……予想の範疇を超えていたと言うか……」
「新、お前キリヒコなんかの手を借りて大丈夫か？あいつ……『造魔（ゾーマ）』の一員なんだろ？」
「仕方ねぇさ。あの時はあぁするしか方法が無かったんだ戻る為にな」

「――――強者を引き寄せる力、ここまで来ると怖いな。首都リリスを壊滅させるモンスターと言う情景を見学しに来たら、まさかグレートレッドと共にキミ達が現れるなんてね」

第3者の声、振り向けばそこには曹操の姿があった

曹操は相変わらず槍を手に持って、倒された仲間を見て目を細めていた

「……僅かな間で超えられたと言うのか。異常なるは、グレモリー眷属の成長率……。ヘラクレスはともかく、ジャンヌは『魔人化(カオス・ブレイク)』を使った筈なのだが……2度使うと弊害が出ると言うのかな……」

仲間の心配よりも負けた理由を独りごちながら模索しているようだった

曹操が登場した事で一気に空気が一変

次に曹操の視線が一誠に移る

ただ……以前のように興味に彩られたものではなく、異質なものを見ているかのような目付きだった

「……帰ってきたと言うのか、兵藤一誠。旧魔王派から得た情報ではシャルバ・ベルゼブブはサマエルの血が塗られた矢を持っていたと聞いていたのだが」

「ああ、喰らったぜ。体が1度ダメになっちまったけど、グレートレッドが偶然通りかかったようでさ。力貸してもらって肉体を再生させた。……先輩達やオーフィスの協

力があってこそだったけどな」
一誠の台詞を受けて皮肉めいたものでも返すのかと思いきや……曹操は目元をひくつかせていた
「……信じられない。あの毒を受けたら、キミが助かる可能性なんてゼロだった。それがグレートレッドの力で体を再生させて、自力で帰還してくるなど……っ！グレートレッドとの遭遇も偶然で済ませられるレベルではないんだぞ……っ！」
『……なんか、すっげぇ信じられないって顔でブツブツ話してやがるぞ……』
『とりあえず、すぐに襲い掛かってくるって事は無いみたいだ。今のうちに――――』
『おお、そうだ！「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」！』
そう、今の一誠には『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』が宿っていない
このままでは本当の意味で再生した事にならない
新も右手が欠落している為、リアスに言う
「リアス、俺の右手持ってる？」
「勿論よ」
リアスが懐から〝新の右手〟を取り出し、新のもとに向ける
右手は意思を持ったかのように輝きを増し、欠落した部分と接合する
静かにゆっくりと接合が行（おこな）われる中、リアスの唇が新の唇と重なった

新はそのままリアスを抱き寄せる
「――私と共に生きなさい」
「ああ、俺はリアスと共に生きる。お前と――仲間達と共に生きる!」
強く宣言し、決意を固めた新は接合された右手を回す
一誠の方もアーシアから7つの『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』を渡され、抱き合っていた
「……イッセーさん……っ。もう、何処にも行かないでください……っ!」
「勿論だ!もうアーシアを悲しませたりしない!」
気持ちを新たにした一誠、駒も肉体に馴染んで気合を入れ直した時だった
不気味な波動……そちらを見やれば、車道の一角に黒いモヤのようなものが発生し、そこから鎌らしき得物が飛び出してきた
装飾が施されたローブ、道化師のような仮面を着けた者――最上級死神(グリムリッパー)プルートが現れた
≪先日ぶりですね、皆さま≫
「プルート、何故あなたがここに?」
曹操にとっても予定外の登場だったらしく、プルートは曹操に会釈する
≪ハーデスさまのご命令でして。もしオーフィスが出現したら、何がなんでも奪取してこいと≫

プルートの視線が一誠の隣にいるオーフィスに注がれた
ハーデスはまだオーフィスを狙っているようだ
「お前の相手は俺がしよう。――最上級死神プルート」
またまた聞き覚えのある声
新達と曹操、プルートの間に光の翼と共に空から舞い降りてきたのは――純白の鎧に身を包んだ男……
「やはり、帰ってきたか、兵藤一誠」
「ヴァーリッ！」
「あのホテルの疑似空間でやられた分を何処かにぶつけたくてな。ハーデスか、英雄派か、闇人か、悩んだんだが、ハーデスはアザゼルと美猴達に任せた。英雄派と闇人は出てくるのを待っていたらグレモリー眷属がやってしまったんでな。こうなると俺の内に溜まったものを吐き出せるのがお前だけになるんだよ、プルート」
大胆不敵に告げてくるヴァーリ
いつもと変わらないポーカーフェイスだが、語気に怒りの色が見える
相当ストレスが溜まってるようだ……
プルートが鎌をくるくる回してヴァーリに構える
≪ハーデスさまのもとにフェンリルを送ったそうですね。先程、連絡が届きましたも

のですから。神をも噛み殺せるあの牙は神にとって脅威です。――――忌々しい牽制をいただいたものです≫

「いざと言う時の為に得たフェンリルだからな」

≪各勢力の神との戦いを念頭に置いた危険な考え方です≫

「あれぐらいの交渉道具が無いと神仏を正面から相手にする事が出来ないだろう?」

≪まあ良いでしょう。しかし、真なる魔王ルシファーの血を受け継ぎ、尚且つ白龍皇であるあなたと対峙するとは……。長く生きると何が起こるか分からないものです。――――あなたを倒せば私の魂は至高の頂きに達する事が出来そうです≫

プルートは白龍皇の挑戦を嬉々として応じ、ヴァーリは兜をつけ直して言う

「兵藤一誠は天龍の歴代所有者を説き伏せたようだが、俺は違う」

ドンッッ!

いきなり特大のオーラを纏い始めるヴァーリ

「――――歴代所有者の意識を完全に封じた『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』のもう1つの姿を見せてやろう」

光翼が広がり、魔力を大量に放出させる

純白の鎧が神々しい光に包まれ、各部位にある宝玉から歴代白龍皇の所有者とおぼしき者達の意識が流れ込んでくる

「我、目覚めるは――律の絶対を闇に堕とす白龍皇なり――」
『極めるは、天龍の高み！』
『往くは、白龍の覇道なりッ！』
『我らは、無限を制して夢幻をも喰らう！』
それは恨みも妬みも吐き出さない代わりに圧倒的なまでに純粋な闘志に満ちていた……
「無限の破滅と黎明の夢を穿(うが)ちて覇道を往く――我、無垢なる龍の皇帝と成りて――」
ヴァーリの鎧が形状を少し変化させ、白銀の閃光を放ち始めた
「「「「汝(なんじ)を白銀の幻想と魔道の極致へと従えよう」」」」
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ(ジャガーノート)　Ｏｖｅｒ(オーバー)　Ｄｒｉｖｅ(ドライブ)!!!!!!!!』
そこに出現したのは白銀の鎧に包まれし、極大のオーラを解き放つ別次元の存在としか思えない者だった
周囲の公共物、乗用車が触れてもいないのに潰れていく
ヴァーリが体から滲ませるオーラだけで物が破壊される……
新と一誠は直ぐに奴がバケモノだと理解できた
「――『白銀の(エンピレオ・ジャガーノート・オーバードライブ)　極　覇　龍』、『覇　龍(ジャガーノート・ドライブ)』とは似ているようで違う、俺だけの

強化形態。この力、とくとその身に刻めッ！」

言い放つヴァーリに斬りかかるプルート

残像を生み出しながら高速で動き回り、赤い刀身の鎌を振るう

バリンッ！

儚い金属音が響き渡る。――プルートの鎌がヴァーリの拳によって難無く砕かれた

≪ッッ！≫

驚愕している様子のプルートだったが、そのプルートの顎に鋭いアッパーが撃ち込まれていく

激しい打撃音を叩き出して、プルートが上空に浮かされる

そのプルートに向けてヴァーリは右手を上げ、開いた手を握った

「――圧縮しろ」

『Ｃｏｍｐｒｅｓｓｉｏｎ　Ｄｉｖｉｄｅｒ!!』

『Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ　Ｄｉｖｉｄ!!』

空中に投げ出されたプルートの体が縦半分に圧縮し、更に横に圧縮していく

プルートの体が瞬時に半分へ、また半分へと体積を減らしていく

≪こんな事が……！このような力が……ッ！≫
プルートは自身に起こった事が信じられないように叫ぶが――――ヴァーリは容赦無く言い放つ
「――――滅べ」
目で捉えきれない程のサイズまで圧縮されていった死神は遂に何も確認できなくなる程体積を無くしていく
空中で震動が生まれたのを最後にプルートは完全に消滅、それがその死神の最期……
最上級死神プルートはこの世に微塵の欠片も残さず消えていった

白銀から通常の禁（バランスブレイカー）手に戻ったヴァーリは肩で息をしていた
消耗は激しいが、最上級死神を何もさせずに瞬殺した力は本物だ……
何処までも強くなるヴァーリ
新達もヴァーリのかけ離れた実力に言葉を失っていた
「……恐ろしいな、二天龍は」
そう言いながら近付いてくる曹操

「ヴァーリ、あの空間でキミに『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』を使わせなかったのは正解だったか……」
『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』は破壊と言う一点に優れているが、命の危険と暴走が隣り合わせ。今俺が見せた形態はその危険性を出来るだけ省いたものだ。しかも『覇龍（ジャガーノートドライブ）』と違うのは伸びしろがあると言う事。曹操、仕留められる時に俺を仕留めなかったのがお前の最大の失点だな」
ヴァーリの言葉に曹操は無言だった
曹操の視線が今度は一誠に移る
「確認しておきたい。――兵藤一誠、キミは何者だ?」
苦慮する一誠を前にして曹操は首を捻る
「やはり、どう考えてもおかしいんだよ。自力でここまで帰ってこられたキミは形容しがたい存在だ。もはや、天龍どころではなく、しかし、真竜、龍神に当てはまるわけでもない……。だからこそ、キミはいったい――」
「じゃあ、おっぱいドラゴンで良いじゃねぇか」
面倒くさいのでそう断ずる一誠
曹操は一瞬間の抜けた表情を見せるが――直ぐに苦笑して頷いた
「……なるほど、そうだな。分かりやすいね」
それだけ確認すると、曹操は聖槍の先端を向ける

「さて、どうしようか。俺と遊んでくれるのは兵藤一誠か、竜崎新か、それともヴァーリか、もしくはサイラオーグ・バアルか。または全員で来るか？いや、さすがに全員は無理だな。神滅具（ロンギヌス）3つを相手にするのは相当な無茶だ」

挑発的な物言いをする曹操

ヴァーリや最大の、渉や大牙まで参戦したら、いくら曹操と言えど耐えられないだろう

ヴァーリが新と一誠に歩み寄り、訊いてくる

「奴の七宝（しっぽう）、4つまでは知っているな？」

「ああ、女の異能を封じるのと、武器破壊、攻撃を転移させるのと、相手の位置も移動できるんだよな」

「他の3つは飛行能力を得るものと木場祐斗が有する聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）の禁手（バランス・ブレイカー）のように分身を多く生み出す能力、そして最後は破壊力重視の球体だ」

「とりあえず、礼は言っとく」

いつの間にか新と一誠が戦う雰囲気になっていた

新と一誠が1歩前に出たのを見て、曹操は嬉しそうに笑みを浮かべた

「俺の相手は赤龍帝と闇皇か。他はそれを察してまるで動かないときた」

曹操の言う通り、皆は新と一誠の曹操とのバトルを確認および容認してくれたようだ

「ああ、俺も一誠も借りを返さないと気が済まねぇんだ」
戦意を感じ取った曹操は肩を槍で軽く叩く
「面白い。あの時はトリアイナの弱点とサマエルの縛りで突いて差し込ませてもらったが、今度は全力のキミ達と戦おうじゃないか」
「勿論、そうさせてもらうさッ！いくぜ、ドライグッ！」
『応ッ！相手は再び最強の神滅具（ロンギヌス）ッ！ここで倒さねば赤龍帝を名乗れんぞ、相棒ッ！』
「あったり前だろうがッ！行くぞ、新アッ！」
「ああ、今度は全力でやってやる！竜の力を解き放ってなッ！」
２人は莫大なオーラをそれぞれ放っていく
「――我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり！」
呪文を唱える一誠と竜の力を解き放つ新
「無限の希望と不滅の夢を抱いて、王道を往く！我、紅き龍の帝王と成りて――」
一誠の鎧の色が真紅と化し、新の全身が赤と黒の鱗に覆われていく
「「「「「汝（なんじ）を真紅に光り輝く天道へ導こう――ッ！」」」」」
『Ｃａｒｄｉｎａｌ（カーディナル）　Ｃｒｉｍｓｏｎ（クリムゾン）　Ｆｕｌｌ（フル）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!!』
――『真紅（カーディナル・クリムゾン）の赫龍帝（ブロモーション）』――
――『超越（インフェルニティ）の黒竜帝（オーバー・ドラグニル）』――

新と一誠の最強形態が、今ここに君臨した
曹操とのリベンジマッチに向けて……

リターンマッチ！赤龍帝＆闇皇ＶＳ天輪聖王

新と一誠、両者の変化を確認した曹操は輪後光と７つの球体を出現させる
相変わらず静かで不気味な禁手（バランス・ブレイク）化だ
間合いを取り、三者三様に睨み合った後――その場を駆け出していった
「象宝（ハッティラタナ）」
曹操は足下に球体を置くと宙に飛び出した
新と一誠も翼を広げて曹操を追う
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

何とかやり過ごしたのも束の間、今度は聖槍から生み出された聖なる波動が飛んでくる
新と一誠はそれを避けて、もう一度魔力を放つ
新は火竜を、一誠は散弾式のドラゴンショットを撃ち出す
「居士宝(ガハバティラタナ)!」
曹操が球体の1つを前方に移動させると、それが弾けて光り輝く人型の存在が複数出現する
自分の分身を多く生み出す七宝だ
それらは散弾式のドラゴンショットと火竜を受けて消滅していく
分身を盾代わりにしたようだ
今の攻防に紛れて曹操の姿が消えており、気配を探っていると横合いから聖槍が伸びてくる
新と一誠は何とか避けるが、多少掠めてしまう
「てめえ!木場と同じ能力使いやがって!しかもお前がバカにした木場の能力とお前の能力、あんま差が無いように思えるぜ?そっちのもまだお前の技術とか反映できてないじゃないか!よくそれであいつをバカに出来たもんだな!」
一誠の指摘に曹操は笑う

「ハハハハ、そうかもしれないな。でも言っただろう?まだ調整が必要な能力で未完成だと。だからこそ、あの時木場祐斗の能力に興味を抱いたのさ。まだ俺と同様の仕上がり具合だったから直ぐに興味が薄れたけどね!それに俺のは木場祐斗のと少し仕様が違う。まあ、それは今後次第かな」

「つまり、調整が進めば厄介になるって事か」

「ったくよ、アザゼル先生に勝ったお前の相手はキツいったらありゃしねぇ!」

「アザゼル総督か。確かにこの間の戦闘では制させてもらったが、次にやったら恐らく易々とは勝てないだろうね」

「?何でだ?」

「あの総督を舐めるなんて事は出来やしない。ああいう研究者気質(かたぎ)の戦士は次に戦う時に徹底的にこちらを研究してくる。俺のように強者の重い一撃を食らえばアウトなタイプはあの手の手合いとの戦いが1番怖い。だからこそ、1度めで総督の力量の知り、2度めで倒せた。――3度めはこちらが危険だ」

確かに曹操の言う通り、アザゼルが黙ってやられ続けるわけがない

もし次に曹操と戦えば、接戦になりそうだ

曹操は槍をくるくると回した後に構える

「さて、戦闘再開だ」

再び曹操の姿が消えたり、現れたりする
町中での空中戦の為、下にまで気を回さなければならない
神出鬼没な出現の仕方に２人の神経が磨り減る
――これは相手を任意の場所に転移させる七宝の能力を応用しているのだろう
相手だけじゃなく、自分にも使用できる
七宝の球体はどれも同じ形と大きさなので、仕掛けてくるまで能力の把握が極めて難しい
曹操の七宝の多様性は群を抜いている……
ただでさえ聖槍の攻撃を警戒しなければならないのに、七宝の能力も加わって対処が厳しくなっている
フェニックスの涙も持っている以上、長期戦は不利だろう……
『……けど、こいつに勝てる要素ならある。攻撃が当たれば勝てるってのもそうだが、あの次元の狭間で対応策を考えてきたんだ。それさえ決まれば……！』
『対応策？隙を作ってそいつが通れば勝てるのか。……だが、それこそ至難の技だ』
新の言う通り、曹操との空中戦は激戦の一途
２人がかりでどの様な攻撃を仕掛けても曹操は球体の能力で受け流す、または防ぐ
聖槍の攻撃も避けるだけで精一杯……

撃ち出した魔力の軌道をふいに変えても曹操の虚を突けない
更に曹操が球体で作り出した分身も転移の球体で瞬間移動させて間を詰めてくる
どれだけ離れていても体勢を立て直す暇が無い
高速で距離を詰めても転移で逃げられるか、球体で生み出した分身を盾にして回避までの時間稼ぎにされてしまう
何とか追い詰めて破壊力のある一撃を叩き込もうとしても槍で弾かれるか、球体による能力で避けられる
――――曹操は鎧装着型の弱点も熟知している
鎧装着型はパワーアップが過剰なせいで、攻撃する際にオーラが集まるので、何処から攻撃してくるか予測しやすい
頭で理解しても実際に動けるのは曹操が強い証拠……
そして曹操の右眼で光るメデューサの眼、あらゆるものを石化してしまう
２人ともいろんな箇所を石化され、その度に石化した部分を破壊して修復させる
一瞬でも動きを止めるのが主な使い方のようだ
周囲の建物は新と一誠、曹操の一戦で破壊の限り……人気(ひとけ)が無いのが幸(さいわ)いだった
少しずつ押され、２人の破損具合が徐々に増していく
新と一誠の攻撃スタイルを把握しつつある曹操

まさにテクニックタイプの鑑（かがみ）と言えよう
パワー重視の新と一誠では相性が悪い……
ふいに何かを感じ取る2人
そちらの方に翼を羽ばたかせると……一筋の紅い閃光が新と一誠のもとに届いてオーラを回復させていく
遠目にビルの屋上から2人におっぱいビームを放つリアスの姿が確認できた
「噂の乳ビームか。なるほど、キミ達3人は怖いね」
曹操はそう言いながら苦笑していた
「笑ってんじゃねぇ、チクショウッ！」
「これでもくらいやがれッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

そのまま聖槍を横薙ぎに振るってくる曹操
新と一誠は急上昇して避けるが、後方のビルが聖槍の波動一閃で真っ二つに崩落
波動は勢いを保ったまま、後方の建物を幾重にも破壊していく
曹操は笑みを浮かべながら楽しげに言う
「ハハハハ！凄い！これが真『女王（クイーン）』と竜の力か！俺の攻撃がクリーンヒットしないじゃないか！その割にキミ達の攻撃もこちらに当たらない！ヒヤヒヤものだな！キミ達の攻撃を受ければ、俺はそれで終わりだからね！」
「そう言うなら１発当たりやがれ！」
曹操が槍を回転させながら器用に振るってくる
下からの斬りかかりを避け、そのまま上からの一撃も後方に退いて回避するが――
聖槍の先端に球体が出現する
曹操がいっそう笑みを深めた
「ヴァーリと比べたら、まだまだだ。――将軍宝（バリナーヤカラタナ）！」
球体が一誠の腹部目掛けて突き進んでくる
寸前で一誠は両手にオーラを集めて肉厚な腕を形成した
両腕を縦に合わせて受け止めようとするが……直撃の瞬間、ありえない程の衝撃が一誠の腕を通り越して全身を襲う！

それこそが破壊力重視の七宝だった
一誠は球体の直撃を受けて後方に吹っ飛ばされていく
ビルを次々と突き破っていき、遂にはその姿が見えなくなった
新は破壊力重視の七宝の威力に舌打ちした
「今の七宝もまだ未完成でね。実は能力も曖昧だ。今は破壊力重視にしているんだが、それだと武器破壊のと被ってしまってね。何か良い能力でも浮かべば良いんだが……あまり逸脱し過ぎた能力は付与できないからね」
「……へっ、それなら武器破壊を女の防具破壊に変えてくるんだな。そうすりゃ少しはお前を倒せる確率が上がる」
「ハハッ、俺はキミ達のような乳フェチじゃないんだけどね」
新は全身からオーラを滾(たぎ)らせ、背中に漆黒の巨腕を6本展開する
黒い波動を撒き散らしながら、6本の漆黒の巨腕を曹操目掛けて解き放つ
雨のように降り注いでくる波動と漆黒の巨腕
曹操は槍で防ぐ、または転移の球体で瞬間移動しながら避けていく
その隙に新は一誠が吹き飛ばされたところに飛んでいった
時間稼ぎの為の捨て弾
唯一全壊していないビルを見つけた新は割れた窓ガラスからビルの内部に入ってい

く

探し回ってみると、無数のオモチャが並ぶ玩具屋にて一誠を発見

鎧は先程の攻撃で破壊し尽くされており、血反吐も吐いていた

恐らく肋骨が折れたのだろう……

「おい、一誠!しっかりしろ!」

「がは……っ。あ、新か……っ」

「酷い傷だな……。俺も多少は食らっているが、あの野郎に当たる気がしねぇ」

「そ、それなんだけど、これ……」

一誠は震える手でとあるオモチャを持ち、新にも見せる

次に〝一誠が考えた対応策〟を新に耳打ちする

それを聞いた新は目を見開いた後、なるほどと頷く

「これでおしまいか?やはり、紅(くれない)と化した赤龍帝でもこれが限界か……」

割れた窓から現れる曹操

「なあ、訊かせてくれ。さっきのヴァーリと戦ったら、やっぱりお前が勝つのか?」

「……いや、あのプルートを瞬(またた)く間に消滅させたヴァーリは既に超越者と言って過言ではないね。――――俺でも勝つのは無理だ。単純にパワー、出力が桁違い過ぎてね、ゴリ押しだけでこちらが爆(は)ぜる」

それを聞いて内心安堵する一誠はたまらず笑ってしまった
「何がおかしい？」
曹操は訝しげに訊いてくる
「あの時と一緒だ。なあ、曹操。弱点攻撃ってよ。俺もやったんだわ。部長を守る為、奪い返す為に、バカな頭を必死に振り絞ってよ」
「何を言っている？キミの言っている異図が分からない。気が変になったわけでもないと思うのだが……何かを企んでいるのか？」
「あの時、俺に残された力はたったちょっとのドラゴンの力だけ。今とそう状況が変わっちゃいなかった」
「ああ、そうだな」
新が先程手渡されたオモチャ――――スイッチ姫のオモチャを見せる
「こいつには仕掛けがある。おっぱいの部分が飛び出すんだ。試作品が家に届いてリアスが呆れてたぜ。――――サーゼクス様が考案したんだってな」
「だから、それがどうしたって言うんだ？」
次に一誠が懐から1発の銃弾を取り出す
「これは次元の狭間で漂っていたゴーレム――――もう動けなくなったゴグマゴグのボディに入っていた内蔵式の対魔物用機関銃の弾なんだってさ。大昔に作られた割に今

の機関銃の弾と形状はそんなに変わらないんだな。……人間の創造力って、今じゃ神さまクラスなのかね」

一誠はそんな事を言いながら、その銃弾をスイッチ姫のおっぱい部分に装填

そしてオモチャに赤龍帝の力を譲渡する

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）‼』

「……撃て、新。必殺――――スーパーおっぱいミサイルだ……っ」

「……あぁ」

譲渡し終えた一誠はスイッチ姫のオモチャを新に渡し、新はスイッチ姫の仕掛けを押した

すると、譲渡されたパワーで勢いが増し、おっぱいに仕込まれたゴグマゴグの銃弾が曹操に飛んでいく

「……血迷ったのかな？」

曹操は軽々と聖槍で銃弾を弾いた

――――刹那、弾かれた銃弾が四散して中から液体が現れ、それが曹操の顔面――――右眼にも飛び跳ねていった

不意打ちの液体をくらった曹操は右眼を擦る

「……何だ、この液体は……」

次の瞬間、ゴボッと曹操は口から血の塊を吐き出した
「ぐはっ！」
曹操は途端に苦しみだして膝をつき、その体は既に震えていた
床に四つん這いになってもう一度、血の塊を吐いたところで曹操はようやく気付く
「こ、これは……ッ！うぐわぁぁぁぁぁっ！」
曹操の体中を言い難い激痛が走り抜ける
一誠は力の戻った両腕と両足で立ち上がり、床でのたうち回る曹操に告げた
「――――サマエルの血だよ。シャルバが俺に使ったもんだ」
一誠の言葉を受けて曹操は目を全開に見開いていた
一誠は説明を続ける
「体を再生する時にサマエルの血を抜いてもらったんだけどさ。それを処理する時、ふいに思い付いた。――――確か、神さまがサマエルに与えた呪いはドラゴンと蛇に対する憎悪のものじゃなかったか？――――と」
「……眼かッ！俺のメデューサの眼……ッ！」
既に曹操の右眼はサマエルの毒による効果で潰れてしまい、大量の血を流していた
「ああ、メデューサって髪が蛇の魔物なんだろう？って事は、その眼を移植したお前にもサマエルの血が効果的なんじゃないか？――――ってさ、次元の狭間で思ったんだよ。

で、次元の狭間で拾ったゴグマゴグの銃弾にこれをオーフィスに込めてもらった」
そう、一誠は次元の狭間で曹操の倒し方を思慮していた
実力で倒せるならそれに越した事はないが、近い内に再戦するとなれば対応策を講じなければ勝てない
そんな事を考えている内に次元の狭間で漂っていた停止状態のゴグマゴグに出会い、ライザーとの一戦を思い返した
そこから導き出されたのが――サマエルの血を込めた銃弾だった
「……ぐふおっ!はぁはぁ……。……ふふふ、まさか、そうくるとはね……っ!」
「悪魔でドラゴンの俺でも瀕死になった。英雄の子孫で最強の聖槍を持っているとはいえ、お前は――人間だ。その呪いに人間のお前が耐えられるか?」
「……無理だろうね……。……既に……体中の機能が停止しつつある……。……サマエルの呪いには……フェニックスの涙も効果を示さない……。俺の敗因は『人間』だから……か……っ!ふはははははっ……弱点を、相手の研究をしてきた俺が……この様……最高の皮肉だ……っ!」
苦痛に苛(さいな)まれながらも曹操は自分をおかしそうに嘲笑うだけだった
曹操唯一の弱点……それは――自分が『人間』だった事……
サマエルの呪いを受けてしまった曹操はもう戦えないだろう

禁（バランス・ブレイカー）手が消え去り、槍の力強さも消失している

――新と一誠の勝利

「……まさか、リアスの人形で勝っちまうとは。しかも何だよ、スーパーおっぱいミサイルって……」

『ずむずむいやーん』

新の手に握られるスイッチ姫の人形が仕掛け音声を発した

今までのシリアス空気を返してほしいと願う新は、もはや笑うしかなかった

「……ならば『覇（トウルース・イデア）　輝』だ」

「――っ!?」

曹操の言葉に驚愕する新と一誠

曹操は震える手で槍を構えると、呪文を唱え出した

「槍よ、神を射貫（いぬ）く真なる聖槍よ――。我が内に眠る覇王の理想を吸い上げ、祝福と滅びの狭間を抉（えぐ）れ――。汝（なんじ）よ、遺志を語りて、輝きと化せ――」

曹操の口にした呪文と共に聖槍の先端が大きく開き、そこから莫大な光が輝く

アザゼルの話では、聖槍に込められたのは亡くなった聖書の神の遺志らしい

ヴァーリ曰（いわ）く『覇（ジャガーノート・ドライブ）　龍』と近くて遠い能力

真相がまるで分からないが、『覇（トウルース・イデア）　輝』が発動したら都市部に大きな損害が出るかも

しれない
防御を固めるか、この場を脱出しようか、選択を迫られた時だった……
槍の光が徐々に弱くなり、大きく開いた槍の先端も普通の状態に戻っていった
曹操はそれを見て目を見開き、絶句する
「……発動……しない？」
膨大な光量が放出されそうになった時とは裏腹に、今の聖槍から感じるプレッシャーは大したものではない
それどころかどんどん弱まっていく
曹操は何かを槍から感じ取り、悟った表情となった
「……なるほど、それがあなたの『遺志』か。――俺の野望よりも赤龍帝と闇皇の夢を選んだと言うわけだ」
『覇輝（トゥルース・イデア）』の不発、それを悟った新は構えを解いた
「……呪いを受けたのか、曹操」
その様な言葉を発しながら現れたのはヴァーリだった
ガラスの割れた窓から入ってきたヴァーリは床にのたうち回る曹操を見下ろす
「……やあ、ヴァーリ。……キミのライバルは最高だな」
「曹操にはやらないさ。――何故『覇輝（トゥルース・イデア）』は失敗した？先程使ったのだろう？この

ビルに近付いた時に感じられたからな」
　ヴァーリがそう訊き、曹操の一言にその場にいる全員が耳を傾けた
「……『覇輝（トゥルース・イデア）』は聖書の『遺志』が関係する。亡き神の『遺志』はこの槍を持つ者の野望を吸い上げ、相対する者の存在の大きさに応じて多様な効果、奇跡を生み出す……。それは相手を打ち倒す圧倒的な破壊であったり……相手を祝福して心を得られるものでもあった。――だが、赤龍帝と闇皇に対する『覇輝（トゥルース・イデア）』の答えは静観だった。……つまり、この勝負は赤龍帝と闇皇の勝ちであり、槍は俺よりも兵藤一誠と竜崎新の夢を見たいと言う事だ……。……今後も俺の野望を見たいのなら、聖槍はここで俺を回復させるか、もしくは絶大な力を発動させただろうからね……」
　聖槍が新と一誠の勝ちを認めたと言うよりは、曹操の夢よりも2人の夢を選んだと言った方が正しいだろう
　ヴァーリがそれを聞いておかしそうに笑みを見せた
「ここに来てその聖槍は曹操ではなく、兵藤一誠と竜崎新を選んだのか。だから言っただろう？手に負えなくなる内に俺と兵藤一誠を倒すべきだった、と。結果この様（ざま）だ。何とも言えない最後だな。やはり、真紅となった赤龍帝を倒せる権利を持つのは俺だけのようだ」
　ヴァーリの皮肉な台詞を貰い、曹操は自嘲した

「……俺が倒したかったんだけどな」
「男同士がホモみたいな事を言って俺の取り合いとかしないでくれる⁉気持ち悪いったらありゃしない！」
「ホモホモしいのは一誠だけで充分だ」
「新てめぇ！俺に押し付けるな！俺は女の子にモテたいの！筋肉ばかりの男衆にモテても嬉しくないの！」
「ああ、そうだな。兵藤一誠は俺が倒すのだから」
「僕の友達は大人気だね」
　更にサイラオーグと祐斗が参戦（笑）
　ここに来て♂度が増し、一誠は心の底から〝助けておくれ！〟と叫んだ……
「……二天龍、闇皇、獅子王、聖魔剣……さすがにこの状態では分が悪いか。と言うか、このままじゃ俺は死ぬな。……レオナルドを失った時点で俺は詰んでいたのかもしれないな。……いや、キミ達にちょっかいを出したのが運の尽きか……。やはり、サマエルの使用はオーフィスではなく……グレートレッドの方が良かったのかな……。……まさか、京都でのグレモリー眷属との出会いと、選択が……俺達の負けフラグだったなんて……」
　自嘲しつつ息も切れ切れになる曹操

顔色も相当悪く、ヴァーリのように魔力でサマエルの呪いを抑える事も出来ない状態は悪化の一途を辿っていた……

その時、新達を見覚えのある霧が覆い、霧の中から人影を視認する

曹操のもとに現れたのは――――ボロボロのゲオルクだった

片目と片腕を失っており、左足も黒く変色していた

「ゲオルクか……」

「……曹操、俺達は……多少の計算違いはあれど、大きくは間違えてはいなかった。――――ただ」

曹操の手を取り、転移の魔法陣を展開するゲオルク

ヴァーリ以外の皆が一斉に取り押さえようとしたが――――聖槍がまばゆい光を発して一瞬だけ目と体が動かなくなる

まだその程度の力は残っていたようだ

「……二天龍に関わると、滅びる。シャルバ達のように……」

「……そうだな、ゲオルク……」

聖なるオーラに身を焦がしながら突き出したサイラオーグの拳が空振りに終わる

曹操とゲオルクがその場から消えていた

聖槍の光量に目をやられたせいか、コンマ1秒の差で逃げられた……

肝心なところで曹操とゲオルクに逃げられてしまった
一誠は自分の詰めの甘さに閉口してしまうが、サイラオーグが一誠の頭を撫でる
「そう落ち込むな。お前達の勝ちだ。なに、あの様子では両者共に当面戦う事も出来ないだろう。いや、障害を遺して以前のように戦えないかもしれんな」
サマエルの毒が何処まで曹操に効果を及ぼすか分からないが、ドラゴンで悪魔の一誠ですら肉体は容易く滅びた
曹操にもまともな展開は待っていないだろう
ヴァーリが一誠の方に視線を向ける
「キミがグレートレッドと通じたと言うのなら、あの赤龍神帝（せきりゅうしんてい）に挑戦する前にキミと決着をつけないといけないようだ」
「ああ、来いよ。俺ももっと強くなって、お前をぶっ倒してやるさ」
「だが、気を付けろ。キミを恐れる者が増える一方で、狙う者も今後増えるだろう。――――真龍と龍神と通じたと言うのはそう言う事だ」
「何が来ても俺は俺の目標の為に突き進むだけだ。――――上級悪魔になって、俺はハー

レム王になる！あと、レーティングゲームの王者にもなりたいしな！」
一誠の宣言を聞いて、ヴァーリは楽しそうに口の端を上げていた
――と、また誰かがここに来る気配が感じられる
店の入り口から入店してきたのは紳士な出で立ちの男――アーサーだった
「ヴァーリ、皆こちらに来ています。予定通り、一暴れしてきましたよ」
「そうか、すまんな」
ヴァーリが踵を返して去っていき、アーサーは祐斗に視線を送る
「――木場祐斗。私が探し求めていた聖王剣コールブランドの相手として、あなたが1番相応しい剣士のようです。ヴァーリが兵藤一誠と決着をつける時、私もあなたとの戦いを望みましょう。それまではお互い、無病息災を願いたいものですね」
そう言い残してアーサーはヴァーリと共に去っていった
祐斗もアーサーの挑戦を受けて、不敵な笑みを見せる
「ジークフリートを倒したのか？」
一誠が腰の魔剣を指差して祐斗に訊く
「え？ああ、これ？まあ、色々あってね。ジークフリートは皆で倒したんだ」
「さて、俺も眷属を待たせているのでな。そろそろ――ッ」
サイラオーグが窓際の方に足を向けた刹那、彼の表情が険しくなる

新も不穏な気配を感じたのか、窓の方を向いて構えを取る
「どうやら、まだ客人がいるようだ」
「……？それって――――」
ビュンッ！バチィィンッ！
突如、割れた窓から何かが高速で飛来してきた！
その狙いは疲弊した一誠に定められていたが、サイラオーグが即座に拳で弾き落とす
サイラオーグの拳によって弾き落とされたのは――――雷の矢だった
床に突き刺さった雷の矢は直ぐに消失し、それを発射した犯人がビルの外に出現する
「キヒヒッ、おっひっさ～♪元気にしてましたか～？」
宙に浮かぶのは神々しくも禍々しい騎士の様な風体をした雷使い、幾度となく新や一誠達の前に現れてきたマッドサイエンティスト……
新と一誠が憎々しげに揃ってその名を呼ぶ
「「神風……ツッ！」」
「キヒヒッ、そぉでぇ～すっ。皆が嫌うビショップの神風だよぉ？」
相変わらずふざけた態度の神風
祐斗が聖魔剣を構え、サイラオーグが睨み付ける
「なるほど、貴様もこの騒動の黒幕とやらか。戻る前にもうひと仕事しなければならな

いようだな」
「キヒヒッ、キミが噂の獅子王ってヤツかい？悪いけど、ボクはこう見えて忙しいんだよねぇ。遊びたいならぁ――こいつらと遊んでなッ！」
神風が刃物状の右腕を上げた刹那、ビルの周囲に転移用の魔法陣が無数に出現する
そこから現れたのは――夥しい数の闇人の軍勢だった……っ！
１００や２００程度じゃない……目測５０００人以上……
ビル周辺の空を、地上を闇人が埋め尽くしていた
圧倒的な闇人の軍勢に新と一誠、祐斗は言葉を失う
「キャハハハハハハハッ！どう？どう⁉闇皇はともかく、今の赤龍帝にこいつらの遊び相手が出来るのかなぁ⁉こいつら全員が上級悪魔クラスの強さを持っている！秘かに増やしといた甲斐があったよ！獲物を仕留め終えて、安心しきった時が１番無防備だからね！そこを物量作戦で攻めりゃキミ達なんざ簡単に殺せるんだよォッ！たとえ力が残っていても、この数を相手に生き残れやしないさッ！キャハハハハハハハッ！」
「この野郎……っ！きたねえ真似を……っ！」
「はぁ～？何すかぁ、赤龍帝ェ？汚い真似を……とか！ププーッ！古臭い台詞が好きだね～！けど、知りまっせん！卑怯汚いは負け犬の戯れ言！そ・れ・に、ボクはもっともっと卑怯です！今頃グレモリーのお姉さん達の所にはぁ、うちのバリーとガーラントが向

かってます！ボクもソッコーで合流して、これからお姉さん達をブチ殺しますゥ！」
　神風のゲス極まりない言葉に新も一誠も怒り心頭、全身から殺意のオーラを迸らせた
　それでも神風は哄笑を上げて嘲笑う
「キヒヒッ！怒った？怒ってる？激おこプンプン丸になっちゃったぁ？キャハハハハハハハッ！でも、ボクは一切マチマセンッ！颯爽と逃げてお姉さん達をブチ殺しに行きま～す！キミ達はここでこいつらとたっぷり遊んでなッ！その間に仲間の惨殺死体をフルコースで揃えてあげるよ！赤龍帝と闇皇、聖魔剣がいない今のグレモリー眷属なんざ――ボクの敵じゃないからねぇ！」
　そう言い残して神風は高速でリアス達がいる場所を目指して飛んでいった
　リアス達の危機に居てもたってもいられなくなった新と一誠
　だが、周りには神風が呼び寄せた闇人の軍勢がいる……
　そこへサイラオーグが告げてくる
「ここは俺が引き受けよう。お前達はリアスの所へ急げ」
「サイラオーグさん！この数を独りで⁉いくら何でも無茶だ！俺達も一緒に――」
「四の五の言わずに行け！こいつらは所詮足止めに過ぎない！そんな奴らにお前達が構ってる暇などあるか！」
　サイラオーグの叱咤を受けて、新と一誠は互いに顔を見合わせて頷いた

「……分かりました。お願いします！」
「僕も道を切り開こう。キミ達の邪魔はさせない」
「助かる、祐斗」
祐斗もサイラオーグと共に闇人の掃討に参戦
サイラオーグは闘気を纏わせた拳を突き出し、窓の外にいる闇人の軍勢を吹き飛ばす
一気に１００近くの闇人がサイラオーグの拳によって滅ぼされ、爆風に紛れて新と一誠が外へ飛び出す
祐斗も外に出て地上の闇人の群れを次々と切り刻んでいく
サイラオーグと祐斗のアシストを受けた新と一誠は急いでリアス達のもとに向かおうとするが、闇人の群れが行く手を阻んでくる
疲弊した状態でも新と一誠は体力を振り絞り、群がる闇人を蹴散らしながら叫んだ
「「退(ど)けェェェェェェェェェェェェェッ！」」
冥界を巻き込んだ魔獣騒動の発端、元凶でもある神風を追っていった……

「兄貴。この辺りの奴らはだいぶ片付いたんじゃね？そろそろ引き上げねぇか」

「……まだだ。まだ蹴り殺さなければならない気配がある」
「旧魔王派とか言うザコの他にもいるのかよ？」
「ああ。恐らく、この１件の元凶とも言える気配だ。俺達と同じく禍々（まがまが）しさに溢れている」
「……俺には今の兄貴ほど禍々しいものはねぇと思うぜ」
「行くぞ、相棒。アーシア・アルジェントにあんな表情（かお）をさせた奴らは誰１人生かして帰さん。肉の一片、骨の欠片たりとも残さず――――粉微塵に蹴り潰す」
「マジでおっかねぇ……。せめて迷わず成仏しろよ。兄貴をキレさせたのが運の尽きだ」

魔鬼化（アビス・ブレイク）！激昂の鬼

「さて、これでヘラクレスとジャンヌの移送は完了したわね」
新と一誠が曹操とのリターンマッチを繰り広げている頃、リアス達（祐斗を除く）はヘラクレスとジャンヌを冥界に転送し終え、一時（ひととき）の安息を迎えていた
旧魔王派の鎮圧も滞（とどこお）りなく進み、事態は終息に近付きつつあった
「なら、オレはこれで失礼する。クイーンとポーンの方も魔獣の討伐が終わった頃だろう」
お役御免と言わんばかりにその場を立ち去ろうとする大牙
そこへ渉が呼び止める
「あのー、大牙さん。どうして帰っちゃうんですか？」
「決まっているだろ。まだ奴の始末が終わっていない。――――神風もこの騒動を見物している筈だ。探しだしてケリをつけねばならない」
そう、この魔獣騒動には少なからず闇人（やみびと）も絡んでいる……
人間界でアドラス、冥界で神代剣護とメタルが出てきたように――――残りの神風一派もこの騒動の陰に隠れ潜んでいる事は明白

　大牙はキングとして、神風の凶行を止められなかった責任を感じているのだ
「今お前達と共闘したのも、目の前にいる共通の敵を倒す為だけだ。オレ達は所詮、相容れない関係にある。だから――――」
「だから、馴れ合うつもりはない……って言いたいんですか？」
　大牙の言いかけた心情を渉が遮る
「確かに僕達は今まで散々争いを続けてきました。穏健に過ごしたい闇人、それを良しとしない闇人、２つの派閥でいがみ合ってきました。……でも、それって結局何も生み出さず、ただ減らしていくだけの虚しい消耗なんじゃないですか？」
「……」
「今なら……今ならお互いに分かり合えると思うんです。この騒動と同じように、ただ破壊するだけの種族なんて最後には消えてしまいます……。あなたのお母さんはそれを知ったから総司さんに鎧を託し、僕のお父さんもその事に早く気付いたから争いをしなかったんだと思います。大牙さんには大牙さんなりの誇りがあるんだろうけど、僕は一誠さんみたいに皆さんと仲良く、楽しく暮らしたい。新さんみたいに大切な人達を守っていきたいんです。それに――――」
「それに？」
「大牙さんは不器用だけど、悪いヒトじゃありません。だって、リアスさん達を助けてく

れたじゃないですか。どんな形でも、どんな言い訳をしてもその事実は変わりません。
――大牙さんは良いヒトです」
涉は自分の思いの丈を大牙にぶつけた
的確な事をズバズバ言い当てられ、大牙は返す言葉も無く、ただキョトンとしていた
祐希那が額に手を当てて嘆息する
「はぁ……涉、あんたって筋金入りのバカよね」
「僕は思った事を素直に言っただけだよ？」
「そういう事を臆面もなく言えるところが筋金入りなのよ」
「……？」
涉と祐希那の夫婦ぶりが滲み出るような会話の中、それを見ていた大牙は心中で『悪いヒトじゃない、か……』と呟く
しかし、そんなほのぼのとした空気が一転……リアス達の周りが何かに覆われる
リアス達をスッポリ包み込むように現れたのは――半透明かつ薄暗いドーム状の結界だった
リアス達は直ぐに魔力による攻撃を仕掛けるが、結界は全く傷つかない
しかも、その結界は涉、祐希那、大牙の3人を包み込まなかった――そう、〝意図的に〟……

「何なの、この結界は……？」
「何の気配も無しに結界を……いったい誰が？」
リアス達が怪訝そうに窺う中、今度は並々ならぬ気配を察知する
結界に包まれなかった3人、結界内に閉じ込められたリアス達がその方向に視線を向けると――――宙に闇が出現し、闇の中から2人の刺客が現れる
1人は神風一派の闇人、剣と銃が両腕になっているバリー・デスペラード
もう1人も同じく神風一派の闇人、大蛇の如く太い体格をしたガーラント・グリンベルデ
両者共に京都で対峙した時とは姿形が変わっており、内から静かに禍々しきオーラが滲み出ていた
そして、彼らの胸部にも〝ブラックウィドウ〟が持つ赤い砂時計の痣が刻まれていた
「グレモリー眷属の大半が勢揃いでやすね、バリーの旦那」
「赤龍帝、闇皇、聖魔剣と攻撃役の要がいない今なら、奴らも容易く葬れる」
「狩りは油断した時こそ、1番の狙い目でありやすからね。『禍の団』の連中は良い目眩ましになりやしたよ」
リアス達に続いて渉達も結界の破壊を試みるが、結界は傷1つ付かない
「無駄だ。お前達の力で破れるようなヤワな結界ではない」

「どうしても解きたいなら、あっしらを倒すしかありやせんぜ？もっとも、この騒動で殆(ほとん)ど力を使い切った上、〝ブラックウイドウ〟でパワーアップしたあっしらに勝てる見込みなんざねぇと思いやすがね」
「……この卑怯者……ッ！」
リアスが毒づくが、バリーは「何とでも言え」と即座に一蹴
地に降り立ち、渉、祐希那、大牙の3人と対峙する
「せっかくでやすから、ゲストもお呼びしやしょうか。神風の旦那から面白いもんを預かっておりやして」
「良いだろう。手駒は多いに越した事はない」
バリーの承諾を得たガーラントは自らの口内に手を突っ込み、何かを取り出す
取り出したのは――――3つの光る球体
それは以前にも見た事のある光景だった
「まさか……それって……！」
「察しが良いでやすね、グレモリーの姫さん。そうっすよ、こいつは〝肉体を失った者どもの魂〟でさぁ。神風の旦那が擬似的な『霊魂復活(ソウル・リバイヴ)』で呼び寄せて、あっしらに渡してくれやした。懐かしのメンツが勢揃いでやすからね、祝ってくださいや」
バリーとガーラントが3つの光る球体に魔力を注ぎ込むと――――球体が弾けて形を

成していく

そこに現れたのは……いずれもグレモリー眷属と深い関わりを持つ者達だった

――白髪の神父、フリード・セルゼン

――初めて対峙した闇人（やみびと）、村上京司（むらかみきょうじ）

――アスタロト家元次期当主、ディオドラ・アスタロト

彼らの登場にリアス達は驚愕し、復活した村上が最初に口を開く

「久しぶりだね、グレモリー眷属。この様な形とはいえ、また会えるとは光栄の限りだ」

「オッス！俺フリードッ！まーたまたまた参上復活大見参っ！昔懐かしの面々でパーリナイ！って事で、あんたらソッコー斬殺キリング！あん時の恨み辛（つら）みをまとめて返済してやるぜぇぇぇぇ？」

「アハハハハハッ！まさか、こんな形でチャンスが巡ってくるとは思わなかったよ。今度こそ、アーシアを僕のものにする。赤龍帝がいない今、もう誰にも邪魔はさせないよ！」

村上、フリード、ディオドラの3人から殺意に満ちたオーラが溢れ出す

明らかに以前と比べてパワーアップした様子……

「奴らも少なからず〝ブラックウィドウ〟の影響を受けているので、強さは生前の倍以上だ。精々心してかかれよ」

リアス達は結界に閉じ込められているので参戦出来ず、今戦えるのは渉、祐希那、大牙の3人のみ
向こうの戦力はこれから来るであろう神風に加え、バリー、ガーラント、村上、フリード、ディオドラと———実質6人
戦況は芳(かんば)しくないものだった……
「くそ……っ!この結界さえ壊せれば……!」
ゼノヴィアが苦虫を噛み潰したような表情で悔しがる
それは皆も同じ……神風一派はまともな勝負を仕掛けてきてない
確実にリアス達を葬る策を行使してきた
卑劣極まりないやり方……
「……イッセーさん……っ」
アーシアは今この場にいない想い人(イッセー)が来る事を祈るしかなかった
いつも自分の傍にいてくれた一誠……
戻ってきてくれるよう祈り続けるアーシア
しかし、神風一派はそんな暇(いとま)を与えたりしない……
「村上、フリード、ディオドラとやら、お前達はガーラントと共にそこの3人を足止めしていろ。グレモリー眷属は今この場で葬るべき存在なんでな。一挙に奴らを消し飛ば

す」
バリーが左腕の銃口を結界内に閉じ込めたグレモリー眷属に向ける
リアス達は危険を感じて結界への攻撃を続けるが、やはり壊れない……
ガーラントが復活させた3人を引き連れて渉達の足止めに掛かる
「おい!アーシアは僕のものにするんだ!彼女だけは殺すなよ!」
「心配するな。後で神風に頼んで復活させてやる。――従順な奴隷としてな」
「それなら安心だ」
「退きなさいよっ、あんた達!退けぇ!」
ゲスの極みここにありと言わんばかりのやり取りに祐希那は大激怒、渉と大牙もバリーの砲撃を止めようとするが――さすがに4人がかりで来られては分が悪かった
ガーラントも復活の3人も思った以上に強く、なかなか前に進めない
その間に着々と砲撃準備を整えたバリーは照準を合わせる
「朱乃!ロスヴァイセ!全力で防御を固め――」
「残念だが、そうはさせない。その結界には防御術式を無効化する機能もある。何もさせない、何も出来ないまま惨めに死んで逝け」
防御も無駄に終わり、徹底した卑劣な策略にリアスは歯噛みする
目の前の悪に対して、どうする事も出来ない……

砲撃が放たれ、リアス達の命運が尽きようとした――その時だった
バシィィィンッ！
突如現れた何者かの攻撃によって、バリーの砲撃は上空に消えていく
突然の現象にリアス達どころか、バリー達も驚いていた
リアス達を滅ぼそうとする砲撃を食い止めたのは意外な人物だった……
左足を覆う脚甲、ボロボロのコートを羽織った男……
リアス達はその者の登場に戦慄した
「幽神（ゆうがみ）……正義（まさよし）……！」
そう、この場に現れたのは――以前、一誠達を強襲した地獄兄弟（ヘル・ブラザーズ）の兄……幽神正義
少し遅れて弟の幽神悪堵（ゆうがみあくと）も合流してきた
思わぬ乱入者に攻撃の手が止まる両陣営
幽神正義は足をほぐした直後、鋭い視線で神風一派を睨み付ける
「貴様らがこの騒動の元凶か」
「事の発端は『禍（カオス）の団（ブリゲード）』にあるが、俺達もその要因だと言っておこう。お前こそ何者――」
「答える必要は無い。貴様らは直ぐにこの世から消え去るからな」
並々ならぬ敵意を神風一派に浴びせる正義

悪堵はリアスに説明を求められ、結界近くまで歩み寄って言う
「ま、とりあえず今の俺達はあんたらの味方って事だ。そう警戒しなさんな」
「……そう、それは頼もしいわね。それにしても……あの異様な敵意は警戒しないでと言われても納得がいかないわ。何が遭ったの？」
「あー……今の兄貴はかってない程ブチキレてる状態でな……。俺でも手に負えねぇのよ……」
リアスの問いに対して悪堵はそう答えるしかなかった
正義は1歩前に出て、渉達に言う
「貴様らは下がっていろ。こいつらは俺が仕留める」
「あのー、あなたは？」
「答える義理は無い。さっさと下がれと言っている。2度も同じ事を言わせるな」
「ちょっとあんた！さっきから何なの？いきなり出てきて失礼にも程が――――ッ」
正義は文句を言おうとした祐希那を鋭い眼力で威圧
凄まじいプレッシャーに当てられた祐希那は思わず言葉を失ってしまい、ビリビリした空気がその場を支配する
正義はドスを利かせた声で再度警告した
「巻き込まれたくなければ下がれ」

「兄貴の言う通りにしな。じゃないと――――マジで死ぬぞ？」
悪堵も警告を促し、正義の鬼気迫る迫力に完全に萎縮してしまう
渉達はやむを得ず後方に下がる事にした
「ワリィな、あんたら。これもあんたらの為なんだ。今の兄貴はマジで手がつけられねぇ程キレてるからよ。しばらくは大人しくしててくれ」
悪堵が宥める中、正義は耐えず神風一派を睨み付けている
すると、フリードが首を傾けて挑発してくる
「おやおやおんやぁ～？助っ人野郎のご登場ですかぁ？初対面のくせに殺気がギラギラしてやがるなぁ。超良い感じでムカつくんだけど！決定、俺に不快感を与えちまったチミは極刑死刑終身刑ザマスッ！」
「不愉快？それはこちらの台詞だバケモノ。貴様らは姿形から醜悪極まりない、息をしているだけでも癇に障る」
正義は神風一派に指を突きつけて問う
「1つ訊こう。あの女――――アーシア・アルジェントを泣かしたのは貴様らだな？」
正義の問いにリアス達はざわつき、神風一派のバリーとガーラントは問いの意味が理解できずにいた
すると、フリードはニンマリと口の端を笑ませる

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ?あのクソビッチシスターに肩入れすんのかよ?てめぇ何様よ。あー、分かった!腐れアーシアちゃんの元カレ的なヤツですか!いやー、未練たらたら垂れ流し野郎は嫌だね～っ!ストーカーは犯罪だっつぅの!そして俺に恥をかかせたクソビッチシスター&クソクズ悪魔どもは俺法によって有罪死刑確定なんだよ!懐かし感動の再会だ!まずはクソビッチシスターのアーシアちゃんからいじめてやりましょうかねぇぇぇぇっ!またあん時みたいに楽しくやりましょぉぉやぁぁぁぁぁぁぁ!」

ピキ……ッ!

フリードの発言によって正義の〝何か〟がキレ、更に鬼気に満ちたオーラが滲み出てくる

正義の声音は怒りを通り越し、激怒の色を孕んだ

「そうか……それだけ分かれば、もう良い。貴様も、貴様の周りにいる奴らも共犯者と言うわけだな……ッ」

「それがどうしたよ?はいはいそーですよ、そーでごぜーますよ!それがどうし――――」

ゴォォォォォォォォォォォォォォッッ!!

正義の全身から毒々しい色合いをしたオーラが吹き荒れる

明らかに今までとは違った感じのオーラ

まるで相手に対する絶対の怒りを表していた……

正義の後ろに鬼の幻影が見える程に……

「貴様らは……肉の破片も、骨の欠片も残さん……ッ！輪廻転生など出来ると思うなよ……ッ。この世から消えて無くなるまで――――蹴り殺す……ッ！」

正義の左足を覆う脚甲も彼の怒りに呼応したのか、オーラと同じく毒々しい色に変化していき、彼自身の肉体を隅々まで覆っていく

全身が覆い尽くされたところで正義は怨嗟にまみれた言葉を発した

「怒りを喰らわば修羅となろう――――。怨みを滅せば魔鬼（まき）となろう――――。深淵に巣食いし鬼を放ちて、前に塞がる害を貫き穿（うが）て――――。汝（なんじ）よ、御霊（みたま）を喰らい罪を背負いし悪鬼と化せ――――ッ！――――『魔鬼化（アビス・ブレイク）』ッッ！」

力強い呪文が唱えられた瞬間、正義に鬼の幻影が重なり――――彼は異質な禁（バランス・ブレイカー）手となった

銀と紫を基調とした毒々しいボディ

両肩、両腕、両足に翼の如く飛び出た刃

頭部に生えた2本角、全身の随所に刻まれた血の如く赤い紋章

その姿形は紛れも無く、彼の深層心理に巣食う〝鬼〟を体現していた……

あまりにも異様な迫力、気迫と瘴気（しょうき）が渦巻き、さすがのリアス達も戦慄せずにいられ

なかった
　ただならぬ進化――魔鬼化（アビス・ブレイク）を遂げた正義は再び神風一派を睨み付ける
「俺の怒りが、貴様らに対する怒りが俺を更なる高みへと昇華させた。この姿は――俺の怒りその物。――『深淵（ディープ・アビサル）の鎧鬼人（デッドスペクター）』。懺悔も遺言も聞き入れんぞ、クズども」
鬼人（きじん）と化した正義が足を踏み鳴らすだけで足下の地が細切れとなり、舞い散った破片が消失する
　正義はフリードに鬼気に満ちた視線を向けた
「まずは貴様からだ。貴様はさっきアーシア・アルジェントに対して散々言ってくれたな。ベラベラと回転するその舌には、よほど無駄な脂（あぶら）が乗ってると見える。――その減らず口を舌の根から蹴り潰してやろう……ッ！」
「ヒャーハハハハハハハハッ！モテない男の僻（ひが）みってヤツですかぁぁぁ

まれてきた事を後悔させてやるぜぇぇぇ?無敵超絶復活モンスターのフリードくんをよろしくお願いしま―――』

ゴシャァッッ!

瞬時に正義の姿がフリードの眼前に現れ、左足による蹴りがフリードの左目を直撃

不快な音が響いた直後、フリードは潰された目を押さえて絶叫した

更に正義は右足の蹴りでフリードの顔面を叩き、そのまま勢いを利用した回転蹴りでフリードを地に叩き伏せる

『いッッッッってぇぇなぁァァッ!こんの腐れゴミクズ野郎がァァァァァァッ!よくもよくも俺様のお顔をォッ、足蹴にしやがってェェェェェェェェェェッ!』

「それがどうした」

正義は文字通りフリードを一蹴、再び強烈な蹴りをくらわせる

「眼球を蹴り潰される気分はどうだ?想像を絶する痛みだろう」

『こおおおおのおおおおおっ、チクショウがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!調子クレテンジャネェェェェェェェェェェッ!』

怒り心頭で突っ込んでくるフリード

しかし、それは正義にとって格好の的―――カモに過ぎなかった

正義は左足を振るって弧月状の衝撃波を飛ばし、フリードの足を止める

刹那、正義のダッシュしてからの飛び蹴りがフリードの口元に炸裂し、口腔内を破壊する

歯が砕け、神経もズタボロにされたフリードは口から大量の血を流し、更に怒りを爆発させる××　　×　×

『このクソ××がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ×××を×　×して死にやがれェェェェェェェェェェッ！』　　×　　×　　×

『キュハハハ……ッ。ヒャハハハハ……ッ！そんなにあのアバズレシスターアーシアちゃんが大事かよ？頭に蛆を沸かせたクソ同士のバカップルにはお似合いの――――』

グシャァッッ！

フリードの態度は正義の怒りの火に油を注ぎ、結果――――フリードの足が見事に踏み潰された

五指もろとも破壊された足から骨が飛び出し、フリードは更に絶叫する

『アギャァァァ

気道を潰されたフリードは呼吸が乱れ、喉元を押さえて苦しむ
「さあ、次は何処を潰されたい？腕か、腹か、それとも頭か」
『……ペッ。まあまあまあ待ちなさいよ……。良いアイディアが思い付いたぜ？そうだ、ジャンケェンで決めようっ。俺がグー出すからテメェはチョキ出せやァァァァァァアアッ！』
フリードが不意打ち気味に巨大な拳を放ってくるが――――正義の蹴りによって敢えなく撃沈
フリードの拳は砕かれ、あらぬ方向にねじ曲がった
『……ヘッ？』
「悪いが俺の蹴り（チョキ）は貴様の拳（グー）より上だ。もっとも、そんな姑息な手段など通用しない。――――この俺を見くびるな……ッッ！」
ゴキンッッ！
フリードの卑劣で愚かな手腕に正義は更にヒートアップ
金的（きんてき）をくらわせた後、左足の先をフリードの口に引っ掛け――――頭から地面に叩きつけた
激昂しながら起き上がったフリードにサイドキックを叩き込み、フリードの鼻をへし折る

立て続けに飛び乗ってフリードの頭を掴み、膝を添えて全体重を掛けて落とす
徹頭徹尾痛めつける正義の鬼畜な所業……
フリードは正義を睨み付けるも、正義は一切揺らぐ事無く倒れたフリードを見下す
『クソッタレのぉぉ……クソクズのぉ……ファッキン野郎がァァァァァァアッ！ファッキンファッキンファッキンッ！俺様を見下してんじゃ――――』
ドゴォッッ！
またもや有無を言わさない鬼の蹴りが炸裂
正義はフリードの周りを縦横無尽に飛び交いながら、蹴りの乱舞を繰り出していく
倒れる事すら許さない正義の蹴りが1発、2発、3発、次々とフリードの体を破壊する
蹴りと共に巻き起こる大爆発、断末魔が発せられても止む気配は無い……
蹴っては爆ぜ、蹴っては爆ぜるの無限ループ
その惨状はリアス達も思わず目を背けてしまう程だった……
炎を操る錬金術師の大佐の如き凶悪なリンチを執行した正義
最後の一撃と言わんばかりにフリードを宙へ蹴り上げ、右足に毒々しいオーラを纏わせる
自分も飛び上がり、フリード・セルゼンと言う存在その物を吹き飛ばす勢いで蹴り抜

いた

『アビバァァァ

フリードは正義を動揺させようとするが、正義は一切引っ掛からない
フリードを踏みつけている足の力を徐々に強めた
「それがどうした。あの女を――アーシア・アルジェントに手を出す輩を消し滅ぼす為なら、俺は鬼となろう。修羅と化そう。人の道など――とっくの昔に踏み外した。だが、貴様から哀れみを受ける筋合いは無い」
ギチギチギチ……ッ！とフリードの頭蓋骨が軋む音が強くなり、フリードの目から血が滲み出てくる
何か言おうとしても決して何も言わせない……
鬼と化した正義には慈悲の欠片も無い……
「俺の前から――消え失せろ……ッッ！」
ゴシャッッ！
耳を塞ぎたくなる音が木霊し、先程までフリードの頭部を踏みつけていた正義の足が血に染まる
まさに鬼畜が成せる業……
一部始終を見てしまったリアス達は口元を手で押さえ、込み上げてくる吐き気を堪えようとしていた
アーシアとイリナ、祐希那は耐えきれず顔を逸らし、嘔吐してしまう

フリードを殺した正義は次の獲物を見据える
「さて、次に死にたい奴は誰だ。――前へ出ろ」
修羅の化身と化している正義の気迫にディオドラは完全に萎縮してしまい、村上も体の震えを抑えられずにいた
「ぁ……ぁぁぁ……っ。嫌だ……嫌だ……!せっかく生き返ったのに、あんな殺され方は嫌だァァァァァァァッ!」
恐慌状態に陥ったディオドラは翼を広げ、空を飛んで逃げようとする
一方、村上は逃亡せずに鬼と戦う事を決意――魔人態へと変貌する
「逃げたところでいずれは殺られる。なら――返り討ちにしてやろうッ!」
村上は幾重もの巨大な薔薇の怪物を召喚し、その群れと共に正義に向かって突っ込んでいく
正義は一気に蹴散らすべく更にオーラを高め――背中から怨霊の如く揺らめく両翼を広げた
その瞬間、先程よりも強い衝撃が発せられ――両翼がまるで1対の眼のように妖しい輝きを放つ
両翼に瘴気とオーラが渦巻き、大地が揺れ始める……
そして、正義は冷酷に言い放った

「――死ね」

ゴオオオ

破られたのは事実
　足止めはしているものの、新と一誠が直(じき)にやって来るであろう事を考慮すれば幽神兄弟の乱入は痛恨のミスと取れる
　バリーは体から戦意に満ちたオーラを揺らめかせ、鬼(正義)を見据えた
「神風が来るまでの時間稼ぎだ。グレモリー眷属が結界内で動けない今、お前達が1番の脅威となり得よう。ガーラント、奴らを排除するぞ」
「分かりやした、バリーの旦那。あっしらが最後の防衛ラインみたいなもんでありやすからね」
　バリーとガーラントが並び、鬼と化した正義と対峙する
　相手は2人と言う事で、悪堵も兄の隣へと並ぶ
「兄貴、俺も手伝うぜ。あいつら、今までの奴らとは違う感じがしやがる」
「……ああ、明らかにさっきまでの奴らとはレベルが違う。相棒、決して気を抜くな」
　地獄の兄弟と神風の近衛兵、予測不可能な戦いの火蓋が切って落とされる……

幽神兄弟ＶＳ神風一派

神風一派、バリーとガーラントの策略によって結界に閉じ込められてしまったリアス達

幽神兄弟の乱入で何とか助かったものの、まだ油断は出来ない状況下にいた

幽神兄弟と神風一派の睨み合いが続き――

ドンッッ！

刹那、凄まじい衝撃音が鳴ると同時に両陣営のつばぜり合いが始まった

バリーの刃を正義が左足で受け止め、蛇に変化させたガーラントの両腕を悪堵が右拳で止める

荒れ狂う衝撃波の渦中（かちゅう）、正義とバリーは互いに飛び出しての空中戦

悪堵とガーラントは地上での打ち合い合戦を始めた

地上と上空で開始された激戦……爆音、破砕音、衝撃波がその場を駆け巡る

バリーの銃撃と剣戟を足技でいなしていく正義

隙を見て蹴りを叩き込むが、決定打と言えるダメージをなかなか与えられずにいる

悪堵も同じく――ガーラントに対して拳の乱打を入れているが、思った以上のダ

メージを与えられない様子
　彼らも〝ブラックウィドウ〟で強化されている為、身体能力が飛躍的に上がっているからだ
『……とは言うものの、この２人の力は俺達と互角――――いや、少し上か。いずれにしても長くは保(も)たない。……リアス・グレモリーの眷属ではないにしろ、戦力を読み違えた俺達側のミス……。見事に足を掬(すく)われたようだな』
　どうやら実際は幽神兄弟の方に軍配が上がっていたようだ
　バリーとガーラントが使用した〝ブラックウィドウ〟はアドラスやメタルの分と違い、近衛兵用の特別製
　技の強化だけでなく、肉体その物の強度も飛躍的に上がる代物だった
　しかし、幽神兄弟の攻撃はジワジワと肉体強度を
　削ぎ落としていたのだ
　顔には出さねど、そのダメージは肉体を確実に蝕(むしば)んでいた
　本来ならリアス達全員を結界に閉じ込めれば労せず討ち取れたのだが……〝ブラックウィドウ〟を寄生させた事により、慢心が生まれた
　自分達の現時点での力を誇示する為、渉達を見せしめの材料にしようと〝敢えて〟彼らを結界に閉じ込めなかった

それもその筈――多かれ少なかれリアス達は『禍の団（カオス・ブリゲード）』との交戦で力を消耗し、万全の状態ではない

〝ブラックウィドウ〟で強化し、この魔獣騒動で消耗したリアス達なら楽に屠（ほふ）れる

……そう考えた

否――考えてしまった……

ゆえに不測の事態と対面してしまい、目論みが完全に外れた……

『……情けない話だ。〝ブラックウィドウ〟によって強化されたと思っていたが、この様な欠陥を生むとは……』

痛恨の皮肉――通常ならば受け入れたくても受け入れ難い汚点だろう

それでもバリーは失態を噛み締め、眼前の敵の対処に戻る

――とは言え、『魔鬼化（アビス・ブレイク）』した正義は一筋縄にはいかない

隙を作ろうと思考を巡らせ、バリーは一瞬の賭けを打つ事にした

左腕の銃に禍々（まがまが）しきオーラをチャージしていく

正義もそれに気付いて警戒を高めるが、バリーの狙撃目標は別にあった

――銃口をアーシアに向け、弾幕射撃を開始した

思わぬ虚を突かれた正義は体が勝手に動き、アーシアを庇うように割り込んだ

全ての銃弾を蹴りで弾き返したが、コンマ1秒の遅れと行動が隙を作ってしまった

弾幕射撃に紛れてバリーの右腕――剣の凶刃が正義の心臓を刺し貫こうと迫ってくる

バリーは先程の戦いから正義の思考・行動を読み、アーシアに向けて銃弾を放った

正義が咄嗟に彼女の盾になろうとする事を予測して……

その読みは見事に的中、コンマ1秒でも隙を作れば――後はそこを全力で突くのみ

バリーの賭けは概ね当たっていた……ただ一点、正義の捨て身を読み違えていなければ……

銃弾を弾き返しても剣による刺突を避けきれないと踏んだ正義は――自らの手で凶刃を止めた

ただし、突き出した左手から肩を貫通させると言った無謀な方法で……

掌、肘、肩、左腕の全関節を貫かれ、肩口から凶刃が顔を出す

腕から脳に走り抜ける激痛、貫通箇所から滲み、噴き出てくる血

それでも正義は逃がすまいと貫かれたまま凶刃を握る

剣と同化した腕を掴まれている事でバリーには逃げる術が無い

正義は自らの足に体から噴出したオーラを纏わせる

鬼に憑かれたような右足が敵を睨み――空を走る！

「――『鬼神の蹴脚ッッ！』」

――――〝一撃必殺〟――――

まさにその言葉が相応しい蹴りだった……

空を走った鬼の蹴りは目の前の敵（バリー）を上下に分断

呼応するかの如く剣も銃も砕け散る……！

絶叫すら上げられない……一瞬の足技……

千切（ちぎ）れた上半身と下半身が地に落ち、正義がそれを見下ろす

「……アーシア・アルジェントに何をする？」

鬼の眼孔が上半身のみとなったバリーを捉え、怒気を孕んで威圧する

並々ならぬ殺意がオーラとして正義の足に転移――――バリーを殺すべく蹴り下ろされた

『……見事にしてやられたな。神風、油断するなよ……』

グシャ……ッッ！

不快な音が響くと同時にバリーの頭が踏み潰され、届かない警告を最期にバリーは絶命した

飛び散った多量の血が地面を赤く染め、ゆっくりと上がる正義の足からも返り血が滴（したた）り落ちる

「――――ッ！バリーの旦那……!?チィッ！」

舌打ちするガーラントは悪堵だけでも仕留めるべく躍起になる
全身から無数の蛇を生み出し、悪堵に仕向けた
襲い掛かってくる無数の蛇に対し、悪堵はステップを踏み始める
「兄貴が強ぇからって、俺が弱ぇとは限らねぇぜ？」
降り注いでくる巨大な蛇の群れを悉く躱していく悪堵
攻撃が1つも当たらない事にガーラントは苛立ちを募らせ、更に攻撃の勢いが増す
しかし、冷静さを欠いた者の攻撃ほど避けやすいものはない
それだけでなく、彼もまた〝正義〟の技を自分なりに会得していた……
無数の蛇を躱しつつ右腕を擦らせ、摩擦熱を帯びていく
やがて右腕は灼熱の輝きを放ち――蛇の1体を掴みに入った
ジュウウウウウウ……ッ！
肉と皮が焼け焦げる異臭
悪堵の灼熱の握力に捕まった蛇は奇声を発して悶え苦しみ、その熱はガーラント本人をも苦しめる
ブチブチッ！と悪堵は捕まえた蛇を引き千切り、ガーラントが悲鳴を上げた隙に灼熱の右腕を打ち込んだ
「――『鬼神の殴拳』オオッ！」

燃え盛る右拳がガーラントの腹部に深々と突き刺さり、その熱がガーラントの肉、皮、骨の全てを焼き尽くす

「アッヂィィィ

肉片と血を浴び、互いに背を向けた２人の鬼が空を見上げる

「「汚い雨だ」」

「……?あ～りゃりゃ。バリーとガーラントの気配が消えちゃったよ。まったく、役に立たない兵を持つと苦労しちゃうよ。まあ、良いけどね。どうせ今のグレモリー眷属じゃあ、天地がひっくり返ってもボクには勝てないからさ。キヒヒヒヒッ♪『禍の団（カオス・ブリゲード）』も冥界の連中も、『初代キング』もマヌケばっかり。正面からぶつかるとかマジでダサいっての。不意打ちでも何でも最後に勝てば良いんだよ」

「はぁ……はぁ……っ。……こいつら、しつけぇな……っ」

「こっちは急いでるってのに……！あと何匹いやがるんだ……!?」

「……何百、何千残っているなんて考えるだけ無駄だ。どの道、こいつらを蹴散らさなきゃリアス達の所に戻れやしねぇよ」

「それもそうだな……っ。こいつらをぶっ倒して……あいつを――神風の野郎もブッ飛ばすッ！あんな卑怯者に仲間を殺されてたまるかよ……ッ！」
「その通りだ。これまで散々煮え湯を飲まされてきた……そのツケを一気に払わせる……！奴の傲慢、脆弱な卑劣、策略だけで生きてきたようなヤツに思い知らせてやる……！」

新と一誠が神風の仕向けた闇人群に悪戦苦闘している中、バリーとガーラントを倒した幽神兄弟はリアス達を囲う結界の破壊を試みた
結界は術者であるバリーとガーラントを倒しても消えず、壊そうとしても壊れない
恐らく神風が事前に仕組んだ術式が作用しているのだろう
〝バリーとガーラントが殺られても消えないように〟と――
やはり結界を破壊するには神風を倒す他無い……
とりあえず正義はバリーの剣に貫かれた左腕の止血処置を受ける事に
祐希那の神器能力で傷口を凍らせ、応急措置を終える
「とりあえず、これで血は止まったわ」

正義は「そうか」と淡白に答えて背を向ける
先程の鬼神の如く戦いぶりを見てしまったリアス達は何も話す事が出来ずにいた
幽神兄弟も何も話さず、ただ黒幕が出てくるのを待つばかり……
『ねえ、祐希那』
『何よ、渉？』
『あの幽神正義さんって人、アーシアさんの事が好きなのかな？』
『ブッ！いきなり何を言い出してんの⁉』
『いや、あの人、何となく一誠さんと似てるなぁっと思って』
『どこが？』
『アーシアさんを悪く言われると凄く怒るところ』
『……』
当たっているだけに祐希那は何も言えなかった
更に２人のコソコソ話を〝実は聞こえていた〟正義も〝自分が一誠に似ている〟と言う指摘に顰めっ面となるが――――
『否定できんかもしれないな。俺がアーシアを侮辱した時、奴も同じ感情を抱いていた。そして、爆発的に強さを増した。……実に良い皮肉だ』
正義は反論もせず、ただ黙して認める

そんな他愛も無いやり取りも直ぐに終わりを迎えた
異様な気配を察知し、上空に視線を向ける面々
「あ～あっ、やっぱり殺られちゃってるよ。ん？何か知らない奴らがいるね。ま、どうでも良いけど」
空から地上に降り立ってきたのは神風一派の纏め役にして魔獣騒動の主犯格
幾度となくリアス達に猛威を振るってきた最悪の闇人（やみびと）――ビショップ神風
既に神々（こうごう）しくも禍々（まがまが）しい騎士のような風体――超魔身態（ちょうましんたい）となっており、戦闘準備万端だった
「黒幕のお出ましか」
「キヒヒッ♪そっ、ボクが黒幕で～す♪」
相変わらず悪怯（わるび）れる様子を微塵も見せない神風に、リアス達は嫌悪感を表す
神風は息絶えたバリーとガーラントの亡骸（なきがら）を見るや否や、それを踏みつけた
「ったく、何やってんだよ。このウスラバカはさぁ！」
神風は声を荒らげ、亡骸をグシャグシャに踏みつける
既に死んだ者に対して更なる追い打ち……外道の極み……
「勝手な事して死にやがって。役立たずにも程があるんだよ！だからお前らは能無しなんだよ！誰のお陰でここまで来れたと思ってんだ!!せっかく英雄派が消えたってのに、

今までの苦労が台無しじゃないか！このクズ！ゴミ！カス！能無し！虫ケラ！オケラ！死骸になっても不愉快なんだよ！アドラスもメタルも神代剣護（かみしろけんご）も――――どいつもこいつも役立たず！クズ！クズ！クズクズクズッ！クゥゥゥゥゥズッ！」

神風は左腕から雷撃の矢を幾重にも撃ち出して、亡骸を焼き払う

鬼畜以下の悪逆非道ぶりに誰もが嫌悪を通り越し、リアスがいの一番に猛抗議した

「いい加減にしなさいっ！いったい何処まで外道なの……⁉自分の仲間をそこまで侮辱して……その上焼き払うなんて……っ！鬼畜以下の外道だわ！自分の仲間に……どうしてそんな事が出来るのよっ⁉」

リアスの怒号を聞いた神風はおかしそうに笑うだけだった

「キヒャヒャヒャヒャヒャ♪んなもん決まってんでしょお？仲間だと思ってないからだよ！所詮あいつらは使い捨ての道具！オモチャさ！オモチャが壊れたらどうするの？捨てるに決まってんだろッ！そんな事も分からないんですかぁ～？ボランティア精神にまみれた偽善者のお姉さん♪世の中には２種類の生き方が存在するの。１つは他人を利用する生き方、もう１つは奴隷みたいに利用される生き方。ボクはねぇ……利用されたくないから利用する生き方を選んだんだよ！この世の中、常に利用する側が勝ち組だと知ったからこそ、仲間なんてものはいらないのさッ！要するに勝てば官軍！どんな手段を使っても、どんだけ道具を使い捨てても勝てば良いんだ！それが地獄を見てきた

ボクが見つけた唯一の答えなんだよッ！信じられるのは自分だけ！たとえ親だろうが何だろうが、使えないとか怖いとか分かったら簡単に見捨てる！切り捨てる！ボクはそんな扱いを受けて生きてきたんだよッ！」

先程とは一変、狂気に満ちた表情で叫ぶ神風

いつもとは違った様子の神風にリアス達は気圧(けお)されてしまう……

息を切らす神風だが、再びいつもの嫌味を孕んだ哄笑を上げる

「温室育ちの坊っちゃん嬢ちゃんには想像もつかないだろうね。世の中の醜(みにく)さ、浅ましさは。ボクの大好きなお菓子みたいに甘くないし、キミ達が思っている以上にドス黒く薄汚いんだよ。おバカなキミ達の為に教えてあげようかな？――――面白おかしい話をね」

……遥か昔、とある村で1人の男の子が産まれた

産まれた子は普通の子と違う点があった

それは――――人並み外れた知能を持っていた事

幼少の頃から好奇心旺盛、知識欲に溢れ、物作りに精通してきた

鍬(くわ)や鎌などの農具から始まり、椅子や机などの家具を自作

〝興味を持てば〟、〝作りたい〟と思ったら即座に行動した

材料は廃棄寸前の木材や鉄屑、果ては古くなった家電品から部品を拝借してきた

両親は子供の並外れた物作りの才能に目を付け、生活に必要な物を作ってもらうよう頼んだ
子供は両親の言う事を素直に聞き、言われた通りの物を作った
当人にとって物作りは楽しい遊びだった
その〝遊び〟で作った物がパパとママを喜ばせる
子供は褒められるのが嬉しくて、物作りに一層励んだ
やがて８歳を迎えた頃、子供の物作りの才能は村中に知れ渡った
村の人々も必要な物を作ってもらうよう頼み込んでくるようになり、子供は言われるがまま作った
両親と同じく人々は子供に感謝、次第にはそれが資金源にもなった
――〝ボクの作った物がパパとママを、村の人達を喜ばせている〟――
それが堪らなく嬉しかった子供は作り続けた
ある日、放浪してきたと思われる老人が〝ある事〟を村に教えてくれた
――〝明後日（みょうごにち）、この村に山賊がやって来る。用心しなさい〟――
老人はそう告げて去っていき、村の人々は不安に駆られてしまう
人々も両親も山賊の存在に怯え、他の村に移り住む事を考えた
山賊の話を聞いた子供は持ち前の頭脳を活かし、山賊を撃退する策を単独で考えた

まずは武器の製作に取り掛かった
1番手っ取り早いのは弓矢――しかし、普通の弓矢では太刀打ちできないと考えた
子供は恐ろしい事を思い付いた
機関銃の如く連射できる弓矢を開発、鏃(やじり)には有毒植物から抽出した毒を塗り付けた
子供は短期間で連射式の弓矢――即(すなわ)ちボーガンを完成させてしまい、山賊が来る日を待った
そして、とうとう村に山賊が現れ、村の人々に金品や食料を渡せと要求してきた
子供は隠れながら射程距離を計り、自作したボーガンを山賊に向ける
震える指で引き金を引き、毒矢が幾重にも山賊の体に突き刺さった
頭に突き刺さった者、目に突き刺さった者は即死
急所を外れた山賊もいたが……鏃に塗られた毒によって命を落とす
残った1人も足を射られたせいでまともに動けず、子供は好機とばかりに飛び出し――トドメの矢を撃ち込んだ
……これが初めての殺人である
山賊を倒した事に子供は無邪気に喜び、〝これでパパとママも、村の人達も褒めてくれる〟とはしゃいだ
しかし、子供に向けられたのは感謝ではなく――畏怖の視線だった

〝人を殺す道具まで作った〟
〝人を殺したのにはしゃぎ回っている〟
〝悪魔の知恵を持った化け物だ〟
村の人々がその子供に恐怖し、蔑(さげす)み、嫌悪し、石を投げた
子供は理解できなかった……
〝どうしてボクに石を投げてくるの？〟
〝どうしてボクを褒めてくれないの？〟
〝どうしてパパとママもボクを怖がってるの？〟
〝どうしてパパとママはボクを化け物って呼ぶの？〟
〝どうして皆がボクを追い出そうとするの？〟
どうして……？どうして……？どうして……？
ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？
ネエ……ドウシテ……？
村を追い出された子供は尽きない疑問を口ずさみながら彷徨(さまよ)った
着いた先はゴミ溜め……生ゴミや木屑(きくず)、鉄屑(てつくず)が転がり、辺り一帯に虫が沸いて出てく

る

悪臭も酷く、普通の人間なら直ぐにでも逃げ出す劣悪極まりない環境……

だが、行く宛も帰る宛も無い子供はそこに住み着くしかなかった

汚水や泥水を啜(すす)り、腐った食物を貪(むさぼ)って飢えを凌ぐ毎日……

廃材で小屋を作り、退屈しのぎに鉄屑で物作り

誰にも頼らず、誰も近寄らない場所での生活を何年も続けた……

月日が流れ、子供に転機が訪れる

自分とは違った異形の化け物が目の前に現れた

子供はもう喰い殺されても良いと諦めていた……

しかし、異形の化け物は子供に語りかける

『実に良い卑屈な目をしておる。己以外の物を信じない濁り腐った目だ。人間でありながら、化け物と同じ目付き。早々に出来るものではない』

異形の化け物が子供の頭に手らしき物を乗せる

『貴様のような者にこそ相応しい道が存在する。問うぞ、小僧。――憎いか？怨めしいか？悔しいか？己を認めぬ輩(やから)が、この世の全てが』

異形の化け物が手から黒い塊――闇を生み出す

『滅ぼしたいものがあるなら、復讐する力を欲するなら――これを喰え。喰って人間

を捨てろ。我らと同じ闇人(やみびと)となりて、この世の全てを喰らい滅するが良い』

異形の化け物が手から出した闇を子供の目の前に突きつける

子供はその闇をジッと見つめ……勢い良く貪(むさぼ)った

殺したい奴……？

ソ　ン　ナ　ノ　ヤ　マ　ホ　ド　イ　ル……ッ！

復讐する力……？

ホ　シ　イ　ニ　キ　マ　ッ　テ　ル……ッ！

ボクは……ボクは……バ　ケ　モ　ノ　ト　ヨ　バ　レ　タ……ッ！

だったら……ダッタラ……ホ　ン　ト　ウ　ノ　バ　ケ　モ　ノ　ニ　ナ　ッ　テ　ヤ　ル……ッ！

闇を喰らった子供の眼が妖しく輝く

『……問うのは野暮だったようだな。気に入ったぞ、小僧。余は闇人(やみびと)の王にして絶対の闇――バジュラ・バロム。貴様の名を聞こうか』

ボクのナマエ……

ボクのナマエは……

〝神(じん)宮(ぐう)〟〝風(ふう)〟太(た)

「こうして、自ら化け物になった子供は自分を捨てた村の連中を残らず皆殺しにしちゃいました♪めでたしめでたしい～☆どう？面白かったでしょお？パパとママも例外なく殺した子供は面白おかしく実験を続けて、今もあらゆる生き物を殺し回ってま～すっ！」

嬉々として語った神風

リアスはその話の全貌を聞いて得心した

「それじゃあ、その子供と言うのは……！」

「キヒッ♪分かっちゃった？そぉでぇすっ。その子供は人間時代の名前を捨てて、改名しました。――――〝神宮風太〟から〝神風〟にね……ッ。お姉さんが察した通り――――ボクは人間から転生した闇人だったのさ……ッ！」

驚愕の事実が発覚……！

神風は元々人間だった

そして、『初代キング』バジュラに遭遇した事で自ら闇人に堕ちた

しかも、持ち前の頭脳と無邪気な残虐性は生来のものだった……

誰もが言葉を失う中、神風は未だに哄笑を上げ続ける

「お陰でボクは世の中の理不尽と仕組みを理解したと同時に、強大な力を手に入れた！『初代キング』はボクを手足のように使おうと考えてたみたいだけど、そんなの真っ平ゴメンだね！ボクは今までが酷すぎた！散々利用された挙げ句に捨てられるなんざ、もう金輪際味わいたくないね！だから、今度はボクが奴らを利用するのさ！その為に研究・実験・強化を続けて、ここまで上り詰めたんだ！『初代キング』が殺られた今、ようやく千載一遇の大チャンスが巡ってきた！キミ達をぶっ殺して、冥界と三大勢力に大打撃を与える！そして、未だに隠遁している闇人も纏める！そうすれば――今度はボクがキングッ！『３代目キング』に就任ってわけさぁっ！キィィィィヒャヒャヒャ

キィィィヒャヒャヒャ

「ププーッ！ナニソレ？結局ビビってるだけじゃんか！それを棚に上げといて偉そうに言うなっつーの！」
「勘違いするな。貴様を倒すのは俺の役目ではない」
「は？」
　正義が遠くの空を見上げる
「貴様を倒したいと思ってる赤龍帝（ヤツ）がもうすぐ現れる。俺はそいつに出番を譲るだけだ」
　正義の視界の先に小さな豆粒のような人影が映り込む
　それがどんどん近付いてくる……
　赤い閃光と共に見えてくる２人のヒーロー
　たとえ傷だらけでボロボロになっても、体中から血を流していても駆け付けてくるヒーロー
　冥界を巻き込む騒動を引き起こした黒幕の眼前に――闇皇（アラタ）と赤龍帝（イッセー）が参上した
　神風にとってはあまりにも面白くない現状……
「……あ～あっ、やっぱ最後の最後までキミ達が邪魔してくるんだね。ホンッットに何処までもムカつく――クソッタレなヴァカだよねェェェ

憤怒と憎悪を撒き散らす神風に対し、新と一誠は共に拳を向けて言い放つ

「「決着をつけるぞ、このクソ野郎ッッ！」」

魔獣騒動決着！闇皇＆赤龍帝ＶＳ神風

「メインイベンターの登場だ。俺達は先に引き上げさせてもらおう。行くぞ、相棒」
新と一誠の登場を確認した幽神正義は弟の悪堵を連れて、その場から去ろうとする
「待ってくれ、幽神！」
正義を呼び止めたのは一誠だった
「何だ？」と簡素に返事する正義
「……お前がアーシアを、皆を守ってくれたんだよな？」
「……単なる気紛れだ」
正義は素っ気なく答えて悪堵と共に去っていった
素直じゃない答え方だが、幽神兄弟がグレモリー眷属を守ったのは事実
一誠は気を引き締め直して神風の方に集中する
『とは言ったものの、正直キツいよな……。こっちは２人ともダメージと疲労が溜まってる』
その通り……新と一誠は神風が仕向けた闇人（やみびと）の軍勢に足止めされ、ここまで強行突破してきたのだ

曹操との戦いが終わった直後に闇人軍の追い打ち、疲労は必至である
対して神風はノーダメージ、そこから導き出される答えは単純明快だった
『……一誠、長期戦で行けば詰まれる。短期戦で一気に勝負を仕掛けるしかない』
『寧(むし)ろ、そっちの方が分かりやすい。頭を使った戦略はもうゴメンだ。残った全力で神風をぶっ倒す――ただそれだけだ！』
『……ああ、その通りだ』
アイコンタクトで意思を伝えた2人に対し、神風は憎悪のオーラを解き放っていた
「決着をつけるとかさぁぁぁ……っ。それ本気で言ってるワケェ？んなの無理無理っ、分かんないのかなぁ？キミ達はさっきまで『禍の団(カオス・ブリゲード)』のクソ英雄くんと戦ってぇ、更にボクがけしかけた兵隊どもと戦ってボロボロだっつーの！全身傷だらけの血だらけ、魔力もカラッポ寸前、そんな体でノーダメージ状態のボクに勝てるとでも思ってんの!!無理に決まってんだろ！ホンット感情論精神論だけで突っ走る単細胞な能無しは大っ嫌いなんだよっ！万に1つどころか、億に1つもお前らに勝ち目なんかねぇんだよッ！だからさぁ、いい加減にいいい――」
神風の左腕にバチバチと雷が迸(ほとばし)り、1本の極大な矢を生み出す
矢の先端を新と一誠に向け、憎悪に塗(まみ)れた一言と共に解き放った
「――死んじまえェェェ

神風が撃ち出した雷の矢は――――即座に無数に分裂し、四方八方から降り注ぐ
真『女王』状態と言えど、疲弊しきっている新と一誠
それでも目の前にいる魔獣騒動の黒幕を放置しておくわけにはいかない
新と一誠は痛む体に鞭を打ち、雷の矢を回避していく
……と言っても、疲弊した状態では完全に躱し切れるわけがなく、度々手や足に被弾してしまう
更に神風も背中や両足から火を噴かせ、目にも止まらぬ速度で何度も斬りつけてくる
雷の矢の豪雨に神風の高速剣戟
それでも新と一誠は怯まず立ち向かっていった
新が背中に漆黒の巨腕を6本出現させ、降り注いでくる雷の矢を撃ち落とす
幾重にも放った漆黒の波動が次々と爆発を生み、神風の移動先を徐々に狭めていく
『Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!』
そこへ一誠がトリアイナ版『騎士』の能力で素早く距離を詰め、瞬時にトリアイナ版『戦車』の腕を形成
『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ
Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!』
肥大化した拳で神風に殴りかかり、肘の撃鉄を打ち鳴らして威力を底上げする

一誠の一撃をくらった神風は後方に飛ばされながらも体勢を立て直し、自身の周りに雷の球体を幾重にも出現させる
その球体は形を歪ませ、次第に怪物の姿へと変貌していく
ゴツいトゲに覆われた獣、口からドリル状の舌を生やした獣、鋭い牙が生え揃った獣と様々なタイプの怪物が新と一誠を睨み付ける
「ウザってぇんだよぉっ！カスどもがァァァァァァァァァァァァァッ！」
怒号を放つ神風は両翼から雷を幾重にも放出
その雷は意思を持ったかの如くうねり、鋭利な形となった
神風が右手を突きだしたのを合図に、雷獣（らいじゅう）の群れと幾重もの雷が２人に襲い掛かる
一誠はトリアイナ版『戦車（ルーク）』の両腕で防御を固めるが……雷獣の群れの突進に押され、装甲が砕かれてしまう
更に雷の凶刃（きょうじん）が伸びてきて、新と一誠を切り刻んでいく
新は魔力を流した剣で雷の刃を切り払い、一誠も散弾式のドラゴンショットで雷獣の群れを消し去るが――――神風は既に次の攻撃を整えていた
禍々（まがまが）しい牙が生え揃った胴体状の口が開き、そこからまた雷の魔獣が解き放たれた
ただし、今度のは３つの首を持った異常なまでに巨大な魔獣だった……
凄まじい咆哮を上げて襲い掛かってくる３つ首の雷獣

新は右手に黒い炎を集めて火竜を形成し、一誠は両翼から砲口を展開した

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!!』

大口を開け、牙をむき出しにして襲い掛かる雷の魔獣

新と一誠は同時に砲撃を放った

「「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」」

『Ｆａｎｇ（ファング） Ｂｌａｓｔ（ブラスト） Ｂｏｏｓｔｅｒ（ブースター）!!!!』

黒い火竜と赤い砲撃が一直線に飛び出し、神風の雷獣と衝突

極大の閃光と火花を迸（ほとばし）らせ、周囲の地を破壊していく

新と一誠の二重砲撃は神風が放った雷獣の頭を貫（つらぬ）いた

……だが……貫いたのは〝３つの首〟の内の〝２つ〟……っ！

雷の魔獣は残された１つの首を糧（かて）に進行を続け、２人の眼前まで迫った……！

そして、極大の稲光（いなびかり）と共に苛烈な爆発、膨大な爆風と衝撃波が巻き起こる

受け入れるようにその爆風を浴びる神風

「はいっ、赤龍帝（せきりゅうてい）と闇皇（やみおう）――――終了（シューリョー）～♪」

愉悦に浸りきった声音を発し、哄笑する

結界の中に閉じ込められたリアス達には目の前の光景を見る事しか出来なかった

大きな絶望がのし掛かる中、次第に爆煙(ばくえん)が晴れてくる
神風は勝利確定とばかりにリアス達の方を向こうとした――その時……
〝ゾクッ……〟
神風の背中に嫌な感覚が走った
背中に突き刺さる視線、気配
〝まさか……〟
〝そんな筈は無いよね……？〟
とても信じられないような考えを振り払おうとするが、頭にかじり付いた考えが離れてくれない
恐々としながら後ろを振り向く……
その視線の先に――赤龍帝(イッセー)と闇皇(アラタ)がいた
鎧は大きく破損、体中から血を流しているにもかかわらず……瞳に宿る戦意の炎は一切薄れていなかった
あり得ない事態が起きた事に神風から余裕の気配が消え、遂には震えまで生じてきた
「……ねえ、ナニコレ？あり得ないんだけど……？おかしいよね……っ？始まる前から傷だらけなんだよ、あいつら……？なのにさぁ、なんで立ってられるわけ……？いやいやいや、どう考えてもおかしいって……。回復も再生もしてないのに、あの攻撃をまと

もにくらって、立てるわけないじゃん……っ。ねえ、何の冗談……？」
自分の目の前にいるのは明らかに死に体寸前とも言える状態の２人
そんな２人に自分がビビっている……怯んでいる……戦慄している……っ
無意識に後ずさる足、冷や汗が噴き出る背中
今まで見た事が無い人種に神風は恐怖と疑問の念を抑えきれなかった
「なんで……ねえ、なんで……⁉なんでお前らはボクを真っ直ぐ見据えてくるの……⁉なんで血をドボドボ流しているのに倒れないの……⁉なんでお前らの目は死んでないの……⁉ねえ、ねえ……っ、なんでだよ……っ⁉――――なんでなんだよォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ⁉」
絶叫と共に神風は左腕から再び雷の矢を幾重にも撃ち放った
迫り来る雷の矢に対し、まず新が剣に右手から生み出した火竜を纏わせ――――雷の矢を切り払う
取りこぼした雷の矢は一誠がドラゴンショットで打ち消す
一瞬で雷撃を打ち消した新と一誠は神風に向かって言う
「……お前には分からねぇだろうな、神風。今まで計画と計算でしか生きた事がねぇから。不条理な活力にビビっちまう」
「それに俺も新も、今まで仲間と共に戦って、生きてきた。てめえは……誰かを利用する

しか能が無いから、いざって時に弱さが出てくる。世の中にはなぁ、てめえの計算じゃ計れねぇパワーがあるんだよ……」

新と一誠の言葉に神風は声を荒らげた

「仲間と共に生きてきた……？誰かを利用するしか能が無いい……？仲間なんてモノが何処にあるんだよ⁉所詮それは他人でしかないじゃんか！見ず知らずの他人を仲間と呼べるわけないだろッ！他人なんて、利用するだけの存在じゃねぇか！他人なんか信じたって、結局裏切られるのがオチなんだよっ！……だって、そうだろっ⁉キミ達だってグレモリーのお姉さんに、眷属に、冥界に利用されてるだけかもしれないんだよ⁉なんで手放しに他人を信用できるんだよ⁉そんなのバカ丸出しじゃないかっ！……なあ、そんなモノ捨てろよ……っ。信頼とか、仲間とか、根拠の無いモノを信じるなよ……っ。そんなモノあったって、何の得にもなりゃしない……っ。だからぁ……切れよ……っ。切り捨てろよ……っ。――――そんなもんはクソの役にも立たねぇんだよ……ッッ！」

必死とも取れる神風の言葉

それを聞いた新と一誠は揃えて一蹴した

「「……可哀想な奴だな、お前って」」

その言葉を聞いた瞬間、神風は怒りと疑問の声音を上げる

「……はぁ……っ？可哀相……っ？ボクが……っ？」

「……ああ。何が遭ったのか知らねぇけど、お前には心の底から信じきれる仲間（ヤツ）がいないから、自分以外の奴を信じる事が出来ないから――利用するって手段しか思い付かなくなっちまったんだろうな……」

新が真っ直ぐな目で神風を見据える

「独りでいれば、さぞかし楽だろう。気を遣わずに済むだろう。けどな……その分、哀しみも苦しみも全部自分にのし掛かってくるんだよ……。その重圧は独りじゃ決して耐えられない――いずれは押し潰されていく……。今のお前みたいにな……」

「今のボクみたいに……？負け惜しみ言わないでくれるかな⁉今のボクの何処にそんな不安要素があるって言うのさ⁉ボクは今や最強の闇人（やみびと）だ！『初代キング』が消えたって、他の駒がいなくたって、ボクは勝てる！キミ達みたいなゾンビの成り損ないに負けるわけがない！ボクの方が圧倒的に有利！そこにいる誰もがボクに勝つ事なんて出来ないッ！そう、ボクは強いんだ！最強なんだッ！」

神風は必死に反論するが、一誠も真っ直ぐな目で見据えてくる

「……確かにお前は強いよ。独りになったってのに、これだけの力を持ってんだ……。羨ましいよ……。――でもなぁ、今が強くても、お前は今より強くなれねぇと思うんだ」

「……はぁ……っ？」

「一緒にいてくれる仲間がいるから頑張れる。一緒に戦ってくれる仲間がいるから、そいつらの為に戦える。そういう気持ちとか、想いとか、色んなものが混ざり合って――――強くなれた時の実感が得られるってもんじゃねぇのか？けどよ……今のお前には何がある？散々他人を利用してきただけのお前には何が残ってる？――――何も残ってねえじゃねぇか」

一誠の言葉に神風は何も返せなかった……

常に誰かを利用し、捨て駒にし、自分以外の誰も信じなかった神風

そんな人物の周りには……何も無い……

信頼も、絆も、仲間も、何も無いカラッポな周り……

神風はワナワナと震えを抑えられず激昂した

「黙れ……黙れぇ……っ。黙れダマレだまれ黙れ黙れダマレだまれ黙れダマレだまれ黙れッッ！黙れェェェ

な感情論精神論で突っ走って生きてるだけのお前らに何が出来るッ⁉」
雷の魔獣の咆哮が近付いてくる……
それでも新と一誠は全く怯む様子を見せない
新は1歩前に出た
「仲間がいたから、仲間といれたから、俺も一誠もこれまで以上に強くなれた。俺達の人生が――――俺達の強さの象徴と証明だッ！それをテメェに叩き込んでやるッ！」
新は再度背中から漆黒の巨腕を展開し、迫ってきた雷の魔獣を正面から受け止める
魔獣から迸る雷をその身に浴びるが、それでも戦意を消さない
「……俺はこの力が怖かった……。呪われた竜の力を持つ俺自身を恐れた……。いつか喰われるんじゃないかってビビってた……。けど、今はもう恐れない！一誠が、リアスが、朱乃が、皆が俺を迎え入れてくれた！暗闇の底から引き上げてくれる仲間がいる！だから、俺は――――遠慮なく、この力を振るえるッ！」
ギュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ッ！
不気味な音が新の口から発せられた刹那、驚きの光景が目に入る
――――〝先程の雷獣が揺らぎ、喰われていく〟――――
そう、新は『初代キング』の時と同じように神風の雷を喰らおうとしていた
信じられない光景に度肝を抜かれる神風

雷の魔獣は徐々に体積を無くしていき、遂にはその全てが新の口へと吸い込まれていった
ゴキュッと喉を鳴らすと、新の体に異変が生じる
まずは全身から黒い火竜のオーラが滲み出し、そこから更にバチバチと雷が走る
噴き出す炎、迸る雷
異なる2つの属性が混ざり合ったオーラを発する新は再び神風を見据えた
「ここからは俺の……いや――俺達のターンだッッ！」
「何処ぞの星を護る天使にでもなったつもりか！このクソがァァァァァァァァァァァッ！」
怒り狂う神風は再び雷の魔獣達を解き放つ
縦横無尽に飛び交い、新を喰い殺そうとする
しかし、新は目にも止まらぬ速さで雷の魔獣達を翻弄
迸る雷と共に消えては現れ、消えては現れを繰り返す
そして、空を切るような音を皮切りに――雷の魔獣達は両断され、霧散していった
神風が左腕から雷の矢を放とうと構えた刹那、新は瞬時に距離を詰めた
「な……っ⁉」
仰天する神風を前に、新は両の拳に火竜を纏わせ――神風のアゴを打ち抜いた

次に新は足にも火竜のオーラを流し、神風の脳天目掛けて蹴りをくらわせる
大きく鈍い音を響かせる強烈な打撃
しかし、それだけでは終わらなかった……！
新の打撃でよろめいた神風に強大な雷が襲い掛かっていった
「アギャァァァァァァァガガガガガガガガガガガガガガッッ！」
火竜を纏わせた強烈な打撃、その直後に雷の追撃
新はリュオーガ族に伝わる〝竜の呼吸法〟を会得し、神風の雷を取り込んでしまったのだ
新の猛攻は止まらない……神風の腹に火竜を纏わせた拳打を繰り出し、蹴りを繰り出し、乱撃乱舞を次々とくらわせていく
その都度、火竜から発せられる雷撃が神風を痛めつける
リアス達は新の猛攻ぶりにただ一言、〝凄い……〟としか言えなかった
「俺だって……俺だって負けてられるかァァァァァァァァァァッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!!』
新の攻勢に当てられた一誠も気合いを入れて吼え、籠手から何度も音声を響かせる
吹き飛ばされてきた神風に拳を構え、左手を肥大化させる

「ギィィィィィッ！調子に乗るんじゃねぇエェェェ

「――――ッッ⁉もう片方の腕にも撃鉄……⁉バカな！だって、その技は単発式の筈――――」

「言っただろう？俺達はこれまで以上に強くなれたって！赤龍帝（俺）と闇皇（アラタ）を――――舐めんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

吼える一誠は撃鉄を何度も打ち鳴らし、神風の刃を拳打で押し戻していく

極大の打撃が何度も何度も繰り出され、遂には神風が出した雷の刀身を砕いた

砕け散ったのを機に、一誠は神風に肥大化した拳の乱打を撃ち込む

１発だけでも強力なソリッドインパクト

それが連続で繰り出され、神風の体に深々と突き刺さる……！

あまりの威力に神風の体はどんどん歪んでいき、装甲も端々から剥がれ落ちていく

ドゴンッッ！と１番大きな音を叩き出し、神風は後方に吹き飛ばされ、激突したビルを倒壊させる

クリティカルヒットを決めた一誠の拳が元のサイズに戻り、ゼェゼェと息を切らす

「この土壇場でまさかの新技（しんわざ）かよ……」

「お前だってヒトの事を言えないだろ……」

「しっかし、ありゃどう見てもオーバーキルだな」

「へへっ、差し詰めソリッドインパクトの強化版――――クリムゾンインパクトってとこ

ろだ」
新しく発現した技のネームを決めた一誠
クリムゾンブラスターと並ぶ決め技のようだ
だが、まだ勝負は終わっていない……
倒壊したビルを払い除けた神風は怒号と共に雷のオーラを爆発させる
「ふ、ざ、け、る、なァァァァァァァァァァァッ！……ボクは……ボクは負けないッッ！負ける筈が無いんだッッ！やっと、やっとクソみたいな人生から脱却できたのに、またゴミ溜めみたいな生活に戻されるなんて嫌だッッ！許さないッッ！許さないッッ！ボクの邪魔をする奴はッッ！ボクのハッピーライフを壊そうとする奴らはッッ！――――絶対ブチ殺すッッ！殺してコロシテころして殺してコロシテころして殺してコロシテころして殺してコロシテころして殺してエッ！殺してやるァァァァァァァァァァァッ！」
もはや激情に取り憑かれた神風
周囲に巨大な雷の魔獣達を具現化し、背中の両翼と胴体上の口に全ての力を注ぎ込む
大気と地が震える程の質量を集め、最後の砲撃準備を整えてきた
この一撃で何もかも消し飛ばすつもりだろう……
新と一誠も迎撃の準備に取り掛かった
一誠は再びクリムゾンブラスターの砲身を出現させ、赤いオーラを集める

新は大きく裂けた口元に炎と雷のオーラを集めていく
螺旋状に描かれる炎と雷、そして赤いオーラ
新と一誠も最後の砲撃を整えた
「決めるぞ、一誠！」
「ああ！これで終わりにしよう！神風（あいつ）の野望ごと消し飛ばそうッ！」
「死に腐れェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッ！」
神風の絶叫が引き金となり、巨大な雷の魔獣達と超極大の雷撃が解き放たれた……！
新と一誠も決死の覚悟で撃ち放つ……！
「――――『雷炎竜の咆哮（ライトニング・ブラスト）』オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
「クリムゾンブラスタァァァ

……ボクだけが！こんな目に遭わなきゃいけないんだァァァ

「……勝った……っ。俺達、勝ったんだ……！ヤッッタァァァ

『……お前の体を再生するのに俺は色々と使い過ぎてしまった……もうじき、意識を失う……』

「……な、なんだよ、そりゃ！どういう事だよ！なんで話してくれなかった⁉」

『……安心しろ……俺がいなくても赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）が機能するようにはしておいてやる。……だから……最後に良い戦いが見られて……良かったよ……』

ドライグの声がどんどんかすれ、小さく弱くなっていく

「待ってくれよ！……俺、まだ……お前がいなきゃ何も出来ねぇよっ！」

『出来るさ……お前には……仲間が……る……。……俺はもう必要……ない……さ』

既に声が所々（ところどころ）聞こえなくなってきている

一誠は涙が止まらなかった

ボロボロと流れ、鼻水も出てくる

それでも脳裏に次々と蘇（よみがえ）るドライグとの思い出が溢れて、どうしようもなかった

ドライグは最後にハッキリとした口調で言った

『俺の相棒――――イッセー、ありがとう。楽しかったぞ……――――』

「ドライグ……？なあ……返事をしてくれよ……なあ、相棒……」

問いかけても返事をしない宝玉

〝もう、喋ってくれないのかよ……？〟などと思っていた一誠の耳に入ってきたのは

『……グゴゴゴゴ』というイビキだった
「……あれ？い、いびき？ね、寝てる……？」
「ドライグ、次元の狭間と今の戦いで力使って疲れた。寝てる」
一誠の籠手にそっと触れてくるのはオーフィス
「……オーフィス？って、ドライグは寝てるだけなの⁉ドライグ！……バカ野郎……ッ！バカ野郎……っ！」
一誠は籠手を抱きながら泣くしかなかった
仲間達の気配がどんどん近付き、戦いと長く険しかった試験がようやく終わりを迎えた
「帰ろうぜ、オーフィス。今度こそ――皆で」
「我、赤龍帝の家に帰る」
オーフィスが浮かべていたのは可愛らしい笑顔だった
――〝やっと戦いが終わった〟――
喜ばしい現状を噛み締め、駆け寄ってくるリアス達の歓声を浴びながら暫く安堵に浸る２人だった――が、万事良く決めたところで一誠はとある事を思い出してしまう
「……あ、学校の中間テスト、どうしよう……」

「……もう、そっちは死亡確定で良いんじゃね……？」

そこで一誠は絶望し、新は悟りを開いたような声音で言った

魔獣騒動後日談

『豪獣鬼(バンダースナッチ)』と『超獣鬼(ジャバウォック)』の殲滅に成功した事がアザゼルのもとに届いたのを切っ掛けに、冥府の緊張状態も収束の方向に向かいつつあった

アザゼル曰(いわ)く、ハーデスとの睨み合いは吐き気しか出てこないらしい

勝利の報告を知ったサーゼクスも滅びの魔力を消して、元の姿に戻っている

この1件に乗じた旧魔王派のテロ、闇人(やみびと)の奇襲もほぼ鎮圧しつつある

最悪の結果だけは免(まぬが)れたようだ

ヴァーリチームはその報告を受ける前に颯爽と退散、闇人の『2代目キング』こと大牙も仲間を連れて退散していった

アザゼルが呼んだ刃　狗(スラッシュ・ドッグ)　退散させており、少なくともハーデスを消滅させるような事態にならずに済んだ

ハーデスに文句と警告だけ述べて帰り支度しようとした時、死神(グリム・リッパー)が1名ハーデスに報告する

≪ハーデスさま、神殿内の死神の大多数が……凍り漬けにされております≫

≪……貴様の仕業か、ジョーカー≫

ハーデスが眼孔を危険な色に輝かせる
とうのデュリオは溜め息をつきながら自身の肩を揉んでいた
「まあ、これぐらいはしないとミカエルさまに怒られてしまうんで。怪しそうな気配の死神さんだけ凍らせちゃおうと思ったんスけどね。めんどいんで、神殿内にいるのは出来るだけ凍らせてみましたよ。すんません、手癖がクソ悪いんスよ。どーも、アーメン」
飄々とした態度と軽口だが、天界の切り札と言われているだけあって強さは折り紙付き
彼が操る神滅具(ロンギヌス)――『煌天雷獄(ゼニス・テンペスト)』は天候を操り、あらゆる属性をも支配できる上位神滅具(ロンギヌス)
使い方次第では臨機応変に対応が出来る
何はともあれ、ハーデスの横槍を未然に防いだ
「ま、サマエルの件はおいおい追及させてもらうぜ? 何せ、英雄派の正規メンバーを生きて捕縛したからよ」
アザゼルの宣告にハーデスは何も答えなかったが、去り際にサーゼクスが口を開く
「ハーデス殿、これで失礼致します。今回は突然の訪問、まことに申し訳なかった」
サーゼクスは丁寧に非礼を詫びた後、強烈なプレッシャーを放って告げる
「それでも敢えて言わせていただく。――2度めは無い。次はあなたを消滅させる」

それを受けてハーデスは楽しげに笑いを漏らした
≪ファファファ、良い目をしよるわ。ああ、よく覚えておこう≫
「ま、俺もここに来るのは2度とゴメンだ」

冥界と冥府を繋ぐゲートに辿り着いたところで、サーゼクスが改まった顔をしてアザゼルを呼ぶ
「アザゼル」
「何だよ。改まって」
「私は最近常々思う事がある。私やアジュカのような魔王の時代は終わりが近いのかもしれない――と」
アザゼルが黙って聞いているとサーゼクスは続ける
「私達が魔王になれた最大の理由は『力』だ」
魔王の血筋以外から生まれてしまった強大な力を有した特異な悪魔――それが現四大魔王
三大勢力が争った大戦の終結以降、そのような悪魔が何名か誕生した

サーゼクスは拳を握りながら悲しげな表情を浮かべる
「どれだけ強くとも『個』の力では、覆せないものがある。反発するものを生み出してしまう」
現政府は力で旧政府を打倒して冥界を変えた
その先頭に立ったのがサーゼクスや現四大魔王などの強力な悪魔だった
その結果、追いやられた悪魔達はサーゼクスの力を妬み、呪った
今に至るクーデターの単純明快に砕いた理由である
「だが、アザゼル。『個』の力とは違う、大きなものがある。それが今の悪魔の世界にあるのだ」
「それは何だよ？」
「それは『輪』の力だ。我が妹リアスと義弟アラタくん、イッセーくんはそれを持って生まれてきた。たとえ『個』の力に限度があろうとも己の周りに集まる力――『輪』によって、力と絆を確かなものとする。その結果、どのような限界、壁をも突き崩して成長していく。リアス達だけではないな。滅びを持てなかったサイラオーグも夢を抱き、信念を貫く事で信頼する仲間を得ている。それもまた『輪』だろう」
「――なるほど、『輪』か。サーゼクス、イッセーと新は遂にオーフィスまで引き込んだ。闇人も中枢勢力がこちら側に傾いていると言っても良い。――もう、いろんなも

のがあいつらを無視できないだろう」
「うむ。それは『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』を超越したヴァーリにも言える事だろう。――『無限の龍神』と二天龍、そこに集う龍王達。そして呪われた竜の一族の末裔。――やはり、この世界の流れを、力の奔流を動かすのはドラゴンとなるか」
ドラゴンは力の塊
そして、人間もドラゴンを力の象徴として古（いにしえ）より崇めてきた
どうやっても強いドラゴンは強者を引き寄せてしまうのかもしれない……
「あ、じゃあ、俺はここで帰ります。ミカエルさまに報告する事があるので」
ジョーカー・デュリオは天使の翼を羽ばたかせて、簡素にアザゼル達へ別れの挨拶を告げる
「では、どうも。今日は楽しかったです。――『輪』！」
頭の上で両手で丸サインしながら飛んでいくデュリオ
案外お茶目なところもあるようだ……
去っていくデュリオを眺めながらアザゼルは息を吐いた
「さーて、俺も再就職口を見つけないとな」
アザゼルの言葉を聞いてサーゼクスは目を細めた
「……やはり、そうなるか」

「ああ、オーフィスや『初代クイーン』を独断でイッセー達に会わせたのはどう考えても免職を免れない事柄だ。俺は――総督を降りる」
各勢力に黙ってオーフィスと『初代クイーン』をリアス達に会わせた事は、どう見繕っても条約違反
糾弾されるのは必然だった
「それにうちの組織の異分子――奴らに手を貸していた連中も大方締め上げたしな」
アザゼルの組織内の裏切り者はヴァーリの他、中間管理職に位置する者達だった
特に上位クラスの堕天使の一部がかなり情報を横流しにしていたらしい
既にその者達の身柄を確保して裁くところまで話は進んでいるが、逃げた者もいる
「……俺の組織も潮時かね」
アザゼルがボソリと呟くとサーゼクスは何とも言えない表情をするだけだった
「天界の方でも裏切り者を把握して、裁いたそうだよ」
「逃げた連中は堕天使と化して『禍の団（カオス・ブリゲード）』に合流か。ま、奴らに協力している間、よく堕天しなかったもんだな。その上級クラスの天使どもは」
「神がいないと言う裏をかいて、天界の各種システムに穴が生まれているのは聞いている。そこを突かれたのだろう。何処も一枚岩ではないな」
悪魔側も旧魔王派とのイザコザが今後も散発的に起こるだろう

だが、今回の1件で旧魔王派の実力者も相当消えた筈
よほどの事が起きない限りは鳴りを潜めて静観するだろう
「堕天使は天界の『御使い（ブレイブ・セイント）』システムのように要員を増やす事はしないのか？」
サーゼクスはそう訊くが、アザゼルは首を横に振った
「良いさ。俺らみたいな悪党天使さまは俺らだけで充分。これは俺だけの意見じゃなくてな。残った幹部連中も同意なんだわ。三大勢力が和平組んでいるなら、もうこれ以上組織を肥大化したって仕方ねぇんじゃねぇかってな。現状維持だけで良い。まお空の天使が堕ちるなんて事があるならいつでもウェルカムだけどな」
「……しかし、グリゴリの――――アザゼルの功績であるオーフィスと『初代クイーン』がこちらに来た事実は大きな事態だ。我らの歴史に残ってもおかしくない偉業なのだよ、アザゼル。それを促したのは――――紛れもないあなただ」
「今頃改まって『あなただ』とか言うなよ。恥ずかしい。だがな、サーゼクス。俺は悪党どもを率いるボスだ。聖書に刻まれても冥界の歴史に残っちゃいけないのさ。――――これからの冥界の歴史に残るのはお前やリアス、イッセー、新で充分だ。俺は堕ちた天使の親玉で良いんだよ」
「アザゼル……」
アザゼルは頬を掻きながら悪戯な笑顔で言う

「なーに、ちょっと肩書きが変わるだけだ。俺は俺だよ。それと俺も前線に行くのは引退する。お前やミカエルのお陰で良い教え子がたくさん出来たからよ。そいつらの面倒を見るだけで余生を過ごせるさ」

それを聞いてサーゼクスはおかしそうに吹き出した

「急に年寄り臭くなってしまったな」

「見た目若いけど、年寄りだぜ俺？お前が生まれる前から存在するんだからな。そこはキミ、年長者を立てたまえ」

「そうだな。今後はそうしたいと建前上は言っておこう」

「まー、とりあえず、これで今回の事件は終わりだ」

堕天使組織『神の子を見張る者』総督アザゼルが総督を辞する事は各勢力の上層部に伝達される事となる

数々の殊勲、戦績を残すが、何よりも1番の功績は異例の成長を遂げる現赤龍帝と歴代最強と称される現白龍皇

そして長年天敵として君臨してきた闇人の力を宿し、呪われた竜の一族の末裔である現闇皇

この三者を指導した事だと各勢力の要人は後に語り継ぐ……

「ぶっざまだなぁ、曹操。あれだけ準備しておいて裏切りだー想定外だーで英雄派の計画はぜーんぶオジャンってか？上位神滅具（ロンギヌス）を3つも潰されやがった」
「……これは帝釈天（たいしゃくてん）さま、下界にまでお越しになられるとは」
「禁手（バランス・ブレイカー）に至った神器（セイクリッド・ギア）も神滅具（ロンギヌス）使いも再起不能じゃねェか。お前とゲオルクとレオナルドも動く事もできねェし？――で、どうすンのよ？」
「……立て直しますよ。新しいオーフィスが生まれますから、それを中心に新しい『禍の団（カオス・ブリゲード）』を結成します。――だが、今回の件であまりに戦力が削がれてしまった。少しの間、身を潜めます」
「そうかねぇ。今のお前のツラは、そう言うのじゃねェなァ。――心を折られた野郎のツラだ。お前、二天龍どもと闇皇に潰されたな？サマエルの毒だ、解呪（かいじゅ）できても後遺症が残るぜ？お前、人間だもンな、ただの」
「……二天龍と闇皇に潰された、か。……否定はしませんよ」
「だせェな、お前。結局何になりたかった？英雄か？勇者か？それとも悪役か？いや、全部になろうとして欲張ったンか？」

「……英雄の子孫でありながら最強の槍を持って生まれた俺は、これ以外の道なんて無かった。異形達の毒と言う選択肢しか――」

「ハハハハハハハッ！クソガキくん、神仏様からのあんまりありがたくもねェ言葉を聞いとけや。良いか？お前みたいに普段B級だが本気出せばS級なんて奴はな、案外結構いるんだよ。問題は普段も本気もB級なのに、決める時にSSS級を叩き出すイカレた野郎だ。こいつが1番厄介だ。絶対に勝てる勝負をわけの分からねェもんで覆してくる。――お前も実感したろ？ああ、赤龍帝と闇皇ってやつがこれだよ」

「……」

「赤龍帝と闇皇みてェなタイプに勝ちたかったらよ、運命ねじ曲げるぐらいの力を見せなきゃよ。何せ聖槍のお前の同期神滅具所有者はあの赤龍帝とあの白龍皇だ。――お前、生まれてくる時代を間違えたンじゃねェか？」

「次は――」

「次？ＨＡＨＡＨＡ！――ねぇよ。お前はここまでだ。その槍に拒否され、呪いで動けない状態のお前なンて価値が無くなったも同然だぜ？」

「……俺をどうするつもりだ？」

「なーに、お前とゲオルクとレオナルドは仲良く揃って冥府送りだ。あそこで蜘蛛の糸でも垂れてくるのを待ってりゃ良い。――ま、お前らの神滅具は全部俺がいただくけ

どな。３つとも禁手（バランス・ブレイカー）状態で引き抜けるなんて、涙が出るほど嬉しいＺＥ！」
「……さすが、酷い神仏だ」
「裏で色々と画策して俺や他の神どもを手玉に取ろうとしていたのは何処のどいつよ？ま、バチが当たったのさ。――――冥府から帰還でも出来れば聖槍を返してやンよ。英雄ならそんくらいやってみせてこそだぜ？赤龍帝と闇皇は似たような事をやってのけたンだからよ？」

冥界での騒動から幾日か経った後、新達は部室で〝ある事〟をアザゼルから聞かされていた
「そ、総督を更迭された⁉マジっスか⁉えええええええええええええっ！」
「お前のアホ面も板についてきたな。ゲゲオの鬼太郎のズーネミ男に似てんぞ」
一誠が顔芸で驚き、それにツッコミを入れる新
そう、〝ある事〟とはアザゼルが総督を辞職した件についてだった
理由は言うまでもなく、オーフィスと『初代クイーン』を新達に会わせた件
アザゼルは耳をほじりながら嘆息する

「うるせぇな。仕方ねぇだろ。うるさい連中に黙ってオーフィスや『初代クイーン』なんざをここに引き連れて来たんだからな」
「じゃ、じゃあ、今の先生の肩書きは……？」
一誠がそう聞くとアザゼルは首を捻る
「三大勢力の重要拠点の１つであるこの地域の監督ってところか。グリゴリでの役割は特別技術顧問だな」
「総督から監督？変わったような変わってねぇような感じだな」
「ま、そう言う事だ。グリゴリの総督はシェムハザがなったよ。副総督はバラキエル。あー、さっぱりした！ああいう堅苦しい役職はあいつらみたいな頭の堅い連中がお似合いだ。俺はこれで自分の趣味に没頭できる」
そう言うアザゼルは以前よりも開放的な表情となっていた
総督と言う肩書きと役職を取り払った事でアザゼルの自由度はますます上昇するかもしれない……
などと、浮かれていたアザゼルが書類を４通取り出した
「先日の中級悪魔昇格試験なんだが、先程合否が発表された。忙しいサーゼクスの代わりに俺が代理で告げる。まず、木場。合格！おめでとう、今日から中級悪魔だ。正式な授与は後日連絡があるだろう。とりあえず、書類の面だ」

「ありがとうございます。慎んでお受け致します」
書類を手に取り、頭を下げる祐斗
「次に朱乃。お前も合格。中級悪魔だな。一足早くバラキエルに話したんだが、伝えた瞬間に男泣きしてたぞ」
「……もう、父さまったら。ありがとうございますわ、お受け致します」
赤面しながら書類を受け取る朱乃
2人とも無事に中級悪魔へ昇格を果たした
「次に新。お前も文句なしに合格だ。それともう1つ朗報がある。先日の魔獣騒動で新の親父さんの功績が認められてな、近々釈放されるそうだ。ダブルでおめでとう、中級悪魔の闇皇が誕生だ」
「マジか……親父も釈放……。んじゃ、遠慮なく受け取るぜ」
口の端を吊り上げて書類を受け取る新
彼の父――竜崎総司（りゅうざきそうじ）の釈放も決まり、内心で爆発しそうな喜びをグッと抑え噛み締める
「最後にイッセー」
「は、はい！」
先の3人と違ってガチガチに緊張している一誠

心中でアレコレ考えている内にアザゼルは早々と言った
「お前も合格だ。おめでとさん、中級悪魔の赤龍帝が誕生だ」
「や、やったぁぁぁぁぁぁぁっ！今日から俺も中級悪魔だ！やった！マジ嬉しいっス！」
つい両手を上げて大声を張り上げてしまう一誠
皆から賛辞が贈られる中、アザゼルが指を突きつけてくる
「て言うか、お前らはあの危機的状況から自力で戻ってこられる程のバカ野郎だからな。お前ら2人の復活劇は既に上役連中の間で語り草になってるぜ？何せ、現魔王派の対立派閥はお前らに畏怖し始めたって話だ」
「ど、どうしてですか？」
「当然だろう。文字通り、殺しても死なないんだぞ？こんなに怖い存在はねぇだろう？サマエルの毒で死なない上にグレートレッドの力借りて体新調してきて自力で次元の狭間から帰還しただなんてどんだけだ。どんだけだよ！新、お前も『初代キング』の力を喰った上に、自力で戻ってきてるんだから更にどんだけだ！お前ら、本っ当におかしいぞ？頭もそうだが、存在がだ」
一連の流れを改めて語られるとおかしな事のオンパレードであるのは頷ける……
冥界では偶然現れたグレートレッドと共にルシファー眷属と新、一誠が共闘して

『超獣鬼（ジャバウォック）』を倒したと言う内容で報道されている

一誠がグレートレッドと合体した事は一般の悪魔には伏せられており、一誠とグレートレッドとの間で起きた事は極秘にすべき事柄らしい

危機的状況だった事も伏せられていた

「ま、お前らの強者を引き寄せる力はもはや異常を通り越して、何でもござれ状態だからな。もう、あれだ。各世界で悪さする奴らもお前らが倒せ。そうすりゃ俺もサーゼクスも楽が出来る」

「マジで勘弁してください！強い連中が襲い掛かってくるなんて懲りごりっスよ！俺は平和な日常が送りたいんです！」

「つーか、何でもかんでも丸投げしてくんじゃねぇ！」

新が毒づいていると、一誠が気になる事を口に出す

「あの、先生、『禍の団（カオス・ブリゲード）』――英雄派のその後の動きはどうなんですか？」

「ハーデスや旧魔王派、神風一派の横槍もあってか、正規メンバーの中枢がやられたからな。奴ら英雄派が行（おこな）っていた各勢力の重要拠点への襲撃も止んだよ。それにお前らのお陰で正規メンバーを何名か生きたまま捕らえる事も出来たし、今締め上げて色々尋問しているところだ。曹操達神滅具（ロンギヌス）所有者は……ロクな事になっていないだろうな。奴らが負ったものはフェニックスの涙や『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』で完治できるほど生やさしいもの

じゃない。ただ、天界では奴らが保有する神滅具（ロンギヌス）の消失が確認されていない為、生存しているのではないかとの見解だ」

アザゼルは息を吐きながらそう答えてくれた

ヘラクレスとジャンヌは冥界に捕縛

曹操、ゲオルク、レオナルドの神滅具（ロンギヌス）所有者は戦闘での深傷で再起不能――しかし、神滅具（ロンギヌス）は消えていない

同様の神滅具（ロンギヌス）は同時に存在できず、所有者が亡くなれば次の宿主となる新生児に移り変わる

消失が確認されていないので、曹操達は生存している可能性が高い

しかし、アザゼルは合点がいかないような表情をしていた

「……奪われた、って事はないのかしら？曹操達神滅具（ロンギヌス）所有者が重傷なら、強力な神滅具（ロンギヌス）を横から奪う輩（やから）が出てもおかしくないわ。あの集団は派閥が生じていて内部抗争も激しそうだもの」

リアスがそう口にする

確かに神器（セイクリッド・ギア）を抜き出して保存したり、他の者に移す技術はグリゴリが既に開発している上に、その技術は『禍の団（カオス・ブリゲード）』に合流した裏切り者の手によって流れているだろう

　アザゼルもリアスの意見に頷いていた
「まあ、その線が浮かぶって事になるよな。……そうだとして、俺が考え得る最悪のシナリオが今後起きない事を願うばかりなんだが……」
　険しい顔つきをするアザゼルだったが、途端に苦笑いする
「ま、あいつらの最大の失点はお前らに手を出した事だな。見ろ、奴らを返り討ちにしやがった。成長率が桁違いのお前らを相手にしたのが英雄派の間違いだ。神風一派も同様だ。触らぬ神に祟りなしってな。あ、この場合は触らぬ悪魔に祟りなし、かな？」
「上手い事言ったつもりか？」
「腫れ物のように言わないでくださいよ！俺達からしてみれば襲い掛かってきたから応戦しただけです！なあ、皆！」
　一誠が皆に訊くが、返ってくるのはいずれも過激発言オンリーだった……
「そうだな、修学旅行で襲撃してきた恨みは大きい」
「ミカエルさまのエースだもの！襲ってきたらギチョンギチョンにしちゃうわ！」
　ウンウンと頷くゼノヴィアとイリナ
「……来たら潰す。これ、最近のグレモリーの鉄則ですから」
　小猫からは恐ろしい一言が飛んでくる
「私が上級悪魔になる為のポイントがあちらから来てくれているのではないかと最近思

うようになりました。このメンバーで戦う分には強敵来襲がおいしいですよね」
ロスヴァイセも都合の良いように解釈していた
皆の意見を聞いてアザゼルが豪快に笑う
「さすがグレモリー眷属だ！こりゃその内伝説になるぞ。『奴らに喧嘩を売ったら生きて帰れない』――――とかよ」
アザゼルの冗談にリアスが嘆息していた
「私達は怨霊や悪霊ではないのよ？変な風に言わないでちょうだい」
「うふふ。けれど、実際襲われたらやっちゃうしかありませんわ」
朱乃は微笑みつつもＳっ気を表情に見せていた……
アザゼルが話を続ける
「だがな、『禍の団（カオス・ブリゲード）』はまだ活動をしている。１番大きい派閥『旧魔王派』と２番目に大きい派閥『英雄派』も幹部を失い活動停止したと見て良い。三大勢力の裏切り者もある程度粛清が済んだ。だが……それでも俺達の主張に異を唱える奴らはそこに残っている。２つの派閥の陰に隠れていた連中も浮上してくる筈だろう」
話によれば魔法使いの派閥もあるらしく、その連中が襲い掛かってくる可能性も考慮される
だが、それとは別に闇人（やみびと）側には進展が見られた

魔獣騒動後、『2代目キング』こと大牙は『初代クイーン』など残った中枢格を連れて京都に向かった
京都にて九尾の八坂姫と和平案を持ち込み、長らく刻まれていた妖怪や三大勢力との溝を埋める事に繋がった
いくつかの誓約・制限はあるものの、穏健派に属する大牙達は京都を主な拠点として三大勢力との確執を少しずつ埋めていくとのこと
不案な事もあるが喜ばしい戦果も得られたと言うわけだ
アザゼルは部屋の隅に視線を送る
「とりあえず、元ボスがこっちにいるからな」
新達もアザゼルの視線の先に目を向けると――――そこにはオーフィスの姿があった
一誠と目が合うとオーフィスは言う
「我、ドライグと友達」
「俺、ドライグじゃなくて、兵藤一誠って名前があるんだよ……。友達は俺の事を『イッセー』って呼ぶんだ」
「わかった。イッセー」
「俺の呼び方はそれで良し」
一誠とオーフィスのやり取りを見ていたアザゼルが言ってくる

「言っておくがイッセー、お前が将来上級悪魔になったとしてもオーフィスは眷属には出来ないぞ。理由は話さなくても分かるな？」
「はい、オーフィスはここにいない事になっているから、ですよね？」
そう、オーフィスは世間的には〝いない〟事になっている
曹操に奪われたオーフィスの力が、現在の『禍の団（カオス・ブリゲード）』にとっての「オーフィス」となっているようだ
アザゼルが続ける
「そいつはテロリストの親玉だった奴だ。いくらこちら側に引き込めたからと言って、それを冥界の連中に知られてはまずい。現にそいつの力は幾重にも封印を施して、ちょっと強すぎるドラゴン程度に留めてある。と言うよりも神格クラスは『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』の転生対象外だった筈だ。半神のヴァルキリーは可能だったようだが」
ただでさえ、サマエルに力を吸い取られて相当弱まっているが……下手な奴よりは強い
それにオーフィスは次元の狭間で一誠を助けてくれた
それだけで一誠はオーフィスを仲間だと思っている
オーフィスを狙う者がいれば、一誠は全力で守る所存だろう
『禍の団（カオス・ブリゲード）』に奪われたオーフィスの力がどうなるか、それが気になるところですね」

祐斗がそう口にしていた
曹操はそれを使って新しいウロボロスを作ると言っていたが、肝心の英雄派は崩壊していた
その事についてアザゼルが言う
「……それは俺を含め、事情を知っている連中の中でも意見が割れているな。ただ、そのまま計画が進行しているって意見だけは一致している。……どんな形になろうとも近い内に見(まみ)えるかもしれない。それだけは覚悟しておけ」
『……覚悟って。ああ、またそう言うのに関わるのかな、俺達……』
『いくら気にしても仕方ねぇだろ』
項垂(うなだ)れる一誠を他所にリアスは話題を切り替える
「いつ来るか分からないものに対する備えも大事だけれど、私の当面の目的は三点。一点はギャスパーね」
リアスの視線がギャスパーに注がれる
とうのギャスパーは相変わらずアワアワするだけだった
冥界では新と一誠の死と言う誤報を聞いた直後、バケモノじみた力を発揮してゲオルクを圧倒した
一方的な場面を見た連中にそれを問いただしても表情が険しくなって、ただ一言「凄

かった」としか聞けなかった
リアスが続ける
「今まで他の事情が立て込んでいて静観していたけれど、あれを切っ掛けにそろそろ本格的に窺(うかが)っても良いと思ったわ」
「ギャスパーについて、か？」
新の問いにリアスが頷く
「――ヴラディ家、いえ、ヴァンパイアの一族にコンタクトを取るわ。あのギャスパーの力はきちんと把握しなければ、ギャスパー自身――私達にもいずれ累(るい)を及ぼすでしょうね」
「……す、すみません。ぼ、僕にそのような力があったなんて全く知らなくて……この眼だけが問題だと思っていたものですから……」
ギャスパーが恐縮しながらそう言う
ギャスパー自身はその時の記憶が全く無かったようだ
ギャスパー自身も知らない、無意識に存在する隠された力……
リアスはギャスパーが家を追い出された理由がそこにあると踏んでいるようだ
「ヴァンパイアも今内部で相当もめている。……閉鎖された世界だが、だからこそ変な事情に巻き込まれなければ良いんだが」

アザゼルが嘆息しながら言う
吸血鬼も色々と立て込んでいるらしい
触れたくないところだが、ギャスパーの謎の力もこのまま放置しておくわけにはいかない
どちらにしろ解明の為に行くしかなかった
「ご、ご迷惑おかけします……。で、でも……家のヒト達とはあまり……」
ギャスパーが言葉をつぐんでしまった
どうやらギャスパー個人としては家族に会いたくないようだ
朱乃があごに指をやりながらリアスに言う
「ギャスパーくんの事と、後は魔法使いかしら？」
リアスは頷いて続けた
「そうよ。そろそろ魔法使いから契約を持ちかけられる時期でもあるの」
「それって、本とかに書かれてる魔法使いとの関係性とか言うやつですか？」
一誠の問いにリアスが首を縦に振る
「ええ、そうよ。魔法使いは悪魔を召喚して、代価と共に契約を結ぶ。私達は必要に応じて力を貸すの。一般の人間の願いを叶えるのとはちょっと様式が違うわね。名のある悪魔が呼ばれるのが常だけれど、若手悪魔にもその話は来るわ」

「俺達にもその話が飛び込んでくると、そう言うわけか？」
新の問いにリアスが頷き、アザゼルが紅茶をすすると話を続ける
「先日、魔術師の協会が全世界の魔法使いに向けて若手悪魔――お前達の世代に関するだいたいの評価を発表したようだ。奴らにとって若手悪魔の青田買いは早い者勝ちだ。特に評価が高いであろうグレモリー眷属は格好の的。魔王の妹たるリアスを始め、赤龍帝のイッセー、闇皇の新、聖魔剣の木場、バラキエルの娘で雷光の巫女である朱乃、デュランダルのゼノヴィアなどなど、そうそうたるメンツだ。――大挙して契約を持ちかけられるぞ？契約する魔法使いはきちんと選定しろよ？ろくでもない奴に呼ばれたらお前達自身の価値を下げるだけだからな」
魔法使いとの契約も悪魔の活動範囲内
契約を持ちかけられれば、それだけ自分の評価にも繋がる
『……ぐふふ、色気ムンムンの魔女さまに呼ばれて契約するのも良いかもなぁ』
『一誠、もうお前〝兵藤ズーネミ〟に改名しとけ。顔が気色悪くなってきた』
『誰がズーネミだよ⁉あと顔が気色悪いって！』
顔芸連発の一誠、それを笑う新の頭をポンと叩くのは――リアスだった
「ところで新。試験前に約束した事覚えているかしら？それが私の当面の目的の最後の一点なのだけれど？」

リアスはほんのり頬を赤く染めていた
無論、新は約束を覚えている
「ああ、デートだろ？今度の休日にしようか」
新の答えにリアスは満面の笑みを見せる
「ええ、楽しみにしているわ、愛しの新」
「ちょっと待ってください」
突如として異議を申し立ててくる者がいた
それはムムッと顔を膨らませるロスヴァイセだった
「新さん、私との約束も忘れていませんよね？」
新の背中に痛烈に走る嫌な予感……っ！（カ○ジ風）
それを聞いたリアスが悪戯な笑みを見せる
「そう言えば、ロスヴァイセともデートの約束を取り付けていたけれど――当然、私が先よね？」
「リ、リアスさんっ！私が先に約束したんですから私が先です！そればかりは譲れませんっ！」
「私だってこればかりは譲れないわ。ロスヴァイセ、悪いけどあなたは私の次にデートしてもらってちょうだい」

「納得いきません！私が先に約束したのに後から……っ！新さん！私が先ですよね⁉」
「新！私が先よね⁉」
ズイッと新に詰め寄るリアスとロスヴァイセ
鬼気迫る迫力に新は気圧(けお)され、冷や汗を垂らす
この窮地を切り抜ける策は無いかと模索していると、ゼノヴィアが自身を指差す
「新、部長とロスヴァイセさんの後でも構わない。その次は私とデートをしてくれ」
「あー、ずるいわ！次は私よね！私だって、新くんとデートしてみたいわ！」
更にはイリナまで申し出てきた
「ちょっ！待て！今の状況分かってる⁉」
混沌としてきた空気に小猫が歩み寄り――――
「じゃあ、私もです」
「私もですわ！日本を満喫させてください！」
負けじとレイヴェルも申し出てくる
退路を絶たれてしまった新を他所に一誠は――――
「……凄い事になってきたな。けど、俺は何もシテヤレマセンっ」
「はぅぅ……。皆さん、大胆です……。イッセーさん、あの……」
「アーシア、俺達は俺達でデートしようか」

「は、はいっ！」
一誠はアーシアとデートの約束を取り付ける事にした……
新が「この裏切り野郎ッ！」と毒づくも、一誠は聞こえないフリをする
ますます窮地に追い詰められてしまった新
「あらあら、それなら私は全員終わった後、ベッドの上でデートしますわ」
「朱乃！少しは助けてくれよ！」
「私が先よね、新！」
「私が先です！新さん！」
これからも大変だが、今だけはこの幸せを喜び合おう
新と一誠の心中でそう思っていた
……だが、ここにいる誰もがまだ知らなかった
想像以上に大きな脅威が爪を研ぎ澄まし、新達に牙を突き立てようとしているなど
……

「……チク、ショウ……！チクショウ……ッ！こんなところでっ、終わって……たまるか

よ……ッ！ボクは……ボクは『３代目キング』に……！王になるんだ……！」

何処の地か分からず、名前も知らない冥界の果て

憎々しげに歯を食い縛りながら地べたを這いずり回るのは――――新と一誠の同時砲撃によって吹き飛ばされた神風

神風はまだ消滅していなかった……！

辛(かろ)うじて消滅は免れたものの、とても満足に動ける状態ではなかった

今も尚、ボロボロの体で亀のようにゆっくりと這う事しか出来ない

今の神風を動かしているのは怒りと憎しみだけだった……

「ふざけんなよ……ッ！あのクソ野郎ども……ッ！まだ終わっちゃいない……、終わっちゃいないんだ……！この傷を治したら、ソッコーでブチ殺してやる……ッ！このボクに恥をかかせて、ただで済むと思うなよ……ッ！」

新と一誠への怨恨、怨嗟を吐き連ねながら這いつくばる神風

そんな彼の前にゆっくりと現れる１人の人影……

「Ｏｈ(オー)　ｌａ(ラ)　ｌａ(ラ)、醜(みにく)い有り様ですね。逸材かと思った筈の元人間がここまで短絡化してしまうなんて」

「……ああ……ッ？」

唐突な言い草に神風は敵意をむき出しにして睨んだ

目の前にいる人物が誰なのか、当然知らない
『初代キング』が見込んだと言うので、どの様な異変を遂げるか見届けたかったのですが――Ｍａ（マ）ｐｕｃｅ（ピュース）。あなたは闇の深淵に辿り着く事が出来なかった。そればかりか、怒りと憎しみに溺れるのみ……それで王になろうなど――もはや愚物（ぐぶつ）と言う他ありませんね」
「……誰だか知らないけどさ……今のボクに話し掛けんな……ッ！ブチ殺すぞ……ッ！」
「……Ｊｅ（ジュ）　ｖｏｉｓ（ヴォワ）、結論から言ってしまえば――あなたは王の器ではなかった。あなたの時代はここで終わりです」
人影――ユナイト・キリヒコは右手に装置（デバイス）を展開し、毒々しいオーラを神風に吹き付けた
その瞬間、神風は絶叫を上げてもがき苦しむ
「ああァァァァァァァァァァァァあっ！な、何を……！ボクに何をしたァァァァァァァァァァァァァァァァ!!」
「〝冥土の土産〟と言うのでしょうか、最期に教えて差し上げましょう。あなたに吹き付けたのは――私がこれまでに集めてきた〝死のデータ〟です。それを多量に吹き付けられたヒトは――死にます」

「……ッ！し、死ぬ……っ？この、ボクが……死ぬ……っ⁉」
「Ｏｕｉ。壊れたオモチャは捨てる――でしたっけ？私から見れば、あなたは既に壊れたオモチャです。せめてもの情けに……一片も残さず消去してあげます。肉体も、魂も……全て虚無と言う闇に葬ってあげましょう。Ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ――神宮風太」
「……ッ⁉な、なんで……ボクの本名を……お前が……っ⁉」
得体の知れない奴が自分の事を何故事細かに知っているのか……？
驚く神風を見てキリヒコはせせら笑う
「私はあなたの事なら知っていますよ？闇人に転生した元人間である事も。貧しい村に生まれ、人並外れた知能を発揮した事も。――村に山賊が襲ってくると老人から聞いて、村を守る為に山賊を殺した事も。本当に……〝しがないお年寄り〟の助言を聞いてくださってＭｅｒｃｉ」
途中でキリヒコの声が老人の声に変質した途端、神風の脳裏に衝撃が走った……
忘れもしない記憶……自分がバケモノと言われる前に聞いた老人の声……っ
〝あの時の声……ッ！〟
そう……あの時、『山賊が村を襲う』と進言したのは――老人に化けたキリヒコだったのだ……！
神風の知能の高さに目を付けたキリヒコは端金で山賊を雇い、村の連中に神風を孤立

させ――――周り全てを憎ませるよう仕向けた

「私の目論(もくろ)み通り、あなたは見事なまでに堕ちてくれました。本当に……笑ってしまうくらいにね」

「ア……、ア……ッ、アアアア

の方がお似合いです」
冷淡、冷酷、無慈悲に吐き捨てるキリヒコ
神風の体は既に半分以上が消えていた……
神風の内に恐怖、恐怖、恐怖がどんどん押し寄せてくる
何も残らず消え逝く恐怖……
今の神風の精神がそれに耐えられる筈などなかった……
「……嫌だ……！嫌だイヤだいやだ……ッ！嫌だァァァァァァぁアアアアアアアアあっ！死にたくないっ！死にたくないよぉぉぉおおおおおおおおおおっ！助けてぇ！誰か助けてぇェェェェェェェェェェェェ！」
子供のように泣きじゃくり、周りに助けを求めるが……周りには誰もいない
地を掻きむしり、叩き、転がり回る神風
どんなに暴れたところで助かる術(すべ)も無い……
「パパぁ……！ママぁ……！ごめんなさい……！ごめんなさい……ッ！これからは良い子になるからぁ……ッ！良い子になるから助けてぇ……ッ！赤龍帝ぇ……！闇皇ぉ……！グレモリーのお姉さぁぁん……！誰でも良いから……誰かボクを助けてよぉぉぉおおおおおおおおおおおっ！正義の味方なんでしょ……⁉謝るからぁ……！今までしてきた事ゼンブ謝るから……っ！もう悪い事はしません……ッ！良い子に

なります……ッ！だから、だから助けてえええエエエエエエエエエエエエエエエエエエ……ッ！」

幼児退行までしてしまった神風の命乞いは届く筈も無い……虚しく響くだけ……

「嫌だァァァァァァぁ……！嫌だァァァァァァぁアアア

達と同じ――――『深淵の喰闇(ダーク・ロード)』として会いましょう。それまで一時(ひととき)の幸せをお楽しみください。――――Ｂｏｎｎｅ(ボンヌ)　ｃｈａｎｃｅ(シャンス)」

数日後、見せしめと言わんばかりに神風の消滅を記録した映像が三大勢力間に流出され、その悲惨かつ惨(むご)い結末は冥界・天界全土を震撼させた……

第１５章　短編騒動のデイリーとシリアス

家族団欒のホームグルメ

「……」

時刻は夜１９時２５分、新は馴染みの酒場のカウンター席で酒を飲んでいた

いつもなら気分が少し高揚したりするものだが、今の新はとてもそんな気分にはなれなかった

理由は――――三大勢力間で流出された〝神風の消滅〟と言う見せしめ映像

新が注目したのはその映像に映っていた〝あの男〟だった……

泣き叫ぶ神風を見下ろし、嘲笑うユナイト・キリヒコ

更には神風を陥(おとしい)れた真の黒幕、元凶であった事も知り、ますます得体の知れなさと恐ろしさを深く認識する事となった

『……「禍(カオス)の団(ブリゲード)」はほぼ活動停止、闇人(やみびと)も敵勢力は瓦解した。その漁夫の利を得て、今度はキリヒコやシド――――「造魔(ゾーマ)」の勢力が動き出す……。今まで静観してた組織が出張(でば)ってくるとなると――――』

「どうしたどうした、新。お前さんらしくもない。いつもなら３、４杯飲んでるのに今日

はまだ1杯しか進んでないじゃないか」
深刻な表情を気取ったのか、新の向かいでシェイカー（カクテル等を作る為の調理器具）を振っている壮齢の男性が話し掛けてくる
行きつけの酒場のマスターであり、新が気軽に話せる数少ない人物――イスルギ・タスク
裏社会の情報にも詳しく酒とツマミも好評なので、新は昔から通い詰めていた
「冥界での騒ぎも収まって、親父さんも釈放されてきたってのにまだ不平不満を抱えてるのか？」
「そりゃそうだろ。あの騒ぎが収まっても、また次の火種が上がりそうなんだよ。今なら延々と愚痴をこぼしそうだ。マスターだって知ってるだろ？」
「……ああ。三大勢力間で拡散されたんだっけ？あれは酷いな。一般社会に公開しないってのがまだ悪どい。……殆ど宣戦布告と見て間違いないだろう」
マスター・イスルギも〝見せしめ映像〟を見たようで、苦々しい顔つきをしていた
中級悪魔昇格試験、冥界での魔獣騒動が終息したのも束の間――間髪入れずに悩みの種が芽を出そうとしている
「……マスター、ユナイト・キリヒコって奴の情報は持ってないか？『造魔』でも何でも良い、とにかく今は情報が欲しいんだ」

「生憎、こっちも仕入れられる情報には限界があってね。今はお前さんの欲している情報が無いんだよ」
「そうか……」
「そもそも『造魔』に関しての情報がまだ少ないと言うか……たとえ入手しても殆どが口を閉ざしてしまうからな」
『造魔』の情報入手は思った以上に芳しくなく、更には報復を恐れて誰も口に出そうとしない……
〝やはり、自分の足で情報を集めるしかない……〟
〝危険を冒して集めるべきか？〟
〝奴らが大きく動いたところで情報を集めるか？〟
脳裏にそんな考えが過り、何度も自問自答を繰り返す
新の表情が険しくなる中、マスター・イスルギがシェイカーを置いて言う
「……変わったよな、お前さん」
「ん？突然何だよ？」
「お前さんが真面目に考え込む姿なんて、今まで見た事無かったからさ。昔の新は酒を飲んでギャンブルしまくって、賞金首を仕留めて荒稼ぎしてたってのに。いつの間にか悪魔に転職して仕事熱心ときたもんだ。不定期なフリーターがブラック企業の社員に

ジョブチェンジってか？」
「おいおい、これでもまだ現役のバウンティハンターだぜ？本業が副業になっちまっただけだ。それに俺の何処が変わったんだよ？」
マスターに疑問を投げつけ、グラスの酒を飲み干す新
マスター・イスルギが話を続ける
「お前さんが一匹狼を気取らなくなったところ、かな？以前は報奨金優先で任務をこなしたり、同業者と結託したりもしていた。リアス・グレモリーって嬢ちゃんの眷属になってからは、すっかり丸くなっちまってる。毒気が抜けて年相応の感じになったなぁと思って」
「ふ～ん」
確かに昔の新は今じゃ考えられない程の落伍者だった
儲けた金で酒を飲み、競馬やギャンブルに費やし、ダラダラと自由奔放に毎日を生きてきた
しかし、それと引き替えに彼は孤独だった……
唯一話が出来る同じ仲間も過去の事件が切っ掛けで確執が生まれ、その果てに死んでしまい、その自責の念に苦しんできた
孤独に耐えられる者などいない……

リアス・グレモリーと出会った事で新の人生は１８０度変わった
心の底から信頼できる仲間がいる事で、やっと本当の自分を出せる……
笑ったり、泣いたり、時には叱られたりと……バタバタした毎日を送っている
そこで感じられる幸せは嘘偽りの無いものだった
マスター・イスルギがグラスにカクテルを注ぎながら言う
「若い内は悩むのも成長の秘訣だが、あんまり悩み過ぎると早く歳を取ってしまうぞ？俺みたいなオッサンにならんようにな。俺から言える事はただ１つ――――今は素直に楽しめ。楽しむ時は楽しんで、仕事する時は気を引き締める。そうじゃないと人生を損するぞ」
「……そうだな。マスターの言う通りだ。最近は気苦労が絶えないせいで、愚痴ってばかりだ。ガス抜きも大事ってか……」
少し気が楽になった新はグラスに注がれたカクテルを一気に飲み干す
まだ先の見えない『造魔（ゾーマ）』の情報集めは一旦保留、今は気を休める事にした
「マスター、いつもいつも愚痴を聞かせてゴメンな。お陰でスッキリしたぜ。また何か情報入手したら教えてくれ」
「おう、頑張れよ」
新はカウンターに代金を置いて、酒場をあとにしていった

「それでね、私が不妊体質だから総ちゃんに迷惑かけちゃったのぉ……。でも、今は幸せ！総ちゃんも新ちゃんもいるし、いーっぱい女の子が増えたんだも～ん♪」
「え～っと……こいつはどういう事だ？」
新が自宅に着いてリビングに入った時、目の前に広がっていたのはカオスだった
テーブルにはカラッポのボトルが何本も散乱しており、リアス達も当惑している様子だった
「ヤーヤーヤー、私の息子のご帰還だよ～♪私の出所祝いを祝いたまえ～♪」
「わ～い♪新ちゃんだ～♪」
テーブルに座っているのは先日釈放された新の父親――竜崎総司（りゅうざきそうじ）と、幼い姿を維持し続けている新の母親――竜崎梓（りゅうざきあずさ）
今日は総司の出所祝いで新の家に飛び込んで来たらしい
２人とも酒が入ったせいか、いつも以上に陽気となっていた
「……おい、リアス、説明を頼む」
「あなたが少し外に出てる間、私達は夕食の準備をしようとしていたの。……その前に

この有り様よ」
「食前酒でこの量か……っ」
額に手を当て、ガックリと頭(こうべ)を垂れる新
竜崎夫婦だけではない……レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトもこの食前酒飲みに当然参加しており、空けたボトルは総計で１００本を超えていた……
「アラタ、遅かったじゃない」
「この２人、なかなかの酒豪だ。特にお前の母親はペースが早いぞ」
「おかえりぃ、アラタ～♪早速だけど何かおつまみ作ってぇ～♪」
完全に飲ん兵衛集団である……
リアス達もまだ夕食の準備が出来ておらず、手がつけられない状態となっていた
新はこの惨状を見て溜め息を吐き、ポリポリと頭を掻く
「仕方ねぇ、面倒だが久々に腕を振るうか……」
「新、あなた料理できるの？」
「簡単な酒のつまみなら作れるぞ。俺があいつらの相手をしておく。このままじゃ家の中にある酒が全部潰されちまうからな」
そう言って新はイソイソと冷蔵庫の中から食材を取り出す
取り出したのは角切りのクリームチーズと酒盗(しゅとう)（鰹の内臓の塩辛）

クリームチーズの上に酒盗を乗せ、あっという間に肴(さかな)の1品を完成させた
それをテーブルの上に置くと、酒豪軍団は揃って箸を伸ばす
酒盗の塩辛さとクリームチーズのマイルドさが互いの良さを引き立て合う
「さてと、次は……」
次に取り出したのは獅子唐(ししとう)
それからゴマ油、醤油、みりん、かつお節、酢等の調味料
まずは獅子唐を洗ってヘタを取り、切れ込みを入れる
フライパンにゴマ油を敷いてから獅子唐を焼く
その間、ボウルに醤油、みりん、かつお節、酢を入れてかき混ぜ、しんなりしてきた獅子唐を入れる
後は小皿に移せば――――獅子唐の焼き浸しが完成
「は、早いわね……」
「酒の肴は手軽に作れるものが丁度良いからな。とは言え……少し本気を出すか」
そう言った新の背中から黒いオーラが噴出、6本の漆黒の巨腕を形成
自前の腕と合わせて計8本、それぞれの腕で一気に肴の調理に入った
数分後……揚げ出し豆腐とゴボウ揚げとアジのなめろうを完成させ、テーブルに並べる

肴が到着したのを見て飲ん兵衛集団は大喜び
更に総司は意気揚々と焼酎のビンを取り出し、グラスに氷を入れてから注ぐ
「諸君、私の息子が作ったおつまみ達が到着したぞ～♪私がこれから美味しい食べ順を教えてしんぜよう」
「美味しい食べ順～？」
「焼酎のロックをより美味しく飲む為の秘訣さ☆まずは――――なめろう！」
総司はアジのなめろうに箸を伸ばし、口に運ぶ
なめろうを一口食べてから焼酎を飲む
それを見て堕天使3人娘も同じようになめろうを食べ、焼酎を飲む
「ぷは～っ。沁(し)みるな～♪相性バッチリ☆さて、お次は獅子唐！獅子唐の焼き浸しで口に残ったなめろうの臭みをリセットするのだ！」
獅子唐の焼き浸しを頬張り、口の中がサッパリしたところで――――カリカリのゴボウ揚げを食べる
細切りにされ、油で揚げられたゴボウの程好い食感を楽しみ――――すかさず焼酎を飲む！
「ぷは～っ！美味い！さすが新、自慢の息子だよ♪」
「この揚げ出し豆腐、ウマウマ～♪」

「クセになるわね」
新が作った肴は飲ん兵衛集団の心を鷲掴み、ここでメインの肴を仕上げる
作ったのは酒の肴の定番――鶏の唐揚げ
それをテーブルの上に置き、飲ん兵衛集団が箸を伸ばす
新が作った唐揚げに舌鼓(したつづみ)を打つのを見て、リアスも思わず手を伸ばし――食べてみる
噛んだ瞬間、外の衣はサクッと小気味良い音を立て、中はジューシーかつ肉汁を溢れさせる
つまりは――
「……美味しい……っ!!私や朱乃が作ったのより美味しい……っ！」
「常温の油で二度揚げしたからな。揚げ物は高温で一気に揚げるより、中火の油で二度揚げする方が美味くなるんだよ。その中でも唐揚げが良い例だ。２分くらい揚げたら一旦冷まして、もう一度軽く揚げる。一旦冷ます事で衣がサクサクの食感を生み出すんだ」
「奥が深いのね、唐揚げって……」
「俺が作れるのは酒のつまみ程度だが、ちょっとした工夫で何とかなる。……俺が通い詰めてる酒場のマスター請け売りだ」

新は唐揚げを1つ摘まんで口に放り込む
「……なあ、リアス」
「どうしたの、新？」
「やっぱり、何だかんだ言っても家族って良いよな……。こうして同じ場所で飯を食って、ワイワイ話して、温かいものだなって再認識できる……。独りでやってた時とは全然違う幸せだ」
以前はシビアに、そして堕落した日々を送っていた新
ここまで大きく変われたのもリアスや朱乃、一誠達との日々が長く凍てついた新の心を溶かしていったからだろう
『造魔（ゾーマ）』やキリヒコの事で頭がいっぱいだったが、今は目の前の幸せが訪れている事を染々（しみじみ）と安堵する
リアスはそんな新に身を寄せた
「あらあら、羨ましい状態ですわね」
突然の声に振り向く両者
そこにはいつの間にか朱乃がいて、彼女も新に抱きついてくる
「リアスってば、新さんを独り占めしてズルいわ。私だって新さんの温もりを感じたいのに」

「朱乃！今は私が幸せに浸ってたのに邪魔しないで！」
「やーですわ。それより、新さんの唐揚げが美味しいって聞きましたわよ？私にも1つ貰えないかしら？勿論、新さんの口移しでね……」
「欲しいなら自分で摘まんで食べなさい！そう言って新の唇を独り占めする気なんでしょ⁉させないわ！」
「それはこっちの台詞よ！口移しで貰う勇気が無いヒトは黙っててくれる⁉」
「言ったわね⁉もう昔の私とは違うのよ！新！口移しするなら私にしなさい！主の命令よ！」
「またそうやって『王（キング）』を主張して！いつまで『王（キング）』の権利を行使するつもりなのよ！リアスのアンポンタン！」
「何よ！朱乃のおたんこなす！」
リアスと朱乃――――女同士のバトルが白熱し始めた……
ヤバい空気を悟ったのか、新は避難しようとするが……ガシッと2人に捕獲されてしまう
「何処へ行こうとしてるの、新？」
「逃がしませんわよ？」
「い、いや……俺が口を挟むのも余計だし……久々に飲んだくれようかな～って」

「そう、新も話したかったのね。良いわ、向こうでゆっくり話し合いましょう。私と朱乃、どちらを先に口移しするか決めてもらうわ」
「うふふ、そうですわね」
　リアスと朱乃の黒い笑顔に危険を察知した新は何とか逃げようとするが、虚しく引きずられていくだけだった……
　そこへ「ちょっと待ってもらおうか」とゼノヴィアが乱入してくる
「今、新が口移しすると聞いたんだが。そういう話なら私も参加させてもらおう！私に口移しするのは私だ！」
「事態が更に悪化！話をややこしくするな！」
「……その話、興味あります」
「三角関係じゃなくて四角関係に発展⁉ドラマの中だけだと思ってた世界が目の前で起こるなんて！」
「きょ、教師としてそう言った話題は本来止めなければなりませんが……立会人という形で聞くとしましょう」
「わ、私もロスヴァイセさんと同意見ですわ！」
　いつの間にか小猫だけでなく、イリナ、ロスヴァイセ、レイヴェルまでも集結していた

もはや新に逃げ場は無い……

「さあ、新。皆の前でゆっくり語り合いましょう？どちらが先か決めるまで」

「うふふ、今夜は寝かせませんわ♪」

「い、嫌だ！この話は薮蛇だから無し痛だだだだだだだっ！腕を引っ張るな！チクショウ！なんでお前らはこういう時だけ力が強くなるんだぁぁぁぁぁぁ⁉」

連れていかれた新を見て総司は「青春だねぇ」とにこやかに傍観するだけだった……

『――と言うわけで、あなたには引き続きグレモリー眷属とシトリー眷属両方の動向を監視、駒王町周辺に転移型侵入装置の構築をお願いしたいのです』

「了解、こっちとしても黙認できないレベルに達してしまってね。監視は大いに結構だが、侵入装置の構築となると必然的に妨害工作をしなきゃならない。その辺は俺に任せてもらっても良いか？」

『Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ。寧ろ、そちらの方が好都合です。グレモリー眷属は興味深いデータの集まりですからね。お好きになさってください――――Ｍｏｎｓｉｅｕｒスターク』

「ＯＫ。それを聞いて俄然やる気が出てきたよ。それにしても……遂に『造魔（ゾーマ）』が動き出す時が来るとはねぇ。悪魔の学生さんらには悪いが、今度ばかりは勝ち目なんか無いよ。何しろ自分達がいる国――日本そのものを敵に回すようなもんだからな」

『しかし、あなた方にとっても良い機会なのでは？』

「まあ、悪く言ってしまえばそうだな。日本に派遣されて何年も経つが……年甲斐もなく楽しみにするなんて久しぶりだ。こうなりゃトコトン遊んでやろうかね」

『遊ぶのは結構ですが、あまりやり過ぎてしまっても困りますよ？では、Ａｄｉｅｕ（アデュー）』

ピッ……

「悪いな、新。夢を見る時間はもう終わっちまった。これからは社会の裏――ドロドロした黒い世界を見てもらう事になる。グレモリー、シトリー、堕天使の元総督さんにも悪いが――ここまで来てしまった以上、あんたらに勝ち目は無いよ。スイートタイムはおしまい、真っ黒な現実で目を覚ます時だ。夢ばかり追い掛けてるような腑抜けには良い薬かもしれんがね」

戦闘校舎のフェニックスＤＸ

それは、とある日の放課後だった
オカルト研究部の部室に顔を出してきたリアスとレイヴェルが、ソファでチェスをしながら楽しげに会話をしていた
途中までチェスに興じていたが、いつの間にか小話がメインに
時に笑ったり、時に真剣に語り合ったりしている
「――で、そこにもしゼノヴィアさまか、ロスヴァイセ先生がいらっしゃったら、プール方面からも――」
「それも面白いけれど、私だったら、まずギャスパーをあの時に――」
お互いに意見を出し合いながら盤上のチェスの駒を動かしていた
会話内容が気になった新は探りを入れてみる事に
「何を話してんだ？」
「ええ、ちょっとレイヴェルとゲームの話をしていたのよ。しかも懐かしい一戦よ」
「はい、リアスさまとライザーお兄さまの一戦を振り返っていましたの。ただし、ただの思い出話ではありませんわ」

「もし、今のグレモリー眷属であの時ゲームをしていたら、どうなっていたのか――――なんて事をレイヴェルと話していたのよ。私としても苦々しい経験だったものだから、『今ならこうしているのに！』って、ついつい悔しがりながらも話に熱くなってしまったわ」

熱を帯びながら口にするリアス

確かにあの時にいなかったゼノヴィア達がもし参加していれば、また違った局面を迎えていたかもしれない

当時、婚約話の真っ只中だったリアスにとってみたら、生き方を懸けた戦いでもあり、敗北を喫した一戦だから話に熱がこもるのも当然だろう

話の内容を聞いた新もライザーとの一戦を懐かしむ

「あの時のレーティングゲームか、懐かしいな。まあ、結局は俺のワンマンプレイで勝利寸前までいきかけたんだけどな」

「ふふっ、そうね。特に女性に対して無類の強さを発揮するもの」

昔の新の戦いっぷりを思い出し、リアスはクスクスと笑う

その時、新は〝ある提案〟をレイヴェルに持ちかけた

「なあ、レイヴェル。１つ提案と言うか、俺個人の頼みを聞いてほしいんだが」

「はい、何でしょうか？」

「今、俺は真『女王』の力と、前に発現した新しいモードの制限時間を伸ばそうとしている。通常の真『女王』ならそこそこ持続できるんだが……あの雷炎モードは消費が激しくて直ぐにガス欠になっちまう」

魔獣騒動にて、新はリュオーガ族に伝わる竜の呼吸法で神風の雷を取り込み――火竜と雷の同時発動を会得した

しかし、あまりにも消費が激しく、反動も大きい為――あの一戦では解除した途端に暫く動けなくなる程だ

「『造魔』にはシドやキリヒコの他、まだ見ない未知の敵が押し寄せてくるかもしれない。そんな時にガス欠なんぞ起こしてたら元も子もない。そこでだ、制限時間の向上を含めてライザーと再戦したいんだ」

新の提案にリアスは驚きを隠せなかった

「新……そ、それ、本気で言っているの？」

「ああ、本気さ。少しでもこの力を長く持続させたいんだ。その為には――やっぱ実戦で鍛えた方が良いかなって」

「面白そうじゃないか」

そこへ突然の声――アザゼルがにんまりとイタズラな笑みを浮かべていた

「その力は重要な戦力となる。実戦で試して鍛えるってのも、今後の成長を測る1つの

ファクターになるんじゃないか？」
「分かってるじゃねぇか、元総督」
「新、あなた独りでやるつもりなの？」
「最初のレーティングゲームでも俺単独で進めてたからな。その点は同じだ。ただし、あの時以上に厳しい条件を俺自身に設ける」
その条件とは２つあった
１つめ……新がゲーム開始時から真『女王（クイーン）』状態でスタートする事
これは体力やオーラを減らしていくような状態を敢えて最初から展開し、その状態に長く耐えられるようにする為だ
つまり、最初から毒持ちのハンデを背負うと言う事である
２つめ……相手の『兵士（ポーン）』全員が最初から『女王（クイーン）』にプロモーションする事
これも新自身に多大な負担を掛けさせる為である
更に新にはフェニックスの涙を付与しない
これらの条件を制定した上でライザー眷属との実戦練習を行（おこな）うつもりだ
「最低でも１日――２４時間は真『女王（クイーン）』を保（も）たせたいんだ。レイヴェル、頼めるか？」
新の提案にレイヴェルは少し考えた後――
「分かりましたわ！新さまのご要望、慎んでお受け致しますわ！」

レイヴェルは生き生きとした表情で新の提案を了承してくれた
リアスにも確認を取る
「レイヴェルからはＯＫを貰えた。良いよな、リアス？」
「断る理由は無いわ。あなたが考えて出した結論だもの。ただし、今後は私達にもそう言った話を持ちかける事。良いわね？」
「了～解っ」
話を聞いてアザゼルも立ち上がる
「よし！レイヴェル、お前もライザーや親御さんに訊いてみてくれないか？段取りやらは俺が決めてやる。案外、あっちも乗り気になるかもしれないぞ」
「分かりましたわ。お父さまとお母さま、それに上の２人のお兄さまにもお訊きしてみます。私もライザーお兄さまの練習相手に新さまがお付き合いしてくださるなら万々歳ですわ」
こうして、雑談から一気に新ＶＳライザーチームとの再戦の話が発展していく事になる

次の休日、新は駒王学園（くおうがくえん）の旧校舎――――オカルト研究部の部室にいた
正確にはゲームフィールドに設けられた疑似空間内の旧校舎
あの日に行われた雑談は、その後のアザゼルのプレゼンとレイヴェルの説得も相まって、グレモリーとフェニックスの両家を焚き付けるには充分だった
直ぐに以前使われたフィールドの構築術式が流用され、あの時と同じ空間が再現される
駒王学園をまるまる再現した試合用の疑似空間
この領域には新と現フェニックス眷属が存在しており、リアス達や両家の関係者は違う場所でモニタリングしている
待機場所も前回と同じで新が旧校舎のオカルト研究部部室、向こうが新校舎内の生徒会室だ
試合は３０分後に行われる
新はゲーム開始に向けて柔軟体操を始め、手や足、肩、首をコキコキと鳴らす
『新、あなたは自分で制限を設けたけれど、戦局はどう見ているの？』
耳の通信用魔法陣からリアスの声が入り、新はそれに対して答えを出す
「正直な話、俺を含めてリアス達も桁違いにレベルアップしている。新しく眷属となったゼノヴィアにロスヴァイセ、真の力を解放した朱乃、小猫、ギャスパー、それに

禁（バランス・ブレイカー）手に至った一誠と祐斗、リアスとアーシアも前回と比べたら相当強くなっている。個人の戦力もそうだが、総合的に見ても正面から打ち合えば負ける事は無いな」

『けれど、あちらもここに来て、眷属がトレーニングをしていると聞くわ。ライザー自身も居城にトレーニング用の施設を用意する程に己の鍛練に向き合い出したらしいわ』

実はライザーも新達やシトリーチーム、バアルチームを見倣って眷属共々パワーアップを図（はか）っていた

新もその事は何となく理解している

何故なら――――時折連絡用の魔法陣で話し掛け、ライザーはその度に腕の力こぶを自慢してくるからである……

更にその話は一誠にも飛び火しており、度々連絡してくるライザーには両者共に困っていた

苦笑いしながら思い返していた新にリアスは話を続けてくる

『それにあちらのアドバイザーはレイヴェル。あなたの事をつぶさにまで知っているあの子が傍（かたわ）らにいるのなら、奇手（きしゅ）で攻めてくるかもしれない。テクニカルな戦術に慣れていないあなたをハメてくるなんて事も大いにあり得るでしょうね』

そう、今回のゲームでレイヴェルはライザー側のアドバイザー

ゲーム前にライザー達に助言する立ち位置にいる

公式戦ではなく、あくまで両家の交流試合なのでその辺りは格好緩かったりする
寧ろ、新は何でも来いと言う構えだった
あと、向こうにはレイヴェルがいないので『僧侶（ビショップ）』の枠が１つ空いている
それではさすがにゲームとしてはどうだろうかと言う事で、レイヴェルが今回だけ代わりとなる助っ人を急遽呼び出した
その助っ人の正体は女性と言う点以外は知らされていない
『皆さま、この度グレモリー家、フェニックス家の「レーティングゲーム」の審判（アービター）役を務めさせていただきますグレモリー家の使用人グレイフィアでございます。今回は両家の交流試合として組まれておりますので、ルールもそれに従い通常の公式ルールとは違います。――――以前行われた両家の一戦と同様のルールに加え、竜崎新が事前報告した条件も適用させていただきます』
ルールは新が提示した条件以外そのまま
新の破壊力を危惧してフィールド破壊の制限をかけるかもしれないと懸念していたが、それは杞憂に終わった
『当時を再現と言うのが目的の１つらしいから。これを見ているお父さまやフェニックスのおじさまもノリノリで合意したに違いないわ』
付け加えてリアスが言うには、このフィールド自体も当時より強化されているので、

暴れてもちょっとやそっとでは壊れない造りに変わっているらしい
つまり、力を存分に発揮できる……
ますますやる気が出てきた新は早速全身からオーラを滲ませ、闇皇（やみおう）に変異
そして、火竜のオーラを解き放って真『女王（クイーン）』――『超越の黒竜帝（インフェルニティ・オーバー・ドラグニル）』へと姿を変貌させた
グレイフィアからのアナウンスも届く
『開始の時間となりました。なお、制限時間は２４時間です。それでは、ゲームスタートです』
鳴り響く学校のチャイム、懐かしい雰囲気の中――ゲームがスタートする

旧校舎から飛び出した新は体育館まで駆けていく
当時の戦術そのまま、同じ手で攻め込む
体育館まで来た新は前回同様裏口から入っていく
すると、体育館のコートに女性が４人いるのを確認する
チャイナドレスの『戦車（ルーク）』雪蘭（シュエラン）

棍を携えたロリな女の子『兵士』ミラ
それにチェーンソーを持った双子の『兵士』イルとネル
配置メンバーがあの時と全く同じ、ライザーも案外ノリノリなのが窺える
ちなみにライザー側の『兵士』は全員『女王』に昇格済みである
チャイナドレスの『戦車』雪蘭が新を確認するなり、皮肉げに笑んだ
「やっぱり、来たわね。……何だか凄く怪物じみた姿になってない？」
「元からバケモノだったんでな。今日はこの姿でぶっ通しの戦闘だ。悪く思わないでくれよ」
「ええ、まあ、良いじゃない？こういう余興って」
肩を竦めながらも満更でもない様子
「前回と違って、今回はあなた独り。いくら強くても、今の私達全員を相手にするのが容易じゃない事を教えてあげるわ！」
雪蘭が拳と足に炎を蓄え、構えを取る
その隣ではチェーンソーから危険な音を鳴らしながら、イルとネルが楽しげにしていた
「解体しちゃいまーす♪」
「バーラバラバラバーラバラ♪」

懐かしいフレーズと共に彼女達はチェーンソーを新に向けてくる
「エッチ蝙蝠のお兄さん、私達も強くなったんだからね！」
「あの時みたいに服をバラバラになんてされないから！」
「それは俺じゃなくて一誠のせいだろ……まあ、良いや」
新が次に視線を送るのは棍を持った少女――――『兵士（ポーン）』のミラだった
「お久しぶりですね」
「よっ、そっちも少しは強くなったか？」
「はい、お陰さまで」
そう言って棍を構えるミラ
全員が構えたのを見て、新も構えを取る
暫（しば）し流れる静寂……まず最初に飛び出したのは雪蘭
炎を纏わせた拳と蹴りは当時よりも磨きが掛かっていたが、新はその全てを受け流す
両側からイルとネルがチェーンソーで斬りかかってくる
しかし、それも新は頑丈と化した腕で受け止め、いなしていく
死角から突いてくるミラの棍も足で受け止め、突き放す
そこから矢継ぎ早に攻めていく雪蘭、ミラ、イルとネルだが……新に悉（ことごと）く攻撃を受け流される

攻撃を繰り返していく内に疲労が溜まる面々
新も少し息が上がっていた
最初から消費促進状態で激しい動きをしていれば当然である
しかし、これは新が自ら設けた条件なので仕方ない
「……とは言え、こっちも反撃するか。スタートからガス欠なんて起こしたら笑い者だからな」
指をコキコキと鳴らし、両手に黒い火竜を纏わせる
濃密な火竜のオーラに危険を察する雪蘭達だが……そこに新の姿は既に無く、ミラの眼前で拳を構えていた
そして、寸止めで突き出される火竜の拳
拳圧の余波は防ごうと構えた棍を破壊し、ついでに彼女の衣服まで吹き飛ばしてしまう
新の脱がし技が炸裂し、ミラは一糸纏わぬ姿となる
「――――ッ！きゃあっ！ま、また……っ！」
ミラは恥ずかしがってその場にへたり込み、あっという間に戦意喪失
新が次に狙いを定めたのはイルとネル
危険な視線を感じた２人はチェーンソーで横薙ぎに斬ろうとする

新はチェーンソーの刃をそれぞれ手で受け止め、火竜の熱でチェーンソーを溶解する
熱が伝導したのか、イルとネルは熱がってチェーンソーを手放し――その隙に火竜で形成した爪を振り抜く
その刹那、イルとネルの体操着も散り散りとなった
「「ひゃぅんっ！」」
イルとネルは揃って悲鳴を上げ、大事な部分を手で隠す
ミラと同じく小振りなおっぱいが丸見え
そして、その場に残ったのは雪蘭ただ1人だけ
「そう何度も脱がされたりしない――」
「と思っていたのか？（ブ〇リー風に）」
もはや予想通りとも言える展開……新が裏拳を振り抜いた直後、凄まじい風圧が雪蘭を襲い――彼女のチャイナドレスも吹き飛ばす
風の衝撃で雪蘭の放漫なおっぱいが揺れ、途端に彼女の顔が赤く染まる
「もうっ、あなたはいつまでこんな恥ずかしい思いをさせるのよ……っ」
「この姿はパワーが半端じゃないんだ。本気でやったりしたら消し飛んじまう。お前らの綺麗な体を傷付けるのは嫌だからな、勘弁してくれよ」
新の細かな配慮に雪蘭達は頬を紅潮させる

「もう……あなたはズル過ぎるわ……。あの時と同じで、そんな台詞を言うなんて……」
「「お兄さんのエッチっ」」
相変わらずの威力を発揮した新の天然落とし文句
４人を戦意喪失（繊繊）に追い込み、体育館での一戦は新の圧勝に終わった
「あ、あの……」
「ん？どうした、ミラ？」
「あ、後で……サインください……実はファンです！」
ミラは『蝙蝠皇帝ダークカイザー』のファンになっていた……

体育館を抜け出し、野球部のグラウンドを目指す新は上空に警戒心を放っていた
前回と同じ流れだとすれば、ここで相手の『女王（クイーン）』が不意打ちで爆破の魔力を放ってくると予想していたからだ
あの時も油断した隙を突かれ、祐斗を撃破されたと言う苦い経験がある
しかし、『女王（クイーン）』の姿は見えずじまい……
代わりに待ち受けていたのは『女王（クイーン）』に昇格した『兵士（ポーン）』――――踊り子のシュリヤー、

メイド服のマリオンとビュレントだった
「来たわね」
「ここでしばらく時間を稼がせてもらいます」
「悪いけど、おとなしくしてね？」
「あの時と全く同じ、か……。いや、少し違うか。あの時よりもオーラが増してる。いつもならゆっくりしてやりたいところだが、今回は時間制限を気にしなくちゃいけないんでな。悪いが、速攻で通らせてもらうぜ」
新は全身から高密度のオーラを迸(ほとばし)らせ、右手から黒い火竜を生み出す
火竜の眼が妖しく輝き、その睨みにたじろぐ『兵士(ポーン)』３人
彼女達目掛けて新は火竜を解き放った
大口を開けて迫り来る火竜に対し、シュリヤー、マリオン、ビュレントの３人は散開して躱(かわ)そうとする
１度は回避したものの、火竜は上空でＵターンして彼女達をしつこく追い回す
「くっ……熱い……っ！」
火竜の直撃を避けられても、その熱までは回避する事は出来ない
しかも、その熱は周りの地面や木を溶かす程で――――彼女達の衣服も各所から溶かされていた

その事にようやく気付いたマリオンとビュレントは顔を赤く染め、丸見えになったおっぱいを手で隠す
一方、シュリヤーは元々が際どい衣装だった為――――あっという間に全裸となった
それでも顔を赤らめるだけで動きを鈍らせず、果敢に新の方へ向かっていった
新に渾身とも言える炎の魔力を放つが、新は火竜を纏わせた右拳で粉砕
空いた左手で若干弱めの掌底をシュリヤーの腹に打ち込む
掌底をくらったシュリヤーは「ぁんっ」と悲鳴を上げ、後方に飛ばされ尻餅をつく
今の新はパワーが有り余っている為、少しの力でも動きを止めるのに充分だった
「はぁ……やっぱり強すぎるわ」
シュリヤーは両手を上げて降参の意を示す
マリオンとビュレントは距離を取って作戦を練ろうとするが――――そんな暇も無く背後から火竜に呑み込まれてしまう……
火竜が霧散した後、マリオンとビュレントも例外無く裸にされていた
「何度もくらってるけど、やっぱり恥ずかしいわ……」
「もうっ、まだ心の準備が出来てなかったのに……」
マリオンはホンノリと頬を染め、ビュレントは少し膨れた顔で新を見る
「さてと、これで7人抜きか。次は誰だ？こうなりゃ誰でもかかって――――」

「次は私達だ」
そう言って現れたのは鎧を纏った女性『騎士(ナイト)』――カーラマイン
その隣には大剣を背負った『騎士(ナイト)』のシーリスもいた
「会いたかったぞ、竜崎新。暫(しばら)く見ない間に随分と姿が変わったようだな」
「見た目は怪物、頭脳は大人だ」
何処ぞの名探偵のキャッチフレーズで飄々と返す新
ここで新は詳細不明の『僧侶(ビショップ)』について探りを入れてみる事にした
「そういや、今回のゲームで出てくるもう1人の『僧侶(ビショップ)』が気になるな。誰か教えてくれねぇかな～」
完全な棒読み……分かりやす過ぎる探り方にカーラマインは不敵に笑う
「ふふふ、すぐに分かるぞ。実はな、こちらに今回心強い助っ人の先生も来ている！レイヴェルさまの欠いた穴を充分に埋めてくれる筈だ！先生！どうぞ！」
そう促されて空中より登場してきたのは、戦闘服を着た栗毛のツインテール少女……
つまり――
「じゃっじゃーん！助っ人は私よ！」
「イ、イリナァッ!?」
イリナの登場劇に素っ頓狂な声を上げる新

カーラマインがイリナを迎え入れて言う
「こちらは緊急の『僧侶』要員、イリナ殿だ。天使だぞ！過去に私が出会った聖剣使いでもある」
「そうなのか？」
疑問を浮かべる新にピースサインをするイリナ
「うふふ、そうなのよ。２年ぐらい前に某国で出会った悪魔の女性剣士がフェニックス眷属だったなんてね。凄い縁だと思わない？」
「凄いっつーか、もう言葉も出ねぇぐらい呆れてます……」
頭を抱える新にイリナはウインクをする
「ふふふ、悪魔のレーティングゲームに参加してみたかったのよね！今回だけの『僧侶』として新くん相手に頑張っちゃうわ！」
ヤル気満々で量産型の聖魔剣を構えるイリナ
新も気を取り直し、自前の剣を出して握る
「まあ、良いか。こういうのも交流試合だからこそかもしれねぇし。ただ、覚悟しとけよ？今日の俺は少し自制が効かない状態だからな」
新の全身から黒い火竜が揺らめき、３人の女性剣士に睨みを利かせる
その迫力と危険性に思わず震えてしまう……

新はお得意の剣戟波（クロス・バースト）を放った
火竜と化した剣戟波は咆哮を上げて突き進み、イリナ達がいた地点を爆破する
イリナは天使の翼を広げて空中に避難、カーラマインとシーリスは左右に跳んで回避していた
いの一番にカーラマインが駆け出し、以前とは違う魔剣を両手に持って剣戟を繰り出す
新も剣でそれを防ぎ、高速の斬り合いを始める
「さすがの剣捌きだ、やはり勝負は剣に限る！」
カーラマインは生き生きとした表情をしていた
横からもシーリスが大剣を振り上げ、新目掛けて振り下ろしてくる
新は咄嗟に左手に火竜を纏わせ、形成した炎の爪で大剣を防ぐ
シーリスの剣戟は以前よりも重みが増しており、炎の爪を懸命に押し込もうとしていた
「お見事です、師匠」
「そっちこそ、腕を上げたな。――――おっと、頭上から天使接近中か」
その言葉通り、新の頭上に回り込んだイリナが聖魔剣を構え――――急降下してくる
「新くんっ、アーメンッ！」と振り下ろされるイリナの聖魔剣に対し、新は漆黒の巨腕を

具現化させた
背中から噴き出てくる6本の巨腕、その内の2本がイリナの聖魔剣を白刃取りで止める
残りの4本の腕もカーラマインとシーリスの得物を掴み、彼女達を1ヶ所に投げ飛ばす
新はすかさず剣を逆手に持ち替え――振り抜いて横一閃の斬撃を放った
カーラマインとシーリスは共に炎の旋風で立ち向かうが……呆気なく突破され――
―
「あれ、何か嫌な予感――」
イリナが言い切る前に斬撃が彼女達の手前で爆発、周辺一帯に砂塵が舞い上がった
暫くして爆煙が晴れると――そこには衣服を一切合切吹き飛ばされたイリナ、カーラマイン、シーリスが呆然と立ち尽くしていた
自分の裸体に気付いたイリナは「きゃあぁぁぁっ！」と悲鳴を上げてその場に屈む
カーラマインとシーリスも力が抜けたようにへたり込んだ
「うぅ……っ、やっぱりこうなるのね……っ」
「イリナ殿をも圧倒してしまうか……私達では到底敵わないな」
「師匠の剣筋、私も見倣いたいものだ」

満足そうに顔を赤らめるカーラマインとシーリス
新は先へ進もうとその場を立ち去ろうとするが、イリナに呼び止められる
「ちょっと待ちなさいよ！新くん！女の子を裸にしておいて、そのままにするつもり⁉」
「今の俺は給油無しのノンストップで走り続ける車みたいな状態だ。これでも結構キツいんだよ。モタモタしてるとガス欠になっちまう」
「うぅ～っ……じゃ、じゃあ、せめて上着だけでも貸して！」
涙目で懇願してくるイリナ
それを見て新は〝仕方ない〟と言った表情で一旦元の姿に戻り、自身の上着を脱いでイリナに渡す
イリナは直ぐに新の上着を羽織り、ムスッとした顔で睨む
「新くん、いつか天罰が下るわよ」
「おー、そりゃ怖い怖い。そうなる前にさっさと行きますか」
進もうとした矢先、またしても次の刺客が登場する
やって来たのは顔の片側に仮面を着けた女性『戦車（ルーク）』イザベラ
更に猫耳を生やした『兵士（ポーン）』のニィとリィも出てくる
ニィとリィは猫又だが、小猫とは種族が違うらしい
「あの時はやられたけど」

「今度はやられないわ！」
２人の意気込みを聞いて新も闘志を復活させ、再び真『女王（クイーン）』へと姿を変える
全身から火竜のオーラを放つ新に猫耳コンビはたじろぎ、イザベラは驚嘆の息を漏らしていた
「……凄まじいオーラだ。あの頃とは天と地ほど変わったな」
「ああ、今の俺の拳、受けてくれるか？」
剣を仕舞い、そう問う新にイザベラは勇ましく笑んだ
「願ってもない事だっ！旧魔王派、ロキ、曹操、闇人（やみびと）を打ち倒してきたキミの拳を私に見せてくれッ！」
イザベラも全身から濃密なオーラを放つ
軽やかなステップで距離を詰め、拳をユラユラと揺らしながら鋭くフリッカージャブを繰り出す
新はそれらを全て体捌きで避け、掌底をイザベラの腹部に突き出した
イザベラは腕をクロスして防御するが、想定を超えた威力にガードが崩される
「相変わらず良い攻撃だ。誇りにさえ思うよ」
「そいつはどうも。さて、ここらでアレを使うか」
新は全身から更に力強いオーラを滲ませ、次第に雷が迸（いかずちほとばし）っていく

神風の雷を取り込み、会得した形態――雷炎(らいえん)モード
黒い火竜に雷が走り、先程よりも重圧が増していく
新は瞬時にその場を駆け出し、イザベラの眼前に現れる
反応も出来なかったイザベラは驚き、新が雷炎を纏わせた寸止めの拳を繰り出す
その一撃の余波は後方の地を大きく破壊し、彼女の衣服も木っ端微塵に弾け飛ぶ程だった
イザベラの豊満なおっぱいが拳の余波によってプルンプルンと揺れる
「――っ！な、なんて威力だ……っ。全く反応できなかったぞ……。しかし、キミはここまで再現するのか？」
「やるからには徹底的にやらねぇとな」
「……フゥっ、相変わらずだな、キミは」
小さく笑って降参の意を示すイザベラ
新は次なる標的――ニィとリィに狙いを定めた
「リ、リィ……、やばそうだにゃ……っ」
「ニ、ニィ！逃げるにゃぁっ！」
ニィとリィは新の強さに完全に萎縮してしまい、逃亡を図るが……先回りされてしまう

腕を組んで仁王立ちする新
バチバチと雷炎を迸(ほとばし)らせ、ニィとリィの胸元をチョンッ、チョンッと小突く
「敵前逃亡はダメだろ」
「「そ、そこを許して欲しいにゃぁ……」」
「却下」
命乞い虚しく……ニィとリィも寸止めの拳打によって衣服を吹き飛ばされ、悲鳴を上げて座り込んだ
これで１３人を戦意喪失(繊維)させ、残りは２人
荒れた息を整える新は近くに残りの敵がいないか見渡す（その間、ニィとリィに石を投げつけられている）
辺りを見回していると――十二単(じゅうにひとえ)を着た和風の美少女が視界に映る
ライザーの『僧侶(ビショップ)』――美南風(みはえ)はペコリと一礼するなり言った
「ついてきてください。――ライザーさまがお呼びです」

彼女の案内で辿り着いたのは新校舎の玄関前

そこには先導してきた美南風の他、今まで姿が見えなかったライザーの『女王(クイーン)』ユーベルーナもいた
「久しぶりだな、ボム・クイーン」
「ええ、ごきげんよう」
「今回は不意打ちを仕掛けてこなかったな。俺を正面から打ち倒すつもりだったのか？フェニックスの涙を使っても構わないぜ」
新の挑戦的な物言いに譜ユーベルーナは不敵な笑みを浮かべる
「ふふっ、私もあれから魔力と魔法に磨きをかけたわ。――ただでは負けなくてよ？」
「ユーベルーナさま、私もお手伝い致します」
ユーベルーナの隣に並び、全身からオーラを滲ませる美南風
新も雷炎を迸(ほとばし)らせ、右手から火竜を放つ
負けじとユーベルーナは杖を振るい、四方八方に展開された魔法陣から――けたたましい爆破の魔力が放たれる
爆破の連続で火竜は形を崩され、遂には爆(は)ぜる
どうやら桁違いにレベルアップしているようだ……
思わぬ成長ぶりに感嘆していると――突如、結界らしきバリアーが新を包囲する
両手を前に翳(かざ)す美南風

逃げ場を絶たれた新の周囲に幾重もの魔法陣が展開される
そこから放たれるユーベルーナの爆破の魔力
凄まじい爆破の弾幕に新は呑み込まれてしまう……
爆煙から上へ飛び出す新は全身から迸(ほとばし)る雷炎の強さを高めた
お返しとばかりに先程よりも巨大な火竜をユーベルーナと美南風に撃ち放った
火竜はバチバチと雷を纏い、凄まじい勢いで２人に向かっていく
ユーベルーナは再度、爆破の魔力で火竜を打ち消そうと試(こころ)みるが……２度目の火竜には通用せず
一点集中に切り替え、美南風と共に特大の波状攻撃で応戦
しかし、それも火竜の勢いに勝てず――――ユーベルーナと美南風は火竜に包み込まれる
巨大な火柱が雷を伴(ともな)って空を貫き、次第に消えていく
新は地面に降り立つと、首や肩をゴキゴキと鳴らす
一方、ユーベルーナと美南風は無事でいたものの――――やはり衣服を消し飛ばされていた
恥じらう美南風と「負けましたわ」と潔(いさぎよ)く降参するユーベルーナ
ユーベルーナは自分と美南風にフェニックスの涙を振り掛けて傷を癒す

「完敗ですわ。見事としか言いようがありませんわね。さあ、どうぞお進みください」
ユーベルーナが一礼して道を空ける
新は両翼を広げ、一気に新校舎の屋上へ飛んでいった

屋上に辿り着いた新
そこで待っていたのは無論、ライザー・フェニックス
「闇皇、随分とバケモノじみた姿になってきたな」
「それ、ついさっきも聞いた」
「ユーベルーナは修行で1番能力を伸ばしたんだが……そうか、やはりお前には及ばなかったか。……潜ってきた修羅場の数が違うものな」
冷静にそう漏らすライザー
以前のライザーなら眷属の敗北に憤りを感じて、苦言を呈していただろう
今回の戦いはある程度の結果を受け入れている節が見て取れる
上着を脱ぎ捨て、背中から炎の両翼を出現させる
その炎の出量を見て、新は気付いた

〝――以前よりも遥かに濃厚で巨大な炎を展開している――〟

ライザーは迫力あるオーラを解き放ちながら言う

「闇皇、今回の一戦を提案してくれた事に改めて礼を言おう。俺はな、赤龍帝にもお前にも勝ちたくなってきた！いや、勝たなきゃならないんだ！お前達を倒さない限り、俺は本当の意味でドラゴンと闇人を克服した事にはならんッ！」

ライザーの真意と覚悟を知り、新は警告を促す

「なるほど、大した覚悟だ。なら、俺も本気でやる事になるが――良いよな？」

「たとえ負けても、それを糧にする！何よりも強者とぶつかり合う事に意味があるのだと悟ったのだ！」

指を突きつけてくるライザーは勇ましく叫んだ

「火の鳥と鳳凰！そして不死鳥フェニックスと称えられた我が一族の業火！その身で受けて燃え尽きろッッ！」

ライザーは炎を巻き上げて巨大な火の鳥と化し、上空へと飛び出していった

新も雷炎を纏って空中に飛び出していき――お互いの拳がお互いの顔面に打ち放たれる

ぶつかり合った衝撃が波動となって新校舎を大きく震動させる

新校舎の屋上で新とライザーの打ち合いが始まった

一撃を食らう度に高熱が新を痛めつけるが、新の攻撃は炎と雷――2つの属性を孕んでいるので威力はこっちの方が勝っている
しかし……ライザーの頭、腕、足が吹き飛んでも不死身の特性からか、瞬時に再生を果たす
一進一退の攻防を続けていく内に新は理解した
「ライザー、まさか体術を使うとはな！誰から教わった⁉」
「最近はこちらも鍛えているからな！何せ組み手の相手にサイラオーグ・バアルを招いている程だ！ぶつかり合いなら保証付きだろうッ！」
「サイラオーグか！どうりでッ！」
激しく続く打撃合戦
新の拳がライザーの顔面に打ち込まれ、ライザーの蹴りが新の腹部に打ち込まれる
疲弊が溜まっている新だが、この殴り合いが戦闘意欲を掻き立ててくる
ライザーの決死の意に応えるべく、新は全身から噴き荒れる雷炎を一層強めた
大きく裂けた口に絶大な雷炎のオーラを集め、ライザーに向かって一気に放射した
「――『雷炎竜の咆哮（ライトニング・ブラスト）』オオオオオオオオオオオオオオッッ！」
ライザーは背中の炎を前面に持ってきて防御しようとするが――その炎ごとライザーを吹っ飛ばす

「ぐはあああああっ！」
ライザーは絶叫を上げて屋上に落下していく
屋上に叩きつけられたライザーは、大きなダメージを受けながらもヨロヨロと立ち上がった
体を炎で再生させ、目をギラギラと輝かせる
「やはり……さすがだな、闇皇（やみおう）……！あの時以上の震えが来る……！俺はお前や赤龍帝に何十回、何百回と負けるかもしれん！だがな！これだけは覚えておけ！永遠に近い悪魔の生だ！それだけあれば、俺はいずれお前らに勝てるッ！いや、１万年もいらん！数年もあれば、この不死鳥の業火で塵（ちり）にしてくれるッ！」
再び背中の炎を莫大に滾（たぎ）らせて、ライザーは空中を飛び出してきた
だいぶ精神を疲弊させたにもかかわらず、まだ向かってくる
その勇姿を見て思わず新も叫んだ
「その意気だ！何度でもかかってこい！俺も強くならなきゃいけねぇんだッ！何十回、何百回でも相手してやるぜぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！」
両者の拳がゲームフィールド内でぶつかり合った

「あ～……っ、しんど……っ」
ゲームフィールドから戻ってきた新は疲弊しきっていた
結果は新の全勝と言う形で交流試合が終わった
スタートから体に負担をかけ過ぎたせいか、新の全身は酷い筋肉痛に苛(さいな)まれ……満足に動けない状態となっていた
歩く度にズキズキと体が軋(きし)み、歩行速度はメチャクチャ遅い……
そんな状態の新に報復の手が……っ
指で小突かれ「ぐあぁぁぁっ！」と絶叫を上げる新
報復の犯人は――――新の上着を着たままのイリナだった
「イ、イリナ……っ⁉」
「ふっふっふ～ん♪新くん？いつか天罰が下るって言ったけど、今ここで私が天罰をあげちゃうっ！」
「ま、待て……！今はマジでやめろ……！話せば分かる……！」
「問答無用！えいえーい！」
「あぎゃぁぁあああああっ！リアスッ、止めてくれ……！」
イリナの報復になす術(すべ)も無く、新はのたうち回るだけ……

新はリアスに助けを求めるが、彼女から返ってきた答えは――――

「１回だけ、私もっつかせてもらえるかしら？こんなに弱った新、そう簡単に見れないし」

悪魔の悪戯（いたずら）だった……

「あらあら、リアスだけズルいですわ」

更に増加……っ

「お、お前ら……！薄情も――――ギャイィィィイイイイイイッ！」

その後、新は数日に亘（わた）ってイリナからこの責め苦をくらい続ける羽目になったそうな……

護衛任務のブラザーズとセルゼン（前編）

「良い天気だねぇ」
この日、アザゼルは暇をもて余していたのか――――小さな釣り堀に出向いていた
釣糸を垂らし、魚が食い付くのを待つ
この釣り堀は堕天使側が経営する施設の1つで、今はアザゼルの貸し切り状態にしている
更に周りには誰もおらず――――リアスや新、一誠達さえもいない
その理由は……これから〝とある人物〟が訪れ、内密に話を進めるからである
身内にさえ隠す話とはいったい何なのか……？
暫く魚が釣れない状態で待っていると、ようやくアザゼルが呼び出した人物が訪れてきた
「貴様がアザゼルか。どうやって俺達の出所を割ったか知らんが、こんな場所に呼び出して何の用だ？」
「総督をクビになって風当たりが悪いってのに、それでも俺らを呼び出すってどういうつもりだよ、オッサン」

訪れて早々にアザゼルへの疑心を追及する2人組
刺々しくなるのも無理はなかった
何故なら、アザゼルが呼び出した人物とは――幽神(ゆうがみ)兄弟だったからだ
今やお尋ね者の賞金首へと成り下がった彼らを、アザゼルが呼び出していた
表向きは〝神器(セイクリッド・ギア)所有者である彼らをグリゴリの監視下に入れる為の説得〟と堕天使側には説明をしているが、アザゼルの思惑はそれだけじゃない
「まあ、そうカリカリしなさんな。釣りでもしながらゆっくり話そうじゃないか」
「生憎(あいにく)だが俺達にそんな気分は無い。くだらん話をするようなら、帰らせてもらうぞ」
踵(きびす)を返して帰ろうとする幽神正義(ゆうがみまさよし)――だが、アザゼルは彼を逃がさない
懐(ふところ)から1枚の写真を取り出す
「良いのか？俺の話を聞いてくれるなら、この写真をくれてやろうかな～っと思ってたんだが」
「俺に写真観察の趣味は無い」
「こいつはただの写真じゃねぇ。体育の授業でコッソリ撮った――マット運動をしているアーシアのお宝写真だ」
「……ッ」
アザゼルが出した交渉材料とはアーシアの写真だった……

幽神正義のアーシアに対する好意は既に知られており、アザゼルはそこを突いて予め(あらかじ)アーシアの写真を撮っていたのだ

しかも、運動が苦手なアーシアが懸命にマット運動をしていると言う場面付きで……

アザゼルは悪い表情をしながら幽神正義に交渉を持ちかける

「さあ、どうする？おとなしく話を聞いてくれるなら、この写真を提供してやらん事もないぞ？今なら3枚セットとお得だ」

「……ッ！……ッ！」

「て、てめぇ！兄貴の弱みにつけ込みやがって！良い歳こいて恥ずかしくねぇのか!!」

幽神正義の弟――幽神悪堵(ゆうがみあくど)が激昂するが、アザゼルは「ハハハ！何とでも言え！」と悪戯な笑みを飛ばすだけだった

見かねた悪堵は右手に神器(セイクリッド・ギア)――『拳獄の手錠(ライジング・ギア)』を展開して、殴り掛かろうとするが――正義は手で制する

「……写真はいらん。写真はいらんが、話ぐらいなら聞いてやる」

「毎度ありっ、そうこなくちゃな。それじゃあ前金代わりに見せてやるか、ほれ」

「ふんっ、こんな写真を見たところで今更――」

ブシャアアアアアアアアア……ッ！

僅か1秒で鼻血大噴射（笑）

「あ、兄貴ィ⁉言ったそばから鼻血が弧を描いてるぞ⁉いったい何がブシャアアアアアアアアアアアア……ッ！」
弟も巻き添えで鼻血噴射（笑）
幽神兄弟は揃って付近に置いてあったバケツに顔を突っ込み、鼻血の捌け口とした
それを見てアザゼルは苦笑い
「アーシアのブラジャーチラ見えでそこまで鼻血を噴くとは思わなかった……」

「さて、死ぬか遺言を残すか決めろ。武士の情けと言うヤツで、どちらか選ばせてやる」
「まあまあ、そういきり立つなって。お茶目なジョークじゃないか」
「バケツ２杯分の出血をさせておきながらジョークと言い張るなら、俺の蹴りが貴様の頭蓋骨を叩き割るのもジョークで良いんだな？」
「いや、マジで悪かった。本題に入ろう」
止血と輸血を終えた幽神正義から刺々しい殺意を浴びせられ、アザゼルは早急に話を本題へ移す
ちなみに悪堵はまだ耐性が弱かったらしく、隣で仰向けになっている

話を始める前に正義が疑問を切り出す
「そもそも何か用件があるなら、何故兵藤達に言わない？」
「イッセー達は冥界での騒動直後で、今は休ませてやりたいんだよ。それに……この件はあいつらにあまり関わらせないようにしたかったんだ。何せ――アスタロト家とヴァサーゴ家の問題だからな」
〝アスタロト家〟と言う一言を聞いた正義は眉根をピクリと動かす
魔獣騒動が終わった今でもアスタロト家は折り合いが悪く、冥界の貴族や市民からの風当たりもすこぶる悪かった
理由はディオドラ・アスタロトと『禍の団（カオス・ブリゲード）』の癒着
その1件がアスタロト家と懇意にあるヴァサーゴ家にも飛び火してしまい、両家は肩身の狭い思いをしている
正義もディオドラ・アスタロトの事は知っている――と言うより、魔獣騒動の時に偶然出くわした
神風の手によって復活した白髪神父フリードと闇人（やみびと）の村上京司（むらかみきょうじ）を惨殺し、復活したディオドラも消息不明となった
生死不明だが、正義にとって彼の生存など微塵も興味なし
正義は胸糞（むなくそ）悪い記憶を消して、話の本題に耳を傾ける

「ディオドラ・アスタロトの1件を皮切りに、アスタロト家とヴァサーゴ家は暫く人間界の辺境の地に身を潜める事になった。傷心旅行って感じでな。ところが……何処で嗅ぎ付けたかは知らんが、タチの悪い過激思想のカルト教団連中が躍起になってアスタロト家とヴァサーゴ家を狙い始めた。――〝悪魔の浄化〟と言う口実でな。『はぐれ』に踏み外した神父やエクソシスト、更には異能者の類まで集まったもんだから手に余る。しかも、そいつらはいくつもの支部をあちこちに構えてやがる」

「つまり、その支部を1つ1つ潰してこいと？」

「いや、それは流石に無理がある。複数の支部を構えていると言ったが――それぞれの場所が何処にあるか、お互いに知らないんだ。……見ず知らずのくせに目的だけ同じと言う組織ほど厄介なものは無い。だから、場所を割らせようとしても無駄だし、全ての支部の場所を調べてる時間も無い」

「なら、俺達にどうしろと？居場所が分からんようなら手の打ちようが無いんだが」

そう言ってくる正義に対し、アザゼルは「そこが今件の鍵だ」と前置きをしてから言う

「場所が特定できないなら、敢えて奴らを集結させてやれば良い。全ての支部の連中が集まる日程を見越して、お前ら2人を護衛として派遣する。支部を1つ1つ潰していては埒が空かないし、多勢で動けば奴らにも気取られる」

「アスタロト家とヴァサーゴ家を餌に誘(おび)き寄せ、一網打尽にすると言う事か」
「そういう事だ」
　正義は暫(しば)し考え込み、アザゼルの要望に対して1つ訊ねる
「その護衛とやらをして俺達に何のメリットがある？たとえ承(うけたまわ)っても、賞金首である俺達の立場など早々に変わったりしない」
「メリットならあるさ。それも踏まえて俺はお前らをスカウトしようと呼んだんだよ」
「スカウトだと？」
「ああ、この護衛の依頼を受けて尚(なお)かつ教団連中を捕縛できたなら、お前ら2人をグリゴリに配属、遊撃兼諜報部隊として活動させる。お尋ね者のお前らには嬉しいメリットだと思うが？」
　アザゼルの依頼を受け、その任を果たせば――幽神兄弟は賞金首からグリゴリの諜報部員として立場を変える事が出来る
　グリゴリの監視下に置かれるなら、三大勢力でも納得の声が上がるだろう
　彼らにとって悪い話ではない筈……
　この話に対して正義が出した答えは――
「良いだろう、その護衛とやらをやってやる。ただし、少しでも不審な考えを起こそうものなら――その時は容赦しない」

「そんな事はしねぇよ、した覚えもない（笑）」
「……貴様の舌にも無駄な脂(あぶら)が乗っている事が分かった。口内に生えてる３２本の歯ごと蹴り潰した方が良さそうだな」
「待て待て、冗談だ！早まるなって！冗談なんだから少しは聞き流してくれよ！」
「誰かが言っていた。貴様の冗談には悪意しか感じられないと」
「ひでぇ濡れ衣だな！」
〝幽神正義(コイツ)の前で下手な冗談は言わない方が良いかも……〟とアザゼルは危惧した後、今件に関するもう１つの報せを伝える
「それから今回の１件にもう１人――お前らと共に行動する奴がいる。そっちに関しては明日、直接会ってもらう事になる」
「余計な人手は邪魔になるだけだ」
「そうもいかないんだよ。万が一ってのも考えられるから、助っ人はなるべくいた方が良い。教団には正教会から追放された連中もいるもんで、ヴァチカンからの要請もあるんだ。なーに、足手まといにはならねぇ人材だから安心しろ」
「まあ、良い。好きにしろ」
疑いつつも幽神兄弟初の護衛任務が始まる事となった

翌日の朝、幽神兄弟はアザゼルに指定された待ち合わせ場所に来ていた
場所は緑の看板が目印たるコンビニ――ファミルーマート
２人は少し早めに集合し、朝食に買ったカップ麺を啜(すす)っている
ちなみに味は正義がイカスミパスタ味、悪堵がタコ焼き味だった
「兄貴、堕天使の元総督が言ってた人材って誰なんだ？」
「その点は俺も分からん。足手まといにはならないとは言っていたが……ただ……」
「ただ？」
「心なしか嫌な予感がする。あの時――ヤツの目に面白がる悪意が見えた」
正義は研ぎ澄まされた警戒心の高さから、アザゼルの目に潜む悪意を見抜いていた
その証拠にアザゼルは当然の如く来ていない
合流してくる人物の正体も告げてない時点から、正義はアザゼルに対する不信感を募(つの)らせていた
カップ麺を食べ終わり、空き容器をゴミ箱に捨てる幽神兄弟
「ただ１つ手掛かりがあるなら、ヴァチカンの要請もあったと言っていた。つまり――
――何処その教会から派遣されると言う事だろう」

「げーっ、教会出身かよ……。今の俺らが1番苦手なタイプじゃねぇか」
お尋ね者の兄弟に教会出身の助っ人と言う珍妙な組み合わせ
あまりにも似つかわしくない予想図に嫌気を顔に出していると――幽神兄弟に声をかける者が現れる
「あのー、スンマセン。緑色のファミルーマートってヤツはここで良いんスか？」
随分と間の抜けた声に振り返る幽神兄弟
そこにいたのは……どう見ても普通じゃない感じの少女だった
白と黒が混じった髪をアップスタイルに纏め、体のラインが浮き彫りになる黒い戦闘服を着込み、その上からマントを羽織っている
正義の第六感が危険の警鐘を鳴らす中、少女はメモらしき紙を取り出し――メモ、幽神兄弟に見比べるように視線を送る
「あー、やっぱり間違いないっスね。アザゼルの旦那が言った通り人相ワルワルっス。見た目で判断するのは失礼かもしれないんですけど、お陰でソッコー分かりましたよ」
『……アザゼルが言っていた同伴者とはコイツの事か……っ』
正義の嫌な予感がズバリ的中
少女はメモをしまってペコリとお辞儀をする
「えー、自己紹介がまだでしたね。自分はヴァチカンとアザゼルの旦那より命(めい)を受けて、

お二人のサポートに参りました――リント・セルゼンっス。どもども、よろしくお願いしまっす」
軽い口調でありながら礼儀正しく接してくるリント・セルゼンに、幽神兄弟も簡単に自己紹介をする
「……幽神正義（ゆうがみまさよし）だ。こっちは弟の悪堵（あくど）」
「イエスイエス、正義パイセンに悪堵パイセンですな」
「パ、パイセン……？」
「〝先輩〟を逆から読んでパイセンっス。自分、初めての共同作戦なもんで、パイセンのお二人からご指導もいただけたら良いなーとも思っております」
リント・セルゼンの飄々とした口調とノリについていけず、毒気を抜かれそうになる幽神兄弟
――ここで正義のスマホに着信を知らせる振動音が鳴る
通話をオンにすると、アザゼルが『オッス、おらアザゼル！』とふざけた挨拶が飛び込んできた
「殺すぞ」
『だから、いきなり殺意を浴びせないでくれよ。本当に冗談が通じない男だな』
「冗談を言ってる暇があるなら説明しろ。貴様が寄越した同伴者――あれは女じゃな

いか」
『あの胸とボディラインを見て女じゃなかったら、それはそれで問題だろ？実力だけじゃない、結構出るところも出てるから逸材だぞ』
「そういう事を言っているんじゃない。俺達に女を組ませるとはどういうつもりだと訊いている……ッ！」
幽神兄弟は女性に対して極端に免疫力が低く、それは女性のスカートが風で捲(めく)れると言う瞬間だけでも鼻血を大噴射してしまう程……
正義の問いに対して、アザゼルは――
『これを機に鼻血癖を少しでも抑えられればと思ってな。……ぷぷっ、お前らにも根性を付けてやりたいと言う俺の心遣いだ』
「今、不愉快な笑い声が聞こえてきたが？」
『あ、バレた？単に面白くなりそうだから組ませてみた。ワリィ☆』
バキバキッッ！
アザゼルの余計な一言により正義の怒りは頂点に達し、スマホが粉々に握り潰される……
恐らくこの任務が終わった後、アザゼルは鬼と化した正義から報復を受ける事になるだろう……

スマホの破片をゴミ箱に捨てた正義は一旦気持ちを落ち着かせる
「……とりあえず、アスタロト家とヴァサーゴ家のもとに行くぞ」
「ラジャーっス」

『『気まずい……』』
アスタロト家とヴァサーゴ家の潜伏先へ向かう道中、幽神兄弟は終始無言だった
何せ相手は女子……女性関係に滅法弱い彼らは何を話せば良いのか、見当もつかない
リント・セルゼンはトコトコと幽神兄弟の後ろをついてくるだけ……
『兄貴、この空気を何とかしてくれよ……。もう俺には耐えられねぇ』
『無茶を言うな……っ、俺だって同じだ……！クソ……ッ！』
正義は脳をフル回転させ、この気まずい空気を解消できないか模索する
『……そう言えば、〝セルゼン〟と言う姓――聞き覚えがあるな。それにこの女を見た途端、あの不愉快な神父の顔が頭の中に過った……』
正義は〝セルゼン〟の姓から探りを入れる事を思い付き、リントに話を振る
「おい、リント・セルゼン」

「いえいえ、リントで良いっスよ。正義パイセン」
「……じゃあ、リント。お前は確かヴァチカン出身と言ったな」
「イエスイエス、正確にはヴァチカンの戦士育成機関の1つだったところ、フリードのアニキやジークのセンセと一緒でございやす」
「――――っ。やはり、そうか。お前はフリード・セルゼンの縁者……報復にでも来たか」
正義は警戒心を一層強めるが、リントは手を左右に振った
「おっと、気にしないでくださいな。自分は自分、アニキやセンセはアニキやセンセなんで。報復とか復讐心とか、これっぽっちもございやせん。あー、2人が迷惑をかけた事に関しては、あの機関を代表して謝ります。すみません、すみません」
軽口のまま頭を下げるリントに正義は警戒心を鎮める
「スマない、嫌な訊き方をしてしまった。忘れてくれ」
「ラジャーっス」
そこから無言の時間が暫し流れ、リントが口を開く
「自分が所属していたのは『シグルド機関』と言うところでしてね。英雄シグルドの血を引く者達の中から魔帝剣グラムを扱える『真のシグルドの末裔』を生み出すのが目的だったわけですわ」
「じゃあ、アンタとフリード・セルゼンは兄妹って事か？」

悪堵の問いにリントは首を傾けて答える
「うーん、複数の遺伝子パターンから作られているんで、兄妹と言えば兄妹ですし、親戚と言えば親戚のような……。あー、フリードのアニキとはほぼ同一の遺伝子なので、同一人物と言えばその通りでもあるかなーって」
「同一の遺伝子か……。どうりで面影があるわけだ」
話から察するに、信徒である教会やヴァチカンが遺伝子を弄(いじ)ると言う非人道的な行(おこな)いをしていたのが見えてくる……
バルパー・ガリレイの例もあり、今更ではあるが教会の闇は想像以上に深くエグいものだった
現在はだいぶ改善する方向で進んでおり、次々と怪しい研究をしていた機関は解散――
――研究員には別の組織を紹介している
「いわゆる試験管ベイビーってやつっスな。機関は人工的にシグルドの末裔を作ろうとしていたと言う事っスわ」
「遺伝子の改良……神とやらを崇拝する組織が、神をも恐れぬ所業をしでかすとは、世も末だな」
刺々しい指摘を浴びせる正義だが、リントは豪快に笑うだけだった
「いやー、ははは、三大勢力同盟前はヴァチカンも混沌していましたからなー。たとえ教

えに反しても結果的に天の為、神の為になるのならって言う狂信者、強欲に駆られたお偉いさんが跋扈しておりましたってやつですわ」
「そんなに明るく教会の闇を語って良いのかよ!!」
「重い話の筈なのに、軽く聞こえてしまうのが解せんな……」
リントは想像以上にぶっちゃけてしまう娘のようです……
「結果的にジークのセンセが一抜けでグラムを扱えてしまいましてね。基本的にその時点で機関の長年の宿願は完遂。ま、ジークのセンセはその後で意気揚々とヴァチカンからおさらばして、テロりまくっていましたけれども」
リントが話を続ける
「グラムを扱えるヒトが出ちゃったんで、機関は残された自分らに対して方針を変えて、『英雄シグルドの子孫が何処までやれるのか試してみよう作戦』に切り替えましたのです。――と思ったら、今じゃそのグラムも持ち主変更と言うお知らせ」
「そうか。……ところで、セルゼンの姓を名乗っているのは何故だ？機関にいた頃、上に与えられたからか？」
正義は次なる疑問を彼女にぶつけてみた
フリード・セルゼンは教会や悪魔、三大勢力にとっても迷惑極まりない存在だった
セルゼンの姓を名乗ったら関係を疑われる上に強く警戒されてしまい、彼女にとって

良い事は無い筈である
「うーん、まあ、色々な意味がありますな。ま、同じ遺伝子を持つ自分ぐらいは、ヤンチャしておっ死んだフリードのアニキの分まで生きてやろーかなってのと、同アニキが行った悪さの数々を償えればなーと」
償いの為に生きる……幽神兄弟にとっては耳が痛くなる言葉だった
彼女自身が悪さを働いたわけじゃないのに、リントはフリードが犯した罪を償おうとしている
その事を当然のように言い切り、何1つ怨み辛みを吐かない
『……コイツもアーシア・アルジェントと考えが近しいな』
話をしている内にアスタロト家とヴァサーゴ家の潜伏先――――山奥の別荘に到着する
名家だけあって別荘もそこらのとは違い、豪勢な造りだった
『……こいつら潜伏の意味を分かってなくね？』
『堂々と紋様が翳してある辺り、世間知らずにも程がある』
アスタロト家とヴァサーゴ家の紋様を確認しながらヒソヒソと耳打ちする幽神兄弟
インターホンを鳴らすとメイドと思われる女性が出て、「お待ちしておりました。お入りください」と告げられる

扉を開けて中に入るときらびやかな内装が視界に映り、メイドの案内で大広間に進んでいく

周りを見渡す正義、唖然と天井を見上げる悪堵

リントは「ほへ～、凄いっスねぇ」と呟いてキョロキョロ見回す

ソファーに座って待っていると、アスタロト家の〝元〟当主、つまり———ディオドラの父親が入室してきた

畏まった様子でソファーに腰掛け、メイドがお茶を持ってきたと同時に話を始める

「この度は遠くまでお越しいただいて、ありがとうございます。アスタロト家〝元〟当主です。まずは私の息子———ディオドラの起こした悪事が皆さま方にご迷惑を掛けた事を深く、深くお詫び申し上げます」

深々と頭を下げるアスタロト家の元当主

正義は心中で〝謝る相手を間違えているだろ〟と毒づくが、その点は後回しにするべく聞き流した

元当主が頭を上げる

「アザゼル殿よりお話は窺っております。息子の1件が火種で我々アスタロト家とヴァサーゴ家は、過激思想の教団に命を狙われております。身から出た錆ゆえ、民や他の貴族からの非難は覚悟していましたが……私の認識が甘かったようです。友人のヴァ

サーゴ家当主と妻は心労で倒れ、使用人も次々と去ってしまい、今は人間界の辺境の地で隠居している身分です……。しかし、私ならともかく――妻や子供達に危害が及ぶのは耐え難いものです。どうか、皆さま方の力をお貸しください」

アスタロト家元当主は再び頭を下げて懇願する

『ディオドラってヤツと違って、父親はまともじゃねぇか。どう間違えたらあんなクソ野郎が生まれてきやがるんだ？』

『相棒、言いたい事は分かるが抑えておけ』

コソコソと悪堵を諌(いさ)める正義

リントが胸をポンッと叩いて言う

「お任せくださいな。その為に自分らが派遣されてきたものでして」

「よろしくお願いします。そうだ、せっかくですから娘達にもご挨拶を」

『『……娘、達……？』』

急激に嫌な予感が走る

そして、その予感は再び的中してしまう……

アスタロト家元当主が立ち上がろうとした矢先、奥の一室から2人の小柄な少女が出てくる

「アスタロトのおじさま、こんにちは」

「ん、そこの3人は誰なの？」
「やあ、ウェンディ、シャルル。皆さま、紹介しましょう。彼女達はヴァサーゴ家の双子の姫君です。ほら、2人とも挨拶しなさい」
　アスタロト家元当主に促され、青い髪をツインテールに纏めた少女が挨拶をする
「はじめまして、ウェンディ・ヴァサーゴです。こっちは双子のお姉ちゃんの――」
「シャルル・ヴァサーゴよ。アンタ達、誰なのよ？」
　白い長髪を靡かせる少女――シャルル・ヴァサーゴが不機嫌そうな表情と声音で簡素に訊ねてくる
　正義と悪堵は嫌な予感が的中してしまった為、言葉が出せなかった……
　そこでリントが2人の代わりに答える
「どもども。自分はアザゼルの旦那よりそちらさん方をお守りしに来ました、リント・セルゼンっス。んで、こちらのお二人も自分と同じガードマンの――」
「……幽神正義」
「……幽神悪堵だ」
「あらら、何かテンション低いっスね。どうしましたか？」
　首を傾げるリント、目線を逸らす幽神兄弟
　その原因は――やはりヴァサーゴ姉妹だった……

彼女達はお揃いのワンピース姿で露出もやや有り、シャルルは更に黒のパンストも穿(は)いている
幽神兄弟にとっては目に毒物のオンパレード……
再びシャルルが不機嫌そうに訊ねる
「ちょっとアンタ達、さっきならその目線は何処を向いてるの?ウェンディに変な視線を向けないでよね」
「……壁を見ているだけだ」
「そっちは床なんだけど?」
「シャ、シャルル……。そんな失礼な事言っちゃダメだよ。私なら気にしてないから……」
「もうっ、ウェンディ!アンタはいつもそうやって弱気だから、いつまでもディオドラの事で悪く言われるのよ!言われっぱなしで良いわけ⁉アンタは何も悪くないのに!」
「はぅぅ……っ、それはそうだけど……」
シャルル・ヴァサーゴの一方的な言葉攻めに発展してしまい、1秒でも早くこの場から離脱したい衝動に駆られる幽神兄弟
だが、この事態は序章に過ぎなかった……
ザワザワザワ……ッ!ザワザワザワ……ッ!

『――――ッ！な、何だ……この怖気が混じった嫌な予感は……ッ⁉』
正義が不意に感じた悪寒、その正体を確かめるべく視線が階段の方に向いてしまう
「お父さま、お客様ですか？」
「ちょうど良かった、キミもこちらの方々にご挨拶をしなさい」
階段を降りて来たのは――――ヴァサーゴ姉妹とは逆にスタイル抜群の美少女だった
ゆるふわのウェーブが掛かった青い髪
黒い帽子と黒い服装に身を包んでいても主張してくる２つの爆乳
括れた腰に深いスリットから見える色白の美脚
彼女の美貌は正義の息の根を止めんとする程の威力だった
１段、また１段と階段を降りる度に彼女の爆乳が揺れる
『……ば、爆乳が迫ってくる……ッ』
蛇に睨まれた蛙の如く固まる正義
アスタロト家元当主は自慢げに紹介する
「あの子はジュビア・アスタロト、私の娘であり――――ディオドラの姉です」
「ごきげんよう」
ジュビアの挨拶に対し、正義は無言で会釈した
そんな様子の正義を見たジュビアは――――

『……ポッ』

護衛任務のブラザーズとセルゼン（中編）

「実はもう1人、末っ子――ディオドラの弟がいるんですが……そちらは今、現ベルゼブブ殿の運営する研究所の1つにいます。本当はお呼びしたかったのですが、当分戻る気は無いと言われまして……」
「いや、構わん。それより……その教団とやらの話を聞かせてもらえるか？」
正義は過激派教団の話に戻そうとする
周りの殆どが女性しかいないと言う空間に耐える自信が無い為、早急に話を終わらせて避難しようと考えていた
アスタロト家元当主は小さな魔法陣を展開し、周辺の地図をテーブルの上に映し出す
話によると、教団の連中はここから数キロ離れた森の奥深くに簡易的なアジトを構えており、そこに他の支部も集結してくるらしい
「教団の人数は確認されているだけでも１０００人弱、全ての支部が集まれば――その数は２０００人、３０００人を超えるかと……」
「ちなみに訊くが、当初はどうするつもりだった？」
正義の問いに元当主は気まずそうな表情で目を逸らす

それを見た正義は元当主の思惑を察して溜め息を吐いた
「――妻子とヴァサーゴ家の者を別の土地に移し、自分だけがここに残って教団の的になろうとした……そんなところじゃないのか？」
「――ッ！」
正義に核心を突かれた元当主は目を見開いて仰天
元当主の思惑にジュビア・アスタロトは詰め寄る
「お父さま、まさか……ご自分を犠牲にして私達を……!?」
「……これ以上、迷惑をかけるわけにはいかない。ディオドラの犯した事は私の監督不行き届きが原因だ。恐らくここも既に知られているだろう。攻め込んでくるのは時間の問題、それなら……私の首1つで教団の目をお前達から逸らせる他――」
「残念だが、その覚悟は無意味だ」
元当主の言葉を遮る正義
「この手の連中はしつこさが売りだろう。たとえアスタロト家元当主の首を取ったところで満足するとは思えん。血族を皆殺しにするまで止む事は無い、少なくとも俺はそう考えている」
正義はソファーから立ち上がる
「向こうから近付いてくるなら、こっちからも出向いてやろうじゃないか。その方が

手っ取り早い」
「ま、まさか今から行くつもりですか⁉」
「当然だろう。この場合、逃げたり待っている方が愚策だ。なだれ込まれる前に叩く。行くぞ、相棒、リント」
「おう、兄貴。久々に腕が鳴るぜ」
「思い立ったら即行動ってやつですな」
正義に促されて悪堵とリントも出発の準備に取り掛かる
正義の思いがけない行動力の大胆さに元当主は言葉を失う
いざ行こうとしたその時、シャルル・ヴァサーゴが正義一行を呼び止める
「アンタ達、まさか3人だけで教団を潰す気でいるの？相手は３０００人以上いるのよ？」
「潰す気でなければ、こんな事は言い出さん。何か言いたげな顔をしているな」
「……ええ」
正義を鋭い目で睨み付けるシャルル・ヴァサーゴは――――こう告げてくる
「その話、私達も加えさせてもらうわ。連れていきなさい」
「シャ、シャルル⁉」
「ウェンディ、元々はアスタロト家とヴァサーゴ家の問題よ。それを今日会ったばかり

の他人に任せるとか――――違うと思うの。逃げてるだけじゃ何も変わらない。ちゃんとケジメをつけなきゃスッキリしないわ」

シャルルの言い分も一理ある

このまま逃げ続けたところで教団は諦めもしないだろうし、他人に尻拭(しりぬぐ)いしてもらうのも虫が良すぎる話……

「と言うより――――泣き寝入りとか逃げの一手とか、一方的に私達にも非があるみたいな決め付けが気に入らないから潰すわよ！」

「それが本音かい⁉……ったく、トンでもねぇジャジャ馬だぜ」

「何よ、少なくとも足手まといにはならないつもりよ」

「……好きにしろ」

正義は無愛想にシャルルの言い分を聞き入れ、シャルルはフフンと鼻を鳴らす

当然、シャルルはウェンディも同伴するよう説得を開始

それと同時にジュビアはアスタロト家元当主と話し込んでいた

「ジュビア、何もキミまで行かなくても！もしもの事が遭ったら――――」

「いいえ、お父さま。ジュビアもアスタロト家の息女です。何もしないで待つのは嫌です」

どうやら彼女もこの問題をヒトに任せて放っておく事が出来ないようだ

本来なら護衛対象を危険に晒すわけにはいかないのだが……幽神正義は気に留めなかった

「どうする、兄貴？」

「自ら決めたのなら文句は言わん。好きにしろ」

ジュビーンッ！

正義の〝好きにしろ〟と言う一言にジュビアは過剰に反応する（謎の擬音付きで）

それもその筈――何せ彼女の耳にはこう聞こえたのだ……

『好きにしろ、ジュビア。そして結婚しよう』

１８０度どころか３００度以上間違った解釈をしたジュビアは脳内にハートマークを溢れさせ、心中でガッツポーズをする

『ああ……っ、初めてなのにジュビアの想いをそこまで……！決めましたっ、ジュビアは全身全霊をかけて期待に応えます！幽神さん――いえ、正義さまっ』

ゾゾ……ッ！

『――ッ⁉また嫌な悪寒が走った……ッ。何だ、さっきからまとわりついてくる怖気は……？』

正義は自分で爆弾を起動させてしまった事に気付いていなかった……

それもただの爆弾ではなく、恋する乙女と言う誰にも解除できない爆弾

その後、ウェンディの説得も終わり――幽神兄弟、リント、ジュビア、ウェンディ、シャルルの教団迎撃チームが結成された
「んで、このまま正面から突っ込むのか、兄貴？」
「いや、途中まで進んで――そこからは二手（ふたて）に分かれる」
「正義パイセン、何か策がありますかね？」
「猪突猛進しか能が無い烏合（うごう）の衆に効果覿面（こうかてきめん）のやり方だ」

場面変わって過激派教団の簡易アジト内部
祭壇らしき場で祈りを捧げる神官
つまり、この教団の総帥とも言える老人が得体の知れない呪文を唱え続けていた
一通り呪文を唱えると息を整え、近くの椅子に腰掛ける
「ルードヴィッヒ神官、全支部の信者が集（つど）いました」
神官・ルードヴィッヒに信者の集結完了を報告しに来たのは――フードを目深（まぶか）に被り、刀を携行する男
恐らくは教団の幹部だろう

報告を受けた神官が「そうか」と淡白に返す
「総勢３０００人、穢れし悪魔の一族――アスタロト家およびヴァサーゴ家の浄化、信者どもは既に躍起になっております」
「……じきに穢れた悪魔の魂は浄化され、その浄化によって我々は更なるお言葉を得る。悪魔祓いの極みと称される術を賜る為に――」
「全ては悪魔祓いの極みと称される術の為に」
「先に信者の士気を上げておくのだ。後に向かう」
祭壇の間から退室し、外へ向かう石造りの廊下にて――男は他のメンバーと鉢合わせする
「いよいよ、穢れた悪魔の浄化が始まるのね。カゲマル」
フードの刀使い――カゲマルに話し掛けてくるのは東洋風の和装をしたお下げ髪の女性
気の強そうな口調に加え、和装に包まれた豊満なバストが揺れる
「ヒメガミか。信者達の士気を上げておけと神官より承っている。そっちの様子はどうだった？」
「既に信者の士気は最高潮よ。後は進軍あるのみ、心配いらないわ」
和装の女性――ヒメガミ・フブキがやれやれと言った感じで首を振る

「神官さまは心配性よね。でも、警戒は怠(おこた)らない方が良いみたい。私達の事を嗅ぎ回ってる連中がいるのは確かだし」
２人の話を聞いて、大きな花のような帽子を被った少女――――フローラ・コスモスが言う
彼女もまた豊満なバストを持っており、上乳を露出させるような服装をしていた
「フローラ、それは本当か？」
「ええ、私の可愛い植物達が教えてくれたわ。私達と似たような人達をグリゴリが雇ったらしいの」
「ムムム、それは何とも遺憾な話ですな。我々の浄化作戦が阻止される事など、あってはなりませんぞ」
修行僧のような出で立ちにハゲ頭の太った男――――フトルモン・ゼツが合掌しながら敵について危惧する
そこへ背中に戦斧(バトルアックス)、腰に片刃刀(スクラマサクス)を携(たずさ)え、頭部も兜で覆(おお)った全身鎧(プレート・アーマー)の騎士――――スティブナイトが割って入る
「運命の賽(さい)はどちらに転がるか……」
「たとえ誰が相手であろうと、我々の信仰の邪魔はさせない。何人(なんぴと)たりとも浄化するまでだ。行くぞ」

教団の幹部達が外に出て、信者達の前に集結する
夥しい数の信者
『はぐれ』となったエクソシスト、神父、シスター、異能者等が老若男女問わず揃っている
暫くして神官ルードヴィッヒが幹部および信者達の前に現れた
「信者の諸君、今日はよく集まってくれた。この浄化作戦をもって穢れし悪魔の一族――――アスタロト家とヴァサーゴ家の者どもに我々の信仰心を見せてやるのだ」
神官が杖を掲げて宣告する
「全ては我々が信仰せし、悪魔祓いの極みと称される術とお言葉を賜る為！『禍の団』などと言う下賤な者どもの手を借りた悪魔に――聖なる鉄槌を下せ！」
「「「「オオオオオオオオオオオオオオオッ!!」」」」
神官の言葉に信者達もそれぞれの武器を掲げて吼える
総勢３０００人の信者達を引き連れ、教団は進む……
「全ては悪魔祓いの極みの為に！」
「全ては悪魔祓いの極みの為に！」
「全ては悪魔祓いの極みの為に！」
進軍している様子はまるで黒い絨毯……

軍勢の中央に位置する幹部達も、この光景は壮観だと称していた
暫く進み、中間地点たる広大な荒れ地に差し掛かると――信者の１人が報告してくる
「前方に複数の人影を確認！」
「ほう、誰だか知らぬが……我々の信仰の邪魔をする愚か者がいたのか。――浄化しろ」
フードの刀使いカゲマルの指示を受けて信者達が動く
武器を持った信者が１００人程の数で攻めようとする
「浄化作戦の邪魔はさせん！」
「我々に仇なす愚か者にも浄化の鉄槌をーッ！」
「聖なる裁きを受けよーッ！」
信者達の怒声が轟音と共に響いた直後――凄まじい衝撃によって吹き飛ばされていく
信者達は散り散りに宙を舞い、大地に叩きつけられる
ざわめく信者達の前に立ち塞がったのは――幽神悪堵、リント・セルゼン、ジュビア・アスタロト、そしてウエンディ＆シャルルのヴァサーゴ姉妹だった
神　器――『拳獄の手錠』を右手に展開した悪堵が、拳の一撃で１００人単位の信者を吹き飛ばしたのだ

口の端を吊り上げて悪堵が言う
「浄化だと？やれるもんなら、やってみやがれッ！」
悪堵が放った開戦の一撃の威力を見て、ウェンディとシャルルは感嘆する
「す、凄いです……っ」
「神器（セイクリッドギア）なんて持ってたの……？とんでもない破壊力ね……」
「こりゃ驚きましたな。敵さんが１００人くらい吹っ飛びましたよ」
リントも爽快とばかりに感心していた
一方、ジュビアは――何故か涙目でイジけている様子だった……
シャルルがジュビアを軽く叱る
「ちょっとジュビア、これからあいつらを倒すんだからシャキッとしなさいってば」
「あうぅ～……正義さまと一緒が良かったのにぃ～……」
……どうやら幽神正義が別行動をしている為に悲愴に暮れていたようだ
そこでシャルルがジュビアに耳打ちする
「今ここでポイント稼いでおけば、見直してくれるかもしれないわよ？」
ジュビーンッ！
シャルルの助言によってジュビアの目が光り、彼女の脳内に妄想が走る
『ジュビア、よく頑張ったな。結婚しよう』

……相変わらず通過点を飛ばした結末にジュビアのやる気が更に上がる
「ジュビアっ、頑張ります！」
気合いと共にジュビアの魔力が高まり、シャルルは〝やれやれ〟と肩を竦めた
先程の一撃で教団は出鼻を挫かれたが、直ぐに突撃を再開してくる
悪堵は意気揚々と拳を打ち鳴らし、禁手（バランス・ブレイカー）の鎧を身に纏った
大地を蹴って駆け出し、突撃してきた教団の連中を拳で吹き飛ばす
振り下ろされる武器、飛んでくる魔術も軽々と弾き返し、悪堵は容赦なく拳を叩き込んだ
「思ったよりやるじゃない、アイツ」
「で、でも……あんまりやり過ぎないようにしないと……」
「そう言ってる間に来てるわよ、ウェンディ！」
シャルルの言う通り、ウェンディ達の前に教団の信者が立ち塞がる
エクソシスト特有の祓魔弾（ふつまだん）による銃撃、光の剣による斬撃、魔術が彼女達にも襲い掛かってくる
シャルルとウェンディは足元に魔法陣を展開し――そこから激しい風を発生させて、向かってきた攻撃を回避する
２人は風をメインとした魔力に特化しているのだ

教団の攻撃を次々と躱し、縦横無尽に飛び回る
ウェンディは手元に魔法陣を展開して――――強烈な竜巻の波動を撃ち放つ
竜巻に呑み込まれた信者達は上空に跳ね上げられ、地面に叩きつけられた
その後もウェンディは風の魔力を応用した加速で教団の攻撃を回避、信者達をパンチと蹴りで打ち倒していく
「何だ、この娘はッ！速すぎて当たらない⁉」
「あら、速いだけじゃないわよ」
驚く信者に蹴りを入れるのは――――ウェンディと同じく風の魔力で加速したシャルル
新体操のような身軽さで駆け巡り、こちらも信者達の攻撃をものともしない
ウェンディとシャルルの立ち回りを見て、信者達が口々に思う
『『『生足とパンスト、ありがとうございますっ』』』
――――ヴァサーゴ姉妹に対する下心だった……
一方、リントも信者達の攻撃を野性的な動きで回避しつつ、光の剣で斬り伏せていた
「斬って、躱して、もう1回斬って躱してバキューンっス！」
掴みどころの無い動きで信者達を翻弄し、彼らと同じ祓魔弾を使用した拳銃を撃つ
ジュビアの方も信者達を圧倒していた

「くそっ、この女も強いぞ！」
「取り囲んで討ち取れ！」
「そうはいきませんっ！」
ジュビアが両手を広げて魔法陣を展開すると――――信者達の足下から水流が噴き上がり、彼らを容易（たやす）く吹き飛ばす
彼女は水の魔力を得意としており、使い方も富んでいた
水流が相手を呑み込む、弾き飛ばす、時には水を刃のように飛ばして相手の武器を切り裂く
鞭の如くしならせて信者を絡め取り、振り回して周りを薙ぎ払う
上級悪魔だけあって実力は申し分無かった
ジュビビーンッ！
――――ここでジュビアは何かを察知したのか、信者達の後方に視線を移す
『感じますっ、正義さまが敵を倒しながら――――ジュビアの方に近付いてくるのを……ッ！』

「何事だ」
「し、神官さま！後方より敵襲ですッ！」
幹部達と共に軍勢の中央にいる神官が、信者の1人から報告を受ける
かなり慌てた様子だった
「我々を嗅ぎ付けた軍でも来たのか」
「そ、それが……敵は1人です！たった1人に――――後方の信者達が蹴散らされています！」
信者の言う通り、後方の軍勢は〝1人の鎧人（よろいびと）〟――――別行動を取っていた幽神正義によって壊滅的な被害を受けていた
正義が立てたプランとは挟撃（きょうげき）だった
前方の悪堵達が敵の注意を引き付けておき、その隙に無防備となった背後から強襲する
退路を絶たれた上、このまま軍勢を蹴散らされれば詰みとなる……
幹部の1人、カゲマルが神官に告げる
「神官、ここは我々にお任せを。奴らの勢いを殺してまいります」
「ウム、頼んだぞ」
神官より了承を得て、教団の幹部達が動き出す

「これより奴らの排除に当たる。薄汚いネズミどもに我々の信仰心を思い知らせてやろう」
「で、どちらに行けば良いのかしら？」
「後方から攻めてくる奴が恐らく1番の手練れだろう。2人がかりで確実に潰せ。残ったメンバーで前方に向かう。ヒメガミ、フローラ、後ろを任せても構わないか？」
「了解」
「任せといて」
「では、行くぞ！」
カゲマル、フトルモン、スティブナイトが前方に、ヒメガミとフローラが後方に駆け出していく
一番手に飛び出したカゲマルが刀を鞘から抜き、信者達を倒していたウェンディに斬りかかろうとする
「くたばれ、穢れし悪魔よッ！」
「ふぇぇっ⁉」
突然の奇襲に驚くウェンディ
カゲマルの刀がウェンディに振り下ろされる寸前、間一髪シャルルがウェンディを抱えて回避した

「ウェンディ、しっかりしなさい！」
「ごめん、シャルル……っ」
　ウェンディを救出したものの、シャルルは衣服の端を斬られていた
　彼女は刀を向けるカゲマルを睨み付ける
「ちょっとアンタ！レディにそんな危ない物を振り回してんじゃないわよ！」
「たわけ、悪魔が何を言う。穢れた存在が我々の信仰の邪魔をする事自体愚かだ。せめてもの情けに苦痛なき浄化を与えてやる！」
　カゲマルは再び刀で斬りかかろうとするが、それに気付いた悪堵が乱入してくる
　悪堵の拳を躱したカゲマル
　すかさず悪堵の鎧に一太刀を入れる
「やるじゃねぇか、日本刀使い」
「貴様も悪魔の一員か。悪魔のくせに拳を使うとは奇異なもの。だが、拳で私に勝てると思うな」
「あぁ？」
「――――剣術三倍談。素手の者が刀を持つ者と互角に戦うには、３倍の段数が必要とされる。私の一刀流剣術は指南免状まで達している。我が神速の刃に浄化されるが良いッ！」

頭上に構えた刀をダッシュすると同時に振り下ろすカゲマル
悪堵はそこから1歩も動かず――――オーラを纏わせた右の拳で弾いた
この結果にカゲマルは驚愕し、悪堵が得意気に語る
「へへッ、残念だけどよぉ、そんな御託は俺には通用しねぇんだ。武器を使う奴ってのは――――武器を破壊されりゃあ途端に弱くなる。俺はそういう奴らを何人も見て、ぶちのめしてきた。つまり……」
構える悪堵から滲み出てくるオーラがどんどん強くなっていく……
「俺にとって武器使いは寧ろ――――おあつらえ向きの獲物って事なんだよッ!!」
その場を駆け出した悪堵が猛烈な拳打のラッシュを繰り出し、カゲマルは何とか刀でそれらを防いでいく
しかし、刀での防御は対処が遅れがちになってしまう為……攻撃に転じる事が出来ない
『……ッ!コイツの拳ッ、なんて威力だ……ッ!この私がッ、徒手格闘の相手に防戦を強いられている……ッ!!バケモノか、コイツは……ッ!』
カゲマルとの立ち合いは完全に悪堵が主導権を握っていた
しかし、次なる幹部の魔の手がシャルルとウェンディに迫る
2人の前に対峙したのはハゲ頭の修行僧――――フトルモン・ゼツ

「ンンンンッ、お主達はこの拙僧がお相手致しましょうぞ！・目眩くお仕置きの世界へっ、お主達を誘ってしんぜようッ！」

フトルモンが前方に円を描くように手を回すと――――不気味な魔法陣の中から三角木馬が出現してきた

その木馬には彼の名前が漢字で……『太流悶絶』と刻まれている

フトルモンが召喚した三角木馬を見て、シャルルが「趣味悪いわね」と一蹴する

「我が愛馬を侮辱するか、悪魔の娘よ！その不浄な振る舞いを清めたまえッ！」

フトルモンがビシッと手を前に突き出すと、三角木馬が地を滑るように突進していく

シャルルは腰に手を当てて溜め息混じりに毒づく

「こんなヘンテコな馬に何が出来るのよ」

「――――と思わせて、実はただの捕獲器！」

フトルモンが指を動かした途端、三角木馬の口や胴体が開き――――中から拘束に使われる縄が飛び出してくる

完全に虚を突かれたシャルルは反応が遅れ、三角木馬が出した縄に縛られてしまう

更に両足にもそれぞれ縄が絡まり――――強制的にM字開脚のポーズをさせられる

「えぇぇぇっ⁉ちょっ、ちょっと！何これ⁉」

「シャルルってば、そんなエッチなポーズを……っ」

「私がやってるわけじゃないわよ！」
「フフフッ、穢れた悪魔の娘にはお似合いの格好であろう」
「穢れてるのはアンタの方よ！この変態！ハゲ！」
「オゥフッ、小娘の罵(ののし)りが染み渡るぞぉ……っ」
フトルモンはドMの変態でした……
変態の眼孔がキラリと光り、その視線が今度はウェンディに注がれる
危険を感じたウェンディは直ぐに逃げようとしたが……地面から出てきた拘束具に足を掴まれ、両手も縛られる
これもフトルモンの仕業であり、ウェンディはその場から逃げる事が出来ない……
フトルモンはジリジリと歩み寄りながら、自らの懐(ふところ)をまさぐる(みずか)
「さあ、お主にも特別なお仕置きをしてやろうぞ。名付けて――――〝おしゃぶりチュパチュパ責め〟だ」
「お、おしゃぶり……ですか……っ？」
恐ろしく聞こえてくる響きにウェンディは涙目となり、フトルモンが懐から赤ん坊がくわえるおしゃぶり――――の形をしたキャンディを取り出す
それをウェンディにくわえさせ、更に「チュパチュパするのだ」と促す(うなが)
ウェンディはとりあえずおしゃぶり型キャンディ（ミルク味）をチュパチュパする事

に……

「どうだ？良い年頃の娘がおしゃぶりを口に押し込まれ、まるで赤ん坊のようにされる気分は。まさに顔から火が出る程の赤面もの。――――そのまま〝バブゥ〟と言いなさい！」

「……バ、バブゥ～……っ」

ウェンディは顔を赤くしながら流れに流されて赤ちゃん言葉を発し、それを聞いたフトルモンは何故か満足そうに頷(うなず)いた

「……幼女の幼児退行、拙僧にとってはご褒美である♪」

「ウェンディに何させてんのよーっ!!」

ドガッ！

M字開脚の拘束から脱出したシャルルが怒り心頭のドロップキックをフトルモンに食らわせ、フトルモンは「ひでぶっ！」と地面を転がり回る

シャルルは急いで手に風を集め、ウェンディを捕らえている拘束具を切り――――おしゃぶり型キャンディを没収した

「ウェンディ！いつまでしゃぶってんの！」

「あうぅ……恥ずかしかったよぉ……っ」

「よくもレディにこんな辱(はずか)しめを……！アンタッ、生きて帰れると思わないでよっ！」

フトルモンは立ち上がり、尚も余裕の態度を見せる
「フフフッ、その意気や良し。拙僧もまだまだお仕置きを披露したいのでな。さて、次は如何なるお仕置きを与えてやろうか。水責め、鞭責め、蝋燭(ろうそく)責めに足裏ペロペロ――――どれでも好きな責めを申したまえ。……逆にお主らが拙僧にしても構わんぞっ」
「頬を染めるなーッ!!」
シャルル&ウェンディVSフトルモンの戦いが混沌を極める中、リントは全身鎧(プレート・アーマー)の鎧騎士――――スティブナイトと対峙していた
スティブナイトは右手にバトルアックス、左手に片刃刀(スクラマサクス)を握る
「その装備から察するに教会の者か。何故悪魔に加担する?」
「いやー、ちょいとワケありなんスよ。自分、これでも教会の異端者を追わなきゃいけない立場にあるもんでね。すみませんけど敵対させてもらいます」
「ふん、ならば叩き潰すまでだ」
そう言った直後、スティブナイトはバトルアックスを素早く横に振り抜いた
しかし、そこにリントの姿は既に無く――――リントはスティブナイトの頭上に跳んでいた
リントは左手に持った銃で祓魔弾を撃ち、更に降下して斬りかかろうとする
スティブナイトは左手の片刃刀(スクラマサクス)を回して祓魔弾を防ぎ、リントの光の剣を刃で受け止

める
そこからバトルアックスの側面で叩こうとするスティブナイト
リントは咄嗟にバトルアックスが来るタイミングに合わせて、側面を踏み台にするように飛び退いた
振り抜かれたバトルアックスの風圧が周囲の地面を破壊する
リントは素早い動きで翻弄しつつ、距離を詰めていく
スティブナイトのバトルアックスが振り下ろされるが、その一撃は大地への空振りに終わる
地に突き刺さった隙を突いて、リントが光の剣を見舞うが……スティブナイトの全身鎧（プレート・アーマー）には刃が通らなかった
「ありゃりゃ」
「隙ありだ」
スティブナイトの力任せに振り抜くバトルアックスがリントに襲い掛かる
リントは間一髪避けたものの……胸元を少し切り裂かれた
「硬いっスね～、鎧の旦那」
「当然だ。俺の鎧は対魔獣用に作らせた特注品、そんな剣や銃ごときで破られる代物ではない」

スティブナイトが片刃刀(スクラマサクス)の切っ先をリントに向ける
「悪いが、我々の信仰の為に死んでもらうぞ。穢れた悪魔を浄化して――悪魔祓いの至高を賜(たまわ)るんでな」
「死ぬのはゴメンですな。自分もまだまだ生きていかなきゃいけない身なんスよ」
気合を入れ直して身構えるリント
だが、ここでジュビアがいない事に気付く
『アスタロトのお姉さん、さては正義のパイセンの所に行きましたか。血相変えて飛び出していったって事は……何かヤバそうな感じになってるんスかね？』

その頃、教団を後方から単独で攻め込んでいる正義は順調に信者達を蹴散らしていた
ただでさえ強い上に、禁手(バランス・ブレイク)化した正義を止められる者は早々にいない
蹴りを繰り出す度に地面が爆(は)ぜ、信者達が宙へ吹き飛ばされる
「まだやる気か？」
正義が睨みを利かせて威圧、その迫力に教団の信者達は完全に臆してしまう
そろそろ片付けようかと構えた直後――正義に嫌な予感が走り、空を切るような音

と共に何かが飛来してくる
正義は飛んできた何かを蹴り落とし、正体を確認する
『――――紙だと？今のは金属を蹴ったような感覚だった……』
正義の言う通り、飛んできたのは紙だったが……手裏剣の形をしていた
怪訝に思う正義の前に2人の女性が現れる
「やるじゃない、単独で攻めてくるだけの事はあるわね」
「でも、それもこれまで。私達の連携であなたを浄化してあげる」
不敵な笑みを見せるのはヒメガミ・フブキとフローラ・コスモス
2人の姿を見た正義は――――スッと目線を逸らした……
『何故だ……！何故、俺の前に際どい女ばかり現れるんだ!!どいつもこいつも俺を殺そうとする爆乳を抱えやがって……ッ!!』
正義の己の女難の悪さに憤り、地面に八つ当たり
ヒメガミとフローラは訝しげに窺う
「目を逸らしたと思ったら、急に怒りだした？何なの？」
「きっと私達の恐ろしさをたった今知って、自分の愚かさに気付いたのよ」
全然違います（笑）
それはさておきとヒメガミは胸元から赤い紙の束を取り出す

『――――ッ！あの女、胸元（そんなところ）から出すな……ッ！』
「舞え――――赤紙（あかがみ）！」
ヒメガミが赤い紙を幾重にも投げ放つと、紙が炎と化して正義を焼き払おうとする
正義は左足の蹴りで炎を消し、上空へ飛び上がる
そのまま降下して蹴りを見舞おうとした刹那、ヒメガミを庇うように地面から茨（いばら）の壁が出現する
茨の壁に蹴りを阻まれた正義は後方に飛び退く
「貴様の仕業か」
「ふふっ、そう。私の可愛い植物の養分にしてあげる」
不敵に笑むフローラもヒメガミと同様――――胸元から植物の種らしき物を取り出す
『だから、胸元（そんなところ）から出すなッ!!』
声に出せない事情ゆえ、心中でキレる正義
フローラは植物の種を地にばら蒔き、魔法陣を展開する
「育ちなさい――――グロウ・フラワー！」
フローラが唱えた瞬間、種を植えた場所から巨大な食肉植物が出現
不気味な鳴き声を吐き、花弁を開いて威嚇してくる
巨大植物が襲い掛かってくるが、正義はオーラを纏わせた左足で一蹴

植物は蹴り砕かれ、その破片が地面に舞い散る
『クソ……ッ、さっさと片付けねば……！』
嫌な予感を拭えない正義は焦りからか、早急に彼女達を倒そうと動く
まずは蹴りから弧月状のオーラを放つ
それに対してヒメガミが胸元から数枚の紙を取り出す
「守れ――鋼紙！」
放り投げられた紙は金属のように硬化して、ヒメガミを守る壁となる
フローラも先程と同じ茨の壁を出して、飛んできた弧月状のオーラを防ぐ
爆煙が生じる中、正義は比較的耐久力が薄いと見た茨の壁に向かって駆け出す
螺旋状のオーラを纏わせた蹴りで、茨の壁を削り取っていく
壁の向こう側へ突き破った蹴りはフローラを捉えるが……紙一重で躱されてしまう
「生意気よ！」
フローラが手を前に翳すと、茨の先端から種子が砲弾の如く射出され正義に被弾
後方に飛ばされた正義は体勢を立て直して着地する
「チッ、今のを躱した……か……っ？」
突然言葉が止まり、金縛りにあったかの如く硬直する正義
その様子を見てヒメガミとフローラは訝しげに思うが――ヒメガミがフローラを

見て気付いた
「ちよっ、ちょっと！フローラ！」
「どうしたの、ヒメガミ？そんなに慌てて」
「む、胸！胸が出てる！」
「え？」
プルルン……ッ
フローラがゆっくりと視線を胸元に下ろすと――――自分のおっぱいが見事丸出しになっていた
実は正義が茨の壁を突き破った時、間一髪直撃を避けていたフローラだったが……蹴りの風圧によって服の胸元が切り裂かれていたのだ
正義が止まったのも、フローラの生乳を目撃してしまった為である……
それに気付いたフローラの顔がどんどん赤くなっていき、彼女の口から悲鳴が……
「い、いやぁぁあ――――」
ゴブシャァァァ

正義の突然の大量出血にフローラの悲鳴が中断に終わり、ヒメガミもキョトンとする
「……？何もしてないのに、あんなに血を……？」
「まさかとは思うけど……アイツ、女に弱い？」
正義の弱点に勘付いてしまったヒメガミ
とりあえず自分の魔術を施した紙でフローラの胸を隠してあげる
正義は大量の血を失ったショックとフローラのおっぱいを見てしまったショックで足取りが覚束なくなり、膝まで笑い始めた
『い、いかん……！余計な事を考えるな！意識を集中させろ！心を乱さず、落ち着かせれば……これしきの事でゴプァッ……！』
今の正義に平静を保つのは無理だった
正義の容態を見て、ヒメガミが確信を得る
「やっぱり、そうね。さっきので確実に弱ってるわ。フローラ、どうやら今がチャンスみたい」
「これ、チャンスって言えるの？嫁入り前なのに見られて……っ」
「その恨みを存分にぶつけてやれば良いのよ」
「……そうねっ、私の純潔を汚した罪、あの男の体で償ってもらうわ！」
好機とばかりに戦意を高めるヒメガミとフローラ

悶(もだ)え苦しむ正義に危機が迫る……

ジュビビビーンッ！

『――――っ。ジュビアの〝正義さまセンサー〟に危険信号……？正義さまの身に何かが遭ったに違いありませんっ。待っててください、ジュビアが今すぐ参りますっ！』

幽神正義に新たな爆乳(ばくだん)の持ち主が迫り来る……

護衛任務のブラザーズとセルゼン（後編）

幽神兄弟、リント、ジュビア、ウェンディ＆シャルルの連合と教団の戦いが始まって数十分
依然として優勢を維持している悪堵は怒涛のラッシュを繰り出しており、カゲマルを圧倒していた
悪堵の拳打ラッシュによってカゲマルは防戦から抜け出せない
打ち続けられては不利と判断したカゲマルは即座に距離を取り、一振りに全力を注ぐ決断をした
刀にオーラを流し込み、その場を駆け出して刀を振り上げる
「我が刃に全身全霊を込め、この一撃に全てを懸けようッ!!」
「捨て身の一撃か、面白(おもしろ)ぇッ!」
悪堵は嬉々として受け入れ、右拳に強いオーラを纏わせる
神速で迫り来るカゲマルが――――頭上に翳(かざ)した日本刀を悪堵目掛けて振り下ろす
風圧と共に来る刃を拳で迎え撃つ悪堵
衝撃波が2人を中心に起こり、一拍空けてカゲマルの刀が折れる

その光景に絶句するカゲマル
容赦なく悪堵の左拳が彼の腹に深々と突き刺さった
衝撃が背中を突き抜け、血を吐いた直後にカゲマルは意識を失い倒れる
終始カゲマルを圧倒した悪堵の勝利に終わり、残る幹部は４人
少し離れた場所でフトルモン・ゼツと戦っているシャルルとウェンディも攻勢に転じ始めていた
２人は風の魔力を応用したスピードで連携攻撃を開始
それが功を奏してフトルモンを追い詰めた
フトルモンは最後の抵抗とばかりに再び三角木馬を召喚する
「ゆけぃっ！我が愛馬よ！小娘どものお尻をビシビシ責めてやるのだ！」
「お、お尻ですかっ⁉」
ウェンディは咄嗟に尻を庇うような仕草をする
フトルモンの命（めい）を受けた三角木馬は口の部分から六角棒を出現させ、ウェンディに向かって突っ走る
「その六角棒をお主らのお尻にねじ込み、突いて突いて突きまくってしんぜよう。そうすれば、拙僧と同じく新しい信仰に目覚めるであろう」
「ひぃぃっ！」

「ウェンディのお尻になんてものを突っ込ませようとしてんのよっ！」
シャルルの蹴りが三角木馬のアゴにヒットし、仰向けに倒れる
「あぁっ、そんな勿体ない事を！」とフトルモンが嘆いてる間に、ウェンディが魔法陣から竜巻を発生させる
「お尻は嫌ですぅっ！」
涙目で魔力の竜巻をフトルモンに放ち、上空に跳ね上げる
乱回転しながら上空に跳ね上げられたフトルモンの前に――――先回りしたシャルルが魔法陣を展開する
「そんなにお仕置きしたいなら、アンタがやられなさいっ！」
魔法陣から濃密な風の魔力が放たれ、フトルモンを今度は下へと吹き飛ばす
しかも、着弾地点には……先程仰向けに倒された三角木馬があった
避ける術（すべ）も無いフトルモンの尻に――――三角木馬の出した六角棒が突き刺さる
「オーウッ！ジュウウウシィィィ

「よしよし、泣かないの。もう終わったんだから」
涙目のウェンディを宥めるシャルル
一方、リントはスティブナイトの鎧の頑強さに手を焼いていた
何度も剣戟や銃弾を撃ち込むが、決定打を与えられずにいる
「こりゃ参ったっスねー。いくらやっても効かないのは初めてっス」
「諦めろ。お前達は我々の信仰によって浄化される運命、おとなしく己の愚かさを受け入れろ」
「何度も言いますけど、自分も生きて償いをしなきゃいけない身なんスよ。ここでおっ死んだら――ヴァチカンや正義パイセンに顔向けできないっス」
「償いなら、今ここで果てるが良いッ！」
吼えるスティブナイトがバトルアックスを横薙ぎに振るい、リントの体を真っ二つに分断しようとする
リントは跳んで躱し、水平に振られたバトルアックスを踏み台代わりにする
『しっかし、どうしましょうか？あの硬い鎧を何とかしないと勝ち目は無さそうっスね』
跳びながら考察するリント
とりあえずスティブナイトの片刃刀を銃撃で止め、光の剣で兜を叩く
大きな音を響かせるが――やはりダメージは無し

着地したリントがフゥッと溜め息を吐く
「何度やっても同じだ。そんな剣や銃では俺の鎧には――――ッ」
突如、スティブナイトは言葉を詰まらせてふらつく
自分の身に何が起きたのか理解できないスティブナイト
リントはその様子を野生の勘を働かせる
『……なるほど、剣や銃は効かなくても〝振動〟は別みたいっスね』
そう――――スティブナイトは先程の剣戟による〝振動〟で足元をふらつかせたのだ
如何に頑強な鎧と言えど、内部に浸透する振動までは防ぐ事が出来ない
振動が脳を揺さぶり、ダメージを与えていた
思わぬ突破口を見つけたリントは頭部――――正確には兜への集中攻撃を開始する
スティブナイトはバトルアックスを盾代わりにして銃撃を防ぎ、直ぐに反撃へ転じようとした
しかし、スティブナイトの視界にリントの姿は無い……
盾代わりに使用したバトルアックスが一瞬視界を遮り、リントはその間に背後へ回り込んでいた
そして、光の剣でスティブナイトの頭部を一閃
後頭部を打たれ、更にバトルアックスの側面にも打ち付けられ――――二重の振動がス

ティブナイトの脳を激しく揺さぶる
兜の隙間から吐血が流れ、スティブナイトは膝から崩れ落ちて倒れ込んだ
これで教団の幹部3人が倒れ、悪堵達の優勢は確固たるものとなった
『あとは正義パイセンだけっスね。もう一働きしますか』

『マズい……っ、血を出し過ぎたせいで意識が遠退きそうだ……っ。おのれ、爆乳め……っ！』
正義は憤ると共に窮地に追いやられていた
不可抗力によってフローラのおっぱいを直視してしまい、体内の血液を殆ど失ってしまった……
正義の弱点を見切ったヒメガミとフローラは直ぐに周りにいる信者――――元シスター達に命令を下す
「そいつの弱点は女よ！」
「全てのシスターで攻撃を仕掛けなさい！」
ヒメガミとフローラの命を受けてシスター達が正義に突っ込んでいく

銃や光の剣、槍などの武器を持って向かってくるシスター達に対し、疲弊している正義は――――

『……際どくない』

直ぐに冷静さを取り戻し、向かってきたシスター達を次々と蹴りで倒していった

正義が危惧しているのは〝露出の多い女性〟や〝エロい格好をした女性〟、〝爆乳が目立つ女性〟であり、露出度が極端に少ないシスターなら特に問題は無いようだ

目論見が一部外れてしまった事によりシスター達の士気が低下、その隙に正義は懐から輸血用の注射器具を取り出した

針を首筋に刺して緊急輸血を終え、血の気を取り戻す

しかし、輸血を終えても危惧を拭い去れるわけではない

正義は現状の打開策を編み出そうと思考を張り巡らせようとした、その時――――

「……恋敵が1人……恋敵が2人……恋敵が3人……恋敵が4人……」

突如、場を支配する怨念にまみれた声音

ここでまた正義に嫌な予感が走り、シスター達も怨念にまみれた声音に戦慄する

声のする方向に視線を移すと――――そこに元凶がいた……

「……あれは恋敵……これも恋敵……たぶん恋敵……きっと恋敵……」

呪いの人形の如くフラフラと覚束ない足取り、長い髪の隙間から見える眼孔

怨霊、死神、鬼神すら睨み殺しそうな迫力のジュビアにシスター達は完全に怯えていた

恐らく、正義に集ろうとするシスター達を見て怒りが滾ったのだろう

「何処もかしこも――――こぉぉぉぉぉぉぉぉいいいいいいいいがぁぁぁたぁぁぁきいいいいいいいいいいいいいッ！」

ジュビアの全身からオーラが溢れ、周囲に水の魔力が噴き出てくる

噴き出てきた水流もジュビアの怨念が宿ったのか、生物のように蠢き――――シスター達を睨み付ける

「ジュビアの愛はっ、誰にも邪魔させませんッ!!」

ジュビアが手を前に突き出すと水流の群れが一斉に襲い掛かっていった

ヒメガミとフローラは召喚した植物に乗って回避するが、シスター達はなす術無く水流に呑み込まれる

ジュビアの乱入によってシスター軍団は戦闘不能

正義は何とか窮地を脱した――――わけではなかった

『……ッ！また爆乳が現れた……ッ！』

一難去ってまた一難、ジュビアの登場に嫌な予感を拭いきれない正義

シスター軍団を撃破したジュビアは直ぐに正義のもとへ駆け寄っていく

「大丈夫ですか⁉」
「俺の事は良い……！それより、ヤツらを――」
正義の警告虚しく、ヒメガミとフローラはその隙を見逃さなかった
「切り裂け――斬紙（きりがみ）ッ！」
「溶かしなさい――アシッド・チェリーッ！」
ヒメガミの投げた紙吹雪が刃物の如く鋭くなって飛び、フローラの召喚した巨大植物が硫酸の実を吐き出す
ジュビアは2人の攻撃に気付き、それらを躱（かわ）していく
直撃はしなかったが、ヒメガミとフローラの狙いはこれで終わらなかった
「不意討ちとは卑怯ですね、やはり恋敵……ッ！」
「さっきから何を言ってるか知らないけど、これでその男は封じたわ」
「ええ、思わぬ収穫よ」
ヒメガミとフローラの言葉に疑問符を浮かべるジュビア
すると、ジュビアの背後で再び〝ブシャァァァァァァァァッ！〟と血が噴出する音が……
振り返ってみると正義が再び兜の隙間から鼻血を流し、ガクガクと体を震わせていた
「ど、どうしましたか⁉まさか、今の攻撃を受けて――」

「ち……ガウ……！良いからっ、俺に構わず……その格好をブシャァァァアアアアアッ――――」

正義に促(うなが)され、ジュビアは目線を自分の体に向ける

そう――――先程の攻撃でジュビアの衣服の所々(ところどころ)が斬られ、または溶かされていた

それによりジュビアは半裸同然の姿にされ、正義は鼻血を噴き出してしまったのだ

『くっ、そぉ……！輸血した血が……！』

せっかく輸血した血も体外へ排出されてしまい、正義は目眩(めまい)を起こす

正義の容態を見たジュビアは――――

『……ッ！正義さまが血を……⁉おのれ、恋敵……！ジュビアの隙を突いて正義さまに血を流させるとは……ッ！』

ジュビアは見事に勘違いした怒りをヒメガミとフローラに浴びせる

ヒメガミとフローラは畳み掛けるように手裏剣型の紙と硫酸の実を幾重にも飛ばし、ジュビアは水の魔力で応戦

激しい攻防が続く中、遂にジュビアの胸元に残っていた布が切り裂かれてしまう……

押さえが無くなった事により勢い良く飛び出すジュビアの色白おっぱい

ジュビアは恋敵(ヒメガミとフローラ)に対する怒りで我を忘れていたので気付かないが――――正義は運悪く目撃してしまった……

ジュビアの爆乳が大きく揺れる様を見た正義は神速で地に突っ伏し、うつ伏せの状態で多量の鼻血を流した

もはや体積の９割以上とも言える血を流出してしまった正義

ジュビビーン！

ジュビアの〝正義センサー〟が警鐘を知らせ、ジュビアはようやく突っ伏している正義に気付いた

「ジュビっ⁉ま、正義さま⁉」

「……ッ……ッ……ッ」

もはや喋る気力すら残されていない……

そんな正義の醜態を見てヒメガミとフローラがせせら笑う

「ふふっ、もう虫の息みたいね、あの男」

「良い気味だわ、そのまま血の海に沈めてあげる！」

ヒメガミとフローラが息巻く中――ジュビアの怒りのボルテージが上昇する

恋敵……恋敵……恋敵……！

恋敵こいがたきコイガタキKOIGATAKI胡威牙多鬼恋敵こいがたきコイガタキKOIGATAKI胡威牙多鬼恋敵こいがたきコイガタキKOIGATAKI胡威牙多鬼恋敵こいがたきコイガタキKOIGATAKI胡威牙多鬼――

コ　イ　ガ　タ　キ……ッ!!

怨嗟にまみれたジュビアから莫大なオーラが放出され、水の魔力の勢いが増す

「ジュビアの愛は奪わせないッ! 誰にも邪魔はさせないッ!!」

ジュビアは恋　敵の周りに水の壁を張り巡らせ、2人を閉じ込める

その間に正義の体を起こそうとするが、当の正義は出血し過ぎて意識を失いかけていた

ようやく正義の重態に気付いたジュビアは〝ある術式〟が施された小型の魔法陣を展開

魔法陣から透明な管が出現し、正義の体に刺さる

次にジュビアは自らの腕に管のもう片方を射す

すると……ジュビアの血液が管を介して正義の体へと流れ込む

ジュビアが展開したのは――なんと輸血の術式が施された魔法陣だった

悪魔にとっても珍しい治療用の術式魔法陣

拒絶反応無しに自らの血液を他の者に譲渡できると言う優れもの

だが……自らの血液を他人に譲渡している為、これを行えば当然貧血となり、一時的に体を動かせなくなってしまう

父親とシャルルからもなるべく使用しないようにと言われているのだが、正義の治療

を専念するジュビアに迷いはなかった

『元々これはアスタロト家とヴァサーゴ家が原因……正義さまに、これ以上の迷惑は掛けられない……！』

輸血は順調に進み、やがて正義の意識がハッキリとしていく

輸血が終わり、ジュビアが力無く倒れると同時に正義がゆっくりと体を起こす

正義は直ぐに自分の状態とジュビアの状態を順に捉え、管を外してジュビアに問い掛ける

「おい、まさか……お前が俺に輸血を……？何故――何故こんな事をした⁉そんなに弱ってまで、自分を犠牲にしてまでする事だったのか⁉」

正義に抱えられるジュビアは息を切らしながら答えた

「……ジュビアが……あなたを助けたいと思ったから……」

彼女の言葉に正義は衝撃を受けた

――〝助けたいと思ったから〟――

それはかつて自分に感情を取り戻させてくれた女性――アーシアとほぼ同じ台詞だった

自分が火傷を負った時、アーシアも有無を言わさず治療してくれた

その時から正義に人の心が戻り始めたのだ……

『……俺は、なんて情けないんだ……。苦手な筈の女に助けられ、守られてばかりじゃないか……っ。不本意だが守る立場の俺が守られるとは……！』

正義は自責の念に駆られ、自分の心の弱さを理解する

正義がこれまで出会った女性は皆――心根が強かった

アーシアは神が死んだ今でも祈りを捧げる事を止めず、悪人である筈の自分に優しく接してくれた……

リントは教会出身としてフリード、ジークフリートが犯した罪を償(つぐな)う為、贖罪の為に生きている……

ジュビアは見ず知らずの自分に血を分け与えてくれた……

貧血で倒れた彼女に対し、正義は禁(バランス・ブレイカー)手を一旦解除――自分の上着をジュビアに着せる

ジュビアをソッと下ろして再び禁(バランス・ブレイカー)手の鎧を身に纏う

『だらしなく血を流している場合ではないな……』

正義が立ち上がると同時に、先程ジュビアが張った水の壁に異変が生じる

主の魔力が弱まったせいか、水の勢いが弱々しくなり――土へと還っていく

水の壁から解放されたヒメガミとフローラ

正義は彼女達を鋭く睨み付けた

「……さっきはよくもやってくれたな」
「凄んだところで私達に敵うと思ってるの？」
「あれだけ血を流しておいて、まだそんな口が聞けるなんてね。お望み通り――浄化してあげる！」
意気込むと共にヒメガミは夥しい数の紙を宙に投げ、フローラは巨大な食肉植物の群れを召喚する
宙に投げられた紙はそれぞれ炎、氷、雷、毒などを発しながら鳥の形を成していく
正義の眼前に食肉植物と怪鳥の群れが並んだ
ヒメガミとフローラの合図と同時に食肉植物と怪鳥の群れは正義に襲い掛かっていった
正義の中で燃え滾る闘志のオーラ
それが脚にも移り渡り、爆発するかの如く噴き上がり――
「――フンッッ!!」
怒号と共に放った正義の蹴りは向かってくる食肉植物と怪鳥の群れを容赦なく薙ぎ払った
凄まじい風圧が怪物どもを端々から崩壊させ、微塵の欠片も残されぬまま消滅
まさに瞬殺……ヒメガミとフローラは目の前で何が起きたのか理解できなかった

一撃で怪物の群れを消した正義は彼女達を鋭く睨む
背後に鬼の幻影を伴(ともな)いながら……
「ひっ……」
正義の異常な迫力にヒメガミとフローラは軽く悲鳴を上げてしまい、後退しようとしたが――――足がもつれて尻餅をつく
そんな彼女達に正義はオーラを高めた左足を振り上げ――――目の前の地面を踏み砕いた
クレーターが出来上がり、踏み抜く風圧によってヒメガミとフローラの衣服が破れるおっぱい丸出し……それは正義にとって何よりも耐え難い光景だが、鬼と化した正義は一切動揺せず
睨みを利かせて彼女達に警告した
「命が惜しければ、おとなしくしていろ」
気迫に満ちた警告、ヒメガミとフローラは応じるしかなかった
涙目で震える2人を尻目に正義は〝ある方向〟に視線を移す
「貴様がこの集団の黒幕か」
正義の視線の先には――――1人の老人がいた
この教団を束ねる神官ルードヴィッヒ

親玉が自ら出てきた

周りの信者達も神官の登場に沸き上がり、歓声が響き渡る

「黒幕とは下賤な言い方をしてくれるな。我々は穢れた悪魔を浄化する聖なる集団だ。全ては悪魔祓いの極みを賜る為、テロ組織に加担したアスタロト家、それと関わりを持つヴァサーゴ家を浄化するのだよ。小僧、お主はその汚らわしい一族の肩を持つと言うのか？人間でありながら、悪魔どもを――――」

「黙れ」

神官ルードヴィッヒの言葉を正義は一喝する

「テロ組織とは『禍の団』の事だろう？それに加担したのはディオドラ・アスタロトであって、アスタロト家ではない。一部の者が穢れたから他の奴らも穢れる？根拠も無い、己の目で確かめた事も無い老害が悪魔を語るな」

「やはり悪魔に魂を売り渡した者に言葉は通じぬようだな。ならば、お主の魂も悪魔祓いの極みへの供物としてくれよう……！」

神官ルードヴィッヒが祭服を取り払うと――――その体には無数の術式や傷痕が刻み込まれていた

火傷、ネジ穴、切り傷……ありとあらゆる傷が神官の体を埋め尽くし、無数の術式が点滅を始める

神官の肉体の惨状を目の当たりにしたヒメガミ、フローラ、信者達は勿論――――正義さえも我が目を疑った

それに対して神官ルードヴィッヒは不気味な笑いを発するのみ……

「何を驚く必要がある?悪魔祓いの極みを賜れるのなら、我が身などいくらでも差し出そう。その為に私は喜んで体を焼き、穴を空け、皮を削ぎ落とした……!それが悪魔祓いの極みの代償……!何かを得る為に何かを犠牲にするのは当然の事だ……!」

「そこまでするとは……もはや常軌を逸しているな」

「何とでも言うがよい……!この傷と術式を体に埋め込んだ事で――――私は悪魔祓いの極みへと近付けたのだッ!!」

術式の点滅が早くなると同時に神官の体に異変が現れる

手や足が形を歪め、異形の姿へと変貌していく……

鋭い爪を持った手足、獣のような白い体毛に覆われた巨躯、口元から剥き出しとなった牙、血走らせる眼孔

目の前にいた神官はバケモノと化した……

その光景に信者達は言葉を失う

牙の隙間から吐息を漏らし、バケモノへ姿を変えた神官が言う

『フハハハハ……ッ、これこそが悪魔祓いの極みを賜る為の下準備!私自身が魔となっ

て悪魔祓いの極みを受ける事により、その術を己の体に刻み込むのだ！我が身を賭して得る術、まさしく我が信仰を象徴する！』

「……自分から卑下していた悪魔になるとは、貴様の思想はますます解せん」

『だが、まだ足りない！悪魔祓いの極みを賜る為には必要なものがある！それは――悪魔祓いを信仰する信者達の魂だ……ッ!!』

神官……否、悪魔と化したルードヴィッヒは周りの信者達に視線を向ける

すると、信者達を巨大な手で捕まえ――彼らを喰らい殺す

突然の凶行にヒメガミとフローラは目を覆い、正義も絶句する

悲鳴を上げて逃げ惑う信者達を片っ端から喰い殺すルードヴィッヒは高らかに笑う

『信者達の信仰心こそが悪魔祓いの極みを呼び寄せる為に必要不可欠！その数が多ければ多い程、悪魔祓いの極みへと到達できるのだ！死した信者達の血肉と魂は最高の供物となる！』

「……！貴様は……その為だけに、この教団を作ったのか……！」

『先程も言った筈だ！何かを得る為に何かを犠牲にするのは当然だと！悪魔祓いの極みに到達できるなら、私は喜んで我が身だけでなく信者達の命も捧げようぞ！』

もはや破綻者の域に達していたルードヴィッヒはヒメガミとフローラにも視線を向ける

彼女達は恐怖のあまり動けずにいた……
『安心しろ、誰1人とて逃がさん。全ての信者を悪魔祓いの極みの贄としてくれよう。――聖なる犠牲となってくれ』
悪魔と化したルードヴィッヒがヒメガミとフローラに手を伸ばそうとする
破綻した欲にまみれた魔の手が迫り来る刹那――孤月状のオーラがその手を弾く
ルードヴィッヒが憎々しげに視線を移すと、左足を振り上げた体勢の正義が視界に映った
足を下ろし、正義はルードヴィッヒに睨みを利かせて言う
「――気に入らんな」
『何だと?』
「貴様のやり方が気に入らんと言ったんだ」
『何と言われようと構わぬ。犠牲が無ければ成し得ぬ事もある。長く生きて私はそれを学んだ。お主にもいずれ分かる時が来るだろう』
「……なるほど、兵藤が1番嫌うタイプの思想だな。最近になってよく分かってきた」
『この世の常も知らぬ青二才には何を言っても無駄と見える。無知のまま浄化される事を悔やむが良いッ!』
悪魔ルードヴィッヒが巨大な手を振り上げ、正義を叩き潰そうと振り下ろしてくる

正義は軽く回避して全身のオーラを高めていく
毒々しいオーラが体から揺らめき、鬼の幻影を映し出す
「怒りを喰らわば修羅となろう――――。怨みを滅せば魔鬼となろう――――。深淵に巣食いし鬼を放ちて、前に塞がる害を貫き穿て――――。汝よ、御霊を喰らい罪を背負いし悪鬼と化せ――――ッ！――――『魔鬼化』ッッ！」
鬼気に満ちたオーラが噴き出し、正義の鎧が異質な形状へと変化する
――――『深淵の鎧鬼人』
鬼人と化した正義は背中から揺らめく両翼を展開し、1対の目の如く妖しい輝きを放つ
その輝きが正義の両足に集束していき、正義は上空高く飛び上がった
『他人を散々罵っておきながら、お主こそ汚らわしい力に満ちているではないか！』
「確かに俺も罪を犯した。それは否定しない。……だから、俺はこの禍々しい姿も受け入れ――――罪を背負って生きていく」
『私がその苦しみから解放してやろうと言うのが分からんのか！』
「それが浄化だと？笑わせるな。貴様は己の罪を認めず、他人の罪だけを糾弾している最低最悪の老害だろう。自らの過ちを認め、生きて償いを果たしてこそ罪を払拭できる！」

全身に絶大なオーラを纏い、蹴りの体勢で急降下していく正義
対してルードヴィッヒは巨大な拳を突き出してきた
両者の蹴りと拳が衝突するが……ルードヴィッヒの拳は瞬(またた)く間にひしゃげ、砕かれていく
絶句するルードヴィッヒに正義は冷徹に言い放った
「貴様は自分の罪にすら気付けなかった哀れな老害だ」
正義の蹴りが眼前の悪魔(ルードヴィッヒ)を真っ二つに分断し、着地する
白い巨躯の悪魔と化したルードヴィッヒは信じられないと言いたげな形相となり、体の端々から崩壊していった
教団の総帥が灰となって消えた事により、運良く生き残った信者達は歯向かう気力も無くなった
『魔鬼化(アビス・ブレイク)』を解除して元の姿に戻る正義
全て終わったところでヒメガミとフローラが正義に恐る恐る訊ねた
「どうして……どうして私達を助けたの？」
「さっきまで、あなた達を殺そうとしていたのよ……？なのに、どうして……？」
彼女達の問いに正義は「単なる気紛れだ」と簡素に答える
ここで正義も彼女達に〝ある事〟を訊ねる

「俺もお前達に訊きたい事がある。――あの老害が頻(しき)りに言っていた〝悪魔祓いの極み〟とは何なんだ？あそこまで執着するのは異常だ。何か知っているんじゃないのか？」

正義の問いに彼女達は心当たりが無いか考察する

すると、フローラが小さな声音で言う

「デビル……スレイヤー……」

「何？」

「少し前に神官が誰かと話しているのを盗み聞きした事があるわ。通信用の魔法陣だったけれど、その時に聞いた言葉が――デビル・スレイヤーだった。もしかしたら、それが悪魔祓いの極みなのかもって……」

聞いた事の無い異能――デビル・スレイヤー

名称から察するに『龍殺し(ドラゴン・スレイヤー)』と似て非なる力なのだろうか？

神官ルードヴィッヒは自らを悪魔に変えてまで、その力を欲していた……

〝誰かと話していた〟と言う事から、恐らく神官は通信の相手に唆(そそのか)されて暴挙に出たのだろう

この教団も結局は利用されていただけだったのかもしれない……そう考えざるを得なかった

『こいつらも願わずして被害者にされていた――――と言う事か……』
『魔鬼化(アビス・ブレイク)』を解除した正義は視線をヒメガミとフローラに向けるが……直ぐに視線を逸らす
何故なら――――彼女達は未だに〝おっぱい丸出し〟のままでいたからだ
背を向けて、これからどうするかを考えようとした時――――彼女達が話し掛けてくる
「私達、これからどうすれば良いの……？神官には最初から見捨てられて、教団も潰れて……」
失意に暮れるヒメガミとフローラに対して正義はこう告げる
「自分の進む道は自分で決めろ。誰かに決められる人生などつまらんだけだ。まずは自分がどうしたいのかを考えていけ」
正義の言葉にお互いの顔を見合わせるヒメガミとフローラ
直後にコクりと頷(うなず)き、正義にこう言ってきた
「「なら、私達はあなたについていくわ」」
「……は？何故？」
素っ頓狂な声で聞き返す正義
ヒメガミとフローラは凛とした顔付きで続ける
「あなたが今言った事を実行するのよ。自分がどうしたいのかを考えて決めるって」

「だから、私達はあなたについていって罪を償う事にしたわ」
「ふざけるな。そういう事は牢屋を出てから決め――」
『おーおー、それなら心配すんな』
突然聞こえてきた声に反応し、正義はポケットからスマホを取り出す
相手は勿論――アザゼルだった
『よっ、幽神。実はいつでも会話が聞こえるように特殊な術式プログラムを仕込んでたんだ。んで、話を盗み聞きしてみりゃ……ププッ、何か面白そうな事になってんじゃねえの。こりゃイッセーの事を言えなくなってきましたなぁ？』
「また貴様か……！話を聞いてたなら直ぐに――」
『まあまあまあ、両手に華ってヤツじゃねえか。その2人はお前に任せるわ。俺からも話をつけとくんで。じゃ、バハハ～イ♪』
陽気な声音でそう告げ、アザゼルは一方的に通信を切った
アザゼルの態度に正義はプルプルと怒り、スマホを握り潰す
『あの堕天使め……ッ！次に会った時は蹴り殺す……ッ！』
アザゼルに対して殺意を沸かせる正義
ヒメガミとフローラは彼の背中へと近寄っていく
「女にここまで言わせておいて、その責任を取らないつもり？」

「しっかりと責任を取ってもらうわ」
もはや何を言っても退く気は無いと悟ったのか……正義は苦々しい顔付きで「勝手にしろ」と告げる
ヒメガミとフローラに笑顔が戻り、これで無事任務達成――と思いきや
「コオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオイイイイイイイイイイイイイイガァァァァァァァァァァァァァァタァァァァァァァァァァァァァァァァァァァキイイイイイイイイイイイイイイ

「ま、待て！俺まで巻き込mゴボボ……ッ！」
ハート型の水流はヒメガミとフローラだけでなく、正義まで呑み込んでいった……
アスタロト家とヴァサーゴ家を狙った教団の目論見は崩れ去り、その後――ヒメガミとフローラ以外の信者達と幹部は揃って冥界に転送された
正義は最後までアザゼルに異議を申し立てたが、それが通る事は無かった……
更に精神的疲労が重なり、リントと共にしばらく留まる事になってしまったそうな……
『覚えてろ、アザゼル……！次に会った時は必ず蹴り殺してやる……ッ！』

吹雪が吹き荒れるとある国の平地にて
凍った大地に佇(たたず)む者が報告係からの連絡を受けていた
『申し上げます、例の教団はアスタロト家とヴァサーゴ家の討伐に失敗し、教団自体も壊滅したようです』
「やはり、そうですか。わざわざ情報を教えたのも無駄になりましたね。報告ご苦労様です」

『しかし、こうも簡単に話に乗ってくるとはマヌケにも程がありますよね』
「悪魔祓いにとって悪魔を祓う力は絶対なるもの。その極みと称される力をチラつかせれば、彼らの信仰心を煽れる。人間は偶像虚像を崇拝する愚かな生き物です。現にあの神官は自ら悪魔と化したわけですからね」
『仮に教団がアスタロト家とヴァサーゴ家を滅ぼしたら、どうするつもりでしたか？』
「無論、消しますよ。用済みには消えてもらうのが手っ取り早いので。そもそも私の悪魔を祓う力を誰かに教えるつもりはありません。教えたとしても――ただの人間に使える代物ではありませんから」
『……酷いですね。端から見れば、あなたの方が悪魔より悪魔らしいですよ――シルバーさま』
「それはどうも。では、そろそろ戻ります」
通信を切り、自分の背後に視線を配る男――シルバー・ゼーレイド
その視線の先にはシルバーによって凍り漬けにされた悪魔が１０体ほどいた
直ぐに踵（きびす）を返して歩き出すと――凍り漬けの悪魔達は儚（はかな）い音を立てて砕け散る
シルバーは眼鏡をクイッと上げて呟（つぶや）く
「所詮、派生に過ぎない『悪魔祓い（エクソシスト）』どもでは役に立ちませんか。悪魔祓いの原初とも言うべき一族――『滅悪祓士（デビル・スレイヤー）』。その末裔たる私の手で『造魔（ゾーマ）』に仇（あだ）なす悪魔は滅ぼして

あげましょう……。如何なる悪魔とて、私の前では無力に成り下がる。いずれ、身をもって教えて差し上げますよ、グレモリー眷属」

シルバーは自ら生み出した風に乗って、その場から飛び去っていった

氷と風を操る『滅悪祓士（デビル・スレイヤー）』シルバー・ゼーレイド

悪魔を滅ぼす絶対の異能は、よりによって『造魔（ゾーマ）』の一員――幹部構成員が有していた

『禍の団（カオスブリゲード）』以上に危険な組織――『造魔（ゾーマ）』が本格的に始動する日は近い……

黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（前編）

冥界のとある場所――アジュカ・ベルゼブブが運営する研究所にて
アジュカはアスタロト家より預かった縁者（えんじゃ）――ディオドラ・アスタロトの末弟と何やら話し込んでいた
「……なあ、やはり考え直す気は無いのか？」
「言った筈だよ、現ベルゼブブさま――いや、アジュカさん。僕もアンタと同じように物作りに秀（ひい）でているけど、考えの根底が互いに合わない。アンタの製造した『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』は確かに素晴らしいよ。でも――そのせいで純血、転生を含める多くの悪魔達が狂ったのも事実。種族を保守するシステムが逆に作用した事例もあるんだ。バカな貴族が利用して、はぐれ悪魔が生み出されたとか」
赤紫色の髪をソフトモヒカンにした少年が、アジュカの開発した『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』に賛否の評価を贈る
彼こそがディオドラ・アスタロトの末弟――トレミス・アスタロト
彼の指摘にアジュカは自嘲気味に嘆息する
「やれやれ、痛いところを突かれたな」

「それに噂で耳にしたんだけど、赤龍帝（せきりゅうてい）に贔屓（ひいき）してるんだって？それってやっぱり神滅具（ロンギヌス）を宿しているから？親友サーゼクス・ルシファーさまの妹君であるリアス・グレモリーの眷属だから？」

「俺はただ『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』の可能性を広げたいだけだ」

「可能性ねえ……。だったら、僕が製作した〝コイツ〟も可能性の1つになれるんじゃないの？『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』と神器（セイクリッド・ギア）のシステムを掛け合わせた僕の技術の集大成――」

トレミスは自分の服を捲り上げ、腹部を見せる

そこにはおぞましいデザインの器具が埋め込まれていた……

恐らく『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』の要素を混ぜた人工神器（セイクリッド・ギア）の1種だろう

グリゴリでも開発が進められているが、彼はいち早く……しかも独自に完成させていた

トレミスが製作した人工神器（セイクリッド・ギア）を見て、アジュカは目を細める

「……本当に完成させるとは末恐ろしい才能だよ、アスタロトの血筋のせいか。だが……その力は未調整な上に危険過ぎる。ただでさえ不確定要素が多い神器（セイクリッド・ギア）に『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』のシステムを融合させれば、どんな不具合が起こるか分からない。何より……肉体に直接埋め込むのはオススメしない。出力が上がる反面――負荷が倍増する。自分の命を削るようなやり方だ」

「それは1万年以上も長生きする悪魔の特権みたいなものでしょ？僕は僕自身を被験体にして〝コイツ〟の性能を実証するのさ。研究に実験は付き物だろ？」
「……トレミス、お前は昔から危なっかしい研究を続けていた。そのせいで上役の連中も、お前の事を酷く煙たがっている。それに――――」
「ディオドラ兄さんの1件もあるから……って言いたいわけか？そりゃどうも。でもさぁ、結局のところ――――ディオドラ兄さんがあんな事になったのって、もとを糺(ただ)せばアジュカさんが製作した『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』が原因でもあるんだよ？誰でも眷属に出来るシステムなんて作るから、ディオドラ兄さんは私欲に走ってシスターや聖女ばかり眷属にしていった挙げ句、アーシア・アルジェントの人生を壊した。こうなるとディオドラ兄さんだけじゃなく、アーシアさんも被害者って事になるんじゃない？」
「……」
　更に痛いところを突かれて何も言えないアジュカに対し、トレミスは話を続けた
「アスタロト家は現当主解任、次期魔王輩出の権利も剥奪され、オマケに世間からも酷いバッシングを受ける始末。泣きっ面に蜂とはよく言ったものだよ。けどさ……それも研究の為の犠牲と思えば、気が楽になるでしょ？――――波風(なみかぜ)立たない研究なんて、この世に存在しないんだよ」
「……だから、お前も自分を犠牲にしてまで〝それ〟の研究と開発を続けてきたと？」

「そういう事。今だから言っちゃうけど、結局アンタもサーゼクス・ルシファーと同じ甘っちょろい魔王さまなんだよ。種の存続を守る為とか言ってるけど、そのシステム自体が種の存続を危ぶめている事に気付いてすらいない……。案外そういうところはバカなんだね」

「……」

トレミスの指摘にアジュカは完全に押し黙ってしまう

トレミスは服を戻して研究所の扉を開く

「アジュカさん、僕は〝技術者〟としてのアンタを尊敬するけど……〝魔王〟としてのアンタは尊敬できないよ。種の存続だの繁栄だの、それも結局は科学技術の進歩によって成り立っているんじゃないか。それを否定しておいて、ヒトの研究にケチつけてほしくないね」

「トレミス、お前……っ」

「じゃあ、僕は一旦ここを出るよ。せっかく完成した研究データを勝手に調査でもされたら、面倒くさいし」

そう言ってトレミスは扉を開き、研究所を去っていった

残されたアジュカは苦い表情で嘆息し、周りにいる研究員が口々にトレミスを非難する

「アジュカ殿、やはりあの者の考えは異端極まりない。危険な研究を平然と行い、あのような物を完成させてしまった……っ」
「早急に処分を下すべきだ！さもないと、またディオドラ・アスタロトのように危険因子になりかねん！これ以上アスタロトの名を、四大魔王の名誉を穢してはならない！」
トレミスに対して処分の声を上げるが、アジュカはそれらを諌める
「そうしたところで何かが変わるか？軽々しく処分を下せば、余計に反発してしまうだけだ。確かにトレミスの言動は些か問題だが、その発端となってしまった原因は俺にもある。何より先入観だけで決め付けるな。〝ディオドラ・アスタロトの弟だから〟と非難を浴びせるのが正しい事か？」
「……っ」
「とにかく、今はソッとしておいてやろう。あいつの負った傷は……俺にも治せないくらい複雑なんだろう」

「そ、それ本当なんスかっ、先生!?幽神兄弟がグリゴリの管理下に入ったって！」
「ああ、俺がこっそり頼んでおいた案件をクリアしたから、奴らを独自の権限を持った遊

撃兼諜報部隊にスカウトしてやったのさ」
オカルト研究部部室にて
一誠のみならず、アザゼルからの報告を聞いて部員全員が驚きを隠せなかった
三大勢力にも既に話は通しており、魔獣騒動の1件も相まって幽神兄弟の所属が認められたのだ
「でも、そんな事があったのなら私達にも言ってくれれば良かったじゃない」
リアスの質問にアザゼルは端的に返す
「アスタロト家とヴァサーゴ家の事もあったし、お前らも魔獣騒動の1件で間も無かったから話すわけにもいかなかったんだ。その点に関しては詫びる。黙ってて悪かった」
アザゼルなりに新やリアス達を気遣っていたのだろう
リアスは嘆息しながらも納得し、アザゼルが話を続ける
「今アスタロト家とヴァサーゴ家は人間界にある山奥の別荘で隠居中、幽神兄弟もしばらくはそこで待機している。また良からぬ輩の襲撃も起こらないとは限らないから、念の為の用心棒ってわけだ」
「信用して良いのか？元々は賞金首だったんだろ？」
新が素朴な疑問を投げつける
危険度の高い賞金首だった経歴から、新は疑いの目を向けていた

　その質問に対してアザゼルは苦笑しながら答えた
「まあ、確かに危ないところはあるけどな。俺が少しからかってやったら、鬼気迫る声音で〝蹴り殺す〟と脅されたもんだ」
「既に恨まれてるじゃないですか！何やらかしたんスか⁉」
「その辺はノーコメントで☆」
「ケチな政治家みたいな言い訳してんじゃねぇよ……」
　アザゼルが何をやらかしたのか、容易に想像できてしまうので嘆息する新と一誠
　そこでアザゼルは一誠に話を振る
「んで、ここからがちょっと大事な話だ。イッセー、今週末にアーシアを連れてその別荘に向かってほしい」
　突然切り出された話に一誠とアーシアは目を丸くする
「実は幽神兄弟――――正確には幽神正義からの要請もあってな。1番に迷惑を被(こうむ)ったイッセーとアーシアに来てもらいたいんだと」
「お、俺とアーシアの2人で……ですか？」
「あまり大所帯で行くには目立ち過ぎるからな。眷属総出ってわけにもいかない。リアス、お前の許可さえあれば2人を行かせてやりたいんだが……どうだ？」
「そうね……本当は私も行かなければならないところなんだけど、分かったわ。せめて

報告だけでもしてちょうだいね」
　リアスの了承が出たところでアザゼルは話を戻し、一誠に待ち合わせ場所を記した紙を渡す
「イッセー、当日はお前らの他にも同行者を付ける。一応の護衛役だ」
「護衛？誰なんですか？」
「そいつは後のお楽しみ、お前の知ってる連中だ」
「先生、心なしか悪い顔になってる気がするんですけど……何か企んでませんよね？」
「失礼な奴だ、俺がいつそんな事を考えた？」
「四六時中考えてるようなイメージしか無いんスけど……」
「さすがに傷付くぞ⁉」
　身から出た錆とはまさに今のアザゼルを示していた……

　そして週末になり、一誠とアーシアは指定された待ち合わせ場所――ファミルーマートに辿り着いていた
　アザゼルの話によれば、案内役に幽神正義が迎えに来るのだが……一誠とアーシアの

護衛役として同行者も加わるらしい
しかも、一誠の知っている人物
『俺が知っている人物って誰なんだろう……？』
一誠が考え込んでいると……その人物達がやって来た
アザゼルが寄越した２人の護衛役、それは――
「お久しぶりです、イッセー様」
「ユ、ユキノさんっ⁉」
一誠は素っ頓狂な声を上げて驚いた
それもその筈、護衛役としてやって来たのは一誠が以前助けた元『禍の団（カオス・ブリゲード）』構成員
――ユキノ・アンジェルだった
更に彼女だけでなく、金髪の女騎士――ディマリア・ロディーナと小悪魔的な女性
――チェルシー・ルビナスも同行していた
彼女達は冥界に移送されていたのだが、アザゼルの要請でこの日の為に一時的な釈放を得たのだ
予想外の人物に終始驚く一誠
「アーシア・アルジェント様ですね？改めて、はじめまして。イッセー様とあなたの護衛役を仰（おお）せつかって参りました。ユキノ・アンジェルと申します。どうぞ、よろしくお願

いします」
「は、はい！こちらこそ、よろしくお願いします」
畏(かしこ)まった様子で挨拶を交わすアーシアとユキノ
　ディマリア、チェルシーも簡単に自己紹介を済ませる
「しかし、驚きましたよ。まさかユキノさん達が俺とアーシアの護衛役だなんて……」
「正直、私達も驚いてます。『禍(カオス)の団(ブリゲード)』の構成員だった私達にイッセー様とアーシア様の護衛を任されるだなんて……」
　どうやら本人達にとっても予想だにしてなかった案件らしい
　一誠はアザゼルの采配を怪訝に思いつつも、幽神正義が来るのを待つ事にした
　それから15分後、幽神正義がやって来て――――
「あ、来た来た。おーい、幽g――――ミビャアッ！なんでいきなり蹴るんだよ⁉」
「黙れ兵藤。遺言を残してから蹴られるか、遺言を残さずに蹴られるか選べ」
「どっちにしろ蹴られるんじゃねぇか！俺が何したって言うんだよ⁉」
「それは貴様が理解しているだろう。アーシア・アルジェントがいておきながら……何処ぞの石油王になったつもりか？このアホが」
「違う！俺がなりたいのはハーレムお――――ギャアッ！」
　正義の容赦ない蹴りの餌食となる一誠

その理由は言わずもがな、一誠がアーシアの他に女性を侍らせている事に対しての制裁だろう
正義が一誠の胸ぐらを掴んで詰め寄る
「そもそも何だ、３人のうち２人も爆乳を所持しているぞ。貴様は何を爆破させるつもりだ」
「当て字が酷い上にヒトを爆弾魔みたいに言うな！」
「爆弾魔じゃなければ、覗き魔もしくは痴漢魔とでも言ってやろうか。少しは自制しろ、猿モドキ」
「何だと、このムッツリスケベめ！丸くなったかと思えば刺々しさを上げやがって！また鼻血の海に沈めてやろうか！」
「それ以上何か喋ってみろ。３２本の歯で貴様の脳髄を貫通させてやる」
唖み合う一誠と正義の様子を見て、アーシアはオロオロ
ユキノ達もどうしたら良いのか分からなかった
「えっと……イッセー様？こちらの方は？」
ユキノが恐る恐る訊くと、一誠が正義の蹴りを回避しながら言う
「あ、ゴメンゴメン。紹介するよ。こいつは俺の中学時代の知り合いで、幽神正義って言うんだ。根は良い奴なんだよ」

「とてもそういう風に見えない気がするんだけど？」
　チェルシーの指摘に一誠も苦笑い
「まあ、基本的に堅物で刺々しいけど……これでもまだマシな方さ」
「なるほど、あれか。喧嘩するほど仲が良いと言う――――」
「いや、仲良しではない」
　一誠と正義は揃ってディマリアの言葉を遮る
　ひと悶着あったところで一誠はユキノ達の事を正義に話す
　彼女達が元『禍の団』構成員であった事や、一誠の将来の眷属候補である事
　そして、彼女達の采配をアザゼルが行った事も……
　それを聞いて正義は制裁の矛先を
　一誠からアザゼルへと変更した
「兵藤、今度あの堕天使の元総督を蹴り殺して構わんか？さすがに我慢の限界だ。この采配に悪意しか感じられない」
「殺すのはやめてくれ！あんなのでも俺達の先生なんだ！」
「チッ」
「その代わり、死なない程度に蹴るのはＯＫだ」
「話が分かるようになってきたな」

「正直、俺達もあのヒトに反省してもらいたい点はあるからな。でも、アザゼル先生は全く反省しない……」
「ならば、お前も奴の折檻に参加するか？日頃の恨みも込めて」
「そうだな、考えておくよ……」
何故かこの案件を終えた後、アザゼルが教え子と部下に殺されかける未来予想図が見えた……
一誠と正義のアザゼル折檻協定が成立したところで、アスタロト家の別荘へと向かう一同
扉を開けて大広間に到着すると、メイドが一誠達を迎え入れる
一誠とアーシアはソファーに座り、ユキノ達はその傍らに佇む
暫くするとアスタロト家の元当主が入室して向かいのソファーに座る
「赤龍帝・兵藤一誠殿、アーシア・アルジェント殿。お忙しい中、お越しいただきありがとうございます。この度は私の息子――ディオドラがリアス・グレモリー殿を含め、皆さまにご迷惑をお掛けしました。元当主として、父親として深くお詫び申し上げます」
畏まった口調で一誠とアーシアに頭を下げる元当主
一誠とアーシアが突然の謝罪に呆気に取られていると、正義が耳打ちしてくる

『1番被害を受けたお前達に面と向かい合って詫びを入れさせるべきだと思ってな、今日お前達をここに呼んだのはその為だ。まだ誠意が足りんと言うなら、腹でも切らせようか？』
『いやいやいや！そこまでしなくて良いって！』
『そうか。……なら、話は終わりだ。帰れ』
『幽神、失礼じゃね？今来たばっかりなのにもう帰れとか』
一誠が訝しげに訊いても正義は『そんな事は無い』とシラを切るばかり
そこへアスタロト家元当主が話を切り出してくる
「お二人ともお疲れでしょう？今日はどうぞごゆっくり寛いでいってください。私どもに出来るのは、おもてなしぐらいですが……」
「いや、待て。そんな必要は無い」
「幽神殿、何故ですか？せっかく来ていただいたのに」
「用件だけ済めば良いだろう」
「それでは私の気が治まりません！それに幽神殿にもご迷惑を掛けた身です。先日の件のお礼も兼ねて――――」
「いらん。余計な事をするな」
話を無理矢理終わらせようとする正義と、頑なにおもてなしを勧める元当主の口論が

続く
そんな中、正義にとってタイミングの悪い出来事が起こる……
「お父さま、コーヒーをお持ちしました」
奥から聞こえてくる女性の声
正義の嫌な予感はまたしても的中してしまった
女性の声に反応した一誠がそちらを見やると、ゆるふわのウェーブを掛けた青い髪の女性――ジュビア・アスタロトが人数分のコーヒーをトレイに乗せてやって来る
「兵藤一誠殿、紹介します。私の娘のジュビア・アスタロト、ディオドラの姉です」
「ディ、ディオドラのお姉さんっ⁉」
素っ頓狂な声を上げて驚く一誠
ジュビアは軽く会釈してから父親、一誠、アーシアの順番にコーヒーを並べていく
そして、正義にもコーヒーが渡されるのだが……彼のコーヒーだけは特別な物と化していた
上にバニラアイスが添えられ、そのバニラアイスは何故か正義そっくりの彫像に形作られていた
バニラアイス彫像の出来に言葉を失うが、何より正義への待遇が厚かった事に一誠はジト目で睨む

「……なあ、幽神」
「それ以上訊くな、俺は何も知らん」
「知らんで済まされるか！お前、俺を散々貶（けな）しておいて、あの爆乳お姉さんと何かあったんだな⁉白状しろ！」
「黙れ、俺は潔白だ。やましい事など何も無い」
「潔白だと⁉だったら、なんでそのヒトがお前の隣に座り込むんだよっ⁉」
一誠の一言に反応する正義
視線を移してみれば、いつの間にかジュビアが隣に座っていた
「……何故、俺の隣に座っている？」
「いけませんか？ジュビアの座る位置は正義さまの隣と決まっています」
「勝手に決めるな、許可した覚えは無い」
正義はバニラアイス彫像を崩して混ぜ、コーヒーを一気に飲み干す
一誠は2人の関係性について元当主に問いただす
「あのー、幽神とディオドラのお姉さんはどういった関係なんですか？」
「おい兵藤、何を訊いている」
「おおっ、よくぞ聞いてくださいました。実はジュビアが幽神正義殿にゾッコンでして。今ではすっかり婿養子気分なんですよ☆」

「誰が婿養子だ⁉そんなものになった覚えは無いッ！」
「まあまあ、遠慮なさらずに。ジュビアが見初めた男性なら、何も言う事はありません。それにあなた自身の実力も申し分ない。差しつかえ無ければ婿養子だけでなく、我がアスタロト家の次期当主候補として迎え入れましょうぞ。どうせなら、私の事もお義父さんと呼んで――――」
「話を飛ばし過ぎるな！そもそも、俺はそんなものになるつもりは無いッ！」
ギャーギャー喚く正義だが、元当主は引き下がる様子を全く見せない
一誠とアーシアが当惑している中、買い出しに行ってた悪堵が戻ってくる
「兄貴～、食い物を買い込んだから手伝ってくれ――――って、兵藤⁉なんでここにいるんだよ⁉」
「ちょっと、アンタ！せっかく買ってきたのに落とさないでよ！」
悪堵は目玉が飛び出す程に驚き、手に持っていた買い物袋を落とした
同行していたであろうシャルルとウェンディが買い物袋を拾い集める
一誠は即座に美少女２人に気付いた
「また美少女が出たっ！しかも２人！」
「おや、おかえり。シャルル、ウェンディ、キミ達もご挨拶を。彼がかの有名な赤龍帝こと兵藤一誠殿だよ」

「あ、はい。えっと……初めまして。ウェンディ・ヴァサーゴです」
「シャルル・ヴァサーゴ、ウェンディとは姉妹よ。よろしく」
　ウェンディは深々と頭を下げ、シャルルは軽く会釈する
　美女美少女に囲まれている幽神兄弟に対し、一誠はワナワナと震え始めた
「幽神……っ！お前ら……なんて、なんて羨ましいんだッ！こんな可愛い女の子達と1つ屋根の下暮らしだと⁉よくも見せつけてくれたな、このムッツリ兄弟めッ！」
「泣くな、鬱陶(うっとう)しい！成り行きでこんな事になってしまっただけだ！」
「成り行きで爆乳お姉さんと双子の美少女を手に入れたってのか⁉コンチクショウ！」
「変な言いがかりをするな！俺達はあくまで護衛として、ここに留まっているに過ぎん！」
　正義は必死に弁明するが、今の一誠は聞く耳を持ってくれない……
　そこへ更に――――少し遅れて帰ってきたリント、教団を脱退し、正義の側近として留まっているヒメガミとフローラも鉢合わせ
　美少女だらけの空間に遭遇した一誠は涙目で正義を睨み付けた
「お前ら、ただのスケベブラザーズじゃねぇか！先生がからかうのも分かった気がするよ！もうムッツリでも何でもねぇ！スケベブラザーズ！」
「貴様にムッツリだのスケベだの言われる筋合いは無い！貴様の方こそ、アーシアがい

ておきながら3人もの女を侍らせているだろうが！アーシアの純真な心を弄ぶのか！」
「アーシアに対する想いは変わらねぇ！アーシアは良い娘だし、俺だって好きだ！お前はどうだ？アーシアにフラれたからって、他の所に婿入りすんのか！」
「言わせておけば……ッ！やはり、さっきの話は決裂だ！あの堕天使もろとも、いずれ貴様を蹴り殺してやるッ！」
「やれるものならやってみろっ、ムッツリ野郎ッ！」
――とは言うものの、実は今の一誠は魔獣騒動の1件でドライグが疲弊しきってしまい、眠る時間が多くなってしまっている
禁手（バランス・ブレイカー）には何とかなれるが、トリアイナや真『女王（クイーン）』が使えない……
しかし、そんな状態もお構いなしに一誠は正義への怒りを飛ばす
それ程にまで幽神兄弟の現状が羨ましかったのだろう……
驚くべき事態は更に起こる……
一誠と正義が啀（いが）み合っていると――大きな扉が開かれる音、その直後に足音が聞こえてくる
「久々に寄ってみたら……何なの、この騒ぎは？外まで聞こえてきたよ」
大広間に入室してきたのは赤紫色の髪をソフトモヒカンにした少年
何処となく見覚えのある面影を持った少年が現れた

「へぇ、アンタが噂の赤龍帝（せきりゅうてい）・兵藤一誠か。――見た目以上にアホ面だね」
「いきなり失礼だな！何なんだよ、お前は⁉」
荒れている一誠が八つ当たり気味に訊くと、ソフトモヒカンの少年は口の端を吊り上げて答える
「僕かい？僕はトレミス・アスタロト。レーティングゲームで、アンタがボコボコにした――ディオドラ・アスタロトの弟だよ」
アスタロト家とヴァサーゴ家の別荘にて、波乱がまだまだ続きそうだ……

黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（中編）

「ディオドラの、弟……？あんまり似てないな」
「あー、よく言われるよ。でも、僕はどちらかと言えば母さん似かな？」
「トレミーくん、おかえりなさい。ここに来るなら連絡の1つでも――――」
「少し休みに来ただけだから、1日か2日ほど休んだら戻るよ。それからジュビア姉さん、その呼び方やめて」
淡々と返していくトレミス・アスタロト
一誠に視線を移した後、今度はアーシアの方に視線を移す
『あのヒトが……ディオドラ兄さんが躍起になってたアーシアさんか』
ジッとアーシアを見つめるトレミス
アーシアはとりあえずペコリと頭を下げて挨拶
それを見てトレミスは――――
『……可愛いな、おい』
兄のディオドラ同様、あっという間に堕ちた……
そこへ元当主がトレミスに話し掛ける

「なあ、トレミス。そろそろ我が家に戻ってきてくれないか？いつまでもアジュカ殿の世話になるわけにもいかないだろう？」
「戻る？家に？僕が戻って何になるって言うの？」
「そ、それは……」
「ディオドラ兄さんの〝代わり〟に僕が次期当主になれって言いたいの？ハッ、そんなの願い下げだね。自分達の体裁を守りたいが為に僕を穴埋めにするのはやめてくれないかな？」
父親に刺々しく反発の言葉を浴びせるトレミス
急に空気が重苦しい雰囲気になっていく……
「ジュビア姉さんに次期当主の話を回しても受け入れてもらえず、仕方無くディオドラ兄さんが次期当主の座についたものの――――兄さんは失態と醜態を世に晒した。お陰でアスタロト家とヴァサーゴ家は風当たりが悪くなり、肩身の狭い思いをしている。だから、あの時に進言したんだ。〝ディオドラ兄さんに次期当主の座は荷が重いんじゃないか？〟って。兄弟の序列程度で決めたりしたから、こんな事になったんじゃないの？」
「う……っ」
「兄さんも兄さんだよ。血筋だの血統だの上級悪魔だの、老害達のくだらない概念ばか

り聞いて、それをバカみたいに重んじた。その傲(おご)りと甚(はなは)だしい勘違いが身を滅ぼす結果になったんだ」
「ト、トレミーくん。そんな酷い事を――――」
「次期当主の座を放棄したジュビア姉さんが言える立場じゃないだろ。姉さんが次期当主についていれば、少なくともディオドラ兄さんの暴走を抑制できたんじゃないのかな？自分にも荷が重いとか言っておいて、力足らずの兄さんに回したのもダメだったんだよ」
　グサグサと痛い言葉を連ねられてジュビアも涙目になってしまう
　その様子を見ていた一誠は我慢できなくなり、トレミスに詰め寄る
「おい！いくらなんでも言い過ぎじゃないのか？自分の家族に対して言って良い事と悪い事があるだろ！」
「四大魔王からの贔屓(ひいき)を受けている赤龍帝(せきりゅうてい)にそんな事を言われる筋合いは無いね」
「ひ、贔屓？」
「そうさ、アンタは赤龍帝の力を宿している。その力がアジュカさんの目に留まり、過去に類を見ないパワーアップを果たしてきた。お陰でアンタは今や冥界のヒーローと持て囃(はや)されている。……でも、ここまでの大事(おおごと)に行き着いたのも全てはアンタが原因でもあるんだよ」

トレミスは一誠の周りを歩きながら語り始める

「考えてみなよ。赤龍帝の神滅具（ロンギヌス）を身に宿したばっかりに、アンタは自分だけじゃなく周りのヒトの人生まで狂わせたんだ。そこにいるアーシアさんが良い例さ。アンタがアーシアさんと関わったせいで、彼女は多くの苦しみを味わってきたんじゃないのか？闇人（やみびと）に1度殺され、ディオドラ兄さんに狙われ、そこの幽神兄弟にも付け入る隙を与えてしまった。赤龍帝、アンタは多くのヒトを惹き付けると同時に――――多くの痛みと苦しみも惹き付けてきたんだよ」

冷酷に言い放つトレミスの言葉を一誠は否定する事が出来なかった……

反論の材料が見つからず、沈黙するしかない一誠に対してトレミスは尚も言い続ける

「分かるかい？アンタが赤龍帝として力を付ければ付ける程、誰かを惹き付ければ惹き付ける程――――痛みにもがき、苦しむヒトも増えていく。世間じゃ希望とか憧れとか言われてるみたいだけど、僕から見ればアンタは周りに夢と希望と言う名の病気を撒き散らす――――性質（タチ）の悪い病原菌だ」

「びょ……病原菌……っ？」

「三大勢力に余計な干渉をさせてきたアンタにはお似合いだろ。今までは何とかなってきたんだろうけど、この先に現れてくる脅威の前で――――アンタの甘っちょろい考えが通じると思わない事だね。アンタが振り撒く病気（夢と希望）ごと押し潰されるかもしれないよ？」

「そんな酷い事……言わないでくださいっ！」
ガタッ！と勢い良く立ち上がるアーシアに対し、トレミスはジロッとアーシアを睨み付ける
『ホンット健気な娘だね。……結婚したいな』
余計な感情が芽生えたようだ……
トレミスは咳払いして一誠のもとから離れ、広間を出ようとする
広間を出る直前、踵（きびす）を返したトレミスが再び言う
「僕はディオドラ兄さんの件でアンタを恨んだりしちゃいない。あれは兄さんの自業自得だからね。その辺はしっかりと割り切ってるよ。――ただ個人的にアンタが気に入らないだけさ」
黒い笑みを浮かべたトレミスは、そのまま広間を退室していった
不穏な空気に包まれ、雰囲気も重くなってしまう……
「イッセーさん……」
「……申し訳ございません。トレミスが失礼な言動を――」
トレミスの悪態に元当主は頭を深く下げて謝罪してくる
一誠は呆気に取られた表情のまま「あ、いえ……大丈夫っす……」と平静を取り繕（つくろ）う
しかし、内心ではトレミスの言葉が突き刺さっていた

自分が周りに多大な影響を与え、これまでに多くの被害を出してきた事は否めない……

「奴の言葉が気になるのか、兵藤？」

正義が一誠に声を掛けてくる

心中を悟られた一誠は目を逸らすものの、肯定せざるを得なかった

「病原菌か。表現は些(いささ)か酷いが、奴の言葉は的を射ている。貴様は周りの者を惹き付ける反面、それがもたらす事柄に対して自覚をしていない。ロートル世代の老害どものようにな」

「……」

「今の貴様は世に大きく影響を与える存在となっている。貴様の行(おこな)い１つ１つが、誰かに期待と希望を容易く植え付ける。――――それを裏切られた時の傷はデカい。良いか？生半可な気持ちで留まるな。他人の言葉１つで揺らぐ程度の信念など、何の意味も無い」

正義は一誠に叱責を贈る

それは自分がただの悪魔ではなく、赤龍帝としての自覚を持つ為のアドバイスでもあった

これまでは赤龍帝としての自覚が足りなかったのかもしれない

一誠は沈んだ気持ちを振り払う
「……そうだよな、気負い過ぎてちゃいけないよな。少し目が覚めたよ。ありがとな、ムッツリ」
「それでこそ貴様だ、兵藤。……ムッツリは余計だがな」
重苦しかった雰囲気が少し和らいだところで、元当主のもとにメイドの1人がやって来て耳打ちする
元当主がフムフムと頷き、一誠達に言う
「皆さん、露天湯の準備が整いましたので、食事の前にそちらの方を先にお楽しみいただければと」
「露天湯⁉」
「露天湯、だと……っ？」
その報せに一誠はより一層英気を取り戻し、正義に戦慄が走る……

別荘から少し離れた山林地帯
周りを木々に囲まれたその場所は元当主が様々な嗜好を凝らした露天湯となってい

た

丁度良い風が木の隙間を吹き抜け、新鮮な空気が疲れた体に癒しを与える

「あ～、自然に囲まれた温泉か～。先生が好みそうだな～」

空気の美味さと温泉の心地よさを堪能する一誠

無論、楽しみはそれだけじゃなかった

「ぐふふっ、しかも〝混浴〟の露天湯だからなぁ。もしかしたらアーシア達も入ってくるかも……！」

そう、この露天湯は自主的な混浴が可能である

ゆえに一誠はアーシアなら来てくれるだろうと待ち望んでいた

下心に満ちた表情を浮かべていると、小さな足音が聞こえてくる

『キタッ！』と心が昂る一誠は一旦咳払いをして気を落ち着かせ、深呼吸する

高まる期待に〝まだかまだか〟と待ちわびていると――

パチン！ボシュッ！

突如、目の前の湯が弾けて一誠の顔に飛沫が掛かる

鼻と口に湯が飛び込んできたせいか、一誠はゲホゲホと激しく噎せる

すると、背後からクスクスと笑い声が聞こえてきた

「良いリアクションするねぇ、キミ♪」

振り返ってみれば――――そこにいたのは棒付きキャンディをくわえるチェルシーがいた

先程の爆発は彼女の悪戯によるものだろう

一誠はその悪戯に抗議しようとしたが……目の前にいるチェルシーはタオル1枚を身体に巻き付けた格好で立っており、しなやかでありながら出るところは出ていた

彼女の艶姿(あですがた)に言葉を失い、ゴクリと喉を鳴らす

「ゴメンね、つい悪戯しちゃった。それにしても……ふふっ、良いリアクションしてくれたねー。もっとからかいたくなっちゃう♪」

「チェ、チェルシーさん……爆破は洒落になりませんって！やめてくださいよ！」

「ゴメンゴメン、背中流してあげるから許して、ね？」

「マジすか⁉お、おおお、お願いします！」

一誠は湯から上がり、チェルシーが泡立てたスポンジで一誠の背中を洗う

アーシア以外の女性でこんな嬉しいイベントに直面するのは初めてだった為か、一誠は珍しく緊張していた

チェルシーが一誠の背中を洗いながら言う

「キミの背中って逞(たくま)しいよね。デキる男の子って感じがするわ」

「そ、そうっすか？」

「アレレ～？声が上擦ってるけど、こういう事には慣れてないのかな？てっきり、あのアーシアって娘と子作りしまくってると思ってた♪」
「チェ、チェルシーさん！あんまりからかわないでくださいよ！」
「アハハ、ゴメンゴメン♪でもさ、あんなに可愛い娘を悲しませちゃダメよ？大切なら必死で守らないとね。……失ってからじゃ、もう遅いから」
　先程までニコニコしていたチェルシーの表情と声音が次第に陰りを見せ始めた
　一誠が怪訝そうに窺うと、チェルシーは語る
「私はね、小さい頃にお父さんとお母さんを殺されて……ユキノとディマリアに出会うまでは独りで生きてきたの……。平凡だった家庭を壊されたショックで神器が目覚めて、襲い掛かってくるものを爆破してきた……。結局、弱かったらどんな時代でも生きていけないって事を痛感したの……。力を付けても、直ぐに強大な敵が現れて……何もかもメチャクチャにしていく……っ。――特に造魔はその真理を体現する組織よ」
造魔の名を口にした直後、チェルシーの指先が震え始め、その震えが彼女の体に伝播していく
「造魔は来るもの拒まず、去るもの追わずの組織だけど……敵対する者には決して容赦しない……。今まで多くの強者が造魔に挑んでいったけど、悉く返り討ちにされたわ……。でも、奴らの恐ろしさは他にもあるの……」

「それは……？」

「奴らはお金で動く事が多い上に、最大級に性質が悪いのよ。謂わば傭兵組織……。依頼人から報酬を受けて依頼を果たす。悪政・圧政を強いる国やテロ組織の壊滅、殺しの依頼まで何でもやるわ。しかも、気分次第では依頼主でさえ殺す理不尽もあり得るの……。敵にも味方にもなる身勝手極まりない組織――それが造魔よ……っ」

リアスのように眷属を従える上級悪魔達は、基本的に大公や冥界政府の命が無ければ動かない

その上、人間界の戦争や紛争に干渉する事は出来ない

しかし、造魔は単なるテロ組織ではなく――傭兵組織

報酬さえ払えば依頼をこなし、相手が人間であろうと容赦なく殺す

平然と非人道的な悪行をしているにもかかわらず、造魔は多くの国々から支持を得ている

国からの資金援助も受け、造魔は瞬く間に勢力と領域を拡大していった

あまりにもスケールがデカ過ぎる組織……

改めて造魔の底知れぬ恐ろしさを知った一誠に、チェルシーは震えながら言う

「だからね……中途半端な覚悟で造魔に手を出さないで、ね……？あれは戦力も規模も強さも次元が違う……」

震えを抑えられないチェルシー
一誠も無意識に固唾を飲むが、それでも怯むわけにはいかない……
震えを和らげるようにチェルシーの両肩に手を置く
「心配してくれてるんですね、チェルシーさん。でも、俺達にだって覚悟はあります。たとえ相手が誰だろうと、俺達は負けません。もし、そいつらがチェルシーさん達に危害を及ぼそうとするなら、俺が迷わずブッ飛ばしてやりますよ！俺は子供達と冥界のヒーローをやってる――――赤龍帝でおっぱいドラゴンなんですから」
「――――っ」
一誠の真っ直ぐな答えにチェルシーは言葉を失い、顔を紅潮させる
重くのし掛かっていた不安と恐怖が和らいだのか、チェルシーの表情に笑みが戻る
「そんな事を平然と言ってくれるなんて、嬉しいっ。ありがと、イッセー♪」
可愛らしい笑顔で礼を言うチェルシー
しかし、一誠の視線は彼女の身体に集中しきっていた……
タオル1枚に隔てられたモデルのようなスレンダー体型
水気を吸ったタオルによって凹凸がハッキリと浮かび上がり、一誠の視線を釘付けにする
その視線に気付いたチェルシーは再び悪戯な笑みを浮かべる

「ん～？キミ、お姉さんの体に見蕩(みと)れてちゃってるのかな？鼻血が出てるわよ」
「そ、そりゃ鼻血も出ちゃいますよ！可愛い女の子が裸でいるんですから！」
「ふふっ。嬉しい事言ってくれちゃって、このこのぉっ♪」
チェルシーは一誠の首に腕を回し、一誠を自分の胸元に寄せてグリグリ攻撃
タオル1枚に隔てられたチェルシーのおっぱいが一誠の顔に押し付けられ、一誠は心中で『フオオオオオオオオオオオオオオッ！』と歓喜した
アタフタしていると濡れた地に足を取られ、チェルシーを押し倒すように転んでしまう
その拍子でタオルもはだけ、チェルシーの全裸が一誠の視界に入る
「「――――っ」」
沈黙の中、一誠は視界に映ったチェルシーに見蕩れてしまう……
アーシアと良い勝負する程の大きさと形のおっぱい
華奢ながらも括(くび)れた肢体
紅潮する彼女の顔が艶(なまめ)かしく映る
「あ、いや、これはっ、その……」
一誠は弁解しようとするが、チェルシーの手が一誠の両頬を捉(とら)え――――
「……ひょっとして、我慢できなくなっちゃった……？」

完璧に誤解を招きかねない解釈をされ、一誠は目の前のチェルシーの可愛さに度肝を抜かれる
このままピーに突入してしまいそうになったその瞬間――第三者達の気配が……
「イ、イッセーさん……？チェルシーさんともうそんな仲に……？」
「ホワァッ⁉ア、アーシアッ⁉ち、違うんだ！これはその……転んでこんな状態になってしまっただけで！」
タオルを巻いたアーシアがムムムっと可愛く頬を
膨らませ、乱入してきた
その後ろには同じく混浴しに来たユキノとディマリアもいる
特にユキノは目の前の光景を見て顔を赤らめ、「だ、大胆です……っ」と感嘆を漏らしていた
ユキノとディマリアの豊満な体もタオルに隔てられているお陰で凹凸が浮き彫りになり、特に上乳はこぼれそうなサイズだった
３人に気付いたチェルシーは軽く苦笑する
「あちゃ～……抜け駆けに気付かれちゃったか」
しかも、チェルシーの独断だったようだ
それを知ったアーシアは頬を更に膨らませ、チェルシーに対抗すべく躍起になる

「ズ、ズルいですっ！私だってイッセーさんと一緒に入ったり、くっつきたいですぅっ！」
アーシアは〝負けたくない〟とばかりにタオルを取り外し、全裸で一誠のもとに突撃していく
アーシアの全裸おっぱいアタックが一誠の顔面にヒットし、一誠は更に血の気と興奮が上がる
そこへチェルシーが含み笑いをしながらユキノとディマリアに言う
「ほらほら、２人ともボーッとしてないで、こっちに来たら？裸の付き合いって言うでしょ？」
「え……っ、で、でも、まだ心の準備が――――きゃあっ！」
チェルシーに背中を押されたユキノは体勢を崩し、一誠の背中に激突
その拍子に巻いていたタオルもズレてしまい、生のおっぱいが一誠の背中に当たる
『フオオオオオオオオオオオオオオッ⁉ユ、ユキノさんのおっぱい！生乳おっぱいの感触がァァァ

「なるほど……赤龍帝（せきりゅうてい）の眷属になるからには、そう言ったスキンシップも必要なのか……。ならば、私も参戦しよう」

意気込むディマリアがタオルを取っ払い、顔を赤らめながらも全裸となる

ユキノに負けず劣らずのサイズと張りを秘めたディマリアのおっぱいがプルンプルンと大きく揺れ、一誠は見逃す事無くその動きを目に焼き付けた

そして、ディマリアは一誠のもとに歩み寄り――――自分の胸元に寄せた

「ど、どうだ……？私も胸の大きさには少し自信があるぞ……」

『フオオオオオオオオオオオオオッ！ディマリアの生乳おっぱいまでもがァァァアアアアアアアアアアアッ⁉こ、これはまさに……生乳パラダイス……ッ！』

一誠の血の気が更に上昇し、鼻血が出てくる

その後も一誠はアーシア、ユキノ、ディマリア、三者三様のおっぱいをローテーションで味わい、湯あたり以上にのぼせたのは言うまでもなかった……

湯あたり寸前、一誠は心中でこう思った

『……幽神の言いたい事が少し理解できた……っ。確かに……おっぱいは……男を狂わせる爆弾だ……っ』

一誠がおっぱいパラダイス（笑）に浸っている頃、別の場所では幽神兄弟の弟――悪堵が露天湯に浸かりながらカップ麺を啜っていた

温泉卵ならぬ温泉カップ麺（塩昆布味）である

「温泉でカップ麺もなかなかイケるな」

普段は味わう事の無い露天湯の心地よさ、心の底から羽を伸ばせる安心感

久々のリフレッシュに自然と伸びをし、カップ麺を啜っていると――湯気の中に２つの人影が見える

悪堵は〝何だ、兄貴と兵藤も入ってたのか〟と最初は気に留めなかったが――次第に輪郭がハッキリと浮かび上がってくる

咀嚼を途中でストップさせ、目を凝らしてみると――そこにいたのはシャルル＆ウェンディのヴァサーゴ姉妹だった……

タオルを巻いたウェンディの手をシャルルが引っ張る

「ほら、ウェンディ。アンタもさっさと来なさいよ」

「はうぅ……っ、シャルルは恥ずかしくないの……？男の人と一緒に……」

「なに言ってるの、私達みたいな幼児体型に興奮するのは変態ぐらいよ。人間のオスってのはね、皆デカい胸が目当てなのよ」

身も蓋も無い言い草をするシャルルは――――タオルを巻いていなかった
清々(すがすが)しいまでに堂々と発育途中の裸体を晒しており、悪堵は目玉が飛び出しそうになる
その直後、ブハッ！と口に含んでいたカップ麺を吐き出してしまい――――鼻からも鼻血と麺が飛び出す
「ちょっと何やってんのよ！汚いわね！」
「ゲホベホゲホッ！それはこっちの台詞だ！お前ら何で平然と入ってきてんだよ……⁉鼻から出た麺を飲んじまったじゃねぇか……！」
「何よ、せっかく私とウェンディがお礼に背中を流しに来たってのに。入ってきたら悪い？」
「悪いに決まってんだろ！良いから出てけ！」
「はあ⁉出てけって失礼じゃない⁉アンタ、日本での礼儀作法すら知らないの⁉」
「間違えた知識を鵜呑みにしてんじゃねぇよ……！――――やべっ、血が足りなくなってきた……っ」
「ほら、良いから礼ぐらいさせなさいよ。オスのくせにだらしないわね」
「何で俺が悪態をつかれなきゃいけねぇんだよ……っ。俺が何か間違えたか……⁉」
理不尽なシャルルの言動に悪堵はもはや抵抗する気力も無くなり、なすがままにされる事に……

座らされ、シャルルが泡立てたタオルで悪堵の背中をゴシゴシと洗い始める
ウェンディも背中流しに参加し、一所懸命に悪堵の背中を洗う
『……落ち着け、落ち着け俺。余計な事を考えるな……。心を無にしろ……小動物と戯(たわむ)れてると思え……。ここにいるのはそう――――チワワと猫だ……チワワと猫……チワワと猫……』
自己暗示をかけて現実逃避を試(こころ)みる悪堵
しかし、投影されたのはそれぞれ犬耳（ウェンディ）と猫耳（シャルル）だけだったので、ますます心拍数が跳ね上がる……
首をブンブン振り、それすら考えないように心を無にしようとするが――――
「はい、終わり。次はアンタが洗って」
『ほっ。すぐに終わって助k――――ゑっ？』
一難去ってまた一難
今度は悪堵がシャルルとウェンディを洗う番に回されてしまった……
異議を唱えようとする悪堵だが、シャルルは既に背中を向けており、白い髪を掻き分ける
ただでさえ鼻血必至の状況なのに、このまま続けては命が危ない……かと言って逃げれば、後で文句をつけられてしまうだろう

悪堵は腹を括ってやるしかなかった
泡立てたタオルをソッとシャルルの背中に当て、ゆっくりと洗っていく
〝時間よ、早く流れろ……！〟と切に願うが、そんな事は起こる筈も無い
目を閉じ、出来るだけ心を無にしてシャルルの背中を洗う
悪堵が必死に己を保っている中――シャルルは紅潮していた
『……結構優しい手つきね……。小さい頃、お父さまに洗ってもらった事あるけど――なんか、その時と同じ感じがする……っ』
父親の洗い方と酷似した手つきに小さく喘ぎ、次第に上記していくシャルル
「……も、もう少し下もお願い……」
「し、下？下って……この辺りか？」
目を閉じているので勘を頼りに探り当てる悪堵
シャルルの腰にタオルを当て、洗い始めた刹那――彼女の身体に電流のような快感が走る
『――っ!!……っー……っ!!何……これっ、ヤバい……っー』
洗っている――ただそれだけの筈なのに形容し難い快感がシャルルの身体を突き抜け、耐えきれなくなった彼女は「もっ、もう良いっ！」と焦ってその場から離れる
よく分からんが、これでやっと解放される……

そう思っていた悪堵に更なる試練が降りかかってきた
「……じゃ、じゃあ、次はウェンディを洗ってあげて」
「まだ終わらねぇのかいっ！」
「当たり前でしょ……。ウェンディもなに逃げようとしてんの？戻らないと後で酷いわよ？」
「ひうぅ……っ」
シャルルに強制されたウェンディはやむ無く座り、タオルをはだけて背中を露(あらわ)にする
シャルルと同じく柔らかそうな玉の肌
悪堵は目を閉じたまま、ウェンディの背中も洗う事に……
ゴシゴシと洗っている最中、ウェンディもシャルル同様に紅潮していく
『ど、どうして……こんなっ、気持ち、いい……っ。はぁぁ……っ』
※誤解の無いように説明しますが、ただ背中を洗っているだけです
ウェンディも背中が性感帯なのか……終始顔を赤らめ、押し寄せてくる快感に耐えようとプルプル震えていた
一方、悪堵は――
『早く終われハヤクおわれはやくオワレハヤクおわれはやくオワレハヤクおわれはやくオワレハヤクおわれはやくオワレハヤクオワレ……ッッ！』

必死に〝早く終われ〟と詠唱を続けていた……
詠唱の数が増えるに連れて、悪堵の手の動きが速くなる
早く終わりたい一心から生じた高速背中洗い
しかし、それはウェンディを更に身悶えさせる結果となった
『んーーーッ！んんんーーーッ!!んんんーーーッ!!』
悲鳴か奇声かすらも分からぬ絶叫がウェンディの喉から出そうになる……
思わぬ惨状を目の当たりにしたシャルルは危険と判断し、悪堵を湯の中に突き飛ばして中断させる
突き飛ばされ、湯の中にダイブした悪堵がゲホゲホと噎せながら顔を出した
「何しやがる!?」
「それはこっちの台詞よ！アンタが激しくするから、ウェンディがこんな風になっちゃったじゃないの！」
激昂するシャルルの横では――――顔を紅潮させ、完全にアヘ顔となったウェンディが横たわっていた
性感帯を激しく刺激され過ぎた結果、ウェンディは身体をピクピクと痙攣させる……
この惨状に悪堵はゆっくりと目を逸らし、静かに潜っていく
「こらぁ！なに逃げようとしてんのよ！責任取りなさいよーッ！」

シャルルの怒声に対し、悪堵は〝シリマセン、シリマセン〟と言わんばかりに手を振った……

一方、別の湯では幽神兄弟の兄――――正義が瞑目したまま浸かっていた
日頃から緊張の糸を切らない彼にとって、ようやく訪れた安息の時間
バシャッと湯水を顔に浴びせ、静かに露天湯を堪能する
『……何だかんだで温泉は落ち着くな』
「おや、こんな所にいましたか、正義パイセン」
馴れ馴れしさが残る口調で話し掛けてきたのは――――リント・セルゼン
ボディラインが浮き彫りになる戦闘服を着ている事から、どうやら様子見に来たようだ
正義は背を向けたままリントに話し掛ける
「何か用か？」
「いえいえ、用って程じゃありやせんけどね。アスタロトさん家(ち)が自慢する温泉がどんなもんなのかなーと思いまして。ま、単なる下見っス」

「そうか」
「そんじゃまあ、下見が終わったところで――自分も入るとしますか」
パリンッッ！
リントがそう言った瞬間、正義の目からガラスが割れたような音が発生した……
正義はすぐにやめるよう言おうとしたが、リントは既に戦闘服をほぼ脱いでいる状態だった
リントのおっぱいが視界に入った刹那、正義は〝グキンッ！〟と超スピードで首を逆方向に捻った
「き、貴様……！勝手に入ろうとするな……！と言うか、何故その下には何も着けていないんだ……っ⁉」
「ん？ああ、はい。この服を着る時はノーパンノーブラなんスよ。その方が着やすいんで」
「ふざけるな……！教会出身のヤツらは露出狂の集まりか……っ⁉」
「まあまあ、日本ではこう言うらしいじゃないスか。〝裸見せ合うも他生の縁〟とか〝裸の付き合い〟とか。正義パイセン、ちょうど良い機会なんでお互いの距離を縮めてみましょうよ」
「〝袖すり合うも他生の縁〟だろ……っ！バカにしてるのか、貴様ぁ……っ⁉」

全部脱ぎ終わり、全裸になったリントは露天湯に浸かる
ふぅ～っと気持ち良さそうに浸かるリント
その横で正義は目を瞑り、先程痛めた首を擦る
「なかなか気持ちいいものっスねー」
「……良いか、よく聞け。風呂とは、温泉とはヒトに安らぎと癒しを与える場だ。俺は独りで浸かって、ゆっくりと疲れを取りたいんだ。ただでさえ兵藤との絡みで疲れているのに、これ以上の疲労を重ねるのは御免被る。……つまり、俺の言いたい事は分かるな？」
「ふーむ、なるほどなるほど。要するに癒されたいんスね？」
「その通りだ。分かったらさっさと――――」
「それじゃあ自分の事はあんまり気にせず、ゆっくりと浸かっててくださいな」
正義の言い分はリントに全く届いていなかった……
無理矢理追い出そうかとも考えたが、裸の女の子相手になす術が無く、込み上げてくる鼻血を抑えるので精一杯
ここから逃げ出す良い手立てが無いか模索していると、柔らかな人肌の感触が押し掛けてくる……
正義は目を閉じているので、リントが今どういう状態でいるのか想像がつかない

現在、リントは正義の左肩に頭を寄せ――――凭(もた)れ掛かっていた
それはまるで恋人のように……
「……ナニ、ヲっ、シ・テイル……っ？」
「いやー、人肌に触れるのってどういうものなのかと思いまして」
リントの軽いノリでの突発的行動についていけない正義
今にも噴射してしまいそうな鼻血を堪(こら)えていると――――ザワ……っと嫌な予感が走る
正義は目を開けたくても開けられず、彼の眼前の湯がブクブクと泡立つ
リントも疑問符を浮かべて見ていると湯がだんだん大きく盛り上がり、次第に人の形を成していき――――
「コオオオオオオオオオオオオオオオオオオオおイイイイイイイイイイイイイイイイがァァァァァァァァァァァァァあタァァァァァァァァァァァあァァァァァァァキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……っっ！」
怨嗟に彩(いろど)られた声音と共に現れたのは……裸体にタオルを巻いたジュビアだった
悪霊・怨霊・死霊さえも睨み殺すような眼差しをリントに向け、湯で濡れて前に垂れた髪が不気味さをより際立たせる
またしても正義の〝嫌な予感センサー〟が当たってしまい、逃亡がますます困難と化

す……

リントは目の前のサダコに「あ、どもどもっス」と軽く対応する

「アなタは……ジュビアのいなイ間にソンナ羨ま死い事を……っ。ソれハ〝ジュビア法〟最大の禁止事項に死て、恋敵的発想ォォォォォォ……っ」

謎の法律のもと、ジュビアは危険なオーラを身に纏ってリントを威圧する

彼女のただならぬ気配は正義さえも震え上がらせた……

目を開けば鼻血……開かなくてもいずれ鼻血……完全に詰みとなった

それでも正義は逃亡を諦めず、脳をフル回転させて脱出方法を導き出そうとするが――

「おんや、アスタロトさん家のお姉さんも正義パイセンの隣を所望っスか。ではでは自分は正義パイセンの右に行きますので、左サイドは譲ります」

ジュビッ⁉と謎の擬音が発され、ジュビアの顔が怨霊状態から通常の状態に戻る

リントは正義の右隣に移動し、手招きしてジュビアを先導する

正義は『ナ、ン、ダ、ト……っ？』と戦慄するしかなかった……

恋敵（ジュビアの勝手な思い込み）からの思わぬ催促にジュビアは――

「あなたはとても良い人ですねっ☆」

「あざーっす」

あっさりと手のひらを返すように態度を一変させ、即座に正義の左隣へ居座る
両側から感じる柔らかい人肌
端から見れば両手に華と言う状況だが、正義にとっては両手に爆弾だった……
逃れられない窮地に立たされた正義は心中で般若心経を高速で詠唱する
全身の血液が鼻に集まり、今にも沸騰しそうなところへ更なる追い打ちが……っ
「なかなか良い温泉じゃない」
「私としてはバラ風呂も欲しかったわ」
元過激派教団のヒメガミとフローラもタオルを巻いて入ってきた
彼女達も正義のすぐ近くまで寄り、正義はあらゆる方面からの退路を失った
極限まで追い詰められてしまった正義は――
『……そうか、今日が俺の命日となるのか……』
目を閉じていながら悟りを開き、鼻血（死）を確信した
周りは完全にジュビア達に囲まれ、逃げ出す事も出来ない
まさに袋の鼠（ねずみ）……
ここで正義は決死の覚悟をもって一大決心する
『……どうせ死ぬなら、少しでも前に進んで死んでやる……っ。ここまで耐え切ったのなら、もしかしたら血を失わずに済むかもしれん。――俺は……兵藤とは違う

……ッ！』

正義の目がゆっくりと開かれ、湯気に遮(さえぎ)られている視界が徐々にクリアとなっていく

前方にはヒメガミとフローラ、２人のタオル越しのおっぱいは湯に浮かんでいる

右に視線を移せばリントと目が合い、左に視線を移せばジュビアがキラキラした目で見つめてくる

無論、全員のおっぱいを見た正義は天を仰ぎ……一言だけ呟いた

――――〝無理だ〟――――

ブッッシャァァァ

分、体への負担が半端じゃなくなるだろうけど。一応感謝だけしておこうかな」
『Ｍｅｒｃｉ。こちらとしても、あなたのような積極的に協力してくれるテストプレイヤーがいて喜ばしいですよ』
「それは良いけど、色々気になる点が出来ちゃったよ。――アンタが何者なのか、何故〝こんな物〟を持っていたのか、どうして僕に協力を持ち掛けたのか。そもそも僕の事をどうやって知ったのか？挙げていけばキリが無い。アンタはいったい何処の誰なんだ？」
『あなたと同じく実験と研究を嗜む者の１人――とでも言っておきましょうか。では、これ以降の連絡は一切しません。お互いの為にもね……Ａｄｉｅｕ』
……
「胡散臭い奴め。……まあ、これで僕の技術が遺せるなら何でも良いさ。思う存分データを取らせてもらうよ。赤龍帝の神滅具を超えられるか否か……良い実験になりそうだ」

黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）のアスタロト（後編）

「はぁ……今日の事が夢だったとしても、文句は無いかも……」

露天湯近くに設けられている簡易休憩所

一誠はニヤニヤ顔で温泉でのおっぱいパラダイスの余韻に浸っていた

アーシア達もベンチに腰掛け、風呂上がりの牛乳を飲む

一方、幽神兄弟は疲れを取るどころか――――逆に疲弊した様子だった……

悪堵はベンチの背もたれに体を預け、虚ろな表情で終始「あ～……」と唸るだけ

正義にいたっては輸血パック3個同時使用でベンチに寝転がっている……

ジュビアは正義の看病に付きっきり、シャルルは別の意味で逆上(のぼ)せてしまったウェンディの介護

リント、ヒメガミ、フローラはそれぞれフルーツ牛乳やコーヒー牛乳を飲んで寛(くつろ)いでいた

一誠は面白がって幽神兄弟に「おやおやぁ、〝混浴〟露天湯で何が遭ったんだぁ？」と詮索しようとするが――――

ソ　レ　イ　ジョ　ウ　シャ　ベ　レ　バ　コ　ロ　ス

幽神兄弟は無言の威圧を放ち、殺意に満ちた目で一誠を睨み付ける
さすがの一誠も彼らの異様な気迫に〝ヤバい〟と察し、訊くのを止めた
１０分程経過したところで輸血を終えた正義がようやく復活し、ジュビアが渡してくれた水を飲む
そこへやって来る１つの人影
「あ、トレミーくん」
「ジュビア姉さん、その呼び方はやめてって言ったよね？」
やって来たのはアスタロト家の末弟トレミス・アスタロト
一誠は彼に対して苦手意識を抱えていた
初対面でいきなり〝病原菌〟と言われては無理もない……
ディオドラとはまた違った不気味さが垣間見える
トレミスは一誠の方を見て質問を飛ばす
「赤龍帝、１つ訊いて良いかい？」
「な、何だよ？」
「アンタ、ディオドラ兄さんの事はどう思ってる？」
いきなり答えにくそうな質問に場の空気が静まり返る……
一誠はなんと言ったら良いのか思慮していると、トレミスが一誠の答えを待たずに言

う

「まあ、快い印象(こころよ)は皆無だよね。アンタからアーシアさんを奪う為に『禍の団(カオス・ブリゲード)』と手を組んだんだからさ」

そう言ってトレミスは小型の機械を取り出し、宙に映像を映す

投影されたのはディオドラとのレーティングゲーム時の映像

その中でも鎧を纏った一誠がディオドラを圧倒している場面だった

突然の映像に一誠は驚き、この映像を見ながらトレミスが語り始める

「僕はアジュカさんと同じく技術に達者でね。三大勢力のシステムにハッキングして、レーティングゲームやその他の記録映像は全て入手してるんだよ。その中でも僕が特に目を付けたのは――――ディオドラ兄さんとのレーティングゲーム時の映像さ」

「どうしてだよ?」

「アンタの甘さが如実に出ていたからだ」

トレミスの一言に一誠の表情が固まり、トレミスは話を続ける

「ディオドラ兄さんを完膚無きまでにボコボコにしたのは良いさ。ただ、問題はその後だ。この時、アンタはディオドラ兄さんを殺そうとせずに警告だけで済ませた。なんでかなぁ?」

「……っ!ディオドラはお前の兄だろ……っ?なんで、そんな事を平然と――――」

「それがダメなんだよ、赤龍帝。ディオドラ兄さんは純血悪魔のプライドにまみれ、性根まで腐りきった高慢ちきさ。実際、シャルバ・ベルゼブブが乱入してきた時も懲りずにアンタを殺そうと提案したぐらいだ。アンタは上の連中に処分を任せようとしたんだろうが、そんな事でディオドラ兄さんの腐りきった根性は直ったりしない。当然の報いってヤツじゃないか」

「トレミーくん……っ」

トレミスのディオドラに対する侮蔑と罵倒にジュビアもショックを受けざるを得なかった

それでもトレミスは口を止めない

「聞けば赤龍帝の囲ってる女も、そこにいる2人も元々は『禍の団』の構成員だったり、父さんや姉さんを殺そうとした教団だったそうじゃないか」

トレミスが一誠側にいるユキノ、ディマリア、チェルシーを指差し、次に正義の近くにいるヒメガミとフローラにも指と視線を向ける

「敵だった奴らを引き連れるだなんて、正気の沙汰じゃないね。あまりにもお人好し過ぎるよ。物事には踏ん切りをつけなくちゃ。アンタ達がやってる事は単なる自己満足、正義感気取りの偽善なんだよ」

トレミスの言い草に正義はデジャヴを感じた

かつて自分が一誠に対して言った台詞がそのまま飛んできたからだ……

心中で〝耳が痛いな〟と自嘲する正義

確かに自分もアーシアと一誠に感化され、以前のような危険度は和らいでしまった

トレミスが一誠に視線を戻して言う

「要するに、アンタに足りないのは〝冷血さ〟なんだよ。敵にまで同情する赤龍帝(せきりゅうてい)――――僕から見ればマヌケの極みだね。アジュカさんの贔屓(ひいき)を受けておきながら、肝心なところでお人好しが出て災(わざわ)いを招く。まさに性質(タチ)の悪い病原菌さ」

「……言いたい放題、言ってくれるじゃないか……っ」

「あん？本当の事を言われて怒った？違うと言い張るなら、赤龍帝らしく力でねじ伏せてみろよ。言っておくけど、僕をディオドラ兄さんのような無能と一緒だと思わない方が良いよ」

トレミスが右手を頭上に掲げ、アスタロトの紋様が入った魔法陣を展開する

彼が展開したのは結界用の魔法陣で、広範囲に及んで外部からの干渉を一切遮断する効果がある

邪魔が入らない為の措置だろう

「ところでさぁ、赤龍帝。アンタ、黄泉戸喫(よもつへぐい)って言葉を知ってるかい？」

「……ヨモギのヘソクリ？」

「全然違うっ」
　素っ頓狂な聞き間違いを出した一誠に対し、正義が〝黄泉戸喫（よもつへぐい）〟の意味を説明する
「黄泉戸喫（よもつへぐい）とは〝あの世の食べ物を食べる事〟を意味する言葉だ。日本神話の女神――――イザナミは死後、死者の国の食べ物を口にした事で黄泉から出られなくなり、夫のイザナギに対して『地上の人間を毎日１０００人殺す』と呪いの言葉を放った」
　なかなかエグい話に一誠は若干引き、トレミスが続ける
「ゆえにイザナミは黄泉津大神（ヨモツオオカミ）と言う別名を持つようになった。死者の国の凄い神って意味合いを込められてね」
「けど、それとお前に何の関係があるんだよ？」
「厳密に言えば関係無いさ。ただ……僕が作った〝コイツ〟にはそういう意味がピッタリ合うんじゃないかと思ってるだけ」
　トレミスが自分の衣服を捲（めく）ると――――彼の腹部におぞましい造型の器具が埋め込まれているのが見えた……
　まるで幾つもの死人の顔が重なり合い、今にも呪詛を放ってくるようだった
「何だよ、その気味悪いものは……っ？」
　一誠が恐る恐る訊くと、トレミスは口の端を吊り上げて語り始める
「コイツは僕が独自に製作した人工神器（セイクリッド・ギア）さ。神器（セイクリッド・ギア）のシステムに『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』のシ

ステムを掛け合わせて、出力増強に特化させた紛(まが)い物と言ったところか。装着者の生命力をそのままパワーに変換する――要するに神器(セイクリッド・ギア)の超危険版ってわけ」
「せ、生命力⁉つ、つまり……自分の命を削るって事か⁉」
「ああ、そうさ。強さを手に入れる為に命を削るのは当然のリスクじゃないか。ただし、人間などの寿命だと直ぐに力尽きてしまう。だから……永遠に近い時を生きる悪魔の生命力を変換すれば、より強大なパワーが発揮される……！アザゼルやアジュカさんさえも踏み込もうとしなかった領域を、僕はいち早く自(みずか)ら踏み込んだのさ！」
「そんなヤバいものを使って、お前は何をするつもりなんだよ⁉」
一誠の問いにトレミスは当然のように言い放った
「決まってんだろ？個人的に気に入らないアンタをダシにして、僕の研究成果を遺(のこ)す。ただ運良く神滅具(ロンギヌス)を宿したアンタに打ち勝つ事で、僕の技術は神滅具(ロンギヌス)を超えられるって事を証明する！その為なら――自分の命なんざ惜しくないッ！」
トレミスは嬉々として人工神器(セイクリッド・ギア)を起動させた
その瞬間、連なった死人の顔から暗雲が吐き出され、トレミスの全身を覆い隠していく
『Ｙｏｍｏｔｓｕｈｅｇｕｉ（ヨモツヘグイ）　Ｄｅｍｏｎ（デモン），ｓ（ズ）　Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）……!!!』
おどろおどろしい音声が発せられ、バチバチと赤黒い雷が迸(ほとばし)り始めた

暗雲が発する瘴気（しょうき）に当てられたのか、辺り一帯の木は瞬（まばた）く間に枯れ果て、一誠達に怖気（おぞけ）が走る……

「ウッ！グ、かは……っ！……んぎ、がっ、アァァァアアアアアアアアアアッ！」

「トレミーくんっ！」

あまりにも負荷が大きいのか、トレミスは苦悶に満ちた絶叫を上げる

ジュビアは止めようと彼に駆け寄るが、激しくうねる暗雲によって弾き飛ばされてしまう

弾き飛ばされたジュビアを起こすウェンディとシャルル

正義は左足に脚甲を展開して身構える

「兵藤、どうやらヤツに話は通じないみたいだ。さっさと構えろ」

「分かってる……分かってるけど……！どう考えたっておかしいだろ⁉自分の研究を残す為だけに俺と戦うとか！その為なら死んでも良いとか！そんなの……っ」

「ヤツを止めたいのか？だったら、腕ずくで止めろ。話が通じない奴を止めるには――それしか無い」

「……！チックショウ……っ！」

やむを得ず一誠は禁手（バランス・ブレイク）化して、鎧を身に纏った

しかし、今は本調子ではないのでトリアイナも真・『女王（クイーン）』も使えない……

トレミスは尚も絶叫を上げ続け、その場をよろめきながらも周囲に漂(ただよ)っていた暗雲を振り払う

――トレミスは異形の姿と化していた……っ

臙脂(えんじ)色と呼ばれる血のように濁(にご)った色の兜と鎧を纏い、深緑の輝きを放つ眼孔

禁手(バランス・ブレイカー)とは似ても似つかぬ異質な力……

息切れを起こしながらトレミスは右手を前に突き出す

すると、再び人工神器(セイクリッド・ギア)の顔からオーラが放出され――トレミスの右手にまとわりつく

やがてオーラは形を成し、遂には銃のような武器が生成された

ただし、それは普通の銃とは違い――トレミスの右手と一体化したような形で生まれた

銃口に紫色のオーラが集まり、無数の波動弾が掃射される

一誠は即座にドラゴンショットで相殺(そうさい)しようとするが……弾幕射撃の勢いに勝てず、何発か被弾してしまう

堪らず後方に吹き飛ぶ一誠

トレミスは逃さず追撃とばかりに波動弾を撃ち込む

「『禁手化(バランス・ブレイク)』ッッ！」

幽神兄弟は揃って禁　手（バランス・ブレイカー）となり、オーラを纏わせた蹴りと拳で弾き返そうとする
だが、それでも銃撃の勢いを殺せず――――先程の一誠と同じく後方へ吹き飛ばされる
「いってぇ……っ、何なんだよ、このとんでもない力は……⁉」
「自分の生命力を変換している分、パワーが桁違いだ……。まさに諸刃（もろは）の剣と言ったところか……ッ」
「ハハハハハ……っ！まだまだ、こんなのは序の口さァ！」
哄笑を上げて突撃していくトレミス
左手を掲げると――――今度は円形状の刃が形成された
恐らく『悪魔の駒（ヴィル・ピース）』のプロモーションシステムを応用し、武器の量産を可能にしたのだろう
トレミスは具現化させた円形状の刃を3人に向かって投げつけ、更に時間差で銃撃を見舞う
一誠達は円形状の刃を1度は避けるものの、直後に放たれた銃撃をまともに浴びてしまう
それだけに留まらず、先程トレミスが投げた円形状の刃は意思を持ったかのようにUターン
一誠の背中に鈍い一撃を食らわせた

その衝撃で一誠は前のめりに倒れ、口から血を吐き出す
「イッセーさん！イッセーさんっ！」
「トレミーくん……っ！もう、やめてください！」
「邪魔をするなァッ！」
トレミスは右手の銃でアーシア達の足下を撃ち、そこから近寄るなと警告を促す
「姉さん達はそこでおとなしく見ていろ！この実験結果の大事な証人になってもらわなくちゃいけないんだから、勝手な真似はするなよ？」
危険なオーラと眼孔を飛ばしてアーシア達を怯ませ、再び一誠達の方を向く
追撃しようとするトレミスだが、度々襲ってくる人工神器のフィードバックのせいで動きが鈍り、苦悶の声を上げながらのたうち回る
「おい、もうやめろ！その力はヤバい！早く止めないと本当に死ぬぞ！」
一誠は人工神器を解除するように叫ぶが、トレミスは全く聞く耳を持たない
「口だけで止められると思ってんのか……っ？甘いんだよッ！さっきも言っただろ！赤龍帝なら赤龍帝らしく、力でねじ伏せてみろよッッ！ディオドラ兄さんをボコボコにした時のように、殺意全開で殴ってこいよォォッ！」
トレミスは足に臙脂色のオーラを纏わせ、ジャンプキックを放つ
迫り来るトレミスに対し、幽神兄弟もオーラを纏わせた拳打と蹴りで応戦

三者の攻撃の衝突によって生み出された衝撃波は周りの木を吹き飛ばし、アーシア達もその余波を受ける

先程よりも力を込めているが……トレミスの勢いは止まらず、徐々に押していく

「兵藤……ッ！何を突っ立っている……⁉さっさとしろ！本気で止めなければ、共倒れになるぞ！それでも赤龍帝かッ！」

「……ッー・チクショウ……！・チクショォオオオオオオオオオオオオオオオッッ！」

一誠は拳に赤いオーラを流し込み、背中のブーストを噴かして加速する

赤いオーラを纏わせた拳打がトレミスの蹴りと激突する

さすがに多勢に無勢……威力負けしたトレミスは後方に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた

血反吐（ちへど）を吐きながらも体を起こすトレミス

その様相は狂気に満ちていた……っ

「ハハハハハ……っ！そうだ、そう来なくちゃな。アンタらが殺す気でやってくれなきゃ、僕の技術証明は成立しないからなァ！」

トレミスは自分の生命力を媒介にして、再び人工神器（セイクリッド・ギア）から武器を生成する

今度は巨大な斧を携（たずさ）え、幾度も振り抜く

振り抜く度に斬撃が発生し、一誠達に襲い掛かる

更に地面に振り下ろして一際デカい衝撃波を放ち、一誠達の場を爆発させる
すかさずトレミスはその場を駆け出し、斧の一撃を見舞った
一誠達はギリギリで躱して近接戦へ持ち込む
一誠と悪堵の拳、正義の蹴りと続けざまに食らい続けるトレミス
しかし、自分へのダメージを顧みず、斧を振り回して3人を痛めつけていく
上下左右、あらゆる方向から繰り出される斧の打撃が一誠達の鎧を壊し、鈍痛が骨髄にまで響く
更にトレミスは斧に臙脂色のオーラを集め、強力な横一閃で一誠達を殴り飛ばす
優勢に立つトレミスだが……その分の代償は大きい
力を振るう毎に襲ってくる苦痛に声を荒らげ、斧が手から離れる
「アァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!」
全身を引き裂かれそうな激痛にまみれてもトレミスは止まらず、更に武器を生成する
今度は戟と呼ばれる槍のような武器を振り翳した
「クソッタレがぁ!」
突貫していく悪堵が再度オーラを纏わせた拳を連続で浴びせようとする
トレミスは拳の乱打を全て戟で防ぎ、石突きの部分で悪堵の腹を突く
動きが一瞬止まったところで足を払い、倒れた悪堵を何度も踏みつける

戟に臙脂色のオーラが集まり、トレミスは下から斬り上げた
地面ごと爆ぜ飛ぶ悪堵は不規則に宙を舞い、地面に叩き付けられる
鎧は大破してしまい、悪堵自身も酷いダメージを負った
「――ッ！相棒ッ！貴様ァァァッ！」
正義は怒号を上げてトレミスに向かっていき、螺旋状のオーラを纏った蹴りを打ち込む
その蹴りはトレミスに見事直撃し、衝撃が彼の体を突き破る
ゴポッと口から血の塊を吐くトレミス
しかし……それでもまだ止まらない……っ
臙脂色に染まった戟で強烈な突きを放ち、正義をも退ける
正義は地を抉り転がり、身体中から血を流す
同時にトレミスの全身からも代償として血が流れ始めた
出血と激痛に苛まれるトレミスに、一誠は再び叫ぶ
「いい加減にしないと、本当に死ぬぞ！こんな事して何が残るんだよ⁉」
「ぐぶっ、ゲボォ……ッ！さっきも言っただろ？僕の技術と研究成果を証明するって……！その為にアンタを打ち負かす！それで赤龍帝を超えられるなら、死んでも構わないッ！運良く神滅具を宿しただけのアンタに、僕の苦労が分かってたまるか！自力で何

かを手に入れた事も無い奴が、意見できる立場にあると思ってんのか⁉悪魔だから神器（セイクリッド・ギア）なんて宿らない！次期当主の座すら貰えなかった！分かるか？何も手に入れられなかった者の悔しさ、惨めさが！〝ただ神滅具（ロンギヌス）を宿しただけ〟で祝されてるアンタが――――すこぶる気に入らねぇんだよォォォ

だらけさ……。でも、その苦労がようやく報われる……っ。神滅具所有者を叩き潰し、僕の研究は間違ってなかった事が証明される……！」

兜の目元から血涙も流れ、狂喜に彩られたトレミスが戟の刃先を一誠に向ける

「何が赤龍帝だ……！何が神滅具だ……！僕はそんな幸運も無しに、自分の才を信じてここまでやって来たんだ……！アンタは単なる偶然で黄金を手に入れたに過ぎないんだよ！覚悟しろ、石が金をぶっ潰すところを見せてやる……ッ！」

トレミスが戟を向けたまま一誠の方に進もうとした、その時……

「――――結局は持たざる者の妬みと嫉みか。案外つまらん理由だな」

「……アァ？」

怒気を含めた声音を発したトレミス

侮辱的な発言をしたのは――――幽神正義

アーシアの治療で傷を癒したであろう正義がトレミスの全ての発言を一蹴する

よりドス黒いオーラを滲ませるトレミスだが、正義は一切怯む事無く言い続ける

「トレミスとやら、貴様は自らを石コロと蔑み、兵藤が黄金と例えているようだが――――それは大きな勘違いだ」

「何だと？」

「ハッキリ言ってやろう。兵藤は黄金などではない、ただ表面に金箔を貼り付けただけ

の石コロ――――貴様と全く同じだ。根底は何も変わっておらん。アーシア以外に女を侍らせ、鼻の下を伸ばし、今も昔と変わらず変態根性を晒して生きている――――ただの痴漢男だ」

「おいっ！ヒトを犯罪者みたいに言うな！俺をフォローするつもりが思いっきり貶してるだけじゃねえか⁉」

「貴様のフォローだと？笑わせるな。そんな材料は1ミリとて存在せん」

バッサリと切り捨てられた一誠は泣くしかなかった……

そんな事は気にせず、正義は尚もトレミスに語っていく

「貴様はさっき言ったな？〝赤龍帝を倒す事で、『神滅具』を超える功績を遺せるなら――命など惜しくない〟と」

「ああ、そうだとも……！」

「――――貴様が死んだところで何も残らぬ。いや、残るのは……新たな哀しみだけだ」

正義がゆっくりと立ち上がり、遅い足取りで歩いていく

「貴様には父親も、母親も、姉もいるだろう。ならば、残された者達はどうなる？更に悲嘆に明け暮れ、振り払えない十字架を背負い続ける。貴様はそんな結末がお望みか？」

「黙れよ……！アンタに何が分かる⁉」

「貴様はまだマシだッッ！」

反論しようとしたトレミスを更なる怒号でねじ伏せる正義
「最初から手に入らなかっただけマシな方だ。……俺は、1度手に入れたものを全て壊された。信頼も、希望も、日常さえも失った。これほど残酷なものは無い。昔の俺は激しく恨んだ……兵藤を、兵藤に関わる者を、俺達を陥れたもの全てを……」
「へぇ……っ、つまり、アンタも僕と同じ穴のムジナって事じゃないか……！」
「そうなっていただろうな。だが、気付かされたよ。恨みを持って生きていても、それが潰える事は無い。過去にすがり付いてばかりでは、過去から逃れられない。その事を教えてくれたのは――――アーシアだ」
正義はアーシアに指を差しながら続ける
「アーシアと出会って、俺は考え方を少しだけ変えられた。恨むだけではダメだとな。……トレミスとやら、貴様の命は貴様だけの物じゃない。周囲にいる者の事も考えろ。狭い視野だけで見えるモノなど、たかが知れている」
「……だったら、証明してみろよ……！アンタの真理ってヤツを！この場で証明できるもんなら、証明してみろよォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
絶叫を放ち、凄まじいオーラを放出するトレミス
正義も毒々しいオーラを全身から滲ませ、背後に鬼の幻影が映し出される
「怒りを喰らわば修羅となろう――――。怨みを滅せば魔鬼となろう――――。深淵に巣食

いし鬼を放ちて、前に塞がる害を貫き穿て――。汝よ、御霊を喰らい罪を背負いし悪鬼と化せ――ッ！――『魔鬼化』ッッ！」

鬼の幻影が正義を覆い、オーラが弾け飛ぶと同時に変貌を遂げた正義が降臨する

正義の想いが通じて発現した異質な禁　手――否、『魔鬼化』

深淵の魔鬼と化した正義がトレミスと対峙する

その鬼気迫る姿を見て、トレミスも思わず言葉を失う

「……なんて気迫だよ。アンタ、いったいどんな人生を送ったら、そんな禍々しいものを発現できるんだい？もう完全にバケモノじゃないか」

「これでもマシになった方だ。以前の俺は怒りと憎しみ、復讐と狂気に溺れた鬼だったからな」

『『いや、どう見ても今の方が鬼だろ……』』

一誠だけでなく、アーシアの治療を受けている弟の悪堵もそう思った……

そんな心の声など露知らず、正義は徐々に歩みを早め――駆け出していく

対してトレミスはオーラを纏わせた戟を振るい、幾重もの斬撃を放つ

飛来してくる斬撃を悉く弾き返し、正義は蹴りの乱舞を繰り出した

息つく暇も無い蹴りの猛攻に、トレミスの手が追い付かない

防御に使用していた戟も弾き飛ばされ、正義の回転蹴りがトレミスに炸裂する

後方に大きく飛ばされたトレミスは次なる武器の生成に取り掛かった
トレミスの生命力を媒介に生成されたのは――――二振りの大剣
双方の得物がオーラによって臙脂色に染まり、勢い良く地に突き立てられる
刹那、地を砕かんとばかりに衝撃波が走り、正義に直撃する
極大の爆煙を掻き分け、血を噴き出しながらも正義は突き進んでいく
禍々しいオーラを放出し続け、トレミスを大剣ごと蹴り飛ばす
二振りの得物はトレミスの手から離脱し、トレミスは滑るように後方へ吹き飛ばされるが――――
「アァァァ

変わらなければ、いずれ自分達も狂気に取り憑かれたバケモノになっていたかもしれない
正義は不覚にもトレミスの姿、気配からそう推測した
だから、止めなければならない
トレミスにはまだ――家族が残されているから……
『失ってからでは遅い。失ってからでは何も出来ない……。悪いが、貴様を止める！』
正義は全力で駆け出し、トレミスに向かって最後の一蹴り撃を繰り出した
鬼の幻影を纏いし蹴りがトレミスを捉え、トレミスも莫大なオーラを纏った蹴りで迎え撃つ
両者の蹴りが激突した瞬間、その場は極大の閃光に包まれた……

僕は……トレミス・アスタロトは……アスタロト家に生まれた事を悔やんでいた
アジュカさんが現魔王ベルゼブブに就任してから、いつも比較されていた
次期当主の座だって、ジュビア姉さんが辞退して……そのせいでディオドラ兄さんに次期当主の座が回ってきた

生まれた順番が悪いの？
生まれた順番で次期当主の座は決まるの？
しきたりとか、規定とか、くだらない……
無能でも〝兄〟だから優遇されるの？
有能でも〝弟〟だからってダメと決め付けられるの？
僕は何も認められないの……？
認められないなら、生きてる意味はあるの……？
くだらない……クダラナイ……現魔王も……アスタロト家も……
冥界のしきたりも……何もかモガ……クダラナイ……ッッ！
ナラ、ボクガコワレテモカマワナイ……ッッ！
ソレナラ、ヤリタイコトヲヤッテコワレテヤル……ッッ！
ダレニモジャマスルケンリハナイ……ッッ！
ソウダ……ッッ！
ボクハサイショカラ……ッッ！
ウマレテコナケレバヨカッタンダ……ッッ！

「……？……？」

トレミスの目がゆっくりと開かれると、自分の視界に〝何かを訴えるジュビアの顔〟が映り込んだ

焦点をジュビアに合わせた途端、ジュビアは大粒の涙を流しながらトレミスを抱き寄せる

「トレミーくん……！ヨカッタ……！トレミーくん……っ！」

「……ジュビア……ねえさん……？」

「もう……！心配させてんじゃないわよ……！ウェンディなんか、顔中ビショビショになってんのよ……！謝りなさいよ……！」

ジュビアの隣には泣きながら怒っているシャルルが、その隣では泣きじゃくるウェンディの姿も映った

トレミスは不思議でならなかった

〝どうして僕は生きているのか……？〟

あれ程の攻撃を受けて、生きていられる筈が無い

トレミスがゆっくり体を起こして自分の体を確認する

姿は未だに異形のままだが……兜の一部は破損し、出血が消えているだけでなく、自

作した人工神器（セイクリッド・ギア）の出力が極端に弱まっていた
頭の整理が追いつかないトレミス
「目が覚めたようだな」
そこへ聞き覚えのある声――――自分と対峙していた正義の姿が映った
アーシアの治療を受ける一誠もトレミスの目覚めに安堵する
トレミスは何故、自分が今も生きているのかを問い質した
その問いに対して正義が答える
「貴様を治療したアーシアに感謝しろ」
「……僕を、治療した……？」
「ああ、さっきの攻撃でダメージが酷かったのは貴様の方だ。兵藤とアーシアは直ぐに貴様の治療を最優先に考えた。早急に治療しなければ、貴様は死んでいたからな」
「……どうして、僕を治したの？さっきまで僕は、アンタ達を殺そうとしていたんだよ……？意味が分からないよ……」
「そうだろうな。正直、俺も昔は理解できなかった。だが……その意味の分からなさが兵藤とアーシアの良いところなのだろう」
トレミスは一誠とアーシアに視線を移す
「……赤龍帝（せきりゅうてい）」

「ん？どうした？」
「アンタ、やっぱり甘ちゃんだよ」
「……そう、かもな……。でも、俺は――――」
「言わなくていい。自分のやった事に後悔が無いなら、それで良いさ。だから、アーシアさんも僕を治したんでしょ？」
「ああ、そうだ。アーシアも後悔なんてしてない。お前がまた俺に挑むって言うなら、今度は正々堂々と勝負してやる！」
「ふっ……ホント羨ましいよ、その能天気な性格が。ただ、忠告しといてあげる。いざと言う時は甘い考えなんて捨てた方が良いよ。『禍の団（カオス・ブリゲード）』の代わりに台頭してくる奴らは――――これまで以上に悪逆非道で、狂ったヤツがいるからね」
　トレミスはゆっくりと立ち上がり、ジュビアのもとを離れる
「僕は戻るよ、アジュカさんの所に。そこで研究を続けるよ。ちゃんとした物を作る為に……1からやり直してくる」
「トレミーくん……」
　トレミスは最後にアーシアに向かって頭を下げる
「改めて、ディオドラ兄さんが迷惑を掛けた事に関して謝るよ。今日の事も含めて――――本当にごめんなさい」

「良いんですよ、もう。あなたが無事で良かったです」
アーシアの曇りの無い笑顔にトレミスはときめいてしまい、心中で『ああ、本当に結婚したいな』と吐露する
トレミスはゆっくりと歩みを始め、そこから静かに去っていった……
その後、一誠達はアスタロト家の別荘に戻り――元当主にトレミスがアジュカの研究所に帰った事を伝え、週明けには駒王町（くおうちょう）に戻っていった
尚、幽神兄弟とリントはそのままアスタロト家の別荘に残り、引き続き警護をする事になった

「……まさか、こんな事になるなんて夢にも思わなかったよ」
アジュカの研究所に戻る道中、トレミスは思いがけない人物と再会していた
それは――死んだと聞かされていた兄、ディオドラ・アスタロトだった……っ
魔獣騒動時、神風の手によって復活を果たしたものの、幽神正義によって吹き飛ばされたと思われていた……
しかし、運良く生き延びていた

ボロボロの格好でディオドラはトレミスに言う
「トレミス！僕に協力してくれ！僕とお前が手を組めば、赤龍帝を倒せる！今度こそ、アーシアを取り戻すんだ！なあ、頼むよ！兄の頼みを聞いてくれるだろ？」
トレミスの目に映るディオドラは何とも言えない見苦しさを露呈していた
もう既に決着はついたのに、未だに執着している……
あまりにも醜い……
「……ディオドラ兄さん、アンタはもう死んだヒトなんだ。今更出てきて何になるの？」
「うるさい！僕をコケにした赤龍帝を殺して、アーシアを取り戻さないと気が済まないんだッ！今更もクソもあるか！黙って僕に協力しろ！」
もはや醜いを通り越した兄の醜態にトレミスは嫌気が刺した
このままアスタロト家に戻せば、父親も姉のジュビアもショックを受けてしまうだろう
トレミスは決意の眼差しで腹部の人工神器に手を伸ばす
「……ディオドラ兄さん、僕はこれから償うよ。兄さんの分まで。だからさ――――もう消えてくれ」
「……は？な、何を言い出すんだ――――」
ディオドラが言い切る前にトレミスは弱まっている人工神器の力を発動し、銃を

生成

銃口にオーラを集め、ディオドラに狙いを定める

「お、おい！何をする気だ⁉冗談だろ⁉なあ、冗談だと言ってくれ！……い、嫌だ！せっかくここまで来たのに、死にたくない！やめろ！やめろ！ヤメテクレェェェェェェェッ！」

「――――さようなら、ディオドラ兄さん」

冷徹な一言と共にトレミスは銃から濃密なオーラを掃射

悪あがきで生き延びてきたディオドラの最期は、実の弟に消されると言う皮肉な結果に終わった……

跡形も無くディオドラを葬（ほうむ）ったトレミスは天を仰ぐ

「……アンタはアスタロトの名を汚（けが）し過ぎたんだ。僕はこれからソレを償っていくよ」

その後、トレミスはアジュカの研究所に戻り、自ら（みずか）アジュカのもとで研究の邁進と謹慎を志願した

アジュカは彼の要望に応え、腹部に埋蔵された人工神器（セイクリッド・ギア）を摘出し、トレミスはひとまず冥界の医療施設に移送された

後日、アジュカは摘出した人工神器（セイクリッド・ギア）を調査した結果――――信じられないモノが検出される

「……驚いたな。まさか、こいつが異常なパワー出力の根源だったのか……っ」

さすがのアジュカも驚きを隠せなかった

何故なら検出されたのは――サマエルの毒

極微量ではあるものの、それは確かにサマエルの毒だった

誰がサマエルの毒をトレミスに渡したのか……？

そもそも、どうやってサマエルの毒を手に入れたのか……？

アジュカはこの事実をサーゼクスやアザゼルには敢えて知らせず、独自に調査を始める事にした

『禍の団（カオス・ブリゲード）』以上にデカい組織が絡んでいるのかもしれない……。もし、そうだとしたら――サーゼクスも、アザゼルも、下手すれば冥界そのものが深傷（ふかで）を否（いな）めないな……」

一抹の不安を抱える中、未知の敵は今も牙を研（と）いで狙っている……

運動会のハルマゲドーン⁉

「よー、イッセー！新！体動かしたくないか、体！良いイベントがあるんだけどよー」
ある日、アザゼルが下校途中の新と一誠を捕まえて開口一番に言ってきた
しかし、怪しい笑みを浮かべている事から、２人は〝どうせロクでもない事を考えているだろう〟と察知した
「嫌ですよ。どうせ、ロクでもない事なんでしょ？」
「トラブル製造マシーンの勧誘なんざ、お断りだ。じゃ、そゆ事で――――」
「まあ、待て！運動会だ！運動会に出ないか？」
アザゼルは新と一誠の腕を引っ張ってそう言う
半眼で見つめる２人に対し、アザゼルは懐（ふところ）から選手登録用の用紙を取り出しながら説明を始める
「ああ、ちょいとうちの組織のイベントでやる事になってな。お前らをゲストとして呼びたいんだよ」
「い、いきなり、そんな事を言われましても……」
「ほら、堕天使の綺麗どころに会いたいって言ってただろう？……旦那、乳がデカくて

エッチなおなごがたくさんいますぜ……？」
アザゼルは写真を数枚見せつけてくる
その写真には黒い翼を生やした綺麗な女性達が大胆なポーズと衣装をしている姿が写っていた
「マ、マジっスか⁉ど、どうしようかなぁ……」
写真をマジマジと見つめる一誠
新も写真を受け取り、確認する
それでも新はアザゼルの思惑に胡散臭さを感じるが、一誠は完全に鼻の下を伸ばしていた
一誠が欲望に負けて登録用紙を受け取ろうとした、その時――
「むっ！アザゼル！言った筈だ！イッセーくんはこちら側の選手！新くんは第４チームだと！」
物陰から紅髪の男性――サーゼクスが飛び出してきた
新と一誠が疑問を浮かべる中、サーゼクスを見かけたアザゼルは舌打ちをした
「チッ！魔王さまが現れやがったか！フハハハハハハ！さらばだ！」
何処その悪役みたいな捨て台詞を吐いてアザゼルがこの場から消えていく
サーゼクスは新と一誠の肩に手を置き、息を吐いていた

「……油断も隙も無い男だ。危うくイッセーくんとうちの義弟(おとうと)が堕天使の選手にされそうになった」
「あ、あの、サーゼクスさま。な、何事なのでしょうか？」
「うむ、リアス眷属が皆集まったら改めて説明しよう」
と言うわけで、合流したリアス達と共に一誠のゲストルームに行く事となった

『三大勢力の運動会ーーーッ⁉』
兵藤家のゲストルームにて、眷属全員が素っ頓狂な声を上げた
「うむ。実は三大勢力での親睦会と言う事で、スポーツに興じようと言う話になったのだよ。それで、スポーツ大会ならぬ運動会を開催する事になったのだ」
「あ、私もさっき運動会の事を天界から聞きました」
イリナも手を上げて言い、サーゼクスが微笑みながら続ける
「勿論、キミ達には悪魔側の選手として参加してもらいたい。これは大事な異文化交流だ。是非ともリアス・グレモリー眷属の皆には協力を願いたい。おっぱいドラゴンであるイッセーくん、ダークカイザー兼オッパイザーの新くんを始め、皆、冥界では人気者

だからね」
「ちょっと待て、今なんか聞き捨てならない呼び名が上げられたぞ⁉」
新はオッパイザーの呼び名に異論を唱えるが、虚しくもそれは聞き入れられなかった……
とはいえ、三大勢力でこのようなイベント交流をするのは悪くない
同盟同士でのイベント開催は関係の強化に繋がる
「あ、あの、さっき先生が俺達を勧誘したのは？」
一誠が挙手して訊くと、サーゼクスは苦笑しながら言う
「……恐らく、堕天使側の選手としてキミ達を引き入れようとしたのだろう。キミ達の能力は競技に影響を与えそうだからね。……まったく、変なところで行動の早い元総督だ。グレイフィアがもしかしたらと言うので、オフを使って見に来たのだよ。――案の定だった」
「やっぱり、そう言う事か。まあ、一誠は鼻の下を伸ばしてホイホイ登録しようとしてたが、俺には通用しなかったな」
「……新先輩、ポケットの写真は何ですか？」
新の膝上に座る小猫がポケットから写真を抜き取り、追及する
ちゃっかり写真だけ頂戴してた新は言い訳できない為か「……ノーコメント」と返し、

小猫に頬をつねられる
リアスが立ち上がってサーゼクスに言う
「了解しましたわ、お兄さま。私達でよろしければ喜んで参加させていただきます！」
こうして、グレモリー眷属は天使、堕天使、悪魔の三大勢力が開催する運動会に参加する事となった
――と、ここで新が１つ疑問を飛ばす
「そういえば、サーゼクスさま。さっき腑に落ちない言葉を聞きましたよ？俺が第４チームだとか何とか」
「よくぞ気付いてくれたね。そう、参加するのは三大勢力だけじゃない。キミだけ第４のチームに属してもらう事になったのだ」
「そのチームって何だ？」
「――リュオーガ族だ。魔獣騒動時の功績が目に留まってね、良い機会だから共に交流を深めようと決定したのさ」
魔王サーゼクスの言葉に三大勢力主催の運動会は早くも波乱の渦を巻き起こそうとしていた……

後日、運動会の花火が鳴り響く中、新達は会場に来ていた
使用されているのはレーティングゲーム用のフィールドで、かなり広めな空間となっている
イリナと同じように、頭に輪、背中に白い翼を生やした天使達や黒い翼の堕天使が大勢いる
悪魔も大勢いるが、ここまで多くの天使や堕天使に会う機会などそうそう無い
全員がジャージ姿
色分けは天使が白、堕天使が黒、悪魔が赤、そしてリュオーガ族は青となっている
アザゼルは堕天使の代表として、イリナは天使側の選手、そして新はリュオーガ族側の選手なのでリアスや一誠達のもとにはいない
今回だけは敵同士である
「なんか新鮮な感じだな、新が俺達側にいないのって」
「まあな。こういう催(もよお)しでもないと、なかなか体験できないだろう」
新と一誠が話しているとイリナを発見し、イリナもこちらに気付いたのか、金色の翼を生やす男性と共に近付いてくる
「あ、リアスさん、新くん、皆！来たのね！」

「お久しぶりですね、皆さん。天使長のミカエルです。三大勢力の和議以来でしょうか」
そう、イリナと共にいたのは天界の現トップである天使長ミカエル
聖書にも名を挙げられている伝説の天使だ
新、一誠、リアス、眷属の皆で合わせて挨拶をする
特に初対面のロスヴァイセは天使長との出会いに感動していた
「今日は正々堂々と楽しみましょう」
「ミカエルさまーっ。開会式が始まりそうですわよー」
突然の声に視線を向けると――――ウェーブのかかったブロンドでおっとり風の女性天使――――四大セラフのガブリエルが近付いてきた
その傍らに彼女のA、ミラナ・シャタロヴァも同行していた
スタイルが良く、おっぱいも大きい事に一誠は内心で狂喜乱舞する
「おや、そうですか。要人とのご挨拶だけで時間は過ぎてしまうものですね。おっと、紹介が遅れましたね。こちら、私と同じ四大セラフの1人で――――」
「ごきげんよう、わたくし、四大セラフのガブリエルと申します」
「あ、あの……はじめまして……っ。ガブリエルさまのAの……ミラナ・シャタロヴァです……っ。よ、よろしくお願いします……っ」
ガブリエルが微笑み、ミラナはモジモジしながらも皆に挨拶をする

「天界一の美女にして、天界最強の女性天使であらせられるガブリエルさまなのです！ちなみに冥界でも人気はすんごい高かったりします！」
イリナが興奮気味かつ自慢げに説明をし、アーシアとゼノヴィアは目を爛々と輝かせ、手を合わせて恍惚とした表情となる
元教会関係者の２人からすると、セラフのミカエルやガブリエルは天上の存在なのだろう
「……セラフォルー・レヴィアタンさまが密(ひそ)かにライバル視されているのがガブリエルさまなのよ」
リアスの耳打ちに新は「へ～っ」と相槌する
――と、ここでガブリエルが新に気付いてペコリと頭を下げ、ミラナも新に向かって頭を下げる
「ごきげんよう、先日はどうもありがとうございました～っ」
「あ、ありがとうございました……っ」
「いえ、こちらこそ」
彼女達とはユナイト・キリヒコの１件で知り合い、新も色々とオイシイ思いが出来た
「イッセーと新じゃねぇか。って、おー、ミカエルもいるじゃねぇか」
黒いジャージ姿のアザゼルがガタイの良い男性を引き連れて現れる

その男性は朱乃の父――バラキエル
ミカエルとアザゼルが握手を交わす
「これはアザゼル。お久しぶりです。相変わらずお元気そうで」
「ハハハ、まあな。今日は負けんからな、天使長さま」
「それはこちらの台詞とだけ言っておきましょう」
２人は笑顔で握手をしているものの、異様なプレッシャーを放っており、両者の間の空間が歪み出す始末……
既に組織同士の意地の張り合いが展開しているようだ
一方で、バラキエルは娘たる朱乃に声をかけようとするが――朱乃が無言で顔を背(そむ)け、それを見たバラキエルは「ガーンッ！」と心底からショックを受けていた
しかし、朱乃は新達にだけ見えるよう舌をペロッと出してイタズラな笑顔を見せる
どうやら少しからかっただけのようだ
「悪魔、天使、堕天使と小憎たらしい顔が揃い踏みだな」
そこへまた突然の声
視線を向けると――そこにはリュオーガ族の面々がいた
その代表が金髪の青年ラース・フレイム・ドラグニル――新の兄に当たる人物だ
新も元々はリュオーガ族の出身で、本名はゼノン・ブラック・ドラグニル

リアス達と死闘を繰り広げ、その後は三大勢力から隔離されていたのだが……魔獣騒動時の功績のお陰で緩和され、今では少しずつ交流を深めているらしい

「よー、悪党ドラゴンの代表のお出ましか。あの時の借りを返す絶好の機会だ。楽しみにしとけよ？」

「たまには腐れ堕天使の嗜好に乗るのも悪くない。せいぜい無様な姿で這いつくばらんようにな」

アザゼルとラースは笑顔だが、その言葉には突き刺さるような毒気が混ざっており、今にも小規模な戦争が始まりそうな雰囲気を出していた……

今回限り、新はこのラース率いるリュオーガ族側の選手

相変わらずの修羅場に新は頭を抱えそうになる

『各勢力の選手の皆さま、中央グラウンドにて開会式を開始致しますので、集合してください。繰り返します。各勢力の――――』

会場アナウンスに促され、全員が中央グラウンドに集まっていった

『えー、スポーツマンシップにのっとり、正々堂々と競い合う事を誓います』

選手宣誓が終わり、各自が自分達のチームに分かれる
今回の運動会は日本式を倣(なら)っているそうで、各種競技もそれに合わせてプログラムされているらしい
手元のしおりにも「借り物競走」や「パン食い競争」等が記載されている
ちなみに新が個人で参加するのは「障害物競走」と「借り物競走」、後はラストの「チーム対抗バトンリレー」
そしてチームで参加するのは「玉入れ」と「騎馬戦」
応援席までの移動中、堕天使チームが集合しているところを通りかかると――――アザゼルが黒いジャージの堕天使軍団に力強い演説を開始していた
「良いか、お前達。――――これは交流会と言う名の戦争だ。今日だけは暴れても文句は言わん。協力態勢を敷いたとはいえ、常日頃から天使や悪魔に言いたい事もたくさんあるだろう。やれ天界アイテムの価格が高すぎるとか、やれ悪魔の持つ等価交換の意識がウゼーとか。最近だとリュオーガ族の見下し感はマジでブッ飛ばしてやりてーとか、溜まるものも溜まっているだろう。今日は存分に暴れ回れ。――――俺が許す！」
『おおおおおおおおおおっ！』
気合いと共に怒号が響き渡る……
その横に集まる白いジャージの天使軍団を統括するミカエルが微笑んでいた

「ははは っ、堕天使の方々は元気ですねぇ」
しかし、堕天使の決起集会を見ていた天使達からも不満の声が上がる
「奴らのペースに全部合わせると我々は堕天するかもしれないと言うのに……！」
「1度堕ちたら天使として終わりなんだから、その辺、堕天使も悪魔も分かって欲しいものだ……！」
ミカエルは「良いですか、皆さん」と笑顔を浮かべながら、危険な金色のオーラを全身から迸(ほとばし)らせる
「普段の教えの通りです。――異端者には天の罰を与えなさい。我々は亡き神の代行を果たす役目があります。――彼らに『光』を」
『はっ！終末を彼らに！』
すれ違い様、新は「……何処もかしこも物騒だな」と呟(つぶや)くしかなかった
空気は完全に運動会と言うよりは戦争になってきている……
同じようにリアス達か いる悪魔側からもサーゼクスの言葉が聞こえてくる
「天界もグリゴリも元気いっぱいのようだ。我々も負けぬよう精一杯競い合おう。交流会の競技だからといって、手を抜いても失礼だ。――本気でやるように」
『ハルマゲドーーーーンッ！』
サーゼクスも爽やかな笑顔で本気宣言、悪魔勢が一斉に叫ぶ

危険極まりない集会を次々と目にした新は、ようやく自分のチームであるリュオーガ族と合流を果たした

メンツはラースを筆頭に、手品師風の少年アノン・アムナエル

爆進帝王（ばくしんていおう）と自分で呼び名を付けた暴走漢ニトロ・グリーゼ

ゴツい体躯の竜人、長光重蔵（ナガミツ・ジュウゾウ）

そしてリュオーガ族の紅一点レモネード・フォールン

人数は1番少ないものの、恐らく危険度はこの運動会に参加するチームの中でトップクラスだろう……

元々彼らは四大魔王を苦戦させた一族、その実力は今もなお畏怖される程だ

ラースが天使、堕天使、悪魔勢の決起集会を眺めながら冷笑を浮かべる

「フフッ、面白い。ヤツらは本気で我々に勝つつもりでいるぞ。能天気なものだ」

「ラース、どうするニャ？」

アノンの問いにラースは危険なオーラを滲ませる

「決まっているだろう、いつもの通りだ。――――遊びは本気でやってこそ、面白味が増す。合法的にヤツらへの不平不満をぶつけてやるぞ」

「ヨッシャァ！鬱・憤・爆・発っ！思いっきりイクゼェェェェェェェェェェッ！」

「何処もかしこも捻り潰したるわ」

ラースの号令にニトロもジュウゾウもやる気――否、殺る気満々だった
どうやら危険性を最も剥き出しにしているのはこのチームかもしれない……
苦笑する新に歩み寄るレモネード
「……食べる？美味しいよ？」
彼女からリンゴ飴を差し出された新は、とりあえず受け取ってペロリと舐める
しかし、内心では嫌な予感しか感じられなかった

意外にも運動会は平和かつスムーズに進む
〝何かの切っ掛けで戦争が起こるのでは……？〟と危惧していたが、そんな様子は無かった
そろそろ競技に参加する順番が近付いてきたので、新は準備運動をして体をほぐす
ちなみにアーシアは救護班として、専用のテントスペースで待機しているらしい
『ふれー、ふれー、あ・く・ま☆』
前に出て応援パフォーマンスをしているのは魔王セラフォルー・レヴィアタン
魔法少女の格好でお付きの女性達とダンスをしながら、悪魔陣営を応援していた
『障害物競走に参加の選手は指定の場所に集合してください』
「そろそろ出番か」

アナウンスも聞こえ、新は指定のポイントへ足を運ぶ
○障害物競走
選手が集合する場所に移動した新は列に並び、そこで一誠と出会(でくわ)す
「何だ、一誠も1番目か」
「新も1番目か。……そっちは最初から容赦ねぇな」
この障害物競走は各勢力の選手が1レースに2名ずつ出る事になっている
一誠の言う通り、新の他にもう1人の出走者――ラースも参加していた
不敵な笑みを浮かべるラース
リュオーガ族の最高戦力2人がいきなりの登場した
『位置について、よーい……ドン！』
アナウンスの掛け声と共に走り出す各陣営の選手
障害物は基本に忠実なもので、平均台を渡り、ネットを潜(くぐ)り、それぞれ異なる球技のボールをついたり蹴ったりする
順調に進んでいき、最後の障害物に――
「ギャオオオオンッ！」
「キュエエエエエエンッ！」
「ゴワンゴワンッ！」

危険な鳴き声を発して現れたのは首が９つもある大蛇、首が３つ連なる巨大な犬、両翼を大きく広げる怪鳥だった……

モンスターの見本市場に目が飛び出す程驚く一誠、他の選手達も同じように仰天していた

「犬、蛇、鳥か。惜しいなー、蛇じゃなくて猿なら桃太郎の子分トリオが完成するのに」

「そういう問題か⁉」

新のボケに突っ込みを入れる一誠

『最後の障害物に各モンスターを配置しちゃいました☆。天使や悪魔も余裕で殺せる猛毒の大蛇ヒュドラ！地獄の番犬ケルベロス！それに謎の怪鳥ジズも参戦です！モンスターを見事退けてみてください！』

「配置しちゃいました☆じゃねぇぇぇだろぉぉっ！」

「おー、兵藤一誠じゃないか」

一誠に話し掛けるモンスターの１匹

よく見てみると巨大なドラゴン、元龍王のタンニーンがいた

「お、おっさん！どうしてここに？」

一誠の問いにタンニーンは頭をポリポリかきながら言う

「いやな、三大勢力の運動会に協力してくれと言うので出てみたが……どうやら、こうい

う役目だったらしい」
元龍王で最上級悪魔のタンニーンが最後の障害物
完全に無理ゲーである……
しかし、それだけではなかった
「やあ、新」
「お、親父イィィッ⁉」
新も仰天する程の人物、彼の父親――竜崎総司もモンスター枠として参加していた……
「いやー、ゼクスくんやアザゼルに協力してくれと頼まれちゃってね。面白そうだから参加してみた☆」
「モンスター軍に元龍王に親父って、完全に殺しに来てる障害物じゃねぇか……」
「いやぁぁぁんっ！そんなとこに絡み付かないでぇぇぇっ！」
「あーれーっ！」
「ぎゃあああっ！」
各陣営選手の悲鳴が上がる
横を見ればヒュドラに絡み付かれてエロいポーズをさせられている女性堕天使、怪鳥に連れ去られる女性天使、ケルベロスに頭からガツツリ食われてる悪魔の選手の姿が目

に映った

『おーっと！選手の皆さん、早速モンスター達と楽しく戯(たわむ)れています！平和な光景ですね！』

「うるせえよっ！楽しくねぇよ！どう見ても危篤に陥(おちい)ってますけど⁉」

「よし、お前も俺にかかってこい！」

タンニーンが口から巨大な火炎を吐く

隕石の衝撃に匹敵する火炎攻撃を食らい、爆発に巻き込まれた一誠は宙を飛んでいった

そして、こちらでも――――

「フフッ、竜崎総司。僕は初めから遠慮なんてしないよ？」

「勿論、あの時の恨みも込めてお返しするよ」

両者共に不敵な笑みを浮かべながら、総司は闇人(やみびと)に変異し、ラースも赤い竜人と化す

莫大なオーラが両者の周りに渦巻き、新は危険を察知して逃げようとしたが……

「「死ねェェェェェェェェェェェェェッ！」」

チュドォォォォォォォォォォォンッ！

大人げない両者の攻撃に巻き込まれた……

○借り物競走

アーシアの治療を受けて応援席に戻ってきた新は既に満身創痍だった
結果は新と一誠の同着1位
ただし、2人とも障害物（タンニーンと総司）から逃げてゴールしてきたのだ……
障害物競走を境に、どのチームも殺伐としてきた
障害物のモンスターと戦ったせいで闘争心に火が点いてしまったのだろう
『借り物競走に参加の選手は指定の場所に――――』
借り物競走のアナウンスが聞こえ、新は再び集合場所と言う名の戦場に足を運ぶ
ここでも一誠と出くわし、列に並んで自分達の番を待つ
「今度こそ平和に終わって欲しいな……」と呟く一誠に対し、「望み薄じゃね？」と新は半（なか）ば諦めた感じで言う
『位置について、よーい……ドン！』
新と一誠は勢い良く駆け出し、途中の封筒を拾う
「ヤキ○リ先生って誰だよ⁉」
「黄○色の詠（うた）使いってどなたですか⁉」
他の選手が拾った内容は無理難題のようだ

一誠は封筒を開けて借り物が書かれている紙を確認する

「……」

一誠は紙の内容を見て思考停止、新が横から盗み見る

その紙には『シスコン』とだけ書かれており、新は思わず吹き出しそうになった

『プッ（笑）ヒデェな、これ（笑）』

『（笑）を2個も付けるなァァァァっ！何だよ、何なんだよ⁉このお題を考えたヤツは誰なんだよ⁉』

『ハハハッ！きっと日頃の行いがここに来て反映されたんだろ。ま、俺はどんなのが来ても――』

そう言って封筒を開けた新も、一誠と同じように紙の内容を見た途端、思考停止に陥った

その紙に書かれていた借り物は――『おっぱい』だった……

『お前の方が俺より酷いじゃねぇか！……でも、羨ましいな』

『……じゃあ、取り替えるか？』

『やだ（笑）』

『死ねっ、クソが！』

新は理不尽な怒りを吐き出し、紙に書かれた借り物をどうクリアしようか頭を働かせ

る

『ここはオーソドックスにリアスか？……いや、朱乃ならスンナリ受け入れてくれそうだよな。ゼノヴィアも然り、イリナやロスヴァイセも捨てがたい。そうだ、大穴狙いで小猫！……後で殺されるな……。んー、セラフォルーさまにガブリエルさま、ミラナも良いよなぁ。そもそも、この「おっぱい」ってフレーズだけじゃ分かりにくい。俺は巨乳も小振りも好みだから、選べと言われても選べねぇよなぁ……』

悩みに悩む新を他所に、一誠はサーゼクスを連れてゴールまで走りきっていた

再び1位をゲットした一誠だが、内容がシスコンだった為にサーゼクスに言えるわけもなく、その紙を墓場まで持っていく事を誓った

○玉入れ競技

次は各陣営の選手全員で参加する玉入れ競技

背の高い棒の先端に籠が設置されており、そこに陣営カラーの玉を入れていく――――日本の玉入れと同じルールだ

各選手達がポジションにつき、スタートを待つ

『それでは全員参加の玉入れ競技のスタートです！』

アナウンスの掛け声と共に地面の玉を拾い――――
「悪魔どもに光を投げろォォッ！」
チュドォォォンッ！
「あの時の恨みっ！」
ドォォォンッ！
「ハルマゲドンじゃ、こんちくしょうがぁぁぁっ！」
「終末の角笛を鳴らしてやろうかぁぁっ！」
ドドドドォォォォォォォォォンッ！
各所で炸裂音が鳴り響き、玉入れそっちのけのバトルが始まった……
玉入れの玉じゃなく、光の玉を悪魔に投げ込む天使と堕天使、それに負けじと悪魔も魔力で応戦
堕天使はどさくさに紛れて天使にも攻撃していく
『天使、堕天使の皆さんは悪魔に光を投げないでくださーいッ！消滅しちゃいますよ！ほら、そこ！光の槍で槍投げするんじゃないよ！競技違うし！悪魔も攻撃を止めなさい！バカか、てめえら！バカなのか！』
アナウンスも破れかぶれでキャラ崩壊（笑）
そんな中、新の視界にアザゼルとミカエルの姿が映り込む

「よー、ミカエル。ここで会ったが万年めってやつだな」
「ふふふ、今日はいつぞやの戦役時のような目付きですね。邪悪極まりない」
「ああ、あの時を思い出すぜ。てめえ、よくもあの時俺が天界にいた頃に書いたレポートを発表しやがったな」
　アザゼルがそう言いながらミカエルに玉を投げつけ、避けたミカエルがあごに手をやりながら意味深な笑みを浮かべる
「ああ、あれの事ですか。設定資料集の事ですね？『ぼくが考えた最強の神器（セイクリッド・ギア）資料集』ってタイトルで長々と設定が書かれていた上に自筆のイラストまで添えてありました。素晴らしい才能じゃないですか。ついつい昔の戦役時、ビラでそれを撒いてしまいましたね。是非とも皆さんに見ていただきたかったのです。――――『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）と暗黒の龍絶剣（ダークネス・ブレード）』でしたっけ？あれ、秀逸でしたよ」
　それを聞いたアザゼルが赤面しながら、更に玉を投げつけた
「うるせぇっ！あれのせいでな、俺は一時期、幹部連中に『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）と暗黒の龍絶剣総督』って呼ばれてたんだぞ⁉『おい、アザゼル、秘密兵器に閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）と暗黒の龍絶剣を出してくれ』だとか、『このあと閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）と暗黒の龍絶剣で敵を仕留めるんだよな？』とか『アザゼルさんや夕食の閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）と暗黒の龍絶剣はまだかい？』とか言われまくったんだぞオオオオオッ！」

「ハハハ、それは失敬！」
アザゼルからの玉を避け、ミカエルもアザゼルに玉を投げつけていく
アザゼルは若い頃、重度の中二病をこじらせていたようだ……
どうでも良い情報漏洩を尻目に、朱乃とバラキエルも対峙している
バラキエルはどう声をかけて良いかの分からず立ち尽くし、その父に向かって朱乃は目を潤ませながら懇願した
「……父さま！私達を助けて！」
「……うぅ、うおおおおっ！」
娘の懇願にバラキエルは叫びながら赤いボールを大量に抱えて、悪魔陣営のかごに放り込んでいった
それを見たアザゼルが驚く
「バラキエル⁉お、おい！お前、なんてことを！黒いボールを投げろって！」
「すまん、アザゼル！娘が！朱乃が！これも一人娘の為なのだァァァァッ！」
バラキエルはアザゼルの言葉を振り切り、娘の為に励んでいく
当の朱乃は嬉しそうに父親と一緒に玉を投げていた
楽しそうな朱乃を見て安堵した新は、気を取り直して自分の陣営のかごにボールを入れていく

○騎馬戦

次の競技も団体戦の騎馬戦
各勢力の選手は馬を組み、上に騎手を乗せる
先程の玉入れでテンションがおかしくなったのか、殺気と敵意が充満する戦場と化していた……
リアスを騎手にした騎馬（先頭・朱乃、後方・ロスヴァイセと小猫）と、一誠を騎手にした騎馬（先頭・祐斗、後方・ゼノヴィアとギャスパー）でチームを組んでいた
一方、数が最も少ないリュオーガ族陣営は新を騎手にした騎馬（前方・ラース、後方・ニトロ）と、レモネードを騎手にした騎馬（前方・アノン、後方・ジュウゾウ）でそれぞれ分かれて他の騎馬を討つ事に
『それでは騎馬戦スタートです！』
アナウンスの掛け声と同時に各勢力の騎馬が戦意満々で飛び出していく
「おりゃあああっ！カタストロフィだっ！死ね、天使どもおぉっ！」
「天使を舐めるなぁぁぁ！最後の審判だっ！」
「天使も堕天使も共に滅べぇぇぇぇっ！」

騎手の帽子を取れば勝ちなのに、どの勢力も命(タマ)を殺(と)りにイっていた（笑）
「転生天使は陣形を組め！我らは札が揃えば力を発揮するのだから！フォーメーション、フルハウスッ！」
「そうはさせるかぁぁぁっ！転生悪魔と転生天使の全面戦争じゃい！」
「転生、転生って、そんな方法で頭数増やしやがって！ちったぁ天使どもは俺達のところに堕ちてこいやぁぁぁっ！」
光の玉、光の槍、そして魔力の炎や雷が無数に飛び交う
「ど、ど、何処から攻めましょうか⁉やられる前にやらなきゃ！」
「落ち着いてください、Ａ(エース)イリナ！」
イリナが騎手を務める騎馬は、混戦と化したグラウンドでどう攻めていいか苦慮している様子だった
『皆さーん、ここであの戦争の続きを始めないでくださーい！再現されてますよ！あの戦争が見事なぐらい再現されてますからね！やめろって言ってんだろぉぉぉっ！ひゃっはーーーっ！』
「ひゃっはーじゃねぇだろ。何処ぞの世紀末のモヒカンか」
「それっ！帽子を取ったわ！」
女性天使の騎手から華麗に帽子を取るリアス

リアス達の周囲だけ、平和な騎馬戦となっていた……
新も何処から攻めようかと考えた矢先、視線の先にアザゼルに耳打ちを聞く一誠の姿が映る
アザゼルから何か助言を貰った一誠は「突っ込め木場！俺を信じろ！」と叫んで指示を送る
ただ、一誠は鼻血を垂らしていた……
それを見た新は『……そういう事か』と直ぐにアザゼルの思惑を察知
一誠は魔力を高め、両手を前に出して女性天使、女性堕天使の騎馬に突貫していく
「剥ぎ取りゴメーーーンッ！」
一誠は形だけの謝罪をしながら、女性騎手の体を次々とタッチし――魔力を解放させながら叫んだ
「――洋服崩壊（ドレス・ブレイク）！」
ババババッ！
一誠がタッチしていった多くの女性騎手のジャージが弾け飛び、全裸となる
「きゃあああああっ！」
「いやぁぁぁぁぁっ！」
可憐で清純そうな女性天使達や、色気溢れる女性堕天使達の裸が大公開

それを見て悪魔と堕天使の男性陣は歓喜し、鼻血を噴き出す
「うおおおっ！じょ、女性の裸……！いかん！いかがわしい事を考えてしまったら……堕ちる！」
「乳……尻……太もも……うぅ！堕天してしまうぅぅっ！でも、白い肌がとっても眩しいいっ！」
天使の男性陣はエロい場面に悩み苦しみ、白い翼を白黒と点滅させていた
それを見ていたアザゼルが高笑いする
「天使どもは堕とせ堕とせ！ふはははっ！女の裸を見ただけで堕天しかけるなんて普段から溜まってる証拠だぜ！」
「やっぱりな、アザゼルの考えそうな事だ。……まあ、良いけどさ」
新はアザゼルの思惑に溜め息を吐くものの、その場のノリで一切咎めない
「俺ら堕天使は堕ちる事が無ければ光が怖いわけでもない！頭数は三大勢力の中で1番少ないが、こういう場面じゃ天使や悪魔に比べたら優れてんのさ！ふはははっ！さて、イッセー！次はあれだ！」
アザゼルがとある美女に指を差す
その先にいたのは――――セラフのガブリエル
「天界一の美女の裸、見たくないか？」

アザゼルが再び一誠を煽る
無論、一誠は「見たいですぅぅぅっ！」と欲望に忠実な獣と化して騎馬をガブリエルに向かわせる
祐斗、ゼノヴィア、ギャスパーも半ば破れかぶれな感じで一誠の先導についていく
それを見た新は――
「させるか、このクソ野郎！俺だって見たいんじゃ！ラース！ニトロ！ガブリエル一点狙いだ！ハイヨーッ！」
「まったく、腐れ堕天使の腐れ思考に毒されたか。まあ良い、勝てば文句は言わないさ！」
「うおおおおっ！天・界・美・女ッ！全・裸・解・放オオオオオッ！」
彼もまた欲望に正直に答える形で突貫していく……
以前、キリヒコの1件でガブリエルの裸は見た事あるが――それでもやはり見たいものは見たい（笑）
ガブリエルは穢（けが）れの無さそうな純真な瞳で首を傾（かし）げる
一誠は『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』の準備に、新は〝一誠を仕留めてからガブリエルを脱がす〟算段を企（くわだ）てようと――
ゴンッ！

突如、一誠の顔面に不意打ちのパンチが飛び込み、その衝撃で一誠達の騎馬が崩れ、一誠も地面に落下する
「……これ以上の破廉恥行為は禁止です」
小猫が両手をパキポキと鳴らしながら、倒れる一誠の頭部を踏みつけた
「一誠、お前の犠牲は無駄にしない。俺が代わりに――――」
「……逃がしませんよ、新先輩？」
小猫はすかさず新を追撃しに向かうが、命の危機を悟った新は騎馬から跳んで脱出
しかし、咄嗟だった為か、跳んだ先にはガブリエルが――――
モニュゥッ
「アンッ……」
新はガブリエルの騎馬に飛び乗ってしまい、尚且つガブリエルのおっぱいに顔を埋めてしまう……
それは男なら誰もが憧れるシチュエーション
「……ッ」
「あ、あの～……エッチな事しちゃ、ダメですよぉ……」
新はガブリエルのおっぱいの感触に言葉を失い、ガブリエルも突然のおっぱいダイブに顔を赤くする

ガブリエルのおっぱいは、まさにこの世の天国だった……

「……覚悟は良いですか、先輩？」

しかし、天国から地獄……っ

小猫は新の首根っこを掴み、空中へ放り投げる

直ぐに小猫も空中へ飛び上がり、両足で新の首と左足、両腕を固定してエビ反りになるようクラッチ

「グガァッ！こ、小猫……⁉いつの間に筋肉族三大奥義の１つを……⁉」

「……新先輩のお仕置きの為に覚えました」

クラッチでメキメキと新の骨が軋み、続けざまに小猫は背中合わせの姿勢で新の手足を固定し、そのまま新の頭と背中を地面に叩きつけた

その衝撃で地面に亀裂が入り、新もピクピクと痙攣する

こうして、騎馬戦は小猫の折檻で幕を閉じた

○決戦！バトンリレー！

三大勢力の合同運動会も遂にラストのバトンリレーを迎えた

『各チーム、選び抜かれたリレー選手が各ポジションに待機しております！さあ、長らく

競い合ってきた運動会も遂に最後となりました！』
アナウンスも最後の声出しで会場を盛り上げる
各勢力の得点は意外にも接戦しており、このラストのバトンリレーで勝敗が決まる状態となっていた
新と一誠はアンカー、既に鎧状態で待機している
「ふふふ、俺の相手はお前らか、新、イッセー」
「お、お手柔らかに……」
「負けねぇぞ」
堕天使側はアザゼルがアンカー、ハッキリ言って嫌な予感しかしない
「がんばりましょうねー」
天使側のアンカーはガブリエルだった
一誠は『洋服崩壊（ドレス・ブレイク）』できなかった事を悔やみ、新は小猫の折檻で痛めた首を擦（さす）る
『さあ、最終決戦スタートです！』
リレーのピストルが撃ち鳴らされ、軽快なＢＧＭと共に各勢力の選手が飛び出していった
悪魔側の最初は祐斗、リュオーガ族の第１走者はニトロ
すると、堕天使側の選手が祐斗に光を放つ

祐斗は軽やかに避けていた
「あれ、アリなんですか⁉」
一誠はアザゼルに抗議するが――アザゼルは「見えんなー」とはぐらかした
とんだ外道である……
それでもリレーは続き、選手達はグラウンドを駆け回っていく
そして、一誠の手前の選手――サーゼクスにバトンが手渡された
「負けないぞ！」
「それはこちらの台詞だ、サーゼクスッ！」
リュオーガ族の第２走者はラース
凄まじい速度でサーゼクスとラースが駆けていく
「うおおおっ！負けん！娘の朱乃の前では負けられんッ！」
「四大セラフ『神の炎』たるこのウリエルが魔王に負けるなど許されないのだッ！」
雷光を体に纏わせるバラキエルと、極大の聖なる炎を全身から迸らせるセラフのウリエル
２人の爆走もサーゼクスとラースの速度に負けていなかった
そして、バトンは遂にアンカーの手に委ねられる
新と一誠はそれぞれのバトンを受け取り、魔力を噴かして飛び出した

猛スピードでゴールに向かうが――

「とりゃぁぁぁあっ！こんな時の為に完成させた秘密兵器じゃい！」

背後からアザゼルが猛追してくる

しかも、その手には光と闇が入り交じった剣が握られていた

「こいつはてめえらが散々煽った『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）』と暗黒の龍絶剣』だッ！」

グラウンドの風景を吹っ飛ばしながらアザゼルが剣を回し始め、それを見て各陣営のトッププクラスが仰天していた

「なに⁉『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）』と暗黒の龍絶剣』は完成していたのか⁉」

「むぅ！あれが『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）』と暗黒の龍絶剣』！」

アザゼルは中二病剣で新と一誠に襲い掛かる

２人はそれを躱し、空振った一撃がグラウンドの地面を大きく抉る

「コラ！俺を殺す気ですか⁉それでも先生かよ！これ、運動会でしょう⁉」

「戦争じゃぁぁぁあっ！魔王と天使長とリュオーガ族のクソッタレには負けん！俺がナンバーワンだ！」

テンションが上がりきったせいで、アザゼルの思考はおかしな方向にブッ飛んでいた……

新と一誠、アザゼルはゴール前で対峙し、拳と剣を繰り出しながら戦闘を始めてし

まった
「良い機会だ！お前らの力を試してしんぜよう！我が生徒よ！」
「何言ってんスか！ぶん殴りますよ、ラスボス先生！」
「テメェら纏めてブッ飛ばしてやるッ！」
　新と一誠は無遠慮にアザゼルを殴る
「よくも俺をぶったな！この！ちったぁ年長者を敬え！」
「いってぇっ！あんたが言える事かよ！」
「元はお前らが原因だ！死にさらせ！諸悪の根源ども！」
　などと殴り合いをしている隙に――――
「お先に～」
　ガブリエルが３人の横を通り過ぎていき、ゴールテープを切った
『ゴーーールッ！バトンリレーを制したのは天使チームでしたーっ！』
「「ああーーーっ！」」
　それを見てお互いに驚く新と一誠とアザゼル
　アホな事に付き合ったせいで、このザマである……
「あんたのせいだぞ、先生！」
「マジで死にさらせ！この腐れ堕天使が！」

「いや、お前らがさっさとやられないのが悪いぞ！」
『おいっ』
３人を取り囲む謎のプレッシャー
チラリと視線を移せば――――堕天使達がアザゼルを取り囲んでいた
全員が殺気めいたものを全身から放ち、眼光鋭くアザゼルを睨んでいた
新と一誠は場違いを理由に逃げようとするが、そこに現れたリアスに頭を小突(こづ)かれる
「新、イッセー、なんて事をしているの……」
「「すみません……」」
新と一誠が頭を下げる中、ソロリソロリと忍び足でこの場を逃げようとするアザゼルだったが――――
「……アザゼル、ちょっと話しましょうか」
グリゴリ現総督のシェムハザに掴まれ、堕天使チームの方に引きずられていく
「わ、悪かった、シェムハザ！ちょ、ちょっと調子に乗っちまった！ハハハ、許してくれ。……な？」
「ダメです」
「ぎゃあああっ！」
堕天使チームの中央でアザゼルが悲鳴を上げた

かくして、大運動会は天使チームの優勝と言う結果で幕を閉じた
各陣営は日頃の鬱憤が吐き出されたのか、終了際には疲れた表情ながらも満足げな様子だった
それを受けて、既に「来年も開催しようか」と言う話になっているそうで……
「こういう殺気めいた運動会は２度とゴメンだッ！」

「ねえねえ、キリヒコ。首尾はどう？」
「Ｏｕｉ（ウィ）、やっと完成しましたよ。あなたと私の力を更に高める為の――画期的なシステムが」
「そっか～♪出来たんだね。じゃあ、後はこれを町中の人達に流せば良いんだね？」
「Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）、あなたは学園で適当な人間にコレを渡してください」
「ＯＫ～♪いや～、楽しみだな～♪コレを使えば、イッセー先輩が本気を出して僕と遊んでくれそうだし」
「我々『造魔（ソーマ）』の実験には欠かせないファクターですからね。タップリと楽しませてもらいましょう。手始めに――この『クロニクル』でグレモリー眷属の連中を逆撫でして

やりますか」

『The（ザ） Chronicle（クロニクル） Game（ゲーム） Start（スタート）……!!!!』

第16章　生存競争のクロニクルとオートマタ
迫るデスゲームの魔手

「新人ハンターの教育？俺が？」

ある日の事、新は行きつけの酒場のマスター・イスルギからそんな話を聞かされていた

どうやら新人のバウンティハンターが協会に登録してきたらしいのだが、新は初耳だった

しかも、新を教育係に当てると言うオマケ付き

マスター・イスルギが新のグラスに酒を注ぎながら言う

「お前もＳＳ（ダブルエス）級まで上（のぼ）り詰めたんだ。そろそろ新人の教育指導も必要だって、協会のお偉方からのお達しさ。近い内に顔を合わせる事になるだろう」

「おいおい、勘弁してくれよ……。俺は教育者ってガラじゃねぇし、既に手の掛かる後輩を3人も抱（かか）えてんだぞ？これ以上増えたら破産しちまう」

嘆息してグラスの酒を飲み干す新

ここ最近はバウンティハンターの依頼が少なく、収入を得てもレイナーレ達の酒代で

消えてしまう……

そんな中で新人の教育など出来る筈も無い

「悪いけど、教育指導なら他の奴に回してくれ。俺、こう見えても結構忙しいんだ」

「そういうわけにもいかないんだよな、これが。協会からの通知である以上、お前さんに断るって選択肢は無い。それに――――お前は必ず引き受けるよ」

「何故そう思う？」

「その新人ハンターが〝女〟だからだ」

「詳しく聞かせろ」

新は即座に先程までの不満を翻(ひるがえ)し、マスター・イスルギの話に耳を傾ける

マスター・イスルギが酒を注ぎながら続ける

「ランクはＣクラス、ちょっと性格に難有りだが……見た目は悪くないと思うぞ？」

「スリーサイズは分かるのか？」

「ハハッ、早くも乗り気だな。上からＢ(バスト)：８４、Ｗ(ウエスト)：５６、Ｈ(ヒップ)：８８、もう返事は確定したんじゃないか？」

「ああ、その教育係――――受けてやるよ」

「その意気だ。ほれ、景気付けにサービスだ。コレ食っとけ」

そう言ってマスターが出してきたのは、小皿に盛られたフランスの家庭料理――――ラ

タトゥイユ
　薄くスライスしたトマトやナス、ズッキーニ等の野菜を使った煮込み料理である
「マスターってこんな凝(こ)った料理もするのか？」
「最近、小さなネズミがシェフを目指す映画を見てね。それが美味そうだったもんだから、見よう見真似(みまね)で作ってみたのさ」
「酒場には似合わないメニューだな」
「ハハハッ、そう言うと思った。けど、味は保証するぜ？」
「そりゃ良い。新人教育の前祝いとしていただくか」
　こうして新はバウンティハンターとして、初めての後輩を授かる事になった

「首尾は上手くいったようですね？Ｍｏｎｓｉｅｕｒ(ムッシュ)　スターク」
『ああ、まずは種蒔き作業を終えたところだ。そっちはどうだ？』
「Ｏｕｉ(ウィ)、順調ですよ。あとは彼が発破を掛けるだけです」
『いよいよ本格的に始動するってか。お前らが考案したデスゲーム、『クロニクル』だっけ？なかなかエグいイベントを思い付いたもんだな』

「造魔のバックアップがあったからこそ――――実現可能になりました。勿論、あなたの斡旋も今件の要因です」
『んで、ここから俺は高みの見物ってわけか。楽しみだねぇ、悪魔のガキどもが振り回されて、壊れていくのを眺めるのは』
「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、彼らには少しばかり痛い目に遭っていただく必要があります。欲望と絶望が渦巻き、狂気と死が逆巻くＦｉｅｓｔａ……Ｔｒ▪ｓ ｂｉｅｎなゲームを前にして、どういった表情で喚いてくれるのか」
『本当にお前は悪趣味だよな』
「あなた程ではありませんが、お褒めの言葉としておきましょう」

ある日の駒王学園
「シドくんっ、お菓子食べる？」
「今日、実習でクッキー焼いたの。シドくんにあげる」
「わぁ、良いの？ありがと、お姉さんっ♪」
１年生として駒王学園に潜入している筈の造魔構成員――――シド・ヴァルディは２年

の女子達からお菓子やら何やらを貰い、学生ライフを満喫していた
年下に加えて無邪気な性格から母性本能をくすぐられ、すぐに年上女子の支持を得たらしい
勿論、新達は彼の正体を知っているが……この公の場で異形の話など出来るわけもない
いつでも新や一誠達をやれるポジションにいながら、シドはお気楽な毎日を送っていた
――と言っても、本分は忘れてはいない
「さてと、〝コレ〟を配れって言われてるけど……誰にしよっかな？簡単に話にノってくれそうなヒトが良いよねー」
女子達から貰ったお菓子をポリポリ食べながら、校庭を散歩していると――２つの人影を見つける
「んー？あ、松田先輩と元浜先輩だ。あんな所で何やってるんだろ」
見つけたのは一誠のクラスメイト、ハゲこと松田とメガネこと元浜
壁に顔を近付け、何かを覗き込んでいる様子……
シドは面白そう事を察知したのか、２人に気付かれないようにスーッと忍び寄り――
――声を掛けた

「せーんぱいっ、何してるのぉ？」
「うわっ！な、何だ、お前か。あっち行けリア充め」
「今の俺達は1年のガキに構ってる暇など無いんだ。さっさと帰ってクソでもして寝てこい」
松田と元浜は嫌悪感をあらわにしてシドを追い払おうとするが、シドは首を傾げてしつこく訊いてくる
「ねぇねぇ、なーにしてるのー？教えてよー」
「うるさい黙れ。リア充には関係無い事だ」
「その通り、チャホヤされているお前のようなリア充など爆発して死んでこい」
「えー、つまんなーい。もっと大声で訊いた方が良いのかなぁ？」
シドは大きく息を吸い込み、大音量の声音を発しようとするが――――危険を気取った松田と元浜に口を塞がれる
『やめろ、バカが！気付かれたらどうする⁉』
『これだからリア充って野郎は！』
『じゃあ、何してたの？教えてよ』
『ったく、マセガキめ。そこの穴を覗けば分かるだろ』
松田は仕方無く小さな穴を指差し、シドはその穴を覗き込む

――中には着替え中の女子達の姿が
ここは剣道部の女子達が使う更衣室
つまり、松田と元浜は女子達の着替えを覗いていたのだ
覗き穴から目を離すと、シドは2人にこう訊ねる
「これが面白い事？何も無いじゃん」
「なん、だと……⁉」
松田と元浜はシドの言い草にワナワナと震えた
「お前……この光景を見て、何とも思わないのか⁉」
「お姉さん達が着替えてるだけでしょ？そんなの見て何が面白いの？」
「かーっ、これだからガキは！女体の神秘と言うモノをまるで分かっちゃいねえ！見ただろ、村山のデカい乳を！片瀬のエロい尻を！キャッキャウフフと戯れる女子どもの乳！尻！太もも！それだけで俺達は明日への希望を見出だせるのだ！」
「俺達は日々この光景を目と脳裏に焼き付け、リア充撲滅とハッピーライフを目指している。女体の神秘をオカズに飯を食らい、探求心を満たす為に女体の何たるかを追究していく。それこそが俺達の幸せへの原動力となるのだ！」
イキイキと語る松田と元浜に対し、シドは〝ふーん〟と生返事をしてお菓子を食べる
「要するに――先輩達はモテたいんだ？」

「ああ、そうだよ！俺達はモテたいんだよ！女子どもからチヤホヤされたいんだよ！彼女が欲しいんだよ！彼女を作ってエロエロな毎日を送りたいんだよ！けど、どんなに足掻いても結局リア充には勝てないんだよっ！」

「少し前まで俺達と同じ仲間だと思ってたイッセーも、今ではアーシアさんと言う伴侶を持って毎日イチャイチャ……！それを見せつけられて俺達のハートはボロボロなんだよ！あいつは先にリア充への道を進みやがった！」

「俺達の周りにはリア充が多すぎるんだよ！竜崎もリア充！イッセーもリア充！イケメンの木場もリア充！どいつもこいつもリア充っ！何なんだよ、何なんだよこれ！神は俺達に死ねって言ってるのか⁉イケメンやリア充以外の奴は死ねとでも言いたいのか⁉」

嫉妬に荒れ狂う松田と元浜は嘆いたり怒ったりと、顔芸を繰り返す

「金があるわけでもない、頭が良いわけでもない、俺達には何も無いんだよ……！エロの欲求を満たす他に無いんだよ……っ！」

「こんなリア充だらけの世界など、いっそ滅んでしまえば良いんだ……っ！」

落胆してこの世の全てを呪うような台詞を吐き捨てる松田と元浜

シドはそんな2人を眺めて――――『きーめたっ♪』と何かを閃き、2人の肩に手を置いた

「せーんぱいっ、それなら良い話があるんだけど」

「良い話だと？1年のガキが何を知ってるって言うんだ？」
「その〝りあじゅう〟ってモノになる為の近道♪」
「「――――っ⁉」」
シドの言葉に松田と元浜は揃って驚愕し、シドは得意気に語り始める
「先輩達みたいなダメダメな人達にオススメの方法があるんだけどなー」
「何だと⁉そ、それはどんな方法だ……？」
「話によっては金を払うぞ、多少の犠牲は厭(いと)わん」
直ぐに食い付いてきた松田と元浜に、シドはニヤリとほくそ笑む
そして、ポケットから〝あるモノ〟を取り出した
それは――――『Ｔｈｅ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ(ザ クロニクル)』と綴(つづ)られた小型の端末だった
松田が「何だよ、これ？」と訊くと、シドは笑顔で話す
「コレは最新技術を利用した新世代のバーチャルアクションゲームだよ。実は僕、コレを作ってる所でアルバイト（嘘だけど）しててさぁ。プレイヤーを集めてるの」
「それがどうリア充に繋がるんだ？」
「分からないかなー？コレはまだごく一部の市場にしか出回ってない新感覚のゲームなんだよ。どんなゲームも目じゃない、プレイ次第で思い通りの自分になれる――――夢を叶えてくれるゲームさ」

〝思い通りの自分になれる〟、〝夢を叶えてくれる〟……シドの甘言に松田と元浜は目を光らせた

畳み掛けるようにシドは話を続ける

「近い内に一般販売されるんだけど、先にプレイしてくれるなら先輩達は優位に立てるよ？〝まだ誰も持っていない最新のゲーム〟をいち早く持ってるのは、ステータスの一因になると思うんだ。モテモテになりたいなら、やっぱり最新の流行を取り入れないとね」

「「最新の流行……リア充への近道……っ」」

揺らぐ松田と元浜にシドは更なる追い討ちを掛ける

「イッセー先輩もビックリすると思うなー。先輩達が一気に〝りあじゅう〟に変身したら」

「「く、くれ！それを俺達にくれっ！」」

松田と元浜は揃ってシドの誘惑に負け、土下座して頼み込んだ

シドは笑みを絶やさず、２人の懇願を受け入れる

「しょうがないなぁ、良いよー。１個で１万円だけど」

「構うもんか！喜んで買うぞ！」

「リア充になれるなら、安いもんだ！」

松田と元浜は躊躇(ためら)う事無く金を払い、それぞれ端末を受け取った
「で、こいつでどうすれば良いんだ？」
「知りたい？それなら、夜に人目の付かない所で教えてあげるよ。……覚悟は良い？」
「勿論だ！リア充になれるなら！」
「ＯＫ～♪また後で連絡するから、バイバ～イっ」
シドはスキップでその場を立ち去っていく
上手く唆(そそのか)した事と、これから面白くなるのを確信してニヤケるシド
その背後では剣道部の女子達に見つかった松田と元浜がシバかれていた……

「待ってたよ、先輩達。……どしたの、その顔の傷？」
「ふっ、リア充になる前の男の勲章だ」
「その通り、リア充になる前の男の宿命だ」
その夜、シドに呼び出された松田と元浜は人気(ひとけ)の少ない路地裏にて合流
２人の顔は絆創膏にまみれていた
言うまでもないが、シドが立ち去った時に覗きはバレており、剣道部の女子達からの

折檻による傷だろう……

それを〝男の勲章〟等と言い切る態度は見苦しいを通り越して呆れる程である

シドは2人の残念性を棚に上げ、本題に入る

「先輩達、ちゃんとアレは持ってきてるよね？」

「当たり前だろ！なんたって俺達をリア充にしてくれる秘密道具だからな！」

「遂に……遂にこの時が来たんだ……！」

松田と元浜は嬉しそうにシドから手渡された小型端末を取り出した

『Ｔｈｅ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ』――――昼間、駒王学園で渡されたシド曰く〝最新技術にして、夢を叶えてくれるゲーム〟……

シドは個人データを登録する為にスマホを取り出すよう言い、松田と元浜はそれに従って自分達のスマホと端末を繋げる

自分の名前やおおよその年齢、生年月日等の必要事項を入力し、登録の手続きを終える

「登録の手続きを終えたね？じゃあ、今からが本番だよ。端末のスタートボタンを押せばゲームが始まるよ」

シドの言葉に期待と一抹の不安を抱えるも、リア充になりたい欲求が勝り、松田と元浜は遂にスタートボタンを押す

『Ｔｈｅ（ザ）　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ（クロニクル）　Ｇａｍｅ（ゲーム）　Ｓｔａｒｔ（スタート）……!!』

不気味な音声が鳴った瞬間、端末からオーロラのような光が放たれ、彼らの周囲を包み込む

周りの光景は然程（さほど）変わらないが、気が付くと２人の姿が変わっていた

茶色を基調としたプロテクターに黒のボディスーツ、頭部を覆うのは坊主頭の如く丸いフォルムのフェイスメット

それらを装備した松田と元浜はそれぞれの姿を見て驚く

「な、何だこれ!?スゲェ！」

「ビックリした……今の時代のゲームはここまで進化していたのか……っ」

変身した自分の姿に興奮する松田と元浜

当然、彼らはコレをゲームだと疑っていない

シドがパチパチと拍手をする

「さあ、今日から先輩達の輝かしいゲームライフが始まるよ。まずはチュートリアルからだね。もうすぐモンスターが出てくる筈だよ」

そう言った直後、２人の近くに円形の光が地面から発され、その中から複数のモンスターが出現してくる

ザコ敵に相応しい様相のモンスター６体、松田がシドに訊く

「で、どうやってプレイするんだ？」
「それは簡単、ただ戦えば良いんだよ。大丈夫、それはチュートリアル用のザコ敵だから、今の先輩達のレベルでも倒せるよ。好きなように戦ってごらん」
「よ、よし！リア充になる為だ！やるぞ、元浜！」
「お、おう！」
松田と元浜はビビりながらもモンスター達に向かっていく
素人感丸出しのパンチやキック、叩きなどを駆使してモンスターにダメージを与える
モンスターの方も負けじと攻撃を加え、２人は衝撃で大きくよろめく
そこでシドから再びアドバイスが贈られる
「腰にデフォルト装備の武器があるから、それも使いなよ」
そう言われて腰元に視線を移すと、短剣が目に入る
すかさず短剣を引き抜き、襲い掛かってくるモンスターに斬りかかった
モンスターは断末魔の悲鳴を上げながら消滅、２人はモンスターを倒した充実感と興奮に駆られる
「スゲェ……スゲェよ、このゲーム！まるで本物みたいじゃねえか！」
「これが……これがリア充への近道か！」
士気が上がった２人は立て続けにチュートリアル用のザコ敵を倒していく

その様子を見ながらシドがほくそ笑む
『〝本物みたい〟だって？……プププッ、当然でしょ？――――本物なんだから』
そう……モンスターは全て本物であり、松田と元浜は今まさに本物の化け物と戦っている……
しかし、本人達はコレを完全に〝ゲーム〟と思い込んでいる為、その間違いに気付く事など出来ない
程無くして、チュートリアル用のザコ敵を全て倒し終わった２人は肩で大きく息をする
「はぁ……はぁ……けっこう疲れるな、このゲーム……」
「愚痴るな、元浜。これも俺達がリア充になる為の試練だと思えば朝飯前だろ？いずれ俺達は彼女持ちのハッピーライフを送れるんだ！」
テレレレッテッテ～♪
何処かで聞き覚えのある効果音が鳴り、２人の前にスクロール画面が現れる
見てみると――――経験値が溜まり、２人のレベルが１から２へ上がっていた
更に下の項目には１１０Ｐ（ポイント）と綴（つづ）られている
「ん？このポイントって何だ？」
松田がそう訊くとシドが答える

「それはモンスターを倒した時に手に入るお金みたいなものさ。ポイントを貯めればショップ画面で武器や防具、アイテムと交換できるよ」
「つまり、モンスターを倒せば倒す程ポイントが貰えるって事か」
「そゆこと♪。ちなみに初回特典はプレイ開始時に１００ポイント支給されてるの」
２人は早速ショップ画面を開いてアイテムを買おうとするが――――
長剣……２０００Ｐ
折れそうな剣（笑）……１０００Ｐ
木の盾……４０００Ｐ
鉄の盾……８０００Ｐ
棍棒……３０００Ｐ
軽鎧（ライト・アーマー）……９０００Ｐ
全身鎧（プレート・アーマー）……１２０００Ｐ
弓矢セット……７０００Ｐ
回復薬（小）……５０００Ｐ
回復薬（大）……６０００Ｐ
ｅｔｃ……
「「値段高（たか）っ!?」」

手持ちが１１０Ｐしか無い松田と元浜はアイテムの値段を見て驚いた
初回特典で１００ポイント、つまり先程のチュートリアル用のザコ敵は１０ポイントの価値しか無かった……
「チクショウ！何処のカ〇ジだよ⁉完全にぼったくりじゃねえか！」
「ゲームとはいえ、そんなに甘くないよ。大丈夫っ、いっぱいモンスターを倒していけば経験値も溜まるし。ポイントも貯まれば、良いアイテムも買えるようになるから」
「リア充への道は険しいなぁ……」
ゲンナリと頭(こうべ)を垂れる２人だが、これもリア充になる為と気持ちを切り替える
チュートリアルを終えた松田と元浜はシドの指示に従ってスタートをもう一度押す
変身が解除されて元の姿に戻り、『Ｔｈｅ（ザ）Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ（クロニクル）』の端末をポケットにしまう
ちなみにモンスターの出現場所に近付くと、連動してるスマホがメッセージで知らせてくれるらしい
「じゃあ、後は先輩達次第だよ。りあじゅうを目指して頑張ってね～♪」
「おう！１年坊、お前本当は良いヤツだったんだな！」
「今度、イッセーにも見せていない秘蔵のエロＤＶＤを貸してやろう。お前も少しはエロを身に付けるべきだ」

「アハハッ、考えとくね」
苦笑いするシドを尻目に松田と元浜は意気揚々と走り去っていった
これからレベル上げに向かうのだろう
そんな2人の後ろ姿を眺めつつ、シドは不敵に笑う
「……頑張ってね、先輩達。普段から退屈ばっかりしてる人間への細やかなプレゼントさ。たっぷり楽しんでもらうよ――命懸けのデスゲームをね」

シドが松田と元浜に『Ｔｈｅ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ』のプレイ内容を教えていた同時刻、新はオカルト研究部の部室にてリアス達に新人ハンターの事を話した
「あなたに後輩のバウンティハンターね……。急な話で驚いたけれど、上級悪魔になる為のノウハウを身に付ける良い機会じゃないかしら？しっかり勉強してきなさい」
「良いのか？そうすると必然的に悪魔側の活動に支障が出るかもしれねぇぞ」
「心配しないで。あなたの成長に繋がるなら、私は許すわ」
リアスも新の本業（副業に下がってしまった）事情を察し、彼の意を汲んであげる事にした

話によれば、新が教育係を務める新人ハンターはもうすぐやって来るらしい
最低限のもてなしぐらいは準備しておこうかと思った矢先――――部室の扉が開かれる
入室してきたのは〝異様〟と言う表現が似合うかもしれない、奇抜な出で立ちをした少女だった……
カチューシャを留めたシルバーブロンドのボブカットヘア
全てを黒のみで統一したゴシックドレスにサイハイブーツ
顔の上半分を目隠しのような装飾品（ゴーグル）で覆い、口元で微かに主張してくるホクロ
無言の空気が部室内に流れる中、その少女はズカズカと新のもとに歩み寄る
眼前にまで来た彼女はようやく口を開いた
「はじめまして、本日よりあなたの指導を受けに参りました――――ミカサ・ヨルハニアです。ハンターランクはCです。よろしくお願いします」
機械的な口調で自己紹介を終えた新人ハンターのミカサ・ヨルハニア
新は「あ、あぁ、よろしく」と戸惑いつつも返事だけしておく
その直後、新はリアスに呼ばれる
『あれが新の教える後輩……？何と言うか、その……随分と個性的ね』
『正直、俺も言葉が出てこなかった。ここまで奇抜過ぎる女に会ったのは初めてだ……』

『どんなに奇抜でも、女の子ってだけで羨ましいよ……！しかも、お前が教育係なんだぞ？エロエロな指導も出来るって事じゃないかッ！』
一誠は相変わらず悔しげに嫉妬をぶつける……
時折チラリと視線を彼女に移すが、ミカサ・ヨルハニアはただ黙って新達を見つめるのみ
否、目隠しのせいで見ているのかどうかすら分からない……
とにかく不思議の塊とも取れる新人ハンターに、新はとりあえず手を差し伸べる
ミカサは差し伸べられた手に視線を移し、暫くしてから再び新の顔に視線を戻す
そのまま沈黙
「……」
「いや、あの、握手なんすけど……」
「……そうでしたか」
言われてから握手に応じるミカサ
彼女に手を握られた瞬間、新は一瞬だけ妙な違和感を覚える
簡素に握手を終えたミカサは軽く会釈してから「外で待ってます」と告げ、退室していった
掴み所の無い新人ハンターに新だけでなく、リアス達も当惑

早くも前途多難の空気が押し寄せてきそうな雰囲気だが、新は先程の違和感に対して目を細めていた

『……何だ、今の……？妙に冷たい手をしていたな……。まるで、無機質な人形みたいだ……。つーか、アレの教育係をしなきゃいかんのか、俺は……』

〝後悔先に立たず〟――――まさにその言葉が相応(ふさわ)しい顔合わせとなった

デスゲーム『クロニクル』、ゲームスタート……！

「……」

「……（垂汗）」

皆より早く部室を出て時間が経つが、新は無言のまま歩いていた

と言うより、話題が見つからない……

新人ハンターのミカサは終始無表情＆無口、一言も話しかけてこないので新もどう接したら良いのか分からずにいた

そのまま5分、１０分と時間が過ぎていく

このままでは気まずいと踏んだ新は一計を案じる事にした

「あ～、ミカサ」

「はい、任務ですか、それとも実践練習ですか？」

「いや……そういうわけじゃなくてだな。……ちょっと話をしに行こうかと」

そう言って新が向かったのはマスター・イスルギが経営している行き付けの酒場

この堅苦しい雰囲気を何とか緩和させる為、まずは話しやすい環境を整える事にした

新の申し出にミカサは勿論従い、新は行き付けの酒場に直行

そして到着した後、扉を開けて入店する
「よー、新。今日はお前ん所の〝堕天使3人娘〟が来てるぞ」
マスター・イスルギが開口一番にそう言ってくる
〝堕天使3人娘〟――――それは勿論、新が抱え込んでいる金欠の元凶……レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの事である
彼女達は既に30本以上の酒瓶を空けており、未だに飲み続けている最中だった
新は額に手を当てて嘆息し、レイナーレが彼の隣にいるミカサについて訊いてくる
「アラタ、その娘があなたの言ってた新人後輩なの？」
「う～っ、ゴスロリとかウチと被ってるんですけどぉ……」
「話には聞いていたが、私達を穀潰しみたいに言うのは失礼だ。ちゃんとそれなりに仕事はしている」
レイナーレに続くようにミッテルト、カラワーナが少々不満を漏らしてくる
特にミッテルトは自分と同じゴスロリキャラな部分が気に入らない様子……
新は愚痴をスルーして、彼女達に言う
「少し話し相手になってやってくれ。お前らの後輩でもあるんだし、先輩ハンターとして何かアドバイスを贈ってくれ」
「あら、真っ先に私達へ押し付けるなんて。女性相手なら負け知らずのアラタらしくな

いわね」
「まずは話しやすい雰囲気を作ってやりたいんだ。女同士で話し合えば少しは堅物な感じが和らぐだろ」
その申し出にレイナーレは「まあ、良いわ」と渋々了承
ミカサにもレイナーレ達と話をするように言い、自分はカウンター席に座り――――頭を垂れた
マスター・イスルギがグラスに水を注ぎながら言う
「いきなりバテてんのか？」
「だってさぁ、ずーっと無表情な上に返事は全部〝任務ですか〟オンリーなんだぞ……？何処をどう攻めれば良いのか分からん」
「まあまあ、気を落とすなよ。ありゃ所謂〝クーデレ〟ってヤツだ」
「クール通り越して完全な〝無〟の状態なんだよ……常に明鏡止水的なヤツなんだよ……」
「ハハハッ、思った以上に苦労してるみたいだな。しっかし、序盤からそんな調子だと先が大変だぞ？ほら、見てみな」
マスター・イスルギに言われてレイナーレ達の方を見てみると――――新の目と口から何かが飛び出した

それもその筈、ちょっと目を離した隙に空(カラ)の酒瓶が３倍以上に増えていたのだ……

突然の増量地帯に新はレイナーレに詰め寄った

「ちょっ……！お前らっ、短時間でどれだけ飲んでんだよ⁉」

「あら、コレ？話してたらいつの間にか飲み比べになってたのよ。そしたら、この娘が予想以上に飲むものだから」

「いえ、嗜(たしな)む程度です」

平然とそう言ってくるミカサの前にはカラッポのボトルが５０本以上並んでいた……

「……これ、全部お前が飲んだの……？」

「はい、飲みました」

「嘘だろ……っ、中にはアルコール度数が強すぎて普通じゃ飲めないようなボトルまであるぞ……」

新の言う通り、ミカサが飲んだボトルの中には〝スピリタス〟と呼ばれるアルコール度数９６度の酒が混じっていた

※ちなみにアルコール度数６０度以上は確実に火が点きます（火気厳禁）

多量のボトルに加え、世界最高のアルコール度数を誇る危険酒を飲んでも平然としている……

「ミカサ……お前、まだ飲めるの……？」
「はい、飲みます。先輩も飲みますか？」
「いや……俺は遠慮しとく……」
「そうですか。では、こちらの方々からのお酒をいただきます」
「む～っ、なかなかやるじゃん。ウチのゴスロリ魂にも火が点いた！よ～しっ、こうなりゃトコトン飲ませてやるっす！お酒５０本追加～っ！」
プライドに火が点いたのか、ミッテルトの追加オーダーが入る
ミカサのまさかの酒豪っぷりに新は再びカウンター席に腰を下ろし、頭（こうべ）を垂れた
「マスター……ここってツケは効く……？」
「無論、現金払いだ」
ツケは一切無しの請求に、新の財布はめでたく破産（笑）
打ちのめされたように突っ伏すも、レイナーレ達と会話をするミカサを見て――
『……まあ、時間を掛けて打ち解けていけば良いか。少しでも話しやすい雰囲気を作れたのが幸い（さいわ）って事だよな』
僅かな進展だが、その代償はあまりにも高額だった……

「計画は順調ですか？Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）　シド　」
「うんっ。簡単に乗ってくれたから楽勝だったよ♪これから楽しいゲームが始まるんだね」
「Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）、既に多くのプレイヤーが『クロニクル』の虜（とりこ）になっています。日常とは違うスリルと興奮に味を占めて、のめり込む人が後を絶ちません」
「皆が日頃から『退屈だ～』とか、『刺激が欲しい～』って不満を抱えているもんね」
「グレモリー眷属や三大勢力は〝安穏な日常〟と言う逃げ道を求めているのに対し、人間は〝非日常〟を探し求めている。何とも皮肉な話です」
「だからこそ、この『クロニクル』は僕達にも、人間にもお誂（あつら）え向きのゲームってわけだね♪」
「Ｏｕｉ（ウィ）、己（おのれ）を満たす為に人間は欲望に溺れ――――その欲望を喰らって我々は更なるフェーズに移行する。人間とは愛（いと）おしい程に愚かで哀れなＭａ（マ）　ｐｕｃｅ（ピュース）です」
「エヘヘッ、これでイッセー先輩も本気で僕と遊んでくれそうだよ。楽しみ楽しみっ♪」
「さあ、Ｔｒｅ（トレ）・ｓ（ス）　ｂｉｅｎ（ビアン）な宴（うたげ）の始まりです。グレモリー眷属、どうぞ心ゆくまで狂ってください。――――Ｂｏｎｎｅ（ボヌ）　ｃｈａｎｃｅ（シャンス）」

翌日、三連休が始まって今日は学園も休み
バウンティハンターの仕事も依頼が来なければ、基本的には休み扱い
久々にゆっくりと過ごせる日を設けた新は――――早速競馬場へ向かう準備をしていた
「新、せっかくの休日を賭け事に費やすの？」
嘆息しながら言うリアスに対し、新は「当然だ」とハッキリ告げる
「これも重要な資金調達なんだよ。昨日はレイナーレ達の飲み代で財布の中身が消え、ほぼ素寒貧状態だ。少しでも元手を増やさないと本当に破産しちまう」
「それなら貯金を下ろしたり、バイトする方がよっぽど健全だと思うのだけれど？」
「貯金を下ろせば直ぐに消費され振り出しに戻り、バイトなんざする気力も無い！仕事はバウンティハンターと悪魔稼業で充分だっ！」
「悪魔になってからのあなたは欲望に忠実ね……」
リアスは額に手を当てて溜め息を吐き、新もいざ競馬場へ出発――――しようとした矢先、新のスマホが着信音を知らせる
発信先は一誠からで、新は不機嫌な様子で通話を開始する

「もしもし？」
『おお、新！俺だ！』
「一誠か、何だよ？今日は大事な稼ぎ時だってのに電話してきやがって。お前だって今日はアーシアとデートの予定じゃなかったのか？」
『いや、そうなんだけどさ！アーシアと一緒に買い物に行こうと近くの公園を通ろうとしたら……何か変な事になってるんだ！』
「変な事？お前の顔芸以上に変な事って他に無いだろ」
『顔芸は後回し！とにかく来てくれ！あと、部長達にも知らせた方が良いのか⁉』
「……いや、大所帯（おおじょたい）で行くとかえって目立つ。だから、俺が行くまでその場から離れるなよ」
『分かった！』
一誠からの着信が切れ、新は休日の競馬を中断せざるを得なくなった
「せっかくの休日がまたパァかよ……。けど、行ってみないとな」
「新、さっきの電話はイッセーからよね？何か遭ったの？」
「詳しい事は分からんが、どうやら変な事に巻き込まれてるらしい。一応、俺だけで行って様子を見てくる」
「分かったわ、気を付けるのよ」

新は「おう」とだけ告げた後、ヘルメットを被り、バイクに跨がって走り去っていく
発信源から特定し、場所は2㎞程離れた公園
そこには一誠とアーシアもいた
バイクを停め、ヘルメットを外した新が2人と合流する
「んで、変な事って何なんだよ？」
「いや、それがさ……アレなんだけど」
一誠が指差す方向を見て、新も「……は？」と間の抜けた声を発するしかなかった
目の前で起こっている奇怪な状況
それは――〝黒いアンダースーツの上に茶色いプロテクターを纏った複数の人物が、怪物どもを相手に戦っている〟と言う光景だった
次々と沸き出てくる怪物、それらを迎え撃つ輩
〝そっちへ回り込め！〟だの、〝ポイントは早い者勝ちだ！〟と叫び回る茶色軍団
持ち前の武器――短剣を駆使して怪物どもを倒していく
新は怪物どもを討伐している奴らに違和感を覚える
「あいつらの戦い方、まるで素人だ……。動きに無駄があり過ぎる」
「やっぱり、新もそう思ったか。俺でも分かるぐらい動きが素人なんだよ、あいつら」
「いったい何がどうなってんだ？――っ。おい、あいつら……！」

新が目を見開いて驚いたような声音を出す
それもその筈、この奇怪な現場に一誠の悪友――――松田と元浜もやって来ていたのだ
これには一誠も仰天する
「松田⁉元浜⁉」
「ん？何だ、イッセーじゃねえか。アーシアさんと公園デートかよ。相変わらずリア充ライフを満喫か、ちくしょうめ」
「だが、俺達の惨めな人生も終わりを告げる。俺達もお前と同じリア充ライフを手に入れるのだ」
「リア充王に、俺達はなるっ！」
何処かで聞いた事のあるような台詞を強く言い放ち、２人は小型の端末を自分の前に掲げた
『Ｔｈｅ（ザ）　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ（クロニクル）　Ｇａｍｅ（ゲーム）　Ｓｔａｒｔ（スタート）……‼』
不気味な音声が鳴った直後、端末から光が放たれ、松田と元浜の全身を包み込む
光が止むと、そこには怪物どもと戦っている奴らと同じ装備の茶色戦士が現れた
「な、何なんだよ、それは⁉」
「行くぞ、元浜！俺達のリア充ライフの為に！」
「おおっ、モテモテ人生の為に！」

一誠の言葉など耳に入っていない2人は、怪物どもに向かっていき――攻撃を加える

新、一誠、アーシアは最初から最後まで目の前の状況を理解できず、ただ見ているしかなかった……

やがて怪物どもの数が減っていき、最後の1体も倒されて消える

茶色軍団が〝ヒャッホウ！〟、〝やったやったー！〟等と勝利を喜んでいると……地面に一際大きなサークルが浮かび上がる

サークルの中から何かがせり上がり、姿を見せる

そこから現れたのは――先程までの怪物とは違う雰囲気を纏った1体のモンスター

結晶の如く光り輝くボディを持つモンスターは茶色軍団に向かって言う

『ようこそ、プレイヤーの諸君！私は当ゲーム「クロニクル」の五大ボスが1人――ソルティーユ・クロコッショーだ！ボスである私を倒せば大量のポイントを獲得できる！更に私と同じボスキャラを5人倒せば、ラスボスへの挑戦権を得られるぞ！さあ、ナンバーワンのヒーローを目指したいなら、かかってきたまえ！』

仰々しく名乗り口上を挙げるボスキャラ

ボスキャラの登場に茶色戦士達のやる気が沸き上がる

「よぉし、ボスキャラのお出ましか！」
「ぶっ倒してポイントＧＥＴだ！」
「僕が倒してヒーローになるぞー！」
松田と元浜を含めるプレイヤー達が我先にとボスキャラ――――ソルティーユに向かっていく
しかし、そうは問屋がおろさない
ボスキャラは今までのザコ敵と違い、プレイヤー達の攻撃を巧みに受け、素早い身のこなしで躱し続ける
隙を見てはプレイヤー達に攻撃も加えていく
『ンッフフフフ、しょっぱい、実にしょっぱい攻撃だな。そんなスウィートな動きと装備で私に勝てると思わない事だ！』
プレイヤー達を悉く退け、余裕を見せつけるソルティーユ
一頻りプレイヤー達を弄んだところで、両腕に電気が迸る
『くらえ！ショッペーノ電気ショック！』
「うわぁぁぁぁ！」
「ぎゃあああ！」
「びびぃいいいっ！」

ソルティーユの両腕から電流が放たれ、プレイヤー達が電撃の餌食となる
電撃で痺れたプレイヤー達はその場に膝をつき、ソルティーユは高笑いする
『ンッフフフフ、まだまだレベルが足りないぞ？私を料理したいのなら、もっともっとレベルを上げてこなければなぁ？出直して来るが良い！』
勝ち誇り宣言を残して、ソルティーユはサークルの光に包まれて姿を消した
ボスキャラの逃亡を機に、プレイヤー達は落胆の声を上げて装備を解除する
「あ～あっ、またボスキャラに逃げられちまったよ」
「レベル3じゃ、まだダメかぁ」
「そろそろ新しい装備も買わないと勝てないか」
茶色戦士（プレイヤー）の中身は老若男女様々な年齢層だが……いずれも一般人ばかり
その事に気付く新と一誠
松田と元浜も元の姿に戻り、ガックリと肩を落とす
「くそぉ……っ、せっかくここまで来たのに、また逃げられた……」
「嘆くな、それは他のプレイヤーも同じだ。チャンスは幾らでもある。俺達がリア充になる為の試練だと思え」
プレイヤー達は散開して公園から立ち去っていく
松田と元浜も公園から去ろうとしたが、一誠に詰め寄られる

「おい、お前ら！さっきのはいったい何なんだよ⁉あの怪物は――――」
「……？イッセー、なに色めき立ってんだよ？」
「やれやれ、今の時代の最先端に乗り遅れる様はみっともないな」
「時代の最先端？」
　意味を理解できない一誠に、松田と元浜は意気揚々と答える
「今のはバーチャルと現実が一体化した最新のゲームだ！」
「これからの時代を先取り、俺達をリア充へ導いてくれる夢のゲーム！――――と言う事だけ教えといてやろう」
「「夢のゲーム？」」
　意味深な言葉に疑問符を浮かべる新と一誠
　松田と元浜は持っていた小型の端末を得意気に見せつけてくる
「これさえあれば、俺達もリア充ライフを築く事が出来るのだ！」
「その通り。負け組から脱却する為に、俺達は時代の最先端を先取っていく。イッセー、悪いがお前にはこれ以上の情報をくれてやるつもりは無いぞ」
「お前は存分にアーシアさんと公園デートしてくると良い。その間に俺達はリア充ライフを網羅してやるのさ！」
　松田と元浜の話に新は訝しげな首を傾げ、一誠とアーシアはお互いに顔を見合わせる

「おい、一誠。このハゲとメガネは遂に思考能力を失ったみたいだ。延々と妄言を宣(のたま)ってやがる。救急車を呼んでやれ。今なら腕の立つ外科医がいる病院も紹介してやる。白黒髪のモグリでも良いか？」

「……そうだな。一度診てもらった方が良いのかもしれないな……」

「おい！俺達を重症患者のように言うじゃないっ！」

松田と元浜のハモりツッコミが決まったところで、新と一誠が〝ある事〟についてヒソヒソと話し出す

『なあ、新。ゲームって言ってるけど……さっきの怪物……』

『ああ、俺も同じ事を考えていた。……あれは、どう見ても本物だ』

周りに視線をやると、地面の所々が焦げているのが分かる

たとえゲームでも、ここまでの再現は不可能

紛れも無く本物である事を証明している……

〝いったい、誰がこんな物を……？〟

そう考えている間にも、松田と元浜はスマホを確認しながら叫んでいた

「おい、次のモンスターの出現地点が出てるぞ！」

「よし、直行だ！そんなわけでイッセー、俺達2人はリア充の道を邁進する！お前はアーシアさんとのデートを楽しんでおくが良い。いずれ、お前を追い抜いてやる」

「お、おいっ！」
一誠は止めようとするが、松田と元浜は脱兎の勢いで公園から走り去っていった
「イッセーさん……」
「あいつら、なに考えてんだよ……っ」
アーシアはどうしたら良いのか分からず、一誠も目の前で起きた状況に歯噛みするしかなかった
そんな中、新はスマホを操作して確認作業を行う
「何にせよ、分からない事が多すぎる。さっきの光景を動画に撮っておいたから、今はそれをアザゼルに見せてみるしかない」
「そう、だな……。部長や先生に相談してみるしかないよな……」

時刻は午前１１時３０分
新はアザゼル、リアスを含めるオカルト研究部全員を一誠宅のＶＩＰルームに呼び寄せ、今朝撮影した動画をスクリーンに映し出す
〝一般人が異形のモンスターと戦っている〟

唐突な事態に驚きを隠せない面々
一通り見せ終わったところで、アザゼルが話を切り出す
「なるほどな……アジュカが言ってたのはコイツの事だったのか」
「先生、何かご存じなんスか⁉」
一誠が食い入るように訊くと、アザゼルは1拍置いてから話を始めた
「アジュカの奴が『冥界興業を揺るがしかねない、興味深いゲームを見つけた』と言ってきてな。その時はまだ半信半疑だったが……アジュカの予想が見事に当たっちまったってわけだ」
「アザゼル、アレはいったい何なの？」
リアスの問いにアザゼルは苦虫を噛み潰したような表情で答える
「コイツは最近、人間社会で蔓延している最先端技術を駆使したバーチャルゲーム――『クロニクル』ってヤツらしい。この町だけじゃなく、世界中のあらゆる都市でコイツが爆発的にヒットしているんだと。……無理も無いか。なんたって〝一般市民がモンスターと戦う〟ゲームなんだからな。非日常と縁が無い一般人にとって、新しい刺激ってのは打ってつけの餌だ」
「だとすると、おかしいわ。世界規模で蔓延しているなら、メディアが取り上げる筈よ。それなのに……テレビやラジオでも報道されないなんて」

リアスの言う通り、この『クロニクル』が爆発的にヒットしているなら全世界に報道されても不思議ではない

――にもかかわらず、一片たりとも報道されていないのはあまりにも不自然

その点についてアザゼルが仮説を語る

「そう、これだけの規模で蔓延しているゲームだ。普通ならメディアで報道される。……だが、コイツは表のメディアでは一切流れず、裏ルートでしか機器も情報も手に入らないらしい」

「じゃ、じゃあ……松田と元浜はどうやってこのゲームを……？」

「イッセー、考えられる説は限られてくる。こう言った〝ゲーム〟を面白おかしく勧めてきそうで、バックに大物組織がいるような奴が１人――簡単に目星が付くぞ」

アザゼルの言葉を聞いて、一誠の脳裏に〝ある人物〟が過ぎる

それは一誠どころか、新もリアスも――否、部員全員が知っている人物……

ゲーム好きで一誠達にも宣戦布告してきた――あの男……

一誠は自然とその者の名を声に出した

「……シド、ヴァルディ……っ」

「そうだ、何せヤツの属している『造魔』はまだ得体の知れない組織だ。こんなバカげたモンを出してもおかしくない。ヤツはお前と戦う事を楽しもうとしている。だから、挑

発的な意味も込めて動き出したんだろうな」
「あの野郎……ッ！こんなわけの分からない事にあいつらを巻き込みやがって……！」
シドの身勝手な振る舞いに一誠は怒りに震え、それは部員全員にも行き渡る
しかし、世界規模で『クロニクル』が蔓延している為、冥界政府どころか三大勢力もこの事態を抑える事は不可能に近い
異形の集いであるがゆえに、〝人間社会での出来事〟に干渉する事は許されないのだ
しかし、『造魔』は違う……
テロ組織ゆえに三大勢力のルールやしがらみ等お構い無し
ルール無用だからこそ出来る芸当であり、三大勢力の干渉を封じてきたと言えよう
アザゼルが苦々しい顔付きで話を続ける
「そう言う事も踏まえると、少なからず『造魔』内部で協力者がいる筈だ。あのシドって奴が単体でこれだけの事態を起こしたってのは無理がありそうだからな」
「どちらにしろ、根源を潰さない限り続くだろう。俺の撮った動画を提出したとしても、揉み消されるのがオチだ。とにかく情報を集めて対処するしか方法は無い」
「ああ、その通り。シトリー眷属にも呼び掛けて網を張ろう。少しでも多くの情報をかき集めるんだ。今の俺達に出来る事はそれぐらいだろう」
「待ってください、先生！だったら、今すぐシドを捕まえて吐かせましょうよ！俺がぶん

殴って――――」
「今のお前じゃあ、シドには勝てない。この前の事をもう忘れたのか？新と二人がかりでも勝てなかった相手に、独りで立ち向かうつもりか？」
アザゼルの言葉に一誠の口が止まる
ただでさえ強いシド、更に今の一誠はトリアイナも『真・女王（クイーン）』も使えない状態にいる……
「冷静さを欠いて勝てる相手じゃない。いや、冷静であっても今のお前が勝てる確率は――――ほぼ0だ。確かに腸（はらわた）が煮え繰り返る思いだろうが、感情任せに行っても返り討ちに遭うだけだ。今はとりあえず耐えて、情報を集めるのが先決だ」
「……はい」
納得いかない様子だが、一誠はアザゼルの進言に従うしかなかった
リアス達も本来なら今すぐにでもシドを捕まえて問いただしたいところだが、彼が直ぐに白状するとは思えない
それ以前に総動員で向かっても勝てるかすら怪しい……
危険が大きい上に、下手を打てば眷属総倒れと言う事態もあり得る
最悪の事態をなるべく避けつつ、情報を集めて『クロニクル』の根源を絶つ
アザゼルが皆に向かって言う

「良いか、現状で1番危険なのは相手の挑発に乗って先走った行動を取る事だ。もし、下手に手を出して返り討ちに遭えば、それこそ奴らの思惑通りになっちまう恐れもある。まずは手分けして情報を集めろ。俺もアジュカに頼んで、このふざけたゲームの起動を止められないかどうかやってみる。だが、これだけは忘れるな。――俺達の町に手を出した事を後悔させてやれ……！」

「「「「はい！」」」」

『造魔（ゾーマ）』発祥のゲーム――『クロニクル』の起動を機に、グレモリー眷属も反撃の準備に取り掛かる

しかし、彼らはまだ知らなかった

『造魔（ゾーマ）』の実に抜け目の無い非道な手腕を……

序盤から難易度高いのはバ〇オだけで充分！

「クソ……ッ！何処をどう調べても手がかり1つ見つからねぇ……！」

舌打ちをする新

『クロニクル』に関する情報収集を開始してから1時間ほど経つが、未だに有益な情報を得られずにいた

幾つかの班に分かれて情報収集に取り掛かっているが、新どころか他の皆も情報を見つけられない

アザゼルの方も何とか探っているものの、結果は同じ……

世界規模で蔓延しているにもかかわらず、情報流出が一切無し

なので、今は町中をしらみ潰しに探し回るしかなかった

捜索範囲を広げつつ、走り回る

何もしないよりマシとはいえ、これではいつまで経っても進展できない……

イライラが募(つの)る中、新の前に1人の人物が姿を見せる

『Ｂｏｎｊｏｕｒ(ボンジュール)』

フランス語で挨拶してきたのは……以前、新が異国で対峙した『造魔(ゾーマ)』の幹部――

ユナイト・キリヒコ

突然の登場に新は不意を突かれるが、直ぐに睨みを利かせる

「キリヒコ……ッ！やっぱり、このふざけたゲームはテメェらの仕業だったのか……！」

「Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）　Ｏｕｉ（ウィ）、『造魔（ゾーマ）』のバックアップを得て完成させた最先端のゲーム――『クロニクル』です。お気に召していただけましたか？」

「気に入るわけねぇだろ……っ。何の真似だ、一般人を巻き込むような物を作りやがって」

「Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）、単なる余興ですよ。『造魔（ゾーマ）』が本格的に動き出す前祝いとして、皆さんにも楽しんでいただこうと思いまして。聞けば――あなた方は異形の存在でありながら、安穏な日常をお求めになっているらしいですね。しかし、人間と言う生き物は退屈な日々に飽きていらっしゃる。非常に皮肉な話だと思いませんか？あなた方が裏で安全を保障しているのに、その人間自身が安全を快く思っていない」

キリヒコは両手を広げ、アピールするように言う

「ですから、我々がプロデュースしてあげたのです。退屈な日常の中で刺激的なスリルを味わえる催し物をね」

「何が目的なんだ……ッ！」

「さあ、何でしょう？」

余裕たっぷりにわざとらしく惚(とぼ)けるキリヒコ
新は舌打ちをして、〝関わっていられない〟とばかりに踵(きびす)を返そうとする……が――
―
「Oh(オー)　la(ラ)　la(ラ)、よろしいのですか？せっかく、プレイヤー達の集まるポイントを教えて差し上げようと思ったのですが」
キリヒコの言葉に新は反射的に足を止め、振り向いて「……どういう事だ？」と訊(たず)ねる
キリヒコは不敵に笑い、タブレット型の端末機を取り出し、操作して画面を見せる
それは『クロニクル』のプレイヤー達の位置情報やコメント欄を表示しており、現在地から1番近いであろう場所を映していた
「こちらの町外れの廃材置き場にプレイヤー達が集まっています。そこを目指すと良いでしょう」
〝何が目的なのか？〟
〝何故、敵である俺達にアッサリと情報を教えるのか？〟
キリヒコの動向が全く読めない新
この情報がガセネタと言う事も考えられるが、このまま自分達だけで情報を集めようとしても手がかりは掴めないだろう

……少しでも有益な情報を拾えるのなら、たとえ罠だとしても拾うしかない

新は直ぐにスマホを取り出し、オカルト研究部のメンバー全員にメッセージを一斉送信

プレイヤー達の集まっている場所を知らせ、自分も直ぐに向かうと連絡する

メッセージを送信し終えた新は再びキリヒコに視線を移す

「……お前、本当に何を企(たくら)んでるんだ？俺達に情報を教えるのは、お前にとって不利益しか生まないんじゃねぇのか？」

「どう思うかはご自由にお考えください。私はただ見たいのです。――あなた方がどう動くのか、どのように我々『造魔(ゾーマ)』に噛み付いてくるのか。そして……どのように踊ってくれるのかをね」

「……相変わらず気味悪い野郎だな」

「人聞きが悪いですね。我々はただ〝スリル満点のゲーム〟を提供しているだけですよ。あなた方も是非お楽しみください。それでは――Ｂｏｎｎｅ（ボヌ）　ｃｈａｎｃｅ（シャンス）」

そういった直後、キリヒコは黒い霧を自分の周りに撒き散らし……その場から消えた

新は腑に落ちないと思いつつも、タブレットに表示されていた町外れの廃材置き場に急行した

「ここか、新が言ってた廃材置き場ってのは……」
連絡を受けて、先に町外れの廃材置き場に到着したのは一誠とアーシアの２人だった
周りを警戒しつつ歩き回っていると……
ドガッ！バキッ！ボコッ！
鈍い打撃音が遠くの方から聞こえてくる
音がする方へ急行する一誠とアーシア
そこには今朝と同じように――茶色の戦士達（ブレイヤー）がモンスターの群れと戦っていた
プレイヤーの人数は１０人程で、近くには『クロニクル』五大ボスのソルティーユもいた
「アーシア、ここで待っててくれ。こんなふざけたゲームをすぐに終わらせる！」
「は、はい。気を付けてください、イッセーさん」
アーシアを物陰に待機させた一誠は、少し離れた場所で禁手（バランス・ブレイカー）となる
未だにドライグは眠ったままなのでトリアイナや『真・女王（クイーン）』の力を使えないが……
悠長な事を言っている暇は無い
背中のブーストを噴かせ、ソルティーユに突っ込んでいく

「――っ？おい、何だあいつ？」
「あれもプレイヤーか？」
「随分赤いな」
プレイヤー達が奇異の視線で一誠を見るが、脇目も触れずに一誠はソルティーユのもとまで辿り着いた
一誠に気付いたソルティーユが仰々しく口を開く
『ンッフフフフ、これはこれは。招かれざる客の乱入か。それもまた「クロニクル」を盛り上げる為の最高のスパイス！しかし……残念ながらキミに私を攻略する事は出来ない！』
「うるせえっ！お前は俺がぶっ倒すッ！」
一誠は拳を握り締め、ソルティーユに突っ込んでいく
ソルティーユが放ってくる電撃を回避しながら距離を詰め、まずは拳打を入れる
ソルティーユは大きく仰け反り、すかさず一誠は蹴りも叩き込み――そこから思い付く限りの体術を繰り出していく
殴って、蹴って、また殴って……とにかく一心不乱にソルティーユを攻撃していった
『松田を……元浜を……俺のダチをふざけたゲームに巻き込みやがって……！そんなもん、1つ残らずぶっ潰してやる……ッッ！』

激しい憤(いきどお)りなのか、もしくは焦りなのか……それらの感情をぶつけるが如く殴打しまくる一誠

何度も何度も打ち込む毎にソルティーユの顔や体が大きく歪んでいく

鬼気迫る乱打もフィニッシュを迎え、一誠は力一杯ソルティーユを殴り倒した

転げ回り、倒れ伏すソルティーユ

「えー、もう倒しちまったよ」

「早すぎんだろ」

「俺ら出番無しかよ」

周りのプレイヤー達が不満を漏らす中、一誠はそんな野次も耳に入らず大きく息を切らす

〝これで、この場は終わる〟

そう思った矢先だった……

突如、倒れているソルティーユの体が発光し――――全ての傷が消えて復活する

あまりにも早すぎる復活に一誠だけでなく、周りにいたプレイヤー達も驚き、ソルティーユは体を解(ほぐ)しながら高笑いする

『ンッフフフ！残念だったね、乱入者くん！「クロニクル」のボスは正規のプレイヤーでなければ倒せないのだよ！それどころか……キミが倒しても我々は即座に復活し、更

にレベルアップしていくのだ！キミが倒してくれたお陰で、さっきまでレベル５だった私はレベル１０にまで上がった！感謝しよう！』

「そ、そんな……！嘘だろ……っ⁉」

なんという事か……っ！

『クロニクル』のボスは正規のプレイヤー……つまり、『クロニクル』の端末を使用している者でなければ倒せないらしく、他の者（非正規プレイヤー）が倒してもレベルアップと共に復活してしまうようだ……！

ゲームを終わらせるつもりで倒した一誠だったが、この想定外の結果にプレイヤー達は――

「はあ⁉ふざけんなよ！」

「なに余計な事してくれてんだよ！」

「せっかくレベル上げたのに台無しじゃねえか！」

「死ねよ、クズが！」

これでもかと言わんばかりの非難と罵声を一誠に浴びせ始めた

周りからの熾烈な罵声に一誠はたじろぐしかない……

そんな中、復活したてのソルティーユが〝ある朗報〟をプレイヤー達に告げる

『さて、プレイヤーの諸君！圧倒的不利になってしまったキミ達に朗報だ！ボスとのレ

ベル差を埋める方法を教えよう！』
ソルティーユの知らせに耳を傾けるプレイヤー達
朗報の正体が明らかとなる……
『この「クロニクル」には――そこの赤い者と同じように様々なレアキャラが潜んでいる！そのレアキャラにダメージを与えれば、ゲームに有利なアイテムや装備の入ったボックスがフィールド内に出現する！レアキャラを見付けたらチャンスだ！たくさんダメージを与えれば、それだけボックスも多く出現するのだ！さあ、プレイヤー達で協力して、レアキャラにダメージを与えたまえ！』
言うまでもなく一誠は仰天、周りのプレイヤー達は一誠を凝視し……デフォルト装備の短剣を構える
「レアキャラって……あいつか！」
「あいつをぶっ倒せば、お宝が出てくるのか！」
「丁度良いぜ。余計な事しやがったからムカついてんだ」
敵意に満ちた視線が一誠に集中する
プレイヤー達は一旦ソルティーユへの攻撃を止め、一誠への攻撃を開始した
我先にと一誠に襲い掛かるプレイヤー達
一誠は相手が一般人な為か、不用意に攻撃を仕掛けられず、躱す事しか出来なかった

「や、やめろ！やめろって！俺は敵じゃない！」
「うるせえ！てめえのせいでボスのレベルが上がっちまったんだぞ！責任取れや！」
「悪いと思ってんなら、殴らせろ！アイテム落とせ！」
「「アイテム寄越せ！アイテム寄越せ！」」
プレイヤー達は一誠に対する怒りと欲望に満ちた言葉を吐き連ねながら、攻撃を仕掛け続ける
躱(かわ)し続ける一誠だが、背後にいたプレイヤーが二人がかりで一誠を捕まえて動きを封じる
抵抗する一誠に対し、プレイヤー達はチャンスだとばかりに短剣を振るってくる
鈍く重い打撃音がフィールド内に響き、滅多打ちにされる一誠
いくら一誠と言えど、数多くのプレイヤーに集中砲火されてしまっては一溜(ひとたま)りもない
そして、フルスイングの総攻撃をまともに食らってしまい……大きく吹っ飛ばされる
吹き飛ばされ、規定以上のダメージを受けてしまった一誠
禁手(バランス・ブレイカー)の鎧も強制解除され、フィールド内に複数のボックスが出現する
「出たぞ！宝箱だ！」
プレイヤーの1人の発言を切っ掛けに、飴に集(たか)る蟻の如く宝箱に向かっていく
箱を開けると……その中には武器が入っていた

ある者は長剣を手に入れ、また他の者はハンマーや弓、棍棒などの武器を手にする
それぞれが宝箱の中の武器を装備し、今度こそはとソルティーユに突っ込んでいく
周りにいるザコ敵を蹴散らしながら向かっていくが、レベルアップしたソルティーユは更に強力なボスキャラとなっていた
『ンッフフフ!くらえ、スパイシー電気ショック!』
腕を地面に叩き付けると、広範囲の電撃が地を走り――プレイヤー達の行く手を阻む
その隙にソルティーユは今朝と同じように、サークル状の光に包まれ――姿を消した
「何だよ、また逃げられちまった!」
「せっかく武器を手にいれたのに」
「どうする?また追いかけんのか?」
「……いや、待て。良いこと思い付いたぞ」
1人のプレイヤーの発言に他のプレイヤー達が耳を傾ける
そして、一誠の方に視線を移しながら――こう言った
「あのレアキャラ、もっとボコればアイテム出せるんじゃね?」
「――――っ!?」

なんと……標的をソルティーユから一誠に変更しようとしていた
〝レアキャラをボコりまくれば、アイテムもたくさん出てくる〟
そう解釈したのだろう……
まさかの事態に絶句する一誠を尻目に、プレイヤー達の欲望が加速する
「それもそうだよな」
「今のままじゃボスキャラに勝てねーんだし、もっとアイテム集めようぜ！」
「まだまだ殴り足りねえんだ、もっとボコってやる！」
プレイヤー達は完全にハイエナ状態と化し、未だにダメージを引きずる一誠を狙うべく構えた
「な、なに言ってんだ……⁉やめろ！目を覚ませ！」
「うるせえ！レアキャラはおとなしくボコられろ！」
一誠の制止など聞くわけも無い……
１０人のプレイヤーが一誠を取り囲んだ直後、物陰に隠れていたアーシアが一誠の前に駆け出してくる
「もう……もうやめてくださいっ！これ以上、イッセーさんをいじめないでください！」
「アーシア……⁉何やってんだ！逃げろ！」
一誠はアーシアに逃げるよう警告するが、アーシアは首を振って尚も一誠を庇う

そんな彼女を前にしてもプレイヤー達の凶行は止まらない……

「何だ、この女？」

「こいつもレアキャラか？」

「だったら、まとめてやっちまおうぜ！」

アーシアをもレアキャラと断定し、プレイヤー達は短剣を向ける

〝アーシアを守らなければ……！〟

一誠は懸命に体を動かそうとするが、ダメージが予想以上に大きいせいでまともに動く事が出来ない

欲を抱えたプレイヤー達が短剣を振り上げた刹那――

「あー、見～つけたっ」

突然飛んできた陽気な声

それは一誠が探している人物の声だった

マゼンダ色の髪にゴーグルを着けた少年にして『造魔』の一員――シド・ヴァルディ

シドは出てくるや否や、一誠に向かって毒づく

「先輩さぁ、本当は強いんでしょ？なんでやられっぱなしなの？サンドバッグじゃ面白くないよ」

「……っ！シ、ド……ッ！」

一誠はシドを睨み付ける
それも当然、シドはこの『クロニクル』の主犯の1人……
プレイヤー達は奇異な視線でシドを見るが、直ぐに「邪魔すんなよ」と捲し立てる
すると、シドがプレイヤー達に視線を移す
「……キミ達もさぁ、戦う気の無い相手にワンサイドゲームなんて、つまんないでしょ？だから代わりに――――僕が遊び相手になってあげるよ」
低いトーンで宣戦布告するシド
手に黒い魔法陣を浮かび上がらせ、自分の前に解き放つ
魔法陣はシドの体を飲み込み、彼を戦闘形態へと変えた
シド・ヴァルディ――――『連携操師（パスリングフォーム）』
メタリックブルーの装甲に巨大な肩アーマー、スマートなボディに加え、彼が得意とする錬金術――――『深淵の闇錬成術（パーフェクト・アルケマイズ）』に特化した姿である
「おっ？こいつもレアキャラだったのか」
「ラッキー！俺がぶっ倒してやる！」
「いいや、俺の獲物だぞ！」
プレイヤー達はレアキャラの登場だと思い込み、嬉々として盛り上がる
一誠が「や、やめろっ！」と叫んでもお構い無し

プレイヤー達はシドに群がっていった
シドは次々と繰り出される攻撃を掻い潜り、パンチやキックを叩き込んでいく
シドの攻撃によってプレイヤー達は良いように弄ばれる
たまにプレイヤーの攻撃が当たっても、シドには全く通用しない……
シドはプレイヤー達の総攻撃をものともせず、強烈な回し蹴りで１０人を纏めて吹っ飛ばした
その間にシドは錬成術の魔法陣を展開し、地面から大量の強化メダルを生成
「さーて、そろそろフィニッシュタイムだ」
不敵な声音と共にメダルを選別し、選んだ３枚を自身のマスクに投入する
『Ｋｏｕｓｏｋｕ　Ｅｎｅｒｇｙ!!』
『Ｊｕｍｐ　Ｅｎｅｒｇｙ!!』
『Ｍｕｓｃｌｅ　Ｅｎｅｒｇｙ!!』
「……っ!?嘘だろ……!?おいっ、相手は一般人だぞッ！」
必殺技の前兆とも言える音声に一誠は声を荒らげた
シドの全身が鬼気に満ちたオーラを発し始め、それを見たプレイヤー達はさすがに危険を感じた
「お、おい……何かやべェぞ！」

プレイヤー達は只ならぬ雰囲気にたじろぎ、逃げようとするが……そうは問屋が卸さない
「悪いけど、逃がさないよ」
その刹那、シドは凄まじいスピードで駆け出し――プレイヤー達全員を空中へ跳ね上げた
なす術無く宙を舞うプレイヤー達に更なる追撃
強化した跳躍力でシドは縦横無尽に跳び回り、必殺の蹴りを叩き込んでいった
1人残らず蹴り落として着地
シドの攻撃によってプレイヤー達は装備が強制解除され――
『Ｇａｍｅ　Ｏｖｅｒ……!!』
おどろおどろしい音声が流れ、元の姿に戻ったプレイヤー達は痛みに呻き苦しむ
幸いにも松田と元浜はこのメンツの中にいなかった
「いってぇ……いてえよぉ……!」
「ちくしょう……!もう1回だっ!もう1回やらせろ!」
懲りずにプレイヤー達は躍起になるが、シドは不敵に笑みながら一蹴する
「残念だけど、1度でも負けたら……次は無いんだよ」
「はあ?」

プレイヤーの1人が疑問に思っていると――――信じられない現象が起こる
サァァァァァァァァ……ッ
まるで砂が落ちるような音
それは男達の手や足が徐々に消えていく音だった……！
自分達の体が消えていくのを目の当たりにした男達は狼狽し始める
「え……？な、何だよこれ！どうなってんだ⁉」
異常な光景に一誠とアーシアも戦慄し、狼狽えるプレイヤー達にシドが告げる
「良いこと教えてあげる。もしも、この『クロニクル』をプレイして負けたプレイヤーは――――この世から消滅する。つ・ま・り……死んじゃうんだよ♪」
「「――――っ⁉」」
シドの言葉に一誠とアーシアは絶句、プレイヤー達もワナワナと恐怖に震える
「……消……滅……っ？」
理解が追い付かなかったが、消えていく自分の体を見てようやく目の前で起きている現象に気付く
否、思い知らされると言った方が正しい……
そこへ新とリアス達も集まってきたが、既に遅すぎた
目の前で人が消滅していく惨状を目の当たりにして、同じように言葉を失う

「い、嫌だ……！何だよ！死にたくねえよぉぉっ！」
「助けてぇぇぇ！助けてくれぇぇぇっ！」
「アア、アアアアアアアアアッ！嫌だァッ！嫌だアアアアアアアアッ！」
発狂し、泣き叫ぶプレイヤー達……だが、残酷で無慈悲な現実は止まってくれない
敗北したプレイヤーは次々と消滅していき、最後の1人も――
「アアアアアアアアッ！助けてッ！助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
恐怖、絶望に彩(いろど)られた表情で一誠に助けを求めるが……叶わず消滅していった
その場にいたプレイヤーは全て死亡(ゲームオーバー)を迎え、シドが元の姿に戻る
「どう、イッセー先輩？こんなにエキサイティングなゲームは他に無いでしょ？」
生き生きした表情で言うシドに対し、一誠は拳を震わせる
「……お前ぇ……ッ！なんで、こんな酷い事を……ッ！」
「酷い？酷いのはさっきの人達の方でしょ。戦おうともしない先輩もマヌケだけど、それを良い事に大勢でフルボッコにしたんだよ？群れなきゃ何も出来ない、弱っちい人間(クズ)のくせに――許せないんだよ。そんな奴らが偉そうにふんぞり返ってるのがさぁ」
一般人、人間を憎々しげに見下すシドは更に話を続ける
「だって、力を持ってない奴らが世界の中心だなんておかしいでしょ。先輩達も力があるのにヒッソリと生きていこうとか、ヌル過ぎて嫌になっちゃうよ。――だから、こ

の『クロニクル』を作ったのさ」
「……何だと……っ⁉」
「『クロニクル』は人間を楽しませるゲームじゃない。この世から弱っちい人間を消す為のデスゲームなんだよ」
『クロニクル』を始めた目的を明かし始めたシド
その目的とは……弱い人間を消し去る事だった……
あまりにも理不尽かつ残虐な目的に戦慄する一同
シドは続けて言う
「勿論、目的はそれだけじゃないけどね。とにかく、のうのうと生きているだけの弱っちい人間なんていらない。低レベルなモンスターなんて持ってても無駄、それと同じさ」
「同じ、だと……っ？……ふざけんなよ……ッ！あの人達は一般人なんだぞ⁉それをお前は――――」
「殺したって言うつもり？残念っ、力を持った時点でそいつは〝一般人〟じゃない。力を持てば、誰だって〝一般〟や〝普通〟と言う領域から逸脱する。だから、僕が殺したのは〝力を持ったのに弱い人間〟――――そういう奴らなんだよ」
……あまりにも酷く、あまりにも狂った考えだった
自ら危険な代物を振り撒いておきながら、殺した相手を終始クズ呼ばわり

シドの態度は逆鱗に触れるには充分すぎた

「この……外道ッッ！」

激怒したリアスが極大の消滅魔力を撃ち放つ

しかし……シドはそれを片腕で難無く弾き飛ばし、邪気を含んだ笑顔で言う

「先輩達だって、こんな風に悪者（わるもの）を攻略していったんだよ？攻略された苦しみと痛みは……攻略された者にしか分からない。タップリ味わいなよ、ゲームで攻略される側の気分を」

それだけ言い残したシドは転移用の魔法陣を展開し、発光と共にその場から姿を消した

グレモリー眷属だけが残され、アーシアは一誠の治療をする

シドの凶行、目の前でプレイヤー達が死んだ惨状に対し、何も出来なかった一誠は悔しさに歯噛みするしかなかった

何度も地に拳を打ち付け、涙まじりに吼える

「ちくしょう……ッッ！ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」

一誠の慟哭（どうこく）に呼応したのか、静かに雨が降り始める

しかし、無情な悪夢（クロニクル）は終わらない……

蛇は言葉を弄（ろう）して獲物を喰らう……

雨が止まない夕暮れ時、グレモリー眷属はオカルト研究部部室に集まっていた
部室内は重苦しい空気に包まれ、誰一人として緊迫状態を解けずにいた
当然であろう……
事の顛末を聞いたアザゼルも苦虫を噛み潰したような顔付きで、机に拳を打ち付ける
「……やってくれやがったな、あいつら……ッ！弱い人間を消し去るだと？ふざけやがって……ッ！」
憤（いきどお）りを抑えられないアザゼル
無理もない……
『クロニクル』のボスキャラは〝プレイヤー以外の者〟の攻撃では決して倒せない上、更に強さを増していく
プレイヤー達も自分達以外の者は〝アイテムを出現させるレアキャラ〟と認識している為、止めようとしてもプレイヤー達に襲われる……
現に一誠はプレイヤー達からの総攻撃を受け、アーシアも危うく標的にされるところだった……

そして、プレイヤー達が負ければ――――死ぬ

「……アジュカから連絡があった。この数時間で『クロニクル』の死亡者が５０００人を超えたそうだ」

その報告に部室内の全員が戦慄した

たった数時間で５０００人以上の死亡者（ゲームオーバー）……

駒王町（くおうちょう）だけでなく、世界中でこのデスゲームがプレイされているので被害状況は甚大なものだった

リアスが立ち上がって言う

「アザゼル！直ぐに各メディアを通じて知らせるべきよ！このままだと被害は広まるばかりだわっ！」

「そんな事は分かってる！いの一番にそうした！……だが、それも出来ないんだよ……！通信系統の術式全てが妨害されているんだ！どの勢力も、どのメディアも……！今アジュカが通信妨害の術式を解除しようとしているが、プロテクトが何重にも施されている上に――――解除しても直ぐに新しいプロテクトが掛けられちまう……！」

「それじゃあ……俺達には何も出来ないって事なんスか⁉このまま大勢の人が死んでいくのを、黙って見てるしかないんですか⁉」

「大元を叩くにしても、奴らが何処から攻めてくるか分からん……！クソッタレ！まさ

か、造魔がここまで搦め手を張り巡らせるとは……！」
アザゼルが憎々しげに吐き捨て、他の皆も造魔の妙手・奇策に歯噛みするしかなかった
通信妨害もされ、『クロニクル』に干渉する事も出来ない
まさに八方塞がり、背水の陣を強いられていた……
何か案が無いかと考えていたアザゼルだったが、ふと不審な点に気付く
「……？ちょっと待て。考えてみれば、おかしくないか？」
「おかしいって何が？」
「最初にお前らが現場に駆け付ける時、その場所の情報は誰から聞いた？」
「誰って……新が教えてくれて――――」
一誠の言葉を機にグレモリー眷属の視線が新の方に向けられる
新は壁際に寄り掛かったまま、終始無言だった
アザゼルが更に指摘する
「これだけ情報操作が封じられているのに、新が何故その場所を知っていたんだ？」
「「――――っ」」
核心を突かれ、新はハァと溜め息を吐き――――廃工場の場所を知った経緯を話した
自分も『クロニクル』に関する情報を手に入れられず四苦八苦していたところで、ユ

ナイト・キリヒコが目の前に現れ――彼が教えていった事も……

その話を聞いてアザゼルは納得しつつも、解せないと言った感じの表情をする

「……奴の魂胆が全く見えんな。何の為に俺達に情報を流した?」

「俺もその点に不信感を抱いたが、はぐらかされたよ。とにかく……シドの他に主犯として動いているのはキリヒコで間違いない。それに……」

「それに?」

「おそらくだが、あいつはこの状況を楽しんでやがる……。解決手段を見出だせない俺達が右往左往する様を見て……。だから、あの時――俺に情報を明かしたんだと思う」

確かにその通りかもしれない

以前、魔獣騒動が終結した直後――彼は見せしめとして、神風の消滅を記録した映像を三大勢力間に流出させてきた

他人の神経を逆撫でするような非道な映像を……

バウンティハンターの任務時にも対峙したが、キリヒコの得体の知れない恐ろしさと不気味さは未だに尾を引いている

「二度の対峙で分かった。……ユナイト・キリヒコ――奴は生粋の邪悪、天性の悪党だ。これから先、どんな卑劣な手段で来てもおかしくない」

「ああ、だろうな。とにかく奴の言動には最大限の注意を払え。――――このまま泣き寝入りすれば、それこそ思う壺だ」
　アザゼルが真剣な面持ちで言う
「俺達が『クロニクル』に干渉できない以上、大元たるキリヒコとシド――――この両方を止める他ないだろうが……今は衝突しても、返り討ちにされる可能性が高い。だから、包囲網を張れ。シトリー眷属、この町に溶け込んでいるスタッフにも総出で探索してもらう。見つけたら直ぐに連絡を取り合え」
　アザゼルの言葉にグレモリー眷属の面々が無言で頷いた
　死亡者が出た事に嘆いていても、状況は好転しない
　だが……新は微かに気付いていた
　〝探すだけではダメなんじゃないか〟と――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

『結局、成果は1つも得られずか……』
　あれから更に時間が経過して日は落ち、外は既に暗い夜に満ちていた
　町中を駆けずり回ってもキリヒコとシドの行方を掴めず、ただただ時間が過ぎていく

だけ……
無駄に費やしてる間にも『クロニクル』の死亡者は増えるのみ
三大勢力どころかバウンティハンター協会、裏社会経由の情報網さえも掻い潜られ、まさに不毛な鼬ごっこ……
アザゼルやリアス達からも情報は一切無し、新は次第に苛立ちを募らせていた
『クソ……ッ！これじゃあ、まるでピエロだ……ッ！バカげた余興を続けて、嗤われるピエロそのもの……』
キリヒコの思惑通りに動かされ、右往左往している現状にイラつき、建物の壁に八つ当たりする新
いくら壁を蹴ったところで無駄……
苛立ちは消えず、この現状も変わったりしない
新はこんな事をしても時間の無駄だと気付き、反省するように溜め息を吐く
それから束の間の休息と情報を求めて、行きつけの酒場に足を運んだ
しかし、そこで得られたのは休息だけで――――情報は手に入らずじまい……
マスター・イスルギに聞いても『クロニクル』に関する新しい情報は皆無、ただ酒を飲むだけで終わりそうになっていた
「随分と血相を変えてるな？今日から三連休だってのに、何をそんなに追い込んでいる

んだ？」
「三連休は返上だよ……。一刻も早く『クロニクル』を止めなきゃならねえってのに、情報が全く掴めない……っ。このまま黙って見てるしかねぇのかって思うと、情けなくて腹立たしくなっちまう……」
新は愚痴をこぼして2杯めの酒を飲み干す
休息も早々に終わろうと代金を払い、酒場を出ようとした――――その時だった
「なあ、新。〝ピンチはチャンス〟って言葉を知ってるか？」
「え……？」
マスター・イスルギが唐突に発した言葉に、新は思わず足を止めて振り返る
イスルギはそのまま話を続けた
「お前さんは今、ピンチに陥（おちい）っている。ピンチってヤツは相手を追い込む為だけのものじゃない。ピンチだからこそ、逆にチャンスでもある。思わぬ所から出てくる活路、僥倖（ぎょうこう）、それを見つけられるかどうか。そして、そのチャンスに手を伸ばせるか否か――それで勝つか負けるかの分かれ道が決まる」
「ピンチは、チャンス……」
「そうだ。例えば……目の前に崖があって、その崖の向こうには金銀財宝が顔を出して待っている。ただし、その崖を繋ぐのは1本の狭い橋のみ。渡れる距離だとしても足の

幅しか無い橋から落ちれば即死、そんな状況があったとしよう。お前さんならどうする？」

謎かけらしき問いを提示するマスター・イスルギ

新は少し考えるような素振りを見せるが……

「あー、ダメだな。そんなんじゃダメだ」

「はっ？ちょっと待てよ。まだ答えてもいないのに――――」

「迷ってる時点でダメなんだよ。今のお前は――――昔よりも決断力が弱くなってる」

「……どういう事だ？」

「言葉の通りさ。昔のお前は自堕落でも、スパッと物事を決めていた。なのに、今はグダグダと考えて――――いつまで経っても進もうとしない」

「そう言われても……相手が相手だ。何を仕掛けてくるのか分からない、どれだけ痛手を負わされるのかも分からない。下手をすれば、そのまま相手の思惑通りに事を運ばされて……最悪の事態に落とされるかもしれないんだぞ。今回の敵は『禍の団（カオス・ブリゲード）』や闇人（やみびと）とは違う……！根本的に違うんだ！だから――――」

「だから、万全の対策をしてからじゃないと動かないってか？」

新の言葉を遮（さえぎ）り、マスター・イスルギは淡々と続ける

「失敗やリスクは常につきまとうものだ。仕事だろうと何だろうとな。……手は何の為

に付いている？足は何の為に付いている？――――〝動く為〟に付いてるんだろ？失敗やリスクを恐れて動かないのは、年金と預金だけが頼りの老人がする事だぜ」

「――――っ」

「確かに築き上げてきた者にとって……リスクを恐れ、挑戦しないと言うのは賢明な判断だろう。だが、それは逆に言えば〝貴重なチャンスを失う本当の痛手〟にもなる。お前は現状に於ける打開策を持ち合わせていないんだろ？だったら、ハイリスクを孕んでいようが、失敗に繋がっていようが――――手を伸ばして道を切り開くべきなんじゃないのか？」

「……っ」

「昔のお前は持たざる者だった。だから、前に進んできたんじゃないのか？持たざる者が動かずにいたら、あとはズルズルと後退していくだけだ。それが今のお前のやるべき事か？」

マスター・イスルギの叱咤に新は先程までの自分を恥じた

確かに打開策を見出だせないまま、走り回るのは何もしないのと同じ

『クロニクル』に干渉できないから、大元を探すのは強（あなが）ち間違ってはいないが……それが解決に繋がるとは限らない

そもそも、キリヒコとシドを見つけたとしても倒せなければ意味が無い

この2人の強さは重々(じゅうじゅう)理解している
おそらく、今の新や一誠では太刀打ち出来ないだろう……
ならば、多少の危険を冒(おか)してでも突破口を作り上げるしかない
新は忘れかけていた事を思い出した
「マスター……あんたの言う通りだよ。今の俺はただのバカだ。失敗やリスクがあるのは当たり前だ。それを危惧し過ぎて、この体(てい)たらく……本当にマヌケだった」
「やっと気付いたか。ハングリー時代のお前を」
「ああ、そうだ。失敗やリスクばかりに目を向けていたら本当の成功なんて見えない。見えてこない……！僅かでもチャンスが目の前にぶら下がっていれば――――取る……！取るしかない！たとえ亀裂が行く手を塞いでも、跳べる距離なら――――それを跳び越えていくだけだ！」
新はバチンと自(みずか)らの頬を叩き、己(おのれ)を鼓舞させる
「マスター、湿(しめ)っぽい愚痴をこぼして悪かった。お陰で目が覚めたぜ」
「良い顔に戻ったじゃないか。気張っていけよ」
新は謝礼として余分に酒代を支払い、酒場から飛び出していった

『……そうだ。お前んとこの元総督やご主人じゃあ辿り着けやしない。この結論にはな……。裏の世界で生き、世の中の真理を知った奴だからこそ辿り着ける境地。綺麗事だけを宣（のたま）う甘ちゃんがやったところで、喰われるのがオチだ。必要なのは覚悟――〝本物の覚悟〟を持った者だけが、勝利への糸口に手が届くんだよ。……新、お前はそれを忘れかけていた。〝仲間〟なんて甘ったれたモノを築いたせいでな……』

酒場を飛び出してから2時間後、新は捜索を続けていた
無論、『クロニクル』の大元たるキリヒコを見つける為に……
しかし、その意図は別にあった
あらゆる場所を探し回ってみたものの、やはり見つけられず
捜索範囲を広げようと思った――その矢先、覚えのある気配が新の全身にまとわりついた
任務時に対峙した時と全く同じ気配……
新は直ぐに気配の先を追った

まるで誘っているかのように気配を飛ばし、新もそれを承知で追っていく
そして、辿り着いたのは――薄暗い路地裏
息を整え、辺りを見渡す新
すると……予想していた通りの人物が姿を現す
「Ｂｏｎｊｏｕｒ」
それは『クロニクル』の大元にして『造魔』の幹部――ユナイト・キリヒコだった
「やっぱりな、思ったより早く会えて助かったぜ」
「それはそれは、随分と熱烈なアピールですね。あなた方が躍起になって我々を探しているのは知っています。……ですが、残念ながら通信は出来ませんよ？既に通信術式を遮断する術を掛けていますので。Ｓ’ｉｌ　ｖｏｕｓ　ｐｌ▪ｉｔ」
「いや、その方がかえって好都合だ。お前に訊きたい事があってな」
その申し出にキリヒコは不敵に笑みながら「何ですか？」と訊ね、新は口を開く
「どうすれば『クロニクル』を終わらせる事が出来る？」
率直すぎる問いにキリヒコの目が一瞬見開かれるが、再度不敵な笑みを漏らす
「Ｔｒ▪ｓ　ｂｉｅｎ……！まさか、私に直接聞いてくるとは……ッ。冥界での魔獣騒動でも感じましたが――やはり、あなたは私達と同じ側のヒトのようですね」
「お前と同じ側？」

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ。突破口の糸口を掴む為なら躊躇わず、臆せず踏み込んでくる。あなたはそんな人種のヒトです」

「……それは買い被り過ぎだ」

「Ｐａｒｄｏｎ？」

「全く臆してないってわけじゃない。俺だって人の子だ、それなりにビビってる。お前の不気味さ、胡散臭さも理解している。ただ……臆して立ち尽くすだけじゃあ、結局は何も解決しない。打開策を見出だせない。だから、俺はお前を探したんだ。……それが危険を孕む細い橋だとしてもな」

新は多少の危険を冒してでも『クロニクル』を止めるつもりでいる

今、最優先すべきは一刻も早く『クロニクル』を終結させる事

その為なら――――敢えて危険地帯に、死地に飛び込む……！

それが新の出した結論であり、忘れかけていた覚悟でもある

パチ……パチ……パチ……パチ……

キリヒコは称賛するように拍手を贈った

「Ｃ’ｅｓｔ　ｓｉ　ｂｏｎ……！素晴らしい限りです。三大勢力のＭａ　ｐｕｃｅにも聞かせてあげたい程ですよ。――――良いでしょう、特別です。あなたに素敵な贈り物を献上しましょう」

そう言ってキリヒコは懐(ふところ)に手を入れ、〝ある物〟を取り出す
取り出したのは――『クロニクル』の小型端末だが、それは一般人に対して出回っている物とは違っていた
「こちらは特別にチューンナップしたマスター版の『クロニクル』端末です」
「マスター版？」
「Ｏｕｉ(ウィ)、こちらのマスター版は通常版と違い――使用者のスペックや能力をそのまま反映する事が出来ます。謂わば――あなた自身がプレイヤーとして参加すると言う事です」
――〝新自身がプレイヤーとして『クロニクル』に参加〟――
そうすれば、『クロニクル』の終結を早める事も出来るだろう
しかし、キリヒコは油断ならない相手
決して裏が無いとは言えず、口車に乗るのも危険だ……
だが、今は――今だけはその疑心と恐れを消すべきだった
たとえ自分の身が危険になろうとも、この先にどんな罠が待ち受けていようとも――
――『クロニクル』を終わらせる為にやるしかなかった
躊躇(ちゅうちょ)しても犠牲者が増えるだけ、今ここで迷うのは愚策……
新は酒場でのマスター・イスルギから貰った叱咤を思い出し、危険な賭けに乗る

「……それがあれば、このふざけたゲームを終わらせる事が出来るんだな？」
「Ｏｕｉ、少なくとも可能性は上がります。後は……あなたの決意次第です」
「……言っておくが俺は――――俺達はお前の掌で躍り続けるつもりはねぇぞ。必ず、必ず一泡吹かせてやる」
「Ｊｅ　ｖｏｉｓ……楽しみにしていますよ。あなたの覚悟と行く末を――――」
キリヒコは〝マスター版の『クロニクル』端末〟を新に向かって投げつける
投げられた端末は意思を持ったかのように周りを漂い――――新の体内へ入り込んでいく
悪い物が侵入してくる異物感に顔を歪めるが、体内に入りきった事で直ぐに解消される
これで新は『クロニクル』の正式なプレイヤーとして登録された……
キリヒコが軽く会釈をする
「それでは『クロニクル』のクリアを目指して頑張ってください。また、お会いしましょう――――Ｓａｌｕｔ」
キリヒコはそう宣言した後、黒い霧と共に姿を消した
独り路地裏に残された新は踵を返し、その場から立ち去っていく
『……本当に食えない野郎だ、あいつは。俺の行動と覚悟に少しも揺らいでいない。ま

るで俺がこうなる事を予期していたかのように……』
歩く道中、新は胸を擦(さす)り――その手が首元にも移行する
違和感を感じずにいられなかった
まるで首筋にネットリとまとわりつき、今にも首を締めて殺しに掛かる――獲物を捕らえた蛇のような違和感……
もしかしたら新は、自ら蛇(みずか)の罠(キリヒコ)に飛び込んでしまったのかもしれない……
だが、今は悠長に構えている時間など無い
デスゲームを終わらせる為に、犠牲者の増加を阻止する為に……新は賭けに出た
この選択が正しいかどうかは五分五分(ごぶごぶ)と言ったところだろう
〝それでも、何も出来ない悪循環を断ち切れるなら――やるしかない〟
そう自分に言い聞かせ、今の自分を正当化させる
『リアスやアザゼルが知ったら、怒るだろうな……』

「――と言うわけで、彼は見事に嵌(は)まってくれました。あなたの誘導が効いたのでしょう」

『そいつは朗報だ。……いや、当然の結果か。この煮詰まった状況を打破するには、背に腹は替えられんからな。これで「クロニクル」の第2段階は完了ってか？』

「Ｏｕｉ、後はグレモリー眷属を踊らせるだけです。それにしても、あなたは随分と信頼されているようですね。少しの叱咤を贈っただけで簡単に蛇の口へ飛び込んでくれるのですから……。彼にとって――あなたはよっぽど〝良いヒト〟なんでしょう」

『ハハハッ、俺がか？冗談っ、俺が〝良いヒト〟なわけねぇだろう。あいつは最初から見誤っていたのさ。――蛇が2匹いる事になぁ』

「私には疑いを向けておきながら、あなたの事は信頼している……。フフッ、実に滑稽な話です」

『そもそも信頼なんてモノを持った時点でダメだ。――〝信じる〟と言う行いは、裏を返せば〝疑う〟のを放棄するって事だ。だから、その先に潜むモノが見えなくなる。根拠も無く盲目的に信じるだけじゃあ……いつか喰われる。〝本物の蛇〟は――そういうところも利用するからなぁ』

「Ｊｅ　ｖｏｉｓ、それもまた人生の教訓ですね」

『だが、それで良い。ヤツには良い発破になる。その蛇の口から抜け出せるかどうか……。そして、抜け出した後にどうなるのかも見所だ』

レベル2か3でレベル50と戦えって無理ゲーだよね？

「何だよ、何なんだよこれ……っ！こんなのって有りかよ……⁉」
「どんだけ攻撃しても倒せない……⁉反則だろ……っ！」
刻(とき)は深夜
戦慄し、狼狽の声を上げる『クロニクル』のプレイヤー達
その原因は――目の前にいるＰ（プレイヤーキラー）Ｋの存在だった
赤と青の眼を光らせ、複数のプレイヤーから受けたであろう傷を修復しながら歩みを進めていく
継(つ)ぎ接(は)ぎだらけの死霊とも言える姿で迫るのは――異形化したユナイト・キリヒコ
彼の持つ不死の再生能力により、如何なるダメージも瞬時に治癒・回復――たとえ肉体が吹き飛ばされようとも僅か数秒で完全復活を果たしてしまう……
シドと同じく『クロニクル』のＰ（プレイヤーキラー）Ｋキリヒコは右腕の装置(デバイス)を向け、危険なオーラを流し込む
『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ（インフェクション）　Ｃｒｉｓｉｓ（クライシス）　Ｗａｖｅ（ウェイブ）……‼‼』
不気味な音声が鳴った直後、装置(デバイス)の銃口から禍々(まがまが)しい波動が幾重にも放射され、プレ

イヤー達に襲い掛かる
半数は不恰好ながらも逃げたが、残りのプレイヤーは成す術も無く波動の餌食となってしまう
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！」
深夜に響くプレイヤーの悲痛な断末魔
ＰＫの放つ波動をくらったプレイヤー達は、そのまま灰となって消滅する
「あ……あぁぁぁ……っ！」
プレイヤーの消滅を目の当たりにした他のプレイヤー達は怯え、恐怖に駆られてジタバタと手足を動かして逃げようとする
しかし、恐怖が勝ったせいで体を思い通りに動かせず――――ＰＫの更なる追撃が迫る……
「――――Ａｄｉｅｕ」
『Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ　Ｃｒｉｓｉｓ　Ｂｕｒｓｔ……!!!』
再度おどろおどろしい音声が鳴り、右腕の装置から無数の光弾が放たれる
光弾は意思を持ったかのように縦横無尽にうねり、残ったプレイヤー達の背中を貫いた

「……たず、げで……っ！」

助けを求めても、その願いが届く事は無い

残ったプレイヤー達も体が粒子化し――消滅していった……

その場にいる全てのプレイヤーが消滅したのを機に、キリヒコは異形の姿を解除

右腕の装置（デバイス）に消滅したプレイヤーの残骸（粒子）を吸収させ、吸収を終えると邪悪な笑みを浮かべる

「だいぶ溜まってきましたね。この1日で死亡者（ゲームオーバー）が８７４５人、実に良い成果です。その数だけ人間の愚かさ、浅ましさ、欲深さがこの世に広がっている……」

キリヒコは装置（デバイス）を自ら肉体に挿（みずか）し込み、採取したデータを注入する

作業が終わると、キリヒコの体から一層邪悪なオーラが滲み出し――生物のように揺らめく

「――Ｔｒ▪ｓ（トレ）ｂｉｅｎ（ビアン）……！楽しくて仕方ありませんね。あとは揺さぶりを掛けたグレモリー眷属がどう動くのか。そして、『クロニクル』の最終局面を目の当たりにした時――どう壊れてくれるのか……っ」

三連休2日めの朝……と言っても、まだ日は昇っていない時間帯
新は他の誰よりも早く目を覚ましてしまい、2階から下りて1階のリビングでコーヒーを飲んでいた
その理由は――キリヒコとの密談の件が執拗に頭を過ったからである
新は『クロニクル』を終わらせるべく、キリヒコの提案を呑み――マスター版の『クロニクル』端末を自身の体内に埋め込んだ
自分が『クロニクル』のプレイヤーとなってボスキャラを倒す……
しかし、それは多大な危険と隣り合わせの提案だった
承知の通り、キリヒコは全く掴み所を見せない策士であり――本人の戦闘能力も極めて高い
このマスター版の端末とて、何かしらの術式や工作を施しているのはほぼ間違いない
それでも新はこの危険な提案を呑んだ――否、呑むしかなかったと言うべきか……
通常の状態では『クロニクル』に干渉する事が出来ない上、ボスキャラを倒しても強化再生させてしまう
そうなれば、『クロニクル』の犠牲者は更に増すばかり……
早急にこのデスゲームを終わらせる為、新はキリヒコの提案を呑むしかなかったのだ
『……もしかしたら、俺は蛇の口の中に飛び込んだのかもしれないな。リアス達に前以

て話したところで、分かってくれるとは思えなかったわけだし……』
新はアザゼルやリアス達にも話さず独断でキリヒコの提案を呑んだので、やはり後々になってから糾弾される事を懸念していた
……今だけはそれも覚悟していなければならない
しかし、何もせずに場を煮詰まらせては悪化の一途を辿るのみ
全ては『クロニクル』を終結させる為……
『必ず、必ずこのふざけたデスゲームを終わらせてやる……っ。その時はまとめて借りを返してやる……！蛇に喰われるなら、その前に口の中を引っ掻き回してやる……！』

時刻は午前9時、グレモリー及びシトリー眷属の面々がオカルト研究部の部室に集まっていた
アザゼルが皆の前に映像を映し、『クロニクル』に対するこれからの動向を話す
「お前らも既に知っているだろうが、この町だけじゃなく世界中のあらゆる都市で『クロニクル』と呼ばれるデスゲームが横行している。使用者の数も多い上、今の俺達には干渉する事が出来ない。アジュカも通信妨害の術式解除に躍起になっているが、相変わら

ず進展無しだ」
　アザゼルは映像の魔法陣を動かし、『クロニクル』の被害状況を映し出す
「軽はずみな気持ちでやり始めただけに、犠牲者が後を絶たない。……既にこの1日と数時間で９０００人以上の人間が死んだ」
　現時点での被害状況にシトリー眷属は絶句、新達も苦虫を噛み潰したような表情となる
　このまま放置していれば、確実に死亡者の数は激増するだろう……
「一般人を……こんなくだらない事に巻き込んでんのかよ……!?その『造魔(ゾーマ)』って奴らは……ッ!」
　映像を見ていた匙が怒り心頭の顔付きで体を震わせ、ソーナを含めたシトリー眷属も怒りが込み上げてくる
　アザゼルが話を続ける
「腹立たしい気持ちは分かる。ただ、それは奴らにぶつけてやれ。このクソゲームをおっ始めやがった元凶にな。まずはシドとキリヒコの行方を追う。捜索範囲はこの町を中心とした数十キロ圏内だ。他のスタッフにも包囲網を張らせている。見つけ次第、お前らに連絡が行き届くようにな」
「問題は……〝プレイヤー達をどうやって鎮圧するか〟よね。彼らに見つかったら襲撃

を受けるのは間違いないわ。アザゼル、その点についての対策はあるのかしら？」

リアスの意見はもっともだった

『クロニクル』のプレイヤーは自分達以外の存在を〝アイテムを落とすレアキャラ〟としか認識していないので、彼らの前に姿を見せればたちまち狩りの対象にされてしまう

相手は一般人なのでこちらは攻撃を加える事が出来ず、下手にダメージを与えてしまえば死に至らしめる……

リアスの問いに対してアザゼルが答える

「その点も対策は考えた。あの後、グリゴリの連中に急ピッチで作らせた。――――コイツだ」

アザゼルが机の真ん中に出したのは、防災ライトのような器具だった

「先生、何なんすかコレ？」

「コイツは自分の魔力を媒介にする睡眠装置だ。魔力をスプレーの様に噴霧して、浴びせた相手を眠らせる。要は暴徒鎮圧用スプレーと似た感じの物だと思ってくれれば良い。プレイヤーをコイツで眠らせて、安全圏まで運び出す。今のところプレイヤーへの対処法はこれぐらいだろうな……」

アザゼルも完全な対処が出来ないゆえに複雑な顔となるが、プレイヤー達の凶行を止めるには効果的かもしれない

全員がその鎮圧用の特殊装置を手に取り、アザゼルが言う
「良いか、お前ら。今の俺達に出来るのは〝死亡者の増加を少しでも食い止める〟事だ。もし、シドとキリヒコに遭遇してもプレイヤーの避難を優先させろ。神経を逆撫でするような事をやられても――今は耐えろ」
その言葉を合図に全員が真剣な面持ちで頷いた

「……クソッ。出てこなくて良い時は出てくるくせに、なんでこう言う時に限って出てこねぇんだか」
捜索を開始してから約３時間
新は単独で担当区域を捜索しているが、未だにシドとキリヒコを見つけられずにいた
他の皆とも連絡を取り合っているものの、そちらも目撃情報は無し
アザゼルやスタッフからの連絡も来ず、新はシドやキリヒコ、『クロニクル』のボスキャラが出没してこない事に対して不満を漏らす
無駄に時間と体力だけが消耗され、仕方なく休息を取る事にした
近くの牛丼チェーン店・松乃屋（まつのや）の前に立ち寄り、いざ入ろうとした時だった

「あら、奇遇ね」
ふと聞こえてくる女性の声
声のした方向に顔を向けると、そこにはレイナーレ達がいた
彼女は普段がボンテージファッションの為、人目に付かないよう天野夕麻(あまのゆうま)の時の服を着ている
隣にはカラワーナ、ミッテルトも引き連れているが――今回は更にもう一人いる
「どうも」
「あれ、ミカサ？」
先日より新が教育・指導する事になった新人ハンターのミカサ・ヨルハニア
本来なら新は指導する立場にあるのだが、『クロニクル』の対応に追われており、指導どころではない
それでも協会からの任は達成しないといけないので、レイナーレ達に協力を煽った
出会った当初の飲みっぷりが好印象だったのか、レイナーレ達は快(こころよ)く引き受け――早くも共に行動する事になったそうだ
レイナーレが新に話し掛ける
「朝から忙しいって言ってたのに、こんな所で何してるのよ？」
「現在進行形で忙しかったんだよ、ノンストップで歩き回ったんだから。んで、昼飯を食

おうと思ったんだ」
「それで牛丼屋に来たわけ?侘しいわね」
「お前らの酒代で稼ぎが消えていってるんだ!侘しくもなるだろ!だいたい、お前らこそ何やってんだよ?」
「ウチらは梯子酒の途中で、今ちょうどランチタイム～♪」
ちなみに彼女達は先程まで１０軒以上の居酒屋で飲んできたらしい……
〝また出費が嵩みそうだ……〟と新は顔を引きつらせ、ミッテルトがトコトコと新に歩み寄っていく
「つーわけでっ、ア～ラタ♪お腹を空かした可愛いウチらにご飯奢ってね☆」
本人の意思に関係無く、不幸と言うものは簡単に訪れてくる……
世の中とは常に理不尽で不条理の渦中にある事を思い知らされる新だった
観念した新はレイナーレ達を引き連れて松乃屋に入り、人数分の食券を買う
買ったのは勿論、定番の牛丼（味噌汁付き）と生卵
席に着き、食券を店員に渡してから数分後――――注文した牛丼と卵が運ばれてきた
小皿に卵を割り、それを溶いてから牛丼にかける
レイナーレ達も見様見真似で溶いた卵を牛丼にかけた
牛丼を掻き込む新、ミカサはそれを物珍しそうに見つめる

「それは……そうやって食べる物なのですか」
「ん？ああ、そうだけど……まさか、牛丼食った事ないのか？」
「はい」
「何処の箱入り娘だよ。……ほら、お前もやってみろ」
ミカサは新の言う通りに卵を割り、それを溶いてから牛丼にソッとかける
箸を手に取り、卵が掛かった牛丼を一掬(ひとすく)い――――口に運ぶ
『……これが、ぎゅうどん……』
彼女にとって未知の食べ物だったのか、その後もゆっくりと箸を進めるミカサ
〝いったい何処の世間知らずの家から飛び出してきたんだろうな……〟と脳裏を過(よぎ)らせている刹那――――
「おい！向こうの方でボスキャラが出たってよ！それも2体だぜ！」
「マジかよ！早く行かねぇと横取りされちまうじゃんか！」
「全員で狩れ！いち早くレベルを上げるんだ！」
外からそんな喧騒が聞こえてきた
新は我が耳を疑い、箸を止めてしまう
『こんな時に……っ！しかも、タイミングの悪い……っ！』
新は心中で毒づきつつ、牛丼を急いで掻き込み――――味噌汁で流し込む

急ピッチで食べたので噎せたが、胸を叩いて強引に止める
「アラタ、どうしたの?そんなに急いで――――」
「急用が入ったんだよ!良いな、お前らはゆっくり食ってろ!この件は俺が片付ける!」
レイナーレの言葉を遮って、新は直ぐに店を飛び出していった
話が全く見えず怪訝そうに窺うレイナーレ達
ミカサも走り去る新の後ろ姿をただ見つめるだけだった……

「……ふぅっ、これで全員か、兵藤?」
「ああ、言っただろ?やりにく過ぎるって」
「しかし、襲ってこられると恐ろしいもんだな。相手はマジで一般人な上に、こっちの話は全く聞いてくれねぇ……。『造魔』を毛嫌いする気持ちが理解できたよ」
アザゼル特製〝一般人は眠っちまえライト〟をしまい、眠らせたプレイヤーを転移用魔法陣で転送させる匙
匙の他にも一誠、アーシア、仁村留流子、花戒桃が同じように『クロニクル』のプレイヤー達を眠らせ、転移用魔法陣で堕天使系列の医療施設へと転送する

プレイヤー達に出くわした彼らは問答無用で襲撃されるが、アザゼルから貰った睡眠装置(眠っちまえスイッチ)によって事なきを得た
日頃から超常の存在と戦っている一誠達にとって、一般人の相手は〝戦いにくい〟の一言に尽きるものだった
レアキャラとして襲撃され、万が一にも攻撃すればプレイヤーを死に至らしめてしまう……
更に『クロニクル』のプレイヤーではないので干渉も出来ない
今の一誠達に出来るのは、こうしてプレイヤー達を眠らせ、安全圏まで隔離するのみ……
「こんな事が世界中で起きてるって考えたら、身の毛もよだつよな……」
「大変だねぇ、先輩達も」
「他人事(ひとごと)みたいに言う――な……？」
匙が言葉を詰まらせ、ゆっくりと声のした方向に視線を移す
そこには――件(くだん)の元凶の1人、シド・ヴァルディが「ニンッ♪」と無邪気な笑顔を振り撒いていた
突然の登場に匙は「うわぁっ！」と素っ頓狂な声を上げて距離を取り、一誠達も驚愕する

「お、お前いつの間に⁉」
「イッセー先輩、そんなに驚く?今時エンカウントなんて珍しい事じゃないんだよ。――と言っても、そこのコンビニでから揚げ買ってたら、たまたま先輩達を見つけただけなんだけどね☆」
　シドは青い看板が目印のコンビニ・〇ーソンで買ってきたであろうから揚げを１つ摘まみ、パクっと口に運ぶ
　やがて食べ終わると空になった容器を捨て、腕を伸ばしたり屈伸したりと準備運動を繰り返す
「先輩達の企みは分かってるよ。『クロニクル』を止めに来たんでしょ?でも、残念っ☆『クロニクル』はプレイヤー以外の干渉を一切受け付けないから、先輩達がいくらボスキャラを倒しても無駄だよ。プレイヤー以外の人が倒せば倒す程、ボスキャラはレベルアップしていくんだから。それに――」
「それに?」
「さっきプレイヤー達を眠らせて、何処かに転送してたでしょ?そんな事をしても無理っ。その程度の策じゃ『クロニクル』は止められないよ」
「悪いけど、止めさせてもらうぞ。これ以上お前らの好き勝手にされてたまるかってんだ!」

「プププッ、分かってないなぁ。あのキリヒコが〝何の対策もしてないわけが無い〟って言ってるのに。プレイヤーを引き離したりしたら、それこそ死亡（ゲームオーバー）を早めちゃうだけなのにさ♪」
「な……何だと⁉それ、どういう事だ⁉」
シドの不吉な言い回しに声を荒らげる一誠
一転して焦りが見え始めた一誠達を見て、シドは再び不敵な笑みを浮かべる
「知りたい？でも、教えてあ～げないっ♪ネタバレしたら面白くなくなっちゃうもの」
「てめえ……っ！」
「まあ……先輩達が遊んでくれるのなら、考えてあげても良いよぉ？」
無邪気な笑顔で邪気に満ちた言葉を放つシド
明らかに挑発している……
アザゼルから〝シドやキリヒコと出くわしても、プレイヤーの転送を最優先させろ〟と言われているが……今の一誠と匙に耐えるなんて利口な事は出来なかった
「……ざけんなよ、てめえっ！だったら、今すぐここでぶちのめして白状させてやる！」
「イッセーさん⁉」
「元ちゃん、落ち着いて！」
「元士郎先輩！アザゼル先生から言われた事を忘れたんですか⁉」

アーシア、花戒、仁村が2人を止めようとするが――シドの挑発に乗ってしまった一誠と匙は、彼女達の制止を聞かずに飛び出してしまう
それを見てシドはニヤリと笑う
「そうそう、そう来なくちゃ♪イッセー先輩はそういうヒトだもんね。――そうじゃなきゃ心が踊らないよっ！」
シドは手元から黒い魔法陣を展開し、自らの体を飲み込ませる
魔法陣が消え去り、シドは戦闘形態となって現れた
メタリックブルーの装甲に身を包んだスマートな出で立ち――『連携操師』を身に纏い、匙もヴリトラの力を解放して黒炎を両腕に纏わせる
「焼き払ええっ！」
匙が手を前に突き出すと、ヴリトラの黒炎が勢い良く地を走り、シドを焼こうとする
シドは直ぐにその場から横っ飛びで回避し、そこへ一誠が追撃を掛ける
背中のブーストを噴かし、飛び出した一誠が右拳でシドに殴りかかっていく
シドは闘牛士のように身を翻して拳打を躱し、すかさず一誠の後頭部にパンチを叩き込む
その勢いで一誠の体は地に落ち、体勢を立て直すべく身を起こそうとするが――今

度は蹴りを入れられる
込み上がる窒息感と鈍痛に兜の中で顔を歪ませ、後方に飛ばされる一誠
シドは更に攻撃を加えようとするが、何かに腕を掴まれる
腕に絡まったのは――――黒炎に包まれたラインのような物
その先を目で追ってみると……匙の腕から黒炎のラインが伸びていた
匙が持つヴリトラ系 神器（セイクリッド・ギア）の1つ――――『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』
対象に接続する事で魔力を奪い取る神器（セイクリッド・ギア）である
「てめえの魔力を、根こそぎ奪ってやる！俺の黒炎は死んでも消えない呪いの黒炎だ！」
匙が怒気を込めて叫ぶが、シドはそのラインを掴み――――
「それじゃあ……離しちゃダメだよッ！」
思いっきり引っ張って匙を空中に引き上げ、背負い投げのように地面へ叩き付けた
盛大に叩き付けられた匙は血反吐（ちへど）を吐く
更にシドはラインを引っ張って匙を引き寄せ、そのまま匙の腹に拳を打ち込んだ
まるでヨーヨーで遊ぶかの如く匙をいたぶる
何度も引き寄せ、何度も殴る蹴るを繰り返す
自分の腕が黒炎で焼かれているのもお構い無し……
あまりにも狂気じみた気迫に匙はやむ無くラインを切り離し、地面を転げ回る

あのまま接続を続けていれば、匙は殴殺(おうさつ)されていただろう……
ラインを切り離されてもシドは攻撃の手を緩めず、倒れている匙に向かって走り出した
「いつか決めるよ、稲妻シュートォッ!」
某サッカー番組の台詞を言いながら、匙を蹴り上げようとする
シドの蹴り足が匙に命中する刹那――――青色の力強い結界が匙を覆う
ガキンッ!と跳ね返されるシドの蹴り
その結界を発生させていたのは――――シトリー眷属『僧侶(ビショップ)』の花戒桃だった
「やらせないわ」
彼女の両腕に腕輪が出現しており、その腕輪がオーラを発している
それを見たシドは標的を変えたのか、花戒の方へ走っていく
しかし、そこへシトリー眷属『兵士(ポーン)』の仁村留流子が行く手を阻む
「このぉっ!」
軽やかなフットワークを駆使して、彼女の蹴りがシドに炸裂する
顔を蹴られたシドは一瞬動きを止め、花戒と仁村の両者に視線を移す
「……へ～っ、面白いね、それ」
興味を持ったように仁村の両足に指を差すシド

彼女は両足にだけ鎧を纏っており、そこからオーラを揺らめかせていた
「もう、こうなった以上――――後には引けませんよね。アザゼル先生から貰った人工神器（セイクリッド・ギア）の威力、見せてやりますよっ！」
「防御は私に任せて！アーシアさんは兵藤くんと元ちゃんの回復をお願いします！」
仁村が半（なか）ば破れかぶれに力強く宣戦布告し、花戒もアーシアに回復を促す
アーシアは手元から回復のオーラを発生させ、一誠と匙にそれぞれ飛ばす
シドは再度仁村に攻撃を仕掛けるが、花戒の腕輪から発せられる結界に何度も弾かれ、仁村の徒手空拳（としゅくうけん）と蹴りがシドに決まっていく
その光景を見て、一誠は驚くしかなかった
「すげぇな……シドの攻撃をモノともしないのか」
「ああ、アザゼル先生から貰った人工神器（セイクリッド・ギア）をこんなに早く実戦で使うとは思わなかったが……お陰でシトリー眷属の戦力は増大されたってわけだ」
匙が得意気にそう言う
花戒が持つ人工神器（セイクリッド・ギア）は一瞬で対象物を結界で覆う『刹那の絶園（アブローズ・ウォール）』
一定の距離内であれば瞬時に結界を発生できる上に、生半可な攻撃ではビクともしない堅牢さを誇る
仁村の人工神器（セイクリッド・ギア）は『玉兎と嫦娥（プロセラルム・ファントム）』――――太ももまで覆う脚甲（きゃっこう）だ

噴出するオーラによって足の速度と蹴りの破壊力を上げる
シトリー眷属の殆どが人工神器（セイクリッド・ギア）を取り入れ、戦力を強化させていたのだ
立て続けに攻撃をくらったシドは――――テンションと哄笑を上げる
「……ププッ、アハハハハハッ！面白いっ、面白いよ！イッセー先輩だけじゃないんだね！他のヒト達も結構やるんだ！やっぱりそうじゃなきゃ面白くないよッ！そうやって僕と遊んでくれるヒトがいるから、ゲームはやめられないんだッ！アハハッ、アハハハハハッ！」
シドの狂気じみた笑いに花戒と仁村は畏怖し、更に警戒心を高めた
一頻（ひとしきり）笑ったシドはフゥッと息を吐き、眼孔を光らせて睨み付ける
「じゃあ……僕もちょっとだけ本気を出しちゃおうかなッ！」
シドの狂気は留（とど）まる事を知らない……

火の手はもう、足を焼いてんだよ……！

シドが〝ちょっと本気を出す〟と高らかにそう宣言した直後、両手を広げて大きな魔法陣を展開

そこから発せられる波動が彼の周りに強化メダルを生み出す

錬成した強化メダルを自在に操り、その中から3枚を選別して自分のマスク部分に投入する

『Ｋｏｕｓｏｋｕ（高速）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｋｏｕｔｅｔｓｕ（鋼鉄）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

3種類の音声が流れ、シドの全身が大きく脈動し、金属のような光沢を得る

そして、超スピードでその場を駆け出し――あっという間に仁村との距離を詰めた

何が起きたのか理解できず、眼前に現れた事に反応すら出来なかった仁村

シドは間髪入れずにパンチと蹴りを決め、仁村を後方へと吹き飛ばす

攻撃力倍増と硬質化による強化の重ね掛け

その威力は凄まじく、仁村は一瞬にして身体の自由を奪われてしまった

「――――っ⁉留流子っ！」

「さ～て、そこのお姉さんにはキツいのをお見舞いしちゃおうかな！」

シドは再び強化メダルを大量に錬成して、選別作業に取り掛かる

3枚を選ぶと即座にマスク部分に投入

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）‼』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）‼』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）‼』

今度は攻撃力倍増の三段重ね……

シドの全身から尋常じゃない程のオーラが噴出する

危険を察知した花戒は勿論、『刹那の絶園（アブローズ・ウォール）』を展開――――青い結界で自身を覆った

しかし、鬼気に満ちたシドが前蹴りを繰り出し……結界と衝突

バリィィィィンッ！

攻撃力をとんでもなく倍増させたシドの強烈な蹴りは結界を容易く蹴破（けやぶ）り、その衝撃が結界ごと花戒を遠くまで吹き飛ばした

近くの壁に叩き付けられた花戒は血を吐いて倒れ伏す

「……っ！花戒っ！仁村ぁっ！……てめえええええええええっ！」

匙が体を起こしながら、彼女達の名を叫び――――怒号を上げてシドに立ち向かってい

く

匙は手から膨大な質量の黒炎、ヴリトラ系神器（セイクリッド・ギア）の1つ――『邪龍の黒炎（ブレイズ・ブラックフレア）』を放つ

黒炎が炎の壁となってシドを四方から囲み、更に足下からも炎の壁が出現する

こちらもヴリトラ系神器（セイクリッド・ギア）の1つ――『龍の牢獄（シャドウ・プリズン）』

その中ではヴリトラの呪いの炎が渦巻き、相手の動きを封じる

更にそこへ『漆黒の領域（デリート・フィールド）』も付加して、魔法力や魔力を削る

ヴリトラ系神器（セイクリッド・ギア）の数々を駆使した攻撃

さすがのシドもこれには……と思った矢先――

ブオンッッ!!

黒炎の壁が風圧によって一挙に消し飛ばされ、赤い拳を振り抜いたシドの姿が現れる

シドのもう1つの戦闘形態――『鉄拳闘士（ファイターフォーム）』

炎のように赤い装甲と巨大な拳による打撃を特化させた攻撃重視の姿である

「これが噂に聞くヴリトラの炎かぁ、心が踊るよッ！」

そう叫んだ刹那、シドの姿が一瞬で消え――気付いた時には匙の眼前で構えていた

シドの拳が匙の腹部に突き刺さり、匙の体が宙に浮き上がる

そのまま空中コンボの拳打ラッシュを叩き込み、トドメに跳び上がってパンチを打ち

下ろす
顔面に巨大な拳がめり込み、地面を抉りながら吹き飛ばされる匙
彼は多量の土煙と血にまみれて倒れた……
「アハハハハハッ！もうダウンしちゃったの？それじゃあダメだよッ！」
「……ッ！アーシア！回復を頼む！」
「は、はい！」
シドにやられた花戒と仁村の治療に当たっていたアーシアは、直ぐに匙の治療に取り掛かる
その間に一誠は体を起こし、怒りの眼差しをシドに向けて飛び出していった
背中のブーストを噴かして距離を詰め、拳を打ち込もうとするが……シドも拳打を打ち込んでくる
お互いの拳が衝突するものの、今の一誠は本調子ではないので呆気なく押し負けてしまう
「アレアレ～？どうしたの、イッセー先輩？何か調子悪そうだねぇ」
「……てめえには関係ねぇだろ……っ！」
口では強がるが……先の魔獣騒動以降、ドライグが眠り続けている為に本来の赤龍帝（せきりゅうてい）の力を発揮できずにいる

『真・女王(クイーン)』もトリアイナも使えない今の状況では、シドに勝つどころか一矢報いる事すら叶わないだろう……

そんな一誠を嘲笑うかのようにシドは拳に纏った炎を幾重にも飛ばす

一誠は飛んでくる炎を拳で打ち消していくが、距離を詰められて強烈なパンチを叩き込まれる

両腕を交差させてガードするも、体勢ごと打ち崩されてしまい――――シドのアッパーカットが腹に深々と突き刺さる

グブッと血を吐き出す一誠の体が〝くの字〟に折れ曲がり、シドが腰を回して右ストレートを振り抜いた

一誠の体が宙を舞い、背中から倒れ込む

打ち抜いたシドは伸びをして戦闘形態から元の姿に戻る

「まだまだだねぇ、イッセー先輩。そんな低レベルじゃ僕とまともに遊べないよ？本気で『クロニクル』を止めたかったら……もっともっとレベルを上げなきゃね？」

「ぐ……が……ぁ！」

またもやシドに一方的に打ちのめされた一誠は悔しさのあまり、ギギギと歯を食い縛る

シドは腰を捻ったり、首を回したりして体を解(ほぐ)した後、転移用の魔法陣を開く

「じゃあねっ、イッセー先輩。暫くしたらまた遊ぼうよ♪」
軽く手を振り、シドは魔法陣の中へと消えていった
一誠はアーシアの治療を受けながら、良いように弄ばれた事に憤慨する
『まだ……！また、あの野郎に手も足も出なかった……っ！チクショウ……！チクショウ……ッ！』

一方、単独で別行動を取っていた新は人気の無い空き地にて戦っている最中だった
野次馬の〝『クロニクル』のボスが出現した！〟と言う話を耳にして、現場に直行
今まさに2体のボスキャラと対峙していたのだ
1人は以前に見かけたソルティーユ・クロコッショー
もう1人は杖を携える悪の魔法使いと言った感じの風体をしたボスキャラ――――アブラカタ・ブラーゲ
そして、彼らの周りに散乱している装備品の破片……
新が現場に着いた時、既に多くのプレイヤーが死亡と成り果てていた
また犠牲者が増えてしまったのは痛ましい事だが、気落ちしている暇など無い

新は両手から黒い火竜を生み出し、２体のボスキャラ目掛けて解き放つ
それに対してソルティーユは電撃、ブラーゲは杖から魔法による砲撃をそれぞれ最大限の威力で放った
しかし、新の火竜は２つの攻撃をものともせず喰らい――そのままボスキャラ２人を焼き尽くす
『せっかくレベル２０にまで上がったのにっ！この敗北はしょっぱ過ぎる～っ！』
『我が最大級のパワフル魔法が通じないとは……！せめて、せめてマ〇ンテ並の魔法を覚えておけば良かった……！』
名残惜しさ満載の捨て台詞を遺し、ボスキャラの２人は跡形も無く消滅していった
『Ｇａｍｅ　Ｃｌｅａｒ!!』
『クロニクル』のボス２体を倒した新は元の姿に戻り、フゥッと息を吐く
「……いきなり２体のボスが出てきてくれたのは好都合だ。奴の口車に乗るのは癪だが、躊躇している暇は無い。一刻も早くこのクソゲームを終わらせないとな」
ボスを倒したのは良いが、問題は〝この経過と経緯をリアス達にどう説明するか〟だった……
〝キリヒコに話を持ち掛けられ、『クロニクル』のプレイヤーになった〟等と普通に話してしまえば怒られるのは明白

新は疲れた頭に鞭を入れて、納得できるような言い訳を組み立てながら帰路に着く

――しかし、それをただで見過ごす程〝ヤツ〟は甘くなかった……っ

『出だしは好調のようですね。……さて、そろそろあなた方のもとに出向かせていただきますよ。信頼関係が壊れ、絶望を犇めかせるのも「クロニクル」の醍醐味ですから。別働隊は何人かのプレイヤーを無傷で保護したようですが、その程度の浅知恵では「クロニクル」を止める事など出来ません。――Ｂｏｎｎｅ　ｃｈａｎｃｅ』

刻は既に夜を迎え、オカルト研究部の部室に戻ってきた面々

アーシアの治療を経た一誠達も何とか復調し、各々の席に着いている

アザゼルも同伴しており、現状報告に入る

「まずは『クロニクル』のプレイヤーの保護状況から伝える。この町を含む近辺で保護したプレイヤーの数は５７人。今までの被害人数から見ても雀の涙ほどの数だが……奴らの思惑通りにされるよりマシだ。確保したプレイヤーは堕天使系列の医療施設に転送し、回復措置を施す。アジュカにも『クロニクル』の端末を渡して、術式と構造を急ピッチで解析してもらっている。そこから対抗術式を生み出せるかもしれんからな」

アザゼルの現状報告に〝ほぼ〟全員が安堵の息を漏らした
現在の『クロニクル』死亡者は既に１００００人を超えてしまっているが……たった数十人の保護だけでも成果は上々と言える
更に端末を直に調査・解析させる事で構造を知り、何らかの対抗策も構築できるかもしれない
〝ここから反撃に出られる〟――――誰もがそう思っていた
ただ１人、新だけが素直に喜べない表情をしているのを除けば……
『……そう簡単に上手く事が運ぶものなのか……？』
新は不気味な違和感を拭えずにいた
最初の時と同じく、自分の首筋にネットリと絡み付き――――ジワジワ絞め殺そうとする蛇がいるかのように……
続いてアザゼルが今後の方針を話そうとした時だった
コン……コン……コン……コン……
突如、部室の扉をノックする音が鳴る
今の時間帯に来客の予定は無い筈
いったい誰なのかと全員が訝しげに扉の方に視線を移した直後、扉がゆっくりと開かれる……

しかし、開かれた扉の先には誰もいない
全員が〝おかしい〟と疑問に思う中、新は背後からの感じる気配を察し――そちらに視線を移す
「――っ。……本当に目的が読めねぇ野郎だな、お前は」
そう呟く新の視線の先に――来訪者がいた
「Ｃｏｍｍｅｎｔ　ａｌｌｅｚ―ｖｏｕｓ、Ｍａ　ｐｕｃｅ」
何処かで聞き覚えのあるフランス語を交えた口調
窓の枠に優雅に腰掛け、軽く手を振っている
まともな知り合いなら文句の１つでも言って笑いを取っている事だろう
しかし、眼前にいるのは決して笑いを取れる人物ではない……
その場にいたほぼ全員が目を見開き、アザゼルが憎々しげに言う
「……わざわざ敵側から来訪してくるとはな。いや、この場合は不法侵入と言うべきか」
「あなた方とはお初でしたね。Ｂｏｎｊｏｕｒ、私がユナイト・キリヒコです。本日は他愛も無いご挨拶に来ました」
来訪者――もとい、不法侵入者は件のデスゲーム『クロニクル』を扇動した張本人だった……っ
キリヒコの登場に全員が臨戦態勢となり、特にゼノヴィアは殺気と共にデュランダル

の切っ先を向ける
「ここで黒幕が出てくるとは……直ぐにその首を斬り落としてやる！」
「やめろ、ゼノヴィア。コイツはそう簡単に殺れるような相手じゃねぇ」
ゼノヴィアを手で制する新
キリヒコの危険性を1番よく知っているので、ここで戦えば無事では済まされない
ゼノヴィアは納得がいかない表情のまま、ひとまずデュランダルを下ろす
「んで、『クロニクル』とか言うくだらんクソゲームを始めた首謀者さまが何の用だ？ただ他愛も無い挨拶に来たってわけじゃねぇだろう？」
アザゼルが怒気を交えて訊ねると、キリヒコは意味深な笑みを浮かべる
「Ｏｕｉ、追い詰められているであろうあなた方の様子を窺いに来ました。あなた方には時間と余裕が無くて、我々には時間も余裕もある。――ですので、どれだけ苦しんでいるのかを間近で拝見させていただこうと思いまして」
「さすが陰で魔獣騒動を焚き付けた黒幕、嫌味と悪意が満載じゃねえか……！だがな、これ以上お前らの好き勝手にはさせねぇぞ」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、怖いですね。たかがゲームでそのような殺気を振り撒かれるとは。私達は日々を退屈に過ごしている人々に刺激を提供しているだけですよ」
「何が刺激だ、悪趣味なクソゲーで民衆を煽りやがって」

「あなた方のビジネスと同じですよ。退屈な日々を劇的に変えて過ごしたいと言う細(ささ)やかな欲求を叶える――――謂わば等価交換です」
キリヒコは一切悪びれる様子も無く、冥界の〝悪魔稼業と真理は同じ事〟だと言い放った
確かに悪魔は人間と契約を交わし、対価を貰ってその者の願いを叶える
しかし、キリヒコが人間に支払わせているのは欲望と命……
命懸けのデスゲームを焚き付け、人間の欲望を刺激し、そしてＰＫ(プレイヤーキラー)と言う立場で殺す
人間側にとっては、どう足掻いても死亡(ゲームオーバー)しか待ち受けていない……
一方的な虐殺をいけしゃあしゃあと〝等価交換〟と述べるキリヒコに、アザゼルは怒りの色を一層濃くする
「ふざけやがって……ッ！何が等価交換だ？最初から死亡エンドしか描いてないクソゲーだろうが……ッ！」
「カジノ等の事業と同じですよ。大元があっさりと負けてしまっては事業として成立しない。全てを公平にする必要はありませんが、〝公平感〟は客に与えなければなりません。冥界・人間界問わず、事業とはそう言うものなのですよ？」
キリヒコは窓枠から降り、タブレット型の端末を手元に出現させて話を続ける

「その証拠にプレイヤー側にも有利な条件を付けてあげたのですから」

〝有利な条件〟と言う台詞に疑問を浮かべる面々

キリヒコはタブレットを操作して、ある場面を宙に映し出す

それは新がキリヒコと密会したと同時に『クロニクル』のプレイヤー登録をした、あの夜の場面……

キリヒコは密会と会話の内容も包み隠さず暴露

密会していただけでも驚愕を禁じ得ないのに、更に『クロニクル』のプレイヤー登録までしていたのだから愕然とした

『……本当にイヤな野郎だな、コイツは……ッ！』

新は何も言い返せず、キリヒコを睨み付けるが――――当の本人（キリヒコ）は薄ら笑いを浮かべるだけだった

キリヒコが軽く会釈する

「この通り、そこのＭｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）にはチャンスを与えました。自らが（みずから）プレイヤーとなり、この『クロニクル』を終結させられるかどうか……。本人の能力をそのまま反映させたプレイヤー、これ以上に無い程の有利な条件で未曾有（みぞう）のチャンスと言っても良いでしょう？――――Ｓ’ｉｌ（シル）　ｖｏｕｓ（ブ）　ｐｌ（ブレ）・ｉｔ」

キリヒコはタブレットを閉じ、新に視線を移して口の端を吊り上げる

恐らく、この暴露も前以(まえもっ)て画策していたのだろう
新以外の皆が愕然とする中、アザゼルが新に問う
「……お前、黙っていたのか？ヤツと密会していた事を」
静かに怒りを孕ませながら問うアザゼルに対し、新は「……ああ」と頷(うなず)くだけだった
「何故、ヤツの話に乗った？」
「……それしか方法が無いと思ったからだ」
淡々と答える新、震えて舌打ちをするアザゼル
それを見て笑うキリヒコは更なる追い打ちをかける
「ああ、そう言えば……あなた方はプレイヤーを確保していましたね。無傷で捕らえて『クロニクル』の進行を妨害するおつもりですか？――Ｎｏｎ(ノン)　Ｎｏｎ(ノン)　Ｎｏｎ(ノン)、そのような事をしても無駄ですよ」
「どういう意味だ？」
アザゼルが訊いてもキリヒコは不敵な笑みを浮かべるだけ
問い詰めようとした矢先、アザゼルのもとに小型の通信用魔法陣が展開される
応答に対応してから直ぐにアザゼルの顔付きが変わった……
「何だと……っ!!本当か……っ!!」
焦燥に駆られた声音と共に表情の険しさが増していき、歯噛みしながら通信用魔法陣

を切る
　リアスがアザゼルに訊ねる
「どうしたの、アザゼル？」
「……アジュカから連絡があった。……たった今、確保してきたプレイヤーが死んだ」
「「「――――っ⁉」」」
　それは誰もが驚く知らせであり、一連の会話を聞いたキリヒコは〝予想通り〟と言った表情で笑っていた
「残念でしたね。『クロニクル』の妨害も先読みして、先手を打たせてもらいましたよ？端末には特殊な術式を施していましてね。『クロニクル』を1度でも起動すれば、そのプレイヤーは術式に犯され――――規定時間内に起動しなかったプレイヤーは自動的に消滅するようプログラムしたのです」
　要約すれば正当な手段で『クロニクル』を終わらせない限り、プレイヤーは『クロニクル』の脅威から逃れる事は出来ない……
　1度でも打てば、それ無しでは生きられない麻薬と同じ……
　キリヒコの卑劣極まりない手腕に全員の表情が憤りに彩られた
　リアスが憤怒の形相でキリヒコを睨み、憎々しげに告げる
「……腐ってるわ……ッ！あなたは……腐りきってる……ッッ！」

悔しさにまみれるリアス達を見て、キリヒコは更に邪悪な笑みを浮かべた
「口では何とでも言えましょう。ですが、私はまだ良心的な方です。世の中には臓腑の底まで腐りきった連中が、掃いて捨てる程います。そのような者と欲望はまさに因果関係にある。上っ面しか見ていないあなた方に、この真理を読み解く事は出来ないでしょうね」
「良心的だぁ?どの口が言いやがる……っ！詐欺師・ペテン師のクソ野郎が……っ！」
アザゼルもリアスと同じく憤怒の形相で吐き捨てるが、この状況下では負け惜しみにしか見えない
完全にキリヒコのペースで事が進んでいた
「て、め、えええええええ……っっ！」
一誠は既に具現化した籠手で殴りかかろうとしていたが、新がそれを制する
新の態度に納得がいかない一誠は、新の胸ぐらを掴んで詰め寄った
「新ッ！さっきから何なんだ！なんで、こんなクソ野郎の肩を持つんだよ‼コイツのせいで松田と元浜も巻き込まれたんだぞ！」
「ここで挑発に乗ったら、それこそ奴らの思う壺だからだ」
「いの一番にヤツの取引に応じたお前が言えた義理か?」
アザゼルに痛いところを突かれた新は反論せず、ただ黙するだけ……

　事実ゆえにその点だけは言い返せない
「新、何故俺達に言わなかった？一言だけでも告げなかった？告げていれば、何らかの対策を打てた筈だ。お前はそれを自分から摘み取ったんだぞ！」
「Ｏｈ（オー）　ｌａ（ラ）　ｌａ（ラ）、ご自分の失態と無能を他人に擦（なす）り付けるとは……さすが堕ちた天使の言う事は理不尽極まりないですね」
　キリヒコの横槍に対してアザゼルは「黙れ！」と一蹴するが、キリヒコはただ笑って受け流すのみ
　アザゼルは再度、新に問いただす
「新、お前自身も言ってたよな？〝コイツらの挑発に乗るな〟と。そう言ったお前が、舌の根の乾かぬ内にコイツと密会して取引に応じるのは充分な裏切り行為じゃねえか！」
「……なら、この状況でどうしろってんだ？完全に詰み、手も足も出なくなった――この状況で他に何か手はあるのか？」
　新は静かに問うが、その態度にカチンと来た一誠が更に激怒する
「――ッ！新ぁッ！お前、言うに事欠いて……ッ！開き直ってんじゃねぇぞ！いつから、こんなクソ野郎の言う事を聞き入れるようになったんだ⁉目を覚ませ！またふざけた事を抜かしたら、目を覚ますまでぶん殴るぞッ！」
　一誠に続くように他の者からも非難の声が飛び交う

新が事情を少しでも話してさえいれば、ここまでの混乱は招かなかっただろう……
しかし、それは目の前で状況の悪さ、打つ手の無さを突きつけられても未だに理解していない者の言動に過ぎなかった
新もキリヒコの挑発に易々と乗るつもりは無いが、これと言った打開策が無いのも事実
その結果、キリヒコの提案に乗るしか無かった……
新も煮え湯を飲まされながら、苦渋の決断を下したのだ
ここまで現状の悪さが明らかになっても、アザゼルを始めとする皆が納得も理解もしてくれない
そんな不毛な空気が新のイライラを覚醒させてしまう……
「……いつまで寝ぼけた事を言ってやがる……っ」
新は一誠の手を振り払い、ドンッ！と拳を机に叩き付けて怒号を放った
「この……ボケどもッッ！目を覚ますのはお前らの方だ！今ので分かっただろ⁉たった２日間で１００００人以上の人間が、こいつらの仕掛けたクソゲームで殺されたんだぞッ！しかも、保護したプレイヤーは自動的に死ぬ仕掛けまで施されて……こちら側の考えも手段も悉く潰されている！俺達は今、絶望的に切羽詰まってんだよッ！」
「だからって……何もこんな奴の口車に乗る事は無いだろ！先生やアジュカさんに解決

策を見出だしてもらえば――」

一誠の反論に対し、新は「ボンクラがッッ！」と怒号を上げて一蹴する

「だったら、他にどんな方法がある？それは今この場で出せる方法なのか⁉この事態を早急に解決できるものなのか⁉それとも安全性を考慮したものなのか⁉」

「そ、それは……っ」

「よく考えろ！このまま3日・4日と時間が過ぎたらどうなると思う⁉犠牲者の数は増加するだけだ！そんな状況で今更〝他の解決案を探す〟ってのは足止めされてるのと同じなんだよ！」

「新……っ」

「お前らは自分達の置かれている状況を全く分かっちゃいない。――奴らが放った火の手は、既に俺達の足を焼いてんだよ……ッ！この状況で〝他の方法を探せ〟とか、〝止めようか〟なんて発言は寝言同然……ッ！前しかねぇんだ！突っ走って、突っ走って、その先にある亀裂を飛び越えるしかねぇんだよッッ！」

他の解決策が無いからこそ、新は現状を踏まえて荒々しく熱弁した

目の前には跳べそうな距離の亀裂、背後からは轟々と燃え盛る火の手が迫ってくる……

そんな状況で後戻り、炎の中に突っ込める者がいるだろうか……？

答えは否、火の手から逃れるには亀裂を飛び越えるしかない……っ躊躇すれば焼かれるだけ……

それが新を含め、今の自分達が置かれている立場である……

先程まで異を唱えていたアザゼルも、自分達が置かれている立場の悪さをヒシヒシと痛感した

それでも納得のいかない様子のイリナが1歩前に出る

「で、でも新くん！まだ他にも方法が――」

「いい加減に気付けよ！退路なんて物は……このクソゲームが始まる前から――奴らの手で壊されてんだよッ！」

「新くん……っ。どうして、こうまでして……」

「決まってんだろっ、このクソゲームを一刻も早く終わらせる為だ！犠牲者を次々と増やしたくないなら、俺がこのクソゲームを終わらせるしかねぇんだよ！その為なら多少の危険――いや、大きな危険を孕んでいようとやるしかねぇだろッッ！」

ノンストップで続ける激しい弁論に新は息切れを起こし、論破された他の皆は完全に沈黙していた……

その様子を一部始終、高みの見物を決めていたキリヒコは邪悪な笑みが止まらない

「――Mon pauvre、彼は独りで『クロニクル』の攻略に勤しんでいました。

しかし、その解決策はあなた方には相談できないものだったのです。相談すれば……間違いなく反対してくると思ったからです。私の提供する攻略案を、あなた方が素直に受け入れる筈が無い。その理由は――『造魔』の一員である私が『クロニクル』の大元だからです。……信用されないと言うのは非常にＴｒｉｓｔｅな事です。同情しますよ、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ」

言葉だけ申し訳なさそうに聞こえるが、実態は嘲笑と悪意に満ちていた……

最後にキリヒコは足元から黒い霧を滲み出させて、自分の周りの空間を覆っていく

「さて、これ以上は野暮ですから、私はこの辺りで失礼させていただきます。あなた方のご健闘を心からお祈りしておきますので。それでは――Ａｄｉｅｕ」

黒い霧が完全にキリヒコを覆い隠し、霧が晴れた直後にはキリヒコの姿が無くなっていた

普通なら逃がさんとばかりに動く筈だが……度重なる衝撃の事実と、裏切りとも言える新との取引を突きつけられて――ほぼ思考停止状態に陥っていた

デスゲームの魔手は一般人だけじゃなく、新にまで及んでいた……

何も言えず、何も言い返せない時間が暫し続き――不意に新のスマホが震える

確認してみると……次のボスキャラの位置情報が表示されていた

これは『クロニクル』のプレイヤーにのみ与えられる情報で、逐一ボスキャラの位置

情報が送られてくる
スマホでボスキャラの出現ポイントを確認した新
重苦しい空気の中、何とか言葉だけでも絞り出す
「……黙っていた事と、勝手な行動をした事は……本当にすまなかった。この1件が片付いたら、いくらでも怒ってくれ。ただ……今の状況を理解してくれ。もう、後戻りしている暇は無いんだ……っ」
それだけ告げると、新は静かに部室を去っていった

復活の要（かなめ）は……おパンティー⁉

新が部室を去ってから1時間、部室内は完全にお通夜状態となっていた
『クロニクル』を仕掛けたキリヒコの策略によって打つ手を悉く潰され、もはやどうする事も出来ない……
『クロニクル』のボスキャラはプレイヤーにしか倒せず、プレイヤーを保護しても自動的に消滅
全てに於いて八方塞がりな状況……
アザゼルは悔しげな表情で頭を掻き、リアス達も現状に頭を悩ませる
「……結局、私達に出来る事は……何も無いの……？」
リアスがボソリと呟く
その一言に部室内の空気は更に沈んでしまう
このまま指をくわえて見ているわけにもいかないが、今の自分達に何が出来るのだろうか……？
居ても立ってもいられない一誠は声を荒らげてアザゼルに言う
「……先生！何か良い手は無いんスか⁉このまま黙って見てるだけなんて……俺、やっ

ぱり納得できないっスよ！」
「イッセー、んな事は俺だって分かってる……！分かってるんだ！……だが、さすがの俺にも現状を打開する方法が思い付かん……！新が全てのボスキャラを片付けるのを待つしか――――」
「それじゃあ……新はまた独りで背負う事になるじゃないっスか！」
一誠の一言にアザゼルの口が止まり、一誠は更に続ける
「……俺、バカだった。あんな頭ごなしに怒鳴っちまって……っ。アイツは……新はいつも危険な事をしてきたんだ……っ。今まで独りで生きてきたアイツだからこそ、悩んで……苦しんで……苦渋の決断を下したんだと思う。その苦しさとツラさを――――俺は全く分かっていなかった……！仲間なのに……これからも一緒に歩んでいくダチ公だってのにっ！」
一誠は頭をクシャクシャに掻きむしり、再びアザゼルに言う
「このままじゃ、俺達は肝心なところで役に立たない……新のお荷物になっちまう！少しでもアイツの苦しみを軽くしたい……！その為にも――――俺達はここで立ち止まっちゃいけない筈なんスよ！」
一誠の熱弁にアザゼルは苦虫を噛み潰したような表情で腰に手を当て、少し考えたのち――――映像用魔法陣を展開する

そこにこれまでの『クロニクル』によって死亡した者のリストが映し出され、被害状況を再確認する

ボスキャラによる死亡者（ゲームオーバー）、ＰＫ（プレイヤーキラー）による死亡者（ゲームオーバー）の数……

その中でも特に群を抜いていたのは――ＰＫ（プレイヤーキラー）・シドによる被害だった

「このグラフを見ても分かる通り、シド・ヴァルディによる被害が飛び抜けてやがる。プレイヤーの救出も保護も出来ない以上、取れる方法はコイツを叩くしか無くなった。新を除いたグレモリー眷属、シトリー眷属総出でシドを叩き潰す……！異論のある奴はいるか？」

全員が〝異論無し〟を表すように黙（もく）し続け、アザゼルは一同を見渡してから話を再開する

「良い覚悟だ。……ただ、この方法には１つだけ不安要素がある。――それはお前だ、イッセー」

「お、俺っスか⁉」

「ああ、今のお前は本調子じゃない。ドライグが未だに眠ったままだから、『真・女王（クイーン）』どころかトリアイナも使えない状態だ。今のままだと、また返り討ちにされるのが目に見えている」

アザゼルの言葉は尤（もっと）もだった

ドライグは冥界での魔獣騒動以降、眠りっぱなしなのでイッセーは本来の力を発揮できずにいる

通常の禁手（バランス・ブレイカー）のままでは、規格外の強さを持つシドに勝つのは到底不可能……

頭を悩ませる一誠だが、アザゼルが直ぐに切り返す

「ドライグに関しては1つだけ秘策を用意してある。かなり一か八かだが、上手くいけば形勢逆転できるかもしれない」

「マジスか！そ、それってどんな方法ですか？」

「以前から打診していた件も相（あい）まったものでな。そのキーパーソンとなるのが――――アーシアだ」

アザゼルの言葉を機に全員の視線がアーシアに注（そそ）がれ、アーシアは畏（かしこ）まった様子でペコリと頭を下げる

一誠がアザゼルに訊く

「ア、アーシアがドライグ復活の鍵なんですか？」

「そうだ。詳しくは言えない――――と言うより、今は言わない方が良いかもしれないな。とにかく明日、両眷属総動員でシドを捜索しろ。秘策はそこから始まる。それまでは何が遭ってもアーシアを守り通せ。アーシアがやられたら、完全にお手上げだ」

いつになく真剣な表情のアザゼル

それを見た一誠は勿論、全員が無言で頷(うなず)いた
全員の確認が取れた事で、アザゼルは再度勧告する
「俺達は今まで踊らされ、コケにされてきた……！その代償を一気に支払わせる……！お前らがやる事はただ１つ！――――総掛かりでシドを叩き潰す、その一点だ！俺達に喧嘩売ってきた事を後悔させてやれッッ！」

時刻は深夜２時、新はスマホに表示された廃ビルの中にいた
建物内で鳴り響く金属同士が打ち合う音、時折走る火花が暗闇を刹那に照らす
一頻(ひとしき)りの剣戟(けんげき)が終わり、新は剣を構え直す
対するは……一振りの刀を上段に構える虚無僧(こむそう)のような出で立ちをした異形
無論、この者は『クロニクル』ボスキャラの１人――――カイデン・オーデン
『我が流派と対峙して、立っておられる者を見たのは初めてだ。心より感服する。今までにやって来た者どもは口先だけの小童揃(こわっぱ)いだったのでな』
口振りからすると、既に死亡者(ゲームオーバー)が何人も出ているようだ……
新は早急に終わらせるべく、剣に火竜のオーラを纏わせた

それを見てカイデンも刀にドス黒いオーラを流し込む
暫しの静寂から数瞬、二者の刃が空を
走って暗闇に包まれた世界を彩る
１０回、２０回、３０回と金属音が鳴り響き――暗闇を一閃……！
背を向け合う両者はそれぞれ水平に掲げた刃を下げ――お互いに振り向く
『……死して尚、一片の悔い、無し……ッー！』
最期の台詞を遺し、カイデンは刻み込まれた切り口から血を噴き出し――淡い光と化して消えていった
新は肩で大きく息をして、鎧を解除する
ほぼノンストップで『クロニクル』のボスキャラを討伐している為か、さすがに疲弊の色を隠せなかった
フラフラと覚束ない足取りで廃ビルを出て、少し先の公園のベンチで一休み
背もたれに体を預け、星々が小さく煌めく夜空を見上げる
それから1分……2分……3分と何も考えずに微睡み、目を自然に閉じてしまう
「……」
どれだけ眠りに耽っていたのだろうか
ふと目を覚ますと――見知った顔の女性が自分の顔を覗き込んでいた

「目が覚めましたか」
「顔近っ!!」
突然の接近に飛び起き、勢い余ってベンチから転げ落ちる新
彼の前に現れたのは――――新人ハンターのミカサ・ヨルハニアだった
打った後頭部を擦りながら起き上がり、彼女が何故ここにいるのかを尋ねる
「ミカサ、なんでここに?」
「はい、警邏も兼ねて町の散策をしておりました」
「警邏って……今は深夜2時過ぎだぞ?そこまで徹底しなくても良くね?……あ、ところでウチの酒飲み堕天使どもは?」
「はい、彼女達はあの後に梯子酒を再開して――――20件終えたところで自宅に戻り、床に就きました」
「あれからずっと飲んでたのかよ……っ。こちとら休まず働いてるってのに……っ」
〝今から説教しに叩き起こしてやろうか〟と思ったが、もはや疲労はピークなのでそれも出来ず……
立ち上がるや否や足が縺れ、倒れそうになる
そこへミカサが新の手を取り、「肩を貸しましょう」と言って新を起こす
疲れが蓄積している状態ではどうする事も出来ないので、新は彼女の言う通りにする

しかなかった
「……とりあえず、俺の家に連れてってくれ」
「了解しました」
ミカサは新を連れて新の家へ向かう事に
道中、新は密着している彼女の身体の柔らかさに反応しつつ、重くなっている瞼を必死に堪える
やがて自宅に到着し、ドアを開けようとした時だった
「では、私は警邏の続きに戻ります」
「待て。せっかくだから、お前も休んでいったらどうだ？」
新がミカサを呼び止め、彼女に休むよう言ってきた
そう言われたミカサは――――珍しく疑問符を浮かべた様子で足を止め、振り返る
「休む、ですか？」
「そうだ。お前も気を張り詰めっぱなしだと疲れるだろ？だから、明日の朝まで休んでいけ」
「……それは任務ですか？」
「あのなぁ……何でもかんでも任務任務って考えるなよ。俺達は機械じゃねぇんだ。動く時は動いて、休む時は休む。自分の意思を尊重せず動こうってヤツは――――ただの機

械と同じだ。良いから休め」
新はミカサの手を引っ張り、家の中へと連れ込んでいく
ミカサは何も言わず、何も答えられず、ただ新に引っ張られていくのみ
リビングに辿り着くと――新は近くにあったソファーに倒れ込み、上着を掛け布団の如く被ってそこで寝る事にした
「じゃあ、俺はここで寝るわ……。正直もう限界……。2階の俺の部屋で好きに寝てくれ。あと、明日は昼過ぎに起こしてくれ……」
「……分かりました、お休みなさい」
ミカサは軽く会釈するが、言い切る前に新は眠りに落ちたようで寝息が聞こえてくる
新が眠ったのを確認したミカサは階段で2階に上が――ろうとはせず、新の傍に座り込む
そして、寄り添うように身体を預け、彼女もその場で眠った

ジ　ブ　ン　ノ　イ　シ　ヲ　ソ　ン　チョ　ウ
キ　カ　イ　ジャ　ナ　イ……？

ワタシハキカイジャナイ……？
データニソンザイシナイコト
バヲ
ニンシキ
ジョウホウヲアップデート
ソレニトモナウカンジョウヲ
ケン
サクシマス
ケンサクチュウ
ケンサクチュウ……

翌朝、兵藤家地下にある巨大な転移型魔法陣
そこに新を除くオカルト研究部のメンバーとシトリー眷属全員が集まっていた
召集を受けた一同にアザゼルが話を切り出す
「……昨日も言った事だが、今の俺やお前らにこのクソゲーを止められる術（すべ）は無い。ま

だ納得のいかない奴もいるだろうが、それを踏まえた上で狙いを一点集中させる。その内容は単純明快――シド・ヴァルディを止めろ」

いつも以上に真剣な面持ちで告げるアザゼル

デスゲーム『クロニクル』の犠牲者は日に日に増加しており、その中でもシドによる被害は甚大なものだった

故に……今回の出陣をシド・ヴァルディの撃破に専念させる

それは並大抵のものではないが、『クロニクル』自体を止める事が出来ない以上――やるしかない……

一誠はここで1つ気になっていた事をアザゼルに訊いてみる

「先生、やっぱ気になります。今回の件はアーシアが重要な役割をするって。それって……いったいどういう理由なんスか?」

一誠の問いに対してアザゼルは答える

「以前から打診していた事なんだが、アーシアには魔物との契約、もしくは召喚魔法に向いている線が濃厚でな。オーフィスにも〝アーシアにドラゴンとの付き合いを教えてやってくれ〟って頼んでおいたんだ」

アザゼル曰く、アーシアには召喚魔力、あるいは召喚魔法の才能があるらしい

ちなみにここで語られてはいないが……アーシアは契約が難しいとされる蒼雷龍

（名前はラッセー）と契約を結んでおり、今ではアーシアの使い魔となっている
アーシアと友好な関係を築き、通常のギブアンドテイクな契約ではなく――――絆を得ての契約を果たした
「シド・ヴァルディを止めるにはイッセー、まずはお前が本来の力を発揮できるようにドライグの意識を呼び戻さなきゃならん。そこで重要なのがアーシアと言うわけだ。アーシアの準備が整い次第、一気に攻勢に転じようってのが今回の作戦だ」
「なるほど」
納得する一誠がアーシアに視線を向けると、当の本人は何故か顔を赤くしていた
アザゼルがアーシアを呼ぶ
「アーシア、オーフィスにアドバイスを貰いながら進めてきたから問題は無いと思うが――――頼むぞ。龍神のありがたい加護ってのを信じろ」
「は、はい、とても恥ずかしいですけど……が、頑張りますっ」
アザゼルの言葉にアーシアが応じる……しかし、彼女の顔は更に赤くなっていた
気になるものの、転移型魔法陣が強い光を放ち始めたので全員が準備する
転送される直前、アザゼルが皆に言う
「良いか、お前ら。ここで奴らの鼻っ柱をへし折ってやれ。散々ふざけた真似をしてくれたツケをたっぷり支払わせるんだ」

全員が頷(うなず)き、シドの撃破に向けて転送の光に包まれた

「最上級のと～りむね肉～で唐揚げ～っ♪唐揚げ～っ♪」
とある町外れの鉱山付近にて、シド・ヴァルディは陽気に歌っていた
何処かで聞いた事のあるようなフレーズを意気揚々(いきようよう)と歌い、手に持っている唐揚げを食べる
彼の周りには死屍累々(ししるいるい)と横たわり、苦しみ悶(もだ)えるプレイヤー達がいた……
既に意識を失った者、体の激痛に苦しむ者
涙を浮かべ――――「死にたくない……！」、「助けて……！」等と命乞いをする者
そんな事をしたところで彼らの願いは届かず、無情にも消滅していく……
絶叫、後悔、悲嘆、負の感情が彩(いろど)られた叫び声が虚(むな)しく木霊する
プレイヤーの消滅を確認したシドは唐揚げを食べ終え、口元を舌でペロリと舐める
「これで死亡者(ゲームオーバー)が１５３７８人か。快調快調～♪ここらでイッセー先輩が乱入イベント起こしてくれたら、盛り上がるんだけどな～」
シドが屈伸しながら〝次は何処へプレイヤー狩りに向かおうか〟と算段を立ててい

ると――――彼の期待するイベントが舞い降りる
「見つけたぞ、このゲーム野郎」
聞き覚えのある声がする方向に視線を向けると……転送され、ここまでやって来た一誠達がいた
彼らの姿を見た途端、シドは無邪気な笑みを浮かべる
「アハハッ♪やっぱ来てくれたんだ、イッセー先輩。騒ぎを起こせば速攻で駆け付けてくる――――もはやどうしようもない性（さが）だね。でも、そうまでして僕と遊んでくれるって事を考えると嬉しいよ♪」
「気色悪い発言すんな！こっちはバトルジャンキーのお前と違って、平和に生きたいんだよ！」
「平和ねぇ……。本当にヌルゲー発想が好きだね、先輩は。その為にわざわざ連敗記録を更新しに来たのかな～？」
シドの挑発に一誠だけでなく、全員が険しい顔つきとなる
早速シドは手元に黒い魔法陣を眼前に展開し、それを潜（くぐ）って戦闘形態（バズリングフォーム）と化した
「イッセー先輩、僕を止めたいなら――――それなりに本気を出してくれないと。いつまでもヌルゲーじゃあ面白くないよ」
〝確かに今のままではシドに勝てない……〟

これまで一誠は何度も煮え湯を飲まされてきた
ゆえに――――ドライグの意識が元に戻ってもらわなければならない
一誠は再度ドライグを呼び掛ける
「……ドライグ。聞こえてるか、ドライグ？」
一誠が宝玉に問い掛けるが……反応は無い
〝まだ寝てる？〟
そう思っていたら――――『……』と何らかの反応はあるようだ
「ドライグ？おい、どうした？」
一誠が再度尋ねる、すると――――
『……お兄ちゃんは誰？』
……変な台詞が出てきた
「……ド、ドライグさん……？」
『うん、僕はドライグ。ドラゴンの子供なの』
「え、えええええええええええええええええええええええええええええええええええっ⁉」
一誠は目玉が飛び出して叫ぶしかなかった
他の皆も今のドライグの声が聞こえたのか、困惑するばかり

シドに至っては首を傾げる始末……
誰もが混乱する中、ソーナが言う
「……もしかすると」
「ソーナ会長、何か分かりますの？」
朱乃の問いにソーナが答える
「……これは仮定ですが、元々兵藤くんによる『おっぱいドラゴン』関連の影響で赤龍帝ドライグは精神的に参っていました。それにプラスして先日の魔獣事件で、ドライグは兵藤くんの蘇生に力を使い、眠る時間が多くなってしまった。力を使い過ぎた結果、未だ完全に復活できず、軽い幼児退行になったのかもしれません」
「……単にイッセー先輩のおっぱい関連で疲れ切って退行したような……」
ソーナの解説に小猫がボソリと言う
つまり、一誠の度重なる〝おっぱいドラゴン・センセーション〟で心身共に疲労が溜まり、それが振り切ってドライグの精神年齢が幼児に戻った――――と言う事だろう……
途端にドライグは震えた声音になる
『……おっぱい……おっぱい、こわいよ……』
なんという事でしょう――――『おっぱい』１つでドラゴンが現実逃避しています……っ

一誠は宥めるように言う
「ドライグ！いや、ドライグくん！おっぱいは怖くない！おっぱいはとても柔らかくて良いものなんだ！そう、おっぱいは奇跡！俺達はそれで何度も助かってきたじゃん！」
『……ずむずむいやーんって、心の奥にまでずーっと残ってるの……』
〝トラウマが酷すぎる〟
もはや、そう言うしかなかった……っ
「天龍が幼児退行⁉何だそれは⁉どうすれば伝説のドラゴンをそこまで追い詰める事が出来るんだ⁉」
匙が驚いている様子だった
そんな事、元凶たる本人も知りたいぐらいだろう
「ヴリトラ、何とか出来ないか？」
匙が訊くと、匙の陰から人間サイズの黒い蛇――ヴリトラが出現して答える
『もう1体、龍王がいればドライグの意識を引っ張ってこられるやもしれぬ』
どうやら何とかなる方法はあるらしい
「ねー、イッセー先輩～っ。まだなの～？早く遊ぼうよ～」
シドは退屈を我慢できないのか地面に座り込み、伸ばした足をパタパタと動かしている

早くしないと、いずれは痺れを切らしてしまうかもしれない
「私に任せてください！」
当惑する一誠達だったが、ここで思いもよらない者が1歩前に出てきた
意を決した様子のアーシアを見てリアスが言う
「準備が整ったようね、アーシア。ここは任せましょう」
怪訝（けげん）に思う一誠を尻目に、アーシアは力強い呪文を唱え始める
アーシアの前方に金色の魔法陣が出現した
「――――我が呼び声に応（こた）えたまえ、黄金の王よ。地を這い、我が褒美を受けよ」
その呪文を受けて、金色の魔法陣が光を高める
「お出（い）でください！黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）！ファーブニルさんっ！」
アーシアが呪文を唱え終わった瞬間、呼び声に応じた者が姿を現す
黄金の魔法陣より出現したのは――――金色の鱗（うろこ）を持つ四足歩行のドラゴンだった
雄大なオーラを纏い、全長は十数メートル
頭部には生える角に布らしき物がくるまっている
「ファーブニル⁉ファーブニルって、先生と契約してたあの龍王⁉」
見覚えがあるのも当然
ファーブニルは五大龍王の一角で、アザゼルが多用する黄金の鎧と化していたドラゴ

ンだった

驚く一誠にリアスが説明する

「アザゼルは前線を引いたから、龍王との契約を解除したそうよ。ただ、そのまま返すのも何だからとアーシアとの契約を促したのよ」

アザゼルは以前からアーシアの魔物使いとしての才能を見ており、回復している時に敵に狙われても良いように壁役を用意しろと打診していた

まさか、その壁役が龍王とは予想もしていなかっただろう……

リアスの話にソーナも続く

「リアスから聞いていた通り、契約を結べたようですね。龍神オーフィスの加護を得られたのも納得できます」

「……オーフィスの加護？ああ！先生がそんな事言ってた！」

「アーシアさんのオーラにオーフィスの神通力らしきものが付与され始めたようです。調べてみたところ、直接の能力向上は無いものの、御利益によって運勢やドラゴンとの相性が底上げされていたそうです。オーフィス自身も加護を与えている自覚は無かったようですから、きっと無自覚の内にアーシアさんに感謝の念を送ったのでしょう。同様に紫藤イリナさんも加護を受けてます」

「運勢がバッチリ上がったわ！この間もショッピングセンターのくじ引きで２等当てた

の！」

　イリナが親指を立ててグッドサインをするが、現実には微妙な御利益だ

「会長、俺にはオーフィスの加護は無いんですかね……？いつも後ろに付いて回るくせに俺にはくれないのかな」

「……兵藤くんの場合は加護と言うよりも憑かれていると言った方が適切でしょう。恐らく、どの神々がお祓いしても祓いきれない業を背負い込みましたね」

懐かれている――ではなく、憑かれている上に神でも祓う事が出来ないらしい……

「オーフィスの仲介もあり、ファーブニルはアーシアさんと契約を結びました。世界中の秘宝を集めてコレクションしていた伝説のドラゴンです。アーシアさんは契約を完了させる為に彼を満足させるだけの宝を用意しなければならなかった。……代償は大きかったようです」

「いったい何を代価に支払う事で契約が完了したんですか？」

「……そ、その……私の口からは……」

　一誠の問いにソーナは口ごもる

　気になる一誠はリアスに視線を移すが、リアスもソーナと同じように「……私からも、ちょっと言えないわ……」と視線を逸らすだけだった

「いえ、気になるんです！俺の大事な家族がいったい何を犠牲にして龍王との契約を得

たのか！俺は聞かないといけないんです！」
力説する一誠
リアスとソーナは頬を赤く染め、恥ずかしそうな小さな声で呟く
「……ツよ……」
「……ツです……」
「え？聞こえません！ハッキリとお願いします！」
聞き直す一誠――すると、アーシアが恥ずかしさ満点で叫んだ
「パンツです！」
……はあぁっ⁉
先程よりも更に驚く一誠は、唐突に角の先端にくるまっていた布の正体に気付く
布の正体は――女物のパンツだった
ファーブニルが重い口を開く
『――お宝、おパンティー、いただきました。俺様、おパンティー、うれしい』
一誠は瞬時に悟った
〝こいつは変態だ……っ！〟
「パンツを代価に契約に応じる龍王だと⁉じゃあ、先生はどういう契約でこのおパンティードラゴンと契約したんだ⁉パンツか⁉先生も何処かからおパンティーを調達し

ていたのか⁉」
「アザゼルはきちんとした宝物を与えていたわよ」
一誠の疑問に答えるようにリアスがそう言ってくれた
……パンツオンリーに思考がいってる時点でバカだと思われるが……とにかくファーブニルの印象が最悪すぎる
アザゼルとの契約では黄金の鎧と化していたが、正体はパンツドラゴン……
イメージダウンにも程がある
恥ずかしさに耐えながら、アーシアはパンツ龍王に訊く
「ファーブニルさん！ドライグさんの精神が弱まっているんです！同じ伝説のドラゴンとして、ドライグさんを助けてあげる事はできないんですか⁉」
『――――できるよ』
「――――っ！本当ですか⁉お願いします！ドライグさんを元に戻してください！」
『お宝、ちょーだい』
パンツ龍王からおねだりが入った
「……わ、分かりました。契約の対価ですね……」
アーシアは恥辱に耐えながら、ポシェットから水色の可愛らしいパンツを取り出した
それを見てゼノヴィアとイリナが叫ぶ

「あ、あれはアーシアのお気に入りの水色のパンツだ！」
「アーシアさん、それをあげちゃうの⁉」
どうやら契約の対価に差し出すのはお気に入りのパンツのようだ
「やめろ、アーシア！アーシアがそこまでする必要なんてない！おい！龍王！なんでおパンティーが欲しいんだよ⁉」
一誠が問うと、パンツ龍王は顔色1つ変えずに言い放つ
『おパンティー、お宝』
「それは分かる！確かにお宝だけど！おい、ヴリトラ！同じ龍王だろ！何とかしろよ！このパンツ野郎を説得してくれ！」
『知らん』
速攻でスルーされる中、ゼノヴィアが叫んだ
「待て！アーシアが差し出す事はない！私のをやろう！」
しかし、イリナがゼノヴィアを制止しようとする
「何を言っているの、ゼノヴィア！その戦闘服って下にパンツ穿いてないじゃないの！」
「くっ……！ファーブニル！私の戦闘服じゃ不服か⁉」
戦闘服を脱ごうとするゼノヴィアだが、当のパンツ龍王は――
『俺様、金髪美少女のおパンティーがいい。パンツシスターのお宝欲しい』

「うちのアーシアちゃんはパンツシスターじゃありません！」
一誠が詰め寄ってファーブニルの頭を叩くが、パンツ龍王は全く動じない
もし、ここに新が居たら――――彼は発狂していただろう
主（あるじ）のリアスがスイッチ姫、アーシアがパンツシスター……酷すぎる
このやり取りを見ていたシドは――――
「パンツせんぱーい、まだ終わらないの～？」
「お前もパンツ先輩とか言うなぁぁぁッ！」
「だって、さっきからパンツパンツ言ってるんだもん。パンツシスター先輩のパンツ劇場は見てて面白いけど、僕は早く遊びたいの」
「頼むから、これ以上アーシアをいじめないで！これが終わったら好きなだけ相手してやるから！」
「あげます！」
アーシアは顔を赤く染め上げて、パンツドラゴンの鼻角に水色のパンツを引っかける
それを見てゼノヴィアとイリナが号泣した
「うう、アーシア！なんて凄い覚悟なんだ……ッ！」
「ああ、主よ！この自己犠牲の塊（かたまり）たるアーシアさんに祝福を！」
親友が見守る中、黄金のパンツドラゴンは鼻の穴を思いっきり広げて一気に酸素を吸

い込む
ドラゴンの解放する、と思いきや――――
『アーシアたんのおパンティー、くんかくんか』
パンツの匂いを嗅ぎ始めただけだった……
「くんかくんかすんなぁぁぁっ！」
「もう、お嫁にいけません！」
またも突っ込んでしまう一誠と、恥ずかしさに耐えられなくなり、顔を両手で覆うアーシア
『おパンティー、いただきました。ドライグ、治れっ！』
ファーブニルが黄金のオーラを一誠の籠手に向かって放った
『くっ！なんてザマだ！』
ファーブニルのオーラに反応して、ヴリトラも文句を言いながら黒いオーラを籠手に向かって放つ
一拍あけて、籠手の宝玉がいつもの赤い輝きを放ち始めた
『――――っ。……はっ！お、俺はいったい何をしていたんだ⁉あ、相棒じゃないか！』
「うう、ようやく戻ってきたんだね、ドライグ……。お前を復活させる為の犠牲はあまりに大きかったんだぞ……っ！」

アーシアはパンツと何か大切なものを失い、ドライグはパンツで意識を取り戻した
こんな事を告げれば、繊細なドライグは完全に壊れてしまうだろう……
一誠はアーシアに向けて叫ぶ
「アーシアァァァァッ！嫁にいけない事なんてないぞ！俺がきちんと責任持つから、安心しろッッ！」
「うう、イッセーさん！ふつつか者ですが、よろしくお願いしますっ！」
「ああ、任せろ！こんちくしょうめっ！なんて酷い運命なんだッ！何が秘策だっ、先生ッ！俺はアンタを絶対に許さんっ！今なら幽神（ゆうがみ）の気持ちが分かっちまうよ、チクショウがぁっ！」
『くんかくんか』
パンツ龍王はまだパンツの匂いを楽しんでいた……
「だから、くんかくんかすんなよ、変態龍王オオオオオッッ！アーシアの思いを無駄にはしないッ！禁手化（バランス・ブレイク）っ！」
『Welsh（ウェルシュ）　Dragon（ドラゴン）　Balance（バランス）　Breaker（ブレイカー）!!!!!!!!!!!』
一誠の全身を覆う赤いオーラが鎧を形成していく
いつもならカウントしてからだが、カウント無しで禁手化（バランス・ブレイク）できている事に気付いた
恐らく、グレートレッドとオーフィスの影響だろう

〝これでようやくシドとまともに戦える〟

鎧を纏った一誠が1歩前に出たのを機に、シドも立ち上がって準備をする

「へぇ……前に遊んだ時と迫力が全然違うや。あの時は本気じゃなかったってわけだね？良いよ良いよ～っ、やっと本気で遊んでくれるようになったんだ。――――心が踊るよ」

トーンの低い声音で構えるシド

一誠も握り拳を向けて啖呵を切った

「ああ、お望み通り本気でやってやる。今まで散々やられた分を――――まとめて返してやる！覚悟しとけよ、このゲーム野郎ッッ！」

赤い拳と青いパズルの交差！

1歩前に出た一誠とシド

両者は互いに相手を睨み、攻撃の構えを取る

「イッセー先輩、独りで僕に挑むつもり？それじゃあ他のヒト達が暇しちゃうよね～？」

「良いんだよ、それで。俺がお前の体力を少しでも削れれば……後は部長達がバトンタッチしてくれる。勿論、俺も全力でお前の相手をするつもりだけどな！」

一誠の言葉にシドは哄笑を上げて狂喜した

「ジリ貧に持ち込む持久戦って事かぁ……っ。アハハハハハッ、やっぱり滾るよぉ、イッセー先輩……ッ！だったらさぁ、攻略してみてよッッ！」

息巻くシドがその場を駆け出し、一誠もドラゴンの両翼を広げて飛び出していく

『ＪＥＴ（ジェット）!!』

高速で正面から向かっていく一誠

シドが鋭い勢いで拳を放ってくるが、一誠は軌道を変えてパンチを掻（か）い潜（くぐ）る

耳元を掠（かす）める拳が空気を震撼させ、距離を詰めた一誠は内の駒を変える

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

「龍剛（ウェルシュ・ドラゴニック・ルーク）の戦車（ルーク）ウウッッ！」

『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ）　Ｓｏｌｉｄ（ソリッド）　Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）!!!!』

鎧の形態が分厚くなり、両腕も攻撃と防御特化に変貌する

一誠はシドの顔面に巨大化した拳を打ち込み、肘の撃鉄も鳴らす

インパクトによって攻撃力が底上げされ、シドを吹き飛ばす勢いで打った

シドは後方へ大きく吹き飛び、何度も地面にバウンドしつつも体勢を立て直す

一誠は着地と同時にトリアイナ『戦車（ルーク）』を解いて通常の鎧に戻り、後方に下がった

首を鳴らし、トントンとステップを踏む

「良いね良いねぇ、先輩～っ♪これなら少しは楽しめそうかなッ！」

シドが両腕をバッと広げると――――周囲から大量のメダルが生成され、シドの眼前に並び立つ

シドお得意の錬金術……自分の武器や強化アイテムを自在に錬成できる

３枚の強化メダルを選別したシドは、それらを自ら（みずか）のマスク部分に挿入する

『Ｋｏｕｔｅｔｓｕ（鋼鉄）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

シドの全身が大きく脈動し、鬼気に満ちたオーラが滲み出てくると同時に――――重金属のような色合いに染まる
一誠に対抗すべく、攻撃力を全面的に強化させたのだろう
強化を遂げたシドが再び一誠の方に向かっていく
一誠は両腕を再度トリアイナ『戦車（ルーク）』仕様に変化させ、シドへの迎撃を図（はか）る
両者の拳が激突し、拳打の余波が突風を巻き起こす
力は互角かと思いきや――――トリアイナ『戦車（ルーク）』の方に亀裂が走る……！
シドの硬度と攻撃力を高めた拳が予想以上の威力だったのか、一誠の拳が押し負けてしまう
すぐに左腕で拳打を放つが……そちらもシドの下からのアッパーカットによって軌道を外（はず）される
返す勢いでシドは左足での蹴りを放ち、一誠の無防備な脇腹にカカトが突き刺さる
全身を硬化しているので蹴りの威力も向上しており、一誠は兜の隙間から血を吐き出す
すかさずシドは自分の眼前に魔法陣を展開し、それを潜（くぐ）ってフォームチェンジする
赤い装甲に覆われた『鉄拳闘士（ファイターフォーム）』に変貌したシド
高熱の炎を拳に纏わせ、そのまま一誠の腹部を打ち抜いた

衝撃と炎が腹を焼き、一誠は負傷した腹を押さえて後方に下がる
炎の拳で打ち抜いたシドは構えを解き、クイクイと挑発するような仕草をする
「……まだまだ、こんなもんじゃないんでしょ？イッセー先輩、本気でやってくれなきゃ心が踊らないよ」
どうやらトリアイナでは役不足らしい……
シドの挑発に一誠は覚悟を決める
「ドライグ、真『女王（クイーン）』で行くぞ。出し惜しみできる相手じゃないからな」
『分かった、相棒。まだ調子を戻したばかりだが、今の奴の台詞は聞き捨てならんからな』
ドライグの了承を得て、一誠は力のある呪文を唱えていく
「――我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝（せきりゅうてい）なり！無限の希望と不滅の夢を抱（いだ）いて、王道を往（い）く！我、紅（あか）き龍の帝王と成りて――」
「「「汝（なんじ）を真紅に光り輝く天道へ導こう――ッ！」」」
『Ｃａｒｄｉｎａｌ（カーディナル） Ｃｒｉｍｓｏｎ（クリムソン） Ｆｕｌｌ（フル） Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!!』
一誠の全身を紅くまばゆいオーラが包み込み、鎧を紅く染めていく
――『真紅（カーディナル）の赫（クリムソン）龍帝（プロモーション）』――
一誠の鎧の変化を見て、シドは再び哄笑を上げた

「アハハッ、アハハハハッ!凄いっ、凄いよ!イッセー先輩ッ!それが先輩の本気モードなんだね!ますます心が踊るよッ!」
嬉々として駆け出すシドは、またも両の拳に炎を纏わせる
一誠も背中のブーストを最大限に噴かし、シドの拳に対して拳打で迎え撃つ
両者の拳が再び激突し、衝撃の余波が周囲を振動させる
先程は押し負けてしまったが、今度は真『女王(クイーン)』での攻撃
一誠は紅いオーラを更に噴き出させて、先程のお返しとばかりにシドの拳を押し返した
一誠の拳打に押し負けたシドは後方に下がり、痛みに震える自分の拳を見つめる
すぐに一誠の方へと視線を戻し、哄笑を上げる
「……良いね、良いね良いねぇ!」
狂喜に満ちたシドは拳を連続で繰り出し、火炎の球を幾重にも飛ばす
それを見て一誠もドラゴンショットの乱れ撃ちで応戦
無数に飛び交う火炎の球と魔力は相殺(そうさい)され、幾度も爆発を繰り返す
その中をシドは俊敏なフットワークで掻(か)い潜(くぐ)り、肉薄する距離まで詰め寄った
一誠は咄嗟に両腕を交差させ、トリアイナ『戦車(ルーク)』仕様に分厚く形成する
距離を詰めたシドが再び炎の拳を連続で繰り出した

高熱の炎を帯びた拳を分厚い両腕で防御する一誠は、響いてくる痛みと衝撃に耐えながら隙を窺う

「ここだアッ！」

『Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!!』

シドが大振りの拳打を打とうとした瞬間、一誠は両腕の分厚い装甲をパージさせた

勢い良く飛び散る装甲の破片はシドの拳打を遅らせ、すかさず一誠はシドの懐に神速で飛び込む

〝攻め時はここしかない……ッ！〟

『Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ!!』

倍加の音声を何度も響かせ、パワーを底上げ

紅いオーラを溜めた拳をシドの腹に打ち込んだ

「これで……決めてやるッッ！」

『Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ　Ｂｏｏｓｔ!!』

『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ　Ｒｕｓｈ!!!』

一誠の両肘に撃鉄が形成され、打ち込む度に強大なインパクトが撃ち鳴らされる

ソリッド・インパクトの連続技――クリムゾン・インパクトがシドの顔に、腹に、深々と突き刺さっていく
シドの口から血反吐が吐き出され、一誠は肥大化させた拳で渾身の一撃を打ち込んだ
シドは高速で吹き飛ばされ、後方の岩壁へ盛大に叩き付けられる
岩壁はひび割れて崩壊し、シドを巻き込んで崩落
一誠は両腕の鎧を元に戻し、肩で大きく息をする
この技も消費が激しい為、1度使うだけで凄まじい疲弊感に苛まれる
しかし、最高の攻撃を打ち込んだ手応えはあった
さすがのシドと言えど、この攻撃をまともに食らっては一溜りもないだろう……
誰もがそう思っていた、刹那――
ガラ……ッと崩落した瓦礫から手が出現し、中からシドが姿を現す
〝あれだけの攻撃を受けても、まだ倒れない……っ〟
シドの規格外とも言えるタフさに一瞬戦慄するが、出てきたシドはボロボロだった
赤い装甲も見事に砕け、通常の姿に戻されていたのだ
確実にダメージは通っている筈なのだが……
「アハッ……アハハッ……！アハハハハッ……！アハハハハハハハハッ！」
ここまでダメージを負っているにもかかわらず、シドは狂喜に満ちた哄笑を上げた

もはや背筋に寒気や嫌な汗を感じる程の狂いっぷり……
一誠は疲弊した体に鞭を打って立たせ、攻撃の構えを取る
「はぁ……はぁ……っ。まだ……倒れねぇのかよ……ッ！」
「アハハッ……効いたなぁ……っ。さすがに今のは効いたよぉ……！こんなの食らっちゃったら、並の相手じゃ速攻で戦闘不能になっちゃうよねぇ……ッ。でも、それだけ消費量も激しい。パワーに特化した分、燃費はすこぶる悪いってところかな。ジリ貧に持ち込まれたらどうしようもないよねぇ……っ」
「へへっ、確かにそうだけどな……！さっきから足が震えてるぜ？本当はお前だってキツいんだろ……？」
一誠の言う通り、シドの両足はガクガクと震えていた
クリムゾン・インパクトのダメージが足にまで来ているのだろう
しかし、そこを指摘されてもシドは自信に満ちた発言を止めない
「なーに……、ちょうど良いハンデみたいなもんさ。寧ろ、ここまでの力を振るってくれたイッセー先輩に感謝したいくらいだよ」
「男に喜ばれても嬉しくねぇよ……っ」
「僕は嬉しいよ？何たってイッセー先輩のお陰で――――僕は更に強くなれるんだからさぁ……ッッ！」

シドは意味深な言葉と共に自身の両手に魔法陣を展開する
魔法陣はカタカタと高速で動き出し、赤と青――――2つの色に輝きだす
「ねえ、覚えてる?僕が先輩達と戦った時、『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』のデータを採取して分析したのを。今回はイッセー先輩のパワーをメインにデータを取らせてもらったよ。〝僕達を絶対に許さない〟、〝誰かを守りたい〟と言うイッセー先輩の強い願いが集まって具現化された――――その姿のデータを僕は欲しかったのさ!でも、生半可なものだと満足のいくデータが取れないからね。……だから、『クロニクル』で煽(あお)ればイッセー先輩は必ず本調子に戻ってくれるだろうと踏んだのさ!」
「な……っ⁉じゃあ、今までのは全部、この為だけにやっていたのか⁉」
「相手の一手(いって)二手(にて)先まで読む、将棋やチェスの基本でしょ?……ま、大半はキリヒコが考えたんだけどね」
――――〝全てはこちらの読み通り〟――――
要点を纏めた解釈と、全て造魔の掌(ゾーマてのひら)で踊らされていた事に一誠達は憤慨するしかなかった
シドも一誠が期待通りに動いてくれてご満悦と言ったところ
しかし、そんな彼にも拭(ぬぐ)い去れない不可解な点があった
それは――――

『怒りや憎しみと言った感情で進化や復活を遂げるのは知っているけど……イッセー先輩のは明らかに異質だ。だって――パンツシスター先輩のパンツで本来の力を取り戻したんだもん。……そう言えば、イッセー先輩は女のヒトのお乳、いや……おっぱいって言ったっけ？それでいろんな奇跡を起こしてきたって情報があったよね。今はそんな強化方法が流行ってるのかな？それとも、パンツシスター先輩に特別な力が宿っている……？』

間違いだらけの思索に耽っていた……

「まあ、それは後で考えれば良いかっ。とにかく今は――この心が踊る状況を楽しまないとねっ」

シドが両手を前でクロスさせ、円を描くように回すと……2色の魔法陣も宙を舞う

赤と青、2つの魔法陣はやがて合わさり――表裏一体のものと化す

シドは構えた右手で空を切るように振り、力強く唱えた

「――マックス大・変・身ッッ！」

唱えた刹那、表裏一体の魔法陣はバチバチと輝き、シドの全身を飲み込むように通過していく

魔法陣の中から更なるパワーアップを遂げたシドが姿を現す

三國志に出てくるような前垂れに、赤と青の模様が混ざり合った装甲

左が青、右が赤い輝きを放つ眼孔
明らかに今までとは様相が変わったシドに、一誠達は冷や汗を流す
「錬成特化の『連携操師（パズリングフォーム）』と、攻撃特化の『鉄拳闘士（ファイターフォーム）』……２つの形態が混ざり合って１つの形態（フォーム）が完成した。その名も――『赫と蒼の連撃闘帝（バーフェクトフォーム）』ッ！」
強化変身を遂げたシドの全身から赤と青が入り交じったオーラが滲み出てくる
「パーフェクト・シド・ヴァルディ……ノーコンティニューで攻略しちゃうよ？」
低いトーンで攻略宣言をするシドに対し、一誠は疲弊した体に鞭を打って立ち上がろうとする
そこへ祐斗およびグレモリー＆シトリー眷属の面々が前に出る
「イッセーくん、キミはアーシアさんに回復を施（ほどこ）してもらうんだ。その間に彼を食い止める。……多分だけど、少ししか時間稼ぎは出来ないだろうね」
「――ッ！木場っ！だったら尚更――」
「少しでもダメージを回復させないと、一矢報（いっしむく）いる事すら叶わなくなってしまうッッ！今の彼は……それぐらい強さを増しているんだ……っ」
〝手傷を負った状態の一誠ではパワーアップしたシドに勝てない〟
祐斗はそう直感した上で時間稼ぎ役を買って出たのだろう……
他の皆もシドの変貌ぶりに畏怖しているのか、微（かす）かに指先が震えている

それでも……行かなければならない
実質、シドも一誠の回復を待ち望んでいるかのような素振りを見せており――クイクイと手招きしている
祐斗は手元に一振りの聖魔剣を創り、深呼吸する
そして、意を決した目付きで1番手に駆け出し――シドに一太刀を浴びせようとした
しかし、シドは余裕綽々と言った感じで祐斗の剣戟を避ける
それを合図にグレモリー眷属とシトリー眷属の共同攻撃が始まった
リアスの消滅魔力、朱乃の雷光、ロスヴァイセの魔術砲撃、ソーナの水の魔力が様々な角度から放たれる
シドはそれらを軽やかに避けつつ、匙が放つ黒炎も自身の腕に纏わせた炎の打撃で打ち消していく
猫又モードと化した小猫、脚甲型の人工神器――『玉兎と嫦娥』を展開した仁村が挟撃に掛かる
右サイドから小猫が仙術の気を込めた拳を、左サイドからは仁村がオーラを纏った蹴りをシドに食らわせた
派手な衝突音が響き、余波が周囲に行き渡る

寸分の狂い無くヒットしたが――――シドはピンピンしていた
「――――っ！・そんな……っ！・」
「渾身の1発だったのに⁉」
小猫と仁村は驚愕の色に包まれ、シドは「残念だったねッ！」と2人に炎の打撃を食らわせた
今までの比じゃない打撃は容易（たやす）く彼女達を後方へ吹き飛ばし、小猫と仁村は岩壁に叩きつけられてしまった
それを見たリアスは憤慨し、更に規模を大きくした消滅魔力をシドに向けて撃ち放つ
だが、シドは避けようとせず手元にパズルピース型のバリアを展開
向かってくる消滅魔力をバリアで受け流し、空の彼方へと追いやる
そこへ雷光、多属性の魔術、水の刃が攻めてくるが――――手元のバリアを幾重にも分裂させ、多方面からの攻撃を全て防ぐ
「まずは遠距離戦から攻略していこうかな」
そう言ったシドは地面に錬成用の魔法陣を展開し、錬成した武器を手に取る
手に取った武器は――――ハンドサイズの斧のような物だった
しかし、それは普通の斧ではない……
「――――パラドクス・アックス、遠近両用の錬成武器だ！」

シドは攻撃部分であろう刃を反転させる
それは宛ら一回り大きい拳銃のような武器へと変形した
シドは柄の部分を連続でタッチしていく
『Ｏｎｅ!!　Ｔｗｏ!!　Ｔｈｒｅｅ!!　Ｆｏｕｒ!!――――Ｆｏｕｒｔｈ　Ｃｏｍｂｏ!!!!』
４回押したところで銃口をリアス達に向けて、引き金を引く
銃口から１つの青い魔弾が放たれるが――――それは意思を持ったかの如く４つに分かれ、リアス達の腹に衝突！
重い衝撃と激痛が体を突き抜け、リアス達の口から血が吐き出される
地に膝をつく彼女達に、シドは更なる追い打ちを掛ける
拳　銃に赤と青、渾然一体となったオーラを流し込み、更に地面から強化メダルも錬成
１枚を武器に、もう１枚を自身に挿入する
『Ｋｏｕｔｅｔｓｕ　Ｅｎｅｒｇｙ!!』
『Ｂｕｎｓｈｉｎ　Ｅｎｅｒｇｙ!!』
『Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｆｉｎａｌ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ!!!』
必殺の音声が鳴り響き、シドが銃口をリアス達に向ける

「「そうはさせないわっ！」」
リアス達の前に立つのは――真羅椿姫（しんらつばき）、花戒桃（はなかいもも）、草下憐耶（くさかれや）の３人
まず椿姫が神器（セイクリッド・ギア）――『追憶の鏡（ミラー・アリス）』を展開する
その前方で花戒が結界型の人工神器（セイクリッド・ギア）――『刹那の絶園（アブローズ・ウォール）』を、草下も同じく人工神器（セイクリッド・ギア）の『怪人達の仮面舞踏会（スカウティング・ペルソナ）』を展開して守りを固めた
ちなみに草下憐耶の『怪人達の仮面舞踏会（スカウティング・ペルソナ）』とは様々な仮面を模した――索敵・諜報・防御に特化した人工神器（セイクリッド・ギア）である
防御を固めた陣営にシドは危険な眼孔を光らせ、自身に挿入した強化メダルの効力を発揮する
一瞬だけ輝いた刹那、シドの分身が６体も出現し――本体を除いて一斉に銃撃を放った
分身達が放った魔弾は花戒と草下の守りを容易（たやす）く破壊
その瞬間、シド本体が硬質化させた魔弾を撃ち放った
硬質化された魔弾は地を抉（えぐ）りながら突き進み、真っ正面から『追憶の鏡（ミラー・アリス）』に激突する
本来なら『追憶の鏡（ミラー・アリス）』によって攻撃が跳ね返されるのだが――その反撃が叶う事は無かった
「――――っ」

ドゴォォォォォォォォォォォォッッ！

『追憶の鏡』は呆気なく砕かれ、巨大な爆裂音がけたたましく鳴り、後方にいたリアス達も必殺の銃撃に巻き込まれてしまう

舞い上がる粉塵と爆煙が晴れると……ボロボロの姿で倒れているリアス達が映った

皆ダメージが酷く、一様に血反吐を吐き出す

「――――ッッ！……やってくれたな、この野郎ォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！」

「許さないよッッ！」

匙も祐斗も、残りのメンバーも怒り心頭でシドに向かっていく

シドは嬉々として受け入れ、彼らの猛攻を躱し続ける

時折、拳　銃で牽制程度の魔弾を放つが――――それらはシトリー眷属の由良翼紗が持つ盾によって防がれる

由良が使用している人工神器は――――『精霊と栄光の盾』

精霊と契約を交わす事で様々な属性と効果を発揮する盾型の人工神器である

『……アハハッ、楽しいっ。本当に楽しいよ、このヒト達はっ！』

心中で興奮しているシドに、今度はシトリー眷属の巡巴柄が刀から斬撃を放つ

彼女が手に持つ刀は光と闇が入り交じった刀身をしており、何処かで見覚えがある様相だった

それもその筈、以前の運動会でアザゼルが披露した中二病剣こと『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア）と暗黒の龍絶剣（ダークネス・ブレード）』とソックリなのだ

ちなみに名は『閃光（ブレイザー・シャイニング・オア）と暗黒の龍絶刀（ダークネス・サムライソード）』

字面（じづら）で表せば〝剣〟と〝刀〟の一文字違いである……

巡が幾重にも放つ斬撃を躱（かわ）し、または手元に展開したバリアで受け流していく

間隙（かんげき）を縫うように祐斗の神速の剣戟、イリナの空中からの光撃（こうげき）と量産型聖魔剣による剣戟が繰り出される

しかし、その悉（ことごと）くがシドに防がれ、或（ある）いは躱（かわ）されていく

その間にゼノヴィアは魔獣騒動時に新しくなったデュランダル――ブレイズ・エクス・デュランダルを掲げ、聖なるオーラをチャージする

「一気に吹き飛ばしてやるッッ！」

豪胆な宣告と同時にデュランダルが振り下ろされ、莫大な聖なるオーラが迸（ほとばし）る

向かってくる極大のオーラに対し、シドは――再び拳（パラドクス・アックス）銃の柄を連続でタッチしていく

『One（ワン）!! Two（ツー）!! Three（スリー）!! Four（フォー）!! Five（ファイブ）!! Six（シックス）!! Seven（セブン）!! Eight（エイト）!! Nine（ナイン）!! Ten（テン）!!――Tenth（テンス） Combo（コンボ）!!!!』

銃口が青く輝き、引き金(トリガー)を引いて青い魔弾を撃ち放つシド
発射された魔弾は１０個に分かれ、向かってくる聖なるオーラと衝突する
お互いの技が相殺され、爆煙が舞い上がった
その爆煙の中からゼノヴィアが飛び出し、シドの体にデュランダルを振り下ろした
聖なるオーラに満ちた刃がシドの鎖骨に直撃、エクス・デュランダルの衝撃が周囲にクレーターを作る
デュランダルの素のパワーに加え、『破壊の聖剣(エクスカリバー・デストラクション)』の破壊力も上乗せした一撃
それをまともに受けて立ち上がれるような者はいない――――筈だった……
「……アハハッ♪良いねぇ、その迷いの無い一撃っ♪」
「――――っ⁉な……っ」
破壊力を上乗せしたデュランダルを食らっても平然としている……っ
装甲が欠け、血を流しているが――――死んでないどころか笑っている……っ
ゼノヴィアは絶句、戦慄を禁じ得なかった……
そんな中、シドは狂喜に彩(いろど)られた声音で言う
「近距離戦も負けないよ？」
シドは拳銃(パラドクス・アックス)の銃身部分を反転させ、形状を元の斧へと戻す
形状を変化させた直後、デュランダルの刃を戦斧(パラドクス・アックス)で弾いてゼノヴィアを突き放す

上からの振り下ろし、横からの薙ぎ払い、下からの斬り上げ等――シドは息も尽かさぬ連続攻撃でゼノヴィアを押していく

ゼノヴィアは足元を狙って切り払うが、シドがジャンプしたので空振りに終わる

宙へ跳んだシドはそのまま荷重を乗せた一撃を見舞い、ゼノヴィアを跪かせ――空いた左手で炎のストレートパンチを突き出す

ゼノヴィアは咄嗟にデュランダルを盾のように構えて直撃を防ぐものの、拳の威力には勝てず後方へ吹き飛ばされてしまう

その隙にシドは戦斧（バラドクス・アックス）な柄を連続でタッチする

『One（ワン）!!　Two（ツー）!!　Three（スリー）!!　Four（フォー）!!　Five（ファイブ）!!　Six（シックス）!!　Seven（セブン）!!――Seven（セブン）　Hit（ヒット）!!!!』

今度は赤いオーラが刃の部分に集まり、シドが駆け出していく

祐斗は聖魔剣を聖剣にチェンジして、禁手（バランス・ブレイカー）の龍騎士団を差し向ける

シドは仮面の中でニヤリと笑い――戦斧（バラドクス・アックス）を振り抜く

破壊力が増し、巨大な斬撃波動と化した一撃は龍騎士団を容易く屠（ほふ）り――由良の盾さえも押し退けた

匙が放った多重の黒炎も消し去る程の威力……

「どうしたのぉ、もう終わり？」

シドが再び戦斧（パラドクス・アックス）に渾然一体のオーラを流し込み、同時に武器と自分に錬成した強化メダルを挿入する

『Ｋｏｕｓｏｋｕ（高速）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｍｕｓｃｌｅ（マッスル）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｋｎｏｃｋｏｕｔ（ノックアウト）　Ｆｉｎａｌ（ファイナル）　Ｃｒｕｓｈ（クラッシュ）!!!』

更に破壊力がアップした戦斧（パラドクス・アックス）を構え、シドは神速の勢いで駆け出した

高速移動で距離を詰め――　戦斧（パラドクス・アックス）で一挙に斬り払う

一瞬でその場にいた６人を全員斬り伏せ、祐斗達の体から鮮血が噴き出す

「……かは……っ、そんな……っ」

速度に定評のある祐斗でも反応できず、ただ倒れゆくのみ……

祐斗達の背後で佇（たたず）むシドは、視線すら向けずに嘲笑する

「案外、呆気ないよねぇ？アハハッ♪アハハハハハッ！」

「……ッッ！……やめ、ろ……ッ！」

シドの獅子奮迅の凶行に我慢ならなくなった一誠は、治療中にもかかわらず体を起き上がらせようとする

しかし、アーシアが涙ながらに制止してくる

「イッセーさんっ、ダメです……っ！まだ傷が……っ」

「アーシア……ッ！でも、部長が……木場が……皆が……ッ！」
『み、皆さんに手出しはさせませんっ！』
そう叫んでシドに立ち向かっていくのは――ギャスパーだった
無数のコウモリと化して、シドの凶行を止めようとするが……それも徒労に終わる
まだ高速移動能力が残留しているシドは、周りに飛び交うコウモリの群れを叩き落とす
最後の１匹も叩き落とし、コウモリの群れが元のギャスパーの姿に戻される
「邪魔なんだから引っ込んでなよ♪」
シドは笑顔で一瞥してギャスパーを蹴り飛ばした
ここで一誠の我慢は限界を迎える……
「……ッ！……ッ！や、め、ろオオオオオオオオオオオッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

！」

狂った声音で叫ぶシドは跳び上がり、赤と青が入り乱れたオーラを纏い――必殺の両足蹴りを繰り出す

対する一誠も右拳を極太に肥大化させ、渾身の力を込めた一撃を突き出した

『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!』

『Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｋｎｏｃｋｏｕｔ　Ｆｉｎａｌ　Ｂｏｍｂｅｒ!!!!!』

両者の攻撃が正面からぶつかり合い、激突の余波が周りの岩壁を粉々に吹き飛ばす

〝絶対にコイツは倒さなくちゃならない……ッッ！〟

一誠は心中で叫びながら、紅いオーラを何度も噴き上がらせた

しかし、訪れる現実は残酷なもの……

鎧は端々から亀裂が走り、シドの蹴りが一誠の拳を打ち破り――爆ぜるっっ！

けたたましい爆発と共に吹き飛ばされた一誠は宙を舞い、地面に叩き付けられる

全身の傷と言う傷から血が流れ、まさに完全なる敗北を喫してしまった……

一方、シドは綺麗に着地を決め――拳を握ってガッツポーズ

圧倒・完封と言った表現が相応しい実力を見せつけ、元の姿に戻る

「やったぁ♪また僕の勝ちだね、イッセー先輩？」

トコトコと歩み寄ろうとするシド

そこへ眼から涙を溢れさせるアーシアが、彼の前に立ち塞がる
無論、アーシアに戦闘の技術など無い……
「もう……やめてください……っ」
涙を流し、体を震わせる彼女の姿は――まるで食われかけの小動物
シドはズイッと顔を近付け、アーシアの額をチョンッと指で小突く
「そんなにガクブルしないでよ、パンツシスター先輩っ。今の僕は先輩達と遊べて満足してるのさ。殺す気なんて最初から無いよ♪」
鼻唄混じりに転移魔法陣を開き、その中へ入ろうとするシド
直前に足を止め、踵を返して言う
「でもさぁ、先輩達は諦めないんだよねぇ? 何度でも何度でも僕達に向かってくるんだよねぇ? そう言うヒト達なんだもんね〜? だから――僕もそれに応えるだけだよ♪ せっかく本気になってくれた遊び相手を殺しちゃったら……面白くないもんっ、アハハッ♪」
何処までも狂った意欲を持つシドは、最後に手を振って一誠達に別れを告げる
「じゃあね、イッセー先輩。また遊ぼうよ♪」
それだけ言い残して転移魔法陣の中へと消えていった……
たった独りに完膚無きまでに叩きのめされたグレモリー眷属とシトリー眷属

ここまで規格外の強さを見せ付けられ、更にそれは造魔勢力の一部分でしかない……

『……先生……っ、俺達……こんな奴らに……勝てるのか……っ？』

そのまま一誠の意識はブラックアウトされていった

「いや～、今回は大収穫だったよ♪満足満足っ。そっちはどう？」

「Ｏｕｉ、順調ですよ。４体のボスを失いましたが、それでも死亡者の数が２００００人を超えました。こちらも収穫です」

「アハハッ、ウナギ登りってヤツだね～♪イッセー先輩も赤龍帝としての力を取り戻してくれたし、僕も更にパワーアップ出来たし、お互いＷｉｎＷｉｎだねぇ♪」

「それだけあなたのご期待に応えてくださったのですか、赤龍帝は」

「うんっ、凄いんだよ？イッセー先輩って――――パンツとおっぱいで強くなるんだよ？」

「……Ｐａｒｄｏｎ？」

「だからぁ、イッセー先輩はパンツシスター先輩のパンツとおっぱいで強くなるんだって。今までに無い新しい発見だよ」

「……言ってる事が今一つ理解できないのですが」

「多分、僕達の知らなかった強化方法だと思うよ。……きっとイッセー先輩はまだまだ強くなる筈さ。僕も負けないように頑張らないとねっ」

「未知の強化方法……。視野に入れておくべき――なのでしょうか……？」

『クロニクル』終局間近、絶望の選択……っ！

時間を少し遡り、睡眠を済ませた新は廃れた教会跡に足を運んでいた
理由は勿論『クロニクル』のボスを討伐する為であり――まさに戦闘を行っている渦中だった
新の正面に1体、そして背後にもう1体
但し、背後の1体には剣が突き立てられていた
『お、弟よっ！』
『ス、スマン……兄者ぁ……！』
〝弟〟に呼び掛けるは黒き体躯のボス、ガッカオ・ビターズ
〝兄〟に詫びを入れるのは赤い体躯のボス、レッドチーリ・ビターズ
二対一体のボスキャラである
弟が刺された事に激昂し、飛び掛かってくる兄
それでも新は冷静に兄ボスの攻撃を躱し、剣で突き刺した弟ボスを兄ボス目掛けて投げつける
早急に決着をつける為に新は『真・女王』形態に変貌し、黒い火竜を撃ち放った

放たれた火竜は猛然と突き進み、兄弟ボスを焼き払っていく
彼らは断末魔を上げる暇も無く、全身を端々から焼き尽くされ――――消滅していった
『Ｇａｍｅ　Ｃｌｅａｒ!!』
攻略完了の音声が響き、新は元の姿に戻って深く息を吐く
クリアしたとはいえ……周りには死亡したプレイヤー達の残骸が転がっていた
「……ったく、やりきれねぇよな……。こんなのを見た後じゃあ……」
新は不機嫌に毒づいて地べたに座り込み、懐から栄養ドリンクの瓶を取り出す
蓋を開けて栄養ドリンクを一気に飲み干し、空になった瓶を投げ捨てる
『……けど、これで5人のボスを倒したんだ。あとは、ラスボスとやらを倒せば……このふざけたクソゲームを終わらせる事が出来る……っ』
そう息巻いた直後、新のスマホが鳴り響く
「もしもし?……アザゼルか、どうした?」
『どうもこうもねぇ、今すぐグリゴリ系列の病院に来てくれ。――――イッセー達がやられた……っ』
「――――っ!?なん……だと……!?」

――――

アザゼルからの凶報を受けて堕天使系列の病院へ直行した新
受付で病室を聞き、部屋の扉を開け放つと――そこにはアザゼルとレイヴェルもいた
険しい顔付きで新を待っていたアザゼルはベッドに視線を向ける
連なるベッドの上には……一誠を含め、グレモリー眷属のほぼ全員とシトリー眷属全員が横たわっていた
目の前の光景に唖然とする新は、直ぐに何が遭ったのか問い詰め――アザゼルが苦々しい表情で答える
「また、あのゲーム野郎にやられたんだよ……」
「ゲーム野郎――って、シドの事か……？」
「ああ、ファーブニルを介してイッセーが復活したかと思えば――厄介な事に……ヤツは赤龍帝のデータを利用してパワーアップしやがったのさ。お陰でこのザマだ……っ。アーシアも無理して全員の回復を行ったもんだから、ぶっ倒れちまった」
シドが去った直後、アーシアは一誠達の傷を癒すべくフル稼働した為――過労で倒れてしまったのだ……
レイヴェルは水で濡らしたタオルをアーシアの額に置く

事の顛末を知った新は震え始め、自責の念に駆られる

『……俺が、俺がもっと早く対処していれば……っ！クソッッ！』

新は急ぎ足で病室を飛び出ようとするが、寸前でアザゼルに呼び止められる

「待て、新！お前、昨日から休んでないだろ！そんな状態で――――」

「睡眠ならさっき取った！ボスも倒した！あと1体……ラスボスとやらを倒せば、このクソゲーを終わらせる事が出来るんだよ！」

「だとしても、独りで突っ走ってどうにかなるワケじゃないだろうが！」

「元々は俺が蒔いた種が原因で一誠やリアスが、皆がこうなっちまったんだっ！俺がケジメをつける……ッ！その為なら――――倒れようが知った事かっ！」

〝自分のせいで一誠達が造魔の魔手に巻き込まれ、深傷を負わせてしまった……〟

新はヤケクソに自分を責め立て、一刻も早く『クロニクル』を終わらせるべくアザゼルの制止を振り切る

レイヴェルは病室を飛び出していった新の背を見る事しか出来ず、アザゼルも一概に新の責任と追及できないがゆえに――――黙っているしかなかった……

――

『クソ……ッ！モタモタしてる暇は無いってのに！こうしてる間にも死亡者の数は増えるばかりだ……！何か情報は無ぇのか……!?』

新はスマホの画面を見ながら辺り一帯を走り回る

画面には――死亡となったプレイヤーの総計がリアルタイムでカウントされており、その数は遂に３００００人を超えてしまった……っ

ますます焦燥感が募って冷静な対応が出来なくなり、新はところ構わず走り回った

時間だけが無情に過ぎていく……

そんな時、新のスマホに何やらメッセージが届く

確認してみると――

『おめでとうございます！５人のボスを倒したあなたはラスボスへの挑戦権を獲得しました！さあ、今こそラスボスを倒し――「クロニクル」のレジェンドプレイヤーになりましょう！』

何処をどう見てもふざけているとしか言えない文面のメッセージだった……

新は心中で沸々と怒りに震えるが、次のメッセージが届く

ラスボスの出現予定ポイントが記された場所である

映ったのは何年も前に閉鎖され、今では誰も寄り付かなくなったボーリング施設

「……待ってろよ、クソ野郎。今まで散々踊らせてくれた礼をしてやる……！」

新は場所を確認すると即座に走っていった

既に日が沈みかけた時刻、新は件の閉鎖されたボーリング場へと辿り着いた
息を切らし、呼吸を整える間も無く新は入口へと足を運ぶ
既に閉鎖されている為か、入口の扉には鎖が巻かれていた
新は鎖を無理矢理壊して入口の扉を勢い良く開け、ズカズカと中へ入り込む
電気は通っておらず、何処もかしこも埃まみれ
不気味さしか滲み出てこないような空間……その中央で新が叫ぶ
「何処だッ！出てきやがれッ！」
怒声を放つが返事は無し、更に声を荒らげる
「ラスボスってのは根性無しか⁉このクソゲーをおしまいにされるのが怖いのかよっ⁉
いい加減ケリをつけてやるッ！さっさと――――」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、欲しがりですね。それともグレモリー眷属の悪魔は堪え性が無いのでしょうか？」
嘲る声が寂れたボーリング場内に響いてくる……

その声の主がゆっくりと新の前に姿を現す
このデスゲーム『クロニクル』の元凶とも言える、悪趣味極まりない諸悪の根源が……
「▪a（サ）va（バ）?.」
あざとい挨拶を放つキザな男
その者こそがデスゲーム『クロニクル』の首謀者……
「キリヒコ……ッッ！」
彼の姿を見た途端、新の中で怒りが沸々（ふつふつ）と煮えたぎってきた
ギリリと強く握り締める拳からは血が垂れ、埃（ほこり）だらけの床に赤い斑点を作る
「ようやく……ようやく、ここまで来たぞ。ラスボスってのはお前か？お前を倒せば終わりか？それともシドってヤツがラスボスか？」
一方的に話を進めようとする新に、キリヒコは「Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）」と首を横に振る
「ラスボスはもっと素敵な方ですよ。あなたの為に用意しました――特別な、ね……」
キリヒコが指を鳴らした直後、その場の雰囲気がガラリと変わる
すると、１人の人影が姿を現す
フード付きのローブを羽織った小柄な者で、その両手には長剣が握られていた
新がキリヒコに訊（たず）ねる

「……アイツがラスボスか？」
「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、頑張ってクリアしてくださいね。私は一切手出しを致しませんので」
「これが片付いたら、次はテメェの番だからな。覚悟しとけよ……っ」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、怖い怖い。たかがゲームじゃないですか。まあ……あなた方にとっては死活問題でしたかね。せいぜい頑張ってください。では――――Ｂｏｎｎｅ　ｃｈａｎｃｅ」
そう言うとキリヒコは近くの椅子に歩み寄り、優雅に腰掛ける
言葉通り、彼はこの戦いに横槍を入れるつもりは無いようだ
しかし、今まで手玉に取られてきた経験ゆえか……新は疑念を拭い去れなかった
警戒心を抱きながら、ラスボスの前に立つ
直ぐに闇皇と化して戦闘態勢に入り、向こうも長剣の切っ先を新に向ける
『……敵ヲ認識、コレヨリ――――排除ヲ開始スル』
機械のように無機質な声音を発した直後、ラスボスの姿が一瞬ブレる
危険を察知した新は瞬時に飛び退くが、鋭い一閃が彼の鎧を掠めた
横一文字に刻まれた鎧の裂傷を見て、新は言葉を失いかける
『……なるほど、ラスボスって言うだけの事はあるな。今までの奴らとは動きがまるで

違う。それに――何か嫌なオーラを感じる……っ。何なんだ、この寒気は……？』

新も剣を構え、慎重に距離を詰めようとする

ラスボスの方も左の長剣を逆手に持ち替えた

少しの静寂……刹那、熾烈な剣戟の音が鳴り響く

新の剣とラスボスの長剣がぶつかり、激しい火花を散らす

順手と逆手、それぞれに持った二刀から繰り出されるラスボスの剣戟は素早く、そして重みもある

今までのボスキャラとは桁違いの強さに新は兜の中で冷や汗を垂らす

『正面から行ってもダメか……っ！だったら――ッ！』

新は一旦距離を取って剣に魔力を流し、幾重にも斬撃を放つ

ラスボスは向かってくる斬撃を悉く斬り払う

その最中、新は斬撃を繰り出す途中で床に一撃を与え――爆煙を生み出した

辺り一帯が煙に包まれ、新の姿が煙に紛れて消える

斬撃を全て防いだラスボスは新が消えたのを機に攻撃の手を止め、静止する

微動だにしないラスボス……新はその背後に回っていた

正面からの打ち合いは分が悪いと判断し、奇襲戦法に切り替えたのだ

素早く背後に回り込んだ新は魔力を込めた剣戟で決めようとした――だが……！

『……敵、背後二確認。迎撃システム起動』

言葉と同時にラスボスのローブから何かが飛び出してきた

飛び出してきたのは――ゲーム等でよく見られる〝浮遊する２つのポッド〟

その浮遊物体から銃口がせり出し、ビームが放射された

『――ッ！ファ○ネル……ッ!?』

完全に意表を突かれた新は咄嗟に身を翻してビームを回避するが、息つく暇も無くラスボスの剣戟が飛んでくる

段々と速度を上げてくるラスボスに対し、新も移動速度を高める

しかし、２つの浮遊物体が空中を飛び交い、掩護射撃してくるので有効な攻撃が与えられない

剣戟も徒手も銃撃によって軌道をズラされて空振りに終わったり、段幕射撃が新の動きを制限させる

実質、三対一の構図だった……

その後も地上での激しい剣戟の打ち合い

壁を伝い、天井を駆けながらの熾烈な攻防

新は浮遊物体からの砲撃を回避しつつ、ラスボスに剣戟を見舞っていくが――深くは通らない

通常の状態では勝ち目など無かった
一頻(ひとしき)りの打ち合いが一旦途切れ、距離を置いて着地する両者
新は鎧の各所が削られており、疲弊も重なっている為か、肩で大きく息をする
一方でラスボスはその様な隙を全く見せず、目の前の敵をただ見据えるのみ……
新は本腰を入れるべく呼吸を整(ととの)え――自分の中に潜む竜の力を解放し始める
火竜のオーラが滲み出て全身を包み、新の肉体が変貌していく
――『超越(インフェルニティ・オーバー・ドラグニル)の黒竜帝』――
竜の力を解放した新は再び剣を取り、水平に掲げる
『……危険(キケン)ナ力(チカラ)ヲ感知(カンチ)。速(スミ)ヤカナル排除(ハイジョ)ヲ――』
「それはこっちの台詞だ……ッ！」
新は火竜のオーラを増大させ、剣を振るって斬撃を放つ
繰り出された斬撃は竜の形となって、地を削りながらラスボスへと向かっていく
ラスボスは2つの浮遊物体(ポッド)からレーザーを掃射、向かってくる斬撃を打ち消そうとする
しかし、新の斬撃はレーザーをものともせず――猛然と突き進んでくる
ラスボスは瞬時に空中へ跳び上がって斬撃をやり過ごすが……新はそれを見逃さない

自分も跳び上がってラスボスの眼前に追い付き、火竜のオーラを纏わせたパンチを打ち込む
ラスボスは二刀を前に掲げ、盾代わりに防ごうとするが――勢いに押し負けて壁に叩き付けられる
しかし、直ぐに攻撃へと転じるラスボス
二刀の剣戟や蹴り等を次々と繰り出すものの、竜の力を解放した新には決定打を与えられず
そこでラスボスは距離を取り、２つの浮遊物体（ポッド）を集結させて巨大な砲口を向け、砲身にエネルギーを蓄積していく
デカい砲撃の準備を整えているのだろう
それを察知した新も砲撃の準備に取り掛かる
口を開き、火竜のオーラだけでなく雷のオーラも解き放ち――異なる２つの属性が渦巻くように混ざり合っていく
以前の魔獣騒動にて、新はリュオーガ族に伝わる〝竜の呼吸法〟を会得
そのお陰で異なる属性の魔力等を喰らい、己（おのれ）の力に変換する術（すべ）を身に付けたのだ
燃え盛る火竜のオーラ、迸る雷（ほとばしいかずち）のオーラが調和し――更に強力な奔流（ほんりゅう）と化す
「――『雷炎竜の咆哮（ライトニング・ブラスト）』オオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！」

新は極大にまで溜めた魔力を解き放ち、雷を纏った火竜が天地を裂くような勢いで突き進む
ラスボスも浮遊物体から極大のレーザーを放つ――だが……
砲撃合戦は新の方に軍配が上がり、雷の火竜は浮遊物体もろともラスボスの全身を呑み込んでいった
壁を突き破り、遥か彼方へと消えていく火竜
爆煙と粉塵が舞い散る中、砲撃の餌食となったラスボスの姿が現れる
既に浮遊物体は損傷が激しく、もはや機能しないだろう
ローブも全身もボロボロで、フードからは口元が見える
この光景を見ていたキリヒコは含み笑いをして、新に拍手を贈る
「Ｔｒ▪ｓ　ｂｉｅｎ……ッ！あれだけの魔力を使いますか！その禍々しさ、荒々しさ――やはり、あなたをプレイヤーになるよう仕向けた甲斐がありましたね」
「お前に褒められたところで嬉しくも何ともねぇんだよ……っ。悪いが、一気に決めさせてもらう。いい加減ウンザリだからな」
「……Ｊｅ　ｖｏｉｓ、確かに今の勢いでなら直ぐに勝敗がつくでしょうね。――しかし、先程も言った筈です、〝これはゲームです〟と……。ゲームには思わぬどんでん返しもあったりするのですよ」

意味深な言葉を放つキリヒコを訝しげに睨む新
その意味を直ぐに知る――――否、思い知らされる事になる……っ
バチバチと火花が散るラスボスの体
それを見て新は思わず呟く
「……っ？何だ、機械の体……っ？」
そう、ラスボスの皮膚が裂けた部分をよく見てみると――――中には血管のように配線が張り巡らされており、金属の部品が稼働していた
明らかに他のボスキャラとは違う異質な存在
しかし、驚愕の事実はそれだけに留まらなかった……
ラスボスがボロボロになったローブを無造作に取っ払い、ローブの下に隠された正体が明らかとなる
新はラスボスの正体を見て絶句した
何故なら――――それは最近知ったばかりの者だったからだ
シルバーブロンドの髪にしなやかな肢体、1度でも見れば強烈に印象に残る特徴を持った者
新は目の前にいる者がとても信じられなかった……信じたくなかった……
「な、なんで……なんで、お前が……っ？」

「驚きでしょう、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）。何故なら、あなたの知っている顔触れなのですから」

ニヤリと嫌な笑みを浮かべるキリヒコ

火花を散らしながらもズカズカと歩いてくるラスボス

その姿が未だに信じられない新は声を震わせながら言う

「嘘、だろ……？なんで、なんでお前が……こんな事を……？」

震える言葉を投げ掛けても一向に返事は来ない

ただ黙々（もくもく）と歩み寄ってくる……

「なあ、嘘だと言ってくれよ……っ？お前が、お前がこのクソゲーのラスボスなのか……っ？」

目の前の現実を受け入れられないのか、新は何度も問い掛ける

疑心、焦燥、あらゆる感情が目まぐるしく新の思考を掻き乱す

「お前は……キリヒコが送り込んだ刺客だったのか……っ？なあ……なあ……っ！」

どんどん冷静さを失っていく新

その声は……今の〝彼女〟には全く響かない

「何とか言ってくれよ……ッ！なんで、何も言わないんだよ……ッ!!黙ってないで、何とか言えよッッ！――――ミカサァァッ！」

新は遂にその者の名を叫んだ……

彼が今、対峙しているラスボスとは……新人ハンターである筈の少女――ミカサ・ヨルハニアだった

『……敵（テキ）、排除（ハイジョ）、再開（サイカイ）』

ミカサは無機質に言葉を発し、即座に新との距離を詰めて――二刀による剣戟をくらわせた

二振りの剣が新の全面を切り裂き、鮮血が噴き出す

まともにくらってしまった新は傷口を押さえ、膝をついて苦悶に満ちた呻き声を上げる

「キリ……ッ、ヒコォォォ……ッ。どういう事だ……⁉テメェっ、ミカサに……何をしやがったぁぁ……⁉」

「Ｏｈ（オー）　ｌａ（ラ）　ｌａ（ラ）、心外ですね。私は何もしてませんよ？彼女はただプログラムに従（したが）い、自らに課せられた命令を全（まっと）うしているだけです。私はただ――彼女を〝造った〟だけです」

「……っ、造った……っ？」

「――機械人形（オートマタ）、主（あるじ）の命令を遵守する戦闘兵器。彼女はその試作品です」

ミカサの正体を明かしたキリヒコは更に続ける

「あなた方グレモリー眷属の事は調べさせていただきました。若手でありながら成長の激しいチーム。その要因は大半が強い想い……仲間に対する想いを糧(かて)にしている。〝誰かを守りたい〟と言った感情が潜在能力を奮い立たせ、爆発的な成長を遂げさせています。そこで私は〝ある考え〟に至ったのです。――もし、思い入れた誰かが敵として現れれば、どのような感情を出すのか？そして、その者を敵として葬(ほうむ)れるのか？その為に私はあなたに目を付けました」

「なん、だと……っ⁉」

「あなたはグレモリー眷属の中でも裏の世界に精通しており、尚且つ彼らと出会った事で大きく変化した者です。仲間を重んじ、誰かを守る為に戦う。そして、その想いで異質な進化を遂げてきた。〝仲間を持つ〟と言う心境が芽生えたお陰で肉体的には強くなりました。……その反面、つけ入る隙が増えたのも事実。そこで――彼女をデータ収集の為のスパイとして送り込む事にしたのです」

キリヒコが指を鳴らすと、ミカサは目から宙に映像を投影させ始める

そこに映されたのは――『クロニクル』での戦闘光景、新や一誠達のこれまでの様子が一部始終記録されていた

「あなたは職業柄、あまり多くの仲間を持つ事が出来ず、信頼感を寄せられる相手も少なかった。しかし、グレモリー眷属と触れ合った事であなたは更なる強さを手に入れまし

たが――同時に弱くもなった。その理由がお分かりですか？」
「俺が……弱くなった……⁉」
「理解できなければ教えて差し上げましょう。それは――あなたに〝信頼〟と言う感情が生まれ、疑心を緩和させた事です。仲間がいると言う安心感が疑いを衰えさせてしまった。だから、新人のバウンティハンターと言う肩書きに騙され、彼女の正体を見破れなかった。――私が裏で糸を引いている事も考えられた筈なのに」
キリヒコの言い分に新は反論する余地・気力が無かった
今にして思えば……ミカサが新のもとに派遣されてきたのは『クロニクル』が始まる同時期
その『クロニクル』の大元がキリヒコ
キリヒコのやり口を考えれば、少しでも疑いを持つのは当然……だが、新はそれを見誤った
リアス達と一緒に過ごす事で心の余裕・安らぎ・安心が生まれ、バウンティハンターとしての勘がどんどん鈍くなっていった……
肉体的には強くなったものの、逆に精神面での弱さに磨きが掛かってしまった……
それらを全て見越して、キリヒコはこのデスゲームを仕掛けてきたのだ
「結局、あなた方は私の掌で踊らされていたのですよ。何も打開できず、何も対処できな

い。弱くて、惨めで、哀れで、愚かな――Ｍａｐｕｃｅ」

最大限に嫌味を込めた侮蔑と嘲笑を贈るキリヒコ

新は頭の中がグシャグシャになってしまいそうな程の怒りに震え、キリヒコに殺意の視線を向けた

「キ、サ、マァァァァァァァァァ……ッッ！」

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、この状況は私のせいではありません。見破れなかったあなたの落ち度です。さあ、Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ。彼に贈って差し上げなさい。――苦悩と絶望感に満ちたＲｅｑｕｉｅｍを」

『……命令ヲ実行。敵ヲ排除シマス』

キリヒコの命令に従い、ミカサは再び剣を振るう

一太刀を浴びせられた新はミカサの凶行を止めるべく体を動かそうとする

『クロニクル』を終わらせるには、彼女を止めるには――倒すしかない

だが、それは新にとって最も嫌な過去を思い起こさせる選択だった……

『また、俺は仲間を殺すのか……っ？あの時と同じように……っ』

嘗て共に戦った仲間を殺し、その自責から他者と距離を置くようになり、次第に堕落していった……

〝もう嫌だ……っ〟

〝自分の手を仲間の血で染めたくない……っ〟

〝あんな苦しみは、もう御免だ……っ〟

そんな思いが頭の中を駆け巡っても、ミカサの無慈悲な凶刃（きょうじん）は止まらない

何度も斬られ、腹を突き刺される新を見て……キリヒコは嘲笑うように一言だけ呟（つぶや）いた

「――Mon（モン） pauvre（ヴァ）」

絶望……絶望……更なる絶望……つ

あれから、どれだけ時間が経ったのだろうか……
何度斬られたのだろうか……
閉鎖され、寂(さび)れたボウリング施設内で飛ぶ血飛沫(ちしぶき)
途切れ途切れになる呼吸
新はミカサの凶刃を受け続け、心身ともにボロボロとなっていた……
その悲惨な光景を静観するキリヒコ
『これだけの攻撃を受けても反撃すらしないとは……。あの時もそうでしたが、ヒトの感情と言うものは本当に理解し難(がた)いですね』
異国で初めて対峙した時の事を思い出し、眉根を寄せる
このままでは埒(らち)が空かないと踏んだのか、キリヒコはミカサに〝もっと苛烈な攻撃〟をするよう指示
その指示を受けたミカサは静かに頷(うなず)き、更なる追撃を開始する
左手を前に突き出し、掌(てのひら)から銃口が出現する
『10㎜弾機関砲(ジュウミリダンキカンホウ)――発射(ファイア)』

けたたましい射撃音と共に飛び出す銃弾
その全てが新の肉体を穿つ
腕、足、腹を撃ち抜かれた新は弾痕から血を流す
ミカサは銃口を掌に収納し、足から火を噴かせて駆け出す
右手で拳を作り、新の腹に重い一撃を食らわせた
しかし、それだけに留まらず……打ち込んだ右手の周りに多数の噴射口が出現
そこからも火が噴き出し、インパクトの威力を底上げする
重く鈍い打撃音が響き、新は血を吐き出しながら後方へと吹き飛ぶ
『標的ノ生存ヲ確認、追撃システムオープン』
ミカサの背中が開き、そこから出てきた幾つもの砲門が新に狙いを定める
『追尾ミサイル錬成――――発射』
砲門から無数のミサイルが射出され、寸分の狂いも無く新に命中
肉と血が飛び散り、爆煙の中から転がり出てくる新に対して――――ミカサは追撃の手を緩めない……
再び左手を前に突き出すが――――今度は左手その物が巨大な砲身と化す
『対魔獣レーザー、掃射』
砲身から放射された太いレーザーが空を走り、新の脇腹を貫く

肉だけでなく骨まで焼かれるような痛みに新は苦痛の声を挙げる
「……ガハ……ッ！」
既に満身創痍、全身を穴だらけにされている新
それでもミカサは冷淡に、冷酷に追撃を続ける
『荷電粒子砲（レールガン）、錬成（レンセイ）』
今度は両肩から二又に分かれた砲身が出現し、バチバチと紫電（しでん）を迸（ほとばし）らせる
照準が新に定まり――紫電の塊が放たれる
一直線に飛来してきた紫電は新に直撃し、彼の全身を焼く
「――ッッ！……ッッ！」
もはや叫び声すら上げられない程の激痛が新を蝕（むしば）み、体の端々（はしばし）から黒煙が立ち込める
膝も震え、今にも倒れそうになっていた
そんな様子を見てキリヒコは哀（あわ）れみの視線を送る
「Ｏｈ（オー）　ｌａ（ラ）　ｌａ（ラ）、まだ無抵抗の意志を貫（つらぬ）くつもりですか？それとも現実が受け入れられなくて、思考停止しているのでしょうか？今あなたの目の前にいるのは、あなたが知っている新人ハンターではありません。『クロニクル』のラスボスであり――冷酷非情な殺戮マシーンです。遠慮する事はありませんよ？存分に戦って、葬（ほうむ）って差し上げなさい」

嫌みったらしくミカサを殺す事を進言してくるキリヒコ
無言で見据えるミカサに対し、新は裂傷と血にまみれた体を動かせずにいた
ミカサを殺さない限り、デスゲーム『クロニクル』は終わりを迎えない……
しかし、そうすれば……新は再び〝仲間殺し〟の汚名を被(かぶ)る事になってしまう
絶望の瀬戸際とも言える窮地(きゅうち)……
新の煮え切らない態度に――――キリヒコは最悪の発破を掛けた
「……仕方ありませんね。あなたに戦う意志が無いと言うのなら、ここで死亡(ゲームオーバー)になってもらいましょう。その後は――――グレモリー眷属を彼女に殺させましょう。非正規プレイヤーである以上、彼らは何も出来ず、なす術(すべ)無く無惨に殺されていく姿が目に浮かび上がってきますよ。ただ、その死にざまを見せてあげられないのが残念です」
キリヒコの言葉を聞いた瞬間、新の頭の中に忌まわしい過去がフラッシュバックされる……
自分の手で仲間を殺した、その時の光景……
何度も何度も記憶に蘇(よみがえ)り、耐え難(がた)い罪悪感に苛(さいな)まれる
〝もう、あんな思いはしたくない……っ〟
しかし、このままではリアス達がミカサに殺されてしまう……
〝もう2度と、失いたくない……っ〟

相反する思いに心を裂かれそうになる新
血だらけの体に鞭を打ち、絶望的な選択肢に対して答えを導き出した
「……殺るしか、無いのか……っ」
涙混じりの選択
新はリアス達を守る為に、再び〝仲間殺し〟を決意する
生涯拭い去れない汚名と罪が新の背にのし掛かる事になるだろう……
しかし、このまま放っておけば――ミカサはリアス達を殺してしまう
一時でしかなかったとは言え、ミカサは初めて出来た後輩
そんな後輩に、これ以上の殺戮をさせたくない
……っ
新はリアス達を守る為に、そして何より……ミカサを止める為に――決して拭い去れない汚名を被る覚悟を決めた
全身から火竜のオーラを揺らめかせ、殺戮マシーンと化したミカサの前に立つ
だが、新の手は今も震えている……
ようやく決意したと言えど、まだ抵抗感がある表れなのだろう
しかし、今は一刻の猶予も無い……
新は再びミカサを見据え、滲み出てきた火竜のオーラを右手に集束させる

燃え盛る炎と共に雷も迸らせる
どうやら一撃で仕留めるつもりなのだろう……
〝せめてもの情け〟――と言えば、聞こえは良いかもしれない
それでも結局は過去と同じ過ちを繰り返す事になるのだから……
『……本当に、なんでこんな事になっちまったんだろう……っ。悪い夢なら覚めてほしいぜ……っ』
新は〝この場、この瞬間が夢であってほしい〟と切なく願った
だが、その願いは決して届かない……
そんな新の心中など察する事無く、無感情のミカサが向かってくる
左手からの銃撃、レールガンでの砲撃
驟雨の如く乱射される弾丸を、新は一切避けずに被弾する
また同じ罪を犯す自分への戒めだろうか……
新は回避行動を一切取らず、ミカサは空いた手で携えた長剣を振り下ろしてきた
剣が新の脳天に直撃する刹那――鈍い音が場内に響いた
ポタポタと雫が滴り、バチバチと飛び散る火花
――新の右腕はミカサの腹部を貫き、その背中を突き破っていた……
ミカサは長剣を振り下ろす体勢のまま、腹を貫かれたのだ

『……深刻ナダメージ発生、機能停止……キノウテイシ……機ノウ停止……キ、能……テイ……シ……』

手から長剣が離れて、金属音を立てて地面に落ち――――言葉と共に動きがどんどん鈍くなっていく

新が右腕を引き抜くと……ミカサは膝から崩れ落ちた

『Ｇａｍｅ　Ｃｌｅａｒ!!!!』

軽快な音楽と共に流れてくるクリア宣言

空気を読まないにも程がある……

そこへ更に空気を読まないキリヒコがパチパチと拍手を贈る

「Ｔｒｅｓ　ｂｉｅｎ!見事に全てのボスを倒しましたね、おめでとうございます。如何でしたか?３日間に及ぶ『クロニクル』のご感想は?」

徹底的に神経を逆撫でする言動を繰り返すキリヒコ

新は今すぐにでも怨敵を殺しそうなオーラを揺らめかせるが、蓄積されたダメージと傷のせいでまともに動く事が出来ない……

そんな中、キリヒコは新のもとに歩み寄り――――自らの左手に黒い霧を纏わせる

「感謝しますよ、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ。あなた方のお陰で有意義なデータが多く集まりました。クリアを果たしたあなたの功績に免じて、『クロニクル』は現時刻を以て終了と致

します。ですから――最後に回収させていただきますよ」
ズン……ッッ！
闇にまみれたキリヒコの左手が新の体内にめり込み、ズブズブと入り込んでいく
息が詰まるような窒息感に襲われ、キリヒコが勢い良く左手を引き抜いた
その手には――以前、新の体内に埋め込んだ『クロニクル』のマスター版の端末が握られていた
意味深な笑みを浮かべるキリヒコは、右手に例の装置（デバイス）を出現させる
「これで私も更なる力を手に出来ます。あなた方にとっては更なる脅威になるでしょうけどね。――Ｓ，ｉｌ（シル）　ｖｏｕｓ（ブ）　ｐｌ・ｉｔ（レ）」
そう告げた直後、キリヒコは右手に展開した装置（デバイス）に回収したマスター版の『クロニクル』端末を挿し込んだ
やがて端末は粒子となって装置（デバイス）に同化し、装置（デバイス）の色が変化していく
おどろおどろしい紫色から一変して――鮮やかなメタリックグリーンカラーとなった装置（デバイス）
それを見てキリヒコが口の端を吊り上げる
「完成しましたよ、私の新しい力が。ご協力、Ｍｅｒｃｉ（メルシィ）」
キリヒコは紳士的に頭を下げ、完成したばかりの装置（デバイス）を起動させる

ニ門の銃口から黒い霧を散布し、自分の周りを色濃く覆っていく
「今夜はゆっくりお休みください。また近い内に会いましょう。その時に私の新しい力をお披露目します。それと……そのゴミは捨てるなり埋めるなり、ご自由にしてください。もう私には必要の無い物ですので。それでは――――Ａｄｉｅｕ（アデュー）」
そう言ってキリヒコは黒い霧に包まれ――――消えていった
最初に対峙した時と同じように、再び煮え湯を飲まされてしまった新
しかし、今はそんな事を考えている暇など無い
いや、視野にすら入れてなかったと言う方が正しいのかもしれない……
激痛に軋（きし）む体を動かし、自ら手に掛けてしまったミカサの残骸へと歩み寄っていく
既に手足は千切（ちぎ）れ、血管代わりの配線も剥き出しになっており、もはやヒトの形すら逸脱していた……
新はミカサの上半身を抱き上げる
「……ミカサ……、お前は……本当にただの機械だったのかよ……？」
涙混じりに問い掛けるが――――ミカサからの返事は一切無し
元々冷たい感触が更に冷たさを増していく……
「レイナーレ達と話してた時のお前も……酒を飲んでた時のお前も……飯を食ってた時のお前も……全部、嘘だったのかよ……っ？」

何度も何度も問い掛ける……だが、それでも現状は変わらない
ミカサの冷たい体を抱(かか)え、ボウリング場から外へ出る新
外はすっかり雨模様となっており、今の新の心境を表(あらわ)すかの如く大粒の雨が降っていた
雨の中を1歩1歩進み、暫(しばら)く歩いたところで雨雲を見上げる
振り続ける雨、晴れる事の無い暗雲
ギリリと歯を食い縛った後、新は空に向かって慟哭した
「――――アアアアアッ、アアアアア

てしまった……

「……あれから1週間か。リアス、新の様子はどうだった？」
「今朝早く出掛けていったわ。バウンティハンター協会からの呼び出しらしくて。……それまでの彼は殆ど抜け殻みたいな状態だったわ」
「そうか……。それでもマシになった方だもんな」
リアスからの報告に、アザゼルを始めとする部室内の全員の表情が暗くなる
実際、『クロニクル』終了後の新は酷い有り様だった
〝ミカサを自分の手で殺した〟――その自責に駆られたせいでまともに眠れず、食事も殆ど摂らず、学校にも来なかった……
レイナーレ達も何とか励まそうと策を講じてみたが、効果は無し
結果、バウンティハンター協会からの呼び出しが来るまで――新の心の傷は全く癒えなかったのだ……
亡骸となったミカサはアザゼルに託されたものの、アザゼルはそれをアジュカの研究施設へと預けた

このまま弔うより、少しでも情報を採取しなければ報われない……
その為に調査の依頼も兼ねてアジュカに預けたのだ
造魔――特にキリヒコは抜かりの無い事後処理まで施していた
『クロニクル』が終了した途端、世界中に出回っていた端末は煙の如く消滅
更には『クロニクル』に関わる一切の記憶がプレイヤー達の脳から消去されていた
〝リア充になる〟と息巻いていた一誠の友人、松田と元浜も『クロニクル』の存在を綺麗サッパリ忘れた
アザゼルの話によれば、『クロニクル』の端末には予め特殊な術式が仕掛けられており
――『クロニクル』のボスを全て倒してクリアした瞬間、術式が発動
仕掛けられた術式がプレイヤー達の記憶から『クロニクル』に関する情報を一切合切消去し、またも三大勢力の出鼻を挫いた
それゆえに調査できるのは新が託してきたミカサの残骸しか無い……
新には悪いと思いつつ、少しでも情報を集める為には仕方なかった
度重なる敗北と屈辱にアザゼルは勿論、リアス達も気が気でなかった
想像以上に心を抉ってくるキリヒコの手腕、その背後に控えている造魔
ここまで末恐ろしい組織は他に見ないだろう……
すると、アザゼルは何かをキャッチしたのか通信用の小型魔法陣を耳元に開く

「おう、サーゼクスか。……え？新がどうしたって？――――――――は……っ？それ、本当か……？」

サーゼクスからの通信らしいが、アザゼルの顔付きが驚愕一色に染まる

その後も興奮した様子で会話を続けていたが、次第に表情が険しくなり、「分かった……」と呟いて通信を切った

全員の視線がアザゼルに集中し、リアスが訊いてくる

「アザゼル、何かあったの？お兄さまから連絡が来ていたみたいだけれど」

「お前がさっき言ってたバウンティハンター協会からの呼び出しについてだ。その内容は――――新のライセンス昇格だったよ」

ここで思いも寄らぬ吉報、バウンティハンター協会が新を呼び出したのは――――ライセンスの昇格を推薦する為だった

今回の『クロニクル』の１件が協会の目に留まり、たった独りで事態を終局させた新の活躍が評価され……昇格を推薦する事になったそうだ

本来、ライセンスの昇格は任務の成功率を吟味し、正式な手続きのもとで行われるのだが――――協会の上層部から直接昇格の手続きをするよう申し出があった

それは極めて異例な昇格推薦

新は現在ＳＳ級なので、この推薦を受ければランクはＳＳＳ級――――即ち、目標でも

あったトップクラスのバウンティハンターになれる事を意味する
本来なら喜ばしい報せの筈だが……アザゼルは未だに浮かない顔をしていた
それを見てリアスが再び訊く
「……新に、何かあったの？」
「……」
「先生、なんで黙ってるんスかー！」
茶を濁すような態度を取るアザゼルに、一誠が堪らず怒鳴る
他の皆からの視線も突き刺さるような雰囲気になった途端、アザゼルは溜め息を吐いて白状する事に……
その内容とは――絶望的なものだった
「……新がライセンスの昇格を辞退したそうだ」
その場にいた誰もが理解できなかった……
ザワつきが収まらず、アザゼルは事の顛末を打ち明けた
協会に着いた新は直ぐに役員達が集まる部屋へ呼ばれ、全世界に被害をもたらした『クロニクル』の件について賞賛された
犠牲者を多く出してしまったのは居たたまれないが、それでも短期間且つたった独りで事態を終局させた事は快挙と言わざるを得ない

三大勢力ですら対処できなかった『クロニクル』を終局させた功績を讃え、新にＳＳＳ級への推薦昇格を持ち掛けてきた
バウンティハンターの中でも最高クラスのライセンス
新にとっては願ったり叶ったりの推薦だった
しかし、その話を持ち掛けられた直後、新はハッキリと告げた
『俺にはそんな資格なんて無い……ッ。後輩を殺した手で、そのライセンスを受け取りたくない……ッッ』
そう言って新は自らライセンスの昇格を辞退したのだ
そして、問題はここからだった……
役員達はライセンスの昇格辞退を撤回するよう、何度も止めてきたらしい
何故なら――――推薦昇格を辞退すれば、２度と昇格が出来なくなるからだ
ＳＳＳ級と言うランクは厳粛な管理制度に基づいている為、辞退した者は通常の昇格も受けられなくなってしまう
つまり、新はＳＳＳ級になる道を自ら絶ってしまった……
「そ、そんな……っ」
あまりの衝撃を受けて声を震わせるリアス
一誠は納得がいかない剣幕でアザゼルに詰め寄った

「先生ッ！そんなのを知らされて、黙ってるだけなんスか⁉何とかならないんスか⁉今すぐ協会に行って説得しましょうよッ！」

「……イッセー、気持ちは分かるが無理だ。たとえ協会の連中を説得できたとしても、新がそれを呑むわけが無い。アイツ自身が昇格を拒んでる以上、俺達にはどうする事も出来ないんだよ……」

「そんなぁ……っ！だからって、こんなの――――」

「んな事は分かってるッ！納得いかないのは俺も同じだッ！だがな、ここにいる誰よりも歯痒い思いしてんのは新だ。アイツだってこんな形で推薦昇格を放り出したくなかった筈だ。……けど、昇格したとしても――――新はもっともっと苦しむだろう……。今まで〝仲間殺し〟と言う不名誉なレッテルを貼られて生きてきたんだ。その上、初めて出来た後輩を殺しちまった……。そんな血に汚れた手でライセンスを受け取ったら、アイツはずっと重荷を背負う事になる。……それがどれだけツラいものか、分かるか……？」

アザゼルは怒りと悲しみを混ぜて一誠達を止める

本来なら一誠の意見に賛成したい筈だが、そうしたところで新は頑なに昇格を拒むだろう

虚しく新の傷を深く抉るだけになってしまう……

結局、何も出来ない面々は肩を落とすばかり……
ゼノヴィアは怒りに震え、机に拳を叩き付ける
「……許さない。絶対に許さないッッ！次に姿を見せた時は、真っ先に斬り殺してやるッッ！」
「ゼノヴィア、今はその怒りを取っておけ。全員が同じ気持ちだ。……正直、ここまでやる腐れ外道だとは思わなかった……っ！」
アザゼルもキリヒコの手腕に堪忍袋の緒が切れかけていた
恐らく、次に対峙した時は即決戦に発展するだろう……
少しでも新の無念を晴らす為に……
しかし、彼らはまだ知らなかった
ユナイト・キリヒコは予想を遥かに超える悪であり、邪悪で凶悪な力を手に入れていた事に……

薄暗い闇の中、独りで佇(たたず)むのは騒動の発端にして諸悪の根源――ユナイト・キリヒコ

完成したばかりの新しい装置を右腕に展開し、ジッと見据えていた

そして、右腕を高く掲げ――――円を描くように1周させる

「さあ、遂に刻は来ました。ここからが……本当のＲｅｑｕｉｅｍの始まりです」

そう言った刹那、右腕の装置が妖しく輝く

『Ｕｎｉｔｅ　Ｃｈｒｏｎｕｓ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ……!!!!!』

天ヲ喰ライテ

地ヲ蝕ミ

刻メ、闇ノクロニクル……ッッ！

今コソ刻ハ極マレリ……ッッ！

ユナイト・クロノス・キリヒコ

オエエエエ……ッ！
ゲボッ、ビシャァ……ッ！
深夜の路地裏、デスゲーム『クロニクル』が終わってからの新は荒れていた
学園にも顔を出さず、自宅にも帰らず、酒場を転々と渡り歩いて飲んだくれる……
アルコールの過剰摂取のせいで胃が対応しきれず、飲んだばかりの酒を吐き出す
吐瀉物をぶちまけた新はフラフラと夜を彷徨(さまよ)い、まるで生ける屍(しかばね)のようになっていた
……
目的も無く歩いていると、ガラの悪そうな3人組の男がわざとらしく肩をぶつけて絡んでくる
「おう、待てやコラ」
「人にぶつかっといて謝りもしねぇのか？」
「あー、いてぇ。こりゃ骨が折れちまったなぁ。治療費で１００万出してもらおうか」
タチの悪い当たり屋のようだが、新はチンピラに視線を移すと……小さく呟いた
「――――失せろ」

「あ？」
「失せろ……殺すぞ……」
「はぁ～？このガキ、頭イッちゃってんの？」
「ギャハハハハ！」
癇に障る……
今の新には何もかもが癇に障った……
下卑た笑い声も……態度も……
やり場の無い怒りが沸々と煮え滾る……
新の手がゆっくりと拳を作り――――チンピラの1人を殴り飛ばした
油断してたチンピラ1号は一撃で失神、新は更に頭を踏みつける
骨が折れる音を皮切りに新は暴走
逆上したチンピラ2号を蹴り上げ、顎と歯を数本破壊する
その後も抑えられない怒りをぶつけるが如く、チンピラ2号の頭を掴んで壁に叩き付けた
チンピラ2号の鼻は潰れ、壁からずり落ちる……
「あ……あぁぁ……っ」
残されたチンピラ3号は完全に恐怖し、新が視線を移してくる

チンピラ3号が悲鳴を上げて土下座する
「ご、ごめんなさい！すいません……！すいませ――――っっ！」
そんな命乞いも新には届かず……無慈悲に頭を蹴り抜かれた
首を折られたチンピラ3号も地に沈み、新は無言で立ち去っていく
やってる事はただの八つ当たり
だが、今の新は制御する心を失っていた……
路地裏から出て再び彷徨(さまよ)い歩こうとする新に、1人の人物が呼び掛ける
「おいおい、たかがチンピラ相手に何やってんだよ？」
そこにいたのは――――買い物帰りと思しき袋を抱え込んだ行きつけの酒場のマスター、イスルギ・タスクだった
新は知ってる顔に会ったせいか、「マスター……」と弱々しく呟く
「お前んとこの堕天使の嬢ちゃん達から話を聞いて様子を見に来てみれば、随分と荒れてやがるな」
「……マスターには関係ないだろ……」
「まあ、とにかく話ぐらいさせろ」
マスター・イスルギにそう言われ、近くの公園まで渋々ついていく事に
ベンチに座り、俯(うつむ)いた何も話さない新

新の様子を見て、〝こちら側から話すしか無い〟と踏んだイスルギが口を開く
「聞いたぞ、推薦昇格を蹴ったんだってな」
イスルギの問いに新はピクッと反応を示す
「デスゲームってヤツを終わらせる為とはいえ、後輩ちゃんを殺しちまって、その罪悪感から昇格を捨てたって事もな」
「……っ」
「確かにツラいわな、普通のヤツなら耐えられんだろう。だがなぁ……いつまでウジウジしてるつもりだ？やっちまった事を女々しく嘆いて、喚き散らして、酒を飲んで暴れ回って――それで何か変わるのかよ？」
「……っ！……何が分かる……っ！アンタに……俺の苦しみが分かってたまるか……ッ！俺はこの手で……初めて出来た後輩を……殺しちまったんだ……ッ！」
頭を押さえて泣き喚く新だったが、イスルギはキツく諭そうとする
「んで、泣いてりゃ後輩ちゃんが生き返るとでも思ってんのか？酒を飲んでりゃ傷が癒えると思ってんのか？八つ当たりしてれば優しく声を掛けてくれるとでも思ってんのか？……今のお前はただの反抗期のガキだ。自分だけが傷付き、自分だけが苦しんでいると思ってやがる」
「……っ」

「良いか？お前の世界ではお前だけが傷付き、お前だけが被害者だ。けどな、現実は違う。傷付かずに生きてる奴なんて何処にもいねぇんだよ。そして、苦しんでいるのもお前だけじゃねぇ」

「……っ」

「こうしてる間にも、お前んとこの悪魔の嬢ちゃん達も苦しんでいる筈だ。今のお前に掛けてやれる言葉が見つからない、見つけられない、どう励ましてやれば良いのか分からない。その事で悩み、苦しんでいるが……それでもお前の帰りを待ってるんだと思うぜ？」

新は何も言い返せなかった

確かに犯した過ちは、どうやっても消せない……変えられない……

だが、だからと言って塞ぎ込んだところで解決の糸口など見つからない

そして、新が苦しんでいるのと同じように――――リアス達も苦しんでいるのだ

それを分かろうともせず、ただ彷徨い、酒に溺れて暴れるのは愚行の極み

ましてや、誰にも打ち明けず独りで抱え込めば押し潰されるのは明白

「ゆっくりでも良い、まずは帰ってやれよ。お前を心配してくれている奴らのもとに。直ぐに治る傷なんざ、この世には存在しないんだ。仲間がいるなら、そいつらと一緒に治していけ」

イスルギが穏やかに諭すと、ようやく新は重い腰を上げ始めた
僅かに過ぎないが、蝕まれていた傷が癒え――――まずはリアス達の所に戻る決意をする
「……マスター……ありがとう……」
「よしっ、少しは持ち直したか？なら、さっさと帰ってやんな」
「……そう、だよな。戻らねぇとな。リアスが、皆が待ってくれてるんだから」
リアス達の所に戻る決意をした新は涙を拭い、イスルギに礼を言ってから公園を去っていく
犯した過ちに潰されている場合じゃない
自分だけで苦しんでいる場合じゃない
戻ったら、リアス達に謝ろう
そう思い、少しだけ足を早めていった

『……はぁ、やっぱり精神面ではまだまだガキだな。まさか、あそこまで廃人寸前になるとは思わなかった。俺としても、ここでお前に壊れてもらったら困るんだよ。一応の助

け舟ぐらいは出してやるが、こんな事で壊れるようなら――この先の修羅場には耐えられんよ。新、お前が足を踏み入れようとしてるのは地獄以上の地獄だ。これからもエグい手段を行使させてもらう。まあ、精々踏ん張ってくれや』

「本当にスマなかった」

オカルト研究部の部室に戻ってきて早々、新は皆に向かって土下座をしていた

独断で行動していた事、1週間も塞ぎ込んでいた事、その他諸々の謝罪も踏まえて誠心誠意を込めた土下座

頭を深々と下げる新に、リアスは頭を上げるように言う

「新、あなたが思い詰めてしまったのは私の……いえ、ここにいる全員に非があるわ。あなたが誰よりも苦しんで、悩んで、傷付いていたのに……私達は認識が甘かったわ……。だから、もう独りで抱え込むのだけはやめなさい」

リアスは新を優しく抱き締め、新もリアスを抱擁して「……ゴメン」と小さく呟く

その後、皆にも一言ずつ詫びを入れていき、謝罪を終えたところでアザゼルが今後の話を進める

「さて、問題はこの後だ。今回の件を皮切りに造魔(ゾーマ)の動きが激化していくだろう。今後は各勢力にも勧告して、少しでも多く情報を入手する他あるまい。幽神(ゆうがみ)兄弟にも独自に動いてもらう必要があるな」
「とにかく、今は情報が欲しいわね。情報が足りないまま攻めるのは無謀極まりないもの」
アザゼルとリアスの言う事は尤(もっと)もだった
今まで戦ってきた敵とは強さも、情報の少なさも、戦力の規模も次元が違う
戦いに於いて情報は武器となり、手にした情報が多ければ多いほど対処の方法も広がる
これ以上、後手に回されるのは避けたいところだろう……
暫(しばら)くすると、窓の外から雨音が聞こえてくる
雨が降り始めたのだろう
リアスがカーテンを閉めようと窓の方に足を運ぶ――――刹那、リアスは動きを止めた
カーテンを握り締める手が徐々に強まり、見開いた目は〝ある人物を見据えている
それは……今もっとも会いたくない諸悪の根源だった

雨　あめ　降れ　ふれ　母さんが～♪

蛇の目で　お迎え　嬉しいな～♪

雨の降る中、声が透き通るように歌う1人の男
不可解にも降り注ぐ雨は男の周囲から弾かれ、逸(そ)れていく
新も窓越しにその男を見つけ、忌まわしき名を呟(つぶや)く……
「……キリ、ヒコ……ッ」
新の視線に気付いたのか、キリヒコは不敵な笑みを浮かべる
キリヒコの登場にゼノヴィアは殺気を迸(ほとばし)らせ、いの一番に窓から飛び出していった
「よせ！」と叫ぶアザゼルの制止を聞かず、一誠も続くように窓から飛び出す
ゼノヴィアはデュランダルを携(たずさ)え、怨敵(おんてき)のキリヒコに斬りかかっていく
「貴様ァッッ！よくも私達の前に顔を出せたものだなッ！今すぐその不愉快な面(ツラ)を斬ってやるッッ！」
「Oh(オー) la(ラ) la(ラ)、せっかちなMade(マド) moi(モア) selle(ゼル)ですね」
キリヒコは余裕綽々(よゆうしゃくしゃく)と言った様子で右手に一新(いっしん)された装置(デバイス)を展開
チェーンソーのような刃でデュランダルの一撃を軽々と受け止め、弾き返す
渾身の初撃をあっさりと返されたゼノヴィアは憎むように睨み付け、残りの皆も合流する

グレモリー眷属全員が揃ったところで、キリヒコは軽く会釈する
「Ｂｏｎｊｕｒ、皆さん。手荒い歓迎のご挨拶、痛み入ります。しかし、悪魔の皆さんは少々モラルが欠落しがちなんですね。ヒトにいきなり剣を振るってくるのは、些か礼儀がよろしくないと見えますが？」
「よく言うぜ。少なくとも、お前みたいな腐れ外道よりは礼儀を弁えてるつもりだ」
アザゼルが憎々しげに返すが、キリヒコは嘲笑するだけだった
「沸き上がる感情を優先させて、自分を律する事も出来ないような方々に弁えると言った器量があるのでしょうか？」
キリヒコの言い草に一誠は堪らず殴りかかりそうになるが、それではゼノヴィアの二の舞になりかねない
ここは何とか堪えるしかなかった……
激情に駆られているのは皆も同じ
キリヒコは構わず続ける
「本日ここに足を運んだのは、私の発現した新しい力をお披露目する為です。とてもＴｒ▪ｓ　ｂｉｅｎに仕上がりましたので、皆さんに是非とも味わっていただきたいのですよ」
そう言ってキリヒコが右手の装置を掲げ、円を描くように一周させる

「心逝(ゆ)くまでご堪能ください。バージョンアップした――――時戒器(ツヴァイト・ギア)を。そして、私の新しい力を――――Bonne(ボヌ) chance(シャンス)」

『Unite(ユナイト) Chronus(クロノス) Chronicle(クロニクル) Breaker(ブレイカー)……!!!!』

不気味で恐々とした音声と共に、キリヒコの背後から時計盤のような幻影が出現

その幻影が中央から2つに分かれ、キリヒコの周りに位置付く

Ⅰ(ワン)、Ⅱ(ツー)、Ⅲ(スリー)、Ⅳ(フォー)、Ⅴ(ファイブ)、Ⅵ(シックス)、Ⅶ(セブン)、Ⅷ(エイト)、Ⅸ(ナイン)、Ⅹ(テン)、ⅩⅠ(イレブン)、ⅩⅡ(トゥエルブ)……カウントが浮かび上がる

宙に浮くカウントと時計盤の幻影はキリヒコの全身を呑み込み――――絶望の化身を誕生させた

以前に異形化した時の姿とは全く別物の様相

鮮やか且つ妖しく輝くメタリックグリーンの装甲、王冠を彷彿させるような頭部

刃のように突き出た両肩、腰にたなびくローブ

優雅な佇(たたず)まいと出で立ちが、キリヒコの底知れない脅威をより強調させる……

怖気(おぞけ)を引き立てる微風(そよかぜ)も吹き、その場にいる全員が息を呑む

キリヒコはアピールするように両手を広げ、得意気に語り始めた

「如何(いかが)ですか？『クロニクル』によって死亡(ゲームオーバー)となった人間達のデータを吸収し、改良を加えた私の新しい力です。あなた方のおかげで非常に有意義なデータ回収が出来まし

た。本当に、本当に感謝しています。期待以上に踊ってくださったのですから……Ｍｅｒｃｉ」

皮肉と嫌味をタップリ混ぜたキリヒコの賛辞に、誰もが怒りを抑えられなかった

特に一誠とゼノヴィアは怨敵を睨むように見据え――――吼えた

「ふざけんなぁァァァ

突如、爆炎と火柱が盛大に噴き上がり、キリヒコに向かっていこうとした一誠とゼノヴィアが吹き飛ばされる

〝いったい何が起きたんだ……？〟

その場にいる誰もが呆気に取られ、一誠もゼノヴィアも何が起きたのか分からないまま体を起こそうとする

全身を焼かれ、痛みが身体中を駆け巡り、血と共に内容物を吐き出した

「……っ⁉な、何だ……っ、何が起きたんだ……っ⁉」

「いったい何をされたんだ、私達は……っ⁉」

『……ポーズだと……っ？まさか……っ！』

アザゼルは最悪の予想を頭に過らせてしまった

キリヒコが使った能力、それは――

「お前……まさか、時間を止めやがったのか……っ⁉」

アザゼルが発した一言に全員が驚愕、戦慄

不可解な現象の核心を突いたアザゼルに対し、キリヒコは含み笑いをする

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、これまで得た膨大なデータを基に、あなた方を完封する術を造り上げました。ギリシャ神話にて時を操る神――クロノスに因んだ能力です」

「造った、だと……⁉神の力を造ったって言うのか⁉バカげてやがるっ！そんな事できる筈が――――」
「さすがに本物の神とは呼べませんが、〝神に近い能力〟なら現存しても不思議ではありません。たとえ、どんな形であろうと目の前で起きてる以上、それが真実なのです」
キリヒコは両手を広げ、こう宣言する
「これからはユナイト・キリヒコ改(あらた)め――――ユナイト・クロノス・キリヒコと名乗りましょう」
この瞬間、時間を操る最悪の化け物(ユナイト・クロノス・キリヒコ)が誕生してしまった……っ
キリヒコは再び時間を止めるべく、時戒器(ツヴァイト・ギア)を輝かせる
「奴を止めろォォォォォォおオオオ

一誠達だけじゃなく、降っている雨粒までもがキリヒコの力によって停止させられていた

停まった刻の中を悠々と往来するキリヒコ

右手の時戒器（ツヴァイト・ギア）の銃口をリアス、朱乃、ロスヴァイセに向け――禍々しいオーラを集束させる

『Ｆｉｎｉｓｈ（フィニッシュ） Ｂｕｒｓｔ（バースト）……!!!』

『Ｔｈｅ（ジ） Ｅｎｄ（エンド） Ｏｆ（オブ） Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ（ジャッジメント）……!!!』

銃口から放たれた光弾は幾つにも分かれ、消滅魔力の塊や雷光（らいこう）、魔術砲撃を蹴散らして彼女達に被弾

撃たれたリアス達は一瞬だけ動きを再開させるが、直ぐにまた停止する

まるで動画やゲーム等で一時停止を連続で行（おこな）うかのように……

キリヒコは次のターゲットを一誠、小猫、ゼノヴィア、イリナに定め、時戒器（ツヴァイト・ギア）の向きを反転させる

チェーンソーの刃を回転させ、先程と同じように禍々しいオーラを集める

『Ｆｉｎｉｓｈ（フィニッシュ） Ｂｕｒｓｔ（バースト）……!!!』

『Ｔｈｅ（ジ） Ｅｎｄ（エンド） Ｏｆ（オブ） Ｓａｃｒｉｆｉｃｅ（サクリファイス）……!!!』

オーラの刃が伸び上がり、振り抜いて一誠達を纏めて一閃

周りの地が爆ぜ、一誠達が爆炎に包まれたまま停止する
キリヒコの凶行はまだ終わらない……
斬りかかろうとしていた祐斗に近付き、まずは聖魔剣をへし折る
その後は止まっているのを良い事にパンチを何発も浴びせ、最後に強烈な蹴りで一閃した
蹴られた祐斗は空中へ飛ばされ、再び停止
コウモリに変化していたギャスパーも時戒器の銃撃で残らず撃ち落とす
無論、時間は止まったままなので一瞬だけ動いて直ぐに停止
そして、新にも攻撃を仕掛けるかと思いきや……
「このまま一方的に蹴散らすのは物足りないですね。ここで解いてあげましょうか」
気紛れなのか余裕なのか、キリヒコは再び時戒器を輝かせ――――時間停止を解除する
『Ｒｅｓｔａｒｔ……!!』
その刹那、止まっていた光景が一気に動き出し――――あちこちで爆炎が噴き上がった
新は自分の周りで噴き上がる爆炎に目を奪われ、一挙にやられたリアス達の姿が視界に入る
キリヒコの時間停止能力に戦々恐々とする……

アーシアとレイヴェルが皆の治癒を急ぐ中、新はユナイト・クロノス・キリヒコを憎々しげに見据える
対するキリヒコは、手をクイクイと動かして挑発してくる
新は火竜の力を解放した――――真『女王(クイーン)』形態へと変貌
半端な力では一矢報(いっしむく)いる事すら叶わないだろう……
新は火竜のオーラを爆発させて、キリヒコに拳打を見舞う
だが、キリヒコはそれを片手で受け止め――――空いた手で逆に拳打をくらわせた
新が拳打を放てば、それを受け止めて拳打を返し……蹴りを放てば、同じように受けて蹴りを返す
肉体と精神を同時に弄(もてあそ)ぶような戦法に、新は反撃する気力すら削ぎ落とされてしまう……
「どうしました？あなた方の感情は、この程度で萎(な)えてしまうのですか？」
両腕を広げ、挑発の意を込めて歩み寄るキリヒコ
憤慨した新は雷炎モードを発現し、雷も迸(ほとばし)らせる火竜を右腕に纏わせて渾身の一撃を放つ
しかし、その攻撃もキリヒコは両手で防ぎ――――新の腹部に強烈な蹴りを入れ、左右の拳打を入れて跪(ひざま)かせる

その後、キリヒコは全身から禍々しいオーラを噴かせ――

『Ｆｉｎｉｓｈ　Ｂｕｒｓｔ……!!!』

『Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｃｒｅｗｓ―ａｉｄ……!!!』

必殺を唱える音声が不気味に鳴り、キリヒコの足元を中心に時計盤の幻影が出現

キリヒコは幻影時計盤の長針の動きに合わせて、新に回し蹴りを撃ち込んだ

「……ッ!……ッ!」

蹴り抜かれ、新の全身に形容し難い苦痛が襲い掛かってくる

時計盤の幻影が消え、キリヒコが「Ａｄｉｅｕ」と呟いた直後――新の足下から爆炎が噴き上がり、火柱に包まれる

極大の衝撃と爆炎によって新は身体中から血を噴き出し――そのまま地面に倒れ伏した

凶悪な時間停止能力と圧倒的な強さに誰もが戦慄、アザゼルも畏怖せざるを得なかった

キリヒコは瀕死状態の新を持ち上げ、治療を受けているリアス達の前に放り投げる

「ご心配無く、加減しておいたので命に別状はありません。寧ろ……今ここで死なれたりしたら興醒めになってしまいますからね」

「……どういう意味だ?」

アザゼルが訊くと、キリヒコは含み笑いをして答える
「もっともっと、あなた方の反応を見たいからですよ。私達を絶対に許さないと豪語し、本質や価値を見出だせない、くだらない信念と正義感を掲げるあなた方が――――圧倒的な力と脅威の前に崩れ、泣き叫び、壊れていく滑稽な姿を見たいんですよ……っ。私が飽きるまで……っ」
恐怖と狂気を孕ませたキリヒコの物言いに、全員の背筋が気持ち悪い汗で濡れる
キリヒコは足元に転移用の魔法陣を開き、そこから放たれる光に包まれていく
「まだまだ壊れないでくださいよ?これから造魔の方々も顔を合わせる事になるのですから。その時までに少しでも力を付けていてください。――――では、Ｓａｌｕｔ」
そう言うとキリヒコは完全に転移の光に覆われ、その場から消えていった……
彼はほんの挨拶程度で来たのだろう
しかし、アザゼルやリアス達にとっては現状の悪さ、造魔の底知れない強さの一端を見せつけられたようなものだ……
こんな事はまだ序章に過ぎず、これからが本番だった
アザゼルは苦虫を噛み潰したような顔で俯き、何も出来なかった悔しさを呪った
キリヒコの恐ろしさにリアス達もすっかり意気消沈してしまう……
しかし、彼らは造魔と言う組織の本当の恐ろしさを、造魔に立ち向かう事の愚かさを

後々思い知らされる……

造魔の主な拠点とされる飛行艦隊の一室
新達を容易く圧倒したキリヒコは時戒器から伸びる管を〝ある物〟に突き刺した
それは――彼の前に複数並び立つ黒い繭
何かを流し込むような作業を終えた直後、繭が静かに躍動する
動く様子はまるで心臓のようだった……
「フム……まだまだ掛かりそうですが、上々のようですね。気長に待つとしますか。――〝彼ら〟よりも、こちらの方が先に目覚めそうみたいですし」
〝彼ら〟と呼ばれる繭から別の方に視線を移すと、そこには同じ形状の黒い繭が2つ並んでいた
ただし、その2つは先程の物と違って内部が少し透けており――中にいる〝何か〟が鋭い眼孔を放っていた
「魔獣騒動時のデータと今回のデータ、三大勢力の皆さんが手こずってくれたお陰で有意義な収穫となりましたよ。後は……まあ、面白おかしく相手をしてあげましょうか。

――深淵の刻に至るまで……」

「おい、シルバー。〝アイツ〟は見つかったのか？あれからだいぶ時間が経つのだが」
「ディザスター指揮官、抜かりはありません。幾つもの情報網を駆使して、ようやく見つけてきました」
「そうか。だが、見つけたからと言って気を抜くな。……奴の方向音痴は気紛れに起こる自然災害と同じ、何人にも予測する事など出来んからな。見失えば、また面倒になる」
「重々承知しています。そちらも重大なんですが……キリヒコの件について、ちょっと……」
「キリヒコがどうかしたのか？」
「ええ。……やはり、あの男は危険な匂いを孕んでいます。何を企んでいるのか分からない上に、あのような力まで会得しました。もしかしたら……我々に反旗を翻す腹積もりなのでは？」
「そんな事は最初から分かりきっている」
「は……？」

「この造魔自体、野心の塊が集った組織に過ぎん。己の力を高める為、卑しい欲を叶える為、大金を稼ぐ為、そんな奴らが自由に行動するのに都合が良いだけだ。何処で何をしようが咎められん、造魔とはそう言う組織だ」
「確かにそうですが……〝あの御方〟は、そんな身勝手を了承しているのですか？」
「そうでなければ、今ここに俺達がいるわけ無いだろう。野心だろうが、裏切りだろうが、正義だろうが、自分に向かってくるならば正面から叩き潰す――――〝アイツ〟はそう言う男だ」
「……実に恐ろしい方ですね。いずれ裏切ろうとしている者さえも受け入れるとは」
「どちらにしろ言える事が１つだけある。奴を敵に回すなら……生半可な覚悟など捨てるべきだ。中途半端な強さは、奴の前だと灰塵に帰する。たとえ神仏や悪鬼羅刹が相手でもな……」

何処か分からない広大な密林地帯
そこに１人の男がいた
何処かで見た事あるような〝某独眼竜〟の風体をした眼帯の男

彼は今、周りを巨大な猛獣どもに囲まれていた……
獅子や虎、熊、ワニ、ゴリラ、象などの姿に酷似した自然発生型の魔獣
その数は１００頭を軽く超えていた
男は周りを見渡し、肩を竦めて言う
「最近はケモノ風情が集ってきやがるな。生憎、今は腹が減ってねぇんだよ。さっきドラゴンみてぇな奴を喰って満腹なんだ。余計な動きをすれば、また腹が減る。……つっても、ケモノ相手に説得は無理か」
唸り声を上げて威嚇してくる猛獣の群れに対し、眼帯の男は自嘲するように笑う
そして……
「――――――ッ！」
「「「「……ッッ!!」」」」
ドサッ……ドサッ……ドサッ……
なんと、周りにいた魔獣どもが次々と倒れ――そのまま息絶えていく
眼帯の男は手を触れずに１００頭もの魔獣を殺したのだ……っ
男は魔獣の群れを一瞥する
「チッ、こんなんじゃ腹の足しにもならねぇ、所詮はケモノ風情か。やっぱ戦るなら手応えのある相手じゃねぇとな。……久し振りに日本へ帰ってみるか。面白い噂も出回っ

てるみてえだ」
　男は口の端を吊り上げ、密林地帯の中を歩いていく
「あれから5年か……。少しは強くなってんだろうなぁ――竜の字(りゅうじ)イ」

第１７章　魔剣聖のヴァンキッシュとゾーマ

情報戦はいつの時代でも大事なので怠らないようにしよう！

「いい加減に自覚なさってください。あなたは極度の方向音痴なのですから、勝手に動かれては面倒事が増えてしまいます。ご自分の立場を理解しているのですか？」
「ったく、面倒臭い説教なんざ聞きたくねぇんだよ。ちょっと散歩してただけだ。どう動こうが俺の勝手だろ、シルコ」
「シルバーです。その〝散歩〟とやらで何故オホーツク海を経由した挙げ句、国外の密林地帯を徘徊していらっしゃったのか説明をお願いします」
「オホーツク海？沖縄じゃなかったのか。何か氷が海に浮いてるなーと思ったら、俺はそんな所にいたのか」
「……間違っても沖縄に流氷など来ません。せめて暑い寒いの違いで気付いてください」
「しっかし、日本も随分と変わっちまったもんだな。頭にポリ袋を被（かぶ）ってる奴らがワン

サカいてよ」
「何処の民族の話ですか」
「あと、背中から変な植物が生えてたな」
「何処の星の話ですか」
「まあ、味は悪くなかったから良いんだけどよ」
「食べたんですか。……あなたが今まで何処にいたのか、これ以上詮索しない方がよろしいみたいですね」
「おう、そうしとけユバーバ」
「シルバーです。……さて、本題に戻りましょう」
「本題？……ああ、例の駒王町って所か。確か……グレイシー？いや、ヒキコモリーか。そんな奴らの管轄――――」
「グレモリーです。それとシトリー家の悪魔もいます。奴らの功績は耳に入っていますか？」
「知らね、何かしたのか？」
「……情報ぐらいは入れてくださいよ。良いですか？グリゴリの元堕天使総督アザゼルが手掛けたグレモリー眷属は、この短期間で目まぐるしい程の成長と功績を収めています。幾度にも亘って『禍の団』の襲撃を退けた挙げ句、旧魔王派と英雄派を事実上活

動停止にまで追い込み、更には三大勢力の仇敵だった闇人とも和解を果たしています。特に悪神ロキの討伐、竜の末裔と呼ばれるリュオーガ族の撃退、冥界での魔獣騒動鎮圧でも実力が如実に語られ、強さは最上級悪魔クラスを超えると言っても過言ではありません。これが今までの戦闘の様子です」

「ふーん……」

「奴らの戦闘データ、あなたの目から見てどうですか？」

「……〝ガキのチャンバラごっこ〟だな」

「え？」

「〝ガキのチャンバラごっこ〟だっつってんだよ。ゼニーバ、テメェはこんな薄っぺらい強さしか持ってねぇような奴らにビビってんのか」

「シルバーです。……では、あなたにとっては大した障害にすらならないと？」

「ああ、取るに足らねぇヤツを殺って粋がってるだけだろうが。要するに、今まで退けてきた奴らが弱かったんだよ。旧魔王派って連中は無駄に自尊心とプライドを振りかざしただけの無能。英雄派は〝人からバケモノの領域〟に踏み出せなかったヘタレ集団。闇人って奴らも、確固たる信条を持たずに安寧に逃げた腰抜け。ドラゴンの奴らは慢心と傲りで足元を掬われただけじゃねぇか。強さもクソも無ぇ――――言うなりゃガラスの杖だ。鉄の斧の一振りで簡単に砕けちまう」

「あなたから見て、グレモリー眷属はその〝鉄の斧〟に至ってないと……？」
「ああ、アイツらは少し固い木の棒ってところだ。あの程度の奴なら、俺が暴れ回ってた時代の全盛期には腐る程いたぜ」
「さすがは元ＳＳＳ（トリプルエス）級のバウンティハンター、豪胆に言い切りますね」
「所詮、アイツらは〝井の中の蛙（かわず）〟だ。そんな狭い場所の一番争いなんざ、俺の眼中に無（ね）えんだよ」
「では……グレモリーとシトリー、両陣営の殲滅に取り掛かり――――」
「阿呆（アホ）か、バジルソース。速攻で潰したらつまんねぇだろ。少しは昔馴染みの顔を見るぐらいの時間を寄越せよ」
「シルバーです。……あの町に昔馴染みとやらがいるのですか？」
「ああ、丁度良い機会だ。俺達も挨拶しとこうや」

〝よぉ、竜の字。道にでも迷ってたのか？〟
『……お前、なんでここに……っ？』
〝なんでって言われてもなぁ。面白そうな匂いがしたから来てみただけだ〟

『……これ、お前が殺ったのか……っ⁉』

〝見りゃ分かんだろ。俺以外に誰が殺ったっつうんだよ？〟

『何故だ……！何故コイツらを殺したッ⁉』

〝あー、邪魔だった〟

『邪魔……？それだけの理由で……⁉』

〝いや、もう1つあるぜ。コイツらは弱ェくせにテメェを侮辱した〟

『侮辱、だと……っ？』

〝ああ、同業者を殺る覚悟も無ェくせに、テメェをボロクソに貶した。それが気に入らなかった、だから殺したんだよ〟

『なんでお前はそんな極端な考えしか――――』

〝弱ければ死に、強ければ生き残る。それが世の常だ。その流れに乗れない奴、仕組みを理解しようとしない奴は――――ただの負け犬なんだよ〟

『……ッ！貴様ァ……ッッ！』

〝俺が憎いか、竜の字？だったら、来いよ。テメェの牙が俺を喰い千切れるかどうか……殺ってみろ〟

『アアアア

「おい、大丈夫か、新？」
「……ッ？一誠……？」
ユナイト・クロノス・キリヒコに手酷くやられてから数週間が経ち、学園生活に復帰した新は昼休みの教室で一誠に起こされていた
机に突っ伏した状態で寝てしまい、冷や汗にまみれた額を手で拭う
〝……嫌な夢を見ちまったな〟と心中で毒づく新だが、不穏な点に気付く
『なんで今更〝アイツ〟が出てくる夢を見たんだ……？』
新の見た夢は――――本人にとって忘れたいと願う過去の記憶だった
自分がこの世で最も忌み嫌う男……
しかし、それは忘れたくても忘れ難く、心髄にまで刻まれた嫌な記憶……
普段は心の深奥に閉じ込めていた記憶が、何故今頃になって脳裏を過ってくるのか……？
『……頼むから、これ以上イヤな事は起こらないでくれよ……。特に〝アイツ〟が出てきたら、周りの何もかもが壊されちまう……っ』
嫌な記憶のフラッシュバックに新は唇を噛み締め、早く忘れようと別の事を考える

とりあえず弁当箱を取り出し、中に入っている唐揚げに箸を伸ばそうとするのだが……その1つが横から急に奪われた
「てめっ、コラァ！1年坊！俺の唐揚げを返しやがれ！」
「や～だよっ♪ク○ボー先輩もノ○ノコ先輩もトロいね～♪」
「その呼び方もやめろっ！このクソガキ！」
松田と元浜の怒声と共に剽軽な声が飛び交ってくる
新や一誠を含め、グレモリー眷属の頭を悩ませる造魔（ゾーマ）の一員――――シド・ヴァルディが今日も教室に乱入していた
流れから察するに、松田と元浜の弁当に入っていた唐揚げを横取りでもしたのだろう
松田と元浜がブサイクな顔芸で追いかけるも、シドはヒラリと回避する
鬼ごっこをしつつ、女子生徒の弁当からも唐揚げを貰い、舌鼓（したつづみ）を打つ
唐揚げを奪われてしまった新だが、怒る事もせず――――ハァッと溜め息を吐くだけだった
シドは次に一誠の弁当に入っている唐揚げに目をつけ、その気配に気付いた一誠は渡すまいと身構える
「さあ、イッセー先輩。その唐揚げを僕にちょうだい」
「ふざけんな！これはアーシアが一生懸命作ってくれた唐揚げなんだ！てめぇなんかに

は絶対に渡さねぇぞ！」
「フフンッ、こう見えても僕は〝全日本唐揚げの摘(つま)み食い大会〟で優勝する程の腕なのさ。優勝者に贈られる称号――唐揚げ職人(カラアゲスト)の名に懸けて、アーシア先輩の唐揚げを絶対に攻略してあげるよ」
「そんな大会も称号も聞いた事もねぇよ⁉」
「そりゃそうだよね。どっちも僕がたった今作ったんだもんっ」
「お前が捏造(ねつぞう)したんかい！いや、そんな事はどうでも良い！とにかく、お前なんかにアーシアの唐揚げは――」
「あっ、あそこで巨乳の女の子がパンチラしてる」
「「ナニィッ⁉」」
シドの安直な陽動に一誠、松田、元浜は即座に視線を移すが――勿論、巨乳の女子もパンチラも存在せず……
気が逸れた隙を突いてシドは唐揚げを奪取し、まんまと教室から逃げていった
一誠は唐揚げを奪われた事に、松田と元浜は巨乳の女子のパンチラが無かった事に落胆する
「くぅう……っ、ゴメン、アーシア……っ。せっかく作ってくれた唐揚げを守れなかった……っ」

「大丈夫ですよ、イッセーさん。私のを分けてあげますから」
一誠はアーシアがお裾分けしてくれた唐揚げを食べるが……学園の外でも中でもシドの良いように弄(もてあそ)ばれ、面目(めんもく)が立たない現状に苦慮してしまう
学園内で事を荒立てては、周りの生徒にも危害が及びかねない
『チクショウ……っ、完全に向こうのペースに乗せられっぱなしだ……っ。いったい、どうすりゃ良いんだよ……？』
一誠はそんな事を考えながら、弁当のおかずに箸を伸ばすのだった……

「ふっふ～んっ、アーシア先輩の唐揚げをフライングゲット～♪まだまだ僕には敵わないようだね、イッセー先輩。それじゃあ、戦利品を堪能させてもらおうかな」
パクッ……！
「……ッッ！こ、これは……⁉瑞々(みずみず)しくジューシーな噛み応え……カリッカリに揚がった衣(ころも)……そして、全体に染み渡った胡麻(ゴマ)と醤油ベースのタレの香り……っ。こんな美味しい唐揚げ……食べた事が無い……！」
ペロ……ッ

「イッセー先輩の劇的なパワーアップの秘訣は……おっぱいだけじゃない……っ。この素晴らしく美味しい唐揚げも合わさった奇跡の産物だったんだね……っ？それを独り占めするなんて、ズルいなぁ……！こうなったら、何がなんでもアーシア先輩を攻略してみたくなっちゃったよ……！イッセー先輩、次に遊ぶ時は――――大事な物を懸けて勝負ぼうねぇ……っ！」

「皆、今日は朗報が来てるぞ。ここ数週間かけて、ようやく造魔に関する一部の情報を入手できた」

放課後のオカルト研究部部室にて、アザゼルが開口一番に告げる

待ちかねたとも言うべき造魔に関する情報の入手にグレモリーとシトリーの両陣営がざわつく

ほんの一部だが、それでもありがたい

アザゼルが情報入手の経緯を語る

「アジュカの情報網を基に幽神兄弟にも情報収集に行ってもらってたんだ。独立の諜報部隊だから、俺達が動けない間でも繰り出せる」

「何かもう、ヴァーリチームみたいな役職っすね。アイツらも随分と丸くなったんだなぁ」
「そうでもないぞ、イッセー？特に幽神正義は少し茶化した程度で『蹴り殺すぞ』って脅してくるぐらいだ」
「そりゃ先生が煽るからでしょ！いい加減にしとかないとフォロー出来ない――と言うより、あの兄弟に襲撃されてもフォローしませんよ？」
「へいへい、分かってるよ。……さて、真面目な話に戻るか」
　アザゼルが目の前に映写用の魔法陣を展開し、造魔についての情報が映し出される
「まず、造魔は普通のテロ組織じゃなく、依頼と独断によって他のテロ組織を潰す傭兵に近い組織だ。俺達みたいな正規の組織では出来ないような汚れ仕事をこなし、方々から支持を得ている。国からも、人民からも、あらゆる意味で厄介極まりない。しかも、ヤツらは鼠算式に傘下を増やしている。それゆえに物量的な戦力も計り知れんと言うわけだ」
「他の組織を潰しているのに傘下を増やせるなんて事があるの？」
　リアスの問いにアザゼルが嘆息する
「要するに会社の吸収合併と同じさ。造魔と言う大企業が周りの小さな企業を吸収し、傘下にしちまう。経緯は交渉だったり武力行使だったり……とにかく、これまでの組織

と比べてクセが強い連中って事だ。そして、それを可能にしているのが――造魔の中枢を担う幹部どもだ」

アザゼルが魔法陣を操作すると、次は造魔の幹部達の姿が映る

すると、ここで一誠がおかしな点に気付く

「あれ？先生、確か造魔の幹部は全部で１２人いる筈なんスよね？シドとキリヒコは知ってるから除いたとしても７人しか映ってませんけど……」

「ああ、その点については後で話そう。まずは映像に映っている奴らの情報から説明する」

アザゼルが魔法陣を操作し、最初にメガネを掛けた銀髪の男の映像が映される

「このメガネの優男、こいつの名はシルバー・ゼーレイド。造魔内の執政官――つまり中間管理職的なポジションにいる奴だ。資金面や傘下組織の管理を担っている。交渉事には大体こいつが出張ってくると言っても良いだろう」

「要は大公アガレス家みたいなヤツって事すか？」

「平たく言えば、そうだな。んで、気を付けるべきはこいつが持つ異能だ。お前ら悪魔にとっては１番の天敵となり得る」

「その男は悪魔祓い……と解釈して良いのかしら？」

リアスの問いに対して、アザゼルは首を横に振る

「そんな生易しいもんじゃない。このメガネは悪魔を滅する一族――滅悪祓士ってヤツの末裔らしい」

「「「デビル・スレイヤー!?」」」

初めて聞いた言葉に全員が驚愕し、アザゼルが話を続ける

「驚くのも無理はない、俺だって初めて聞いたんだからな。だが以前、幽神兄弟に任せたアスタロト家とヴァサーゴ家の護衛の1件から存在が判明した。天使の光撃なんかとは比べ物にならない、悪魔に対して必殺の威力を有する異能――それが滅悪祓士だ。悪魔祓いってのは、祓魔の威力を弱めた派生品に過ぎないらしい」

「そ、そんなヤバい能力を持ってるヤツがいたんスか……っ」

「ああ、実際相当ヤバいらしいからな。悪魔を滅する力でありながら、限りなく悪魔に近しいとさえ言われている。この男……シルバーはその中でも特に氷と風に秀でた滅悪祓士で、前に武装勢力を国ごと凍り漬けにした張本人でもある。まさに冷血漢ってヤツだ」

アザゼルが魔法陣を操作して、次の造魔人員――異形の者を映す

「この緑色のバケモノはギルグレイ・ジャーグ。造魔の中でもかなり好戦的な上、血を好む殺戮野郎だ。ここまではよく見る腐れ外道だが、コイツには神器狩りって肩書きが付いてやがる」

「セイクリッド・ハンター？」
「要は神器所有者を好んで狩るハンターって事だ。これまでヤツが仕留めた神器所有者は――――判明しているだけでも９９人。神器所有者を多数抱えている三大勢力は、ヤツにとって格好の標的になっちまうわけだ」
　次は漆黒の鎧兜に包まれた造魔幹部、牙鬼斬月に目を向ける
「この鎧武者――――牙鬼斬月は単独で１００隻以上の海賊船を沈めた奴だ。天下五剣って剣技を使ってくるらしい」
　〝天下五剣〟とは数ある日本刀の中で室町時代より名刀と言われた五振りの業物の総称
童子切安綱、鬼丸國綱、三日月宗近、数珠丸恒次、大典太光世――――その殆どが国宝や重要文化財等に指定されている
「でも、おかしいですよ。管理されている筈の国宝や重要文化財がテロリストの手に渡っているとは考えられません」
　ソーナの物言いに対し、アザゼルは嘆息して告げる
「耳が痛い話なんだが、日本に現存している天下五剣は諸説を基に真似て作られた――――つまりは紛い物。この鎧武者が持っているのが本物の天下五剣って事だ。噂ではデュランダルや魔帝剣グラムにも引けを取らない妖刀だと言われている」

話を聞くだけでも垣間見えてくる造魔（ゾーマ）の底知れぬ戦力、規格外の人員……

次に映されたのは、三国志のような鎧を纏った異形と壮年の男だった

「鎧を着けている異形はスメラギ・リュウゲン、こっちも噂程度だがドラゴン系統の神器（セイクリッド・ギア）を宿しているらしい。詳細はまだ分かっちゃいない。んで、こっちの目付きが悪い奴はスナイド・コブラ。名前から察するに、恐らく毒系統の神器（セイクリッド・ギア）を持っているそうだ」

「ドラゴン系統に毒系統って……物騒な奴らオンパレードじゃないスか……っ」

「イッセー、ゲンナリしたくなる気持ちは分かる。だがな、これから俺達が相手をするのはイカレた奴らが山ほどいる組織だぞ？少しでも情報が入ってくるだけマシだと思ってくれ」

アザゼルは〝次の奴らが問題だ〟と前置きをしてから映像を映す

映されたのは――――骸骨と機械が混ざったような異形と……風神や雷神を彷彿させる出で立ちの異形

新は骸骨の方を見て、目を丸くする

「この骸骨、前にキリヒコと一緒にいた奴じゃねぇか。確か……」

「ブラッドマン・クルーガー、造魔（ゾーマ）の中ではバケモノ三人格と呼ばれる奴らの1人で、〝死神〟と呼ばれ恐れられている。さっき見せたスナイドってヤツもバケモノ三人格の

1人だ。この骸骨野郎は特にヤバくてな、大抵の奴は近付いただけで死に至るらしい……」

「近付くだけで死ぬ⁉そんな奴とどう戦えって言うんですか⁉」

「知らん。とにかく、ヤツの力が判明するまでは絶対に近付かんのが得策だ」

「そんな無責任な……」

項垂(うなだ)れるイッセーを尻目に、アザゼルは話を続ける

「んで、造魔(ゾーマ)の指揮官ディザスター。……コイツは本当にヤバい、別次元の強さらしい」

「どういう事なの？」

「バケモノ三人格の中では1番の実力者で、あらゆる災害を操ると言われている。噂では神滅具(ロンギヌス)――『煌天雷獄(ゼニス・テンペスト)』を超える力を持っているとか……」

「ロ、神滅具(ロンギヌス)を超える力ッ⁉」

一誠だけでなく、他の皆も度肝を抜かれた

『煌天雷獄(ゼニス・テンペスト)』は天界の切り札(ジョーカー)役が所持する上位神滅具(ロンギヌス)で、あらゆる天候を支配する

神をも屠(ほふ)る神器(セイクリッド・ギア)さえ凌駕する力とは、いったい何なのか……？

「まさか神滅具(ロンギヌス)持ちか……？仮にそうだとしたら、俺や三大勢力が嗅ぎ付けられないのはおかしい……。〝まだ知られていない未知の神滅具(ロンギヌス)〟……？そんなもんがあるのか……？」

アザゼルは独りでブツブツと呟くものの、色々あり過ぎて考えが纏まらない
すると、ここで一誠が気になっていた事について訊く
「先生、さっきの答えを聞かせてくださいよ」
「さっきの？……ああ、造魔の幹部が全部で１２人いるのに、なんで７人分しか情報が入手できなかったのか。それはな……」
「それは？」
「――残り３人の幹部が女だからだ」
ズコッッ！と盛大にコケる一誠、ポカーンと開いた口が塞がらない新
リアスがキョトンとした表情で訊ねる
「……アザゼル、そんな理由で情報が入手できなかったの？」
「仕方ねぇだろ、情報収集に動いたのは女にめっぽう弱い幽神兄弟なんだぜ？調べさせたところで鼻血エンドになるのがオチだからな（笑）」
「先生、そんなに笑ってたらマジであの兄弟に殺されちゃいますよ……？」
「その時はイッセー、お前が止めてくれや」
「嫌ですよ⁉あんな鬼の化身みたいなヤツをどうやって止めろって言うんですか⁉」
「そこはホレ、アーシアをダシに使って――」
「今のでハッキリしました。先生は一度、幽神兄弟に殺された方が良いかもしれないっ

スね。死んだら骨ぐらいは拾ってあげますよ」
「おいコラ！教え子のくせに先生を見捨てるのか⁉この恩知らず！」
「何とでも言え、このバカ監督！」
ギャーギャーと喚く教え子と一応教師
アザゼルは一通り説明が終わったところで映像を切り、新達の方を見据える
「さっきも言ったが、今回入手できた情報はごく一部に過ぎない。まだまだ分からん事は多々ある。このバケモノ揃いの幹部どもを束ねる首領もいるだろう……。だが、それでも俺達はやらなきゃならない。三大勢力が築いた和平をぶち壊そうとする奴らを放置してはいけない」
アザゼルが真剣な面持ちで告げる
「ここからが正念場だ。俺達もやられっぱなしのままじゃ、腹の虫が治まらん。俺達に喧嘩を売ったら無事ではいられないって事を、造魔の連中に嫌と言うほど叩き込んでやろうぜ」
「勿論よ、今まで煮え湯を飲まされてきたもの。これまでの屈辱を纏めて返した上で――滅ぼしてやりましょう」
「「「「「はいっ！」」」」」
アザゼルとリアスの檄によって皆が一丸となり、造魔への対抗心を燃やす

だが、このように決起している間にも――造魔（ゾーマ）は先手先手を打って行動している事を知る由（よし）も無かった……

――〝ヒュルッ〟――
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
――〝ボオッ〟――
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
――〝ヒュルッ〟――
「いやぁぁぁぁぁぁんっ！」
――〝ドドンッ〟――
「そげぶぅぅぅぅぅぅっ！」
「な、何なんだアレは……⁉いったい何が起きているんだ⁉」
「分かりませんッ！竜巻が発生したり、炎が噴いたり……奴がそれらの現象を引き起こしてるとしか言えません！」
「たった独りの敵に三大勢力の拠点が潰されていくのか……⁉」

「まさに……厄災だ……！アレはヒトの姿を借りた厄災だ……ッ！」

――〝ヒュルッ〟――

「「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」」

「……」

「うぅ……っ、貴様は……いったい、何者なんだ……っ⁉」

「我に名は無い。我は造魔にて生まれた深淵の欠片。――ヒトは我を〝厄災〟と呼ぶ」

「……造魔の……厄災……ッ」

「深淵の扉、開かれる刻が近付いた。ゆえに脆弱な者どもに、闇の鉄槌を下す」

「……サーゼクスさま……っ！ミカエルさま……っ！アザゼルさま……っ！造魔は……想像を遥かに超えた、バケモノ集団です……っ！どうか……ご存命を……っ！」

「堕ちろ、闇の彼方へ」

「ユナイト・キリヒコ、以前にも忠告した筈ですよ。あまり勝手な真似はしないようにと」

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、自由行動がこの組織の持ち味だと記憶していますが？目的さえ見失わなければ、お咎めも無い筈ですよ？それと今の私はユナイト・クロノス・キリヒコです。まあ、下の名前で呼んでいただいても構いません」

「……何処までも胡散臭い奴め。それで、あなたが新しく造ったと宣う尖兵、トランザーとテンペスターとやらは何処に行ったんですか？」

「お二人には別任務に当たってもらいました。各地にある三大勢力の拠点を発見次第、制圧するようにと……」

「私が出向く前に手を打っておいた――――とでも言いたいのか？」

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、中間管理職はブラック一色のハードな役職ですからね。手を煩わせないように配慮したつもりなんですが、お気に召しませんか？」

「……ふん、まあ良いでしょう。今のところは不問にしておいてあげます。ただし……あの御方を敵に回すような事をしてみろ。その時は私が滅してきた悪魔どもと同じ末路を辿らせる。それを肝に命じておけ」

「ご忠告、Ｍｅｒｃｉ」

晦冥（かいめい）と厄災（やくさい）の襲来

「「「各地で三大勢力の拠点が襲撃されている!?」」」」

翌日の放課後、アザゼルから開口一番にそう言われたグレモリー眷属とシトリー眷属が口を揃えて驚愕する

実はここ数日で人間界、冥界問わず三大勢力の拠点が次々と襲撃を受け、制圧されているらしい

襲撃の実行犯は言うまでもなく……造魔（ゾーマ）によるものだった

本隊だけでなく、傘下組織も荷担している為か――被害は拡大の一途を辿っていた

「特に酷いのは人間界に潜伏している議員クラスが管理している拠点だ。隣接地帯にまで被害が及んでやがる……」

「その地点の襲撃は造魔（ゾーマ）の幹部クラスが行（おこな）っているわけね？」

リアスがそう訊くと、アザゼルは何故か訝（いぶかし）げな表情で話し始める

「それがな、造魔（ゾーマ）である事には違いないんだが……どうも幹部連中じゃないらしいんだ」

「……？どういう事？」

「前に映像で見た造魔（ゾーマ）の幹部とは似ても似つかぬ様相だったと目撃証言が出ている。た

だ確固として言えるのは……そいつらも幹部どもと同じくバケモノ染みた強さだって事だ」

「そ、それじゃあ、今の造魔（ゾーマ）には……そいつら含めてバケモノみたいな連中が１４人もいるって事スか⁉」

あまりにも突然過ぎる敵戦力の増強に一誠は声を荒らげ、アザゼルも苦虫を噛み潰したような顔付きとなる

「〝魔（ま）〟を〝造る〟組織――造魔（ゾーマ）か……。首謀者はキリヒコ辺りか……？ヤツもあの反則能力を造ったと言い張ってるぐらいだしな。……クソッ、いつまでも先手を打たれていたらジリ貧だ……！」

アザゼルは直ぐに映像用の魔法陣を展開し、造魔（ゾーマ）の次なる襲撃ポイントを考察しようとする

しかし、三大勢力の拠点は数多くある為、どの地点に行けば良いのか予測できない

アザゼルだけでなく、リアスやソーナも頭を悩ませた

そんな時、通信用の魔法陣がアザゼルの前に出現する

通信の主は四大魔王の１人――アジュカ・ベルゼブブだった

「アジュカか。何か情報は掴めたのか？」

『かなり気が立っているようだな。……まあ、苛立つのも無理はない。これだけ大々的

に拠点を潰されてるからな。だが、こちらもやられっぱなしで黙るつもりは無い。造魔（ゾーマ）が次に襲撃しそうな拠点を突き止めてきた』

「そいつぁ吉報じゃねえか。で、次の襲撃予定は何処なんだ？」

アザゼルがそう言うと、アジュカは映像用の魔法陣を映し出し――造魔（ゾーマ）が次に襲撃すると思（おぼ）しき拠点を表示する

そこは勿論（もちろん）三大勢力が管理しており、重要な拠点の１つでもある

『造魔（ゾーマ）が次に襲撃する確率が高いのはそこだ。その施設には稀少な金属が貯蔵されている。恐らく、武器の製造に必要な資材や情報収集の為に各拠点を襲撃していたのだろう。あと考えられるのは――土地その物を手中に収める為かもしれない』

「土地を手に入れる？その目的は？」

『それも予測に過ぎないが……武器製造の他に密輸や密入国ルートを確保するのが襲撃の主（おも）な狙いだろう。三大勢力の拠点を制圧しつつ、侵入経路を複数作り上げる。そうする事によって絶え間無くそちら側に潜入、襲撃しやすくなる』

「こっちの戦力は削ぎ落とされ、向こうは情報や資金と共に侵入経路を確保。更には刺客を堂々と送り込めるってわけか……クソッタレ……！」

アジュカの推測した造魔（ゾーマ）の目的にアザゼルは舌打ちをする

ともあれ、襲撃予定地点が判明しただけでも対処し易（やす）くなったのは事実

『襲撃決行は今夜だろう。……アザゼル』
「ああ、分かっている。少しでも奴らの情報を持ち帰らねえと割に合わん。造魔（ゾーマ）の生意気な鼻っ柱をへし折ってやる」
アジュカからの通信が切れた直後、アザゼルは皆の方を向いて告げる
「聞いての通りだ。今夜、造魔（ゾーマ）の連中が襲撃してくる。どんな奴らが来るかはまだ分からんが、1人残らず取っ捕まえる気合で行くぞ！お前ら、気を抜くなよ！」
アザゼルの言葉に全員が気合を入れた

時刻は深夜帯を回り、新達は襲撃予定地点の警護に当たっていた
施設を囲うようにグレモリー眷属が方々（ほうぼう）へ配置され、施設内の部屋にはシトリー眷属と新が配置される
特に新と一誠はグレモリー眷属の中でもトップクラスの実力なので――――施設外部の警備を一誠に、内部の警備を新に振り分けさせた
そして、更に今回は超強力な助っ人がいるのだが……
「……どうして、お姉さまがいらっしゃるのですか……？」

「ソーナちゃんがいるところに、お姉ちゃん有りだもんっ！安心してね？造魔（ゾーマ）なんて危険なヒト達はお姉ちゃんのきらめくスティックで滅ぼしちゃうんだから☆」
そう、アザゼルが呼んだ助っ人とは――――四大魔王の1人でソーナＬＯＶＥの魔王少女セラフォルー・レヴィアタンでした……
確かにこれ以上頼もしいものは無い助っ人なのだが、ソーナにとってはありがた迷惑な話だった
新はそんな様子を眺めつつ下の階層へ向かおうとするが、セラフォルーに呼び止められる
「あれれ？新くん、何処に行くの？」
「下の階層を見て回ってくる。さっきから……何か匂うんだよな」
「もうっ、女の子に向かってそんな言い方しちゃダメよっ。ソーナちゃんも私も、椿姫（つばき）ちゃん達も汗臭くなんかないもんっ」
「いや、そういう意味じゃなくて……。何つーか、嫌な匂いがしてくるんだよ。それも――――とてつもなく嫌な予感をさせる匂いだ……」
新が渋い顔付きで言う
やはり昼休みで見た〝夢〟の事が気になってしまうのか、終始落ち着かなかった
「ソーナ、とりあえず俺は下の階層を一通り見て回ってくる。何かあったら通信で呼び

出してくれ」
「ええ、分かりました。気を付けてくださいね、新くん」
そう言うと新は部屋を出て、下の階層へ続く階段を降りていく
ソーナはいつもと違う雰囲気に包まれた新の背中を無言で見届けていた
『……何でしょうね、いつもの新くんと少し様子が違う……。まるで――何かに怯えているような……』

下の階層を散策中の新は、昼休みから終始浮かない表情をしていた
……と言うのも、立て続けに造魔からの痛手を被っているので無理は無い
デスゲーム『クロニクル』、シド・ヴァルディの強化、ユナイト・クロノス・キリヒコの降誕
ただでさえ頭を悩ませる事態が多発しているのに、加えて〝嫌な夢〟を見る始末……
新の表情は歪むばかりだった
『嫌な予感とか災いってのは立て続けに、それも理不尽に降りかかってくるものだって誰かが言ってたよな……。――って、これじゃあ〝アイツ〟と同じじゃねぇか

……っ』

思い出したくもない事を思い出してしまった新は、忘れろと言わんばかりに頭を振り乱す

気分を紛らせる為に孤独のストレッチを始める――その直後、新の全身に怖気が走った

しかも、それは彼にとって忘れ難い気配だった……

『……ッッ！この気配……心臓まで握り潰してくるような寒気……ッ！まさか……アイツがここに来ている……⁉』

信じたくないと願いながらも、ゆっくりと怖気の発生源がいると思われる方に視線を移す

下の階へと続く階段から〝何者か〟が上がってきている……

1歩、また1歩と近付いてくる度に新の呼吸が落ち着かなくなり、震えも止まらない

そして、その者が遂に――新の前に姿を見せた

青いコートを羽織り、右目を眼帯で覆った某〝独眼竜〟の風体をした男

新は目を見開いて茫然自失のまま立ち尽くし、眼帯の男はニヒルな笑みを浮かべて言う

「久しぶりだな、竜の字。少し見ねぇ内に老けたんじゃねぇか？」

「な……なんで……っ、なんでお前が……⁉」

信じられなかった……

夢であって欲しかった……

死んでも出くわしたくなかった……

そんな思いが新の頭の中を掻き乱し、平静さを奪い取る

眼帯の男が数歩進み、足を止めて告げる

「やっぱ俺達は何処まで行こうと平行線のように腐れ縁が切れねぇらしいな。決して交わる事が無ぇのに、すぐ近くに居やがる。どれだけ月日が流れようとも、いつかは必ず遭遇しちまう。世の中ってヤツぁ本当に理不尽に出来てるよな」

「……理不尽の権化がそれを言うのかよ……ッ。いや、それ以前に――なんでお前がここにいるんだ⁉」

「おいおい、そう目くじら立てんじゃねぇよ。懐かしい顔触れにちょっくら挨拶しに来ただけだ。それに――造魔っったっけ？ウチの者が世話になったらしいじゃねぇか。まあ、これからも世話になるけどな」

――〝造魔〟――

それを聞いて新は耳を疑った

何故この男が造魔の名を口に出したのか……？

思慮を巡らせた結果――最悪の答えに行き着いてしまった……

「……お前……っ、まさか……ッ⁉」

「ああ、言ってなかったか？今の俺ァ造魔（ゾーマ）って組織の纏め役やってんだよ。いや、〝やってる〟って言うより〝なっちまった〟って言った方が正しいか。好き勝手にやってたら自然にそうなっちまったんだよ」

「……最悪じゃねぇか……ッッ！」

「おいおい、こんくらいで最悪とか言ってたら身が保（も）たねぇぞ？」

「お前の存在その物が最悪なんだよ……ッッ！お前は周りの奴まで、それこそ関係の無い奴まで戦渦（せんか）に巻き込む――理不尽と最悪の権化だ……！」

「前にも言ったろ？災いや戦渦ってのは理不尽に、立て続けに起こるモンだって。そいつに抗（あらが）えねぇようじゃ、この世界で生き残れやしねぇんだよ」

新の悪態に全く動じず、いけしゃあしゃあと返し続ける眼帯の男

そして、新はギリリと歯を食い縛った後――憎々しげに言った

「変わってねぇよな……その考え、その理不尽さ……！昔から何も変わっちゃいねぇ……ッ！また俺の周りを壊し続けるのか……ッ⁉――バサラ・クレイオス……ッッ！」

新は眼前に現れた造魔（ゾーマ）の首領の名を叫んだ

――〝バサラ・クレイオス〟――

新にとって最も忌まわしい男が、よりにもよって危険な組織のトップとなっていた……

眼帯の男――バサラ・クレイオスは口の端を吊り上げ、再び言う

「簡単に壊れちまうような奴ァ最初から無ェのと同じだ。そいつを擁護するような言い方からすると、テメェの今いる環境はよっぽど平和ボケしてるみてぇだな」

「平和ボケ、だと……ッ！」

「ああ、力を持った奴はまともな生き方なんて出来ねぇ。力を持てば、知らず知らずに寄ってきやがる。敵だろうと何だろうとな。なのに、テメェらは平和に生きたいとかほざいてやがる。そんなもんは――ただの幻想に過ぎねぇ。否応なしに戦渦に巻き込まれるのが世の常だ。生き残りてぇなら強くなるしかねぇ……強くなりたきゃ生き残るしかねぇ。それが現実ってヤツだ。夢だの理想だの平和だの、んなもんばっか追い求めてたら――腐り落ちるぜ？」

「……相変わらず極論だな……っ。平和を忌み嫌う典型的な戦争野郎の言い草だ……ッ！」

「戦うのが悪か？強くなる事が悪か？んなもん誰が決めた？俺は俺のやりたいように生きるだけだ。それが俺のライフスタイル、生き様ってヤツよ。誇りも尊厳も信念も捨て

て生きるような奴ァ、ただの家畜だ。だから……俺はテメェらの平和主義を否定する。これから先の戦渦に耐えられるかどうか、俺が試してやるよ。まずは――前菜を奢ってやるぜ」

そう言うとバサラは懐からスイッチのような器具を取り出し、親指でボタンを押す

その刹那、外の方で大量の転移型魔法陣が開かれ、中から大勢の人影が降ってくる

それを見た新は仰天し、直ぐにバサラの方を向く

「バサラ！今なにをした⁉」

「慌てんなよ、俺達に協力する連中を向かわせただけだ。テメェらがそれぞれ警備してるポイントに送り込んでやった。これぐらいは退けてくれねぇと張り合いが無ぇよ」

「テメェ……ッツー」

「おっと、竜の字。助けに行こうなんてシラケる真似はすんなよ？せっかくお膳立てしてやった戦いなんだ、派手にやらせてやれよ。テメェが行くってんなら――俺はこの中で好き勝手に暴れさせてもらうぜ。それでも良いのか？」

「……！そうか……お前は俺を足止めする為に……ッー」

新はバサラの目論見に気付いたが……既に遅し

新がこの場を離れれば、バサラは直ぐにでもソーナ達の所に向かうだろう

この男の恐ろしさ、身勝手さ、性質の悪さを嫌と言うほど知っている新は身動きが取

れなくなってしまった
一誠やリアス達に造魔（ゾーマ）の洗礼が降りかかる……

場面が変わって、施設の東門前
そこの警備を担当するリアス、朱乃、アザゼルは急襲してきた造魔（ゾーマ）傘下の兵達相手に応戦していた
アーシアとレイヴェルは後方にて支援と回復に徹しており、アザゼルが用意した簡易結界が攻撃の飛び火を防いでいた
造魔（ゾーマ）傘下の兵達は人間の他にも獣人（じゅうじん）等が多数混ざっており、その数はここだけでも１００人以上いる
リアスは消滅魔力の塊を、朱乃は雷光を放って空の敵を撃ち落とし、アザゼルは光の槍で地上の敵を撃破していく
「いきなりこんな大群で攻めてくるとはな！だが、大量の敵を相手にするのが得意なお姫さま２人――――相手が悪かったな！」
「私達を侮辱し続けた事を後悔させてあげるわッ！」

「覚悟はよろしいですわね？」
アザゼルの言う通り、リアスと朱乃は範囲攻撃メインなので大群相手には打ってつけだった
しかし、相手も負けておらず……生半可な攻撃では倒れやしない
少なくとも中級から上級悪魔クラスの強さを持っているのだろう
『恐らく今頃はイッセー達の方にも造魔（ゾーマ）の連中が押し掛けているだろうな……。兵隊クラスでも結構な強さだ、幹部クラスの奴らが来たら少数で相手するには危険過ぎる……。とにかく、この場を速攻で片付けて加勢しに行かねぇと……！』

西門エリア、ここを警備しているのは祐斗、ゼノヴィア、イリナの３人
三者はそれぞれの得物で襲い掛かってくる造魔（ゾーマ）の兵達を斬り伏せていた
祐斗は自慢の速度で立ち回りながら敵を斬り、ゼノヴィアはデュランダルのパワーで一挙に薙ぎ払う
イリナも光の攻撃で牽制しながら量産型聖魔剣（せいまけん）で敵を斬り払った
暫（しばら）くすると、サーベルを携（たずさ）えた男が前に出てくる

恐らく、この兵隊達のリーダー的な役割だろう
鞘からサーベルを引き抜き、切っ先を祐斗達に向ける
「かの有名な聖魔剣(せいまけん)、デュランダルの使い手と剣を交えられるとは、私も運が良い。是非お手合わせ願おうか」
「ゼノヴィア、イリナさん。彼は僕が引き受けよう。周りの連中は任せても良いかい？」
「分かった、ザコは任せてくれ」
「オッケーよ！」
ゼノヴィアとイリナは周りの敵を討伐しに行き、祐斗はサーベル男の前に立つ
それぞれが得物を構え、一瞬の静寂が流れる……
刹那、サーベル男は目にも留まらぬ速さで連続の突きを繰り出してきた
しかも、ただの突きではなく――――回避し続ける祐斗の周りを削る程の突き……
「ほう、私の突きを躱(かわ)すだけでも驚異的な速さだ。しかし、さすがに踏み込めないと見える」
「驚きましたよ。まさか、これ程の剣士がいるなんて」
「私も造魔(ゾーマ)の中では単なる兵隊の1人に過ぎないが、それでも君達のような上級悪魔クラス相手にも渡り合える。油断はしない方が良い」
「そのようですね。それでも、ここを通しませんよ。僕達にも心強い仲間がいるんでね」

祐斗は聖魔剣を聖剣にチェンジし、禁手（バランス・ブレイカー）の龍騎士団を出現させる
全ての龍騎士が剣を構え、サーベル男を取り囲む
四方八方から攻めてくる龍騎士に対し、サーベル男は鞘も使った二刀流で突き崩す
全ての龍騎士を突きで倒し、残された祐斗にも突きを放つ
ドズッ！と切っ先が刺さり、サーベル男はニヤリと笑むが――
「……ッ!!」
サーベル男は仰天していた
何故なら……刺した筈の祐斗の体が徐々に透けていき、遂には消えてしまったからだ
驚愕に包まれる中、倒された龍騎士の1体が起き上がり――その場を駆け出す
「――ッ！しまった！」
目の前の祐斗が魔力で作られた偽者（フェイク）だと気付いたサーベル男は、直ぐに反転して龍騎士のフリをしていた祐斗に突きを繰り出そうとする
しかし、コンマ1秒の差で祐斗がサーベル男の腹を斬り払った
サーベル男は口から血を吐き、龍騎士の兜を外した祐斗が告げる
「あなたの剣の腕も素晴らしいものでした。出来れば、もっと違う形で剣を交えかった」
「ふふ……っ、見事だ……。若いのに大したものだよ……」
サーベル男は満足げな表情で倒れ伏し、意識を失った

南門エリア、ここでは小猫とロスヴァイセが豪快に立ち回っていた
猫又モードと化した小猫が打撃で敵を打ち倒していき、ロスヴァイセが魔術砲撃で遠距離から敵を倒していく
グレモリー眷属の強さに造魔（ゾーマ）の兵達は驚きの声音を上げる
「くそっ、こいつら強すぎんだろ⁉」
「こんなチビ相手に――ブゲァァッ！」
「……チビって言った人、もう1回殴ります」
「いや、俺は寧（むし）ろちっぱいが好――アベシッ！」
「……変態も殴ります」
「じゃあ、俺の事はお兄ちゃんと呼んで欲し――ダムルグッ！」
「……ツラい（精神的に）」
「小猫さん、随分と荒れてますね……」
どうやら、ここには変態どもが集まっていたようだ……
小猫は不快感を明らかにして敵兵を殴り倒すのだが、きっと終わる頃には心身ともに

疲弊しているだろう……

北門エリア、ここを警備する一誠も皆と同じく造魔（ゾーマ）の軍勢と対峙していた

「……俺、1番のハズレを引いちゃったかも……っ」

悲壮な表情で呟く一誠

彼の眼前には――水晶のような輝きを放つ異形が大勢飛来していた

背中には羽根らしき物が生え、様々な種類の敵が確認できる

球体のボディに裂けた口だけが存在するタイプや、光の剣を携（たずさ）えた騎士のようなタイプ、更には杖のような武器を携行したタイプがいる

聖なる力や光の攻撃は悪魔にとって猛毒

一誠は冷や汗を流しながら目の前の大群と対峙する

その時、異形の大群の中から何者かが降りてくる

「邪魔は許さないゾ、悪魔の子。邪魔するなら――天使が裁いちゃうゾ♪」

飄々（ひょうひょう）とした声音を発したのは、どうやら女性のようだ

それだけでも一誠にとっては嬉しい情報だが、更に嬉しい事に――その女性はとて

つもない露出度の服装をしていた
最低限の部分、胸元と下半身のみをフワフワした羽のような衣装で隠しているものの……胸元は大きく開いており、太股(ふともももかなり露出している
水色がかった長い銀髪に黒いリボン、輪っかを形作ったアホ毛
奇抜な格好をした女性が地面に降り立つと、ウインクしながら言う
「ワタシの可愛い天使達が月に代わってお仕置きしちゃうゾ♪」
『……この女性(ひと)、めっちゃエロい格好してんな！おっぱいもデケェ！しかもアレ、ほぼ裸みたいな衣装だぞ⁉エロいお仕置きだったら受けてみたいかも……っ！』
一誠はだらしなく鼻の下を伸ばしてエロい顔付きになる……
顔芸満載のエロ顔で凝視する一誠に、謎の女性は不敵な笑みを見せる
「キミが噂の赤龍帝(せきりゅうてい)――――いや、乳龍帝(ちちりゅうてい)かな？女の乳を食べたり飲んだりして戦うって聞いてるゾ」
「酷い噂が立ってるな⁉俺ってそんな認識されてるの⁉てか、俺はおっぱいを食べたり飲んだりしない！」
「じゃあ、どうしたいんだゾ？」
「揉んで吸いたい！……って、何言わせるんだ⁉」
「アハハハッ、キミって面白いゾ♪」

銀髪の女性は可愛く笑い、一誠は顔を赤くしてしまう
しかし、この女性も造魔（ゾーマ）の一員
油断は出来ない……
銀髪の女性が胸元から硬貨（コイン）を取り出す
「ワタシはこれからやらなきゃいけないお仕事があるんだゾ。悪いけど……邪魔するなら容赦しないゾ」
そう言って女性は手元のコインを複数枚投げる
すると、投げたコインが輝き始め――――周りの異形と同じ怪物が生み出された
その光景に一誠は驚愕する
「コ、コインが怪物に変わった⁉」
「失礼だなっ、怪物じゃないゾ。この子達はワタシが生み出した――――天使だゾ」
「これが天使っ⁉こんなバケモノみたいな天使がいるのか⁉」
「正確には〝ほぼ天使〟だゾ。これはコインをコストに様々な天使を創れる神器（セイクリッド・ギア）――『天使創造（シンセティック・エンジェライズ）』。まさにワタシに相応（ふさわ）しい神器（セイクリッド・ギア）だゾ」
天使を創る神器（セイクリッド・ギア）……
造魔（ゾーマ）の幅広い戦力に一誠は当惑するが、相手が女性なので何とかいけるかもしれないと気合を入れ直す

直ぐに禁手（バランス・ブレイカー）の鎧を身に纏い、銀髪の女性が創った天使軍団と改めて対峙する
「さあ、ワタシの可愛い天使達。このソラノ・アンジェルに勝利をもたらすんだゾ」
銀髪の女性――ソラノ・アンジェルが指を突きつけると同時に天使軍団が突撃していく
『……ん？〝アンジェル〟？……何処かで聞いた事がある名前のような――』
一誠はふと違和感を覚えたが、天使軍団の猛攻が迫ってきた為、考えを中断する
騎士型の天使達は光の剣を振るい、杖を携行した天使達は遠距離から光線を放つ
球体型の天使は一誠の周りを飛び交い、鋭い牙で噛みつこうとしてくる
一誠は天使軍団の攻撃を回避しつつ、拳や蹴り、ドラゴンショット等で天使達を倒していく
しかし、倒しても倒してもソラノが次々と新たな天使を創り出すので数を減らせない……
そこで一誠は天使軍団の根源を狙う事にした
「女性相手なら必勝の策がある！いくぜ――乳語翻訳（パイリンガル）ッッ！」
一誠は溜めた魔力を解放し、謎の夢空間を生み出した
ソラノを射程距離に捉（とら）え、すかさずソラノのおっぱいに訊（たず）ねる
「さあ、エロいお姉さんのおっぱいちゃん！何を考えてるのか教えてくれ！」

〝これで決まった！〟と気持ちを昂らせる一誠だが、彼女のおっぱいから聞こえてきたのは――

――〝妹を……助けて……っ〟――

「……え……っ？」

思わぬ言葉に一誠は当惑し、一瞬動きを止めてしまう

ソラノのおっぱいから発せられた悲痛な叫び……

いったいどういう事なのか？

一誠は思いきって真意を訊いてみる事にした

「あのー、聞いても良いスか？」

「うん？何だゾ？ワタシのスリーサイズでも知りたいのか？」

「アンタ、妹さんを助ける為に……こんな事をしてるのか？」

一誠の指摘にソラノの表情が陰りを見せ、それに呼応するように天使軍団の動きも止まる

「……お前、人のプライバシーにズカズカと踏み込んでくるのは悪い事だゾ。気を付けないと嫌われるゾ」

「すんません……。でも、アンタのおっぱいが――――いや、あなた自身が助けを求めてるんじゃないのか？本当はこんな事したくないのに、妹さんを助ける為に……」

黙り込むソラノを見て、一誠は確信を抱く

ソラノは自ら望んだわけではなく、強制されているのだと……

一誠は説得を試みる

「その妹さんを助けたいんだろ？だったら、俺達が協力する！俺達が妹さんを助けるから――――」

「……無理だゾ。妹とは幼い頃に生き別れたから居所を知らない……。でも、造魔の連中が見つけたって言って、ワタシに話を持ち掛けてきたんだゾ。『協力するなら妹の命は保証してやる。ただし、断れば即座に殺す』と……」

萎れた表情で一誠の説得を許否するソラノ

彼女もきっと本心では妹を助けてもらいたいのだが、背後に造魔が控えてるゆえに逆らう事が出来ないのだろう

ましてや、身内の命を狙われているなら尚更……

「結局ワタシは従う他ないんだゾ……。造魔は予め退路を絶ってから、協力体制を持ち掛けてくる……。最初から選択肢なんて存在しないんだゾ……。だから、どう足掻いても逃げられないゾ……。妹が――――ユキノが無事でいられる為には、こうするしか

……」
「――っ？ちょっと待った。今、〝ユキノ〟って言わなかったか？」
「……？そうだゾ。――ユキノ・アンジェル、それがワタシの妹の名だゾ」
「……ッ！やっぱり、そうか！何か聞き覚えのある名前だなぁと思ったら――アンタ、ユキノさんのお姉さんだったのか！」
「――ッ⁉ユキノを知ってるのか⁉」
思わぬ好機を得た一誠はユキノとの接点をソラノに打ち明けた
ユキノが現在グリゴリの管理下に置かれ、無事である事を伝えると……ソラノは歓喜の涙を流し、戦闘の意思を消してくれた
生み出した天使軍団をコインに戻し、その場に座り込む
「良かった……良かったゾ……。ユキノは無事なんだな……」
「ああ、大丈夫っスよ。これでもうアンタがこんな事をする理由は無い筈だ」
「……でも、ワタシが裏切れば造魔（ゾーマ）の連中が黙っていないゾ？奴らは敵対する者は欠片も残さないぐらい徹底的に潰してくる、血も涙も無い連中だゾ……」
「そんなの関係ねぇ！俺が、俺達がブッ飛ばす！相手が誰だろうと――俺がユキノさんを守ります！」
一誠の力強い台詞にソラノは次第に心を開き、涙を指で拭（ぬぐ）って「……ありがとう……

ありがとう……」と何度も繰り返す

妙な形ではあるが、とにかくこの場を切り抜けた――と思ったその矢先……

「念の為にと来てみれば、戦わずに和解か。反吐が出る展開だ」

突如、何者かの声音と共に重厚なプレッシャーが襲ってくる

その方向へ顔を向けると――そこには造魔の刺客らしき異形が歩いてきた

ズシ……ズシ……と重く鈍い足音を鳴らし近付いてくるのは――赤紫色の体皮に覆われ、頭部と太い両腕に刃のような鋭いヒレを生やした大柄なサメ型の魚人

サメ男が放つ異様な重圧に一誠は思わずたじろいだ

「な……何だコイツ……！とんでもなく邪悪なオーラに満ちてやがる……ッ！何なんだ、お前は⁉」

「造魔の先兵、〝晦冥〟のトランザーと呼ばれている」

聞いた事の無い名前だが、造魔である事には違いない

恐らく、このトランザーと言う男は三大勢力の拠点を潰し回っている輩の1人だろう

淡々と名乗りを終えたトランザーは――瞬時に距離を詰め、ソラノ目掛けて太い右腕に生えた刃を振り下ろす

「――ッ⁉」

一誠は咄嗟に横っ飛びでソラノを救出

トランザーの刃は空を斬り、そのまま地面を叩き割った
「あっぶねぇ……！大丈夫か⁉」
「へ、平気だゾ。ちょっと服が破れただけだゾ」
先程の風圧によるものか、ただでさえ露出度の高いソラノの服が破れ――おっぱいが丸出しになっていた
たわわな果実を直視した一誠はお馴染みの顔芸となる
「ウホッ♪良いおっぱい♪」
「……キミって顔が面白いゾ」
「よく言われま――ッ⁉」
一誠は背後から迫ってくる殺気を感じ取り、振り向き様に拳打を放つ
ガキンッ！と一誠の拳がトランザーの刃と衝突し、風圧が周りの地面を抉る
防いだだけでも拳が痺れ、衝撃が骨に染み渡ってくる……！
「ほう、オレの腕刀を受けきるか。赤龍帝の名は伊達ではないようだな」
「テメェ……いきなりこの女性を狙いやがって……ッ！」
「何がおかしい？弱い奴を先に片付けておくのは戦闘の基本だろう。余計な邪魔をしなければ一撃で死なせてやれたものを。和解なんぞした今、この女はもはや敵対者でしかない」

「ふざけんな！人質を取って無理矢理こんな事させやがったくせに！」
「人質？ああ、そんな話もあったな。だが、それは指揮官とキリヒコが進言した事だ。オレには関係無い」
悪びれる様子を微塵も見せないトランザーに、一誠は怒り心頭で拳を叩き込もうとする
トランザーは冷徹に一誠の拳打を太い両腕で捌いていく
重く鈍い打撃音が暫く鳴り響き、トランザーは自らの体を弓なりに反らし――――頭部の刃を介した頭突きを繰り出す
一誠は負けじとオーラを高めた拳打で対抗
ガゴンッ！と衝突し合う音が鳴り、トランザーが地面を滑るように轍を刻みながら後方へ下がる
首をゴキッと鳴らすトランザーは表情を一切変えず、逆に拳を痛めた一誠は苦悶の声を漏らす
「ぐ……っ！ちくしょう……ッ、何なんだ、コイツの体は……ッ⁉硬すぎる……っ！まるで鋼鉄の塊を殴ってるみたいだ……！」
「フン、オレの強さにお前が泣いたか。涙を拭きたければ今の内に拭いておけ」
「誰が泣くかよ……ッ！」

一誠は魔力を高め、増大させたドラゴンショットを掌（てのひら）から解き放つ
向かってくる赤い奔流に対し、トランザーは――その場を動く事無く両腕の刃（ヒレ）で容易（たやす）く切り裂いた
呆気なくドラゴンショットを霧散させられ、驚愕する一誠
トランザーが嘆息して言う
「つまらんな。赤龍帝（せきりゅうてい）――ドラゴンの名を冠（かん）するから、どれ程のモノかと思えば……大した強さではなかったか」
「何だと……ッ！」
「人間界の諺（ことわざ）では、こう言うらしいな。――〝弱い犬ほど、よく吠える〟と。この場合は〝弱い龍〟だがな」
淡々と見下してくるトランザー
自尊心を著（いちじる）しく傷付けられた一誠は怒りに震える
それを見て、トランザーは更に嘆息した
「安い挑発にすぐ乗せられる、それもお前達の愚かな部分だ。現に懐（ふところ）に潜り込まれている事にも気付いておらん」
「……っ⁉どういう事だよ⁉」
「分からんのか？お前達が必死に守っている後ろの施設、その内部には既にもう1人―

――〝厄災〟が紛れ込んでいる。外部で派手に攻めれば、その分だけ意識がこちら側に集中する。お前達はまんまと策に嵌まったんだ」

なんと、施設内には既に造魔の刺客が入り込んでいた……！

つまり、外部からの襲撃は陽動

主戦力を外で足止め、内部より崩すのが奴らの目的だったのだ……

またも造魔の思惑通りに運ばされた事に、一誠は憤慨する

「この野郎……ッ！」

「中に何人残っているかは知らんが、それでも終わるだろう。いずれにしろ、中の者は滅びる。――〝厄災〟の手に掛かってな」

「……新くん、遅いですね」

その頃、内部を警備中のソーナ達は戻ってこない新を案じてソワソワしていた

落ち着かない様子のソーナに、セラフォルーが小声で言う

『ソーナちゃん、もしかして新くんの事が心配っ？』

『い、いえ、そういうわけではありません。ただ……彼の様子がいつもと違っていたの

で、不審に思っただけです』
『ウフフッ♪ソーナちゃんってば、ジ～ッと新くんを見つめていたのね☆』
「……ッ！もうっ、お姉さま！こんな時に茶化さないでくださいっ！」
「あぁっ、そんなソーナちゃんも可愛い～！」
セラフォルーはソーナに頬擦りし、ソーナは先程の指摘に顔を真っ赤にしながらセラフォルーを引き離そうとする
結局、シトリー眷属総出でセラフォルーを引き離し……警戒の方へと意識を集中させた
その直後、扉の開く音が聞こえてくる
「やっと戻ってきたのか。おい、竜崎！あんまり会長や俺達に迷惑をかけるんじゃ――」
そこまで言いかけた匙だったが、途中で言葉を止める
理由は当然――そこに現れたのが新ではなかったからだ……
フードを目深に被(かぶ)り、顔は確認できないが異様な気配を発している男
如何(いか)にも怪しげな雰囲気を滲み出している男に対し、ソーナが問いかける
「あなた、何者ですか？」
「……我に名は無い、造魔(ソーマ)の先兵。……ヒトは我を〝厄災〟と呼ぶ」

そう、このフードを被った男こそ……実はトランザーと同じく三大勢力の拠点を次々と壊滅させた〝厄災〟

真の名は――――〝厄災〟のテンペスター……

「ヒュルッ」

その一言と共に現れた無数の竜巻

造魔（ゾーマ）の〝厄災〟がソーナ達に牙を剥く……ッ！

魔王少女ＶＳ厄災のテンペスター

「――ッ！な、何だ……このおどろおどろしい気配は……ッ⁉」
下の階層にて造魔首領（ゾーマ）――バサラ・クレイオスと対峙していた新は、突如やって来た別の怖気（おそけ）に気付いて後ろを振り返る
その発生源は上の階層からだった
バサラ・クレイオスが思い出したように告げる
「ああ、そう言えば造魔（ウチ）の先兵が来てたんだっけな。ハハッ、すっかり忘れてたぜ。今頃は上の奴らとドンパチかましてるだろうよ」
「何だと……ッ⁉」
「上にいる奴らの事が心配か？行きたきゃ別に行っても良いぜ？今日は挨拶程度で来ただけだからな」
バサラ・クレイオスは〝さっさと行きな〟とばかりに腕を組んで静観する
新はヤツの一挙一動（いっきょいちどう）が心底気に入らないのか、不愉快を露（あらわ）にした
「……本当に何処までもムカつく野郎だ……ッッ！」
しかし、直ぐにでもこの場を離れて、ソーナ達の所に向かわねばならない

踵を返して上の階層に向かおうとした時、バサラが再び言い始める
「なあ、竜の字。この際ハッキリ言っといてやる。俺ァ正直、組織のボスを全うするつもりはあまり無ェんだ。派手に動くのに都合が良いから、情報とか手に入れやすいから、とりあえず組織を纏めてるだけに過ぎねぇ。実際、纏めてんのはウチの指揮官と中間管理職の奴よ」
「……何が言いたい……っ」
　睨みを利かせる新に、バサラは口の端を吊り上げて言う
「なぁに、俺が斡旋してやるから――――お前が造魔のボスをやってくれって事さ」
「――――ッッ!!」
　〝この男は、いったい何を考えているのか……？〟
　事もあろうに、自分が座している造魔の首領と言う立場を新に譲ろうと持ち掛けてきた……！
　バサラの真意が全く読めない……
　読めないが、新は腹の底から拒絶の怒号を飛ばす
「ふざけんなよ！俺に……俺にアイツらを裏切れって言うのか!!」
「そういう事になっちまうかもな。だがよぉ、案外そうした方がお前の為にもなるんじゃねぇの？ほら、平和ボケを願ってるテメェんとこの……何だっけ？確かアイス・ブ

ロッコリーって女の――――」
「リアス・グレモリー」
「あー、そうだそうだ。シマリス・バルコニーだったな」
「まともに答える気すら無いだろ……。――――って、そうじゃない！今すぐソーナ達の所に戻らねぇと――――」
「おいおい、もう行っちまうのかよ？いつからノリが悪ィ奴になったんだ。せっかく来てやったってのに、つまんなくなっちまったな。それともお前が行こうとしている場所で話を続けるか？」
「アイツらには指１本たりとも触れさせやしねぇ。……来たら殺すぞ……ッ！」
「ハンッ、言うようになったじゃねぇか、竜の字。けどよぉ、その台詞を吐いて〝１度でも俺に勝った〟事があんのか？あまり大口叩いてると火傷どころじゃ済まねぇぞ」
「うるせぇッッ！テメェなんかと喋ってる時間はねぇんだよ！そんなに殺りたきゃ、向こうをソッコーで片付けてから相手してやるッ！もう……今までの俺とは違うんだよッッ！」
　新は最後まで憎々しげに怒号を吐き捨て、危機が迫っているであろうソーナ達のもとに向かっていった

「〝今までの俺とは違う〟だぁ？――――ハッ、笑わせやがる。テメェこそ何も分かっちゃいねぇんだよ。俺に対するキレ方、焦り方、何一つ変わっちゃいねぇ。変わったところと言えば……テメェが昔より弱くなったって事だ。俺が知ってる竜の字（テメェ）はもっと暗く、獣のようにギラギラしてたぜ。血の気が多く、牙を研ぎ澄まし、同業者からも敬遠されてた。それがいつの間にか、飼い主に尻尾を振って媚びるような犬に成り下がってやがる。獣が牙を失（うしな）っちまったら――――終わりなんだよ」

「ヒュルッ」

ソーナ達の前に現れた造魔（ゾーマ）の刺客――――〝厄災〟のテンペスター

小さく呟（つぶや）くと同時に無数の竜巻が発生し、ソーナ達に襲い掛かっていく

ソーナ達は何とか直撃だけは避けたものの、竜巻の凄まじい風圧によって吹き飛ばされ――――各々（おのおの）が壁や地に叩きつけられてしまう

しかし、〝厄災（テンペスター）〟は追撃の手を緩めやしない……

「ヒュルッ」
今度は自(みずか)らの体に竜巻を纏って空中へ飛び出し――ソーナに狙いを定める
「……ッ！会長には指１本触れさせやしねぇっ！」
そう息巻いて飛び出してきた匙は、ヴリトラの黒炎を放って迎撃しようとする
幾重にも黒炎を放出してテンペスターの行く手を遮(さえぎ)るが……黒炎は竜巻に呑まれ、霧散してしまう
「ビュンッ」
その一言と共にテンペスターの速度が急激に上がり、匙はあっという間に距離を詰められ――竜巻を纏った拳が匙の腹に突き刺さる
鋭く重い一撃が深々と食い込み、匙は血反吐を吐いて吹き飛ばされる
テンペスターは即座にソーナにも攻撃を仕掛けるが、寸前のところで真羅椿姫(しんらつばき)、花戒桃(はなかいもも)、草下憐耶(くさかれや)が立ち塞がる
椿姫は自身の神器(セイクリッド・ギア)――『追憶の鏡(ミラー・アリス)』を展開
更に花戒の人工神器(セイクリッド・ギア)――『刹那の絶園(アブローズ・ウォール)』
草下の人工神器(セイクリッド・ギア)――『怪人達の仮面舞踏会(スカウティング・ペルソナ)』による三重の防御陣が張られ、テンペスターの攻撃を防ぐ
しかし、それでも衝撃は凄まじく……椿姫達は苦悶の表情を見せる

『く……っ！なんて威力なの……っ⁉攻撃を跳ね返すまでに、鏡が保つかどうか――――』

「ドドンッ」

バリンッッ！

テンペスターの手から衝撃波が放たれ、椿姫達の張った鏡、結界、仮面の群れの防御陣が容易く破られ――――衝撃の余波が彼女達を襲う……！

テンペスターの放った衝撃が隅々まで行き渡り、肉も骨も悲鳴を上げる

椿姫達は血を吐き、その場にくず折れてしまう

「よくも副会長達をっ！」

「許さないっ！」

果敢に向かっていくのは巡巴柄と仁村留流子

巡は〝中二病刀〟こと『閃光と暗黒の龍絶刀』を、仁村は脚甲型の『玉兎と嫦娥』を展開してテンペスターへ攻撃を仕掛けようとする

しかし、攻撃の気配を察知したテンペスターは、その場から動かずに――――

「ボオッ」

全身から莫大な炎を噴かせて2人を焼き払う

巡と仁村はテンペスターが発した炎に呑み込まれ、衣服と体を焼かれてしまう

それだけでも大きなダメージだが、テンペスターは容赦の無い追撃を見舞おうとした

「グイッ」
テンペスターが左手を前に翳すと、巡と仁村の体が引き寄せられていく
テンペスターは眼前まで引き寄せた両者の腹に手を当てて――――「ドドンッ」と衝撃波を放った
巡と仁村は吹っ飛ばされ、地に倒れ伏す
「はあっ！」
由良翼紗が人工神器――――『精霊と栄光の盾』から雷を迸らせ、ヨーヨーのように投擲する
猛然と回転しながら飛来する盾に対し、テンペスターは再び「ヒュルッ」と竜巻を生み出して由良の攻撃を相殺する
「ドゴンッ」
更に由良の足元から土塊が意思を持ったかのように突き出し、強烈な打撃を与える
盾で防御したにもかかわらず、後方の壁に叩き付けられる
まさに〝厄災〟……ソーナは眼前の厄災に戦慄せざるを得なかった……
予め支給されたフェニックスの涙（少量）を負傷した眷属達に振り掛け、何とか傷だけでも治癒させるが、それも気休め程度にしかならない
『攻撃が多彩過ぎる……！リアス、私達は甘く見ていたのかもしれない……っ。造魔が

……ここまで恐ろしい組織だったなんて……っ』

1歩、また1歩、自分と倒れる眷属達に近付こうとする厄災（テンペスター）

「お前達は厄災に勝てない」

淡々と告げ、再びソーナを狙おうとする

しかし、そこへ最強の魔法少女――否、魔王少女が立ち塞がる

「待ちなさいっ！これ以上、私の大事なソーたんと椿姫ちゃん達を傷付けさせないわ！魔法少女マジカル☆レヴィアたんが相手よっ！」

「――ッ！お姉さま!!」

魔法少女姿の四大魔王――セラフォルー・レヴィアタンが自前のスティックを振りかざして、周りにハートマークや星を煌（きら）めかせる

「ミルルン・ミルミル・スパイラル～☆煌めく魔法で、凶悪魔人を消滅させちゃうんだもんっ☆」

可愛くポージングするものの、彼女が放つ魔力は可愛らしさの欠片も無かった……

ファンシーなエフェクト音とは真逆の魔法攻撃が厄災（テンペスター）に降り注ぐ

「……ミルルン……？」

苛烈な魔法攻撃が特大の爆発と爆煙を生み、厄災が呑み込まれる

魔法攻撃を決めた当のセラフォルーは決めポーズをしていた

本来なら四大魔王が自ら戦線に出向く事は避けたいが、妹ＬＯＶＥのセラフォルーにはそんな通告など通用しない
「ソーたんを泣かせようとする悪い子は、魔法少女マジカル☆レヴィアたんがお仕置きしちゃうんだから☆」
「ですから、たん付けはお止めになってくださいと――――ッ!?」
背筋から冷や汗が噴き出す程の怖気が走り、充満していた爆煙が霧散する
言うまでもなく……爆煙を振り払ったのは造魔の〝厄災〟――――テンペスター
体の至るところが焦げているものの、大きなダメージは無かった
「お姉さまの魔力を受けて、ほぼ無傷……ッ!?」
冥界でも屈指の実力を持つセラフォルー
そんな彼女の攻撃を受けても、厄災は致命傷すら負っていなかった
セラフォルーが再び身構えると、フードに隠れたテンペスターの目が妖しく光る
そして、フードごと自分の着ている服を荒々しく破り捨てた
全貌が明らかになった〝厄災〟は人間ではなく、獣人に近い姿をしていた
筋骨粒々の肉体に獅子のような鬣
鋭い目付きでセラフォルーを睨み、セラフォルーも負けじと指を突きつける
「それがあなたの正体ね?どんな相手でもレヴィアたんは負けないっ!正義の魔法を煌

めかせて、厄災なんて消滅させちゃうもんっ☆」
ノリノリで宣言するセラフォルー
テンペスターは「ヒュルッ」と呟いて、複数の竜巻を生み出す
全ての竜巻がセラフォルーに向かっていくが、セラフォルーは自慢の魔力で竜巻を凍らせる
コンマ1秒後に、凍らされた竜巻の間からテンペスターが飛び出してきた
自分にも竜巻を纏わせ、風圧で砕いた氷を目眩ましに使い――セラフォルーに竜巻の拳を見舞おうとする
セラフォルーは「とうっ！」と華麗なジャンプで攻撃を躱す
テンペスターは「ビュンッ」と素早く方向転換し、再度セラフォルーに竜巻の拳を突き出す
身を捩って回避するセラフォルーだが、凄まじい風圧によって飛ばされる
空中で体勢を立て直し、魔法攻撃を放つ
テンペスターは「ボオッ」と極大の爆炎でセラフォルーの魔法攻撃を相殺した
爆煙が周りを覆い、視界が悪くなってしまう
「ドロリッ」
テンペスターは肉体を液状化させ、更に分裂してセラフォルーの死角から距離を詰め

る

　爆煙のせいでテンペスターの姿を確認できないセラフォルー

　その隙を突いて、液体となったテンペスターがセラフォルー……ではなく、ソーナを捕らえた

「きゃあっ！」

「――――ッ⁉ソーナちゃんっ⁉」

　液体となったテンペスターはソーナの手や足、胸などに絡み付いて身体の自由を奪う

　頭部のみを元に戻したテンペスターが、セラフォルーに忠告する

「四大魔王、これ程の魔力とは予想外。だが、我の回復力ならば直ぐにダメージを再生できる。普通に戦っても良いが、ここは任務を優先させてもらう。下手に抵抗するなら、コイツの命は無い」

　テンペスターは戦法を変え、ソーナを人質にセラフォルーの動きを封じてきた

　卑劣な手腕にセラフォルーは怒りを見せる

「卑怯よ……っ。私の大事なソーたんにイヤらしく絡み付いて、ヌルヌルにしようとするなんて……っ！天使と堕天使が許しても、このレヴィアたんが許さないんだからっ！」

「ならば……何故鼻血を出している？我の攻撃を受けた形跡は無い筈だ」

「お姉さま……」
こんな状況にもかかわらず、セラフォルーは鼻血を垂らしてちょっとワクワク顔
その光景にソーナは溜め息を吐いてしまい、テンペスターは疑問符を浮かべる
すると、突然ソーナの体に脱力感が訪(おとず)れてくる
手足に力が入らなくなり、膝から崩れてその場にへたり込む
「……っ。ど、どうして……っ？急に、力が抜けていく……っ」
「ソーナちゃん⁉あなた、ソーたんに何をしたの⁉」
セラフォルーの問いにテンペスターは淡々と告げる
「我は相手の生命力や魔力などを吸収し、自(みずか)らの呪力(じゅりょく)に変換する事が出来る。我がこのまま吸収を続ければ、この女は死ぬ」
「――――ッ⁉何ですって……！今すぐソーナちゃんを離してっ！じゃないと――――」
「我を滅ぼすか？それも良い。ならば……この女ごと我を滅ぼしてみろ」
テンペスターはソーナを盾にするように構える
こんな事をされれば、さすがのセラフォルーも手出しが出来ない……っ
セラフォルーは焦燥にまみれた表情でテンペスターを睨んだ
攻めあぐねている間にもソーナの魔力と生命力が吸われ、テンペスターの呪力が上昇していく

テンペスターはソーナを拘束したまま液状化している肉体を切り離し、元の獣人の姿に戻る

「言っただろう。お前達は我には――――〝厄災〟には勝てないと。――――ヒュルッ」

ソーナの魔力を吸収したせいか、先程よりも凶悪性を増した竜巻が複数出現し――――セラフォルーに襲い掛かっていく

セラフォルーは氷の魔力で再び竜巻を凍らせようとするが……強化された竜巻に魔力が呑み込まれてしまう

四方（しほう）から飛来してくる竜巻を飛んで回避するセラフォルー

しかし、その背後には既に厄災（テンペスター）が待ち構えていた

「……っ!?」

「堕ちろ。――――ドドンッ」

厄災の放った衝撃波が魔王少女の背中を撃ち抜く……

「ウオオオオオオオオオオオオオオッッ！」

「フンッ」

場面が変わって、厄災(テンペスター)と同じく造魔(ゾーマ)の刺客として襲撃してきた〝晦冥(かいめい)〟のトランザー

通常の鎧状態とはいえ、禁手(バランス・ブレイカー)と化した一誠を肉弾戦で追い詰めていた

一誠は何度も拳や蹴りを打ち込むが……トランザーの並外れた防御力の高さに苦慮し、手足からも血を流す

『クッソォ……ッ！硬すぎるだろ、コイツ⁉攻撃だけでもサイラオーグさん並みだってのに……！』

「なかなかしぶといな。丈夫さだけは一人前か」

「この野郎……ッ、余裕かましやがって！」

「実際余裕だからな。この調子だと、お前の仲間とやらも大した事が無さそうだ。弱い従者を持った主(あるじ)が哀れでならん」

「うるせぇっ！部長を……俺達の仲間をバカにすんじゃねぇっ！」

激昂した一誠は背中のブーストを噴かし、トランザーに突撃していく

トランザーは腰を落として構え、一誠の拳に対して張り手で迎え撃つ

拳と張り手が衝突した刹那、トランザーは直ぐに一誠の腕を掴んで勢い任せに地面へ投げ付ける

一瞬の浮遊感から背中に激痛と窒息感が走り、一誠は表情を歪ませる

更にトランザーはそのまま回転して、自らの背面を浴びせかけるように一誠を押し潰す
そこから腕の刃を利用した肘打ち
一誠は何とか肘打ちだけは回避し、空振ったトランザーの肘が地面を砕く
「丈夫さだけでなく、逃げるのも一人前だったか」
「ハァ……ハァ……ッ」
いくら打ち込んでも全く怯まない怪物に、一誠は畏怖せざるを得ない
『こんなバケモノが向こうにもいるってのか……！モタモタしてる暇は無いのに……ッ！』
憤りと焦りが混ざり、一誠は兜の中で歯を食い縛る
トランザーが肩を回しながら言う
「向こうの様子が気になるか？心配せずとも、直ぐに会わせてやる。お前を葬った後で1人残らず同じ地獄へ叩き落としてやろう」
「そう簡単に殺られてたまるかよッッ！」
行かせてなるものかと一誠は再度自分の魔力を増大させ、ドラゴンの両翼を広げて飛び出していく
トランザーもその場を駆け出して、腕刀で切り裂こうとする

腕刀が当たる寸前、一誠はトランザーの腕を踏み台にして背後に飛び――そこから後頭部に蹴りを入れる

不意を突かれたトランザーが体勢を崩し、着地した一誠は直ぐに方向転換して――肥大化させた拳を見舞った

ドゴンッッ！と大きく響く打突音

直撃を食らったトランザーは地面を抉りながら吹き飛ぶ

手応えのある一撃を入れた一誠

だが、それでもトランザーはムクッと平然とした様子で起き上がる

「クリーンヒットしたのに……今のでもダメなのかよ……!?」

「ほう、今のは良い攻撃だったぞ。普通の者ならば失神を免れん威力だ。まあ、オレには効かないが」

言い終わると直ぐにその場を駆け出すトランザー

一誠は迎撃の体勢を整え、迫り来るトランザーに拳を打ち込もうとしたが――

パンッッ！とトランザーが目の前で自らの掌を合わせるように叩いてきた

相撲技の1つ――猫騙しである

乾いた炸裂音に一誠は反射的に怯んでしまい、先程のお返しとばかりにトランザーが肘打ちを叩き込む

トランザーの刃が一誠の腹に深々と刺さり、腹部の鎧を砕いた
一誠は血を吐き出して後方へ吹っ飛び、背中から倒れる
「コイツ、強ェ……ッ！」
『二天龍の一角と聞いていたが、どうやら期待外れだったようだな。――〝真の姿〟を出すまでもあるまい。早急に片付けて、施設内の者も始末するか』

再び場面を施設内に戻し、セラフォルーは苦戦を強いられていた
拘束されたソーナ、倒れているシトリー眷属がいる為に全力の攻撃が出来ない上、テンペスターがソーナの魔力を吸収し続けると言う悪状況
魔力を吸収する事によりテンペスターは呪力を上昇させ、肉体の強度も技の威力も増していく
力を制限しなければならない上、テンペスターの魔力吸収が続けばソーナの命も危ない……
『このままじゃ、ソーナちゃんが……っ』
テンペスターの攻撃をくらったセラフォルーは軋む体を起こす

ソーナの魔力どころか生命力も尽きかけている現状、もはや猶予は無い……
セラフォルーが自前のスティックを構え、特大の魔力を集中させ始める
「一か八かのレヴィアたんなのよっ！」
一瞬に勝負を賭けたセラフォルーがスティックを掲げ、氷の魔力の余波が周囲に広がっていく
「女ごと我を滅ぼすか」
テンペスターは静かにそう呟くが、セラフォルーの狙いまでは読めていなかった
セラフォルーの氷の魔力が徐々に高まり――
「どんな状況でも諦めない、皆を救う魔法少女ミルキーに、私はなるっ！――――『零と雫の霧雪（セルシウス・クロス・トリガー）』ッッ！」
そう叫んだ刹那、室内の全てが瞬時に氷の世界と化し――――ソーナを捕らえていた液体も凍りつく
無論、それだけには留まらず……氷の魔力はテンペスターを氷塊に変えてしまった
まさに瞬殺……
テンペスターを凍らせたセラフォルーは直ぐにソーナのもとに駆け寄り、自分の魔力を分け与える
呼吸が弱りかけていたソーナの顔色に生気が戻る

「ソーナちゃん、もう心配しなくて良いわ。悪い厄災はお姉ちゃんが凍らせてやったから☆」
「お姉さま……少しはご自分の心配をしてください……。そんなボロボロで……」
「私は良いのっ。ソーナちゃんが無事なら、こんなのどうって事ないもんっ☆――――でも、この衣装お気に入りだったのに破けちゃった……」
セラフォルーが意気消沈した表情で服を摘まむ
自身が憧れている魔法少女ミルキーの衣装は至るところが破れており、際(きわ)どい格好となっていた
ソーナが凍結した液(テンペスターの破片)体を砕きながら言う
「衣装なら、また新しいのを買ってあげますから」
「本当っ⁉じゃあ、ソーナちゃんもお揃いで買ってくれる⁉」
「それは嫌です」
「うえぇぇんっ！ソーナちゃんの意地悪ぅぅぅぅっ！」
駄々をこねるセラフォルーを見て、ソーナは嘆息するものの――――姉の無事な姿に安堵する
椿姫達もようやく起き上がり、氷塊と化したテンペスターへの処遇をどうするか言おうとした

その瞬間、全身に形容しがたい怖気(おぞけ)が走る……っ！

視線をそちらに移すと――氷塊にされている筈のテンペスターがソーナ達に鋭い視線を向けていた

そして、徐々に氷塊が震え始め……熱を帯びたように赤く変色していき――呪力が噴き出して氷を木っ端微塵に破壊した

飛び散る氷の破片とマグマのような呪力がソーナ達に襲い掛かり、呪力の余波が彼女達の体と衣服を溶かそうとする

凄まじい余波ゆえにソーナ達は吹き飛ばされてしまい、テンペスターが地に降り立つ

ボゴボゴと肉体から噴きこぼれるマグマが止み、テンペスターはゆっくりと歩みを進める

「……お姉さまの魔力を、あんな簡単に……!?」

――〝厄災〟――

まさに生きた厄災……っ

ソーナは目の前の厄災(テンペスター)に戦慄と恐怖を抱(いだ)いた

セラフォルーはソーナを庇うように立つが、先程の攻撃で魔力を大量に消費してしまったので――呼吸が乱れている……

『さすがにちょっとヤバい……。魔法少女ミルキー、最大のピンチを迎えちゃったかも

……』

セラフォルー自身もテンペスターの規格外過ぎる力に冷や汗を流す

そんな事などお構い無しに目の前の〝厄災〟は再び「ヒュルッ」と呟き、自分の両腕に竜巻を纏わせる

「堕ちろ、闇の彼方へ」

竜巻の両腕でセラフォルーを薙ぎ払おうとした刹那、背後からドンッッ！と壁が吹き飛び――――火竜がテンペスターに食らい付く

セラフォルーから距離を離されたテンペスターだが、直ぐに竜巻の両腕で火竜を消し去る

テンペスターは直ぐに敵意の視線を、破壊された壁の方に向ける

そこには――――既に鎧を展開した新が佇んでいた

ようやく新が戻ってきた事に安堵しかけるが……

『……？新くん、先程よりも様子がおかしい……。ここを離れてる間に、何か遭った……？』

ソーナは新の様子がおかしい事に気付いた

戻ってきた新はさっきよりも険しい顔付きとなっており、怒りの色がより濃く見える

「貴様、何者だ？」

テンペスターが問い掛けるも、新は「うるせぇ」と一蹴(いっしゅう)して足を進める
殺気を孕(はら)んだ視線を〝厄災〟に向け、火竜を両腕に纏わせながら告げた
「テメェが誰だか知らねぇけど、ソッコーで片付けさせてもらうぜ。今の俺は虫の居所(いどころ)が悪いからな……ッ！」
「〝厄災〟に歯向かうとは愚かな奴だ。貴様も闇の彼方へ堕ちろ」
静かに敵意を燃やす厄災(テンペスター)と、今にも爆発しそうな様子の新
相反する感情が施設内に渦巻く……

新ＶＳ厄災のテンペスター

「ヒュルッ」

先に攻撃の口火を切ったのは造魔（ゾーマ）の〝厄災（やくさい）〟ことテンペスター

両腕と自分自身に竜巻を纏わせ、空中へと飛び出し――――猛然と襲い掛かっていく

その〝厄災〟に対して、新はその場を動かず……火竜を纏わせた拳を突き出した

竜巻と火竜が衝突し、衝撃の余波が室内の全てを揺らす

テンペスターはもう一方の腕で新の腹を殴り、その勢いのまま突き進んで壁に叩き付ける

血反吐（ちへど）を吐く新だが、直ぐに合致させた両手をテンペスターの後頭部に振り下ろす

更に顔面に膝を叩き込み、再び火竜を纏わせた拳でテンペスターを殴り飛ばした

轍（わだち）を刻みながら転げ回るテンペスター

新はすかさず追撃を仕掛けるべく飛び出した

今度は火竜を足に纏わせ、跳躍からの踏みつけ攻撃

テンペスターの鬣（たてがみ）を掴んで殴る、殴る、ひたすら殴る……ッ！

大きく鳴り響く打突と破砕音

相手に反撃の暇(いとま)すら与えない……
苛烈(かれつ)な殴打の光景を目の当たりにしているソーナ達は言葉を失う
否、正確には突然の〝新の変貌ぶり〟に戦々恐々としていた……
『やっぱりおかしい……っ。これは――――いつもの新くんの戦い方ではありません……。まるで、殺意と敵意をむき出しにした野獣のような……っ』
新は現役のバウンティハンターゆえに、クレバーな戦法を取る事もあった
そうしなければならない場面もあるからだ
しかし、今の新は全く違う……
ただ力任せに暴力を振るい、相手を徹底的に殺さんとする獣(ケダモノ)のような戦い方をしていた……っ
こうなった原因は無論――――ここへ戻る前にバサラ・クレイオスと対峙してしまった事である
バサラ・クレイオスに出くわしてから、新は明らかに苛立ちや怒りの色が濃密なモノとなり――――人が変わったようになっていた
過去に因縁があったゆえか、新はその鬱憤(うっぷん)をぶつけるようにテンペスターを徹底的に痛めつける
最初は違和感を覚えた程度の認識だったが、ここへ来てソーナは新が〝いつもの様子

と違う〟事を確信し――新のもとへ駆け寄った
「もう止めなさいっ、新くんっ！」
「……アア？」
今まで聞いた事の無い程低くドスを利かせた声、血走らせた眼孔
敵ならいざ知らず、ソーナ……仲間に対して向けるのは初めてだろう
ソーナは一瞬萎縮しかけるが、殴ろうとしている新の拳に自身の手を掛ける
暫くすると徐々に新の顔から怒りの色が消え、テンペスターの鬣から手を放す
新はハッと我に返り、力が抜けたように息を吐いた
「悪い……っ」
「落ち着きましたか、新くん？」
「ああ……お陰さまで」
「下の階で何かあったのですか？あなたがあんなに取り乱すなんて」
「……別に。ここ最近の造魔のやり口にイラついて、ちょっと荒れてただけだ」
新はバサラ・クレイオスと遭った事を伏せて、その場凌ぎの嘘で弁明する
本当なら話しておきたいところだが、そうなるとリアス達にまで話が行き渡ってしまう恐れがある……
『俺とアイツの問題にリアスやソーナ、皆を巻き込みたくない……っ。巻き込みたくな

いが……アイツの性格からして無理だ……。話しておくべきなのか……？いや、それでも――――』

苦々しい表情で思慮していた矢先、新の背後から再び〝厄災〟の魔手（ましゅ）が迫る……！

「ジャキンッ」

テンペスターは十指を刃物のように変化させ、新の背面を切り裂く

完全に不意を突かれた新の背中から鮮血が噴き出し、新は飛び退いて距離を取った

あれだけ痛めつけられたにもかかわらず、テンペスターは驚異的な回復力で復活を遂げていた

「ぐ……ッ！こいつ、まだ生きてたのか……⁉」

「余所見とは余裕だな、お前達の厄災はまだ終わってないぞ。――――ヒュルッ」

テンペスターの周りに複数の竜巻が現れ、新やソーナ達に襲い掛かる

新は今の状態では防ぎきれないと踏んで、自分の内にある竜の力を解放

『真・女王（クイーン）』形態となり、背中から漆黒の巨腕（きょわん）を展開した

黒い火竜と漆黒の巨腕を一斉に撃ち放って、全ての竜巻を相殺（そうさい）させる

莫大な爆煙が立ち込め、その中から十指を刃物に変化させたテンペスターが斬りかかって来た

間に合わないせいか、新は自前の両腕でテンペスターを押さえ込もうとするが……〃

厄災〝の十指が新の両腕を貫く……！
両腕に走る激痛に耐えながら、新はそのままテンペスターの両肩を掴む
更にそこから雷炎モードとなり、大口を開けて炎と雷の塊をチャージしていく
超至近距離での砲撃
テンペスターは直ぐに距離を取ろうとしたが、新が漆黒の巨腕でその動きを封じる
「――――『雷炎竜の咆哮（ライトニング・ブラスト）』オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！」
炎と雷が入り乱れた砲撃が〝厄災〝の全身を焼き払う……ッ！
極大の砲撃は室内の壁を突き破り、空の彼方へ消えていく
砲撃が止み、テンペスターの体からブスブスと黒煙が立ち込める
〝厄災〝は力尽きて倒れ伏し、新も雷炎モードを解除して座り込んだ
そこへソーナが歩み寄り、声を掛ける
「大丈夫ですか、新くん？」
「あ、ああ……何とかな。ただ、こんなバケモノみたいな奴が造魔（向こう）にはまだ１３人もいるんだ……。早々と喜んでいられねぇぞ……っ」
新は大きく息を切らしながらも立ち上がろうとするが、足元がふらつき倒れそうになる
ソーナは直ぐに『僧侶（ビショップ）』の花戒桃（はなかいもも）と草下憐耶（くさかれや）を呼び、２人がかりで新に治療を施す

戦闘が終わっても新は浮かない表情をしており、ソーナは不安と疑心を拭えなかった
そこへセラフォルーがソーナに話し掛ける
「今日の新くん、いつもと様子が変だよね」
「お姉さまもお気付きになりましたか。……ええ、今の彼は明らかにいつもと様子が違います。まるで何かに憤りを感じているような、焦っているような――――」
「そうよねっ。ソーたんも私も、椿姫ちゃん達もこんなにエッチな格好しているのに、全然反応してくれないんだもんっ。ソーナちゃんに見向きもしないなんて、お姉ちゃんとしては失礼しちゃうわっ」
「そういう問題では……いえ、確かにそうですよね。いつもの彼なら、視線ぐらいは向けてもおかしくありません」
セラフォルー、ソーナ、シトリー眷属女子は先程のテンペスターとの戦いで服が破れ、際どい格好になっている
いつもの新なら戦闘の最中でもエロい格好のソーナ達に視線を向ける筈だが、今回は全く反応を示さなかった
それだけを鑑みても、今の新は本調子ではない事が分かる
『やはり……さっき彼が下の階を見に行った時に、何か遭ったのでしょうか？リアスにも伝えた方が良さそうね』

とりあえず今は倒れ伏しているテンペスターのもとへ行き、その身柄を冥界へ移送しようとした

転送用の術式を施そうとした――その時、テンペスターの目が見開いてソーナを睨む

『――――っ⁉』

突然の復活に驚愕するソーナとシトリー眷属の面々は、直ぐに距離を取って身構える

しかし、テンペスターは倒れたまま淡々と告げてくる

「……我がここまでダメージを受けるとは計算外、想定外のダメージ。我の回復力でもこれ以上の戦闘は不可能と見た。……我は1度、死ぬしかない」

「死ぬ……？それはどういう意味？」

「〝相手が悪かった〟――――と言う事だ」

ボシュンッッ！

次の瞬間、テンペスターの肉体が灰になるかのように吹き飛び、黒い霧が室内一杯に広がった

訝しげに黒い霧を見るソーナだが、直ぐに異変が訪れる……！

「――――ッ！かは……っ！ぐ……あぁ……っ！」

「ソーナちゃんっ⁉どうし――――っ！ア……ウゥ……っ！」

突如、ソーナやセラフォルー、シトリー眷属全員が苦しみ始めた
首や口元を手で押さえ、咳き込み、血を吐き出す
その異変は新にも訪(おとず)れ、黒い霧に体を蝕(むしば)まれていく
だが、新はこの痛みが〝前にも1度、味わった事がある〟事に気付く……っ
そう……魔獣騒動の時に新が倒した――〝初代キング〟の放った闇
あの時と全く同じ状況と苦しみが、再び牙を剥く……！
全身を駆け巡る激痛に苦しんでいると、闇の一部が1つの塊になるよう集結する
『……深淵の闇、それは生きとし生けるものを蝕(むしば)む呪毒(じゅどく)。我は魔力を喰らいて無尽蔵に呪力(じゅりょく)を蓄(たくわ)え、何度でも甦(よみがえ)る。――ゆえに厄災』
闇の塊から発せられたのは、先程霧散した筈のテンペスターの声
確かな意味では死んでいなかった……！
『我は1度本部へ戻り、肉体を再生させる。だが、お前達は厄災の呪毒によって闇の彼方へ堕ちる』
「ま、待て……ッ！」
『厄災に終わりは無い。だが、お前達は滅び逝(ゆ)く運命(さだめ)。――いずれ冥府で会おう』
そう言い残し、闇の霧と化したテンペスターはその場から消え去っていく
一方、新達は一転して窮地に追いやられてしまった

全員が闇の霧に冒され、吐血と苦悶が止まらない
〝このままではソーナ達が死ぬ……っ！〟
そう直感した新は悪状況を打開すべく、また無茶な方法を取らざるを得なかった
それは……あの時と同じく――――周囲一帯に漂う闇の霧を、竜の呼吸法で吸い込む
しかし、その方法は諸刃の剣……
そのせいで１度、闇に呑み込まれて生死の境を彷徨ったのだ
『それでも……やるしかねぇ……ッッ！』
新は意を決して口を開き、室内に漂う闇の霧を吸い込み始めた
浮遊している闇の霧が導かれるように、新の口へと吸い込まれていく
薄れる意識の中、その光景を見たソーナが目を見開く
「新くん……何を……っ!!」
「この霧をっ、全部吸い込む……ッ。竜の呼吸法を会得した俺なら……これぐらい……ッ！」
「や、やめなさいっ！あなたは１度、その方法で命を落としかけたのでしょう!!」
「他に方法がねぇんだ……ッ！やるしか、ねぇんだよ……ッッ！」
皮膚に次々と裂傷が生まれ、全身の至る所から血が噴き出しながらも――――新は闇の霧を吸い込み続けた

そうしなければ、ソーナ達を助けられない……
無茶をしなければ、〝奴(バサラ)〟にも勝てない……
様々な思考が頭の中で交錯し、焦燥感が新に無茶を働かせる
止めようとするソーナだが、闇の霧に体を蝕まれているので思うように動けず――
ただ傍観するしかなかった……
やがて、全ての霧を吸い込み終えた新は体を震わせる
「……っ……っ。これで……もう、大丈夫――」
ブシャアアアッツ!
目、口、鼻、耳、そして全身から鮮血が迸(ほとばし)り、新はそのまま膝からくず折れ、倒れた……っ
倒れた場所から血が広がり、致死量とも言っても過言ではない程の血が床一面に染み込む
「――っ!あ……新くんッッ!」
ソーナの悲痛な叫びが血染めの室内に響いた……

「はぁ……はぁ……っ」
「フム……オレの攻撃にここまで耐えた奴は初めて見たな。案外骨があるやもしれん」
施設の外で未だに戦闘を繰り広げていた一誠とトランザー
一誠の鎧はボロボロの状態となっており、本人も息を切らしている
それに対してトランザーは余裕の様子で指を鳴らす
〝そろそろ遊びは止めようか〟と構えた直後、トランザーの耳に小型の魔法陣が展開される
恐らく通信用の魔法陣だろう
その魔法陣から出された指示にトランザーはコクリと頷き、攻撃の構えを解く
「悪いが今日はこれで切り上げさせてもらう。お前達の実力はだいたい把握できた。やはり、到底我々と善戦できるレベルでは無さそうだ」
「何だと……っ!?」
「いずれ造魔が――――否、深淵の闇がお前達を残らず葬るであろう。それまで首を洗って待っているが良い」
そう言った直後、トランザーの足元から転移用魔法陣が開き、トランザーは転移の光の中へと消えていった
ソラノを守れたのは良かったが、一誠としては歯痒い気持ちを抑えられない……

また造魔相手に一矢報いる事も出来ず、歯牙にも掛けられなかった
落胆、失望、軽視される屈辱感
これまで戦ってきた『禍の団』、闇人、リュオーガ族とはまた違う強敵……
更にこの後、新とソーナ達が倒れた事をリアスより知らされ……グレモリー眷属、シトリー眷属ともども手痛い打撃を与えられた
直ぐに堕天使系列の病院に緊急搬送され、一誠達はアザゼルから事の顛末を聞かされる
「造魔の〝厄災〟って奴にやられたらしい……っ。そいつが自爆して毒を撒き散らしやがってな、全員がその毒に冒された……。セラフォルーとシトリー眷属らは吸い込んだ量が少なかったから、大事に至らずに済んだ。……問題は新だ」
ソーナ達の病室から離れた集中治療室に足を運び、〝面会謝絶〟の札が貼られた扉を開ける
ベッドには口元に呼吸器を着け、力無く横たわる新の姿があった……っ
身体中に付けられた管からは輸血用の血液が流れ、医師や看護師達が慌ただしく動いている
新の痛々しい姿を見て、誰もが絶句した
アザゼルが沈痛な面持ちで口を開く

「最低でも3日間は絶対安静だ。新の場合は特に体内汚染が酷い……。ソーナ達を守ろうとして、撒き散らされた毒を一身に吸い込みやがった……っ。どれだけ危険な事か、分かっていただろうに……！」
「新は……新はどうなるの……っ？助かるのよね……っ⁉答えなさいっ、アザゼルッッ！」
リアスは恐慌しながらアザゼルの肩を掴み、ガクガクと揺さぶって問い詰める
アザゼルは「落ち着け！」と一喝し、リアスの動きが止まってから再び告げる
「ついさっきアジュカにも連絡を取った。解呪方法を急ピッチで調査して、奴に直接解呪してもらう。術式の構築と解析に長けたアジュカなら解呪の術式も割り出せる筈だ。……後はアジュカに任せる他ない……っ」
リアスを宥めたアザゼルだが、その表情は未だに険しさが拭えなかった
その理由は……またしても造魔の手腕である
「今回の1件、俺達が護衛してた施設は――奴らにとっちゃ囮に過ぎなかった……！つまり、そこを手中に収めようが収めまいが関係無い……っ。奴らの狙いは交渉を妨害されない為の足止めだったんだ……！」
「足止め……交渉……⁉」
「俺達が足止め役と一戦交えている間に、奴らは各国の企業や組織とのバックアップを

広げる交渉をしてやがった……！そっちが本命、最初（ハナ）っからこっちの事は眼中に無かったんだ……！――――ハッキリ言って侮辱されてるんだよ、俺達は……っ。何処までもヒトを小馬鹿にしてくれる連中だ……っ！」

今回の護衛は全てが無駄骨、徒労に終わらされたと言う事だろう

またも造魔（ゾーマ）に煮え湯を飲まされる一誠達は、やり場の無い憤り（いきどお）を溜め込むしか無かった……

場面変わって造魔（ゾーマ）の本部

ボコボコと気泡を噴くのは――――培養液が満たされた黒い繭

その中には新と戦い、自爆して呪毒を撒き散らしたテンペスターが浸かっていた

頭部も胴体もところどころが欠けており、黒い繭によって修復されている最中なのだろう

『迷惑を掛ける、キリヒコ』

テンペスターが一言漏らす

彼の眼前にはユナイト・キリヒコ――――否、ユナイト・クロノス・キリヒコが佇（たたず）んで

いた
「ご心配なく、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）テンペスター」
『……テンペスター、それが我の名前か？だが、我は肉体を再生させる度に記憶が欠落する。ゆえに名前など意味が無い』
「Ｏｈ（オー）　ｌａ（ラ）　ｌａ（ラ）、そう言わずに。呼びやすい名前ぐらいはあった方がよろしいでしょう？」
『我の再生にはどれくらい時間が掛かる？』
「そうですね、本来なら１日あれば完全に再生できますが……残りの繭にも魔力と呪力を供給しなければならないので、２日もしくは３日ほど掛かるかと」
キリヒコの言葉にテンペスターは『そうか』と一言だけ呟いて瞑目する
キリヒコは装置（デバイス）を操作して、今回取れた戦闘データを閲覧
そこへトランザーが姿を現す
「我々が単なる足止め役とは気が引けるものだが……任務である以上は仕方無いか」
「Ｏｈ（オー）　ｌａ（ラ）　ｌａ（ラ）、こちらでも不満ですか？Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）トランザー」
「不満とまでは言うまい、それなりに楽しませてもらった。……しかし、テンペスターが自爆する程の相手がいたとはな」
「Ｏｕｉ（ウィ）、これからもっと楽しめると思いますよ。彼らの憤（いきどお）り、苦難苦闘に歪（ゆが）む様（サマ）をね」

嫌味な笑みを浮かべるキリヒコの周りで、複数の黒い繭が静かに鳴動を続ける……

「バサラ様、今回の件について報告です。各国の企業および組織との交渉は可決。各々がこちらの提示した条件を呑み、援助を担うとの事です」
「そっか。ご苦労なこった、シーザーサラダ」
「シルバーです。……あなたは何度間違えればお分かりになるのですか？それに自ら足を運んで敵対者に顔を見せるなど、常軌を逸した行動も控えてください」
「常軌を逸してこそ開かれる活路ってのもあるんだよ。今の世の中、考え方が凡人・凡庸・凡夫な奴らばかりでつまらねぇ。堅物な老害どもや平和ボケ主義の日和った野郎どもしかいない、無気力で非生産的な人生の何が良いんだか。テメェもそう思うだろ、シークワーサー」
「シルバーです。まあ、日々錬磨しなければならないと言うお考えは賛同致します。錆び付いた刀ほど役に立たない物はありませんからね」
「ああ、そうだ。刀ってのは元来〝斬る〟為に在るモノだ。〝力〟は磨かねぇとナマクラに成り下がっちまう。三大勢力はそれをいつまでもインテリア気分で飾ってやがる。

本質を見誤り、身勝手に自己満足した挙げ句――――周りに吹聴して日和らせる。俺から見れば向こうの方が罪悪で害悪、性質が悪いんだよ」

「その彼らと〝交渉〟しに行くとは、どういう風の吹き回しですか？」

「見定めてやるんだよ、俺がアイツらの器量を。今の俺は造魔の頭、奴らにとっちゃ怨敵だ。その怨敵が目の前に現れたら、どんな反応を示すか？どんな対応をして、どんな答えを出すか？そいつを確かめてやる」

「私としては即全面戦争になりかねないと思いますが」

「その時はその時、それが奴らの答えで器量の底だ。底が浅かったと踏ん切りがつくだろ？」

「見た目に反して嫌なやり方ですね」

「それが世の常ってヤツだ。この程度の引っ掻きで癇癪を起こすような奴ぁ――――ただのクソガキと変わりゃしねぇんだよ」

――――――――――――

造魔の襲撃から丸１日経過した放課後、ソーナ達は何とか学園生活に復帰、セラフォルーも復活を果たした

だが、新は未だに呪毒に苛(さいな)まれており……アジュカも解呪の術式の算出を進めていた『初代キング』の闇と同質のモノだったので、解析は思ったよりも早く進められるが――――それでも解呪には1日かかるらしい

本来なら3日間は絶対安静にしなければならないが、いつ造魔(ゾーマ)が再び仕掛けてくるか分からない……

通信用魔法陣の向こうでサーゼクスが重い口を開く

『恐らく造魔(ゾーマ)は我々の動きを読んでいたのだろう。三大勢力の拠点を次々と襲えば必ずリアス達が動く。襲撃地点の1つを足止めの場として選び、その間に各国の企業や組織との交渉――――裏取引を進めていた。……ここまで躊躇(ちゅうちょ)無く表舞台にも手を出してくる組織は初めてだ。その上、やる事が豪胆過ぎる……』

「バレようがバレまいが関係無い……っ、ある意味『禍の団(カオス・ブリゲード)』以上に開き直った連中だ。シャルバや曹操が可愛く見えてきやがる……っ」

アザゼルが険しい表情で歯を噛み締め、サーゼクスも沈痛な面持(おもも)ちとなる

『とにかく……新くんの復帰を待つ事が先決だ。この状況下で造魔(ゾーマ)の挑発に乗るのは危険極まりない。アザゼル、納得いかないかもしれないが……今は耐えてくれ。リアスや他の皆にも耐えて欲しい』

「お前の言いたい事は分かってる。ここで下手に爆発させたら、それこそ奴らの思う壺

だろう。……サーゼクス、本当はお前も爆発しそうなんじゃねえのか？」
アザゼルの指摘にサーゼクスは眉根を潜め、指を強く握る
どうやら図星のようだ
しかし、今はその爆発を懸命に抑えようとしている……
感情的になれば、それこそ造魔に付け入る隙を与えてしまい兼ねないからだ
『……正直に言えば、今すぐにでもそちらへ向かいたい。だが、四大魔王が安易に動けば格好の的になる……。不意討ちとはいえ、セラフォルーを追い詰めかけた者でさえ〝まだ幹部クラス〟……その上に立つ首領の情報も、正体も、行方も、こちらは何１つ得ていない……っ。動きたくても動けない……。ここまで歯痒い思いをしたのは久しぶりだ……っ』
「ああ、全くだ……！出来る事ならこれ以上、後手に回りっぱなしってのは避けたい……っ。何かしらの情報を掴めれば良いんだが……」
アザゼル、サーゼクス、新を除いたオカルト研究部の面々も沈痛な表情で押し黙ってしまう
しかし、理不尽や災難は往々にして立て続けに、そして突然起こってしまうものである……

ゾワ……ッッ！

突如アザゼルや一誠達の全身を駆け巡る――――激しい悪寒と怖気（おぞけ）

それは今までに味わった事の無い感覚だった

部室の壁や床、窓、天井に亀裂が走り、空気がビリビリと震撼する程だ……っ

「な……っ！何なんだっ、この異常なまでの気配は……っ⁉」

アザゼルが真っ先に窓から外を見やる

しかし、校庭や正門前には誰もいない……

『まさか、こんなドデカい殺気を〝遠くから直接ここに放ってる〟のか……⁉仮にそうだとしても、警備の奴らが直ぐに気付く筈！なのに……連絡が一切来ないまま、あっさりと侵入された……⁉こんな気配が今の今まで気付かれなかったなんてあり得るのか……⁉』

あまりにも不可解な侵入と気配に当惑せざるを得ないアザゼル

ただ確実に言える事が1つだけある……

それは――――〝その殺気の主がこちらに近付いてきている〟という事だ……！

映像越しに見ていたサーゼクスにも殺気が届いたのか、嫌な汗が出てくる

『……アザゼル、どうやら造魔（ゾーマ）は我々の想像など軽く飛び超えてくるようだ……っ。ま

さかとは思うが……これは……！』

「そのまさかだろう、サーゼクス。間違いねえ……造魔の首領のお出ましだ……ッッー！」

アザゼルが憎々しげに出した言葉に、その場にいた全員にも戦慄が走る

その遥か遠くで〝殺気の主〟は――――アザゼル達がいる駒王学園を見据えていた……

「あれがアイツらの根城か。ハハッ、マジで普通の学校じゃねぇか。人外魔境どもが人間のフリして学生ライフってか？笑わせやがる」

「真っ正面から堂々と敵地へ足を運ぶあなたのお考えには笑えないでしょうけど」

「おいおい、手荒い歓迎を用意してくれてるかもしれねぇんだぞ？そういう催しは大歓迎だ。それなのに裏口から侵入するバカが何処にいる？」

「つまり、裏を返せば――――その気になれば小細工無しで奴らを全滅できる……と言いたいわけですね。確かにあなたの圧倒的かつ理不尽な剣腕の前では、どんな強者も紙クズに成り果てる。更に悪魔である以上、私の力が奴らへの抑止力となる」

「分かってるじゃねぇか、シルバーシート」

「……シートは余計です。バサラ様、交渉に向かうのは我々だけでよろしいですか？」

「いつものようにレビィも向かわせろ。それと……ついでにブラッドマンも呼んでおけ」

「死神……ブラッドマンですか。これだけでほぼ勝利確定ですね」
「向こうがその気なら、それなりに応戦するだけだ。さーて……そろそろ取引（パーティ）を始めるか」

剥げたな、テメェの化けの皮が……

「アザゼル……今の殺気は……っ」
「ああ、そうだ。最悪の展開……造魔の大ボスが自ら出向いてきやがった……！」
アザゼルだけでなく、リアスも恐々とした様子で震えている
あまりにも濃密な殺気に当てられ、部室内の全員が震えを止められなかった
特に戦闘に秀でてないアーシア、ギャスパー、レイヴェルの3人は一瞬でも気を抜くと意識を持っていかれそうだった……
アザゼルは警備のスタッフに連絡を取ろうとするが、先程から誰にも通じない……
その間にも〝殺気の主〟――――造魔のトップがこちらに近付いてくる気配を感じた
近付く度にビリビリと空気が揺れ、気配が肌に突き刺さる……
『新がいない現状で造魔の大ボスがやって来るとはな……っ。なんてタイミングの悪さだ……っ！……いや、仮に新がいたとしても俺達総出でやり合えるかどうかも分からん……！いずれにしろ、ここで全滅だけは避けるべきだ。だったら……』
アザゼルは思考を働かせた後、窓から校庭へと飛び出し――――リアス達に告げる
「お前らはそこで待機してろ……。まずは俺が奴らの動向を探ってみる。間違っても攻

撃を仕掛けるなよ……」

「……っ⁉なに言ってんだよ、先生っ！そんなの自分から殺られに行くようなもの――――」

「もし、奴らが本当に俺達を皆殺しにするつもりなら――――とっくに殺ってる。これだけデカい殺気を遠くから放ってくるような奴だ……。この町を丸ごと滅ぼす程の攻撃を放ってきてもおかしくない筈……。だが、それをせずに殺気のみを飛ばしてきた。多分、俺達に対する牽制……何らかの意図があるって事だろうよ……。だから、まずはそれを確かめる」

アザゼルの指摘は一理あった

確かに一誠達を殺すつもりなら、最初の段階で既に実行していただろう

殺気の大きさからして、この場にいる全員を殺す事など容易い

それをしなかったのは――――〝少なからず戦闘の意思は無い〟事を示唆している

だが、戦闘の意思が無いにしても殺気のデカさはまさに規格外……

下手に刺激すれば、一気に〝全滅〟と言う最悪の事態にもなりかねない

それだけは避けるべく、まずはアザゼルが先陣を切る

あくまで様子見の真意を持って……

そんな極限状態を知ってか知らずか、殺気の主はどんどん近付いてくる

空気が痺れ、木々が揺れ、地が微細に鳴り響く
まるで巨大な魔物にでも睨まれているかの如く……
口の中の水分が失われるような感覚に苛(さいな)まれながら、アザゼルは必死に目を凝らす
そして……遂に殺気の主――造魔(ゾーマ)のトップが姿を見せる……！
威風堂々と歩みを進めてくる、青いコートを羽織った眼帯の男
男の少し後ろには3人の人物がついてくる
その内の2人は幽神正義(ゆうがみまさよし)からの情報で見覚えがあった
1人は滅悪祓士(デビル・スレイヤー)と呼ばれる銀髪の優男(やさおとこ)――シルバー・ゼーレイド
もう1人は〝死神〟の異名を持つ異形――ブラッドマン・クルーガー
その2人を視認したアザゼルは苦虫を噛み潰したように顔を歪める
『クソ……ッ、早くも先手を打ってきやがった……！悪魔殺しに死神……こっち側の動きを制限された……！』
悪魔を滅殺(めっさつ)する異能と、触れずに敵を葬(ほうむ)る死神
造魔(ゾーマ)のトップだけでも厄介極まるのに、スタートから劣勢のレールを敷かれてしまった……
そして、残りの1人は情報映像で確認されていない――青い髪にカチューシャを着けた小柄な少女

見た目だけを注視すれば、猛者揃いである造魔の幹部とは思えない程の風体だった造魔の４人が徐々に近付いていき、アザゼルの眼前で足を止める

ただ目の前にいる……

それだけなのに凄まじい重圧を浴びせられていた

特に眼帯を着けた男の重圧は他の比ではない……

『……ッ！1人分の圧力じゃないだろ、こいつは……ッ⁉まるで、ドデカい魔獣の群れにでも睨まれてるような気分だ……。「豪獣鬼」や「超獣鬼」とは全然違う……ッ！こんな奴が、こんな奴らが今まで世に出回らなかったってのか……⁉』

緊迫した空気の中、右目に眼帯を着けた男――――即ち造魔のトップが口を開く

「よぉ、テメェがこの一帯を仕切ってるヒキコモリー眷属の元締め――――アンコゼリーって奴か」

「バサラ様、グレモリー眷属と堕天使元総督のアザゼルです」

「ああ、そんな名前だっけ？アンコゼリーで良いだろ？それか汗疹汁」

「前者はともかく、後者だと単なる汚い汁になってしまいますよ」

「ピッタリなんじゃねぇの？姑息な手ぇ使って生き永らえてるカラスどもの親玉なんだからよ」

ふざけた態度でありながら辛辣な毒を浴びせるバサラに、アザゼルは睨みを利かせる

が……当の本人は全く意に介さない
バサラの傍らにいるシルバーが旧校舎――――オカルト研究部の部室に目をつける
「バサラ様、ここで立ち話をしても意味がありません。道を作りますので行きましょう」
そう言ってシルバーが指を鳴らした瞬間、彼の周囲から冷気が発生
その冷気がオカルト研究部の部室の窓に向かって一直線に伸び、氷の階段を形成する
一瞬で道が作られ、目を丸くしてしまうアザゼルにバサラが告げる
「道は出来たんだ、さっさと案内してくれよ。テメェらの根城の中心部に」
口の端を吊り上げ、アザゼルに案内を催促するバサラ
アザゼルは敵意を持ちながらも、バサラに質問を飛ばす
「案内はするが……2つの質問に答えてもらおうか」
「何だ？」
「何故ここに来た？造魔の被害を受けているこの町の、それも俺達の所に来た目的は何だ？警備を強化しているこの町に、どうやって入ってきた？」
アザゼルの問いに対してバサラは直ぐに答える
「まず1つめの質問に答えてやる。ここに来たのはテメェらと契約・取引をする為だ」
「取引、だと……？」
「ああ、双方にとって悪くない話だ。今日は少なくとも戦う気は無ぇから安心しとけ。

それと2つめの質問に対する答えだが……テメェらんとこの兵隊は弱っちい奴らばっかりじゃねぇか。チョイと睨んだだけで落ちていきやがったよ。んで、そのまま普通に入ってきただけだ」

つまり、直接手を下さずに警備の者達を仕留め――――悠々とこの町に侵入してきたと言う事だ

当然の如く言ってのけたバサラに、言葉を失うアザゼル

しかし、質問に答え終わったバサラが再び案内を催促してくる

「くだらねぇ質問は終わったか？なら、さっさと案内しな」

「……チッ、分かったよ」

舌打ちしたアザゼルは不機嫌な表情で先頭を上り、バサラ達4人もあとを追って上っていく

果たして、造魔が持ちかけてきた契約・取引とは何なのか……？

一触即発の空気が漂う中、アザゼルは背中に嫌な汗を感じながら氷の階段を上っていった

『アイツらが耐えられるかどうか、胃が痛くなってきそうだ……』

「「「「「……っ」」」」」

オカルト研究部の部室内は刺々しい雰囲気が充満していた

アザゼルが造魔（ゾーマ）の面子（メンツ）を案内してきた直後は怒りの色が滲み出ていたが……対峙した瞬間、膠着状態に陥（おちい）った

ソファーに腰を下ろし、行儀悪くテーブルの上に足を乗せるバサラ

その傍（かたわ）らに佇（たたず）むシルバー、ブラッドマン、レビィ

対面するようにアザゼルとリアスが座っている

アザゼルだけでなく、リアス達もバサラの全身から滲み出る殺気（本人曰く、抑えているらしい）に当てられ――――落ち着かない様子だった

『ヤベェな、こりゃ……。室内に来ただけだってのに、こっちが逃げ道を塞がれた気分だ……。造魔（ゾーマ）の首領に滅悪祓士（デビル・スレイヤー）、死神……ヤベェ奴らが勢揃いで吐き気すらしてくる……』

極限状態とも言える場の中で、バサラが開口一番に名乗りを上げてくる

「まずは自己紹介から始めるとするか。俺はバサラ・クレイオス、一応造魔（ゾーマ）のトップだ。んで、このちっこいのがチビスケ」

「チビスケって紹介やめてくれるっ⁉」

バサラの〝チビスケ〟発言に真っ先に異を唱えたのは青い髪にカチューシャを着けた小柄な少女――――レビィ・シャルティア

この場にいる造魔（ゾーマ）の面子（メンツ）の中でも、特に狂気とは無縁に思える人種である

チビスk……もとい、レビィに異議を申し立てられたバサラが言い返す

「んだよ、ちっこいからチビスケだろ？何処が間違ってんだ」

「まずチビスケって名前じゃないからっ！私の名前はレビィ！」

「チビィスケ？」

「レ・ビ・イッ！と言うより、このやり取りを何回もやる必要がある⁉」

話が進まない事に業を煮やしたのか、シルバーが台頭する

「話が進まないので私が説明させていただきます。彼女はバサラ様の〝右目〟役――――レビィ・シャルティア。まあ、ペットボトルの蓋的な存在だとお考えください」

「蓋⁉私ってペットボトルの蓋みたいなポジションなの⁉」

「それはさておき、私は造魔（ゾーマ）の執政官を務めるシルバー・ゼーレイド。そして、そこにいる骸骨は〝死神〟の呼び名を持つ――――ブラッドマン・クルーガー、以上です」

「私の扱い終わりっ⁉」

紹介の酷さに呆気に取られるレビィを意に介さず、ブラッドマンが語り始める

「魔の学舎（まなびや）に奏（かな）でるは、地の獄に堕ちし鈴の音（ね）か。照らす魔煌（まこう）は、大地を癒やせし明星（みょうじょう）

の息吹か。今宵は密約を結びし幸とならん事を願い、魔の骸を煉獄へ堕とし誘うこと無かれ」
「……つまり、彼はあなた方におとなしく我々の取引に応じるべきだと言っているのです」
ブラッドマンの詩的な言い回しをシルバーが簡潔に要約する
上から目線の態度に顰めっ面となる一同だが、ここでキレてしまっては元も子もない
アザゼルが話を切り出す
「そんなに言うなら、さっさと話の本題に入ったらどうなんだ？くだらん時間稼ぎをするつもりか」
「おっと、悪ィ悪イ。そろそろ始めるとするか。おい、しば漬け」
〝シルバーです〟と前置きをしてから、彼が取り出したのは1枚の紙だった
その紙には――――〝造魔との取引誓約・契約書〟と綴られていた
契約書を机の上に置いた後、バサラが口の端を吊り上げて言う
「単刀直入に言うぜ。――――俺らと取引しねぇか？テメェんとこの土地の一部と引き換えに、俺らが『禍の団』って残党どもの息の根を止めてやるよ」
「「「「「――――っ!?」」」」」
契約を持ちかけてきた事にも驚きだが、その契約内容も度肝を抜かれるようなもの

だった

〝『禍の団』の根絶〟を引き合いに出してきた造魔の真意が理解できず、アザゼルが訝しげに訊いてくる

「……どういうつもりだ？そもそも何故、そんな契約を敵である俺達に持ち掛けてくる？お前らに何のメリットがある？」

「メリット、か……。強いて言えば依頼・要望が多数あったから、それに応えてやろうとしてるだけってところだな。けどよ、その方がテメェらにとっても都合が良いんじゃねぇの？目の上の瘤を俺らが進んで除去してやる。その対価として土地の一部を献上してくれって事だ。１年契約なら１０％分、２年契約なら１５％分だ。そして、その契約期間中はお互いの管轄地域に干渉しない――――つまり、『禍の団』を根絶するまでは部分的に同盟関係を結び、諍い等の敵対的行為を禁ずる。どうだ、良い条件だろ？」

何とも破格の交換条件……

１０％～１５％、つまり１割程度の土地を献上するだけで『禍の団』を根絶してくれると言うのだ……！

実質、『禍の団』は機能停止にあるものの、未だ壊滅には至ってない

契約さえ結べば造魔がその期間内に全て片付けてくれる

しかも、誓約書を介しておけば契約に違反する行為を起こしても即糾弾できる

更に『禍の団』が入手した情報や研究資料の類も回収し、その全てを三大勢力間で共有すると言う条件も付け加えられた

まさに至れり尽くせりの条件である

机の上に出された誓約書を手に取るアザゼルと、ますます造魔の真意が読めなくなるリアス達一同

ただ分かる事は1つ……強か

造魔と言う組織も、それを束ねているバサラ・クレイオスと言う男も想像以上に強かだった

『……この男、見掛けによらず狡猾だな。実力だけなら向こうが圧倒的有利、優位に立っている筈だ……。それなのに一方的どころか、こちら側にとっての好条件を交渉の材料に引き出し、小規模の土地を掠め取る……。確かに僅かな土地だけで問題点、障壁を取り除けるなら――――大抵の奴は首を縦に振るだろうよ。……キリヒコとはまた違った意味で厄介な男、巧妙にヒトの揚げ足を取る嫌な野郎だ……っ』

アザゼルは心中でバサラの抜け目の無さに感嘆しつつも酷評

そんな中、リアスが怒気を含みながら反論する

「ふざけてるの？目の敵であるあなた達の要求を私達が呑むと思っているのかしら？相手にどう思われているのかも弁えず、ヒトの町にズカズカと足を踏み入れて、自分の立

場を分かっているの？」
　リアスが怒りのオーラを滲ませながら問い質してくるが、バサラは微塵も動揺する事無く言い放った
「立場、ねぇ……。今そんなもんを気にして、何になるんだよ？問題は契約するのか、しないのか、ただそれだけだ。話をすげ替えてんじゃねぇよ」
「……っ！」
　契約以外の話をまともにする気は無いとばかりに吐き捨て、リアスは無言でバサラを睨む
　ここで攻撃的な対応を取ろうものなら、バサラ達造魔は容赦無く返り討ちにしてくるだろう
　しつこいようだが、この場で即戦争＆全滅だけは何としても避けたい……
　リアスも他の皆も黙って聞いているしかなかった
　そして、アザゼルが造魔との契約に対する答えを出す
「確かにこの条件でお前らが『禍の団』を潰してくれるってのは、俺たちにとってオイシイ話だろうな。まさしく棚からぼた餅みたいな契約内容、文句の付け所が１つも無い」
「先生っ、こんな奴らの誘いを受けんのかよっ⁉」

アザゼルの反応に声を荒らげる一誠
他の皆もアザゼルの反応にざわつくが、アザゼルは手に持った誓約書を――ビリッと破り捨てた
「猫の手も借りたいとは言うが、お前らのような怪しい化け猫の手なんざ借りたくねぇわな。真意が読めない相手との契約は危険極まりない。それに……この町をお前ら悪党どもの好きにはさせねぇ。誰が契約なんぞするかよ」
アザゼルはハッキリと契約を拒絶、シッシッと追い払うように手を振る
アザゼルの態度にシルバーは眉を潜め、今にも殺さんとする気迫を見せるが――バサラが手で制する
その直後にバサラは顔を俯(うつむ)かせ、笑うように肩を震わせた直後……一言吐き捨てた
「――――つまんねぇ」
「は？」
「ここまで予想通りの反応をされたら、逆にシラケちまうな。全くクソ面白くもねぇ。つまんねぇ奴……もはや愛想笑いさえする気も萎(な)えた。せっかく目の上の瘤を除去できるチャンスを提示したってのに……テメェらは取るに足らねぇ意地とプライドとやらで、その機を無下にするんだからな。……どうやら俺はテメェらの事を買い被り過ぎていた。こんな様(ザマ)じゃあ今まで生き残れたのは相手が弱かったか、単なるマグレの産物

だろうよ」
「……何が言いたい？」
「堕天使のオッサン、聞けばテメェは前々から神器（セイクリッド・ギア）ってヤツをかき集めてるそうじゃねぇか。研究だの抑止力だの言ってよぉ」
「ああ、そうだ。お前らみたいな戦争バカとは違って有意義に――」
「そいつは大嘘だ」
バサラはアザゼルの言葉を遮（さえぎ）るように否定し、鋭い眼孔を飛ばしながら続ける
「テメェはただ単にビビってるだけだ。これから先に起こるであろう激戦、激動、修羅場、死線、降り掛かってくる災禍（さいか）を恐れてやがる。いつか到底敵（かな）わない相手が出てくる事に、周りの物を失いかねない焦燥感に、そして何より――今の安穏とした暮らしを壊したくないが為に……外壁を固めている。力を持っているくせに平和を求めてやがる」
「……それの何が悪い？」
「〝力を持った者〟が平穏に生きられるわけねぇだろ。力を持てば、必ず何処かで衝突する。それも理不尽かつ否応無く。テメェはそんな至極当たり前の現実から目を背（そむ）け、逃げてやがる。つまり、テメェは管理がしたくて勝負をしたくない腰抜けの男。謂わば、学歴だけで威張り散らすエリート気取りの無能と同じ。平常時の仕事は無難にこな

しても緊急時にはクソの役にも立たねぇと言う事だ。ピンチは凌げず、チャンスも逃(のが)す。……とてもヒトの上に立つ器じゃねぇな。総督をクビになるのも当然か」

そして、バサラはアザゼルに対して――――以下のように断じた

「オッサン……剥げたな、テメェの化けの皮が。――――二流だ。俺から見れば所詮テメェは二流、臆病風が骨まで染み付いた保身中毒、大詰めで見誤る指示待ちの老害に過ぎねぇ」

「……っ」

声こそ荒立てぬものの、アザゼルの急所を的確に抉(えぐ)るような罵倒

バサラの一言一句がアザゼルの心中に痛く突き刺さる……

確かにアザゼルは自身の研究と敵対勢力への抑止力の為に、神器(セイクリッド・ギア)所有者や情報をかき集めていた

先の三つ巴戦争で多くの仲間を失い、種族の絶滅を避けるべく真っ先に三大勢力間の和平を提案した

〝力を持った種族〟であるにもかかわらず、平和に暮らしたいと願っている

〝力〟と〝平穏〟――――それは両立など出来ない、相反する事実だ

力を手に入れなければ外敵に脅(おびや)かされ、力を持っていれば必ず別の力を引き寄せてしまう

争い・諍いの無い世界など――この世には存在しないのだから……

「〝力〟を持つからには覚悟を決めなきゃならねぇ。〝力〟がもたらすのは平穏じゃねぇ――破壊だ。何かを創る為には何かを壊さなきゃならねぇ。世界ってのは……幾星霜の破壊と創造を繰り返した死屍累々の上で成り立っている。医学だろうが科学だろうが、食育だろうが歴史だろうが、その全てが先人どもの血と犠牲によって構築されてんだよ。それが現実、この世の真理だ。残酷で理不尽なのが当然、常識。最初っから平等に創られている世界なんざ存在しねぇんだよ。テメェはその残酷な現実から目を逸らしてやがる。口では堅実的な事を言ってるだろうが、内心は真逆……この世の残酷さに押し潰され敗けた。だから、偽善ぶった理想ばかりほざいた挙げ句――周りの奴らを負のスパイラルに巻き込む。俺から言わせりゃ、テメェらの方が最大級に性質が悪いんだよ」

「……っ」

「ここまで保身的な腰抜け野郎は見た事がねぇ。だから、竜の字も腑抜けた空気に毒されちまったんだろうな」

「――っ？誰の事を言ってるんだ？」

「おいおい、まだ気付かねぇのか？テメェらの中で〝竜の字〟っつったら、1人しかいねぇだろ」

――〝竜の字〟――

そのワードで連想されるのは1人しかいない……

アザゼルはその人物にいち早く気付いた

「……新の事か」

「ああ、アイツとは同業のよしみだった、謂わば腐れ縁みてぇなもんだ。竜の字がテメェらの飼い犬になったと聞いた時は、さすがに開いた口が塞がらなかったぜ」

同業……即ち、この男もバウンティハンター

目の前の男――バサラが新と同業者である事に驚きを隠せないリアス達一同

そんな視線を尻目にバサラは淡々と続ける

「昔のアイツは俺と同じ匂いを持つ――修羅の道を進む獣だった。それが今やテメェら腑抜けた平和主義どもの飼い犬、すっかり尻尾を振って媚びるようになっちまってる。他の奴からも敬遠されていた面影が全く無ェ。正直言って呆れ果てたぐらいだ。世間でどう持て囃されているかは知らねぇが、少なくとも俺から言える事はただ1つ――今の竜の字は昔より弱くなってやがる」

「「「「――っ！」」」」

新に対する侮辱にリアス達は一層憤りを強く表し、アザゼルも眉根を潜めたピリピリした空気を意に介さず、バサラは新への罵倒を続けた

「テメェら温室育ちのボンボンどもに囲まれてりゃあ、弱っちくもなる。だがな……少なくとも戦いに関する心構えだけは変えちゃならねぇ。もし、竜の字が自分の信念をも変えて飼い犬に成り下がっちまったら――それこそ俺はヤツを軽蔑する。アッサリと心根を変えちまうようなヤツとは戦う価値も、張り合う価値すらも無ェ。時間の浪費だからな」

そして、バサラは鋭い眼光のまま言った……

「飼い犬になりたがるのは――逃げ癖が染み付いたアホだけだ。平和主義を唱えるアホと同じなんだよ……クズが」

バサラがそう断じた刹那、ドゴンッ！と机に拳を打ち付ける音が響き渡る

視線を移すと……一誠が憤怒の形相でバサラを睨み付けていた

歯軋りを鳴らし、今にも飛び掛からんとする様子だった

「てめえ、もういっぺん言ってみろ……！殺すぞ、この野郎……っ！」

「やめろ、イッセーッ！見え見えの挑発だ！安易に乗るんじゃ――」

「ふざけんなよっ！俺達の仲間をボロクソにバカにされて、黙ってろって言うのか⁉」

アザゼルの制止に聞く耳を持たない一誠

確かにここまで愚弄されては黙っていられないものだが、相手はバケモノ揃いの猛者を束ねる造魔の首領

安易に喧嘩を売れる相手ではない……
しかし、一誠は自身の激情を抑えられなかった
それはゼノヴィアも同じ
既にデュランダルを構え、その切っ先をバサラに向けている
「私もイッセーと同意見だ。仲間を……新を目の前で侮辱されて、おとなしくしていろと言う方が無理だ。……こんな奴とは話をする必要も無い、今すぐこの場で斬り払うのが賢明だ……ッ！」
ゼノヴィアも頭に血が上っており、完全に臨戦態勢に入っていた
それを見てシルバーとブラッドマンも迎撃しようと構えるが……バサラが「待てよ」と2人を一喝して止め、口の端を吊り上げる
「そうやって直ぐに激情に任せて暴走するのは――――図星を突かれた証拠だ。まあ、俺は核心を突いてやったんだから無理もなかったか。けどよ……喧嘩を売るなら相手を見てからにしろ。テメェらなんざ俺の足元にも届かねぇよ」
バサラは組んでいた足を下ろし、ソファーから立ち上がる
「ただ……ここで俺らが帰ったら、それこそテメェらの気が済まねぇよなぁ？俺に竜の字をバカにされたままじゃあ引き下がれねぇよなぁ？どうしても戦りてぇって言うなら――――表に出ろ。テメェらの望み通り、相手してやるよ」

なんと、バサラは私闘と言う形で一誠達を駆り出させようとしてきた……！
バサラはシルバーに目配せして、再び氷の階段を作らせた
窓から外へ伸びた氷の階段を降りていくバサラ達
一誠とゼノヴィアは直ぐに外へ飛び出そうとしたが、アザゼルに一旦止められる
「お前ら少しは頭を冷やせッ！確かに奴の口振りは腹立たしいが、無策でどうこう出来る相手じゃないのは分かってるだろ⁉」
「じゃあ先生は……このまま黙って仲間をバカにされていろって言うのかよっ⁉あんなクソ野郎が新と同じバウンティハンターだなんて……！」
「いずれにしろ、今ここで奴の首を刎ねれば造魔（ゾーマ）は終わりだろう！私は行くぞッ！」
一誠もゼノヴィアも怒り心頭、こんな状態になってしまっては何を言っても止まらないだろう……
アザゼルは舌打ちをしつつも「とりあえず落ち着けッ！」と2人を宥（なだ）める
そして、溜め息を吐いてから言う
「良いか、ここで奴を倒そうとは考えるな。焦って深入りすれば必ず足を掬（すく）われる。ここは……相手の力を知るつもりで戦え。俺達はまだ奴の能力を知らない。こうなったのは不本意だが、ある意味チャンスでもある。奴の能力を引き出すつもりで行け。それを踏まえてなら、いくらでも殴って構わん」

「……っ。さすが先生、今だけはアンタの悪知恵に感謝しますよ！」
「ならば、遠慮はいらないな！思う存分斬り刻んでやる！」
「イッセーくん、ゼノヴィア。それなら僕も行くよ。……僕も今の侮辱は聞き捨てならないからね」
一誠とゼノヴィアだけでなく、祐斗も参戦してきた
グレモリー眷属主戦力トリオの出陣にリアスも奮起する
「勿論、私達も出るわ。私の大事な眷属を……新を侮辱した事を後悔させてやらないと治まらないわ……！あの男に一泡吹かせてやりましょうッ！」
「ええ、当然そのつもりですわ」
「そうよそうよ！思い切ってギッタンギッタンにしちゃうわ！」
「……潰します」
「新さんは誰よりも苦労してきた人です。それを侮辱されるのは我慢なりません」
リアスに続いて朱乃、イリナ、小猫、ロスヴァイセも参戦を申し出てきた
アーシア、ギャスパー、レイヴェルの3人は控えに残し、8人がかりでバサラ・クレイオスとの私闘に踏み込む意志を決めた
しかし、彼らは思い知らされる……
バサラ・クレイオスと言う男が規格外のバケモノである事を……

そのバケモノに決して安易に挑んではいけなかった事を……！

「バサラ様、宜しいのですか？あのような下級集団の相手をなさって」
「何度も言ってんだろ、シーラカンス。アイツらが戦う気の無ェ奴らなら、最初っから安い挑発なんざしねぇよ」
「シルバーです。……もしかして、こうなる事も計算していましたか？」
「まあな、仲間意識の強い奴らは身内を愚弄されれば簡単に乗ってくる。契約しようがしまいが関係ねぇ、〝侮辱してきた俺を仕留められる〟と言う大義名分を得て躍起になってくるだろうよ」
「なるほど……豪放磊落でありながら賢しいやり方ですね」
「今までの奴らがアホ過ぎたんだよ。さーて、これから少しは面白くなりそうだ。グラタンコロッケどもの実力とやらを推し測ってやるぜ」
「グレモリー眷属ですけどね」

独眼の怪物、バサラ・クレイオス

不気味なまでに静寂に包まれた夜
校庭に出た一誠達は既に戦闘準備を整えていた
一誠は禁手（バランス・ブレイカー）の鎧を身に纏い、祐斗とゼノヴィアもそれぞれ聖魔剣（せいまけん）とデュランダルを構えている
この3人が前衛を務め、中衛にイリナ、猫又モードの小猫、ロスヴァイセ
後衛にリアスと朱乃が控えており、アーシア、ギャスパー、レイヴェルはアザゼルと共に後方で待機している
一方、バサラ・クレイオスは余裕綽々と言った感じでリアス達の方を見ていた
造魔（ゾーマ）の執政官シルバーと死神ブラッドマン、〝バサラの右目役〟と称されるレビィも静観している
すると、バサラが手を差し伸べながら呼ぶ
「おい、チビスケ」
「だから、その呼び方はやめてって言ってるでしょ⁉」
「チビスケはチビスケだろうが。さっさと得物を創りな」

「もうっ……バサラのバカ」

〝チビスケ〟の呼び名に不満を見せながらも、レビィは人差し指と中指を伸ばした状態の右手で何かを描くような動作をする

光の軌跡から生み出されたのは……一振りの刀だった

レビィによって創られた刀を受け取るバサラ

その様子を見たアザゼルは目を見開き、驚愕に満ちた顔付きとなる

『何だ、あの力は……？何処から刀を出した……っ？いや、〝創った〟のか……⁉まさか、あの娘は神器（セイクリッド・ギア）持ちか……っ？』

アザゼルが驚きを隠せないのも当然だった

神器（セイクリッド・ギア）の中でも何かを生み出す創造系（クリエイト）の神器（セイクリッド・ギア）は珍しい部類に位置する

祐斗の持つ『魔剣創造（ソード・バース）』や後天的に会得した『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』、神滅具（ロンギヌス）の『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』等が広く知られている

恐らくレビィも創造系（クリエイト）の神器（セイクリッド・ギア）で刀を創り出したのだろう

しかし、それは『魔剣創造（ソード・バース）』でも『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』でもない

アザゼルですら初めて見る程の代物……

バサラは刀の使い心地を確かめるように1回、2回と刀を振り、リアス達に視線を移す

「ハンデだ、先に1発打たせてやる。誰でも良いから、かかってきなよ」
バサラは左手をクイクイっと動かして挑発する
その一挙一動に対して不快感を露にするリアス達
そこで一誠が1歩前に出てくる
「お前……さっきから人をバカにしやがって……っ！後悔するぞ……っ！」
「おっ、テメェがやるのか？テメェは確か……セキセイインコのひょうたんイチジクだったな」
「赤龍帝の兵藤一誠だッッ！何処もかしこも間違いだらけなんだよ！ワザとやってんのか⁉」
「あー、ギャンギャンうるせぇな。吠える暇があるなら、さっさと来いよ駄犬」
バサラの挑発オンパレードに一誠は我慢の限界を迎えたのか、握った拳を震わせ――
―背中のブーストを噴かして飛び出していった
距離を詰めて右拳を力の限り突き出し、バサラの顔面にドゴンッ！と拳打が派手な音を立てて突き刺さる
手応えのある感触だったのか、一誠は内心で〝ザマァ見ろ！〟と毒づき、他の皆も一矢ぐらいは報いただろうと表情を緩める……だが――――っ
ニヤリ……ッッ！

「「「「「――――――っ!?」」」」」

全身をムカデが這い回るような気味の悪い怖気(おぞけ)が走り、拳を打ち込んだ一誠は反射的に飛び退いてしまう

それもその筈、渾身の力で顔面に拳打を食らわせたにもかかわらず――――バサラ・クレイオスが無傷で佇(たたず)んでいたのだから……

「なるほど、石炭まみれのひょうすべインターハイと言われるだけの事はあって、そこそこ良い拳打を打ち込んでくるじゃねぇか。三流程度の奴なら1発でKOされてらぁ」

『コ、コイツ……まともに食らったってのに全く効いてない……!?しかも、鼻血すら出てないって……っ』

バサラの平然とした態度、先程の威圧感に一誠は戦慄するしかなかった

そして、同時にこうも思った

〝石炭まみれのひょうすべインターハイって、どんな間違い方だ……っ〟と……

一誠が心中でツッコミを入れる最中、バサラは得意気に言う

「まあ、それも平和ボケに満ちた平和主義世代での話だ。本物の死線と修羅場を潜り抜け、激動の時代を生き抜いてきた俺達ハンター世代には全く……通用しねぇんだよ」

そう言いつつバサラは刀を右手から左手に持ち替え、腰を深く落として半身(はんみ)の姿勢を取り、左手に持った刀は体の後ろに置くように引き、刀の切っ先を相手に向け、その峰(みね)

に右手を軽く添えた
分かりやすく言えば、ビリヤードの棒（キュー）を構えた状態に近い体勢だ
独特な構えを取った……その刹那――――っ
ドンッッッッ!!!!
地面が爆（は）ぜ、バサラは瞬時に距離を詰めて一誠に刀での突きを食らわせた
「……ッッ⁉」
いったい何が起きたのか……？
一誠や祐斗だけでなく、グレモリー眷属の誰もが反応さえ出来なかった……
更に凄まじい突進の勢いを維持し、一誠の右肩を貫（つらぬ）いたまま校舎の壁を粉砕して突き進む
幾（いく）つもの壁や障害物を破壊し、離れた体育館の壁も突き破ったところでようやくブレーキを掛ける
右足を踏ん張らせて土煙を上げながら止まり、刀を引き抜くバサラ
一誠は慣性の法則によってそのまま吹き飛び、壁に叩き付けられた
右肩と口から血を出す一誠は倒れ込み、バサラが一瞥する
「何だよ、ドラゴンの鎧を纏ってるからどれだけ硬（かた）ェのかと思えば――――強度がまるでオモチャ並みじゃねぇか。竜の字はこんな弱っちい奴らとつるんでたのかよ」

そのまま立ち去ろうとするバサラだが、後ろから「ま、待て……っ！」と苦悶を孕んだ声が聞こえてくる

振り返ってみると一誠が立ち上がり、再度攻撃の構えを取っていた

しかし、先程のダメージが響いたせいか呼吸が乱れており、兜と鎧も半壊している

そんな状態の一誠を見て、バサラはつまらなそうに吐き捨てる

「おとなしく寝ていた方が身の為だぜ？致命傷じゃないとはいえ、肩を貫いたんだ。もうテメェはまともに戦えやしねぇよ」

「うるせえっ！こんな傷が何だってんだ……！まだ勝負はこれからだァァァッ！」

一誠は声を荒らげ、殴りかかろうとするが――――バサラが右手に持ち替えた刀で一誠の肘関節を打ち、攻撃の勢いを止める

すかさず左手で一誠の右肩を掴み、負傷した箇所を握り潰しに掛かる

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

傷口を抉(えぐ)られた一誠は絶叫を上げ、バサラが右手で一誠の顔面を鷲掴み――――

「寝てろ」

ガゴンッッ！と床に叩き付けた

――――――

一方その頃、取り残されたリアス達はハッと我に返ったように後方へ視線を向ける
思考さえも止めたバサラの突き……まさしく一撃必殺……
その速度および破壊力は〝凄まじい〟の一言に尽きるものであり、校舎に開けられたドデカい風穴がそれを物語っていた……
バサラの剣腕(けんわん)を目の当たりにしたリアス達は、嫌な汗が止まらなかった
暫(しばら)くするとバサラが崩壊した穴を介して戻ってきた
左手に握る刀からは血が滴(したた)り落ちている……
静寂を壊すようにバサラが後方を親指で差しながら言う
「回復役がいるなら、さっさと行きな。死んじゃいねぇけど襤褸(ボロ)切れみてぇになってるからよ」
「――――ッ。急げっ、アーシアッ！」
「……っ、は、はい！」
アザゼルはアーシアを連れて一誠の救護に向かい、バサラはその様子を見据えてから歩みを再開
祐斗とゼノヴィアの前に立ち、刀に付着した血を
舌で舐め取る

「石像定食のガキの血は青臭ェ味してんな。美味くも不味くも無エ」
一誠の拳打をまともに受けてもダメージらしき傷を受けていない頑丈さ、一撃で仕留める剣腕、そして得体の知れない狂気具合……
どの点から取ってもバサラ・クレイオスは桁違いの恐ろしさを滲み出していた
自然と祐斗の呼吸も乱れ始め、ヌルリとした嫌な汗が止まらない
それでも……1歩も退くわけにはいかない
気力を振り絞り、地面を蹴って飛び出す祐斗
幾重もの残像を生み、フェイントを混ぜてバサラとの距離を詰めていく
目にも留まらぬ素早さを駆使する祐斗に対し、バサラは――欠伸をするだけだった
侮辱的な態度に祐斗は内心で憤慨しながらも、冷静に仕掛けるタイミングを窺う
そして……右から攻める――と見せかけて左サイドからの剣戟を見舞った
バサラは瞬時に読んだのか、左手の刀で難無く防ぐ
簡単に防がれてしまう祐斗だったが……機転を利かせて左手にもう一振り聖魔剣を創り、挟み込むようにしてバサラの刀を封じる
そこへゼノヴィアがデュランダルを振りかざして向かってきた
刀ごと左手の動きを封じている以上、防ぐ術は無い筈
ゼノヴィアはデュランダルに聖なるオーラを滾らせ、バサラの頭部目掛けて振り下ろ

した
だが……ガキインッッ！と鈍い金属音が鳴り響く
「……っ⁉素手でデュランダルを受け止めた……っ⁉」
ゼノヴィアが驚くのも無理はない
渾身の剣戟をバサラは空いている右手で難無く制していたのだから……
バサラは余裕の満ちた笑みを浮かべて告げる
「そんな腕じゃあ、俺は斬れねぇよ」
斬ッッ！
バサラは体を捻って両手の剣戟による風圧で祐斗とゼノヴィアを薙ぎ払い、周囲の地面を切り裂く
祐斗とゼノヴィアは斬られながらも体勢を立て直した
疲弊の色を見せる2人に対して、バサラは〝大した事ねぇな〟と言わんばかりに口の端を吊り上げる
そこへ猫又モードの小猫が俊敏な動きで殴り掛かってくるが、バサラはそれを悉く躱していき――――
「どいつもこいつも欠伸が出ちまうな」
侮蔑するように吐き捨て、刀で小猫を斬ろうとするバサラ

そこへイリナが光の槍を複数投げて牽制、バサラは瞬時に回避した
しかし、投げつけられた光の槍を1本掴んでおり、それを素手で握り潰す
「こんなもんかよ」
再びつまらなそうに吐き捨てるバサラ
リアスが正面から極大の消滅魔力、朱乃が上空から雷光をそれぞれ撃ち放った
前方と上空からの同時砲撃
バサラは腰を深く落として構え、斬り上げるように雷光を切り裂き――返す勢いで消滅魔力を豆腐のように両断する
ロスヴァイセの全属性による魔術砲撃も容易く斬り払い、霧散させた
暫くグレモリー眷属の猛攻が続いたが、バサラはそれらをいとも簡単に躱し、防ぎ、斬り払っていく
どれだけ攻撃しても届かない……無駄だと言う虚無感が押し寄せてくる……
「そろそろ潮時だな」
そう呟いた直後、バサラは距離を取るように飛び退く
「眼、耳、鼻、舌、身、意。人の六根に好・悪・平。また各々に浄と染。……一世三十六煩悩」
バサラが神仏の説法らしき言葉を唱えた後、左手に持った刀を頭上に掲げ、その腕に

右手を添えて構える
「テメェらの攻撃はだいたい分かった。及第点ぐらいはやっても良い。だがな……所詮テメェらは井の中の蛙だったんだよ」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！
突如、バサラの全身から禍々しいオーラが放出され、持っている刀にも伝播していくその気迫、その威圧感はまるで巨大な魔獣にでも睨まれているかのようだった……
「1つ聞いておく。テメェらは――魔獣のような斬撃を見た事があるか？」
禍々しいオーラの濃さが増していき、バサラの眼孔が妖しく光る
そして――――ッ！
「――クロス・バースト……ッッ！」
勢い良く刀を振り下ろした刹那、極大の斬撃が迸り、轟々と地を抉りながら突き進むしかも、その斬撃は見覚えがあるもので……新が度々使用していた剣戟波と同じものだった
否……厳密には少し違っていた
撃ち放たれた斬撃は、先程バサラが言った通り――魔獣の如き恐ろしげな形相と化していたのだ……っ！
その尋常ならざる斬撃に一瞬の判断が遅れ、小猫と空を飛んでいたイリナが斬撃の余

波を食らってしまう
直撃だけは免れたものの、余波だけで全身の内外を激しく痛めつけ、２人をそれぞれ吹き飛ばす
イリナは崩壊した校舎の壁に激突して落ち、小猫は木に叩き付けられてしまう
想像を絶する威力に戦慄する面々
もし直撃をくらってしまえば、消滅は必至だろう……
バサラは持っている刀で土煙を軽く斬り払い、一言だけ告げる
「峰打ちだ、勘弁しろよ」
いったい何処をどう見れば〝峰打ち〟になるのだろうか……？
祐斗は得物を聖魔剣から聖剣にチェンジし、禁手（バランス・ブレイカー）の龍騎士団を生成する
アウトレンジ戦法に切り替えたのだろうが、バサラ相手に生半可な攻撃は通用しない
……
向かってくる龍騎士団の剣戟を躱し、得物を掠め取りながら龍騎士を刀で屠っていく
龍騎士を全滅させたバサラは奪い取った２本の剣を得意気に見せ、その内の１本を地面に突き刺す
「一世三十六煩悩、二世七十二煩悩」
先程放った剣戟波と同じ様に構えを取り、禍々しいオーラを刀に纏わせる

〝また、あの斬撃が来る……ッ！〟
危険を察知したリアス、朱乃、ロスヴァイセは「そうはさせないっ！」とばかりにそれぞれ極大の魔力を撃ち放った
滅びの塊、雷光、魔術砲撃のフルバーストが一斉に向かっていく
ゼノヴィアも便乗し、デュランダルから極大の聖なるオーラを迸らせ――――それを解き放った
祐斗は聖剣を再び聖魔剣に持ち替え、リアス達を囲むように幾重もの聖魔剣を出現させる
聖魔剣でシェルターを作り、更にリアス、朱乃、ロスヴァイセが防御魔法陣を展開してシェルターをより頑丈にする
一方、バサラは二振りの刀を振り下ろし――――再び魔獣の斬撃を放った
先程よりも巨大で凶悪な形相となった斬撃が４つの攻撃と正面衝突
否……一方的に消し去り、聖魔剣のシェルターをも容易く呑み込んでいった
凄まじい爆発と爆煙が巻き起こり、シェルターがバラバラに吹き飛ぶ
爆煙が晴れると……死屍累々と倒れているリアス達の姿が映った……
「……ッ！何なんだよ、これ……っ」
戻ってきたアザゼル、肩を貸してもらっている一誠、アーシアは愕然とする

バサラが戻ってきた3人に気付くと、口の端を吊り上げて言う
「よお、カラスのオッサン。まだコイツらに続けさせたいか？」
挑発してくるバサラに対し、腹立たしさを沸かせるアザゼルだが……悲惨に成り果てた現状を見て激情を抑え込む
〝これ以上続ければ命に関わる……！〟
アザゼルはやむを得ず、降伏を宣言しようとしたが……アーシアの治療を終えたばかりの一誠が前に出てきた
「……我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり……っ！」
「――――っ⁉イッセー⁉」
「無限の希望と不滅の夢を抱いて……王道を往く……っ！我、紅き龍の帝王と成りて……っ」
「やめろっ、イッセーッッ！傷を治したばかりで『真・女王』は無茶だっ！」
アザゼルが必死に呼び止めるが、仲間をやられた現状を見てしまい、激情が爆発した一誠は止まらない……
アーシアの声も……アザゼルの声も……今の一誠には全く届かず、一誠は最後の呪文を唱えた
「「「「汝を真紅に光り輝く天道へ導こう――――ッ！」」」」

『Ｃａｒｄｉｎａｌ（カーディナル）　Ｃｒｉｍｓｏｎ（クリムゾン）　Ｆｕｌｌ（フル）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!』

籠手の宝玉から力強い音声が鳴り、真紅の鎧が一誠の全身を覆う

『真紅（カーディナル・クリムゾン）の　赫（ブロモーション）　龍帝』となった一誠はドラゴンの両翼を広げ、ブーストを噴かして猛然と驀進（ばくしん）する

それを見たバサラは不敵な笑みを浮かべ――――両腕の筋肉を大きく脈動させる

血管が浮かび上がる程に膨らんだ両腕で刀を持ち、一誠の放った拳打を軽々と打ち返した

バサラの剣圧に押し負けた一誠は体を起こし、両翼からキャノン砲を展開して魔力をチャージしていく

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!!』

音声を何度も何度も響かせる最中、バサラは地に突き刺していた刀を引き抜き――――

３本の刀を右手の指の間に挟むようにして持つ

その様相はもはや刀と言うより爪である

まるで竜の爪……っ

３本の刀を挟んだ右手を掲げ、先程と同じ様に禍々しいオーラを溜めていく

「一世三十六煩悩、二世七十二煩悩、三世百八煩悩」

天変地異の前触れか……世界崩壊の前触れか……

バサラの全身から揺らめく禍々しいオーラは、この世のものとは思えなかった……

「クリムゾン……っ、ブラスタァァァ

真紅の鎧は砕け散り、全身をズタズタに斬られ、焼かれ、肉体の隅々から血が噴き出し、黒煙が立ち込める

この一撃によって一誠の意識は途絶え、膝をつき……倒れ込んだ

「……イッセー、さん……っ？イッセーさん……⁉イッセーさんッッ！」

アーシアが泣き叫んで駆け寄り、一誠の体を起こす

だが、一誠は完全に意識を失っており……酷い有り様となっていた

止められなかったアザゼルはワナワナと震え始め、一誠のもとへ歩み寄る

その震えは怒りから来るものではなく――バサラ・クレイオスに対する戦慄・圧倒的恐怖から来るものだった

『こんな事が……現実なのか……っ⁉こんな奴が、本当に存在するのか……っ⁉』

目の前にいるのは、もはや人間ではない……

他を一切寄せ付けず、あらゆる障害をねじ伏せる

まさに稀代の怪物……っ！

アザゼルは現状が夢幻（ゆめまぼろし）であって欲しいと願った……

そんな心中を見抜いたのか、バサラが奪い取った聖剣を捨てて告げる

「おい、オッサン。残念だがコイツは夢でも幻でもねぇよ。テメェらが見てるのは現実、リアルだ。いくら目を逸らそうが、血迷った戯れ言をほざこうが変わらねぇ――たっ

た1つの真実と結果。分かっただろ？これが……テメェらが俺に喧嘩を売った代償――いや、こんなもんは代償ですらねぇ。ただの自爆、ガキが火遊びに手を出したしっぺ返しってところだ」

さも当然の如く冷淡に吐き捨て、踵（きびす）を返すバサラ

圧倒的な実力差と勝利を見せ付け、シルバーがパチパチと賛辞の拍手を贈る

「お見事です、バサラ様。さすがは魔剣聖（ヴァンキッシュ）の異名を持つ御方（おかた）。無礼極まりないグレモリー眷属も理解した事でしょう。我々造魔（ゾーマ）に歯向かうのがどれだけ愚かで無謀な事かを。しかし、宜しいのですか？この場で消した方が良い見せしめになるかと――」

「ほっとけ、シーチキン。この程度で心が折れるようなら、俺どころかお前らの相手にもなりゃしねぇよ」

「そうですか。……あと、シルバーです」

面白味が無くなったのか、バサラは興醒めした様子でアザゼルに再び吐き捨てる

「テメェらと俺じゃあ、潜（くぐ）ってきた修羅場の数が違うんだよ。――アホが」

侮蔑の視線と言葉を贈るバサラ

アザゼルは口元に血が滲むほど歯を噛み締めるが、一誠達の治療を優先すべく動く

バサラはフンッと溜め息を吐き、帰り支度をしようとした

その時、不意に正門側から殺気を孕んだ視線がバサラに向けられる……

それは彼にとっても嬉しい来客のものだった

「よお、随分と遅かったじゃねぇか？昼寝でもしてたのか――――竜の字？」

バサラが呼ぶ――――〝竜の字〟

腐れ縁であり、一誠達よりも幾分か歯応えのある男

痛々しく巻かれた包帯、疲弊が抜けていない体を引きずって現れた男

「……っ……っ！やってくれたな……っ、バサラァ……ッッ！」

憎々しげにバサラを睨み付ける男――――新

本気の殺意を孕んだ視線にバサラは嬉々として言った

「良いじゃねぇか、その目付き。その気迫。やっと昔のテメェに戻った気がしてきたぜ。あの頃の狂気、見せてくれよ」

闇皇（アラタ）と魔剣聖（バサラ）、ここに相対する……！

ハンター同士の戦い

魔剣聖(ヴァンキッシュ)バサラに叩きのめされ、負傷したリアス達にありったけの回復ポーションを与える新

アーシアもフル稼働で全員の傷を治療し、３０分後……リアス達は何とか事なきを得て、体を起こす

新は直ぐにバサラを睨み付けて戦闘モードに入り、対するバサラは不敵な笑みを浮かべるだけだった

「しっかし、懐かしいよな、この感じ。確か最後に戦(や)り合った場所はルーマニアだったか？　胸くそ悪い吸血鬼どもを殺りまくってる時にテメェが乱入してきたよな。……あれから5年か。言葉にすれば一言だが、実際は長いようで短(みじけ)ぇなぁって沁々(しみじみ)思っちまうよ」

「……ああ、人が腐るには充分過ぎる時間だ」

新は鎧を身に纏い、依然として殺意を全身から滲み出させる

「バサラ、昔のお前は〝違う意味〟でキレた奴だった。雲のように掴み所が無い強(したた)かさを持ちながら、勝負事に関してはフェアな一面もあった。だが……今のお前はあの頃よ

りも腐りきってやがる……っ！　何の目的があってリアス達を襲った……⁉　人質にでもしようと思ったのか⁉　俺を焚き付ける為だけにリアス達を――――ッッ！」

新が言い終わる前にバサラは体を震わせ――――堪えきれないと言わんばかりに笑った

バサラの態度に「何が可笑しいッッ！」と激昂する新

バサラは笑いを止め、一拍置いてから言う

「腕が鈍ったとは思っていたが、まさか頭の回転もここまで鈍ってるとはな。その駄犬どもを人質にするだぁ？　アホか、俺がそんなセコい真似するかよ。そもそも、そんな奴らは人質にする価値すら無え。三流以下のやり方でテメエと戦り合ったところで何が面白い？　筋違いも甚だしいんだよ」

一転して声のトーンが低くなり、バサラは更に言い続ける

「テメェが何処ぞのベッドでお寝んねしている間、俺達は簡単に敵陣へと入り――――ずっとここに居た。〝取引をしたい〟って話を餌にしてなぁ。まあ、そいつらは俺達に関しては半信半疑だったし、結果的に取引を断ったものの……敵の懐に潜り込んだ事に変わりねぇ。つまり――――」

バサラが刀の峰に指を添えてハッキリと告げる

「俺が殺ろうと思えば、いつでも殺れたと言うわけだ」

鋭い眼力とリアス達をいつでも殺せたと言う事実を突きつけ、新に重圧を掛けていく
「そんな事にも気付かねぇとは……確かにテメェの言う通りだ。たかが5年、されど5年。人が腐るには充分過ぎる長さだったな。今の環境が明らかにテメェを弱くしやがった。今回に限った話じゃねぇ。〝仲間〟だの〝守る〟だの、甘っちょろい自己満足の正義感を抱(かか)えたせいで躊躇(ためら)いが芽生え、隙を作る羽目になった。――聞いたぜ？竜の字、ライセンスの昇格を蹴ったんだってな。顔も知らねぇ新人を殺した罪悪感ってヤツでよぉ」
バサラは新にとって最も痛いところを突いてきた
造魔(ゾーマ)の情報網は世界中に拡がっているので、情報は容易(たやす)く手に入る
バサラは冷徹な眼を向けて新に言い放つ
「テメェはいつからくだらねぇロマンチストになった？　口先だけの偽善者を語るようになった？　中途半端な強さに成り下がりやがって、胸くそ悪いったらありゃしねぇ。以前のテメェは何処に消えた？　甘ったれた理想論を否定し、常にシビアな価値観を維持し続けてきた竜の字が――今や飼い犬になろうとしてやがる」
「……今の俺には、大切な仲間がいる。仲間と周りの人達を守れる力さえあれば良い。お前のように延々と、嬉々として戦禍(せんか)を求め続ける力なんて必要無い……っ。今の世を俺達がいたような暗黒時代に戻しちゃならねぇんだよ……っ」

「だったら俺は――今のテメェの全てを否定してやる」
バサラは左手に持った刀を後方に引き、腰を深く落として右手を峰に添える
一誠を一撃で瀕死寸前に追い込んだ必殺の突き……その呼び動作である
バサラの構えを見た新は眼を細め、バサラは戦闘を促す
「どうした？　さっさと構えろ。舌の根も乾かねぇ内にそいつらを巻き込みたいのか？」
新は剣を出現させて右手に持ち、リアス達を巻き込まないように移動しようとするが……突如、後ろから左手を誰かに掴まれる
リアスだった
しっかりと両手で新の手を掴み、声には出さねど――まるで〝行ってはダメ〟と訴えているようだった
リアスが口を開く
「新……ダメ……っ」
「アイツの狙いは俺だ。ヤツとの戦いは避けられない」
「分かってる……分かってる……っ。けれど――」
「こうなったのも俺の責任、俺の不始末だ。アイツとの因縁は……俺がケジメをつける」
新はリアスの手をソッと離し、リアス達を巻き込まない立ち位置に着く

リアスは新に掛けるべき言葉を見つけられなかった
嫌な胸騒ぎが拭えず、本当ならもっと強く止めるべきなのに止められない……
まだ近くにいる筈なのに、だんだん遠退いていくようにも見えた
立ち位置を確保した新とバサラが再び構える
お互いに構えたまま動かず、無言の静寂が流れ続ける
時間が経つ毎に緊迫感は徐々に増していき、やがて最高潮に達した……
「――――ッッ！」
バサラの左目がカッと見開いた刹那、地面が爆ぜるッッ！
地を蹴って飛び出したバサラは左手に携えた刀での強烈な突きを見舞ってきた
新はバサラが地を蹴ったのと同じタイミングで上空へ跳び、バサラの頭上を取る
空振りに終わった突きの剣圧は眼前の地を抉り、敷地内を荒らす
バサラの頭上に跳んだ新はここぞとばかりに剣を振り下ろそうとした――――だが
……っ！
「それで避けたつもりかよ？　竜の字ィッッ！」
「――――ッッ⁉」
バサラは新の動きを読んでいたかの如く、二撃めの突きを頭上に放った
恐るべき反応速度で切り返してきたバサラの突きは、新の右脇腹を切り裂き――――そ

こから血が噴き出す
「……っ！　新ぁぁぁぁぁぁっ！」
リアスの悲痛な叫びが響き、他の皆も絶句してしまう
だが、ただでやられたわけではない……
脇腹を切られはしたものの、ギリギリのところで剣を差し込み、串刺しだけは何とか免れた
あと少し遅ければ、完璧に貫かれていただろう……
「へっ、串刺しだけは避けたみてぇだな。だが――」
バサラは刀の向きを新の脇腹に向け、薙ぐように斬る
それによって脇腹の傷を拡げ、更に右の拳打で新を後方へ殴り飛ばす
新は乱雑に転がり、斬られた脇腹を押さえながら立ち上がる
流れるように優位に勝負を運ぶバサラの手腕に、静観していたシルバーが口を開く
「突きを外されても間髪入れずに横薙ぎの攻撃に変換できる。かつて〝戦術の鬼才〟と呼ばれた新撰組副長、土方歳三の考案した『平刺突』に死角が無いと言うのは事実のようですね。ましてや……バサラ様がその技術を盗み、破壊力に特化させた剣技――通称『呀突』なら、尚更です」
刀に付着した新の血が滴り落ち、バサラはそれを舌で舐める

「悪くねぇ味だが……俺が欲しいのは〝今のテメェ〟じゃねぇ。――――〝昔のテメェ〟だ。こんなもんでやられてんじゃねぇぞ」
再び平刺突(ひらづき)……否、呀突の構えを取るバサラ
先程と同じように新を串刺しにするべく、地を蹴って飛び出し――――呀突を繰り出してくる
新は咄嗟に剣で払い除けようとするが……
「小賢(こざか)しいんだよッ！」
突進の勢いを止める事など出来るわけもなく、バサラの右肘が新の頬を打ち抜く
強烈な肘打ちにより兜は破壊され、新本人も地を転がった
バサラが鋭い目付きで見下ろして言う
「チビスケに創らせた無銘の得物だが、今のテメェには傷1つ付けられねぇよ」
桁違いの強さ……あの新でさえ子供扱いされている……
「新……っ。――――っ」
すると、ここでリアスが新の異変に気付く
割られた兜の隙間から見えた新の目付き
それがいつもと違い、血走ってきている……
まさしく餓(ごと)えた獣の如し

ソーナからも話を聞いており、造魔（ゾーマ）の尖兵テンペスターと戦っていた時の新は終始殺気立っていた
明らかに異常な異変……
「立てよ、竜の字」
戦闘の継続を促（うながす）してくるバサラ
〝これ以上、続けさせてはいけない……！〟
リアスはバサラの前に立ち塞がり、両手を広げて新を庇おうとする
「退（ど）け、飼（ワンコロ）い犬。テメェの出る幕じゃねぇんだよ」
バサラが鋭い睨みを利かせて威圧してくる
実力差は証明され、勝ち目が無いのは火を見るより明らか……
それでも……リアスはその場を離れない
だが、新はそんなリアスを無視して再び歩み出す
「新……っ？」
「……」
火竜のオーラまでも滲み出し、新は真っ直ぐバサラを見据える
対してバサラは――ニヤリと口の端を吊り上げた
『脇腹を斬られたにもかかわらず、二撃めの反応は一撃めよりも速かった。……やっぱ

思った通りだ。竜の字は俺と戦う度に〝昔の竜の字〟に戻りつつある。自分自身で気付いてねぇだけだが……着実に感覚を取り戻してやがる』

そう考察した矢先、新が突っ込んできた

バサラは三度、呀突で迎撃しようとする

突き出される刀の切っ先が新に届く寸前、新の姿がブレて消え、バサラの背後に……！

「――――おっとぉ！」

それでもバサラは並々ならぬ反応速度で察知し、新に回し蹴りを食らわせた

新は体勢を崩されるが、完全には倒れずブレーキを掛けて土煙を舞い上がらせる

繰り返す度に新の速度はどんどん速くなり、目付きも鋭くなっていく

新は無言で火竜の力を解放――――『真・女王』形態へと姿を変えた

いつもの様子とは違って身に纏う炎はドス黒く、怨念めいた蠢きを見せていた

『俺との戦いを経る事で一気に〝昔の竜の字〟に立ち戻りつつある。普段はヘタレ発言をしてるくせに、ここぞって時には決めやがる。……口では違うとか言ってやがるが、やっぱテメェも俺と同類――――平穏なんて偽物の中じゃ生きられねぇ獣なんだよ。それを思い出させてやる』

バサラが四度めの呀突を構える、ただし……

「今度は手加減無しだ。上半身が吹き飛ぶかもしれねぇが、腹ァ括れよ？」
なんと、今まで撃ってきた呀突は全て手加減したままだった……！
手加減していても、赤龍帝である一誠を軽くあしらう程の破壊力
そんなものを本気で撃てば、冗談抜きで上半身が消し飛ぶだろう……
新は依然としてバサラを睨み付けながら、1歩ずつ歩みを進めていく
そして……バサラの左目がカッと見開き――
「オオオオォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！」
咆哮と共にバサラの呀突が空を走るッ！
新はその突きをバサラの死角側――眼帯で覆われた右目の方へ躱して距離を詰めようとする
空振りに終わった突きの余波が校庭を抉り、バサラは瞬時に横薙ぎの攻撃へシフトチェンジ
しかし、完全に力が乗る前に新がその刀身を剣で弾き返し――体を回転させ、勢いを乗せた剣戟をバサラの後頭部に見舞おうとした
弾き返された瞬間、バサラもそれを察したのか……弾き返された刀を後ろ手に構えて剣戟を防いだ
だが、咄嗟の防御だけでは勢いを乗せた剣戟を抑え込む事は出来ず……バサラは吹っ

飛ばされ、校舎の壁に激突してしまう
ガラガラと崩れる壁に鋭い視線を向け、新が呟く
「……あの頃、ハンター全盛期の暗黒時代では相手を一撃で葬る必殺の技が必要だった。バサラ、お前で言えば呀突がその代表格だ。だが……どんな技だろうと4回も見せつけられれば、返し技の1つや2つは思い付くんだよ」
新がドスを利かせた低い声音で言う
「……立て。5年ぶりの決着がこんなもんじゃ呆気ないだろう?」
その言葉の後に崩れた壁の中からバサラが姿を現す
足元の瓦礫を退かし、首をゴキゴキと鳴らす
「決着だぁ? そんなつもりは微塵も無かったんだがな。まあ、テメェがそう言うなら付き合ってやるか。……死んでも恨むなよ?」
「死ぬのは貴様の方だ……っ」
再び得物を構える2人
ただ構えているだけなのに禍々しい気配が立ち込める
リアスは豹変していく新の様子に愕然とする……
1分、1秒経つ度に新がどんどん離れていく……っ
もし、このままにしておけば――――リアス達の知っている新は本当に消失してしまう

だろう
　しかし、２人の戦いを止められる者は誰もいない……っ
「オオオオ

新は体勢を崩されたせいで背中から地に倒れ、バサラが刀を振り下ろしてくる
新は振り下ろされてくる剣戟を防いだが、バサラが刀の峰に手を添えて荷重を掛ける
刀身が眼前にまで迫り、今にも真っ二つに斬り裂かれそうになるが……新は先程の意趣返しとばかりにバサラの顎を蹴り上げた
一瞬の隙を突いて体勢を立て直し、距離を取る新
バサラは口元の血を手で拭い、ペッと何かを吐き捨てる
地面に吐き捨てられたのは――――血まみれの歯だった
恐らく先程の蹴りで歯が折れたのだろう……
しかし、その事を気にも留めないバサラは突進しつつ刀を振るう
新も火竜のオーラを剣に纏わせ、剣戟一閃
一際大きい金属音が鳴り響き、お互い背中合わせで動きを止める
数秒後、地に突き刺さる刀の切っ先……
先程の一閃でバサラの刀は折られていた
新は踵を返してバサラに警告する
「……次は貴様の首を飛ばす」
「その調子だ。やっと良い目付きになってきたじゃねぇか、竜の字」
殺意を見せる新、暗い興奮を見せるバサラ

彼らの戦いはあまりにも逸脱した狂気に満ちていた……
危険を感じたリアスは新を止めようとするが、アザゼルに制止される
「放しなさいっ、アザゼルッ！　新を……新を止めないと――」
「……無理だ、俺達には止められない。止めようとすれば斬り合いに巻き込まれて死ぬぞ」
「でも……ッ！」
「今のアイツらは現代の中じゃなく、暗黒時代全盛期の中で戦っているんだ。俺達の声なんてとっくに遮断されてる……っ。この戦いを止められるとしたら、同じく激動の暗黒時代を生き抜いた者――本物の死線と修羅場を味わったヤツだけだ……」
アザゼルにも止められない事実を突きつけられ、リアスは意気消沈してしまう
ただ見守る事しか出来ない……っ
リアスだけじゃなく、他の皆も歯痒い思いをしているに違いない
そんな事はお構い無しに新とバサラの戦いは止まらない……
バサラは刀が折れているにもかかわらず呀突の構えを取り、それを見た新が嘆息する
「お前は相変わらず退く事を知らねぇんだな」
「退くだと？　笑わせんな。こっちは久々に昂ってきてんだ。そんな時にシラケるような真似をするアホが何処にいやがる？　士道不覚悟ってヤツで切腹させんぞォッ！」

バサラは呀突――と見せ掛けて折られた刀を投げ放ち、あとを追うように駆け出す
先に投擲された刀は新に向かって飛んでいくが……新は左手で薙ぎ払うように弾き飛ばした
持っている剣で弾いても良かったが、それだと僅かながらもタイムラグが生じてしまい、相手に隙を与える事になる
命取りになるのを防ぐ為、新は〝敢えて〟得物ではなく手で刀を弾いたのだ
それでもバサラは左の拳を握り締め、〝大振り〟の拳打を放つ寸前の構えとなった
新はその左手を斬り落とすつもりで剣を振り下ろしたが……その寸前、バサラの左足が新の右膝頭（ひざがしら）――膝に於ける急所を蹴り抜く
蹴られた衝撃でミシミシと骨が軋（きし）み、振り下ろしの剣戟が一瞬遅れる
そのコンマ1秒後、バサラの左拳打が剣の持ち手に叩き込まれ……新は剣を落としてしまう
投げ付けた刀を囮（おとり）に使い、更にわざと〝大振り〟の拳打を見せる事で下方への注意を散漫させた
バサラの読みは見事に的中、すかさず新のボディに拳の乱打を叩き込む
新の体に無数の拳の痕が生まれ、新は口から血を吐き出す
攻勢に転じたかと思いきや、一瞬で逆転される……

バサラの手練には舌を巻くばかりだった
だが、これで終わるわけが無い……
バサラは羽織っているコートを外し、背後から縄のように新の首元に巻き付けて吊し上げる
「これで終いだ」
絞め技によって宙吊りにされる新
窒息させるつもりかと思いきや――
ミシ……ッ！　グキグキ……ッ！
「な、何……？　変な音が鳴ってるよ……？」
イリナが不快そうな表情で言ってくる
耳を塞ぎたくなるような音が聞こえ、新の苦悶に満ちた顔付きを見てアザゼルが音の正体に気付く
「窒息なんて生やさしいもんじゃない……っ。あの野郎、首の骨をへし折るつもりだ……ッ！」
そう、さっきのは強烈な絞めで新の首が悲鳴を上げている音だった
血が混じった泡まで吹き始め、このままでは本当に首の骨をへし折られてしまう……
意識が途絶えそうになりながらも、新はこの状況から脱する為に――自らの脇腹に

右手を伸ばす
しかも、そこは斬られた脇腹……っ
自ら傷口に手を突っ込み、血の塊を引きずり出す
そして、握った血の塊をバサラの顔にぶちまけた
目に異物を放り込まれたせいで一瞬だけ絞め具合が緩み、新はその隙を突いて脱出
首に巻き付けられたコートを放り捨て、バサラを睨み付ける
一方のバサラも顔面にぶちまけられた血を拭い、口元にまで垂れた血は舌で舐め取る
〝これがバウンティハンター同士の戦い……っ〟
アザゼルを始め、リアス達は戦々恐々としていた
２人の戦いは苛烈かつ凄惨な光景しか無く、入り込む余地すら見当たらない……
昔の新はこのような戦い――――否、殺し合いを何度も何度も経験してきたのだ
新は先程からのダメージが溜まっているせいで動悸が激しくなっており、傷の具合も酷くなる
対してバサラはまだまだ余裕がある様子だった
ゴキッと指を鳴らし、「そろそろ終わらすか」と意気込むバサラ
新も火竜のオーラを両腕に纏わせ、「そうだな」と低い声音で冷淡に吐き捨てる
新の方は余力が無い

恐らく、次は玉砕覚悟で向かっていくだろう
そうなれば運が良くても相討ち、最悪の場合はどちらかに死が訪れる
そして、その死はバサラではなく……
「新……っ、ダメよ……っ。止まって……っ」
最悪の結末を頭に過らせてしまったリアスは震える声で呼び掛けるが、当の本人は聞いてくれない……
周りどころか自分の声すら届かない……
止めたいのに自分の体が動いてくれない……
リアスは今の情けない自分を呪った……
そんな事など露知らず、新とバサラが再び地を蹴って駆け出していく
僅か数秒後に結果がやってくる……っ
勝利か敗北、生還か破滅
リアスは喉が潰れる勢いで叫んだ
しかし、その叫びも虚しく響くだけ……
今の新には届かない……っ
新とバサラが衝突しかけた刹那――――ッ！
「はい、ストップ～！」

突如、1つの人影が割って入り……新とバサラの拳を両手で制した
突然の出来事に目を奪われる一同
いったい誰が2人の争いを止めたのか……？
両者の間に視線を向けると、意外な人物の姿が目に映った
その人物とは……竜崎総司、新の父親だった
「……ッ！　親父……っ？」
「正気に戻れ、新。お前はいつから女の子の呼び掛けを無視するような薄情者になったんだい？見てみろ、リアスちゃんが泣いてるじゃないか」
そう言われて新はリアスに視線を向け、涙を流している彼女に気付く
指摘を受けて返す言葉も無い新
次に総司はバサラの方を向いて言う
「キミもヒトが悪いじゃないか、バサラ。また誰彼構わず火種を振り撒いて、新を修羅道に引きずり込もうって魂胆かい？」
「何だよ、良いところだってのに。オッサンと言えど邪魔すんな」
「そうはいかないよ。新は私の息子なんでね、是が非でも止めるよ」
バサラを止めただけでなく、まるで親しげに話している総司
その不審な様子に気付いたアザゼルは総司を問い詰めた

「おい、アンタ。やけにソイツと慣れた感じで話しているな？　その男と何か関係があるのか？　そもそも何故ここに来た？」
　すると、総司は肩を竦めて嘆息する
「1度に何個も質問されると答えられない……と言いたいところだけど、そうは言ってられないよね？　ここに来れたのはアジュカくんから連絡が入ったからさ。新が治療から飛び出していった直後、万が一の為に見張っていてくれってね」
　総司がここに来たのはアジュカの根回しのおかげだったようだ
「んで、彼との関係性なんだけど……正直言って金輪際関わるつもりは無かったんだ。何せ私と彼は折り合いが極めて悪い関係にあるんでね」
「折り合いが悪い……？」
　アザゼルの疑問に総司は顔をしかめて言う
「バサラ・クレイオス、彼は昔――私の弟子だった男なんだよ」
「「「「「――――ッッ⁉」」」」」
　衝撃的な事実に全員が言葉を失った……っ

バサラ・クレイオスと言う怪物（おとこ）

「アイツが……親父の弟子……っ？」
突然のカミングアウトに新もリアス達も混乱する一方、バサラはフンっと鼻を鳴らすように笑う
総司は先程の攻撃で痛めた手を擦（さす）りながら言う
「ああ、そうだ。私の唯一の弟子であり、最大の汚点とも言うべきかな。彼は私からバウンティハンターのノウハウや技術を盗み、独学で会得した。そして、異例の早さでＳＳＳ（トリプルエス）級になったんだ。……だが、協会の意に背（そむ）く行動が多すぎて何度も糾弾され、遂には自（みずか）らライセンスを捨てた。それ以降、彼は戦いを求める戦鬼（せんき）と化して放浪を続けている――そう聞いていたが、まさかこんな所にまで来るとは思わなかったよ」
総司がバサラに視線を向けて言う
「バサラ、キミはそこまでして戦いに身を落とすのか？　自分の命すら惜しまないキミのやり方は……ハッキリ言って周りに良くない影響を及ぼす。バケモノ染みた強さを持つキミでも命は１つしか無い。何故その命を大事にしようとしない？　やはり、キミは――」

「命を大事に？　本気で言ってんのか？」
急に総司の言葉を遮るバサラ
嘆息した後に語り出す
「命は1つしか無い……だから大事にしろと誰もが言いやがる。テメェらの親も、先公も、テレビに出てくるコメンテーターとか言う輩。挙げ句の果てにはミュージシャン、警察だけじゃなく……テメェらの所の魔王や天使までもが言いやがるんだ。命は大切にしろってよぉ」
バサラは額に手を当てて笑いを堪えるような仕草をした後、左目をカッと見開かせる
「――――だから、テメェらはダメなんだよッ！　命ってのはもっと粗末に扱うべきものなんだ。生命ってヤツは丁寧に扱い過ぎると澱み腐る。老害やテメェらみたいな最近の奴らはとにかく保身に走る、自分を大事にし過ぎている。一言に纏めりゃあ――――やり過ぎ、病的なまでにやり過ぎだ。その結果、貴重なチャンスを掴む事無く、ズルズルと後退しながら腐り落ちていく……ッ！　テメェらはその事にまだ気付いちゃいねぇ。いや、気付こうと言う考えすら放棄してやがる……ッ！　そんな燻った生ヌルい奴らなんざ、俺の相手にならねぇんだよ……ッ！」
力説するバサラは次に新の方に視線を移す
「その点、竜の字は違う。命の使いどころってヤツを心得ている。さっきも言ったよう

に竜の字はヘタレ発言を繰り返しちゃいるが、決める時には決めてくる。何故なら――――本質は俺と同じように〝戦いの中で生きてきた獣〟だからだ。生きるか死ぬかの瀬戸際、ギリギリの淵でこそ見えてくる闘争心、本性。その全てが俺と酷似している。ただ1つ違うとすれば……環境の悪さだ」

「環境の悪さ……？」

「ああ、平和ボケなぬるま湯に浸かり過ぎて、くだらねぇ毎日を送り続け、日々を無駄に塗り潰す。強く生きようともしねぇ奴らが量産されて満足しようとしてやがる。日常？　平和？　そんな偽物の環境下で強くなれるのか？　平和ボケの保身主義に走っていれば俺に勝てるのか？　明らかに竜の字の――――戦いの中で生きてきた奴らの価値を殺している。んなもんクソくらえだ。生きる為には勝つしかねぇ、また勝つ為には生きるしかねぇ。それが諸行無常たるこの世を生き抜く唯一の真理だ」

〝諸行無常〟――――この世に存在する一切のモノは常に変転して生滅し、永久不変なものは全く無いと言う仏教の根本思想の1つである

確かに完璧な平和など存在しない……

今もこの世の何処かで争いや諍いが勃発している……

それを認知せずに平和や平穏を謳う者を、バサラは吐き気がするほど見てきた

平和に現を抜かせば勘が衰え、判断も鈍り、その結果――――滅びてしまう……

「だから、俺がテメェらに教えてやるよ。テメェらがほざく平和なんてモノはやって来ねぇ。生きている限り常在戦場、ヒトだろうが何だろうが――――戦ってこそ強さを得られ、〝本当に生きている〟って瞬間を実感できる。それが俺の掲げる真理だ」

常在戦場……即ち、自分が生きている限り戦いを止めるつもりは無い

アザゼルやグレモリー眷属を始めとする三大勢力への宣戦布告とも取れる……

徹底的に平和や平穏を否定するバサラの極論に、一誠はワナワナと震えた

「そんなの……メチャクチャじゃねぇかっ!?　狂ってるどころの話じゃないっ！」

「ザコには分からねぇよ。――――〝ただ生きたいだけ〟のザコにはな」

一誠の反論を一蹴するバサラ

凶悪な実力に伴い、彼の思想はグレモリー眷属全員を畏怖させた……

そんな中、総司が1歩前に出る

「やっぱりキミは話しただけで分かってくれる男じゃないよね」

総司の体からオーラが溢れ出し、闇人の姿となる

鬼と蝙蝠が混ざったような怪人と化した総司は、両手にオーラを集束させていく

普段はオチャラケている総司だが、ここぞと言う時に見せる本性は味方でありながら恐ろしい程の寒気を感じさせてくる……

怪人と化した総司を見たバサラは――――嬉しそうに口の端を吊り上げた

「ハハッ、やっぱオッサンもオッサンじゃねぇか！　そっちの方が遥かに良いぜ？　まあ、今日は挨拶代わりに来た程度だから、オッサンには置き土産をくれてやらぁ」

そう言った、次の瞬間――――っ！

ズシャアァァァッッ！

「「「「「「――――ッ⁉」」」」」」

総司以外の全員が目の前の光景に仰天した

それもその筈……バサラの胸から剣の柄らしき物体が飛び出てきたのだ……！

それも1本だけじゃなく、2本……3本……4本……5本……総計6本

バサラは飛び出てきたソレを掴んで、自身の胸から引きずり出す

右手と左手に3本ずつ携えたところで、バサラの胸の裂傷が跡形も無く消えていく

右の三振りは炎の如く波打つ赤い剣、鉱物のように煌めく剣、血のような線が刻まれた漆黒の剣

左の三振りは水と氷が混ざり合った青い剣、鳥の羽を模したような鮮やかな緑色の剣、眼の如き柄から稲妻を顕現させたような剣

その六振りの剣を見たアザゼルは信じられんとばかりに驚愕した

「何なんだ、あの剣は……ッ⁉　神器かっ⁉　だとしても、あんな禍々しい物は見た事ねえぞ！　それに……アレは〝体内に宿してる〟なんてもんじゃねえっ！　まるで

……寄生虫じゃねぇかッッ！」

「前に戦った時よりも剣の数が増えてる……ッ⁉」

新も驚きを隠せない様子だった

六振りの魔剣（まけん）を携（たずさ）えたバサラに対し、総司はドスの利いた声音を飛ばす

「止められなくなっても知らないよ？　キミのやり方は、その魔剣どもと同じく周りの全てを戦禍に巻き込み、暴走させる……っ！」

「恐れるに足らねぇなぁ。戦いに生きる――それが俺だ」

少しの言葉を交わした直後、バサラの六振りの魔剣と総司の打撃が一瞬でぶつかり――極大の衝撃が巻き起こった

その衝撃は新の時の比ではない……

校舎どころか町の全てを震撼させる程のモノだった……

あまりにも次元が違う衝突に目を瞑（つむ）ってしまい、ふと目を開けてみると――再度信じられない光景が視界に飛び込んできた

「――――ッッ。嘘だろ……っ？　雲が……天が割れてる……ッ⁉」

アザゼルの言った通り、広大な天が先程の衝撃によって裂かれていた……！

その発生源たる総司とバサラは互いに1歩も退（ひ）かず、やがて矛（攻撃の手）を収めた

「今日は久々にスカッとしたぜ、オッサン。とりあえず引き上げてやらぁ」

「その方が良い。これ以上続けたら、ただの大災害になってしまうからね」
上機嫌のバサラは全ての魔剣を体内に戻し、総司も元の姿に戻る
バサラがシルバー達のもとに行こうとした時、総司が呼び止めてくる
「そうだ。1つだけ気になっている事があるんだけど、聞いても良いかい？」
「あ？　何だよ？」
「その右目は――――いったい誰に潰されたんだ？」
総司の言葉に奇異の視線が集まり、総司が話を続ける
「今までそんな眼帯なんて着けていなかったじゃないか。バケモノ以上のバケモノであるキミが深傷（ふかで）を負う程の相手……それは――――キミが作った造魔（ゾーマ）とやらの中に居るんじゃないのかい？」
「……妙なところで目敏（めざと）いじゃねぇか、オッサン」
バサラは開き直ったのか、指摘された右目の眼帯を取り外す
バサラの右目は――――眼球その物が完全に無くなっていた……
骸骨のように薄暗い空洞が露呈し、その異様な顔立ちが怖気（おぞけ）を更に増長させる
殆どの者が目を背（そむ）け、一誠に至っては吐き気が喉元まで込み上げてくる程……
バサラは不敵な笑みを絶やさずに言う
「こういう事が起こりうるから、戦いってのは止められねぇんだ。どんな奴でも化ける

可能性を秘めている。たとえば――ウチのチビスケとかな」
バサラが流し目でチビスケ……もといレビィを見据える
対してレビィは何故か気まずそうな表情をしていた
その話を聞いて総司は何かを得心したような顔付きとなる
「やっぱりね、その娘も――」
「おっと、長話ならそっちで勝手にやってくれや。俺はもう帰るぜ」
踵を返してシルバー達のもとに足を運び、シルバーが転移用の魔法陣を開く
「またな、竜の字。次に戦り合う時は今日以上の獣に戻っておけよ？　飼い犬のままで俺に勝とうなんて夢を見るな。獣だった自分を反芻して、戦いに活かせ。俺の相手をまともに出来るのは――お前だけなんだからな」
そう言ってバサラ達は魔法陣の中へと消えていき、脅威が去った事で空気が一気に軟化する
恐怖で張り詰めっぱなしだった為、多くの者がその場でへたり込み、暫く落ち着かない呼吸が続いた
新もようやく気持ちが落ち着いてきたのか、血走っていた眼が普通の様相に戻っていく
総司は足早に立ち去ろうとしたが、アザゼルに「ちょっと待て！」と止められる

「おっとっと、その顔は……聞きたい事が山程あるって顔をしてるね？」
「よく分かってるじゃねぇか、嘘吐きオヤジ。奴の事も、あのおかしな魔剣についても色々知っていそうだから洗いざらい吐いてもらおうか？」
総司は〝野暮な事をしなきゃ良かったかな〟と後悔しつつ、仕方がないと前置きをしてから話す事を決めた
「こうなってしまった以上、話すとしよう。避けては通れない相手だからね。アレは――魔王や神だけじゃなく、次元すらも滅ぼしかねない禁じられた魔剣だ」

「――禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）？」
バサラ達が去り、部室に戻ってきたアザゼルとグレモリー眷属一同は総司から聞き慣れない単語を聞かされた
総司が神妙な面持ちで説明を続ける
「そう、それがバサラ・クレイオスの持つ魔剣の正体――禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）だ」
「ロンギヌスって言葉が付くぐらいだから……神器（セイクリッド・ギア）って事だろうな。けど、おかしいだろ？　あの魔剣が神器（セイクリッド・ギア）だとしたら、なんで今の今まで誰も知り得なかったんだ

？」

アザゼルの疑問は尤もだった

アザゼルはこれまで神器（セイクリッド・ギア）の研究に没頭し、数多くある神器（セイクリッド・ギア）の存在を認知している

しかし、話題に挙げられた禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）の存在は全く知らなかった

その疑問に総司が答える

「当然だね。今は亡き聖書の神が存在を隠蔽（いんぺい）していたんだから」

「なっ、何だとっ⁉」

総司の言葉にアザゼルは勿論、オカルト研究部の全員が驚いた

神器（セイクリッド・ギア）とは聖書の神が作った異能システム

発見されていない物は多いが、存在すら認知されていない物は初耳だった

それだけならまだしも、〝発生源たる聖書の神が存在を隠蔽していた〟と聞かされたら度肝を抜かれるのは当然だろう

総司は禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）について知っている限りの事を語り始める

「――禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）、それは通常の神器（セイクリッド・ギア）や神滅具（ロンギヌス）と違い……聖書の神の意志とは関係無く生み出された突然変異のような物だと聞いている。人に宿るのではなく、自ら（みずから）ヒトを引き寄せて宿主を見極めるんだ」

「自らヒトを引き寄せる……？　独立具現型の類か？」

アザゼルの問いに対し、総司は首を横に振る

「そんな優しいモノだったら、どれだけ良い事か……。引き寄せるだけならまだしも、宿主に相応しくないと判断すれば即座に殺す――――ヒトを喰らう神器さ」

「神　器が……ヒトを殺す……っ⁉」

続々と出てくる衝撃の事実にアザゼルも、新も、リアス達も開いた口が塞がらない……

そんな危険極まりない神　器――――否、神　器と呼べるかどうかすら疑わしい魔剣が造魔の手中にある……

しかも、規格外の強さを見せつけたバサラ・クレイオスの手に……

「バサラ・クレイオス……彼が持っているのは禁忌の神滅具の中でも特に凶悪な魔剣型のモノだ。火、水、風、地、雷、闇、それぞれの属性を司る6体の魔獣を封じ込めた魔剣――――『六獄の魔皇剣』。その全てが彼を宿主……いや、主として認めてしまった」

「つまり、ヤツの中には文字通り6体の魔獣が巣食っているって事か……っ。最初に出くわした時、尋常じゃないプレッシャーを感じたのは気のせいじゃなかったんだな……っ！」

アザゼルが憎々しげにバサラとのファーストコンタクトを思い出す

バサラが放っていた重圧は彼自身に加え、彼の体内に巣食っている魔剣群――即ち、6体の魔獣によるモノもプラスされていたのだ

総司が禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）――『六獄の魔皇剣（ヘキサゴラム・プリンガー）』について話を進める

先程見た魔剣群を簡単なイラストで描き、それぞれに封印された魔獣達を明かす

「あの魔剣に封じ込められている魔獣は、どれも神話や伝承に名高いモノばかりだ。中にはキミ達がよく知っている神もいるだろう。まずは火の魔剣、天界から火を盗み、人類に〝火〟と言う知性を与えた神――プロメテウス。尽きる事の無い紅蓮の炎を操り、炎騎神（えんきしん）とも呼ばれている」

「プロメテウス……人間に火を与え、文明や技術を発展させたと同時に戦争を起こす引き金にもなったギリシャ神話の神か。あの戦闘狂にピッタリだな……」

「水の魔剣に封じられているのは北欧神話の神――エーギル。海で死した者の魂を喰らい、水、氷、幻を操る水幻龍（すいげんりゅう）の名を持つ。これは船に噛み付いて破壊する〝エーギルの顎（あぎと）〟と呼ばれる表現に由来しているらしい。風の魔剣はイラン神話に伝わる神霊鳥（しんれいちょう）シムルグ、〝鳥の王〟と称され、その羽には治癒の力が秘められている」

ここまでの説明だけでも破格過ぎるバサラの魔剣……

ギリシャ、北欧、イラン神話と様々な神があの魔剣に封じ込められている……

アザゼルは顔を顰（しか）め、他の皆は生唾を飲むしかなかった

それでも総司は説明を続ける

「地の魔剣に封じられているのは硬魔獣ガルグイユ。これはフランス語での呼び方で、もっと分かりやすく言えばガーゴイルかな」

「ガーゴイルって漫画やゲームなんかで出てくるザコキャラみたいな奴じゃあ――――」

「それは違う。本来のガーゴイルは雨樋や魔除けの象徴として崇められる程の怪物、パリのノートルダム大聖堂にも奉られている神格化された魔獣なのさ。堅牢な魔石で出来た肉体は、並大抵の攻撃を一切寄せ付けない」

次は雷の魔剣に視点を置く

「雷の魔剣には先程のプロメテウス同様、ギリシャ神話の神キュクロプス――――通称サイクロプスが封印されている。単眼から大地を焼き払う程の雷を放ち、雷滅鬼と忌み名を付けられた」

「サイクロプスって……あの一つ眼の巨人みたいな怪物が⁉　つーか、神様だったのか⁉」

驚く一誠に、総司は淡々と語っていく

「また漫画やゲームでの先入観から来る誤解だね。サイクロプスは元々才能ある鍛冶の神だったんだ。ギリシャ神話の主神ゼウスに雷霆と呼ばれる武器を作った事から雷の精霊とも言い伝えられていた。キミ達がよく知っている一つ眼巨人の怪物は叙事詩で

描かれた物、それが世間で広まっただけに過ぎない」
　最後に血の紋様が刻まれた漆黒の魔剣について語り始める
「そして、闇の魔剣……。コイツが1番厄介な代物でね。彼が最初に手に入れた禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）でもあった……。この魔剣に封じられているのは死神であり、スラヴ神話の悪神（あくしん）――冥刹皇（めいせつおう）ツェルノボーグ。〝黒い神〟の名を持ち、夜と闇、破壊と死を司（つかさど）る魔獣だ」
　総司の口から全ての魔獣の名が明かされ、部室内は不気味な静寂に包まれる……
　張り裂けそうな空気の中、アザゼルは絞り出すように総司へ問い掛ける
「……いつから奴はあの魔剣を持っていた？」
「私と出会う以前から持っていたそうだよ。と言っても、最初の内は2本だけだったけど。残りの魔剣は後々（のちのち）になってから手に入れたんだろう。一振りだけでも所持していれば、本人の意志とは関係無く引き寄せ合うからね……。そして、彼は遂に全ての魔剣を手中に収めてしまった……」
「運命の悪戯（いたずら）ってヤツかよ……っ。いや、あの野郎のとんでもない技量を鑑（かんが）みたら必然だったってのか……っ！」
「それがバサラ・クレイオスと言う怪物（おとこ）さ。概念や理論を一切合切はね除（の）ける、もはや異次元の存在と言っても過言ではない。……キミ達はそんな怪物（おとこ）が束（たば）ねている組織を相

手にしようとしているんだよ？」
総司の言葉に静まり返る一同
総司は真剣な面持ちを崩さずに言う
「アザゼルくん、これから先は本当に厳しい戦いになると思うよ。彼は――――バサラは戦いを楽しむ戦鬼だ。否応なしに煽ってくるだろう。私も出来る限りの対処をするが、決して心を折らないようにしてくれ。心が折れた瞬間、バサラは躊躇無くキミ達を滅ぼすよ？　彼は信念を持たない者を最も嫌うからね」
警告とも取れる総司の言葉にアザゼルは何も言えなかった
ここまで来た以上、引っ込みなどつけられない……
そんな事をすれば、バサラは駒王町ごとアザゼルやグレモリー眷属を滅ぼしに来るだろう……
総司の視線が新に向けられ、総司が新に伝える
「新、お前もバサラの性格は知っているだろう？　彼の目的は〝キミと戦い続ける事〟だ。だが……今のままでは到底キミに勝ち目など無い。怒りをぶつけるだけではダメだ。頭のてっぺんからつま先まで自分を使いこなせ。今のお前なら出来なかった事も出来る筈だ」
「……俺を使いこなす……？」

「と言うわけで、今から父子(おやこ)水入らずで飯でも食いに行くぞ。考えが纏まらない時はとにかく食べる。それが1番の特効薬だ」
「こんな時に食欲なんか湧くかよ……」
「良いから良いからっ」
総司は新の手を掴み、半(なか)ば強引に連れ出していく
部屋を出る寸前、総司がアザゼル達に告げる
「アザゼルくん、リアスちゃん、皆も今日はご飯をしっかり食べて気分をスッキリさせたまえ。さっきは脅すような口振りだったけど、バサラはキミ達の這い上がる姿も期待しているんだよ。ただ、そのやり方が過激過ぎるのが難点だけどね。とにかく、自分を見失わない事。良いね？　それじゃっ」
そう言って総司は新を連れて部室から出ていった
すっかり淀(よど)み沈んだ空気の中、アザゼルはふと総司とバサラの言葉を思い出す
――〝やっぱりね、その娘(こ)も〟――
――〝どんな奴でも化ける可能性を秘めている。たとえば、ウチのチビスケとかな〟――
その言葉からアザゼルは最悪の予想を脳裏に過(よぎ)らせた
『――あのレビィって娘にも禁忌の神滅具(ロスト・ロンギヌス)が宿っているってのか……っ⁉　いや、も

しかしたら他にもいる可能性がある……っ⁉　だとしたら、本当にバケモノ集団じゃねぇかよ……ッッ！』

　アザゼルは心の底から〝とんでもない組織を敵に回そうとしている〟と後悔してしまった……

「バサラさま、本当によろしかったのですか？グレモリー眷属を野放しにしたままで」

「良いんだよ、今日は挨拶代わりに来ただけだ。ここで終わらせちまったら面白味が無ぇだろ？」

「そうですか。しかし……これで彼らも思い知ったでしょうね。六振りの魔剣――禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）を持つあなたの力を。我々造魔（ゾーマ）の恐ろしさを」

「この程度で尻尾巻いて逃げるようなら興醒めだ。俺が殺るまでもねぇよ」

『六獄（ヘキゴクノ）の魔皇剣（ブリンガー）』、『想像創造（ソリッド・イマジネイト）』、『恐天災獄（ディザストル・ゼロ）』、聖書の神が隠蔽していた忌まわしき遺物が揃っている以上、彼らに勝ち目など微塵も無いでしょうけど」

「おいおい、シルクスカーフ。うちのチビスケみたいに化けるかもしれねぇだろ？」

「シルバーです。……それより、バサラさま。指揮官から次の襲撃地点の目処（めど）がついた

とお達しがありました。隣町の外れにある教会関連の建物だそうです」
「三大勢力の拠点か」
「はい。つきましては傘下に入った盗賊ギルドの３人を向かわせようかと」
「ああ、あの連中か。確かパンダトレーニングって奴ら――――」
「『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』です。加えてトランザーと復活したテンペスターも向かわせる予定です」
「構わねぇよ、好きに暴れさせてやりな」

焼かねぇホルモンはただのゴミだ……

「……」

「ハグハグっ、んっ？　新、どうしたんだい？　早く食べないと焦げてしまうよ？」

その日の夜、総司と新はとある焼肉店を訪れ、食事を取っていた

テーブルの真ん中の網で焼かれるタン塩、カルビ、ロース、ハラミが美味そうな匂いを漂わせ、総司は焼けた肉を白米の上に乗せて食べる

しかし、新は一向に箸を伸ばさず、不機嫌そうな顔で頬杖をついているだけだった

その間にも総司は焼けた肉を次々と平らげ、ジョッキに注がれたビールも豪快に飲む

長い溜め息を吐いた新は次第に不満を漏らしていく

「……なんで食べ放題の店なんだよ。焼肉ならもっと良い店があるんじゃねぇのか？　麻布に六本木、銀座、新宿とか。それこそ、この近辺にだって少しはマシな所があるだろ。なのに、なんでわざわざ――」

「おいおい、ここだって結構イケるんだぞ？　メニューは豊富だし、ビールも美味いし。せっかくの焼肉なんだから、食べないと勿体ないよ」

「親父、今の俺らの状況を分かってるのか？　造魔が現れてからは散々揚げ足を取られ

て煮え湯を飲まされ、終いにはバサラまでもがやって来る始末。元からバケモノみたいに強すぎた奴が、更にバケモノどもを引き連れて一大組織を結成している……。何か圧倒的な差を見せ付けられたせいで惨めになってきた……」

「なんで惨めになるんだい？　良いから今は食べなって。すいませーん！　ホルモン追加でー！」

女性店員に追加注文をする総司

バクバクとがっつく総司とは対照的に、新は沈んだ表情でユッケを摘まむ

「はぁ……っ。造魔が来てからはスッカリ食欲も落ちてんだよ。特に脂っこい肉は胃が受け付けなくなってる。カルビ一皿で炊飯器のメシ一合を食ってた時代が懐かしいぜ……」

延々と愚痴を溢す新の箸は止まり、手元に視線を落とし――バサラの言葉が脳裏に甦ってくる

〝次に戦り合う時は今日以上の獣に戻っておけよ？〟

〝飼い犬のままで俺に勝とうなんて夢を見るな〟

〝獣だった自分を反芻して、戦いに活かせ〟

〝俺の相手をまともに出来るのは――お前だけなんだからな〟

「……また戻らなきゃいけねぇのか……。クズだった時代の、あの頃に……」

自分にとって忌まわしい過去であり、1番の汚点だった
獣(むかし)に戻そうとするバサラと、獣(むかし)に戻りたくない新
ネガティブな物思いに耽(ふけ)る中でも、網の上に取り残されたホルモンは焼かれ、焦げ目が付いていく……
そんな時、追加のホルモンを乗せた皿がテーブルの上に置かれ――総司はそれを一気に網の上へ投入
「なーにジジ臭い事を言ってるんだ。ほら、これでも食べて元気を出せ」
総司が網の上で焼かれていたホルモンを箸で掴み、新の皿に乗せる
しかし、そのホルモンは――
「……何だよコレ。丸焦げじゃねぇか」
「そのホルモンと同じさ、お前も私も」
「は？」
「カルビやロース、ハラミ、タン塩、どの肉も確かに美味いけど、焼き過ぎたら固くなって不味くなる。だけどホルモンは違う。焼かれてこそ価値があるんだ」
「……」
「焼かれて焼かれて、真っ黒になるまで焦げて……脂(あぶら)を落として味を磨くんだ」
新は皿に乗せられた黒焦げのホルモンを摘まみ、口へ運んで咀嚼(そしゃく)する

一拍置いた後、「おお、美味い」と素っ気なく言う
「そうだろう？　じゃあ、コレはどうだ？」
今度は〝さっき焼き始めたばかり〟のホルモンを1つ、皿の上に乗せられる
新は先程と同じように口へ運ぶが……
「――――っ⁉　何だよコレ！　生焼けじゃねぇかっ⁉　ぶえっ！　ペッ、ペッ、こんなモン食わせんなよッ！」
新は生焼けのホルモンを吐き出し、口直しに水を飲み干す
その様子を見て総司が告げる
「そうだ、生焼けのホルモンほど食べられない物は無い。もっと焼かれなきゃダメなんだ、私達は。いくらブランド物や宝石で着飾っても、贅沢な暮らしをしても、所詮は裏の世界の住人。……育ちの良い肉とは違う」
「……俺達はホルモンみたいなロクデナシって事かよ」
「そうだ。私達のような輩はもっと焼かれなきゃならない。焼かれてないホルモンは――ただの生ゴミだからね。生ゴミは放置しておけば直ぐに腐って悪臭を放つ。その結果、誰も寄り付かなくなる。だから、焼かなきゃならないんだ。ゴミは焼かれて黒焦げになって、初めて意味を成す。そんな当たり前の事も忘れてしまってはいけない」
総司がジョッキに注がれたビールを飲み干し、話を続ける

「新、キミは今まで支えられて生きてきたんだ。たとえ焼かれても、黒焦げにされても、キミの周りにいる人達が支えてくれた。リアスちゃん、一誠くん、アザゼルくん――――大勢の人達に支えられて〝今のキミ〟がある。新、今度はキミが皆を支えてやる番だ」

「俺が……皆を支える……？」

「そうだ、これからの戦いは更に激化していく。その時、1番の経験者でもあるキミが落ち込んでいたら、それが周りにも伝播してしまう。ウイルスの感染と同じさ。いつまでも弱気でいると、その弱気がどんどん周りを蝕（むしば）んでいく。そんな悪循環は避けなければならない。ただでさえ三大勢力にいるのは……生焼けの連中ばかりだからね」

良い具合に焼けたホルモンを網の端に寄せ、総司はホルモンを1つ食べる

「確かに今は三大勢力として天使、悪魔、堕天使が手を取り合っているし、過去最大の規模にもなっている。キミや一誠くんのように実力のある若手が増えたのも事実だが……その大半は戦争を知らない坊ちゃん・嬢ちゃん世代だ。促成栽培のモヤシと同じく、ヒトの手で育てられたに過ぎない。堅気（かたぎ）崩れの中途半端な連中が集まっている。もし、造魔（ゾーマ）が全勢力で攻め込んだりしてみろ。尻尾を巻いて逃げ出すのが関の山だろうね」

「……」

「平和を願うのは構わない、造魔（ゾーマ）を憎むのも構わない。けれど……綺麗事だけで生き残

れる程、世の中は甘くない。どんな世界だろうと――最後は〝力〟だ。だから、私達が彼らを支えてやるんだ。それが私達〝裏の世界の住人〟が今もここに居る理由だからな」

「……そうだな」

汚れてきた自分にしか出来ない事がある

そして、裏の世界に通じてきた自分だからこそ出来る事もある

過去は目を逸らしても、思い出さないようにしても消えるわけではない……

だから、新も嫌な過去に……バサラ・クレイオスとも向き合い――戦わなければならない

ヤツに立ち向かえるのは新(じぶん)しか居ないのだから……

「――よしっ！　じゃあ俺も腹一杯食うとするか！」

吹っ切れた新は網の上で黒焦げになったホルモンを取ろうとするが――総司が横取りして食べる

「あっ⁉」

「早く食べないと燃えカスになっちゃうだろ？　いくらホルモンでも、消し炭になっちゃったら意味が無いからね♪」

「なっ……人がせっかくやる気を出したってのに……っ！　おーいっ、特上ホルモン追

加、３人前っ！　あと、カルビとロースとタン塩も３人前ずつだ！　早く持ってきてくれーッ！」
その後はリアス達へのお土産として〝特選焼肉弁当〟（１個・４５００円）を買って帰路についた

深夜、新はリアスに呼び出され、彼女の部屋に足を運んでいた
新が部屋の扉を開けた直後、リアスは結構な勢いで新に抱き付く
多少の圧迫感に苦しむも、リアスの震える体をソッと抱き締め、頭を優しく撫でる
「新……っ」
「今日は随分と積極的じゃねぇか。……バサラの事を思い出しちまったのか？」
新の問いにリアスは無言で頷(うなず)き、より一層強く抱き締めてくる
少しだけ落ち着きを取り戻したリアスはベッドに腰掛け、徐々に口を開く
「初めて見るタイプだったわ、あの男……。何もかもが私達とは違う。強さも、威圧感も、価値観も……っ。その全てが私達を圧倒的に上回り、平和を忌み嫌っていた……っ」
「……ヤツが怖いか？」

「自分が情けないわ……。あれだけ啖呵を切ったのに、全く手も足も出なかった……っ」
「でも、それは俺だって同じ――――」
「それだけじゃない……っ。私は……新を止められなかった……っ。あの男と戦う新を……っ」
　リアスの目に再び涙が零れ、心中を吐露する
「あなたが本気で戦っている時、怖くなって……動けなかった……っ。本当は止めなきゃいけないのに、震えて……見てるしか出来なかった……っ。あの時の新は、私達の知ってる新じゃなかった……っ。そう考えた途端、体が動かなくて……何も出来なかった……っ」
　リアスは狂気じみたバサラにも、獣に戻りかけた新にも臆してしまったのだ
　止めたくても、彼らの領域に足を踏み込む事が出来なかった
　本物の殺し合いを目の当たりにして、認識の甘さを思い知らされた……
「本当に情けないわ……っ。私はあなたの主なのに……」
　リアスの目から再び涙が溢れそうになるが、新がその涙を指で拭う
「いや、元はと言えば俺が周りの事まで顧みずに戦ったのがいけなかったんだ。今の俺は……あの時とは違うのに、大事なことを忘れちまっていた。本当にスマン」
　新は畏まった様子でリアスに告げる

「リアス、これから先……俺はもっと無理をするかもしれない。今のままじゃアイツに勝てないのは明白だ。だから、俺は自分を使いこなしてみせる」
「自分を、使いこなす……？」
「そうだ。俺はヒトとしての部分――知性は充分に使いこなせているが、もう1つ……獣(ケモノ)としての部分――獣性を使いこなせていない。それは今も俺が過去から逃げている証拠なんだ。アイツと亘(わた)り合う為には二律背反(にりつはいはん)する性質――知性と獣性を自分の物にしなきゃならない。そうしない限り、俺はアイツの足元どころか歯牙にも届かない……。だから、リアス」
　新が頭を下げてリアスに頼み込む
「もし、俺がどうしようもない獣(ケモノ)になっちまったら……その時は全員で止めてくれ」
「……っ」
　新は決意をしたものの、自分で自分を抑えられるかは半信半疑
　ゆえにリアスに止め役を託(たく)した
　もしもの場合は……自(みずか)ら命を断(た)つ事も辞さないだろう
　新の覚悟を聞いてリアスも毅然(きぜん)とした表情で返す
「ええ、分かったわ。でも、1番の望みはいなくならない事よ。私の……いいえ、私達の前からいなくなってはダメよ？」

「……ああ、約束する」
ようやく肩の力が抜けたのか、リアスはそのまま新の方に体を委ねる
新に支えられるリアスは上目遣いで彼を見つめた
その流れでキスしようとする２人……だが――
「話は聞かせてもらったぞっ！」
バァンッ！と豪快に扉が開かれ、視線を移すとゼノヴィアが腰に手を当てて立っていた
その後ろからは朱乃、イリナ、小猫、ロスヴァイセ、レイヴェルがチラリと顔を覗かせる
「あらあら、リアスったら。また抜け駆けで新さんとイチャイチャするつもり？　そうはさせないわ」
ズカズカと朱乃が歩み寄り、ムギュゥッと新を抱き締める
「コ、コラ！　朱乃！　今は私と新がキスする雰囲気でしょう⁉　ここは譲りなさいっ！」
「やーですわ。私だって彼に甘えたいですもの。慰めた後で彼にキスしたいですわ」
リアスと朱乃のおっぱいに挟まれながら、二大お姉さまの口論に巻き込まれる新
しかし、それだけには留まらない……

「むむっ、リアス部長と朱乃副部長に後(おく)れを取ったか。それなら私は新を元気付ける為に裸で添い寝するぞっ！」
ゼノヴィアは勢い良くパジャマを脱ぎ捨て、全裸で新の方に駆け寄った
新の顔を自身のおっぱいに引き寄せて埋(うず)めさせる
それに触発された小猫は新の背後に回り、背中に小振りなおっぱいを密着させる
「……新先輩を癒してあげます」
「わわわっ、私だって新くんを癒してあげないとね！こういうのも天使の使命なのよっ！」
「あ、新さまのマネージャーとして私もお手伝いしますわ！」
「私も教師として、生徒の相談を親身(しんみ)になって受け止めてみせます！」
イリナも慌てて参戦し、レイヴェルとロスヴァイセ、部屋に突入してくる
てんやわんやになった室内で新はモミクチャにされながら、自分を気に掛けてくれる仲間を大事にしようと誓ったのだった
「リアスのアンポンタンっ！」
「朱乃のおたんこなすっ！」
『ただ、そろそろ解放してくれないと圧死するかも……っ』

とある空中を浮遊する造魔（ゾーマ）の戦艦
その船内の一室、場に似つかわしくない造りのテーブルが置かれ、囲うように5人の人物が椅子に腰掛けていた
テーブルの中央にはトランプの山札があり、ドローポーカー（チップを賭けずに行うゲーム）の真っ最中だった
1人めは造魔（ゾーマ）の首領バサラ・クレイオス
魔剣聖（ヴァンキッシュ）の異名と六振りの魔剣――禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）を持つ今世紀最凶（さいきょう）と言っても過言ではない怪物（おとこ）だ
彼は大胆にもカードを4枚チェンジ
2人めは彼の右目役と称される青髪にカチューシャを付けた少女レビィ・シャルティア
慣れない手つきでカードを1枚チェンジする
3人めは造魔（ゾーマ）の中間管理職……もとい、執政官を務める滅悪祓士（デビル・スレイヤー）シルバー・ゼーレイド
眼鏡を上げつつ、カードを2枚チェンジする

４人めは白いミニスカ軍服を纏い、前髪ぱっつんな黒髪の美女カグラ・イザヨイ
彼女もこう言った賭け事やゲームに疎いのか、たどたどしい手つきでカードを1枚チェンジする
そして5人めは……ユナイト・クロノス・キリヒコ
造魔の中でも一際不穏な動きをしており、同じ組織内でも周りから不信感を買われている……
カードを2枚チェンジした後、バサラに訊く
「Ｍｏｎｓｉｅｕｒバサラ、久々のご対面は如何でしたか？」
「対面？　あぁ、竜の字の事か。今のアイツは昔よりもキレが悪くなってやがるからな。少なくとも感動の再会なんて気色悪いもんじゃねぇよ」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、意外と辛辣ですね」
「俺は仲良しごっこをやってるわけじゃねぇからな。今の竜の字がどんな風になってるのかを見に行っただけだ」
「その割りには随分と楽しみに待っているような表情をしてますが？」
「当たり前だ。俺が出張ってくるのを知って竜の字は焦り始めた。〝今のままじゃ到底勝てねぇ〟って考えてるだろうよ。そこからどうやって獣に戻るのか、それとも〝全く新しい獣〟に化けるのか……見物だぜ」

バサラは意味深な笑みを見せながら、再びカードを4枚チェンジする
他の皆も2周めのチェンジに突入し、3周めに入る
ここで手札を揃えれば、あとは開いて勝負するのみである
すると、キリヒコが〝ある提案〟をバサラに持ち掛けてくる
「せっかくですし、どうせなら何か賭けませんか？　お金以外のモノで」
バサラが「良いぜ、何を賭ける？」と返しながら、手札のカードを2枚取り替える
キリヒコが持ち掛けた賭けの対象とは……？
「お互いの首――――と言うのは如何でしょう？」
「――――っ⁉」
「――――ッ！」
キリヒコの言葉を聞いた瞬間、レビィは目が飛び出しそうな程に驚き、シルバーは表情に殺気を滲み出させる
カグラに至っては腰元に帯刀している刀を今にも抜き放つ様相だった
シルバーが濃密な殺気を滲ませながら問いただす
「キリヒコ、今の言葉は我々に対する宣戦布告と捉えられてもおかしくありませんよ？
あなたの多少の冗談には目を瞑ってきましたが、今回ばかりは許容できません。……
今すぐこの場で滅してやろうか？」

丁寧だった口調が粗暴に変わり、シルバーの眼力もより鋭くなる
「あなたが何を考えているのかは知りませんが、バサラさまへの不遜な言動はこの私が許しませんよ！」
カグラも怒り心頭の様子でキリヒコに詰め寄るが……当のキリヒコは2人の反応を見て笑うだけだった
「何が可笑しいのですかッ！」とカグラが問いただすと、キリヒコは悪怯れる事もなく告げる
「Ｅｘｃｕｓｅｚ－ｍｏｉ。あなた方の反応があまりにも面白くて、つい笑ってしまいました。ちょっとしたジョークのつもりだったのですが……ここまでユーモアセンスの欠けた人達だとは思いませんでしたので」
「今の無礼極まりない発言をジョークの一言で済ませるつもりですか⁉」
「Ｍｏｎｓｉｅｕｒバサラ、今のは忘れてください。ただ、あなた方の反応が見たかっただけです。Ｊｅ ｓｕｉｓ ｄ▪ｓｏｌ▪」
「別に気にしちゃいねぇよ。最初っから冗談だと分かってたからな。お前らもいちいち目くじら立てんなよ」
バサラは性質の悪い冗談を意にも介さず、シルバーとカグラを諌める
シルバーとカグラは渋々キリヒコへの追及を中断し、席に着く

「最後のチェンジだぜ？　早くしな」
「Ｍｅｒｃｉ（メルシィ）。あなたなら分かっていただけると思ってました。……では、１枚チェンジです」
そう言ってキリヒコが手札の１枚を捨て、山札からカードを１枚引く
ここで全員の交換が終了し、手札を公開する
レビィは５（♥（ハート）＆♠（スペード））のワンペア
シルバーは♣（クラブ）の３、５、６、８、９でフラッシュ
カグラは２（♦（ダイヤ）＆♠）と７（♥＆♣）のツーペア
対してキリヒコは――――
「すみませんねぇ、４のフォーカードです」
見せびらかすようにアピールするキリヒコ
それを見たバサラはフッと鼻で笑い、何故か自分の手札を裏向きで置いて立ち去ろうとする
キリヒコが「おや、続きをしないのですか？」と引き止めようとしたが、バサラは視線だけをキリヒコに向けて言う
「ああ、イカサマ野郎のお陰でもう勝負は決まっちまったからな。昼寝でもしてくるわ」
意味深な台詞を残して部屋を出るバサラ

バサラがいなくなった直後、キリヒコが「やれやれ」と言った感じで自身のカードをトントンと指でつつく

その瞬間、カードからドロッとした黒い液体が排出され……キリヒコの指へ吸収されていく

やがてキリヒコの持ち札だった4のフォーカードは消失し、残されたのは♥の4とQ（クイーン）、♠の7、♣のJ（ジャック）、♦の10となり、数字もスートも全てバラバラだった

つまり……役無し

それを見た3人は仰天し、レビィとカグラが再び詰め寄る

「キリヒコッ！　アンタ、イカサマしてたのっ!?」

「さっきの無礼な発言だけでも許せないと言うのに、この男は……ッ！」

「Oh（オー）　la（ラ）　la（ラ）、短気なMademoiselle（マドモアゼル）ですね。しかし、イカサマはその場で摘発されなければ意味が無いのですよ？　Monsieur（ムッシュ）バサラは気付いていたようですが摘発せず、あなた方は気付いてすらいなかった。彼はイカサマを黙認していたのですから、勝負は有効です」

グヌヌと悔しさを露（あら）わにするレビィとカグラ

キリヒコが裏向きに置かれたバサラの手札に視線を移す

「さて、そんな彼の手札は……。――――ッ」

開いた瞬間、キリヒコの顔色が一転……表情から嫌味を含んだ笑みが消えた
それもその筈、何せバサラの手札は……♠のA、10、J、Q、Kの5枚
即ち……ロイヤルストレートフラッシュ
ポーカーの役の中で最も強いのはファイブカード、その次に強い役を揃えていたのだ
しかも、キリヒコのイカサマを黙認した上で……
「さすがはバサラさまだ。イカサマをも捩じ伏せるとは……」
「これに懲りたら、もう2度とふざけた真似はしないように」
シルバーがバサラを称賛し、カグラがキリヒコに釘を刺すように言う
キリヒコはそんな言葉など意にも介さず、バサラの手札を見続けていた
『……勝つ可能性は限りなく皆無に等しい状況でこの引き。圧倒的な強さに加え、禁忌の神滅具を従える技量とカリスマ性。そして、相手の策を意にも介さず捩じ伏せる悪運の強さ……』
理不尽の権化とも言えるバサラの手腕に、キリヒコは不敵に笑む
『Ｊｅ　ｖｏｉｓ……これは焦るのも無理ありませんね。どんな策を練ろうがお構い無しに一切合切蹂躙する。魔剣聖バサラ――――彼はそういう星の下に生まれてきたのかもしれませんね』

戦艦内のとある部屋にて
1人の異形が天上から吊り下げられた複数の糸に囲まれ、瞑想をしていた
その者の名は……スメラギ・リュウゲン
中国拳法の如く流れるような円舞を行い、更に素早く力強い拳と蹴りを糸に向かって放つ
迫力ある動作でありながら、吊り下げられた糸を全く揺らさず――全ての先端を一つ結びに纏めた
力強さと繊細さが溢れる手腕……
すると、何処からか拍手が聞こえてくる
「へえ、やるじゃない。糸を全く揺らさないで結ぶとか。芸達者」
声の主はどうやら女性のようだ
スメラギは「大した事は無い」と簡素に返事し、糸の囲いから抜け出す
「じゃあ、こっちも見せてあげるっ」
そう言って女性は右足を上げ――離れた場所から糸に向かって連続の蹴りを放つ
尚、こちらも糸を全く揺らさない

蹴り終えた後を見てみると……全ての結び目が綺麗に解けていた
「ほう、糸を切らずに蹴りで解いたか」
感嘆するスメラギの前に女性の他、２名の男が現れる
１人は顔中に金属片が埋め込まれ、人間の胴体以上に太い両腕を持った厳つい巨漢
もう１人はカウボーイハットを被ったガンマン風の男
そして、女性は長い黒髪にピッチピチのボディスーツを着込み、口元には棒付きキャンディの『チュッパチュッパス』を咥えていた
「アンタが『双竜の武人』とか呼ばれてるスメラギ・リュウゲンね？　さすが造魔の幹部、威厳がアタシらとは全然違うわね」
「お前達が『三羽の闇鴉』とやらか。マリア・ミルコビッチ、ゴリランド・ローニッシ、ジョーズィ・バリスタン。殺人、強盗、人身売買を専門的に行うような外道と言えど、実力はお墨付きか」
「ええ、造魔に入っておけば好き勝手できるでしょ？　アタシらにとっては最高の仕事場ってわけ。お金も儲かるし」
「フン、ならば見せてもらおうか。外道に仕事が務まるかどうか」

誰にだって苦手な人物はいるさ……

外も寒くなり、本格的な冬になろうとしている頃
部室は珍しく新、一誠、アーシア、ゼノヴィアの４人のみと言うメンツ
「そう言えば、イリナって俺達と別行動している時、何してんだ？」
新が部屋でお茶を飲みつつ、そんな事を口から漏らした
「天界――天使の役割を果たしているそうだぞ」
新の対面に座るゼノヴィアが言う
イリナはオカルト研究部の中で唯一の転生天使
普段の生活では行動を共にしているが、それ以外のところ――主(おも)に悪魔の仕事中の際は別行動が多い
新や一誠達は深夜この部屋に集まって人間からの召喚を待っているが、イリナは居ない
時折(ときおり)差し入れを持ってくるくらいだ
「休日の時もたまにお一人で出かける事もあるようですよ。何でも天使のお仕事だと……」

アーシアがショートケーキの苺をフォークで掬いながらそう言った
つまり、イリナは新達の知らないところで色々と仕事をしているのである
「……天使の仕事か。興味深いな」
新と一誠がふとそう口にした途端、アーシアとゼノヴィアが顔を輝かせる
「そうだな、私もイリナの仕事――――いや、天使の普段の役割とやらに大変興味があるぞ。元教会の戦士だったから知らないわけではないが、イリナの仕事ぶりは友人として見てみたい。なあ、アーシア」
「はい、ゼノヴィアさん！　私、一度で良いから天使のお仕事を拝見したいと思っていたんです！」
変な部分を刺激してしまったようで、完璧に2人は信仰深い教会関係者モードに突入
転生前は教会に属していたから気になるのだろう
「……でも、やっぱり、ご迷惑でしょうか……」
途端に控えめになるアーシア
一瞬興味が沸き立ったようだが、冷静に考えてみればイリナ――――天界に迷惑をかけてしまうと思ったのだろう
しかし、そんなアーシアの謙虚な思いを拭い去るように〝ある娘〟は扉を豪快に開いて登場する

――無論、イリナだった

「ふふふ！　話は聞かせてもらったわ！　良いわ、皆！　私の仕事を見学してみて！」

どうやら、今回は教会と関係を持ちそうな展開になりそうだ

次の休日、新と一誠、アーシア、ゼノヴィアが辿り着いたのは隣町の外れにある教会関連の建物だった

この辺りで活動している信徒の拠点の１つであり、三大勢力の協力体制下にあるこの一帯での天界側の本部でもある

イリナは普段ここに通い、仕事や報告などを行っているそうだ

三大勢力の同盟で急遽新設した為か、外観はわりと新しめで大きな十字架が目立ち、建物の大きさだけなら駒王学園の新校舎ぐらいはある

イリナは一足先に到着しているそうだ

ちなみにリアス達には許可を得ており、「良い機会だから教会について勉強してきなさい」と送り出され、裏で天使との話はつけておいてくれるらしい

だが、悪魔ゆえか教会関連の建物に近付くだけで寒気が襲ってくる……

それはアーシアやゼノヴィアも感じているようだ
「……悪魔になってから、町中で教会を見かける度に悪寒が走る。ふふふ、悪魔に転生した信徒にはお似合いかもしれない」
「いい加減に割り切れ。破れかぶれで悪魔に転生したくせに」
自虐するゼノヴィアにツッコミを入れる新
教会の施設育ちである彼女達からすれば、まだ難しい問題なのだろう
「……ミサに参加したいです」
アーシアは遠い目で建物を見つめていた
ちなみに今日は全員が駒王学園の制服を着ており、アーシアは最後までシスター服で行くべきか苦慮していたが……相手側への配慮も鑑みて駒王学園の制服にした
「来てくれたのね、皆！」
建物の前で佇んでいると、イリナが話しかけてきた
「今日は天使のお仕事、見せちゃうわ♪」
だいぶ上機嫌で声も明るくハキハキしている
イリナは新達にとある物を渡してくる
首から掛けるカードストラップ、サラリーマンがよく使う社員証のような物だ
ストラップの中には新達の顔写真が貼られているＩＤカードが収まっていた

イリナがカードを指して説明する
「それは専用の特別許可証よ。天界関連の場所に足を踏み入れても相互に影響が出ないようになっているの。最近、開発されたばかりのもので、まだ関係者の分しか無いみたい」
新達がストラップを身に着けると、先程までの悪寒が嘘のように消えていく
「その許可証を身に着けている間は悪魔の能力とかは使わないでね。まだ研究段階のものだから、何が起こるか分からないの」
イリナはウインクをしながら補足説明をしてくれた
ストラップを着けている間は能力の使用は不可、しかも魔力を使ったら何が起こるか分からない
まさに一長一短である……
しかし、スムーズに事が進んだところを見ると、両陣営による信頼関係は良好だろう
「ま、私達が力を使わなければ良いだけの事だ」
「お前が真っ先に力を使いそうなんだよ」
平然と言うゼノヴィアに再び新がツッコミを入れる
特に同じ『騎士(ナイト)』の祐斗からは「ゼノヴィアに技の幅を広げてもらいたい。彼女、戦闘時に何も考えていないと思うんだ……」と残念に語られている

イリナ先導のもと、新達は建物内に入った
何事も無く自動扉を抜けて中に進む
内部の様子は一見何処にでもあるオフィスビルと変わりは無い
通路を行き交う関係者もスーツを着ており、普通のサラリーマンに見える
――と思ったら神父やシスターとも通路ですれ違い、新達に気付いたようで軽く驚いた様子と共に好奇の視線を向けてくる
「……あー、例の」
「……噂には聞いていたが……」
すれ違う者達の小声も気になるが、何よりも行き交う人々からのイリナへの挨拶が気になっていた
「Aイリナさま、お帰りなさいませ」
「天使イリナ、ごきげんよう」
「イリナさま、あとで主への祈りを見守ってください」
スーツを着た人達、神父やシスターを問わず、イリナを見かけるや否や手を組んでお祈りしたり、頭を下げていた
誰もがイリナを聖者のように扱い敬っていた
忘れがちだが、イリナは天使長ミカエルのA

よくよく考えてみれば凄いポジションなのだ
「「……イリナって凄いんだな」」
「凄いです……！　私もイリナさんに憧れてしまいます！」
「そうだな……元信徒としては、信仰の果てに天使化があるのなら、これ以上ない誉れだろう。友人が天使だなんて、私は誇りに思って良いのかもしれない」
新と一誠がボソリと呟き、アーシアとゼノヴィアは目を爛々と輝かせ、手を組み祈りを捧げだした
ふいにイリナが振り返り、気まずそうな表情で笑みを浮かべる
「ごめんね。ここに来ているヒト達は全派閥の中でも良識のあるヒト達ばかりなんだけど……やっぱり、悪魔――と言うよりも新くんやイッセーくん達が物珍しいんだと思う」
「別に気にしちゃいねぇから」
「そうそう。とりあえず、このヒト達は諸々知ってるんだろう？テロリストの事とか、先日の冥界で起きた魔獣騒動の事も」
「まあね。この三大勢力の同盟拠点に所属しているヒト達は全派閥の中でも一定の条件をクリアしてきた者ばかりだから。普段は表立って行動せずに、裏方に回って私達をサポートしてくれているの。そのついでに布教したり、お祓いしたりかな」

新や一誠達が戦っている裏で天界サイドも動いている
その話は聞いているが、そらよりも気になる事が……
「お祓い……悪魔をか？」
一誠がまさかと思って問うと、イリナが苦笑いして答える
「ううん、この辺を縄張りにしている悪魔――リアスさんやソーナさんもそうだけれど、彼女達は同盟関係の大切な仲間だもの。そんな事しないわよ。それにリアスさん達が酷い事するわけないじゃない？」
「それじゃあ、悪霊とかを退治しているのか？」
「ああ、あとは邪な精霊だな？」
新とゼノヴィアの問いにイリナも頷く
「ええ、悪霊や悪い事する精霊はあとを絶たない、無限に出現する存在よ。そういうものに困ったヒト達を救う為に祓うの」
「それはリアスお姉さまもおこなわれていますね」
アーシアがそう続き、イリナが階段を上りながら深い息を吐く
「実はね、三大勢力の協力体制でエクソシストが縮小傾向にあるの。教会に所属する神父、シスターとか、異形と戦える者――戦士の事ね。戦士達は協力体制の影響で戦う相手を絞られてしまったの。今までは悪魔や堕天使を相手にテリトリー争奪戦をして

いたわ。けれど、悪魔に堕天使、妖怪まで味方になってしまったから、相手が少なくなってきたの。現在は魔物や、未だ同盟を拒否している吸血鬼ぐらいが主な相手かしら。おかげで戦士の数も今後減少傾向にあるわ。平和になれば戦う必要は無いものね。テロリストと言う共通の敵がいるから、急激に戦士の数を減らしていくわけではないけれど……」

エクソシストの縮小傾向……以前にアザゼルからも聞いてはいたが、確かに問題視される傾向である

「主のため、戦いに命を懸けてきた者にとって、生き甲斐でもある剣を捨てろなどとは、さすがにツラいものがあるな。私なら暫くの間、生き方に苦悩しそうだ」

ゼノヴィアがそう言う

戦士ならではの悩み、今までの生き方を変えると言うのは確かに苦悩するのも否めない

新も自堕落な生活スタイルを一変したので、その辺りの苦労は何となく理解できてしまう

「ちなみによほどのポストでもない限り、主の存在については隠してあるわ。敬虔な信徒の皆さんにそのような事を伝えられるわけがないもの」

イリナは切なそうな瞳を浮かべて補足してくれる

この建物にいる神父やシスターは基本的に聖書に記されし神の不在を知らないようだ
アーシア、ゼノヴィア、イリナでさえ心の均衡（バランス）を失いかけたのだから、教会関係者にとっては劇薬その物の情報である
何も信じられなくなり、自暴自棄になったりしたら大事（おおごと）になりかねない
階段を上りきり、上階に上がる一同
先導しているイリナが〝とある扉〟の前で止まる
扉には天界の文字が刻まれ、十字のレリーフまで彫られていた
如何（いか）にも威厳がある扉で、この中にいるのは相当なお偉方なのだろう
ドアをノックする前にイリナが新達に告げる
「実はね、今日、この一帯の天界スタッフを統轄（とうかつ）されている支部長がお見えになられているの。普段はお忙しくて、主に教会本拠地のヴァチカンと天界を行ったり来たりしているんだけれど、今日は特別少しだけスケジュールが空いたらしくて。私と同じ転生天使なのよ」
「支部長で転生天使か。きっと、元聖人クラスの信徒だったのだろうな。会うのが楽しみだ」
期待に胸を膨らませるゼノヴィアだが、その彼女を見てイリナが意味深な笑みを浮か

べる
「うふふ、きっとゼノヴィアは驚くわ」
そう言いながらイリナは扉をノックする
中のヒトが「どうぞ、お入りになってください」と丁寧に返してくれた
声から察するに若い女性のようだ
『――――ッ。……っ？　何だ、今の声を聞いた瞬間、とてつもなく嫌な予感が……ッ』
新が訝しげにそんな事を考えているのも束の間、開かれた扉から部屋に入っていくと
――――役員用のオフィスデスクにシスターが１人座っていた
頭部にベールをしっかりと被り、髪の毛の具合までは分からないが、北欧的な顔立ちで青い目をした美女だった
歳は２０代後半ほどで柔和な表情を浮かべていて、優しそうな雰囲気のオーラを纏っていた
「これはこれは、ようこそお越しになられました、皆さん」
シスターは立ち上がり、新達を迎え入れてくれた
柔らかな対応だが、一誠が注目したのは美女シスターの肢体だった
ハッキリした体つきはラインを隠すシスター服からは分かりづらいが、恐らくは隠れ巨乳

お尻は安産型で、脚の太さも理想的で適正なものだった
一誠がスケベな視線を投げかけてもシスターはニッコリと微笑(ほほえ)み、それが逆に申し訳なく感じてしまう程だ
……一誠は隣で表情と全身を強張(こわば)らせるゼノヴィアに気付いた
青ざめた顔でゼノヴィアは声を上(うわ)ずらせながら発した
「シ、シシシシシシシシシ、シスター・グリゼルダ！　ど、どどどどどどどどうして、に、日本に⁉」
ゼノヴィアがここまで慌てふためく姿はとても珍しい
シスター・グリゼルダと呼ばれた女性は、笑みを絶やさぬままに口を開く
手の甲を向けると、そこには『Q(クイーン)』の文字が浮かび上がる
「ごきげんよう、グレモリー眷属の皆さん。わたくし、四大セラフたるガブリエルさまのQ(クイーン)、グリゼルダ・クァルタと申します。この支部の長(おさ)を務めております。以後、お見知り置きを」
四大セラフ――――ガブリエルのQ(クイーン)
その肩書きから天界でもかなりの要職ポジションだろう
「シスター・グリゼルダ……高名な信徒の方です。私も教会に属していた頃は、お名前を何度も耳にしました」

アーシアの言葉に対し、イリナがウンウンと頷きながら言う
「ちなみにガブリエルさまが司るカードはハート。シスター・グリゼルダはハートのQ（クイーン）って事になるの。皆からは『クイーン・オブ・ハート』と呼ばれているのよ」
シスター・グリゼルダの視線が一誠に移る
「赤龍帝（せきりゅうてい）の兵藤一誠さんですね？　お話はかねがね伺（うかが）っております。数々の功績を立てている冥界きっての期待のホープ」
「そ、そんな、期待のホープだなんて……そんな風に言われたら照れちゃいますよ！」
赤面しつつ恐縮していた一誠だが、シスター・グリゼルダはニッコリしながらもキッパリと続けた
「七つの大罪の1つ――色欲が大変強いそうですね。まさに悪魔らしいと言うか、しかもドラゴン。主の教えではドラゴンとは邪悪な存在。『色欲を持った悪魔でドラゴン』……うふふ、刺激に弱いうちの若い信徒が聞いただけで卒倒しそうなフレーズです」
褒められているのか、貶されているのか、反応に困る一誠へイリナが耳打ちしてくる
『シスター・グリゼルダは悪魔にとっても厳しいわ。何せ同盟前までは主のため、天のため、悪魔や堕天使と戦ってきたわけだもの。キリスト教全派閥内、特に女性エクソシストの中では5本の指に入ってたのよ。でも、悪い方ではないの。今のもシスターなりの悪魔への冗談みたいなものだから』

つまり、以前は悪魔相手に悪魔祓いをしてきた猛者シスター
言葉とは裏腹に悪意は感じ取れないから、本当に冗談混じりの挨拶なのだろう
「さて、次は――――ゼノヴィア」
シスター・グリゼルダの視線がゼノヴィアに移った
ゼノヴィアは口元を引くつかせ、目線を逸らそうとするが、途端にシスターがずずいっと歩み寄って顔を両手で押さえる
ニコニコしながらも迫力のある声でシスター・グリゼルダが言う
「お久しぶりね、戦士ゼノヴィア。まさか、こんなところで再会できるなんて思ってもみませんでした」
声音はあくまで冷静だが、何処か怒気も含まれている……
「……や、やあ、シスター・グリゼルダ。ひ、久しぶりだね……げ、元気にしていたかな……？」
「元気にしていたかな、じゃないでしょう？　なんで任務のため日本に向かったまま、帰還もせずに悪魔に転生しているのでしょうか？　しかも今日の今日まで連絡は一切無しとは如何なものかしら？　敢えて今日あなたに言葉を投げかけるなら、どの面下げてここに来たと言うべきかしらね……！」
ゼノヴィアの顔を掴む手に力が入り、語気もどんどんヒートアップしているシス

ター・グリゼルダ
優しげな印象から一転、凄まじいプレッシャーが室内を支配していた
イリナが一誠とアーシアに言う
「シスターとゼノヴィアは同じ施設の出で、シスターはゼノヴィアの仕事の先輩なの。あっちでは1番付き合いが長かったんですって。私もゼノヴィアとコンビを組んだ時に何度もお世話になったわ」
顔を押さえられて、逃げ場の無いゼノヴィアがイリナに言う
「イリナ！　ど、どうしてシスター・グリゼルダの事を今まで話さなかった！　こ、ここの支部長が彼女なら、私は今日ここに来なかったぞ！」
「そう言ったら今日来ないだろうから黙っていたの。だって、ゼノヴィアったらシスター・グリゼルダに連絡の1つもしなかったじゃない？」
「あ、当たり前だ！　言ったら……私は殺される！」
ゼノヴィアは体をジタバタさせるが、顔を強く押さえられているので逃げられない
両手で強く押さえられているから顔も不細工な格好となっており、それを見てイリナもブフーッと愉快そうに噴き出していた
シスター・グリゼルダは両手でゼノヴィアのほっぺを最大にまで伸ばしながら言う
「あなたが日本で悪魔に転生したと聞いた時は卒倒して気がどうにかなりそうでした。

あんなに手塩にかけて主の教えを説いたあなたが、まさか悪魔だなんて……。あなたは昔からヒトの話は聞かない、勝手に行動する、わけの分からない持論を作り出す、と問題児ではあったけれど、優しい心根の女の子だと信じていたのですよ？」

確かにシスター・グリゼルダの言う通り（笑）

ゼノヴィアは〝話を聞かない〟

〝勝手に動く〟

〝わけの分からない思想を持つ〟の三拍子が揃った大変困った娘です（笑）

ふいにアーシアがシスター・グリゼルダに言う

「シスター・グリゼルダ、どうかゼノヴィアさんを許してあげてください。……教会を追われ、悪魔になった私が言っても説得力が無いと思いますが……それでも、ゼノヴィアさんは良いヒトです。私達の大事な仲間で、私も何度も助けていただきました。ゼノヴィアさんがいなかったら、きっと誰かがもっと傷付いていた筈です。それに……ゼノヴィアさんは私の大切なお友達です。お許しになってください」

深く謝罪するアーシア

彼女にとってゼノヴィアは今や大事な友人

アーシアの言葉を聞き、シスター・グリゼルダはゼノヴィアのほっぺを離して柔和な表情に戻る

「シスター・アーシア、あなたの事は知っています。身に宿る神　器（セイクリッド・ギア）の影響で、だいぶ辛（つら）い目に遭われたようですね。あとで特例のＩＤカードを新たに発行します。それを今回のように持って入れば、この地域限定ではありますが、教会の行事にもある程度参加できるでしょう」

それを聞いてアーシアは酷く驚き、狼狽（ろうばい）してしまう

「そ、そんな……、良いのですか？　そのように大事なものを悪魔になった私に……」

アーシアの恐る恐るの問いにシスター・グリゼルダは満面の笑みで頷く

「ええ、たとえ悪魔になろうとも信仰の心があるのなら、あなたは私達の同志でしょう。悪魔ゆえ不自由は多いかもしれませんが、主の教えを信じるならば共に素晴らしい時を過ごせる筈です」

シスター・グリゼルダの言葉にアーシアは感動し、目頭（めがしら）を熱くさせていた

「良かったな、アーシア！　ミサにも参加できるかもな！」

一誠がそう言うとアーシアは「はい！」と元気良く心底嬉しそうにしていた

シスター・グリゼルダはゼノヴィアのほっぺを再び伸ばす

「シスター・アーシア、良かったら今後もこの困った娘のお友達をしてあげてください」

「もちろんです！　そ、それと、私はもうシスターでは……」

「少なくとも私はあなたの事をシスターとして接しますよ？」

シスター・グリゼルダの言葉にアーシアは本当にノックダウンしそうだった
それ程までに今日は最良の日となっているのだろう
「シスター・アーシアには色欲まみれの悪魔と、自由気ままな悪魔の扱い方をお教えしましょう。うふふ、これでも数多くの悪魔を見て、退(しりぞ)けてきた身の上ですもの。それぐらいお手の物です」
……どうやら一誠とゼノヴィアには手厳しそうだ
「それと……先程から気配を消して、この部屋から抜け出そうとしている悪魔の扱い方も教えてあげましょう。――ね？　そこのワンパク坊主さん？」
シスター・グリゼルダの意味深な言葉に一誠達が振り返る
その視線の先には……部屋から脱出しようとしたが、シスター・グリゼルダに気付かれたせいでギクッと硬直している新の後ろ姿が見えた
「え？　このヒト、お前とも知り合いなのか、新？」
一誠が間の抜けた声音で訊くと、新は何処からともなく付けヒゲとカツラを取り出し、カツラを被って付けヒゲを装着
「……おやおや、新とは、いったい誰の事でございましょうですかな？」
明らかにおかしい喋り方とバレバレの変装に一誠は引くつくが、新（？）はお構い無しに妙なポーズを決めて告げた

「ワガハイは偶然ここに迷い込んだ旅人、ナナッシエノ・ゴンビェモン・フォンティーヌ13世――通称エリザベス良江なのであ～るっ。決して竜崎何とかさんではないので、悪しからずでア～ルっ」

「異議ありぃっ！そのトボケ方、前にも見た事があるぞ！　確かお前の親父さんがやってたよな⁉　何たら4世の次は13世⁉　ふざけた一族を長続きさせんな！　しかも、通称エリザベス良江って何だよっ⁉　ごちゃ混ぜにも程があるわ！　やっぱそう言うところは親子ソックリじゃねぇかっ！」

一誠のツッコミに対し、新は見苦しくもトボケ続ける

「フォッフォッフォッ、何処のどなたか存じませんが、ワガハイは歴とした謎の旅人。何物にも縛られず放浪するのが運命、ただ流離うのみなのであ～るっ。それではサラバダー」

扉を開いて逃げようとした刹那、ヒュンッと何かが一誠の横を通り過ぎ――新（？）の背中に突き刺さる……

バタンッと倒れ伏す新の背中に突き刺さったのは――万年筆だった

投げたのは勿論、シスター・グリゼルダ

シーンと静まり返る中、彼女はズカズカと歩み寄って新を引きずり戻し、カツラと付けヒゲを取り上げる

「あなたとも久しぶりの再会だと言うのに、そんな態度で困った子ですね。まだお話を聞かないフリをするのでしたら……もう2本か3本ほど追加で刺してあげましょうか？」
「い、いや……勘弁してつかぁさい、シスター・グリゼルダ……ッ」
新は観念したのか、背中に刺さった万年筆を抜いて恐る恐る立ち上がった
そして、シスター・グリゼルダは先程ゼノヴィアにしたのと同じように新の顔を両手で掴む
「さて、あなたにも言いたい事は多々あります。まずはお久しぶりね」
「あ、ああ……久しぶり、グリゼルダ……さん。元気にしてまっか……？こちらはボチボチやっとりますわ……っ」
キャラ崩壊してるのか、新は下手な関西弁で返すが――シスター・グリゼルダの手は強まる一方だった……
「あなたの事を聞いた時も卒倒してしまいそうでしたよ？　あれだけ私や教会のシスターに迷惑をかけてきたあなたが悪魔に転生、全勢力の天敵とも言える魔族（まぞく）の力を身に宿（やど）し、あまつさえドラゴンの欠片から作られた存在だった等と信じられない事実のオンパレード。本当に……本っ当にどうしようもないヤンチャ坊主だったんですね、あなたは……！」

「いや～……人生色々ありますわな……俺もビックリぃ～っ」
「ゼノヴィアだけでも手が掛かる娘だったのに、あなたはそれ以上の問題児だった。『教会のシスターが下着を穿(は)かないのは本当か？』等と言って淫(みだ)らに触る、シスターの沐浴(もくよく)や着替えを堂々と覗く、挙げ句の果てには聖堂内で口説(くど)き落とす。あなたのおかげで変な興味を抱(いだ)き、正道を外れてしまったシスターがどれだけいると思ってるのかしら……！」
「……認めたくないものだな。自分自身の、若さゆえの過(あやま)ちと言うものを」
赤い彗星の有名な台詞を詠唱する新だが、かえってシスター・グリゼルダの怒気に火を点けるだけだった……
「……どうやら、あなたは昔も今も変わってないようですね。その点だけは安心しました。心置き無く折檻する事が出来そうね……！」
「フッフッフッ、今までの俺だと思ったら大間違イダダダダダダダダダッ！　ギブギブギブ！　ちょっ、マジすんませんっ！　調子に乗り過ぎましたっ！　シスタージョークがあるならデビルジョークもイケるかなと思ってましダダダダダダダッ！　ノーモア爪！　爪が食い込むっ！」
女性にたいして、ここまで手も足も出ない新の姿は極めてレアだった
初めての光景に一誠達は呆気に取られる

そうこうしている内にシスター・グリゼルダが手を離し、ようやく解放される新

痛々しい手の痕が残っている頬を擦り、シスター・グリゼルダと距離を取る

「い、意外だな。新にも頭が上がらないヒトがいたのか」

「本当よね、ここまで焦った新くんを見るのは新鮮かも」

一誠とイリナがふいに出した言葉に対し、シスター・グリゼルダが柔和な笑みを見せる

「ええ、この子は教会で配給されるパンやスープをよく貰いに来ていた事がありまして。まだ１０歳の子供が独りで暮らしていくには、困難だった事でしょうから。……でも、とにかくヤンチャが過ぎる子で、教会嫌いなのに食糧やシスターが目当てでやって来る事が多かったわ」

「――――と言う事は、まさかシスター・グリゼルダにも？」

イリナが恐る恐る訊くと、シスター・グリゼルダは迫力ある笑顔で言った

「勿論、私も例外無く彼の被害を受けました。今はだいぶ大人びているようですが……昔は本当に酷かったんですよ？　何度叱っても懲りずに仕掛けてくる彼の往生際の悪さには、逆に感服させられた程です。……まあ、その都度８時間ほど主の教えを説いて差し上げましたけれど」

「ああ、思い出したくないのに思い出しちまうよ。ガキの頃は引き際を知らなかったか

らな。無知なガキながら死の恐怖を味わったのは……アレが初めてだったよ」
新の体がプルプルと小刻みに震え始め、何故かゼノヴィアに「分かる、分かるぞ……っ」と涙を浮かべながら励まされた
「困った子ですが、そんなあなたにも可愛い時代はありましたよ?」
そう言うとシスター・グリゼルダは徐(おもむろ)にデスクの引き出しを開け、何かを取り出す
取り出したのは1冊の本――アルバムだった
シスター・グリゼルダが開いたページの写真を見せてくる
「こちらの写真は彼がパンを照れ臭そうに受け取っている場面です。最初は盗みを働いていましたが、私の指導によって少しは反省してくれた雰囲気が感じられるでしょう?」
「照れ臭そうにと言うより、ふて腐れてる感がありますけどね……」
「次にこちらは泥の中に落ちて、見事に半分だけが泥まみれになった写真です。この時ばかりは私も思わず笑ってしまいました」
「ブフッ!　見事なハーフ&ハーフッ!」
「呆然としている様子がまた笑えるな……っ」
一誠が噴き出し、ゼノヴィア、イリナが笑いを堪(こら)えている中、新は苦虫を噛み潰した表情となる

「こちらは大きな仕事に失敗して泣き疲れ、教会の側で眠っている時の写真です。自分の無茶で同僚の方に大怪我させてしまった事を悔やんでいました」
「仕事に関してはシビアだったのに、良いトコあるじゃん」
「それは俺がまだガキだったからだ。……あの頃は失敗しまくってたから、仕方ねぇだろ」
「特に思い入れがあるのはこちらですね。木から降りられなくなった猫を見つけて、遠征に来ていた娘と一緒に助ける写真です」
シスター・グリゼルダがその写真を見せると、２人して木に登っていく姿があった
確かに木に登っているのは幼い頃の新だが、皆が着目したのはもう１人の方である
最初に気付いたのは———イリナだった
「え？　これって……私!?」
「本当だ！　これ……昔のイリナじゃないか！」
「新とイリナは過去に会っていたのか？」
「いや、そんな記憶は……。———あっ！　思い出した！　確かやたらと俺に突っ掛かってくる聖職者もどきが居たぞ！　それでよく言い争いや取っ組み合いになった事がある！　んで、その最中に偶然見つけて、２人で木によじ登っていったんだ！」
驚く一誠達、ハッと思い出した新を尻目にシスター・グリゼルダが続ける

「ええ、Ａ(エース)イリナはご両親の仕事の都合でたまたま遠征に来ていました。短期間ではありますが、その時に彼と知り合ったのです。最初は主義主張の違いから仲違いしていましたが、気遣い無く言い合えるところから次第に仲良くなっていきました。そして……件(くだん)の猫を救出する際、彼女は猫と一緒に木から落ちてしまったんです」

「あ、それは何だか覚えがあります」

「その時、彼は両方とも受け止めましたが――――体勢が悪かった為に腕を骨折してしまいました」

「そんな事もあったなぁ。確か尻で踏み潰されたんだっけ」

「えええっ⁉　わ、私のお尻で折れちゃったの⁉」

「ああ、その時に付けたあだ名も思い出したよ。――――尻(シリ)ナだったな」

紫藤尻(シリ)ナ（笑）

黒歴史とも言えるネーミングの発覚にイリナは顔を真っ赤にした

「もうっ、私のお尻はそんな重くないもんっ！」

「そうだな。重くはないが痛かった」

「なるほど、イリナは実は新と幼馴染みで尻(シリ)ナだったのか」

「ゼノヴィアも尻(シリ)ナって呼ばないでよ⁉」

新とゼノヴィアに茶化されるイリナだったが、シスター・グリゼルダが２人を諌(いさ)めた

事で終息

改めてイリナがシスター・グリゼルダに言う

「お話しした通り、今日は天使のお仕事を皆に見せようかなと思っています」

「ええ、それは素晴らしい事です。悪魔が天使の仕事を見学する、これ程までに三大勢力の同盟の意義を強く感じる事はありません。是非とも今日は天使の役割を見て行ってください。Ａ（エース）イリナ、粗相（そそう）の無いように」

「はい！」

元気良く敬礼して応えるイリナ

かくして、新達は天使の仕事を見学する事になった

「ああ、天使よ。我が懺悔（ざんげ）に耳を傾（かたむ）けてくれたまえ～」

建物内にある礼拝堂で、跪（ひざまず）き懺悔する男性信者

「ええ、どうぞ、私でよろしければお話を聞きましょう」

イリナは頭上に輪っかを出して、天使の翼を広げて信者の悩みを聞いていた

信者はこの支部で働く関係者で、天使の存在を認知できている

今の状況を簡単に説明すると「天使の悩み相談室」らしく、悩みを打ち明けたい信徒から相談を持ち掛けられて、礼拝堂でそれを聞く
「神はエッチなＤＶＤをたくさん借りた事、きっとお許しになってくださる筈です」
男性の悩みを聞き、イリナはそう答えていた
新達は礼拝堂の長椅子で仕事を見学している
しかし、悩みもそうだが……それに答えるイリナの格好もおかしい
純白の羽衣を身に着け、神々しい演出を光力で展開させ、口調と態度を無理に正している為――――その光景が妙に笑えてしまう
「……ヤバい、吹き出しそうだ」
「イリナの相談室って、演出が強すぎないか？」
笑いを堪える新、一誠はアーシアとゼノヴィアに語りかけるが……当の２人は興味深そうにイリナの仕事ぶりを見学していた
残念ながら感性や捉え方が違うようだ……
イリナはその後も訪れる信者達の話を真剣に聞いて答え、２時間ほどで相談室が終わり、次の仕事に向かう
建物内の聖堂に赴（おもむ）き、赤ん坊連れの若い夫婦に対応するイリナ
「天使さま、どうか、この子に聖なる名をつけてあげてください」

どうやら赤ん坊の命名を願いに来たようだ
「分かりました！」
イリナは快く承諾して、用意されていた紙にペンを走らせていく
「はい！　その子の名前は『治虎武』と書いて『やこぶ』くんです！　聖人からお名前を拝借しました！」
「ひと昔前の暴走族か、お前はァッ！　何だ、その適当感溢れる当て字は⁉」
「ありがとうございます、天使イリナさま！」
「お礼言っちゃったよ！　良いのか、そんなＤＱＮネームで⁉」
「うん、良い名だ」
「はい、さすがイリナさんです」
ゼノヴィアもアーシアも納得しており、新と一誠は信徒の感覚をますます理解できなくなっていた
次にイリナが向かったのは建物内にあるスタジオ
用意されていた撮影器具と専属のカメラマン、水着に着替えたイリナの写真撮影が始まった
「はい、良いですよー、イリナさま。じゃあ、次はこういうポーズで」
「こ、こうですか？」

「そうです！　1枚いただきます！」
可愛くポージングするイリナにフラッシュが焚かれる
一部の信徒向けに発刊している身内専用雑誌『週刊ぶれいぶエンジェル』なる物が存在するそうで、今度の特集はミカエルのA――――即ちイリナを取り上げるのだと言う
「イリナさん、教会で天使の存在を知っている方々の間ではかなり人気があるそうです」
アーシアがそう情報をくれる
まるでアイドルのような仕事だが、それは新達も同じ
イリナも天界関連の業界では有名で人気もあるようだ
撮影が終わったイリナにカメラマンが言う
「ふふふ、イリナさま、今日は彼氏同伴ですか？　あれが噂の闇皇でドラゴンのボーイフレンドですな？」
カメラマンが新に視線を送り、イリナは途端に顔を紅潮させる
「そ、そ、そ、そういうわけではなくて……！　最近分かった事なんだけど、新くんはセカンド幼馴染と言うか……！」
「イリナさまは信徒の間でも人気なのですから、彼氏が発覚したら男性ファンはたいそうショックを受けるでしょうな」
カメラマンはそう言いながら豪快に笑っていた

イリナが当惑する一方で――

「ほう、彼氏ねぇ」

ゼノヴィアが半眼で新を睨んでいた

「も、もう！　新くんからも何か言ってあげて――きゃっ！」

イリナが新に詰め寄り、フォローを頼んでくるが――その時、イリナが撮影機器のコードに足を引っ掛けて新の方に倒れ込んでくる

新は上手くイリナを支えたのだが……ムニュンと柔らかな肌触りが手に伝わる

見れば、体勢を崩した拍子に水着のブラがはだけて、イリナのおっぱいをダイレクトに触れていた

「おおっと、イリナさま！　こんなところで幼馴染の彼氏とハグとは大胆ですな！」

新とイリナが抱き合っているところを、カメラマンがパシャリと激写

当のイリナは恥ずかしさに耐えるように切なそうな表情を浮かべる

「……こ、こんなところでダメだよ、新くん。……そっか、こ、こんな風に幼馴染の関係、越えちゃう気なのね……」

そんな事を言いながら天使の翼を白黒に点滅させるイリナ、堕天の危機に直面している

「イッセーさん、見ちゃダメです」

「はい」
「私の前で抜け駆けは許さん。やるなら3人で一緒にだ」
「ゼノヴィア、お前の思考も大概おかしいぞ?」

その後もイリナの天使の仕事は続いた
書類の整理、料理教室、果てはお茶の相手まで……天使と言うよりは何でも屋に近い感じだった
しかし、頼み込む人々がイリナの事を待ち望み、期待して頼っていた
思ってる以上に天使の存在は教会信者にとって大切なものなのだろう
建物内の食堂で一休みする一同
「いやー、今日は面白かったな」
「最高の1日だった」
「はい、まさに最高でした」
一誠は素直な感想を述べ、ゼノヴィアとアーシアは大満足だったようだ
「どうやら、一通り見学されたようですね」

現れたシスター・グリゼルダが微笑みながら言う
「ところで、若手の戦士にエクソシストの実践練習をさせたいのですが、見学していきますか？」
エクソシストの実践練習、興味がそそられるが……
「ただ、対象となる悪霊がなかなか見つからなくて……。最近、大規模に一斉殲滅したものですから」
シスター・グリゼルダの視線が新と一誠に移り、新は嫌な予感を悟った
「ドラゴンで悪魔のあなた方に若手戦士達のお相手をしていただけると幸いなのですが……。色欲だけお祓いしてしまうとかどうでしょう？　エッチなのはよくありませんよ？」
シスター・グリゼルダの意味不明な提案に新と一誠は度肝を抜かれるが、アーシアとゼノヴィアは頷いていた
「そうですね。もしかしたら、イッセーさんはエッチなところを少しだけ祓っていただいた方が良いのかもしれません」
「うん、新はスケベなのが良いところだが、度の過ぎた性欲は時に女を当惑させるかもな」
「なんですとぉぉぉぉっ⁉　俺のスケベをお祓いで調整すると⁉　そんなバカな！」

「ふざけんな！　そんなもんお断りだ！　イリナ！　何とか言ってやってくれ！」
新がイリナに助け船を求めるが――イリナは顔を赤らめながら言う
「……新くんとは堕天しないお付き合いがしたいから、賛成かも？　なーんてね」
ウインクする始末……ここに来てから3人とも信徒の精神が高まってしまっている……
「クソッタレ！　逃げるぞ、一誠ッ！　俺達から性欲を消されるのは〝無〟に帰するのと同じだッ！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　性欲を消されてたまるかぁぁぁっ！」
その場を逃げ出す新と一誠だが、シスター・グリゼルダとゼノヴィアに追われ……哀れにも捕まってしまう、その刹那――
ドドォォォォォォォォォンッッ！
とてつもない爆音が響き渡り、周りを見渡す一同
すると、1人の教会関係者が慌てた様子で飛び込んできた
「シ、シスター・グリゼルダッ！　大変です！」
「いったい何が起こったのですか？」
「敵襲です！　何者かがこの建物に乗り込んできました！」
「なんて不届きな……人数は？」

「そ、それが……3人です……っ！」

同時刻、建物に空けられた大穴から3人の襲撃者が侵入してくる
それは『造魔（ゾーマ）』傘下の盗賊ギルド『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』のメンツだった
騒ぎを聞き付けて集まってくる信者や教会関係を前に、襲撃者3人が佇（たたず）む
「ここの支部長がいるらしいが、ソイツを殺せば良いのか？」
タバコを吹かしてそう訊くのは、ガンマン風の男――ジョーズィ・バリスタン
その問いに対して黒髪の女性――マリア・ミルコビッチが答える
「それは性別にもよるんじゃない？　男なら殺しても構わないし、女だったら売り飛ばしちゃえば金になりそうね」
「ここには金目の物が山ほどありそうだな。暴れるのは良いが、派手に壊すんじゃねぇぞ、マリア」
マリアに忠告するのは両腕が太く厳（いか）つい男――ゴリランド・ローニッシ
3人の襲撃者の目が妖しく光る
「さて……タップリ殺して、タップリ稼がせてもらうわよ？」

ＶＳ『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』！

「止まりなさい、不届き者め！」
「神聖なるこの場所に土足で踏み入れるとは、天罰を下すぞ！」
駆け付けた若手のエクソシスト達が『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』の３人を取り囲む
「ジョーズィ」
「ああ」
マリアの声に応じてジョーズィ・バリスタンは腰のホルスターから一丁の拳銃を素早く抜き、直ぐに元の位置に収める
理解不能の動作を見て怪訝に思うエクソシスト達だったが……刹那、その中の何名かが肩や腕、足、腹などを撃ち抜かれて倒れた
いったい何が起きたのか……？
「相変わらず速（はえ）えな」
「さすが早撃ちガンマンね」
「たまには歯応えのある獲物を撃ちてぇよ」
つまらなさそうに愚痴るジョーズィ

どうやら銃で撃ち抜いたようだが、その初動作が全く見えなかった
横で見ていたゴリランドは柱の1本を左手で掴み、強引に引っこ抜いてぶん回す
風圧で周りの物を巻き込みながら、向かってきたエクソシスト達を薙ぎ払う
土煙が晴れると、辺りには倒れたエクソシスト達の姿が……
「壊すなって言った本人が壊してどうすんのよ?」
「ここに金目の物は無ぇから心配無用だ」
「あー、はいはい。そういう事ね」
マリアがやれやれと言った感じでいると、背後から2名のエクソシストが光の剣を振りかざしてきた
マリアは後ろを向いたまま、なんと右足を伸ばしてエクソシストの腹に強烈な蹴りを入れた
少なくとも1メートル以上伸びたマリアの蹴り足は深々と食い込み、そのままもう1名のエクソシストを巻き込んで壁に叩きつける
手応えならぬ、足応えを感じたマリアは壁に叩きつけたエクソシストに向かって吐き捨てる
「激弱っ」
エクソシスト達を一瞬で蹴散らした『三羽の闇鴉』

奥へ進もうとすると、騒ぎを聞き付けた新、一誠、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、シスター・グリゼルダと出くわす

「――――っ。アイツら……まさか『三羽の闇鴉』⁉」

「新、知ってるのか？」

「ああ、悪名高い３人組だ。殺人、強盗、誘拐に密輸、人身売買を手掛ける盗賊ギルド。そんな奴らが何故ここに……」

新達が身構えていると、『三羽の闇鴉』の方も新達を見て気付く

「マリア、ゴリランド、有名どころが登場してきやがったぞ。奴ら……グレモリー眷属の連中だ」

「へー、アイツらが？」

「ああ、噂には聞いてるぜ。赤龍帝とか言うヤツがいるんだよな？　確か名前は……兵藤不摂生」

「兵藤一誠だっ、イッセーッ！　俺は何回名前を間違えられれば良いんだよ⁉」

ゴリランドの言い間違い（笑）にキレる一誠

そんな彼を無視して、『三羽の闇鴉』の３人はアーシア、ゼノヴィア、イリナ、シスター・グリゼルダに目をつける

ジョーズィが懐から手配書らしき紙を取り出す

「元シスターの聖女にデュランダル使い、自称天使に……ここの支部長さまも居やがる」
「プッ、自称とか、笑えるっ」
「偉(えれ)えベッピンが揃ってんな。売春ルートに出せば高値で売れそうだ」
　意地汚く金の話をする3人に対し、シスター・グリゼルダが1歩前に出る
「あなた方、ここを何処だかお分かりですか？　三大勢力の協力体制下にある――――」
「うるせぇ」
ＢＡＮＧ(バン)ッッ！
　有無を言わさずシスター・グリゼルダに向けて発砲するジョーズィだが、新が瞬時に反応して弾丸を弾き返す
　ＩＤカードを着けている間は悪魔の力を使うと不具合が発生してしまうのだが、新は躊躇(ちゅうちょ)無く外して籠手を展開――――シスター・グリゼルダを凶弾から守った
　シスター・グリゼルダの表情が険しくなる
「……どうやら話をするつもりは皆無のようですね」
「当たり前じゃん。ここが三大勢力の拠点の1つだって分かってるから、攻めに来たのよ。それが『造魔(ゾーマ)』からの仕事依頼なんだし。――――で、誰が誰の相手をするの？　ゴリランド、ジョーズィ」
　マリアが嘲笑しながら両脇の2人に言うと、まずジョーズィが切り出す

「そうだな……なら、俺はデュランダル使いと自称天使の相手をしよう。あの２人は剣士だからな、楽に仕留められそうだ」

「ちょっと！　さっきから自称自称って失礼じゃない⁉　私は本物の天使なのよっ！」

先程からの〝自称発言〟にイリナはプンスカと怒りを明らかにするが、

『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』の３人は「違うの？」と異口同音に発する

あまりにも不遇な扱いにイリナは涙目で『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』を睨み付けた

一方、新と一誠はアイコンタクトを取りながら、お互いの相手をどちらにするのか決めようとしていた

『一誠、お前どっちを相手にする？』

『もちろん、あのムッチムチのお姉さんだっ！』

『言うと思った……。悪い事は言わねぇ、あの女は俺に譲れ』

『ふざけんな！　これだけは譲らねぇぞ！　相手が女性なら俺の方が断然有利！

「乳語翻訳（バイリンガル）」＆「洋服崩壊（ドレス・ブレイク）」で必殺必勝ものだろ⁉』

『バカ野郎、相手は裏の界隈（かいわい）でも有名な悪党どもだぞ？　実力は相当なものだろう。ここは俺がやるべきだ』

『いつもいつもお前にオイシイところばっかり持ってかれてる俺の身にもなれよっ！

たまには俺にも譲れよっ！』

「何やらイヤらしい気配を感じますね。あとでキツめに問いただしておきましょうか」
新と一誠のアイコンタクト内容に気付いたのか、シスター・グリゼルダが半眼で見据えてくる
若干の寒気を覚えながらも、新はどうしようかと考察した末……１つの提案を浮かばせた
「仕方ねぇ……やるしかねぇか」
指をポキポキと鳴らす新を見て、一誠もその真意に気付いて拳を握る
「ああ、今回ばかりは話し合いの余地はねぇ。男と男の勝負だ」
いったい何を始めるのか……？
周りの皆が怪訝そうに窺う中、新と一誠は全身からオーラを迸らせ、１つの勝負に走った
その勝負とは――――ッ！
「「「「ジャンケンっ⁉」」」」
鬼気に満ちた空間で行われたのはジャンケンだった……
しかし、それはただのジャンケンではない
新と一誠はお互いの手を見て、超高速で自分の手を変え合っていたのだ
相手がグーを出せば自分はパーに変え、チョキに変えてくれば間髪入れずグーに変え

る

熾烈な変更合戦が繰り広げられた

『この勝負、絶対に負けられねぇ！　必ず勝って、あのお姉さんの相手をするんだっ！　セクシーなボディスーツに包まれたおっぱい！　くびれた腰つき！　ムッチムチのお尻！　これはもう俺が相手するしかないと言わんばかりのエロエロボディじゃないか！　グフフッ、待ってろよ、お姉さんっ。直ぐに「洋服崩壊（ドレス・ブレイク）」して見事な裸体を拝んでやるぜっ！』

一誠は鼻の下を伸ばしながら、尚もジャンケンの手を変えていくが……

『一誠、そう言う気概を絡ませるのは構わねぇけど……読み違えたら意味ねぇぞ？』

ボソッと聞こえてきた新の言葉に、一誠はハッと我に帰ってジャンケン勝負に身を投（とう）じる

しかし、新の手が一瞬だけフェイントを織り混ぜて、一誠の手を先走らせる

見事に引っ掛かってしまった一誠の手はパーを出しきる寸前、すかさず新は自分の手をチョキに変えようとする

『ヤバい……ッ！　このままだと俺がパーで、新がチョキだ！　負ける……負けてしまう……ッ！』

頭では理解してても手が、体が追いつかない

このままパーを出した挙げ句、負けてしまうのか……？
その瞬間、一誠はマリア・ミルコビッチの肢体を瞼（まぶた）の裏に浮かび上がらせる
浮き彫りのボディライン！
触り心地の良さそうなおっぱい！
エロく括（くび）れた腰つき！
ムッチリと浮かび上がったお尻！
『エロは……全ての限界を超えるんだァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！』
その瞬間、一誠の右手が限界を突破し――衝撃波を放った……っ
最後の手が決まる刹那、凄まじい風圧が巻き起こる
新の手は――チョキ
では、一誠の手は……？
「……まさか、あの状態から切り返すとはな」
自嘲するように言う新の視線の先に映ったのは――パーではなく……腕に血管を浮かび上がらせ、至るところから血を流しながらもグーを出している一誠の手だった
一誠は右手の筋を痛めたが、エロパワーで勝利をもぎ取ったのだ
「分かったよ、お前に任せる」
新はそう言って『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』の１人、ゴリランド・ローニッシと対峙する

『や、やったぞ……っ。勝った……。でも、この勝負が終わるまで右手はあんまり使えないかも……っ』

一誠は痛めた右手を擦(さす)りながら、バツが悪そう表情を浮かべる

エロの為とはいえ、右手のダメージが予想以上に大きいものだったからだ

確かに代償は大きいが、得られたものは――――

「で、アンタがアタシの相手をするってわけね？　そんな腕で戦えんの？」

マリアが挑戦的な笑みを浮かべながら訊くと、一誠は不敵な笑みで返す

「ああ、諸事情で右手を負傷したけど……ちょうど良いハンデだ！　何たって俺には秘策があるからな」

その秘策とは無論、『乳語翻訳(バイリンガル)』と『洋服崩壊(ドレス・ブレイク)』の変態コンボである（笑）

それぞれの相手が決まったところで、シスター・グリゼルダが新達に言う

「皆さん、首に下げたＩＤカードを外してください。今はまだ調整中ですので、教会関連の施設内で悪魔の力を使用すると何が起こるか分かりません。苦しくなるかもしれませんが……」

「心配いらねぇよ、シスター・グリゼルダ。コイツを外したら、せいぜい頭痛と寒気が酷くなるだけだ」

結構なハンデだが、この状況下では仕方がない

アーシアは非戦闘要員な為、今は外さずに待機している
外す必要があるのは一誠とゼノヴィア
２人はＩＤカードを首から外すと、途端に寒気が襲ってくる
これでとりあえずの準備は整（ととの）い、それぞれの相手と対峙する面々
一誠は素早く禁（バランス・ブレイカー）手の鎧を身に纏った
それを見たマリアが口元を笑ませる
「へー、それが噂の赤龍帝（せきりゅうてい）ってヤツ？　見た目通り赤いのねッ！」
マリアはその場から右足を急激な勢いで伸ばし、アーシアを蹴り抜こうとする
一誠は咄嗟に背中のブーストを噴かし、マリアの伸びるキックからアーシアを守った
しかし、マリアの蹴りが腹に深々と突き刺さり……一誠は口から血を吐いた
マリアの蹴り脚が元に戻り、一誠は地に膝を付く
「イッセーさんッ！」
「だ、大丈夫だ、アーシア……っ。それより……いきなり何すんだよっ、アンタ……ッ！」
「何って、弱そうな奴を片付けようとしたらアンタが庇って来たんでしょ？　弱そうな奴から仕留めるのは殺しの基本――――知らないの？」
マリアは悪びれもせずに言った直後、再び蹴り脚を走らせる
狙いは勿論アーシア

一誠はその場から動けず、アーシアを守る為に盾にならざるを得なかった
激しい蹴りの嵐が吹く中、横目で見ていた新が一誠に対して毒づく
「一誠、やっぱりお前はエロが絡むと読み違えるよな。よりにもよって1番の手練(てだ)れ相手だぞ？」
新と対峙する巨漢――ゴリランド・ローニッシが言う
「あのガキ、片腕でマリアの相手をする気か？　笑える」
「笑ってくれて構わねぇ。身から出た錆だからな」
久しぶりにS的な発言をする新
マリアは哄笑を上げながら、尚も一誠に〝伸びる蹴り〟をくらわせ続ける
「アハハハッ！　何よコイツ、案外大した事ないじゃんっ！」
「ぐ……っ！　ちょっ、タンマタンマ！　お姉さん、もう少しお手柔らかに！　ゴムゴムの蹴りに加えてヒールっぽいブーツは痛いッ！」
右手を負傷している一誠はアーシアを守りつつ、伸縮自在の蹴りを一方的に受け続ける
さすがにヤバいかも……と察した一誠は、新にヘルプを求めた
「あの～、新？　今更で悪いんだけど相手を変えてくれない？」
「えー？　なんでー？　お前がやりたかったんだろー？　自分の言葉には最後まで責任

を持て。俺から言えるのはそれだけだ。じゃ、そゆ事で」
「この人でなしいいいいいいっ！」
「俺は元々人間じゃないのでっ」
泣き叫ぶ一誠、笑う新
ゴリランドは「俺達よりヒデェ奴かもな」と呟き、太い両腕を振るってくる
大木のように太い豪腕が空を走るが、新は難無く回避する
ゴリランドは舌打ちをしながらも、右手に持っていた巨大な拳銃を向け――発砲する
耳を劈く爆音と共に飛び出す弾丸
新はスレスレで回避し、壁に巨大な弾痕が刻まれる
「……違法改造にも程があるだろ、その拳銃」
頬から血を流す新が毒づくと、ゴリランドは銃口から立ち込める煙を息で吹き消して言う
「造魔の下につけば色々とコネが出来るんだよ。武器も兵器も密輸入し放題、金も儲け放題、オマケに殺しも好きなだけやれる。ボランティア精神で真っ当な生き方をしてるてめぇらの気が知れねぇよ。裏の世界に足を踏み込んでおきながら、良い子ちゃんのフリしてんのか？　バカ丸出しだな」

「俺はなんて言われようと構わねぇ。それでも……一誠達は真剣に考えて、この世界を生きてるんだ。こんな俺にも〝仲間〟だなんて言ってくれる。そんな奴らを守る為に――俺はこの世界に踏み留まっているんだ。向かってくるなら容赦はしない……覚悟しとけ」

一方、『三羽の闇鴉（バンディット・レイヴン）』の1人、ジョーズィ・バリスタンと戦っているゼノヴィアとイリナは間髪入れず放たれる銃撃に苦戦を強（し）いられていた

ジョーズィは左手にも銃を携（たずさ）え、2丁拳銃で彼女達を近寄らせない

使っているのはリボルバーなのだが、撃った後の再装填（リロード）の速度が異常に速い為――ゼノヴィアとイリナは思うように距離を詰められずにいた

ジョーズィが嘆息してから言う

「剣士ってのは不便だよな。せっかくのデュランダルとやらも、こんな施設内じゃあ真価を発揮できやしねぇ。それとも玉砕覚悟で振り回してみるか？　ま、生き埋めになるのがオチだけどよ」

「く……っ！　舐めるな……っ！」

苦虫を噛み潰した表情になるゼノヴィアだが、ジョーズィの言ってる事は正論だった
狭い室内ではデュランダル本来のパワーを発揮する事が出来ない
まさに宝の持ち腐れ……
それでもゼノヴィアはデュランダルを構え、突っ込んでいった
ジョーズィの弾幕射撃を躱しつつ、何とか距離を詰めようとする
イリナも光力で生み出した槍を投擲して牽制し、ゼノヴィアをサポート
そして、ようやく太刀が届く距離にまで詰め寄る事が出来た
デュランダルを振りかざし、ジョーズィの頭上に振り下ろそうとした刹那――
「甘いな」
ジョーズィがそう呟いた直後、拳銃のグリップからナイフの刃が飛び出し、振り下ろされるデュランダルの刃を受け止めた
実はジョーズィが持っている拳銃は遠近両用の武器だったのだ
ジョーズィはデュランダルを受け流し、左手の銃をゼノヴィアに向ける
「Ｇｏ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ……!!!」
〝地獄へ逝け〟と言い、引き金を引く……！
ＢＡＮＧッツ！
壁に刻まれた弾痕……っ

ゼノヴィアは……身を捩らせてギリギリで銃撃を回避していた
背後に回り込もうとするゼノヴィア
ジョーズィは振り向きざまに右手の銃で撃ち抜こうとするが、ゼノヴィアがデュランダルから分離させたエクスカリバーで防ぐ
「二刀流はお前だけじゃないっ！」
「俺は〝二刀流〟じゃなくて〝2丁拳銃〟だがな」
謎の口論をしながらジョーズィが身を翻し、2丁拳銃を乱射
ゼノヴィアは滑り込むように銃撃を躱し、ジョーズィがその場から跳ぶ
ゼノヴィアの頭上に跳んだジョーズィは、逆さまの体勢のまま銃口を向けた
けたたましく鳴り響く銃声
ゼノヴィアはギリギリで回避したものの、先程までゼノヴィアがいた場所には無数の弾痕が刻まれていた……
着地し、再び相対するゼノヴィアとジョーズィ
「……Ｇｏｏｄ！　剣士にしては良い動きしやがるじゃねぇか。俺の早撃ちをここまで避けた奴はお前が初めてだ」
「造魔の傘下に入った悪党に褒められても嬉しくないんだがな」
「へっ、そうかよ」

ジョーズィは両手の拳銃をクルクル回し、再び銃口をゼノヴィアに向ける
遠距離では分が悪く、接近戦でも決定打を決められない……
「直ぐにＴｈｅ　Ｅｎｄ（ジェンド）にしてやるぜ」
引き金を引こうとした瞬間、ジョーズィは小さな違和感に気付く
自分が相手にしているのは目の前のゼノヴィア
そして、もう１人―――イリナだが、その姿が少し前から見当たらない
警戒心を強め、目でイリナを探すジョーズィ
刹那、気配を察したのか……ジョーズィは背後に向けて銃を乱射した
しかし、全ての銃弾はイリナを捉える事も無く、壁に食い込むのみ……
その一瞬の隙を突いてゼノヴィアが真っ正面から飛び出す
ジョーズィは直ぐに両手の拳銃をゼノヴィアに向けようとするが……右手だけが何かに掴まれたかのように動かせない
突然のアクシデントにジョーズィは判断が遅れ、悪あがきとばかりに空いてる左手の銃でゼノヴィアを撃ちまくる
ゼノヴィアはデュランダルを盾のように構えて銃弾を防ぎ、距離を詰めてエクスカリバーでジョーズィを斜め下から斬り払った
体の前面から血を噴き出すジョーズィ

銃を落とし、傷口に手を当てながら足取りをふらつかせる
「……何故だ、何故剣士ごときに俺が……っ？　それに……あの天使の女は何処に消えやがった……っ？」
憎々しげに言うジョーズィに対し、ゼノヴィアは「種明かしをしてやろう」と得意気に言う
その直後、ゼノヴィアの隣にイリナの姿が見え始めた
イリナもフフンと自慢げに言う
「さっきゼノヴィアがデュランダルからエクスカリバーを分離させる時、実は密(ひそ)かにもう2本のエクスカリバーも分離させていたのよ。透明になれるエクスカリバーと、擬態のエクスカリバーをね」
「私が囮になっている間にイリナがトランスペアレンシーの能力で透明になり、ミミックの能力ででお前の片腕を封じた。そこを斬らせてもらったと言うわけだ」
いつの間にかジョーズィは2人の術中に嵌まっていたようだ
長年コンビを組んできたからこそ、阿吽の呼吸で実現できたのだろう
ジョーズィは舌打ちをして、最後に毒づきながら天を仰ぐように倒れた
「話が違うじゃねぇか……っ。デュランダル使いの方は……ただのパワーバカじゃなかったのかよ……っ」

〝パワーバカ〟発言にゼノヴィアは「もう一度斬ってやろうか」とむくれていた（笑）

場面変わって、新ＶＳゴリランド戦
こちらは殴り合い等の白兵戦が目立ち、今のところは新が優勢だった
ゴリランドが持っていた巨大な拳銃を握り潰し、黒い火竜を纏わせた拳を向ける
「さーて、そろそろトドメと行こうか？」
「フン、それはこっちの台詞だ。ガキめ」
そう言った直後、ゴリランドの体が端々から消え始める……！
足も、腕も、遂には全身が全く視認できなくなった
ゴリランドの消失に新は一層身構えるが、突如殴られたような衝撃が走る
新は直ぐに視線を向けるが……やはりゴリランドの姿は無い
右から、左から、前から、後ろからとボコボコに滅多打ちにされてしまう
『クソ……ッ！　まさか、コイツ……透明になれるのか⁉』
新の考えは正しく、ゴリランドは自身を透明にできるのだ
この能力の正体は神器（セイクリッド・ギア）――――『姿無き狩人（ハイド・アンド・シーカー）』によるものである

透明と化したゴリランドの猛攻が続き、新の顔が血に染まっていく
何とか活路を見出だすべく、目を逸らさずゴリランドの姿を追おうとする
しかし、透明になっているので見つける事など出来るわけがない
ゴリランドの殴打が一旦止まり、ボンヤリと姿を現す
新は親指で右の鼻孔を押さえ、フンッと左の鼻孔から鼻血を噴出させる
「なるほど、さすがは悪名高き盗賊どものやる事だ。コソコソ隠れて殴るのが趣味か」
「てめぇ、まだそんな減らず口が叩けるのか。俺が今まで何人殴り殺してきたと思ってる?」
「さあな。だが……だいたいの目星は付いた。今度こそ次で決めてやるよ」
新の不敵な台詞にゴリランドはイラつき、舌打ちをする
「だったら、お望み通り殺してやるよ」と前置きをしてからゴリランドは再び姿を消してきた
それに対して新はその場から1歩も動かない
まるで〝何処からでもかかってこいよ〟と言わんばかりに無防備な姿を晒している
それでも視線だけは戦意を灯しており、周囲を隈無く見渡す
『バカなガキだぜ。目視で俺を捉えられると思ってんのか？　次は頭を砕いてやる』
透明状態のゴリランドは新の頭上に回り込み、太い両手を合わせた体勢で落ちてくる

両手を合わせたハンマーナックルで新を粉々にするつもりだろう……

射程距離に入った刹那――――

「そこかッッ！」

「――――ッッ⁉」

いきなり居場所がバレた事に驚愕するゴリランド

新は右手から黒い火竜を解き放ち、頭上にいたゴリランドを焼き払った

全身を焼かれ、透明状態から元に戻されたゴリランドは黒煙を立ち込めながら地に落ちる

黒焦げと化したゴリランドがピクピクと体を痙攣させ、「な、なんで俺の居場所が分かったんだ……っ？」と信じられないように問う

その問いに新が答える

「調子に乗って俺を殴りまくったのが運の尽きだったな？　お前の体に付いた俺の返り血が居場所を教えてくれたんだよ」

「返り血だと……⁉　バカな……ッ！　確かに付着したが、俺の神器（セイクリッド・ギア）で透明にした筈――――」

「その能力、匂いまでは消せてねぇだろ？」

「に、匂い……ッ⁉」

「そうだ。姿形は消せても匂いまでは消せなかった。それにお前の両腕――――ソイツは義手なんだろ？　油臭さがプンプン匂うから、分かりやすかったぜ。それに俺の血の匂いも合わされば……目を瞑ってても居場所を割り出せる。最近の俺は鼻が利くようになってきたからな」

散々殴られたお返しか、皮肉めいた台詞で一蹴する新

詰めが甘過ぎたゴリランドはそのまま意識を失った

一誠ＶＳマリア戦

こちらの戦況は芳(かんば)しくないものだった

マリアの伸縮自在の蹴りを一身に受け続ける一誠

度々(たびたび)アーシアを狙い続けてくるので、攻撃に転じる事が出来ない

「んで、いつまでお姫様を庇ってんのよ？　クソガキ」

「ぐ……っ。遂にクソガキにまでグレードダウンしちまったか……っ」

「そっちの金髪お姫様を狙ってりゃ、勝手に攻撃を食らってくれる。バカ丸出しじゃない。右手を怪我してまでアタシと戦いたがってた割りには大した事ないわね」

呆れた表情で毒づくマリアにムカッときたのか、一誠は魔力を高め始めた
「さすがにそこまで言われたら、黙っちゃいられないよな。良いぜ、アンタの度肝を抜かせてやるっ！」
「へー、面白いじゃない。やれるもんならやってみなさいよッッ！」
マリアは再び伸縮自在の蹴りを連続で見舞ってきた
一誠はその全ての蹴りをガードしつつ、１歩ずつ前へと進んでいく
マリアは伸ばした右足を一誠の左腕に絡め、伸縮性を利用した飛び膝蹴りを食らわせる
顔面にクリーンヒットしたせいで一誠の兜は破損し、背中から倒れ込む
更にマリアは尖ったブーツで一誠の右手を踏みつける
先程のジャンケンで負傷した右手を踏み抜かれ、一誠の顔が苦痛に歪む
「中途半端に紳士ぶってバカね、アンタ」
「そう笑っていられるのも……今のうちだっ！」
踏みつけられながらも一誠は左手でマリアの足に触れ、久々たる〝あの技〟の条件を整えた
そして、指パッチンと共に――――
「食らえっ！　洋服崩壊（ドレス・ブレイク）ッッ！」

指を鳴らした瞬間、マリアのボディスーツが弾け飛び――瞬く間に彼女は全裸となった

一誠は倒れた体勢でいる為、全裸となったマリアの〇〇〇も丸見え

破損した兜の隙間から鼻血を噴出した

『やはりお祓いをした方が良さそうですね、それも念入りに……』

一瞬シスター・グリゼルダの良からぬ幻聴が聞こえた気もするが、そこはとりあえず後回し（笑）

「グフフッ、どうだ⁉　おっぱいもお尻も丸見えっ！　これでもう戦闘は出来ないだろうっ！」

「……で、これが何？」

「え……いや、だから、俺の必殺技ドレス・ブレイクでして――」

「ああ、これが噂に聞く変態技ね。――だから？」

なんとマリアは怯んだり恥じらうどころか平然としていた……！

おっぱいもお尻も〇〇〇も丸見えであるにもかかわらず、踏みつけの体勢を緩めない

初めての体験に一誠は焦燥感に駆られた

「な、なんで平気なんだ⁉　女性なら普通は『キャーッ！』とか『イヤーッ！』とか言って恥じらう筈なのに！」

「別にい、造魔（ゾーマ）の下についた時から女なんて捨ててるし。そんなのいちいち気にしてたら生き残れないわ」
マリアはそのまま足を頭上に掲げ、カカト落としの体勢を取る
勿論、丸見えの○○○（ピー）が視界に映った為、一誠は更に鼻血を噴かせる
「アタシが欲しいのは大金と――――相手を殺した時に得られる快感よッッ！」
迫り来るカカト落としに対して、一誠は背中のブーストを噴かし――――推進力を利用してマリアを引き離した後、体勢を立て直す
吹き飛ばされたマリアだが、こちらも直ぐに体勢を立て直して着地する
「じゃあ、そろそろ殺してやるわっ」
ドロリ……ッ！
突然マリアの全身が歪みだし、ゼリーのような不定形へと変貌していく
奇妙な現象に一誠は驚愕、液状化したマリアが地を這うように高速で詰め寄る
一誠の全身に絡み付き、両手両足を拘束した
「な、何だよ、コレ……ッ！」
引き剥がそうと一誠はもがこうとするが、それも叶わず……
マリアが全裸の上半身を具現化させて一誠の首を絞めに掛かる
「アタシはね、変形粘獣（シェイプ・シフター）って言うスライムの亜種なのよ。体をどんな形にも変えられ

るってわけ。体が伸び縮みするのもスライムの特性よ」
マリアの正体は人型のスライムだった……
スライムゆえに手や足を伸縮自在に伸ばせる
マリアの正体を知った一誠は……唐突に思い出し泣きをした
「くぅぅぅ……っ。スラ太郎……っ、触手丸ぅぅぅ……っ」
「なんで泣いてんのよ」
「……グスッ、いや、使い魔にしたかった俺の友の死を思い出して……っ」
思い出話に浸る気は無いのでマリアは首絞めに力を入れる
首の骨が軋み、頸動脈を絞められて窒息感が増す
「まあ、とりあえず死になさいよ。裸の女に抱かれながら死ねるって男の夢でしょ？」
「……ッ！　悪いけど、童貞のままで死ぬのはゴメンだ……ッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

自らを焼く勢いで出した捨て身の火炎放射
一誠の体に絡み付いていたマリアも火に焼かれる
「――――ッ⁉　アンタ正気……っ⁉　どんな自爆攻撃してんのよ……っ！」
「なり振り構ってられないからな……ッ！　造魔の連中を退けるには、これぐらいの無茶しねぇとよ……ッ！」
「ハッ、それこそ無理な話ねっ！　造魔には想像を絶するバケモノが大勢いるのよッ！　国ごと凍り漬けにする悪魔殺しとか、近付いただけで命を殺ってくる死神とか、得体の知れないフランス被れの奴とか！　それだけでも卒倒ものだってのに……魔剣聖ってボスは人外魔境を超えてるし、幹部以外にいる奴らだって凶悪な猛者揃いなのよっ！　命がいくつあっても足りないわっ！　そんな連中に歯向かうとか、アンタら三大勢力は頭おかしいんじゃないのっ⁉　あー、既に頭おかしくなってんのね！　だから未だに死人が多いのかしら⁉」
マリアはこれでもかと言うぐらいの暴言を吐きまくるが、一誠は轟々と燃え盛る火に耐えながら反論する
「そんな連中がいるからっ、俺達だって必死になって……平和を維持させたいんだッ！　造魔を野放しにしておけば、また誰かが理不尽に苦しめられる……ッ！　そんな世界が嫌なんだよ、俺達は……ッ！　だから……相手が誰だろうと戦うしかないんだッ！

敵が果てしなく強大で凶悪な事ぐらい分かってんだよッ！　それでも……俺は赤龍帝(せきりゅうてい)で、『おっぱいドラゴン』だから――逃げるわけにはいかないんだよっ！」

一誠の叫びに呼応したのか、炎の勢いが一層増していく

平穏な日常を守る為、子供達の笑顔や未来を守る為、造魔(ゾーマ)に屈するわけにはいかない……っ！

確かに造魔(ゾーマ)は今までに無いほど恐ろしい組織であり、首領たるバサラ・クレイオス、その周りを囲む幹部格もバケモノ揃い

並大抵じゃない事ぐらいは百も承知……

だからこそ、平穏な世界に蔓延(はびこ)らせてはいけない……っ

一誠の気迫に気圧(けお)されたのか、マリアは――

『今のご時世にヒーロー気取りとか、ピュア過ぎるでしょう……っ』

半(なか)ば諦めた感じで愚痴ったが、その表情は何処となく安らかなものだった

「では、イッセーさま。彼女達の移送は責任を持って私達が請け負います」

「助かるよ、ユキノさん。それにしても驚いたな。まさかユキノさん達がこの近くに来

ていたなんて」

「万が一の保険にと、アザゼルさまより仰せつかって参りました」

『三羽の闇鴉』との戦いは新達の勝利に終わり、アーシアの神器で傷も完治

マリア、ゴリランド、ジョーズィはユキノ達に身柄を拘束されていた

ユキノ、ディマリア、チェルシーらは事前にアザゼルから『念の為、イッセー達が向かう施設の付近で待機していてくれ』と頼まれ、現在に至るのだ

その上、彼女達の中にはもう1人見知った女性もいる

「ヤッホヤッホ、赤いドラゴンくん。ユキノから聞いてるゾ。ワタシの妹も助けてくれてありがとだゾ♪」

露出度の高い水着のような格好で可愛くウインクしてくるのはユキノの姉――ソラノ・アンジェル

彼女もまたアザゼルの口利きにより、ユキノ達と共に行動できる権限が与えられたのだ

ソラノは一誠の首に両腕を回し、自分の胸を押し付けるように密着してくる

ユキノに負けず劣らずのおっぱいが形を歪め、一誠は「ふおおっ!?」と驚く

「ユキノはキミに夢中みたいだし、ワタシもゾッコンだゾ……。この後でシッポリと姉妹丼でもご馳走してあげようか――だゾ？」

「えええっ！　マ、マジっすか⁉」
「ソラノお姉さま、しまいどんって何でしょうか？」
無垢なユキノにソラノが耳打ちで〝姉妹丼〟の意味を教えると……途端にユキノは顔を真っ赤にして、一誠を見ながらアワアワと挙動不審になってしまう
一誠は驚きながらもソラノとユキノ――――姉妹とのイチャラブ場面を想像するが……
「一誠、そのニヤケ面はやめておけ。おっかないシスターが目を光らせてるからな」
新の一言でハッと我に返る一誠
その意味通り、シスター・グリゼルダが迫力ある笑顔で睨んでいたのだ
「……やはり、お祓いをした方が良さそうですね。念入りに、タップリと１０時間ほどかけて」
「いやぁぁぁぁぁっ！　助けてぇぇぇぇぇぇっ！」
シスター・グリゼルダの気迫とお祓い宣言に一誠は取り乱し、緊迫状態だった空気が少しだけ和む
だが――――っ
「……っ。どうやら、まだ奇襲は終わってねぇようだな」
気配を気取った新が警戒を強めた口調で言う

その瞬間、ガシャァァァンッ！と窓の割れる音が内部に響き渡り……何者かがシスター・グリゼルダに襲い掛かっていく
その正体は――――造魔（ゾーマ）の尖兵トランザー
「死ね」
淡々と告げるトランザーは太い腕から生えている刃（ヒレ）で、シスター・グリゼルダの首を切断しようとする
しかし、いち早く気配を察した新が防いだ事で失敗に終わる
殺害に失敗したトランザーは一旦距離を取り、ゴキッと指を鳴らす
「てめぇは……あの時のサメ野郎ッ！」
「また会ったな、赤いトカゲもどき。今回は温情など掛けんぞ。確実に殺す」
「こっちだって、やられっぱなしでいてたまるかっ！」
一誠は再び禁（バランス・ブレイカー）手の鎧を着込み、背中のブーストを噴かして加速
トランザーに拳打を見舞うが、トランザーは強靭な肉体で容易（たやす）く防ぐ
だが、奇襲はトランザーだけではない……
直ぐにもう１人、シスター・グリゼルダと新の前に人影がやって来る
若草色の髪に色黒の肌をした男だ
「――――ボオッ」

男がそう呟いた途端、巨大な炎が発生し――――新とシスター・グリゼルダを呑み込もうとする
新は瞬時にリュオーガ族直伝の〝竜の呼吸法〟で炎を吸い込み、難を逃れた
シスター・グリゼルダが驚きを隠せない表情で言う
「あなたは、そんな事も出来るのですか……？」
「ああ、ドラゴンの欠片で創られたからこそ会得した力だ。今じゃ頼もしい限りだ」
炎を喰い終わった新がもう1人の襲撃者を見据える
「さっきの攻撃……妙に覚えがあるんだが、テメェ何者だ？」
「我に名は無い。……否、名はあるようだ。我は深淵たる尖兵――――厄災（やくさい）のテンペスターなり」
「……ッ⁉　テンペスターだと⁉　あの時の獣人みたいなヤツか⁉　丸っきり別人じゃねぇか！」
驚く新にトランザーが捕捉する
「姿形は別物だが、ソイツは紛れも無くテンペスターだ。ヤツは再生する度（たび）に姿を変えられるらしい。……確かセイラと言う娘の要望で今の姿になったと聞いたんだが」
「それにしてもビフォーアフターが過ぎるだろ⁉　……ったく、ややこしいったらありゃしねぇ」

改めて対峙する新とテンペスター

テンペスターが静かに口を開く

「お前、我の記憶に残っている。我が１度滅びる羽目になった者。今度は我が貴様を滅ぼす番だ」

「そうかい。だったら今度はモデルチェンジ出来ないように――――徹底的にやってやる」

赤龍帝（イッセー）ＶＳトランザー

闇皇（アラタ）ＶＳテンペスター

因縁とも言える四者、その戦いの火蓋が切って落とされる……っ！

深淵の闇（ダークネス・フォーム）、晦冥（かいめい）のトランザー

「ヒュルッ」
遂に始まった因縁のリベンジマッチ
新はテンペスターと、一誠はトランザーが相手と言う振り分け
テンペスターの作り出した無数の竜巻が新に襲い掛かる
新は剣に火竜のオーラを纏わせ、向かってくる竜巻を片っ端から斬り裂いていく
その後、剣を勢い良く振り抜いて、剣に纏わせていた火竜を放つ
大口を開けながらテンペスターに向かっていく火竜
テンペスターはその場から動かず――――
「ドザァッ」
一言呟いた途端、大雨が降り注ぐ
大雨に打たれる火竜は次第に勢いが衰え、遂に消えてしまう……
テンペスターは「ビュンッ」と動きを加速させて詰め寄り、新に蹴りを入れる
新は体勢を崩され、更なる追撃が来る

「ゴロロンッ」
新の頭上から膨大な雷撃が降り注ぎ、新の全身を呑み込む
雷に打たれながらも、新は先程と同じように竜の呼吸法で迸(ほとばし)る雷を喰らう
身体中からプスプスと黒煙を上げる新は、テンペスターを睨み付ける
「チクショウ……この前よりも強くなってやがるな」
「炎だけでなく、雷も喰うのか。奇異な奴だ」
「それはこっちの台詞だ……ッ！」
新は両手両足に火竜のオーラを纏わせ、テンペスターに拳と蹴りの乱打を繰り出す
テンペスターは「ガキンッ」と肉体を硬質化させ、肉弾戦で対抗する
殴打合戦の中でも時折(ときおり)火竜を放つが、テンペスターは鋭利な刃物に変化させた十指で切り裂く
多彩な技と技のぶつかり合い……
新とテンペスターの戦いをそう例えるのなら、一誠とトランザーの戦いは〝力と力のぶつかり合い〟と言うべきだった
「うおぉぉぉぉおおおおっ！」
「フンッ」
一誠の拳打を同じく拳打で迎え撃つトランザー

何度も何度も入れているにもかかわらず、トランザーには決定打を与えられない
しかも、このトランザーはパワーだけに留まらず……
一誠が見舞った拳打を片手で止め、更にそれを内側に捻って転がす
関節を捻られ、なす術無く転がされた一誠に対して――――トランザーは追い討ちの踏みつけ
背中に重量級の衝撃がのし掛かり、口から胃液を吐き出してしまう一誠
トランザーは更に跳躍して、エルボードロップの体勢で落ちてくる
ギラリと鈍い光を放つ刃が迫り来る
一誠は咄嗟に背中のブーストを噴かして、その場から緊急離脱
トランザーの刃がフロアの床に突き刺さり、先程まで一誠がいた場所は大破する
ムクリと起き上がるトランザーに対し、一誠は再度ブーストを噴かせて突っ込んでいく
「まだ懲りずに殴ってくるか。ワンパターンな奴め」
「うるせぇよっ！」
一誠の拳打をまたも軽々と止めるトランザー
その直後、一誠は「新アッ！」と呼び掛けてからトランザーの腕を掴む
一誠の呼び掛けに意図を察した新は、テンペスターの蹴り足を掴み――――お互いの相

手同士を激突させようとする
しかし、そうは問屋が卸さない……
「ドドンッ」
テンペスターの発した衝撃波が新と一誠を上から押し潰し、２人のコンビプレイは失敗に終わってしまう
目論見を潰したテンペスターとトランザーはそれぞれの相手を殴り飛ばし、新と一誠は壁に叩き付けられる
「ズバババンッ」
テンペスターが腕を振るうと無数のカマイタチが発生し、２人を切り刻もうと襲い掛かってくる
カマイタチは猛威を振るい、壁もろとも２人を切り刻んでいく
全身を斬られ、血を噴き出す新と一誠
更にバラバラに切り刻まれた壁が２人の頭上から降り注ぎ、押し潰される
瓦礫の下敷きとなってしまい、血が床に拡がっていく……
トランザーとテンペスターは踵を返し、今度はアーシア達の方に視線を移す
得物を手にして身構えるゼノヴィアとイリナ
その時、背後から瓦礫がはね除けられ、新と一誠が飛び出してきた

「まだ終わっちゃいねぇんだよッ！」
「アーシア達に近づくんじゃねぇッ！」
飛び出してきた両者に対し、トランザーとテンペスターが再び迎え撃つ
新の火竜を纏わせた打撃を、テンペスターは竜巻の両腕で防ぐ
一誠の拳打をトランザーは頑強な刃（ヒレ）で受け止める
その後、熾烈な白兵戦が続き……一旦距離を取る四者
新と一誠は息が乱れているが、トランザーとテンペスターは相変わらず余裕の様子を崩さない
そして、テンペスターが一言漏らす
「飽きたな」
「ウム……そろそろ認めてやろう。こやつらはただの悪魔にあらず」
不穏な台詞が出た直後、トランザーとテンペスターの体から呪力（じゅりょく）のオーラが滲み出てくる
揺らめく呪いのオーラはまるで生物のように新達を睨み、周囲の空気を震撼させる……
その震えは次第に大きくなり――2匹のバケモノに異変が訪（おとず）れる
「我ら深淵の力を解放しなければ、破壊できぬ相手と見た……ッ」

トランザーの体が一回り肥大化、頭と両腕の刃（ヒレ）が更に鋭さを増し、頭部もより凶悪じみた様相となる
「本気で行くぞ……ッッ！」
テンペスターは鬣（たてがみ）が伸び、黒い体毛が身体中を覆っていく
以前、新と対峙した時の姿と似ているが……今度は計４本の魔手（ましゅ）を生やす獅子の獣人と化した
その光景を見てイリナが表情を強張（こわば）らせる
「な、なに……この重圧……っ⁉」
「ああ、さっきまでとは桁違いだ……っ。嫌な脂汗が出てくる……っ！」
ゼノヴィアも２匹の尋常ならざる気迫に当てられ、顔を顰（しか）める
当然、新と一誠にもプレッシャーが伝わっているだろう……
「ここからが本番ってわけか……ッ！」
「新、だったら俺達も――――」
「ああ、遠慮無く――――」
「本気で行くぞッッ！」
負けじと２人も本気を出す事を決意
新は竜の力を完全解放し、一誠は『真・女王（クイーン）』の呪文を唱える

新の体から黒い炎と雷が迸り、一誠が呪文の最後の一節を謳う
『Ｃａｒｄｉｎａｌ　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ!!!!』
莫大なオーラが解き放たれ、新と一誠の変化も完了した
新の『超越の黒竜帝』雷炎モード
一誠の『真紅の赫龍帝』
「深淵の闇――解放ッッ！」
トランザーは更に大柄なサメ型の怪物と化し、テンペスターは4本の魔手を広げた獅子の獣人となった
佇んでいるだけなのに、その場が凶悪なオーラの渦に包まれる……
天地を揺さぶり、イリナ達が固唾を飲んで見守る刹那――地面が爆ぜた
新とテンペスターは同時に空中へ飛び出し、高速かつ連続の打ち合いを始めた
あちこちで飛び散る衝撃は大きく、打撃が衝突する度に建物内が震撼する
一誠とトランザーも重量級の殴打合戦を繰り広げ、こちらでも大きな衝撃が飛び交う
「……出来る事なら、ここを壊さないで戦ってもらいたいものですね」
シスター・グリゼルダがボソッとそう呟くが、それは無理な話である
何せ相手は規格外の組織――造魔が送り出した怪物２匹
本気でやらねば倒すどころか、亘り合える相手ではない……

壮絶な打ち合いが一頻（ひとしき）り終わると、テンペスターが「ヒュルッ」と竜巻を全身に纏い、新に向かって突進していく

凄まじい勢いで滑空し、竜巻の拳を突き出す

新も雷炎を纏った拳打で迎撃しようとするが……テンペスターの狙いは別にあった

拳同士を激突させるのではなく新自身を捕らえて、建物の窓を破り外へ飛び出していく

「このっ、何しやがるっ!!」

「我は貴様を確実に殺す。その為に場所替えだ」

新を外へ連れ去っていくテンペスター

一誠は追い掛けようとするが、トランザーに行く手を阻（はば）まれる

「くそっ！　そこを退（ど）きやがれっ！」

「そうはいかん。確実にお前を葬（ほうむ）る為、ヤツには場所を移してもらった。安心しろ。直ぐに同じ地獄で再会する事になるだろう」

そう言うとトランザーの体から呪力のオーラが揺らめき、より一層濃くなる

「招待しよう。お前ら一介の悪魔ですら抗（あらが）えない冥府の深海へと……ッ。――――『天地晦冥（てんちかいめい）』ッッ！」

ドドドドドドドドドドドドッッ！

トランザーの周りから黒い水が大量に噴き出し、凄まじい勢いで建物内を浸水していく

一誠達も黒い水の勢いに呑まれ、強制的に建物の外へ追いやられてしまう

噴き出した黒い水の勢いは止まらず、周辺一帯をどんどん覆っていく

それは何処までも広がる黒い大海原の如し……

一誠は「ぷはぁっ！」と水面から顔を出し、続いてアーシア達も水面から顔を覗かせる

「どんだけ広範囲に出してんだよ……っ!?」

一誠はヤバそうな雰囲気を察したのか、ユキノに向かって叫ぶ

「ユキノさん！　アーシアや皆を避難させてくれ！」

「は、はい！　ですが……イッセーさまも――」

「俺は大丈夫！　どっちにしても、あのサメ野郎を食い止めなきゃならないんだ！」

「……分かりました。くれぐれもお気をつけて」

「ワタシも手伝うぞ、ユキノ」

ユキノは神器（セイクリッド・ギア）――『獣達の楽園（ゾーオン・ガーデン）』の能力で鳥のような姿となり、姉のソラノも神器（セイクリッド・ギア）――『天使創造（シンセティック・エンジェライズ）』により、コインから天使を生成してアーシア達を近くの高台へ避難させる

自分もひとまず空へ飛んで体勢を立て直そうとしたが……直ぐに海中へと引きずり込まれてしまう

無論、一誠を海中に引きずり込んできたのは――トランザーだ

極太の右腕を構え、一誠の首元にラリアットを打ち込む

ただでさえ息の出来ない水中戦、更に首元への攻撃はまさに二重苦（にじゅうく）である

トランザーのラリアットをまともに食らい、ゴボッと空気を吐き出してしまう一誠

トランザーは悠々と海中を泳ぎ、一誠の前に立ち塞がる

一誠はお返しとばかりにドラゴンショットを撃とうとするが――放たれた魔力はあまりにも弱々しく、勢いが無いものだった

『……っ!!　魔力が上手く撃てない……っ!!　それに何だ……この水……？　浸かってるだけなのに、力が入らねぇ……っ』

一誠が黒い水に対して違和感と疑念を抱えている間に、先程放ったドラゴンショットがようやくトランザーの元に届く

しかし……勢いの無いドラゴンショットはトランザーに命中したかと思えば――パシュンッと儚（はかな）く霧散していった……

トランザーはポリポリと被弾した部分を掻き、自身が出現させた黒い水について語り始める

「力が入らぬか？　それも当然。この『晦冥の黒水』はお前達の魔力などを著しく低下させる作用があるのだ。更に毒性もあり、少しでも飲めば5分程度で死に至る。いや……それ以前にお前達のような地上の生物は、水中で5分も息が続かぬか」

つまり、トランザーが出したのは猛毒の水……！

それが建物だけでなく、周辺一帯を覆い尽くしている……！

しかも、タイムリミットは僅か5分しかない……！

『ソッコーで片付けるしかないってのか！』

一誠は籠手から何度も倍加の音声を鳴らし、魔力を上昇させる

背中のブーストを噴かして距離を詰めようとするが……地上での戦いと違って、水の抵抗が邪魔して思うように速度が出ない

海中だと〝多少速い〟程度の動きにしかならなかった

それでも何とか拳を突き出すが……トランザーは易々と回避する

まさしく水を得た魚の如し、自由自在に泳いで海中での機動力を見せつける

『地上でさえ厄介だったのに、水中でこの速さとか反則だろ……ッ！』

一誠は心中で毒づきながら懸命に攻撃を当てようとするが……拳も、蹴りも、魔力も全てが威力不足で通じない

水の抵抗と毒性により、一誠の動きは完全に封殺されていた……！

トランザーは素早く一誠の頭上に回り込み、極太の右腕に呪力のオーラを溜め込む
危険な密度の呪力に包まれた右腕を構え――――
「ディープ・インパクトォッッ！」
トランザーの破壊力に満ちた拳が一誠に炸裂
一誠はまともに食らったせいで勢い良く海底に叩き付けられ、空気と共に血を吐き出してしまう
たった一撃で筋肉も骨も内臓も悲鳴を上げる……
『……ッッ！　こ、こんなの食らい続けたら……マジで身が保たない……ッ！　それ以前に息も続かない……ッ！』
一誠は急いで水面に浮上すべく、魔力を増大させて背中をブーストを噴かした
「ほう、オレのディープ・インパクトを受けてまだ動けるのか。大した頑丈さだ」
水面へ逃げていく一誠を追い掛けるトランザー
一足先に水面から顔を出した一誠は苦しさからゲホゲホと噎せて、新鮮な空気にありつける
高台の方から「イッセーさん！」とアーシアが呼び掛けてくるが、一誠は応える暇も無く再び水中へと引きずり込まれていく
『クソ……ッ、コイツ……ッ！』

「この海域(かいいき)にいる限り、お前の攻撃などカトンボ以下に成り下がる。おとなしく水葬(すいそう)された方が苦しまずに済むと思うが？」
『ふざ、けんなよ……っ！　こんな暗い海の底で死んでたまるか……っ！』
「無駄な足掻きだな。漆黒の海の藻屑(もくず)となるが良い」
トランザーは再び一誠を海底に叩き付けた

一方、高台に避難したアーシア達は当惑していた
先程は一誠が水面から顔を出してきたのに、直ぐに水中へと引きずり込まれる場面を見てしまったからだ
アーシアは真っ先に助けに行こうとしたが、ゼノヴィアとイリナに止められる
アーシアは元々泳ぎが得意じゃない方なので、飛び込んだとしても助けられる可能性は極めて低い
「それにこの黒い水……何か良からぬ力を感じます。無作為(むさくい)に飛び込むのは危険過ぎますね……」
シスター・グリゼルダも黒い水の危険性を気取ったのか、重苦しい表情で告げる

アーシアが回復のオーラを飛ばすと言う方法もあるが、漆黒に染まった海中は非常に見えづらく、一誠の居場所を突き止められない

このまま指を咥えて見ている事しか出来ないのか……？

全員が後込みしていると……ユキノが1歩前に出た

「私がイッセーさまのもとへ参ります」

ユキノの神器（セイクリッド・ギア）――『獣達の楽園（ゾーオン・ガーデン）』は動物の特性を使用および任意の動物に変化する事が出来る

陸上生物や鳥類は勿論、水棲生物の能力を使用する事も可能である

……とは言え、トランザーが出現させた『天地晦冥（てんちかいめい）』の黒水（くろみず）は毒その物

そんな危険な水の中に飛び込めば命の保証は無いだろう……

「ユキノさん……っ」

「アーシアさま、イッセーさまを助けたい御気持ちは私達も同じです。その為にもアーシアさまはこの場でお待ちください。アーシアさまの回復能力は重要ですので」

ユキノの説得にアーシアは涙目で「お願いします……っ」と頷（うなず）き、ユキノは一誠の救出準備に取り掛かるのだが――

シュル……ッ

「「「――――っ!?」」」

アーシア、ゼノヴィア、イリナ、シスター・グリゼルダがユキノの行動に仰天する
それもその筈、いきなり〝服を脱ぎ始めた〟のだから……
「ユ、ユキノさん⁉」
「ちょちょちょ、ちょっと待って！　なんで服を脱ぎ始めてるの⁉」
慌てるイリナが問うと、近くにいたチェルシーが補足説明する
「あ～、そう言えば知らなかったわね。ユキノの神器（セイクリッドギア）って水中仕様の能力を使う際
――――いちいち裸にならないといけないらしいのよ」
「何その特殊条件⁉　大きなお友達にとって都合良すぎじゃないっ⁉」
そうこうしてる間にユキノはパンツも脱ぎ、文字通り一糸纏わぬ姿となった
顔を赤らめているが、一誠の救出に向かう覚悟を決めた表情のユキノは神器（セイクリッドギア）を発動する
下半身が魚の尾ヒレと化し、人魚のような姿となった
「では、行ってまいりますっ」
そう言ってユキノは漆黒の海へ飛び込んでいった
視界が悪い漆黒の海中を泳ぎ、一誠を捜索する
『……っ。この水、思った以上に厄介ですね……っ。浸かっているだけなのに、力が抜かれていく……っ。この姿になれば水中でも呼吸が出来る筈なのに……息苦しい……っ。

早くイッセーさまのもとへ向かわないと……！』

「不憫なものだな、水中で息が出来ん輩（やから）と言うのは」

『……ッ！　……ッ！』

トランザーは海底で一誠を押さえ込み、ジワジワと追い詰めていた

手足をバタつかせる一誠だが、その行動は貴重な体内酸素を消費するだけだった……

「もはや無意味だ。オレが『天地晦冥（てんちかいめい）』を発動させた時点でお前は詰んでいた。いい加減諦めろ。今なら死に体寸前のお前に鞭を打つような真似はしない」

トランザーが哀れむような視線で言うが、一誠は当然諦めるつもりなど無い

左腕でトランザーを殴ろうとするが、トランザーは少し身を引く程度の所作で避ける

『伸びろっ、アスカロンッッ！』

『Ｂｌａｄｅ（ブレード）!!』

左の籠手から内蔵されている聖剣アスカロンの刃が伸び、トランザーの頬に切り傷を付ける

僅かに一矢報いた一誠だが……逆にトランザーの神経を逆撫でしてしまった

「……最後通告のつもりだったんだが。どうやら理解力も無くなったようだな、赤いトカゲもどきよ」
押さえ込むのを中断し、一誠を放り投げる
「良かろう。お前の要望通り――徹底的に殴り殺してやろうッッ！」
ドゴォッッ！
トランザーの呪力を纏わせた剛腕が一誠の体に突き刺さり、一誠は堪らず空気と共に血を吐き出す
そこから先は一方的な私刑だった……
海中で自由の利かない一誠を剛腕で殴り、叩き落とし、蹴り上げ、肘打ち
シャチが獲物を弄ぶかの如く、微塵も容赦の無い攻撃を浴びせ続ける
重厚な一撃を食らう度に、一誠の意識が徐々に薄れていく
『ダ……ダメだ……っ。コイツ、強すぎる……ッ』
遂には指一本動かす気力すら無くなってしまい、海中を漂う格好となる
しかし、トランザーは温情など掛けてくれない
「これが造魔――否、深淵に歯向かった者の末路だ」
特大の一撃が鎧を破壊し、吹き飛ばされた一誠はゆっくりと海底に沈んでいく
『息が出来ない……っ。目も霞んでいく……っ』

一筋の光さえも届かない暗い海の底へ吸い込まれる一誠
『チクショウ……何なんだよ、この黒い水は……っ。こんな真っ暗な海の中で……俺は死ぬのかよ……？』
何処までも漆黒に覆われた海に対して毒づくが、今の一誠に抗う術は無い
ただ暗黒に沈んでいくのみ……
『嫌だ……っ！　こんな真っ暗な海の中で死んじまったら――――2度と女の子のおっぱいを拝めないじゃねぇか……っ！』
こんな時でもおっぱいの事を考える辺りは流石と言わざるを得ないが、今はそんな場合ではない
しかし、一誠の脳裏に浮かぶのは――――
『ああ……アーシアのおっぱいの成長を見届けなきゃいけないのに……っ。ユキノさんとソラノさんの姉妹おっぱいを……味わいたい……っ。チェルシーさんのナイスな小振りおっぱいも、ディマリアの爆裂おっぱいも……もっともっと堪能したかったのに……っ』
おっぱい、おっぱい、ただ只管おっぱい
しかし、この漆黒の海の中では――――そんな願いも雲散霧消
このまま海の藻屑となってしまうのか……

意識を手放そうとした刹那、弱々しいが……一筋の光が一誠の視界に届く
『……光……っ？　そんなのいらねぇよ……っ。空気……空気が欲しいんだ……っ。空気をくれぇ……っ』
一誠は残り少ない意識でそう願った
彼の必死の願いは――――叶った
救援に来たユキノからの口移しと言う形で……
彼女から空気が送られ、徐々に意識を取り戻す一誠
『……う？　……っ。……っ⁉　人魚……⁉　いや、ユキノさん……⁉』
突然の人工呼吸に一誠は驚きを隠せず、意識を取り戻した一誠を見て安堵するユキノだが、彼女も『天地晦冥』の毒に冒されしまい、今度はユキノが意識を失ってしまう
力無く沈んでいくユキノ
そんな彼女に突進してくる巨大な影
「何処から涌いて出てきた！」
やって来たのは晦冥の主――――トランザーだった
一誠ではなくユキノに狙いを定め、膨大な呪力を腕に纏わせる
ユキノを殺そうとするトランザーの姿が視界に入った瞬間、一誠の意識が急激に覚醒し――――

『その女性に触わるんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！』

魔力を爆発させる勢いで加速し、ユキノをトランザーの剛腕から救出

『Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ Ｂｏｏｓｔ

一誠の傷も消失し、ユキノの顔色も良くなっていく

『これで少しは楽になった……けど、早くアイツを倒さないとその内やられちまう……！　水中じゃ向こうの方が圧倒的に有利だ……っ。どうすりゃ良い……⁉』

回復しても状況が好転したと言うわけではない

いずれは晦冥(かいめい)の黒水(くろみず)による毒で殺(や)られてしまうのは明々白々(めいめいはくはく)

一誠は頭をフル回転させ、どうにか知恵を絞り出そうとしたが……やはり打開策など簡単には思い付かない

「イッセーさま、折り入ってお願いがあります」

そんな時に声を掛けてくるのはユキノ

一誠は怪訝(けげん)そうに彼女の方に顔を向けた

「ユキノさん？」

「イッセーさま……私がイッセーさまの足となります。どうかお力添えの許可をお願いします」

ここから一誠の大反撃が始まる……⁉

異世界おっぱいチャンネル受信⁉

「では、イッセーさま。しっかりと掴まっていてください」
「で、でも良いんスか？　こんな思いっきりしがみついちゃったりして……」
「……はい。少々恥ずかしいですけど……っ、頑張ります……っ」
顔を赤らめるユキノ、今の彼女は一誠の背中にガッチリとしがみついていた
ユキノが提案した打開策とは――――〝彼女自身が一誠の足役となって水中移動を担(にな)う〟と言うものだった
この黒水(くろみず)の中では魔力が思うように維持できないので、砲撃系統の魔力ではトランザーにダメージを与える事は難しい
ゆえに打撃で押していくしか無い……
更に水の抵抗のせいで動きも制限され、何もかも圧倒的に不利な状況
しかし、人魚と化したユキノが加われば話は別だ
彼女の能力によるサポートが加われば、速度だけでも向上できる
「では、参りますっ！」
そう言ってユキノは一誠と共に漆黒の海の底へと潜(もぐ)っていく

先程とは違って海中を自由自在に泳いでいる感覚に、一誠は少しばかり感動を覚える
しかし、この漆黒の海が自分達にとって苦である事は変わらない
いくら水中仕様とてユキノにも負担が掛かる上、限界もある……
一誠は気を引き締めて攻撃に意識を集中させる
海底にまで差し掛かったところで、先程叩き落とされたトランザーが土煙を上げて飛び起きる
「チッ、オレとした事が不意を突かれてしまったか」
打たれた部分を擦(さす)り、首をゴキゴキと鳴らすトランザー
「しかし、解(げ)せんな……。赤いトカゲもどきの攻撃力がいきなり跳ね上がっただと？いったい何が奴の力を増大させた？　実に不可解だ……そして不愉快極まる……！」
不快感を明らかにした表情で一誠を睨み、海中を猛然と突き進んでいく
両腕の刃(ヒレ)で2人を斬ろうとするが、人魚状態(マーメイド)のユキノの移動速度は感嘆の一言に尽きるものだった
一誠を抱(かか)えているにもかかわらず、水中を優雅かつ素早く泳いでトランザーを翻弄する
目まぐるしいスピードでトランザーの攻撃を回避し、一誠が攻撃を仕掛ける
顔面やボディにパンチを浴びせ、更にアゴを蹴り上げる

トランザーも反撃を試みるが、悉く躱されてしまう
ヒット&アウェイを繰り返していく一誠だが、それでも決め手を与えられない……
しかし、有効とも言える手法が見つかり、絶え間無く打ち込んでいけば勝機は訪れてくる筈
一誠は一心不乱にヒット&アウェイ戦法を続けた
殴っては逃げる、蹴っては逃げる
そんな戦法に撹乱されているトランザーは徐々に苛立ちを募らせた
「チョコマカと逃げ回りおって……鬱陶しい限りだ。ならば――」
このまま追い掛けても埒が空かないと踏んだトランザーはその場で停止し、全身から何かが噴き出し始めた
プシューッと噴き出したのは――大量の気泡
その気泡がトランザーの全身を包み込んでいく
一誠とユキノは警戒しつつも、トランザーとの距離を詰めていく
気泡によって覆い隠されたが、徐々にトランザーの影が見えてくる
動こうとする様子も無い……
『よしっ、ユキノさん！　ここで特大のを打ち込みます！　突っ込めますか⁉』
『はいっ！』

一誠の指示を聞いてユキノが移動速度を上げて突っ込んでいく

一誠は右の籠手を肥大化させ、更に力を倍増させる

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）

見るからに硬そうな肉体と化したトランザーに、一誠とユキノは絶句する……
「残念だったな、赤いトカゲもどき。オレは体の硬度を自在に変化できる。『天地晦冥』の黒水には炭素も含まれていてな。それを吸収し、圧縮する事で肉体の硬度を最大限に高めた。造魔……否、深淵イチの防御力を誇る――このトランザー。もはや貴様の攻撃などヤワなガラス細工同然だ」
トランザーは太い両腕で一誠とユキノを捕まえる
優勢が僅かな時間で劣勢に陥り、トランザーの握力で2人の体が軋む
「このまま握り潰しても良いがまずは赤いトカゲもどき、お前から先に始末してやる。そうすれば先程のように不可解な真似は出来なくなるだろう。いずれにせよ、『天地晦冥』の毒がそろそろ回ってくる頃合いだ。体の自由も利かなくなる」
トランザーはユキノを放り捨て、一誠の始末を優先する
直ぐに助けに行こうとするユキノだが、悲しくも『天地晦冥』の黒水の毒性によって体の自由が利かなくなり、思うように動けない
また一誠も黒水の毒で体を蝕まれていく
トランザーは微塵の容赦も無く、腕の刃で一誠の鎧の前面を切り裂いた
一筋、二筋の裂傷が刻み込まれ――噴出した血が海中に漂う
トランザーが硬質化した状態で拳を握る

「今度の拳は先程の比ではないぞ？　精々成仏できるように祈っておくんだな！」
ドゴオオオッッ！
裂けた傷に極太の拳を叩き込んでいくトランザー
防御力――――肉体の硬度が上がると同時に、攻撃力も今までのモノとは比べ物にならない……
最硬度と言っても過言ではない強固な拳が打ち込まれ、一誠は更に血を吐き出す
内側から、外側からも滅多打ちにされ……一誠の気力と体力はもう限界を迎えようとしていた
散々殴ったトランザーは一誠の頭部を右手で掴み、最後の仕上げに取り掛かる
「我々に啖呵を切った胆力（たんりょく）だけは褒めておこう。だが、これがお前の限界だったわけだ。……では、そろそろトドメを刺してやろう。２度と目覚めぬように頭を粉々に砕いてやる」
『……ッッ！　……ッッ！』
トランザーの右手が一誠の頭を握り潰すべく、徐々に力を強めていく
兜が割られ、遂には頭蓋骨が軋（きし）み始める……っ
『チクショウ……っ！　せっかく、ユキノさんのお陰で助かったってのに……っ！　この暗い海の中で死んじまうのかよ……っ⁉』

もがいてみせる一誠だが、トランザーの右手はビクともしない
貴重な体内酸素を無駄に消費するだけだった……
ユキノも限界寸前で、苦悶に満ちた表情で海中を漂う
本当にここで最期を迎えてしまうのだろうか……？
『こんな所で死にたくねぇよ……っ。せめて、せめておっぱいを堪能させてくれぇ……っ』
薄れていく意識の中で一誠がそう願った刹那――――〝声〟が流れてくる
『あなたの想いはその程度ですか、乳龍帝？』
『……んっ？』
突然聞こえてきた声にハッと意識が甦る一誠
いったい何処から〝声〟が聞こえてくるのか視線を泳がせると……視界に捉えたのはユキノのおっぱいだった
すると、おっぱいは静かに話し始める
『私はこの女性のおっぱいではありません。――――私はおっぱいの精霊です』
……
『……誰だ、お前はっ⁉』
あまりにも意味不明な語りに一誠の意識が覚醒し、ユキノのおっぱいに指を突きつけ

ていた

『落ち着いてください。私はこの娘のおっぱいを介して、あなたに話しかけているのです』

『だから！　誰なんだよ、お前！』

『私は全てのおっぱいを司りし神――――乳神さまに仕える精霊です。あなたの頑ななまでのおっぱいへの渇望が私を呼び出したのです』

『バカな！　俺のパイリンガルが知らずに発動しただけじゃなく、違うチャンネルまで受信しちゃったの⁉』

「さっきから何を慌てているんだ、こやつは？」

怪訝な表情で一誠を窺うトランザー

〝おっぱいの精霊〟を自称する声に驚愕せざるを得ない一誠だが、その声は籠手に宿るドライグにも聞こえていた……

『あ、相棒……っ。確かに俺にも乳の精霊とやらの声が聞こえる……。俺の知らない世界の力を感じる。……まさか、相棒は異世界の神の使いを呼び寄せたと言うのか……っ？』

『ドライグ！　乳神さまって、何処の神話体系の神さまなんだ⁉』

『俺が知るわけ無いだろぉぉぉぉぉぉっ！　うおおおんっ！　また俺はおっぱ

いドラゴンの忌み名に拍車が掛けられるぅぅぅぅぅぅぅっ！　俺は何も悪くないのに！　相棒が、相棒がぁぁぁぁ！』

ドライグはいつにも増して泣き叫んだ（笑）

『よく聞きなさい、乳龍帝（ちちりゅうてい）よ』

『あーもうっ、何スか⁉』

『今こそ乳神さまの力を、ご加護をあなたに与える時です。おっぱいを求める者に乳神さまは慈悲深いご加護を与えます。きっと役に立つ事でしょう』

おっぱいの精霊がそういった直後、一誠の鎧の全宝玉が光り輝き始める

今までに無い力強さを灯（とも）した光……

『乳神さまの加護を今こそ、あなたへ――――』

ゴオオオオオオッ！

一誠の鎧の各所から莫大なオーラが噴き出し、そのパワーアップに一誠もドライグも驚く

『な、何か知らないけど……スゲェ力を感じるぞ⁉』

『お、俺もだ……っ。それに……何故か懐かしい力の波動も感じる……！』

〝今なら勝てる気がするっ！〟

そう思った瞬間、一誠の意識は完全に覚醒し、トランザーの右手を引き剥がす

そして、直ぐに攻撃へ転じた一誠の拳打がトランザーの顔に突き刺さる
「――――ッッ⁉」
拳を食らったトランザーの顔は驚愕に満ちていた
何故なら……一誠の拳打でダメージを受けたからだ
一誠はそのまま拳の乱打乱撃を繰り返し、トランザーを押し戻す
全ての拳がトランザーの肉体に刺さり、その度にトランザーの顔が苦痛に歪む
「……バ、バカな！　ヤツの攻撃力がオレの防御力を上回っただと⁉　いや、それどころじゃない！　まるで攻撃が体内にまで直接響いてくるような感覚だ……ッッ！　何なんだ、コイツは……⁉　何なんだ、この力は⁉」
あり得ない事態に憤慨したトランザーはお返しとばかりに殴り返す
暗い海中での殴打合戦に発展し、両者が息つく暇を与えず殴りまくる
『やっと勝機が見えてきたんだ……ッ！　1発でも多く打ち込んでやるッ！』
一誠は残された気力と体力を振り絞り、トランザーに拳打を浴びせ続ける
ひたすら殴る、ひたすら蹴る、ひたすら殴る……！
必死の攻撃がトランザーに焦燥感を募らせた
「おのれぇぇぇ……ッ！　調子に乗るなァッッ！」
憤るトランザーは両手に禍々しい呪力のオーラを纏わせて一誠の腹に打ち込み、その

まま突き進んで岩壁に叩き付けた
前後からの圧殺攻撃に一誠の骨と内臓が悲鳴を上げる
しかし、トランザーの猛攻は終わらない……
岩壁から引き剥がした一誠に今度は肘を押し当て、海底に叩き付ける
海中を泳ぎ回り、あちこちの海底や岩壁に連続で叩き付けていく
「これで終わりにしてやろう……ッ！」
トランザーは一誠を頭上に抱え上げ、自らの肩の上に乗せる
そして顎と太腿を左右の腕でロックし、弓なりに反らせて背骨を痛め付ける
続けてトランザーは呪力のオーラを全身に纏い、猛スピードで海中を突き進み始めた
速度が乗ってきたところで海面から空中へ飛び出し、一誠を再び海面へと叩き付ける
その行為を何度も繰り返していき、いよいよ最後の仕上げに取り掛かった
猛烈な回転を加え、暗い海中に渦潮を発生させながら海底目掛けて突き進む
「ディープ・ダイブ・インパクトオオオッッッ！」
トランザーは逆さまの体勢で回転を加えながら、一誠を脳天から海底に激突させた
激突した瞬間、莫大な破砕音と土煙が上がり――――周辺一帯が大きく揺れる
暫くして揺れが治まり、トランザーは体勢を元に戻す
脳天から海底に叩き付けられた一誠の体は完全に埋もれ、両足だけが飛び出ている

その足はピクリとも動かない……

「……フンッ、死んだか」

トランザーは埋もれた一誠に背を向け、次は海中に漂(ただよ)っているユキノの殺害に移行しようとした

ボコ……っ

僅かに聞こえた気泡の音にトランザーは表情を強張(こわば)らせた

あれだけ苛烈な攻撃を食らわせて、生きていられる筈が無い……っ！

そう思って背後に視線を移すと……信じられない光景を目の当たりにした

「……ッッ！　キ、キサマ……ッ！　何故生きているッッ⁉」

トランザーの言葉通り、一誠は死んでいなかった……！

兜も鎧もボロボロに破損し、全身が血だらけになっているが――赤龍帝(イッセー)の眼には闘志の炎が燃えていた

『Boost(ブースト) Boost(ブースト) Boost(ブースト)

トランザーの呪力を帯びた豪腕を左の拳打で塞(せ)き止め、右の拳打を力一杯撃ち込んだ
撃鉄を鳴らして威力を底上げさせ、そこから更に倍加の音声を響かせた
『――――クリムゾン・インパクトォォォ

「イッセーさんっ！　ユキノさんっ！」
「ア、アーシア……っ。ユキノさんを、先に回復させてやってくれ……っ」
一誠の頼みに応じたアーシアは直ぐ様ユキノの治療に取り掛かる
さすがに力を使い過ぎたのか、一誠はその場で尻餅をついて大きく息を切らす
『乳龍帝よ、見事でした。またいつか会える日を楽しみに――』
「あ、おっぱいの精霊とやらの声が遠ざかった。……結局、乳神さまって何だったんだろ」
『相棒。出来れば俺は2度と関わりたくないぞ……っ。これ以上、心労の種が増えるのは嫌だ……っ』
ドライグが今にも泣きそうな声音で一誠に懇願する
恐らく一誠もこんな意味不明な異世界の神との接触は御免被るだろう……
ふと一誠は離れた場所で倒れているトランザーに視線を向けた
「……また起き上がったりしないよな？　これ以上は保たないぞ……」
『その心配は無さそうだ、相棒。ヤツからは生気を感じられない。もう動く事は無いだろう』
「そっか……良かったぁ……っ。そこんトコだけ乳神さまのご加護に感謝しないとな」
ようやくトランザーが事切れた様子に安堵し、一誠は天を仰いだ

その後、アーシアの治療を受けてある程度回復した一誠は〝乳神〟や〝乳神に仕える精霊〟の経緯を話したが……一様に引いていた

「あ、あれ？　なんで皆して引いてるんだ？　いや、引くのは分かるよ。俺だって信じられないって思ってるもん。でも、本当なんだ！　本当におっぱいの精霊ってのが俺に語りかけてきて、乳神さまのご加護のお陰で――――って、アーシア⁉　なんでまた回復させようとしてるの⁉　しかも、頭部に集中してるよ⁉　もしかして頭がヤられたと思ってる⁉」

『気持ちは分かるが、皆聞いてくれ。実は相棒の言う通りなんだ。乳の精霊とやらの声が聞こえてきたんだ。残念な結果だが、こいつは異世界の神の使いを呼び寄せたらしい――――って、おい！　俺にまで回復の光を飛ばすなぁぁぁぁぁっ！　うおおおんっ！　どうせおっぱいドラゴンの声なんて誰も信じちゃくれないんだ！　こんな生活もう嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！』

弁明しようとしたドライグは泣き叫び、一誠は心労の種を増やしてしまった事に心の底から謝った

そこへ人魚の姿から元に戻ったユキノが歩み寄ってくる

「あ、あの……っ。イッセーさま」

「あ、ユキノさん。どうしたんスか？」

一誠が訊ねるとユキノは何やら顔を赤らめ、チラチラと視線を合わせる
ユキノは深々と頭を下げて言い放った
「先程は緊急事態とはいえ、あのような形で……く、口付けをしてしまい――――申し訳ありませんでしたっ！」
「ゴッフォッ⁉」
ユキノの爆弾発言に一誠の口から何かが飛び出し、彼女の姉であるソラノは「ヒューヒューッ、役得だゾ～♪」と茶化してくる
その直後、アーシアがジト眼で一誠に詰め寄る
「……イッセーさん？　今のはどういう意味ですか？　口付けって……キスの事ですか？」
「ア、アーシアちゃん？　お顔が怖いよ？　あの……ユキノさんが言ってるのは人命救助的な意味であって、決してイヤらしい意味で言ったわけじゃ――――」
「人命救助、ですかぁ……。そうなんですか……。では、シスター・グリゼルダにお願いして、お祓いを受けてもらいましょう。イッセーさんの中にエッチな精霊さんが潜んでいるかもしれませんので」
「アーシアちゃんっ⁉　もしかして怒ってますか⁉　もう俺の中におっぱいの精霊はいませんよっ⁉　いないからお祓いするのだけはヤメてっ！　心身ともにボロボロの状

態でお祓いなんかされたら本当に死んじゃうッ！　誰かぁぁぁ！　助けてええええええっ！」

一誠は〝シスター・グリゼルダのお祓い〟から逃れるべく、軋む体に鞭を打って助けを求めた

そして、その願いは成就せず――否、別の形で叶う事になった

ドオオオオオオオオオオンッッ！

突如鳴り響く爆砕音

音のした方向を見てみると、砂煙の中から2人の人影が現れた

一方は苦しそうに傷を押さえ、ペッと血を吐き出すボロボロの新

もう一方は悠然と佇む怪物――厄災ことテンペスター

どうやら今まで空中戦を繰り広げ、ここに落ちてきたようだ

状況は新が劣勢のように窺える

「クソ……ッ、マジで歩く災害だよ、コイツは……！」

「災害ではない。我は深淵より生まれし、厄災のテンペスター。同じ相手に2度も負けはしない」

テンペスターは4本の魔手を広げ、「ヒュルッ」「ボオッ」「カチカチッ」「ゴロロンッ」と唱えると――呪力を帯びた凶悪な竜巻、炎、氷、雷がそれぞれの腕を覆っていく

１つだけでも厄介だった攻撃が、今度は４つ同時に発動……っ

多種多様な厄災を操る怪物（テンペスター）が新を見据えて告げた

「深淵に沈み、闇の彼方へ――――堕ちろ」

厄災を砕け!?（あか）き雷炎竜（らいえんりゅう）

「トランザーを下したからと言って付け上がるな。お前達の厄災はまだ終わっていない」

テンペスターは呪力を噴き出させて４本の魔手を大きく突き出した

腕に纏わせていた竜巻、炎、吹雪、雷が解き放たれ、天変地異の如く猛威を振るう

狙いは新――――だけではなく、その後方にいる一誠達にも及んだ

新は背中から黒炎を噴き出し、漆黒の巨腕を６本形成

負けじと６本の巨腕を向かってくる厄災目掛けて飛ばす

４つの内、炎と雷は相殺できたが……竜巻と吹雪は消しきれなかった

新はすかさず『真・女王』の雷炎モードを発現し直し、口から炎と雷が入り乱れた砲撃を放った

新の咆哮とテンペスターの放った厄災が正面からぶつかり、爆音と共に霧散する

「ズブズブッ」

テンペスターが口ずさんだ途端、新の足が地面に飲み込まれて身動きが取れなくなってしまう

懸命にもがく新だが、足が抜ける気配は無い……
その間にテンペスターは再び４本の魔手に厄災を纏わせ、地を蹴って飛び出す
身動き出来ない新に竜巻の腕が突き刺さる……ッ！
新は皮膚を引き裂かれ、内臓にまでダメージが響いたせいで口から大量に吐血する
しかし、テンペスターは攻撃の手を緩めやしない
炎の腕、氷の腕、雷の腕も殴打に加わり、あらゆる厄災が新を滅多打ちにしていく
四方八方から飛んでくる厄災の腕に新の肉体はボロボロ
骨も内臓も端々（はしばし）から悲鳴を上げ、噴き出した血が辺り一面に飛び散る
凄惨な私刑（リンチ）に堪（こら）えきれなくなったのか、ゼノヴィアがデュランダルを構えて飛び出してきた
「これ以上、貴様の好きにはさせんっ！」
ゼノヴィアは聖なるオーラを溜めて、デュランダルをテンペスター目掛けて振り下ろす
しかし、テンペスターは直ぐに２本の腕でデュランダルの刃を止める
「邪魔をするな。――ドドンッ」
テンペスターが残る２本の手をゼノヴィアの腹に宛（あて）がい、衝撃波を放つ
衝撃波はゼノヴィアの肉体を内外ともに痛め付け、彼女は後方に吹き飛ばされてし

まった
　直ぐにアーシアがゼノヴィアの方に駆け付けて、治療を施していく
「よくも……よくもゼノヴィアをっ！」
　今度はイリナが飛び出そうとするが、シスター・グリゼルダに制止される
「いけません、Ａ（エース）イリナ。あなたが行ってもゼノヴィアの二の舞になってしまいます」
「でも……このままじゃ、新くんが！」
　涙目になるイリナに対し、シスター・グリゼルダは彼女を下がらせてから言う
「ここは私がやります」
　シスター・グリゼルダは手元に光力を集め、光の弓と矢を形成する
　矢を番（つが）い、テンペスターに狙いを定め――――光の矢を放った
　シスター・グリゼルダが放った光の矢は高速で飛んでいき、無数の矢に分裂してテンペスターに降り注ぐ
　テンペスターは攻撃の気配を察知して避けるが、光の矢は追い掛けるように軌道を修正し――――全ての矢がテンペスターの体に刺さる
　シスター・グリゼルダの光力は必中とも言える御技（みわざ）だった
「私の教え子に手を出しておいて、無事でいられると思わない方が良いですよ？」
　迫力ある口調でテンペスターを牽制するシスター・グリゼルダ

テンペスターは自分に突き刺さった光の矢を見て、再度シスター・グリゼルダに視線を移す
「その程度か?」
ジュゥゥゥゥゥゥゥゥ……ッ!
テンペスターは呪力を噴き出させ、自らの肉体に刺さった光の矢を1つ残らず蒸発させる
その所業にシスター・グリゼルダは目を見開いた
「……このような相手は初めてですね。悪魔や邪悪な精霊が可愛く見えてしまいます」
「我は厄災、今のお前達に抗う術など無い。闇の彼方へ堕ちろ。――――ドゴンッ」
テンペスターが4本の魔手を地面に突き刺すと、シスター・グリゼルダや一誠達の足場が大きく崩壊する
意思を持ったかのように動く地面によって一誠達は吹き飛ばされ、シスター・グリゼルダの注意が逸れる
「――――ガラガラッ」
テンペスターがそう呟くと今度はシスター・グリゼルダの頭上から無数の岩石が降り注いでくる
しかも、その岩石の群れは炎や雷を纏っていた

シスター・グリゼルダは懸命に回避するが……瞬時に距離を詰めてきたテンペスターに捕まり、背中から岩壁に叩き付けられてしまう

彼女は2本の魔手で左右の腕を封じられ、身動きが取れない状態にされる

シスター・グリゼルダを捕らえたテンペスターは空いている2本の魔手で彼女の首を絞め、更に光力を吸収し始める

「我はお前達の魔力や生命力を吸収し、我が呪力に変換できる。このまま吸収し続けて葬(ほうむ)るのは容易(たやす)いが……ここは確実に殺す」

テンペスターはシスター・グリゼルダを放り投げ、「ヒュルッ」と右腕に竜巻を纏わせる

ただし、通常の竜巻とは違い――――ドリルのような形となっている

シスター・グリゼルダは身を起こそうとするが……手足に力が入らず、その場を動く事が出来ない

「――――滅びろ」

凶悪な竜巻を纏ったテンペスターの右腕が、シスター・グリゼルダを刺し貫(つらぬ)こうと繰り出された

それを見た瞬間、新は両足に火竜を纏わせ――――爆発する勢いで飛び出し、両者の間に割って入った

ドズッッ！
肉を貫く嫌な音……っ
テンペスターの竜巻を纏った右腕は、新の左肩を見事に貫通していた
皮膚と肉が抉り削られ、更には肺にまで至ったのか……新の口から大量の血が流れ出てくる
「あ……ああ……っ」
目の前の惨劇に愕然とするシスター・グリゼルダ
一誠達も凄惨な光景を見てしまい、言葉を失った
手応えを感じたテンペスターはニヤリと嘲笑する
その刹那――――新の眼光がテンペスターを捉え、自らの左肩を貫いた竜巻の腕を掴む
「――――っ⁉　貴様、左肩と肺を潰した筈だ……っ！　何故まだ動ける⁉」
これには流石のテンペスターも動揺を隠せず、声を荒らげて問い詰める
新は爪を立てて掴みながら、空いた右手に黒い火竜と雷を纏わせた
「……何故動けるかって……っ？　決まってんだろ……っ。動かなきゃならねぇからだ……！　ここで止まっちまったら、俺はお前にも……アイツらにも勝てやしない……っ！」
新の脳裏に浮かぶのは２人の男

１人は六振りの魔剣型『禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）』を携（たずさ）える――――バサラ・クレイオス
もう１人は刻（とき）を操る怪物となった天性の悪――――ユナイト・クロノス・キリヒコ
この２人にだけは何としても追い付かなければならない……っ
そうでなければ自分だけじゃなく、本当に全てを失（うしな）ってしまう……！
「俺はいくら傷付こうが、血反吐（ちへど）を吐こうが構わない……っ！　守りたいモノを守れるのなら、いくらでも命を削ってやる……ッッ！」
火竜と雷を纏った新の右拳がテンペスターの顔面を捉え、後方に大きく吹っ飛ばす
だが、左肩にはポッカリと風穴が開けられ、全神経に激痛が伝播する
殴り飛ばされたテンペスターは直ぐに起き上がり、口元の血を拭（ぬぐ）う
「粋がるのは勝手だが、それだけで我を滅する事など出来ない。真の姿となった我が回復力を以（もっ）てすれば、如何（いか）なる攻撃を食らっても直ぐに回復する。対して貴様は死に体寸前となっている。無駄な足掻きだ」
「たとえ、そうだとしても……止まるわけにはいかねぇんだよ……ッ！　アイツらに対抗できるのは俺ぐらいしかいないんだからな……ッッ！」
左肩の傷、口元、肉体のあらゆる部分から血を流しても歩みを止めない新
１歩進むだけでも意識が飛びそうになる筈なのに、新の眼光は毅然としてテンペスターを捉えていた

「止まる気が無いのなら、我が止めてやろう。――これで終わりだ」
テンペスターは三度(みたび)呪力に満ちた竜巻、炎、氷、雷を４本の魔手に纏わせ、全身からも呪力を噴出させた
間違いなくトドメを刺してくるだろう……
ここで決めなければ死ぬ……っ
新は身体中の血液を沸騰させる勢いで雷炎(らいえん)を迸(ほとばし)らせた
そして、テンペスターが爆音を轟(とどろ)かせて飛び出し――４つの厄災の魔手を突き出してきたッッ！
新もそれに合わせて火竜と雷を纏った右拳で迎え撃つ
鍔迫り合う両者だが、実質はテンペスターが圧倒的に優勢
竜巻、炎、吹雪、雷の余波が新の全身を隈無く痛め付け、新の体から更に血が噴き出す
「厄災には勝てぬっ！　滅び堕ちろッッ！」
「言っただろ……ッ！　俺は止まってられねぇんだよ……ッ！　俺はアイツらを――超えなきゃならねぇんだァァァ

火竜と雷が赤黒く変色していく……ッ！

「――ッ！　何だ、これは……っ⁉」

突然の異変にテンペスターは驚き、更には４本の魔手が赤黒く変色した火竜と雷によって千切れ飛ぶッ！

肩口から全ての腕を破壊されたテンペスター自身も吹き飛び、倒れた体を起こす

「赤黒い炎と雷⁉　いや、ただの赤ではない……ッ！　アレは――血の？っ⁉」

初めて戦慄するテンペスター

その視線の先には……赤黒い火竜と雷を我が身に従える新の姿があった

身体中の血が蒸発し、火竜と雷に行き渡っていく……っ

「――『？雷炎竜』。親父と密かに特訓して得た……新しいモードだ。血を流せば流すほど威力が上がる……！」

実はバサラとの戦いの後、新は父親の総司に頼み込んで密かに修練を重ねていた

より攻撃的に、より素早く……竜の血を雷炎に混ぜ、手足の如く自在に操る

数日間、寝る間も惜しんで特訓した結果――完成した新たな形態だ

……だが、発現には成功したものの、このモードには欠点が１つ存在する

それは――発動する際に〝多量の血を流さなければならない〟事だ

出血していない状態では発動できず、必然的に流血状態へ自らを追い込まなければな

らない
完全に諸刃(もろは)の剣(つるぎ)たる危険極まりない力……
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！」
吼える新は爆発的な速度でテンペスターの眼前まで距離を詰め、赤黒い雷炎を纏った拳を相手の腹に打ち込んだ
炎と雷の衝撃が背中を突き破り、テンペスターの表情が苦痛に歪む
更に赤黒い雷炎が追い討ちをかけるようにテンペスターの全身を呑み込み、上空へ吹っ飛ばした
無論、新は炎と稲妻を迸(ほとばし)らせながらテンペスターの頭上へと先回り
テンペスターを叩き落とし、墜落させた後に追撃の蹴りを加える
その二撃の後でも赤黒い雷炎が畳み掛け、テンペスターの肉体が襤褸(ボロ)切れのように成り果ててくる
「……ッッ⁉　我の回復力が追い付かない……ッ！　それ程の威力だと……ッ⁉　厄災を超える炎と雷……ッッ！」
テンペスターは何とか体を起こすが、もはや勝敗は目に見えていた
血を流し続ける新は1歩、また1歩とテンペスターの方へ歩みを進める
「アイツらに対抗するには……生半可な力じゃ足りねぇッッ！　だから、俺の体の全て

を使って――――アイツらを止めるッッ！」
赤黒い火竜と雷が右手に集束し、周りを破壊しながら突き進んでいく
そして、新は眼前のテンペスターに目掛けて最後の一撃を繰り出した
「――――『雷炎竜の？御雷（ライトニング・ブラッド）』オオオオオオオオオオオオオオッッ！」
絶叫と共に血の？（あか）が混ざった火竜と雷が吼え、テンペスターの全身を飲み込んだ
「我が……厄災が……ホロびる……ッッ!!」
テンペスターの体が端々から粒子状に崩れ、遂には消滅していった……っ
見事テンペスターを倒した新だが、代償はあまりにも大きい
発現した新しい力のせいで血を流し過ぎ、元の姿に戻ると直ぐに倒れ伏した
意識はあるものの、左肩と肺に穴が空いているのでまともに呼吸が出来ない……
今まで呆然としていたシスター・グリゼルダがハッと我に返り、一誠達に指示を出す
「皆さん！　彼を直ぐに施設内の医務室に運んでくださいっ！　シスター・アーシアは医療スタッフと共に彼の治療をっ！」
「は、はいっ！」
一誠達は慎重に新を施設内にある医務室へと運び、大急ぎで治療に取り掛かった
――――いつの間にかトランザーの亡骸（なきがら）が消えていた事も露知（つゆし）らずに……

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ。様子見にと来てみれば……なかなか面白いものを見させていただきましたよ。あれ程苦戦していた相手を破るとは意外でした。まあ、所詮あの２人は前戯――本命を生み出すデータを集める為の消耗品に過ぎないので良しとしましょう。回収した戦闘データを注ぎ込めば、誕生する日も遠くありません。真に喰らう闇――『深淵の喰闇』のお披露目が楽しみです。彼らがどれ程Ｔｒ・ｓ　ｂｉｅｎな表情をするのか、期待しましょう」

「……」

あれからどれ程の時間が経ったのだろうか？

気が付けば、新はベッドの上にいた

恐らく施設内の医務室だろう……

包帯だらけ、汗まみれの体を起こし、窓の方に視線を向ける

外は既に真っ暗……夜を迎えていた

「……数時間ぐらいか。もう傷も塞がってる……今までの事を考えたら早い方か」
新はそう愚痴りながらベッドから降りようとすると、丁度シスター・グリゼルダが医務室の扉を開けて入ってくる
「起きて早々、何処へ行こうとしているのかしら？　怪我人の自覚を持ちなさい」
「……ああ、シスター・グリゼルダ。一誠達はどうした？」
「安心してください、皆さんも別の医務室で眠っています。先程の戦いでの疲労もそうですが、あなたの措置を手伝ってバタバタしていましたからね。あなたの無事が確認できた途端、一気に疲れが振り返してきたそうです」
その後の経緯をシスター・グリゼルダが話してくれた
『三羽の闇鴉（バンデイット・レイヴン）』の3人は冥界に移送され、ユキノ達はグリゴリに帰還したそうだ
事後処理もかなり慌ただしいものだったので、天界のスタッフ一同も忙（せわ）しなく駆け回っていた
特に新の怪我が1番酷く、輸血が何度も行（おこな）われたとか……
一誠達も身体に鞭を打ち付けて手伝ったので、今はベッドの上で爆睡中らしい
「……あいつらには悪い事しちまったな」
「ええ、後でキチンと謝っておきなさい。……まったく、あなたはいつも自分の事を顧（かえり）みず、危険な行動ばかりする。もういい加減ムチャをするのは止めなさい。あなたの体は

あなただけのものではないのですから」
「はいはい、肝に銘じておきます」
「本当に分かっていますか？　普通なら死んでいてもおかしくない傷だったんですよ？」
「……普通じゃダメなんだよ、俺は」
新はグッと拳を握り締め、心情を吐露する
「シスター・グリゼルダ、俺達が相手にしているのは〝普通〟じゃ到底通用しないバケモノ連中だ。そんな奴らを退(しりぞ)けるには……俺もバケモノになるしかない。バケモノじみた力を使うしかない。そうしなかったら――シスター・グリゼルダだけじゃねぇ。自分も、仲間も、何も守れやしない。だから俺は……」
そこまで言いかけた刹那、シスター・グリゼルダが新を自身の胸元に抱き寄せてくる
突然の抱擁に呆気に取られる新
シスター・グリゼルダは目元に涙を浮かべて言う
「……そんな事を言ってくれる日が来るとは思いませんでした。でも、それでも自分を追い込み過ぎるのは良くありません。もう、あなたは独りじゃない。心配してくださる大切な人達がいるんですから。その人達を悲しませない為にも――死ぬのだけは許しませんからね？」

シスター・グリゼルダがギュウッと新を抱き締め、頭を撫でてくる
彼女も彼女なりに新を心配してくれているのだろう……
新は暫し沈黙した後、「……ごめんなさい」と小さく謝った
これで無事に円満解決――と思いきや……
「ところで、シスター・グリゼルダ」
「何ですか?」
「俺、汗だくなんすけど」
「そういえば、そうでしたね。では、体を拭いてあげましょう」
シスター・グリゼルダはタオルを用意し、新は着ていたシャツをバサッと脱ぎ捨てる
まずは頭を拭き、そこから背中、脇の下、腕、前面を丹念に拭いていく
拭いている最中、新の身体に刻まれた傷痕がシスター・グリゼルダの視界に映る
「……」
「ん、どうした?」
「いえ……あなたの体、いつの間にかこんな傷だらけになってたのね……知りませんでした」
「今の俺にとっては仲間を守ろうとした証――勲章みたいなものさ」
「ふふっ、尖ってた頃のあなたとは思えない台詞を言うのね」

暫くして拭き終わり、新は予備のシャツに着替える
「さあ、終わりましたよ。汗をかいたのですから水分補給も忘れないように」
「どうも。どうせならシスター・グリゼルダも一緒に拭いてあげましょうか～？」
新はいつものスケベジョークを言うが、直ぐに「なんてな、冗談冗談っ」と訂正する
そのジョークに対してシスター・グリゼルダは――――
「構いませんよ」
「パルドンっ？」
新は目玉が飛び出る程に驚いた
いつも厳格で冗談が通じなさそうなシスター・グリゼルダの口から許容の言葉が出た……
シスター・グリゼルダはコホンッと咳払いしてから言う
「言っておきますけど……背中だけですよ？　それ以外は許可しません」
「ファっ？　あの……シスター・グリゼルダはん？　どういう風の拭き回しでっか……？」
「どうも何も……私を守る為にこんな傷を負ってしまったのでしょう？　教え子に守られたと言うのに、何も返さないのでは保護者としての顔が立ちません。ですから――――特別に許可致します」

〝どういう屁理屈なんだ⁉〟と心中でツッコむ新
しかし、ここまで言われて大人しく出来る筈もなく……新はひとまず言う通りにする
シスター・グリゼルダはベッドに腰掛けて、シスター服の背面にあるファスナーを下ろすよう促す
新は恐る恐るファスナーを摘まみ、ゆっくりと下ろしていく
シスター服の背面が完全に開かれ、シスター・グリゼルダの背中が露になる
真っ白で綺麗な背中が視界に映り、新は思わずゴクリと息を呑んでしまう
「じゃ、じゃあ……拭きますよ？」
「ええ、お願いします」
新はタオルを握り、シスター・グリゼルダの背中を丁寧に拭いていく
柔肌の感触が布越しに伝わり、新は未だに現状が信じられんと言う考えを脳内に過らせる
「んんっ……んっ、ぁ……っ」
シスター・グリゼルダの口から嬌声が漏れ始め、新の心拍数が上昇
「シ、シスター・グリゼルダ……声を抑えてくれ。何か誤解を招きそうな空気や……」
「――――っ。……すみません。思わずはしたない声を出してしまって……っ。も、もう結構ですのでっ」

居たたまれなくなったのか、シスター・グリゼルダは慌てて立ち上がろうとする
その拍子に新はバランスを崩してしまい、ベッドの上から落ちそうになる
それに気付いたシスター・グリゼルダは直ぐに新の体を支えようとするが、力を入れる前だったので支えきれずに共倒れ
シスター・グリゼルダは仰向けに、新は覆い被さるように倒れ込んでしまった……
これだけでもマズイ状況なのに、シスター服が完全にはだけてしまい――――シスター・グリゼルダは殆ど裸という状態に……
「あ……っ」
「あ……っ（汗）」
新の視界に映ったのは――――顔を紅潮させるシスター・グリゼルダ
シスター服に隠されていた豊満なおっぱい、綺麗な乳輪と乳首も丸見えとなる
腰元もくびれていて、臍ですら官能的に見えてしまう
『……俺、今日死ぬかも……っ』
せっかくのラッキースケベ状態なのだが、新は興奮よりも〝折檻と言う名の死〟への恐怖が勝っていて素直に喜べなかった……
引いた筈の汗が再び噴き出し、遂に死の瞬間が来るのかと思ったが……シスター・グリゼルダの反応は――――

「あの、そろそろ退(ど)いてもらえます……？」
「へ、へい！　退きます！　退くから俺を死人にしないでっ！」
慌てて飛び起きた新は勢い良く土下座し、シスター・グリゼルダは胸元を隠す
「い、今のは私の不注意が招いた出来事です。咎(とが)めたりしません……。ですが、いつしか私や他の女性にそういう事をするのでしたら……もう少し段階を踏んでからにしなさい。今のように不健全な触れ合いはダメですよ？」
「え、あ……はいっ。すんません……」
いつもの毒気は何処へやら……シスター・グリゼルダはイソイソとはだけたシスター服を着直した
その後、目が覚めたゼノヴィアとイリナが医務室に突撃してきたのは言うまでもない……
「おい、新！　シスター・グリゼルダと何が遭った⁉　さっきすれ違った時、顔を赤くしていたぞ！」
「新くん、まさか自分が怪我人である事を利用して……シスター・グリゼルダにエッチな事をしたの⁉　不健全よ！」
「今すぐ謝りに行こう！　そうしないと……殺されるぞっ！」

「謝りましょう！　全身全霊を込めてっ！」

『……頼むから、大人しく寝させてくれ……っ』

温泉に行こう！

とある日の放課後、職員会議を終えてきたアザゼルが開口一番にこう言った
「よし、お前ら伊豆に行くぞ。この間の魔獣騒動（まじゅうそうどう）と立て続けに起こる造魔（ゾーマ）の襲撃、あれの慰安旅行だ」
唐突な慰安旅行の提案に、リアスが目を通していた書類を置いて言う
「良いわね、慰安旅行。日程は？」
「ん？　リアス、アザゼルの急な提案に賛同するのか？」
即答したリアスに新がそう訊く
いつもの彼女なら「いきなりそんな事いわないでちょうだい。こっちにも都合と言うものがあるの」と返しているだろう
実際、リアスは悪魔の仕事を優先する現場第一主義的な面が強い
「ええ、一息つくと言うわけではないけれど、皆に英気を養（やしな）ってもらうプランを私も立てようとしていたわ。大きな事件が立て続けに起きて、皆の疲れも溜まってきていると思っていたから。リフレッシュも兼ねて良い提案だと思うわ」
リアスがそう言う

確かに二学期に入ってからの事件を並べてみると……旧魔王派と闇人のテロ、悪神ロキ襲来、修学旅行先と昇格試験後に英雄派＆神風一派に襲われ、その後は冥界全土を巻き込んでの巨大魔獣騒動

最近では新しく台頭してきた組織『造魔』によるデスゲーム『クロニクル』の横行、その首魁バサラ・クレイオスとの対面、『造魔』の尖兵トランザーおよびテンペスターの襲撃

信じられない事件のオンパレード、こうして皆が無事に生きているのが奇跡に等しいぐらいである

リアスが言うように全員が心身ともにダメージを負ったのも事実

アザゼルがウンウンと頷いて新達を見渡すように言う

「そうそう、その通りだ。お前達は信じられないぐらいの騒動に首を突っ込んだんだもんな。若いお前らがあれだけの修羅場、死線を潜れば体や心の何処かが傷付いていても不思議じゃない。――そこで慰安旅行なわけだ！　リアス、日程は次の週末でどうだ？　こういうのは即実行した方が良いってもんだ！　なーに、手配は直ぐに済む。あとはお前達の同意次第だぜ？」

全員が突然のリアスとアザゼルのやり取りに視線だけで追っている

すると、リアスが１度大きく頷いた

「ええ、分かったわ。では、次の土日は伊豆に行きましょう」
こうして、オカルト研究部の伊豆一泊二日慰安旅行が決行される事となった

そんなわけで次の土曜日を迎えた
天気は朝から快晴で絶好の旅行日和
一誠達は前夜に旅行の準備を整えて、午前１０時に兵藤家の門前に集まっていた
「私、伊豆に1度行ってみたいと思ってましたの」
目を爛々と輝かせているレイヴェル
彼女は最近、日本の事を勉強しているので全国の有名な観光地等に強く興味を持っていたりする
「……伊豆のお魚は美味しいから楽しみです」
小猫は観光地の食べ物に意識が釘付けのようだ
祐斗とギャスパーが到着し、あとはアザゼルとロスヴァイセを待つだけ――と思いきや、一誠がここで不審な点に気付く
「あれ？　先生やロスヴァイセさんはともかく……なんで新がいないんだ？」

一誠がキョロキョロと周りを見渡していると、リアスが告げてくる
「新なら私達が起きた時には既にいなかったわ。で、机の上にメモが置かれていたのよ。『先に用事を済ませてくるから、集合時間には合流する』って書いてあったわ」
「旅行当日に済ませる用事って何なんだよ……」
一誠が愚痴った直後、遠くの方から走行音が近付いてくる
走行音の正体は――――愛車のバイクに跨がる新だった
ただし、いつものバイクではなく大きなサイドカー付きの特注仕様で、そのサイドカーにはお馴染みの飲ん兵衛……もとい堕天使三人娘――――レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトが乗っていた
エンジンを止め、バイクから降りた新はフルフェイスのヘルメットを外す
「よぉ、待たせたな」
「新！　どうしたんだ、そのバイク？　買ったのか？」
一誠がそう訊くと新は首を横に振って答える
「コイツは取り外し可能なサイドカーをくっ付けただけの代物だ。……実は慰安旅行の事がレイナーレ達にバレちまってな。『連れていけ！』ってしつこくせがまれたんだよ……。んで、早朝に家を出て、行き付けのバイク屋でサイドカーをくっ付けてもらったんだ」

「なるほど、あのメモに書かれた〝用事〟はコレの事だったのね」
リアスが納得していると、新が「ああ、書き置きだけでスマなかった」と謝罪してくる
しかし、何故わざわざバイクで来たのか？
一誠が疑問を浮かべていると、背後でゼノヴィア達教会トリオの会話が聞こえてくる
「……てっきり、魔法陣で移動かと思ったら、車なのか」
「……え？　マジか。今日、車移動なの？　車で伊豆まで行くのか？」
一誠が会話に介入すると、イリナが頷いてきた
「うん、私はそう聞いたわ。アザゼル先生も車で来るそうなの」
「ええ、突然そういう事になったの。アザゼルの提案よ」
「俺もそう聞かされた」
リアスだけでなく新からもそう言われる
一誠が「それ、先生の思い付きだろうな」と思っていると、遠くから車の走行音が近付いてくる
青いボディの車が高速で角を曲がり、兵藤家の門前で弧を描くように激しいドリフトで急停止した
目の前に現れた青一色のスポーツカー

扉が開き、中から現れたのは光沢のあるジャケットとパンツと言う出で立ちのアザゼル
サングラスも着けており、何処の歌舞伎町のホストですかと言わんばかりの格好だった
「ふふふ、今日は俺の愛車で伊豆の海岸線をドライブだ」
キザなポーズで車に寄り掛かりながらアザゼルはそんな事を言う
「……おおっ、速そうだ。悪魔の仕事で金を貯めてこういう車を買おうかな」
ゼノヴィアが興味津々でスポーツカーを見ていると、アーシアが首を傾げていた
「でも、車で移動と言っても、この大人数ですし、先生の1台だけでは……」
アーシアの言う事はもっともだった
アザゼルが乗り付けてきたスポーツカーは珍しい5人乗りだが、そもそもここにいるメンバーは10人以上
バイクで行くであろう新（堕天使三人娘同行）を除いても――――面子は一誠、リアス、アーシア、朱乃、小猫、祐斗、ゼノヴィア、ギャスパー、イリナ、ロスヴァイセ、レイヴェル、アザゼル、更に今回はオーフィスもいる
一誠曰く、オーフィスを家に置いていく事も出来ないので連れていく事になってしまったそうだ

『……まさか、ジャンケンで負けた奴は現地まで空を飛んでこいとか無茶ぶり言うんじゃ⁉』

『あのアホ堕天使なら言いそうだな……』

新と一誠がヒソヒソと会話していると、もう1台の車が兵藤家の前に到着する

赤いワゴン車から降りてきたのは――ロスヴァイセだった

「ワゴン車をリアスさんに用意してもらいました。こちらは8人乗りですよ」

「と言うかロスヴァイセ、免許持ってたのか」

新がそう言うと、ロスヴァイセに「当然です。これでも元北欧の主神のお付きですから」と自慢げに返された

北欧の主神オーディンの付き人をする前から様々な資格を取得していたので、そこは曲がりなりにも才女と言えよう

ここで一誠が挙手してきた

「俺！　ロスヴァイセさんの車に乗りたいです！」

ロスヴァイセの運転技術はアザゼルと比べて遥かに静かなもので、一誠はロスヴァイセの車に乗車した方が安全だと確信を得ていた

アザゼルが不満げに言う

「おいおい、イッセー、俺のドライビングテクニックに不安でもあるのか？」

「あるに決まってますよ！　絶対安全運転しそうにないじゃないですか！　死の旅路になるに決まってます！」
「普段からトラブルメーカーの奴に信用なんてあるわけねぇだろ」
新と一誠がボロクソに言う中、ゼノヴィアはアザゼルの車のドアを開けて、既に乗り込む姿勢になっていた
「私はアザゼル先生の車でも良いぞ。スリリングなドライブも悪くないだろう」
「さすがゼノヴィア。分かってるじゃねぇか」
ゼノヴィアの頭を撫でるアザゼル
「スリリングな運転を否定しなかった⁉　うわぁぁぁんっ！　やっぱり安全に運転する気ないじゃないですかっ！」
「堕天使に人間の法廷速度は当てはまらないのさっ！」
「ドヤ顔で言ってんじゃねぇボケッ！」
「もう嫌だ、この邪悪で悪党なラスボス堕天使を誰か倒してっ！」
周りの皆も率先してアザゼルの車に乗りたいと申し出る者がおらず、自然とロスヴァイセの車の周囲に集まっていた
しかし、ワゴン車の乗車枠は運転手を除いて7名――――即ち……スポーツカーに乗らねばならない犠牲者が4人も出てしまう計算だ

唯一バイクで乗ってきた新はホッとするが、一誠に詰め寄られる
「俺は嫌だ！　動く棺桶に乗るつもりはねぇぞ！　だいたい何でお前だけバイクなんだよ⁉　ズルいぞっ！」
「ハッハッハッ、知るか。免許を取ってないお前がマヌケなだけだ。諦めて棺桶（スポーツカー）に乗ってこい」
「この薄情者ッッ！」
ギャーギャー喚く一誠を尻目に、リアスが息を吐いて意見を述べる
「じゃあ、公平にジャンケンで決めましょう」

……結局、一誠はジャンケンで負けてアザゼルの車（と言う名の棺桶）に乗る事になってしまった
アザゼルの車に乗るのは一誠、ギャスパー、ゼノヴィア、オーフィスと言う色物メンバー
「ごめんね、イッセーくん」
一誠に謝りつつ、ワゴン車に乗り込む祐斗

ワゴン車は運転手のロスヴァイセを始め、リアス、アーシア、朱乃、小猫、イリナ、レイヴェルと華があり過ぎるメンツだ

そこへ祐斗が乗り込むわけだから、一誠は久しぶりにイケメンに対して嫉妬を禁じ得なかった

しかも誰かの身代わりではなく、単にジャンケンで負けたゆえの結果なので旅行に出る前から凶運(きょうぅん)だった……

悔しさに拳を震わせる一誠を迎え入れるように、スポーツカーの助手席のドアが独りでに開く

助手席越しにアザゼルが不敵な笑みを見せていた

「ふふふ、ようこそ、俺の愛車へ。イッセー、お前は助手席な」

まるで地獄の門が開かれたようにしか思えない状況……車内からも邪悪なオーラが流れてくる

恐る恐る乗車する一誠達

先にロスヴァイセが運転するワゴン車が発進する

一方、スポーツカーの後部座席に座るゼノヴィアは平然としており、オーフィスも無表情

そんな両者に挟まれているギャスパーは「……ひぐっ。……あぅあぅ……」と既に顔

面蒼白でシートベルトを必死に掴んでいた
全身をブルブルと震わせ、発進する前から顔が涙と鼻水まみれになっていた
「よーし、カーナビつけっぞ。堕天使特製のナビゲーションだ」
そんな一誠やギャスパーの事なぞ知らぬアザゼルはカーナビを起動させようとしていた
ボタンを押した瞬間、車のボンネットが開いて衛星放送のパラボラアンテナに似た物体が姿を現し、機械音声が車内に響く
『サテライト・ダウンフォール・キャノンシステムの起動準備に入ります。半径1キロ以内に存在する友軍はただちに避難――――』
車内の一誠達は突然の警告に驚き、アザゼルはケラケラ笑いながらボタン操作をして音声を止める
「おーっと、コレは違うボタンだった。失敬失敬」
「何かキャノンとか避難とか危険極まりない単語が聞こえてきたんですけどっ⁉　つーか、ボンネットから何か出てきましたよ⁉」
「気にするな。サテライト兵器はここでは使わん。ハリウッド映画じゃよくある事だぞ？　えーと、こっちのボタンだったかな。何せ弄り回したせいで空は飛べるわ、水上は走れるわ、次元の狭間にダイブできるわと色んな機能があり過ぎて、何処に何が設置し

てあるか制作者の俺でもよく覚えてないんだわ。コレだったかな？」

アザゼルが次にボタン操作をすると――――

『目標を指定してください。ただちにドラゴン・デストロイ・ミサイルを発射します』

ボンネットが再度開いて小型ミサイルが出現した……

「ああ、これはイッセーが『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』で暴走した時を想定して作った龍殺（ドラゴンスレイヤー）しミサイルだったかな。すまんすまん」

「サテライト兵器にミサイル⁉　何を積んでいるんだ、この不思議スポーツカーは⁉」

「私はむしろそれが見たい」

「ふざけんな、ゼノヴィアァァァァッ！　発車が発射になっちまうだろうがっ！」

「じゃあ、今日は普通に走るぞ！　パワーブースター、スイッチオン！」

アザゼルがハンドル横にある謎のスイッチを押した瞬間――――けたたましい音のロケット噴射と共に青いスポーツカーは爆走を開始させた

一誠はシートベルトに手をかけ、体に掛かるGを感じながら思いっきり泣き叫んだ

「降ろせぇぇぇぇぇぇぇっ！」

スポーツカーが走り去った直後、新は一誠の冥福を祈るように合掌した

「一誠、お前の事は忘れねぇよ。もし逝ったら……骨は俺が埋めてやる」

「アラタ～、うちらも早く行こうよ～」

退屈していたミッテルトにせがまれ、新は気を取り直してバイクに跨がる
エンジンを入れて出発しようとした矢先、ミッテルトがサイドカー内の何かに気付いた
「ん、何コレ？　ポチッとな」
ミッテルトがボタンらしき物を押した瞬間、聞き覚えのある音声が響く
『オッス！　毎度お馴染みマスター・イスルギだ！　３秒後にハイパーロケットブースターで加速するから、振り落とされないようにしとけよ！』
「……何だと（バルドン）……っ？」
キリヒコの口癖が移る新（笑）
バイクの後部からロケットの噴射口が出現し、アナウンス通り３秒経った刹那――
こちらもけたたましい爆音と共に爆走し始めた
「あら、良い風ね。悪くないわ」
「これなら直ぐに追い付くかもしれないな」
「キャッホ～！　超速（ちょうはや）ブラリ旅～！」
レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトが平然とする中、新も全身に凄まじいＧを受けながら叫んだ
「マスタァァァァァァァァッ！　いつの間に細工しやがったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ

!?」

その後、青いスポーツカーとサイドカー付きのバイクによる爆走カーチェイスが発生したのは言うまでもなかった……

「ようやく海が見えてきたか……」

兵藤家から旅立って2時間半ほど

伊豆の海岸を新は疲れた表情で見ていた

勝手に取り付けられたロケットブースターで爆走していれば、疲弊するのも無理はない

ちなみに一誠の方も車の中でグッタリと死んでいたそうだ

もう後は何事も無く目的地に到着する事を願うのみ……

車はそのまま山に登るべく街道を突き進む

山を登って山中に入り込み、細い道を通っていく

伊豆の山に入って1時間程で、濃霧の先に目的地となる温泉旅館が見えてきた

周りは山と木々しか無く、旅館は古き良き木造の純和風な雰囲気

「良い旅館ね。今日は……今夜は素敵なものになりそうだわ」
リアスは新の手を握り、ほんのり頬を赤くしながら旅館を見ていた
「……温泉。旅行……一組だけ敷かれた布団には枕が２つ……」
朱乃も空いている新の手を握っており、その表情はリアス同様に瞳を潤ませていた
何か期待に応えねばならないような雰囲気だが、爆走バイクのせいで新は疲弊が溜まっており、１秒でも早く部屋で休みたい気分だった
他の皆も車から荷物を下ろして旅館に移動する
新、一誠、ギャスパーはフラフラのまま旅館の入り口を通っていった
「お帰りなさいませ、いーひっひっひっ」
不気味な笑い声と共に新達を迎え入れたのは―――着物を着たシワクチャの老婆だった
一見すれば妖怪の類にしか見えない程怖い面持ちをしている
「おー、女将！　今日は厄介になるぜ！　貸し切りだしな」
「いっひっひっ、伊豆の山んなかまでようこそお出でくださいました。ここは悪魔さんや堕天使さんにご贔屓にしてもらっている秘境ですぞい。私はここの女将をしておりますゆえ。いま流行りの山ガールですぞ。ひっひっひっ」
『『山ガールと言うより、山姥だろ！』』

新と一誠は胸中で揃ってツッコんだ
「実は来る途中、一般人では通れない結界をいくつか潜ってきたのさ」
アザゼルがそう説明する
恐らく、道中の濃い霧が結界だったのだろう
「今日はお世話になります――――」
山姥女将にそこまで挨拶をしたリアスの表情が笑顔のまま凍り付く
彼女の視線の先に目を向けると――――奥から銀髪の女性が近付いてきた
「ごきげんよう、皆さん。先にこちらでお待ちしてました」
「「グレイフィアさん⁉」」
またもや揃って素っ頓狂な声をあげる新と一誠
しかし、その反応も当然……まさかグレイフィアが来ているとは誰も思わない
しかも、メイド服ではなく完全なる私服
「オフをいただきました。学生達だけの旅行は色々と危険でしょうから、今日は引率として参った次第です」
淡々とグレイフィアがそう言った後、凍り付くリアスの真っ正面まで来て一言告げる
「リアス、まさか旅先でハメを外そうなどと思ってはいなかったでしょうね？」
半目でグレイフィアに問われたリアスは「ギクッ！」とばかりに体を反応させて強張

らせる

……図星だったようだ

朱乃も魂胆を見破られたのか、諦めたように肩を落としていた

グレイフィアがリアスに正面から言う

「高校生が温泉旅行の名目で想いを完遂させるなど、百年早いですね。いつも言っているでしょう？　まずは殿方と普段の生活で成就させなさい。殿方との旅行で盛り上がるのはそれからでも遅くありません」

クドクド説教する中、アザゼルがグレイフィアの肩に手を置く

「まあまあ。今日は無礼講と言う事で良いじゃねぇか。お前さんも温泉に浸かって日頃の疲れを取れって」

グレイフィアはアザゼルの手を取り、奥に引っ張っていこうとする

「良い機会です。あなたにも色々と話さなくてはいけない事が山のようにありました。今日は今までの反省とそれを踏まえての今後を話し合いましょう」

「お、おい！　マジか！　俺は今日温泉に入って酒をキューッとやって岩盤浴やって卓球やってマッサージ機を使う予定なんだぞ⁉」

「サーゼクスに悪影響なので、今の内にあなたの悪いところを摘みます」

「摘まれるの、俺⁉　おい、助けろ、お前達ぃぃぃっ！」

アザゼルは新達に助けを求めるが……全員が満面の笑みで手を振って見送った
これ以上に素晴らしい粛清は無いだろう（笑）
「てめえら！　薄情者ぉぉぉぉっ！」
こうして、悪の堕天使は銀髪の女王に旅館の奥へ連れて行かれたのだった

「自称天使には負けん！」
「言ったわね！　天界式ピンポンを見せてあげるわ！」
時は夕飯前、大浴場近くにあるゲームコーナーでゼノヴィアとイリナが卓球勝負をしていた
激しいラリーを繰り広げている
アーシアは見学しながら2人に応援を送る
「……レイヴェル、これおいしいから食べてみて」
「まあ、いただきますわ」
小猫とレイヴェルはゲームコーナーに設けてあるソファーに座って温泉まんじゅうを食べていた

普段は口喧嘩しているけど、何だかんだで仲の良い２人だったりする
「あぁぁぁぁぁぁあああああぁぁ……良い……」
震えた声を出しながら気持ち良さそうにマッサージ機を使うロスヴァイセ
声が若干おばさんくさい（笑）
「……わぉわぉわぉ……」
変な声を震わせて揺れるマッサージ機に座るオーフィス
「あーっ、またレイナーレさまだけ大当たり(スリーセブン)!? ズル～いっ！」
「フフン、これも私が至高の堕天使に近付いた賜物(たまもの)よ」
「またサクランボ……っ。レイナーレさまには敵(かな)わないのか」
スロットマシーンで盛り上がっているのはレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの堕天使三人娘
皆が思い思いに温泉旅館を堪能していた
祐斗は温泉に、リアスと朱乃も岩盤浴を堪能している
実はこの旅館には混浴風呂も備わっているのだが、まだ誰もそこに入る気配が無い
『……ぐふふっ、ようやく車内での気持ち悪さも抜けてきたぞ。夕飯食べて一息ついたら大浴場に行ってみようかな！』
一誠はスケベな目論みに備えて英気を養(やしな)う事にした

そして深夜を迎え、一誠はスケベな勘を働かせて「この時間帯なら女子の誰かが入る筈！」と言う時間に部屋を抜け出す

ちなみに部屋は男子ひと纏めになっており、アザゼルは夕飯前にグレイフィアからようやく解放され、部屋で晩酌タイム

ギャスパーは部屋に備え付けてある温泉に入っており、祐斗は岩盤浴に行っている

夕食を食べ、仮眠も取り、睡眠欲と食欲を満たしたら……次は性欲だ

「せっかく温泉に来たんだ、スケベが女湯を覗かないでどうするよ……っ！　さーて、いざ温泉へ――――」

ガシッ！　ミシミシ……ッ！

気合を入れて向かおうとする一誠は背後から何者かに首を掴まれ、絞められる

突然の奇襲に声を上げる暇さえ無く、一誠は窒息しながら背後に視線を向けた

『……ッッ！　あ、新……ッ⁉　なに、しやがる……っ⁉』

「詰めが甘いな、一誠。温泉＝覗（イコール）きと聞いて俺が静観するとでも思ったのか？」

『お前、だって……覗き、たいだろ……っ⁉　だったら――――』

「はぁ……分かってねぇな。忘れたのか？　俺はな……女湯を覗く時は戦友（とも）を欺（あざむ）いてから覗く。欺けなかった場合は――――仕留めてから覗く」

ゴキッッ！

新は一誠の首をあらぬ角度にねじ曲げ、意識を奪い取った
最期に一誠は「裏切り、もの……っ」と怨嗟を込めて倒れ伏した
その後、新は一誠を簀巻きにして人目の付かない場所に放り込み、温泉へと向かった
件の混浴風呂に着いた新は脱衣場に足を踏み入れるが、中には誰も入っていない
奥の露天風呂も確認してみたが誰もおらず、お湯が沸く音しか聞こえてこない
「まあ、あの山姥ババアがいないだけマシか」
これは男湯に入って女湯を覗いた方が確実だと思った新は、振り返って出ようとした
その時、誰かが脱衣場に入ってくる
長い銀髪の女性、ロスヴァイセ――――ではなく……グレイフィアだった
「あら、新さん。殿方がいらっしゃるなんて……事前の確認を怠るなんて迂闊でしたね」
混浴風呂の脱衣場でグレイフィアに出くわした新は数秒ほど思考が停止した後、こう結論を出した
〝……よし、出よう〟
彼女の厳格さを考えれば当然の答えで、説教どころか折檻を食らわされるかもしれない……
「じゃ、じゃあ俺はこれにて失礼するでござる」
ござる口調で足早に出ようとした時、グレイフィアが新の手を掴む

怪訝に思う新にグレイフィアは微笑んで言った
「一緒に入りましょうか」
「……何ですと？」
予想外の一言に、新は呆気に取られた

混浴の浴場、その洗い場に座る新とグレイフィア
自分の２つ横に全裸のグレイフィアが座っている……っ
横目で見れば、たわわなおっぱいとグラマーな肢体がそこにある
リアス以上のナイスバディが直ぐ横にあると言うあり得ない状況……
新はスケベ心よりも緊張感に包まれていた
何せ相手は魔王サーゼクスの眷属最強の『女王』の上、サーゼクスですら恐れる女性
下手に下心を持ってしまえば消されかねない……っ
そんな厳格さを持っている筈のグレイフィアが何故新と混浴の温泉に入るのか？
説教？
性欲の自粛勧告？

リアスとの関係についての進言？
頭に巡るものを上げていけばキリが無い
「……あの、良いんすか？」
新は恐る恐る訊ねてみた
グレイフィアは桶に入れたお湯で体を流しながら「何がですか？」と聞き返してくる
非常に困る返答とこの状況下に居たたまれなくなったのか、新は立ち上がって出ようとした
「俺、やっぱ上がりますわ」
足早に去ろうとした新の手をグレイフィアは再び掴み、直ぐ横の洗い場に座るよう促してくる
「お待ちなさい。まだ体を洗ってはいないのではなくて？　お湯に浸かってもいません」
グレイフィアの横に座らされる新
チラリと目線を向ければ、タオルで隠す事すらしない極上のお姉さんボディがある
グレイフィアの肌は眩しい程に白く、シミ1つすら無い
形も良く大きいおっぱいに綺麗な乳輪と乳首、丁度良い太さの足、腰も経産婦と思えない程くびれている

「背中を流してあげましょう」
そう言われて新はグレイフィアに背中を流してもらう事に……
ゴシゴシと背中をタオルで擦られる新
鏡越しに映るグレイフィアのおっぱいはブルンブルンと揺れ、背中から腕、太ももの辺りまでタオルで擦られる
たまに近寄り過ぎてグレイフィアのおっぱいが新の背中に触れるが、当の新は反応に困ってしまう
「広いのね、新さんの背中は」
「そ、それ程でも……っ」
「うふふ、何をそんなに改まっているのですか？　私は正直な感想を言っただけですよ？　やはり高校生と言えど男性ね。とてもたくましい背中をしているわ。いえ、冥界の為に数々の強敵を倒してきたあなたにそのような事を言うのは失礼かもしれないわね」
「そ、そうですか？　でも、褒めていただいて光栄っす」
そんな会話をしながらも新の背中にお湯がかけられる
「はい、これで綺麗になりましたね」
「ありがとうございます。じゃあ、俺はこれにて――――」
「今度は私の背中を流していただけると嬉しいのですが？」

本日3回目の「何ですと……っ？」を絞り出す新
呼吸を整え、グレイフィアに訊ねる
「い、良いんですか？」
「ダメかしら？」
残念そうな声音を出すグレイフィアに、新は受けるしか選択肢が無くなった！
「い、いえ。喜んでお受け致します！」
「うふふ、新さんは本当におかしな方ですね」
普段は見る事の無いグレイフィアの可愛らしい笑顔に、新の下心が擽られる
だが、今は真面目に背中流しに取り掛かった
『……思っていたより、小さい背中してんだな』
泡立てたタオルでグレイフィアの背中を流す新
緊迫状態の中、新は意を決して告げた
「あの、グレイフィアさん」
「はい。何でしょう」
「こんな時に言うのもなんですが……俺とリアスはお互いの想いを告げました」
「ええ、うかがっています。冥界でも有名ですもの、『グレモリー次期当主の恋人』として。それで、私に改めて報告された理由は？」

「……認めてもらえますか？　俺とリアスとの事……」
新の問いに対してグレイフィアはこう訊き返してくる
「その確認は私があの子の義姉(あね)だからですか？　それともグレモリー家のメイドだからでしょうか？」
「両方です」
新の言葉を受けて、グレイフィアは少し考え込むように黙した
暫(しば)し考えた後、こう言ってくる
「そうですね。では、条件をクリアしてくれるのなら許してあげましょうか」
「条件？　それはどんな……？」
グレイフィアは顔を新の方に向けて、笑みを見せる
「今後、私の事をプライベート時に『義姉(あね)』とお呼びなさい。それが条件です」
難易度が高いと言うか、恐れ多いと言うか……考えようによっては殆(ほとん)ど許すと捉えられる条件である
真相は分からず終いだが、新は湯でグレイフィアの背中を洗い流す
「背中、ありがとうございました。さ、お湯に浸かりましょう。せっかくの温泉なのですから」
グレイフィアに言われるまま、次は温泉に浸かる事にした

「……良いお湯です。温泉は日本のものに限りますね……」
温泉に浸かり、グレイフィアが気持ち良さそうにそう漏らす
新は「そうっすね……」と返すものの、直ぐ隣に銀髪の美女がいるゆえに温泉よりも気になってしまう
このままでは保たないので何か話題を振る事にした
「そ、そう言えば一誠とミリキャスが随分と打ち解けたって聞きましたけど」
「ええ、あの子もとても喜んでいました。……あの子は出生が特別なものだったゆえに他の子供達のように自由が約束されているわけではありませんから……」
ミリキャスは魔王サーゼクスとグレイフィアの息子
魔王の子供と言うだけで周りの大人達は特別な目で捉えている
今後待ち受けるものはミリキャスが思う以上に大きなものとなるだろう
プレッシャーに押し潰されないよう、一誠もそうだが新も出来る限りのフォローをしていかなければならない
そんな風に思っていると……グレイフィアが新に近付き、身を寄せて新の頬に手を伸ばす
「夫も息子もプライベートな時間を有意義に過ごした。それならば私も多少新さんと楽しく過ごしても文句は言われないと思いませんか？」

「――――ッッ！」

いつものグレイフィアと違い、官能的な目をしているので不覚にも鼓動が昂ってしまう

「……義弟が出来るのですね……」

「グレイフィアさん、家族とかは……？」

新は不意にそう訊いてしまい、グレイフィアは少しだけ表情を落ち込ませていた

「死別、または生死不明です。過去の旧政府と反政府の内戦でルキフグス家の者は実質私しか残りませんでしたから……」

「……ツラい事を訊いてしまいましたね」

「あなたが気に病む必要はありません。遠い昔に終わった事です。それに私には新しい家族がいますから……。サーゼクス、ミリキャス、リアス、お義父さま、お義母さま、ルシファー眷属……それに」

グレイフィアが新の頬を撫でる

それはリアスの撫で方にそっくりだった

「義弟もいる。今はとても幸せなんですよ」

素敵な笑顔を向けるグレイフィアに、新の下心指数が上昇

そして、こんな状況でも新の目がグレイフィアのおっぱいに釘付けになってしまう

――と、ここで新が何かに気付いた
『……酒の匂い……っ？』
最近の新はリュオーガ族の力を頻繁に使用するお陰で鼻が利くようになり、グレイフィアの口元から微かな酒の匂いを嗅ぎ取れたのだ
「……グレイフィアさん、もしかして酔ってる？」
「さあ、どうでしょうか？　……ひっく」
「絶対酔ってるよな⁉　〝ひっく〟って言ったぞ！」
「そんな事より新さん。先程、私の胸ばかり見てましたよね？」
「えーっと、それは……俺の悪い癖でして……どうにも視線がそちらに行ってしまうもので」
そう言うとグレイフィアはクスクスと小さく笑う
「構いませんよ。若い男性なのですから、当然の反応でしょう？　けれど、そうね。前にも言った覚えがありますけど……私の裸を見た殿方はサーゼクスとあなただけですね」
――と、ここで突然の浴場の扉が開かれる
そちらに目を向けてみると――そこにはリアス、朱乃、小猫、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセ、レイヴェルと女性陣が全裸で混浴に姿を見せていた
特にリアスが新と身を寄せ合うグレイフィアを確認する

「新……と、お義姉(ねえ)さま⁉」
新とグレイフィアの状況を見て驚き、全身を震わせるリアス
グレイフィアは新とリアスを交互に見た後、意味深な笑みを浮かべて言う
「あら、リアス。浴場で大きな声を出すものではありません」
「……新を混浴の温泉に誘おうと男子部屋に行ってみたら、新がいなくて……もしかしたらとここに来てみれば……こ、これはいったい……？」
〝ヤバい！〟と直感した新は直ぐに言い訳をしようとしたが――――グレイフィアが新に抱き付いてくる
素晴らしいボリュームのおっぱいが新の背中に押し付けられ、極上の感触が広がる
そして、グレイフィアがからかうようにリアスに告げた
「義弟(おとうと)とお風呂でのスキンシップ、と言ったらどうするのかしら？」
その言葉に対してリアスはタオルを落とし、イヤイヤと首を横に振った
「……取られちゃった……私の新、お義姉(ねえ)さまに……取られちゃった……」
駄々っ子が言いそうな事を呟(つぶや)きながら、リアスは涙目になった
「これが真の浮気なのね……グレイフィアさま、さすがですわ……」
その場にくず折れ、虚ろな目になる朱乃
「魔王の妻を新が略奪！　いや、魔王の妻が部長から新を奪ったのか？　どちらにして

もさすがだな」
「うんうん！　もう、これは大事件よ！」
ゼノヴィアとイリナは感心するように見守るだけ（笑）
「……新先輩ゲットの道は険しすぎる」
「……最近、新さまを遠く感じますわ」
小猫とレイヴェルは遠い目をしていた
「凄い現場を見てしまいました……。浮気旅行とはよく言ったものです」
ロスヴァイセは何を言っているのだろうか？
リアスは意を決したような目付きで、フラフラと覚束ない足取りで新とグレイフィアの方に向かっていく
「……良いもん。……お義姉さまを倒して、新を取り戻すもん！　死ぬ気でいくわよ、朱乃！」
リアスは決死隊のような宣言をして、手元に紅い魔力を滾らせる
「そうですわね。たとえ相手がグレイフィアさまでもここは退けませんわ！　リアス、彼を奪い返しましょう！」
朱乃も手元に電気を走らせていた
「面白いですね。ふふふ」

新に抱きつきながらも不敵な笑みを浮かべ、オーラを纏うグレイフィア

「ちょ、ちょっと待て！　俺の言い訳を聞いてくれ！　グレイフィアさんは酒に酔って――――」

「お義姉(ねえ)さまのおたんこなすぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

その後、混浴の浴場で熾烈なキャットファイトが始まり、新は何も出来ずに巻き込まれる事に――――

結局、最後まで癒されたのか癒されなかったのか分からない慰安旅行になってしまいました（笑）

第１８章　進路指導のウィザードとダークロード

平和が１番とか言ってるけど、本当に大丈夫?

都内にある某会員制高級レストラン、ここで親睦を深める為の会食が行われていた
ただし、それは和気藹々としたものではない……
テーブルに座しているのは――いずれも裏社会に蔓延る組織の重役
しかも、中には未だ三大勢力の和平に反対する冥界政府の連中もいた
初老から中年の男性ばかり――否、２人ほど若い者がこの会食に参加している
　そして、主催者は……造魔だ
首魁のバサラ・クレイオス、執政官のシルバー・ゼーレイド、〝バサラの右目役〟と称されるレビィ・シャルティアが出席していた
『……なに、この場違い感……』
様々な悪が蔓延する雰囲気に一言も発せず、ガチガチに固まるしかないレビィ
シルバーは参加者の空いたグラスにワインを注ぎ、バサラは皿に並べられた料理を次々と食べていく
しかし、バサラの食事作法は決して行儀の良いものではなかった

何故なら――――全ての料理を手掴みで食べていたからだ
前菜のサラダや魚のムニエルは勿論、熱々に焼かれた肉料理さえも平然と手掴みで食べ進める
まさに〝カ○ジ〟に出てくる帝王の如し……
ここで参加者の1人が話を切り出してくる
「ところで、三大勢力との抗争はどんな具合ですかな？　執政官どの」
「概ね問題ありません。こちら側の戦力を多少減らされはしましたが……所詮は傘下組織、中枢格は微塵も揺るぎません」
シルバーは淡々と答えながら、他の空いたグラスにワインを注いでいく
「心強い発言だ。やはり造魔に肩入れしたのは正解と言えよう」
「三大勢力は我々にとっても目の上のたん瘤だ。こうやって親睦ってのも結構だが、裏社会を領域にしている我々がナメられては他国に隙を見せる事になる。そうは思いませんか、首相補佐官どの？」
参加者の1人に〝首相補佐官〟と呼ばれた男性は「そうだな」と簡素に返事をする
年齢は30代半ばといった感じのヒゲを生やした男で、如何にも裏がありそうな雰囲気を纏っていた
「この日本はまだまだ弱い。今の日本は無能な政治家どもに生殺与奪の権を握られてい

る。そんな連中が交渉を誤(あやま)れば……アッサリと我が頭上で核爆弾が炸裂する。三大勢力の連中はシビア意識に欠け過ぎている。そんな奴らに我が国――――日本を語ってもらいたくないものだ。執政官どのから見てもそうは思わないか?」

「ええ、おっしゃる通りです。ただ……1つお伺いして宜しいでしょうか?」

「何だ?」

「……何故、口元に肉が張り付いたままなのですか?」

シルバーの言葉に場の空気が止まる……

それもその筈、確かに〝首相補佐官〟の口元には皿に乗せられた料理の肉がくっついていたのだ

食べ残しならまだしも、明らかに切り分けたばかりの肉……

〝どうやったらそんな風にくっつくんだ?〟とバサラ以外の誰もが胸中でツッコむ

シルバーの指摘でその事に気付いた〝首相補佐官〟は口元に付いた肉を指で摘まみ、そのまま口へ運ぶ

「すまない。時々あるんだ、気にしないでくれ」

「お言葉ですが、時々でもそんな珍妙なハプニングは起こりませんよ」

シルバーが冷静にツッコミを入れていると、別の席に座っていた男性が話に入ってくる

　こちらは白いスーツを着た見た目も若い男だ
「説明を求めるだけ無駄だよ。普通ならば１０００％起こり得ない状況を、知らず知らずの内に生み出してしまう。彼はそう言う男なのだよ」
「はあ……失礼ながら全く意味が分からず、理解も出来ません」
「事実とは小説よりも奇なり、今のご時世では何が起こってもおかしくないと言う事だ。誰もが偉大な芸術家になれるわけではないが、誰が偉大な芸術家になっても不思議じゃない。それは表の世界でも裏の世界でも共通する――お分かり頂けただろうか？」
　白スーツの男の語り種にシルバーは疑問が尽きなかったが、周りの参加者が次々に同調する
「その通りだ」
「さすがは世界に名を馳せるテクノロジー企業――ＧＡＩＡコーポレーションの若社長、言う事が違う」
「〝若〟社長はよしてもらいたい。私は永遠の２４歳なだけだ」
　先程まで止まった空気が和やかになり、参加者が話を戻そうとする
「今や造魔は裏社会の顔なんだ。しっかりしてもらわないと」
「いやね、我々としては造魔のような真なる強者こそが裏から統率するのに相応しいと思っているんだよ」

「皆さまにはご迷惑をお掛けするかもしれませんが、ご期待を裏切らないよう善処致します」

ここで冥界政府の役人（反三大勢力）が話を切り出してくる

「そう言えば執政官どの。噂で聞いたんだが……そちらの魔剣聖どのは闇皇と因縁浅からぬ関係らしいじゃないか」

「お耳が早いですね。バサラさま曰く、その者とは同業者時代の腐れ縁だそうです」

「なるほど、だから必要以上にグレモリー眷属へ絡み出したのか。更に自ら敵地へ足を運んでグレモリー眷属相手に圧勝したそうじゃないか。我々としては実に気分が良い話だ。アザゼルの面目が潰れたのだからね。ただ……１つだけ気掛かりがあるのだが、訊いても良いか?」

「何でしょう?」

「何故その時に闇皇を始末しなかったのかね?　魔剣聖どのの実力なら簡単だっただろうに」

その言葉が聞こえた瞬間、バサラの手が止まった

周りがザワつく中、反三大勢力の冥界政府役人が続ける

「あのような雑種にいつまでもデカい顔をされてしまっては、我々の立場も危うくなってしまう。危険な芽は今の内に摘んでおくべきではないのかと思って」

「……」
「これからは造魔と、それに与するものが影のトップに成り得る時代なんだ。そろそろアザゼルのような老害が仕込んだ雑種には消えてもらいたいのだよ」
〝老害が仕込んだ雑種〟と言う発言に周りの参加者の殆どが含み笑いをする
静観しているシルバーが不意にバサラの方へ視線を向けると――――バサラは掴んでいる肉を静かに握り潰していた……っ！
肉はどんどん体積を小さくしていき、絞り出された肉汁が皿に溜まる
ただならぬ雰囲気になっているにもかかわらず、反三大勢力の役人は闇皇への侮辱を止めない
「アザゼルは今や腰抜け同然の老害と成り果てているんだ。そんな者に教えを受けている闇皇もいずれは老害脳に毒されていく。たかだか転生の雑種ごときが冥界の希望だの何だの、持て囃されている事自体おかしい話だ。権利も何も無いのに出張ってくるのも烏滸がましい。あのような輩はさっさと消えて然るべきだ。貴殿らもそう思うだろう？」
「確かに言えてる」
「闇皇も魔剣聖どのの前では赤子同然だ」
「やはり時代は造魔に傾いていると言うわけだな！」

次々と上がる同調の声に反三大勢力の役人も口の端を吊り上げる
シルバーが嘆息していると……バサラが席を立ち、反三大勢力の役人の所まで歩み寄る
「おや、魔剣聖(ヴァンキッシュ)どの。どうかされましたかな?」
「ああ、何か弾んだ会話が聞こえてきたからよ」
「聞いておられましたか。此度(こたび)の働きは実に胸がすく思いでしたぞ。まるで我々の胸中を代弁してくれたかの如く、貴殿の後ろ楯を得られたお陰で我々も動きやすくなった。感謝しているよ。如何(いかが)かな?　今度の祝いの席は是非我々に設(もう)けさせていただきたい。存分に馳走しよう」
「……何かめでたい事でもあったのか?」
「それはもう――――」
言いかけた刹那、バサラの表情が一変
テーブルに置かれた食事用のナイフを握り、反三大勢力の役人の手に思いっきり突き刺した……ッ!
ザシュッ!と肉を貫(つらぬ)く音と共に絶叫が響き渡る
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!」
「何がめでてえんだアッ⁉」

バサラはナイフを突き刺したまま、空いた左手で役人の頭を押さえつけて睨みを利かせる
突然の凶行に周りの殆どが萎縮し、同胞のレビィも苦い表情で目を逸らす
「テメェに竜の字の何が分かるんだ？　戦り合った事も無ぇくせに何が分かるんだよ？　今のアイツは芽吹こうとしてる途中だ。大器晩成って言葉と同じように、これから面白くなろうとしてんだよ」
「あっが……っ！　あ、あああぁぁぁぁあ……ッ！」
「竜の字が死ぬのがそんなにめでてぇのか、アァッ？　めでてぇってのかァッッ！」
バサラは怒号を飛ばしつつ、刺したナイフに何度も力を加える
刺し傷を無理矢理拡げられた役人は更に絶叫を重ね、痛みで体を何度も跳ねさせた
一頻り刺し終えたところでバサラはナイフを引き抜き、無造作に放り捨てる
だが、これだけでは終わらない……っ
役人が手を押さえて呻いている間に、バサラはシルバーが持っていたワインボトルを奪い取る
ワインボトルで役人の顔面を力一杯殴り、ボトルが割れて中身と共に血が飛び散る
「お、おい！　いくらなんでも……っ」と参加者の1人が声を上げるが――――誰も止めようとしなかった

バサラは椅子から転げ落ちた役人の髪の毛を掴んで無理矢理起こし、割れたボトルを目元に宛がった

即座に目を抉り取れる体勢……

役人は歯をガチガチと鳴らし、完全にバサラに怯えた挙げ句――泡を吹いて気絶した

そのザマを見て興醒めしたバサラは「フンッ」と役人を一瞥し、割れたボトルを床に放り投げて会食の場を去っていった

レビィは慌ててバサラのあとを追い、シルバーが参加者の全員に「大変失礼致しました」と頭を下げる

「申し訳ありませんが、私達はこれでお開きとさせていただきます。皆さま方はどうぞお食事を続けてください」

冷静かつ冷淡にそう言い残したシルバーが退室する直前、この場にいる参加者全員に告げる

「ああ、言い忘れてましたが……このような些細なイザコザで我々との取引を打ち切ろうなどと考えない方が宜しいですよ？　我々造魔は来る者拒まず、去る者追わずの組織ですが、敵に回ると言うのなら話は別です。その時は――この世に存在していた痕跡すら残さず滅ぼします。では、失礼します」

警告とも取れる言葉を残して退室するシルバー

その場に出席していた参加者は硬直し、今更ながら〝とんでもない組織と関わりを持ってしまった〟と恐れ、後悔していた

〝約２名〟を除いて……

『造魔（ゾーマ）の首領、魔剣聖（ヴァンキッシュ）バサラ……噂以上のクセ者だな。敵である者を詰（なじ）るかと思いきや、裏では好敵手と認めている。そんな奴の前で好き勝手ほざけば粛清されるのは当然。貴族、悪魔、役人と言った人種は無能ばかりで困るな。だが、明日は我が身になるやもしれん。その時が来るまでに、こちらも準備を整えておかねばならんようだな。我が日本を強国（きょうこく）にする為にも……』

『現時点で彼を敵に回せば、こちらの不利益は１０００％必至。造魔（ゾーマ）の技術および情報提供によって我が社のテクノロジーが飛躍的に発展したのも事実。生ぬるい三大勢力に代わって我々が表と裏、両方を支配する時代へと進化を遂げる……。その時までにはお互い利用させてもらおうか』

「ね、ねえ、バサラ。さっきのはいくらなんでもやり過ぎだったんじゃないの……？」

「アホか、チビスケ。あの程度で逆ギレして取引を無下にするようなら居ねぇ方がマシだ。貴族だの純血だの階級だの、そんなもんばかりにこだわってるから足元掬われちまうんだよ。今の時代じゃ無意味な肩書きだ」

「バサラさま。機嫌を損ねたばかりで申し訳ありませんが、是非とも小耳に挟んでもらいたい情報があります」

「ああ?　何だよ、シルベッタ・スタローン」

「シルバーです。近々、カーミラ派の吸血鬼が三大勢力との会談を設け――――グレモリー眷属と接触するとの事です」

「……ほぉ、吸血鬼の連中が遂に動き出すか。しかも会談だぁ?　あいつらの事だ。どうせ向こうに不利な条件を突き付けて、一方的なマウントで話を進めるつもりなんだろうよ。吸血鬼ってのは嫌味と陰険の塊だからな」

「その会談、如何されますか?」

「邪魔するってか?　ほっとけほっとけ。あんなクソどもにまともな交渉なんざ出来やしねぇ。せいぜい陰で監視が良いとこだろう」

「では、私かブラッドマン辺りに――――」

「いや、俺が見とく」

「……バサラさま、少しはご自重なさってください。あなたは造魔の首領、そのような方

がホイホイと敵地へ出向く事はありません。遠足じゃないんですから……」
「別に良いじゃねぇか。俺の首を取りたきゃ堂々とかかって来れば良い。闇討ち不意討ち奇襲は大歓迎だぜ？」
「やれやれ、本当に底が知れない御方ですね、あなたは」
「どいつもこいつも肝が据わってねぇだけだ。それにしても……ククッ、カーミラ派の連中が随分偉くなったもんだな」
「……？　バサラ、そのカーミラ派の吸血鬼と何か遭ったの？」
「なぁに、５年ほど前に吸血鬼どもを狩りまくってたんだが、その時の事を思い出しちまって」
「そんなに笑う程？」
「当たり前だ。貴族だの純血だの偉ぶってやがったのに、チョイと鬼ごっこしただけで泣き叫んでたんだからよ。特に酷かったのはカルビホルスタインって家のヤツだ。追い回したらヒィヒィ泣いた挙げ句、ションベンまで漏らしやがった（笑）」
「カルンスタイン家ですね。カーミラ派の女性吸血鬼の中でも古参の一角です」
「あー、そいつだ。あの時は腹が捩れるくらい笑っちまったよ」
「何か……その吸血鬼が可哀想に思えてきた」

「……ここは俺の部屋だよな?」
ある日の早朝、新はそんな自問をするほど不可解な状況に身を置かれていた
「……すーすー」
ベッドから聞こえてくるリアスの寝息
彼女とはいつも一緒に寝ているので、そこは変わらぬ風景である
問題はここからだった
「……新さん……もっと強く……」
「……ぐーぐー……」
「……うふふ、天界のおまんじゅう美味しい……」
「……にゃん……」
官能的な寝言を呟く朱乃、豪快にお腹を出して寝ているゼノヴィア、そのゼノヴィアを抱き枕にしてよだれを垂らしているイリナ、猫のように丸まって寝ている小猫
「……アラタ……至高の堕天使となった私に生涯尽くしなさい……」
「……えへへ、ウチのちっぱいが世界遺産に登録、あざ～っす……」
「……んんっ……そんなに欲しがるな……」

更にはレイナーレ、ミッテルト、カラワーナの３人も思い思いの夢を見ていた
いくら大きなベッドと言えど、さすがにこれだけ多くの人数まともに寝られる筈も無く……
ベッドの上は女子てんこ盛りと言う凄まじい光景だった
新は既にベッドの外にいて、起きる時も床の上で目を覚ました
ゼノヴィア辺りに蹴飛ばされたのだろう
自分のベッドに女の子がたくさん居れば、普通なら嬉しい状況なのだが……入れるスペースが全く無い
新は椅子に座りながら息を吐く
魔獣騒動（まじゅうそうどう）や造魔（ゾーマ）の奇襲が終わってから、だいたいの確率で毎朝がこんな状態である
魔獣騒動で死にかけ、命を削るような戦いが頻発したせいか――――眷属女子の行動がいっそう大胆になってきた
それは性的なものと言うよりも生活面のちょっとした事から始まる
朝の登下校で新の横と言うポジションを取り合ったり、部活動で新の膝上に座ろうと小猫とレイヴェルが争ったりｅｔｃ……
いくら新でも身は１つなので全てには対応しきれない
この事をアザゼルやロスヴァイセに相談してみた

アザゼルからは――

「ま、お前の生死不明と言うあいつらにとって絶望的な一件があったせいか、その反動でお前をいつも以上に求めているんだろう。オマケに『造魔(ゾーマ)』との戦いでもお前は無茶ばかりしてるから、いつ死んでもおかしくない状況に晒されている。一時的なものだと思うから落ち着くまで相手をしてやれ。甲斐性はあるんだろ?」

……と言われ、ロスヴァイセからは――

「新さんの男子力が試されている時期なのだと思います。バランス良くお付き合いしないと可哀想な目を見る女子が出てしまいますからね。――っと、私は何を真面目にこんないやらしい事を答えているのでしょうか。新さんや他の女子の影響なのかしら……。でもあれです。敢えて教師としての面から言わせてもらうと、教育上よろしくない事柄です」

……と、長々と語られた

椅子でベッドの女子軍団を見ながら、新は頭を抱える

「……まあ、この場面はオイシイから文句は無いんだよな」

あられもない格好で寝ている女子達の姿に、新の視線は釘付け

リアスと朱乃は透け透けのネグリジェを着ており、乳首も見えている

特に朱乃は寝る時に浴衣を着ているので、こう言ったネグリジェ姿は眩(まぶ)しく思えてし

まう
ゼノヴィアは上がシャツで下はパンツ一丁、イリナは普通のパジャマ
小猫も猫マークの入った愛くるしいパジャマを着ている
レイナーレはビスチェと呼ばれる女性用の下着姿、露出も多めで黒のカラーが良く映(は)える
カラワーナも同じく紫色のビスチェで妖艶さを増長させ、ミッテルトは黄色いキャミソールで無邪気な魅力を引き立てていた
コンコンと不意にドアがノックされる
「おはようございます、新さま、リアスさま。――皆さん起きてますか？」
声の主はレイヴェルだった
新が「ああ、入って良いぞ」と応じると、レイヴェルがドアを開けて入ってくるが……ベッドの状況を見て目を丸くする
「……す、凄い事になってますわ。昨夜はこのような状態になるなんて皆さん露(つゆ)ほども気配を感じさせなかったのに……。私も参加したかったですわ……」
「お前も参加したら俺の寝る場所は床一択になっちまうぞ……」
「……ふぁぁぁぁ……」
レイヴェルの登場にリアスが起き、寝ぼけ眼(まなこ)で新とレイヴェル――そしてベッドの

状況に視線を配っていた
「……凄い事になっているわね、ベッド」
ベッドの上で寝ている眷属女子達を見て苦笑いするリアス
部屋の中を進み、小猫を揺り動かして起こそうとするレイヴェルは思い出したように言った
「そういえばリアスさま。そろそろ魔法使いの方々の契約や例の吸血鬼の方がいらっしゃるとおっしゃってませんでしたか?」
その通り、リアスは少し前に「そろそろ魔法使いとの契約について話し合う時期なの。それと、ヴァンパイアの来客があるわ」と言っていた
魔法使いの件はともかく、〝ヴァンパイアの来客〟と言うワードに新は眉根を寄せた
実を言うと……新は仕事柄、ヴァンパイアに対してあまり良い感情を持っていない
彼が何よりも嫌う貴族社会や純血至上主義を存分にひけらかしてくるからだ
顰(しか)めっ面(つら)をする新の横でリアスが言う
「レイヴェル、魔法使いに関して新のフォローをお願いね。マネージャー、頼りにしているわ」
「お任せください！　マネージャーたるこのレイヴェル・フェニックスが、新さまに相応(ふさわ)しい魔法使いを選び抜いてみせますわ！」

リアスの一言にレイヴェルは胸を張って頷(うなず)いた
中級悪魔昇格試験の勉強でもレイヴェルのサポートがとても良く作用していたので、こう言ったマネージャーはありがたい
リアスが「まずは皆を起こして朝食ね」と言い、1日が始まると思いきや――――レイヴェルの後方から思いも寄らない人物が姿を現す
「ちゃお♪　お邪魔してるにゃん」
「く、黒歌(くろか)⁉　ど、どうしてここに⁉」
現れたのは着物を着た黒髪の美女、猫又の黒歌だった
さすがのリアスも黒歌の登場に驚き、背後を取られていたレイヴェルも「い、いつの間に！」とビックリしていた
「あ、どうも。私もお邪魔しております」
黒歌の後ろから現れたのはとんがり帽子の魔法使い――――ルフェイだった
ヴァーリチームの女性陣の登場に、新はまさかと思っていると……黒歌が「ヴァーリ達は来てないにゃん」と新の心中を読んだようにそう答えた
「……ね、姉さま。どうしてここに？」
黒歌の声に反応して起きたのか、小猫が目を擦(さす)りながらベッドから這い出る
「どうしてって、白音(しろね)が私から術を習いたいって言ってたから来てあげたのよ。ありが

たく思ってほしいにゃ。あ、それと空いている部屋、占拠させてもらってるから。よろしく～♪」

「勝手に占拠して更に住み込むつもりか⁉　せめて事前報告ぐらいはしとけよ……」

頭を抱える新、ルフェイが恐る恐る手を上げる

「そ、それとですね。魔法使いの方々と交渉するかもとの事なので、僭越(せんえつ)ながら私もアドバイザーとして滞在させていただこうかなーっと。……ご迷惑でしょうか?」

リアスが嘆息して言う

「ご迷惑も何もどうして白龍皇(はくりゅうこう)側のあなた達が私達の家にいるの?　敵地に等しいのよ?」

黒歌はズカズカと部屋に入ってきてリアスの頭を撫でる

「スイッちゃんは難しいこと考え過ぎにゃー。そんなだから、脳みそに行くエネルギーがお乳から飛び出すようになるのよ?」

リアスのおっぱいをポヨンポヨンと手で弾ませながら黒歌がそんな事を言い、新は吹き出しそうになった

リアスが黒歌の手を払う

「大きなお世話よ……。と言うよりも、スイッちゃんって何よ……!……はっ!　まさか、以前この家に来た時に転移魔法陣のマーキングをしたのね⁉」

「ピンポーン♪　お陰さまでイッシュンデ来られるようになったにゃ。いつでもここのおっきなお風呂使えるってわけね」
「なんつー抜け目の無い性悪猫だ……」
　当惑する新達にルフェイが1枚の手紙を出してくる
「あ、あの、これ、アザゼル元総督よりのお手紙です」
　新がそれを受け取り、封を切って中身を確認する
『ヴァーリんところの黒歌とルフェイが度々そこにお邪魔するかもしれねぇがよろしくな♪　ま、酷い事しないだろうから、仲良くしてやってくれや。お前らが尊敬するアザゼルより』
「俺は尊敬しとらんがなボケッ！」
「んもう！　また勝手にこんな事を！」
　新は手紙を速攻で破り捨てた
「たまにしか来ないから、気にしないで。ね、スイッちゃん？　白音の事、ちゃーんと鍛えるから♪」
　手を合わせてウインクしながら頼み込む黒歌
　リアスは額に手を当てながら言う
「……勝手になさい。その代わり、小猫のこと頼むわよ？　それと必要な時は力を貸し

なさい。悪魔らしくギブアンドテイクよ」
たまにだが黒歌とルフェイの訪問も加わり、新の家はいっそう賑やかになりそうだ……

『……平和だな』
『そうだな～』
ある休み時間、新と一誠は窓から空を眺めながら物思いに耽(ふけ)っていた
ここ最近は強敵襲来が頻発しているせいか、学園生活が楽しく感じてしまう
普通の授業ですら平和を感じる程に……
平和が1番、昼間は学園生活を送って、深夜は悪魔稼業に勤(いそ)しんで何事も無く1日を終えたい――そう切実に願うばかりだった
しかし、敵の襲来が頻発したからこそ、異例の早さで中級悪魔に昇格できたのも事実。このまま行けば、上級悪魔も夢ではない
アザゼルにも既に「上級悪魔になる為の心がけと、昇格した後の進路」を考えるよう言われている

高校２年、もうすぐ冬、親含めての進路相談の話もあるし、進路希望調査のプリントにも希望を書いた２人

人間としての進路は――駒王学園（くおうがくえん）の大学部への進学、あとは悪魔としての進路が考えものだった……

上級悪魔を目指すのは当然だが、具体的にはどういう生き方を決めるかだ

悪魔の駒（イーヴィル・ピース）を得て独り立ちする――それが主な内容だが、詳しい事までは決まっていない

アザゼルにも〝独り立ちする時は軍資金を用意しておけ〟と言われ、自分の眷属と縄張りを持つのなら、自分の下僕を養うだけの用意が無ければ意味が無いと突きつけられた

『まあ、金は無いわけじゃないんだけどな……』

新にはバウンティハンター時代に稼いだ貯蓄と、一誠の『おっぱいドラゴン』同様『オッパイザー』の稼ぎの一部――著作権の利潤が口座に振り込まれてきている

リアスから悪魔用の口座を貰い、悪魔稼業での働き分がここに入り、それにプラスされて著作権料が振り込まれる

その金額は両者ともに偉い数字なので、高校生が使うには早いと、今はまだグレイフィアに管理されていた

次に転生悪魔のあり方を木場祐斗の師匠――沖田総司に教わった
人間から転生した悪魔は生き急ぐ傾向があるらしい
永い時を生きるので、早い段階に目標達成を目指して突き進んでしまうと残りの時間が余り過ぎて困ってしまうとの事
所謂燃え尽き症候群みたいなものが生じて、感情の起伏が乏しくなってしまいかねないそうだ
ゆっくりと悪魔としての生き方を楽しみながら動いた方が転生悪魔として上手く生きられるらしい
残りの人生を無駄に消費してしないように目標や夢はたくさん見つけておいて損は無い
『……まずは上級悪魔にならないとな』
生きていれば他にもやりたい事は見つかる筈
まずはリアスの眷属として生き、将来の為に多く稼ぐ
漠然としているものの、今やれる目標が分かったところで学園生活を平穏に過ごす事を決めた
「「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」」
背後から２人分の物騒な声が聞こえ、新はつい反射的に襲撃してきた人物の攻撃を躱

し――――確認する前にボコボコにした
ボコボコにした後、改めて確認する
「ああ、ハゲとメガネか」
「殴ってから確認するなよ！」
新がボコったのは一誠の悪友、松田（ハゲ）と元浜（メガネ）だった
くだらない嫉妬心で新に奇襲を仕掛けるが、その都度やられるバカコンビである
何故か怒りに震えた様子で新に詰め寄ってくる
「やいっ、竜崎！　1年のレイヴェル・フェニックスさんとも親しいらしいな！」
「ん？　ああ、ここに転校する前から知ってるし。家族のヒトにもよろしく言われてるから面倒見てんだよ」
今は逆にマネージャーと言う立場で世話になっているがそこは割愛（と言うより教えられない）
新の言葉を聞いて、元浜がふるふると全身を震わせていた
「お、親公認かよ……どうなっているんだ……。唯一の味方である筈のイッセーもアーシアちゃんとイチャラブ状態……っ。リアス先輩、姫島先輩、塔城小猫さんにゼノヴィアちゃんにイリナさんまで……全員、この学校のマドンナだぞアイドルだぞ……っ！
そ、それに加えてレイヴェル・フェニックスさんまで……っ！」

「あんたら、その反応、もういい加減やめたら？　端から見ていても飽きるわよ」
　そんな事を言いながら登場したのは――――クラスメイトのエロメガネこと桐生藍華だった
　彼女は一誠達と分け隔てなく喋れる数少ない女子である
「こんな事言ってはあれだけど、美人のヒトってほら、変わった男性を好きになりやすいって言うじゃない？　竜崎は巧みなエロテクで落としたんだろうけど、アーシアはきっと兵藤のアレっぷりに惹かれるところがあったのよ」
「あー、なるほど」
　手をポンと叩いて納得する松田と元浜
　しかし、途端に松田は頭を抱えてしまい、元浜も涙を流して訴える
「いや、やっぱり理不尽だって！　だったら、同じエロバカな俺や元浜にだって御利益がある筈じゃねぇか！」
「その通りだ！　俺や松田のもとには一切美女とのフラグが立たないぞ⁉　どういう事だ！　どういう事なんだぁぁぁっ⁉」
「まあまあ、きっとそういうフラグが全部竜崎や兵藤に立ってしまったのよ。つまり、あいつらの方があんた達よりもずーっとエロでバカだったって事で諦めるの。ね？」
　桐生が松田と元浜の頭を撫でて慰めていたが、一誠は猛抗議する

「桐生！　そんな慰めの仕方があるか！」
「聞き捨てならん台詞が聞こえたな。バカは一誠の方で、俺はエロいだけだ」
「そうだそうだ――――って、おい！　新も俺をバカの括りに入れるなっ！」
しかし、否定は出来ない事実でもある……
「松田と元浜にも主の慈愛があれば良いのだが……」
悲哀の眼差しを向けるゼノヴィア
「今度、ミカエルさまにお願いしてみようかしら」
バカ２人の為にミカエルのありがたい慈悲を与えようとするイリナ
「松田さん、元浜さん、今度ミサに参加しませんか？　悲しい事があっても皆と一緒の時を過ごせば少しでも気持ちが楽になれると思うんです」
無自覚で布教を始めるアーシア
教会トリオの文化の違いを垣間見ていると、その横で桐生の目が新を捉えてきた
彼女の眼鏡がキラリと光る
「ところで竜崎。噂は本当なの？」
「何だよ、噂って？」
「リアス先輩の事を『リアス』って呼び捨てで呼んでるって」
桐生のその一言は教室中にいるクラスメイトの注目を一身に集めてしまった

誰もが好奇の視線で「そう言えば、そんな噂が流れてたな」「私も訊きたかった事をよく訊いたわ！」等と口にし始めている

一誠は小声で新に詰め寄った

『新！　お前そんな噂が流されてるのか⁉』

『あー、俺って敬語とか〝さん〟付けで呼ぶのが苦手だからな。それを誰かに聞かれたんだろうよ』

『どうすんだよ、下手に勘付かれたら……！』

『心配すんな、お前と違ってヘマはしねぇよ』

「で、竜崎。結局どうなの？」

ニヒヒと笑みながら訊いてくる桐生に対し、新は平然とした様子でこう言った

「それについて話すにはこんな場所ではな～。俺のプライベート事情はそう安くない。出来れば余人を交えずに語りたいものだな」

誘うような新の言葉に教室中の女子から黄色い声が上がり、男子からは驚愕の声が上がった

「ま、まさか竜崎のヤツ……桐生まで手篭めにする気か⁉」

「知りたければ、俺の言う事を聞けって事か⁉　なんてヤツだ！　このエロリストめ！」

「でもでもっ、噂の真相は知りたいわ！　桐生さんの出方次第で勝敗が決まる！」

「大スクープの予感……！　しかも、新作のネタが決まったわ！　竜崎くん×桐生さんよ！」
教室内で男子からの非難や女子からの歓声が飛び交い、桐生もまさかの提案に「むむっ、そう来たか……」と暫し考え込む
そこへ丁度良いタイミングで祐斗が教室の入り口に現れた
「イッセーくん、新くん、アーシアさん、ゼノヴィア、イリナさん、放課後の事について話し合いたいんだけど――――」
「お、おう！　木場！　いま行く！　ほら、皆も行くぞ！」
一誠がアーシア達の背中を押して、逃げるように教室を出ていく
新も便乗して桐生の追及から逃れた
「ちょっと、竜崎！　逃げる気？」
「逃げるが勝ちって言うだろ？　じゃあな～」
新はスタコラサッサと一誠のあとを追うように教室を出ていった

「うーん、やっぱり手強いわね、竜崎のヤツ。さすが何人もの女を口説き落としてるだけ

の事はあるわ」
「桐生さん」
「ん?　あらら、村山っちと片瀬っちじゃない。どうしたのよ?」
「あの噂って、やっぱり本当なの?」
「竜崎くんがリアス先輩と付き合ってるって……」
「それがねー、上手い事はぐらかされて聞きそびれたのよ。なになに、気になってる?」
「だ、だって……竜崎くん、修学旅行でロスヴァイセちゃんとも親しげだったし……」
「そ、それなのに……私達と、その……っ」
「セッ○スしたのに?」
「――――っ!!」
「あ～らら、図星ですか。まあ、竜崎の女癖の悪さは既に知ってるから良いんだけど……やっぱり、この話題の真相を見逃すわけにはいかないのよねぇ」
「ど、どうするの?」
「どうもこうも、こうなりゃトコトン追っ掛けてやろうじゃない。今まで女子を丸裸にしてきたんだから、たまには竜崎を丸裸にしてやろうじゃない。エロスクープを目の前にして、私が諦めると思ったら大間違いよ」

魔法使いとの契約は思った以上に大変そうだ！

その日の放課後、オカルト研究部の面々は部室に集合しており、職員会議を終えてきたロスヴァイセが少し遅れて合流

ソファに座る新達を確認したリアスが立ち上がり、見渡すように話し始める

「さて、皆、今日集まってもらったのは他でもないの。――今日から例の件、『魔法使い』との契約期間に入っていくわ」

――魔法使いとの契約

悪魔と魔法使いの関係は古くより太く濃密で、人間が悪魔に願い、契約する形態とは違う代物である

魔法使いと言う人種は基本的に自分の魔法研究を生涯に渡って磨き続ける魔の探求者

黒魔術、白魔術、召喚魔術、精霊魔術、ルーン文字式、地域ごとの術式、その他にも多くの魔法があり、その中から自分なりのテーマを決めて、一生をそこに注ぐ

研究を自分だけの秘匿としたり、探究の仕方も人それぞれ

その魔法使いと悪魔の関係についてリアスが改めて言う

「魔法使いが悪魔と契約する理由は大きく３つ。１つは用心棒として。いざと言う時、バックボーンに強力な悪魔がいれば、イザコザに巻き込まれた時に相手先と折り合いが付けられるからよ」
「丸っきりヤクザだな」
新がそう言うとリアスも苦笑いしながら「そうね」と答え、指を２本立てた
「２つめ、悪魔の技術、知識を得たいが為。もっと言えば冥界の技術形態ね。魔法使いが研究に使う為にそれらが効力を発揮するの」
それだけなら直に冥界に行って欲しい物を直接手に入れたり、他の陣営経由でも入手できる筈なのだが、それらの方法は高リスクらしい
前者は冥界に行く為の手段が相当限られている為
新や一誠などが手軽に冥界へ行けるのは「上級悪魔グレモリー」の眷属だからであり、悪魔でもない魔法使いが気軽に行ける程、冥界までの道のりは楽ではない
仮に行けるとしてもハイリスクな条件を要求され、魔術師の歴史に名を残す程の者なら冥界へのパスも手に入れられるが……それに関しても相当な限定条件が課せられる
つまり、悪魔や堕天使でもない者がそう簡単に冥界に行く事は出来ない……ヴァーリ等が冥界にヒョッコリ姿を現すのは異常な強さゆえにだ
そういう意味では己の強力な転移魔法のみで冥界に侵入する魔法使いも中には居る

ようだが……その手の輩(やから)は　魔法使いの協会からも悪魔からも危険視されている異端者が多い

そして、後者の「他の陣営経由から欲しい物を手に入れたらどうなのか」と言う事だが、そちらは仲介料を取られてしまう為、値段がバカみたいに跳ね上がるらしい

欲しい物次第では下手をすれば生涯の研究で得た富――――全財産でも足りないぐらいの値段を付けられてしまう

たとえばフェニックスの涙は冥界でも高級なアイテムだが、一般の魔法使いからしてみれば１０個でも少ないと評される程にレアだと言われている

その為、悪魔と契約して直に等価交換した方が安上がりになる（それでもだいぶ高値の取引となるらしい）

リアスが指を３本立てた

「最後に、簡単な事よ。己のステータスにする為、悪魔と契約するの。強力な悪魔と契約すればそれだけで大きな財産となるわ。私のお父様やお母さまだって、魔法使いと契約しているのよ？　何か遭った時は相談事を受ける為に召喚に応じるってわけね。上級悪魔及び、その眷属ならばそれが義務の１つなの」

上級悪魔グレモリーの娘たるリアスが適正の年齢に達した為、リアスを始めとするグレモリー眷属は魔法使いとの契約期間に突入する事になり、それが今回の集まった理由

でもある

ゼノヴィアが複雑そうに首をかしげる

「まさか、私が魔法使いに呼び出される側になるとは、人生とは面白いものだ」

リアスが苦笑して言う

「そうね。異能に携わる人間なら、普通は呼び寄せる側だわ。呼ばれる側なんて悪魔や魔物ですものね。だからこそ、皆には契約を大切にしてもらいたいの。１度交わした契約は簡単に反故できるものではないわ。契約したら、キチンとお仕事するの。けれど、程度の低そうな相手と契約したら、こちらの品位が疑われるわ。最高の取り引き相手を選びなさい。魔法使いにとっては異能研究の延長線上でしょうけれど、私達悪魔にとってこれはビジネスだもの。普通の人間との契約、両立してこそ悪魔よ」

『はい！』

主の言葉に新達は大きく頷いた

リアスの言う通り、これは仕事――悪魔としてこれをこなさずに上級悪魔を目指そうと言うのはあり得ない

魔法使いとの契約――良い相手を見つければ、それだけ高ステータスを確保できる

『……出来れば美人の魔女とかが良いよなぁ』

「……いやらしい事を考えていましたね？」

膝上に座っている小猫に足をつねられる新
そんなやり取りをしている内に、リアスが部室の時計を確認していた
「そろそろ時間ね。皆、魔法使いの協会のトップが魔法陣で連絡をくださるの。キチンとしていてね」
それを聞いて膝上の小猫も膝から降りて、新の隣の席に座り直す
ソファに勢揃いしたところで部室の床に大きな魔法陣が出現し、淡い光が円形を描いていく
「……メフィスト・フェレスの紋様」
祐斗がボソリと口にしたメフィスト・フェレスとは……番外の悪魔（エキストラ・デーモン）に属し、あの英雄派の霧使いゲオルクの先祖が契約した伝説の悪魔である
そんな事を思い返している内に現れた魔法陣は立体映像を映し出し、椅子に優雅に座った中年男性の立体映像が目の前に現れる
赤色と青色の毛が入り乱れた頭髪をピッチリと固めて、切れ長の両眼は右が赤で左が青と言うオッドアイ
アジュカ・ベルゼブブに似た怪しい雰囲気を漂（ただよ）わせ、少しだけ強面（こわもて）だった
その怖々（こわごわ）とした顔がニッコリと
破顔（はがん）する

『これはリアスちゃん、久しいねぇ』
　何とも軽い声音、もっと恐々としたものかと思いきや……一気に緊張の糸が解けてしまった
　リアスが挨拶に応じる
「お久しぶりです、メフィスト・フェレスさま」
『いやー、お母さんに似て美しくなるねぇ。キミのお祖母さまもひいお祖母さまもそれはそれはお美しい方ばかりだったよ』
「ありがとうございます」
　リアスが新達にメフィスト・フェレスを改めて紹介する
「皆、こちらの方が番外の悪魔にして、魔法使いの協会の理事でもあらせられるメフィスト・フェレスさまよ」
『や、これはどうも。メフィスト・フェレスです。詳しくは関連書物でご確認ください。僕を取り扱った本は世界中に溢れているしねぇ』
　いきなりのメタ発言をしているが、伝説の悪魔かつ魔法使いを束ねる長である
　新の脇に座っていたレイヴェルがコッソリと口を開く
『……初代ゲオルク・ファウストも契約した後、初代が亡くなられた後も人間界に留まり、そのまま協会のトップに位置したそうですわ』

『ふーん、人間界が気に入ったのか？』
「個人なんですよね。家とかじゃなくて」
一誠がつい気になって質問を投げ掛け、質問に対してリアスが説明をくれる
「メフィスト・フェレスさまは悪魔の中でも最古参のお一人で、活動の殆どを人間界で過ごされているの。それと、タンニーンさまの『王（キング）』でもあらせられるわ」
『タンニーンくんには僕の「女王（クイーン）」の駒をあげたんだ。滅びそうなドラゴン種族を出来る限り救済したいと言ってきてね。やー、龍王の鑑（かがみ）だよ、彼は。ま、僕ってゲームに参加しないし、冥界の騒動にも首を突っ込まないから、基本的に自由にさせてるけどねぇ』
タンニーンはメフィスト・フェレスの『女王（クイーン）』、意外なところで知りたかった情報が分かるものだ
レイヴェルが更に補足説明をくれる
『メフィスト・フェレスさまは旧四大魔王さまと同世代だそうですわ。仲が悪かったようですけど。だから旧政府とは仲違いをして、人間界にお隠れになったそうですわ』
『旧四大魔王と同期……って事は、何年も生きてる中身爺さん悪魔か』
悪魔は魔力で見た目を変えられる上、同じぐらい長生きしているアザゼルやミカエルも外見は若い
まさに見た目は子供、頭脳は大人の探偵のような感じだ

耳打ちを聞かれたのか、メフィスト・フェレスが大きく頷いていた
『そうそう、その通り。僕は彼らがだいっ嫌いだったからねぇ。だから、今のサーゼクスくんやセラフォルーちゃんの事は大好きさ。何せ僕のやっている事の大半は容認してくれているからね。前魔王の連中ときたら、あれをしろ、これをしろって要求ばかりで嫌になってしまったよ。ま、現魔王のアジュカくんとだけは思想の違いで意見が対立しているけど、それにしたって嫌いって程じゃない』
つまり、現冥界政府とは良好と言うわけだ
『年寄りの話を聞いてくれるリアスちゃんは本当に良い子だねぇ。グレモリーはキミのお祖父さんもひいお祖父さんも話の分かる方ばかりだからねぇ。お祖父さん達は元気かな？　隠居して久しいよね』
「は、はい。グレモリー領の辺境でヒッソリと過ごされてますわ」
家督の引き継ぎの際、現当主は次の家主に全てを託すと隠居生活に入るらしく、その話を以前リアスに聞かされていた
リアスは既に隠居後の事も視野に入れ、日本に住むとも言っており、まだ当主にもなっていないのにだいぶ先の事まで考えているようだった
そこからリアスとメフィスト・フェレスの昔話、世間話、昨今の魔術師業界についての話が続いていった

「では、メフィスト・フェレスさま。ソーナとは既にお話を?」
『ううん、残念だけどね、あとになってしまったよ、リアスちゃん。なんでも新しい眷属を迎えてからお話をしたいと言うから、キミ達が先になったんだ。ちなみにサイラオーグ・バアルくんとシーグヴァイラ・アガレスちゃんとは既に話は済んだよ』
「そうですか。ソーナの新しい眷属。話には聞き及んでおりますわ」
遂に増えるソーナの新眷属、話では『戦車(ルーク)』と『騎士(ナイト)』が追加メンバーで入るらしい
『いやー、キミ達「若手四王(ルーキーズ・フォー)」はうちの業界でも、他の業界でも大人気だからね。早く話をつけろと下に突っつかれて仕方なかったんだ』
〝若手四王(ルーキーズ・フォー)〟
聞き慣れない単語を耳にした新は、レイヴェルに訊いてみた
『最近つけられたサイラオーグ・バアルさま、シーグヴァイラ・アガレスさま、リアスさま、ソーナさまの若手悪魔4人を称した名称です。近年を顧(かえり)みても破格のルーキーが集まった豊作の世代と言われてます。リアスさまや新さまの世代は冥界の歴史から見ても成熟前のルーキーとしては逸脱し過ぎた世代なんですよ?』
――そこへ部室にアザゼルが入ってくる
「わりぃわりぃ、俺だけ会議が長引いてな。お、メフィストじゃねぇか!」
魔法陣に映し出される立体映像を見かけると、直ぐさま笑顔で対応

　相手もアザゼルを見ると和やかに手を上げていた
『やーやー、アザゼル。この間ぶりだねぇ。先にリアスちゃんと話をさせてもらっていたよ』
「ああ、魔術師の協会も大変なもんだな。それより、今度こっちで飲まないか？　良い酒を手に入れてな」
「お知り合いなんですか？」
　一誠がアザゼルに訊く
「まあな。長い付き合いだ。メフィストが悪魔側の旧政府と距離を置いている時期にな、グリゴリは独自の接触をさせてもらっていたのさ」
『グリゴリの情報網は大変役に立ったよ、アザゼル。今でも世話になっているしねぇ』
「お互い様さ、メフィスト。ま、グリゴリ的に魔法使いの協会と裏でパイプを持っていて損は無かったわけだ。それも三大勢力の和平で秘密裏にする必要も無くなったが」
　そこからは他の皆を置いて、２人だけで業界トークが始まってしまった
「なぬ！　マジか！　同盟拒否ってたあそこの神話体系が交渉を？」
『と言うよりも、例のドラゴンの件を掘り返している輩がいるようでねぇ。そこだけについて話し合いがあったってぐらいかな。同盟には期待しない方が良い。基本、我々とは交流を拒絶しているからねぇ。おかげで鎖国してる神話のまともなデータが入手で

きずじまいだけどさ』

「……その件か。ま、古参の神話体系は他の勢力に対して完全に黙殺だからな。たとえ、自分のところの反乱分子がこちらに牙を向けても知らぬ存ぜぬを貫くだろうよ」

『それだけ信仰者を奪われた事に対して心を閉ざしているのさ。特に僕ら聖書に記されし天使、堕天使、悪魔は他勢力に酷く嫌われているからねぇ。どれだけの神話を潰して、信仰と伝説を広めたやら。今まで和平に応じてくれたところだって、腹の中じゃどう思っているかな。各神話の主神さまの指導っぷりに期待するしかないねぇ。基本、僕らは本来の魔王と神を失っているから、神話体系の真実としては酷いぐらいに弱者だ。今の僕らが歩いている歴史は偽りとされていても何らおかしくはない』

「……それでも生きなきゃどうしようもねぇだろうが。神や魔王がいなくても俺らは生きてんだからよ」

『ま、僕も今の魔王達が好きだから、文句は無いよ』

……あまりにも深く高次元な会話に新はついていけなかった

それを察したのか、アザゼルとメフィスト・フェレスは会話を止めて、本題に入る事にした

『長くなってしまって悪かったね、リアスちゃん。それでは、キミ達と契約したいと言っている魔法使いの詳細データを魔法陣経由で送るよ』

そう言いながら映像のメフィスト・フェレスが指をクルクルと回して、新達の方に向ける
新たな魔法陣が部室の宙に展開し、そこから書類が多量に降ってきた
それを朱乃や祐斗が回収し、新や他の皆も書類の山を動かしていくが……魔法陣から落ちてくる書類は後を絶たず、次々と送られてくる
少し確認すると、履歴書みたいな書面が目に飛び込んできた
顔写真、または肖像画で魔法使いの顔らしきものが認識でき、あとは悪魔文字や魔術文字で項目が書かれていた
書面に目を落としていた祐斗が言う
「昔はともかく、今の悪魔に対する魔法使いの契約って言うのは、まず書類選考だよ。その後の選考、決定の仕様は僕達に委ねられるけどね」
「就職活動ならぬ、契約活動ですね。今はこれが主流なんですよ。抜け駆けを目指す契約合戦をして、血に塗れた時代もあったそうですよ」
ロスヴァイセが山盛りの書類を抱えて言う
それだけ力ある悪魔との契約はステータスであり、生涯の経歴として大きな意味合いを持つ……
そんな事を思っている内に、送られてきた書類の山を指名された者ごとに仕分けてい

く

1番書類が多かったのはリアスで、アザゼルはその結果に至極当たり前と言った面持ちをしていた

「ま、当然だろう。リアスはグレモリー眷属の『王』だ。リアスと契約しておけば、眷属のお前達を動かせるかもしれないと踏むだろうからな。グレモリー家とも懇意に出来る可能性も含まれる為、『グレモリー眷属』と言うカテゴリーではリアスが1番人気になるのは当たり前だ。それゆえ、リアスが選ぶ相手は慎重かつ、強力な魔法使いでなければならない」

「分かっているわ。じっくり選ばせてもらうつもりよ」

リアスが選ぶ魔法使いなら、名のある相手になるだろう

次に多いのはロスヴァイセだった

「なるほど、魔法を研究する上で私の北欧で得た知識――世界樹ユグドラシルに関するものを欲したのでしょうね」

ロスヴァイセは自分の評価を冷静にそう分析していた

北欧神話の真実や知識を得たい魔法使いが多いと言ったところだろう

更にロスヴァイセは悪魔でヴァルキリー、稀少な存在でもある

次に多かったのは――意外にもアーシアだった

「……こ、こんなにたくさんの書類をいただけるなんて……私で本当に良いのでしょうか？」

恐縮しているアーシア、自分がこんなにも多く求められているとは露ほどにも思っていなかったのだろう

メフィスト・フェレスが言う

『回復と言う能力はメリットが大きい。どこの時代、何処の誰でも癒しの力とは究極のテーマの１つだよ。キミと契約を結び、回復の恩恵を受ける。それを使って富を得る事も容易に可能だからねぇ』

確かに癒しの力を求める者は世界中にいる、それを考えればアーシアとの契約は大きい

儲け話にも出来る上、如何なる取り引きにも使えるだろう

「アーシア！　相手は慎重に選べよ！　悪どそうな奴だけには引っ掛かるな！　いや、俺も一緒に選ぶ！」

庇護欲満々に一誠はアーシアを心配してしまう

『まあ、僕達協会が人選した者達だから、そこまで非道な輩はいないさ』

メフィスト・フェレスがそう言ってくれるものの、やはり心配なものは心配だ……

「安心なさい。私や朱乃もアーシアの相談に乗るのだから、下手な交渉はしないわ」

リアスと朱乃がついてくれるなら、心配事も薄れる
話を戻し、アーシアの次に並んだのが一誠？新？祐斗？朱乃？ゼノヴィア？小猫？ギャスパーと言う結果だった
全員のオファー具合を見てアザゼルが言う
「まあ、『王（キング）』たるリアスが1番ってのは予想できた。リアスと契約できれば一気にお前らも引き出せると思う魔法使いが大勢だ。魔法の使い手ロスヴァイセ、聖母（トワイライト・ヒーリング）の微笑を持つアーシア、赤龍帝（せきりゅうてい）のイッセー、闇皇（やみおう）の新、聖魔剣（せいまけん）の木場、バラキエルの娘である朱乃、聖剣使いのゼノヴィア、ここまでは指名率が高いだろう。未だ己の力を発揮しきれていない小猫とギャスパーは少なめだが、量よりも質で勝（すぐ）れる事もある。だいたい、リアス達を指名した連中の大半が雑兵も良いところだろう。この書類の山で光る魔法使いなんて数える程しかいないだろうな」
『ハハハハ、ま、大半が雑兵さ』
協会の理事たる者がそう言う事を言って良いのだろうか……？
『その割には冥界で人気者であり、殊勲（しゅくん）を上げる赤龍帝くんと闇皇くんへの指名率が思ったほど伸びなかったねぇ。それでも充分過ぎる程に多いけど。案外こちらの若い子達はミーハーってわけでもないようだよ』
「魔法使いの連中はステータスも重視するが、それ以上に業界内の体裁（ていさい）を気にするから

な。特にエレガントではないものに関しては少々手厳しい。イッセーや新の人気が俗すぎると判断したのかもな。本人もエロ技ばかりだしな。ま、そこは文化と価値観の違いだ」

『『いやいや、あんなおっぱい番組が流行る冥界の方が変だと思う……』』

新と一誠は渋い顔でそう思った……

メフィスト・フェレスはコホンと咳払いすると告げてくる

『そのようなわけで、今回の書類は全部送らせてもらったよ。めぼしい子がいたら、連絡をいただけるとありがたいねぇ』

「……今回？　またあるって事か」

新が訝しげに問うと、リアスが答えてくれる

「ええ、それはそうよ。今回で決まるとは限らないし、仮に契約を結んだとしてもその魔法使いが悪魔のように長生き――――永遠に等しい時間を生き続けられる筈もないわ。今回良い相手がいなかったら、また新たに書類をいただけば良いだけよ。契約を結んだとしてもその相手が寿命や事故で亡くなれフリーになるのだから、新規契約となるわ」

つまり、今回で無理に決める必要はない

祐斗が追加情報をくれる

「それに契約したとしても、期間限定の場合もあるからね。たとえば、相手の都合により

1年だけの契約だったり、契約の代価を支払えなくなって解約と言う形もあり得るよ」
期間を設けての契約、不利益による解約……まさにビジネスそのもの
ファンタジーでダークな印象と思いがちだが、実際はとっても商業的だったようだ
山盛りの書類は持ち運べないので、転移魔法陣で自宅に送る
そんな中、メフィスト・フェレスが皆の手伝いをしていたレイヴェルに話しかける
『そこの女人はフェニックス家の者かな？』
「は、はい。レイヴェル・フェニックスと申します」
丁寧に挨拶するレイヴェルに、メフィスト・フェレスはアゴを手で擦（さす）りながら言い始める
『うん……これはうちの協会だけに届いている極秘の情報なのだけれどね。どうにも「はぐれ魔術師」の一団が「禍（カオス）の団（ブリゲード）」の魔法使いの残党と手を組んでフェニックスの関係者に接触する事例が相次いでいるんだよ』
何とも不気味な情報にリアスが問い返す
「……それはどういう事なのでしょうか？」
『フェニックスの涙が裏でテロリストに流通していたのは知っているね？』
メフィスト・フェレスの問いにレイヴェルが頷いた
「はい。一部の卸業者が裏取引をしていたと耳にしましたわ。ですが、それはもう粛清

されて、流通は元に戻ったと――――」
『いや、闇のマーケットで「フェニックス家」産ではない涙が、新たに売買されているようだよ』
その情報に全員が驚いた
製造元がフェニックス家ではない『フェニックスの涙』が流通している……
リアスが眉根を寄せる
「純正ではないのでしたら、偽物――――効果の無いものだと思いますが……。――――ッ！まさか……」
何かに気付いたリアスにメフィスト・フェレスが首を縦に振る
『そうだよ、リアスちゃん。純正に等しい効果を示す涙が裏で流れているんだ。ほら、これだ』
メフィスト・フェレスの手に小瓶――――〝偽物〟のフェニックスの涙が現れる
『どうやっているかは知らないけれど、フェニックス産ではないフェニックスの涙が流通し、それに呼応するかのようにはぐれの術者達がフェニックス関係者に接触している。ま、繋がっているだろうね。そこでそこのお嬢さんが狙われるかもしれないから、気を付けてほしいと思ったのだよ』
「……」

メフィスト・フェレスの言葉にレイヴェルも表情を少しだけ陰らせていた

「俺の方もグリゴリでどうなっているか当たらせる。なーに、心配すんな。レイヴェルには強い王子さまが付いてんだ。問題ないさ。それに三大勢力の同盟関係にあるこの周辺は強力な結界やらが張ってある。そうそう侵入はされないだろう。造魔（ゾーマ）の1件以来、全ての結界も強化済み。レイヴェルもここにいて、王子さまも傍（そば）にいれば安心だ」

アザゼルが新の頭をポンポンと叩くが、不意に不安な情報を言い出す

「と言うよりもな。どうにも『禍の団（カオス・ブリゲード）』の旧魔王派、英雄派の残党、陰に隠れた魔法使いどもを纏めようとしている輩がいるようでな。そいつが実質的な現トップだって話だ。詳しい情報はこれからだが……嫌な予感ばかりがする。造魔（ゾーマ）はともかく、奴らの戦力は確実に破滅の一途なんだけどな。戦力減少の歯止めが利かない状態で何をするつもりなんだか」

やめてもらいたいものだが、アザゼルの嫌な予感はだいたいが当たってしまう……

瓦解した『禍の団（カオス・ブリゲード）』を纏めようとしている者とは、いったい誰なのか？

メフィスト・フェレスが改まる

『話が逸れて申し訳なかったね。と言う事で、うちの魔法使いをよろしく頼むよ。良い契約が叶う事を願わせてもらうからねー』

こうして、魔法使いの協会理事――メフィスト・フェレスとの話は終わる事となる

フェニックスの件も気になるが、まずは自分の元に送られてきた書類に目を通さなければならい
『今夜は長くなりそうだ……』

「あー、頭が痛(いて)え……」
数日後の深夜、その日の悪魔稼業を終えた新は、自宅にある空き部屋で山盛りの書類に目を通していた
「新さま、この魔術文字の解読が済みましたわ。読んでくださいましね」
横につくのは敏腕マネージャーのレイヴェル、新とレイヴェルは床に書類を並べて、1つ1つ確認作業をしていた
他の部屋では皆がそれぞれの見方で魔法使い式の履歴書を見ている
時折リアスと朱乃に相談したりするが、基本的にはレイヴェルと話し合いながら書類を見ている
『王(キング)』のリアスにすべて任せるよりも、良い経験なのでマネージャーのレイヴェルの助言を受けながら、自分で選んでみようと考えたわけだ

勿論、最終的な確認はリアスに取ってもらうが、そこに至るまではレイヴェルと協力していこうと考え――そう伝えた時のレイヴェルの喜びようは……「お任せください！　私が新さまに相応しい相手を選び抜いてみせます！」とやる気充分だった

今も書類１つ１つに視線を落として、辞書や資料を片手にあれやこれやとチェックしており、彼女の一生懸命な姿に新も気合いが入る

レイヴェルは書類審査に一定の基準（主にグレモリーにとって、あるいは闇皇たる新にとって有益かどうか）を設け、それに満たない者をバッサリと切り捨て、残った者をつぶさに調べていた

無論、バッサリ切った者達についても基本的な調査を終えていた

その中にはスタイル抜群で美人の魔女も落とされてしまったと言う……

「この魔法使いの男性は錬金術に於いて、希少なレアアース、レアメタルの魔術的利用方法を研究されてますわ。こっちの女性は――」

分かりやすく噛み砕いて情報を教えてくれるレイヴェル、契約した時の有用性も考慮して新に伝える

小猫から聞いた話によると、休み時間にも人目に隠れて調べていたようだ

それと先日のフェニックスの者が狙われると言う情報は改めてフェニックス家からも届いたそうで、レイヴェルの兄――ライザーが酷く心配していた

「レイヴェルは俺より遥かに詳しいよな」
　ふと新がそう漏らすと、レイヴェルはエヘンと胸を張った
「当然ですわ。これでも悪魔歴は新さまより長いです」
「ゲームもライザーの隣で見ていたんだよな？」
「勿論です。……直接の戦闘参加は兄に避けられてしまいましたが、直に本場の風を肌に感じてますわ」
「そのレイヴェルから見て俺達グレモリー眷属はどうだ？」
　新の問いにレイヴェルは手に持っていた資料を置き、正座して改まる
「一言で称するのでしたら、超高火力重視のチームですわね。下手な指示がいらないぐらいに圧倒的ですわ」
「ああ、それは俺も感じてた。その反面、弱点も多いんだよな。テクニックタイプ、搦め手に嵌(は)められちまったら返り討ちにされる」
　そう、グレモリー眷属は超高火力の反面、弱点が多い
　策に嵌まると一気に崩される……アザゼルにも指摘され、実際シトリー戦では見事にやられ、曹操にも手痛い目に遭わされている
　しかし、レイヴェルは懐疑的な反応を示した
「そうはおっしゃいますが、私から言わせていただければ、そんな事はどのチームだって

恐れて当たり前なんです。卓越した技術派が敵にいれば、誰だって怖がります。逆に言えばですね、超高火力のグレモリーチームを相手にする方も大層な恐怖だと思います」

「――――ッ。新鮮な意見だな」

「それにグレモリー眷属は新さまも含めて、皆さんご自分の弱点を補おうと切磋琢磨していますわ。正直、今のプロプレイヤー陣は己の実力、戦術に誇りを持ち過ぎて、自身を鍛える事なんてしません。上級悪魔そのものが努力や修行と言った類を好まず、家の特色と血に流れる才能を重んじて行動しています。眷属の力が足りないと感じれば、トレードで済ませようとしてますもの。勿論、自分が選んだ眷属に誇りを感じる上級悪魔のプレイヤーも多いです。けれど、トレードはプレイヤー間でよく行われております」

プロのプレイヤーは力が足りないとトレードをする、だからレーティングゲームに対しての修行と言う概念が根付かない

使えないと感じた眷属はトレードで流されてしまう……非常に割り切り過ぎだ

レイヴェルの話を興味深く聞く新に、彼女は更に弁舌を振るう

「その中でリアスさまのご眷属は主を始め、皆さん自主的に修行されてますわ。それに関してシトリーやバアルも同じですけれど、それでもその行為は悪魔の歴史から見ても異例の事です。そしてそれは結果を出しています」

確かにグレモリー、シトリー、バアル眷属はテロリスト相手に成果を出していた

若手を戦いに送りたくないサーゼクスの意思とは裏腹に、新達の力は冥界の役に立ってしまっている

レイヴェルは目をキラリと輝かせて断じた

「私が思うグレモリー眷属のあり方とは、下手に戦術で動くよりも個々を鍛えて総合チームバランスを底上げしていくだけで充分だと思うんです。戦術が足りないとその事を重視して、本来の能力発揮の妨げになるぐらいなら、今までのスタンスを纏め上げるだけで良いのではないでしょうか。パワー重視でも結構です。弱点を突破できるぐらい鍛えれば、長所は短所を補うと思います」

アザゼルともリアスとも違う考え方……メンバーによってはその方が成長しやすいだろう

レイヴェルの言い分に呆気に取られていると、レイヴェルがハッと気付き、オロオロし始めた

「……す、すみません。私とした事が出過ぎた物言いで……」

「いや、感心していたんだ。スゲェな、レイヴェル。俺なんかよりもずっと物事を考えている。軍師に向いてるな」

新の賛辞を聞いて、レイヴェルは顔を真っ赤にする

「ぐ、軍師は言い過ぎですけれど、これでも日々勉強しています！　いろいろ考えていま

すわ！」
「俺ももっと頑張らねぇとな。でも、あれだよなー。こんなに頑張っているレイヴェルに礼の1つも出来ないのは申し訳ねぇよ」
新は心の底からそう感じてならなかった
せっかくマネージャーとして一生懸命動いてくれているレイヴェルに何もしてあげられない……
すると、レイヴェルは更に顔を紅潮させて、言葉少なにこう漏らす
「……で、では、あ、頭を撫でてください……」
思ってもいないリクエストに新はキョトンとする
「良いのか、頭を撫でる程度で？　他に欲しい物とか無いのか？　何ならデートでもしようか」
しかし、レイヴェルは首を横に振り、真っ正面から言ってきた
「新さまのマネージャーをするだけで光栄なんです。だから、頭を撫でていただけるだけで、私はどんな事でも頑張っていけます」
『――――っ。レイヴェル、お前ホントに良い娘だよ……っ』
新は抱き締めたくなる気持ちが先走りそうになるが、そこを抑えてレイヴェルの頭を撫でる

「……えへへ」

満面の笑みで応じるレイヴェル

新はレイヴェルと共に今後も頑張っていこうと改めて誓い、途端にレイヴェルは思い出したかのように懐のスケジュール帳を取り出した

「あ、そうです。この後、『おっぱいドラゴン』と『オッパイザー』のお仕事についてもスケジュール調整しますわ。魔獣騒動でショックを受けた子供達の為に設けたチャリティーイベントに顔を出してほしいと冥界の各地より打診をいただいておりまして。えーと、現時点で既に十数件――」

『……敏腕なのは良いが、少しは休ませてくれっ！』

「協会のランク付け、確認したか？　メフィストのクソオヤジの所じゃ、今期若手悪魔のランクが発表された途端に話題騒然になったってよ」

「ああ、今回の若手悪魔はここ何十年の比じゃないぐらいに突出した連中なんだってな」

「もう、連なるところから別格だわ。魔王の妹が２人、大王次期当主と獅子王、大公次期当主、グリゴリ新副総督の娘、闇皇、天龍の赤龍帝、聖魔剣、デュランダル使い、龍王

ヴリトラの宿主、上げただけでも怖くなっちゃう。他の眷属も化け物よ、こいつら」
「そりゃ、協会の奴らがこぞって契約の書面を提出するわけだ」
「……『禍の団（カオス・ブリゲード）』の術者達が言ってたぜ。そいつらにちょっかい出した幹部連中がやられまくって組織は崩壊寸前まで陥（おちい）ったって。――でも、やるんだよな？」
「ああ、その『禍の団（カオス・ブリゲード）』から依頼が入ってんだから、そのついでだ。あっちの術者どももヤル気満々だってよ。フェニックスだけじゃつまらないからな」
「どのぐらい強いか。紫炎（しえん）の姐（あね）さんが期待してるしな」

……

コ コ ハ ド コ ダ ？

ナ ゼ オ レ ハ コ コ ニ イ ル ？

『Ｂｏｎｊｏｕｒ（ボンジュール）、お目覚めの気分はどうですか？』

ダ レ ダ オ マ エ ハ ？

オ レ ハ イ ッ タ イ ナ ニ モ ノ ナ ン ダ ？

『Ｏｕｉ（ウィ） Ｏｕｉ（ウィ） Ｏｕｉ、私はあなた方を創造する者。そして、あなた方は――私の

同胞です』

ドウホウ？

オレタチヲソウゾウスルモノ？

『Ｏｕｉ（ウィ）、あなた方はいずれ「深淵の喰闇（ダーク・ロード）」として、私に協力していただきたいのです』

ダークロード？

『ええ、闇をも喰らう深淵の使者……。あなた方７人と私で、この世を思うように作り替える――悪い話ではないと思いますが？』

ヨクワカランガオマエニキョウリョクスレバイイノカ？

『その通りです、Ｍｅｒｃｉ（メルシィ）。きっと、あなた方もお気に召すと思いますよ。退屈しない相手が山ほど居ますからね』

ワカッタ

トコロデオレノナハ？

『名前ですか……それはあなた方が完全に生まれた時に名乗ると良いでしょう。それまではこう呼ばせていただきます。――「色欲の喰闇（ルクスリア・ワン）」と』

ルクスリアワン？

『Ｏｕｉ（ウィ）、大罪の名を抱えし七つの闇……その内の２人があなた方――「色欲の喰闇（ルクスリア・ワン）」

と「嫉妬(インウィディア・ツー)の喰闇」なのです』

たまには日々の幸せを噛み締めたいものさ

頭を使うのも結構だが、体も鍛えなければならないのがグレモリー眷属の厳しい現実

魔法使いの書類選考と悪魔稼業の傍ら、グレモリー眷属＋イリナはジャージに着替えて、グレモリー領の地下にあるバトルフィールドでトレーニングを続けていた

広大なフィールドで二組に分かれて修行しており、この場には戦士タイプの新、一誠、祐斗、ゼノヴィア、イリナがいた

新と一誠は共に祐斗との一戦を終えて休憩していた

魔帝剣グラムを筆頭に、各種魔剣を入手した祐斗は龍殺しの聖魔剣も相まって、通常の鎧では厳し過ぎる相手と化していた

新も新しく会得したモード――『？雷炎竜』で対抗したものの、やはり使いどころが厳しく、長時間の多用は出来ない

更に……自ら出血させただけでは効果も薄く、多少動きが速くなる程度にしかならなかった

自発的に付ける傷は小さな物になってしまうので、どうしても威力不足に陥る……

『やっぱり瀕死になり得るぐらいの致命傷を負わないと発揮できねぇか……』

汗だくで座り込み、スポーツドリンクを飲みながらそんな事を考える新の視界に祐斗が映り込む

グラムをジッと眺め、息を吐いてから一言漏らす

「……やはり、グラムは使いどころが難しいかな」

「お前でも使うのが困難なレベルなのか？」

一誠がそう訊くと、祐斗は目を細める

「技術的なものもあるけどね。とにかく消耗が激しいんだ。これを思いっきり振るうだけで僕の体力、魔力、いろんなものが大量にすり減ってしまう。1回の戦闘に連続で使えば、命すら削るだろうね。まさに魔剣の帝王と呼ばれるだけはある代物だよ」

龍殺（ドラゴン・スレイヤー）したるグラムのプレッシャーは凄まじく、対峙しただけでも新と一誠は寒気を禁じ得なかった

それだけグラムが有している龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しの特性が強力なのだろう……

近付けるだけでも影響が出るので、アザゼルも祐斗に普段は亜空間にしまうよう指示していた

祐斗が右手の先の空間を歪めて、そこにグラムをしまい込む

ゼノヴィアがデュランダルを亜空間に格納しているのと同じ原理で、祐斗はそこに

ジークフリートから得た各種魔剣を収納している
「ジークフリートの野郎はよくそんなのを使えたな」
「いや、だからこそ、彼も容易に本気のグラムを使えなかったんじゃないかな。神器（セイクリッド・ギア）がドラゴン属性だから使えなかったってだけではなかったと思う。これを使うには覚悟がいるんだよ。ゼノヴィアではないけど、使うなら1発で決める時だね」
「他の魔剣は？」
「良い魔剣だよ。ただ、魔のアイテムだけあってリスクはあるけど。どれも持ち主が呪いを受けるか、使う度に持ち主の何かを削る。ジークフリートは……長生きするつもりは無かったんだろうね。もしくは戦士育成機関で生まれつき命をいじってあったか」
　祐斗はスポーツドリンクを飲んだ後に言う
「どちらにしたって僕が直接持つよりも、龍騎士達に持たせて運用させた方がデメリットは少ないだろうね」
「……魔剣を持った龍騎士に阻まれて木場に触れる事すら出来なかったぞ。ふふふ、所詮パワーバカの私はアウトレンジの攻撃に弱いんだ」
　体育座りしてイジケているのはゼノヴィアだった……
　祐斗にテクニックのトレーニングを受けているゼノヴィアは、彼の厳しい洗礼を受けていた

デュランダル砲と破壊力重視を出来るだけ使わずに、他のエクスカリバーの特性を使って祐斗と模擬戦をしているのだが……技術を取り入れようとすればする程、祐斗との格差を思い知らされたそうだ

祐斗が進言する

「パワーを解禁したキミなら、魔剣を持った龍騎士も軽く屠(ほふ)れるさ。それに僕もキミの攻撃が当たれば一巻の終わりだ。けど、エクスカリバーの８つの特性を覚えないのは勿体ない。完全に使えるようになれば、僕以上の剣士になれるだろうからね」

エクスカリバーの８つの能力は確かに驚異的で、ゼノヴィアはデストラクションの破壊力重視を主体にしか使えていないが……最低でも擬態するミミックや透明になるトランスペアレンシーはマスターして損は無い

実際、それらの特性を覚えてきているものの……祐斗との溝が開けられているのは事実

だが、ゼノヴィアに関してはエクスカリバーの能力をいくつか覚えた方が必ず強くなれる

本人もそう感じているからこそ、祐斗相手にトレーニングを申し込んだのだろう

修行相手に任命された祐斗は「……やっとゼノヴィアがテクニックタイプのトレーニングをしてくれる……！」と感動して打ち震えていたそうだ

トレーニングに付き添っているイリナがゼノヴィアからエクス・デュランダルを借りて、振るってみせる
刀身がウネウネと変化して、サイズの大きい日本刀の形となった
「ほら、ミミックはこうするのよ。イメージ力が必要よね。使いこなせればいろんな物に変化させられるんだから」
イリナはミミックの元持ち主だけあって、擬態のやり方についてはゼノヴィアよりも一日（いちじつ）の長がある
バアル戦のロスヴァイセも一時的な使用とはいえ、大した技量だった
８つに分かれたエクスカリバー、それぞれに独自の特殊能力を有していた
それは統合し、デュランダルと合体した後も消えずに残っている
破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）――文字通り攻撃に特化した能力
破壊力が凄まじく、ゼノヴィアは元々その聖剣の持ち主だった為、特に使いこなせている
次に擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）――これはイリナが持っていた聖剣で、どんな姿にも形を変えられる特性を持っている
イリナは平常時には紐状にして、戦う時は日本刀にしていた
これも使用者によって多様な姿を見せる

３番目は天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリィ）、フリード・セルゼンが１番最初に使っていた聖剣だ
所有者のスピードを底上げし、振られた剣の速度も増す
透明の聖剣（エクスカリバー・トランスペアレンシー）――刀身だけでなく、持ち主をも透明にする事が可能な聖剣だ
夢幻の聖剣（エクスカリバー・ナイトメア）は主に幻術や夢を司り（つかさど）、魔法などが得意な者の方が相性が良いらしく、そちら方面に疎いゼノヴィアは習得に難航していた
使えれば幻術で敵を惑わし、或（ある）いは相手が眠っている内に夢を支配して、色々できるそうだが……
祝福の聖剣（エクスカリバー・ブレッシング）は信仰が関与するようで、主に聖なる儀式などで使うと効果を発揮するらしい
たとえばエクソシスト中に相手の悪魔や吸血鬼を弱らせたり、祓い師の力をアップさせたり、またはミサに参加している者達に幸運を授けたりと、能力は特異な部類に入る
これも使いこなすには独特の才能が必要で、ゼノヴィアはあまり得意としていない
７つめは支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）――ヴァーリチームのアーサーが所有していたものだ
如何なる存在をも意のままに操れるようになる特性を持っているのだが……
「私はアーサーのように伝説の魔物を支配できるような才能は発揮できないだろうな。……上手く発動すらしない」
ゼノヴィアの言うように支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）の習得に苦慮していた

最後の８つめは灼熱の聖剣（エクスカリバー・イグニッション）――ゼノヴィアとイリナの元上司、神代剣護（かみしろけんご）が所有していた聖剣だ

〝灼熱〟の名が付く通り、刀身に高熱を付与する事が出来るが、この特性も習得に難航していた

魔獣騒動（まじゅうそうどう）時に神代剣護と対峙し、イリナと二人がかりで戦い――勝利した後、エクス・デュランダルと統合

刀身に赤い紋様が刻まれ、ブレイズ・エクス・デュランダルと化した

数ある特性の中、支配の力の習得は１番最後になるだろうとゼノヴィアだけでなく、リアスも予想している

イリナもサポートに入ってくれているので、最低でも擬態の特性は完全に習得できるだろう

ちなみにイリナも新達のトレーニングに付き合って修行を開始しており、天使用に量産された聖魔剣の使い方を祐斗に聞きながら、独自の戦闘スタイルを確立させようとしていた

イリナは天使だが、悪魔で分類するならテクニックタイプのウィザード寄りで、ロスヴァイセから魔法を訊いて覚えてきているらしい

「このままじゃ、自称剣士になってしまうわよ、ゼノヴィア」

イリナにそう言われ、ゼノヴィアは「ガーン！」と大口を開けてショックを受けていた

ゼノヴィアは涙目になりながらも言い返す

「……自称天使の尻（シリ）ナめ」

それはイリナにとって禁句（タブー）に近く、途端に頬を膨らませて怒ってしまった

「私、天使だもん！　尻（シリ）ナじゃないもん！　ね、新くん？　幼馴染みの新くんなら私が本当の天使だって分かってくれるよね？」

「俺に振るな！　……と言うか、俺とイリナって実は幼馴染みだったな。たまに忘れちまうわ」

新がそう言うや否や、ゼノヴィアがせせら笑う

「なるほど、イリナ――――尻（シリ）ナは自称幼馴染みなのか。そうかそうか」

ゼノヴィアがイリナをイジる新しいワードを得てしまい、当のイリナも頬をいっそう膨らませて目を潤ませる

「天使だもん！　幼馴染みだもん！　酷いもん！」

「やーい、自称幼馴染みぃ」

「何よ、自称剣士！　脳みそまで筋肉ぅっ！」

『なんつー低レベルな口論だ……っ』

横から見ていた新も頭を抱える程の低レベルな舌戦……
出会った当初は危ない雰囲気を漂わせていたのに、今ではパワーバカと自称天使……
恐らくこっちが本来の年相応な姿なのだろう
それを見せてくれていると言う事は、それだけ新達と打ち解けた証拠でもある
「やっぱり実戦が1番だと思うぞ。また『はぐれ悪魔』の捕縛任務が出ないだろうか。もしくは造魔（ゾーマ）がちょっかい出してきても構わない」
ぼやくゼノヴィア
実は英雄派の事件以来、理不尽な取引で上級悪魔の下僕にされていた神器（セイクリッド・ギア）所有者が、力に目覚めて『はぐれ』になる事例が頻発していた
曹操達が禁手（バランス・ブレイカー）の使い方をリークしたお陰で、彼らの捕縛または討伐する任務が大公アガレス家からよく言い渡される
ツラい思いをして逃げ出してきた者は話し合いに応じて捕縛と言う形になるが、力を得て暴走してしまった者は……やむを得ず討伐する事もある
しかも禁手（バランス・ブレイカー）になっているケースもあり、任務は結構シビア
人間界の日本に逃げてきた者に関しては、リアスを含めたグレモリー眷属が受け持ち、冥界ではサイラオーグが討伐に駆り出されて活躍しているそうだ
現段階で本当の平和と言うものは極めて難しい……

巨大な魔獣によって破壊された冥界の各町村は復興し始めたが、心の平穏はそう簡単に戻らない……
加えて造魔（ゾーマ）と言う巨大な組織も牙を向けてきている……
それらを食い止められるよう、新達は鍛えるしかない
「さて、そろそろ一旦切り上げて、あっちに行ってみるか？」
新の言葉に皆が賛同し、リアス達がトレーニングしている場所へ歩き出した

フィールドを移動中、リアス達のもとに向かう中、一誠がこんな事を言い出した
「なあ、新は今もバウンティハンターの仕事をしてるんだったよな？」
「ああ、最近は依頼の数が減っちまって、こっちがメインになりつつあるけどな。急にどうした？」
「いや、先生から少しだけ聞かされたんだけど……ハンター協会も吸血鬼の事を快（こころよ）く思ってないってのは本当か？」
一誠の問いに対し、新は疲れた表情で溜め息を吐く
アザゼルが言った通り、バウンティハンター協会にも吸血鬼を敵視している者が多

く、昔はよく依頼任務に駆り出された
人間を糧にする吸血鬼は人間社会にとって非常に害悪で、新も吸血鬼を幾度となく討伐した事があった
「吸血鬼はハゲ鷹、或いはヒトの生き血を啜って生き永らえる蛭と同類なんだよ。他人がどうなろうが関係無い、自分至上主義の連中……だから、俺も吸血鬼の事情には首を突っ込みたくないが、討伐任務となれば話は別。吸血鬼を殺す事に微塵の躊躇いも無かった」
「それで吸血鬼との会談の話が出た時、嫌な表情をしていたんだね」
祐斗の言葉に新は生返事し、更に話を続ける
「その上、アイツとも事ある毎に衝突していたしな。嫌な思い出しか残っちゃいないんだ」
「アイツ？」
「……バサラだよ」
バサラ・クレイオス――その名が出た瞬間、一誠達の表情が強張る
つい先日、この町に現れて一誠達を圧倒的な力で捩じ伏せ、新を修羅道に焚き付けようとした張本人……
5年前に吸血鬼の本地ルーマニアで出会し、そこでも衝突していた

新は苦々しい顔付きで語り始める

「アイツも吸血鬼を毛嫌いしてるのは知っていたし、依頼が出された以上文句は言えない。だが……それでも、あの時のアイツのやり方には賛同できなかった」

「いったい何が遭ったんだ？」

「バサラは――――討伐対象だけじゃ飽き足らず、自分の目に留まった吸血鬼を片っ端から斬殺(ざんさつ)していったんだ。〝調子に乗ってるのが気に入らねぇ〟って理由だけでな……」

一誠達は絶句するしかなかった

そんな短絡的な理由だけで吸血鬼を根絶させようとしていたのか……っ

しかし、バサラの凶行はそれだけではなかった

「しかも、アイツは……同じ討伐任務に来ていた多くのハンター達を吸血鬼もろとも斬殺(ざんさつ)しやがったんだ……っ！　その中には、かつて俺と同じ釜の飯を食った同業者もいたんだ……っ！　ハンター協会では戦線で競合する事は珍しくないが……同業者を殺すってのは最大級の禁止事項(タブー)なんだ！　それをアイツはあっさりと破った！」

珍しく新が声を荒らげるのも無理はない

何故なら……以前、任務の際に墓参りした５つの墓標――――その内の４人が吸血鬼の討伐時、バサラ・クレイオスの手によって葬(ほうむ)られたからだ

つまり、新にとってバサラはただの腐れ縁ではなく――――４人の同業者の仇(かたき)、怨敵(おんてき)と

言っても過言ではなかった

イリナも任務の際に同行していた為、事情はある程度知っていたが……まさか、こんな形で真相を知るとは思わなかったのだろう

愕然とするイリナが青ざめた表情で呟く

「酷い……っ」

「ああ、クズだった俺から見ても酷いと思ったさ。当然の如く、俺はヤツに詰め寄ったよ。〝なんで躊躇いも無く同業者を殺せるんだ!?〟って。そしたら、アイツは当たり前のように――――こう言いやがったんだ……ッ！」

〝しょうがねぇだろ、邪魔に入ったコイツらが悪いんだ〟

『……ッ』

あまりにも身勝手過ぎるバサラの発言と凶行に、一誠達は開いた口が塞がらなかった……

そして、この1件が引き金となってハンター協会と吸血鬼の軋轢は深まり、敵意の目を向けられる事が多くなった

それと同時にバサラ・クレイオスの凶行が目に余るものと判断した上役は、バサラ・クレイオスのライセンスを永久凍結――――即ち、2度とバウンティハンターとして復帰できないよう処分を下した

ところが、それでもバサラ・クレイオスは「別に構わねぇよ。好き勝手できると思ってたが、結局ここも堅苦しいだけだったな」と逆に開き直り、あっさりとライセンスを捨てたと言う

まさに傍若無人、傲岸不遜をそのまま人型にしたような男だ……っ

「今でも瞼に焼き付いてるぜ……っ。周りが返り血と肉の破片に埋め尽くされた光景が……。下手なスプラッターよりも吐き気が催したもんだ……っ」

「今更だけど、俺達そんなヤツを相手にして、よく生きていられたな……」

一誠が恐々とした様子で言うと、新が付け加えで説明する

「バサラは根っからの戦闘狂かつ実力主義だから、人を観る眼はあるんだ。内に確固たる信念があるかどうか、権力や血筋の威を借っているかどうか……それを見極める能力だけはズバ抜けている。信念も無く、権力を笠に着るような人種は誰であろうと斬り殺す。それだけの力量があるから、周りの貴族連中もヤツに手を出せないんだ。安易に手を出せば……逆に滅ぼされるからな」

「だから、造魔に加担してる貴族は資金援助程度に留まっているんだね？」

「ああ、犬は餌で飼える。人は金で買える。だが……真の獣を飼い慣らす事は誰にも出来ない……。鎖で雁字搦めにしても、それさえ喰い千切り――――相手の喉元を噛み切る。それがバサラ・クレイオスと言う怪物だ」

新とバサラ、ルーマニアでの出来事を話している内にウィザードタイプの仲間達がトレーニングしている区画に辿り着く
輝く魔法陣の上に立って話し込むロスヴァイセとルフェイ
座禅を組み精神統一しているのは小猫とギャスパー
小猫は静かに闘気を身に纏っており、傍(かたわ)らで黒歌(くろか)がそれを見守っている
遠くでは紅い魔力と稲光が激しく渦巻き、リアスと朱乃が魔力や魔法などの研究をしているのだろう
アーシアはオーフィスと自身の使い魔ラッセーと話し込んでいるようだ
以前から打診されていたように、アーシアには魔物との契約、もしくは召喚魔法を用いて魔物を使役する方面が向いている
ゆえにアーシアはたくさんの魔物と眷属もしくは使い魔として契約をして、召喚の力を高めてみたいと自(みずか)らの方向性を模索していた
ちなみに描かれていないが、一誠も魔王サーゼクスの計(はか)らいによって使い魔を得ている
空を飛ぶ魔法の船――――スキーズブラズニルとは問題なく契約を結べたらしい
話を戻して、レイヴェルがここにいないのは家に1人残り、新の相手となる魔法使いの書類選考を進めているからだ

「新さまはトレーニングをしてきてください。あとは私がいつも通り下調べしておきますので」――と、毎回トレーニングに送り出してくれる
一誠や他の皆がアーシアと共に魔物との契約や召喚魔法の向上について話し合っている間、新が周囲に視線を配らせていると、少し離れた位置で小猫とギャスパーに座禅を組ませていた黒歌が手招きしているのを確認
新が自分に指を差すと黒歌が首を縦に振る
新は「ちょっと行ってくる」と一誠達に告げてから会話の席を外して、黒歌のもとへ足を運ぶ
「何だよ？」と黒歌に問うと、黒歌はにんまり笑んでいた
「にゃはは、今さー、白音（しろね）とギャーくんに心の中を空っぽにしてもらってんの」
小猫だけでなくギャスパーまでそうしているのは、内に巣食う力を探る為
小猫は心を無にする事で仙術の基本である自然との一体化を促（うなが）す為だ
「協力してよ、リューくん」
「そうは言っても、何をすりゃ良いんだ？」
「簡単よ。――ほれっ♪」
黒歌は新の手を取り――ムニュンッと着物の隙間から見えていたおっぱいの谷間に新の手を埋没させてく

極上の柔らかさと質感に新は反射的に指を動かし、黒歌のおっぱいを揉む
この光景を感じ取ったのか……小猫の目が見開き、非難の表情を浮かべた
「ね、姉さま！　新先輩から離れてください！　私の体がおっきくなる前に先輩が姉さまの肌触りを覚えてしまったら……っ！」
訴える小猫の頭をハリセンでペチンと叩く黒歌
「はい、失格にゃ。この程度で気を乱して修行を解くようではまだまだ半人前も良いところね、白音？」
「……は、はい」
黒歌にそう注意され、小猫は言葉も無かったようだ
悔しげな様子だったが、頭を振って気を取り直し、再び座禅を組み始めた
更に３０分経つと、皆がその日のトレーニングを終えて集合し始めた
未だにこの場にいないのはリアスと朱乃
離れた位置で魔力と魔法のトレーニングをしているようだが……少し経ってようやく姿を現す
「ごめんなさい、今日は思いのほか朱乃と入り込んでしまって」
「うふふ、部長ったら、いつにも増して激しかったですわ」
かなりの練習をしていたのか、ジャージは双方ともにボロボロで肌も露出していた

その姿に着目していると――リアスと朱乃と共に移動してきた物体を見て生唾を飲み込んだ
リアスの頭上に浮かぶ巨大な球体……球体の内側を紅色と真っ黒なオーラが滾(たぎ)るように暴れ回っていた
誰の目から見ても分かるように、とんでもない質量の魔力を圧縮させている代物だ
新が球体を指差しながら2人に訊く
「……さっきから異様なプレッシャーを放っているアレは何だ？」
「部長の新必殺技ですわ。……やっぱり、分かります？」
朱乃の言葉にゼノヴィアが頬に汗を伝わせながら頷く
「ああ。相当ヤバいものだろ？　絶対に食らいたくない類(たぐい)の魔力だ」
破壊力一点に費やしたものだと分かるが、リアスの事だから単に威力重視と言うわけではなかろう
「……この大きな紅色の球体は完全にゲームでは禁止技ね。私が今まで甘かったのよ。ゲーム前提で攻撃を考えていたところがあったものだから……。でも、テロリストの襲撃を受け、新を一度失い、考えを改めたわ。――実戦に必要なのは、相手を確実に滅ぼす威力よ」
「それってつまり……」

一誠の言葉に祐斗が続く
「レーティングゲームのリタイヤシステムですら回避できない一撃を有しているって事だろうね」
謎めくリアスの新必殺技に皆が恐ろしげな表情を浮かべた
リアスはウィザードタイプだが、どちらかと言えばパワー寄りに分類する
兄のサーゼクスもウィザードタイプだが、テクニック寄りの為、兄妹でありながら滅びの魔力に差異が見られる
残念な事にリアスはサーゼクスのようなテクニカル要素の才覚は無いのだそうだ
しかし、滅びのパワーだけを追求すれば話は別
大規模な破壊力を重点的に伸ばす……先程の球体から感じる力強さはそれを物語っている
リアスと朱乃は自身の破れたジャージを魔力で元に戻して、笑みを浮かべた
「さ、今日は皆帰りましょうか」
こうして、今日の全員でのトレーニングが終了となる

「ふう、サッパリしたなぁ」
トレーニングを終えて、風呂で汗を流した新はリビングのソファーで寛ぎ、アイスの『コーリッシュ・サイダー味』を飲む
疲れた体に炭酸風味が染み渡る
「……先輩、チョコミント食べますか？」
膝上に座る小猫が自分のアイスをスプーンで掬い、新の口元に差し出す
新は「じゃあ、ひと口」と言ってそれを食べる
しかも、間接キスで———
打ち解ける前の小猫なら絶対にしないであろう間接キスも、今ではごく当たり前のようになっていた
ちょっとした幸せを感じていると、レイヴェルが前に立つ
「……こ、小猫さん。いつも思ってましたけれど、人前で新さまのお膝に座るなんてお行儀良くないですわ！」
レイヴェルが物申してきたが、小猫は平然と座り続ける
「……ここは私だけの特等席だから」
「と、特等席⁉　新さまからも言ってあげてください！」
「レイヴェル、別に困ってるわけじゃねぇから大丈夫なんだが」

膝上に座っている小猫が今度は抱っこと言う格好になる
「……私は将来先輩のもとにお嫁に行くから、ここをキープする」
「……っっ！」
それを聞いてレイヴェルは心底悔しそうな表情を浮かべていた
実はレイヴェルも二人っきりの時に、新の膝上に座りたいと言って座らせる事もある
その時は逆に小猫が不機嫌そうに頬を膨らませていた
最近ではいの一番に小猫が占拠するようになり、「ここはずっと私の席です」と主張までしてくる
猫の妖怪ゆえに縄張りに執着があるせいか、新の膝上はいつの間にか小猫のテリトリーになっていた
レイヴェルは徐々にジンワリと目元を潤ませて抗議を始める
「ず、ずるい！　ずるいずるいずるいずるいっ！　小猫さんばっかりずるいですわっ！　えいっ！」
レイヴェルが子供のように地団駄を踏み、小猫を突き飛ばしてしまう
「私だって、ここに座ります！　いいえ、占拠です！」
空いた新の膝上に今度はレイヴェルが鎮座する
突き飛ばされた小猫は眉を吊り上げ、口を三角にして「えいっ！」とレイヴェルを突

き飛ばしてしまう
直ぐに新の膝上に座り――――
「……ここは私の席っ！　あげない……っ！」
新にしがみつく小猫はレイヴェルに意固地なまでに譲らなかった
「独り占めなんて許しませんわ！　私も座りたいいっ！」
小猫を引きずり下ろそうと奮闘するレイヴェル
その気迫は2人のバックに睨み合う猫と火の鳥の幻影が見える程だった……
新は唐突にライザーとの回線で話していた事を思い出す
『レイヴェルはな。親しい者の前では礼儀正しく、慎ましいんだが……。基本的にリアス並のわがままプリンセスだ。特にヒトのものを欲しがる癖があってな。……お前と暮らしている内にその辺りも見えてくるかもしれないぜ？』
確かにその通りだった……と思い返す新を尻目に、小猫とレイヴェルの奮闘はまだ続く
「お前ら、いい加減にしろよ。ヒトの膝上でいつまでも争うな」
新が少しキツめに諌めて、結果的に――――新の左膝に小猫が座り、右膝にレイヴェルが座ると言う折衷案に纏めた
お互い喧嘩したばかりか、目も合わせずにいた……

しかし、不思議な事に翌朝には普通に接する
『やっぱり、２人は友達なんだな』と新は心中で笑った

次の日の昼休み、新は生徒会室に足を運んでいた
部屋にいるのは新と匙だけで、本来なら一誠も来る筈だったが……シド・ヴァルディの『アーシア先輩の唐揚ゲット大作戦』と言う強制イベントに遭遇してしまい、アーシアが作ってくれた唐揚げを死守すべく奮闘しているらしい……
「――コール。手札を見せな」
「……役無しだ」
「スリーカードで俺の勝ち、１０連勝だ」
「またかよっ、チクショウ！　竜崎っ、いい加減こっちの勝負も再開させろよ！　俺を何度負かせば気が済むんだ⁉　ハッキリ言ってイジメじゃねぇかっ！」
「俺はやられた事をやり返しているだけだ。勝負を戻したいなら、一度くらい俺に勝ってから言うんだな」
新と匙がプレイしているのはポーカーで、新は匙に１０連勝していた

先程まではボードゲームで遊んでいたのだが、5回連続で黒星と言う煮え湯を飲まされた為、ポーカーに移行して匙をボコボコにしていたのだ……

ちなみに先程までプレイしていたのはレーティングゲームの競技の1つ――――スクランブル・フラッグを模したボードゲーム

ルールを簡単に説明すると、広大なゲームフィールドに旗が何本も立っていて、交互に駒を動かしてそれを奪い合う

制限時間内に旗を全て奪取するか、相手よりも多くの旗をキープすれば勝利となる

取られた旗を奪う事も可能で、その時にダイスが使われ――――出た目によって防衛か強奪されるかが決まる

本来のゲームでは旗の死守に如何様(いかよう)な手段を用いても良いらしく、フィールドに隠すのも良し、敵を誘い込んで囮にするも良し、逆に旗を1本ぐらい捨てて態勢を立て直すも良しと戦い方は千差万別

戦術タイプのシトリーやアガレス向けのルールで、パワーでゴリ押し傾向のグレモリーには難儀なものだった……

新がカードをシャッフルしていると、匙が神妙に話し掛けてくる

「……ところでさ、お前さ……」

「何だ？　急に顔を曇らせやがって」

顔を曇らせ、輝きを失ったような目付きの匙が新に訊く
「お前、リアス先輩と付き合ってんだってな！」
匙の突然の追及に新は『ああ、そういやコイツには言ってなかったな』と何処吹く風
匙が深い息を吐きながら続ける
「……ほら、この間の魔獣騒動(まじゅうそうどう)あったろ？　あそこでお前が兵藤と一緒に登場したじゃん。そしたら、英雄派ボス――――曹操との一戦前にリアス先輩と恋人同士のようにチューしたよな？　あれを見て、俺マジで仰天したんだわ。でさ、それとなく会長に訊いたら――――」
『ええ、2人は学園祭以降、恋人同士です。……サジは知らなかったのですか？』と、ソーナ会長に答えられたらしい
途端に匙は詰め寄り、新の肩を掴んで揺さぶる
「知らなかったよっ！　竜崎、お前ぇぇぇぇっ！　なんで教えてくれなかった⁉」
「言う機会が無かっただけだ。それより匙、お前も一誠と同じく顔芸化してきたな」
「いま言う事がそれか⁉」
斯く言う匙も主のソーナに恋心を抱いているのだが、新に先を越された事に多大なショックを受けていた
恨めしそうな顔で匙は新に問う

「……それで、主さまを落とした感想は？」
「勿論、最高だ」
何の躊躇も無く告げた新（笑）
匙はワナワナと震えだし、頭を抱えて慟哭（どうこく）する
「チクショウ！　呪ってやるぅぅぅっ！　ヴリトラの力で呪ってやるぅぅぅっ！　俺なんて会長と映画に行ったぐらいしか進展ねぇよ！　しかも眷属と一緒に映画鑑賞だ！　兵藤のヤツもアーシアさんと良い感じになってるしいいいっ！　俺とお前ら、何処で差がついた⁉　やっぱ天龍と龍王の差か⁉」
「待て待て、一誠の場合はそうかもしれんが、俺とお前の差はそんな浅はかなもんじゃない。俺は１２歳で童貞を捨てた。一方、お前は現在進行形で童貞――ただそれだけの話だ（笑）」
「うわぁぁぁんっ！　こっちでもマウント取るなぁぁぁっ！」
「サジ、何を叫んでいるのですか。外まで聞こえていましたよ？　静かにしなさい」
生徒会室にソーナ会長を含めた生徒会メンバーが帰ってきた
ソーナ会長の登場に匙も涙を拭い、姿勢を正す
ソーナ会長の視線が新を捉え、柔和な笑みを見せる
「あら、新くん、ごきげんよう。生徒会室に遊びに来ていたのですね」

「ああ、一誠の代理みたいなもんだけどな。お邪魔してるぜ」
「そうですか。何も無いところですが、生徒会の会議が始まるまではゆっくりしてくれて構いません」
「何も無くはないだろ。綺麗所(きれいどころ)がたくさん居るじゃねぇか」
「ふふっ、相変わらず女性を褒めるのが達者ですね」
リアスとの関係で親しみを感じたのか、最近ではソーナも笑顔を見せる場面が多くなっていた
すると、匙がさっきよりも一層深刻そうな顔で全身を震わせ――――新の肩に手を回し、耳打ちしてきた
『……お、お、お、お、お、お、おおおおおおおお、お前ぇぇぇぇぇっ。会長から「新くん」って何だ⁉‼　どういう事だよ⁉‼』
『おやおや、どうしたのかな、童貞龍王くん？』
『童貞って言うなぁぁぁぁっ！　どういう事だって訊いてんだよ！　お、お、俺だって下の名前で呼ばれた事なんてないのに……っ！』
涙を流す匙の横で『僧侶(ビショップ)』の花戒桃(はなかいもも)が親指を立てて新に言う
『グッジョブ、竜崎くん。元(げん)ちゃん、諦めって肝心かも』
ウンウンと頷いて『兵士(ポーン)』の仁村留流子(にむらるるこ)も続く

『竜崎先輩、そんな感じで会長も落としてください。元士郎先輩、年上は向いてませんよ？　年上のお姫さまを狙うなら竜崎先輩ぐらいゴリ押しのゴリ押しじゃないと無理です』

『おおおーい！　花戒、仁村ぁぁぁっ！』

２人の言葉に突っ込む匙……御愁傷様（笑）

ガックリと項垂れる匙を尻目に、新は花戒と仁村に小声で言う

『２人もさ、たまには匙を慰めるつもりでデートに誘ってやったらどうだ？　何なら俺とデートでもしてみるか？』

いつもの調子を取り戻したのか、新が若干からかい気味に進言すると――彼女達は

「え……っ」と顔を紅潮し始めた

花戒と仁村はハッと我に返り、平静を取り繕う

『も、もうっ！　また私達をからかって面白がってるのね⁉　竜崎くんのドSっ！』

『竜崎先輩っ、少しはそのスケベ根性を控えてください！』

『え～、満更でもない顔をしてるくせにぃ』

新が茶化していると、いつの間にか近くに寄っていた副会長――真羅椿姫が小さく言う

『あなた達、竜崎くんのペースに乱されてはいけません。それに……会長がそんな簡単

に落ちるわけないでしょう。竜崎くん、うちの子達の言う事は気にしないでくださいね』

『そんなに言うなら副会長が俺とデートしてみる？』

『……っ。……っ』

『おい、何か言ってくれよ。さすがに無言を貫かれると気まずいんだが……』

『言ってる傍から副会長が1番ペースを乱されてるじゃないですか』

『どうせなら副会長、一気にチューしちゃいましょう。この先輩なら笑って許してくれますよ』

『……っ⁉　あ、あなた達……いい加減にしなさいっ！』

真羅椿姫は顔を真っ赤にして花戒と仁村を追い回す

副会長らしからぬ可愛さに含み笑いをしていると、ソーナ会長が新を呼ぶ

「新くん」

「ん、どうした？」

ソーナ会長の手元には小型の連絡用魔法陣

何か遭ったのかと思慮していると、ソーナ会長が告げる

「今、連絡がありました。あなたのもとにも直ぐに届くと思いますが……吸血鬼との会談が明日の夜になったそうです」

「――っ」
ソーナ会長の言葉に新の表情が険しくなる……
吸血鬼――身近と思っていたが、最も遠かった種族
ここから本当のヴァンパイアと邂逅(かいこう)していく事になる……

「バサラさま、どうやらグレモリー眷属と吸血鬼の会談の日取りが決まりました。明日の夜に行(おこな)われるそうです」
「そうかい、吸血鬼どもにしては随分と急ぎ足じゃねぇか」
「ええ、吸血鬼サイドでも色々と問題が起きてるようなので。恐らくそれを鎮静化させたいが為に日程を早めに設(もう)けたかと」
「ハッ、何処までも笑わせやがる。他との接触を一切合切拒んできた奴らがこういう時だけ根回しが達者でよぉ」
「バサラさま、再三言っておきますが……くれぐれも乱入するような真似だけはご自重ください。ただでさえややこしい案件なのですから」
「んな事ぁ言われなくても分かってらぁ。あくまで監視、だろ？　俺が見境(みさかい)無しに引っ

掻き回すと思ってんのか」
「実際、何度も引っ掻き回してきたでしょう」
「チッ、まあ良い。とりあえず、あのクソ吸血鬼どもの対応に竜の字がどう反応するか……見届けてやるか」

吸血鬼との会談

翌日の深夜――――つまり、件(くだん)の吸血鬼との会談当日を迎え、新達は旧校舎オカルト研究部の部室にいた

この場に集合したのはグレモリー側オカルト研究部全員、シトリー側のソーナ会長と真羅椿姫(しんらつばき)、堕天使代表としてアザゼル

そして天界側からシスターが1人

ベールを深くまで被り、女優のように目鼻立ちがハッキリとした北欧的な顔立ち

２０代後半ほどで柔和な表情と優しそうな雰囲気を纏っていた

シスターが見渡すようにこの場にいる全員へ挨拶する

「挨拶が遅れました。私、この地域の天界スタッフを統括しておりますグリゼルダ・クァルタと申します。赤龍帝さんやシスター・アーシアとは少し前にご挨拶できたのですが、皆さまとはまだでしたので、改めまして今後とも何とぞよろしくお願いできたら幸(さいわ)いです」

「私の上司さまです！」

イリナがそう付け加え、アザゼルがシスター・グリゼルダと握手を交わす

「おー、話は聞いてるぜ。ガブリエルのＱ（クイーン）！　シスター・グリゼルダっていやー、女のエクソシストの中でも五指に入ってたな」
「恐れ入ります。堕天使の前総督さまのお耳に届いているとは……光栄の至りですわ」
　シスター・グリゼルダはこの地域で展開する天界側のスタッフを統括する転生天使であり、四大セラフ――ガブリエルのＱ（クイーン）でもある
　更にはイリナの上司、新とゼノヴィアの知人だったりする
　普段は天界とヴァチカンを行ったり来たりしているので、この地域の教会支部に顔を出す事が殆ど（ほとん）叶わず、新達と面会できたのもつい最近の事だ
　その際、新とゼノヴィアの狼狽ぶりは凄まじく、小さい頃から世話になってたせいか、２人とも彼女には頭が上がらない
　シスター・グリゼルダが深く陳謝する
「申し訳ございませんでした。本来ならもっと早くに挨拶に伺（うかが）うべきでしたのに……もろもろ都合が付かず、今になってしまい、己の至らなさを悔やむばかりです」
「あらあら？　新くんとゼノヴィアったら、顔色が悪いわね？」
　イリナが意味深な質問を新とゼノヴィアに投げ掛ける
「……からかうな、イリナ」
「わざと言ってやがるな？　覚えとけよ」

新は苦々しい表情、ゼノヴィアは顔を強張(こわば)らせ、両者ともシスターの視界に入らないようにするが――

「ゼノヴィア？　私と顔を合わせるのがそんなに嫌なのかしら？」

シスター・グリゼルダがゼノヴィアの顔をガッチリと両手で押さえる

「……ち、違う。た、ただ……」

「ただ？」

「……で、電話に出なくてごめんなさい」

ゼノヴィアから謝罪を受けて、シスター・グリゼルダも手を離す

「はい、よく出来ました。せっかく番号を教え合ったのだから、連絡ぐらい寄越しなさい。分かりましたか？　食事ぐらい出来るでしょう？」

「……ど、どうせ小言ばかりだろうし……」

「当たり前です。また一緒の管轄になったのだから、心配ぐらいします」

端から見れば困った妹としっかり者のお姉さんと言った感じである

次にシスター・グリゼルダは新の方にも顔を合わせる

「あなたもですよ、アラタ。以前言った事は覚えてますね？　これ以上、皆さまにご迷惑や心配事を増やさないように」

「……分かってますよ、シスター・グリゼルダ」

そんなこんなでシスター・グリゼルダとの挨拶も済ませて、後は吸血鬼の来客を待つだけとなった
外は完全に静まり返り、会話も少なくなった頃、外から異様な冷たさを感じてしまう
全員がそれを把握したようで一様に窓――――旧校舎の入り口のある方向に視線を向けていた
リアスが立ち上がる
「来たようね。……相変わらず、吸血鬼の気配は凍ったように静かだわ」
リアスが祐斗に視線を向ける
祐斗は立ち上がり、一礼をしてから部屋をあとにした
吸血鬼を迎えに行ったのだろう
ここで吸血鬼に関する情報をおさらい
吸血鬼とは――――招待された事の無い建物には入れない
鏡に姿が映らず、影も無い
流水を渡れず、ニンニクを嫌い、教会のシンボルたる十字架や聖水にも弱い
そして、自分の棺（ひつぎ）で眠らなければ自己の回復が出来ない
ハーフのギャスパーはそれらの内、いくつか違う
影もあり、鏡に姿も映る

川も渡れる上にニンニクも克服しつつある
自分の棺で眠らなければならないわけでもない
これはギャスパーが人間の血の方が濃いからである
祐斗が下まで降りていったのは来客の吸血鬼が純血であり、招待されなければ旧校舎に入る事が出来ないからだ
新達は来客に備えて席を立ち、『王(キング)』であるリアスの傍(かたわ)らに並んで待機する
同様にソーナ会長の背後に椿姫が立ち、イリナも席に座るシスター・グリゼルダの後ろについた
朱乃は給仕(きゅうじ)が出来るよう専用の台車の前に待機
アザゼルは堂々と座り、新達は立って待機と言う形で来客を待つ
そして、当のギャスパーは複雑極まりない表情をしていた
自分を迫害してきた本物の吸血鬼が訪(おとず)れてくるのだから、当然の反応だろう
しばらくして、部室のドアがノックされる
「お客さまをお連れしました」
祐斗が紳士的な応対で扉を開き、来客を招き入れる
姿を現したのは――――中性のお姫様が着るようなドレスに身を包む人形のような少女だった

目と鼻、口元は西洋人形の如く人間味の感じられない、作られたような美しさがあった
長い金色の髪をウェーブさせており、それも相まって人形のイメージを強くさせていた
死人のように顔色が悪く、生気を感じ取れない色合いの肌
真っ赤な双眸(そうぼう)はギャスパーの眼よりも深く濃い
見た目は新達と同じぐらいの年齢だろう
『――っ』
一誠は少女の足下を確認して、目を見開く
――影が無い
彼女が本物の吸血鬼である事を改めて思った
少女の背後にスーツを着た男女が1人ずつ、恐らくボディーガードだろう
その2人も吸血鬼で、冷たく刺々(とげとげ)しい気配が感じられる
少女――吸血鬼の来客が丁寧にリアスと新達に挨拶する
「ごきげんよう、三大勢力の皆さま。特に魔王の妹君のお二人に、堕天使の前総督さまとお会いできるなんて光栄の至りです」
リアスに促(うなが)されて、対面の席に少女が座る事に

座る前に彼女は名乗る
「私はエルメンヒルデ・カルンスタイン。エルメとお呼びください」
如何にも高貴な響きの仰々(ぎょうぎょう)しい名前……
アザゼルがあごに手をやる
「……カルンスタイン。確か吸血鬼二大派閥の1つ、カーミラ派の中でも最上位クラスの家だ。久しぶりだな、純血で高位のヴァンパイアに合うのは……」
カーミラ派――
吸血鬼は古(いにしえ)より存在する闇の世界の住人
上級悪魔と似たような階級制度や弱点まで有するが……悪魔は冥界の住人
吸血鬼は人間界の闇に住む者達であり、似てはいるが価値観と文化は差違(さい)するところが多い
悪魔と吸血鬼はお互いに縄張りを刺激せず、人間を糧に生きてきた
天界――神の従僕達が天敵なのも一緒だが、共闘をせず今の今まで一定の距離を置いてきていた
悪魔は今夏に行(おこな)われた三大勢力の和平に応じて長い三つ巴の様相を収束させたが……吸血鬼は未だ和議のテーブルに付こうとすらしていない
その為、今でも天界――教会の戦士達と小競り合いがある

ここまでは吸血鬼の基本的な知識、問題は二大派閥の事だ
数百年前に吸血鬼の業界で大きく袂を分かつ事件があった
それがツェペシュ派とカーミラ派の誕生である
ツェペシュ派は男尊主義、カーミラ派は女尊主義の派閥
なんでも純血の吸血鬼を残す為、男の真祖を尊ぶか、女の真祖を尊ぶかで長年主張を対立させていた者同士が拗れに拗れて、その結果――――数百年前に真っ二つにグループが分かれたそうだ
アザゼルの説明通りなら、エルメンヒルデは女尊主義カーミラ派の吸血鬼と言う事だ
席に座るエルメンヒルデ
朱乃がお茶を差し出したのを確認して、リアスが開口一番に率直な質問をする
「エルメンヒルデ、いきなりで悪いのだけれど、今まで接触を避けてきたあなた達カーミラの者が、突然グレモリー、シトリー、アザゼル前総督のもとに来たのは何故？」
エルメンヒルデは瞑目し、１度だけ頷くと目を静かに開いた
「――――ギャスパー・ヴラディのお力を借りたいのです」
『――――ッ!?!』
新達は全く予想もしていなかった答えに絶句、驚愕するしかなかった
全員の視線がギャスパーに集まり、ギャスパーはブルブルと全身を震わせていた

アザゼルがエルメンヒルデに問う
「率直な質問に率直な答え。すまんが、順を追って説明してもらおう。――――吸血鬼の世界に何が起きた？」
エルメンヒルデが口を開く
「我々吸血鬼の世界でとある出来事が、根底の価値観を崩す程のものになっているのです。情報が流出しご存じかもしれませんけれど、神滅具（ロンギヌス）を持つ者がツェペシュ側のハーフから出てしまったのです」
ツェペシュ派のハーフヴァンパイアから神滅具（ロンギヌス）所有者が出現、なのに相談してきたのはカーミラ派
面倒事の臭いが強くなる……
アザゼルが目を細めながら訊く
「それでツェペシュ側が所有している神滅具（ロンギヌス）は何だ？」
神滅具（ロンギヌス）とは全部で１３種ある神器（セイクリッド・ギア）の総称
現在判明している段階で悪魔側が『赤龍帝の籠手（ブースト・ドラゴン・ギア）』、『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』の２種
つまり、一誠とサイラオーグの『兵士（ポーン）』レグルスの事だ
天界側には２番目に強いとされる『煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）』を持つジョーカーがいて、堕天使側はアザゼルの配下に『黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）』こと『刃狗（スラッシュ・ドッグ）』がいる

魔法使いの協会――――三大勢力と懇意にしているメフィスト・フェレスの組織に『永遠の氷姫』

三大勢力とは距離を取り、多くの魔法使いから危険視される無法者のはぐれ魔法使い集団に『紫炎祭主による磔台』が在籍している

その他にヴァーリが持つ『白龍皇の光翼』、『禍の団』英雄派には『黄昏の聖槍』、『魔獣創造』、『絶霧』の3種と言う形

ただし、英雄派は機能停止してしまった為、3種の行方は知れずじまい……不気味にも、元の所有者から離れて次の宿主に移ると言う段階には至ってないそうだ

所在が未だに判明していない残りの3種は――――『幽世の聖杯』、『蒼き革新の箱庭』、『究極の羯磨』は三大勢力でも把握しきれていない……

話によれば、『蒼き革新の箱庭』はアジュカ・ベルゼブブがその素性を捕捉しているらしいが……詳しくは調査中だと言う

そうなると残るのは『幽世の聖杯』か、『究極の羯磨』のどちらかである

エルメンヒルデはこう答えた

「――――『幽世の聖杯』です」

彼女の言葉を聞いた瞬間、アザゼルは目元を更に厳しくした

「よりにもよって聖遺物の1つ――――聖杯か」

聖遺物（レリック）――曹操が持っていた聖槍（せいそう）もその1つで、『紫炎祭主（インシネレート・アンセム）による磔台』も聖十字架の聖遺物（レリック）に該当する

アザゼルが話を続ける

「最後の晩餐に使われたもの、イエスの血を受けたもの、聖杯ってのはとりわけ伝説が多い。だが、神器（セイクリッド・ギア）のアレはただの聖杯じゃない。神滅具（ロンギヌス）であり、生命の理を覆（ことわりくつがえ）しかねない代物だ。……エルメンヒルデと言ったか、不死者の吸血鬼がそれで何を求める？」

「絶対に死なない身体（からだ）――。杭で心臓を抉（えぐ）られても、十字架を突きつけられようとも、自分の棺で眠らずとも、太陽の光を浴びようとも、決して滅びない体をツェペシュの者達は得ているのです。いえ、正確に言いますと滅びにくい体を得た――でしょうか。聖杯の力はまだ不完全のようですから」

エルメンヒルデは続けてこう加えた

「何も弱点の無い存在になろうとしているのです。吸血鬼としての誇りを捨てる。それだけならまだしも、あの者達はこちら側を襲撃してきたのです。既に犠牲者も出ております。これら一連の行為を私どもは決して許すつもりはございません。同じ吸血鬼として粛清するつもりです」

エルメンヒルデの瞳は暗く、憎悪の色を強く帯びていた

よほど吸血鬼の生き方を否定し、攻撃を加えてきたツェペシュ側の行動が気に食わな

いのだろう
「カーミラ側は吸血鬼としての生き方を否定して、襲ってきたツェペシュサイドのやり方が気に入らないって事か。まあ、攻撃されたら誰だってアタマくるわな」
アザゼルの言葉にエルメンヒルデは頷く
「はい、その通りです。そして、私達の目的は――――」
彼女の視線がギャスパーへ移り、両者の赤い双眸が邂逅する
「そちらにいらっしゃるギャスパー・ヴラディの力を借りて、ツェペシュの暴挙を食い止める事です」
つまり、ギャスパーを吸血鬼同士の抗争に参戦させようと言う目論見だ
リアスが冷静に訊く
「……それは、ギャスパーがヴラディ家の――――ツェペシュ側の吸血鬼である事と関係があるのかしら？」
いつものエレガントな態度と口振りだが、新は気付いていた
リアスが内心で少しずつ激情を煮えさせているのを……
自分の眷属を今まで交渉に応じなかった吸血鬼の抗争に貸せと言われ、情愛の深いリアスがそれを知って黙っているわけがない
それでも真意を、ギャスパーの事を少しでも知ろうと表向きは平静を装い、問いただ

そうとしている

リアスの問いにエルメンヒルデは意味深な笑みを見せた

「それもあります。リアス・グレモリーさま。けれど、本当に私どもが欲しているのは、ギャスパー・ヴラディの力です。眠っていた力が目覚めたと小耳に挟んだものですから」

何処でギャスパーが得体の知れない能力を発揮したと知ったのか？

確かに覚醒（暴走に近い感じ）したギャスパーは上位神滅具（ロンギヌス）所有者で魔法の使い手だった英雄派ゲオルクを圧倒

破格な力である事は間違いない

エルメンヒルデは言葉を続ける

「私どもは吸血鬼同士の争いを吸血鬼の力で解決しようと思っていますわ。その為には、ギャスパー・ヴラディのお力をお借りしたいのです」

リアスが眉根を寄せてエルメンヒルデに訊く

「……あの力は何？　あなた達はそれを知っているの？」

核心――――新達が知りたい事の本質……

新達の視線がエルメンヒルデに注がれる

「……ごく稀（まれ）に本来の吸血鬼の持つ異能から逸脱した能力を有する者が、血族から生ま

れる事があります。今世においてはハーフの者に多く見られておりますわ。ギャスパー・ヴラディもその1人でしょう。カーミラに属する私どもでは、詳細を調べ上げられる程の資料を有しておりません。しかし、ツェペシュ側には手がかりになるものがあるやもしれませんわ」

吸血鬼側から見てもギャスパーの力は常軌を逸した能力……

詳しく知るには、やはりヴラディ家を訪問しなければならない

エルメンヒルデは続けて言う

「そして、問題の聖杯について。所有者はもちろん忌み子――――ハーフではありますが、名はヴァレリー・ツェペシュ。ツェペシュ家そのものから生まれたのです」

〝ヴァレリー・ツェペシュ〟

その名を聞いてギャスパーが泣きそうな顔をしていた

「……ヴァレリーが……？　う、嘘です！　ヴァレリーは僕みたいに神器（セイクリッド・ギア）を持って生まれてはいませんでした！」

先程までビクビクしていたギャスパーがヴァレリー・ツェペシュの名前が出た途端、人が変わったようにエルメンヒルデに言葉をぶつける

どうやらギャスパーにとって大事な存在のようだ

エルメンヒルデは答える

「生まれつきではなくとも神器（セイクリッド・ギア）とは、何かの切っ掛けで発現します。それはあなたもご存じでしょう？　ヴァレリー――彼女も例外ではありませんでした。近年覚醒し、能力を得たものと思われます」

神器（セイクリッド・ギア）は知らず知らずの内に発現している場合もあり、どの歳で目覚めるかは個人差がある

アザゼルが目を細め、腕を組む

「俺達や天界が観測、特定が済む前に隠蔽されたと思っていいんだろうな。ったく、どうしようもないな。聖なる力を嫌う吸血鬼が、聖遺物（レリック）の神滅具（ロンギヌス）――聖杯を捨てもせず、こちらに預けもしないで自分達のもとに隠すなんてよ」

「私もそう思います」

アザゼルの言葉にエルメンヒルデも応じていた

エルメンヒルデは目線をギャスパーに向け、ギャスパーはオドオドしながらも今度は真っ直ぐに視線を交わす

「ギャスパー・ヴラディ、あなたは自分を追放したヴラディ家に――ツェペシュに恨みは無いのかしら？　今のあなたの力なら、それが可能ではないかと私は思うのだけれど」

「……ぼ、僕はここにいられるだけで充分です。部長達と一緒にいられればそれだけで

「――――」

「――――雑種」

その言葉を耳にした途端、ギャスパーの顔は徐々に曇り始める

それを確認してエルメンヒルデは続けていく

「――――混じり物、忌み子、もどき、あなたはいかような呼び名でヴラディ家で過ごしていたのかしら？　感情を共有できたのはツェペシュ家のハーフ、ヴァレリーだけ、でしたわね？　ツェペシュ側のハーフが一時的に集められて幽閉される城の中で、あなたとヴァレリーは手を取り合い、助け合って生きてきたと聞いておりますわ。ヴァレリーを止めたいと思いませんか？」

今まで黙していたシスター・グリゼルダが口を開く

「あなた方はハーフの子たちを忌み嫌いますけれど、元々人間を連れ去り、慰み者として扱い、結果的に子を宿させたのは吸血鬼の勝手な振る舞いでしょう？　あなた方に民を食い散らかされ、悔しい思いをしながらも憂いに対処してきたのは、我々教会の者です。出来れば、趣味で人間と交わらないでもらいたいものです」

柔らかい物腰ながら、その言葉には毒が満載

エルメンヒルデは口元に手をやり、小さく笑む

「それは申し訳ございませんでしたわ。けれども、人間を狩るのが我々吸血鬼の本質。

悪魔や天使も同じだと思っておりますが？　人間の欲を叶え対価を得る、または人間の信仰を必要とする。我々異形の者は、人間を糧(かて)にせねば生きられぬ『弱者』ではありませんか」

確かに悪魔は〝正義〟ではない、理不尽な取引で下僕にされるヒトも多い

一誠も人間をやめ、悪魔として生きるしかないものの――人と悪魔の狭間を往来している立場にいる

しかし、エルメンヒルデは完全に異形側

人間は糧だと割り切り、等価交換などせず一方的な狩りと断言している

純血の吸血鬼は悪魔以上に血と階級にこだわり、彼らにとっては純粋な吸血鬼か、「雑種」や「忌み子」等と酷く蔑むものしかない

エルメンヒルデは後ろで待機していたボディーガード役の吸血鬼を呼び、鞄から書面らしき物を取り出させた

「手ぶらで来たわけでもありませんわ。書面を用意しました」

エルメンヒルデは書をアザゼルに渡し、それを受け取ったアザゼルは書面を見て息を吐く

「……カーミラ側の和平協議について、か」

『――ッ⁉』

今の今まで応じてこなかった吸血鬼が、ここに来て外交のカードを切ってきた……
アザゼルは書類をテーブルに置いてエルメンヒルデに言う
「つまりだ。今日のこれは外交――――特使として、お前さんが俺達のもとに派遣されたって事だな？」
アザゼルの問いにエルメンヒルデは笑みを見せる
「はい。我らが女王カーミラさまは堕天使の総督さまや教会の方々との長年にわたる争いの歴史を憂いて、休戦を提示したいと申しておりました」
エルメンヒルデの対応にアザゼルは額に青筋を立てる
「順番が逆だ、お嬢さん。普通は和平の書面が先で、神滅具（ロンギヌス）の話は後だろうが。これじゃ、まるで力を貸してくれなければ和平には応じないと言っているようなもんだ」
目元を妖しく細めたシスター・グリゼルダも平静を装（よそお）いながら続く
「隔てる事なく各陣営に和議を申し込み、応じていた我ら三大勢力が、この話し合いに応じなければ他の勢力への説得力が薄まりますわね。『各勢力に平和を説いているのに相手を選んで緊張状態を解いているのか』――――と。しかも停戦ではなく、休戦ですもの。こちらの弱みを突かれた格好ですね」
要約すれば、彼女達は〝和平に応じてやるからギャスパーを貸せ〟と上から目線で言ってきたのだ

この話に応じなければリアスの体面だけでなく、魔王サーゼクスまで信用を失う
更にはスイッチ姫やテロリストとの戦いで殊勲を上げているので、今後の活動にも支障が出てもおかしくない……
リアスがフルフルと怒りに打ち震え、ソーナ会長がリアスの手を握り、宥めるように首を横に振る
『……相変わらず胸くそ悪いな、この女は……ッ！』
新は無言でエルメンヒルデを睨み、エルメンヒルデは嬉しそうに口の両端を吊り上げて言った
「ご安心ください。吸血鬼同士の争いは吸血鬼同士でのみ、決着をつけます。ギャスパー・ヴラディをお貸しいただければ、あとは何もいりませんわ。和平のテーブルにつくお約束と共にヴラディ家への橋渡しも私どもがおこないましょう」
ここで一誠が堪らず訊いてしまう
「待てよ。仮にギャスパーをそっちに送ったとして、無事にこちらに返すつもりはあるのか？　いや、まだ貸すとは言ってないけど！　一応その辺を訊きたい！」
問いただしてきた一誠に対し、エルメンヒルデは蔑んだ目で見る
「あなたは上級悪魔リアス・グレモリーさまの下僕――赤龍帝ですわね？　あなたが特使である私に話しかける権利があるのですか？　いくら赤龍帝でも権利を持ってい

ない、ただの従僕であるのなら、私に意見する資格は無いでしょう？」

「――――ッ！」

怒りで頭が沸騰しそうになる一誠

こんな言葉を投げ付けられては直ぐに「ふざけんなっ！」と叫びたくなるだろう

しかし、それをしたら全てが台無しになってしまう……

権利云々（うんぬん）を持っていないにしても、明らかな上から目線での侮辱……

祐斗が一誠を手で制し、リアスに目を配らせる

リアスも深く息を吐いて、自分を落ち着かせようとしていた

『……本当に何も変わっちゃいねぇな、この腐れ吸血鬼どもはッッ！』

新は憤怒の形相でエルメンヒルデを睨み付け、リアスの代わりにアザゼルが言う

「グレモリー次期当主の眷属1人を犠牲に、吸血鬼と休戦協定、か。お前らカーミラ側の言い分は雑な言い方をすると、こういう事だな？」

アザゼルは気を利かせてリアスの言葉を代弁してくれたが、エルメンヒルデはいけしゃあしゃあと言ってのける

「犠牲になるとは決まっておりません。早々と決着がつけばそれに越した事はありませんわ」

「俺達の介入は嫌なんだろう？　両者の仲介、もしくはどちらかに加勢ってのは？　戦

力不足だからこそ、ギャスパーが必要なんだろう？」
アザゼルの提案をエルメンヒルデは首を横にして答えた
「いえ、あくまでも我々の決着は我々の手で行います。アドバイザーぐらいでしたら、いかようにも」
本当に身勝手極まりない……っ
自分達の領域、価値観以外はどうでも良い
忌み子やハーフだろうと有用ならば対立側の出身者でも使う
迫害しても半分吸血鬼ならば使う
何処までも理不尽と矛盾にまみれた種族だ……
次にエルメンヒルデの視線が新に向けられる
「そちらの方もリアス・グレモリーさまの下僕でしたね？　確かバウンティハンターだとか……。正直に申しますと私は驚いています。我々吸血鬼を敵視している者が多いバウンティハンターを眷属にするとは……情愛の深いリアス・グレモリーさまは大変貴重な逸材を得て、羨ましい限りです」
「……それは褒め言葉と受け取って良いものかしら？」
「もちろんですわ。ハンター協会は永きに亘って吸血鬼と争ってきた――――謂わば怨敵のようなモノですからね。その出身者を眷属に引き入れるリアス・グレモリーさまの巡

り合わせの良さ……是非とも見倣いたいものです」
最後に新達全員を見渡した後、エルメンヒルデは立ち上がる
「以上ですわ。今夜はお目通りできて幸いでした。何よりも、自分の根城に吸血鬼を招き入れると言う寛大なお心遣いに感謝致しますわ、リアス・グレモリーさま」
エルメンヒルデのわざとらしい氷の微笑にリアスは憤怒の形相となり、瞳は怒りに滾っていた
「……ええ、今日は貴重な会談が出来て良かったわ。あなた達の事がよく分かったものね」
「それでは、ごきげんよう。この地に従者を置いていきます。何かありましたら、その者に取り次いでください。――――では、良いご報告をお待ちしております」
リアスの最後の最後に吐き出した嫌みをものともせずに、闇の住人達はこの旧校舎をあとにしようとする
その時、エルメンヒルデが急に足を止めた
皆が怪訝そうに窺っていると……エルメンヒルデの口から驚きの言葉が出る
「そちらのバウンティハンターさま。あなたにお見送りをお願いしたいのですが、よろしいかしら？」
「――――っ？」

突然のご指名にキョトンとする新、リアス達の視線が新に向けられる
いったいどういうつもりなのか……？

「……どういう風の吹き回しだ、エルメンヒルデさんよお？」
エルメンヒルデから突然見送り役に指名された新は、歩きながら怪訝（けげん）な眼差しで彼女に問い質（ただ）していた
彼女のボディーガードたるヴァンパイア２人は新の様相に警戒し、殺気を強めるが
……エルメンヒルデが手で制止して言う
「あら、私のご指名に何かご不満でも？」
「不満もクソもあるだろ。さっきは散々バカにしておきながら、わざわざ見送り役に俺を指名するなんざ怪しさ満載だ。……何を企（たくら）んでやがる？」
「企むだなんて人聞きの悪い。貴族のレディをエスコートするのは殿方の役目でしょう？　たとえ……それが下賤（げせん）で卑しいハンターの出身で、一介の中級悪魔でしかないあなたであってもね」
あざとく嫌味を含んだ笑みを浮かべるエルメンヒルデ

新はフンッと鼻息を鳴らして、さっさと見送り役を果たそうと歩みを進めていく
「それにしても……あなたの主さまも随分と変わったご趣味になりましたわね。私達を敵対視しているバウンティハンターを飼うなんて」
エルメンヒルデの侮蔑とも取れる言葉に新が足を止め、「……今、何て言った？」と視線を向けずに訊く
エルメンヒルデは高圧的な態度で更に続けた
「失礼、お気に障ったかしら？　でも、私は事実を述べただけですよ？　吹き溜まり出身の低俗な野良犬を眷属に加えるだなんて……噂以上に寛容な精神をお持ちのリアス・グレモリーさまに、敬意を払って差し上げているだけですわ」
「俺には〝リアス・グレモリーが悪趣味〟としか聞こえないんだが？」
「そう聞こえるのは、あなたの中から下賤な価値観が抜け出ていないからではなくて？　いくらハンター協会出身の野犬であろうと、牙を向ける相手を弁えるぐらいの事は出来て当然ではありませんか。ですが……会談中でもあなたは、微少と言えど常に怒気を放っていましたわ。さすがの私も緊張してましたよ？　……いつ、この野犬が噛み付いてくるのかと。そんな事になればリアス・グレモリーさまの面目は丸潰れ、今夜の会談も破談になっていたでしょう。野犬の躾は大変ですからね、リアス・グレモリーさまのご苦労が目に見えてきますわ」

丁寧に言い換えようが早い話、エルメンヒルデは遠回しにリアスを侮辱しているのだ

エルメンヒルデのあからさまな侮辱はまだ続く……

「吹き溜まり出身の野犬は本当に礼儀知らずで野蛮な俗物が揃っていましたもの。話には聞いていましたが、実物を見るまではとても信じられませんでした。私としては今夜の会談すら危険と進言したのですが……状況が状況ですので、カーミラさまの意向を汲んで差し上げなければなりません。カーミラ派の為にもね。しかし……それも杞憂に終わって幸いでした。見事に野犬を手懐(てなず)けたものですわ。それだけリアス・グレモリーさまの躾(しつけ)――ご教育がよろしかったのでしょう」

いくら最後に褒めようとも、大半が皮肉と嘲笑、侮蔑に染まっているので新の神経を逆撫でするだけだった……

ここでエルメンヒルデに掴みかかれば、最悪の事態は免(まぬが)れない

だが、ここまで貶(けな)されて黙っている程……新も大人ではなかった

「……お漏らしエルメのくせに」

「――――っ⁉」

新の一言を聞いた途端、エルメンヒルデの顔が真っ赤に染まり、彼女が口元をひくつかせて問いただす

「あ、あなた……まだその事を……っ！　まさか、周りに言いふらしたりしていないで

しようね……っ⁉」
「安心しろ、俺はお前らみたいに弱味を突いてマウントするような悪趣味なんざ持っちゃいねぇよ」
「野蛮なハンターの言う事を素直に信じると思いますか⁉」
「アレアレ～？　高貴な貴族で純血の吸血鬼さまは〝一介の中級悪魔〟でしかない〝野犬ごとき〟のつまらない独り言1つで癇癪を起こすのかぁ？　それってある意味――――〝人間以下の弱者〟がやる行為だと思うけどなぁ。貴族・純血の吸血鬼さまはモ・チ・ロ・ンッ、そこら辺を弁えてくださってるんだろう？」
意趣返しと言わんばかりに新はエルメンヒルデにとって痛いところを突っつきまくる
エルメンヒルデは「グヌヌ……っ」と今にも怒りが沸騰しそうになるが、2人の付き人に落ち着くよう説得され……深く息を吐く
新は少しスッキリしたところでエルメンヒルデに警告する
「お前、忘れてねぇだろうな。5年前に何が遭ったのか……」
「――――っ。忘れる筈がありませんわ。あなたも当事者ですからね」
エルメンヒルデが苦い表情で言う
先程は触れていなかったが、新は5年前にバウンティハンターの任務でルーマニアに

渡り、そこで吸血鬼とも接触していたのだ
　その時にエルメンヒルデと少なからず知り合っていたので、会談に彼女が来た時は非常に嫌な顔をしていた
　新が話の続きを切り出す
「ああ、吸血鬼とバウンティハンターの全面戦争みたいなものだったからな。両陣営ともに悲惨・散々な痛手を負ったが、何とか全滅による共倒れは免れた……。そんな大惨事があったからこそ、お前も何かしら改めてくれるかと内心では期待していたが――見事に変わっちゃいなかった。呆れを通り越して笑っちまったよ」
「何がおっしゃりたいの？」
「……バサラ・クレイオス、次にヤツが動き出せば間違いなく――――お前ら貴族・純血のヴァンパイアは滅ぼされるぞ」
　バサラ・クレイオスの名を出した途端、エルメンヒルデの顔が青褪める……
　その怯え方は尋常ではなく、先程までの高圧的な態度が嘘に見えるぐらいの様相だった
　エルメンヒルデが恐る恐る訊いてくる
「あ、あの男が……また……っ？」
「お前らも知ってる筈だ。今のアイツは当時よりも凶悪な強さになってやがる。それだ

けならまだしも――――今や造魔（ゾーマ）と言う大組織を束ねるイカレた野郎だ。オマケに情報網も広いときた。もし、この会談の内容を聞かれでもしたら……間違いなくアイツの怒りを買う事になる。アイツはお前らみたいな連中を酷く嫌悪しているからな」

エルメンヒルデは堪（たま）らず辺りを見渡すが、気配が感じられないと分かるや否や――――ホッと胸を撫で下ろす

「も、もし仮にあの男が来たとしても……三大勢力が放っておかないでしょう？　今は三竦みの時代と違って天使・悪魔・堕天使が手を取り合っているじゃないですか」

「確かにそうだが、ヤツにそんな事情は関係ねぇよ。アイツは殺ると言ったら必ず殺る……それが胸くそ悪い吸血鬼相手なら尚更だ。三大勢力全てを敵に回してでも、肥えた貴族・純血の吸血鬼を滅ぼしに来るだろうよ」

バサラ・クレイオスと言う怪物（おとこ）をよく知っているからこそ、説得力に満ちた警告を促（うなが）せる……

冗談が微塵も感じられない新の目付きを見て、エルメンヒルデは息を呑み込む

「……まあ、良いですわ。あなたなりのご心配と受け取ってあげましょう。我々の方でも警戒を怠（おこた）らないように進言しておきますわ」

「あくまで上から目線かよ……。その見下し体制が〝5年前の全面戦争〟の引き金になった事をどうして理解しない――――いや、理解しようともしねぇんだ？　一方的に人

間を狩り、弄び、他を見下していけば周りに敵を作り過ぎてしまう。それを後先顧みずに横行させた結果――手痛いしっぺ返しを食らった」

「……あなたこそ、私腹を肥やす為に身勝手を続けてきた野良犬のくせに……！」

「ああ、偉そうに能書きを垂れちゃいるが……俺も昔は吸血鬼を屠ってきた身だ。けどなぁ、それでも覚悟を決めてやって来たんだ。『撃って良いのは、撃たれる覚悟がある奴だけ』――それを肝に銘じてきた。お前らはどうだ？　貴族だの純血だの、家柄や血筋の伝統にかまけて、自分達は〝人間を糧にしなければ生きられない弱者〟と言う立場に調子付いて、覚悟なんざ微塵もしていなかった。世間じゃ吸血鬼は他との接触を拒んでいるって言うが……俺はそうと思わねぇ」

新はエルメンヒルデをジッと見据えて、ハッキリと告げた

「吸血鬼が拒んでいるんじゃない。その逆――吸血鬼が他から拒まれているんじゃないのか？」

「……っ！」

新の言葉にエルメンヒルデは口元を歪ませ、ワナワナと震え出す

ボディーガード役のヴァンパイア２人が殺気を強めて新に掴みかかろうとするが

……エルメンヒルデは「結構です」と諌める

エルメンヒルデが面白くないと言った表情で新を睨む

「……吸血鬼の時世を何も知らない野良犬が、よく言えたものね」
「ああ、野良犬だからな。箱入り種族のご時世なんざ知らねぇよ。だが、これだけは言える。〝吸血鬼〟と言う種を根絶させたくないなら……その姿勢を改めろ。さもないと本当に滅びるぞ」
「……ふんっ、一介の中級悪魔風情に言われなくても承知していますわ。アドバイスとして受け取ってあげますわよ。では、そろそろ失礼させていただきますわ。念の為に言っておきますけれど……あなたの無礼な態度や言動を許した覚えはありませんからね？　本来ならあなたも赤龍帝と同じくただの中級悪魔に過ぎない従僕、少しは身の程を弁えてください」
「分かりましたよ。お漏らしエルメさま」
「あと、その呼び方も金輪際やめてくださらないっ⁉」
　立ち去ろうとしたエルメンヒルデが再び顔を真っ赤にして新に抗議を飛ばし、彼女はやむ無く踵を返して駒王学園を去っていった
　エルメンヒルデ達が去った後、新は「はぁ～っ」と深い溜め息を吐き、頭を垂れて一言呟く
「俺もまだまだガキだよな……」

『クックックックッ……ハッハッハッハッハッハッハッ。竜の字もなかなか良い事言うじゃねぇか。殺気を消して覗き見した甲斐があったぜ。それにしても……やっぱ吸血鬼どもは何も変わっちゃいなかったな。ここまで来るとある意味アッパレもんだぜ。見下すしか能が無い吸血鬼(クソ)どもは何も学ばねぇ。バカは死なないきゃ治らねぇってよく言うけどよ、ありゃデマだったな。本物のバカは――――死んだとしても治らねぇんだ。だったら……滅ぼすしかねぇよなぁ？　今まで殺(や)られる覚悟を決めてこなかった吸血鬼どもに俺が教えてやるよ。狩られる側の恐怖ってヤツをなぁ……』

唐揚げを二度揚げするかしないかで、美味しさが劇的に変わる……！

新がエルメンヒルデを見送って部室に戻ってきた後、堰を切ったようにゼノヴィアがテーブルを叩いた。

「……相変わらず、吸血鬼は好きになれない……っ！」

「よく我慢したよ、お前は。俺より敵意満々だったからな」

新がポンポンとゼノヴィアの肩を叩き、シスター・グリゼルダがカップに口をつけた後、ゼノヴィアに言う。

「昔のあなたなら、デュランダルで斬りかかったところですね。よく我慢しました。成長しましたね」

シスター・グリゼルダに褒められ、ゼノヴィアは複雑そうな表情で頬を赤く染めていた。

しかし、ゼノヴィアの言う事は尤もである。

ギャスパーと同じ種族とは思えない程、嫌味と傲慢なプライドの塊だった……。

唯一冷静を保ち続けたソーナがリアスに言う。

「どうするのですか？　協定を無視するわけにもいかないでしょう。そうなると、ギャスパーくんを送り出す事にもなります。そうなれば……最悪、彼を失うかもしれません」

ソーナのハッキリした答えにギャスパーも複雑極まりない顔になっていた。

それも当然、自分が外交のカードに使われるなんて思いもしなかったのだろう。

更には拒否が物凄く難しい状況……和平を謳っていた手前、ようやく和平のテーブルに着こうとする吸血鬼側からの申し出を突っぱねるわけにもいかない。

世間的に見ても、ギャスパー1人の条件でカーミラ派――――即ち吸血鬼側の半分と休戦できるのはメリットが大きく安い。

可能ならば拒否したいのが本音だが、断る理由も無い――――グレモリーにとって最悪の展開だ。

ギャスパーが大きく息を吸って、震える口調で吐き出した。

「ぼ、僕、行きます」

ギャスパーの宣言に皆が驚いた。彼は自ら行く事を志願してきた……しかも、決意に満ちた瞳で。

ギャスパーが続ける

「……吸血鬼の世界に再び戻るつもりはありませんし、ここが僕にとってのホームです。

で、でも、ヴァレリーを助けたい！　彼女は……僕の恩人なんです。彼女のお陰で僕はあの城から抜け出て、ここに辿り着けました。……一度は死にましたけど、それでも今は優しい主(あるじ)がいて、頼れる先輩がいて、一緒に遊んでくれる友達もできました……。こんなに幸せになれたのに、彼女だけ辛(つら)い目に遭っているのかもしれないと思うと……。きっと理不尽な扱いを受けていると思うんです！」

ギャスパーは男の顔をして、リアスに告げた。

「僕、ヴァレリーを助けたいです！そして、絶対に死にません！　ヴァレリーを救って、ここに戻ってきます！」

決意に燃える今のギャスパーは愉快な段ボールヴァンパイアではなく、1人の男の目と顔をしていた。

その姿に感化され、一誠は無言でギャスパーの頭を撫でる。

普段は頼りないが決める時は決める……グレモリー男子としての矜持(きょうじ)を見せてくれた。

ギャスパーの決意を聞いて、リアスも立ち上がる。

「――――行くわ、私。今度こそヴラディ家とテーブルを囲むつもりよ。まずは私が行ってこの目であちらの現状を確認してくるわ。ギャスパーの派遣に関してはそれからでも遅くはないと思うの」

リアスの目にも炎が灯(とも)っていた。ギャスパーの一言が決起の火を点けたのだろう。
かつて世話になった女の子を助け出す――――男にとってはこれ以上ないシチュエーションである。
「じゃあ、俺達も――――」
新達が申し出ようとしたが、リアスは首を横に振る。
「いえ、新達は待機していてちょうだい。もしかしたら、と言う事があるかもしれないもの」
「……と、言うと？」
新の問いにリアスは指を２本立てる。
「前提条件として、ギャスパーの主たる私が直接訪れるのが道理だし、先方にも失礼が無いわ。そしてあなた達にここで待機してもらう理由を大別すると２つね。１つは有事が起きた際に、私がいなくても直ぐに行動できるようにする為。ここに襲来してくる者がいるかもしれないから、対応できるメンバーが残った方が良い。２つめに……」
リアスは眷属全員を見渡す。
「私があちらで何かあった時、増援メンバーが必要になるでしょうから」
「部長は何かが起きる、または巻き込まれると踏んでいるんですね？」
「ええ、祐斗。そうならないのが何よりだけれど、今までの経緯(けいい)、ヴァンパイアの問題か

ら察しても巻き込まれる可能性があるわね。いえ、それを踏まえて行動して何らおかしくない」

「だったら尚更、最初からついていった方が良いんじゃねぇのか？」

新がもう一度確認するが、リアスはやはり首を縦には振らなかった。

「ゾロゾロと全員で行けばあちらも警戒するわ。力で解決するつもりか？――――と勘繰られて交渉しにくくなるでしょうから、まずは私が行って然るべきよ。……今までこちらの声に耳を傾けなかった彼らなのだから、それぐらいの気構えを持って当然だわ。……私の思慮は浅いかしら？」

リアスはアザゼルに確認を取る。

「いいや、力押し眷属の『王』にしては悪くない考えだ。ただ、お前だけじゃ不安だな。今回の1件、ツェペシュ、カーミラ、双方の裏の事情が絡みそうだ。さっきの話は腑に落ちない点がいくつもあるからな」

「勿論、最低限の備えはするわ。――――私の『騎士』は連れて行くつもりよ。良いわね、祐斗？」

「はい、お任せください」

「木場が行くなら安心できます」

一誠の率直な答え。何度も模擬戦で交えてきたので、祐斗の実力は誰よりも知ってい

る。
　アザゼルが首をコキコキ鳴らしながら言う。
「――と、俺も行こう。俺は先にカーミラに会ってくる。んでもって、最低でもグレモリーの何名かが吸血鬼の抗争でも動けるように話をつける。いくつか土産（みやげ）を持って行くつもりだ。逆にリアスはヴラディ家に直接行った方が良い。リアスがカーミラ側に顔を出したら、警戒が強くなるだろうからな」
　土産持参で交渉の条件を付与させる気だろう。抜け目の無い判断だ。
　新達何名かが動けるようになるなら話は別。ギャスパーの危険も軽減できる上に、件（くだん）の聖杯を持った吸血鬼――ヴァレリー・ツェペシュも救えるかもしれない。
「でも、先生自らだと警戒されるんじゃ？　堕天使の要人ですし。他にも誰かつけた方が良いのでは？」
　一誠の問いに対してアザゼルは首を横に振る。
「未だ吸血鬼を相手に戦っている天界と教会――天使が行くよりは多少マシだろうよ。て言うよりも、神器（セイクリッドギア）に詳しい俺が行くのは交渉の武器になる」
「あ、聖杯とかで！」
「ああ、そういう事さ。今日来た奴らだって、重要な話し相手は俺だったろうからな」
　アザゼルがシスター・グリゼルダとイリナ――天界側のスタッフに言う。

「イリナ、シスター・グリゼルダ。この事はミカエルにも伝えておいてくれ。聖杯と吸血鬼、さすがにきな臭さ過ぎる」

シスター・グリゼルダが頷く。

「ええ、分かりました。こちらは場合によってはジョーカーを切るとミカエルさまもおっしゃっておりますし、最悪の結果だけは避けたいものです」

シスター・グリゼルダの言葉にアザゼルは軽く驚いていた。

「……ジョーカー、そんなに簡単に切れるのか？　て言うか、俺達への対応のランクが上がってるな。まあ、偉い連中ばかりが狙ってくるから当然か。聖杯が絡む以上、手助けをジョーカーに請うかもしれない。聖杯と吸血鬼。本来、相容れない聖と闇。多分ロクでもない事にはなるぞ。俺は最低限の犠牲で済むようにしたいんだがな」

「ええ、そうならない為にも暇人ジョーカーは存分に使えと四大セラフさまのご意志です。本当、あの子ったら暇さえあると美味しいもの巡りで連絡がつかなくなりますから。そこの新やゼノヴィア以上に困った子です」

どうやらジョーカーはシスター・グリゼルダの知り合いらしい。そこは一先ず置いておき、これからの行動を整理。

リアスと祐斗、アザゼルが吸血鬼側のもとに行く事が決まった。あとのメンバーはギャスパーを含めて、この町で待機。

何かがリアス側で起こったら、改めて合流する手筈となる。
何事も起こらなければ良いのだが……アザゼルの言い分ではどうにも争いは起こりそうだ。
犠牲も出ない事を願うが……そんなには甘くない。
新達にやれるのは、リアスと仲間に降りかかる火の粉を全力で振り払うだけ……。
気合いも入るが、不安も大いに覚えてしまう深夜の会談だった――――。

「先生、いつ頃旅立つ予定ですか？」
「とりあえず、これからリアスと打ち合わせをする。良い機会だからな、ヴァンパイアサイドと交渉しておかないと後々面倒になる」
会談を終えて、一息ついた新は一誠と共に旧校舎の別室に来ていた。
アザゼルに籠手の具合を見てもらう一誠。それに付き添う新はアザゼルから出発予定について訊いていた。
祐斗とアザゼルがいるので、リアスが最悪の事態に巻き込まれる事は無いと思いたいが……それでも心配の種は消えない。

魔法使いとの契約話も重なり、グレモリー眷属はトラブルに見舞われ過ぎている……。

アザゼルの診断が終わり、アザゼルが息を吐く。

「イッセー、これから伝説のドラゴンは大事にしろよ？　魂だけになっているとはいえ、それでも貴重な伝説さまだぞ？　滅びてしまって神器（セイクリッド・ギア）にも封印されず、魂の所在すら不明とされるドラゴンがどれだけいるか」

「も、勿論、ドライグは大切にしますよ！」

「ドライグが幼児退行した元凶とも言えるお前がそんな事を言うとは……明日は大雨だな」

新が茶化していると、アザゼルが何かを思い出したかのように手をポンと叩く。

「……と、これも教えておいた方が良いか。ヴァーリからの情報があってな」

「ヴァーリから？」

「あいつが世界中に足を運んで未知のものを探求しているのは知っているな？」

現在、白龍皇（はくりゅうこう）のヴァーリは育ての親――――アザゼルのように豊かな探求心から、世界中を旅して不可思議なものを見て回っているらしい。

「どうにも旅先でよく『禍の団（カオス・ブリゲード）』の構成員に出くわすようだ」

「それはお尋ね者になっているヴァーリチームに粛清を与える為ではないんですかね

？」

一誠の言う通り、ヴァーリはオーフィスを勝手に新達のもとに送り込んだ罪で『禍の団（カオス・ブリゲード）』から追われる立場となっている。

そもそもヴァーリチームは元から『禍の団（カオス・ブリゲード）』内の他の派閥と折り合いが悪く、事ある毎に睨まれていた……。

アザゼルが話を続ける。

「ヴァーリが探していたのは……既に滅んだとされる凶悪な魔物の類（たぐい）だ。生きているかもしれないと言う不確かな情報を基に探していたようだ。あいつの強者捜しもそこまでいくと超暇人集団と思えちまうよ。――で、だ。その滅んだ魔物、主に滅んだドラゴンの生息していたと言う地にヴァーリの他に『禍の団（カオス・ブリゲード）』の構成員――魔法使いのグループも来ているって言うんだよ。……遭遇は一度や二度じゃないようだからな、偶然ではないだろう」

「滅んだドラゴン……それってどんな有名なのがいたんですか？」

「お前らが知っているかどうか分からないが、『二日月の暗黒龍（クレッセント・サークル・ドラゴン）』クロウ・クルワッハ、『魔源の禁龍（ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン）』アジ・ダハーカ、『原初の晦冥龍（エクリプス・ドラゴン）』アポプスかな。懐かしい名前だ、あいつら相当危険だったな。――残虐性が高すぎて封印、または退治されちまったよ。他にも北欧のニーズヘッグ、初代ベオウルフが退治したと言う凶暴なグレンデル。

同じく英雄の初代ヘラクレスが試練で倒したラードウンは伝説の果実を守護していたドラゴンではあるが退治されちまったな。日本だと八岐大蛇（やまたのおろち）か。……特にクロウ・クルワッハとアジ・ダハーカ、アポプスは今じゃ絶滅してしまった『邪龍（じゃりゅう）』でな。ヴリトラも『邪龍』だが、いま言った3匹に比べたら可愛いもんだ」

邪龍――――聞くだけでもおどろおどろしい名称である……。

「その3匹、そんなにやばかったのか？」

「ヴリトラですら、魂を幾重にも刻まれて意識を封じられただろう？　それぐらいしないと邪龍ってのは存在を抹消できない程に強力だ。だが、ヴリトラは神器（セイクリッド・ギア）の融合で意識を取り戻した。何処までも邪龍はしぶといんだよ。その中でも凶悪さで筆頭だったのがクロウ・クルワッハ、アジ・ダハーカ、アポプスだった」

ヴリトラでさえ不気味と感じるのに、邪龍筆筆頭格の3匹はそれ以上……恐ろしい限りだ。

「……二天龍より強いんですか？」

「それはさすがに現役時代の赤白の方が強いだろう。だが、出来るだけ各ドラゴンも『邪龍』と争うのを避けたそうだ。『邪龍』、もしくはそれに近しい属性のドラゴンは相手にするのがこの上なく面倒だったとな。それはつまり触れちゃ不味いって事だ」

まさしく触らぬ神ならぬ……触らぬ『邪龍』に祟りなしと言ったところだろう。アザ

ゼルはアゴに手をやりながら続ける。
「しかし、滅んだドラゴンども――特に邪『邪龍』を語るのは久しぶりだ。だが、よく分かるだろう？――力があり、暴れん坊のドラゴンは例外なく滅ぼされている。五大龍王（ごだいりゅうおう）最強とされるティアマットは要領が良いんだろう。上手く世俗に融（と）け込みながら好き勝手に生きているようだ」
「俺も元々はドラゴンの欠片から創られたけど、滅ぼされるのは御免だからな」
「やっぱりドラゴンはタンニーンのおっさんのように威風堂々な姿が良いな。龍王って感じがして、俺は格好良いと思います」
　新と一誠の意見にアザゼルも同意する。
「ああ、そうだな。現存する伝説のドラゴンと付き合うならあいつにしておいて損は無い。あれこそドラゴンの王だ。あんなドラゴンは今じゃ他にいないから、よーく見て参考にしておけ。何はともかく、水面下でテロ集団も何かを企んでいるようだ。……また、嫌な事が起こるかもしれないと覚悟だけはしておけ」
「はい」
「おう」
　アザゼルは途端に新と一誠の頭に手を乗せる。
「いつも悪いな。また、お前らに貧乏くじを引かせる事になるかもしれない」

「本当、まいっちまいますね。でも、来るなら退けるしかないでしょう。俺達はそうやって突き進んできましたから」
「そうだな、愚痴ったところで敵が手加減してくれるわけじゃない」
敵が来るなら倒すしかない。生き残る為には強くなって打破していかなければならない。
それがグレモリー眷属、駒王学園オカルト研究部の道である。
「まあ、俺も俺で冥界の事業に関して忙しい面があるんだけどな」
「何か始めたんですか？」
一誠が問うと、アザゼルが途端にいやらしい顔付きになる。
「ああ、土地を転がしてんのさ。冥界が悪魔側と堕天使側で分かれてるのはお前らも知ってるだろう？」
「ちょくちょく話には聞いているな」
「実はな、悪魔側に比べると堕天使側は住人の数に比べて相当土地が余ってんだよ。堕天使側に住んでるのは、純粋な堕天使と堕天使と関わりを持つ種族、あとは堕天使と異種族のハーフだ。種の存続が危ぶまれる悪魔と比べても住んでる者は少ない。何せ悪魔や天使と違って、俺達は転生システムを敢えて選択しなかったからな」
そう、アザゼルを含めグリゴリは堕天使を増やす転生システムを敢えて作らなかっ

た。
アザゼル曰く、「悪い天使は俺達で終わりで良い」らしい。
「――それで、だ。余った土地を使って、同盟関係を結んだ勢力向けのリゾート地を開発してんのさ。商業施設やカジノなんかも大々的に計画されていてな。既に別荘を持ちたい各勢力のセレブ連中から注文が殺到してる。俺はかなりの産業になると踏んでる。ま、堕天使も色々と資金――先立つ物が必要だから商売していかないとな」
ここでドアがノックされる。入ってきたのはリアスだった。
「アザゼル？　診察は終わったかしら？　日本を発つスケジュールを決めましょう」
アザゼルが「おう、そうだな」と言ってリアスと共に出発スケジュールの打ち合わせをしに行く。
新と一誠も部室に戻ろうかと思った矢先――新が〝ある匂い〟に気付いた。
「どうした、新？」
「一誠、下の方から何か匂ってくるんだよ」
「匂い？　どんな匂いだ？」
「それが……熱した油のような匂いなんだ。それに……食い物の匂いも混じってる」
新が言うには複数の食べ物の匂いが、下から来ているらしい。
「これは……鶏肉？　他には醤油、ニンニク、生姜、一味唐辛子。それにカキピーの匂い

もしてくるぞ……」
「何か唐揚げみたいだな」
一誠が口走った唐揚げと言うワードに――――2人はハッと顔を見合わせ、〝とある人物〟の顔を脳裏に浮かばせる。
「「ま、まさか……っ」」
新と一誠はダッシュで下の階に降りていった……。

「……唐揚げの呼吸、壱の型――――下味」
一口サイズに切られた鶏肉がボウルに入れられ、醤油、擦り下ろした生姜とニンニク、塩コショウ、一味唐辛子を振りかけられる。
「唐揚げの呼吸、弐の型――――揉味揉味」
ボウルの中で鶏肉が揉み込まれ、肉の繊維が柔らかくなる……っ。
これぞ、コネ得ならぬ――――揉み得……っっ！
揉み込まれた鶏肉は水気を取られ、予め砕かれたカキピーが片栗粉と混ざり合う。
「唐揚げの呼吸、参の型――――粉磨不士」

鶏肉はカキピーと片栗粉の中へ潜り、衣を纏っていく……。
そして、いよいよ行程は終盤……熱した油の中へ落とされる。
泡立つ気泡、香ばしい匂いが漂い、作り手の口元が歪む。
鶏肉達は狐色に揚がり、網皿の上で余分な油を切られる……。
「そして、これでフィニッシュだ……。唐揚げの呼吸、肆の型――二度揚戯！」
一度揚げた鶏肉を、今度はより高温となった油の中へ落とし……水分を飛ばす。
二度揚げされた鶏肉達が更に盛られ、上に白髪ネギを添えられる……。
「フッフッフッ……やったぁ、完成した……っ。これこそ悪魔的かつ禁断の唐揚げ、その名もカキピー唐揚げ……っ」
作り手は出来具合に満足したのか、ニヤリと口の端を吊り上げ、舌舐めずりする。
その1つを箸で掴み、いざ食そうとした時――その部屋の扉が勢い良く開かれる。
「お前ぇぇぇ……何やってんだぁ⁉」
「あれ、イッセー先輩。どうしたの？」
「それはこっちの台詞だ、シドォッ！　お前うちの調理実習室で何作ってんだよっ⁉」
一誠が声を荒らげて言った通り、旧校舎の調理実習室に居たのは――造魔の一員、シド・ヴァルディだった……。
唐揚げと言うワードで真っ先に彼の顔が浮かび、匂いを辿って調理実習室に着いた新

と一誠。

到着して早々に新はガクッと頭を垂れ、一誠はツッコミを入れてしまった。

シドが得意気に語る。

「見て分からない？　唐揚げ作ってたの」

「なんでこんな真夜中にうちの調理実習室に忍び込んで、唐揚げを作ってるんだって聞いてんだよ！」

「いや～、唐揚げ好きとして疼いちゃってさぁ。作りたくなっちゃったんだよねぇ。せっかくだからアーシア先輩に食べてもらおうと思って張り切っちゃった♪」

「張り切っちゃった♪――――じゃねぇだろぉぉぉっ！　いろいろツッコミどころが多くて何から指摘して良いのか分からねぇよ！　だいたい何なんだよ、唐揚げの呼吸って⁉」

「フッ、イッセー先輩。唐揚げの呼吸を知らないの？　唐揚げ好きとしてはまだまだだね。基本中の基本なのに」

「知らねぇよ！　また勝手に編み出した新語じゃねぇのか⁉」

「うん、そうだよ」

「だーもうっ！　何処までもマイペースを貫くコイツ腹立つっ！」

「やめとけ、一誠。いちいち突っ掛かるだけ無駄だ」

新はどうどうと一誠を宥め、シドは唐揚げが乗った皿を2人の前に突き出す。
「そうだよ、イッセー先輩。きっとお腹が空いてるからイライラしちゃうんだよ。ほら、コレでも食べて元気出しなよ」
未だにマイペースなシドに対して一誠は文句を言おうとするが……カキピー唐揚げの香ばしい匂いが鼻に入り込み、喉元まで上がっていた言葉を下がらせる。
ゴクリ……っ。
「アレアレ～？　イッセー先輩、食べたくないのかなぁ？」
「ふ、ふざけんな。だだだ誰が食うかよ、そんな怪しげなもんを」
「ヨダレ垂らしながら言っても説得力ねぇぞ」
カキピー唐揚げの誘惑に呑まれそうになった時、またしても思わぬ来客がやって来る……。
室内の端にドラゴンの紋様が描かれた扉らしき物体が出現し、それを開けて何者かが出てくる。
出てきた人数は2人。その内の1人は肩まで伸びた茶髪、旋毛辺りからピョコンと主張するアホ毛、中性的な顔立ちに深い紫色の眼が印象的だ。
一見すれば誰もがその者を女子と見紛うだろうが――――名は八代渉、残念ながら男子である。

もう1人は腰まで伸びる白髪に琥珀色の眼、こちらは言わずもがな歴とした女性――――高峰祐希那。

久しぶりの顔合わせに一誠は驚いた。

「おおっ、渉じゃねぇか！　久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです」

久しぶりと言うのも無理はない。渉と祐希那は今まで休学していたのだ。

魔獣騒動が収束した後、2人は休学届けを提出し、暫く京都に身を置いていた。

その理由は――――闇人と妖怪との和平の仲介役、三大勢力との溝を埋める為の復興活動に勤しむ為だった。

今は穏健派として身を置いているが、元々闇人は妖怪だけでなく三大勢力の敵として、幾度となく新や一誠達の前に立ち塞がってきた。

しかし、先日の魔獣騒動を機に三大勢力を敵視していた闇人は殆んど討伐され、組織も弱体化の一途を辿り、『2代目キング』こと蛟大牙の意向で三大勢力、妖怪との和平案が承諾された。

無論、今までの行いが全て帳消しにされるわけではなく……いくつかの制限と、被害を受けた冥界および京都の復興支援を命じられ、肩身が狭い毎日を送っているらしい。

渉も元を辿れば闇人の父、人間の母との間に生まれた者――――所謂ハーフなので、和

平案および復興支援の仲介役として立ち合う他なかった。
休学届けを提出してからは忙(せわ)しなく動き回り、ようやく落ち着いてきたので顔を出せるようになったと言うわけだ。
「皆さんが頑張ってくれたおかげで、やっと復学できるようになりました。これからもよろしくお願いします」
「おう、よろしくな」
「はいはい、感動もしない再会はそれまで。それより……そいつ誰なのよ？　見ない顔なんだけど」
渉の隣にいる祐希那がシドに気付き、新と一誠に訊く。
２人はカクカクシカジカとシドについて説明し、渉と祐希那はシドの方に視線をやる。
「じゃあ、このヒトが話に聞く『造魔(ゾーマ)』って組織の？」
「ああ、しかもバカみたいに強い上、こんなマイペース野郎だから手を焼いている」
「敵地に堂々と居座ってるって事⁉　何よそれ！　いつから⁉」
「少し前からだ。しかも、お前らと同じクラスらしい」
「そうだったんですか。とりあえず、クラスメイトとしてよろしくお願いします」
「渉！　こいつは敵だから頭下げなくて良いのよ！」

馬鹿正直に頭を下げる渉を祐希那が諌(いさ)め、シドは「よろしくね～♪」とにこやかに手を振る。

シドは再度カキピー唐揚げが盛られた皿を前に突き出してきた。

「んじゃ、お近づきのご挨拶って事で。唐揚げ食べる？」

「いらないわよ！　何なのアンタ⁉」

「そんなに目くじら立てないでよ、お姉さん。僕は美味しい唐揚げが出来たから、先輩達に食べてもらいたいだけ。大丈夫、毒入りなんてセコい事はしてないからさ」

「立場分かってる？　アンタは敵地のど真ん中にいるのよ？　総がかりでアンタを仕留めるわよ？」

祐希那がそう言った途端、シドはニヤリと不気味な笑顔を見せた。

「へぇ……先輩達全員で遊んでくれるんだぁ。良いよ？　だったら僕も本気で遊んじゃおっかなぁ……っ！」

無邪気から邪気に転換したシドの様子に祐希那は目を見開き、構えようとするが……新と一誠に制止される。

「やめろ、考え無しに突っ掛かるな。こんな奴でも『造魔(ゾーマ)』の幹部、今ここで戦ったりしたら周りを巻き込むだけだ」

「悔しいけど、こいつの強さは本物なんだ……っ！　下手に刺激したら相当マズい事に

なっちまう。だから、ここは堪えてくれ……っ」

祐希那は反論しようとするが、新と一誠の歯痒そうな表情を見て言葉を詰まらせる……。

２人の心中を汲み取ったのか、祐希那は渋々構えを解いた。

「……分かったわよ。仮にもアンタ達は先輩だからね、顔を立ててあげるわ」

「良かったねぇ、先輩。話を分かってくれて。んじゃ、唐揚げどうぞ♪」

しつこくカキピー唐揚げを突き出してくるシド。恐らく食べるまで１歩も退かないのだろう……。

仕方ないので新が先陣を切る事にした。

「……本当に毒は入ってねぇんだな？」

「もう～、疑り深いなぁ～」

シドがカキピー唐揚げを１つ摘まんで食べる。

ザクザクと小気味良い音を立てて咀嚼し、毒の類が入ってない事を証明する。

ゴクンっと飲み込み、「ほらね、何も無いでしょ？」と無実をアピール。

その様子を見た新は眉を潜めながらも、カキピー唐揚げに手を伸ばし――ようやく食べた。

１回、２回、３回と噛む回数を増やし、遂に飲み込み――黙り込む。

「……っ」
「ど、どうした、新？」
「……っ」
「新さん、どうしました？」
「……っ」
「ちょっと、どうしたのよ⁉　まさか、やっぱり毒入り――――」
「……うんまッッッッッ！」
突然声を張り上げた新に驚く一同。今まで沈黙していたのは毒が入っていたからではない。
〝単純にカキピー唐揚げが美味しかった〟だけのようだ……っ。
困惑する一誠達を尻目に、新はワナワナと震え出す。
「細かく砕いたカキピーが生むクランキーな食感……っ。揉む事で鶏肉の繊維が解れて柔らかくジューシーな仕上がり……っ。更に一味唐辛子が程よいアクセントとなり、二度揚げで閉じ込められた旨味が口の中に溢れてきやがる……っ！　ウメェ……ッッ！」
「そんな泣く程にっ⁉」
「こればっかりは……認めるしかねぇ……っ。コイツは……真の唐揚げ好きだ……っ」
あまりの美味さに涙を流し、天を仰ぐ新。

完全なる無実の証明とお墨付きを貰ったシドはドヤ顔で一誠にも勧めてくる。
「さあさあ、イッセー先輩。食べなきゃ損だよ～？」
「う……っ、分かったよ。食ってやるよ！」
半ばヤケクソで一誠はシドの作ったカキピー唐揚げを口に放り込み、咀嚼する。
結果は勿論――――。
「……うんめぇぇぇッッ！　何だこれ⁉　めちゃくちゃ美味いぞ……っ！」
「ほ～ら、言った通りでしょ～？」
「くぅぅぅ……っ！　クソぉぉぉ……っ！　美味すぎて涙が勝手に出ちまう……っ。何なんだよ、この美味さは……っ⁉」
カキピー唐揚げの圧倒的美味さに打ちのめされた一誠も、新と同様に涙を流し……天を仰ぐだけだった。
残る砦は渉と祐希那のみ。
「ちょっ、ちょっと！　なんで泣いてんのよ⁉　たかが唐揚げ1つで大げさ――――」
「祐希那、コレ本当に美味しいよっ。食べてごらん」
「って、アンタも勝手に食うなぁぁぁ！」
いつの間にかカキピー唐揚げを食べていた渉にキレる祐希那。

渉はカキピー唐揚げを摘まんで祐希那の前に差し出す。
祐希那は渋々カキピー唐揚げを食べてみる事に……。
結果は――――。
「――――超美味しいんですけど……っ」
見事に陥落。ここに居る４人全員がカキピー唐揚げの美味さに屈した。
感動して言葉も出ない新、一誠、祐希那に代わって渉が言う。
「シドさんでしたっけ？　美味しい唐揚げ、ありがとうございます。でも、本来はお互い敵同士です。何か悪い事をするようなら、僕達も黙っていませんよ？」
「フフンッ、良いね良いねぇ。そう来なくちゃ。でも、今日はノーサイドだから安心しなよ。これからもよろしくね～♪」
「はいっ」
その後、リアス達も調理実習室に駆け込んで来たが――――シドが提供したカキピー唐揚げの美味さにヤられ、全員が骨抜きにされたとか……。

――

『いくら赤龍帝でも権利を持っていない、ただの従僕であるのなら、私に意見する資格は

無いでしょう？』

『あなたも赤龍帝と同じく、ただの中級悪魔に過ぎない従僕』

日も上がらない早朝――――。

新は自宅の大浴場にてシャワーを浴びていた。

いつもより早く目が覚めてしまった新はベッドを抜け出て、リアス達を起こさずに来ていた。

脳内で思い返していたのは昨夜カーミラ派の吸血鬼――――エルメンヒルデが放った言葉だった。

……ただの従僕、発言する権利を持たない……。

確かに冥界で持て囃されている新と一誠だが、他の勢力からは「リアス・グレモリーの眷属」と見られている。

真実ゆえに外交の場面だと役に立たない……。

北欧のオーディンや京都の妖怪とは良い関係を築けたが、あれは特殊なケース。

基本的に新や一誠は他勢力から見れば、発言力の無い一介の中級悪魔である。

こう言った場面でリアスやアザゼルの力にもなれないのはとても歯痒いだろう……。

「……だから、貴族だの純血だの謳ってる連中は好かねぇんだよな……」

大事な後輩を……ギャスパーだけじゃなく、誰かを正面から庇う為には力以外のモノ

も必要となってしまう。一誠もそれを思い知らされただろう……。

「……思い上がるな。今の俺はもう独り善がりの俺じゃない。やれる事をやれば良いんだ」

今はとにかく自分に出来る事をするべきだ。

いつか必ず上級悪魔になれる時がやって来る……。その時までに力を蓄えていけば良い……。

「一誠も、祐斗も最上級悪魔になるって決めたんだ。……なら、俺も最上級悪魔になってやる……っ」

決意を改めて口に出して確認していた時、不意に大浴場の戸が開く。

顔を向けてみると――――そこには今まさに入ってきたばかりの全裸のレイヴェルが居た。

「……新さま？」

「お、レイヴェルか。ワリィな。誰も入ってないもんだから使ってた」

一応の謝罪はする新だが、裸のレイヴェルから目を逸らさなかった。

小柄な身体でありながら、しっかりと魅力的な女性の体つき。豊かな双丘（おっぱい）。いつものドリルロールも下ろしているので、また違う印象が魅力を引き立てる。

上がった方が良いか？と思慮していた新にレイヴェルが告げる。

「……お、お背中をお流しします！」
「――――ファッ？」
予想だにしなかった一言に新は間の抜けた返事をしてしまった。
「……いかがですか？」
「あ、ああ。良いぞ」
――――と言うわけで、レイヴェルにタオルで背中を洗ってもらっている新。
背中を流してもらっている間、会話が無いのは気まずいので……昨夜の吸血鬼の話題で繋いでいた。
「……私、今回生まれて初めて純血の吸血鬼と出会いましたけれど……まだ理解できないところもあって……。ギャスパーさんとなら直ぐにお友達になれたのに……」
レイヴェルも複雑な心境なのだろう。
「……お友達のギャスパーさんを取り引きの条件に指定した事もありますけれど、自分達以外はどうでもいいと言う姿勢が……。ですが、これもあちらにとっての政治なのでしょうね。……難しい問題ですわ。勿論、ギャスパーさんをあちらに闇雲にお貸しするのもどうかと思います。……でも、悪魔も合理的で純血を尊びますわ。私も純血の悪魔です」
そう、レイヴェルはフェニックス家のお姫様で長女でもある。上流階級で生きている

生粋の上級悪魔。

それゆえに思うところが多々あるのだろう……。

「純血の悪魔でも様々な友達を選べます。私も小猫さんとギャスパーさん、クラスメイトの皆さんが仲良くしてくれますもの。正体を隠さざるを得ないのが残念ですけれど……。種族が違おうともお友達をキチンと選べる事ができれば素敵だと思うんです」

レイヴェルは普段はツンとしているが、根は本当に純粋で良い子だ。

――――正体を隠す。確かに話せないし、話す事で危険に晒す事になってしまう。

せめて学園にいる間だけは平和であって欲しいと願うばかりだ。

「今回の1件で思い知った。俺達が外交の場で何かを言うには、ただ実力があるだけじゃダメだってな。一介の中級悪魔じゃ聞いてもらえない……改めて上を目指さなきゃいけねぇってよ」

お湯で背中を流してもらった後、レイヴェルが新に訊いてくる。

「新さまは……そ、その、将来のご眷属は決めておられるのですか？」

「眷属？　ああ、上級悪魔になった時のか？　実はまだ決まっていないんだ」

悪魔の駒（イーヴィル・ピース）は最高で15枠、相手によっては複数の駒を使うかもしれない。

「ゼノヴィアは俺についてきてくれるって言うから、リアスとトレードしようかって話は出ている。まあ、確定したわけじゃないけどな。俺が独立するなら、ゼノヴィアを眷

属にして連れていった方が早めに行動できるだろうし、仕事もやりやすくなるだろう。同様に一誠もアーシアを眷属にして連れていくらしいから、そうなるとリアスの眷属がだいぶ抜ける事になっちまう。その抜けた分の穴埋めはどうするのか、その辺が明確に決まってねぇんだ」

そこまで言って新は思った。

〝レイヴェルが将来もマネージャーでいてくれれば、心強いだろう〟と……。

そんな新の心中に反応するかのようにレイヴェルが言う。

「……私、新さまのマネージャーをしていきたいです」

「ああ、嬉しいぜ。頼もしい限りだ」

良い雰囲気になったところで、新はこんな事を言い出す。

「よしっ、今度は俺がレイヴェルの背中を流してやるか」

「……っ。よ、よろしいのですか……？」

「さっきの礼も兼ねてな。嫌なら別に構わないが――――」

「い、いえ……是非お願いします……っ」

少し顔を赤らめて承諾するレイヴェル。新は早速タオルを泡立て、彼女の背中を優しく洗っていく。

「お、お上手ですね……新さま……」

「まあ、よくリアスや朱乃も洗ってやってるからな」
慣れた手付きでレイヴェルの背中を洗い、お湯で泡を洗い流す。
「ほい、終わったぞ」
「ありがとうございました……。あの……っ」
「ん、何だ？」
「こ、今度は……前の方も、お願いします……っ」
レイヴェルの口から驚きの言葉が出てきた――――っ。
今度は前……即ち、レイヴェルのおっぱいを洗って欲しいと言う事だ……っ。
一瞬ギョッとする新に、レイヴェルは艶のある表情で訊いてくる。
「ダメ、でしょうか……？」
「洗いますっ」
即決した新。レイヴェルは新の方を向いて座る。
小柄な身体に釣り合わない豊かなおっぱいがプルンッと揺れ、レイヴェルの顔が更に紅潮する。
新は再びタオルを泡立て、レイヴェルのおっぱいを洗い始めた。
「ん……っ、んんっ、……ぁん……っ」
丁寧に洗われているせいで無意識に艶声を発してしまうレイヴェル。

必死に羞恥心を堪(こら)える姿も相まって、新の手付きがだんだんエスカレートする……。
タオルを落とし、レイヴェルのおっぱいを手で洗い始める新。
ゆっくりと撫で回し、緩急をつけて揉み、乳首も指で弄(いじ)りまくる。
「はぁぁん……っ！　あ、あらたっ、さまぁ……っ！　そこは……っっ」
「そんな声を出されちゃ、抑えられるわけねぇよ」
新は執拗にレイヴェルのおっぱいと乳首を洗い、責め続ける。
全身を駆け巡る快感にヤられたレイヴェルは、遂にその場でへたり込んでしまう。
艶かしい息遣いと共に上下するおっぱい。レイヴェルの表情は完全に蕩(とろ)けていた……。
「あ、新さま……っ。私、こういう事は初めてで……どうしたら良いのか分かりません……っ。ですから、新さまのしたい事を……なさってください……っ」
それは情事ＯＫとも言えるサインだった。そんな事を言われてしまったら、もう止まれない……。
新はレイヴェルの唇にキスしようとした――その寸前、背後からガシッと頭を掴まれる。
新の首が強制的に背後に向けられ、自分の頭を掴んでいる者の姿を目の当たりにする。

新の頭を掴んでいるのは――全裸の小猫だった……。
ミシミシと頭蓋骨が嫌な音を立てる中、新は引きつった笑顔を作る。
「こ、小猫さん……。いつから居ましたか……？」
「……３０分前からいました。新先輩が入ってきたので、湯船の中に隠れてました」
「ほ……ほぉ、潜水の記録にチャレンジしていたのかな？　それなら見事に新記録樹立だな……」
「……先輩、レイヴェルに何をするつもりでしたか？」
「そ、それは……ほら、頑張ってくれてるマネージャーの後輩を労ってやろうと――」
「……レイヴェルに何をするつもりでしたか？」
「いや、だから……」
「……レイヴェルとナニをするつもりでしたか？」
「小猫さん、話を最後まで――」
「……ナニをするつもりでしたか？」
頑なに問い詰めてくる小猫。その異様な迫力に新は「……すみません」と弱々しく謝るしかなかった。
小猫はそのまま新を引き摺っていく。
「……先輩、そんなにおっきいのが良いんですか？　ちっこいのは嫌いですか？」

「落ち着け小猫、俺はそんな事で女を区別したりしない。ただ、あの空気だと行かない方がしつれイダダダダダッ！　割れる！　ミシミシと頭蓋骨が割れるっ！」
「……言い訳なら聞いてあげますので、とりあえず上がりましょう」
「こ、小猫……っ。よく聞いてくれ。確かに俺はレイヴェルの艶っぽい雰囲気に流されそうになった。だが、小猫だってレイヴェルと同じ土俵――――つまり、俺とお前の体を洗い合えばその気になってもおかしくなダダダダダダァッ！　更に握力が強くウウウウウウっ！」
絶叫する新は小猫によって強制連行されていった。
大浴場に残されたレイヴェルは息を整(ととの)え、もどかしい表情となる。
「もうっ、小猫さんってば……良いところでしたのに……っ。でも、その場の流れって怖いですわね……。私、あんな風に新さまを誘惑するなんて……っ」

「はぐれ術者の連中との最終確認は？」
「問題ない。奴らも存分に楽しむそうだ。そんなだから協会を追放されたんだ」
「ハハハ、テロリスト集団に身を置いている魔術師の俺達が言えた義理じゃないな。――

――で、リーダーは本当にやるつもりなのか？」
「それが今の上の意向ってんだから、仕方ないだろう」
「イカレてる。シャルバも曹操(そうそう)も大概だったが、実際今回のはヤベェよ」
「いつだって俺らがやる事はヤバい事ばかりだ。もう、あとになんか引けやしない」
「リーダーは準備が整ったって連絡をくれたよ。ま、あのヒト達がいなかったら、うちの組織も俺らも終わりだったんだ。付いていくしかない。――俺らはロクな生き方なんて出来やしないよ。だったらトコトン楽しむべきだ」
「行く先々でヴァーリ達と出会ったのに縁(えん)を感じたわ」
「強者を呼ぶと言うドラゴン。だったら踊り合えってな。――ドラゴン同士で」

リアス一行、ルーマニアへ発つ

吸血鬼の来客があってから、数日が経過した。

深夜にリアスが日本を発つ予定の日で、目的地はルーマニアの山奥らしい。

その日、学校を終えた新はリアスの準備が整うまで、自宅の地下にあるトレーニングルームで筋トレをしようと足を運ばせていた。

リアスの準備は女性陣がやっているので、男子の新は手持ち無沙汰になってしまう。

しかも、他の皆とやっている合同練習は吸血鬼との会談があってから休止状態。魔法使いとの書類選考も進めづらくなってしまった。

昼間も学業があるのでスケジュールは過密。そんな中でも体が鈍らぬよう、空いた時間に筋トレだけでもしておこうと言うことだ。

新がトレーニングルームを開くと――――黒歌とルフェイが先に入っていた。2人して床に座り、難しそうな分厚い本を広げている。

「何だ、お前ら来てたのか」

新がそう謂う。

あれ以来、彼女達はたまに訪れるようになっていた。特に黒歌は勝手に冷蔵庫を開け

て牛乳を飲んだり、ストックしていたチーズを食べたりしているらしい……。
黒歌が勝手をする度にルフェイが必死に頭を下げて謝る事になる……。
「お邪魔してます」
「にゃはは、お邪魔してるにゃん」
キチンと挨拶するルフェイと、いつもの如く悪びれる様子も見せない黒歌。
新が2人に近付き、開いている本を確認すると――人体の図式と手から発するオーラのような絵が添えてあった。
新が「何だこれ？」と訊くと、黒歌がにんまりしながら言う。
「生命に関する本にゃ。オーラとか仙術とか闘気の事とかのね」
「仙術に闘気か……。ん？　黒歌はそういう類は得意じゃなかったか？」
訊ねる新にルフェイが小さく笑いながら言う。
「妹さんにどうやったらよく教えられるか、本を見て研究されているんですよ」
どうやら、ちゃんと姉として頑張っているようだ。黒歌が本の表紙をなぞりながら言う。
「仙術の基本は己と他者と自然の気のあり方を把握する事。とにもかくにもまずは精神集中、静かに座禅を組んで己の気を緩やかにたゆたえて、周囲の気も認識する。基礎中の基礎だけど、これが成長するのに一番にゃ。なのでまずは座禅させてるんだけど

ねー」
「お前の事だから、わけの分からんものでもやらせるのかと思ったが……案外まともにやるんだな」
新がからかうと黒歌は不満そうに口を尖らせる。
「ぶー、失礼にゃー。やるときゃやる女よ、私は」
「よく言うぜ。前は俺や小猫を毒霧で殺そうとしていたくせに」
新のツッコミに対し、黒歌はウインクして可愛く回避しようとしていた。
「あれはほら、白音に再会できた嬉しさでヤンチャしちゃったの♪　てへぺろにゃん♪
ほらほら、悪どいキャラがふとした優しさを見せるとコロッといくって言うでしょ？
ねねね、リューくんも私にグッときたんじゃにゃいの～？」
「否定はしないが、お前が悪猫なのは確かだろうが。……いつか小猫と本当に復縁しろよ」
新の言葉に黒歌は瞳に憂いを乗せる。
「そうねぇ……。けど、無理かもね。あの子の為を思ってやった事でも結果的に白音は私のせいで追い詰められたんだしさ」
黒歌の言うように、彼女が元主を殺したから……姉の罪を小猫が一身に浴びてしまった。挙げ句、処分まで検討された……。

魔王サーゼクスが小猫を庇ったお陰で事なきを得たが……その後、精神的ダメージから復調して普通に生活を送れるようになるまで時間が掛かってしまった。

心に傷を負った小猫は「姉に裏切られて、大勢の大人に責められた」と思っているだろうから、それは半分当たっている。

「確かに難しい事かもしれないな。……だが、その時が来たら俺もよりを取り戻すのに協力する。お前と小猫はこの世にたった2人の姉妹だからな」

こう言う事情を聞いてしまえば、新は力を貸す事を惜しまない。小猫にも笑顔でいて欲しいから……。

新の言葉に黒歌は一瞬目を丸くし、直後におかしそうに笑い出した。

「にゃははは。うんうん、にゃるほどねぇ。分かった気がするにゃ。そりゃ、みーんな惚れるわ。リューくんはイケメン以上のイケメンで魅力的よ？」

「そりゃどうも」

ここでルフェイが話題を変えるように訊いてくる。

「魔法使いさん達との交渉はどうですか？」

「まあ、ボチボチだな。何せ人数が多いから書類選考でバンバン落としていってる」

「蝙蝠皇帝さまは大人気だそうですからね」

そう言われるが、実際はリアスが一番大変そうにしていた。普段の仕事に加えて学

業、『王』としての役割をこなしながら魔法使いの事や吸血鬼絡みの事にも手を向けている。

上級悪魔かつ『王』になる事は――――眷属の事も全て抱えるのと同義。

いずれなるかもしれない上級悪魔と『王』の世界に一抹の不安を抱えながらも、今はリアスを支えて前に突き進むしかない。

ふと、新はこんな事をルフェイに訊いてみる。

「なあ、俺がルフェイに魔法を習いたいと言ったら習得できるのか？」

魔法使いと付き合っていくのであれば、少しは知識を蓄えた方が有意義になるだろう。

質問に対してルフェイが頷く。

「どのような魔法を使いたいのか分かりませんが、悪魔の方でしたら、常人の方よりも異能に対して基本が作りやすいので、習得は努力次第で可能だと思います。ところで基本的な事ですが、魔力と魔法の違いはご存じですよね？」

「ああ、魔力はイメージしたものを発現するもの。魔法は術式で超常現象を発動させるもの、だったな？」

「簡単に分けると、その通りです。魔力はイメージ力――――想像力と創造力が必要で、センスが問われます。魔法は術式を扱うだけの知識、頭の回転と計算力が必要になります

ので、似ているようで全く違うものですね」
「知識と計算か……。頭の悪い俺じゃ厳しそうだな」
「計算があまり必要ないものでしたら、習得は可能だと思います。たとえば、冷めたコーヒーを温かくする魔法や、簡単な透視の魔法などでしょうか」
〝透視の魔法〟と聞こえた瞬間、新の目がキュピーン！と光る。彼にとってはタイヘンキョウミガそそられる話だ（笑）
透視の話に頭が塗り替えられた新に、黒歌が説明を補足してくれる。
「つまりね。魔法ってのは『どうすれば、そうなるのか』と言う計算と知識がキチンと無いとダメって事にゃ。私にだって分からない現象があるし、そういうのは魔法で再現できないにゃ。よく解明されてないのに、センスと才能だけでそういうのをやれてしまう術者もいるけどね。それはチョーが頭に１０個は付く非凡の類にゃ」
ロスヴァイセが魔力よりも魔法を優先するのは、イメージするよりも計算した方が早いと言う事だ。覚えられるのはモノにもよる。
使いこなす事は出来ないかもしれないが、基本的な魔法を１つか２つなら覚えられるかもしれない。
『今度ロスヴァイセやルフェイに聞いて、魔法を覚えるのも悪くないな』
そう思った矢先、トレーニングルームにゼノヴィアが入ってきた。

「新、リアス部長がもう日本を発つそうだ」
「――――っ。予想よりも早いな。まだ夕方だぞ？」
「うん。天候が回復して、小型ジェットが飛べるようになったから早めに行くそうだ」
新は黒歌とルフェイに「ちょっと出てくる」と言ってその場を離れた。

地下にある巨大な転移魔法陣。そこにオカルト研究部のメンバーとソーナ会長が集（つど）っていた。リアスと祐斗、アザゼルを見送る為である。
吸血鬼――――ヴラディ家を訪問するには、まず日本――――ここから何度も魔法陣を介してヨーロッパまで飛ばねばならない。そこから専用の小型ジェット機をチャーターする。
吸血鬼は独自の結界を張っており、いくつかの移動手段を駆使しないと彼らの王国に入国できないらしい。
話では、ヨーロッパ――――ルーマニアまで魔法陣、そこから小型ジェット、更に車に乗り換えて山道を登るそうだ。よほど辺鄙（へんぴ）なところにあるのだろう。
出発時間が早まったのは、あちらの天候が荒れていて小型ジェットが飛べなくなって

いたのが、先程回復したからだ。予想よりも早く回復したので、今の内に飛んでしまおうと言う事になった。

直ぐに飛べる魔法陣と違い、航空機は天気との勝負。移動の都合が小型ジェット優先なのは仕方がない事だ。

荷物を持ち、魔法陣の中央に向かうリアス、祐斗、アザゼル。ヴラディ家を直接訪問するのはリアスと祐斗。アザゼルはカーミラ側に一度接触してからヴラディ家に向かう。

リアスはギャスパーの事を抱き締める。

「……あなたの事は私が守ってあげるから、何も心配しなくて良いわ。ヴラディ家との事も私がキチンと話をつけてくるから」

「はい、部長……」

リアスの抱擁に甘えるギャスパー。……リアスの母性が炸裂している。

リアスは朱乃に顔を向ける。

「朱乃、あとは頼むわね」

「はい、リアス」

一方で、一誠は祐斗と拳を打ち付け合う。

「部長の事、頼むぞ」

「勿論だよ」
祐斗が居れば問題ないだろう。あちらで面倒事に巻き込まれたとしても……リアスの事を必ず守ってくれる。
アザゼルの方はと言うと、ソーナ会長とロスヴァイセに笑みを向けていた。
「じゃ、学校の方、あとは頼むわ。ソーナ会長♪　ロスヴァイセ先生♪」
「忙しいので早く帰ってきてください」
「んだよ、つれない反応だ」
２人の素っ気ない返事にアザゼルは不満げだった。
もうすぐ年末なので、学校のスケジュールも既に年末進行。そんな時期に教師が１人いなくなるのだから、学校に深く関わっている２人にとってアザゼルの外交は素直に送り出せないものだろう。
それにアザゼルの性格上、向こうで外遊なんて事もあり得る……。
アザゼルが皆に伝えてくる。
「例のフェニックス関係者を狙っているって魔法使いどもが不気味だ。気を付けろよ」
『はい！』
返事をする新達。その後、リアス、祐斗、アザゼルの３人は皆と最終確認と別れを述べて、遂に旅立つ事に――――。

最後に新とリアスが視線を交わし、リアスが新のもとに歩み寄る。
「……行ってくるわね」
「ああ、良い報せを待ってる。何か遭ったら必ず駆け付けるからな」
「うん。分かってるわ」
お互いに見つめ合い、手を取り、数秒だけ別れを惜しむ。
３人は転移魔法陣の中央に並び、魔法陣の輝きが増してきた。
朱乃が魔法陣の術式を最後に確認した後、転移の光が室内に広がり――次に目を開けると、リアス達の姿は無かった。
リアス、祐斗、アザゼルがいない間、残された新達は留守を守る。

「……」
その日の就寝時間、新は少し広くなったベッドの上で寝付けずに居た。
先程見送ったばかりなのに、既にホームシックのような気持ちが押し寄せていた。
……と言うのも無理はない。リアスは毎日のように新と一緒に寝ていたので、居ないと分かった途端に寂しく感じてしまう。

久しぶりにレイナーレ達をベッドに呼ぼうかと思った矢先、ドアがノックされた。
ドアに視線を向ける新。すると、ドアを開けて入ってきたのは――透け透けネグリジェ姿の朱乃だった。
「うふふ、今夜からしばらくお世話になりますわ」
「おお、朱乃。どうしたんだ？」
「リアスの代わりをしようと思って、ここに来ましたわ。では、早速――」
朱乃はベッドに歩み寄り、スルスルっとネグリジェを脱いでいく。
「……ひ、久しぶりですから、や、優しくお願いしますわ……。あと、明かりも消してもらえると嬉しいかも……」
全裸となった朱乃は顔を真っ赤にして、情事ＯＫとも取れる台詞を口に出していた。
新はやや暴走気味の朱乃を宥めようとする。
「朱乃、落ち着け。気持ちはスッゲェ嬉しいけど、無理して俺を慰めようとしなくても良いんだよ」
「え？　だって、今夜からリアスの代わりをするのですもの……違うの？　リアスと毎晩エッチしてるのかと……」
「ま、まあ、そう思われるのも分かるけどさ……俺達は結構平和に寝てるぞ？」
新がそう言った途端に朱乃は当惑気味の表情となる。どこまで覚悟をしていたのだ

ろうか……？

「あらあら、困りましたわ。私、覚悟と準備を整えて今日に臨みましたのに……てっきり、激しくされるのかと思ってしまいましたわ」

そう言うと朱乃は全裸のまま、ベッドの中に入り込み――――手を広げて新を迎え入れる格好となる。

「じゃあ、普通に寝ましょうか♪」

「今さっきまで普通に寝ようとしてなかったよな？　……まあ、良いか」

朱乃は楽しそうに新の手を取り、自身の胸に誘導させていった。

モッチリと柔らかなおっぱいに手が吸い付き、リアスとは違う感触に手が喜ぶ。

新は次第に朱乃に覆い被さり、手だけでなく顔も朱乃のおっぱいに埋めていく。

新が朱乃と視線を合わせると、途端に朱乃は儚げな色を瞳に浮かべた。

「……あなたが死んだと思った時、私は全てが終わったと感じましたわ。頭が真っ白になって……記憶の中の新さんをずっとずっと思い返して、現実から逃げていたの……」

新もその時の様子は聞いており、相当酷い状態だった。

リアス以上に心の均衡が崩壊し、父親のバラキエルが駆け付けなかったら意識を戻す事も出来なかったそうだ。

『……俺が死んだかもしれない、それだけで朱乃をそこまで悲しませちまったんだよな』

新はアザゼルから言われた言葉を思い出す。

『お姉さまって偽りの仮面を脱ぐと、朱乃の本質は男への「依存」だな。父親のバラキエル然り、お前然り。２人の身に危険が及べば、あいつはまた意気消沈するだろう。だが、逆を言えば焚き付けてテンションを上げる事も出来る。なーに、甲斐性を見せてやれば良いんだ。お前ならどう言えば良いか、分かるだろ？』

新は決意を固めた表情で朱乃に呼び掛ける。

「朱乃」

「――――っ。は、はい」

「俺は絶対に死なない。たとえ死にそうな目に遭っても……必ず、お前のもとに帰ってくる。だから、俺を信じろ。そして……リアスと俺の為に生きてくれ」

新は体を起こし、朱乃を引き寄せて真剣に見つめる。

「俺と共に強くなろう。俺達と一緒に生きていこう」

弱い部分があるのなら、一緒に強くなって乗り越えるしかない。新自身も……まだまだ弱いところがある。

だからこそ、仲間と共に強く生きていく……！

新の言葉を聞いて、朱乃はボロボロと涙を流した。

「……うん。うん、大丈夫だよ。私、新とリアス、そして皆の為に生きるから。私、新と

強くなる。ずっと一緒に生きるから……！」
普段はお姉さまの朱乃だが、お姉さまの声音と態度を崩して普通の女の子の反応になると……殺人的な可愛さが発揮される。
そして、アザゼルがその後に言った事も思い出す。
『でもな、言ったら最後まで責任持てよ？　朱乃は繊細で病み気味だから、一度そんな事言ったらずーっと頑なだぞ？　お前が死んだら、たぶん今度こそダメになるだろう。だから、絶対に死ぬなよ？　死んだら大変だぞ？　だが、お前が死ななきゃ朱乃は今まで以上に強くなるさ』
……責任重大、絶対に死ぬような場面が許されない……っ。
自分の首を絞めただけのように思えるが……決めた以上、やるしかない。
朱乃は涙を拭い、いつもの笑顔と調子に戻った。その状態でこう言い放つ。
「はい。じゃあ、あとは私の体を新さんにお任せしますわ♪」
またも魅惑の言葉を言い放った朱乃。そんな事を聞かされては男として引き下がるわけにもいかない。
どのように楽しもうかと思った矢先、またドアが開けられた。
「……こんばんは」
今度は小猫が登場。上に白ワイシャツだけと言うマニアックな状態だった。

「小猫、どうしたんだ？」
「……新先輩達と一緒に寝ます」
小猫はツカツカと近寄り、新に抱き付いてきた。
「……新先輩の膝上をレイヴェルに取られてしまったので、先輩の抱っこだけは死守します」
主（リアス）が居ない間に、小猫まで大胆な事を言い出した……っ。
「あらあら、小猫ちゃんも大胆になりましたわね♪」
「……にゃ」
小猫の甘えボイスにグッと来る中、今度はゼノヴィアとイリナが現れた。
「リアス部長が居ない隙にと思ったのだが……」
「わ、私はゼノヴィアに無理矢理連れてこられたのよ！　こ、こんな夜這いだなんて主はお許しになられないわ！」
「いや、イリナ！　リアス部長が居ない間に何とやらだ！」
パジャマ姿の２人はドアの前に立ち、戦隊ヒーローのようなポーズを取っていた。
リアスが出張に行った途端に皆が新の部屋に集結。普段からこういう傾向はあったが、『王（キング）』たるリアスが居ない分、制御が利かなくなっている。
さすがに暴走気味の娘達全員を相手には出来ないので、新は何とか会話を繋げようと

考察する。
そこで以前から疑問に感じている事を訊いてみた。
「前々から思っていたんだが、天使は堕天しないでどうやって人間との間に子供を作るんだ？　天使とのハーフは居るんだろう？」
堕天使と人間の間に子供が生まれるように、天使と人間の間にも子供を生む事が出来る。その際に天使は堕天せず、生まれた子供も堕天使ではない。
しかし、天使は肉欲に駆られると堕天してしまう。度々堕天しそうになるイリナや他の天使を見て不思議に思っていたのだ。
ゼノヴィアとイリナは顔を見合わせ、ゼノヴィアが口を開いたと同時にパジャマの上着を脱いでいく。
「ああ、物凄く数は少ないが天使のハーフはいる事はいる」
「うん、いるわね。私も会った事あるよ」
ゼノヴィアの言葉にイリナもノリでパジャマを脱ぎ始めた。
「だが、天使の子作りは制約が多かった筈だ。だろう？」
パジャマの下も脱いだゼノヴィアがイリナに再度確認する。イリナも言いながらパジャマを完全に脱ぎきった。
「うん。その行いをする為に前もって準備しなきゃいけないものが結構あるわ。場所は

特殊な結界で覆い、前夜に身を清めてお祈りをしなければならないし、邪(よこしま)な感情を抱(いだ)くのは勿論ＮＧ。常に信仰心を忘れず、聖人に等しい精神状態で臨まなければならないの。一度でも欲望に駆られてしまうとアウトよ。そして何より無償の愛を抱かないとダメ！」

聞けば聞く程、たとえ新でも無理な状況だ……。人間側だろうと天使側だろうと、美女・美少女と子作り出来るとなれば堕天は必至。

そうこうしてる間にゼノヴィアとイリナは遂に下着姿となった。真面目な話をしながらシュールな光景である……。

「……愛を抱くのに性欲無し、更に聖人のような精神で子作りって……無理ゲー過ぎないか？」

新が渋い顔付きでそう呟(つぶや)くと、ゼノヴィアが頷(うなず)く。

「だからこそ、選ばれた者しか天使と交わる事が出来ない。同様に天使も欲に駆られず行為を完遂しないとダメだ。欲に溺れた時点で堕天する」

要約すれば難易度高めのエッチ。新は勿論だが、イリナも難しそうな条件である。

彼女も性的な場面に出くわすと、よく堕天の危機に陥(おちい)ってしまう。――その割には下着姿になっているが……。

「イリナには無理かな？」

ゼノヴィアが新の心中を代弁するようにイリナに言うと、イリナは口をへの字に曲げていた。
「……お、幼馴染みだから、越えられる壁ってあると思うもん！」
「ああ、そうだったな。そう言えば幼馴染みだったか」
「もう、ゼノヴィアったら！　私は天使の限界に挑戦する事にしたの！」
「だいたいお前はどうして新に言い寄る？　私は三大勢力の和平会談以降、相手はコイツのみだと心に決めた。いや、それ以前からだ。私を守る為に剣護（けんご）さんの前に立ちはだかる！　並の男子では出来ない事だぞ？」
「わ、私は……っ！」
「イリナ、ノリと勢いで好きになった感は否（いな）めないな？」
「ち、違うもん！　格好良いからだよ！」
「動機が弱いな！　友達の相手を好きになったようにしか思えん！」
「最近、思い出したのよ！　ちっちゃい頃、新くんが約束してくれたの！」
イリナにそう言われて「？（ハテナ）」状態の新。小さい頃に何を約束したのだろうか……？
「とにかくだ、イリナ。今回は私と新の背後で光力を発揮していてくれ！　私は右の乳を見せたら、左の乳も見せる気構えで臨むぞッ！」
「ゼノヴィアのバカ！　私は電球じゃないもんッ！　修学旅行の時とは違うの！」

また2人の低レベル合戦が始まってしまった……。
「うふふ、私は悪魔で堕天使ですもの。何も心配ありませんわ」
朱乃は再び新の手を掴んで、自分の胸元に持っていこうとする。辛抱たまらない状況だ……。
「小猫さん！　やっぱり、ここにいましたのね！」
遂にはレイヴェルまで現れた。怒りを感じる足取りでベッドに向かってくる。
レイヴェルは「……失礼致しますわ！」と言って、ベッドの片隅に横たわる。
「……ふつつか者ですが、ベッドの隅にいさせてもらいます！　マネージャーですもの！　新さまの事を猫からお守りしますわ！」
頬をプクーっと膨らませて小猫を威嚇するレイヴェル。対抗するように火花を散らす小猫。
「……鳥娘」
「……何よ、泥棒猫さん」
もはやカオス、子作りどころではない……。
朱乃もこの事態に諦めたのか、新の手をおっぱいから放す。
「あらあら、新さんのベッドは満員御礼状態ですわ。これでは、浮気は当面無理そうですわね」

「ああ、そうみたいだな……」
新も苦笑いしてそう言った直後、バーンと部屋のクローゼットが豪快に開かれた。
中から出てきたのは――レイナーレ、カラワーナ、ミッテルトこと堕天使３人娘だ。
「堕天使・イン・クローゼット～っ！」
キャミソール姿のミッテルトが自信満々に言う。いつから隠れていたのだろうか？
新が彼女達に問い質す。
「お前ら、いつからそこにいた？」
「最初からよ。私を除け者に出来ると思わない事ね」
「しかし、この状況では夜這いも難しいですね」
「まあ、良いわ。普通に寝てあげるわよ」
大胆なビスチェ姿のレイナーレとカラワーナ、ミッテルトの３人も夜這い目的で来ていたようだ。
――と言いつつ、今夜は平和に寝るしかない。

リアスが日本を発って数日経った頃、新は駒王学園でいつもと変わらぬ学校生活を

送っていた。

現在リアス達は無事にルーマニアに到着し、目的地まで移動しているのだが――――人里離れた場所に吸血鬼の住む領域があるので、そこまで移動するのが大変困難らしい。

それだけでだいぶ時間がかかりそうだと定期連絡を貰った。今はリアス達を信じて吉報を待つしかない。

この時間、これから体育の授業があるので新はジャージに着替えてグラウンドに移動するところだった。ちなみに一誠は先に松田や元浜と共に向かっている。

外は冬なので、グラウンドでの運動もキツくなってきた時期だ。いっそサボってしまおうかと悪い考えを過らせた時だった。

「あっ、いたいた。竜崎～っ」

新に声をかけてくるのはジャージ姿のクラスメイト――――桐生藍華。

彼女の後ろには同じくクラスメイトの村山仁美と片瀬奈緒もいた。

体育の授業、男子はグラウンドで女子は体育館に割り振られている筈なのだが……。

「桐生？　なんでここにいるんだよ？　女子は体育館で授業の筈だろ」

「いやいや、竜崎。この前の話についてまだ真相を聞かせてもらってないからね。このまま逃げられるのも癪だから、ちょっと強硬手段に出たってわけ」

桐生がメガネをキラリと輝かせ、新に詰め寄っていく。新は逃げ道を探ろうとするが

……村山と片瀬に行く手を阻まれてしまう。
「さすがのアンタも、迫ってくる女子を無理矢理振り切るなんて真似は出来ないでしょ？　さあ、洗いざらい吐いてもらうわよ」
「チッ……そう来たか。だがな、俺がそう簡単に口を割ると思ったら大間違いだ。こう見えて俺は口の堅い男だからな」
「ふっふっふっ、いつまでそんな強がりを言えるかしら？」
桐生が何かを企んでいるかのような含み笑いを見せる。そして……こう切り出す。
「話してくれるなら――この場でエロエロな事をしてあげても良いんだけどね～？」
「「――――っ!?」」
桐生の発言に新だけじゃなく、村山と片瀬も一緒に驚いていた。
戸惑う村山と片瀬を尻目に桐生は話を続ける。
「さあ、どうするの？　洗いざらい話してエロエロな事をするか、それとも話さずに諦めるか」
「桐生……お前、案外汚い真似をしやがるな」
「竜崎相手に普通の追及なんか通用しないのは分かってんのよ。だったら、女の武器を使って聞き出すしかないじゃん？」
桐生は悪戯な笑みを浮かべたまま、村山に近付いていき――彼女の体を撫で回す。

「きゃあっ！　き、桐生さん……っ⁉」
「ほらほら～、見てみなさいよ。村山っちの肉付き豊かなボディを。特にこのデカパイっ。こんなエロエロな巨乳で〇〇〇〇してもらったら男冥利に尽きるものじゃない？」
ジャージ越しに村山のおっぱいを揉んだ桐生は、次に片瀬の傍まで歩み寄り――彼女の太ももを撫でる。
「片瀬っちは乳のボリュームが劣るけど、その分ムッチリした太ももで男のアレを挟んで〇〇〇〇も出来るし、２人揃ってダブルの〇〇〇〇ってのも捨てがたいんじゃない？」
「わ、私と仁美で〇〇〇〇……っ？」
桐生が連ねる放送禁止用語に村山と片瀬は完全に茹で上がり、顔を真っ赤にする……。
しかし、新はそれでも揺るがない。
「ソソソ、ソンナ事で俺が籠絡スルトデモ思ってるのか？　２人に無理強いサセルノハ感心シネェナ」
「声が上ずってるわよ？」
「やかましい！　村山、片瀬。桐生の口車に乗る必要は無いぞ。だいたい外は寒いんだ。

こんな寒い場所で出来るわけないだろ？」

「「……構わない」」

先程まで固まっていた村山と片瀬の口から信じられない一言が出てきて、さすがの新も「ファッ？」と間の抜けた声音を発してしまった。

２人は意を決したような表情で告げてくる。

「私達も聞きたい……っ！　いろいろ聞きたい！　竜崎くんは……リアス先輩が本命なの⁉　それともロスヴァイセちゃんが本命なの⁉」

「姫島先輩、ゼノヴィアさん、イリナさん、塔城小猫（とうじょうこねこ）さんにレイヴェルさん！　その中で誰が本命なのか教えて！　そ、そうしたら……どんなエッチな事でもしてあげる！」

そう叫んだ後……村山が新の右腕を、片瀬が左腕をガシッと掴んでくる。彼女達の決意は梃子（てこ）でも動かないと言わんばかりのものだった。

その様子を見ていた桐生はここぞとばかりに詰め寄ってくる。

「竜崎、２人がここまでしてくれてんのよ？　エロエロマイスターなアンタが、この据え膳を放置するなんて出来る？」

「ぐ……っ！」

桐生の一言に新の抑制心（ブライド）が揺らぎ始め、桐生は更に畳み掛けてきた。

ズイッと顔を近付け、自ら（みずから）ジャージのファスナーを下ろそうとする。

「今なら村山っちと片瀬っちだけじゃなく、私も参加してあげるんだけどな～？　身体には結構自信があるし、ぶっちゃけ興味もあるし。どう？」

思わぬ形で背水の陣とも言える状況に追い込まれてしまった新。女性にここまで言われ、迫られてしまっては男として引き下がるわけにもいかない……。

言いように動かされるのは癪だが、切り抜ける妙案も思い付かない。

いっそ、このまま流されてやろうかと思った時だった――――。

「よぉ、相変わらず女を誑してやがんな、竜の字ィ」

……。

……それは、この日常では決して聞こえてはいけない声音だった。

昼間の駒王学園はあくまで普通に通える学舎、そんな場所にまで入り込む筈が無いと思っていた……。

だが、新が密かに抱いていた考えは甘く――――呆気なく打ち砕かれた……っ。

新は硬直し、桐生達が声の主の方に視線を向ける。

「え、誰、あの人？」

「コスプレの人？」

「やたら気合い入ってるわね。独眼竜的な？」

村山と片瀬が怪訝そうな表情を浮かべ、桐生も興味を示すように言う。

新は息をする事さえ忘れ、視線をそちらに移す……。
そこにいたのは紛れもなく、新が最も忌み嫌っている男だった――――っ。
「なに面白(おもしれ)え顔してんだ？」
バサラ・クレイオス――――っ。
日常、平和、平穏が容赦無く壊される……っ。

悪党より一般人（パンピー）の方が性質（タチ）が悪い

「竜崎、あのコスプレ独眼竜と知り合いなの？」
桐生が訝しげに窺い訊いてくるが、新の耳には全く届いてなかった。
今の新は目の前の男――――バサラ・クレイオスの登場に動揺しきっており、心の余裕など無かった。
そんな新を尻目にバサラは1歩、また1歩と近付いてくる……。
「相変わらず真っ昼間っから女を侍らせてやがんな、竜の字。そこんところはちっとも変わっちゃいねぇ」
「……っ」
「まだまだガキ臭さが抜けてねぇ。だいたいテメェはこんな所で油売ってる暇があんのか？　そんな腑抜けてやがるから、こんな風にズカズカと入り込まれるんじゃねぇの？」
「……っ」
「おーい、話聞いてんのかー？」
一向に言葉を発しない新に、バサラは眉を寄せてチッと舌打ちをする。そんな中、桐

生がバサラに訊ねてきた。
「ちょっとちょっと、そこの独眼竜コスプレの人」
「あ？　俺の事か、何だ？」
「あんた、竜崎の知り合いなの？　どういう関係？」
　興味本位で聞いてきたのだろう。バサラは桐生や村山、片瀬に視線を移し、直ぐに彼女達が何の異能も持たない一般人だと見破る。
『……典型的な一般人気質か。何の能力も技術も無エ。野次馬精神丸出しで絡んできやがる。おまけに戦う術も知らねぇような体つきだ。……竜の字の周りにはこんな奴らがゴロゴロしてやがんのか』
　バサラは心の底から新の生活環境に腹を立て、ポリポリと頭を掻く。どうしてやろうかと思った矢先、新が桐生に告げる。
「……桐生、悪いな。ここから先は女の入れる話じゃないんだ。村山と片瀬を連れて体育館に戻っててくれ」
　新の真剣な勧告に桐生は怪訝そうな表情を浮かべる。
「なになに？　いきなりシリアスな顔しちゃって。この独眼竜コスプレと何か遭ったの？」
「……頼む。話なら後でいくらでも聞いてやるから」

新は桐生達に頭を下げ、人気(ひとけ)の無い場所まで誘導しようと歩いていく。バサラはその様子を見て口の端を吊り上げ、桐生達に〝一応の〟警告を促(うなが)す。

「そういうわけで、ここからは大人の話だ。ガキや女の出る幕じゃねぇってこった。さっさと帰りな」

バサラは踵(きびす)を返して、新のあとを追っていく。何とかバサラの気を逸らしたのだろうが……それは大きな間違いだった。

何故なら……バサラは既に見破っていたのだ。桐生がこの後、好奇心から自分達を尾行してくるであろう事を……！

『弱い奴に限って、面白半分で厄介事に首を突っ込む輩(やから)が多いんだよ。特に戦う術を持たない野次馬どもがソレだ。あのメガネの女からも同じ匂いがしやがった。しっかし、日和(ひよ)った平和主義者(ホ)どもに弱っちい一般人(バンピー)……こんな連中との暮らしが大事なのかよ、竜の字。俺らみてぇな悪党どもはなぁ、テメェらの都合なんぞに譲歩も妥協もしねぇんだよ』

「うむむ……いつになく真剣な竜崎ね。あの独眼竜コスプレと何かあるのかしら？」

「ど、どうする？　桐生さん」
「やっぱり、先生に相談した方が……」
「い～やっ、こんな怪しさプンプンの雰囲気を見せられて引き下がれるわけないでしょ。勿論、尾行してやるのよ。運が良ければ竜崎の秘密とかもバッチリ聞けそうじゃない？」
「そ、それはそうかもしれないけど……っ」
「はい、決まりっ。それじゃあ完全に見失わない内に、あとを追うわよ」

新はどうにか校内の敷地、人気（ひとけ）の無い林の中にバサラを引っ張ってきた。到着して早々、新が怒気を孕ませてバサラに問い質（ただ）す。
「……お前、何しに来た？　しかも堂々と姿を見せやがって……！　この辺りは結界が張られている筈だぞ……っ⁉」
新の言う通り、駒王町（くおうちょう）周辺には以前にも増して強力な結界が張られている。だが……バサラ・クレイオスはそんな理屈や常識が通用する相手ではない。
バサラが軽く笑い飛ばしながら言う。

「ハッ、あんな薄っぺらい結界は俺にとっちゃザルと同じだ。張ってあろうが無かろうが関係ねぇ」
「チッ……相変わらずの常識ブレイカーめ……っ！　とにかく失せろ！　ここはお前みたいな奴がホイホイ立ち入って良い場所じゃねぇんだよ！」
「おいおいっ。せっかく良い情報（ネタ）を掴んできたから、教えてやろうと思ってワザワザ来てやったんだぜ？　俺を毛嫌いすんのも大概にしとけよ」
「情報（ネタ）だと？　何の話だ？」
不機嫌な面構（つらがま）えでバサラを睨む新に対し、バサラは欠伸（あくび）をしてから話し始める。
しかし、話される内容は驚愕一色に包まれるものだった……っ。
「暫（しばら）くの間、俺達は『禍の団（カオス・ブリゲード）』ども（カスタード・プリンゲート）の討伐を保留する事にしたからよ。良い情報（ネタ）ってのはソレだ」
「――――っ!!」
なんと、あれだけ『禍の団（カオス・ブリゲード）』の討伐を推奨していたバサラ――――否、造魔（ゾーマ）がいきなり討伐の保留宣言をしてきたのだ……！
あまりにもデタラメでメチャクチャな造魔（ゾーマ）の動向に、新は反射的に声を荒らげた。
「な……っ!!　どういう事だ!!　お前らは『禍の団（カオス・ブリゲード）』を潰すんじゃなかったのか!!」
「珍しいじゃねぇか、竜の字。テメェが俺を当てにするなんてよぉ？」

「いや、そういうわけじゃ……。そもそも、お前ら『造魔』は『禍の団』を潰すよう依頼を受けてるんだろう？　依頼人の意に叛くような事をしたら糾弾されるんじゃねぇのか」

新のもっともな質問に対し、バサラは不敵な笑みを浮かべて答える。

「実はな……以前、テメェらが取引を蹴ったお陰で造魔の稼ぎも上がってんだよ。まあ、相乗効果ってヤツだ」

「相乗効果？」

「ああ、『禍の団』の残党どもが魔法使いと組んで、各地で不穏な動きを見せてるのは知ってるよな？　俺らが出向いた際、完全には討伐せず――――〝敢えて〟泳がせておくんだよ。理由は単純、依頼人からの報酬を増やす為だ。テメェら三大勢力よりも先に情報を掴み、奴らが逃亡するまで追い込みを掛ける。そうしておけば、テメェらの無能っぷりを証明し、流れてくる客も新規の依頼も確保できる。もっと欲を言えば、奴らの動向を探って横から大元を掠め取る。テメェらが出てくれば、奴らを〝囮〟にすりゃ良い」

三大勢力の評価を削りつつ依頼の数を増やし、追い込んだ『禍の団』を身代わり役に仕立てる――――要するに、〝漁夫の利〟商法のようなものだろう。

わざと逃がし、泳がせておけば『禍の団』と魔法使い達の目的を割り出し易くなり、催促するように依頼者からの報酬も増やせる。そして、頃合いを見て『禍の団』の計

画を根刮ぎ奪い、自分達が引き継ごうとする。
「勿論、その計画に興味が湧かなかったら三大勢力に売り飛ばせば良い。テメェらも有力な情報は喉から手が出るほど欲しいだろ？」
「散々引っ掻き回した挙げ句、無価値と判断すれば即座にポイ捨て。オマケに三大勢力に〝奪った計画〟とやらを売り渡す事で、無理矢理貸しを作らせて不穏の火種を撒き散らすのかよ……ゲスいやり方だ……っ！」
「そんなもんだぜ？　今時の悪党なんてものはよぉ」
新の毒づきも意に介さず、いけしゃあしゃあと言い切るバサラ。コートのポケットからタバコを1本取り出し、火を点ける。
フーッと煙を吹かした直後、話を続ける。
「まあ、テメェらが俺達との取引を蹴った時点で後手戦法しか取れなくなったって事だ。要するにテメェらはチャンスをドブに捨てた、それだけの話だ」
「そんな嫌味を言う為だけにワザワザ現れたってのか……⁉」
「いや、肝心なのはここからだ。いま俺が話したのは――――あくまで組織的に俺達との取引を蹴った末の結果。だが……個人的な取引なら話は別だ」
〝個人的な取引〟と言うワードに新は訝しげに目を細め、バサラが再びタバコの煙を吹かす。

「良いか、竜の字？　これが本当の意味で最終勧告だ。奴らを一掃したけりゃ――造魔に来い。俺がケツ持って兵隊も貸してやる。テメェらが縄張りを、この町を守りてぇと抜かすなら〝本物の力〟を手に入れろ。チンケな小悪党なんざ数秒で握り潰せる――かつて俺と同じ釜の飯を食ったテメェなら分かる筈だ。いつの時代にも勘違いで調子付いた小悪党は腐るほど出てきやがる。そんな奴らを抹消するには徹頭徹尾殺るしかねぇんだ。テメェらの信念は何もかも半端過ぎるんだよ。生かすなら最期まで生かせ、殺るなら徹底的に殺れ。恨まれようが、蔑まれようが、憎まれようが関係ねぇ。火消しと同じだ。いくら水をぶっかけようが火元を消さねぇ限り――炎は絶えず燃え続ける。竜の字、テメェは守りたがってるモノを小悪党なんぞの放った火で焼き尽くされてぇのか？」

「――――っ」

一言一句、的確に的を射ているバサラの言葉に新は反論できなかった……っ。

確かにその通り、『禍の団』は消滅しておらず、未だに活動を続けている。はぐれの魔法使いとも組み始め、不穏な動きも見せてきている。

後手に回りっぱなしでは、いずれ足元を掬われ――最悪寝首を掻かれる事になるかもしれない……。

新も、グレモリー眷属も、三大勢力も最近は保守に専念し過ぎている。壁を張っても、

相手がそれ以上の力と物量で仕掛けてくれば容易(たやす)く崩壊する。
敵が流れに乗ってしまう前に、その流れを塞(せ)き止めるのがベストだろう。新は今まさにそのベストな選択を掴める距離に居るのだ。
掴める距離に居て、掴める手綱(たづな)が目の前まで来ている……。そこで取らない等と言う選択肢は普通ならば到底考えられない。
新は唇を噛み締め、迷った……。
「……それでも、それでも俺は……っ」
「……」
新が迷うこと数秒、バサラはハァと溜め息を吐いてタバコを足元に捨て、そのまま足で踏み潰す。
「それでも譲れないモノがあるってか？　なら、この話は無しだ。迷いっぱなしのテメェじゃ答えなんぞ出てきやしねぇ。腕は立つくせにそういうところだけ甘ちゃんに成り下がってんだな、竜の字」
「……っ」
「良いか、これだけは覚えておけよ？　テメェらが守ろうと抜かしてる平穏なんて紛(まが)い物は決して永遠じゃねぇ。いつかは終わりが来る　。リンゴが木から落ちるのと一緒だ。切っ掛けも無く唐突に終わりがやって来る。その時になって後悔すんのは誰でも

ねぇ、ノホホンと生きてるテメェらだ。そもそも――――」

バサラはズイッと顔を近付け、新を見据えたまま言い放つ。

「あんな一般人（パンピー）どもを守って何になるんだ？」

「……っ。どういう意味だ？」

「さっきテメェが必死こいて庇って逃がした奴ら、ありゃ丸っきり素人（しろうと）の匂いだ。裏の事を全く知らねぇ典型的な一般人（パンピー）。異能どころか腕っ節すら立たねぇ、そんな連中を庇って何の意味があるんだっつってんだよ」

バサラの無遠慮な言い分に新は青筋を立て始めた……。尚もバサラは非難し続ける。

「それにな、一般人（パンピー）ってのは俺達以上に性質（タチ）が悪い連中だって知らねぇのか？　物珍しいものには直ぐに食い付き、無責任な好奇心でちょっかい出してきやがる。蜂の巣を突っつくガキどもと同じだ。面白半分で危（あぶ）ねぇ遊びに首を突っ込み、何か起これば自分は被害者ですと開き直る始末。自分で被（こうむ）った被害の責任を他人に押し付ける……それがテメェ（テメェ）らの守りたがってる〝日常〟とかに住み着く寄生虫どもの本質だ」

「……っ！　桐生は……あいつらは異形とか、非日常とは無縁なんだよ！　お前らみたいなバカどもが巻き込もうとするから――――」

「だったら、今ここに住み着いているテメェらは何だ？　テメェらがここに居座るから俺達みてぇな悪党どもが群（むら）がって来る羽目になるんじゃねぇのか？　こうなる発端が

テメェらにある事を棚に上げて、俺達を責め立てるってのは見当違いも甚だしいんじゃねぇのか？」

またもや痛いところを突かれた新は押し黙ってしまい、バサラが顔を離して数歩距離を取る。

「図星を突かれてダンマリかよ、形無しだな」

バサラはコートのポケットからナイフを取り出し、刃先を新に向ける。

「竜の字、俺は昔から言ってるよな？　意見が違う場合、自分の我を通すにはどうすれば良いか。自分の信念を掲げるには何が必要か」

「……っ」

「必要なのは〝力〟だ。どの時代でも、どの世界に於いても〝力〟の無い信念なんざ存在しねぇんだよ。テメェはここまで来てまだ分からねぇのか？　力無き信念は薄っぺらい氷と同じだ。何もしなくても勝手に溶けて、少しの力で呆気なく割れる。そんなもん、クソの役にも立たねぇよ」

ここで場面が桐生サイドに変わり、桐生達は十数メートル離れた木陰から新とバサラ

のやり取りを見ていた。
やはり、好奇心から2人の様子を探っていたのだ。ただならぬ雰囲気に村山と片瀬の表情が強張る。
「ね、ねぇ……何かヤバそうな感じじゃない……？」
「だって、あれ……ナイフだよね……？　警察に言った方が良いんじゃあ……」
村山と片瀬の助言を聞きつつも、桐生はカメラモードにしたスマホを向ける。
「ま、まあ、警察を呼んだ方が良いのは分かるとして……こんな特ダネ見逃す手は無いわ。〝竜崎とコスプレ独眼竜のワケアリ密会〟的な？　思わぬ収穫が出来ると思わない？」
桐生は緊迫した状況を目撃しているにもかかわらず、己の好奇心優先でカメラモードにしたスマホを向け、撮影を開始。
音を出さないように設定し、何枚も写真を撮りまくる。遠目からの写真だけじゃ飽き足らず、ズームアップして新の顔も撮影。
『よしよし、良い感じ。じゃあ、次はコスプレ独眼竜を……』
桐生がバサラの顔にピントを合わせ、ズームアップした……刹那――――バサラの鋭い眼力が桐生を捉えた……！
『――――っ⁉』

突然、バサラと眼が合った事に動揺したのか……桐生は反射的にスマホを下げた。
『……い、今、眼が合った……？　嘘よね……あの距離で普通気付く……？』
何かの間違いよねと言い聞かせ、桐生は再度スマホを向けた。今度は慎重に、バレないようにと静かに一連の動作を行うが……ズームアップした途端、再びバサラの眼が桐生の方を睨んできた。
まるで自分達の居場所を見透かしているかのように……っ。
そこまでされて、ようやく桐生は確信した……！
『ヤバい……っ、バレてるわ、これ……っ！』
一刻も早く逃げようと考えを過らせ、その場を離れようとした刹那――
「出歯亀たぁ、良い度胸してるよなぁっ！」
バサラが大声を上げ、付近の石を拾って投擲。投げた石は桐生の足に直撃し、桐生は「痛っ！」と苦痛に満ちた声を上げてしまう。
そのせいでバサラだけでなく、新にも気付かれてしまった……っ。同じく新も桐生達の姿を見て気が動転する。
「――っ⁉　桐生っ⁉　お前ら、尾けてたのかっ⁉」
「だから言ったろ、竜の字？　テメェらが守りたがってる一般人どもは俺達以上に性質が悪いってなぁ」

口の端を吊り上げ、鋭い眼力で桐生達を睨むバサラ。桐生達は蛇に睨まれた蛙のように動けなかった……。

『ちょっ、どうしよう……っ。足が震えて動かないんだけど……』

桐生だけでなく村山と片瀬も動けず、悲鳴を上げる事すら出来ない……。そんな状態の3人にもバサラは一切の容赦を与えない。

「こんな時、テメェならどうする？　竜の字」

そう言った矢先、バサラは持っていたナイフを桐生達に向かって投げつけた……！

新は目を見開き、考えるよりも先に足を動かした。投擲されたナイフは桐生の眼前にまで迫る……！

刹那――――新の伸ばした右手にナイフが突き刺さり、桐生達は無傷で済んだ。しかし……代償として衝撃的な現場を目撃されてしまった……っ。

「「――――っ！」」

ショックのあまり村山と片瀬はその場でヘタリ込んでしまい、桐生はただ愕然と固まるのみ……。

新は右手を貫通したナイフを抜き取り、それをバサラに向かって投げ返すが、バサラは難無くキャッチする。

「……なに考えてんだ、お前は……っ！」

新が怒気を孕(はら)んで問い質(ただ)すと、バサラはナイフをクルクル回しながら答えた。
「そいつらは出歯亀してたんだぜ？　テメェらの立場でメディアとかにバレんのはマズいんじゃねぇのか？　だから、テメェの代わりに始末しといてやろうと思ったまでだ。しかも、俺が親切に忠告してやったってのに……見事に無視しやがった。それが一般人(パンピー)どもの本性なんだよ」
「たとえ、そうだとしても……ここまでするのかっ⁉」
「前にも言ったよな、一般人(パンピー)どもの都合なんざ考慮すんな。あいつらはくだらねぇ好奇心で他人様の事情に首を突っ込むクソどもだ。俺達のような悪党以上に無遠慮で無粋な連中、そんな輩(やから)の１人や２人――――巻き添え食って死んだところで自業自得だろうが」
新とバサラのやり取りに、桐生は視線を交互に泳がせる。
『これ、何がどうなってんの……？　巻き添えとか、死ぬとか、かなり危険な言葉が飛び交ってるんだけど……っ』
未だに状況が理解できず、頭が混乱する桐生。新は歯軋(はぎし)りしてバサラを睨み付ける。
『本当にコイツは何処までも癪(かん)に障(さわ)る言動をしやがる……っ！』
度重(たびかさ)なる腹立たしさ、それはまるで金属やガラスを爪で引っ掻かれるような不快感と同じだった……。生理的に受け付けられない言動。

バサラの放つ一言一句が新から冷静さを失わせる……。しかし、桐生達だけは何としても安全圏に逃がさなければならない……。

そんな事を考える中、更に最悪の事態が……っ。

「おー、いたいた。あれが紫炎の姐さんが言ってたヤツか」

突然、割って入ってきた声の方向に視線を向けると――そこには魔法使いのローブのような物を着込んだ男が複数人いた。しかも敵意を孕んでいる。

ただでさえマズい状況が、より最悪の方向へ落ちる……っ。

魔法使い達の登場に新は激しく動揺し、桐生は更に混乱する。

『――――っ！　魔法使いだと⁉　どうやってここに⁉　しかも、こんな時に最悪だ……っ！』

『今度は魔法使いのコスプレ？　何なの、竜崎ってコスプレイヤーに恨まれてるの……？』

混迷する状況の中、新はとにかく桐生達の安全を最優先させた。桐生に耳打ちする。

『……桐生、村山と片瀬を連れて逃げろ。ここを離れて何処かに隠れてろ。あいつらは俺に用事があるみたいだからな』

『え？　やっぱ何か遭ったの？　あのコスプレ軍団と』

『さっきも言った通り、女の入れる話じゃないんだ。……こんな事に巻き込んで悪かっ

た。償いは後でいくらでもするから、今はとにかく逃げてくれ』

新の真剣な表情と勧告に桐生は只事じゃないのを察したのか、コクリと頷いて村山と片瀬を立たせ――その場から走り去っていく。

彼女達が逃げるまで新はバサラ及び魔法使い達を睨み付け、自分に意識を向けさせる。

「仲間を庇うか、闇皇！」

「ハハッ！　報告通りだっ！　甘っちょろいんだな！」

「だが、協会が出した若手悪魔のパワーでのランクはＳＳ！　破格なんてもんじゃない！」

嘲笑うように喋ってくる魔法使い達に新が訊く。

「お前ら、はぐれ魔法使いか。いったい何をしに来た？」

「俺達を追放したメフィスト理事の協会がお前達若手悪魔にランク付けをしたんだよ。だから、作戦ついでにどんなもんか試したくなったのさ」

「作戦だと？」

訝しげに思う新の耳に爆音が届いてくる。……新校舎の方からだった。地面も軽く揺れて、規模が大きい事を認識してしまう。

新校舎で誰が魔法使いの相手になっているのか……？

新達のクラスは男女共に体育、男子はグラウンドで女子は体育館。３年の朱乃か、教諭のロスヴァイセ、もしくは生徒会の面々か……。

そこまで考えた時、嫌な予感に行き当たる……！

新校舎にあるのは1年生の教室……。最近聞かされたフェニックス関係者を狙う魔法使い……。奴らの語った作戦……。

「――――ッ！　まさか、レイヴェルが目的かッ！」

新の叫びに魔法使い達はゲラゲラとせせら笑う。

「ま、そういう事で」

「キミはとりあえず、ここで足止めついでに俺達の相手でもしてちょーだいな」

魔法使いの1人が手元に魔法陣を展開させ、新に炎の一撃を繰り出してくる。新は直ぐに鎧を発現させ、飛んできた炎を殴って霧散させる。

「ふざけんなよ……っ、クソどもが……っ！」

憤怒にまみれた新が前方へ飛び出し、魔法使いの1人に殴りかかるが――――その際、横から氷の礫（つぶて）を大量に吹き付けられてしまう。

もう1人の魔法使いが展開した魔法陣から出てきた氷の礫が、新の全身に重く突き当たってくる。

しかし、新はそんな事など意に介さなかった。冷静さを失ってるゆえか……。

止まらない新の勢いに魔法使いは驚き、防御魔法陣を展開するが――バリンッと儚(はかな)い音を立てて、防御の魔法は新の一撃で粉砕される。
新はその勢いのまま、魔法使いの1人を顔面から殴り飛ばし、魔法使いは後方に大きく吹っ飛んで木に叩き付けられた。
未だに新校舎から炸裂音が響いてくる……。時間は掛けていられない……！
残った2名の魔法使いが戦意を高めようとした時、彼らの耳元に小型の魔法陣が出現した。
形状からおそらく連絡用の魔法陣だろう。2人の魔法使いは情報に耳を傾け、嫌味な笑みを浮かべて構えを解く。
そのまま倒れた魔法使いを抱(かか)えて、足下に転移魔法陣を展開した。
「待ちやがれ！」
新は追おうとするが、奴らは「また遊んでくれよ！」と不快な言葉を残して、転移の光と共に消えていった。
逃げられた事に苛立つ新。直ぐに高みの見物をしていたバサラをキッと睨み付けるが、バサラは嫌味な笑みを浮かべて言う。
「おいおい、竜の字ィ。今ここで俺に八つ当りしてる暇があんのか？　テメェらは一般人(バンピー)どもや日常、平和とかを守るってほざいてやがったよなぁ？　ソイツをガン無視

して俺なんかに目くじらを立てて良いのかぁ？」
　煽るバサラに、新は一層歯軋りを強くする。
「結局テメェはメンタルに関してはその程度なんだよ。目先の敵や感情を優先させて、肝心な部分を見落とす。今もそうだ。さっきの魔法使いども、テメェの連れが目的だったんじゃねぇのか？　テメェの落ち度を俺にぶつけてる暇は無ぇ筈だろ？　三流ごときに足元を掬われてんじゃねぇぞ」
　何処までも腹立たしい言い草だが、確かにここでバサラに構ってる暇など無い……っ。新は舌打ちをしながらも新校舎の方へ走っていった。
　バサラはそんな新の背中を見届け、ハァと溜め息を吐く。
「綺麗事だけでやっていける程、この世界は甘くねぇんだよ。アホが」

　魔法使い達との戦いを抜けて、お互いに合流した新と一誠。
　一誠の方も魔法使いに襲われ、松田と元浜を巻き込まないように人気の無い場所に移動して応戦したようだが……今は新校舎の方が気掛かりだ。
　来る途中に確認しただけでもかなりの被害が出ており、校舎のいくつかの場所が破壊

されていた。窓際も消し飛び、校庭にも穴が空いている。
嫌な予感しかしない……っ。
新と一誠は1年生の教室――――小猫達のもとに急いだ。
教室前の廊下は激しく破壊され、廊下の窓側が大きく穴を開けられており、外が丸々一望できる程にまで変わり果てていた。外気も容赦なく吹き込んでくる……。
廊下に小猫達のクラスメイトらしき女子が1人ヘタリと座り込んでいた。他の1年生達は教室の扉から怖々と廊下の様子に目線を送っている。
新は廊下に座り込む1年生女子に歩み寄り、話し掛けた。
「おい、しっかりしろ。大丈夫か？」
その女子は世にも恐ろしげな体験をしたかのように呆然として、全身を強張らせていた。新の声も届いていないようだ。
……魔法使いに襲撃されて、怖い目に遭えば無理もない。
「一誠さん！　新さん！」
「何よコレ……ヒドッ……！」
隣の教室から飛び出してきたのは渉と祐希那。２人に気付いた一誠は、呆然と座り込んでいる1年生女子を介抱するように言う。
渉と祐希那が1年生女子を介抱している最中、新と一誠は教室に視線を送るが……小

猫、ギャスパー、レイヴェルの姿は見当たらない。

意識が定かではない状態であるものの、1年生女子はボソリと呟いた。

「……変なヒト達に、私捕まって……小猫さんとギャスパーくんとレイヴェルさんが私を助けるために……」

『――――っ！』

「小猫ちゃん達、魔法使いみたいな格好したコスプレのヒト達と光に包まれて、急に消えたんです！」

教室の扉から廊下の様子を窺う生徒が、新と一誠にそう伝えてくれた。

どうやら小猫、ギャスパー、レイヴェルはクラスメイトを守る為に行動を起こしたが、先程の女子を人質に取られてしまい――――そのまま連れていかれたようだ……っ。

ガンッ！

一誠は蟠る思いを抱えたまま、廊下に左拳を打ち付ける。同様に新も怒りと悔しさに体を震わせる。

『……チクショウ……ッ！　俺はリアスの留守も、大事な後輩も守れていなかった……ッ！　全部……バサラの言う通りになっちまってるじゃねぇか……ッ！』

暫くして、眷属の仲間達と生徒会のメンバーが駆け付けてくる。1年生3人組以外は無事だったようだ。

魔法使いの目的とは、いったい何なのか……？

『あ～あっ、イッセー先輩。やっぱ何にも守れてないじゃん？　僕にあれだけ偉そうに言っといてさぁ、結局三流っぽい奴らに出し抜かれてるよ。ザマァないね。本当なら僕があの場で大暴れしても良かったんだけどね～。暴れたら暴れたでうるさいだろうし。でもさぁ、こういう時に限って何も出来ないって情けないよね～♪』

ロリっ娘（こ）死神（グリム・リッパー）、略してロリム・リッパーだ！

夕方――――オカルト研究部と生徒会のメンバーは旧校舎に集っていた。生徒会『僧侶』草下憐耶だけは情報を同盟スタッフと相互連絡できるよう別室で待機している。

生徒会副会長の真羅椿姫が皆に報告した。

「学園の破損箇所はこれより修復します。全校生徒は全て下校させました。侵入してきた者達については、この地で活動されている三大勢力のスタッフの方々が追っています」

椿姫に続いて会長のソーナ・シトリーも口を開く。

「……アザゼル先生が置いていかれた生徒の記憶を司る装置が役に立ちました。魔法使いに襲撃されたと言う生徒達の記憶を『変質者が校内に侵入して、学校が臨時休校となった』と言うものに置き換えてあります」

堕天使は一般人が異能、異形に関与した際に記憶を消し去る技術を有しており、今回も堕天使特有の機械で記憶を改竄させている。

ただし、あまり多用すると記憶に悪影響が出てしまうので、本来限定条件を付けて

やった方が良いらしく……今回は「変質者が校内に侵入した」と言う設定に塗り替えた。

「破壊された場所についての記憶は？」

ゼノヴィアがソーナに問う。

「それは緊急の補修作業が同じ日に重なったと言うものに生徒達の記憶を変換しています。……あのような騒ぎがあったのに、学校から抜け出した者がいなくて幸いでした。携帯機器などで記録したであろうものについても三大勢力のバックアップで何とかなりそうです」

つまり、未然に異形の正体――この学園の裏の顔はバレずに済んだと言う事だ。しかし……副会長の椿姫は悔しそうにする。

「ですが、今回の事でショックを受けた生徒の心は完全には消せません。『何か怖いものに遭遇した』と言う記憶だけは永遠に残り続けると思います。それが何なのか、分からぬままに今後過ごすかと思うと……許せないわ、襲撃してきた者達が……っ！」

人質にされた1年生女子……。魔法使いの記憶は変換されたが、怖い者に襲われたトラウマは心に残り続けるかもしれない。しかも、それが何なのか分からないまま、不安を抱えて一生を過ごす……。

『……こんな事になっちまったのは魔法使いのせいであると同時に、俺達のせいでもあるんだよな……。』

新も先程、桐生達を巻き込んでしまった事を思い返し、自責の念に駆られる。それは一誠も同じだった。

――そもそも、この学園自体が――

そう思った刹那、心中を察した匙が一誠の肩に手を置き、首を横に振った。

「兵藤。この学園が一般人に偽(いつわ)って運営していること自体が――って思ってないか？気持ちは分かるが、今はそれよりもさらわれた塔城小猫(とうじょうこねこ)さん達の方が気がかりだ。そうだろう？」

「ああ、分かってる」

そう、今は魔法使い達に捕まった小猫、ギャスパー、レイヴェルを助けるのが最優先だ――と言えど、やはり衝撃は隠せない……。

安全圏だと思っていた昼の駒王学園(くおうがくえん)。普段の学校生活でテロを受けるとは思いも寄らなかった事態。……1歩間違えれば、一般の生徒が犠牲になっていたかもしれない。

悪魔である新や一誠達と関わる以上、その危険性と隣り合わせだった事を今更ながらに思い知らされる……。だからこそ、改めて駒王学園の存在を考えてしまう……。

新の横でゼノヴィアが言う。

「襲撃犯は『禍の団(カオス・ブリゲード)』と共にフェニックス関係者を狙う『はぐれ魔法使い』か？」

「でしょうね」

イリナがそう続けた。その辺りは大体の見当が付く。
「ロスヴァイセ、お前はどう思う？」
新が魔法の使い手でもあるロスヴァイセに意見を求める。
「ええ、魔法の痕跡などを分析しましたところ――――」
そこまで言いかけた時、室内に携帯電話の着信音が鳴り響く。着信音の先はロスヴァイセだったようだ。
「コホン、失礼。もしもし……」
咳払いして応対するロスヴァイセ。誰からの着信かと怪訝に思っていると――――。
「あ、お祖母ちゃん！　どした？　何かあったの？」
『……お祖母ちゃん？』
唐突に言葉が訛った違和感……。それは気のせいでもなく、ロスヴァイセが方言で話し始める。
「んだ、いま大事な会議中だかんな。え？　仕事？　心配すなくとも、わたす、元気にやってっからね。お祖母ちゃんが心配すっことなーんにもないんだってば」
ロスヴァイセの生粋とも言える方言っぷりに会議が中断され、皆が驚きで目を丸くする事態になる……。
如何にも都会が似合うクールビューティー（百均マニア）だったのに、今度は方言と

言う残念属性が出てきたのだから無理もない。
「今の仕事先の上司さんは、えんらい良いヒトだから、お給金も前のとこよりいっぺぇ出してくれてんのよ？　だっから、そっちさ仕送り出せんだから。ええからええから！　田舎さ何もねぇでしょ？　送った金で何か買って、ぬくくしてくれたら、わたすはそれで充分だかんね？」
　目をパチクリさせている新と一誠にアーシアがボソリと言う。
「少し前に聞いたんですけれど、ロスヴァイセさんは故郷に仕送りをされているそうでして……」
　それにゼノヴィアも続く。
「私は、故郷は何も無いド田舎だと聞いたぞ。祖母が一人暮らしをしているから、悪魔の仕事で得たお金を仕送りしているそうだ」
　更にイリナまで口にし始める。
「ご両親は北欧の神々に仕える戦士なので、お家に帰る事が稀で、殆どお祖母さんに育てられたって言ってたわ。だからお祖母ちゃんっ子なんですって。田舎に何でも揃うディスカウントストアを建てるのが夢なのよね」
「は、初めて知ったな……ロスヴァイセの夢」
　新はそう呟きながらも……百均マニア、方言田舎娘、お祖母ちゃんっ子と、どんどん

属性増やしていく元ヴァルキリーに親近感が湧くと同時に不憫さも湧いて仕方なかった。

電話を終えたロスヴァイセが再び咳払いする。

「……すみません。まさか、実家からいきなり電話が掛かってくるなんて……。ついでなので、魔法の使い手だった祖母にも強固なセキュリティーを突破できる術式について聞いてみましたが……かなり厳しい見解を口にしていましたね。私もその可能性があると思ってはいたのですが……」

「その可能性って何だ？」

「――――裏切り者です」

新がロスヴァイセに訊くと、ソーナが代わりに答えた。全員の視線がソーナに集まる。

「この地域一帯は三大勢力の同盟関係にあり、私達以外にも数多くのスタッフが在任しています。この学園を中心に町全体に強力な結界が張られ、怪しい者が足を踏み入れると直ぐに誰かが察知できるようになっています。侵入して姿を眩まされると察知しにくいと言う点もありますが、ここに入るにはいくつか可能性が絞られるわけです。１つは無理矢理の侵入。これは力があるものであれば可能でしょう。しかし、これは侵入が直ぐに発覚しますので、今回の件とは違うでしょう。２つめにこの町に住む者、または

スタッフの者が結界の外に出かけ、そこで敵対組織に捕らわれてしまい操作されて侵入されるケース。これに関しても今回は今のところ、住民、全校生徒、スタッフに反応が出ていません。となると、裏切り者が仲介をして、学園まで侵入させた事になります」
「そんな事が可能なんですか？」
一誠の問いにソーナは眉根を寄せる。どうやら難しい見解のようだ。
「この結界を問題なく通れる中核メンバークラスであれば可能でしょうね。つまり、グレモリー眷属とイリナさん、レイヴェルさん、私達シトリー眷属、アザゼル先生、それぐらい中核の者でなければこれ程大胆な襲撃を手配できないでしょう」
「それって……俺達の中に裏切り者がいるってんですか⁉」
匙が〝そんなこと信じられない〟と言った表情で叫ぶ。確かに生死を共にした仲間の中に裏切り者がいるなど信じたくない……っ。
ソーナは匙の叫びを聞いて、優しげな表情を浮かべる。
「私も裏切り者がいるなんて信じてません。けれど、襲撃犯は油断の出来ない相手です。目的はレイヴェル・フェニックスさんなのかどうかすらも分かりません。しかし、ただで見過ごす程、私達も甘くありません。さて、連れていかれてしまった塔城さん達について――――」
「会長！」

そこまで言ったソーナの言葉を遮(さえぎ)るように『僧侶(ビショップ)』の草下憐耶(くさかれや)が部室に飛び込んでくる。

皆の視線を集める草下は興奮した様子で告げた。

「……オカルト研究部の1年生を連れ去った者から、連絡がありました」

深夜――。新達オカルト研究部、生徒会メンバーは最寄りの駅に来ていた。

その理由は――ここに来いと襲撃犯から連絡があったからだ。

奴らからの伝言とは、『塔城小猫、ギャスパー・ヴラディ、レイヴェル・フェニックスを返してほしければ、グレモリー眷属、紫藤イリナ、シトリー眷属のみで地下のホームに来い』と言うものだった。

ちなみに渉と祐希那は外部からの侵入や襲撃に備(そな)える為、別行動中である。

地下のホーム、それはこの最寄り駅の地下に設(もう)けられている冥界へのルートの事だ。

夏休みの折、新達はこの駅の地下にある列車で冥界に入った。

この町には悪魔専用の空間がいくつか存在するのだが、その内の1つを敵に指定されるとは思わなかっただろう。

ソーナが駅のエレベーター前で呟く。
「ここを指定されるとは思いもしませんでしたね。他の悪魔専用の地下空間は既にスタッフの方が調査していますが……いくつかの魔法の痕跡はあったようです。一時的な潜伏先として利用されていた気配があります」
「地面を潜って地下から侵入してきたって事か？」
「それか冥界側――列車のルートから侵入したとか？　次元の狭間を通ったり……」
新と一誠がそう訊くが、ソーナは首を横に振る。
「いえ、どちらも違うでしょう。やはり、誰かが知らない間に利用された……？　裏切り者によって侵入を許したとは思えませんが……」
ソーナは難しい顔で深く思慮している様子だった。もし、冥界のグレモリー領などから侵入したと言う事なら、〝グレモリーが侵入を許したのでは？〟と咎められかねないので、また事情がややこしくなる。
エレベーター前に集合する新達一向。ソーナが皆を見渡すように言う。
「この駅周辺を天界、冥界のスタッフが囲んでいます。冥界のグレモリー領にある、列車用の次元の穴も封鎖しました。相手は何を考えているか、未だに真意は判明しませんが……あとは指名された私達が直接会いに行くだけです」
可能な限りの逃げ道を封鎖したので、これで相手は袋のネズミ……と言うより、わざ

わざ指名してきたのだから寧ろ逃げる意識は薄いのだろう。
「グレモリーの指揮は誰が執る？」
ゼノヴィアがそう訊くと、ソーナがメガネをくいっと上げた。
「問題ありません。有事の為、生徒会、オカルト研究部の指揮は私が執ります。リアスにもそのように任されておりますから。『王』不在で当惑する事があるでしょうけれど、私の指示に従ってくれますね？」
『はい！』
グレモリー眷属一同は異口同音に応じた。ちりゃくに長けたソーナが指揮を執ってくれるのは実に心強い。
ソーナがゼノヴィアに訊く。
「まず、ゼノヴィアさん。あなたは聖剣の８つの能力の内、いくつ使えるのかしら？」
「破壊の方は問題無しだ。それに訓練のおかげで擬態と透過と天閃はいける。だが、使いこなせているレベルではない。夢幻と祝福は能力的に相性が悪くて辛いな。一番の難易度を持つ支配は特に難しい。全く他者を支配できない。灼熱も同じくらいだ」
「今回、町の地下と言う事で戦いによる制限があります。大きな破壊は崩落、地盤沈下の影響が出てしまいます。極力、派手な攻撃を避けねばなりません。……状況は違いますが、シトリー対グレモリーのゲームのようなものです。破壊は出来うる限り回避しなけ

ればなりません。必要以上の威力は控えてください。必須となったら、私が指示します」

確かにソーナの言う通り。地下のホームを破壊するわけにはいかないので、度が過ぎた攻撃は出来ない。

ソーナはその後、グレモリー眷属の様子について訊いていく。どうやら即興の戦術を考案するようだ。

――と、ここで気になる点が1つ。シトリー側に見知らぬ巨躯（きょく）の男が1人立っていた。

灰色の髪をしていて前髪が長く、目元が隠れている。サイラオーグと同じくらい体格も良い。

一誠が恐る恐る副会長の真羅椿姫（しんらつばき）に問う。

「あ、あの、そちらの大柄な男性は……？」

「ええ、こちらの男性は駒王学園大学部に在籍する大学生の方で――シトリーの新しい『戦車（ルーク）』です」

なんと、その男はシトリー眷属の新しい『戦車（ルーク）』だった。唐突な発覚に驚きを隠せない。

男は無骨そうな反応と言葉少なに「……ルー・ガルーと呼んでくれ」と呟き、真羅椿

姫が続ける。

「私達はルガールさんと呼んでいます。竜崎くんと兵藤くんもそのように呼んであげてください。ルガールさん、今回は外でのバックアップをお願いします」

「……ああ」

シトリー眷属の新入り『戦車（ルーク）』――ルガールはそのままこの場を離れていく。今回、彼は外回り担当のようだ。

『……ルー・ガルー……？　何となく正体が分かりそうな名前だな』

新はルガールの本名――〝ルー・ガルー〟に思慮を巡らせるが、今はそれどころではない。

≪マスター、周辺の準備は整ったようですぜ≫

突然、聞き覚えの無い声がしてくる。グレモリー眷属が声の主を探して視線をあちらこちらに飛ばしていると――駅の天井に行き着いた。

駅の天井からシトリーの魔法陣が出現し、そこから逆さに頭が飛び出してくる。

しかも、出てきたのは髑髏（どくろ）の仮面を被った小柄な者――死神（グリム・リッパー）だった！

「……っ⁉　死神（グリム・リッパー）⁉」

新が叫ぶと、ソーナが言う。

「こちらは私の新しい『騎士（ナイト）』――」

≪……あっしはベンニーアと申します。……元死神であります≫

天井から小柄な死神が降りてきて、下に上手く着地。それと同時に死神は仮面を外す。

そこにあったのは中学生ぐらいの女の子の顔だった。

眠たそうな目をした可愛い女の子で、深い紫色の長髪に金色の瞳。手に持つ死神の印――鎌には可愛いドクロの装飾が施されていた。

「ロ、ロリっ子の死神ぁぁぁっ!?」

≪イエスイエス、ロリ死神。略してロリム・リッパーですぜ≫

「そこは略さなくても良いだろ」

驚く一誠とツッコミを入れる新に、ソーナは頷く。

「ええ、ベンニーアは死神です。と言っても半神です。死神と人間のハーフ」

「最上級死神の一角――オルクスの娘なんだってさ。な、驚きだろう？」

匙が追加情報をくれるが、いきなり過ぎる死神の加入には誰だって度肝を抜かれてしまうだろう……。

「……新しい『騎士』と『戦車』の当てがあると聞いてましたが、まさか死神とは……」

ロスヴァイセも小柄な少女死神の登場に目を丸くさせていた。

そこで真羅椿姫が首を横に振る。

「いえ、『騎士』の当ては本来他のヒトだったのです。しかし、その方と都合が付かなくなりました。そこに彼女が現れまして――――」

≪ハーデスさまのやり方についていけなくなったのでこっちに寝返る事にしやした。あっしを眷属にしてみませんかね？≫――――と、交渉してきたらしい。

一瞬ハーデス側のスパイじゃないかと思ったそうだが、こんなに大胆なスパイもあるのだろうかとソーナは首を捻りに捻ったと言う。

「怪しさは凄まじいものでしたが、ある一点で信頼する事にしました」

「ある一点？」

新がソーナに聞き返すと、死神ベンニーアは新に色紙を突き出す。

≪オッパイザーの旦那。あっし、旦那の大ファンですぜ。ほら、マントの裏はオッパイザーの刺繍って具合です。サインを１つお願いできませんかね？≫

「あ、本当だ。しかも、鎧姿の俺の刺繍もある！」

≪へい。オッパイザーとおっぱいドラゴンのコラボ刺繍ですぜ≫

ベンニーアはフリフリとマントの裏を見せつけ、新は渡された色紙にサインを書きながら訊く。

「まさか死神のファンが出来るとはな……」

≪ええ、それにプラスしてクソ親父とハーデスさまのやり方が気に入らなかったんで

家を飛び出してきたですよ≫
「『騎士（ナイト）』の駒１つで足りて幸（さいわ）いでした」
ソーナがそう言う。確かに半神とはいえ、駒１つで死神（グリム・リッパー）を眷属に出来たのはお買い得である。
≪あっし、母方の人間の血が濃いんで、大した事ありませんぜ≫
ベンニーア本人はそう漏らすが……キャラと能力の両方でクセは強そうだ。ソーナがベンニーアに言う。
「ベンニーアもルガール同様、外でのバックアップをお願いできますか？」
≪イエッサーですぜ、マスター。同期の大柄あんちゃんと共に外で待機してやす≫
そう言うなり、ロリ死神（グリム・リッパー）――ベンニーアは足下に魔法陣を展開させて、スポッと潜って消えていった。ソーナが小さく息を吐く。
「大事な作戦前に眷属の紹介になってしまって、申し訳ありませんでした……。こういうのは重なるものですね」
「いや、何か作戦前に緊張が解（ほぐ）れて良かった」
正体不明の敵を相手に後輩達を奪還しなければならなくて余裕が無い状態だったが、シトリーの追加メンバーの紹介で多少ではあるが緊張が和（やわ）らいだのも事実。ちなみにこれでシトリーの残った駒は未使用の『兵士（ポーン）』３つとなった。

ソーナが新に訊いてくる。
「さて、新くん。また新しい能力を発現したと聞いたのですが……どんな具合ですか？」
「……レーティングゲームみたいな制限付きの戦闘では丸っきり使えない。パワーとスピードが爆発的に跳ね上がるが……制御するのも難しい上に、多量の血を流さなきゃならないんだ。正直言って、今回の破壊制限を設けられた戦闘に於いて俺は役立たずになっちまうだろう」
確かに新が発現した新しいモード――――〝？雷炎竜〟は破壊力と速度が増す代わりに長時間保たない。更に多量の出血が必須条件な為、自らを窮地に追いやらなければならない。つまり、今回のように派手な攻撃が出来ない場面では全く使えない……。
それは一誠も同じ。２人はグレモリー眷属の攻撃の要だが……パワー寄りなので繊細な技術がまだ足りない。いざと言う時に自分達の力を存分に発揮できないのは痛手であり、面目無い事だ。
気落ちする２人にソーナは微笑む。
「あなた達が謝る事なんて１つも無いわ、新くん、兵藤くん。あなた達は冥界を救った英雄です。２人が無理できない分、私達がフォローすれば良いだけよ。それにね、あなた達は短期間に頑張り過ぎた。本当、私達の力不足が申し訳ないと感じる程に」
ソーナだけじゃなく、シトリー眷属の皆がウンウンと頷いていた。

「たまには俺達も頼れよ、兵藤、竜崎。ゲームじゃライバルだ。だが、実戦じゃ仲間じゃねぇか。俺達だって冥界や駒王学園を守りたいんだよ」

匙も励ましの言葉を言ってくれる。その通り、足りない分は補い合えば良い。それが仲間である。

ソーナが新と一誠の手を取る。

「だから、今日は私があなた達を導きます。リアスではないけれど、今だけは私の力を信じてください」

『はい、もちろんです！』

グレモリー眷属の全員が改めて応じたところで、ソーナが再度訊いてくる。

「ところで、兵藤くん。譲渡はどれくらい保つのかしら？」

「倍加の具合によって変動しますが、２０回ぐらいまでなら余裕でいけます」

それを聞き、ソーナはフムフムと考え込んだ後、作戦が伝えられ――皆が駅のエレベーターから地下に降りていく事になる――。

地下に降りた全員は冥界行きの列車用に建設されたホームを進んでいく。広い空間

を抜けて、右に左に通路を進んでいくと――。

途端に不穏な気配を察知する。この通路を抜けた先に敵が待ち構えているのだろう。

全員が無言で視線にて確認し合い、突入の陣形を作り出す。

オフェンス――前衛は新、ゼノヴィア、イリナ、匙、『騎士』巡巴柄、『戦車』由良翼紗。

中衛は一誠、朱乃、ロスヴァイセ、『女王』真羅椿姫、『兵士』仁村留流子。

後衛はソーナ、アーシア、『僧侶』花戒桃と草下憐耶。

構成は近接タイプを前衛、遠距離からの攻撃メンバーを中衛に、後衛は指示を中心としたサポート要員だ。

新と一誠はリアスの承認無しでも昇格できるので通常の『女王』へ。匙と仁村もソーナの承認のもと、『女王』となった。

チームの形が整った後、全員が耳に通信用の冥界アイテムを入れていく。インカムの代わりになる物で、主にレーティングゲームなどでも活躍している。

最終確認を目で合図し合った後に通路を抜けていく――。そこは初めて足を踏み入れる地下の開けた空間だった。地下のホーム以上に広大な場所で、天井もいっそう高い。

前方に視線を向けると、魔法使いの集団が視界に映る。全員が魔術師用のローブを着込んでいた。

新達は距離を置いて、彼らと対峙する。パッと見ただけでも１００人以上は居る。召喚したであろう魔物もかなりの数だった。

一誠が指を突きつけて言う。

「来てやったぜ？　俺達の後輩は何処だ？」

一誠の声が地下に響く。魔法使いの連中は嘲笑（あざわら）ったり、肩を竦（すく）めるだけだ。実にナメた反応である。

この反応だけでも怒り心頭な一誠だが、冷静にならねばならない。彼の欠点は仲間の機器に冷静になれずに突貫してしまう事だ。

魔法使いの１人が前に出てきた。

「これはこれは、悪魔の皆さん。『若手四王（ルーキーズ・フォー）』のグレモリー、シトリーの皆さんが俺達の為に来てくれるなんて、光栄の限りだ」

ソーナが訊く。

「あなた達の目的は何ですか？　フェニックス？　それとも私達でしょうか？」

「どっちもですな。ま、フェニックスのお嬢さんは大事に扱（あつか）っているんで。そうしろと、リーダーの命令なんですよ」

どうやら魔法使いの連中はその〝リーダー〟とやらの指示で動いているらしい。魔法使いはそのまま続ける。

「フェニックスの件はＯＫなんで、あとはあなた達との件だ。――気になって仕方ないんですよ。メフィストのクソ理事とクソ協会が評価したって言うあなた達の力がね。この思い、理解できます？　出来ないですよね？　ま、強い若手悪魔がいたら試したくなるでしょ？　魔法を乱暴に使う俺達ならね」

その魔法使いが指を鳴らした刹那、この場にいる魔法使い全員が攻撃魔法の魔法陣を展開し始めた！

「やろうぜッ！　悪魔さん達！　魔力と魔法の超決戦ってやつをよ！」

それが開戦の合図となった！

怒濤（どとう）の如く炎、水、氷、雷、風、光、闇とあらゆる属性の魔法が新達に向けて放たれ、使役している魔物の群れも突っ込んでいく！

無数とも思える激しい魔法の雨が降り注ごうとした――その時、思わぬ事態が……っ！

ブオオオオオオン……ッ！

突如、両陣営の間に巨大な黒いモヤが出現し……降り注いでくる魔法の雨を全て飲み込んでいった……ッ！

その黒いモヤは魔法だけでなく、魔法使いの連中が使役していた魔物の群れも１匹残さず飲み込み、消し去った……。

この異常時態に新達は勿論、魔法使いの連中も驚愕の色を隠せなかった。
「な、何だ今のはっ⁉」
「俺達の魔法が一瞬で消された……⁉」
動揺と混乱が支配する中、巨大な黒いモヤは次第に小さくなり――――５つに分裂する。
分裂した黒いモヤ……その内の４つから何者かが飛び出していき、魔法使い達の方に突っ込んでいく。
その刹那、強大な破砕音と爆煙、衝撃が地下に響き渡り、魔法使い達の悲鳴が木霊する……っ。
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ひ、ひぃぃぃぃぃっ！」
鈍い打撃音、飛び散る血飛沫、地下は一気に阿鼻叫喚の間と化した……っ。
「な、何だよ……ッ。いったい何が起きてんだッ⁉」
慌てふためく一誠、ソーナも何が起きているのか分からず当惑するばかり……。
僅かな時間で敵の魔法使い全員が地に倒れ、壊滅状態となっていた……。
爆煙が晴れると、そこには見覚えのある人物が見えた。

「ヤッホー、イッセー先輩♪　元気～？」
この飄々とした口調に、人を喰ったような態度。それは忘れたくても忘れられない……ッ。
一誠は目を見開いて〝その者〟の名を叫んだ。
「お前……シド……ッ!?」
そう、現れたのは造魔（ゾーマ）の一員――シド・ヴァルディ。何度もグレモリーとシトリーに煮え湯を飲ませてきた男である。
新が目を細めて訊く。
「お前、何しに来た？　なんで、魔法使いの連中を……」
「アハハッ、乱入バトルは格ゲーの華って言うじゃない？　だから、乱入してみたんだよね～♪」
「ふざけんな！　今はお前なんかと遊んでる暇は無いんだよっ！」
相変わらずなシドの態度にキレる一誠。シドはチッチッチッと指を振って言う。
「分かってないな～、先輩は。せっかくゲストをいっぱい連れてきてあげたのに、シラケるような事言わないでよ。ねえ？」
視線を横に向けるシド。爆煙の中から更に3人の人影が姿を見せる。
軍服のような衣装に、刀を携（たずさ）えた女性――カグラ・イザヨイ。

漆黒の鎧に身を固めた鎧武者――――牙鬼斬月。
三國志のような鎧を着込んだ武人――――スメラギ・リュウゲン。
いずれも猛者揃いと言われる造魔の幹部……っ。そして、残された黒いモヤから出てきたのは――――。
「……悪魔の祈りと囁きは、地の底に届くか否か。魔術の宴は叶うこと能わず、冥底に沈むか否か。その答えは神にも仏にも見出だせず……。」
全身に走る怖気……っ。最後に出てきたのは……死神よりも死神と呼ばれるに相応しい異形……っ。
その名はブラッドマン・クルーガー……っ！
「地の底を彷徨いし若気の悪魔よ。骸の道を辿るか否か、この死神が見定めてやろうぞ」

とある空間にて、装飾の凝った銀色のローブに身を包む人物に、白衣を着た研究者らしき男性が現時点での経緯を報告していた。
「そうですか。造魔の連中も侵入していたのですか」
「はい、グレモリー眷属とシトリー眷属にけしかける手筈だった魔法使い達は造魔に

よって壊滅状態。最悪の場合、ここにやって来るのも時間の問題かと……。如何いたしましょう？」

研究者の疑問にローブの人物は間髪入れずに答える。

「放っておいて構いません」

「対処されないのですか？」

「元々彼らの好奇心と欲求を満たすのは〝ついで〟ですからね。やられたところで作戦に支障はありません。こちらとしては必要なデータさえ入手できれば良いので」

どうやら先の魔法使い集団は捨て駒として扱われたようで、ローブの人物は全く意に介さない様子だった。その返答に研究者がやれやれと肩を竦めて言う。

「薄情ですね」

「願わくば共倒れしてもらいたいものですが……まあ、どちらが来ようと問題ありません。私はただ作戦を実行するだけです」

「……かしこまりました。では、捕らえたレイヴェル・フェニックスの様子見も兼ねて、私はこれで失礼します」

「ええ、ご苦労様です」

そう言ってその場から離れた研究者は、レイヴェルの様子を見に――――行かず、別の場所に足を運ぶ。

研究者の眼前には無数の培養カプセルが並んでいた。チューブや機器に繋がれた数多くの培養カプセルの中には……液体に漬かる〝何か〟が入っていた。

それを見て研究者は口の端を笑ませる……。

「Ç’ｅｓｔ　ｂｏｎ、Ç’ｅｓｔ　ｓｉ　ｂｏｎ、Ｔｒ▪ｓ　ｂｉｅｎ。『禍の団』……瓦解しても往生際が悪く、尚も混沌をもたらそうとする組織。ただのＴｒｉｓｔｅな集団かと思いきや、このような興味深いデータを収集してくださっていたとは……。私としても大変Ｍｅｒｃｉな事です」

その〝研究者〟は腕から管のような物を複数伸ばし、培養カプセルに繋げる。管が大きく脈動し、研究者の腕に流れていく……。

「これだけ大量のデータを集めれば、新たな『深淵の喰闇』――『強欲の喰闇』の誕生も早まる事でしょう。実に華やかでＰａｓｓｉｏｎｎａｎｔな展開です。Ｍａｇｎｉｆｉｑｕｅ」

グレモリー＆シトリー　ＶＳ　造魔（ゾーマ）幹部衆！

「そうだっ、僕とブラッドマンは顔合わせしてるから良いけどさぁ。他のヒト達はまだでしょ？　せっかくなんだし、自己紹介しちゃえば～？」

「……そうですね。こうやって顔見せするのは初めてですので、まずは名乗るとしましょう」

シドに促(うなが)されて１歩前に出るのは――軍服のような衣装に身を包み、腰に刀を携(たずさ)えた女性。新達を見据えて名乗りを上げる。

「初めまして。私は造魔(ゾーマ)の『拾弐の魔凶(ツヴェルフ・テラーズ)』が１人、カグラ・イザヨイと申します。　以後、お見知り置きを」

カグラ・イザヨイが簡素に名乗った直後、三國志のような鎧と兜を着込んだ異形も前に出てくる。

右拳を左の掌(てのひら)で包む中国武術の礼儀作法――抱拳礼(ほうけんれい)を行(おこな)ってから口を開く。

「我が名はスメラギ・リュウゲン。同じく造魔(ゾーマ)『拾弐の魔凶(ツヴェルフ・テラーズ)』に属し、武の極(こころざ)みを志す者だ」

最後に漆黒の鎧武者が前に出て、高々と名乗りを上げる。

「某は牙鬼高虎之進斬月！　貴殿ら悪しき魔の者どもに穢された日の本を救うべく、造魔に仕え馳せ参じた者なり！」

いきなり謂われようの無い言い掛かりを付けられた新達。ちなみに〝日の本〟と言うのは〝日本〟の美称である。

「お、俺達が日本を穢した？　どういう事だ？」

突然の難癖に当惑する一誠、他の皆もザワつく。そんな中、牙鬼斬月は握り拳をブルブルと震わせる。

「この期に及んで自覚無しとは許し難い……っ！　貴殿らのような輩に由緒正しき日の本は毒され、軟弱な思想に塗れた社会へと成り果ててしまった……っ！　その悪行、神仏が許しても某が許さん！」

「だから何なんだよ、その悪行ってのは？」

新がそう突っ込むと……牙鬼斬月はビシッと指を突きつける。その指先はソーナに向けられていた。

「そこの女子、音に聞くシトリー家の淑女に相違ござらぬか？」

「ええ、ソーナ・シトリーは私ですが」

「まずは貴殿に物申す」

一瞬流れる静寂……。刹那、牙鬼斬月は叫んだ。

「……何なのだっ、その破廉恥極まる装束はッッ！」

「……え？」

それは誰もが疑問符を浮かべる叫びだった……。キョトンとするソーナに対し、牙鬼斬月は語り続ける。

「淑女たる者が、そのように脚を見せるような淫らな召し物を着て何とする!!　特に腰の布地！　明らかに短すぎるではないか！　そのような物で日の本を誑かし、国民を拐かし、汚れた我欲に染め上げてきたのであろう！　何たる外道！　何たる破廉恥！　誇り高き日の本を〝はいから〟な異文化に染めおって……っ！　それだけにあらず、異端な文化を取り入れて他国に媚び諂い、わけの分からぬ食物と流行りものに現を抜かすとは……！　何が〝たぴおかみるくてぃー〟だ！　何が〝いんすた映え〟だ！　日の本に生まれたならお茶を飲むべし！　煎茶、日本茶、緑茶、ほうじ茶、梅こぶ茶！　茶道は日の本を映す鑑！　その鑑を穢したのも貴殿らの差し金と見たぁっ！　この牙鬼斬月が日の本に代わって成敗してくれる！」

『酷い濡れ衣だっっ！』

新達は口々にそう叫んだ……。いつの間にか日本を汚した重罪人のように扱われている……。

それでも牙鬼斬月の追及（？）は止まらない……。

「無論、貴殿だけではない。……そこの２人！　黒い召し物の女子！」
「ん？　私か？」
「わ、私も？」
　突如、指名されたのは戦闘服姿のゼノヴィアとイリナ。牙鬼斬月は再び怒号を交えて語り出す。
「そこの女子２人に至っては破廉恥どころではない！　何なのだっ、その装束は⁉　ただの薄い布地ではないか⁉　体の線が浮き彫りになっていて、もはや変態としか言いようが無いぞ！」
「へ、変態⁉　私達がっ⁉」
　牙鬼斬月のメチャクチャな暴論にビックリするイリナ。ゼノヴィアは自身の戦闘服を見て、牙鬼斬月に視線を移し直す。
「変態と言われるのは心外だな。これは教会から支給された正規の戦闘服だ。何処が破廉恥なんだ？　……いや、これを着ると下着が穿けないからな。その点だけがネックか」
　ゼノヴィアの発言に牙鬼斬月は再び衝撃を受け、ワナワナと震え始める。
「――――ッッ！　何だと……？　下穿きを着けてない……っ⁉　日の本の女子は……大和撫子の誇りと魂を捨てたと言うのか……っ⁉　おのれ、既にそこまで貴殿らの悪行

が日の本を蝕(むしば)んでいたのか……っっ！　もはや成敗など生ぬるい！　神魔必滅(しんまひつめつ)・見敵必殺(けんてきひっさつ)ッ！　我が天下五剣(てんがごけん)にて、貴殿らを魂ごと斬り伏せてくれるわアアアアアアアアッ！」

牙鬼斬月から鬼気迫るオーラが放出され、その場の空気が震撼するが……憤慨の理由があまりにも理不尽とも言えるので、新達は顔を見合わせて苦笑するしかなかった。

怒り心頭の牙鬼斬月に対し、シドはカラカラと笑う。

「斬月ってさぁ、今どき珍しいと言うか……感性が古いよねぇ（笑）」

そう言いながら両手に赤い紋様と青い紋様を浮かび上がらせ、円を描くように回す。

「マックス大・変・身っ！」

渾然一体(こんぜんいったい)となった魔法陣を潜(くぐ)り、シドが戦闘形態――――『赫と蒼の連撃闘帝(パーフェクト・フォーム)』へと姿を変える。

シドが変貌したのを皮切りに、女性剣士カグラも鞘から刀を抜き、武人スメラギも空を斬るように拳を振るって静かに構えを取る。

斬月は相変わらず勘違いした怒りを滾(たぎ)らせ、ブラッドマンも新達を見据える。

戦意に満ちた雰囲気が渦巻く中、ソーナが通信を介して告げてきた。

「――――では、見せようではありませんか。若手悪魔の力を――――。駒王学園の悪魔を敵に回した事を後悔させてあげましょう」

迫力ある宣言を聞いて、まずはゼノヴィアが飛び出す！

エクス・デュランダルを大振りに振るって聖なるオーラを飛ばし、中衛のロスヴァイセも魔術のフルバーストを撃ち放った。ゼノヴィアとロスヴァイセの連携攻撃に対して造魔（ゾーマ）の陣営は――。

『Ｏｎｅ（ワン）!!　Ｔｗｏ（ツー）!!　Ｔｈｒｅｅ（スリー）!!　Ｆｏｕｒ（フォー）!!　Ｆｉｖｅ（ファイブ）!!　Ｓｉｘ（シックス）!!　Ｓｅｖｅｎ（セブン）!!　Ｅｉｇｈｔ（エイト）!!　Ｎｉｎｅ（ナイン）!!　Ｔｅｎ（テン）!!』

『Ｔｅｎｔｈ（テンス）　Ｃｏｍｂｏ（コンボ）!!!!』

シドが手に持ったハンドサイズの斧――パラドクス・アックスを銃に変形させ、柄頭を連打する。銃口から青い魔弾が放たれ――十方向に分散。ロスヴァイセが撃ち放った魔術砲撃の四分の一を相殺（そうさい）した。

「術式展開――竜爪拳（りゅうそうけん）・羅針（らしん）の陣……！」

次にスメラギが力強く足を踏み鳴らして構えると……足元から竜の爪のような紋様が広がり、闘気が高められる。向かってきた聖なるオーラを両手の爪を振るう事で引き裂き、霧散させた。

「十六夜流剣術（いざよいりゅう）、蝶の型――羽刃斬（はばたき）」

カグラは蝶の羽を描くように、手に持った刀を振り回し――自身に向かってきた魔術の砲撃を全て切り裂く。その姿と刀さばきは敵ながら優雅で流麗なものだった。

『Ｂｌｏｏｄ（ブラッド） Ｔｕｎｉｎｇ（チューニング） Ｆａｎｇ（ファング） Ｓｐｉｄｅｒ（スパイダー）……!!』

最後にブラッドマンからおどろおどろしい音声が鳴り……先程と同じ黒いモヤが背中から噴き出してくる。生物のように蠢（うごめ）き、ブラッドマンの右腕にまとわり付く。すると――ブラッドマンの右腕は巨大な蜘蛛が張り付いたような禍々（まがまが）しい武器と化した。

ブラッドマンが蜘蛛の形をした凶刃を振るい、残りの魔術砲撃を一閃。ゼノヴィアとロスヴァイセの先制攻撃は雲散霧消（うんさんむしょう）となった。

吹き荒（すさ）ぶ爆風が止み、造魔陣営（ゾーマ）の姿が見えてくる。

「……予想はしていたが、ここまで軽くあしらわれるとはな」

舌打ちする新。他のメンバーも先程の攻撃を見ても冷や汗を流す。それでも、この戦闘は避けられない……。新が通信を介してソーナに言う。

「ソーナ、俺だけ作戦から除外させてくれ。単体で止めなきゃいけない相手がいるんだ」

『新くん、あなた独りでは荷が重すぎるのでは……？　せめて誰か1人でも味方を――』

「いや、広範囲攻撃で巻き込まれたら厄介だ。集中させてくれ。あの中で一番ヤバそうなのは――死神だ」

新の進言にソーナは暫（しば）し考え、答える。

『……分かりました。死神は新くんに任せましょう。けれど、決して無理はしないでく

ださい。私達の目的はあくまでレイヴェルさん達を取り戻す事です』

「ああ、分かってる。そっちも気を付けてくれ」

新はそう告げた直後、闇皇（やみおう）の鎧を展開し――ブラッドマンに狙いを定めて飛び出していった。手元に剣を出現させ、ブラッドマンに斬りかかる。

ブラッドマンは右腕の凶刃で難無く防ぐ。それと同時に両陣営も戦いの火蓋を切った。新はブラッドマンを一誠達から遠ざけるように攻め込んでいく。

ブラッドマンは全身から危険なオーラを滲ませながら、新の剣戟を防いでいく。一見すると新が優勢に思えるだろうが……実は違う。攻撃を加える毎に新の周囲がブラッドマンから発する黒いモヤに覆われていく。

『この黒い霧……まるで『初代キング』の闇みたいな感覚だ……。俺の体にまとわりついて、内外から蝕（むしば）もうとしてきやがる……っ』

ブラッドマンから発せられる黒い霧に、新の体が端々からダメージを受けていく。肉が傷み、骨が軋み、内臓や血管が悲鳴を上げる……。まだ数分も経たない内に鼻血が出て、口から血の塊を吐き出す。

それでも新はブラッドマンを止める事に集中力を費（つい）やす。ブラッドマンは感心するかのように言う。

「ほう、我が体から発せられる〝黄泉（よみ）の瘴気（しょうき）〟を受けてもその程度か。悪魔と言えど、並

大抵の者ならば浴びるだけで死に至るモノぞ」
「生憎、俺は並の悪魔じゃないんでね。それに似たような物を受けた事があるから、少しばかり耐性も付いちまったのさ……！」
「それは結構な話だ。では、存分に我が力を振るわせてもらおうぞ！」
ブラッドマンの右腕が黒い霧状に変化し、凶刃を伸ばして攻撃を仕掛けてくる。新は直ぐに飛び退いて回避。しかし、凶刃は蛇のようにしつこく追い回してくる。
新はブラッドマンの凶刃を躱したり、剣で弾いて凌ぎつつ、ブラッドマン自身に火竜を撃ち放つ。火竜がブラッドマンの顔に直撃するが……被弾した部分が霧状に変化し、火竜の攻撃は素通りしてしまう。
顔の一部が削られたが、ブラッドマンは平然としている。その姿に新は戦慄を覚える。
「残念だが、我が肉体は〝黄泉の瘴気〟で構成されている。生半可な攻撃など効かない。故に死神――――黄泉の国の番人だ」
ブラッドマンが左手を地に付けると、体から発せられる〝黄泉の瘴気〟が地に溶けるように行き渡っていく。徐々に範囲を拡げ、新の周りを囲んでいき――――噴き出す！
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオン……ッ！
そこから噴き出してきたのは夥しい数の骸骨……！　人骨や魔獣、ありとあらゆる生

物の骸が新の眼前に現れる……！

「マジかよ……!?」

「俺は死神、死した者を喚び寄せる。死とは森羅万象、生きとし生けるもの全てを支配する不変の真理。死神は眼前の咎人に対して、〝生きるべきか、死ぬべきか〟――その真理を問う。この言葉はウィリアム・シェイクスピア作、『ハムレット』の第３幕第１場に出てくる有名な台詞だったか」

「死神が戯曲を語る、か。こんな状況じゃなかったら良かったんだけどな……」

ブラッドマンが左手を前に掲げた刹那、人骨・魔獣を問わない骸の群れが――怨嗟の声を上げて新に向かっていった。

新とブラッドマンの戦いを遠目から確認した一誠は、ブラッドマンの異様な強さと能力に思わず生唾を飲み込む。

『あれが死神ってヤツの力か……!?　おっかねぇ！』

「イッセー先輩、ヒトの心配してる場合なのかな～？」

シドが武器の形態を斧に変形させ、一誠に斬りかかっていく。一誠はシドの攻撃を回避しつつ牽制のドラゴンショットを何度も撃つが、全てシドに防がれてしまう。

撃っては逃げ、撃っては逃げての繰り返し。そんな攻防が続いているとシドが不満げに告げてくる。

「ねえ、イッセー先輩。やる気あるの？　さっきからショボい攻撃ばっかしてさぁ、そんなので僕に勝てると思ってるの？」

「今回はお前に構ってる暇は無いんだよ！　仲間を助けに行かなきゃならねぇんだ！」

この後に控えているであろう敵に備えるべく、ここで力を無駄遣いするわけにはいかない。しかし、相手は造魔（ゾーマ）……そう簡単に突破できないのも事実。シドはそんな一誠の戦い方を嘲笑う。

「あ～、縛りプレイってヤツ？　お友達を助ける為とか、健気だよね～。でもさぁ、それって自分の実力に自信のあるヒトがやってこそだよ？　イッセー先輩にそんな実力あるのぉ？　僕にも勝てないくせにさぁ！」

そう言いながらシドは錬成能力を発動し、2枚の強化メダルを錬成。手持ちの武器を銃に変形させた後――強化メダルを投入する。

『Ｋａｋｕｓａｎ（拡散）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

『Ｔｓｕｉｂｉ（追尾）　Ｅｎｅｒｇｙ（エナジー）!!』

「追跡、撲滅、いずれも～っ、マッハってね！」

シドは銃口を宙に向けて魔弾を発射。撃ち上げられた魔弾は一拍置いて数十の魔弾に分散、その全てが一誠を追い掛けるように降り注いでいく。

一誠は背中のブーストを噴かして回避しようとするが、魔弾の群れは意思を持ったか

の如く執拗に追跡してくる。更に武器を再び斧に変形させたシドが、赤いオーラの斬撃を何度も放つ。

前方からは斬撃、後方からは魔弾の群れ。普通ならば、この時点でほぼ詰みだろう……。しかし、一誠は速度を上げて斬撃に突っ込んでいく。

乱雑に放たれた斬撃を、身を捩って掻い潜り――――シドの眼前にまで迫る。シドは嬉々として斧に赤いオーラを蓄積させ、一誠に目掛けて振り下ろす……！

その寸前、一誠は急激に方向転換。横に飛ぶようにシドの斧を回避。しかも……シドの視界には先程自分が撃ち放った魔弾の群れが……。

「――――っ⁉」

標的を急に失った魔弾の群れは方向転換が間に合わず、全弾漏れる事無くシドに突っ込んでいく。突然の事態に一瞬驚いたシドは、咄嗟にバリアを展開。魔弾の群れを防いだものの――――。

「こっちだ、バカ野郎！」

爆煙に紛れて背後に回っていた一誠が、シドの顔面に拳を打ち付ける。続けざまに左の拳打を叩き込み、その勢いを利用した蹴りでシドの斧を弾き飛ばす。更に至近距離からドラゴンショットを撃つ。

ドラゴンショットに呑み込まれるシドだが、直ぐに赤いオーラを爆発させてドラゴン

ショットを斧で切り裂く。体からプスプスと黒煙を上げても、体勢を崩さないシド。
「へえ～、通常の禁（バランス・ブレイカー）　手なのにやるねえ」
「当たり前だっ、こっちだって毎日毎日トレーニングを重ねてんだよ！　お前らみたいな戦闘狂どもに負けない為になぁ！」
「ホント健気だよね～。そんなに頑張っちゃってさぁ。そこまで必死になってるなら……僕もイッセー先輩のやり方に乗ってあげちゃおっかな」
シドは手に持っていた武器をしまい、左手に蒼いオーラ、右手に赤いオーラを集束させる。一誠が「何のつもりだ？」と訊くと、シドはニヒヒッと笑って答えた。
「僕も縛りプレイしてあげるよ。武器も強化メダルの錬成も使わない。地力（じりき）で相手してあげるよ」
「……っ！　本当にムカつくよな、お前って！」
「お互いに制限付きでプレイしなきゃ、フェアじゃないでしょ？」
「ああ、そうかい。後悔すんなよっ！」
赤龍帝（イッセー）と連撃闘帝（シド）の拳が激突し、極大の衝撃波が巻き起こった――――。

「はぁ……はぁ……っ、くそっ！」

疲弊した様子で舌打ちする匙。近くにいる仁村と由良も苦い表情をしていた。彼らを苦戦させているのは――武人スメラギ・リュウゲン。

「フン、五大龍王の神器（セイクリッド・ギア）を有する者と聞いていたが……この程度とは。片腹（かたはら）どころか両腹痛（りょうはら）いな」

スメラギが嘆息しながら毒づく。匙は解呪（かいじゅ）が難しい黒い炎――『邪龍の黒炎（ブレイズ・ブラック・フレア）』を放つ。更に四方から黒い炎が出現して、壁のようにスメラギを囲んでいく。

ヴリトラ系神器（セイクリッド・ギア）の１つ、『龍の牢獄（シャドウ・プリズン）』――。その中ではヴリトラの呪いの炎が渦巻き、動きを封じられる。

炎の熱が徐々に捕縛した者を苦しめ、更にそこに『漆黒の領域（デリート・フィールド）』も付加されて、相手の力を削ぎ落としていく。更に匙は『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』を幾重にも飛ばして、黒炎の牢獄に捕らえたスメラギに繋げようとするが……。

「無駄だ」

牢獄の中から一言聞こえた刹那、黒炎の牢獄が内側から切り裂かれ――スメラギが姿を現す。体に焦げ目こそ付いているが、目立ったダメージは無し。飛んできた複数のラインも闘気を溜めた両手で切り裂く。

その手はまるで本物の竜の爪の如し……。

「何なんだよ、こいつ……っ！　俺の黒炎をあんな簡単に切り裂くなんて……っ！」
「竜爪拳――それは文字通り、竜の爪を形にした拳法。我が手は竜の爪と同じ。空を切り、大地を抉り、肉も骨も断ち、魔獣の頭蓋骨さえも卵の如く握り潰せる」
スメラギは全身に闘気を巡らせ、竜の爪に見立てた両手を構える。
「竜爪拳・空式――烈空閃ッッ！」
スメラギがその場で闘気を纏わせた拳を何度も打つと、幾重もの衝撃波が飛んでいく。匙は前方に炎の壁を出し、由良も人工神器――『精霊と栄光の盾』を輝かせ、巨大な光の盾を作り上げる。
しかし、黒炎の壁と光の盾に拳打の痕が無数に刻まれ……凄まじい拳圧によって容易く破壊され、後方に吹き飛ばされてしまう。
悠々と歩みを進めるスメラギ。
「我が竜爪拳に掛かれば、大気をも拳と化す。お前達のような未熟者に防げはしない」
「――っ！　未熟者だと……っ？　俺達の事を言ってんのか⁉」
「正確には五大龍王の神器を宿す〝お前〟が未熟者だ。己と力を一体化できておらず、ただ複数の神器を寄せ集め、それに頼りきっているだけに過ぎん。仮にもドラゴンの名を冠する神器を有した身ならば、それに恥じない実力を身に付けるべきだ」
スメラギの力強い物言いに匙は何も言い返せず、痛めた体に鞭を打って立ち上がろう

とする。再び『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』を飛ばしてスメラギを捕縛しようとするも、逆に掴まれ――全てのラインを引き千切られてしまう。

それでも攻撃の手を緩めず、『邪龍の黒炎（ブレイズ・ブラック・フレア）』と『龍の牢獄（シャドウ・プリズン）』でスメラギの行く手を阻もうとする。

スメラギは「何度やろうと無駄だ」と言いつつ、竜の爪と化した手で匙の放った黒炎を掻き消す。しかし、この黒炎はあくまで囮――。由良と仁村がスメラギの両サイドから攻め入ろうとしていた。

仁村は脚甲型（きゃっこう）の人工神器（セイクリッド・ギア）――『玉兎と嫦娥（プロセラルム・ファントム）』を展開した蹴りを、由良は『精霊と栄光の盾（トウインクル・イージス）』から炎と雷を噴出させ、ヨーヨーの如く回転させながら放った。

眼前の匙に集中させ、死角となる両サイドからの挟撃。これならば一矢報（いっしむく）いる事も出来るだろう。そう思った矢先――。

ボゴッ！

スメラギの両肩から〝何か〟が勢い良く飛び出し、仁村と由良の挟撃を防いだ。スメラギの両肩から出現したのは――なんとドラゴンの頭部……っ！

右肩から伸びた紅いドラゴンが仁村の蹴りを止め、左肩から伸びた蒼いドラゴンの首が由良の放った盾を弾き返す。突然出てきたドラゴンの首に匙達は驚きを隠せなかった。

「な、何だ、ありゃ⁉　ドラゴンの頭……っ⁉　しかも、それぞれ別の動きをしてんのか⁉」

「我が両肩に巣食う蒼竜と紅竜、この2つは〝ある男〟を倒すべく後天的に手に入れた神器――『龍の手』とやらを亜種に昇華させた物だ。無論、己の意思もある」

仁村が紅竜の牙から逃れて体勢を立て直す。スメラギの両肩から伸びる蒼竜と紅竜が匙達に敵意の視線を向ける。

「私は嘗て〝ある男〟に破れた。ただの1度も負けた事が無い私に完璧な敗北を与えた。そして、私は誓ったのだ。己の納得がいく強さに達するまで、2度と敗北の二文字を背負わない――と。その為に私は造魔に入り、己の技を錬磨し続けた。竜爪拳に磨きを掛け、ありふれた神器たる『龍の手』を亜種へと進化させた。今やこの2つは『龍の手』にあらず」

スメラギが両手を宙に泳がせると、蒼竜と紅竜も同じように頭身をくねらせ、主のスメラギと共に流麗な円舞を披露する。その洗練された動作に匙達は言葉を失う。

「左肩の蒼竜は――『蒼竜の左頭』。右肩の紅竜は――『紅竜の右頭』。それぞれが意思を持つドラゴンであり、我が手足も同然。これが己と力を一体化させた神器の姿だ」

これこそ、スメラギが〝双竜の武人〟と呼ばれる所以である。自身の両肩に巣食うド

ラゴンの首はそれぞれが意思を持ち、異なる動きも容易にこなす事が出来る。
　つまり、スメラギを相手にするには当人だけでなく、この２体のドラゴンとも同時に戦わなければならないと言う事……。
「ただでさえ強いのに、ドラゴン２体って……っ」
「これが造魔（ゾーマ）の幹部なのか……っ」
　仁村と由良は萎縮してしまい、匙もスメラギの規格外の強さに震えが止まらなくなる。それでもスメラギは微塵の猶予も与えない。
「悔やむが良い。己の未熟さ、我々に牙を剥いた浅はかさを。兵器に頼れきればヒトは衰（おとろ）え、力無き者は消え去るのが世の道理だ。それを理解しない輩（やから）に――我が竜爪拳（りゅうそうけん）は砕けやしないっ！」
　スメラギの力強い言葉と共に、両肩のドラゴンが吼える――。

「由緒ある日の本を汚（けが）した罪、我が天下五剣（てんがごけん）にて成敗してくれるわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「だから、汚してないってば！　もうっ、全く話が通じないわ！　まるで昔のゼノヴィア

みたいなヒトね！」
「おい、イリナ。それは心外だぞ。私だってたまには冷静になる時もある」
「あのっ、今そんな口論してる場合じゃないと思うんですけど⁉」
ゼノヴィア、イリナ、巡が相手にしているのは天下五剣を操る鎧武者――牙鬼斬月。
やはり、ゼノヴィア達を日本の怨敵と認識しており、傍迷惑な怒号を撒き散らしていた。
斬月は両腕を頭上に掲げる。
「天下五剣、壱の太刀――鬼斬イイイイイイイイイッ！」
交差させるように両腕を振り下ろすと、X型の斬撃がゼノヴィア達に向かっていく。
その威力は凄まじく、斬撃の余波だけで床や壁まで抉り取る勢いだった。
唯一の救いは斬撃の軌道が直線的なので、回避しやすいと言う点だ。それでも斬撃の余波が皮膚を切り裂こうとするが……直撃するよりはマシだろう。
ゼノヴィア、イリナ、巡もそれぞれの得物を構えて斬月に斬りかかっていく。斬月は刀と化した両腕で応戦する。左腕で巡の刀を受け止め、右腕でイリナの量産型聖魔剣を防ぐ。残るゼノヴィアのエクス・デュランダルは――兜で受け止めた。
斬月の足が床にめり込むものの、堅牢な兜にデュランダルが阻まれる。
「く……っ！　なんて硬さだ！　破壊と天閃も上乗せしているのに……っ！」
「愚問っ！　日の本を汚した不義な貴殿らの剣では、我が身体に傷を付ける事など出来

ぬわぁっ！　天下五剣、参の太刀――――三日月イイイイイイイイイッッ！」

刀と化した斬月の両腕が鈍い輝きを発した刹那、無数の小さな斬撃が縦横無尽に飛び出す。周囲を飛び交う幾重もの斬撃にゼノヴィア達は身を翻して避け、何とか直撃だけは免れた。

距離を取って着地する3人だが、斬撃を躱すだけでも手一杯だった。斬月は刀剣状態の両腕を打ち付け合って火花を散らし、その切っ先をゼノヴィア達に向ける。

「某の目が黒い内は、貴殿ら悪しき輩の好き勝手にはさせぬぅっ！　勧善懲悪・悪鬼滅殺！　日の本を破廉恥な異文化に染め上げた事を懺悔し、悔い改めよっ！」

斬月がそう叫ぶと、先程放たれた無数の三日月型の斬撃が意思を持つかのように宙を自在に動き回る。ゼノヴィアがそれらを斬ろうとするが……全て避けられてしまう。トリッキーな攻撃はゼノヴィアが苦手なタイプだ。

すると、ゼノヴィアにソーナの指示が届く。

『ゼノヴィアさん、支配の力を使いなさい』

「だが、会長。私は支配の能力を上手く発動できない。それに相手は造魔の幹部だ。操ろうにも操れないぞ？」

『いいえ、違います。支配とは、何も生物を操れば良いと言うわけでもありません』

縦横無尽に動き回る斬撃に襲い掛かられそうなゼノヴィアにソーナは強く言う。

『ゼノヴィアさん！　その放たれた斬撃に支配の能力を向けなさい！　強く念じるのです。斬撃を止めたい――――と！　私の考えが当たっていれば、あなたの剣はもうひと段階、様相を変えます！』

「――――ッ！」

ゼノヴィアはソーナからの指示通り、顔を難しくして、何かに集中し始めた。すると、デュランダルがそれに呼応するように光り輝く！

次の瞬間にはゼノヴィアに向かっていた斬撃の群れが直撃を止めて、その場に留まりだした。支配の聖剣の力なのか、斬撃を支配して止めた！

「な……っ！　某の三日月を止めた⁉」

その結果に斬月は勿論、ゼノヴィア本人も驚いていた。

「……支配の力にこんな応用が……会長、どういう事だ？」

『やはり、そうでしたか。恐らく、その聖剣で支配できるものは何も生物だけではないようですよ。今は斬撃を少しだけ操りましたが、それだけではありません。やりようによっては、如何なる現象をも支配できる筈です。それが難しいと言うのなら、せめて敵の攻撃を操ろうと思いなさい。または味方の攻撃が外れた時にフォローするのも良いでしょう』

「……その力で敵の攻撃を乱し、仲間のオフェンスを支えれば良いのか」

『そうです。能力をまっすぐ見るのも良いでしょう。しかし、やりようによっては多様な使い方も出てきます。今の支配の力もその一例です』

戦いながらもソーナは新たな手法まで開発してくれる。造魔（ゾーマ）と言う強大な敵がいる戦場の中でも、怯まず頭の中で様々な局面を描いているのだろう。

ゼノヴィアは支配の力で止めた斬撃の群れを全て斬り払い、霧散させた。その所業に斬月は怒気を孕ませたオーラを発する。

「日の本を異文化に汚した悪魔が聖剣を使うとは……っ。由々（ゆゆ）しき事態が起こり過ぎている。だが、我が天下五剣（てんがごけん）は決して砕けぬ覚悟の剣（つるぎ）。貴殿らの邪（よこしま）な思想などに負けるつもりは毛ほどもござらんッ！」

「まだ言うのか、この堅物頭（かたぶつあたま）は」

「ゼノヴィア、あなたも少し前まで似たような感じだったのよ？」

「会長や後衛陣をやらせないわ」

『僧侶（ビショップ）』の花戒桃（はなかいもも）が両腕に腕輪を出現させ、青色の力強い結界で後衛のソーナ達を覆った。

結界系人工神器（セイクリッド・ギア）――『刹那の絶園（アブローズ・ウォール）』。以前よりも力を増しているようだった。

更に同じく『僧侶(ビショップ)』の草下憐耶(くさかれや)が展開する仮面型の人工神器(セイクリッド・ギア)――――『怪人達の仮面舞踏会(スカウティング・ベルソナ)』も周囲を漂(ただよ)い、守りの態勢を整えている。

造魔(ゾーマ)の女性剣士カグラは何度も剣戟を見舞うが、草下の仮面群と花戒の強固な結界に阻まれる。

「さすがに硬いですね。ならば――――」

カグラは刀を鞘に収め、静かながらも迫力あるオーラを滲み出させる。

「十六夜流剣術(いざよい)、蜻蛉(せいれい)の型――――飛翔旋風(ひしょうつむじ)」

上方に向けて抜刀した直後、刀から大きな斬撃が放たれ、後衛陣に向かって急転回。更に幾重もの細かな斬撃へと分かれて降り注いでいく。如何に強固な結界と言えど、絶え間無く斬撃が降り続ければ何れ破られるだろう。

「あらあら、そうはさせませんわ」

不敵な笑いをしながら、朱乃は降ってくる斬撃の群れに向けて魔力を撃ち放つ――――。

すると、東洋の龍の形をした雷光が激しい稲光(いなびかり)と炸裂音を発生させ、降り注いできた斬撃を全て飲み込んでいく！

指をバチバチ鳴らしながら微笑みを浮かべる朱乃。背中に生やすのは6枚の堕天使の翼。魔術文字が刻まれた黄金の腕輪を両腕に装着していた。

「――――雷光龍。新さんの気をこの身で受け続けていたら、このような特殊な技が出来るようになりましたわ」

「やりますね。では、これならどうです？」

カグラは先程と同じく刀を振るって斬撃を放った。ただし、今度は１つで威力に特化させた斬撃。直撃はまずいだろう。

しかし、その心配も杞憂に終わる。朱乃は防御――――魔法を展開して斬撃を防ぐ。しかも、それは魔力による魔法陣ではなく、魔法の紋様と文字が描かれた魔法陣だった。

「うふふ、ロスヴァイセさん直伝の防御術式ですわ。『戦車』の特性はこれで強化します」

どうやらロスヴァイセと同じように『戦車』の特性を防御魔法で補っていたようだ。通常、『戦車』の悪魔は普段から防御魔力や魔法などで自身の特性を高めている。

朱乃は攻撃魔力の方に長けていた為、今まで強敵との戦いでは防御面で劣勢を強いられてきた。朱乃は『戦車』の特性が苦手で、防御面で不利な事が多かった。

しかし、強敵との戦いが多い為、苦手な部分も克服するべく朱乃は防御型の魔法で強化を図った。つまり、防御魔力のイメージ不足を魔法の術式で補ったのだ。

「では、今度はこちらから参りますわ！」

朱乃は炎と氷の魔力を用いて、カグラに攻撃を仕掛けた。その際、炎も氷も龍の形をしており、先程の雷光龍と同じく意思を持つかのようにうねりながらカグラに向かって

いく。

炎と氷の龍が迫り来る中、カグラは握っている刀を逆手に持ち替えて構えた。

「十六夜流剣術、螳螂の型――六道の鎌切」

逆手に持ち替えた刀を横薙ぎに振るうと、三筋の剣閃が炎と氷の龍を切り裂き――更に返す勢いで振り下ろすと、再び三筋の剣閃が発生。炎と氷の龍が纏めて切り裂かれる。

合計六筋の剣閃が、朱乃の放った炎と氷の龍を瞬く間に細切れへと変えた。炎と氷の龍が霧散し、カグラが刀を逆手から順手に持ち直す。

「情報以上の能力を持っているようですね。特に先程の……雷光龍と言いましたか。それに炎と氷の龍も……」

カグラの視線がブラッドマンと戦い続ける新に移る。

『彼女が放った龍は元々彼女の能力ではなく、竜崎新――彼の影響によって生まれた産物。ドラゴン……ドラゴン……っ』

カグラの視線が新に集中し始め、その目付きが次第に鋭さを増していく。それも……何やら憤りを孕んだかのような視線……。

『竜崎新……彼の力もドラゴン……。あの様相、あの波長……。今ここで仕留めるべきかもしれませんね……ッ！』

カグラはグレモリー＆シトリーの後衛陣との戦闘を中断、その場を駆け出す。狙いは無論、ブラッドマンと交戦中の新……っ。

「――っ！　あの人、新さんを狙って……っ？　そうはさせないわっ！」

「あなたの相手は私達です！」

朱乃は直ぐに複数の雷光龍を撃ち放ち、更にロスヴァイセも幾重もの魔術砲撃を繰り出した！

迫り来る雷光龍の群れと魔術砲撃に対し、カグラは走りながら刀を水平に掲げた。

「十六夜流剣術、蜈蚣の型――百足舞踊剣舞ッ！」

ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！

地を抉る程の強い踏み込みが幾度も響き渡り、カグラの姿が度々ブレる。四方八方に跳び交うカグラは躱しながら雷光龍と魔術砲撃を刀で斬り払っていく。

朱乃とロスヴァイセの同時攻撃を全く意に介さず、ブラッドマンと交戦中の新を狙うべく突き進み――遂に剣戟の範囲内に捉えた。新はブラッドマンの猛攻を凌ぐのに精一杯で、カグラの接近に気付いていない……！

「こんな形で申し訳ありませんが……あなたの首、落とさせていただきますっ！」

「――っ！　新さんっ！」

朱乃の叫びにようやく気付いた新だが、カグラの振るった刀が既に首元まで迫ってい

た……！

〝首を斬られる……！〟　新も他の誰もがそう思った刹那、カグラの刀が突然何かに阻まれる！

カグラの刀を止めたのは、蜘蛛の形をした凶刃……。つまり――――。

「――――っ⁉　ブラッドマン……⁉　何故止めるのですか⁉」

カグラが驚いた表情でそう叫ぶ。その言葉通り、カグラの刀を防いだのは……なんと同じ造魔（ゾーマ）――――味方である筈のブラッドマンだった……！

ブラッドマンの不可解な行動に造魔（ゾーマ）の他の面子（めんつ）も度肝を抜かれた。ブラッドマンはそのままカグラの刀を弾き返して、カグラの方に視線を移す。

「カグラ、お前こそどうした？　何故いきなり彼（か）の者を狙った？」

「私の質問に答えるのが先です！　何故あなたが敵である筈の彼を庇うのですか⁉　しかも、今まさに交戦中だと言うのに！」

「その質問に対する答えはこうだ。――――この男は、この場で殺すべきではない。死神として、そう判断したまでだ」

意味深な言葉を並び立てるブラッドマンに対して、カグラは苛立ちを見せる。

「ブラッドマン、あなたの言動は前々から理解に苦しむものばかりでした。仕留めるべき敵を敢えて見逃したり、脅威になり得そうもない者を葬（ほうむ）ったりと……。死神と呼ばれ

恐れられているあなたが、何を選り好みしているのですか⁉」

「俺は目の前にいる者が生きるべきか死ぬべきか判断し、その命に審判を下しているまでだ。死神とは文字通り、『死』を司り導く者。『死』とは誰しも迎える、抗えぬ運命。その理に基づき、俺は死神としての責務を全うしているだけに過ぎない。手前勝手に命を終わらせるものは死神にあらず」

全く動じず己の意を押し通すブラッドマン。カグラは今すぐにでもヤツを断罪したいのだろうが……相手は死神。そう易々と事を運べる相手ではない。

次にブラッドマンは左手から黒い霧を放ち、周辺に転がっている魔法使い達の死体を包み込む。暫くすると魔法使い達の死体が消え、ブラッドマンが語り始める。

「この者達の言葉を借りて、死神が伝えよう。『この先にあんた達の後輩と、今回の襲撃のリーダーがいる。さっさと行けよ。ただし、赤龍帝、闇皇、ヴリトラ、デュランダル使い、雷光の巫女、癒しの聖女、ヴァルキリー、ミカエルのＡだけは確実に来い』――――との事だ」

ブラッドマンが黒い霧を少し離れた所に向かって放つと、転移型の魔法陣が現れる。

ブラッドマンの行動に驚きを隠せない面々。

〝何故、魔法使い達の言葉を伝えられるのか？〟

ブラッドマンは死した者を取り込めば、その者の記憶や思考を読み取る事が出来る。

無論、それは人間・異形を問わずあらゆる生物に対しても可能である。
まさに〝死神〟の成せる業……。
その所業に上手く言葉が出せない新達を尻目に、ブラッドマンはヒト1人分潜れる大きさの黒い霧を展開し、次のように述べた。
「死神の名に於いて告ぐ。今宵はお前達の命を冥底に捧げる事無かれ。いずれ、再び相見える刻が来るであろう。我らもその時を待ちて、地の下より去りぬ」
「それって……この場から退き上げるって事ですか⁉」
カグラの解釈にシド、スメラギ、斬月の視線がブラッドマンに集中する。それもその筈、奇襲を仕掛けておいてアッサリ引き上げるなど思いもしなかったであろう。強者ゆえの傲慢か、それとも他に思惑があるのか……？
死神の真意が分からぬ中、シドが不満げに言ってくる。
「ちょっと、チョットチョットォ。造魔はそれぞれ好き勝手に動いて良い組織なんじゃないの？　こんなに盛り上がってる中で、そんな事言われたら流石にシラケるんだけどぉ？」
「ならば問うぞ。貴様は赤龍帝との勝敗をここで着けて納得するのか？　今の奴らは本来の力を抑えている状態だ。本来の実力――――真価を発揮した赤龍帝を倒してこそ、貴様の強さの証明になるのではないのか？」

ブラッドマンの指摘にシドは暫し考え込むような仕草をした後――「それもそうだねっ」と納得する。シドはそのままブラッドマンが用意した転移用の黒い霧へ向かっていく。

「と言うわけでイッセー先輩、今回の縛りプレイ勝負はここまでにしといてあげる。早くお友達を助けて、邪魔がいなくなった時に思う存分決着をつけようよ。じゃあね～♪」

陽気に言いながら黒い霧の中に消えていくシド。その様子を見たカグラは納得がいかないとばかりに抗議を飛ばす。

「ブラッドマン、ここまで出向いておきながら敵を見逃すと言うのですか？　あなたに何の権限があるのかは知りませんが、これは違反行為と糾弾されてもおかしくありませんよ！　このような身勝手をすれば、指揮官や執政官が黙っていません！　今すぐ撤回してグレモリーとシトリーをこの場で――」

「カグラ、お前が独りで奴らを仕留めたいのならば好きにすると良い。俺もそれを咎めはせぬ。しかし、お前が仕留めようとした男はバサラ・クレイオスが定めた好敵手であり、旧知の因縁とも言える者。そんな男を許可も承諾も無しに仕留めたりすれば……それこそバサラから大目玉を食らうのではないのか？」

ブラッドマンの忠告を聞いた途端、カグラは言葉を詰まらせ、苦虫を噛み潰したよう

な表情となる。その後、彼女はゆっくりと刀を鞘に収めた。
「……分かりました。ブラッドマン、今回はあなたの進言通り引き下がるとしましょう。……ですが、あまり行き過ぎた言動はしないように。執政官はともかく、指揮官から叱責を受ける事になっても知りませんよ？」
「肝に銘じておこう　」
ブラッドマンが簡素に返答し、カグラは転移用の黒い霧の中へと消えていく。これで造魔側は2人が退場した。そこでスメラギも踵を返して、転移用の黒い霧へと歩みを進める。
「――――っ⁉　スメラギ殿！　貴殿もこの場から引き上げるつもりか⁉」
声を荒らげる斬月に対して、スメラギも冷静に答える。
「確かに今のグレモリーとシトリーは本調子ではないな。そんな奴らを倒したところで私は納得せん。戦るなら万全・磐石。今回は少々の手合わせを出来ただけで良しとしよう。では、失礼する」
そう言ってスメラギも戦線から離脱していった。これで残るは死神ブラッドマンと牙鬼斬月のみとなった……。ただ、斬月は未だに納得がいかない雰囲気を醸し出しており、ブラッドマンに詰め寄る。
「死神殿っ！　某は納得いかぬっ！　日の本を異文化に染め、陥れた元凶を眼前にして

おきながら、みすみす見逃すなど！」
「早合点するな。別に奴らを見逃すわけではない、別の機会に仕切り直せと言っている。地の下で人知れず葬るよりも、大々的に打ちのめす方がお前にとっても都合が良かろう？　その時が来るまで待つだけの話だ」
「し、しかし……っ！」
「それとも何だ？　貴様が宣う大和魂とやらは、実力を発揮しきれていない相手を甚振る為に掲げているのか？　それこそ武士として恥ずべきことだと思うが」
　低い声音で諌めようとするブラッドマン。痛いところを突かれた斬月は言葉を詰まらせ、刀に変化させていた両腕を元に戻す。そして、転移用の黒い霧の前に立ち、新達の方を向いて叫ぶ。
「良いかっ、悪しき者どもよ！　某は決して貴殿らを許しはせぬっ！　今だけは死神殿の器量の広さに感謝しておけ！　次に相見えた時こそ、我が天下五剣の錆になると知れっ！」
　斬月はそう叫んで消えていき、ブラッドマンも後に続こうとする。その直前、ソーナがブラッドマンを呼び止めた。
「……1つ、お聞きしたい事があります。何故あなたは自ら味方に反感を買われるような真似をするのですか？　その点がどうにも理解できません」

ソーナの問いにブラッドマンは背を向けたまま答える。
「先程も言った筈だ。俺は死神としての責務を全うし、お前達の命に審判を下す――――それだけだ。いずれ来たる混沌に満ちた宴……闇の災禍が我々を翻弄するだろう。その時まで、お前達の命を散らすべきではないと判断した」
「闇の災禍……？　いったい何なのですか？」
「それは〝死神〟の名を持つ俺にも分からない。だが、闇の災禍は近い内に必ず訪れる。その災禍で多くの嘆き、悲しみ、怒り、憎しみ、妬み、恨みが飛び交うだろう。三大勢力、造魔、そして――――未だ見ぬ暗き闇。悪魔が照らす光を喰らい、魔が造りし闇をも凌ぐやもしれん。いま言える事はそれだけだ」
そう言ってブラッドマンは転移用の黒い霧の中へと消えていき、同時に黒い霧もその場から完全に消え去った。いくつもの不穏な言葉を残して……。
造魔との戦いは思わぬ形で中断に終わり、張り詰められた空気が軟化する。
「……はぁ……っ、何だか死神の気紛れに救われたって感じだな」
「そうだな……」
ガックリと肩を下ろす一誠と、眉を顰める新。今はとりあえずアーシアの治療による負傷者の回復に取り組む事にした。
しかし、事態はまだ始まったばかりに過ぎない……。

『大罪の暴龍（クライム・フォース・ドラゴン）』グレンデル

不本意な形ではあるものの、造魔（ゾーマ）幹部衆との戦いを終え、新しく出現した魔法陣を通るのはグレモリー眷属とイリナ、シトリー眷属からはソーナと匙だけと言う形となった。

残った生徒会メンバーは上で待機していた三大勢力のスタッフと共に冥界に移送する事になった。……尚、地下で遭遇した魔法使い達は1人残らず造魔（ゾーマ）にの手によって息絶え、亡骸（なきがら）は全てブラッドマンに喰われ消えた。

地上でも渉達と魔法使いの戦闘があったらしく、魔女達は外で転移魔法陣を使って石と土製のゴーレムと召喚した魔物を地下に転送する手筈だったそうだ。その魔女達も倒され、捕縛された。あまりにも芳（かんば）しくない成果である……。

モヤモヤする状態だが、一行は魔法使いの記憶を読み取ったブラッドマンが言っていた『リーダー』と呼ばれる者のもとに行く。用意された魔法陣で転移した先に広がっていたのは――だだっ広い白い空間だった。

何も無い、ただ白いだけの空間。上下左右が白く四角い場所……天井はかなり高く、

新達が修行で使うフィールドと同じぐらいの広大さだった。
「ここは次元の狭間に作った『工場』なのですよ。悪魔がレーティングゲームに使うフィールド技術の応用です」
突然の第三者の声。そちらに視線を送ってみると……先程空間を見渡した時には見当たらなかった人影がそこにあった。
新達と距離を置いたところに装飾の凝った銀色のローブに身を包む誰かがいた。声は若い男のものである。
格好から察するに魔法使いなのか？　相手の出方を窺っていると――――。
「新さま！」
今度はレイヴェルの声が聞こえてくる。声の出所を探ると、新達から少し離れた位置の右方面にレイヴェル、小猫が立っていた。……小猫はギャスパーを背負っている。ギャスパーはグッタリしていて、何かをされたのは明白だった。
レイヴェルと小猫に関しては特に拘束されているわけでもなく、連れ去られた時の駒王学園の制服と言う出で立ちで、見た感じでは怪我らしきものは見当たらない。
「彼女達を返しましょう」
ローブの男がそう言う。相手の出方を窺いつつも新達は小猫とレイヴェルを手招きして、駆けてくるよう促した。

３人が新達と合流する間もローブの男は何も仕掛けてこなかった。
「新さま……」
「レイヴェル、何かされたか？　奴らはフェニックスの事を嗅ぎ回ってるらしいが……」
新が問うとレイヴェルは無言で体を震わせていた。肉体的ではなく、精神的なダメージを与えられた様子が見える。
小猫が背負っていたギャスパーを下ろし、アーシアに回復を任せる。小猫は悔しそうに唇を噛んでいた。
「……私もレイヴェルもギャーくんも魔法陣で何かを調べられました。体には特に何もされていません。ただ、ギャーくんが……」
ギャスパーは――――顔中が腫れ上がる程に殴打されていた。青く晴らして、いつもの可愛い顔が見えなくなる程に――――。
「……ギャーくんは私達を守ろうとして……」
小猫が目元を潤ませていた。ギャスパーの変わり果てた姿を見ていると、ローブの男が言う。
「彼に関してはこちらの落ち度です。彼がそこの２人を守ろうと立ち向かってきた為、配下の者がつい手を出してしまったようでして。それ以外は丁重に扱いました」
ギャスパーは小猫とレイヴェルを助けようとしたのだろう。彼は本当にここぞと言

う場面で男を見せてくれる。そんな健気なギャスパーの姿に眷属全員が体に纏わせるオーラの質を変えていた。

怒りのオーラを発する新や一誠をソーナは冷静に手で制して、口を開く。

「あなたが今回の黒幕ですか？」

「ええ、そうです」

ソーナの問いに即答するローブの男。やはり、この男が魔法使い達が言っていた「リーダー」と呼ばれる者のようだ。ソーナは再度問う　。

「あなたは『禍の団（カオス・ブリゲード）』？　だとしたら、襲撃の理由は何です？」

「ええ、今は『禍の団（カオス・ブリゲード）』をさせてもらっています。今回我々が襲撃した目的は、何点か理由がありまして。魔法使いの彼らがあなた方を襲ったのは、彼らの好奇心です。『禍の団（カオス・ブリゲード）』に元々所属していた者たち――――」

男の言葉にソーナが続く。

「その者たちとはぐれ魔法使いの集団は手を組んでいた、でしょう？　先程の魔法使い達は協会を追放された魔法使いと、『禍の団（カオス・ブリゲード）』に入った魔法使いの混合チームです。彼らが使う術式は以前三大勢力の和平会談を邪魔してきた魔法使いが使ってきたと言う魔法陣の紋様にそっくりでしたからね」

「ええ、彼らは比較的頻繁に交流をしていたようですから」

「今回の襲撃劇ももしかして、協会が出したと言う若手悪魔の評価に関連しますか？竜崎新くんや兵藤一誠くんを襲った魔法使いがランクについて言及しながら攻撃を加えてきたと言いますし、先程も私達の力について大変な関心を抱いていました」

「ふふふ、私が説明しなくても良いぐらいですね。ええ、そうです。彼らは協会が出した若手悪魔の評価が気になったようでして、自分の魔法が通じるかどうか、試したくなったそうです。まあ、造魔の介入で一網打尽にされてしまいましたけどね」

つまり、メフィスト・フェレスが理事を務める魔法使いの協会が出した新達の評価。それがどれ程のものか気になって襲ってきた――――と言う事だ。今更だが身勝手過ぎる理由である。

男は続ける。

「若い魔法使いが多い為、自制が効きにくいところがあったのですよ」

ソーナが「ああ、なるほど」と相槌を打つ。

『禍の団』で最大派閥を誇っていた旧魔王派、その後に台頭した英雄派、この二大派閥が無くなり、組織の勢力図が乱れに乱れて、彼らの意見も通りやすくなったと言う事ですね？」

「ええ、そうです。もはや組織内で権威と猛威を振るっていたシャルバ・ベルゼブブと曹操はいませんので。今は私が一部指揮しているのですが……なかなか大変でして。今

回の件は彼らのワガママを少々叶えた形でした。『とりあえず、好きにやらせてみろ』と上の意向も多分に含まれていますけれども」

男は更に言葉を続けた。

「それが今回の理由の一点、2番目はこれです」

男が指を鳴らすと右手側の壁が作動して、下に沈んでいった。壁の向こうが見えてくる。

そこにあったのは――――たくさんの培養カプセルが並んだ実験室のような光景だ。機器に繋がれた数多くの培養カプセルその中には何かが入っている。

レイヴェルが眼を逸らし、新達がカプセルの中身を確認すると――――液体が満ちていて、その中に浮かんでいたのは……ヒト型の何かだった。

怪訝(けげん)に思っていると、男が言う。

「フェニックスの涙の製造方法、知っていますか？　純血のフェニックス家の者が特殊な儀式を済ませた魔法陣の中で、同じく特殊儀礼済みの杯(さかずき)を用意して、その杯に満ちた水に向けて自らの涙を落とすのです。涙の落ちた杯の水は『フェニックスの涙』に変化します。その際、心を無にして流す涙でなければ『フェニックスの涙』にはならないとされています。感情のこもった涙は『その者自身の涙だから』、だそうでして。自らの為に流した涙と、他者の為を思って流した涙では効果が生まれない」

男が培養カプセルに指を差す。
「ここが『工場』だと言ったのは、あれを魔法使い達が量産しているからです。上級悪魔フェニックスのクローンを大量に作り出し、カプセルの中で『フェニックスの涙』を生み出させる――――。ここの『工場』は既に放棄させる予定なので、あの者達ももう機能を停止させています」
カプセルの中にいるのは悪魔フェニックスのクローン……それらを使って偽の『涙』を製造していた……。しかも、破棄寸前……。レイヴェルが終始ツラそうにしているのは、これを見せつけられたからだった……。
彼女は生粋（きっすい）のフェニックス家の長女。こんな物を見せられては精神がヤられてもおかしくない……っ。ソーナが目を細めながら嫌悪の言葉を吐き出す。
「……ここで生み出した物を闇のマーケットで流して莫大な資金を集める。考えそのものがおぞましい限りです。あなた方がフェニックス家の者に手を出していたのは、あれを作り出す精度を上げる為ですね？」
「ご理解が早くて助かります、シトリー家次期当主。どうやら魔法使い達の研究でもフェニックスの特性をコピーするのに限界があったようでして、最終手段としてフェニックスの関係者をさらって直接情報を引き出そうとしたそうです。結局、純血の者からでなければ分からない事があったようで、レイヴェル・フェニックスを連れ去る事に

したようです。ああ、心配しないでください。レイヴェル・フェニックス達の身体には何もしていません。『涙』の精度を上げる為に魔力などの詳細データを取らせてもらっただけですから」

「……酷い……酷いよ……こんなのって……どうしてクローンなんて作ったの……」

カプセルを見るレイヴェルは哀しそうに涙を流していた。〝何もしていない〟――――等と言うのは詭弁に過ぎない。奴らはレイヴェルの心を傷付けた……っ。以前まで裏取引で『フェニックスの涙』を得ていた彼らは流通を止められた事で、独自にこのような研究を始めていた。

男は「ギャスパー・ヴラディの情報はこちらにとっても予想外の収穫でした」と言葉を続けるが、その1つ1つが淡々とし過ぎている。長い言葉を吐く割に全く感情がこもっていない。

全てがまるで他人事のように……。男はローブを翻(ひるがえ)して改まる。

「――――さて、我々が欲する要求の最後です。あなた達のような強者と戦いたいと願う者がいるので、お相手をしてもらえませんか？　実は私にとって今回の襲撃はそれが主目的でした。魔法使い達の要望を叶えたのは、あくまで『ついで』でして」

そう言うと男は新達との間に巨大な陣形を作り出していく。光が床を走り、円を描いて輝き出した。その魔法陣は以前にも見た事がある形式で、匙がふと漏らす。

「――龍門（ドラゴン・ゲート）？」

そう、目の前で光り輝く魔法陣の正体は龍門（ドラゴン・ゲート）。力のあるドラゴンを呼び出す際に使われるモノだ。龍門（ドラゴン・ゲート）の輝きは緑色を発している。

龍門（ドラゴン・ゲート）は呼び寄せるドラゴンによって色がそれぞれ異なる。ドライグは赤、アルビオンは白、ヴリトラは黒、ファーブニルは金色、玉龍（ウーロン）は緑、ミドガルズオルムは灰色、ティアマットは青、タンニーンは紫と聞いている。

「……えーと、緑？　緑を司るドラゴンは確か五大龍王（ごだいりゅうおう）の一角、玉龍（ウーロン）！　どうして、玉龍（ウーロン）がここに⁉」

疑問に思う一誠だが、ソーナが首を横に振る。

「……いえ、あの色は緑ではありません……。更に深い……緑色……」

ソーナの言う通り、龍門（ドラゴン・ゲート）が放つ輝きは緑ではない。更に濃い――深緑だった。

よって、呼び出されるのは玉龍（ウーロン）ではない。

「深緑を司るドラゴンっていたっけ……？」

「俺も初耳だな」

新とイリナがボソリと呟く。

「――いたのですよ。過去に深緑を司るドラゴンがね」

銀色のローブの男がそう言い放ち、龍門（ドラゴン・ゲート）の魔法陣が輝きをいっそう深くして――

―遂に弾ける！

グオオオ

濁らせながら、驚きに包まれた声音を漏らす。
『……ッ！　グレンデル……ッ⁉』
〝グレンデル〟――それは先日、アザゼルが言っていた邪龍の名前だった。しかし、グレンデルは既に滅ぼされた筈……。ヴリトラが続ける。
『……あり得ぬ。奴は暴虐の果てに初代英雄　ベオウルフによって完膚なきまでに滅ぼされた筈だ』
ヴリトラと一誠に視線を配らせる巨大なドラゴン――グレンデル。
『――ッ！　こいつはまたおもしれぇ。天龍（てんりゅう）、赤いのか！　ヴリトラもいやがる！　何だ、その格好は？』
「二天龍（にてんりゅう）は既に滅ぼされ、神器（セイクリッド・ギア）に封印されていますよ」
ローブの男の言葉を聞いて、グレンデルは哄笑（こうしょう）をあげる。
『グハハハハハッ！　んだよ、おめぇらもやられたのか！　ざまぁねぇな！　ざまぁねぇよ！　なーにが天龍だ！　滅びやがってよっ！　まあだが、確かになぁ！　目覚めには良い相手だッ！』
グレンデルは一頻（ひとしき）り笑った後に両翼を大きく広げて、体勢を低くする。オーラの質から見てもかなりの危険度が窺（うかが）える。ゼノヴィアとイリナが剣を構えた。
「……やるしかないのか？」

「で、でも、私、伝説のドラゴンと戦うの初めてだよっ！」
「私だってそうだ。ロキ戦でミドガルズオルムもどきやフェンリルの子供達とはやったが……こいつはどう見ても龍王クラスか、それ以上だ！」
ゼノヴィアの言う通り、グレンデルは龍王クラス以上のオーラを体から放っている。おそらく、これまで見てきたドラゴンとは比べ物にならないだろう。緊迫の場面でローブの男が言う。
「赤龍帝（せきりゅうてい）、鎧を纏わないのですか？　あなたとグレンデルの戦いが本題の１つでもあるんですよ」
「言われなくてもそうしてやるさ！　禁手化（バランス・ブレイク）っ！」
『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ）　Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン）　Ｂａｌａｎｃｅ（バランス）　Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!!!』
一誠の全身を覆う赤いオーラが鎧を形成していき、鎧を纏った!!一誠がグレンデルの前に立つ。
『――ッ！　グレンデルだと……？　どうなっている？　こいつは俺よりもだいぶ前に滅ぼされた筈だ』
さすがのドライグも驚きの声音を出していた。
『グハハハハッ、おうっ！　来いよ、ドライグ。久しぶりに殺し合いしようぜ？』
不敵に大きな口の端を吊り上げるグレンデルに、ドライグが訊く。

『俺のように神器（セイクリッド・ギア）に魂を封じられていたようでもなさそうだ。……いったいどうやって現世に蘇（よみがえ）った？』

『細けぇ事は良いじゃねぇか。要はよ、強ぇ俺がいて、強ぇお前がいる。じゃあブッ殺し合い開始じゃねぇかッッ！』

グレンデルは体勢を低くして、一誠に飛び掛かる姿勢を整えた。

『相棒、奴はただ暴れる事しか頭に無い異常なドラゴンだ。……やるなら、徹底的に倒せ。微塵も情けをかけるな』

あのドライグが危険を促（うなが）す程のドラゴン――グレンデルは嬉しそうに言い放つ。

『言うじゃねぇか、言うじゃねぇかよッ！　天龍なんて呼ばれやがってッ！　ドラゴンに天も神も真（まこと）もねぇんだよッ！』

グレンデルから放たれる異様な迫力とプレッシャー。修行関係で戦ったタンニーンとは別物のオーラだ。

『そうだったな。相棒は伝説級のドラゴンとこうして本格的に相対するのは初めてだったな』

「ああ、タンニーンのおっさんと山でサバイバルしたけど、生死を賭けた本当のバトルはしてない。……新とタンニーンのおっさんの二人がかりでイジメられただけだったなぁ（泣）」

一誠はサバイバルでの過酷な記憶を思い出してしまい、染々（しみじみ）と涙を流す。グレンデルが言う。

『おい、お前ら、気が変わったぜ。ドライグと1対1でやらせろ』

グレンデルから出たタイマン発言。だが、それは一誠にとっても好都合だ。溜まりに溜まった怒りをぶつけられる……。

「俺は良いぜ。皆は俺に任せてくれるか？」

一誠が皆に訊き、新が言う。

「やってやれ、一誠。このふざけた連中にぶちかましてやれ！」

「よっしゃ！　任せとけ！」

一誠はドラゴンの両翼を広げて、前方に飛び出していく。

『ＪＥＴ（ジェット）!!』

高速で真っ正面から飛び込んでいく一誠を見て、グレンデルは愉快そうに笑んだ。

『おほっ！　良いじゃねぇかよぉぉっ！　真っ正面からかっ！　そうそう、そういうので良いんだ！』

グレンデルの巨大な拳が一誠に向かってくる。まともに受けたら粉砕される程のオーラだ。一誠は空中で軌道を変えて、鋭いパンチを掻い潜（くぐ）る。

一誠はグレンデルの懐（ふところ）に飛び込んで、内の駒を変える。

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

「龍剛（ウェルシュ・ドラゴニック・ルーク）の戦車（チェンジ）ウウッッ！」

『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ） Ｓｏｌｉｄ（ソリッド） Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）!!!』

鎧の形態が太く厚くなり、両腕の様相も攻撃と防御特化に変貌する。一誠は飛び込み様、グレンデルの顔面に巨大化した拳を打ち込んだ。肘のインパクトで攻撃力を底上げさせて、吹き飛ばす勢いで打つ！

グレンデルは大きく仰け反（のけぞ）り、後方に倒れそうになるが……持ちこたえる。

一誠は着地と同時にトリアイナの『戦車（ルーク）』を解いて通常の鎧に戻り、後方に下がった。正面から拳を受けたグレンデルは自身の頬を擦（さす）る。

『……っ。何だこりゃ？　おいおいおい』

「――――ッ!!」

一誠は酷く驚いていた。トリアイナ『戦車（ルーク）』の攻撃をまともに浴びせた筈なのに、グレンデルは平然としていた。口から少しばかり青い血を垂らすだけで大きなダメージは無い。

グレンデルが鼻息を荒くして愚痴を吐き捨てる。

『こんなもんかよ？　宿主がクソ弱いんじゃねぇのか？　前のお前はもっとイカレた程

に強かったじゃねぇか、ドライグゥ。本当ざまぁねぇなっ！』

どうやらトリアイナでは役不足のようだ……。

『相棒、真「女王（クイーン）」になろうか。今の奴の台詞は聞き捨てならんからな』

「ああ、ドライグ。そうだな！」

一誠は力のある呪文を唱えていく――。

「――我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり！　無限の希望と不滅の夢を抱（いだ）いて、王道を往（い）く！　我、紅（あか）き龍の帝王と成りて――」

「「「汝（なんじ）を真紅に光り輝く天道へ導こう――ッ！」」」

『Ｃａｒｄｉｎａｌ（カーディナル）　Ｃｒｉｍｓｏｎ（クリムソン）　Ｆｕｌｌ（フル）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!』

一誠の体を紅くまばゆいオーラが包み込んで、鎧を紅く染めていく。一誠の鎧の変化を見て、グレンデルが再び哄笑を上げた。

『紅？　何だそりゃ？　おもしれぇっ！　面白すぎんぞ、ドライグゥゥッ！　明らかにさっきよりも強くなったじゃねぇかっ！』

グレンデルが巨体とは思えない程の速度で飛び出す！

間合いを瞬時に詰め、振り下ろし気味に鋭い爪を放ってきた。一誠はそれを高速で飛び退いて避け、カウンターの要領で右の拳をグレンデルの顔面に叩き込んだ。

しかし、パンチを当ててもグレンデルは吹っ飛ぶ気配を見せず……その防御力は筆舌

に尽くし難い。まるで鱗や皮膚自体が鋼鉄であるかのように思えてしまう程だ。
『グレンデルは滅んだドラゴンの中でも最硬クラスの鱗を誇っていた。生半可な攻撃力では突破できないぞ、相棒』
「かと言って、ここじゃあドラゴンブラスターもクリムゾンブラスターも撃てないしな」
ドラゴンブラスター並びにクリムゾンブラスターは攻撃力が高いが、周囲の風景まで一気に吹き飛ばしてしまう規模の砲撃。今いる空間はどの程度の強度で作られたか分からないので、安易に撃つ事が出来ない。下手に撃てばこのフィールドが消滅してしまうだろう……。
しかし、このグレンデルに対する大きな一撃は欲しい。
『相棒、お前の左の籠手には何が収まっている？』
ドライグにそう言われ、一誠は思い出す。一誠には過ぎた物だったが、今なら使える。
『いくぜぇぇぇっ！　ドライグちゃんよぉぉぉっ！』
グレンデルがそう叫ぶなり、腹部を大きく肥大化させる。グレンデルが口から吐き出したのは――――巨大な火炎球だった。
一誠はそれを避ける為、翼を広げて横に飛び退くが――――そこにはいつの間にか距離を詰めていたグレンデルの姿があった。……炎は注意を逸らす為のブラフだった。
グレンデルの巨大な拳が一誠の全身を襲い、衝撃が体中を走り抜けていく……っ！

『……なんて攻撃力だ……っ！　ただのパンチなのに、獅子の衣を纏ったサイラオーグさん以上のパワーを持ってやがる……っ！』

空中で体勢を崩した一誠にグレンデルは叩き落とす要領で手を振り下ろす。背中にまともに喰らってしまい、一誠は床に勢い良く叩き付けられる！

叩き付けられた勢いと衝撃でマスクから血反吐（ちへど）が吐き出され、全身に激痛が走り抜けていく。

『グハハハハハッ！　ぺしゃんこになっちまえよォッ！』

一誠の視界に巨大な足が振り下ろされる場面が映り込む。一誠は体を横に転がして避け、素早く体勢を立て直す。空振りとなった巨体による踏みつけ攻撃が床を大きく砕き、フィールドを振動させた！

一誠は直ぐに上空へ飛び出す！

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト） Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』

一誠は上に飛んだ勢いでグレンデルのアゴを思いっきり蹴り上げた。まともに入っただけでなく手応えもあったが……やはり感触は硬く分厚い。

『ドラゴンは最強の生物だ。その中で龍王、またはそれを超えるクラスは凶悪な程の難敵だ。それだけは忘れるな。……特に「邪龍（じゃりゅう）」とそれに近しいドラゴンは凶暴な上にし

ぶといぞ！』

　全くその通り、現にグレンデルはアゴに蹴りを喰らっても平気で巨大な拳を打ち込んでくる。一誠は両腕を『龍剛（ウェルシュ・ドラゴニック・ルーク）の戦車』状態にして真っ正面から受けるが……パンチの勢いは凄まじく、遥か後方の壁に打ち付けられた。

　激突の痛みで息が詰まる……鎧越しにもかかわらずダメージが尋常ではなかった。

『あいつの攻撃力と防御力は桁違いに高い！』

　一誠とグレンデルはそこから打撃戦にもつれ込んだ。巨体とは思えないしなやかな動きで拳や蹴りを放つグレンデル。隙を突くように尻尾を死角からも打ち込んでくる為、気は一切抜けない……。

「……巨人型のドラゴンってだけで、ここまで動きが多彩になるのか……！」

　新もグレンデルの攻撃力と防御力、技の多彩さに舌を巻くしかなかった……。その上、体格差も歴然。1発でも受けるだけで致命傷ものだと理解できてしまう。

『楽しいなぁッ！　ちっこいくせに俺と打ち合えるなんてよォッ！　たまんねぇぇぇぇよおおおおっ！』

　グレンデルは狂喜に満ちた面構えで愉快そうに攻撃を繰り出していく。一誠のパンチやキック、ドラゴンショットを喰らっているのに、ダメージをものともせずに向かってくる。

『ダメージは確実に通っているぞ、相棒！　だがな、あいつは……頭のネジが元々ハマってすらいない壊れたドラゴンだ。ダメージを受ける事すら楽しんでいる！』

どれだけ当てても全く終わりが見えない……。だが、このままやられっぱなしでいるわけにはいかない。一誠は息を整えた後に、再び突進していく！

フェイントを入れ、空中で軌道を無数に変えながらグレンデルとの距離を詰める。同時に左籠手に収納されていたアスカロンにドラゴンのオーラを蓄積させていく。

そう、聖剣アスカロンは龍殺し（ドラゴン・スレイヤー）――。どんなドラゴンでもこれには耐えられず、致命傷は必至。

グレンデルが再び炎の球を――今度は連続で放ってきた。その数は3発。

一誠は1発目を空中で回避して、2発目は床スレスレを滑空してやり過ごす。

『グハハハハハッ！　いくぜ、ドライグゥウウッ！』

3発目よりも先にグレンデルは現れて、一誠の上空を飛んでいた。更に上からも広範囲の火炎を放ってくる。正面から先程吐き出された3発目の火炎球が襲い掛かろうとしていた。

一誠は右腕に力を込めて、ドラゴンショットを撃ち出した。正面からの火炎球は相殺（そうさい）したが……上からの火炎は躱（かわ）せない。

一誠は火炎の中に飛び込み、膨大な熱が一誠の全身を容赦無く蒸し上げていく……！

『明らかに過去のグレンデルが吐いていたものよりも強力だっ！』

火炎の中を突き進んでいく一誠を見て、グレンデルは心底喜ぶ。

『マジかよっ！　お前っ、マジで最硬じゃねぇかぁぁっ！　こんなバカが俺は好きなんだよぉぉぉぉっ！』

「後輩達の分、お前らに返すぜぇぇぇぇっ！」

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　

……龍殺（ドラゴン・スレイヤー）したるアスカロンの力を上乗せした一撃が殆（ほとん）ど効いてない……!?

驚愕する一誠にグレンデルは醜悪に笑む。

『痛ぇな！　最高に痛ぇぇぇよっ！　でも、良いパンチじゃねぇかッ！　グハハハハハッ！　おもしれぇおもしれぇッ！　この痛みってのが生きてる実感を与えてくれるんだよなぁっ！　こっから始まりだなっ！　良いぜぇっ！　殺し合いだ、殺し合いいっ！　お前と俺！　どっちの体が木っ端微塵（こっぱみじん）に吹き飛んでおっ死ぬか、勝負といこうじゃねぇか！　ドライグゥゥゥゥゥゥゥゥッッ！』

……ここまで頑丈だと、もはや嫌気が差してくる。

『今のダメージを嬉々として受けて立ち上がるのか!?　イカレたドラゴンめ……ッ！』

ドライグも吐き捨てるようにグレンデルを嫌悪していた。グレンデルは腹部を三度膨らませる。火炎攻撃の動作だ。

警戒する一誠だが、グレンデルは体の向きを変えて――――。

『でもよ、その前に予定変更だっ！　てめぇら、全員ぶっ殺し決定だぜぇぇっ！』

グレンデルは新達に向かって特大の火炎球を複数吐き出した！

「くっ！」

「やらせませんわっ！」

ロスヴァイセが前に立ち、防御魔法の魔法陣を強固かつ幾重にも張り巡らせた。朱乃

も堕天使の翼を広げて、雷光の龍を形作る。
「――水よ」
静かで力強い青色のオーラを身に纏わせるソーナ。その周囲に水が発生し、集まっていく。ソーナの魔力で操られた大量の水が壁となって仲間達を覆う。
グレンデルの火炎はロスヴァイセが張った防御魔法の魔法陣に阻まれ、或いは朱乃が放った雷光龍に相殺されて消し飛んだ。爆発と熱の余波がフィールドを包み込むが、ソーナの作り出した水の壁がそれらを防ぐ。
しかし、まだ火炎球は２つも残っている……。
「――んじゃ、やりましょうかね！」
「これぐらいは防いでやる！」
まずは匙が前方に黒炎の魔法陣を発生させ、その中にグレンデルの火炎球が入り込む。ヴリトラの特性で炎の威力を削り、黒い炎がグレンデルの炎を侵食していく。
そこへ新が火竜を放って、匙が止めていたグレンデルの火炎球を完全に消し飛ばした。
そして、最後の火炎球はゼノヴィアとイリナのコンビが――。
「デュランダルで切り刻むっ！」
天閃と破壊の組み合わせで、剣速と威力を高めて炎を一刀両断にし、そのまま高速の

斬撃で火炎球を細切れにしていく。細切れになっても尚グレンデルの火炎は勢いを無くさなかった。

「最後は私ね！」

最後の仕上げとばかりにイリナは氷の仕様にしたであろう量産型聖魔剣で細切れにされた火炎球を全て氷漬けにした。これで仲間を襲ったグレンデルの火炎球は全て消滅。……しかし、今の行為はあまりにも卑怯だった。

「てめぇっ！　一対一だって、言ってただろうがっ！　なんで俺の仲間に攻撃しやがったっ⁉」

一誠がそう怒鳴りながらグレンデルの顔面を殴り飛ばすが、グレンデルは鼻血を手で拭いながら大きな口元を嫌味に吊り上げる。

『わりいわりい、ぶっ殺すのが好きだからよ。ああやって適度に殺しを入れていかないとテンションが維持できねぇのよ。でも、失敗しちまった。強ぇじゃねぇか、お前の仲間はよぉ。――全員ぶっ殺すッ！　殴ってッ！　なぶってッ！　踏んでッ！　噛み砕いてッ！　最後は消し炭にしてやんよぉぉぉぉぉッ！』

グレンデルの銀色の瞳は殺意と殺気で凶暴なぐらい光っており、その敵意が一誠だけでなく新達にも向けられた。

「兵藤くん！　もう1対1に付き合う事はありません！　全員でかかりましょう！」

「ソーナの言う通りだ。向こうがタイマンしねぇなら、こっちも全員でやり返してやる」
新とソーナの言葉に一誠も応じるが、ダメージも重なって紅の鎧が限界に近付いている。
『んじゃ、二戦目と行こうか、赤い――いや、紅（あか）い龍帝ちゃんよぉぉぉぉっ！』
グレンデルが翼を広げて、飛び出そうとした時だった――。
パチ……パチ……パチ……パチ……。
突然小気味良く響く拍手の音。音のする方向に視線を向けると――そこには1人の男が立っていた。白衣姿の研究員。
「おや、どうかされましたか？　あなたには用が無かった筈ですけど？」
ローブの男がそう言うと、研究員は小さく笑い始める。
「いえいえ、実に面白そうな展開でしたので。少し横槍を入れて差し上げようと思いまして」
ズズズズズ……ッ！
研究員の体から黒い霧が発生し、包み込むように覆い尽くしていく。そして、振り払われた黒い霧の中から姿を現したのは――。
「Ｂｏｎｊｏｕｒ（ボンジュール）、皆さん」
「――ッ！　てめぇ……キリヒコ……ッ！」

新が憎々しげにその者の名を呼ぶ。そう、新達に何度も煮え湯を飲ませてきた天性の悪――ユナイト・クロノス・キリヒコ。奴の登場に新達は警戒心を強める。

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、随分と嫌われているようですね」

「当たり前だろ。お前が出てくるとロクな事にならねぇからな……！　この状況で何しに来やがった⁉」

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、今回は我々の新顔をご紹介しようと思いまして」

――〝新顔〟と意味深な言葉を放った直後、キリヒコは指を鳴らす。すると……キリヒコの両隣に黒い紋様が浮かび上がり、そこから何かが現れる。

魔法陣から姿を現したのは――１人めは赤い革製のロングコートを羽織った青年。もう１人は……誰が見ても分かる程の異形だった。

燃え盛る炎、無数の人魂や恨みがましい亡者の顔が浮かび上がった体。般若のような顔に両肩から生える鬼の髑髏。

両者の全身から滲み出てくるオーラは異質なものだった……。

「な、何だ、あいつら……？」

「……気を付けろ。あの２人、只者じゃねぇ……っ」

一誠も新も、他の皆も姿を見ただけなのに嫌な汗が噴き出し、息苦しさまで感じてくる。それ程の重圧がキリヒコ曰く〝新顔〟の２人から発せられているのだろう……。

そして、赤いコートを羽織った青年が口を開く。
「おおっ、あれがキリヒコの言っていた退屈しない相手とやらか？　なかなか良いオーラを出している。見ただけで分かるぞ、強そうだな」
「お気に召していただけましたか？」
「ああ、勿論だとも。周りの奴らも、巨大なドラゴンも強そうだ。お前もそう思うだろ？」
赤いコートの男がもう1人の異形に話し掛けるが、異形の方は溜め息を吐いた後、額に手を当て、頭を垂れて嘆息する。
「ハァ……頭が痛え」
いきなりの頭痛宣言に疑問符を浮かべる面々。すると、直ぐに異形が垂れていた頭を上げる。
「あぁ、悪い悪い。こっちの話だ。お前らが弱そうに見えたから目眩がしちまった」
「いきなり失礼じゃない⁉」
「うたく、うるせぇ女だ。ハァ……頭が痛え」
異形の言い草に憤慨するイリナに対し、異形は更に煽るように頭を痛める仕草を見せる。それを見てイリナはプク～っと頬を膨らませ、不機嫌な表情となる。
不機嫌になったのはグレンデルも同じだった。

『あぁん？　クソチビどもが舐めた口を開いてくれんじゃねぇか？　いきなり現れて俺の楽しみを邪魔してくれやがってよぉ』
「おぉっ、それはスマンな。俺で良ければ相手になろう」
　男はそう言うと着ていた赤いコートを脱ぎ捨てる。その下から現れたのは見事なまでに鍛えられた筋肉だった。体脂肪率一桁と言わんばかりの肉体美で、まさに鋼の肉体と呼ぶに相応しかった。
　赤いコートを脱ぎ捨てた男は「ムンッ」と腕の筋肉を見せつけ、更に「ムンッ」と背筋も見せつける。
「何してんだ、アイツ……？」
「なんでいちいちポーズ取ってんだよ！」
「ん？　その方がカッコいいと思ったからだ」
　男の発言に新と一誠はガクッと体勢を崩す……。グレンデルが哄笑を上げる。
『グハハハハハッ！　面白ぇじゃねぇか、クソチビがよぉッ！　その自慢の肉体ごとペシャンコにしてやんよォォォォォォォォォォォォッ！』
　グレンデルは巨大な拳を振り上げ、男めがけて振り下ろす。拳が巻き起こす風圧で空間が揺れる。
　男の方は――――微動だにせず、グレンデルの巨大な拳を待ち受ける体勢を取ってい

た。このまま受けるつもりなのだろうか……。体格差は歴然、グレンデルは防御力だけでなくパワーも桁違い。一誠でさえ1発食らっただけで大ダメージを受けた。

グレンデルの拳が男の眼前にまで迫り――――極大の衝撃が発生した！土煙が立ち込め、風圧がその場の空間を大きく震動させる……！

誰もが無事では済まない――――そう思った矢先、目の前でとんでもない光景が映った。

――――あのグレンデルの拳がいとも簡単に止められていた……っ！　しかも、片手で……っ！

その光景に新達は驚愕し、グレンデルも『あっ？』と眉根を吊り上げていた。グレンデルの拳を左手で止めた男はニヤリと笑みを浮かべる。

「おおっ、さすがはドラゴン。物凄いパワーだ。なら、俺も喜んで一撃を返させてもらおうっ！」

男はグレンデルの拳を払い除け、高く跳び上がった　。グレンデルの眼前に跳んだ男は右の拳を握り締め、筋肉を脈動させ、血管を浮かび上がらせる。全身から危険なオーラを滲ませ、握り拳が赤熱し始める。

ドゴォッッッ‼

男の赤熱した拳がグレンデルの顔面を捉え、天地を揺るがす程の轟音が鳴り響く！

赤熱の一撃を食らったグレンデルは顔がひしゃげ、血反吐(ちへど)を吐き散らし、歯も数本吹き飛ぶ。

『――――――ッ⁉』

グレンデルは絶句し、その巨体が倒れる……！

倒れた巨体が地を揺らし、着地した男は肩を回す。衝撃の光景を目の当たりにした新達は未だに頭の整理が追い付いてなかった。

『あのグレンデルを一撃で……っ⁉』

驚愕一色に包まれる面々。そんな最中、もう1人の異形が新達のもとへ足を進めてくる。

「ハァ……頭が痛ぇ。お前ら、ノンビリ見物してる場合かよ」

バキッッ！

不快な音が鳴ると同時に異形の腕から骨が飛び出し、その飛び出た骨を引き抜く。引き抜いた骨は形を変え、禍々(まがまが)しい銃と化す。

異形は即座に銃口を向けて、炎の弾丸を撃ちまくる。新と一誠は前線に立って銃撃を弾き返していく。しかし、異形は更に苛烈な銃撃を繰り出し、炎の弾幕射撃が新と一誠の体を痛め付ける。

不気味な唸り声を上げながら弾幕射撃を続ける異形。苛烈極まる銃撃の嵐に新と一

誠は次第に圧され、ソーナ達にも飛び火してしまう。彼女達も何とか防御魔法陣を展開して最小限のダメージに留めようとするが……耐えられる筈も無く、防御魔法陣は容易く破壊されてしまう。

炎の弾幕射撃に肌を焼かれ苦悶の表情を浮かべる新達に対し、余裕綽々と言った様子で異形はフウッと銃口から漂う煙を吹き散らす。

「……っ！　イカレてやがる……っ！」

「チクショウ……ッ、何なんだっ、お前らは⁉」

新は憎々しげに毒づき、一誠が声を荒らげると――――ようやく男と異形は自身の名を語った。

「俺は大罪の名を預かる『深淵の喰闇』の１人、『色欲の喰闇』のハート――――ハート・メルトダウン」

「オレはエンドヴィル・ジョロキア、『嫉妬の喰闇』だ。ハァ……頭が痛えぜ」

ハート・メルトダウン、エンドヴィル・ジョロキア

「ルクスリア・ワン？　インウィディア・ツー？」

一誠は聞き覚えの無い言葉に疑問符を浮かべるが、新は暫し考えた後、言葉を絞り出す。

「……ルクスリア、インウィディア。確かラテン語で前者は色欲、後者は嫉妬を意味する――七つの大罪……」

〝七つの大罪〟――それはキリスト教に於いて罪の根源とされる7つの悪しき感情、欲望を意味する言葉である。

傲慢、嫉妬、憤怒、色欲、強欲、暴食、怠惰――。その中でハートは色欲、エンドヴィルは嫉妬の名を冠する。

新は唐突に嫌な予感を頭に過らせ、憎々しげにキリヒコを問い詰めた。

「まさかとは思うが……あと5人もこんな奴らがいるんじゃねぇだろうな？」

その言葉に皆の視線がハート、エンドヴィル、キリヒコに集中し、キリヒコは嫌味タップリの含み笑いを見せて答えた。

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、勿論いますよ。……これから、ね」

「これから、だと……っ？」
「Ｏｕｉ、これから始まるのですよ。新しき深淵の時代が」
　キリヒコの言葉に新を含め、一誠達は戦慄せざるを得なかった。新は音が鳴る程に奥歯を噛み締める。
「Ｍｏｎｓｉｅｕｒ　ハート、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ　エンドヴィル、ウォーミングアップも済んだ事ですし……彼らと遊んで差し上げては如何でしょうか？」
「おおっ、そうだな。実を言うとさっきから試してみたくてウズウズしていたんだ。特に赤いヤツ――――赤龍帝だったか？　何故か無性にヤツと戦いたい気分になっている」
『色欲の喰闇』――――ハートが一誠の方を向き、ワッシワッシと腕や肩を回しながら言う。
「赤龍帝、お前の力を俺に見せて見ろ」
　自信満々に宣戦布告してくるハート。一誠は先のグレンデルとの戦いで肉体を傷めているが、ここで退くわけにはいかない……。
「……良いぜ、見せてやるよ！」
　一誠は背中のブーストを最大限にまで噴かし、ハートに向かって突っ込んでいく。力を倍増させ、握り締めた拳を突き出した！

それに対し、ハートは――まるで〝受けてやる〟と言わんばかりに両手を広げていた。一誠は憤慨しながらも拳を叩き込んでいく！

一誠の拳打はハートの腹部に突き刺さり、衝撃が辺り一帯に広がる。無防備とも言えるハートに強烈な一撃を食らわせた一誠だが――。

「なかなか良いパンチだな。先程のドラゴンには劣るかもしれないが、芯のこもった一撃だ」

「な……っ⁉」

ハートは平然とした様子で一誠の拳打を好評価していた……っ。一誠は愕然とするが、すぐに二撃め、三撃めの拳打を繰り出す。ハートの顔面やボディに何度も何度も打ち込み、豪快な打突音と衝撃が鳴り響く。

一誠は更に倍加の音声を鳴らし、右腕をソリッド・インパクト仕様に肥大化させ――

――力の限り撃ち込んだ！

『Ｃｈａｎｇｅ（チェンジ） Ｓｏｌｉｄ（ソリッド） Ｉｍｐａｃｔ（インパクト）!!!』

ドデカく、鈍く、重い一撃がハートに炸裂し、衝撃がフィールド全体を揺らす！　さすがにこれだけの攻撃をまともに受ければ無事では済まないだろう……。

そう思っていた矢先――。

「……良いっ。やはり良いパンチだ。この威力、この気迫、どれを取っても俺好みの素晴

らしいモノだ！」

「――――っ⁉」

もはや言葉も出なかった……。グレンデルとの戦いで消耗しているとは言え、紅の鎧と化した一誠の攻撃をまともに受けて――――ピンピンしている……っ！

口元から多少の血を流しているものの、ハートは倒れるどころか後退すらしなかった。グレンデル以上に驚異的な防御力……っ。ハートは歓喜した様子で叫ぶ。

「これが赤龍帝か……！　対峙したばかりだが、分かるぞ！　幾多の修羅場を乗り越えてきた強者の重みだ！　しかも、まだ伸び代があると見た！　震える……震えるぞ……ッ！　この強さを受け止めて――――俺も強くなるッッ！」

ハートの体が赤熱し始め、彼の周りの空間が熱によって歪んでいく……っ。やがて、ハートの全身が赤い熱に染まり――――その姿をも変えていった！

蒸気を噴出しながら現れたのは……大柄の異形の姿へと変貌を遂げたハートだった。血の如く赤い体色、頭部から伸びた大きな2本の角。剥き出しとなった心臓に、ヒトの頭蓋骨のように露出した口元。

先程の好青年とは似ても似つかぬ不気味な様相だった……っ。姿が変わった途端、プレッシャーが跳ね上がり、ハートはゆっくりと足を進める。

「さあ、今度は俺の攻撃を受けてもらうぞ。嫌とは言わないよな？　赤龍帝」

グレンデルを吹っ飛ばした時と同じように右腕が赤熱し始め、ハートはズンズンと歩みの速度を速める。

ハートの赤熱を帯びた拳が突き出され、一誠はそれをソリッド・インパクト仕様の腕で迎え撃とうとした。拳同士が衝突した瞬間、ジュウウウウウッと焼けるような音が聞こえてくる……！

「――――ッッ！　ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

一誠の口から絶叫が漏れ、反射的に飛び退く。それもその筈……肥大化させた籠手が飴のように溶かされ、手を焼かれていたからだ！

紅の鎧をあっという間に溶かす規格外の熱量に驚く一同。ハートは赤熱現象を止め、再び一誠に向かって歩みを進めていく。

「どうだ、俺の拳の威力は？　なかなかのモノだろう？　ただ、今は調整段階だから乱用し過ぎると暴走するかもしれんのでな。暴走すると俺自身が参ってしまう。そうならないようにする為、俺はもっともっと強くなりたい。だから――――もっと打ち込んで来い！　俺はそれを受けきって、更に強くなるッッ！」

アピールするかのように両手を広げ、攻撃を促してくるハート。硬派な言動とは裏腹に、末恐ろしい力を見せつけてくる……っ。

さすがの新も呆気に取られ、ハートの底知れぬ強さに戦慄する……。しかし、敵は1

人だけではない。
「何ボケ～ッとしてやがる？　テメェはオレの相手をしてくれよぉ」
言うや否や銃撃をかましてくる異形――――エンドヴィル・ジョロキア。我に返った新はすぐに雷炎モードを発現し、エンドヴィルの銃撃を全て弾き返した。
「そうだったな、悪かったよ。こっちも出し惜しみは無しだ」
「やっとヤル気になったかよ。ハァ……頭が痛えぜ」
気怠そうに言いながらも、銃撃を再開するエンドヴィル。苛烈な弾幕射撃を新は躱し、または弾き返しながら距離を詰めていく。
雷を帯びた火竜を両手から撃ち放って、飛んでくる銃弾を焼き払う。それを見たエンドヴィルはすぐに得物を変形させる。銃身を起こすと銃口から刃が伸び、1本の剣と化した。
襲い掛かってくる2匹の火竜を、エンドヴィルはそれぞれ真っ二つに切り裂く。両断された火竜はそのまま跡形も残らず消え去る……。
新は間髪入れず全身から雷炎を噴かして、エンドヴィルに突っ込んでいく！　雷炎を纏わせた拳や蹴りをエンドヴィルの顔面、ボディとあらゆる場所に叩き込んだ。
攻撃を打ち込まれたエンドヴィルは「チィ……ッ！」と舌打ち。剣を握る手に力が入り、下からの斬り上げで新の雷炎の拳を弾き返し、その後も全ての攻撃を素早い剣戟で

相殺していく。
「クソ……ッ！　一撃一撃が重い……っ！」
「アァン？　オレの攻撃が重てぇってのか？　そりゃそうだ。テメェには嫉妬が足りてねぇからな」
「……嫉妬だと？」
「あぁ、そうさ。オレには分かるぜぇ？　テメェからは嫉妬の匂いがプンプンしてくんだよ」
「俺が誰かに嫉妬してるってのか？　ふざけんな！　なんで俺が――――。」
「自覚ねぇのかぁ？　可哀想な奴だなぁ。でもまぁ、いずれ気付くぜぇ？　テメェが誰に嫉妬してんのか。そして、その嫉妬にまみれたテメェの醜い本性さえもなぁ！」
エンドヴィルが振り下ろしてくる怨嗟のオーラが込められた剣戟を、雷炎を纏わせた両手で受け止める新。しかし……それを見越していたエンドヴィルは眼を妖しく光らせる。
――――刹那、エンドヴィルの両肩から突き出ている鬼の髑髏が新を睨み付け、口を開く。口腔内に禍々しいオーラが溜まり――――放射される……ッ！
「……ッ！」
新は咄嗟に体を限界まで反らして砲撃を躱そうとするが、完全には避けられず兜と体

の前面を焼かれてしまう……っ。放射された禍々しいオーラはそのまま疑似空間の端まで飛んでいき、空間内を震動させる。

新は直ぐにエンドヴィルの顎に蹴りを食らわせ、そのまま後方へ飛び退いていった。先程の砲撃によって溶かされた兜は端々(はしばし)から壊れ、胸元からも血と焼かれた異臭が漂(ただよ)う。

壊れた兜の隙間から見える新の苦悶に満ちた表情。エンドヴィルは顎を押さえて首をコキコキ鳴らすと、再度溜め息を吐く。

「チッ、脆(もろ)い空間だな。これじゃあ本気を出す前に崩壊しちまうじゃねぇか。ハァ……頭が痛(いた)えぜ」

理不尽に不満を垂れ流すエンドヴィル。しかし、その強さは本物……っ。ハートも一誠の攻撃を受け続け、それ以上の攻撃で返してくる……！

一誠もハートの恐ろしいまでの打たれ強さと攻撃力に舌を巻く他無く、肉体の疲労度もダメージもピークに達していた。エンドヴィルの横に並び立つハートは、まだまだ余力ありと言った雰囲気を見せている。

「くそ……っ！　何なんだよ、コイツのデタラメな強さは……っ⁉」

「一誠、そっちも苦戦してるみたいだな。……ったく、こんな奴らがあと5人も控えてんのかよ。さすがに嫌になってくるぜ……」

毒づく新。その通り、キリヒコが率いる戦力――――『深淵の喰闇（ダーク・ロード）』はこれが全てでは無い。ハートもエンドヴィルもその一部に過ぎない……っ。

一方、ハートは肩や腕を回しながら高揚した様子で言う。

「良いぞ、ギアが上がってきた。エンドヴィル、この調子で行けば俺もお前も今以上に力を付けられそうじゃないか？」

「だろうな。まあ、こいつらが俺達に対応できればの話だが。ハァ……頭が痛（いて）えぜ」

「それなら心配いらんだろう。奴らも俺達同様、まだまだ強くなる。つまり、俺達にも奴らにも伸び代があるって事だ」

ハートは喜びを表すように構え直し、エンドヴィルも剣の切っ先を新に向ける。その直後、すぐ近くで大きな地鳴りが響いてくる。音の正体は……先程ハートに殴り倒された筈のグレンデルだった……！

グレンデルは口元から血を流し、ひしゃげた顔を無理矢理直して新達とハートを睨み付ける。

『グハハッ、グハハハハ……ッ！　やってくれたじゃねぇか、クソチビどもがよぉ……っ！　今の攻撃、ムカついたと同時に最高に痛くてイっちまいそうだったぜぇ……っ！　現世にはまだまだ楽しい奴らがワンサカいるってこったなぁ……！　良いぜぇ、こうなりゃトコトンぶっ殺し合いだアアアアアアッッ！』

「おおっ、まだ立てるのか。さすがはドラゴン。そうでなければ張り合い甲斐が無いからな」

グレンデルが凶悪な視線と敵意を向け、ハートも嬉しそうにグレンデルの殺意を受け入れる。エンドヴィルは新達の方に視線と怨嗟の刃を向ける。

三者三様の凶悪なオーラが揺らめき、飛び出す寸前……奴らの動きが止まる。

理由は明白――――グレンデルやハート達の足を黒い影のようなものが包み込み出したからだ。怪訝に思って影――――否、闇の発生源に目を向ける。

……不気味な闇を周囲に生じさせているギャスパーがそこにいた。赤い双眸を妖しく輝かせて、全身をダラリとしている。

闇が蠢き、グレンデルやハート達に向かおうとしていた。ギャスパーの隠された力は怖々としたオーラを放っており、闇は更に広がりを見せて、この空間を飲み込もうとすらしようとしていた。

『……何だ、ありゃ。まあ良い。あれもやって良いって事か？　良いんだよな!?　強ぇクソガキがいっぱいじゃねぇかッ！　良い時代だッ！　破壊し甲斐があるよなァッ！』

グレンデルはこの状況を嬉々として受け入れようとしていた。……何処までも狂ったバトルマニアである。

「クソ！　あのバトルマニアがっ！　俺の後輩まで手を出させてたまるかよっ！」

一誠がグレンデルの目標を自分に戻そうと、注意を向けさせようとした時だった。
「――――いえ、グレンデル。そこまでにしてください。実験は成功していたようです。本来ならば、木場祐斗もここにいればより良い調査が出来たのですが、充分でしょう」
ローブの男がグレンデルに制止の言葉を投げるが、グレンデルは途端に不満な叫びを発した。
『止めんなよ止めんなよッ！　こっからだ、こっから！　ぶっ殺しってやつぁよッ！　まずはお互い最高にハイになるのをぶっ放してからが本番よッ！　潰し合いをやらせてくれよッ！　せっかく、あの時の無念を晴らせるんだッ！　今度こそ思う存分、思うがままにいろんなもんを喰らって、喰らわれて、壊して、壊されて、ぶっ殺すんだよッ！』
……本当に凶暴の一言に尽きる。ここまで戦意と殺意にまみれたドラゴンを見たのは初めてだろう。同じくバトルマニアのヴァーリが可愛く見える程だ。
敵味方見境無しに敵意と殺意を剥き出しにしていた。そのグレンデルにローブの男は冷たく言う。
「――――また、骸と化したいのですか？　あなたはまだ調整段階なのです。これ以上無理をすれば……」
それを聞いた途端にグレンデルは舌打ちして、振り上げていた拳を下ろす。

『……チッ、ったく、敵わねぇな。それを盾にされたらよ。止めるしかあんめぇよ』

先程までやる気に満ちていたグレンデルが拳を納めた。『骸』、『調整段階』とはどういう事なのか？

ローブの男の耳元に通信用の魔法陣が唐突に出現する。男はその魔法陣に耳を傾け、一度頷いた。

「良い報告です、グレンデル。白い方で大分苦戦しているとの事です。今度はそちらに行きましょう」

『おほっ！　今度はアルビオンかよッ！　たまらねぇなッ！』

ローブの男の言葉を聞き、グレンデルはまた口元を吊り上げていた。〝アルビオン〟、〝白い方〟……それはヴァーリの事だろう。黒歌達が家に居なかった理由にも合点がいく。グレンデルが一誠に指を突きつける。

『クソのドライグ、根暗のヴリトラ、それに上半身裸の筋肉野郎――――は、何か姿が変わってんな。お前らとの遊びはお開きだ。次だ、次。次はあれだ、殺すよ。３匹まとめて殺すからな？　グハハハッ！』

龍門が開き、魔法陣が深緑色の発光を出しながらグレンデルを包み込んでいく。光が止むと――――そこにグレンデルの姿は無かった。それを確認して、ローブの男はフードを取り払う。

そこにあったのは銀髪の青年――――。その青年の顔には何処となく覚えがあった。新の脳裏に浮かぶのは――――いつもお世話になっている最強の『女王（クイーン）』の顔。

銀髪の男は言う。

「私はルキフグス、ユーグリット・ルキフグスです」

「……っ！　――――ルキフグスだと……っ⁉」

〝ルキフグス〟の名に驚く新と一誠。確かにユーグリットと名乗る男の顔にはグレイフィアの面影（おもかげ）があった。

「あんたがボスってわけじゃないんだろう？　じゃあ、いったい誰が『禍の団（カオス・ブリゲード）』の残党を纏め上げたって言うんだ⁉」

匙が訊くと、男――――ユーグリットは目元を細めるだけだった。

「『禍の団（カオス・ブリゲード）』現トップの正体はいずれ分かりますよ」

ユーグリットの言葉を聞いてソーナは何かを得心した。

「……なるほど、この町に侵入し、魔法使いを招き入れたのはあなたですね？　グレイフィアさまと同質のオーラを有する者であれば、結界を通過できてもおかしくはないのかもしれません」

それを聞いてユーグリットは冷淡な声音になる。

「姉に、グレモリーの従僕（じゅうぼく）に成り下がったグレイフィア・ルキフグスに伝えておいてくだ

さい。――あなたがルキフグスの役目を放棄して自由に生きるのであれば、私にもその権利はある、と」

――〝姉〟――

その言葉から察するに、この男――ユーグリットはグレイフィアの親族に当たるのだろう……。

ユーグリット・ルキフグスは転移の魔法陣へと消えていき、同時にこのフィールドの端々が役目を終えたように崩れだしていく。ピースが欠けていくように空間が崩壊を始め、次元の狭間特有の万華鏡の中身のような景色が見えだしていた。

もはや数分とも保たないだろう。謎の力を放っていたギャスパーも再び倒れてしまった。しかも、先程までいた筈のキリヒコ、ハート、エンドヴィルも既にこの空間から姿を消していた。

「この領域は崩壊するようです！　早く、転移魔法陣で脱出しましょう！」

ソーナの指示のもと、朱乃が地下空間に帰還する為の魔法陣を直ぐに展開する。ギャスパーを回収して、皆が魔法陣の中央に集まった。

すると、レイヴェルが手元に小型魔法陣を発生させて培養カプセルの方に放っていく。カプセルの1つに放った魔法陣が当たり、1度輝いた後に消えていった。

「……せめて、これぐらいはさせてもらいますわ」

レイヴェルはそう意味深に呟いていた。
「なるほど。そういう事ですか」
ソーナもそれを見て何かに気付き、同様に小型魔法陣をカプセルの方に投げていった。
２人の行動を訝しげに感じながらも、新は転移の光に包まれていく中で、今回起きた様々な事象を脳内で反芻する。
グレイフィアの弟を名乗るユーグリット・ルキフグス、滅んだ筈のドラゴン。更にはユナイト・クロノス・キリヒコが率いる新たな脅威――――『深淵の喰闇』。
これから何が起ころうとしているのか……？

「お二人とも、どうでした？　彼らと一戦を交えた気分は？」
「物足りなかったところもあるが、また次の機会にしよう。これからが楽しみだ」
「ハァ……オレはまだまだ喰い足りない気分だぜ。せっかく良い具合に嫉妬を孕むヤツを見つけたってのに」
「それはさっきまでお前と戦っていた男の事か？」

「あぁ、間違いねぇ。ヤツは仲間面(なかまづら)しておきながら、実は知らねぇ内に嫉妬心を抱(いだ)いてやがる。次に会った時はそこを攻めてやるさ」
「そういうやり方、俺はあまり好きじゃないな」
「好みなんざどうでも良い。ハート、テメェは赤龍帝(せきりゅうてい)とやらの相手でもしてろ。……それで、キリヒコ。次のヤツが目覚めるのはいつ頃になるんだ？」
「もうすぐですよ。それにフェニックスのクローンに関するデータは採取済み。私が密かに採取しておいたレイヴェル・フェニックス――純血のフェニックスのデータも揃っていますので、もう1人の方も目覚めるのは遅くありません」
「なるほどな。で、次に目覚めるのはどんな連中だ？」
「憤怒を冠する『憤怒の喰闇(イーラ・スリー)』。そして、強欲を冠する『強欲の喰闇(アワリティア・フォー)』です」

朝日が昇ろうとしていた。戦いを終え、レイヴェル達を奪還できた新達は疑似フィールドから帰還。上に戻り、駅内でグッタリとしていた。
一誠は真『女王(クイーン)』などの昇格や先のシド戦、グレンデル戦、更にはキリヒコと共に現れた『深淵の喰闇(ダーク・ロード)』――ハート・メルトダウンとの戦いで疲弊しきっており、駅内休

憩所の椅子に座っていた。

新もブラッドマン、エンドヴィルとの戦いで蓄積された疲労を抱え、同じように椅子に横たわっていた。ソーナ達は事後報告の為、駅を出てスタッフと話し合っている。ギャスパーは救護班に運ばれ、アーシア達もそれに付き添っている。

ギャスパーは命に別状は無いそうだが……やはり、例の謎の力は不気味だった。彼の身にいったい何が起きているのか？

……しかし、現時点で問題視しなければならないのはグレンデルの防御力、龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しが効かなかった点である。

ここでソーナが言っていた言葉を思い返す。

「……彼らの実験とやらの真意は測りかねますが、あのグレンデルは……龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しに耐えた。防御力が桁違いだったのは間違いありません。――しかし、何かを付与されているのも間違いないと思います。さすがに紅（くれない）の鎧を纏った兵藤くんの龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しをまともに受けて、あのダメージは不可解です」

恐らく龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しへの耐性を付与したのだろうが……実際にそんな事が可能なのか？

「実験」――フェニックスの事はあくまでも〝ついで〟、本当の目的はグレンデルをぶつける事。そして、グレンデルを引っ張ってきたのが――グレイフィアの弟、ユーグリット・ルキフグス。

確かに顔には面影（おもかげ）があり、フードを払った後に発したオーラも同質のものだった。グレイフィアに近しい質のオーラなら、この町に侵入するのも魔法使いを招き入れる事も出来るだろう。

結局、あのフィールドにあった「偽フェニックスの涙」製造の中身も回収する事は叶わず、捕らえた魔法使い達から情報を引き出すしかない。

「……とんでもない事になっちまったな。吸血鬼に魔法使いとの契約、造魔（ゾーマ）も絡んできたってのに……また『禍の団（カオス・ブリゲード）』かよ……っ」

新は天井を仰（あお）ぐ。旧魔王派の　シャルバ、英雄派の曹操。何度も首謀者が入れ替り立ち替り、今度はルキフグスと滅んだ筈のドラゴンが立ち塞がる。それに加えて造魔（ゾーマ）、キリヒコ率いる『深淵の喰闇（ダーク・ロード）』。またもや難敵が増えていく……。

「新さま……お茶を買ってきましたわ」

レイヴェルが自販機で買ってきたであろう缶のお茶を手渡してくる。小猫も隣にいた。新はそれを受け取り、レイヴェルと小猫が新の隣に座る。少しの静寂、その間に新がお茶を飲み干し――――レイヴェルは言った。

「……私、許せません」

それはハッキリとした口調だった。先程まではぐれ魔法使い達が作った『工場』の有り様を見て泣いていたレイヴェルとは思えない程、瞳は強く輝いていた。

「あんな事、絶対に許せない」
小猫がレイヴェルの手を取る。
「……私もだよ。だから、レイヴェル、頑張って」
小猫は笑みを浮かべ、それだけ言い残してここをあとにする。途端にレイヴェルは顔を赤らめた。
「……新さま、少しだけ昔話をしても良いですか？」
そして、彼女は意を決したように言った。
「私は幼い頃、執事が読んでくれた様々な英雄譚（えいゆうたん）に心を踊らせておりました。こんな英雄を支える女性になりたいと幼心に夢を膨らませていたのです。けれど、大きくなるにつれて、いつの間にか、それを忘れ去っていて……」
レイヴェルは真っ直ぐに新を見つめる。
「ですが、ふと蘇（よみがえ）ったんです。主（あるじ）を――――好きな女性の為にライザーお兄さまと戦った新さまを見て、幼い頃に抱（いだ）いていた夢が徐々に蘇って……気付いたら、新さまの事をつぶさなまでに調べていました。優しくて、時々厳しくて、性的で、欲望に忠実だけど、誰よりも仲間想いで、夢にひたすら向かって突き進む。その姿は、私の周囲――――上流階級には無い輝きで満ちていました」
「俺が……輝いていた？」

「――――新さまの夢を傍で見ていたい。本当にふとした切っ掛けで抱いてしまった夢です。私の勝手な幻想……。ここに来たのも私の身勝手な思い上がり……。でも、新さまのマネージャーに任命されたのが本当に嬉しくて……。叶う事ならこれからもおそばでお仕事がしたいって……」

「……俺はお前を駒王学園で救えなかった。それだけじゃない。レイヴェルは幼い頃から夢を抱いてたんだろ？　忘れかけていたものの、今は立派にその夢を思い出して、追いかけようとしている。……けどな、俺は違う。……ガキの頃から夢を持とうとさえしなかった。シビアで真っ黒な現実――――裏社会の中でやさぐれて、廃れて、夢なんてものは直ぐに覚めちまうと見限っていた。一時凌ぎにしかならない目の前の娯楽で欲を満たし、堕落した日々を塗り潰していった。結局、俺は独りだと夢を持てなかった……。結局、俺は独りだと夢を持つ事すら出来ない――――薄っぺらな見栄だけ張ってるハリボテ男なんだよ……」

　レイヴェルの言葉を皮切りに、新も自分の抱いていた心情を吐露し始めた。幼い子は誰だって夢を抱く。それがどんなに途方も無い夢だとしても……。

　しかし、新は泥沼とも言える裏社会で生きてきたゆえ――――夢を抱くなんて考えをしなかった。ただ単に前へ進み、目に映る娯楽で気分を盛り上げ、淡い期待など抱かずに生きていく。人生はドラマや映画、ミュージカル等とは違う。夢を叶えられる者は僅か

一握り。他は全て忘れるか、諦めるか……そんな人種しかいない。新はそう割り切っていた。

しかし、レイヴェルは違った。

「助けに来てくれましたわ。新さまは、あの不気味な怪物と戦ってまで、私達を助けに来てくれましたわ。私は無事です。生きてます。――信じてました」

レイヴェルが新の手を取り、輝くような笑顔を見せる。

「――私のヒーローが必ず助けに来てくれるって信じてました。とても嬉しかったんです。それだけはお伝えしたくて……」

「……っ」

新は心の底から嬉しさを感じた。彼女がマネージャーでいてくれたら、どんなに心強いか。新は改めて言った。

「――レイヴェル、俺はもっと強くなる。相手が誰であろうと強くなる。――お前さえ良かったら、今後も俺のマネージャーをしてくれないか？」

「共に盛り上げていきたいと言う野望も抱いてますわ！」

「ああ、ありがたい。俺の足りない部分の補佐をしてくれると助かる。よし、今はフェニックスを蔑ろにした奴らをぶちのめす。あんな『工場』なんて物はあるべきじゃねぇからな」

「はい！　私もただでは起き上がりません！」
　レイヴェルが懐から1枚のメモ用紙を取り出した。そこには魔法陣と魔術文字が複数描かれていた。
「これはあのフィールドにあったカプセルやあそこにあった機器に記されていた魔術文字と、彼らが私を調べた時に展開した魔法陣の形式と紋様ですわ。小猫さんとも確認していましたから、間違いありません」
　事細かに術式の魔術文字の詳細が描かれている。レイヴェルはたった1度見ただけでここまで記憶していたのだ。レイヴェルは強気な笑みを見せて述べる。
「この魔術文字と魔法陣は既にここに常駐されている冥界、天界スタッフの方々にもお伝えしましたわ。フェニックス家にも転送する予定です。これらの情報だけでもかなりの事が分かりますわ。彼らが偽の『涙』で何をするのか、私達フェニックス家は徹底的に追及します！　それに、もしかしたらフィールド崩壊後、あそこにあったカプセル等が次元の狭間に漂っているかもしれません。最後に私とソーナさまの魔力でマーキングしましたので、もし存在しているのなら、私とシトリーの魔力を頼りに次元の狭間を探索すれば痕跡が見つかると思いますわ。これに関しても冥界の調査班にお伝えします。時間が多少かかろうとと彼らの情報は出来うる限り回収します。――――私を捕らえたのが運の尽きだと思い知らせてあげますわ！」

あのフィールドから転送する寸前に放ったレイヴェルとソーナの小型魔法陣は、どうやらマーキングの役目があったようだ。ギリギリの状況まで抜け目が無い。

『禍の団（カオス・ブリゲード）』と『はぐれ』の魔法使い達は侮（あなど）っていた……。彼女は不死身のフェニックス――。

その精神まで不死の如く、強くなろうとしている事を――。レイヴェルを捕まえた事が逆に裏目に出る事を、いずれ思い知らされるだろう……。

暫くして、ライザーが駆け付けたりした。

「レイヴェル！　無事か!!　こちらに来るのにだいぶ手間取ったが、眷属を率いて加勢に来たぞ……って、何!!　も、もう終わっただと!!」

報告を受けてレイヴェルが心配だったようだ。ライザーは妹思いの良き兄でした（笑）

吸血鬼の領域。そこにアザゼルは入国していた。ルーマニアに入ったアザゼル達は車を借りて、山の道無き道を進んでいた。舗装されていない道はデコボコなので車体が何度も跳ねる。しかも、道中は濃い霧に包まれていた。

同情しているリアス達とは途中で別れる予定である。アザゼルはカーミラの所へ。リアスと祐斗はヴラディ家へ行く。そこまでは共に移動し、アザゼルはカーミラとの話し合いがついたら合流するらしい。

『イッセーや新達をこちらに呼ぶような拗(こじ)れた事態にならなきゃ良いが……』

頭を悩ませていると、ルームミラーを覗くと考え事をしている様子のリアスが映り込んでいた。アザゼルは後部座席に座るリアスに話し掛ける。

「やっぱり、日本に残してきた彼氏が気になるか？」

「……気にならないと言えば嘘になるわ。彼……いえ、彼を愛する子達は私以上に大胆なアプローチをするものね」

「お前の旦那はこれからも波乱を呼び込みそうだな」

「覚悟しているわよ。でも、あのヒトを愛すると決めた以上、全て受け入れるわ」

アザゼルのからかいに対し、リアスは平然と答えるだけだった。

「……あと15分ほどで吸血鬼側の現地スタッフと落ち合う場所に出そうですね」

助手席に座る祐斗は地図を広げて、悪魔専用の方位磁石を見ていた。不意にリアスが訊いてくる。

「曹操はどうなったの？　昨日、何か連絡があったのでしょう？」

リアスの言う通り、帝釈天(たいしゃくてん)から昨夜アザゼルに事後報告が届いた。

「英雄派の曹操、ゲオルク、レオナルド、神滅具（ロンギヌス）所有者は全員インドラが処罰したそうだが、インドラ曰（いわ）く、槍だけ没収して、ハーデスの所に送ったってよ」

聖槍（せいそう）は三大勢力側に渡らず、絶霧（ディメンション・ロスト）と魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）も帝釈天が所持しているだろう。体裁的には英雄派にトドメを刺したのはインドラと言う事になる。

自ら英雄派に手を貸しておきながら最後まで利用した挙げ句、神滅具（ロンギヌス）を所持する口実も得た。

『英雄派を処罰した帝釈天なら、一時的に神滅具（ロンギヌス）を持っていても仕方無いのか』と絶妙な言い訳を手に入れたので、アザゼルも文句を言いづらい雰囲気だ。

一応、捕らえたヘラクレスとジャンヌから帝釈天との繋がりを聴取しているが……あざとい天帝（てんてい）に何処まで通じるのやら……。

「……異形の毒を目指した彼が冥府行きとは」

祐斗はそう漏らしていた。アザゼルの脳裏に、曹操の事を語っていたインドラの声が蘇（よみがえ）る。

『ＨＡＨＡＨＡ、あの坊主は何になりたいか、それをハッキリと決めずに動きまくったから、いけねェのさ。人間のまま強者を極めてエんなら、メデューサの眼なんかに頼らなければ良かったンだ。中途半端に英雄を騙（かた）ろうとしたから、裏目に出た。結果、あの眼が命取りになっちまった。笑えるだろう？　笑っとけ。あいつは最後で道化になった』

確かにその通り。人間を貫き通せば聖槍も曹操の意思に答えて力を貸したであろう。聖槍に宿る『聖書の神の遺志』に『宿主の野望を叶えるぐらいなら、悪魔でドラゴンな赤龍帝や闇皇の夢の方がマシ』と判断された。その時点で負けが確定したのだ。

『――――怪物退治すンのは、人間の英雄だ。人間を逸して俗物に転じたクソガキくんじゃ、どうしようもねェよ』　それに関してはその通りだが、新や一誠と同様に曹操には若さがあった。何者かになりたいと思うのも若さゆえの過ち。

『天帝さまよ、その若者に英雄願望を焚き付けたのはお前なんじゃないのか？』

更に天帝は続けざまに通信でアザゼルにこう言った。

『ま、俺にしてみれば、悪魔なのにヒーロー騙ってる「おっぱいドラゴン」も「オッパイザー」も相当な道化だと思うけどよ？　悪魔が英雄やってどうするよ。悪魔は人間騙くらかして裏で支配すンのが本懐だろう？　どんなキレイごと並べて生きてたってよ、アザ坊ンところの若手悪魔軍団も人間利用して生きる邪悪で陰湿な「悪魔」なンだぜ？　何処までいったって、ヒーローなんてもんには程遠い。――――ただのごっこだ』

……アザゼルは全部を否定しなかった。しかし、悪魔も冥界も変わろうとしている。旧体制の悪魔世界のままでは崩壊しかねなかった。

『……いや、英雄願望を焚き付ける、か。俺も同じ事をしているのか……』

リアスが訊いてくる。

「帝釈天は何がしたいの？　曹操を泳がせ、ハーデスを間接的に煽り、各勢力に混乱をもたらした戦の神。アザゼルは真意を訊いたの？」
「ああ、奴は破壊の神シヴァの野郎に対抗できる人材が欲しいんだとさ。戦乱がより良い強者を作り出すと信じ込んでやがる」
実際、それが何処まで本当かは分からない。……だが、シヴァに勝つ為なら帝釈天ことインドラは何でもするだろうとアザゼルは踏んでいた。
そんな時、アザゼルのもとに通信用魔法陣が届き、耳元で自動で展開した。そこから一方的に連絡が入る。これは定期的な連絡で、後で本格的に相互連絡のやり取りをする。
アザゼルは通信用魔法陣から入ってくる情報に耳を疑った。
『――――ッ！　……グレンデル……ルキフグスだと……？　……何だ、何が起こってやがる……？　日本でまたわけの分からねぇ事が起きたってのかよ！　グレンデル⁉奴は既に滅んだぞ⁉　それに「禍の団」だと？』
アザゼルの頭の中でグルグルと事柄が浮かんでいく。
聖杯を得た吸血鬼、はぐれ魔法使い、再編中の『禍の団』、ヴァーリの調査先に現れる『禍の団』の構成員、ルキフグスの生き残り、滅んだ筈の伝説のドラゴンが現世に現れた。

『……これらは全て繋がっているんじゃないか？　あまりにタイミングが良すぎるだろう。必然として起こったとしか思えない……。全てが1本に繋がるとすると……これ程厄介極まりないものはない……ッ！』

そして、ユーグリット・ルキフグス――。アザゼルは以前、このルキフグスに関するデータを少しだけ閲覧した事があった。

過去に起きた悪魔の内乱――旧政府とサーゼクスをエースとした反政府側の内部抗争。その際に生死不明になった筈であるグレイフィアの実弟。それがユーグリット・ルキフグス。公式では死んだ事になっており、グレイフィア自身も弟は生きていないだろうと語っていた。

『そいつが生存していて、組織をまとめ上げた……？　いや、それだけの能力があったとしてもならず者達を仕切るには――イカレた連中どもの頭（かしら）を張るには足りないものがある』

それは……カリスマ性――。

オーフィスほど高名でなくても、それに相応（ふさわ）しいボスの風格が必要である。

『生まれてからトップに立つ者の傍（かたわ）らで仕えるルキフグスだ。ユーグリットが新しい首領とは思えない。……黒幕は誰だ？　この短期間に「禍の団（カオス・ブリゲード）」を纏めやがった中心人物はどいつだ……？』

奪ったオーフィスの力から、新しいオーフィスを作った――と言う事もあり得るが、そうだとしてもそれを操るだけの強固な存在が必要になる。強固な存在、それが今の黒幕。

ハーデス、帝釈天……この2人はあり得ないだろう。

前者は表立てば今度こそ主神ゼウスに追放されかねない。後者は怪しいが……インドラの目的はあくまで将来のシヴァ戦。両者は陰で暗躍していたとしてもテロリストの頭になるだけのメリットが感じられない。

各陣営からの忌み者が集まり、各勢力から憎悪（ぞうお）を抱（いだ）かれる『禍の団（カオス・ブリゲード）』――。

そのトップを張るのは傀儡（かいらい）と化す純粋な強者か、それとも常軌を逸した異常者か……。アザゼルはわだかまった思いをぶつけるように自身の膝を叩いた。

『禍の団（カオス・ブリゲード）』――。各勢力の現体制に不満を持つ輩（やから）が集まって生まれたテロリスト組織。

実質的に動かしていた頭は何度も変わっている。旧魔王派のシャルバ・ベルゼブブ、英雄派の曹操。オーフィスを失った今でも、まだ走り続ける――。

中身が幾度変わろうとも『禍の団（カオス・ブリゲード）』と言う存在そのものが、アザゼル達の前に立ち塞がっていく。何度叩いても組織自体は動き続ける――。

更には造魔（ゾーマ）の襲撃、ユナイト・クロノス・キリヒコ率（ひき）いる『深淵の喰闇（ダーク・ロード）』の登場。

『禍の団（カオス・ブリゲード）』だけでは終わらない、凶悪無比な脅威――――。

「リアス、木場、厄介な事になりそうだ」

アザゼルは先の見えない濃霧の中を車を進ませながら、２人に日本で起きた事。そして、これからの対応を話し始めたのだった――――。

お嬢様キャラって目の前では気丈に振る舞うけど、実は泣いてる事が多いよね。

『テメェには嫉妬が足りてねぇからな』

『オレには分かるぜぇ？　テメェからは嫉妬の匂(にお)いがプンプンしてくんだよ』

『自覚ねぇのかぁ？　可哀想な奴だなぁ。でもまぁ、いずれ気付くぜぇ？　テメェが誰に嫉妬してんのか。そして、その嫉妬にまみれたテメェの醜い本性さえもなぁ！』

皆が寝静まったであろう深夜、なかなか寝付けない新は独り洗面所で鏡と睨めっこをしていた。寝付けなかったのは……先の戦いの時、エンドヴィルに言われた言葉が頭から離れなかったせいである。

〝嫉妬が足りてない〟、〝嫉妬の匂いがする〟、〝嫉妬にまみれた醜い本性〟等々、謂われも無い言葉を吐かれたのだが――その時、新は反論が出来なかった。

勿論、自分が誰かに嫉妬を抱(いだ)いている根拠など無いが……嫉妬の感情が微塵も無いとも言い切れない。元々新は一般的な日常生活とは無縁の世界で生きてきた。そこに身を置く者は等しく劣等感や歪んだ価値観を抱き、シビアな情勢に揉まれ、世間一般の常識から多少なりともズレた考えと人間性を持っている。暗い道を歩んできた日陰者が、

いきなり日の当たる領域に足を踏み込めば世間との違いに当惑するのは自明の理。
そんな世界で生きてきた新からして見れば、エンドヴィルの発言は――まさに的確な的（マト）を射ていたものだった……。
しかし、それでも新は認めたくなかった――否、認めてしまう日が来るかもしれない事に不安を抱え、自分自身の中に潜（ひそ）んでいる暗い感情に内心ビビっていた。
「……俺も嫉妬の仮面を被（かぶ）って、醜い本性を隠しているだけなのかもしれねぇのか……」
新は自然に自分の頬に手を当て、撫で下ろすような動作をする。今している〝表情〟も――実は〝指摘された嫉妬を隠す表情（仮面）なのかもしれない〟と言う案外笑えない皮肉を交えて……。
そんな考えに気落ちしながらも寝間着を雑に脱ぎ捨て、風呂場に足を踏み入れる。軽くお湯を浴びてから広い浴槽に浸かろうと思った矢先、先客がいる事に気付き、向こうも新が入ってきた事に気付いたのか視線を向けてくる。
「……っ？　あ、新さま」
「レイヴェル？　珍しいな、こんな時間に。どうした？」
「い、いえ……なかなか寝付けなかったので、気分転換にと」
「ハハハッ、お前もか。俺と同じ理由だな」
先客のレイヴェルも新と同じ理由で風呂場に来ていたようで、新は「隣、良いか？」と

彼女に訊(たず)ねる。勿論、レイヴェルは「どうぞ」と断る筈も無く受け入れる。
腰掛けに座り、軽くシャワーを浴びる新。その間、隣ではレイヴェルが泡立てたタオルで体を洗っている。小柄な体に不釣り合いと言える豊満なおっぱい、程好い腰のラインとお尻を持つ彼女の肢体をチラチラと見ながらシャワーを止める。
すると、新は突然こんな質問をレイヴェルに投げ掛けた。
「なあ、レイヴェル。今の俺って……どんな表情(かお)をしてるように見える？」
それを聞いたレイヴェルは一拍置いてから答える。
「率直に言ってもよろしいなら、あまり浮かない表情をしているように見えますわ。それも分かりやすいくらいに」
彼女の答えに「そっか……」と新は言葉少なに呟き、自然と溜め息を吐いてしまう。更にはレイヴェルに核心を突かれてしまう。
「もしかして、先程の戦いで何か遭ったのですか？　あの……『深淵の喰闇(ダーク・ロード)』と呼ばれる者に何か言われたのを気にしているのですか？」
「――――っ。……気付いてたのか？」
「あの異形に言葉を掛けられてから、明らかに新さまの動きが鈍くなったのが見えました。普段の新さまなら到底あり得ない事です」
「俺ってそんなに分かりやすいのか」

「私は新さまのマネージャーですのよ。どのようなお顔をされているのかは、一緒に過ごしていれば分かりますわ！」

レイヴェルは自信に満ちた表情で胸を張り、新は自分の表情の分かりやすさに苦笑する。やがてエンドヴィルとの戦いで何が遭ったのか、新は彼女に打ち明けた。

エンドヴィルに問われた『嫉妬』、己自身が無意識に嫉妬を抱えているであろう事、そして……何より、その『嫉妬』に気付かないフリをしている事――――。新は一拍置いてから話を続ける。

「前にも言ったが、俺は元々世間一般から褒められるほど立派な奴じゃない。俺自身でさえ知らず知らずに疚しい部分を抱えて、隠して、たとえ気付いたとしても眼を逸らしちまう――――そんな逃げ腰が染み付いている根性無しでもあるんだ。ヤツの言葉は……まるで弱いクセに粋がり強がってるのを見透かした発言だった。だから、俺はヤツの言葉に反論できなかった」

「……」

「レイヴェル、俺は確かに他の奴と比べたら１つ２つ飛び抜けて強いかもしれないが……同時に飛び抜けて弱い一面もある。いくら肉体的に強くても、精神面で弱かったら意味が無い。バサラやキリヒコを前にすると平静を欠いてしまうのが良い例だ。俺は……まだまだ弱い。奴らを前にすると、それを否応無しに思い知らされてしまう

……っ」

確かに新は今までバサラの狂人的な強さと真理を突くような言葉に心の隙を突かれ、キリヒコには精神を抉られるような手法で幾度となく煮え湯を飲まされてきた。その度に新は自分の力量不足を痛感してしまう……。

今回の1件もそうだ。乱入してきたバサラに注視し過ぎたせいで、レイヴェルを人質に取られた事に気付くのが遅れてしまった。新は未だにこの失態を引きずっている……。レイヴェル本人は気にしていないが、新にとっては反省すべき点である。

「本来の俺はどうしようもない程バカでクズな男なんだよ……。真っ先にやらなきゃいけない事があるのに、目の前にアイツらが現れると途端に理性を抑えられなくなる。それもこれも……俺が弱いせいだ。一誠やリアス達に散々説教垂れておきながら、俺自身がまだまだ未熟者だって事に気付いてなかった。いや、気付かないフリをしてたんだ……！　その結果がこのザマだ、情けねぇよ……っ」

己に憤りの言葉を吐き連ねて頭を垂れる新。そんな様子を見たレイヴェルはゆっくりと手を差し伸べ、新の手を優しく握り締めた。その手は微かに震えている。

「それを言うなら私だって同じです。あの時は気丈に振る舞っていましたけれど、今だって思い返しただけでも震えが来ますわ……。それでも私は新さまを信じます。たとえ、他の誰もが新さまを蔑んでも私は胸を張って言いますわ。新さまは強い殿方で

す」

「――――っ」

レイヴェルの凛とした表情、真っ直ぐで曲がる事の無い言葉に新は胸が痛くなった。こんなにも自分を信じてくれるヒトが身近にいる……。そして、彼女と同じように自分を信じてくれる仲間もいる……。新は不覚にも目頭（めがしら）が熱くなりかけた。

いつまでも過去を引きずっているのは、立ち止まる事と同じ。時間の流れは優しくない。止まった者に配慮などしない。ゆえに進むしかない。それが過去を反芻（はんすう）した者に課せられた使命でもある。新はレイヴェルに礼を言う。

「スマン、レイヴェル。お陰で少し気が楽になった。いつまでもグダグダ言うなんて、俺らしくなかった。悔やむなら、奴らを見返してやりゃあ良い。こんな簡単な事を忘れていた」

「そうです。それでこそ新さま、私が愛すると誓った殿方ですわ！　……あっ、やだっ、私ったらはしたない……！」

「いやいや、寧（むし）ろ大歓迎だぜ。よしっ、お返しにレイヴェルを隅々まで洗ってやるよ」

「あ、あの……それなら、私のお願いを聞いていただけますか？」

レイヴェルの申し付けに新は「ああ、良いけど」と返答する。その直後、レイヴェルは顔を赤らめてモジモジと体を揺らす。そして――――意を決した表情で告げる。

「新さま……わ、私と……エ、エッチしてください……っ」
それはまさに晴天の霹靂。あのレイヴェルが自ら情事を懇願してきたのだ。一瞬驚いたが、ここで応えないようでは男児失格。新はレイヴェルの申し出を受け入れた。
「ああ、俺の方こそよろしく頼む」
「……っ。あ、ありがとうございますっ！　そ、それでですね。もう1つお願いがありまして――――」
レイヴェルが新に耳打ちする。新は「……良いのか？」と確認を取るが、レイヴェルは躊躇無く了承する。新は早速濡らしたタオルを持ってきて、レイヴェルの両手を縛る。
頭上へ掲げるように両手を縛られ、水気を含んだ床に寝かされる。その姿はまるでエロい同人誌に描かれるお姫様のようだ。屈辱的な体勢で縛られ、あられもない姿を晒され、辱しめを受ける……そんな場面を彷彿とさせる。
思った以上に恥ずかしいのか、レイヴェルはモジモジと身を捩らせる。
「レイヴェル、何処でこんな体勢を知ったんだ？」
「は、はいっ。朱乃さまやゼノヴィアさんから聞きました。このような体勢やシチュエーションを『クッコロ』と言いまして、特に姫君や令嬢の方にピッタリだと……」
「ナニ教えてんだ、アイツら」

「それに……少しでもおぞましい記憶を緩和できるのでしたら、私はどのような体勢でも構いません。新さま、私の心に残る不安を……あなたの手で揉み消してください……っ」

レイヴェルの懇願に新は断る筈も無く、ゆっくりと手を這わせる。レイヴェルの太腿から徐々に腰へと進め、吟味するように撫で回す。やがて、括(くび)れた腰から華奢な身体に不釣り合いなおっぱいに到達し、形が歪む。

「あ……っ、あぁ……ん……っ」

風呂場に響くレイヴェルの艶(あで)やか声。つきたての餅の如く歪むおっぱい。まるで紅潮したかのように綺麗な乳首。乳輪に指を這わせると……彼女の裸体がピクンッ、ピクンッと跳ねる。

新は更に舌も這わせ、レイヴェルのたわわな果実を味わう。時折(ときおり)、意地悪で腋(わき)の下も舐めてレイヴェルの恥じらう表情を見つめる。レイヴェルも紅潮しきった顔で見つめ、瞑目する。

それを見た新は察したように顔を近付け、彼女と唇を重ねた。イヤらしい音が反響し、唾液の橋が2人の唇から落ちる。

「はぁ……ぁ、はぁ……っ。私のファーストキスは……お風呂の味、ですわね……っ」

「レイヴェル、準備は良いか？」

「……はいっ、新さま。私を余すことなく、お召し上がりください……っ」
そこから2人はイヤらしく、優しく身体を重ね合った――――。

――――――

全裸の小猫が恨めしそうに睨んでいた。レイヴェルも固まり、新は冷や汗だっくだくで小猫と視線がかち合う。
「……ＨＥＬＬＯ、小猫サァン」
「……最近の先輩は顔芸が進んでますね」
「イツカライラッシャイマシタカ？」
「……新先輩がレイヴェルを縛ってイヤらしい体勢にした時からです」
　要するに情事の様子は最初から見られていたと言う事だ（笑）。小猫は四つん這い、宛ら本物の猫の如く新に躙り寄っていく。
「……先輩」
「まあ、待て。落ち着きなさい小猫はん。ここは風呂場なんで流血沙汰は勘弁してオクレヤス……っ」
「……いです……」
　小猫が何かを呟く。最初は聞き取れなかったが、小猫がハッキリと告げてくる。
「……レイヴェルだけ抜け駆けなんてズルいです！　……私だって先輩とエッチしたいのにっ！」
　ガバッと新に抱き付く小猫。尻尾を手に絡ませ、離したくないとばかりに小柄な身体を押し付ける。新の胸板と小猫の小振りなおっぱいがくっつき合い、小猫は「……

ニャァァ……ッ」と艶(なまめ)かしい声を上げる。まさに発情期を迎えた猫その物である。
「……2人のエッチな姿を見たら、もう我慢できません……っ！　先輩、お願いします……私ともエッチしてください……っ」
「小猫……お前……」
「……やっぱり、私じゃダメなんですか……？　胸がおっきくないから、ダメですか……？　レイヴェルみたいにおっきくないけど、私の、お、おっぱいだって……先輩を喜ばせる事ができます……っ。だから――」
「新さま、私からもお願いします」
　小猫が言い終わる前にレイヴェルが情事を勧めてくる。思いも寄らぬ展開に小猫が目を丸くする。
「小猫さんだって新さまをお慕(した)いしているので、気持ちが分かります。抜け駆けみたいな真似をしてしまった以上、小猫さんの要望に口を挟むなんて野暮は致しません。新さま、どうか小猫さんとも」
「……レイヴェル……？」
「私と小猫さんは同じ新さまの後輩同士。恋のライバルであり、お仲間ですわ。私だけリードを保(たも)ったままと言うのは不公平です。なので、小猫さん！　これで対等と言う事でよろしいですわね？」

彼女なりの気遣いなのだろう。レイヴェルは身体を起こして小猫に発破を掛ける。それを受けた小猫は照れ臭そうに「……バカ……っ」と呟く。その表情は何処か嬉しそうに見えた。

改めて小猫は新に懇願する。

「……先輩、レイヴェルからもお墨付きです。私とエッチしてください……っ。レイヴェルにも私と先輩のエッチな姿を見せつけてやりましょう」

「お、おう……。積極的なのは嬉しいが……お前は――――」

「……大丈夫です。ちゃんとゴムを持ってきてます」

「準備良いんだな」

いつになく積極的な小猫に押されながらも、受け入れる新。小猫は堅くなった新のモノを優しく握りながら言う。

「……先輩、スる前に約束してください」

「何だ、言ってくれ」

「……今日はゴムを付けますけど、いつか……いつか私がおっきくなった時。おっきくなって、ちゃんと子作りできる身体になったら……」

潤んだ瞳、赤らめた表情で小猫が言った。

「……その時は、××で……エッチ、してください……っ」

×

「――――っ」
「こ、小猫さん……大胆な発言ですわね……っ」
そんな台詞を聞かされたら我慢など出来る筈も無い。新は貪(むさぼ)るように小猫の小振りなおっぱいを舐め、尻と尻尾の付け根を撫で回す。
上下両方から快感が押し迫り、小猫はあっという間に雌(メス)の表情となる。
「ンンッ、ハニャァァ……ッ！　ァッ、ァァッ……！」
「す、凄い激しい……っ。私の時よりも激しいですわ……。で、でも新さま、もう少し優しく……」
レイヴェルも食い入るように見続けるが、新に少し抑えるよう進言する。彼女の言葉にハッと我に返った新は、中断して小猫に謝る。
「あ、スマン！　つい興奮し過ぎて――――」
「……ら、らいじょぉぶれす……せんぱぃ……っ。わひゃしでよろこんでくりぇて……うれひぃれす……っ」
呂律が回らない小猫。相当な快感を味わったせいだろう……。ここからは優しくエスコートするべし。小猫が落ち着きを取り戻したところで改めて言う。
「それじゃあ、小猫。良いか？」
「……は、はい……。先輩……いろいろちっこいですけど、私で……気持ち良くなっ

てください……っ」
小猫との第二回戦は、小猫が大いに乱れたそうだ――――。
――――――

「先程の小猫さんには、ちょっと妬いてしまいましたわ……。あんなにイヤらしく……」
「普段押さえつけられていた欲求がここで爆発したんだろう。……とは言え、まさか小猫があんなエロ発言を連発するとは思わなかったな」
小猫の隠れた一面を見れたのは貴重だが、素になった彼女に聞かせれば赤面パンチまっしぐらである。新とレイヴェルはそんな事を想像しながらクスクスと笑い、見つめ合う。
「新さま、今日は本当にありがとうございました」
「いや、俺の方こそ礼を言うよ。これからも俺のマネージャーとしてよろしくな」
「はいっ。勿論、新さまの後輩としても小猫さんと一緒に支えていきますわ」
改めて秘めた決意を誓い合い、やがて2人は泥のような眠りについた。

第19章　日常暗躍のサービスとエヴォル・スターク

魔法少女リーア☆マジか⁉　前編

魔法使いの集団に襲撃されて数日後。新は自宅の自室でルーマニアに発ったリアスからの吉報を待ちながら契約相手の魔法使いについて選抜を進めていた。

「――と言う風に、この方は――のようになってまして――敢えて付け加えるとしたら――」

隣でレイヴェルが書類を見ながら新に説明をしてくれるが……正直なところ、気になる事が多くてレイヴェルの声が殆ど耳に入ってなかった。

リアスの方はヴラディ家との会談が進んでいると報告を受けた為、特に心配は無く、何かあれば直ぐにでも駆けつける所存だ。

懸念すべき問題は……ユーグリット・ルキフグス。先日の魔法使いによる襲撃の主犯がその者だ。ルキフグス、滅んだ筈のグレイフィアの身内、しかも実の弟だ。冥界の悪魔側上層部はそいつの登場に騒然となったらしい。

何せ前ルシファー直属の配下であるルキフグス家の生き残りがグレイフィア以外に存在していたのだから。現在、グレイフィアはユーグリットの生存について査問に掛け

られているらしい。つまり、グレイフィアがあの男の生死を偽ったのではないかと上層部が疑ったからだろう。

サーゼクスがグレイフィアを疑う筈は無い……が、他の上役は別だ。不安を抱いて査問を開いたのだろう。旧魔王に関する事柄に対して悪魔側上層部は過敏なほど反応する。『ルシファー』に関連したものは新旧問わず冥界でも別格の扱いらしい。

前ルシファーの末裔たるヴァーリが白龍皇だったり、悪魔最強の存在と称される現ルシファーのサーゼクス然り。そこに前ルシファーに最も近かったルキフグスの生き残りがグレイフィア以外に存在しており、その上テロリスト集団『禍の団』の一員となっていたのだから、上役が慌てふためくのも必然と言えよう。過去の内戦、後の旧魔王側への扱い、その延長線上に先日の魔獣騒動があるので、悪魔の内部構造が孕んだ根深いものなのだろう。

朱乃がグレイフィアにユーグリットが吐いた台詞を伝えたそうだが、グレイフィアの狼狽え方は半端じゃなかったそうだ。完全に予想もしていなかったのだろう……。それだけグレイフィアは生死不明の実弟が死んでいるものだと思っていたのだ。

何故ユーグリットは今頃になって現れたのか？　旧魔王派のような思想ではないのは何となく分かる。一誠曰く、シャルバが全身に漂わせていた怨恨、憎悪のオーラをユーグリットは感じさせてなかった。恨みと言うよりは確固たる野望を持っている者

の目をしていた――――。
少しだけ上の空だった新にレイヴェルが怪訝そうに話しかけてくる。
「……グレイフィアさまの事をお考えですか？」
マネージャーになってもらってから、そんなに日が経っていない筈なのに、顔色だけで何を考えているか分かるようだ。……単に新が顔に出やすいタイプなのかもしれないが……。
「分かるか？」
「マネージャーですもの」
胸を張ってそう言うレイヴェル、末恐ろしい限りだ。レイヴェルは息を一度吐くと改まって言う。
「正直言って、これは政治に関するお話になります。私達が口を挟める事柄ではありませんわ。ただ、前政府に関係するお話はデリケートな部分ですので、上は相当慌てていると思います」
「だろうな。確かにこの手の話は向こうで進展が無い限り、考えても仕方ねぇか。スマン、話を切り替えるぞ」
政治は新にとって専門外。基本的にリアス・グレモリーの眷属悪魔と言うだけで、普段は悪魔稼業を続けていかねばならない。頭の中を切り替え、魔法使いの選抜に専念す

る。

レイヴェル的には今回の選考で目ぼしい者がいなかった場合、全て断る方向も思慮している。つまり、次回の選考に持ち越しと言う事だ。

「レイヴェル、今回はどうなんだ？」

新が此度の書類選考について問うと、レイヴェルは可愛い顔を渋くさせていた。

「正直申し上げますと……次回に持ち越しても良いのではないかと思い始めております。と言うのも、新さまを選ばれた魔法使いの方々の大半が私からの太鼓判を押せない者ばかりなのです。……書類選考後の試験などで詳しく調べてみないと分からない部分もありますが、書面で記された経歴、習得技術からですと、『闇皇』のパートナーとして相応しい人物は見当たりませんわね」

つぶさに調べていたレイヴェルが言うのだから、その評価は概ね合っているのだろう。彼女が新の事をだいぶ買ってくれているところもあるが、それでも「長期的な相手」として見ると不満なところがあるのだろう。

確かに新も書類に一通り目を通したが、ピンと来る者はいなかったそうだ。逆に短期間（数ヵ月から1年程度）での契約となると、契約しても良いと言える相手はいる。その辺はレイヴェルも認識しており、他のグレモリー眷属に関しても「とりあえず短期間で契約を結んでみようかな」と言う考えを持つ者が少なくない。

短期間の契約でノウハウを積みたいのだろう。魔法使いの方も短期のパートナーで利益を得たい者もいると言う事だ。

「やっぱり最初は短期契約で取ってみるか？」

新が首を捻りながらレイヴェルに問う。レイヴェルもそればかりは大きく否定せず、可愛らしい顔を難しくさせていた。

「……短期で結んで、新人ゆえのうっかりミスで変な評価を抱かれてしまい、あちらの業界にいらぬ噂を流されるとそれはそれで厄介極まりないと言いますか……。次の相手を探す時に契約相手ゼロと言うのはマネージャー的にも悲し過ぎますわ」

２人して「ううーん……」と唸り続けていると、不意に部屋のドアが開かれる。入ってきたのはお茶を運んできてくれた朱乃だった。

「あらあら、お話は進んでいるのかしら？」

「おっ、悪いな――って！」

新は朱乃の後ろから現れた人物に間抜けな声を上げて驚く。それもその筈、朱乃の後ろから現れたのは――ソーナだったのだ。

「お邪魔しています」

「ソーナじゃないか、珍しいな。今日はどうしたんだ？」

新が問うとソーナはメガネの縁をクイッと上げる。ソーナの冬の私服姿は淡い水色

のレースブラウスにデニムと言う格好で、紺色のコートを手に持っていた。いつもは制服姿しか見てないので私服姿はなかなか貴重な装いだ。ソーナと朱乃は新達と同様カーペットに置かれたクッションに座る。

「ええ、今後について朱乃達とお話ししようと思っているのですよ。あとで椿姫もここに来ます。お邪魔かもしれませんが、少しの間だけお話をさせてくださいね」

≪あっしもお邪魔させてもらってますぜ≫

そのような声が天井から聞こえてくる。見上げれば天井に魔法陣が展開しており、そこから逆さまの体勢で小柄な死神が頭を出していた。

彼女はシトリーの新しい眷属、ベンニーアである。

「ごめんなさい、新くん。この娘もどうしてもあなたのお家に来たいと言っていたので連れてきてしまいました」

謝るソーナの横に死神少女ベンニーアが天井からヒラリと上手く着地する。そのままソーナの隣に鎮座した。

≪オッパイザーの自宅……これはあっしにとっちゃ桃源郷に等しいですぜ≫

目を爛々と輝かせながら新の自室を見回すベンニーア。新は「気にするな、寧ろ大歓迎だ」と言ってカラカラと笑う。

ここでカーペットの上に広げていた書類の数々に、ソーナが視線を配らせる。

「うちの眷属達もちょうど選考しているところです。今日は私と椿姫以外が集まって苦慮しているところでしょう。私もアドバイスしていますが、出来る限り自分で決めて欲しいと思っています」

シトリー眷属も魔法使いの契約相手選別に絶賛苦戦中、しかもグレモリーよりも自主性の傾向が強いようだ。ここで新は最近感じていた疑問を訊いてみる事にした。

「今更だが、魔法使いとの契約で1番の利益は何なんだ?」

新の問いに対し、ソーナは朱乃から受け取った紅茶をひと口飲んだ後に言う。

「魔法の研究成果です。魔力は悪魔の力であり、魔法はその悪魔の力を解析して人間が扱えるようにしたものです。それ以外にも精霊魔法、北欧式の魔法など、多種多様な術式の魔法があり、中には神々が生み出したものもありますが、一般的な術者が使う魔法の大半は大魔法使いマーリン・アンブロジウスの流れを汲むものだと言われています」

「あー、それは何か聞いた事があるな」

「その魔法は既に悪魔のもとを離れて独自の進化、変貌を遂げていて、中には悪魔では出来ない力も生まれました。それは未だに変化し続けていて、底が見えない領域です。そして、その魔法は冥界の技術発展に貢献する事もあるのです」

ソーナは自身のメガネを指差す。

「これも実は魔法の研究によって誕生した特別なメガネです。大した力はありません

が」

「それ、ただのメガネじゃなかったのか……？」

「人間界では大した魔法ではなくても悪魔にとっては画期的な特性と言う事があるのです。そう言う魔法は価値が高く、取り引きとしても充分に成立します。我々は魔法使いの才能を買うと言って良いでしょうね。その為、魔法使いへの先行投資に近いものがあります。だからこそ、選考はキチンとしなければなりません。損する事も大いにある事柄ですから」

魔法使いの研究が悪魔にとってプラスになる事もある――――と言う事だ。悪魔の能力を解析して生まれた魔法が、別の形で冥界に関わると因果（いんが）めいたものを感じる。ソーナは人差し指を立てて諭（さと）すように言う。

「けれど、これだけは忘れてはいけません。魔法使いとの契約は悪魔としての活動の1つです。それが全てと言うわけではありません。人間との契約、魔法使いとの契約、レーティングゲーム、冥界での事業、悪魔として上を目指すのであればやるべき事はたくさんあると言う事です」

ソーナの言う通り、永い悪魔の一生は1つを極めるだけでは足りない。複数をこなしてこそ上級悪魔なのだろう。転生悪魔は目標が多い方が良いらしく、それに見合った生き方も必要と言う事だ。

その点は今後リアスやレイヴェルと話し合いながら気長にやっていけば良い。まずはソーナとの会話に戻る。

「そう言えば、ソーナが俺の家に来るのって、あまり無いよな。……確か２回ぐらいだったか？」

「そうですね。以前、ここに来て兵藤くん達とテレビゲームをしましたね。あとは……まあ、姉と……」

１回目は新が一誠とアーシアを呼んで、更にゼノヴィアとイリナを交えてゲームしている時に、リアスと朱乃と共にソーナが新の部屋に顔を出し、そのままゲーム大会になった。その時のソーナのゲームさばきは凄まじく、プレイした事の無いゲームを短時間で覚え、やり込んでいる新や一誠を圧倒していたそうだ。

レースゲーム、格闘ゲーム、最新作のマ〇オパーティ、挙げ句にはリメイク版の『ポ〇モン・金剛石＆真珠』で何度も対戦したが、戦略を悉く読まれ――ソーナにボロ負けしたとか。

新曰く、『マジで泣きそうになった』らしい……。

そして、２回目は――と、ここで唐突に朱乃が小さく笑い、ソーナが隣で怪訝な表情を浮かべていた。

「朱乃、どうしたのですか？」

「うふふ、そういえばソーナったら、魔法使いの一件で大変な目に遭ったなーって思って。セラフォルーさまがあのオーディションで――」

その話を聞いて、途端に顔を紅潮させるソーナ。新もちょうど思い出していたところで、それはソーナが「姉と……」と口をつぐんだ事にも起因する出来事だ。

そう、あれは――温泉旅行から帰って数日後だった。

「魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺しちゃうぞ☆」

眼前で紅髪のお姉さまが魔法少女の格好をして、可愛くポージングを決めていた。紅髪のお姉さまとは無論――リアスの事である。

あの華麗で高貴な雰囲気の漂う姫君が魔法少女のコスプレをしつつ、紅髪をツインテールに纏め、手には魔法のスティック（玩具）と言う出で立ちだった。

一部の男にとっては大いにアリだろう。……しかし、傍から見ると魔法少女としては少し年齢と背格好が高すぎる……。

「……ナニコノカオス……」

何故こんな事になっているのか……？　発端は〝とある休日〟に遡る。

とある休日、珍しい組み合わせの2人が新の家を訪れてきた。1人は駒王学園の生徒会長であるソーナ・シトリー。

そして、もう1人は――――。

「魔法少女ミルキーの映画に出たいのよ☆」

そんな突拍子も無い事を言って新達のもとに現れたのは四大魔王の1人――――セラフォルー・レヴィアタンだった。……開口一番からして嫌な予感しかしない（笑）

竜崎家の広い居間で改めて話を窺う。

「……ま、魔法少女のオーディションですか……」

反応に困っているリアスがそう言うとセラフォルーは大きく頷き、手元のスティックをクルクル回して天井高く掲げた。

「そうなのよー　実写映画版『魔法少女ミルキー』のオーディション！　出演者を芸能人だけじゃなくて、一般からも広く公募しているのよ☆　合格すればミルキーとして映画の主役になれるの！」

目を爛々と輝かせてセラフォルーは笑顔を全開にしていた。……セラフォルーは魔

法少女に憧れており、特に人間界のアニメ番組『魔法少女ミルキー』シリーズに夢中らしく、普段の格好も魔法少女の衣装を着ていた。

元々美少女なので似合っていると言えば似合っているのだが、天真爛漫な性格も手伝って周りの者はどう反応して良いか分からない事が多い。新と一誠曰く「魔王少女」らしい……。

更に冥界でも特撮番組「魔法少女マジカル☆レヴィアたん」を制作し、主役も張っているらしい。セラフォルーの魔法少女愛は人間界の魔法少女業界にも介入する足取りを見せ始めてしまった……。

その隣でセラフォルーの妹――ソーナが顔を真っ赤にさせながら、「……ゴメンなさい、このような姉で……」とリアスと朱乃に謝っていた。苦労が計り知れない……。

四大魔王はフリーダムで奇抜な者が多く、逆に身内は真面目な者が多い。リアスとソーナの家系が良い例である。

「それで、ここに来たのはどういった理由なんだ？」

新が率直に訊く。オーディションに参加したい熱意は分かったが、ソーナと共に新の家を訪れたのはどのような理由があったのだろうか？

「それはね。私と一緒に――」

ウインクしながら説明しようとするセラフォルーを制して、ソーナが口を開く。

「お姉さまは黙っていてください。……リアス、お願い。私と一緒に魔法少女のオーディションに参加してください」

あのクールな生徒会長たるソーナが顔を最大にまで真っ赤にさせてそう言ってきた。言われた方のリアスは――――親友からの予想外のお願いだったからか、暫し口をポッカリ開けたまま反応が止まっていた。一拍置いてようやく――――。

「え、えーと……。ど、どういうこと、ソーナ……？」

笑顔をひくつかせながら再度訊き直すと、ソーナは切々と語る。

魔王たるセラフォルーが人間界で実写映画版ミルキーのオーディションがある事を知り、何とか取れた僅かなオフを利用して参加したいと無茶ぶりを妹のソーナに懇願してきた。どうにか諌めようとしてもセラフォルーの意志は固く（駄々をこねたとも言う）、このままでは職務にまで影響が出そうな程だった。

意を決したソーナは、自分とシトリー眷属で警護させる事（監視、保護者とも言う）を約束させ、オーディションに付き添う事になったそうだ。

セラフォルーは四大魔王でありＶＩＰでもあるので、人間界での警護はあって当然。オーディションでの護衛は妹のソーナが受け持つ――――と。そこまでは理解できた。

しかし、問題は何故リアスに「一緒にオーディションに出て欲しい」と懇願しに来たのか？　あまり関係ないのではと思っていた新だが、ソーナが鞄からスルスルと取り出

したモノを見て驚く。
それは――派手でフリフリな衣服、どう見てもコスプレ衣装だった。ソーナは必死に恥辱に耐えている様子で言う。
「……お、お姉さまが私に用意してくださった……オーディション用の……魔法少女の衣装よ」
「――――っ」
何とまあ驚き、ソーナ用のコスプレ衣装。魔法少女成分１００％の衣装に身を包むソーナの姿など決して容易（たやす）く見れるものではないが、少し想像するだけでも未知の領域を捉えてしまう。
吹き出しそうになる新を尻目に、ソーナは続ける。
「……オーディションを受けるお姉さまを私達シトリー眷属が警護します。そうなると、必然的に身近で護衛しなくてはならなくなるので……お姉さまと一緒に私もオーディションへ参加する事になったのです……」
プルプルと全身を震わせながらソーナはそう言った。
姉たるセラフォルーをすぐ傍（そば）で警護する為、自（みずか）らオーディションに参加する事を決めたようだ。クールビューティーと称されるソーナからしてみれば、魔法少女のオーディションなど縁（えん）の無い世界――――寧（むし）ろ、嫌な部類だろう。

そこに身を挺して参加するわけだから、その覚悟は凄まじいものを感じる。これも姉を守る為――――否、姉の監視と保護者として。

「そう言えばセラフォルーさまを『禍の団』に属する魔法使い達や魔法使いの協会から追放された『はぐれ魔法使い』が狙っていると言う噂も聞いた事がありますわね」

朱乃がそう口にする。要人たる魔王なので狙われるのは当然だが、魔法使い限定と言う点が解せない。新が「何でだ？」と訊くと、ソーナが説明をしてくれた。

「……本物の魔法使い、特に魔女からはお姉さまの趣味が嫌悪されているそうなのです。……一言で言うなら『世間に魔法使いと言う存在の間違った認識を与えかねない』と。……姉の、この姿を見れば何となくはご理解いただけると思うのだけれど……」

「……あー、なるほど」

新は直ぐに納得した。本物の魔法使い――――魔女からすれば空想の存在『魔法少女』の格好で外交している魔王は迷惑千万どころか、侮辱の領域に入ってしまってもおかしくない。

重鎮である魔王が魔法少女に憧れて、特撮番組まで制作して放送しているので本物の魔法使いの心中は計り知れないだろう。〝少し気にし過ぎじゃないか？〟と思った矢先、ソーナが息を吐いて続ける。

「もしかしたら、その魔法使い達がオーディション会場でお姉さまに襲い掛かってくる

かもしれないので私達が警護をするのです。仮に襲われてもお姉さまがそうそうやられるとは思えません。――が、大暴れして人間界に多大な被害をもたらすかもしれないので、それを抑える役目が私達にはあるのです」

「な、なるほど……」

新は〝それはあり得る〟と直感してしまう。セラフォルーがその気になれば、魔力1つで島などを余裕で消し飛ばしそうだからだ。外交担当が人間界の地図を塗り替えたら大問題は間違いなし。

献身的な妹にセラフォルーは目元をウルウルと潤ませてソーナに抱き付いた。

「うぅぅ、ソーたんはなんてお姉ちゃん思いなのぉぉぉっ！　私を心配してくれる上に一緒にオーディションへ参加してくれるなんて！　お姉ちゃん感激なのよぉぉぉっ！」

「……そう思うのでしたら、今からでも参加を止めてください」

「それはダメ☆　ソーたん用の衣装を用意したんだから、お姉ちゃんと一緒に魔法少女になりましょう♪」

ウインクと可愛いポーズで即否定のセラフォルー。妹に魔法少女の衣装を着せられる状況に嬉々（きき）としている……。

「そ、それで、私に一緒に参加してほしいと言うのは？」

リアスが再度訊くと、ソーナはリアスの手を握り、切に言った。
「リアス。お願い、恥ずかしいの。……私と一緒にオーディションに参加してちょうだい……。私、このままでは耐えられない……！　友達のあなたにしか頼めないのです……。あなたと一緒なら耐えられると思うのです……！」
ソーナは肩を震わせ、親友に吐露した。リアスは暫し瞑目し、息を1つ吐くとソーナの手を握り直した。
「ソーナ。私とあなたは小さな頃からの親友だもの。良いわ。私もオーディションに参加する。テロリスト対策にも協力するから、安心してちょうだい」
「……リアス。ありがとう……」
見つめ合うリアスとソーナ。普段クールな生徒会長も今回ばかりは目元をウルウルさせていた。美しい友情である。
「百合百合だわ！　ソーたんとリアスちゃんの百合百合だわ☆」
「セラフォルーさま（一応）、アンタはそろそろ自重しなさい。……そうなると、必然的に俺達もオーディション会場に行かなきゃならないのか？」
「……ですね」
そんなやり取りを新の膝上に座る小猫としていると――――。
「リアスちゃんの衣装も用意してあるのよ☆　ほーら、こんなに可愛いリボンまで！」

そう言ってセラフォルーがリアスの分と思われる派手な衣装まで取り出してきた。それを見て表情を険しくするリアス。

「……わ、私も着なければダメなんですよね」

「……今更だけれど、このような姉でゴメンなさい、リアス」

「良いわよ、私も昔から知っているから……。けれど、この衣装は……」

ノリノリのセラフォルーにリアスもソーナも嘆息していた。

「あー、でもよ、オーディションって書類選考とかあるんだろ？　今からじゃあ間に合わない――――」

新が疑問を言い終わる前に、セラフォルーは「じゃっじゃーん♪」と書類を取り出した。

「ソーたんとソーたんのところの女の子達、そしてリアスちゃんとリアスちゃんのところの女の子達の書類は既に送っていたりするのよー☆　皆、可愛い子ばかりだから書類選考は合格を貰っているわ！」

「さてはアンタ、最初から巻き込む気満々だったな!?」

新のツッコミに対し、セラフォルーは「テヘペロ☆」と可愛く舌を出していた。もしかしたら、今回のオーディションはセラフォルーの掌（てのひら）の上にあるのかもしれない……。

こうして、新達はセラフォルーのお願いに付き合う事となった。

そんなこんなでオーディション当日を迎え、新達グレモリー眷属とシトリー眷属は都内にある高層ビルのホール会場に集結していた。

オーディションに参加する女の子達が広いホール会場に大勢いた。皆、それぞれ番号を記したプレートを衣服に付けており、約２００人程来ているらしい。

逆を言えば２００人も書類選考を通過したと言う事であり、ミルキーの根強い人気をヒシヒシと感じてしまう程だ。年齢的には小学校高学年から中学生の女子が中心。

「……これ、オーディションに来るのは大半が十代前半の女子ばかりの筈です……。劇中でミルキーの年齢がそれぐらいなので。実写映画だとどうなるか分かりませんが……」

魔法少女の衣装に加え、自前の猫耳と尻尾を出した小猫がそう言う。〝猫耳魔法少女〟と言う萌え要素満載の可愛さに、新も内心ニヤついてたりする。本当ならベタ褒めしてやりたいところだが、それを言ったら恥ずかしがりながら殴られるので敢えて言わなかった（笑）。

会場には有名な子役の芸能人も参加しており、他のメンツも書類選考を通っただけ

あって容姿端麗。まだ本日の選考は始まってないので、新達を含んだ保護者や関係者もホール内にいた。

――で、その女の子達は奇異な視線をこちらに向けており、中にはクスクスと言う笑い声も聞こえてきている。……その理由は簡単だ。

「……これは己との戦いね」

フリフリな魔法少女の衣装に身を包んだリアスが恥辱に耐えながら、そう呟いた。長い紅髪をツインテールにして、可愛らしいリボンで纏めていた。

本来ならメチャクチャ可愛いと褒め倒したいところだが、周囲の参加者から比べると若干年齢が上だろう。さすがに高校3年生での魔法少女はなかなか無理があるらしく、傍から見ても旬を過ぎた感は拭えない……。

おっぱいが大きいのも違和感に拍車を掛けている。何故なら……魔法少女は基本的にはツルペタな娘が多いイメージが根付いているからだ。

「まあ、俺はその辺にこだわりが無いから良いけどな」

しかし、好奇な視線はその年齢から来る無理な姿ではなく、魔法少女の衣装その物を着込んでいるサマにある。他の参加者は普通の可愛らしい服装――即ち私服であり、魔法少女の衣装でコスプレしているのはセラフォルー、グレモリーとシトリーの女子だけなのだ。

それそれは会場で浮きまくり、気合を入れたレベルを通り越して熱狂的な信者に見えてしまう。

「まあ、今日は頑張りましょう、リアス。うふふ」

リアスの隣で巫女服姿の朱乃が若干楽しげに言う。普段持っている巫女服とは違い、随分とデザイン的な特徴が目立つ衣装だった。なんでも〝和風魔法少女〟と言うスタンスでセラフォルーが制作したらしい。

衣類の面積が少なく、袴（はかま）も短くて胸元もかなり開いている。手にはお祓いなどでよく見る大麻（おおぬさ）が握られていた。

「朱乃はやっぱりエロいな。それに似合っている」

「……こ、このような姿、実家の者に見られたら私は死ぬしか無いわ……」

新がニヤニヤ眺めていると、魔法少女の衣装に着替え終えたソーナも会場に姿を現し、全身を震わせながら開口一番にそう呟いていた。胸元に大きなリボンを付け、クールなイメージとはかけ離れたプリティな衣装だ。

その姿を見た匙は「ぐはっ！」と鼻血を噴き出して倒れた（笑）。

新は「どうした、匙（鼻血マン）」と珍妙なアダ名で匙をイジり、匙は過呼吸に陥（おちい）りながらも幸せそうな笑顔を浮かべていた。

「……はぁはぁ……か、会長の魔法少女……。も、萌える……。萌え死ぬ……。りゅ、竜

崎……お、俺、もう死んでも良いかなって……」

ソーナ・ＬＯＶＥの匙には、魔法少女の姿がクリティカルヒットだったらしい（笑）。新は匙の顔をペチペチと叩きながら言う。

「しっかりしろ、匙。こんなところで死ぬな。オーディションが始まってもいない内に死なれたら……俺の負担が増えるだろうが！　ただでさえ一誠が風邪で来られなくなったってのに……！」

新の言う通り、一誠はこの日に限って風邪を引いてしまったらしく、会場に来ていないのだ。一誠は這いつくばってでも行こうとしたのだが、やはり無理だった。

そんな一誠から連絡を貰った新は、電話越しに遺言（？）を託された。

『新……お、俺の分まで……部長やアーシア、皆の魔法少女姿を目に焼き付けて……帰ったら事細かに教えてくれ……。金ならいくらでも出す……っ』

弱々しくも力強い遺志（まだ死んでない）を託された新は溜め息混じりに「……分かったよ」と了承するしかなかったそうだ。

『……あ、あと、ツッコミ役もよろしく……。多分、そのオーディション荒れると思うから……』

普段ツッコミ役（？）を背負わされている一誠がいない今、その役目は新に託されてしまったのだ。せっかくのオーディションなのにあまり乗り気じゃないのは、そのせい

である。新が心中でイラつく最中、匙は震える声を絞り出す。
「……メ、メガネっ子の魔法少女だぞ……？　か、会長は俺をピンポイントで殺しに来ている……。……女子高生でその格好は無理があるのも分かる……。それでも俺にとっちゃマジカルでラジカルなクリティカルヒットなんだぜ……？
「お前、メガネ属性だったのか。……まあ、確かにリアスも珍しく恥辱に耐えている姿はグッと来るモノがあるな。童貞鼻血マンのお前には荷が重すぎたか」
「悪かったわね……、高校生の私が魔法少女の格好をしていて」
ペチンと新の頭を叩くリアス。そんなやり取りをしていると、後ろで祐斗が「やれやれ」と苦笑していた。
会場の女の子達から「あの人かっこいい！」「芸能人かな！」と熱い視線と黄色い声を貰っている。新も見た目は良いので「あの人も素敵！」「ワイルドな感じが堪らない！」と同じように熱い視線と黄色い声を貰っていた。
ロックミュージシャン風の私服なので、良い意味でも悪い意味でも目立つ（笑）。
「ふむ、この格好も動きやすいか」
「うーん、天使が魔女だなんて……」
「魔法少女ですよ、イリナさん。でも、ちょっと恥ずかしいですね……」
ゼノヴィア、イリナ、アーシアの教会トリオも魔法少女の姿で登場。ゼノヴィアは模

造の刀剣を帯刀し、頭にはラブリーなリボンを付けていた。イリナも魔法少女の格好にプラスして自前の天使の輪と白い翼を展開していた。

そして、アーシアはピンク色メインのフリフリ衣装に身を包んで、肩には小ドラゴンのラッセー（精巧なぬいぐるみと言う設定らしい）を乗せていた。手にもマジカルなスティックを持ち、グリーンの瞳に金髪も合わさり――その姿はまさに魔法少女そのものだった。

「……やはり、小猫ちゃんか、アーシアさん辺りがそういうの似合うんでしょうね」

ロスヴァイセの声。振り返ってみるとヴァルキリーの装備になっているロスヴァイセの姿があった。

「ロスヴァイセは魔法少女の衣装を着なかったのか？」

新が問うと、ロスヴァイセは息を吐く。

「あーいうのを着るぐらいなら、着慣れたこちらの方にします。……さすがに私だけ普通の格好では申し訳無いので。これでご容赦願いたいところです」

「義理堅いな。……まあ、ロスヴァイセの魔法少女姿も見たかったな」

「新さん、あなたはどれだけ私に恥ずかしい思いをさせたいのですか……？」

「いや、そんなつもりはねぇよ？　純粋に見たかったってだけで」

屈託の無い感想にロスヴァイセは若干頬を赤く染める。そこもまた可愛らしい。

「せ、先輩……」
　続いてギャスパーの声も後方から聞こえてくる。振り替えるとそこには――――魔法少女の衣装を着た後輩男子がモジモジしながら立っていた。
「……ナニシテンノ？　オマエハオトコダロ？」
　あまりのインパクトに片言で問い質す新。ギャスパーは赤面しながら言う。
「……レ、レヴィアタンさまが僕の分まで書類を出していたそうで……。つ、通過しちゃっていたんですう……」
　何という事でしょう。女装男子がまさかの書類選考合格……！　性別を偽った？　否、素で通過しました（笑）。……グレモリー眷属は新と祐斗、病欠の一誠以外全員参加と言う形になった。
「……は、恥ずかしいわ。シトリーの『女王（クイーン）』たる私がこのような……うむむ、竜崎くんも見ていると言うのに……っ！」
「こ、これも会長の為ですよ！」
「そう思い込まないとやってられないし……」
　横では着替え終わったシトリー眷属の女子達も匙のもとに集まり出していた。匙は相変わらずソーナの魔法少女姿に鼻の下を伸ばしている……。後で八つ当たりしてやろうかと考えていると――――。

「……その気配、悪魔さんと同じにょ？」

突然投げ掛けられた野太い声。恐る恐るそちらへ視線を向ける新。

「……カハッ」

――――以前、一誠から聞かされた事を思い出した。

『俺のお得意様には、魔法少女に憧れる穢れの無い漢の娘がいる。今度お前にも紹介しておくよ。もしかしたら、何処かで会うかもしれないから（笑）』

そう言って見せられたのは――――眼前にいるのと同じく、巨木のように太い上腕、明らかにサイズの合わないマジカルな衣装を張り裂かんばかりの分厚い胸板。

フリフリのスカートから姿を現す女性の腰回りよりも太い足。頭部の猫耳。指の1本1本がゴツくて太く、握るマジカルスティックがあまりに小さく見えてしまう。

そして、彫りが深く濃すぎる顔……。ソレを見せられた当初、新は壊れた哄笑を上げながら一誠を半殺しにした（笑）。そして――――「こんな魑魅魍魎もマッハで逃げ出すような人外魔境に出会ってたまるか！」と吐き捨てた。

しかし、その願いは敢えなく打ち砕かれた……。

「……ア、アンタが噂の……ミルたん……っ？」

「そうだにょ。ミルたんにょ。ミルキーになる為に来たんだにょ」

おかしい……！

絶対におかしい……ッ！

新は頭を押さえて天を仰ぐしかなかった！

ここにいると言う事は……彼も書類選考を通った事を示す……っ。性別どころか人種さえ疑わしい筋肉の塊が何故に通る⁉　明らかに魔法と程遠い存在感を放出していた！

「……一応、訊いておく。オーディションを間違えてませんか？　格闘技やボディービルの会場はここじゃないんだが……？」

新の問いに対し、ミルたんは彫りの深い顔を笑ませるだけだった。

「何を言っているにょ。ミルたん、魔法少女になる為にここに来たにょ」

「いや、明らかに魔法よりも拳法か殺法に特化した肉体だろっ⁉　溶鉱炉に落とされても秒単位でアイルビーバック出来そうな肉体だぞっ⁉」

〝このオーディション、案外ろくでもない選考基準なんじゃないのか……⁉〟

そんな事を考えていたら、会場がザワつきだした。何事かと思えば、映画の関係者らしき人達が入ってきた様子だった。

「はーいはい、皆さーん。今日はお集まりいただいてありがとうございまーす」

一昔前のプロデューサーの如く肩にセーターを羽織った業界人風の男性が会場にいる新達に向けてそう言う。その男の横には帽子、サングラス、ちょびヒゲと言う出で立

ちの少し怖そうな雰囲気の男性とロン毛で線の細い男性の２人が並ぶ。
プロデューサー風の男性がマイクを使い会場全体に発する。
「私は『劇場版魔法少女ミルキー』のプロデューサー、酒井でーす。そちらの帽子を被った方が監督の遠山監督、その隣にいる髪の長い方が脚本家の東海林先生！」
「……」
「どーも」
無言の監督と軽い挨拶をする脚本家。
「見て見てソーナちゃん！　魔法少女モノと特撮モノに定評のある遠山監督に東海林先生よ！　生で見るのは初めてなのよ☆」
大興奮のセラフォルー。どうやら、そちらの方面では有名な人のようだ。しかし、目を引くのは彼らだけではない。明らかに場違いと言うべき着ぐるみがいる……。
見た目はよくあるウサギの着ぐるみだが、目元、耳、鼻等の配色がパンダと全く同じ。謂わば――パンダ柄のウサギの着ぐるみである。
コミカルなポーズを続ける着ぐるみを見て、セラフォルーが再び興奮気味で言う。
「あーっ！　アレは魔法少女モノと特撮モノに時折出てくる謎の賑やかしキャラ、パン・ダビットソンくんよ！　まさか……このオーディションで、しかも生で見れる日が来るなんて嬉しいっ☆」

「ここはカオスの巣窟か……？」
新が唖然とした様子で見ていると、パンダ柄のウサギ――パン・ダビットソンが手を振ってくる。新は「あー、はいはい」と投げやりな感じで手を振り返す。
すると、パン・ダビットソンがピョコピョコやって来て、新の手を取って握手する。そこへセラフォルーがやって来て――。
「パン・ダビットソンくーん！　私にも握手して☆」
セラフォルーがビシッと手を差し出すと、パン・ダビットソンは『ＯＫ』と言った感じでポーズを決め、セラフォルーの要望に応える。
そんな中、プロデューサーが再度言う。
「遠山監督や東海林先生と共に今日は映画に出演するキャストを選んでいきたいと思います。しくよろ～」
『よろしくお願いします！』
会場の女の子が一斉に選考員に挨拶すると、監督が眉間にシワを寄せて、会場にいる女の子達をマジマジと見始める。監督はうんうんと頷き、プロデューサーを呼び寄せて耳打ちする。
「ふんふん。なるほどなるほど」
プロデューサーは相槌を打ち、書類と照らし合わせながら――リアスやソーナの方

に視線を送る。プロデューサーがコホンと咳払いした後に告げる。
「えーと、いきなりですが、今回の一次試験の結果が今ここで決まりました」
「は？　もう決まったの？」
　あまりにも早すぎる展開に新は勿論、会場の女の子達も「ええっ⁉」と驚愕していた。プロデューサーが監督主導のもと、名前を次々とあげていく。
「――――さん、リアス・グレモリーさん、ソーナ・シトリーさん、アーシア・アルジェントさん」
　その中にはリアスやソーナ、グレモリー眷属＋イリナ、シトリー眷属、セラフォルーも含まれており、挙げ句――――。
「それと、『ミルたん』さん」
　何故かミルたんまで名前を呼ばれていた……！
「いま呼ばれた方が一次試験突破です！監督はフィーリングを大切にされる方なので、すみませんがこれにて一次試験終了でーす！」
『ええぇぇぇぇぇぇぇっ⁉』
　不満と驚きの声を上げる女の子達。
「「ええぇぇぇぇぇぇぇっ⁉　こんな格好で⁉」」
　同様に合格に目が飛び出すほど仰天するリアスとソーナ。実はここに向かう前、リア

スは新に「あんな格好をするのだから、まあ、セラフォルーさまを始め、私達は早々に落ちるでしょう。選考ってそんなに甘くはないでしょうし」と苦笑しながら言っていた。

しかし、この選考は糖分タップリと言わんばかりの甘々(あまあま)だった……っ。

「やったー☆　やっぱり、分かる人には分かってしまうのね！」

大はしゃぎのセラフォルー。更に合格者の周りをパン・ダビットソンがピョンピョンと跳ね回り、賛辞を表現していた。

「……っ、これはただのオーディションじゃないかもしれねぇぞ……っ」

……波乱に満ちたオーディションの幕開け。この一次試験も、その序章に過ぎなかった……。

魔法少女リーア☆マジか!?　中編

二次試験の会場は場所を変え、広いフロアの一室だった。身内の女子は全員合格してそこに行ってしまったので、新と祐斗と匙は気付かれぬようフロアの扉を少し開けて中の様子を窺(うかが)っていた。

選考員＋数名のスタッフが長テーブルの席についており、対面するように参加者がパイプ椅子に座っている。

先程の唐突な合格によってここまで来られたのはグレモリー＆シトリーの眷属女子、セラフォルー、ミルたんを含めて３０名程度。……半分以上がコスプレ魔法少女と言う異様な光景だった。プロデューサーが言う。

「えー、合格おめでとうございます。皆さんの合格理由は我々の映画に対するコンセプトとマッチしていたのです。そうですね、東海林先生？」

プロデューサーから振られた脚本家はロン毛を手で払いながら、キザな口調で言う。

「その通り。僕と監督は今回、今までにないミルキーを作りたいと思っているんだ。そう、普通のキャストを求めちゃいない。過激で！　華麗で！　比類なき才能を発掘して、僕らと共に新たなミルキーを作り上げていきたいんだよ。ね、監督？」

今度は監督に振られる。監督は不機嫌そうに腕を組み、チョビヒゲの口元を動かした。

「いいね～」

その一言の意味も分からず、試験がスタートする。どうやら二次試験は自己アピール――面接のようだ。

呼ばれた女の子がスタッフの前に立ち、質問に応じながら自分をアピールしていく。普通にアピールしていく一般の女の子達とシトリー眷属の女子。そして、グレモリー眷属の女子＋イリナはと言うと……。

プロデューサー「特技は？」

ゼノヴィア「悪魔祓(ばら)いと斬る事だ。剣さばきには自信がある」

監督「いいね～」

プロデューサー「どうして魔法少女になりたいと思いましたか？」

ロスヴァイセ「それはどうして魔法を覚えたか、と言う事ですか？　そうですね。ヴァルハラと言う所への就職に有効でしたし、あちらの業界では魔法がステータスなので必修として覚えました。北欧式は勿論、最近は黒魔術と白魔術、召喚魔法にも手を伸

ばし始めてます。魔法には自信があります」
脚本家「設定から作ってきたんだね。鎧まで着てくるなんて、役に入っているね。うんうん」

プロデューサー「魔法少女の衣装に輪っかと翼！　天使の魔法少女とは珍しいですね」
イリナ「いえ、私、天使ですし」
プロデューサー「おおっと、自称で『天使』と言っちゃうなんて自信満々ですね～」
イリナ「いえいえ、本当に天使なんですよ。ほら、手の甲にA（エース）って記されているでしょう？　これって、天界にいる天使長ミカエルさまのA（エース）って事なんですよ～」
監督「いいね！」

……と、こんな感じでムチャクチャでした（笑）。
一般人に話してはいけない事まで話している……。幸（さいわ）いにも、ここにいる人達は一切誰も信じていなかったが、今日に限って身内の女子達のテンションが変な方向に迷走している気がしてならない……。
「今日は個性的な女の子が集まっていますね～」

「いいねぇ」
プロデューサーも監督も楽しそうにしている。そして、何故か賑やかしキャラのパン・ダビットソンもフロア内で待機――と言うより、身振り手振りで応援していた(?)。
『……ここには変なスタッフしかいねぇのか……?』
新は心中でツッコむ。朱乃やアーシア、小猫は何とか普通に受け答えしてくれたので、そこは一安心。
そして、セラフォルーに順番が回ってきた。セラフォルーはスタッフの前に出ると、クルクルと可愛く回ってウインクを向ける。
「レヴィアたんです☆　ミルキーが大好きで、今日来ちゃいました!　よろしくお願いしまーす♪　ブイ☆」
「そうですね。書類にも並々ならぬ想いが書かれておりました」
「はい、その通りでーす、プロデューサーさん!　私とミルキーの出会いは――」
セラフォルーは目を爛々(らんらん)に輝かせながら、無垢な一般ファンの少女のようにミルキーの素晴らしさを語り始めたのだった。どう見てもミルキーの熱狂的なファンによる作品語りなのだが、監督も脚本家もうんうんと興味深そうに聞いていた。
セラフォルーのアピールも好印象で終わる。

「それでは次にミルたんさん、どうぞ」
プロデューサーの呼ぶ声と同時に参加者席から言い知れない覇気が放たれ始めた……。
ヌゥッと巨大なシルエットがゆっくりと立ち上がる。寒気すら感じる闘気を纏いながらスタッフの前に立ったのは――巨躯の漢の娘、ミルたん……ッ！
「お願いしますにょ」
圧倒的な存在感にスタッフも気圧されている様子だった。それもその筈、どの角度から見ても今日この場にいてはならない部類の生物にしか見えないのだから……っ。
「……な、何だ、あの生き物は……」
新と一緒に部屋の様子を見ていた匙がそう呟く。
「匙、アレは一誠曰く――地上最強の漢の娘、だそうだ……。俺も一誠から聞いた程度でしか知らないが、現白龍皇に気配すら感じさせずに近付けるらしく、一誠のお得意様でもあるらしい……」
「マジかよ！　『漢の娘』なんて単語、生まれて初めて耳にしたぞ。何だよ、その絶対に出会っちゃいけない系の単語はよ……。人間か？」
そんなやり取りをしている中、ミルたんの面接は進む。
「……一応、お聞きしましょう。と、特技は？」

「精霊と交信していろんな魔術が使えますにょ」
「なるほど。しかし、それでは他の参加者と同じですよ?」
などと脚本家は言うが、そういう問題ではない（笑）。
「じゃあ、ミルたんの魔法力を見せてあげるにょ」
そう言うとミルたんは余ったパイプ椅子を持ち上げた。すると、全身の筋肉が盛り上がり始める！
腕や背中がいっそう隆起して巨大に膨れ上がる中、ミルたんはパイプ椅子を易々（やすやす）と折り曲げ、ひしゃげ、形を変えていく。
ベキン！　バキッ！
映画のオーディションでは絶対に聞こえてはいけない怪音が会場に響き渡る……！
隠れて見ている新も会場の人達も驚き、ミルたんはパイプ椅子を圧縮し続けていく。
次第に小さく形を変えていくパイプ椅子は最終的にミルたんの大きな両手にスッポリ収まる程にまで変形していった！
ぎゅうううう……っと、おむすびを力強く握る要領でミルたんの手の中に生まれたのは――圧縮され過ぎたパイプ椅子の成れの果て。歪（いびつ）な鉄の球体と化していた。
ミルたんはそれを満面の笑みでスタッフに見せつける。
「パイプ椅子を鉄球に変える魔法にょ。魔法力、感じてくれたにょ?」

『魔法力じゃねぇよ！　それ、ただの腕力だろ⁉』
「ミルたんの希望は癒し系によ」
『癒し系どころか嫌死系、または壊し系じゃねぇか！』
「いいね！」
『良いね、じゃねぇだろクソ監督ゥゥゥッ！　なんでノリノリ⁉　お前らの目はビー玉か⁉　このオーディション壊れてやがる！』
　新はもう頭を抱えて、心中のツッコミに疲れ果てていた。ミルたんのアピールも終わり、次の人の名前が呼ばれる。
「じゃあ、次はリアス・グレモリーさん」
　遂にやって来たリアスの番。リアスの方へ視線を向ければ――――顔を真っ赤にして体を震わせていた。
　彼女が震えているのには理由がある。一次試験合格後、こちらの会場に向かう途中でリアスは言った。
「……わ、私、レヴィアタンさまにもし試験を1つでも合格できたら、アピールタイムの時、レヴィアタンさまの言う通りのアピールをしますって言ってしまったの……」
　セラフォルーはアピールタイムに備えて、リアスとソーナの分のアピール台本を用意していたらしく、リアスもソーナもそんな簡単にオーディションを進めるわけが無いと

踏んで軽く約束してしまったのだ。
それが現実に叶ってしまい、リアスは極限状態に追い込まれてしまっていた。見ればソーナの方も極度の緊張で、顔が強張(こわば)っている……。
リアスがセラフォルーの方を振り返ると、セラフォルーは期待に満ちた表情かつ無垢な眼差しでリアスを見つめている。純粋に楽しみなのだろう。リアスが自分の決めた魔法少女アピールをする事が……！
リアスが一度交わした約束を違(たが)える筈も無く――――。リアスが席を立ち、スタッフの前に進んでいく。
そして、深呼吸を1つすると――――声色(こわいろ)まで可愛くして、リアスが叫ぶ。
「魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺(めっさつ)しちゃうぞ☆」
このように冒頭へ戻るのであった……。
「魔法少女ソーナ！　まばゆい魔法で凶悪魔人をたくさん消滅させちゃうもん☆」
続くソーナの無茶したアピールを見て、セラフォルーと匙が鼻血を噴いて狂喜乱舞(きょうきらんぶ)していた。
結局、リアス、ソーナ、セラフォルー、ミルたんを含む数名が合格して、三次試験へと進む事になってしまった……。

午後からはバスで移動して、試験場所を変える。

「……死にたいわ」

「……ええ、私もです」

新達はバスの中で落ち込むリアスとソーナを励ましていた。……この2人は本当に頑張っていた（笑）。しかし、それでも何かが間違っているオーディションはまだ続く。

バスで到着したのは撮影現場の1つとされる港近くの廃工場だった。ここで撮影形式の演技をチェックするらしい。撮影現場で試験とは、かなり力が入っている。

などと思っていたら、物陰から黒いローブを着込んだ怪しげな女性が複数出現する。新達――――悪魔へ敵意と殺意を放ち、眼前に立つ。

「私達は『禍の団（カオス・ブリゲード）』の一派――――『ニルレム』に属する魔法使いだ。我ら魔法の使い手を侮辱せし魔王レヴィアタンに抗議をしに来た」

なんと姿を見せてきたのは『禍の団（カオス・ブリゲード）』の魔法使い。例のセラフォルーを狙っている連中だった。ここに来てまさかの襲撃……。

「おや？　ドッキリ？」

プロデューサー達は状況を理解していない様子。ここで一般人を巻き込むのはマズ

イ……。緊迫する中、他の参加者とスタッフ達の体がよろめきだした。
「あれ……眠気が……」
パタリと1人、また1人とその場で倒れていく。
「さすがに巻き込んだら可哀想だから、眠らせたのよ☆」
セラフォルーが指に魔力を光らせながらウインクをくれた。指先1つで一般人全員を瞬時に眠らせる辺り、流石(さすが)である。
「新、皆、無関係の人間を安全な場所に運んでちょうだい！」
「ああ、分かった」
新達はリアスの指示のもと、路面に倒れたスタッフを離れた場所に抱えて運んでいく。
「さーて、ソーナちゃん、リアスちゃん！魔法少女対魔法少女なのよ！　魔法をきらめかせましょう！　良い？　昨夜、練習した魔法の掛け声でいくの！」
襲撃を受けているこの状況でもセラフォルーは無茶ぶりをリアスとソーナに言う。
無論、2人も驚いていた。
「ええっ⁉　こんなところでですか⁉」
「お、お姉さま！　時と場所を考えてください！　相手はテロリストなのですよ！」
若干(じゃっかん)、怒り気味のソーナに言われてもセラフォルーは「うふふ」と不敵な笑みを止め

ない。
「２人が着ている魔法少女の衣装は、一度着てしまうと昨夜練習した方法でしか魔力を放てなくなる特別な作りなのよ！　さあ、一緒にマジカル☆魔力を撃ちましょう！」
「そ、そんな！　この服にそのような効果を施(ほどこ)していたのですか⁉」
「お姉さま！　もう！　どうして、そんな事ばかり！」
不満を漏らすリアスとソーナだが、それでも相手は待ってくれない。
「女の魔術師を舐めるな！」
「死ぬが良い、悪魔ども！」
魔法陣を展開し、炎、雷、水と様々な属性魔法を放ってくる魔女達。新達はそれを躱(かわ)しながらリアス達の指示を待つ。
「悪の魔法使いは許さないにょ！」
ミルたんが近くのドラム缶を持ち上げ、魔女に向かって放り投げる。新は「……んんっ⁉」と一誠並みの顔芸で驚愕し、目の前の光景に視線を向けた。
「ミルキィィィィィィィィ・スパイラルゥゥゥゥ・ボォォォムァァッ！」
野太い声と共に、ミルたんは魔女が撃ち出した魔法の火球や氷の槍を拳で破壊していく！
「ミルキィィィィ・サンダァァァァァァ・クラッシャァァァァァァァッッ！」

更にアスファルトを抉る程の鋭い蹴りで、複数人の魔女を一気に弾き飛ばす！
その光景を見た新は「……コイツ、何者ォ!!」とビックリ仰天するしかなかった。それもその筈。セラフォルーの魔力が効かない上に、魔女の魔法を拳と蹴りで破壊しているのだから……。
「何だ、この……何だ、こいつは!!」
「新手の冥界生物か!!」
無論、魔女も驚愕していた。遂には例のスティックで魔女の魔法を打ち消し始めた……。何度も言うが、ミルたんは一般人（？）かつ魔法少女に憧れる穢れの無い漢の娘です（笑）。
リアスはプルプルと全身を震わせ、目元に涙を溜めながらヤケクソ気味に大きく叫んだ。
「グレモリースティィィィィィック！」
胸の飾りからラブリーなエフェクトを放ちつつ、魔法のスティックが出現する。
「シトリースティィィィィィック！」
同様に恥辱の涙を流しながら、ソーナが魔法のスティックを出した。セラフォルーも自前のスティックを取り出して、リアスとソーナ、そして両眷属の女性陣に掛け声をかける。

「さあ、行くわよ、皆！　レヴィアビィィィムッ！」
「リーア・シャイニング・ラブ・ファイヤァァァァッ！」
「ソーナ・ライトニング・アクア・ジャスティィィィィスッ！」
セラフォルーを筆頭にリアス、ソーナの強烈なマジカル攻撃（笑）。更にはグレモリー、シトリー眷属の女子達の追撃も加わり、膨大な魔力が撮影現場で爆ぜていく！
リアスとソーナの魔力が発動する瞬間、可愛らしい☆マークや♥マークが撒き散らされていた……。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」
その威力に本物の魔法使いも太刀打ちできない様子だった。テロリストの魔女達がコスプレ悪魔のマジカル攻撃によって倒されていく――何とも珍妙な光景だ……。
新も倒れた一般人を匙と祐斗に任せておき、どさくさに紛れて――。
「脱がしの呼吸、壱の型――全裸一閃」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「続いて弐の型、乳揉味」
「や、やめ……アッ、ぁん……っ。イヤァン……っ」
魔女の衣類を斬り裂き、裸体とおっぱいの感触を堪能していた。そこにベチンッと新の背中に小猫のツッコミによるチョップが軽く飛んできた。

「おうっ……小猫、いつの間に……」
「……エロエロは禁止です」
新が突っ込まれている間にも戦闘は終了していた。まあ、最強の女性悪魔と称される魔王セラフォルーがいるのだから、そう簡単には負けない。
「……もう、こういうのは懲りごりだわ」
「……そうね。巻き込んで申し訳ないわ、リアス」
恥辱に耐えて、息を吐くリアスとソーナだったが――――ポンッと言う軽い音がする。
セラフォルーとロスヴァイセを除いたリアスとソーナ、そして魔法少女のコスプレをしていた女子達の衣装が綺麗サッパリ消え去り、全裸となった……。
「あれれ、戦闘をした拍子(ひょうし)に衣装に施した特殊加工の術式が解けたのかしら？」
セラフォルーは首を傾(かし)げながら言うが、女性陣の多くが手で体を隠して「キャアアアアアアアアアッ！」と悲鳴を上げた。朱乃とゼノヴィアは裸になっても「あらあら」「おっ？」と冷静を崩さず、リアスも感覚が麻痺しているせいか、多少顔を赤く染める程度の具合で手ブラをする。
「ふぇぇぇぇんっ！　なんで僕までぇぇぇぇっ⁉」
何故かギャスパーの衣装も煙のように消え、ギャスパーは悲鳴を上げて体を隠す。その際、新は「死ねっ」と毒づいた。

目の前で繰り広げられる裸祭りに新の視線は釘付け。役得とばかりに女子達の裸体を見ていると、裸の小猫が袖を掴み———。
「……新先輩。いつものように上着を貸してください」
「小猫、既に俺から上着を奪おうとしているし、俺より強い力で追い剥ぎするのは止めてくれるか？」
そう言ってる間にも新は上着を奪われ、小猫が新から奪い取った上着を羽織って裸体を隠す。そこへイリナもやって来て———。
「あ、新くん！　シャツを貸してぇぇぇぇ！」
「イリナ、お前も追い剥ぎに来たのｋ———って、コラァ！　小猫！　なんでシャツまで奪い取るんだぁ⁉」
「……私達の裸を見たんですから、等価交換です」
「こんな時に等価交換を持ち出すな！　って、ゼノヴィア⁉　なんでお前は俺のズボンを奪おうとするんだ⁉」
「小猫が新の上着を着て、イリナが新のシャツを着ているから、私は新のズボンを穿くしかないだろう？」
「その理屈はおかしい！　お前らは俺をパンイチにする気か⁉」
「良いじゃないか。私達も裸で、新も裸になればお揃いだぞ？」

「そんなお揃いは御免だ！」
小猫とイリナが新の上着とシャツを着て、裸のゼノヴィアが新からズボンを奪おうとしている……。そんな珍妙な光景にリアスは思わず苦笑する。
「ふふっ、新も大変ね」
「リアス、ロスヴァイセ先生が魔法で着替えを出してくれましたから。早く着ましょう」
「ソーナ、あなたも見ておいたら？　新がアタフタしている姿って結構レアなのよ？」
「そう言えば、そうですね。ふふっ」
ソーナも珍しく意地悪な笑みを浮かべていた。見物もそこそこに、ロスヴァイセが魔法で出した着替えを着ようとした、刹那――――。
ドドドォォォォンッ！
突如、けたたましい爆音が鳴り響き、全員の視線がそこに集中する。視線の先に映る爆煙。その中から２つの人影が放り出される。
「――――っ⁉　祐斗⁉」
「――――っ！　サジ⁉」
リアスとソーナが驚く。彼女達の言う通り、爆煙の中から放り出されたのは祐斗と匙だった。しかし、彼らは何故かボロボロで血まみれの姿で倒れていた。
匙は既に白目を剥いて意識を失っており、祐斗も虫の息だった……。

「ぶ、部長……すみません……っ。油断して――がはっ！」

何者かに背中を踏みつけられた祐斗は意識を絶たれ、地に突っ伏す。いったい誰が……!?　そんな考えを過らせたのも束の間、謎の攻撃は更に――。

漆黒の閃光が一直線に空を走り――新の右足を貫く……っ！

「――っ!?　アァァァァァァァァッ！」

「新!?　新アッ！」

右足に風穴を開けられた新は崩れるように膝をつき、傷口から血が流れる。直ぐに皆が攻撃の発生源に視線を向けると、そこにいたのは――。

「――っ。パ、パン・ダビットソンくん……!?」

セラフォルーがショックを受けた表情でその名を呼ぶ。そう、攻撃の主は先程までコミカルな動きとポージングで場を賑やかしていた着ぐるみ――パン・ダビットソンだったのだ。

何故あのふざけた着ぐるみウサギが新達に攻撃を仕掛けてきたのか……？　その答えを知るのは遅くなかった……。パン・ダビットソンが軽やかにステップを踏みながら移動し、挨拶をする。

「ボ～ン、Ｂｏｎｊｏｕｒ。お加減は如何でしょうか？」

その口振りは忘れたくても忘れやしない……。パン・ダビットソンが頭部の被り物を

外す。その下から現れたのは――――見覚えがあり過ぎる顔だった……。

「――――ッ！　キリヒコ……ッ!!」

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、〝人生とは思いがけない事が得てして起こる〟――――。誰が言ったのかは知りませんが、妙に納得できる言葉ですよね。何せ……奇抜な着ぐるみキャラが出入りしても怪しまれないどころか、出演依頼を持ち掛けてくる奇特な人種までいるのですから。潜入の為とは言え、当初はくだらないと考えていましたが……やってみると案外楽しいものですね」

　キリヒコは取り外したパン・ダビットソンの被り物をクルクルと回し、宙に浮かせてからキャッチ。キリヒコの登場により、新達は一気に警戒態勢を強めた。リアスが憎々しげにキリヒコを睨み付ける。

「その口振りからすると、私達がここに来る以前から潜伏していたようね。私も驚いたわ。まさか外道の権化とも言えるような悪党が着ぐるみで変装しているなんて、思いも寄らなかったもの」

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、それに関してはノーコメントでＳ，ｉｌ　ｖｏｕｓ　ｐｌ■ｉｔ。返す言葉もありませんので」

「あら、随分と素直ね？　そのまま大人しく滅んでもらえると嬉しいのだけれど」

「Ｎｏｎ、それは丁重にお断りさせていただきます。仮に私が滅びても……あなた方を

道連れに――――いや、あなたの方が大きなダメージを受けると思いますよ？」
キリヒコは右腕に出現させた装置（デバイス）を掲げ、宙に何かの映像を映し出す。それを見たリアスは次第に顔面蒼白となり、ワナワナと震え始めた……。
『魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺（めっさつ）しちゃうぞ☆』
映し出されたのは――――先程のアピールタイム時に披露したリアスの姿だった……！
そう、キリヒコはパン・ダビットソンとして会場に居た。その時に抜かり無く録画していたのだ。キリヒコは底冷えさせるような含み笑いをする。
「それにしても……フフフッ、面白いですねコレは。名高いグレモリー眷属の『王（キング）』に、このようなお茶目な嗜好があるとは思いませんでしたよ。今の刺激的な格好もそうですが、こちらの方がよりインパクトありますね」
『魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺（めっさつ）しちゃうぞ☆』
「や、止めなさい！　それ以上は……！」
『魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺（めっさつ）しちゃうぞ☆』
「本当にやめてっ、お願い……っ」
『魔法少女リーア！　きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺（めっさつ）しちゃうぞ☆』
「もう、これ以上――――っ」

『魔法少女リーア!』『魔法少女リーア!』『魔法少女リーア!』『魔法少女リーア!』『魔法少女リーア!』『魔法少女リーア!』

「……うわぁぁぁぁぁぁあんっ!　もう嫌アアアアアアッ!」

キリヒコの執拗なメンタルブレイク攻撃に耐えきれなくなったリアスは両手で顔を覆い隠し、泣き崩れてしまった……っ。そのやり口に新も他の皆もドン引き、ソーナが「リアス!　しっかり!」と言ってリアスの背中を擦る。

「なんてヒトなの……。リアスから話は聞いていたけど、ここまで非道な行いを平然とする者は初めて見ました……っ」

「私だって心苦しいですよ（笑）。笑いを堪えるのにどれだけ苦労した事か」

キリヒコは続けて〝ある映像〟を宙に投影し始めた。それは――――同じく先程のアピールタイム時に披露したソーナの姿……。

『魔法少女ソーナ!　まばゆい魔法で凶悪魔人をたくさん消滅させちゃうもん☆』

「グフゥッ!」

黒歴史映像を投影されたソーナは血を吐くような音を口から出し、リアスと同じように玉砕、メンタルブレイクされてしまった……。

新が負傷した足を引きずりながら、リアスとソーナのもとに歩み寄る。しかし、彼女達の眼からは生気が失われていた……。

「新……私、穢されたわ……。出来る事なら今すぐにでも死にたい……っ」
「しっかりしろ、リアス！　傷は決して浅くないが、ヤツのペースに乗せられるな！」
「新くん……もし、生まれ変われるとしたら……私は物言わぬ貝になりたいです……。そうすれば海の底で静かに暮らせます……っ」
「なんてこった……っ！　あの２人がここまでバグっちまうとは……！」
　新はリアスとソーナの介護に追われる羽目になってしまい、眷属の皆もリアスとソーナを懸命に励ます。しかし、それでも外道の追撃は終わらない……っ。
「せっかくですから、この貴重（笑）な映像を三大勢力間に流してみましょうか。これで彼女達の人気もウナギ登りに――」
「やめろ。マジでやめろ！　そんな事をしたらリアスとソーナが死ぬ！　いろんな意味で死ぬ！」
「そう言われましてもねぇ」
　鬼畜過ぎるキリヒコの所業になす術は無いのか……と思った矢先、勇猛果敢に立ち向かう１人の魔法少女――否、魔王少女がいた。
「あなたの思い通りにはさせないわ！　これ以上、私の大事な大事なソーナちゃんをイジメるヒトは魔法少女マジカル☆レヴィアたんが滅ぼしちゃうわよ！」
　自前のスティックをクルクルと回し、ポーズを決めるセラフォルー。それを見てキリ

ヒコは紳士風に挨拶する。

「Ｂｏｎｊｏｕｒ、Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ。あなたが四大魔王の１人、セラフォルー・レヴィアタンですね？　このような酔狂な場でお会いできた事を光栄に思います。私はユナイト・クロノス・キリヒコ、造魔の――」

「知ってるわ。時間を停める能力を持つ諸悪の根源。そして、その能力で行った悪行の数々……。たとえ天使・堕天使が許しても、このマジカル☆レヴィアたんが許さないっ！　あなたはそれ程までに重い罪を犯したのよ！」

「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、いったいどのような罪なのでしょうか？」

嫌味な笑みを浮かべてわざとらしく訊ねるキリヒコ。セラフォルーは指を突きつけて答えるが――その内容は全く違うものだった……。

「あなたの罪、それはうちのソーナちゃんを現在進行形でイジメて泣かした事よ！　いいえ、それだけじゃないわ。あなたは時間を停める能力を使って、ソーナちゃんの体を隅々まで舐め回すような視線で見た！　ソーナちゃんの可愛いほっぺにチューしたり！　ソーナちゃんの控えめで慎ましやかなお胸をツンツンしたりモミモミしたり！　ソーナちゃんの小振りなお尻をナデナデしたり！　更には時間を停めているのを良い事に――ソーナちゃんを脱がしてあんな事やこんな事、そんな事にどんな事まで……きっとそうに違いない！　あなたはソーナちゃんがお嫁に行けなくなるぐらいの辱し

めを与えたのよ！」

見当違い過ぎる指摘をされたキリヒコは「……ちょっと何言ってるか分かりません」と返すしか無かった。それでもセラフォルーの暴走論理が続く。

「そして今も尚、隠し撮りしたソーナちゃんの魔法少女姿を世間に晒すつもりなのね！　ダメよっ、ダメダメっ！　ソーナちゃんの魔法少女姿はお姉ちゃんだけの永久保存版なのよ！　さあ、おとなしくソーナちゃんの可愛い魔法少女姿を撮った映像を渡しなさい！　もしくは売ってちょうだい！　今なら言い値で買うから！」

「頭から酷い指摘だが、後半は完全に私情が入ってる!?」

セラフォルーは鼻血を出しながらキリヒコに取引（とも呼べない酷い要求）を持ちかけるが、キリヒコは首を傾げて「……本当にこれが四大魔王なのでしょうか？」と一瞬当惑してしまう。しかし、直ぐに元の悪意を孕んだ顔付きに戻り、右腕の装置を向ける。

「実に面白いご提案ですが、生憎お金には余裕がありますので。それに……交渉と言うのは自分が有利な状況に居てこそ成り立つものですよ？」

『Ｕｎｉｔｅ　Ｃｈｒｏｎｕｓ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ……!!!』

右腕の装置――『時戒器』から時計盤の幻影が出現し、背後からキリヒコの体を呑み込む。そうして現れたのが……あらゆる刻を停める時間の支配者、ユナイト・クロノス・キリヒコ。邪悪なオーラを滲ませ、その場の空気を一変させる……。

さすがのセラフォルーも表情が険しくなった。
「……確かに凄い圧を感じるわ。これが時戒神クロノス・デ・キチークの真の姿なのね……っ」
「ユナイト・クロノス・キリヒコです」
「それでも私は負けないっ！　これ以上ソーナちゃんの純潔を穢させない！　魔法少女ミルキーと魔法少女マジカル☆レヴィアたんの名に懸けて、ソーナちゃんの純潔を守り通して見せるわっ！」
「ダメだ、この状況！　もう俺1人だけじゃ処理しきれねぇよ！」
カオスな展開が続けざまに起こったせいで、新は頭を抱えて嘆くしかなかった……。
セラフォルーはスティックに膨大な魔力を滾らせ、特大のマジカル攻撃を撃ち放とうとするが――――。
『Ｐａｕｓｅ……!!』
ああ、無情なり。キリヒコは早くも時間停止の能力を発動し、周りの刻を停めた。その力の前では新も、リアス達も、セラフォルーさえも無力と化す……。
キリヒコが悠々とした足取りでセラフォルーに近付いていく。
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、四大魔王でさえも私の能力には抗えませんか。期待していただけに残念です。またも私の思惑通りに事が運んでしまうのですね」

キリヒコは右腕の『時戒器（ツヴァイト・ギア）』から飛び出したチェーンソーの刃を回転させ、切っ先をセラフォルーの首元に向ける。

「シンプルに首を刎（は）ねるか、体を袈裟（けさ）斬りにするか……どちらの方がショックが大きいですかね？　敢えて両方と言うのも良いですね」

不気味な唸り声を上げるチェーンソーの刃。セラフォルーの首を狩り取ろうとした刹那――――。

「悪の魔法使いは許さないにょ！」

「――――っ!?」

突然の声にキリヒコが振り向くと、砂煙を上げながら猛烈な勢いで突き進んでくる1人の漢（おとこ）の娘の姿が視界に映った……。それは言うまでもなく――――ミルたんだった……ッ！

「ミルキィィィ

「ミルキィィィィィィィィィィ・シャアアアアイニングゥゥゥゥゥゥゥゥゥ・スカアイクラッシャアアアア

ミルたんは異次元の速度で距離を詰め、極太の両腕でパンチを繰り出す。「ミルキィィィィィィィィィィパウワァァァァァァァァァァァァァァァァッッ！」と雄々しい雄叫びを上げながら１０発、２０発、３０発とパンチの連打を浴びせていく。

キリヒコもパンチで応戦するが、予想以上にミルたんのパワーが凄まじく――次第に体への被弾回数が増えていく。そして……ミルたんの剛腕パンチがキリヒコの腹部に突き刺さり、衝撃が背中を突き抜ける……ッ！

キリヒコは驚愕と共に後方へ後退（あとずさ）り、腹部を押さえて片膝を地に付けてしまう。

『Ｒｅｓｔａｒｔ（リスタート）……!!』

なんと、その衝撃で時間停止能力が強制的に解除され……周りの刻が全て動き出す。ようやく自由を取り戻した新は違和感に気付き、周りを見渡し――現状に度胆（どきも）を抜かれた。

「……んんっ？　キリヒコが膝を付いてる……？　しかも、相手は――ウソダロッッ!?」

驚くのも無理は無い（笑）。一般人（ギリギリ）である筈のミルたんがキリヒコを追い詰めようとしているのだから。リアス達もその光景に驚きを隠せず、絶句するのみ……。一方、セラフォルーは――。

「……あの娘、凄いミルキーパワーを感じるわ……っ」

このように感嘆するだけだった。……何だ、このカオスは？

「Ｚｕｔ（ズィット）……ッ！」

想定外の存在によほど腹が立ったのか、珍しく苛立ちの言葉を吐き捨てるキリヒコ。しかし、ゆっくりと立ち上がるキリヒコは全身から更に邪悪なオーラを揺らめかせていた。

「まさか、三大勢力にこのような隠し球（だま）がいるとは思いませんでした。さすがに驚きましたよ……っ。Ｊｅ（ジュ）　ｖｏｉｓ（ヴォワ）、私も少々本気を出した方が良さそうですね。時間停止が効かないのであれば――――別の方法で嬲（なぶ）り殺しにしてあげましょう。Ｍａ（マ）　ｐｕｃｅ（ピュース）……ッ！」

最凶（ユナイト・クロノス・キリヒコ）の悪ＶＳ最強（ミル）の漢（たん）の娘――――予測不可能な戦いが実現した瞬間だった……っ。

魔法少女リーア☆マジか!? 後編

『……いつも余裕をかましてるキリヒコが、今回は逆に追い詰められてやがる……っ。こんな状況、初めて見た……！　そして――――マジでミルたんって何者なんだ……っ!?』

アーシアの治療を受けている新が心中でそうツッコミを入れる。それもその筈、キリヒコと対峙しているのは一般人である筈の漢（おとこ）の娘（こ）ミルたんで、あのキリヒコに片膝をつかせたのだから……っ。

一般人に片膝をつかされたせいか、全身から邪悪なオーラを解き放つキリヒコ。それは今までに見た事が無いほど凶悪に満ちていた。一方、ミルたんは本調子のままで――――。

「魔法少女☆ミルたんのミルキーパウワーは、悪の邪神なんかに負けないにょ！」

「Ｆｅｒｍｅ（フェルメ）　ｔａ（タ）　ｇｕｅｕｌｅ（ギョール）!!!!　あなたの言動は何一つ理解できない。いや……だからこそ、これ程までに苛立つのでしょうか……っ。ハッハッハッ、Ｊｅ（ジュ）　ｖｏｉｓ（ヴォワ）……！　グレモリー眷属も私を相手にしている時、このような感じだったんですね……。なかなか良い勉強になりましたよ……！」

キリヒコは薄気味悪い哄笑と共にくぐもった声音で自分に対する皮肉を吐く。罵詈雑言らしきフランス語を吐き、ミルたんに対して完全に敵意を超えた殺意を孕む。右腕の装置（デバイス）――『時戒器（ツヴァイト・ギア）』を操作し、銃口を向けて光弾を連続で発射する。しかし、ミルたんは飛んでくる光弾を拳や蹴りで打ち返していく。

「効かないにょ！　正義のミルキーパウワーを纏ったミルたんは無敵だにょ！」

相変わらずブッ飛んだ持論で常識を破壊していくミルたん（笑）。ミルたんのミルキーパウワーでキリヒコが撃ち放った光弾は全て弾き飛ばされ、距離を詰められる。

「ミルキィィィィィィィィィィ・ダイナマァァァァァァァァイト・ラブリィィィィィィィィプウウァァァァァァァァァンチィァァッ！」

周りを震撼させる程の勢いを乗せた拳が空（くう）を走り、キリヒコの腹部に突き刺さる！その衝撃も凄まじく、両者の間の地面に亀裂が生じる程のものだった……。

またしても剛拳を食らったキリヒコは吐血し、後方に飛び退いてしまう。腹を押さえ、苦悶に歪む呻き声を絞り出す。ミルたんは再度『ミルキー・ダイナマイト・ラブリーパンチ』を突き出していく！　ダメージが溜まっているせいで逃げられないであろうキリヒコに、ミルたんの剛拳が迫り来る……ッ！

ガゴォォンッ！　――と大きく響き渡る音……。再びミルたんの剛拳がキリヒコの芯を捉えたかと思ったが――。

ブシュゥゥ……ッ！　ミルたんの右腕から血が噴き出し、ミルたんの彫りの深い顔が苦痛に歪む。

「……ッ！　とっても硬いによ……っ！」

堪らず後退るミルたん。ミルキーパゥワー（笑）に満ちた拳を打ち込まれた筈のキリヒコが、くぐもった声音で不敵に笑う。その姿は何処かで見た事があるような光沢感を出していた。

「ポーズだけがクロノスの能力だと思いましたか？」

「――――ッ!?　お前、まさか……っ！」

「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ。勿論、他の能力も使用できますよ。たとえば……こんなものとか」

そう言ってキリヒコは右腕の『時戒器』を操作すると、次は大きく身体が脈動し、鬼気迫るオーラが噴出される。そう、これはシド・ヴァルディが得意とする自身の身体強化を施す錬成能力そのもの……ッ。

唯一違う点があるとすれば、２つ以上の強化能力を同時に発動するのが出来ない事である。キリヒコ曰く、「そこまでの再現はさすがに出来なかった」らしい。

しかし、１つずつしか使えないと言えど……ただでさえ時間停止能力を持つユナイト・クロノス・キリヒコが身体強化の錬成能力まで使うとなれば、鬼に金棒どころの話

じゃない……。

キリヒコはズンズンと足跡を刻みながら歩み、ミルたんに近付いていく。一方、ミルたんは自前のスティックを構えて迎え撃つ体勢を取った。

「ミル キィィィィィィィィ・マァ ジ カルゥゥゥゥゥゥゥゥ・コ メットオオオオオオオオオオオオ・スウィィィィィィィィィィングァァァアッッ！」

空を斬り裂きそうな勢いでスティックを振るうミルたん。キリヒコは右腕に邪悪なオーラを纏わせ、迎え撃つ。特大の衝撃波が周囲に吹き荒れ、キリヒコとミルたんの間にバチバチと火花が飛び交う。

直後、ミルたん自前のスティックが弾き飛ばされ、ミルたんの巨躯が大きく後退させられた。滑るように地面を抉りながら後退し、踏ん張りを利かせるミルたん。彫りの深い顔が真剣な面持ちと化す。

「これが悪の邪神の邪悪パゥワー……ッ。禍々しくて、とても強いにょ……っ。でも、それでもミルたんは負けないにょ！　愛と勇気が詰まった正義のミルキーパゥワーは何が遭っても不滅だにょっ！」

「いい加減あなたの妄言には付き合いきれませんね。次で終わらせてあげましょう」

『Ｆｉｎｉｓｈ　Ｂｕｒｓｔ……!!!!!』

必殺の音声が鳴り、キリヒコの全身から揺らめいているオーラが更に邪悪さを増して

いく。一般人たるミルたんに対して容赦の無い念押し。それ程までにキリヒコの苛立ちは募っていたのだろう……。ミルたんは相変わらず自分のミルキーパゥワーを信じ、筋骨隆々の肉体を脈動させ――地鳴りと共に飛び出していった！

「愛とぉっ！　勇気とぉっ！　正義のミルキーパゥワーッ！　ミルたんに力をください！　ぉぉぉ

かった。少しして爆煙が晴れると――――キリヒコとミルたんの姿が見えてくる。
　ミルたんは苦悶に顔を歪ませ、両腕からは血を流し、筋骨隆々の全身が傷だらけとなっていた。一方、キリヒコは足から血を流しているものの、他に目立った外傷は無し。どうやら必殺技の衝突はキリヒコの方に軍配が上がったようだ。キリヒコが大きく息を吐いて言う。
「本当にバカげた存在ですね、あなたは。……Ｓａｌｅ　ｆｉｌｓ　ｄｅ　ｐｕｔｅ!!
　しかし、ようやくダメージを受けてくれましたね。ここまで手こずらせてくれた礼です。完膚無きまでにトドメを刺してあげますよ……ッ！」
『Ｆｉｎｉｓｈ　Ｂｕｒｓｔ……!!!!』
　なんと、キリヒコは再び必殺技の音声を鳴らせて、全身から邪悪なオーラを噴出させ始めた！　新や一誠でさえ死にかけたような技をミルたん相手に連続で発動。どうやら本気で殺るつもりだ……っ。邪悪なオーラが今度はキリヒコの足に集束していく。
「Ｖａ　ｔｅ　ｆａｉｒｅ　ｅｎｃｕｌｅｒ!!!」
『Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ……!!!!』
　フランス語で罵倒らしき言葉を吐き散らし、キリヒコは高速で飛ぶように水平移動を開始。その勢いを利用した回転蹴りがミルたんのボディに食い込む！　ミルたんは筋肉をパンプアップさせて防御しようとしたが……敵う筈も無く、極大の衝撃と共に後方

へ吹き飛ばされてしまった！

しかし、これだけでは終わらない……。ミルたんの背後に時計盤の幻影と同じ様な紋様が描かれた立方体（キューブ）らしき物体が出現し、ミルたんを閉じ込めるように捕縛。そこからⅠ（ワン）、Ⅱ（ツー）、Ⅲ（スリー）、Ⅳ（フォー）とカウントが始まる……。カウントの速度が速くなり、幻影の針がⅫ（トウエルブ）を差した刹那――ミルたんを閉じ込めたキューブが大爆発を起こした！

情けや容赦など微塵も無いオーバーキルな所業に、新もリアス達も言葉を失ってしまう……。爆炎の中からミルたんがドサッと地面に落下。全身はズタボロの血まみれ、もはや立ち上がる事すら出来ないだろう……。しかし、それでもミルたんは――ッ！

「……ミ、ミルたんは……魔法……少女、だ……によ……っ」

自らの手を天に向けて矜持（きょうじ）、諦めないと言う意思を掲げるが……次第に意識を失い、上げていた手がパタリと地に落ちる。どうやら完全に意識を断たれてしまったようだ。

「まさか、あれだけの攻撃を受けても死なないとは……未知のバケモノですか、アレは？

まあ、これで少しは溜飲（りゅういん）が下がりましたよ。貴重な体験も出来ました。――――Mercｉ（メルシィ）」

皮肉をタップリ混ぜた礼を告げるキリヒコ。あとはトドメを刺すだけと言わんばかりに再び『時戒器（ツヴァイト・ギア）』を操作し、砲門に邪悪なオーラが集束していく。

それを見て危険だと判断したリアス達は直ぐにキリヒコへ攻撃を仕掛けようとした。

ロスヴァイセが魔法で出した着替えを着用し、全員が手を向けるが――――キリヒコは既に読んでいた。

「鬱陶しいんですよ――――Ｍａｐｕｃｅ……!!」

『Ｆｉｎｉｓｈ　Ｂｕｒｓｔ……!!!』

『Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ……!!!!!』

キリヒコは即座に振り返り、邪悪なオーラに満ちた砲撃をリアス達に見舞った。砲撃は複数に分裂し、リアス達を残らず殲滅するべく襲来してくる。先程と同じように防御魔法陣を展開するリアス達だが、耐えられる筈も無い……。防御魔法陣の壁が撃ち破られた、その刹那――――。

「本邦初公開！　レヴィア・バリアーッ！」

セラフォルーが自前のスティックを振るうと、リアス達の身体が輝きを纏い始めた。直後にキリヒコの放った砲撃を受け、吹き飛ばされたものの、リアス達は奇跡的に無傷で済んだ。この不可思議現象を目の当たりにしたキリヒコは再び怒りを表す。

「Ｚｕｔ……！　今のはかなり本気で撃ちましたよ……？　なのに、何故無傷でいられるのですか……!?」

「それが私、魔法少女マジカル☆レヴィアたんのミルキーパワーだからよ！」

「またソレですか……っ。バカのひとつ覚えのように意味不明な力を発揮して、私を怒

らせたいようですね」

キリヒコは『時戒器』を操作し、分身能力を発動。キリヒコが3人に分裂する。

『『『Finish Burst……!!』』』

『The End Of Sacrifice……!!』

『The End Of Judgement……!!』

『The End Of Explosion……!!』

三者同時に必殺の音声を響かせ、邪悪なオーラが全身から噴出される。キリヒコ（分身A）が刃を向けた『時戒器』を振り下ろし、巨大な丸鋸状の斬撃を放つ。解き放たれた斬撃は地面を削りながらセラフォルーに向かっていく。

それとほぼ同じタイミングで『時戒器』の銃口を向けたキリヒコ（分身B）が邪悪なオーラに満ちた砲撃を撃ち放った。双方から迫り来る斬撃と砲撃。セラフォルーは自前のスティックに魔力を流して構える。

「ミルキー・スパイラル・レヴィアビィィィィムッ！」

セラフォルーの杖から☆マーク、？マークが連なった螺旋状の魔力が放たれ、キリヒコ（分身）が放った斬撃と砲撃と衝突！

火花が散り、衝撃の余波が地を抉り、セラフォルーの腕にも痺れが走る。

「うう……っ。さすが時戒神クロノス・デ・キチーク……なんて凄まじい攻撃なの……っ

！　でもっ、マジカル☆レヴィアたんは負けないもんっ！　ミルキーへの愛と勇気！　そして、ソーナちゃん達を守りたい想い！　それがマジカル☆レヴィアたんに無限大の力を与えてくれるのよ！　ミルキーパワー全開ッッ！」

セラフォルーの放った魔力が一層勢いを増し、徐々に斬撃と砲撃を押していく。セラフォルーのマジカル砲撃が双方の攻撃を完全に押し退け、２体のキリヒコ（分身）は為す術無く散っていった。

肩で大きく息をするセラフォルー。何とか押し返したが……まだ本体の攻撃が残っている……！

「終わらせましょうか――――Ｍａｐｕｃｅ!!!」

爆煙の中から邪悪なオーラを纏ったキリヒコが飛び出し、先程と同じように高速の水平移動で距離を詰めていく。邪悪なオーラが右に集まり、セラフォルーに必殺の蹴りを見舞うべく迫り来る……！

セラフォルーも負けじと自前のスティックに膨大な魔力を流し、☆マークと？マークがセラフォルーを囲うように飛び交う。セラフォルーがスティックを突き出して叫ぶ。

「ミルキー・ラブアンドピース・レヴィアアタァァァァックッ！」

セラフォルーの強大なマジカルスティック攻撃とキリヒコの邪悪極まる必殺キックが激突し、特大の衝撃波と火花が辺り一面に散らばるっ！　２人の力はほぼ互角……と

言いたいところだが、キリヒコの方が若干圧(お)しつつあった。
「うぅ……っ！　ミルキーパワーは絶対に負けないもん……っ！」
「そのふざけた力もどうやらネタ切れのようですね。腹立たしかったですが、なかなか面白くもありましたよ。それでは……永遠にＡｄｉｅｕ(アデュー)！」
キリヒコがトドメを刺そうと吼(ほ)えた刹那、燃え盛る炎と迸(ほとばしか)る雷(ずち)を纏った新が横から割り込み、強烈な一撃をキリヒコに繰り出した！
雷炎モードの新はキリヒコの蹴り足に雷炎を纏わせた拳打を叩き込み、キリヒコの体勢を崩した。横槍を入れられたせいでキリヒコはセラフォルーのマジカル攻撃もまともに受けてしまい、後方に吹き飛ばされる。
その一瞬の隙を見逃さず、新は兜の口部分を開いて魔力をチャージ。セラフォルーも「新くん！　一緒にいくわよー！」と自前のスティックを翳(かざ)した。
「――――『雷炎竜の咆哮(ライトニング・ブラスト)』オオオ

「――――っ⁉　何故発動しない⁉　まさか、あの珍妙な生物の攻撃を食らったせいで不具合が起きた……!?」

まさかの事態発生！　なんとキリヒコの『時戒器（ツヴァイト・ギア）』からエラーの音声が流れ、時間停止能力が発動しなかった！　ミルたんの攻撃がヤツの装置（デバイス）に不調を起こさせたのだ。

特大の二重砲撃は目前。急遽変更して錬成能力を発動し、全身を鋼鉄化。防御力を高めたキリヒコが二重砲撃に呑み込まれる……！

砲撃が止み、爆煙の中からキリヒコが姿を現す。全身からは煙を噴き、血も流している。先程とは打って変わって疲弊した様子を見せるキリヒコ。しかし、それでもヤツはくぐもった声で不敵に笑う。

「……フッフッフッフッフッフッ。Ｔｒ▪ｓ　ｂｉｅｎ（トレビアン）……！　まさか、ここまで予想外の事態に陥（おちい）るとは思ってませんでしたよ……っ。火遊びのつもりでしたが、手痛い火傷を負わされましたね。このまま続けてもよろしいのですが、美味しいところは最後まで取っておくとしましょう。今回はこの辺で失礼させていただきます」

「……お前にしては珍しい弱腰発言じゃねぇか。さすがにキツかったか？」

「Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）　Ｎｏｎ（ノン）、私はまだ負けたとは思ってませんよ？　あくまで楽しみが増えそうだと言っているのです。実に有意義かつ興味深いデータを頂（いただ）けましたので、謝礼として退（ひ）くとしましょう。では――――Ｓａｌｕｔ（サリュー）」

そう言うとキリヒコは装置(デバイス)から黒いモヤを噴かして自身を包み込み、晴れると同時に姿を消した。キリヒコが去った事で一気に緊迫感が抜け、新達は安堵の息を漏らす。
「……ふぅっ。今回は散々だったな、いろんな意味で……おっと」
フラつく新をリアスが支える。一方でセラフォルーは泣き顔になっていた。何故なら先程のバトルで自前のスティックが破損してしまったから……。ボロボロのスティックを抱(かか)えて涙を流すセラフォルー。
「ふぇぇぇぇぇぇんっ！　私の……私のスティックが壊れちゃったよぉぉぉぉぉ……っ！　お気に入りだったのにぃぃぃぃぃ……っ！」
「お姉さま、仮にも四大魔王なのですから。そんな事で大泣きしないでください」
「うえぇぇぇぇぇんっ！　ソーたんの意地悪ぅぅぅ！　皆を守ろうと頑張ったのにぃぃぃぃっ！」
ギャン泣きするセラフォルーに頭を痛めるソーナ。そこへリアスが宥(なだ)めに掛かる。
「セラフォルーさま、それなら私が買って差し上げます。形はどうあれ、新と皆を守ってくださったのですから。お礼をさせてください」
「ホント⁉　ありがとね、リアスちゃん☆　それと先に謝っておきまーす、ゴメンね？」
「――――っ？」
リアスが疑問を顔に浮かべた途端、ポンッと軽い音がする。今度はロスヴァイセを含

めた女性陣の衣服が綺麗サッパリ消え去り、再び全裸祭りと化していた（笑）。
「実はさっきのバリアー、どんな攻撃からも守ってくれる代わりに、使用後は魔法少女もののエッチなお約束パターンになっちゃうの。テヘペロ☆」
『キャアアアアアアッ！』
　再び悲鳴を上げる女性陣。朱乃とゼノヴィアは先程と同じように「あらあら」「やれやれ」と冷静でいた。リアスも嘆息しつつ手ブラで隠す。一方、２度目はしっかりと巻き込まれたロスヴァイセは涙目になっていた。
「うぅ……っ、また新さんに恥ずかしいところを……。これでは本当にお嫁に行けなくなってしまいます……っ」
「まあ、そう言うな。いずれ俺が貰う予定なんだから」
「――――っ。こんな状況でも新さんはブレませんね。……今の言葉、絶対に忘れないでくださいよ？」
　ロスヴァイセは紅潮した顔を背けつつ、口元を僅かに緩ませる。そこへ小猫が新のもとへ歩み寄ってきた。
「……先輩、シャツを貰います」
「今度は問答無用で追い剥ぎか⁉　っーか、さっき俺の上着を引っ剥がしていっただろう！　それにもうインナーシャツしか残ってねぇんだぞ⁉」

「……さっきの攻撃で無くなりました。おとなしくインナーシャツを渡してください」
「そう言いつつもヘッドロック掛けるお前の神経に脱帽する痛ダダダダダダダッ！　軋(きし)む！　頭蓋骨がミシミシ軋むッ！」
小猫の全裸ヘッドロックで締め上げられる新。今の新に身包みを渡さないと言う選択肢は与えられない……。そこへ再びゼノヴィアが参戦。
「それじゃあ、私は今度こそ新のズボンを貰うとするか」
「ゼノヴィア⁉　本当に新くんのズボンを穿(は)くつもりなの⁉」
「ああ、穿くぞ？　それともイリナが新のズボンを穿くか？　いや、その方が良いかもな。私の裸で新の視線を釘付けにしようか」
「ええっ⁉　お、男の子のズボンを私が穿いちゃうの⁉　そ、それは天使的にもしてはいけない感が……。でもっ、このままスッポンポンは恥ずかしいし……っ。新くん！　私はいったいどうしたら良いのかな⁉」
「とりあえず、俺の頭蓋骨が破裂する前にこのバカ2人の暴走を何とかしろ……っ！」
再び繰り広げられる珍妙なコント（笑）。その代償として新はインナーシャツとズボンを奪われ、パンイチになってしまった……。
「今回の新は悲惨ね。ふふっ、笑っては悪いでしょうけれど……っ」
「そ、そうですね。でも、一番の原因は私の身内なんですが……」

　珍妙な目に遭っている新を見て、笑いを堪えきれないリアスとソーナ。しかし、ソーナの言う通り……今回の元凶はセラフォルーである。当の本人はと言うと、妹ソーナの全裸に興奮し続けていた。
「ハフゥぅんっ！　ソーナちゃんの生まれたままの姿！　お姉ちゃん、今ならどんなお仕事でも余裕で終わらせちゃうわ！」
「セラフォルーさま……」
「リアス、こんな姉ですみません……」
　もはや嘆息するしかないリアスとソーナ。そこへパンイチの新が顰(しか)めっ面でやって来た。
「おいコラ」
「きゃっ、新くん。そんな格好で女の子に迫ってくるなんて大胆☆」
「元はと言えばアンタが原因だよな⁉　アンタがこんな騒動に巻き込むから俺はパンイチにされる羽目になっちまったんだぞ！　いや、そもそもパンイチにされる意味が分からん！」
「ん～、そこは私にも分からないかな。でもでもっ、可愛い女の子達に囲まれるのは男の子から見ればラッキーじゃない？」
「俺がパンイチじゃなければな！」

「新、もう諦めましょう。セラフォルーさまには何を言っても敵わない気がするわ……」

新を宥めようとリアスが背後から頭を撫でる。背中に当たる柔らかな感触も相まって怒りは徐々に収まるが、それでも納得いかない部分がある……。セラフォルーの独り勝ちのような結果に終わってしまうのだろうか……？

否、世の中そうは問屋が卸さない……！

パァァンッ！　小気味良い音が響くと、セラフォルーの衣装が弾け飛び――――全裸となった。小柄な身体には不釣り合いとも言える豊満なおっぱいがプルンプルンっと揺れ、程良い細さの腰、綺麗な形に整ったお尻が新の眼前に晒される。

「……あら？」

「お姉さまっ!?」

キョトンとするセラフォルー、驚愕するソーナ。一同もソーナと同じような反応を示す。何故このような事態になったのか？

セラフォルーの衣装だけ特別強固な術式を施していたのだが、キリヒコの攻撃が予想以上に強すぎた為、既に許容ダメージを越えていたので、時間差で崩壊してしまったのだ。何とも都合の良いタイミング……。

『……あ、あらら～っ。遂に私もエッチなハプニングに巻き込まれちゃった……。そう言えば私、新くんに裸まで見られるのは初めてかも……っ。ここはとりあえず、可愛

らしさをキープしつつ恥じらう！』

セラフォルーは頬を赤く染め、手ブラで自(みずか)らのおっぱいを隠し、ブリっ子の如く片足を上げてポーズを決める。

「いやんっ☆」

「セラフォルーさま、こんな時にポーズを決めてる場合ですか……」

リアスが嘆息しながら言う。ソーナは慌てた様子でセラフォルーに駆け寄り、遮るようにセラフォルーの前に立つ。

「あ、新くん！　お姉さまを見てはいけません！　それと私の方も見ないでくださいっ！」

「どんな要求やねん」

思わず関西弁でツッコむ新。身を挺して姉の裸を死守しようとする妹(ソーナ)の姿に……セラフォルーは変なスイッチが入り、感極まってしまう。

「うぅっ、ソーナちゃんっ！　自分も裸なのにお姉ちゃんを守ってくれるのね⁉　はふぅんっ！　嬉しさと愛(いと)しさと元気百倍！　でも、大丈夫よ！　ソーナちゃんにだけ恥ずかしい思いはさせない！　お姉ちゃんがソーナちゃんのお洋服になってあげるからっ！」

「お、お姉さま⁉　何をわけの分からない事を――――きゃあぁっ！」

献身的な妹の姿に感極まったセラフォルーは、ソーナを抱き締めるように密着してきた。ソーナの小振りなおっぱいとセラフォルーの豊満なおっぱいがくっつき合い、ムニュムニュと形を歪ませる。ここから更にセラフォルーの暴走が始まる……。

「お姉さま！　ふざけるのはやめてくださ――――ひゃあぁぁっ！　ど、何処を触ってるんですか!?」

「ハァハァ☆　ハァハァ☆　ソーナちゃんのスベスベで柔らかいお肌……！　お胸……！　お尻……！　どうしよう、お姉ちゃん変な気持ちになってきちゃった……っ！　これはマジカル☆レヴィアたんの闇落ち百合（ゆり）百合フラグ!!　もしかして、今までの騒動は全て時戒神が仕向けた巧妙な罠だったのかしら……？　だとしても、良いっ！　むしろ良いっ！　お姉ちゃん、百合百合の展開に堕ちちゃうのも辞さないわっ！　だって、ソーナちゃんが一緒だもの！」

「何を意味不明な事を言ってるんですか！　いい加減に――――ぁん……っ！　リ、リアスっ！　新くん！　助けてくださいっ！　お姉さまの奇行を止め――――にゃぁぁんっ！」

「あ、新！　セラフォルーさまを止めましょう！　このままだとソーナの大切なナニかが色々と失われるわ！」

「お、おう。分かった」

新とリアスはセラフォルーの奇行を止めるべく、急ぎ足で向かうが……モミクチャしているセラフォルー、必死に抵抗するソーナ。両者の足が絡み合ったせいで体勢が崩れ、新とリアスもろとも巻き込んで倒れた。
「ぶべらっ！」「きゃあっ！」「あぁんっ☆」
新は後頭部を打ち、その両隣にリアスとセラフォルーが倒れ込む。そして、ソーナは……新の上に覆い被さるように倒れてしまった。モミクチャに巻き込まれたせいで新の右手はセラフォルーのおっぱいを、左手はリアスのおっぱいをそれぞれ鷲掴(わしづか)みにしていた。
「うんん……っ。ちょ、ちょっと新……っ」
「やんっ☆　新くんってばぁ♪」
紅潮するリアスと何故か喜ぶセラフォルー。それよりも問題は……ソーナの方だった。新は現在パンイチで仰向け、ソーナは全裸で新の上に覆い被さるように倒れている。
第三者の視点から見れば――「これ、間違い無く入ってるよね？」と思われるほど危ない体勢になっていた……。自分の現状に気付いたソーナは、顔が一気に赤くなり湯気まで噴き始めてしまった。
「あ……ぁあ……っ。ふにゃぁあ……っ」

「ソーナっ!?　ソーナが気絶しちゃったわ！　新！　あなた、ソーナになんて事を……っ！」
「いやいやいや！　俺なにもしてないんだけどぉ⁉」
「はぅぅんっ！　新くんに跨がるソーナちゃんも、恥じらい過ぎて気絶しちゃうソーナちゃんも可愛いッ！　これはもう永久保存版決定ね！　でもでも、新くん！　ソーナちゃんの処女はまだあげられないわ！　お姉ちゃんたるレヴィアたんの試練をクリアしてからじゃないと！」
「アンタもさっきから何を言ってんの⁉　もう嫌だ、こんなカオス！　誰か止めてくれ！」
　そんな新の懇願にやって来たのは……ジト目の小猫でした（笑）。小猫は新の髪を掴んで引き剥がし、そのまま捻って自身の方に向かせる。ゴキッと嫌な音がなりつつ、小猫が危険な雰囲気の睨みを利かせる。
「……先輩、エロエロな展開で楽しいですか？」
「こ、小猫……っ？　まずは落ち着け。これに関して俺は何も悪くない筈――――」
「……問答無用です」
　ブゥゥンッ！　小猫は新を空中へ勢い良く放り投げ、それを追うようにジャンプ。空中で逆さまとなった新の両足を交差させて左手でロック。そのまま背中合わせにたす

き掛けして強烈なエビ反りを掛ける形で新の上半身を右脇に捕え、更に顔面を右膝に押し付けるようにして固定する。それはまるで数字の〝0〟を彷彿させるような体勢だった。

後はそのまま地面へ着弾するのみ……。

「小猫っ、お前パーフェクト奥義まで使いこなせるようになったのか!?」

「……先輩、ダイヤモンドパワーで耐えてください」

「俺にそんな技は使えなグベァァァァァァァァッッ!」

エロ祭りの代償として、新の背骨と頭蓋骨は暫く死んだ（笑）。

後日。余談だがオーディションは当然ご破算。監督達一般人の記憶から今回の事件は消して、リアス達が参加した事は無かった事にされた。セラフォルーは凄く落ち込んでいたが……。

ミルたんはキリヒコの攻撃によって重傷を負っていた筈だったが、いつの間にか姿を消していた。本当に謎だらけの漢の娘である。セラフォルーもミルたんを見ていて――。

「あの娘、力強く清い瞳を持っていたわ。きっと、私と同等かそれ以上のミルキーパワーを有した魔女っ子なのよ。私、駒がまだ余っているし、ぜひぜひ眷属にスカウトしたいぐらいだわ☆」

ツッコミどころ満載だったが、新は「一誠、あのミルたんとか言うバケモノをお前の眷属にしろ。あれはキリヒコを倒せる切り札になるぞ」と更に斜め上の進言を一誠にしたそうな……。無論、速攻で「絶対に嫌だボケ！」と拒否されてしまったが。

更にセラフォルーは魔法陣から何かを取り出す。

「あ、そうだっ。聞いて聞いて。実はね、『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』特別ストーリー編の制作が決まったの！　タイトルは『魔法少女マジカル☆レヴィアたん　ＶＳ　時戒神（じかいしん）クロノス・デ・キチーク！　〝刻（とき）をも操る邪神の軍団〟』よ！　今回の一件でビビッと来ちゃった！　レヴィアたんに足りないもの……それは『強大な敵キャラ』！　人気急上昇中の二大番組『おっぱいドラゴン』と『オッパイザー』に対抗するには、悪の大ボスが必要だと気付いちゃったの！　あの造魔（ゾーマ）のヒトはまさに打って付け！　敵でありながら特撮心（とくさつごころ）をくすぐるデザイン！　悪の大ボスにピッタリの強さと悪さ！　敵ながら見事としか言えなかったわ……っ」

セラフォルーが取り出したのは『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の番組ポスター。それには先程言ったタイトルが大きく掲載されており、クロノス化したキリヒコがレ

ヴィアたんの敵としてそのまま掲載されていた。既に1話が放映され、その視聴率は従来以上の数字を叩き出したらしい……。

『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の監督にクロノス化したキリヒコのキャラクター案を持っていったところ、即座に「良いね、それ！」と採用されたとか（笑）。制作陣も今までに無かった前衛的なアイデアに刺激を受け、特別長編の制作が決定した。

「更に更に！　それに合わせて『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』のフィギュアも作っちゃったの！　しかも、3万個に1つの確率でシークレットフィギュアが当たるのよ！　監督にお願いして私だけ先取りしちゃった！　見て見て☆」

セラフォルーが高々と掲げたのは勿論――――クロノス化したキリヒコを模したシークレットフィギュア。細かいところまで再現したシークレットフィギュアは完成度が無駄に高く、ファンの心を悉く刺激したそうだ（笑）。セラフォルーはフフンと得意気に宣言する。

「今まで私達は利用されてきたんだもの！　だったら、こっちも思う存分利用してあげるわ！　これでレヴィアたんの人気と冥界経済もウナギ登りよ☆」

もはや、何からツッコんで良いのか分からない……。

「……Ｐａｒｄｏｎ？（パルドン）　私がシークレットフィギュアに？」
　無論、そんな情報が造魔（ゾーマ）のもとに入ってこないわけが無い。執政官のシルバーがタブレットで映像を見せ、レビィがシークレットフィギュアの画像を見せる。
「もう、冥界全土はこの情報で持ち切りだって。コメントも『時戒神マジカッケー！』とか『レヴィアたん頑張れ！』、『クロノスのデザインはまさに神ｗｗｗ』って書かれてるの」
「完璧にナメてますね、奴らは。こんなバカみたいな商業に利用されるあなたもマヌケですが、セラフォルー・レヴィアタンはそれ以上に大バカ極まりない。こんな事で造魔（ゾーマ）が怯むとでも思っているのですか」
　シルバーが不快そうに吐き捨てる中、キリヒコはタブレットの映像とシークレットフィギュアの画像を見た後、「ふむぅ……」と考え込む。
「……いよいよ私もレア物扱いですか」
「えっ？」
「……フッ、フフッ。……フッフッフッフッフッフッ、フッフッフッフッフッフッ」
　キリヒコは不敵な含み笑いをしながら、その場を離れていった。その様子を見て、レビィは思った。

「……もしかして、満更でもない？」

――とまあ、こんな事がありました（笑）。

新達は場所を自室から移して、竜崎家に増設された地下プール場のプールサイドに設(もう)けてあるテーブル席で会話を続けていた。魔法使いの書類とにらめっこ中だったが、休憩を挟もうと言う事でこのプールに来ている。時期も冬なので温水仕様かつ一誠やアーシア達もお邪魔していた。

新と一誠は海パン一丁。レイヴェルは泳がないのか、水着の上にTシャツを着ている。しかし、服の上からでもボリュームのある胸部が窺(うかが)えて眼福ものである。朱乃は肌色成分多めのビキニで、こちらも目の保養となる。

ソーナは柄の可愛いワンピースタイプの水着。生徒会長の水着姿なんて早々に見られないレアものだった。

「家族以外の男性に水着姿を見せたのは新くんが初めてかもしれませんね」

「おっ、意外だな。まあ、私服姿もそうだが……水着も見れたのは確かにラッキーだな」

「とは言え、新くんにはもっと恥ずかしい姿を見られてますけど……」

「あー、裸とか、あの時の姉妹サンドとか？」
「――――っ！　だから、そういう事を平然と言わないでください！　本当に恥ずかしかったんですから……っ」
　ソーナはオーディション時の騒動を思い出したせいか、顔を真っ赤にして目を逸らす。あの時はセラフォルーが主な原因だったので、ハチャメチャかつエロい展開になってしまったから無理もない。
「……いつか本当に責任取ってもらいますよ」
「ん、何か言ったか？」
「な、何でもありませんっ。とにかく、破廉恥な言動は控えめにしてくださいね？」
　ソーナに釘を刺される新だが、人に言われて控えるような男ではない（笑）。一方、死神っ娘のベンニーアは水着に着替える事も無くテーブルの下に潜っており、新達の足下でお茶を飲んでいた。
　≪あっしはここが一番落ち着くんですぜ≫
「変なヤツだな……。せっかく来たんだし、少しぐらい泳げば良いのに」
　≪お誘い感謝致しますぜ、オッパイザーの旦那。でも、あっしはこう見えてインドア派なんで勘弁してくださいな。その代わりと言っちゃなんですが、あっしに関する小粋な情報を１つ≫

「何だ？」
≪あっしはノーパン・ノーブラ解放主義ですぜ≫
「ぶっふぅっ!?」
唐突なベンニーアのノーパン&ノーブラ宣言に、新は飲もうとしていたお茶を噴き出してしまった。新はゲホゲホと噎せ、ソーナがベンニーアを嗜める。
「ベンニーア！　こんな場所でそういう事を言うのは止めなさい！」
≪いやいや、マスター。これはお詫びの意味も兼ねた重要な事ですぜ。実際、世の男性の大半がノーパン・ノーブラにときめくらしいじゃねぇですか≫
「間違った知識を鵜呑みにしてはいけません！」
≪おや、アテがハズレちまいましたかね？≫
クスクスと笑うベンニーアに、赤くなった顔で注意するソーナ。新はようやく落ち着きを取り戻してハァッと深く息を吐く。
「イリナには負けん！」
「ゼノヴィアには負けないわ！」
１００メートルもある地下プールで泳ぐのはゼノヴィアとイリナ。壮絶な水泳対決の真っ只中であり、物凄い勢いの水音と共に水飛沫を立てていた。
「どちらも負けないでくださーい！」

プールサイドで2人を応援しているのはスク水姿のアーシア。そのすぐ近くでプールに入っているのは黄金の変態――ファーブニル。

『アーシアたんのスク水。俺様、アーシアたんの浸かったプールの水を飲み干したい』

相変わらずのド変態ぶり……。その頭部にはオーフィスが鎮座しており、更にオーフィスの頭上にも小さなドラゴン――ラッセーが乗っかっていた。これぞ……ドラゴンの3段重ねである（笑）。

「我、この三体合体なら、グレートレッドに挑戦できる、と思う」

『合体してねぇよ、ただの鏡餅体勢じゃねぇか……』

そう心中でツッコむ新は、一誠とドライグに「あのパンツドラゴン、そろそろヤキ入れとかねぇか？」と進言するも――。

『俺様、何も見えない』

「俺様も、ナニもミエナイ」

一誠とドライグは既に壊れていた……それもファーブニルの口調を真似する程に……。ファーブニルが加わって以降、疲れが溜まっているのが目に見えるようだ。

「『禍の団（カオス・ブリゲード）』のニルレムってヤツが、以前襲ってきた連中なのか？」

「魔法使いの集まりは結構ありますものね」

新の質問に朱乃が頷（うなず）く。魔法使いの協会は、朱乃が言うように他にもある。現在悪魔

と深く関わり合いを持つのはメフィスト・フェレスが理事を務めている組織のみ。正式名称は『灰色の魔術師（グラウ・ツァオベラー）』と言い、新達に書類を出してきた組織でもある。

他にもルシファー眷属の『僧侶（ビショップ）』マグレガー・メイザーズが創設メンバーの1人でもある『黄金の夜明け団（ゴールデン・ドーン）』も近代魔術を扱う組織として有名らしい。

あとは人間からの転生悪魔でありながら、最上級悪魔にまで上り詰めたリュディガー・ローゼンクロイツが過去に在籍していたと言う『薔薇十字団（ローゼン・クロイツァー）』も有名な魔術結社である。

悪魔と魔法使いの関係はかなり密で、改めて魔法使いの各組織を頭の中で巡らせていると……この地下プール場を訪れる者が居た。

「にゃー。疲れたわ」

やってきたのは黒い着物を纏った女性――――黒歌（くろか）だった。気だるそうな様子でプールサイドに堂々と入り込んでくる。ルフェイも後ろからついてきて「ど、どうも」と丁寧に頭を下げていた。ソーナや朱乃が顔を若干険しくしているのは、未だ黒歌に思うところがあるからだろう。

「ただいまにゃー」

黒歌が不意に新に近付いて抱き着く。着崩れた着物からきめ細やかで白い肌のおっぱいがこれでもかと主張し、もにゅんと柔らかな感触を与え、新の頬に自分の頬を擦り

付けてくる。
「にゃはは～、リューく～ん♪　ちかれたんで癒やしてほしいのよねー」
ファサッと掛かる黒髪から漂う良い匂い。年上のお姉さんの色香は脳内が蕩けてしまうほど危険なものだ。新の家に居候するようになってからは、明らかに密着度を高めてきている。
朱乃が不安げな表情で見つめる。彼女は身内以外の女性が新に近付くと、年上の女性とは思えないぐらい不安がってしまうのだ。
「黒歌。お前、ヴァーリに呼ばれて向こうに行ってたんだろう？」
新が頬擦りしてくる黒歌にそう問い掛ける。小猫、ギャスパー、レイヴェルを助けるべく魔法使いの集団（実際は造魔）と戦った時、彼女達は新達のもとを離れてヴァーリの所に戻っていた。向こうで何か起こっていたのは確実。黒歌が息を吐きながら言う。
「そうなのよー。もうさー、アジ・ダハーカが襲ってきてねー」
『――――ッ!?』
この場にいる全員（新、一誠、朱乃、レイヴェル、ソーナ）が黒歌の言葉に驚いた。それもその筈、アジ・ダハーカとは以前、アザゼルが話していた滅んだ邪龍の1体……。
「……滅んだ伝説の邪龍の1匹ですわ。確か、凶悪なドラゴンの1匹だと……」
レイヴェルがそう言って、ソーナが続く。

「千の魔法を操り、ゾロアスターの善神の軍勢に牙を剥いた邪悪なドラゴン。英雄スラエータオナが封印に近い形で滅ぼしたと伝えられていますね。……そのドラゴンもグレンデル同様に現世に蘇(よみがえ)ったと言うのなら、これは……」

どうやら予想以上に事が大きくなっているようだ……。『禍(カオス)の団(ブリゲード)』――――グレイフィアの弟であるユーグリット・ルキフグスは滅んだ邪龍を復活させている。グレンデルでさえ凶暴性と頑丈さが桁外れだった。それよりも凶悪と言われているアジ・ダハーカ……。

『……ある意味でここが正念場かもしれん。赤龍帝として、な』

ドライグも覚悟を持った声音でそう呟き、一誠も神妙な面持ちとなる。最悪な状況下での邂逅(かいこう)も覚悟しなければならないと言う事だろう……。

黒歌は頬を離して、目元を若干厳しくさせた。

「……私達ってさ、その手の強者(つわもの)や隠された神秘を求めて世界の各地を飛び回っているんだけど……紛れもなく、私達が相手をした中で一番強いわ」

黒歌は新のティーカップを勝手に取って、口を付けてから話を続ける。

「……あの邪龍は殴っても蹴っても斬っても笑って向かってきたわ。血を全身から噴き出しながらよ？　倒れる気配が全く無かったの。……ありゃ、ダメよ。まともじゃないわね。個人的に戦っちゃいけない部類のモンスターだと思うにゃ。その英雄何たらも

封印でやっとってのも納得できる程のしぶとさだったわ」

ドライグが低い声音で言う。

『……出来れば戦いたくはないな。恐らく、アルビオンもそう思った筈だ。破壊衝動と自滅願望を併せ持つ輩は忌避するべきだぞ、相棒』

豪気で剛胆なドライグも邪龍との戦いだけは否定的になるぐらいだ。それほど厄介な部類なのが窺える……。ルフェイが黒歌の話に続いた。

「そのあと、もう1体の滅んだドラゴン――グレンデルとローブを着た男が現れまして……その場でアジ・ダハーカとグレンデルが私達との戦いを巡って争い始めてしまったのです。あまりに混迷したので、私達はそこで一時退散する事にしました」

確かにグレンデルとユーグリットはヴァーリが現れた事を聞き付けていたが、転移した先で仲間割れを起こしていたのは意外だった。……否、邪龍同士には仲間意識すら無いのかもしれない。

〝頭のネジがハマってすらいない〟――――。このドライグの弁が邪龍を的確に表している事に寒気すら覚える……。

「あれとの戦いを喜んで迎えたヴァーリもどうしようもないバカ者だったにゃ」

呆れた口調で黒歌はそう言う。新と一誠も『アイツは戦い以外の事にも興味を抱いた方が良い』と心中で同意した。

「あとでその件に関していくつか質問してもよろしいでしょうか？」
ソーナがルフェイに問うと、彼女も「はい」と素直に応じていた。黒歌が新の鼻を摘みながら言う。
「リューくん。あんたはあんなドラゴンになっちゃダメよ？　きっと、リューくんはリューくんのままでなきゃいけないんだと思うにゃ」
「言われなくても、俺はヴァーリのようなバトルバカにも邪龍みたいなイカレた奴にもなるつもりはねぇよ」
新の率直な意見に黒歌も「良い子にゃ」と頷いていた。口ではそう言ってる新だが、心中では『今の俺にそんな理性が残せるだろうか……？』と不安がっていた。
バサラ・クレイオス、ユナイト・クロノス・キリヒコ、エンドヴィル・ジョロキア――次々と現れる凶敵どもを目の当たりにし、今までの力が通用するのかと内心焦っていた。無論、邪龍のような理性が崩壊したドラゴンになるつもりは毛頭無いが……現状のままでは奴らに勝つどころか一矢報いる事さえ出来ないだろう。
だが、越えてはいけない線を越えなければならない時が来てしまった場合は――――歯を食い縛り、どれだけの罵詈雑言を一身に受けてでも越える……っ。新はその覚悟を取り戻しつつあった。
ここで黒歌が話を切り替えるように訊く。

「で、何を話していたのかにゃ？」
「魔法使いとその組織の事についてだ」
新がそう言い、レイヴェルが会話の流れを黒歌達に説明してくれた。すると、ルフェイが手を上げて恐る恐る口にした。
「実は私、元は『黄金の夜明け団（ゴールデン・ドーン）』に所属していたんです。そこで近代魔術を始め、他の魔術組織で禁止になっている術式を習っていました」
中級悪魔昇格試験の折、冥界で曹操によって空間の中に閉じ込められた時にも彼女の転移魔法が活躍した。珍しい魔法を使えたのも有名どころに所属していたお陰でもある。
レイヴェルが頬を膨らませながら言う。
「組織の名前の繋がりですけど、この間、攻めてきた『はぐれ魔法使い』の集団――――『魔女の夜（ヘクセン・ナハト）』！　無法者の名前は絶対に忘れません！」
しかも、『魔女の夜（ヘクセン・ナハト）』と呼ばれる組織に神滅具（ロンギヌス）の1つである『紫炎祭主（インシネレート・アンセム）による磔台』の所有者がいるらしく、トップの1人でもあるらしい。荒くれ者の集団のトップに神滅具（ロンギヌス）の所有者……何とも面倒極まる組み合わせだ。
朱乃がうんと1つ頷いて言う。
「それらの魔術師組織が有名所ですわね。私達若手悪魔の主な取り引き相手はメフィス

トさまのところでしょうけれど」
現状では『灰色の魔術師(グラウ・ツァオベラー)』だけ覚えておけば然程(さほど)問題は無い。あとは先日敵対した『はぐれ魔法使い』の集団『魔女の夜(ヘクセン・ナハト)』と『禍の団(カオス・ブリゲード)』の魔法使い一派――『ニルレム』を重視しておけば良い。
『……『魔女の夜(ヘクセン・ナハト)』、か。懐かしくも聞きたくない名前だ』
新が心中で毒づく。実を言うと……新は『魔女の夜(ヘクセン・ナハト)』の名前は昔から知っていた。何故ならバウンティハンター時代によく仕事の邪魔をされたり、依頼によっては一時的な共闘までした程だからだ。新は正直言って金輪際関わるつもりなど無かったのだが……何の因果か、ここに来て再び衝突し合う事になってしまった。
そして、そのトップの1人でもある神滅具(ロンギヌス)所有者も知っている……と言うより、出来れば思い出したくない。それもその筈――。
『また、あの女が絡んでくるだろうな……。先日、最悪の形で会ったばかりだってのに……あの性悪女め……っ!』
――話はつい先日まで遡(さかのぼ)る。

新の黒歴史。『魔女の夜（ヘクセン・ナハト）』の元カノ

「……なんで久々の競馬帰りにパシられなきゃならねぇんだ」

新が不機嫌そうに愚痴りながらバイクを走らせる。この日は久々の競馬でプラスの儲けを得たのだが、帰る直前でスマホが鳴って――――。

『もしもし、アラタ？　私よ。その近くにマリトッツォって食べ物の専門店があるらしいのよ。帰りに買ってきなさい』

『レイナーレさまのご要望だ。勿論、断ると言う選択は無いと思え』

『アラタ～。うちもマリトッツォ食べた～い。美味しいヤツ買ってきて～♪』

通話の主はレイナーレ、カラワーナ、ミッテルトの堕天使三人娘で、買い物をねだられてしまった。ちなみにマリトッツォとは、タップリの生クリームをブリオッシュ生地で挟んだイタリア発祥のデザートである。最初は面倒臭いので断ろうとした新だったが――――。

『……先輩、フルーツとクリームたっぷりのマリトッツォを買ってきてください。絶対に』

途中から小猫が通話に乱入、更にマリトッツォの調達を念押し（ほぼ脅迫）されたので仕方なく購

入する事にしたのだ。食べ物に関して断れば、間違いなく小猫からの折檻（お仕置き）を受ける羽目になってしまうだろう……。

もはや女房の尻に敷かれる夫のような扱いだった……。

「俺、最近までこんなキャラじゃなかったよな？」

そんな事を考えながらバイクを走らせること15分、マリトッツォの専門店に到着。駐輪場にバイクを停め、店内に足を運ぶ。冷蔵機能の付いたショーケース内に並べられた色んな種類のマリトッツォ。オーソドックスな物から風変わりな物まで、種類は豊富に亘（わた）る。そこへ――――。

「チョっト待テ・チョっト待テ・オニイサンっ♪　当店ノ・マリトッツォ・買イマスノン？」

「何処の何秒バズーカだよ⁉」

グラサン掛けて赤いエプロンを着けた店員らしき男性が某芸人の如く、リズミカルにステップを踏みながら近付いてくる。とりあえずプレーンのマリトッツォを数個、イチゴ入り、ミカン入り、レモン入り、メロン入り、抹茶味など次々とチョイスしていく。

変な店員もいるので早く買い物を済ませて帰ろうと思った矢先――――覚えのある声が聞こえてくる。

「やっぱり、マリトッツォと言えばこの店よね。種類豊富で値段も安いし。遠出した甲

斐があったわ」

聞き覚えのある声の正体は――――クラスメイトの桐生藍華。それだけでなく剣道部の村山仁美、片瀬奈緒も一緒だった。

顔見知りが入店してきた事に焦った新は『ゴキンッ！』と変な音が鳴る程の速度で首を捻り、他人のフリを決め込む。魔法使いの集団が襲撃してきて以降、彼女達とは顔を合わせづらくなってしまったのだ。少し離れた位置でどのマリトッツォを買おうか話し合う彼女達。すると、村山が少し曇った表情で話し始める。

「……ねえ、桐生さんはどう考えてる？　竜崎くんの事……」

「どう考えてるって？」

「だって……竜崎くん、何か危ない人達に絡まれてたのよ？　そんな人が近くにいたらって思うと怖くて……っ」

村山の不安を皮切りに片瀬も恐る恐る口を開く。

「私も、だんだん怖くなってきたの……。最近の竜崎くん、私達の事を避けてるみたいだし……。もう関わらない方が良いのかなって……」

『――――っ』

３人より少し離れた位置で聞き耳を立てていた新。分かってはいたが、やはり改めて言われると傷付くものがあった。確かに彼女達一般人の感性から見れば、新に対して畏

怖の感情を抱いても不思議じゃない。隠してきたとはいえ、新と彼女達では済んでいる世界が全く違う。

今まで裏社会で育ってきた新がそう簡単に表社会に馴染めるわけも無く、新に因縁のある相手が事情や都合やらを一切無視して牙を向けてくるのは当然。正体がバレてないとはいえ、それを目の当たりにしてしまった村山と片瀬は疑念と恐怖を拭い去れなかった……。

アザゼルが残した記憶を司る装置による処理があっても、彼女達は『何か恐ろしいものに遭遇した』と言う形で記憶が断片的に残り、その忌まわしい記憶はずっと心に居座り続ける……。第三者の視点からすれば、新や一誠達もこの事件の加害者と言えよう。その罪悪感から、新は暫く彼女達との接触を避けてきた。

無論、理由はそれだけじゃなく……あの場にバサラがいた事――――ここが大きな問題となっていた。実は魔法使いによる襲撃を受けた後日、新は父親の竜崎総司から嫌な話を聞かされていたのだ。それはバサラが体内に宿す禁忌の神滅具――――『六獄の魔皇剣』の厄介極まりない特性についてだった……。

「……記憶の改竄（かいざん）・干渉を阻害する……？」

『そう、それこそがバサラの持つ禁忌の神滅具（ロスト・ロンギヌス）――「六獄の魔皇剣（ヘキサゴラム・ブリンガー）」の一際（ひときわ）厄介なところだ。対峙した相手、または周囲にいた者の記憶に特殊な念波を送り込み、記憶の改竄を阻害するんだ。念波自体はヒトに直接危害を加えるものではないが……代わりに、記憶に対する干渉を一切受けなくなってしまう』

「それって……っ」

『ああ、キミが考えてる通り。その女の子達はキミとバサラのイザコザに巻き込まれてしまったんだろ？　その時点で彼女達は記憶に対してあらゆる干渉を受け付けないようになってしまった。つまり今後、外部から彼女達の記憶を改竄する事が出来ない――〝何をもってしてもね〟……』

そう言われた当初は絶句するしかなかった。バサラが持つ魔剣群に備（そな）わる厄介な特性……。それは他者による記憶の改竄および干渉の阻害――平たく言えば〝記憶の捏造を封じる〟ものだった。基本的に一般人が異形の世界の事情に巻き込まれた場合、大概は記憶を改竄もしくは消去する処置が施（ほどこ）される。

しかし、神器（セイクリッド・ギア）の中でも特に異質な禁忌（ロスト・ロンギヌス）の神滅具――『六獄（ヘキサゴラム）の魔皇剣（ブリンガー）』は記憶に関する措置の類を全て封殺（ふうさつ）する。新達にとってはまさに鬼門（きもん）とも言える特性だった……。

つまり、バサラ・クレイオスの居る前で一般人が巻き込まれれば――その人物の記憶を操作する事が出来なくなり、新達の正体もいずれはバレてしまう……。しかも、バサラ自身は突然やってくる自然災害と同じくらいの気分屋なので、行動が全く読めない。否、バサラにとっても因縁深い新が居れば、これからも無遠慮かつ無軌道に絡んでくるだろう。その度（たび）に一般人を巻き込んでいけば取り返しのつかない事態にまで発展しかねない……。

結局はバサラの言葉通り、偽（いつわ）りの平和など脆く崩れやすい事を思い知らされてしまった……。

『……確かに奴（バサラ）の言う通り、俺達が学園や町に居座ったりしなければ、桐生達を巻き込まずに済んだのかもしれないよな……。あいつらや一般の生徒を危険に晒したのは「禍の団（カオス・ブリゲード）」、「造魔（ゾーマ）」もそうだが……俺達にも責任がある。いや、むしろ俺達がいるから――』

「んー、それってちょっと勝手が過ぎるんじゃない？」

ネガティブな考えを過（よぎ）らせていると、桐生の言葉がハッキリと聞こえてきた。しか

も、それは予想だにしない答えだった……。
「まあ、確かに危ない連中と関わってるのかもしれないけど、竜崎が私達を助けてくれたのは事実でしょ？　それなのに〝ヤバそうだからもう関わらない〟って、２人はそんな打算だけで竜崎に抱かれたの？」
「そ……それは……っ」
「違うわよね～？　竜崎にゾッコンだから揃って一緒に告ったんだもんね～。それも３Ｐする程に」
　顔を真っ赤に染める村山と片瀬。桐生は更に続ける。
「それにさぁ、竜崎も竜崎で他人（ひと）には言いづらい事情を抱（かか）えてんのよ、きっと。その事情に私達を巻き込んじゃった責任を感じてる。それを引きずってるせいで私達を避けてるってトコなんじゃないの？」
　的確に物事の芯を捉えた桐生の言い分に聞き入る村山と片瀬。同時に彼女達から少し離れた位置で聞き耳を立てていた新も『あいつエスパーかよ……』と目を丸くする程に驚いていた。桐生のメガネがキラリと怪しく光る。
「だから、その責任を取ってもらうってのを口実にして――――竜崎に詰め寄っちゃいなさいっ。更にエロエロな流れに持ち込めば、今度こそリアス先輩やロスヴァイセちゃんとの関係も聞き出せるかもしれないわ。まさに一石二鳥ってヤツよ」

「た、確かにそうかも……っ」

桐生の説得に村山と片瀬は謎の納得をしてしまう……。少しズレた発想だが、思ってた以上に効果覿面。新に対する猜疑心をひと欠片と言えど払拭させた。新も『素人のクセに案外目ざといな……』と心中で毒づきつつ、半ば安堵して口元を緩ませた。

そのタイミングで桐生がマリトッツォの選別を終えて会計を済ませ、桐生達は退店していった。その様子を見届けた新は少し時間を置いてから選別したマリトッツォを受け取り、料金を払って店を出る。バイクのシートの中にマリトッツォの箱を入れ、エンジンを噴かせて走らせた。

とりあえず早く帰ろうかと考えながらバイクを走らせる最中、新は〝何者かの気配〟に気付いてバックミラーに視線を送る。そこに映っていたのは――――宙を飛ぶ人影。つかず離れずと言った一定の距離を保ちつつ、新を見失わないように追跡してくる。『造魔……ではなさそうだな。気配の質からすると魔法使いか？　何にせよ、このまま尾行されるのは人目に付く。仕方ねぇ……寄り道していくか』

バイクを走らせること２０分、新は人気が全く無い廃工場に到着した。工場のあちこちに雑草が生え茂っており、至る所に蔦が絡まっている。直ぐにバイクから降りて施錠すらされてない工場の錆びた扉を開け、中に入っていく。

機材などは既に撤去されたのか、工場内は寂れた空間が目立ち、埃と錆にまみれた大

型の機械が最低限の数だけ放置されているのが目に映った。
工場内を歩き回ること数分、新は少し開けたスペースで足を止め、周りを見渡しながら言う。
「……出てこいよ。隠れているつもりだろうが、そんなに殺気をむき出しにしてたら意味ねぇぞ？」
新の言葉を皮切りに物陰からゾロゾロと姿を現す人影。それは以前、駒王学園を襲撃してきた『はぐれ魔法使い』の集団――『魔女の夜』に所属する魔法使い達だった。ただし、今回は男性でなく女性の魔術師……魔女しかいなかった。その数はおよそ１０人以上。新の退路を断つように囲っていく魔女達。
「俺もまだまだ捨てたもんじゃないな。こんな大勢の女に言い寄られるなんてよ。殺気さえ無ければ１人ずつデートしてやるんだけどな」
「おほほほほほ♪　あなたの為に綺麗どころを集めてきたのよん。感謝して欲しいわねん♪」
突如聞こえてきたキャピキャピ声にゾクッと反応する新。まるで天敵に出くわしてしまった小動物のように小さく震え、不機嫌さが如実に出てくる。
言葉を失ってる新の前に１人の若い女性が遅れて現れる。年齢は２０代前半と言った感じで、紫色のゴスロリ衣装を身に纏っていた。クルクルと回すゴシック調の日傘も

衣装と同じく紫色。人形のような風体に怪しい美しさを孕んでいる。
　女性は微笑んで挨拶をする。
「お久しぶりねん。アラたん♪　こーんな辺鄙な場所で再会しちゃうなんて、やっぱり私達はベストカップルとして結ばれる運命なのねん♪」
「……ワーストカップルの間違いじゃねぇのか？　紫炎のヴァルブルガさんよぉ」
「あらあらあらん？　そんな他人行儀みたいな言い方は無いんじゃないかしらん。昔みたいにぃ――――〝ヴァルちゃん〟って呼んで欲しいわん♪」
「やなこった。もう俺はガキじゃねぇし、だいたい俺とお前はとっくに終わった関係だろうが」
「ぴえ～ん、酷いわん。しばらく会わない内に変わっちゃったのねん。前まではあ～んなに激しく燃え萌えし合ってたのにぃ♪」
「燃えてたのは敵のアジトとか、敵兵とか、そんなもんばっかりだろ。誤解を招く言い方すんな」
「あらぁん？　でもぉ、私とアラたんが体を重ねたのは事実よん。それは否定できないわよねん？」
「……チッ、初体験が性悪の魔女とか黒歴史だっつぅの」
　女性に対して珍しく嫌悪感をむき出しにする新。それもその筈、〝紫炎のヴァルブル

ガ〟と呼ばれたこの女性は『魔女の夜（ヘクセン・ナハト）』のトップの1人であり――――新の元彼女でもある。バウンティハンター時代は度々（たびたび）ヴァルブルガと衝突したり、共謀して任務をクリアしたり、時には味方・時には敵……といった感じで絡んできた。

更に言うなれば、新の初体験の相手であり――――新にとっては苦い思い出でもある。

苦々しい顔付きで嫌悪する新に対し、ヴァルブルガはルンルン気分で語り始めた。

「あぁ……今でも昨日の事のように思い出しますわん。私とアラたんで標的を仕留めたりぃ、追手を返り討ちにした時は息ピッタリだったわよねぇん？　あの頃のアラたん、容赦なんて少～しも無かったから相手もガクブルしてたわねん。特に相手をころころ殺して返り血を浴びてる時のアラたんは本当に……ケ・ダ・モ・ノ♪　何度も興奮して濡れちゃいそうになったわぁん♪」

ヴァルブルガはウットリとした表情で自身の下腹部に手を添え、過去の思い出に耽（ふけ）る。直ぐにでも自家発電を始めそうな勢いだった……。取り巻きであろう魔女達が「ここでは止めてくださいっ」と制止する。一方、当の新は「……チッ」と不機嫌そうに舌打ちをするだけだった。

気を取り直してヴァルブルガが新に訊く。

「ねぇ、アラたん。どうしてそんなユルユルになっちゃったのかしらん？　もちろん今も素敵だけどぉ、わたくし的には昔のアラたんの方が好みなのねん。ギラギラしたお

目々に終始ピリピリムード、何にでも噛み付く飢えたケダモノみたいなアラたんっ。それがいつの間にか尻尾をフリフリする子犬ちゃんのように成り下がるなんて……どういう心変わりなのかしらん？」

　問うてくるヴァルブルガに対して、新は一拍置いてから答えた。

「……結局、そういう奴ほど周りに敵を作り過ぎてしまうんだよ。昔の俺は本当にクズで、身勝手で、我欲を満たす為だけに生きていたようなものだからな。仕事とは言え、この手でどれだけ多くの相手を殺してきたのか……今となってはそれさえも黒歴史だ」

「あらぁ？　随分あなたらしくない発言をするのねん。わたくしと何度も共謀して標的をころころ殺してきたのにぃ♪」

「何でもかんでも燃やしてきたお前には分からねぇだろうよ。骨を砕く音、頭蓋骨を潰す音、筋肉を断ち切る感触、事切れる寸前の喉の動き、吐き散らされた血反吐の臭い……どれも一度味わうとクセになっちまうほど恍惚なものだろう。だがな……そんな鬼畜行為を嬉々として延々と行えるのは――――生来非情なクソ野郎だけだ。殆どの奴はその瞬間よりも、その後にのし掛かってくる罪悪感に苛まれ、押し潰された挙げ句……壊れていった。俺はそんな同業者を何人も見てきた。結局……後ろめたさを抱えたまま生きていけるような奴は、ごく僅かしかいない」

　新の手が自然と震え、あの男――――バサラ・クレイオスの顔が脳内にチラつく。バサ

ラはトコトン割り切る性分で、曖昧な考えや妥協などは一切見せない。それは後天的に至ったものなのか、生まれついての思想なのかは分からないが……バサラ・クレイオスが持つ底知れぬ強さと恐ろしさの要因の1つでもあるだろう。

『悪に徹しきれない中途半端な奴はいずれ淘汰される。良くも悪くもアイツはその本質を理解している。だから、今まで生き永らえてきたんだ……。俺はそのラインに至れず、燻ったままグダグダと生きているに過ぎない……。力だけじゃなく、この時点で差が付いちまってるのかもしれない』

新は心中で自虐し、バサラとの差を改めて振り返る。ただ、それでも新は今の自分を全否定したくない……。すると、ここでヴァルブルガが割り込むように口を出す。

「もしかしてぇ、アラたんはそんな風に壊れたまま死ぬのが嫌だから、今のアマアマちゃんに成り下がっちゃったのかしらん?」

「……かもしれないな。だが、俺はその生き方についてだけは後悔なんてしない。ようやく今の俺としての生き方を見つけられたんだ。失いたくない。それを奪い、壊そうとするなら――相手がお前でも許さねぇぞ」

警告とも取れる言葉を発し、新はヴァルブルガを睨み付ける。対してヴァルブルガは口元を歪ませ、舌舐めずりする。

「あぁ……っ、やっぱりアラたんはアラたんよねぇん♪　尻尾フリフリの子犬ちゃんと

思いきや……獰猛なケダモノ的部分は残ってるのねん。いやーん、興奮しちゃうっ♪」
「そろそろ俺の前に現れた用件を吐いてもらおうか。まさか、ただストーキングしてきたってわけじゃないだろう？」
新が問い詰めると、ヴァルブルガは「モチモチのロンよ」とキャピキャピ声で答える。
「さすがアラたん、わたくしの考えをすぐに分かってくれるなんて。やっぱり相思相愛なのねん。また昔みたいにぃ、私と愛し合わない？　今なら周りの魔女達もサービスしてくれる特典付きよん♪」
「……そんな事だろうと思ったよ。さっきも言ったが、俺とお前はとっくに終わった関係だろ。やり直すつもりは毛ほども無い」
「もうっ、冷たいわねん。そ～んなツレない事を言っちゃうなんてぇ……少しお仕置きが必要みたいねぇん？」
ヴァルブルガが悪戯な笑みを浮かべながら、周りの魔女達に手で合図する。途端に魔女達は手元に魔法陣を展開し、有無を言わさず魔術による砲撃を開始した。
炎や氷、雷などの攻撃魔術が襲い掛かってくるが、新はそれらを全て回避する。機械が爆ぜ、埃と鉄錆の匂いが宙に漂う。新は埃を払ってから臨戦態勢を取る。
「お仕置きが必要なのはお前らの方だ。この前の学園襲撃、お前らが主犯らしいからな。その借りを返させてもらうぜ」

新は闇皇の鎧を展開し、剣を取り出して構える。魔女達は続けて魔術砲撃を放つが、新の剣戟によって悉く斬り払われる。

真正面からは不利と見て、今度は新を中心に包囲網を組む。四方八方から放たれる魔術。新は上に跳んで躱そうとするが……魔女達はそこを突いて一斉に巨大な魔術砲撃を放った。

空中なら逃げ場が無いと踏んでの砲撃だが、新は手元に火竜のオーラを迸らせ、魔女達が撃ってきた魔術砲撃に向けて火竜を解き放つ。火竜と魔術砲撃の群れが衝突し、特大の爆炎と爆風が工場内に吹き荒ぶ。凄まじい衝撃にたじろぐ魔女達、その一瞬の隙を新は見逃さない。火竜のオーラを剣に流し、周りの魔女達に剣戟一閃。

魔女達は直ぐに防御の術式が描かれた魔法陣を展開して防ごうとするが……力の差があった為、まるで薄いガラスの如く儚い音と共に砕かれてしまう。更に剣圧と熱波が傍を通り抜け――――魔女達の衣装が木っ端微塵に弾け飛ぶ。魔女達は一糸纏わぬ姿となった。

「きゃあぁぁっ！」「いやぁぁぁっ！」「ハァハァ……この羞恥心の高まり……っ」「ンン……っ、クセになるかも……っ」

ヴァルブルガの言葉通り、綺麗どころを揃えてきた事も相俟って多様な裸体が披露される。爆乳、巨乳、美乳、小振りとあらゆるサイズのおっぱいが丸見え、括れた腰つき

も安産型のお尻も曝け出された。魔女達は羞恥のあまり裸体を手で隠す。何故かごく一部は危ない発言をしているが……。

そこへヴァルブルガが前に出てくる。

「あはっ♪　アラたん、そういうケダモノ的なところは変わってないのねん。アマアマちゃんになったのに、昔よりもキレ味が増してるわん。周りの娘達じゃ相手にもならないわねん」

「昔よりかはマシになったからな。それでもヤツに届かねぇのはネックだが……お前の場合はどうだ？」

「ふふっ、試してみる？」

ヴァルブルガが挑戦的な笑みを浮かべ、新は静かに『真・女王形態』に姿を変える。昔のよしみだからこそ知っている。〝半端に行けば死ぬ〟と……。周りの魔女達は全裸のまま巻き添えを避けるべく距離を取り、暫し睨み合いの時間が設けられる。

ヴァルブルガが口元を舌でペロッと舐めた刹那、彼女の手元や周囲に無数の魔法陣が展開され、そこからあらゆる属性の魔術が迸る！　新は瞬時に横っ飛びで初弾を回避し、追撃してきた魔術を剣戟や火竜で相殺していく。

一触即発――――まさにその言葉が相応しいやり取りだった……。新は間隙を縫うように飛んでくる魔術の群れを躱していき、遂に懐を捉えられる距離まで詰め寄った。

新は手元に黒い火竜のオーラを集束させ、ヴァルブルガに向かって撃ち放とうとしたが……彼女のニヤけた笑みを見て、今の距離では危険だと察知する。
「アラたん！　わたくしに燃え萌えしてくださいませぇん！」
「――――ッッ！」
新は既に火竜を撃ち放っていたが、同時に少しでも危険を避けるべく後ろへ跳ぶ。その刹那、目と鼻の先で紫色の火柱が発生し、新の火竜と衝突！　２つの炎が特大の爆発を生み出す！
爆発と熱波を浴びてしまった新は焼ける痛みと共に吹き飛ばされ、地面を転がる。その威力は凄まじく、兜が破損して素顔が露呈する程までイッていた。ジリジリと焼けるような痛みを堪えつつ立ち上がる新。ここまで凄まじい爆発が起これば、ヴァルブルガも無傷では済まされない筈……。
やがて爆煙が晴れていき、人影が見え始める。
「うふふのふっ。やっぱりアラたんは素敵ねん。あの一瞬で切り替えすなんて……っ。おかげでわたくしのドレスが燃え萌えになってしまいましたわぁん♪」
爆煙の中から見えてきたのは――――ボロボロと焼け焦げたゴスロリ衣装が舞い落ち、パンツ１枚だけの半裸姿となったヴァルブルガだった。
良い形をしたおっぱい、細く括れた腰、小振りなお尻、まるで職人が完璧に仕上げた

人形のような艶やかなボディライン。更にはパンツも紐パンと言う下心を擽る逸品。無事だとアピールしたいのか、自分の半裸姿を嬉々として見せつけてくる。

しかし、新にはそれよりも注目すべき物があった……。それは先程の紫色の炎――紫炎だ。

「……おい、今の炎はまさか――あのババアが使ってた紫炎か？」

「あらぁ？　わたくしのヌードよりも注目するのはそこですのん？　んも～、イケズなヒトっ。そうよん。今は亡きお師さま――アウグスタさまの紫炎こと神滅具の１つ、『紫炎祭主による磔台』よぉん。わたくしが継承しましたのん」

「あのババア、まだ往生際悪く生きてるんじゃねぇかと思ったら死んでたのか……。って、さっきの紫炎は神滅具の一種だったのか！」

『紫炎祭主による磔台』とは以前、アザゼルから聞かされた１３個ある神滅具の内の１つであり、聖遺物と呼ばれる代物でもある。それを目の前の魔女――ヴァルブルガが所有している。因果は巡ると俗に言われてるが、あまりにも数奇過ぎる巡り合わせだ……。

「はあ、俺にとっては最悪の巡り合わせじゃねぇか……っ」

「おほほほほ♪　アラたんはツンデレですわねん。本当はわたくしと感動の再会を果たした事に萌え萌えしていらっしゃるくせにぃ♪　よく言うじゃないかしらん？　嫌よ

嫌よも好きのうちって」
「そんな事を言うぐらいなら、おとなしく捕まれよ！」
「いや～ん、ダメダメですわ。わたくし、アラたんをこの手に収めるまでは捕まりたくないのよん。本当はもっとも～っと恋人同士の逢瀬を楽しみたいのですけどぉ、残念ながら時間切れねん」
そう言った刹那、ヴァルブルガ達の足元に転移用の魔法陣が発生し、強い光に包まれる。口振りからすると、どうやら先に仕掛けておいた魔法陣が時間を迎えた為、発動したようだ。ヴァルブルガが新に向かってウインクする。
「じゃあね、アラたん。次に会った時はもっとオトナの逢瀬を楽しみましょうねぇん♪」
その言葉と共に一際強い光が発せられ、ヴァルブルガを含む魔女達の姿がこの場から消える。新は徒労に終わってしまった戦闘の結果に舌打ちし、廃工場から出ていく。直ぐに停めてあったバイクに跨がり、エンジンを噴かせる。
「クソッ、女狐め……。相変わらず逃げの準備だけは天下一品だな。……ったく、もっと違う形で会っていれば、別れてなかったかもしれねぇな」
これ以上長居すると人目に付きそうので、新はバイクを走らせた。その直後、地面に魔法陣が輝き出し――なんと撤退した筈のヴァルブルガ達が現れる。実は発動した魔法陣は転移用に見せかけた擬態用の魔法陣で、本当はその場に留まっていたのだ……

！

何故そのような事をする必要があるのか？　それは……ヴァルブルガが〝新のその後の反応を見て楽しみたかったから〟と言う何ともお粗末この上ない理由ゆえだった……。ヴァルブルガはクスクスと含み笑いをして、走り去っていく新に投げキッスをする。

「うふふ、アラたんも満更でもなかったみたいねん。今度は野暮ったいバトルは無しにして……イチャイチャパラダイスを楽しみたいわぁん。その時が来るまで少〜し待っててねぇん♪」

「ヴァルブルガさま、我々も早く引き上げましょう。いずれ人目に付くでしょうし。それに……こんな姿を誰かに見られたら恥ずかしいです……っ」

取り巻きの魔女の1人がヴァルブルガにそう進言する。それもその筈、取り巻きの魔女達は全裸、ヴァルブルガは紐パン1枚と言う露出狂に間違えられてもおかしくない格好をしているのだ。約一部は「ヴァルブルガさまの柔肌……ハァハァ……ッ」とヤバい息遣いをしているが……。ヴァルブルガは長い紫色の髪をかき上げ、今度こそ本当に撤退しようとする。

そこへ――――「Ａｌｌｏ（アロー）　Ａｌｌｏ（アロー）　Ａｌｌｏ（アロー）。Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ（マドモアゼル）」と何者かの声が聞こえてくる。ヴァルブルガがその方向に視線を向けると……何故か先程の

マリトッツォ専門店の店員らしき男がいた。取り巻きの魔女達は悲鳴を上げて裸体を隠すが、ヴァルブルガは一切動じずに問いただす。
「女性の柔肌を覗き見だなんて、随分と趣味の悪い殿方ですわねん。何か御用かしら？」
「Ｎｏｎ（ノン） Ｎｏｎ（ノン） Ｎｏｎ（ノン）、少々気になる事がございましたので」
そう言うと男の体から黒い霧が噴き出し、化けの皮が剥がれる。その中身は誰もが知る天性の悪――ユナイト・クロノス・キリヒコ……ッ！　さっきの某芸人風店員はヤツの変装だったのだ……ッ！　変装を解いたキリヒコがヴァルブルガに問う。
「あなたこそ、Ｍｏｎｓｉｅｕｒ（ムッシュ）闇皇が店内に入った時から覗いてましたよね？　でしたら、先程彼の近くにいたＭａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ（マドモアゼル）達を何故人質に取らなかったのでしょうか？　彼女達を人質にすれば、彼との交渉は一層簡単に進められた筈なのですが？」
キリヒコの言う〝彼女達〟とは――桐生達の事だろう。新の身柄が目的ならば、桐生達を人質に取ってしまえば交渉事など容易に進められる。なのに、ヴァルブルガはそうしなかった……。
キリヒコの問いに対し、ヴァルブルガは嘲笑するように吹き出す。
「ププッ♪　あなた、噂通りの腐れ外道さんのクセにな～んにも分かってないわねん。アラたんとわたくしは恋人同然の関係よん。そんな２人の間に無粋な部外者を立ち入

らせるわけないでしょう？　おバカさんねぇ♪」
「Ｏｈ　ｌａ　ｌａ、私としてはその考えの方が理解できませんね」
「あら～？　嫌われ者の腐れ外道さんには無縁のお話だったかしらぁん？」
「当人に避けられている事実を認知しない痛々しいヒトよりは気が楽ですけどね」
　キリヒコとヴァルブルガの煽り合戦……。今にも爆発しそうだが、取り巻きの魔女達がヴァルブルガを宥める。ヴァルブルガは肩を竦め、転移魔法陣を開く。その際、キリヒコに向けて警告を飛ばす。
「よろしいかしら、悪趣味外道さん？　とにかくアラたんはわたくしのモノですから。わたくしとアラたんの逢瀬を邪魔しようとするなら、たとえ協力関係にあるあなたでも……容赦無く燃え萌えにしてやりますわよん？」
「Ｏｕｉ　Ｏｕｉ　Ｏｕｉ、女性のヒステリーは怖いですね。肝に銘じておきましょう。せいぜい足元を掬われないように――Ａｄｉｅｕ」
　ヴァルブルガ達は転移の光に包まれて消え去り、キリヒコも黒い霧と共に消えていった……。少しずつだが着々と悪意の牙が侵攻の準備を進めている……。

聖☆お嬢さん聖地へ！

「――――さん、――――さん」
『……結局、俺は過去の腐れ縁――――いや、腐りきった縁からは逃げられねぇのか……。バサラ然り、ヴァルブルガ然り……』
「――――さん、――――さん」
『ここ最近は俺にとって嫌な過去でしかない連中が関わり過ぎている。もはや不吉を通り越してやがるな……っ。これ以上、面倒事が起きたりしたら――――』
「新さんっ？」
　朱乃が覗き込むように顔を近付けると、虚を突かれた新は「んぉっ⁉」と素っ頓狂な声を上げてしまう。腐れ縁と言うか因果と言うのか、自分の嫌な過去を思い起こし耽っていたので
「……んにゃ、泳ぐにゃ……」
　黒歌は寝ぼけながらも起きる。フラフラとプールの飛び込み台に移動するすると、着物を大胆に脱いでしまい、全裸でプールに入っていく。脱いだ拍子にブルルンッと弾むおっぱいは魅了の一言に尽きる。

『つーか、あいつ着物の下は何も付けてないのよ』
「小猫の姉はいなくなったのだな。ちょうど良い。はぁはぁ」
　息を上げながら登場したのは――――競泳水着姿のゼノヴィア。イリナとの勝負を終えたのか、新達のもとに足を運んできた。
「新、失礼するぞ」
　そんな事を言うと――――ゼノヴィアが新の膝上に座り、新の足にゼノヴィアの柔らかな太ももとお尻の感触が伝わってくる。膝上に座るゼノヴィアは濡れた髪をいじりながら言う。
「イリナと勝負で賭けていたんだ。水泳で勝った方が新の膝上に座るとな」
「そんな賭け事をしていたのかよ。しかも、俺の意思は無視かいっ」
　同じく競泳水着姿のイリナが涙目で登場して、水泳キャップを外す。長い髪がファサッと現れた。いつものツインテールも良いが、縛ってない長髪のイリナもまた乙なものである。
「良いな良いな！　私も新くんのお膝の上に座りたいな！」
　などと心底羨ましそうにイリナが言う。何故か最近、新の膝上が人気になってきている……。小猫、レイヴェルに続いてゼノヴィアやイリナまで求めてきた（笑）。
　――――すると、イリナが新の背後に回り「えいっ！」と掛け声と共に後ろから抱きつ

く。むにゅんっと新の背中にイリナのおっぱいが形を歪ませる。
「背中は私がゲットよ、ゼノヴィア！」
「むう、やるな、イリナ」
何かよく分からない勝ち負けにこだわるバカ2人、可愛らしい（笑）。一方、アーシアは一誠と仲良く談笑していたりする。傍から見れば既に夫婦と言っても良いだろう。この3人はいつだって仲良し。そんな彼女達に関して〝とあるエピソード〟があったりする――――。

「え？　イッセーくんへのプレゼント？」
昼食のサンドイッチを手にするイリナ。彼女は真剣な表情で切り出してきた友人2人の意見を聞いていた。
「はい。人づてに耳にしたんです。イッセーさんが今とても欲しい物があると」
「アーシアが買いに行きたいと言うから、私も付き合おうと思うんだ。アーシア1人で遠出は厳しそうだからね」
サラサラの金髪美少女――――アーシアがモジモジしながらそう口にして、大きな弁当

をがっついているゼノヴィアがそう言う。
「今度の休日、新の欲しい物を買いに行こうと思うんだが、イリナも一緒にどうかな？」
ゼノヴィアのお誘いにイリナは「ええ、是非ともご一緒させて！　楽しそう！」と二つ返事で了承した。

次の休日。イリナとゼノヴィアは朝食を済ませて、一休みしてから下宿先たる新の家を出てアーシアを迎えに行った。今回は皆、私服を決め込んでいる。アーシアはベージュ色の可愛らしいワンピース。ゼノヴィアはジャケットにジーンズと格好良く決め、イリナはシャツにスカート風のレースショートパンツと言う出で立ち。
行き先は東京で、そこじゃないと今回の目的の物が手に入らないらしい。
「それで新くんの欲しい物は何なの？」
最寄りの駅まで歩く最中、イリナはゼノヴィアに訊く。
「どうやら、『えろげ』と言うものらしい。何かの略称かもしれないね」
「へー、『えろげ』ねー。どういうものかしら？」
イリナは想像で色々な物を思い浮かべるが、答えには辿り着かない。それもその筈、

『えろげ』とは『エロゲー』――――つまり『エロいゲーム』の略称なのだから……。その方面に疎い彼女達が知らないのも無理はなかった。ゼノヴィアがメモ書きを見ながら言う。

「ちなみにその『えろげ』の中で新は『小悪魔お姉さまとの聖生活3』と言うものが欲しいようだ。イッセーも同じ物が欲しいらしい。あと、『ラブ姫夢想・三国統一伝』なる『えろげ』も新は揃えたいと言っていた」

「……映像作品なのでしょうか？　映画？　ＤＶＤ？」

可愛く首を傾げるアーシア。ゼノヴィアが目元をキラリと光らせながら推理する。

「うん。小悪魔と聖生活と言うタイトルがポイントだと私は感じているんだ。小悪魔とはおそらく、悪魔に関連したものだろう。聖生活とは教会の儀式だと思う。しかもナンバリングが付いている。映像作品か何かなのは確かだろう。これらから推理すると、新とイッセーは悪魔に取り憑かれた姉を教会の儀式にて祓うエクソシストの映像資料集、その3番目が欲しいと言う事になる」

「おぉ……」

イリナとアーシアはゼノヴィアの見事（？）な推理に感嘆の息を漏らした。

『す、凄いわ、ゼノヴィア！　僅かな情報からここまで引き出せるなんて……っ。私とコンビを組んでいた時は力任せに事を運ぶやんちゃガールだったけれど、暫く見ない間に

こんなにも立派になって……！』

感動しているが実際は『エロゲー』に対して間違った見識、間違った推理を辿っているだけである（笑）。

「しかし、さすが新だ。普段はスケベだが、意外にも勤勉だったんだな。体のトレーニングだけではなく、頭の鍛錬にも力を注ぐとは……。私も見習うべきところが多いよ」

ウンウンと頷（うなず）きながらゼノヴィアは尊敬の眼差しになっていた。

「はい。イッセーさんも立派な悪魔になるため、1日1日を懸命に修行しています。さ、さすが私の大好きなイッセーさんです……」

アーシアは顔を真っ赤にして、目も乙女モードに輝いていた。ゼノヴィアも頬を赤く染めて新に想いを馳せる。

「それで、何処に行くの？　教会関連の場所で売っているのかしら？　それなら私が行けば事が済みそうだけれど……」

イリナの問いにゼノヴィアは答える。

「いや、それは教会でも手に入らない逸品（いっぴん）らしい。『聖地』と呼ばれる場所にあるそうなんだ」

「日本にも聖地があるのね。それで何処なの、ゼノヴィア？」

「秋葉原だ」

こうしてイリナ達は最寄りの駅から秋葉原――通称『アキバ』へと向かう事となった。

電車で揺られること1時間。教会トリオは電気街口と言う場所から外に出たが、3人共に外の風景に圧倒された。立ち並ぶ電気屋の数々。アニメを宣伝する看板。道に停まっているアニメ絵が描かれた車。知らない者から見れば、様々な要素が異様に混じり合った風景だと思うだろう。

「……め、冥界の都市部も凄いと思ったが……これは別世界だな」

「は、はい！　す、すごいです！　見渡す限り電気屋さんばかりです！」

ゼノヴィアは目を見開いて驚き、アーシアは既に目を回しそうな程に狼狽（ろうばい）している。

「噂には聞いていたけれど、想像以上に凄いところだわ。これが秋葉原……。私がイギリスで聖なるお仕事をしている間にも日本はグングン高度成長していたのね……」

イリナもそんな風に口にしていた。彼女は幼少時に日本からイギリスへ渡ってしまったので、日本の都市部を見た事が無かったのだ。周囲を歩く人々を見て、ゼノヴィアが真剣な面持（おもも）ちになる。

「聖地か。歩いている彼らは巡礼者と言う事になるな。私達も教会に関係した者として、毅然たる態度で動かないと恥をかくぞ」
「は、はい！」
　ゼノヴィアの言葉にアーシアも改めて背筋を伸ばす。イリナも立ち振る舞いに気を付けながら頷いた。
「そうね。私もミカエルさまの使徒として、堂々と歩いてみせるわ」
「とりあえず、聖地を歩く前に天に祈ろうか」
　ゼノヴィアの提案に勿論アーシアとイリナは応じて、「「ああ、主よ！」」とその場でお祈りを済ませる。アーシアとゼノヴィアは現在悪魔だが、天界からの特例で天に祈る事が出来る。
　ゼノヴィアは懐からメモ書きを取り出す。
「――――と、実は秋葉原に買い物に行くと言ったら、新のご両親と朱乃副部長と小猫がついでに買ってきて欲しい物があるとメモ書きを渡してきたんだった」
「あ、私もお父さんとお母さんから買ってきて欲しい物があるって言われてましたっ」
　アーシアもイソイソとメモ書きを取り出す。アーシアは一誠の家に住み、一誠の両親を本当の父と母のように感じているので、２人の娘として生きていくと天に誓った。その話を聞いた時、イリナは感泣したそうだ。

アーシアとゼノヴィアがメモ書きを確認すると、アーシアの方は『テレビのケーブル』で、ゼノヴィアの方は『ポータブル式のＤＶＤプレーヤー』だった。形式はメモ書きを店員に見せれば分かる代物。

「それではあの電気屋さんに行きましょうか！」

イリナがそう言うと、教会トリオは駅から出てすぐに目にした大きな電気屋を指で指し示した。

「……こ、これが経済大国日本の電気屋か」

ゼノヴィアが額（ひたい）に汗をかきながら呟いた。店に入り、店内を一周してきたところでイリナ達は最上階のベンチで休んでいた。全員が電気屋の未知の風景に驚き、絶句し、頭がパンク寸前になっていた……。

彼女達は幼い頃から教会で育成されてきたので、機械的な物とは縁遠い世界で生きてきた。教会でもパソコンやテレビぐらいは使っているものの、最新鋭の家電が揃う東京の電気屋に比べれば一目瞭然。一店舗めで彼女達は凄まじいカルチャーショックを受けている。

「デ、デ、デ、デーンキ、デンキ・ホーテ……」
　アーシアは目を回しながら、店舗で流れてる歌を口ずさんでいた……。
「アーシア、しっかりしろ！　まだ初戦だぞ！　いきなりやられてどうする！　私達はまだ買い物を終えてすらいないんだ！」
　ゼノヴィアがアーシアの肩を揺すって、気を確かに戻そうとしていたが……そう簡単には戻らない。
「……デンペンくん、可愛いですねぇ～。デンペンく～ん……」
「アーシア！　うぅぅ！　そんな、アーシアがぁぁぁっ！」
　キャパオーバーしてるアーシアと狼狽するゼノヴィア。イリナは近くの自販機でジュースを購入して、２人に手渡した。
「とりあえず、冷たいものを飲んでから気合を入れ直しましょう」
　アーシアもジュースを飲んで落ち着いたのか、改めて話し始めた。
「お父さんのお買い物だけでも済まして、次に向かわないと身が保ちませんね」
「……アーシアさんの言う事は確かね。私やゼノヴィア、アーシアさんのように教会育ちにとって、この聖地はまだ早い場所かもしれないわ。手早く動かないとこの地に宿る不思議な力に捕らわれてしまいそう……っ」
　気を取り直したイリナ達は再び下の階に降りて、まずは一誠の父親の買い物を済ませ

る為、テレビがたくさん置いてある場所へ向かった。メモ書きを店員に見せて無事に買い物を1つクリア。次に同じ階のＤＶＤコーナーに行き、メモ書きを店員に見せて『ＤＶＤプレーヤー』を購入。何とか2つめの買い物もクリアした。

その後、更に下の階に降りて、各々緊張しながらも興味深そうに未知なる機械に目を配らせていった。そこで――とあるコーナーを見学していたゼノヴィアがイリナとアーシアを呼ぶ。

「見ろ、アーシア、イリナ！」

ゼノヴィアはワナワナと全身を震わせて、小さな機械の箱らしき物を見ていた。

「ど、どうしたの、ゼノヴィア？」

駆け寄るイリナとアーシアが訝しげに訊くと、ゼノヴィアは生唾を飲み込んだ後に言った。

「こ、これを見ろ……。この小さな箱1つで……パンが作れるらしい！」

「――――っ！」

ゼノヴィアの言葉にイリナとアーシアは言葉を失った。彼女達にとってはにわかに信じられない事だろう……。しかし、経済大国日本の技術力を舐めてはいけない。

「そ、そんな……竈も使わずにこれ1つでパンが作れるなんて……。パン屋さんが失業してしまいます……」

　アーシアが口元を手で押さえながら声を震わせていた。彼女達がそこまでの衝撃を受ける機械の名は……『ホームベーカリー』。
「ホームベーカリー！　直訳するとお家のパン屋さん！　日本の食にこだわる姿はここまで……！」
「ざ、材料を入れるだけで生成するそうですよ！」
「これでどれだけの迷える子羊が救われると言うんだ……。こ、これが最先端を行く日本の技術力か……ッ！　錬金術師の技術を遥かに超越しているではないか！」
　イリナ、アーシア、ゼノヴィアの３人はその場で手を合わせた。
「「ああ、主よ！　これ１つでたくさんの信徒が救われます！」」
　そこまで大げさじゃない（笑）。むしろ、錬金術師の方が凄い。
「これ、欲しいな。値段は……ぬぅ」
　目を爛々（らんらん）と輝かせるゼノヴィアだったが、値札を見て唸（うな）った。値段は約３万円……高校生にとっては手が伸びにくい。天使および悪魔と言えど、基本的には高校生。給料は１ヶ月分のアルバイト代と大差無い。それぞれの財布の中身を確認し、全員難しい表情になっていた。
「……こ、この間、新しいお洋服と少女コミックを数冊まとめて買ってしまいましたし、何よりそこまでお金は持っていなくて……」

「私もつい最近、トレーニング用のグッズ一式を購入したばかりだ……むう」
アーシアとゼノヴィアの財布の中身中身は心許ないようだ。イリナも2人と状況は変わらず、天界の新グッズを実費で購入。部屋に飾る小物も買っていたら一気に金欠になってしまったそうだ……。
「ハッ！　そ、そうだわ！　もしかしたら！」
その時、イリナの頭に素晴らしい（？）閃きが降りてきた！
「これ、天界の経費で落とせるかもしれないわ！　迷える子羊を1人でも多く救えるとするなら、ミカエルさまもお許しになられると思うの！」
イリナは素早くケータイで天界へ直通の電話を入れる。担当のヒトと二、三の問答を経てから――――イリナは2人にピースサインを向けた。
「天界のクレジットカードを特別に使用しても良いですって！」
その報告にゼノヴィアもアーシアも涙した！
「そんな事が可能なのか!?」
「ミカエルさまのご慈悲ですね！」
天界が持つ専用のクレジットカードは本当に必要な物を買う時にしか使えないのだが、今回は特例と言う事で使用許可が出た。イリナは涙を流して天へ、そしてミカエルへ感謝の祈りを捧げた。

「ミカエルさま、見ていてください！　このホームベーカリーでたくさんパンを作って、迷える子羊達を救ってみせます！」
　その後、天界から「パンの材料費はそちら持ちでお願いします」と言うちょっと厳しい連絡が届いた。……信仰の道は険しい（笑）。

「さて、次は朱乃副部長の買い物だ」
　ゼノヴィアはホームベーカリーの大きな荷物を楽々持ちながら、メモ書きを見ていた。こういう時に力持ちがいると、突然の買い物でも対応できるので心強い。
「うん。どうにもコスプレ衣装のようだ」
「コスプレ？　朱乃さん、最近コスプレに凝っているのかしら？」
　ゼノヴィアの言葉に首を捻るイリナ。通行人に尋ねながら、イリナ達はコスプレ衣装を売っている店を見つけた。いざ行かんと思った矢先、その店の前で見知った女性達が話し込んでいるのが目に映る。
「ほら、ウェンディ。早く来なさいよ。アンタ1人で外で待つ気？」
「だ、だって、こういうお店って……ちょっと恥ずかしい……っ」

「私だって躊躇うわ、こんなの。ちょっと元凶のお姉さん？　アンタが言い出しっぺなんだから責任持って先陣を切ってもらいたいんだけど」
「ジュビアも恥ずかしい……っ」
「いやいやっ、普段から露骨に『正義さま〜！』ってアピールかましてるヒトが今更カマトトぶらないでよねっ!?」
「本来のジュビアは奥ゆかしいんです！　ただ、正義さまの前だとジュビアの欲望が全面的に、そして開放的に押し出されてしまうだけですのでっ！」
「言い訳の端々から奥ゆかしさが微塵も感じられないんだけどぉっ!?」
　忙しくツッコミを入れるのは長い白髪に黒猫型の髪留め、猫耳のような跳ねっ毛が特徴の美少女。その傍らでシャルルを宥めようとしているのは藍色の髪をツインテールに結わえ、緑色の菱形模様が施されたエスニック風なデザインの肩出しワンピースと――『さっきまで恥ずかしいと言っていたのはどうした？』と言わんばかりのオシャレに攻めた衣服を着た美少女。そして、もう1人は水色に近い青髪にゆるふわのウェーブをかけ、深いスリットが入れられた紺碧のコートを着こなした美女。その顔触れにアーシアは見覚えがあった。
　それもその筈。青髪の美女は以前アスタロト家――――トレミスとの一件で会ったディオドラ・アスタロトの姉――――ジュビア・アスタロト。藍色の髪と白髪の美少女2

人はアスタロト家と繋がりのあるヴァサーゴ家の息女にして姉妹、ウェンディ・ヴァサーゴとシャルル・ヴァサーゴ。人間界の街、しかも秋葉原に彼女達が来てるとは予想だにしていなかっただろう。彼女達もアーシア達と同じくコスプレ衣装を売っているこの店が目的のようだが、なかなか踏み出せずにいる。そこへアーシアが彼女達に声を掛けた。

「あ、あのっ。ジュビアさん、でしたよね？　お久しぶりです」

呼び掛けられたジュビアは「ジュビッ？」と謎の効果音を発しながら、アーシアの方へ視線を移す。ジュビアはアーシアの顔を覗き込むように見つめ、暫くするとジュビアの脳内に落雷が落ちるような衝撃が走った……ッ！

『こ、この金髪は確か……アーシア・アルジェントさん、でしたよね!?　正義さまが度々視線を走らせていた女性……ッ！　それもただの視線ではなく、ジュビアの「正義さまセンサー」が警鐘を発する程の……。そう、恋の視線を……ッッッッ！　そこから導き出される答えはただ一つ！　この金髪のヒトはズバリ――恋敵ッッッッ！　どうして恋敵がここに……ジュビーンッ!?　まさか、正義さまを誘惑して毒牙に掛ける為の何かが、このお店にある事を知ってやって来たッ!?　だとしたら、この恋敵は正義さまを手籠めにしようと……ッッ！　見かけによらず、なんて狡猾で卑劣な……ッ。むしろジュビアが正義さまの手籠めにされたいのにッッ！　以前の件ではトレミーくんを治

療してくれたのでお礼を言わせてもらいましたが……正義さまを狙っているのならば話は別です！』

そんな独り勘違い思考を走らせているジュビア（笑）。アーシアはイリナとゼノヴィアにジュビアの紹介を終え、２人がジュビアに声を掛ける。

「うちのアーシアがお世話になったようだ。私はゼノヴィアだ、よろしく」

「紫藤イリナです！　アーシアさんからもお話は聞きました。よろしくお願いします！」

ゼノヴィアとイリナは軽く会釈して挨拶を済ませるが、ジュビアは警戒心ＭＡＸで２人を見つめる。

『ジュジュビビッ！　この２人も、もしや恋敵――――いえ、違いますね。こちらの２人にはジュビアの「正義さまセンサー」が反応してません。よって、恋敵から除外です。やはり油断ならないのは、この金髪恋敵ですか……っ！　ジュビア、負けませんッ！　必ずこの恋敵を降(くだ)し、正義さまを毒牙から守ってみせますッ！』

瞬時にゼノヴィアとイリナが恋敵でない事を見抜いたジュビアは、口早に「はい、どうもよろしくお願いします。そしてサヨウナラッ」と言い終えて疾風の如くウェンディとシャルルを引っ張って、店の中へ入っていく。行動の速さに呆気に取られる教会トリオ。

「……なんか、嵐を呼びそうなヒトね」
「は、はい……。でも、とっても良いヒトですよ？」
「うむ、アーシアが言うなら間違いないだろう。さて、私達も店に入ろう」
　コスプレ衣装を売っている店に入店した面々だが、入って直ぐに圧倒される。あちこちに物珍しい衣装が飾られており、シスターっぽい服もあれば学校の制服らしき物もたくさん飾ってある。皆が興味津々の様子で衣類を見渡していた。
　店員に確認しながら、ゼノヴィアが朱乃の欲しい物を見つける。ゼノヴィアが手に取った衣装を見て、アーシアとイリナは勿論、ジュビアとウェンディも顔を真っ赤にした。
「……ビキニアーマーと言う衣装らしい。ゲームに登場する女戦士が身に着ける物のようだ」
　ゼノヴィアがビキニ風の軽鎧（ライト・アーマー）を手にして、興味深そうに見ていた。
『こ、これ……隠す面積がほとんど無い衣装だわ！　し、下のパンツも際（きわ）どい角度！　あ、朱乃さんのバストサイズだと上のアーマー部分も全部覆いきれないでしょうし……。ハッ！　それが目的なのね!?　はみ出したおっぱいで新くんを魅了すると言う作戦！　こんなエッチな衣装で迫ったら、おっぱい大好きな新くんなら喜んで飛びつきそうだわ！』

「……女剣士としては、一度着なければいけないような気がする」
何やら目元を光らせて挑戦的な表情になるゼノヴィア。おそらく、この場にいない朱乃へライバル心を燃やしているのだろう。
「はい！　では、こちらで試着してみては如何でしょうか？」
女性店員がノリ気で試着室へ案内し、ゼノヴィアはそのビキニアーマーを手にして、
「うん、一度着てみよう」と言って試着室の方へ。
「わ、私だって着られます！」
アーシアも顔を真っ赤にしながら、付近にあった際どい衣装を手にしてゼノヴィアと同じ試着室の中に入り込んでいった。イリナも一度着てみたかった衣装を手に取り、隣の試着室に入って着替えをしていく。ジュビア達も女性店員に後押しされる形で試着室に入り込む。
『不思議な材質だが、着心地は悪くないな。これで頑丈な造りならば実際の戦闘でも使用できるかもしれない』
ゼノヴィアの声が聞こえてくる。どうやら先程のビキニアーマーを気に入った様子。
『……や、やっぱりゼノヴィアさんのようにグラマーじゃないと、そういう衣装は映えませんよね。私だと少しボリュームが……』
アーシアは衣装を着たものの、自分のスタイルと照らし合わせて満足できない部分が

あるようだ。
『ふふふ、そんな事はないぞ。ほら』
『あふぅん！……ゼ、ゼノヴィアさん、急に揉まれると困ります……』
『アーシアだって、充分なサイズだと思うぞ？　もしや、部長や副部長と比べてそう思っているのかい？』
『……だ、だって、イッセーさんは大きいおっぱいが好きですから、私のサイズでは満足してもらえそうになくて……』
『そんな事ない。桐生に聞いた。要は感度らしい。揉み心地さえ良ければ男は充分に満足してくれるそうだ。イッセーだって、アーシアが相手ならきっと喜んでくれる』
『そ、そうでしょうか……？』
『そうだぞ。きっと、こんな風に』
『い、いやぁぁぁ。ぁうぅん……』
『エッチな吐息を漏らすんだな、アーシアは』
『だって、ゼノヴィアさんの指が、そ、そんな風に……。わ、私だって負けません！　えい！』
『ぁぁん！　アーシア……何処でこんな技を……いゃぁ……む、胸が変な感じだ……』
『ゼノヴィアさんの真似をしたんです！　ゼノヴィアさんはこんなにいやらしい指付き

で私の体を弄(もてあそ)んでいたんですよ？』

『……そ、そうだったのか……。やる方とやられる方では天と地ほどの差が……あ、あ、いぁん……！　アーシア、私の体はどんどん変になっていくぞ……』

いったい試着室で何をやっているのやら……。この場に一誠がいれば間違い無く鼻血をダラダラ垂らしながらゲヘ顔を披露していただろう（笑）。そんなわけで着替え終わったイリナ達は試着室から出てみる。

ちょうど店内で衣装を物色していた他の女性客達がイリナ達を見て『おおっ』と感嘆の息を漏らしていた。ゼノヴィアは例のビキニアーマーを見事に着こなし、その場で模造の西洋剣を巧みにヒュンヒュンと動かす。アーシアは露出の多い踊り子らしき衣装。恥ずかしそうにしているが、神秘的な美しさが見える。体のラインも綺麗なので踊り子の衣装がよく似合う。イリナは小悪魔のような衣装を着ていた。真っ黒で背中に小さな悪魔の翼が生えており、お尻の部分には尻尾まである。2人に比べると派手ではないが、ヘソ出しがポイントだ。

すると、別の試着室付近から感嘆の声が上がるのが聞こえ、その方向に視線を移す。視界に映ったのはヴァサーゴ姉妹――妖精のような衣装を着たウェンディとシャルルだった。中央部分を露出させた背中には小さな羽があり、フリフリのスカートをあしらった可愛さ満載のドレス。如何(いか)にもファンタジー作品に出てくる妖精そのものを体

現していた。お揃いのコーディネートと言う点も加算されてイリナ達以上の盛り上がりを見せる。
「わぁ……こうして見るとスッゴい可愛いっ」
「まさに双子妖精って感じがするな」
「はい、凄く似合ってます」
イリナ、ゼノヴィア、アーシアが各々の感想を述べ、それを聞いてシャルルはフフンと得意げな表情で腰に手を当てる。
「なかなか悪くないじゃない」
「で、でも……ちょっと恥ずかしい……っ」
ウェンディは顔を赤くして恥じらっていたが、そこへ２人の着付けを担当していた女性店員が捲し立てる。
「やはり……やはり私の見立ては間違っていなかったっ！　日本人離れした可愛さを、色違いのお揃い衣装でコーディネートッ！　元々の魅力が相乗効果で更にアップしましたよッ！　お陰で私のファッション魂に火が点いてきました……ッ。さあっ、どんどん着替えさせてあげましょうッ！」
「な、何この店員、目がイッてるんだけど……」
「す、凄い迫力に満ちてますぅ……っ」

尋常ならざる迫力の女性店員にたじろぐウェンディとシャルルだが、女性店員の勢いは止まらない（笑）。様々な衣装と共に試着室へ連行され、女性店員の独壇場が開幕される。

「まずはド定番！　アニメに出てくる制服！」
「これは……可愛いですね」
「なんで私まで？」
――お着替え中――
「次なるお題はコレ！　へそ出しノースリーブ！」
「ビックリするほど似合いませんね……」
「だから、なんで私まで？」
――お着替え中――
「夜はちょっと大胆に！　大人のパーティードレス！」
「これも似合いませんね……」
「ちょっ、これサイズ自体合ってないんだけど……」
――お着替え中――
「白衣でお注射されたい！　ミニスカナース！」
「あのぉ……っ」

「なんか、どんどん嗜好が偏ってきてない？」

――――お着替え中――――

「女王様とお呼び！　セクシーボンテージ！」

「これはダメですぅぅぅぅぅっ！」

「ちょっと、この店員問題あり過ぎよっ!?」

もはや完全に店員のオモチャにされているウェンディとシャルル……。アーシアとイリナが「はわわ……っ」と言った様子で当惑する中、ゼノヴィアは「ふむぅ、あの衣装も動きやすさを重点的に仕立てているのか。今度着てみよう」などとボンテージ衣装の性能を褒めていた（笑）。

女性店員はハァハァと危険な息を荒立てて、意気揚々と更なるお披露目に移る。

「ここまではただの前菜ッ！　そして、ここからがメインディッシュッ！　真の切り札ッ！　私が今日まで築き上げてきたコーディネート人生の集大成なのですッ！　双子の姉妹さん以上に逸材を感じさせる青髪ゆるふわウェーブのお姉さんッッ！　見た瞬間に私のイマジネーションと美的センスがビビビッと来ましたッ！　一見おとなしそうに見えながらも実は肉食系を超えた超肉食系女子ッッ！　そんな彼女にピッタリのコーディネートがコチラァッッッ！」

女性店員が息巻いて試着室のカーテンを勢い良く開ける。その中から現れたのは

ジュビアだが……。

「「おぉぉぉぉぉ……ッッッ」」

先程以上に感嘆の声が店内に小さく響く。それもその筈、ただでさえ抜群のプロポーションが着ている衣装によって更に際立っているのだ。……問題なのはその衣装、明らかに店員の趣味嗜好が露見するような組み合わせだったのだ。

各所にフリルが付いた真っ白なビキニ、結婚式などでよく見られるベールには女性用冠(かんむり)のティアラも乗せられている。まさに清楚(間違った方向)を体現したコーディネートを施されたジュビアは一挙に注目の視線を浴びた。これにはイリナ達も思わず息を呑んでしまい、女性店員が狂喜乱舞する。

「フゥオォッハァッハァッハァァァァッッ！　如何(いかが)でしょうかッ!?　これぞ名付けて――――ウェディング・ビキニッッッ！　清楚・清廉を表す白ビキニに全女性の憧れとも言うべきウェディングドレスの要素を誂(あつら)えた至極の逸品ッッ！　これさえ着れば意中の相手を射止める事も間違い無しですっ！」

「ジュビーンッ!?　そ、そうなんですか？　つまり、これは花嫁衣装と言っても過言ではないのですねッ!?」

「はいっ！　むしろ必殺必中！　どんな堅物男性でも瞬(まばた)く間に骨抜きイチコロですよぉ！」

女性店員の言葉にジュビアの脳内妄想力がフルスロットル！　いま彼女の脳内に浮かび上がっているのは……祝福の鐘が鳴り響く我が家、盛大な拍手を贈る人々、そして……正装に身を包み、『ジュビア、結婚しよう』といつまでも繰り返し続ける幽神正義（笑）。ジュビアの手を握り、本人のキャラに似合わないほど爽やかな笑顔を振り撒き、延々とジュビアに結婚宣言をする姿は――――まともな人が見れば『……ナニコレっ？』としか言葉が出てこないようなイメージである……。

しかし、妄想暴走力を発揮したジュビアは口元からヨダレを垂らしながらトリップしていた……。そのまま妄想の濁流に呑み込まれた彼女が、このカオスな空気に更なる拍車を掛ける。

「店員さんッッ！　他にはどんな花嫁衣装がありますかッッ!?　ジュビアに教えて下さいッッ！」

「もちろんっ、喜んでッッ！　お客さまの為にも今宵は時間外勤務上等！　サービス残業だって受け入れカモンですよぉッッ！」

店員の狂ったハイテンションぶりにウェンディとシャルルはついて行けず、当惑するしかなかった。非常に危険な巻き込まれ展開が来る事を察したのか……ヴァサーゴ姉妹はその場から逃げる事を決め、ソロリソロリと忍び足を始める。

しかし、妄想で暴走したジュビアと最初から暴走していた女性店員からは逃れる事な

ど出来ず、あっという間に先回り&確保されてしまった……。ジュビアと女性店員の目が怪しく光る。
「お二人とも、何処へ行こうとしてるのですか？」
「逃しませんよ、お客様ぁ？」
「い、いえ……その、私達はそろそろ帰ろうと思いまして……」
「そ、そうよねっ。ほ、ほらっ、子供が夜遅くまで出歩くのは色々と危ないって言うじゃない？　ウェンディも私もまだ子供だから」
　ジュビアの両手がウェンディとシャルルの肩に置かれる。
「シャルルはともかく、ウェンディは違いますよね？　いつも大人の女性に憧れているじゃないですか。そういう意味ではコレも大人の女性になる為の良い経験です。さあ、2人とも。素敵な大人の女性に近付きましょう……っ？」
「ひぃぃぃぃぃっ！　ジュビアさん、目が怖くなってますぅぅぅぅぅっ！」
「ちょっ!?　私はともかく、ウェンディは見逃して！　まだ穢(けが)れを知らない年頃だから――って、なんでこんなに力が強いのよっ!?」
「さあっ、お客様ぁッッ！　私がデザインした花嫁衣装はまだまだありますっ！　清楚系、小悪魔系、セクシー系、女王さま系と各ジャンルが選り取り見取りッッッ！　今宵は寝かせませんよぉオオオオオッッッッ!?」

捕獲者1号（女性店員）と2号（ジュビア）に捕まり、連行されていくウェンディとシャルル。彼女達の悲痛な叫び声は店内に哀しく響き渡り、周りの人達も「くわばら、くわばら」とせめて無事で帰って来られるのを祈るしか無かった……。

「……じゃあ、私達はお会計を済ませて行きましょうか」

「そ、そうですね……」

イリナとアーシアは女性店員とジュビアの迫力に圧倒され、そそくさとレジへ向かった。一方でゼノヴィアは――。

「私もついて行った方が良いかもしれんな。着れば、どんな敵でも倒せる花嫁衣装とやらに俄然（がぜん）興味が湧（わ）いてきたぞ」

明後日の方向に解釈して、女性店員とジュビアの後を追おうとしていた……。

「お母さんが欲しがっていた本も買えました！」

アーシアが公園のベンチで収穫を喜んでいた。秋葉原の大きな書店で一誠の母が欲しかった本も買い、残すは小猫の注文と本命である一誠へのプレゼントだけとなった。そこで小休止として、偶然見つけた公園にて体を休めていた。

「見慣れない土地だと疲れるものだな」
ゼノヴィアは想像以上に疲れていたようで、ベンチに座りながら首をコキコキと鳴らしていた。その割には近くのハンバーガーショップで買ったハンバーガーを豪快に食べていたそうだ……。
「そ、そうですね。歩いても歩いても知らないところですから、一旦大きな道から離れてしまうと全然分からなくなってしまいます」
アーシアは紅茶をストローでチューッと飲みながら一息ついている。2人の言い分はもっともで、見知らぬ土地での行動はやはり体に堪(こた)える。イリナとゼノヴィアは任務として知らない土地で行動する事に慣れているが、それは戦闘を前提にしたもので今の状況とは全く違う。
聖地秋葉原は思いのほか複雑な部分も含め、何処が何の店かも分からない事が多い。小猫の注文と新、一誠のプレゼントを買う場所はゼノヴィアが分かっているようなので問題は無いが、この土地が落ち着かないのは確かだ。
『弱音を吐いていてはダメよ、イリナ！　私は天使長ミカエルさまの直属の天使！　こんな事くらいで弱っていては天界に顔向けできないわ！』
イリナは「パンッ！」と頬を叩くと、気合を入れ直す。
「さあ、ゼノヴィア、アーシアさん！　次の買い物に行きましょう！」

「うん！」「はい！」
２人もイリナの元気っぷりに一瞬唖然とするが、直ぐに笑顔で頷(うなず)く。そう3人で気合を入れ直しているところに――――。
「ねーねー、キミたちぃ、今ヒマ？」
三人組の若い男性がイリナ達に声をかけてきた。髪を染めていたり、ピアスをしていたりと――――如何(いか)にもチャラ男と言った感じの派手な服装だった。
「って、皆、外国の子じゃないか？　言葉通じねーかも」
「いや、言葉なら分かるぞ」
ゼノヴィアがそう答える。それを聞いてチャラ男達は喜んでいた。ちなみに悪魔や天使はどんな言語でも対応できるらしい。
「なら、話は早いや。どう、俺達とこれから遊ばない？」
イリナは初めて経験するナンパに少々感動を覚え、アーシアはゼノヴィアの後ろに恥ずかしそうに隠れ、困っている様子だった。
「金髪の子、マジ、か、可愛い！」
「やべぇな！　凄い純情そうだぜ！」
その行動はチャラ男達に大ウケしたようだ。しかし、アーシアとしては一誠以外の男と接するのは難易度が高いものだろう。後ろに隠れたアーシアをゼ確認し、ゼノヴィア

が一言呟く。

「私は私よりも強い男にしか靡かん。よって、私を倒せたら一緒に遊んでやろう」

そんな挑戦的な物言いに苦笑するチャラ男達。普通に見れば線の細いゼノヴィアだから、か弱いと思うのかもしれない。……しかし、ゼノヴィアの線の細さは鍛え上げられた為だ。しかも悪魔となっているので、普通の男性では太刀打ちできない程の腕力だろう。

「まあまあ、そう言わずに――――」

チャラ男の手が伸びた瞬間、ゼノヴィアはその腕を軽やかに躱し、足を引っ掛けて転ばせる。間髪入れずに倒れたチャラ男の顔面に鋭い蹴りを――――寸止めで放った。

「私に勝てそうか？」

「「ゴメンなさいいいいいっ！」」

冷淡な一言にチャラ男全員が震え上がって退散していった。ゼノヴィアは「アーシア、もう大丈夫だ」と安心させるように微笑む。

「はい！　でも、あの方々に悪い事をしたようで……」

アーシアは先程のチャラ男達を心配していた。なんて優しいのでしょう……っ。ゼノヴィアはアーシアの頭を撫でて言う。

「いいや、今日私はイッセーの代わりにアーシアを守る役目がある。多少の無茶をして

でもアーシアを守るよ」
「ゼノヴィアさん！」
抱き合うアーシアとゼノヴィア。教会トリオの友情は美しく尊い……。と、そんなこんながあった後に向かった先はアニメショップだった。小猫の注文は『ネオねこねこパラダイス』と言うアニメ作品のグッズ。小猫はいろんな物を見て知っており、アニメやドラマだけでなく、歌にお笑い番組とその趣味は多岐に渡っている。
そんな中で最近小猫がお気に入りなのは可愛い猫の亜人が事件を解決していくアニメ番組――今回のお目当てたる『ネオねこねこパラダイス』である。
「あ、これ、『エデンの緑龍』です！　私の好きな少女コミックなんです。空中都市で食いしん坊なドラゴンさんがいろんな事件を解決していくんですよ」
アーシアは好きな作品をアニメショップの漫画コーナーで見つけて、はしゃいでいた。ゼノヴィアも漫画コーナーで何かを探している様子だが、「うーん。私の好きな作品が無いな」と少し残念そうに唸っていた。「何が無いの？」とイリナが話しかけると、ゼノヴィアが答える。
「うん。私は『生徒会の一撃』と言う漫画が好きなんだ。全校生徒の投票によって選ばれた屈強な5人の戦士が、狭い生徒会室でナンバーワンを決めるまで戦い続ける作品なんだ。ちょうど今、副会長が書紀の毒手をくらって戦死してな、新しい副会長となる漢が

出てきそうなんだ。良いところなんだ。もしかしたら、会長が巨躯を利用した新技を繰り出すかもしれない」

ゼノヴィアは戦闘ものの漫画が好きなようだ。2人とも漫画を楽しみつつ、日本語を勉強しているそうだ。そこで偶然にも目に留めたのが小猫の注文らしき作品だった。本と共にグッズも置かれており、その作品だけで1つのコーナーになっていた。

「ねえ、ゼノヴィア、アーシアさん。これじゃない？」

イリナの声に2人が集まり、確認。ゼノヴィアが頷いた。

「これに間違いない。小猫は画像付きでメモをくれたが、このグッズで間違いないぞ」

ゼノヴィアが手にしたのは執事服を着た目の大きい猫の人形だった。

「よし、日程的に午後三時までには秋葉原を出て帰路につかねばならないだろうから、これを買って一通り見たら、この店を出よう」

今日のゼノヴィアはいつもと違ってリーダーシップを発揮している。おそらく、新やリアス、一誠がいないから「自分がアーシアを守らないといけない！」と思っているのだろう。意外と責任感が強い（笑）。

「しかし、この聖地に来てからホームベーカリーに目を輝かせたり、本屋で本を買ったり、ここでもまた漫画を買いそうだ……。主よ、私はなんと欲深くて金遣いの荒い女なのでしょうか……」

ゼノヴィアの悩みグセもまだまだ直りそうにない……。

買い物袋も多くなってきたところで最後の買い物。新と一誠へのプレゼントを買う為、イリナ達は大通りを外れて裏道を歩いていた。ゼノヴィアが地図を見ながら先導しているが、何度も右往左往しており、イリナもアーシアも不安を募らせていく。ここでゼノヴィアの歩みがピタリと止まり、右手側の雑居ビルに視線を向けた。

「ゼ、ゼノヴィアさん。、こんな裏の裏にお店があるのですか？」

不安げなアーシアがそう訊く。

「新とイッセーの欲しがる『えろげ』は普通の店舗では、私達が買えないものらしいんだ」

「あら？　そんなに表へ出せないものなの？」

イリナが訝しげに訊くと、ゼノヴィアもよく分からない様子だった。

「うーん、桐生から聞いた事だからな」

桐生とは、イリナ達と同じクラスメイトのメガネ女子――桐生藍華。物事をハッキリ言う女子でスケベ知識が豊富である。最近では新でさえも手を焼いているらしい。

しかし、アーシアとゼノヴィアは桐生の意見を真剣に聞いている事も多い。特にアー

シアは一誠の為にエロ知識を増やしているようだが、それで良いのだろうか……？

「このビルにあるお店なら、私達にも『えろげ』を売ってくれると言うんだ。桐生の紹介だと言えば良いらしい。狭そうだから、私が代表して行って来ようかな」

向かおうとするゼノヴィアだが、アーシアが引き留める。

「いえ、私が行ってきます！　イ、イッセーさんへのプレゼントですから……わ、私が……」

いつにも増して気合の入っているアーシアだが、やはりもじもじと顔を真っ赤にしている。しかし、一誠への恋心を全開にした彼女の姿は健気の一言に尽きる……ッ！　ゼノヴィアもアーシアの真剣な想いに微笑んだ。

「分かった。けど、無茶だけはしてはダメだぞ？」

ゼノヴィアはメモ用紙をアーシアに手渡して、髪を撫でる。

「はい！　アーシア・アルジェント、行ってきます！」

アーシアは元気良く気合を入れて、雑居ビルの階段を上がっていった。イリナ、ゼノヴィアの２人が待つこと数分――――。

ドドドドドッッッ！

突然、顔を真っ赤にした男性達が脱兎の如く雑居ビルから降りてくる。何事かと思ったその直後、フラリフラリと体をふらつかせながら、顔面真っ赤っかのアーシアが階段

から降りてきた。アーシアはイリナ達のもとに辿り着くと、その場でバタンキューと崩れ落ちる。
「アーシア！　しっかりしろアーシア！」
ゼノヴィアがアーシアを抱きかかえ、アーシアが震える声で呟く。
「……だ、男性がいっぱい……お、おっぱいがたくさん……ふにゃぁぁぁ……」
それだけ言い残すと、アーシアは目をグルグルな回して気絶してしまった！
「男がいっぱいだと!?　アーシア！　おい、アーシア！　クソ！　いったい中で何が起こったんだ!?」
雑居ビルを睨むゼノヴィア。その体に薄っすらと戦闘的なオーラが迸り始めていた。
アーシアがやられた（？）事でゼノヴィアは怒りに打ち震えている。
「……私が甘かった。ここは聖地だ。見たところ、様々な宗教の者がこの地を訪れている。彼らからしてみれば私達は異教徒だったんだ……。ここで異教徒弾圧が起こったって何ら不思議ではない。……おのれ、アーシアを宗教弾圧したんだな……。しかも男がたくさんだと？　嫁入り前のアーシアを辱めたのか!?　許さんぞ、異教徒どもめ……ッ！」
「何だか分からないけれど、ゼノヴィアの言っている事は半分ぐらい当たっていると思うの！　ここは聖地。私が知る限り歴史上、聖地と呼ばれる場所では異教徒からの攻撃

が幾度となくされているわ。それはここも変わらず――――アーシアさんは異教徒の弾圧を受けたのね！」

ゼノヴィアとイリナは間違った解釈のまま、お互いに視線を交わして頷き合う。

「行くぞ、イリナ！　アーシアの弔い合戦だっ！」

「ええっ！」

イリナとゼノヴィアは雑居ビルの奥へと駆け上がっていったが――――。

「……まさかのエッチなものばかりでしたっ！」

雑居ビルの一室。そこはエロエロな女子のイラストが全域にわたって展開する店で、入ったイリナ達は面食らって呆然としていた。そこから察するにアーシアはエロいイラストばかりの光景を見て、臨界点突破してしまったのだろう。

「あんな清純そうな金髪のお嬢さんが店を訪れたら、うちのお客さま方は恥ずかしくなって出て行ってしまいますって」

……などと店長にも言われてしまった。雑居ビルから出てきた男性達はアーシアの清純な容姿に魅せられて邪な気持ちが耐えられなくなったのだろう……。

『てっきり、私とゼノヴィアはアーシアさんが聖地で宗教的攻撃を受けたのだと思ってしまったわ。うぅ、自分達の世間知らずな面が恥ずかしくて堪らない！』

ゼノヴィアがメモ書きを店員に渡して、目当ての物は何とか買えた。パッケージには

『小悪魔お姉さまとの性生活３』と書かれていた。ちなみに新のは無修正版です（笑）。
「買い物は終了だ……。帰りの電車に乗るぞ……」
「「りょ、了解～」」
ゼノヴィアのくたびれた言葉に、イリナとアーシアは疲れた声で応じたのだった。

「今日は楽しかったな」
帰りの電車に揺られながら、ゼノヴィアがイリナにそう呟いた。ゼノヴィアの肩には疲れて寝てしまったアーシア、スヤスヤと安らかな寝顔。イリナがアーシアのほっぺをつつきながら言う。
「ええ、本当に。日本の聖地は不思議がいっぱいだったけれど、楽しい事も多かったわ」
「うん。それもそうだけど、イリナやアーシアとの買い物自体がとても楽しかった。私はこんな風に生きて来なかったからな」
遠い目をするゼノヴィア。そう、イリナ達はその才能を買われて、幼い頃から主の為、教会の為にと体を鍛えてきた。今は色々な経緯の結果、こうして普通の女の子のように生活できる。それは平凡ではあるが、とても素晴らしい事でもある。

ゼノヴィアの目元が優しげになる。
「またこうやって買い物に来よう。女だけの買い物も楽しいと思うんだ」
「ええ、勿論。また来ましょう、聖地の秋葉原へ。今度は小猫ちゃんや、リアスさん、朱乃さんにロスヴァイセさんともお買い物したいわね！」
「さて、この『えろげ』だが……」
袋から取り出して、箱をマジマジと見ているゼノヴィア。箱の裏側にはエロいイラストが映っており、〇〇〇（ピーッ！）な事をしている男女の絵がズラリとあった。
「店員に軽く聞いた。どうやらエッチなゲームのようだ。イッセーの物とは違って、新のは無修正……つまり、何も隠していない姿が溢（あふ）れているらしい。新め……あれだけ女に囲まれておきながら、まだこういう物を欲すると言うのか。いや、問題はそこではないな」
ゼノヴィアはワナワナと怒りに打ち震える。
「……これの内容はお姉さま系らしくてな。お姉さまとの性行為の疑似体験ときている。新の性的欲求が部長と副部長に向けられていると言っても良いだろう。だが、少しは『元教会関係者との子作り』みたいなゲームもやったらどうなんだ！　そんなに私は魅力が無いのか!?　イッセーもイッセーだ！　私達の自慢の親友とも言えるアーシアの何が不満なのだ!?」

その場で立ち上がり、全身からオーラを迸らせるゼノヴィア。あと、『元教会関係者との子作り』等と言ったピンポイント過ぎる内容のエロゲーはありません（笑）。
「落ち着いて、ゼノヴィア！　周囲のお客さんが見ているわ！」
「帰ったらこれを議題に女子全員で緊急会議だ！」
「……イッセーさん……えろげ……買いましたよ……むにゃ……」
燃えるゼノヴィア、慌てふためくイリナを他所に寝言を呟くアーシア。帰ったら孵ったで、新と一誠には苦難が待っている（笑）。

兵藤一誠と幽神正義、2人を合わせれば迷コンビ、『イッセーギ』の誕生だッ!?（前編）

――――と、教会トリオはそのような事があったそうだ。

あの後、新と一誠はそれぞれ『エロゲ』について女子から相当問い詰められた挙げ句、皆でエロゲをプレイする羽目になり、そのお陰で一誠の性癖の1つが赤裸々になったそうです（笑）。

「最近はゼノヴィアさんとイリナさんまで新くんに大胆になってきているので、面食らう事もしばしばだとリアスにうかがってますが……。とうの新くんも大変そうじゃないですか？」

ソーナが冷静にそう訊ねるが、新は「最近はもう慣れちまったよ」と返す。たまにゼノヴィアとイリナが強引過ぎて痛い目に遭うのがたまにキズだが……。

「……後発は辛いですわ」

レイヴェルが遠い目をしている。マネージャーを務める彼女は新の膝上（と言う名の指定席）を先輩に取られてなんとも言えないようだ。あとでアフターフォローしてあげましょう（笑）。

ソーナがメガネをキラリとさせながら言う。
「学校ではそのような事はしないように。学内でのエロスは禁止です」
「相変わらず厳しいな、ソーナは。……だが、断るッ！　俺からエロスを取ってしまえば、もはや何も残らないッ！　たとえ禁止にされようが、俺は俺のやりたいようにやるッ！」
新は意気揚々とエロス禁止を突っぱね、堂々とエロス宣言。ソーナは軽く額を押さえて嘆息する。ゼノヴィアがテーブルに置かれたクッキーを１つ摘まむと訊いてくる。
「ところで何の話をしていたんだ？」
新と一誠はゼノヴィア達に魔法の事で話していたと返すと、ゼノヴィアは途端に渋い表情を浮かべた。
「……私はヴァチカンにいた頃から魔法使いの相手が苦手だったな」
確かにゼノヴィアの戦闘スタイルから見れば、魔術師や魔法使いの類とは相性が悪い。主に力技で突き進む脳筋パワーゴリ押し戦法（笑）は破壊力こそ申し分無いが、搦め手を多用するテクニックタイプが相手では一方的にやられてしまう……。特に今後は厄介な相手が増えていく為、課題になるとも言えよう。
アーシアが会話に続く。
「教会でも魔法の使用については賛否がありましたよね？」

ゼノヴィアとイリナが「その通り」と同時に頷(うなず)いた。アーシアが言うように教会でも魔法の使用について未だに是非が分かれていて、一般的な魔法は悪魔の魔力が大元なので、信仰心の厚いお偉方にとっては面白くない代物らしい。

他の神話体系にある魔法（例えば北欧式など）も聖書の神の範疇から逸脱するものゆえ、更に賛否が分かれている。宗教の思想の相違というものだ。その辺を割り切ってコッソリ魔法を使用してる教会の戦士もいるらしい。

新は参考までにゼノヴィアとイリナに問う。

「お前らに訊きたいんだが、魔法を突破するには何が必要だと思う？」

今度のテロリストは魔法使いが絡んできているので、その対策は必要不可欠。すると、２人が出した答えは――――。

「何だかんだ言っても魔法を弾(はじ)けるだけのパワーは必要だと思うっ！」

「前衛ならそれもありよね。もちろん、後衛のフォローありでだけれど」

「結局パワー頼りの脳筋ゴリ押し戦法かよ……」

全く参考にならなかった答えに新は呆れ、一誠も苦笑いするしかなかった……。すると、誰かが嘆くように息を吐く。

「魔法に対する心構えですか？　よろしい、私がお話ししましょう」

そこにいたのはロスヴァイセで、ジャージ姿での登場だった。百均ショップへ買い物

に行ったままだったが、ようやく帰ってきたようだ。……美人なのに普段の生活がジャージなので勿体無い（笑）。

「良いですか、アンチマジックとは――――」

ロスヴァイセが生徒に教えるようにゼノヴィアとイリナに対魔法の持論を語り始めた。新は〝面倒臭そう〟と言う理由でバックレようとしたものの、ロスヴァイセが魔法陣を展開してすかさず捕縛。

捕縛された新はゼノヴィアとイリナの間に座らされ、ロスヴァイセから説教＆対魔法の持論責めを喰らう羽目になった……。

そんな場面を見て苦笑していた一誠のスマホから着信音が鳴る。発信元は『幽神（鬼）』と表示されていた（笑）。発信元を見た一誠は少し固まった後、恐る恐る通話ボタンを押す。

「……この電話番号は電波の届かない所にあるか、電源が入っていないか、相手との通話を避けている為かかりませんっ」

『ほう、貴様でもそんな冗談を言える立場になったとは、良い度胸だ。ならば、今から突撃しても問題は無さそうだな』

「大いにあるからやめてくれっ！　さすがに他人様（ひとさま）の家で刃傷沙汰（にんじょうざた）、流血沙汰を起こせば訴えられるぞっ!?」

『安心しろ。訴えられるのは貴様だけだ』
「なんで俺だけぇ!?」
『それは貴様自身が理解しているだろう？　この世に生を受けた瞬間から変態の皮を被ってるような人種が何をほざく』
「思うんだけどさ、最近のお前って口撃（こうげき）に刺々（とげとげ）しさが増してないかっ!?　相手が俺じゃなかったらとっくにメンタル折られてるぞ！」
『折られるだけで済んでマシだと思え。本来なら貴様など百と八つに切り刻み、粉になるまで挽いてから跡形も無くなるよう溶かして殺りたいぐらいだ』
「理不尽ここに極まれりってヤツだよ……。で、俺にそんな罵詈雑言を浴びせる為だけに電話してきたのか……？」
『それはついでだ。今日は造魔（ゾーマ）に関する情報が少し手に入ったから、耳としての機能を忘れた貴様の耳にも入れてやろうと思ったんだ』
「いい加減泣くぞっ!?」
　容赦が微塵も無い口撃に一誠は既に涙目となっていた（笑）。それもその筈、通話相手の鬼――もとい、幽神正義（ゆうがみまさよし）は一誠が最も苦手とする人物。色々確執があったものの、彼は現在グリゴリに属し、遊撃兼諜報部隊として活動している。造魔（ゾーマ）に関する情報を少しでも集めるべく、アザゼルは幽神兄弟を動かしていた。造魔（ゾーマ）の情報はなかなか手に入

らず、大きく動けば情報を入手する前に封殺されかねない……。

そこで幽神兄弟の隠密性と行動力に白羽の矢が立ち、彼らは造魔（ゾーマ）に関する情報収集に努めていた。

「それで、情報は手に入ったのかよ？」

『難航したが無いよりはマシ程度には掴んだ。造魔（ゾーマ）は様々な企業や富裕層どものバックアップは勿論、ここ最近は周辺組織を傘下にする吸収活動を活発化させている』

「周辺組織ってどんな奴ら？」

『半グレや愚連隊のような組織だ。多額の契約金、または実力行使で傘下に加え、汚れ仕事の斡旋（あっせん）もしている。もはや造魔（ゾーマ）は裏社会を代表する大元の企業（そしき）と言っても過言ではない』

「先生もそんな事を言ってたっけ。造魔（ゾーマ）は大企業みたいな組織だって」

『今回手に入った情報は造魔（ゾーマ）の傘下に入った組織――まあ、一兵卒程度の連中ばかりだが、それなりに有名だったらしい。まずはカラーギャングだ。それぞれ赤・白・青のメインカラーで区別された組織がある。赤の「ブラッディ・アイ」、白の「ホワイト・スネイク」、青の「ブルー・サンダー」――この３つがカラーギャングどもの大元になっている。最近では黒の「黒霊兵団（こくりょうへいだん）」、黄色の「ガン・ドッグズ」等も加入したそうだ』

幽神正義から造魔（ゾーマ）の傘下に入った組織の情報を聞かされた一誠は顔を顰（しか）める。ただ

でさえ凶悪なメンツが揃っているのに、勢力拡大にも余念が無い動きを見せ付けられている……。少なくても情報を入手できるだけ幸いと言ったところだ。幽神正義が話を続ける。

『その他にも構成員が甘党だらけの組織「未留奇衣」だの、「肉巣威」、「鉄血裏」、「古魔津成」、「水鳴州」、「不愚鎖志」、「過萬兵柄瑠」、「矢貴雨鈍」と言った弱小組織もおこぼれを目当てに参入してきた』

「何か居酒屋にでもある名前ばっかりだな……」

『ただ……問題なのはそう言った木っ端どもを束ねる大元の組織が4つある事だ。さっき説明したカラーギャングどもとは全く次元が違う。そいつらは四勢力の間で同盟を結びつつ、造魔のバックアップも得ている。つまり、造魔が大手企業や元請けと例えるなら――その4つの組織は中堅企業ならびに下請けと言ったところだ』

「って事は……その4つの組織を潰せば、造魔の勢力拡大も止める事が出来るってのか？」

『少しは頭を使えるようになったみたいだが、それも容易い事ではない。中堅と言えど猛者揃いだ、並大抵の力では太刀打ち出来まい。まず1つめが「凶獣団」と呼ばれる組織だ。四勢力の中で最も数が多く、主に自分の姿を動植物等に変える――いわゆる獣化能力を持つ輩で構成されており、雑兵どもを6人の隊長が統率している。その中に

は「神　器（セイクリッド・ギア）」持ちもいるそうだ』
「獣化に加えて『神　器（セイクリッド・ギア）』持ちか、また嫌な敵が増えそうだな」
『２つめは……』
　ここで幽神正義が口を止める。その事に気付いた一誠は「どうした？」と訊くと、彼は『チッ』と舌打ちをした。
「え、なんで舌打ち？　俺そんなに嫌われてるの？」
『……２つめの組織は貴様の大好物だから胸糞悪くなって自然と舌打ちしただけだ』
「ここまで嫌悪感を出されるともう清々（すがすが）しくなってくるわ……。って、俺の大好物ってどういう事？」
『２つめは「蝶の楽園（パピヨン）」と言って、女のみで構成されている組織だからだ。しかも、かなりの美人揃いらしい……チッ』
「なぁにいっ!?　美女美少女だらけの組織イッ!?」
　一誠は即座に食い付き、グフフの変態顔となる。幽神正義が舌打ちをする理由も納得（笑）。彼は女性に対する免疫力が低い――――特にスケベな要素が大の苦手だ。しかし、以前と比べればマシになった程度まで来たが……それでも不安の種は拭い去れない。
「そうかぁ。幽神、お前もそれを調査できる程に成長したんだな……。以前のお前なら鼻血噴射を避けるべく諦めていただろうに……っ。何か感動したっ！　と言うわけで、

早速紹介してくれ。いったいどんな美女美少女達がいるんだ？」
『阿呆が。聞こえは良いが、実態は男を奴隷や家畜のように扱った挙げ句、痛ぶり殺して悦に浸る相当な外道集団だぞ。貴様はマゾっ気があるのか？』
「えっ、そんな悪の女王みたいな集まりなの……？　いや、夢と希望を諦めるにはまだ早いッ！　たとえ相手が外道でも、美人のお姉さんや可愛い美少女がいるなら、俺の勝利は確約されたも同然！　大義名分の『洋服崩壊』が火を噴くぜッ！」
一誠の意気揚々で気分上々な決意表明を聞かされた幽神正義は『……チッッッッッッ』と過去最大級の舌打ちを放つ。そして話を戻す。
『3つめは「六魔凶将」と呼ばれる少数精鋭の組織だ。名前の通り、構成員は6人しかいない。だが……個々の戦闘力は非常に高く、単独でも大陸1つを制圧できる程だと言われている』
たった6人、されど6人。襲い掛かってくる脅威は造魔だけに留まらない……。一誠は固唾を呑んで話を聞くしかなかった。
『そして、4つめは「六魔凶将」よりも更に人員が少ない組織――「双角の剣刃」。こいつらに関する情報は殆ど無い。2人の剣客と言う情報以外はな。まあ、バケモノじみた強さである事は間違いないだろう。「凶獣団」、「蝶の楽園」、「六魔凶将」、「双角の剣刃」――この四勢力を通称「四獄同盟」と言い、造魔の基盤を固めているらしい。とりあ

えず調査で得られた情報はこれぐらいだ』
「逆によくここまで情報を掻き集めたもんだな。尊敬できるよ」
『貴様らが表立って動けない分、俺達は自由に動ける。まともに情報収集もできない貴様にとっては渡りに舟だろうな』
「せめて尊敬の念を一瞬で消し飛ばすような罵倒はやめてくれっ!?　これでも感謝してるんだぞッ！」
『貴様やアザゼル（悪徳堕天使）から感謝と言う似つかわしくない戯言（ざれごと）を聞かされるぐらいなら、羽虫の羽音を聞く方がまだマシだ』
「やっぱ俺、お前が嫌いだわッッ！」
『安心しろ、俺も貴様如き愚物（ぐぶつ）を最初から好いてなどいない。本来なら有無を言わさず肉塊になるまで蹴り潰して殺るところだが、アーシアの事を鑑（かんが）みて何とか我慢してやっているに過ぎん。それを忘れるな』
「そう言う割には、つい数日前まで俺を殺す気で追い掛けてきたよなぁっっ!?」
『あれは貴様が悪い。それ以外に理由など無い、以上だ』
　幽神正義からの通話が切れて、一誠は「ハァ……っ」と深い溜め息を吐く。そこへアーシアが話し掛けてくる。
「イッセーさん、どうかされましたか？」

「いや、大丈夫だ、アーシア。ちょっと鬼からキツい説教めいたものをくらっただけだから……」
「鬼、ですか……？」
アーシアが頭に疑問符を浮かべる中、一誠は幽神正義に追われた事を思い出してしまう。それはアーシア達教会トリオが秋葉原から帰ってきた日の翌日まで遡る……。

いつも通り授業が終わり、新、一誠、アーシア、ゼノヴィア、イリナが帰路につこうとした矢先――少し離れた場所に見覚えのある人物２人が佇んでいた。１人は幽神正義、もう１人はその弟、幽神悪堵。彼らは自ら出向く事は滅多に無いのだが……この日は何故か兄弟揃って姿を見せていた。
「あれ、幽神じゃないか？　おーい、どうしたんだ～？」
一誠が呼び掛けた直後、幽神正義は弟・悪堵から〝何か〟を受け取り、〝何か〟を装着した顔を伏せながら歩いてくる。
「幽神、いったい何の用があって来ｔ――ッッ」
一誠の言葉が急に止まる。それもその筈、一誠は本能レベルで危険を察知し、危険の

正体を目撃してしまったのだ……。幽神正義の歩みがだんだん速くなり、手に握られた鈍色の得物が一瞬だけ光る。

血管が浮き出るほど強く握り締められる得物――出刃包丁の切っ先を一誠に向けて……幽神正義が吼えた。

「死ャァァァ嗚呼ァァァァァッッッ

たッッ！　そのせいで俺は……俺は……また、あの世へ逝きかけたんだアアアアッッッッッ!!!

しょう！　そうすれば、きっと分かり合い許し合える筈ッ！」

まるでアザゼルと同じように必死に弁明を捲(まく)し立てて、落ち着かせようとする一誠。だが、正義は般若(般若)の面を取り外し――その下に潜んでいた自前の顔(般若)を見せて再度訊ねる。

「兵藤、今の俺が貴様の言葉に耳を傾けると本気で思ってんのか……ッ？」

「……お面(般若)の下にも、素顔(般若)が潜んでたのね……ッッッッ!!!!」

「そういう事だ……ッ。さあ、覚悟は良いか……ッッッッ!!!!」

弁明は無意味だと悟った一誠はアーシアに鞄を渡し、澄んだ表情で告げる。

「アーシア、先に帰っててくれ。俺は……今晩無事に帰れないかもしれない……。もし、生きて帰れたら……優しく慰めて欲しい……っっ」

「は、はいっ!!!!

のもとへ歩み寄る。
「悪かったな、こんな形で呼び止めちまって。今日はジュビア姐(ねえ)さんに頼まれて来たんだ。コイツをアーシアに渡してほしいって」
そう言うと悪堵はポケットから数枚のチケットを取り出し、アーシアに渡す。それはレジャー施設の割引招待チケットだった。場所は駒王町(くおうちょう)から１０駅ほど離れた町で有数のレジャースポット『水流・絶ランド』。室内に多彩なプールや売店、更には水族館まで併設している大型の娯楽施設だ。悪堵が話を続ける。
「この間、トレミスの一件で迷惑かけちまっただろ？　あの時のお詫びも兼ねた親睦会って事で、ジュビア姐さんが提案してきたんだ」
「良いんですか？　こんなにたくさんいただいて」
「ああ、何か知らねぇけどジュビア姐さんが推してくるんだ。それに……一度アンタと話がしたいらしい。何を話すかは分からんが、とにかく来てくれ」
「はい、ありがとうございます」
アーシアが丁寧にお辞儀して礼を言う。用事を終えた悪堵は、『ＤＥＡＴＨ鬼ごっこ』を続けている兄・正義のあとを追っていった。
「兄貴～っ！　追加の包丁だ！　どれを使う！」
「刺身包丁(さしみぼうちょう)を寄越せ、相棒。抜群に切れ味の良いヤツをな。今日は変態トカゲの三枚お

ろしを振る舞って殺る」

「変態トカゲって嫌な仇名を付けるなァァッ！　ってか、鬼が増えたァァァッ!?イィィィィィィヤァァァァァッッッッ!!!!」

一誠は喉が潰れそうな程の絶叫を上げながら爆速で逃げていき、鬼と悪堵は複数の得物を携えたまま獲物を追い掛けていった……。

その場に残された面々、ゼノヴィアは「あれは……良い鍛錬になりそうだ」と脳筋バカ発言。アーシアとイリナは苦笑するしかなく、新は「一誠、死ぬなよー」と棒読みで応援する気皆無のエールを送るだけだった。その後、一誠は親睦会の日を迎えるまで『ＤＥＡＴＨ鬼ごっこ』を続ける羽目になったそうな（笑）。

そして、迎えた親睦会当日。レジャー施設『水流・絶ランド』の前までやって来た一誠とアーシア。一誠はまだ『ＤＥＡＴＨ鬼ごっこ』の疲れが残っているせいか、ドンヨリと沈んだ表情をしていた。

「イッセーさん、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ちょっと疲れが抜けてないだけだから……」

一誠は顔をパンパンと叩き、気を持ち直す。何せ本日は待ちに待った親睦会で、場所は室内プールを売りとしているレジャースポット。一誠は心中で嬉しさを吐露する。

『室内プールで親睦会ッ！　つまり、アーシアや他の女の子達の水着を見られるって事だッ！　今日に至るまで何度か死にかけたけど……その分ハイリターンがやって来ると思えば！　グフフのフッ♪　アーシアの水着も楽しみだけど、今日はそれだけじゃないッ！』

「イッセーさま、よろしかったのですか？　私達までご招待いただいて」

一誠に確認を取るのは銀髪の美少女――ユキノ・アンジェル。以前、造魔（ゾーマ）絡みの一件で知り合い、現在はグリゴリの管理下で働いている。彼女の他にもオレンジ髪の小悪魔めいた（見た目は）美少女チェルシー・ルビナス。金髪の女剣士ディマリア・ロディーナ。更にはユキノの姉――ソラノ・アンジェルと美人揃いに囲まれていた。テンション爆上がりの一誠は勢い良く答える。

「もちろんっ！　むしろ向こうから招待してくれたんだから、お言葉に甘えるのが礼儀っすよ！　にしても、まさかソラノさんまで来るとは思わなかった」

「フフ～ン、ワタシとユキノは姉妹なんだから、いつでも何処でも一緒なんだゾ？　こんな楽しいイベントがあるなら、行かないわけにはいかないゾ？　イッセー、ユキノのたわわでキャワワな水着姿を見てハァハァしても良いんだゾ？」

「きゃあッ！　お、お姉さま……ダメです……っ！　イッセーさまの前でそんな……っ」

ソラノが背後からユキノの豊満なバストを鷲掴み、形を歪める程に揉みまくる。一誠は見事なまでに鼻の下を伸ばす。これだけでも疲れが取れそうなぐらいだ。

そうこうしてる内に幽神兄弟と、親睦会の提案者たるアスタロト家の息女ジュビアがやってきた。他にもアスタロト家と懇意にしているヴァサーゴ家の双子姉妹――――ウェンディとシャルル。元過激派教団の一員で、現在アスタロト家に居候中の美女――――ヒメガミ・フブキとフローラ・コスモス。そして、リント・セルゼン――――以上が親睦会に参加する面々である。到着するや否や、幽神正義が一誠に敵意を込めた睨みを放つ。

「貴様ァ……また痴女（おんな）を増やしたのか……ッ！　アーシアと言うものがありながら、何処まで汚い我欲を撒き散らすつもりだッ!?」

「ちょっ、幽神っ！　ここでの流血沙汰は勘弁してくれっ！　今日は親睦会の筈だろ!?」

「親睦会？　いいや、違うな。今日開かれるのは――――死ン撲（ぼく）会だ。死ぬまで貴様を撲殺するＤＩＥ（大）イベントだと聞いている」

「物騒過ぎる当て字やめてッ!?」

今にも爆発しそうな怒りを燃やす正義。そんな中、珍しくジュビアが前に出て正義を止めに入る。

「正義さま、今日はジュビアが提案した親睦会の日です。今日1日は嫌な事を忘れてください。日頃の疲れを癒やす為に来たのですから、たまには羽目を外しましょうっ」
「……ジュビアの言う事も一理ある、か。……分かった。ジュビアに免じて今は勘弁してやる。さっさと行くぞ」
　正義は不機嫌ながらもスタスタと施設の方へ歩いていき、ジュビア達もあとに続く。とりあえず命の危機を脱した一誠は安堵の息を漏らし、気を取り直して皆と共に施設へと入っていく。
『ハァ……始まる前から殺意を向けられるとかシャレにならねぇよ……。しかーし！　中に入ってしまえば、そこからはノータッチ！　これだけ多くの美女美少女達の水着を合法的に拝めるッ！　親睦会を開いてくれたジュビアさんっ、ありがとうございますっ！　よーしっ、今日は皆のムフフな水着姿を拝み倒してやるぞーっ！』
『……ついに、この時がやって来ました……っ！　正義さまとの仲を深めつつ、恋敵（アーシアさん）の真意を探る……ッ！　正義さまが度々（たびたび）口にする恋敵（おんな）……ッ。し、か、も！　正義さまが愛の告白をしたのに、正義さま自ら退くと言うあり得ない暴挙をさせた恋敵（おんな）……ッ！　何故そんな事になったのか、洗いざらいジュビアが吐かせてあげましょう……ッ！　たとえ、如何なる手段を使ってでも……ッッッッ！』
　一誠のスケベな心中と、ジュビアの物騒な心中が不吉に漂（ただよ）う。十中八九、この親睦会

は無事に終わらないだろう……。

何故なら――――良からぬ気配を宿した者達が、施設の中へと入っていく一誠達を見張っていたのだから……。

兵藤一誠と幽神正義、２人を合わせれば迷コンビ、『イッセーギ』の誕生だッ!?（中編①）

「……青い空っ、白い雲っ、眩しい太陽っ。俺は今モーレツに幸せｄゴッビャァッッッ!?

いきなり顔面キックは無いだろっ！」

「黙れ。２４時間、３６５日、不眠不休で欲情しているド変態（貴様）の顔を蹴って何の問題がある？」

「ホントお前は言葉というか、罵倒のエッジが掛かり過ぎてるなぁっ!?」

親睦会早々、一誠の顔面を文字通り一蹴する正義。まあ、それも無理はない。青い空、白い雲、眩しい太陽を変態顔で眺めていた一誠がとても不愉快に見えたのだから（笑）。一歩間違えば通報されるだろう。

そんな彼らはオーソドックスなバミューダパンツを穿（は）いて、室内プールゾーンに足を踏み入れた。人気のレジャースポットである為か、多くの人で賑わっており、一誠が言うように一般の女性客も楽しんでいた。

幽神正義は女性に対する免疫が低いせいでまともに見る事など出来ず、苦虫を噛み潰したような表情をしていた。弟の悪堵は幾分かマシだが、それでも刺激が強すぎる

青ビキニのお姉さん、白ビキニお姉さんの巨乳、赤ビキニお姉さんのお尻

……。顔を逸らせ目を泳がせていた。一誠が鼻息を鳴らして言う。
「ここに先生がいないだけマシじゃないか。あのヒトがいたら絶対に良からぬ事を起こされて、お前らのストレスが爆上がりしてたと思うぞ。そう考えたら、招待されたのが俺達で良かったと思わないか？」
「……チッ、貴様の口から正論を聞かされるとは。俺もヤキが回ったものだ」
「あとは罵倒をマイルドにしてくれれば良いんだけどな!?　それより、そんな調子で大丈夫かよ。もう既に鼻血噴射５秒前の状態なのに、プールに入れるのか？」
　一誠の言葉を受けて、正義は「あまり俺を舐めるなよ」と前置きをしてから、腰に巻いた防水仕様のウエストポーチを開く。中から取り出したのは――――液体入りの注射器だった。それを見た一誠が進言する。
「……幽神、早まるな。今すぐ自首すれば、まだ罪は軽くて済む筈だ。やっと芽吹きそうな人生を自分から捨てる気か……？」
「何を勘違いしてるか知らんが、哀れみの視線を向けるな」
「だってソレっ、どう見たって危ない薬か何かを打とうとしてるじゃねえか!?」
「違う、コイツはグリゴリから支給された抑制剤だ。精神を安定させつつ、過度な興奮を抑制する事で余分な出血を抑える働きがある。謂わば興奮剤とは真逆のような物だ」
「グリゴリって元々は先生がトップ張ってた組織だよな？　イマイチ……と言うか、か

なり信憑性が薄いように感じると思うのは気のせいか……？」

〝ゲラゲラ笑う悪徳堕天使〟の顔が一誠の脳裏に浮かび、冷や汗を流す。正義はそんな反応など露知らず、抑制剤（？）を左腕に打ち込んでいく。

「……ッ。あぁ、効くぅ……ッ。まるで体中の汚れた血が全て入れ替わるような心地良さだ……ッ」

「本当に危ない薬じゃないんだよなっ!?　今の言動からスッゲェ不安なんだけど！」

危惧する一誠だったが、実は正義が打っている抑制剤とやらは真っ赤な偽物――本当はただの栄養剤である（笑）。アザゼルがプラシーボ効果で栄養剤を抑制剤と偽って、幽神正義に渡すよう部下に伝えていたのだ。そこから正義は定期的に抑制剤（と言う名の栄養剤）を支給するようになった。

現時点ではバレていないが、バレた時は再び般若面の鬼が降臨するだろう……っ。

「イッセーさ～ん、お待たせしました～っ」

そうこうしてる内にアーシアがユキノ達と一緒にやって来た。遂に待ちに待った女性陣の水着がお披露目となる。

トコトコとやって来るアーシアはピンクを基調にした、上下ともに白いフリルが付いたビキニ。可憐で清楚な様相だが、ビキニと言う少しの大胆さが加わる事でいつも以上に魅力が増す。本人の可愛らしさと見事にマッチし、一誠は『ＹＥＳッッ！』と心中で

ガッツポーズした。
「こう言った場所は初めてですので、少し緊張しますね」
「おやおやぁ、ユキノォ？　緊張してるならワタシが揉みほぐしてあげるゾォ♪」
次は姉妹枠、ユキノとソラノ。ユキノの水着は鮮やかなグリーンのビキニ。控えめな性格の彼女に明るい色合いのビキニがよく映え、普段とは違った色気を醸し出す。ソラノは色違いの白いビキニで妹とお揃いのコーディネート。と言っても、普段の衣装とあまり変わらない気もするが……そこら辺は割愛。
人目も憚らず姉は妹にセクハラ。ユキノの豊満なバストを揉みまくり、太腿にも手を伸ばす。そのやり取りを見て一誠は鼻の下が伸びる――――が、幽神正義から降り注がれる怨念の視線に気付き、慌ててソラノを窘めに入った。
『ちょっ、ソラノさん。今はストップ。それ以上セクハラを続けたら、（俺から）血の雨が降る事に……っ』
『え～？　ワタシ達姉妹のスキンシップだゾ？』
『頼むよ！　じゃないと、また般若面の鬼が……ッ！　せっかくのプールを血の海にしたくないんだ！　お願いしますッ！』
『もうっ、分かったゾ』
ソラノは渋々と言った感じでセクハラを中断。ユキノも解放され、一誠も取り敢えず

身の危険を回避できた事に安堵する。……あと一瞬でも遅れていれば正義は般若面を被り、文字通り鬼と化していただろう。

「まあ、たまにはこういう和気藹々(わきあいあい)とした親睦会も良いんじゃない？」

「そうね。命の洗濯ってヤツだな」

悪戯(いたずら)な笑みを浮かべるチェルシーは水色を基調としたビキニだが、下はスカートタイプ。小悪魔めいた彼女は出るところも出ているので良く似合っていた。

ディマリアは踊り子のようなアラビアンテイストのビキニで、抜群のスタイルをより強調させる物だった。動く度にヒラヒラとはためく金色の装飾が妖艶さをアピールする。

アーシア、ユキノ、ソラノ、チェルシー、ディマリア――合計５人の美女美少女達の水着姿に一誠は感無量、幸福度も鰻登り。出来る事なら狂喜乱舞でヒャッハーしたいところだろう。

しかし、今だけは何とか耐える。般若面(幽神正義)の鬼から逃れる為、せっかくの親睦会を血の海に沈めない為に……。――と言っても、そうは問屋が卸(おろ)してくれないのが非情なる現実。

その戦犯(せんぱん)になったのは――チェルシーだった。

「と・こ・ろ・でっ。イッセーはどの娘(こ)の水着が一番好みなのかしら？」

「ゑッ!?　チェルシーさん、いきなり何を――――」
「いや～、健全な男の子として誰の水着がお気に入りなのかな～っと思っちゃって♪」
「おっ、それは確かに気になるゾ。さあさあ、誰が好みなのか白状するんだゾ？」
　先程、一誠に窘められた筈のソラノもチェルシーの悪ノリに便乗。２人は悪戯な笑みを浮かべて前屈(かがみ)の体勢となる。ソラノの豊満なおっぱいが揺れ、チェルシーのジャストサイズな美乳も主張してくる。美女美少女に答えを迫られた一誠は、懸命に脳を回転させて適切な回答を絞り出そうとする。
「そ、そりゃあ勿論！　アーシアも、ユキノさんも、ソラノさんも、チェルシーさんも、ディマリアも、み～んな素敵ですよ！　水着＝個性！　それぞれの個性に順位を付けるなんて寧ろ失礼でしょう！」
「むっ、そう来たか。まあ、素直に褒めてくれただけでも良しとしましょうか」
「ワタシ的には物足りないが、仕方無しだゾ。ちなみにワタシの推しはユキノ一択だゾ」
　チェルシーとソラノは渋々ながらも納得し、ディマリアはフフンとドヤ顔。アーシアやユキノも一誠に褒めてもらえたのが嬉しかったのか、頬を赤く染めて照れる。何とか危機的状況を脱した一誠だが……次なる刺客達(眼福)がやって来た。
「ふ～ん、なかなか良い場所じゃない。ほら、ウェンディも早く来なさいよ」
「ま、待ってよシャルル～っ」

姿を見せたのはウェンディ&シャルルのヴァサーゴ姉妹。腰に手を当て、堂々と佇(たたず)む白髪の美少女シャルル。その後ろには藍色のツインテールを揺らし、浮き輪を持ってトテトテと小走りするウェンディ。

シャルルは黒のスク水で小柄な身体の利点を最大限に活用していた。一方、ウェンディは……大胆にも緑と白のチェック模様が入ったビキニだった。まだ青い果実でありながら背伸びしてみたいと言う気持ちの表れが、可憐な少女の可愛らしさと儚(はかな)さを存分に主張してくる。ヴァサーゴ姉妹の水着センスに一誠は再び心中で狂喜乱舞してしまう（笑）。

『うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!?　ロリっ娘(こ)に黒のスク水と言う王道の組み合わせは言うまでもないが……片方はまさかのビキニッ！　まだまだ青い果実――――成長途中のロリおっぱいに大人っぽさを魅せるビキニを合わせるとは……ッ！　これが、これが噂に聞くギャップ萌えってヤツなのか……ッ！』

「うっひゃ～。自分、こんな娯楽施設をお目にかかれるとは感謝感激っスねぇ」

一誠がニヤケ面を浮かべていると、更にやって来る女性陣。次に現れたのはリント・セルゼン。彼女のは競泳用とも言えるスポーティな水着で、スタイルの良さも相まって活発な印象がより引き立てられる。その様相に一誠は更に興奮せざるを得ない。

『フヒョホォォォォォォォォォッ！　健康的な肢体を包む競泳用のピッチピチ水着ッ！

ただでさえ出るところは出ているのに、密着率が高いから余計にエロく見えるッ！』

「水遊びなんて何年ぶりかしら」

「教団にいた頃は沐浴(もくよく)ぐらいしか娯楽が無かったものね」

リントの後を追うように現れたのは、かつて過激派教団の一員だった女性――ヒメガミ・フブキとフローラ・コスモス。彼女達の水着姿もまた映えるものだった。

まずヒメガミはセパレートタイプの黒いビキニだが、ビキニトップのフロント部分をリボンで留(と)めるタイプのもので、穿(は)いているボトムも両サイドをリボンで結わえていた。

次いでフローラの水着は一風変わっており、ヒメガミと同じくセパレートタイプだが、ビキニトップは黄色でボトムは緑と色分かれしている。まるで花弁と茎のカラーリングをそのまま水着に転用し、自分自身を一輪の花と表現したように言える様相だった。何より――両者ともビキニのお陰で豊満なバストが更に強調され、そんな２人の水着姿に一誠は鼻の下を伸ばしたアヘ顔で大興奮（笑）。

『イイイイヤッハッフォオオオオウッ！　やっぱり今日は人生で最高の役得日和だァァァァッ！　こんな状況で狂喜乱舞するなって言う方が無理だ！　たとえ死んでもっ、この素晴らしい光景だけは脳内の紳士フォルダに焼き付けてみせるッ！』

『……そうか、じゃあ死ねッッッッ！』

『ホワァッ!?!!?!!?!!』

一誠はギリギリで迫りくる危険を察知し、身を捩って鬼の攻撃を回避。一誠の後方に生えていた観葉植物の幹に無数の包丁が突き刺さる……っ。これぞ幽神正義の秘技――『どこでも包丁』。しかも、投げ付けられた包丁はワイヤーで?がっており、幽神正義は直ぐに引き抜いて全ての包丁を回収。この間、僅か1秒の出来事である（笑）。無論、アーシア達は気付いておらず、一誠が皆に聞こえない声で幽神正義に抗議を飛ばす。

『おまっ、何処からそんな本数の包丁を出したんだよっ!?　てか、なんで俺の思ってる事が分かった!?　心の声が読めるのかよっ!?』

『貴様の考えそうな事など、その汚らしいアホ面を見れば容易に想像つく。やはり脳髄まで染み付いたゲス思考は言葉なんぞで抑えられるわけもないか。せめてもの慈悲で選択肢をくれてやる』

『せ、選択肢?』

『4つのうち、1つを選べ。その①――目無し。目があるから貴様は変態と化す。ならば、両目を使えなくしてやれば良い。その②――耳無し。声が聞こえるから下劣な思考を巡らせる。ならば、耳を削ぎ落とすまで。その③――口無し。口があるから変態発言を繰り返す。だから、口を切り取る。その④――鼻無し。貴様なら匂いを嗅ぎ分けて変態行為に及ぶ技があってもおかしくない。ゆえに鼻を削ぎ落とす。さあ、どの

部分を失いたい？』

『どれも嫌じゃボケッ！　あと、匂いを嗅いでする変態行為って何だぁっ!?　俺は躾(しつけ)のなってない犬だとでも言いたいのか！』

『貴様、まさか自分が犬畜生よりも格上だと思い込んでいたのか？　どれほど能天気な脳ミソが頭蓋の中に入っているんだ。今すぐ全ての犬種に土下座してこい』

『もうヤダこの毒づき鬼ッッッッ！』

犬畜生にも劣ると断言された一誠は堪らず涙腺崩壊。その様子に気付いたアーシアが一誠のもとへ駆け寄る。

「イッセーさん、どうかしましたか？　泣いてるようですけど……」

「ひっぐ、グシュ……ッ。何でもないぞ、アーシア。最近、俺の涙腺が脆くなってるだけだ……ッ」

取り繕えてない一誠を心配するアーシア。幽神正義は一誠に『まだ懲りないか』と言わんばかりの気迫を放とうとしたが、献身的に介抱するアーシアの姿が視界に入る。アーシアの水着姿が眩しい……もとい、今回の親睦会は謂わばアーシアの為にあるようなもの。ここで余計な水を差すわけにはいかない。

正義は内(うち)に沸き上がる鬼気を急速に鎮め、腕を組み瞑目。そして、誤魔化すように話題を切り替える。

「……ところで、ジュビアはまだ来てないのか？」
「ありゃりゃ、おかしいっスね。ジュビア姐さんがいの一番に飛び出していった筈なんスけど」
リントがキョロキョロと周りを見渡す。他の皆も周囲に視線をやるが、ジュビアの姿は見えない。それもその筈、ジュビアは観葉植物の陰に隠れながら正義との距離を詰めようと絶賛画策中だったのだ。その行動力は感嘆に尽きるもので、未だ正義だけでなく他の面々にも気付かれていない。
密かに、そして着実に距離を縮めていくジュビアの鼓動が昂る。
『はぁ……はぁ……正義さまぁ……ッ。ジュビアはここにいますぅ。さあ、早くこっちを向いてくださいっ♪　奥ゆかしいジュビアに正義さまの熱い視線を注いでくださいっ。ジュビアはこの日の為にスペシャルな水着を選んできました……ッ！』
ジュビアの水着は紫を基調にしたビキニに白い水玉模様と、同じく白いフリルをビキニトップに誂えた逸品。フロント部分をリボン結びで留め、フリフリとスカートタイプのボトムが靡く。雪のように白い柔肌を持つジュビアの魅力が更に引き立てられていた。
『先日アキハバラなる町へお出かけした時、ジュビアの花嫁衣装を見繕っていただいた店員さんと共に、数時間かけて選びに選び抜いた……この可愛らしい勝負水着をッ！

その可愛らしい水着を身に着けたジュビアをッ！　正義さまの熱い視線で仕上げてくださいっ！』

『――ッ。何だ、この邪心に満ちた気配と視線は……ッ？』

　正義の嫌な予感センサーが過剰に反応し、背筋に悪寒が走る。気配の居所を探るべく背後に視線をやると――ようやくジュビアの姿を捉えた。正義の視線が自身に注がれた事でジュビアは感極まる。

『ジュビビィーッ！　見ましたーッ！　正義さまの視線がジュビアに釘付けーッ！　さあっ、そのままジュビアに視線をっ！　愛に満ちた熱々の視線を注ぎ続けてくださいっ！　そしてっ！　２人はやがてリゾートと言う名のハネムーンへ身を委ねるのですぅーッ！』

　ジュビアの脳内妄想が暴走し始めたと同時に、正義が訊ねるように口を開く。

「ジュビア」

「ハァイ！」

「その水着――」

「ハァイッ！」

「――値札が付いたままだぞ？」

「……ジュビッ？」

素っ頓狂な声を上げるジュビア。よーく見てみると、確かに彼女の水着には値札がぶら下がっていた……。一番大事なところで失敗してしまったジュビアは「ジュビガーンッ！」とショックに打ちのめされ、膝から崩れ落ちる。
「ガクッ……ジュビアは修行が足りませんでしたぁァァ……っ」
「お前は何の修行をしていたんだ？　とりあえず、これで全員揃ったか」
やっと全員が揃い、親睦会が始まりそうだ。スタートから疲労が溜まりそうな場面はあったが……。ジュビアは直ぐに気持ちを切り替えて当初の目的を果たそうと動く。
「ではではっ、ジュビアはアーシアさんと秘密のガールズトークがありますので。少しの間、皆さんとは別行動になります。お話が終わり次第、合流しますので。それでは行きましょうっ、アーシアさんっ！」
「えっ、あ……はいっ」
押され気味に迫られたアーシアは断る事など出来ず、ジュビアに手を引っ張られて同行していく。まるで突風のようなやり取りに一誠、正義、他の面子（メンツ）もただ呆然と見送るしかなかった。リントがパンッと手を叩いて注目を集める。
「はいはいっ、思考ストップはおしまいっスよ。せっかく来たんスから、目一杯楽しんでいきやしょ～っ」
リントの仕切りで親睦会がようやく始まりを迎える。こんな日は何も起こらないで

欲しいと願うばかりだが、そうは問屋がおろさない……。
何故なら――良からぬ気配を持つ者達が密(ひそ)かに、そして着々(ちゃくちゃく)と悪巧みを進めていたからだ。

室内プールに並び立つ観葉植物等の遮蔽物。そこに潜むのは悪意と野心を滾(たぎ)らせ、向上心と出世欲に溺れた複数の人影……。数は５つ。その人影が１か所に集結し、悪巧みのプランを練り始める。
「ようやく、おバカな獲物が網に掛かったわよぉっぉっぉ～ん。ここからあたし達の大出世劇が始まるわぁ♪」
最初に声を発したのはオカマ口調の男。身長も凡そ１９０ｃｍ前後と高めで、ガッシリとした筋肉を纏った肉体。虹の如く七色に彩られた髪を逆立て、白く塗られた顔には星や三日月のマークを書き込んでいた。個性が際立っており、一目で見れば誰もがピエロだと分かる様相。
オカマピエロこと――ジョルジョ・ピエール・オッカマスは腰だけでなく全身をくねらせ、これから始めようとする大出世劇の結末を想像する。

「んだ、んだぁ。オデ達にやっとこさ巡ってきだチャンスだぞ。あいづら仕留めぢまえば、造魔のヒト達がら好評価を得で、オデ達を側近にしでぐれるにちげぇねぇ」

次に口を開いたのは……田舎者のように訛りが激しく、カエルとキノコが合わさったような異形――――エルゲロッペ・ドイナカン。快適な温度に設定された室内プールにいるにもかかわらず、粘液のような汗をタラタラと流していた。粘液特有の光沢具合が反射によって強くテカり、オカマピエロのニヤついた顔を小さく映す。

「しかも～、あそこにいるのは赤龍帝とか言う超～ドスケベ変態くんでしょぉ？　それならアタシのハニートラップ作戦で即死即殺ぶっ殺しＥＮＤじゃん。ラッキー楽勝～♪」

３人目は露出過多のビキニを纏った褐色肌の女性。頭部には角、臀部に尻尾を生やしており、スタイルも良くて如何にも淫乱な雰囲気を出していた。物騒な言葉で捲し立てる悪女――――サキュバッチは勝利を確信した笑みを浮かべる。

「むぅんっ！　これだから貴様は分かっておらんっ！　拳と拳、筋肉と筋肉のぶつかり合いこそ、我が掲げる暗殺の信条なり！　色仕掛けで骨抜きにしてからアッサリ殺すなど！　まさに！　愚の極みで然り！」

無駄に声を荒らげる４人目の指摘にサキュバッチは「はぁ？　絞り殺すよ？」と怒り剥き出しで威嚇する。４つの眼をギョロリと動かし、無数の傷が勲章のように刻まれた

筋骨隆々のスキンヘッド男――マッチョル・ガチムーティは荒々しく鼻息を出し、自慢の筋肉を主張しながら「貴様など我が足下にも及ばん！」とばかりに睨み返す。

一触即発の空気の中、最後の1人が「……やめとけ」と小さく制止する。ボロボロのマントで顔や身体を隠し、マントの中から垣間見える手足は小枝のように細い。しかし、彼が纏う雰囲気は油断ならないほど濃密な物だった。恐らく、この集団のリーダー格なのだろう。――ジィミスンギ・テ・キヅガレンが悪巧みプランに話を戻す。

「……やる気があるのは充分に理解した。……今回のプランは我ら暗殺団『アンサツファイブ』にとって千載一遇の好機。……だから、確実に成功させる。……そうすれば、我らは勝ち組。……造魔（ゾーマ）のお眼鏡に叶い、劣等扱いから下剋上。……今まで馬鹿にしてきた奴らに思い知らせてやるんだ」

彼ら――『アンサツファイブ』はお世辞にも有名と言えず、実力も「ソコソコあるんじゃない？」と囁（ささや）かれる程度のモノで、無駄な行動や迂闊さが多い事から同業者ならびに一流の実力を持つ者達からは鼻で笑われる。そのせいで界隈でも雑な扱いを受けてきたのだ。

リーダー格の発言にオカマピエロが同調する。

「ええっ、その通りよぉっぉっぉ～ん！　あたし達だって実力は確かなのに、陰でコソコソと『ネタ集団乙ｗｗ』とか『ワンパターン芸プギャァｗｗ』とか、ふざけんじゃない

わよって話よ！　と・く・に！　四獄同盟の連中は露骨に侮辱してくるし、ムカつくったらありゃしない！」
「んだ、んだ！　あいづらの強さがおかしいだげなんだでよ！　それを棚上げしやがっで！　パワーバランス差別だど！」
「アンタらの事情は知らないけど～、アタシも見下されるのだけは勘弁ならないしぃ～。この作戦が成功して出世したら、見下してきた奴ら全員をグッチャグチャに踏みつけてやるし～♪」
「我もあやつらの傲慢は許すまじ！　我が向上の為に手合わせを提案しても鼻で嘲笑う始末！　あれ程の侮辱！　何度も腸が煮えくり返された所存！　もはや許容も無し！」
「……俺もだ。……事あるごとに『あれ、お前いたの？　てか誰？』とお家芸みたくイジられ、一兵卒の奴からも『何か枯れそうだから水を掛けてあげますね』と哀れみの視線を受け続ける。……俺は枯木ではない……ッ！」
　５人はそれぞれ不平不満を吐き散らし、怒りと共に『この暗殺は絶対に成功させるぞ！』と決意を固める。どうやら相当酷い扱いを受けてきたのだろう……。
　オカマピエロが訊く。
「で、どういうプランで殺すのかしら？　１人ずつ誘き出して？　それとも全員を一挙に？」

「……急ぐな、赤龍帝は冥界でも指折りの実力者。……加えて、あの幽神兄弟ことヘル・ブラザーズ『地獄兄弟』もいる。……一筋縄ではいかない。……だから、まずは赤龍帝と幽神兄を仕留める。……この２人を最初に殺せば、残りは容易い。……だが、確実に成功させる為……奴らにも協力を要請した」

「「「奴ら？」」」

「……『名無し（ノーネームド）』の４人だ」

「「「――――ッ!?」」」

ジィミスンギの発言に４人の目が見開かれる。『名無し（ノーネームド）』とは彼らと同じく暗殺を生業（なりわい）とする戦闘集団で、四獄同盟に不平不満を抱える同志でもある。

何故『名無し』と言う組織名なのか？　それは人員全てが孤児など、戸籍を持たない者達で構成された組織だからだ。各地から孤児や捨て子などを集め、戦闘および暗殺に特化した育成を施された――――謂わば『殺人マシーン』に成り果てた者達の集まりでもある。造魔（ゾーマ）の援助も相まって裏事情に精通した富豪や同業他社などのバックアップを得て、莫大な予算や最新の技術、全てを惜しみ無く注ぎ込まれた存在……。

人員の総数は１００人以上いるが、今回はその中でも上位４名が駆り出された。ジィミスンギが周囲に視線を移すと、早速『名無し（ノーネームド）』の４人が姿を現す。

「ナンバーⅣ（よん）、ここに」

ヌルっと木陰から姿を現したのは、全長約3メートル前後の異形。全身を甲冑で覆っているが、その甲冑は武骨さを示す一般的な物ではなく、極限までツルっとした丸みを帯びており、まるで子供が持ってる玩具の人形の如く滑らかなフォルムだった。

無論、それはただの甲冑ではなく――――様々な魔物の皮膚や肉片を加工して作り上げた特注の代物。外側は油断を誘う為の偽装コーティングで、内側には硬い魔物の皮膚と肉を配合している。更に伸縮性も抜群で、ただでさえ長い手足の射程距離を伸ばす事が出来る上に攻撃力、防御力、素早さともに申し分ない性能を誇る。

「ナンバーⅢ（さん）、参上」

木の上から語りかけてくるのは顔や腕、足など、衣装からはみ出た部分を包帯で覆い隠した男。如何（いか）にも喋りづらそうな様相だが、これには理由がある。

ナンバーⅢは自身の肉体に黒魔術や呪術などの術式および紋様を刻み付けており、普段は特殊な魔術を施した包帯で抑えている。しかし、一度（ひとたび）包帯を解けば強力な呪詛に染まったオーラが周囲に漂（ただよ）い、耐性の無い者ならば触れただけで死に至る。無数の呪術が刻まれた腕や足に触れても結果は同じ。いずれにせよ、正気の沙汰とは思えない方法だ。

「ナンバーⅡ（に）、いま～すっ」

飄々とした声音を発したのは童顔の青年。割りと身長も低めで、体格には似つかわし

くないほど巨大な純白の鎌を携え、その大鎌と同じく純白の軽・鎧を身に着けていた。武器・防具ともに芸術品のような美しさを出している。

実は彼が持つ純白の大鎌は対魔法使い用に開発された――即ち、アンチマジックに特化した武器である。どのような魔術系統にも干渉し、魔法陣を紙のように切り裂く事が可能。つまり、ナンバーⅡは魔法使い及び魔術師を狩るスペシャリストなのだ。勿論、軽・鎧も対魔法使い用の特注品で、大抵の魔術攻撃を無力化する事が出来る。魔法使い、魔術師にとって天敵と呼べよう。

そして『名無し』最後の１人――ナンバーⅠが無言で姿を現し、「私がナンバーⅠだ」と言わんばかりに人差し指を立てる。

暗殺者特有の黒尽くめ衣装に身を包み、片目を隠すように前髪を垂らしている。比較的軽装な見た目だが……実際は４人の中で最も火力が高い。

――と言うのも、ナンバーⅠは体内に幾つもの呪われた武器を埋め込んでおり、その全てを自在に使用する事が出来るのだ。無論、これは数多く行われた人体実験が実を結んだ結果によるものである。持つだけでも使用者に災いをもたらす呪いの武器……それを体内に埋め込むなど常軌を逸している……。

そこに至るまでの道程も悍ましく、人体実験の過程では大量の死体が積み上げられた。非適合者は呪いの武器を１つ埋め込むだけでも発狂し、性能を発揮せず死ぬだけ。

仮に生き残れたとしても2つめ、3つめの過程で肉体が耐え切れず自壊してしまった者も少なくない。

しかし、この悍ましい人体実験はようやく彼――ナンバーIと言う適合者の発掘に成功した。ナンバーIは『呪いの武器と波長が合う』特異体質の持ち主で、そのお陰で複数の呪われた武器を体内へ埋め込む事に成功し、攻守ともに優れた実力者へと変貌を遂げた。前髪で隠した片目にも、実は呪いの成分が強い魔石を埋め込んでおり、いざと言う時の切り札として温存している。

このナンバーIだけでなく、他の3人もそれぞれに適した武器を使いこなす事が出来る。組織名の通り、彼らに名前は無く――数字で呼ばれている。その数字が組織内での実力の高さを表している。

ジィミスンギが改めて作戦を伝えるべく、懐(ふところ)から2枚の写真を取り出す。写真に映っていたのは――アーシアとジュビアだった。

「……『名無し(ノーネームド)』の4人には、この写真の女どもを捕獲してもらいたい。……コイツらは赤龍帝と幽神兄の女で、奴らのアキレス腱だ。……俺達が赤龍帝と幽神兄を引き付けておく間に捕獲して、奴らの前に引きずり出してやれ。……勿論、死ぬ寸前まで痛め付けても構わない」

「たかが女2人相手に4人がかりで？　不満だ。我のみで充分過ぎる」

ナンバーⅣが抗議を唱えるが、ジィミスンギは冷静に説明する。

「……文句を言いたい気持ちは分かる。……だが、確実に捕らえるからこそ４人全員に協力を要請した。……お前達も四獄同盟の鼻を明かし、造魔（ゾーマ）の側近に位置付けたい向上心はあるだろう？　……ならば、ここで暗殺を成功させるべきだ。……側近の椅子に一歩でも近付く為にも。……それには女どもの捕獲が必要不可欠。……女どもを餌にして赤龍帝と幽神兄の動きを封殺、耐え難（がた）い屈辱と恥辱と苦痛の極みを与え、絶望の底へと突き落とす。……奴らの名誉もプライドもズタズタにして、無様（ぶざま）な死に様を眺める。……どうだ、最高だろう？」

「なるほどね～。虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ずってヤツだね～。確かに合理的だし、収穫としては申し分ないよね～」

ナンバーⅡがリターンの大きさを理解した上で代弁する。この作戦を遠回しに賛同したと言って良いだろう。ナンバーⅢも「分かった」と言葉少なに伝え、ナンバーⅠも無言で頷く。ナンバーⅣは「仕方なしか」と言った様子で渋々了承する形に。

斯（か）くして――――『アンサツファイブ』と『名無し（ノーネームド）』、２つの暗殺集団が共闘する形で悪巧みが進行してようとしていた。全ては自らの出世欲と汚い野心を満たす為に。

しかし、彼らは既に計算ミスをしていた。

無慈悲の化身とも言うべき鬼（幽神正義）の理不尽さを……ッ。